

---

# 髑髏天使

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

髑髏天使

### 【Nコード】

N1803G

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

五十年に一度姿を現わし魔物達を倒す髑髏天使となった大学生牧村来期。魔物達と闘う度に彼は強くなっていく。しかしそれと共に彼もまた異形存在になってしまふのか。現代を舞台にしたヒロイツクファンタジーです。

## 第一話 刻限その一

髑髏天使

### 第一話 刻限

何気ない日常だった。この日も普段と変わりがない。

日本、いや世界でも屈指のマンモス大学である八条大学。様々な学部が内部に存在し幼稚園から高校までキャンバス内に置いている。キャンバスもまた広大であり中を車やバスが行き来している。その中に今一台のサイドカーが横行していた。

「おい、あのサイドカー」

「ああ、かなり凄いのみたいだな」

バイクに興味のある学生達はそのサイドカーを見てひそひそと言いつている。見ればそのサイドカーは黒地にシルバーの直線の模様を入れ曲線と直線が見事な調和で以って合わさった実に勇壮なデザインのものであった。しかもかなりの大型でもあった。

「七五〇はあるよな」

「一〇〇〇じゃないのか？」

エンジンについても推測が為される。サイドカーは緑の木々が陰を作っている白い建物と青いアスファルトのキャンバス内を進んでいる。徐行しているがそれでもスピードは出しているように見えるのはその巨体故であるうか。

「いいのに乗ってるよ、全く」

「誰なんだ、あれは」

今度は乗っている人間についての話になった。バイクに乗っている自然とそれを乗りこなしている人間についても話が及ぶのは当然の流れであった。彼等もそれに従ったのだ。

「あんなのに乗ってたら目立つんだだけだね」

「まあ広い大学だしな」

自分達が通っている大学についても述べられる。

「そうおいそれとはわからないが」

「けれどあそこまでのサイドカーは」

「ないな」

これははつきりと言われたのだった。断言だった。

「うちの学校でもな」

「しかしあれだけのを乗ってるなんてな」

「一体誰なんだろうな」

彼等の話の内容なぞ知る由もなくサイドカーはキャンバスの中を進む。そうしてやがて大学の真ん中にある巨大な建物の前に来た。見ればそこは図書館であった。

サイドカーはその前で止まった。巨体がようやくその動きを止めたといった感じであった。乗っていた者も降りる。水色と青の薄い生地の特ートンチエックの上着にライトブルーのジーンズといったでたちだ。靴は普通の白いジーンズでヘルメットは黒だ。

そのヘルメットを外すとそこから出て来たのは長めの黒髪を持つ細面の顔の青年だった。目は細めでクールな印象を与える。唇は薄く引き締まっている。頬は痩せていて肌はよく日焼けしている。乗っているサイドカーに合っている実に精悍な感じの青年であった。

その彼は図書館には向かわずにその横にある白い建物に向かった。そこもまた中々の大きさを持つ建物であり三階建てだった。高校の校舎を思わせるその建物に入り口に入ると一人の若い女と擦れ違った。

「あら、牧村君」

「ああ、あんたか」

彼は女に声をかけられてすぐに応えた。

「今日もあのサイドカーで登校したの？」

「雨の日以外はな」

また女に応えた。態度はかなり素っ気無く表情も乏しいものだ。

「いつもだと思っがな」

「そうね。じゃあ今日は誰を隣に乗せたの？」

「別に誰も」

やはり素っ気無い返事だ。

「妹を家に送る時に乗せるだけだ」

「今日も妹さんだけなのね」

「別に誰が乗ってもいい」

それについてはあまりこだわっていないようである。言葉にそうした感情が出ていた。

「空いている時ならな」

「じゃあ今から私が乗っていいかしら」

「悪いがそれは無理だな」

しかし今度はこう応えたのだった。素っ気無さはそのままに。

「残念だな」

「あら、嫌いなのかしら私が」

「違う。用事がある」

それは否定してこう述べたのだった。

「大和田教授はいるか？」

「大和田教授！？ああ」

女はその名前を言われて己の記憶からふとある名前を思い出したのだった。そしてそのうえでその名前を口に出すのであった。

「悪魔博士ね」

「そうだ。いるか？」

「相変わらずあの研究室に籠ってるわよ」

くすりと笑って男に答えたのだった。

「何でも今度はウィーンの図書館から面白い本を手に入れたんだって」

「またか」

「そう、また」

言葉が返る。

「この前はロンドンで今度はウィーンだけれどね」

「英語にドイツ語か」

「そつだとは限らないのがあの博士だけねどね」  
言葉が笑っている。見れば顔もそれに同じになっている。

## 第一話 刻限その二

「どんな言葉でもよくことができるから」

「そうだな。英語に中国語にドイツ語に」

「スペイン語にフランス語にアラビア語にイタリア語にロシア語？」

「ヒンズー語にギリシア語もいけたな」

「ラテン語もね。何でも読めるのね、本当に」

「それを考えると凄いな」

男はその大和田教授という人物のことについてあらためて思うのだった。

「ただの文学部の教授じゃないな」

「まあそうね。それで博士に会いに行くのよね」

「そうだ」

そのことをまた答える。

「おられるのなら今からな」

「それはいいけれど」

女はふとした感じでまた言ってきた。

「あんたも変わってるわね」

「一応自覚はある」

このことを自分でも否定しないのだった。

「そのことはな」

「もつともあの博士はもつと凄いけれどね」

「凄いとかそういうものじゃないでしょ」

女は笑って言葉を返した。

「変人っていうか完全に正体不明の人じゃない」

「集めている本も変な本ばかりだしな」

「そうそう」

また男に言葉を返す。

「悪魔だの妖怪だの伝承だの。変な人よね」

「確かにな」

「そしてそんな博士に会いに行くあんたも随分と変わってるわね」

「話は面白い」

理由をそこに置いていた。

「だから行くんだがな」

「妖怪の話とかが？」

「民俗学では妖怪の話も多い」

これは事実である。民俗学は硬いものばかりではないのだ。民族伝承の中に伝わる妖怪について研究し学ぶのもまた民俗学なのだ。

民俗学と言っても様々である。

「だからだがな」

「それでも変わってるわよ」

女はその意見を変えなかった。

「あんな変な人にわざわざ会いに行くのは」

「少なくとも悪い人間じゃない」

これは断言だった。

「それに学識は確かだしな」

「それは確かにね」

女もそれはこくりと頷いて認めるのだった。

「悪い人じゃないわよね。頭も柔らかいし」

「この大学はかなりりましたが大学には質の悪い人間が多い」

語る男の顔が顰められる。

「実際のところな」

「随分とシニカルな見方ね」

「俺は事実だと思ってるがな」

彼は己の意見を完全に正しいと確信しているようだった。それが言葉にも出ている。

「それについてはな」

「そうなの」

「しかしもう一つわかっていることがある」



彼はここで言葉を付け加えてきた。

「何が？」

「大和田教授のことだ」

その博士のことである。

「あの人は確かに風変わりだが知識は確かだ」

「確かなのね」

「人間性もな。奇人だが清潔だ」

「それって褒めてるの？」

彼の言葉に必ず否定する言葉が入っているのを聞いて彼女は苦笑いと共に突っ込まずにはいらなかった。それと共に言葉を続けていく。

「けなしているように見えるけれど」

「褒めている」

「そうなの？本当に」

「少なくとも俺はそのつもりだ」

「そうだったらいいけれどね」

「それでだ」

彼はまた話を変えてきた。

「教授は研究室におられるんだな」

「ええ、それは間違いないわ」

これについては確実な返事が返ってきたのであった。彼女も確信したような顔で言葉を出してきたのであった。

「さっきまで博士の研究室にいたし」

「そうか。それなら」

「ただしよ」

彼女の笑みくすりとしたものになった。

「相変わらずだから」

「相変わらずか」

「そう、相変わらず」

そのくすりとした笑みでまた語る彼女だった。

「机に向かつてね。その取り寄せた本を読んでるわ」

「ウイーンからのだな」

「あれっ、ロンドンじゃなかったかしら」

「ここで話が少し混乱した。」

「違った？」

「ウイーンじゃなかったか。まあいい」

彼はそれについてはどうでもいいことだったのだ。だからとりあえず話は終わらせることにしたのだった。それを意識しての言葉である。

「今から博士のところに行く」

「ええ。それじゃあまたね」

「またな」

これで彼女と別れ建物の中に入る。建物の中はやはり学校の校舎を思わせる白い壁と廊下であり左右に教授達の研究室が並んでいる。彼はその奥にある研究室の扉の前に来た。その表札には大和田研究室とある。扉はクリーム色のプラスチック製であり外見はまともなものである。少なくとも異様な印象を与えるものではなかった。

彼はその扉をノックした。するとすぐに声が返って来た。

「どうぞ」

「はい」

その言葉に従い扉を開ける。するとそこには異次元があった。

扉からは想像もできない程広い部屋だった。部屋の中には本棚が何十個も並びそこには無数の本が詰め込まれている。奥が見えなくなる程だった。そしてその入り口に彼がいた。小柄で背も曲がった老人で長い左右にはねた白髪と髭だらけの顔を持っている。黒いコートと黒い靴を羽織りその下には青いアイボリーネックのスクーフに黒スリッパがある。一目で只者ではないと思わせる外見であった。

### 第一話 刻限その三

「おお、牧村君ではないか」

「暫く振りです」

にこりともせずその小柄な老人に返事を返した。

「相変わらずのようですね」

「ははは、何も変わらんさ」

老人はその髭だらけの顔を大きく崩して笑って彼の言葉に応えた。机の上の本はそのまま広げられている。古い紙であちこちが汚れたり破れている。書いてある言葉はそのまま手書きでありしかもどう見ても日本語ではない為彼、牧村にはわからないものであった。

「わしは今こうして本を読んでいるしな」

「ウィーンから取り寄せた本ですね」

「その通りじゃよ」

彼は答えた。

「先日荷物があつたじゃろう。大和田源太郎名義でな」

「ああ、この建物への届け物で」

「それじゃよ。わざわざ取り寄せたのじゃ」

「そうだったのですか」

「手に入れるのに苦労した」

この老人大和田教授は感慨を込めた言葉で述べたのだった。

「何しろハプスブルク家の秘蔵品だったものじゃからろう」

「ハプスブルク家の！？」

「ほれ、あのルドルフ二世」

ここで人名が出て来た。

「あの皇帝が持っていた本でな」

「ルドルフ二世というと」

「あの世紀の奇人じゃよ」

教授はその破顔した笑みで彼に述べた。

「世俗を避け様々な珍品を取り寄せてな」

「話には聞いたことがあります」

ここでようやく部屋の扉を閉めた。立ったまま教授と向かい合っ  
て話をする事になった。

「それにより彼の宮殿は秘蔵品の宝庫となったそうですね」

「如何にも。この本もまたそのうちの一つじゃ」

「そうでしたか」

「これがかなり面白くてのう」

「面白いですか」

「そうじゃ。読んでみるか？」

「いえ」

牧村はそれは断ったのだった。やんわりとだがはつきりとした声  
だった。

「それは遠慮させて頂きます」

「何じゃ、残念じゃな」

「ドイツ語は読めませんので」

「これはラテン語じゃよ」

教授は笑って牧村に言葉を返した。

「まあかなり古いがな」

「ラテン語ですか」

「昔の欧州の本は大抵そうじゃ」

笑いながらの言葉が続く。

「マルティン・ルターまで聖書もドイツ語では書かれなかった。そ  
れはこれ以前の本じゃな」

「ルター以前ですか」

「おそらくは十五世紀位かのう」

その皺が多いだろうが髪と髭により見えなくなっている首を捻っ  
てから述べた。

「その頃の本じゃ」

「だから手書きですか」

「そうじゃ。まあこの日本で解読できる人間はそうはおらんな」

教授はさらに首を捻りつつまた述べた。開かれているページには虫食いすらある。紙にしる今俗に使われている紙とは全く違うものであるのがわかる。

「わし位じゃな」

「そうなのですか」

「しかし。本当に面白いことがわかる」

本を見つつの言葉だった。

「何かとのおう。そういうことか」

「何が書いてあるのですか？」

「そのうちわかるかもな」

今の牧村の問いには答えなかった。

「わからぬかも知れぬ。それ以前に君には関係ないことかも知れんぞ」

「俺には関係ない」

「おそらく関係はない」

これまた実に突き放した言葉だった。

「だから気にしなくてもいいぞ」

「そうですか。それじゃあ俺は」

「どうするのじゃ？」

「ちよつと本を借りに来ました」

彼は答えた。

「ここに江戸時代の仙台の民族伝承に関する本があったと記憶していますので」

「ああ、それか」

教授にも思い当たりのある話のようだった。彼の言葉に頷いてみせていた。

「あの本じゃな」

「何処にありますか」

「確か奥から二番目の右側の書齋の上から二列目の左端じゃ」

「そこですね」

「うむ、そこにある」

確かな言葉での返答だった。

## 第一話 刻限その四

「持っていくといい」

「お借りして宜しいのですね」

「返してくればいい」

教授はまた答えた。

「返さねば取り立てるだけじゃしな」

「取り立てるのですか」

「本は宝物じゃぞ」

学者らしい言葉であった。

「一冊たりとも無駄にしてはならん。違うか」

「それは確かにそうですが」

「それでじゃ」

教授は牧村にさらに言ってきた。

「一応一週間だな。それでよいな」

「わかりました。それでは一週間お借りします」

「ではそれで話は終わりじゃな」

「はい。それでは」

「うむ。また会おう」

こうして牧村は教授の書斎の一つからその本を借り研究室を後にした。教授は扉が閉められるのを見届けてから一人呟くのだった。

「やはり今年か」

呟いた後で本に目を戻したのだった。ラテン語で書かれたそこに何かあるのかは教授にしかわからない。しかし確かなことがそこにはあったのだった。

牧村が教授の部屋から本を借りて六日になった。この日も彼はサイドカーで登校していた。講義が終わりサイドカーに乗ろうとすると胸のポケットに入れている携帯が鳴った。

「んっ!？」

携帯の音はモーツアルトだった。レクイエムの怒りの日である。銀色の携帯からそれは鳴っており開くとメールが届いていた。それは。

「あいつからか」

『こんにちは、お兄ちゃん』

まずはこう書かれていた。彼の妹である未久からだった。

『今日塾の帰りよかったら』

「迎えに来て欲しいんだな」

妹の考えはすぐにわかった。何故彼になのかもすぐにわかったのだった。

何故かというと彼がサイドカーを持っているからだ。その横に乗るのも好きだししかもそれで周囲から注目されるからだ。しかも牧村は彼女の友人達の間では格好のいいことで知られておりささやかな自慢である。彼女にとっては実にいいことづくめだからだ。

「そういうことが。それじゃあ」

返信を送った。いいということだった。それを受け取ってから彼は携帯を収めた。それから行く先はまずは家だった。高層マンションの三階にある己の部屋に入るともうそこには母親がいた。四十代半ば程度の穏やかな顔と黒く長い髪を持つ女性である。

「只今」

「あら、来期」

母親は彼の名を呼んで意外そうな顔を見せてきた。

「早いね、今日は」

「早いか？」

「いつもはもっと遅いと思うけれど」

笑いながら牧村に言葉を返すのだった。

「そのところはどうかしら」

「それは母さんの主観だろ？」

「そうかしら」

「いつも真面目に帰ってるさ」



「サイドカーに乗ってる時はそうね」

母親は少し考えた顔になってから我が子にこう述べた。

「そういえばそうね」

「乗っていて酒は飲まないさ」

そうしたところには真面目と言える牧村であった。言葉には真剣さもある。

「飲んで運転したらそれこそ」

「犯罪よ」

応じる母の言葉もまた真剣なものであった。今度はふざけてはいない。

「言っておくけれどうちの数少ない誇りは」

「道を間違った人間は出していない。それだな」

「そういうことよ。そこは覚えておきなさい」

「わかつてるさ。ところで」

「未久ね」

妹の名前が出た。

「迎えに行ってくれるのね」

「サイドカーで迎えに行くと喜んでくれる」

それが迎えに行く理由だった。意外と妹思いであるのかも知れない。

「だから。行つて来る」

「悪いわね。お父さん帰り遅いし」

「部長になつて余計に帰りが遅くなつたな、本当に」

「それは仕方ないわよ」

また笑顔になつて息子に述べた言葉だった。

「偉くなればそれだけ仕事は増えるものよ」

「風来坊じゃ駄目か」

「少なくとも」

少しお説教するような顔になつての言葉だった。この辺りは母親らしいと言えた。

「今のあんたみたいなのじゃ駄目ね」

「俺は俺なりに真面目にやっているんだがな」

「協調性を持ちなさい」

声にも少しだけだが厳しさが入っていた。

## 第一話 刻限その五

「もつとね。いいわね」

「気が向いたらな」

「全く。誰に似たのかしら」

「さてな」

母の今のぼやきには答えない。青ざめた返事と言うべきか。

「サイドカーはお爺ちゃんの前見だけれどお爺ちゃんはもつと立派で格好よかつたし」

「そんなにか」

「立派なんてものじゃなかつたわ」

言葉が少しうっとりとしたものになっていた。

「実の娘から見てもね。かなりね」

「ふうん」

「お父さんも格好いいし。これでも男を見る目はあるのよ」

「親父が格好いい」

今の母の言葉にはかなり懐疑的なようだった。何しろ背は高いが結構肥満していて家ではいつもシャツにトランクスといった格好だからだ。それでダンディとはとても思えなかつたのだ。だから今の自分の母親の言葉には懐疑的な顔を見せたのである。声にもそれは出ていた。

「それはかなり」

「内面も見なさい」

しかし母はさらに言うのだった。

「そうすればわかるわよ」

「別にわかりたくもない」

「ここでも素っ気無い牧村の返答だった。」

「そんなことはな」

「そんなのでいいの？ぶっきらぼうは女の子にもてないわよ」

「女の子か」  
「そうよ。あんた今付き合ってる人とかいないでしょ」  
「別に構わない」  
「やはり素っ気無い返事だった。」  
「そんなことはな」  
「まああんたが いいのなら いいけれどね。それより」  
「未久のことか」  
「そうよ。塾が終わるにはまだかなり時間があるけれど」  
「とりあえず晩御飯を食いたいな」  
「まずはそれだった。」  
「今日は何なんだ？」  
「ホツケの開きに若布とお野菜のお味噌汁にもやしのおひたしよ」  
「その三つか」  
「あんたの大好物ばかりよ」  
「少し誇らしげな顔になって我が子に語る。」  
「それで満足でしょ」  
「それに白い御飯があればな」  
「普通はそれじゃない」  
「今の言葉にはすぐに突っ込みを入れた。」  
「玄米や麦御飯もいけれど」  
「それはホツケには合わない」  
「ささやかな好みであった。」  
「だからいい」  
「そうでしょ。だから今日は普通の白い御飯だから感謝しなさい」  
「有り難う」  
「もっと心を込めなさい」  
「わかった」  
「とはいっても素っ気無い返事は変わらないのだった。母親としても我が子のそうしたつれなき、素っ気無さが内心快くないようだった。それもまた言葉に出す。」

「そんなのだとお母さんみたいない人には振り向いてもらえない  
ということだけは言っておくわ」

「別にいい」

「もう好きにきなさい。さっさと食べてね」

「じゃあその通りにさせてもらおう」

こう母に対して答えそのうえでホツケやお味噌汁、もやしを食べ  
はじめた。まずは彼にとっては満足のいく夕食だった。丁度その時  
博士の研究室では。博士があの本を読みながら何者かと話をしてい  
たのであった。

「ねえねえ博士」

「何かわかったの？」

「んっ、まあな」

見れば博士の周りに無数の影が集まっていた。それは大きいのも  
小さいのもあり無数に存在していた。その影達が彼に対して声をか  
けていたのだ。

そして博士もそれに応える。その本を開いたまま。

「わかったぞ。やはりあの時と同じじゃ」

「あの時と同じなのね」

「うむ」

博士はその影達に対して答えていた。

「全く同じじゃ。本当にな」

「そのことはこの時から書かれていたのね」

「五十年に一度」

博士は言う。

「現われるとな。この時から同じじゃったのう」

「あの時だけじゃなかったんだ」

「あの時。そう」

「五十年前だよね」

影達は博士の周りで口々に話していた。それは人間には見えな  
かった。人間以外の存在が話しているようにしか見えなかった。

「その時には確か」

「ああ、それは言わない約束でしょ」

「おっと、御免」

影達の間での話であった。

「御免ね、デビル博士」

「これから言わないよ」

「わしはいいのじゃがな」

彼は別に構わないようであった。

## 第一話 刻限その六

「当の本人に聞かれぬ限りはな」

「それでいいんだ」

「そもそもじゃ」

博士はさらに言う。

「確かに今年じゃ」

「うん」

「今年二十歳になる若者じゃ」

「今年に二十歳だね」

「左様。今年で二十歳」

このことを周りの影達に対して説明する。しかも強調までしている。

「二十歳になる若者じゃ。その若者が二十歳になったその時に」

「その時にだね」

「そう、それになる」

博士の声がこれまでよりもはっきりとして強いものになった。顔も上げていた。

「天使にな」

「天使にだね」

「五十年に一度奴等も現われる」

彼の言葉はさらに強いものになっていた。その声での言葉だった。

「それに合わせて天使も降臨するのじゃ。この世にな」

「けれどどうなるのかねえ」

「そうだよね」

影達はここではこれからのことに不安を言葉に出してきた。

「天使は出たけれど果たしてどうなるか」

「今回は特に奴等の夕チが悪いんでしょう?」

「千年に一度とあるのう」

博士はまた本を読んでいた。彼にしか判読できないであろうその手書きの古いラテン語をだ。それを解読しつつ読んでいたのである。

「今回はな」

「そうなんだ。やっぱり」

「わかっているのはここまでじゃ」

博士はこう述べて本を閉じた。埃が少し起る。

「奴等についても天使についてもな」

「そう。それだけ」

「何か全然わかっていないのと一緒にじゃない」

「少しはわかった」

だが博士はこう影達に対して答えた。

「今はそれで充分じゃ」

「充分なんだ」

「今はそれで」

「おいおいわかる」

彼はまた言った。

「おいおいな」

「じゃあ僕達はそれを見ているよ」

「つていつか見るしかない？」

「そうだよな」

また博士の周りで話し合う。彼の頭の上や横や後ろで。めいめいの口で話していた。

「今はそれしかないね」

「それじゃあ」

「さて、問題は誰かじゃ」

博士は腕を組んで述べた。

「誰が天使なのかな。そういえば」

「そういえば？」

「何かあるの？」

「一人心当たりがあった」



その白髭に隠れた顎に左手を当てながらの言葉だった。

「一人な。彼か」

「彼!？」

「彼っていうと？」

「まさかとは思うが」

一応可能性はまずないとしながら言葉を続ける。

「ここに入入りしている学生でな。一人おる」

「博士の生徒？」

「まあそんなところじゃ」

影の一人に対して答えた。

「一人な。おるぞ」

「博士の生徒だったら変な人だろうね」

「僕達人のこと言えないけれど」

何故かここでは影達は己のことも言うのだった。その姿は黒くてよくわかりはしないがそれでも彼等がどうやら異形の存在であることはわかるものがあつた。

「とにかくその生徒さんの名前は？」

「団十郎とか藤十郎っていうの？」

「残念だが歌舞伎役者の名前ではない」

博士は冗談には冗談で返した。

「といつても落語家でもないからな。米朝とかのう」

「誰もそんなこと言つてないし」

「博士、今のは冗談としては失格だよ」

「ううむ、面白くなかつたか」

「うん、全然」

「もっと努力が必要だよ、そっちは」

影達から駄目出しされた。しかしそれでも博士はめげずに話を続けるのだった。どうやらこついつたことはいつもらしく慣れたものであつた。

## 第一話 刻限その七

「とにかくじゃ。彼がおる」

「生きているんだね」

「人間は生きていなかったら動けん」

自明の理だが影達にとってはそれは決して自明の理ではないようであつた。

「極楽か地獄へ行き生まれ変わることになるわ」

「そういえばそうだったね」

「人間はね」

影達もそれを聞いて納得したようだった。

「何かそれって寂しいね」

「死んだらそれで生まれ変わりってね」

「仕方なからう。それが人間なのじゃからな」

博士の言葉は少し居直りが入っている感じになっていた。

「とにかく。それでじゃ」

「そうそう。それでその学生さんだけけど」

「どんな人なの？」

彼等が次に聞いたことはこれだった。

「とにかくそれを知りたいんだけど」

「どんな人？」

「名前は牧村という」

博士はまず彼の名前から語った。

「牧村来期というのじゃ。今年で二十歳になる」

「とにかく二十歳になるんだね」

「左様。かなり無愛想じゃが根はいい奴じゃ」

そして次には牧村の人間性について言及した。

「それは確かじゃ」

「そうなんだ。いい奴なんだ」

「まあ悪い奴よりいい奴の方がいいよね」

「そうそう。悪い奴は御免だよ」

影達は口々に述べていく。その様子が実にテンポよくそのうえユ  
ーモラスなものであると言えた。人間ではないようだがそれでも調  
子がいい。

「人間でも僕達でも悪い奴がいるから」

「そして今年は」

その今年であった。

「今年こそその五重年に一度の」

「悪い奴が一度に出て来る時」

「今年は特にとんでもないのが一杯出て来るんだよね」

「この本によればそうじゃ」

本をまた開いた。そこに書かれていることはやはり博士にしかわ  
からないが彼はそれを読みつつ影達に対して述べるのであった。

「果たしてどうなるかじゃが」

「まああれだね。はじまってみないとわからない」

「そうそう」

また影達が言いだした。

「そういつことだね。結局ね」

「はじまらないと何かと言えないよな」

「どうなるかなんてね」

「そうじゃな。まだ誰がなるのかもわからんしのう」

博士は机の上で腕を組んで顔を上げて言った。

「とりあえず誰がなるのか見てからじゃな」

「そうだね。まずははじまってから」

「じっくりと考えようよ」

「うむ」

こうして博士と影達の話し合いは終わった。だが彼等はそのまま  
部屋に留まり今度はそれぞれ酒や食べ物を出して楽しく宴会をはじ  
めた。その頃牧村は家を出てサイドカーに乗り妹を迎えに行ってい

た。夜の道の中を黒と銀のサイドカーが進む。サイドカーにある銀色の光が夜の街を照らす電灯を反射し闇の中に映し出されていた。

「さて」

牧村はそこで前を見据えていた。

「丁度いい時間か。いや」

ここで右手をちらりと見た。そこには腕時計がある。

「一時間程早いか？しまったな」

自分が早く出過ぎたことに少し舌打ちした。

「何処で時間を潰すか。コンビニかマクドナルドにでも行くか」

時計を見た後で考えるのだった。少なくとも一時間も夜の何もない塾の前で待つてもりはなかった。それで変質者に思われるのも癪という事情もあった。

「だとしたら」

とりあえずはマクドナルドに向かおうとした。だがその時だった。

「むっ!？」

ヘッドライトの向こうに何かが映し出された。それは。

「人か？馬鹿か、あいつは」

道の真ん中に黒い影を見たのだった。それは人形の影だった。

## 第一話 刻限その八

「こんな夜に道の真ん中にいるなんてな。さて」

クラクシヨンを鳴らそうとした。だがその時だった。

「くっ！死にたいのか！」

何と影は牧村の運転するサイドカーに対して向かって来たのだった。彼はそれを見て慌ててハンドルを右に切った。

「あいつ……只の馬鹿じゃないのか！？」

彼はこの時は自分の中にある常識の中でこう考えた。人間は己の中の常識の範囲内で考える。それは彼もまた同じであった。

それでこう考えハンドルを切った。影は何とかかわしたが牧村はまずサイドカーを止めた。そしてそのサイドカーから降りて影の方に対して怒鳴ったのだった。

「おい、この馬鹿！」

彼にしては珍しく感情的になっていた。それは自分でもわかっていた。

「危ないだろうが。何を考えているんだ」

「危ない」

「そつだ」

牧村は怒る目でその者に対して言った。

「こんな真夜中に道路の真ん中でぼーぼーっとしているなんてな。どういっつもりだな」

「どういっつもりもない」

ここで相手は不意に妙なことを口にしてきた。

「別にな」

「！？何だこいつ」

牧村はすぐに相手の様子が妙なことに気付いた。

「どういっつもりもない。何が言いたい」

「何も言いたくはない」

また相手は変わった言葉を出してきた。

「別にな。ただ」

「御前、何が言いたいんだ」

相手の妙な様子にどうしても疑念を拭えずに問い返した。

「さつきから。頭がおかしいのか」

「おかしいも何も無い。俺は」

「俺は？」

「最初からここにいた」

また奇妙な言葉が出された。

「ここにな。何故なら」

「自殺志願者か？それなら一人で首をくくるなりして」

「自殺？何だそれは」

またしても妙な言葉が出された。

「自殺。聞き慣れない言葉だな」

「こいつ、まさか」

頭がおかしいのではないかと思った。しかしそれは違った。何故なら頭がおかしい等といった言葉は相手人間に対しての言葉であるからだった。

「俺は。殺すだけだ」

「殺す………」

「そう、人を」

影の形が変わっていった。それまで人のものだったのが耳が生え目が爛々と輝きだした。闇の中でその目が赤く光っているのが見えた。

「殺し喰らう。それが俺のやること」

「こいつ、一体」

思わず身構えた。しかしその瞬間に相手は牧村に対して飛び掛つて来た。それはどう見ても人間の動きではなかった。

「喰わせる」

「くっ！」

後ろに飛び退き相手の襲撃をかわす。それは何とかかわしたが一撃を受けた。右の爪の一撃を自身の左肩に受けてしまったのだ。

服が裂け肩も切られた。そこから血が出る。

「つうつ………」

「かわした」

左肩を押さえる牧村に対して相手は言ってきた。サイドカーのライトに照らされるその相手はやはり人間ではなかった。

頭は猫のものだった。いや、それは虎だった。虎の頭を持ち禍々しく伸びた爪を生やしていた。牧村はそれを見てすぐに相手は何かを言った。

「化け物、いや」

ここで高校の時に授業で習ったあるものを思い出したのだった。

「虎人間か。そうだな」

「そう、俺は虎」

その虎の方から言ってきた。山月記に出て来るその虎そっくりだったのだ。目の前にいるそれは身体はまだ人間であれば完全に虎になっってしまったが。

「虎だ。人ではない」

「人ではないか」

「そうだ。だから喰う」

虎人はまた牧村に対して言ってきた。

## 第一話 刻限その九

「ここだな。人を喰らう」

「化け物が。誰が」

「あがいても無駄だ」

牧村を完全に獲物として見ていた。やはり血走った目を彼に向けている。

「俺は何をしても喰らう。それだけだ」

「生憎俺はそう簡単に食われるつもりはない」

言うまでもなく彼もはいそいそですかと虎の餌になるつもりはなかった。虎人に負けない程の強い光の目を放ち相手を見据えていたのだった。

「やられる前にやる。それだけだ」

「どうするつもりだ？」

「こうする」

応えてすぐにサイドカーの方に跳んだ。そして虎人が見ている間にそれに乗りエンジンをかけた。そのまま虎人に対して襲い掛かる。「それは」

「覚えておけ。バイクだ」

牧村はヘルメットを外したままだった。だが今はそんなことを考えている余裕はないのだった。

「本当はサイドカーと言うが今はいい。貴様をこれで」

「これで」

「轢いてやる」

本気だった。とりあえず虎に対抗できるものは今はこれしか思いつかなかったのだ。それでサイドカーに飛び乗ったというわけである。

「幾ら貴様が虎でも。これの体当たりを受けて無事では済まないだろ」



「重そうだ」

虎人は自分にサイドカーが向かって来るのを見ても冷静なままだった。

「そして速いな」

「そうだ。貴様よりも重くて速い」

それがわかっていているからだ。だからサイドカーでの体当たりに移ったのだ。マシンは一直線に虎人に向かっている。

「これで……死ね」

「死ぬ。俺が」

「そうだ。貴様が死ぬ番だ」

話の間にもサイドカーは速度を増していく。もう激突は間近だった。

「ここでな。俺は喰われん」

「確かに重くて速い」

虎人の言葉の調子は相変わらずだった。何処か白痴めいたものすらそこにはある。

「だが。それだけでは俺は倒せない」

「なら……受ける」

さらに速度を速める。もう虎人は目の前だった。

そして遂に体当たりを浴びせた。虎人は後ろに大きく吹き飛びアスファルトに背中から叩き付けられた。これで終わりだと思った。

「終わったか……んっ!？」

「確かに重くて速い」

背中からアスファルトに叩き付けられた虎人はすぐに起き上がった。頭が割れそこから血を流していたがそれでも生きていたのだ。頭が割れそこから血を流していたがそれでも生きていたのだ。

「しかし。それだけでは俺は死なない」

「馬鹿な、百キ口は出していた」

「俺は人ではない」

虎人はこのことをまた牧村に対して告げた。この言葉はさらに彼

の心に深く入り込んでいく。

「ならば。この程度では」

「死なないというのか」

「人は俺の餌」

殺意ではなかった。獣のそれ、餓えと食欲だった。その二つの感情が入り混じり一つになったものが今牧村に対してはっきりと向けられていたのだった。

「ただそれだけだ。わかつたら食われる」

「そう簡単にな」

彼とてもはいそうですかと食べられるつもりはなかった。当然であるが。

「俺も貴様に食われるわけにはいかないんだがな」

「あがくのか？」

「あがくつもりはない」

それも否定する。

「あがいても何にもならないからな」

「ではどうするつもりだ」

「倒す」

毅然として虎人を見据えて言った。サイドカーに乗ったまま。

## 第一話 刻限その十

「貴様なんぞに食われてたまるか。その位なら」

「またその重く速いもので俺を打つつもりか」

「何度でもな。貴様も今ので無傷ではない」

頭から血を流しているのが何よりの証拠だった。流石に百キロを超える速度で重量のあるサイドカーの体当たりを受けてはさしもの異形の者も無事では済まなかったのだ。

「ならば。また」

「では来い」

虎人も受けて来た。

「貴様は何としても食う。絶対にな」

「そこまでして俺を食いたいのなら」

今の虎人の言葉は牧村をさらに燃え上がらせただけだった。クー ルだがそれでもその中には静かだが激しい炎が燃え上がっていたのである。

その炎を見せ。彼は再びサイドカーのアクセルを効かし前に突っ込んだ。そしてその時だった。

「むっ!？」

「行くぞ」

この時彼は何故虎人が声をあげたのかわからなかった。そしてそれに気付いてもいかなかったのだった。

「今度こそ。これで貴様を」

「馬鹿な、ここで出て来たのか」

アクセルを効かして突撃をはじめた牧村を見て虎人は。怪訝な声をあげていた。

「そして貴様が。まさか」

「何を言っている………むっ!？」

遂に彼自身も気付いた。己の周りにある光に。

「この光は。何だ？」

「髑髏天使」

虎人は不意に牧村がはじめて聞く言葉を出してきた。

「そうか。五十年に一度現われるのだから。それが今だったか」

「五十年！？何を言っている」

光には気付いていたがそれでも己自身には気付いていなかったのだった。

「五十年でも百年でも。俺は貴様を」

「最早喰らうつもりはない」

虎人は己の執着を捨て去ったのだった。

「倒す。髑髏天使は」

「髑髏天使が何かは知らん」

牧村にとつて今はそんなことはどうでもよかった。

「ただ。貴様を倒す。それだけだ」

「倒さなければ俺が倒される」

虎人の言葉にこれまでにない危機が宿っていた。それは己の生存を賭けた本能的なものであった。その獣めいた危機感を見せつつ前に突っ込んで来た。サイドカーに対して。

「ならば。ここで」

「来るか……それなら好都合だ」

サイドカーを突っ込ませつつ何故かその上で身構えた。

「体当たりの後で。貴様を」

突っ込んで来る虎人を見据えていた。何故かここで彼は無意識に動いていたのだった。

「倒す。来い」

虎人はそのまま突っ込む。突撃するサイドカーに対して正面からだがサイドカーの速度は先程のものよりも遥かに速かった。そしてその重さもまた違っていた。その重さと速さは虎人ですら耐えられるものではなかった。

「ぐわっ……」

虎人は大きく後ろに吹き飛ばされた。先程とは比較にならない程吹き飛び宙に舞う。だが牧村はこれで終わらせることはなかった。

サイドカーを走らせたまま跳んだ。やはり無意識のうちに。跳ぶと空中で身体を屈め前方に数回回転しそれから身体を伸ばした。何時の間にかその左手には剣があった。

「これで………終わりだ」

丁度吹き飛ばす虎人のすぐ上にいた。吹き飛ばされたまま態勢を整えることができないでいる彼を斬ることは容易だった。そして彼はその容易な解決を選んだ。

剣を大きく右にやりそこから左に大きく一閃させた。それで虎人の腹を両断してから着地した。屈み左膝をついて着地したその後ろでは赤い紅蓮の炎が虎人の形で浮かび上がっていた。

「まさかここで会おうとはな」

虎人は呻きながら声をあげていた。断末魔の声だった。

「髑髏天使………」

「髑髏天使が何かは知らないが」

後ろに虎人の声を聞きながら立ち上がる。虎人は灰になりそのまま崩れ落ち消え去っていた。彼が消え去ったところでサイドカーが牧村の横に来て止まった。

「貴様は死んだ。俺の手でな。だが」

だがここで。彼は不意にあることに気付いたのだった。

「どういうことだ。俺は何故今みたいな動きを」

無意識のうちに動いていたが今ようやくそれを不思議に思うのだった。続いて左手に握っている剣を見た。それは西洋にあった両刃の剣であった。

「そしてこの剣は。何だというのだ」

ここで彼は気付いた。サイドカーのミラーに映っているその姿に気付いたのだ。そこにいたのは。

「………俺なのか」

その姿を見ては彼とても呆然としないわけにはいかなかった。そ

ここにいたのは髑髏だった。西洋の、騎士の鎧を着込んでいる髑髏がそこにいたのであった。

第一話 完

2008・8・13

## 第二話 天使その一

### 髑髏天使

#### 第二話 天使

「……………俺なのか」

サイドカーのミラーに映る髑髏の騎士。その姿を見て牧村は思わず絶句した。言葉も搾り出すようでも自分でも血を吐く感じがするものだった。

「これが俺か」

信じられなかった、いや信じたくはなかった。今映っている異形の存在が自分だとは。信じられる筈もなかった。だが嘘ではないのはわかった。

「……………間違いない」

また呻きになっていいる言葉が口から出た。

「俺だ。間違いなく俺だ。何故こんな姿に」

自分でもわからない。わかる筈もなかった。呆然としている彼が次に思ったことは果たしてこの姿から元に戻ることができるかどうかということだった。

「このまま永遠にか」

それは流石に耐えることができなかつた。このような異形の姿でこれから生きるほど。人の世に生きられないだけではなく人の姿ではないことにも耐えられなかつたからだ。

だがここで。思わぬ救い主が出て来た。不意に携帯の音が鳴ったのだ。

「むっ!？」

それに気付いた瞬間だった。この異形の髑髏の騎士への恐怖がそれで一瞬だが消えた。するとそれで彼の姿は元に戻ったのだった。髑髏の騎士から見る見るうちにもとの姿に戻りそれはミラーにはつきりと映し出されていたのである。彼は元に戻ることができたのだ。

「戻れた。何なのだ今は」

何なのかわからなかった。今起こったことが夢ではないのかとさえ思った。しかしここで現実が彼を呼んだ。携帯が鳴り続いていたのだ。

「そうか、あいつか」

かけてきたのが誰かすぐにわかった。それと共に彼がどうしてここにいるのかも思い出した。髑髏の騎士のことに心を奪われ忘れてしまっていたのだ。

電話に出る。するとよく知っている声が早速耳に入って来た。

「お兄ちゃん」

「御前か」

妹の声だった。未久の声に他ならなかった。

「どうしたんだ？」

「さっきお母さんから聞いたんだけれど」

彼女は電話の向こうからまずこう言ってきたのだった。

「迎えに来てくれるのよね」

「ああ、そうだ」

彼は妹に対しても無愛想でぶつきらぼうな人間である。そしてそれは今この時でも変わらないのだった。個性は中々変わりはない。

「その通りだ」

「サイドカーで来てくれるの？」

次に尋ねてきたのはこのことだった。

「それとも車？何でなの？」

「サイドカーだ」

彼は素直に自分の妹に答えた。

「サイドカーで来ている。それでいいんだな」

「うん」

サイドカーと聞いてか電話の向こうの声が明るくなった。

「よかった。やっぱりそれよね」

「そう思ってサイドカーにした」



妹が自分のサイドカーが大好きなのはもうよく知っていたのだ。何度も迎えに来ているし何度も乗せているからだ。その度に大喜びではしゃぐ姿も見ているのだ。

「だからそれでいいんだな」

「お兄ちゃんのサイドカー、凄く格好いいから」

これが彼女が牧村、自分の兄のサイドカーに乗りたがる理由だった。彼のサイドカーは彼女の大的お気に入りなのである。

「だから。それで来てくれたらね」

「わかった。じゃあ今すぐ行く」

「塾の入り口のところまで待ってるから」

待ち合わせの場所は彼女の方から言ってきた。

「そこに来て。御願いな」

「ああ、わかった」

「それでね。お兄ちゃん」

「ここで妹はまた言ってきた。

「今度は何だ？」

「何か声がおかしいけれど」

不意にといった感じでの言葉だった。だがこの言葉を聞いて牧村の心に動揺が走った。先程自分がなっていたあの異形の姿のことを思い出したからだ。

「どうしたの？」

「気のせいだろう」

その動揺を必死に覆い隠して妹に答えた。

「それはな。気のせいだ」

「気のせいなのね、私の」

「そうだ。俺は別に変わらない」

「こつも言つ。とにかく妹の疑念を消し去ろうと必死になっていた。

「何もな。だから安心しろ」

「風邪とかじゃなかったらいいけれど」

「体調管理には気をつけている」

これは事実だった。彼は健康管理には気を使っているのだ。その為か体調はいつもかなりいいのだ。

「だからそれはまずない」

「そうよね。お兄ちゃん風邪なんてひかないものね」

「わかつたらこれでいいか」

これ以上話せば今度は何を感じられるかわからない。だから今はこれで電話を切ることにしたのであった。彼の危機からの逃れ方であつた。

## 第二話 天使その二

「切るぞ。それでそちらに行く」

「うん、御願い」

どうやら自分の言葉を信じたようだ。そのことに内心で安堵の息を漏らしながら自分のリードで話を進めていくのだった。そしてそれは成功した。

「それじゃあね。待ってるからね」

「ああ。すぐに行く」

話が終わるとすぐに電話を切った。そうしてそれを福のポケットに戻してサイドカーに乗った。だがそれでも心の中では先程のことを思わずにはいられなかった。

「どういうことなんだ、これは」

あのミラーに映った姿。今はヘルメットを被りサイドカーに乗る自分が見える。だがあの姿は違っていった。何故違っていったのかさえもわからないのだから。

「……夢ではないとしたら」

ヘルメットの中で苦い顔をして呟く。

「忌まわしい現実だな。どういうわけかわからないが」

だがこれ以上何かを言うことも考えることもできなかった。妹を迎えに行かなくてはいけなかったからだ。彼はサイドカーを進ませ場を後にした。その姿を一つの影が見ていることには気付いていなかった。

塾は六階建てのビルだった。予備校としても使われている。その赤い煉瓦をイメージした外装のビルの前にサイドカーを止めると小柄で顔が丸く髪を左右ではねさせた女の子がガラスの自動扉の入り口の前に立っていた。少しぽっちょりとした身体つきで色は白い。顔立ちは幼いがそれでも目ははつきりとしていて口は小さい。青いジーンズと白いパーカーを着ておりそれを上手く着こなしていた。

その彼女は牧村のサイドカーを見ると。笑顔で彼を呼んできた。

「お兄ちゃん、やっと来てくれたのね」

「ああ、済まない」

サイドカーを彼女の前で止めヘルメットを脱ぎつつ答えた。

「少し寄っついていな」

「コンビニ？」

「まあな」

ここでの返答は少し誤魔化したものだった。

「アイスを食べていた。悪かったな」

「お兄ちゃんがアイスねえ」

その少女未久は兄がアイスを食べていたという告白を聞いてまずは首を傾げさせた。そのうえでいぶかしむような声で言うのだった。

「何か珍しいね、お兄ちゃんがアイスって」

「ハーゲンダッツなら食べる」

妹に対してもぶつきらぼうなのは変わらなかった。

「あれならな」

「警沢なのね、案外」

「ささやかな警沢だ」

ぶつきらぼうな返答を続ける。

「アイスクリーム程度じゃな」

「まあそうだけれど。それじゃあね」

「ああ」

「車のところに乗っついていいよね」

サイドカーを見つつ兄に問うた。牧村はサイドカーに乗ったままだ。何時でも出られるようにしているのがわかる。ヘルメットも両手に持ったままだ。

「いつもみたいに」

「サイドカーは人を横に乗せるものだ」

今更といった感じの言葉だった。

「ヘルメットも用意してある。乗れ」

「うん。ところでさ」

未久はサイドカーに歩み寄りながらまた兄に声をかけてきた。

「何だ？」

「お兄ちゃん、そのハーゲンダッツだけだ」

彼女が問うてきたのはアイスクリームに関してだった。まさか髑髏のことではないかと思った牧村は内心身構えたがそれは杞憂だった。

「何を食べたの？」

「確か抹茶だったな」

実際にハーゲンダッツは食べているので質問にすぐに答えることができた。

## 第二話 天使その三

「それを食べた」

「そうなの、抹茶なの」

「美味いぞ」

あまりそう思っているとは聞こえない言葉ではあった。

「抹茶アイスはな」

「抹茶のお菓子は私も好きだけれど」

これは彼女も同じであった。

「それでも。そんなに美味しいのね、ハーゲンダッツのって」

「何なら食べてみればいい」

素っ気無く妹に告げる。

「行きたいのならそのコンビニに行くか？」

「ううん、今はいいわ」

今の兄の申し出は断る未久だった。

「今日は帰ったら西瓜があるから」

「西瓜か」

「私が西瓜好きなのわかってるでしょ」

「まあな」

未久は西瓜が大好物なのだ。兄である彼がそれを知らない筈がなかつた。

「だから。今日はね」

「西瓜か」

「アイスはまた今度にするわ。だから」

「すぐに家に帰るんだな」

「ええ。じゃあ乗るわね」

「乗れ」

兄の言葉を受けてそのサイドカーに乗った。補助座席に置いてあった赤いヘルメットを取ってそれを被ってから乗るのだった。

「こつちはいいわ」

「じゃあ行くぞ」

「ええ、御願い」

サイドカーのアクセルがかかり発進する。牧村は妹を乗せて家に帰る。妹は彼の横で明るく話していたがそれでも、彼の心の中はあの髑髏のことで満ちていてどうしてもそれには乗れないでいた。

八条大学大和田研究室、通称悪魔博士の部屋。その部屋の中でこの部屋の主である大和田教授、通称悪魔博士はまた影達に囲まれて彼等のうちの一人の話を聞いていた。自分の席に座りそこで話を聞いている。

「そうか。まさかとは思ったがのう」

「博士も予想していなかったんだね」

「それはさっき言った通りじゃ」

こつ影に言葉を返したのだった。

「今年で二十歳なのはわかっていたがな。誕生日もそろそろじゃと」

「それが今日だったんだ」

「そうじゃな。しかしまさかわしのすぐ側に現われるとはな」

彼はそれが意外で仕方ないといった様子であった。それが言葉にも顔にも出ている。

「わからんものじゃな。こうしたことは」

「とにかくさ、博士」

「天使はすぐ側にいるんだよ」

影達はこのことはかなり強調して博士に言うのだった。

「そのことだけははっきりわかっておかないと」

「そうだよ。それが一番大事なことじゃない」

「それはわかっておる」

博士も彼等の言葉に対して頷いて答えた。

「充分にな」

「それじゃあどうするの？」

「本人はかなりショックを受けているけれど」

「だからといって天使から逃れることはできんよ」

博士は表情はそのままだが達観したような言葉を口に出した。

「それだけはな」

「できないんだ」

「うむ。これだけはどうしようもない」

「こつも言うのだった。」

「五十年に一度じゃ」

「うん」

「それもつ何回も聞いたよ」

「それでも聞くのじゃ」

博士の影達に対する声が鋭いものになった。しわがれた声に鋭さが宿っていた。

「よいな」

「ちえつ、頑固だなあ」

「まだ八十歳なのに」

「八十といえば人間ではかなりの高齢じゃぞ」

影達にこつ言い返す。

「御主等と一緒にするな」

「まあそれはそうだけれどね」

「僕達はね。やつぱり」

「御主等には御主等の物指しがある」

博士は今度はこつ述べた。

「それはわかつておくのじゃ」

「まあわかったことにしておくよ」

「それでさ」

影達はあまり反省していない様子でまた博士に声をかけてきた。

「あの若いのはどうなるのかな」

「シヨックを受けているのは間違いないけれど」

「そんなものは乗り越えるしかないのじゃ」

博士は腕を組んで述べた。今は本から視線を離している。



「天使になったのは。因果律じゃからな」

「因果律ねえ」

「何度も言うが五十年に一度現われる」

それが天使だと。このことをまた言った。

「それはどうしても離れられぬ。天使になってしまったからにはど

うしようもないのじゃ」

「戦うしかないんだね」

「うむ」

影達の言葉に対してしっかりとした顔で頷く。

## 第二話 天使その四

「そういうことじゃ。逃げることはできん」

「じゃあ博士」

「ここはさ」

「何じゃ、今度は」

「彼に僕達のこと紹介したら？」

「そうそう」

影達は今度は博士に提案してきた。牧村に自分達のことを紹介することを。する。

「彼がショックを受けているのは突然天使になったからだけれど」

「それでもね。それは少しずつ消えていくだろうし」

「その時だよ」

彼等はタイミングも見ていた。

「僕達のことを紹介して」

「今わかっているだけでも天使のことを説明してね」

こう博士に話す。

「こうしたら彼もショックから起き上がることができるよ」

「僕達の中にもいいのと悪いのがいるって」

「それに彼女のこと説明してね」

何故か彼女という言葉が出て来た。

「それでどうかな」

「これでまあ大丈夫じゃない？」

「そうじゃな」

博士は彼等の話を聞いてまずは深い思索に入っていた。それから身を起こしてゆっくりと口を開いたのであった。顔には思索がまだ残っている。

「確かにのう。一人であれこれ悩んでもかえってよくない」

「下手したら自殺とかあるしね」

「まあ自殺するような人間でもないがのう」

牧村のこうしたところは把握していた。だからこのことに関しては安心はしていた。しかしそれでも思索に入らざるを得なかったのは事実である。

「じゃが安心させることは必要じゃ」

「じゃあそれでいいね」

「彼をここに招こう」

「そうじゃな。どのみちここに来るじゃろうがな」

これは彼がこの大学に出入りしていることからわかることだった。

彼は八条大学の教授であるということも考慮に入れていたのだ。

「まあ招いて悪くはないな」

「そういうこと」

「何だ、博士もわかってるじゃない」

「わかっていないことは言わぬ」

博士は言う。

「それがわしじゃ。だからじゃ」

「慎重だね、相変わらず」

「じゃあこれについてはそういうことで」

「うむ」

このことに関してはこれで終わった。だがそれでも話は続けられるのであった。

「博士、このことは終わったし」

「ねえ、お酒飲もうよ」

「酒か」

「日本酒でいいのが入ったんだ」

「おつまみに塩辛と枝豆もあるよ」

「お豆腐もね」

「ほう、いいのう」

博士は酒と肴を聞いて顔を明るくさせた。どうやら酒好きらしい。

「では早速。やるとするか」

「ほらっ、これ」

「このお酒だよ」

「おお、これは男盛り」

酒の名前を見て顔をさらに綻ばせる。

「これはよいな」

「そう思っで持っで来たんだよ」

「高かつたんだよ」

「ちゃんと買ったんじゃな」

博士は影達を見て意外そうに述べた。

「御主達がのう」

「当たり前だよ、ルールはちゃんと守らないとね」

「そうそう」

答える影達の声が笑ったものになっている。

「人間に化けて行ったよ」

「だから安心していいから」

「ちゃんと化けられたんじゃろうな」

問いながらもう塩辛の瓶を開けている。桃色の烏賊の塩辛である。

「そこが不安なんじゃが」

「まあ何も言われなかつたよ」

「目は結構怪しそうなを感じるだっただけれど」

つまりは駄目だったのである。しかしそんなことは別に気にして

はいないようだ。

「それはどうでもいいし」

「買えたしね、ちゃんと」

「怪しまれては駄目であろうに」

今度は豆腐に醤油をかけている博士であった。

## 第二話 天使その五

「どうせあれじゃろ。元の姿がかなり残っておったのじゃろ」

「そうかな。上手くやっていたよな」

「それもかなりね」

「どうだか。しかしこの酒を買って来たのはいいことじゃ」

博士はもう己の関心を酒に完全に向けていた。杯は影達が用意していた。これで後は飲むだけである。

杯に酒が注がれ後は。博士も影達もその杯を手に取って言うのであつた。

「乾杯」

「乾杯」

杯を打ち合わせてそれからまずは一気に飲む。酒の持つその独特の味が口の中を支配する。博士はそれを堪能してからまた言った。

「やはり酒はいいのう」

「博士って日本酒好きだよな」

「酒は何でも好きじゃ」

今までとはかわり変わって朗らかな笑顔になっていた。早速先程の豆腐を食べている。塩辛は影達がまずは皿に出してそれをそれぞれ箸で取って食べている。宴はもうはじまっていた。

「ビールでもワインでものう」

「いいねえ、それ」

「だから博士好きなんだよ」

「わしが好きなのか」

「うん」

「そうだよ」

にこやかに笑って博士に答える。

「お酒と一緒に飲んでくれる人間ってあまりいないからね」

「僕達それが寂しくて」

「ならもつと人前に入るのじゃな」

またここで一杯口に入れてから述べる博士であった。

「そうすれば一緒に飲んでくれる奴がもつと出て来るわ」

「その前に皆逃げるから」

「そつだよ」

だが影達はこう言つて博士に言い返す。見れば彼等もそれぞれ肴をつまみそれと共に酒を楽しんでいる。見れば肴もかなりの量がある。無論酒もだ。

「だからそれはね」

「できないんだ」

「まあそつじゃろつな」

そして博士もそれはわかっているようだった。彼等の言葉を聞いて頷いている。

「そうおいそれと御主等と一緒にいようという者もおらんわ」

「何だ、わかつていて言つたんだ」

「人が悪いよ、それつて」

「わしは性格が悪い」

博士も否定しない。

「わかつておるじゃろつに」

「曲者なのは間違いないね」

「それもかなり」

「アクも強いし」

「若い頃から難しい人間じゃと言われてきたわ」

自分でもこのことを肯定する。

「だから今更言われてものう」

「そうなんだ、やつぱり」

「やつぱりか」

「だつてわかるし」

「ねえ」

影達はそれぞれの顔を見合せて言い合つ。

「博士とは本当に付き合い長いから」

「こうやって一緒に飲むのも百や二百じゃ利かないでしょ」

「確かにそうじゃな」

今度は枝豆を一粒一粒ずつ口の中に入れて噛みながら述べる。淡白だが確かである枝豆の味が噛まれると共に口の中を支配していく。

「何日かに一回、いや三日に一回はこうして飲んでおるかのう」

「毎日でしょ」

「そこ誤魔化さないの」

「ではそれこそ一万や二万はいつておるぞ」

数字の桁がいきなり二つも大きくなった。

「わしも長く生きておるし御主等とは若い頃からじゃったからな」

「思い出すね、メチレンみたいな飲んでた時」

「あれは酷い酒だったよ」

影達は終戦直後に出回っていた悪質な酒のことを話に出した。何とメタノールが混ざっていることもありこれを飲んで命を落とした者もいるのだ。三合飲んで死ぬ場合もあったという。

「あんなのでも飲んでたよね、あの時は」

「それを考えたら今はね。満足できるよ」

「その通り。今は何でもある」

博士もまた笑って応える。

「それはよいことじゃな」

「僕達もいるしね」

「あつ、これは変わらないか」

「変わらないも何もじゃ」

ここでまた一杯飲む。どうも歳のわりに随分と酒を飲める人間のようだ。

## 第二話 天使その六

「御主等はずっといるじゃろうが」

「それもそうか」

「僕だつて何百年もいるし」

「わしはまだ百年も生きてはおらんぞ」

この言葉から博士が一応は人間であるとわかる。その外見からそれがあまり信憑性のないものに見えはするが。それでも人間なのであつた。

「とりあえずはな」

「けれど二百年生きるんでしょ」

「この前そんなこと言っていたよね」

「サンジェルマン伯爵の薬が見つければな」

また随分と怪しいものである。

「そうしたいのじゃがな。是非な」

「そんなに生きてどうするの？」

「何か目的があるの？」

「生きておればそれだけ楽しいことがあるものじゃよ」

またいっぱい飲む前に塩辛を箸でつまんで口の中に入れた。口の中に塩辛の独特の辛味と味覚が口の中を支配していく。それは酒と実に合うものだった。

「それだけな。同じ程度悲しいこともあるがな」

「半々つてわけだね」

「楽しいことと悲しいことが」

「左様、あるのじゃよ」

こつ影達に述べるのであつた。

「実際のところな」

「それでも楽しいことはあるんだ」

「だから生きるのはいいことじゃ」



また酒を一杯飲む。

「悲しいことを受け入れられる心があればな。それだけでな」

「僕達には無理だね」

「ねえ」

彼等は悲しみを受け入れることをここでは嫌がった。

「あの若い兄ちゃんだって」

「天使になったじゃない」

「うむ」

話は牧村のことに移った。その異形の天使に。

「それって人間にとつてはかなり辛いことだよ」

「多分悲しみばかりになるよ」

「おそらくそうなるじゃろうな」

博士にはもうそれがわかつているようだった。影達の話聞きつ  
つ静かに応えていた。目には達観を教える知的な光があつた。

「楽しみは。天使である間はないじゃろ」

「じゃあ生きている意味ないじゃない」

「楽しくないんならさ」

「言つたじゃろう？楽しみと悲しみは半々じゃと」

だが博士はまたこのことを述べるのだった。やはり達観した目で。

「じゃから。今は悲しみばかりでもじゃ」

「楽しみもあるってこと？」

「それと共に学ぶことも多々ある」

多々あるとも言つのだつた。学ぶことが。

「確かに楽しみは少ないじゃろう。じゃが見ること学ぶことは多い  
筈だ」

「そうなのかな」

「どうかな」

影達にはわからない話のようだった。姿はよくわかあないがそれ  
でも首を傾げているのはその声からおおよそのことが察せられるも  
のであつた。

「人間をな。見るじゃろう」

「人間を？」

「そう、人間をじゃ」

影達に述べるのであった。

「見ていくじゃろうな。それから何を学ぶかは彼次第じゃが」

「何か全然意味がわからないよ」

「人間じゃない、彼」

影達はまた首を傾げる声を出したのであった。どうしても今の博士の言葉がわからないのであった。

「それでどうしてまた」

「人間をだなんて」

「そのうちわかるものじゃ」

だが博士はここでは答えなかつたのであった。

「そのうちな。それもまた」

「やっぱりねえ。わからないよ」

「博士、もうお酒回ってるの？」

「回ってることは回っておる」

自分でも飲んでいることは認める。

「しかしわしは幾ら酔っても大丈夫じゃ」

「だから余計におかしいと思ってるんだけれど」

「そこんところ本当に大丈夫なの？」

「じゃから。安心せい」

声は笑っていた。

「この程度ではのう。さあ、もう一杯じゃ」

「はいよ」

早速また一杯注がれる。それもまたすぐに消えてしまった。

## 第二話 天使その七

「では。難しい話は止めじや」

「飲むのに専念するんだね」

「飲めればそれで幸せじや」

真の酒好きの言う言葉であつた。

「だからじや。もう一杯」

「わかつたよ。じやあ」

「うむ」

彼等はこの夜は飲み明かした。それが終わった時は朝だつた。九時になつてようやく椅子で寝ている自分に気付いた博士に影の一つが声をかけてきた。

「ねえ博士」

「何じや？」

「来るよ、彼」

こつ囁いてきた。目を醒ましても特に辛くはない。どうやら二日酔いをしない体質のようである。人によっては非常に羨ましがる体質である。

「もうすぐここに」

「ふむ、来るのか」

博士はその言葉を聞いて考える顔になつた。昨夜飲み明かしたとは思えない程元気のいい顔であつた。やはり酒は残つてはいないようである。

「ここにのう」

「それでどうするの？」

影は今度は問うてきた。

「彼。多分かなり悩んでいるだろうけれど」

「悩みは消されるべきものじや」

博士はすぐにこつ答えた。実にあっさり。

「それもすぐにな。悩むのもいいがそれは長く続いてはならん」

「そういつものなんだ」

「そうじゃ。長く悩めばそれは病となる」

精神医学的な言葉であった。

「だからじゃ。それはならん」

「じゃあ言うんだ」

「そうじゃな。ただし」

ここで博士は考える顔を見せた。

「少し細工をしよう。これでよいか」

「細工って？」

「だからじゃ」

ここでまた言う博士であった。

「わしがいきなり天使の話をしたらおかしいじゃろうが」

「まあそれはね」

「博士只でさえおかしいし」

「こらっ、何を言うか」

影達の今の言葉には口に泡を作って抗議する。

「わしの何処がおかしいのじゃ。言っていていいことと悪いことがあるぞ」

「だってねえ」

「悪魔博士じゃない」

この大学での博士の通り名である。その研究内容と容貌からこう呼ばれているのだ。確かにその異様な癖の白髪と長い白髭はそう言わせるものがあつた。

「それでどうしておかしくないって言えるのぞ」

「おかしくないってどういうのなら怪しい？」

「こつも言われるのだった。」

「博士って何か人間っていうよりも」

「僕達に近いじゃない」

「近いというのは認めるぞ」

それは認める博士であつた。

「わしものう。これでかなり御主等と付き合いがあるからのう」

「本当に長いよね」

「一体どれだけだつたっけ」

「七十年か？まあそれはよいのじゃ」

とりあえずこれは大した問題ではないとした。

「それでじゃ」

「うん」

「あれだよね」

「そう、あれじゃ」

これで話が進んだ。

「ここはちと芝居を打つぞ」

「芝居？どんな？」

「まずわしは隠れる」

博士は最初にこう述べた。

「わしはな。ついで御主等もじゃ」

「僕達もなんだ」

「左様。それで彼が部屋に来たらじゃ」

自分の机の周りに集まり漂う彼等に対して説明を続ける。

## 第二話 天使その八

「一斉に驚かすのじゃ。御主等でな」

「驚かせばいいんだね」

「それだけでいいんだ」

「そう、それだけで充分じゃ」

「ここまで彼等に話すのであった。」

「それだけでな。もうそれだけでよいのじゃよ」

「まあ驚かすのは好きだしね」

「っていうか大好き」

驚かせるという話を聞くとさらに元気がよくなる影達であった。

その言葉には明るい活気さえ見られる。

「僕達の仕事だしね」

「それじゃあすぐに用意して」

「いつも街の物陰とかでやっておるじゃろっ」

どうやら博士もこのことは承知しているようじゃった。一応念押

しの様に問うがその言葉には一片の疑念もなく確信が見られた。

「そういつぶうにやればよいからな」

「うん、任せて」

「じゃあ早速」

「頼むぞ。ではわしはじゃ」

「ここまで言うと言席を立つ博士であった。」

「早速隠れさせてもらおう」

「打ち合わせ通りだね」

「わしがおっては話が成り立たん」

「だからだというのであった。」

「じゃからじゃよ。ここは隠れるぞ」

「うん、それじゃあそういうことだね」

「後は任せて」

「うむ。それではな」

博士は席から立ちそれから部屋の奥に隠れた。丁度ここで部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「早速かな」

「そうみたいだね」

影はそのノックする音を聞いて言葉を交えさせた。

「思ったより早いかな」

「そうだね。まだ九時だし」

壁にかけてある時計を見てまた言い合う。

「まあそれだけ昨日は緊張して寝れなかったんだろうね」

「やっぱり天使になったからかな」

「他にないでしょ」

「？誰かいるのか？」

ここで扉の向こうから声が聞こえた。その声は。

「間違いないね、彼だね」

「そうだね、まあわかっていたけれど」

「それじゃあ。話はこれで止めて」

「かかろう」

「教授」

牧村の声であった。その声を聞いて彼等はいっせいに身を隠した。

「入ります」

「うむ、どうぞ」

影の一つが博士の声色を使って応えた。

「おるぞ」

「わかりました。では」

こうして牧村は扉を開けてそこから部屋に入った。部屋に入るとそこには誰もいなかった。牧村はそれを見てもまずは目を顰めさせたのであった。

「誰もいない。おかしいな」

「おかしくないよ」

これは声の一つが応えた言葉だ。今度は声色を使つてはいない。  
「別にね」

「博士の声ではないな」

牧村は今の言葉に今度は眉を顰めさせた。

「博士、何処ですか」

「博士じゃなくてさ」

また影の一つが答える。するとその瞬間に部屋のあちこちから牧村が今まで現実には見たことのない者達が姿を現わしたのであった。

「やあやあ」

「牧村さんだよな」

「！？御前等は」

牧村は部屋のあちこちから姿を現わし彼を取り囲んできたその者達を見て無意識のうちに身構えた。そのうえで彼等に対して言うのだった。

「化け物が」

「化け物つて言われたらもう」

「否定はできんばい」

小柄で昔の子供の格好をした老人と空をひらひらと舞う顔と小さな手があるその化け物が牧村の今の言葉を聞いて顔を見合わせる。

「実際そう言われることも多いしなあ」

「おいども随分言われたばい」

「子泣き爺と一反木綿か」

牧村は彼等の名前をすぐに出した。これは本でその姿と名前を読んだことがあるから言葉に出て来たのである。

「本当にいたのか」

「おるよ」

「しかもおいどんだけじゃないばい」

彼等は陽気に牧村に言葉を返す。

「わしもいるしの」

「わしもじゃ」



白い老婆と巨大な顔のある壁も出て来た。牧村は彼等についてもよくわかった。

## 第二話 天使その九

「砂かけ婆に塗り壁か」

「やっぱり知っておるぞ」

「意外と博識だな」

「化け物が。どうしてここにいる」

「牧村は今度は身構えつつ彼等に問うた。」

「まさか。博士を」

その言葉と共に牧村の身体が光った。激情が爆発しそれにより顔が変わりあの髑髏と鎧の騎士となったのであった。彼等の姿を見ての警戒もそこにはあつた。

「貴様等、ならば」

「やはりそうじゃったな」

だがここで。その博士の声が聞こえてきたのだった。

「博士、いるんですか」

「うむ、ここじゃ」

本棚の間から姿を出す。そこから牧村が言う化け物達に囲まれて姿を現わしたのであった。見れば元気なものだった。

「やはりな。君じゃったか」

「俺だった!?! 一体」

「君は天使なのじゃよ」

「天使だと。俺が」

「まずはその姿を元に戻すのじゃ」

こう牧村に告げる。

「よいな」

「戻す。どうやって」

「一度変身したのではなかったのか?」

牧村の前に来て問う。

「ではわかるじゃろう」

「昨日のことも知っていたんですか」

「この連中から聞いたのじゃ」

また述べる博士であった。

「昨日のことをのう」

「この化け物達から」

「妖怪とも言いがな」

博士は化け物という呼び方は好きではないらしい。あえてこう呼んできた。

「まあ聞いてはおる」

「そうだったんですか」

「僕が教えたんだよ」

ふわふわと飛ぶ軽そうな丸いものだった。見ればそれがやけに多く部屋の中を飛んでいる。

「博士にね」

「人魂か」

「何じゃ、知っておるのか」

「漫画だの小説だったので読んでいた」

博士に対して素っ気無い様子で答える。

「こんなものだというのはな」

「ふむう、意外と妖怪について知っておるのう」

それを聞いて腕組をして述べる博士であった。

「それでは話が早いものう」

「話が早いだと」

「うむ。まあとりあえずはじゃ」

一旦話を元に戻してきた博士であった。

「その変身を解こうぞ」

「どうやればいいんだ？」

実はそれがわからない牧村だった。声に微かに戸惑いが見られる。

「そもそもどうして変身するかどうかもわからないというのにな」

「念じればいいのじゃ」

「念じる!？」

「そうじゃ。例えば変身したい時じゃ」

「今までは自然となっていたんだが」

「それが違うのじゃよ」

「そうではないと牧村に対して説明する。」

「あの虎人と闘った時でも今でも危険を察したな」

「確かにな」

「危険を察して無意識のうちに変身したのじゃよ」

「そうだったのか。それでか」

「だから本人が望めば変身できるのじゃ」

「こう述べたのであった。」

「それでいいのじゃ。わかってくれたか」

「では変身を解く時は」

「同じじゃよ。人間の姿に戻りたいと思うだけじゃ」

「それだけか」

「試しに念じてみよ」

牧村に対して勧める。

「早速な。ほれ」

「わかった。それではな」

牧村は博士の言葉に従いすぐに念じてみた。するとそれでもう変身が解け元の姿に戻った。紛れもない牧村来期になったのだった。

「確かにな」

「どうじゃ。本当にすぐだったじゃろうが」

「信じられん話だ」

牧村は人間に戻った己の姿を見て述べた。まだ信じられないといった顔であった。

## 第二話 天使その十

「鎧もまた同じか」

「その通りじゃ。その名も髑髏天使」

「髑髏天使!？」

その聞き慣れない名前を聞いて牧村の眉が顰んだ。

「それがあの姿の名前か」

「どういった存在か聞きたいか」

「少なくとも俺には聞く権利がある」

これが牧村の返答だった。

「どうしてこんな姿になれるようになったのか、そしてこの姿が何なのかな」

「成程な。やはりそう言ったのう」

「では聞かせてくれ」

周りの妖怪達を目だけで見回しながら博士に答えた。

「その髑髏天使が何なのかな」

「うむ、わかった」

博士は今の牧村の言葉を受けて説明をはじめた。それによるとその髑髏天使というものは五十年に一度姿を現わし同じく五十年に一度多量にこの世に出て害を与える異形の者達を倒す存在だという。人が変身しその力で異形の者達を倒すというのだ。

「そういうことじゃ」

「その髑髏天使に俺がなったのか」

「昨日二十歳の誕生日だったそうじゃな」

「そういえばそうだったか」

実は意識していなかったのだ。

「家族も俺も忘れていた」

「忘れていたのか」

「ああ。大した話じゃないからな」

「誕生日が大した話ではないか」

「一歳老けるだけだ」

やはり牧村の言葉は素っ気無い。

「それだけだ。俺にとってはな」

「本当に味気ないのう。わしなんぞは今でも誕生日は祝うというのに」

「お酒でね」

「僕達と楽しくね」

妖怪達がここで笑いながら話す。

「そういうことじゃ。それがないとはのう」

「とにかくだ。二十歳になった時に髑髏天使になるのか」

「その通り。しかしなあ」

博士はあらためて牧村を見て言うのであった。

「まさかな。君だったとはな」

「それは俺の台詞だ」

牧村から言ってきた。

「全く。こんなことになるとはな」

「それでじゃ。君はこれから」

「その化け物共を倒さないといけないんだな」

「できるか？」

真顔になって牧村に問う。

「それは。どうじゃ？」

「正直なところ願い下げの話だ」

また実に正直に述べた。

「今まで化け物にしろ本やテレビの中だけだと思っていたしな」

「しかし現実にいるぞ」

「まだ信じられないんだが」

牧村の偽らざる本音であった。

「この目で見てはいるがな」

「ふむ。見ても信じられんか」

「夢ではないのはわかる」

それはわかると博士に述べた。

「しかし幾ら何でもな。これはな」

「まあこうした連中は信じるには色々と慣れるのも必要じゃからな」

「慣れるって博士」

「随分な言いようだね」

また妖怪達が博士に突っ込みを入れる。悪意のある調子ではない。

## 第二話 天使その十一

「とにかくじゃ。君がこれからやらなければならんことは」

「化け物共を倒すことか」

「あくまで悪い奴だけをじゃよ」

博士はそこは釘を刺すようにして言ってきた。

「そこはしっかりとしてくるようになる」

「化け物にいいのも悪いのもあるのか」

「今日の前におるじゃろうが」

丁度周りの彼等を指し示してみせる。

「ほれ、この連中じゃよ」

「僕達は人を襲ったりしないから」

「それは安心してね」

からかさと一つ目小僧が牧村に言ってきた。彼等の姿は牧村もよく知っていた。それこそ子供の頃から漫画や本で見てきた連中だからだ。

「とりあえずこうした連中と戦うことはないのか」

「その通りじゃよ」

笑いながら牧村に答える博士であった。

「すぐにわかるじゃろ。というか人間よりもわかりやすいぞ」

「人間よりもか」

「雰囲気で一発でわかるからのう」

博士にしてみればそうであるらしい。

「人を襲わん連中は呑気なものじゃ」

「確かにな」

感覚ではつきりとわかるのだった。鋭さや殺気が全くない。あるのは呑気さと遊び心だけだ。子供よりもまだ無邪気なものであった。

「それはないな」

「それでじゃ。昨夜君が倒した」



「あの虎と人間の合の子みたいなものか」  
「あれは虎人というのじゃ」  
「虎人か」  
「元々は中国の魔物じゃ」  
「日本以外の国が出て来た。」  
「普段は人に化けておるがの。時折ああした姿になり」  
「人を喰うのか」  
「その通り、かなり凶暴な奴じゃよ。それを最初に倒すとはのう」  
「あいつは強かったのか」  
「だって虎だよ」  
「決まってるじゃないか」  
「妖怪達もこのことを牧村に告げる。」  
「強い何のって」  
「僕達だって襲いかねないし」  
「そんな奴だったのか、あれは」  
「そうだよ」  
「それをデビニュー戦で倒すなんて。かなり凄いよ」  
「まあそうじゃな」  
「これについては博士も認めるところであった。」  
「幾ら髑髏天使でもものう。相手が相手じゃった」  
「喰われると思ったがな」  
「語る牧村の目はこれもまた正直に述べたものであった。」  
「あの時。その髑髏天使にならなければだ」  
「死んでいたな、間違いなく」  
「あの連中は自分達からも来るのか」  
「というと？」  
「だからだ」  
「博士に対して言う。」  
「化け物共は俺に対しても向かって来るのか」  
「向こうも髑髏天使の存在は知っておる」

博士は静かに牧村の言葉に答えた。

「それはしつかりとな」

「そうか。それではだ」

「狙って来ることもある」

今度ははつきりと答えてみせたのだった。

「じゃから。どのみち」

「戦わないとならないんだな」

「嫌か？」

「俺は戦いは好きじゃない」

本音の言葉を続けていく。

「勝手気ままに生きていたいものだがな」

「そうじゃろうな。君はな」

「だが。振りかかる火の粉は払う」

これもまた彼の本音であった。戦いは好まないがそれでも自分に及ぶ危害に対しては立ち向かいそれを払うのが彼の主義である。

「向こうから来るのならな」

「そうか」

「何かあつたらまた来る」

ここまで言つと博士達に背を向けた。

「そして何かあつたらまた呼んでくれ」

「帰るの？」

「気持ちを落ち着かせてくる」

逃げるつもりはなかった。また逃げても魔物達の方から来ると聞いていてはそれもまた無駄だとわかったからだ。道は一つしかないというわけだった。

「少しな」

「帰って来るんじゃない」

「そのつもりはなくても聞きたいことがある」

これが今の牧村の返事であった。

「だからだ」

「そうか。ではな」

「牧村さんだったかのう」

砂かけ婆が部屋を出ようとする彼に声をかけてきた。

「確か」

「そういうあんたは砂かけ婆か？」

「もう覚えてくれたのか」

「その格好ですぐにわかる」

こう彼女に答えるのだった。

「それにすぐに覚えられた」

「人気者は辛いのが」

実に自分にとって都合よく解釈する砂かけ婆であった。しかしそれはどうやら彼女だけではないようである。他の彼等にしろそうであるらしい。その証拠に。

「わしの方が人気があるぞ」

「わしもじゃ」

「やけに明るい連中のようだな」

牧村は背を向けたままだが彼等の言葉を聞いて言うのだった。

## 第二話 天使その十二

「どうやらな」

「そうじゃよ。この連中はかなり明るいぞ」

「人を襲わないんだな」

「人を襲う奴はここにはおらんよ」

博士は笑って牧村に言葉を返した。

「それも一切のう」

「そういう化け物もいるのか」

「妖怪って言ってくれよ」

「そうそう」

その妖怪達が彼に告げる。やはり明るい声で。

「化け物って言われるよりも気持ちがいいし」

「だからさ。妖怪ってね」

「妖怪か」

扉に手をかけつつこう呟いた。

「そう呼ばれたいのなら呼んでみよう」

「何か他人行儀だけれどいいよ」

「できればフレンドリーにいきたいけれどね」

妖怪達の言葉が続く。

「まあそれもこれからね」

「宜しくね」

「少なくとも御前等が俺に向かって来ないのならいい」

「そういうこと」

こんな調子であった。

「まあ少しずつでもいいしね」

「時間はあるし」

「とにかくだ」

牧村は少し強引に話を打ち切ってきたのだった。扉を開けた。

「また来る。ではな」

「うむ、何時でも来てくれ」

博士はこう牧村に声をかけたのだった。

「待っておるからな」

「携帯の電話番号も知っていたな」

「携帯!?!うむ」

また牧村の言葉に頷く。

「知っておるぞ。安心せよ」

「連絡してくれてもいい。何時でもな」

「そういえばサイドカーじゃが」

「俺のサイドカーがどうかしたか」

「改造もできるからのう」

協力の申し出であった。

「何かあればな。それも考えておいてくれ」

「気が向いたらな。それではな」

「またな」

牧村は部屋を出た。そのまま扉を閉めて姿を消す。妖怪達は閉じ

られた扉を見つつまた博士に対して言葉をかけるのであった。

「ねえ博士」

「彼だけけれど」

「いい奴じゃろ」

「そう?」

今の言葉にはすぐに疑問符で応えた彼等であった。

「あまりそうは思えないけれど」

「悪い人じゃないけれどね」

これはおおよそ彼等も察していた。

「けれど。無愛想だし」

「硬いしね」

「素直でないのじゃよ」

博士は少し笑って彼等に応えた。

「実はな。それでじゃ」

「ああだつていうの？」

「そういうことじゃよ。まあ付き合っていけばいい奴だとわかるものじゃ」

「そうだつたらいいけれどね」

「あと。気になるのは」

「何じゃ？」

「闘うのかな」

「ああ、それだよ」

妖怪達が次に牧村に対して思ったのはこのことだった。

「何か闘うとは言ってるけれど」

「どうなのかな」

「疑問だというのじゃな」

「うん」

また実にはつきりと答えたのだった。

「だつてさ。いきなり変身するなんて言われても」

「普通はいそうですかって考えられるかな」

彼等の今の考えはかなり人間臭いものであった。

「そこんとこ難しいんじゃないの？」

「彼は結構強いみたいだけれど」

「それでもやらなければならんのじゃよ」

博士は少しおどけたような、それでいて真面目さも入った顔で彼等に述べた。

「髑髏天使になつたのは運命じゃからな」

「運命なんだ」

「運命からは逃れられん」

博士はまた言うのだった。

## 第二話 天使その十三

「変えることはできるがな」

「逃げられないけれど変えられるんだ」

「左様」

また答える。

「そうじゃよ。運命は変えられる」

「じゃあさ。これから変えられる彼の運命は？」

「どうなの？」

「残念じゃがそれはまだわしにもよくわからん」

首を捻ってこう述べるのだった。今は。

「何せ髑髏天使についてわかっておるのはまず五十年に一度現われること」

「まずはそれだよな」

「そして悪い魔物を倒すことじゃ」

「これだけ？」

「残念じゃがこれだけじゃ」

言葉は少し素っ気無いものだった。

「今のところわかっておるのはな」

「それだけなんだ」

「今のところは」

「全てはこれからじゃな」

考える目で述べた言葉だった。

「調べていくのは。さしあたってはじゃ」

「どうするの？」

「ルドルフ一世の所蔵の書をあたるか」

ハプスブルク家、神聖ローマ帝国の皇帝であった。奇妙な秘宝や不可思議な書を集めることに情熱を傾けていた。集めたものの中にはその素性がすこぶる怪しいものも多かったという。

「それかアレクサンドリア図書館やローマ帝国にあった書でも」

「そんなのまだあるの？」

「探せばある」

妖怪達に述べる。

「探せばな。そのかわり色々と苦労が必要じゃが」

「やっぱりね。アレクサンドリア図書館なんて」

既にカエサルがエジプトを占領した際に焼失している。歴史の中で消え去るものも実に多いのだ。中には消え去ったと思われるものが残っていたりするが。

「時間を超えでもしない限り」

「簡単には手に入らないよね」

「そうじゃ。じゃが苦労する価値はある」

博士はそう定義付けしたのであった。

「髑髏天使の為にはな。さてさて」

「とりあえずはその本を読むんだね」

「うむ、これがまたのう」

左手でとんとんと右肩を叩きながらの言葉だった。

「難解なのじゃよ。実に」

「難しいんだ」

「手書きじゃぞ」

昔の書はどれもそうだ。とりわけ西洋においてはグーテンベルクの金属による活字印刷が発明されるまでまず手書きであった。そのうえ書はどれもラテン語であり今それを読み解くとなると古文書の解読能力だけでなくラテン語の教養も必要になる。だからかなり難解なのだ。

「どれだけ難しいか。しかもあちこち破れたり虫食いがあるし」

「じゃあ本当にゆっくりになるね」

「うむ。まず魔物共が髑髏天使をも襲うことはわかった」

「天敵を襲うんだ」

「やられる前にやれじゃよ」



実に簡単な理屈であった。

「それでな。襲うのじゃよ」

「悪い奴の考えることは野蛮だね」

「全く」

妖怪達はそれを聞いて口々に相手を悪く言う。どうやら彼等にとつてはそうした行動そのものが非常に忌まわしい行動であるらしい。

「まあそんな連中だからやつつけられるんだらうつけねど」

「さて。彼は生きられるかな」

「髑髏天使は強い」

博士はこれについてはきっぱりと言い切った。

## 第二話 天使その十四

「そう簡単に敗れはせんよ」

「けれど彼自身はどうなの？」

「そうそう、彼は」

「また話は牧村自身についてのことになるのであった。」

「戦えるの？」

「何かしてるの？」

「いや、格闘技の類はしておらん」

「しかし博士の返答はこうであった。」

「そういったものはな。一切な」

「じゃあ駄目じゃない」

「相手はそれこそ何をしてくるのかわからないのに」

「しかし運動神経は見事じゃよ」

「これについては保障してみせた。」

「伊達にサイドカーを乗り回しているわけではないしな。反射神経

もよいし体力もある」

「そうなんだ」

「筋肉も発達しておるしな。あれでよく動けるのじゃ」

「じゃあまあ大丈夫かな」

「戦いにかけては」

「とりあえずは大丈夫じゃ」

「こう結論付けた博士だった。」

「しかし。これからは」

「これからは？」

「わからないっていうの？」

「正直髑髏天使についてわかっておるのはまだ僅かじゃ」

「目が少し困ったようなものになった。」

「これから何がわかるかじゃが」

「そういえば僕達も髑髏天使のこと知らないね」

「ああ、確かに」

「ってどうかさ」

妖怪達も博士の言葉を聞いたうえでそれぞれ話し合っただった。

「そもそも髑髏天使って悪い奴を倒すんだよね」

「魔物をね」

彼等は自分達を妖怪と言い悪い自分達の同胞を魔物と呼んでいた。

ここに大きな認識があると言えた。妖怪と魔物という違いが。

「だから僕達妖怪が知らないのも当然だよな」

「大体日本に出るのってはじめでだっけ」

「そうじゃないの？」

「それについても調べていくとするか」

博士はまた考える顔になってから述べた。

「そういうところもな」

「じゃあそのルドルフ一世やアレクサンドリアっていう場所だけじゃ済まないね」

「そうだよな、他にも一杯」

「中国も漁ってみるか」

考える目でまた述べた博士だった。

「あの国はやはり歴史が深いからのっ」

「中国もなんだ」

「うむ。あとはエジプト」

もう一つ歴史の深い国の名前が出た。

「象形文字が読めることが役に立つのっ」

「博士って何でもできるんだね」

「語学は得意じゃ」

これについても絶対の自信があるようであった。

「あとはインドじゃな」

「その国もなんだ」

「資料を持っているという点では」

さらに考えを巡らせていく。そのうえでもう一つ国の名前が出て来た。

「あとはアメリカじゃな」

「アメリカは歴史が浅いんじゃないの？」

「できてまだ二百年ちよつとじゃなかつたっけ」

「アメリカという国の歴史はまだ若いかな」

博士もそれは認める。

「しかし横にかなり広くまた多くのものが集まってある」

「だからいいんだ」

「うむ。それにあの国は移民の国じゃ」

このことも考慮に入れる博士であった。アメリカといえはやはり移民である。移民達によって作られた国であるからだ。それこそ様々な国から来ているのだ。

「多くの話があるからのう」

「じゃああの国もね」

「ネイティブのことも調べておきたいしのう」

彼等の歴史は古い。そのうえ多くの伝承がある。そこも注目している博士なのだ。

「あの国にも髑髏天使に関する話があるかもものう」

「だからアメリカもなんだ」

「ついでに大英図書館も漁ろうとするか」

言わずと知れた世界屈指の大図書館である。

「調べることに実によりそうじゃ」

「これで論文も書けそうだね」

「無論そつちも書くぞ」

自分の仕事も忘れない博士であった。

「ちゃんとな」

「そつとも忘れないんだね」

「論文を書け。さもなくば滅びよ」

随分と厳格な響きを持つている言葉であった。

「学者の鉄則ではないのか？」

「最近それ守ってる人少ないんじゃないの？」

「少ないってどうかさ」

また妖怪達が口々に言う。

「博士も面白い歳だし」

「名誉教授だったけ」

「大学に長くおれば誰でもそうなるぞ」

平然として妖怪達に答えるがこれには根拠があった。大学に三十年いればそれで名誉教授となるのだ。だから博士はこう答えたのである。

「それこそな」

「まあそうだけれどね」

「それでもまだ書くなんて」

「人生ずっと勉強じゃ」

かなり求道的な言葉であった。

「ずっとな」

「だから書くんだ」

「左様。論文なぞ一日もあればそれで一つ書ける」

常識外れの速筆である。少なくとも博士の歳では考えられない程だ。

## 第二話 天使その十五

「髑髏天使について調べている合間に書いていくわい」

「じゃあそつちも頑張つて」

「一応応援するから」

「一応か」

「だってそつちは全然興味ないし」

「ねえ」

薄情な面もある妖怪達であつた。

「まあ僕達で協力できることがあつたらするけれど」

「とりあえずは」

「ああ、別にないのう」

博士も博士で実に素つ気無い返事であつた。

「資料はあるからのう、肝心のな」

「だったら遊んでいたらいいんだね」

「遊ぶよ。答えは聞かないから」

「別に構わんが」

やはり言葉は今も素つ気無い。

「遊ぼうが何をしようともな」

「それじゃあ飲むとする？」

「いいね」

「また飲むのか」

これには少し呆れた感じを見せる博士であつた。

「好きじゃのう、本当に」

「まあ博士も後でね」

「楽しくやろつよ」

「毎日飲み過ぎではないのか？」

これは博士自身にも言えることであるがそうしたことには頓着してはいないようである。ある意味非常に幸せな人物ではある。

「いい加減身体を壊すぞ」

「大丈夫大丈夫」

「お酒は百薬の長」

垢舐めと河童はもう飲みだしている。当然ながら河童は楽しそうに胡瓜を啜えている。やはり河童といえは胡瓜なのである。

「飲めば飲む程健康になる」

「だからやるよ」

「ではわしも仕事が終わったらな」

とりあえずは本を読むのだった。

「入らせてもらおうか」

「是非共」

「また皆でやるうよ」

「わかった。それにしても」

ふとここで物思いに耽るのであった。そして出る言葉は。

「最近家に帰っておらんのか、わし」

「そういえばそうだね」

「ずっとここで本を読んでお酒飲んでだからね」

「お風呂はどうしてるの？」

「近くのスーパー銭湯じゃ」

警沢である。

「そこで洗濯もしておるぞ」

「そうだったんだ。それで臭くないんだ」

「成程ね」

「じゃから時々いなくなっておったじゃろう？」

こう妖怪達に問うてみせた。

「そういうことだったんじゃないよ」

「身体を清潔にするのはいいことだしね」

「けれどさ、博士」

ここで垢舐めが出て来た。

「何じゃ？」

「お風呂に入る時間がなかったら僕がいるよ」  
「楽しそうに笑って博士に言うのであった。その長く赤い舌を見せながら。」

「何時でも垢を舐め取ってあげるよ」

「それは遠慮するわ」

あからさまに嫌そうな顔をしてそれは断る博士であった。

「折角じゃがな」

「何だい、つれないなあ」

「舐められたらそこが唾臭くなるじゃろうが」

博士が嫌がる理由はこれであった。当然と言えば当然であった。

「じゃから遠慮したいわ」

「そう、わかったよ」

「まあ今は適当に酒を飲んでおいてくれ」

話をこれで止めてまた本を読みだす。

「後で合流するからのう」

「了解」

「それじゃあ」

こうして妖怪達は酒を飲みだし博士は本のさらなる読解にかかった。その頃牧村はサイドカーで学校を出て学校の近くの河の岸辺にいた。そこで一人座り込み河の流れをただ見ていたのであった。

何故見ているかという己の気持ちを落ち着ける為だ。比較的クールで物事を受け入れる性格の彼だがそれでも今自分に起こった事態を受け入れるには相当な動揺と混乱があるのだ。それを落ち着ける為には河を見ていたのだ。

河は静かに流れている。水面には微かに波がありそれが太陽の光を反射して銀色に輝いている。向こう側の岸辺には自転車で走る女の人が見え左手には橋がある。橋には車が時々行き交っている。そんなのかな日常の中で彼は深刻な混乱と葛藤の中にいたのだ。



## 第二話 天使その十六

「受け入れるしかないのはわかっている」

水面を見ながら呟いた。

「しかし。それでもだ」

受け入れるのは難しかった。己の身体の異変だけではなく異形の者達と闘っていかなくてはならないというのだから。五十年に一度この世に現われ悪しき魔物達を倒す髑髏天使として。そのことを言われては流石の彼でも動揺せずにはいられないということだった、

闘いは既に一度経た。勝つことはできた。だがまた勝てるとは限らない。敗れば当然死が待っている。生死にもまた淡白な考えの持ち主で人は何時か必ず死ぬとわかっている。しかしそれが急に来るとなると。それもまた受け入れるのが難しいことであつた。

「死ぬ。俺が」

このことも呟く。

「敗れば。死ぬのは怖くない」

それを怖れる考えは彼にはあまりない。

「しかし。魔物共に殺されるのか」

そんな彼でも殺されるのは望まない。自然に死ぬのならともかくだ。そのことも考え物思いに耽る。やがてそれにいたたまれなくなつたのか立ち上がり傍にあつた小石を拾いそれを河に向かって投げた。

石は何段か水面を跳ねそれから沈んだ。その動きは普段と変わることがない。しかし今の彼は。もうこれまでの彼ではなかつたのであつた。

「髑髏天使」

次に出た言葉はこれだった。

「それが俺のもう一つの姿になつたのか」

すつと一歩前に出た。もう足元には水面がある。そこには彼自身

の姿もある。それを見ると。明らかに浮かない顔をした彼がいた。だった。

「悩んでも仕方ないがな」

それはもうわかっていた。

「だが。闘わないと死ぬ」

このことも認識して顔を苦く暗いものにさせる。

「死ぬつもりはない。それなら闘う」

闘いを拒むつもりはなかった。それを受け入れることに抵抗はない。何よりも自分自身を守る為に。だがそれでもだった。彼にはそれを容易に受け入れて前に進むまでには確固たる強さはなかったのである。漠然と決意はしているがそれが確固たるものにはなっていないのである。

「闘うが。しかし」

顔を水面から離れた。そのうえでまた考えるのだった。

「こんなことになるとはな。いきなりな」

今度は上を見上げる。空は何処までも青い。しかしその青が今は爽やかなものではなく暗鬱としたものに見えるのだった。それが何よりも今の彼の心を表わしていた。どうしようもないまでに。

悩んでも仕方ないと思った。河に背を向けてこの場を去ろうとした。とりあえずはサイドカーに乗りドライブをして気を紛らわせようとした。しかしその時だった。

「髑髏天使だな」

「まさかとは思うが」

後ろから、即ち河から声がした。それだけで今の声の主が何者か察したのだった。

「魔物か」

「そう言うのか」

後ろを振り向く。すると河から異形の者が顔を出していた。水と泥にまみれた頭を見せているその異形の者は。赤い目で牧村を見据えていたのであった。

「今は我々のことを」

「では化け物とでも言おうか」

牧村は一步退き間合いを取った。間合いを取りつつ身構えてまた異形の者に対して言う。

「どちらがいい？」

「どちらでも変わりはない」

異形の者にとってこちらからの呼び名はどつでもいいことなのかもしれない。言葉が素っ気無い。

## 第二話 天使その十七

「別にな」

「そうか。いいのか」

「話は言葉に関するものではない」

異形の者、つまり魔物はずっと前に出た。そのうえで岸边に手をかけるがその手には鋭い爪と水掻きがある。よく見ればその顔も人のものではなく人と魚の合いの子のようでありまた鱗があった。当然その手にも鱗がありそれが彼を魔物であるとはつきりさせてもいた。

「貴様に関することだ」

「俺か」

「そうだ。髑髏天使よ」

岸边から出ながら牧村を髑髏天使と呼んだ。

「貴様に用があるのだ」

「大体言いたいことはわかっているがな」

構えを保ったままその魔物に言葉を返す。魔物の姿は背中と手に鱗があり足の指もまた水かきと爪がある。どう見ても魔物であった。しかも水棲の。

「俺を殺すつもりだな」

「わかっていたか」

「髑髏天使の話は聞いた」

その魔物を見据えつつ答える。魔物を前にして今彼は己の中の闘う決意をはつきりと感じていた。

「貴様等を倒す存在だとな」

「では話が早いな」

魔物もまたそれを聞いて納得したように応えてきた。その口は大きく開かれ鋭い無数の牙が見える。牙は三列にも連なっていた。

「倒してやる。いいな」

「はいそうですねかと倒されるとでも思っているのか？」  
「抵抗するつもりか」

今の牧村の言葉に対して問うてきたのだった。

「この半漁人に対して」

「抵抗！？俺がか」

「そうではないのか」

「残念だがそれは違う」

そのことははっきりと否定するのだった。

「貴様にとっては残念だろうがな」

「では何だ？」

「話は聞いたと言った筈だ。髑髏天使は抵抗する者ではない」

「ほう」

「闘う者だ」

半漁人の赤い目にも負けない程の強い光をその目から放っていた。

そのうえでの言葉である。

「貴様等と闘い倒す者だ。それは勘違いするな」

「では歯向かうというのだな」

「言った筈だ。貴様を倒すと」

「抵抗しなければ苦しむこともないというのにな」

また一歩出て来た。

「愚かな奴だ」

「俺が愚かかどうかは闘って見極めるのだな」

半漁人に応えながら念じる。両手を拳にして胸の前でクロスさせ

る。この動きは己に気合を入れる為であったがそれにより身体が光に包まれたのだった。

「行くぞ………！」

この言葉と共に光の中で姿が変わっていく。服は鎧となり顔は髑髏となっていく。あの髑髏天使の姿になったのであった。

その姿になりまずは右手を大きく開く。そのうえで握り締める。

その間顔はずっと半漁人から離してはいなかった。

「半漁人だな」

「そうだ」

半漁人は己の名前を認めたのだった。牧村、いや髑髏天使の問いにこくりと頷くことによつて。

「人や他の同胞達は俺をそう呼ぶな」

「同胞か」

「貴様等が魔物と呼んでいる存在だ」

博士や彼の周りの妖怪達の弁でもある。

## 第二話 天使その十八

「我々はな。そうなのだ」

「それは聞いていたがな」

「そうか。では話が早いな」

「俺を倒すつもりか」

「それは最初から言っている筈だ」

言葉とその目の殺気がさらに強く鋭いものになるのだった。

「倒す。覚悟するのだな」

「ではその言葉完全に貴様に帰そう」

髑髏天使もまたただやられるつもりは毛頭なかった。彼も闘気をその身体に纏わせ構えを解くことはない。今また闘いがはじまろうとしていた。

先に仕掛けたのは半漁人だった。爪で引き裂かんと右手を出してきた。

「裂けるっ!」

「ふん!」

しかし髑髏天使はその右手の手首を受け取りそこから後ろに投げるのだった。丁度背負い投げの形になって投げたのだった。

「むっ!?!」

「迂闊に攻撃を繰り返さないことだ」

投げられながら声をあげる半漁人に対して言うのだった。

「さもなければ。こうなる」

「こうなるというのか」

「そうだ。そしてだ」

まずは地面に叩き付ける。下は緑の雑草が生えそれがクッションにもなるがそれでもダメージは確実に与えられることが期待された。半漁人は背中から叩き付けられた。髑髏天使はそれで攻撃を終わらせずさらにその腹に上から蹴りを入れようとす。しかし今度は

彼が反撃を受ける番だった。

「くっ！」

「甘いな」

右足で蹴りを入れた。しかしそれは半漁人の両手で防がれてしまっていた。防がれただけではなくその足首も掴まれてしまっていた。

「その程度で我を倒すつもりか」

「その程度だと」

「そうだ」

半漁人は言う。

「この程度ではな。倒せん」

「うっ……」

「だが投げられた恨みは晴らす」

そしてこうも言ってきた。

「しかも。我の得意とする場所だな」

「得意とする場所!？」

髑髏天使は今の言葉だけで全てを察した。

「まさかそれは」

「そのまさかよ」

この言葉と共に髑髏天使を投げたのだった。それと共に起き上がる。

髑髏天使は後ろに投げられた。後ろは河だ。彼は河の中に投げ込まれてしまったのだ。

「しまった、水か」

「これでよし」

半漁人は髑髏天使が落ちた河を見下ろしつつ満足気に笑っていた。「そしてだ」

そのうえで自分も河に飛び込む。闘いは水中戦へと移るのだった。髑髏天使は水の中でも至って冷静だった。その動きは水中であるうとも陸上にいる時とほぼ変わりがなかったのであった。彼はこのことにまず驚いていた。



「水中だというのにこの動きか」

身軽だった。水の中特有のあの不自由さはない。それがどうして  
かもすぐに察することができていた。

「そうか。これも力だな」

「髑髏天使。やはりその名だけはあるな」

「やはり貴様もそうか」

「我は半漁人」

この言葉が答えだった。

「水の中でこそその真価を発揮する」

「そうだったな」

彼のその言葉に納得する髑髏天使であった。

「貴様は魚の力を持つ魔物。ならば」

「では貴様の運命もわかるな」

半漁人は髑髏天使に進み間合いを詰めつつまた言ってきた。

「その確実な死が」

「生憎だがそれはわからん」

「何っ!？」

「人の身体である時ならいざ知らずだ」

半漁人が突き出した右の突きを身体を左に捻ってかわしつつ述べた。

「この身体なら。髑髏天使の身体なら」

「今のをかわすか」

「何の問題もない」

今度は彼の番だった。後ろに回り込む。

「そしてだ」

「むっっ!？」

「水中でも効果のある技はある」

答えながら半漁人の首に手を回すのだった。プロレスで言うスリ  
ーパーホールドのポジションであった。

「こっついう技がな。このまま」

「絞め殺すつもりか」

「そうだ」

実際に彼の首を締め付けながらの言葉であった。

「死ね。貴様がな」

髑髏天使は言う。

「このまま。絞め殺してやる」

「生憎だがそうなるつもりはない」

今の半漁人の返答は決して負け惜しみでも強がりでもなかった。

## 第二話 天使その十九

「貴様には悪いがな」

「負け惜しみか」

「魔物は負け惜しみを言うことはない」

だが彼はこう反論するのだった。

「貴様にとっては悪いだろうがな」

「そうか」

髑髏天使にとってはそれを聞いても動じるところのないことだった。

「ならそれでいい」

「それ以上は聞かないのか」

「俺には興味のないことだ」

こつとも答える髑髏天使だった。

「貴様がそう言うのならな」

「そうか。それではだ」

半漁人の身体に力が入った。そして。

「外させてもらうぞ」

「むっ!？」

髑髏天使の手をその爪で突き刺すのだった。それによりそれまで己の首を絞めていたその手の力を弱めさせたのであった。これが彼の狙いであった。

その瞬間に彼は髑髏天使から離れた。そうして再び間合いを取ったのだった。

「これでよし」

「逃げたか」

「何度も言うが我は半漁人だ」

このことをまた髑髏天使に言ってみせた。

「水の中での戦いならば誰にも敗れはしない」

「水の中ならか」  
「貴様は髑髏天使だ」  
髑髏天使であるということもまた言ってみせた。  
「水の中での戦いは少なくとも我に劣る筈だ」  
「貴様よりもか」  
「思ったよりもやるようだがな」  
それは認める半漁人であった。  
「だがそれでもだ」  
「貴様よりは劣るといふのか」  
「そろそろ疲れが出て来ている筈だ」  
今の半漁人の目は冷静なものになっていた。クールですらある。  
「違うか」  
「違うがな」  
「強がりはいい」  
今度は言葉に冷徹な読みが入ってきていた。  
「動きが微かに遅くなってきたからな」  
「ほう」  
「それが何よりの証拠だ。しかし我はだ」  
「疲れていないというのだな」  
「その通り。今こそ貴様を倒す時」  
その言葉と共に姿を消すのだった。  
「消えた」  
「安心しろ。我は誇り高き半漁人」  
声だけが水中に聞こえる。  
「苦しませることはないからな」  
「一撃ということか」  
「心臓だ」  
また半漁人の声だけが聞こえてくる。  
「貴様の心臓を一撃で貫く。覚悟しろ」  
「心臓か」

髑髏天使は今の半漁人の言葉を聞いて髑髏の奥の目をピクリと動かした。その目は人のものだが異形の顔がそれをそうではないかのように見せている。

「そうだ、心臓だ」

半漁人はまた言ってきた。

「貴様の心臓を貫いてやる。それで終わりだ」

「そうか、心臓か」

髑髏天使はその言葉にまた反応するのだった。

「俺の心臓を貫くのか」

「その通りだ。それではだ」

相変わらず姿は見えない。どうやら髑髏天使の死角に入りそこから語っているようだ。方角がわからないのは彼が常に動いているのと水中なので音の反響が地上のそれとは違うせいだった。

「死ね」

何かが動いた。水中での動きが何処かではじまるのがわかった。しかし今の髑髏天使の感覚では水中での動きまではわからなかった。半漁人もそれを知っていてあえて素早く動いたのがわかるのだった。しかし髑髏天使は動かない。少なくとも自分からは。ただその場所に留まっている。右手に剣を持ったまま。微動だにしないのだった。

そして。身体を右に捻った。そのまま身体を反転させて右手の剣を突き出した。するとそこには半漁人がいたのだった。

半漁人の胸を貫く。忽ちのうちにその緑色の血が沸き起こる。水中なのでまるで花が咲くように水の中で沸き起こったのだった。それは禍々しい色をした緑色の花だった。

「ば、馬鹿な」

「やはりそこだったか」

髑髏天使は剣が胸に突き刺さり呆然としている半漁人に対して冷徹な声で語った。

「来るとわかっていた」

「わかつていただと」

「心臓だと言ったな」

剣を引き抜きつつまた彼に述べた。

「貴様は今」

「言った」

「それでわかったのだ。貴様がどう来るかな」

「我の言葉でか」

「そうだ。一撃で倒すと言った」

このことも彼に聞かせる。

## 第二話 天使その二十

「それならばどう来るか。前か後ろからだと思った」

「何故後ろだとわかった？それで」

「貴様は俺を侮ってはいなかった。だからだ」

「それもわかっていたか」

「貴様の口調はそれだった。俺を敵視こそすれ侮っていたものではなかった」

このことを見抜いたうえで反転した攻撃だったのだ。それを見抜いた髑髏天使の鋭さこそ見事と言うべきものであった。

「だからだ。正面から来るのではなく後ろからだとな」

「そういうことだったか」

「一瞬遅れていれば死んだのは俺だった」

緑の血が彼の周りにまで漂ってきた。彼はそれを見つつままた半漁人に言うのだった。

「危ないところだった」

「我を褒めるつもりか」

「いや」

「違うというのか」

「俺もまた貴様を侮っていないだけだ」

これが髑髏天使の返答だった。

「ただそれだけだ」

「そうか。貴様はそうなのだな」

「何かおかしなところでもあるか？」

「いや」

そうではない。これもはっきりと髑髏天使に述べるのだった。

「見事だ。戦士に相応しい」

「俺が戦士か」

「そうだ、戦士だ」

半漁人はまた彼を天使ではなく戦士だと言ってみせるのだった。あえてという感じで。

「貴様はな。その天使に最後に言っておこう」

「末期の言葉か」

「そうだ。貴様はこれから次々に狙われる」

緑の己の血の中で語る。

「我だけでなくな。そして」

「そして？」

「貴様を狙わずともただ殺戮だけを望む者もいる」

「魔物だからか」

「説明は不要だということだな」

「それはおおよそわかる」

髑髏天使も既に察していることだった。魔物の本質というものが人のそれとは全く違ったものであるということ。ただ人を殺し喰らう存在のことはもう聞いているのだ。昔話で。

「だからそれはいい」

「そうか。その連中とも闘うことになるだろう」

「俺が望まずともか」

「貴様が」

死の間際の為言葉が少し止まった。

「望むと望まずに関わらずだ。それが髑髏天使の運命だからだ」

「そうか」

「我が言うことはここまでだ」

これが最後の言葉であった。

「ではな、さらばだ戦士よ」

そして紅蓮の炎となって姿を消すのだった。水中にその人型の紅い炎が沸き起こる。そうして彼は消えたのだった。それを見届けた髑髏天使はその炎が消えると背を向け岸边にあがった。岸边に戻る。岸辺に帰る。まず本来の姿、人間である牧村来期の姿になるのであった。

「闘うのが運命というのなら」



振り返って河を見つつ呟く。先程まで戦場だったその河を。

「闘う。何時までもな」

こう言い残してサイドカーに乗り自宅に帰るのだった。闘いが闘いを呼びそれが彼の決意をさらに固いものにさせていくのであった。

第二話 完

2008・8・30

### 第三話 日々その一

#### 髑髏天使

#### 第三話 日々

牧村は自宅にいた。自宅のリビングでテーブルに座り茶と菓子を楽しんでいた。見ればそれは玄米茶と和菓子であった。完全に和風である。

その彼の向かい側に座る黒く長い髪に落ち着いた目に涼しげな顔を持つ美しい顔立ちの少女が声をかけてきた。服は上がブイネツクのセーターとブラウス、下がクリーム色のミニスカートだった。ハイソックスは白でそれが彼女の見事な脚をさらに際立たせていた。

「ねえお兄ちゃん」

彼女はまず牧村にこう声をかけてきた。

「何してるの？」

「菓子を食っている」

俯いてその菓子を食べながら答える。柿を寒天で包んだものだ。

「ただそれだけだ」

「相変わらず無愛想ね」

彼女はそんな彼の応対を見て口を尖らせるのだった。

「何よ、それ」

「何だもない」

やはり態度は素っ気無い。

「見ればわかるだろう。本当に食っているだけだ」

「そうじゃないの。悩みでもあるの？」

少女はこんな彼の応対を前にしても態度を変えない。口を尖らせて聞き返すのだった。

「最近。おかしいわよ」

「おかしいか。俺が」

「そうよ。何か変よ」

羊羹を食べながら兄に述べる。

「いつも以上に黙って。身体の調子でも悪いの？」

「身体の調子が悪ければこんなものを食いはしない」

見れば今度は饅頭を食べていた。田舎饅頭だ。

「それも次から次にな」

「それはその通りだけれど」

「それならそれで終わりだ」

話をここで強引に終わらせようとしてきた。

「いいな。俺は」

「何処かに行くの？」

立ち上がった兄に対して問う。

「大学？それとも遊びに？」

「大学は今日は休みだ」

馬鹿にするでもないやはりクール、いや無愛想と言ってもいい言

葉であつた。

「なら行く必要はない」

「じゃあ何処なの？駅前？」

「そうだな。そこにするか」

少女の言葉に応えるようにして述べたのだった。

「少しな。行って来る」

「行ってらっしゃい」

「何か欲しいものはあるか」

不意にといつた感じで少女に尋ねた。

「あれば言え。買って来てやる」

「別に何も」

しかし彼女は首を捻ってはっきりとしない返事をするだけだった。

「ないわね」

「そうか。じゃあいいな」

「駅前よね」

「ああ」

「まあいいか」

何か言いそうになったがそれを自分で止めてしまっていた。

「別に。今はね」

「！？何か欲しいのか？」

「ブローチ買おうかしらって思ってたの」

やはり少し戸惑っていたがこう兄に答えたのだった。

「それで買って来てもらおうかしらって思ったけれど」

「お金は御前が出すんだな」

「それは当然よ」

そういうことは決して忘れない未久であった。

「お兄ちゃんに出してもらおうなんて考えていないわ」

「そうか」

「そうよ。それで頼もうかしらって思ったけれど」

「いいんだな」

「ええ、別にね」

今度ははっきりと答えた未久だった。

### 第三話 日々その二

「楽しんできて。私は家にいるから」

「外には出ないのか」

「今買って来たゲームしてるのよ」

「にこりと笑って兄に述べたのだった。」

「だから。別にね」

「そうか。ならいいが」

「そういえばお兄ちゃん最近ゲームしてる？」

「一応はな」

静かに妹に答える。

「やってはいる」

「そうなの。だったらいいけれど」

「しかし御前がやるようなゲームはしないな」

「まあそれは当然ね」

こう言われても別に驚くことはしない妹だった。

「だってお兄ちゃん男じゃない」

「ああ」

「私は女の子、しかも中学生」

自分のところはかなり強調していた。

「違いがあるのも当然よ。同じだったらかえって怖いわ」

「それもそうだ」

「とにかく。まあ楽しんできて」

また兄に告げた。

「お母さんと二人で家にいるからね」

「戸締りは忘れるなよ」

「安心して、ちゃんと部屋に金属バット置いてあるから」

これは冗談ではない。本当のことだ。母親が何かあった時にとわざわざその金属バットを買って彼女に与えたのである。母親も常に

そういうものを持っていたりする。

「大丈夫よ」

「おかしい奴が来ても一撃か」

「そんなの来たら本当に容赦しないから」

随分と気が強い一面があるようである。

「安心してね」

「わかった。では安心して」

「言ってるっしょい」

こうして彼はサイドカーで街に出た。街に出るとさらに無口になりただサイドカーを走らせるだけだった。周りもこれと言って見ず静かなものだ。その彼は駅前のあるビルの前でサイドカーを止めその中に入るのだった。そこは一軒の喫茶店であった。

「いらっしょい」

「ああ」

「あつ、暫くぶりだね」

口髭を生やした中年の男がカウンターから声をかけてきた。赤いベストに黒い蝶ネクタイの洒落た出で立ちで黒い髪を綺麗にオールバックにしている。その彼が一見するとバーにも似た茶色い木造の店の中で彼に声をかけたのである。気さくな声で。

「昼に来るのは」

「そうだったか」

「そういえば夜もこの数日見なかったね」

「気が乗らなかった」

こう答えつつカウンターに座るのだった。それだけで木の匂いがするようだ。

「だからだ。悪かったな」

「またそれはどうして」

「色々あった」

髑髏天使のことを出すことはなかった。これはあくまで彼自身、そして博士と妖怪達だけしか知らないことだった。それ以上の誰に

も言つつもりはなかったのだ。

「だからだ。済まなかった」

「まあ毎日来て欲しいけれどね」

笑って語るマスターであった。

「仕方ないか。誰にだって事情があるからね」

「そうか」

「そついうものさ。さて」

ここまで話したうえでまた牧村に声をかけてきた。

「いつものやつかな、昼のいつもの」

「ああ、それを頼む」

「ロシアンティーだね」

「そつだ」

一言で答えて頷く。

「それを頼む。いいか」

「いいよ。ジャムはたつぷりだよね」

「それもいつもの通りだ」

こうマスターに述べた。

### 第三話 日々その三

「何もかもいつも通りに頼む」

「わかったよ。しかしあんたも」

「何だ」

「ロシアンティー好きだね」

「気さくに笑って彼に言うのであった。」

「いつもそれだからね」

「美味いからな」

「気さくなマスターに対して彼の言葉は素っ気無いままだった。」

「だからだ。いつもそれにしている」

「そうなのか」

「ああ。それで」

「ここまで話してまたマスターに声をかけた。」

「今日はマスター一人か？」

「ああ、そうだよ」

「にこりと笑って彼に答えてきた。」

「今日はね。三人共出払ってるんだ」

「そうか」

「若奈はね。大学だよ」

「大学？」

「図書館に行ってるんだよ」

「こっぴつに説明する。」

「ちよつとね」

「レポートの課題だな」

「よくわかったね」

「図書館に行くとすれば大抵そうだからな」

「ここでそのロシアンティーが来た。紅茶の横に苺ジャムを入れた小さなカップが置かれている。紅茶の赤とジャムの赤がそれぞれの



赤を見せていた。

「だからだ。わかった」

「そうかい。相変わらず鋭いね」

「別にそうは思わないがな」

紅茶にジャムを入れながら答える。入れるとすぐに銀色のスプーンでかき混ぜる。砂糖は入れずジャムだけで甘さを求めていた。

「俺自身はな」

「そうかい。それはそうと」

「今度は何だ？」

「前に比べてさらにクールになったね」

「クールにか」

右手にカップを手に取る。そのうえで紅茶を口に含む。苺ジャムでの濃厚な甘さと紅茶でのほのかな渋さが混ざり合って口の中で絶妙なハーモニーを奏でている。

「なったよ。それだとうちの若奈も放っておかないよ」

「そうか」

「そうかってねえ。そういうところもさらに強くなってるね」

「別に強くしているつもりは自分ではないがな」

「まあそれだとそれでいいがね」

マスターの方で話を打ち切ってきた。そのうえで話を変える。

「それでだよ」

「ああ。今度は」

「どうだい、今度の紅茶」

今度尋ねてきたのは紅茶についてであった。

「美味いかい？どうだい？」

「まずければ飲まない」

一旦カップを口から放して述べたのだった。カップは白い陶器で青い模様が欧州、それもオーストリアの趣きを見せていた。

「それだけだ」

「じゃあ美味いんだな」

「ああ。ジャムを変えたのか？」  
「いや、頼んだのは同じ店でだよ」  
にこにここと笑いながら牧村に述べる。ダンディなその顔が一気に人懐っこいものになっていた。  
「造ってる人もね。同じなんだよ」  
「ではどうして味がこんなに」  
「こっちの紅茶の淹れ方を変えたんだよ」  
「紅茶をか」  
「そう、紅茶をね」  
そこをまた言うのであった。  
「変えたんだよ。そうしたらこうなったんだ」  
「紅茶の葉は」  
「同じさ」  
答えるその顔はやはり笑っていた。  
「では水か」  
「いや、水も同じだよ」  
それもまた同じだというのであった。笑顔はそのままに。  
「それもね」  
「では一体どうやって」  
「工夫だよ」  
にこりとしたままの言葉が続いていた。  
「淹れ方全体を変えてみたんだよ」  
「茶も水もそのままか」  
「勿論容器もね」  
それまで同じだという。

### 第三話 日々その四

「全部同じだよ」

「それでも工夫一つでか」

「変わるんだよ、これが」

「そういうものか」

「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」

胸を張って述べてみせたのだった。

「そういうものだよ」

「ふむ」

「値段はそのままだ」

これは客にとっていい意見であった。

「どうだい、いい話だろ」

「そうだな。しかしだ」

「何だい？」

「ロシアンティーだけじゃない話だな」

牧村が今度言うのはこのことだった。また茶を口に入れつつ言う。

「茶の淹れ方になると」

「ああ、基本さ」

基本であるということも語られた。

「基本こそが一番大事だからな、やっぱり」

「そうか、基本か」

「そうだよ。バイクだって何だってそうじゃないか」

マスターもまた彼がバイクに乗っていることは知っていた。そしてそのバイクがサイドカーであることも知っていたのである。とにかく目立つからだ。

「何だってね。紅茶だってね」

「そう言われるとよくわかるな」

「そうだよ。その点あんたは」

「俺は？」

「最近それを守っているかな」

「楽しげに笑って彼に問うのであった。」

「基本を忘れない。これをね」

「いや、それは」

「こう問われて顔を少し曇らせた牧村であった。」

「そういえば。忘れていたな」

「忘れていたのかい」

「色々あつたからな」

「また紅茶を含みつつ述べた。」

「そのせいにしては駄目なのだが。やはり」

「忘れていたんだね」

「何かあるとすぐに忘れるな」

「まだ飲んでいる。茶とジャムの二つの味を楽しみ続けている。」

「そういうことはな」

「忘れたら駄目だよ、やっぱり」

「笑いながら彼に述べるマスターだった。」

「土台がないと何にもならないからね」

「土台か」

「基本はすなわち土台だよ」

「こう例えてきたのであった。」

「土台がないと。何にもならないさ」

「そういうものか」

「今何かしているのかい？」

「不意に牧村に尋ねてきた。」

「今は。どうだい？」

「しなければならなくなつた」

「髑髏天使のことは隠す。しかしそれでも隠して話すのだった。」

「そういうところだ」

「趣味じゃなくて義務かい」

「しなければならなくなったことを義務と呼ぶのならそうなる」「  
これが牧村の返答であった。

「必然的にな」

「ふうん、あんたも結構とあるんだね」

「何かない人間もいない」

哲学的な言葉になっていた。彼はその哲学の中で語っていた。

### 第三話 日々その五

「誰だって大なり小なりある」

「まあそうだけれどね」

「俺も」

彼も言った。

「俺もそうなる。やはりな」

「じゃあその義務をやり遂げる為にもね」

「基本をか」

「やっぱり基本があるだろ」

牧村に対して問うてきた。

「それをしっかりやっていくんだ。それがいいよ」

「わかった。ではやってみる」

「そうするといいさ。さて」

「むっ!?!」

「もう一杯どうだい?」

ここで彼に勧めてきたのであった。

「よかつたらさ」

「もう一杯か」

「ああ、これはサービスだよ」

にこりと笑っている。そしてその笑みは他ならぬ彼に向けられて  
いるものであった。

「よかつたらさ。どうだい?」

「ロシアンティーか」

「お望みとあらばそれにするよ」

「そうだな」

ここまで話を聞いて考えたうえで述べる牧村であった。

「では貰いたい」

「わかったよ。ところでさ」

「今度は一体」

「うちの若奈だけれど」

その紅茶を用意しながら話題を変えてきた。

「大学じゃどうだい？元氣かい？」

「落ち込んだところは見ていない」

その紅茶を受け取りつつ述べた言葉だった。

「そして悪い噂も聞かない」

「じゃあ安心していいってことかい」

「特に悪い噂は聞かないな」

「それはいいことだね」

娘のこうした話を聞いて喜ばない親はいない。彼もまたその顔を綻ばせている。

「おかげで気が楽になったよ。女房にも伝えておくよ」

「そういえば今日は奥さんは」

「ちよつと勉強に行ったよ」

「勉強!？」

「だから。基礎だよ」

またこの話になった。

「基礎を学ぶ為にちよつと出ているのさ」

「お茶のか」

「いや、お菓子だよ」

話はこのことだった。

「お菓子のね。勉強に出ているってわけさ」

「食べ歩きか」

「ああ、そうだよ」

牧村のその言葉にさらに笑うマスターだった。

「わかるかい、やっぱり」

「奥さんそうしたものを作るの上手いからな」

牧村はここで今は自分がお茶だけを頼んでそうした甘いものを頼んでいないことに気付いた。実は最初から今はお茶だけにしておく

つもりではあった。

「それにはこうした積み重ねがあったのか」

「何でも積み重ねだよ」

マスターの笑顔の言葉は続く。

「修行ってやつだね」

「修行か。それを言うとかかな」

「柔道一直線や空手バカ一代になるか」

「また随分と古いな」

そのおかわりのロシアンティーを飲みつつマスターに言葉を返す。

「俺の生まれる前の漫画だった筈だが」

「知ってるみたいだね、それでも」

「一応はな」

ここでまた一口飲む。

「知ってはいる。面白いそうだが」

「まあそこは人それぞれってやつだね。わしは面白いと思うよ」

「一度読んでみるか」

そこまで聞いてぼつりと呟いた。

「そうした漫画も」

「読んでみるといいさ。とにかくだね」

「毎日修行か」

「勉強と言い替えてもいいね」

今マスターは陶器のコップを磨いている。その磨き方もかなり手馴れたものであった。おそらくそこに至るまでに相当な年季があったことを思わせる。



### 第三話 日々その六

「そうすると少しずつだが違ってくるさ」

「そういうものか」

「お兄さんもそうじゃないのかい？」

カップを磨きながら牧村に問うてきたのであった。

「何かしてるだろ、毎日」

「いや、別に」

この問いには何の感慨も意志も見せずに答えた。

「何もないな」

「けれどやらなければいけないことができたんだろう？」

「ああ」

それは否定しない。肯定すると共にまたあのことを思い出すのだった。髑髏天使としての闘いのことを。そのことを思い出すのであった。

「だったらそれに関するのを毎日続ければいいさ」

「毎日か」

「そうすれば全然違うからね」

「そういうものだな」

その二杯目の紅茶も残り少なくなっていた。もうこれで終わるつもりだった。

「しかし。それでも」

「それでも？」

「何をすべきか」

それが今一つわからないのだった。何しろ闘いというものを経験したことは今までなかったからだ。それで何をすればいいのか。わかる筈もなかった。

「それすらな」

「まあやってるうちに見つかるさ」

「見つかるか」

「見つかるものだ。やっていたらな」  
マスターは語り続ける。

「そのうち見つかる。そういうものだよ」

「正直なところそうなのかと思う」

これは牧村の本音の言葉だった。

「見つければいいがな」

「大丈夫だって。それは」

「ああ。さて」

ここで飲み終わった。それを自分で確認してからまたマスターに声をかけた。

「お勘定だな」

「一杯分がいいよ」

「いいのか」

「二杯目はサービスマ」

相変わらずコップを拭きながらの言葉だった。笑顔も忘れてはいない。

「だからさ。いいんだよ」

「ではそれでいいな」

「ああ、お金はそこに置いてくれたらいいからさ」

「わかった」

マスターの言葉に頷き懐から財布を取り出した。そこから小銭を出してそれをカップの横に置いたのだった。そのうえで席を立った。

「それではな」

「じゃあまた今度な」

「今度はデザートも頼むか」

「クレープかい？それともケーキかい？」

「クレープだな」

声は微かに笑った感じになっていたが表情は変わってはいない。  
「それを頼みたいな」

「クレープかい」

「それも食べてきていると思うが」

「勿論だよ。クレープもね」

ここでマスターは少し蘊蓄に入った。

「皮が問題なんだよ。美味しい皮にするには一朝一夕にはできないんだよ」

「そこでまた基本か」

「そういうことさ。それじゃあね」

「ああ、またな」

最後にこう述べて店を出た。店を出てそのまま家に帰りこの日は終わった。次の日は山の方に行っていた。学校が終わってただのドライブであった。

二車線の道路の左右は見渡す限りの森であった。緑の木々が連なっている。その木々の間を走っているとやがて目の前に。何かが立っているのが見えた。彼はそれを見てあることを察した。

「出て来たな」

「髑髏天使だな」

見れば外見は普通の男だ。若い背の高い男である。

「そうだな」

「だと答えたらどうする」

サイドカーを止めた彼はそれから降りながらこう男に言葉を返した。

「どうするつもりだ」

「決まっている。食らってやる」

これが男の返答だった。

### 第三話 日々その七

「今ここでな。覚悟するのだ」

「覚悟しろと言われてさうですかと覚悟するつもりはない」

男と対峙しつつ言葉を返す。

「特に魔物に対してはな」

「俺は蛇男」

言いつつその顔を変えていく。今までごく普通の男の顔だったそれがまず目が蛇のものになり顔の形が歪に歪んでいく。口が突き出てそれが細長くなり遂には赤く長い舌まで出してきた。完全に蛇の顔になったのであった。手も首も顔も鱗に覆われ頭の髪の毛は一本もなくなっている。

「貴様等の言う魔物の一人だ」

「俺を倒しに来たのか」

「今から街に向かうつもりだった」

こつ彼に答えてきた。

「今からな。だがここで貴様に会うとは思わなかった」

「奇遇だな。俺もさうだ」

牧村はまだ変身していない。彼本来の姿で蛇男に言葉を返すのだつた。

「腐れ縁というやつか」

「髑髏天使は我等を呼び寄せる」

「奇遇ではないのか」

「さうだ。貴様は我等を倒す存在とされている」

このことを彼等自身も知っているのであった。五十年に一度この世に現われ悪しき異形の者達を倒す髑髏天使の存在を。知っているのである。

「だからだ。ここで会ったのも偶然ではない」

「俺はこうして行く先々で貴様等と闘うことになるということか」

「その通りだ。だがその運命は今日この場で終わる」

牧村に対して言ってきた。

「貴様が俺に倒されてな」

「その言葉は現実にはなることはない」

牧村は蛇男の今の言葉を冷然と返すのだった。

「貴様にとつては残念だがな」

「俺を倒すというのか」

「如何にも」

前に出ずその場でまず両手を拳にした。

「貴様等を倒すのが髑髏天使の宿命なら」

その拳を胸の前に出しそして。

打ち合わせた。するとそこから白い光が放たれ彼を包み込んだ。

光が消えたその時そこにいたのは白い髑髏の顔と白銀の鎧に全身を包んだ異形の戦士がいた。髑髏天使が。

「行くぞ」

変身した彼はこの言葉と共に右手を一旦開き握り締めた。戦闘開始だった。

まずは髑髏天使が動いた。その右手に剣を出し右斜め上から一閃させたのだった。

「剣か」

蛇男はその剣を見て述べた。

「いい剣だな」

「貴様等を倒す剣だ」

髑髏天使はこう蛇男に言葉を返した。

「覚悟するのだな。これで」

「確かにいい剣だ」

蛇男は剣を見たままた同じ言葉を発した。

「実にな」

「ただ感想を言っているだけではあるまい」

「如何にも」

蛇の口の両端を吊り上げさせて応えてみせてきた。

「それだけで言うことはない」

「では何を考えている」

「簡単なことだ」

蛇男は言いながら己の右腕を大きく後ろに、下手に振った。すると彼の右手に蛇が姿を現わした。数匹の蛇を束ねた鞭であった。

「蛇!？」

「ただの蛇ではない」

蛇男は答える。

「この蛇男の分身だ。俺の意識で自在に動く蛇達だ」

「意識を持った鞭か」

「そうとも言つう。そして」

「そして？」

「貴様を倒す鞭だ」

こつ言いながらその鞭を下から上へ、髑髏天使の剣と対する動きで動かしてきた。剣と鞭が激しくぶつかり合った、

### 第三話 日々その八

この勝負は蛇男の勝利だった。髑髏天使の剣は弾き返された。かろうじて手放すことはなかったがそれでも姿勢を大きく崩すことになってしまった。

「くっ……」

「剣はいい」

またこのことを髑髏天使に告げる。

「しかしだ」

「しかし。何だ」

「剣の腕はまだ隙があるな」

今度の言葉はこれであった。

「筋もいいのだな」

「俺が未熟だというのか」

「少なくとも俺の鞭には勝てはしない」

彼が冷然とした言葉を放つ番であった。

「今の腕ではな」

「俺が勝てないというのか」

「そうだ」

はつきりと言い切ってみせてきたのであった。

「今の腕ではな」

「俺は髑髏天使だ」

このことを述べて言い返す。魔物を倒す髑髏天使、彼の中にその自覚が芽生えようとしていたのであった。だからこそその言葉だった。「その俺が。敗れるというのか」

「今のままではな」

笑ってはいなかったし嘲笑もなかった。ただ事実のみを述べた言葉であったがだからこそ髑髏天使の心にも響くものがあった。はつきりと。

「俺には勝てはしない」

「まだ言うか」

怒りと共にまた剣を振るう。しかしそれも蛇の鞭の前に防がれるだけだった。

「くっ……」

「無駄だ」

また髑髏天使に告げる。

「その程度ではな。何度も言うが俺には勝てない」

「いや、勝つ」

言葉は強いものだった。言葉は。

「俺は髑髏天使だ。だからこそ」

「勝つというのだな」

「そうだ、勝つ」

言いながらまたしても剣を振るう。何度も何度も防がれようとも。しかしそれでも剣を振るう。何故か蛇男は自分から攻撃を浴びせようとはしないのだった。

「何があってもな」

「そうか、勝つというのか」

「貴様にな」

言いながら剣を縦横に振るう。

「俺は……勝つのだ」

「わかった」

彼のここまでの言葉を聞いたからであろうか。蛇男は急に動きを止めるのだった。そうしてずっと後ろに下がり間合いを離してきた。音もなく。

「ではまた会おう」

「！？どういっつもりだ」

「今は貴様を倒す時ではないということだ」

静かにこう語る。

「今はな」



「情けをかけたというのか？」

「それもまた違う」

今の髑髏天使の言葉もまた否定するのであった。

「それもまたな」

「違うというのか。一体」

「また会おうと言った筈だ」

また彼に言う。

「またな。会おう」

「だからどうしてだというのだ」

いぶかしむ顔で蛇男に対して問う。表情は髑髏なのでわかりはしない。しかしそれは声に出していた。髑髏天使としてでだけではなく、牧村来期の声にもなっていた。

「俺を今ここで倒さないというのは」

「これが俺の考えだ」

「考えだと」

「敵を倒すがその敵を選ぶのだ」

これが彼の考えであるというのだ。

「強い敵をな。倒すのが好きなのだ」

「強い敵をか」

「はつきりと言っておこう」

厳然とした言葉になってきていた。

「今の貴様では俺の相手にはならない」

「まだ言うか、この俺を」

「己を知ることと実力のうちだと言っておこう」

怒りを覚え前に出ようとしてきた彼に対してまた言うのだった。

「それだけだ。ではな」

「また会うのだな」

「そうだ」

姿を消しつつまた告げたのだった。

「またここに来るのだ。強くなったその時にな」

「わかった。ではまた来る」

蛇男を見据えながら語る。

「貴様を倒しにな」

「そうだ。また来るのだ」

姿は消したがそれでも声は聞こえていた。

「またな。その時にこそ強くなって来るのだ」

「わかったと言っておこう」

その場に立つたまま姿を消した蛇男に告げる。

「今はな」

蛇男の気配は完全に消え髑髏天使だけが残った。彼はただ一人そこに立ち尽くしていた。牧村に戻った時その顔には苦々しいものが満ちていた。その顔で誰もいない緑に囲まれたハイウェイに立っていたのだった。その苦い顔のまま。

### 第三話 日々その九

博士の研究室で。彼は憮然とした顔で部屋の端にいた。そこに椅子を置いて座り静かに紅茶を飲んでいたのであった。気配は剣呑なものだった。

「いつも不機嫌な人だけねどね」

「今日はまた特に」

妖怪達はそんな彼を見てひそひそと囁き合つ。

「どうしたのかな」

「二日酔いとか？」

「ああ、それは違つたらうね」

自分達でそれは否定する。

「多分。何かあつたんだよ」

「何か？」

「そう、何かだよ」

こつも言つたのだつた。

「そうじゃなきゃあそこまで無愛想にならないでしょ」

「じゃあ何？」

「何かあつたの？」

今度の話題はこのことであつた。

「何かあつたらあなるのかな」

「さあ」

「さあつて」

「聞ける？」

頭の禿げた老人に似た小さい妖怪が皆に問う。ひょうすべである。

「今のあの人に。聞けないでしょ」

「まあ聞けつて言われたら」

「困るねえ、確かに」

「普段から怖い雰囲気あるのに」

彼は妖怪から見ても怖いのであった。だから誤解する人も多いのだがそれでもそんなことを気にするような人間でもない。

「それが今は余計に強くなってるから」

「部屋にいるだけでもねえ」

「迫力あるよ」

「敗れたか」

だがここで誰かが牧村に声をかけたのであった。

「そうじゃな。敗れたな」

「わかるのか」

「わからない筈もない」

彼に問うたのは博士であった。自分の席に座りつつ彼に顔を向け  
て声をかけたのである。これには周りの妖怪達も驚きを隠せない。

「博士勇気あり過ぎ」

「怖くないの？」

「別のう」

こう答えながら机の上にあるお茶を飲む。見れば玄米茶である。

「それはないな」

「ないんだ」

「僕達物凄く怖いんだけど」

「御主等はまた怖がり過ぎじゃ」

しかし博士はそんな彼等に笑ってこう述べる。

「何も怖いことはないぞ」

「そう？怖いよね」

「話し掛けられないよ」

妖怪達は博士の言葉を聞いて顔を見合わせて言い合う。

「普段からあれだし」

「やっぱり博士って凄いね」

「別に取りつて食われるわけではあるまい」

博士の言い分はこうであった。

「それでどうして怖いのです。全然こわくないぞ」

「言われてみればそうかな」

「まあそうだね」

妖怪達は博士の言葉を受けてまた顔を見合わせる。

「それを考えたら話し掛けられるかも」

「それでも滅茶苦茶怖いけれど」

「だから怖くない。それでじゃ」

博士は妖怪達をよそにまた牧村に声をかける。牧村もまたそれに応えて顔を向ける。

「敗れて。どうするのじゃ」

「どうするかか」

「そうじゃ。敗れても生きておる」

牧村に対してこのことを告げるのだった。

「だったらまた戦うんじゃろ？」

「それが髑髏天使の宿命だな」

「如何にも」

すぐに牧村に対して答える。

「言ってしまうばな。その通りじゃよ」

「ではやることは決まっている」

その無愛想な様子で博士に答える。

「闘う。だが」

「だが？」

「どうやら俺はただ髑髏天使であるだけらしい」

「変なこと言い出したね」

「今度は言葉までおかしいね」

妖怪達はまたしても顔を見合わせる事となった。そうして彼の言葉について話すのだった。

### 第三話 日々その十

「髑髏天使だけだなんて」

「言ってみれば当然じゃないの？」

「まだ本当の強さを身に着けてはいない」

それでも牧村は述べる。妖怪達の話をもよそに。博士に対して語るのだった。

「まだな。どうすればいいか」

「髑髏天使は今何を使っておる？」

「何を？」

「うむ。また文献を調べていての」

牧村の顔を見つつ文献のことを述べる。

「わかったのじゃ。髑髏天使は武器を自由に出して使える」

「それが」

「それかというともう使っておるのじゃな」

「剣だ」

剣のことを博士に話した。

「今は剣を使っている。そしてその剣で敗れた」

「そうか。剣か」

「俺の剣の腕はまだ未熟らしい」

暗い顔で博士に述べる。

「まだな。弱い奴は相手にしないとまで言われてな」

「髑髏天使って弱かったの？」

「そんなわけないと思うけれど」

妖怪達は彼の言葉を聞いてまた言い合う。

「だってねえ。悪い魔物を倒すんだから」

「それでどうして弱いんだよ」

「強さは相対的なものじゃ」

「相対的!？」

「そうじゃ。相手が強いとな」  
「うん」

妖怪達は博士の言葉を聞きだした。今は静かに聞いている。先程までの騒がしさはすっかり音を響めている。

「こつちがそれ程でないと弱いじゃろ」

「まあそうなるね」

「確かね」

「そういうことじゃよ」

博士はここでまた妖怪達に対して話す。

「つまりじゃ。彼の強さはそのままで」

「強い奴に当たったってことだね」

「そうだったんだ」

「これでわかったな」

あらためて妖怪達に述べる。

「今の彼が置かれた状況をな」

「うん、そう言われればね」

「そういうことだったんだ」

ここまで言われてやっと納得するのであった。

「じゃあかなりまずいんじゃないの？」

「そんなに強い奴が出て来たら」

「何、まずくはないぞ」

しかし博士は穏やかで涼しい顔を見せていた。

「こんなことは想定の範囲内じゃよ」

「想定範囲内ねえ」

「人間の誰かが言っていた言葉だったっけ」

「まあそうじゃ。じゃが今はそれはどうでもいい」

一旦話を元に戻す。

「とにかくじゃ。負けたのじゃな」

「ああ」

牧村に問うと彼はすぐに答えた。やはり表情はない。

「強くなつてから来いだ。まるで何処かの格闘家みたいなことを言う」

「そうか。そういう奴もおるからの」

「魔物でもか」

「魔物といつても様々じゃよ」

博士はいぶかしむ牧村にこう説明した。

「実際のところはな」

「そうなのか」

「そうなのかって当たり前じゃよ」

ここでは顔を崩して笑つてみせた。

「人間だつて色々じゃろうが」

「まあな」

「そういうことじゃ。だから魔物もな」

「色々なのか」

「そういう強い奴と闘いたいというのかもしれない。残忍なのもある」

ここで残忍という言葉を出すのであった。

「まあ後者のイメージが強いだらうがな」

「それは否定しない」

そして牧村もここでも無愛想だが率直に述べた。

「だから俺は奴等を倒すのだな」

「御主に倒されるのは悪い奴じゃからな」

博士はこう定義付けをすることはする。髑髏天使は人や世界に害をなす異形の存在を倒す為に五十年に一度現われる存在だからだ。

だからこう定義付けをしてその髑髏天使に変身する牧村に対して説明するのである。



### 第三話 日々その十一

「まあそういう奴が多い」

「やはりな」

「しかしじゃ」

だがここでまた話すのだった。

「それだけではないぞ」

「そういう奴もいるのか」

「そういうことじゃ。それでじゃ」

博士はまた彼に言う。

「どうするのじゃ？」

「どうする？」

「そうじゃ。負けたが生きておるな」

「ああ」

これは事実である。確かに彼は生きている。敗れたうえに情けをかけられるという屈辱的なものであったがそれでも生きていることは事実であった。博士に言われるまでもなくこのことははっきりとわかっていた。

「またそ奴と闘うのじゃな」

「そうしなければならぬんだな」

「はつきり言ってしまうばそうじゃ」

博士もそれは否定しない。

「髑髏天使は魔物を倒すものじゃからな」

「そうだな。では」

「それで今は剣を使っておるな」

このこともまたあらためて牧村に問うてきた。

「確か。そうじゃな」

「ああ、今はな」

そして牧村もまた再びこの問いに頷いてみせた。

「使っている。剣をな」

「それではじゃ。その剣で敗れたのなら」  
「そうなら」

「剣の使い方を身に着けるのじゃな」  
静かにこう教えるのであった。

「それをな。結局はそれじゃ」  
「剣をか」

「ほれ、色々あるじゃろうが」  
「こつも牧村に語る。」

「素振りをしたりな。稽古をしたり」  
「素振りか。剣道と同じだな」

「相手がおればなおよい」  
さらに述べる。

「おればな。相手がおるのが最もよい」  
「そうだな。そういうことは何でもな」

牧村自身も博士のその言葉に納得したように頷く。  
「いればいいな」

「そういうことじゃよ。まあ今は身に着けるのじゃ」  
「剣の使い方をか」

「幸いこの大学にはあれじゃろ」  
「あれ？」

「フェシングじゃよ」

笑いながら剣を扱うスポーツの名前を出してきた。言わずと知れた西洋の剣術である。髑髏天使が使っている剣が西洋のものであるからこの場合は妥当であった。

「あれをやってはどうかじゃ？」  
「鍛錬にか」

「丁度いいと思うぞ」  
また彼に述べる。

「剣の使い方を身に着けるにはな。どうかじゃ？」

「そうだな」

そして彼自身も博士のその言葉に頷くのだった。

「言われてみればな。そうだな」

「ではやってみるか」

「この大学のフェシング部はどうだったか」

「さて」

牧村のこの問いには首を捻るだけであった。

「そこまではもう。わしはスポーツの類はからっきしじゃから」

「強さまでは知らないか」

「済まんな。残念じゃが」

「しかし。あることは確かだな」

ここは念を押して問うのだった。

「ならいい。行ってみる」

「うむ、そうするべきじゃな」

「少なくとも型を覚えることができるし練習もできる」

「一人でもするのか？」

「相手がいればそれに越したことはないが一人でも鍛錬はできる」

「いい考えじゃ。それでこそじゃ」

博士はそんな牧村の言葉を肯定してみせた。

「では頑張れよ」

「わかった。では早速な」

応えると共に席を立つ。そうして部屋を出ようとする。

「フェシング部に顔を出して来る」

「もうか。早いな」

「思い立ったらその時だ」

牧村の信条でもある。即断即決もまた彼の持っているものの一つなのだ。

「だからだ。行って来る」

「左様か。今日はもうここに戻らんか」

「それはわからない」

「戻って来たら面白いものがあるぞ」

「面白いもの？」

それを聞いて博士に顔を向ける。扉の前で立ち止まる。

### 第三話 日々その十二

「何だそれは」

「酒じゃよ、酒」

「楽しげな笑みになって牧村に述べる。

「どうじゃ？肴はお好み焼きにたこ焼きにな」

「大阪風か」

「嫌いか？そういうものは」

「いや、好きだ」

しかし答えるその顔は無表情である。

「どちらもな」

「では来るか？」

「しかし今日は止めておく」

だが彼はこう言っただけで断るのだった。

「今日はな」

「それよりも鍛錬か」

「これから暫くは酒を控えた方がよさそうだ」

自分自身でこう判断するのだった。

「どうやらな」

「ふむ。節制か」

「魔物を倒せるのは俺だけだな」

博士に顔を向けて問う。

「そうだな。倒せるのは」

「まあ今わかってる限りではそうじゃ」

白く濃いその顎鬚をしごきながら牧村に答える。

「文献ではな」

「そして倒されればそれで終わりだ」

そのうえでこうも言う牧村であった。

「それでな。倒されれば。そうだな」

「その通りじゃ。死ねば終わりじゃ」

このことに関しては博士の言葉は実に素っ気無いものであった。

「後は生まれ変わるかあの世に行くかじゃな」

「どちらにしろ。今の俺は死ぬか」

「その通り。死にたいか？」

「今はそのつもりはない」

その無表情で答える。

「全くな。まだこの世を楽しむつもりだ」

「だからこそその節制か」

「そうだ。今はな」

「仕方ないのう。まあ髑髏天使になったからにはそれはな」

博士もまたそれで納得するのだった。首を少しだけ捻るがそれもすぐに終えてまた言ってきた。

「まあいい。ではな」

「また今度だな。それにその時も」

「その時も？」

「酒はいい」

ここでも酒は拒むのであった。

「他のものを飲む」

「サイダーとかジュースをか」

「あれなら酔うことはないからな」

「酒は万薬の長なんじゃがのう」

「だが。身体の動きに影響する」

このことも博士に告げる。

「だから。今はいい」

「そうか。そこまで言うのならいいが」

「それでも。お好み焼きやたこ焼きはいいな」

「好きみたいだのう」

「ああ」

今度はそのまま答えた。

「今度一緒にな。食べたいものだ」

「僕達も一緒だけれどいい？」

「食べるのなら」

「構わないが」

妖怪達にも答える。

「それはな。一向にな」

「あれっ、断らないんだ」

「かなり意外」

「偏見はないつもりだ」

牧村はその彼等に対して告げる。

「こちらもな」

「じゃあまあ今度ね」

「楽しくやろうね」

「ああ。今は強くなる」

最後にこう言って部屋から姿を消した。それから朝から晩まで時間があればトレーニングに励みとりわけ剣を手にする彼を見たのだった。

### 第三話 日々その十三

この日もであった。夕食を終えた彼は家の庭に出てフェシングの剣を振ったり突いたりしている。持っているのはサーベル、あの細い剣ではなくそれだった。彼はそれを選んでフェシングをしているのだ。

何百回も振ったり突いたりしている。未久は家の窓のところからそんな兄を見て声をかけてきた。

「頑張ってるね」

「そう見えるか」

「見えないわけではないじゃない」

こう兄に述べた。もう空は漆黒になっており空には白銀の満月が輝いている。牧村はその月明かりを浴びつつ剣を振っているのだ。

「朝はランニングに筋トレに」

「ああ」

「夜はそれでしょ。大学のフェシング部に入ったのよね」

「そうだ」

剣を振りながら妹に答える。やはり神経はそちらに向けている。

「だからだ」

「またどうしてフェシングをはじめたの？」

今度はこのことを兄に尋ねてきた。

「急にだけれど。どうしたのよ」

「やらなければならぬからだ」

振ったり突いたり動作を足捌きと共にしているうちに汗が出て来ていた。ほとぼしるその汗を拭いもせずただひたすら剣を操っている。

「今はな。これを」

「フェシングを？」

「そうだ」



妹に答える。

「それが理由だ」

「何かよくわからない理由ね」

兄の言葉の意味が全くわからず首を横に傾げる。

「やらなければいけないなんて」

「どちらにしろ身体を鍛えておいて損は無い筈だ」

「まあ確かにね」

この言葉には素直に頷くことができた。

「それはその通りよ」

「だからだ。今はこれをやる」

「八条大学っていえば剣道部や柔道部が有名だけれど」

実際にそちらでは全国的に名前を知られている。ただ単に大きいだけの大学ではないのだ。

「フェシングって有名だったかしら」

「有名かどうかはどうでもいい」

妹に対しても返事は素っ気無い。

「だが。今は」

「それをやるのね」

「これでないと駄目だ」

目は必死だった。

「フェシングでないとな」

「しかもその刀じゃないと駄目なのね」

「刀ではない」

未久の今の言葉はすぐにそうではないと教えた。

「これは剣だ」

「どう違うの？」

「日本刀みたいなのは片方に刃があるな」

まずはこのことを教える。

「だが剣は」

「見れば両方に刃があるわね」

「そういうことだ。だから今俺が持っているのは  
「剣ね」

「これでわかったな」

「ええ。それにしてもあの細長いのは」

「スピアか」

相変わらず剣の動作を続けながら妹に答える。

「それがどうした」

「お兄ちゃんあれは使わないのね」

フェシングといえばスピアである。だが兄はそれを使わずサーベルを使っているのどころ尋ねたのである。何気ない問いではあるがそこにあるものは的を得ていた。

「あの。スピアね。それはないんだ」

「これでないと駄目だ」

フェシング自体に対するものと同じ返答だった。

「この剣でないとな」

「そんなにそれが好きなの？」

「好きかどうかは別だ」

「けれどするのね」

「そういうことだ。それにしても」

「何？」

「これはこれでかなり難しいな」

こつ妹に告げるのだった。

「剣一つ扱うのもな」

「そうなの？上手くやってるじゃない」

「いや、まだまだだ」

それでも振り続けている。

「まだ。動きが悪い」

「だから全然そうは見えないけれど」

「そう見えるか」

「動き速いし」

また言う未久だった。

「全然悪くは見えないわよ」

「御前にはそう見えるか」

「大体お兄ちゃん元々運動神経いいじゃない」  
これは彼女もよく知っていることであった。

### 第三話 日々その十四

「それが上手く活きているわよ」

「運動神経か」

「高校まで陸上部だったじゃない」

実はそうだったのだ。四〇〇メートルでインターハイに出たこともある。高跳びもまた得意であるし短距離とは正反対だが長距離もできる。彼女はこのことを今彼に言ったのだ。

「だからさ。動きは悪くないわよ」

「それとこれとは別だがな」

「別かしら」

「剣の捌きはそれとはまた違う」

言いつつ休みなく剣を使う。今は突きをメインに行っている。

「数しなれば。身体が覚えはしない」

「身体がねえ」

「それでやっとな戦える」

これは失言だった。

「その時にな」

「戦う？」

「いや」

牧村はすぐに自分の失言に気付いた。それで言葉を打ち消したのだった。

「何でもない。気にするな」

「早速試合を考えてるのね」

しかし未久はこう捉えていた。彼女はただ彼が試合に出るとだけ思っていたのだ。これは彼女が髑髏天使という存在を知らないからだった。

「凄じじゃない」

「試合か」

「だって。フエシングやってるじゃない」  
「ああ」

「だったら試合に出るじゃない。違つなの？」

「そんなところだ」

「こつ言つて誤魔化した。」

「今はな」

「そつでしょ？ だったら試合頑張つてね」

「わかつた」

「下手な負け方したら駄目だからね」

急に妹の声が厳しいものになった。

「勝つて来てね」

「俺は勝つ」

突きから振りに戻る。縦横に振っているようである。そこには型があった。

「安心しろ。それはな」

「わかつたわ。じゃあ頑張つてね」

「必ずな。帰つて来る」

今度も失言だったが未久はこれにも気付かなかった。髑髏天使としての兄を知らないからこそ。だからこそ気付くことはなかったのだ。

妹との話の数日後牧村はまたサイドカーに乗りハイウェイを進んでいた。進む先はもう決まっていた。そしてそこにその目標が立っていた。

「早かつたな」

「早かつたか」

「もう少しかかると思っていた」

彼はサイドカーを止めてそこから降りる牧村に声をかけてきた。その前に堂々とした構えで立っているのだ。彼に立ちはだかるようにして。

「どつやら。髑髏天使だけはあるな」

「髑髏天使か」

「そうだ。五十年に一度だけ現われ我々を倒すという髑髏天使」  
牧村をこう呼んでみせるのだった。

「それになるだけはある。見事だ」

「見事か」

「強くなったのがわかる」

サイドカーから離れ足を進めていく彼に対してまた告げてきていた。

「はつきりな」

「少なくとも御前と戦えるだけのものが備わったと見ているのか」

「その通りだ」

蛇男は右手に鞭を出してきた。あの数匹の蛇の鞭を。

「顔つきが変わった。完全にな」

「顔でわかるものなぞない」

牧村は足を止めた。そうして蛇男を見据えて言い返す。

「何もな」

「それはどうしてだ？」

「俺には顔がないからだ」

表情は消えている。しかしここで彼が語っているのは明らかにそうした意味ではなかった。

「だからだ。何故なら俺は」

言いながら両腕をゆっくりと動かす。そうしてその両手を拳にして打ち合わせた。そこから光が発されそれが全身を包み込む。それが消えた時牧村は髑髏天使となっていたのだった。

白銀の鎧と白い髑髏の異形の天使になった彼は右手をゆっくりと前に出し開いてからすぐに握った。これがはじまりとなった。

「行くぞ」

「剣を出すのだ」

蛇男は髑髏天使に対して言った。

「戦うぞ。いいな」

「勝つ」

握り締めたその両手を横に大きく一閃させるとそれで右手に剣が現われた。それが出され構える。そうして一歩前に出た。

蛇男はその彼の構えを見て自身も蛇の鞭を前に出した。それと共に足も前に出し。遂に闘いになるのだった。

### 第三話 日々その十五

まずは蛇男が鞭を出す。上から下に大きく振るう。

髑髏天使はそれを左にステップしてかわした。その動きは以前とは全く違ったものだった。

「速いな。しかもその動きは」

「何だ」

「フェシングだな」

「そうだ」

クールな声で蛇男に答えた。

「わかるのか」

「本来のフェシングはただラインの上で戦うものではない」

かなりよくわかつていることがわかる言葉だった。どうやら剣の扱いに関してもかなりの知識があるようである。それを感じさせる言葉である。

「戦う技だ。ならば」

「この足捌きも当然というのだな」

「その通りだ。どうやらただ剣を操ることを学んだだけではないな」

「如何にも」

その剣を構えつつ答える。

「貴様に敗れてからな。色々とわかった」

「ただフェシングをやったわけではないということだな」

「その通りだ。それでだ」

構える髑髏天使に対してまた述べる。

「今度は足だけでなく剣も見せてもらおうか」

「俺の剣をか」

「腕はおおよそはわかった」

「何っ!？」

「剣は腕だけでするものではない」



「こつも言ってみせる。」

「それだけではない。足もだ」

「さつきと話が同じだが」

「それでも言わせてもらおう。足でおおよそのことがわかる」

「武道でも言われていることだがな」

「武道のことは知らないが」

「どうやら彼は東洋のことには詳しくはないらしい。よく見れば今持っているその蛇の鞭も西洋にある本来は拷問用の鞭のそれに似ていた。」

「その通りだ。今の貴様は俺が倒すに相応しい」

「相応しいか」

「倒すか倒されるか」

言葉には笑みさえ含まれていた。

「そうでなければ戦う意味がない」

「面白い考えだ。しかし」

「今度は何だ」

「俺は髑髏天使だ」

このことをはつきりと彼に対して告げる。

「敗れることはない。同じ相手に二度もな」

「どうやら貴様は本当に俺が闘うべき相手になったようだな」

髑髏天使の今の言葉を聞いて返した言葉だった。

「そうでなくてはな。やはりな」

「行くぞ」

一歩前に出て来たのは髑髏天使だった。静かに、だが確実に剣を突き出してきた。

それは蛇男の喉を一直線に狙っていた。しかし蛇男はそれを首を左に捻ることで紙一重でかわしたのだった。

「むっ!？」

「今度は俺の番だ」

剣をかわすとすぐに反撃に転じてきた。鞭を左斜め下から右斜め

上に振り上げる。その蛇達を食らいつかせようというのだ。

しかし髑髏天使は今度は一步後ろにステップしそれをかわした。前に突きを繰り出したその勢いをそのまま後ろにやってかわしたのである。

「今度はそう来たか」

「これだけではない」

鞭がそのまま上に上がったのを見てすぐにまた攻撃に転じてきた。勢いを今度は前にやる。前から後ろ、それから前に。力を上手く使っていた。

今度もまた突きだった。しかし今度は一度ではない。何度も胸や腹を狙って繰り出す。蛇男はそれを蛇達の胸で防ぐがこうしたことには鞭では限界があった。

「これでどうだ」

「思った以上にやるな」

「思ったよりもか」

「そつだ。どうやらお互い長期戦になるとまずいな」

髑髏天使のその剣の勢いを見ての言葉だ。

「それならばだ」

「一気に決めるといふことか」

「その通り」

突きを防ぐのを止めて今度は彼が後ろに跳んだ。しかも結構な距離をだ。それで一旦間合いを整えてそのうえで構えに入った。そうして彼と再び向かい合うのだった。

「一撃で決める」

「望むところだ」

髑髏天使もその申し出を受けた。

「それではだ。俺も行くぞ」

「来い」

睨み合いながら言い合う。

「この剣で決める」

「剣が常に鞭より上とは限らない」

「そうか。しかしだ」

少しずつ間合いを詰める。次第に闘う距離になっていた。

### 第三話 日々その十六

そうして両者同時に進んだ。剣と鞭が前に出される。無数の蛇達は天使に襲い掛かる。だが天使はその蛇達こそ見ていたのだった。

「まずはだ」

「むっ!？」

「この連中を倒させてもらおう」

そう言つとその蛇達に対して突きを繰り出すのだった。的確な突きで蛇達の頭を突き次々と潰していく。これで蛇男の戦闘力を大きく減らした。

しかしそれだけでは終わらなかった。彼はさらに踏み込みを続け攻撃力をなくした鞭をかわしながら蛇男の横を左からすり抜けた。その間に剣を一閃させ彼の胸を斬つたのだった。

「むっ……」

「これで終わりだな」

背中合わせになったところで蛇男に告げる。蛇男は動きを止めてしまつており髑髏天使はすり抜けたその姿勢で動きを止めていたがやがて剣を消して彼に顔を向けたのであった。

「今の一撃でな。決まつたな」

「その通りだ」

蛇男の言葉が返つて来た。

「見事と言つておこつ」

「まさか貴様の様な魔物がいるとは思わなかった」

髑髏天使は彼にこうも告げた。

「残忍で卑劣な奴ばかりと思つていたがな」

「それは当たつてはいる」

蛇男は立っていた。致命傷を受けていたがそれでも最後の力を振り絞つて立っていたのだ。それは髑髏天使をしても感嘆させるものだった。

「それについてはな」

「では貴様は例外か」

「それは違う」

今の髑髏天使の言葉は否定するのだった。

「それはな」

「話が矛盾していると思うが」

「いや、矛盾してはいない」

だがこう主張してきた。

「それはな」

「どういうことだ、それは」

「魔物にも様々な者がいる」

蛇男の主張はこうだった。

「人間と同じだ」

「そういうことか」

髑髏天使はそれを聞いてまずは頷いた。

「それならわかる。人間にも色々な奴がいるからな」

「人間はそうではないと言わないのだな」

「人間もまた様々だ」

蛇男とここでは考えは同じだったのだ。

「いい奴もいれば悪い奴もいる」

「魔物もまた同じだ。だがそこにあるものが違う」

「どう違うというのだ？」

「魔物は妖怪とはその種類は同じだ」

「それは知っているが」

「一つ決定的に違うものがあるのだ」

これについては髑髏天使も知っていた。しかし決定的に違うものがあるというのが蛇男の言葉だった。髑髏天使はその髑髏の裏にある人間の顔に怪訝なものを感じていたのである。

「それは貴様を狙うか」

「俺を狙うのはわかっているが」

「それに理由があるのは知っているのか」  
「何っ!？」

彼の言葉に怪訝な声をあげた。

「どういうことだ、それは」

「他にも理由はあるがな」

「それも聞きたいが」

「ではそれも言おう」

蛇男はそれについても話すのだった。

「単純に人や世界に対して悪意を持っている者もいるのだ」

「それが大抵だと思いがな」

「俺は貴様を倒す類の魔物だ」

蛇男はあらためてこのことを彼に告げたのだ。

「人にも世界にも何の興味もなかった」

「そうだったか。それではだ」

「ああ」

話が進む。髑髏天使はさらに聞こうとする。だが。

「しかし。それはできないようだ」

「何？」

「もう時間がない」

その言葉と共に蛇男の身体が燃えていく。紅蓮の炎になっていく。

「言うことはできない。さらばだ」

「死んだか」

蛇男は紅蓮の炎になった。髑髏天使はそれを静かに見ていた。戦いには勝った。しかし謎が浮かび上がった。彼はそのことに考えを及ばせつつ勝利の証である紅蓮の炎を見ていたのであった。

2  
0  
0  
8  
·  
9  
·  
1  
2

## 第四話 改造その一

髑髏天使

### 第四話 改造

蛇男との戦いを終えた牧村は博士の研究室に向かった。そしてそこで博士に蛇男の言葉を伝えたのであった。

そのうえで彼に対して問う。何故自分が狙われているのかを。

「そっいえば不思議だ」

彼は言う。

「俺は魔物を倒す存在だ」

「その通りじゃ」

「だから狙われるのだと思っていた。しかし向こうから来る話を聞いている博士にそのことを告げるのだった。

「何故来るのだ。奴等は。俺があいつ等を倒す存在だからか」

「それじゃがな」

博士はここで彼に言うのだった。

「文献を調べていてまたわかったのじゃ」

「このことに関してか」

「その通り。実はの」

「ああ」

「魔物はただ魔物ではないのじゃよ」

「どういうことだ」

「倒した相手の力を手に入れることができるのじゃ」

こう牧村に話すのであった。

「だから御主を狙うのじゃ」

「俺の力を狙ってか」

「強くなりたいたいという気持ちは誰にも大なり小なりあるものじゃ」

「それはわかる」

彼もまた子供の頃から何かをして強くなりたいと思ったことがあ



るからだ。強さへの憧れというものは誰もが多少は持っているものであるからだ。だから自分の中にあるそれを察して答えたのである。「では魔物達もまた」

「左様。人に害を為す魔物とそうした魔物の二つに大別されるな。むしろ後者が主流なのかもな」

「ではこれから俺を」

「狙って来るじやろうな。髑髏天使は本来前者を倒す存在じゃが必然的に後者とやり合うことも多くなるのじゃよ」

「因果な話だな」

牧村はそこまで聞いて一言呟いた。

「それはまた。では」

「生きたければ勝ち抜くしかない」

博士はこうも彼に告げた。

「そういうことじゃよ」

「終わりはあるのか」

「それはまだわからん」

牧村にとってはいい返答ではなかった。

「今はな。まだ文献はそこまで読み解かれてはおらん」

「そうなのか」

「うむ。しかしじゃ」

だがここで博士は牧村に対して言うのであった。

「何事も全て終わりがあるものじゃよ」

「それはわかってているがな」

「わかっていればよい。つまりじゃ」

「俺のこの髑髏天使としての戦いも終わる時が来るか」

「生き残ればな。何時かはな」

「わかった」

表情を変えずに博士の言葉に頷いた。

「ではそれまで生きていく」

「そうしてくれ。それでじゃ」

博士は話を変えてきた。

「最近フェシングに打ち込んでおるな」

「他のトレーニングもしている」

「こつも答える牧村であった。」

「ランニングや筋肉トレーニングもな」

「よいことじゃ。そうした積み重ねが強くしていく」

「これは戦いにおいては常識と言えるものであった。」

「少しずつな。さて、それでじゃ」

「今度は何だ？」

「考えておるのじゃが」

目を光らせて牧村に言ってきたのであった。

「サイドカーじゃが」

「前に話したあれか」

「左様。魔物との闘いはこれからより激しくなっていく」

これはもう予想されているどころではないことだった。何しろ今の時点で三体の魔物を倒している。どれも激しい、命懸けの闘いだ。それを思えば当然のことである、

「それでじゃ」

「サイドカーを改造するのだな」

「改良じゃな」

博士はこう言い替えた。

「これはな」

「改良か。この場合は」

「闘えるようにしておくのじゃよ」

その為の改良であるというのだ。あくまで魔物と闘う為のものだ。

「一度サイドカーで体当たりもしたな」

「ああ」

「それでも生きておったな、魔物は」

「それどころかピンピンしていた」

虎人との闘いのことを思い出しつつ語る。これは事実でありそれがはじまりとなり彼は髑髏天使となったのであるから忘れる筈もないことであった。

## 第四話 改造その二

「ほぼ効いてはいなかった」

「だからじゃよ。是非共な」

「そういうことか」

「すぐに終わるわ」

「すぐに!?!」

今の博士の言葉には顔を顰めさせる牧村であった。

「サイドカー全体を改良するのだろう?」

「その通りじゃが」

「それですぐに終わるのか」

顔を顰めさせたまま彼に対してまた言う。

「それで」

「終わるとも。だから普通の改良ではないのじゃ」

「普通ではない」

「あれじゃよ。錬金術じゃ」

笑いつつ牧村に述べるのであった。

「科学や工学も使うがのう。しかしメインはやはり」

「錬金術になるのか」

「科学や工学と同じものじゃよ」

博士はこうも言った。

「錬金術もな」

「とてもそうは思えないがな」

牧村の考えではそうであった。これは今の一般的な人間の考えでもあった。最早錬金術などというものは怪しげなオカルトの類にしかなくなってないからだ。だからこそその名前を聞いて顔を顰めさせたのだ。こうした意味で彼の判断は妥当であると言えた。

「錬金術を使うと言われてもな」

「安心せよ。本当にすぐに終わるわ」

それでも博士は言うのであった。

「すぐにな」

「すぐにすぐにと言うがどれだけだ？」

「これから講義はあるか」

「午後の四時までだ」

研究室の壁にある古ぼけた鳩時計を見て述べる。この時計は博士の趣味で時折居眠りをしている博士が鳩によって起こされることもある。

「今日はな」

「ではそれまでには充分に終わる」

「今十二時だが」

牧村は今度は今の時間を述べた。

「それがすぐに終わるのか」

「簡単にな。三時には終わっておるな」

博士はこつも答える。

「その頃までにはじゃよ」

「本当か？」

「本当だよ」

今度彼に答えてきたのは妖怪達であった。彼等も今この部屋にいたのである。

「僕達も手伝うからさ」

「すぐに終わるよ」

「妖怪がサイドカーのことを知ってるのか」

牧村にとつてはまずこれが奇妙に思えることであった。そのうえでさらに奇妙に思えたことがさらにあったのだった。

「それに錬金術まで」

「それはわしじゃよ」

今の言葉に答えたのは博士であった。

「わしが知っておるのじゃよ」

「だから僕達はお手伝いなんだよ」

「まあ錬金術には抵抗がないけれどね」

「そうなのか。とにかく夕方にはできているんだな」  
「うむ」

博士は牧村に対して頷いて答えてきた。

「そうじゃ。じゃから安心して講義に行くといい」

「わかった。では期待している」

「凄いものになるぞ」

実に楽しみに牧村に語るのだった。

「これまでにない素晴らしいサイドカーになるからな」

「ああ」

彼は博士に別れを告げるとそのまま講義に向かった。左右に木々が並んでいるキャンバスを歩いていると不意に後ろから誰かが来た。牧村はそちらに顔を向けた。

「誰だ？」

「誰って」

そこにいたのは小柄な女の子だった。背の高い牧村から見ても三十センチ程度は差がある。黒い髪を後ろで束ねた垂れ目の女の子で色は白く顔は童顔だ。黒いズボンに白いパーカーにシューズという格好だ。黒ズボンがその脚線をはっきりと映し出していた。

#### 第四話 改造その三

「ちょっと怖い言葉になってるわよ」

かなり音域の高い声だった。しかも澄んだ透明感のある声で女の子の声としては実に奇麗だ。鳴き村はこの小柄で声のいい女の子を見てまずは警戒したものを消すのだった。

「奥谷さんか」

「そうよ。講義に出るのよね」

「ああ」

彼女に対しても無愛想に答える。

「今からな」

「あれでしょ。文学散歩よね」

「あまり出たくはないがな」

何故か講義名をこの奥谷という少女から言われて暗い顔になるのだった。

「あの講義は」

「どうしてなの？」

「坂口安吾だからだ」

声が無然としたものになっていた。

「だから。あれは」

「嫌なの」

「ああ。坂口安吾は嫌いだ」

今度ははつきりと言い切った牧村だった。

「あの生き方も主張もな」

「作品の傾向は？」

「それも好きじゃない」

これについても否定した言葉を述べる牧村である。

「ああした無頼派はな。好きになれない」

「そうなの。無頼派自体が嫌いな」

「太宰にしるな」

坂口安吾は所謂新戯作派、またの名を無頼派と称される作家の中に分類される。ここにはあの太宰治もいる。この無頼派の特徴としては破滅的な作風と作者自身の生き方にある。坂口安吾はその中でもとりわけそうした傾向が強い作家であるのだ。

「嫌いだな」

「けれど織田作之助は読んでなかった？」

同じ無頼派に入る作家だ。

「確か」

「その中ではあの作家だけ例外だな」

牧村の返答はこうであった。

「あの作家の作品は好きだ」

「そうなの」

「去年は織田作之助を扱っていたと聞いて受けたが」

牧村の顔がここでさらに曇る。

「しかし。それで」

「出て来たのが坂口安吾だったのね」

「よりによってな。全く」

またしても無然として述べるのだった。

「あの作家が一番嫌いだ」

「それでも講義は出るのね」

「一度取った講義の単位は取っておく」

しかしこう言葉を返すのだった。

「そうしないと何時単位を取れるかわからないからな」

「そうしたところは真面目なのね」

「真面目というかな。捨てるのが嫌いなだけだ」

この場合は単位を取らないという意味だ。彼はこう言い替えているのだ。

「ただな」

「まあ私は坂口安吾は嫌いじゃないけれど」



女の子は牧村の話を聞きながら彼の横に来た。そのうえで持つている黒い鞆からノートを出してきた。そこには奥谷若奈と書かれている。

「別にね」

「いいのか」

「確かにああした生き方は好きじゃないわ」

これについては彼女も同じであった。

「いい加減っていうか自分勝手じゃない」

「しかもあまりにもな」

牧村はこつも答える。

「だから嫌いだ。あの作家は」

「今の講義のテキストは墮落論とかだしね」

坂口安吾の代表作の一つだ。人は必ず墮落するものだと言張する

如何にも無頼派といった趣きの作品である。

「ひょっとしてそれが一番？」

「ああ、あの作家の作品の中で一番嫌いだ」

牧村の返答はこの通りだった。

#### 第四話 改造その四

「何が墮落なんだ。それは御前だけだ」

「本当に坂口安吾が嫌いなのね」

「最近は特にな」

「特になの」

「色々あったからな」

髑髏天使のことだがそれは決して言葉には直接出さないのだった。

その辺りは用心していた。元々慎重な性格がここでも出ていた。

「だからな」

「ふうん、そういえば最近フェシングはじめたんだっけ」

「ああ」

若奈のこの問いにははつきりと答える。

「少しな」

「面白いの？フェシングって」

「やってみるとな。中々な」

表情は変えないがそれでもこれは心のある言葉だった。

「面白いものだな」

「そうなの。まあ私は」

「テニス部はまだやってるのか」

「ええ、そうよ」

若奈は牧村の今の問いに答えた。にこりと笑って彼に言葉を返す。

「私はやっぱりテニスが一番好きだからね」

「テニスもいいか」

「？何が？」

「いや」

やはり髑髏天使のことは言わない。どうしても言うことはできないことだった。

「何でもない」

「そうなの」

「しかし。テニスは左右のフットワークだな」

「知ってるんじゃないの？」

牧村の言葉がどうもわからないのだった。テニスを少し知っていれば言うまでもないことだ。だが彼はそれを言い続ける。それがどうしてもわからないのだ。

「それは」

「ああ、まあな」

また返事をするが少し曖昧な感じになっていた。

「そうだな。そっちも少しやってみるか」

「テニスも？」

「少しな」

「少しなって来期君」

若奈は彼の話の話を聞くうちに怪訝な顔になって彼の名を呼んでみせた。

「どうしたの？テニスに興味があるの？」

「ああ、ある」

また頷くがやはり返事は曖昧な感じである。

「左右のフットワークだな」

「また随分とこだわりがあるのね」

「フェシングはそこが問題になる。ラインが狭い」

「ええ、まあそうよね」

何が何かわからないまま牧村の言葉に答える若奈だった。

「それはね。まあ」

「しかしテニスのそれを入れれば。かなり変わるか」

「フェシングにテニスを入れるの？」

「そうだな。そうするか」

若奈の言葉は半分ぼんやりと聞いていた。考えは次第に髑髏天使に関することに集中していった。しかし自分ではそれには気付いていない。

「ここは。やはり」

「ちよつと来期君」

若奈はここでまた彼の名を呼んだ。

「どうしたのよ、一体」

「どうした？」

「そうよ、おかしいわよ」

口を尖らせて彼に問うた。

「今。考え事でもしてるの？」

「あつ、いや」

この問い掛けに対してはまた曖昧な感じの返答になっていた。

「それはない。別にな」

「日本語も少しおかしい感じになってるし」

「そうか」

「そうよ。とにかく少しおかしいわよ」

「俺は別に」

「とにかく。テニスにも興味あるのね」

若奈が問うたのはこのことだった。

「そっちにも。そうなのね」

「まあそうだな」

今度は多少はつきりと答えることができた。

## 第四話 改造その五

「あるといえればあるな」

「じゃあテニス部も入ってみる？」

「テニス部もか」

「掛け持ちしても別にいいわよね」

「そうだな。時間的にはな」

問題はなかった。大学生は高校までと比べて時間的にかなり余裕がある。だから掛け持ちをしても別に問題はないのであった。これは牧村にもわかった。

「ないな」

「じゃあどう？」

あらためて牧村を誘う。

「テニス部。私もいるしね」

「わかった。じゃあ考えてみる」

「答えはできるだけ早いうちにね。それにしても」

「それにしても。何だ？」

「来期君高校じゃ陸上部一直線だったのに」

彼は高校まで陸上部にいた。若奈は高校から彼と一緒にだからこのことを知っているのだ。

「今は複数掛け持ちなのね。変わったわね」

「悪いのか？それは」

「悪いって聞かれたら違うわね」

それはそうではないと答えた若奈だった。

「別にね」

「どちらも大事になってくるな」

牧村は髑髏天使としての考えにまた入っていた。

「これからな。余計に」

「フェシングとテニスが？」

「そつだ。勝つ為に」

完全に髑髏天使になっていた。

「俺はやる。どちらもな」

「勝つ、ねえ」

当然ながら事情を知らない若奈にとっては今の彼の気合の入りようは少し不自然にも思えた。しかしそれはあくまで彼が熱中しているからだと思つてその考えに基いてまた言つのだつた。

「随分と熱中しているのね、スポーツに」

「んっ！？スポーツか」

「どちらもスポーツじゃない」

やはりここでも若奈の考えは彼がスポーツに熱中しているというものだつた。

「だからよ。まあ何かに熱中できることはいいいことだし」

「熱中か」

ここで髑髏天使から牧村来期の考えに戻るのだつた。

「俺は熱中しているんだな」

「他の何だつて言われたら困る位にね」

「そつか、わかつた」

まずは頷く牧村だつた。

「それはな。むしろ熱中するだけでないと身に着かない」

「本当に燃えてるわね、今の牧村君つて」

実はこれに関しては若奈にとつては意外なことだつた。何かにつけ無表情で無愛想な彼だからだ。それを知っている彼女にとつてはやはり意外なのである。

「珍しいわね、本当に」

「そつか」

「まあとにかく。テニスもするのね」

「ああ」

「わかつたわ。じゃあ今日の四限が終わつた後でね」

若奈の方で時間を指定してきた。

「テニス部の部室に来て。歓迎するわ」  
「頼む」

こうして彼はテニスもすることになった。この話はこれで終わり  
まずその部活に行く前に博士の研究室に顔を出しに向かった。しか  
しその研究室のある建物の前でもう博士が待っているのだった。

「おお、丁度いいタイミングじゃな」

「できたのか」

「これじゃ」

見れば彼のすぐ側にサイドカーがあった。言うまでもなく牧村が  
乗っているそのサイドカーである。

「もうできておるぞ。立派にな」

「外見は」

まずはその外見を見る。しかし何も変わったところはなかった。

「特に何もだな」

「外見はいじつてはおらんよ」

「では何が変わったのだ？」

「変わったのは中身じゃよ」

こう牧村に答えてきた。

「中身じゃ。色々とわかってくるわ」

「今はわからないのか」

「後のお楽しみじゃよ」

笑顔で彼に告げるのだった。

「乗ってから、戦ってからのな」

「そうか。だが見たところ」

「何じゃ？」

「本当に何も変わってはいないな」

外見を見る限りそうとしか思えないのであった。確かに何一つ変  
わったところはなかった。

## 第四話 改造その六

「だが。変わったのならいい」

「うむ。じゃが一つだけ言っておこう」

「一つだけ？」

「エネルギーはガソリンだけではなくなったぞ」

「ガソリンだけではない」

「そうじゃ。今まではガソリンでしか動けなかったが」

バイクといえば普通はそうである。しかし博士の今の言葉はそれを真つ向から否定するものだった。少なくとも牧村にとってはそうだった。

「これからは違うのじゃよ」

「ガソリン以外でも動くのか」

「その通り。大気中のあらゆるエネルギーを吸収してな。動くようにしておいた」

「ではいざという時に」

「ガス欠もない」

このことをはつきりと牧村に教えてきた。

「それも全くな」

「それはかなり大きいな」

「魔物との戦いの時サイドカーが動けないとなったら大変じゃろう」  
「ああ」

これはその通りだった。いざという時に頼りになるであろうことはもうわかってしている。n ならばそれが動けないとならばそれだけで敗北に直結する。博士の読みはここではかなり鋭かった。

「だからじゃよ。まずはそれじゃな」

「そうか」

「まあ後はおいおいわかる」

博士が言うのはここまでであった。



「おいおいな」

「後は戦ってからか」

「必ず悪いようにはならん」

またしてもしつかりとした言葉であった。

「君にとつてもな」

「では。有り難く使わせてもらおう」

こう言つたうえでサイドカーのハンドルを握つたのだった。

「これからな」

「うむ。ああ、そうじゃ」

「まだ何かあるのか？」

「アクセルやらブレーキやらじゃがな」

博士が今度言つたのはこのことだった。

「少し古くなつたので整備しておいたからな」

「そうか。それも済まないな」

「それではな。頑張つて来るのじゃよ」

「わかつた。こいつの力も借りて」

ヘルメットを被る。いよいよ発進だった。

「魔物を倒して来る。何体でもな」

「わしも調べ続けるからな」

博士の言葉に責任感が宿つた。

「その都度来てくれ。ではな」

「また明日だな」

牧村はアクセルを入れた。確かにそれは今までとは比較にならないまでに軽くそして強いものだった。爆音を聞きつつ発進する。そうしてテニス部の部室に向かうのだった。新たなものを身に着ける為。

フェシングとテニスの掛け持ちは確かにハードであったがそれでも彼にとっては実に得るものが大きかった。身体はこれまでよりさらに引き締まりそのうえ動きは段違いによくなった。家で剣やラケットを振る動作一つでも日に日に速く鋭いものになっていた。

「動き、またよくなったね」

「そうか」

今は庭先でラケットを振っている。それを前と同じく窓のところから見て声をかけてきた未久に対して言葉を返す。その間にも素振りと左右への動きを欠かさない。

「それにしなやかになったわね」

「しなやかか」

「柔軟もしてるのよね」

このことを兄に対して問うのだった。問いながら右手に持っていたアイスクャンデーの袋を破る。白いミルクのアイスクャンデーである。

「お部屋とかで。そうよね」

「あれは欠かせない」

こう答えてそのことを認めるのだった。

「あれはな。しなないと怪我をする」

「それに身体の動きもよくなるしね」

「余計にな。だから毎日している」

「いいことだと思うわ。私だって体操部じゃない」

「ああ」

「だから余計に。柔軟が大事なのよ」

「体操は身体が柔らかくないとどうしようもないからな」

当然それだけではない。体操は身体全体を駆使するスポーツであり考えようによってはテニス等よりもさらにハードなものだ。未久はそれを中学校に入ってからずっとしているのだ。

#### 第四話 改造その七

「だからしているんだな」

「そうよ。お兄ちゃんは体操はしないのね」

「そうだな。フェシングとテニスの二つで充分か」

素振りをしながらだがここで考える顔になった。

「これ以上増やしてもな。身体にはつかない」

「確かにね。それはね」

「そしてフェシングとテニスもおろそかになる」

彼はこのことも警戒しているのである。

「それだけはあつてはならないからな」

「その通りね」

「そうすれば」

ここで漏らしてしまった。

「死ぬことになる」

「それはオーバーよ」

妹は今の兄の漏れ出た言葉には苦笑いになった。

「幾ら何でもね」

「オーバーか」

「そうじゃない。フェシングは確かに剣を使うけれど」

髑髏天使のことは知る筈もないのでこう言うのだった。

「それでもよ。そこはまではないわよ」

「むっ」

ここで言葉を漏らしてしまったことに気付いた。一瞬しまった、といった感情を微かに顔に出したがそれはすぐに消して元の顔に戻してしまった。

「それもそうか」

「そうよ。けれど本当に真剣にやってるわね」

「やるからにはな」

髑髏天使の顔を隠して妹とのやり取りを再開する。

「真剣にしないと何の意味もない」

「その通りね。あとさ」

「今度は何だ？」

「食べ物だけれど」

アイスクャンデーをしゃぶりながらの言葉だった。キャンデーを前に置いて舌を出してその先を丹念にしゃぶっている。赤い小さな舌がちろちろと見える。

「今の量じゃ少ないんじゃないの？」

「少ないか」

「そうよ」

ここでキャンデーを咥え込んだ。そのうえで上下に動かす。頬に当たりそこが膨らんでいる。

「もつと食べないと駄目だと思っわ」

「脂肪がつくのは嫌いだが」

「脂肪じゃなくて筋肉よ」

「筋肉か」

「といってもフェシングとテニスだからね」

未久はこのことも考慮しつつ述べる。

「間違つても清原みたいな筋肉は駄目だけれどね」

「俺はあそこまで駄目ではない」

清原についてははつきりと言い捨てた。

「あの筋肉は何の意味もない」

「少なくとも野球選手のそれじゃないわよね」

「当然フェシングでもテニスでもない。戦う筋肉ではない」

牧村も言う。

「野球選手には野球選手の筋肉があるからな」

「じゃああれは何なのかしら」

「ボディービルか何かだな」

「野球の筋肉じゃ全然ないってことね」

「意味があると思うか」

やはり素振りが続けているがその中で妹に問うてきた。

「それで」

「ないっていうかだから怪我ばかりなんじゃないの？」

その辺りは彼女もよくわかっていた。だからこの話をするのだ。

「あんなのだから」

「そういうことだ。駄目だ」

また言い捨てる牧村だった。

「あの男はな。駄目だ」

「やっぱりそうなのね」

「フェシングやテニス、そして」

さらに言う。

「戦いには何の意味もない」

「弱いつてことね」

「あの男の得意技は虚勢と弱い者いじめと空元気だけだ」

「何か最低の男ね」

未久も元々嫌いな相手だからかなり言う。

「そんなのには負けないでね、お兄ちゃん」

「安心しろ、あそこまでの人間はそうは会えない」

「そうなの」

「会うこともないから敗れることもない」

彼が言うのはそういうことだった。

「決してな」

「それ聞いて安心したわ。とりあえずね」

「そうか。それでだ」

「今度は何？」

「アイスはまだあるか？」

今度は横から舌を這わせしゃぶっているそのアイスを見つつ問う。

未久はアイスクャンデーを好物としているのだ。とりわけ今しゃぶっているミルクをだ。

「まだ。あるのか」

「一応あるけれど」

あまりはつきりしない返答だった。

「一応はね」

「そうか、あるのか」

「一本だけね」

しかし返答はこうだった。

「あるけれど」

「一本!？」

それを聞いてすぐに顔を顰めさせる牧村だった。

## 第四話 改造その八

「今一本と言ったな」

「ええ、そうだけれど」

「五日前に一ダースセットを買った筈だが」

「食べればなくなるわよ」

「五日前だぞ」

目だけを顰めさせて妹に問う。

「それでもう一本か」

「そう、一本よ」

「俺はまだ一本しか食べていない」

その顰めさせた目で言うのだった。

「それで残り僅か一本か」

「また明日買えばいいじゃない」

「御前食べ過ぎだ」

素振りをそのままに妹にその目を向けての言葉である。

「一日二本も。幾ら何でも」

「いいじゃない、別に」

しかし妹の返答は実にさらりとしたものだった。悪い意味で。

「好きなんだから。それにお兄ちゃんずっとスイカ食べてたじゃない」

「い」

「スイカはまた特別だ」

こつ妹に反論する。

「あれはな」

「あたしスイカあまり食べなかつたし」

「その分か」

「そういうこと。だったらいいわよね」

「うつむ」

「まあとにかくね」

兄が考え込んだところを見てすかさず言葉を言い加えてきた。

「最後の一本は置いておくからね」

「そうか」

「食べるわよね」

「ああ」

このことには異論はなかった。確かに食べるつもりだった。

「頂く。では食べるなよ」

「わかったわ。じゃあこれでね」

「？何処が行くのか」

「自分の部屋」

全て舐め終えたところで兄に答えた。

「今から勉強しないと」

「ああ、そうか」

「そうよ。中学生は忙しいのよ」

「高校生よりもか」

「それも知ってると思うけれど」

くすりと笑って兄に問うてきた。

「お兄ちゃんも中学生だった時があるんだし」

「遠い昔の話だ」

しかしこう答える兄だった。

「そんなことは忘れた」

「都合のいい記憶ね」

「自覚はしている。とにかくだ」

「ええ、キャンデーね」

話はやはりそこに重点があつた。

「置いておくからね」

「あと明日買って置く」

「買うの」

「そうだ、また一ダース」

こう妹に述べる。



「買っておく。今度は一日一本にしておけ」

「わかったわ。一日一本ね」

キャンデーの話が終わると未久は姿を消した。牧村はそれからも暫く練習をしていたがやがてそれを終えキャンデーを口にした。こつした日々を送り戦いに備えていたがある日。昼に街の橋の辺りをサイドカーで進んでいるとその横に一台のオートバイが張り付いてきた。

「！？バイクか」

「髑髏天使だな」

直接彼の脳に語り掛けてきた声だった。

「そうだな。間違いないな」

「そうだと言えば」

脳内で答えた。これで通じるかとも思ったが通じた。

「倒させてもらおう」

「こう返事が来た。」

「今ここでな」

「魔物というわけか。しかし」

ここで彼は自分の左にいるそのマシンを見た。見ればごく普通のバイクであり男は漆黒のライダースーツを着て白いヘルメットを被っている。それだけ見れば普通の人間に見える。

「最近の魔物はバイクにも乗るのか」

「普段は人として暮らしている」

「これが魔物の返事だった。」

「だからだ。これもまた当然だ」

「そうか。人としてか」

今の返答で牧村はあることがわかった。それは魔物というものは普段は人に化けその中で普通に暮らしているということだ。だから彼が今まで、髑髏天使になる前に擦れ違った者達の中にも魔物だった者がいてもおかしくはない。このことがわかったのだった。

## 第四話 改造その九

「そして今は」

「魔物として来たのだな」

「その通り」

言葉と共にヘルメットが切り裂かれた。そこから顔を出したのはやはり異形の顔であった。昆虫の、しかも凶悪で鋭利な緑のものだった。目が異様に大きく口は禍々しい形に歪に光っていた。その虫とは。

「蠃螂か」

「蠃螂人と呼ぶがいい」

こう牧村に述べてきたのだった。

「それが一番呼び易いのならな」

「ではそうさせてもらう」

牧村はヘルメットを脱ぎつつ彼に答えた。脱ぐと共にそれをサイドカーのボックスに放り込んだ。ヘルメットはすんとその中に収まった。

それが収まってから彼は両手を拳にした。そしてその二つの拳を胸の前で撃ち合わせると。白銀の光がそこから起こり全身を包み込んだ。その中で彼は今天使となったのだ。

「………行くぞ」

言葉と共に右手を一旦開き握り締める。それが合図となった。

まずはその右手に剣を出し左に振り抜く。しかしそれは無理だった。

「くっ!？」

「ふむ、右利きか」

蠃螂人はそれを見て冷静な声で述べただけだった。

「どうやらそれが不幸になったな」

「くっ、しまった」

サイドカーは左に側車がある。そのうえ右手で左に振ったのだ。それならばリーチに問題が出る。幾ら身体を捻ったとしてもだ。

蠍人はそれを利用した。すつと左にバランスを移しその剣をかわしたのである。

「剣捌きも身のこなしもいいのだがな」

「ならば」

「生憎だがこちらもやられるつもりはない」

態勢を立て直そうとした髑髏天使に言ってきた。

「何しろ。俺は御前を倒す為に来たのだからな」

そう言つと両腕を変形させてきた。それまで人だったものを蠍に変えてきた。鋸を思わせる邪悪な刃が二つ、陰惨な光と共に現われた。

その刃を出すと一旦バイクから跳びサイドカーの側車に移ってきた。そしてその上に立ち髑髏天使に蠍を振り回してきたのだつた。

「くっ！」

「さあ、どうする」

蠍人は彼を襲いながら問ってきた。

「運転を止めるか、それともこのまま俺に首を落とされるか」

実際に彼は髑髏天使の首を狙ってきていた。髑髏天使はそれを右の剣で受け止め左手でサイドカーの操縦を行っているがそれにも限度があつた。

「どちらを選ぶ」

「うっ……」

「それとも」

その緑の、中央に青を中心とした虹を思わせる光を放つ目が陰険に光つた。

「俺に喰われてみるか。頭から」

「悪いが喰われる趣味はない」

左から来た蠍を剣で弾き返した。

「生憎だがな」

「ほう。それではどうする」

「こつさせてもらう」

そう言うともまずは剣を一闪させた。しかしそれは特に狙いを定めたものではなかった。それで蠓螂人にあえなくかわされてしまった。

「この程度なら」

何ということはない。蠓螂人は言った。しかし髑髏天使の狙いはそれではなかった。

「そしてだ」

「そして？」

「こつするまでだ」

今度は跳んだ。蠓螂を退けたのはこの為だったのだ。彼はサイドカーから跳び降りてそのうえで橋の上に着地した。蠓螂人はまだサイドカーの側車の上にあった。

「降りただと」

「そうだ。この方が闘いやすいからな」

遠ざかるうとする蠓螂人に対して述べた。

「サイドカーの上で細々と闘うよりはな」

「ふむ、そう来たか」

「さて、どうする？」

また蠓螂人に問うた。

「俺はここにいる。貴様はそのまま去るのか」

「生憎だがそのつもりはない」

しかし蠓螂人は不敵な笑みを声に含ませて述べたのだった。

「俺の望みは貴様を倒すことだからな」

「そうだな。では来い」

蠓螂人を挑発する言葉だった。

## 第四話 改造その十

「ここで倒してやる」

「ならば。参ろう」

髑髏天使の言葉に応えると彼も跳んだのだった。しかし彼はそのまま直接髑髏天使のところに来たのではなかった。髑髏天使のサイドカーと並行して走っていた己のバイクに跳び乗ったのだった。サイドカーはそのまま正面に走って行く。蠅螂人はそれをよそにバイクを反転させて髑髏天使に対峙したのだった。

「こうしてな」

「俺のサイドカーは乗っ取らないのか」

「乗り物は慣れたものに限る」

「これが蠅螂人の言葉だった。」

「だからこそだ」

「そうか。そういうことか」

「その通りだ。さて」

一旦止めていたバイクのアクセルをふかしてきた。

「行くぞ」

「来い」

「だが。このままでは面白くない」

しかし何故かここで蠅螂人は動こうとしなかったのだった。

「このままではな。貴様を倒しても何にもならない」

「どういうことだ」

「俺は乗り物に乗っている」

彼はこう髑髏天使に答えた。

「しかし貴様はだ」

「俺は？」

「サイドカーに乗ってはいない。それでは面白くとも何ともない」

「サイドカーに乗れということか」

「如何にも」

彼が言うのはまさにこのことだった。

「乗って来い。勝負はこれからだ」

「ふん。正々堂々というつもりか」

「そういうわけでもない」

今の髑髏天使の言葉は否定するのだった。

「俺はただ楽しみたいだけだ、貴様を倒すことをな」

「バイクとバイクの闘いでだな」

「その通りだ。見たところ」

サイドカーは遙か彼方に行ってしまった。後ろを振り向いた蠍螂人が見たのは主がないまま駆けて行くサイドカーだ。それはそのまま何処までも行ってしまうそうだ。

「早く乗りに行った方がいいな。その間待とう」

「わかった。それではな」

蠍螂人の言葉を受けてそのサイドカーに向かおうとする。しかしその時だった。

突如として主のいないサイドカーが反転した。そしてそのまま一直線に髑髏天使の所に向かって来たのだった。

「何っ！？動いただと」

「これは」

蠍螂人も髑髏天使もそれを見て思わず声をあげた。

「まさか。主がいないというのにか」

「乗ろうと思ったただけだったか」

二人はそれぞれだが同時にいぶかしんだ。

「己だけで走るといふのか」

「まさか」

ここで髑髏天使は思った。

「俺の念で。主がいなくとも走ることができるようにしたというのか」

博士がである。闘ってからの楽しみというのはこのことだったのか

か、彼はあらためてこう思わずにはいらなかった。その己の力だけで走るサイドカーを見て。

「この様なことをしているとはな」

「面白いことだ」

蠅螂人は冷静さを取り戻し声にも不敵な笑みを戻していた。

「己で動いて戻って来るとはな。それでは」

「ああ」

サイドカーは蠅螂人の横を通り過ぎた。そうして髑髏天使の前でまた反転して止まった。髑髏天使はそのサイドカーに再び乗った。

「待ちに待った再戦だな」

「こうでなくては面白くはない」

バイクの上の蠅螂人は笑って告げた。

「互いに同じ条件で闘わなければな」

「そしてどちらが勝つか、か」

「如何にも」

今度はアクセルを本格的にふかしてきた。

「行くぞ、今度こそ確実にな」

「勝つのは俺だ」

サイドカーの上で剣を再び手にしていた。

「それは言っておく」

「その言葉、覚えておく」

蠅螂人は今度は右手だけを燈籠にしていた。一旦人間の手に戻していたがそれを右だけ蠅螂にさせたのである。またあの禍々しい刃であった。

「貴様の首を見る度に思い出してやるうぞ」

「俺の首をか」

「この蠅螂で刈り取る」

断言であった。

「次でな」

「できるとは思わないがな」

「自信か」

「自信、違うな」

そつではないと言いつ。



## 第四話 改造その十一

「それとはまた違う」

「では何だ」

「確信だ」

あえてこう言ってみせたのだ。 髑髏天使として。

「この俺のな」

「いい言葉だ。余計に倒したくなつたぞ」

「余計にか」

「貴様の實力は確かなものだ」

それはもう読み取っていたのである。 そうした意味で実に冷静かつ沈着な蠅螂人であった。 そしてその實力も確かなことが窺える。

「それもわかつているしな」

「そうか」

「では。行くぞ」

遂に前に出た蠅螂人だった。

「決める」

「ならば」

髑髏天使もまたアクセルを思い切り入れた。 するとこれまでより遙かに強い力が感じられた。 それは彼が今まで感じたことのない程のものだった。

それが信じられない速度を起こす。 サイドカーとは思えないまでの。 サイドカーはそのまま一直線に蠅螂人に対して向かうのだった。

「なっ、この速さは」

「そうか、これが博士の言っていた」

髑髏天使は悪魔博士が言っていた言葉を思い出していた。

「改造の一つか。 先程の自動操縦と同じ」

「サイドカーの速さではない」

このことは蠅螂人にもわかつていた。

「尋常なものではない。これは」

「よし、ならば」

その速さを受けて髑髏天使はあることを思いついたのだった。そしてそれを実行に移す。それは。

右に動いた。それまでは左に動き蠍螂人を擦れ違いざまに斬るつもりだった。しかしそれを止めたのだ。別の方法を選ぶことにしたのだ。

右に動きその側車を蠍螂人のバイクにぶつける。すると彼のバイクはバランスを崩しその場で激しくスピンのした。

「なっ!？」

まるで駒の様に回る。倒れこそしないがそれでバランスを完全に崩してしまっていた。最早戦闘に移ることは不可能になっていた。

蠍螂人の後ろに出た髑髏天使はここで反転した。そのうえで再び突っ込み剣を繰り出した。それで勝負は決したのであった。

乗っているバイクごと激しくスピンを続けていた蠍螂人だがその中で胸を刺し貫かれたのだった。髑髏天使の剣は彼の心臓を寸分違わず貫いていた。これで決したのである。

「うぐ………」

「終わったな」

スピンを無理矢理止められた蠍螂人に対して告げる。

「これでな。終わりだな」

「見事と褒めておこう」

蠍螂人は呻きつつ彼に述べた。

「まさか。こう来るとはな」

「咄嗟に思いついた」

剣を消しつつ彼に述べる髑髏天使だった。

「それが上手くいった。それだけだ」

「それだけか」

「そうだ。若し左に抜けていればわからなかった」

「こつも蠍螂人に告げる。」

「そうなれば。俺の方が倒されていたかもしれん」

「戯言を言う。勝ったのは貴様だ」

しかし螭螂人はこう言って彼の言葉を退けたのだった。

「勝ったのは貴様だ。そして敗れたのは俺だ」

「そうか」

「そうだ。それだけが真実だ」

これが螭螂人の言葉だった。

「勝敗だけがな」

「つまり必然の結果だったということか」

「そのサイドカー、見事なものだ」

今度は彼の乗るサイドカーを褒めてきた。

「普通のものではあるまい。違うか」

「その通りだ」

彼もそのことを認める。

「これは。改造された」

「科学以外のものも入っているな」

「錬金術らしい」

この辺りはまだ完全に受け入れてはいないのでこう答えたのだった。

「話によるとな」

「面白いことだ」

螭螂人は錬金術まで入っていると聞いて興味深そうに述べた。

「今それを使える人間がいるというのはな」

「何分変わり者でな」

博士のことを思い出しつつ述べる。

「そういうのも身に着けているそうだ」

「そうなのか」

「どちらにしろ。見事な闘いだった」

彼もまた相手を称賛したのだった。その戦いぶりを。

「闘いを楽しむ趣味はないがこう言っておこう」

「感謝する。その言葉で迷いはなくなった」

蠅螂人の言葉に笑みが含まれていた。

「それではな。さらばだ」

最後にこう言い残して紅蓮の炎と化した。髑髏天使はまた勝利を収めることができたのだった。

闘いが終わるとすぐに牧村の姿に戻った。そのうえで再びサイドカーのアクセルを踏むとここで携帯が鳴った。ヘルメットを取ろうとしていた手を止めて胸のポケットに入っているそれを取り出すのだった。するとすぐに彼が最もよく知っている声が出て来たのだった。

「ねえお兄ちゃん」

「何だ、御前か」

「何だはないんじゃないの？」

未久の明らかに不機嫌な声が返ってきた。

「折角可愛い妹が電話してきたのに」

「御前は可愛かったのか」

また随分と惨い返し言葉だった。

「初耳だがな」

「お兄ちゃん、本当に人間関係大丈夫？」

妹もまた負けてはいなかった。

「そんなので。お友達いるの？」

「苦労はしていない」

こう言われてもぶしつけな返事は変えない。

## 第四話 改造その十二

「生憎な」

「だったらいいけれどね」

「それでだ」

話を一旦切ってそのうえでまた尋ねてきた。

「何の用だ」

「今時間空いてる？」

それに応じてこっぴど尋ねる妹だった。

「今。どうなの？」

「空いていると言えばどうなるんだ？」

「ちよつと来て欲しいのよ」

要するに迎えの催促だった。

「ちよつとね」

「何かあったのか」

「塾が終わったんだけど」

「それで。迎えに来て欲しいのか」

「そういうこと」

いつもと同じことだった。送り迎えは最近よく彼がしている。当然そのサイドカーの横に乗せて送り迎えをするのだ。未久はそれが大好きなのだ。

「いいかな、それで」

「別にいい」

ぶしつけなのは親切な時でも同じだった。

「それならな。今から行こう」

「御願いできるのね」

「丁度今は暇だ。だからな」

「そう、よかった」

兄の言葉を聞いて笑顔になるのが電話からもわかった。

「それじゃあ。塾の入り口で待ってるわね」

「ああ。じゃあな」

「うん。あつ、待って」

ここで不意に兄を止めてきた。

「言い忘れたことがあるんだけど」

「んっ！？何だ」

「お兄ちゃん今何処なの」

彼の場所のことだった。それを聞き忘れていたのである。

「大体ここまで何分位で来られるかな」

「今橋だが」

「ああ、あの橋ね」

橋と言えばわかる。二人にとってはそれだけ馴染みの場所なのだ。

「あそこね」

「そうだ、今そこにいるが」

「じゃあ十五分位？」

未久は少し考えてからこう述べてきた。

「それだと」

「それはどうかな」

「だってサイドカーでしょ」

サイドカーは普通のバイクと比べてスピードが出ない。それは重量のせいである。側車が影響しているのは言うまでもない。そのせいで重いのだ。それが当然ながらスピードにも影響しているのだ。

「だったらやつぱり」

「安心しろ」

しかし彼は妹に言う。

「すぐに来てやる」

「スピード違反はしないでよ」

兄が結構飛ばすのを知つての言葉だ。運転も冷静なのだが速度はかなり出すのだ。だがそれで捕まったことは一度もないのもまた事実だ。

「それはね」

「わかってる。それは気にするな」

「だといけれど」

半信半疑といった感じの声だった。

「とにかく。十五分ね」

「十分か」

ここで彼は言うのだった。

「それ位だな」

「そこから十分!？」

「そうだ」

「無理でしょ」

すぐに答える未久だった。声が驚いたものになっていく。

「幾ら何でもそれは」

「若しかしたら半分かも知れない」

「半分ってことは七分半」

ただ単純に十五分を二分しただけだがそれだけで相当な時間になつてしまっている。

「無理よ、それは」

「来たらどうする」

「警察にも捕まらずに？」

「捕まる筈がない」

絶対の自信さえ見せてきた。

「そんなまずいことはしない」

「じゃあ七分半ね」

未久はあらためて彼に時間を聞いたのだった。

「待ってるわよ」

「ああ。楽しみにしておけ」

「遅れたらアイスクャンデー一本貰うわ」

「それは断る」

この辺りは今までで最もはつきりとした言葉であった。

「あれは半分は絶対に俺のものだ」

「厳しいわね」

「厳しいも何も御前は前どれだけ食べた」

「育ち盛りだからいいじゃない」

「駄目だ。半分は俺だ」

「わかったわよ。それじゃあ」

少しふてくされた感じになって電話を切ってきた。何はともあれこれで話を終えて牧村は携帯を元のポケットに収めた。そのうえでサイドカーを発進させようとする。その時にふと思ひ呟くのだった。

「今日の勝利は御前のおかげか」

こつ呟く。それは他ならぬこの相棒に対して向けた言葉だった。勝利をもたらした相棒に対して。

#### 第四話 完

2008・9・24



## 第五話 襲来その一

髑髏天使

第五話 襲来

牧村はこの日朝のトレーニングに励んでいた。朝早くに起きて準備体操と筋肉トレーニングの後で外をランニングする。川の土手のところまで走るのが日課だ。

今日も同じコースだった。そしていつも目印にしている橋の前まで来た。そこでターンして後は家に帰る。その道を辿ろうとしたその時だった。

「ねえ君」

不意に彼を呼び止める声が出た。

「その青いジャージの君、そう君だよ」

「俺のことが」

牧村はその声に応えて声が出た方を見た。声は橋の上、それも柱になっている鉄筋の上からのものだった。声の主はそこに立っていた。漆黒の服の若い男である。

「何の用だと言いたいが用件はわかる」

「あれっ、もうわかるんだ」

「魔物だな」

汗をそのままに彼に対して言葉を返した。既に身体ごと彼と向かい合い見上げている。

「俺を倒しに来たか」

「もうわかってるなんて凄いな」

「わからない筈がない。ならば来い」

「まあちよつと待ってよ」

しかし彼は笑ってまだ来ようとはしなかった。

「そんなに慌てなくてもいいじゃないか」

「生憎だが仕事やそういったものは早いうちに済ませる主義だ」

ぶしつけな言葉で取り合おうとはしない。言葉では。

「来い。すぐに倒してやる」

「せっかちなだねえ。噂通りだよ」

「噂か」

「君のことはさ、僕達の間でも噂になってるよ」

男は楽しそうに笑いながら牧村を見下ろしつつ言ってきた。

「色々だね」

「髑髏天使としてか」

「そうだよ。普通は人間にはあまり興味がないんだ」

これは魔物としては意外な言葉だった。少なくとも牧村が抱いている認識とは違っていた。男は次にその答えも述べてみせてきた。

「少なくとも僕はね」

「人間に興味はないか」

「他のことには凄く興味があるよ」

脚は閉じてそれぞれの手で互いの肘を抱いた姿勢で彼に答えてきた。

「けれど人間そのものには興味がないんだ。食べるつもりも殺すつもりもないよ」

「そうか」

「強いて言うのなら強くはなりたくないね」

ここでは今までの魔物と同じであった。

「僕もね」

「だから俺の前に来たというのか」

「その通り。悪いけれど相手になってもらうよ」

その言葉と共に彼の周りにある鳥達が姿を現わしてきた。それは。

「鳥か」

「友達だよ」

「友達だよ」

「そうだよ。鳥は僕の友達なんだよ」

ここでも楽しそうに笑って牧村に告げてきた。

「いつもね。一緒にいる」

「鳥か」

牧村は話を聞いて呟いた。

「貴様は。そうだな」

「うん、そうさ」

牧村のその呟きになこりと笑って答えてきた。

「僕は鳥だよ。これでわかってくれたね」

「わからない筈がない。それではか」

「そうさ。今からいいかな」

「何時でも断るつもりはない」

鋭い言葉を頭上の彼に投げた。

## 第五話 襲来その二

「それが俺の宿命なのだからな」

「いい心掛けだね。それじゃあ」

男の顔が変わっていく。顔中に黒い羽毛が生え口が尖っていく。目もそれと共に黒く大きいものとなる。そして背中から黒い大きな翼が生えたのだった。それはまさに鳥のものだった。

「遊ぼうか」

「望むところだ」

牧村は彼を見上げつつ両手を拳にした。そしてそれを己の胸の前で打ち合わせた。そこから光が発し全身を包んでいく。その光が消えた時彼は白銀の鎧を身に纏う髑髏天使となっていたのだった。

「行くぞ」

右手を一旦開きそのうえで握り締める。それが合図であった。闘いが幕を開けた。最初に動いたのは鳥男だった。彼は翼を大きく動かしてきた。

「それじゃあ行くけれど」

「むっ!？」

「多分僕の闘い方は君が今まで知らないものだろうね」

「俺が。知らないだと」

「そうだよ。ほら」

ここで羽ばたき空に舞いだした。

「今までこういうことをしてきた相手はいったかな」

「正直に答えようか」

「うん、是非共」

「御前の言っ通りだ」

本当に正直に答えてみせた。ここでは隠しても何の意味もないと判断したからである。

「御前がはじめてだ。空を飛んだ相手はな」

「それはどうも」

「考えてみればそれも道理だ」

髑髏天使の言葉はそのような相手を前にしても冷静沈着なままであった。

「何しる魔物だ」

「それはわかってくれていると思うけれど」

「魔物だ。だからこそだ」

指摘されたがそれでも言う髑髏天使だった。

「どんな奴がいてもおかしくはない。水の中を自在に動ける奴もいたしな」

「それが僕なんだけれどね」

嘴の両端が歪んでいた。笑っている証拠である。

「他にも色々というけれどね、そういう仲間は」

「そうだろうな。空を飛ぶ相手が」

「僕が最初で最後の相手になるよ」

「色々というのか？」

「そうだよ。だって」

周りに鳥達を従え空を舞っている。髑髏天使を悠然と見下ろしつつの言葉である。

「君は。僕に倒されるからね」

「大した自信だな」

「自分をよくわかってるんだよ」

やはり相当な自信家であった。それを隠そうともしない。

「よくね」

「では今ここで俺を倒すというのか」

「当然そのつもりさ。じゃあ」

翼の羽ばたきが余計に増した。

「行くよ、まずは」

「来るか」

翼に手をやり何かを取って来た。見ればそれは漆黒の羽根であっ

た。烏の羽根である。

それを数枚手に取っている。顔の前に笑いつつやりそうして。髑  
髑天使に向けて投げてきたのであった。

「さあ、小手調べだよ」

羽根を放ったうえで髑髑天使に声をかけてきた。

「これは避けられるかな。身のこなしは相当なものだって聞いているけれどね」

「それも知っているのか」

「教えてくれる仲間がいるんだ」

烏の目が細まっている。今度は目で笑っていた。

「仲間って言うには随分と偉い方だけれどね」

「偉いだと」

「ああ、このことについて答えるつもりはないからね」

今の髑髑天使の言葉には答える素振りは見せなかった。

「悪いけれどこちらにも事情があるんだよ」

「貴様の事情は俺にはどうでもいいものだがな」

「話がわかるね。じゃあ」

あらためて彼に声をかけてきた。

「この黒い羽根。どうやって避けるの？」

「避けるか」

「そうだよ。言っておくけれど僕の羽根は鋭いから」

声も笑つてもものになっていた。

「当たれば死ぬよ。幾ら鎧を着けていてもね」

「避ける必要はない」

髑髑天使は静かにこう答えたのだった。烏男と彼の羽根を見つつ。

「この程度ではな」

「この程度ねえ」

「そうだ」

言いつつ右手に剣を出してきた。

「これでな。こうするまでだ」

「んっ!？」

「俺を甘く見ないことだ」

この言葉と共に剣を振るいだした。そうして烏男の黒い羽根を次々と払い落としていく。その剣捌きは以前にも増して速く鋭いものになっていった。

瞬く間に全て払い落としてしまった。これにより難を逃れた髑髏天使であった。

「この通りだ」

「やっぱり凄いね」

「大したことはない」

今度は髑髏天使が自信を見せるのだった。

「さっきも言ったがこの程度で俺は倒せない」

「確かにね。それじゃあ次は」

「どうするつもりだ？」

「少し本気を出させてもらっつよ」

その言葉と共にまた背中の羽根に手をやる。そこから一枚の羽根を筆取り取る。するとそれは今度は弓になったのだった。漆黒の巨大な弓であった。

## 第五話 襲来その三

「これでね。射抜いてあげるよ」

「弓か」

「そうさ。僕は弓が大好きでね」

言いながらまた背中の羽根に手をやる。すると今度はその羽根が矢になるのだった。

「闘いもこうしてやるんだ。いつもね」

話していると周りの烏達が騒ぎだす。彼はその烏達に対して声をかけた。

「慌てることはないよ、見ているだけでいいから」

友人にかける言葉そのものの優しい言葉であった。

「君達に迷惑はかけないからね。だから」

烏達は彼の言葉に頷いた。そうして静かに彼の上にあがり羽ばたきつつ闘いを見守りだした。とりあえず彼等の介入はないことがわかった。髑髏天使はそれを見つつまた烏男に対して声をかけた。

「友人か」

「そうだよ、皆僕の親友さ」

言葉を微笑まさせつつ彼の言葉に答えてみせてきた。

「皆ね。友達さ」

「烏がか」

「僕は烏だからね」

人ではないとまで言い切ってきた。

「当然じゃないか。違うかい？」

「確かにその通りだ。少なくとも人間ではないな」

「まあね。それじゃあ」

こうした話の後で弓矢を構えてきた。

「いいかな、再開させて」

「何時でもいい」



上を見上げつつ烏男の言葉に返した。

「立ち向かってやる。それだけだ」

「じゃあ。行くよ」

その言葉と共に弓矢を放ってきた。それは続け様に何本も何本も放たれる。凄まじい速さと唸り声をあげて髑髏天使に襲い掛かるのだった。

髑髏天使は右手の剣でその矢を叩き落していく。だがそれでも弓矢は次々と放たれ減ることはない。まるで尽きることがないようだった。

「やるね。やっぱり」

烏男は彼が弓矢を完全に叩き落しているのを見て言ってきた。言いながらもまだ弓矢を放ち続けている。その速度もかなりのものだ。「今まで四人も倒しているわけじゃないね」

「倒さなければ生きることができない」

髑髏天使は話すその間も弓矢を落としていく。防戦一方であると言えたがそれでも負けてはいなかった。

「決してな」

「そうだね。それが髑髏天使だからね」

「貴様等を倒すことがな」

「それは知っているよ。けれどね」

「けれどね。何だ？」

「どうやって僕を倒すんだい？」

楽しそうに笑いながら髑髏天使に問うてきた。

「今どうやって。この僕を」

「倒せないというのか」

「そうじゃない。僕は空にいる」

まずは彼の位置を述べてきた。

「そして君はそこだね。それでどうやって僕を倒すんだい？」

「方法はある」

だが髑髏天使は落ち着いた声で返したのだった。

「方法はな」

「あるんだ」

「そうだ。こつする」

ここで彼は足を踏ん張った。そうして思いきり跳躍してきた。

「なっ!？」

「ふむ、やはりな」

跳躍しながらも弓矢を叩き落していく。だがその弓矢が突如として止まった。彼の思いも寄らぬ行動に烏男はその弓矢を止めてしまったからである。

## 第五話 襲来その四

「跳躍力も上がっているか。そういうことか」

「跳ぶなんて。まさか」

「しかしそのまさかだ」

急上昇していく。一直線に烏男に向かっていてる。

「これなら貴様にも直接向かうことができるな」

「くっ……」

「行くぞ」

今までは弓矢を叩き落すだけだったその剣を構えなおしてきた。

「受ける」

剣を繰り出す。だが烏男は咄嗟にさらに上にあがってそれをかわした。髑髏天使の剣は足にも届かず空しく空を切るだけだった。そこが彼の跳躍の頂点で後は落ちるしかなかった。

落下中は身体を烏男に向けた。そのうえで備えていたのである。

「残念だったね」

何とか危機を脱した烏男はとりあえずは胸を撫で下ろしていた。

「危ないところだったけれどね、こっちも」

「抜かった。逃げられたか」

「いやいや、こう来るとは思わなかったよ」

声はまだ笑っているがそこには先程までの余裕はない。

「まさかね。跳ぶなんて」

「甘く見ないことだな」

落下しながらも戦意は落ちていない髑髏天使だった。

「俺はどんな相手でも立ち向かう。それだけだ」

「どんな方法を使ってもだね」

「如何にも」

そしてそれを否定しない。

「何があるうとも。俺は闘う」

「それは立派だよ。けれどね」

ここでまた弓矢を構える烏男だった。

「まだ僕にはこれがあるんだよ。わかるかい？」

「わからないと答えれば嘘になる」

「そうだよ。それじゃあ」

弓を引き絞ってきた。しかし今はまだ放たない。

タイミングを狙っているのは明らかだった。そしてそのタイミングとは。

着地点だった。そこを狙っていた。着地するその瞬間が最も無防備となる。彼が狙っているのはまさにその瞬間であったのだ。

そして今髑髏天使は着地した。その時だった。弓矢が放たれる。その無防備な瞬間に。

「終わりだよ」

烏男の勝利を確信した声が響く。だがここで髑髏天使は。着地すると共にある行動に移ったのだった。

「なっ!？」

「一手も二手も先を読む」

今の髑髏天使の言葉だった。

「それが俺の闘い方だ」

「いいね、賢いっていうのは」

烏男も今の髑髏天使の言葉を褒める。見れば彼は着地の瞬間にすぐ後ろに跳んだ。それで弓矢の攻撃をかわしたのである。単純だが咄嗟にするには機転がいる行動だった。

弓矢はさらに襲うが髑髏天使はそれも全てかわしていく。そのうちに烏男の攻撃は止まった。

「どうした？俺はまだ生きていますぞ」

「悪いけれどももう矢がないんだ」

烏男はこう彼に答えた。

「だから。今は終わりさ」

「終わるといふのか」

「そうさ。じゃあまたね」

闘いの後とは思えない明るい言葉だった。

「再戦といこうよ。それでいいかな」

「俺の方は構わない」

髑髏天使の言葉は何でもないといった様子だった。

「別にな。それで」

「それじゃあまたね」

「本当に帰るのだな」

「だからそれは今言ったじゃない」

笑いつつまた髑髏天使に対して語る。

「もう弓矢がなくなつたからね。けれど今度は違つよ」

「俺を倒すというのか」

「その通り。それは覚えておいてよ」

「生憎だが都合の悪いことは忘れる主義だ」

無愛想に言葉を返すだけだった。

「悪いがな」

「やれやれ、人付き合いが悪い人だね」

烏男はそんな彼の言葉と態度を見て空中で肩を竦めてみせる。

「そういう態度はどうかなって思うんだけどね」

「だからといって御前には何の関係も無い筈だが」

「まあね。けれど無駄話も何だし」

ここまで言つて完全に姿を消した烏男だった。黒い羽根が羽ばたき鳥達と共に姿を消す。後に残つたのは髑髏天使だけだった。しかしその彼もまた烏男が姿を消したのを見て牧村に戻つた。とりあえず戦いはこれで終わった。しかしこれで完全に終わったのではないことは彼が最もよくわかつていた。

## 第五話 襲来その五

「ふむ、空からか」

「そうだ」

牧村は博士の研究室にいた。そこで烏男のことを話している。博士は己の机に座しつつ落ち着いて彼の話を聞いている。話を聞きながら考える顔を見せている。

「空から来た。そいつはな」

「不思議ではない」

博士はその考える顔で答えた。

「空から来るのもな」

「そうなのか」

「おいどんがそうばい」

ここで一反木綿が出て来た。宙をひらひらと舞いながら牧村に言う。牧村は部屋の壁に寄り添うようにして椅子に座ってそのうえで話しているのだ。彼の周りにも博士の周りにも相変わらず妖怪達が集まっている。

「おいどんこうやって空飛ぶばい。だから」

「魔物が空を飛ぶことも充分あるか」

「その通りじゃ。これでわかるな」

「ああ」

牧村は一反木綿を見つつ答える。

「実例を見ればな。確かにな」

「うむ。実はのう」

博士はここでも言った。

「サイドカーじゃが」

「あれか」

「そういうこともあるつかと改造をしてあった」

「あの時にか？」

「そうじゃ。まあそれはじゃ」

博士は牧村に対してさらに述べる。

「闘ってからわかる。すぐにな」

「すぐにか」

「伊達に改造したわけではないぞ」

楽しそうな笑みを牧村に向けてきている。

「ただパワーアップさせたりスピードをあげたり脳波だけでも動くようにはしておらぬ」

「他にもあったのか」

「そうじゃ。だからこそ傑作になった」

「そうだったのか」

「それにじゃ」

博士はさらに牧村に対して話す。

「御主自身もそれだけではあるまい」

「俺が？」

「天使じゃな」

博士が今度言うのはこのことだった。

「御主は。そうじゃな」

「今更何を」

言っているのだ、はっきりと博士に返した。

「俺は髑髏天使だ。それはもう」

「そこじゃ。天使じゃ」

博士は牧村を指差すようにしてまた話してみせる。

「天使じゃ。そこにあるのじゃよ」

「そこにあるだと」

「今また文献を読んでおるのじゃが」

博士の研究は続行中だった。相変わらず世界中から怪しいまでの不可思議なルートを使って本を集めている。そのうえで髑髏天使のことも調べているのである。

「天使には九つの階級がある」

「九つの!？」

「これは知らなかったか」

「天使にはそういうものがあつたのか」

牧村はこのことを知らなかった。天使はただ天使であるとだけ思つていたので。だがそれは違つていた。このこともあらためて知るのだった。

「そうだったのか」

「そうじゃよ。そしてじゃ」

「そして？」

「今は天使じゃな」

またこのことを言う。

「そのすぐ上は大天使じゃ」

「大天使か」

「聞いたことはないようじゃな」

要領を得ない顔を見せている牧村の顔を見ての言葉だった。

「どうやら」

「ああ、天使だけじゃなかったか」

「天使も天使でかなり複雑な社会なのじゃよ」

「神の前で平等ではなかったのだつたな」

これはキリスト教の世界の基本である。ただしここでは欧州独自の階級社会が大きく関係してくる。欧州から階級を抜いてはどうにもならないところがある。

「天使の世界でも」

「欧州じゃぞ」

博士もこのことを言う。

「欧州は日本と違う」

「それはわかっているがな」

「つまりじゃ。階級がかなりのものでな」

「天使の世界でもそれは同じか」

「そういうことじゃ。だから九つも階級がある」



自然とそう育成されてきたのである。キリスト教が欧州にあればその思想や社会により形成されていくものだ。それはここでも同じなのだ。

## 第五話 襲来その六

「わかったな」

「それが髑髏天使にも影響するか」

「最初は違ったようじゃがな」

「最初は？」

「うむ。最初は天使だけじゃった」

ここの牧村に話す。

「太古の髑髏天使はな」

「太古のか」

「髑髏天使は五十年に一度現われるな」

「ああ」

このことはもうわかっていることだった。しかしそれだけではないというのだ。

「それは昔からじゃった」

「昔からか」

「キリスト教よりもまだ昔からあった」

「その頃の髑髏天使はどうだったのだ？」

「残念じゃがそれはわからん」

これについては首を横に振る博士だった。

「全くな」

「全くか」

「太古から存在していたのはわかった」

これは認めるのだった。

「しかしじゃ。わかったのはそれだけでな」

「他はまだか」

「わかっていないことの方が圧倒的に多い」

髑髏天使という存在についてはまさにそうなのだ。とにかく何もかもがわかっていないのだ。文献もまだ解読中であり髑髏天使のこ

とは謎に包まれているのである。

「圧倒的にな」

「圧倒的か」

「そうだ。それでだ」

また言う博士だった。

「大昔の髑髏天使についてはまだわかっておらん」

「わかったのは太古からいたことと九つの階級があること」

牧村は呟いた。

「それだけか」

「とりあえず天使の上は大天使じゃ」

このことはわかっていているのだった。

「しかし大天使がどういったものかもわからん」

「わかった。わかっていないのがな」

顔を暗くさせたわけではないが少し懨然としていた。

「それがな」

「まあこれについては少し待ってくれ」

また答える博士だった。

「少しな。それでじゃ」

「それで？」

「今闘っておる相手じゃが」

「あの鳥か」

闘い話になり牧村の目の光が鋭くなった。

「そうじゃ。空を飛ぶな」

「ああ」

「空を飛ぶ相手が出て来たらとりあえずはサイドカーを呼べ」

「それでいいのか」

「そうじゃ、それじゃ」

指差すようにさせた右手を上下に振りながら答えた。

「それでじゃ。呼べばそれでいい」

「わかった」

博士の言葉に静かに頷いた。

「それではな。そうしよう」

「まずは闘ってみることじゃ」

「闘わないとどうにもならないか」

「そもそも闘わないとならないものじゃろ」

博士の今の言葉は何を今更といった色が含まれていた。

「違うか？」

「それが髑髏天使だったな」

「うむ」

牧村の言葉に対して頷く。

「その通りじゃ。それが髑髏天使じゃ」

「なら。闘うだけだ」

牧村の方も結論は出て来た。

「もう決めていることだがな」

「覚悟はしておるのじゃな」

「闘わなければ死ぬ」

前から言っていることであるし話していることであった。

「だからだ。俺はそれだけだ」

「そうじゃったな。まあ今度の闘いはじゃ」

「サイドカーか」

「それを使うとよい。後は君に任せるぞ」

牧村に任せるとまで言ってきた博士であった。

「闘いに関してはわしは何も言うことはできんのじゃ」

「そうなのか」

「わしが知っておるのは文献のことと妖怪や魔物のことだけじゃ」

ここで博士は妖怪と魔物とはつきり分けてみせた。あえて牧村、

即ち髑髏天使と闘う者達を魔物と呼んでみせたのである。ここには

博士自身の考えがあった。

## 第五話 襲来その七

「それだけじゃからな」

「烏男のことは知っているのか」

「弓矢を使う奴じゃな」

「そつだ」

「元々はイギリスにおつた」

「ここで魔物の国籍まで述べてみせる博士であつた。」

「そこで妖精の様なものとして扱われておつたのじゃよ」

「妖精か」

「意外か？」

「ああ」

博士の問いに対して頷く牧村であつた。

「確かにな。あれが妖精か」

「妖精といつても色々じゃ」

「こつ答える博士であつた。」

「中にはああしたものもある。悪い妖精や変わった妖精もな。多々おるのじゃよ」

「そつなのか」

「そつじゃよ。妖精といえは幻想的じゃが結局は妖怪と同じなのじゃ」

「妖怪と」

牧村は今の博士の言葉に周囲を見回した。丁度その妖怪達が周囲で遊んでいる。見ればその遊ぶ姿は確かに西洋の妖精のそれを思わせる。

「起源もな。あつちの妖精はケルトの神々のなれの果てじゃ」

「ではこちらの妖怪は」

「神様のなれの果てだったり物が魂を持ったりな」

その辺りは色々であるらしい。

「この鬼なんかはじゃ」

「どうも」

赤く大きな身体をした毛むくじゃらの鬼がぺこりと牧村に挨拶をしてきた。青鬼もいる。どうも身体は大きい心は大人しく優しいらしい。

「山の神のなれの果てじゃよ。土蜘蛛にしるじゃ」

大きな蜘蛛が牧村の足元で楽しく一杯やっている。「豆腐小僧と一緒に。」

「まつろわぬ神とか一族とか。そういうものなのじゃよ」

「民俗学の話だな」

「柳田邦男とかののう」

博士は日本民俗学の巨人の名前を出してきた。

「そういう世界の話じゃな」

「妖精もそれと同じようなものだったか」

「何も難しく考えたり特別に考えたりすることもないのじゃ」

博士はこうも彼に話す。

「日本もイギリスもそうした意味では同じじゃよ。それでじゃ」

「あの烏男はイギリスでは妖精だったのか」

「その通り。最初の虎人は中国から、半漁人はブラジルじゃ」

「それはわかる」

博士の言葉に頷く牧村であった。

「外見でな」

「鋭いのう。蛇男はベトナムで蠃螂人はタイじゃ」

「熱帯だな」

「それぞれわざわざ日本に来ておる。正体は当然人の姿ではない」

博士はこのことははっきりと言う。

「むしろ人の姿は仮初めじゃよ。変えようと思えば変えられるものなのじゃよ」

「変えようと思えばか」

「そうじゃ」

「奴等はそうなのか」

牧村は博士の話をここまで聞いて不意に思いはじめたのだった。

「奴等は」

「!?!?どうしたのじゃ?」

「では俺はどうなのだ」

自分に対しての思いであった。

「俺は髑髏天使になる」

「うむ」

「ならば俺は奴等と同じだな」

「そうなるかもな」

博士は素っ気無く彼に答えた。

「変わることを同じというのならばのう」

「そうだな。だとすると俺は奴等と」

「魔物と同じだと思うのか?」

「違うのか?」

博士に顔を向けて問う。

「それは。今思ったが」

「それはどうかのう」

しかし博士は牧村の今の言葉には首を捻って答えてみせた。

## 第五話 襲来その八

「それは。違うのではないのか？」

「違う？」

「そうじゃ」

このことを言う博士だった。

「御主は御主じゃよ」

「俺は俺……」

「だからじゃ。御主は牧村来期じゃな」

「そうだ」

この問いにははつきりと答えることができた。

「その通りだ。それは」

「それが答えじゃよ」

にこやかに笑って牧村に言ってきた。

「それがな。紛れもない答えじゃよ」

「そうなのか？これが」

「髑髏天使ではあってもな。御主は御主じゃ」

「髑髏天使でもか」

「心じゃよ」

博士が次に出したのは心であった。

「心さえ人であったならばな。それで人なのじゃよ」

「そうなのか」

「連中は違うのじゃ」

今度は魔物達について話を移してきた。

「連中はな。心が魔物なのじゃよ」

「心がか」

「元は人間だった連中もおるぞ」

博士は一つの真実を牧村に告げた。これは牧村にとっては驚くべきことであった。



「人間だっただと」

「そういう奴もおるぞ。しかしじゃ、人であることを心で捨てたからこそ」

「魔物になったのか」

「そういうことじゃ。姿はどうでもいいのじゃ」

博士に言わせればそうであるらしい。

「大事なものは心。それは言っておくぞ」

「心がそんなにか」

「左様。見てみるがいい」

「むっ!？」

「この連中を。どうじゃ?」

博士が今度言ったのは今も周りにいる妖怪達だ。見れば妖怪達は部屋のうちこちでふざけ合ったり花札をしたりテレビゲームをしたりしている。実に気楽な様子である。

「何か恐ろしいものを感じるか?」

「いや」

博士のこの問いにはすぐに首を横に振ることができた。

「何一つ。ない」

「そうじゃろ。そういうことじゃよ」

「そういうことか」

「この連中は妖怪じゃよ」

これまた言葉だけでは言うまでもないことであった。

「しかしじゃ。心は妖怪だからそうなるのじゃ」

「魔物ではなく妖怪か」

「わかっておるではないか。そういうことじゃ」

「この連中も心が魔物になれば魔物になるのだな」

「人もまた同じじゃ」

「そうか。心か」

「このことはよく覚えておいてくれ」

博士の言葉は念押しになっていた。

「よおくな」

「わかった。それならな」

「博士」

話が一段落つくところで女の声がした。

「お茶が入りました」

「おお、済まんな」

「お茶？」

「牧村さんも如何ですか」

言葉と共に顔が彼のすぐ目の前に出て来た。

「宜しければ一杯。抹茶ですが」

「抹茶……」

話を聞くよりも前にその顔を見ていた。その顔は黒いボブの髪型に眼鏡がよく似合う知的な顔立ちをしていた。美人と言ってもいい。目も奇麗で唇も形がいい。白い顔に化粧が見事に映えている。その化粧も高校の教師めいていてそれが余計に彼女に似合っている。彼はその顔を見たのである。

「抹茶か」

「そうですね」

「抹茶は好きだがしかし」

「しかし？」

「あんたは何者だ」

怪訝な顔で彼女のその知的な顔を見つつ問うた。

「いきなり出て来たが。一体」

「ろくろ首です」

「ろくろ首!？」

「知ってますよね」

平気な顔で牧村に問うてきた。

「ろくろ首のことは」

「それは知っているが」

答えはするが怪訝な顔はそのままだった。

「しかし。何故ここに」

「妖怪だからいるんですよ」

笑いながら首を後ろにやっってきた。見れば顔はそのまま後ろに向かい収まっていく。牧村はその首の動きを見ていたが首はするすると動き縮まっていき胴体に収まった。レモンイエローのタイトのスイーツに包まれた見事なプロポーションの身体がそこにあつた。ズボンだがそれが余計に引き締まった美貌を見せている。

## 第五話 襲来その九

「ろく子君」

「何でしようか博士」

「君は本当にズボンが好きじゃな」

博士はそのろくろ首をこう呼んでしかも服の嗜好にまで言及していた。

「スカートを穿いておるのを見たことないぞ」

「動き易いからです」

そのろくろ首はにこりと笑って博士に答えた。

「いざという時にも」

「そうか」

「スカートはそうはいきません」

ろくろ首はどうやらスカートが嫌いであるらしい。牧村は横で話を聞いていて心の中でそう思った。しかしそれを口に出すことはない。

「それに殿方の視線を集めてしまいますし」

「それがいいのではないのか？」

「私は好みません」

丁寧だがいささか事務的な感じの言葉であった。

「ですから」

「ふむ、色気がないのう」

「色気よりも動き易さです」

あくまでこれにこだわるろくろ首であった。

「私はあくまで教授の秘書ですね」

「まあよいか。わしもそろそろ百歳じゃ」

「八十ではなかったのか？」

「年齢はまあ大した問題ではない」

牧村の問いに平気な顔で返す。

「それはな」

「そうなのか」

「実際のところわしはあまり女性というものには興味がないのじゃ  
よ」

「ぱらぱらと文献をめくりながら牧村に述べる。」

「あまりのう」

「興味がないのか」

「ずっと学問一筋じゃった」

それは風貌からも察することができ。少なくとも博士の風貌は  
学者以外には見えないものである。そこに異様という単語がつくに  
しるだ。

「子供の頃からのう。色々勉強したものじゃよ」

「色々とか」

「うむ。学んでもう百年か」

「そろそろ百歳じゃなかったのか？」

「また博士の言葉に突っ込みを入れる。」

「確か。今さっきは」

「だからじゃ。年齢のことはあまり関係がないのじゃ」

「こう言って話を強引に進める博士であった。」

「それはな。まあ長い間勉強し続けておるのは事実じゃよ」

「そうか」

「今もな」

話は現在進行形であった。確かに今も文献を見ている。この言葉  
は嘘ではなかった。

「そうじゃよ。一生勉強じゃよ」

「家族はいないのか」

「おるよ」

「素っ気無く牧村に返してきた。」

「ちゃんとな。おるぞ」

「いるのか」

「かみさんが一人じゃ」

やはり素っ気無い言葉だ。

「もう寄り添って七十年は超えとるかのう」

「博士ってね。これでも愛妻家なんだよ」

「そうそう、何だかんだで家にいる時はずっと二人だからね」

「これこれ」

横で言う妖怪達を窺める。

「そんなことを言うでない。プライベートじゃよ」

「そのプライベートが面白いのに」

「博士のケチ」

「少なくとも家族はおるぞ。子供や孫もな。曾孫、玄孫までおるわ」

「博士に家族がいたのか」

牧村は今度は驚きを顔に見せていた。魔物達と見る時よりもそれは強かった。

「何と・・・・・・・・」

「わしだって人間じゃぞ」

あまりそうは思えない言葉だった。

「ちゃんとおるわ」

「ううむ」

「しかも恋愛結婚でね」

「あの時は凄かったよね」

「あまり女に興味がなかったのじゃなかったのか？」

「だから。あまりじゃよ」

言い訳じみた言葉になっていた。

## 第五話 襲来その十

「しかしわしは一人じゃ。生涯かみさんは一人じゃ」

「そういうことか」

「女はかみさん一人がいい」

また文献を見ている。

「それでな。そういえば君はどうなのじゃ？」

「俺か」

「そう、君じゃ。見たところ顔は悪くない」

これは確かだった。牧村の顔は精悍な感じがして実にいいものである。背も高く身体も引き締まっている。均整の取れた容姿と言っている。

「身体もな。それでもてないとは思えないが」

「あんたと同じだな」

今度は牧村が素っ気無く答えた。

「相手は一人でいい」

「そうなのか」

「もつとも今はその一人すらいないがな」

「あの小柄な娘は何じゃ？」

「友達だ」

若奈のことはこう答えた。

「それだけだ。何も無い」

「また随分と寂しいのう」

「何時どうなるかわからない」

これは髑髏天使としての言葉だった。

「それで人並の生活を送れるものか」

「送れると思うがの」

「何故そう言える？」

今の博士の言葉にはかえって顔を顰めさせてしまった牧村だった。

「何時死ぬかわからないというのに。魔物との戦いで  
「軍人も何時でもじゃよ」

博士は特殊な職業を出してきた。

「しかしじゃ。普通に生きておる」

「軍人はか」

「陸軍にしる海軍にしるそうじゃった」

「陸軍！？海軍！？ああ」

言われてすぐにわかったのだった。

「かつての日本軍か」

「刹那的になることなく。ちゃんと結婚して家庭も持っておった  
ぞ」

「軍人でもか」

「まあ君よりは死ぬ確率はずっと少なかった」

このことはあらかじめ言っておくのだった。

「しかしそれでも何時死ぬかわからなかった」

「当然だな。軍人は戦うことが仕事だ」

最早ここで言うまでもないことであった。

「それなら死ぬのも当然だ」

「そういうことじゃ。それでもだったのじゃよ」

「では俺もか」

「そう考える方がかえってよいぞ」

そして最後に言い切った。

「君にとつてもな」

「気張る必要はないということか」

「その通りじゃ」

博士が今の彼に言いたいことはこのことであった。

「硬い心のままだとかえって負担がかかる」

「普段と変わりなくか」

「それでじゃ」

また牧村に対して声をかける。



「彼女を作る気はないのか？」

「そうだな。今のところはな」

「これは縁もかなりあるしのう」

「縁か」

「出合いは何時あるかわからんものじゃ」

老人らしい人生の深みを感じさせる言葉であった。どれだけ生きていたのかわからないということが博士の言葉を余計に深いものにさせていた。

「前から知っておる相手とそうなるしな」

「知っている相手が」

「まあ、探すのもよいし待つのもよい」

少し突き放した言葉になっていた。

「そのところはな」

「わかった。それではな」

「どうも作りそうにないのう」

博士は牧村の言葉からこう読んだのだった。

「しかしそれでもじゃ」

「相手はできるといふのか」

「できる場合とできない場合があるがな」

この辺りはどうも曖昧な言葉になっていた。

「その辺りはな。やはり縁じゃよ」

「何もかも縁なのだな」

「わしと君が今ここで会って話をしているのもそれじゃよ」

「それは腐れ縁という意味か？」

「また随分と言つものう」

今の牧村の言葉にはいつもと変わらない彼を見た。

## 第五話 襲来その十一

「それでも縁は縁じゃがな」

「ではその縁をこれからも頼りにさせてもらおう」

「酒を付き合っつのならもつとよくさせてもらっぞ」

「酒か」

酒と聞いて少し微妙な顔になった牧村であった。

「それは少しな」

「それは駄目なのか？」

「サイドカーに乗っている」

これを話に出してきた。

「しかもいつもな。これで飲んでいれば」

「危ないのう」

「流石にこれで捕まっては話にならない」

飲酒運転ということだった。当然ながらこれは犯罪である。今ではその責任はかなり重いものとなっている。牧村はこのことを言うのだった。

「それにだ。俺は少し飲めばそれで終わりだ」

「終わりなのか」

「どうも酒には弱い」

ここでわかった牧村の意外な一面だった。

「甘いものは好きだがな」

「ではサイダーはどうじゃ？」

博士はそれを聞いて酒とは違うものを出してきた。

「サイダーは好きか？」

「ああ」

今度ははつきりと答えてきた。

「それはな。いける」

「そうか。ならそれでな」

「あとコーラも好きだな」

「炭酸飲料派か」

「意外か？」

「顔を見ればな」

牧村の顔を見ながら述べてきた。

「そう思えるのう、確かに」

「とにかく酒以外ならいける」

「酒以外はか」

「基本的には甘党だが辛いのも好きだ」

「そうか。ではケーキでも用意しておこう」

「それは有り難い」

こうは答えるがそれでもあまり嬉しくはなさそうにも聞こえるのはやはり彼の無愛想さ故だった。少なくとも初対面の相手にはそう思えるものだった。

「では今度来る時は楽しみにしておく」

「それでどのケーキが好きなのじゃ？」

博士が今度尋ねるのはこれだった。

「ケーキといっても色々じゃが」

「ケーキなら何でもいい」

牧村は率直に述べた。

「何でもな」

「そうか。ではチョコレートケーキはどうじゃ？」

「かなり好きだ」

やはり大好物であるらしい。言葉が微かに動いたことからそれを

読み取る博士だった。

「とはいっても他にもな」

「ふむ、わかった」

ここまで聞いたうえであらためて頷くのだった。

「それでは一通り揃えておくとしよう」

「スライスしたセットをだな」

「デコレーションもいいがあれもよい」

何気にケーキにも詳しいようである。

「それぞれの味が楽しめるからな」

「そうだな。ケーキの味わい方は一つじゃない」

「その通りじゃ。それではだ」

「ああ」

「勝つて来るのじゃよ」

戦いに対しての言葉だった。

「ケーキの為にな」

「そうさせてもらう。それではな」

「うむ。またな」

最後にこの言葉を交えさせて博士と別れた。そうして約束の日に橋の場所に来ると。そこにはもうあの男がああ場所に立っていた。

「やあ、時間通りだったよ」

「もう来ていたのか」

「丁度暇だったしね」

牧村を見下ろして笑っていた。鉄筋の橋の上に腕を組んで脚を閉じて立っている。

「だからもう来ていたんだよ」

「暇だったのか」

「うん、ゲームもクリアしたしね」

「ゲームをか」

「それにこのゲームの方が面白いみたいだし」

口の両端を吊り上げて笑ってきた。

「だからね。余計にね」

「そうか。ではゲームを」

「はじめる？もう」

「その為に来た」

烏男を見上げつつ言葉をかえした。

「その為にな」

「いいねえ。その言葉」

烏男は己の背に太陽の光を感じつつ述べた。それは夕陽であり赤い太陽が輝いている。赤い太陽にはもう熱はなくなただ彼を背中から照らしているだけである。長い影が青いアスファルトの上に描かれている。それは牧村の影もまた同じであった。橋の鉄筋の影もそこにある。

## 第五話 襲来その十二

「闘うのがやつぱり最高のゲームだからね」

「ごたくはいい。はじめなのだな」

「うん」

にこりと笑って頷いてみせた。

「そっだよ。じゃあいいね」

「よし」

牧村はその両手を拳にし己の胸の前にやった。

「それならばだ」

「僕もね」

烏男はその顔を徐々に烏のものに変えていく。それと共に背中には翼が生える。牧村は胸の前で両拳を打ち合わせた。眩い光が彼を包み髑髏天使となった。

「行くぞ」

右手を一旦開き握り締めてからまた言った。

「貴様の大好きなゲームのはじまりだ」

「早速行くよ」

もうあの弓矢を取り出して来た。早速何本も放つ。彼の周りに少しずつ烏達が集まって来る。

「今度はね。前とは違うよ」

「どういうことだ」

髑髏天使は剣をその手に持ちつつ烏男を見上げて問い返した。

「何かあるというのか」

「そっだよ。羽根を一杯用意してくれているからね」

「用意してくれている？」

「ほら」

楽しげに周りの烏達を見ながらまた言葉を出す。

「皆がこうして」

「むっ!？」

「羽根をプレゼントしてくれているからさ。だから幾らでもあるんだよ」

「そういうことか」

見れば彼の周りを舞う鳥達はその黒い羽根を次々と舞わしている。鳥男はそれを手に取り弓矢に変えて放っているのだ。時折手裏剣にもして投げて攻撃に変化を持たせている。

この空からの攻撃に対して髑髏天使は避けるしかできない。前後、そして左右に激しく動き手裏剣に弓矢をかわす。その度にアスファルトが無残に刺し貫かれていく。

「やっぱり動きはいいね」

「敵を褒めても何にもならないが」

「それでもだよ」

相変わらず楽しむように述べてきている。

「動きがいいのは確かじゃないかい？」

「貴様はそう思うか」

「うん。テニスだね」

彼のフットワークを見つつ言った。

「その動きは」

「やはり人間の世界での暮らしが長いようだな」

「っていつか生まれた時からずっと人間として生きているんだけれどね」

「生まれた時から？」

「そうだよ」

橋の上に立つたまま楽しそうに語っている。

「人間としてね。生きてきているんだよ」

「そういえば前に言っていたな」

「だってさ。その方が便利じゃない」

まるでゲームを楽しむようににこにことした言葉だった。

「人間が多いんだから人間の姿だね」

「そういうことか」

「そうだよ。別に悪いこともしていないけれどね」

「信用できないな」

「わかってないなあ。魔物だってさ、人を取って食べるわけじゃないし」

「人を取って食べるわけでもないのか」

「少なくとも僕はそうだよ」

本人の言葉ではそうであるらしい。

「人間を襲ったり食べたりする魔物じゃないからね」

「ではどうして俺と闘う？」

「力が欲しいからだよ」

これは博士から聞いた通りだった。魔物は髑髏天使の力を欲して彼の前に現われ闘いを挑む。烏男もそれはまた同じなのであった。

「それはね」

「力を手に入れるか」

「神様になるんだよ」

「神に!？」

「そうだよ。僕達の神様に」

声はここでも楽しそうに笑っている。

「なる為さ。君の力を手に入れてね」

「神が何なのかわかりはしないが少なくとも俺の敵なのはよくわかっている」

「それだけわかればいいんだ」

「他のことはおいおいわかればいい」

実に割り切ったものであった。

「今はな。貴様を倒すだけだ」

「そう。じゃあ」

烏男は髑髏天使の今の言葉を受けて漆黒の翼を羽ばたかせてきた。そしてそれと共に天高く舞いそこから再び攻撃に入りだした。



## 第五話 襲来その十三

「さあ、これはかわせるかな」

「むっ!？」

「この前はまだ手加減していたんだ」

「弓矢を構えながら髑髏天使を見下ろしている。」

「まだね。けれど今度は違うよ」

「違うというのか」

「君の実力は本物だから」

「また髑髏天使を認める言葉を口に出してきた。」

「だからだよ。さあ」

「また来るか」

「かわせるかな?これが」

言いながらその弓矢を放つ。今度はその数も矢が降り注ぐ範囲もかなり広がった。少なくとも先程までとは比較にならない程のものだった。

髑髏天使は後ろに跳びそこから一旦跳躍して橋の上に跳んだ。それで烏男に少しでも近付き攻撃を仕掛けるつもりであった。

「ふうん、やっぱり諦めないんだ」

「諦めてどうにもなるものではないからな」

「それは最初からわかっているのだった。」

「だからだ。これならな」

「飛び道具がないのが惜しいね」

「しかしそれでもやり方がある」

「また跳んで来るっていうのかな」

「少し違うな」

烏男を見据えて言う。言いながら博士が言ったその言葉に従い念じた。あれが来ることを。

(来い)

「んっ!？」

その瞬間だった。烏男が声をあげた。そして彼は前、髑髏天使の後ろを見るのだった。

「何か来た!？」

「速いな」

髑髏天使はこの時烏男を見ながら耳で音を聞いていた。

「もう来るとはな」

「あれは……サイドカー!？しかも」

「この音は。そうか」

髑髏天使はその音を聞いてわかった。サイドカーが今何処を進んでいるのか。それは水の上だった。河の上を進んでいるのだ。赤い夕陽に照らされ赤と銀に照らされている水面を二つに割り白い水飛沫をあげながら戦場に突き進んできているのだった。

「そういつた能力もあるのだな」

「いや、凄いね」

烏男はそれを見ても相変わらずの楽しそうな笑みだった。

「まさか河の上を操縦者なしで進むことができるなんてね」

「特別なマシンでな」

髑髏天使は彼の言葉にこう返した。

「それでだ。驚くことはない」

「驚くってというか感心したよ」

「感心か」

「だってさ。普通はないからね」

橋の上に立つ髑髏天使、そしてこちらにやって来るサイドカーを見ての言葉だった。その二つを見比べながら弓矢を手に行っているのだ。

「こつこつのはね」

「それだけか」

「面白いのはこれからだから」

だからだというのだ。

「そうじゃないの？まだ驚かないよ」

「驚かないか」

「さあ、今度は何を見せてくれるの？」

「楽しそうな笑みを消すことなく髑髏天使に対して問う。」

「今度はさ。水の上を走るだけじゃないよね」

「多分な」

「多分つて。乗ってる本人の言葉じゃないけれど？」

「俺もまだ完全には知らない」

「これは本当のことだった。彼もまだ自分のサイドカーが何処まで改造されているのかよくは知らないのだ。それを知っているのはあの博士だけである。」

「悪いがな」

「そうなんだ。じゃあ今から見せてよ」

「それを聞いても態度の変わらない烏男だった。」

## 第五話 襲来その十四

「君のサイドカーの能力つてやつをね」

「どうなる？」

彼は後ろにサイドカーの爆音と波を切る音を聞きながら烏男を見据えていた。

「これから。ただ水の上を進むだけではこの男に勝つことはできないが」

「まあ。とにかく今はね」

烏男はここでその翼を大きく羽ばたかせた。

「僕も攻めさせてもらうよ。いつも通りね」

「来い」

髑髏天使は無意識のうちに願った。

「俺の場所に。来い」

「こう願った。するとそれを受けてか。」

「おやつ!？」

「!？まさか」

烏男はそれを見ていた。髑髏天使は後ろで聞いている。しかしその音は確かに彼の耳に届いていた。爆音はそのままに何かが舞った音を。

「来るというのか」

「飛ぶなんてね」

流石の烏男もこれには驚いているようだった。

「まさかサイドカーが」

「そうか。それならば」

髑髏天使は己が何をすべきかわかっていた。そしてそれを選んだ。

「こうする。ここでな」

軽く跳躍して空中で反転する。そして今まで彼がいたその場所に

飛んで来たサイドカーの操縦席に乗る。そのうえで空に舞う烏男に襲い掛かる。

「そうか、こういうことか」

ここでようやく彼は博士の言葉の意味がわかったのだった。

「空を飛ぶ相手には同じく空を飛ぶ」

「相手の土俵にあがるってことだね」

「どうやらそうだな」

今そのことを完全に理解した髑髏天使だった。

「それでか。しかしこれなら」

「悪いけれどね。僕だってね」

迫り来るサイドカーを前にしても烏男は怯むところがなかった。

「力を手に入れたいからね。神の力を」

「闘うのか」

「そうだよ」

再び弓矢を構えつつ迫り来る髑髏天使と対峙する。

「これでね。決まるね」

「決める……」

二人はそれぞれ言った。

「ここで。この闘いを」

「終わらせるよ」

「受ける」

烏男は今まさに矢を放とうとする。髑髏天使も剣を右斜め上から左斜め下に振るう。

「これで。終わらせる」

「くっ、早い!?!」

サイドカーの飛翔は烏男が思っていたよりも早かった。そう、それは彼が弓矢を放つよりもまだ。そして髑髏天使の剣もまた実に早いものだった。

サイドカーが彼に体当たりする。それと共に剣が一閃する。空中にさらに高く吹き飛ばされた烏男はそのまま何処かへと消えるかと

思われた。しかし彼は空中で留まるのだった。

「生きている!？」

攻撃を終えそのまま河の上に着水した髑髏天使はサイドカーを反転させつつ空中の烏男を見て言う。

「まさかと思うが」

「いや、もう無理だよ」

聞けば烏男の声は苦悶で歪んでいた。顔こそ何とかこれまでと同じ様に保っているがそれでも胸に深い傷を受けていた。明らかに致命傷だった。

「流石にね。これはね」

「それでもまだ飛ぶというのか」

「ずっと決めていたんだ」

声を無理して笑わせたの言葉だった。

「ずっとね。最後の場所はね」

「最後の場所は」

「空だってね」

笑ってこう言うのであった。

「決めていたからね。だから」

「今飛んでいるのか」

「そうだよ。見事だったよ」

最後も髑髏天使を褒め称えてきた。

## 第五話 襲来その十五

「どうやら君は。僕が思っていた以上の相手だったね」

「その言葉、受け取っておく」

「どうも。最後にね」

彼は今度は周りの鳥達に顔を向けた。見れば彼等は心配そうに鳥男を見ている。しかし彼はその彼等に対して穏やかな声を出して言うのだった。

「君達、悲しむことはないよ」

こう友人達に告げた。

「少しもね。だってこれは決まっていたことだから」

「決まっていたことか」

「魔物だつて死ぬんだよ」

髑髏天使に対しても言った。

「絶対にね」

「不老不死ではなかったのか」

「まさか」

このことは笑って否定してきた。

「そんなわけないじゃない。生きていれば絶対に死ぬさ。絶対にね」

「異形の者であろうともか」

「神様になれば死なないかもね」

また神という言葉を出してきた。

「神様ならね。けれど僕はただの魔物だから」

「死ぬか」

「長生きするだけさ」

鳥男の言葉ではこうである。

「君達人間より長くね。それだけだよ」

「そういうものか」

「そつだよ。だから僕も死ぬ」

人間の多くと違うのは死というものを無機質に受け止めているというところであろうか。少なくとも生に執着しているようには見えない。

「それだけのことなんだよ」

「しかし御前の友人達は違うようだが」

見ればまだ烏男の側にいる。心配そうに声まで立てている。

「別れを惜んでいるのか」

「僕だって別れたくはないさ」

これは烏男の本心であろうか。

「けれどね。こうなったら仕方ないよ」

「では。死ぬのだな」

「うん」

髑髏天使の言葉にこくりと頷く。

「それじゃあね。ただ、一つ言っておくよ」

「何だ？」

「僕だけじゃないよ」

彼が言うのはこのことだった。

「僕の前にも何人かと闘っているね」

「ああ」

その通りだった。既に幾つかの闘いを経ている。既にそれ等の闘いから多くのものを見てきているのは隠しようのない事実であった。

「これからもそうだから」

「わかっている。それが髑髏天使の宿命だな」

「そういうことだよ。そしてその果てには」

「その果てには？」

「………御免」

だがここで烏男の言葉は止まった。

「さようならだよ。これでね」

「………そうか」

烏男は途中で言葉を切ってしまった。そうして紅蓮の炎と化して



燃え尽きてしまった。赤い空に見えるその炎は十字架を思わせるものがあつた。

髑髏天使はその炎をまだ見続ける鳥達を見ていた。だがやがて彼等に背を向け水の上をサイドカーで走りその場を後にした。背に鳥達の悲しげな鳴き声と前に今まさに大地に完全に落ちようとする赤い夕陽を見ながら。一人戦場を後にするのであつた。

第五話 完

2008・10・6

## 第六話 大天その一

髑髏天使

第六話 大天

「それで最後まで聞くことはできなかったのじゃな」  
「そうだ」

烏男との闘いを終えた牧村は次の日学校に来るとまず闘いの一部始終を博士に対して話した。博士は妖怪達と共にその話を聞いている。

「最後に何か言おうとしていたがな」

「ふむ、何だったのじゃろうな」

「それはわからないか」

「何分な。文献が実に多い」

見ればまたテーブルに本が置かれている。今度も随分と古い紙のものだ。

「これにしるじゃ。変わった紙じゃろ」

「紙………なのかそれは」

「パピルスじゃ」

歴史の教科書に出て来る単語であった。

「古代エジプトのな。あれじゃよ」

「エジプトか」

「髑髏天使の歴史は古くてのう」

博士が今度言ったのはこのことだった。

「古代ギリシアやエジプトにも記録があるのじゃよ」

「エジプトにもな」

「インドや中国にもあるぞ」

見ればパピルスの他に今にも朽ちそうな木を紐でまとめたものもある。

「ほれ、中国のものはこれじゃ」

「それは確か」

「木簡じゃよ」

博士はその木の束に触れて述べた。

「中国の西周時代のものじゃよ」

「西周か」

「これを手に入れるのにも苦労したぞ」

苦労を思い出しているの苦笑いとその手に入れた木簡をいとおしむ笑みと二つの笑みがあった。その二つの笑みが混ざり合っている。

「何分な。西周時代の資料は少ないのじゃ」

「そうなのか」

「何しろ古い。それに戦乱があった」

中国の歴史において紀元前一〇〇〇年から七百年辺りは歴史的に空白の時代なのだ。周は一度西から東に移っているがこれは異民族の襲撃を受けてのことだ。この際に様々な文献を消失している。それにより歴史的空白が生じてしまっているのである。

「だからじゃ。これも手に入れたのは奇跡に近かったの」

「それ程まで重要な文献なのだな」

「その通りじゃ。それでじゃ」

「うむ」

「読んでみると面白いことがわかった」

こう牧村に言うのであった。

「面白いこと？」

「うむ。この前話したが」

「天使のことか」

「そう、それじゃ」

やはりであった。博士は強い表情と声で牧村に対して語ってきた。牧村もそれを強い顔で受ける。

「天使じゃ。この前話したことじゃが」

「九つの階級があるのだったな」

「まずは天使じゃ」

最初はこれだった。俗に言われる天使とはこの階級を言う。

「今の君はそれじゃ」

「つまり最下級ということだな」

「まあはつきり言えばそうじゃな」

今の牧村の言葉には少し思うところがあつたがあえて口に出さずに返した。

「天使は下の第三階級じゃからな。はじまりじゃよ」

「そうか、やはりな」

それを聞いても相変わらず表情をこれとって見せることのない牧村であつた。元々階級や身分にこだわらないのだ。これは当然だった。

「それでだ」

「うむ」

「その上が下の第二階級じゃが」

「それは一体」

「前に話したかのう」

博士はここで少し己の記憶を辿った。

「ほれ、大天使じゃが」

「大天使か」

「アークエンジェルというのじゃ」

キリスト教での正確な呼び名も彼に教えた。

「天使よりさらに上の力を持つておる」

「それは一体どういったものだ？」

「それがのう」

しかしここでは残念そうに首を横に振る博士であつた。

「わしにもわからないのじゃ。まだな」

「わからないのか」

「済まんのう」

「別に謝る必要はないが」

別にそれにはこだわることのない牧村であつた。

「まだ文献で読んでいる最中だな」

「そうじゃ。しかしな」

博士はふと手元の木簡に手をやって述べてきた。

「一つ気になることがあった」

「気になること？」

「古代の中国の文字じゃがな」

「甲骨文字か？」

「それとはまた違う」

殷、正確に言えば商の時代に使われていた文字である。骨や亀の甲羅に書き込みそこから占いを行って政治に使っていたのである。中国の最初の文字だとされている。

「商の文字と周の文字はまた違うからのう」

「違うか」

「昔の中国は国ごとによって文字が違った」

「これは事実である。」

「始皇帝の統一で文字も統一されたのじゃよ」

「貨幣や度量衡を統一したあの時にか」

「その通りじゃ。それよりも以前の文字でのう」

「かなり古いのはわかるが」

「その文字で気になるものがあったのじゃ」

また牧村に対して語る。

「天を表わす文字が何度か見えるのじゃ」

「天!？」

牧村はその言葉に目を少し鋭くさせた。

## 第六話 大天その二

「天というと」

「左様、空じゃ」

わかりやすいように簡潔に言う博士であった。

「空を表わす文字がのう。出て来るのじゃよ」

「そうなのか」

「何故かはわからん」

そしてこつも言うのだった。

「何故かはな。しかし何度も出て来るのじゃ」

「まさかと思うが」

牧村の直感がここで動いた。

「大天使と関係があるのか」

「それはわからん。それにじゃ」

「それに？」

「このパピルスにもな」

今度出してきたのはこれであった。

「やはり天を表わす文字がよく見える」

「そうか」

「じゃが全体の意味はまだよくわからん」

返事は曖昧なものだった。

「今解読中じゃ」

「どれだけかかる？それで」

「それもよくわからん」

こつ言つてまた首を横に振ってきた。

「申し訳ないがな」

「わかった。では待とう」

「とりあえずその間魔物が出て来たらじゃが」

「天使の能力で闘えというのだな」

「それしかあるまい」

ぶしつけな言葉だったがその通りだった。また牧村もそれを言われてどうということとはなかった。実に静かで落ち着いた態度を保ち続けていた。

「あるもので闘わなければならないからな。何でもな」

「そうだな。それはな」

「そういうことじゃ。まああのサイドカーもある」

「まさか空を飛ぶとは思わなかったが」

「自信作じゃよ、わし等の」

また笑顔で述べる博士であった。

「やりがいがあったぞ」

「そんなにか」

「短い時間じゃったがな」

「あまり早いので正直不安だった」

これも牧村の本音だ。

「できるかどうか。まともな改造が」

「しかし凄かったじゃろう」

「錬金術か」

「今では公式には否定されておるものじゃがな」

現代では錬金術は所謂空想上のものとして認識されている。しかしそれは間違っているのだと。博士は牧村に対して言っているのである。

「それは間違いじゃ」

「前にも言っていたな」

「科学も同じじゃよ」

かといって科学も否定しない博士であった。

「そもそもどちらもな。同じなのじゃよ」

「昔は区別がなかったそうだな」

「魔術もそうじゃよ。元は同じじゃ」

「そういうものか」

「それが分かれただけじゃ。人の勝手な考えでな」

ここで少し人間の主観というものにも否定的な見方を見せる。

「嘆かわしいことじゃて」

「それは俺も同じ考えだ」

「理解してくれているようで有り難いぞ」

「実際に乗ってみたからな」

実経験程重いものはない。それが牧村に言わしているのだった。

「だからな。わかる」

「ふむ。左様か」

「そして大天使だな」

牧村は話を天使について戻してきた。

「調べておいてくれるか」

「勿論じゃ。それはな」

確かな声で頷く博士だった。

「わかっておる。ついでに他の階級の天使達についても調べておく」

「大天使の上もか」

「九つもあるからのう」

一口に言ってもそれが尋常でないことは博士にも牧村にもわかるものだった。今でさえ大天使について何一つわかっていないからだ。だから二人は晴れない顔になっているのだ。

「さて、何が何かじゃが」

「調べてわかるのならいいがな」

「調べてわからん場合もあるからのう」

「世の中はいつも答えが出るわけじゃない」

達観した牧村の言葉だった。

「わからない場合も考えておいた方がいい」

「そうじゃな。しかしそれにしてもじゃ」

「どうした？」

「相変わらず達観しておるのう」

牧村の顔を見つつ感心したように述べる博士だった。



「何があっても。当然として受け止めておるではないか」

「何が起こつても不思議じゃない世の中だ」

そのクールな声で答える牧村だった。

「少なくともそう思っているからな」

「だからか」

「妖怪もいる」

ここで妖怪達に目をやる。

## 第六話 大天その三

「この連中を見て受け入れられないならこんな考えは持てない」

「一目見て受け入れていたけれどね」

「あれは僕達の方が驚いたよ」

「全く」

妖怪達は妖怪達で牧村に言う。

「全然平気で見てるんだから、二回目から」

「髑髏天使になるのだってね」

「最初は驚いた」

牧村もこのことは認める。とはいっても相変わらずあっさりとした表情だが。

「いきなり目の前に魔物が出て来たしな」

「まあ普通は驚くよね」

「っていうか驚くことあるんだ、牧村さんも」

妖怪達はこのことに注目していた。

「何かそつちの方が凄いよ」

「ちゃんと感情あるんだ」

「感情のない人間なんていはずよ」

博士はそれは妖怪達にはつきりと述べた。

「ゴーレムじゃないんじゃからな」

「ゴーレム！？ああ、あれね」

「イスラエルのあれだよ」

「うむ、そうじゃ」

博士は妖怪達の言葉に対して頷いてみせる。

「それじゃ。あの動く人形じゃよ」

「ロボットって言うのかな」

「人間の科学とか工学じゃ」

「最近ロボットでもそれは備えられていたりするかの」

中々細かいところまでわかっている博士だった。

「基本的にはないな」

「生きていれば絶対に感情があるってことね」

「そうじゃ。彼にしてもな」

また牧村に目を向けてきていた。

「あるに決まっておる。生きていればな」

「けれどそれが乏しいって場合はあるみたいだね」

「そうだよ。何か」

「昔からこうだ」

牧村はまた博士と妖怪達に対して述べる。

「子供の頃からの。喜怒哀楽は乏しいのは自分でもわかっている」

「わかっているんだ」

「これで困ったこともない」

だからいいのだとも言った。

「別にな」

「そういうものかなあ」

「笑いたい時に笑って」

妖怪達は彼の言葉を聞いてそれぞれの口で述べる。

「泣きたい時に泣く」

「それだよ」

「うん、それだよ」

口々に言い合うのだった。

「そうじゃないと面白くないじゃない」

「折角生きてるんだからね」

「そうそう、思いきり泣いて笑って」

あくまでこう主張する。

「そうして生きないかね」

「面白くないよ」

「そういえばこの妖怪達は」

牧村も彼の言葉を聞いて述べる。

「喜怒哀楽が随分と激しいな」  
「それが妖怪なのじゃよ」  
博士はこう牧村に話す。  
「これがな。喜怒哀楽が激しいのじゃ」  
「そうなのか」  
「子供がおるじゃろうが」  
「子供!？」  
「そう、子供じゃ」  
彼が今度牧村に話したのは子供に関してだった。  
「人間の子供じゃが」  
「そちらの方が」  
「左様じゃ。子供は大抵喜怒哀楽が激しいものじゃな」  
「そうだな」  
「これはわかる正道だった。  
「それはな。はっきりとあるな」  
「それじゃよ。人間の子供と同じなのじゃよ、妖怪は」  
「心が同じという意味だな」  
「やっぱりわかるんだ、この人」  
「頭はいいね」  
妖怪達はそれを聞いてまた言い合つ。  
「だからいいけれど」  
「何でこう。表情がないのかなあ」  
「とにかくじゃ。妖怪はそういうものじゃ」  
その妖怪達の言葉を後ろに聞きつつ述べる博士だった。  
「無邪気での。騒がしいものじゃ」  
「童心か」  
牧村はここでまた言った。  
「つまりはそれだな。それを持っていると」  
「そつとも言うつう」  
「ではあれか」

今度はふとあることに気付いた。

## 第六話 大天その四

「妖精と同じだな」

「これはこの前に話したかのう」

「確か」

静かに博士に答える。

「そうだったと覚えている」

「名前が違うだけで大体同じじゃ」

「そうか、やはりな」

「特に怖がることもないのがここでもわかるところが」

「元から怖がってはいない」

やはり表情を変えずに博士に答える。

「驚きはしたがな」

「普通はもつともつと驚くんだけれどねえ」

「心臓が吹き飛ぶ位にね」

「ねえ」

牧村の言葉を聞きつつまた妖怪達が言い合う。

「それでもこの人はこんなのだからね」

「何か拍子抜けていうかね」

「面白くないよね」

「面白いことをするつもりもない」

やはり素っ気無い牧村の返答だった。

「別にな。今はそうした時ではない」

「じゃあ面白いこともできるの？この人」

「想像できないよね、全然」

「ねえ」

やはりどうしてもそれはできない妖怪達だった。

「こんなのだからね」

「漫才師とか向いてると思う？」

「まさか」  
ふと想像してみるがどうしても無理だった。  
「全然向いてないよ、お笑いは」  
「芸能人だったらあれ？俳優さん？」  
「随分役柄が限られている感じだけれど」  
「芸能界にも興味はない」  
「ここでもこんな返事の牧村だった。  
特にな」  
「まあその方がいいよ」  
「向いてないからね」  
「それも絶対」  
また妖怪達は牧村に話す。  
「賢明な判断だね」  
「まあその話は置いておくのじゃ」  
博士はここでまた口を開いた。妖怪達の話が終わらせたのだ。  
「きりがないぞ」  
「あっ、御免」  
「それじゃあ止めるよ、博士」  
「そういうことじゃ。とにかくじゃ」  
ここで牧村に顔を戻してきた。  
「大天使についてはこれから調べておく」  
「わかった」  
「少なくとも悪いようにはならんよ」  
「それは確かか」  
「天使の階級はあれでかなり厳格なのじゃよ」  
「天使だけではないか」  
「これがまだ今一つ把握できない牧村だった。  
ただ天使だけがいるとだけ思っていたのだがな」  
「最初の髑髏天使はどうだったかわからぬぞ」  
「最初とは」

「だからじゃ。昔からおつたのが髑髏天使じゃよ」

博士が今度言うのはこのことだった。

「キリスト教以前からな」

「では時代と共に形が変わるのか」

「その証拠に御主の髑髏天使としての姿はどうなっておる？」

博士が次に指摘したのはこの部分だった。

「まず頭は髑髏じゃな」

「ああ」

「そして西洋の鎧を着ておるな」

「その通りだ」

確かな声で博士に答える。

「考えてみよ。その鎧ができたのはほんの数百年前じゃ」

「数百年前か」

「十字軍の時代やアーサー王ではあれじゃよ。鎖帷子じゃ」

これは絵画にもよく表わされている。アーサー王の伝記ではラン  
スロットもガウエインも鎖帷子なのだ。また十字軍の騎士達も同じ  
だ。アーサー王の物語を纏めたサー・トーマス・マロリーは丁度こ  
の時代に生きていた。彼の時代にはプレートメイルはなかったのだ。

「多分その時代の髑髏天使は鎖帷子だったのじゃろうな」

「そうなのか」

「髑髏天使の格好は多分になる人間のイメージが働くようじゃな」

目を少し思慮深いものにさせて牧村に告げる。

「君は鎧といえはあれじゃな」

「西洋の鎧だ」

このことを自分でも話す。

「それが第一にあるが」

「ではそれがそのまま出たのじゃ。それで西洋の鎧を着ておるのじ  
ゃ」

「そうか」

「そして天使としての階級が加わった」



博士はまた天使の話をする。

## 第六話 大天その五

「まあ簡単に言うならそれは強さのレベルじゃな」  
「レベルか」

「これもその時の髑髏天使で変わるもかもな」  
「考えながらの言葉が続く。」

「キリスト教以前と以後でな」  
「俺はキリスト教は知らないが」

「牧村はこのことを告げて疑問符としてきた。」

「それでも。反映されているのか」

「ああ、ここは少し違う」

「違う!？」

「うむ。大天使とかは文献にある話じゃ」

「牧村自身のイメージとはまた別だといっているのである。」

「これはな。おそらく髑髏天使本来の能力をキリスト教風に解釈したもののじゃよ」

「そうなのか」

「それで大天使とかいうのじゃ」

「こつ牧村に話す。」

「おそらくランクは九つじゃな」

「天使の階級だけか」

「天使は階級が一つ違えばそれで全く違ってくる」

「博士はこのことをこれまでより強い言葉で語る。」

「上級の天使ともなれば他の宗教では下級の神にも匹敵する程じゃ」  
「神か」

「そう、神じゃ」

「牧村の目を見て述べる。」

「神にも等しいまにな」

「そこまでいくと話がわからないが」

「まあ今はそれ程わかる必要もない」  
「わかる必要もない？」  
「というよりかは」  
「ここで言葉を言い替える博士であった。  
「考えても仕方ないことじゃ」  
「それはまたどうしてだ？」  
「文献をまだ解読しておるところじゃぞ」  
博士はまた木簡とパピルスを指し示す。  
「ここに書かれておることがまだ解読できてはおらん」  
「だからか」  
「そうじゃ。だから仕方のないことじゃ」  
彼は言う。  
「今はな。楽しみは少しずつ待っておくでしょう」  
「わかった」  
「それよりもじゃ」  
「また話を変えてきた博士であった。  
「また魔物が出て来るぞ」  
「来るか」  
「間違いなく来る」  
「今度は断言だった。  
「もうすくな」  
「今度は何が根拠でわかるのだ？」  
「そういう気がするだけじゃがな」  
「明確とは到底言えない根拠であった。  
「まあ勘というやつじゃよ」  
「勘か」  
「別に疑ってはおらんようじゃな」  
「牧村の目を見つつ問うてきた。  
「今のわしの言う根拠には」  
「闘いにおいて勘は必要不可欠なものだ」

それがなくては生きていくこともできない。闘い抜く前に倒されてしまう。そうした世界に身を置くようになってしまったからこそ頷くことができたのである。

「だからだ。それはな」

「左様か。やはりな」

「だとすれば何処で遭うからな」

彼が次に思うのはこのことだった。

「それ次第だが。相手もな」

「そういえば今までは人型の魔物ばかりだったそうじゃな」

「そうだ」

これはその通りだった。彼が今まで出会った魔物はどれも二本足で立ち二本の手を使っていた。だから普通に対峙することもできたのだ。

「じゃがそうともばかりに限らんぞ」

「！？他のタイプの魔物もいるのか」

「だってそうじゃない」

「僕達を見てよ」

ここでまた妖怪達が彼に声をかけてきた。

「僕達なんかあれだよ。ほら」

「僕なんか足が四本だよ」

からかさとすねこすりが言う。当然ながらからかさは足が一本で目も一つだ。傘から細い両手が出ていてやたらと大きな口と舌を持っている。すねこすりは猫に似た姿で牧村の足元にいる。

## 第六話 大天その六

「こんなのなのに」

「どうして魔物だけが違うって言えるのさ」

「どういうことか」

「普通に人間とは全然違う姿の魔物もいるから」

「そうそう」

今度は塗り壁と猫又が言う。

「化けるのもいるしさ」

「日本以外の国からも来ているじゃない」

「そうだったな。日本以外の国からもな」

「今日本は魔物に関してとんでもないことになっておるぞ」

博士はこのことも牧村に話した。

「君も最初に出会ったのは虎人だったじゃろ」

「そうだ。あれは中国からだったな」

「虎人の分布は広いのじゃよ」

「そうなのか」

「アジア全域におる」

なお虎の分布自体がそうになっている。東南アジアや中国だけでなくインドにもいるしシベリアにもいる。韓半島においても虎は象徴的な存在として知られている。

「中国だけにおるわけではないのじゃよ」

「それが日本に来た」

「後の連中ものう。半漁人はブラジルじゃな」

「アマゾンか」

「左様。あそこにいる魔物じゃ」

魔物についても実に詳しい博士であった。

「アマゾン川において生活しておる。普段は魚を獲って暮らしておる至って呑気な連中だというが」

「あいつは例外だったか」

「妖怪と魔物の境界は曖昧じゃよ」

「こつも言う博士だった。」

「人を襲うか襲わないか。それだけじゃ」

「妖怪の世界にいる半漁人もいるのか」

「そういうことじゃ。この連中は人を襲わぬから妖怪なのじゃよ」

「前にもそういう話出たけれどね」

「そつだよ」

今度はわいらと土蜘蛛が牧村に言ってきた。

「たったそれだけ」

「それだけなんだよ」

「そついえばこの連中は」

牧村はここでそのわいらと土蜘蛛を見て述べた。

「人を襲つても不思議ではない姿だな」

「はい、その通りです」

いきなり彼の目の前に美しい女の顔がやって来た。

「そうですよ。私にしるそうですし」

「ろくる首もか」

「御存知ありませんか？ろくる首も人を襲う者がいますよ」

「初耳だが」

「しかし事実じゃよ」

博士は牧村にまた話す。

「それはな。ろくる首の中にも魔物がある」

「どうやってだ。こんなのが」

「あら、こんなのなんて」

ろくる首のろく子は牧村の失礼とも思える言葉にその知的な美貌の顔をむくれさせてみせる。その間に首をゆらゆらと宙に動かしている。

「心外ですわ。私だつてれっきとした妖怪ですのに」

「少なくとも緊張感を感じられない」

ろく子にこう返す牧村だった。

「到底な」

「あらあら」

「日本の妖怪には多いみたいだな」

「ろくろ首には二種類あるのじゃよ」

博士がろくろ首について話してきた。

「まずはこうして首が伸びるもの」

「これだけではないのか」

「あとは首が抜け出て飛ぶものじゃ」

「首が抜ける!？」

「そうじゃ」

牧村にとつては信じられない話であった。

「首が抜けるのじゃよ」

「ろくろ首の首が抜けるのか」

「そのうえで空を飛ぶ」

さらにまた言う博士であった。

「空をな」

「そんな者もいるのか」

「中国に似たようなのがおつてな」

「中国か」

「左様。飛頭蛮と言う」

「飛頭蛮か」

やはりこれも牧村の知らない妖怪であった。ただ名前を聞く限り

は頭が飛ぶ種類のものではないかと漢字についても考えるのだった。

「色々というな」

「何でもおるぞ」

博士の言葉はやけに達観したものだった。

「妖怪というものはな」

「どうやらそうらしいな」

「そう。だからろくろ首もな」

「首が抜ける者もいるのか」

「そちらは首が空を飛ぶ」

「完全にその飛頭蛮と同じだな」

「しかし一つだけ違う」

ここで言葉を付け加える博士であった。



## 第六話 大天その七

「一つだけな」

「それが人を襲うということか」

「血を吸うのじゃ」

これまた牧村には考えも寄らぬことだった。

「血をな」

「血！？吸血鬼か」

牧村はそれを聞いて顔を顰めさせた。

「吸血鬼か」

「何かおかしいかの」

「日本にも吸血鬼がいたのか」

彼が顔を顰めさせた理由はここにあった。

「そんなものが。日本にも」

「吸血鬼は何処にでもおるぞ」

「何処にでもか」

「スラブだけではない」

つまり東欧だけではないということだ。ルーマニアのドラキュラの話から吸血鬼といえはスラブのイメージがある。確かに東欧には吸血鬼の話が多いが彼等は東欧にだけいるのではないのだ。

「世界各地におるぞ」

「そうだったのか」

「ほれ、映画にもなったあれじゃ」

そして今度はこう言う博士だった。

「キョンシーがおったじゃろ」

「あれか」

「あれも吸血鬼なのじゃよ」

「中国には吸血鬼はいないと聞いたが」

「一体誰にそれを聞いたじゃ」

今度は博士が顔を顰めさせる番であった。

「中国に吸血鬼はいない？中国のことを何も知らんのじゃな」

「しかしそれを言った作家はかなりの中国通だが」

「それでも中国のことを知らん」

きつぱりと切り捨ててしまった博士であった。その言葉で。

「それも全くな」

「そうなのか」

「そもそも吸血鬼とは広範囲な話での」

「広範囲か」

「血を吸うだけでなくその肉も貪り食うこともある」

また随分と陰惨な話になってきた。

「血を吸うついでにな」

「そういえばキョンシーも人肉を食うな」

「その通りじゃ。キョンシーの血の吸い方はな」

不意にその手を振り回して何かを掴むようにしてきた。

「こう相手の頭を掴んでな」

「うむ」

「もぎ取る」

「人の頭をか」

「左様。そしてじゃ」

「そこから血を吸うのだな」

「頭からな。傷口から吸うのじゃよ」

やはりそうであった。随分と惨たらしいことである。

「ついでに頭も食ったりする」

「そういう吸血鬼か」

「仲間を増やさぬ吸血鬼もある」

「ではその頭が飛ぶろくろ首は何だ？」

「仲間を増やさぬ方じゃ」

それが答えであった。

「完全に魔物じゃからな」

「飛んだ首が相手を襲うのか」

「首筋に噛み付く」

この辺りはドラキュラを彷彿とさせるものであった。

「そしてそこからじゃ」

「血を吸い取るのか」

「しかも何人かで一人を襲ってな」

「考えるだけでぞっとする話じゃ」

「そうでしょ。けれど私は違いましたよ」

ろく子がまた首を伸ばしてきて牧村に話してきた。

「そんなことはしませんから」

「血は吸わないのか」

「人間と食べているものは全く同じです」

知的な笑みで牧村に述べる。

「何一つ変わりはありません」

「人間と食べているものは同じか」

「首が伸びるろくろ首はそうなのじゃよ」

また博士が牧村に対して説明してきた。

「わし等とは。普段は何も変わらんよ」

「何もか」

「首さえ伸びなければ人間と変わるところは何もないのじゃよ」

「妖怪なのにか」

「左様、妖怪でもじゃ」

見れば博士の顔は少し面白そうに笑っていた。どうも牧村に対してこのことを話すのが楽しいようだ。学者としての習性として人に何かを話すことが好きなようである。

「普通に暮らせるのじゃよ」

「まさか」

「しかしそのまさかじゃ」

また言う博士であった。

「ほれ。首が伸びないと妖怪に見えるか？」

「いや」

どう見ても普通の人間である。少なくとも牧村にはそう見える。

## 第六話 大天その八

「別に何もな」

「そういうことじゃよ。わかったな」

「外見にもよるのか」

「妖怪といっても千差万別じゃよ」

「適当に溶け込むこともできるしね」

「そうそう」

「ここでまた妖怪達が楽しそうに話す。

「犬とか猫のふりしたり」

「簡単だよ」

「それではだ」

博士の言葉と妖怪達のお喋りを聞いて彼はあることを仮定した。

「俺達の隣の人間が妖怪の可能性もあるのか」

「魔物は人間に化けておったな」

「ああ」

「溶け込むか化けるかの違いじゃよ」

「今度はこう言う博士であった。」

「たったそれだけの違いなのじゃよ」

「魔物が俺達の世界に入っていることは聞いたが」

「そういうことじゃよ」

「そうか」

「世界は複数あるものじゃ」

「またここで言う博士であった。」

「しかしのう。それと共に世界は一つなのじゃ」

「互いに重複し合っているということか」

「流石じゃな。すぐに察したか」

「この程度はな」

鋭い目で言葉を返す牧村であった。

「容易に察しがつく」

「ふむ。左様か」

「では俺は隣人と闘う可能性もあるのか」

「それは嫌か？」

「いや」

今の博士の問いにはすぐに首を横に振って返した。

「向こうが来るのなら相手をする。それだけか」

「いつも通りの返答じゃな」

「それだけだ。では」

ここで立ち上がる牧村であった。

「今日はこれで去らせてもらう」

「講義か」

「今日はこれからはじまりだ」

大学の講義はその日その日で違うものだ。学生は曜日によってそのスケジュールが極めて違うことがある。それは牧村にしろ同じである。

「だからな。邪魔をしたな」

「また明日も来るのか？」

「そのつもりだ」66

立ち上がりながら博士に答える。

「今日は何かと勉強させてもらった。感謝している」

「感謝されておるのならよいことじゃな」

「それで満足しているのか」

「世の中で感謝されること程よいものはない」

博士は純粹に笑みを浮かべながら牧村に述べた。

「世の中感謝を知らぬ人間もおるしな」

「それはいるな」

そうした人間を何人が知っている牧村であった。

「残念な話だ」

「君がそうでなくて何よりじゃよ」

「感謝を知らない人間は寂しい人間だ」

冷たい、そこには同情をあえて見せない何かがある言葉であった。

「感動がないからな」

「この人も感動とか見えないよね」

「そうだよね」

「それは間違いだ」

ひそひそ話をする妖怪達に対して返した。

「俺は感動を知っている」

「表に出ないだけ？」

「いつもみたいに」

「見せる必要のないものは見せない」

これが牧村の返答であった。

「ただそれだけだ」

「本当かな」

「さあ」

「無愛想な人だからね」

「ひょっとしたらアニメのあの青い髪の女の子みたいなの？」

「よく知ってるな」

牧村は妖怪達がアニメまで観ていることに少し驚いていた。今まで自分が考えていたよりも人間界に親しんでいることもわかった。

「もう結構古いアニメだな」

「だから僕達一生長いしさ」

「人間の世界のものって楽しいのばかりだし」

「面白いことだったら大歓迎だよ」

「美味しいものもね」

「人間に近い部分も多いのは確かか」

「わかったようじゃな。そういうことじゃよ」

部屋を出る時に博士の声を聞いた。ここでは最後まで話すことはなかったが。それでも彼の心には残った。妖怪も人間と変わらない部分が多いということに。

## 第六話 大天その九

それから暫くは大学で講義や部活に専念する日が続いた。その中で彼は若奈ともよく話した。髑髏天使としての顔は完全に隠したうえでのことだが。

「ねえ牧村君」

「何だ？」

二人はこの時サイドカーに乗っていた。牧村が運転し若奈は側車に乗っている。未久の時と同じでいつもの乗り方である。

「最近忙しいの？」

「別に忙しくはない」

静かにこう答える牧村だった。サイドカーは今信号待ちで車と車の間にいる。

「それはな」

「そうなの」

「部活が一つ増えただけだからな」

「フェシング部とテニス部よね」

「ああ」

「どっちも西洋的ね」

若奈は彼が今している二つのスポーツを文明というカテゴリーでくぐって述べた。

「考えてみたら」

「西洋か」

「ええ。何かあったの？急にどちらもはじめて」

「別に何も無いが」

「ほら、牧村君ってさ」

側車から牧村の方を見上げる。小柄な上に側車の中に座っているのでも見上げる形になってしまふ若奈であった。

「静かじゃない」



「無愛想とも言われるがな」  
「自分で言ったら駄目よ」  
今の牧村の返答にはついつい苦笑いになった。  
「私はそうは思わないし」  
「俺は無愛想じゃないのか」  
「言葉がそんな感じなだけよ」  
少なくとも若奈はこう考えているのだった。  
「ただね。それだけよ」  
「そうか」  
「表情もあまりない方だけれど」  
「それは無表情とは言わないのか」  
「だから。私はそうは思っていないから」  
この辺りを特に強調する若奈だった。  
「別にね」  
「ならいいが。ところでだ」  
「うん。ところで？」  
「青だ」  
丁度ここで信号が変わった。青になったのだ。  
「行くぞ」  
「ええ、それじゃあ」  
「飛ばすがいいか」  
「相変わらずスピードは出すのね」  
このことが少し残念そうな若奈だった。苦笑いを浮かべて述べる。  
「また」  
「スピードは出すものだ」  
言いながらももうアクセルを踏む足に力を入れはじめている。  
「しかも全力でな」  
「よく今まで捕まらないわね」  
「捕まるような下手なことはいらない」  
早速スピードを出し車の横を通り抜けながら答える。

「それにだ」

「それに？」

「事故を起こすこともない」

言いながらスピードをどんどんあげていく。運転もアクロバットになっている。サイドカーが時々片方が浮きそれで車の脇を通り抜けるのだ。

「ここまでやってなの。サイドカーで」

「バイクでやるのはまだ二流だ」

今も車の脇で側車を浮かして進んでいる。若菜が牧村より上にいる。

「しかしだ。サイドカーでやることができれば」

「一流ってこと？」

「少なくとも二流ではない」

「二流は嫌いなよね。相変わらず」

「二流は中途半端な響きがある」  
だから嫌だというのである。これも牧村のポリシーであろうか。

「だからな。好きじゃない」

「三流は？」

「やるのなら最高か最低だ」

非常に割り切っていると言える考えであった。

「三流も駄目だ」

「つまり一流か最低ってことね」

「そう思う。俺はな」

「本当にそういうところは変わらないわね」

昔から牧村を知っているからこそその言葉であった。

「極端なんだから。考えが」

「やるかやらないかだが」

「それか一流か最低なのね。さっぱりしているって言えばさっぱりしているけれど」

「サイドカーもだ」

今度は今操っているサイドカーについて言及した。

「それも。一流か最低だ」

「運転技術のこと？」

「これでどうだ？」

このことを若奈に対して尋ねた。

「今の俺の技術は」

「こんな凄い運転する人他に知らないわ」

これが若奈の返答だった。

「私は他にね」

「そうか。ならいい」

「もつとも」

しかしここで言い加えることも忘れない。

## 第六話 大天その十

「私サイドカー持つてる人はあまり知らないけれどね」

「あまりか？」

「もつとはつきり言えば牧村君だけよ」

そもそもサイドカー自体があまりないものであるのは確かだ。マニアが持っているものであるという考えが何処かに強いものである。ハーレーダビットソンやそれよりもこの考えは強いであろう。

「私の知ってる限りはね」

「それで一流と言えるか」

「サイドカーでこんな運転できるの？普通」

今度は今の牧村の運転をさしてきた。

「できないわよね、やっぱり」

「多分な」

これは牧村自身もわかっていることだった。

「できるものじゃない」

「じゃあそれで一流じゃない」

若奈の言いたいのはこういうことだった。

「間違いなく。牧村君のサイドカーは一流よ」

「それなら何よりだ」

「バイクの運転だと凄いものがあるし。それに」

「それに？今度は何だ」

「このバイクチューンアップしたの？」

風を感じながら彼に問うてきた。今の彼女の目の前には次々と抜かれていく車の残像だけが残っている。風景はもうあまり目には入らなくなっていた。

「随分速くなってるけれど。風だって凄いし」

「博士に改造してもらった」

「博士！？ああ」

それが誰なのか若奈にもすぐわかった。八条大学にいて博士といえど誰を指すのか。この大学に一月でもいればすぐにわかることだった。

「あの博士ね。悪魔博士」

「そうだ。あの博士だ」

「あの博士ってバイク好きだったの」

「嫌いなものはないらしい」

「何かその言い方って」

若奈にとっては随分引つ掛かる言い方であった。

「あれじゃない。食べ物みたいね」

「学問なら何でもできるといのが本人の言葉だ」

「戦前から八条大学にいたって話だけねど」

「本人の言葉では百歳だ」

実際の年齢は誰もよくは知らないのだ。思えば謎だらけの人物である。しかしそれも博士の外見を見れば納得できるから不思議である。

「もつと上かも知れない」

「それだけ御歳なのにまだ大学におられるのも凄いです」

「工学や機械にも詳しいのは確かだ」

「文学博士じゃなかったの？」

一応大学でこの肩書きで有名になっている。彼の学問はどちらかというとと民俗学に分類できるものだからである。

「確か」

「他にも哲学や法学の博士号もある」

「多いわね」

「理学や物理学、医学もだ」

「そしてその工学も」

「とにかく長く生きているからな。何でも知っているらしい」

ただそれだけでは済まないのがあの博士である。

「あと確か知能指数が」

「幾つなの？」  
「三百に達しているそうだ」  
「アインシュタイン以上？」  
「四百かも知れない」  
「桁外れの数字なのは間違いない。」  
「だから学問は何でもできるそうだ」  
「羨ましいっていえば羨ましいかしら」  
「羨ましいか」  
「勉強に苦労している身からすればね」  
「これは若奈の本音が多少混ざっていた。」  
「やっぱりそう思ったりするわね」  
「そうか」  
「牧村君は別にそうじゃないみたいけれど」  
「他人のことはどうでもいい」  
「また素っ気無い言葉になっていた。」  
「そんなことはな。自分は自分、他人は他人だ」  
「相手がどんな人でもいいのね」  
「嫌な奴でなければいい」  
「個人主義とでも言おうか。少なくとも他者に対して嫉妬したりするような人間であるのは確かだ。優越感や劣等感を抱く男でもない。」  
「俺はそれだけだ」  
「やっぱり素っ気無いわね」  
「だがこれで困ったことはない」  
「ここでもこうであった。」  
「今までな」  
「他人に干渉しないのはいいことだけれどね」  
「言つつもりもない」  
「やはりこの考えを述べる。」  
「何もな」  
「私にも？」

若奈はここで不意に自分のことを話に出してきた。

## 第六話 大天その十一

「やっぱり。そうなの？」

「誰に対しても言うつもりはない」

「こう問われても返事は変わらなかった。」

「別にな」

「そう、やっぱり」

「だが」

若奈は今の牧村の言葉で少し暗い顔になりかけた。しかしそれよりも前にその牧村がまた彼女に対して言うてきたのであった。素早いタイミングで。

「俺は嫌いな人間とは話をしない」

「そうよね。牧村君はそうね」

「お互い不愉快になるだけだ。それに」

「それに？」

「このサイドカーにも乗せない」

「このことも告げるのだった。」

「横には。特にな」

「そうなの」

「そうだ」

微笑む若奈だが牧村は運転の為正面を向いているうえにヘルメットを被っているので彼女の顔が見えることはなかった。若奈は頭だけを覆うヘルメットで牧村のそれは顔全体を覆うものであった。

「未久も君もな」

「じゃあこのままずっと横に乗せてもらいたいわ」

微笑んだままの言葉だった。

「それは駄目かしら」

「別に構わない」

「ここでも素っ気無い言葉だがそれでも言うのだった。」



「いたければいい」

「じゃあそうさせてもらおうわ」

「ただ」

しかしここで、牧村の言葉が少し暗いものになった。

「俺が急に何処かに行っても何も思わないことだ」

「旅行にでも行くの？」

若奈は今の彼の言葉をこう受け取った。勿論彼が髑髏天使であることなど知らない。知っているのは博士とその周りの妖怪達、そして魔物達だけだ。それで知ることができる筈もないのだ。

「牧村君って旅行したの？」

「それは」

「それとも旅行に興味があるの？」

彼が何時死んでも、魔物との戦いの中で倒れても不思議ではない立場にいるのを知っているならば出ない言葉だった。牧村はこのことに心の中で寂しいものも感じたがやはりそれも表には出さないのだった。何もかも言うことはない、それが今の彼であった。

「それなら本貸すけれど」

「旅行の本か」

「私もそれなりに興味があることだし」

こう述べてきた。

「よかつたら。どうかしら」

「その時に頼む」

髑髏天使としての顔は隠した。

「その時にな」

「わかつたわ。それじゃあ」

「さて、そろそろだ」

話を変えてきた牧村だった。

「そろそろ店に着く」

「そうね。お父さんどうしているかしら」

「カウンターにいるのは間違いない」

牧村は言った。

「そしてそこでコーヒーを淹れている」

「コーヒーかしら」

「それとも紅茶か」

もう一つ飲み物を話に出した。

「それかココアか」

「ココアだと嬉しいけれど」

若奈はココアを話に出してそれを欲しがる顔を見せた。

「今はね」

「何故ココアだ？」

「寒いからよ」

それが理由であった。

「最近少し寒いじゃない。それに」

「それに。何だ」

「バイクに乗つてるとね。どうしても」

言葉に苦笑いがこもった。

「身体が冷えるから」

「それか」

「牧村君もそうじゃないの？」

また牧村に顔を向けて尋ねた。

「やっぱり。バイクに乗っていると」

「馴れている」

バイク乗りとしての言葉であった。

「もうな」

「だから平気なの」

「平気ではないが寒いことよりこれに乗る方がいい」

「そうなの。そんなにこのサイドカーが好きなの」

「落ち着く」

そのサイドカーを操りつつ言った。

「乗っているだけでな」

「それって凄いことだと思っけれど」

若奈はまた牧村に突っ込みを入れた。

「それだけで落ち着くって」

「好きだからな」

「だからなの？」

「そつだ。やはりいい」

感情こそ乏しいがここでも感慨がある言葉だった。

第六話 大天その十二

「こうして乗るのがな」

「まあ好きなのはわかるわ」

若奈もこれはわかった。

「サイドカーがね」

「身体が冷えるのは確かだがな」

「じゃあお店で何にするの？」

「何がいいか」

「ココア。どう？」

またココアを話に出す若奈だった。

「サービスするわよ」

「サービスか」

「私がいれてあげるわ」

にこりと笑って牧村に顔を向けて告げた。

「コーヒーも紅茶もやっぱりお父さんの方が上手いけれど」

「ああ」

「それでも。ココアには自信があるのよ」

何気にココアが好きな若奈である。

「だから。どうかしら」

「そうだな。ではココアを頼む」

「寒い時はココアよ」

牧村から言葉を受けたうえでまた言った。

「一番あつたまるから」

「そうだな。あれがな」

「それじゃあ。お砂糖をたっぷりに入れてね」

「白砂糖だな」

「勿論よ」

二人はココアに対する共通のこだわりも見せた。

「ココアにはね」

「ココアはやはり白砂糖だ。しかも角砂糖ではなく」

「粉砂糖よね」

「そこもこだわってるな」

「勿論よ。喫茶店の娘よ」

若奈はこのことを子供の頃からよく自覚していた。それが自慢の種でもありいつも両親の仕事を見て育ってきているのである。だからよく自覚しているのだ。

「これ位はね」

「では楽しみにしておこう」

「任せて。じゃあね」

「ああ」

こうして牧村は若奈のココアを飲んだ。それで身体を暖めそのうえで家に帰った。その次の日。彼はまたサイドカーで街を走っていた。しかしここであるものを見た。

「むっ!?!」

空の上だった。ふと見上げた時にそれを見たのだ。

「あれは」

シルエットは先に闘った烏男に似ていた。しかし何かが違っていた。

どちらにしる魔物なのは間違いないと思った。ビル街の方に向かって行くのを見て彼もそちらに向かった。そうしてビル街に入ると目の前に一人の男がやって来た。

「来られましたなあ」

「貴様は」

外見は飄々とした白髪頭の老人だった。白髪といってももう髪の毛、頭頂部には殆どない。そして顎鬚を生やしにこやかな笑みを浮かべていた。草色のスーツを着て信号停車している牧村の前に出て来たのだ。

「魔物か」

「おわかりのようですなあ」

「俺の前に出て来た」

その老人を見据えて言った。

「それだけで充分にわかる」

「おやおや」

そう言われても飄々とした雰囲気を崩さず笑う老人であった。

「それはまた」

「何者だ？」

老人の雰囲気に飲まれることなく鋭い目で問うた。

「魔物なのはわかつているが」

「魔物ですか」

そう言われても飄々とした雰囲気を崩さない老人だった。

「確かにそうですなあ」

「確かに何も俺を倒しに来たのだな」

「いやいや、今は違います」

だがそれは否定するのだった。

「今は『違いますぞ』」

「今はだと？」

「貴方はまだ天使ではありませんか」

牧村の今の階級も知っていた。

「それではまだ。私が出て来ても貴方がお困りでしょう」

「俺が天使なのも知っているのか」

「知らない筈がありません」

断言さえしてきた。

「これ位のことは」

「只の魔物ではないな」

「如何にも」

今度は自分でそれを認めてきた。

第六話 大天その十三

「ですから。今は貴方のお相手はしません」

「では帰れ」

ぶしっけな調子で老人に返した。

「俺が用があるのは闘う魔物だけだ。それ以外にはない」

「確かに私は『今は』闘いません」

「今は、か」

「そうです。今は」

「わかった。では今は貴様の相手はしない」

とりあえずは彼に対しては闘志を向けないことにした。

「では帰らせてもらっぞ」

「いえいえ、そうしてもらっても困るのです」

「何っ!？」

呼び止められてその目がまた鋭くなった。

「だが貴様は今」

「私だけではないので」

にこやかだがその裏には底知れぬ何かを宿らせた不気味な笑みで

牧村に告げてきた。

「ここにいる魔物は」

「もう一人か」

「何度も言いますが私は今は貴方とは闘いません」

そのうえでこのことを念押ししてきた。

「ですから。どうぞお行き下さい」

「魔物がいる場所にか」

「何でしたらサイドカーはお預かりしますが」

「それには及ばない」

それは断った。

「細工をしたり調べたりするつもりはないようだがな」

「ええ。そのサイドカーに興味はありませんので」

今も一瞥だにしない。心から今牧村が乗っているサイドカーに対して興味がないのがわかる。興味があるのはあくまで彼自身に対してだけということだった。

「それは御安心下さい」

「だがそれでもいい」

こう言われてもやはり断るのだった。

「これは俺が望めばそれで動くからな」

「随分と便利なもので」

「頼りにはしている。それでだ」

ここまで話したうえでまた老人に言葉を向けた。

「俺と闘いたいという魔物は何処だ」

「あちらです」

老人はすぐにそれに応えて彼から見て右手、牧村から見て左手にあるそのビルを指し示した。それはビル街によくあるごく普通の高層ビルだった。

「あちらの屋上に」

「屋上か」

「案内致しますが」

「それもいい」

この申し出も断る牧村だった。

「自分で行く。それだけだ」

「左様ですか」

「一応礼は言っておく」

サイドカーから降りながら老人に述べた。

「サイドカーを気遣ってくれたり案内を買って出てくれたことにはな」

「闘いと関係なければ何でも」

「そうか。しかし」

サイドカーから完全に降りビルに身体を向けたところで老人を見



た。それと共に彼が秘めている何かも見てそのうえでまた言うのであった。

「貴様は。やはり只の魔物ではないな」

「おやおや。またご剣呑な」

「気配でわかる」

鋭い目で彼に告げる。

「そのとてつもなく巨大な気配。貴様は何だ？」

「さて。何でしょうか」

「これまで俺が闘ってきた魔物達が人だとすると」

それぞれの気配を思い出しながら老人に語る。

「貴様のそれは神だ。まさにな」

「神ですか」

牧村にそう言われても笑顔を崩さない。

「それはそれは」

「誤魔化すつもりはないか」

「少なくとも今ここでお答えしても何にもならないことです」

こう言って答えないのであった。

「まだ天使ではない貴方には」

「ふん」

「早く昇られることです」

「昇るだと」

「まずは大天使に」

その今の彼の天使よりも一つ上の階級であった。

「そしてさらに上に」

「九つの階級全てをか」

「そう。そして」

さらに言葉を続けてきた。

## 第六話 大天その十四

「その上にある存在にも」

「！？まだ上があるのか」

これは牧村がはじめて聞くことだった。

「九つの階級のさらにうえが」

「それもおいおいわかりになることです」

しかし老人は笑うだけで答えはしない。

「お楽しみを」

「ではそうさせてもらう。そしてだ」

ここでビルに顔を向ける。

「このビルか」

「屋上です」

「わかった。それならばだ」

それを聞いてまずは一步前に踏み出した。

「行かせてもらおうぞ」

「御健闘をお祈りします」

老人はここでもにやかなままであった。

「それでは」

「ああ」

この不気味な老人に別れを告げビルに入る。ビルは事務的で殺風景とも言える内装だった。幾つかテナントが入っているビルらしく彼が入っても特に何も言われない。エレベーターを使わずは最上階まで行き屋上まで出る。ここまでは何もなかった。

そして屋上に出ると。外の世界は周りにビル群を見せ強い風が吹いている。四角い場の向こう側にいたのは一人の若い女であった。

「来たのね」

「得体の知れない年寄りに言われてな」

老人のことを話しながらその女と対する。女は黒いズボンのスー

ツを着てビルの屋上に立っている。長い髪を風にたなびかせ牧村と対している。

「それで来たが。御前か」

「この展開でそうじゃないって言ってもあんたは信じる？」

「いや」

女の言葉に首を横に振る。

「まさかな。そんなことは有り得ない」

「そういうことよ。今度の相手はあたしよ」

「やはり貴様もまた」

「そうよ。一応名乗るわよ」

切れ長の目がここでさらに鋭くなった。

「人間としての名前は別にいいわよね」

「興味はない」

それが返答だった。

「偽りの名前はな」

「そう。じゃあそれはいいわね」

「それでだ」

牧村もまた鋭い目で女を見据えてきた。

「貴様は何だ」

「ムササビよ」

女は名乗ってきた。

「やまちちという妖怪は知っているかしら」

「やまちち!？」

その名前を聞いた牧村の眉がぴくりと動いた。

「やまちちだと」

「どうやら知らないようね」

「日本の妖怪か」

彼もそれはわかった。

「名前を聞く限りは」

「そうよ。この国には生まれた時から住んでいるわ」

つまり日本生粹の魔物だといふのである。

「それが私よ。やまちはムササビが歳を取りなるもの」

「最初は普通だったのか」

「けれど今は違うわ。やまちは人の精を吸い取りそれを糧として生きる」

まさに魔物であつた。

「そしてあなたの精も吸つてあげるわ」

「生憎だがそれはできないとだけ言っておこう」

「どうしてかしら」

「御前は俺に倒される」

この女、つまりやまちちを睨んでの言葉だつた。

「だからだ」

「話には聞いていたけれど相当の自信家ね」

やまちはそれを聞いてクールな声で述べた。

「そして伊達に同胞を倒してきたわけじゃないわね」

「今度は御前が倒される」

ここでも牧村の自信は変わらない。

「それだけだ」

「いいわ。その自信気に入つたわ」

言葉と共にその目を紅く光らせてきた。

「吸つてあげるわ。その精」

この言葉と共に顔と身体が黒がかった茶色の毛に覆われ耳が立つ。口が耳元まで裂け牙で満ちる。脇を広い幕が覆つた。まさにムササビであつた。

## 第六話 大天その十五

「行くわよ」

「ならば俺も」

牧村も彼女の変化を見て両手を動かしてきた。

両手を前にやってそれを拳にする。その二つの拳を胸の前で打ち合わせる。すると拳と拳の間から白い光が起こり彼の全身を包み込んだ。顔が白い髑髏となり身体は白銀の甲冑に包まれる。そして右手を少し前に出して開いてから握り締める。そのうえで言った。

「行くぞ」

「あなたのことはもう聞いているわ」

やまぢちはこう言うalmazは上に跳んだ。

「色々だね」

「あの年寄りからは」

「あの方からもだけねど」

老人をあの方と呼びつつ風に乗ってきた。

「他にもね。聞いているのよ」

「どうやら魔物は一匹狼というわけではないようだな」

「そうよ」

空を滑るように舞いながら髑髏天使の言葉に答える。

「生憎ね。それなりの世界があるのよ」

「そうか」

「そして」

やまぢちは言いつつ降下してきた。

「こうしてね」

「むっ!？」

降下しつつその爪で髑髏天使を襲ってきた。

「あんたを狙っているのよ」

「俺をか」

「五十年に一度姿を現わし魔物を倒す髑髏天使」

このことも髑髏天使本人に対して告げる。

「そのあんたを倒せば魔物にとって究極の力が手に入ることもね」

「つまり俺は獲物か」

「獲物？違うわ」

「違うというのか」

「あんたは私達を倒す存在」

このことはわかっていているようだった。髑髏天使が自分達にとって  
どういう存在なのかを。

「それはね」

「しかし俺を狙っていると言った」

「それもその通りよ」

「その通りだと？」

「そうよ。つまり狙い狙われる」

一旦着地してきた。そして今度は両手の爪を縦横に振りそれで髑髏天使を切り裂こうとする。髑髏天使は右手に剣を出しそれで応戦する。

「それだけのことよ」

「お互いを殺し合う存在か」

「そういうこと。わかったかしら」

「一応はな」

言葉と共に今度は髑髏天使から攻撃を加えた。右手の剣で何度も突きを繰り返す。しかしそれはのぶすまの爪により全て弾かれる。

だがそれでも髑髏天使の攻撃は続く。今度は下から上に剣を突き上げてきた。

「むっ！？」

「ならばだ」

突き上げながらのぶすまに対して言う。

「こちらも狙う。貴様等の命をな」

「あたし達が狙っているからかしら」

「それは違う」

このことは否定する髑髏天使だった。

「俺は髑髏天使だ」

「それで？」

「だからだ。髑髏天使は魔物を倒す」

彼等にとつては今更という言葉だった。だがそれでも髑髏天使として言うのだった。

「それに従う」

「そういうことね。わかったわ」

「わかっただと」

「あんた、いい流れよ」

のぶすまの声が笑っていた。

「その流れ。私達と同じね」

「御前達と同じだと。どういうことか」

「さあ。それはわかることはないわ」

ここで突き上げてきたその剣を左に跳んでかわす。

「何故なら」

「むっ!？」

「あんたがここで死ぬからよ」

左に跳ぶと共に右手を横に払ってきた。その爪が髑髏天使の胸を襲う。

これはかわせなかった。下から上に剣を出しそれに神経を集中させていた為だった。剣は空しく空を突き身体のバランスを崩してしまっていた。それが命取りになった。

爪は胸を切り裂いた。そこから鮮血がほとぼしり出る。

「ぐっ……」

「鎧で助かったかしら」

だがそれは致命傷ではなかった。のぶすまの言葉通り鎧に助けられた。

「その南蛮の鎧にね」

「不覚、遅れを取った」

前屈みになり左手でその傷口を押さえる。確かに致命傷ではなかったがそれでも傷が深いのは明らかだった。それを隠すこともできなかつた。



## 第六話 大天その十六

「まさか」

「そのまさかがあるのが闘いじゃなくて？」

のぶすまは傷を受け屈む髑髏天使に対して言う。声には笑みがこもっている。

「違うかしら」

「確かにな」

これ以上の攻撃を避ける為に後ろに下がり間合いを取る。摺り足で。

「その通りだ。ぬかった」

「油断大敵よ。そして」

「まだあるのだな」

「そうよ。闘いで深手を負う」

声に入っている笑みがさらに深いものになる。

「それはそのまま死に直結するわよ」

「くっ……」

「さて」

ここでのぶすまも後ろに下がった。彼女もまた間合いを離してきたのだ。

「それでは。止めといくか」

「止めで何故間合いを離す？」

「あたしはのぶすまよ」

「それは何度も聞いている」

まだ傷口を押さえている。しかしそれでも闘志は失ってはいない。

「今更な」

「だからのぶすまよ。のぶすまは精気を吸うもの」

のぶすまが言うのはこのことだった。

「だからよ」

「精気を吸い取るか」

「ええ。覚悟はできて？」

言いながら跳んだ。跳びつつ髑髏天使を見下ろす。

「それで。いいわね」

「いいも何も来るのだな」

「ええ」

空を舞いながら笑っていた。髑髏天使を見下ろし。

「その通りよ。その精気貰うわ」

「来るか」

「さあ、どうするのかしら」

空を飛べるといふ己の有利点をはっきりとわかっていた。わかっているからこそその言葉だった。

「サイドカーが空を飛べるのは聞いているけれど。その傷じゃ無理よね」

「むっ」

「その通りね」

今の彼の傷の深さをわかっていた。あまりにも傷が深くサイドカーに乗るにも無理があることも見抜いているのだ。

「だからよ。止めにね」

「俺の精気を吸うのか」

「やまちちのこと、知ってるかしら」

上から見下ろしつつ笑いながらの言葉が続く。

「本来は夜寝ている人の側に来るのよ」

「ほう。寝込みにか」

「ええ。そして息を吸う」

こう言われている。やまちちは本来山にいて山の中に宿を取っている者の枕元に来てその息を吸うのだ。息を吸うとはこの場合精気を吸うことなのだ。

「そして吸われたら」

「死ぬ」

これは髑髏天使もすぐに察しがつくことだった。

「そうだな」

「わかるのね。やっぱり」

「わからない筈がない。しかし俺は今起きている」

「実は寝ていても起きていてもいいのよ」

こう髑髏天使に返す。

「それはね。別に」

「つまり精気を吸うことに意義があるのか」

「そうよ。だから」

風に乗ってきた。ビルの上に吹いているその風に。

「覚悟しなさい。行くわよ」

「いかん……」

やまちちがいよいよ攻撃態勢に入ったところで。髑髏天使は己の身に迫る死を意識して髑髏の下にあるその顔を歪めさせた。

「このままでは」

死ぬ。当然死ぬつもりはない。ならば取る選択肢は一つしかなかった。

闘う。それだ。確かに傷は深い。しかしその痛みやダメージに動きを止めてはやられるだけだ。それがわかつている彼はここではその痛みを振り切って前に出ることにした。

## 第六話 大天その十七

跳んだ。向かって来るやまちちに向かうように。右手のその剣で精気を吸いに来る相手を一気に貫くつもりだったのだ。勝負もつけるつもりだった。

「来るのね」

「むぎむぎやられるつもりはない」

一直線にやまちちに向かいつつ言った。

「やられるのならその前に」

「いいわ、その意気よ」

やまちちもまた髑髏天使のその意気を受けて言う。

「そうでなくてはね」

「決める、一気にな」

絡め取られそのまま吸い殺される危険が高かった。だがそれでもこれしかなかった。そう決断しての行動だったのだ。ところがであった。

不意に髑髏天使の身体が光った。眩い黄金色に。そしてその背中から二つの巨大な翼が生え左手には剣とはまた別のサーベルが出て来たのだ。

「!?!?翼が」

「これは…….…….しかも」

それまで己の動きを鈍いものにさせていた傷もまた消えた。みるみるうちに消え去ってしまった。

そして翼が羽ばたき。今まさに迫らんとするやまちちをかわしたのだった。攻撃をかわされたやまちちはそのまま降下したがすぐに上に上がりまた髑髏天使と向かい合った。

「翼が生えた!?!?どうして」

「まさか」

ここで彼は。数日前の博士との話を思い出していた。あの天使に

関する話を。

「これが大天使の力か」

「大天使！？確か」

それが何なのかはやまちちにもわかった。

「あの天使の第八の階級の」

「そうらしいな。どうやら俺は大天使として覚醒したらしい」

「くっ、こんなところで」

「まさかな」

覚醒した彼が最も驚いていた。

「しかし。この力は」

「！？これは」

やまちちもまた髑髏天使から感じられる気を受けていた。

「これまでよりも。遥かに強い」

「ただ翼を持ち空を飛べるようになっただけではないらしいな」

空に羽ばたきやまちちを見据えながら言う。

「この力、これまでよりも」

「比較にならない。それが大天使の力だというの？」

「やれる」

右手の剣、そして左手のサーベルを握りながら呟く。

「この力なら。俺にも」

「勝つのは私よ」

しかしここでやまちちが彼に言うてきた。

「私でなくてはならない。そして私は」

「よせ」

意固地に自分に言い聞かせているやまちちに対して告げた。

「貴様では今の俺には勝てはしない」

「勝てない！？この私が」

「それは貴様が一番わかっている筈だ」

やまちちを見据えて言う。今髑髏天使はやまちちよりも上に位置している。それがそのまま今の二人の強さを象徴しているかのよう

だった。

「違うか？」

「戯言ね」

やまぢちはこう言って髑髏天使の言葉を否定した。

「私は。勝つ」

血走った目での言葉だった。

「何があっても。そして力を」

「ならば行くぞ」

自分から攻めると告げてみせた。

「これで決めてやる」

「吸ってあげるわ」

空中でそれぞれ身構える。そして。

先に動いたのはやまぢちだった。風に乗って一直線に二人に向かう。

「これで………終わりよ」

「これまではこれで終わりだった」

髑髏天使は自分に対して突っ込んで来るそのやまぢちを見て言う。

「だが今は」

「どうだっていうの？」

「やれる」

両手にそれぞれ持っている剣を構えての言葉だった。

「これでな。やれる」

「戯言ね」

今ののぶすまの言葉には虚勢も入っていた。

「そう簡単に私がやられると思って？」

「俺にはわかる」

やまぢちの言葉をこれで打ち消してしまった。

「よくな。だからこそ」

「むっ!？」

「これで」

間合いに入った。するとすぐに動いた。

まずは右手の剣を前に繰り出す。それでやまちちを突く。

「なっ、速い！」

「この速さ、そして力」

髑髏天使は今その力を自分自身の中からはっきりと感じていた。

## 第六話 大天その十八

「これなら……俺は」

「くっ！」

「貴様に勝てる」

こう言っつてやまちちの胸を貫いた。激しい、焼けるような痛みが彼女の胸を襲う。

「ぐっつ、先程までと全く違う!？」

「大天使の力だ」

また言う鬨體天使だった。

「これがな。この力なら倒せる」

「私を倒せるとでもいうのかしら」

「さつきから言っているがな」

そしてそれを否定することはないのだった。

「このことはな」

「おのれ……」

「少なくとも俺の精気を吸うことはできなかったな」

このことをはつきりと告げた。

「貴様にとっては残念なことにな」

「……まだよ」

しかしそれでもやまちちは諦めてはいなかった。

「まだ。私は」

「やるというのか」

「魔物のルールを教えてあげるわ」

喋るその口からは血が溢れ出てきている。胸の傷からによるものであることは明らかだった。だがそれでもやまちちは言葉を出すのだった。

「命を惜しまない」

「命をか」



「そうよ。何があっても」

「そうか」

「ええ。だから今も」

口と同じく紅くなってしまっている目で見据えていた。

「決して。諦めないわよ」

「では来い」

やまちちの胸から剣を抜いた。血が零れ出るが勢いは強くはなかつた。どうやらそこまで深く突かれたものではなかったらしい。

「決着をつける」

「精気は後回しでいいわね」

やまちちは己の傷を考慮してこう判断したのだった。

「それよりも」

「まずは俺を倒すのか」

「そうよ」

既にその言葉には余裕が消えていた。

「それからよ。精気を貰うわ」

「できればな」

再び両手の剣を構える。右を攻めに、左を守りに置いている。

「俺とてそう簡単にやられるつもりはない」

「なら……!!」

話を聞く前に動いていた。やまちちはその両手の爪を斜め上から下ろしてきた。

「これで……!!」

「むっ!？」

「引き裂いてあげるわ!」

言いながらまた襲い掛かって来た。

「これでどうかしら!」

「そう来たならば」

髑髏天使はその爪を冷静に見ていた。そうしてまずは左手のサーベルを動かしてきた。

「サーベル!?」

「剣にはそれぞれの使い方がある」

逆手に持っているそのサーベルを使いながらの言葉だった。

「時には守り」

まずは彼から見て左から来る爪をそのサーベルで受ける。下から振り上げる形だったので爪は思い切り弾き返された。それを受けてやまちち全体のバランスが崩れてしまった。

「しまった!?!」

やまちちは身体のバランス自体を崩したことにより左の爪の動きも乱してしまった。何よりも身体をのけぞらせてしまった。それが致命傷になった。

「時には攻める!」

「ぐっ!」

「このようにしてな」

今攻撃を受けたそのサーベルを今度は横薙ぎにした。するとそのサーベルはやまちちの胸を切り裂いた。今度は明らかに致命傷だった。

「しまった………」

のぶすまは動きを止めてしまった。髑髏天使はそれを見てまた言うのだった。

## 第六話 大天その十九

「これで決まりだな」

「うっ……」

「俺の勝ちだ」

こう言った。

「そうだな。これで」

「不覚だったわ。まさかそう来るなんて」

「剣は一本より二本の方がいい」

「使いこなせればの話だけれどね」

「それへの答えは今出しておいた」

翼を動かしやまちちから間合いを離して述べたのだった。

「貴様自身に対してな」

「確かにね。これでね」

「これが大天使の力か」

今度は自分でその力の凄さを感じるのだった。

「これが。予想以上だ」

「それだけの力があるとは私も知らなかったわ」

「そうか」

「まさかね」

やまちちは口から血を出しながら言ってきた。致命傷を受けてはいてもまだ宙に浮かんでいる。どうやら最後の力で宙に浮かんでいるようだ。

「けれど。勝敗は絶対だから」

「俺の勝ちだ」

「ええ」

髑髏天使の言葉に頷いてみせてきた。

「そうよ。見事だったわ」

「そうか」

「貴方の勝ちよ。それは認めるわ」

「他に言い残すことはあるか？」

「別に」

「それはないと言ったのだった。」

「ないわ。特にね」

「そうか。それならだ」

右の剣を掲げてきた。そのうえでやまちちに対して問うてきた。

「止めは。いるか」

「いえ、いいわ」

それは断るのぶすまだった。

「それは別にね」

「いいのか？辛くはないのか」

「確かに辛いわ」

何故かこう言っていてもやまちちの顔は笑みを浮かべていた。それが髑髏天使にとっては実に奇妙なものに見えていたのである。

「けれどね」

「けれどね。何だ？」

「それが死というものだから」

「受け入れるというのか」

「そうよ」

やはり笑っていた。

「その通りよ。これもね」

「そうか。ならいいか」

「気持ちだけ受け取っておくわ。それじゃあ」

身体が次第に燃えてきた。あの紅蓮の炎に。

「さようなら。最後に楽しませてもらったわ」

「ああ」

やまちちの形をした紅蓮の炎が浮かび上がりそれが終わりの知らせとなった。こうして髑髏天使ははじめて大天使としての力を使ったのだった。だがそれは。さらなる戦いの幕開けであったことを今

の彼は知らなかったのだった。

「終わりですか」

遠く離れたビルにおいてあの老人が紅蓮の炎とまだ空にいる髑髏天使を見て言っていた。

「そしてはじまりですね。これからです」

最後にこう呟いて姿を消した。髑髏天使の姿を夕焼けの赤い光が照らしていた。

第六話 完

2008・10・23

## 第七話 九階その一

髑髏天使

第七話 九階

「そうか、大天使になったのだな」

「はい、そうですよ」

あの老人がいた。いるのは誰もいない倉庫の中だった。剥き出しになった鉄パイプや金網が見える。コンクリートの床は暗く冷たい。所々に水滴が見え中は静まり返っている。彼はそこで一人の赤いドレスの、妖艶な美しさを持つ長い髪の女と対して話をしていた。

「やまちちを倒して」

「あのやまちちをか」

女はやまちちが倒された話を聞いて顔を顰めさせた。

「にわかには信じられないが」

「ですが大天使の力なら」

「やまちちを倒しても当然か」

「はい。天使ではありませんから」

「確かに。しかし」

ここで女は言うのだった。

「思ったより。早かった」

「大天使になるのがですか」

「貴殿はどう思うのだ？」

女は老人に対して尋ねてきた。

「貴殿は。大天使になるのは早いと思うか」

「いえ、こんなものですよ」

老人はにこりと笑って女に答えた。

「この程度でしょう。あの青年を見ていると」

「人間の男のか」

「名前は。別にいいですね」

「人間としての名前はどうでもいいだろう」  
「女はそちらには何の興味も見せなかった。」  
「そんなものはな」  
「その通りですね。重要なのは」  
「髑髏天使だ」  
「語る女の目が赤くなった。」  
「髑髏天使。やはり階級を登るか」  
「果たして何処まで登られるのか」  
「生きている限りだな」  
「女は老人に対して返した。」  
「生きている限り。間違いなくな」  
「おや。それでは」  
「そうだ。魔物達を倒しそれだけ強くなっていく」  
「経験を積むということですね」  
「人間だな」  
「女はそんな髑髏天使を人間だと評した。」  
「まさにな」  
「ですが。覚えておられますか」  
「老人はその温和な笑みと共に女に言ってきた。」  
「我等の最高神も同じだったではありませんか」  
「確かにな」  
「我等にしる同じですしね」  
「人ではなかったがな」  
「女は人間という言葉に少し目を顰めさせた。」  
「私はな」  
「ですが今は同じではないですか？」  
「神か」  
「そうです」  
「今度は神という言葉が出て来た。」  
「我等十二魔神」

「うむ」

老人の言葉に頷く。

「そもそも元は魔物でも神でもなかったではありませんか」

「神とはなるものか」

「そうです」

「そして魔物もまた」

「あの方も本来そうでありましたし」

「そうだな。そしてだ」

女はここで話を変えてきた。

「今ここにいるのは我等だけか」

「残念なことに」

こう答える老人だった。

「他の方々はまだ」

「そうか。出て来ているのは二人だけか」

「どうされますか？」

「同志達の復帰は時間がかかりそうか」

「その方それぞれのようです」

老人の返答はこうであった。

「ですからどうにも」

「我等の手では難しいか」

「まずはそれについては様子を見るべきですよ」

老人の言葉は温和で静かに教え諭すものであった。

「今は」

「わかった。しかし髑髏天使」

女は髑髏天使のことに想いを馳せた。

「果たしてどうなるのか」

「それも見せてもらいましょう」

二人は暗い工場の中で話をしていった。その姿を見る者はいない。だが確かに話はされた。このことだけは確かなことであった。



## 第七話 九階その二

牧村はやまちちとの鬪いを終えてからまた静かな生活に戻っていた。大学でもフェシングとテニス、それに講義に出ているが他は特に何もなかった。時折博士の研究室に顔を出している位だ。この時彼は大学の喫茶店でくつろいでいた。飲んでいるのはコーヒーだった。

ウインナーコーヒーだ。白い生クリームがコーヒーの上に置かれている。それをスプーンで取って食べつつコーヒーを飲む。コーヒーは黒からクリームの白が混ざり茶色になっていた。その茶のコーヒーを飲みつつ本を読んでいた。その本とは。

「おっ、牧村君」

「こんな所で読書かな？」

二人の青年がここで牧村の側に出て来た。一人は大柄で金髪、もう一人は癖の悪い頭をした眼鏡の青年であった。牧村に対してにこやかに笑っている。

「また随分と難しいみたいだな」

「何々、これは」

「天使についての本だ」

顔を上げてこう二人に返す牧村だった。

「天使!？」

「天使っていうと」

「キリスト教の天使だ」

また二人に言葉を返した。

「それはな」

「キリスト教ねえ」

「御前クリスチャンじゃないよな」

「違う」

それは一言で否定してしまった。

「だが。縁がないわけじゃない」

「クリスマス位じゃねえのかね、それって」  
「なあ」

金髪の青年が眼鏡の青年の言葉に頷く。

「精々そんなところだよな」

「キリスト教なんてな、日本じゃ」

彼等の認識はこの程度だった。実際日本でキリスト教といえは多くの者にとってはクリスマス位だ。後は結婚式の式場になるかその程度だ。

「あまり縁がねえしな」

「俺も。家仏教だし」

「俺の家もそうだ」

牧村も眼鏡の青年の言葉に応える。

「今までキリスト教を意識したことはなかった」

「それで今何で縁があるんだ？」

「何があったんだよ」

「別に」

生クリームを食べつつ述べる。コーヒーの苦さの後で味わうその柔らかい甘さは普段食べる生クリームよりもさらに甘く感じられた。

「それはな」

「言えないってか？」

「余計気になるんだけどな」

「博士に聞いた」

「こつ答えることにした。今は。」

「それでだ」

「ああ、あの博士だね」

「悪魔博士か」

「それで縁もできた」

「そのうえでこつも言った。」

「それだけだ」 8

「それが縁ねえ」

「何か違う気もするけれどな」

二人はその返答に今一つ納得できなかった。しかし牧村のいつものことだが有無を言わせないとところのある無愛想な返答に納得したのである。

「まあいいさ」

「それにしても天使だよな」

「そうだ」

「最近ゲームでも出ているぜ」

「ゲームに」

「そうさ。それも詳しくな」

眼鏡が彼に対して話す。

「そういうゲームもあるんだよ」

「どんなゲームだ？」

「神様が出て来るゲームでな。天使も敵で出たりするんだよ」

「天使が敵か」

「普通だろ？今だと」

何でもないといった感じの眼鏡の返事だった。

「当然悪魔も出るんだけどな」

「天使も悪魔も敵か」

「戒律によってそこが変わってくるんだよ」

「こつも言うのだった。」

「それでなんだよ」

「では善だと悪魔が敵で」

「ああ」

「悪だと天使が敵か」

「その通りさ。そうなっているんだよ」

「だがどちらも正義か」

牧村はここでは善がそのまま正義とは考えなかった。  
「そういうことだな」

「そう、その通り」

「よくわかってるじゃないか」

金髪もこう言ってきた。どうやら彼もそのゲームのことは知っているらしい。

## 第七話 九階その三

「だからさ。天使といつても」

「正しいわけではないか」

「つていうかあれじゃない？」

また眼鏡が彼に言ってきた。しかしここで少し言葉の間を空けてきた。

「あつ、ちよつと悪い」

「どうした？」

「僕も何か頼むよ」

「俺もな」

金髪もにこりと笑って牧村に言った。

「そうだな。ココアなんかいいかな」

「俺はロシアンティーにしようかな」

「ここで休むのか」

「講義もないしね」

「それに何か話をしたくなってきたんだよ」

二人は笑ってまた牧村に話す。

「だからさ。いいよね」

「席はここだな」

「ああ」

牧村は小さく頷いて二人への返事にした。

「それで。いい」

「よし、じゃあ」

「ちよつと待っててくれよな」

こうして二人はカウンターに行ってそれぞれ注文した。すぐにそのココアとロシアンティーを持って来て牧村の前に座る。そのうえで話を再開してきた。

「それでね」

「そのゲームの天使か」

「まあ天使だけじゃないけれどね」

眼鏡は視線を少し右斜め上にやって述べた。

「その辺りは。神様とも戦うしね」

「凄いゲームみたいだな」

「だから絶対の正義のないゲームなんだ」

こう牧村に説明するのだった。

「そのゲームはね」

「絶対の正義がないのか」

「これ、わかるよね」

ココアのカップを手に取りそれを口に含みながら彼に問うた。

「絶対の正義がないっていうのは」

「俺はアメリカ人でも中国人でもない」

牧村はこう眼鏡に返した。

「正義は一つだとは思わない」

「よく言うよね。百人いれば百人の正義がある」

「そうだ」

これが牧村の考えであった。彼は絶対の正義があるとは全く思わないのだ。この辺りの考えもまた己の中にしっかりと持っているのである。

「そう考えている。俺はな」

「じゃあ神様が敵なのもわかるね」

「絶対の正義がないからだな」

「そういうこと。だから天使もね」

「敵か」

「仲間にもできるよ」

眼鏡はこうも彼に話した。

「ちゃんとね」

「敵にも味方にもなるのか」

「悪魔も同じことができるし」

「随分変わったゲームだな」

少なくとも牧村にとってははじめて聞くタイプのゲームだった。

「それはまた」

「何ならやってみる？」

「いや」

しかしこの誘いには首を横に振る牧村だった。

「それはいい」

「いいの？」

「また機会があれば自分で買ってやってみる」

こう答えるのだった。

「今はな」

「そうなんだ」

「それよりだ。今はこの本を読んでおきたい」

「また随分と難しそうな本だな」

金髪が向かい側から覗き込みながら言った。

「何だ？小難しい漢字が一杯だな」

「そうだな。確かに」

「それにカバラとか何とか」

「ああ、それユダヤ教のあれだね」

金髪に対して眼鏡が横から言ってきた。

「ユダヤ教の奥義だよ」

「ユダヤ教っていうとあれか？」

金髪もユダヤ教については知っているようだった。怪訝な、幾分いぶかしむような声で眼鏡に対して言葉を返していた。しかしあまり深くないようである。

## 第七話 九階その四

「ユダヤ人のあれだよな」

「そうだよ。ユダヤ教のね」

「そうなのかよ。それのか」

「そうだよ。元々キリスト教はユダヤ教がもとじゃない」

「ああ」

これは流石に知っていた。

「そうだったな。旧約聖書と新約聖書だろ？」

「そうだよ。天使は旧約聖書にも出て来るから」

「どっちにもか」

「だから天使の話にも出て来るんだろうね」

眼鏡はこう予想を述べた。

「カバラの話とも関係があるし」

「あるのかよ」

「うん。ただね」

眼鏡はここで首を傾げてきた。

「カバラはねえ。ちよつと」

「ちよつと。何だ？」

「かなり難しいよ」

こう金髪に説明してきた。

「一見じゃわからない位ね」

「そうみたいだな。何だこりゃ」

金髪は牧村が読んでいるその本にある説明やイラストを見て目を顰めさせた。そこには何か複雑な数字の配列があり何かの陣のようになっている。彼はそれを見て目を顰めさせているのだ。やはり何が何なのか全くわからない。少なくとも彼にとってはそうだった。

「これがカバラかよ」

「そう、これがなんだ」



眼鏡はまた彼に対して答えた。

「カバラなんだよ」

「数字の陣か？」

「うん、色々な意味があるらしいんだ」

眼鏡もここで首を傾げてきた。

「どうやらね」

「どうやらなつて御前もよくわからねえのか？」

「うん」

金髪の問いにくくりと頷いた。

「そうなんだよ。実はね」

「何だよ、わかってると思つたのによ」

「だからさ。難しいんだよ」

眼鏡の奥のその瞳を困惑させたものにしていた。

「カバラはね」

「だからわからねえのか」

「わかっている人少ないと思うよ」

少し言い訳めいた言葉になっていた。

「正直なところね」

「そうなのか」

「確か理解している人は」

眼鏡は今度は考える目になって述べた。

「あの人がそうだったかな」

「誰だよ、あの人つて」

「ゲツペルス」

ある意味不吉な名前が出て来た。

「ポールⅡヨゼフⅡゲツペルスね」

「それナチスの宣伝相じゃねえのか？」

「うん、そうだよ」

やはりそうであった。

「ヒトラーの知恵袋だったね」

「あのおっさんこんなもん理解していたのかよ」

「知能指数はヒトラーより高かったそうだしね」

ナチス「ドイツの頭脳とまで呼ばれていた。ヒトラーは怪物と言つてもいい男だったが彼はそのヒトラーよりも頭脳では上と言われているのだ。」

「それでね。理解していたんだって」

「すぐえ奴が理解していたんだな」

「それで牧村君」

眼鏡は今度は牧村に対して尋ねてきた。

「どうなの？わかる？」

「いや」

彼もその問いに首を横に振った。

「わからない。俺にもな」

「そうだろうね。わからなくて当然だよ」

だが眼鏡はここで彼に笑って言うてきた。

「それはね」

「当然なのか」

「カバラはね。特別なんだよ」

今度はこう述べてきた。

「もうね。かなりね」

「かなりか」

「ユダヤ教の秘術って言われているんだよ」  
またこのことが話される。

## 第七話 九階その五

「だからね。やっぱり」

「そう簡単にわかりはしないということか」

「そういうこと。わかってもらえたかな」

「それならな」

こう言われるとわかった牧村だった。

「わからないからこそ秘術か」

「わからないようにしているからね」

「そういうことか。しかし」

だがここ牧村はまた言った。

「この数字の配列は」

「これだよね」

「そうだ。これに何かあるな」

「それは間違いないって言われているね」

これはまだ察しがつくものであったのだ。

「けれどね。わかるのは本当に」

「僅かか」

「どうしてもね。それはね」

「そうか」

「何かよ」

今度は金髪が眼鏡に言ってきた。

「俺にも全然わからねえけれどよ」

「だからわからなくて当然なんだけれど」

眼鏡は今度は金髪に対して言った。

「秘術なんだから」

「そういうことかよ」

「うん。けれどね」

「けれど？」

「わかる人間にはわかるんだよ、これって」  
「わかる奴にはかよ」  
また言う金髪だった。  
「何か特別な奴だけわかるみたいな言葉だな」  
「少なくともヘブライ語を理解しないと駄目なんだよ」  
「ヘブライ語!？」  
金髪はヘブライ語と聞いてまた顔を顰めさせた。  
「ヘブライってユダヤだよな」  
「そうだよ」  
「じゃあユダヤ人の言葉かよ」  
「そういうこと。古代ユダヤ人の言葉だよ」  
「古代って何なんだよ」  
金髪にとってはさらにわからない話だった。  
「何千年前の話って何なんだよ」  
「それでも文字は残ってるからね」  
「残ってる? ああ、そうか」  
金髪もここでわかったことがあった。  
「あれだったよな。ユダヤ人ってよ」  
「そうだよ。自分達の文化守るのに厳しいからね」  
「そういうこと。だからね」  
「わかるのか」  
「わかるにしろ何か話が無茶苦茶になってきたな」  
「秘術らしくていいじゃない」  
眼鏡の言葉は心なしかうきつきとした感じになっていた。  
「それだけ歴史があるなんてさ」  
「そういうものか?」  
「そうだよ、それにさ」  
「ああ」  
「わかりそうな人もいることだし」  
「いるのかよ」

金髪にとってはまた訳のわからないことになってきていた。

「これがよ」

「古代へブライ語がわかる」

これが絶対必要条件である。

「それとユダヤ人についてもよく知っている」

「待て」

ここで牧村が眼鏡に言ってきた。

「ユダヤ人か」

「うん」

「確かにこの学校には外国からの教授や講師、研究者、留学生も多  
い」

「そうだね」

「しかしだ」

さらに眼鏡に対して言ってきた。

「ユダヤ人はいたか」

真剣な目で眼鏡に問う。

「ユダヤ人は。いたか」

「ユダヤ人ってまずイスラエルだよな」

金髪がまた言ってきた。

「それと？ヨーロッパ各地にいて」

「アメリカに一番多かったな」

牧村は今は金髪に話を合わせた。

「確かな」

「ああ、アメリカに確か」

「どうやら彼は国際情勢に詳しいらしい。その金髪に手を当てながら述べる。」

## 第七話 九階その六

「数百万だったな」

「重要な都市に集中的にいたな」

「ああ、そうだったな」

アメリカのユダヤ系社会の特徴の一つである。彼等は人口こそ他のマイノリティーに比べてそれ程多くはないがそれでも重要な都市に集中しているのだ。人口分布ではこれが特色である。

「アメリカのユダヤ系って独特なんだよな」

「そもそもユダヤ系自体がだ」

牧村はユダヤ系そのものについても語る。

「独特だな」

「そうなんだよな。ユダヤ教ってな」

金髪はユダヤ系の話になるとどんどん進めてきた。

「あれじゃね？食べ物にしろな」

「乳製品と肉は一緒には食べない」

「チーズバーガー駄目らしいな」

「その通りだ。だからすぐにわかる」

アメリカにおいては、という意味である。

「ユダヤ系かどうかはな。チーズバーガーを前に出せばな」

「食わないのがユダヤ教徒ってわけだからな」

「他にも色々ある」

とかく決まりが多いのがユダヤ教なのである。食べ物以外の特色といえば。

「髭も剃らない場合が多い」

「スピルバーグなんかがそうだよな」

「その通りだ」

映画監督のステイブンスピルバーグもまたユダヤ系である。

アメリカという社会がどれだけユダヤ系が独特のポジションにいる

かということの証明の一つであるとも言っている。

「髭あるんだよな」

「そうだ。サムソンからだな」

「だからわかりやすいんだよな。職業もな」

「学者やジャーナリスト」

牧村は言う。

「経営者に映画関係者だ」

「知識人とか金融関係に多いのはヨーロッパと一緒にだけどな」

「アメリカではそれが特に強い」

「それでアメリカではあれだよな」

金髪はさらに話を進めていく。

「ユダヤ系の発言力がかなり強いよな」

「人口的にはマイノリティーの一つでしかない」

これが現実である。人種の坩堝と言われているアメリカ社会ではユダヤ系の数自体はそれ程ではないのだ。数で言うならばアフリカ系やヒスパニックの方が遥かに多い。

「その中の一つだ」

「けれどあれだよな。その力は」

「まず資金力だ」

これが大きいのだ。

「そして発言力。知識人が多いからこそ」

「発言力も大きいってわけか」

「しかもこの二つの力を集中的に使ってくる」

力をただ使うだけではないのだ。集中的に使うのがアメリカのユダヤ系社会の特色なのだ。これは彼等の団結力の強さ故のことである。

「だから彼等は強いとされているな」

「アメリカじゃあれだろ？伝説的なんだろ？」

金髪の言葉は知ったうえでのものであった。

「その強さはな」

「間違いなくマイノリティーでは最強だろうな」

そもそも今のアメリカ社会ではマジョリティーにあたる存在は人口比率ではないと言っていていいところがある。所謂ホワイト、アングロサクソン、プロテスタントのピルグリム「ファーザーズ」以来のワスプという存在はその比率は少なくなってきた。大統領にするアイゼンハワーはドイツ系でありケネディ、ニクソン、レーガン、クリントンはアイルランド系である。またユダヤ系だけではなくフリカ系やヒスパニック、イタリア系、アジア系の高官も実に多い。政府ですらそうであるしアメリカ社会は実に雑多なのである。

「ユダヤ系はな」

「そのユダヤなんだな」

金髪はあらためて述べた。

「これってな」

「そうだよ。けれどね」

眼鏡はここで少し溜息をついた。

「うちの学校にはいないからね、ユダヤ系の人は」

「探せば一人はいるんじゃないのか？」

金髪は少し楽観的に述べた。

「これだけ留学生もうじゃうじゃいる学校だからよ」

「いたとしてもこれ古代のヘブライだよ」

しかし眼鏡は今度はこのことを指摘したのだった。

「古代の。それに必要な知識だっつね」

「あまりにも専門的だな」

「そういうこと」

今度は牧村の言葉に対して頷いてみせた。



## 第七話 九階その七

「かなりなんてものじゃなくね」

「ユダヤ教の奥義か」

「ラビでもないかわからないんじゃないかな」

「こつも言う眼鏡であつた。」

「これは流石にね」

「ラビか」

「そつだよ」

ユダヤ教の聖職者である。言うまでもなくユダヤ系の社会においてその社会的地位は指導者としてかなりのものになっている。

「それもかなり高位のね」

「あの博士でもわからないか」

「あの博士！？ああ」

「あの人かよ」

二人にもその博士が誰なのかすぐにわかつた。

「悪魔博士ね」

「あの人だよな」

「博士ならわかるだろうか」

牧村は真剣な顔で呟く。

「カバラのこつも」

「ひよつとしたらかな」

眼鏡のここでの言葉はあまり齒切れのいいものではなかつた。

「あの人のこつよくわからないからね」

「確か政治学者なんだろう？」

金髪は博士をこつも考えていた。

「法学の博士号持つてたしな」

「あれ、お医者さんじゃなかつたっけ」

眼鏡は博士についてこつも言った。

「外科の権威だよな」

「どちらの博士号もあるらしい」

その二人に牧村が答える。

「どちらもな」

「へえ、そうだったのか」

「何個か博士号を持つてるっていうのは聞いていたけれど」

「だからどちらも正しい。それに文学博士でもある」

「とにかく何でも持つてるんだな」

「じゃあひよつとしたら」

「知っている可能性はあるな」

こう言うと本を閉じた。

「とりあえず話を聞いてみるか」

「何かあの博士はな」

「そうだよな」

ここで二人は苦笑いで顔を見合わせて話し合った。

「近寄りにくいところがあるよな」

「何かね。すつごくね」

「そうなのか」

「だってよ。あんな外見だぜ」

「百歳だったつけ」

二人は牧村に対しても言った。

「仙人か何かに見えるしよ」

「通称が通称だし」

「悪魔博士か」

学園内でもあまりにも有名になっている博士の通称だ。とにかくまともな人間とは思われていないのだ。半ば本気で仙人と噂されているのだ。

「それだな」

「ああ、それだよ」

「悪魔学？」

普通は話されない学問の名前が出て来た。

「そんな分野の学問があるらしいね」

「そうらしいな」

牧村も眼鏡に言葉を返す。

「それはな」

「悪魔についてのあれだよな」

「怪しいなんてものじゃないぞ」

また眼鏡と金髪が言う。

「そんなおかしな学問があるなんて」

「一体何を勉強するんだろうな」

「まあとにかく」

眼鏡がまた言った。

「天使と悪魔は裏返しが存在だしね」

「表裏一体か」

牧村はここで悪魔について考えるのだった。

「天使と悪魔は」

「ほら、天使が神に反逆して地獄に落とされて」

「神曲か」

牧村はそれを聞いて述べた。

「ダンテだったな」

「地の底だったり魔界だったりするけれどね。まあ天界から落とされたのは確かだね」

「そうだな。では天使と悪魔は」

「ほぼ同じものだよ。だからさ」

「博士に聞けば何かわかるかもなんだね」

「そういうこと。まああの博士ってね」

またあの博士について話される。

「変人って評判もあるけれどね」

「っていうかそのものだろ」

金髪が眼鏡に突っ込みを入れる。

## 第七話 九階その八

「あの人はよ」

「まあそうだね」

否定できないものがそこにはあった。

「あの研究室の前通ると変な感じする時あるし」

「それは気のせいだな」

牧村は妖怪達のことはこう言って隠した。

「気にするな」

「そうかな。かなり気になるよ」

「気にするなっていう方が無理だろ」

金髪もそれに続く。

「まあとにかく話を聞いてわかるのならね」

「聞いたらいいさ」

二人もここでは博士と話すことを勧めた。

「じゃあ僕達はここでね」

「またな」

「講義か」

「うん、そうなんだ」

「俺もだ」

二人共こう言って話をする。

「だからね。また」

「丁度飲み終わったしな」

「そうか。ではまたな」

「うん。そうそう」

また言う眼鏡だった。

「一つ気になるんだけど」

「どうした？」

「面白い話だけれどね」

「こう彼に話してきた。」

「今君テニスとフェシングやってるじゃない」

「ああ」

「それでいいスポーツ用品店見つけたんだけれど」

「それが」

「そう。興味あるよね」

「このことを牧村に対して問うてきた。」

「このことは」

「そうだな。テニスのラケットが欲しいと思っていた」

「そうなんだ、やっぱり」

「大きさはどれだけのものがいいかな」

「そこは人それぞれだからね」

眼鏡の返事は今回はあまりはつきりしたものではなかった。

「合ったの選ぶといいよ」

「合ったのをか」

「牧村君はさ」

「ああ」

「どんな感じのプレイがしたいの？」

「こう牧村に対して尋ねてきた。彼にしては純粹にテニスの話をしていた。しかしそれでも牧村にとっては闘う為のトレーニングなのだ。ここに大きな違いがあったが相手がこのことについて知る由はなかった。知らなくて当然のことであつたし彼も気付くことはなかった。」

「一体さ」

「足を使ったものがやりたいな」

「インサイドワークだね」

「そうだ」

答える牧村だった。

「そうしたテニスがしたい」

「フットワークなんだ」

「そうだ。それならラケットは」

「そんなに大きいものを持つ必要はないよ」  
眼鏡のアドバイスだった。

「別にね」

「そうか。では適度のものでいいな」

「そういうこと。そういえば牧村君でさ」

「何だ？」

「フェシングで突くだけじゃなくて斬るのもやりだしたんだよね」

「サーベルか」

「最初からやってたっけ」

また彼に問うてきた。

「それは」

「そうだ。最初からだ」

このことを隠すことはなかった。

## 第七話 九階その九

「それはな。最初からやっていた」

「そうだったんだ」

「だがな」

しかしここで彼はまた言うのだった。

「その他にもやってみてはいる」

「ああ、だから話になってるんだね」

「ラケットもそれぞれなら剣もそれぞれだ」

これも髑髏天使としての言葉だが眼鏡にも金髪にもわかる話ではない。しかし牧村は元々このことを話すつもりはなかったのでどうでもよかった。

「だからだ」

「ふうん」

「それにしても。面白いものだな」

ここでまた本を開いてきた。またあのカバラの図式のページだ。

「天使か」

「ユダヤ教のね」

「わかった。それも勉強していく」

「色々と頑張ってるんだね。じゃあこれで本当に」

「またな」

「ああ、また会おう」

二人に対して別れの挨拶を告げる。

「またな」

「うん」

こうして二人と別れる。後は暫くその本を読んでいたがそれも閉じ博士の研究室に向かった。しかし入り口のカードは不在になっていた。

「誰もいないのか」

「あれっ!？」

しかし扉の向こうから声がしてきた。

「牧村さん？」

「来たの」

「その声は」

誰からの声かすぐにわった。幾つもあった。

「御前達か」

「そっだよ」

「何しに来たの？」

扉の向こうから牧村に対して尋ねてきた。

「何なら入る？」

「ドア開けるけれど」

「博士はいないのだな」

「ええ、そうです」

今度はろく子の声が聞こえてきた。

「今はおられません」

「そうか。しかし」

だがここで牧村はふとした感じで言ってきた。

「ここで話すのも何だ。中に入っていいか」

「どうぞどうぞ」

「お茶とお菓子があるよ」

「コーヒーもね」

「コーヒーは今飲んだばかりだがまあいい」

今はそれとは別のことで来たからだ。

「では中に入らせてもらおう」

「はい、どうぞ」

「いらっしやい」

こうして牧村は博士の研究室に入った。中に入るといるのは妖怪達ばかりでやはり博士はいなかった。それでも妖怪達は随分陽気な顔をしていた。



「今日も来てくれたんだ」

「お菓子あるよ」

「お茶もね」

「ああ」

そして彼はいつもの無愛想だった。妖怪達が差し出した席に座りそこから話をする。そうして行われる話はまずは妖怪達に対する礼からであった。

「有り難う」

「いやいや」

「それには及ばないよ」

妖怪達は相変わらずの陽気さで彼のお礼に返す。

「こんなのはね」

「それにしてもどうしたの？」

「どうした？」

「うん。いつもに比べても」

「そうだよ。顔が暗いよ」

彼を困らせてきたのである。

「何かあったみたい」

「闘いには勝ったんだよね」

「勝っただけじゃない」

饅頭の一つを受け取ってからの言葉だった。まずはそれを包んでいるビニールを剥がしていく。綺麗な茶色のその皮が如何にも美味そうである。

「なった」

「なっただって？」

「大天使だ」

このことを妖怪達に話すのだった。

「大天使にな。なった」

「へえ、大天使になっただ」

「その噂の」

「そうだ」

「それでどんなのじゃ？」

子泣き爺が彼に問うてきた。

「その大天使というのは」

「まず翼が生えた」

「へえ、翼が」

「背中から生えたんだよね」

「その通りだ」

また妖怪達に答える。無愛想なままだが。

## 第七話 九階その十

「そして空を飛べるようになった」

「空を？」

「サイドカーを使わなくても」

「サイドカーとはまた違う感じだった」

このことも語る。これは自分で飛んでみたらこそわかる言葉だった。それは確かに自分で空を飛んでいた。だからこそ全く違っていたのだ。

「それも完全にな」

「完全なんだ」

「じゃあどつちがいいとかじゃなくて」

「サイドカーは移動には確かにいい」

牧村は己が乗るサイドカーに対して述べた。

「そしてだ。スピードや衝撃力で一撃離脱を仕掛ける場合にだ」

「サイドカーなんだね」

「そうだ。そう思う」

「クールに分析してるね」

「またとてもね」

「あえてそう心掛けているだけだ」

酒や菓子で楽しくやっている妖怪達に対して語る。彼等はいつものように楽しく飲み食いをしている。何処からか出したそれ等をやっているのだ。

「それはな」

「ふうん。それだけなんだ」

「じゃあもつと聞けけれど」

「何だ？」

「大天使になつてそれだけ？」

ひょうすべが彼に尋ねてきた。

「それだけなの？飛べるようになっただけ？」  
「勿論それだけではない」  
その問いにも静かに答えた。  
「それだけではな」  
「ふうん、じゃあどんな感じ？」  
「どうなったの？それで」  
「力が増してまた剣が手に入った」  
「剣までなんだ」  
「今度は左手に持ってサーベルを握っていた」  
「このことも妖怪達に対して語る。」  
「左手にな。それは主に守りに使った」  
「攻防揃ったんだ」  
「またかなり凄くなったね」  
「自分で飛べるようになっただけじゃないし」  
「そうだ。だからだ」  
自分の左手を見ていた。  
「俺の中で何かが変わった」  
「強くなったんだよね」  
「それってかなり凄いじゃない」  
「しかし」  
だがここで不意に顔を曇らせるのだった。  
「何故そうなった」  
「何故って？」  
「そうなったって？」  
「それがわからない」  
こう妖怪達に答えたのだった。  
「俺は大天使になった」  
「うん」  
「そして階級をあげていくのだな」  
「そうらしいね」

また妖怪達は答える。

「博士の言葉だと」

「まあ僕達は妖怪だからよくわからないけれど」

「その辺りは御免ね」

「いや、それはいい」

妖怪達の謝罪はよしとしたのだった。

「それはな。御前達には感謝している」

「感謝!？」

「僕達に!？」

牧村の謝礼には一斉に不思議な、何か聞いたこともないような言葉  
を耳にしたように驚いた顔を見せる妖怪達だった。それが牧村に  
は不思議だった。

「何かおかしいか」

「おかしいっていうかね」

「ほら、僕達って妖怪じゃない」

「ああ」

「だから。人間にさ」

妖怪達は相変わらず飲み食いしながら語っていく。

## 第七話 九階その十一

「御礼とか言われるのって」

「ないんだよね」

「妖怪だからか」

「妖怪つてさ。人を驚かせるじゃない」

「まあそれが趣味なんだけれど」

この辺りは微妙なものがあつた。確かに妖怪といえば人を驚かせるものである。こつした部分は妖精達と全く同じ性質であるのだ。

「だからさ。そんな僕達がね」

「御礼言われるのってね」

「ないのだな」

「そういうこと」

「珍しいなんてものじゃないよ」

口々にこつ言うのだった。

「こんなことつてね」

「牧村さんつてそういうのこだわらないんだ」

「こだわるも何もだ」

また静かに語る。

「俺は今は御前等に何も思わない」

「変わった!？」

「最初は驚いていたのに」

「驚いたのは確かだ」

牧村もそれは認める。

「しかしだ。今は」

「違うんだ」

「やっぱり変わったね、牧村さん」

「それも随分」

「俺は。下手をすればだ」

ここで牧村の顔が深刻なものになった。微かにではあるがそれは確かなものがあった。

「御前等よりも化け物かも知れない」

「化け物!？」

「牧村さんが!？」

「そうだ。俺は髑髏天使だ」

このことを語る。

「しかし。その俺はだ」

「全然違っつていうの?」

「天使なのに」

「心が違う」

不意に心を言葉に出す牧村だった。

「俺の心は。御前等とは違っつてきているのかもな」

「!？そうかな」

「全然普通よね」

「ねえ」

妖怪達は彼のその言葉を聞いて首を捻る。

「全然おかしくないし」

「何処がなんだろ」

「わからないならいい。しかしだ」

「しかし?」

「やっぱりおかしい感じ?」

「俺は。大天使には終わらないみたいだな」

「とりあえずこのまま闘っつていけばそうなるよね」

「ええと。それでここにどうして来たんだっけ」

「博士だったよね」

酔っている者はもう記憶があやふやになってきていた。

「博士に何を聞きに来たの?」

「それは何だったの?」

「カバラだ」

先程読んでいたその言葉を告げた。

「カバラだ。ユダヤ教の」

「カバラって何？」

「さあ」

しかしこれは誰にもわからない。彼等にとっては全く理解不能のものだった。

「何だろうね」

「魔物の名前？」

「いや、そうじゃない」

魔物というのは否定した。

「魔物ではなく。秘術だ」

「秘術ねえ」

「魔法みたいなものみたいだね」

「少なくとも俺に関係しているものらしい」

そして今度はこう言った。

「どうやらな」

「髑髏天使につてことかな」

「そうじゃないの？」

「その通りだ」

このことを牧村自身も認めた。何故かそう語る顔も目も声も牧村ではなく髑髏天使のものになっていた。しかし彼も妖怪達もこのことには気付かなかった。

「髑髏天使、俺のことだ」

「ああ、やっぱり」

「それだと悪いけれど余計にね」

「わからないか」

「御免ね」

塗り壁が一同を代表してその巨大な如何にも固そうな身体を折り曲げて謝ってきた。

「俺達そういうのはさ。どうしても」



「わからないんだよね」

「ここにイスラエルの奴いないし」

「イスラエルか」

「ゴーレム？」

不意にといった感じで河童が言った。

## 第七話 九階その十二

「あいつがそうだったっけ」

「ああ、あいつがいたんだっけ」

「そういえばそうだったね」

「知り合いか。そのゴーレムが」

「そうだけれどね」

答えは返ってはきたが今一つ歯切れの悪いものだった。

「けれどさ。今はいないよ」

「この日本にはね」

「いないか」

「イスラエルに帰ってるんだ」

「戻って来るかな」

「あと百年後じゃないの？」

妖怪の時間間隔での言葉だった。

「百年したら帰って来るんじゃないの？」

「どうかな。あいつ呑気だしね」

「二百年かも知れないなあ」

「だよ。けれどそれだけ長い時間は」

「人間には無理だ」

牧村は人間の時間間隔で答えた。

「とてもな。そこまでは」

「そうだよ。土に還ってるよね」

「人間だとね」

「じゃああいつに話を聞くのは無理か」

「何なら呼ぶ？」

こんな話も出るには出る。

「あいつ。ひよっとしたら出て来るかもよ」

「いや、無理みたいだよ」

だがこの話はすぐに打ち消された。

「何でもあいつ今寝ているらしいから」

「寝てるって？」

「イスラエルに帰ったのはそのせいらしいんだ」

妖怪同士でしかわからない言葉だった。牧村は聞いているだけだ。だがそれでも聞き逃すことなく聞いていた。妖怪の話に興味を覚えただからだ。

「かなり起きていたらしいからね」

「そうだったんだ」

「だからあいつ呼んでも無駄だよ」

こういう結論になった。

「今はね」

「じゃあ待つか」

「それかやっぱりあれじゃない？」

また話が変わった。

「博士を待つしかないんじゃないの？」

「やっぱりそれ？」

「そうそう、それぞれ」

妖怪達の中では結論が出たようであった。

「博士ならやっぱりさ。わかるだろうしね」

「それしかないか。やっぱり」

「そうだよ。それしかね」

「じゃあ牧村さん」

ここまで話したうえで牧村に顔を向けてきた。

「それでいい？」

「博士が帰って来るのを待つってことでさ」

「わかった」

饅頭を食べながら妖怪達の言葉に頷く。

「それでな。少なくともそれまでは生きている」

「うん、頑張って生きて」

「死んだら駄目だよ」

髑髏天使としては洒落にならない言葉のやり取りだった。何しろ彼は実際に命を賭けて闘ってきているからだ。だからこそこのやり取りが重いものになっていた。

「絶対にね」

「じゃあさ。今度会う時はね」

「果物。一緒に食べようよ」

そしてこう提案してきたのだった。

「果物ね。どうかな」

「用意しておくよ」

「果物が」

果物と聞いて牧村の目が少し動いた。

「それで何だ？その果物は」

「まあ色々」

「柿とかね」

最初に出たのはこれだった。

「あと蜜柑とか」

「まあ何でもね」

「無花果もあるか」

牧村は不意に無花果を言葉に出してきた。

「いいな、それは」

「あつ、無花果好きだったんだ」

「かなり好きだ」

珍しく強い肯定を試みさせた。

「あれはな」

「そう。じゃあそれも用意しておくよ」

「あと柿もいける？」

「蜜柑は？」

「そのどちらも好きだ」

やはり返事は肯定のものだった。

「どちらもな」

「結構果物好きなんだね」

「そういえば甘党だったっけ」

妖怪達はこのことを思い出した。

「この前言ってたしね」

「何だ、じゃあそれでいいんだ」

「ああ、それでな」

「わかったよ。無花果をまず用意して」

何にかけてもまずはこれであった。

第七話 九階その十三

「他にも色々だね」

「用意しておくから」

「頼む。では」

「何かさ。牧村さんもね」

「そうだよね」

「俺が。どうした？」

妖怪達の言葉に顔を向けた。

「いやさ、結構以上に」

「人間味があつたんだね」

「人間味！？」

「だってねえ」

「そうだよね」

牧村が問うとここでそれぞれの顔を見合わせる妖怪達だった。

「無愛想だしね」

「言ったら悪いけれど」

「話し方だつて無機質な感じだし」

「これは生まれつきだ」

やはり無機質な感じの言葉は変わらない。

「悪いがな」

「まあそれは聞いているけれど」

「それでもさ」

「だよね」

そしてまた顔を見合わせていた。

「どうしてもそんな感じが」

「否定できないし」

「俺も人間だがな」

「いや、そういう感じじゃなくて」

「機械みたいな感じがしたから」

彼等が言うのはこういうことだったのだ。

「そういうこと。わかってくれた？」

「まあとにかくね。今度来たら果物をさ」

「用意しておくから」

「ああ」

静かに妖怪達の言葉に頷く。

「わかった。ではな」

「またね」

「楽しくやろうね」

こう話を交えさせて場を後にした。牧村はその場を後にするとそのまま大学の図書館に入りカバラについて調べた。しかし結局何もわからないまま図書館を後にした。そしてサイドカーで帰路にしているその時だった。

不意に横にバイクが来た。見れば紅いライダースーツを着て赤いヘルメットを被っている。スーツからはっきりと浮き出ているものとヘルメットからこぼれている長い黒髪から女であるとわかる。その女は牧村の横に来て声をかけてきたのであった。

「髑髏天使」

「むっ!？」

「そうね」

笑みを含んだ声で彼に言ってきた。

「貴方が今のね」

「魔物か」

「生憎だけれどそうじゃないわ」

顔を正面に向けたまま、声だけを彼に向けてきていた。

「私はね。魔物とはまた違うわ」

「では何だ」

「この前老人に会ったわよね」

女は今度はこう言ってきた。

「そうよね」

「それがどうかしたのか」

「それよ」

「それ！？では貴様は」

「ええ。同志と言っのかしら」

ヘルメットのバイザーの奥の目が光っていた。黄色い禍々しい光であつた。

「人間の言葉だとね」

「一体何の用だ」

牧村は女の素性がある程度知つたうえで彼女に問うた。

「俺と。闘うというのなら」

「今はそのつもりはないわ」

相変わらず笑みを含んだ声であつた。

「今はね」

「そうか。今はか」

「それよりもよ」

また言ってきた。



## 第七話 九階その十四

「時間。あるわよね」

「なくても作るだけだ」

「そう。面白い返事ね」

牧村の返答に興味を見せる声で返した。

「なくても作るの」

「そうだ。それで用は何だ」

「どうして貴方の横に来たのか」

今度は答えずにこう言ってきた。

「それを言えばわかるわよね」

「そうだな。それではだ」

「けれどここで鬭うつもりはないわ」

「俺は構わないが」

「演出よ」

声に含ませてきていた笑みがさらに深いものになる。二人は道路で並行して走りながら言葉のやり取りを行っていた。互いに前を見たまま話をしている。

「これはね」

「そうか。演出か」

「女はね。場所にこだわるのよ」

牧村と並行して進みながらの言葉だった。

「そう、場所にね」

「では場所は何処だ」

前を見たまま素っ気無く女に問い返した。

「その場所は。俺は何処でもいいが」

「このまま先に進んで」

こう彼に言った。

「先にね」

「先にか」

「わかつてもらえたかしら」

「それはわかった」

「このことは簡単に受け入れた。」

「しかしだ。貴様が相手ではない」

「それはまた今度ね」

やはりこう言ってこれは否定するのだった。

「いづれ。その時が来ればね」

「わかった。では相手は」

「このまま先に行けばわかるから」

あえて答えない女だった。

「このままね」

「ふん。あそこだな」

牧村の目にあるものが映ってきた。

「あの場所だな」

「前は屋上だったわね」

女は今度は牧村が髑髏天使として闘ったあの屋上について言及し

てきた。

「やまちちと。そうね」

「あの老人から聞いたのだな」

「その通りよ」

やはりそういうことであった。

「それはね。ちゃんと聞いているは」

「そういうことが」

「だから」

女はまた言ってきた。

「来てね」

「誘いを断る趣味はない」

女の誘いだからではなかった。

「それが俺の主義だ」

「いい主義を持っているのね」  
「そうは思ったことはない」  
「そうした無味乾燥さもそれはそれで味があるけれど」  
「そうか。それでだ」  
今の言葉には構わず女にまた問い返してきた。  
「貴様も来るのか」  
「私も？」  
「そうか。貴様もか」  
目はその場所にやっている。やはり言葉だけを女にかける。  
「貴様も来るのか」  
「私は行かないわ」  
だがこう言ってそれは否定する女だった。  
「立ち会うつつもりもないわ」  
「来ないのか」  
「けれど。見ているから安心して」  
しかしこうも言うのだった。  
「貴方のことはね」  
「魔物に見られていても嬉しくも何もないが」  
「また随分と言うのね」  
「気にしても気にしなくてもいい。これはな」  
「あら、またその乾いた感じが」  
「とりあえずわかった」  
女が来ないことに対しての言葉だった。  
「それはな」  
「どうも有り難う」  
「では一人で行こう」  
「相手はもうそこにいるわよ」  
女はここでもまた楽しそうに言うのであった。  
「そこにね。貴方のことを待っているわよ」  
「俺と闘う為にか」

「ええ。ただし」

女の声の笑みがここでまた深いものになった。

「手強いわよ」

「手強いか」

「果たして。勝てるかしら」

笑いながら牧村に問うてきた。

## 第七話 九階その十五

「果たして。貴方に」

「今まで生きてきた」

女の今の言葉に特に感情を見せることのない言葉であった。

「だからだ」

「凄い自信ね」

「自信があるといえはある」

「このことは否定はしない。」

「しかしだ」

「しかし？何かしら」

「俺はただ闘うだけだ。御前達とな」

「そう。それじゃあ」

「行こう」

やはりこれだけだった。

「今からな」

「一つ言っておくけれど」

女はサイドカーの機首をそちらに向けた牧村に対して最後に声をかけてきた。

「今度は。翼は使えないわよ」

「翼はか」

「大天使になつても。限りがあることは覚えておくことね」

「覚えておこう」

こう返したただけでその場所に向かった。ビルの地下に入っていく。そこは地下の駐車場だった。蛍光灯の白く淡い灯りだけで他にはこれといって何も無い。左右に車が数台ずつ泊まっている。牧村はその間を進んでいたがやがて彼の前に一人の男が出て来た。

「よお」

モヒカンの如何にもといった感じのパンクの青年だった。黒い皮

のジャケットと青いジーンズだ。ジーンズは所々破れているがそれはあえてであるのがわかる。

「髑髏天使さんよお。来てくれたんだな」

「御前か」

牧村は彼の前でサイドカーを止めてそこから降りて話をした。

「御前が今回の俺の相手か」

「そうさ。あの方にここまでエスコートしてもらってな」

「あの方？そうか」

あの方とは誰なのかはすぐにわかった。

「あの女か」

「そうさ。あんた等人間の姿をしてるが人間じゃねえぜ」

「それは承知している」

素っ気無く返しつつ男の顔を見る。細い目が印象的だ。

「しかし。御前のことは知らない」

「俺かい？俺はな」

男はそれに応えにやけながら言ってきた。

「イギリスから来たんだよ」

「イギリスからか」

「そうさ。まあ厳密に言えばスコットランドだけれどな」

見れば目は黒ではなかった。緑だ。緑のその目で語ってきていた。

「そこから来たんだよ。わざわざ」

「今度はスコットランドからか」

「そうさ。ナックラ＝ビー」

自分の名前を名乗った。

「それが俺の名前さ」

「ナックラ＝ビー」

牧村にとってははじめて聞く名前だった。

「何だそれは」

「まあ詳しく言つとややこしくなるな」

こう言つてそれについては話そうとはしない。

「それにな」

「それに？」

「あんたに言っても意味ないだろ」

今度はこう言うのである。

「別にな。違うかい？」

「それはそうだ。俺にとつてもだ」

「闘っただけだろ」

「そうだな」

その男ナツクラ＝ビーの言葉に応える形になっていた。

「それはな。その通りだ」

「じゃあ早速はじめるかい」

相変わらずニヤニヤしながら牧村に対して言う。

「倒してやるからよ」

「それではだ」

彼の後ろのサイドカーがひとりでに動いた。そうしてそのまま間近にあった空いている場所に入る。彼が脳波から動かしたのは言うまでもない。

「行くぞ」

「その前に一つ言っておくぜ」

ナツクラ＝ビーはその笑みでまた彼に言ってきた。

「一つな」

「何をだ？」

「驚くなよ」

「一つ言つのである。」

## 第七話 九階その十六

「俺の姿を見てな。驚いたら駄目だぜ」

「生憎だが化け物を見るのには慣れてる」

彼もこう返す。

「それはな」

「へえ。そうなのかい」

「言いたいことはそれだけか」

牧村は既にその身体に気をまとっていた。闘っていないだけである。

「それだけか。ならもういいか」

「気が早いね。っていうか遊び心はないんだね」

「そんなものは今は必要ない」

またナツクラ「ビー」に言葉を返す。

「今はな」

「わかったさ。それじゃあな」

「はじめるのだな」

「ああ。行くぜ」

この言葉と共に彼の姿が変貌しだした。

「楽しませてもらうからよ」

「むっ!？」

男の姿の変貌は異様なものだった。まず肌が剥けて飛び散り足が別に二本生える。そしてさらに首がなくなり肩に直接くつつく。目は巨大な一つ目となり異形の姿と成り果てた。牧村はその外見を見てまずは言った。

「ケンタウロスか」

「ギリシアだったか？」

ナツクラ「ビー」は牧村の話を聞いて述べた。

「確か。馬と人間の合いの子だったよな」



「そうだ」

「生憎それとは違うんだよ」

頭をぐるぐると回しながら彼の言葉に答える。

「それはな。生憎だな」

「違うのか」

「俺はスコットランドであいつ等はギリシアだろうが」

「それはそうだがな」

「それにだ」

「それに？」

「俺はあの連中よりずっと強いぜ」

唇のない剥き出しの口で笑っていた。鋭い牙が見える。

「ずっとな」

「だが足は馬のものだな」

「そうさ」

このことは否定しなかった。

「海の中じゃこれが一番動き易いんだよ」

「海？」

「ああ、言い忘れていたな。俺は元々海にいるんだよ」

自分の生憎も話す。どうやらその辺りはかなり複雑なようである。

「そこから出てな」

「出て。何だ」

「人間共をぶつ殺してやるんだよ」

左手の拳を掲げて楽しげに笑う。その皮膚のない手で。

「ぶん殴ったり引き裂いたりしてな」

「つまり貴様はそういう魔物か」

「そうさ。生きている奴は目に入ったら絶対にぶつ殺す」

実に荒っぽい返答だった。

「それが俺のやり方さ。だからあんたもな」

「貴様にとっては残念なことだが」

牧村はナッククラッビーの自信に満ちた言葉に応える形で言ってきた

た。

「それは今ここで終わる」

「俺があんたに倒されるからだつてもいいのかい？」

「そう、その通りだ」

言いながら両手に拳を作る。そうしてそれを胸の前で打ち合わせようとする。

「一つ言っておく」

「何だ？」

「俺は本来は魔物はどうでもいい」

これは牧村の本音である。

「それはな。どうでもいいのだ」

「そうなのかよ」

「俺に向かうのなら相手をするだけだ。だが」

「だが？」

「貴様の邪悪さは許さん」

こう言うのだった。

「その。生あるものを粗末にする貴様のそれはな」

「それで倒すっていうのかよ」

「そう。その通りだ」

「面白いね。正義感ってやつかよ」

それを聞いても平気な顔であった。

「じゃあ来な。それを見せてやるぜ」

「行くぞ……」

今その拳を胸の前で打ち合わせた。それにより白い光が彼の全身を包み込み。彼は髑髏天使となったのだった。

## 第七話 九階その十七

右手を開きそのうえでまた拳にして。それを合図としてまたナツクラ＝ビーに対して言った。

「覚悟はいいな」

「いよいよはじまりってわけかよ」

「そつだ。貴様が待ちに待っていたな」

「いいねえ。そうこなくつちな」

余裕綽々といった声での言葉だった。

「折角やるんだつたらな。やっぱりな」

「ごたくはいい」

髑髏天使の言葉には怒気があった。そしてその怒気と共に右手に剣を出した。あの双刃の普段からその手に持っている剣である。

「貴様は倒す。それだけだ」

「そつかい。じゃあ行くぜ」

ナツクラ＝ビーの方から仕掛けて来た。

馬の下半身で突撃してきた。その蹄で髑髏天使を踏み潰そうとする。

「ほらほら、油断してたら踏み潰すぜ」

「くっ！」

その馬の突進を慌てて右にかわす。しかしここでナツクラ＝ビーの左の拳が彼を襲う。

かなり強い拳だった。鎧がひしゃげんばかりになり髑髏天使の身にダメージを与える。血こそ吐きはしなかったが衝撃が鎧を通してダイレクトに伝わる。

「ぐふっ……」

「どうだ？俺の拳はよ」

髑髏天使を見下ろすナツクラ＝ビーの単眼が笑っていた。

「最高に効くだろうが」

「何の……」

「痩せ我慢しても無駄だぜ」

ここでまた拳が来る。しかしそれは何とか後ろに跳んでかわすことができた。もう一撃受けければ本当に危ないところであった。

「まあまだそれだけ動けるみたいだな」

「何という力だ」

「これが俺の力ってわけだ」

間合いが離れたがそれでも彼の自信は変わりがなかった。

「このナツクラ『ビー』のな」

「貴様の闘い方でもあるのか」

「そうさ、大事なのは力さ」

既に声は髑髏天使をせせら笑うものになっていた。

「何でもな。潰して引き裂く」

拳を振り回しながらの言葉だった。

「それこそが全てなんだよ」

「それで俺も倒すというのだな」

「その通りさ。どうだよ」

また髑髏天使に対して問うてきた。

「効くだろ？かなりな」

「確かにな」

それはとても否定できなかった。実際に今の一撃を受けて鈍い痛みをその胸に感じている。これ以上受けければ命の危険があることは彼が最もよくわかっていた。

「もう一撃を受ければ」

「それを喰らいなよ」

言いながらまた拳を振り回してきた。

「今ここでな」

「くっ……」

また来た拳を後ろに跳んでかわす。受ければ命がないことはわかっていたし防げるものではないことも承知していた。だからこそ

行動だった。

だがナックラ「ビー」の動きはこれで終わらなかった。またその四本の脚を使って突進してきた。その力と機動力を駆使して彼を追い詰めてきていた。

「ほらほら、そう簡単には逃げられねえぜ」

「また来るか」

「どうするんだ？さっさとやられるしかねえぜ」

言いながらまた拳を振ってきた。今度は右に跳びまたかわすことができた。

「脚が二本しかねえのに四本に勝てるわけねえだろうが」

「いや、勝てる」

しかし髑髏天使はここで言った。

「勝てる。それでもだ」

「ほお」

今の言葉を受けてまたせせら笑ったナックラ「ビー」だった。

「そうそう行くかね？上手く」

「俺にはこれがある」

その言葉と共にだった。髑髏天使の身体が再び輝きその背に翼が生える。そのうえで左手にサーベルが姿を現わす。大天使の姿だった。

「大天使ってわけか」

「これならば。貴様の力にも」

「さて、それはどうか」

馬鹿にした笑みでその首をぐるぐると回しながらの言葉だった。

「そう上手くいくかね。ここは何処なんだ？」

「地下の駐車場だ」

「その通りさ。飛べる場所じゃねえぜ。わかってんだろ？」

「無論だ」

それをわかっていなくてここで闘っているわけではない。満足に飛ぶことができないのはわかっていた。しかしだったのだ。

「それでもだ。これで行く」

「あんた。何考えてんだ？」

「天使と大天使の力は違う」

「まずこう答えた。」

「それはな」

「！？今更何言ってるんだ？」

「それに今の剣は二本。一本ではない」

「だからってわけかい」

「そういうことだ。ではわかったな」

「まあわかってやるさ」

大天使を前にしてもその自信は変わらなかった。最早自分が勝つと信じて疑っていないことがわかる。そんな声と酷薄な笑みだった。

## 第七話 九階その十八

「あんたもこれが最後だからな」

「上に飛べないのならそれはそれで闘い方がある」

また言う鬨體天使だった。

「それを見せてやる」

「むっ!?!」

「行くぞ」

羽ばたいた。二つの翼が大きく動いた。

そして宙にあがる。そのうえで地面の上を滑るように滑空してきた。

「何っ!?!」

「飛ぶのは何も上で舞うだけではない」

滑空しながらの言葉だった。身体はコンクリートと並行にさせ顔だけをナツクラ「ビー」に向けている。そのうえで両手に剣を持っていた。

「こっつして。滑ることもできる」

「まさか………そう来るっていつのかよ」

「これならばどうだ」

思わず動きを止めてしまったナツクラ「ビー」に対して問う。

「少なくとも機動力では貴様に勝っているぞ」

「それがどうしたってんだよ」

ナツクラ「ビー」はその彼に対して言葉を返した。しかしその声には強がりがありやはり彼の動きを見て狼狽があるのだった。

「俺にはまだな。力があるんだぜ」

「力か」

「そうさ。これだよ」

言いながら自分の左手にあったコンクリートの柱に拳を入れた。

するとそれだけで柱は粉々に砕け散り破片となってしまった。やは

り恐るべき力だった。

「力で。負けてはいねえぜ」

「それはわかっている」

それを見ても動じてはいない髑髏天使だった。

「当然な」

「何を言っても動じてはいないんだな」

「動揺はそれだけで死を意味する」

こう返す髑髏天使だった。返しながらその両手に持つ剣でナックラ「ビー」に切りかかりそのまま離れていく。ダメージは与えられなかったがそれでもだった。

そのうえで間合いを離してから反転してまた向かって来る。柱と柱の間を縫うようにして飛びつつ。地下のコンクリートの玄室で天使は光となって舞っていた。

「だからだ。それはしない」

「へっ、何かむかつかつてきたぜ」

その言葉に苛立ちが混ざってきていた。

「あなたのその態度な」

「この程度でか」

「この程度！？また言うね」

言葉の苛立ちが余計に増してきていた。

「俺をここまでイライラさせておいてよ」

「それは貴様のことだ」

「俺のことかよ」

「俺はそうなつてはいない。それだけだ」

「へっ、個人主義者ってわけかよ」

「さあ、どうする」

飛び回りながらナックラ「ビー」に対して問うた。

「俺に対して。どう攻める」

「馬鹿にするなよ」

言葉に怒気を含ませるとその前足の蹄を鳴らしてきた。



「俺だつてな。こうして」

「むっ!？」

「脚があるんだよ。行くぜ」

こう言つてまた突進してきた。彼が正面に来たところで。

「こうするんだよ。受けな」

「ふんっ」

しかし髑髏天使はすぐに柱と柱の間に入りそこで飛翔する。少なくとも小回りにおいては彼は馬であるナックラ「ビー」のそれを上回っていた。

「くそっ、来ないつていうのかよ!」

「来ないわけではない」

それに応える形で右の柱から来た。既にその両手の剣を輝かせている。

両手に持つその剣を一閃させる。それで。

「がはっ!」

「貴様の力は確かに強い」

それは一撃を受けただけあつてよく知っていた。

「しかしだ」

「しかし!？何だつていうんだ?」

「その護りは弱い」

「何が言いたいつてんだ」

「貴様に肌はない」

彼が言うのはこのことだった。

## 第七話 九階その十九

「そして皮もな」

「それがどうしたってんだ？」

「皮がない相手は実に脆いものだ」

彼が言うのはこのことだった。今の一撃は両手の剣を交互に一閃させたものだがそれはナツクラ「ビー」の両腕を斬った。傷はそれ程深くはなかったがそれでも彼にとっては痛いものであったようだ。その動きが止まってしまっていたからだ。

「剥き出しだからな」

「くっ……」

「そうとなれば攻め方もある」

髑髏天使はまた言う。

「幾らでもな」

「ふざけるな。俺の力の前にはな」

「力の前には？」

「そんなものは不要なんだよ！」

右の拳を思いきり振り下ろそうとしてきた。

「力こそが全てなんだからな！……ぐっ！？」

「やはりな」

ナツクラ「ビー」の動きを冷静に見ての言葉だった。

「貴様の動き。やはりな」

「うっ……」

「ダメージが効いている。動きに限界が出ている。」

「くそっ、まさかそれを」

「そう。その通りだ」

髑髏天使は宙に飛ばしたままナツクラ「ビー」の呻きに答えた。

「ダメージは必ず動きに出るものだからな」

「それがわかっていてのことだったっていつのかよ」

「俺もまた同じだからだ」

実はこれは彼とてなのだった。

「俺もまた先程の貴様の一撃でな。思うように動けないところがある」

「それでどうしてなんだ？」

「鎧が護ってくれた」

彼が言うのはこれだった。

「鎧がな。確かにかなりのダメージを受けたことは事実だが」

「鎧かが」

「そうだ」

彼はまた言う。

「それにより助けられている。そういうことだ」

「ちっ」

髑髏天使の言葉を聞いて思わず舌打ちしたナックラビーだった。

「そういうことかよっ」

「護りもまた必要だ」

髑髏天使は言う。

「攻撃と共にな」

「しかしな。それでもだ」

だがまだナックラビーは諦めてはいなかった。

「俺は。この俺は」

「まだやるというのか」

「魔物の鬨いはどちらか死ぬまでだ」

顔を上げての言葉だった。

「どちらかな。だからだよ」

「また来るのだな」

「殺してやるぜ」

殺意も全く衰えてはいなかった。

「ここだな。覚悟するんだな」

「ならここで決着をつけてやる」

髑髏天使もまた宙で構えを取った。再びその両手で。

「この一撃でな」

「死にな」

ナックラ「ビーもまた負けるつもりはなかった。

渾身の力で拳を繰り出す。それは髑髏天使の頭を狙っていた。それで髑髏天使の頭を砕き一気に勝負をつけるつもりだったのだ。己の力をわかつたうえでの一撃だ。

しかしだった。ここはスピードが勝った。髑髏天使は何とここでナックラ「ビーのその拳を。左手のサーベルを一閃させ切り捨てたのである。

「何だとっ！？」

「もらった」

今度の言葉は一言だった。

「これでな」

そして返す刀で右手の剣を突き出した。それが魔物の胸を貫く。これで決まりであった。

## 第七話 九階その二十

「うぐっ……」

「心臓だな」

呻き声をあげたナツクラ＝ビーに対しての言葉だった。

「間違いなく。そうだな」

「その通りだ……」

「俺の勝ちだ」

言いつつその剣を引き抜く。剣は赤黒い血で濡れ、また傷口からその血が溢れ出てきていた。それを観ても致命傷であることがわかる。

「そして御前の負けだ」

「この俺が……」

「俺は負けはしない」

そしてこうナツクラ＝ビーに対して告げた。告げながら後ろに着地し翼を収める。普段の髑髏天使の姿に戻っての言葉であった。

「言った筈だ」

「それが理由か」

「そうだ。勝ったな」

言葉には何も悪びれるものがなかった。

「そういうことだ。わかったな」

「へっ、理由にはなっていないな」

ナツクラ＝ビーの血を吐きながらの言葉は悪態だった。

「だがな」

「だが。何だ」

「納得はしたぜ」

髑髏天使を見据えての言葉だった。

「よくな」

「そうか。なら言葉はもういらぬな」

「俺はこれでおしまいだ」

身体を紅蓮の炎が包もうとしていた。それは今までの魔物達と同じく彼の形そのままであり彼はその中で炎と化して消えようとしていた。

「御前の力を手に入れて暴れたかったぜ」

「残念だがそれは不可能になった」

「全くだ。じゃあこれだな」

「心置きなく死ね」

最後にこうナツクラ「ビー」に対して告げた。

「悔いなくな」

「まあ悔いはあるがな。けれどそれももういいさ」

不思議と達観した言葉になっていた。

「そうして死ぬのもよくあることだからな。じゃあな」

彼も自分の死を受け入れた。そうして紅蓮の炎と化して消え去った。今度の闘いも髑髏天使の勝利に終わった。勝利を収めた彼は牧村の姿に戻りサイドカーで駐車場を出た。そこで入り口にあの女が立っていた。相変わらずライダースーツにヘルメットを被ったままであった。バイクはすぐ側に止めている。

「勝つなんてね」

「俺は負けはしない」

ヘルメットを脱ぐことなく女に返した。

「何があるうともな。どんな相手であるうともな」

「面白い言葉ね。戦士の言葉ね」

「戦士か」

「ええ、戦士よ」

あえて彼を人間とは呼ばないような言葉であった。

「その言葉はね」

「そうか」

「けれどまだね」

しかし不意にこうも言った女であった。

「まだね。階段を登りつめるのは」

「階段!？」

「天使の階段よ。まだ二階にいるだけよ」

「大天使のことか」

「そうよ。さらに登りなさい」

ヘルメットの奥の目を光らせつつ牧村に対して言ってきた。

「早くね」

「さらに上の天使になれということか」

「そうよ」

その言葉を認めてきた。

「その通りよ。わかったわね」

「それが貴様の望みか」

「少なくとも私は」

女の言葉が不意に鋭くなった。

「それを望んでいるわ」

「貴様、一体何を」

「私は強い存在を倒したいのよ」

ヘルメットから聞こえる声は不気味な笑いになっていた。

「それだけよ」

「だから俺に強くなれというのか」

「ええ」

こくりと頷いてきた。ヘルメットが縦に動く。

「その通りよ。それだけよ」

「そうか。わかった」

牧村は女の言葉を聞いたただけだった。それ以上は聞こうとはしない。

「ではその時にだな」

「私もそのつもりよ」

「倒してやる」

強い言葉で女に告げた。

「その時にはな」

「こちらこそ。楽しみにしているわ」

「ふん」

最後は言葉は交えさせなかった。サイドカーを発進させそのまま帰るだけだった。カバラの謎と天使の関係、その二つが彼の中で胎動するのを感じながら。

第七話 完

2008・11・11



## 第八話 芳香その一

第八話 芳香

牧村は今は家族と食事を摂っていた。今日は珍しく家族四人揃っている。父もいてテーブルを囲んで座り夕食を食べているのである。

「いや、やっぱり寒い時はこれだな」

「そうでしょ。お父さんが早く帰って来るっていつからね」

「わざわざこれにしてくれたんだな」

「ええ、そうよ」

母親が眼鏡をかけた父親に対して答える。二人共もう中年からそろそろ壮年になるうとしていているがそれでもまだ仲睦まじくそのうえ若々しさも残っている。

「皆で食べられるようになって」

「やっぱりこういう時は鍋だな」

「そうよね。けれどさ、お母さん」

未久が母親に対して言ってきた。丁度今鍋にある箸で葱やしらたき、それに菊菜を取って自分のお椀に入れている。お椀の中にはぼん酢がある。

「どうしたの？」

「あっさりしてるわね、このお鍋」

「お魚だからね」

母親はあっさりとした声で彼女に返した。

「だからよ。お魚だと太らないでしょ」

「ええ」

「それも鱈だったら余計にね」

見ればそうだった。入っている魚は白い。鱈である。

「太らないからいいのよ」

「そういうことなのね」

「未久が五月蠅いからよ」

少し意地悪そうな笑みを浮かべて彼女に言うのだった。

「太る太らないって。いつもいつも」

「そんなに五月蠅い？私」

「かなりね。女の子は食べる方がいいのよ」

「そうなの？」

「そうよ。特に未久みたいな歳の頃はね」

なお彼女は中学生である。女の子にとっては何かと難しい年頃であるのも言うまでもない。そして女の子にとっては成長期でもある。

「食べたら胸だって大きくなるわよ」

「胸って」

「そうよ。だから食べなさい」

また言うのであった。

「痩せたければ運動してね」

「ちゃんとバスケ部で頑張ってるけれど」

「それならいいけれどね。ほら、この鱈」

鍋の中の一番大きな鱈を娘に対して指し示した。

「食べなさい。いいわね」

「ええ。じゃあ貰うわ」

「茸もね」

今度は椎茸やしめじも指し示す。

「食べなさい。身体にいいんだから」

「あとお豆腐もね」

「そうよ。身体にいいものばかり選んで入れたんだから」

見てみれば確かにその通りである。葱にしる菊菜にしるそうであるし豆腐や茸はもう言うまでもない。何から何まで栄養がよくしかも美味しいものばかり入れている。

「太る心配もないし。食べなさい」

「わかったわ」

「デザートは林檎用意してあるし」

今度はいささか先の話であった。

「それもね。後で切るわ」

「それは私が切るわよ。ところで」

「ところで。どうしたの？」

「鍋の後はどうするの？」

未久は自分のお椀の中の豆腐を食べながら母に尋ねた。その目の前では鍋がぐつぐつと煮えてその中に様々な具が煮立っていた。

「後は。何するのよ」

「雑炊にするつもりだけれど」

母は湯気を立てるその鍋を見ながら未久に答えた。

「今日はね」

「そうなの、雑炊なの」

「お父さん好きだから」

「ここでちらりと自分の夫を見るのであった。

「それに最後の最後まで栄養を摂らないと駄目じゃない」

「そうよね、確かに」

「来期だつて最近かなり身体動かしてるし」

母は最後に自分の向かい側にいる息子を見た。彼は今まで会話に入ることなく黙々と食べ続けていた。表情もいつもの無愛想なものである。

## 第八話 芳香その二

「だからね。やっぱりそれにしたのよ」

「成程。ねえお兄ちゃん」

「何だ」

「最近痩せてきてない？」

兄の顔を見ながらの言葉だった。

「っていつか引き締まってきたかしら」

「そうか」

「食べる量は倍になったけれど」

このことを言うことは忘れない。

「それでもね。痩せたわよね」

「デニスにフェシングよね」

母親が彼がしているものを言ってきた。彼女は今は椎茸を食べている。

「その二つ同時にしていたらそれこそに」

「トレーニングも毎日欠かさないし」

「当然だ」

いつもの調子での妹に対する返事だった。

「それはな」

「トレーニングもなの？」

「そうでなければ動けない」

「こつも言ったのだった。」

「満足にな」

「それはそうだけれどね。それにしても随分と熱心ね」

「そうか」

「そうよ。大会にも出るの？」

「大会！？そりゃ凄いな」

今まで牧村には話し掛けて来なかった父親が大会と聞いて彼に声

をかけてきた。

「そうか。来期もそういうのに出るようになったんだ」

「何言ってるの、お父さん」

母親がここで父に突っ込みを入れてきた。

「前にも出たじゃない、陸上で」

「それは知ってるよ」

息子のことには無知というわけではない。流石にこういふことは承知しているのだった。

「走り幅跳びやら短距離走でだったよな」

「そうよ。覚えてるじゃない」

「これでも子供の誕生日だってちゃんと覚えてるよ」

つまり子供のことはいつも気にかけているといふことである。

「それはね」

「だったらいいけれど」

「それで来期」

息子に直接声をかけてきた。

「どうなんだい？フェシングは」

「かなりよくなった」

素っ気無く語る牧村だった。父に対しても。

「それはな」

「じゃあテニスはどうなのかな」

「そちらもだ」

素っ気無い言葉で父にも顔を向けてはいない。しかし確かな声での返答だった。

「それはな」

「そうか。ならいい」

そこまで聞いてまずは満足した顔になる父だった。

「それならな。しかし来期はなあ」

「どうしたの？お父さん」

「いや、いつもの調子だなんて思ってね」

今度は未久の言葉に対して返したのだった。

「本当にね。いつもの」

「確かに。お兄ちゃんっていつも無愛想なのよね」

「あんたが生まれる前からよ」

母親も言ってきた。前にいる息子を苦笑いを浮かべながら見ての言葉である。

「もうね。ずっと」

「無愛想なの」

「そうよ。子供の頃からよ」

「子供の頃からの？」

「だからあんたが生まれる前から」

「じゃあ四つや五つの頃からの」

「そうなのよ」

そこまで小さな頃からののだという。思えばそれはそれでかなりのものである。子供の頃から愛想がないというのもそうはないことである。

「いつもね。むすっとして」

「笑わなかったの」

「そうなのよ。もう将来どうなるかって本当に心配だったわ」

「そうしたらそのまま大きくなって」

父親も苦笑いになっていた。

「全く。どうしたのか」

「まあ慣れたけれどね」

母親は苦笑いから達観に顔を変えた。

## 第八話 芳香その三

「この表情も喋り方も」

「慣れるものなの」

「子供なのよ」

子供を受け入れられない親はいないというのである。

「ずっと一緒だから」

「そうなのよね。ずっと一緒なのよね」

未久もここで兄を見るのだった。

「お兄ちゃんと。私も」

「嫌な」

「無愛想なのはどうかと思うわ」

こう言って首を傾げる未久だった。

「それはね」

「そうか」

「そう言われても表情は変わらないのね」

「一応変えはしたつもりだ」

本人の言葉によればそうらしいが傍目にはとてもそうは見えないのだった。やはり無愛想で声もぶっきらぼうなものではなかった。

「だが。そうは見えないか」

「全然」

兄の言葉に対して首を横に振って返す。

「このお豆腐より表情がないわよ」

「豆腐に表情があるのか」

「例えよ」

困ったような笑顔でまた兄に返した。

「例え。強いて言うなら豆腐の味だけねど」

「どう？今日のお豆腐」

母親が豆腐の話が出たところでそれについて尋ねてきた。

「いいでしょ」

「うん。何か凄く食べやすい」

見れば未久は本当に豆腐をかなり食べていた。今も一つ食べている。

「スーパーのやつなの？」

「そう思う？」

「そう言われると」

質問をはぐらかされて少し困った顔を見せて首を傾げる未久だった。

「違うの？」

「そうよ、お豆腐屋さんのお豆腐なのよ」

「お豆腐屋さん」

「そのお店が凄いのよ」

自分が作ったわけではないのに何故かここでは誇らしげな笑みになる母親であった。人間心理の不思議なところとしてこうした場合に何故か自慢めいたものになるのである。

「そこね。何と」

「何と？」

「南禅寺で仕入れていたお店で修行積んだ人のお店なのよ」

「南禅寺って？」

こう言われても全くわからない未久だった。

「何処、そこ」

「何処って。知らないの？」

「お寺よね」

流石にそれはわかる未久だった。

「名前聞く限りじゃ」

「そうよ、お寺よ」

「お寺でお豆腐っていうと精進料理よね」

これもわかった。

「多分だけれど。そうよね」



「そうよ。南禅寺って湯豆腐で有名なのよ」

「ふうん、湯豆腐」

湯豆腐と聞いた未久はその目の輝きを微妙に強くさせた。そのうえでまた自分のお椀の中に入れていた豆腐を見る。彼女は豆腐がかなり好きだよ。だ。

「湯豆腐が食べられるの。その南禅寺で」

「そうなの。これが凄く美味しいのよ」

「そんなにいいんだ」

「ははは、未久も一度行ってみたらいいさ」

父が大きく笑ってから娘に言ってきた。

「是非な。あそこの湯豆腐は美味いぞ」

「このことか大阪の湯豆腐よりもなの？」

「京都のお豆腐はまた特別だ」

また言う父だった。

「もうな。あれを食べたら他のお豆腐は食べられないな」

「京都って美味しいものないって聞いたけれど」

未久は父に対してこう返した。眉間に皺が少しいつている。

「そうじゃなかったの？」

「お金を出せばね」

だがその彼女に母が言うのだった。

「美味しいものがあるのよ」

「お金を出せば」

「少なくとも今の未久じゃ無理ね」

少し微笑んで娘に告げた。

「子供や学生さんがね。美味しいものを食べられる場所じゃないか

ら

「それなら行っても仕方ないじゃない」

こうしたところは実にわかつている未久だった。

## 第八話 芳香その四

「京都なんか。この神戸だって大阪だって美味しいものは安くてす  
ぐに手に入るんだから」

「その通りだ」

暫く沈黙していた牧村がここで再び口を開いたのだった。

「俺も。京都には興味がない」

「そういえばあんた京都のことは話さないわよね」

「ああ、そうだよな」

母も父も今そのことに気付いたのだった。

「それよりも大阪よね」

「それとこの神戸だよな」

「飾った場所は好きじゃない」

彼はこうも言うのだった。確かに京都という街は飾った場所ではある。古都というせいであるがそこには気位というものが存在している街なのだ。

「だから。大阪がいい」

「それかこの神戸ね」

「東京はもつと嫌いだがな」

「東京なんていい場所一つもないじゃない」

未久が兄に続く形ではつきりと切り捨てた。

「食べ物はずいし寒いし」

「その通りだ」

「そこにいくところのお豆腐なんて」

未久は話しながらその豆腐をまた食べる。

「美味しいわよ。京都は好きじゃないけれど」

「幾らでも食べられるでしょ」

「うん」

母の問いに今度は満面の笑顔で答えるのだった。

「何かどんどん食べられるわ」

「それが京都のお豆腐なのよ」

「京都の」

「まあそのうちわかるわ。京都の料理はね」

話は京料理に関するものになってきた。

「素材を生かして」

「素材を」

「そして香りも楽しむものなのよ」

「そうなんだ」

「そういうことよ。まあ今はわからなくていいわ」

「こつも言う母だった。」

「今はね。そのうちわかるから」

「私が大人になったらかしら」

「そういうことよ。来期はもうすぐかしらね」

「京料理には興味はない」

「あら、素っ気無いこと」

息子の今の言葉に口を尖らせてみせる。

「そんなに大阪や神戸がいいの」

「お高く止まったのは好きじゃない」

結局はそこに行き着くのだった。

「だから。京都は」

「まあ食べ物の好き嫌いじゃないからいいけれど」

こつ言って納得はする母親だった。だがその間にも豆腐を食べ続

けている。

「それにしてもあんたも」

「そうよねえ。昔から好き嫌いのはっきりしてるのよね」

未久が苦笑いと共にまた述べた。

「お兄ちゃんってね。無表情なのに」

「悪いか」

「少なくとも曖昧なのよりはいいんじゃないの？」

とりあえず自分の考えを述べる未久だった。

「それは」

「そうか。ならいいんだな」

「完全とは思えないけれどね。まあとにかく」

彼女はさらに言葉を続けていく。

「最後は雑炊だしね」

「そうよ。卵も入れるから」

また母が言う。

「楽しみにしておいてね」

「わかったわ。それでデザートは」

「ネーブルあるわよ」

「ああ、それね」

ネーブルと聞いてまた明るい笑みになる未久だった。

「それじゃあそれ。貰うわね」

「ええ。雑炊の後で切るから」

「わかったわ。じゃあお兄ちゃん」

また兄に顔を向けて声をかける。

「それでいいわよね」

「ああ、わかった」

ここでも表情を変えず頷く牧村だった。食べながらその口の中にあるものを感じていた。それは。

## 第八話 芳香その五

「これは……香りか」

「おつ、来期もわかったか」

父が今の彼の言葉を聞いて楽しそうに言ってきた。

「これなんだよ。京都はな」

「香りが」

「京都の料理は確かに味は薄い」

それで有名でもある。

「素材を生かしているといつてもな。それでも味付けは」

「薄いのか」

こつという話がある。織田信長が京の都に入った時三好氏の料理人だった男を召し抱えることになり彼に料理を作らせた。しかしその彼の料理を食べた信長はすぐに怒ってしまったのだ。

「こんなものは水っぽくて食べはせぬ」

こつ言つて怒りだし料理人を切ろうとさえした。流石にこれだけで手打ちにするとは流石の信長でも極端でありいささか誇張が含まれているのではないかとも思えるが少なくとも怒ったのは事実である。

だが料理人は。ここでうろたえることなくこつ信長に言ったのであった。

「それでは明日また作らせて下さい」

「明日か」

「はい、明日です」

これは啖呵にも似た言葉であつた。

「明日また作らせて頂きたく存じます」

「わかつた。じゃが明日若しわしが食べぬようでは」

「その時は如何程にも」

こつまで言つて再び料理を作った。だがその料理はどれもこれも

その信長が昨日水っぽくて食べたものではないといった品と何一つ変わらなかつたのだ。それを見た信長は自分が馬鹿にされていると思ひこれまた激怒した。やはり彼は気が短かつた。

「昨日と全く同じものではないか！」

「ですが御賞味を」

しかし料理人はこう信長に言うのであつた。

「それから如何程にも」

「ふん、覚悟しておれ」

言葉を返したうえで実際に食べてみる。食べてからの信長の言葉は。

「美味いではないか」

「はい」

料理人はそれを当然のこととして受け止めていた。

「この様な美味いものを作るのなら最初から作れ。よいな」

「わかりました」

これで料理人は信長の許しを得た。だがこれを妙に思った家臣の一人がこつそりと彼に尋ねたのだつた。どういふ事情でこんなことになつたのかを。

「味付けでございます」

「味付け？」

「はい。信長様は尾張の方ですな」

「うむ」

これは最早この当時から天下の誰もが知つていふことと言つまでもないことであるがそれでも彼は言うのであつた。そこにこそ何かがあるというように。

「それで味付けを変えたのです」

「味付けを変えたとは」

「三好様は代々都で足利様や細川様にお仕えしてきました」

彼は先の主のことを話した。

「その為そのお好みは京風です」

「それは至極当然のことだな」

「そうですね」

京に代々いればその舌の好みは京のものになる。それも当然のことであつた。

「ですから最初は京風の花鳥風月を重んじた味にしたのですが」

「それが殿の舌に合わなかつたのか」

「その通りです。ですから先程の料理は」

「ここにこそ秘密があるのだつた。」

「思いきり田舎風の味にしてみましたのです」

「田舎風にか」

「尾張風と申しましょうか」

彼はこうも話した。

「その味にしました」

「つまり殿の好みに合わせたのじゃな」

「はい」

とどのつまりはこういうことであつた。

「左様です」

「ふうむ。しかしじゃ」

家臣は彼からこの言葉を聞いてまず腕を組んだ。そしてそのうえで深く考える顔になりそのうえでまた彼に対して言うのであつた。

「それは危険じゃぞ」

「存じています」

彼はこう家臣に言葉を返したが顔は平気なものであつた。

## 第八話 芳香その六

「それはもう。これは下手をすれば」

「そうじゃ。殿がどういった御方かは」

「それもまた存じています」

また答えるのであった。

「御気性が非常に激しい御方ですね」

「大きな声では言えぬがな」

信長の気性の激しさは当然彼が生前の頃からよく知られていた。

小姓や側女に不都合があれば即刻手打ちにするということも失敗した家臣に対してその拳で懲罰に及ぶことも稀ではなかった。羽柴秀吉も睨が開けられなくなる程殴られたことがあるし明智光秀も茶器を投げつけられたことがある。誰に対してもそうなのが信長だが非常に仕えにくい男なのは確かなことであつた。

「その通りじゃ」

「斬られても承知のことです」

彼はさらに述べた。

「それもまた」

「よいというのか」

「包丁にも誇りがありますので」

今度は毅然とした言葉になつていた。

「ですから」

「左様か。そこまで覚悟があるのならわしはもう何も言わぬ」

「わかりました」

彼は既に覚悟を決めていた。何しろ信長の舌を京の味がわからぬとはつきり示したのだから。信長にとては恥をかかされたと思つても当然のことだつた。だが当の信長はそれを聞いても平然としたものであつた。

「当然であるう」



「当然ですか」

「そうじゃ」

菓子を食らいながら家臣達に伝えるのだった。上座で片膝を立てながらいささか無作法な格好で食べている。その姿がまた実に信長らしかった。

「料理人がわしの舌に合わせることは当然のこと」

「はあ」

これが彼の考えであったのだ。

「特に言うこともない。そういうことじゃ」

「左様ですか」

「じゃが一つ言っておけ」

ここで彼は菓子を一つ摘みそれを口の中に入れてから家臣達に告げた。

「酒じゃが」

「酒ですか」

「わしの食膳にはいらぬ」

こう言うのだった。

「わしにはな。それはよく伝えておけ」

「それだけですか」

「それだけじゃ」

信長の言葉は素っ気無くすらあった。その態度も同じだった。

信長は酒が飲めないのだ。想像できかねることだったが甘党であったのだ。だから今も菓子を美味そうに食べているのだ。人の好みはわからない。

「わかったな。そういうことじゃ」

「はっ、それでは」

「料理人にはそのように」

家臣達が平伏してその言葉に応える。こういう話である。信長の舌の好みやその考えを示すと共に京の味も伝えている逸話である。

その京都の料理であるが。牧村はどうも積極的に好みではないよ

うなのだ。そしてそれを隠すこともなく今テーブルにいる彼であった。だがそれでも。

「この香りが」

「いいだろう」

父が誇らしげに笑いながら彼に問うてきたのだった。

「香りが。いいな？」

「確かに」

目が微かだが考えるものになっていた。

「この香りは。後から漂ってきた」

「それが京都の味なんだよ」

また誇らしげに言う父だった。

「後でな。ほのかに来るものだ」

「香りか」

「来期、教えておくわね」

母もまた自分の夫と同じ笑みになって彼に言ってきた。

「京都の料理はね。味だけを楽しむものじゃないのよ」

「味だけでも」

「香りもなのよ」

彼女もまたこのことを彼に教えてきた。

「香りも。味わうものなのよ」

「そうだったのか」

「そういうこと。それはわかったかしら」

「一応は」

答えはするがそれでもいつもの彼なのは変わらない。

「わかった」

「本当かしら」

「多分そうじゃないのか？」

どうも今一つそうは見えない息子を見て首を右に傾げた妻に対して言ってきた夫だった。

「来期は昔からいつもこうじゃないか」

「それもわかっているけれど」  
わかっているが、というやつであった。

## 第八話 芳香その七

「この無愛想さがねえ」

「仕方ないか。生まれつきだし」

結局のところ親達もこれで納得するのだった。納得するしかなかったと言つてもいい。とにかくこうして一家団欒での食事の時は終わった。牧村はそれからまたトレーニングに励みそのうえで風呂に入り眠りに入った。翌日の学校ではまず博士の研究室に向かった。今日は博士はちゃんと部屋にいた。

「この前は済まなかつたな」

「何処かに出かけていたんだつたな」

「そうじゃ。それで聞きたいこともあるそうじゃな」

「カバラのことだ」

すぐに話に出してきた牧村だった。

「カバラ。知っているか」

「ああ、あれじゃな」

話を聞いてすぐにこう述べる博士であった。

「ユダヤ教の奥義じゃな」

「そこまで知っているのか」

「うむ。一応じゃが」

これも牧村に述べる博士であった。

「知ってはいるぞ」

「では聞きたい。カバラとは一体何だ」

「一言で言つと神秘じゃな」

「神秘か」

「様々な解釈も可能じゃな。じゃが今の君には」

「俺には」

「天使としての解釈になるじゃろうか」

こう牧村に言つてきた。

「この場合はな」

「天使としての解釈!？」

「うむ」

牧村に対して頷いてみせる。

「そうじゃ。今は大天使になれるな」

「ああ」

博士の問いに対して頷く。その通りだからだ。

「そうだが」

「そこから先があるのも知っておるな」

「全部で九段階あるのだったな」

「左様。今は第二段階じゃな」

「第二段階でこれか」

「天使は階級によってその力が大きく違うのじゃよ」

これは牧村も実感していることであった。天使と大天使ではそのパワーまでもが全く違ってきている。ただ翼があるだけではないのだ。

「それはわかるじやろう。君自身が最もよく」

「その通りだ」

「さらに強くなれるのじゃよ。まだな」

「今よりもか」

「この場合のカバラはそういう意味になるのう」

そしてこう言うのだった。

「君のその天使に関してはな」

「髑髏天使としての俺はか」

「しかしじゃ」

「しかし？」

博士はここまで話したうえで言葉を少し変えてきた。牧村もそれを聞いて眉を動かす。

「まだ何かあるのか」

「どうも天使になると力を得るだけではなさそうじゃな」

「力を得るだけではないか」

「それはまだ調べておる。今までの髑髏天使も含めてな」

「俺の前の髑髏天使達も」

「じゃからまだ全部わかるには時間が必要じゃ。わしとても何でもすぐにわかるわけではない」

「そうか」

「そうじゃ。済まんな」

こう謝罪の言葉も述べる博士であった。彼の周りにはいつも通り妖怪達がうろつると徘徊している。そのユーモラスな様子が深刻な話をかなり和らげてもいた。

「時間はな。まだじゃ」

「わかった。それではな」

「待ってくれるな」

「聞いているのは俺だ」

牧村は一言で返した。

「なら待つのが道理だからな」

「わかってくれて何よりじゃ。そしてじゃ」

「そして？」

「魔物に何かあったか？」

今度はこう問うてきた博士であった。

## 第八話 芳香その八

「向こうに何か動きが」

「おかしな奴が出て来た」

博士の問いに応えてこう述べるのだった。

「妙なのかな」

「妙なのかな？」

「二人出た」

その人数まで告げる。

「二人だ。一人は顎鬚のある老人で」

「老人……」

「もう一人は若い女だ。その二人だ」

「その二人か」

「知っているのか？」

「もしかと思うが」

老人と女と聞いて顔を微妙に曇らせる博士だった。そしてそのう  
えでまた牧村に対して言ってきた。

「その二人はこんな連中ではなかったか？」

「むっ!？」

「ああ、済まぬ」

ここで筆と硯がぼん、と博士の机に出て来た。どちらもそれぞれ  
妖怪である。筆も硯も百年以上経ち自然と命を持ったものなのだ。

その二つを使って白い紙のうえにすらすらと描いていく。そして  
出て来たのは。

「こういう顔だったか？」

「むっ!？」

意外なことに和風で上手な絵だった。筆なので時代劇の人相書き  
を思わせる。そこにあるのはまさに。牧村が見たあの二人だったの  
だ。

「どうじゃ？この二人か？」

「そうだ」

牧村はその人相書きを見つつ答えた。そこにあっただのは確かにその二人だった。見間違える筈もない、そこまで同じだったのだ。

「その二人だ」

「そうか。やはりな」

博士はそれを聞いて納得したような顔で頷いた。頷きながら自身の白い顎鬚をしごいている。その動作が如何にも彼の姿に合っていた。

「そうだと思っておったわ」

「それでこの二人は何なのだ？」

博士が頷くのを見ながらそのことを問うのだった。

「魔物なのはわかるが」

「魔物は魔物でもじゃ」

語る博士の目が鋭いものになったのを見た。

「尋常な奴等ではないぞ」

「というと」

「どちらも魔物の神々なのじゃよ」

「神々!？」

神と聞いて牧村の目の色が一変した。探るような、同時に学ぶ目からすぐに剣呑な目になった。まるでそこに敵がいるような目であった。

「魔物に神がいるのか」

「そうじゃよ。人間の世界にもおるじゃろ」

「ああ」

「無神論者もまあおるがな」

無神論者というところで博士はその言葉を馬鹿にしたように口の左端を歪めた。髭に隠れていたがその髭が動いたのでわかるのだった。

「それでもおることは確かじゃ」



「色々な神がな」

「特に日本の国にはな。それと同じじゃよ」

「魔物の神か」

「ああ、それは僕達も同じだから」

「そこんところも宜しくね」

これまで今の場では彼等は彼等で適当に博士や牧村の周りを徘徊したり部屋の端に腰を下ろして酒をやっていた妖怪達が牧村に対して言ってきたのだった。

「妖怪にもね。神様がいるから」

「それもかなりの数がね」

「妖怪にもいるのか」

「人間も妖怪もそういうところは変わらんよ」

こう述べる博士だった。

「全くな」

「そして魔物もか」

「左様。ただしじゃ」

博士の語るその目がさらに鋭い光を宿した。

「少しわし等の神様達とは違つぞ」

「というと」

牧村もその鋭い光を見つつ問う。

## 第八話 芳香その九

「どういうことだ？」

「神様は普段はおおっぴらに出て来たりわし等に対してあれしろだのこれしろだの言うことはないな」

「それはな」

牧村も神の存在を否定しない。否定しないが確かに家を出入りするようになり人に姿を現わすような存在でもないと思っている。だから今の博士の言葉に同意できるのである。

「その通りだ」

「じゃが。魔物の場合は違うのじゃよ」

「あれか」

「左様、あれじゃ」

今はあれ、というだけで話が進むのだった。それは牧村がその『神』をその目で見たからである。これは無言の、そして無二の説得力があった。

「簡単に出て来るじゃろ」

「そうだな」

「そういうことじゃ。奴等は魔物を操り指図をするのじゃよ」

「だから俺の前にも出て来るのだな」

「その通り。奴等を魔神という」

「魔神か」

「全部十二柱おるとされている」

博士はその数も知っていた。

「全部でな」

「十二か」

「文献には十二魔神と書かれておった」

文献にあったとも牧村に言うのだった。

「全部でな」

「十二の魔神か。そしてあの二人は」

「そのうちでも中心人物じゃよ。しかしのう」

「しかし？」

「連中はずっと封印されておったのじゃがな」

首を捻って言う博士だった。

「ずっとな。それが出て来るとはな」

「前の髑髏天使の時には出て来なかったのか」

「前どころではない」

五十年前という単位ではないと。こう牧村に告げるのだった。

「それこそじゃ。何千年とらしいのう」

「何千年か」

「文献によってその辺りはまちまちじゃ」

博士はここで本棚の方を振り向く。どうやらあそこにその文献があるらしい。何しろその蔵書はどれだけあるかわからずそのうえ様々なものがあるので博士や妖怪達以外が見ても容易にはわからないのだ。そうした本ばかりが置かれている、そんな本棚なのだ。

「まだはつきりとはわからん」

「そうなのか」

「そこは済まん。しかしじゃ」

博士はそれでも言葉を続ける。

「今出て来るとはのう」

「そこがわからないのか」

「じゃから。何千年じゃぞ」

このことを強調する博士だった。

「何千年も封印されておったのが出て来たのじゃ。何故かのう」

「封印も永遠ではないだろう」

牧村は静かに分析してこう述べた。

「永遠に続くものはないのだからな」

「そういうことかのう。封印が弱まってか」

「そういうことだと思う。だが奴等は全部で十二いるのか」

「そうじゃ、十二じゃ」

数は確かであった。博士もその数ははっきりと言う。牧村はその数をしっかりと頭の中とその心の底に刻み込むのだった。まるで鋭いナイフで木に刻むように。

「十二おるからのう」

「まずは二人か」

「気をつけるようにな」

語る博士の目が剣呑なものになる。

「くれぐれもな」

「気をつける？」

「そうじゃ。相手は神じゃぞ」

彼が言うのはここであった。相手を魔物達の神である魔神であると。強調してさえいた。やはり彼も牧村の心にそれを刻んでおきたかったのだろうか。

「尋常な相手ではないからな」

「それ程の力を持っているのか」

「少なくとも大天使では勝てまい」

こつ牧村に告げるのだった。

「到底な」

「そこまでか」

「うむ。じゃから今は闘ってはならん」

今度ははっきりと闘うなと教えた。

「よいな。勝てる相手ではない」

「では今より強くなってからか」

大天使でなければさらに上の階級の天使になるだけだ。牧村が出した答えはそれであった。ある意味非常に合理的な結論だった。

## 第八話 芳香その十

「わかった」

「わかつてくれたか」

「今はあの連中を避けるでしょう」

「果たして今君に向かって来るかどうかもわからんがな」

「敵は弱いうちに叩く」

一つの定理を述べる牧村だった。

「違うのか」

「本来はそうじゃがな。魔物の考えはわし等と多分に違うところがあるのではな」

「その通りだよ」

「そこはね」

ここで横からまた妖怪達が声をあげてきた。そうして牧村に対して言うのであった。

「僕達は一番大事にするのは楽しみだから」

「だから闘いとなればね」

「楽しみを優先させるのか」

「そういうこと。魔物って強い奴と闘うのが好きだからね」

「何で闘うのが好きなのかは理解できないけれど」

だが楽しみを優先させるといふのは理解できるといふのだ。この辺りは人ならざる存在としてわかるようだ。妖怪と魔物を分けるものはその考え方だけだからということもあるのだろう。

「まあそれでもね」

「連中の考えはわかるから」

「魔神でも」

「では。今は奴等は俺には向かつては来ない」

「進んで勝ち目のない闘いをするともないぞ」

また言ってきた博士だった。

「わかったな。それは」

「わかった。それではだ」

博士の言葉に対して頷く牧村だった。

「連中については避けるということだな」

「そうしてくれ。それでじゃ」

「ああ」

「また魔物と闘ったようじゃな」

話はそこに移った。先のナツクラ「ビー」との闘いのことだった。

このことは妖怪達に話していたがそれが博士の耳にも入ったのである。

「地下の駐車場での闘いじゃったか」

「力の強い相手だった」

ナツクラ「ビー」のあの怪力を思い出している言葉だった。

「攻撃を受け続けていれば。俺が負けていた」

「だが君は勝った」

牧村に事実を告げた博士であった。

「そうじゃな」

「ああ」

このことには静かに頷いてみせた。目の光は強いが。

「その通りだ」

「闘いは力や技だけではない」

「素早さだけでもないな」

あの時彼は大天使としての機動力を使って勝った。しかしそれが最大の勝因になったのではなかったのだ。最大の勝因とは何であったか。その話だった。

「あの時は」

「頭じゃよ」

穏やかな笑みを浮かべて言う博士だった。

「それが一番頼りになるものじゃて」

「俺もあの時は考えた」

考え素早く決断を下して闘った結果の勝利なのだ。

「そしてその結果だ」

「それがよかったのじゃ。闘いは気付くことじゃよ」

「気付くことか」

「相手の何かに気付きそこを衝く」

「こう言うのである。」

「それなのじゃよ」

「俺はそれができているのか」

「聞けばもうできておる」

博士は客観的な様子で述べた。

「既にな」

「だといいのだがな」

「そういうことじゃよ。とにかくじゃ」

博士はまた牧村に言ってきた。

「今のまま鍛錬し勝ち抜いていくのじゃな」

「それが」

「左様。どちらにしろ魔物は出て来る」

まるで石が道に転がっているのを見るような言葉であった。

「ならばじゃ。それを相手にしていけばな」

「それだけでいいか」

「そういうことじゃ。さて」

「ここで話を止めてきた。」

第八話 芳香その十一

「わしが今言えるのはこれだけじゃ」

「そうか」

「そしていいものがここにはある」

言いながらろく子に顔を向ける。見れば彼女はその両手にお盆を持っている。その上に丁寧にピラミッド型に重ねて置かれているものは。

「どつじゃ？」

「柿か」

見ればそれだった。橙色の見るからに適度な硬さを持っているその柿が置かれていた。牧村はその柿を見て己の中で何か動くのを感じていた。

「一緒にと思っているのじゃがな」

「あつ、柿だ」

「いいね、それ」

ここでまた妖怪達も声をあげる。

「僕柿好きなんだよね」

「そうそう」

「って御前河童じゃないか」

のっぺらぼうが河童に突っ込みを入れる。

「何で河童が柿食べるんだよ」

「顔に何も無い御前に言われたくないね」

どっちもどっちのやり取りをはじめてきた。

「そもそも御前食べられるのか？」

「食べられるよ」

しれっとして言うのっぺらぼうだった。

「もう何でもね」

「匂いは？」



「わかるよ」

「こつも答える。当然鼻もない。そして今度は彼から言ってきた。

「勿論目だって見えるしね」

「嘘つけ」

「嘘はつかないさ」

あくまで主張してきた。

「嘘じゃないさ。本当に見えてるんだからさ」

「柿もか？」

「勿論だよ」

見れば何も無いその顔を河童に向かい合わせている。どつやらその言葉は嘘ではないようだった。やはりはっきりと見えているのである。

「今だつて喋ってるだろ？」

「そついえばそつか」

「そついうこと。見えていなくてもあるんだよ」

彼の言葉によればそつである。

「ちゃんとね」

「一体どうなってるんだよ」

河童は彼の言葉を聞いてもどついうことかわからず首を捻る。

「全く。わからない奴だよ」

「そついう君はどうして手が左右つながってるの？」

「そついう身体をつくりになってるんだよ」

その河童の返事である。

「そついうふうだね」

「それもかなりわからないんだけれどさ」

「そつかな。普通だろ」

「普通じゃないよ」

どう見ても普通ではない顔ののっぺらぼうの言葉である。

「そんな手。しかも伸びたり縮んだりするし」

「何処かおかしいかな」

「だからおかしいって。第一柿だって」

「好きだから仕方ないだろ」

「どうやらここには理由がないようだ。」

「僕だって胡瓜ばかり食べるわけじゃないさ」

「そうだったんだ」

「胡瓜は主食」

つまり人間にとっての五穀ということだった。米や麦と同じものなのである。

「そして柿はおやつなんだよ」

「そういうことだったんだ」

「そうだよ。じゃあろく子さん」

「はい」

ろく子は河童の言葉にその知的な顔をにこりとさせる。今は首は伸びてはいない。

「柿僕達の分もある？」

「どうなの、そこは」

のっぺらぼうもそのことを尋ねてきた。

「なければ別のをこっちで食べるけれど」

「どうなの？」

「ええっと」

ろく子は彼等の問いにまずは考える顔になった。そうしてそのうえで首を伸ばし部屋の奥を覗きに行った。本棚が並ぶその部屋は何処まであるのかわからない。果ては暗くなって見えなくなってさえいる。

## 第八話 芳香その十二

「あつたわ」

「あつたの」

「ええ。たつぷりと」

その暗くなつて見えなくなつてしまつて居る部屋の奥からろく子の声が返つて来る。首だけでそこに入つており声は遠いものになっている。

「あるわ。じゃあ持つて来るわね」

「うん、御願ひ」

「やっぱり柿だよな」

妖怪達は柿があるのを聞いてさらに陽気になつた。既に菓子をかなり食べているがそれでもというわけだつた。

「この季節はね」

「つていうか柿が一番じゃない？」

「やたら柿が好きな妖怪もいた。」

「果物の中じゃさ。柿がさ」

「一番甘いつていうか美味しいつて？」

「そうそう」

そう言い合つて居る。言い合いながら早速ろく子が持つて来たその柿を手を伸ばしてそれぞれ取つていく。そして本当に美味そうにかじつていくのだつた。

「はい、牧村さんも」

「どうぞ」

そして牧村にも柿を差し出してきた。それも何個もだ。

「幾らでもあるからね」

「どんどん食べてよ」

「悪いな」

その彼等に礼を述べながらまず一個手に取る。そのうえでかじる。

固くそれでいて渋みがなく絶妙の味具合になっている柿だった。その柿を食べてまず言う言葉は。

「美味しいな」

「そうじゃろ。奈良の柿じゃよ」

博士もまたその柿を手にとっている。そうしてその柿を食べながら牧村に言うのであった。

「あそこの柿は味が違うからのう」

「奈良の柿か」

「柿はやっぱり奈良じゃ」

彼はまた言う。

「他のもいいがやっぱり奈良のが一番じゃよ」

「そういうものか」

「実際に食べてみて美味しいじゃろ」

言いながら彼もその柿を食う。見れば何なく食べている。どっちらその歯は歳の割にはかなりしっかりとしていているようである。牧村もそれに気付いた。

「この柿はな」

「確かにな。いい味だ」

「さあ、幾らでもあるからな」

笑みを浮かべながら妖怪達と同じ言葉を口にした。

「どんどんやってくれ。よいな」

「わかった。しかしこの柿は」

「何じゃ？」

「柿の香りもいいな」

食べかけの三口程度かじった柿を見ながらの言葉である。

「香りまで。いい柿なのか」

「ほう、柿の香りまでわかるのか」

博士は今の牧村の言葉を聞いてその目をさらに細めさせた。

「上々じゃよ。香りまでわかるとは」

「強くないがいい香りだ」

「こう言う牧村だった。」

「中々な。食欲がさらに沸く」

「香りはな。大事なものじゃ」

博士はそれについて言葉を続ける。

「それもかなりな」

「かなりか」

「その通り、食べ物には味や歯ざわりだけではない」

博士は言う。

「香りもな。大事じゃからな」

「だからこの柿はいいのか」

「ここまでの香りを持っている柿は奈良の柿だけじゃ」

また奈良の柿を持ち上げてきた。

「わかってくれるな。香りの素晴らしさが」

「おおよそはわかった。そうか。香りか」

牧村はまた柿をかじりつつ呟いた。

「それが大事なのか」

そのことを考えながら柿を食べていく。そうして柿を食べ終えてから研究室を後にする。研究室を出るとテニス部に行き汗を流した。ごく有り触れた彼の日常だった。

しかし牧村来期は髑髏天使でもある。髑髏天使は日常の存在ではない。彼にとって日常とはすぐに戦闘という非日常に変わってしまうものなのだ。それはこの日も同じであった。

## 第八話 芳香その十三

サイドカーに乗り帰路についている彼の目の前を何かが掠めた。それは。

「花か」

一輪の花だった。紅い、美しいが何処か毒々しさも漂わせている花だった。その花が彼のヘルメットの前を掠めて地に落ちたのである。香りは強くその場を一気に覆ってしまった。

「何故ここで」

「プレゼントよ」

ここで女の声があった。だがあの女の声ではなかった。

「私からのね」

「私から!？」

「そうよ。ここよ」

左手から声があった。そこを向くと。

紅のドレスの女だった。その女が妖艶な笑みを浮かべつつ左手の信号機の上に立っていた。黒髪は上でまとめられ白い顔がよく見えている。はつきりとした顔立ちはラテン系、それもフランスのそれを思わせる。服はスペインだが着ている者はフランス、そんなアンバランスな女であった。その女がいたのであった。

「髑髏天使よね」

「それがわかる御前は」

「そうよ。アルラウネ」

その妖艶な笑みと共に名乗ってきた。

「今度の貴方の相手よ」

「アルラウネ」

牧村はヘルメットのバイザー越しに女を見つつ相手が名乗ったその名を呟いた。

「また外から来た魔物か」

「その通りよ。欧州から来たわ」

「スペインか？」

「近いけれど違うわ」

微笑と共にそれは否定してきた。

「私の祖国はフランス」

「あのお高くとまった国か」

「それは人間の世界ね。少なくとも私の世界では違うわよ」

「魔物の世界ではか」

「ええ。だから」

また言ってきた。

「私も。今こうして貴方に会いに来たのよ」

「闘うのなら何時でもいいが」

そのアルラウネを見据えながら彼女に告げた。

「俺は」

「せっかちな」

だがアルラウネは今の彼の言葉は笑って打ち消してきた。

「そんなのだと女の子に好かれないわよ。それとも日本の男は皆そ

うなのかしら」

「妖怪や魔物は知らん」

まずはこう前置きする。

「人間も他の奴は知らないが俺はそうだ」

「そうなの」

「そうだ。それだけだ」

素っ気無い言葉はここでも健在だった。しかしアルラウネはそんな彼を口では言っても顔はそうではなかった。興味深い笑みを向け続けている。

「それで。どうするのだ？」

「闘うかどうかということね」

「そうだ。今も言ったが俺は何時でもいい」

またこのことをアルラウネに告げる。

「俺はな。どうするのだ」

「今は挨拶に來ただけよ」

これがアルラウネの返事だった。

「今はね」

「闘う気はないか」

「闘うのなら夜よ」

時間を指定してきた。

「夜。明日のね」

「明日か」

「場所は。そうね」

アルラウネは興味深い顔で牧村を見つつまた述べてきた。

「植物園でどうかしら」

「植物園か」

「そこで。どうかしら。この街のね」

「ならそこだな」

牧村はそれを聞いてもどうも思うことなく頷くだけだった。

「そこで。明日の夜だな」

「ええ。いいかしら」

「俺は何時でもいい。そして」

「そして？」

「何処でもいい」

こつ言っただけであった。



## 第八話 芳香その十四

「闘うのならな」

「そう。それじゃあ」

「御前の命は明日までだ」

顔を正面に戻しての言葉であった。

「それは覚えておけ」

「それは貴方だと思っけれど？」

「俺は敗れることはない」

「自信家ということかしら」

「事実を言っているだけだ」

信号が青になった。それを見てサイドカーのアクセルをかける。

アルラウネはもう見てはいなかった。

「これから起こる事実をな」

「面白いわね。人間の男も何度も見てきたけれど」

「それで何だ？」

「貴方みたいなのははじめてよ」

笑みを浮かべた言葉であった。

「そういうふうな態度の人間は」

「だからどうしたというのだ？」

「人間というのは面白いわね」

言葉の笑みはそのままであった。

「色々な性格があって」

「それは貴様等も同じだと思っが」

「確かにね。けれど」

「けれど？」

「貴方達はそれ以上よ。貴方が髑髏天使じゃなかったら色々お話し  
たいところね」

「俺から話すことはない」

アクセルがかかり前に進みつつの言葉だった。

「何もな」

「だったら。明日直接聞いてあげるわ」

「明日も同じだ」

また言う牧村だった。

「明日も。俺は何も言わない」

「喋るのは口だけかしら」

「鬨いから聞くつもりか」

「その通りよ。それじゃあ」

ここでアルラウネは姿を消した。

「明日。また会いましょう」

「ふん」

こうしてこの場での対面は終わった。牧村はそのまま自宅へと帰る。その夜。誰もいない路地裏において彼等は集まっていた。そしてそこで話をしていった。

光はない。光は遠くから街の灯りが見えるだけだ。その光のない場所で彼等は向かい合い話をしていた。老人が女に対して問うてきていた。

「アルラウネですね」

「そうよ」

女は静かな声で彼の問いに答えた。

「彼女になつたわ。行くのは」

「そうですね。それはまた」

「いいと思うけれど？」

老人が何か言いたそうだと見ての言葉だった。

「それとも何かあるのかしら」

「それはないです」

老人は穏やかな声で彼女に答えた。

「アルラウネでいいと思いますよ」

「そう。だったらいいけれど」

「それはそうと」

だがここで彼はまた言うのだった。いつもの温厚な笑みだがそこには独特の凄みも含まれているのがわかる。やはり人間のその笑みとは違っていた。

「一つ気になることがあります」

「気になること？」

「はい。先の戦いです」

彼が言うのはそれだった。

「あの。ナツクラ「ビー」との戦いですが」

「あの戦いがどうかしたというの？」

「ナツクラ「ビー」といえばかなりの実力者でしたね」

「ええ、そうよ」

女は老人の言葉を探りながらもそれを隠しつつ答えた。

「それは貴方も知っている筈よ」

「その通りです。少なくともです」

彼はそれを受けてさらに言う。

「最低でも大天使は退けられる程の」

「けれど倒された」

女が先に言ってきた。後ろの壁に背をもたれさせかけその腕を組みながら。

## 第八話 芳香その十五

「そう言いたいよね」

「正直に申し上げまして私も勝つと思っていました」

「ナツクラ＝ビーがなのね」

「倒せはせずとも退けると思っていました」

「こう言うのである。」

「しかも場所は地下でしたね」

「地下の駐車場よ」

他ならぬこの女が演出した戦いであるからこのことはよく知っていた。言うまでもないことであった。

「そこだったわ」

「つまり大天使の翼は有効には使えなかった」

「ところがそれを上手く使いこなして勝利を収めた」

「はい」

老人はここで頷いてみせた。

「実に見事な戦い方で」

「それは褒めていると受け取っていいのかしら」

「はい、あの髑髏天使を」

「包み隠さず言つてのけてみせた老人だった。」

「それは否定できないと思います」

「確かにね。あれはね」

そして女もそれは否定しないのだった。慚然とすらしていない。

「見事なものだったわ」

「どうやら今までの髑髏天使と比べて強いようですね」

「そうかしら」

「はい。大天使になったのも早かったですしね」

「そうね」

言われてそのことに気付いたような顔になる女だった。

「そういえばそうね。確かに」  
「ですからこれは尋常な相手ではないかと」  
「それでも。アルラウネよ」  
女はここでアルラウネに対する信頼を見せた。  
「あのアルラウネよ。そうは簡単にやられないわ」  
「左様ですか」  
「それよりもよ」  
女は話を少し強引に切ったうえで変えてきた。  
「問題はよ。私達のことだけれど」  
「私達ですか」  
「今日本にいるのは二人」  
こう老人に告げる。  
「残りの同胞達はまだ封印されたままなの？」  
「いえ、どうやら違うようですよ」  
老人は温厚な声で女に対して答えた。  
「それも」  
「誰か封印を解かれたのね」  
「アメリカです」  
老人が出した国はそれであった。  
「アメリカで。封印が一つ」  
「そう。彼ね」  
「はい、彼です」  
老人はそう答えるのだった。  
「彼が目覚めたようです」  
「彼が来てこれで三人ね」  
「あと九人ですが」  
「九人。全員この時代に封印から解かれるかしら」  
「そこまでは何とも」  
彼でもわからないのであった。  
「申し訳ありませんが」

「そう。わからないのね」

「思えばここに二人いるのです」

「私達が？」

「そう。長い封印が解かれて」

女に対して話す。

「ということは他の同胞達も」

「そうね」

女はこれで彼の言葉に頷いた。

「私達の封印が解かれているということだ」

「必然的に他の同胞達もまた」

「間も無く出て来るわね」

「今度の戦いは面白いものになります」

老人はここまで話して笑った。普段の温厚そうな笑みではなく凄みのある、悪魔めいた笑みだった。温和さはもう何処にも存在していなかった。

## 第八話 芳香その十六

「それも非常に」

「そうね。私達十二魔神が揃うならば」

「素晴らしいものになります。この時代の髑髏天使もまた強いようですし」

「強い相手でなければ面白くないわね」

「全くです」

二人の言葉は一致した。

「だからこそ。今度の闘いは」

「アルラウネに任せておいて問題はないわ」

「間違いなくですわね」

「私が嘘を言ったことがあるかしら」

女は妖艶な笑みを浮かべつつ老人に問うた。

「私の記憶にはありません」

「そういうことよ。だから」

「楽しいものになりますか」

「そうよ。ただ」

「ただ？」

「どうも動きがあったようよ」

「動きとは」

老人は今の女の言葉にその眉を少し動かした。

「何かありましたか？何処かで」

「あちらの世界でね」

「あちらというと」

「そうよ。冥界よ」

急にこの世界をはまた別の世界の話が出て来た。

「そこでね。動きがあったようなのよ」

「ほっ」

老人はそれを聞いてその目を少し動かした。ただ動かすだけではなくそこには深い読みもあった。

しかしその読みが何なのかは言葉には出さずに。また女に対して話すのであった。

「それはまた」

「何故なのかは聞かないのね」

「いづれわかりますから」

悠然と笑って述べる老人だった。

「ですから」

「言っておくけれど聞かないと言わないわよ」

「ならばいいです」

やはり聞かないのであった。こう言われても。

「私は無欲です」

「言っわね。けれどそれならね」

「はい」

「楽しみにしておくといいわ」

女も楽しそうに笑ってこう言うに止めるのであった。

「今はね」

「そうさせてもらいましょう。それではですね」

「何かあるの？まだ」

「いえ、ありません」

今度の言葉はこれまでよりも簡素なものであった。

「私からは」

「そう。それならもういいわね」

「そうですね。今宵はこれで」

「お別れね。それにしても今度の闘いは」

「これまでより面白くなりそうですね」

「それはね。わかるわ」

二人の笑みは期待であった。だがそれは陰惨な期待でありそれを隠そうともしないのであった。やはりそれは人間の笑みではなかつ



た。

「さて。私達も闘えればいいけれど」

「それもまた楽しみとしておきましょう」

「そうね。ではまた」

「御会いしましょう」

こう言い合つてそれぞれ闇の中へと溶け込む二人であつた。その次の夜牧村は街の植物園に向かつていた。植物園の門まで来ると当然ながらそこは閉じられていた。

「やはりな」

「待つていたわ」

門のところにアルラウネが出て来た。門の上に一人立っている。

「時間通りよ」

「時間は守る主義だ」

髑髏天使はその彼女を見上げて述べた。

「だからだ」

「そうなの。律儀なのね」

アルラウネは牧村の言葉を聞いて笑う。妖艶な、それでいて凄みのある笑みであつた。

「これから死ぬというのにそれでもだなんて」

「死ぬのは俺の予定には入っていない」

しかし髑髏天使も負けずにこう言葉を返す。

「だが別の予定は入っている」

「それは何かしら」

「貴様を倒すことだ」

アルラウネを見上げながらの言葉であつた。

「貴様をな。それは入っている」

「尊通りの自信家ね」

アルラウネはその言葉を聞いても表情を変えることなくこう述べるだけであつた。

「どうにもこうにも」

「自信ではない」

牧村はアルラウネに対して厳然と言い放った。

## 第八話 芳香その十七

「確信だ」

「見事ね。そうまで言ってもらったらこちらも面白いわ」

「面白いか」

「闘いは楽しむものよ」

実際に妖艶な笑みを崩してはいない。その笑みと言葉が一つになつているからこそ説得力のあるものがあるのであった。見事なまでに。

「だからこそよ」

「貴様は闘うのか」

「貴方は違うのね」

「俺は髑髏天使だ」

女に対する返答はまずはこれだった。

「貴様等を倒す。髑髏天使だ」

「そういうことね。それじゃあ」

女は跳んだ。後ろに跳びそのまま着地する。膝を折って衝撃を抑えることもしない。そのまま地面にすくつと立っている。その後ろには闇に覆われた植物園が不気味な姿を見せている。

「入って来られるわよね」

「ふんっ」

答えずに跳んだ。そのまま門を跳び越えアルラウネの前に着地してみせた。既にその筋力は人間のものを超えてしまっていた。

「この通りだ」

「わかったわ。それじゃあ」

「行く場所は何処だ？」

「面白い場所を見つけているのよ」

「面白い場所か」

「闘う場所には相応しい場所を」

目を細めながらの言葉だ。細めさせたその目が緑に闇の中で輝いている。

「見つけたから」

「ではそこに行こう」

反論はなかった。そのまま受け入れていた。

「そこにな」

「ええ。こつちよ」

アルラウネに案内されて植物園の中を進む。左右に様々な植物が生い茂っている。中には花も多く闇の中に赤や黄色、紫といった色を浮かび上がらせている。だがそれは決して己から光を放つことはなくただその姿を闇の中に浮かび上がらせているだけだ。光はない。しかしその中に色はある。二人はその中を進んでいく。

やがて二人が来たのはハウスの中だった。ガラス張りの中は熱帯の植物で満ちている。ハエトリソウもあればウツボカズラもありまた赤や白、黄色の毒々しいまでに鮮やかな花々が緑の中に咲き誇っている。アルラウネが彼を案内したのはそのハウスの中であった。

「ここか」

「そう。ここよ」

今まで前を歩いてきたアルラウネはここで牧村の方を振り向いて述べてきた。

「ここよ。いい場所でしょう」

「確かにな」

目だけで周りを見回しながらアルラウネに対して答える。

「昼に来れば実に面白かったな」

「夜には夜の楽しさがあるわ」

アルラウネは含み笑いと共に彼に述べた。

「それはそれでね。むしろ」

「貴様にとっては今の方がいいのだな」

「夜は魔物の世界」

アルラウネは言う。

「だからよ。この夜の中に咲き誇る花々こそが至上の美」

彼女の周りにその花々が咲き誇っている。青のものも紫のものも黒のものも。あらゆる色の花々が彼女を讃え崇めるようにして彼女の周りを飾っている。彼女はその中で両手を上に掲げ恍惚とした声で語るのである。

「この美しさこそが私の愛してやまないものだから」

「だからこそここで闘うというのだな」

「ええ」

恍惚とした声は続く。

「その通りよ。それでいいわね」

「構わない」

どうでもいいといったような牧村の言葉だった。頓着すらない。

「俺は何処でも魔物を倒す。それだけだからな」

「そうなの。貴方には美をわかる心はないのね」

「美か」

牧村はその言葉に眉をぴくりと動かした。

「それは俺にもある」

「では何故この美を否定するというの？」

夜の闇を堪能しつつ牧村に問う。

「この至上の美を」

「言った筈だ。俺は昼の世界にいる」

これが牧村のアルラウネに対する言葉だった。

「そこに俺の美はある」

「そうなの。今ではなくて」

「確かに闇には闇の美がある」

牧村もそれは否定しない。

「だが」

「だが？」

「俺が好むのは光。光の美だ」

言いながらそれまでポケットに入れていた両手を出す。それをゆ

じくじと身体の前で出っくへ。

## 第八話 芳香その十八

「人間の美だ」

「そういうことね。貴方の言葉はわかったわ」

アルラウネも彼の言葉を受けて構えに入った。

「言葉はね。意味は認めないけれど」

「認められるつもりはない」

牧村はまた言葉を返す。

「これから俺に倒される相手にはな」

「それじゃあ。やるのね」

「来い」

両手を拳にしそれを胸の前にやっていく。

「ここで貴様を……倒す」

「楽しませてもらうわ」

女の髪が緑に変わっていく。肌はより白くなり闇に浮かび上がる。ドレスはそのまま禍々しい形状の花びらを重ね合わせたようになり所々に緑の棘のある蔦が出て来た。顔はそのままにして異形の姿になったのだった。

「今からね」

牧村はその両拳を胸の前で打ち合わせた。するとそこから白い光が起こり全身を覆った。白い髑髏に白銀の鎧を着た天使、髑髏天使となったのであった。

「行くぞ」

右手を前に出し一旦指を開き握り締める。これが闘いの合図となった。

髑髏天使はすぐに右手に剣を出す。それでアルラウネを切るうと前に出た。

ところがそれに合わせるようにして彼女はその右手を前に出してきた。すると。

「むっ!？」

「貴方が剣なら私はこれよ」

前に出してきた右手の五本の指が薔薇の鳶になったのだ。それは一本一本が生き物の如く蠢きながら髑髏天使に対して迫ってきた。

まずは二本上から来た。髑髏天使はそれを剣で斬った。

「むんっ」

声が出る。気合の声だ。これでとりあえずの危機は脱したかと思われた。

しかし斬られたその鳶はさらに伸びそのまま髑髏天使を撃つ。鞭の様になったその鳶の衝撃と棘の痛みが鎧を通して彼を襲った。それは決して小さなダメージではなかった。

「まさか。斬った筈だ」

「斬っても無駄なのよ」

アルラウネは右手を突き出したままの姿勢で妖しい微笑を浮かべながら彼に言ってきた。

「それでは。私の鳶は防げないわよ」

「伸びるからか」

「そうよ」

それはもう今見せたものであった。

「その通りよ。そう簡単にはいかないということよ」

「ふん、伊達に悠然としているわけではないということか」

「貴方の剣のことは知っていたわ」

ここで右手を収めた。五本の鳶は指に戻り消えていく。斬られまるで魚の様に髑髏天使の下で跳ねていた鳶の切れ端もそのまま姿を消してしまっていた。

「もうね」

「だから今の鳶を使ったのか」

「そういうことよ。わかってもらえたようね」

「斬っても無駄ということか」

髑髏天使はここでこのことを悟った。



「つまりは」

「その通りよ。私に剣は効かないわ」

このことをはつきりと彼に言ってみせたのだった。

「決してね。つまり貴方では私に勝てない」

「それはどうかな」

「あら」

絶望の言葉が聞けると思っていたというのに髑髏天使がこう言ってきたので拍子抜けするアルラウネだった。やはり言葉にそれが出ている。

「ここで観念すると思っていたけれど」

「言った筈だ。俺は髑髏天使」

ここで背中に翼を出し左手にサーベルを持つ。大天使になりつつの言葉だった。

「決して敗れはしない。だからだ」

「つまり最後まで闘うということね」

「違うな。勝つということだ」

アルラウネを見据えながらの言葉であった。

「言葉は。訂正しておいた」

「感謝はしないわ。けれどそのつもりなら」

アルラウネは動きを止めた。そして。

不意に彼女の足元からあの鳶が出て来た。今度は五つどころではなく無数にあった。

「地面から!？」

「私はただ身体を鳶に変えられるのではないのよ」

身体のうちここに絡み付いている鳶達も動きだした。それ等の鳶は生き物そのものの動きで蠢きだし彼女の周りを踊る。彼女を中心として異形の舞いを見せていた。

「こうして。出すこともできるのよ」

「それで俺を倒すつもりか」

「そのつもりよ。さて、これはどうするのかしら」

「むう……」

「できないわよね」

また笑みを浮かべながらの言葉であった。

「私は。心臓さえ貫かなければ死なないのだし」

「心臓をか」

「言っておくけれど魔物とて不死身ではないのよ」

勝利を確信している余裕からか自分から話すアルラウネであった。

## 第八話 芳香その十九

「魔神の方々を除いてね」

「十二魔神か」

「そうよ。あの方々は別」

「このことも言うのであった。」

「死ぬことはないのよ。封印はされても」

「そうか。封印か」

「今日日本におられるのは御二人」

言葉を続けてくる。

「その方々には会ったのね」

「そうだ。既にな」

髑髏天使もそれは否定しない。アルラウネの周りで異形の舞いを舞い続けるその無数の緑の鳶達とそれを操る彼女を見据えながら。

「会っている」

「言っておくけれどあの方々は神よ」

「それは今も聞いたが」

「それよ。その神に貴方は勝てはしない」

こう彼に言葉を続ける。

「決して。それにここで私に敗れるのだから」

「さつきも言った筈だ。俺は敗れはしない」

その無数の斬つても生える鳶を見つつの言葉だった。

「例え何があるうとも」

「これ以上。何を言っても無駄なようね」

「降伏はない筈だな」

髑髏天使は言葉を強くさせたアルラウネに対して返した。

「そうだったな。我々の闘いは」

「その通りよ。それなら」

「来い」

劣勢にありながらも相手を挑発してみせた。表情を変えずに。

「今ここで。倒してやる」

「それは私の言葉だけれど」

アルラウネの態度には余裕が増してきていた。勝利を感じているのがそれだけでもわかる。その為にも出ているのである。

「まあいいわ。それじゃあ」

「むっ!？」

ここでアルラウネは姿を消したのだった。赤い花煙と共に。

「消えたか」

「これは予想していなかったようね」

アルラウネの声だけが聞こえてくる。暗いガラスの温室の中で。

「私が消えたのは。そうね」

「確かに」

冷静な声でそれを認める髑髏天使だった。両手の剣は構えたまま  
で周囲に気をやっている。

「まさか。こう来るとはな」

「さあ。どうするのかしら」

アルラウネの楽しそうな声だけが響く。

「貴方からは私は見えない。けれど私からは貴方はよく見えるわ」

「俺が」

「ええ。それもよくな」

笑っていた。その声が。

あの棘の鳶達は何時しか髑髏天使を囲むようにして地面から出て  
いてやはり蠢いている。闇の中で舞を続けているのであった。

「見えるわよ。さあ」

また声がする。

「倒してあげるわ。今ここでね」

花煙の強い芳香は何時しか消え髑髏天使は闇の中で蠢く鳶の中に  
身を置いていた。動きはしない。しかしそこで相手の気配をじっと  
探るのであった。

アルラウネもまた姿を現わさない。どうやら彼の出方を見守っているらしい。そしてそれと共にその隙を窺っている。温室の中を緊張した空気が支配する。

髑髏天使は前を向きながらもその注意は四方八方に及ばせていた。何時アルラウネが襲って来てもいいように。しかし気配は感じない。そのまま時間だけが過ぎていく。

それが永遠に続きそうになったその時だった。不意に彼の周りがあるものが包んできた。

「!?!」

そしてそれを感じた時に彼は思い出した。先日家族で鍋を食べていた時と博士の言葉を。この二つの話を咄嗟に思い出したのであった。

それを感じた瞬間にはもう動いていた。右手の剣を後ろに刺す。するとそこには。

「うぐっ……」

アルラウネがいた。丁度今後ろから髑髏天使を襲おうとしていたのだ。しかしその直前に彼女は。その心臓を今出された剣で貫かれてしまったのだった。

「何故……」

「確かに姿は消えた」

髑髏天使は唯一の弱点である心臓を貫かれ断末魔の顔になっているアルラウネは見ずに正面を見据えたままで彼女に対して語る。

「それは確かだ」

「なのにごうして」

「貴様は目だけを考え過ぎた」

「目を!?!」

「耳についても注意は払っていたようだがな」

「このことも言い加えはした」

## 第八話 芳香その二十

「だがな」

「だがな。まだ何かが」

「そうだ。鼻だ」

彼は言った。

「貴様の香りは強い。それを感じたのだ」

「それで今剣を」

「その通りだ。あともう少しそれを感じるのが遅ければ俺は敗れていた」

こう述べながら剣を抜く。剣には緑の血が柄の近くまで達していた。

「だが。その香りを感じたその瞬間に」

「剣を出し」

「俺は勝利を収めた。そういうことだ」

言いながら身体を後ろに向ける。アルラウネは立ったまままで今事切れようとしていた。既にその身体のおちこちから赤い炎が起こつていく。

「それによりな」

「くっ、私が花であることが仇になったということね」

「あらゆることが仇になる」

静かにこう返した。

「この世にあるものはな」

「そうね。私のこの香りさえも」

「そういうことだ。わかったな」

「わかるしかないわね」

無念さをあえて虚勢で隠しつつ笑ってみせての言葉であった。

「実際に今やられたのだから」

「そうか」

「見事よ」

今度は純粹に彼を褒める言葉を口にしてきた。

「私を倒すなんて。どうやら貴方は本物ね」

「本物。俺がか」

「ええ。髑髏天使」

今の彼の名も呼ぶ。

「これまでの髑髏天使の中でもかなりのものね」

「だからこそ貴様を倒せたというのだな」

「その通りよ。けれど」

アルラウネはここでまた言うのであった。

「一つ。覚えておくといいわ」

「むっ!?!」

「確かに私は倒せたわ」

緑の血を口から出しながらの言葉であった。

「けれど。あの方々はそうはいかないわよ」

「十二魔神か」

「ええ。あの方々は」

彼等についての言葉であった。

「そうはいかないから。それはわかっておくことね」

「こつはいかないというのだな」

「そうよ。少なくとも大天使ではね」

彼の今の階級である。

「勝てはしないわ。絶対にね」

「そうか」

「けれど」

しかしここでアルラウネは言葉を変えてきた。次第にその身体を紅蓮の炎に包ませながら。それでも彼に対して言うのであった。

「私を倒したのは褒めてあげるわ。この私をね」

「それは受け取っておく」

静かな調子でその言葉を受けるのだった。

「今こうしてな」

「御礼は言っておくわ」

身体を包む炎がさらに強くなってきた。

「最後にね」

そしてその紅蓮の炎に包まれていった。アルラウネの形になり紅蓮の炎が燃え上がる。その中で消えた魔物を見送りつつ彼は戦場から姿を消すのであった。

闘いを終えた彼はそのまま帰路につく。しかしその前に。

あの老人がいた。彼はにこやかな笑みを浮かべて彼の前にいるのだった。

「また貴様か」

「お見事でしたよ」

彼はこう牧村に対して言うのであった。既に髑髏天使から戻っている。

「今先程の闘いぶりは」

「見ていたのか」

「見えていました」

「こう言うのである。」

「我々には」

「神ならば当然ということか」

「そうよ」

ここでもう一人出て来た。それはやはりあの女だった。



第八話 芳香その二十一

「その通りよ。私達はそれぞれ千里眼を持っているから」

「それもまた神の力というわけか」

「ええ。わかっているのね」

「神であるというのを聞けばな」

サイドカーの側に立ち冷静な言葉で二柱の神々に対し告げるのだ  
った。

「それも領ける」

「左様ですか」

「それはまた随分と物分りがいいわね」

「しかしだ」

「だがここで彼は言うのだった。」

「こちらとしては一つ聞きたいことがある」

「何でしょうか」

「俺と闘うつもりはないのか」

鋭い目での言葉であった。

「この俺と。それはないのか」

「今のところは」

「ないわ」

二人は静かに彼の言葉に答えた。

「それはありません」

「安心していいわよ」

「今なら俺を確実に倒せる」

牧村が今度言うのはこのことだった。

「間違いないな。大天使でしかない俺は」

「我々は神です」

「だからよ」

牧村の今の言葉に応える形での今の二人の言葉だった。

「魔物はそれ相応の相手と闘うものです」  
「私達もそう」

自分達もだというのだった。

「この十二魔神はね」

「そういうことです」

「だからか」

牧村は二人の言葉を聞いてまずは納得するのだった。

「そういうことか」

「はい、そうです」

「だから今は」

「それはわかった」

とりあえずは彼等の言葉に納得するのだった。

「だから今は俺と闘わないのか」

「貴方はさらに強くなります」

「今よりも」

「大天使よりさらにか」

「その通りです」

老人が言うのはそういうことだった。そしてそれは女に関しても同じであった。

「まずは今より上にあがられることです」

「待っているわ」

「その時をか」

「楽しみにしていますので」

「その時をね」

こう述べて笑う二人であった。

「さて、それでは」

「また会うけれど闘うのはまだ先ね」

「先か。しかし」

牧村は二人を見据えてさらに問うてきた。

「貴様等は一体」

「我々が!？」

「どうしたのかしら」

「魔神であるのはわかった」

「まず言うのはそれであった。」

「しかしだ」

「しかし!？」

「神の思い通りになるものばかりではない」

「このことを彼等に告げた。」

「それは覚えておくことだな」

「わかりました。では覚えておきましょう」

「老人はいつもの温和な笑みで答えはした。」

「ですが力は違うのは確かですよ」

「そのことは貴方が覚えておくことね」

「なら近付いてみせる」

側にサイドカーが来た。それに乗る。ヘルメットを被りつつ最後

に彼等に対して言うのだった。

「貴様等にな」

「楽しみにしているわ」

女の言葉が最後になった。そうして今は彼等は別れた。また会うのはわかっていた。だが今は別れ次の闘いに備えるのであった。

## 第八話 完

## 第九話 氷神その一

第九話 氷神

空港において二人はいた。人が行き交う中で二人並びそこで人を見ていた。

空港の中は白く窓の多い場所だった。窓からは滑走路が見えそこには多くの航空機が止まっている。大型のものが多くそれがこの空港の規模の大きさを知らしめていた。

「この空港に来るのははじめてよ」

「そうでしたか」

「日本で使った空港は成田だったかしら」

女はこう横にいる老人に話すのだった。話しながら目だけで周囲を見回していた。見回しながらまた老人と言葉を交えさせるのだった。

「あそこよりは小さいわね」

「しかしいい空港ではないですか」

老人は前を見たまま女に述べた。

「この関西新空港も」

「国際空港だったわね」

「ええ」

女の言葉に頷いた。

「そうですね。ですから外国の方も多いですね」

「そうですね。ただ」

「ただ？」

「今日来るのよね」

声が怪訝なものになっていた。

「今日。この時間に」

「その通りですが」

「その割には姿が見えないけれど」

声にある怪訝なものがさらに増すのであった。

「どういうわけかしら」

「ですが気配は感じますよね」

老人は前を見たまま女に対してまた述べた。

「あの方の気配は」

「まあね」

それは感じているのだった。女にしても。

「けれど。姿が見えないのは」

「以前より悪戯好きな方でしたが」

「それでも。迎えに来ているのに姿を見せないのはどうかと思うわ」

「まあそう怒らないで今は待ちましょう」

苛立ちを見せている女に対して老人は穏やかな顔のままであった。

その顔と顔と同じものになっている声で彼女に対して続ける。

「ゆっくりと」

「じゃあ場所を変えない？」

女は老人に顔を向けて言ってきた。

「場所を。どうかしら」

「そうですね。ここにおられるのは間違いないですし」

「喫茶店にでも行きましょう」

「こう老人に提案したのだった。

「そこで待っていれば来ると思うわ」

「そうですね。それでは」

老人も彼女のその言葉に頷いた。

「そこで待ちましょう。ゆっくりと」

「そうしましょう。それじゃあ」

「はい」

老人も頷き踵を返す。二人で何処かに行こうとする。しかしその踵を返したそこに。その彼が立っていたのであった。

「あら」

女は彼の顔を見て声をあげた。その彼は赤い肌に精悍な顔立ちと

白いたてがみを思わせる長い髪と眉を持っている。青いジーンズに白いシャツ、黒い皮のジャケットという格好だ。背は高く筋肉質の身体をしている。その顔を見ると彼が日本人とはまた違うことがある。

「そこにいたのね」

「今来た」

男はこう女の声に言葉を返した。

「今な」

「気配は感じていたけれど」

少し咎める声で男に述べた。

「それでそんなことを言うのね」

「ここに来たのは今だ」

これが彼の返答であった。

「今な」

「面白いことを言うわね。まあいいわ」

「そうですね。貴方が来られたのは間違いないですし」

老人は咎めることなく彼に告げた。

「素直に喜ぶべきです」

「そうか。ならいい」

「私もそれで納得しておくわ」

女もここでこう言うのだった。

「やっとこれで三人だからね」

「アメリカの何処におられたのですか？」

「オレゴンだ」

男は老人の言葉に述べた。

## 第九話 氷神その二

「そこで今まで眠っていた」

「ですが遂に封印が解けて」

「ここに来れたというわけね」

「そういうことだ」

そして二人の言葉に頷くのだった。

「やっとな。しかしだ」

「しかし？」

「どうしたのかしら」

「まだ空港にいるだけだが」

辺りを見回しながら二人に対して述べる。

「面白そうな国だな」

「はい、それはその通りです」

「人間の世界の中でもとびきり楽しい国よ、ここは」

二人は実際に楽しそうに微笑んで彼の言葉に答えるのだった。

「すぐに御気に召される筈です」

「一旦棲めば離れられなくなるわ」

「あいつもいるからか」

二人の説明を聞きつつ目も鋭くさせるのだった。

「そうだな」

「はい、その通りです」

「彼もいるしね」

「今度のあいつは」

男は硬い声で述べた。岩石を思わせる、硬くそれと共に重い声であった。その声で今向かい合っている二人に対して述べるのであった。

「どついう奴だ」

「一言で言えばですね」

「ああ」

老人のその言葉を聞く。

「クールな方です」

「クールか」

「はい。といたしますか」

「あまり感情を表に出さないわね」

女はこう牧村、つまり『今の』髑髏天使について述べた。

「どうもそういうことは苦手みたいなのよ」

「そうか。そういう人間か」

「はい、そうです」

「それは言っておくわ」

「わかった。では早速だ」

男は一步踏み出した。

「その今のあいつに会ってみよう。楽しみだ」

「左様ですか。それでは」

「私達も行くわ」

男が足を踏み出すと二人もそれに続いた。そうして空港を後にし

て何処かへと向かうのであった。

牧村はまた博士の研究所にいた。そこで妖怪達の戯れを周りに見ながら机に座り博士と向かい合って話をする。もういつもの光景になつてしまつてゐる姿だつた。

話しているのは先のアルラウネとの闘いと。そして彼等のことだつた。

「まずあの老人はじゃ」

「ああ」

博士の説明を聞いていた。博士はまた机に何かしらの古ぼけた、羊皮紙と思われる紙に手書きでこれまた何処の言語かわからない言葉で書かれている書を開いていた。端のあちこちが破れ破損しているがそれでも字は読めているのかそのまま開いている。その書を開いたままで牧村と話しているのだ。



「あれは日本の魔神じゃ」

「日本のか」

「魔物にもそれぞれ出身があつてな」

「そういえば」

牧村はここで妖怪達についてあることに気付いた。それは。

「妖怪であつても日本のものとは思われないものもいたな」

「そういうことじゃ。妖怪も移動するのじゃよ」

「そうか」

「もつとはつきり言えば髑髏天使を倒す為に集まる」

「俺をか」

「その通り。何度も言うが髑髏天使は五十年に一度姿を現わす」

確かに彼が何度も聞いている話である。

「そして魔物を倒すな」

「そうだな。それはもう知っているが」

「そして魔物もまた髑髏天使のその力を得ようとする」

「だから集まるのだな」

「そういうことじゃ。髑髏天使と魔物は互いに闘い合う運命」

こう牧村に話す。

「だからじゃよ。世界中から来るのじゃよ」

「そういうことなんだな」

「左様。それでじゃ」

博士はここまで話したうえで話を戻してきた。

### 第九話 氷神その三

「この老人じゃが」

「日本の魔神だな」

「おそらくその正体は百目じゃ」

「百目!？」

百目と聞いて声をあげる牧村だった。

「それは何だ」

「身体中に目があつてな」

「目がか」

「実際にどれだけ目があるかわからんが」

こつも断る博士であつた。

「とにかくじゃ。身体中に目があつてじゃ」

「ああ」

「それで何でも見渡せる。そういう奴なのじゃよ」

「それが日本の魔神か」

「そうじゃ。それがあの老人の正体じゃよ」

「わかつてはいたが」

牧村は博士の話を聞きながら呟いた。

「あの姿はやはり。偽だったか」

「人間の姿は仮初めじゃ」

博士はこつも話した。

「他の魔物と同じくな」

「そうか。ではあの温和な笑顔もまた」

「左様。偽りのものじゃからな」

「わかつた」

牧村は今の博士の言葉に真剣な顔で頷いてみせた。

「そうだな。それには騙されはしない」

「そうあるべきじゃ。そして次はじゃ」

「あの女のことか」

話の流れで彼女のことになるのは読んでいた。だからこう問い返したのであった。

「そうだな。あの女のことだな」

「その通りじゃ。無論あの女も人ではない」

「あの姿は仮初めか」

「その通りじゃ。あれの正体は狐じゃ」

「狐!？」

「話には聞いたことがあると思うがな」

博士は一旦言葉を止めてから述べた。

「九尾の狐じゃが」

「あれか」

「やはり知っておるようじゃな」

牧村が気付いたような顔と言葉を出したので博士もわかったのだ。つた。

「その通りあの中国のな」

「今日本で殺生石になっているのではないのか？」

彼が知っている九尾の狐はそれであった。殷を滅ぼしインドを混乱に落としいれ周を惑わしそして遂には日本に來たあの狐だ。様々な名で呼ばれてきているが本朝においては玉藻前という名で鳥羽法皇の側に仕え法皇の命を吸い取っていたと言われている。その狐である。

「確か。あの狐は」

「狐といつても様々じゃてな」

だが博士は牧村にこう答えるのだった。

「中国では狐には様々な階級があつてのう」

「階級か」

「それと共に魔力もあがるのじゃよ」

こう彼に話すのであった。

「魔力もな。千年生き魔道を極めた狐は」

「その狐は」

「尻尾が九本になる。それが九尾の狐なのじゃよ」

「それがあの女の正体か」

「さつき君が言った日本に来た奴じゃが」

「あいつか」

その玉藻前である。言うまでもなくその魔力は恐ろしいものがあった。何しろ国を滅ぼし惑わす程である。恐ろしいものがないわけがなかった。

「あれは神にまでは達しておらんかった」

「神にはか」

「じゃがあの女は違う」

「魔神だからか」

「そういうことじゃ。どれだけ生きておるかもわからん」

こう牧村に話すのであった。

「それこそな。何万年かな」

「それだけ魔力を極めているというわけだな」

「大体他の魔神連中も同じじゃが」

他の魔神達についても話した。

「何万年も生きてそれだけ魔力を蓄えてきておる」

「あの女もそうだというのか」

「そういうことじゃ。九尾の狐達の長じゃった」

「というところの石になった奴よりもか」

「その魔力は比較にならんよ」

やはりこう述べる博士であった。

## 第九話 氷神その四

「到底な。じゃから注意しておくのじゃ」

「少なくとも今の俺では相手はできないか」

「その前に向こうも相手にはしておらんと思うが」

「確かにな」

今の博士の言葉には牧村も真剣な顔で頷くだけだった。

「配下の魔物を向けて来るだけで直接は何もしては来ぬい」

「少なくとも大天使には何もしては来ぬな」

「大天使ではか」

「前にも言ったが天使には九つの階級がある」

またこの話になった。

「大天使は二番目じゃな」

「下からだな」

「まあその言い方は少しあれじゃが」

今の牧村の身も蓋もない率直どころではない言葉には苦笑いするしかなかったがそれでもその通りだった。しかし博士はそれでも言葉が続けた。

「それでもじゃな。まだまだ上がある」

「そうだな」

「大天使は翼が生えた」

それが大天使の力の最も大きな特徴である。

「しかしそれ以上はまだな」

「わかっていないか」

「うむ。今調べている途中じゃ」

こう牧村に述べたのであった。

「まだな。少し待っていてくれ」

「わかった。では待たせてもらう」

「今また天使の本を読んでおる」

言いながら今開いているその本を見るのであった。

「これをな」

「そこにまた書いてあるのか」

「色々とな。しかしそれでもまだよくわからん」

書にある文字を見つつ難しい顔をする博士であった。

「どうにもな。よくはのう」

「それは何語だ？」

「アイルランド語じゃ」

「アイルランド語か」

「十一世紀の書じゃな」

また随分と古い時代の本なのがわかる。

「その時代の書じゃよ」

「十一世紀か」

「その頃はまだイングランドに征服されておらんかったからな。こ  
うしたアイルランド語の本もちゃんと存在しておるのじゃよ。ラテ  
ン語でもないものがのう」

「ゲール語だったな」

牧村はアイルランド語の正式名称を口にしてきた。

「確か。そうだったな」

「左様。その名前も知っておったか」

「名前だけだがな。しかしアイルランドか」

「うむ」

「あのナツクラ＝ビーは確か」

先に闘ったあの魔物のことをここで思い出しつつ述べた。

「妖精に入っていたな」

「そうじゃな。あれはスコットランドか何処かの妖精じゃった」

博士も彼の今の言葉に答える。その間もずっとそのゲール語の書  
を読んでいる。その文字の筆記もかなり独特だがそれでも読んでい  
た。

「近いといえは近いのう。アイルランドに」

「そうだな。しかし」

彼はまた言うのだった。

「その本に書かれているのはまた別だな」

「天使のことじゃからな」

博士はここでまたその書を見た。

「ふむ。大天使じゃが」

「今の俺か」

「その翼は二つじゃが」

「翼か」

「やがて増えるとも書かれておるな」

「翼がが」

己の翼が増えると聞いて声をあげる牧村であった。

「大天使の翼が増えるのか」

「はつきりとしたことがわからんがな。このまま階級を登っていけ

ばじゃ

「そうなるのか」

「そのようじゃな。その結果どうなるかはわからんが」

「それはすぐか？」

「それはわからん」

これについては首を横に振った博士だった。

## 第九話 氷神その五

「そこまではな、しかし増えるようじゃ」

「増えるのは間違いないか」

「どうやらな。しかしこの本に書いてあるのは天使についてだけじゃ」

「それだけか」

「魔神については全く書かれておらんな」

困った顔をして述べる博士であった。

「今のところわかっているのはあの二柱だけじゃ」

「その百目と九尾の狐だけか」

「そのな。二柱だけじゃ」

あらためて言う博士だった。

「じゃが。どうやらその中で百目はじゃ」

「あの老人がか」

「魔神の中心人物のようじゃな」

語る博士の目が鋭いものになった。

「どうやらな」

「そうなのか」

「十二魔神といってもやはりそれぞれの役割がある」

博士は言う。

「その中でな。百目は最長老でもあるようじゃしな」

「だからまとめ役なのか」

「そのようじゃ。従ってその魔力も」

「相当なものだな」

「それは君が一番わかっていると思うがのう」

今度は牧村を見る。その鋭くなっている目をだ。

「違うかのう」

「いや、多分そうだ」



そして牧村もこう返すのだった。

「それについては。やはり俺が」

「そうじゃな。わしは百目とは会っていない。だからわからん」  
「会ってみればわかる」

牧村はあえて静かな、落ち着いた声で述べた。

「その魔力がどれだけのものかな」

「そうか。それだけのものがあるのじゃな」

「俺も。今は勝てない」

自分でもそれを認めた。

「今はな。間違はなく敗れる」

「それがわかっておるのなら今はじゃ」

「そうだな。向かうことはできない」

「とりあえず今は目の前の魔物を倒すことじゃ」

博士としてもこう言うしかなかった。その魔神を倒せないのならば。やはりこう述べるしかなかったのであった。倒せないのならば。

「よいな。それで」

「わかっている。それにしても」

頷いたうえでまた述べる牧村だった。ただし話題は変えている。

「十二魔神だったな」

「そうじゃ」

牧村のその言葉に頷いてみせた。

「十二柱じゃよ」

「あと十柱いるのか」

牧村は呟くようにして述べた。

「ああした存在が」

「今はまだ二柱じゃ」

「しかしこれからはおそらく」

「出て来るぞ」

ここでも牧村の目を見ていた。

「後の神々もな」

「この日本に集まるのか」

「君がいる場所にじゃ」

それこそが日本なのだが博士は彼が髑髏天使であることを指し示す言葉として述べたのであった。彼が髑髏天使であることが全ての発端だからだ。

「必ず来る」

「何時か倒すか」

「まだ先になるがな」

「それは心に定めておく」

そして静かに頷く牧村だった。

「それはな。それではだ」

「講義か」

「ああ。それが終わったらまた来る」

立ち上がりながら博士に述べた。

「またな」

「ああ、牧村さん」

「ちよつと待ってよ」

しかしその彼を妖怪達が呼び止めたのだった。相変わらず彼等は陽気に楽しくやっている。悩みなぞ何もないようにさえ見える姿であった。

## 第九話 氷神その六

「贈り物があるんだけれどさ」

「そうそう」

「贈り物!？」

贈り物と聞いてその妖怪達に顔を向ける牧村だった。

「あんた達がか」

「そうだよ。はい、これ」

「よかつたら食べて」

こう言っ出て出してきたのは羊羹だった。栗羊羹である。

「山月堂の羊羹」

「よかつたら食べてよ」

「山月堂か」

この八条町で有名な和菓子屋である。味だけでなく店員のマナーも非常にいい和菓子の名門として知られている店である。当然彼もその名は知っている。

「そのか」

「甘いもの好きだったよね」

「だからさ」

妖怪達は言うのだった。

「食べてよ、よかつたら」

「遠慮せずね」

「済まないな」

妖怪達はその気遣いに対して礼を述べる牧村だった。そのうえでその手を栗羊羹に向ける。そうして羊羹の置かれた皿にあった爪楊枝で刺し口の中に入れるのだった。

甘いだけではなかった。静かな気品がそこにはあった。一流の腕の持ち主だけが出すことのできる、気品のある羊羹の味がそこにあるのだった。

それを食べた彼は。羊羹を噛みつつ妖怪達に顔を向けて言った。  
「美味しいな」

「そうでしょ？やっぱり和菓子はここの羊羹だよ」

「ケーキもそうだしね」

「そういえばあそこはケーキもやっていたな」

牧村もそのことを思い出した。

「確かあそこの息子さんも八条大学か」

「だから後をつけて行ってね」

「それで人間に化けて買ったんだよ」

「場所は知らなかったのか」

「今まではわしが買っておったのじゃよ」

博士もその羊羹を一口食べつつ牧村に述べた。どうやらこの博士は酒だけではなく甘いものもいけるらしい。所謂両刀使いというやつである。

「わしがな。わしも好きでの中」

「そうだったのか」

「しかしじゃ。この連中はそれ以上に好きでじゃ」

「だからどうしても我慢できなくてね」

「好きな時に好きなものを好きなだけ食べたいじゃない」

実に率直な言葉であった。

「だからだったんだ」

「買いに行ったんだよ」

「それでか」

ここまで聞いて納得する牧村だった。

「それでこの栗羊羹をだったのか」

「その通り。やっぱり美味しいよ」

「病み付きになるね」

見れば彼等は羊羹だけを食べているわけではなかった。他の様々な和菓子も食べている。その顔が実に楽しそうなものである。

「お菓子もいいよね」

「ケーキも好きだけれど」

「何でも食べるんだな」

ケーキも話に出て思った言葉だった。

「本当にな」

「僕達嫌いなものないし」

「胡瓜が一番だけれど」

今は河童の言葉である。

「だから何でもいけるよ」

「和菓子でもケーキでもね」

「ケーキか。そういえば」

ここでふとあることを思い出した牧村だった。

「未久がスタープラチナのケーキがいいと言っていたな」

「ああ、そのケーキもじゃよ」

博士はスタープラチナと聞いてすぐに突っ込みを入れてきた。

「そのケーキの仕入先は山月堂じゃよ」

「そうだったのか」

「世界は案外狭いものでな」

また笑って牧村に話してきたのであった。

「案外近くにあったりするものなんじゃよ」

「何でもか」

「そう、何でもな」

笑いながらページをめくっていた。

## 第九話 氷神その七

「この本にしる案外近くにあつたんじゃよ」  
「近く!？」

近くと聞いて目を動かさせた牧村だった。

「近くにあつたのか、それだけの本が」

「うむ、日本にあつた」

「日本に!？」

それを聞いても顔を顰めさせるしかない牧村だった。

「十一世紀のアイルランドの本が日本にか」

「不思議か」

「普通はないだろう」

これは彼の主観ではなく誰もがこう考えることであつた。何しろそれだけ過去の本になるとアイルランドですら滅多にあるものではなくしかも日本にあるなどとは誰も夢にも思わないからだ。彼が今こう考えたのも無理もないこと、いや当然のことであつたのである。

「日本には」

「ところがそれがあつたのじゃよ」

「何故だ？」

「イギリス人が持って来たのじゃよ」

「イギリス人がか」

「名前はウィリアム・アダムスという」

「三浦安針か」

それが誰のことなのか牧村はすぐにわかつた。江戸時代初期に日本にやって来て徳川家康に仕えたイギリス人である。その名は東京に地名として残っている。

「あの男が持って来たのか」

「そういうことじゃ。それを徳川家康に献上してのう」

「この本をだな」

「うむ。それが幕末の混乱で徳川家から八条家に移り」

八条学園の理事でもあるその家だ。八条家は代々公家の名門であり明治維新でも討幕派を支援し維新後では公爵になっている。そうした名門なのだ。

「それでこの大学の図書館にあったのじゃよ」

「また随分と数奇な話だな」

「まあ手に入れたのも運命じゃ」

今度はこう話す博士だった。

「思えば君もそうじゃいな」

「髑髏天使か」

「その通りじゃ。五十年に一度世界に現われる髑髏天使」  
最早言うまでもない。彼の今闘う理由である。

「それになったのもな。本当に数奇なことじゃて」

「そうだな。だがそれはいい」

「よいのか」

「受け入れると決めている」

これが彼の結論であった。既に決めている。

「だからだ。それはいい」

「その達観ならばこの本の数奇さも受け入れられるな」

「そうだな。俺と同じか」

ここで不思議な親近感を覚えその本を見るのだった。本は何も語りはしない。だが古ぼけたその姿を今牧村にも見せているのである。

「この本もまた」

「うむ。数奇な運命はよくあることじゃ」

博士はまた言う。

「しかしじゃ。問題は」

「それを受け入れどうするかだな」

「そういうことじゃ。わかっていれば話が早い」

博士の顔がここでまた綻んだ。

「生き残るようにな。最後までな」

「わかった。ではな」

ここまで話して踵を返し部屋を出ようとする。だが扉へ着くその途中で振り向きことう博士と妖怪達に対して告げるのであった。

「羊羹、有り難うな」

「どういたしまして」

「それじゃあね」

妖怪達の明るい返事が返る。彼はそれを受けた後で講義に向かう。その途中の校舎の廊下を一人歩いている。校舎は白くコンクリートの壁とビニールの廊下で造られている。彼はその校舎の中を進んでいたがその前から。大柄な一人の男がゆっくりとやって来たのであった。

見れば赤い顔をしておりしかも彫がある。だがその顔立ちはアジア系のものであった。ジーンズにシャツがその逞しい身体によく似合っている。牧村はその男からすぐに得体の知れぬ、しかも圧倒的なまでの凄まじい気を感じ取ったのだった。一言で言うと妖気をである。

「まさか。こいつは」

「貴様か」

男は牧村の前に来た。そうして不敵な笑みを口に浮かべて彼に声をかけてきた。

「今の時代の髑髏天使は」

「貴様は一体」

「神だ」

その不敵な笑みをそのままに牧村に返してきたのだった。

「俺は。神だ」

「神か。ならば三人目だな」

「そうだ。我が名はウェンティゴ」

自ら名乗ったのであった。



## 第九話 氷神その八

「覚えておくことだ」

「ウエンティゴか」

「これから楽しませてもらう」

また彼に言うのだった。

「久し振りにこの世に出て来たのだしな」

「久し振りか」

「どれだけ経ったかは忘れた」

時間の概念の違いが彼が人でないことを教えていた。そのことをあえて言うのも神としての余裕であろうか。

「しかしだ。出て来たからにはだ」

「どうするつもりだ？」

「楽しませてもらう」

不敵な笑みがさらに強まりそのうえで彼に言った。

「思う存分な」

「闘いをか」

「そうだ。見たところ貴様はまだ大天使か」

「わかるのか」

「聞いてもいる」

聞いても、と言ってきたのであった。

「それもな」

「あの二人からか」

「ほう、すぐに答えが出て来たな」

「こちらもわかってる」

牧村はウエンティゴを見据えて言い返した。彼が魔神の一人であっても臆するところはなかった。むしろ睨み返さんばかりの勢いを静かなその中に秘めていたのだった。

「貴様等のことはな。十二魔神だな」

「そうだ」

ウエンティゴはその問いに答えてみせた。

「それが我等だ」

「今は三人というわけか」

「安心しろ。それでは終わらん」

ウエンティゴの不敵な言葉は続く。

「あと九人いる。同胞達はな」

「それが全て俺に倒されるというわけだ」

「面白い。自信があるというのだな」

「俺は髑髏天使」

臆したところなぞ微塵もない言葉であった。

「貴様等を倒す者だからだ。それも当然だ」

「一つ言っておく」

ウエンティゴは牧村の今の髑髏天使としての言葉を受けても感情を変えない。しかしここであえてといった感じで彼に言ってきたのであった。

「我等は神だ」

「それはわかっているが」

「神は死ぬことがない」

彼が言うのはこのことであった。

「だからだ。倒れることはない」

こう告げたらうでさらに言葉を続けてきた。

「封印されはするがな」

「なら封印してみせよう」

牧村はそれならば、といった感じでまた答えてきた。

「貴様等をな。全てな」

「面白い。久し振りにこの世に出て来たかいがある」

目まで笑っていた。心から笑っているのがわかる。だがそれは人の、また魔物の笑いでもなかった。絶対なる存在の、神としての、その笑いで牧村に応えているのであった。

「今の髑髏天使は実に面白い相手だ」

「面白いか」

「最高と言っておこう」

その神の目で見つつ牧村に述べた。

「今度の髑髏天使はな」

「最高か。違うな」

「ほう」

牧村の今度の言葉にも楽しそうに左眉を上げてきた。

「俺は最高ではない」

「では何だというのだ？」

「最強だ」

こう断言する牧村だった。

「今までの髑髏天使の中でな。勘違いするな」

「わかった。では最強の髑髏天使よ」

彼もそれを受けて言葉を変えてきた。

## 第九話 氷神その九

「面白い催しを用意してきた」

「魔物か」

「そうだ。場所はこの学校……というのか  
ウエンティゴは目だけで周りを見ながら述べた。

「ここにな。魔物を一人召喚しておいた」

「そうか。ここにだな」

「すぐにそちらにやって来る」

また牧村に目を向けてきた。

「貴様のところにな。楽しみにしておけ」

「楽しみか」

「そうだ。貴様は確かにいい髑髏天使だ」

楽しんでる言葉が続く。

「このままいけば。やがては」

「やがて？」

「いや、今は言わないでおこう」

言おうとしたところで言葉を止めてみせてきたウエンティゴであった。ここでも楽しんでるのがわかる。しかし今のは何に對して楽しんでるのかは牧村にとってはわからないことであった。

「これからの為にな」

「そうか」

そう言われても動じはしない牧村だった。

「ならばいい」

「その泰然自若というのか」

牧村のぶしつけとも言つていい態度を見ての言葉だった。

「そのスタイルもまたいい」

「別にこれについてどうも思ったこともない」

「そうか」

「そうだ。そして貴様の言いたいことは言い終わったか」  
「一応はな」

またここでも不敵な笑みを浮かべてきた。

「以上だ。それではだ」

「わかった。しかしだ」

「むっ!？」

「一つ言っておく」

牧村は前に進みその場を去ろうとする彼に対して言ったのだった。すれ違いざまにその言葉で囁く。言葉は相手の耳の間近で入った。

「何だ？」

「俺は敗れはしない」

言うのはこのことだった。

「それはよく覚えておくことだ」

「敗れないのなら敗れないでいい」

だがその言葉を聞いてもウエンティゴの言葉にある不敵な笑みは変わらないのだった。

「それでな」

「どういうことだ？それは」

「いずれわかる」

ここでも言おうとはしなかった。

「いずれな」

「いずれか」

「その時に貴様も知ることになるだろう」

不敵な笑みはそのまま不敵な言葉になっていた。

「髑髏天使のこともな。さらに」

「さらにだと」

「そうだ。その時に貴様が何と思うか」

言葉には笑みがあった。今度は未来を見透かしたような、そうした笑みであった。

「楽しみにしている」

「戯言か」

その言葉を聞いても言い捨てる牧村だった。

「所詮は」

「そう思いたいなら思うことだ」

ウエンティゴの言葉の調子は変わらない。

「それではだ。また会おう」

「ふん」

「その時に貴様が今よりさらに強く」

言葉をここで終わらせてはこなかった。

「そして。より髑髏天使になっていることを望む」

「俺が髑髏天使に」

その言葉には引っ掛かるものを感じた。しかし相手を見るより前に彼はもう姿を消してしまっていた。廊下に残っているのは牧村だけとなってしまうていた。

## 第九話 氷神その十

「さて」

一人になつた彼はまずはウエンティゴが言った言葉を思い出していた。

「この学校にいると言つていたな」

魔物のことである。すぐにその魔物の気配を探った。

するとすぐに感じた。上だ。

「そこか」

すぐに傍にあつた階段を登る。するとその階にいた。誰もいない廊下の中央に黒く巨大な。禍々しい姿をした八本足の怪物がそこにいたのである。

「蜘蛛か」

「残念だが蜘蛛ではない」

見ればその頭は人のものであつた。醜い、やけに鼻が大きくしかも曲がり顔中に疣がある男の顔だつた。その顔から言葉を発してきただのである。

「我が名はマニトー」

「マニトーだと」

「そうだ。アメリカから来た」

こつ牧村に言つてきたのだつた。

「ウエンティゴ様に連れて来られてな」

「そうか。貴様もこの国に来たというわけか」

「髑髏天使よ」

彼をこつ呼んできた。

「貴様のことはもう聞いている」

「あの男からだ」

「そつ、ウエンティゴ様からだ」

あくまであの男を本来の名で尊称で呼ぶのであつた。

「御聞きしたのだ。今は大天使だな」  
「そうだ」

牧村は彼の目を見据えつつ答えた。見ればその大きさは彼の優に三倍はある。その巨体で廊下を塞いでしまっているのだった。

「それがどうかしたのか」

「ならば相手にとって不足はない」

舌なめずりせんばかりの声であった。

「このマニトーの相手にな」

「魔物といっても夢を見るようだな」

牧村はその舌なめずりせんばかりの声に対して述べた。

「魔物であつてもな」

「何が言いたい」

「俺が相手にとって不足はないか」

「違つとでもいうのか？」

「貴様にとつては残念だがその通りだ」

こつ言葉を返すのであった。

「何故なら俺は貴様とは比較にならない程強いからだ」

「それだけの自信があるということか」

「それを今から見せてやる」

言いながら構えに入った。

「いいな」

「さらに面白い」

牧村のその自信を聞いてもマニトーは怯まない。むしろその声にある不気味な舌なめずりをさらに嫌らしいものにさせてきたのであった。

「こつした相手でなければ戦つかいがないからな」

「それではだ」

両手をゆつくりと前に出してきた。そうして。

その両手を拳にして胸の前で打ち合わせる。すると光がそこから発され彼の全身を包み込んだ。光が消えたその時。彼は髑髏天使と



なっているのだった。

「行くぞ」

右手を顔の前に出してそこから胸に向かって下げながら握り締める。これがはじまりの合図となった。

まず動いたのはマニトーだった。糸を発してきた。

だがそれは尻から出てきたものではなかった。口から出てきたのだった。そしてその糸は。静かに髑髏天使の周囲を漂いだしたのであった。

「糸か」

「何の為の糸かわかるな」

「蜘蛛の糸の目的は一つしかない」

髑髏天使は構えを取りつつマニトーに対して告げる。その間にも横目でその周囲に漂っている糸を見ていた。何時何が起こってもいのように。

「相手を捕らえるものだ」

「その通りだ」

マニトーも髑髏天使のその言葉に対して頷いた。

「そしてその相手とは」

「一人しかいない。俺だな」

「そういうことだ。覚悟はいいな」

「生憎だが覚悟はしていない」

「ほっ」

「闘う覚悟はしている」

その覚悟は、というわけだった。だが彼はそれで言葉を終わらせはしなかった。

## 第九話 氷神その十一

「しかし。敗れる覚悟はしていない」

「あくまでそれは無いというのだな」

「その通りだ。では行くぞ」

「むっ！？」

「糸が来たならば」

右手を一旦上から下に振るった。するとそれで彼の右手に剣が現われたのであった。

「それを防げばいいだけだ。違うか？」

「真理だ」

マニトーも今の髑髏天使の言葉自体は褒めた。

「その通りだ。害を為すものに対しては防ぐ。」

「だからこそ俺は」

「だが」

「だが！？何だ」

「それがいつも正しいのは限らないのだ」

笑みに不気味なものを戻らせての言葉だった。

「では試しに切っているといい」

「この糸をか」

「そうだ」

髑髏天使を挑発するような言葉だった。

「それはそう簡単に切れるものかどうか」

「自分で確かめてみるというのだな」

「如何にも」

「そして」

マニトーはまた言った。

「こつしたこともあるのだ」

「むっ！？」

「糸は一つから出すとは限らない」

八本の足のうち真ん中の四本を掲げてきた。蜘蛛の足とは全く違う、間接が逆になった動きであった。その動きで足を掲げると。その先からあの白い糸が再び出て来たのである。

「糸が……そこからも」

「俺は人ではない」

魔物はその糸を再び見ながら述べる。

「魔物だ。それならばこうしたとしても不思議ではあるまい」

「常識なぞ通用しないということだ」

「如何にも。それではだ」

また言うマニトーであった。

「この糸で」

「来るか」

自分を囲むその糸達を見つつ呟く。

「今ここに」

「死ぬがいい」

マニトーの言葉に勝ち誇るものが少しだが宿った。そして。

周りに漂う糸達が一斉に彼に襲い掛かる。そのまま間合いを詰めてきたのだ。何の為にそうしてきたのか。それも言うまでもなかった。

「そうか。このまま」

「わかっていても動けまい」

マニトーはまた勝ち誇った声で彼に告げてきた。

「こうなってしまうては。そうだな」

「それはどうかな」

しかし彼は髑髏天使としての誇りをあくまで疑わなかった。

「そう易々といくか」

「俺は蜘蛛だ」

マニトーは言う。

「しかもただの蜘蛛ではない」

「蜘蛛と魔物は違う」

髑髏天使もこう返す。

「当然だと思うが」

「糸もまた然りだ」

マニトーが言いたいことはこれであった。

「わかるな。だから貴様は」

「このまま捕らえられ死ぬか」

「その通りだ。死ぬのだ」

死という言葉が繰り返される。

「さあ。今こそ」

「ふん」

だがここで。髑髏天使の身体がまた輝いた。

その背中から翼が現われ左手にサーベルが逆手に握られる。大天

使の姿であった。

「言ったな。俺には敗れる覚悟はない」

「それはさつきも聞いた」

「こういうことだ」

彼はまた言うのであった。

## 第九話 氷神その十二

「それがこの」

「大天使というわけか」

「その通りだ」

両手の剣を構えながらの言葉であった。

「これならばだ。貴様の糸とて」

「さて」

しかし今の髑髏天使の言葉に。マニトーは冷笑を以って返すのだった。それがどうしたと言わんばかり、いやそのものの態度であった。

「それはどうか」

「大天使なぞ恐れるに足らずともいうのか」

「如何にも」

自信に満ちた声で言葉を返してきた。

「そう言っているのだ」

「ならばだ」

髑髏天使もその言葉を聞いて構えを解かず己の言葉を返した。

「今それを見せよう」

その両手の剣を縦横無尽に切り回しだした。それにより周りの糸を断ち切ろうとする。だが。それは彼の望み通りにはいかなかったのだった。

「むっ!？」

切った側からくつつくのだ。その糸が。まるで何事もなかったかのように元に戻ってしまう。それは丁度先のアルラウネとの闘いと全く同じであった。

「そういうことか」

「アルラウネと同じだ」

それはマニトー自身も言うのだった。

「俺の糸は。剣では断ち切れん」

「そういうことか」

「そしてだ」

マニトー自身は動かない。しかしその間にも糸は髑髏天使を覆っていく。少しずつだが確実に。まさに真綿で首を絞める感じであった。

「あの時と違い今は逃げられんぞ」

「この囲いからか」

「そうだ。終わりだ」

勝利を確信した言葉であった。

「髑髏天使。貴様もな」

「くっ……」

「確かにその剣の使い方は見事だ」

今の剣の腕は彼も認めるところであった。

「だが。それだけで俺は倒せないのだ」

「剣だけではか」

「その通りだ。それではだ」

糸の覆いがさらに狭まる。

「死ね。ゆつくりとな」

そのまま髑髏天使を包み押し潰さんとする。

糸が遂に彼を完全に覆った。もうこれで逃げられはしない。マニトーが会心の笑みを浮べた。その時だった。

突如として糸の色が変わった。それまでの純白が代々に変わったかに見えた。それはすぐに紅蓮になり生き物のように上にのたうちだした。それは。

「火!？」

「これは」

ここで髑髏天使の声もした。

「どういうことだ」

その火により糸が消えていく。燃え尽き消え去ってしまった糸の

屑を踏み越えるようにして髑髏天使が姿を現わした。見ればその鎧も二本の剣も赤いものになっていた。

「これは」

「火だ」

マニトーが言った。

「貴様が火を使ったのだ」

「馬鹿を言え」

しかしそれは髑髏天使自身が否定することだった。

「俺はそのようなものは使ってはいない」

「いや、使った」

マニトーが彼の言葉を否定する。

「今はつきりとな」

「どういうことだ。だが」

ここではじめて自覚する彼だった。

「力がみなぎる。これは」

「まさか」

マニトーはその彼を見てあることを想定した。それは。

「上がったか、貴様は」

「上がった・・・そうか」

その言葉を聞き気付く彼であった。

「俺はまた天使の階級を登ったのだな」

「それがその力というわけか」

これまで以上に警戒する目で髑髏天使を見ての言葉であった。

「貴様の」

「これが俺の新しい力か」

あらためてその赤い鎧と剣を見て言うのだった。

「今度の」

「まさか。ここで」

唸るような言葉であった。

## 第九話 氷神その十三

「階級が上がるとはな」

「俺も思いもしなかった」

髑髏天使にとってもであった。

「だが。この力」

その全身にみなぎる力を感じ取っての言葉である。

「この力なら。俺は」

「くっ……」

今度はマニトーが唸っていた。立場が逆転してしまっているの  
ここで彼自身も認めざるを得なかった。非常に忌々しいことであ  
たが。

「勝てる」

髑髏天使は言った。

「貴様にもな。確実に」

「させるものか」

だがマニトーもまだ諦めてはいなかった。剣呑な声でこう述べた  
のであった。

「それはな」

「ではどうするつもりだ？」

「場所を変える」

「こう言うのだった。」

「そこで。貴様を倒す」

「ほっ」

その言葉を聞いて目を光らせた髑髏天使だった。髑髏の中にある  
その両眼が光ったのが見えた。

「そうか。そこでか」

「そつだ。そこは」

「何処だ？」



「上だ」

こう言った。

「上で待っている。それではな」

「むっ」

ここまで言うつと姿を消してしまったモニターだった。まるで煙のようにすつつと消えてしまった。後に残っているものは何もなかった。

髑髏天使は彼が消えるのをまず見送っていた。しかしその姿が完全に消えてしまったのを見届けてすぐに。その気配を上を察したのだった。

「屋上か」

場所もわかった。後は行くだけだった。階段を登り屋上にいるとやはりいた。空を背にして屋上にその巨大な姿を晒している魔物が。

「来たな」

「来いと言われたからな」

屋上に出てすぐに身構えつつそのモニターに言葉を返した。

「だからだ」

「そうだな。それではだ」

「ここで俺を倒すというのか」

「貴様に糸は通じないのはわかった」

それも合わせて言うモニターだった。

「それはな」

「だが諦めないというわけか」

「俺は諦めが悪い」

自分でそれを言ってきたのだった。

「それもまず言うておこう」

「蜘蛛の姿をしているからではないようだな」

「蜘蛛は関係ない」

「それはないとも述べた。」

「ただ。俺がそうであるだけだ」

「そういうことか。それはわかった」

そこまで聞いて納得した髑髏天使だった。既に赤い鎧を着た大天使の姿になっている。その剣も燃え上がりばかりに紅になっている。

「だが。俺も」

「貴様も？」

「ここで決着をつけたくなった」

両手に持つ二本の剣を手にマニトーに告げた。

「今ここでな。終わらせる」

「それは俺も同じ考えだ」

マニトーもまたその両眼を赤く光らせ言うのであった。

「俺もまた」

「では。来い」

マニトーに対する言葉だ。

「ここで切つてやる」

「言われずともだ。行くぞ」

早速動きだしたマニトーだった。その動きは巨体からは想像できないまでに俊敏で滑るようだった。その動きを見て髑髏天使はまです空に舞い上がった。

## 第九話 氷神その十四

「それはわかっていた」

「何っ!？」

「翼は何の為にあるか」

マニトーはその空に上がった髑髏天使に対して告げる。

「それは飛ぶ為だ」

「ではどうするつもりだ？」

空を舞いそこからマニトーに急降下を仕掛けながら問う。

「この俺の攻撃を。どのようにして」

「こうする」

その言葉と共にまた姿を消してしまった。一瞬で。

「また消えただど!？」

「そうだ。しかしだ」

何処からかマニトーの声がした。しかし姿は見えない。髑髏天使は急降下を止め一旦空に再び舞い上がったのだった。この辺りの判断の速さは見事だった。

「ただ消えたわけではないぞ」

「何っ!？」

「こういうことだ」

その言葉と共に上からマニトーが現われた。何と彼の方が急降下を仕掛けて来たのだった。

「上からだど!？この俺の」

「俺は空は飛べない」

マニトーもそれは認める。

「しかしだ。こういうことはできる」

「上に現われそこから攻撃を浴びせることがか」

「そうだ」

こういうことであった。

「この様にしてな。これで終わりだ」

「くっ、させるものか」

髑髏天使は咄嗟のこの奇襲に驚いたがすぐに冷静さを取り戻した。すぐに後ろに下がろうとする。それでまずは数本の足の攻撃はかわした。だが最後の一本は。そのまま上から下に彼の胸をえぐったのであった。

「がはっ！」

思わず声を出してしまった。まるで丸太で撃たれたかのような衝撃であった。

その衝撃に何とか耐えつつ態勢を立て直す。地に落ちかねかったところで必死で宙に留まり。そのうえで下に降りたマニトーを見下ろすのだった。

「急降下攻撃か」

「それができるのは空を飛べる者だけではないということだ」  
降り立ったマニトーはその顔を見上げて彼に述べた。

「こうして。瞬間移動を使うことによってもできるのだ」

「確かにな」

忌々しげな声だがそれを認める髑髏天使だった。

「そうしたやり方もあるな」

「流石だな。すぐにわかったか」

「この胸の傷が教えている」

胸の鎧が激しくへこんでいた。その下では打たれた傷が痛む。そのことを言っているのだ。

「だからだ」

「そうか。ならばだ」

「また来るといふのだな」

「さて、どうするか」

その問いには答えないマニトーだった。

「それは俺の思うままだ。あくまでな」

「手のうちは見せないというわけか」

「そういうことだ」

「わかった」

髑髏天使は彼のその言葉に頷くと行動に出た。着地したのである。翼はそのままだが折り畳みそのうえで二本の剣を構えるのだった。

「それではだ」

「もう空からは来ないというのか」

「考えが変わった」

また答える髑髏天使だった。

「少しな」

「そうか。貴様も手のうちを見せないというのだな」

「貴様に倣うことにした」

こう言葉を返したのだった。

「今はな」

「そうか。それならばだ」

また少しずつ動きだしたモニターだった。八本の脚で素早く左右に動きだしたのだった。

「行くぞ」

「今度は大地からか」

「さてな」

やはり答えない。しかしそれと共に姿を消したのだった。

## 第九話 氷神その十五

「またか」

「これでどうだ？」

今度は後ろからだった。言葉と共に前脚を出す。それで髑髏天使を串刺しにしようとする。だが髑髏天使はそれを宙返りの要領でかわした。そのうえで宙を舞いマニトーの後ろに着地したのであった。マニトーはその彼に顔を向けて身体を向けて隙を見せないのだった。かわしたか」

「今のを受けていたら死んでいた」

髑髏天使は構えを再び取りながら自分に向かって振り向いてきたマニトーに述べた。

「確実にな」

「当然そうするつもりなのだがな、こちらも」

「それはわかっている」

言うまでもないことであった。

「だが。貴様の腕の動きはある程度は見切った」

「もうか」

「そうだ、既にな」

構えながら身を屈めていく。今度は彼から攻撃を仕掛けようとしているようだった。

「だからだ。今度は俺が」

「確かに俺が一つではそうだな」

ここでマニトーは妙な言葉を口にしてきた。

「俺が一つではな」

「何が言いたい」

髑髏天使もまた彼のその言葉に対して返した。

「貴様は一人だ。それ以外の何者でもない」

「俺は一人だ」

これはモニターも認めた。

「しかしだ。一つとは限らないのだ」

「何っ!??」

「こういうことだ」

言葉と共に身体を激しく左右に動かしてきた。するとモニターの身体が忽ちのうちに幾つにもなったのであった。まさに幾つにも。

「分身か」

「日本ではそう呼ぶのだな」

「おおむねな。そう来たか」

「そうだ。これで終わらせる」

複数になった口からそれぞれ述べるモニターであった。

「これでな」

「来るか」

「どうする?」

また複数の口からの言葉であった。

「この攻撃は。貴様とてかわせるか」

「幾つもの貴様の脚をか」

「俺が一つならかわせると言った」

「このことを彼自身も言ってきた。」

「だが。それが複数ならばだ」

「できるかどうか」

「容易ではあるまい」

問う声に余裕が含まれてきていた。

「少なくとも。そうだな」

「確かにな。しかしだ」

「しかし?」

「俺にもカードはまだある」

彼の言葉には余裕はなかった。だが落ち着いた声でモニターに返したのであった。

「まだな」

「諦めていないというのか」

「俺の辞書に諦めるという言葉はない」

「こう言うのであった。」

「決してな」

「だからこそ最後まで戦うのだな」

「そういうことだ」

「ここでも彼自身の考えを述べるのであった。」

「何があるうともな」

「この心は見事だ」

彼のそうした考えはマニトーも素直に称賛した。

「そこまではつきりと決めているのならな」

「褒めても何も出ないが」

「そういう問題ではない」

それぞれの口で言うマニトーであった。分身は少しずつ増えやがて髑髏天使を取り囲んだ。その数は相当なものであり一見したただけではどれだけいるかわからなかった。

「俺とても相手であろうがその褒めるべきものは見る」

「そうか」

「そうだ。それだけだ」

マニトーもまた毅然とした言葉になっていたのだった。



## 第九話 氷神その十六

「そしてだ。それだけの相手の力を備えることができる」

「俺を倒してだな」

「如何にも。これ以上の喜びはない」

「マニトー達の表情はそのままだったが声は笑っていた。」

「髑髏天使よ。これで死んでもらうぞ」

その無数のマニトーから同じく無数の脚が放たれてきた。その数は如何に髑髏天使といえどかわせないように思われた。だが彼は今いるその場から動くことなく。何と右手に持つ剣を足元に突き刺したのであった。

「むっ!？」

「確かに今の貴様の数は多い」

髑髏天使はその剣を刺しながら言った。

「しかしだ。それだけだ」

「何っ!？」

「それだけだと言った」

また答えるのであった。

「数が多くとも貴様自身は変わらん」

「何が言いたい」

「何が言いたい、か」

攻撃を繰り返し出しながらもいぶかしげに問うマニトーに対して言葉を返す。

「俺が何を言いたいかか」

「そつだ。貴様は最早」

「ならば見せよう」

彼はまた言った。

「俺が言う言葉は」

「むっっ!？」

「これだ！」

言葉と共に全身に力を込め何かを放った。それは紅蓮の炎であった。炎は剣を通してそのまま周囲に飛び辺りを燃やし尽くしたのであった。

炎は当然ながらマニトー達にもかかる。忽ちのうちに殆どのマニトーの姿が消え残る一体のマニトーもまた。その紅蓮の炎に包まれたのであった。

「グオオオオオオオ・・・」

「貴様は炎に弱い」

炎を放ち終えた髑髏天使はコンクリートに突き刺した剣をそのままに立ち上がって言うのだった。

「それは変わりはない。そうだな」

「まさか。この様にして使うとは」

「周りにいれば攻撃をその周りに向ける」

髑髏天使は周りで燃え盛る炎にその顔も身体も紅にさせながら述べた。マニトーは彼の正面にいてそこで炎にその全身を包ませているた。

「それだけだ」

「成程、そういうことが」

「これでわかったな」

「確かにな」

髑髏天使の言葉に対して納得したように呻いたマニトーであった。

「こころ来るとは思わなかった」

「これもまた闘い方だ」

髑髏天使は立ち上がったままのその姿勢で述べた。

「相手の意表を衝くのがな。貴様と同じだ」

「見事だ」

また称賛の声を彼に送るマニトーだった。

「やはり貴様は髑髏天使だけはある」

「そうか」

「俺の負けだ」

今度は己の敗北を素直に認めてきた。

## 第九話 氷神その十七

「完全にな。こうなつては認めるしかない」

「安らかに眠れ」

自身が放つた炎とは別の紅蓮の炎に包まれていくモニターに対しての言葉であつた。

「その炎の中でな」

「うむ。では髑髏天使よ」

モニターは最後の力で髑髏天使に告げてきた。

「さらばだ。永遠にな」

こう言つとその紅蓮の炎の中に消えた。こうしてモニターは完全に死んだのであつた。

闘いが終わるとそれまで晴れ渡っていた空が急に曇り。雨が降ってきた。雨は炎を忽ちのうちに完全に消し去つてしまい。髑髏天使の身体もまた濡らすのであつた。

「雨か」

髑髏天使はその雨を見上げて顔でも受けた。そうしてそうしながら牧村に戻るのだった。「これは少し参つたな」

その雨を見つつの言葉だった。

「あいつへの見送りがな」

そう呟くところで携帯が為つた。とりあえずは階段に入りそこでそれを手に取つたのだった。まだ髪も顔も濡れたままである。電話の主は未久であつた。

「お兄ちゃん、今凄い雨が降ってるんだけど」

「ああ、そうだな」

素っ気無い声で妹に返した。さっきまでのことはその素っ気無さに完全に隠している。

「かなりだな。これは」

「だから。今お母さんから連絡来たんだけど」

「母さんからか」

「うん。車で迎えに来てくれるって」

このことを兄に話すのであった。

「だからね。悪いけれど今日は」

「わかった」

それから先は言うまでもなかった。納得の言葉を返す牧村だった。

「そういうことだな。じゃあ今日はな」

「うん。ところでお兄ちゃんはどうするの？」

「俺か」

「そうだよ。ここまでの大雨だとやっぱり」

「俺は大丈夫だ」

だが彼はこう妹に言葉を返すのだった。

「俺はな。心配はしなくていい」

「何でなの？」

「帰るのが遅い」

何故か今このことを未久に話すのだった。

「だからだ」

「それでなの？」

「御前は今から帰るんだな」

「うん」

兄の言葉に電話の向こうで頷いた。

「そうよ。だから電話してるんだけど」

「俺は時間をずらす。そうして帰る」

「雨が止むのを待つからね」

「これだけ強い雨はそうは続かない」

雨は強ければ強い程止むのも早いものだ。それを踏まえての言葉であるのだ。

「だからだ。わかったな」

「そうなの。じゃあお兄ちゃんは大丈夫なのね」

「そういうことだ。俺はな」

「わかったわ。じゃあまたお家でね」

「ああ」

こうして携帯電話での話を終えた。電話を切りそれを懐に収めると。階段のところから見える雨はまだ勢いよく降り続けている。しかし彼はそれは長くないと見ていた。

「強い雨も一瞬ならば闘いも一瞬のことだ」

その豪雨と己の闘いを重ね合わせた。

「だが。その一瞬で全てが決まる。何もかもな」

こう言い残して階段を下りていく。その彼はまた一つ力を手に入れたのであった。

第九話 完

2008・12・11

## 第十話 権天その一

髑髏天使 第十話

権天

モニターとの闘いのことは次の日に博士に話をした。やはりあの研究室で妖怪達に囲まれながらこのことを己の席にいる博士に対して話すのであった。

博士は彼のその話をじつと聞いていた。そして一通り聞き終えてから彼に対して言った。

「まさかもうなるとはのう」

「意外か」

「意外も何もこの前大天使になつたばかりじゃつたな」

「そうだな。まだ何週間も経つてはいない」

「それでじゃ。どうも調べていてわかつたのじゃがな」

「天使の階級のことか」

「そうじゃ。普通大天使になるにも一年」

その翼ともう一本の剣を持つ天使の階級である。

「それもすぐでさらに上か」

「確か権天使だつたな」

牧村はその階級を自分から言った。

「そうだつたな」

「それじゃ。権天使じゃ」

博士もまたその階級について述べた。

「九の階級のうちのな。三番目じゃな」

「炎の力を持っているのか」

「後付けになるがそれも今わかつたことじゃ」

博士はこうこ牧村に告げた。

「今このう」

「そうか。権天使は炎を司るか」

「どうも本来の天使の階級とは違う部分もあるよっじゃ」

博士が次に言及したのはこのことであった。

「実際の天使達とはな」

「聖書の天使はまた違うのか」

「一説には炎を使うのは主天使となっておる」

「第六の階級のだな」

「そうじゃ。しかしそれは違った」

博士の目は探るような、深いものになってきていた。

「権天使が炎となっていた」

「そこに何かありそうなのだな」

「おそろくな。カバラがあるじゃろ」

「髑髏天使の謎が書かれているというあれだな」

「そもそもはユダヤ教の奥義なのじゃよ」

「それは前にも聞いたな」

カバラについては博士だけでなく牧村も述べた。二人共それぞれ調べているのである。しかし牧村はそのことはまだ何もわかってはいないのだった。

「本来はそうだと」

「どうやら髑髏天使の謎はユダヤのそれとはまた違うのかもな」

「そうかも知れないのか」

「髑髏天使はそもそも遙か古代よりその姿を現わしていた」

博士はあらためてこのことも述べた。

「今はな。そうしてじゃ」

「調べていくのか」

「まず炎じゃった」

博士はまた炎に対して言及した。

「そして次じゃが」

「先にあるものも見るのか」

「うむ。他にも色々調べるものはあるがな」

「魔神や魔物のこともだな」



「あのマニトーもじゃ」

彼が先に闘ったそのマニトーである。

「とにかくあちこちから来ているからもう」

「そうだな」

「魔神は各地に封印されておる」

博士はこのことも彼に話した。

「百目は日本で九尾の狐は中国」

「ああ」

「そしてウエンティゴはアメリカじゃ」

「まずはその三人だったな」

「あと九人もおるからのう。その連中のことも調べておく」

「魔物の神はその十二人だけなのか？」

牧村は不意にそのことについて述べてきた。

「他にはいないのか？ 奴等だけなのか？」

「奴等だけとは？」

「ギリシア神話では主だった神の他にも多くの神がいるな」

「そうじゃ」

当然博士もこのことを知っていた。ギリシア神話において神々はただオリンポスにいる十二人だけではないのだ。彼等はそれぞれ従神を持っておりまたオリンポスはあくまで天界を治めるゼウスの世界でしかない。他にはポセイダンの治める海界、ハーデスの治める冥界があるのだ。その二つの世界にもそれぞれ神々が存在している。ギリシア世界は三つの世界からなりそこにそれぞれの神々がいるのである。牧村はこのことを知っているからこそ今それを実際に博士に対して話に出したのである。

## 第十話 権天その二

「それはな。わかっておる」

「ならばだ。奴等も」

「少なくともあの十二人は従神はおらんようじゃな」

「そうなのか」

「まだ全て判読したわけではないがな」

一応はこつ前置きもする博士であった。

「じゃがな。読んだところではじゃ」

「いないのか」

「うむ。それは安心してくれ」

「わかった」

「ただ。わしも気になることは気になるがな」

だが博士は考える目で首を左に傾けつつこつ述べたのであった。

「少しな」

「少し？」

「ひよつとしたらじゃよ」

そしてまた言う。

「従えている神はおらんが上におるかもな」

「上にか」

「若しくは奴等のうちの一人がじゃ」

「一人が？」

「主神かも知れんな」

主神という存在を口に出すのであった。

「ひよつとしてな」

「主神か」

「神にも順列はある」

これはどの神話でも宗教でも同じである。先のギリシア神話におけるゼウス。ポセイドン、ハーデスがそれぞれそれぞつであるようになだ。

神が一人しか存在しない宗教も入れてのことだ。

「じゃから。主神は奴等の中にも必ず存在するな」

「それは確実なのだな」

「文献でもまだそこまでは調べてはおらんが間違いはない」

「ここでは強い言葉になる博士であった。」

「それはな」

「そうだな。言われてみればな」

牧村も彼の言葉に頷いたのだった。口には手を当てて考える顔で。

「いて当然の存在だな」

「じゃが今彼等と闘う時ではないぞ」

「神とはか」

「やはりじゃ」

博士の表情がここで一気に険しいものになって言葉が出された。

「神は神じゃ」

「神か」

「人とは隔絶たる力がある」

神が神である由縁である。人やあらゆるものに対して絶対の存在

である、それが神なのだからだ。

「魔物に対しても今は相当苦戦しておるじゃろっ」

「マニトーの闘いでも」

牧村はまたマニトーのことを話に出してきた。

「正直なところな」

「権天使にならなければ危なかったじゃろっ」

「その通りだ」

それを自分で認めるのだった。

「さもなければ。敗れていた」

「権天使でまだ三番目の階級じゃ」

「あれだけの力か」

「神は天使より上の存在じゃ」

これもまた自明の理であった。それだけの力の差があるのである。

「じゃから。今闘ってもじゃ」

「勝てはしないか」

「向こうもそう言っておると思うが？」

「その通りだ」

このことも博士に述べるのであった。

「今は闘う時ではないとな。言ってきた」

「魔物は闘いを楽しむものじゃからな」

「今の俺と闘っても面白くはないということか」

牧村の目が語ったところで怒ったものになった。

「いや、それも道理か」

「そうじゃ。魔神から見ればな」

博士はすぐに目を元に戻した牧村に対して述べた。

「弱いじゃよ。まだな」

「権天使ではか」

「確かに強くなるのは早い」

今の髑髏天使としての牧村は、という意味である。

## 第十話 権天その三

「しかしな。それでもじゃ」

「神にはまだ及ばないか」

「焦らぬことじゃ」

博士は言う。

「じっくりとな。そこに迫ればいい」

「わかった」

牧村もその言葉に頷いて答える。

「では焦らないでいこう」

「焦ったら何でも負けじゃよ」

博士の今度の言葉は人生経験を漂わせる深みのあるものであった。

「じゃからな。それは止めておいてじゃ」

「それだけはか」

「それだけはどうと他にも色々もある」

今度もまた人生を味あわせる言葉であった。

「他にもあるが焦らないことはな」

「必須か」

「そう思ってくればいい。そのうちの一つじゃよ」

やはり人生を見せる言葉であった。伊達に歳を取ってはいないということであるうか。そしてその言葉と共に彼はさらに言うのであった。

「そしてじゃ」

「そして?」

「楽しむことも必要じゃよ」

「闘いを楽しめというのか?」

「それとはまた違う」

闘いに関してはそうではないというのである。

「闘いとはまた別にな。楽しみを見つけたらということじゃよ」

「そういうことか」

「左様。例えばじゃ」

この言葉と共に妖怪達が二人にすつと出してきたのはお菓子であった。それも今度は見事なチョコレートのデコレーションケーキであった。

「こういつものじゃよ」

「今度はケーキか」

「美味しそうでしょ」

「山月堂だよ」

「あそこは和菓子屋だったと思うが」

牧村は山月堂と聞いてその目を妖怪達に対して向けた。

「違ったか」

「和菓子だけじゃないから、あそこは」

「ケーキもあるよ」

「そうだったのか」

言われてあらためてそのケーキに顔を向ける牧村だった。

「洋菓子もあるのか、あそこには」

「嫌いか？」

「いや」

その問いに対しては首を横に振る。

「かなり好きだ」

「そうか。それは何よりだ」

「チョコレートもな」

「それもいいというのである。」

「いいものだ」

「それなら問題はないのう。で、飲むのはじゃ」

「コーヒーがいいな」

牧村はケーキを見つつ述べた。

「今はな」

「コーヒーなのか」

「チョコレートにはコーヒーだ」

こう述べるのであった。

「俺にとつてはな」

「ふむ。いい趣味じゃな」

博士もそれを聞いて納得した顔で頷くのだった。

「チョコレートにコーヒーか」

「黒と黒になるがな」

「それもまたよいことじゃ」

応えながらその白髭だらけの顔を綻ばせてきた。

「ではわしもそうするか」

「そうか」

「うむ。実は今までは紅茶だったのじゃがな」

「それも悪くはない」

牧村はそれについても否定しなかった。

「紅茶は洋菓子ならば何にでも合う。イギリス人の珍しい当たりの  
飲食物だ」

「全くだよね」

「イギリスの料理なんて食べられたものじゃないよ」

妖怪達の中に小柄で赤い帽子で右足が義足の老人が言ってきた。

## 第十話 権天その四

「もう日本に比べたらね」

「そんなに凄いんだ」

「巻き寿司がお握りなんだよ」

子泣き爺の問いに応えてその老人は述べた。

「天麩羅のね」

「お寿司がお握り!？」

「そうなんだよ」

「それは嘘だよ」

「そうそう」

周りの日本の妖怪達が彼の言葉を否定する。

「幾ら何でもそんなの間違えないし」

「見間違いじゃないの？」

「いや、その通りじゃよ」

ここで博士が言い合う彼等に対して述べたのだった。

「それはわしもイギリスで見たぞ」

「あれっ、本当なの!？」

「そんな馬鹿みたいな食べ物がいギリスにはあるんだ」

「レプラホーンの言う通りじゃ」

その老人を見ての言葉だ。

「あるのじゃよ、イギリスには」

「お寿司がお握りになるって」

「イギリス人って凄いね」

「全然別の意味でね」

「あれもまた才能じゃ」

皮肉抜き言葉であった。

「あそこまで見事なあれな料理を作れるのもな」

「あれなんだ」



「あれとしか言い様がないのう」

あえて肝心の部分はぼやけさせているがその意味もない言葉であった。

「あれではな」

「きついね、それって」

「レプラホーンも大変だね」

「イギリスにいた時はイギリスが普通だって思っていたんだよ」  
レプラホーンは皆に応えてこう述べた。

「それでもね。日本に来たら」

「わかつたんだ」

「味ってというのが」

「まあそうなるね」

周りの同じ妖怪達の言葉に頷いた。

「日本は食べ物美味しいよ、本当に」

「それはまあね」

「その通りだね」

「確かに」

周りの妖怪達も彼のその言葉に頷くのだった。そのうえでさらにそのレプラホーンに対して言う。彼等も食べ物に関してはかなりに興味があるようである。

「特にね」

「特に？」

「そう、大阪」

この都市の名前が出された。

「大阪が一番美味しいかな」

「そうだね、やっぱり」

「この神戸もいいけれどね」

「大阪が一番いいんだ」

レプラホーンは彼等の言葉を聞いてその大阪に興味を抱いたのであった。

「ふうん、じゃあ今度一度行ってみようかな」

「ああ、そうしたらいいよ」

「是非ね」

「そうだね。それじゃあ」

また皆の言葉に頷くのだった。

「一度行ってみるよ」

「とりあえず何でも美味しいから」

「何でもね」

皆は彼にこうも述べた。

「特にたこ焼きかな」

「たこ焼き!？」

「そう、それ」

「蛸を小麦粉の中に入れて丸く焼いたものなんだよ」

たこ焼きについてこう説明が為されるのであった。

「それがまた美味しくてね」

「是非食べたらいいいよ」

「あときつねうどんかな」

「ああ、それは食べたことあるよ」

きつねうどんについてはレプラホーンも知っているのだった。

## 第十話 権天その五

「あれもいいよね、確かにね」

「ああ、知っていたんだ」

「だったら話は早いよ」

妖怪達も彼がきつねうどんを知っていると聞いて笑顔になった。

「他にも色々もあるしね」

「串カツもお好み焼きもどて焼きもね」

「本当に何でもあるんだね」

「そうだよ、何でもあるよ」

「美味しいものはね」

彼等は口々に大阪の食べ物を褒めるのであった。

「基本的にビールと合うね」

「たこ焼きとかお好み焼きとかね」

「確かに」

「ああ、だったらこっちも楽しみだよ」

ビールと聞いてレプラホーンも乗ってきた。

「ビールと合うんだ」

「そうだよ、かなりね」

「そういえばビールもやっぱり？」

「日本の方が美味しいよ」

にこりと笑って答えるレプラホーンであった。

「やっぱりね」

「そうなんだ。ビールも」

「イギリスって本当に何でもまずいんだね」

「美味しいものを食いたければ自分で作ることじゃよ」

博士はここでまた妖怪達に言ってきた。

「自分でな」

「お店のは？」

「美味しい店なぞない」

断言であった。

「何一つとしてな」

「ああ、やっぱりね」

「これまでの話でそれはわかるよ」

皆も実によく納得する博士の今の言葉であった。

「自分で作るしかないんだ」

「困ったなあ」

「自分で作るしかないか」

牧村はこれまで周りの話を黙って聞いていたがここで言うのだった。

「イギリスで美味しいものを食いたければ」

「まあ結果としてそうなるんじゃないよ」

博士は今度は牧村に対して述べた。

「料理のメニュー自体は悪くはない」

「メニューはか」

「素材もな」

それもであった。この二つはいいのだという。

「しかしじゃ。問題は」

「作り手が」

「これが悪くてはどうしようもない」

料理に関する自明の理であった。どれだけメニューや素材がよくとも作る人間がまずくはそれで料理はおしまいになってしまふものなのだ。

「逆はあってもな」

「そうだな。メニューや素材が悪くても腕でカバーできたりはする」

「しかし料理人が悪ければ終わりじゃ」

「料理漫画の基本だな」

こうした展開も多いのが料理漫画というジャンルである。素材で劣ってもその腕やアイデアでカバーして勝利を収めるといふのも

よくある展開の一つなのだ。

「それはな」

「流石にわかってくれておるのう。それでじゃ」

「それで？」

「君もそれは同じじゃな」

ここで牧村に話を振るのであった。

「幾ら強い天使になり力を手に入れようとも」

「俺自身が強くなければ駄目か」

「そういうことじゃ。相変わらず鍛えてはいるな」

「それは欠かしていない」

はつきりと博士に答えた。

「毎日な。やっている」

「いいことじゃ。やはり相手は強い」

魔物達についても言及してきた。

「強くなっておくことじゃ。よいな」

「わかっている。とりあえず権天使だが」

「うむ」

話は先になった天使についても及んだ。

「炎を使えるようになったが」

「それはかなり大きいのう」

「そのおかげであるの魔物にも勝つことができた」

マニトーのことであるのは言うまでもない。

## 第十話 権天その六

「僥倖だった」

「僥倖ではないがな」

「違うか、これは」

「君の強さがその権天使の域に達しておったのじゃよ、その時にな」

「それであそこであることができたのか」

「そういうことじゃ。僥倖ではなく必然じゃ」

「こう彼に言うのであった。」

「これはな」

「そういうものか。必然か」

「わしはそう思う。これからもその必然は続くぞ」

「闘いを重ね強くなる度にだな」

「うむ。強くなることじゃ」

牧村を見つつ声をかけた。

「よいな。それでな」

「わかった。しかし」

「しかし？」

「炎の使い方も考えていくか」

彼が今度考えたのはこのことだった。

「そちらもな」

「ただ燃やすだけではないのじゃな」

「あの時はまず剣に及ばせ」

持っている二本の剣に炎を及ばせそれでマニトーの糸を断ち切っ

た。彼が劣勢を挽回したあの時である。

「そして勝敗を決した」

「周りに炎を炸裂させてじゃな」

「他にもあるかも知れない」

考えながら述べた言葉であった。

「その二つ以外にな」

「そうじゃな。何でも考えてみることにじゃ」

博士は牧村のその言葉を聞いてまた述べてきた。

「何でもな。考えてみるとよい」

「考えるのか」

「人間考えることも大事じゃよ」

これもまたよく言われている言葉であった。

「さもないと頭が錆びてしまっわ」

「だが考え続けていると」

「錆びないどころかどんどんよくなってくる」

そういうものなのである。頭というものはそうした意味で無限に動き進化することが可能なものなのだ。考えてみれば不思議なものである。

「それは闘いにも活きるしのうち」

「だからこそ余計に考えるのだな」

「その通り。考えることじゃよ」

博士はまた牧村に告げた。

「よくな。そしてやってみることじゃ」

「わかった。では色々とやってみよう」

「そうするといいい。そして」

「そして!？」

「おそらく手に入る力は炎だけではない」

今度はこう彼に言ったのだった。

「それはな。一つだけではないぞ」

「そうか」

「そうじゃ。まあまだ他の天使については詳しいことはわからんが」

「権天使だけか」

「まだな」

また牧村に答えた。

「それより上はわからんよ」

「謎はこれからというわけか」  
「このことは済まないと思っておる」  
博士もこのことについて牧村に謝罪するのだった。  
「わかつていればそれだけ対処ができるからな」  
「それはいいがな」  
だが牧村はその謝罪の言葉を受けたうえでこう返すのだった。  
「別にな」  
「いいのか？」  
「少なくとも今こうしてわかる」  
彼は今を語るのであった。  
「それならそれでいい。それに」  
「それに？」  
「かなり先のことを言われても実感が湧かない」  
「こう述べるのだった。」  
「あまり先だとな」  
「ふむ、そういう考えか」  
「そうだ。だから今はいい」  
「そうか。じゃがこちらはこちらで調べていくぞ」  
「それは頼む」  
それは是非にという牧村であった。  
「よくな。そしてだ」  
「うむ」  
「とりあえず権天使にはなった」  
あらためてこのことを話すのだった。



## 第十話 権天その七

「この力を確かなものにしなければいけない」

「それは君次第のことじゃな」

「俺次第か」

「左様。先程言った通りじゃ」

「話を少し戻す博士だった。」

「修練を積み強くなりな」

「それと共にこの力をか」

「身に備えるのじゃ。よいな」

「わかった。では今まで通り鍛えていく」

「絶対にな。さて」

「話が一段落したところで息抜きのように言葉を出す博士であった。」

「話はこれで終わりじゃが」

「終わりだが？」

「今日はそのイギリスのお菓子を用意しておるのじゃよ」

「急に顔を綻ばせて牧村に対して言ってきたのだった。」

「実はな」

「イギリスのか」

「私が焼いたんですよ」

「不意に牧村の前に美女の顔が出て来た。それはろく子のものであった。部屋の端に静かに立っていた彼女が首だけを伸ばしてきたのである。」

「最初から作って」

「あんたが焼いたのか」

「はい、プディングです」

「今にも口付けをせんばかりの近さで牧村に言うのであった。その知性的な美貌の顔をにこりとさせている。これが普通の人間だったなら普通の男ならここでその唇を奪っているであろう。」

「プディングを焼いたんです」

「プディングか」

「嫌いか？」

ろく子が頭を少し離れたところで博士が彼に問うてきた。

「プディングは」

「いや、好きだ」

表情こそ変えないが素直に答える牧村だった。

「それもな」

「ならばいいな。皆の分もあるぞ」

「えっ、本当に!？」

「僕達の分もあるんだ」

「当たり前じゃ。美味しいものは皆で食べるものじゃ」

博士は笑って歓声をあげる周りの妖怪達に対して述べる。

「だからじゃ。皆の分もあるぞ」

「はい、こちらに」

ここでろく子がそのプディングを出してきた。盆の上に丁寧にガラスの皿の上に置かれ黒いカラメルソースをかけたそれがすぐに博士や牧村、妖怪達の前に置かれるのだった。当然スプーンも一緒だ。

「うわ、これはまた」

「美味しそうだね」

「イギリスじゃこんな美味しそうないよ」

ここでレプラコーンが皆に言う。

「っていうかもっと凄い形になってるし」

「ってこれイギリスの料理じゃない」

「それでそうなの？」

「そうなんだよ。だから凄いんだよ」

うんざりとした顔で皆に話すレプラコーンだった。

「イギリスの料理はね」

「じゃが日本人が作るとじゃ」

「作ったのは私ですが」

ろく子が博士に突っ込みを入れた。

「私は人ではないですけどね」

「それはよいのじゃ」

今のところはそうしたことには構わず話を進める博士だった。

「今はな」

「左様ですか」

「それでじゃ」

ろく子に対する話をこれで終わらせあらためて一同に言う博士であつた。

「このプティングは間違いなく本場のものよりも美味しいぞ」

「それ程にか」

「何事も腕じゃよ」

またこのことについて話す博士であつた。

「じゃからな。それさえよければじゃ」

「美味しいのか」

「そういうことなのじゃよ」

目を細めさせての言葉であつた。

「まず大事なのは腕じゃよ」

「そういうことだな」

牧村もまた博士のその言葉に頷くのだつた。

## 第十話 権天その八

「何でもだな」

「そうじゃ。試しに君の妹さんじゃが」

「あいつか」

「妹さんおつたじゃろう？」

言ったすぐ側から問い返すのが歳を感じさせた。ただし今回のそれは多分に危うさを意識させるものではあったが。

「確か」

「一人な」

だが牧村はその危うさには突っ込みを入れずそのまま答えたのだ。  
「た。」

「いる。中学生のな」

「ではその中学生の妹さんにこのプディングを作ってもらおう」

「ああ」

「そうしたらイギリス人よりは美味しいプディングにはなるぞ」

「あいつはお菓子はあまり作らないが」

「そうなのか？」

「魚や野菜の料理が好きだ」

こう述べる牧村だった。

「天麩羅や刺身、佃煮やそういったものがな」

「何じゃ、和食派か」

「とにかく醤油を使った料理を作るのが好きだ」  
やはり和食であった。

「そういうものがな」

「ふむ。中学生でそれは珍しいのう」

「博士もそう思つか」

「中学生といえはあれじゃろう？」

博士は自分の頭の中にある中学生のイメージを元にして彼に話し

はじめた。

「やはり。クレープだのケーキだのアイスクリームだのをじゃな」

「そういったものも好きだ」

「ではどうしてそちらを作らんのじゃ？」

「何でもお菓子を作るのは苦手らしい」

「これが牧村の返答だった。

「それでらしい。自分では作らないとのことだ」

「ふむ。お菓子を作るのは苦手か」

「とりあえず和食なら大抵は作ることができるな」

「それはそれで凄いいことじゃがな」

博士は牧村の話聞きつつ述べた。

「和食はあれで難しいものじゃからのう」

「やはりそう思うか」

「少なくとも中学生で得意にしているといつのはあまりないのう」

博士はここでも己の中にある女子中学生のイメージを元に語った。

「うちの婆さん位でないとな」

「博士の奥さんってお幾つ？」

「確か八十年は連れ添ってるよね」

横から妖怪達に突込みが入った。

「確か博士が百歳いつてるんだっけ」

「じゃあやっぱり」

「うむ、もう百歳じゃな」

こう妖怪達に返したのだった。

「目出度くのう」

「夫婦で百歳って」

「人間じゃ滅多にないんじゃ」

「しかも結婚して八十年って」

「ほっほっほ、よいことじゃろう」

妖怪達の驚いたような言葉を横から聞いて楽しそうな笑い声をあげる博士であった。

「縁起のいいことじゃ。ダイヤモンド婚もとうの昔に超えておるわ」  
「そこまで一緒なのか」  
「うむ」

今度は牧村に対して楽しげな言葉で返した。

「そうなのじゃよ。実はのう」

「八十年か」

「料理をやって九十年じゃ」

歳月が十年プラスされた。

「そんなものじゃよ」

「あいつはまだはじめて数年だが」

大体そんなものである。中学生ならば。

「それで味はどうなのじゃ？」

「あいつの和食か」

「そうじゃ。問題はそこじゃ」

博士は指摘する。これは話の流れからいっても当然のものであった。

「一体。どうなのじゃ？そこは」

「悪くはないな」

牧村は博士の今の問いに答えて述べた。

「決してな」

「そうか。悪くはないか」

「最初からそれ程悪くはなかったが今では腕をあげた」

「よいことじゃな」

「特に生姜を使うのが上手い」

「ほう、生姜を」

生姜と聞いてまた声を綻ばせた博士であった。

## 第十話 権天その九

「もう生姜を使うのか」

「そうだが」

「ふむ。それは将来有望じゃな」

博士は話を聞きながらその白い髭を右手でしごいた。目は感心したものになっている。

「もう生姜を知っておるのか」

「生姜を知っていれば何かあるのか？」

「あるのじゃよ、これが」

「生姜にか」

「まず生姜はのう」

生姜についてあれこれと話をはじめた。

「身体によいのじゃよ」

「風邪には効くな」

「それだけではない。よい滋養になる」

「こつ言つのである。」

「それにな。味が違つ」

「味がか」

「入れておくだけで全く違つるのじゃよ。何もかもな」

「そういうことか」

牧村はそれを聞いて考える顔になるのだった。

「俺には今一つわからないのだが」

「それはいつも食べておるからじゃよ」

博士はそう言つて牧村を見た。

「普段から食べておるとそうそうわかるものではない」

「そういうものか」

「そういうものじゃ。普段からじゃと中々わからん」

また述べる博士だった。

「全くな」

「ふむ。そういうものか」

牧村はそれを聞いてまた考える顔になった。

「普段からだとわからないものか」

「生姜にしろそれは同じなのじゃよ」

「生姜もか」

「そういうものじゃ。とにかく生姜を使うとは見所がある」

博士はあらためて目を細くさせた。

「まだ中学生だというのにのう。楽しみなことじゃ」

こう言ってからそのプディングを食べていく。博士は今はずごぶる機嫌がよかった。

その頃あの三柱の魔神達は今度は周りに水が滝となり流れている暗闇の中で。白く淡いキャンドルの輝きにその身体を浮かび上げらせつつ話をしていた。

「マニトーは敗れた」

「そうみたいね」

女が男に対して応える。彼女の周りにも水が流れている。

「そしてそれだけじゃないわね」

「炎を使えるようになった」

「権天使ですね」

老人がここで二人に対して述べてきた。

「それは」

「第三の段階か」

「そうなります」

今度は男に対して答えた。

「権天使で」

「そうだったな。思ったよりもかなり早い」

「こんなに早いものだったかしら」

女は男の早いという指摘に続いて自身も述べた。

「天使の階級を上げるのは」



「私の記憶では一段階に一年程度でした」

老人がここでまた述べた。

「確か。それ位だったかと」

「それが一月程度か」

「そうね」

女がここで頷いた。

「それ位ね。時間は」

「やはり早いな」

男はここまで聞いてまた言うのだった。

「今度の髑髏天使の階級を上げる早さは」

「そうね。ただそれならそれでやり方があるわ」

「そうですね」

老人は女はその問いに対してまた述べた。

「それだけ人ではなくなる恐れも早くなるのですから」

「今のところは人なのね」

「間違いない」

今度は男が答えた。

## 第十話 権天その十

「それはな」

「そう。今のところはね」

「少なくともそうでなくなるとしてもまだ先だ」

男はこうも述べた。

「まだな」

「本来はそれは徐々にだけれど」

「今回は事情が違う」

男はそこを指摘した。

「まだ先といつてもこれまでの髑髏天使よりも早い」

「それもずつとね」

「それです」

老人がまた言ってきた。

「今度の魔物ですが」

「俺がまた出そう」

男が一步前に出て名乗りをあげた。名乗りつつ側にある滝に触れた。するとその滝は瞬く間に凍りつき動かなくなってしまった。

「俺がな」

「貴方がですか」

「もう一人連れて来た」

こう二人に対して述べた。

「だからだ。その者にやらせてくれ」

「わかったわ」

「それでは」

二人もまた彼の言葉を受けた。そのうえで頷いてもみせた。

「そういうことで」

「任せたわ」

「わかった。それではだ」

男は滝から手を離れた。すると先程まで凍りついていた滝はすぐに元に戻りまるで何事もなかったかのようにまた静かに流れだしたのだった。

「今から向かわせる。いいな」

「はい。それでは」

「話はこれで終わりね」

二人は話が決まったと見てあっさりと言葉を返してまた述べた。

「それでまだ時間があるかしら」

「時間？」

「そうよ。いいお店を知ってるのだけれど」

「人間の店か」

「駄目かしら」

女が男に対して問うてきていた。

「料理のね。日本の料理だけれど」

「この国のか」

「私達が眠っている間にかんりの進歩があつたのです」

老人もまた彼に述べた。

「料理に關しても」

「料理に？」

「そうです」

老人はまた述べた。

「それはもう凄いもので」

「確かに世界は変わっているのはわかるが」

これは男もわかっていた。これまで世界をざっと見渡しただけで彼がまだ封印されていなかった頃から見て全く別の世界になってしまっていることは。よくわかっていた。

「だが。それでもだ」

「はい。料理は特にです」

「美味しいわよ」

女は楽しげに笑みを浮かべて彼にまた述べた。

「だから。どうかしら」

「そうだな。では俺も是非」

「ただ。貴方はお米は知らないわよね」

「米!？」

「それにお箸も」

「何だ、それ等は」

実際にこう返す彼だった。

「その米や箸というものは」

「やっぱりね。知らないと思ったわ」

「私は百の目ですぐに知ることができましたが」

「米は食い物だな」

男もこれはすぐに察しがついた。

「そうだな」

「ええ、そうよ」

「それはその通りです」

二人もまたその言葉を認めて頷いた。

## 第十話 権天その十一

「この国の主食よ」

「食べやすく実に美味しいです」

「そうか。美味しいのか」

「そしてお箸は」

次はそちらの話になった。

「それは何だ？」

「食器よ」

「皿と同じか」

「ええ。ただ手に持ってね」

「手に!？」

「それで使うのよ」

女が男に説明していた。

「二本で一对なのを持ってね」

「二本で一对か」

「簡単に申し上げると細長い棒を二本持ってそれで食べ物をつまむのです」

「細長い棒二本でか」

「そうです」

また述べる老人だった。

「そのようにして」

「わからんな」

ここまで話を聞いた男の感想だった。

「それを聞いてもな」

「そう。わからないのね」

「想像ができない」

首を傾げながらの言葉であった。

「どうにもこうにもな」

「だったら行っていいわ」  
「これが女の考えだった。」  
「それだったらね」  
「そうですね。やはりここは」  
「一緒に来てくれるかしら」  
「最初からそのつもりだ」  
男はまた二人の同胞達に対して述べた。  
「それではな。行こう」  
「わかりました」  
「それじゃあ」  
「それでだ」  
話を聞いているうちに彼はまた言うてきた。  
「その料理だが」  
「それですか」  
「何という料理なのだ？」  
彼が次に気になったのはそのことだった。  
「それで。この国の料理だというのが」  
「天麩羅よ」  
「天麩羅というのか」  
「油で色々なものを揚げて食べるのよ」  
「こつ男に説明する。」  
「そうして食べるのよ」  
「油で揚げるのか」  
「興味を持ったかしら」  
「ああ」  
静かに女に言葉を返す。  
「はじめて聞く料理だからな」  
「料理はもう完全に別のものになっているわ」  
「俺が封印される前の時代よりもか」  
「あの頃は何時だったでしょうか」

老人はふと彼等が封印される前のその時代について思いを馳せた。

「あの頃は」

「確かローマ帝国の時代だったかしら」

女が彼の今の言葉に答えた。

「カエサルというのがいたのは覚えているわ」

「ええ、あの人は覚えていますよ」

「俺もだ」

老人はにこやかに笑い男は相変わらずの険しい顔であった。だが

二人共その名前は知っているのだった。

「見事な人物でした」

「人とは思えぬ気配があつたな」

「確か東の方で救世主が出てその時だったわね」

「そうでした。その時に封じられていました」

「その時の髑髏天使にな」

「そうだったわね。確かね」

女もその時のことを思い出したうえで述べた。

## 第十話 権天その十二

「その二千年の間に人間は全く変わったわ」

「心はどうだ？」

「心は。変わっていないみたいよ」

悠然と笑って男の問いに述べた。

「そちらはね。相変わらず善と悪の間で揺れ動いているわ」

「人間の善と悪でか」

「そうよ。あくまでその狭い中でね」

「それはどうやら変わらないようです」

老人もまた述べてきた。

「人は。心だけは」

「そういうものか」

「ええ。それは変わらないわ」

「ただ。色々と学んではいるようですが」

「我々のように完全な善ではないのなら同じだ」

男は二人の話をここまで聞いたうえで述べたのだった。

「魔物としての完全な善でないのならな」

「魔物として、ね」

「違うか？我等は魔神だ」

自分達が何であるかということにまで話が及んだ。

「それならばだ。魔物の善である筈だ」

「そういうことになるのね。魔物として」

「魔物は魔物だ。人とは違う」

彼はまた言った。

「力を追い求めそれを手に入れる。違うか」

「その通りよ」

そして女もそれは否定しなかった。

「だから魔物なのよ。私達は」



「わかつているのなら言うまでもないな」  
「けれど。人にも同じように力を追い求めるのがいるわ」  
「この時代にもだな」  
「何度も言うけれど人の心は変わっていないわ」  
「女はまたこのことについて述べたのだった。」  
「それはね」  
「だからか。いるのか」  
「さて。それが髑髏天使にも及ぶかしら」  
「及べば面白いのですが」  
「老人はここでまたしてもにこやかに笑って述べたのであった。」  
「それで。また新たな」  
「催しになるわね」  
「ふん。若しそうなるのなら今度は早そうだな」  
「男はそのことには二人程興味はなさそうだったがこう述べた。」  
「どうやらな」  
「そうね。それじゃあ」  
「宜しいですか？」  
「ああ」  
「また二人の言葉に応えた。」  
「行くのだな」  
「そうよ。その天麩羅を食べにね」  
「この時代は他にも色々とありますし」  
「食べるのは好きだ」  
「男は表情を変えずに述べた。」  
「相変わらずな」  
「人はどうかしら」  
「この時代の連中は美味くなさそうだな」  
「ええ、それはわかるわ」  
「女はそれについては男と同意であるようである。」  
「どうもね。匂いがね」

「それは昔とは違うようだな」

「食べているものがかなり変わっているせいかしら。少なくとも二千年前のあの味でないことはわかるわ」

「人はあの味に限る」

男はこうも述べた。

「あの味でない限りは。食うに値しない」

「まして他にも美味しいものがあれば」

「そういうことだ。我等は神だ」

そしてまたこの話をした。

「既に力を得る必要もないしな」

「そういうことね」

「まあ私は人を食べることはないの」

老人は二人の話を聞きつつ穏やかな笑みと共に述べてきた。

「あまりそういうことはわかりませんが」

「そういえばそうか」

「あんたはそうだったわね」

「はい」

二人に対しても答えるのだった。

「ですから。そちらのお話には」

「わかった。それではだ」

「この話はこれで終わりにするわ」

二人も老人の言葉を受けて人食いの話は止めた。そのうえでまた元の話に戻るのであった。

## 第十話 権天その十三

「では。その天麩羅とやらをな」

「食べに行きましょう」

「そうしましょう。では」

老人はここでまた男に声をかけてきた。

「今回の魔物は。御願いしますよ」

「わかった」

男は老人のその言葉に対して静かに短く、だが強く言葉を返したのだった。

「それではな」

「そのことは御願いします」

三人はこれで話を終えそのまま何処かへと姿を消した。後にはその泉達が流れたままだった。静かにその流れる音を聞かせながらそこにあるのだった。

牧村は相変わらずテニスにフェシングにトレーニングに励んでいた。その顔つきも身体つきも次第に変わりより精悍なものになっていった。

それは当然ながら周りからもわかった。ある日若奈の喫茶店に行った時にカウンターにいる彼女からそのことを言われたのであった。

「最近変わったわね」

「そうか」

「ええ。顔がもう違うわ」

まずはカウンターの席に座る彼の顔を見て述べた。

「何か。もう」

「どんな感じだ？」

「引き締まって鋭くなって」

「元からそうだと言っていなかったか？」

「余計によ」

彼を昔から知る若奈の言葉である。

「余計に。もう陸上部員というよりは」

「いうよりは？」

「ちょっとこれで正しいかどうかわからないけれど」

「ここで少し首を傾げさせるのだった。」

「あれね。騎士かしら」

「騎士か」

「戦士っていうわりにはスマートだし」

「これが若奈の今の牧村を見ての言葉である。」

「だから。それで」

「そうか。今の俺は騎士か」

「とにかく。引き締まって」

「このことを言うのであった。」

「鋭いから。けれどあれね」

「何だ」

「野生とかはないわね」

「このことも感じ取っているのだった。」

「そういうのはね。感じないわ」

「別に野生を求めてはいない」

「それは自分から言う牧村だった。」

「それはな」

「そうなの」

「そうだ。だが騎士か」

「牧村は彼女のその言葉にあるものを見たのだった。」

「今の俺は」

「丁度サイドカーにも乗ってるわよね」

「ああ」

「話は今度はそれに及んだ。」

「それはな」

「それもあるし」

「つまりサイドカーは馬になるのだな」

「何か。そうね」

今度は首を少し捻ってから彼に述べた。

「そうなるわね。牧村君が騎士だと」

「そういうことか」

「私の考えというか見たところだけれど」

自分の主観であるというのは断るのだった。

「そんな感じに見えるわ」

「そうか。そう見えるのか」

「ええ。とにかく変わったわね」

そしてまたこう言うのである。

「余計に。強くなったような」

「身体はか」

「精神的にもじゃないの？」

若奈はまた彼に告げた。

「そちらも。そう見えるけれど」

「果たしてそうかな」

このことには自分で疑問符をつけたのだった。

「それは」

「何かあったの？」

若奈は不意に彼に問うてきた。

## 第十話 権天その十四

「それを何度も潜り抜けたみたいな」

「何度もか」

「ええ。それで鍛えられて強くなったみたいな」

「こう彼に言うのだった。」

「そんな感じだけね」

「別にな」

当然ながら詳しいことは彼女には言わないのだった。

「何もなし」

「そうなの？」

「そうだ。何もなし」

髑髏天使のことは言うわけにはいかなかった。ここでも完全に隠している。

「何もなし」

「だったらいいけれど」

「だが。それ程変わったか」

「ええ、それはね」

あらためて牧村の言葉に頷く若奈だった。

「スポーツ選手から騎士になって感じで」

「動きも変わってきたか」

「前よりもずっと素早くなった気がするわ」

若奈はまた答えた。

「それに力も強くなった感じでね」

「ならいいが」

「あと食事の量も増えてない？」

「むっ!？」

「ほら、今だって」

話は喫茶店に相応しいものになってきた。若奈が言うのだった。

「コーヒーとケーキ頼んでるじゃない」

「タルトをな」

「そう、さくらんぼのタルト」

この店での人気メニューの一つだ。コーヒーは若奈の父親が、そして菓子類は母親がこだわっているのだ。それだけにかんりの味がある。

「前だったらコーヒーしか頼まなかったじゃない」

「ああ」

「それが今じゃお菓子まで頼んで」

彼女が言うのはそこであった。

「やっぱり食べる量が増えてるわよ」

「そうだったか」

「まあこっちとしては注文が増えていいけれど」

「それだけ店が儲かるか」

「そういうことよ」

ここまで言うてにこりと笑うのだった。これは商売人の娘として当然のことでありそれに基づく笑みであった。

「やっぱりね。一つでも注文が多いとね」

「嬉しいか」

「ええ。ところで今日のコーヒーだけねど」

「もうそろそろできるな」

「ええ、もうすぐよ」

牧村に伝えて述べてきた。

「今丁度最後の仕事だから」

「一仕事!?!」

「そう、コーヒーのね」

こっちは表現したのであった。

「それが終わってからだから。もうちょっと待ってね」

「コーヒーも働くものか」

「当たり前じゃない。コーヒーは生き物よ」

牧村の意外といった感じの言葉に当然という感じで返すのだった。

「だからね。働くのよ」

「そういうものか」

「何でもそうじゃない」

「そしてこうも言う若奈だった。」

「コーヒーやお水を温める火だつて」

「火もか」

火という言葉聞いて目を僅かに鋭くさせる牧村だった。

「それもか？」

「?どうしたの？」

若奈はその鋭くなった牧村の目に気付いて問った。

「何か急にまた鋭くなったけれど」

「いや、何でもない」

やはりここでも答えない牧村だった。

「何でもな。しかし」

「しかし？」

「そうか。働くのか」

若奈の言葉に頷いた形になっていた。



第十話 権天その十五

「あらゆるものが。それぞれ」

「そうよ。お水にしろそうだし」

「水もだな」

「何でも働いてやっといういいコーヒーができるのよ」

若奈はあくまでコーヒーについて話していた。だから牧村がどうして鋭くなつたのかは気付かないのであった。これは仕方のないこともでもあった。

「それでね」

「そういうものだな」

「そういうものよ。それでね」

「ああ」

「コーヒー。ブラックよね」

「今日はな」

「わかつたわ。じゃあそのままだね」

出すと言つのだった。

「ミルクはつけないわよ」

「それで頼む」

「了解。けれど今日はちょっと珍しいんじゃないの？」

若奈はようやくできたコーヒーを白いカップに入れながらまた彼に言ってきた。白いカップに注がれた黒いコーヒーから湯気と香りが立っている。

「ブラックなんて」

「よく飲むと思うが」

「そうかしら」

牧村の今の返事に首を捻つた若奈だった。

「私はそうは思わないけれど」

「ウインナーだというのだな」

「ええ」

やはりそれであった。彼女のイメージでは牧村が飲むコーヒーといえばそれなのだった。生クリームをコーヒーの上に置いたあれである。

「あれだとばかり」

「親父さんがいる時には結構それを頼む」

「お父さんがいる時に？」

「たまたまだな」

実はそうなのだった。彼はその時の気分でコーヒーを選んでいただけ。若奈がいる時にはウィンナーコーヒーを頼むことが多いのもそういうことなのだった。

「それはな」

「そうだったの」

「そうだ。だから今の気分は」

「ブラックってことね」

「そういうことだ。だからブラックを」

「はい」

そのブラックを彼に差し出すのだった。やはりミルクもつけてはいない。

「どうぞ。満足してもらえたら嬉しいわ」

「どれ」

牧村はそのブラックを受け取るとまずは己の前に置きそのうえでカップを手に取る。そうして一口飲んでみてその味を確かめる。すると。

「ふむ」

「どう？」

「いいな」

まずはこう述べたのであった。

「いい味だ」

「そう。よかった」

「コーヒー豆の素材の味をよく生かしている」

「コーヒー豆についても舌で見ている」

「殺さずにな」

「お父さんによく言われてるのよ」

若奈は今の牧村の感想に微笑んで答えた。

「コーヒーは生き物だって」

「だから仕事をするのだな」

「ええ。いつも言われてるのよ」

「そうか。あの親父さんらしいな」

「それが美味くいったみたいね」

「それに水もいい」

牧村は今度は水について述べた。コーヒーのその水だ。

「この水は事前に沸騰させて湯冷ましをさせた水だな」

「そうよ」

そのことにも微笑んで答える若奈だった。

「うちのお店じゃそうしてるのよ。それでその白湯をコーヒーや紅茶にね」

「それでいい。それだけで全く違う」

「どうしても水道や井戸のお水だと問題があるからって」

若奈は言葉を続ける。

「お父さんが言うのよ」

「水道の水はそのままだとどうしてもカルキの匂いや味が残る」

牧村の目が微かに歪められた。

## 第十話 権天その十六

「そして井戸は衛生的に不安だ」

「まあ井戸は今殆どないけれどね」

「それでもだ。やはり不安が残る」

「やっぱりそつちも独特の味だしね」

「そういうことだ。やはり白湯がいい」

「六甲とかのお水もあるけれどね」

「ここは神戸だからな」

その六甲のある神戸である。

「元々その水だがさらに美味しくするには」

「そういった工夫が必要だった。お父さんに言われているから」

「あの親父さんの言うことを忠実に守っているか」

「そうじゃないと美味しいコーヒーはできないのよ」

今そのことをはつきりと言う若奈だった。

「だって。お父さんのコーヒーって」

「そうだな。絶品だな」

「ええ。だから」

父の味を生かそうと努力しているのだった。若奈も考えているのだった。

「言われた通りにね。しているのよ」

「それでいいと思う」

とりあえずコーヒーの五分の一程度を飲んでから一旦カップを皿の上に置いての言葉だった。なお彼はコーヒーには砂糖は入れてはいない。

「少なくともあの人のコーヒーは最高だ」

「最高ののね」

「俺は今まであそこまでのコーヒーを飲んだことはない」

こつまで若奈に対して言った。

「あの人のコーヒーが一番だった」

「そうよね。やっぱり」

「ああ。しかした」

「しかし？」

牧村はここで話を变えてきた。若奈もそれを聞く。

「どうかしたの？」

「御前のコーヒーもいいな」

「そんなに？」

「ああ。流石にあそこまではいかないが」

だがこのことは前以って言うことは忘れなかった。

「だがな。それでも」

「いいのね」

「かなりな。これはいい」

また言った。

「あと何年かしたら親父さんを超えるかも知れない」

「ちよつと牧村君」

今の牧村の言葉に赤面してしまう若奈だった。その白い顔が一気に朱に染まった。

「それは言い過ぎよ」

「俺は嘘は言わないが」

牧村は謙遜する彼女にこう返す。

「それは知っているとと思うが」

「それはそうだけれど」

「舌は嘘はつかない」

こつも言った。

「だからだ。あと何年かしたらきつとな」

「お父さんよりもいいコーヒーを私が」

「このまま努力を続けていればなれる」

また若奈に対して言う。

「必ずな」

「上から目線なのはいつものことだけれどその言葉は好きになつたわ」

若奈もまんざらではない感じになっていた。

「何かね」

「そうか。それなら有り難い」

「それでケーキだけねど」

「今度はそちらだな」

「はい、どうぞ」

そのさくらんぼのタルトを出してきた。薄い狐色のパイの中に白と赤の世界がある。見れば紅のさくらんぼの実が幾つもタルトの上に置かれている。

「これはお母さんが作ったのよ」

「奥谷が作ったものじゃないのか」

「これは違つよ」

こう牧村に答えるのだった。

「お母さんがね」

「そうか。これはか」

「お菓子の勉強もしてるわよ」

だがここでこうも言つたのだった。

## 第十話 権天その十七

「毎日ね。こっちも」

「お菓子もか」

「やっぱりね。どっちもやりたいのよ」

視線を横にやって述べた言葉だった。

「コーヒーもお菓子もね」

「両方見に着けたいのか」

「お父さんのもお母さんのも身に着けたいのよ」

言葉を少し変えてきた若奈だった。

「どちらもね」

「それならかなり大変になるな」

「それでもよ」

牧村の言葉にも確かな声で答えるのだった。

「どちらもね。私がこのお店継ぐのは決まってるし」

「それでか」

「妹達も頑張ってるけれどね」

実は彼女は長女なのだ。三人姉妹のうちの長女なのである。

「それでも。私がお姉ちゃんて家を継ぐから」

「随分気が張ってるな」

「否定はしないわ。それで牧村君はね」

「俺は？」

「味を見て欲しいんだけど」

「コーヒーとお菓子のか」

「コーヒーは合格よね」

まずはコーヒを再び確かめてきた。

「そっちは。そうよね」

「さっき言った通りだ」

落ち着き払った声で述べた。

「見事なものだ」

「そうよね。だったらやっぱり今度は」

「お菓子もか」

「お金の方はサービスするから」

「さりげなくいい条件を出してもきた。」

「だから。食べてみて」

「美味かったら頼む」

「御願いするわね」

「ああ。しかしこのタルトは」

話をしながらタルトを食べていた。その柔らかい中身も硬めの生地もさくらんぼも味わいながら若奈に対して述べるのだった。

「いいな。やはり」

「お母さんのタルトだからね」

「奥さんは元々ケーキ職人だったな」

「そうよ。覚えてくれてるのね」

「長い付き合いだからな」

時間を出して述べるのだった。

「だからな」

「そういえばここに来るようになって長いわね」

「家族で来たのは小学校の時だったな」

「その時に牧村君とはじめて会ったんだったわね」

「それから同じ中学校になってな」

「で、今に至ると」

二人は今度はお互いの出会いについて話した。

「思えば私達も結構長いわよね」

「ああ。まさか大学まで一緒になるなんてな」

「あら、嫌なの？」

ここでその垂れ目をくすりと頬笑まさせる若奈だった。

「それは」

「嫌か、か」



「そうよ。そこはどうなの？」

「嫌な人間とは話をしないし嫌いな場所には絶対に足を踏み入れない」

牧村は彼女の今の問いには直接答えずにまずはこう述べた。

「俺はな」

「それはそのまま受け取ってもらっていいのかしら」

「そう思うのなら思えばいい」

「相変わらず微妙に素直じゃないわね」

「そうか」

「そうよ。本当に無愛想なんだから」

そうは言ってもその顔は笑ったままの若奈だった。

「格好つけてるし」

「そんなつもりもないがな」

「けれどそう見えるわよ」

「見えるが実際は違う」

「ぶしつけな言葉も相変わらずね。その癖色々と世話を焼くし」

牧村のこうした性格も昔からなのだった。その喋り方や態度は無愛想で傲慢に思える部分も多々あるがそれでも人に嫌われていないのはこうしたところがあるからなのだ。意外と複雑な男なのだ。

## 第十話 権天その十八

「変わってるって言えば変わってるわね」

「自覚はしている」

だが気にはしていないことがわかる返答だった。

「それはな」

「そういうのも昔からね」

「そうか」

「そうよ。まあ私は馴れているからいいけれど」

若奈はここで彼にこうも言うのだった。

「けれどそんなだと客商売は無理よ」

「それをするつもりはない」

こう返すだけの牧村だった。

「自分でも向かないのはわかっている」

「それについて努力するつもりはないのね」

「ない」

一言であつた。

「無理なこと適性がないこともわかっているしな」

「このことはあっさり諦めるのね」

「しかし作ることはできる」

不意にとりかかるといふ感じでも言ってきた。

「それはな」

「ああ、作るのはね」

「そうだ。料理はな」

料理についても言うのだった。

「それはできる」

「牧村君ってお料理もできるの」

「何なら作ってみせるが」

「ケーキも？」

「勿論だ。ケーキを作るのも好きだ」

「ふうん、それなら一度見てみたいわね」

若奈は彼のその言葉に興味を抱いて言うのだった。

「是非ね」

「今度見せようか」

「ええ、それで御願ひするわ」

そしてその言葉に頷きもするのだ。

「一体どんなものか食べてみたいわ」

「わかった。では今度作ってくる」

「それでどんなケーキなの？」

「何がいい？」

コーヒ―を右手に持ちつつその目を若奈に向けて問うた言葉であった。

「それで。どうしたケーキが」

「とりあえずケーキなら何でもいいけれど」

視線を上により考える顔で牧村に述べた。

「そうね。やっぱりここは」

「ここは？」

「タルトがいいわ」

彼女の注文はタルトであった。

「今牧村君が食べているさくらんぼのタルトね」

「これか」

「そう、これ。これなら今食べてるし比べ易いじゃない」

「俺のが美味いかそうかだな」

「その通りよ。それでいいかしら」

「ああ」

そして牧村も若奈のその言葉に対して頷くのだった。

「ならそれでいい。さくらんぼのタルトか」

「それね。タルトも作られるのよね」

「それもな。作ることができる」

表情は変わらないが声は真剣なものであった。

「何なら豆腐でケーキを作ることまでできる」

「最近噂になってるあれね」

「豆乳は意外とよく合う」

ここまで知っているのだった。豆腐は淡泊な為何に対しても合うのだ。思えばかなり凄い食べ物である。

「だからだ。それでもな」

「実はお母さんも最近そっちも調べているのよね」

「そうなのか」

「そうよ。だからそちらも期待しているわね」

「今度な。まずはさくらんぼのタルトだな」

「ええ、まずはそれを御願い」

話はそれで決まりだった。

「それをね。いいわね」

「わかった。そういうことだな」

「ええ。コーヒーは淹れられるかしら」

「コーヒーはな」

ここでは言葉が少し濁ったのだった。

## 第十話 権天その十九

「実は淹れたことがない」

「そうなの」

「家ではコーヒーは妹が淹れる」

これは彼女の好み故のことである。その妹の。

「あいつがいつも淹れて飲んでいる。インスタントは俺が自分で淹れているが」

「ああ、未久ちゃんってコーヒー自分で淹れてるの」

「それがお袋がな。二人共コーヒーにはこだわりがある」

「ふうん、それはまた将来有望ね」

若奈は彼の妹の言葉を聞いてこう述べた。実は彼女と未久は互いに顔見知りであるのだ。だからここでその名前を言葉に出したのである。

「何ならアルバイトにも雇いたいわね」

「中学生をか？」

「高校生になつてからよ」

言葉はすぐに訂正された。

「それからね。それだと問題ないでしょう？」

「ああ」

「その時になったらこつちからスカウトするから」

既に半ば決めているような言葉であった。

「こつちからね。そういうことだね」

「わかった」

牧村の若奈のその言葉に対して頷いた。

「では伝えなくていいな」

「その時になればだから」

また言う若奈だった。

「それでね。御願いね」

「ああ。それじゃあそれはそれでな」

「そういうこと。ところで牧村君」

「むっ!?!」

ここで話を変えてきた若奈だった。牧村もそれも目を動かした。

「何だ?」

「これから帰るのよね」

「ああ」

最初からそのつもりだったので率直に答えた。

「そのつもりだが」

「そう。だったらね」

若奈はそのことを聞いてさらに言ってきた。

「そのさくらんぼのタルトのことだけれど」

「それが」

「そう。そのことだけれど」

話はそれについてであった。

「一つ気をつけて欲しいことがあるのよ」

「何かあるのか」

「さくらんぼを買う場所は駅前の百貨店が一番よ」

「こっぴつ彼に言うのである。」

「駅前のね。あそこの地下で売っているさくらんぼが一番いいのよ」

「あそこのがか」

「他のもいいのが揃ってるけれどさくらんぼはとにかくね」

「あそこのものが一番なんだな」

「そうよ。だからね」

話がありきたりで人によっては極めて下らないことである。だが喫茶店で菓子を扱っている彼女にとってはかなり真面目な話であった。

「さくらんぼだけは。あそこだね」

「そうか。わかった」

牧村は彼女のその話に対して真面目な顔で頷いた。

「それではな。さくらんぼはそこで買おう」

「まああそこなら食材は大体いいのが揃うわ」

そしてこうも述べる若奈だった。

「お菓子の系統はね」

「うちのお袋はよくスーパーを利用するがな」

「八条大学の近くのあのスーパーよね」

「そう、あそこだ」

「あそこはお魚かしら」

考える目で述べた。

「お魚は家で食べるだけだからあまりマークはしていないけれど」

「魚はあそこか」

「ええ。あそこも品がいいけれどお菓子に関しては百貨店が一番なのよ」

その百貨店についてさらに述べるのだった。

「品の揃い方も質もね」

「質もか」

「この二つがあれば後は一つだけよ」

「腕だな」

「そういうこと」

牧村に対して微笑んで答えてみせた。

「後はね。期待しているわよ」

「ああ、わかった」

若奈の言葉に頷いた。そしてコーヒーとタルトを楽しんだ後で店を出てサイドカーを百貨店の駐車場に停めた。そしてその地下に入ったのだった。

## 第十話 権天その二十

そこは人でごった返し様々な品が並べ置かれていた。パスタや生鮮もあるが牧村は今はその中には目を向けず菓子や果物のある場所に向かった。そうしてまずはさくらんぼを手に取るのだった。その周りには他にも苺や葡萄等様々な菓子里に使える食材が揃っていた。その数も種類も実に多彩だった。そして。

「あいつの言う通りだな」

ここで牧村はさくらんぼを手に取って見つっこう呟いた。

「これはいい。見事なものだ」

そのさくらんぼは赤く眩いまでに輝いていた。色彩だけでなくその果肉のつき具合も見事なものでしかも新鮮そのものだった。これならば最高のタルトが作られる、牧村もそのことを確信した。

そのさくらんぼを左手に持っている籠に入れそうして次は菓子の場所に向かおうとするとここで。彼の前にあの男が姿を現わしたのだった。

「会う約束はしていないが」

「人と会うのに約束はしない主義だ」

あの男だった。牧村の問いにこう返してきたのだった。

「俺はな」

「随分と礼儀には無頓着なようだな」

「少なくとも今はそうだ」

また言葉を返してきた。

「今はな」

「そうか。それではまたか」

「その通りだ」

男のぶしつけな言葉はそのままだった。

「もう一人呼んでいたのだ」

「そいつは何処だ」



「外にいる」

既に戦闘に心を向けている牧村に告げた。

「外にな」

「わかった」

「それまで貴様の都合を済ませておくのだな」

「すぐには言わないのか」

「これが貴様の最後の時間だ」

鋭い目での言葉であった。

「ゆつくりと過ごすがいい」

「随分と余裕があるのだな」

「俺の連れて来た魔物だ」

男はこう言った、

「手強くない筈がない」

「確かにな」

牧村もまたそれはよくわかっていることだった。否定することはできなかった。

「あのマニトーという奴もな」

「惜しい男だった」

ふと男の言葉に悔やむものが混じった。

「しかしだ。その弔いの為にもだ」

「そいつを出してくるのだな」

「その通りだ。上にいる」

そして牧村にこう告げた。

「上で貴様を待っている」

「わかった。では買い物を済ませてから行こう」

「買い物!？」

「今俺が行っていることだ」

男に対して静かに告げた言葉である。

「こうしてな。ものを金で手に入れることだ」

「それを買う物というのか」

「そうだ。それは知らないようだな」  
「俺のいた国ではまだそんなものはなかった」  
男は牧村と彼が手にしているそのさくらんぼを見つつ述べてきた。  
「俺が封印された時にはな。まだな」  
「そうか。それで知らないのか」  
「その通りだ。だが随分と面白そうなものだな」  
男は買い物というものに対して興味を抱いたようであった。  
「それもまた」  
「中には病みつきになる奴もいる」  
牧村は男の目を見つつ答えた。  
「離れられない奴がな」  
「そこまで面白いものか」  
「人それぞれだ。だが話はわかった」  
話をここで一旦終わらせて言うのであった。  
「これでな。上だな」  
「そうだ、上だ」  
また答える男であった。  
「楽しみにしているのだな」  
「ふん。今度もまた随分と手強い相手なのか」  
「それはさっき言った通りだ」  
このことは繰り返さない男だった。

第十話 権天その二十一

「そういうことだ。それではな」

「わかった。しかしだ」

「何だ？」

男は牧村の前から姿を消そうと踵を返したがそこで足を止めて彼に顔を戻してきた。

「貴様はまだ闘わないのか」

「俺は神だ」

まずは己のことを言って答えとしてきた。

「神は人とは闘わない」

「だからか」

「俺と闘う為には神になることだ」

そしてこうも言うのだった。

「わかったな。俺もまたそれを待っている」

「俺が神にか」

「天使から神になるか」

男は牧村を見据えたまま言葉を続けてきた。

「それとも」

「それとも？」

「全ては貴様次第だ」

「ここから先は言わずにこう言うだけだった。

「全てはな」

「そうか。やがて貴様等と闘うことができるのだな」

「待っている」

男の今度の言葉はこれだった。

「どちらにしろ。貴様が我等に近付くのをな」

最後にこう言って牧村の前から姿を消した。牧村はそれを見送り姿が消えたところで買い物に戻った。そしてそれを終えて百貨店の

外に出るとそこに一人の男が立っていた。

「貴様か」

「如何にも」

その男は牧村のその問いに静かに答えてきた。長い髪がまるで柳の様に風に揺れてそこに立っている。

「俺が髑髏天使を倒す者だ」

「それで名は何という？」

「チヨンチヨン」

「こつ名乗ってきたのだった。」

「それが俺の名だ」

「チヨンチヨンか」

「場所を変えましょう」

後ろに夕陽を背負いつつ牧村に言ってきた。

「ここでは人目につく」

「魔物が人目を気にするのか」

「貴様にとって不都合だと思っからだ」

「だからだというのである。」

「だからだ。俺は別にどうでもいいのだがな」

「そうだな。ここで髑髏天使になるのは俺にとってもいいことではない」

それはもう言うまでもないことであった。人前で髑髏天使に変身すれば一体どういったことになってしまうのか。それは自明の理であった。

「では。その言葉を受けさせてもらおう」

「俺の言葉を受けてくれて感謝する」

「感謝される道理はない」

「牧村は今度はこつ返した。」

「それはな」

「いいというのか」

「俺の為にそれを受けた」

彼の今の言葉である。

「それだけだ」

「そうか」

「そしてだ」

牧村は彼に問うてきた。

「貴様の名は。何というのだ？」

「ポルトー」

「ポルトーだと」

「そうだ」

こつ名乗ってきたのだった。

「それが俺の名前だ」

「そうか。ポルトーというのか」

「その力。すぐに見せよう」

自信に満ちた言葉であった。

「貴様の死と共にな」

「面白いことを言う」

牧村にとっては最早こつしたやり取りは馴れたものになっていた。

だから表情も特に変えはしなかった。

「では俺もだ。この力を貴様に見せよう」

「場所は何処がいいか」

「何処でもいい」

彼はまた言った。

「貴様の望む場所だな」

「何処でもか」

「そうだ。俺は場所は選ばない」

こつも言うのであった。

「何処でも。貴様を倒せる」

「言っておくがマニトーのことは忘れてはいない」

ここでそのポルトーは不意にあのマニトーの名前を出してきたのだった。

「絶対にな」

「マニトー。あいつか」

「忘れたわけではあるまい」  
言葉が鋭くなっていた。

第十話 権天その二十二

「あの男のことは」

「如何にも」

そして牧村もまたそのことを隠しはしなかった。

「手強い奴だったとだけ言っておく」

「仇は取る」

その声がさらに鋭いものになった。

「あいつの仇はな」

「友情か？」

「そういうところだ」

友情という言葉聞いて。牧村はその目をぴくりと動かした。

「魔物にもそうした感情があるのか」

「不思議か？」

「少なくともそうは思っていなかった」

こう答えるのだった。

「魔物にそうした感情があることはな」

「だが。俺とあいつは古い付き合いだった」

「古い、か」

「何百年もな。その無念も晴らす」

「貴様の考えはわかった」

牧村は彼の言葉をそこまで聞いたうえで述べた。

「しかし俺とても倒されるわけにはいかなくてな」

「では。行くか」

「ああ」

こうして二人は闘うべき場所に向かった。そこは百貨店の裏側の殺風景な空き地だった。風が吹き荒び寂しげな場所である。そこで二人は向かい合ったのである。

「それではだ」

「はじめなのだな」

「その通りだ」

先に身構えたのはポルトーの方だった。そして。

「死んでもらう」

この言葉と共にその身体を変えてきた。身体は青い鱗に包まれていき顔が前に突き出て尻尾が生えてきた。赤く長い舌が出てそのうえ四足になった。見ればそれは青く大きな蜥蜴であった。

「それが貴様の真の姿なのだな」

「如何にも」

その巨大な蜥蜴の姿で答える。優に人の倍はある。

「怖気付いたわけではあるまい」

「もう慣れているからな」

平然と答えるのだった。

「最早な」

「だから何とも思わないのか」

「思わないと言えば嘘になるが」

一応はこう言う牧村だった。

「だが」

「だが？」

「それが魔物だな」

彼の言葉であった。

「そうした姿が」

「そうだがな」

「なら特に言うことはない」

今度は彼が構えに入りつつ述べた。

「倒すだけだ。それだけだ」

「ならば貴様もまた」

「やらせてもらう」

まずは両手を拳にしてきた。そして。

その両拳を胸の前で打ち合わせる。そこから眩い光が放たれ全身



を包み込む。それが消えた時髑髏天使斗なってそこに立っていた。  
「行くぞ」

右手を少し前に出して握り締める。これがはじまりの合図となった。

前に出たのは髑髏天使だった。その右手に剣を握っている。

そしてすぐに大天使になる。その背に巨大な翼が生え左手にも剣を持った。逆手に持っているサーベルであった。

剣を両手に持ち今空に舞い上がる。だがそこでポルトーが動いたのだった。

青い炎を口から放ってきたのだった。それは空を舞う彼に襲い掛かってきた。

「むっ!?!」

「大天使のことは聞いている」

炎を放ったポルトーの言葉だ。

「既にな」

「そうか」

その言葉を聞きながら首を右に捻ってその炎をかわした。だが掠った場所が何と凍ったのだった。

「炎で凍っただと!?!」

「俺の炎はただの炎ではない」

空中にいる髑髏天使に対して告げた言葉であった。

## 第十話 権天その二十三

「この青い炎は氷の炎」

「氷の炎だと」

「そうだ。全てを凍らせる魔性の炎だ」

「こう言うのであった。」

「だからだ。今の貴様では勝てはしない」

「貴様の言いたいことはわかった」

彼の今の言葉から察した髑髏天使だった。その髑髏の奥の目が強く光った。

「つまりだ。その青い炎を打ち破ってみせろということか」

「できるか？貴様に」

「できなければ最初から言いはしない」

その強い光の目の言葉であった。

「ならば。ここは」

「むっ!？」

「見せてやろう」

応えながら今その全身を赤く染めた。炎の天使、権天使になったのだった。

その赤くなった髑髏で以って。彼は着地しそのうえでポルトーに對してまた告げるのである。

「これでいいのだな」

「そうだ」

ポルトーはその赤い身体を見て不敵に笑うのだった。

「そうでなくては面白くはない」

「それ程この力と闘いたいというのか」

「俺のこの青い炎と貴様のその赤い炎」

彼は言う。

「どちらがより強いか勝負だ」

「わかった。それではだ」

着地した髑髏天使はあらためて構えに入った。そのうえでまた言うのである。

「その青い炎。全て溶かしてやる」

そう言い右手の剣を横に振るった。そうすることによってその剣から炎を放ちポルトーに対してぶつけんとしたのである。まずはそれからだった。

「来たか」

「さあ。これはどうする？」

「こうしようぞ」

その不敵な笑みをそのままにまた口から青い炎を放ってきたのであった。それで髑髏天使が放ったその赤い炎に対さんというのだった。

赤い炎と青い炎は空中でぶつかり合いそのまま何かが激しく溶ける音を立てて空中で四散して果てた。後には何も残らなかった。

「まずは引き分けというところか」

「ふん」

髑髏天使はポルトーの今の言葉に不快気に声をあげた。

「この程度は何ということはないか」

「まさか今のが最大の技というわけではあるまい」

ポルトーは今度は髑髏天使に対して鋭い視線を向けてきていた。

「それはどうだ？」

「その通りだ」

そして彼もそれを否定しないのだった。

「生憎だが俺はこの程度ではない」

「そうか。やはりな」

「ならば見せよう」

また攻撃態勢に入った。

「今ここでな」

「むっ！？」

今度は周りに炎の柱を出してきた。全部で八本あった。

「この炎の柱でだ」

「柱か」

「そうだ。これはかわせるか」

その八本の柱を全てポルトーに向けてきたのだった。柱達は唸り声をあげつつそれぞれ複雑な曲線を描いてポルトーに向かって来た。

これはかわせないかと思われた。ところがであった。

「しゃらくさいものだ」

「何っ!？」

「そう来たならばこうするだけだ」

こう言いつつ己のその蜥蜴の身体を炎に包んだのだった。その青い炎が彼の全身を包み込むとそれで髑髏天使の柱をあえて受けて全て無効化したのであった。またあの激しく溶け合う音が響いてその中で炎達が消え失せてなくなってしまったのであった。

「こうな」

「己の身体からも炎を出したというのか」

「如何にも」

髑髏天使に対して静かに答えてみせた。

「その通りだ」

「口から放てるだけではないのか」

「俺は青い炎、氷の化身」

自分自身での言葉である。

## 第十話 権天その二十四

「口からだけでなく身体の全てからこの炎を放てることができるのだ」

「そういうことか」

「そうだ。貴様がそうやって炎を出せるのと同じだ」

こう髑髏天使に対して告げるのだった。

「それはな」

「どうやら。思った以上に一筋縄ではないな」

髑髏天使もそのことを認めるしかなかった。

「ならばだ」

「どうするつもりだ？」

「こうさせてもらう」

「むっ!？」

何とここで髑髏天使は。己の右手に持つその剣をポルトーに対して投げつけてきたのであった。

剣はそのまま一直線に向かう。ポルトーは彼の今の行動を見て眉を顰めずにはいらなかった。

「何を考えている!？」

その顰めさせた目での言葉である。

「己の武器を投げるなど」

「すぐにわかる」

彼はその問いに対してこう述べるだけだった。

「すぐにな」

「すぐにだと」

「そうだ」

この時ポルトーは剣を見ていた。それ以外はほぼノーチェックだったのである。

「我が剣の炎をな」

「炎だと!？」

「そうだ。これならばどうだ」

剣はポルトーの前に突き刺さった。そうしてそこから激しい炎を噴き出してきたのであった。

「ぬっつ!？」

「普通にやったのではかわされ防がれる」

彼は言う。

「ならば。これならばだ」

「小癩な真似を」

だがその噴き出す紅蓮の炎を見てもその余裕は変わらない。

「その程度で俺は」

「どうするつもりだ？」

「俺の青い炎を溶かすことはできない」

こう言ってまたその全身を青い炎で包み込んだ。またしてもそれで防ごうというのは明らかだった。

「この青い炎。この程度でな」

「面白い。根競べをするつもりか」

「貴様がそう来るならばだ」

強い声で述べてきた。

「俺もまた。そうさせてもらう」

「面白い。ならば俺もその勝負を受けよう」

彼はここで剣の前に来た。そしてその身体からも紅蓮の炎を噴き出させてきたのであった。

「俺の赤い炎と貴様の青い炎、どちらが勝つのかをな」

「ふん。負けた方が滅びるといっわけか」

「その通りだ」

まさに命懸けの勝負である。

「さあ。これならどうだ」

「思ったよりも気概のある男だな」

ポルトーはそんな彼の心を見て言うのだった。

「どうやらな」

「勝負は命を賭けるもの」

彼は言った。

「だからこそだ」

「貴様は俺が命を賭けるだけはある」

ポルトーはまた髑髏天使を褒め讃えてきた。

「まさにな」

「褒めずともいい。さあ、どちらが生き残るか」

「うむ」

「勝負だ。行くぞ」

「参る」

お互い言い合いそうして炎を出し合う。赤い炎と青い炎がせめぎ合う。互いの身体も紅と蒼に輝く。その闘いが暫く続いたがやがてポルトーの身体が揺れ動いてきた。

「むっ!？」

「俺の負けだな」

彼はこう言ってきた。

「髑髏天使よ」

「何だ」

そして髑髏天使に声をかけてきたのだった。

「どうやら貴様の勝ちだな」

「俺のか」

「そうだ。俺は最早限界だ」

見ればその青い炎が少しずつ弱まってきた。

「これでな。負けを認める」

「そうか」

「どうやら貴様は俺が思っていた以上に恐ろしい男のようだ」

「随分と俺を褒めてくれるものだな」

「褒めているのは事実だ」

彼もそれは認めるのだった。

「しかしだ」

「しかし？」

「これは事実だ」

「こう言うのだった。」

「だからこそ貴様は勝った」

「そういうことか」

「この力比べにな」

今の炎の対決をこう表現したのだった。

「それが何よりの証拠だ」

「ならばその言葉受けよう」

「こう言われては髑髏天使も受けるしかなかった。」

「貴様のその言葉をな」

「遠慮することはない。ウエンティゴ様には申し訳ないがな」

「あの男の名前だな」

「その通りだ」

そのことも認めてきた。

「あの方のな」

「何時かあの男とも闘う時が来るのかもな」

「その時が早いことを祈る」

彼はまた髑髏天使に対して言ってきたのだった。

「できるだけな。それを見届けられないことだけが心残りだが」

「そうか」

「さらばだ」

ポルトーの身体をまた青白い炎が包んだ。しかしその炎は先程ま

での彼自身の炎とはまた違う炎であった。

「髑髏天使よ、貴様と闘えたことを俺の最後の誇りとしよう」

「その言葉、例を述べておく」

ポルトーはその型のまま青白い炎となって燃え尽きた。これで髑髏天使とポルトーの戦いは終わった。彼は牧村の姿に戻りサイドカ  
ーの置いてある駐車場に向かった。



その駐車場は百貨店の地下にあった。そこに入り暗い中を進みサイドカーの横に来てそのまま乗り駐車場を後にする。するとその横にハーレーダビットソンが来て彼を追い越していった。不意にそのハーレーを見てどうにも違和感を感じるのだった。

「あのハーレーは」

しかしそう思ったのは一瞬でハーレーはそのまま姿を消した。彼はそれでハーレーから考えを移しそのまま帰路についたのだった。この闘いはこれで終わりだった。

第十話 完

2008・12・31

## 第十一話 死神その一

髑髏天使 第十一話

死神

ポルトーも倒された。そのせいか三柱の神々はまた話し合いの場を持っていた。今度の話し合いの場は港であった。そこで遠くの船や汽笛を背景に話をするのであった。

「今回もでしたね」

「そうだな」

男が老人の言葉に頷いていた。

「まさかこうまで簡単に倒されるとは思っていなかった」

「あら、当然の結果だと思っけれど」

だが女はこう言うのだった。

「こうなったのは」

「当然の結果だというのか」

「ええ、そうよ」

女はまた言った。

「今回の髑髏天使の強さを考えればね」

「どうやら。予想を遥かに超えた強さのようだな」

男は女の言葉にこれといって反論することなくそれに返した。

「俺の予想を」

「私も最初はおそこまでとは思わなかったわ」

女も最初はそうだったと言うのだった。

「あつという間に大天使になって」

「そして権天使か」

「そう、もうよ」

女が言うのは天使の階級のことであった。

「もうなのよね」

「これまでの髑髏天使はどれも一年はかかりましたね」  
「ここでまた老人が述べてきた。」  
「ですからここまでは二年です」  
「そうだったな」  
男は老人のその言葉に応えて彼自身も述べた。  
「それはな」  
「ところが今度の髑髏天使は二ヶ月です」  
「言葉では一言だが」  
「その時間の違いは髑髏天使としてはかなりのものです」  
「それだけ強くなつてきているというね」  
女はまた言ってきた。  
「短時間にね」  
「そうなるな。そしてだ」  
男もまた言葉を続ける。  
「それだけ我等にも近付いてきているということでもある」  
「久し振りのこの世界ですが」  
老人は楽しげな笑みを浮べたまま告げてきた。  
「どうやら。思ったより楽しめそうですね」  
「そうね」  
その言葉を聞いて女も楽しげに笑ってみせてきた。  
「魔物達にだけ闘わせているのも案外面白くはないし」  
「それに今は三人だけだな」  
男は今度は自分と周りにいる同胞達を見渡して述べた。  
「寂しいことにな」  
「あと九人ですが」  
老人は今度は数について言及した。  
「果たして。どうなるのでしょうか」  
「あんた達はどうかやって封印を解いたのだ？」  
「年月のせいよ」  
「私ものです」

女と老人の返答はこうであつた。

「そのせいで出られたのよ。封印が弱くなつていたから」

「よいことでした」

「俺と同じだな」

男は二人の同胞の言葉を聞いて納得する顔になつて頷いたのだつた。ここで遠くから汽笛が聞こえてくる。神戸の港はやはり船が多い。朝の港にはもう行き交う人々が遠くに見え出港の用意にかかつている船も見えた。そういう場所であつた。

三人はその港の倉庫の並ぶ前にいてそこで話をしているのだつた。誰も三人を怪しんではない。ただそこにいる観光客か何かと思つただけであつた。

また彼等もそうしたことを気にせずに。そうして話を続けるのであつた。その三人で。

「ではあとの九人も同じだな」

「そうね。そろそろね」

「封印を解かれそうしてここにやって来る」

男はまた言つた。

「待つていればいいな。それでな」

「その通りですね。ただ」

「ただ。何だ？」

「一つ気になることがあります」

老人が言つてきた。

## 第十一話 死神その二

「一つですが」

「気になること!？」

「何だそれは」

二人は老人の言葉に顔を向けた。どちらも怪訝な顔になっていた。

「私達だけじゃなくて」

「まだあるのか」

「冥界ですが」

「冥界!？」

「あそこか」

二人は冥界と聞いて眉を顰めさせてきた。

「あそこが何か考えているというのかしら」

「だとすれば何だ」

「冥皇は元々我等をよく思ってはいませんが」

老人は今度は冥皇という存在を言葉に出してきた。

「冥府の神々の中でも」

「それは知っているけれど」

女は怪訝な顔で述べた。

「けれど。それでも」

「どうも誰かを送り込んできたようです」

「よくわからないけれど冥界が私達の闘いに対して干渉してくる可能性があるのね」

「はい」

老人が言いたいのはそういうことだった。

「その可能性があります」

「そうか。冥界も暇なようだな」

男は言葉を笑わせることなく述べた。

「我々の闘いに干渉してくるのならな」

「それはそれで面白くなりそうですが」

老人は穏やかな声で述べた。

「まあ今は様子見ですね」

「そういうことね」

「今のところはな」

三柱の神々はここまで話したうえでその場からそれぞれ去った。

彼等は今はこれで話を終えて場を後にするのだった。この時はであるが。

牧村は今日は大学のクラブ活動においてランニングに励んでいた。黒のジャージを着て学校のあちらこちらをかなりの速さで走っている。

その速さはかなりのもので普通のジョギングのものではない。陸上選手、それも長距離選手のそれを思わせる速さで走り続けているのだった。

「ちよつと牧村君」

その彼の横についているのは若奈だった。彼女は白いジャージでストップウォッチを片手に彼の横について自転車を進めていた。

「またどうしたの？」

「何がだ？」

牧村は正面を見たまま彼女の言葉に応えた。

「何かあるのか？俺に」

「あるわよ」

少し不平が混ざったような声になっていた。

「かなり速いじゃない。どうしたのよ」

「そんなに速いか」

「トレーニングよ」

彼女が言うのはこのことだった。

「それでこんなに速いなんて」

「トレーニングだからだ」

彼は相変わらず前を見たまま言うのだった。

「それはな」

「トレーニングだから？」

「そうだ」

彼は言う。

「だからこそ走る」

「それだけの速さでなのね」

「トレーニングは己の為にあるものだ」

彼の今度の言葉はそれだった。

「鍛える為にな」

「己を鍛える為でも」

「何だ？」

「ちよつとペースが速いわよ」

自転車の若奈もかなりの速さだ。それで額に汗さえかいている。

「本当に競技に出てるみたいじゃない」

「競技か」

「そうよ」

若奈はまたいう。

「これってそんな速さよ」

「もっとペースを速めてもいいがな」

「ペースを速めるって？」

「今以上にな」

至極落ち着いた顔での言葉であった。

## 第十一話 死神その三

「何ならな」

「馬鹿言わないでよ」

若奈はその言葉を聞いて呆れた顔になった。

「仕舞いに体力なくなるわよ、本当に」

「闘いではそうも言ってはられない」

牧村はその言葉に不意に闘いという単語を出してきた。

「その場合にはな」

「闘い!？」

若奈はその闘いと言う言葉に眉を顰めさせた。

「今闘いつて言わなかった？」

「言ったが」

「テニス部なのに闘い!？」

彼は今テニス部の活動に参加している。若奈もいるその部活だ。

当然ながら闘いとは全く無縁の世界だ。それで闘いという言葉を出すからいぶかしむのだった。

「何よ、それ」

「何でもない」

これについては特に答えない牧村だった。

「それはな」

「闘いが何でもないって」

「何でもない」

彼はあえて言うのだった。

「俺だけのことだ」

「まあ試合を闘いだって考えてるのならそれでいいけれど」  
若奈は話しているうちにそう考えたのだった。

「けれど。それだけの速さだったら肝心な時にはてるわよ」

「アフターケアはしているがな」



牧村はそれは忘れていないというのだった。

「身体はほぐしているし栄養も摂っている」

「だったらいいけれど」

「まずは二十キロだ」

ランニングの距離である。

「走るのほな」

「それから筋力トレーニングよね」

「ああ」

若奈の言葉に対して答えた。

「いつも通りな」

「まずはランニングとそれなのね」

「基本だろう？」

今度は素っ気無く返したのだった。

「それはな」

「まあ走るのも筋力トレーニングもね」

このこと自体については若奈も反対することはなかった。

「どちらも。スポーツの基本中の基本だからね」

「だからやる」

こう答えるのだった。

「今もな」

「けれど。それにしても速過ぎるのよ」

ウオッチを覗きながらまた牧村にこのことを告げたのだった。

「本当に。異常よ」

「異常か？」

「これじゃあ競技よ」

またこう言ったのだった。

「この速さ。凄いわよ」

「あえてそうしている」

「そうなの」

「とにかくだ」

彼は相変わらず前を見据えたまま走っていた。その額には汗が流れ出ている。そこまで暑くはない季節だというのにそれでもだった。「こっぴどくないとな」

「駄目なの」

「走って体力を溜める」

「それだけ？」

「身体のキレもより強くさせていく」

今度はこ答えたのだった。

「今よりもな。ずっとな」

「だから走るのね」

「そしてテニス自体もな」

それもだった。

「これが終わったらする」

「本当に凄いななんてものじゃないわよ」

テニスのことも忘れていないので若奈の言葉には呆れたものさえ含まれるようになった。

「ここまでやるなんて。尋常じゃないわ」

「そんなにか」

「世界大会とかオリンピッククにでも出るつもりなの？」

まずは前者がテニスであり後者がフェシングについての話だった。彼女は彼がフェシングもしていることを当然ながら知っているの  
である。

## 第十一話 死神その四

「本当に。そんな調子だけれど」

「最低そこまですらないと駄目かもな」

「ここで何故かこんなことを言う牧村だった。

「俺が。あいつ等に勝つにはな」

「また何か変なこと言うし」

牧村の言葉がまたわからなくなって目を顰めさせた。

「それでもどうせ何でもないのよな」

「そうだ」

やはり返事は決まっていた。

「気にすることはない。俺だけの話だ」

「それはいいけれど変なことにはならないでね」

「変なこと?」

「そうよ。何か得体の知れない組織と闘うとか」

若奈はこれは冗談で言った。特撮の話である。

「そういうのはなしよ」

「組織か」

だがここで牧村の言葉は不意に止まったのだった。

「そうだな。そういうものか」

「!?」

「いや、違うか」

「違うって何が?」

「ゲームの話だ」

流石に今の言葉はまずいと思いこう言って誤魔化したのだった。

「今やっているゲームのな」

「それじゃあ今までの話も?」

「どうも最近熱中していな」

こう言って誤魔化し続けることを選んだのだった。

「それでな」

「何だ、そうだったの」

それを聞いてまずは納得した若奈だった。

「ゲームの話だったの」

「身体も使うゲームだ」

そういう意味では間違いではない言葉だった。

「それはな」

「ふうん。テニスとかフェシング以外にもやってるのね」

「少しな。それもあってな」

「やっとわかったわ。そういうことだったのね」

若奈は彼がゲームセンターか何処かでそうしたゲームに凝っているのだと思った。彼も人並みにそうした店に通っていることも知っているからだ。

「それでなの」

「そういうことだな」

「何かと思ったら。まあいいわ」

だがそうした言葉を聞いて安心もする若奈だった。彼が何か得体の知れないことをしているのではと思い不安を感じてもいたからだ。

「そういうことならね」

「納得してくれたか」

「一応は。それじゃあ牧村君」

「今度は何だ？」

「このランニングの後だけけれど」

「ああ」

「筋力トレーニングよね」

メニューの話であった。トレーニングの。

「やっぱり。それよね」

「そのつもりだが」

「何か本当に一通りやるのね」

若奈は感心したように彼に言うのだった。

「やるってなったら」

「やるからにはな」

そして牧村もそれを肯定するのだった。

「やる。一通りな」

「だったらいいけれど。ただ」

「ただ？」

「オーバーワークには本当に気をつけてね」

彼女が注意するのはそこであった。

「あと。アフターケアもね」

「それはさつきも言った通りだ」

「ちゃんと気をつけてるのね」

「いざという時に動けなかったら何にもならない」

牧村の言葉のキレが鋭いものにまたなってきた。

「そうなればな」

「そうよ。それはね」

「だからだ」

さらに言うのであった。

「それは気をつけているつもりだ」

「気をつけ過ぎるに越したことはないわ」

若奈の言葉はまるでインストラクターの如く真面目でしかも的確なものがあつた。

## 第十一話 死神その五

「特に。今の牧村君はね」

「激しく動いているからか」

「そういうこと。くれぐれも気をつけてね」

「ああ」

短く若奈の言葉に頷いた。

「あと食べ物もだな」

「それもね。考えてね」

こんな話をしつつこの日もトレーニングに励んだ。その身体は日増しに引き締まりそうして動きも俊敏で持久力もかなりのものになっていた。だがそれでも彼は満足してはいなかった。

「まだだな」

帰り道のことだった。サイドカーで家に帰りながら一人呟いていた。呟きながら道を進んでいたのである。

「まだ。強くならなければな」

トレーニングにおいてもということであった。

「俺は。駄目だ」

そしてこう言った。

「今以上に強くならなければ。 髑髏天使として」

「そうか」

ここで横から声がした。

「それ程強くなりたいのか」

「むっ!?!」

「貴様は。髑髏天使として」

「誰だ!?!」

声が出したのは右手だった。それでその右手を見てみるとだった。

そこにいたのはあのハーレーダビットソンと黒いライダースーツにヘルメットだった。

「強くなりたいのだな」

「魔物か。それとも」

髑髏天使と呼ばれたことからすぐにこう考えた牧村だった。

「貴様は。一体」

「話をしようか」

だが相手はこう返してきたただけだった。

「場所を変えてな」

「闘うつもりか？」

「それは貴様次第だ」

特に闘争心を見せることなく告げてきた言葉であった。

「それはな」

「闘わないというのか？」

「だからそれは貴様次第だ」

また言ってきた。

「それはな。とにかくだ」

「ああ」

「話をしようか」

この言葉もまた言ってきた。

「場所を変えてな。どうだ」

「そうだな」

牧村も今はその言葉に頷くことにした。周りには車や人が行き交い夕暮れの街を慌しいものにさせている。少なくともここで闘うわけにはいかなかった。

「変えるか。それでいいのだな」

「そういうことだ。それではな」

ハーレーダビットソンを右に曲げてきた。巨大なハーレーをまるで自分の身体のように扱い流れるように動いてみせたのだった。

「行くか」

「ああ、わかった」

牧村はそのハーレーの言葉に頷きサイドカーをついて行かせた。

そうして案内されたのは行き止まりだった。先には壁があり向こうから赤い海と波の音が聞こえてくる。そこに案内されたのだった。

「ここならまず誰も来ないな」

「闘えるというわけか」

「何度も言うが私は闘いに来たわけじゃない」

「ここ牧村に返してきた。」

「今の髑髏天使である貴様と話がしたいだけだ」

「俺とか」

「そういうことだ」

「応えながらその黒いヘルメットを外してきた。そして。」

「むっ!？」

そこから姿を現わしたその顔を見て。牧村は思わず声をあげたのだった。

見ればそれは白い顔にまだ幼さの残る切れ長の、それでいて大きな黒い目を持つ女だった。唇は小さく眉は細い。鼻の形は整っている。アジア系、それも日本の顔だった。

髪は黒くそれをショートカットにしている。見ればその背は決して高くはない。むしろ小柄と言ってもいい。その女が今彼の前に姿を現わしたのである。

「女か」

「私に性別はない」

「返答はこうであった。」

「私にはな」

「女でも男でもないか」

「そして人間でもない」

「今度はこう言ってきたのだった。」



## 第十一話 死神その六

「これは言っておく」

「人間ではないか」

「そうだ」

また答えてきた。

「私は冥界から来た」

「冥界から？」

「そう。御前達人間が死神と呼ぶ存在だ」

こつ牧村に対して告げたのだった。

「御前達の冥界への案内人だ」

「死神か」

死神と聞いて牧村の目が僅かだがぴくりと動いた。

「今貴様自身が言ったが」

「うむ」

「死神は冥土への案内人だな」

「如何にも」

自分が言った言葉なのでそれは全く隠すことはなかった。

「私はな。そうだ」

「ではその案内人がどうして俺の前に姿を現わす？」

牧村の言葉はいよいよ鋭いものになってきた。

「それは何故だ？俺を冥界に案内するといふのか？」

「それは違う」

死神と名乗るこの女の顔を持つ者はそれは否定した。聞けばその声も女のものだ。メゾソプラノの声で彼に対して告げてきていた。

「冥界の定めでは御前はまだ死ぬ時ではない」

「冥界ではか」

「あくまで冥界、ではだがな」

この言葉には死神は何かを含ませていた。牧村もそれは感じてい

たがそれでも今はそれについては問うことはないのであった。

「貴様は死ぬ時ではない」

「それでどうして俺の前に姿を現わした？」

「牧村来期としての貴様に用があるのではない」

「今度のこの者の言葉はこうであった。」

「それはな」

「ないのか」

「そうだ。貴様のもう一つの姿に用がある」

「やはりな」

「牧村はその言葉を聞いて予想通りだという顔になったのだった。」

「そう来たか」

「予測していたようだな。そうだ」

「また牧村に対して言葉を返してきた。」

「そういうことだ。私が用があるのは髑髏天使だ」

「今度ははつきりと口に出してきた。」

「髑髏天使としての貴様に用があるのだ」

「用があるというのはどういうことだ？」

「ここで僅かに身構えたのだった。」

「まさかとは思うが」

「安心しろ」

「その身構えた牧村に対しての言葉だった。」

「私は闘うつつもりはない」

「？ないのか」

「私は魔物ではない」

「このことは断るのだった。」

「私は死神だ。奴等とはまた違う」

「違うというのか」

「そうだ。むしろ私は奴等の敵だ」

「今度はこう牧村に話すのだった。」

「冥界でも今の奴等の動きは問題になっているのだ」

「どういうことだ？冥界と魔物には関係があるのか」

「魔物もまた必ず死ぬ」

死神は言った。

「生ある神ならざる者ならばな」

「そして最後は冥界に入るといふのか」

「その通りだ。だが魔物は他者の運命を乱すこともある」

「他者の！？」

「普段は違つ」

このことは断ってきた。

「普段はな。だが今回は十二魔神が封印から抜け出してきている」  
とにより奴等の力が今までになく増してきているのだ」

「今までよりもか」

「そして人をはじめとして他者を襲い喰らい取り込んでいる」

魔物に対して如何にもという言葉であった。

「それにより本来死ぬ筈でなかった者の命まで脅かされようとして  
いる」

「冥界の秩序に刃こぼれが出て来ているとでもいふのだな」

「察しがいいな。そうだ」

牧村の今の言葉に対して頷いたのだった。

「その通りだ。今それにより冥界は多少混乱に陥ろうとしている」

「それであんたがこの世界に来たのか」

「そうだ。他者の運命を狂わす魔物の命を刈り取る為」

「こつ言つのである。」

「私はここに来た。この世界にな」

「魔物にも運命があるがそれも変えていいのか」

「無論本来は許されることではない」

死神はこのこともわきまえていた。牧村の問いにもしかと答える。

## 第十一話 死神その七

「それはな」

「では今回はどうしてだ？」

「特別な事情だ」

「特別な、か」

「今の魔物達の動きは異常なまでに活発だ」

「それによりまだ冥界に行ってはならない命がそちらに来るというのだな」

「それも多量にな」

語るその声に感情は見られないが不快に思っているのはわかる。そうした言葉であった。

「だからだ。それを防ぐ為にだ」

「話の元になつてゐる魔物を刈るのか」

「いささか矛盾しているがな。その通りだ」

牧村に対して述べた。

「魔物にも運命があるのだがな」

「より多くの運命の為か」

「魔物達の魂を冥界に送り届ける」

死神の言葉が強くなった。

「それが私のこの世界での仕事だ」

「では貴様も魔物を倒すのか」

「そういうことになる。貴様とは違う理由だが行動は同じだ」

「行動は、か」

「邪魔をすることは許さない

牧村の目を見ての言葉だった。

「例え貴様が髑髏天使であろうとな」

「俺は魔物と闘う」

牧村は静かに死神に言葉を返した。

「それだけだがな」  
「貴様と闘うつつもりはないがな」  
「私もだ」  
死神も彼に言葉を返す。  
「基本的にはな」  
「基本的にはか」  
「だが。さつきも言ったが」  
死神の言葉は続く。  
「邪魔をすることは許しはしない」  
「それは俺も同じことだ」  
ここで両者の視線が衝突した。互いの意志もまた。  
「誰にも邪魔はさせない」  
「貴様が魔物を倒すことをか」  
「その通りだ。これは覚えていてもらおう」  
「わかった。では覚えておこう」  
死神はここでは牧村の髑髏天使としての言葉に頷いた。  
「そのことはな」  
「そうか。では話はこれで終わりだな」  
「そうだ。言いたいことはこれだけだ」  
こう言って踵を返しハーレーに向かうのだった。  
そして乗り。ヘルメットを被る。そのうえでエンジンを入れる。  
「また会うことになるだろう」  
「おそろくはな。その時を楽しみにしている」  
「楽しみにか」  
「死神の力。どういったものか」  
彼もまた己のサイドカーに乗りながら言う。  
「見てもみたいしな」  
「そういうことか」  
「ああ。またな」  
「会おう」

こつ言葉を交えさせてそのうえで別れた。死神がその場から姿を消した。後に残った牧村もやがてサイドカーでその場を去った。家に帰った彼は普段と変わらない日常に戻った。

家のリビングで一人でテレビを観る彼に対して。妹の未久が声をかけてきたのだった。

「ところでお兄ちゃん」

「何だ？」

「この前タルト作っていたよね」

「さくらんぼのか」

「そう、あのタルトだけけどね」

「あれがどうした？」

「また作らないの？」

こつ兄に対して問うのであった。問いながらその横に座る。白いミニスカートから出ている脚が立っている時よりもさらに露出されていた。

「あのタルト」

「食べたいのか」

「まあね」

このことを隠さない未久だった。

「かなり美味しそうだったから」

「御前タルトが好きなのか」

「甘いものは何でも好きじゃない」

今度はこつ言っただった。

## 第十一話 死神その八

「私って。そうでしょ？」

「そういえばそうか」

「そうじゃない」

兄の朴念仁な調子の言葉に口を尖らせるのだった。

「アイスクリームだってチョコレートだって」

「それにタルトもか」

「そういうこと。それでね、よかつたら」

「そうだな。今度作るか」

「よかつた、作ってくれるんだ」

兄の今の言葉に一気に明るい顔になった。

「それじゃあ。今度御願いな」

「さくらんぼのタルトだな」

「そうよ」

その明るい声でまた答えるのだった。

「さくらんぼのね。御願いな」

「ではまた百貨店に行くか」

牧村はテレビを観ながら考えて述べた。

「百貨店にな」

「あその素材ってそんなにいいの」

「少なくとも菓子を作るには苦労しない」

未久の声は明るいのはいつものことだが彼の言葉が無愛想なのもいつものことだった。

「それにはな」

「そうなんだ。じゃあ私も一度」

「お菓子でも作るつもりか」

「ええ。最近そういうのにも興味があつて」

見れば彼女は考える顔になっていた。その顔での言葉であった。

「だからね。いいわよね」

「悪いことじゃない」

牧村もそれには特に反対はしなかった。

「何かを作るのはいいことだ」

「そうよね。だったら」

「だが。御前がお菓子か」

牧村はそのことについても言ってきた。

「そうか」

「そうかって何か言いたいの？」

「いや、今まで作ったことがなかったからな」

彼が言うのはこのことだった。

「はじめてはな。いきなり難しいものは」

「作らない方がいいっていうの？」

「簡単なものにしておくことだ」

静かだが確かな言葉であった。

「今はな」

「ふうん。そういうものなのね」

「作るのならゼリーがいい」

「ゼリー!？」

「あれが一番簡単にできる」

だからだというのである。

「はじまりにはいい。だからだ」

「わかったわ。じゃあまずはそれね」

「そうだ。ゼリーだ」

「何のゼリーがいいかしら」

早速何のゼリーにするか考えだすのだった。この辺りの頭の回りの速さに個性が出ていた。

「オレンジとかピーチとか」

「ジュースは百パーセントにしておくことだ」

「百パーセントね」



「ゼリーにはそれが一番だ」

兄として妹に教えたのであった。

「そしてゼラチンを使う」

「あれ、寒天じゃないの？」

「ゼリーだな」

牧村が言うのはゼリーそのものについてであった。

「和菓子ではない筈だ」

「それはそうだけれど」

「御前はゼリーは弾力がある方が好きだったな」

「ええ」

兄のその問いに対して素直に答えた。

「そうだけれど」

「だから余計にだ」

「ゼラチンの方がいいのね」

「弾力が違う」

今度は断言だった。

「それも全くな」

「そう。それじゃあやっぱり」

「ゼラチンにしておけ。いいな」

「わかったわ。じゃあゼラチンを使っわ」

「それがいい。それではな」

「で、お兄ちゃん」

未久はゼリーの話が終わったところでまた兄に声をかけてきた。

## 第十一話 死神その九

「そのタルトだけれど」

「ああ」

「何時作るの？」

今度尋ねたのはこのことだった。

「それは何時になるの？」

「今度の日曜にするか」

少し考えてからこう答えたのだった。

「それでいいか」

「うん、日曜ね」

日曜と聞いて明るい顔になる未久だった。

「わかったわ」

「菓子は時間をかけて作るものだ」

牧村は信念込めるようにして述べたのだった。

「じっくりとな」

「手間隙かけてってこと？」

「無論そうはいかない場合もある」

そうしたケースも否定しはしなかった。何かを作るにあたってはいつも同じ状況とは限らない。それもまたわかつているから言うのだった。

「特に商売ならな」

「手間隙かける余裕はないってこと？」

「手間隙をかけなくてはいけないがかけてはいけない場合にはだ」

「その場合はどうするの？」

「それならそれでやり方がある」

ケースバイケースだがそれでも努力を払うということだった。

「美味しいものを作る方法がな」

「そういうものなのね」

「御前もそれを勉強するといい」  
「勉強して身に着くものなの？」  
「何度もしていればわかる」  
こう妹に告げた。  
「何度もな」  
「つまり数しろってこと？」  
「一度や二度でできるものではない」  
話は経験論になっていた。その経験論に基いてさらに話をする。  
「それはな」  
「そういうものなの」  
「何度でも失敗するものいいことだ」  
失敗すら認めていた。  
「何度でもな」  
「何度でもって」  
「そうやって学んでいくものだからな」  
やはり経験論であった。しかしそれを隠すことはなかった。  
「それでだ」  
「ええ」  
「最後に成功すればいい」  
そして最後に、と述べた。  
「最後にな」  
「最後になの」  
「最後に成功してこそだ」  
また未久に対して言う。  
「最後にな」  
「そういうものなのね」  
未久は兄のその言葉を聞いて考える顔になって述べた。  
「お菓子作りって」  
「お菓子だけに限らない。何でもだ」  
「ふうん」

「かつて漢と楚が戦った時」

今度は歴史の話を出してみせた。

「漢の高祖劉邦は何度も敗れた」

「何度も？」

「時には五十五万の大軍を擁しておりながら油断して僅か三万の項羽率いる楚軍に敗れた」

「そんなこともあったの」

未久も授業で劉邦や項羽のことは知っていた。だがここまで見事な敗北があったとは流石に思わなかったのだ。この敗北こそが一敗地にまみれるの語源である。

「とにかく勝てなかった」

項羽はそれだけ強かったのだ。

「しかし最後に一回だけ勝った」

「一回だけね」

「それで劉邦は天下を手に入れた」

これは歴史にある通りである。

「その一回の勝利だけだな」

「そうだったの」

「だからだ。最後に成功すればいい」

ここまで話してあらためてこのことを話した。

## 第十一話 死神その十

「わかったな」

「つまり失敗してもそれでも続けろってことね」

「何を言われても諦めないことだ」

「このことも言い加えてきた。」

「わかったな」

「ええ、何となくだけれど」

「彼女も兄の言葉に頷いた。」

「それじゃあ。頑張って作ってみるわ」

「そうするべきだ。必ずな」

「そうね。ところでお兄ちゃん」

未久は兄の話が終わったところであらためて彼に言葉をかけてきた。  
た。

「それってお兄ちゃんも同じなの？」

「俺もか」

「そうよ。こついうこと言うなんて」

彼女にも何故兄がこんなことを言うのか根拠を知りたくなったの  
だ。

「やっぱり。失敗してきたの？」

「当然だ」

「これまたはつきりと答えた牧村だった。」

「失敗しない人間なぞいない」

「そういうところ見たことないけれど」

「御前が見ていないだけだ」

「素っ気無い返答だった。」

「それはな」

「そういうものなのね」

「そうだ。それでだ」

「ええ」

「俺も今まで数え切れない失敗をしてきた」

真剣な顔での言葉になっていた。

「それこそな。今でもだ」

「今でもなの？」

「何度もな。それこそな」

話しながら髑髏天使としての闘いのことを思い出していた。確かにその幾多の闘いで彼は数多くの失敗を犯してきた。それで何度も命を落とすところだった。そのことも思い出しての言葉であった。

「おかしてきた」

「私にはそれが見えなかっただけなのね」

未久は兄の言葉からこう考えることにしたのだった。

「ただ」

「そういうことだ。それでだ」

「ええ」

「失敗から学ぶ」

またこのことを話した。

「例えそれが命懸けのものであってもな」

「命懸けだったらずいんじやないかしら」

これには未久もいぶかしむものがあつた。

「お菓子で死ぬってことはないけれど」

「俺の方の話だ」

こう言つてこのことについてはこれ以上話さなかつた。

「これはな」

「フェシングつて剣使うからね」

彼女はそれはこのことだと思つた。やはり兄のもう一つの顔には気付いていない。

「だからなのね」

「まあそうだ」

「危険なのね」

何も考えることなく述べる未久だった。

「やっぱり」

「危険は常に隣り合わせだ」

牧村はここでは少しだけ髑髏天使になっていた。

「俺にとってはな」

「何かそれって随分キザな言葉ね」

「キザかも知れないが現実だ」

こう返しもした。

「それはな」

「何かよくわからないけれど気をつけてね」

妹はフェシングのことだと考えてまた言葉を返した。

「怪我なんかしないでよ、本当にね」

「それはわかっている」

「わかっているのならいいけれどね。それじゃあね」

「ああ」

「お菓子だけねどね」

話をそこに戻してきたのだった。

「それで。ゼラチンよね」

「それを使えば余計に弾力が出る」

「わかったわ。じゃあ使ってみるわ」

このことははっきりと受け入れたのだった。

## 第十一話 死神その十一

「ゼリーにはね」

「そうすればいい」

「了解。じゃあどんどん作るわ」

「このことも言うのだった。」

「何度失敗してもね」

「それでいい。失敗できるものはどれだけ失敗してもいい」

やはりここでも髑髏天使としての一面が出て来ているのだがやはりそれは未久にはわからないのだった。何故なら彼女は知らないからだ。

「幾らでもな」

「うん、めげずにね」

こう言葉を交えさせていた。これでここでの兄と妹の話は終わった。その翌日。牧村が砂浜にサイドカーを止めてただ海を眺めていると。そこに来た。

「まさかここで来るとはな」

「意外だったとでもいうのか？」

「正直に言おう」

砂浜は牧村から見ると右手に海がある。今海は紅と銀の二つの光を放っている。太陽が今にも海の中に消えようとしている。紅く鈍く光る太陽が。そして砂は次第にその色を黒くさせていった。世界は今光から闇へと変わるうとしていて、そんな時間であった。

「御前等にとつてはな」

「我々にとつてはか」

「そうだ」

こう前の前にいる男に対して返すのだった。男は背が高く白い服を着ている。髪も白くそれがやけに目立つ。大柄で筋肉質であった。「御前等はいつも俺を呼び止めているからな」



「少なくとも御前と闘いたい」

その白い服の男は言うのだった。

「俺達はな」

「それが御前等の習性だからか」

「そうだ。俺達は貴様を倒したい」

牧村を見据えて語る。

「何としてもな」

「俺の力を手に入れる為にか」

「如何にも。五十年に一度姿を現わし我等魔物を倒す髑髏天使」

他ならぬ牧村のことである。

「確かに貴様は我等にとつて脅威だ」

「少なくとも火の粉は払う主義だ」

「だが。それと共にその力」

髑髏天使の力であるのは言うまでもない。

「倒せば我等のものとなる」

「そしてさらなる力を求めるのか」

「その通りだ。だからだ」

これが返答であった。

「貴様を倒す為に。我等は」

「言葉は不要だな。ならばだ」

牧村としてもこれ以上語るつもりはなかった。語ろうが何をしようが闘いが避けられないのはわかっていたしそもそも彼の方で避けるつもりもなかった。

「来い。相手をしてやろう」

「話がわかるな」

「俺は話はわからん」

男に対して返した。

「ただ」

「ただ？」

「無駄話が嫌いなだけだ」

「こつ返すのだった。」

「俺はな」

「?どういうことだ」

「話そうが何をしようが闘うことになる」

「髑髏天使と魔物の関係そのものだった。」

「ならばだ。話すこともない」

「そういうことか」

「その通りだ。それではだ」

「ふむ。では参るとしよう」

「男の顔の形が急に変わってきた。」

「俺もな」

「むっ!?!」

「これが俺の姿」

「顔が猿のものになっていった。それと共に服も白毛になっていく。」

「そして髪と一体化し全てが白く覆われていくのであった。」

「身体も変わった。巨大に。」

「見ればそれは巨大な猿であった。白い毛に覆われた巨大な猿。そ

「れが男の真の姿であったのだった。」

「猿か」

「ただの猿ではない」

「その猿の口での言葉であった。」

「俺は。しばてんだ」

「しばてん?四国のか」

「知っているのだな」

「四国の話は聞いている」

「牧村はまだ姿は牧村のものだったがその言葉は既に髑髏天使のものだった。」

## 第十一話 死神その十二

「猿の魔物がいることもな」

「調べたのか？」

「髑髏天使としては調べていない」

「ではどうして調べたのだ？」

「おとぎ話だ」

これが彼の返事だった。

「四国に猿の妖怪がいて暴れ回っている話はな」

「そういうことか。それでは話が早い」

「早い」

「来い」

しばてんは右手で手招きをしつつ牧村に対して声をかけた。

「楽しむか」

「貴様もまた楽しむのだな」

「魔物とは何かはもう知っていると思うが？」

楽しむという言葉肯定したうえで、しばてんの今の言葉だった。

「それはどうなのだ？」

「そうだな」

牧村もそれは否定はしなかった。

「先程の話通りだな。それではだ」

「さあ変身するのだ」

しばてんはまた彼に言ってきた。

「早くな。人間である貴様には興味はない」

「人間の俺にはか」

「俺が興味があるのは髑髏天使」

彼の口からもこの存在のことが出された。

「それだけか」

「そうか。ならば」

しばてんの言葉を受ける形になったがそれでもだった。彼は変身に入ろうとした。しかしその時だった。

「少し待ってもらおうか」

「むっ!？」

「貴様は!？」

牧村は変身に入ろうと拳を作ったところで動きを止めた。そのうえで声がした自身の左斜め後ろを見た。しばてんもそちらに顔を向けていた。

そこにいたのは彼だった。そう、その彼が今夜の砂浜に姿を現わしたのだった。

「面白いことをしているようだな」

「何故ここに来た」

死神だった。あのライダースーツで悠然と出て来た彼に対して問うたのは牧村だった。

「どういう風の吹き回しだ？」

「順番を譲ってもらいたくて来た」

死神は悠然と出て来たうえで牧村の隣に来て言うのだった。

「私にな」

「順番だと？」

「そつだ。私にな」

表情は変わっていないが声は笑っていた。

「譲ってもらおう」

「闘うというのか」

「私にも闘わなくてはならない理由がある」

悠然とした調子のままで牧村の横に来て述べた。

「そう。増え過ぎた魔物達の命を駆る為にな」

「それは俺のことか」

「貴様だけではない」

死神は今度はしばてんに対して顔を向けて言葉を出した。

「貴様等。増え過ぎた魔物達の命を減らす」

両手をスーツのズボンのポケットに入れた姿勢で宣言してみせた。

「死神である私の手でな」

「面白い。髑髏天使の次は死神か」

しばてんは死神の自信に満ちた言葉を受けても平然としたままであった。

「ならばだ」

「闘うというのだな。私と」

「無論髑髏天使の力は欲しい」

その本来の目的は忘れてはいなかった。決して。

「だが。死神の力にも興味がある」

「私を倒せば私の力が得られる」

この辺りはそのまま髑髏天使を倒した時と同じであるらしい。魔物の力故であろうか。

「無論。倒せればだな」

「では。倒してみせよう」

しばてんは言いながら身構えてきた。その両手を拳にして前に出してきた。

「最初に貴様をな」

「一つ言っておく」

死神は両手をズボンのポケットから出したうえで宣言するように言ってきた。

「私は強い」

「こう言うのだった。」

「死神だからだ」

「死神だからか」

「私もまた神」

自信は氷の如く絶対のものになっていた。

## 第十一話 死神その十三

「それは言っておこう」

「では神の力見せてもらおう」

しばてんもだからといって退くつもりはなかったのだった。

「この俺にな」

「髑髏天使よ」

死神はしばてんとの話を終えたとみると牧村に顔を向け彼を髑髏

天使とあえて呼んだのだった。その中性的な顔と声で。

「今は貴様の出番はない」

「貴様が倒すからか」

「如何にも」

言葉には微動だにしないものがあつた。

「だからだ。休んでいてもらおう」

「嫌だと言えば？」

「その時は無理にでも通らせてもらおう」

言葉だけでなく視線も鋭いものになっていた。

「それが私のやり方だ」

「どうしても闘いたいか」

「仕事だ」

まずは己のやるべきことも述べる。

「だが。それ以上に」

「闘いが好きか」

「死神は命を刈るもの」

言葉の鋭さはまさに刃であつた。その刃の煌きを隠そうともしない。

「それは闘いによつてだ」

「だからこそか」

「貴様の命を刈るつもりはない」

これもまた前以って言ってきた。

「しかしだ。私に譲らないというのならな」

「どうやら向こうもまずは貴様と闘いたいようだな」

牧村はここでそのまま答えることはなくまずはこう述べたのだ。  
た。

「それではだ」

「下がっている」

今度の言葉はこれだけだった。

「そしてそこで私の闘いを見ているがいい」

「死神の闘いをか」

「一つ言っておく」

死神はさらに一步踏み込んだうえでまた述べた。

「私は強い」

「強いが」

「何度も言うが私は神だ」

その死を司る神だというのだ。

「その神の力。見ておくことだ」

「ではその力。喜んで見せてもらおう」

牧村は自分が立っている場所から身動き一つすることなく言葉を返した。

「その自信もな」

「自信は完全な裏づけがあつてこそ成り立つもの」

死神は足を止めて牧村に告げた。

「それがなければただの虚勢だ」

「虚勢ではないか」

「私の強さ」

死神はここで己の右手をゆっくりと前に出してきた。

「今こそここに」

この言葉と共にその前に出した右手を胸のところ強く握り締め  
た。するとその拳から青い光が放たれ死神の全身を包み込んだ。青

い光が消えるとそこには女と見紛うばかりの美貌の異形が存在していた。

白い丈の長いスカートはワンピースだった。腕も何もかもを包み込みフードが付いた同じ色のケープも羽織っている。

ブーツとスカートから覗く脚は漆黒でそれが白い服の下からその身体をさらに包み込んでいた。手袋もそれと同じで黒であり皮を思わせる光沢を放っている。右手には巨大な、禍々しい銀の輝きを放つ刃を持つ大鎌を持っている。顔は変わってはいない。だがその殺気は尋常ではないものになっていた。

「それが貴様の真の姿か」

「如何にも」

己の背中から声をかける牧村に対して答えた。

「これこそが私の真の姿」

「死神のか」

「この姿を見て生きていた者はいない」

今度はしばてんに向けての言葉だった。その言葉と共に目を一旦しばたかせる。

「それは言っておく」

「つまり俺を倒すことしかないということか」

「それ以外に聞こえるようには言っていないがな」

「そうだな。その言葉受けた」

しばてんもまたそこに絶対の自信を見せていた。



## 第十一話 死神その十四

「来い。殴り潰してくれる」  
「行くぞ」

しばてんの挑発を受ける形で一步前に出た。鎌は両手に持ちそのまま音もなく前に出たのであった。

そのまま滑るようにして砂浜を進みそのうえで。両手に持ったその鎌を右から左に一閃させた。

「速い」

「ただ速いだけではない」

まずは後ろに跳びその鎌をかわしたしばてんに対して告げる。

「この鎌は命を刈り取る鎌」

「死神の鎌だからか」

「そうだ。斬るのは身体ではない」

「こつも言うつのだった。」

「魂を斬るのだ」

「俺の魂を」

「貴様の魂、冥界に送ってやる」

言いながらまた前に出て来た。やはり音もなく進み出て来ている。

「苦しまずにな」

「苦しまずに冥界に送られるのは御前だ」

だがここでしばてんはその白い姿を消したのだった。

「むっ!？」

「死神が強いのはわかる」

死神の強さは認めていた。

「だが」

「だが？」

「俺は貴様以上に強い」

姿は見せずやはり声だけであった。

「それは言っておこう」

「私よりも強いというのか」

「俺もまた神と呼ばれていた」

「そうだったな」

闘いを見ていた牧村はしばてんの今の言葉に静かに頷いた。

「しばてんはな」

「猿神といった」

四国での古い伝承による。この場合の神とはほぼ魔物と言っても差し支えはない。日本では神と妖かしの境界は曖昧であり続けているのだ。

「だが。それでもだ」

「何だ？」

「魔神の方々程ではない」

このことは謙遜しているようだった。

「あの方々程ではな。まだな」

「まだではない」

「何っ!？」

死神の言葉に顔を向けるしばてんだった。

「それはどういうことだ？まだではないとは」

「それは永遠だ」

鎌を両手に強く握り締めての言葉だった。

「貴様は私に今倒されるのだからな」

「やはりそう言うのだな」

「そうだ。ではまたはじめるか」

「言われずとも」

ここでまた声がした。

「これで。死ぬのだ」

「むっっ!？」

牧村が声をあげた。見ればしばてんのその巨大な白い両腕だけが虚空に姿を現わした。そしてその巨大な両腕がそれぞれ死神に対し

て拳を向けてきたのだ。

「両腕だけか」

「俺をただ力だけの存在と思うな」

しばてんの声がまた聞こえてきた。

「こつした術も使えるのだ」

「突如として姿を現わし襲い掛かる」

「そつだ」

「成程な」

死神はその己に迫る白い巨大な両腕を見つつ述べていた。

「そう来るか」

「さあ。どうする？」

しばてんは勝ち誇った声で死神に問うてきた。

「この俺の両腕。かわさなければ」

「かわす必要はない」

ここで死神はこつ言った。

「別にな」

「何だと!？」

「何度も言うが私は神だ」

またこのことを言う死神だった。

「神にしか見えないものがある」

「戯言を」

「戯言ではない」

相変わらずの調子でしばてんに返す。

## 第十一話 死神その十五

「だからだ。私は動かない」

「愚かなようだな。思ったよりはな」

しばてんは死神のその様子を見て声を笑わせてきた。

「それではだ。死ね」

「終わりか」

牧村はしばてんのその両腕を見つつ呟いた。

「では。次は俺か」

死神は相変わらず動かない。その手に持っている鎌を動かすこともない。そうしてそのまましばてんの両腕を受けようとする。しかしその時だった。

「私がわかっていないとでも」

「ぬうつ!?!」

「思ったか」

その言葉と共に鎌を一閃させたのだった。下から上に。そうしてそれにより今切り裂いたのは己の右だった。右の虚空を切り裂いたのである。

「そこだな」

「虚空を切っただけではないか」

牧村は死神の至って落ち着いた顔を見てそれを見抜いた。

「どうやらな」

「その通りだ。見るのだ」

今両腕が死神を撃つ。ところがだった。

両腕はそのまま通り過ぎてしまった。死神の身体をすり抜けそのまま煙のように消えてしまったのだった。それだけであった。

「幻影か」

「術だ」

死神は鎌を正面に戻して静かに述べた。

「しばてんのな。そうだな」  
「如何にも」

ここでまたしばてんの声が聞こえてきた。

「俺は力技だけではないということだ」

「姿を消すことができ幻術も使うことができる」

「ただの猿と思うな」

「こつも言うのだった。」

「それはな」

「そして今の攻撃も防いだな」

死神は今しがた攻撃を浴びせたその右を見ることなく顔を正面にやっただま述べた。

「そうだな」

「ふふふ、如何にも」

ようやくしばてんが姿を現わしてきた。己の胸の前であの巨大な両腕をクロスさせている。見ればその両腕から血が一条流れ出ていた。

「危ういところだったかな」

「私が動くのを待っていたな」

死神は身体をそのしばてんに向けた。そうして正面に向き合った態勢になってまた対峙したのだった。

「そしてその瞬間にこそ」

「そうだ。動くその瞬間」

しばてんは言った。

「その時が最も隙が出る」

「それをわかつてのうえでか」

「そのつもりだったのだがな」

「残念だったな」

死神の声に不敵なものが宿った。

「それができずに」

「今はな」

「今は？」

「そう、今はだ」

死神の声には不敵なものがあったが対するしばてんのそれには余裕があった。

「あくまで今はな」

「今度はあるとでもいうのか？」

「動かなくては攻撃はできん」

しばてんは言った。

「だからだ。違うか？」

「そうだな」

死神もそれは否定しない。今は動かなくともだ。

「私とてそれは同じだ」

「では。覚悟するのだ」

しばてんはこう言ってまた姿を消してきた。すつとそのまま空  
間の中に消えていく。

「貴様が動いた時が最後だ。動かなくとも」

しばてんの余裕のある声は続く。

「やがて隙が出来る、その時が最後だ」

「果たしてそうかな？」

ここでまた死神の声に不敵なものが宿った。

## 第十一話 死神その十六

「そうそう上手くいくものかな？」

「余裕か？」

「違うな。確信だ」

言いながらその秀麗な顔の唇に笑みを浮かべてきた。

「私の実力をわかったうえでなのな」

「ほう。ではどうするのだ？」

「確かに一人ならば狙われる」

彼は言うのだった。

「一人ならばな」

「一人ならばか」

「だが。これならどうだ」

言いながら死神の身体に異変が起こったのだった。

「これならな」

「むっ！？」

「これは」

しばらくただけでなく牧村も声をあげた。ここで死神は分け身を使ってきたのだった。そのまま数人の死神に分かれ横一列に並んだのだった。

「分身か」

「そうだ」

死神はそれぞれの口で牧村に対して答えた。

「だが普通の分身ではない」

「何っ！？」

「私は神だ」

このことをまた言いもしてきた。

「ただ述を使っているわけではない」

「そこに何かあるのか」

「全て私だ」

「こう言うのだった。」

「そう、私は実体を幾つも出すことができる」

「そうした意味での分身だな？」

「その通りだ。ではしばてんよ」

「むっ!？」

「どうする？」

不敵なものは相変わらず声に入っていた。それはさらに増していた。

「全ての私を。倒すつもりか」

「むっ……」

「行くぞ」

死神の声が動いた。

「今ここで」

全ての死神が一斉に動いた。その瞬間だった。

「これよ!」

しばてんの腕がまた現われた。そうして死神の一体を打った。

「これで貴様は!」

「そこか」

その死神は拳に打たれて姿を消した。しかし他の死神達は違っていた。

「そこだな」

「そこにいたな」

それぞれの死神が言うのだった。

「ならば」

「覚悟するのだ」

その動いた死神達がそれぞれ腕が出て来た場所に鎌を投げた。両手を思いきり振り振り被り上から、正面から、そして横から投げつけた。その巨大な鎌を。

鎌達は凄まじい唸り声をあげ空を切り裂きつつその場所に向かう。



そして。

一斉に突き刺さった。そこから幾条もの鮮血が吹き出る。それと共にその白い身体に鎌を突き刺させた死神が紅く染まった身体を出してきた。

「おのれ……」

「言ったな」

死神達はそのしばてんを取り囲んだまま彼に告げてきた。

「私は全て実体だと」

「そうだな」

「確かにな」

鮮血に塗れながらもそれでも声を出すしばてんだった。

「では今俺が倒したのは」

「確かに私だ」

それは認めるのだった。

「だが。私は一人ではない」

「一人を倒しても他の私がいる」

「そういうことだ」

「そうだったか」

「そうだ。確かに貴様は強かった」

それは死神も認めた。

「仮にも神である私の一人を倒したのだからな」

「見事だ」

「しかしだ」

それでもだったのだ。

「貴様は一人」

「一人に過ぎない」

このことを言う。

## 第十一話 死神その十七

「しかしだ。私は」

「姿を幾つも持てるのか」

「そういうことだ。これでわかったな」

「身を以ってな」

しばてんはその口から赤いものを吐き出しながら答えた。

「わかった」

「では。行くがいい」

死神の聲がこのうえなく冷徹なものになった。

「冥府にな」

この言葉と共にしばてんの身体が燃え上がった。そのシルエットそのままに燃え上がる。だがその炎の色は髑髏天使のそれとは違い紅蓮だった。しばてんは紅蓮の炎となりその中に消えていくのだった。

「赤い炎か」

「貴様とは違う」

死神はその炎を見て呟いた牧村に背を向けたまま述べた。まだ幾つにも別れたままであるのでそれぞれの口で言ったのである。

「だからだ」

「炎の色も違うか」

「そうだ」

答えながらそれぞれの死神が前に出る。その炎に近づく。

そうしておのおの鎌を手を取った。そのうえで一人、また一人と自分自身に重なり合っいていき遂には一人の死神に戻ったのだった。

「貴様の炎は青だな」

「そうだ」

「髑髏天使の炎はそれだ」

「俺は青か」

「そして私は赤」

「今のそれだな」

「その通りだ。貴様に倒されればそのまま冥府に行く」  
髑髏天使に倒されてもそれは同じなのだった。

「だが。私は死神」

「冥府に送るのだな」

「送り主のいる炎は赤いのだ」

「だから今の炎も赤いのだな」

「そういうことだ。これでわかったな」

「一応はな」

死神のここまでの言葉に頷いてみせる。

「だが」

「だが？」

「貴様が死神なのはわかった」

牧村はまずはこのことを言った。既に炎は消え死神は彼の方に顔を向けてきていた。右手に鎌を持ち顔を左から後ろに向けている形である。

「そして炎のことも」

「ならばそれで問題はない筈だが」

「しかしだ」

ここで牧村の言葉に剣が宿った。

「貴様は魔物の魂を刈る為にこの世に出て来たと言ったな」

「私は嘘は言わない」

顔だけを牧村に向けたままで答える死神だった。

「神だからな」

「それもいい。ただ一つ気になることがある」

「それは何だというのだ？」

「貴様は。俺にとって何なのだ」

鋭い目で死神に対して問うのであった。

「俺の命には興味がないとも言ったが」

「その通りだ。貴様には興味はない」

このことははっきりと答える死神だった。

「私が興味のあるのは魔物だ。貴様ではない」

「では敵ではないというのか」

「その通りだ」

答えは彼にとっては一つしかなかった。

「だから貴様と闘うつもりはない」

「そうか」

「少なくともこちらからはだ」

話に前置きが入った。

「私からはな。貴様の魂については私は何の関心もない」

「魔物だけか」

「そういうことだ。ただしだ」

「ただし。何だ？」

「貴様の方から来るのなら別だ」

ここでこう言うのだった。

## 第十一話 死神その十八

「貴様の方からな。その時は容赦はしない」

「容赦は、か」

「このことは覚えておくことだ」

ここまで言う顔と顔を正面に戻し牧村に対して完全に背を向けた。白いスカートにそのフードが目につく。

「その時は。刈る」

「俺の魂をか」

「そのことはよく覚えておけ。それではな」

「何処に行く？」

「私の本来の世界に」

牧村に背を向けたまま前に歩きだした。

「戻る」

「また。来るのか」

牧村はその前に歩きだした彼に対して問うた。

「この世界に」

「無論だ。私はその為に来た」

歩きながら答える死神だった。

「だからだ。それは」

「当然か」

「そういうことだ。話はこれでいいな」

「ああ」

死神の言葉に対して頷いた。

「また会うことになる」

「今度は俺が魔物を倒す」

「さて、それはどうか」

今の牧村の言葉には賛成してはこなかった。

「これについては競争としたいものだ」

「競争!？」

「そうだ」

これが死神の提案だった。

「どちらが先に出て来た魔物を倒すか」

「争うということか」

「無論その時で衝突することも考えられる」

牧村に背を向けながら述べる。

「その時はだ」

「闘うというのか」

「それも一興ではある」

ここで死神は足を止めた。そして牧村に再び顔を向けて。

「そうは思わないか？」

「俺は自分からは仕掛けはしない」

牧村はそれは確かに言った。

「だが」

「降りかかる火の粉は払う」

牧村の言葉に続けた形になった。

「そうだな？」

「その通りだ。俺は火の粉は払う」

彼もこのことを自分自身の口から述べた。

「どんな火の粉でもな」

「ではその時は容赦はしない」

死神はここでは牧村に鋭い目を向けてきていた。闘いはしないがそれを受けている目であった。その目を牧村に向けたうえで語っているのだ。

「いいな」

「俺も同じだ」

牧村も今の死神と同じ目になっている。

「貴様が来るのならばだ」

「そうならないに越したことはないのだが」

「だが。魔物は倒す」

牧村も譲るつもりはなかった。

「それは覚えておくことだ。いいな」

「わかった」

一言で死神に対して返した。

「では。また会おう」

「闘いはまだ続く」

死神は再度牧村に背を向けた。

「そのことも忘れるな」

「お互いにな」

こう言葉を交えさせて今は別れる二人だった。世界は完全に夜になり二人はその中に姿を消す。だが闘いは終わったわけではない。むしろはじまりと言っていいものだった。

## 第十一話 完

2009・1・30

## 第十二話 大鎌その一

髑髏天使 第十二話

大鎌

「死神が出ました」

「そうね」

「わかっている」

女と男が老人の言葉に頷いていた。今三柱の魔神達は酒場にいた。そこで人間の世界の酒と馳走を楽しんでいる。壁にのれんがありそこに筆で手書きされている文字と木の壁に椅子やテーブルがその店の和風の趣を演出していた。その中で三人は顔を見合わせて話をしている。

「まさか出て来るとは思わなかったけれど」

「何故だ？」

「彼には彼の事情があるのでしょう」

老人は今はこう言うだけだった。

「死神の。ひいては」

「冥界のね」

「おおよそこういうことだろうな」

男がビールの大ジョッキを右手に己の予想を述べてきた。

「我等の活動が活発化し数が増えたことにより」

「それを抑える為になのね」

「そうでしょうね」

女も老人も彼のその予想に頷いた。

「それで彼は出て来た」

「冥界の意向を受けてですね」

「だとすればだ」

男は語りながらその目を光らせてきた。

「我等の今の動きを冥皇が見ている」



「それは最初からわかっていることです」

老人は男のこの予想を聞いてもいつもの穏やかな顔のままだった。そのうえで右手に持つ箸を操って海老の天麩羅をつゆにつけたうえで口の中に入れていた。

「冥界が常に我々を見ていることは」

「そうね。ただ」

「はい。死神が来たのははじめてです」

今度は女の言葉に応える。やはり問題はそこであった。

「それですが」

「髑髏天使だけではなくなった」

男は言う。

「敵がな」

「それもあります。ではこちらも」

「何か考えがあるの？」

「戦力があります」

老人の言葉はさらに落ち着いたものになった。

「こちらにも」

「二人を同時に相手にするということかしら」

「必要とあらば」

老人の言葉は笑っていた。

「それも可能です」

「そうね。魔物の数は多いわ」

「それにだ」

女に続いて男が言った。

「一対二は無法だが」

「二対二になるなら」

「それでいい」

こう女に返したのだった。

「これなら数は釣り合いが取れるな」

「そうね。それなら法に乗っ取ってるし」

「魔物の法に」

ここでまた妙な単語が話に出て来た。

「適っている。ならばそれでいいな」

「それではです」

男が語り終えたところで老人がまた口を開いた。

「次に出す魔物ですね」

「ええ、それね」

「誰を出すか？」

「前は私の日本から出てもらいました」

老人は話しながら刺身を食べる。鮪の刺身でありその赤い身を箸に取り山葵醤油で食べる。日本の伝統的な食べ方をしえいる。

「ですが彼は」

「やられたな」

「その死神によってね」

「はい、ですから」

さらに二人に語るのだった。

「今回は私の方からは」

「わかったわ。つまり」

「俺達からか」

「はい、それで御願いできるでしょうか」

「私はそれでいいわ」

まず応えたのは女であった。

## 第十二話 大鎌その二

「一人。面白いのを既に読んでいるわ」

「ほう、もうですか」

「ええ。まずはこれで一人ね」

「はい」

老人は女に対して頷いてみせた。

「まずはですね」

「それで俺か」

次に声を出したのは男だった。

「俺になるな」

「あんたは来てからまず二人出したわよね」

女は男に目を向けて問うた。その妖しい光を放つ目を。

「それでまた出せるのかしら」

「案ずることはない」

男はまずは落ち着いて、余裕のある態度を見せた。

「アメリカは大きな国だ」

「私の国もそうよ」

女の国は中国である。

「大きさは同じ位じゃなくて？」

「それはそうだがな」

男もそれは認める。

「だが。今はそれを張り合うつもりはない」

「そうなの」

「魔物を出せるということだ」

彼が言うのはこのことであった。

「魔物をな。それは安心してくれ」

「それでは誰を？」

「出せるのかしら」

老人と女はその彼を見つつ問うた。

「一人ですが」

「誰なの？」

「そちらに負けない面白いのがいる」

男はここで女の先程の言葉を返す形で述べた。

「また一人な。それを出す」

「期待していいのね」

「俺は期待を裏切らない」

言いつつ唐揚げを口に入れる。鶏の唐揚げでそれには既にレモンをかけている。それを生姜醤油で食べるといふ食べ方をしている。

「そういうことだ」

「そう。それもいつも通りね」

「そういうことだ。では話は決まりだな」

「ええ、そうね」

まずは女が彼の言葉に頷いた。彼女は頷きながら揚げを食べた。厚揚げを焼いてカラッとさせたものである。それを醤油に漬けて食べていた。

「私はそれでいいわ」

「あんたはどうなんだ？」

「私事です」

老人はいつもの微笑で彼の言葉に返した。

「ではそういうことで」

「よし。これで話は終わりだ」

「そうね」

「そうですね」

「それではだ」

男は話を変えてきた。

「ここの食い物だが」

「いいものでしょう？」

老人が男に言葉を返した。

「この店は」

「この時代の食い物は味がかなりいいが」

「この店は特にです」

「この男に告げた。」

「特にいいですよ」

「そうみたいだな」

「はい。ですから」

「今日はここで最後まで飲み食いして」

「彼等の中ではこれはもう決まっていた。」

「そして」

「終わりですね」

「これで」

「彼等はそれぞれ言った。」

「そういうことよ。今日はね」

「先は長いですからね」

「老人の笑みはいつもと変わらない穏やかなものであった。」

「そういうことにしましょう」

「だが。それでもだ」

「男もまたいつもと変わらない言葉の調子である。」

## 第十二話 大鎌その三

「あの死神はな」

「面白くなつてきているのは確かね」

女はこれだけ言つて妖しく微笑んでみせたのだつた。

「一人より二人ね」

「さて、その二人ですが」

老人は笑みはそのままで言葉だけ変えてきた。

「果たしてどうなるでしょうか」

「争うのか？」

男は剣呑な目になり呟いた。

「天使と死神が」

「天使と死神ね」

女はそこに注目した。その二つの全く異なるとされているそれぞれの存在についてだ。

「相容れない存在同士ではあるわね」

「そうですね」

老人も女の言葉に同意して頷く。

「それは間違いありません」

「ええ。けれどどうなるか」

女の妖しい笑みは消えた。真剣な顔になっていた。

「それね」

「さて、どうなるか」

「それも見せてもらうとしましょう」

三人は人間の世界の店で人間の姿で話をする。しかしそこで話されているものは人間のそれではなく異なつた存在のものであるのだつた。

牧村は髑髏天使として見たものをそのまま博士に対して話した。その話される内容を聞いた博士はまずはその目を細く顰めさせその

うえで彼に対して言うのであった。その場はいつもと同じ彼の研究室であった。やはり周りには妖怪達がたむろしてそれぞれ何かをしていた。

「死神か」

「知っているか？」

「その死神もな」

「その死神だと!？」

「うむ」

学者というよりは宗教家の顔であった。その顔で目を顰めさせる牧村に対して答えた。

「そうじゃ」

「死神は何人でもいるのか」

「少なくとも一人ではないのは間違いない」

博士はまた牧村に答えた。

「何人でもおるのじゃよ」

「何人もか」

「例えばギリシア神話に出て来る死神じゃが」

「タナトスだったか」

牧村は己の中にあるその知識を辿って述べた。

「ギリシア神話だと」

「うむ。そうじゃ」

また牧村の言葉に頷いてみせた。

「ギリシア神話ではな。そうじゃ」

「タナトスとあの死神は違うのか」

「あの死神は冥府の神の一人」

「ハーデスの僕ではなくか」

「ハーデスはギリシア世界の冥府の神じゃがそちらの冥府の世界の神ではないのじゃよ」

「そうか」

牧村はこれで理解したのだった。あらかたであるが。

「様々な冥府のうちの一つの神か」

「世界は一つではないのじゃよ」

博士も牧村の言葉に続いて述べた。

「一つではな。幾つもある」

「複数の世界があるということだな」

「北欧神話でのユグドラシルには無数の葉があるのう」

今度の話は北欧神話に関するものになっていた。

「そしてその葉一つ一つが世界なのじゃよ」

「葉の一枚一枚がか」

「そういうことじゃ。世界はユグドラシルの葉の数だけある」

博士はまた言った。

「あの死神はその冥府の世界の一つにあるのじゃよ」

「成程な」

牧村は納得した顔で静かに頷いた。

「話は完全にわかった」

「あの死神には名前はない」

博士は今度はその死神について話した。

「名前はな。死神というそれこそが名前じゃよ」

「死神がか」

「そういうことじゃ。あの死神はその世界の冥府の主神の命に従い

動いておる」

「その主神のか」

「魔物を倒す為にな」

「では俺の敵ではないな」

牧村が次に考えたのはこのことだった。



## 第十二話 大鎌その四

「ならやはり闘う必然性はないか」

「さて、それはどうかのう」

ところが彼はここで首を捻りその動作を牧村に見せるのだった。

「そこまではわからんぞ」

「敵になるというのか？」

「確かに魔物を倒すという目的は同じじゃ」

博士はそれは確かだと前置きした。

「それはな」

「しかしか」

「目的は同じでもそれでも味方とは限らん」

博士はまた言った。

「それはな」

「世の中は単純なものじゃない」

それがわからない牧村でもなかった。この程度の世界の理は彼も

わきまえていた。

「目的は同じでもそこで衝突するものがあれば」

「その通りじゃ。あの死神は悪しき存在ではない」

「あくまで命を刈るだけか」

「死は必然じゃ」

この考えは東洋的な考えであった。だが真理でありこれから逃れられることができた者は少なくとも博士も牧村も知らないことである。

「じゃから。悪ではない」

「魔物を倒すのも必然」

「うむ」

牧村の言葉に対して頷いてみせた。

「しかしじゃ」

「その過程では何があるかわからないか」

「偶然はいい場合と悪い場合があるものじゃ」

博士はこうも言った。

「じゃからのう。普通にやっていれば闘うことはないのじゃがな」

「普通なら、か」

「しかし。そもそも髑髏天使は普通ではない」

「そうだな」

髑髏天使のことは彼が最もわかっていた。他ならぬその髑髏天使であるからだ。

「それはな」

「そして死神がこの世に出ることもな」

「普通ではないか」

「普通でない存在が出会う」

「それだけで何かがあるな」

「そう考えてよい。それでじゃ」

博士の言葉は続く。

「死神と闘った場合じゃが」

「どうなるというのだ？その場合は」

「危険じゃよ」

博士の言葉だけでなくその目にも剣呑なものが宿った。

「その場合はな。死神は強い」

「神だからか」

「神は何故神かというとじゃ」

「力があるからか」

「そういうことじゃ。人間を超越したその力」

「魔物の神と同じだな」

彼は今度は魔神達を話に出してきた。

「それは」

「その通りじゃよ。今の髑髏天使では魔神に勝てはせん」

厳然たる事実であった。まだ彼はそこまで至ってはいない、精々

魔物を倒せる程度でしかない。そうした意味で髑髏天使もまた卑小な存在でしかなかった。

「決してな」

「そして死神にもか」

「うむ、勝てん」

また現実が語られる。

「だから。決して闘うな」

「向こうから来てもか」

「それでもじゃ」

また言う博士だった。

「よいな。それはな」

「一応は聞いておく」

だが今の博士の忠告に対して牧村の返答は随分とぶしつけでしかも誠意のないものだった。そしてそれを隠そうともしなかった。

## 第十二話 大鎌その五

「だが。それでもだ」

「闘うというのだな」

「こちらから闘いは避ける」

これは言うのだった。

「しかし。向こうから来た場合はだ」

「違うのか」

「振りかかる火の粉は払う」

こつも言った。

「それが俺の主義だ」

「どうなつても知らんぞ」

博士はそんな彼を強い目で忠告した。

「神を相手にしたならばな」

「安心しろ。死にはしない」

彼は素っ気無く返した。

「少なくとも死ぬつもりはない」

「神を相手にしてはそうも言えんのだが」

「神だからといって無敵ではないな」

「世の中に無敵の存在なぞおらんよ」

博士の真理を語る言葉は続く。

「しかしのう。力の差は覆せぬものじゃぞ」

「力だけで闘うつもりもない」

腕を組んで述べた。

「その場合はな。もっとも俺から仕掛けるつもりはないがな」

「ならいいがのう」

「とりあえず死神の存在はわかった」

それは受け入れた。

「それでだ。次は」

「魔物か」

「今度は何が出て来るかだが」

「ふむ。何が出て来るかのう」

博士は己のその白く長い髭を右手でしごきつつ述べた。考えるようにそれでいて探るような。そうした顔で牧村に対して話すのだった。

「今度はな」

「魔物といっても多いな」

「今までは一体ずつじゃったがそれもわからんな」

「わからない？」

「じゃから死神もある」

また死神の存在が話に出された。

「向こうもそれはわかっておるからな」

「二体か」

「今までは一対一じゃからどうにかなったが」

「死神に向けた戦力が作戦が変わってこちらに向かう場合もある」

「そういうことじゃ。その場合は辛くなるぞ」

「二体を同時に相手にする」

現実を考えるのだった。

「その場合もだな」

「その場合のことは考えておくようにな」

「そうだな。そうさせてもらおう」

今度は牧村が己の顎に手を当てた。

「俺も。むざむざとやられるつもりはない」

「そうじゃ。その意気じゃよ」

博士は牧村のその意気は認めた。しかし言葉はさらに出すのだった。

「じゃが」

「何だ？」

「一つ気をつけておいた方がいいのかも知れんぞ」

不意にこんなことを言ってきたのだった。

「若しかしたらのう」

「何かあるのか？」

「今読んでいる文献に一つ妙なことが書かれておった」

「文献か」

「タイから取り寄せたものじゃが」

見れば今度は机の上に巻物がある。やはりかなり古ぼけて触っただけで崩れてしまいそう。そうした紙の巻物があった。

「タイか」

「タイといつても。これは」

「また随分古い時代のものなのわかるがな」

「千年は前のものだな」

「アユタヤとかそういう時代の前だったか」

「カンボジアの方と一緒にたつた頃じゃったかのう」

博士は今度は左手を顎に当てて考える顔になって述べた。

## 第十二話 大鎌その六

「これは」

「アンコールワットか」

「うむ、その奥から見つけてきたものだそうじゃ」

実際にその象徴とも言えるアンコールワットの話が出て来た。言わずと知れた東南アジア最大の仏教遺跡の一つである。カンボジアはタイの領土であった時代もタイを征服していたような時代もあったのだ。東南アジアの民族史も実に複雑なものがあるのだ。

「これはな」

「何語だ？」

「当時のタイの言葉じゃがな」

博士は言語についてはこう答えた。

「しかし。それでもこれは」

「わかりにくいか」

「今のタイ語ならわかる」

あくまで今は、であった。

「しかしこの時代になるとな。どうにもな」

「だが。わかったと今言った」

「多少は読める」

これが返答だった。

「解説中というわけじゃよ。それでここに書いてあったのじゃよ」

「どういったことがだ？」

「やはり東南アジアにも過去髑髏天使は現われた」

やはり話は髑髏天使のことであった。これしかなかった。

「千年以上にも前にな」

「俺の前の髑髏天使の一人か」

「その通りじゃ。その髑髏天使もまた魔物達と戦い続けておった」

この辺りは変わりはないのだった。髑髏天使は五十年に一度こ

の世に現われてそうして魔物達を滅していく。これが宿命なのだから。

「そして」

「そして？」

「魔物に近付いた」

博士は巻物を見ながら述べた。

「こう書かれておるのう」

「魔物に？」

「まだよくわからんが」

巻物を見ながら首を捻るのだった。

「そう書かれておるぞ」

「魔物に近付くだと」

「何じゃ、書かれておるのはこれだけじゃ」

博士は今度はこう言った。

「この巻物には」

「魔物に近付く」

「どういう意味じゃ？」

博士は身体を起こして腕を組んだうえで述べた。

「これは。意味がわからんな」

「髑髏天使は魔物を倒す存在だな」

「今の君がそれそのものじゃな」

「それが魔物に近付く」

牧村の表情は動いてはいないがそれでも目が動いていた。

「意味がわからないが」

「これについても文献を探していくかのう」

「じゃあさ、博士」

「今度はさ」

ここでそれまでめいめい勝手に部屋の中でたむろってあれこれしていた妖怪達が博士の周りに来て声をかけてきた。見ればから傘に一つ目小僧である。



「南米の文献なんてどう？」  
「そこ調べてみたら？」  
「南米の？」  
「そこのはまだじゃない。だから」  
「調べてみたら？」  
「あそこは難しいのう」  
博士はそのから傘と一つ目小僧に顔を向けて答えたのだった。  
「南米はのう」  
「あれっ、どうして？」  
「あそこなら何かあるんじゃないの？」  
「あるものはあるがないものもあるのじゃよ」  
博士はいぶかしむ彼等にこう答えたのだった。  
「あそこはな」  
「あるものはあるけれどないものはない」  
「何、それ」  
「じゃから。ないものはないのじゃよ」  
また妖怪達に対して言うのだった。

## 第十二話 大鎌その七

「ないものはのう」

「どういうこと？それって」

「意味わからないんだけれど」

「中南米の文献はないのじゃよ」

今度はこう言った。

「殆どのう」 8

「ないんだ」

「何で？」

「全部壊されて燃やされてしまったからじゃよ」

博士は歴史の話に移った。その話に移りながら寂しい顔になっていく。

「スペインにのう。侵略して何もかもを壊して焼いたのじゃよ」

「それで残ってないんだね」

「あそこには」

「その通りじゃ。それでもあれこれやって集めてはおるがな」

それでもであった。この辺りは学者特有の貪欲さであった。

「しかし。集まりは悪いのう」

「ふうん、そうなんだ」

「じゃあそっちは期待できないかな」

「いやいや、これがまた違っておるのじゃよ」

それでもという感じでまた周りにいる妖怪達に話した。

「その僅かな文献からまた一つ面白いことがわかったぞ」

「面白いこと!？」

その言葉に反応したのは牧村だった。

「何だ、それは」

「魔神のことじゃ」

今度の話はこれであった。

「魔神のな。聞きたいか？」

「是非共な」

牧村の返答は決まっていた。魔神といえば彼の究極の敵である。敵のことを聞きたくない、知りたくない者なぞいはしない。それに命がかかっているのなら余計にであった。

「聞かせてくれ。それでどういった魔神だ？」

「いや、魔神は中南米にもおった」

博士の言葉は牧村が今求めているような確実なものではなかった。

「それだけじゃがな」

「それだけか」

「一人じゃな」

数はわかっているようである。

「おるようじゃな」

「中南米にも魔神がか」

「その名前もわかっている」

これはわかっているようである。

「カマソツツという」

「カマソツツだと!？」

「とりあえず名前はわかった」

あらためてこのことを牧村に告げた。

「しかし。どういった魔神かはまだわからん」

「そうか」

「それはこれから調べさせてもらう」

「ではそちらも頼む」

「そのカマソツツも近いうちに現われるかも知れん」

博士は考える顔で述べた。

「今は魔神達の封印の効果が切れる時のようじゃから」

「そのせいでか」

「うむ。その時は用心することじゃ」

博士の言葉にも表情にも警告するものが宿った。その警告が誰に

対してのものかは今ここにいる者は誰であれ瞬時に察した。

「くれぐれもな」

「魔神はこれで四人か」

「あと八人じゃな」

魔神の数についても話される。

「おるのは」

「その八人も必ず来るな」

「髑髏天使は魔物を呼ぶ」

これまで何度となく言われてきた言葉である。実際に彼はこれまで何人もの魔物を倒してきている。それと共に強くもなっているのであるが。

「それは魔物達の神であつてもな」

「そうだな。それではだ」

牧村はここまで話すと席を立った。

「今日はこれだな」

「行くのか」

「これから講義に行かなくてはいけない」  
だからだというのである。

## 第十二話 大鎌その八

「それでも大学生だからな」

「そういえばそうだったね」

「牧村さんもね」

妖怪達も忘れかけてしまっていることだった。彼等にとっては牧村は人間の世界における大学生ではなく髑髏天使なのだ。だからである。

「そしてその後はまたテニスとフェシングじゃ」

「ランニングも続けているようじゃな」

「それと筋トレも毎日している」

博士の言葉に返した。

「しつかりとな」

「よいことじゃ。それがそのまま君の強さになるからのう」

「さらに上の天使にか」

「なれるやも知れぬ」

牧村の顔を見上げつつ述べた。

「さらにな」

「魔物を倒す為に必要ならばなってみせる」

牧村もそれに応えて言葉を返した。

「それならばな」

これが今のこの場での最後の言葉だった。彼は博士の研究室を後にした。そして建物も出て外に出るとそこにあの彼がいたのだった。「御前は」

「この……大学だったな」

死神は今黒い、神父の法衣を思わせるゆつたりとした長い服を着ていた。そのうえで牧村の前において一旦周囲を見回していた。

「八条大学だったか。日本の学び舎だな」

「それはその通りだ」

牧村は死神の今の言葉には素直に教えた。

「だが。どうしてここに」

「何度も言うがこちらからは仕掛けることはない」

死神は牧村の警戒する気配に気付いていた。

「それは安心しろ」

「では何故ここにいる」

「ここに魔物の気配が強く残っているからだ」

「魔物のか」

「この場所でも闘ったな」

死神は牧村に目を向けて問うてきた。

「そうだな」

「如何にも」

牧村は今度も素直に述べた。

「闘った。そして倒した」

「この気配はマニトールか」

彼は気配からそこまで読んでみせた。

「そうではないか？」

「確かそうした名前だったな」

これは牧村はあまり意識して覚えていたものではない。まずは倒すことを考えていつも動いているからだ。魔物の名前にはさして興味はないのが彼だった。

「蜘蛛の様な奴だった」

「ウエンティゴの配下だ」

死神はここで言った。

「あれはな」

「ウエンティゴ。魔神の一人か」

「そうだ。北米に古くから存在している氷の魔神だ」

死神はウエンティゴについての話もはじめた。

「その者も気配も残っているな」

「ここで会った」

牧村はこのこともそのまま述べた。

「闘うことはなかったがな」

「少なくとも魔神達は今は御前とは闘わない」

死神は静かに彼に告げた。

「今はな」

「俺がまだそこまでの強さにはなっていないからか」

「魔物は闘いを好む」

だからこそ魔物なのである。闘うことに興味がなければ妖怪となる。妖怪と魔物の違いはこれだけだがそれを隔てているそれは大きいものなのだった。

「しかも闘いがいのある闘いをな」

「俺はそこまで達してはいない」

「そういうことだ。今の貴様では魔神はおるかさらに上の魔物の相手もできない」

「今の俺にはか」

「そうだ。今はな」

あえて今は、と限定する両者であった。

## 第十二話 大鎌その九

「これからはわからないがな」

「では強くなってみせよう」

「そうか」

「その邪魔をするのなら遠慮はしない」

牧村はその目に鋭いものを宿らせたうえで死神に言ってきた。少なくとも一歩も引かないものがそこにはあった。それを抜き身にしてる。

「俺はな」

「私は神だ」

死神もまたその抜き身のものを正面から受けて引かなかった。

「魔神達と同じな。それでもだな」

「それでもな」

牧村はここでも引かなかった。

「その時は遠慮はしない」

「少なくとも心はあるか」

死神は牧村のここまでの言葉を聞いたうえで述べたのだった。

「わかった」

「何がわかった？」

「貴様のことがだ」

死神はまた静かに言葉を返した。

「これでわかった。では今は去ろう」

「消えるというのは」

「聞きたいことは聞いた」

彼は言う。

「そして知りたいことも知ったからな。用は終わった」

「だが。また会うことになるな」

髑髏天使は去ろうと踵を返しだした死神の背に対して声をかけた。



「またな」

「それは間違いなくな」

死神は彼に背を向けつつ言葉を返すのだった。

「闘いの場でな」

「魔物は俺が倒す」

牧村の声には強さが宿った。

「どの魔物もな」

「それは私も同じだ」

話す死神の前にあのハーレーダビットソンが来た。操縦する者はいなかったがそれでもひとりでに主のところに来て来た。そうしてひとりでに主の前に止まったのだった。

「私もまた。魔物の命を刈る」

「目的は同じだな」

「だが。狙うものもまた同じだ」

ここに問題があった。

「魔物だな」

「私は狙ったものは諦めない」

死神は牧村に顔を向けて言ってきた。

「死神だからな」

「死神だからか」

「そうだ。外したことはない」

「こつも言うのだった。」

「一度もな」

「では外した時はどうするのだ？」

牧村は自分自身に顔を向けるその死神に対して問うた。

「その場合は」

「それはもう決めてある」

死神はすぐに彼に答えてきた。

「その場合はな」

「ではどうするのだ？」

「その外した原因をなおす」  
彼は答えた。

「そしてそれが障害ならば」

「障害ならば？」

「その障害を刈る」

一言であつた。

「それだけだ。その障害を刈るだけだ」

「そうか。刈るか」

「容赦はしない」

死神はさらに言う。

「その場合はな」

「そうか。その場合はか」

「覚えておくことだ」

語る死神の目からは鋭い光を放っている。その鋭い光で彼を見ている。それは冷静だか明らかな殺気を放っていた。言うまでもなく彼に向けている。

「いいな」

「覚えてはおく」

牧村はその殺気を受けても怯むことなく彼に言葉を返した。

## 第十二話 大鎌その十

「それはな」

「覚えてはおく、か」

「覚えてはおく」

彼はまたこの言葉を口にした。

「それだけだ」

「死神の言葉と鎌は絶対だ」

鎌は出してはいないが背負ってはいた。その心に。

「神としてな」

「神か」

「ただしあの魔神達とは違う」

魔物達を統べるその魔神達だ。二人にとっては共通の敵だ。共通の敵にはなるがそれでもだった。二人には結び付きは何一つ見られなかった。

それは今もであった。死神は冷たい、氷そのものの殺気を牧村に向け言葉を出していた。しかしその視線は顔を前に戻してそれは彼から離れた。

「また会おう」

「おそらく今度は魔物の前でだな」

「またすぐに来る」

死神は今度はただ冷たいだけの言葉になっていた。

「奴等もな」

「それはわかっている。だが魔物を倒すのは俺だ」

牧村は先程の話に対する返答をここでもした。

「何があるうともな」

「私もまた魔物を刈る」

死神は己のハーレーに乗りながらその彼に告げた。

「それだけだ」

最後にこう言ってその場を後にしたのだった。牧村は死神がハリーのエンジンを入れヘルメットを被ったうえで場を去ったのを見届けてから彼も大学生生活に戻るのだった。それが終わってから家に戻りシャワーを浴びてから夕食に入った。夕食は今は妹の未久と二人だった。

「お父さんもお母さんも遅くなるんだって」

「そうなのか」

「帰る時に携帯から連絡があってね」

未久は右手に赤い箸を持ち左手に持っている茶碗の飯を食べながら彼に述べた。

「二人で映画館行くんだったって」

「映画か」

「うん。それで今日は私達二人だけよ」

また兄に話した。

「だから今日は私が作ったのよ」

「米も炊いたのか」

「そうよ」

「この米もか」

牧村はここで己が左手に持っている飯を見た。見ればその飯は普通の白米だけではなかった。他にも様々なものが入っているのだった。

「色々が入ってるな」

「十六穀よ」

未久は言う。

「それ炊いたんだけれど」

「十六穀か」

「そうよ。身体にいいっていうから」

「それでか」

「それでおかずは」

今度はおかずについて言及する。

「鰯とお豆腐と若布のお味噌汁だけねど」

「それに梅干か」

「どう？」

兄の目を見て問う。

「今日のメニューは」

「健康志向というわけか」

「ダイエットにいいらしいから」

「ダイエットか」

「最近太ったのよ」

未久は言いながらそのまだ幼さが残りはしているが整っている顔を顰めさせた。

「ちよつとね」

「お菓子の食べ過ぎだな」

その妹に対して素っ気無くきついことを言う牧村だった。

「それはな」

「またストレートに言うわね」

「だが事実だな」

やはり容赦がない。

「それはな。そうだな」

「まあね」

妹も渋々ながらそのことを認めた。

「アイスクャンデーとかタルトとか一杯食べたし」

「俺もそうだがな」

「お兄ちゃんが太らないのってやっぱり運動してるからよね」

未久は今度はこう兄に問うてきた。

「テニスにフェシングについて」

「そうだな」

少しだけ自己分析してから答える牧村だった。

## 第十二話 大鎌その十一

「やはりな。それが大きい」

「私もやってるけれど」

彼女は学校では吹奏楽部に入っている。吹奏楽はただ演奏をするだけではない。それにあたって体力をつける為にランニングや筋力トレーニングも行うのだ。この辺りは厳しいのである。

「けれど。それでも」

「要は食べ過ぎないことだ」

牧村はまたしても素っ気無く告げた。

「甘いものばかりな。食べてもいいが」

「食べ過ぎないのね」

「さもなければ太る」

彼はまた言った。

「それだけだ。太ってもいいというのなら別だがな」

「嫌よ、そんなの」

太るといふ言葉には敏感な顔を見せる未久だった。

「太ったら嫌われるから」

「嫌われる？」

「そうよ、嫌われるわ」

未久はまだ自分が何を言っているのかわからなかった。この辺りは迂闊だった。

「だから困るわ。それはね」

「誰に嫌われるのだ？」

そしてそれを聞き逃す牧村ではなかった。その十六穀飯を鰯で食べながら妹に対して問うのだった。その鋭い目をじっと向けながら。

「それで」

「それでって決まってるじゃない」

やはり気付かない未久だった。

「健也君にね。嫌われるわ」

「そうか。健也というのか」

牧村は妹から名前まで聞いて納得した顔で頷いた。

「御前の彼氏は。そうか」

「えっ、何でわかったの!？」

未久はここでもまだ気付いていなかった。やはり迂闊である。

「私に彼氏がいるって。どうして？」

「今言った」

牧村はここでも素っ気無く告げた。

「今な。自分でな」

「あっ、しまった」

「俺にとっては別にどうでもいい」

だからといって口出しはしないのだった。妹が付き合う相手はとりあえずまともな人間ならそれでいい、こう考えているだけなのである。

「俺はな」

「お父さんやお母さんには内緒にしてね」

妹はその顔を乗り出して兄に対して言った。

「いい?そこは」

「俺は何も言わない」

やはり素っ気無い牧村だった。

「それについてはな」

「吹奏楽部とクラスで一緒なのよ」

未久はまた自分で言ったが今度は少し違っていた。

「それでね。一緒にいるうちに」

「それで付き合うようになったのか」

「言っておくけれどキスはまだよ」

どうにも焦っている感じも見られた。

「だから。別に」

「俺は何も聞いていないが」

「それでもよ」

必死に言うのだった。いささか弁明めいた調子で。

「何もないから。健也君も真面目だし」

「真面目ならそれでいい」

やはり何も言わない兄だった。

「それでな」

「そう。よかった」

「ただ」

安堵する妹だったが何とここでその彼女に言ってきた。

「ただ？」

「この十六穀飯だが」

彼が言うのは今食べているその飯についてであった。

「またしてくれるか」

「気に入ったの？」

「美味い」

それははっきりと認めるのだった。



## 第十二話 大鎌その十二

「実にな。だからだ」

「うん、わかったわ」

妹も笑顔で彼のその言葉に頷いた。そのうえで言う。

「また作ってくれってことね」

「しかも身体にもいい」

牧村はそのことについても述べた。

「身体にもな」

「それもあるのよ」

未久もこのことをおくわかっていた。

「ダイエットにいいだけじゃないし」

「食べ物には気を使うべきだ」

牧村はこのことを強く認識していた。

「何でもな」

「お兄ちゃんただでさえテニスにフェシングもしてるしね」

「格闘家ではない」

それは否定した。

「俺はそうではない。だから」

「ああ、格闘家の人って」

未久も今の兄の言葉であることを思い出した。

「食べ物に凄い気を使ってるのよね、確か」

「まず低カロリーに高タンパクだ」

格闘家の食事はそれを念頭に置いて採られる。それは肉体を作り動きにも影響するからだ。だからそうした食事に行っているのである。

「メニューとしては」

「どういったものなの？」

「鳥のササミにゆで卵の白身だな」

「黄色い部分は食べないの」

「あの部分にはカロリーが高い」

だから食べないのだ。あくまでカロリーのない白身だけである。

「だから食べない」

「何か勿体無い気がするけれど」

未久にとってはそうである。彼女は食べ物が無駄にすることを好んではない。これは子供の頃から両親に強く言われてきたからである。

「それって」

「だがそうやって強い身体を作る」

兄の言葉は絶対のものを含んでいた。

「そうやってな」

「その為には黄身は邪魔なのね」

「少なくとも食べはしない」

そういうことであつた。

「他にも色々と食べ物には気を使っている」

「低カロリーに高タンパクね」

未久も話を聞いて考える顔になった。

「それだつたらお蕎麦やお豆腐とかもいいわよね」

「そうだな」

「ああ、そういえば」

未久はここであることを思い出した。それは。

「あのプロ野球選手」

「あいつか」

牧村もこれでわかつた。すぐにだつた。

「あの人も筋肉、格闘家になるって言つてそういう風な食事に変えたんだっけ」

「そうだつたな」

「それで格闘家の身体にして」

「あれは馬鹿だ」

彼はそれを一言でばっさり切り捨てた。

「馬鹿だ。それ以外の何者でもない」

「そうなの」

「格等家の筋肉は格闘家の為のものだ」

当然のことだった。

「そして野球選手には野球選手の筋肉があり肉体がある」

「やっぱりそうなるわよね」

未久も兄の今の話を聞いて頷く。

「野球選手って走ったり守ったり打ったり投げたりするけれど闘わないわよね」

「そうだ。それで闘う筋肉を着けても」

「何にもならないわよね」

「それがわからないということは馬鹿だ」

また馬鹿だと言った。

「そしてそれに気付かず持て囃す連中もな。馬鹿だ」

「その人達もなのね。じゃあお兄ちゃんは」

「俺は特に食事制限するつもりはない」

牧村はここまで話したうえで自分についても話した。

## 第十二話 大鎌その十三

「特にな」

「今まで通りいつも通りってこと？」

「そうだ」

静かに妹に答えた。

「それはな。変える気はない」

「テニスとかフェシングにはそういう気遣いはないの」

「食べられるものは何でも食べる」

語るその目が不意に強いものになった。

「そうしないと。生きていられない」

「それって大袈裟じゃないの？」

兄のもう一つの顔を知らない彼女にとってはそう聞こえる言葉だった。

「生きていられないって」

「そうか」

「そうよ。まあ今は食べましょう」

あらためて兄に告げた。

「早く食べないと折角の料理が冷めちゃうわよ」

「ああ、わかった」

妹の言葉に頷きそのうえでまた食べはじめた。鰯も味噌汁も実に美味かった。この時は兄妹で楽しい夕食の時を過ごした。それから数日後だった。

休日の昼にサイドカーで道を進んでいた。趣味のドライブである。そこで長いトンネルの中に入った時だった。道の真ん中に一人立っていた。

牧村はその者を見てサイドカーを止めた。丁度その者のすぐ前だ。見るとそれは小柄な男であった。

「危ない……. . . . .という忠告は無用のようだな」

「その通りだよ」

小柄な男はヘルメットを脱ぎながら話す牧村に楽しそうな声をかけてきた。

「僕はね。そういうのが大好きだから」

「好きか」

「だって人間じゃないから」

こう牧村に返すのだった。

「だからさ。ここにいるんだ」

「魔物としてか」

「中国から来たよ」

彼はまた言った。

「九尾の狐様に呼ばれてね」

「あの女からか」

「僕の名前は妖犬」

己の本来の名も告げてきた。

「覚えておく必要はないよ」

「それは何故だ？」

「だって君死ぬから」

牧村を完全ニコ馬鹿にした言葉だった。

「ここでね。僕の手でね」

「そう言っただけが倒れた者は見てきた」

牧村はサイドカーから降りつつその妖犬に言葉を返した。

「よくな。貴様もその一人になるか」

「自信家だね。そういうのって好きだよ」

やはりその言葉の調子を変えない。

「僕もね。自信家だから」

「だから闘うというのか」

サイドカーから降りてから妖犬と対峙しだした。

「容赦はしないぞ」

「遠慮してもらうのは嫌いだからいいよ」

「それでは。はじめるか」

牧村は早速両手を動かした。そうしてその両手を拳にして胸の前で打ち合わせる。するとその両手から白い光が放たれ全身を包み込んだ。それが消えた時。異形の天使がいた。

「……………行くぞ」

右手を少し前に出し開いてから握り締める。牧村来期は髑髏天使にその姿を変えたのだった。

「髑髏天使だね」

「その通りだ」

「格好いいね。その髑髏にあつちの鎧が」

自分の国である中国から見ての言葉だった。

「いい感じだよ。それじゃあ僕も」

「むっ!？」

「本来の姿に戻るよ」

こう言つてその身体を白い煙で覆った。それが消えるとそこには黒い毛を持ちその身体を中国の鎧と兜で護っている犬が姿を現わした。

その犬は二本足で立ち手に槍を持っている。確かに異形の姿であった。

「それが貴様の正体か」

「狐と同じで犬も長く生きると力を持つんだ」

その異形の魔物、妖犬はここでも楽しそうに笑いながら髑髏天使に語った。

「僕みたいだね。僕は三百年生きているよ」

「三百年か」

「九尾の狐様よりはずっと短いけれど」

このことは言いながら少し照れ臭そうだった。

「けれど。君よりはずっと長いから」

「一つ言っておく」

髑髏天使に対しては優位性を述べてきたが彼はそれを平然と受け

流したうえで逆にこう切り返してみせたのであった。至極冷静に。

## 第十二話 大鎌その十四

「闘いにおいて何年生きていたかどうかは関係ない」

「関係ないんだね」

「どちらが強いか弱いかな」

彼が言うのはそのことだった。

「それだけだ。強いか弱いかな」

「だったらやっぱり僕の方が上だよ」

妖犬は髑髏天使の今の言葉を受けてもやはり平然としたものであった。飄々としたその語り口の中に余裕と優越感がはっきりとあった。

「僕の方がね」

「それは何故だ？」

「三百年生きているということはそれだけ霊力を蓄える時があったということだよ」

ここでも悠然とした口調だった。

「それだけね。だから」

「貴様は俺より強いというのか」

「うん。僕が君を倒す」

言いながらその槍を前に構えてきた。

「ここだね。苦しませることはしないからそれは安心してね」

「面白い」

牧村はその言葉も受けるのだった。

「それではだ」

「やるよね」

「髑髏天使は逃げることはない」

彼もまたその右手に持つ剣を構えるのだった。

「何があるうとも闘う」

「そう。それじゃあね」



「行くぞ」

先に動いたのは髑髏天使であった。すすす、と摺り足で前に出てそのうえで右手に持っているその剣を繰り出す。最初は突きの連続だった。

「突き!？」

「槍は確かに優れた武器だ」

髑髏天使もそれは認識していた。

「しかしだ」

「しかし？」

「手元に入ればその優れたものは逆に枷になる」

言いながらさらに突きを出す。妖犬は今はその突きを左右に身体を捻って避けているだけだ。だがそこにも余裕に満ちたものを見せているのだった。

「そう。その場合は」

「悪いけれどね」

だが妖犬はその髑髏天使にまた言葉を返してきた。

「僕は魔物だよ」

「それがどうした」

「魔物の持つ武器はただの武器じゃない」

「こう言うのである。」

「だからね」

「むっ!？」

「こうしたことまでできるんだ」

その言葉と共に槍が動いた。何と一気にその長さが縮まったのだ。

「縮んだか」

「魔物の持っているものは人間のものとは違うんだよ」

妖犬は楽しそうに笑いながら髑髏天使に話すのだった。

「だから。こうしたことができるんだ」

「魔物のものだからか」

「特に驚いたわけじゃないみたいね」

「驚くこともない」

やはり彼は冷静だった。落ち着いた顔で返してきた。

「貴様が魔物だからな」

「そうだよ。人間とは違うよ」

言いながらその縮んだ槍を右手一本で持ちそのうえで突き振ってきた。

「この速さもね」

「くっ」

その槍を右手の剣で防ぐ。だがその突きも振りも予想以上に速く右の剣一本では限界があつた。少なくとも攻めるのは無理になつてしまった。

彼はそれを見てすぐに動いた。力を開放した。それにより大天使となつた。すぐにその背に翼が生え左手にサーベルが現われたのだ。

「それが大天使だね」

「如何にも」

「わかるよ。力が強くなつたよ」

妖犬はそれを見ても陽気な態度を崩さない。

「多少はね」

「多少かどうかはこれから己で確かめる」

大天使となつた髑髏天使は妖犬の小馬鹿にしたような軽い言葉にも動かない。ただ両手の剣を構えるだけだった。

右手を前に出し左手は奥にやる。右手の剣は肩の高さでいささか斜め前にやつて突き出し左手のサーベルは逆手に持ち心臓の辺りに拳を置いている。そのうえで妖犬を見据える。再び戦闘態勢に入つたのであつた。

## 第十二話 大鎌その十五

そのうえで今度は飛んだ。翼を使ったのではなく足の跳躍で跳んだ。そうしてそこから右手の剣を振り下ろす。空からの攻撃だった。「受ける」

一言発しそのうえで剣を振り下ろした。できればこれで勝負をつけるつもりだった。

しかしそれは適わなかった。妖犬はその右の剣を槍の穂先で何なく受けると剣を受けた衝撃を利用してか槍を回してきた。それと共に槍を伸ばしてきた。

「槍を！？ここで」

その伸びた槍には刃はない。だがそれでも衝撃を与えるには充分だった。

サーベルで防ぐ時間もなかった。振られた槍はそのまま髑髏天使の顔を撃った。それにより彼を妖犬の後ろに上から下に吹き飛ばしたのであった。

「ぐっ……」

「こうした使い方もあるんだ」

地面に叩きつけられそこから立ち上がる髑髏天使に首を捻ることにより顔を向けて述べた言葉だった。

「この槍にはね。どういった使い方もね」

「万能の槍というわけか」

「そういうこと」

完全に立ち上がった髑髏天使に対して告げる。

「わかってくれたかな。僕の槍は凄いからね」

「そしてそれを操る貴様の腕もな」

「その通りだよ」

髑髏天使の今の言葉に得意げな顔を見せてもきた。

「少なくとも槍では他の魔物にも引けは取らないよ」

「槍では、か」

髑髏天使はその言葉に反応した。

「誰にでもだな」

「そうだよ。君の剣にもね」

「なら。わかった」

髑髏天使は何かを悟ったような声を出した。

「俺は貴様を倒せる。確実にな」

「強がりと言うのはよくないと思うけれど？」

「強がりではない」

それは否定した。

「それを見せよう。行くぞ」

立ち上がっていた彼はここで一旦その構えを解いた。そうしてそれと共に身体の周りに紅蓮の炎の輪を出すのだった。

それと共に姿を変えた。彼もまた紅蓮を身に備えていた。座天使の力を今開放したのである。

「それが座天使だね」

「その通りだ。この力で貴様を倒す」

こつ妖犬に言うのだった。

「今からな」

「無理だとは思わないんだね」

「俺は俺ができもしないことは決して言いはしない」

再び両手の剣での構えを取りつつ妖犬に告げる。

「絶対にな」

「絶対になんだね」

「そつだ。貴様を倒す」

紅蓮の炎はそのまま闘志になっていた。

「あらためて。行くぞ」

今度は跳ばなかった。そのままダッシュの要領で前に出る。紅蓮の残像が彼の後ろに続く。

髑髏天使はその残像を後ろに従えつつ妖犬に向かう。妖犬は余裕

そのものの顔でそれを見つつ己は悠然と構えを取るのだった。

「そうして前から出ても」

言いながら槍を繰り出す。

「無駄だよ」

その繰り出した槍は伸びた。今度もまた伸びた。それにより彼を貫こうというのだ。

「僕の槍はその力でも防げないよ」

彼はこの時は勝利を確信していた。今の槍の突きは髑髏天使の心臓を狙っていた。ガードも破りそのうえで心臓を貫くのだと見ていた。しかしであった。

「今だ……」

髑髏天使は滑る様な突進を続けていた。それと共に伸びる槍も見ていた。

槍の伸びるのと彼の突進がそれぞれ向かい合い槍の速さはかなりのものになっている。しかし彼はその中で今まさに己の心臓に迫るその槍の穂先に右手の剣を突いたのであった。

「先で止める!？」

「違うな」

髑髏天使はそれは否定した。

「残念ながら」

「じゃあどうするのかな？」

「槍が鉄でなかったことを。いや」

髑髏天使はその槍の穂先を見て言った。その槍の穂先は彼の剣の先と完全に合わさっていた。彼はそのようにして槍を止めたのである。

## 第十二話 大鎌その十六

「鉄であつても。後悔することだ」

「後悔!？」

「炎は全てを焼き尽くす」

「この言葉と共だった。」

「そう、全てを」

「えっ!？」

妖犬がその言葉に声をあげたその時だった。髑髏天使は己の右手に炎を宿らせた。そしてその炎を剣に及ばせそのまま槍に送ったのだ。

「炎が!？」

「貴様の槍は確かに伸縮する」

「それはもう言うまでもなかった。」

「それは確かに強い」

「このことも認める。」

「だが」

「だが?」

「それでも木であることもまた事実だ」

確かに穂先は金だ。しかもただの金ではない。魔物が特別に鑄造した金であると察することができた。しかしその伸縮する柄の部分は違っていた。

「その柄はな」

「というと」

「燃える」

髑髏天使は静かな声で告げた。

「座天使の炎によつてな」

言葉と共に炎は槍の柄にまで及んだ。そうしてそれにより槍は瞬間に燃え上がった。最早何をしようとも手遅れの状況になった。

「くっ！」

妖犬はその槍から手を離すしかなかった。燃えてしまっただろうしょうもなかった。

その時だった。髑髏天使がさらに動いた。前に出てその左手のサーベルを左斜め下から右斜め上にかけて一閃させたのだった。それは。

妖犬の身体を切り裂いていた。鎧をも切り裂きそれにより傷を与えたのだった。彼が妖犬の向こう側に出たところでその動きを止めた時勝負はついていた。

「終わったな」

「まさか。炎をさういうふうに使うなんてね」

「読んでいなかったか」

「残念なことにね」

妖犬は己の背の方にいる髑髏天使に振り向くことはなかった。そのまま立ったままで彼に対して告げていた。

「これは考えなかったよ」

「そうか」

髑髏天使は彼の言葉に応えながらそれまでサーベルを一閃させた後の動きで止めていた身体を元に戻したうえでそのうえで身体を魔物に向けたのだった。そのうえでまた彼に言う。

「考えつかなかったか」

「僕の槍を剣で止めたよね」

妖犬は今度はこのことを彼に話した。

「あれもだけれどね」

「咄嗟に思いついたことだ」

「その咄嗟が凄いなだよ」

彼はまた言う。

「その咄嗟がね」

「さういうものか」

「そうだよ。どうやら君は予想以上だね」

今度は髑髏天使を褒めてきた。

「僕が見たよりも」

「俺の実力を認めるのか」

「どうやら。今の座天使よりも」

「彼が今なっているその炎の天使だ。」

「君は上になれるね」

「上か」

「そして今よりもっと強くなる」

魔物は彼にこのことも告げた。

「今よりもね。けれど僕はこれで終わりだから」

「命は絶っている」

髑髏天使は己が出したその一撃に手応えを感じていた。

「確実にな」

「その通り。今よりももっと強くなった君と闘えないのは残念だよ」

これが今の彼の思うことだった。

「それはね。けれど今の君に敗れたからそうなくても勝てはしない

かな」

「それは違う」

髑髏天使はそれは否定した。

「俺はどのような場合でも貴様を倒す」

「そうなんだ」

「貴様だけではない」

そしてこうも言った。

「全ての魔物を。どのような場合でも倒す」

「凄いね。そういう考えを持っているのなら強い筈だよ」

口から赤い血を吐きながら述べた。それと共にその身体に青い炎が出て来た。



## 第十二話 大鎌その十七

「じゃあ。これでね」

「終わりか」

「うん。さようなら」

その小柄な身体をさらに青い炎が包み込む。

「見事だったよ」

これが最後の言葉になった。妖犬はその形に青い炎を出しそのう  
えで消え去った。髑髏天使はこの闘いにも勝利したのであった。

「終わったか」

炎が消え去ってから述べた。

「さて、ドライブの続きをするか」

呟きながら変身を解こうとする。しかしだった。

「まだそう考えるのは早いな」

「また来たのか」

「その通りだ」

声は彼の後ろからだった。

「魔物は一度に一人だけ来るといっわけではない」

「方針が変わったのか」

髑髏天使はその声に応えながら声がする後ろに身体を向けた。

「そちらも」

「そうとも言う。貴様を倒すにあたってな」

「そうか」

その言葉を聞きながら構えに入る。今度出て来たのは壮年の男だ  
った。黒いスーツが喪服を思わせ重厚な印象を与えてきている。

「そうするようになった」

「では次の相手は貴様か」

「如何にも」

黒スーツの男は彼の言葉に返してきた。

「俺の名はうわん」

「うわん。日本の魔物だったな」

うわんという魔物が何なのかは博士の所蔵している本から知っていた。彼も時折博士の研究室でそういうものを調べているのである。日本語のみであるが。

「確かな」

「その通りだ。百目様にお声をかけて頂いた」

あの老人である。

「そして今貴様を倒す為にここに来た」

「面白い。ならばだ」

髑髏天使は引くつもりはなかった。

「ここでもう一人倒してやろう」

「行くぞ」

応えたうわんの身体が変わってきた。黒い、まるで黒檀の様な肌になり服はそのまま僧侶の服に似たものになっていく。頭髪はなくなり何もかもが黒くなっていく。黒い大柄の僧侶の姿になったのであった。

「それがうわんの姿だな」

「如何にも」

うわんはまた彼の問いに応えた。

「俺は元々は寺にいた」

「廃寺にだな」

「その通りだ。だからこの姿になっている」

魔物の姿はその住んでいる場所の影響を受ける場合もある。このうわんがまさにそれであった。彼は廃寺にいるから僧侶の姿となったのである。

「そういうことだ」

「貴様のことはわかった。それではだ」

構えはそのまま取り続けている。

「行くぞ」

「来い」

髑髏天使の言葉をうわんも受けて立つ。

「貴様を倒す」

「倒せればな」

髑髏天使はそのまま滑空するようにして前に進みそのまま剣を繰り出そうとする。うわんもそれを受けて立つ。しかしその瞬間だった。

「待ってもらおう」

不意に第三者の声が出てきた。

「その勝負。私に預けてもらう」

「むっ!？」

「その声は」

うわんも髑髏天使もその声が出た方に顔を向けた。うわんは左を、髑髏天使は右をそれぞれ見る。するとそこには彼がいた。

「貴様か」

「そうだ」

死神だった。彼は何時の間にかこの場にいたのだった。

「私もまた。やるべきことがあるのだ」

「この魔物の魂を刈るつもりか」

「その通りだ」

これが死神の仕事であった。

「だからこそここに来た。その魔物の相手は私がさせてもらう」  
「嫌だと言えは」

髑髏天使は言葉にあえて疑問符はつけなかった。

「その場合はどうするつもりだ」

「前に二度か三度言った通りだ」

死神の返答は厳然としたものだった。

「その通りだ」

「そういうことか」

「それに貴様は既に魔物を一人倒している」

先の妖犬との闘いのことだ。彼はこのことを知っているようだ。少なくとも察してはいる。

「ならば。次は」

「俺は髑髏天使だ」

彼は答えずまずはこう言った。

「魔物を倒す。髑髏天使だ」

「私は魂を刈る者」

死神もまた言う。

「それが私だ」

「引かないというのだな」

「貴様も」

今度は二人が対峙しだした。

「ならば。容赦はしない」

「できることなら闘いは避けたかったがな」

死神は今は大鎌を出してはいない。しかしその言葉に既に出していた。

「そもそも行かないようだな」

「貴様との闘いは後だ」

髑髏天使はうわんに顔を向けて告げた。

「今は」

「まずは貴様とだな」

二人は対峙する。お互いに凄まじいまでの殺気を放ちながら今剣と鎌がその刃を刻み合おうとしていた。薄赤い光が灯す中で。

## 第十二話 完

## 第十三話 衝突その一

髑髏天使

第十三話 衝突

睨み合う両者。その中で髑髏天使は死神に対して告げた。

「変われ」

「変われというのか」

「今の貴様と闘うつもりはない」

髑髏天使は彼に告げた。

「今の貴様とはな」

「あくまで闘う姿になった私とか」

「そうだ」

そういうことであつた。

「だからだ。変われ」

「そのうえで私と闘うというのか」

死神もまた髑髏天使の言葉を受けて述べた。

「ならば」

「貴様が神であろうと俺は引きはしない」

髑髏天使はまだ構えは取ってはいなかった。両手に剣を持っただけ

で彼に対して告げていた。

「闘うのならな」

「では。変わるう」

言いながらその右手をゆっくりと前に出す。そして。

「今こそここに」

その右手を拳にして胸のところをやつた。するとその拳から青い光が放たれ彼の全身を包み込む。その光が消えた時鎌を持った白い服の死神がいた。

「覚悟はいいな」

死神は一旦目をしばたかせてから彼に告げた。

「私をこの姿にさせて」

「闘うには覚悟は必要だ」

髑髏天使は構えを取りながらその死神に言葉を返した。

「だからだ。それはな」

「そうか。いいのか」

「行くぞ」

早速左に動きだした。

そのうえで死神の動きを窺う。しかし死神は今はその場に立ったままである。

そのまま動きこうとはしない。髑髏天使はそれを見て呟いた。

「動かないというのか」

だが何の理由も考えもなしに動かないのだとは思っていないかった。

「何を考えている」

彼は死神の考えについて思索した。

「ここもあれを使うのか」

「貴様は一人」

あの時の術を使うのかと思ったその時だった。

死神は言った。そして彼が読んだ通りの動きを見せてきた。

その身体が幾つにも分かれるやはりあの分身の術だった。五人に分かれた死神はそれぞれ独自の動きを見せつつ同じ大鎌を持って彼に襲い掛かって来た。

「やはりそれで来たか」

「この術の力は貴様も知っている筈だ」

そのうちの一人が早速彼に斬り掛かって来た。

鎌が上から彼を一閃しようとする。しかしそれは左手のサーベルで何とか受けた。

頭の上に鎌の白銀の殺気だった光が見える。それはトンネルの橙の光をも反射し禍々しい光を発しているようにも見えた。まさに死そのもののように。

「見事だ」

鎌を振り下ろしたその死神が言う。

「今の一撃を受け止めるとはな」

「伊達に多くの闘いを経ているわけではない」

髑髏天使は言葉を返しながらも周囲への警戒は怠ってはいなかった。

「そしてだ」

すぐに後ろに跳び退いた。それにより右から来た別の死神の攻撃をかわした。

その上で翼を使って上に飛びまた別の一人が左から来るのもかわした。四人目が下から跳んで斬りつけてきたが右手の剣を一閃させその鎌を跳ね返して防いだのだった。

何とか四人の死神の動きは防いだ。そのうえでトンネルの天井近くを飛びつつ今浮かび上がってきた五人目の死神に正対した。

「貴様もまた飛ぶことができるのか」

「翼はない」

それはないと言う。

「しかしだ。私自身の力によって飛ぶことができる」

「そういうことか」

「そしてだ」

他の四人もここで浮かび上がってきた。五人で彼を取り囲む。

「それはどの私もだ」

「己の力はそのままにして身体を分けることができるのだったな」  
「ここであらためて彼の力を知った。」

「見事なものだな。実際に相手をしてみるとそれがさらにわかる」  
「では覚悟はいいか」

五人の死神が鎌を構えたうえでそれぞれの口で彼に問う。

「これで」

「命を刈る」

「しかし俺もまたこうした場合にカードはある」

髑髏天使はまだ諦めてはいなかった。

「俺にもな」

言うとするぐそのカードを切った。彼の周りに複数の炎の柱が噴き上がった。その炎柱はそれぞれ螺旋状に動き回りながら死神達に襲い掛かったのだった。



### 第十三話 衝突その二

「炎か」

「ここで使うというのか」

「周りを囲まれようとも闘い方はある」

髑髏天使はその髑髏の奥の目を光らせながら述べた。

「このようにしてな」

彼はそれにより形勢を逆転させるか少なくともある程度引き戻そうとしていた。だがそれもこの死神にとっては充分に返すことができるものだった。

「炎が来るならば」

また一人が言う。

「こうすればいい」

「むっ!？」

彼等は一斉に己に迫り来る炎柱に対して鎌を横薙ぎに振るった。するとそれによりその炎柱達が一斉に凍り氷柱となってしまったのだ。

「炎が凍っただと!？」

「私が操るのは鎌と術だけではない」

また死神の一人が彼に告げる。

「このようにして」

「氷か」

「氷だけではないがな」

こつも彼に告げた。

「だが。氷を操るのは得意だ」

「俺の炎をそれで凍らせるとはな」

「この世で凍らないものなぞない」

語るその声も氷の如きものになっていた。

「炎でさえもな」

「それは違うな」

髑髏天使は死神のその言葉を完全に否定してみせた。

「氷といえど凍らせることができぬものがある」

「ほう」

死神は彼の今の言葉に目を光らせた。

「ではそれは何だ？聞こう」

「俺だ」

彼は断言してみせた。

「この俺は決して凍ることはない。この髑髏天使はな」

「炎さえ凍らせる私の氷ですらか」

「そうだ。嘘だと言っのなら見せてやろう」

言いながらまた構えを取ってきた。

「俺が決して凍らないそのことを。ここでな」

両手の剣には今は炎を宿らせてはいない。だがそれでもその目は死神を見据えていた。

そのうえで構えている。本気で死神の氷を退けてみせるつもりだった。しかしここで死神は彼の予想に反した行動を取るのだった。

「どうやら思ったより面白い男のようだな」

「少なくともつまらない男のつもりはない」

髑髏天使の返す言葉はいつもの調子だった。

「それはな」

「では。それは今度の機会にしておこう」

死神達はこう告げて構えを解いてきた。

「今度。刃を交えたその時にな」

「闘いを止めるというのか」

「貴様もそのつもりならそうする」

「こう言葉を返すのだった。」

「私はな。それでいい」

「そうか。止めるのか」

「その魔物も貴様に譲ろう」

魔物に対しても言ってきた。

「倒すといい。貴様の望む通りにな」

「命を刈るのが仕事ではないのか？」

髑髏天使は構えを取ったまま一人に戻っていく死神に対して問うた。

「だからこそ俺と刃を交えたのではなかったのか」

「確かに刃は交えた」

それは彼も認める。

「しかしだ。どの魔物を刈らなくてはならないということはないのだ」

「そうなのか」

「別にその魔物でなくともいい」

彼は言う。

「だからだ。その魔物は貴様が相手をするといい」

「その言葉の撤回は聞かないがいいか」

「神に二言はない」

これが彼の返答だった。

「だからだ。好きにするといい」

「わかった。それではだ」

髑髏天使も構えを解いた。そのうえで着地する。死神もまたそれに倣うかのように地に降り立った。髑髏天使は翼をはばたかせ、死神はそのまま自然に黒と橙に染まっているアスファルトの上に戻ったのだった。

髑髏天使は地に戻るとすぐにうわんに顔を向けた。彼はまだその場にいた。

そして髑髏天使に対して声をかけてきた。その地の底から響き渡るような声で。

「そちらの用事は終わったな」

「待たせたな」

うわんに身体も向けつつ応える。

「今度は貴様の用事の相手をしよう」

「悪いが今はそれは延ばさせてもらおう」

しかし当のうわんは彼にこう言うのだった。

「今はな」

「気が変わったとでもいうのか」

「そうだ」

彼もこのことを隠しもしない。

### 第十三話 衝突その三

「その通りだ。先に闘うのなら違ったがな」

「貴様とも仕切りなおしか」

「そちらにとつても悪い話ではない筈だ」

「うわんはこうも彼に告げた。」

「これはな。どうだ？」

「俺は何時でも闘えるが」

「貴様は既に妖犬と闘っている」

そして倒している。彼は当然ながらそれを知っていた。

「そのうえ死神と闘った。体力をかなり消耗している」

「傷はこれといって受けてはいないが」

「目に見えていないだけだ」

「うわんはまた告げた。」

「それは蓄積されている。その様な貴様と闘って俺が勝つのは自然なことだ」

「では相手をすればいいと思うが」

「魔物は強い相手を倒してこそその魔物だ」

「魔物の摂理を彼も語った。」

「そうでなければその力を手に入れることはできはしない」

「だからだ」

「そうだ。勝負は預けておく」

「うわんは言いながらその姿を人間の仮のものにしてきた。」

「その時はこちらから出向こう。またな」

「貴様の方から来るといふのか」

「貴様が万全の時にだ」

「その時にというのだった。」

「また会おう。それではな」

「その時は。覚悟しておくことだな」

髑髏天使は黒い煙となつてその中に消えていく彼を見送つて言った。こうしてまずうわんが去つたのだった。

残つたのは髑髏天使と死神だけになった。しかしその死神もまた。「私もこれでな」

「去るのか」

「話はないことになつた」

だからだというのである。

「ならばここに留まつている理由もない」

「そうだな。それは確かにな」

「また近いうちに会うことになるだろう」

鎌を消し服をあゝの神父を思わせるものに戻したうえで彼に告げた。

「その時どうなるかはわからないが」

「今のように刃を交えることも有り得るな」

「その場合は今のようになるとは限らない」

二人はそれぞれ今を語つたがその中身は違つていた。

「決してな」

「そうだな。それではまた会おう」

髑髏天使も牧村の姿に戻つた。

「こちらとしては無駄な闘いは避けるつもりだがな」

「それはこちらとて同じこと」

声は鋭いが言葉はその通りだった。

「死神は殺戮を行う存在ではない」

「ただ。命を刈るだけだというのだな」

「刈りもするし狩りもする」

「二つの言葉は違つていた。」

「しかし。血に餓えてはいないのだ」

「血には、か」

「それもよく覚えておくことだ」

牧村の目を見据えつつ述べてみせてきた。

「よくな。話はこれで終わりだ」

ここまで言うとはハーレーに乗りそうしてバイクの機首を百八十度返したうえでそちらに姿を消した。牧村はその後姿を見送っていたがやがて彼もサイドカーに乗りそのままトンネルを後にした。この闘いのことはいつも通り博士に話した。博士もまたいつもと同じく妖怪達があちらこちらにたむろしているその風変わりどころではない研究室で彼の話を聞くのであった。

「ふむ。死神とか」

「手強い相手だった」

牧村は率直に死神について述べた。今は部屋の壁に背をもたれかけさせつつ左手をズボンのポケットに入れ右手にコーヒーカップを持ちその姿でコーヒーを飲んでいいる。

「身体を分けることができれば宙に浮かぶこともできる」

「そして氷を操るか」

「それだけではないようだがな」

死神の言葉を思い出しながら述べた。

「どうやらな」

「ふむ。文献にある以上じゃな」

博士は牧村の話をもここまで聞いたうえで考える目を見せて言った。

「どうやらな」

「それ以上か」

「左様。確かに身体を分けることはここにある」

今度もまたやたらと古い文献だった。見れば普通の紙ではない。

### 第十三話 衝突その四

「ここにな」

「それは紙ではないな」

「パピルスじゃよ」

「エジプトのあれか」

「そうじゃ。エジプトの知人から送ってもらったものじゃ」  
博士は言う。

「これはな」

「エジプトに知人がいるのか」

「何人かな。他の国にも色々とおるがのう」

「顔が広いのだな」

「生きていればそれだけ顔が広くなる」

牧村に素っ気無く話す。

「それだけな」

「それでそのパピルスにあの死神のことが書かれているのか」

「その通りじゃ。やはり身体を分けてそのうえで相手の命を刈る」

あの死神の行動そのままであった。

「はつきりと書いておる」

見ればその文字は神聖文字である。この当時のエジプトの神官達  
が書き残したものであるらしい。博士は今その文字を読んでいるの  
だった。

「ここにな」

「それは書いてあったのか」

「じゃが宙を舞うだの氷を使うだのは書いてはおらぬ」

やはりそれはないというのだった。

「そういったことはな」

「文献に書かれていることが全てではないか」

「知られていないことはそれこそ山より高く海より深くあるぞ」



博士は言う。

「人間が知っているこの世のことなぞそれこそあれじゃ」

「大海の中の小匙一杯か」

牧村も今の言葉の続きはわかった。コーヒーをそのまま壁に背をもたれかけさせた姿勢のまま飲みながらその言葉を続けたのだった。

「そうだったな」

「今は精々それが二杯になった程度じゃ」

博士はこれでも増えたのだとは言っていた。

「その折角知ったことも失われたり忘れられたりする」

「だからあの死神のことも碌に知られてはいないのか」

「そういうことじゃ。じゃが一つだけはっきりしていることがある」

「それは何だ？」

「あれが死神であるということじゃ」

牧村の目を見て言うてきた。

「それははつきりとしておるぞ」

「死神が死神であることはか」

「それは確かじゃ」

また言った。

「死神であることはな」

「命を刈る存在」

牧村もまた死神について言及した。

「だからこそ魔物を刈る」

「そういうことじゃ。髑髏天使としての君が前に現われる魔物と闘うのと同じじゃ」

「それとか」

「そうじゃ。しかしそれで刃を交えることになるとはな」

「本意ではない」

そのことは言う。

「しかし。俺は退くつもりもない」

「あくまで魔物を倒すのを選ぶか」

「今回は向こうが退いたがな」  
「少なくともそういう形にはなった。彼にとっても幸運なことだ。」  
「だが。また退かなければ」  
「やり合っのじゃな」  
「それだけだ。だが」  
「だが？」  
「死神は活動を活発化させた魔物を倒す為に出て来たな」  
「話が魔物が現われた理由にも及んだ。」  
「そうだったな」  
「そうじゃ。そして今この世にいる」  
「俺とはまた違う理由でだな」  
「牧村は言った。」  
「闘うか」  
「死神とは基本的に闘わなくともよい」  
「このことは博士はむしろ牧村よりよくわかっていた。」  
「むしろわしが思うはじゃ」  
「何だ？」  
「今魔神も出て来ておる」  
「彼が気にかけているのは彼等についてであった。」  
「今は三柱じゃ」  
「残るは九柱か」  
「少なくとも一人は誰かわかった」  
「博士は言っ。」

### 第十三話 衝突その五

「中南米の魔神クマゾツツじゃな」

「前に話していたな、俺に」

「蝙蝠の姿をした魔神じゃ」

こう彼にまた告げた。

「その魔神はわかった」

「残るは八柱か」

「それについては今調べているところじゃ」

と述べてから机の端にある今度はとりあえず普通の紙の書を手にとった。紙は紙であるがそれでも随分古いものはある。

「今な。とりあえず日本と東アジア、北米に中南米にはいた」

「他の地域にもいるか」

「これがアラビアの書じゃが」

見ればかなり個性的な字のアラビア語がそこにあった。

「しかし。これは」

「その書に何かあるのか」

「字がのう」

困った顔になる博士であった。

「あまりにも個性的で。それを解読するだけでも大変じゃ」

「そこまで下手なのか」

「それを言ったらおしまいじゃよ」

こう言うがまさにその通りだった。字には個人の個性がある。中にはとても読めたものではない、本人が後から読んでもわからない文字もある。

「それはな。じゃが」

「それでもわからないか」

「わかりにくい」

実に率直に牧村に述べた。

「この文字は」

「書の解読には時間がかかるか」

「普段より遥かに進むのは遅い」

やはり困った顔になっている。

「普段はただ何が書かれているのかそれを解読するだけでよいのじやが」

「今回は文字を解読してからか」

「そうなのじゃよ。しかし本当に」

拳句には腕を組んで首を捻りだした。

「ここまで汚い字はわしもはじめて見るのう」

「博士でもか」

「うむ。こんなのは百年生きてもはじめてじゃ」

博士の実際の年齢もかなり不明ではあるがそれでもだった。

「アラビア語なのかも怪しく思えてきたのう」

「その中でわかったことはあるか」

「まだない」

これが返事だった。

「本当にここまで汚い字じゃとのう。わかったものではない」

「では暫くしてから頼む」

彼はこう博士に言った。

「書を解読し終わってから教えてくれ」

「わかった。それではその話は後でな」

「頼む。しかしこのコーヒーは」

「美味しいじゃろ」

「ブルーマウンテンか」

そのコーヒーの豆が何であるか彼は舌で見抜いた。

「そうだな。これは」

「私が淹れてみました」

ここでろく子が首を伸ばしてきて彼の前に顔を出してきた。その知的な顔を明るくさせて彼に問うてきた。

「如何でしょうか」

「そうか。貴様が淹れたのか」

「美味しいですよね」

「美味しい」

その淹れた本人に対してはつきりと述べた。

「豆がいいだけではない。淹れ方もな」

「有り難うございます。私最近コーヒーに凝ってるんですよ」

「それでブルーマウンテンを淹れたのか」

「その通りです。他にも豆揃えてみました」

「本当に凝ってるのだな」

牧村は他の豆の話も聞いて述べた。

「本気か」

「紅茶も凝ってるんですよ」

ろく子は牧村に褒められたせいも機嫌をよくさせてさらに聞かなくてはいいことも話しました。

「実は」

「なおいしいな。コーヒーにはコーヒーの、紅茶には紅茶の味わいがある」

「そして深さも」

「そつだ。どちらも深い」

牧村はそのことがよくわかっていた。

### 第十三話 衝突その六

「どちらがより深いかという問題ではないかな」

「コーヒーと紅茶に優劣はないんですね」

「赤ワインと白ワインを同時に愛することができるのが人間だ」

「酒は飲まない彼だがあえてワインに例えてきた」

「そういうことだ。全てはな」

「だからですか」

「コーヒーは飲ませてもらった」

「今それを飲み干したのだった」

「次に来る時は紅茶がいいな」

「紅茶をですか」

「セイロンティーかそれともシナモンティーか」

「紅茶の種類を話に出してみせていく」

「どちらもいいがな」

「では今度はセイロンティーを」

「ろく子は牧村の話を聞いて紅茶はそれにしようかと考えだした」

「しましうか。博士、それでいいですか？」

「ああ、わしは構わんよ」

「博士は自分の秘書でもある彼女に顔を向けて述べた」

「別にな。それでもな」

「わかりました。それでは」

「ブルーマウンテンはよかった」

「牧村はまだその右手にコーヒーカーップを持っている。それを持ちながら彼はふとした感じでまたろく子の自分の顔の前に来ている彼女の延びてきた顔を見つつ述べた」

「それでだ」

「はい」

「もう一杯もらえるか」

「こつ彼女に問うた。」

「ブルーマウンテンをもう一杯。いいか」

「はい、どうぞ」

「ろく子にはこりと笑って彼の問いに答えた。」

「では。すぐに淹れますね」

「悪いな」

「凝ってるのはコーヒー豆だけじゃないですよ」

首を引っ込めて人間の姿に戻ってそのうえで彼の方に歩いてきながら言ってきた。服はいつもと同じズボンのスーツである。

「お水にも気を使っています」

「水もか」

「六甲の水です」

八条大学があるその神戸の水である。

「それを使っています」

「水には気付かなかったな」

「気付かなくてもそこに気をやるのが通ですよ」

牧村の方にさらに歩み寄りながらの言葉だった。その手には赤と黒の盆がある。日本風の木の盆でよく見れば黒は漆のものであった。

「ですから」

「また徹底しているものだ」

「お砂糖やミルクにも気を使っていますよ」

話はそういったものにまで及んだ。

「そちらも」

「いいことだ。だが俺は今ミルクは欲しいが」

「はい」

「砂糖は止めておこつ」

「こつ言っただった。」

「今はな」

「何故ですか？」

ろく子は彼の今の言葉を聞いて怪訝な目を見せた。

「ダイエットでもされていますか？私の使っている砂糖は天然のもので」

「いや。ただ気分の問題だ」

「こう答えるのだった。」

「それだけだ」

「それだけですか」

「砂糖が入っているコーヒーを飲みたい時もある」

決してそういったコーヒーが嫌いではなかった。

「今は」

「その気分ではないのですね」

「そう。それだけだ」

「こう述べたのだった。」

「今はな」

「わかりました。それじゃあ」

「ろく子は彼の言葉を受けてそれで言わなくなった。」

「ミルクはいりますね」

「ミルクは頼む」

「彼もそれはいいというのだった。」



### 第十三話 衝突その七

「今はな。それでそのミルクは」

「私が選んだミルクをコンデンスしたものです  
それだというのである。」

「コンデンスも一からしました」

「それがそこにあるミルクか」

「はい、そうです」

見れば盆にはコーヒーが入っていると  
思われる白と青の欧風、それもドイツのそれを  
思わせる陶器のティーポットの横に  
白い小さな陶器の壺があった。

「ここに」

そしてろく子は次にその壺に触れて述べた。

「入っています」

「では。それを頼む」

「やっぱりあれですよ。ミルクもよくな  
いと駄目ですよ」

「全てがよくなってこそ完璧な味が出る」

牧村もまた述べる。

「コーヒーだけではないがな」

「コーヒーだけじゃないですか」

「全ての料理がそうだ」

話をあえて広いものにさせてきた。

「全てがよくなってこそだ」

「そうですよね。最近それがわかって  
きました」

ろく子も彼の言葉に納得した顔で頷いた。

「やっぱり。作ってみないとわからない  
ことですよ」

「作ってみないと？」

「実はずっと作ったことなかったん  
ですよ」

ろく子は今度はその知的な顔に屈託の  
ない笑みを浮かべて言う

きた。

「お料理は」

「作ったことがない」

牧村はその言葉をまずは怪訝な顔で受けてそのうえでまた問うた。

「それは人の世界にいなかったからか」

「いえ、ずっといました」

ところがろく子はこう彼に返す。

「それで仕事もしていましたけれど。人間の世界で」

「なら作ったことはある筈だが」

「人間の食べ物を料理してはいなかったんです」

こう言うのであった。

「実は」

「人間の食べ物をか」

「その辺りの草とか虫を食べてたんですよ」

また牧村に対して話す。

「最近まで。作るようになったのは。そうですね」

眼鏡の奥の目を右斜め上にやっただうえで考える顔になって話す。

「五十年程度ですかね」

「五十年だとかかなりのものではないのか？」

牧村はここでは人間の時間を基準にして話をしていた。

「長いぞ。人間五十年とっていたからな」

「私三百歳なんですよ」

自分の年齢について話してきた。

「実は。それだけ生きてるんですよね」

「三百歳か」

「はい。それで二百五十年の間あちこちで尼さんとか旅芸人になっ  
ていたりして」

「それで道でそうしたもの食べて生きていたのか」

「そういうことです。ろくろっ首って首が伸びますよね」

「ああ」

だからこそろくろっ首なのだ。首が伸びるものと首が飛ぶものがあるがどちらにしろその首に秘密があるのがろくろっ首なのである。

「それで虫とか木の実とか草をですね」

「食べていたのか」

「それですつとやっていけたんですよ」

また笑って話す。

「食べることは」

「だから作る必要はなかったのか」

「夏でも冬でも」

そういつことらしい。

「人間の食べるもの以外にも食べることができますから」

「それでどうして料理をはじめたんだ？」

牧村はその料理をする必要がなかった彼女に対して問うた。

「五十年前から」

「五十年前にですね」

にここにことしながら彼に話す。

「博士に御会いしまして」

「博士にか」

「ほっほっほ、その時丁度秘書を探しておったのじゃよ」

ここで博士が楽しそうに笑って言った。

### 第十三話 衝突その八

「それでじゃ。たまたまこの娘に出会ったのう」  
「たまたまか」

「妖怪について研究していると妖怪達が寄ってきてのう」  
「研究していると寄って来るものなのか」

博士の今の話にまた怪訝な顔になった。  
「妖怪というものは」

「僕達を好きな人にね」  
「集まるんだよ」

彼等は笑顔で牧村に話をしてきた。

「それが妖怪だからね」  
「だからだよ」

「それでなのか」  
とりあえず彼等の話を聞いて納得はした。

「それで博士のところにか」  
「それででした」

ろく子がまた彼に話す。  
「博士に御会いしまして」

「それで秘書になり、か」  
「はい。人間の世界の料理にやっと興味を持ちはじめまして  
やっと、と自分で言うのだった。」

「それで今です」  
「思えば長い時間だったな」

「そうですね。けれど作りはじめて五十年」  
一言で済むがその歳月もかなりのものだ。

「それで今に至ります」  
「今のコーヒーは五十年の年季があるのか」

「こちらはそれ程ではないです」

こう牧村に話してきた。

「実は。この二年か三年ですね」

「案外短いのだな」

「コーヒーよりお茶に凝っていました」

「実は」

「お茶か」

「お茶は昔から好きでした」

また笑顔で答えるろく子だった。

「それでそっちは前から」

「お茶もいい」

牧村はそちらもいいというのだった。

「飲んでいると落ち着く」

「そうですね。味もいいし」

ろく子の顔はさらににこにことしたものになっていた。

「ですから好きなのですよ」

「ああ。今度はそれも飲ませてもらう」

牧村はにこりとはしていなかったが言葉は機嫌のよさを感じさせるものだった。

「お茶もな」

「どんなお茶がいいですか？」

「緑茶か」

彼がここで欲したのはそれであった。

「それをもらう。今度な」

「いいですね。私緑茶には特に凝っています」

「そちらにか」

「はい。といってもこの研究室で茶道はちょっとできませんけれど」

「そうなの？」

「初耳だよ」

彼女の今の言葉に他の妖怪達が驚きの声をあげる。見ればひょうすべや一本だたらといった面々が床に敷き物を敷いてそこで茶道を

行っていた。

「僕達普通にやってるよね」

「ねえ」

彼等は顔を見合わせて言い合う。

「お茶は何処でも飲めるし」

「太閤様なんか物凄い振舞ってくれたよね」

「太閤様……あれか」

牧村でなくともこの官職だけでわかった。

「豊臣秀吉か」

「あの人凄い気前よかつたからね」

「権現さんはけちだつたけれどね」

今度は家康のことが話に出て来た。

「それでもいい政治してくれたから助かつたけれどね」

「僕達もね」

「茶道だけでなくその時から人間の世界に入っていたのか」

牧村はあらためてそのことを感じたのだった。

### 第十三話 衝突その九

「妖怪というものは」

「だってねえ。僕達日本の妖怪だよ」

「日本人の永遠の友達だよ」

彼等は茶道をやり和菓子を食べながら笑顔で彼に応えてきた。

「いつも一緒にいるんだよ、何処でもね」

「気付いてくれている人は最近少なくなってそれが寂しいけれど」

「俺も気付いたのは最近だがな」

牧村にしるそれは同じであった。

「妖怪が本当にいるということもな」

「案外わかりませんよね」

またろく子が笑顔で首を伸ばしてその首を彼の周りを螺旋状に囲みながら声をかけてきた。その首は牧村の顔のすぐ前にある。

「妖怪がいつも側にいるなんて」

「ああ。そうだな」

またろく子の言葉に頷く牧村だった。

「言われてみないと。本当にな」

「わしが気付いたのは学者になってからだったかのう」

そして博士も己の記憶を辿りながら述べてきた。

「いや、子供の頃じゃったか？」

「博士、まだそこまでぼける歳じゃないでしょ」

「たった百年しか生きてないのに」

またひょうすべや一本だたらが笑いながら博士に言った。

「まだまだこれからのに」

「そうそう。百歳が妖怪生の暁だよ」

彼等に見ればそうらしい。少なくとも何百年も生きているのは間違いない。

「楽しいな楽しいなってね」

「お化けは死なない」

また随分と懐かしい歌も知っていた。

「試験も何にもないってね」

「それはいいけれどそこでお茶を飲むのは」

「いいじゃない。お酒も飲むし」

「茶道だけ駄目ってことはないじゃない」

少し苦い言葉を出して苦言してきたろく子に対してひょうすべ達は返した。

「茶道は堅苦しくしたら駄目だよ」

「リラックスリラックスでね」

「それにしてもいつも随分とくつろいでいるな」

ろく子は彼等の言葉にふてくされたような、さらに怒ったような顔になったが牧村はこう言うのだった。

「妖怪というものは」

「だってねえ。学校も試験も何にもないし」

「人間の世界の法律もないし」

彼等は牧村にはこう返してきた。

「それに明るく楽しくが妖怪の世界の決まりだから」

「僕達それに従ってるだけだよ」

「明るく楽しくか」

「妖怪の明るく楽しくじゃよ」

博士がまた牧村に言ってきたのだった。

「人間は人間での。明るく楽しくな」

「そうしていけばいいか」

「わしもそうしておるよ」

またしても顔を崩して笑う。

「いつものう。家ではかみさんもおるし」

「博士の奥さんも可愛い人だよな」

「若いし」

「ふおふおふお」



白い顎鬚をしごきながら笑う。まんざらではないようである。

「奥さんもやつともうすぐ百歳だし」

「若いよね、本当に」

「若いのか」

この言葉はやはりまだ牧村にとっては違和感のあるものだった。

「妖怪の中では」

「全然若いんだって。だからさ」

「僕達普通に数百年生きてるから」

「わしなんぞもうすぐ千年じゃぞ」

「わしもじゃ」

子泣き爺と砂かけ婆が笑いながら言ってきた。

「それを考えれば百歳なぞ」

「赤子赤子」

「では俺は赤子にもなっていないな」

牧村は彼等の話からそのことを察したのだった。

「そうなる」と

「まあそうだよね」

「二十なんて僕達の間じゃ生まれたばかりどころじゃないからね」

「それはね」

妖怪達も彼のその言葉に対して告げる。

### 第十三話 衝突その十

「けれど牧村さんにとっては二十歳って大きいよね」

「それで髑髏天使になったんだし」

彼の事情ではそうであった。

「髑髏天使になって。それで今闘って」

「そんな二十歳だからね」

「髑髏天使か」

彼等の言葉を受けてあらためてその存在について考えることになった。

「そうだな。俺は髑髏天使だ」

「うん、魔物と闘って倒す」

「けれど牧村さん」

今度は赤舐めが彼に対して声をかけてきた。その長い舌を口からべろべろと出しながら。

「最近何か変わってきてない？」

「変わった!？」

「うん。雰囲気だけじゃなくて何か言葉も」

「変わったか」

「ああ、そういえば変わったよね」

「そうそう」

他の妖怪達も垢舐めの言葉からそれに気付いたのだった。

「前までもうちよつと動揺とかあったけれど」

「今は超然的!？」

こう表現したのはすねこすりだった。猫、それもスコティッシュ  
|| フォールドに似た格好で牧村の足元にうづくまっておりそのうえ  
で言うのだった。

「そんな感じになってるかな」

「何があっても動じなくなっただし」

「言葉遣いも淡々としてきたし」

「変わったって言えばかなり変わったよね」

「そうなのか」

だがこのことは自覚のない牧村だった。

「俺は。そんなに変わったか」

「少なくとも髑髏天使になって僕達とこうして話をする前と比べたらね」

「もう別人だよ」

「だよ」

こう言葉を交える妖怪達だった。

「やっぱり闘いを経ているからかな」

「それでかな」

彼等はその原因を闘いに求めた。

「だからそんなに変わったんじゃないの？」

「そう思っただけけど、僕達」

「そうかも」

そして牧村もそれを否定しはしなかった。すねこすりの言う超然とした態度で彼等の言葉を受けるのだった。

「少なくとも闘いは常に意識している」

「そのせいかな。変わったのって」

「闘いつていつも緊張するんだよね、確か」

から傘は闘いというものを知らないようである。

「それもいつもそれが頭の中にあつたらやっぱり」

「変わるよね」

「うん、変わる」

妖怪達はこう結論を出した。博士も彼等の話を黙って聞いていたがそれが終わってから自身も口を開いたのだった。

「確かに君は変わった」

「博士もそう見るのか」

「彼等の言う通りじゃよ。超然となった」

やはり彼も同じ意見だった。

「雰囲気も鋭くなっておるな」

「そうなのか」

博士にも言われまた考える目になった。

「俺は。そうなっているか」

「うむ。髑髏天使になったことがやはりある」

「それが全ての原因か」

「そうとしか言えまい。しかしこのまま髑髏天使として闘いを生きていくな」

「ああ」

博士の言葉にはそれはもう完全に受け入れた者としての達観があった。

「そのつもりだ。どのみち逃げても何にもならないのならな」

「では君はこれからより変わっていくじやろうな」

こう見ているのだった。

「よりな。どう変わるかまではわからんが」

「より変わるか」

「今は前より鋭くなった」

これは妖怪達が言わなかったことである。

「剣の様にな」

「剣か」

「そしてその剣で魔物を絶つ」

今度はこう言った。

### 第十三話 衝突その十一

「髑髏天使としてな」

「では今からまた絶ち切つて来る」

その髑髏天使としての言葉だった。

「それじゃあな」

「やれやれ、いつも忙しいことじゃ」

博士は壁から背を放した彼に笑いながら述べた。

「まあそれも仕方ないのう。髑髏天使じゃからな」

「先約はもう入っている」

そのうわんとのことであった。

「死神から強引に奪え返したそれがな」

「ではそれを果たしてくるのじゃな」

「そうだ。それではまたな」

「うむ」

牧村の言葉に温厚な顔で頷いて返した。

「吉報を待つておるぞ」

「その時にまたあいつと会うかも知れない」

牧村は扉に向かいながらふと呟いた。

「若しかしたらな」

「死神とか」

「俺は魔物を呼び寄せる」

まずは髑髏天使としての己を語った。

「そしてあいつは魔物のいる場所に現われる」

「死神はその命を送る相手の場所に現われるものじゃ」

博士は牧村の言葉に承えて死神の行動の法則について述べた。

「だからじゃよ。それもな」

「俺とは逆だな」

「完全にな。しかし魔物と縁があるのは同じじゃよ」

「それは、か」

「そうじゃ。まあそれは特に気にせずじゃ」  
今は考えるなど述べたのだった。

「行くのじゃな。行って本当に返って来るのじゃ」

「わかった」

「お菓子用意してるからね」

「果物もあるよ」

ここでまた妖怪達が陽気に彼に声をかけてきた。

「お酒は飲めなくてもジュースがあるからね」

「今度は紅茶ですよ」

ろく子もまた彼に言ってきた。

「それもありますので」

「楽しみにしておく」

彼はその妖怪達に対してまた返した。ろく子にも。

「それをな。それではだ」

「うん、頑張つてね」

「またね」

妖怪達の声は温かかった。牧村はその温もりに送られて研究室を出た。そうして建物の外に出てそのうえで今サイドカーに乗った。

場所は何処でもよかった。ただ己の気の向くままに向かった。そうしてやって来たのは。街の外れにある寂れきった廃寺であった。

本堂は朽ち果て今にも崩れ落ちそうだ。木は腐り白蟻の食べた後が見える。墓場も墓石があちこち倒れ卒塔婆も朽ちて折れているものすらある。鐘はなくそこも荒廃している。あちこちに雑草が生えており見るも無残と言える有様だった。彼は今そこに入りサイドカーを止めたのだった。

廃寺はその無残な姿を夕暮れの中に映し出している。彼は墓地の中に進んでいく。すると向こう側に何時の間にか相手が姿を現わしていた。

「面白い場所を選んだのだな」

「気が向いたままだ」  
牧村はこう彼に言葉を返した。  
「そのままここに来た」  
「気の向くままか」  
「そうだ。それでここにした」  
「淡々と相手に告げるのだった。」  
「ただそれだけだ」  
「随分単純に選んだだな」  
「悪いか？」  
「いや、構わん」  
「うわんもまたそれをよしとしたのだった。」  
「むしろこちらとしては実に有り難い」  
「有り難い？」  
「俺はうわんだ」  
「今度は己から名乗ってきた。」  
「うわんの本来の住処はこうした廃寺だ」  
「ではここは貴様の家か」  
「それは違うがな。気に入った場所ではあるがな」  
「それでもそうではないというのだった。」  
「それはな。違う」  
「そうか。だがここは気に入っているのだな」  
「如何にも」  
そのまま牧村の言葉に答えた。

### 第十三話 衝突その十二

「それは今言った通りだ」

「そうか。では貴様は幸福だな」

牧村はうわんのその言葉を聞いて次にはこう告げたのであった。

「実にな」

「俺が幸せだと」

そしてうわんもその言葉に反応してきた。

「それはどういうことだ？」

「気に入った場所で死ぬる」

うわんを見据えての言葉であった。

「それが幸せでなくて何だというのか」

「それでか」

「そうだ」

彼の言いたいことはこれであった。

「だから貴様は幸せだ。今からここで死ぬるのだからな」

「戯言だな。ここで死ぬのは貴様だ」

うわんは早速己の正体を出してきた。漆黒の僧侶に変わっていく。

「墓もある。安心して死ぬ」

「墓に入るのは貴様だ」

そして牧村も髑髏天使になろうとしていた。

「貴様だ。それを今から証明してやる」

「では。闘うのだな」

「無論」

返答はもう決まっていた。

「少なくとも退くつもりはない」

「それはこちらと同じだ」

既にうわんは完全にその正体を現わしていた。しかしまだ彼からは来ない。そのかわりこう牧村に言うのだった。



「早く変身しろ」

「早くか」

「人間の姿の貴様と闘う趣味はない」

「これが彼の言葉であった。」

「だからだ。早く変身しろ」

「人間としての俺には興味がないか」

牧村はそこにうわんの魔物としての誇りを感じた。それを感じ取り決して悪い気はしなかった。

「あくまで髑髏天使としての俺に興味があるのか」

「何度も言うが魔物は強い相手と闘ってこそその力を得られる」

うわんの返答は鋭く確かなものであった。

「だからだ。これでわかったな」

「わかった。それではだ」

「変身するのだ」

うわんはまた彼に告げた。

「いいな。今すぐにだ」

「わかっている。それではだ」

彼の言葉を受ける形で変身に入った。両手を拳にしそのrを胸の前で打ち合わせる。そこから白い光が発し全身を包み込む。彼はその中で顔が髑髏になっていき服が鎧となっていく。そうして今度も異形の戦士髑髏天使となるのだった。

髑髏天使になるとすぐに右手を前に出した。そうしてそれを握って言うのだった。

「行くぞ」

「あの時は残念だったからな」

うわんは身構えながら髑髏天使となった彼に対して言ってきた。

「闘えずな」

「そうか。それだけ残念だったか」

「如何にも何度も言うが闘うことこそ魔物の生きている理由」

またこのことを言うのだった。

「だからだ。今こうして貴様と合間見えているのが楽しくて仕方がない」

「そうか」

「そうだ。だからこそだ」

その構えは両手を拳にして右の方を前に出している。どうやらその拳で闘うようだ。髑髏天使は彼の姿を見ながら考えるのだった。

「早くはじめるか」

「貴様が望むならな」

髑髏天使はその右手に剣を出してきた。宙から浮かび上がり彼の手に現われた。

「はじめるか。いいな」

「ただしだ」

だがここでまたうわんが言ってきた。

「一つ用件がある」

「用件!？」

「貴様の今の姿は天使のものだな」

彼が言うのはそこだった。

「そうだな」

「その通りだが」

髑髏天使もそれは否定しない。確かに翼が生えていない天使の姿である。

「それでは不服か」

「そうだ。座天使の姿で来い」

彼はこう注文をつけてきた。

### 第十三話 衝突その十三

「あの時貴様は座天使の姿だったな」

「そうだったな。そういえばな」

彼に言われてそのことを思い出しつつ述べた。

「貴様の前では最初から座天使だったな」

「あの時の続きになる」

「うわんはまた彼に言ってきた。」

「だからだ。座天使の姿で来い」

「大天使の姿でなくか」

「そうだ。座天使だ」

何度も言うところ、に彼のこだわりが強く見られた。

「その姿で来るのだ」

「そしてその座天使の俺を倒すのか」

「そうだ」

「ここでも返答は強いものだった。」

「何度でも言う。そうでなくては闘う意味がない」

「魔物はもう何人も倒してきたが」

髑髏天使はその剣を構えながら彼に対して告げる。

「どの魔物も闘いにこだわりがあるな。だから魔物か」

「そうだ。そして貴様を倒す為に貴様の前に現われる」

「五十年に一度この世に現われ魔物を倒すこの髑髏天使をだな」

「その通りだ。敵を倒しその力を手に入れる」

声に楽しむような笑みが宿った。

「それこそが我等魔物の本懐よ」

「しかし。俺もまた髑髏天使」

彼は髑髏天使としてうわんの今の言葉に返した。

「魔物を倒すその髑髏天使だ」

「だからこそ我等を倒すというのだな」

「この俺が髑髏天使である限りな」

彼の身体は今全身に炎をたゆませってきた。座天使のその炎だった。

「貴様等を倒す。何があるうとも」

「ならば。来い」

うわんは言いはずるが決して動こうとはしない。

「座天使としてな」

「言われずともな。それではだ」

その炎の中で彼の姿が変わっていく。そして次には。

翼に赤い鎧の姿となっていた。それこそが座天使の姿であった。

「この姿でか」

「そうだ。それだ」

うわんはその座天使の姿を見て満足そうな声で応えた。

「その姿で来い。そして力でな」

「それではこの力で貴様を倒そう」

既に左手にもサーベルがある。それは逆手で右手の剣は順手だ。

そのそれぞれの剣を構えたうえでそのうえでうわんに対して告げた

のだった。

「行くぞ」

「言われずともこちらから行く」

うわんは自分から前に出た。

「この拳を受けて倒れるのだ」

漆黒の姿が夕暮れの暗がりの中に消えた。そして。

突如として髑髏天使の横に現われた。そのうえで拳を横から放つ

てきた。

「むっ!?!」

「隙だらけだな」

拳は右からのものだった。それで髑髏天使の頭を砕こうとしている。

しかし髑髏天使はその拳を間一髪でかわしたのだった。屈んで

それをかわす。

「かわしただと!?!」

「ただかわしたただけではない」

彼は応えながらそのうえで右手の剣を横薙ぎにする。それでうわんの身体を断ち切るうというのだ。

剣は一直線にうわんの腹に迫る。うわんはそれをかわせなかった。

「他愛もない」

髑髏天使は剣を放ちながら呟いた。

「これで終わりか。言葉程もないな」

「果たしてそうか？」

だがここでうわんの口から不自然な言葉が出て来たのだった。

「そうなるか？貴様の思い通りに」

「何っ！？」

「このうわんは影」

彼は言っ て来た。

「影は消えるもの。そう」

「消える！？それでは」

「そうだ。こうなるのだ」

今のこの言葉と共に身体を消した。そうして髑髏天使の剣をかわしたのだった。

「また消えたか」

「残念だったな」

うわんの勝ち誇る声だけが聞こえてくる。

### 第十三話 衝突その十四

「俺はこうして攻撃をかわすことができるのだ」

「影だからか」

「そうだ。俺は影の化身」

またこのことを髑髏天使に話すがそれでも姿は見せない。

「だからだ。貴様のその攻撃は効かんぞ」

「影……」

しかし髑髏天使は今のうわんの言葉に舌打ちも絶望もしなかった。ただ影に対して考えるだけだった。そのうわんについてである。

「影か」

「その通りだ。だから」

今度は髑髏天使の後ろから出て来た。そうしてその拳で彼を撃つ。今度は正拳でそれで背を撃った。これは髑髏天使といえどかわせるものではなかった。

「うぐっ……」

「これはかわせなかつたな」

拳を繰り出したうわんの勝ち誇ったような声が聞こえてきた。

「残念だつたな」

「影だからか」

髑髏天使は拳受けてもそれで倒れはしなかった。前屈みになり倒れかけたが体勢を立て直す。そうしてそのうえで後ろを振り向いてまたうわんと対峙したのだった。

「瞬時に後ろに出て来られたのは」

「そうだ。俺は影」

何度もこのことを話すのだった。

「だからだ。その影を倒すことができるか」

髑髏天使に対して問うてきた。

「できなければ貴様は倒れる。それだけだ」

「影……」

「影を倒せるか？果たして」

「この世に無敵のものなぞ存在しはしない」

こちらの攻撃は退けられ向こうの攻撃は受けてもまだ冷静な髑髏天使だった。

「それは言っておこう」

「強いな」

うわんはその言葉を聞いて満足気に述べた。

「この状況でそれだけのことが言えるとはな。見事だ」

「皮肉ではないな」

「俺は皮肉は言わない」

うわんはそれは否定した。

「事実だ。俺は事実しか言わない」

「では俺を認めているのか」

「その通りだ。俺が倒すのに相応しい相手だ」

また言うのだった。

「行くぞ。今度は一撃で倒してやる」

ここまで言っておび姿を消した。その声だけが響く。

「苦しまないようにな」

「影は何によつて出て来るか」

しかしこの状況でも髑髏天使は冷静さを崩さなかった。

「それを考えれば」

「何をする気だ？」

「まず言おう」

髑髏天使はその右手の剣をまず横に一閃させた。

「貴様は消えたわけではない」

「見えていないというのにそう言うのか？」

「確かに今貴様の姿は見えてはいない」

「なら。勝てはしない筈だ」

「しかし何処にいるのかはわかっている」

「こう言うのだった。」

「何処にいるのかはな」

「わかつているだと？」

「そうだ。今それを見せよう」

言いながらその剣を下向きに構える。そうして。

「これであつ」

言いながら剣を地面に突き刺した。そのうえでそこから炎を放ったのだった。

炎は四方八方に広がりそのうえで辺りを覆う。するとそこからうわんが驚いたようにして墓石の影のところから跳び出てきたのだった。

「くっ！」

「やはりな」

髑髏天使はその影から飛び出てきた彼を見て言ったのだった。

「影は消えることはない」

そして言う。



### 第十三話 衝突その十五

「だが同じ影の中に入ることができる」

「見破ったというのか」

「その通りだ」

己の前に出て来た彼に対してまた告げた。

「影というからは。そうだと思つてな」

「ふん、それで今剣を刺しそこから炎を出してみせたか」

「凶星だったな。だがこれで影の中に隠れることはできないな」

「確かにな」

うわんにもそれはわかることだった。技は見破られればそれで終わりだからだ。

「しかしだ」

「しかし？」

「俺はこれで終わりではない」

こう髑髏天使に対して言うのだった。

「決してな。見るのだ」

「むっ!？」

「俺はこうした動きも出来る」

言いながらすすすすと横に動くのだった。その速さは尋常なものではなかった。

「影は光のもう一つの姿」

その素早い動きの中での言葉だった。

「こうして動きながら攻めることもできる。そして」

「むっ!？」

いきなり髑髏天使の右隣から拳を繰り出したのだった。

「こういうこともできるのだ」

拳は彼の右肩を撃った。その衝撃で思わず吹き飛んでしまった。吹き飛びその身体を墓石にぶつけてしまう。鈍く重い衝撃が彼の

身体を撃った。

「ぐっ……」

「まだ立てるか？」

「馬鹿にしないことだ」

一旦倒れたがそれでも立ち上がる彼だった。

「この程度ではな」

「存外頑丈なのだな」

「体力には自信がある」

倒れた墓石はそのままにして起き上がる。

「生憎な」

「そうか。自信があるか」

「如何にも。それでだ」

完全に起き上がったからの言葉だった。

「それが貴様のもう一つの武器なのだな」

「力と影の中に入る」

語るその口から見える歯と舌もまた漆黒のものであった。

「そしてこの素早さだ。この三つが俺の武器だ」

「そうか。それがか」

「その通りだ。ではいいな」

「まだ来るのだな」

「俺は勝つ」

これがうわんの返事だった。

「貴様を倒してな。だからこそだ」

「来るか」

「今の一撃はかなりのものだった筈だ」

うわんは冷静に彼を見つつ述べた。

「そうだな。ならば」

「くっ……」

「次の一撃で決める」

言いながらまた動きはじめてきた。

「覚悟するのだな」

「来たか」

うわんがまた動きはじめたのを見て彼も身構える。しかしダメー  
ジのせいで動きが鈍い。構えも満足にはできない程であった。

右肩に痛みが走る。その痛さに耐えながら考えるのだった。

(どうする?)

自分で自分に問う。

(このままでは敗れる。だが)  
「行くぞ」

だがその間にもうわんは迫る。最早一刻の猶予もなかった。  
彼には最早考えている暇はなかった。そして考えなかった。考  
えるかわりに跳んだ。そうしてその翼ではばたき空を舞うのだった。

「空か」

「それだけではない」

右腕を上から見据えながらの言葉だった。

「これで……どうだ」

言いながら再び剣から炎を出す。それでまた辺りを焼こうとい  
うのだ。

### 第十三話 衝突その十六

炎はうわんをも包み込む。しかしだった。

「そうすることも考えていた」

「考えていただと？」

「そうだ。貴様が空を飛ぶことができる」

言うのはこのことだった。

「それはな。わかっていた」

「わかっていたというのか」

「だからだ。その時はだ」

うわんは跳んだ。信じられない程の跳躍で彼に迫ってきた。

「こうするつもりだ」

「むっ!？」

「貴様は飛べる」

うわんは上に向かって跳びながら己の上にいる髑髏天使に対して言うてきた。

「しかしだ。俺は跳べるのだ」

「跳べるというのか」

「空を飛んだだけでは上には立てない」

彼はこうも言う。

「それは貴様自身もわかっている筈だ」

「確かにな」

それは髑髏天使も自覚していることだった。彼はこれまでの闘いで空を舞う相手とも闘ってきた。それもまだ大天使の翼がない時にもだ。その時のことは今でも覚えていた。

「それはその通りだ」

「あらば。そうした場合の闘い方もわかっている筈だ」

うわんは既に拳を繰り出そうとしていた。

「こうしてな。貴様を倒す」

その動きの速さは相変わらずだった。まさに光速だ。しかしであった。髑髏天使はそれを見ても平気だった。至って冷静な様子を崩してはいない。

「しかし。冷静だな」

「闘いで己を見失ったその時が終わりだ」

「これが髑髏天使の返事だった。」

「それでな」

「覚悟を決めたわけではないのか」

「覚悟は決めてはいない」

「彼もそれは否定する。」

「しかしだ」

「しかし？」

「勝利は確信している」

「こう言うのだった。」

「勝利をだと!？」

「そうだ。これだ」

言いながら右手の剣を前に突き出してきたのだった。

「攻撃はただ繰り返すだけではない」

「何っ!？」

「敵を誘い出しそのうえで仕掛ける場合もある」

「それが今だというのか」

「跳べばそれに力点を集中させてしまっ」

「彼は言うのだった。」

「一旦向けた点はそのから変えることはできない。つまり攻撃ポイントが決められる」

冷静沈着な言葉が続けられる。今まさにつわんの拳が迫ろうというその中で。

「だからだ。俺はただこうする」

言いながらその突き出した剣に炎を宿したのだった。そしてその炎を。

思いきり放った。紅蓮の炎が渦となつて放たれそれをうわんに放つのだった。ただ直線に突き進むだけのうわんにそれをかわすことができなかった。

「ぐうつ……」

「こういうことだ」

炎はそのままうわんを包み込む。髑髏天使はそれを見つつ呟いた。

「貴様が跳んだ時既に勝負は決まっていた」

「そういうことだったのか」

「そうだ。そして言ったな」

うわんは炎に包まれながらも何とか着地した。しかしその着地した場所も紅蓮の中にある。彼はその中で漆黒の身体を炎に包み込んでしまっていた。最早勝敗は決していた。

「俺は勝利を確信しているとな」

「これによつてか」

「炎が勝利をもたらした」

髑髏天使は静かに述べた。

「今回はな」

「炎か。確かにその力は絶大だ」

うわんは今己の身体を包み込んでいるその炎を見ながら髑髏天使を見上げていた。

「少なくとも俺も妖犬もその前に敗れた」

「その通りだな」

「だが。一つ覚えておくのだ」

しかし彼はここで言った。

### 第十三話 衝突その十七

「既に知っていると思う。その炎も万能の力は持つてはいない」

「万能ではないか」

「この世界に万能の力なぞありはしない」

「うわんはこうも髑髏天使に言うのであった。」

「それは覚えておけ。いいな」

「それが貴様の最期の言葉か」

「俺を破った男への言葉だ」

「だからだというのである。」

「見事だ。だから覚えておくことだ」

「わかった」

「うわんのその言葉に対して上から静かに頷く。鎧はその炎の輝きを受けて紅く染まっている。」

「それでは。覚えておく」

「俺の言葉はこれだけだ」

「うわんの声が笑ったように聞こえた。」

「それではな」

「うわん自身もまた紅蓮の炎の中に包まれていく。その形の炎が起こりそうして彼は消え去ったのだった。髑髏天使はうわんと闘いにも勝利を収めた。」

「闘いが終わり地に降り立つ。彼は今消えようとしている炎を見ていたがその彼の前に炎を挟んで現われた者がいた。それは彼だった。」

「また炎の力で倒したのだな」

「貴様か」

「髑髏天使は彼の目を見た。それは死神だった。彼はあの白い服に大鎌を持ったあの闘う時の姿で彼の前に立っているのだった。」

「やはり。倒したか」

「俺が倒すとわかっていたようだな」

「それだけの力がある」

髑髏天使のそれとはまた違う感じの言葉だった。冷静というよりは冷徹な言葉であった。

「貴様にはな」

「俺にはか」

「もつと言えば貴様の炎にだ」

その言葉が先程のうわんのそれと同じものになっていた。

「それはある」

「そうか。あるか」

「その通りだ。だが言っておこう。その炎とてだ」

「万能ではないというのだな」

「わかっているのだな」

死神は表情を全く変えることはなかった。それはさながら仮面のようであり髑髏天使のその髑髏の顔とそうした意味で同じであった。

「それは」

「当然だ。そしてそれを俺に見せたのは貴様だ」

「確かにな」

先のトンネルの中での鬪いのことを受けての言葉である。

「私の氷は炎すら凍らせる」

「貴様の氷。俺の今の炎では溶かすことはできない」

髑髏天使は感情こそ出さないがそこから滲み出ているものは忌々しげなものだった。

「だが」

「だが。何だ」

「それでも俺は氷を破る」

「今は無理でもか？」

「何なら今でもだ」

髑髏天使の言葉に鋭さがさらに宿った。

「破ってみせるが」

「それでは今ここで鬪うというのか」



「貴様が来るならばだがな」

言葉の鋭さはさらに強いものになっていく。そして死神もそれから身をかわそうとはしない。両者は互いに睨み合うようになっていた。

「その場合はだ」

「面白い。それではだ」

「やるというのか？」

「いや」

しかし死神はここでは動くこととはしなかった。一步も前には出ない。

「それは止めておこう」

「やるつもりはないのか」

「そうだ。今はな」

こう言って動くこととはしないのだった。

「止めておこう。勝手にするのだ」

「そうか。ならばいい」

「無駄な闘いはここでも避けるのか」

「貴様と同じだ」

死神に対しての言葉だった。

「闘うが無駄な闘いはしない」

「そうだな。私もそれは同じだ」

これについては彼も同じであった。やはり髑髏天使の言う通りである。

「それでは。今はだ」

「退くというのだな」

「如何にも。また会おう」

こう言って己の周りを白い霧で覆ってきた。霧は自然を彼の周りを覆い徐々にその濃さを増していくのだった。彼はその中に隠れていく。

「果たして私の氷をどうするか見たいものだがな」

「それはその時に見せよう。ではまたな」

死神は霧の中に消え髑髏天使もまた牧村の姿に戻ってサイドカーに乗って廃寺から姿を消した。闘いは終わったがこれもまた新たな闘いのはじまりでしかなかった。

### 第十三話 完

2009・3・20

## 第十四話 能天その一

髑髏天使

第十四話 能天

うわんとの鬪いが終わって数日後。牧村はこの日も大学でトレーニングを行っていた。大学の体育館で黒のジャージ姿で一心不乱に剣を振るっていた。

体育館ではフェシング部員の他にも様々な部の部員達がそれぞれ練習を行っていた。牧村もまたその中で剣を振るっているのである。それは寡黙にして激しいものであった。

汗は床に滴り落ち続けている。その中でのトレーニングは何時終わるともなく続いていた。その彼に若奈が来て彼にそっとタオルとポカリスエットを差し出すのだった。

「休憩の時間よ」

「そうか」

牧村は彼女の言葉に動きを止めて応えた。

「もうそんな時間か」

「ええ。少し休んで」

「わかった」

牧村はクールな声でまた応えた。

「それではな」

「ええ。それにしても凄い集中していたわね」

「集中してただけじゃない」

ところが彼はこう返すのだった。

「それはな」

「集中してただけじゃない？」

「そうだ。周りもな」

こう言うのである。

「見ていた」

「そうだったの」

「時計は見てはいなかったがな」

だから時間はわからなかったのだ。時計は体育館の壁にかけてある。しかし彼はそれは見てはいなかったのだ。今ようやく見たところである。

「それはな」

「けれど周りは見ていたのね」

「来るのも見えていた」

それも見えていたというのである。

「それはな」

「集中していないと危ないんじゃないの？」

若奈は彼の話の話を聞いたうえで首を捻って述べた。これは至極当然の考えであった。

「相手は正面にいるのよ」

「それはわかってている」

「じゃあどうして？」

また首を傾げさせて彼に問うた。

「周りにも注意していたの？」

「相手は正面にいる」

牧村は若奈からそのポカリスエットを受け取りながら述べた。そうしてそれを飲みながら話すのだった。

「正面にな」

「じゃあどうして周りにも注意していたの？」

「敵は何処から来るかわからない」

剣の如き声でこう言うのである。

「何処からな。来るかどうかわからないものだ」

「だからなの」

「そう。だからだ」

話すその間にも気配は鋭いものであった。まさに剣であった。

「何時でもな。そういつぶうに注意している」

「何かそれってスポーツじゃないみたいね」

若奈はここまで話を聞いてこう述べたのだった。

「ってどうか武道みたいだけれど」

「武道か」

「武道ってどうか闘い？」

暫く考える顔になってからこう訂正もしてきた。

「それに近いような気がするわ」

「そうかもな」

そして牧村もそれは否定しはしなかった。右手に持ったタオルで顔の汗を拭き左手でポカリスエットを持ちながら飲みつつの言葉だった。

「闘いかもな。確かにな」

「そういう感じよ。本当にね」

「そもそもスポーツも武道もそうだしな」

「そうって？」

「どちらも闘いの為のものだった」

話はスポーツや武道と闘いの関連についてのものにも移った。

「どちらもな」

「武道はわかるけれどスポーツも？」

「スポーツは元々スパルタからはじまった」

「ああ、スパルタね」

スパルタといえば若奈もよくわかった。かつてギリシアに存在した都市国家である。国民皆兵制であり常に厳しい軍事訓練を行い精鋭を擁していた国家である。

## 第十四話 能天その二

「あそこからだったの」

「そこで己を鍛える為にはじまった」

牧村はその歴史を語っていく。

「鬪いに勝つ為にな」

「そういうことだったの」

「今でも軍隊では同じだ」

次に現代の軍について話す。

「そういつた意味ではな」

「シビアなのね」

「スポーツのはじまりを考えるとな。そうなる」

「それはわかつたわ。けれど」

「けれど。何だ？」

「何で牧村君がそれをするの？」

かなり率直に己の中で生じた疑念を述べた若奈であった。

「そんなに生き死にが関わってるようなふうにするの？それがわからないのだけれど」

「少しな」

この問いには積極的に答えようとはしなかった。

「やることがあつてな」

「やることつて？」

「鬪つて勝つ」

彼は短い声で言った。

「だからだ」

「だからなの」

「そうだ。だから俺はこうして鍛える」

「こつも言った。」

「今も。これからもだ」

「それでフェシングやテニスをしているのね」

「それぞれ活きるものだ」

「闘いにつてこと？」

「鍛えることにだ」

髑髏天使であることはここでも隠しはしていた。

「それにな」

「ただスポーツを楽しむだけじゃないの」

それだけではないのは彼女にももうわかることであつた。それをあえて話した。

「つていうか楽しんでいないの？」

「これはこれで楽しんでる」

それは確かであつた。彼にしてもだ。

「汗をかくのはいい」

「それはそうね」

若奈にしろただ彼の側にいるだけではない。共に汗をかいている。だからその気持ちよさは知っているのだ。だからこそ頷くことができた。

「そういうのも楽しんでるのね」

「そうだ。さて、休憩の後はだ」

「どうするの？」

「ランニングはもうやったしな」

「それはいつも最初にしてるわよね」

「ああ」

ポカリスエットを飲み終えたうえで若奈に答えた。

「まず走ってからだ。まずはな」

「走ると身体の動きが全然違うからね」

「その通りだ。次はテニスか」

「そっちに行くのね」

「それでいいか？」

自分の考えを述べたうえで若奈に顔を向けて問うた。

「テニスに向かうということだな」

「試合の練習ね」

「それをしたい」

「相手の人がいないかも知れないけれど」

「それならそれでいい」

返事はドライであった。

「それでな。マシンか壁を相手にする」

「それでもするのね」

「少しでも何かがあればしておく」

また静かに述べたのだった。

「それだけだ」

「そういうことなのね。じゃあ」

「ああ。行こう」

ポカリスエツトを飲み終えてすぐの言葉だった。

「行っている間が丁度休憩にもなる」

「歩いていたら休憩にならないんじゃないの？」

「身体は全く疲れていない」

若奈にこう返す。

「ただ。気力が回復できればそれでいい」

「それだけで充分なの」

「そうだ。だから行こう」

思い立てば即座であった。

「テニスコートにな。それで今度はテニスだ」

「わかったわ。それじゃあね」

こうして若奈は牧村と共にそのテニスコートに向かいそのうえで今度はテニスをする彼の世話をするのだった。彼はこの日も己を鍛え続けていた。そうした日々を過ごしながら次の闘いに備えているのだった。



## 第十四話 能天その三

彼がこうして己を鍛えているその頃。魔神達は今度は朽ち果てた教会の礼拝堂の中に集まっていた。十字架も崩れ落ちステンダガラスの窓もあちこちが割れ主の頭も何処かに行ってしまった。机も椅子も腐ってしまい床も汚れきっている。その中に集まっていたのだった。

「そう。来るのね」

「間も無くです」

老人が女の問いに答えていた。三人はその朽ち果てた礼拝堂の前でそれぞれ三角を作る形で立会いそのうえで話をしていた。

「こちらに来ます」

「これで四人目だな」

男は老人の言葉を聞いて静かに述べた。

「あと八人か」

「四人で終わらないかも知れません」

だが老人は男の言葉にこう返したのだった。

「四人では」

「ではもう一人来るのか」

「気配を感じます」

語る老人の顔は穏やかな笑みだったがその目の光は鋭いものであった。漆黒の、それでいてぎらつくものがある、そうした光であった。

「中東から」

「中東？それじゃあ」

「あいつか」

女にも男にもそれでわかったようであった。

「彼が来るのね」

「あいつは。扱い辛いぞ」

「何、わかり易い方ではないですか」

怪訝な顔になった二人とは対称的に相変わらず穏やかな笑みを浮かべて述べる老人であった。何もわかっているような顔であった。

「ですから。御安心を」

「そちらがそう言うのならいいけれどね」

「こちらはな」

二人は今の老人の言葉を聞いてまずは彼に任せることにしたのだ。つた。

「とにかく。五人になりそうなのね」

「これで残るは七人か」

「はい。我々は一人ずつ確かにこの国に集まっています」

老人はこのことは事実だとはつきりと二人に述べるのだった。穏やかだが確かな声で。

「髑髏天使の力を手に入れる為に」

「そうね。若しくは」

「はい。髑髏天使が髑髏天使でなくなる」

老人の目のその黒い光がさらに不気味なものになる。黒い光、まさにそれを思わせるそうした光を発しているのであった。奇怪な光であった。

「そうなるかも知れません」

「この時代の髑髏天使は強い」

男は髑髏天使そのものに対して言及した。

「その成長もかなりのものだ」

「もう権天使だったわね」

「そうです。今は権天使です」

老人もまたこのことは把握していた。

「下級天使のうちで最上位にあたります」

「あとは中級の天使だけけれど」

「それも間も無くだな」

「もう次の階級にあがることはできるでしょう」

老人は己の見方を二人に告げたのだった。

「今すぐにも」

「能天使ね」

「次はそれか」

「そうなればその力はさらに強いものになります」

老人は言った。

「今よりさらに」

「そうね。そして」

「その心もまた」

「最初とかなり変わってきています」

老人の目の奥の闇の光はさらに深く強いものになっていた。そのうえで言葉であった。

「超然としているようになってきていますがそれ以上に」

「闘いに馴れてきている」

「そうだな」

「はい。我々と同じです」

今度はその口元に笑みが宿っていた。ピエロの仮面を思わせる、それでいて何か邪なものを感じさせる、そうした得体の知れない笑みであった。

「闘いに馴れてきています」

「次第にこちらに近付いてきているわね」

「魔物にな」

「髑髏天使の力。それは手に入れる方法は一つではありませんから」  
老人の笑みはそのままですらに邪なものを増していった。

#### 第十四話 能天その四

「ですからそれで」

「そうね。鬪いを進めていけばね」

「おのずとこちらもやるべきことがわかってくる」

「そうです。そして」

老人はここで話を少し変えてきた。

「今回のことです」

「私に任せてもらうわ」

女が名乗り出て来た。

「ここはね」

「貴女がですか」

「ええ。けれど一人よ」

「一人か」

男は女が出すのは一人と聞いて声をあげてきた。

「髑髏天使はそれでいいだろうが」

「死神のことを言いたいよね」

「そうだ。今はあの男もいる」

その死神のこともあった。今彼等の相手は髑髏天使だけではなくなっていたのだ。このことを忘れることは決してなかった。忘れられる筈がなかった。

「一人だけというのはだ」

「安心していいわ。死神のことも考えているわ」

女は男の問いに対して余裕の笑みで応えたのだった。

「それはもう充分にね」

「考えているというのか」

「身体が一つだから問題なのよ」

「はい、そうです」

老人は女の今の言葉に対して頷いてみせた。

「一つだからです。確かに」

「けれど一つではなかったら」

こう言って笑うのだった。

「そういうことよ。それじゃあ」

「それでは。今は任せた」

男はここは女に任せることにしたのだった。

「だが。俺もまたな」

「配下の魔物はもう用意してあるのね」

「無論だ。だが今度は趣向を変えてきた」

「趣向を変えてきたというの？」

「水だ」

水だと言うのだった。

「水の中に用意しておいた」

「そうなの。水なの」

「一応そちらも出しておいていいか」

「私の方の邪魔をするというの？」

女は今の男の言葉に眉を少し動かした。そこには幾分警戒するも

のもあった。

「若しそうならその時は」

「案ずるな。俺はそうした無粋な真似はしない」

男もそれは否定するのだった。

「だが。若し水での闘いになったならばだ」

「その時はわからないというのね」

「陸では思う存分闘うといい」

そちらは女に完全に任せるというのだった。この言葉に偽りは見られなかった。それは女だけでなく傍らにいる老人にもわかったことだった。

「貴様が今度出す魔物は水で闘えるか？」

「いえ」

男の今の問いには首を横に振って答えたのだった。

「残念だけれど。それはないわ」

「では好都合だ。俺は今回はトラップとを考えておいてくれ」

「そう。トラップなのね」

「貴様は貴様の闘いをすればいい。俺はトラップだけ用意しておく  
こう言って闘いには積極的に関わらないというのだった。

「それだけだ。それではな」

「ええ。ここで二人の仲間が戻って来るのならさらに楽しくなるし」

「そうですね。三人より五人です」

老人も女のその言葉に対して微笑んでみせた。

「また。楽しくなりそうですね」

「それが楽しみよ」

「全くです」

彼等はこちら話し合いながらまた手を打とうとしていた。彼等もまた髑髏天使との闘いを進めようとしていた。牧村はそのことを知る由もなかったが。

牧村は今は家にいた。休日の朝にトレーニングを終えシャワーを浴びてから家でくつろいでいた。とりあえず今はリビングでテレビゲームに興じていた。ソファーに座って暫く遊んでいるとそこに未久が来たのだった。

## 第十四話 能天その五

「あれっ、久し振りね」

「何が久し振りだ？」

「お兄ちゃんがゲームをしてることよ」

こう言いながら兄の側に来るのだった。今の彼女の格好は白とグレーの横縞のシャツに黒いスパッツだ。素足から動物の柄のスリッパをはいている。

「それもシュミレーションなんて」

「久し振りにやってみたくなった」

テレビ画面を見たまま妹に言葉を返す。

「だからだ」

「そうなの。やってみたくなったの」

「最近何かと身体ばかり動かしている」

「それはそうね。何かスポーツ選手みたいだね」

このことは未久もよくわかっていた。今見ても兄の身体はさながらスポーツ選手か戦士の様に引き締まったものになっている。服の上からでもそれがわかるのだった。

「そればかりだからね」

「たまにはこんなこともする」

淡々とした調子で述べる牧村だった。

「それがかえっていい」

「そうよね。ゲームってね」

未久もそれには同意であった。同意しながらリビングの隣にある台所に向かいそこからあるものを取り出した。それは豆乳であった。もう一つ野菜ジュースも取り出し両方をコップの中に注ぐ。そうしてそれをかき混ぜて独特の色のものにしてから飲むのであった。

飲み終えて口を洗面所で洗ってタオルで拭いてからまた兄に顔を向けて言ってきた。

「気分転換に最高なのよね。実際にね」

「だから今している」

手はコントローラーを握ったままである。

「こうしてな」

「それでそのゲームなの」

未久は今度はゲームそのものについて言ってきた。

「戦争ものよね」

「ああ、そうだ」

見れば画面には戦車や航空機のユニットが多数存在している。草原や森林の地形もある。どうやら現代か近代を舞台にした作品らしい。

「ちょっとやってみている」

「お兄ちゃんってそうしたゲームもするのね」

「意外か？」

「意外って言われると」

未久も少し困った顔になるのだった。

「別に。そこまでは」

「何となく面白そうだからやってみている」

彼にしてみればただそれだけだったのだ。このゲームにしても。

「中古で。よさそうだから買って来た」

「ああ、中古なんだ」

「新作を買ってもよかったが」

一応という感じの言葉であった。

「だが。それでもな」

「よさそうだから買ったのね」

「そういうことだ。しかし」

「しかし？どうしたの？」

「敵の数が多いな」

それが少し厄介に感じていることがわかる今の言葉であった。

「どうしたものかな。この数の多さは」



「敵の数がそんなに多いの」

「三倍はいる」

こう未久に述べた。

「優にな。それだけはある」

「三倍ねえ」

妹はその数字を聞いて考える顔になった。視線が上に向かう。

「一言で言っても多いわよね」

「質はそれ程でもないがとにかく数が多い」

見れば画面には牧村が動かしている青いユニットの向こう側にその青の三倍はあるであろう膨大な数の赤いユニットがある。「画面ではやけに赤が目立つ形となってしまうっている。」

「数がな」

「それで攻めあぐねてるの」

「それどころか押されている」

こう答えた。

「さて。どうしたものかな」

「こうしたゲームってあまり詳しくないけれど」

未久は兄の言葉を聞いてまたテレビの画面を見ながら述べてきた。

「地形あるじゃない」

「地形か」

「それを上手く使ってね」

まずこのことを話す。

## 第十四話 能天その六

「それであとは敵それぞれに苦手な相手っているじゃない」

「ああ」

「そういうこと考えて戦ってみたらどうか」

「地形と相性か」

「そうよ。私シミュレーションは恋愛ゲームしかしないけれど」

この辺りはやはり女の子であった。

「それでも。恋愛ものでも相性とかあるし」

「だからか」

「そうよ。だからそれでやってみたら？」

彼女の提案はこうであった。

「そういうこと考えてね」

「そうだな。なら」

まずは敵の歩兵ユニットを見る。これがとにかく敵の主力だった。

「歩兵には装甲車だ」

「それなのね」

「装甲車には戦車。戦車は歩兵にも回し」

言いながら次々と動かしていく。

「対空車両は歩兵だな。歩兵は全体のサポートにして戦車には航空機、対空車両はやはり航空機だ」

「何か色々あるのね」

「そうだな。そして山や森林を抑えて護りを固め」

そこまで考えて動かした牧村だった。

「これで護りながら戦うか。三倍の数でもな」

「それでどう？」

兄が動かし終えたのを見てまた問い掛けてきた。

「結構違ってきた？」

「かなり楽になった」

実際に画面での戦局は彼の軍にかなり有利になってきていた。赤い軍の動きが止まろうとしていた。

「これで凌いで数が減ったところで」

「反撃ね」

「そのつもりだ。そうか、こうして戦えばいいのか」

「何でも工夫よ」

未久は笑って兄に言ってきた。

「何でもね。工夫しないと」

「そうだな。確かにな」

「ゲームは工夫して面白くなるんだから」

まさにその通りだった。未久の言葉はここでは正論そのものであった。

「そうしないとね。ところでお兄ちゃん」

「今度は何だ？」

「最近また身体つきがよくなってきてない？」

兄の身体を見ながらの言葉だった。

「筋肉モリモリってわけじゃないけれど何か発達してきてるって感じ？」

「発達か」

「服の上からそう見えるのよ」

こう述べながら兄の身体をさらに見る。

「何かね。やっぱり身体動かしてるからよね」

「そうだな」

ゲームの画面を見ながら妹の言葉に応える。

「やはり。そのせいだな」

「そうよね。筋肉ってモリモリになるわけじゃないのね」

「そうした筋肉を作ることできる」

牧村はいつもの冷静な声で妹に述べた。

「そうしたものな」

「そうなの」

「だが」

しかしここで牧村はまた言うのだった。

「そうした筋肉は役に立たない」

「ああ、そうらしいわね」

未久も牧村のその話はすぐにわかった。すぐに頷くことができた。

「ボディービルとかの筋肉よね」

「そう、それだ」

やはりそれであつた。牧村も未久もその筋肉のことを話していたのだ。

「ああした作られた筋肉は意味がない」

「そうよね。スポーツの筋肉じゃないのよね」

「見せる為の筋肉だ」

牧村は事実だけを言っているがそれでもそこには厳しいものが感じられた。

「闘いのものではない」

「闘いのね」

「見せることも確かに重要だ」

「見せるのはいいの？」

そうした筋肉を否定したうえでそれ自体はいいというのだから矛盾している。少なくとも未久にはそう取られる今の兄の言葉だった。

## 第十四話 能天その七

「それは」

「相手をそれで威圧させたり驚かせる」

彼は言った。

「そのこと自体はな。視覚は大事だ」

「相手に見せてどう思わせるかなのね」

「その通りだ。例えば姿を消すにしろだ」

「あつ、そうね」

ここで未久はわかった。

「見えないとどうしていいかわからないからな。耳とか鼻で感じ取れることはできても」

「耳や鼻で刺激を与えて何かをすることもできるがな」

「それもなの」

「そうだ。しかしそれは実際に役に立ってこそだ」

「だからそうした筋肉は駄目なのね」

「闘いにはな」

「ここでも闘いを話に出す牧村だった。

「だから俺はそうした筋肉は持たない」

「持たないの」

「少なくとも興味はない」

やはり否定するのだった。

「いざという時に役に立たないのでは幾ら威圧しようとも何の意味もない」

「そうよね。テニスやるのに筋肉モリモリでも意味ないものね」

「逆に動きが悪くなる」

それはその通りだった。

「余計な筋肉がついてな。怪我也多くなる」

「だから駄目なのね。成程ね」

「余計なものは身に着けない」  
彼は言った。

「そして威圧するにしろ役に立ってのものだ」  
「身体を鍛えるのも大変なのね」

「何も考えなくてもそれは役には立たない」  
牧村の分析は続く。

「俺も考えてはいる」

「わかったわ。じゃあ私も」

「どうするんだ？」

「ちよつと考えてやってみるわ」  
考える顔で言うのだった。

「ちよつとね」

「何をだ？」

「勉強よ」

こう兄に話してきた。

「最近ちよつと成績が伸び悩んでるのよ」

「悪いというわけではないだろう？」

「それでもよ」

満足していないということだった。不満そうな顔にそうした感情  
が出ていた。

「何か最近幾ら勉強してもね」

「伸びないか」

「だからちよつとやり方考えてみるわ」

不満そうな顔が多少であるが晴れた。

「ちよつとね」

「やり方をか」

「そういうことよね」

あらためて兄に尋ねてきた。

「だからね。何が悪いのか考えてみてね」

「一番簡単な方法がある」

牧村は相変わらずゲームをしながらここでまた妹に声をかけてきた。

「簡単な方法がな」

「成績を上げる方法？」

「そうだ。何度もやれ」

彼は言った。

「同じ場所を何度も読んで何度も書いて何度も同じ問題を解く」

「それでいいの」

「教科書も参考書もそれぞれ一つでいい」

彼は具体的な方法を言ってきた。

「そうして何度も何度もやっていけば確実に力がつく」

「何度もなの」

「何度もだ」

まるで刻み込むようにして妹に告げる。

「それが一番効果があるし伸びる」

「そうだったの」

「今までどんな方法をしていたんだ？」

自分の考えを述べてから妹の今までのやり方を問うた。

## 第十四話 能天その八

「今までは。どうだったんだ」

「参考書を何冊も買って一回やったら捨てて」

未久はその今までのやり方を兄に説明した。

「そうしてたんだけれど」

「それは駄目だ」

牧村の返答は一言だった。

「それでは何にもならない」

「そうなの」

「学校の教科書と塾の教科書、それと参考書と問題集が一冊ずつで充分だ」

「それだけなの」

「これでも多いな」

言ったすぐにこころも考えたのだった。

「これでもな」

「多いの」

「四冊ある」

確かにこれで四冊だった。

「これを何回もやっていけばいい。予習復習でな」

「それで成績があがるのね」

「同じことを何回もやっていくのがいい」

またこころ妹に話すのだった。

「それで成績は確実に伸びる」

「わかったわ。じゃあやってみる」

未久は兄のこの考えを受けることにしたのだった。

「そういうふうだね」

「やってみるといい。これは勉強だけでないしな」

「学校の勉強だけでないの」



「何でもだ。フェシングやテニスでもだ」

彼が髑髏天使として闘う為に行っている二つのスポーツのことだった。

「こちらもだ。何回も同じことをやってことだ」

「それで強くなるの」

「何千何万と素振りをして」

彼はフェシングでもテニスでも実際にそれをやっているのだ。

「そして走り筋力を鍛える」

「それを毎日なのね」

「それで強くなっていく。そういうものだ」

「つまり。毎日基礎を積み重ねていくってことなのね」

話を聞いているうちに兄の言っていることの本質が見えてきたのだった。

「そういうことよね。やっぱり」

「その通りだ。わかってきたみたいだな」

「まあね」

兄の言葉に対して頷いた。

「わかったわ。じゃあこれからは教科書や参考書を何度も読んで書いて問題を解いて」

「そうしろ。そうすればいい」

兄もまた妹に対して再度告げた。

「成績をあげたければな」

「わかったわ。それでお兄ちゃん」

兄の話が終わったところで話題を変えてきた。

「私はそれでいくつもりだけれど」

「ああ」

「お兄ちゃんはそれでいくのね」

言いながらゲームの画面を見ていた。

「そのやり方で」

「そうだな。やっぱりこれがいい」

戦いは地形を利用してそのうえで相手の弱点をつき敵を減らして  
いっていた。戦局は当初の数の差を覆し遂に牧村の軍が優勢になっ  
てきていた。青が画面に多くなっていた。

「地形と弱点か」

「そういうことよ。それを使って勝つのがシュミレーションじゃな  
い」

「そうだったな」

言われてようやく思い出したという感じだった。

「頭を使ってか」

「私は基礎を鍛えなおすけれどお兄ちゃんはその思い出すことにな  
るみたいね」

「そうだな。今までそれはわかっていたつもりだったが」

ここでは髑髏天使としての闘いのことを思い出していた。これま  
での多くの闘いのことをだ。

「それでもだ。確かではなかったな」

「だから今忘れたんじゃないの？」

「そうだな。なら」

ゲームをしつつ他のことを考えるようになっていた。考えている  
ことはやはりあのことだった。

## 第十四話 能天その九

「意識しておくか」

「そうしておくといいよ。ところで」

妹はここでまた話題を変えてきた。

「そのステージが終わったら」

「ああ」

「次は何処だったっけ」

「この調子で勝てば今度はオリジナルシナリオで敵の首都への再攻撃だ」

「そうなの」

そういうことになっているらしい。このゲームでは。

「それじゃあ余計に気合が必要よね。敵の首都だから」

「丁度冬だから進撃は容易ではないな」

彼はゲームに関心を戻していた。

「やはり。どうするかな」

「雪なら雪で仕方ないじゃない」

しかし未久はその雪に対しても先程と変わらない調子だった。

「地形と一緒に」

「今度は敵に有利になるが」

「それを逆手に取らないと勝てないんじゃないの？」

何気なくの言葉ではあった。

「そうしないと。違うの？」

「逆手にか」

「うん。お天気が相手に有利ならこちらはそれを逆手に取ってよ  
また言うのだった。」

「そうすればいいんじゃないの？」

「それならだ」

ここで彼はまた考えるのだった。

「装備を変えるか。ガソリンは凍らないものにして兵士の防寒着も増やす」

「徹底してるわね」

「やるからにはな」

「ここは牧村の考えが出ていた。」

「徹底してやらないとな」

「そうね。徹底ね」

未久も兄の言葉を聞いていいことを聞いたという顔でしきりに頷きだした。

「そういうことね」

「そうだ。そうしないといい結果は出ない」

「そうよね。徹底しないとね」

兄の言葉を聞きながらまだ頷いていた。

「成績だつて伸びないわよね」

「強くもならない」

ゲームの画面を見ながらまた鋭い言葉になっていた。

「決してな」

「それはわかるけれどちょっと熱中し過ぎなんじゃないの？」

未久は兄がゲームに対して言っているのかと思っていた。

「そこまで根詰めてやることないじゃない。ゲームなんだし」

「それはまた違う」

だが彼はゲームのことではないと言った。

「それとはな」

「違うの？」

「違う。また違うことだ」

彼はまた妹に告げた。

「闘いは。違う」

「何かよくわからないけれどそのゲーム楽しんでるのね」

「いいゲームだ」

今度はゲームの話になり彼も今度は自然に妹に言葉を返した。

「やりがいがあるな」

「そうよね。じゃあ私は」

「どうするのだ？」

「今から勉強するわ」

「こう言うのだった。」

「今からね」

「それはいいことだ。では俺もだ」

「そのステージが終わったらまた身体動かすのね」

「そのつもりだ。もうランニングは済ませた」

静かに妹に述べた。

「後はだ」

「フェシング？テニス？」

「テニスだな」

考えることなく述べた言葉だった。

「テニスをしよう」

「じゃああれね。ラケットの素振りに左右に身体を動かしてボールを打って」

「それだ。何度もやる」

また何度も言ったのだった。

## 第十四話 能天その十

「何度もな。そして」

「身体を鍛えるのね。じゃあ私は身体を鍛えて」

「そうするといい。それではな」

「ええ。じゃあ行くわ」

丁度ここでその豆乳と野菜ジュースを飲み終え冷蔵庫に戻したのだった。

「お兄ちゃんも怪我しないようにね」

「ああ」

丁度ここでステージをクリアした。牧村はセーブするとそのうえで席を立った、そうしてテニスに向かうのだった。妹との話を思い出しながら。

次の日も彼はテニスをしていた。だが場所は違う。大学のテニスコートにおいて一人でマシーンから打ち出されるボールを相手に左右に身体を動かしていた。黒いジャージの姿でラケットを右手に持って練習を行っていた。

額からは汗をかきそれが顔全体に広がってこようとしている。もう結構身体を動かしているのがわかる。それでもまだマシーンから打ち出されるそのボールを打ち返している。フットワークはかなりのものだ。そのうえ手の動きもいい。そこには確かな練習の後があった。

「いい動きだな」

その彼に声をかける者が出て来た。

「闘いの時と同じだな」

「貴様か」

牧村は最後のボールを打ち返したうえで動きを止め声に応えた。声はテニスコートの周りの木々から聞こえてくるかのようだった。「また学校に来たのか」

「別に場所は選んではない」

この言葉と共にコートに入り口から彼が出て来た。彼は牧村の前にあるマシンの横に来てそのうえでまた彼に対して言ってきたのだった。

「貴様の前に姿を現わしているだけだ」

「俺のか」

「テニスのこととは知っている」

死神は牧村とコートのネットを挟んで向かい合った。

「人間のやるスポーツの一つだな」

「そうだ」

「人間は面白いことをする生き物だ」

彼はコートを見回しながらまた牧村に言ってきた。

「こつしたことを楽しむのだからな」

「必然でしていることだが好きだ」

牧村はこう死神に言葉を返した。

「テニスもフェシングもな」

「そうか」

「身体は鍛えるものだ」

「こつも言つのだった。」

「身体をな」

「人間の不思議な部分の一つだ」

人間ではない存在の言葉に他ならなかった。

「身体を動かして、鍛えて楽しむことはな」

「貴様はしないのか」

「私は神だ」

この言葉こそが返答だった。

「神は。鍛える必要はない」

「そういうものか」

「そうだ。鍛えずとも進化し強くなるものだ」

「進化!？」

牧村は今の死神の言葉に眉を動かした。

「神が進化するのか」

「何かおかしいか？」

「そんなことは聞いたことがないが」

「それは貴様が知らないだけだ」

しかし死神はその眉を動かした彼に対してこう告げるのだった。

「それはな」

「神も進化するというのか」

「神は不変の存在ではない」

彼は言うのだった。

「神話を見るのだ。時代によってその地位や役割も変わる」

「神話か」

「貴様も知らぬわけではあるまい」

嘲りの言葉ではなかった。彼の中のものを起き上がらせるような。

そうした言葉だった。

「このことは」

「我が国の神話か」

「日本の神話はわかりにくい」

牧村は日本人らしく日本神話を話に出そうとしたが死神はそれには乗らなかった。



## 第十四話 能天その十一

「神が出て来ては次々と消えまた新しい神が出て来る。そうした読み解くだけでも困難な世界でなくともだ」

「他の神話か」

「ゼウスを見よ」

彼が話に出してきたのはオーソドックスと言えるものであった。ギリシア神話のゼウスだった。確かに彼は非常によく知られた神である。

「父を倒し天空の神になったな」

「うむ」

「かつては信仰されていなかった」

これは事実であるらしい。彼は父であるクロノスを倒しそのうえで天空の神となったのだがこれはかつてはクロノスとその神族であるティターン神族が崇拝されていたことの証でもある。そのクロノスにしる父であるウラノスを倒して神々の王になったのであるが。

「しかし時代が変わり信仰されるようになりその力も変えていった」

「天空と雷だけでなく全知全能の神にか」

「そうだったのは何故か」

死神は言うのだった。

「それは彼が進化したからだ」

「だからか」

「そうだ。これはどの神も同じだ」

こう牧村に話すのだった。

「時代により変わり、そして進化するのだ」

「それは貴様もだというのだな」

「如何にも」

ここまで話したうえで牧村に対して頷いてみせた。

「その通りだ。私もまた進化する」

「他の神々と同じくだな」

「これでわかったな。そして私がどのようにして進化するか」  
「どのようにしてだ？」

「命を刈り取り冥府に送ることによってだ」

つまり彼の責務を果たすということであった。

「それによってだ。私は進化する」

「それによってか」

「わかったな。貴様の様に鍛える必要はない」

そのことはここでも否定した。

「しかし。命を刈り取りその命を冥府に送ることにより」

「貴様は進化していく」

「わかったな。そういうことだ」

牧村に対して話し終えた。

「私も。他の神々もまた進化し変わっていく。貴様等人間と同じく  
な」

「そして俺もか」

「貴様も？」

「そうだ。俺は髑髏天使だ」

覆せない絶対の真実である。

「髑髏天使もまた」

「そうだったな」

死神は彼のその言葉で気付いたのだった。

「その通りだ。貴様もまた闘いの中で進化している」

「今は能天使だ」

己の今の位置もわかっているのだった。

「だが。さらに闘いを経れば」

「さらに進化する」

死神もそれは認める。

「だが」

「だが？」

「いや、まだそれはわからないか」  
彼はここから先は言わなかった。

「まだな」

「何か言いたいことがあるのか？」

「それはない。気にするな」

「気にするなと言われて気にしない人間はいないが」

「忘れる。それよりもだ」

彼は牧村に対して告げてからそのうえでまた彼に言うのだった。

「次の魔物との闘いだか」

「それがどうしたというのだ？」

「ダムに行け」

「ダムにか」

「そうだ。そこにいる」

こう彼に話したのだった。

「そこで貴様を待っている」

「わかった。では貴様も行くのだな」

「いや、私は今度行きはしない」

しかし彼はこれについては否定したのだった。

## 第十四話 能天その十二

「今回はな」

「それは一体どういう風の吹き回しだ？」

「事故が起こった」

彼は言うのだった。

「そちらに行かなければならない。大きな事故だ」

「事故!？」

「何度も言うが私は死神だ」

死神はここでも己のことを語った。

「死んだ魂を冥府に送るのが仕事だ」

「それで行くのか」

「そうだ。死んだ者が多く出た」

こう語るのだった。

「だからだ。その魂を全て冥府に送り届けに行くのだ」

「魔物の魂を刈るだけではなかったのだな」

牧村は少し皮肉に彼に対して言った。

「それだけではないのだな」

「生憎私の仕事は多い」

死神はその少しばかりの皮肉を受け流しながら言葉を返した。

「それだけではないのだ」

「そうか」

「今回は貴様が全てやるといい」

ここまで話したうえでこう告げたのだった。

「私は何もしない。それではな」

「今から行くのか」

「既に死者の香りがする」

香りと表現する。そこには死神独自のものがあつた。

「それでな。今から行かせてもらおう」

「わかった。では行くといい」

牧村に止める理由はなかったし実際に彼も止めはしなかった。実際にドライに彼に対して言葉を返した。本当にそれだけであった。

「また機会があればな」

「会おうというのだな」

「どちらにしろまた近いうちに会うことになるな」

「おそろくな」

双方共それは感じ取っているのだった。

「その時にな。また会おう」

「わかった。それではだ」

死神はコートから去ろうとする。牧村に背を向ける。そしてそのうえで背中越しに彼に対して言ってきた。

「それでだ」

「今度は何だ？」

「貴様、香りが変わったな」

こう言うのだった。

「私が最初に貴様に会った時とな」

「香りが変わった？」

「そうだ」

また告げてきた。

「といっても死の香りではないがな」

「俺はまだ死なないのか」

「それもある」

これもだというのだった。

「しかしだ。それとはまた別の香りだ」

「それは一体何だ？」

「それはすぐにわかることだ」

今ここでは語ろうとはしないのだった。

「貴様がな。それではな」

「行くのだな、その事故の現場に」

「さて。どれだけいるか」

表情を見せない言葉だった。

「それはわからないがな。今から言ってくる」

「そうか。ではまたな」

「うむ。また会おう」

こう言葉を交えさせたうえで姿を消す死神だった。牧村も練習をこれで終えてサイドカーでその街の離れた山のところにあるダムに向かった。その門の白いコンクリートのところに進むと目の前に一人の男がいた。それは白髪の高背の老人であった。彼が門の上の部分にあたる通り道に立っているのだった。

牧村から見て左手にダムの水がたたえられており右手から水が出ていた。そこは滝そのものであり水が勢いよく流れ出ている。監視の建物はその側にありそれも白いコンクリート製だった。前と後ろは山である。アスファルトの道がある以外は全て木々だ。その緑と茶以外は何も無い世界の中にダムの白と水の青がある。そうした場所だった。

その世界の中に老人は一人いた。背筋は伸びており品のいい黒いスーツに身を包んでいる。彼はサイドカーが前に来ても全く動くことがなかった。

## 第十四話 能天その十三

牧村はその彼の前でサイドカーを止めた。そのうえでヘルメットを脱いでそれから彼に声をかけたのだった。まだサイドカーには乗っている。

「貴様か」

「髑髏天使ですね」

「今は人間の姿だがな」

バイクに乗ったまま彼に対して告げた。

「その通りだ。俺が髑髏天使で」

「来て下さり何よりです」

老人はその皺が多いが気品のある顔で彼に述べてきた。

「感謝します」

「俺は魔物と戦う存在だ」

己の髑髏天使としての存在理由を述べたのだった。

「ならば。今こうしてここに出て来るのも道理だ」

「道理ですか」

「そうだ。でははじめるのだな」

「はい」

老人は彼の言葉に静かに頷いたのだった。

「それでは。私は」

「今度は。誰だ？」

「私の名は狸力といいます」

「中国の魔物か？」

「おわかりなのですね」

「名前でわかる」

こう答えた牧村だった。答えながら今サイドカーから降りた。サイドカーは自然に彼の後ろに下がり闘いを邪魔しない場所に移った。「その名前でな」

「九尾の狐様の下におります」

自身もこう答えたのだった。

「その通りです」

「やはりな。では俺はだ」

今度は彼が名乗るのだった。その狸力と対峙したうえでだ。

「髑髏天使だ」

「はい、承知しています」

「名乗る必要はないと思ったがな」

それをわかったうえでの名乗りであった。

「しかし。貴様が名乗ったならばこちらも名乗るのが礼儀」

「それを御承知のようで何よりです」

狸力はいくまで紳士的だ。しかしその全身から発されている妖気はかなりのものだった。牧村もそれは口には出さないが感じ取っていた。

「それではです」

「はじめるのだな」

「死合いましょう」

狸力はこう言ってきた。

「いざ」

「よし」

牧村も彼の言葉に応える。

「それではだ」

「参ります」

老人の姿が変わった。顔がまず毛に覆われ豚に似た顔になっている。そして全身が獣のそれになり四足になる。蹴爪ができ豚に似ているが何かが違う姿になった。鳴き声は犬のそれに近い。

「変わった姿だな」

「昔から言われています」

狸力もこのことを否定しない。

「自覚もしています」



「そうか。それでは俺もだ」

彼もそれを受けて変身に入った。両手を拳にしてそのうえで胸の前で打ち合わせる。するとそこから白い光が発され全身を覆った。その中で全身を鎧で多い顔を髑髏のそれに変えていく。そうして牧村来期から髑髏天使にその姿を変えたのだった。

「行くぞ」

変身を終わると右手を前に出した。そうして一旦その右手を開いたうえで握り締めた。これが闘いのはじまりの合図となったのだった。

闘いがはじまった。まず髑髏天使はすぐに翼を生やし大天使の姿になった。そのうえで飛翔し両手に持っている剣で襲い掛かったのだった。

「来ましたね」

「さて。どうする?」

牧村は急降下攻撃を仕掛けながら彼に問うてきた。

「この攻撃。防げるか」

「防げますよ」

変身しても紳士的な狸力だった。髑髏天使を見上げてその言葉で返してきた。

「私は空からの攻撃には何ともありません」

「どういうことだ?」

「これです」

ここで口を開いてきた。そしてそこから声を出したのだった。

犬の鳴き声だった。その声はただの声ではなかった。声そのものが激しい衝撃だった。その衝撃が髑髏天使の胸を撃ち吹き飛ばしたのだった。

## 第十四話 能天その十四

「ぐうつ……」

胸にその衝撃を受けた牧村は空中高く吹き飛ばされた。そのうえ身体のバランスを崩し空中できりもみ回転になりそのうえで落下した。すんでのところでバランスを取り戻し翼を動かして空中に浮かび上がる。かろうじてそのままの落下は防いだのだった。

「それが貴様の力か」

「はい」

また紳士的に応える狸力だった。

「その通りです。実は中国では私は」

「どうなのだ？」

「災いを呼ぶ魔物とされてきました」

こう着地した髑髏天使に語るのだった。

「実は。そうだったのですよ」

「災いか」

「はい。災いといっても色々なものがありますね」

「そうだな」

一口に災いと言ってもだ。それこそ星の数程ある。牧村もそれはわかっていた。

「それはその通りだ」

「中国の長い歴史において」

話は今度は彼の国の歴史に関するものになった。

「多くの普請が行われてきました」

「普請か」

「はい。万里の長城然り大運河然り」

前者は本格的にはじめたのは秦の始皇帝であり後者は隋の煬帝である。どちらも歴史上においては暴君であるとされとかく何かと民衆を建築に駆り出したとされている。

「その普請は数多いものでした」  
「それは知っている」

髑髏天使もまた知っている話であった。中国の長い歴史については彼も知っているのだ。

「しかし。それが貴様とどう関係があるのだ」

「私が姿を現わすとです」

狸力は彼に説明をしてきた。

「その場所に普請をもたらすのですよ」

「それにより民衆が苦しむというのだな」

「そうですね。長城を作り上げるにあたって多くの犠牲が払われました」

今のように機械がある時代ではない。全て人力だ。ならばそれにより多くの犠牲が生じるのは常であった。しかも駆り出されることにより農作業や商業がおろそかになってしまふ。かつての建築というものはそれだけ民衆にとって重い負担であったのである。

「それをもたらしてきたのが私だったので」

「不幸をもたらす魔物か」

「そうなります」

己についてこう定義したのだった。

「そしてこの声はその不幸を知らせる声」

「普請を知らせる不吉の声か」

「また作り上げたものを壊すこともできます」

「こつも述べてきた。」

「それが私の武器なのです」

「わかった。だからこそ貴様は魔物なのだな」

「その通りです。それではまた参ります」

豚の目で彼を見据えながらまた言ってきた。

「いざ」

「ならば」

彼がまた仕掛けてきたのを見てすぐに動いた髑髏天使だった。大

天使から権天使に変わる。その鎧と髑髏が紅に染まった。

そしてすぐに己の前に炎の壁を出した。それで狸力の炎を防いだのだった。

「炎の壁ですか」

「咄嗟に出したがな」

その通りだった。今のはまさに咄嗟に出したものだ。しかしそれでもだった。

「だが。効果はあったな」

「まさかそのようにして防がれるとは」

「炎もただ攻める為だけのものではないな」

彼自身も今わかったことであつた。

「こうして。守りにも使える」

「どうやら。しかしそれは」

「俺だけではないというのだな？」

「そうです。いえ、攻撃は最大の防御」

狸力は炎の壁が消えまた己の前にその姿を見せてきた髑髏天使に對して話した。

「ですから。私は」

「また来るといふのだな」

「貴方の炎は使われる度にそれなりの力を消費されるようですね」

その通りだった。やはり無尽蔵に使えるわけではない。炎を使えばそれだけで気力を消耗する。それがそのまま戦いにも影響する。

無尽蔵では決していないのだ。

## 第十四話 能天その十五

「ですが私は」

「違うというのだな」

「私は普請を呼ぶ魔物」

ここでまた己のことを語った。

「そしてそれを自在にこの声で壊すことも可能ですので」

「幾らその声を出しても力尽きることがないというのだな」

「はい」

はつきりと答えてきた。

「その通りです。それでは」

また声を放ってきた。目には見えはしなないがそれは確かに髑髏天使に対して迫る。髑髏天使はその音をまた炎の壁で防いだ。だがそれと共にまた気力を使ってしまった。

「またそれで防がれましたか」

「役に立つ」

自分で述べる髑髏天使だった。

「思ったよりもな」

「ですが。それが何時まで続くか」

見越した笑みだった。

「見ものですね」

「そうだな。確かに何時までも続けてはいられない」

このことは髑髏天使が最もよくわかっていることだった。

「どうするべきか」

迷っていた。早いうちに決めなければ敗北するのはこちらだ。それもわかっている彼は内心焦りを覚えた。しかしここで。狸力の姿をよく見たのだった。

（足は四つ）

まずはそれだった。

(そして首は短い)

次にこのことを。

(確かに上に顔は向けられるがそれでも)

彼の姿を見て何かを分析していく。それは長いようすでいて一瞬だった。その一瞬のことを終わらせてそのうえで彼が取った行動だ。

再び飛んだ。そのまま上を飛翔する。狸力はその飛翔する彼を見てその紳士的だがそれでいて楽しむような声をあげたのだった。

「またですか」

「空を飛んでいることか」

「はい。またなのですな」

その楽しいげな声で彼に言ってきた。

「また飛ばれましたね」

「如何にも」

彼もこのことを否定しない。

「だが。ただ飛んでいると思うな」

「ほう」

「貴様のことはわかった」

飛びながらこう狸力に対して告げる。

「よくな」

「では。見せてもらいましょう」

言いながら後ろ足で立ち上がった狸力だった。

「私のことをどうおわかりなのか。今」

その立ち上がった姿勢で真上に顔を向けて声を放つ。それは今の髑髏天使には当たりはしなかった。彼は空中をとんぼ返しそれで音をかわしたのだ。

だが狸力はさらに声を放つ。それは何度も何度も続けられる。しかし髑髏天使は空を飛ぶことによりそれ等の攻撃を全てかわしていく。しかし狸力は余裕だった。

「そう飛ばれていても状況は変わりませんよ」

「何故だ？」

「その翼で飛ばれるのも」

彼は言う。

「気力を消耗されていく筈です。つまり最後には大地に降り立ちざるを得なくなる」

「それもわかっているのだな」

「如何にも」

ここでも自信に満ちた狸力の声だった。

「しかし私は」

「これもまたその通りだ」

今回も髑髏天使は認めた。

「こうして飛ぶだけでも気力は消耗する」

「ならば最後に笑うのは私です」

「いや、俺だ」

だが彼は言った。

「俺が勝つ。今からな」

「ではどのようにして」

「来い」

攻撃するように言った。

「貴様のその音。俺に当ててみせる」

「ふむ」

狸力は彼の言葉に考える顔になった。それは一瞬ですぐに元の顔に戻り言葉を返した。

「それでは。お受けなさい」

今度はその音を続けざまに放ってきた。まさに乱射であった。しかし髑髏天使はその乱射に対して姿を消した。そのように見えたのだった。

「むっ!？」

狸力は髑髏天使の姿が見えなくなったのを見て思わず声をあげた。

## 第十四話 能天その十六

「一体何処に」

「確かに貴様の力は強い」

何処からか髑髏天使の声が聞こえてきた。

「だが」

「だが？」

「貴様にも弱点はある。それがこれだ」

声は立ち上がり首を真上にあげた姿勢になつてゐる彼の背からのものであつた。そしてその声と共に風が動いた。凄まじい速さで突き進み一閃したのだった。

「ぐう……」

「これで決まりだ」

髑髏天使は彼の背中の方に降り立ちそこからダツシュを仕掛け斬つたのだった。その一閃は致命傷だった。外に傷こそなかったがそれでも断ち切られていたのだった。

「これでな。貴様は終わりだ」

髑髏天使は抜けて彼に背を向けた姿勢で告げてきた。

「そつだな」

「お見事です」

狸力は後ろ足で立ち天を見上げた姿勢のまま彼の言葉に応えた。

「確かに。これで私は」

「終わりだな」

「はい」

素直にこのことを認めるのだった。

「まさか。後ろから来られるとは」

「貴様は四つ足だ」

姿勢を正し狸力に身体を向けた。そのうえで言葉だった。

「ならば上を見上げた姿勢になれば後ろ足でバランスを取るな」



「如何にも」

「そして顔をあげる」

今彼が取っている姿勢に他ならない。

「そうなれば上にもみ注意がどうしてもいってしまう。二つ足の連中よりもな」

「それに気付かれてのことですか」

「そうだ。上手くいったな」

このことに満足しているのがわかる今の声だった。

「気付かなければ負けているのは俺だった」

「確かに。私も勝ったと思いましたが」

攻撃を仕掛けているその時まで彼が優勢だった。だからこう思うのも道理であった。しかし勝ったのは彼ではなく髑髏天使であったのだ。

「こうなるとは」

「眠れ」

髑髏天使はその彼に告げた。

「これでな。眠るがいい」

「はい。それでは」

狸力の身体をあの前白い炎が包みだした。最期の炎であった。

「これで。私は」

この言葉を最後にして己の形をした炎となって姿を消す。ダムでの闘いはこれで終わった。髑髏天使はそれを感じ去ろうとした。しかしその時だった。

「甘いわね」

「何っ!?!」

「まだ私がいるわよ」

その言葉と共だった。

不意にダムの水門の崖のところから何かが飛び出てきた。そうして彼に一直線に襲い掛かってきた。

その不意打ちに彼は何もできなかつた。そのまま攻撃を受けダム

の中に放り込まれてしまった。彼は水中でその何かを見たのだった。巨大な魚だった。しかしただの魚ではない。その頭は鹿のものだった。鹿の頭をした魚、これまた異形の存在であった。優に五メートルはあった。

「狸力の仇は取らせてもらうわ」  
「魔物か」

鬍髯天使は水中からその異形の魚を見て言った。魚は今彼の前にその巨体を見せている。

「また出て来たのか」

「私の名前はグール」

自分から名乗ってきた。

「ウエンティゴ様の配下よ」

「あの男のか」

「そうよ。狸力が仕留めればそれで帰るつもりだったけれど」  
こう話してきたのだった。

「仇を取ることにしたわね。容赦はしないわ」

「そうして貴様が出て来たのか」

「覚悟はいいわね」

ここでグールは一旦その姿を人のものにしてきた。それは緑と青の服を着て長い髪を水の中にゆぐらせた女だった。その髪と目も緑だが肌は赤い。美しいが異様な女だった。

「ここであんたを倒してあげるわ」

「水の中でか」

「わかりは水の魔物」

これは言わずともがなであった。

## 第十四話 能天その十七

「だからよ。覚悟するのね」

「ふん。水の中といつてもだ」

逃げるつもりはなかった。その翼をはばたかせようとす。しかしだった。

空中にいる時程その翼は動かない。思ったより鈍い。彼はそのことに気付いたのだった。

「水のせいか」

「どうやらそのご自慢の翼も水の中では満足には動けないみたいね」  
グールもそれを見てせせら笑うようにして言った。

「当然といえば当然ね。翼は空のもの」

そしてその笑みで彼に言うのであった。

「水のものではないわ」

「くっ、確かにな」

髑髏天使もこのことを認め歯噛みするしかなかった。

「その通りだ」

「けれど私は」

ここで姿を戻してきた。あの巨大な鹿の頭の魚に。

「この姿があるわ。だから」

「俺に勝てるというのだな？」

「話通り頭は切れるのね」

「この場合この言葉は褒め言葉ではなかった。

「嬉しいわ。そういうことよ」

「だからといって貴様に負けるつもりはないがな」

「どうかしら。自慢の翼だけでなく炎も使えないの？」

彼の権天使としての力も把握しているのだった。

「それでどうやって私に勝てるのかしら。この水の中で」

「火も翼もなくとも」

臆した言葉ではなかった。

「俺は貴様に勝つ。これだけは言うておく」

「その気概はいいわ。けれど」

グールの言葉はあくまで勝ち誇ったものだった。既に闘う前から勝利を確信していた。己のことと今の髑髏天使のことをわかつているからこそだった。

「それだけで勝てはしないわよ」

言いながら襲い掛かる。その巨体で体当たりを仕掛けようとする。髑髏天使はそれを翼を収めすのでかかわしたのだった。

攻撃をかわされたグールは髑髏天使の反対側に出た。そこから身体を反転させつつ再び彼に対して向かい合ってきたのであった。

「今のをかわしたのね」

「いい攻撃だ」

髑髏天使も今のグールの体当たりは素直に賞賛する。

「しかしだ。当たらなければ」

「そうやってかわしているだけでも疲れが溜まってくるわ」

だがグールにとって今彼が攻撃をかわしたことも想定範囲内のことだった。今の余裕に満ちた言葉がそれを何よりも物語っていた。

「そうすれば。その時は」

「かわしきれなくなるというのか」

「既に狸力との闘いで相応の気力と体力を消耗している筈よ」

このことまで頭に入れているのだった。

「だから。その時にこそ」

「待つというのか」

「私はその時に狙えばいいだけ」

声が笑っていた。

「それだけよ。さあ覚悟するのね」

「ふん。しかしだ」

今の状況を知ってはいてもだからといってそれで諦めたりはしない髑髏天使だった。鋭い言葉も強い視線もそのままであった。

「俺は敗れるつもりはない」

言いながらまた襲い掛かってきたグールの体当たりをかわす。それを二度三度と続けていたがやがて動きは鈍くなってきた。それを見てさらに笑うグールだった。

「もう少しね」

「俺が敗れるというのか」

「そうよ。もう体力が落ちてきているわ」

その髑髏天使に対して言うのだった。

「いよいよよ。貴方の最後の時が」

「最後かどうか」

この期に及んでも闘志を衰えさせていない髑髏天使だった。

「見てみることだな」

「それはいいけれどどうするつもりかしら」

勝者の余裕に満ちた目で髑髏天使を見ての言葉だ。

## 第十四話 能天その十八

「翼も炎も使えないというのに」

「どちらも使えなくとも」

彼は全身に己の残っている全ての力を満たさせた。

「俺は髑髏天使だ。髑髏天使として闘うのみだ」

言いながらさらに力を満たさせる。

「行くぞ、貴様を倒す」

両手の剣を握り締めそのうえで何と自分からグールに向かおうとする。するとその時だった。

「!?!」

グールは思わず目を瞠った。何と髑髏天使の色が変わったのだ。

権天使の赤から白になっていく。それと共に動きも変わった。それまでは水の抵抗を受けていたがそれが全くなかった。まるで風のような動きであった。

「水の抵抗がなくなった!?!まさか」

「これは」

髑髏天使はその身違えるまでに速くなった己の動きを感じつつ言った。

「また力が備わったのか」

「その力は」

グールは動きを変えた髑髏天使を見ながら考えを巡らせる。

「風!?!その動きは」

「風か」

髑髏天使は彼女の言葉から己に新たに備わった力を察した。

確かに今の動きは風のそれだった。水の中にありながらそれを切り裂くものだった。この動きにより彼は。今まさにグールに迫る。

「けれど」

しかしだった。グールはまだ己の絶対の優勢を信じていた。

「今は水の中。私に分があるわ」

「それはどうか」

髑髏天使はグールに向かって突き進みながら動きだした彼女に対して告げた。

「今の俺は風だ」

「風がどうかしたというの？」

「風は水を切り裂く」

これが彼の言葉だった。

「鋭い風はな。そして」

「そして？」

「その中にあるものもまた」

言いながらその両手の剣を構える。グールに突き進みながらその剣を構えたのだった。

「切り裂く。こうしてだ」

グールに向かって剣を放った。しかしそれは間合いではなかった。だがその剣から白銀の刃が飛びそれがグールを撃った。刃はグールの身体を切り裂きその巨体から血煙を湧き起こさせた。水の中がその紅い血で急激に染まっていく。

「貴様の血は赤か」

「私に傷を付けた!？」

グールが驚いたのはこのことだった。

「しかも。この傷は」

「深いな」

髑髏天使はその水を染め上げていく血の量を見つつ冷静に述べた。

「最早。動くことも辛いだろう」

「くっ、確かに」

グールも忌々しいがこのことを認めるしかなかった。

「その通りよ。私はもう」

「腹を切った」

見ればその通りだった。血は腹から噴き出ている。しかも傷は二

つだ。

「鱗のない腹をな」

「そこまで見ていたというのね」

「敵の弱点はすぐに見抜きそこを狙う」

はつきりとした声で言い切ってきた。

「それが闘いの常識の筈だ」

「そうね。それはその通りだわ」

「俺はそれをしたただけだ」

またしても簡潔な言葉であった。

「それにより今こうして貴様を倒すことになった」

「どうやら。私は慢心していたようね」

今になってそれを実感したグールだった。

「貴方のことはわかっていたつもりだったけれど」

「確かに権天使までなら敗れていた」

これは髑髏天使自身が最もよくわかっていることだった。実際に能天使になるまでは防戦一方というのもおこがましい状況だった。

それは否定しようがなかった。

「しかし。俺は勝った」

「まさかここで能天使になるなんて」

流石にグールもそれは考えもしていなかったのだ。

「それも。風を使えるなんて」

「運が俺に味方したということだ」

こう述べたのだった。

「そしてそれにより俺は勝った」

「見事だと言っておくわ」

今まさに息絶えんとする声で言ってきた。

「私を倒したことは事実だから」

「その言葉受け取っておく」

「行くといいわ。勝者が闘いの場から去るものよ」

グールの身体もまたあの青い炎が包もうとしていた。その巨体が



徐々に青く燃え上がっていく。

「貴方がね」

「そうさせてもらう。それではな」

「このまま次々に強くなっていくのね」

グールはその身体を急激に青く燃え上がらせながら最後の言葉を出した。

「どうなるか見てみたい気もするけれど敗者にその資格はないわね」

これを最後の言葉にして青い炎に変わった。闘いに勝利した髑髏天使は上に飛び水から出た。そうしてサイドカーの上に着地すると牧村来期の姿に戻った。そうしてそのサイドカーに乗りダムを後にした。

その彼をダムの門の橋から見る男がいた。それは死神だった。彼は去っていく彼のサイドカーを見ながら一人呟くのだった。

「あと五つか」

一言こう呟いただけで姿を消した。後には誰も、そして何も残ってはいなかった。ただ静寂があるだけだった。死闘の後の静寂が。

#### 第十四話 完

## 第十五話 子供その一

髑髏天使

第十五話 子供

ダムでの闘いを終えた翌日。牧村は博士の研究室に入った。そしてそこで博士に対してその昨日の闘いのことを全て話したのだった。当然能天使のことも。

「ふむ、また一つ階級が上がったのか」

「そうだ。今度は風か」

「風だったか」

博士は彼の言葉を聞いて呟いた。

「そこまではまだわかっていなかったのう」

「天使の階級によつてその力が違うのはわかっていたが」

「うむ。大天使になると翼が生え」

まずはそれであつた。

「権天使は炎じゃつた」

「そして能天使は風だ」

「それぞれな。操れる力が違うな」

「しかも動きが変わつた」

牧村はこのことも博士に話した。

「権天使の時よりもその動きは素早いものになつた」

「そうなのか」

「そして攻撃の威力もだ。どちらもな」

「あがつたか。それは能天使になつた時だけではあるまい」

「そうだな」

これは実はこれまでも実感していることだつた。

「大天使になつた時も権天使になつた時もな」

「そうじゃろうな。階級があがれば天使はその力が全く違ってくる

のじゃよ」

「そうなのか」

「天使の世界はのう。あれで色々ややこしいのじゃ」

博士の言う天使とはここではキリスト教世界の天使である。その九つの階級を持つ天使達だ。

「階級が一つ違えばそれで天と地程の差がある」

「そうした話は確か前に聞いたな」

「そうじゃろう？とにかくそういうものだからじゃ」

博士は言うのだった。

「階級が一つあがればそれで全く違う」

「確かにな。最初に変身した時とは最早」

「違うじゃろ。そういうものじゃ」

「これで四つめの階級か」

「やはり異常に早いぞ」

博士が次に言うのはその階級の上がり方だった。

「普通はここまでなるのにそれこそ十年かそこいらはかかるものだったらしい」

「過去の髑髏天使達はか」

「そうじゃ。しかし君はじゃ」

牧村を真剣な目で見据えながら述べる。

「四ヶ月か？まだそこいらじゃろ」

「そうだな。三ヶ月半といったところか」

彼も髑髏天使となつてからの時間を計算しながら答えた。

「ここまでなるのにな」

「普通はそこまで十年か」

「文献によるとな」

またしても文献のことが話に出て来た。見れば今も博士の机の上には一体何百年経ったかわからないような古い書がある。他には何か木を束ねてそれを縄で綴ったものまである。

「大抵はそこまでかかっておる。中には天使のままの髑髏天使もおつた」

「天使のままか」  
「大天使になるのも相当な時間がかかるものなのじゃよ」  
あの翼を生やした姿のことである。  
「しかし君は違う。ここに至るまでほんの三ヶ月半じゃ」  
「ああ」  
「能天使になつた髑髏天使は半分程度のようにじゃがな」  
「半分か」  
「やはり物凄い速さじゃ」  
また速さについて言及したのだった。  
「これはな」  
「しかし。能天使になつたのは半分程度か」  
牧村はこのことについて言及したのだった。  
「少ないな」  
「それより上の力天使になるともっと少ない」  
博士は述べた。  
「上級の三ランクじゃが」  
「それはどうなのだ？」  
「なつた者は僅かじゃ」  
博士の声が深いものになつた。

## 第十五話 子供その二

「しかもなれたのはその一番下の座天使のみじゃよ」

「それが限度だったのか」

「うむ。智天使や熾天使になつた者はおらん」

こう牧村に述べる。

「従つてじゃ。文献にもな」

「どういったものかはないのか」

「実はその座天使や君がなつた中級の天使達についても詳しいことはまだわかつておらんのじゃ」

「まだか」

牧村は今の博士の言葉に眉を動かした。

「わかつていないのか」

「これはじゃ」

その机の上にあつた木の束を出してきた。随分と古いものである。

「木簡じゃがな」

「中国で昔使つていたというあれだな」

「左様。紙ができる前はこれを使つておつた」

漢代まではそうだったのだ。

「これは。動物を使った文字じゃが」

「中国にもそんな文字があつたのか」

「楚の文字じゃな」

博士は言った。

「これは」

「楚！？項羽のか」

楚と聞いて牧村がすぐに思い浮かべたのは項羽のことだった。あまりにも凄まじい武勇で伝説的存在となっている。中国では霸王とは彼のことを言う。

「あの楚か」

「そう、その楚じゃ」

博士もそうだと告げたのだった。

「その楚の文字じゃがな」

「そういえば始皇帝が統一するまで中国の文字は統一されていないか  
つたな」

「砥皇帝が何もかも統一したのじゃよ」

これは世界史の授業であった。

「文字だけでなく貨幣や度量衡、それに道の広さもな」

「そうだったな」

これは統一の為に必要だったからだ。始皇帝はその冷酷で猜疑心の強い性格と焚書坑儒や過度の建築好きの為に史記等では暴君として書かれている。しかし彼が後の中国を形成したのは紛れもない事実である。中国においては学は孔子からはじまり境は始皇帝からはじまり法は漢の武帝からはじまるという言葉がある。彼は中国を形成し今に至るものを築き上げたのである。

「それでその楚の字か」

「動物をモチーフにしている字だったのじゃよ」

また牧村に話してきた。

「これがな」

「楚辞でも使われていた字だな」

「うむ」

中国の古典の一つだ。その楚の外交官であり詩人であった屈原が書いたものである。彼はその始皇帝を後に出す秦により鬪り滅ぼされる祖国を嘆いて長江に身を投げて死んでいる。なお楚の秦に対する怨恨は極めて深く例え家が三戸になろうと秦を滅ぼすのは楚だと言っていた。奇しき縁であろうか。その秦を滅ぼした漢の高祖劉邦にしても楚の生まれである。項羽に至っては言うまでもない。

「それに書かれておるが」

「天使のことか？」

「君が今なつた能天使のことがのう」

それであつた。

「書かれておるぞ」

「風のことがか」

「そうじゃ。能天使は風を操る存在」

博士は言う。

「そう書かれておる。そしてその力は」

「権天使よりも上だな」

「その通りじゃ。天使は階級があがる度に強くなっていく」

「その通りだな」

「能天使も然り。そして」

「そして？」

博士に対して問うた。

「人間でなくなっていくとな」

「人間でか」

「この文献はここで終わっておるな」

こう言つて木簡を再び丸めそれに紐をしたのであつた。

「ここまでじゃよ」

「力天使のことは書かれていないのか」

「うむ、そうした文献はまだ見つかつてはおらん」

「そうか」

「探してはおるがの」

木簡の他にも文献は色々ある。しかしなのであつた。

## 第十五話 子供その三

「中々見つからんものなのじゃよ」

「欲しいものは欲しい時にこそない」

牧村はふとこう呟いた。

「全てがそうだな」

「まあそうじゃな。いざという時にはないものじゃ」

博士も今の牧村の言葉に頷く。

「世の中というものはな。難儀なものじゃ」

「全くだ」

二人でこのことを話していた。話しているうちにまた周りの妖怪達がやって来て博士には酒を、牧村には茶と菓子を差し出してきたのだった。

「まあまあ。辛気臭い話はこれ位にしてね」

「食べて食べて」

「飲んでよ」

「これは」

牧村は雨ふり小僧が差し出してきたその菓子を見て言った。

「豆腐ではないな」

雨ふり小僧はいつも豆腐を持っている。これを人に差し出して食べさせるのだがその豆腐を食べると身体中カビだらけになってしまふ。そうした悪戯を楽しむ妖怪なのだ。

「シュークリームか」

「僕だって豆腐ばかり食べてるわけじゃないからね」

雨ふり小僧は笑って彼に答えた。

「だからね。どうぞ」

「食べても身体にカビは生えないな」

「それは豆腐だけだから」

また笑って彼に話してきた。



「安心してよ。ほら、食べて食べて」

「ああ、わかった」

シュークリームは何個もあった。それが欧風の皿の上に置かれている。茶は紅茶だ。彼はまずシュークリームのうちの一個を手にとってそれを口の中に入れた。薄皮の香ばしさのすぐ下にクリームの甘さがあった。その二つを同時に味わい言うのだった。

「美味しいな」

「そうでしょ？スタープラチナの残りものだけね」

「あのカラオケ屋のか」

駅前にあるカラオケ店である。他には居酒屋やゲームセンターも同じビルにある。中々繁盛している店で菓子が美味しいことでも評判だ。

「あの店のものか」

「残りものをバイトの人達にいつものように渡そうとしていたんだ。その中のを幾つかこっそりとね」

「くすねたのか」

「くすねたなんて人聞きが悪いよ」

それは笑って否定するのだった。

「ただね」

「ただ？」

「断りなく頂いただけだよ」

また笑ってこう話した。

「ただそれだけだよ。それだけ」

「それがくすねたというのだがな」

牧村は目を少し鋭くさせて雨ふり小僧に告げた。

「人間の世界ではな」

「誰も気付かなかったし別にいいじゃない」

しかし雨ふり小僧はまだこんなことを言っただけで全く気にはしていないかった。

「それならそれで」

「それが妖怪の世界か」

「そうだよ。人が困らないように人から拝借する」  
本当に何でもないような言葉であった。

「それが妖怪だから」

「だからいいのか」

「うん、それが僕達の常識」

「こつも言つのだつた。」

「だから全然気にしないよ」

「どうやら言つても話が交わらないな。ならいい」

どのみち残りものでしか誰も気付かなかったのならそれはそれでいい、こつ思いなおしたうえでシュークリームをまた手に取って食べるのだつた。

「しかし。美味しいな」

「そうだろ？山月堂のだからな」

今度は猫又が彼に言ってきた。一本の尻尾がゆらゆらと揺れ動いている。

## 第十五話 子供その四

「美味しい筈だよ」

「あの店から仕入れているのか」

「スタープラチナのご隠居が、あそこの社長さんに野球選手のサインをあげて契約取ったらしいな」

「そんなことがあったのか」

「そうだよ。何か名古屋の方のチームの凄いピッチャーのサインをあげてな」

「誰だ、それは」

牧村は今度は紅茶を飲みながらその選手について考えた。茶も見事なものだった。ローズテイーである。

「星野か？小松か？」

「まずは少し古い選手から考えた。」

「それとも今中か？川上か？」

「いやいや、もっと昔々」

「あんたの親父さんも生まれてない時代かな」

「妖怪達が考える彼の横から言ってきた。」

「もうそれだけ昔のピッチャーだったね」

「俺達にとっちゃついこの前の話だったけれど」

「親父も生まれていないような」

牧村はこの言葉を聞いて頭の中でさらに歴史を掘り起こした。そうして出て来たのは。

「杉下か。フオークボールの」

「その人だよ」

「その人のサインをね。プレゼントしてだったんだ」

「それはまた高くついたな」

彼は杉下のサインとわかってあらためてこう呟いた。

「その選手のサインはな」

「けれどそのおかげでお菓子美味しいんだからね」  
「いいことだよな」

妖怪達は選手のサインよりも菓子に心がいつていた。牧村はそうした彼等の言葉を聞きながらそのうえでまた言うのであった。

「確かにこの菓子は美味しいな」

「僕達味わかるからね」

「こういうの見つけるには自信があるよ」

「おかげでわしも喜ばせてもらっとるよ」

博士は酒をちびちびとやっていた。肴は塩からであった。烏賊の塩辛で赤というよりはピンク色の中に烏賊のその白を見せていた。

「いつもいいものを見つけてくれるからな」

「酒もか」

「肴もな」

「どちらもだというのである。」

「こうしてな。この酒にしろだ」

「日本酒はどれも同じじゃないのか？」

「違う違う」

「全然違うよ」

横で妖怪達が言ってきた。

「日本酒だってね。味が全然違うから」

「いいのは物凄くいいよ」

「そうなのか」

そう言われても実感が沸かない牧村だった。これは彼が酒が飲めないせいであり仕方のないことであった。彼が飲めないのはアルコールの類全てであるが。

「酒も全然違うのか」

「あれだよ。お菓子だってそうじゃない」

「お店によって違うよね」

「菓子はその腕が大きく出る」

彼は言った。

「それこそだ。その職人の腕がそのまま出る」

「それと同じだよ」

「お酒もね」

「そういうことか」

牧村はこう言われてようやく頭ではわかったのだった。しかし実際に飲んだことはないのだからやはり頭でだけなのであるが。こればかりはどうしようもなかった。

「酒もか」

「まあ牧村さん飲めないのはわかってるからね」

「だからお菓子どんどんやってよ」

今度はティラミスが出て来たのであった。

「これもスタープラチナからこっそり拝借したものだよ」

「どうか」

「これもいいな」

彼はそのティラミスも食べてみて述べた。

「賞味期限が少しばかり気になるが」

「僕達そんなこと関係ないから」

「ねえ」

これは妖怪達の事情であった。

## 第十五話 子供その五

「お腹なんか壊さないし」

「それこそ腐ったものでも平気だしね」

「人間と妖怪は違うが」

牧村は今の彼等の問いに対して顔をすぐに少しむっとしたものにさせたうえで述べたのだった。その顔は実に真剣なものであった。  
「身体の構造がな」

「ああ、それは大丈夫じゃよ」

しかし博士はこう言った博士に対して言葉を出してきたのだった。

「それはな。安心していいぞ」

「いいのか」

「君は髑髏天使に変身するじゃろ」

「それと関係があるのか」

「あるのじゃよ。ただ変身できるようになっただけではない」

博士は塩辛を瓶からそのまま箸で取りつつ食べている。そのようにして食べながら牧村に対して話していた。

「その身体も強くなっておるのじゃ」

「髑髏天使になることか」

「左様。それは内臓もな」

「中也か」

「ただ表面だけが強くなるのではないのじゃ」

博士は彼に教えた。

「中也な。強くなる」

「そういうものか」

「だから多少以上のものを食べても平気じゃ」

こう言って太鼓判を押してさえしてみせた。

「もっとも味覚はそのままじゃからまずいとは思っじゃろっがな」

「ならあまり意味はないな」

「しかし腹を壊さなくなった」  
博士はそこを指摘した。

「これは大きいぞ」  
「確かにな。それはな」

このことには牧村も素直に頷いた。

「大きいな。しかしこのティラミスも実に」

「やっぱりお菓子は山月堂だね」

「だよな」

また妖怪達が笑顔で頷き合う。

「他にもいいところ一杯あるけれど」

「何もかもが違うよね」

「わしもあそこのは好きじゃな」

博士はまた酒をちびちびとやっていた。

「和菓子も好きじゃからのう」

「酒を飲むのにそちらもか」

「わしは何でもいけるぞ」

牧村に対して答えた。

「それこそな。甘いものも辛いものもな」

「そうなのか」

「君は甘いもの専門のようじゃがな」

「酒はどうしても駄目だ」

彼自身もそのことを認めた。

「身体が受け付けない」

「ふむ、なら仕方ないのう」

博士は今の牧村の言葉を聞いて腕を組んだうえで述べた。

「それならな」

「酒は体質が関係するな」

「そういうものじゃ。人によっては幾ら飲んでも酔わない者もいれ

ば」

そうした人間もいるのである。

「逆に少し飲んだだけ、いや全く飲めない者もある」  
「粕汁もかなり酒を飛ばしてからでない」と  
「飲めないのか。それはかなりのものじゃな」  
それを聞いてまた言う博士だった。  
「それではわしも勧めん。お菓子でも食べてくれ」  
「そうさせてもらっている」  
「酒は飲めれば楽しいが飲まなくともやっていける」  
「こつも言う博士だった。」  
「それはそれでな」  
「俺は飲めなくとも困ったことはない」  
牧村もこつ言葉を返した。  
「菓子が食えないのは困るがな」  
「じゃあ糖尿病には注意だね」  
「そうだね」  
今の彼の言葉を聞いた妖怪達が横で言い合う。  
「糖尿病になったら甘いものどころじゃないからね」  
「そうそう」  
「まあ身体動かしてるから大丈夫だろうけれど」  
「むしろ足りない位？」  
「特にそういうことは気にしてはいない」  
牧村はその糖尿病と身体のことを話す妖怪達に対して告げた。



## 第十五話 子供その六

「それはな」

「ああ、やっぱりそうなんだ」

「動かす量が半端じゃないからだよね」

「そうだ。幾ら食べてもな」

「足りないというのだ。今は。」

「何を食べてもすぐに身体になっていく。そんな気がする」

「うむ。それはいいことじゃな」

博士も今の彼の言葉を聞いて満足した顔で頷いた。

「太るとのう。どうしても身体の動きが落ちるものじゃからな」

「それは注意しているが食べることは制限はしていない」

今の彼はそうだった。確かに身体のいいものをバランスよく食べるようにしているが量はかなり取っている。また甘いものはいつも通りなのである。

「むしろ足りない気がする」

「足りないんだ」

「幾ら食べてもな」

また妖怪達に対して述べた言葉だった。

「足りない。これが結構辛い」

「君の歳でしかもそれだけ動いておればそうなるものじゃ」

博士はまずは人間としての彼について述べた。

「それにじゃ」

「髑髏天使としてか」

「うむ。人間の姿から髑髏天使になる」

その時の変身のことだった。

「その時にじゃ。変わるじゃろ」

「エネルギーを使うということか」

「左様。君は今まで気付いていなかったようじゃがな」

「意識もしていなかった」

こう博士に答えたのだった。

「そんなことは別にな」

「そうじゃろうな。それはわかる」

博士はまた彼の言葉に頷いたのだった。察していたような顔で。

「君を見ていればのう」

「そして闘いでか」

「そもそも闘いそのものがかなりのエネルギーを使うものじゃ」

これは言うまでもなかった。命をかけた勝負である。しかも剣を振るい空を舞う。それで体力を使わない筈がないのである。牧村も普段はそれの為に鍛えているのだから。闘う為に。

「それもあるからのう」

「その時のエネルギーもか」

「今のままでとりあえず補充はできているようじゃが」

また彼を見ての言葉であった。

「それでもじゃ。足りないということがあつては駄目じゃぞ」

「わかっている」

博士の言葉に対してあらためて頷いたのだった。

「それはな」

「よいことじゃ。さて、菓子を食ったらじゃ」

「どうするのだ？」

「サイドカーで来ておるな」

彼がいつも乗っているあのサイドカーだ。博士も改造を施したあのサイドカーだ。

「あれに乗せてくれんかのう」

「運転できるのか」

「いや」

今の牧村の言葉には首を横に振ってみせた。

「それはできんよ。そもそも百歳の爺がサイドカーなんぞ乗れるものか」

「それもそうだな」

牧村も話を聞いてその通りだと思った。百歳でここまで矍鑠な人間も珍しいというのにな。

「それでは。横にか」

「連れて行って欲しいところがあるのじゃよ」

少しにこりと笑って彼に言ってきた。

「実はのう」

「何処だ？」

「うむ、街のな」

街だという。

「レコードショップにのう。買いたい新曲があつてな」

「音楽を聴いたのか」

「聴くぞ」

今度はからからと笑って彼に言ってきた。

「ちゃんとのう」

「そうだったのか」

「そうじゃな。嵐が好きじゃな」

所謂ジャニーズである。

「昔からあの事務所のタレントは皆好きじゃな」

「ジャニーズか」

「いいじゃろ」

牧村に対して同意を求めてきた。

## 第十五話 子供その七

「ああした男性アイドルというのもな」

「悪くはないな」

牧村も別に彼等は嫌いではないので博士の言葉に対して素直に答えた。

「俺は世代的にはS M A Pだがな」

「S M A Pか。定番じゃな」

「博士はあれか。ジャニーズからか」

「その頃から応援しておったよ」

世代が完全にわかるやり取りだった。もっとも博士は世代どころではない年齢なのであるが。

「もうのう。長いのう」

「三十年以上か」

「そうじゃな。うちのも好きじゃしな」

「奥さんもか」

「九十過ぎてあれでミーハーなのじゃよ」

「ほっほっほ、と顔を綻ばせながらの言葉であった。

「中々元気でよかろう」

「九十過ぎてジャニーズか」

牧村はこのことになり思うことがあったがすぐに思いなおした。考えてみれば今日の前にいるこの博士は百歳である。しかも男である。それでジャニーズが好きなのだからさらに、であった。

「それもいいか」

「そしてこう考えることにしたのだった。

「それもな」

「そうじゃろ。それでのう」

「ああ」

「嵐の新曲を買いたいじゃよ」

またこのことを彼に言ってきた。

「それで店まで連れて行ってくれんかのう」  
「構わないが」

別に断る理由もなかった。博士の申し出に頷いたのだった。

「それじゃあ。行くか」

「うむ。ついでに昔のCDも探すか」

博士はこうも言った。

「しぶガキ隊のものでもな」

「それも好きだったのか」

「だからジャニーズは全部好きじゃ」

博士はまた述べた。

「全部のう。好きじゃからな」

「だからか。それにしてもな」

「何じゃ？」

牧村が言葉の調子を変えてきたのですぐに問うた。

「何かあるのか？」

「いや、凄いグループ名だと思ってな」

彼が今度思ったのはこのことだった。ジャニーズ事務所のタレントのグループ名についてである。

「しぶガキ隊か。思えば凄いな」

「あそこの事務所は全部グループ名が凄いじゃろ」

「男闘呼組もだったな」

ジャニーズのバンドグループである。

「あれもかなりだったな」

「たのきんトリオはどうじゃ？」

「少なくとも一度聞いたら二度と忘れられないレベルだ」

牧村は実に率直にそのグループ名について思うことを述べた。

「絶対にな」

「キンキキッズとかのう」

「あの事務所のグループ名はどれもかなりだ」

牧村はまた述べた。

「ステージ衣装もかなりだがな」

「ラメ入り大好きじゃからな」

それがジャニーズのステージ衣装の特徴でもある。これが実に目立つ。さながら闇夜の中に咲き誇る食虫花の様に映えている。

「郷ひろみの衣装も凄かったのじゃ」

「どういったものだったんだ？」

「黄緑のラメ入りの上着にシャツじゃ。想像できるかのう」

「容易にな」

流石に今の話には顔が曇った牧村だった。

「そんな服があるのか」

「あるのじゃよ。一度見たら絶対に目から離れんぞ」

「光GENJIのピンクのラメ入りもあつたな」

「どちらにしろラメ入りじゃ。あそこはな」

「しかし。それがかえっていいのか」

「よいのじゃよいのじゃ」

博士の答える声が綻んでいた。そういうことまで含めて好きなの  
うである。

## 第十五話 子供その八

「そうじゃ。DVDも買ったのう」

「それもか」

「行くついでじゃ。何でも買うぞ」

博士は明るく言い出してきた。そこには何の迷いもない。

「店にあつてわしが持っていないものは何でもな」

こう言つて牧村のサイドカーの横に乗り店に向かう。店に入ると早速スキップをするようにして明るい足取りでジャニーズのタレントのコーナーに向かう。そうしてCDを次々と手に取っていくのだつた。

牧村は見ているだけだつた。特に何かを買うという素振りは見せない。しかしここで彼に対して声をかけてきた者がいたのであつた。

「ねえ」

「むっ!？」

子供の声だつた。牧村はすぐにその声に反応を示した。

「君は買わないの？」

「君？」

「そう、君だよ」

また彼に声をかけてきた。

「君は。買わないの？」

「買いたいものはもう見つけた」

その声に答えるのだった。

「もうな」

「そうなの」

「そして御前は」

その子供の声に対して問い返した。

「買いたいものは買ったのか？」

「ううん」

笑った声で彼に答えてきた。

「それは最初からないよ」

「そうか」

「ここに来たのは別の理由からなんだ」

「俺か」

「わかるんだ」

今の牧村の言葉に声を笑みにしてきた。

「やっぱり」

「わからない筈がない」

牧村は落ち着いた言葉で彼にまた返した。

「それもな」

「やっぱり髑髏天使だから？」

「そうだ。そして貴様は魔物だな」

「ああ、それは違うよ」

そうではない、これは否定してきたのだった。

「僕は魔物じゃないよ」

「魔物ではない。ならば」

彼はその言葉から子供の声の主が誰であるのかわかったのだった。

「魔神か」

「そうだよ。僕は魔神」

また自分から名乗ってきたのだった。

「十二魔神の一人だよ」

「やはりそうか」

「名前はクマゾツツ」

言葉と共に牧村の前に姿を現わしてきた。青いジーンズを穿いた如何にも無邪気そうな、黒い髪のおどけない顔をした子供であった。

「それが僕の名前だよ」

「クマゾツツか」

「そう。中南米のね」

また彼に語ってきた。



「それが僕だよ。わかったよね」

「名前は覚えた」

牧村は鋭い声で子供に告げた。

「その姿もな」

「じゃあ。そういうことだから」

ここまで話すと牧村に対して踵を返した。

「またね」

「もう帰るのか」

「うん。僕の話は終わったから」

こう言って彼に背を向けた。

「またね。これでね」

「貴様は闘わないのか」

「魔物のルールは知ってるよね」

牧村の今の言葉を受けてまた顔と身体を向けてきた。そのうえで彼に対してまた言ってきたのだ。そのあどけない笑みをそのままにして。

## 第十五話 子供その九

「魔神でもそうだけれど」

「己に相応しい相手と闘う」

「そうだよ」

にこりと笑ってその笑みで彼に答えた。

「だから。今君とは闘わないよ」

「そうか」

「うん。君と闘うのはまた今度」

また言った。

「君が僕と闘うに相応しい相手になった時にね」

「その時にか」

「あの時の髑髏天使は凄く強かったよ」

にこりとした笑みはそのままだった。

「おかげで僕達全員不覚を取ったから」

「その時に封印されたのか」

「それで今やっと出て来れたんだ」

そうなのだった。彼等は今まで封印されていたのだ。その時の髑

髏天使によって。

「それでね」

「ではまた俺が封印してやる」

髑髏天使は子供を見据えて言うのだった。

「俺がな。覚悟しておくのだ」

「覚悟はしないよ」

子供はそれはしないと言う。

「そんなの僕らしくないから」

「ではどうするのだ？」

「楽しみにしておくよ」

「楽しみにか」

「早く強くなるんだね」

にこやかな笑みはここでも消えていない。

「早くね。いいね」

「ではその時を楽しみにしている」

牧村も今はこう言葉を返すのだった。

「その時をな」

「そうさせてもらうよ。それじゃあ」

ここでまた彼に背を向けた。今度は完全に帰るつもりだった。

「またね」

こうして子供は彼の前から姿を消した。そしてそれと入れ替わりに博士が戻ってきた。その手にはCDやDVDが何枚もあった。

「いやあ、大漁大漁」

そのCDやDVDを手にして御満悦の顔であった。

「見つかったわ。これで当分は楽しめるな」

「それはよかったな」

牧村は険しい顔で彼に言葉を返した。

「見つかったな」

「うむ。しかしじゃ」

博士はここで彼の顔を見た。その険しい顔から不穏なものを感じ取ったのだった。そしてそのことを直接彼に対して問うのだった。

「若しかしたらじゃ」

「何だ」

「魔物にでも会ったのか？」

「魔物じゃ」

「そうじゃ。違うか？」

「魔物どころかな」

彼は険しい顔をそのままにして博士に告げる。

「それで済めばいいがな」

「では魔神か？」

「そうだ」

鋭い目で博士に答えたのだった。

「それがわざわざ目の前にまで来てくれた」

「何かそういうことが多いのう」

博士は牧村の話を聞いて述べたのだった。

「この前の大男もそうだったそうじゃな」

「確かウエンティゴと名乗っていた」

牧村はこのことも博士に話した。

「そうな」

「ウエンティゴは北米じゃったな」

何処にいた魔神なのかはもう博士の頭の中にあつた。

「確かなのう」

「そうだな。自分で言っていた」

「それで今度は何処の魔神じゃ？」

「クマゾツツと言っていた」

「クマゾツツ？ああ」

名前を聞いてただけですぐに何処の魔神かわかった博士であつた。

納得したような顔になってしきりに頷く顔をしてから言うのだった。

## 第十五話 子供その十

「中南米じゃな」

「そうだったな。文献では」

「左様じゃ。そうか。中南米の魔神か」

「これで四人目だが」

牧村は魔神の数についても述べた。

「今のところな」

「あと八人じゃな」

博士も彼の今の言葉に応えた。

「さて、次は誰が出て来るかじゃが」

「あいつはこんなことも言っていた」

「どんなことをじゃ？」

「俺があいつと闘うのに相応しい強さになつたならば」

今度話すのはこのことであつた。

「その時に闘うと」

「魔物の習性じゃな」

それがどうしてかは博士も知っていた。

「それはのう」

「そうだな。それが魔物だ」

「魔神もまた然りじゃよ」

魔神もそうだというのだった。

「魔物達の神であるあの連中ものう」

「ではその考えは魔物と同じか」

「そうじゃ。ただし強さはまるで違つ」

「このことを言つと博士の目が鋭くなった。

「それこそ上級の天使にでもならないとのう」

「闘う時は来ないか」

「文献ではそうなつておる」

また文献を話に出してきた。

「文献ではのう。かつて封印された時はその髑髏天使は最高位の天使じゃった」

「九つの階級でだな」

「そうじゃ。そのうちでの最高位じゃった」

博士は話す。

「熾天使じゃった」

「その位にならないと駄目なのだな」

「少なくとも相手にはされないじゃろうな」

博士は極めて冷静に述べた。

「相手は仮にも神じゃからな」

「そうか。ではまだ先だな」

「そう遠い先でもないかも知れぬがのう」

しかし博士は牧村の言葉にはこう返すのだった。

「今の君では」

「俺ではか」

「何度も言うが君の上がり方は尋常ではない」

博士はこのこともここにおいても彼に話した。

「とてもな。このままいけば本当にすぐかも知れん」

「そうなのか」

「かえって心配にもなる」

今度は怪訝な顔で首を捻ってきた。

「ここまで急だとな」

「すぐに強くなることが問題か」

「それは実際はよいことじゃ」

まずはそれはいいことだというのだ。

「何でも早いに越したことはない」

「そうだな。ではどうして」

「しかし。髑髏天使にはまだわかっていないことが多過ぎる」

博士は今度はこのことを言ってきた。

「まだな。わかっておらんことがな」

「その階級や強さのことか」

「そう。まずその時の髑髏天使によって随分と違う」

髑髏天使は五十年に一度現われる存在だ。つまり五十年周期でそれぞれ一人ずついたのだ。その髑髏天使達がそれぞれ違うというのである。

「中には然程強くならず終わった者もある」

「熾天使にはならずにか」

「座天使になった者も実は僅かなのじゃよ」

「このことも牧村に話すのだった。」

「それものう。少しなのじゃよ」

「そうだったのか」

「そうじゃ。君が今なっている能天使には誰もなっておる」

その全ての髑髏天使がだ。

「しかしそもそもそこに至るまで相当かかるからじゃ」

「中々そこからはか」

「そういうことじゃ。また強くなれることにも限度があってじゃ。

天使によってな」

「ではすぐ上の力天使になるには」

「ここから減って殆ど主天使止まりじゃ」

「中級の最上位でか」

そこまでが中級の天使なのである。

## 第十五話 子供その十一

「そこで終わりだったのか」

「しかし君はもう能天使じゃ」

また彼の話に戻った。

「この調子でいけばな」

「力天使もか」

「いやいや、もっと上じゃよ」

それには留まらないというのだった。この言葉は本気であった。

「上に行けるぞ、このままいけばな」

「その智天使や座天使にか」6

「熾天使にもものう」

それもだというのだ。

「なれるかも知れんな。しかもすぐにじゃ」

「実感は湧かないが」

「今はなくともなる時はなるものじゃ」

博士はこつも言っただった。

「その時になればのう」

「そういうものじゃ。それではな」

「とりあえずはだ。俺はやれることをやる」

これは確かに心に定めていた。

「それだけだな。今はな」

「そうか」

「そうだ。だから今の魔神が何をしても」

「闘っただけじゃな」

「そのつもりだ。それではだ」

ここで話を変えてきたのだった。

「戻るか」

「うむ、そうじゃな」



話が終わったとみてこうしたことになった。今は二人は話を終え  
また牧村のサイドカーで戻った。今の話はこれで終わった。だが終  
わったのは彼等の中でだけだった。

あるビルの屋上においてだった。周りに同じかそれより高いか低  
いかのビルがそれぞれ建っている。その中で彼等は集まり話をして  
いるのだった。

「お久し振りですね」

「そうだね」

あの子供だった。彼は今老人達の中に入ってそのうえで話をして  
いるのだった。

「本当にね。長い間会っていなかったけれどね」

「お互いにね。会えなかったから」

今度は女が子供に言ってきた。

「仕方ないと言えば仕方ないけれど」

「うん。あの時の髑髏天使は強かったから」

話は遙かな過去に遡った。

「そのままやられちゃったね」

「そうだ。そしてだ」

男もまた口を開いてきた。ビルの屋上にお互いにそれぞれ十字の  
形になってそのうえで向かい合って話をしているのだった。

「この時代の髑髏天使もだ」

「みたいだね」

子供は男の今の言葉に対しても頷いた。

「かなり強いね」

「もう能天使だ」

男はその階級についても述べた。

「もうな」

「確かまだ髑髏天使になって四ヶ月も経ってないよね」

「はい、そうです」

老人は子供の今の問いに答えてきた。

「まだそれだけです」

「早いね」

その時間を聞いての率直な言葉だった。

「それだけでなれるなんて」

「しかも強いわよ」

女も言ってきた。

「かなりね。私達が闘ってきた中では」

「あの我等を封印した髑髏天使」

男の言葉だった。

「あれに匹敵するか」

「そこまで強いとは思わなかったよ」

子供はここで彼を知っているかのように述べた。

「そこまでだったんだ」

「はい。その通りです」

老人もまた述べたのだった。

## 第十五話 子供その十二

「それだけの強さが確かにあります」

「だったらここは数でいこうかな」

子供はこんなことを言い出してきた。

「死神もこの世界に来ているんだったよね」

「死神も魔物達の命を刈ってきている」

男が子供に告げた。

「あの者も我等の敵になっている」

「死神もねえ。だったら余計にだよね」

子供は男の今の言葉を聞いてさらに楽しそうに述べた。

「数でやるよ」

「それでは今回は御前に任せていいのだな」

「そうしてよ」

満面の笑顔で言葉を返した。

「絶対にね。頼むよ」

「そうね」

それを聞いた女の言葉である。

「それじゃあそうしようかしら」

「私もそうさせてもらいます」

老人も意見を同じにさせた。

「ここは貴方にお任せします」

「有り難う。それじゃあね」

これで話は終わりだった。子供は楽しく笑って今度は三人に対して言ってきた。

「もうすぐもう一人来るけれどそれより前に終わらせるね」

「もう一人？ああ」

女は今の少年の言葉から何かを察したようだった。納得した顔で頷いていた。

「彼も来るのね」

「そうみたいだよ」

「これでまた一人ですね」

老人もそれに続く。

「五人です」

「ここから揃って行くのかしら」

女は少しばかり期待するように言葉を出すのだった。

「だとしたらいいのだけれどね」

「そうだな。やはり賑やかな方がいい」

男も言う。

「十二人いればそれでな」

「その通りだよ。やっぱり皆いないと」

子供もそれは同じ意見だった。やはり彼も仲間達が多い方がいいというのだ。

「つまらないよね」

「はい。神も多くてこそです」

老人もこれからのことを期待する笑顔であった。

「それでこそ楽しいのですから」

「さて、そのうえで楽しみましょう」

女も笑顔であった。期待していることは同じであった。

「髑髏天使との闘いをね」

目を細めての言葉だった。そのうえでこれからのことを考えているのだった。仲間達が集まりそして髑髏天使との闘いも激しくなっていくことに。

牧村はこの日は真夜中の街中をサイドカーで進んでいた。大きな用事ではなくただコンビニに行っただけだ。そのコンビニにしかない菓子を買ったのだ。プリンである。そのプリンはビニールに入れそれを横の車の中に入れそのうえで帰路についていた。彼以外に誰もいないその夜道を進んでいると。不意に後ろからバイクが来た。それはあの見覚えのあるハーレーダビットソンであった。

「御前か」

「久し振りと言うべきか」

ヘルメットの奥からあの声が聞こえてきた。声と共に彼の横に来ると顔を向けてきた。

「こうして会うのもな」

「そうだな。一週間ぶりか」

彼も時間を振り返って言うのだった。

「貴様と会うのも」

「また強くなつたな」

ここで死神は言ってきた。

「貴様は。今度は能天使か」

「わかるのか」

「わかるがそれより前に見ていた」

「こう彼に言ってきたのだった。」

「貴様の闘いをな」

「ダムの時をか」

「見事だったと言っておこう」

死神は今度は彼を褒めてきた。

## 第十五話 子供その十三

「二匹の魔物を。ああも見事に倒すとはな」

「どちらも手強い相手だった」

闘った者しかわからない言葉だった。

「だが俺は勝ちそして能天使になった」

「水の中では能天使になったからこそ勝つことができたな」

「その通りだ。運がよかったと言うべきか」

「運もあるがそれ以上に必然があった」

死神は運よりもそれを言うのだった。必然をだ。

「貴様が勝ったことにはな」

「必然か」

「そうだ。貴様は確かにそれなりの闘いを経てきた」

次に言うのはこのことだった。

「しかしだ。それ以上にだ」

「それ以上に？」

「どうやら貴様には恐ろしいまでの素養がある」

彼に今度告げたのはこのことだった。

「闘いに関してのな」

「闘いに関してのか」

「これは聞いたかも知れないがここまでで能天使になった者はいない」

奇しくも博士と同じ指摘であった。

「貴様以外にはな。いないのだ」

「そのようだな」

そして彼もそれを知っているという言葉述べたのだった。

「どうやらな」

「その通りだ。貴様の強さの上がり方は尋常ではない」

「ではどうするのだろうか？」

問う牧村の言葉が鋭いものになった。

「闘うつもりか？また」

「いや」

死神はそれは否定するのだった。

「前にも言ったが。そのつもりはない」

「そうか」

「私が刈るのはあくまで決められた者だけだ」

死神としての存在意義そのものの言葉だった。

「あくまでな。貴様はそうではない」

「では邪魔にならなければか」

「そうだ。何もしない」

このことを確かに言う死神だった。

「だからだ。安心しろ」

「わかった」

そして牧村も死神のその言葉を受け頷くのだった。

「それではな」

「ただしだ」

だがここで死神はふと声の色を変えてきた。

「闘いはある」

「闘いはだと？」

「耳を澄ませるのだ」

彼が次に言ってきた言葉はこれであった。

「耳をな。聞こえるか」

「聞こえる？何をだ」

「風だ」

こう牧村に言うのである。

「風が教えてくれている」

「風がか」

「御前にも聞こえてきている筈だ」

そのうえで今度はこう牧村に言ってきたのだった。

「御前にもな。違うか」

「俺にも!？」

牧村は今の彼の言葉を聞いてヘルメットの奥で顔を顰めさせた。

「まさか。いや」

「聞こえてきたな」

牧村の今の言葉でわかった死神だった。

「御前にも」

「前からか」

ヘルメットの中で呟いていた。

今確かに牧村の耳にそれが聞こえていたのだった。その無数の声を。風に乗って来るその声を聞いたのだった。今前から来るそれを。



## 第十五話 子供その十四

「多いな、今度は」

「今度は私も闘わせてもらおう」

死神は顔を正面にやって言った。

「それでいいな」

「数が多いからか」

「その方が貴様にとってもいい筈だ」

今度はこんなことを言うのだった。

「違うか。一人や二人ではないのだからな」

「そうだな。勝手にしろ」

いいとは言わなかったがこう言うのだった。

「御前の好きなようにな」

「わかった。それではそうさせてもらおう」

死神もそれを聞いて納得した顔で頷いた。

「私の思う通りにな」

「それではだ」

バイクに乗りながらだった。それでも変身に入るのだった。両手をハンドルから離しそのうえで拳にする。そうしてそれを胸の前で打ち合わせた。

するとそこから白い光が起こり全身を包み込む。光が消えたそこにはいたのは白い髑髏に白銀の鎧の騎士だった。その髑髏天使である。「行くぞ」

右手を前にやってそのうえで手を広げてそして握り締める。そのうえで闘う姿勢に入っていた。

死神も同じだった。死神は右手を拳にしてそれを胸の前に置く。すると青白い光が起こりその中であの白く長い服に大鎌を持つ死神の姿になった。

「それではだ」

「行くのだな」

「行くまでもない」

しかし死神は髑髏天使に対して言うのだった。

「もう来ている」

「もうか」

「そうだ。見るのだ」

その前からであった。

何と無数の人の顔が来る。闇夜の中で不気味な咆哮をあげつつやってくる。髑髏天使はその無数の顔を見て思わず声をあげた。

「今度の魔物は何だ」

「チョンチョンだ」

死神が彼に答えた。

「あれはチョンチョンだ」

「チョンチョンというのか」

「そうだ。あの咆哮の声を聞いてみるからだ」

今言ったのはその咆哮についてだった。

「あの咆哮をだ。聞いてみるといい」

「むっ!？」

髑髏天使は彼の言葉を受けて実際にその咆哮を聞いた。すると確かにその顔の魔物達は吠えていた。チョンチョン、と。奇怪な声であった。

「確かにな。これはな」

「聞こえたな」

死神はあらためて髑髏天使に言ってきた。

「この咆哮が」

「ああ、確かに聞いた」

髑髏天使もまた死神の言葉に冷静に頷いた。

「この声。確かにな」

「これが名前の由来にもなっている」

ここまで話したうえでチョンチョンの名のこと話した。

「これがな。奴の名前の由来だ」

「そうだったのか。声がか」

「中南米の魔物だ」

今度はその出自のことだった。

「あれはな」

「中南米か」

「会ったか？」

また牧村に対して問うてきた。

「あの魔神に」

「魔神……子供にか」

「やはり会っていたか」

死神は今の髑髏天使の言葉からそれを悟ったのだった。

「既に」

「自分から来てきた」

彼は言った。

## 第十五話 子供その十五

「それで言ってきたのだがな」

「そうだったか」

「魔神なのはわかっていた」

それは既に把握していた。

「クマゾツだったな」

「その配下の魔物だ」

「そうだな。中南米ならな」

既にそこまで話はわかっていた。

「あの魔神の配下だ」

「その通りだ。話がわかっているならだ」

「闘うだけだ」

二人の結論はもう出ていた。それでであった。

それぞれ剣と鎌を出す。そのうえで敵を待ち受ける。すぐに前から顔だけの異形の怪物が無数の姿を現わしてきたのであった。

「チョン、チョン」

「チョン、チョン」

その不気味な声と共にだ。髑髏天使はその声を聞きつつ身構えるのだった。

「近くで聞くと余計に変わった声だな」

「死者の鳴き声だ」

死神はこの不気味な声をこう表現した。

「これかな」

「死者の鳴き声か」

「そうだ。何故かというとな」

彼は右手に大鎌を持っていた。そうして左手でそのハーレーを操っている。そのうえで魔物を今にも断ち切らんと構えているのだった。

「チヨンチヨンは元々は死者の霊だ」

「死霊というわけか」

「近いな。それも怨霊に近い」

「だからこそ魔物になったというわけだな」

「話がわかるな。そうだ」

見れば顔だけではなかった。二つの耳で飛んでいた。その耳は普通のそれよりも遥かに巨大でそれを羽ばたかせて飛んでいるのだった。さらに異様な姿だった。

「だから私も今度は思う存分闘わせてもらう」

「好きにしる。では俺もだ」

「闘うな」

「それだけではない」

髑髏天使は身構えながら彼に告げた。

「変わらせてもらう」

「能天使にか」

「見たいと思っっているだろう」

右手の剣を順手に構えながら死神に問うのだった。

「俺のその時の姿を」

「一度見たがな」

死神は静かに髑髏天使に答えた。

「それでもだ。見たいと言えば見たい」

「こちらもその方が都合がいい」

変身するということがであった。

「それでは。変わらせてもらうぞ」

「うむ」

髑髏天使はすぐに両手を顔の前でクロスさせそのうえで全身に力を込めた。するとそれによりすぐにあの能天使になるのだった。背中の翼も生え左手にもサーベルが出た。

チヨンチヨン達はもうすぐ側まで来ていた。口で彼に噛み付こうとする。しかし髑髏天使はその魔物達を両手に持っている剣で次々

に切り裂くのだった。

右手の剣を上から下に振り下ろす。すると魔物の首が両断されおぞましい断末魔の顔と共に姿を消した。青白い紅蓮の炎となりそのうで消えたのだ。

「消え方は他の魔物と同じだな」

「そういうことだ」

彼の横では死神が右手だけで己の大鎌を振るいチヨンチヨン達を切り裂いていく。縦に、横に、縦横無尽に振り回し彼等を赤い炎に変えていくのだった。

「魔物だからな」

「そういうことだな。しかし」

「しかし。何だ？」

「数が多いな」

髑髏天使が次に言ったのはこのことだった。その間にも両手の剣で魔物達を切り裂き青白い炎に変えて消していくのだった。

「また随分とな」

「チヨンチヨンとはそういう魔物だ」

死神もまた鎌で彼等を切り裂きそのうで炎に変えながら答える。

「数で攻めそうして喰らう」

「喰らうのか」

「しかし身体を喰らうのではない」

「こう言うのだった。」

## 第十五話 子供その十六

「心を喰らうのだ」

「魂をか」

「そういうことだ。魂を喰らう」

彼は言った。

「そうして生きる魔物だ」

「そうか。怨霊らしいな」

髑髏天使はそれを聞いてさらに攻撃を続けながら言うのだった。

「そして俺の魂もか」

「そういうことだ。貴様の魂も喰らうつもりだ」

「こういうことだった。」

「そして私のものもだ」

「そういうことか」

「悪食でもある」

そうでもあるというのだった。

「集団で襲い貪って来る」

「そのようだな。しかしこのままではな」

「やられるというのか？」

「やられるつもりはない」

彼は言った。

「ただこうやってな。だからだ」

「むっ!？」

「こうさせてもらう」

ここで飛んだのだった。そのうえで翼で舞う。サイドカーはそのまま前に走っていくのだった。

それを見ながら魔物達に向かって急降下しそのうえで両手の剣を古いそこから鎌イ足を放つ。それで魔物達を次々に切り裂くのだった。

「成程、そうやって闘うのか」

死神はそれを見て頷くのだった。

「そうやってか」

「そうだ。数が多いのならこうした闘い方もある」

敵の中に再び入ってからも剣を振り回しその鎌イ足でさらに切り裂いていく。そして前に行った筈のサイドカーが戻り魔物達の中に飛び込み彼等をさらに混乱させるのだった。

その時に髑髏天使自体はサイドカーに惑わされることなくまた衝突することもなかった。その衝突を巧みに避けつつ見事に闘っているのだった。

「ふむ、相変わらず頭の回転がいいな」

死神もその闘い方を見て素直に賞賛の言葉を述べた。

「むしろさらによくなったと言うべきか」

「賞賛はそのまま受け取っておくが」

髑髏天使はそのサイドカーと合わせた攻撃を繰り返しながら死神に対して言葉を返す。

「貴様の方はそれでいいのか」

「私か」

「そうだ。闘う為にここにいる筈だが」

「如何にも」

彼もそのことは隠さない。

「私もまた。その為にここにいる」

「なら。闘うことだな」

こう彼に告げる髑髏天使だった。

「貴様にそのつもりがあるのならな」

「わかっている。私もだ」

ここでハーレーは自然と前に出た。死神はそこから離れ両手で大鎌を持って身構えた。するとその構えのまま彼の身体が左右に幾つも分かれたのだった。

「またそれか」



「多くを相手にする時には都合がいい」

それぞれの口で髑髏天使に述べる。

「この方がな。では私もやらせてもらう」

死神達が動いた。その両手に持った鎌で魔物達を次々と切り裂いていく。一つ切ればそれがすぐに赤い炎に変わっていく。幾人もの死神達が縦横に魔物達の中で動き回り敵を斬っていく。何時しか魔物の半球状の中に赤い炎と青い炎が次々に起こるようになっていた。髑髏天使は相変わらずサイドカーを突入させ離し、また突入させることを繰り返しながら魔物の陣を混乱させそのうえで両手の剣から鎌イ足を放ち彼等を倒している。そして死神は分身の術でそれぞれの分かれ魔物達を斬っていつている。その個々の強さもそのままであり魔物達の適う相手ではなかった。

彼等のその強さの前に頭だけの魔物達は次第に数を減らしていき。遂には一人残らず炎となり消え去ってしまったのであった。

「これで終わりだな」

「そうだな」

闘いを終えた髑髏天使は己の側にサイドカーを止めさせた。死神は一人に戻っていた。そのうえでお互いに闘いが終わったことを確認するのだった。

しかしその二人の前に。あの子供が姿を現わした。夜の道の左右の街灯や信号の灯りを背にそこに立っている。灯りが後光になりその顔は影になっているが何処となく笑っているのがわかった。

「やっぱりね。二人だと簡単だったみたいだね」

「貴様か」

髑髏天使はその子供の声を聞いてにこりともせず言葉を返した。

## 第十五話 子供その十七

「何の用だ」

「別に」

子供は自分に言葉を返してきた彼に対して素っ気無く言ってきた。

「ただの挨拶だよ」

「挨拶の為にここに来たのか」

「もつとも今のが僕の挨拶だけれどね」

無邪気な、しかしそれでいて何処か残虐さを感じさせる笑みを含んだ言葉だった。

「チヨンチヨン達には頑張ってもらったよ」

「生憎だがこの程度ならばだ」

死神も彼に対して言ってきた。二人は今顔も身体も彼に向けたうえで話している。

「私一人でも充分だった」

「だろうね。伊達に死神じゃないね」

そして子供もそれがわかつているようであった。

「それはわかるよ」

「そんなことはどうでもいい」

髑髏天使は二人の話を遮るようにしてまた子供に対して言葉を投げてきた。

「問題は何故貴様がここに来たからだ」

「それはさっき言ったじゃない」

「挨拶か」

「そうだよ」

何でもないといったような言葉だった。

「これからね。君達と会うことになるからね」

「そして俺を倒すつもりか」

「今は違うけれど。いずれ闘ってみたくはあるね」

そのことは隠すことはなかった。

「僕だって闘うのは好きだしね」

「しかし俺はまだそこには至っていないということか」

「その通り。まあ今日は本当に挨拶だけだから」

このことは念を押す子供だった。

「じゃあね。またね」

「帰るのか」

「うん」

踵を返したところで死神の言葉に対して述べるのだった。

「これでね。またね」

「そうか。これでか」

「ああ、そうそう」

去ろうとしたところで不意に立ち止まった。そうしてそのうえで言うのだった。

「すぐにもう一人来るよ」

「魔神がか」

「うん。この人にも宜しく言っておくから」

楽しそうな声で髑髏天使に伝えていた。

「またね。楽しみにしておいて」

ここまで言うと言を消した子供だった。後に残ったのは髑髏天使と死神だけだった。しかし二人もすぐに普段の姿に戻るのだった。

牧村に戻った彼は。今度は死神に対して問うた。

「これで五人目か」

「そうだ。早いな」

死神は五人目と聞いてこう考えていたのだった。

「思ったよりな」

「早いのか」

「集まるのが早い」

彼が言う早いとはこういうことであった。

「封印が解かれたとはいえ。思っていた以上に早いな」

「それは何故だ？」

「そこまでは私にもわからない」  
死神はまずはこう返した。

「しかしだ」

「しかし？」

「どうも貴様に関係があるようだな」

ここで牧村の顔を見るのだった。

「そんな気がする」

「俺自身にか」

「やはり貴様の強さの上がり方は尋常なものではない」

彼はここでもこのことを指摘するのだった。

「その強さが魔神達をも呼び寄せているのかもな」

「俺がか」

「確かなことはわからん。しかし私はそう思ったりもするのだ」

「あくまで確定したものはないのだな」

「それはない。そんな気がするだけだ」

確かなものはないことは何度も言う。しかしそれと共にこの彼に告げるのだった。

「十二の魔神が揃い貴様が奴等と闘うのに相応しい強さとなった時はだ」

「その時か」

「そうだ。本当の闘いはじまるだろう、貴様にとってな」

牧村を見つつ述べた言葉だった。彼等は夜の街で闘いの後のお互いを見やっていた。そうしてやがて別れそれぞれの場所に戻るのだった。

2  
0  
0  
9  
·  
4  
·  
1  
6

## 第十六話 青年その一

髑髏天使

第十六話 青年

「まずはこんな感じだったよ」

あの子供だった。彼は今他の三柱の魔神達に対して話していた。

「髑髏天使も死神もね」

「そうですね。また腕をあげていますね」

「そうですね。強くなっているわ」

子供の言葉を聞いて老人と女がまず言った。

「先の闘いよりも」

「一層ね」

「やはり闘う度に強くなつていつているな」

そして男もまた言うのだった。

「今の髑髏天使は。それ度にな」

「そうなんだ。そういえば髑髏天使になったまだ四ヶ月も経ってないんだよね」

「はい、その通りです」

老人が子供の問いに答えた。

「まだその程度です」

「それでもう能天使なんて凄いね」

そのことに対して賞賛さえする子供であった。

「道理で強い筈だよ。じゃあこれからも闘いがいがあるね」

「じゃあ次も行くつもりかしら」

女は子供に顔を向けてそこを問うた。

「それならそれでいいけれど」

「いいの？そんなこと言われたら僕本当に行くよ？」

「はい、どうぞ」

「好きにするがいい」

そして老人と男もまた彼に対して述べるのだった。まるで完全に任せるかのように。

「貴方がそれを望まれば」

「俺は何もすることはない」

「何か随分寛容だね」

子供は彼等が自分の名乗りをそのままにしていることにあらためて思ったのだった。

「普段ならここで先を争うところなのに。昔はそうだったじゃない」  
「何、貴方と久し振りに御会いできたからですよ」

老人は穏やかな声で彼に対して告げた。

「だからなのです」

「それで御祝いについてこと？この場合は御祝いじゃないよね」

「まあプレゼントね」

女はこう表現したのだった。

「強いて言うのならね。お返しはいいわ」

「そこまで言うんだったら本当に乗るよ」

「好きにするといい。何度も言うがな」

男もその態度を変えない。腕を強く組みそこから動くことはなかった。

「御前のな」

「それじゃあね。またね」

「そしてです」

老人がここでまた言ってきた。態度は穏やかだがその奥にあるものは何か窺い知れない不気味なものを含んでいた。その顔で言うのだった。

「また私達のうちの一人がここに来るそうですが」

「彼ね」

「そうだな。奴だ」

女と男もまた言った。

「やっとして感じただけれど」

「また久し振りに会うな、奴とは」

「ああ、そうだね」

子供も彼等の話を聞いて述べるのだった。

「彼とも随分会ってないからね」

「もうそろそろ来るとは思っけれど」

「まだか」

「いえ、来られましたよ」

しかしここで老人が言うのだった。

「ほら、あちらに」

「あら、来たのね」

「我等がここにいるのはもうわかっていたのか」

「ああ」

四人の前に若い男の声がしてきた。

「何となくだけれどな。わかったさ」

「そう。それは何よりだよ」

子供は彼の言葉を聞いて笑顔になった。

「やっぱりね。君もいないと寂しいからね」

「それは俺もだ」

彼は子供の明るい言葉を受けて彼の声も明るいものにさせた。

「俺も御前とずっと会いたかったさ」

「だよ。本当に待ってたんだから」

「済まない」

子供の声に謝罪の言葉で返してきた。



第十六話 青年その二

「それはな」

「わかつてくれたらいいよ。それでね」

「ああ。何だ」

「やっぱり早速仕掛けるの？」

「こう声に対して尋ねるのだった。」

「昔みたい」

「そのつもりだが」

声の方もそれを認めてきた。何とでもないようにだ。

「駄目か」

「別にいいよ。じゃあ今回はそつちでやるんだぜ」

「やらせてもらいたい。ではすぐに行つて来る」

「待つて」

しかし声に対して女が声をかけてきた。

「行くのはいいけれどね」

「何だ？」

「髑髏天使が何処にいるかはわかるわよね」

「探すまでもない」

静かな、冷徹なものさえ感じさせる言葉での返事だった。

「あの気配は何処からでも感じ取ることができる」

「そうね。だったら問題はないわね」

「そうだ。それでは行つて来る」

「せめて一息されてはどうかと思うのですが」

老人はすぐに行こうとする彼に対して寂しそうな声で述べた。

「それはありませんか」

「悪いがな。今はそんな気分じゃない」

「そうですね。では無理強いしても悪いですし」

「行つて来る」

声は今度は一言で返したのだった。

「それではな」

「はい、それでは」

「楽しんでくるのだな」

男は声に対してこう告げた。

「今度の髑髏天使の強さをな」

「強くない輩と闘っても何の意味もない」

声はこのことは強く己の中でも確かめている感じであった。それが声にも滲み出ていた。

「つまらない奴なら帰る」

「帰るの？」

子供はその言葉を聞いて声をあげた。

「倒さずに。帰るの？」

「弱い奴は倒す価値もない」

子供の問いにこう言い返すのだった。何でもないと聞いたように。だからだ。では行って来る」

「うん、またね」

こうして声は何処かへと消えていった。四人はそれを静かに見送るだけだった。女は彼の気配が消えてからまた口を開いたのだった。「変わっていないようで何よりだわ」

「そうだね」

子供は微笑んで女の今の言葉に頷いた。

「あのぶっきらぼうな感じがいいんだよね」

「そうですね。彼も戻ってきてさらに賑やかになります」  
老人もまたその顔を綻ばせていた。

「大いに。では今は彼に任せて」

「我等はどうするのだ？」

「待っている間飲むとしましょう」

「こう男に対して応えるのだった。」

「その間。如何ですか？」

「いいわね。この国のお酒もいいものだしね」

「そうだよな。お酒は何でも揃ってるし」

子供も笑顔で述べる。

「じゃあ早速何処かで飲む？」

「場所はもう見つけてあります」

老人は自分の周りにいる三人の同胞達に告げた。

「そこに行きましょう」

「そこは何処だ？」

男はその鋭い目で老人に場所を問うた。

「また居酒屋か。何処かの」

「今回はお店ではありません」

しかし老人はそれは否定するのだった。

第十六話 青年その三

「酒屋です。そこで最高の美酒を見つけてまして」

「それを買って飲むのね」

「場所は池のほとりで」

場所についても述べるのだった。

「そこで宴を開こうと思っています」

「いいんじゃないかしら」

女はすぐに老人に言葉を返してこう述べた。

「それで。池のほとりで一杯ね」

「一杯どころじゃないけれどね」

子供の声は今から楽しそうであった。

「もうね。何杯でもいけるから」

「そう思つて樽は二つを考えています」

そしてそれはもうわかつていたと言わんばかりの老人の言葉であった。

「それでは。今から行きましょう」

「肴はどうする？」

男はそれについても忘れていなかった。やはり酒には肴が必要だ。

「何かあるのか？」

「はい。そのお店に既にそうしたものも売っていますので」

「じゃあそれを買えばいいわね」

「その通りです。ここで店にいる人間を食べるといふものは」

「そんなものはいらん」

男は人間に関しては一言で言い捨てた。

「人間はすこぶるまずい。あれは食い物ではない」

「そうそう。人を食べるのなんてゲテモノだよ」

子供も顔を顰めさせてそれは拒むのだった。

「それはね」

「だからです。それはありません」

老人もまたそれは否定するのだった。

「普通の食べ物ですよ。御安心下さい」

「そうか。それなら後でな」

「はい、後で」

「一緒にね」

こんな話をしてその声の主と別れる。また一人魔神が日本に来たのだった。

チヨンチヨン達を全て倒し子供とまた会った牧村は次の日未久の店にいた。そうしてカウンターに座りそこでロシアンティーを飲んでた。これはいつも通りであった。

表情も変わらない。相変わらず何が面白くないのかといった感じの懨然とした顔である。その彼に対してマスターが声をかけてきた。

「何か今日は一段と無愛想だね」

「そうか」

「わかるよ。オーラでね」

笑ってこう彼に告げた。

「何となくだけれどね」

「少し考えることがあった」

彼はロシアンティーのカップの持つ部分に指をかけて呟くようにして述べた。

「昨日な」

「何だい？学校の講義でかい？」

「それとはまた違う」

声に表情を出さずに述べた言葉だった。

「それとはまたな」

「違うっていうんだね」

「そうだ。また違う」

またこう言うのだった。

「それとはな。ただ」

「ただ？」

「こういう時もあるか」

カップから手を離して述べた。

「後で少し静かになるのもな」

「何かよくわからないけれどそういう時もあるね」

マスターもそれは認めた。

「うちの未久だっていつも明るいわけじゃないしね」

「そうは思えないが」

今のマスターの言葉に目を向けて懐疑的な声で返した。

「あの娘は。いつも」

「ははは、それは彼氏だから言えるんだよ」

半ば公認である。そうした意味では有り難い立場の牧村であった。

「彼氏だからね。そう言えのさ」

「そういうものか」

「そうさ。人間惚れている相手は何時でも眩しく見えるんだよ」

目を綻ばせてにこやかな顔になっての言葉だった。ダンディな顔が意外なふうになっている。

## 第十六話 青年その四

「またそういう年頃だしね」

「俺は別に」

「いやいや、わかってるから」

牧村の否定しようという言葉は出される前に打ち消してみせた。

「もうね。態度でわかるんだよ」

「態度でか」

「そうだよ。自分はあれだよ」

関西ならではの二人称もまた出て来た。

「言葉にも顔にも出さないけれど」

「ああ」

「それだけで完全に消せるわけじゃないんだよ、人間ってものはね」

「さっき言ったオーラか」

「そうさ。それでもわかるんだよ」

またオーラを話に出してきたのだった。

「何となくだけけどね。高校の時からいつもこの店に来ていてくれたよね」

「そういえばそうか」

とぼけるふりをしようとしたがそれができなかった言葉だった。

こうした場合歳というものがものを言い若い側はどうしても不利になっってしまった。

「その時いつも未久見てたじゃない」

「自覚はないが」

「自覚はなくてももう視線がいつもそっちにあったから」

だからわかるというのだった。

「もうカウンターにいたらカウンター見ている」

「そうだったのか」

「それでウェイトレスの時はお店の席のところ見て」

そういう具合だったのである。

「もういつも見ていたじゃない。視線だけでね」

「自覚はなかったな」

「自覚はなくても出るんだよ」

また顔を崩して言うマスターだった。

「そういうのはね。もうね」

「出るか」

「出るさ。誰だってね」

今度は誰でもというのだ。

「わしだってそうだろうし未久もね」

「あいつはそういうふうだろうな」

牧村も未久はどうかと考えてみて確かにそうだと心の中で頷いた。

「表情もはつきりしているからな」

「それで気付いたら二人共付き合っていたからねえ」

マスターの顔が困ったような苦笑いになった。

「これは予想していなかったけれどね」

「それはか」

「全く。責任取ってもらおうよ」

何気に怖い言葉を出す。

「うちの娘は高いよ」

「値段の問題じゃないな」

牧村も何気のにのろけを入れてきた。

「あの娘はな」

「何だ、わかってるじゃないか」

マスターも彼の今の言葉で顔を崩した。

「親が言うのも何だけれどあんないい娘今いないよ」

「この世に二人としてな」

「実は芸能プロダクションからスカウトが来ないか心配なんだよ」

満面の笑顔でも困っているように言うのだった。

「もうね。あそこまで可愛いとね」



「それは俺も同じだ」

牧村もこんなことを言い出してきた。

「あれだけの娘は滅多にいない」

「わかっているじゃないか。いや、わしもね」

親馬鹿は続けた。

「本当にこのままいったらどれだけ美人になるのかって不安でね」

「その通りだ。俺は幸せ者だな」

「君みたいな幸せ者はいないよ」

牧村を指し示してこうまで言うのだった。

「もうね。三国一の幸せ者だよ」

「いや、三国一じゃないな」

しかし牧村はここではマスターの言葉を否定するのだった。

## 第十六話 青年その五

「俺は世界一の幸せ者だ」

「言うねえ、その通りだよ」

「あれだけの可愛い娘が側にいてくれてな」

「ただ可愛いだけじゃないしねえ」

マスターの親故ののろけはさらに続くのだった。

「性格もねえ。最高にいいしね」

「性格美人でもあるな」

「性格は顔にも出るんだよ」

よく言われていてしかもその通りの言葉であった。

「顔にもね。出て来るんだよ」

「そうだな。生き方にしる性格にしる顔にも出る」

牧村はまた言った。

「あの娘もそうだな」

「いやいや、そこまでわかっていてくれたら安心だよ」

最早破顔になっているマスターであった。その顔でさらに言うのだった。

「もうね。わしも店の後継者が見つかって何よりだよ」

「後継者？」

「ああ、まだ気にしなくていいよ」

マスターは今の牧村の言葉にはさりげなくはぐらかした。

「それはね。少なくとも君の卒業後の就職先は決定だ」

「俺の就職先か」

「そうだよ。それも生涯就職だ」

「こんなことまで言うのだった。」

「もうね。任せていいからね」

「任せる。生涯就職を」

「無愛想だけれどもまあそれはいいか」

牧村をよそに話を進めているマスターだった。

「うちの未久のあの天使の笑顔があればね」

「天使の笑顔なのは同意だが」

それはなのだった。

「しかしだ。何か話はわからないが」

「ああ、こつちの話だから」

ここではこんなことを言うマスターだった。

「気にしないでいいよ」

「気にしないでいい？」

「うん、今はね」

また言うマスターだった。やはり牧村を置き去りにしつつ牧村のことを話すのだった。牧村にはそれが何なのかわからないがそれでも話をするのだった。一人で。

「それでいいから」

「就職は考えたことがなかったな」

「コーヒー淹れるの得意かな」

今度はこんなことを尋ねてきたマスターだった。

「それはどうか」

「紅茶もコーヒーもいつも家で淹れている」

素直に答えた牧村だった。

「それはな」

「そうかい、じゃあ通だね」

「少なくとも五月蠅いつもりだ」

こうそのロシアンティーを飲みながら述べた。

「紅茶にもコーヒーにもな」

「それは何よりだよ。じゃあ合格だな」

「合格？」

「ああ、これもこつちの話だから」

また話をはぐらかすマスターだった。やはり何かを隠している感じだ。牧村もそれはわかるが何を隠しているのかまではわからな

った。

「それよりもだよ」

「ああ。今度は何だ」

「お菓子は何かいいかな」

今尋ねてきたのはお菓子に関してだった」

「所謂スイーツだけれどそれは何かいいかな」

「そうだな。クレープがいいか」

「よし、じゃあクレープだね」

「バナナとアイスクリームのな」

それだというのである。

「それがいいが」

「わかったよ。母さん」

カウンターの後ろに顔をやって声をかけた。

第十六話 青年その六

「クレープだよ」

「クレープね」

「ああ。バナナとアイスクリームのクレープ」  
注文についても伝えるのだった。

「それを一つね」

「わかったわ。じゃあ今から作るわね」

「ああ、頼むよ」

こう自分の妻に告げてから顔を牧村に戻す。そうしてまた彼に対して笑顔で言うのだった。

「それでうちのお菓子はね」

「ああ。何かあるのか？」

「最近未久にも仕込ませているんだ」  
こう彼に対して語ってきた。

「最近ね」

「そうなのか。あの娘が」

「いい感じだよ、素質があるんだろっね」

またしても親馬鹿であった。これはどうしても離れなかった。

「本当にね。それでだよ」

「ああ」

「はい、クレープ」

ここでその注文したクレープが彼の前に出された。黄色い包みの上にチョコレートがかけられている。そして中の膨らみも確認されるのだった。

「どうぞ」

「早いな」

「安くて早くて美味しい」

マスターはまた笑顔で彼に話した。

「それがうちの店のモットーだからね」

「そういえばそうか」

「そうだよ。だからほら」

食べるように勧めるマスターだった。

「今日のも最高に美味しいよ」

「そうか。じゃあ楽しませてもらう」

「どうぞ」

こんな話をしながら食べる彼だった。それが終わってから店を後にする。店の前に停めてあったサイドカーに乗ろうとする。しかしここでまたあの男が目の前にいるのだった。

「貴様か」

「暫くぶりだな」

こつ彼に声をかけてきたのだった。

「元気でいると思っていたがな」

「少なくとも美味しい茶と菓子は楽しんだ」

今食べ終えたそのロシアンティーとクレープのことに他ならなかった。

「貴様もどうだ？」

「悪くはないな」

彼もそれはいいとするのだった。

「しかしだ。今はいい」

「いいのか」

「甘いものを食べるのは今はな。いい」

また言う彼だった。

「それよりもだ。私が何故ここに来たのかわかるか」

「おおよそ察しはつく」

サイドカーを挟んで向こう側にいる彼に対して言葉を返した。表情を変えずに。

「闘いか」

「少なくともその話題だ」

こう答える彼だった。やはり表情も変えずにだ。

「また魔神が日本に来た」

「またか」

「そう、まただ」

彼は言うのだった。

「魔神がな。また来た」

「そうか。またか」

「やはり貴様が呼び寄せているようだな」

また言う彼だった。

「貴様のその髑髏天使としての力の増大がな」

「俺が魔神達を呼び寄せているか」

「私はそう考えるようになってきている」

フードの向こうから彼を見つつ告げた言葉だった。

「どうやら貴様のその強くなつていく力がだ。そうさせているのだ」

「俺の力が強いのならだ」

そのフードの彼にまた言い返すのだった。

## 第十六話 青年その七

「貴様はどうなる？」

「私か」

「そうだ。死神である貴様がだ」

「こう彼に言うのだった。彼の目を見据えながら。」

「貴様の方が強い筈だがな」

「確かに私の方が力は強い」

その彼、死神もそのことは認めた。力関係で言えばやはり神である彼と牧村とはかなりの差があった。これは両者共わかっていることだった。

「しかしだ」

「しかし。何だ？」

「それは今においてだ」

死神は今度はこう言うのだった。

「私の力は神のものだ。だが」

「だが？」

「貴様はその域に近付こうとしている」

死神はまた彼に告げた。

「貴様はな。神にな」

「近付こうとしているのか。俺が」

「その通りだ。少なくとも私はそう思う時がある」

「思うだけか」

「そうだ。思うだけだ」

ここでも言葉は鋭い。しかしそれは決して間違ったものではない。そうした響きを持つ言葉であった。今の死神の言葉は。

「私だけかな。そして魔物は髑髏天使の前に現われる」

「五十年に一度現われ魔物を倒す俺の前に」

「その力を手に入れる為にな」



これが両者の関係なのだった。髑髏天使は魔物を倒し魔物はその髑髏天使の力を得ようとしている。両者は互いに狙い合う関係なのだった。

「その中で貴様は急激に強くなってきた」

「らしいな」

「強さには際限がない」

死神が次に出した言葉はこれであった。

「次々に上にあがっていくものだ」

「上にか」

「そうだ。強くなっていく」

また言う死神だった。

「貴様はな」

「そうして天使の階級をあげていくか」

「だが。それで終わるか」

「天使は九つの階級で終わりではないのか？」

「さてな」

今の牧村の問いには彼も答えることができなかった。

「それはな。どうか」

「知っているのではないのか？」

「私とて髑髏天使の全てを知っているわけではない」

死神はこう断ってきたのだ。

「全てをな。知っているわけではないのだ」

「九つの階級だけでか」

「それがわからないのだ」

また言う死神だった。

「神である私にもだ。それはわからない」

「あの博士も髑髏天使については文献が頼りだがな」

「髑髏天使はあまりにも謎が多い」

このこともまた話されるのだった。

「髑髏天使はだ。私ですら知らない程にな」

「そこまで謎の存在だったのか」

牧村は己自身のことをまた知ることになった。謎に満ちているということをだ。

「俺は」

「そういうことだ。その強さが魔物を呼ぶ」

彼はまた牧村に告げた。

「それはよく覚えておけ。いいな」

「わかった。それでだ」

死神の言葉を聞いてからまた話す牧村だった。

「貴様は今これからどうする？」

「私か」

「そうだ。貴様はだ」

「それはもう決まっている」

答えるまでもないといった調子の死神だった。

「既にな」

「そうか。魔物の魂を刈るか」

「その通りだ。私の獲物は譲らない」

鋭い目になって彼に告げてきた。

## 第十六話 青年その八

「決してな」

「それはわかった」

わかりはする、という意味である。

「しかしだ。譲りはしない」

「ならその場合はか」

「そうだ。俺はその場合でも迷いはしない」

言いながら今にも変身しようと身構える。それこそが彼の意思表示に他ならなかった。

「ここでもな」

「安心しろ。今はそのつもりはない」

しかし今度は自分から鬨いを避ける死神だった。

「貴様と闘うつもりはな。ただ話をしたかっただけだ」

「それだけか？」

「それだけだ」

感情は見せない素っ気無い口調だった。ここでも。

「さて。それではだ」

「どうするつもりだ？」

「話は終わった」

こう告げたらうえで牧村に背を向けるのだった。

「これでな。それではだ」

「帰るのか」

「また会う」

背中越しに彼に告げるのだった。

「それではな」

「貴様も変わった奴だな」

牧村は去ろうとするその死神に対して告げるのだった。

「俺の敵でもなければ味方でもない」

「貴様が敵だと思えば敵だ」

「しかし味方ではないのだな」

「それは間違いない」

「こう言うのである。」

「決してな」

「決してか」

「貴様が何かすれば容赦しないが少なくとも貴様を助けることはない」

「この考えは一環しているのだった。彼の中ではだ。」

「それも覚えておくのだな」

「やはり貴様は変わっている」

話を聞いたうえでまた言う牧村だった。

「面白い奴ではあるな」

「貴様もな」

やはり牧村に背を向けたままだがそれでも彼に告げる死神だった。

「ではな。これでな」

「また会おう」

最後にこう言葉を交えさせてそのうえで別れる両者だった。牧村はそのままサイドカーに乗りそのうえで家に帰ろうとする。家に着きサイドカーから降りヘルメットを脱いだ。するとその彼の目の前を見たこともない浅黒い彫の深い精悍な顔をした青年がいた。白い背広を着ており黒い瞳の視線は鋭い。頭は短く刈っている。

その彼が目の前にいるだった。牧村は彼を見て言うのだった。

「誰だと尋ねるのは愚問か」

「流石だな。わかっているのか」

「わからない筈がない」

「こう青年に返す牧村だった。」

「わざわざ俺の前に出て来ると言うことはだ」

「そつだ。魔神だ」

彼の方から名乗ってきたのだった。

「十二魔神の一人バジリスク」

「バジリスクか」

その名を聞いて彼が何なのかすぐにわかった牧村だった。

「確か八本の足に鶏冠の冠を持つトカゲだったな」

「俺の真の姿も知っているのか」

「そして全身が毒に満ち見るもの全てを石にするという」

「少なくとも人の姿ではないがな」

それはないというのだった。

「しかしだ。魔神の一人だ」

このことは強調するのだった。

「覚えておくことだ」

「魔神の一人なら忘れることはない」

牧村もこう青年に言い返すのだった。

「決してな。今確かに覚えた」

「覚えてもらって礼を言う。しかしだ」

「単刀直入だな」

牧村は青年が次に何を言うのか読んだ。そのうえで彼に対して言葉を返したのだった。

## 第十六話 青年その九

「いきなりそう来るか」

「そうだ。既に魔物は用意してある」

青年はその黒く鋭い目をそのままにして彼に告げてきた。

「来るか」

「断る権利は？」

「それは貴様にある」

思った以上に突き放した言葉であつた。

「貴様の好きにすればいい。来るのも来ないのもな」

「その言葉は余裕か」

牧村は己が青年の今の言葉に感じたもののうちの一つだけをあえて彼に出してみせた。

「何時でもいいというふうに」

「俺は闘いは好きだ」

青年もこれは言う。

「しかしだ。それは相手があつてのものだ」

「相手がか」

「そうだ。そして相手にその気がないと面白くとも何ともない」

「こつも言うつのだつた。」

「全くな」

「では俺に闘う気があるかどうかか」

「あればそれでいい」

「今度の言葉はこれであつた。」

「しかしなければ俺は去る。それだけだ」

「去るのか」

「そうだ。どちらだ？」

「俺は髑髏天使だ」

「まずはこつ述べる牧村だつた。」

「魔物を倒す存在だ。何時でもな」

「では。戦うのだな」

「そうだ」

こう言うのだった。それ以外には何もなかった。

「闘う。何なら貴様ともな」

「俺ともか」

「どうする？俺は別に構わないが」

強気の言葉だった。その言葉と共に一步前が出る。少なくとも氣迫では負けていなかった。その氣迫で以ってそのまま彼に向おうとさえしていた。

「どうするのだ？」

「焦るな。その氣ならだ」

「何だ？」

「ついて来い。既に相手は用意している」

ズボンのポケットに手を入れてそのうえで踵を返してから述べた言葉だった。

「既にな」

「場所は何処だ？」

「ここでは人目がある。場所を変える」

言いながら歩きだしたのだった。

「それでいいな」

「俺は何処でもいいのだがな」

「それでは貴様自身が困るだろう」

背は向けたままだがそれでも言葉は出すのだった。

「違うか」

「そうだな。俺も髑髏天使としての姿を見せるつもりはない」

彼が髑髏天使であることを知っているのは人間では博士だけだ。

言葉を変えれば彼以外に知られてはならない。そういうことだった。

「全くな。不都合なことでもある」

「我等魔神にとって貴様の人の姿なぞどうでもいい」

青年はまた言ってきた。

「どうでもな。とにかく闘うのなら来い」  
「わかった」

こうして彼は青年に案内されてそのうえである場所に向かった。そこは公園だった。夕暮れの誰もいない公園であらためて二人だけになるのだった。

周りの滑り台や砂場やジャングルジムにも誰もいない。その完全に静かになった場所で彼は青年と向かい合う。そしてそのうえで彼に尋ねるのだった。

「ここで闘うのか」

「そうだ。ここでだ」

青年は牧村に対して答えた。二人は鋭い目で睨み合い続ける。

「既に相手も用意している」

「誰だ、それは」

「出て来い」

右手を顔の横にまであげてそのうえで親指と人差し指で音を鳴らしてみせた。すると砂場の中から半分腐ったような男が姿を現わしたのだった。



## 第十六話 青年その十

「死体か」

「グールだ」

青年は牧村に顔を向けたまま述べた。

「それがあの魔物の名だ。知っているか」

「確か生きる死体だったな」

牧村は魔物に顔を向けつつ青年に言葉を返した。

「何かの本で読んだ」

「そうだ。あれは生きる死体だ」

青年もこう彼に答える。

「それが貴様の今回の相手だ」

「面白い相手だ」

自分の方に向かって歩いてくるそのグールを見ながらの言葉だった。

「生きる死体というのもな」

「随分と余裕があるな」

「余裕があるように見えるか」

「少なくとも焦ってはいないな」

青年は牧村のその姿を見て冷静に告げるのだった。

「そして怯えてもいないな」

「髑髏天使だ」

牧村はここでも髑髏天使だと言うのだ。

「焦りも怯えもない」

「いい言葉だ。その言葉を聞いて安心した」

青年は今の彼の言葉に口元に笑みを浮かべさせた。明らかに楽しむ笑みであった。

「では。その闘い見せてもらおう」

言いながら数歩退いた。足を動かさずそのままの姿勢で影の如く

後ろに退いたのだ。

「貴様のそれをな」

「見せるつもりはないが見ておけ」

牧村は言いながら両手をゆっくりと動かす。そうしてその両手を拳にしてそのうえで胸の前で打ち合わせる。すると拳から白い光が放たれその光の中で髑髏天使となるのだった。

右手を少し前に出し一旦開いたそれを握り締める。そうしてそのうえで言うのだった。

「行くぞ」

「いい気だ」

青年は離れた場所で今姿を現わした髑髏天使を見つつ述べた。

「それでは。その闘い見せてもらおう」

「バジリスク様の御言葉だ」

グールがここで言葉を出してきた。左肩をだらりと落とし頭もそれに合わせている。全体的にけだるい、そんな格好になっていた。

「闘わせてもらうぞ」

「倒す」

髑髏天使の彼への言葉はまずはこれだった。

「バジリスク様の御前でな」

「その言葉、そのまま返してやろう」

言いながらその剣を構える髑髏天使だった。今は天使のままであつた。

「貴様をここで倒す。いいな」

「尊通り自信家のようだな」

グールはその力のこもっていない、しかし屍とは思えない素早さで動いてきた。

「どつやらな」

「自信はある」

そして髑髏天使もそれを隠さなかった。

「少なくとも貴様を倒すだけの自信はな」

「いい言葉だ。やはり髑髏天使だけはある」

言いながら変わった。翼を生やしそのうえで両手に剣を出し色を変えた。それは能天使だった。

「では。行くぞ」

「参ろう。ではバジリスク様」

「うむ」

バジリスクもまたグールの言葉を聞いて頷くのだった。

「では見せてもらおう、貴様の闘いをな」

「有り難うございます。ではそちらで」

こうして青年が見るその前で闘いは始める両者だった。髑髏天使はまずその右手の売木を突き出した。それでグールを突き倒すつもりだった。

「喰らえっ」

「むっ」

だが魔物はその剣を身体を右に捻りかわすのだった。筋肉の構造を無視したかのような想像を絶する不気味な動きだった。何と上半身を百八十度捻ってかわしたのだ。

「かわした！？しかも」

「身体の動きか。俺の」

「貴様のその動きは」

「俺は既に死んでいる」

身体はということだった。

## 第十六話 青年その十一

「だからだ。こうした動きもできるのだ」

「痛みを感じないというのか」

「その通りだ。俺は痛みを感じない」

自分からも言うのだった。

「全くな。感じることはない」

「だからこそそうした動きができるのか」

「そしてそれだけではない」

右腕を上から下に振り下ろしてきた。しかもここで肩と肘の関節を伸ばしそのうえで彼を絡め取ってきたのだった。まるで触手の様だ。

「くっ、今度は腕がか」

「腕もそうだ」

また言ってくるのだった。

「このようにして。痛みを感じないからこそだ」

「間接を外すこともできるのか」

「その通りだ。屍のことをわかっていなかったな」

「少なくとも闘うことははじめてだ」

彼もそれは認めた。

「しかしだ。はじめてだからといってだ」

「既に捉えられていてどうするつもりだ？」

「捉えられていてはそこから逃れるだけだ」

髑髏天使の言葉は何でもないとといった様子であった。

「それだけだ。こうしてな」

「むっ!？」

彼を捉えるその右腕を斬るのだった。自由になっていたその右腕の剣でだ。

グールの右腕を断ち切る。そのうえで絡め取っていたその剣をそ

の右手で掴んで引き剥がす。しかし魔物の右腕はそれで死んではいなかった。

力づくで引き剥がしたので腕はばらばらに引き千切られていた。しかしその腕がそれぞれで地の上で蠢きだしたのだった。

「引き剥がした腕が」

「俺を甘く見ては困る」

不敵な声でまた言うグールだった。

「俺は傷が回復するのだ」

「だからこそ腕もか」

「そういうことだ。このようにな」

やがて魔物の右腕はそのまま合わさり元の姿に戻った。そうして自然に動きそのうえで彼のところに来て斬られた部分で合わさり元に戻ったのだった。

「どつだ」

「見事ではあるな」

髑髏天使も今の姿には素直に賞賛の言葉を述べた。

「しかしだ」

「何だ」

「回復するというのならだ」

彼の自信はここでも変わらなかった。

「それ以上のダメージを与えるだけだ」

「回復以上のか」

「単純な足し算だ」

言いながらその両手の剣を構えてきた。右手の剣を前に出して。

「そうだな。それだけだ」

「確かにその通りだ」

グール自身もそれは認めた。回復以上のダメージを受ければ倒れるということに。

「しかしだ。貴様にそれができるか」

「俺にできないというのか」

「そうだ。俺は今までこれで倒れたことはない」  
やはり彼にも自信があるのであった。彼なりに強固な。  
「その俺をだ。倒せるのか」  
「確かに今までの奴は倒せなかったのだろう」  
髑髏天使は構えを取ったまま彼に告げ続ける。  
「しかしだ。俺は違う。俺は髑髏天使だ」  
「髑髏天使だから違うというのだな？」  
「その通りだ。髑髏天使は魔物を倒す存在」  
このことをこの闘いでも言うのだった。  
「だからだ。貴様を倒す」  
「ならばやってみるがいい」  
グールの自信は彼の今の言葉を聞いても変わらなかった。  
「俺を倒せるのならな。ただだ」  
「ただ。何だ？」  
「もう一つ言っておこう」  
ここでも余裕に満ちた言葉だった。

## 第十六話 青年その十二

「俺が伸ばせるのは右腕ではない」

「むっ!？」

「こちらもだ」

言いながら今度は左腕を伸ばしてきたのだった。そのうえで先程のように絡め取るのではなく殴ってきた。リーチを伸ばして髑髏天使の顔を狙ってきたのだった。

「こういうこともできるのだ」

「くっ」

その拳に対して右手の剣を振るってそのうえで拳を手首のところまで切ってみせた。拳は空しく宙を飛び腕はあえなく後ろに身を引いた髑髏天使にかわされてしまった。

しかしそれでも。魔物の余裕は変わらなかった。

「言った筈が。斬られてだ」

「平気なのだな」

「そうだ。見るのだ」

かわされた左腕は元の長さに戻っていく。髑髏天使は這い回ろうとしているその拳に対して右手に持っている剣を振るいそこから鎌イ足を放って両断した。しかしその左手は真つ二つになってもそれぞれが動きそのうえでまた本体に這っていくのだった。

「このようにまた斬られてもだ」

「ではこれではどうだ？」

髑髏天使は今度は炎を左手に持つサーベルから放った。炎を刃にして放ちそれでその分かれた左手に当て燃やすのだった。

「屍は炎によって焼かれるものだ」

「日本ではそうなのか」

「貴様の国では違うかも知れない」

これは国によって違う。基本的にキリスト教やユダヤ教の世界に

おいては遺体は土葬である。それに対して仏教の日本では火葬が主流になっっているのだ。

「だが。これならばもう回復はできない。違うか」

「そうだな。少なくともつけることはできない」

グールもそれは認めるのだった。

「しかしだ」

「まだ何かあるのか」

「そうだ。見るのだ」

髑髏天使に告げながらその左手の斬られた部分を前に出して彼に見せてきた。すると。

「こうなるのだ」

「むっ!?!」

「見るのだ」

魔物はまたその左手を見せながら言うのだった。

「俺の力をな」

「むっっ!?!」

ここで彼は見た。何とその斬られた部分から何かが出て来るのをだ。そうしてその出て来たものは次第に形になってきてそうしてそれはあの左手になるのだった。

「出て来るといふのか。手が」

「くっつけるだけではない」

グールは次第にその形を作っていく左手を見てまた告げた。

「こうしてだ。再生することもできるのだ」

「そうしたことでもできるのだな」

「その通りだ。俺を甘くみるな」

手を完全に回復したうえでまた告げた。告げるその間にもう完全に回復してしまっていた。

「こういふこともできるのだ。」

「どうやら俺の予想以上ということだな」

「貴様の予想は確かにかなり読んでいたのだろう」



髑髏天使のその読みに対しても返してきた。

「しかしだ。俺はそれ以上だった」

「そういうことか」

「そうだ。そういうことだ」

ここでも静かに彼に告げるのだった。

「わかったな。俺を倒すことはできない」

「どうしてもだというのだな」

「例え全身を炎で焼かれようとも俺は倒れることはない」

そしてこうも言ってきたのだった。

「そのそばからこの身体を回復させてみせよう」

「では俺の剣でも炎でも風でもか」

「俺を完全に倒すことはできない」

自信に満ちた言葉は相変わらずであった。

「何を以ってしてもな」

「くっ、しぶとい奴だ」

「言っておくが俺はもう死んでいる」

歯噛みした彼にさらに言ってきた。

「心臓を狙おうとしても無駄だ」

「ふん、死者の心臓は動いてはいない」

心臓は動いている証だからだ。そういうことだった。

「そうだな」

「その通りだ。わかったならば観念しろ」

ゆっくりと両手をまた伸ばしてきたのだった。

## 第十六話 青年その十三

「せめて苦しまないようにしてやる。一撃でな」  
「まだだ」

しかし髑髏天使はその伸ばされてきた両腕を見てもまだ言つのだつた。

「まだだ。俺はだ」

「観念しないというのだな」

「生憎だが俺は諦めの悪い男だ」

そしてこう言つのだつた。

「そう簡単にはな。諦めはしない」

「ではどうするのだ？」

「とりあえずは払わせてもらおう」

言いながら両手の剣をそれぞれ一回ずつ横薙ぎに払った。そうしてそこから鎌イ足を放ちそれで魔物の両腕をまた断ち切つたのだつた。

「こうしてな」

「意味がないとわかっているのか？」

「さてな」

今の問いにはあえて答えないのだつた。

「意味があるのかないのかはもうすぐにわかる」

「諦めたわけではないな」

これは髑髏天使のどの髑髏の奥の目の光とそして言葉の色を見てわかることだつた。

「では破れかぶれになつたか」

「残念ながらそうでもない」

それも否定する髑髏天使だつた。

「生憎だがな」

「それも違つというのなら何だ？」

「貴様は確かに死んでいる」

それはもう言うまでもないことであった。

「しかしだ。死んでいても己の言葉で語り動いている」

「それがどうかしたのか？」

「そこだ」

それだと言うのである。

「そこだ。貴様の弱点はどこにあるのだ」

「何を言うかと思えば」

グールはそれを聞いてせせら笑うのだった。

「その程度か。どうやら貴様に対しては俺が買いかぶっていたようだ」

「買いかぶっていたというのか」

「そうだ。貴様は所詮その程度だ」

こう言うのである。

「所詮な。所詮俺の両腕を断ち切ってもすぐに元に戻る」  
実際にその両腕は這っていた。そうしてまたくっつくようにしていった。

「このようにしてな。幾ら斬っても無駄なこと」

「確かに貴様の身体を斬っても意味はない」

髑髏天使は再び両腕の剣を構えながら言うのだった。

「しかしだ。貴様のある部分だけは違う」

「ある部分だと？」

「それを今から見せよう」

言いながらその構えに力を込めていくのだった。風が彼の周りを覆っていく。

「行くぞ。この風の力」

「風でも火でも無駄だと言った筈だがな」

「無駄ではない。ではここで決める」

左手だった。そこに持っているサーベルを振るいそこから鎌イ足を放った。それは一直線にグールに向かう。だがそれは今まで通り

だった。

「馬鹿が。何度やろうともそれはだ」

グールは最早避けることすらしない。もっともそれは最初からであつたが。そしてその攻撃を受けた。ただしそれは今までとは別の部分であつた。

「何っ!？」

「やはりな」

グールの今の言葉を受けて会心の声をあげる髑髏天使だった。

「弱点のない者なぞ存在しない」

「俺の弱点……」

「貴様も然りだ」

髑髏天使はまた言うのだった。

「その頭だ。先程も言ったが貴様は己の言葉と動きをしていた」

彼はこのことも再度指摘してみせた。

「つまりだ。脳は生きている」

「それに気付いたというのか」

「その通りだ。貴様の脳は死んではない」

もう攻撃は放つてはいない。既に魔物の頭は縦には断ち切られそこから鮮血を噴き出していた。決着がついたのは明らかであつた。

「血も流れている。間違いない」

「それがわかつての今ということか」

「勝負あつたな」

髑髏天使の言葉は勝利を確信したものになつた。

## 第十六話 青年その十四

「これでな。俺の勝利だ」

「どうやら。先程の言葉は訂正されなくてはならないようだな」  
グールは断末魔の呻きの中で最後に言うのだった。

「貴様の強さは真実の強さだ」

「真実だというのか。俺の強さが」

「そうだ。貴様は間違いなく強い」

また告げた。

「買いかぶりなどではなかった。確かに強い」

「事実を事実と認めるのだな」

「そういうことだな。では俺はだ」

ここまで言ったのが最後だった。そうしてそのうえで今全身から青白い炎を出していった。そのままその中に消えていく。これがグールの最後であった。

魔物の形に燃え上がる炎はやがて消える。髑髏天使はそれを最後まで見届けると今度は青年に対して顔を向けてそのうえで言った。

「貴様の配下は今倒した」

「見事な闘いだっただ」

青年は彼の言葉を受けてまずはこう言った。

「見事だな。グール、見せてもらった」

「では次は貴様が」

「それはまだ先のことだ」

しかし彼はそれは受けようとはしなかった。

「まだな。貴様はそこまでの強さではない」

「先に言った通りか」

「そうだ。それはまだ先だ」

また言うのだった。

「まだな」

「では今は」

「去らせてもらおう」

「こう言うだけであつた。」

「またな。帰らせてもらおう」

「そうか。では今日はこれで終わりか」

「そういうことだ。では髑髏天使よ」

「別れの言葉を告げるのだつた。」

「また会おう」

最後にこう話して姿を消すのであつた。残つたのは髑髏天使だけであつたが彼もまた牧村の姿に戻つた。そして一人家に戻るのだつた。

家に戻ると。妹の若奈が彼を出迎え笑顔で声をかけてきた。

「おかえり、お兄ちゃん」

「ああ」

笑顔の妹にいつも通りの無愛想で返す。

「もう帰つてたのか」

「そうだよ。それでね」

「何だ？」

「今日塾なんだけれど」

「こう笑顔で話すのだつた。」

「だからね。いいかな」

「送つて欲しいんだな」

「うん」

「やはりこれであつた。」

「駄目かな。今日は」

「いや、いい」

「彼は妹のその願い出を断らなかつた。」

「じゃあ今から行くか」

「あつ、時間ちよつとあるから」

しかし若奈は兄にこう言うのだった。

「時間あるから。ちよつと待って」

「待って。そういえば」

ここで彼は妹の服を見る。見ればまだ中学校の制服のままであった。黒地に赤いタイのセーラー服であった。オーソドックスなセーラーであると言える。

「御前まだ服は」

「うん。着替えてくるから」

妹の方でも兄に言ってきた。

「ちよつと待ってね」

「わかった。じゃあ台所にいるからな」

「そこでアイスクリームでも食べていて」

「アイスがあるのか」

「お母さんが買って来てくれてるよ。ハーゲンダッツ」

それだというのである。

## 第十六話 青年その十五

「苺とバニラがあるけれど苺食べて」

「何で苺なんだ、俺は」

「それはもう苺しかないからよ」

にこにここと笑って兄に話すのだった。

「今さつき食べたから、私が」

「だから苺しかないのか」

「美味しかったよ」

ここでまたにこにここと話す若奈だった。

「バニラ。だからお兄ちゃんも食べなよ」

「バニラが好きなんだがな、俺は」

妹の調子のいい言葉に対してむっとしたような声で返した。

「苺は。少しな」

「嫌いだったっけ」

「いや、嫌いじゃない」

実はそうなのだった。

「別にな。苺の甘さも好きだしな」

「そうそう、それ私もわかってたから」

若奈はここでまた調子のいいことを言いだしてきた。

「だから残しておいたの。感謝してね」

「それは嘘だな」

妹の今の言葉にはこれまたむっとしたような声で応えるのだった。

「そうだな。実際は御前はバニラを食べたかったから食べた」

「そう思ってるの？」

「思ってるんじゃない。確信だ」

こうまで言う兄だった。

「そうだな。バニラを食べたかったんだな」

「そういう見方もあるわね」



いい加減ばれているがそれでもまだ白を切るのだった。視線は左斜め上にある。

「ひよつとしたらだけれど」

「まだ言うか。まあいい」

牧村もこれで話を打ち切ることにしたのだった。靴を脱いでそのうえで家にあがるのだった。そのうえで妹の横を通り過ぎながらまた言った。

「その苺だが」

「食べてね」

「言われるまでもない」

「これが返事だった。」

「今から食べる。その間に着替えておくんだな」

「わかっているわ。今日もおめかしして行くから」

「別にセーラー服でもいいんじゃないのか？」

ふとこんなふうにも思っただけの妹の方を振り向いて述べた。

「そのままでもな」

「それがそうはいかないのよ」

しかしそれでも若奈は言うのだった。

「女子中学生っていうのはね」

「塾は塾でか」

「そういうこと。今日もちゃんとした格好でないと」

胸を張って両手を腰にやって笑顔で宣言するのだった。

「周りに負けちゃうちから」

「ファッションでも勝負しているのか？」

怪訝な声で妹に問い返した。

「勉強だけでなく」

「勉強は普通にやっただけいいじゃない」

若奈の成績はそれ程悪くはない。むしろいい方である。このままいけば八条学園高等部にも平気でいけると言われている。八条学園はレベルが高いが入りにくくはないレベルでもある。つまり若奈の

成績もそうした状況であるのだ。そういうレベルなのである。

「そうでしょ？けれどファッションはそうはいかないのよ」

「そういうものなのか」

「それは女の子の世界の話」

「こんなことも言う若奈だった。」

「男の世界じゃないけれどね」

「何か別世界みたいだな」

「完全にそうよ」

若奈はまた言った。

「女の子の世界はね」

「厄介な世界みたいだな」

「別にそうでもないのよ」

厄介かというところではないというのだった。

「これがね。住んでみると楽しい世界だから」

「そういうものなのか」

「まあ男世界の住人にはわからない話よ」

くすりと楽しそうに笑って出した言葉であった。

「じゃあとにかく。アイスクリーム食べて」

「言われなくても食べる。それじゃあな」

「ええ。後でね」

兄と妹は玄関で別れた。そうして牧村はアイスクリームを食べ若奈は着替えに向かうのだった。それが終わってからサイドカーでその着替えた妹を塾に送るのだった。

## 第十六話 完

## 第十七話 棺桶その一

髑髏天使 第十七話

棺桶

青年も加わり五人となった。彼等はそのうえでまたそれぞれ集い話をしていた。

「これでまた賑やかになったね」

「そうですね」

今彼等は水族館の中にいた。薄暗く水槽が並ぶ中をそれぞれ歩きながら話をしている。その黒い壁の中に埋め込まれている水槽の中には様々な魚達がいる。

見ればどれも非常に変わった形の魚ばかりだ。タツノオトシゴもいればマツカサウオもいる。それにミノカサゴもいる。海の変わつた形の魚達であつた。

子供はその中のあるものを見ていた。それは蛸だが普通の蛸ではなかつた。赤くなくそのかわりに青と黄の柄であり変わつていてというよりは毒々しい、そんな色の蛸を見ているのだった。

「何、これ」

「ヒヨウモンダゴですよ」

老人が穏やかな笑みと共にその蛸がいる水槽を見上げて問う子供に対して述べた。

「非常に珍しい蛸なのですよ」

「そうなんだ」

「はい。毒もありますし」

「毒!？」

子供は毒と聞いて思わず声をあげてしまった。

「蛸に毒があるの?」

「おかしいと思われませんか?」

「だって蛸じゃない」

彼はそこを言うのだった。言わずにはいらなかった。

「蛸に毒なんてあるの？」

「普通の蛸にはありません」

老人はそのヒョウモンダコを見ながら話していく。蛸はその水槽の中で動くことはしない。壺の中でじっとしているだけである。それを見るとやはり蛸である。

「毒といったものは」

「この蛸だけなんだ」

「そういうことです」

また語る老人だった。

「ですから非常に変わった蛸なのです」

「そもそも毒のある蛸なんてはじめて見たよ」

「私も見るのははじめてです」

老人にしるそうなのだった。

「この水族館においてはじめてです」

「うん。けれどこの蛸って」

「何でしょうか」

「綺麗だね」

その毒々しい青と黄を見ながらの再度の言葉であった。

「何か宝石みたいだし」

「綺麗なものには毒があるのよ」

今度は女が言ってきた。彼女もそのヒョウモンダコを見ている。

「花にも何にもね」

「そうなんだ。蛙と同じだね」

「蛙!？」

蛙と聞いた男が声をあげた。彼は蛸は見えていないがそれでも仲間達の側にいるのだった。

「蛙だと？」

「そうだよ。中南米には蛙がいるけれど」

子供はここでこんなことも言ってきた。

「物凄く綺麗なんだよ」

「これだな」

ここで青年が丁度自分の前にある水槽を見て話してきた。彼はそこにいる蛙達を見ていた。見ればその蛙達はどれも赤や緑や黒といった柄でありやはり毒々しい色をしていた。

「この蛙達だな」

「そうだよ。その蛙達」

彼も話すのだった。

「それなんだよ。どう？」

「話を聞けば如何にも毒のある感じだな」

青年はそれを聞いてまた蛙を見つつ述べた。

「その蛸と同じでな」

「全くだ。そうとしか見えない」

男も言う。

「この柄はな」

「所謂警戒色ってやつ？」

子供は今度はその蛙達を見つつ話すのだった。

「こういう色ってやっぱり」

「毒があるぞってわざわざ教えてくれるのね」

女も言った。

「親切って言えば親切ね」

「ですから人間はこういった生き物には近寄りません」  
老人もまた言う。

「他の動物達もです」

「そうだね。それがいいよ」

子供は彼の言葉を聞いて頷いた。

## 第十七話 棺桶その二

「人間も他の動物も毒には弱いからね」

「はい、ですから」

「僕達は別だけれど」

言いながらヒョウモンダコの水槽に手をやるのだった。するとそのまま水槽のガラスを通り抜けて蛸を掴むのだった。

「噛まれたよ」

「どんな感じかしら」

「ちよつと痛いね」

女の問いにこう答えるだけだった。

「それだけでよ」

「我々にとつては何ともありません」

老人そんな子供の様子を見て微笑んで話すのだった。

「どのような毒でも」

「我々は人間とは違う」

ここで男もまた口を開くのだった。

「だからだ。何ともないのだ」

「逆に言えばだ」

青年は相変わらずその毒々しい蛙達を見ながら話す。

「人間にとつて何ともないものでも我々にとつては毒となる」

「そうなのよね」

女は今の青年の言葉に苦々しい顔になった。

「残念なことだね」

「まあそれは仕方のないことです」

老人はここでも笑顔であった。

「人には人の、魔物には魔物の苦しみというものがありますから」

「そういうもだね。そういえばさ」

「どうした？」

「うん、また来てくれたらしいよ」

子供は笑いながら青年に対して話すのだった。

「またね。僕達の仲間がね」

「初耳だけれど」

女はそれを聞いてその目を顰めさせずにはいらなかった。

「その話。今聞いたわよ」

「あれっ、言わなかったっけ」

「いいえ」

「俺もだ」

「俺も今聞いた」

そしてそれは女だけでなく男も青年も同じであった。やはり彼等もまた今の子供の話ははじめて聞くものであったのだ。聞いたのははじめてなのだった。

「それはな」

「聞いたばかりだ」

「私もです」

老人もそうなのだった。このことについては。

「六人目ということですか」

「うん、今日本に来てくれてるそうだよ」

子供は仲間達が皆知らないことをさらに話すのだった。自分だけが知っていてそれを説明しなかったということは今はどうでもいいと考えているのだった。

「この国にね」

「全く。そんな大事な話を何故してくれないのかしら」

女はそのことが不満で仕方なかった。

「けれどいいわ。それでも来てくれるのね」

「うん」

それは事実なのだという。少なくとも子供は言っのだった。

「そうだよ。六人目の仲間がね」

「問題はそれが誰かということですが」

老人は今度はミノカサゴを見ていた。そのヒョウモンダコから少し離れた水槽にいるその異常に針が出ている魚を見ながらの言葉だった。

「六人目は」

「そこまでは僕もわからないけれど」

子供の言葉はここでくぐもったものになってしまった。

「けれど来てくれているのは間違いないよ」

「そうか」

「そうだよ。それでだけれど」

また仲間達に話す子供だった。

「今度は任せる？彼か彼女かもわからないけれど」

「いや、俺も行く」

ところがここで青年が名乗りをあげてきたのだった。

「俺もだ。魔物を出させてもらおう」

「あれっ、昨日グールを出したのに？」

「それでもだ。また行かせてもらおう」

こう話すのだった。



第十七話 棺桶その三

「それでいいか」

「ええ、私は別にね」

それに賛成したのはまず女であった。

「それでいいわ」

「俺もだ」

そして次は男であった。

「行きたいなら行け。止めはしない」

「私もです」

老人も同じ意見であった。

「また髑髏天使だけでなく死神も出て来るでしょう。それならば」

「ああ、僕もだよ」

子供もまたにこにこしながら青年に告げた。

「見るだけでいいから。頑張ってきてよ」

「そうか。それならいいな」

「ええ」

「行くといい」

魔神達はそれぞれ彼に話す。これでこの話は決まりであった。

しかしであった。決まったのはこの話だけであった。子供は相変わらず朗らかに笑ったままそのヒョウモンダコに噛まれたまま言うのであった。

「何かさ、不思議だよね」

「その蛸が？」

「うん。毒がある蛸なんてね」

こつ女に答えるのだった。

「本当にね。珍しいよ」

「髑髏天使と同じです」

そしてここで老人がまた言うのだった。

「彼と同じなのですよ」

「髑髏天使と同じって？」

「突然変異と申しましょうか」

老人は髑髏天使をこう評するのであった。

「五十年に一度現われ我々の毒となる」

「そして僕達はその毒を手に入れようとして」

「闘うというわけね」

彼等はそれぞれ言うのだった。

「じゃあ。ここはバジリスクも出るってことでね」

「そうだ。既に魔物の用意はした」

彼はまた話した。

「既にな」

「了解。じゃあ見させてもらうよ」

子供が笑顔で彼に言う。言いながら蛸から手を放してそのうえで手を抜き出す。そうしてそのうえでこれからのことを楽しく想像するのだった。

牧村はまた博士の研究室にいた。話は当然魔神に関するものであった。

「今度はそれじゃったか」

「そうだ。バジリスクだ」

牧村は部屋の壁にもたれて立ちながら博士に述べていた。

「それが出て来た」

「これで五人目じゃな」

「その通りだ。これでな」

牧村はまた彼の言葉に頷くのだった。

「五人目だ。あと七人だったな」

「左様。そして知っているとと思うが」

「バジリスクのことだな」

博士が何を言うのかはもうわかっていたのだった。

「あの魔神のことか」

「そうじゃ。あれは尋常ではない魔神じゃ」

博士は怪訝な顔になって述べる。

「それは確か」

「はい、どうぞ」

ろく子がにこりと笑って博士に一冊の本を差し出してきた。見ればそれは黒い厚い表紙の書であった。やはりその書もかなり古いものであった。

「こちらですね」

「そうじゃ。その書じゃよ」

博士はろく子の差し出したその書を受け取って笑顔を見せる。

「この書に書かれておるのじゃよ」

「そうか。それにか」

「その通りじゃ。ここにある」

博士はまた言うのだった。

「ここにのう。まずは八本の足があり」

「そして冠がある蜥蜴だったな」

それがバジリスクの姿なのである。あの青年の本来の姿なのだ。

## 第十七話 棺桶その四

「そうだったな」

「そうじゃ。そもそもその生まれからして奇怪じゃ」

博士は今度はバジリスクの生まれについて語る。

「雄鶏の卵をヒキガエルが温めそのうえで生まれるのじゃよ」

「そのうえでか」

「左様じゃ。これも知っておるな」

「それもな」

彼はそれも知っているのだった。

「読んだ。確かに有り得ない生まれ方だな」

「魔物というものは大体そうじゃな」

博士はこうも言うのだった。

「有り得ない生まれ方をしたり生き方をしておるものじゃ」

「そういうものか」

「まあ妖怪もそういうのがおるがのう」

「ああ、僕のことかな」

「僕かな」

「私じゃないの？」

ここですれすりだのわいらだの天井さがり等が出て来る。とりわけ天井さがりは逆さまに長い髪を持った女の顔が出ていてすこぶる不気味である。

「何か心当たりが多いけれどね」

「そもそも僕どうやって生まれたんだっけ」

「私も。ちよつと覚えてないわ」

「結局闘つか闘わないかの違いじゃからな」

博士はそんな彼等を見ながら話すのだった。

「魔物と妖怪なぞな」

「そうだな。そういえば連中は人を襲うのじゃなかったのか？」

「それは力を求めてじゃ」  
「力をか」  
「人間は一人一人が霊力を持っておる」  
彼は言うのだった。  
「それを得る為にな」  
「そして俺と闘う理由もか」  
「全ては力じゃよ」  
このことも語る博士であった。  
「全てはのう」  
「そういうことだな。魔物は力を求めるもの」  
「うむ」  
「だからこそ魔物なのか」  
あらためてこのことを知る牧村だった。  
「そして俺はその魔物を倒す」  
「髑髏天使じゃな」  
「そつだ。俺は髑髏天使だ」  
言いながらその手をじつと見るのだった。右手の手の平をだ。  
「紛れもなくな」  
「その通りじゃ。しかしグールとの闘いも終わったのじゃな」  
「手強いことは手強かった」  
その闘いのことを思い出している言葉である。  
「だが。弱点に気付いた」  
「それで勝ったというのじゃな」  
「逆に言えば弱点に気付かなければ負けていた」  
こんなことも言うのだった。  
「それでな」  
「そうじゃが何でも弱点はあるものじゃぞ」  
博士は少しばかりネガティブに見える今の牧村の言葉に対して穏やかに声をかけた。  
「何にでもものう」

「では俺は勝つべくして勝ったのか」

「その通り」

そしてこう言うのであった。

「弱点を見抜くだけの力があつたということじゃよ」

「運ではなく、か」

「運でそうそう見抜くものではないのじゃよ」

また穏やかな声で語ってみせるのだった。

「わしはそう思うがのう」

「閃きもか」

「閃きもまた実力じゃ」

博士はそれもだというのだ。

## 第十七話 棺桶その五

「全てのう。それなりのものがなければ閃くことがないものじゃかな」

「だといいがな」

それを聞いてもそれでもにこりとしなない牧村だった。

「それならな」

「そういうことじゃよ。まあ何にしる勝ってよかった」

そのことは素直に喜ぶ博士だった。

「五人目の魔神の送り込んだ魔物にもものう」

「しかし。バジリスクか」

牧村はその五人目の魔神のことをここでまた考えた。

「闘う時はかなり苦戦しそうだな」

「まあそれはかなり先じゃろうがな」

「俺がさらに強くなってからか」

「少なくとも今の能天使よりさらにじゃ」

今ではないというのは博士も語るのだった。

「どうやら封印された時は髑髏天使は熾天使じゃったようじゃな」

「熾天使か」

「そうじゃ。天使の最高位じゃ」

これはもうわかつていることだった。天使は九つの階級があり熾天使はその最上位にある。即ち最強の天使であるのだ。髑髏天使にとっても。

「その熾天使の髑髏天使がじゃ」

「文献にあったことか」

「うむ。この前手に入れたスミソニアンから取り寄せた文献にのう」  
アメリカのスミソニアン博物館から特別に取り寄せたというのだ。  
どうやらこの博士は異様な人脈まで持っているようである。それも海外にまで。

「あつたのじゃ。今のところわかつておるたつた一人の熾天使までなつた髑髏天使にじゃ」

「そうなつてからか」

「魔神達と闘うのはな」

「そもそもなれるかどうかすらわからないな」

牧村は壁にもたれかかったまま腕を組んだ姿勢になっていた。

「そこまではな」

「まあ能天使なぞ熾天使と比べればちつぽけなものじゃ」

「ちつぽけか」

「現にどうじゃ？権天使と能天使」

三つ目の階級と四つ目の階級を出して話す博士だった。

「その力の差はかなりじゃろ」

「そうだな。強さが極端にあがつた」

実感できることであるのだった。

「自分でも驚く程にな」

「三つ目と四つ目でそうじゃ。最早天使とは別物になっておる」

「では熾天使ともなると」

「神に匹敵する」

「こうまで言つのだつた。

「最早な」

「だからこそ魔神達を封印できたのか」

「そのようじゃな。じゃからまだまだ先じゃよ」

あらためて彼に対して告げた。

「バジリスクとの闘いものう」

「わかつた。ではそれは置いておいてだ」

「うむ」

「まずは今後のことだな」

目の前にあることを考えるというのだった。

「これからだか」

「トレーニングは積んでおるようじゃな」



「それは欠かさない」

はつきりと言いつつみせた牧村だった。

「それこそ毎日な」

「よいことじゃ。やはり鍛錬せねばならんからな」

牧村の返事を聞いて目を綻ばさせていた。笑うと好々爺の顔にも見えなくはない。いささか髭が化け物めいたものではあるがだ。

「闘う為にはな」

「おかげで動きがまたよくなった」

「よいことじゃ。それで食べるものはどうじゃ？」

「そちらは特に変えてはいない」

「こう言葉を返すのだった。」

「特にな」

「ではやはり甘いものは好きか」

「ああ。別に食べてもいいな？」

博士に目を向けて問うてきた。甘いものが太るということを知っていて脂肪が身体の動きに影響するということも把握しての問いである。

「それは」

「そこまで動いているのなら問題はないじゃろっな」

博士は少し考えてから述べた。

## 第十七話 棺桶その六

「筋肉のつき方を見ればのう」

「ならこのまま食べていいいな」

「よいぞ。甘いものもまた必要じゃからな」

「必要か」

「人間の友達じゃよ」

「こんなふうにも言う博士だった。

「酒だの甘いものだのはな」

「博士はどちらでもいけるのだったな」

「ふおふおふお、両刀使いじゃよ」

「今度は声が綻んでいた。

「酒でも甘いものでもな」

「ある意味羨ましいいな」

「牧村はそんな博士の言葉を聞いて少し述べた。

「どちらもというのはな」

「何じゃ？酒を飲みたいのか？」

「そういう時もある」

「表情も声の色も変わらないがそれでもそこにははつきりとした感情があった。

「時としてな」

「まあ酒は体質じゃからな」

「少し飲んだだけで駄目だ」

「かなり極端な下戸なのであった。

「もうそれでな。倒れてしまっ」

「やれやれ。魔物を倒す髑髏天使にも弱点があったか」

「酒も弱点になるのか」

「これがなるのじゃよ。すっかりとな」

「酒を操る魔物でもいるのか？」

「いるかもものう。まあそれでも実際にそれが闘いに関わるかというとな」

「どうなのだ？」

「ないじゃろうな」

首を捻り髭をしごきながら述べた言葉だった。

「髑髏天使になってしまえばな。身体の構造自体が変わるからな」

「では弱点ではないな」

「いや、しかし弱点じゃよ」

それでも弱点だと指摘する博士だった。

「それはな。しっかりとした弱点じゃよ」

「つまり髑髏天使ではなく俺にとってはおか」

ここでやっと博士が今何を言いたいのかわかったのだった。

「弱点だ。そうだな」

「そういうことじゃ。君は髑髏天使じゃが」

「同時に牧村来期でもある」

「うむ。人でもあるのじゃよ」

やはりそうであった。博士が今言いたいのはこのことだった。牧

村来期は確かに髑髏天使だ。しかし同時に牧村来期でもあるのだ。

そういうことだった。

「君はのう」

「俺の弱点か」

「もつとも些細な弱点じゃがな」

あらためて告げた言葉もまた笑みと共にあった。

「酒が飲めない程度はな」

「気にすることはないか」

「酒が飲めないからといって死ぬわけではない」

それはまさにその通りだった。飲めないからといってそれで死ぬ

わけではない。むしろ過度に飲み過ぎそれで死ぬことはあってもだ。

「かわりに甘いものを食べるといいうのもいいものじゃしな」

「そうだな。では」

「では？」

「何か食べに行くか」

身体を壁から起こしそのうえで述べるのだった。

「今からな」

「何言ってるの」

「今から食べるのに」

しかしここで妖怪達が彼に対して声をかけるのだった。いつものように。

「お菓子、あるよ」

「羊羹ね」

「羊羹か」

「スーパーで買ったものじゃがな」

見れば博士はもうその羊羹を食べていた。数切れ白と青の陶器の皿の上に置かれたその羊羹を楊枝で刺しそのうえで口の中に入れてもぐもぐとやっていた。

「中々いけるぞ」

「そうか」

「別にスーパーの羊羹でもいいじゃろ？」

さらに食べながら牧村に問うてきた。

## 第十七話 棺桶その七

「それでも」

「それにはこだわらない」

「これが牧村の返答だった。」

「中にはグルメぶってスーパーのものだの何だのと馬鹿にする輩がいるが」

「君は違つものじゃな」

「それは食べ物を知らない人間の言葉だ」

「こう言つのだった。」

「何一つとしてな。それは似非だ」

「似非か」

「食通ぶつた奴は嫌いだ」

「これは彼の個人的な嗜好でもある。」

「そしていちいち店の中で騒ぐ輩も嫌いだ」

「漫画でおるのう。まずいと言って店の中で騒ぎまくる新聞記者やら芸術家が」

「あれこそ愚か者の見本だ」

「とにかくそうした存在が嫌いなのがわかる牧村の今の言葉だった。」

「野蛮人の最たるものだ」

「そうじゃのう。わしもああした奴は大嫌いじゃ」

「そしてそれは博士も同じなのであつた。」

「他人の食うものをまずいとかがあれこれ言つのならな。自分が食わないならそれでよいじゃろうに」

「世の中愚か者も多い」

「牧村はその言葉に感情を見せていた。実に忌々しげに語っているのが何よりの証拠だ。」

「自分の考えが他人とは違つことを認められない奴もまたな」

「そういう奴に限って民主主義だの言つものう」

「民主主義は己の考えを言いたいだけ言い押し通すものではない」  
彼はこうも言うのだった。  
「他人の考えを受け入れることだ」  
「ではあの新聞記者や芸術家は民主主義者ではないのじゃな」  
「ただの愚劣な野蠻人だ」  
彼にとつてはそれでしかなかった。  
「あの漫画に出て来る人間は殆どそうだがな」  
「そうじゃな。あれはな」  
そして博士も今の彼の言葉に同意であった。  
「原作者の品性じゃな」  
「まさにその通りだな」  
「何でも飯を食いに行つてまずければ怒鳴り散らしていたらしい」  
人間として最低の品性であるのは言うまでもない。  
「あの漫画の登場人物のようにな」  
「およそ食べ物の漫画を描く資格のない輩だ」  
牧村は珍しく嫌悪感に満ちた声でそれを評した。  
「無論何かを食べる資格もな」  
「まずいと思つたらそう思えばいい」  
博士もそれはよしとする。  
「しかしじゃ。他の者も食べておるからのう」  
「それを邪魔するのは言語道断だ」  
「しかも店の中で騒ぐとなるとじゃ」  
「営業妨害だ」  
当然犯罪行為である。つまりこの漫画に出て来る登場人物の多くは下劣な犯罪者ということになる。汚らしい野蠻人であると共に。  
「そんな奴が描いておるからのう」  
「少なくともあの原作者は人間の屑だ」  
牧村はまた嫌悪感に満ちた言葉で言い捨てた。  
「最悪のな」  
「そうじゃな。しかも権力を濫用しておるしな」

「さらに悪い」

「このおまけつきであった。」

「もっともマスコミの連中の多くがそうじゃ」

「奴等に知性はない」

牧村の今度の言葉は軽蔑だった。

「あるのは特権意識とエゴだけだ。腐敗したらそれっきりじゃ」

「我が国のマスコミはそうじゃよ」

博士も言うのだった。

「全くもってな。腐敗してさらに腐敗していく」

「その象徴がああ漫画だな」

「読んでいればわかるのじゃ」

描いていてはわからないことである。

「その愚劣さと醜悪さがのう」

「あれはグルメ漫画ではない」

牧村はまた軽蔑に満ちた声で言い捨てた。

## 第十七話 棺桶その八

「アジビラだ。それ以外の何者でもない」

「じゃからわしはあの漫画はまともには読まん」

博士もまた軽蔑した声で言うのだった。

「とても読むに値せん」

「その通りだ。それで博士」

「うむ」

ここで話が元に戻った。

「その羊羹」

「そうそう、これじゃな」

話がやつと元に戻ったのだった。

「この羊羹じゃな。美味いぞ」

「そんなにか」

「しかも安い」

そこにこれまでつくのだった。

「早速食べてくれ。早速な」

「わかった。それでは」

「はい、どうぞ」

「お茶も」

立ったままの牧村に対して周りの妖怪達が皿に入れられ爪楊枝まで添えられている二切れの羊羹とお茶を差し出してきた。お茶は普通の玄米茶である。

「食べて食べて」

「僕達が食べても本当に美味しいからね」

「妖怪が食べてもか」

「何言ってるんだよ」

彼等は牧村の今の言葉にすぐに反応してきた。

「僕達こそは真のグルメだよ」



「違いがわかるんだよ、違いが」

「そこが想像できない」

これまで付き合っけてきても今だに、であった。

「妖怪が人間の食べ物の味がわかることがな」

「いやいや、わしにしるだ」

赤鬼が笑いながら彼に言ってきた。その頭の角が今にも天井に届きそうなた大きい。しかしその顔はいかついながらも実に愛嬌があり屈託のない笑みを浮かべている。

「豆腐も葡萄も大好きじゃ」

「鬼の好物か」

「左様、それに酒じゃ」

鬼といえはやはりこれである。

「酒ものう。大好きじゃぞ」

「そうしたもののも味もわかるのだな」

「わかるから好きなのじゃ」

まさにその通りの言葉であった。

「豆腐についてもな」

「では味覚は人間と変わらないのか」

「そうだと思うよ」

今度は河童がにこにここと笑って彼に答えてきた。

「僕はやっぱり胡瓜じゃない」

「ああ」

河童といえはである。まさに。

「人間も胡瓜好きだよな」

「そうだな。中にはそうではない奴もいるが」

「それと同じだよ。僕魚だつて食べるしね」

「それもか」

「焼いた魚だつて食べるよ」

実際に岩魚を焼いて食べていると河童に取られたという話もある。真かどうかは不明であるが。

「もうそれこそね」

「ではやはり味覚は」

「そうじゃ。まあ同じじゃよ」

ここで博士が言ってきた。

「妖怪によるがな」

「妖怪によるがな」

「猿だとあれだったな」

牧村は羊羹を手にとってそれを食べながらまた述べてきた。皿はとりあえずは博士の机の上に置いてもらいそうして今は羊羹を食べていた。左手で皿を持ち右手に爪楊枝を持ってそれに羊羹を刺してそのうえで口の中に入れてそうして少しずつ食べていた。口の中に羊羹のその程よい弾力のある固さと小豆の甘さが広がる。それは彼が思ったより美味かった。

「渋柿でも美味そうに食うな」

「まあ猿は猿じゃ」

博士は猿についてはこう述べた。

## 第十七話 棺桶その九

「それでも甘い柿も普通に食うぞ」

「そうだな。どちらかというとな」

「やっぱりそっちの方が好きなのじゃよ」

結局のところ猿も甘いものが好きだということである。

「それと同じじゃよ。妖怪達ものう」

「美味しいものが好きか」

「甘いものもな」

「そういうことか。しかし」

ここで牧村は羊羹をさらに食べながらまた述べてきた。

「この羊羹だが」

「美味しいじゃろ」

「思った以上にな」

ここでその羊羹を見た。

「美味しいな」

「そうじゃろ。じゃからスーパーの羊羹もまたいいのじゃよ」

顔を綻ばせてこのことをまた言うのだった。

「山月堂のもいいのじゃがな」

「あそこは品のある味だな」

「老舗じゃしな」

老舗の和菓子屋には独特の意識がある。それを店の味に出すものだ。

「それは絶対に出るものじゃしな」

「だからか。その品が出るのか」

「あれで店の親父はざつくばらんじゃがな」

それは店の人間の人間関係ないということだった。

「ケーキもやっておるしのう」

「ケーキもだったな。洋菓子も全体的にやっていたな」

「うむ。カラオケ屋にも出しておるぞ」

「スタープラチナだったな」

牧村はこのことを話した。

「確かな」

「スタープラチナ!？」

博士はそう言われても首を傾げるだけであった。

「何じゃそれは。変わった名前じゃのう」

「だからそのカラオケ屋の名前だ」

牧村はそれだと言っただった。

「山月堂がケーキを出しているカラオケショップだ」

「そこだったのか」

「店が何処かは知らなかったのか」

「わしはカラオケは行かんからのう」

ここでは首を傾げるのではなく捻る博士だった。

「そこまではわからなかった」

「わからなかったか。それは」

「ああ、僕達はわかったよ」

「ちゃんとね」

しかしここで妖怪達はいつもの陽気さで牧村と博士に話してきた。

「だってあのお店よく行くしね」

「そうそう」

「昨日も行ったしね」

「こつ話す彼等だった。」

「今日も行く?」

「そうしようか」

「妖怪がカラオケ屋に行くのか」

牧村は彼等の言葉を聞きながら博士にまた問ってきた。

「というかばれないのか」

「これが案外ばれないのじゃよ」

しかし博士は明るい声で彼に答えるのだった。

「普通にラーメン屋とか居酒屋とかに行ってもな。ばれないのじや  
よ」

「化けているのか？」

牧村はまずはそれは彼等が化けているからではと考えた。

「だからか？」

「うん、化けるよ」

「当然それはね」

そして妖怪達の方もそうだと答えるのだった。

「このまま行ったら流石にやばいからね」

「そこはちゃんとしてるよ、僕達も」

「そうか。やはりな」

「いや、スタープラチナってさ」

そしてそのうえでスタープラチナの話をはじめのだった。

「いいよね、雰囲気明るくて」

「お店の女の子も可愛いしね」

「あの娘だな」

牧村は彼女のことも知っているようである。彼等の話からふと気付いたようにして述べるのがその証だった。

## 第十七話 棺桶その十

「明日夢ちゃんだったかな、確か」

「あれっ、名前も知ってるんだ」

「あの小柄でショートヘアの娘だけけど」

「あの店をやっている家の娘さんだ」

やはり知っていた。それも結構だ。

「公立に通っている女の子だな。今は何年だったかな」

「詳しいねえ。っていうか女の子にも興味あったんだ」

「いつも仏頂面だったからてつきりそんなのには一切興味がないと思ってたのに」

「いやいや、これで結構のう」

博士は今度は玄米茶を飲みながら妖怪達に述べていた。

「もてるようじゃ」

「もてるの!?!」

「本当に!?!」

「うむ、もてるのじゃよ」

楽しそうに笑って彼等に話すのだった。

「彼女もおるしいう」

「意外!?!っていうか」

「物好きな人もいるもんだね」

「そうだよね」

「そこまで言うか」

牧村も今の妖怪達の言葉には少し言いたそうになる。

「俺に彼女がいることがそこまで不思議か」

「不思議だから言っただよ」

「ねえ」

これが妖怪達の反論だった。

「牧村さんに彼女なんて」

「つていうか人付き合いできたんだ」

「また随分と言ってくれるな」

流石の牧村もいい加減口を尖らせてきていた。

「俺に彼女がいると聞いただけで」

「で、誰なのそれって」

「その変わった人は」

「これがのう。抜群に可愛い娘なのじゃよ」

博士がここでまた笑って話すのだった。

「小柄で目が垂れていて色が白くてのう」

「ふうん、そうなんだ」

「可愛いんだ」

「そこいらのアイドルよりも余程上じゃな」

博士も博士で若奈を絶賛していた。

「声もいいしなのう。しかし一番いいのはじゃ」

「何なの？」

「それで何が一番いいの？」

「性格じゃよ」

それが一番いいと言っただった。これは若奈にとっては最大の褒め言葉であった。

「性格美人じゃな。あそこまでの美人はおらんぞ」

「ああ、だからなんだ」

「だからこんな人と付き合えるんだ」

「今度はこんな人か」

子泣き爺と塗り壁の言葉にまたむっとした声になる。

「俺も随分と言われるな」

「どんな奇人変人かって思ったけれど仏様だったんだ」

「成程ね」

「博士、いいか」

牧村は羊羹を食べ終えてそのうえで机の上のお茶を取りそれをすすりながら彼に声をかけてきた。

「ここで髑髏天使になってもな」

「魔物はおらんぞ」

「少し頭にきた」

実際に立腹した声になっていた。

「一度斬っておいていいか」

「髑髏天使は魔物を倒す存在じゃよ」

博士はわかっただけはいたがそれでもあえて言うのだった。

「魔物をのう。妖怪ではないぞ」

「いい加減頭にきた」

表情は動いてはいない。しかしそれが余計に彼の怒りを見せていた。

「斬らないと気が済まない」

「おいおい、そりゃないよ」

「ほんの軽いジョークなのに」

「そうそう」

妖怪達は自分達が斬られると言われて血相を変えて言うのだった。

「大体さ、こんなことで怒るなんて大人気ないよ」

「妖怪達の軽いジョークじゃない」

「ねえ」

「そうだよ、本当に」

「人間の世界にはある言葉がある」

牧村は相変わらずにこりともしていない。



第十七話 棺桶その十一

「口は災いの元だという言葉がな」

「やばいね、牧村さんマジで怒ってるね」

「そうだね」

それが今更ながらわかったのだった。

「これはちよつと言い過ぎたかな」

「どうしよう。斬られたら痛いよ」

「痛いどころじゃないよ」

実際のところそれどころでは済まない話だった。しかし彼等はいつもの能天気さをそのままにしてここでも明るく言うのだった。

「ううん、どうしたものやら」

「とりあえず牧村さんに怒りを止めてもらわないとね」

「そうだね」

そんな話をしたうえでまた言うのだった。

「どうする？あれ出す？」

「それしかないぞ」

一反木綿と砂かけ婆が話し合う。

「そうじゃのう。高いがのう」

「斬られては元も子もないからのう」

「そうだよね。もうそれしかないね」

「うん、確かに」

彼等の話から傘と赤舐めが頷く。

「もうね。切り札を出すしかね」

「それしかないね」

「全部聞こえているぞ」

その彼等に牧村が突っ込みを入れる。

「全部な」

「あつ、聞こえてたよ」

「まずいな」

そうは言っても緊張感は微塵もないままであった。

「まあいいさ。とりあえずあれ出そう」

「そうだね」

それでも言い合って出してきたのだった。それは。

「はい、どうぞ」

「これを」

「これは」

「三色団子だよ」

見れば確かにそれであった。三色団子が三本皿の上にあった。桃に白、緑の三色が実にいい。

「これ食べて機嫌なおして」

「御馳走するから」

「何本でもあるし」

「何本でもか」6

牧村はそれを聞いてまずは言葉だけで応えた。

「好きなだけ食べていいのだな」

「うん、だから機嫌なおして欲しいな」

「流石に髑髏天使に斬られるの嫌だから」

牧村が本気で言っているわけではないとはわかっているがそれでもであった。

「だからどうぞ」

「食べて食べて」

「遠慮せずに」

「最初から遠慮するつもりはない」

牧村の方も最初からそのつもりはないのだった。

「好きなだけ食べさせてもらうが」

「じゃあ機嫌なおしてくれる？」

「このお団子で」

「別に怒ってもいい」

牧村自身も実際のところを語ってみせる。

「機嫌はすぐになおるものだしな。それよりもだ」

「うん。それよりも？」

「この団子だが」

団子のことを彼等に尋ねるのだった。

「これは何処の団子だ？山月堂か？」

「ううん、スーパーの」

「スーパーで買ったやつだよ」

「そうか。それが」

それを聞いてまずは頷く牧村だった。

「それでいいよね、別に」

「食べてくれるよね」

「さっきも言っただが遠慮なく食べさせてもらおう」

言いながらその団子を一本手に取った。そうしてそれを口の中に入れるのだった。

団子のそのもちもちとした感触と控えめであるが確かな甘みが口の中を楽しませる。牧村はその団子を食べながらまた妖怪達に対して言っただった。

## 第十七話 棺桶その十二

「美味しいな」

「そうだろ？この三色団子も美味いんだよ」

「こここのスーパー和菓子いけるからね」

「うんうん」

「似非グルメなぞよりスーパーの製造側の方が味がわかってる」  
そしてまたこう言って似非グルメを批判するのだった。

「何しろ愚にもつかない妄言を撒き散らすよりも生活がかかっているからな」

「だよな。何かにつけて自然食とか言うけれど」

「実際は何もわかってないからね」

「あいつ等の舌は狭いんだよ」

妖怪達まで彼等を批判するのだった。

「ああいう連中廃止斧持って皮の太鼓叩いてウホウホ言ってるのが相応しいんだよ」

「全くだよ」

そしてこう叩きもする。

「食べ物口にする資格ないから」

「食べ物入ったお皿投げるしね」

「それ最低」

「それは人間として許されない行いじゃよ」

博士も厳しい声でそうした行動を批判する。

「何かを食べる資格をそれで失うぞ、それは」

「あとちゃぶ台ひっくり返すおじさんもいたよね」

「ああ、あの児童虐待の常習犯の」

世の中実に奇人変人が多いものである。

「あのおじさんね」

「あの人もかなりおかしな人だからね」

「食い物を粗末にしていると罰が当たる」  
牧村はまた言った。

「そんなことはな。外道の所業だ」

「その外道の似非グルメだけれど最近あちこちで叩かれてるね」

「ほら、インターネットでも」

「あつ、本当だ」

ここで河童がその水かきのある手で器用に床の上に置いたノートパソコンのキーボードを叩いていた。それをひょうすべやすねこずりが覗いている。

「何か物凄く嫌われてるね、やっぱり」

「まあ当然だけれどね」

「品性は出て来るものだ」

ここでまた牧村は言うのだった。

「特に食べ物の扱いにな」

「じゃあお店の中で怒鳴り散らしたり投げたりするのは」

「野蛮人そのものだ」

やはりそれであった。

「何度も言うがああ連中は野蛮人だ。世の中のゴミだ」

「そうだよ、全く」

「バイ菌にも劣る連中だよね」

妖怪達も彼の言葉に頷く。ここでもまた。

「まあとにかく。牧村さん」

「お団子好きなだけ食べていいからね」

「遠慮なく貰っておく」

見ればもうおかわりしていた。既に五本目である。

「それではな」

「はいはい、どうぞ」

「遠慮なくね」

こうして彼は心ゆくまで三色団子を食べた。そうしてそのうえで話を終えて博士の研究室を後にした。するとそこに若奈が待ってい

た。

「ああ、やっぱりここだったのね」

「探していたのか」

「ちよっとね。トレーニングの時間だから」

「そうか」

「ランニングとか筋肉トレーニングは終わったし」

「後はだ」

ここで牧村は言うのだった。

「フェシングか」

「テニスもあるけれど」

若奈はそちらの方も示してきた。

「どっちにするの？私はどっちでも付き合わせてもらっけれど」

「そうだな。まずはフェシングだ」

牧村は今羊羹や団子で膨れてしまった己の腹具合を考えて述べた。

第十七話 棺桶その十三

「そちらにしよう」

「フェシングにするの」

「テニスは激しい動きをする」

そのことを第一に考慮に入れていた。

「今はな。それよりもフェシングで身体を慣らしたい」

「だからなのね」

「そうだ。それからテニスをしたい」

まずフェシングで身体を動かして慣れると共に腹の中のもの 소화させてからそのうえでテニスで激しく動くということなのだ。

「それでいいか」

「いいわ。けれど今日は慎重ね」

「身体を動かすのはいい」

まずはそれはよしとした。

「しかしその時にだ。怪我をしては何にもならない」

「怪我？」

「身体が重いと激しい動きをすればそれだけで怪我をする恐れがある」

彼はまた言った。

「そうなれば何もならない。だからまずはフェシングだ」

「わかったわ。じゃあそつちに行きましょう」

「実は食べたからな」

若奈にこのことを話すのだった。

「今はテニスを後回しにしたい」

「そうそう、食べた後で極端に激しい運動って駄目なのよね」

彼女も当然ながらそのことを知っているのだった。そしてそのうえで牧村が下した判断に対して賛成の言葉を述べるのである。

「昔野球選手で試合前にお弁当食べて」

「身体の動きが鈍ったな」

「そうなの。それで足を取られて怪我したのよ」

これは実際にあったことである。だからスポーツ選手は試合前には過度な食事は摂らないのだ。身体が鈍くなるだけで済まないからだ。

「そういうことがあるから」

「そうだ。だから今はだ」

「テニスよりは身体を動かさないうで済むフェシングね」

「そのつもりだ。じゃあ行くか」

「ええ。それにしても最近の牧村君で」

若奈はここで彼をあらためて見て述べた。

「一段と身体が締まってきたわね」

「トレーニングの成果か」

「そうね。もう脂肪とか殆どないんじゃないの？」

「そうかも知れないな」

実際に今は極めて整った身体になっている。まさにスポーツ選手そのものの。

「少なくとも動きはさらによくなった」

「アクシヨンプラブにも入れそうな位ね」

「悪くないな。それも」

実はそうしたことも嫌いではなかったりする。

「大学を卒業したらな。就職にな」

「考えてみてもいいと思うわ。かなり大変らしいけれどね」

「そうだな。さて、では」

「行きましょう」

話を途中で打ち切ってそのうえでフェシングに向かう。今は彼は真剣にトレーニングに励んでいた。そうしてその次の日。朝のランニングを終え学校に向かおうとサイドカーに乗る彼の前にまた死神が出て来たのであった。

「また貴様か」



「伝えておくことがある」  
彼はハーレーの上から牧村に対して告げてきた。  
「何かはわかるな」  
「闘いか」  
「その通りだ。また出て来た」  
彼の言葉はこれであつた。  
「魔神がな」  
「これで六人か」  
「行くか？その魔神がいる場所に」  
鋭い目でまた牧村に言つてくる。  
「今から。どうするのだ？」  
「魔神と聞いて行かないわけにはいかない」  
そして牧村の返答も決まっていた。  
「それならばな」  
「そう言つと思つていたならば来い」  
「貴様も闘うつもりか」  
「今回はな。刈らせてもらう」  
「また声が鋭いものになる。」

## 第十七話 棺桶その十四

「案内させてもらうついでにな」

「魔物が一人でなかつたならどうするのだ？」

その場合は、ということだった。

「俺は魔物を倒すが。貴様はどうするのだ？」

「勿論私も倒させてもらう」

死神も退く素振りは見せない。

「そして貴様がどうしても言うのならばだ」

「面白い。ではその場合も楽しみしている」

牧村はにこりともせず述べた。

「ではな。行くか」

「来い」

死神はヘルメットを被りながら彼に告げた。

「案内はしてやる」

「案内はか」

「それだけはしてやる」

彼はまた言った。

「しかしだ。それからはだ」

「どうなるかわからないか」

「貴様が譲るのなら問題はない」

死神は退く素振りを何一つとして見せない。

「そうでなければ私の相手が増えるだけだ」

「それは俺もだ」

そして彼も同じであった。

「相手が増えるだけだ。それにだ」

「それに。何だ」

「この前の闘いは中断されていたな」

そのことも話してきた。

「確か。そうだったな」

「そうだな。ではそれもか」

「貴様が望むのなら続きをしてやる」

既にその言葉は髑髏天使のものになっていた。

「その続きをな」

言いながらサイドカーに乗りそのうえで死神の後についていく。

そうして辿り着いたのは電車の橋の下だった。川辺にあるその砂利の場所に来たのだった。

上からはその電車が行き交う音が時折聞こえ土と砂利が下にある。柱は重そうなコンクリートでありいささか年代を感じさせるものだ。少し欠けた部分もあった。

彼等はその柱の傍にそれぞれのバイクを止めた。そうしてそこから言うのだった。

「ここか」

「そうだ、ここだ」

死神はハーレーから降りながら同じくサイドカーから降りようとしている牧村に答えてきた。

「魔物の気配はここにある」

「その魔神にか」

「気配自体はある」

彼はバイクから降りて周囲を見回しながら語る。

「しかしだ。姿はだ」

「見えないな。今のところは」

サイドカーから降りた牧村も周囲を見回していた。

「何処から出て来るかわからないがな」

「さて、魔神ならそろそろ出て来るな」

死神はまた言った。

「何処からだか」

「むっ!？」

ここであつた。牧村は前に顔を向けた。すると川からあるもの

が流れてきた。それは。

「あれは・・・・・・・・」

「棺だな」

死神が流れてくるその黒く細長いものを見て言った。

「あれは」

「西洋の棺か」

「そうだ、それだ」

それだと言ったのだ。

「棺だ。ということだ」

「あの中に魔神がいるのだな」

「おそろくな。それでははじまりか」

「出て来い」

牧村はその川を流れる棺を見据えながら言ったのだ。

## 第十七話 棺桶その十五

「六番目の魔神、俺の前にな」

「その声か」

不意にその棺から声がしてきた。

「この時代の髑髏天使の声。それがか」

「俺は確かに髑髏天使だ」

牧村はこう彼に答えた。

「それがどうした」

「確かめただけだ。それならばだ」

「やるというのだな」

「如何にも」

牧村はまたその声に答えた。

「それが髑髏天使だ。貴様等を倒すな」

「では来い」

彼等はその話を聞きながら述べた。

「闘いを行うならな」

「それではだ」

そうして遂に棺が開いた。そこから端正な顔をしていて黒い髪を丁寧に後ろに撫で付けたタキシードの男が出て来た。漆黒のマントに身を包んでいる。

「吸血鬼か」

「すぐわかったようだな」

「口元を見ればすぐにわかる」

牧村は棺から起き上がり顔を見せる彼のその口元を見て述べた。

「その牙の生えた口元を見ればな」

「そして目をか」

「その通りだ。牙のある口元に赤い目だ」

まさにそれだった。その紳士の目は赤くそして口元には狼のもの

を思わせる鋭い牙がある。顔は白くまるで死者のものであった。

「それでわかる」

「如何にも私はヴァンパイア」

完全に棺から出て来て二人の前にその全身を現わしてきた。

「十二魔神の一人。ルーマニアから来た」

「東欧か」

死神はその国の名前を聞いてすぐに述べた。

「そこから来たのだな」

「如何にも。とはいっても私はあの公爵とは違う」

「こつ断りはしてきた。」

「彼は人間だが私は魔神。生粋のな」

「ヴァンパイアは死者がなるものとは限らない」

死神は彼の今の言葉を聞いて述べた。

「そういうことか」

「その通りだ。私は死んだことはない」

彼は言うのだった。

「最初からヴァンパイアだったのだ」

「つまりは生粋のヴァンパイアということか」

牧村は彼の今の言葉をこつ言い替えたのだった。

「貴様は。魔神だというのだな」

「如何にも。私は神だ」

紳士はこつも彼に告げてきた。

「魔物達のな。神は人ではないのだ」

「確かにな。神は人ではない」

牧村もそれは認めた。

「しかしだ。一つ言えることがある」

「それは何だ？」

「神といえども倒れることはある」

既にその目に激しい闘志を宿していた。静かだが激しく燃えている。そうした闘志を今己の目に宿らせそのうえで今にも紳士に向か

わんとしていた。

「そして人は神を倒せる存在だ」

「神が人を倒すというのか」

「その通りだ」

言いながら今にも変身しようとしていた。

「では。いいな」

「残念だが今の貴様では私の相手にはならない」

だがここでは彼は牧村を相手にしようとはしないのだった。

「能天使では私の相手をするのには不十分だ」

「ではどうするのだ？」

「既に貴様の相手は用意してある」

こう言うのだった。

「既にな」

「面白い。ではそれは誰だ？」

「出て来るのだ」

紳士は牧村を見据えたまま言葉を出した。その間その牧村の横にいる死神は見えてはいない。いるのはわかつているがそれでも今は見えないのだった。

「今ここにな」

「わかりました、ヴァンパイア様」

その言葉と共にであった。彼の影から漆黒の雄牛が出て来た。赤い目をした普通の雄牛よりは優に一回り以上も大きい、そんな雄牛であった。

## 第十七話 棺桶その十六

「それでは髑髏天使の相手は私が」

「うむ、頼むぞ」

「ストーンカカ」

ここでやっと死神が口を開いた。

「かつてバルカン半島を我が物顔で荒らし回った雄牛の魔物だな」

「そうだ、死神よ」

紳士もまた死神に対してはじめて声をかけた。

「これがそのストーンカカだ。髑髏天使の相手のな」

「私の相手ではないのか」

「残念だが貴様の相手をするつもりは今はない」

彼はまた言った。

「そこで見ているのだな」

「では無理にでも相手をしてもらおう」

やはり彼は闘うつもりだった。

「髑髏天使よ。貴様は下がっているのだ」

「言ってくれるな。指名されたのは俺だ」

そして牧村もまた退く素振りは一切なかった。

「それでどうして下がる必要があるのだ」

「では。何としてもだな」

「そうだ。何度も言うが退くつもりはない」

顔を死神の方にやや向けて目でも告げていた。

「決してな。例え刃を交えることになってもだ」

「ではこちらもだ。いいな」

死神もまた顔を彼の方にやや向けて目でも告げてきていた。二人はまさに一触即発であった。闘いが今まさにはじまるうとしていた。だがここで。

「相変わらずの闘争心だな」



ここでまた一人出て来た。牧村から見て左手からあの青年が出て来た。そうしてそのうえで言葉を出してきたのであった。

「貴様は」

「遊びに来たというわけではないな」

死神はその青年を見て言うのだった。

「どうやら。闘いに来たのか」

「そうだ。仲間を迎えに来ただけではない」

「バジリスク、久し振りだな」

紳士は青年に顔を向けて口元で微笑み挨拶をするのだった。

「元気そうで何よりだ」

「そちらもな。早速魔物を出すのか」

「貴様もな。用意してきたのだな」

「一応用意はしていた」

青年はその言葉に答える。

「だがしかした。必要になるとはな」

「私の相手ということか」

「そうだ。出て来るのだ」

彼が言うのだった。紳士が背にしている川からそれが出て来た。

それは禍々しい老人の顔に蝙蝠の翼と蠍の尾を持つ獅子だった。剥き出しになった歯は全て牙になっており三重に重なっているそのおぞましい口を見せていた。

「マンティコアか」

「死神、貴様の相手はこれだ」

青年は死神に顔を向けて告げた。

「これならば不足はあるまい」

「そうだな。相手としては充分だ」

死神もとりあえずは不足のない声で彼に返した。

「マンティコアならな」

「よし。ではこれで話は決まりだ」

青年は静かに告げた。

「俺はこれで去らせてもらう。ヴァンパイアよ」

「うむ」

紳士もまた彼の言葉に頷いてきた。

「では私もまたな」

「仲間達が待っているぞ」

青年はこころも彼に対して告げた。

「では行くぞ」

「わかった。では髑髏天使に死神よ」

彼は最後に二人に顔を向けて言うのだった。

「また会おう。その時が来れば闘ってやろう」

「それではな」

紳士も青年もその場を後にした。そして二匹の魔物だけが残った。彼等はその禍々しい姿を見せつつその牧村達を見据えてきた。

「では髑髏天使よ」

まずはストーンカが牧村に対して言ってきた。

## 第十七話 棺桶その十七

「貴様の相手は私でいいか」

「相手は選ばない」

牧村はその彼に対して冷徹に述べた。

「貴様等が来るならばな」

「そうか。それならばだ」

彼等はこうして睨み合うことになった。そうして次にはマンティコアだった。彼は死神と向かい合いその三重に並んだ牙を見せていた。

「死神か」

「そうだと言えはとうするのだ？」

「喰らう」

マンティコアの鮮血の色の目が殺意に満ちた光を放っていた。

「それが俺のやり方だ」

「神である私を喰らうというのか」

「相手は誰であれ骨一本残さず喰らう」

彼の言葉は続く。

「それがこの俺だ。マンティコアだ」

「そうだったな。確かにな」

死神はそれを聞いて思い出したようにして応えたのだった。

「貴様は人を喰らい何一つ残さず喰らう魔物だ」

「如何にも」

そのことにはっきりと答えるのだった。

「それが神であつてもな」

「そうか。ではこちらも容赦する必要はないのだな」

「少なくとも俺はその気はない」

死神もまた怯むことなく言葉を返す。

「目の前にある刈るべき命は刈る。それだけだ」

「ではこれ以上の話はいらないな」

「そうだな。それではだ」

「喰らう」

魔物は言った。

「神をな」

「その命、永遠に眠らさせてやる」

彼等もまた今にも闘おうとしていた。そうしてまずは牧村が動いた。両手を拳にしてそのうで胸の前で打ち合わせる。その打ち合わせたそこから白い光を放ち。その姿を変えたのだった。

「行くぞ」

右手をその胸の前に肘を折り曲げて出し握り締める。そうして言うのだった。

死神もまた己の右手を拳にして胸の前に置いた。そこから青白い光を放ち今その姿を変えるのだった。白い服に鎌を持つその姿に。

「その命、今ここで刈らせてもらおう」

「喰らってやる」

まずはマンティコアが跳んだ。その蝙蝠の翼ではなく逞しい四肢を使ってだ。跳ぶとその鋭い牙で死神を喰らわんとかかってきた。

「さあ。これはどうするのだ？」

マンティコアはその剥き出しの牙を見せつけながら彼に問う。

「この牙は。貴様といえどだ」

「ならば喰らいつくがいい」

しかし死神は平然とこう返すのだった。

「貴様の思うようにな」

「死ぬ気か？」

マンティコアは死神の今の言葉を聞いてまずはこう返した。

「それならば一思いにしてやるが」

その言葉と共に喰らいついた。筈だった。だがそうはならなかった。

「むっ!?!」

喰らいついたのは空だった。そして彼は空しく着地するだけだった。その死神の身体を通り抜けて。着地してそこでわかったのだ。た。

「幻術か」

「その通りだ」

その死神の姿が消えていく。そうしてマンティコアの上にその姿を見せるのだった。

「私が何もなしに貴様と闘うと思ったか？」

「そうだな。幻術もあつたな」

マンティコアはその死神を見上げながら応えた。

「貴様には」

「それも知っているな」

「無論だ。もつと言えば今思い出した」

見上げるその目は変わっていない。やはり殺意に満ちたものである。

## 第十七話 棺桶その十八

「貴様のことをな。ではこちらもだ」

「本気になるか？」

「最初から本気だ。俺は手を抜くことはない」

それはすぐにわかることだった。何故ならその目が相変わらず。

鮮血の殺意の色だったからだ。その目こそが何よりの言葉であった。

「では。この力の全てを使って貴様を喰らう」

「では来い」

今度は羽ばたいた。その蝙蝠の翼で。そうして宙に浮かび立っている死神に対して急上昇する。二人の闘いは橋の下で空中戦になっていた。

彼等がそうして激しい空中戦に入っているその横では髑髏天使とストーンカが対峙を続けている。髑髏天使は既に能天使になっている。

「さて、来い」

「言われずともだ」

ストーンカはその漆黒の巨体を誇示するかのように告げてきた。

「貴様を倒す」

「その言葉はいつも聞くな」

「そうか。言ったのは私だけではないか」

ストーンカはそれを聞いても冷静なままだった。

「私だけではないか。この言葉を言ったのは」

「そうだ。闘いの度に聞いている」

「このことも話す彼だった。」

「しかしだ。俺にその言葉を告げた魔物はだ」

「常に倒されているとでもいうのか？」

「その通りだ。では覚悟はいいな」

答えながらその両手に持つそれぞれの剣を構える。両手の剣には

風が次第に宿ってきている。今は鋭さはないがそれでも漂いだしていた。

「貴様もまた俺に倒されるのだ」

「確かに私は同胞達と同じことを言った」

「魔物もそれは認める。」

「しかしだ。私と彼等は違う」

「勝つというのだな。俺に」

「私に敗北はない」

彼はまた言う。

「決してな。私の力を知っているのならそれもわかる筈だ」

「ストーンカの力か」

「私はバルカン半島を暴れ回ってきた」

それが彼の行ったことなのだ。その力はバルカンにおいて今もな

お知らない者はいない。

「長きに渡ってな」

「そしてその力によつてか」

「そういうことだ。ではな」

魔物もまた身構えてきた。身構えながらそのうえで前足を動かしてきた。右の前足が勇ましく動き蹄を鳴らしていた。

そうしてだった。一直線に向かつてきた。黒牛の姿に相応しく凄まじい速さと衝撃力を見せながらそのうえで突き進んできたのだ。た。

「むっ!？」

「さて、どうする?」

魔物は突進しながら髑髏天使に対して問うてきた。

「私のこの突進。防げるか」

「防ぐ必要はない」

髑髏天使は冷静な声で彼に返す。身動きせずだ。

「むしろ貴様のその突進を防ぐ力は俺にはない」

「わかっているというのか」

「己を知ること」

彼はまた言ってきた。

「そうでなければ闘いに勝つことはできない」

「それはその通りだ。ではそれによりどうするのだ？」

魔物の問いがここでも出される。

「この私の突進を。防げないのならば」

「簡単なことだ。こうするだけだ」

今まさに突進しようというところで左に身をかわす。そうしてその右手の剣を魔物の首に刺す。それはさながらマタドールの如きだった。

しかしその剣は空しく弾き返されてしまった。鈍い金属音だけが響く。

「むっ!？」

「生憎だが私の身体にはあらゆる武器は通用しない」

ストーンカは一旦通り抜けた。そうして反転して彼に身体を向けなおして言ってきたのだ。

「そう、あらゆる武器がだ」

「通用しないというのか」

「例え髑髏天使の武器であってもな」

それもだというのだ。



## 第十七話 棺桶その十九

「通用することはない。絶対にな」

「攻撃力と防御力」

髑髏天使もまた身を翻しながら彼に言葉を返す。

「貴様はその二つを併せ持っているということか」

「しかも絶対のな」

絶対の矛と盾を持っている、そういうことだった。

「だからだ。私は強いのだ」

「俺を倒せるという程にだな」

「その通りだ。では覚悟するのだ」

言いながらまた身構えてくる。そうしてそのうえで再び突っ込んでくる。髑髏天使はまた身体をかわしそのうえでまた剣を繰り出す。しかし攻撃は相変わらず通じず彼にとっては苦しい闘いになっていた。

死神もまた同じだった。マンティコアと激しい空中戦を繰り広げている。だがその牙と爪以外のものにもかなり苦労させられているのだった。

「ちいっ！」

牙を防いだところで迫ってきた蠍の尾をかわす。牙は鎌で受け止めたが尾は不可能だった。首を左に動かしてそれで何とかかわせた。

「危ないところだったな」

「よく今のをかわせたな」

その醜悪な老人の顔で告げてきた言葉だった。

「俺の毒の尾を」

「こちらとて何が来るのかはわかっている」

鎌を思いきり前に出し相手を弾き飛ばしそのうえで間合いを作ってから述べた言葉だった。

「だとすればかわすことができる」

「それによつてか」

「そうだ。何が来るかわかっているのならだ」  
彼はまた言うのだった。

「かわすことはできる」

「どうやら。噂だけのことはあるな」

赤い目で見据えながら死神に告げる。

「やるな」

「私は死神だ。命を刈るのが仕事だ」

その両手に持っている鎌を構えなおしながらの言葉である。

「貴様等のそれもな」

「では。俺の命もか」

「如何にも」

言葉に引くものはなかった。

「今から刈つてやるう、心おきなくな」

「その言葉は見事だ」

魔物も今の彼の言葉は認めた。

「だが。俺を倒せることは無理だと言つておこつ」

「くつ！？」

魔物はまた攻めてきた。その前足の爪を斜め上から振り下ろしそれで死神を引き裂こうとする。しかし彼はそれもすり抜けてみせたのだった。

「またか！？」

「そうだ、まただ」

死神の姿が消え声だけが聞こえた。

「そしてだ。次は」

「何っ！？」

死神はマンティコアの横に出て来た。そしてそこから鎌を振り下ろすのだった。

その胸をまさに両断せんとする。魔物にそれを防ぐことはできない。そう思われたが。

だが彼はそうはならなかった。その鎌を前に飛んでかわしたのだった。かわしてそのうえで上に飛ぶのだった。

「上か!？」

「喰ってやる」

橋の底を蹴りながらまた言ってきた。

「貴様が神であるともな」

そして蹴った衝撃を利用して急降下を仕掛ける。今度はその三重の牙で喉を噛み切らんとする。流星に今度は幻術でかわす余裕はなかった。

鎌でそれを受け止める。だが衝撃までは殺すことができず地面に叩き付けられてしまった。しかも魔物はその上に覆い被さりそのまま攻撃を続けんとしてきた。

「さあ、これで飛ぶことはできまい」

「確かにな」

死神もそれは認める。

「それに幻術もな。使えないか」

「では貴様はこれで終わりだ」

真つ赤に血走った目でまた言うのだった。

「さあ、影も残さず喰ってやろう」

また牙を向けてくる。鎌で何とか防ぐ。しかしそれは苦戦だった。完全になを押しさえられ組み敷かれ逃げ出すこともできない有様だった。

その横では髑髏天使がストーンカと闘い続けている。しかし彼にしるその突進をかわすだけで一杯でありこちらの攻撃は全く効いてはいなかった。

## 第十七話 棺桶その二十

「何をしても無駄ということか」

「その通りだ。貴様の攻撃では私は倒せない」

何度めかの突撃をかわされ反転しながら彼はまた言ってきた。

「風ではな」

「風は刃となる」

それでも彼は言う。

「それで斬ることができないというのか」

「その通りだ。そして火もだ」

権天使としての力である。

「それもまた私には通じない」

「貴様のその鎧にはだな」

「そういうことだ。つまり貴様はやがてその体力を消耗していき」

ここからはストーンカが見る闘いの流れだった。

「やがて私の角を受けることになる。それで終わりだ」

「果たしてそうなるか」

「なる。何時かはな」

魔物の言葉は絶対のものがあつた。

「現に貴様の体力は消耗しはじめているな」

「それもわかつているのか」

「動きでわかる」

その絶対の言葉がまた出された。

「すぐにな。さて、それではだ」

「来るか」

また突撃してくるのだった。やはり彼のその突撃をかわすことが次第に難しくなってきた。彼もまた次第に劣勢になるうとしていた。

そしてマンティコアに組み敷かれ防戦となっている死神だが。彼

はその中で今にも倒れんとしていた。牙は容赦なく執拗に彼を喰い千切らんとしていた。

「さあ、何時まであがく？」

魔物は既に勝ち誇ってさえた。

「いずれは力尽き俺の牙に倒れるがな」

「勝ったつもりか。既に」

「では勝てるというのか？」

赤い光を放つ目にもそれが出ていた。

「今の状態の貴様が俺に」

「できると言えばどうだ？」

「戯言を」

やはりそれを信じようとしなかった。

「そのようにいくものか。今の貴様ではな」

「一つ見せていないものがある」

だが死神は落ち着き払った声で彼に告げてきた。

「貴様にはな。まだ見せていないものがあるのだ」

「まだだと!？」

「そうだ。私はただ宙に浮かんだり幻術を使ったりするわけではな  
い」

その二つだけではないと言っただった。

「私の最も得意とする術はだ」

「それは一体」

「これだ」

その言葉と共にであった。不意に彼を完全に組み敷くマンティコアの周りに幾つもの人影が出て来た。何とその人影は。

「何だとっ!？これは」

「これが私の切り札だ」

組み敷かれてもそれでも自信に満ちた言葉を出せたのだった。

「これこそはな」

「馬鹿な、この術は」

己が組み敷いている死神から目を離しその幾つもの人影を見て驚きの言葉をあげていた。

「この状況で使えるというのか」

「もつと言えば何時でも使える」

死神はさらに言った。

「好きな時にな」

「くっ、それが神の力だというのか」

「その通りだ。さあ我が分け身達よ」

その自分自身達に対しても告げるのだった。

「攻める。好きなようにな」

「ちいっ！」

マンティコアは己の上から鎌が一齐に振り下ろされるのを感じ咄嗟に前に跳んだ。それにより間一髪でかわし体勢を立て直すのだった。

そのうえで死神に顔を戻す。見れば彼は何人もの自分自身に囲まれ構えを取っていた。それまでの劣勢を完全に覆ってしまった。

「まさかここでその術を使うとはな」

「切り札は取っておくものだ」

彼は忌々しげに己を見る魔物に目を向けて言っのだった。

## 第十七話 棺桶その二十一

「こうした時の為にな」

「何と忌々しい奴だ」

「忌々しいがそうでなかるうがだ」

死神の返す言葉は魔物とは逆に傲然としたものになっていた。

「勝てばいいのだ。違うか？」

「その通りだ。しかも堂々とか」

「私は策は弄しない」

それはしないと言っているのである。

「しかしだ。カードは切る」

「それが今というわけか」

「その通りだ。では行くぞ」

一人だけではなかった。全ての死神が動く。まるで流れるようにそれぞれ左右に動きそうしてそのうえでマンティコアを完全に困らせてしまった。

「その魂、刈ってやる」

言いながら一気に間合いを詰めそのうえで鎌を一斉に一閃させた。それは最早マンティコアとて避けられるものではなかった。彼はその鎌を全て受けてしまった。全身から血を流し動きを止めてしまった。

「おのれ……俺がここで倒されるか」

「貴様の魂は今から冥府に行く」

攻撃を終えた死神はすぐに一人に戻っていく。何人かいたのが次第に影の様に横に動いていき一人になっていく。そのうえで魔物に告げていた。

「これでな」

「死神の鎌に斬られた者は冥府に送られる」

魔物はまだ生きていた。しかし声は既に途切れ途切れになってい

た。その途切れ途切れに出される声で最後に語っているのである。

「無念だ」

「それ以上何かを貪りたければ冥府で貪るのだな」

死神は徐々にその身体を紅蓮の炎に包んでいく魔物に対してまた告げた。

「好きなだけな」

「ではそうさせてもらう」

彼はその言葉に頷いた。そうしてそのうえで紅蓮の炎の中に消えていく。彼等の闘いは死神の勝利で幕をおろしたのだった。

そしてそのうえで右手を見る。そこではまだ髑髏天使とストーン力が闘っていた。しかし彼はここでは動こうとはしないのであった。「見せてもらうぞ。貴様の闘いを」

髑髏天使の闘いぶりを見るだけだった。決して動かずそのうえで見るのだった。

ストーンカと髑髏天使の闘いは続いていた。しかし髑髏天使は魔物の次から次に来る突撃をかわしはしていたが疲れが次第に出てきていた。空を舞ってもそこにも突撃が来る。魔物は跳躍力もかなりのもので空中戦まで行っていたのだ。

「空まで来ることができるのか」

「私の脚を甘く見ないことだ」

一旦空への突撃を敢行しそのうえで着地し上に位置する髑髏天使に対して告げていた。

「例えば貴様が空にいようとともどうということはない」

「攻撃は可能か」

「私は空を飛ぶ驚さえも貫くことができる」

その言葉が出された瞬間に彼の二本の角が黒光りする。

「貴様とてな」

「そうか。ならば空は止めだ」

髑髏天使は彼の言葉を受けて翼をゆっくりと羽ばたかせてそのうえで着地した。そうしてそのうえで再び地上にて彼と対峙するのだ



った。

「この地上でケリをつける」

「だが貴様は私に勝てるのか？」

ストーンカはまた突撃の姿勢を店ながら彼に問うてきた。

「そろそろ体力が限界ではないのか？既に」

「だとしたらどうだというのだ？」

「私の勝ちだ」

魔物の声はもう勝利を見ているものだった。

「間も無くな。今度で決めてやろう」

「くっ……」

最早動きのキレは落ちていた。これまでの様な動きはできない。ならばそれだけで彼の運命は決まる。何故なら今までですら紙一重でかわしていたからだ。

そうしてこちらからの攻撃は効かない。最早手詰まりと言ってもいい状況であった。しかしだった。彼はここでふと思いついたのだ。つた。

「どの様な魔物でもだ」

ストーンカを見つつ述べる。

「その身体で弱点はある。そして」

「続いて思いついたことは。」

「風は切るだけではない」

「このことだった。」

第十七話 棺桶その二十二

「そうだ。ならばだ」

「行くぞ」

魔物は今まさに突撃せんとしていた。

「これで最後だ」

「そうだ、確かに最後だ」

髑髏天使は両手に持つ剣を構えながら言葉を返した。

「だが。それは俺ではない」

「ほう。まだあがくというのか」

「何かをしないよりは何かをする方がいい」

これは彼の普段からの考えでもあった。

「だからだ。俺は今これをする」

「私に貴様の攻撃は通じないのだがな」

これは脅しではない。確信だった。

「それを見せてやろう。またな」

「貴様をそのまま斬ることは不可能だ」

このことは最早よくわかっていることだった。

「だが」

「だが。何だ？」

「やり方はある。それを見せてやる」

言いながらその全身に風をまとっていく。凄まじい風がその全身

を覆っていく。

「そして勝つ」

「勝つというのか。私に」

「来い、そして死ね」

闘志に燃え盛る目で魔物に告げた。

「この俺の剣でな」

「何をするつもりかは知らんが」

魔物の右の前足がガツ、ガツ、と土を払った。

「貴様では私には勝てない」

「少なくともこれまでのやり方ではな」

髑髏天使は身構えつつ魔物にまた言葉を返す。

「勝てはしないだろうな」

「では私が勝つ」

魔物はすぐにそう結論付けた。

「貴様の攻撃が通用しないのだからな」

「それはあくまで今までの話だ」

しかしそれはあくまで今までだと限定するのだった。

「これからは違う」

「ではそれを見せてみるのだな」

それができる筈がないとはつきり言っていた。彼は既に勝利を確信していた。

「今すぐな」

「では来るのだ」

今まさに突撃せんとしてきている魔物を見据えていた。

魔物は今度は何も言わなかった。そうして一直線に突き進んでくる。髑髏天使はその彼に対して右手に持っているその剣を振るった。しかし今度放ったのは鎌イ足ではなかった。

「それは!？」

「これが俺の出した答えだ」

こう言うのだった。彼が出したものは竜巻だった。

その竜巻は一直線にストーンカに向かう。鎌イ足とは変わらない速さで。

一直線に突き進む魔物をそれで止めてしまった。一步も動けなくなっただのだ。

「何っ、私の突進を？」

「確かに貴様の突進は相当な衝撃力がある」

髑髏天使はまだ身構えていた。

「しかしだ。止めることはできる」

「止めたただけでは何にもなりはしないがな」

「無論これだけではない」

右手から出した竜巻だけではない、彼もまた断言した。

そして次の瞬間には今度は自分から前に出た。この闘いで彼がはじめて取った行動だった。

突進だった。竜巻により動きが取れなくなっている魔物に向かって突進しそのうえで。今度は左手に持っている剣を魔物の目の前で振るったのだった。

そしてまた竜巻が生じた。その竜巻で上に飛ばす。巨体がそのまま上にあがったのだ。

「何っ、私の身体が!?!」

「風の力を甘く見ないことだ」

上にあがった魔物の巨体を見上げながら告げた言葉だ。

「ありとあらゆるものを吹き飛ばすことができるのだ」

「くっ、そしてか」

「そう、そしてだ」

魔物を見上げながら言葉を続ける。そうしながらまた身構えていた。

そのうえで上に飛んだ。彼が狙うのはその魔物なのを言うまでもない。だが狙っていたのは今までとは違う場所であった。

彼が狙ったのは腹だった。その腹に向かって右手の剣を突き出す。その剣は一直線に腹に突き刺さった。それと共に赤い鮮血がほとぼしり出る。

## 第十七話 棺桶その二十三

髑髏天使はすぐにその腹から剣を抜きそのまま上昇する。そのうえで空中で体勢を立て直し着地する。その後ろに魔物の巨体が落ち地響きを立てた。

「この通りだ」

「くっ、まさか私の腹を狙ったのか」

「確かに貴様の鎧は堅固だ」

彼のその皮を鎧と表現していた。

「しかしだ。それでも弱点はある」

「それが腹だというのだな」

「どのような存在でも腹は弱いものだ」

生あるものはどんなものでもということだった。

「それを突いただけだ」

「その通りだ。だが竜巻を使ってそれをやるとはな

「風だ」

また風のことを話に出す。

「風にはこうした使い方もある。もつとも今それで気付いたのだがな」

「だが。勝利を収めたのは事実だ」

「そうだ、俺は勝った」

まだ立ち続けている魔物に目を向けていた。魔物は地面に叩き付けられたがそこからすぐに起き上がったのだ。それはまさに誇りから来るものであった。

「貴様に。竜巻を使ってな」

「見事だと言っておこう」

魔物はその彼を認めるのだった。

「では。私はこれでな」

次第にその巨体に青白い炎が生じてきていた。

「去らせてもらおう」

「では俺はそれを見届けよう」

髑髏天使は彼から目を離さなかった。

「こうしてな」

「礼を言う」

今度の魔物の言葉はこれだった。

「貴様のその心遣い。まさに戦士だ」

「俺は戦士ではない」

しかし髑髏天使は魔物の今の言葉は否定した。

「戦士ではな」

「では何だというのだ？」

「天使だ」

魔物の問いに返した言葉はこれであった。

「俺は髑髏天使だ。他の何者でもない」

「そうか。そうだな」

今の言葉を聞いた魔物の声が微笑んだ。

「髑髏天使だったな。確かに」

「その通りだ。俺は髑髏天使だ」

彼はこのことをまた告げた。

「それ以外の何でもない」

「では髑髏天使よ」

遂にその全身を青白い炎に包ませながら最後の言葉を述べてきた。

「さらばだ」

最後にこう言い残し炎の中に消えた。こうして髑髏天使のここでの闘いは終わった。闘いが終わると彼は静かに死神に対して顔を向けた。

「貴様の方も終わったようだな」

「そうだ。私の方もな」

彼もまた髑髏天使のその言葉に伝えてきた。

「終わらせた」

「随分と手強そうな魔物だったが」

「何、大したことはなかった」

苦戦したという意識は確かに彼にはなかった。

「あの程度で私は倒せはしない」

「神だからか」

「そういうことだ。神の力ではな」

その神の力も認めていた。

「どうということはない。それこそ魔神でもなければ私は倒せはしない」

「そうか。では気にしなくて正解だったな」

「私もまた貴様のことは気にしてはいなかった」

それは彼自身もというのだった。

「全くな」

「勝つと思っていたのか？」

「そんなことも考えていなかった」

「俺が敗れてもどうでもよかったのか」

「そうだ。どうでもいいことだった」

実に素っ気無く返す死神だった。

## 第十七話 棺桶その二十四

「貴様が敗ればその魔物を私が倒す。それだけだ」

「それだけか。しかしそれは適わないことだ」

髑髏天使は確信の言葉で彼のその素っ気無い言葉に返した。

「俺が負けることはないからな」

「相変わらずの自信だな。しかしそれも当然か」

「当然だというのか？」

「貴様はまだ強くなるうとしている」

今度はこのことを彼に話してきた。

「またしてもな」

「強くなるうとしている。ではまた」

「そうだ。階級があがる」

具体的にそれが何かまで話すのだった。

「間も無くな」

「そうか。今は能天使だ」

己の今の階級から考えるのだった。

「その上となると」

「力天使だ。貴様の次の力はな」

「どんな力が楽しみだな」

「楽しみだというのか」

髑髏天使の今の言葉にふと眉を動かしてきた。

「強くなるのが」

「それだけ魔物を倒せるようになる」

だからこそ楽しみだというのだった。

「だからな」

「それだけならばいいがな」

死神の言葉は微かだがその色を変えてきていた。

「貴様がそれだけであればいいがな」



「それだけならばいい？」

「そうだ。貴様は今人はだ」

これは髑髏天使にはわかりきっていたことであり言葉を聞いて妙だと思ふのだった。しかし死神がここで言った言葉はそうではなかったのである。

「だが。これからは変わるのかもな」

「変わるだと。俺がか」

「人であればいい」

彼は人ならばいいとした。

「人としての貴様は私が刈る運命ではない。しかし魔物になったならば」

「何だ？」

「その時はわからない。それは覚えておいてくれ」

「覚えておこう」

こう返しはした。

「意味はわからないがな」

「今はわからなくともいい。しかし覚えておくことだ」

彼はこのことを強調するのだった。

「よくな」

「話はそれで終わりだな」

それが一段落したところでこう言い返すのだった。

「では。帰らせてもらおう」

「人間の世界に戻るのだな」

「俺は最初から人間だ」

応えながら変身を解く。そのうえで髑髏天使から牧村の姿に戻るのだった。そうして牧村の姿でこれまたフードの姿に戻った死神に自分から言った。

「そしてこれからも人間だ」

「人間であり続けるのだな」

「人間でなければ何だというのだ？」

また問い返す牧村だった。

「俺は何だ？人間でなければ」

「今は確かに人間だ」

彼はまた言った。

「人間だ。しかしこれからは変わるかも知れない」

「それも覚えておけというのだな」

「そうだ。覚えておくのだ」

死神の言葉は続く。

「いいな」

「覚えておくだけでいいのなら覚えておく」

話の間にサイドカーが牧村の前に来た。彼が自分の前に来るように頭の中で考えた結果の動きである。

第十七話 棺桶その二十五

「それでいいな」

「まだどうなるかはわからない」

「わからないというのか。貴様が出した話でか」

「それでもわからないことはある」

死神の前にもまた彼のハーレーが来ていた。これまた彼の意志によつて自由に動くことができるようである。

「私でもな」

「そうか。それもわかった」

牧村はそれを聞いてまた言うのだった。

「ではな。俺はこれでだ」

「帰るのだな」

「学校がある」

彼が行くのはそこだった。そこ以外にはなかった。

「これからな。また何かあれば学校に来い」

「わかった。ではそうさせてもらおう」

「しかし。貴様は普段何をしているのだ？」

サイドカーに乗りながらこのことも彼に問うのだった。

「人間の世界にいるのか？それとも」

「そのそれともだ。私は普段はこの世界にはいない」

「このことはしっかりと話すことができるのだった。」

「私がいる本来の世界にいるのだ」

「そうか。貴様の本来の世界にか」

「そして刈るべき命があればこの世界に来る」

「そうしてそのうえで向かうのだった。」

「その時にな」

「では。すぐにこの世界を後にするのだな」

言いながら今度はヘルメットを被るのだった。

「貴様のいるべき世界にな」

「元よりそうさせてもらうつもりだ。ではな」

死神もまたハーレーに乗る。そうしてそのうえで彼もヘルメットを被りそのうえで話すのだった。

「また会おう」

「この世界については何も思っていないようだな」

「少なくともどうしようというつもりはない」

これが死神の考えであった。

「別にな」

「世界を支配しようとしたり意のままにしようということとはか」

「下らないことだ。私は権力を握るつもりはない」

また己の考えを述べるのだった。

「別にな」

「野心はないか」

「この世界は貴様等人間や他の生物のものだ」

「そういえば魔物達も野心はないな」

「魔物にあるのは闘争心だけだ」

それだけだというのだ。

「他にはこれといって何も無い」

「そうだな。関心があるのはそれだけだ」

このこともわかってきている牧村だった。その彼等との闘いを経ているうちにだ。

「他にはないな」

「権力を目指したいのなら目覚せばいい」

それに興味がない者の言葉だった。

「私の興味の外だ」

「俺もまた同じだがな」

「それは確かに同じだ」

死神の言葉の色がまた戻ってきた。

「だが。それが人のものであるようにな」

「ふん、またそれか」

「このことはよく覚えておくことだ」

最後にこう言ってハーレーを発進させ姿を消した。牧村はそれを見届けると彼もまたそのサイドカーで学校に向かうのだった。闘いは終わり日常が戻った。だがこの二つは決して相容れぬものではなく言つならば表と裏なのだった。そうした関係にあるものだった。

第十七話 完

2009・5・16

## 第十八話 力天その一

髑髏天使

第十八話 力天

死神がいたのは。虚空だった。

黒く何も無い。何一つない世界に彼はいた。そこに一人座り何もしていない。ただそこにいるだけだった。

「暇かい？」

「いや」

ふと出て来た声に対して応える。

「別にな」

「暇そうに見えるけれど？」

「しかし暇ではない」

こう声に返すのだった。

「実はな」

「っていうと何か考えてるの？」

「そうだ。考えていることがある」

また声に返す死神だった。

「少しな」

「そういえば人間の世界ではあれだったかな」

声はふと気付いたようにして言ってきた。声だけで姿は見えない。しかし死神はその声の主が誰なのかわかっているようであった。

「また髑髏天使が出て来てるんだよね」

「会っている」

声に素っ気無く述べた。

「既に何度もな」

「考えているのはその髑髏天使のことかな？」

声は彼の話からそれを感じ取ったのだった。

「やっぱり。それ？」

「それだと言えは？」

死神は虚空の中で述べた。

「何を聞きたい？今度は」

「髑髏天使ねえ」

しかし声は答えるより前にその髑髏天使に対して言うのだった。

「あれじゃない。人間じゃない」

「人間か」

「そうだよ。たった五十年に一度現われて魔物と闘うだけで」

実に小さいもののように話していた。

「それだけじゃない、本当にね」

「そうだな。あれは確かに人間だ」

死神もそれは認めた。

「人間だ、紛れもなくな」

「人間はやっぱり人間じゃない」

声は笑いながらまた言ってきた。

「所詮はね。そうでしょ？」

「人間か」

死神は声のその言葉を聞いてまた呟いた。

「人間は人間だ。しかし」

「しかし。どうしたの？」

「面白い存在だ」

こう言うのであった。

「人間としてな。面白い存在だ」

「何かわからないけれど興味持ってるの？」

声は死神のその言葉を聞いてまた述べた。

「その人間がなってる髑髏天使に」

「興味がないと言えは嘘になる」

虚空を見ながら述べる。そこに見えるものは何も無いがそれでも何かを見ていた。彼はそれを見ながらそのうえで話をするのだった。

「全くな」

「何かわからないよ、言ってることがさ」

しかし声は死神の言葉に首を捻るようだった。声だけでその動作はわからないがそれでもだった。声はそうした響きになっていた。

「そりゃ僕達の中にも元は人間だった存在だっているよ」

「そうだな」

「まあ僕達はそうじゃないけれどね」

このやり取りは死神の素性をそのまま語っていた。実に率直に。

「私もだ。だが」

「興味を持つんだ」

「ただの人間だがそれが変わろうともしている」

「変わるって？」

「何かが出ようとしている」

彼はまた言った。

「あの人間からな」

「何か？」

「はつきり言えば危険な存在だ」

死神の目が動いた。だが前には何も無い。渦巻く漆黒があるだけで存在しているものは何も無い。しかしそれでも彼はそこに何かを見ているのだった。



## 第十八話 力天その二

「それが出ようとしている」

「ひょっとしてそれって僕達とは違う存在？」

声はその言葉を聞いてまた彼に尋ねてきた。

「つまりそれは」

「そうだ。貴様が考えている通りのことだ」

こつ答えるのだった。

「それになろうとしている」

「じゃあ置いておいたら危ないんじゃないの？」

声はまた言ってきた。

「今度の髑髏天使は」

「そうだ。しかしだ」

「しかし？」

「あれはまだ人だ」

限定ではあった。しかし人だと言ったのだ。

「それにそれならば動くことはない」

「そうなんだ」

「私が今刈るように言われているのは魔物だけだ」

「じゃあ髑髏天使が魔物になったら？」

「その時は刈る」

こつ言うのである。

「しかしだ。人であるうちはだ」

「わかったよ。君は動かないんだね」

「そして見ていきたいものだ」

言葉は二つであった。危険だと感じながらもそれでいて興味も持っている。相反するものが同時にある、そうした言葉であった。

「これからどうなるかな」

「何かわからないけれど今回の髑髏天使は変わってるんだね」

声は少し考えるような声になっていた。

「僕も向こうの世界に行けたら見られるんだけれどね、詳しく」

「残念だったな」

「そうだね。けれど仕方ないかな」

声は今度は諦観を見せてきた。

「それもね。まあとりあえずさ」

「何だ？」

「私はまたあの世界に行く」

虚空を見たまま声に告げる。

「そしてあの者とまた会う」

「その魔物になっていつてる髑髏天使とだね」

「そうだ。強くなる度に心をなくしていく」

彼の言葉は続く。

「果たしてどうなっていくのかをな」

「そして魔物になれば」

「刈る」

今度は一言だった。

「その時はだ。しかし今は見ていく」

「魔物でない限りはなんだ」

「今の髑髏天使は急激に強くなっていつている」

これは博士も見ていることだった。彼は牧村に対してこのことを語っていた。しかしそれを見ているのは博士だけでなく彼もであったのだ。

「急激にな。それは魔物と幾度も激しい死闘を繰り広げた結果だ」

「その中で魔物に染まっていつてるんだ」

「そうだ。魔物と闘う者は魔物に染まっていく」

彼は言う。

「そうして果てにはだ」

「けれど今までそんな髑髏天使いた？」

声はふとこのことも言った。

「何か記憶にないんだけれど」

「いなかった」

そして死神はこのことも彼に告げた。

「これまではな」

「そうだよ。それにもう能天使だし」

「普通はそこまで早くとも十年はかかる」

「それが数ヶ月だし」

「全てにおいて異常だ」

そしてまた述べるのだった。

「あの髑髏天使はな」

「その異常な髑髏天使がどうなるかな」

声はまた声だけで首を傾げていた。

## 第十八話 力天その三

「本当にね」

「それを見たい。これからな」

「それもわからないんだよね」

声は今度は死神にそれを向けてきていた。姿は見えないままであるがそれでも声の調子でそれがわかるのだった。

「君ってそんなに人間に興味があつたっけ」

「人間は死ぬものだ」

死ぬからこそ人間である。死なない人間なぞこの世には存在しない。それはそのまま神と人間を分けるものの一つでもあるのである。

「それだけだった」

「言葉が過去形になつてるよ」

「わかつている。あえて言つたからな」

「だからなのだった。」

「今はな」

「死神の仕事は死者を冥府に送ることだからね」

「案内人だ」

大抵の死者は運命によつて死ぬ。その死者を迎えてそのうえで冥界まで案内する。普段才死神の仕事はそれだけなのである。戦うこととはないのだ。

「そして人間はその案内される存在だ。それだけだった」

「それだけだったよね。けれど今の君は違うね」

「興味があるからだね」

「そういうことだ。それではだ」

「ここで立つのだった。闇の中で。」

「行く。またな」

「その人間の世界だね」

「そうだ。魔物の気配がまたした」

彼は静かに述べた。

「主神は何と仰ってる？」

「さあ。いつも通りじゃないの？」

声はあまりはつきりとは答えなかった。

「やっぱり。君任せだと思っよ」

「そうか。いつもと同じか」

「だってあれじゃない」

声の言葉は続く。

「あの人最近忙しいし」

「また奥方と衝突されているのか」

「みたいだよ。豊穰の女神との浮気がばれたみたいでね」

「相変わらずお好きなことだ」

死神はそれを聞いて静かに述べた。

「女なぞの何処がいいのか」

「いいよ。かなりね」

しかし声はこう言って笑うのだった。

「あれこそがこの世での最高の喜びだね」

「私はそういう身体ではないからな」

やはり女のことに対しては素っ気無いのだった。全く興味がな

といった顔である。

「女を愛することも男を愛することもない」

「何かそれって物凄く損じゃない？」

「別にな。元からそうだから何の関係もない」

言葉の調子も変わらない。

「それだけだ。ではまたな」

「何だよ、もう行くの」

「私は話すことは終わった」

「困るなあ。僕最近退屈で仕方ないのに」

「退屈ならその女とでも遊んでいろ」

皮肉にも聞こえる言葉だが今は決してそうではなかった。彼にし

てみれば女には何の興味もないものだからやはりどうでもいいと思  
つての言葉なのだ。

「好きなだけな」

「そうしようかな」

「それに飽きたのなら男と遊べ」

「ああ、それもあるね」

言われて気付いたような感じだった。

「男もいいんだよね」

「男とも遊ぶのだな」

「僕は博愛主義者だから」

また笑う声だった。

「そっちも好きなんだね」

「好きなようにしろ」

「うん。じゃあそうするよ」

「どのみち私には関係のない話だ」

「じゃあ今度飲もう」

声は去ろうとする死神に話題を変えてきた。

## 第十八話 力天その四

「黄金酒でもね」

「それはいいな」

今度は興味を見せる死神だった。

「では帰ったら二人で飲むか」

「待ってるよ。それと御馳走も用意しておくから」

「私も人間の食べ物を持って来ようか」

「そうだね。人間もあれで舌が肥えてるからね」

そういうことは知っているらしい。言葉の色にも出ている。

「面白いね。じゃあそれでね」

「楽しみにしているのだな」

「うん、人間に興味はないけれど食べ物にはね」

あるというのだった。

「あるよ。じゃあそれ頼むよ」

「わかった。楽しみにしている」

「そうさせてもらうよ。それじゃあね」

死神は虚空の暗闇を後にした。そのうえで人の世界に戻った。その頃牧村はまた妹と共に家にいた。庭に出てフェシングの素振りをしていた。

「相変わらず精が出るわね」

「そうか」

未久の言葉にも素っ気無く返すだけで一心不乱に素振りを続けている。

「そういうふうに見えるか」

「見えるわよ。もう顔中汗だらけじゃない」

妹は窓のところ立ってそこから兄を見ながら言う。今彼女はその左手にキーキが乗った皿を持ち右手のフォークで口の中に入れていた。そのうえで兄に対して言っていた。

「物凄く。千回は振ってるわよね」

「そうだな」

今も振りながら言うのだった。

「ではあと千回か」

「二千回ねえ。よくそんなに振るわね」

「フェシングの素振りはこれで終わりだ」

しかし彼はここでその手に持っているサーベルは置くのだった。

「それはな」

「じゃあ後はどうするのって………決まってるのね」

「そうだ、これだ」

すぐ側の壁のところにおいていたそのテニスのラケットを取るのだった。それを左手に持って早速振り始めるのだった。身体を左右に動かしながら。

「こうしてな」

「そうね。あれっ!？」

ここで未久はあることに気付いた。兄のその素振りを見て。

「確かお兄ちゃん右利きだったわよね」

「そうだ」

彼もそれを認める。

「それは知っているな」

「まあね。生まれた時からずっと一緒にいるんだし」

未久も頷く。彼女にしる兄の利き腕のことはとづくに知っていた。兄妹ならばこうしたことは知っていて当然であった。むしろ知らない方がおかしな話である。

「知っていたわよ」

「そうだな。知っていてね」

「じゃあ何でなのよ」

ここで妹の言葉が響められた。

「何で今左手で振ってるの。そういえばさっきのサーベルだって」  
その話もするのだった。



「左手で振ってたじゃない」

「そうだ」

「何でなの？右手怪我したとか？」

「怪我はしていない」

「そうではないというのだ。」

「怪我はな。してはいない」

「じゃあ何で左手で振るのよ」

「右だけでは不十分だ」

「こつ妹に対して告げながらその左手で振り続けている。相変わらず左右に動きながら。」

「両手でないと」

「両手って？両利きになるの？」

「そのつもりだが。おかしいか」

「おかしくはないけれど」

「しかしそうは言っても首を右に捻ってはいる。」

## 第十八話 力天その五

「けれど。意味があるの？何か」

「俺にとつてはな」

やはり言葉はここでも素っ気無いものではある。

「ある。充分にな」

「意味があるのね」

今度は首を左に捻りながら述べた。

「ちゃんと。お兄ちゃんにとつては」

「そつだ。右だけでは勝てないかも知れない」

「試合に？」

「そんなところだ。右だけではない」

また言うのだった。

「両方使えてこそだ。それでやつと勝てる相手もいる」

「確かテニスもフェシングも使う手は一本だけだったと思うけれど」

兄の髑髏天使としての顔を知らないからこそその言葉だった。だから

「こそ今も試合のことだと考えたのである。それが違つとは夢にも思わずにだ。」

「それでも左もつて」

「今までは左手は護るだけだった」

牧村の言葉は髑髏天使としての言葉だ。当然ながら未久にはわからないものである。

「しかし。右手でも護り左手でも攻めることができればだ」

「何か意味わからないんだけど」

「俺にはわかる」

ここでもこんな調子である。夜の庭で家の中からの灯りに照らされその汗が輝いて見える。顔だけでなく腕からも全身からも汗をほとぼしらせている。

「俺にはな」

「とりあえず話していつて言っても話してくれなさそうね」

兄の性格はわかっているのだった。

「何かもう」

「悪いがその通りだ」

そしてその言葉にこう返すのが牧村であった。髑髏天使のことだから当然だがそれでもあえてこう答えてみせるところがある。

「言いつもりはない」

「だったらいいわ、それで」

兄の性格をわかったうえでの返事だった。

「わかつてるし、お兄ちゃんの性格」

「ならいいがな」

「それはわかったけれど」

それはまだいいとするのだった。

「けれどよ。それでもよ」

「何だ？」

「少し休んだら？」

こう兄に言ってきたのだった。

「もう。フェシングの素振り千回したのよね」

「そうだ」

「だったら一度休んだら？」

またこう勧めてきた。

「ケーキあるけれど」

「そのケーキか」

「ううん、チーズケーキ」

未久が今食べているのは苺ケーキだ。白いホイップで付けられたクリームとその赤い苺がケーキの外と中にある。中にあるスライスされた苺の赤もまた映えている。

「それ。残ってるわよ」

「チョコレートケーキもなかったか？」

「さっき私が食べたわよ」

なお今彼女が食べているのは苺ケーキである。

「残念だけれど」

「おい、二つ食べたのか？」

テニスの素振りをして左右に激しく動きながらも妹に顔を向けて問うた。

「二つ共か」

「チーズケーキだけじゃなくてモンブランもあるわよ」

それも話に出すのだった。

「それもね。それでいいでしょ？」

「チーズケーキにモンブランか」

「別に嫌いじゃないわよね」

このことも兄に尋ねてきた。相変わらず苺ケーキを食べながら。

今度はケーキの上にあるクリームをフォークですくってそのうえで口の中に入れてきた。その穏やかであるがほんのりと口の中を支配するミルクの甘さが彼女の口の中を支配していた。

「どちらも」

「ああ。どちらもな」

彼もそれは認める。相変わらず素振りを続けながら。

「それは好きだ」

「じゃあ問題ないわよね」

未久はまた言った。

## 第十八話 力天その六

「その二つでね。いいわよね」

「いい。それじゃあこの素振りを終わってからな」

「最後までするの？結局」

「今日はこれで終わりだ」

その言葉の間も素振りを続けるのだった。

「トレーニングはな」

「後はシャワーを浴びてゆっくりなのね」

「そういうことだ。ケーキはそれからだ」

そこまでしてからというのだった。

「シャワーを浴びてからな」

「その間に私がまた一個食べるかもよ」

「そうすれば太るぞ」

悪戯っぽく笑って言うてきた妹に今度は顔を向けずそのまま真顔で返すのだった。

「太りたいのか？それならいいが」

「あのね、その言い方ないんじゃないの？」

流石に今の兄の言葉には顔を顰めさせるのだった。

「太るって。女の子には禁句でしょ」

「禁句か」

「そうよ。太るとかブスとかそういうのは禁句よ」

このことを尖った言葉で言うてきた。

「何があっても絶対にね」

「チビとか胸が小さいとかだといいいのだな」

「それは別にいいわ」

何故かそれはいいとするのだがやはりこれにも彼女なりに理由はあった。

「それはね」

「何故これはいいのだ？」  
「だってどっちも好きだって人がいるから」  
「だからだというのである。」  
「背が低い娘が好きっていう人もね」  
「それに胸もか」  
「そうよ。胸もね」  
「その胸もなのだった。」  
「胸が小さいのがいいって人もいるじゃない。だからいいのよ」  
「太るのもそうだと思うがな」  
「牧村はここではあえてブスという言葉を言わなかった。」  
「太っている娘がいいという奴もいる」  
「私太りたくないから」  
「あくまで自分の考えではある。」  
「絶対にね」  
「だから嫌か」  
「そうよ。だからその言葉取り消してよ」  
「ならケーキは置いておけ」  
「見事な駆け引きであった。」  
「わかったな。そういうことだ」  
「わかったわよ」  
「そして未久も慥然としながらであるが頷くのだった。」  
「それじゃあよ。ケーキ二つ共置いておくわね」  
「そうしてくれ」  
「あと紅茶もあるけれど」  
「それももらおう」  
「じゃあ淹れておくわね」  
「もう淹れているものはカップに移しておいてだ」  
「しかしここで独特のこだわりを見せるのだった。」  
「後は自分で淹れる」  
「そうするの」

「自分で淹れるのもまたいい」

こう言うのだった。

「もっともあの店のマスターが淹れたのもいいがな」

「それと若奈さんの淹れたのもでしょ」

未久はここで笑って言うてきた。

「そうでしょ？違うかしら」

「その名前は出すな」

素振りは続けているが動きに少し無駄なものが入った。

「いいな」

「何よ、焦ってるの？」

「焦ってはいない」

表情にも出さないがやはり言葉にはそれが微かに見られた。

## 第十八話 力天その七

「別にな」

「そう？だったらいいけれど」

「とにかくだ。お茶は自分で淹れる」

「あらためてこのことを妹に話した」

「いいな。それで」

「ええ。私が飲むんじゃないし」

未久の言葉は完全に他人事であった。それも当然であるが。

「好きにして。こだわってね」

「わかった」

「けれどよ。お兄ちゃんってココアとかコーヒーも飲むわよね」

「どちらも好きだ」

彼もどちらも好きなのだった。甘党であるのでココアもよく飲むのである。

「それにチョコレートもな」

「チョコレートなら淹れてあげるけれど」

「ここで未久は自分から言ってきた。

「よかつたらだけれど。どう？」

「チョコレートか」

「お砂糖を効かせてね」

砂糖のところのにこりと笑ってみせてきた。

「どう？飲む？」

「いや、いい」

しかし彼はそれはいいと言っただった。

「やはり今は紅茶だ」

「そうなの」

「それもミルクティーだ。ロイヤルミルクティーにする」

「今日はそれなのね」



「ロシアンティーもいいがな」

だがそれでもロイヤルミルクティーだというのがである。

「今日はそれだ」

「ロイヤルミルクティーか」

未久は今度はそれについて考えを巡らせた。

「それもいいわよね」

「御前も飲むか？」

妹に対しても勧めるのだった。

「よかつたら淹れるぞ」

「いえ、私はいいわ」

今度は彼女が断るのだった。しかし無表情で相変わらず素振りを続けている兄とは違い妹はにこりと笑ってみせていた。そのうえで話すのだった。

「自分のがあるからそれで充分よ」

「わかった。それではな」

「ええ。ところでお兄ちゃん」

そのにこりとした笑みのまま話を変えてきた未久だった。

「その若奈さんとはどうなの？」

「どうかとはどういうことだ？」

「だからよ。仲は進展したの？」

「御前に言う話じゃない」

やはり感情が言葉に出ていた。微妙にはあるが儼然としているものだった。

「それはな」

「何よ、私の義姉さんになる人でしょ」

「どうしてそうなる？」

声の儼然とした色がさらに強く深くなる。

「俺はそんなことは一言も言っていないぞ」

「あれっ、そうじゃないの？」

今度はからかうような笑みになっての言葉だった。

「結婚するんでしょ？大学卒業したら」

「誰からそんな物語を聞いた」

声は憮然としたものから次第に怒りのものへと変わってきていた。

「俺はそんなことは言ったことも話したこともない」

「けれどさ。付き合ってるんでしょ？」

あくまでこう言って引かない未久だった。

「そうなんですよ？だったらやっぱり」

「違うと言っても信じないな」

「うん、全然」

やはりからかうようにして言うのだった。ケーキを食べ続けているその口元も緩んでいる。

「今更そんなこと信じないわよ」

「だが言わない」

牧村の言葉も少し意固地な感じになってきていた。

「俺は決してな」

「怒ったの？ひょっとして」

「その通りだ」

今度は全く隠さない。

「今度言ったら許さないからな」

「やれやれ、兄妹の軽いスキンシップじゃない」

妹はここでもからかうような顔であった。

## 第十八話 力天その八

「怒ることもないわよ」

「人には言つていいことと悪いことがある」

牧村の言葉は少しずつであるが本気になろうとしていた。

「それは覚えておけ」

「はいはい、わかつたわよ」

ここでやっとわかつたふりをしてきた未久だった。

「全く。私のことは何も言わないのに」

「そういえば御前今は」

「ええ。順調に付き合ってるわよ」

少し笑顔を見せてきたのだった。

「私達もね」

「そうか。確か名前は」

「近藤君よ。近藤忠臣君」

未久の口からこの名前が出て来たのであった。

「順調に交際してるわよ」

「ならいい」

「けれど特に何も言わないのね」

「言つのは父さんと母さんの仕事だ」

「こつ言つて何でもないとこつ言つた態度であった。」

「俺が言つことじゃない」

「けれど若し忠臣君が悪い奴だったらどうするの？」

「御前はそんな奴は選ばない」

それはもうわかつているとこつ言つたような返答だった。

「絶対にな」

「信用してくれてるの？」

「わかつているだけだ」

信用ではなく熟知であった。

「俺はもうそれはな」

「そうなの。わかってるの」

「そうだ。御前は人を見る目はある。決して悪い奴を選ばない」  
「ふふふ、わかってるじゃない」

妹も兄の今の言葉を受けて楽しそうに微笑んだ。

「そうよ。私は絶対に変な人間とは一緒にならないから」

「だが若し相手が豹変したらどうする？」

「その時はあれよ。やっつけてやるわよ」

言葉が強いものになった。

「一撃でね。伊達に体操部じゃないわよ」

「体操部も強いのか」

「強いわよ。いつも全身鍛えてるし身体は物凄く柔らかいし」

「こう兄に言うのだった。強い声で。」

「最強に近いのよ。バレリーナだってそうじゃない」

「バレリーナの脚力は尋常じゃない」

牧村はこのことは知っていた。バレリーナは常に足をつま先で使いそのうえで動いている。そして基礎練習を欠かさない。いつも足を使っているからその力も尋常なものではないのである。

「それは知っているがな」

「体操だって同じよ。男の子が下手なことしてきたら」

「その時はか」

「急所を一撃よ」

悪魔的なまでに不敵な笑みを浮かべての言葉であった。

「もうそれで男の子は終わりでしょ」

「終わりも何もそれで人生終わりだ」

牧村はこうまで言うのだった。

「そこを狙われたら男は終わりだ」

「そうでしょ。だったら余計にね」

「あとは喉を狙うのもいい」

闘いの経験からの言葉である。

「そこを突いてもやはりな」

「終わりなのね」

「これは男だけじゃない。女もだ」

そしてそれは全体だと言っているのである。

「喉はかなり効く」

「あれよね。ブッチャーさんの地獄突き」

「それだ。それを決めればいい」

「わかったわ。それじゃあ喉もね」

「肩甲骨を狙うのもいいし脳天を狙うのもいい」

話は徐々に物騒なものになっていく。

「腹もな。狙える場所は幾らでもある」

「それはわかるけれど何かスポーツの範疇超えてない？」

「闘うとなれば別だ」

相変わらず素振りを左右に動きながらしつこく言っていた。

## 第十八話 力天その九

「それも全くな」

「闘うとかって」

未久は流石に兄の今の言葉には引くものがあつた。

「かなり違うような気がするけれど」

「そうか」

「そうよ。確かにいざつて時に身を守るのは大事だけれど」

それは彼女もわかつていた。しかしなのであつた。

「そんな闘うとかって。違うじゃないの？」

「そうだったな」

牧村もここで気付いたのだつた。これは確かにその通りだ。彼は  
ついつい髑髏天使として言葉を出してしまつていたのである。

「それはな。違つた」

「そうよ。けれどまあ」

だが兄が何であるかを知らない未久はこれで話を終わらせた。そ  
うしてそのうえでまた話すのだつた。

「いざつて時に身体を守るようにしておくのは大事よね」

「その通りだ。それはわかつたな」

「ええ、よくね」

この言葉には素直に頷くことができた。

「わかつたわ。いざつて時は本当にね」

「容赦することはない」

そうした相手には、ということだつた。

「向こうが傷を負つても正当防衛だからな」

「複数でもなのね」

「そういう奴は一人潰せばそれで終わる」

実にシビアな見方に基く言葉だつた。

「一人目の前で潰れたらそれでかなり怯むからな」

「まずは最初が肝心ってことね」

「最初の奴を潰せばそれで勢いができる」

「その勢いに乗ってなのね」

「そうだ。一気に倒す」

牧村もそのことをそのまま妹に告げる。

「そのままな」

「身体を守るのにも勢いなものね」

「流れを作ることが肝心だ」

「こつも妹に話していく。」

「何事もな」

「そうよね。それはわかるわ」

未久も勢いや流れという言葉には納得した顔で頷くことができた。

「体操だつて練習してる時とか実際の実技の時でも勢いに乗ったら

そのままいけるからね」

「相手がいれば尚更だ」

「ええ。相手をそのまま勢いの中に入れるのね」

「その通りだ。それではだ」

「ええ。何なの？」

「これで素振りは終わりだ」

「ここまで動かしたところで実際に身体を動かすのを止める牧村だった。」

「これでな」

「じゃあ今日の練習はこれで終わりね」

未久もここでケーキを食べ終えた。全て食べ終え皿の上には何もなくなっていた。

「お疲れ様」

「後はシャワーを浴びてケーキを食べて」

「これからのことを話していく。」

「それで後はストレッチをして寝るだけだ」

「ストレッチをしてそれから寝るのね」

「そうだ。それで最後だ」

最後なのだと言っているのである。

「今日はな」

「何か毎日よく続くわね」

「生き残る為だ」

ラケットとサーベルを両手に持ってそのうえで玄関に向かいながら述べた。

「全てな」

「生き残る為っていうのも極端だと思うけれど」

髑髏天使のことを知らないのならばこう言うのも当然だった。

「確かに健康の為にはいいけれどね」

「じゃあシャワーを浴びるからな」

「ええ。どうぞ」

こうしてこの日はシャワーを浴びケーキを食べたうえでストレッチをしてから寝るのだった。その次の日牧村はまた博士の研究室にいた。そうしてそこでまた魔神について話していた。

「そうか。六柱目の魔神が出て来たのか」

「ヴァンパイアか」

彼はその名前も告げた。

「それが六柱目の魔神だ。棺桶の中から出て来た」

「ふむ。それは資料にあった通りだな」

博士は机に座っていつも通り本を読んでいた。その本は紙でできているがやはりかなり古ぼけている。ページの端々には虫食いもある。博士はその端を手に取りそのうえで読んでいるのだ。



## 第十八話 力天その十

「この本にのう」

「その本にその六柱目の魔神のことが載っているのだな」

「東欧の本じゃよ」

博士は言った。

「ルーマニア。いやこれはハンガリーじゃかな」

「ハンガリー!？」

「吸血鬼はルーマニアだと言いたいのかのう?」

「そうではないのか?」

実際にそうではないかと言う牧村だった。彼はいつも通り壁にその背をもたれかけさせそのうえで立って博士と話をしているのだ。

「吸血鬼といえば」

「確かにあの国でのものがかなり有名じゃかな」

博士もある程度はそうだと答えるのだった。

「しかしそれだけではないのじゃよ」

「それだけではないのか」

「そうじゃ。吸血鬼はルーマニアだけではない」

そしてこう言うのだった。

「ルーマニアだけではのう。東欧全体におけるのじゃよ」

「東欧全体にか」

「うむ」

博士は牧村の言葉に対して頷いてみせた。

「そうじゃ。前に話したと思うが」

「そういえばそうだったか」

とりあえず記憶を辿りながら答える牧村だった。

「覚えていないが」

「まあその前提で話をするとじゃ」

とりあえずそういうことにして話を進めるのだった。

「東欧だけでなく世界中にそうした話がある」

「吸血鬼はルーマニアだけではなくか」

「左様。当然日本にもおるし」

我が国においてもいると語るのだった。

「本場にどの国でもおるのじゃよ」

「血を吸う魔物はか」

「うむ。そしてあのヴァンパイアはそれの主でもある」

魔神として、ということだった。

「用心するようにな。手強いぞ」

「手強いのはよくわかる」

それについては言を持たないといった感じだった。

「しかし。あいつともやがては闘わなければならぬな」

「そうじゃろうな。このまま強くなればな」

「わかった」

牧村はここまで聞いてまた頷いてみせた。

「それもな」

「それでじゃ」

博士は話を変えてきた。

「昨日ケーキを食ったじゃろう」

「何故わかった？」

「僕達が教えたの、博士に」

「そういうこと」

ここでまた妖怪達が出て来た。いつもと全く変わらない能天気なまでの陽気さで話に入って来た。そうしてそのうえで牧村に対して言うのだった。

「ケーキを食べたことをね」

「言ったんだよ」

「匂いでか」

「チーズの匂いに。それに」

「モンブランだよ」

「その通りだ」

まさにそのものズバリであった。牧村も内心は隠しながら答えた。

「昨日食べたのはその二つだ」

「美味しかった？」

「それでそのチーズケーキとモンブランは」

「正直に言つて美味かった」

このことを隠さずに答える牧村だった。今度は隠さなかった。

「あのケーキはな」

「いいよね、美味しいケーキが食べられて」

「全くだよ」

「しかしそういふ御前達も」

今彼等が床に車座になつて座りながら食べているそれを見て言うのだった。

## 第十八話 力天その十一

「今ケーキを食べているな」

「そうそう、ザッハトルテ」

「山月堂のね」

「ザッハトルテか」

「わしの大好物の一つなのじゃよ」

博士が満面の笑顔でまた言ってきた。見ればここでもく子から青と白の欧風の当期の皿に入れられたそのザッハトルテが彼の側に置かれた。黒くチョコレートそのものさえ思わせるそのトルテが置かれるのだった。当然銀の小さなフォークも添えられていた。

「このザッハトルテはな」

「それも好きだったのか」

「オーストリアに行った時に覚えたんじゃよ」

またにこにこしながら牧村に話すのだった。

「この味をのう」

「本場でだな」

「うむ。やはりザッハトルテはオーストリアじゃ」

確かな声での言葉だった。

「じゃが実際のところ日本のものもじゃ」

「美味いか」

「日本人は凄いぞ」

自国民のことだから必然的にそれは自分をも褒めていると言えた。逆に言えば自国を貶める者は自分自身も貶めていることになる。それに気付いていない愚か者が知識人と呼ばれる人種に実に多いというのはこれは日本特有の異常現象なのであろうか。

「ちゃんとオーストリアの味を再現してくれて」

「そしてか」

「その味さえ超えておるのかもな、もう」

「まさかとは思うが」

牧村はこの評価には流石に懐疑的に返した。

「そこまではな」

「いやいや、しかし舌には合っておるぞ」

だが博士はここでは舌を話に出すのだった。

「舌にはのう」

「舌にはか」

「日本人には日本人の舌がある」

まずはこう言いそのうえで。

「オーストリア人にはオーストリア人の舌があるじゃろう」

「では日本人の舌に合うザツハトルテか」

「そうということじゃ。オーストリア人が作るのはオーストリア人の舌に合うザツハトルテじゃ」

これは必然的にそうなることであつた。オーストリア人が作るのならはその嗜好は必然的にオーストリア人好みのザツハトルテになる。そういうことだ。

「そうじゃろ？それは」

「確かにな」

牧村もそれはわかるので静かに頷いた。

「それはその通りだ」

「それでじゃよ。このザツハトルテはじゃ」

ザツハトルテの話が続く。その山月堂のだ。

「日本人による日本人の日本人の為のザツハトルテなのじゃよ」

「リンカーンだな」

今の博士の言葉の元が何かはすぐにわかることだった。

「それは」

「そうじゃよ。まさに日本人の為のザツハトルテじゃよ」

しかし博士はそれでも言うのだった。

「じゃから美味しいのじゃよ」

「だから僕達もね」

「美味しく食べられるんだよ」

妖怪達もそのザッハトルテを食べながら笑顔で牧村に告げてきた。

「このザッハトルテ、最高だよ」

「コーヒーにも最高に合うね」

「そのコーヒーもやはり」

「そうじゃ、日本人の為のコーヒーじゃよ」

博士の返答はもう完全に決まっていた。

「これももう」

「全てが日本人の為か」

「そして日本の妖怪の為」

「いいことだよな」

「全くだよ」

「では俺の口にも合うのか」

牧村がふとこう考えたその時間だった。そつとろく子の首が彼のところに出て来た。そうしてそのうえで身体を彼のところにやって来てそのうえで博士のものと全く同じ皿を出すのであった。

「どうぞ」

「俺にもか」

「勿論です」

にこりと笑って彼に告げてきたのだった。

## 第十八話 力天その十二

「牧村さんも是非」

「悪いな」

礼を述べてからそのザツハトルテを受け取りそのうえで食べる。

食べてみるとこのザツハトルテは確かに非常に美味しいものであった。

しかもそれだけではなかった。その味は。

オーストリアのものよりも甘さが抑えられてありしかも穏やかである。それはまさに和風の味であり日本人の牧村が食べても非常に心地よいものであった。

「どうじゃ？」

「美味しいな」

博士にもこう答えることができた。

「それもかなりな」

「そうじゃろう。甘さはそれ程ではないじゃろ」

「オーストリアのものよりも甘くはない」

このことも実際に言ってみせるのだった。

「だが」

「口に合うのじゃな」

「オーストリアのものよりもな」

こう答えるのだった。

「ずっとな」

「だから。日本人が作ったものだからじゃよ」

結論はここに行き着く。やはりここしかなかった。

「これはのう」

「そうか。よくわかった」

また一口食べて述べた。

「この味はな」

「どうじゃ？気に入ったらじゃ」

「今度は自分でも買って食べてみることにする」

「これが彼が出した答えだった。」

「そしてまた食べるとしよう」

「ほっほっほ、それは何より何より」

博士は今の牧村の言葉を聞いて破顔してみせた。

「ではな。その味を楽しんでくれ」

「そうさせてもらう。しかし」

「しかし？」

「甘いものに限らないが何かを食べたらだ」

牧村は言ってきた。今度は話が変わってきていた。

「必ず歯を磨かなければならないな」

「虫歯になりたくなかったらもう」

歯を悪くすればそれはそのまま健康に直結する。ただ痛むだけで

は済まない。歯も極めて重要なのだ。寿命にまで関わる程なのだ。

「磨かなくてはいけないぞ」

「博士も磨いているな」

「抜けている歯は一本もないぞ」

ここでまた破顔して笑ってみせてきた。

「この歳になるまでのう」

「それはまた凄いな」

「歯は命じゃよ」

そしてこんなふうにも言うのだった。

「それがおかしくなれば。わかるのう」

「わからない筈がない。俺は闘う身だ」

髑髏天使としての己も語ってみせた。

「ならだ。余計にだ」

「そうじゃな。闘う者は健康管理も大事じゃからな」

「その通りだ。なら歯も常によくしておかないといけない」

具体的には磨くということである。さもなければ泣きを見るのは他ならぬ自分自身である。だからこそ健康管理は怠ってはならない



のである。

「絶対にな」

「わしも同じじゃよ。磨いておるぞ」

「しかしそれでも百歳で一本も抜け歯がないのか」

「うむ」

頷いてもみせてきた。

「そうじゃ。わしの誇りの一つじゃ」

「俺もそこまで生きてそうであって欲しいものだな」

「気をつけることじゃな。よくな」

「それでこの連中もか」

今度は妖怪達を見ての言葉だ。彼等は相変わらずザツハトルテを食べ続けている。その程よい甘さに相変わらず舌鼓を売っている。

「やはり」

「そつだよ、僕達とても奇麗好きなんだから」

「当たり前じゃない」

その妖怪達も彼に答えてきた。

## 第十八話 力天その十三

「毎日磨いてるよ」

「寝る前には必ずね」

「だから健康なのだな」

牧村はその話を聞いて頷いた。

「御前達も」

「そうだよ。それもいつもね」

「歯磨きだけじゃなくしてお風呂にも入ってるし」

「風呂にもか」

牧村はこれについては考えたこともなかった。まさか彼等が風呂にまで入るとは想像もしなかったからだ。だからここで言うのであった。

「入るのか」

「入るよ、それも毎日ね」

「ちゃんとね」

「それは意外だな。いや」

言葉を変えてきた。

「想像もできなかったししなかった」

「そうなんだ」

「何か僕達ってそんなに変わった存在かな」

「妖怪だからな」

このこと自体が話の根拠だった。

「だから当然だ。普通ははこう考える、人間ならな」

「僕達から見たら人間の方が変わってるけれどね」

「ねえ」

しかし妖怪達は妖怪達で口々に顔を見合わせて言うのだった。

「だってさ。あれやこれやと忙しいし」

「楽に暮らせばいいじゃない、楽に」

「のんびりとね」

「それが人間だ」

しかし彼はここでこう返した。

「それがな。人間社会は忙しいものだ」

「それが嫌なんだよね」

「僕達つてのどかなのが好きだから」

「そうそう」

妖怪達は牧村の話聞いてそのうえで言うのだった。

「人間もその世の中も嫌いじゃないんだけれどね」

「忙しいのがねえ」

「やっぱり嫌なんだよね」

「それは仕方がない」

牧村は忙しいということには諦めると彼等に告げた。

「それはな。人間だからだ」

「人間になつたら忙しく感じないのかな」

「じゃあ今度はいつも念入りに変身して遊びに行くか？」

「それは見ているものが違うがな。しかしだ」

牧村はまた話を変えてきたのだった。

「御前等人間が嫌いじゃないのか」

「そうだけれど」

「それがどうかしたの？」

「それが意外だ」

牧村は言った。

「人間が好きなのかな」

「だってさ。人間だって世の中の一部だし」

「僕達もちゃんと世の中にいるしね」

「人間も妖怪も世の中か」

「それが理解できんようじゃな」

博士はここでまた牧村に対して言うてきた。

「人間も妖怪も世の中ということが」

「少しな。人間と自然は対立すると言う人間もいるしな」

この意見は確かにある。人を悪と考えてそのうえで述べる場合もあるし自然は征服するものだという西洋的な考えから述べる場合もある。どちらにしる人間と自然は別のものだという考えである。

「それに妖怪はだ」

「自然そのものじゃな」

「よく山や水の中にいる」

実際にその中から出て来ている妖怪達もこの研究室に大勢いる。すねこすりや青鷲火もそうだし一反木綿や砂かけ婆にしてもそうである。

「その妖怪達も世の中か」

「世の中は自然じゃよ」

博士は言った。

## 第十八話 力天その十四

「そして人間も自然の一部じゃよ」

「では人間が作り出す文明や社会も自然か」

「左様」

また牧村の言葉に応えるがその言葉には曇りも濁りもなかった。

「その通りじゃよ。自然は特別なものではないのじゃよ」

「特別なものではない」

「要するに森羅万象じゃ」

次に出された言葉はこれであった。

「ありとあらゆるものがな。そうなのじゃよ」

「そういうものか」

「うむ。だから全てが世の中じゃ」

博士の言葉は続く。

「人間も妖怪もな。世の中なのじゃよ」

「世の中、すなわちそれが自然か」

「うむ。ではな」

博士の言葉が続く。

「わかつてくれたようじゃな」

「多少だがな。完璧にはではない」

この言い方がやはり牧村だった。淡々としていて感情はない。しかし決して取り乱すことはなく冷静な調子で言葉を続けていた。

「だが少しだがわかった」

「その少しが大きなものになるな。ではそれでじゃ」

「この連中の生活も人間と変わらない部分が多いか」

「わしはあれじゃよ」

一反木綿がひらひらと飛びながら牧村のすぐ側に来て言った。

「風呂は入らんど。身体が布じゃからな」

「では洗濯機か」

「今の回転式は目が回るから嫌じゃ」  
しかし洗濯機は嫌だと言つのである。  
「ちゃんと昔ののう。洗濯板で洗っておるのじゃよ」  
「自分で自分をか」  
「そうじゃ。自分のことは自分でじゃ」  
「ひらひらと飛びながらの言葉だった。」  
「わしはそうしておるぞ」  
「わしは風呂に入っておるぞ」  
「今度言つたのはひょうすべだった。」  
「もつとも毛ばかりじゃからシャンプーで洗っておるがな」  
「頭もか？」  
「いや、頭は洗顔フォームをそのまま使ってるぞ」  
「笑いながら自分の禿頭を撫でてみせる。」  
「これは額と考えておるからな」  
「額か」  
「少しだけ広い額じゃ」  
「自分でわかつての言葉である。」  
「そう考えてくれ」  
「わかつた。ではそうする」  
「そうしてくれたら有り難い。まあそういうことじゃ」  
「昔は米を研いだ水で洗っていたんだな」  
「左様じゃ」  
昔は石鹸がなかったののでそれで頭を洗っていた。身体もだ。牧村はこのことを知っているからこそこう問うたのだった。そしてひょうすべも答えた。  
「あれはあれでよいがシャンプーのお洒落さもな」  
「お洒落か」  
「何言つてんだよ、妖怪だってお洒落するよ」  
傘も出て来た。  
「僕だつてほら」

「何処がだ？」

牧村は傘のその言葉を聞いて目を微かに顰めさせた。見たところその外見はいつもと変わらない。一つめで昔のあの油紙の傘に一本足と小さな両手が生えている。それに大きな舌が見える口があるだけだ。よく漫画等に出て来る格好そのままである。

「いつもと変わらないが」

「だからさ。違っじゃない」

しかし傘自身はこう主張するのだった。

「わからない？それって」

「だから何処がだ」

「この紙昨日貼り替えたんだよ」

最初に言うのはこのことだった。

## 第十八話 力天その十五

「これまでは赤だったじゃない」

「そうだったのか」

「けれど今は黄色だよ」

「そうだったのか」

言われてはじめて気付く牧村だった。

「傘の色はあまり気にしないから」

「しかも油も上等なの使って。糊だつて選んだんだから」

「そうだよ。から傘つて凄いい洒落なんだから」

「それわかってくれないと駄目だよ」

また横から妖怪達が笑いながら彼に話す。

「ちゃんとね。しつかりしてよ」

「髑髏天使なんだから」

「髑髏天使でも何でも興味のないことを知る趣味はない」

こう返すだけの牧村だった。

「別にな」

「まあ牧村さんはそういう人だからね」

「気にしても仕方ないし」

妖怪達ももうそれで納得していた。だからこれでいいとするのだ。

「とにかくさ。僕達だつてお洒落するんだよ」

「これでもかなり自信があるんだから」

「それを考えると人間と変わりないのか」

彼はまた妖怪達の話聞いて述べた。

「妖怪も」

「そういうことじゃ。わかってくればいい」

またここで博士が彼に言う。

「よくな。それでじゃ」

「そうだ。俺が今日ここに来た理由だが」



「そうそう。それじゃ、棺桶に入っていた六人目の魔神じゃな」

「あの男も気になるが」

「それだけではないのか」

「そうだ。それだけではない」

牧村はザツハトルテをまだ食べていた。そうしてそのうえで彼に話していた。

「俺は今能天使だが」

「うむ」

「これより上は」

「力天使じゃな」

今度の階級はそれなのだった。能天使の上は。

「中級三階級のうちの第二階級」

それなのだという。

「それじゃ」

「そうか。俺は今度はそれになるのか」

「普通はそこまでするのにもここまで早くにはなれんぞ」

彼は言った。

「異常な速さじゃな」

「それは何度も聞いたがな」

牧村にとってはいつも博士や妖怪や死神から言われていることである。

「だが。俺の他の髑髏天使のことは知らないからな」

「まあ知っていればおかしなことじゃ」

これは博士もわかっていることだった。何しろ髑髏天使は五十年に一度だけ現われる存在だからだ。従ってその時代にいるのは一人なのである。

「それはのう」

「文献にあるだけだな。他の髑髏天使のことは」

「左様。しかし確かに君が強くなるのは早過ぎる」

言葉に危惧も宿っていた。

「まさかとは思うがこのまま何かになるのではないのか？」

「何かか」

「その何かさえもわからんが」

これは博士にもまだわからないことであった。

「まあとにかくじゃ。今は闘うことが先決じゃ」

「魔物とだな」

「その通り。おそらくまたすぐに魔物を差し向けて来るぞ」

「今度出て来るのはどんな魔物かだな」

「とりあえず。そうじゃな」

博士は文献を読んでいた。そうしてその文献を読み解きながら牧村に述べてきた。

「今おる六柱の魔神じゃな」

「あの連中からまただな」

「そうじゃ。今は日本に東アジアに北米」

老人、女、男のいた地域である。

## 第十八話 力天その十六

「そして中南米に中近東、それに東欧じゃ」

「あらたに出て来た三柱か」

「左様、あの三柱」

やはり彼等のことであつた。

「あの者達のいずれかが来るのは間違いないがのう」

「果たしてどの魔神が来るか」

「それは断定はできん」

博士はここでは即決はできなかつた。

「しかしじゃ」

「しかし？」

「何となくクマゾツツが来ると思うのう」

考える顔になつてこう牧村に述べたのであつた。

「わしはな」

「あの子供か」

「中南米の魔物もまた実に独特じゃ」

博士は彼の配下にある魔物達に対しても述べる。

「用心してかかるようにな」

「あのチョンチョンという魔物は」

「あれにも結構てこずつたようじゃな」

「数がな。尋常じゃなかつた」

彼が言うのはその数のことだつた。

「一つ斬つてもまた一つがやって来る。その相手が大変だつた」

「そういう戦いかも知れんぞ」

「そうかもな。どちらにしろ俺がやることはだ」

「つむ。闘いそして勝つことじゃな」

「そつだ。俺は闘う」

言葉が鋭く強いものになつていた。

「何処までもな」

「髑髏天使の闘いにしてもしゃ」

博士の言葉はここでもまた発される。

「終わりについては今一つわからんところがあるし」

「終わりか」

牧村もまたふと考える顔になった。

「そういえば髑髏天使は五十年に一度この世に現われ魔物を倒す」

「しかしその結末はわからん」

「何処まで闘う？」

彼はまた言った。

「俺は。何処まで闘うのだ？」

「その時代の魔物が全ていなくなるまでじゃないの？」

呼ぶ子がふと言ってきた。

「それってやっぱり」

「この時代のか」

「そうじゃないの？やっぱり」

「それだと」

「いや、違ったと思うよ」

しかしここで垢舐めがこう言う。

「前の髑髏天使いたじゃない」

「ああ、あの人ね」

「そうそう、あの人。確か一年位闘ってそれで自然に消えたじゃない」

「い」

こう話すのだった。

「確かさ。それで魔物が消えて髑髏天使じゃなくなっさ」

「一年か」

「前の髑髏天使はそうだったんだ」

垢舐めは牧村に対しても話す。話すその間もその赤く長い舌をべろべろと動かしている。それが如何にも垢舐めらしい動きであった。

「五十年前のね」

「そうだったのか」

「僕達が覚えてる限りではね」

「確かそうだったよね」

「百年前の人もそうだったかな？」

「百年前の人は中国だったんじゃないの？」

話は日本以外にも及ぶのだった。牧村は話を聞いていて眉を動かすのだった。

「アメリカだったっけ」

「アメリカの人はその五十年前の人だったんじゃないの？」

「そうだったかな」

どうやら彼等の記憶はかなり入り混じっているようである。だがそれでも髑髏天使という存在は日本以外にも出るといことがわかる話である。

「あの百年前の人も一年だったっけ」

「あれ、三年じゃなかったかな」

「それも天使のまま終わってたよね」

「だよ、どちらの人も」

「確か」

この辺りはどうも話が混乱している。やはり彼等も昔の話は記憶が混ざっている。どうにもこうにも話がわからなくなっているのだった。

## 第十八話 力天その十七

「そうかと思えば何十年も闘う人もいるし」

「それぞれかな、やっぱり」

「だよな」

話はそれぞれ行われるがどうしてもわかることは少ない。妖怪達にしても全てを知っているわけではない。そしてそれは博士も同じであつた。

「わしも文献を全て解読しておるわけではないしな」

「だからわからないこともあるのだな」

「はつきり言えばわからないことの方が多い」

これが返答だつた。

「残念じゃがな。それにまだまだ手に入れていない文献もある」

「それもか」

「そうなのじゃよ。存在も知らない文献や資料もまたあるしのう」

結局のところわかっているところは非常に少ない。博士も妖怪達もわかっていることは非常に少なくそれが結果として牧村の思考も制限してしまつていた。

「まあおいおい集めていつて解読していくがな」

「そうか。では頼むぞ」

「うむ。そちらは任せておいてくれ」

「僕達も思い出していくから」

「期待していてね」

妖怪達も言う。しかし牧村は妖怪達にはこう返すのだった。

「御前等は特に期待してはいない」

「あれっ、そうなの」

「期待していないの」

「期待はしていないが信頼はしているし嫌いでもない」

だがここで牧村の言葉はこうなつた。

「御前達はな」

「信頼していて嫌いじゃないってことは」

「つまり僕達牧村さんに好かれてるんだ」

「そう思いたければそう思っていればいい」

はつきり答えることはあえてしないのであった。

「そういうようにな」

「じゃあそう思っておくけれどさ」

「それじゃあね」

そして妖怪達もそれに乗るのであった。

「さてと、お菓子も食べたし」

「後は」

ここで彼等も牧村も丁度ザツハトルテを食べ終えたのだった。後には心地よい満足感が残る。

「どうしようかな」

「何処かに行こうかな。それとも」

「どうするつもりだ？」

「いや、遊びに行くかそれとも」

「昼寝でもしようかなって」

こつ牧村に答える妖怪達だった。

「考えてるんだけれど」

「どっちがいいかな」

「好きにすればいい」

牧村はそんな彼等に対して告げた。

「御前等の好きなようにな」

「好きにすればいいんだ」

「何処かに行っても昼寝をしても」

「そうだ。好きにできる時に好きにすればいい」

「そうだよな。それが妖怪なんだし」

「それじゃあ」

また牧村の言葉を聞いて述べるのだった。

「そうしようか」

「それじゃあこれでも飲んで」

話しながらあるものを出してきた。見ればそれは一升瓶だった。それと塩辛や枝豆を出してきてそのうえでまた飲み食いをはじめたのである。

「ゆっくりと寝ようか」

「そうだよね」

そう話をしながら今度は酒を楽しむ。しかし牧村は今度は眉を顰めさせてそのうえでその彼等に対して声をかけるのだった。

「いや、それはいいがな」

「あれっ、好きにしたらいいって言ったからこうしてるのに」

「何かあるの？」

「御前等今ザッハトルテを食べてたな」

「うん、そうだよ」

「それが？」

それを聞いてまずはいぶかしむ顔になるのだった。



## 第十八話 力天その十八

「どうかしたの？」

「何かあつたの？」

「甘いものを食べてすぐに酒か」

「彼が言うのはこのことだった。」

「いいのか？それで」

「あれっ、牧村さんって下戸だよね」

「そうだよね」

妖怪達は目を丸くさせて彼に言葉を返した。

「それでいいのかって」

「まさか飲めるようになったとか？」

「いや、それはない」

牧村は相変わらず酒に対しては関心を見せなかった。

「酒はな。それはない」

「じゃあ何で言うの？」

「飲みたいのなら一緒にだけれど」

「甘いものを食べた後で味がわかるのか」

彼が言うのはこのことだった。左党が何故甘いものを好まないかというところにあつた。甘いものを食べた後では酒の味がわからな  
いからである。ただしそれも人により明治帝は日本酒を好まれたが  
それと共に甘いものも非常に好まれたことで知られている。

「しかもすぐに」

「うん、全然平気」

「それはないよ」

しかしここで彼等は言うのだった。

「それはね。全然ね」

「ないよ」

そしてまた牧村に対して話す。

「はつきりとわかるよ」

「大丈夫だよ」

皆で話すのだった。やはり何でもないと。よつに。

「美味しいよね」

「なあ」

「それも凄く」

「どうやら舌が変わるのはすぐのようだな」

牧村はそうしたものを見聞きして話すのだった。

「どうやら」

「うん、そういうこと」

「牧村さんも飲めればいいのにね」

「飲めないからといって特に困ることはない」

しかし牧村はそのことに対して特に何も言わないのだった。

「全くな」

「ふうん、だったらいいけれど」

「それはそれでね」

そして妖怪達もそれはよしとするのだった。

「だったら僕達はこれを飲んだらね」

「寝ようか、気持ちよくな」

こう話してそのうえでであった。彼等はさらに飲んでいくのであった。

牧村はそれを暫く見ていたがやがて床から背を離した。そうしてそのうえで部屋を後にするのだった。

部屋を後にしてそのうえで駐輪場に出てサイドカーに乗る。そうしてドライブに出るがその時だった。空港の側を進んでいるとその横に彼が来たのだった。

「また貴様か」

「そうだ、私だ」

死神だった。彼はいつものようにハーレーに乗り彼の横に来た。そうしてそのうえで応えてきたのである。

「暫くぶりだな」  
「今日は何の用だ？」  
「少し見たいものがあった来た」  
「こう言うのだった。」  
「少しな」  
「見たいものだ？」  
「そうだ。見せてもらいたい」  
「今度はこう言う死神だった。」  
「貴様にか」  
「俺にだというのだ」  
「そうだ。間も無くまた魔物が来る」  
「そうか」  
牧村は無機質に死神の言葉に応えたのだった。  
「また来るのか」  
「特に驚いてはいないのだな」  
「いつものことだからな」  
「だからこそ全くということなのだった。」  
「最早な。魔物と闘い倒すのが髑髏天使だからな」  
「もう覚悟はしているというのか」  
「そういうことだ。では場所は何処だ？」  
「案内してもいいが」  
「それはいい」  
はつきりと断ってしまった。

## 第十八話 力天その十九

「俺一人で行く。だからいい」

「しかし私もそういうわけにはいかない」

だが死神もこう言って牧村の言葉を断る。二人は互いに断ったのである。

「見たいからな。私も」

「俺の鬪いをか」

「そういうことだ。いいか」

「好きにしる」

今度は断ることはなかった。

「貴様がそうしたいのならな」

「そうか。それならだ」

「案内するのだな。そこに」

「その通りだ。では来るがいい」

そのハーレーが前に出た。そうしてそのうえで彼を先導していく。彼等が来たのは廃墟だった。廃墟は病院だった場所だが今は誰もいない。朽ち果て寂れコンクリートが露わになったその中に入った二人は。まずはそこにたむろしている柄の悪い連中に遭遇した。

「あん！？何だこいつ等」

「俺達に何の用だよ」

スキンヘッドの者もいれば髪を下品に茶色に染めた男もいる。わざと柄の悪い服を着て唇にピアスをしたりタトゥーを入れたりする。そんな柄の悪い連中が車座になって煙草を飲み漫画を読んでいるのだった。

「警察とか補導員だったら筋違いだぜ」

「煙草以外に悪いことはしてねえぞ」

そして今度はこんなことを言ってきたのだった。

「こっに見えても真面目な不良なんだよ」

「ちゃんと学校も行ってるとし授業も出てんだぞ。馬鹿にするんじゃないぞ」

「だから何だというのだ」

死神は冷たい声で彼等に返した。彼等が今いる部屋の中もやはりコンクリートが露わになっている。上には蛍光灯が半ば割れてそこにある。部屋の端にはコンクリートの破片が転がっている。不良達はその中央に車座になってそこから二人を見ているのだった。

「大体こんな暗い場所にいずに明るい場所で遊んでいいだろうに」

「それじゃあ面白くないんだよ」

「廃墟には廃墟の面白さがあるんだよ」

「なあ」

どうやら廃墟マニアの集まりらしい。

「それがわからねえのかよ」

「じゃあ帰るんだな」

「悪いがそういうわけにはいかない」

しかし死神はこう彼等に返すのだった。

「今はな」

「今はって何だよ」

「まさかここをハッテンバにするとかか？冗談じゃねえぞ」

「そつだそつだ」

顔を顰めさせて二人に抗議してきたのだった。

「廃墟はこうやって楽しむものだけ、そんなのに使うなよ」

「おまけにあんた達男じゃねえか。冗談じゃねえぞ」

「ホモはお断りなんだよ」

「生憎だがそのつもりはない」

死神はまた感情のない声で彼等に返した。

「私にはそうした機能はない」

「ああ、あんたエンドなんだな」

「何だ、そつかよ」

「とりあえず地下に行く」

また言う死神だった。

「少し騒がしくなると思うが気にするな」

「気にするなつて何するんだよ」

「ダンスでもするのかよ」

彼等は今度はこんなことを言うのだった。

「だったらそれはそれでいいさ」

「部屋使うなどは言わねえからよ」

「そうか。随分と気前がいいんだな」

「そうさ。縄張りだけれど悪いことに使わないんだつたらいいさ」

「行きたけりゃ行きな」

そしてこんなことも言うのだった。

「ただしよ。地下に行くのは俺達はお勧めしねえぜ」

「忠告はしたぜ」

そしてここで彼等の言葉の調子が変わった。

「あそこ霊安室だったしな」

「俺達も行かないんだよ」

「出るのか」

今度は牧村が彼等に対して言ってきた。

## 第十八話 力天その二十

「まさかとは思うが」

「いや、そんなのは知らないけれどな」

「とりあえず大丈夫だとは思うけれどな」

そうは言ってもだった。

「まあそれでも気色の悪いところだしな」

「やたらと広いしな。霊安室ってあんなに広がったのかよ」

顔を顰めさせていた。そう言っただけから動こうとはしないのであつた。

「そんな場所を使うなんてあなた達も変わってるな」

「まあそこまで言ったりはしねえけれどな」

「そうか」

死神はまた感情のない様子で彼等に返したのだった。

「では行かせてもらう」

「まあ。好きにしな」

「俺達はこれまで通りここで楽しくやってるからよ」

「そうか」

死神はそれを聞いてまずは静かに頷いた。

「ならそうさせてもらうが。しかし」

「しかし？」

「まだ何かあるのかよ」

「御前達も変わった趣味を持っているな」

こう彼等に対して述べるのだった。

「随分とな」

「まあそうかもな」

「廃墟マニアなんだからな」

彼等もそれは認めるのだった。

「けれどよ。これはこれで中々いいもんだぜ」

「この何か出て来そうな雰囲気かまたいいんだよ」

「それで本当に何かが出て来たらどうするつもりだ」

牧村はここでこう彼等に言った。

「その場合は」

「出ねえ出ねえ」

「なあ」

しかし彼等は牧村の今の言葉は笑って否定するのだった。

「そんなのよ。出るわけねえって」

「幽霊とかお化けとかよ。いたら見てみたいもんだぜ」

「なあ」

「私は死神だが」

死神は本当のことを告げてみせた。

「言っておくが」

「何だよ、随分と格好いい通り名だな」

「あんた綺麗な顔してるけれど実は格闘家か何かか？」

「いいねえ、顔はよくてしかも強い」

やはり彼等は死神が本当に死神だとは思っていなかった。そんな

ことは夢にも思わずそうしてそのうえで彼に対して言葉を続けるの  
だった。

「そっちの兄ちゃんもいい感じだけれどな」

「もてそうだよな」

「信じないのならいい」

だからといって死神にとってどうということはないからの言葉だ  
った。

「それならな」

「まあその性格はなおした方がいいんじゃないかな」

「それはな。ちょっとな」

「どうかって思っぜ」

ただし死神の性格については苦笑いで返すのだった。

「もうちよっとな愛想よくしないとな」



「そっちの兄ちゃんもな」

また牧村に対しても言うのだった。

「もうちよつと。愛想よくな」

「頼むぜ、その辺りはよ」

「わかつたがそれをするつもりはない」

牧村は極めて無愛想に彼等に返す。

「人にはできることとできないことがある」

「だからその性格はよ」

「なおした方がいいぜ。もてる為にはな」

「そうか」

こつ言われてもやはり態度はそのままの牧村だった。

第十八話 力天その二十一

「では話は聞いた」

「じゃあな。それでな」

「霊安室で怖がってくれよ」

これで終わりだった。牧村達は彼等と別れそのうえで地下に向かった。やはりコンクリートが露わになっているその階段を降りて地下に向かう。暗闇の中だったが死神は己の前の青白い鬼火を出してそれを灯りとして降りていく。牧村もその横にいて降りていつてい

る。  
「感じるか」

「かなりな」

牧村は死神に対して答えた。

「間違いなく下にいる」

「気配が強い」

死神は言った。鬼火に照らし出され青白くなっている顔で。

「しかも強くなってきた」

「そうだな。間違いない」

牧村だけでなく死神も言うのだった。

「霊安室にいるな」

「あの子供か」

「クマゾツツだな」

あの子供が何なのか、死神も知っているようだった。

「あれが待っているのだな」

「貴様もあの子供と知り合いか」

「魔神達とは全員古くからの付き合い」

それは一応は付き合いとは言った。

「腐れ縁ともいうがな」

「そういうものか」

「その通りだ。私はあの者達とも刃を交えたことがある」  
「今まで全くの謎だった彼の過去の一つだ。」

「魂のことだな」

「魔物の魂を狩ろうとして戦ったのだな」

「その通りだ。どの者も強い」

「彼等の実力も知っていた。」

「しかもかなりな」

「俺が相手をできない程だな」

「能天使では神には遠く及ばない」

「これが死神の彼への返答だった。」

「遙かにな」

「そうか」

「だがそう言われても動じたところのない牧村だった。」

「わかった」

「そして魔物、そしてそれを司る魔神達は闘うに値しない者とは闘わない」

「死神の言葉は変わったようできてそれで変わってはいなかった。」

「決してな」

「ではあいつとは闘わないか」

「それは絶対でない」

「死神はまたその可能性を否定した。」

「しかしだ。出て来る魔物はだ」

「やはり手強いか」

「そして見せてもらおう」

「彼は言った。」

「貴様をな。じっくりとな」

「では見ているといい」

「そして牧村もそれを隠そうとはしなかった。」

「俺の闘いをな」

「そうさせてもらおう。さて」

ここで階段が終わった。目の前に黒く重厚な扉がある。それは固く閉じられまるで全てを拒むかのようだった。

牧村はその扉に近付き右手を前に出した。そうして開いたそこはまずは漆黒だけがあった。だがその漆黒はすぐに死神の鬼火により朧に照らし出された。

照らし出されたその部屋の中には何もなかった。広くがらんとしたものだ。中には何も見えはしない。そして誰もいないように見えた。しかしであった。

「いらっしやい」

「姿を消しているな」

「うん、ちよつとね」

楽しそうな子供の声が聞こえてきた。

「だってそつちの方が面白いしね」

「最初は隠れてそのうえで姿を現わす」

死神は冷静な声で彼に返すのだった。

## 第十八話 力天その二十二

「貴様の好きなやり方だな」

「そうだよ。僕って無邪気だからね」

「ここの子供の声の話すのだった。」

「そういうのが好きなんだ」

「趣味がいいとは言えないな」

死神は彼の楽しそうな言葉とは全く正反対に感情を一切見せないものであった。その言葉と共に周囲を見回しているがそれでも彼の姿は見えない。

「貴様らしいがな」

「僕は僕らしく」

しかし子供の言葉の調子は変わらない。

「それがスタイルだからね」

「貴様のスタイルについて話す気はない」

死神はそれについては話そうとはしなかった。

「しかしだ。貴様には用がある」

「そっちの髑髏天使がだね」

「そつだ、俺だ」

今度は牧村が彼に対して言ってきたのだった。

「俺が貴様の魔物の相手をする。それでいいな」

「うん、いいよ」

また子供の楽しそうな声がしてきた。

「僕もそのつもりでここにいるし」

「そして俺とここでその魔物との闘いを見るのか」

「そういうこと。それじゃあ」

その言葉と共にであった。不意に部屋から何かが出て来た。漆黒の中から浮き出てきたのはあの子供だった。闇の中で鬼火に青白く照らされながら不気味に微笑んでいた。

「そろそろはじめる？」

「すぐにでもいいが」

「そうだね。じゃあ僕は出すよ」

彼が言うのとすぐだった。その広い部屋の中央に何かが出て来た。それは翼のある空飛ぶ蛇であった。

ただの蛇ではなかった。鹿に似た細長い顔をしており口は尖っている。頭には二本の角がある。そうして身体には毛が生えているのが見える。どうにも変わった姿をしていた。

「ピグチェンっていったね」

子供は相変わらず楽しそうにその魔物の名前を言ってきた。

「血を吸う魔物なんだ」

「血をか」

「そうだよ。今から君のその血を吸うんだ」

「こう言うのだった。」

「そうして君を倒すんだよ」

「宜しく」

ピグチェンと呼ばれたその魔物は気さくに牧村に対して言ってきた。

「僕が今度の、そして最後の君の相手だよ」

「最後かどうかかわからないが今度の相手は貴様か」

牧村はもう最後という言葉には反応をさして見せはしなかった。

「それならばだ」

「早速闘うんだね」

「そうだ。あれこれと話するもりもない」

「話に聞いていたけれど随分と愛想がないね」

ピグチェンはこのことにいささか落胆したようであった。子供の周りを遊ぶようにして飛びながら述べる。その細長い口から赤いこれまた長い舌を出しながら。

「噂以上だよ」

「それが今度の髑髏天使なんだよ」

子供は自分の周りを舞うその魔物に対して告げる。

「僕もそれが不満なんだけれどね」

「もう少し愛想よくしてもいいですよね」

魔物は自身の主に対しても述べた。

「そう思いませんか？」

「確かにそう思っつけれど話を聞かないしね」

「貴様等の話を聞く必要はない」

牧村は相変わらずの調子で魔物達に返した。

「それが不服だとしてもな」

「まあだったらいいけれど」

「はじめる？それじゃあ」

「来い」

子供と魔物に対して告げた言葉だ。

「はじめるぞ」

「さて、では見せてもらおう」

死神は闘いがはじまると見て身動き一つせずに後ろに退いた。

「貴様の今度の闘いをな」

「では見ているがいい」

牧村も彼に対して言葉を返す。

## 第十八話 力天その二十三

「そこでな。じっくりとな」

「むむ。そうさせてもらおう」

こう言葉を交えさせそのうえで今牧村は変身に入った。

両手を拳にしてそのうえで胸の前で打ち合わせる。するとそこから白い光が放たれ忽ちのうちに彼の全身を包み込んでしまった。

それが消えた時そこにいたのは眩い白銀の甲冑を身に纏った髑髏の男だった。牧村来期はまた髑髏天使になったのであった。

「行くぞ」

肘を曲げたままの右手を前に出しそれを握り締める。これがはじまりの合図となった。

髑髏天使はすぐに能天使の姿になった。翼が生えその顔の色も変わる。そうしてその姿でまずは羽ばたきそのうえでペクチョンの翼に対抗しようとしてきた。

「ふうん、君も飛んでくるんだね」

「そうだ、俺にも翼がある」

このことを魔物にも告げながら部屋の中を飛翔する。部屋の中は舞うには狭い。しかし彼はその中で身体を横にさせて飛翔し魔物の隙を窺っていた。

「それがこれだ」

「そしてそれだけじゃないんだね」

「その通りだ。受けるがいい」

言いながら魔物に向けて剣を一閃させた。するとそこから鎌イ足を放ったのだった。

それで魔物を撃とうとする。しかしであった。

「甘いよ」

「むっ!?!」

それは呆気なくかわされてしまった。まるで何とでもないように。



魔物はその細長い身体からは想像もできない素早さでその鎌イ足をかわしたのだ。

「これ位じゃ。僕は倒せはしないよ」

「貴様を倒すのには鎌イ足では無理か」

「こんなのさ。どうやって当たれっていうんだよ」

楽しそうに話しながら動き続けている。宙を泳ぐようにして。

「無理言っちゃいけないよ。そうだろ？」

「俺の鎌イ足が効かないか」

「ああ、一つ言っておくよ」

闘いを見ている子供が楽しそうに笑いながら宙を舞い続けている。髑髏天使を見て言うのだった。

「ペクチョンは素早いよ」

「素早い」

「そうだよ。素早いよ」

こう彼に言うのだった。

「だからこんなの当たらないよ。残念だったね」

「そういうことか」

「近寄らないと駄目だよ」

魔物もまた彼に対して言ってきた。

「そうじゃないと僕に攻撃は当てられないよ」

「それではこれもか」

しかし牧村はまだ攻撃を仕掛けた。今度は炎だった。それを地上から出し下から魔物を焼こうとする。しかしそれもあえなくかわされてしまった。

「だから無駄だった」

「炎もか」

「風も炎も遠くからじゃ僕に当たらないよ」

こう言うのだった。

「残念だけれどね」

「ならばそれでわかった」

髑體天使はそれを聞いても冷静な態度は崩してはいない。

「それだな」

「じゃあどうするの？」

「簡単なことだ。それではだ」

飛翔する髑體天使が魔物に向かう。そうして。

その両手の剣で一斉に切ろうとする。左のサーベルが魔物を斬る。それにより魔物のその細長い身体から一条の黒い血が流れた。

「あっ、やったね」

「あれっ、左の剣で？」

攻撃を受けた魔物とそれを見ている子供で声がそれぞれ違っていた。

「意外と斬れるね。もう少しかわすのが遅かったら危なかったよ」

「左の剣は守る為のものじゃなかったのかな」

「そういえばそうだったな」

死神もそのことを思い出して述べた。彼等はこれまでの髑體天使の闘いでは左のサーベルは守る為に使っているのだけを見ていたからだ。

「しかし今は斬るのに使った」

「何か変わったのかな」

「そうだ。俺は身に着けた」

髑體天使は一日前に飛びそれで魔物から離れた。そうして弧を描いて反転しそのうえで魔物にまた向かう。そうしながら彼等に語るのだった。

## 第十八話 力天その二十四

「二本の剣の使い方をな」

「そういうことだったんだ」

「両手のその剣をか」

「そういうことだ。そして右の剣もだ」

「おやっ」

ペクチョンが向かってくる髑髏天使に対して己の舌を出してきた。しかしそれを右の剣を一閃させてそれにより弾き返してみせたのである。

「上手いね、本当に」

「右の剣で守ることも身に着けた」

「じゃあ両手で攻めることも守ることもできるんだ」

「さらなる力を身に着けたというわけだね」

「そういうことだ」

また子供と死神に対して告げる。魔物に対してさらに向かいながら。

「両手の剣でだ」

「わかったよ。じゃあそれもね」

「見せてもらおう」

子供と死神は立場は違うが言葉は同じになっていた。

「今の髑髏天使の闘い方をね」

「是非な」

「言った筈だ。見ているといいとな」

言いながらまた魔物を斬りつける。右の剣は上から下に、左の剣は右から左に。しかし今度は完全にかわされてしまった。

「残念だったね」

攻撃をかわした魔物は楽しそうに彼に言ってきた。

「僕を斬れなくて」

「まだだ」

しかし髑髏天使は諦めていなかった。また反転してそのうえで彼に告げるのだった。

「まだ闘いは終わっていない」

「そうだね。それはね」

これは魔物も認めはした。

「けれどさ。攻撃が当たらないと勝てないよ」

言いながら今度は彼の方から動いてきた。流れるように、まるで風の如く動いてきた。

そうしてそのうえで飛翔する髑髏天使に向かう。そうしてそのうえで彼をその長い身体で取り囲みそのうえでさらに泳ぐように飛んでいた。

「ああ、もう終わったね」

「終わりだと？」

「そうだよ。これで終わりだよ」

子供はここで死神に対して語ってきたのだった。

「もうね。これでね」

「ふむ。確かに危機にはあるようだね」

死神も今の髑髏天使の状況を見て述べた。彼は宙に立ち今その周りをペクチヨンに囲まれている。魔物は彼を幾重にも取り囲みその輪を次第に小さくしていった。

「このままでは」

「そうそう、ペクチヨンは血を吸うんだよ」

子供はこのことをわざと思い出したようにして語ってみせてきた。

「つまりね。このままね」

「今この状況を何とかしなければか」

「そういうこと。血を吸われて終わりさ」

子供の言葉は実に楽しそうだった。まるでおもちゃで遊ぶ純粹な子供のように。

「さて、この時代の髑髏天使を倒すのはペクチヨンだったんだね」

「さてな」

死神は今の魔物の言葉には懐疑的な声で応えてみせた。

「それはどうかな」

「あれっ、この状況でまだ勝てるっていうの」

「あの男の強くなる速さは尋常ではない」

死神は今まさととぐるの中に消えんとするその髑髏天使を見てまた言うのだった。

「そしてだ」

「そして？」

「おそらく間も無くだ」

言葉は続く。

「また強くなる」

「それはどうかな」

だが子供は彼のその言葉に対して笑うのだった。

「果たして。こんな状況で強くなっても仕方ないんじゃないかな」

「この状況ではか」

「そうだよ。今囲まれたよ」

その通りだった。今髑髏天使は遂にその身体を完全に囚われてしまった。空中で締め上げられそのうえで今魔物の長い舌を向けられていた。

「さてと、頂くよ」

「俺の血をか」

「うん。僕は血を吸う魔物だからね」

こう言うのだった。

## 第十八話 力天その二十五

「だからさ。君の血を頂くよ」

「果たしてそう上手くいくか」

「この状況でそんなことが言えるんだ」

魔物は髑髏天使のこの言葉には失笑したような声で返した。

「完全に捕まってるのに。言えるの？」

「俺は諦めが悪い」

だが髑髏天使はまだその言葉を強いままにさせていた。

「これを言い忘れていた」

「諦めが悪くてもさ。それでどうにかなるものじゃないよ」

今まさにその舌が髑髏天使の喉元に迫ろうとしていた。血を吸う  
為に。

「言っておくけれどね」

「くっ……」

「じゃあ頂くよ」

勝利を確信した笑みがそこにあった。

「その血をね」

「勝負ありだね」

子供はにんまりと笑ってまた死神に告げてきた。

「これでね」

「いや、まだだ」

しかし死神はここでもまだこう言うのだった。

「まだまだ。闘いは一方が死ぬまでわからない」

「死ぬまでって今死ぬよ」

「あの男はそう簡単には倒されはしない」

言いながら闘いを見る。その髑髏天使の闘いをだ。

「今貴様もそれを見る」

「言っね。じゃあ見せてもらうよ」

子供は死神の言葉も予想も小馬鹿にはしていた。しかしそれでも闘いを見たくて残っているようであった。

「それをね」

「見ているのだな」

死神はまた彼に言う。

「このままな」

「そうさせてもらうよ」

こうは答えるがそれでもだった。子供は己の配下のその魔物の勝利を疑ってはいなかった。そうしてそのうえで闘いを見ていた。

今舌がまさに髑髏天使の喉に突き刺さるうとしていた。魔物は勝利を確信してその目を細めさせ口元をあげていた。しかしこの時だった。

不意に髑髏天使の全身が青く光った。そうしてその全身から何かを発した。それは。

「！？これは」

「まさか！？」

魔物だけでなく子供も声をあげた。

「氷！？そんな」

「髑髏天使が氷だつて！？」

魔物の身体の毛が忽ちのうちに凍っていく。全身がこのまま凍らせられてしまうことを恐れた魔物は急いで髑髏天使から身体を離す。そうしてそのうえで間合いを置いてそこから舞いはじめたのだった。

「今の髑髏天使は氷なんて使えない筈なのに」

「それは何故か。もうわかっている」

「わかっているって！？」

魔物は思わずその髑髏天使自身に対して問うた。

「君自身はつてことかい！？」

「そうだ。俺はまた強くなった」

こう魔物に対して答えるのだった。

「またな。これが力天使の力か」

「どうやらそうだな」

今度は死神が彼に答えた。

「それが力天使のようだな」

「氷か。いや」

髑髏天使はここでわかったのだった。

「水か。その力か」

「水ねえ」

子供もまた興味深そうに見ていた。そうしてその声で言ってきたのだった。

「それが力天使なんだ」

「神である貴様も知らないのか」

「正直なところ随分と封印されていたしね」

子供はこう髑髏天使に対して返した。

「だから見ていなかったりするし忘れていたりもするし」

「だからか」

「そうだよ。力天使の力は知らなかったんだよ」

こう正直に述べるのだった。

「僕もね」

「そうだったのか」

「ただだよ」

しかし子供は言葉を加えてきた。



## 第十八話 力天その二十六

「今の君じゃまだ僕達には勝てないよ」

「神にはか」

「力天使でもね」

やはり楽しそうに笑っている言葉であった。

「それはね。力天使ではまだ僕達の力にはならないからね」

「そうか。まだか」

髑髏天使はそれを聞いて静かに述べた。

「力天使でもまだか」

「そうだよ。その時は待っているけれどね」

「確かに力は強くなった」

死神もそれは認める。

「だが。その心は果たして人のままなのだろうか」

しかしこの言葉は他の者には聞こえなかった。そうして髑髏天使はその青い姿のまま宙にはばたきそのうえでまた魔物と対峙していた。

「それではだ」

「闘いの再開だよ」

「そうだ。行くぞ」

魔物は強くなった彼を見てもまだ平然としていた。

「このままな。倒させてもらおう」

「力は強くなったみたいだけれどそれでもだよ」

魔物もまた宙を泳ぐように待っていた。相変わらず。

そうしてそのうえで。また髑髏天使に対して攻撃を仕掛けようとしていたのだった。

「さて、それじゃあ行くよ」

「来るのか」

「魔物は逃げることはないからね」

彼もまた魔物なのだからだった。

「闘わせてもらうよ、絶対にね」

「闘うことは嫌いではないのだな」

「魔物だからね」

「だからだというのである。」

「さあ、話はこれ位にして」

「来い」

両者は同時に動いた。髑髏天使はまず両手の剣を一閃させた。そうしてそのうえでその剣から氷の刃を放った。だがそれは鎌イ足と同じ結果に終わった。

魔物はその氷の刃もすんなりとかわした。やはりこれは効果がなかった。

「悪いけれどそれには当たらないから」

「そのようだな」

「もう少し攻撃にも凝らないと駄目だよ」

「そうして笑いながら言うのだった。」

「さつきもやったじゃない」

「無論これだけではない」

髑髏天使はさらに前に飛びながら魔物に対して返す。

そして今度はであった。まだ間合いに入っていないというのにその剣を突き出してきた。するとその剣から氷が出た。氷の刃が突き出されたのである。

「なっ!？」

「まだだ」

さらに突きを繰り出す。するとその都度刃が突き出される。

それにより魔物を倒そうとするのだ。魔物もまたこれには苦戦していた。

「くっ、これは辛いかな」

「さて、これでどうだ」

両者はそれぞれ言ってきた。

「かわせるか？どうだ？」

「結構難しいかな」

魔物の声もまた苦しいものであった。

「これは。けれどね」

「けれど。何だ？」

「まだだよ」

声は確かに苦しかったが諦めたものではなかった。

「僕だってね。同じことができるからさ」

「何っ！？」

「こうするんだよ」

言いながら己の顔を髑髏天使に向けてきた。そうして。

舌を前に突き出してくる。それも何度も何度も。それにより髑髏

天使の氷の刃を退けてきたのだ。

氷の刃は舌によりその都度砕かれる。また舌はそれと共に髑髏天

使に攻撃を浴びせてくる。彼の一方的な攻撃はこれで止まってしま

った。

「これでどうかな？」

「突きは俺だけではないということか」

「そうだよ。そしてね」

魔物の声がここで笑ってきた。口の端にもそれが出ている。

「僕はそれだけじゃないんだよね」

「むっ！？」

後ろからその長い尾が来るのを察した。すんでのところ上で上に飛

びそれをかわす。まさに間一髪であった。尾は今ほむなく宙を叩

いただけであった。

「やっぱり気付いたんだね」

「この程度ならな」

気付くと答える髑髏天使だった。

## 第十八話 力天その二十七

「流石だね。動きも速くなってるし」

「髑髏天使はただ階級があがるだけではない」

髑髏天使自身の言葉である。今は魔物を上から見上げている。頭は今にも天井につきそうだがそこに激突するようなへまな真似はしない。

「その強さもあがるものだ」

「だからだね。今の余裕も」

「その通りだ。俺は負けはしない」

彼は言い切った。

「この鬪いもな」

「それはいいけれど僕にも都合があるんだよね」

魔物もまた言う。余裕のある声と共に。

「だからさ。これでさ」

「決めるというのか」

「そうさ。行くよ」

相変わらずその声は笑っていたがそこに鋭さも加わってきていた。その声と共にまた尾を繰り出してきた。それは下から上へ、一閃させるものであった。そう、何かを叩き落とすような。それで髑髏天使を倒すつもりなのは明らかだった。

髑髏天使はその尾をかわすことができた。だが彼は今それをしなかった。ここで勝負を決めるつもりだった。そしてその決める手段も既にあつた。

両手の剣をその尾に向けた。そうしてそれで尾を弾き返す。しかもただ弾き返すだけではなかった。

「えっ!？」

「氷はただ使っただけではない」

彼は言った。

「こうした使い方もある。こうな」

尾に氷を送り込む。それは忽ちのうちに魔物を凍らせてしまった。そうして遂に。その全身から青白い炎を出させたのだった。白い氷から青白い炎が次々と起こっていつていた。

「なっ、こんなやり方が!？」

「ある、いや気付いた」

「こう返す髑髏天使だった。」

「俺もな。今な」

「そう、気付いたんだ」

「氷は伝わっていくものだ。炎が燃えるのに対して」

その属性を意識して使った技なのだった。

「思えば最初もそうだったな」

「だったね。君が力天使になった時に」

魔物もここで気付いたのだった。髑髏天使が力天使になったその時に。全身から氷を出しそれで彼を凍らそうとしたことに。それと同じであるということに。

「同じだったね。迂闊だったよ」

「しかしこれで勝った」

髑髏天使は言った。魔物は最早その全身を炎に包まれようとしていた。その青白い炎に。

「俺の勝ちだ」

「力天使、見事だったよ」

そして魔物の声はその中で笑っていた。今炎の中に消えようとするその中で。

「僕を倒したんだからね。褒めてあげるよ」

「そうか」

「じゃあね。クマゾツツ様」

「うん」

最後に己の主に対して声を向ける。神もまたそれに応える。神妙な顔で。

「これでお別れです。御機嫌よう」

「寝ているといいよ」

子供は穏やかな声で彼に告げるのだった。

「ゆっくりとね」

「はい、それでは」

これが最後の言葉になり彼は青白い炎に包まれ消えていった。後に残ったものは何もなかった。こうして闘いは終わった。髑髏天使は地に降り立ち牧村に戻った。そうして一人出口に向かうのだった。

「見事だったよ」

子供が彼に告げてきた。

「ピクチョンを倒したその強さ。見事だったよ」

「いずれは貴様とも闘うが」

「そうだね。その時は思ったよりも近いかもね」

子供の声には無邪気さはなかった。真剣な研ぎ澄まされたものがあるだけだった。剣のような。

「その時は楽しませてもらうよ」

「貴様が楽しむ前に一瞬で終わらせる」

牧村の言葉は髑髏天使と変わりはない。彼の声もまた鋭い。

「覚悟しておくのだな」

「その時はね。そうさせてもらうよ」

魔神もまたその言葉を受けるのだった。

「遠慮なくね」

「わかった」

「では。戻るとするか」

死神は二人のやり取りが終わったと見て牧村に声をかけてきた。

「これでな」

「それでさ」

子供は今度はその死神に声をかけてきた。

第十八話 力天その二十八

「君は彼をどう見ているのかな」

「私か」

「そうだよ。どう見ているの？」

「こつ彼に問うのだった。」

「彼のことは。どうかね」

「それに答える必要はあるのか？」

「死神は子供に顔を向けて問い返した。」

「その言葉に。私が」

「それはないよ」

「相変わらず無邪気とも言える笑みで返すだけであった。」

「それはね」

「そうか」

「けれど気にはなっているよね」

「しかし彼はこつも問うのだった。」

「その髑髏天使のことが。そうだよね」

「さてな」

「その問いには何故か答えようとはしなかった。」

「ただ。見るべきものはあると思っている」

「だったらそうじゃない。あるんだよ」

「彼は言うのだった。」

「ちゃんね。興味があるんだよ」

「そう思いたいなら思っておくといい」

「死神は今度はあえて答えはしなかった。」

「貴様の好きなようにな」

「ふつん、じゃあそうさせてもらおうかな」

「私にとつてはどつというこつはない」

「そしてこつも彼に返すのだった。」

「貴様がどう思おうとな」

「じゃあそう考えさせてもらうよ。それにしても  
ここでまた言う子供であった。」

「今度の髑髏天使は随分と面白いね」

「俺がか」

今度は牧村自身が彼に顔を向けることになった。落ち着いた顔で。

「俺が面白いというのか」

「そうだよ。だってさ、こんなにすぐ強くなるし  
まず言うのはこのことだった。」

「それにだよ。人から……まあいいか」

何故かここから先は言おうとはしないのだった。

「それはまだわからないしね」

「何かよくわからないが話はこれで終わりだな」

死神がその横で目の光を微妙にさせたことは気付いてはいなかった。

「それではな。また会おう」

「また仲間がやって来るよ」

子供は去ろうとする牧村にまた話した。

「今度は七人目だね」

「魔神がか」

「そうだよ。七人目だよ」

このことをまた言うのだった。

「七人目が来るからね」

「その七人目も俺が倒す」

牧村は最早それを決めていたのだ。彼の中で。

「貴様もだ。それを覚えておけ」

「忘れるって言っても聞かないだろうし」

「魔物を倒すのが髑髏天使だ」

またこの言葉を出す。

「そして魔神もだ。いいな」



「その時は楽しみに待ってるよ」

また魔神の声が笑った。

「それじゃあね」

そうして最後に別れを告げてその場から消えるのだった。二人もそれを見届けてから上に上がった。先程のマニア達の部屋を横切ると。まだ彼等は侍っていてそこで車座になってあれこれと遊んでいた。

死神が彼等を見て言うのだった。

「まだいたのか」

「あれっ、あんた達も終わったのかい？」

「その用事ってやつは」

「終わった」

牧村が彼等の問いに答えた。

「今な」

「へえ、じゃあフリーだな」

「しかし随分と早かったな」

どうやら地下で何があったのかも何が行われていたのかも全く知らないようである。そして興味さえ最初から持っていないようであった。

## 第十八話 力天その二十九

「で、もう帰るのかよ」

「ここからさ」

「もういる必然性もない」

牧村は素っ気無く彼等に答えた。

「そちらみたいにマニアでもないしな」

「煙草吸わないのか？」

「よかつたら一本ずつどうだよ」

彼等は二人に対してその煙草を箱ごと差し出してきた。見れば彼等の口にはそれぞれその煙草がある。そうして曇をたゆらせていた。「遠慮しないでよ」

「俺達もここ位しか吸えるところないしよ」

どうやら廃墟マニアというだけでなく煙草を吸えるからという理由でもここにいるようである。

「ほら、どうだよ」

「一本さ」

「気持ちは有り難いが私はいい」

「俺もだ」

しかし死神も牧村もこう答えるだけであった。

「私は煙草は吸わない」

「俺もだ。煙草はやらない」

「まあそれならいいけれどさ」

「無理強いはしないしよ」

それを聞くと彼等も煙草を収めるのだった。そうしてそのうえでまた言う。

「とにかくさ、マニアでもないならさっさと帰った方がいいぜ」

「ここにいても楽しくないだろうしさ」

「そうだな。では帰らせてもらおう」

「俺もだ」

「そうしな。それにしてもな」

彼等の中の一人が二人に対してまた言ってきた。

「あんた達、本当に無愛想だね」

「全くだよ」

「こつ彼等に言うのだった。」

「特にそつちのあんた」

「俺か」

「そう、あんただよ」

「あんたが特にね」

牧村に向けた言葉だった。牧村自身も彼等に顔を向けている。

「あんたそんな仏頂面だったら人付き合いもないだろ」

「彼女とかいるのかよ。それで」

「いると言つたらどうする」

若奈のことはあえて言わないのだった。

「そつだとしたら」

「信じないぜ」

「絶対にな」

「これが彼等の返事だった。」

「つていうかそれだけはないだろ」

「天地がひっくり返つてもな」

「そつか」

そして牧村はそれをただ聞くだけだった。

「わかつた」

「ああ、まあ俺達は来る者は拒まずだからよ」

「マニアは誰でも歓迎するぜ」

そんな牧村に対してにこやかに笑つて言うのだった。

「何時でも廢墟巡りを楽しもうぜ」

「ついでに煙草もな」

「そんなに煙草がいいのか」

死神は彼等がとにかく煙草を愛するのを見て述べた。

「麻薬の類ではなくか」

「おいおい、そんなのやったら身体が潰れるぜ」

「あんなのやるのは馬鹿だぜ」

「シンナーもよ」

そうしたものに関して極めて真面目な彼等だった。必死の顔で首を凄く速さで横に振って否定する。その動作が全てを物語っていた。

「俺達がやるのはこれだけよ」

「煙草位いいじゃねえか。違うか？」

「十代で煙草吸っても許してくれよ」

「私は人間の世界の補導員でも警官でもない」

死神はそんな彼等にまた言った。

「咎める気も誰かに言う気もない」

「そう言ってくれると有り難いぜ」

「じゃあ心おきなく吸わせてもらうか」

「誰が煙草を何本吸おうが言うつもりはない」

死神らしい言葉ではあった。

「好きだけ吸うといい。百本でも二百本でもな」

「そこまで吸う気はねえけれどな」

「百本ってよ。凄いいぜ」

煙草は吸うがヘビースモーカーではないらしい。彼等は。

「とりあえず程々に楽しんでるさ」

「そうそう、何事も程々」

「煙草もそうなんだよ」

やはり妙なところで真面目な彼等だった。外見は如何にもチーマーでありそうは見えないが。案外根はしっかりしているようだ。

「じゃあよ。またな」

「欲しくなったら何時でも来な」

最後に廃墟を後にしようとする彼等に告げた言葉だった。牧村は

廃墟を出ると死神に一言だけ告げた。

「またな」

「わかった」

死神も短く返した。これで全て終わりだった。後に残ったものは無かった。だが死神はサイドカーに乗り去る牧村の背に変わっていくものも見た。しかしそれについては何も言わなかった。

第十八話

完

2009・6・7

## 第十九話 人狼その一

髑髏天使

第十九話 人狼

「また階級をあげたのね」

「そうなんだ」

暗い、何も無い海の底だった。時折そこに通リ掛る異形の魚達が見える。それは深海魚だった。

「またね」

「早いな」

青年はそれを聞いて一言述べた。

「こんなに早い昇進はじめてだ」

「そうね。ここまで早いのはね」

青年のその言葉に女も頷く。

「はじめてだわ」

「かつて多くの髑髏天使がいたが」

紳士も言う。

「ここまで早いのは確かにないな」

「僅か数ヶ月でもう力天使だ」

男もここで言葉を出した。

「このままでいけばだ」

「全ての階級に至るのも時間の問題ですね」

最後に老人が言葉を出した。そうしてそのうえで海の中に立っている。だが海の中にといてもそこにいるのは陸にいる時と変わらない。

「一年以内ですか」

「普通はさ、あれだよな」

また子供が言ってきた。

「大天使になるのでも早くて一年だったよな」

「そうね。封印される前のことは覚えてるけれど」  
「女がそれに応えて言ってきたのだった。」  
「それ位ね。確か」  
「我等が封印されてから後のことも調べた」  
「今言ったのは男だった。」  
「しかしだ。その天使達もまた」  
「遅かったのだな」  
「そうだ。あそこまで早い者は到底いなかった」  
「あまりにも早い。我等を封印したあの髑髏天使以上に」  
「紳士も語る。」  
「何処までもな。早過ぎる」  
「私達と戦うのも時間の問題でしょうか」  
「老人が今度出した言葉はこれだった。」  
「このままですと」  
「わからないわね。しかもよ」  
「しかも？」  
「老人だけでなく他の魔神達も女の今の言葉に顔を向けた。」  
「何か色が変わってきているわ」  
「色が変わってきた!？」  
「どういうことだ、それは」  
「男と青年が今の彼女の言葉に顔を向けて問うた。」  
「色が変わってきたとは」  
「何かあるのか？今の髑髏天使に」  
「まだはつきりとはわからないけれど」  
「こっ前置きする女だった。」  
「それでもね。何か変わってきているわ」  
「人間じゃないとでもいうのかな」  
「子供はふと考えてからこっ問うた。」  
「ひょっとして」  
「そういえばだ」

今度は紳士が口を開いてきた。

「あの髑髏天使は」

「最初に会ってみてどうだったかしら」

「普通の人間のものとは少し違っていたな」

女に返す言葉はこれだった。

「微妙にだがな」

「貴方はそう感じたのね」

「そうだな。はっきりとしたものではないがな」

それは彼も同じだった。やはりはっきりとは感じてはいなかったのだ。

「あれはな。人のものとはまた違う」

「人間じゃなかったら何なの？」

子供もそれがわからないのだった。いぶかしむ声になっていた。

「人間は人間じゃない。そうでなくなったら何なのさ」

「私達と同じでしょうか」

老人が言ったのは自分達のことだった。

「それでは。人間でないというのなら」

「そうだな。そうなる可能性もある」

男もそれに応えて述べてきた。

「人から魔物になった存在も多いしな」

「そういえば。一つ空いていたな」

青年が言ったのはこれまで話に出たことのないものだった。



## 第十九話 人狼その二

「席がな」

「席？そうだな」

青年のその言葉に紳士もふと声を出してきた。

「我等の席がな」

「我等は本来十三柱からなる」

青年は紳士に応える形でまた言ってきた。

「しかし我等十二柱は最初から今まで存在してきたがだ」

「最後の一柱だけはね」

女も目を光らせたうえで言葉を出した。

「出て来なかつたわね」

「そうですね。一柱だけはです」

老人も言った。

「最初から今まで空席のままです」

「そこに今の髑髏天使が入るかも知れないっていうの？」

子供は周りに問うた。話を出した青年に対してだけではなかった。

「若しかして」

「その可能性はある」

青年が子供に対して答えてきた。

「若しかするとな」

「あの強さで？」

子供は青年の言葉にまた首を傾げさせた。その首が右から左に傾く。そうしてそのうえでまた己の言葉を発していくのだった。

「魔神になるっていうの？」

「今は確かに我等程の強さはない」

青年もまたそのことはわかっているのだった。言葉にもそれを出した。

「だが。これから強くなっていけばだ」

「わからないんだね」

「そして何度も言うが」

また前置きしてきた。

「あの髑髏天使の強くなる速さは尋常ではない。このままでいけば我等に匹敵する強さを身に着けるのも時間の問題だ」

「じゃあ十三柱、最後の魔神になる可能性はあるんだね」

また言う子供だった。

「今の髑髏天使が」

「人でなくなってきたいるのが確かならな」

青年はあくまで仮定だが言うのだった。

「そうなるかも知れない」

「面白くなるかも知れないわね」

女もまた話すのだった。

「それだったら」

「じゃあさ。これからもどんどん闘っていけばいいんだね」

子供の言葉もうきうきとしたようなものになってきていた。

「僕達は」

「そうですね。それに」

老人は仲間達ににこやかに告げてきた。

「また一人戻ってきますよ」

「誰かしら」

女はそれを聞いて口元を頬笑まさせてきた。

「今度は」

「七人目は誰なのかな」

子供もまたその言葉に笑みを入れてきていた。

「もっと賑やかになって何よりだね」

「誰かまではまだ感じ取れませんが日本に向かってきているのは事実です」

こつ答えるのだった。

「それは確かです」

「そうか。なら待たせてもらおう」

男は静かに述べた。

「楽しみにさせてもらってな」

「それではだ」

最後に紳士が言う。

「今度は私が行かせてもらいたい」

「そう、あんたがなのね」

女は彼の言葉を聞いてまず述べた。

「あんたが行くのね」

「駄目なのか？」

「いいえ」

口元だけで笑ってそれは否定したのだった。

「私も今は魔物を出せないし構わないわ」

「何だ、呼んではいけないのか」

「今のところはね」

そうだとしたことだった。女はそのことを隠さなかった。

## 第十九話 人狼その三

「その通りよ。だから見させてもらうわ」  
「そうか」

紳士は女のその言葉を聞いた。そうしてそのうえで他の者に対して問うのだった。

「それでは他の者はどうだ？」  
「俺も狐と同じだ」  
「俺もだ」

男と青年が彼の今の問いに答えた。

「まだ魔物と呼んではない」  
「既に連れて来た魔物は出してしまった」  
やはりこう答えるのだった。彼等も。

「僕もね。今はね」  
「貴殿もなのだな」

「うん。僕もね、今は誰も呼んでいないよ」  
子供も同じなのだった。彼も今は魔物を用意していなかった。  
「ピクチョンは残念だったね」

「では。貴殿は」

彼は最後に老人に対して問うた。彼等の中で中心になっていると言ってもいい彼に対してである。最後に彼に対して問うたのである。

「どうなのだ？行くのか？」  
「私は遠慮させて頂きます」  
老人は穏やかな笑みと共に答えた。

「今回は」  
「そうか。では私だけで髑髏天使の相手させてもらうか」  
「ええ。楽しんできたらいいわ」  
「ここで見させてもらうから」

他の魔神達は口々に彼に告げる。

「そういうことだな」

「楽しんで来るといい」

「ではそうさせてもらおう」

彼は悠然と動いてそのうえでその場を後にする。そのマントが暗い海の中でも風になびくように動いていた。まるで風の中にいるように。

「ではな」

「はい、それではお楽しみ下さい」

老人がその彼に声をかけた。

「心ゆくまで」

「うむ」

こうして紳士はそのまま深海から姿を消す。深海の中にいる異形の魚達は彼には近寄らない。それはまるで恐れを感じ避けているようであった。

牧村は大学の講義に出ていた。ノートを開き右手にペンを持ちテキストと講義をする教授の話を交互に見聞きしていた。教室は広く段になっており三つの席が一つになったその席のうちの一つに座っている。彼の横には若奈がいて彼女も同じように講義を受けていた。「まずはです」

教授がここでマイクで話をしていた。

「この時代の欧州の騎士の特徴としましては」

「騎士か」

牧村は騎士と聞いてふと言葉を出したのだった。

「騎士がどうだというのだ。それで」

「主従関係は契約によりものであり」

「契約か」

「確か双務的だったわよね」

若奈も話を聞いていた。そしてここで牧村の横で言うのだった。

「騎士の契約って」

「そうだったな、確か」

牧村はその若奈の言葉に対して述べた。

「日本の主従関係と違ってな」

「そうよね。そこが全然違うのね」

「そしてその倫理観は」

騎士について話されていく。二人は今はその騎士の話聞いていただけだった。そして講義が終わるとすぐに体育館に入り。そこでフェシングの素振りをするのだった。

「そういえば」

「何だ？」

黒いジャージ姿でフェシングの剣を振っている。その彼に対して若奈がまた声をかけてきた。

「この剣もあれよね。騎士のものよね」

「そうだな。ルーツは同じだ」

剣を振りながらこう述べる牧村だった。

「あの時代の剣ではないがな」

「サーベルとは違うのね」

牧村が振っているその剣はフェシングで最もポピュラーなあの細いものではなかった。所謂両刃の剣だった。それを振っているのだ。

「あの時代の剣は」

「あの時代の剣はより大きい」

牧村はそのサーベルを振りながら若奈に答えた。

## 第十九話 人狼その四

「それこそ自分の身体に近いだけの大きさがあった」

「そんなに大きかったの」

「その剣で相手を斬るといふより叩く」

そしてこう話すのだった。

「馬上から叩き落とすといった方がいいな」

「何かこのサーベルとは使い方が全然違うのね」

「武器の使い方は時代によって違う」

今度の言葉はこれであった。

「だからだ。そういう使い方もある」

「剣つていふよりあれよね」

若奈は彼の話の話を聞いて首を右に少し捻って述べた。

「棒とかそんな感じよね」

「棒か」

「そう、棍棒」

これだと言っているのである。

「鉄のね。それじゃあ叩くのと一緒じゃない」

「その通りだ。そして馬から叩き落とす」

あくまでその為だったのである。当時の欧州の戦いでは相手を馬から落としてそのうえで捕虜にするのが狙いだった。だからそれでよかったのだ。

「それで行く」

「成程ね。それでそんな剣なのね」

「そういうことだ。だがそれが変わって」

「今のフェシングのレイピアとかになるのね」

「レイピアは馬上では使えないな」

「それには無理があるわよね」

若奈はここでそのレイピアを脳裏に浮かべる。それは確かに馬上

で扱うにはあまりにも細くとても無理だと結論を出すのだった。

「やっぱり」

「そうだ。俺はこのサーベルを使う」

「それが一番いいのね」

「俺にはな」

「ここでもあえて髑髏天使のことは隠していた。

「これが一番いい。確かにな」

「そうみたいね。実際に剣の振りが一日ごとに変わってるわ」

「一日ごとにか」

「ええ、もう本当にね」

今実際に彼のその剣の振りを見ての言葉だった。

「変わってるわよ。よくな」

「そうか。ならいい」

「やっぱりあれよね。一日で何千回も振ってるのよね」

「千回は最低でも振っている」

これは実際にやっていることだから言えることだった。

「テニスの方もな」

「凄いわね。そこまでできるなんて」

若奈はあらためて彼のその鍛錬を知って言葉を出すのだった。

「毎日毎日。それで走って筋肉トレーニングもして部活も出たか

らね」

「身体を動かす理由はだ」

「スポーツだから？」

「スポーツの原点に帰っているつもりだ」

あえてこう言ったのである。スポーツに関して。

「その原点にな」

「ふうん、とにかく燃えてるのね」

若奈はこういうふうに捉えたのだった。やはりよくわからずに。

「フェシングとテニスに」

「そんなところだ。この二つはやっていく」



「いいんじゃない？身体つきも半端なものじゃなくなってきたし」  
それはその通りだった。牧村の身体には脂肪がなくなってきた。全身動く為の、闘う為の筋肉になってきていた。まさに戦士の身体になってきていたのだ。

「それでね」

「今日はもう講義はない」

牧村はここで学生の本分についても述べた。

「だからだ。このままここでやっていく」

「そうするのね」

「そっちはどうするんだ？」

素振りを続けながら若奈に問う。もうその顔には汗が流れている。

「このままいるのか？体育館に」

「私はマネージャーよ」

まずはこう答える若奈だった。

「はい、これでわかってくれたわよね」

「ああ」

そして実際にわかる牧村だった。二人の関係がそれをさせていた。

## 第十九話 人狼その五

「充分だ」

「ならいいわ。それにしてもよ」

そしてそのうえでまた言うのだった。

「最近少しずつだけれど雰囲気も変わってきてるわね」

「雰囲気がか」

「ええ、変わってきてるわ」

このことを彼に告げるのだった。

「何か余計に鋭くなって」

「鋭くなってるか」

「前を見ている？」

「まずはこう言った。」

「いえ、むしろ」

「むしろ。何だ」

「本能から闘いを見ている感じかしら」

今の牧村を見ながら考えつつ出した言葉だった。

「最近の牧村君ってね」

「本能か」

「私の気のせいかも知れないけれど」

そしてこうも言うのだった。

「そんなふうになってきているわ」

「最近似たようなことを言われる」

牧村は若奈の言葉を聞いてぼつりと言葉を出した。

「最近な」

「ふうん、他の人にも言われるのね」

「何故かな。どうしてかはわからないがな」

「自分が変わるのって自分自身じゃわからなかったりするのよ」

「自分ではか」

「こんな言葉言われたことがあるのよ」

若奈は言葉を少し寄り道させてみせた。

「目は自分自身は見えないってね」

「そうだな。他人は見えるがな」

「それこそ鏡がないと見えないから」

鏡というのだった。ここで。

「だからね。難しいのよね」

「そして自分で気付かなければどうしようもないな」

「そうなのよね。おまけにね」

若奈はまた難しい顔をして述べたのだった。

「何でもそうなのよね。まず自分で気付かないとね」

「それはフェシングやテニスだけではないしな」

「お料理もよ」

若奈の本職である。彼女が家の喫茶店を継ぐことはもう決まっている。それは彼女が三人姉妹の長女であるからだ。そして彼女もそれを受け入れている。

「自分で気付かないと駄目なのよね」

「コーヒーマット淹れるのもそうだな」

「コーヒーマットだつて深いからね」

その深さをわからない彼女ではなかった。

「それこそ淹れ方一つで味もかなり変わるから」

「その通りだ。そしてそれを淹れることもな」

「自分で気付かないとね」

やはりそれもだと話されるのだった。

「駄目なのよね。本当に厄介よね」

「そうだな。そしてできたらだ」

「全然違ってくるのよね」

「少しでも変われば全く違ったものになる」

言いながら素振り続ける。その間目の前の鏡から目を離さない。そこには顔中から汗を滴らせている自分自身がいた。そしてその自

分自身をじつと見ていた。

「全くな」

「そうよね。牧村君フェシング全然違ってきてるわよ」

「最初と比べてだな」

「ええ。もう別人」

「こうまで言う若奈だった。

「剣捌きだけでなくフットワークや身体の動き全体がね」

「剣はただ剣を操るだけじゃない」

「それだけではない。これはフェシングだけではなかった。

「身体の動き全体が大事だからな」

「テニスの動きもちゃんと出てるわね」

「若奈はそれも見て言うのだった。

「今の素振りにも」

「お互いを影響させ合う」

「牧村の言葉だ。」

## 第十九話 人狼その六

「その為にどちらもはじめたからな」

「考えてのことだったのね、フェシングもテニスもしたの」

「その通りだ。それが生きてきているな」

「最近じゃどっちも大学の誰にも負けなくなってきたるんじゃないの？」

やはり若奈はスポーツの視点から話していた。やはり彼がフェシングとテニスをする真の目的は知らない。そうして知らないまま話すのだった。

「はじめたばかりなのに。やっぱり練習が半端じゃないからね」  
「そうかもな」

しかし髑髏天使である彼にとってはそれはどうでもいいことだった。素っ気無い言葉にそれが出ていた。だがこれも若奈にはわからない。

「それはな」

「どう？試合とか出てみる？」

やはりそのスポーツの視点から話す若奈だった。

「試合。どうする？」

「出られるのか？」

「出られるわよ」

今の牧村の言葉には何を言っているの、という感じの若奈だった。

「当たり前じゃない。クラブ活動なんだから」

「そういえばそうか」

「そうよ。先輩の人達にもお話してね」

「だったら出てみるか」

返事はどうにも今二つ以上にどうでもいい感じだった。実際に彼にとってはそうなのだがこれも若奈にはわからないことだった。知らないが為である。

「試合にも」

「絶対にいいわ。試合に出てこそだからね」

若奈はこのことをこっそりとばかりに彼に勧めてきた。

「やっぱりね。じゃあ私から先輩達に言っておくわね」

「そっちでか」

「私フェシング部とテニス部のマネージャーだし」

「それもあつてか」

「そうよ。マネージャーとしても推薦してあげるから」

私情だけではなく公でもあるというがこれはかなり言い訳めいていた。

「楽しみに待っていてね」

「そうさせてもらうか。それにしてもだ」

「どうしたの？今度は」

「右手だけでは駄目だな」

不意にこんなことを言ってきたのである。

「腕を変えてみるか」

「変えるの」

「こつする」

若奈に応えながらだった。右手に持っていたその剣を左手に持ち替えてみせた。そうしてそのうえで今度は左手で素振りをはじめたのだった。

「左手でな」

「あれっ、右手だけじゃないの？」

左手に持ち替えてそのうえでまた素振りをはじめた彼に対して話すのだった。

「左手でも振るわね、そういえば最近」

「右だけじゃ駄目だからな」

「テニスでもそうよね」

「右だけじゃなくて左もだ」

彼は言うのだった。

「どちらもできないとな。駄目だ」

「駄目ってどういうこと？」

若奈は彼のことかわからず話した。

「だから駄目って。剣道じゃないから二刀流はできないわよ」

「それはわかつている」

「じゃあ何でなの？左手でも振るの」

怪訝な顔でまた彼に問うたのだった。

「どうしてなのよ、本当に」

「その方がいいからだ」

彼はここでもぶつきらぼうに答えたのだった。

「両手で使える方がな」

「それじゃあ本当に剣道だけれど」

「闘うにはだ」

また髑髏天使としての言葉を出してしまった。

「両手の方がいい」

「闘いつて。本当に何か」

若奈は彼のそんな言葉を聞いてまた首を捻ることになった。

## 第十九話 人狼その七

「牧村君つてスポーツしてるようには見えない時があるわよ、そんな言葉を出すから」

「だからスポーツをしている」

「スポーツはしているというのである。」

「スポーツはな」

「スポーツねえ」

「スパルタのスポーツをしている」

「彼がしているのはこうした意味でのスポーツなのだった。」

「俺はな」

「話が今一つ以上にわからないけれど」

「しかしそれはどうしても若奈にはわからないことだった。」

「まあいいわ。とりあえずスポーツドリンク用意しておくわね」

「済まない」

「それとタオルとね」

「とりあえず今日は汗をかく」

「練習を続けるということだった。」

「このままな」

「頑張つてね、無理をしない程度に」

こんな話をしてそのうえで練習を続ける牧村とそのサポートをする若奈だった。二人はその日は練習に専念した。そしてその次の日牧村はまた博士の研究室にいた。しかし彼が部屋に入った時博士はいなかった。彼は博士がいないのを見てまずはこう呟いた。

「扉のあれは在室になっていたが」

「ああ、すぐに戻るからだよ」

「だから博士はそうしておいたんだよ」

「すぐにか」

妖怪達の言葉を聞いて述べたのだった。



「ここに戻って来るのか」

「ただ本を買いに行っただけだからね」

「大学の本屋さんにね」

「本!？」

本と聞いて思わず声をあげたのだった。

「普通の本を買いにか」

「そつだよ、漫画ね」

「週刊誌をね」

「漫画をか」

博士が漫画を読むと聞いてその顔をさらにいぶかしむものにさせた牧村だった。

「博士は漫画を読むのか」

「あれっ、知らなかったの？」

「博士漫画大好きだよ」

「百歳を超えてか」

それで漫画を読むということが想像できなかったのだ。牧村の考えでは漫画は若い者が読むものであるという意識がある。だからであつた。

「漫画を読むのか。しかも週刊のか」

「そつだよ。それも少年誌をね」

「青年向けのも読むけれど」

ここでまた話す妖怪達だった。

「あと少女漫画も読むし」

「色々と読むんだよ」

「意外と若いのだな」

牧村は博士のその趣味を知って思わず言った。

「その気は」

「他にもテレビゲーム好きだしね」

「あとラジコンとかもね」

「趣味も若いな」

テレビゲームやラジコンと聞いてまたしても驚く牧村だった。

「それもかなり」

「そうだよ、だから長生きするんだよ」

「そうやって気が若いからね」

妖怪達はだからこそと牧村に話すのだった。

「あと二十年は生きられるかな」

「三十年はいけそうだよ」

「三十年か」

牧村はその三十年という言葉聞いてまた言うのだった。

「そこまで生きれば最早記録だな」

「あの調子だといけるよ」

「奥さんもね」

「奥さんとも確か金婚式を終わっていたな」

つまり五十年だ。そこまでいける夫婦は確かに少ない。

## 第十九話 人狼その八

「いや、六十年だったか？」

「そういえばそこまでいつてたっけ」

「終戦直後からだしね」

「ここでまた話す妖怪達だった。」

「あの御二人もね」

「僕達との付き合いも百年いったかな」

「本当にあの博士は幾つだ」

「今度は実際の年齢についても疑問に思った牧村だった。」

「相当な長生きだが」

「さあ。多分百歳は超えてるけれど」

「どれだけかはね。僕達にもわからないし」

「やはり何処か人間離れしているな」

「牧村でさえ博士についてはこう思うしかないのだった。」

「仙人かそうしたものみたいだな」

「仙人ね、確かにね」

「外見もそんな感じだしね」

「妖怪達も仙人という表現には賛成するのだった。」

「僕達に近くなってるかもね」

「付き合い深いしねえ」

「妖怪に近いのか」

「牧村はそれを聞いてまたその表情を動かしたのだった。」

「あの博士は」

「こう言っても納得できるよね」

「博士に関しては」

「確かにな」

「そしてその通りであった。牧村も妖怪達のその言葉に頷く。」

「そう言われても。納得できる」

「だからさ。博士はかなり特別な人だから」

「百歳超えても気は若いんだよ」

「いいことではあるがな」

牧村はそれはいいとするのだった。

「気が若いのはな」

「そうでしょ？だからさ」

「漫画を読むのもいいことなんだよ」

「悪いとは一つも言っていないが」

それは一つも言っていない牧村だった。

「別にな」

「あつ、そういえばそうか」

「牧村さんそんなことは一つも言っていないよね」

「驚いたただけだ」

それだけだというのだった。彼は。

「百歳を超えて尚だからな」

「僕達は何百歳も生きていてそれでも読んでるけれどね」

「そうそう」

また自分達のことを話す妖怪達だった。

「ブラックジャックも大好きだったし」

「嗚呼！花の応援団もよかったよね」

「あとサイボーグ009もね」

「随分古い漫画だな」

牧村は彼等がここで挙げた漫画のタイトルを聞いて述べた。

「そんなに古くから読んでいるのか」

「戦前の漫画も大好きだったよ。冒険ダン吉とかね」

「のらくろもね」

やはりかなり古い漫画だった。なおのらくろの作者の妻は評論家であり保守論壇の領袖の一人であった小林秀雄の妹である。

「よかったよね」

「最近じゃマガジンとかサンデーがいいかな」

「ヤンマガとかヤンジャンもね」

「あと月刊だとチェンピオンレッド」

今の漫画もかなり読んでいる妖怪達だった。

「どれも面白いよね」

「ストップ！兄ちゃんとかいがくり君もよかったけれどね」

またしても随分と古い漫画のことが話に出る。

「デビルマンとかもね」

「アストロ球団とかリングにかけるも迫力あったよね」

「本当に随分読んでるな」

牧村は彼等が次々と挙げる漫画のタイトルを聞いてまた言った。

「それも熱いジャンルのものが多いのだな」

「女の子はまた別ですよ」

ろく子の首が延びてきて牧村の顔の前で言ってきた。

## 第十九話 人狼その九

「私はガラスの仮面とか川原泉先生の漫画が大好きですよ」

「あとパタリ口もか」

「あれっ、何でわかつたんですか？」

「花とゆめだからな」

だからだと答える牧村だった。

「ガラスの仮面に川原泉先生といえはな」

「そうですね。花とゆめです」

ろく子もにこりと笑ってそれを認めてきた。

「私あれが好きなんですよね」

「私はりぼん」

「わしはなかよしじゃ」

雪女と砂かけ婆も言ってきた。

「それが好きなんだけれどね」

「驚いたかのう」

「驚いたのは事実だ」

牧村もそれを認めてきた。

「まさかな。漫画も熱心に読んでいるとはな」

「別冊フレンドやちゃおも好きですよ」

またここでろく子が彼に言ってきたのだった。

「これでも漫画好きですから」

「妖怪も漫画を読むか」

「それがやっとなわかってくれたみたいだね」

「何より何より」

妖怪達は牧村のその言葉を聞いて述べたのだった。

「しかし。納得できないものはまだあるがな」

「そんなの慣れたら終わりだから」

「気にしない気にしない」

いつもの調子で牧村にかけた言葉だった。

「全然ね。問題ないから」

「さて、そろそろかな」

妖怪達は林檎や葡萄のジュースを飲んでいた。そうしてそのうえで言い合っていた。

「博士が戻って来るのって」

「そうだね。そろそろだね」

「じゃあもうすぐだからね」

そして牧村にも声をかけるのだった。

「楽しみに待っていてよ」

「漫画をね」

「漫画はいいが」

それについてはどうでもいい牧村だった。

「俺はな」

「けれど漫画読むよね、牧村さんも」

「さっき僕達が出したタイトル全部知ってたし」

「漫画は好きだ」

牧村もそれは言う。

「読むのも買うのもな」

「まあ嫌いな人はあまりいないよね」

「実際にね。妖怪もね」

彼等は話すのだった。

「嫌いなのはいないよね」

「本とか全く読まない人は例外としてね」

それは例外だというのだった。中にはそんな人間もいる。しかしであった。牧村はそうした人間ではなく彼はやはり漫画を読むのだった。

「僕達だってね。読むしね」

「あればあるだけね」

「漫画は読んで減るものではない」

牧村はまた言った。

「だからだ。好きなだけ読めばいい」

「そうそう。博士だって言ってるしね」

「あっ、帰って来たよ」

ここで、であった。その博士が戻って来た。見ればにこにことしてその手に漫画雑誌を数冊抱えている。如何にも今から読もうという顔であった。

しかし牧村の姿を認めて。また別の笑顔になって彼に言ったのだった。

「ほう、来ておったのか」

「少し待たせてもらっていた」

牧村はその博士の顔を向けて述べた。姿勢はいつものように壁に背中を当ててそのうえで立って彼に顔を向けている姿勢であった。



## 第十九話 人狼その十

「漫画を買いに行っていたのか」

「うむ、後は文庫本も買ったがな」

「文庫もか」

「何、ライトノベルじゃよ」

これまた笑顔で牧村に話してきた。

「今から読もうと思っておったのじゃがな。まあ後にすればよいな」

「別に俺は読みながらでもいいがな」

自分に気を使ってくれているとわかったので彼も博士に対して気遣いを見せてみせた。

「それでも話はできるしな」

「いやいや、そうはいかんのじゃ」

しかし彼は牧村のその申し出を断るのだった。

「わしはあれじゃよ。漫画に専念したくてのう」

「だから後にするのか」

「続きが楽しみじゃ」

やはりその言葉は実に明るいものだった。

「じゃからじっくりと読ませてもらうとする」

「そうか。それならいい」

牧村も博士のここまでの言葉を聞いて頷いたのだった。

「俺はな」

「それではじゃ」

まずはその雑誌を全て自分の机の上に置いた。そうしてそのうえで席に座り。それから牧村に顔を向けて話に入るのだった。

「どうしてここに来たのかはおおよそわかっておるがな」

「そうか。わかるか」

「また階級をあげたのじゃな」

牧村の顔を見て出した言葉だった。

「そうじゃな。力天使になつたのじゃな」

「そうだ。なつた」

彼も博士のその問いに答えて頷くのだった。

「今度はな。それになつた」

「ふうむ。やはり早いのう」

博士は左手で自分の顎鬚をしごきつつそのうえでまた述べたのだつた。

「昇進がのう。早いものじゃ」

「やはりそう思うか」

「うむ、早い」

博士はまた彼に告げた。

「少なくとも文献でここまで早かつた髑髏天使はいないのう」

「そうか。そこまで早いか」

「その通りじゃ。そしてその力天使じゃが」

話はそこに移つた。その今度なつた力天使についてである。

「どうじゃ？その力は」

「水と氷の力だつた」

その力のことも述べた牧村だつた。

「それだつた」

「水と氷か」

「それは文献にあつたか？」

「これにあつたぞ」

言いながら出してきたのは机の右側にあつたこれまた非常に古い書物であつた。紙ですらない。それは骨であつた。見ればその骨にはかなり独特な文字が書かれていた。

「その字は何だ？」

「甲骨文字じゃ」

博士はそれだと告げてきた。

「それは知つていると思うが」

「教科書によく出て来るあれだな」

牧村にとって甲骨文字とはそうした存在だった。

「そうだな。確か」

「そうじゃ。あの甲骨文字じゃ」

博士もそれだと言った。

「中国の殷代、本当の国名は商だったな」

「確かな」

殷というのは王族の姓である。そして国名が商なのだ。殷という国家にはこうした混乱があるがこれは若しかすると史記でこのように表現されていたからかも知れない。

「それだったな」

「左様、その甲骨文字じゃ」

それだというのだった。

「それに書かれておるのじゃがな」

「力天使のことがか」

「やはり氷と水を使うと書かれておる」

牧村が身に着けた力そのものであった。

## 第十九話 人狼その十一

「そのようにのう」

「そうか。それではやはり」

「君は力天使になった」

あらためてそのことが確かめられたのだった。

「紛れもなくな」

「俺は力天使にもなったか」

「第五の階級じゃな」

博士は階級についても彼に告げた。

「中級の第二階級でもある」

「中級のか」

「あと一つで中級も最上級になる」

「というであれだな」

「主天使じゃ」

それが中級三階級の最も上になるのである。

「中級はあとそれだけじゃ」

「最初は天使だったのにもうそこまでなったのか」

牧村にしては珍しく言葉に郷愁のようなものが宿っていた。

「俺は」

「何か変わったところはないか？」

博士は今度はこう牧村に尋ねてきた。

「それでじゃ。強さや能力の他にはじゃ」

「特に感じないな」

自分で感じていることをそのまま述べた言葉だった。

「別にな。感じはしない」

「そうか。感じないか」

「俺は俺だ」

そしてまた言った牧村だった。

「別におかしなところはないがな」

「だといいのじゃがな」

しかし博士はここで牧村の言葉を完全に肯定するのではなくいささか否定めいたものを漂わせた、そんなふうな言葉を出したのであった。

「それでのう」

「俺が気付いていないうちというのか」

「そういうことはままにしてある」

奇しくもそれは若奈が彼に言った言葉と同じであった。

「時にしてのう」

「鏡を見なければ気付かないか」

「鏡を見ても気付かないこともある」

「こつも述べる博士であつた。」

「時としてのう」

「鏡を見てるか」

「鏡は確かに自分を映し出してくれるが見るのは自分自身じゃ」

「だからか」

「一度に全てが見えるわけではない」

人の目とはそういうものだ。視点は一つのポイントにどうしても集中してしまう。だからその時に見なくてはならないその場所のことが見えないこともあるのだ。

「決してな」

「そういうものだからか」

「君についても同じじゃ。やはり見えていないかも知れぬぞ」

「俺自身のことがか」

「人の話も聞くことじゃな」

いささか人生論めいた言葉が出された。

「それで気付いたりもするものじゃからな」

「わかつた」

そして牧村も博士のその言葉に頷いてみせた。

「ではそうしてみよう」

「言うのはいいけれど」

「どうかね」

彼の側に車座で座っている妖怪達が。ここでまた言うのだった。

「牧村さんってねえ」

「だようねえ」

そのうえで牧村について話す。

「人の話聞かないような気がするし」

「何か独自の世界を持つてるしね」

「人の話を聞かないか」

「そうじゃないの？」

「そんな気がするけれど」

こう彼について告げるのだった。

「何処かね」

「当たってるかどうかはわからないけれどさ」

「当たっているのかも知れないな」

牧村は彼等の言葉を聞いてまた述べた。

第十九話 人狼その十二

「若しかしてな」

「自覚しているところあるんだ」

「それじゃあ」

「昔から言われていた」

だからだというのである。

「時々な」

「皆そう思うんだね。やっぱり」

「そうみたいだね」

妖怪達の今の彼等の言葉を聞いてそれぞれ納得した顔で頷くのだ  
つた。

「結構頑固なところもあるし」

「何か物凄く自分の強い人だし」

「それも否定しない」

それもだというのだった。

「別にな」

「だと思っただよ」

「けれどさ」

そのうえでまた彼に対して告げた。

「全く聞く耳持たないってわけじゃないよね」

「中には自分は手駒じゃないとか動くのは自分だとか言う奴もいる  
けれど」

「少なくともそこまで愚劣なつもりはない」

牧村はこつも返したのだった。

「そこまで頑迷だと最早生きることも困難だ」

「そういう手合いもおったのう」

博士もそれを聞いてまた述べた。

「以前会ったわ」

「人間でか？」

「人間でじゃ」

牧村にすぐに返してきた。

「思慮分別が全くなく常識が皆無じゃった」

「また随分と厄介な奴だつたんだな」

「そうしたこともおつたわ」

しかもそれであつたのである。

「破廉恥極まる行動を取つて信用を完全に無くしてそれに気付かなかつたしのお」

「そんな馬鹿本当にいるんだね」

「凄いね」

長く生きている妖怪達ですら呆れるような話であつた。

「ことの善悪も全くつかんで悪党とグルになつておつた」

「また随分と愚劣な奴だつたんだな」

「わしが今まで会つた中で一番の愚か者じゃつた」

博士ですらそう言う程であるのだつた。

「法律やルールも全く理解できんかつたしのお」

「凄い馬鹿だね、いや」

「何それ！？」

妖怪達がまた驚いていた。

「つてどうか生きていけるの！？それで」

「しかも頑迷なんだよね」

「じゃから。人の言うことは全然聞かん」

やはりそれだといふのである。

「それで暴走してとてつもない愚行を繰り返し責任も全く取らん」

「馬鹿どころじゃないよね」

「頭おかしいよな、絶対」

「実際の生活にもかなり重度の支障をきたしておつたらしいからの  
う」

「当然だ」



牧村はそうなることも当然だと言いつ捨てた。

「そこまで酷ければ自然とそうなる」

「背信行為と呼ぶなら呼べ、この行動は仕方なかったとか必然性があつたとかも言つておつたな」

「いや、それ自己弁護じゃない」

「自分は可愛いんだ」

「自分だけじゃつた」

博士は忌々しげな口調でも憎しみを思い出したものでもなかった。ただ淡々と事実を述べているだけだつた。ただそれだけだつたのである。

「何しろ自分勝手に動いて責任把握能力が皆無じゃつたからな」

「それでそいつはどうなつたのだ？」

牧村は最後にそのことを博士に問つた。

「その愚か者は。どうなつた」

「まず務めている会社は懲戒免職された」

「やはりな」

牧村はそれを聞いて静かに頷くのだつた。

## 第十九話 人狼その十三

「それではそうなるの当然だ」

「外部の人間に社内の秘密をばらすわ大事な商談を自分勝手に動いては破談にするわ処理に行くように言われても嘘をついて行かないわでろう」

「バイトでもそこまでやったら訴えられる」

「牧村は今度は一言だった。」

「よく訴えられなかったものだ」

「上司は『心を広く持ちましようよ』と言われた時点で切れた」

「心を広くって」

「僕達でもそんなことやられてそんなこと言われたら間違いないよ」

「殺す」

「赤鬼の言葉は本気だった。」

「そうした奴にそうしたことを言われたらな」

「同感」

「絶対にそうするね、僕も」

「そこで仏とまで言われたその上司も切れて社長に言って懲戒免職となったのじゃよ」

「ここで遂に、なのだった。」

「会社がそ奴に受けた損失を全部実家に請求したうえだな。訴えられはせんかった」

「それで家に戻ってどうなった？」

「同じじゃよ。反省することもなかったからのう」

「やはりな」

「牧村はそれを聞いて納得した顔で頷くのだった。」

「それで一族にも見放されたか」

「禁治産者に認定されたわ」

つまり完全な社会的無能力者と認定されたのだ。

「後は知らん。どこぞにずっと幽閉みたいにされとるそうじゃがな」

「まあそうなるよね」

「だよねえ」

妖怪達も納得することだった。

「そこまで馬鹿だとね」

「どうしようもないよ」

「これがわしが今まで知ることになった奴の中で一番の愚か者じゃ  
博士はここでまた話した。

「どうじゃ。凄いじゃろ」

「凄いなんてものじゃないよ」

「三歳か四歳の子供じゃないよね」

「れっきとした成人じゃった」

それでもそうだったというのである。

「それでもな。そんな有様じゃった」

「どうしようもない奴は何処にもいるな」

牧村は静かに言い捨てた。

「とはいってもそこまでの愚か者はそうはいないだろうがな」

「他にも権力に反対するのならテロリストもいいとほざいておった

愚か者もおったのう」

「それも酷いね」

「どんな馬鹿？本当に」

またしても呆れる妖怪達だった。

「つていうかそれって」

「だよねえ」

「そこまで馬鹿だって生きていけるのかな」

「だから破滅したじゃない」

「それもそうか」

妖怪達の間で出た答えはそれであった。

「無理か、やっぱり」

「最後は幽閉なんてね」

「それまでが実に酷いものじゃった」

博士ですらその顔を思いきり顰めさせていた。

「問題外にな」

「だよねえ。とてもね」

「有り得ないよね」

「まあそんな馬鹿は滅多におらん」

博士もまたあらためて言ってきた。

「はつきり言つて二度と会いたくはない」

「まあ僕も会いたくないね」

「僕も」

「私もよ」

そしてそれは妖怪達も同じであるのだった。

「そんなふざけたのと付き合つたらこつちまでえらいことになるよ」

「しかも責任取らないしおまけに悪いとも思わないって」

「つける薬ないじゃない」

こつちまで言う妖怪達だった。

## 第十九話 人狼その十四

「博士も苦勞したんだね、やっぱり」

「そんなのと会って」

「百歳を超えれば色々あるものじゃが」

博士は腕を組んで回想にも入っていた。

「こんな経験できるのは滅多にないことじゃったな」

「だって僕達だってそこまで馬鹿な人間聞いたことないし」

「出鱈目なね」

その出鱈目さを聞いて妖怪達の誰もが呆れていることだった。世の中とはそうした意味でもかなり広いと言えた。いい意味では絶対がないが。

「妖怪達で驚くものだが」

「いや、牧村さんはね」

「あまり驚いていなかったよね」

「ねえ」

今の牧村の言葉には一斉に突っ込みを入れる妖怪達だった。

「僕達見ても何だって感じだったし」

「普通泡吹いて倒れるよね」

「それか血相変えて逃げ出すか」

こんな話をしていくのだった。

そして、であった。彼等はさらに話すのだった。

「けれど牧村さんそういうのなかったし」

「それが凄いいんだけれど」

「そこまで驚くこともなかった」

やはりその言葉は平然としている牧村だった。

「妖怪はな」

「けれどそこまでの馬鹿は見たことがなかったんだ」

「妖怪よりもなんだね」

「妖怪は害がない」

これもわかつてきた牧村だったのである。やはりそういうこともわかつてきたのだ。牧村の元々の性格である偏見のなさと妖怪達自身の無邪気さがそうした結論にさせたのだ。

「別にな」

「そうだよ。僕達平和主義者だし」

「楽しければいいからね」

「人を脅かすのは好きだけれど」

「脅かすだけか」

「それが妖怪の生きがい」

「だからだよ」

これはそれこそ昔から変わってはいない。やはり妖怪というものの仕事といえば人を驚かせることである。小泉八雲の小説にもある通りだ。

「それだけは止めないよ」

「絶対にね」

「その程度はな」

牧村もいいというのだった。

「もつともそれで人に逆襲されても知らないがな」

「何度もあったよ、そういうの」

「刀で切りつけられたり銃で撃たれたり」

「一番凄かったのはあれじゃったか？」

博士も笑いながら彼等に対して述べてきた。

「陸軍将校を驚かせた時か」

「いやあ、お侍を驚かせるより勇気がいったよね」

「あの人達真面目だし」

「しかも冗談が全然利かないからね」

まさにそれが陸軍将校であった。とにかく融通が利かない糞真面目さがあつたのである。

「だからもう僕達にすぐ刀抜いて成敗しようとしたし」

「凄かったよね」

「命がけだったよね」

「そうそう」

「よく死ななかつたな」

牧村はそれを聞いてまた述べた。

「そんなことがあつて」

「あと一歩で、だったけれどね」

「かなり危なかつたよ」

やはりそのわりには明るい声の彼等であつた。

「けれど。だからこそスリルがあつたよね」

「面白かつたよ」

「思えばいい者達じゃつた」

博士は陸軍将校達に対してかなりいい評価を出していた。

「昔のことはやはり懐かしいものじゃ」

「いい者に出会えば悪い者にも出会つか」

「それが人生つてことだね」

「そうだね」

妖怪達が出した結論はこれであつた。

## 第十九話 人狼その十五

「牧村さんはその辺りどうなの？」

「髑髏天使にもなったけれど」

「一概には言えない」

「こう妖怪達に返す。」

「一概にはな」

「そうなんだ」

「髑髏天使になったのはそれとはまた別問題なんだ」

「妖怪にも魔物にも色々な者がいる」

これは髑髏天使だからこそわかることであつた。それもまた話すのである。

「そして人間にもだ」

「そういう無茶苦茶なものには会ってないんだ」

「博士があつたみたいなのは」

「そこまでの馬鹿にはな」

牧村も流石にそこまでの相手には会っていないのだった。

「見たことも聞いたこともない」

「あれはまあ何じゃな」

博士にしる首を捻っていた。実際に彼が会って知っている相手だというのにだ。しかも記憶に残っているというのにそれをするのであつた。

「稀少種じゃな」

「稀少か」

「あんな奴がそうそういては世の中は成り立たん」

「ここまで言うのであつた。」

「到底な」

「到底か」

「滅多におらんから驚くべきことなのじゃよ」



博士の言葉はまさにその通りだった。そうした相手だから話に出るのだ。よくいるような人間ならば最初から誰も話にしたりはしないものだ。

「そこまでの人間はのう」

「そういうことだな。やはりな」

「人間には常識があるのじゃよ」

「当然僕達にもそれはあるよ」

「常識はね」

彼等もそれは話していくのだった。妖怪達にしる妖怪の世界としての常識が存在しているのである。それがないとやはり付き合えないのである。

「それって人間とはあんまり変わらないよ」

「大抵はね」

「俺もそれは同じだ」

また言う牧村だった。

「常識のある相手とだけしか会っていない」

「けれど常識のない相手もいたよね、やっぱり」

「世の中そういうのも幾らでもいるよ」

「それもやはり限度がある」

限度というものも話に出るのだった。この限度を超えているかどうか、そうしてどの程度であるかによって問題は大きく違ってくるものだ。

「そこまで常識のない相手は聞くのもはじめてだ」

「まあそうじゃな」

言うまでもなく博士が知っているその彼である。

「会社の帳簿を他社の人間に見せるのじゃからな」

「それは確実に懲戒免職だ」

牧村は即答した。

「何故そんなことをしたのだ？」

「簡単じゃ。常識がないからじゃ」

だからなのだった。やはり。

「その他にも会社の人間の今で言う個人情報細かい部分まで普通に他人に教えたりな」

「それはその人に許可を得ていたのか？」

「いいや、無論そんなことはない」

やはりなのだった。これは牧村も妖怪達も話を聞いて予想はしていた。

「勿論無断じゃ」

「その人は滅茶苦茶怒っただろうね」

「っていつか今それやったら大問題だよ」

「で、仕事は勝手に暴走して潰すしろう」

先程出た話のことである。

「しかもそれは何日もかけるような仕事で他の人間が今日はこれで終わりということにしようと思ったたら一人で暴走してのう」

「救いようのない馬鹿だね」

「っていつかそれも問題外だよ」

妖怪達はそれを聞いてまた呆れる次第だった。妖怪である彼等も呆れることだったのだ。

## 第十九話 人狼その十六

「それで失敗して仕事は完全に終わりじゃ」

「その仕事を再開しようとしても動かなかったんだな」

「他の仕事で忙しいと言って出なかつたがそれは嘘じゃった」

「えっ、それでその仕事しなかつたの!？」

「どういう頭の構造してんの!？」

牧村は表情を消していたが妖怪達は完全に呆れてしまっていた。

「それでその仕事再開させなかつたの」

「潰した本人なのに」

「話を切ったのは必然性があつて動くのは自分じゃと言つてな」

またこのことを話す博士だった。

「それで動かず仕事は潰れて周りは大損害じゃ」

「その周りの人達怒つただろうねえ」

「やっぱり俺だったら殺す」

赤鬼の言葉は本気だった。

「この金棒でな。頭を叩き潰す」

「そうだよ。そんなのね」

「人間の世界でも。この時点で首なんじゃ?」

「上司が温厚な人格者でその周りを宥めたんじゃよ」

それで助かつたというのである。

「それで反省せずと同じことをやって開き直つてじゃ。その帳簿を見せて会社の公にしなくてはならない情報を全て流してのう。それでじゃ」

「あの言葉だよ」

「心を広く持ちましようだよ」

「それで上司も完全に切れたのじゃよ」

当然の流れであった。

「会社はそれで懲戒免職、次に一族の仕事を手伝つたが仕方なくや

つたとか言つてそれで今度は裏の筋の人間にいらんことを話してその仕事を大混乱にしてじゃ」

「で、今度こそ禁治産者か」

「完全に破滅したのじゃよ」

博士の牧村に述べた言葉には感情は一切なかった。そうなつてしまつたのも至極当然のことである、そうはつきりと言つていた言葉だつた。

「さて。今はどうしておるかのう」

「何年前の人？それ」

「大体幾つの人なの？」

「はて。幾つじゃつたかのう」

博士はそれに関してはあまり覚えていないようであつた。妖怪達の問いにも今一つ以上にはつきりとしなない返答を出すだけであつた。

「何年前に会つたかのう」

「それ覚えてないの？」

「どんな奴かは覚えてるのに」

「正直覚えたくもないことじゃしな」

つまりそこまで腹に据えかねているのである。今も。

「あのような愚か者はのう」

「まあ馬鹿というレベルも超えてるっぽいしね」

「話を聞いていたら」

「とつくの昔に野垂れ死んでおるかもな」

まさにものを語る口調であつた。

「まあそれでもどうでもいいことじゃ」

「どうでもいいか」

「縁も切つておる」

牧村の今度の問いにも実に素つ氣無い。

「というよりはあまりにも愚劣なので知り合い全てから縁を切られたのじゃよ」

「まあねえ。そんなのだつたらね」

「信用もなくすよね」

「完全になくしたがそれにも気付くことはなかったのじゃ」

それもなのであった。やはりこうした人間もこの世には存在しているのだった。やはり世の中はかなり広いのである。どんな意味でもだ。

「じゃから破滅したからのう」

「その破滅した奴が今も生きていても」

「まあ何もしていないだろうね」

「っていつかできないだろうね」

妖怪達はまた話すのだった。

「禁治産者だったらね」

「やっぱりね」

こう話をしていく。そうして話をしているうちにだ。めいめい菓子やジュースを出してそれ等の飲み食いはじめる。牧村もそれに参加してからそのうえで研究室を後にした。研究室を後にしてそのままサイドカーに乗って未久の喫茶店の前に来たがそこに彼がいた。

「貴様か」

「奇遇だな」

だが彼は牧村の姿を認めるところ言うのだった。

「ここで会うとはな」

「奇遇だと？」

「今日は貴様に会いに来たのではない」

死神は牧村の顔を見て述べた。そのサイドカーから降りてヘルメットを外した彼にだ。

## 第十九話 人狼その十七

「別にな」

「ではどうしてここにいる？」

「通り掛かったただけだ」

彼はただこのように言うだけだった。

「それだけだ」

「そういうわけでもないようだな」

しかし牧村はその彼に対して告げた。

「どうやらな」

「何が言いたい？」

「仕事をしていたのではないのか」

そしてこう彼に問うのであった。

「貴様の仕事をな」

「わかるようだな」

「貴様は何の目的もなしに動くようなことはしない」

彼はわかっているのだった。死神のことが。

「そうだな。違うか」

「それはその通りだ」

死神も遂にそれを認めてきた。

「私は仕事でここを通ったのだ」

「やはりそうか」

「とはいっても魔物に関する仕事ではない」

それではないというのだった。

「本来の仕事だ」

「死者を送り届けるのだ」

「そうだ。見る」

こう言っすつと右手を前に動かした。すると彼の後ろに髪の毛が一本もなく小柄で背の曲がった老人がいた。貧弱な身体をしてお

り顔は無気力そのものであった。全体的に虚ろか顔をしたその老人が彼の後ろにぼつと立っているのであった。まるで棒切れのように。

「この魂を地獄に連れて行く」

「地獄にか？」

「そうだ、地獄にだ」

こう言うのである。

「今から地獄に連れて行くのだ」

「地獄に行くような人間には見えないがな」

牧村はその老人を見て言った。邪悪なものは何も感じなかったからだ。

「かといつても何かいいことをするようには見えないが」

「この男は生きている時に人を散々に裏切ってきた」

「裏切ってきた？」

「そうだ。自分が何をしたのか全く自覚することなく破廉恥な行動を繰り返してきた」

死神はその老人を見て言うのだった。

「拳句に誰からも見放されそのうえでこうして死んだ」

「死んだのか」

「親族にも見放され何かをすることを許されずそのうえで無為に死んだのだ」

「まさかと思うが」

牧村はその話を聞いてこの老人が誰なのかわかった。

「博士の言っていたその愚か者のことか」

「どの愚か者かは知らないがこの男は生前愚かだった」

死神は老人を見ながらまた述べた。

「ことの善悪もつかず思慮分別も全くなかったのだからな」

「やはりな」

これで牧村もこの老人が誰か確信したのであった。

「その年寄りか。博士が言っていたのは」

「ではな」

ここまで話してそのうえで去る死神だった。

「今は貴様とは特に話すこともない。それではだ」

「そうだな。ではまたな」

「また来る」

これは自分自身への言葉ではなかった。

「またな」

「そうか。また来るか」

「しかも間も無くだ」

彼はこうも言い加えた。

「それはわかつておくことだな」

「わかった。それではな」

牧村もまたその言葉に頷いてみせた。

「その時に備えておこう」

「そうしておくことだ。それではな」

「その老人を地獄に送るのだな」

「そうだ。だがな」

ここで死神の言葉の調子が変わった。色が変わった感じだった。



## 第十九話 人狼その十八

「おそらく自分でわかることはない」

「自覚していないということだな」

「自分が何をやったのか全く自覚できない」

まさに博士の言う通りであった。この老人はそうして一生を生きてきた。ある意味において非常に幸せな人生であるが他の者にとつては迷惑なことである。

「そのせいで罪を犯したとしてもだ」

「そしてどの地獄に行くのだ？」

「最も深い地獄だ」

そこに行くというのである。

「そうして未来永劫出ることはない」

「それだけ重い罪だということだな」

「その通りだ。自覚せずに人の信頼を裏切り続け破廉恥な行動により実害を撒き散らし他の者に多大な迷惑をかけ続けその責任を自覚することもなかった」

それが罪だというのである。

「その罪を償わせるのだ」

「償えればいいがな」

「わかる筈もない」

その虚ろな老人を一瞥しての言葉であった。

「しかしだ。それでもだ」

「罪は罪か」

「うむ。その定めに従って私はこの魂を地獄に送る」  
彼は言うのであった。

「ではな。また会おう」

「それではな」

こうして今回はすぐに別れたのであった。それから彼は喫茶店で

若奈の淹れた紅茶とクレープを食べそれからまたサイドカーに乗った。サイドカーに乗り暫くするとだった。不意に目の前にあの紳士が浮かんでいたのであった。

空を浮かぶ彼はあの端整な服を着ていた。そうしてマントを風にたなびかせそのうえで牧村を見下ろしていた。そうしてそのうえで告げるのだった。

「来てもらいたい場所がある」

「何処だ？」

「こちらだ」

一瞥しその姿を変えた。それは巨大な漆黒の蝙蝠だった。

その紳士が姿を変えた蝙蝠に従い道を進む。そこはハイウェイであり夕刻のその世界には今は道行く車もなく彼等だけであった。道の左右にはもう照明が白い光を見せていた。その光の中で牧村はサイドカーを止めた。ヘルメットを脱ぎそのうえで。あらためて紳士を見上げそのうえで問うのであった。

「ここだな」

「そうだ。ここだ」

こう彼に語るのだった。

「ここで闘う」

「わかった。それではだ」

「私が闘うべきなのだがな」

言いながらゆっくりと降り立ってきた。そうしてそのうえで牧村と対峙するのだった。

「しかしな。それはな」

「俺の力がまだ足りないというのだな」

「その通りだ」

やはりであった。紳士はこう彼に告げるのだった。

「今の貴様では私には及ばぬ」

「そうか」

「しかし貴様の相手は用意してある」

そのうえでこう言うのであった。

「既にな」

「では今度の俺の相手は誰だ」

「この者だ」

顔を右にやった。するとそこにもう相手がいた。

それはアメーバに似た身体をしていた。赤と白のまるで肉がそのまま出て来たようなまだら模様をしている。目は一つでその下には巨大な鞭のようなものが出ていた。そうした不気味な姿をした者がそこにいたのである。

「何だその魔物は」

「まだらミイラという」

紳士はその名前も彼に告げた。

「この魔物の名前はな」

「その通りだ」

そしてまだらミイラと呼ばれたその魔物も名乗ってきたのであった。

「我が名はまだらミイラという」

「そうか。覚えておく」

牧村もその名を聞いて述べた。

「しかしだ。覚えてはおくが貴様の命はここで消える運命にある」

「つまりだ。我をここで倒すというのだな」

「その通りだ。貴様を倒す」

言いながら既にサイドカーから降りていた。そうしてそのうえで身構え今まさに変身しようとしているのだった。

## 第十九話 人狼その十九

「それではだ。いいな」

「よかるう。まだらミイラよ」

「はい」

まだらミイラは主の声に応えた。

「わかっております」

「髑髏天使になってからだ」

応えたまだらミイラに対して再び告げたのであった。

「それからだ。闘いはな」

「我とて魔物

このことを言う。声で頷いていた。

「闘うべき相手と闘います」

「そうだ。そうでなければ魔物ではない」

この辺りに魔物の厳格なルールが見られた。彼等の世界でも厳然としたルールが存在していることがここで窺うことができた。

「わかっていればよい」

「はい。それでは髑髏天使よ」

「変身しろというのだな」

「その通りだ。それまで待つておいてやる」

あらためて牧村に対して言ってきた。

「それまでの間はな」

「わかった。それではだ」

牧村はその言葉を受けた。そうしてそのうえで今両手を拳にして。その両手を胸の前で打ち合わせた。

すると白い光がそこから発せられ全身を包み込んだ。その白い光が消えた時そこには髑髏の顔と甲冑を身に纏った異形の戦士がいたのであった。

「行くぞ」

この言葉と共に肘を曲げた状態で右手を前に出し握り締める。それを合図として今闘いをはじめたのだった。

牧村はまずはすぐに能天使になった。その白い姿で両手に剣を構え。そのうえでまずは右と左に次々に剣を振るいそこから鎌イ足を放ったのであった。

「風か」

まだらミイラはその鎌イ足を見て呟いた。

「まずはそれで来るか」

「これならばどうだ」

攻撃を放ったうえで魔物に対して問う。

「この鎌イ足ならば」

「いい攻撃だ」

魔物もそれは認めはした。

「しかし我がどういった者かをわきまえることだ」

「どういった者かだと？」

「そうだ。見るのだ」

その言葉を出したのと同時に鎌イ足が魔物に直撃する。しかし魔物はそれを受けても全く何ともなかった。傷一つ負ってはいなかった。

そしてそのうえで。彼に対して言うのだった。

「私の身体には切るものは通じない」

「身体が柔らかいからか」

「その通りだ」

だからだというのだった。

「無論叩く攻撃も効果がない」

「その身体故にか」

「そういうことだ。これでわかったな」

「わかったがそれで俺を倒せるとは思わないことだ」

髑髏天使は攻撃を退けられてもそれでもまだ平然としていた。

「それでな」

「しかしどのようにして倒すつもりだ？」

「俺にあるのは風だけではない」

その言葉と共にであった。またその身体を変えた。今度は青い力天使になってみせたのであった。そうしてそのうえで今度は魔物の周りに無数の氷の柱を出してみせた。

「氷か」

「これならばどうだ」

またしても魔物に対して問うてみせた。

「この攻撃ならばどうだ」

「氷で我を凍らせるつもりか」

「斬る攻撃が効果がないのならば」

髑髏天使はまた言ってみせてきた。

「こつした攻撃もある。違うか」

「やはり。ヴァンパイア様が仰る通りはある」

彼を褒める言葉を出すことにやぶさかではないのが「こ」でもわかった。

「しかしだ」

「これも効果がないとでもいうのか？」

「その通りだ。見るのだ」

氷が彼を直撃し凍らせようとする。しかしだった。彼はそれを受けてもやはり何ともなかったのだ。そのまま傷一つ受けていない身体でそこに居続けている。

## 第十九話 人狼その二十

「こういうことだ」

「氷も効かないというのか」

「私の身体は特殊だ」

「ここで己の身体のことをまた言ってみせてきた。

「氷もまた通じることはない」

「そしてだ」

ここでその口のような場所から見えている不気味な鞭のようなものを振り回してきた。そうしてそのうえで髑髏天使に攻撃を仕掛けてきたのだ。

鞭は一振りすると忽ちのうちに倍以上の長さになった。その長くなった鞭で斜め上から髑髏天使に攻撃を浴びせてきたのであった。

「くっ……」

鞭をかわしきれなかった。右肩にその鞭を受ける。鎧の上からはいえ焼けるような痛みが彼を襲った。

「これが貴様の攻撃か」

「この鞭で貴様の気を吸い取ることもできる」

「それも可能だというのだ。」

「それもな」

「その鞭でか」

「そうだ。我はこの鞭で相手を打つとそれだけ気を奪い取ることができる」

「つまり。既にということだな」

「どうだ？今の身体の様子は」

そこから動きはしないがそれでも長い鞭を自由自在に操りながら髑髏天使に問う。

「少し疲れてきたのではないのか」

「さてな」

言葉にも態度にも出さない。その通りだと認めればそこからさらに攻められることがわかっているからだ。この辺りもまた駆け引きであった。

「生憎俺は髑髏天使だ」

「それを受けても平気だというのか」

「一撃で倒せると思うな」

彼はこうも言い返した。

「この俺をな」

「いい言葉だ」

魔物は髑髏天使のその言葉にさらに燃えたようであった。

「これは吸い取りがいがある」

「残念だがそうはいかない」

髑髏天使はその弱みを決して見せなかった。

「やらせてもらう。いいか」

「むっ!？」

「一度受けた攻撃をもう一度受けることはない」

また鞭が来た。今度は髑髏天使から見て左手からだった。彼はその鞭を後ろに下がることでかわした。その間合いを完全に見切ったうえでだ。

「今のはかわしたか」

「こうしてな」

「かわしたのは見事だ。だが」

「だが。何だ」

「だからといって我を倒せるとは思わないことだ」

また髑髏天使に対して言うのであった。

「貴様の攻撃は我には通じないのだからな。我は貴様に攻撃を与え続けそのうえで消耗していくのを待てばいい。違うか」

「攻撃が通じないか」

「違うか」

「確かに今までの攻撃は通じなかった」



彼もそれは認めた。

「しかしだ。斬ることが通じず凍りもしない貴様であっても」

「どうだというのだ？」

「無敵ではない」

髑髏天使は再び両手の剣を構えながら述べた。

「決してな」

「それがどうしたというのだ？」

「方法はあるということだ」

髑髏天使の言葉に動じたものはなかった。

「このような方法もある」

「むっ！？」

魔物が声をあげたその時だった。髑髏天使は跳んだ。そうしてその剣から水を放ってきたのであった。それはごく普通の水であった。

「水だと！？」

「そうだ。水だ」

跳んだのは一瞬だった。飛んでさえいなかった。

「これはな」

水はそのまま魔物に浴びせられた。髑髏天使はそのうえで着地する。彼のそれはとても攻撃を放つたとは言えないものであった。

しかしであった。それでも彼は何かを成功させたような様子であった。やけになったようなものではないことはこのことからわかった。

「何か考えがあるな」

「只の水でもだ」

彼は言うのだった。

## 第十九話 人狼その二十一

「それだけで力になる場合もある」

「この水がか」

「水は変わるもの」

次の言葉はこうであった。

「今それを見せてやるう」

そうして今その氷を再び出す。するとその氷は忽ちのうちに魔物を凍らしてきたのだった。

「凍っただと!？」

「貴様の身体はそう簡単には凍らない」

髑髏天使は先程の闘いでそれはわかっていたのだ。

「しかしだ。水をかければどうか」

「くっ、そういうことか」

ここでようやく魔物も髑髏天使の考えがわかったのだった。遅まきながらではあったが。

「これで我をか」

「そうだ。そして」

再び両手の剣を構える。そのうえで右手の剣を前に出す。

そこから水の帯を出した。それは一直線に突き進み魔物を貫こうとしてきた。魔物はそれを避けることができなかつた。氷が邪魔で動けなかつたのだ。

水はその凄まじい衝撃で魔物を貫いた。剣も効くことがなかつたが身体を凍らさせられた今ではそれは可能だった。これで勝負は決したのだった。

「氷と水か」

「炎と比べると強くは見えない」

髑髏天使は技を放ち終えてから述べた。

「だが。使い方を考えればだ」

「こうした効果があるということか」

「そういうことだ。確かに貴様の守りは強い」

これまでの攻撃が効果がないことからの言葉だ。

「しかしだ。こうしたやり方ならばだ」

「それも効果があるということか」

「その通りだ。俺の勝利だな」

髑髏天使は魔物に対して告げた。

「そういうことだな」

「その通りだ。見事だ」

魔物はこのことも認めるのだった。髑髏天使の勝利もだ。

「見事だと告げておこう」

言うそのそばからだった。身体を青白い炎が包み込んでいく。その炎こそがまだらミイラの最期が近付いてきている何よりの証であった。

「どうやら貴様がまことに強いのは知恵故だな」

「そう思っているのだが」

「現実だ。では髑髏天使よ」

いよいよその全身を青白い炎に包まれた。

「さらばだ」

こう言っただけ姿を消すのだった。魔物は消え去った。髑髏天使はそれを見届けてから今度は紳士に対してその顔を向けるのであった。

「それではだ。次はだ」

「何度も言うがそれはまだ先だ」

やはりそれは拒む彼であった。

「まだな」

「ではどうするということだ」

「去らせてもらおう」

彼は言った。

「これでな」

「俺が貴様と闘うまでに至っていないからだな」

「何度も言つがその通りだ」

やはりそうであった。実際に紳士の気配は戦いに向かうものではなかった。

「今は去らせてもらう」

「そうか。わかった」

髑髏天使も彼の言葉を受けて今は動かなかった。

「それではな」

「まだらミイラの仇は何時か取らせてもらう」

穏やかな言葉だがそれでもそこには怒りが見られた。

「そのことは覚えておいてもらおう」

「覚えておこう」

髑髏天使もまた彼に返した。

「では。行くがいい」

「うむ。……むっ!？」

去ろうとしたその時だった。

「ここに来たのか」

「如何にも」

着飾った男が出て来た。それは十八世紀頃の貴族の服だった。その身なりをした金髪に碧眼の男がゆつくりとその場にやって来たのであった。

「ヴァンパイアよ。待たせたな」

「別に待つてはいない」

紳士はこうその男に返した。

第十九話 人狼その二十二

「私はその前に闘いをさせた。それだけだ」

「そうか。では次は私だな」

その貴族の身なりの男は悠然と彼等の方に歩み寄りながら述べるのだった。

「次はな」

「貴様は魔物ではないな」

髑髏天使はその貴族にを見てまずこう告げた。

「それより上位か。となればだ」

「ほう、わかつたのだな」

貴族もまた彼の言葉を受けて楽しそうな声をあげてみせてきた。

「やはり僅かな時間で力天使になつたわけではないな」

「褒めても何も出ないことは察していると思うが」

「それはその通りだ。しかし貴様のことはわかつた」

だが貴族はこうも言うのであつた。

「貴様のことはな」

「というかどうかするのだ？」

「貴様を倒す」

髑髏天使として構えを取ってきての言葉であつた。

「来るのならばな。今ここでな」

「それは安心するのだ」

しかし貴族もまた今は悠然と笑うだけで何もしようとはしないのだった。あえて悠然とそこにいるだけで全く動こうとはしないのである。

「私もまた貴様とは今は闘わない」

「そうなのか」

「ただ。私のことは言っておこう」

そしてこう告げてきた。

「私は十二魔神の一人ワーウルフ」

「人狼か」

その名前をスオレートに和訳したものであった。

「それが貴様か」

「そうだ。これが私の名だ」

こう髑髏天使に対して告げるのであった。

「私のな」

「その名は覚えておこう」

髑髏天使はその言葉をそのまま受けてみせた。

「今ここでな」

「覚えておくことだ。それではだ」

名乗りを終えるとだった。貴族はもう去ろうとしてきた。

「私は今はこれで帰らせてもらおう」

「待つのだ」

踵を返そうとした彼に紳士が声をかけてきた。

「我等が今何処に集っているかは知っていないな」

「ふむ。そうだったな」

紳士の言葉に顔を向けて答えた。

「そういえばそうだったな」

「案内する。ついて来るのだ」

そしてこうも彼に言うのであった。

「私にな。いいな」

「わかった。ではそうさせてもらおう」

「髑髏天使よ」

紳士が髑髏天使に告げてみせてきた。

「また会おう。次も楽しみにしていることだ」

「私からも言うておく」

貴族からも告げてきたのだった。

「貴様とはすぐにまた会う。楽しみにしていることだな」

「また来るというのだな」

「その通りだ。ダイナーでも用意しておく」

最後の言葉を告げてハイウェイを後にするのだった。彼等が消えたのを見届けた髑髏天使は牧村の姿に戻った。そうしてそのうえで彼のその側にサイドカーを持って来てそれに乗る。今の闘いはこれで終わったのであった。

第十九話

完

2009・6・23

## 第二十話 人怪その一

髑髏天使

### 第二十話 人怪

「それで昨日だけねど」  
「何だ？」

牧村は今サイドカーを操っていた。夕刻の道をそのまま進んでいる。そうしてその横には未久がいる。妹を学校から家まで送っている最中だったのだ。

「面白いことがあったのよ」

「面白いこと？」

「ほら、こつくりさんってあるじゃない」

未久はサイドカーに乗りながら兄に対して告げてきていた。

「あの遊びをしていたのよ」

「こつくりさんか」

牧村はその遊びの名前を耳にしてここで眉を顰めさせた。

「そんなものをしていたのか」

「それがどうかしたの？」

「悪いことは言わん」

まずはこう告げるのだった。

「止めておけ、あれは」

「やるなってこと？」

「そうだ。あれは霊を呼び出してそれで遊ぶな」

彼もまたこつくりさんは知っているのだった。この遊びは昔からある。はじまりは明治維新の頃アメリカから伝わった心霊術からだととも言われている。

「その呼び出される霊が問題だ」

「そんなに問題なの？」



「霊はいいものばかりとは限らない」

真剣な顔でこう告げるのであった。

「決してな。そうとばかりは限らない」

「というとあれ？」

妹は兄の言葉からあることを察したのだった。

「呼び出される幽霊にとんでもないのがある可能性もあるってことなのね」

「その通りだ。何が呼び出されるかわかったものじゃない」

彼はあらためて妹に告げた。

「だからだ。注意するのだ」

「そうだったの」

「友達にも言っておくことだ」

真面目な言葉は続く。

「悪いことは言わないから止めておけとな」

「何だ、つまらないの」

未久はそれを聞いて如何にも残念そうな声をヘルメットの中から出した。

「折角面白かったのに」

「面白がるうがなかるうかだ」

「駄目なのね」

「危険はことはしないに限る」

正論でありそれをあえて妹に話すのだった。

「絶対にな」

「わかったわ。じゃあ止めるわ」

そして未久も兄のその忠告に素直に従うのだった。

「こっくりさんはね」

「ああしたことは遊びでするものじゃない」

彼はこうも話すのだった。

「何があるうともな」

「遊びでやったら何が出て来るかわからないからなのね」

「実際に見たことはないがな」

牧村もそれはなかった。しかしこっくりさんというものの危険さについてはよく知っているのだった。だからこそ妹に対して言うのだった。

「それはな」

「そうなの。けれどわかったわ」

それでもわかることはわかった未久だった。

「もう二度としないから」

先程も同じようなことを兄に告げたがここでもまた言うのだった。

「そういつ遊びはね」

「そうするべきだ。それでだ」

ここで牧村は話を変えてきた。

「ヘルメットはどうだ？」

「私が今被ってるこれ？」

「そうだ。それはどうだ」

今度妹に尋ねたのはこのことだった。

「この前新しく買ったが」

「凄くいいわよ」

声を頬笑まさせて兄に答える。それと共に顔も向ける。見ればそのヘルメットは黒地に銀色の薔薇を飾っていた。そうした柄であった。

「被り心地もいいし外の薔薇も」

「いいな」

「うん。それでね」

ここでふとした感じで兄に問うてきた。

「前のヘルメットはどうしたの？」

「当然持っている」

その前のヘルメットについてもこう答えるのだった。

## 第二十話 人怪その二

「コレクションにしている」

「相変わらずヘルメット集めるの好きなのね」

このことは彼女も知っていた。彼女は兄の趣味の一つにそうしたヘルメットを集めることもあるのだと思っているのである。

「それがかなり」

「嫌いではない」

牧村もそれは隠さない。

「いざという時に自分を守ってくれるのだからな」

「だから好きなの？」

「そこから愛着が出て来た」

だからだというのである。自分の身体を守ってくれるものに対して愛着を感じるのもまた人間の感情の一つなのである。彼もまた然りであった。

そして彼もまたヘルメットを被っていた。彼のものは白地に青く流星が描かれていた。

「今では多ければ多いだけいい」

「そうなの。多ければね」

「だがそれは俺に合わせている」

サイズが、ということだった。

「御前には大きいか。かなり」

「ううん、別に」

ヘルメットのまま首を横に振ってそれは否定するのだった。

「そういうわけでもないわ」

「ならいいがな」

「それにしてもヘルメットね」

未久は自分のヘルメットを右手で触りながら考えるのだった。

「確かにこれを被っていると安心できるわね」

「若しこれが必要ならばいざという時に命はない」

「そうね。頭だし」

人間の弱点がそこに集中していると言っても過言ではない。だからこそそこを守る為にヘルメットというものが発達したのである。

「やっぱり大事よね」

「俺のサイドカーにはヘルメットを被っている奴が乗ることができない」

牧村のこだわりでもあった。

「これもまた譲らない」

「わかったわ。それじゃあこっくりさんとヘルメットはね」

「忘れるな」

念を押す声であった。

「絶対にな」

「ええ、わかったわ」

未久も兄のその言葉に頷く。そうしてそのうえで家に帰るのだった。家に帰ると二人は母が用意した夕食を摂った。その日は穏やかな日常であった。

次の日の夕方は喫茶店だった。当然ながら若奈の家のその店だ。そのカウンターに座りコーヒーとモンブランを口にいしているのだった。

「どう？今日のスイーツは」

カウンターにいる若奈が彼に問うてきた。彼女は今白いエプロン姿でカウンターの中にいた。カウンターの中でガラスのコップを拭いている。

「モンブランだけね」

その金色の糸と宝玉に飾られた菓子を見て牧村に問うのだった。

「美味しい？どう？」

「そうだな」

牧村はそのモンブランにフォークを入れ一片切り取った。そうしてそれを口の中に入れて味わってから彼女のその問いに答えるのだ

った。

「栗の味がよく生きているな」

「そう。よかった」

「適度な甘さで品もある」

そのモンブランの味をさらに楽しんでいた。

「いい感じだな」

「よかった。それ私を作ったのよ」

牧村の今の言葉に機嫌をよくさせたのだった。

「そう言ってもらえると嬉しいわ」

「それにこのコーヒーもだ」

今はクリームを入れている。それだけのごく普通のコーヒーであつた。

「また淹れ方がよくなっているな」

「そつちも努力続けてるから」

「それでか」

「牧村君も毎日努力してるけれど」

そのフェシングとテニスのことである。若奈から見れば彼はあくまでスポーツマンである。戦士やそうしたものとは決して見てはいないのである。

「私もなのよ。それはね」

「そついうことか」

「おいおい、他人事じゃ困るよ」

ここで店のマスターが出て来て彼に言ってきた。若奈はマスターの顔を見て言った。

「お父さん」

「若奈の彼氏としてはだね」

「ちよつとお父さん」

若奈はそのマスターの横で困った顔をしていた。小柄なのであまり目立たなくなってしまうがそれでも顔が真っ赤なのは見え

## 第二十話 人怪その三

「そんなこと言ったら牧村君が困るじゃない」

「困るって何がだよ。実際に付き合ってるんだろ？」

「それは別に」

「付き合ってもらうからにはあれだよ」

牧村に顔を戻しての言葉であった。

「永久就職してもらうからね。いいね」

「永久就職という？」

「決まってるじゃないか。この店を継いでもらうんだよ」

こういう意味での永久就職であった。つまり若奈と結婚してこの店の次のマスターになれということであった。入り婿とも言っている。い。

「わかってるね、それは」

「俺がか」

「見たところ君は接客には向いていない」

マスターもまた牧村のその非常に無愛想なのはわかっているのだ。つた。

「それも全くな」

「自覚はしている」

若奈も入れたそのコーヒーを飲みながらの言葉であった。

「それはな」

「自覚しているんなら話は早い。そして君はだ」

牧村に対してさらに言うのであった。

「コーヒーやスイーツを淹れたり作ったりするには向いているな」

「そっちへの自覚はない」

今度はこう答えるのであった。

「淹れたり作ったりするのは好きだがな」

「いやいや、私にはわかるんだよこれが」

「お父さんってそんなに人を見る目があったの？」

「だからお母さんと結婚したんだ」

また随分と強引な主張であった。しかも自分を中心に置いた。

「違うか？」

「まあそう言えるけれど」

そう言われると若奈としては納得するしかなかった。何しろその両親の間に生まれたのが他ならない自分自身だからである。それも当然であった。

「それはね」

「その私が言うんだ。君は立派なコーヒー淹れ、お菓子職人になる」

「そうか。俺はなれるか」

「絶対になれる。君なら大丈夫だ」

太鼓判さえ押してみせるのだった。

「絶対にな」

「それで俺にこの店を継げというのか」

「私にしているのは絶世の美少女三人だけ」

「またお父さんたらそんなこと言うんだから」

またしてもその父の横で顔を真っ赤にさせる若奈であった。この父親の親馬鹿も相当なものであった。それをここでも出すのであった。

「大体私もう二十歳よ。それで美少女っていうのも」

「今でも芸能事務所からスカウトが来ないか心配だ」

親馬鹿はまだ続くのであった。

「これだけ可愛いと。三人共」

「そつだな」

牧村もわかっているのかマスターのその言葉に頷いた。

「何時スカウトが来てもおかしくはない」

「よし、それがわかっていると合格だ」

今度は牧村に太鼓判を押した。

「これで浮気をしないとすれば完全に合格だ」

「合格か。俺は」

「そうだ。どうやら私の後継者が決まったようだな」

「ずっと探してたの？ひよっとして」

「当たり前だろう？娘婿を探すのは親の務めだ」

「こんなことも言うのであった。それにしても随分と強引なマスタ  
ーの言葉であった。」

「牧村君はこの店に相応しいな」

「無愛想でもか」

「愛想は若奈はいる」

左手で自分の娘を指し示しての言葉である。

「一億ドルの微笑とエンゼルボイスには老若男女全てが陥落する。  
おまけに性格は真面目で公平で愛嬌があるときている」

「そうだな」

「二人共いい加減にしてくれない？」

若奈顔をさらに真っ赤にさせて二人のやり取りを聞いていた。

「他のお客さんがくすくす笑ってるじゃない」

「気にするな。皆常連さんだからわかってくれている」

「わかってくれるまでずっと言ってるんじゃない」

言い替えばまさにその通りだった。



## 第二十話 人怪その四

「何度も何度も。特にお父さん」

「私は真実を言っているだけだぞ」

「主観は真実って言わないの」

若奈も言い返す。

「そんなふうにはね。言わないわよ」

「いや、主観じゃなくて事実だ」

事実が親馬鹿という言葉のかわりに入っているがやはりそうしたことは一切見ようとはしないマスターなのであった。

「それはな」

「全く。それでお父さん」

顔を真つ赤にさせながらもマスターに対して声をかける。

「お店を本当に牧村君に」

「結婚式は大学卒業と同時にだな」

勝手にそんなことまで決めてしまっていた。

「君の御両親ともお話してな」

「あの、お父さん」

若奈は何処までも強引な自分の父にあえて言わざるを得なかった。

「何勝手に決めてるのよ」

「こついうことは早いうちに決めた方がいい」

やはり勝手に進める彼であつた。

「勿論母さんとも話はするがな」

「それで結婚って？」

「嫌なのか？」

今更ながらの娘に対する問いであつた。

「それは。嫌なのか？」

「嫌なのかって言われたら」

「別にそうじゃないだろう？」

意識してかしていないのか若奈にとっては非常に困る問いではあった。

「だったらいいな。結婚だ」

「私何も言っていないけれど」

「何も言っていないのなら決まりだな」

やはり何処までも強引であった。若奈の話は全く聞いてはいない。

「よし、では牧村君」

「俺も何も言っていないが」

「異論はないということだな」

顔を崩して笑ってここでも強引にそういうことにしてしまった。

何処までも話をそうやって決めてしまつ、何時になく強引な話の進め方である。

「よかつたな、牧村君」

「よかつたのか」

「就職先と結婚相手が同時に決まっただぞ」

満面の笑みで彼に告げる。

「これが目出度くなくて何と言うのだ」

「一生が決まっただからか」

「その通り。君の人生の薔薇色というのも決まっただ」

そこまで決まっただと言いつ切るのであった。

「善き哉善き哉」

「そうだといいな」

だがここで、牧村は言うのであった。

「その間に何もなければな」

「何も？」

「何時倒れるかわからない」

彼はまた言った。

「大学卒業までにしてもまだまだ時間がある。それまで何もなければいいがな」

「そうよね、確かにね」

若奈は今の彼の言葉に便乗することにした。そうしてそのうえで言うのであった。出す言葉はかなり必死なものでさえった。意識しないうちだ。

「やっぱり。そういうのはね、ちゃんとしないと」

「ちゃんとか」

「私だって大学卒業までどうなるかわからないわよ」

あえて悪いことを言って父の強引な決定を押し戻しにかかった。

「それで大学卒業したらすぐってどうなのよ。早過ぎるじゃない」

「考えてみればそうか」

「そうよ。幾ら何でもね」

またこう言うのであった。

「早過ぎるわよ、絶対にね」

「そうだったな。確かに」

それまで暴走機関車の如く突っ走っていた彼もここでようやく立ち止まったのであった。腕を組んでそのうえで考える顔になって言うのだった。

「早過ぎるな、まだ時間がある」

「その間に俺が死ねば」

牧村はまた随分と率直に言った。

「どうなるかだがな」

「何があっても死なないで欲しいけれどね」

若奈は牧村にはこう告げはした。

## 第二十話 人怪その五

「それでもよ。何かあるかわからないわよね、世の中って」  
「ではこうしよう」

少しは反省したマスターは言葉の調子も穏やかなものにさせて述べた。

「二人の大学卒業まで待つ」

「待つのね」

「それから決めよう」

とりあえずそれまでは保留、ということであった。

「それからな。それでいいな」

「俺はそれで構わない」

牧村はここでも落ち着いた声であった。

「それでな」

「よし、これで決まりだ」

マスターは牧村の言葉を受けて頷いた。

「今はだ。二人で楽しくやってくれ」

「ずっと楽しくやらせてはもらうけれど」

若奈はさりげなく自分の考えを口にした。

「それでも。何でもかんでも自分勝手に強引に決めないでしょ」

「いや、申し訳ない」

照れ臭そうに笑つての言葉であった。

「今回はな。済まないことをした」

「わかればいいのよ。じゃあ牧村君」

「ああ」

若奈は父の強引な話が一段落したところで牧村に顔を向けて話を消してしまうことを狙った。そして牧村もそれに応えるのであった。彼等もまた話をしていくのであった。

「コーヒーお替りいる？」

「そうだな」

牧村もそれに応えて言葉を出す。

「もう一杯貰えるか」

「もう一杯ね」

「同じものをな」

そしてこうも言い加えるのだった。

「欲しい。それでいいか」

「いいわよ」

そのマスターが言うところの一億ドルの微笑で応える。

「それじゃあもう一杯ね」

「頼む」

「コーヒーはどんどん飲んでくれよ」

マスターがその彼に笑って告げる。

「何しる君はだね」

「お父さん」

しかしここで若奈の言葉の釘が刺さった。

「またそんなこと言って」

「おっと、これは済まない」

その若奈に言われて思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「では今日はこれで止めておくか」

「今日だけじゃなくていつもよ」

若奈の言葉はさらに厳しいものになっていた。

「いつも。わかったわね」

「何だ、随分厳しいな」

「親は甘やかしたら駄目だから」

殆ど保護者の言葉である。

「だからよ」

「何だそれは。折角今まで可愛く育ててきたのに」

「甘やかしてきたというのか」

「その通りだよ。子供は甘やかしていいんだよ」

今度は牧村に対して述べたマスターであった。

「思う存分な」

「こういう考えだから困るのよ」

しかし当の甘やかされた子供からはこうクレームが来た。

「子供の頃からね。こんなのだから」

「子供には甘いのか」

「子供じゃなくてバイトの人達にも甘いのよ」

若奈は困ったように話すのだった。

「優し過ぎるっってお母さんにも言われてるのよ」

「しかし母さんも優しいぞ」

「限度があるでしょ」

少なくとも若奈の方がずっとしっかりしているのはわかるやり取りであった。

「限度が。お父さんはまた甘過ぎるのよ」

「甘くてもいいじゃないか。世の中は世知辛いんだしな」

正しいといえれば正しい言葉であった。今のマスターの言葉は。

「せめて人付き合いだけでも優しくしないと」

「それはそうだけれど」

「わかつたら牧村君にコーヒーを淹れてあげるんだ」

「わかつてるわ」

見ればもうコーヒーは淹れ終わっていた。そうしてそのコーヒーを彼に差し出すのであった。そこまでの動きがまた実に流れるようであった。

## 第二十話 人怪その六

「はい、どうぞ」

「悪いな」

「いいのよ。さあ飲んで」

「ここでも一億ドルの微笑が溢れ出ていた。」

「コーヒーをね」

「このコーヒーはいい豆を使っているな」

「そうそう、豆を選ぶのも重要なんだよ」

「マスターは豆の話もはじめるのだった。」

「豆もね。それにもこだわっているから」

「それで美味しいのか」

「コーヒーだけじゃなくて紅茶もそうよ」

「今度は若奈も言ってきたのだった。」

「そういうのも見てね」

「安心してくれ。見ている」

「牧村もこう答える。」

「舌でな」

こんな話をしながらこの時はコーヒーを楽しんでいた。そして次の日もコーヒーを飲んでいった。しかし今度は喫茶店ではなく博士の研究室であった。そこでいつものように壁に背をもたれさせかけて立ってそのうえでコーヒーを飲んでいるのであった。

「どうでしょうが」

その彼にろく子の首が伸びてきた。そうしてそのうえで彼に尋ねてきた。

「今日のコーヒーは」

「インスタントだな」

「はい、そうです」

にこりと笑ってこう答えるろく子だった。

「丁度豆を切らしてしまして」

「そうか」

「インスタントコーヒーはお嫌いですか？」

「いや、好きだ」

こつろく子に答える牧村であつた。

「インスタントコーヒーもな」

「あれっ、そうなんですか」

ろく子は彼のその言葉を聞いて意外といったような顔になるのであつた。

「インスタントもお好きなんですか」

「そんなに不思議か？」

「ええ。だっていつもいいお豆のコーヒーにいいって仰いますからだからそう思っていたというのである。

「けれどインスタントも飲まれるんですね」

「ラーメンと同じだ」

牧村はそれをラーメンに例えてきた。

「ラーメンとな」

「ラーメンとですか？」

「普通のラーメンもあればインスタントラーメンもある」

牧村は話にその両方を出してみせてきた。

「しかしどちらも好きな者は多いな」

「あつ、僕達も確かに」

「その通りだよ」

ここで妖怪達も言ってきた。やはり彼等も部屋に集まっていた。

そうしていつもと同じくそこいらに座つてめいめいお菓子を食べたり雑誌を読んだりしている。

「インスタントラーメンって美味しいよね」

「お店で食べるのもいいけれどね」

「そういうことだ」

牧村は彼等の言葉を受けてまたろく子に告げた。



「それはコーヒーにも言えることだ」

「コーヒーもですか」

「豆を使ったものは確かにいいがインスタントもいい」  
言葉を続ける。

「どちらもな」

「そうなんですか。成程」

「インスタントラーメンは好きだな」

「はい」

ろく子はインスタントラーメンに関する問いにはにこりと笑って  
答えた。

「特に塩ラーメンが」

「そうか。それが好きなのか」

「あれが一番いいのではないかと思えます」

ろく子の舌が饒舌なものになってきていた。どうやら本当にイン  
スタントラーメンが好きなのようである。そういつたことを窺わせる  
今の言葉であった。

## 第二十話 人怪その七

「エースコックのワンタンメンも好きやねんもいいですけど」

「結構詳しいな」

「はい、好きですから」

やはりこう答えるのだった。

「インスタントラーメンそのものが」

「そうか。成程な」

牧村もそれを聞いて納得したように頷く。

「俺も嫌いではないがな」

「牧村さんもですか」

「真の美食というものはインスタントだ健康食品だとそうしたものにこだわらない」

これが牧村の持論であった。

「そうしたものにこだわるのはそもそも似非グルメだ」

「似非ですか」

「何の漫画だったか」

牧村の顔に嫌悪が微かにではあるが宿った。

「あの新聞社の記者と傲慢な芸術家の親子が好き勝手やる漫画か」

「ああ、あの漫画ね」

「あの漫画のことだね」

妖怪達もそれを聞いて牧村が何の漫画のことを言っているのかすぐにわかったのだった。彼等もかなり漫画好きだと言えた。

「あの漫画は何もわかってないから」

「結局あれだよ」

そうして忌々しげに言うのであった。

「自然食だけがいいんだよね。そればかり」

「後出しジャンケンで絶対に勝つしね」

実によく呼んでいると見える。少なくともかなり知ってはいた。

「絶対にでかい企業負けるし」  
「全然合理的な考えないしな」  
はつきりと酷評していた。それもかなりのものである。  
「あの漫画はあれなんだよ。野蛮人ばかり出るから」  
「正直言つて知識も何も滅茶苦茶だから」  
酷評は何処までも続く。  
「あんな漫画読んでたら本当にいいものは絶対に食べられないから  
な」  
「牧村さんもそれはわかってるんだね」  
「やっぱりつて思ったけれど」  
「俺は野蛮人は嫌いだ」  
牧村はその漫画の登場人物から批判した。  
「あの漫画に出て来るのは品性も知性もない野蛮人ばかりだ」  
「そうだね。確かに」  
「言っていることも滅茶苦茶だし」  
「美味しいものは美味い」  
牧村は妖怪達に忖えてまた述べる。  
「まずいものはまずい。それだけだ」  
「別に自然食とかそういうのじゃないんだね」  
「牧村さんはそういうの全然こだわらないんだ」  
「何度も言っがそうしたことにごだわるのは似非だ」  
牧村はこのことを何度も話すのだった。  
「似非だ。それにだ」  
「それに？」  
「まだあるんだ」  
「まずいものはまずいだけでいい」  
「こつ言っつのである。」  
「それで騒いで暴れるのは野蛮人だ」  
「ああ、あの漫画の連中食べたものがまずいと絶対に暴れるよね」  
「あれ物凄い野蛮だよな」

妖怪達の間でもそうした行為は嫌われるのであった。こうしたことでまで考えたと牧村にしろ妖怪達にしろそうした行為を明らかに嫌っていた。

「何であんなに野蛮なんだろうね」

「営業妨害じゃない」

「その通りだ。自分がまずいと言って他人もまずいと思うとは限らない」

牧村はこのこともわかつていたのであった。それこそが牧村であるとも言えた。

「それを押し付けて暴れるのもやはり野蛮だ」

「やっぱりあれかな。原作者の品性かな」

「そうじゃないの？あれって」

「野蛮人が原作をすればその漫画も自然と野蛮になる」

牧村の辛辣な口調もまた珍しいものであった。

「ましてや食べ物もまた珍らしいものであった」

「あの親父と巨人の星のあの親父は食べる資格ないんだ」

「そうなるよね」

「その通りだ。食べ物を粗末にするな」

このことを強く言うのであった。

「食べ物について何かを論じることはおろか食べることも許されない」

「そんな野蛮人ばかりの漫画なんだね。結局」

「とんでもない漫画だね」

「そう思う。だから俺はあの漫画が嫌いだ」

一言で言えばそうなのであった。

## 第二十話 人怪その八

「登場人物達もな」

「牧村さんらしいね」

「全く」

「左様。食べ物は大事にせんといかん」

そしてここで博士の声も出て来たのであった。

「それができん奴は何かを口にしてはいかん」

「博士もそういう考えなんだね」

「案外厳しいんだね」

「食べ物がなく死んだ者ものう」

博士の言葉も目の光も昔を懐かしむようなものになった。

「結構見てきたからのう」

「戦争の後にか」

「うむ」

その通りだと牧村に対して答えたのだった。

「そうじゃ。あの頃は大変じゃった」

「そうだな。あの時はな」

「あの時だけじゃないよ」

「昔なんかそういうこと多かったよ」

妖怪達もここでこのことを話すのだった。

「もつさ。飢饉とかになつたらそれだけで」

「東北なんか死ぬか生きるかだったからね」

ここで東北の話も出るのだった。実際に東北というと飢饉に苦しめられてきた。また貧しさ故に娘を売るということも非常に多くあったのである。

「それだからさ」

「大変だったんだよね」

またここで顔を見合わせて話をしていった。

「僕達も食べ物がなくなつてさ」

「どうしようかって思ったことあつたんだよ」

「妖怪ですら食べるものがなかったのか」

牧村は妖怪達の話からそうしたことまで察したのだった。

「飢饉になると」

「そうだよ。人間が食べられないんだよ」

「だったら妖怪だって同じだよ」

「結局僕達は表と裏で共存してるんだし」

そして今度は表と裏という言葉が出されたのだった。

「人間の食べるものがなくなつたら」

「僕達だって」

「もうそのまま消えちゃいそうになつたよね」

「そうした状況になつたのか」

「まあ東北はとりわけそうじゃつたな」

博士はここでまた言うのだった。

「日本も地域によつて色々であつたのじゃよ」

「それは知っている」

牧村も勉強しているということだ。やはり学生だけはある。

「それぞれでな」

「中には思うように食べられん場所もあつたのじゃよ」

日本ではそれが東北だったということだ。江戸時代でも飢饉にな

ればすぐに窮してしまふ地域だったのだ。これは戦前まで中々改善

されなかつた。

「そういうことを考えるのう」

「食べ物を粗末にする連中は許せないか」

「左様。じゃからわしはあの漫画は持つてはおらん」

そういうことになるのであつた。

「全くのう」

「百巻を超えていてもか」

「百巻を超えていようともどれだけ売れていようとも」

博士はわざと素っ気無く言っているようであった。

「そこにあるものが屑ならばその漫画は屑じゃ」

「そうだな。それはな」

まさにその通りだというのだった。牧村にしても。

「俺もあの漫画は読んではいない」

「代わりにあれじゃない？雑誌社は違うけれど」

「ほら、あの顎の大きなお父さんが料理を作る漫画」

妖怪達が進めてきたのはその漫画であった。

「あれはいいよね」

「そうそう。レシピも出てるしね」

彼等はそちらは実に陽気に話し合っただった。とても明るい感じ  
で。

「かなり面白いよな」

「そうだよね」

「あの漫画は食べ物の有り難さがわかっておる」  
博士もまた言うのであった。

## 第二十話 人怪その九

「わしもあの漫画はよいと思うぞ」

「そうだな。あれから色々料理も作った」

「牧村さんって自分で料理作るしね」

「それがかなり意外だけれど」

「意外でも作るものは作る」

「こつ妖怪達に返す牧村だった。」

「そしてそれはかなり好きだ」

「やっぱり意外だよ」

「そうそう」

そして妖怪達のこの見方も変わらなかった。

「それにしても美味しいのかな、牧村さんの作ったものって」

「どうかな」

「自信はある」

本人の言葉である。

「何なら今度ケーキでも作ってみせよう」

「えっ、ケーキ!？」

「ケーキ作ってくれるんだ」

妖怪達はケーキと聞いて一斉に嬉しそうな声をあげたのであった。

「いやあ、それだったら是非」

「作って作って」

「もうたっぷりと」

「人参のケーキにするか」

彼が考えているケーキはそれであった。

「ここはな」

「人参のケーキだね」

「あれ僕大好きなんだよね」

「僕も」



「人参のケーキもいけるのか」

牧村はその妖怪達の言葉を聞いて少し意外な顔になるのだった。

「そちらもか」

「あれっ、それおかしい？」

「普通だよね」

「ねえ」

だが妖怪達はそれを当然だと考えていた。その証拠に牧村の今の言葉を受けても顔を見合わせてそのうえで話をするのであった。

「人参のケーキってね」

「僕達よく食べるよ」

「そりゃ苺やチョコレートよりは食べることは少ないけれど」

それでもだというのだった。

「やっぱり人参も食べるよね」

「甘いから美味しいよね」

「そうそう」

「確かに人参は甘い」

牧村は言った。

「しかも身体にもいい」

「そうなんだよね」

首なし馬が宙を漂いながら牧村の言葉に応える。

「人参って凄く身体にいいんだよ」

「それはそうだけれどさ」

「君、食べてもいいんだ」

他の妖怪達はその首なし馬に対して突っ込みを入れた。

「胴体ないのに」

「食べたものは何処に行くの？」

「何処につて胴体にちゃんと行くよ」

彼は当然と言わんばかりに仲間達に対して答える。答えるその間もその首は宙を漂い続けている。丁度彼の周りに漂っている人魂達と同じように。

「ちゃんとね」

「いや、胴体ないじゃない」

「それ何処にあるんだよ」

彼等の突っ込みももつともなことであった。

「胴体ないのに胴体にちゃんと行くって」

「矛盾してるじゃない」

「ああ、それはのう」

今度は一つ目で顔中濃い髭だらけの鬼が出て来た。頭の左右にそれぞれ一本ずつ、合計二本小さな角が生えている。その鬼が出て来たのだ。

「わしが説明しようか」

「あつ、夜行さん」

「夜行さん知ってるんですか。こいつの胴体のこと」

「左様。何しろわしが乗っておるからのう」

この鬼、夜行さんはまた笑いながら仲間達に話すのであった。

## 第二十話 人怪その十

「いつもな」

「いつもっていうとあれかな」

「あの首なし馬だよな」

「そうよね」

彼等はここでこのことに気付いたのだった。その首なし馬のことを。

「じゃああれが胴体だったんだ」

「そうだったの」

「そうなのじゃよ。こいつは元々一つじゃったが二つになったのじゃ」

「こう話すのである。」

「それで胴体はわしが乗り物として使わせてもらってるのじゃよ」

「何時でも一つにくつつくことができるよ」

首なし馬は宙を楽しそうに漂いながらまた皆に話した。

「けれどもこうやって離れている方が楽しいんだよね」

「それはわかったけれど」

「首が離れているのに胴体に行き着くのはやっぱり不思議だけれどね」

皆そうは言ってもそれでも納得するものがあった。

「まあそれはいいか」

「とにかく胴体には行き着くんだ」

このことは納得することができたのであった。

「じゃあさ。君も人参のケーキ食べるんだね」

「ちゃんと」

「そうだよ。人参なら何でも大好きだよ」

実に馬らしい言葉であった。妖怪ではあっても。

「本当にね」

「まあ納得はしたよ」

「それはね」

皆このことは受け入れた。

「牧村さんの作った人参のケーキ」

「楽しみにしておくか」

「生きていれば作る」

牧村は言った。

「その時にな」

「楽しみにしてるからね」

「そのケーキね」

「では君はじゃ」

博士もまたにこにこしながら牧村に告げるのだった。

「絶対に生き残らないと駄目になったからにはじゃ」

「今度の戦いも勝てということか」

「そうじゃ。わしもそのケーキを食べてみたいのう」

にこにことした顔はそこから崩れたものになった。

「人参のケーキをのう」

「そうか」

「人参だけじゃなくて野菜そのものが身体によいのじゃよ」

博士はこう言うのだった。

「味がいいだけではなくのう」

「そういえば苺も野菜か」

「そうじゃ。あれも野菜じゃ」

そう認識されることは少ないがその通りである。木になるのが果物であり地面から生えるのが野菜である。だから苺は野菜になるのだ。他にはスイカやパイナップルも野菜になる。

「甘い野菜も多いからのう」

「それは承知している」

だからこそ人参のケーキを作った、牧村が言いたいのはそういうことだった。

「充分にな」

「あれじゃよ。野菜が嫌いでも果物が好き」  
子供に多い事例ではある。

「あれはまだ野菜がわかっておらんじゃよ」

「野菜は甘くもある」

「そういうことじゃ。じゃから人参も甘いじゃよ」

「人参が嫌いな子供は実際に多いな」

「人参のよさがわかっておらんからじゃよ」

これが博士の人参に対する考えであった。

「それがわくれば違うからのう」

「こうして美味いケーキにもなる」

牧村は実際に自分が作ったそのケーキを食べてもいた。それもかなり美味そうにである。

「そしてジュースにもな」

「ジュースか。それ考えたらやっぱり」

「人参も苺と同じだよな」

「だよな」

妖怪達もまたその人参のケーキを食べている。そうして話すのだ  
つた。

「嫌いになるのも勿体ないよね」

「美味しいんだから」

「野菜のよさがわからないのは嘆かわしいことだ」

そしてまた言う牧村だった。

## 第二十話 人怪その十一

「豆腐にしるな」

「豆腐の菓子もいいのう」

博士はそちらにも理解を示すのだった。

「大豆はよい。あっさりしていて何でも使える」

「その通りだ」

牧村はここでも彼に頷く。

「何をしても駄目だという食べ物はない。子供達が食べるのが嫌いなら別の料理を出してみてもそれで食べさせてみるのもいいことだ」

「ホウレン草のジュースもいいよね」

「ヘルシーヘルシー」

「缶詰は見たことなかったけれど」

妖怪達は今度はホウレン草について話していく。

「あれってポパイだけなのかな」

「僕あれ見てホウレン草食べはじめたけれど」

「僕も」

意外とミーハーでかつホウレン草を食べはじめたのも早い妖怪達である。

「缶詰はなかったんだね」

「あれ食べたらあんなに強くなれるって思ったけれど」

「胡瓜は元から好きだったけれどね」

これは河童の言葉である。

「あんな美味しいのが嫌いな人ってやっぱりいるのかな」  
「いる」

その河童の問いにはつきりと答える牧村だった。

「好き嫌いは色々だ。そして誰にでもあるものだ」

「わからないなあ。それが」

河童にとってはどうしても、というものだった。

「あんなに美味しいものなのね」

「河童君はあと西瓜好きだよ」

「それに茄子も」

「うん、好きだよ」

仲間の妖怪達の問いににこにここと笑って答える河童であった。

「全体的にね。あっさりとしたお野菜が好きだよ」

「じゃあトマトなんかも？」

「そっちも好きなのかな」

「プチトマトもいいね」

やはりであった。そうした水っぽいものが好きだというのもよくわかることだった。やはりそれは彼が他ならぬ河童だからであった。

「折角だから皆で食べればいいんだよ」

「けれど人参のケーキも食べるんだね、そっちも」

「お酒も」

「好き嫌いはないから」

こつこつ答える河童であった。

「基本的にね。お肉はあまり食べないかもだけれど」

「お魚は好きだよ、それでも」

「それも川魚が」

この辺りは流石に河童だと思わせるものがある。そんな話をしながら皆で牧村の作った人参のケーキを楽しむ。それが終わるとそのままそれぞれの遊びに入るのだった。

牧村は遊びに入らずそのまま大学の講義に戻った。その後はいつも通りトレーニングを行った。そしてそのトレーニングのメニューを全てこなしシャワーを浴びてサイドカーの前に来たところで。彼の目の前に一人の男が静かに立っていた。

「貴様か」

「そうだ。私だ」

紳士であった。いつものタキシード姿でそこに立っているのだった。

「暫くぶりだな」

「この前の鬪いのことですか」

「そうだ。それもある」

「それも？」

牧村は紳士のその言葉に反応を見せた。

「それもとはどういうことだ？」

「一つ話がしたい」

紳士の言葉はここでその調子を変えてきた。

「それでいいか」

「話をしたいというのか」

牧村は紳士がこう言ってきたので目の光も変えてみせた。それまでの警戒するものを全面に出したのではなくしてきたのである。

「俺とか」

「ワインの美味い店を見つけた」

紳士はこうも言ってきた。

「それでいいか」

「悪いが酒は飲まない」

牧村はそれは断ったのだった。

「酒はな」

「そうか。不調法か」

「体質がそうになっている」

このことは隠さなかった。別に言ったところでどうこうなるものではない、魔物に対して酒が飲めないことがわかってもどうということはないのだから。



## 第二十話 人怪その十二

「だからいい」

「では何がいいのだ？」

「菓子がいい」

そして言うのはこれであった。

「菓子がな。それを食いながらでどうだ」

「悪くはない」

紳士もそれに頷きはしてみせた。

「しかしだ」

「何かあるようだな」

「私はいいがもう一人はそうはいかない」

こつ彼に話すのであった。

「もう一人がな」

「そちらは甘いものは好きではないのだな」

「酒は好きだが甘いものは嫌いなのだ」

こつ牧村に話すのであった。

「甘いよりむしろだ」

「血か」

牧村はここでこつ紳士に返したのだった。

「貴様と同じように。血が好きなのだな」

「私が血が好きか」

「その通りではないのか」

話は血に関するものになってきていた。牧村はその声を次第に鋭いものにさせながらそのうえで紳士に対して問う。それは既に闘いに入る前のようにであった。

「貴様のことはもうわかつている。それならばな」

「それは否定しない」

そして紳士もこつ返したのであった。

「私が血が好きだというのはな」

「貴様も隠しはしないのだな」

「隠してどうこうというものではないからな」

この辺りは牧村も紳士も同じ様な応対を見せていると言ってよかつた。少なくともどちらも己の嗜好を相手に対して隠すようなことはしなかった。

「だからだ。それは言おう」

「そうか」

「しかしだ」

だがここで紳士は言うのだった。

「血を好むのは私だけではない」

「俺がこれから会う魔物もそうなのだな」

「そうだ。少なくとも一方はそうだ」

「一方は？」

「もう一方とはいったが一人だけとは言ってはいない」

この辺りは言葉遊びであった。彼は今それをあえてしてみせてきたのである。この辺りの余裕のあるところもさりげなく見せてきたのである。

「それは違うか」

「その通りだ」

そして牧村もまたその余裕を受けてみせた。彼もまた余裕を持っているのだった。お互いにそれを見せ合ったうえで話を続けていく。

「では俺は二匹の魔物の相手をするということだな」

「残念だがそれは違う」

しかしここで。彼の後ろから不意に声がしてきた。

「私のことは忘れないでもらおう」

「貴様か」

「一匹は貴様にやる」

死神であった。そのマントを思わせる法衣の姿で彼の後ろにいた。そうしてその姿のうえで牧村、そして紳士を見すえながら言葉を続

けるのであった。

「しかしもう一匹は私がもらおう」

「俺に言われてもどうとなるものではない」

牧村は死神に背を向けたままで彼に告げてみせた。

「俺が決めることではないからな」

「私が決めることだ」

今死神に対して応えてみせたのは紳士であった。

「この私がな」

「ではどうするのだ？」

「既にわかつていた」

紳士はここでは死神の問いに答えなかった。こう言つのであった。

「死神がここに来るのはな」

「わかつていたというのか」

「だからこそだ」

そして今度はこう言ってみせるのだった。

「魔物は二匹用意しておいた」

「用意のいいことだ」

「では。来るがいい」

牧村と死神双方に向けた言葉であった。目も双方に向けている。

牧村のみ、死神のみを見ている目ではなかった。あくまで双方であった。

## 第二十話 人怪その十三

そして彼等を見据えながら。言葉を続けていく紳士であった。落ち着いて気品があるがそれでいて何処か血の匂いを漂わせる声で。

「その然るべき場所では」

「一つ言っておく」

死神が案内しようとする紳士に告げてきた。

「私は酒は好きだ」

「そうか」

「とりわけ仕事の後の酒がな」

「こう言うのである。」

「好きだ。それは言っておこう」

「覚えておくことにする」

「有り難い。では飲ませてもらおう」

「髑髏天使の方は駄目だったな」

「何があるうとも飲むことはできない」

「牧村は己のことでも引こうとはしなかった。」

「何度も言わせてもらおう」

「よくわかった」

紳士もその彼の言葉にまた応えてみせた。実に落ち着いた態度で。

「では。その場所はだ」

「何処だ？」

「死神がその紳士に対して問う。」

「何処だ？そこは」

「来るといい」

「答えずに案内をするのだった。」

「今から案内をさせてもらおう」

「わかった。それではな」

「共に行かせてもらおう」

こうして二人は紳士に案内されてある場所にやって来た。見ればそこは。教会の前だった。ゴシック建築の巨大な、さながらケルン大聖堂を思わせる尖った屋根や塔のある教会の前に案内されたのであった。

その教会を見てまず紳士に対して問うたのは牧村であった。

「教会だな」

「その通りだが」

前に進んで案内をしていた紳士はここで自身の後ろにいる牧村に對して顔を向けて答えた。

「それがどうかしたか」

「貴様はバンパイアだったな」

牧村は今度は紳士のその正体を話に出してみせた。

「それで教会か」

「バンパイアは教会を恐れる」

紳士もまた彼が何を言いたいのかはわかっていた。それでこう返すのだった。

「そのことか」

「貴様は違うようだな」

「なら答えよう」

紳士は今度はこう牧村に対して言った。

「今私は太陽の下に歩いているな」

「ああ」

「そして十字架を見ても何も起こらない」

実際にその教会の上に掲げられてある十字架を見てみせる。しかしそれでも彼は全くどういふものも見せず平然としたものであった。

「私にはな」

「バンパイアには本当は教会の力は通じないのか」

「普通のバンパイアには通じる」

紳士はこう答えた。

「普通の、バンパイアにはな」

「貴様は普通ではないのだな」

「私は神だ」

だからだというのである。

「その私にこの程度のものが効く筈がない」

「そういうことか」

「話はわかったな。それではこれでいいな」

「ああ。納得させてもらった」

牧村もこう答えて頷いてみせた。

「それではだ。話はこれで終わらせてだ」

「戦うのだな」

「この教会の前か」

死神が紳士に問う。

「ここで戦うつもりか」

「いや、外ではない」

死神の今の言葉は否定する紳士であった。

「ここではない。残念だがな」

「では中か」

「そうだ」

そこだというのである。

「この教会の中に。貴様等の相手がいる」

「そうか。この中か」

牧村はその教会をまじまじと見た。足を止めてそのうえでしっかりと見ている。

## 第二十話 人怪その十四

「俺は闘うのだな。今度は」

「私もだな」

死神も彼に続く。

「面白い場所での闘いだな」

「私の演出は気に入ってもらえたようだな」

「今のところはな」

あえて限定した牧村だった。

「しかしそれをはつきり言えるのは全てが終わってからだ」

「そのうえで判断するというのだな」

「そういうことだ。では中に入らせてもらおう」

「いや、案内は最後までさせてもらおう」

紳士は教会に向かおうとした牧村をこう言って制止した。

「この中までな」

「ではその言葉受けよう」

こうして牧村達は紳士に教会の中まで案内された。教会は外からは何の変哲もない、妖気も全く感じられなかった。至って普通の教会であった。

その教会の外観を見て死神は。一言漏らした。

「外からではわからないか」

「中に入ってこそということだな」

「そうだな」

牧村の言葉に対しても頷いてみせるのだった。

「全てはわかりはしないな。さもないとな」

「そういうことか。それではだ」

「扉が開いた」

紳士が開いたのだった。彼がその檜の木の重厚な褐色の扉に手を触れるとそれだけで中に開いた。中は外の光との対比のせいか暗い。

かろうじて入り口だけが見える状況だった。

「では入るとしよう」

「是非共な」

ここでまた紳士が彼等に方を振り向いて声をかけてきた。

「既に私の僕達は待ちあぐねているからな」

「宴のもう一方の相手がか」

「待っているというのだな」

「もう待てないようだ」

紳士の声だけが微かに笑ったように聞こえた。

「どうやらな」

「それならそれで好都合だ」

死神は紳士のその言葉を聞いて落ち着いた調子で述べた。

「こちらとしても仕事は早いうちに終わらせたい」

「仕事か」

「宴だったか」

先に紳士が表現してみせた言葉をあえて出してみせもする。

「これは」

「そうだ。宴だ」

紳士もまた彼に対して言葉を返してみせた。

「これはな。あくまで宴だ」

「では言葉を変えよう。宴ならばだ」

死神は紳士に合わせてこう言ってみせるのだった。

「早いうちに幕を開けるべきだ」

「はじまる前の序曲は楽しまないのか」

「序曲はもう終わろうとしている」

それについてはこう返す死神だった。

「ならばだ」

「そうか。それでは私も言わない」

紳士もまたそれでよしとしたのだった。死神のその考えを。

「では」



「うむ。入ろう」

まずは死神からだった。

「その宴の中にな」

「俺もそうさせてもらおう」

続いて牧村だった。まだ牧村としての姿のままだ。しかしその心は既に戦いに向かっており髑髏天使のものになるうとしているのだった。

「宴の客としてな」

「では私はホストをさせてもらおう」

紳士は己はそれだというのだった。

「この宴のな」

「見ているだけか」

「そう捉えてもらっても構わない」

自身に顔を向けて問うてきた牧村に対しても穏やかに返すだけだった。

「これが私の今の立場だとな」

「よし。ならば立会人を務めてもらおう」

牧村はホストを立会人と言い換えてみせた。それだというのだ。

## 第二十話 人怪その十五

「では入ろう」

「宴のはじまりだ」

紳士の言葉が笑った。

「血の宴のな」

教会の中に入る。入るとまずは聖堂があつた。そこは高い天井を持つ奥行きのある部屋であり中央が道になっており左右に席が連なっている。

壁には円柱が連なっておりその一つ一つに聖人達の像がある。奥の礼拝堂は十字架のキリストがある黄金の世界であり上が円形になっている窓からは白い光が差し込んでいる。

天井は白くアーチ状になっている。二人はその聖堂の中に入ったのだった。

「見事なものだな」

「全くだ」

牧村はまずは死神のその言葉に対して頷いた。

「俺はキリスト教にはこれといって興味はないがな」

「それでもよさはわかるのだな」

「ワイングラスを使わなくともその美しさはわかる」

こう表現してみせたのだった。

「違うか？それは」

「その通りだ。私もまたこの美しさはわかる」

死神はその聖堂の中を目で見回しながら牧村に答えた。

「美は普遍のものだからな」

「そしてこの美しい世界の中での宴か」

「気に入ってもらえたか」

二人の前にいる紳士は声を笑わさせてこう二人に問うてきた。

「この舞台は」

「大いにな。それではだ」

牧村は今度は単刀直入だった。

「相手は何処だ」

「今日の前にいる」

紳士はこう牧村に返した。

「ここにな」

「ほう」

牧村は彼のその言葉を聞いてまず前を見た。するとそこには。二人の神父が立っていた。

一人は頭が禿げた年配の男、もう一人は女だった。即ちシスターであった。若く妖艶な顔立ちのいささかシスターとは思えぬ女であった。

「この二人か」

「私はまだらミイラという」

「私はシャルカ」

彼等はそれぞれ名乗ってきた。

「髑髏天使、それに死神よ」

「貴様等が最後に覚える名前だ」

「こつも二人に言うのだった。」

「それでは。はじめるとしよう」

「バンパイア様の宴を」

「いいだろう」

「よかるう」

牧村も死神も彼等のその言葉に応えた。

「俺としてもそのつもりでここに来た」

「私もだ。では私の相手はだ」

「私よ」

シャルカが死神に対して名乗りをあげた。

「貴方は私が相手をしてあげるわ」

「そうか。ではもう一人はだ」

「髑髏天使の相手は私だ」

自らをまだらミイラと名乗った神父はこう応えるのだった。

「私が務めさせてもらう」

「責様がか」

「不服か？」

牧村の声に応えて問い返してきた。

「私が相手では」

「いや」

だが牧村はそうではないと返した。ここでは既に髑髏天使の声になっていた。

「俺は相手が誰であろうとだ」

「闘うというのだな」

「目の前にいるその相手が俺と闘うことを望むならばだ」

その場合は、というのだ。

「俺は闘う。その相手とだ」

「そうか。それではだ」

「責様の姿、見せてもらおう」

神父に対して告げた言葉だった。

## 第二十話 人怪その十六

「本来の姿をな」

「よかるう。それではだ」

「無論俺も見せよう」

相手が見せるならば、ということだった。牧村も応えるというのだ。

「俺のもう一つの姿を」

「髑髏天使の姿を」

「それでいいな」

あらためて神父に対して問う。

「そのうえで闘う」

「いいだろう。それではだ」

神父が先だった。その姿が次第に変わってきた。

まず肌の色が変わる。皮膚がそのまま肉になったかのようなグロテスクなものにだ。それと共に身体全体が崩れさながらアメーバのようになる。口が尖り何か一本の触手の様なものに変貌した。目も何時の間にか一つ目になっており完全に異形の存在となっていた。

「これが私の本来の姿だ」

「まだらミイラだったか」

「そうだ」

牧村の今度の問いにも答えてみせてきた。

「これが私、まだらミイラだ」

「そうか。わかった」

「それではだ」

己の姿を見せたうえで、であった。あらためて牧村に対して声をかけてきた。

「髑髏天使よ。次は貴様の番だ」

「わかっている」

それは既に、ということだった。

牧村はその両手を拳にして胸の前で打ち合わせた。するとそこから白い光が起こり彼の全身を包み込んだ。その中で彼は異形の天使へとその姿を変えたのだった。

「行くぞ」

右手を少し前に出し一旦握り締める。それと共にすぐに背中から翼を出し身体の色も変えてみせてきた。

「力天使か」

「その通りだ」

その力天使の姿でまだらミイラの言葉に応える。

「では行くぞ」

「うむ。ではこちらもだ」

まだらミイラは動かないまま彼の言葉に返した。

「闘わせてもらおうとしよう」

「貴様の腕、見せてもらう」

髑髏天使は既にその両手に剣を持っていた。そのうえで背中を翼を飛ばたかせる。

そしてそれからまだらミイラに向かった。彼等の闘いが今はじまった。

その時死神とシャルカの闘いも幕を開けていた。死神もまた既に闘いの時の姿になっておりシャルカもまた本来の姿になっていた。それは半裸の長い緑の髪の毛の女であった。

「それが貴様の本来の姿か」

「私は森に潜む魔物」

血塗られた声で死神に返していた。

「その力を見せてあげるわ」

「戯言を。見せるのは私だ」

死神はその両手の鎌を構えながら魔物に対して述べた。

「この鎌の力をな」

「命を刈り取るその鎌の力をね」

「そつだ。見せてやるう」  
「こつ魔物に告げるのだった。」  
「貴様の最後にな」  
「面白いことを言うわね」  
「シャルルカは死神のその言葉を聞いても悠然としていた。そうしてその血塗られた声で妖しい笑みまで含ませてきたのであった。」  
「貴方も。面白いわ」  
「生憎だが私は冗談は言わない主義だ」  
「死神はそんな彼女の言葉をここでは受け流してみせた。」  
「眞実のみを言う」  
「眞実ね」  
「そして今の眞実はだ」  
「さらに言葉を続けてみせる。」  
「貴様の死だ」  
「私の」  
「私のこの鎌を受けて死を免れた者はいない」  
「これこそまさしく死神の言葉であった。」  
「一人としてな。人であろうとも魔物であろうとも」  
「では私がその最初の一人になるわ」  
「魔物もまた負けてはいなかった。」  
「そして最後のね」  
「最後の、か」  
「何故なら貴方はここで死ぬから」  
「だからだというのである。」  
「この私の手でね」  
「私は冗談は言わないが冗談は聞く」  
「死神の言葉が彼女の言葉を受けて変わってきた。」

## 第二十話 人怪その十七

「しかしだ」

「しかし？」

「それをそのまま聞くとは限らない」

だがこうも言うのだった。

「これだけは言うておく」

「面白いことを言うわね」

シャルカはそれを聞いて動揺を見せることなく平然と返すだけだった。

「それはまた」

「面白いことを言ったつもりもない」

死神はここでも態度を変えはしなかった。その手に持っている大鎌を構えただけだった。

「そしてこれ以上何かを話すつもりもない」

「そう。それじゃあ」

「行くぞ」

その鎌を構えたまま流れるように前に出た。そうしてそのうえで魔物を斬りつけてきた。

鎌を右斜め上から左斜め下に一閃させる。白銀の光が見えた。

だがその白銀の光は何も斬らなかつた。あえて言えば空を斬つただけであつた。

「かわしたか」

「流石ね」

シャルカの声がその鎌の後ろから聞こえてきた。今二人は礼拝堂の前で対峙していた。

「死神だけはあるわ。見事な鎌の動きね」

「だがかわしたな」

死神はそれを言うのだった。



「私の鎌を」

「いい動きだけれどそれで私を斬ることはできないわ」  
自信に満ちた声だった。

「残念だけれどね」

「少なくとも今の鎌はかわしたか」

「そしてこれからの鎌もね」

それもだというのだった。その自信に満ちた声で。

「私を斬ることはできないわよ」

「確かに今ではそうだ」

死神は己の言葉をあえて限定してみせているようだった。

「だが。これならばどうだ」

「んっ!?!」

死神の身体が分かれた。一人が二人、二人が三人、三人が四人へと。右から左にそのまま影の様に増えていったのであった。

気付けば五人になっていた。その五人それぞれの死神が。鎌を手に魔物を見据えていた。

「一人で無理ならば五人だ」

「そう、分身ね」

「知っていると思うがただの分身ではない」

こつも言う死神だった。言いながらそのそれぞれから強い殺気を出していた。それはまるで氷の様な、冷たくそれでいて澄んだ殺気であった。

その殺気を放ちながら五人の死神は。間合いをゆっくりと狭めてきた。そして。

五人一度に斬りつける。しかし魔物はそれもかわしてしまった。今度は上に跳んだのであった。

「惜しかったわね」

「これもかわしたのか」

「分身での攻撃もまた」

「そうよ」

白い天井に手をやりそれで止まっていた。そうしてそのうえで言うのだった。

「その通りよ。私の動きを甘く見ないことね」

「そのようだな」

死神は魔物の言葉を聞きそれをそのまま受け入れた。

「分身も効かないか」

「少なくとも斬られはしないわ」

シャルルカは言いながら降り立ってきた。降りるその時に前方に数回転する。そうしてそのうえで着地して立ち上がってみせた。

「貴方の鎌がどれだけ凄かろうがね」

「私の鎌が通じない」

「そして」

声がさらに笑ってきていた。

「今度は私の番よ」

「むうっ!?!」

「さあ見なさい」

その言葉と共にであった。魔物の周りから何かが出て来た。それは。

針葉樹の葉だった。その葉が無数に出て来たのだ。

それは瞬く間に魔物の周りを包んでしまった。その舞うものはすぐに死神の元にも届いた。そして。

「くっ」

「そういうものか」

「そうよ。この葉は私の剣」

舞うその緑の刃の中で妖しく笑うのだった。

## 第二十話 人怪その十八

「貴方の鎌と同じよ」

「この葉で私を倒すつもりか」

「その通りよ。さあ逃げられるかしら」

「ここでも緑の刃の中で妖しく笑っていた」

「この私の刃から」

「逃げるつもりはない」

既にその全身を切り刻まれだしている。しかし五人の死神達はその切られるのをそのままにしてまずは一人に戻った。それからまた言うのだった。

「決してな」

「そう。決してなのね」

「何故なら逃げる必要がないからだ」

「あら、自信かしら」

「私は自分をよくわかつている」

彼はまた言った。

「よくな。では見るがいい」

一人に戻りその顔も服も切り刻まれ続けながらそれでも出す言葉だった。

「私がこれから何をするのかをな」

彼は窮地にありながらもまだ闘っていた。鎌を構えたまま。だがまだ前には出ようとはしていなかった。

そしてその頃髑髏天使もまた。席が立ち並ぶその後ろでまだらミイラと闘っていた。魔物はその口からの触手を鞭の様に操りそれで髑髏天使を撃とうとしていた。

触手が前から突き出されてきた。髑髏天使はその触手を左手に持っているサーベルで払った。それで一旦防ぎ翼を使って上に飛んだ。だがそこでまた触手が来た。下から上に襲い掛かる。それは翼で

舞いさらに上にあがることでかわした。そして彼はただ上にあがっただけではなかった。

そこから急降下を仕掛ける。両手の剣を構えほぼ直角に降りる。そこにまた触手が来るが今度は斬った。しかし触手はその側からまた伸びるのだった。

「何っ!？」

「例え斬ろうともだ」

まだらミイラはその触手をまた動かしながら髑髏天使に告げる。

「何度でも伸びてくるのだ」

「回復力が半端ではないということか」

髑髏天使はこう見て取った。

「そういうことだな」

「難しい言い方をすればな」

そして魔物の方もそれを認めた。

「その通りだ」

「そうか。わかった」

髑髏天使は魔物の言葉を受けてそれを完全に己の中にインプットさせた。その思考が自分ではいささか機械めいたものに思ったのも事実だ。

だがそれは顔には出さず。彼は間合いを取ったうえで着地した。魔物に告げた。

「貴様のことはな」

「私を倒すことは容易ではない」

魔物は今度は誇らしげに言ってみせてきたのだった。

「さて、どうするか」

「風も効かないか」

髑髏天使は今の瞬時に回復したまだらミイラの触手からそれも判断したのだった。

「斬ることはな」

「だとすればどうする?」

「一つ言っておく」

髑髏天使は冷静さを崩していなかった。その冷静な様子で身体の色を変えてきた。

「むっ!？」

「俺の持っている力はもう一つではない」

赤くなった。権天使の力を出してきたのだった。

「こうした力も持っていることは知っているな」

「権天使だな」

まだらミイラはその赤くなった髑髏天使を見て言った。

「その赤い姿は」

「知っているのだな」

髑髏天使は魔物が答えてきたのを見てすぐにそれと察した。

「この力のことを」

「知らない筈がない」

魔物はこのこともまた隠さなかった。

「髑髏天使、貴様のことは既によく調べている」

「そういうことか」

「貴様の炎、見せてみるがいい」

そしてそのうえで彼を挑発する言葉を出してみせさえもするのだった。

「その炎をな」

「望みとあらばだ」

右手に持っている剣に炎を宿らせた。それによりただの剣が紅蓮の柱になった。そうしてその剣を今大きく上に掲げるのだった。

## 第二十話 人怪その十九

燃え盛るその剣を上から下に振り下ろし紅蓮の炎を魔物に放った。炎はそのまま刀身の形で魔物に向かう。しかし魔物はそれをよけようともしない。

「かわさないのか」

「見るのだ」

悠然とした声をここでも出すのだった。

「今から起こることをな」

「そういうことか」

髑髏天使は彼のその自信に満ちた声から結末を察した。

「炎もまた、か」

「流石だな。察したか」

「自信には裏付けがあるものだ」

髑髏天使は自信は何に基くものかわかっていた。わかっていたからこそ今の言葉を出したのだ。だがそれでも冷静さは健在だった。

「時として根拠もなくそれを持っている愚か者もいるが」

「生憎だが私は愚か者ではない」

魔物はそれはそうではないと述べてみせた。

「それは言っておく」

「そうだな。確かに貴様は愚かではない」

髑髏天使もまたそれは承知していた。やはり冷静に言葉を返す。

「それではだ」

「そうだ。見るのだ」

炎は今まさに魔物を貫かんとしていた。そして今それが魔物を撃った。

しかしであった。魔物は炎の中で平然としていた。まるで何でもないように。

「やはりな」

髑髏天使はそれを見て一言出した。

「炎は通じないか」

「先程も見せたが私の身体の回復力は尋常なものではない」

魔物の声がここでも誇らしげなものになっていた。

「だからだ。炎もだ」

「効果がないのか」

「斬ろうも焼こうともだ」

これまで髑髏天使が彼に繰り出した攻撃をどちらも告げてみせたのだった。

「私には効かない。私は倒れることがないのだ」

「倒れることがか」

「そう。つまりだ」

倒れることがないということ的前提にしてさらに髑髏天使に告げてきた。

「最後に勝つのは私なのだ」

「それはかなり強引な解答の導き方だと思うがな」

髑髏天使は既に勝ち誇ったものさえ見せている魔物にあえて感情を見せずに返した。もっとも今の彼は実際にこれといって感情を持つてはいなかったが。

「勝つのは貴様か」

「私は倒れない」

またこの前提を出してみせる魔物だった。

「それならばそうなるのは当然のことだ」

「生憎だが俺の持っている力は炎と風だけではない」

髑髏天使はその既に勝利を確信している魔物に対してまた告げた。

「そして剣だけでもない」

「氷か」

「そうだ。そして水」

それもだというのだった。

「力天使の力もある」

「ならばそれも見せてみるのだ」

魔物は氷に対しても同じ様な自信を見せてきた。

「その力をな」

「いいだろう」

髑髏天使は魔物のその言葉に応えた。そうしてすぐにその身体を青いものに変化させた。これこそまさしく力天使の色であった。

「これでいいな」

「ふむ」

魔物は力天使になってみせた髑髏天使を見て声を出した。

「それが力天使か」

「知っつていと思うが」

「如何にも」

魔物もそれは否定しない。

「知っつている。よくな」

「では何も声を出すこともない筈だが」

「だが出す必要はあつた」

こう返すまだらミイラだった。

「何故ならばだ」

「どうしたというのだ？」

「その力を私をはじめ破るからだ」

だからだというのだった。



## 第二十話 人怪その二十

「だからこそだ」

「相変わらずかなりの自信だな」

髑髏天使はまだらミイラのその言葉を見て取りこつ返した。

「しかも根拠があるか」

「何度も言うが私は根拠のないものは言わない」

このことには絶対の信念を見せるのだった。

「それはわかることだ」

「わかった。それではだ」

髑髏天使はそれを聞きながらも力天使の姿を取っていた。だがそこに何か考えがあるかというところではなかった。それでも力天使であるのだった。

「俺もまた力天使の力を見せよう」

「見せてみることだ」

また挑発めいた言葉を出す魔物だった。

「よくな」

「受ける」

今度は右手に持つその剣に冷気を及ばせた。青く凍えるような冷気である。

「この力をな」

今度は力天使の力を使う。彼等の戦いはまだ続くのだった。

死神はシャルカの攻撃を受け続けていた。その葉の刃にただ傷付けられていた。

「貴方もこれで終わりね」

「私が終わるといふのか」

「動けば動く程」

この女の魔物の声が笑っていた。

「動かなくても。今のようにな」

「私の身体を切り刻んでいくか」  
「それをどうして防ぐのかしら」  
死にいくものを眺めて笑う声だった。  
「防ぐことができて？貴方に」  
「確かに今は無理だ」  
「これが死神の返答だった。」  
「今はな。だが」  
「だが？」  
「貴様を倒すことはできる」  
しかしここでこう言う死神だった。  
「貴様をな」  
「面白いことを言うわね」  
魔物は今の死神の言葉を聞いて今度は楽しむような笑みになった。  
「それじゃあ。見せてもらおうわ」  
「見るのだな」  
「ええ。貴方がどうやって」  
言いながら。その目を細めさせ口の両端を吊り上げさせた。それにより整っていた魔物の顔がまさに異形の顔に変貌してしまった。  
その異形の顔で魔物は。さらに死神に問うのだった。  
「私を倒すのかしら。今のこの状態で」  
「面白いものを見せよう」  
死神はここでこう言うのだった。  
「私の力の一つをな」  
「力？」  
「そう、力だ」  
また力という言葉が魔物に対して出してみせた。  
「私はただ分身し空を漂うことができるだけではない」  
「他にも力があるというのね」  
「そうだ。では見てみるのだ」  
この言葉と共にであった。

「私のこの力をな」

「んっ!？」

女は今自分の目の前で死神がしたことに目を瞠った。何と彼は己の影の中に己自身を沈めたのだ。彼が己の影の中に完全に消えるとそれと共に影も消え去ったのだ。

「消えた!？」

「これもまた私の力の一つだ」

死神の声だけがする。

「これがな」

「影の中に消えるというのも」

「これで貴様のその葉は効かなくなった」

今度の死神の言葉は微かに笑っていた。

「私がこうして姿を消したのだからな」

「確かにね」

シャルカもそれは認めるしかなかった。忌々しい思いはしたが。

「これでは私の葉も」

「そしてだ」

また死神の声がしてきた。

## 第二十話 人怪その二十一

「これからは私の番だ」

「あら、それで私を倒すというのかしら」

「その通りだ」

死神の声は既に魔物に狙いを定めている声であった。

「今からな」

「じゃあ見せてもらおうわ」

魔物もまた死神のその声に応えるのだった。

「今からね」

「行くぞ」

また死神の声がした。

「今からな」

「それでどう来るのかしら」

魔物は死神の姿が見えなくとも悠然とした声を出すのだった。

「私はここにいてくれねど」

「そして葉に護られているか」

「そうよ」

そしてこうも言うのだった。

「その通りよ。この葉に近寄ればそれだけで傷付くわ」

「確かにな」

これまで傷を受けてきたからこそわかることだった。死神の身体も服も既にかなり切り刻まれている。影の中に消えたのもそれから逃れる為ということもあるのだ。

「そして私が何処にいるのかもわかるといふことか」

「この葉は相手を切るだけではなくその場所も知らせてくれる」

魔物はまた言った。

「そうして私を護ってくれているのよ」

「そういうことか。しかしだ」

「しかし？」

「完璧なものなぞ有り得ない」

死神は言うのだった。

「私にしるそうだ」

「では私のこの葉もまたそうだというのね」

「その通りだ。見るのだ」

「んっ!？」

今の言葉と共にだった。不意に礼拝堂が背後から光を受けて影になっっている部分、丁度主が十字架にかけられそこが影になっている部分から出て来たものがあった。見ればそれは影だった。死神の姿をしたその影だった。

「貴方の影ね」

「そうだ。私の影だ」

死神の声がここでもした。

「私のだ。影だ」

「また面白い術ね」

シャルルカはそれを見ても悠然とした態度を崩さない。

「それで私の相手をしてくれるのね」

「見るのだ」

また死神の声が言った。

「影に刃は通じない」

「通じない？」

「そうだ。見るといい」

影は一步一步確実に魔物に対して近付く。葉はその影を素通りするだけだった。切り刻むこともまとわりつくこともなかった。何もできはしなかったのだった。

「私の葉が」

「言った筈だ。影に刃は通じない」

またこのことを魔物に対して告げる死神の声だった。

「斬ることは決してできないのだ」

「そうだといいのね」

「そうだ。そして」

しかもであった。ここで影は動いた。右手を高く掲げそこから複数の光を出してみせた。淡い、まるで月の輝きのような光であった。

「光を出してどうするつもりなの？」

「光を幾つも浴びた影は」

死神の声はまた魔物に告げた。

「一つだけではなくなるものだ」

「一つだけでは」

「そうだ。見るのだ」

また見ると言う。すると。

その複数の光を浴びた死神の影は幾重にもなっていた。それぞれ  
の方向にそれぞれの影が出ていた。そうしてその影達が一斉に動き。  
複数の影が立っていた。

「影を分身させたというのね」

「そういうことだ。影は一つではない」

死神は言った。

## 第二十話 人怪その二十二

「このようにな」

「それはわかったわ。けれど」

「けれど。何だ」

「それがどうかしたのかしら」

その複数になった影を見ても魔物の余裕は崩れない。 58

「見世物としては面白いけれど」

「見世物か」

「そうとしか思えないわ」

その崩れていない余裕での言葉であった。

「確かに貴方の影に私の刃は通じない」

「そうだ」

「けれど。逆も同じよ」

こつも言ってみせたのだった。

「逆もね。そうではなくて？」

「私の影も貴様を斬ることができない」

死神は魔物が何を言いたいのかを察してみせた。

「そういうことだな」

「その通りよ。貴方もまた私を斬ることができない」

悠然とした言葉をまた言いその右手で己の長い緑の髪をかきあげてみせる。その動作が妖艶なものに見えた。

「その通りではなくて？」

「その通りだ」

死神はこのことを隠さなかった。

「私の影は斬ることができない」

「やっぱりね」

「攻撃をすることはできない。だが」

だが、であった。今の死神の言葉は。

「それでもできることはある」

「それは何だ」

「こういうことだ」

この言葉と共にであった。

魔物に接近して取り囲んできていた影のうちの一つから鎌が出て来た。そうして。そのまま魔物の胸を貫いてしまったのだった。

「なっ……」

「私は影の中に入ることができる」

死神が出て来た。鎌の次にその影から。

「そして出ることもできるのだ」

「影の中に自由に出入りできたのね」

「その通りだ。こうしてな」

完全に己の影から出て来た。それと共に複数あった光も影達も消え影は一つになった。何時しか完全に彼の影に戻っていた。

「私は影も自由に操ることができるのだ」

「流石ね」

口から緑の血を出した。その血と共に彼を賞賛する言葉も出した。

「死神というだけはあるわ」

「私の持っている力は一つだけではない」

死神はその賞賛には応えずにこう返したただけであった。

「中にはこうした力もあるのだ」

「そしてその力によって私は敗れた」

魔物は今度はこう言ってきた。

「そういうことね」

「そういうことになる。あの世に行く覚悟はできたか」

「ええ、できたわ」

不敵な笑みで返しての言葉であった。

「充分にね」

「では。行くがいい」

死神はまた魔物に告げた。



「安心してな」

「そうさせてもらっわ。それじゃあ」

身体中から炎が起こった。赤い炎であった。

魔物はその赤い炎に覆われその中に消えていった。魔物の型に燃える炎を見ながら死神は。一言だけ呟いて終わるのであった。

「後はあの男か」

自分のことではなかった。他の者のことだった。そしてその男は今。青い力天使の姿でまだらミイラと対峙していたのであった。

「氷の力だったな」

そのまだらミイラは青い髑髏天使を見て告げてきた。

「そうだな」

「如何にも」

髑髏天使はこのことを隠さなかった。ここでも。

「それは先程話したのと同じだ」

「そうだな。では今度は氷で私を攻めるのだな」

魔物はこのことももう読んでいるのだった。

「そうだな」

「さて、それはどうか」

だが髑髏天使はこのことにはすぐに答えはしないのであった。

第二十話 人怪その二十三

「それはな。どうかな」

「違うというのか」

「力天使が使える力は氷だけではない」

そしてこうしたことも言ってきた。

「水もあるということをお忘れな」

「水か」

「そうだ。水だ」

彼は言うのだった。

「水も使える。それを忘れるな」

「ではその水を使ってどうするのだ」

魔物はその水の力のことをあえて髑髏天使に問うた。

「その水の力を。どうするつもりだ」

「考えはある」

応えながら再びその両手に持つ剣を構える髑髏天使だった。

「貴様を倒す考えがな」

「面白い。では見せてみるのだ」

魔物の挑発めいた言葉はここでも出された。

「私をどうやって倒すのかな」

「水はただ出すだけではない」

髑髏天使はその構えのまま魔物に告げた。

「吸い取ることもその中にあるのだ」

「吸い取るだと?」

「そうだ。こうしてな」

言いながら左手に持つサーベルを一閃させた。一閃させるとその前に小さな水球が数個出て来た。それはそのまま飛び魔物の周りに来たのだった。

「水の球か」

「その通りだ」

まさにそれだと魔物にも言葉を返した。

「これはその通りだ。水球だ」

「この小さな水がどうしたというのだ」

魔物はその一つ目で己の周りを漂う水球を見回した。

「何でもないとしか思えないが」

「今言ったな。水は出すだけではない」

また言う髑髏天使だった。

「吸い取ることもできるのだ」

「吸い取るか」

「この水球はどれも水分を吸い取っていく」

髑髏連枝は言葉を続ける。

「周りがある水分をな」

「周りのだと」

「そう。それはあらゆるもののだ」

また言う髑髏天使だった。

「そして貴様自身のものもな」

「私のだと」

「貴様のその身体」

まだらミイラのその身体のことだった。

「その柔らかかさこそが強さだ」

「それはわかるのだな」

「それ以上のこともだ」

髑髏天使の言葉はこれまでになく鋭いものになっていた。それは

まさに剣の鋭さであった。

「わかったのだ。つまりは」

「つまりは」

「水分を多く含んでいる」

ミイラでありながらであった。

「だからこそ炎を遮り氷も剣も効かない。水分を多く含みそういっ

た打撃や変化を中和するからだ」

「そこまでわかったというのか」

「そうだ。ならば」

「そこまで読んだうえで答えを出したのである。」

「それを吸い取らせ無効化するまでのこと」

「考えたものだな」

「魔物は髑髏天使の今の力をここでも素直に評価してみせた。」

「しかしだ」

「これも通じないというのか」

「いや、通じはする」

「言葉は限定したものにさせていた。」

「通じはする。しかしだ」

「敗れるというのだな」

「見ればもう私の水分を吸い取り出しているな」

「水球達は既に大きくなりだしていた。何故大きくなるのかは髑髏」

「天使はよくわかっていたし魔物にも容易に察しがつくことであった。」

## 第二十話 人怪その二十四

それならばであった。魔物はすぐにそれに対してきたのであった。  
「ならば」

「むっ」

「こうするのみだ」

言いながら触手を振り回した。それにより水球達を次々に壊すのだった。

壊れる水球はその度にジュウ、という何かを吸い取る音を出した。だが魔物はそれに構わずその水球達を壊していくのであった。

「壊しても水分を吸い取っていくぞ」

「触れているからだな」

魔物は動じることなく髑髏天使に言葉を返した。

「だからだな」

「その通りだ。それは恐れてはいないのだな」

「些細なことだ」

魔物は今水分を吸い取られることを些細なことと言って捨てた。

「このまま吸い取られ続けるよりはだ。蚊にそのまま血を吸い取らせる人間はいないと思うが」

「蚊についてはその通りだ」

髑髏天使もその通りだと返す。

「そういうことか」

「そうだ。だからこそ今ここで全て壊していく」

言いながらさらに水球を壊していく。

「全てな。貴様の策も無駄に終わったな」

「それはどうか」

だが髑髏天使は今の魔物の言葉には疑問符で返してみせた。

「それはどうか」

「これが無駄ではないというのか」

「見るのだ」

彼はここでも魔物に告げる。

「次に俺が何をするのかを」

「何をするというのだ？」

「こうする」

言いながら右手の剣を左から右に一閃させる。すると氷が魔物を覆いそのまま包み込んでいく。魔物はそれを見てまずは声をあげた。

「このまま私を凍らせるつもりか」

「その通りだ」

「無駄だな」

魔物は氷に覆われながらも平然としていた。

「それはわかっていると思うがな」

「さて。それはどうか」

しかし髑髏天使もまたこう返すのだった。

「それはな。どうか」

「?どういうことだ」

魔物は髑髏天使が虚栄を言うような男ではないとわかっていた。だから今の彼の平然とした言葉に対してすぐに聞き返したのであった。

「その余裕は。どういうことだ」

「貴様の水分は確かに減った」

彼はここでこのことを告げた。

「確かに」

「大したことはない」

魔物はこう彼に返す。

「全くな。現に私は今こうしてここにいる」

「確かに減らした水分は大した量ではない」

髑髏天使もそれはわかっているのだった。

「だが」

「だが？」

「その大した量もまた影響するのだ」

言いながらさらに氷に覆われていく魔物を見据えていた。

「それがな」

「何が言いたい」

「こういうことだ」

その言葉と共に魔物の全身が氷に覆われた。そして。

「何っ!？」

ここで驚きの声をあげる魔物だった。

「氷が私を蝕んでいく」

「こういうことだ」

髑髏天使の声が勝利を前にしたものになった。

「貴様のその護りは水分故だ」

これは先程言ったことそのままだった。

「それが減れば。その護りもまた弱まる」

「だからこそあの水球だったのか」

「僅かでも減らせばそれで変わる」

彼はまた言う。

「俺はそこを衝く。そういうことだ」

「くっ、そこまで読んでいたのか」

「貴様を凍らせ。そして」

言いながら右腕の剣を上大きく掲げる。今まさに投げんとするかのように。

「これで終わらせる。氷になることを防げなくなった貴様を貫いてな」

言い終わると同時に剣を投げた。剣は一直線に飛び完全に氷となった魔物を貫いた。貫かれるのと同時に青白い炎が彼の身体から起こった。

## 第二十話 人怪その二十五

「抜かったか」

「貴様は確かに厄介な相手だった」

氷から元の身体に戻っていく魔物に告げた言葉だった。

「だが。決して倒せない相手なぞいない」

「決してか」

「そう。決してだ」

彼は言うのだった。

「そのような存在はいない。絶対にな」

「言うだけはあるな」

魔物は青白い炎に全身を包まれようとしながら彼に言葉を返した。

「それだけのことはな」

「少なくとも俺は今回も勝利を収めた」

その炎に包まれる魔物を見据えての言葉だ。

「貴様に対してもな」

「それは認める」

魔物もまた言うのであった。

「私に勝ったことをな」

「安心して死ね」

魔物にかける最後の言葉だった。

「そのまま苦しまずな」

「ではこのまま旅立たせてもらおう」

まだらミイラもまた青白い炎に全身を覆われ。最後の言葉を出してきた。

「さらばだ」

「ああ」

髑髏天使が応えるとその瞬間に青白い炎に包まれ消えた。髑髏天使は今回もまた勝利を収め生き残ることができたのであった。



生き残った彼のところに来たのはまずは死神だった。彼はこう声をかけてきた。

「どうやら生きているようだな」

「見ての通りだ」

その死神の言葉にこう返す髑髏天使だった。

「今度も生き残ることができた」

「そうだな。貴様はまた生き残った」

「次はわからないが俺は今は生き残った」

また言う髑髏天使だった。

「この闘いもな」

「私もだ」

そして死神は今度はそれは自分も同じだというのだった。

「魔物の魂を一つ冥府に送り届けることができた」

「また一つか」

「一つ。一つずつ送り届けていく」

死神はその外観はそのままだった。鎌も手にしたままである。

だが髑髏天使は闘いが終わると次第に牧村の姿に戻ろうとした。

しかしその戻ろうとしたところですぐに髑髏天使の姿を維持するこ  
とにしたのである。

それは何故か。彼は今正面を見据えていた。そしてそこにいる男  
もだ。

「安心しろ」

紳士は二人に対して言ってきた。

「私は戦わない」

「戦わないというのだな」

「残念だが今の髑髏天使では私の相手にならない」

そしてこう言うのであった。

「だからだ。安心しろ」

「そうか。では安心させてもらおう」

髑髏天使の方もそれを受けて頷くのだった。そうして頷いてから

その姿を牧村のものに戻し紳士の顔を見やるのだった。構えも取ってはいいい。

「魔物のその修正は忘れていた」

「魔物にも規律はある」

紳士は言う。

「我々魔神が決めていることだがな」

「それが実力が釣り合う相手としか戦わない」

具体的にはこのことだった。

「そういうことだな」

「そういうことだ。だからこそ今は君とは闘わないのだ」

「私ともか」

死神はここで話に入って来た。

「神である私ともか」

「神と神が戦うのもだ」

何故かそのことに妙な嫌悪感を感じさせる言葉で返す紳士だった。

「好きではない」

「だから私とは闘わないのか」

「少なくとも今はそうだ」

こう死神に対して答えるのだった。

「今はな」

「闘う気がないのならいい」

死神も積極的に自分から動くことはしなかった。

## 第二十話 人怪その二十六

「それならばな」

「闘わないというのか」

「私もまた闘う相手は向かってくる者だけだ」

死神は今の牧村の問いにこう返した。

「そういう手合いだけだ。そうでなければ」

「闘うことはないか」

「うむ。闘わない」

この闘わないという言葉を強調さえる。

「送ると闘うのはまた別だからだ」

「それを聞いてわかった」

牧村は死神の今の言葉を聞き彼の方を振り向かずには頷いた。

「そういうことだな」

「わかってくれたらそれでいい」

死神もまた素っ気無く返す。

「私はそれ以上は求めないし欲することもない」

「あくまでそれだけか」

「そういうことだ。そしてだ」

彼は牧村との話をこれで終わらせそのうえでまた紳士に顔を向けて言うのであった。

「貴様はこれで帰るのだな」

「戦いは見届けた」

こう述べる紳士だった。

「私の役目はこれで終わった」

「ならば帰るのだな」

死神はその彼を追おうとはしなかった。

「もうこれでな」

「そうさせてもらう。それではだ」

紳士のマントが翻った。すると。

それで姿を消してしまった。後には何も残ってはいなかった。紳士は影一つ残すことなく何処かへとその姿を完全に消してしまったのであった。

残ったのは牧村と死神だった。だが残った二人ももうここには何の用もなかった。

「帰るとするか」

死神が牧村に声をかけてきた。

「これでな」

「ここにはもう何の用もない」

牧村も今の死神の言葉に応えるようにして言ってきた。

「もうな」

「では帰るな」

「ああ」

そして死神の言葉に頷くのであった。

「もうな。帰るとしよう」

「それでは私もだ」

死神もそれは同じなのだった。彼は既に教会の礼拝堂に背を向けていた。最早ここには何の関心もないといった態度がそのまま出ていた。

「去るとしよう」

「いい礼拝堂だな」

牧村は今は礼拝堂の中を見回していた。落ち着いて見てみると確かに壮麗な造りであり実に神々しい礼拝堂であった。神聖さも実によく醸し出されている。

「もう帰るのか」

「私はこの宗教とは何の関係もない」

キリスト教とは、ということであった。

「髑髏天使である貴様はどうか知らないがな」

「この宗教とはか」

「この宗教の者達がどう言っているかは知っている」  
それは知っているというのである。

「だが」

「だが？」

「宗教も神も一つではない」

これが死神の考えであった。

「一つではな。実際にこの宗教の神がいて私もいるな」  
「確かにな」

その死神が今目の前にいるからこそ。 頷く牧村だった。

「今貴様はここにいる。 実際にな」

「それを否定することはできない」

死神はまた言うのであった。

「そういうことだ」

「そして俺も存在する」

牧村は続いて己のことを考えそうして述べた。

「今ここにな」

「宗教は一つではない」

死神の言葉は続く。

## 第二十話 人怪その二十七

「そして神もだ。一人ではない」

「貴様もいればあの魔神達もいる」

牧村はこのことも実感できたのだった。それも神については宗教が一つではないということよりも強く実感してもいたのである。

「そういうことか」

「無論他にも存在している」

「他にもか」

「私が本来いる世界にもな」

死神はこれまでになく己のことを牧村に対して話していた。そしてそれを止めることなくさらに話を続けていくのであった。さらに、であった。

「多くの神がいる」

「そこが貴様のいる神の世界というのだな」

「他にも神の世界はある」

他にもあるというのである。

「そこには他の神々がまた存在している」

「神の世界も一つではないのか」

「ありとあらゆるものが一つではないのだ」

死神の今の言葉は少し聞いただけでは到底わかり得ないものであった。しかし髑髏天使は彼が何を言いたく何を言いたいのかわかっていた。

そしてそのうえで。死神の話をさらに聞くのであった。

「世界とは縦横に複雑に入り組み絡み合い無数の世界が存在するものだ」

「無数にか」

「その通りだ。この人の世界もまた同じだ」

やはり異なる世界の住人の言葉であった。

「この世界のもな」  
「わかった。世界もまた一つではないのか」  
「私はその重なり合っている世界の一つの住人だ」  
「それが彼だというのである。」  
「神々と呼ばれる住人の一人なのだ」  
「わかった。それでは神の一人よ」  
「うむ」  
「今は貴様の本来の世界に帰るのだな」  
「死神の話をごここまで聞いたうえで言葉であった。」  
「俺は俺がいるべきこの世界に留まり続ける」  
「このまま留まり続けられるのならその限り留まることだ」  
「死神はまた意味深い言葉を述べてきた。」  
「その限りな」  
「どうということだ、それは」  
「人は人の世界に生きるもの」  
「死神はまた彼に言ってきた。」  
「そういうことだ」  
「今の言葉はわからないが」  
「牧村は目を警戒するように細めさせて死神に言葉を返した。」  
「今のは。どうということだ」  
「いずれわかるかも知れない」  
「しかし死神は今答えようとしなかった。これ以上言おうともしないのだった。」  
「貴様もな。人である限りな」  
「俺は人間だ」  
「これが牧村の今の彼自身への認識であった。」  
「それ以外の何だというのだ」  
「同時に髑髏天使でもある」  
「死神はまた答えることなくこう返した。」  
「それを忘れるな」

「覚えておこう」

一応その言葉を受けはする牧村だった。

「だが」

「理解することはないというのだな」

「その通りだ。今の貴様の言葉はわからん」

やはりそうなのだった。今の牧村には。

「だが。やがてわかるかも知れないな」

「それではその時に考えることだ」

死神もそれ以上は彼に言わないのであった。

「その時にな」

「わかった。それではな」

「また会おう」

彼等はこれで教会を離れ別れを告げ合った。戦いは終わったが全ての戦いが終わったわけではなかった。魔物達にまた新たな神が降臨しようともしていた。

## 第二十話 完

2009・8・11



## 第二十一話 人狼その一

髑髏天使

### 第二十一話 人狼

「やっと来てくれましたね」

「待たせてくれたわね」

空港であった。あの老人と女がまずこう告げていた。見れば彼等は全員集まりそのうえで今空港に来たその者を出迎えようとしているのだった。

「何時来るかと思っていましたか」

「やって来たな」

老人の言葉に男が応えた。

「ようやくな」

「そうだね。やっとだよね」

子供もまた言うのであった。

「待たせてくれたよ。イギリスってそんなに遠いの？」

「かつては遠かった」

青年が子供に伝える。空港は清潔な床とガラス張りの壁で全てが透き通って見える。その透き通った中で彼等は行き交う人々を他所にその誰かを待っているのであった。

「かつてはな」

「ああ、今は凄く便利になったからね」

子供は今の青年の言葉に応えたのだった。

「この港だつてあるし」

「空港というのだ」

紳士が子供に述べた。

「ここはな」

「ふうん、空港ねえ」

「飛行機というものについては御存知ですね」

今度は老人が彼に言ってきた。

「それは」

「うん、わかるよ」

このことには何の問題もないといった態度で答える子供だった。

「あれだよ。今空を飛んでいる鉄の乗り物だよ」

「はい、それです」

老人はまた答えた。見れば空港の周りを飛行機達が離着陸している。それを見ながらにしての会話なのであった。

「あれが飛行機なのです」

「僕は船でここまで来たからね」

子供は少し感慨ありげな声で述べた。

「けれど船もね。変わったね」

「そうだな」

紳士が子供のその言葉に頷いた。

「人の世界はかなり変わった」

「私達が封印されていなかった時代はここまで騒がしくなかったわね」

女はそれが少し残念なようであった。

「何から何まで。この時代は騒がし過ぎるわ」

「人間達も変わったか」

男は人間について述べた。

「かつてよりも。忙しく動くな」

「何もかもが変わったようですね」

老人もまた言うのだった。

「人の世界は」

「別に変わらなくてもいいものだが」

青年はその変化自体を好んでいなかった。

「あの時代のままでよかったのだが」

「だが人間達はそうは思っていないらしい」

紳士は人間の側に立った言葉を述べた。

「どうやらな」

「今の人間は騒がしいのが好きなんだ」

子供は紳士の言葉を聞いてこう考えるのだった。

「何か妙なことだね」

「私達から見ればそうですが彼等にしては違うのでしょ」

老人もまた人間の側に立って考えてみた。

「もっとも。魔物にとっては大した意味はありませんが」

「そうね。私達は私達だから」

女はそう考えることにしたのだった。

「それでいいわ」

「そういうことですね。さて」

老人は話が一段落ついたと見てここで言葉を少し強くさせてきた。

「間も無いですね」

「そう。やっと来るんだね」

「今飛行機が着陸しました」

窓から見えるその着陸した旅客機を見ての言葉である。

「いよいよですよ」

「そう。やっとなんだ」

子供は待ちかねたような声をまた出した。

## 第二十一話 人狼その二

「何か焦ったら人間みただけけれど」

「それも仕方ありません」

老人は子供を宥めるようにして告げてきた。

「何しろ本当に待ちましたから」

「そうだな。封印を解かれたと聞いて」

男もまた言うのだった。

「あれから随分と経った」

「それでやつとだから」

女が続く。

「私も同じ思いだわ」

「しかし今ここに来る」

青年はそのこと自体を言うのであった。

「ここにな」

「これで七人だ」

紳士が言うのは数であった。

「あと五人か」

「そうね。五人ね」

女が今の紳士の言葉に伝えて頷いてきた。

「残るは五人ね」

「あとの者達も間も無く封印から解き放たれるか」

「そうなることを祈ります」

これは老人の言葉である。

「是非共」

「そのうえで髑髏天使と戦う」

男はそのことを考えていた。

「我等十二人と今の髑髏天使は戦うことになるのか」

「なればいいね」

子供の言葉はそれを期待するものであった。

「それが楽しみなんだし、僕等にとっては」

「その通りだ。さて」

青年は己の言葉を途中で止めてきた。

「来るな。いよいよだ」

「はい」

老人は今度は彼の今の言葉に対して頷いてみせた。

「来られましたよ、遂に」

「やっとだけれど」

「何か随分と変わったな」

「そうね」

子供と男、それに女が言った。見れば目の前に金髪でサングラスをかけた白人の男がやって来た。黒いブルゾンにレザーパンツ、それに同じく黒のブーツといたいで立ちである。その格好で彼等の前に姿を現わしてきたのであった。

「久し振りだな」

「全くです」

老人が彼等を代表する形で彼の言葉に応えた。

「ようやく再会することができましたね」

「そうだな。しかし」

ここでこのロツカー風の男は彼等を見回してまた言ってきた。

「皆あまり変わっていないな。いや、全然か」

「あんたが変わり過ぎたのよ」

女は表情を変えずにこのロツカーに述べた。

「それも随分と。まるで別人じゃない」

「別人か」

ロツカーはそれを言われてかえって得意そうであった。まるでそう呼ばれることを期待していて実際に言われて楽しいかのようである。

「そうかもな。俺は変わったからな」

「確か以前は騎士の姿だったか」

「そうだったな」

今度は青年の言葉に応えてみせた。

「それが今ではこの姿だからな。変われば変わるものだ」

「それはイギリスで流行っている姿か」

紳士が問うのはこのことだった。

「だからその姿なのか」

「少しばかり古い格好かも知れないがそうだ」

こう紳士に答えるロツカーだった。

「このスタイルがロンドンでは流行っている」

「ふうん、そうなんだ」

子供はそれを聞いてまずは納得したような声を出してみせた。

「まあいいんじゃないの？似合ってるしね」

「似合ってるか。ならいいな」

ロツカーはそう言われて御満悦であった。ブルゾンの中から櫛を取り出してその金髪のリーゼントをなおしている。その姿は確かにさまになっていた。

## 第二十一話 人狼その三

「このスタイルでな」

「貴殿が気に入っているのならそれでいい。それでだ」

紳士は今の彼のスタイルを認めたとうえでさらに言ってきた。

「人狼よ」

「ああ」

「ここに来たということは知っているとと思うが」

「こう彼に言ってきたのだった。」

「わかっているな。この時代の髑髏天使はだ」

「かなりの強さらしいな」

人狼と呼ばれたロツカーは実に楽しそうな微笑みを浮かべて彼に  
応えたのだった。

「歴代の髑髏天使の中でも屈指らしいな」

「その通りよ。もう力天使よ」

女も言う。

「この前髑髏天使に目覚めたばかりだというのにな」

「この前というところあれか」

ロツカーは彼の感覚で尋ねた。

「十年前か？それでももう力天使か」

「いや、五ヶ月程度だ」

男がこう彼に答えた。

「五ヶ月でだ。力天使にまでなった」

「何っ!？」

それを聞いた男の言葉が一瞬だが止まってしまった。表情も驚いたものになっていた。

「五ヶ月で力天使か」

「そうだ」

また答える男であった。

「僅か五ヶ月でだ。そこまでなった」

「信じられないな。いや」

ロツカーは最初その言葉に信じられないと返そうとしたがすぐに止めた。そしてその言葉とは別にこう言うのであった。

「あの時の髑髏天使と同じか」

「そうなるな」

青年が今の彼の言葉に応えた。

「あの時の。俺達を封印した髑髏天使とな」

「そうだな。あの時以来の強さというわけか」

「既に多くの魔物達が倒された」

紳士も言ってきた。

「既にな」

「じゃあ俺もやらせてもらう」

ロツカーはここまで話を聞いて述べたのだった。

「既に魔物は連れて来ている」

「そうですか。既に」

「早速この時代の髑髏天使にその魔物を向ける」

言葉は本気のものであった。

「すぐに行つていいな」

「ええ、どうぞ」

老人はロツカーの今の言葉にもにこやかに返したのだった。

「貴方のお好きなように」

「そうか。ではそうさせてもらう」

ロツカーはそれを聞いて頷いたのだった。

「今から行つて来る」

「待て」

だがここで青年も出て来たのであった。

「俺も行こう」

「御前もか」

「そうだ。俺も魔物を用意しておいた」



「こう言うのである。」

「だからだ。行かせてもらおう」

「髑髏天使は俺の獲物だが」

ロッカーは引こうとはしなかった。

「それでも来るといふのか」

「今敵は髑髏天使だけではないからな」

だからいいという青年であった。

「もう一人いる。そちらでもいい」

「もう一人という」と

これはロッカーにはすぐにわからないことであった。青年の言葉を聞いてもその表情を微妙なものにさせるだけであった。それだけしかできなかった。

「誰だ、それは」

「死神だよ」

子供がいぶかしむロッカーに対して答えた。

「死神もいるんだ」

「死神。あいつもか」

死神と聞くとそれでわかったロッカーであった。微妙なものになっていた表情が納得したものになる。それが何よりの証拠だった。

## 第二十一話 人狼その四

「あいつもここに来ていいのか」

「そうなんだ。どうかな」

「面白いな」

ロツカーはそれを聞いて今度は楽しそうな顔になった。

「あいつも一緒だな」

「死神とも戦いたい？」

「いや、今は髑髏天使だ」

だが彼はこれは変えないのだった。

「髑髏天使の相手をしたい。今はな」

「ならそうすればいい」

青年も彼のその主張には何も言わなかった。

「では行くぞ」

「ああ、そうするか」

「日本に来て早々とは思わなかったな。いや」

男はすぐに自分の言葉を変えるのだった。

「それも貴様らしいな」

「俺は何事も思い立ったらすぐに行動に移る」

ロツカーも実際にこう返した。

「それはわかっていると思っていたがな」

「今思い出した」

これが男の返事だった。

「今だ。何しろ長い間眠っていたからな」

「そうだな。ならば無理もないことだ」

ロツカーもそう言われて納得するのだった。

「俺も色々忘れてしまっているようだからな」

「少しずつ思い出していけばいいわ」

女はこう言って彼に笑みを見せて述べた。

「少しずつね」

「そうさせてもらおう。では手はじめにだ」

足を進めだしたロッカーであった。青年もそれに続く。

「髑髏天使のことを思い出すでしょう」

「ではな」

青年も共に行く。二人並んで空港を後にしていく。それを見送るのは他の魔神達であった。また一柱異形の神が日本に降り立ったのであった。

牧村は今は川辺の道をランニングしていた。青い上下のジャージを着てそのうえで走っている。その横には自転車で走る若奈がいた。「いいタイムよ」

若奈は左手に持つタイムウォッチを見ながら牧村に述べた。

「前よりタイムが短いわ」

「速くなっているか」

「その通りよ」

こう答える若奈であった。

「少しだけねどね」

「少しか」

「その少しよ」

彼女はそれこそがというのであった。

「少しずつタイムが速くなっているから」

「全体として見ればか」

「一月前と比べたらね」

彼女はさらに言う。

「相当短くなってるから」

「そうか。それならいい」

「ええ。やっぱりいつも走ってるせいかしら」

若奈は尚も自転車に乗り彼の横を進みながら述べた。

「だからこんなに」

「走っているだけじゃない」

牧村は走りながら述べてきた。その額には汗をかいている。その汗が彼の顔を輝かせてさえいた。

「他にも」

「筋力トレーニングもしているしね」

「だからだ。走るのも速くなる」

「そうなのよね。走るのも全身使うから」

だから筋力トレーニングもタイムをあげるのに効果があるのである。とりわけ腹筋を鍛えると効果があるのだ。

「そうなるのよね」

「走れば走るだけ体力もつく」

持久力ということである。

「いいことだ」

「後は瞬発力だけけれど」

持久力だけでは戦うことができない。その瞬発力も重要だ。若奈は牧村が戦っていることは知らないが瞬発力の重要性はわかっているのである。

それで今言うのだった。

「それもあがってるわ」

「一月の間でもか」

「かなりね。もうテニス部とフェシング部に入る前と今じゃ」

「どうなっている？」

「もう別人みたいよ」

そこまで変わっているというのである。

## 第二十一話 人狼その五

「完全にね。元から身体能力は高かったけれど今はそれどころじゃないわ」

「それだけ違うのか」

「だって今だってあれよ」

その自転車をこぎながらの言葉である。

「私全速力で自転車こいでるのよ」

「全力でか」

「そうよ。それでやっとな追いついてるのよ」

しかもやっとな、というのである。

「それだけ持久力も凄くなってるし」

「長距離を走ることとか」

「テニスでも上下左右の動きが物凄く速くなってるし」

それでもあるというのだ。テニスは瞬発力でありとりわけ脚のフットワークが重要だ。それもかなりあがっているというのである。

「フェシングだって」

「剣捌きがか」

「もう段違いよ。どっちも部の誰よりも上になってるじゃない」

「誰よりもか」

「本当に凄いわよ」

あらためて感嘆の言葉を出す若奈だった。

「部活やこつしたランニングもして筋力トレーニングもして」

「ああ」

「それで家でもやってるのよね」

それについても牧村本人に対して尋ねるのであった。

「素振りとか」

「左右両方の手でな」

そつだというのである。

「それぞれしている。フットワークも入れてだ」  
「凄くなる筈よ」

若奈はそれは努力だと認識した。

「そこまでやったらね」

「そんなにか」

「何でそこまでやるのかわからないけれど」

「生きる為だ」

つい髑髏天使としての言葉を出してしまった。

「これは生きる為だ」

「健康の為にしてもよ」

だが若奈はその生きる為ということを健康だと解釈した。ここに彼と彼女の認識の違い、生きている世界の違いが出てしまっていた。もともと若奈には全く気付かないことであつたが。

「こんなのスポーツ選手並よ」

「そこまでか」

「後はアフターケアもしっかりして」

動かした後のことである。

「疲れが溜まったり乳酸には気をつけることね」

「乳酸か」

「そうよ。過度な運動をすると乳酸が溜まりやすいから」

そこまで勉強しているのであつた。実は彼女は牧村のトレーナーのような立場になってからそうしたこと勉強しているのである。

「それには気をつけてね」

「つまり痛風にか」

「そう、それよ」

まさにそれだというのである。

「痛風にも注意してね。若くてもなるものだから」

「痛風か」

「まず水分をたっぷり摂ること」

痛風に関して最初に言ったことはこれであつた。

「それでお野菜や大豆をしつかりと食べて」

「そうして乳酸が溜まるのを防ぐのか」

「要するに血を綺麗に保っておくのよ」

「それだというのだ。」

「そうすれば痛風にはならないから」

「わかった。それではそうする」

「だからね。私だって」

「ここでさらに言う若奈であった。」

「牧村君に出すドリンク考えているのよ」

「いつもの野菜ジュースに豆乳か」

「そう、それよ」

「まさにそれだというのである。」

「スポーツドリンクの他にね。そういったのがね」

「いいのか」

「かなりいいのよ。栄養もあるし」

それについても考慮しているのだった。野菜ジュースや豆乳が身体にいいものであることは最早言うまでもないことであった。

## 第二十一話 人狼その六

「だから出してるのよ」

「あらゆることを考えてか」

「牧村君ビールは飲まないけれど」

酒を飲まない牧村のことはよくわかっているのであった。

「それでも気をつけてね。お肉は食べるわよね」

「何でも食べる」

「これが今の返事であった。

「肉は何でもな」

「鶏肉はいいけれど」

若奈は肉についても述べてきた。

「牛肉とかはね」

「食べ過ぎると駄目だな」

「そうよ。食べ過ぎが駄目なのよ」

若奈はこう言うのであった。

「そうしたお肉はね」

「では牛肉はあまり食べ過ぎないことか」

「むしろ豚肉の方がずっといいわ」

そして彼女が勧める肉はこちらなのだった。

「羊もかなりいいわ」

「羊もか」

「あれはカロリーもかなり少ないし」

「そこまで調べているのであった。」

「いいわよ。豚肉は料理次第でコレステロールもかなり解消されるし」

「だからいいのか」

「カロリーは確かにあるけれど牧村君の場合は」

牧村自身に当てはめて考えもするのだった。



「むしろカロリーはどんどん摂るべきだから」

「気にしなくていいか」

「かなり動いてるから」

これはもう言うまでもないことであった。牧村の運動量は尋常なものではない。それは即ちそれだけカロリーを消費しているということでもある。

「だからね。かなり摂っても問題ないわ」

「わかった」

「金田正一さんだって」

往年のプロ野球の名選手だ。四百勝したことで名高い。

「一日に相当なカロリーを摂ってたのよ」

「そんなになのか」

「確か普通の人の倍位に」

そこまで摂っていたのである。普通の人間は一日三〇〇〇カロリーであったが金田は六〇〇〇カロリーであった。これは尋常なものではない。

「摂っていてそれでね」

「身体を動かしていたのか」

「相当走っていたそうね」

金田の強靱な足腰はそのランニングによって作られたのである。

「他にも相当なトレーニングしていたそうだし」

「それでかなりのカロリーが必要だったのか」

「カロリーはあれよ」

さらに言う若奈であった。

「エネルギーだから。摂っちゃいけないってことはないのよ」

「よく太らない為にカロリーを摂らないというのはあるかな」

「あれは人それぞれよ」

「そうだとするのである。」

「だから。摂らないといけない人は摂らないといけないのよ」

「俺はその摂らないといけない立場か」

「そういうこと。摂らないといけないの」  
また言うのであった。

「それもかなりね」

「ではそうさせてもらうか」

「相当摂っても大丈夫よ」

カロリーに関してはかなり寛容な若奈であった。

「甘いものだって」

「そちらもか」

「それで私考えただけけれど」

何とか牧村のランニングに自転車でつきながらの言葉が続く。

「豆乳やお野菜を使ったデザートはどうかしら」

「豆乳か」

「お野菜はもうあるし」

それはもうあるというのだった。

「ほら。苺とか人参とか」

「それか」

「そうよ。あるから」

だからそれはもういいというのである。

## 第二十一話 人狼その七

「後はそういう豆乳を使ったお菓子ね」

「大豆からお菓子を作られるのか」

「それができるのよ」

若奈はさらに言う。

「アイスクリームだってあるしケーキだって」

「ケーキもあるのか」

これは牧村にとつては予想外の話だった。話を聞いていてその意外だという表情を実際に若奈に対して見せてもいるのであった。

「豆乳のケーキか」

「お豆腐のケーキね」

同じものであった。豆乳も豆腐も同じ大豆から作られるものだからである。

「それがあるから」

「どういったものだ、それで」

牧村は話を聞いているうちに興味を覚えたのであった。

「そのケーキは」

「アイスクリームもあるけれど」

「そちらも面白そうだな」

両方に興味を抱いた牧村であった。

「今度作ってみるか」

「何言ってるのよ」

牧村の自分で作るという言葉はすぐに否定した若奈だった。

「自分で作るって。私が作るのよ」

「君がか」

「そうよ。私よ」

また答える若奈だった。

「私に作らせてよ」

「その豆腐のケーキをか」

「それにアイスクリームも」

やはりどちらもなのだった。

「作らせて。いいわね」

「わかった」

その申し出を素直に受ける牧村であった。その間も走り続けている。

「では楽しみにさせてもらおう」

「お豆腐って凄く淡泊だから」

若奈はこのことを強調して言ってきた。

「だから何にでも使えるのよ」

「あらゆることにか」

「それがお菓子にもってわけ」

「わからないな」

牧村はその話を聞いてもまだ実感が沸かないようだった。実際に首を傾げさせてそれが元に戻らなかった。どうしてもといった感じだった。

「それが」

「わかつてもわからなくても食べてみたらわかるわ」

若奈の言葉はやや強気なものだった。

「食べてみればね」

「食べてみればか」

「人参のケーキだつて美味しいじゃない」

その例えに出してきたのはこれだった。

「人参自体もお菓子にかなり使えるし」

「それはその通りだな」

牧村も人参については否定しなかった。傾げさせていた首も元に戻っていてそのうえで言葉になっていた。それは確かであった。

「人参はな」

「大豆はその人参より癖がないのよ」

「癖がか」

「だからいいのよ」

これが若奈の主張だった。それは変わらないのだった。

「その大豆のお菓子もね」

「では食べてみるとするか」

「ここでやっつと牧村も言うのだった。」

「その豆腐のケーキやアイスクリームをな」

「他にも作るかも知れないわよ」

若奈の言葉はさらににこにこしたことしたものになっていた。

「期待していてね」

「期待させてもらう」

牧村は今度はこう返した。

「食べる機会にな」

「楽しみにね。さて、それでね」

ここまで話して話題を変えてきた若奈であった。

「牧村君、ランニングの後だけけれど」

「筋力トレーニングだったな」

「そうよ。あと考えがあるんだけど」

「こつも述べてきた若奈だった。」

## 第二十一話 人狼その八

「今こうしたトレーニングとテニス、それにフェシングやってるじゃない」

「そうだ」

このことはもう言うまでもないことのように牧村には思われた。しかしその内心で思ったことはここでは隠して若奈に伝えるのだった。

「それがどうかしたのか」

「アフターケアにね」

彼女が今度言うのはこのことについてであった。

「お風呂。上手く使ってみたらどうかしら」

「風呂か」

「やっぱりいつもシャワーよね」

こう予想してみせてそのうえで尋ねてみせた。

「シャワーよね。普段は」

「そうだな」

少し思い出してから答える牧村だった。最近のことを思い出してもそうだった。彼はどちらかといえばシャワーの方が多いのだ。

「シャワーだな、確かに」

「それよりもね。お風呂の方がいいのよ」

「身体の疲れを取るにはか」

「そういうこと。身体をあっためてね。それでね」

「疲れを取るか」

「どうかしら」

ここまで話したうえでまた牧村に問うてきた若奈だった。

「それって」

「一度やってみるか」

今度は考える時間もなく答える牧村だった。

「それもな」

「そう。やってみるの」

「いざという時に動けないのでは何にもならない」

そうしたことまで考えている牧村だった。ただ鍛えるだけでは駄目だ、そうしたことまでわかっていいるからこそ今の若奈の言葉に應えるのだった。

「だからな」

「そうしてくれたらいいわ。さて」

「さて？」

今度は何かと思った牧村だった。それで若奈の今の言葉に應えた。

「何だ。一体」

「そろそろ折り返し地点よ」

若奈が言うのはこのことだった。

「折り返しよ。戻りましょう」

「そうか。折り返しか」

「そうよ。それで帰ったら」

「筋力トレーニングだ」

このことを忘れない牧村だった。はつきりと覚えていた。

「それをするか」

「そうしましょう。整理体操の後でね」

「動かして整えてまた動かす」

牧村はこうも言った。

「そういうことだな」

「そういうことよ。私だってね」

自転車を全速力で漕ぎながら苦笑いを浮かべていた。

「そうしてるし」

「身体を整えているのか」

「今だって全速力よ」

見ればその額に汗までかいている。自転車でそれなのだからかなり身体を動かしているのがわかる。言い換えればそれだけ牧村のラ

ンニングが速いということでもある。

「だからね」

「わかった。では帰ったらだ」

「私も整理体操ね」

今度は苦笑いでない若奈の笑みだった。すっきりとした笑顔であった。

「一緒にね」

「そうなるな」

「たまには一緒にするのもいいわよね」

「こんなことも言う若奈だった。」

「二人でね」

「そうだな。一人ですることが多いが」

牧村はそうであった。彼がしているテニスもフェシングもそして戦いも。一人でするものである。だから彼は傍に若奈がついていてもするのは一人であり続けていたのである。



## 第二十一話 人狼その九

「二人もいい」

「そうよね。じゃあ帰ったらね」

「二人で整理体操だな」

「ええ」

にこりと笑う若奈だった。彼等は帰ると本当に二人で整理体操をした。それから牧村はトレーニングを行った。それが終わってから家に帰る。家に帰ってもまだ日は高い。途中で店に寄ろうとしたがふと気が変わって道の橋の上でサイドカーを止めた。そうしてそこで下に流れる川を見ながら休息を取ることにした。しかしここでであった。

「貴様か」

「暫くぶりだな」

まず彼の目の前に出て来たのは青年だった。その鋭い顔を牧村に向ける。

「相変わらず生きているようだな」

「俺は死なない」

牧村は橋の手すりに自分の身体を背中からもたれさせていた。そのうえで両肘をその手すりにかけそのうえで青年に應えていた。

「少なくとも貴様等に倒されることはない」

「相変わらず気が強くて何よりだ」

青年は牧村のその言葉をまず受け取った。

「しかしだ。今回はどうか」

「今度の相手は貴様の配下か」

「一人はな」

「一人は、というのだった。

「俺の配下だ」

「一人は、か」

牧村も彼の今の言葉で察したのだった。

「ではもう一人は」

「俺が連れて来た」

青年の左手から急にもう一人出て来た。まるで彼の影から出て来るようにして。それはあのロッカーであった。

「この俺がな」

「ハードロッカーか」

「その姿を取っているつもりだ」

ロッカーは今は黒いサングラスをしていた。そのサングラスに左手の人差し指と親指をかけながらそのうえで牧村に対して答えてきたのだった。

「だからこそそう言ってもらって何よりだ」

「貴様が新しい魔神だな」

「そうだ。人狼だ」

彼は己のありのままを牧村に告げた。

「それが俺だ」

「今度は人狼か」

牧村は彼の言葉を聞いて述べた。

「これで七柱か」

「そして貴様が逢う最後の魔神だ」

ロッカーは不敵な笑みを口元に浮かべて言ってみせた。

「この俺がな」

「さつきも言ったが俺は貴様等に倒されることはない」

手すりに背中をもたれさせかけたままの言葉だった。

「何があるうともな」

「では。ここでもか」

「そうだ。戦うからには勝つ」

今の言葉は宣言であった。

「何があるうともな」

「面白い。それではだ」

ロツカーの笑みがさらに深いものになった。そうして。

「場所はここでいいな」

「望むところだ」

こう返す牧村だった。

「何処であろうといい。貴様等が望む場所だ」

「よかるう。それならばだ」

「そうだな。私もここでいい」

ここでもう一人の声がした。それは。

牧村と二人で魔神達を挟み込む形になっていた。死神は青年とロツカーの後ろにいた。そこでハーレーを後ろにして立っているのであった。

「貴様等がここで戦いたいというのならな」

「死神か」

「如何にも」

ロツカーの言葉に応え口元だけで笑ってみせてきた。

「そういう貴様は人狼だな」

「俺のことはすぐにわかるのだな」

「気配でわかる」

今度はこう答えた死神だった。

## 第二十一話 人狼その十

「その鋭い気配でな。手に取るようにわかる」

「そうか。その力は健在なようだな」

「いや、健在ではない」

今のロツカーの言葉は否定してみせたのであった。

「健在ではな」

「ではどうなのだ？」

「強くなっているのだ」

今度は口元だけでなく目元でも笑う死神だった。自信に満ちた笑みであった。

「私はな。以前より、貴様と最後に出会った時よりもな」

「そうか。では見せてもらおう」

ロツカーは死神に顔だけでなく身体も向けていた。彼と正対しながら話しているのだった。

そうしてそのうえで。死神に対してこう言ってきたのであった。

「貴様の今の力をな」

「よかるう」

死神はまだ戦う姿になってはいない。しかし既に刃は持っていた。まさにその顔だった。

二人の激突がはじまろうとしていた。だがここで。青年がロツカーの後ろから言うのであった。

「待て」

「むっ!？」

「貴様はここに髑髏天使に対して己の魔物を向かわせるつもりで来たのだったな」

「そうだが」

「では貴様の相手は髑髏天使だ」

こう彼に告げるのだった。

「貴様のはな」

「それじゃああれだな」

ロツカーは青年にそう告げられても悪い顔はしなかった。むしろさらに楽しそうな顔になってそのうえで笑いながら彼に対して言葉を返すのだった。

「御前が死神の相手をするんだな」

「そうだ」

青年も彼の問いに答える。

「俺の連れて来た魔物が死神の相手をする」

「わかったぜ」

ロツカーは笑いながら彼の言葉に頷いてみせた。そうしてそのうえであらためて牧村の前に来て彼に対して言うのであった。

「この時代の髑髏天使」

「何だ」

牧村もあらためて彼に応えた。

「貴様の魔物が今回の俺の相手になったのか」

「そういうことだな。それでいいな」

「俺は相手は選ばない」

牧村はもう手すりにもたれかかってはいなかった。今は立ってそのうえで応えてきていた。

「どの魔物が来ようとした」

「倒すっていいのか。いいねえ」

ロツカーは彼の言葉を受けてさらに笑ってみせてきた。そしてまた言ってきた。

「それならこつちもやり易いってことだ」

「来るな」

「ああ、それじゃあ」

サングラスを外しその目を見せる。すると彼の影から肌のない人を思わせる異形の存在が姿を現わしてきたのであった。その不気味な姿を見せながら。

「こいつはモズマっていつてな」  
「モズマか」

「そうさ。イギリスにいる奴だ」  
「それだというのである。」

「それを連れて来たってわけだ」

「イギリスのか」

「それでいいよな」

あらためて牧村に問うのだった。

「いいつて今言っただしな」

「構わない。それではだ」

「では人狼様」

そのモズマという名前の魔物はロッカーの横に来て彼に対して恭しく一礼して述べてきたのだった。

「髑髏天使の相手は私にお任せを」

「よし、じゃあ頼むな」

「はい」

ここでも恭しく一礼する魔物であった。異様な姿であるが礼儀正しいようである。動きも人間のものにかなり近くはあった。

「それでは。早く変身することだな」

「それまで待つというのか」

「私は魔物だ」

魔物の方からの言葉だった。

「相手が闘うに適していないならば闘うことはない」

「そうか。ならばだ」

「じゃあ俺はこれで帰らせてもらうか」

ロッカーは彼等が対峙したのを見届けて笑いながらその場を去りにかかった。身動き一つすることなく流れるようにその場を後にしていく。

## 第二十一話 人狼その十一

「これでな」

「では後程」

「成功したら祝ってやるぜ」

ロツカーは口元だけで笑って魔物に述べた。

「失敗したらその時はな」

「はい」

「弔ってやる。だから安心して闘え」

「勿体ない御言葉。それでは」

「バジリスク、俺は先に帰るからな」

ロツカーは青年に対しても告げた。彼の本来の名前で呼んだうえで。

「御前は どうするんだ？」

「俺もそうするとしよう」

彼もこれで帰るといふのだった。

「魔物を置いてな」

「そうか。じゃあそれまで待ってやるぜ」

今度は目元まで笑わせたうえで彼に告げたのだった。

「御前が魔物を出すまでな」

「礼を言おう。それでは死神よ」

「出すがいい」

死神もまだ闘う姿ではなかった。しかしそれでも鋭い声で彼に返すのだった。

「貴様の今回の魔物をな」

「そうさせてもらおう。では出るのだ」

「はい」

彼の言葉に応じてその横に魔物が現われた。それは。蠅であった。巨大な蠅が姿を現わしたのであった。

「ナスか」

「その通りよ」

その蠅から女の声が出て来た。

「私の名はナス。知っていたのね」

「古来より蠅を操ってきた魔物」

死神は魔物に対してさらに言うのであった。

「今度私が魂を刈る相手は貴様か」

「あら、残念だけれどそれは違うわ」

魔物の声は今の彼の言葉には笑って返すのだった。

「それはね」

「違うというのか」

「貴方は腐ってここで朽ちるのよ」

返す言葉が笑ったものになっていた。

「この橋の上でね。私によってね」

「言うな。それだけの自信があるということか」

「ナスを侮ってもらっては困るな」

青年がそのナスの横から死神に対して告げてきた。

「このナスの力をな」

「バジリスク様。それではここは」

「貴様なら大丈夫だ」

ナスに対して絶対の信頼を見せる死神だった。

「死神を倒すこともな」

「有り難き御言葉。それでは」

「任せた。それではな」

「よお、終わったな」

ここでロツカーが青年に声をかけてきたのであった。話が終わったと見て。

「じゃあ行くぜ。いいな」

「わかった。それではな」

「髑髏天使に死神よお」



ロツカーは青年が自分の横に来たところで今度は二人に声をかけてみせた。

「まあ頑張るんだな。楽しみに観ておくからな」

「では観ているといい」

死神が彼に対して言葉を返した。

「貴様の気の済むようにな」

「そうだな。そうさせてもらうぜ」

言いながら姿は消そうとする。

「俺の場所だな」

「俺もそうさせてもらう」

青年も彼と同じように姿を消す。こうして牧村と死神はそれぞれ魔物と対峙するのだった。

「それではだ」

まずは死神が言葉を出してきた。

「私の相手は貴様だな」

「そうね」

ナスはその蠅の巨大な顔で彼に応える。

「私が貴方を腐らせてあげるわ」

「生憎だが私は腐ることはない」

死神は魔物のその言葉に対して平然と返してみせた。

## 第二十一話 人狼その十二

「何故ならだ」

「身体が腐ることはないというのね」

「貴様が何かを仕掛ける前に貴様を倒す」

だからだというのである。

「だからだ。私は腐らないのだ」

「そうなの。それじゃあその言葉を偽りにしてあげるわ」

魔物はその無数の複眼に笑みを浮かべてみせていた。その笑みは酷薄でしかも死を予見してそのうえで楽しむ、そんな笑みであった。

「私自身でね」

「では行くぞ」

死神はその右手をゆっくりと動かしてまた述べた。

「闘いははじめる」

「いいわ。じゃあ来て」

魔物も今は動こうとしなかった。彼のその動きを見るだけだった。死神は右手を拳にしてそのうえで自身の胸の前に置いた。するとそこから白い光を発しその中で己の姿を変えたのであった。

その中から出て来たのは戦う姿の死神だった。あの白いフードの服を身にまとい大鎌を持っている。その姿で現われたのだった。

大鎌を両手で持ち一閃させる。そのうえで魔物に対してまた告げた。

「私の方はこれでいい」

「私はもう何時でもいいわよ」

ナスは悠然とした声で彼に返した。

「それじゃあ。はじめましょう」

「望むところだ」

こうして彼等の闘いがはじまった。そして牧村もまた。モズマと  
いう異形の魔物と対峙していた。

「では髑髏天使殿」

魔物は彼に対しても恭しい態度を見せていた。

「はじめましようか」

「礼儀正しいのだな」

牧村はその魔物の物腰を見て述べてみせた。

「魔物だというのに」

「魔物や人間といったことは関係ないのです」

しかし魔物は笑みで彼に返した。声は気品のあるものだったが皮膚のない顔からそれは到底気品のあるものには見えなかった。少なくとも表情としては。

「それにつきましては」

「関係ないのか」

「私は誰であろうと態度を変えません」

そしてこうも言うのだった。

「常にです」

「誰であろうとか」

「それが私のポリシーです」

次に言った言葉はこれだった。

「ですから私は貴方ともこうして」

「わかった。それではだ」

「はい」

「闘うとしよう」

魔物のその考えをしかと聞いてから今の言葉を出した牧村だった。

「いいな」

「では変身して下さい」

モズマもまた今は仕掛けようとはしなかった。闘う姿ではない彼に対しては。

「それからです。全ては」

「ではな」

両手を拳にして胸の前で打ち合わせる。すると黄金色の光が拳と

拳の間から起こり彼の全身を包んだ。それが消えた時に彼は髑髏天使になつていた。

右手を少し前に出し開いてから握り締める。そのうえで言つたのだ。

「行くぞ」

「わかりました」

魔物は彼の言葉に頷く。こうして彼等の闘いもはじまった。髑髏天使はすぐにその背に翼を出し両手に剣を持った。そのうえでまは青くなるのだった。

「青。力天使ですか」

「そうだ」

魔物の言葉に答える。それは確かに力天使の姿だった。

「風の力。受けてみるのだ」

「それでは」

髑髏天使は左手のサーベルを逆手に持ったまま一閃させた。そこから鎌イ足を出し魔物に攻撃を仕掛ける。それは一直線に魔物に向かう。

しかしその鎌イ足はあえなくかわされてしまった。魔物は急に姿を消したのだ。

「消えたか」

「さあ、私は今どこにいるのか」

「ここでも魔物の声は丁寧なものであった。

「おわかりでしょうか」

「わからない。しかしだ」

確かに敵の姿は見えない。しかしその中でも冷静さを崩さない髑髏天使だった。

彼は一旦飛んだ。翼がはばたく。そうしてそのうえで上から見下ろす。しかし魔物は何処にもいなかった。

「完全に消えたというのか」

「それがおわかりになられれば私を倒すことができますが」

「その通りだな」

髑髏天使もそのことはわかった。

「だが。今貴様は見えない」

「そうです。私は見えないのです」

魔物の声がまた聞こえてきた。

## 第二十一話 人狼その十三

「それが何を意味するのかもしれませんが」

「わかっている。言わずともな」

髑髏天使は空を飛び続けている。しかしその上からだった。

「むっ!？」

「空にいたとしても安全とは限りません」

無数の槍が降ってきた。髑髏天使はそれをすぐに前に飛びかわした。橋にその槍が何本も続けて突き刺さり大きな穴を開けた。

「この槍は」

「これもまた私の力です」

「ここでも魔物の声だけだった。

「私は血を吸いそのうえでそれをこうして使うことができます」

「妙な能力だな」

「ですがこうして使うことができます」

声は楽しそうに笑っているものだった。

「この様にして」

「血で作った槍か」

髑髏天使は橋の上に降りた。そのうえでその降り注いだ槍を見て  
呟いた。

「まさかここまで鋭いとはな」

「槍だけではありませんよ」

また魔物の声が聞こえてきた。

「この武器もまた」

「むっ!？」

今度は斧だった。赤黒い斧が上から来た。それは髑髏天使の頭を  
そのまま狙っていた。

それを何とかかわそうとする。何とかぎりぎりです。直撃はかわしたがかわしきれなかった。胸の鎧を打たれてしまったのだった。

「ぐっ、ぬかった……」

「かすっただけですか」

モズマの声は胸を打っただけに終わっていささか残念そうではあった。

「流石ですね。今のはいけると確信したのですが」

「生憎だが当たってしまった」

髑髏天使はあえて逆説的な言葉で返してみせた。

「完全にかわすつもりだったのだがな」

「あれをああしたふうにかわせる方が驚きです」

だが魔物は魔物でこう言うのだった。

「貴方はやはり見事な髑髏天使です」

「髑髏天使にも見事やそういったものがあるのか」

「当然です。髑髏天使は五十年に一度現われるもの」

このことはもう髑髏天使も知っていた。そうして魔物を倒す存在であるということも。彼がその他ならぬ髑髏天使であるから当然のことだった。

しかしだった。それを今聞いたところでだった。彼はどうにも思わない。あらためて両手に持つその剣を構えながらそのうえで魔物の気配を探すのだった。

探しながらそのうえで。魔物の言葉に応えていた。

「その髑髏天使によって差があります」

「そういうことか」

「貴方はその髑髏天使の中でもです」

その彼のことだった。

「かなりの強さです。最高かどうかはまだわかりませんが」

「別に最高であろうがなかるうが俺にはどうでもいいことだ」

それについては興味がないと言いたげな今の言葉だった。

「それはな」

「では何がどうでもなくはないのですか？」

「生き残ることだ」

それだというのである。

「貴様等との闘いの中でだ。生き残ることがだ」

「それこそが大事だというのですね」

「そういうことだ。俺は人間だ」

自分を人間だと言い切りもした。

「生き残る。それが人の務めだ」

「ふむ。一理ありますね」

魔物は今の彼の言葉を認めるような言葉を述べてきた。

「それもまた」

「一理ある、か」

「はい。それは貴方が人である場合においてです」

区切るのだった。何故か。

「ですが」

「ですが。何だ」

「貴方が人でないのならば」

何故かこうも言うのだった。

「人でなくなつたならば今の御言葉は意味がなくなります」

「言っている意味がわからんな」

なおも周囲にいる筈の魔物の気配を探りながら言葉を出す。

「それはな」

「そのうちにおわかりになります」

魔物も今はこれ以上は深く言おうとはしてこなかった。



## 第二十一話 人狼その十四

「そのうちに。貴方御自身が」

「俺自身がか」

「そうです。そのうちに」

魔物はまた言ってきた。言葉の深さはそのままに。

「ここで生き残られればです」

「では生き残ってみせる」

彼の言葉は断固たるものだった。

「俺の望み通りにな」

こう言葉を言い合いながら姿を消した魔物と対峙していた。そしてその頃死神もまた。ナスと激しく睨み合い対峙しているのだった。

「さて、貴様はどのようにしてだ」

死神はその両手の大鎌を構えたまま魔物に尋ねてきた。

「どの様にして私を腐らせるつもりだ」

「それはもう決まっているわ」

巨大な蠅の姿の魔物は楽しげな声で彼に応えてきた。

「それはね」

「そうか。では見せてもらおう」

間合いを少しばかり詰めてからまた魔物に言葉を返した。

「それをな」

「言われずともね」

言いながら己の周りに何かを出してきた。それは。

「むっ!?!」

「さあ行きなさい」

それに対して告げるナスだった。

「私の言葉に従って」

「蠅か」

死神はそれを見て言うのだった。それは無数の蠅達だった。魔物

の周りにその限りなく不浄なその姿を見せて飛び回っているのだ  
た。

「蠅を出してきたか」

「蠅達は私の忠実な僕」

ナスは己と同じ姿をしているその蠅達を見て言うのだった。

「これが貴方の相手をしてあげるわ」

「蠅で私を倒すというのか」

「貴方も知っているのではなくて？」

魔物は楽しむ声でまた言うてきた。

「貴方なら。どうかしら」

「蠅は死者の魂」

死神は魔物の言葉に応えるようにして述べた。

「死者の。そういうことか」

「そうよ。この蠅達が貴方を貴方の世界に送り返してあげるわ」

こう楽しそうに言うのだった。

「永遠にね」

「死者を送る私を逆に送り返すというのか」

「そうよ」

また答える魔物だった。

「その通りよ。さあ、覚悟はいいかしら」

「覚悟はしていない」

だが死神は感情の見られない声でこう返すのだった。

「そんなものはする必要もない」

「蠅達を見てもそう言えるのね」

「そうだ。ならば私もだ」

そしてそのうえで魔物に言葉を返してみせた。

「それを見せるとしよう」

「死者の魂をね」

「その通りだ。見るのだ」

言いながら両手に持つ大鎌を一闪させた。すると。

今度は死神の周りに現われた。だがそれは蠅ではなく髑髏だった。無数の青白い炎に包まれた不気味な髑髏達が姿を現わしたのである。

「これが私の死者の魂だ」

「髑髏ね」

「髑髏が上か蠅が上か」

死神は魔物を見て言ってきた。

「それを比べるか」

「面白いわね」

そしてそれを受けて立つ魔物だった。

「それじゃあこちらもね」

「望むところということか」

「魔物は勝負は逃げないわ」

「こつも言うのであった。」

「決してね」

「ならば。いいな」

再びその大鎌を構えなおしての言葉だった。

## 第二十一話 人狼その十五

「行くぞ」

「ええ。こちらもね」

互いに見やっつての言葉になっていた。

「行くわ」

「勝負だな」

鬮體と蠅が一斉に動きだした。そのうえで互いに激突し合う。

鬮體達はその威力で蠅達を押し潰そうとする。それに対して蠅達はその数で押し切ろうとする。互いに潰し合い無惨に溶け合い砕け合う中で死神も蠅もそれぞれ前に出た。

死神の鎌が右斜め上から一閃される。だが魔物はそれを翼で受け止めたのだった。

「むっ!?!」

「いい一撃ね」

魔物はそれは認めた。

「けれど。私には通じないわよ」

「鎌が通じないというのか」

「その攻撃ではね」

そうだというのである。

「残念だったわね。さあ」

「むっ!?!」

「今度は私の番よ」

言いながら右の足を二本出してきた。それで死神の胸を貫こうとする。

だが死神はすぐに姿を消してそれを避けた。そのうえで魔物の右に出てそのうえで再び鎌を一閃させる。しかしこの攻撃もだった。

素早く元に戻してきたその右の二本の足で止められてしまった。

魔物の足はどれも昆虫のその堅い殻に覆われているのだった。

だからこそ鎌は通じない。死神は今それを察した。  
「鎧か」

「そうよ」

やはりそれだというのだ。

「私の足は鎧そのものよ」

「そうだな。どうやら足には鎌は通じないか」

「これで貴方の攻撃を防いでみせるわ」

彼に向かい直ったうえでまた告げるのだった。

「全てね。そしてそのうえで貴方を貫いてあげるわ」

「そうして私を倒すか」

「さあ。どうするのかしら」

声を楽しむものになっていた。

「私に鎌は通じないけれど」

「生憎だが弱点のない者なぞいない」

先日牧村に言われた言葉をここで思い出していた。

「そんな者はな」

「私だけは例外ね」

だが魔物は死神のその言葉を一笑に伏すのだった。

「この私はね」

「残念だがそれは違う」

死神は魔物のその言葉を打ち消してしまった。

「貴様もまた同じだ」

「じゃあそれを見せてもらおうわね」

魔物は死神の声に対して笑ってみせた。

「それを」

「ならばだ」

再び大鎌を握る死神だった。

「見せてやるっ」

ここを出してきたのは分身であった。今回もこれを使ってきたのだ。

そのうえで魔物に対して一斉に切り掛かる。しかしであった。

「むっ!?!」

「残念だけれどそれも通じないわ」

また言ってきたのだった。

「それもね」

「!?!?そういうことか」

攻撃を受け止められてもそこからすぐに察した死神だった。

「見えているのか」

「そうよ」

その前の四本の足で攻撃を止めてみせたまま答える死神だった。

「見えているのよ。私はね」

「目が二つだけではない」

死神はこのことも見抜いていたのだった。

## 第二十一話 人狼その十六

「だからだな」

「そういうことよ。わかったみたいね」

その巨大な目は笑ってはいない。だが声が笑っていた。

「私のことが」

「目が幾つもある」

死神は魔物のその巨大な目を見て告げた。

「そういうことだな」

「そうよ。私は蠅の魔物」

ただ聞くと何を今更の言葉だった。

「だから。目も多くあるのよ」

「複眼か」

それだと。彼は見抜いたのだった。

「それだな」

「そうよ。これは複眼よ」

魔物の方もそれだというのである。それは昆虫特有の無数にある目だ。昆虫はそこからそれぞれの目で多くのものを見るのである。

「それなのよ」

「それで見るか」

死神はあらためて魔物のことを知ったのだった。

「今ここに姿を現わしている全ての私を」

「その通りよ。よく見えるわ」

また言う魔物だった。

「全ての貴方がね」

「そうか」

それを聞いて納得した言葉を出す死神だった。

「それならばだ」

「さて。どうするのかしら」

「生憎だが何も思い浮かびはしない」

「こう返すしかないといった態度だった。」

「だが」

「だが？」

「貴様は必ず倒す」

「このことだけは確かに告げるのだった。」

「必ずな」

「どうやって倒すのかだけれど」

「そう言われても平気な調子の魔物だった。」

「どうするのかしら。個案が得も及ばないのに」

「今は及ばずともだ」

「強気なのは変わらなかった。今も。」

「倒し方はあるということだ」

「さて。それを見せてもらおうわ」

「今度は魔物の方から攻撃を仕掛ける。次々との前足を繰り出す。」

「むっ」

「この攻撃はかわせるのね」

「四本の前足を使ったその攻撃は次々にかわしてみせる死神だった。」

「その身体を巧みに左右に動かし。そのうえでかわすのだった。」

「これは」

「その程度はな」

「かわせる、こう返すのだった。」

「けれどかわせるだけでは話にはならないわよ」

「それはわかっている」

「さて、それで」

「ここでまた蠅を出してきたナスだった。相も変わらず髑髏達と戦い続けている蠅達とは別にだ。出してみせてきたのである。」

「これでどうなるかしら」

「また蠅を出してきたというのか」

「そうよ。私は幾らでも蠅を出せるのよ」



そうだといいのだった。はっきりと。

「こうしてね。さて、これだとどうかしら」

「それで私を狙うというのか」

「私だけなら防いでもここに蠅達が加われば難しいわね」

それがわかっていいるからこそなのだった。今ここでまた蠅を出してきたのは。

「その通りね」

「そうだ。よし」

だがここで不意に。死神はよし、と言ったのだった。

「それならばだ」

「むっ!？」

「蠅で来たならばだ。こうさせてもらっ」

言いながらだった。その両手に持ったままの大鎌を一闪させてみせた。それは本体だけでなく分身達も同じであった。鎌を振ったのである。

「これによつてな」

「鎌を振ってどうするといつかしら」

「ただ振ったのではない」

そうではないとも答えたのだった。

## 第二十一話 人狼その十七

「それだけではな」

「という」と

「見るのだ」

言うのであった。その鎌に炎が宿っていた。赤い紅蓮の炎である。

「確かに貴様の身体は硬い」

このことはもう言うまでもなかった。

「だが。炎ならばどうだ」

「それで私を焼くつもりかしら」

「そうだと言えはとうする？」

「やってみるといいわ」

魔物はその紅蓮の炎を見ても余裕を変えない。

「果たしてそれで私を倒せるのかね」

「では見せてやろう」

死神もその言葉を受けて述べた。

「この炎で貴様を倒す」

「ただの蠅ならいざ知らず」

魔物の声がまた笑った。

「この私を炎で倒せるとは思わないことね」

「ただの炎ではか」

「そうよ。ただの炎で私を倒すことはできないわ」

自信に満ちた言葉で告げるのだった。

「決してね」

「ならば見せてやろう」

言いながら全ての死神が鎌を振りかざしてきた。

「この炎をな」

「何をしても無駄よ」

魔物はその自信そのものの声で四本の前足を死神のうちの一体に

集中させてきた。

「もう貴方の本体はわかっているのだし」

「確かに私の本体はわかっているようだな」

死神もそれは見抜いていた。

「だが」

「だが？」

「それだけで私は倒せない」

こう告げるのだった。

「そして倒されるのは貴様だ」

言いながら鎌を一斉に振り下ろした。すると。

魔物はその四本の手で鎌を防ごうとした。燃え盛るその鎌をだ。

炎を見ても動じるところはない。それで受け止めたがしかし。ここ

でその炎が動いた。

「なっ!？」

炎は忽ちのうちに魔物を包み込んでしまった。魔物の身体が紅蓮に覆われた。

「この炎は」

「ただの炎ではない」

死神はその炎に包まれた魔物に対して告げた。

「ただの炎だと信じ込んでいたようだがな」

「一体何を燃やしているというの？」

「貴様自身をだ」

こう告げる死神だった。

「貴様自身を今まさに燃やしているのだ」

「わからないことを言うわね」

だが魔物は彼のその言葉を聞いて笑うのだった。

「私は炎に包まれているけれど燃えてはいないわ」

「燃えてはか」

「そうよ。熱くとも何ともないわ」

実際に魔物は平気な様子であった。炎に包まれてはいてもそれで

も苦しむ様子もなければもがくこともなかった。全く平気な様子だった。

「特にね。これでどうして私が燃えているというのかしら」

「燃やすのは何も身体だけではない」

「だが彼は言うのだった。」

「身体だけではな」

「というと」

「見るのだ」

紅蓮の炎がさらに沸き立ってきた。

「この燃え盛る炎を」

「炎が燃えた!？」

「そうだ。今この炎が燃やしているのは貴様の魂だ」  
「それだというのである。」

「貴様の魂そのものを燃やしているのだ」

「くっ、そうだったのね」

「確かに痛むことも苦しむこともない」

「このことは確かに言ってきた。」

「だが。貴様の魂は確実に燃え続ける」

「くっ、まさかそうした炎だったなんて」

「言った筈だ。倒れるのは貴様だ」

「ここでまた言う死神だった。」

## 第二十一話 人狼その十八

「私の勝ちだな」

「そうね。こうなつては認めるしかないわ」

魔物も遂に観念した言葉を出したのだった。

「もうね。これでね」

「では。倒れるのだ」

また告げる死神だった。

「このままな」

「ええ。私もあがく趣味はないから」

最早言葉に自信も笑みも消えていた。観念だけがそこにあった。

「大人しく受け入れるとするわ」

「魂は燃えるが苦しむことはない」

「このことも告げる死神だった。」

「そのまま安らかに死ぬのだ」

「そうさせてもらうわ。ただ」

「ただ。何だ」

魔物の今の言葉には反応を見せる死神だった。

「最後の言葉か」

「そうよ。私の蠅達もまた」

今その蠅達が彼女の周りに集まって来た。残っていた蠅達が。

「一緒に連れて行くわ」

「共にか」

「この子達は私そのもの」

「こう言うのである。」

「置いていっては可哀想だから。それでよ」

「ならばそうするといい」

死神は魔物のこの最期の願いを受けたのだった。

「共にな」

そして鎌を一閃させるとだった。紅蓮の炎はそれぞれ蠅達も包み込んだ。そのうえで魔物も蠅達も紅蓮の炎の中に消えた。死神はこの炎により勝利を収めたのだった。

「さて」

その勝った死神は言うのだった。

「残るはあいつか」

視線をそこにやる。すると髑髏天使はそこでまだ姿を見せない魔物と戦い続けていた。

赤黒い血の槍がまた襲い掛かってくる。それを身を捻らせて裂ける。だが相手は見えないままであった。そう、何処にもいないのであった。

「何処から投げたかさえ掴ませないのか」

「それをしては何にもなりませんので」

声も同じだった。何処から聞こえるのかわからない。

「それでなのですよ」

「そういうことか」

「はい。それです」

魔物の声だけが聞こえ続ける。

「そろそろでしょうか」

「俺を倒すというのだな」

「そうです。貴方も疲れてきている筈です」

まるで学者の、人間のそれの如く冷静な声であった。

「そうではないですか」

「疲れか」

髑髏天使もその言葉に反応を見せた。

「俺に疲れが見えてきているというのか」

「動きが僅かですが鈍くなっています」

そのことも見ているようだった。

「違いますか」

「言葉でどう言っても動きは否定できないということだな」

「その通りです。貴方の動きは実際に鈍くなってきました」

「ここでも冷静で分析し尽くしているかの如きであった。」

「ですから。私が勝利を掴めます」

「このままではそうなるか」

「鬮體天使もその言葉に応えて述べた。

「だが」

「だが？」

「俺にはまだカードがあった」

「あつた、というのである。」

「今思いついたことだがな」

「思いついたのですか」

「確かに今貴様は見えない」

「それは認めるのだった。」

「だが」

「だが？」

「見えるようにするやり方もある」

次にこう述べてみせた鬮體天使なのだった。

## 第二十一話 人狼その十九

「それはあるのだ」

「では見せてもらいましょう」

魔物には絶対の自信があった。決して姿を見られないという。だからこそ今このように言葉を返すことができたのであった。

「そのカードを」

言いながらまた攻撃を繰り出す。またしても血の槍だった。髑髏天使はそれをかわしそのうえで。背中にあるその翼を羽ばたかせたのだった。

「翼を!?!」

「見るのだ」

羽ばたかせながらの言葉だった。

「これが貴様を倒すその切り札だ」

「まさかと思いますが」

魔物の声が怪訝なものになっていた。

「その羽根に刃でも仕込んでおられるのですか」

「安心しろ。それはない」

そうではないというのである。

「だが」

「だが?」

「この羽根で貴様を倒す」

翼から生じそのうえで辺りに舞うその羽根を見ながらの言葉であった。

「この羽根でな」

「仰る意味がよくわかりませんが」

声が首を傾げたものであるのもまたわかるものだった。

「今のは」

「そしてだ」



髑髏天使は今の魔物の言葉には答えずにまた言うのであった。

「次にこれを使う」

「むっ!?!」

軽い風が起こったのだった。辺りに。

「風を起こされたのですね」

「風はものを運ぶ」

髑髏天使はまた言った。

「そして」

「そして」

「羽根が貴様を覚えてくれるのだ」

やがて舞うその羽根達はある場所で動きを止めていった。舞う羽根達のうちの幾割かがある場所で止まり。次第にその数を増やしていったのである。

「むっ、これは」

「そこか」

髑髏天使はその羽根が止まっていく空間を見て述べた。

「そこにいたな」

「そうですね。羽根達は」

「その通りだ。貴様が何処にいるか知らせてくれるものだ」  
それだというのである。

「その為の羽根だったのだ」

「成程。ただ舞わせたわけではないのですね」

「そういうことだ。これで貴様の居場所はわかった」

何時しか羽根は人の形を映し出していた。そこにいるのが何者なのか。もう言うまでもないことであった。これ以上なくはっきりとである。

「そこだな」

「お見事です。それでは」

「決める」

髑髏天使は姿を映し出された魔物に対して構えを取った。

「これでな」

「確かにわかってしまいましたか」

魔物は徐々に姿を現わしてきた。あの肉と血管、それに骨が浮き出たその姿を。

「ですがまだ勝負が決まったわけではないことは申し上げておきます」

「貴様はまだ立っているからですか」

「そうです」

だからだというのである。

「だからこそ。まだなのです」

「そうだな」

髑髏天使は魔物のその言葉を受けた。否定しなかった。

「言われて見ればそれもその通りだ」

「決まるのはどちらが倒れてから」

魔物はまた言ってきた。

「その時ですよ」

「それではだ」

髑髏天使は構えたまま再び魔物に目を向けて言った。

「行くぞ」

「ええ。それでは」

両者は互いに前に出た。そのうえで一気に突き進む。どちらもまさに風となったかのように速く、その姿が消えてしまったかのように見えた。

## 第二十一話 人狼その二十

一瞬であった。一瞬で交差した。髑髏天使も魔物も互いに背中合わせになっていた。そしてまず口を開いたのはモズマの方であった。

「成程」

「納得したか」

「はい」

こう髑髏天使に答える魔物であった。

「これでわかりました」

「ならいい」

「見事です」

魔物は言うのだった。

「まさかこれ程までとは」

「貴様もな」

髑髏天使もまた魔物に言葉を返した。

返すとここでその左肩から血が噴き出た。間欠泉の様になる。

しかし彼は立っていた。血が流れようとも。しかし魔物は。

その身体から青白い炎が出て来た。そしてその中で。次第に燃えていった。

「流石は僅かな間で力天使になられただけがあります」

「それだけ俺が強いということか」

「そうです。そうでなければです」

魔物は炎に包まれながら言うのだった。

「私を倒せはしません」

「貴様も。俺の肩に傷を付けたか」

「つけることはつけられましたが」

「それでも勝ったのは俺か」

「そういうことです。それでは」

「ああ」

「さようならです」

最後にこう言って炎の中に消えるのだった。今回の戦いも髑髏天使の勝利に終わった。

すぐに髑髏天使から牧村の姿に戻る。そこにライダースーツを着た死神がやって来た。

そしてそのうえで。牧村に声をかけてきたのだ。

「そちらも終わったようだな」

「生きていたのか」

「生きていなければ今貴様とこうして話すことはない」

こう返す死神だった。

「そうではないのか」

「その通りだな。そして俺も生きている」

「だが傷を受けたか」

「肩か」

ふと自分の左肩を見る。だがそこはもう血が滲んでいるだけになってた。それだけになっていたのであった。

「今血が噴き出したのだから」

「髑髏天使は階級があがればあがる程傷の回復が早くなる」

死神は言っのだった。

「それだけな」

「そうか。強くなればなる程か」

「そしてだ」

死神の言葉はさらに続く。

「血の色は赤だけとは限らない」

「人の血は赤だが」

牧村は表情を変えず死神に顔を向けた。死神は彼の左に立っていた。そちらに顔を向けてそのうえで彼に声をかけたのである。

「違うのか」

「それはその通りだ」

人の血については、ということだった。

「人はな」

「では俺の血は赤だ」

今の死神の言葉を述べて言う牧村だった。

「これからもな」

「そうであればいいがな」

「何が言いたい」

「いや」

今は言おうとしない死神だった。

「それだけだ。ではな」

「帰るのか」

「闘いは終わった」

こう告げて牧村に背を向けそうして。自分のハーレーに戻るのだった。

ハーレーに跨りそのうえでヘルメットを被る。そのうえでまた牧村に告げてきた。彼に声をかけながらバイクのエクセルを踏んでいた。

「またすぐに会うことになる」

「お互いに会いたくなくてもだな」

「そうだ。貴様が髑髏天使である限りだ」

会うことになるというのだった。

## 第二十一話 人狼その二十一

「闘いがありそこで私達は会うのだ」

「貴様と闘うことになる可能性もあるかもな」

「前のようにだな」

「その時は手を抜くことはしない」

牧村の言葉には剣が宿っていた。

「絶対にな」

「それはこちらと同じだ」

ヘルメットの中からの言葉だ。

「私は相手を刈ることが仕事なのだからな」

「そういうことか」

「また会おう」

死神は言った。

「すぐにな」

「またな」

こつ言葉を交えさせて別れる。死神と別れた牧村はサイドカーに乗った。それを駆り向かったのは妹の未久が通っている中学校だった。

学校の玄関に着くとすぐに。彼とサイドカーを見て中学校の生徒達が言うのだった。

「あつ、あれって」

「未久ちゃんのお兄さんかな」

「格好よくない？」

まずは彼を見ての話だった。

「何か決まってるわね」

「そうよね」

「ニヒルっていうのかな」

あくまで牧村の外見を見ての言葉だった。

「ああいうのって」

「そうよね。渋いし」

「ああいう人彼氏に欲しいわよね」

「贅沢言わない。あんたもういるでしょ」

女の子達はおおむね彼自身を見て話をしてた。しかし男の子達はまた違っていた。彼等が見ているのは牧村だけではなかった。

「乗ってるのって牧村の兄ちゃんか」

「相変わらず決まってるよな」

「そうだよな。特にあれがいいんだよな」

「だよなあ。あのサイドカー」

「最高だよな」

サイドカーも見ているのである。どちらをよりよく見ているかというところも言えなかった。どちらについても話されているのは間違いないかった。

「あれって高いのかな」

「高いだろ」

「それにいつも奇麗にしてるよな」

「見ろよ、あの横の席」

サイドカーをサイドカーたらしめているものだった。その横の席である。彼等はそれも見てひそひそというにはかなり大きな声で話していた。

「あそこに乗ってみたいよな」

「ああ、俺は運転するのもいいけれどな」

「サイドカーもいいよな」

「ああいうの乗れたら最高だぜ」

「全くだ」

そんな取りとめのない話をしてた。そんな話をする中未久が校門に出て来た。彼女は兄の姿を見るとまずはこう言った。

「人だかりができてるって思ったら」

「迎えに来た」

少し困った声を出す妹に素っ気無く返した。

「帰るぞ」

「今日塾なんだけれど」

「では塾に行く」

「こつ返すだけだった。」

「それでいいな」

「ええ。それにしても目立つわね」

今度は苦笑いを兄に見せる未久だった。

「サイドカーって」

「目立つのならそれでいい」

構わないといった口調だった。

「気にしないだけだ」

「その態度は本当に相変わらずね」

呆れもする。だがそれでもサイドカーのその横の席に向かいその中に入るのだった。



## 第二十一話 人狼その二十二

「あつ、いいな」

「羨ましいわよね」

「全くだよ」

「本当」

その席に入った未久を見て男の子達も女の子達も言う。

「サイドカーのあの席に座れるなんてな」

「あんな渋いお兄さんの隣に座れるなんて」

ただしその感じているものは違っていた。

「いいよなあ」

「羨ましくて仕方ないわ」

それぞれ言い合う。未久はその中に座る。その席の座り心地はいつもと同じで何処か硬いものがありそして狭かった。

だがその硬さと狭さがだった。未久にはそれが実にいいものに感じられたのだった。

「じゃあ塾ね」

「行くか」

「ええ」

今回は短いやり取りだった。

「それじゃあ」

「帰りに迎えに行く」

また言う牧村だった。言いながらヘルメットを被る。

「それでいいな」

「帰りも来てくれるのね」

「いつも通りだ」

それはいつもと。やはり言葉は素っ気無かった。

「いつも通り来る。いいな」

「有り難う」

未久もまたヘルメットを被る。それを被りながら兄に話した。

「それじゃあ」

「行くぞ」

「ええ。じゃあ行こう」

また言う未久だった。

「塾にね」

「この学校は同じだな」

牧村は今は校舎を見ていた。その白い三階建ての一棟の校舎を見ての言葉だった。

「俺が通っていた頃とな」

「ああ、そういえばお兄ちゃんこの学校の出身だったね」

未久も兄の言葉を受けて思い出した顔になった。

「私が子供の頃に通ってたわね」

「そうだったな。もう卒業して五年だ」

彼は言った。

「早いな。時間が経つのは」

「まさかこうしてお兄ちゃんのサイドカーに乗れる日が来るなんて」

「嫌か？」

「うっん」

微笑んだうえで首を横に振ってそれは否定した。

「全然」

「ならいいんだな」

「だって気持ちいいから」

にこにこことしての言葉だった。

「悪い筈ないじゃない」

「その席にいと気持ちいいのか」

「お兄ちゃんに乗ったことなかったの？」

「子供の頃にはあった」

こっぴどく答えるのだった。

「その頃はな」

「じゃああるんじゃない」

「しかし今こうして運転している方がずっと心地いい」  
そのうえでこうも告げた。

「俺にとっではな」

「運転している方が好きなの」

「そうだ。だから俺はこのサイドカーに乗る」

「私にはよくわからないけれど」

彼女にとっでは横に乗っている方がいいのだ。だから今の言葉には首を捻るのだった。

「そうなの」

「御前も将来乗ってみるか」

「どうかしら」

また首を捻ることになったのだった。

「あまりバイクに乗るのは興味ないし」

「乗せてもらう方が」

「どっちかっていったらね」

そういうことだった。

「そっちの方がいいわね。今みたいに」

「ならそうするといい」

牧村は妹のその言葉を受けて述べた。

「俺は何時までも御前を乗せて進む」

「頼むわね。それでね」

「それで。今度は何だ」

「有り難う、お兄ちゃん」

兄に顔を向けて見上げてにこりと笑っての言葉だった。

「その言葉忘れないわ」

「では行くぞ」

「ええ」

またにこりと笑って兄の言葉に頷くのだった。

「それじゃあ。行こう」

「飛ばすか」

「スピードはいいから」

別にスピードにはこだわらない未久だった。彼女にとっては車やバイクのスピードといったものは別にどうでもいいものであったのだ。だからこう返したのだった。

「安全運転で御願いな」

「何百キロ進んでも安全運転だが」

「何百キロも出して安全運転も何も無いじゃない」

この辺りは案外厳しかった。

「そうじゃないの？」

「そういうものでもないが」

「そういうものよ。とにかくね」

未久は兄の言葉を遮るようにしてまた言ってきた。

「急がないからゆっくりでいいから」

「そうか」

「塾はじまるまでにはまだ時間があるし」

だからだというのだった。

「本当にゆっくりでいいのよ」

「わかった」

ここでようやく妹の言葉に頷いた。

「それでは。ゆっくりと行くぞ」

「御願いな」

こうして牧村は妹を乗せてそのうえで彼女の塾に向かうのだった。今の彼は妹が知る無愛想だが彼なりに優しい、そんな兄だった。

## 第二十二話 主天その一

髑髏天使

第二十二話 主天

「ああ、あいつも来たんだ」

「そろそろだと思ってたけれど」

妖怪達は今日も博士の研究室にいる。そこでいつものように酒盛りをし菓子や果物を楽しみながらそのうえで牧村と博士の話聞きながら言っていた。

「人狼も来て」

「これで七人になったね」

「思ったより早いろう」

博士もいつもの様に自分の机に座り前に何かしらの文献を開きながら述べていた。

「もう七人だとはのう」

「早い」

「魔神の封印は同時に解かれる時じゃったのか」

博士は牧村の言葉に応えながらまた述べた。

「だからかのう」

「何はともあれこれで七人だな」

「そうじゃ」

牧村の今の言葉にはそのまま答えた。

「それは確かじゃ。あと五人じゃな」

「五人か」

「全員揃えば何かあるかも知れん」

博士は牧村にこうも話した。

「若しかしてじゃが」

「何かというと」

「いや、それはわからん」

それについては博士も答えられなかったのだった。

「少なくとも相当な力の持ち主が集まるとなると君にとってはいいことではないな」

「十二人全てを相手にしなければならぬのか」

「そういうことじゃ。神を十二人じゃ」

「こう話すのであった。」

「楽ではないぞ」

「かつての髑髏天使はその魔神達を全て封印したのか」

「その髑髏天使は最高位じゃった」

博士はこうも彼に告げた。

「だからこそできたのじゃ」

「最高位か」

「今までそこまですたのは一人じゃ」

「一人か」

「そう、一人じゃ」

このことを強調するかのような今の博士の言葉だった。

「僅か一人なのじゃよ」

「これまで多く出た中で一人だけか」

「もつと言えはわかつている限りではじゃ」

今度は牧村に顔を向けてきてそのうえでの言葉だった。

「君はかつてない速さで強くなっておるしもう」

「力天使になったことか」

「そうじゃ。ここまで半年と経っておらん」

「そのことは何度も聞いたが」

「その僅か一人の髑髏天使もじゃ」

その最高位まで至った者のことである。

「そこに至るまで二年かかったのじゃ」

「二年か」

「そのうえであの魔神達を封印したのじゃよ」

そのうえでだというのだ。そこに至るまで二年かかったというの

である。

「無論力天使になったのもじゃ」

「俺よりも遅いか」

「とにかく君のそれは異常に速いのじゃよ」

「そこまでか」

「このままではどうなるかのう」

博士の声も目も少しばかり遠くを見たようなものになった。

「一体どうなるやら」

「そうだよ。まだ半年も経ってないのに」

「ここまで強くなるなんてね」

「有り得ない」

妖怪達もその牧村のことを話すのだった。

「こりゃ果てが恐いね」

「一年も経たないで最高位になるかもね」

「この調子だと有り得るね」

「そんなことはどうでもいい」

しかし当の牧村はここでもクールな調子であった。

「最高位かどうかはな」

「それがいいって」

「じゃあ何がいいっていうんだらう。この人」

「魔物を倒せるかどうかだ」

彼が髑髏天使として興味があるのはこのことであった。

## 第二十二話 主天その二

「その為の強さだ。位そのものには興味がない」

「じゃあ今の力天使の力も」

「あくまで魔物を倒す為なんだ」

「そうでなければ位なぞ何の意味もない」

やはり位そのものには何の興味もない牧村だった。

「それよりもだ」

「強さだね」

「それだけ」

「強くなっている自覚はある」

それは誰よりも強く感じていた牧村だった。

「だが。まだ強くなるな」

「そうじゃ。次は主天使じゃが」

「主天使か」

博士のその言葉にあらためて顔を向けた。

「今度はどんな力なのかのう」

「それはまだわからないか」

「今その主天使に関する文献を読んでおる最中じゃよ」

見ればまた極端に古い書物を読んでいる博士だった。パピルスで書かれたそれには何処のものか、何時の時代なのか容易にはわからない文字が書かれていた。

「解読はまだ先じゃ」

「難しいか」

「少し待ってけると有り難い」

こう牧村に対して述べるのだった。

「この文字の解読は厄介じゃ」

「どの時代のどの文字だ」

「パピルスを使ってはおるが」



それ自体は古代エジプトのものである。エジプトではそこに独特のヒエログリフ等を使いそのうえで記録を残していたのである。

「しかし。この文字はのう」

「エジプトのものではないか」

「フェニキアの文字のようじゃ」

それだというのである。

「どうやらもう。そのようじゃ」

「フェニキアか」

「名前は知っておるな」

「小アジアに栄えた海洋民族だったな」

牧村は歴史の勉強で得た知識で博士に応えた。

「高度な航海技術と商才を持っていたな」

「それじゃ。カルタゴもその植民都市じゃった」

カルタゴ人はフェニキア人だったのである。これは歴史にある通りだ。

「そのフェニキアの文字じゃよ」

「それか」

「実はわしも解読にかかるのははじめてじゃ」

「この学校で読める人間はいるか」

「いいや」

牧村の今の問いには首を横に振って答えた。

「一人もおらん。残念じゃが」

「では博士だけか」

「それでもはじめてじゃからのう」

このことをまた言うのだった。

「実際に解読にかかるのは」

「だから難しいか」

「しかも厄介な文章じゃな」

今度は文章についても言及してきた。

「文字そのものも読みにくくなっておる」

「下手か」

「癖が強いんじゃない」

牧村の今の言葉をこう言い換えた。

「それも随分とのおう。おまけに暗号の様にしておるわ」

「随分と手が込んでいるな」

「だから解読までちと待ってくれ」

「どれだけかかるかわからないか」

「はつきりとはのう」

博士も首を捻ってしまった。

「すまんがのう」

「別に急ぎはしない」

牧村もそれにはこだわらない姿勢を見せた。

「じっくりとやってくれ」

「よいのか？それで」

「俺はあくまでしてもらおう立場だ」

それだというのである。

## 第二十二話 主天その三

「させる立場じゃない」

「だからよいのか」

「そうだ。だが頼む」

それでもこうは言うのだった。

「何と書いてあるのかな。解読してくれ」

「わかっておるぞ。実は楽しみでもある」

「楽しみ？」

「こうして文字を解読していくのも楽しいものなのじゃよ」

それが楽しいというのである。ある意味非常に學者らしい言葉であつた。

「これがのう。実にじゃ」

「そういうものなのか」

「だからこそ學者をやれるんじゃ」

博士はこうも述べた。

「こうしたことが楽しいからこそじゃ」

「俺が楽しいと思うことは今は」

「甘いものを食べること？」

「それだよ」

ここで横から妖怪達が言ってきた。

「牧村さん甘いもの大好きだからね」

「それもかなりね」

「それはその通りだ」

彼もそれは否定しなかった。

「甘いものはいい」

「そうそう。いいよね」

「やっぱり甘いものだよ」

彼等はそんなことを言いながら今もその甘いものを食べていた。

キンツバやドラ焼きといったものを次々と口の中に入れていつてい  
る。

「これ食べて明るくないかね」とね

「生きている意味がないよ」

「それはいいが今回は和菓子か」

牧村は彼等が食べているそれを見て言うのだった。

「和菓子も食べるのか」

「食べるよ」

「ねえ」

彼等はその和菓子を次々に口の中を食べながら牧村に答える。

「牧村さんもどう?」

「この団子とかさ」

言いながら竜宮童子が一本の三色団子を出してきた。外見は和服  
を着て鼻水をたらした汚らしい男の子である。その妖怪が牧村に団  
子を差し出してきたのだ。

「どう?」

「もらおうか」

その竜宮童子から団子を受け取る牧村だった。そのうえで団子を  
上から口の中に入れていく。するとほのかな甘みともちもちとした  
感触が口の中を支配した。

「あっ、いいね」

「竜宮童子から貰えるなんて」

「牧村さんに幸運があるよ」

「あるのか」

牧村はその団子を食べながら妖怪達の言葉に応えた。

「これであるのか」

「あるよ。だって竜宮童子がいる家って栄えるから」

「その竜宮童子に貰ったんだから」

「もうその効果はばっちりだよ」

こう彼に話すのだった。

「さて、どんな幸運が訪れるかな」

「楽しみだね」

「運は自分で手繰り寄せるものだ」

だが牧村は彼等の言葉を聞いてもにこりともせずいつもの調子だった。

「そんなものはな」

「だから今手繰り寄せたんだよ」

「そういうこと」

しかし牧村はそれはそれでこう返したのだった。

「竜宮童子からのお団子受け取ったからね」

「善き哉善き哉」

言いながらさらに団子を食べる彼等であった。

「それはそうとしてさ」

「これ食べる？」

「これも」

今度はから傘と一つ目小僧がキンツバとドラ焼きを牧村に差し出してきた。

## 第二十二話 主天その四

「滅茶苦茶美味しいからだ」

「是非食べてよ」

「わかった」

丁度団子を食べ終えた牧村はそのキンツバとドラ焼きも受け取ったのだった。そしてその二つも口の中に入れて楽しむのだった。

「確かに美味しいな」

「山月堂のだからね」

「やっぱりあそこは美味しいよ」

「そうじゃのう。あそこ若様も好青年じゃしのう」

見れば博士もだった。彼も田舎饅頭を食べて御満悦であった。

「その若旦那の作ったものじゃよ」

「そうだったのか」

「そうじゃよ」

牧村に対してそうだと語るのだった。

「いいじゃろ。これも」

「確かにな」

そのキンツバとドラ焼きこそが何よりの証拠だった。

「この味は見事だ」

「流石に味がわかるね」

「牧村さんだけはあるね」

妖怪達はキンツバとドラ焼きを褒める彼を見て言ってきた。

「やっぱりここの味はしっかりしてるよね」

「しかしあそこの若旦那って」

妖怪達はその彼のこと話すのだった。

「巧いよね、作り方が」

「まだ若い筈なのにね」

「いや、これが中々」

「これからが楽しみじゃな」

博士もまた田舎饅頭を食べながら言うのだった。

「ここまで見事なものをあの若さで作ってくれとな」

「じゃあもつと食べる？」

「そうする？」

妖怪達は今度は芋羊羹を出したのだった。出したそのすぐ傍から切っていく。

「この芋羊羹もあの若旦那が作ったものだよ」

「どう？」

「では貰おうかのう」

博士はその芋羊羹を見て言うのだった。

「そちらものう」

「芋羊羹も大好きじゃ」

博士はそれもいいというのである。

「薩摩芋はよい食べ物じゃ」

「甘いしね」

「それに身体にもいいし」

どうやら薩摩芋は妖怪達にとってもいい食べ物であるらしい。彼等はその薩摩芋のことも笑顔で話しているのがその証拠になるものである。

「美味しいしね」

「食べがいもあるし」

「薩摩芋か」

牧村は彼等の話を聞いていてあることを思い出したのだった。

「そういえば俺もだ」

「ああ、牧村さんも食べるんだ」

「どうぞどうぞ」

「欲しいな。実はだ」

「うん」

「どうしたの？それで」

「最近薩摩芋を食べていない」

「このことを言うのだった。」

「薩摩芋を使った菓子もな」

「それはよくないよ」

「そうそう」

妖怪達はその言葉を聞いて残念そうに告げてきたのだった。

「薩摩芋を長い間食べないなんて」

「それってとても悲しいことだよ」

「悲しいのか」

牧村は今の妖怪達の言葉に僅かに首を捻ることになった。

「薩摩芋を食べないことは」

「美味しいものを食べないなんて」

「それだけで悲しいことだよ」

「全く」

「こう話すのである。」



## 第二十二話 主天その五

「だからさ、芋羊羹食べようよ」

「その美味しいお芋をね」

「どうぞどうぞ」

言いながらその切ってきた芋羊羹を彼の前に出す。牧村はその芋羊羹を受け取ってそのうえで答えるのであった。

「有り難う」

「じゃあ食べて」

「美味しいよ」

「確かにな」

早速その芋羊羹を食べてみて答える牧村だった。落ち着いた甘さでしかも上品な味だ。その落ち着いた上品な芋羊羹を食べながら言うのだった。

「この芋羊羹はかなり」

「いいものだ。それでだ」

「うん」

「まだ食べる？まだまだあるよ」

「そんなにあるのか」

見れば次から次に切ってそのうえで食べている妖怪達だった。

「芋羊羹は」

「だから甘いものも好きだしね」

「たっぷり買ったんだ」

「そうだったのか」

「ほら、本当にどんどん食べてよ」

「遠慮はいらないから」

さながらわんこそばの様に芋羊羹を出して来る彼等だった。

「美味しいよね、本当に」

「だから何切れでもね」

「何なら一本丸ごといく？」

「どうまで言うのだった。」

「ほら、ここに一本丸ごとあるよ」

「どう？」

「そこまではいい」

牧村はその申し出は断ったのだった。

「おかわりは欲しいがな」

「それじゃあ分厚く切ったこれをね」

「どうぞどうぞ」

実際にこれまでの倍は分厚く切っている芋羊羹を出してきたのだ。  
った。

「やっぱり羊羹は分厚く切らないとね」

「美味しくないからね」

「羊羹は御馳走なのじゃよ」

見れば博士もおかわりをしていた。その芋羊羹を次から次に口の中に入れていく。百歳を超えているとは思えない食欲だった。

「あの明治帝も大好物じゃった」

「あの方もな」

「帝は甘いものが好きじゃった」

このことはかなり有名である。それを牧村に語るのだった。

「羊羹の他にもカステラにアイスクリームにアンパンといったものが好きじゃった」

「本当に甘党だったんだね」

「そうだね」

妖怪達もそれを聞いて言い合うのだった。

「僕達もそうだったの好きだけれどね」

「それと一緒だね」

「質素を好まれる方じゃったが同時に甘いものもお好きじゃった」

「そうだったのか」

「お好きでも一切れずつじゃった」

「このことも話す博士だった。」

「召し上がられるのはのう。いつもそうじゃった」

「本当に質素だったんだ」

「確かに」

「わしは残念ながら生前には御会いできなかつた」

「できたのではなかつたのか？」

牧村はここでこう博士に問うた。

「博士は確か一二〇歳ではなかつたのか」

「いや、百歳じゃよ」

しかし博士はこう彼の言葉に返したのだった。

「明治帝御存命の折には御姿を見ることができなかったのじゃよ」

「そうだったのか」

「残念なことじゃ」

そしてこう言いもするのだった。

## 第二十二話 主天その六

「全くのう」

「つていうか明治天皇知ってるつていうか御会いした人つて」

「人間じゃね。とてもね」

「生きていないよね」

「今はね」

自分達はともかく、という妖怪達の言葉であった。

「博士も人間としてはかなり長生きだけれどね」

「そこまではね」

「昭和天皇とは御会いできた」

「御幾つの時だ」

「陛下が皇太子の頃にも即位されて軍服を着ておられた時もだ」

つまり戦前ということである。

「当然背広であられる時ものう」

「つまり何度も御会いしてるんだ」

「結構凄くない？」

「お声をかけて頂いたこともある」

それもあるというのである。

「有り難いことにのう」

「お声をか」

「そうじゃ。終戦直後全国を巡幸されていた時にじゃ」

その時にだというのだ。この御巡幸が国民にとって非常に心強い支えになったことはあまりにも有名だ。なおこの時日和見主義者達はスターリンを賛美しだしていた。

「その時にお声をかけて頂いた」

「そうだったのか。有り難いことだな」

「うむ。しかしじゃ」

博士はここまで話したところで牧村に顔を向けて声をかけてきた

のだった。

「君も意外じゃな」

「意外？」

「そうじゃ。皇室を尊敬しているのじゃな」

「それが悪いのか」

「いや、悪くはない」

それを聞いても悪いとはしない博士だった。

「むしろいいことじゃ。だから意外なのじゃよ」

「意外か」

「そうじゃ。意外じゃ」

そのこと自体を意外というのである。

「国家とかそうしたことには興味がないと思っておったがのう」

「俺も日本人だ」

牧村は今度は饅頭を貰っていた。それを食べながら応えていた。

いつも通り背中を部屋の壁にもたれかけさせてそのうえで話している。

「国家や皇室にはそれなりの敬意を持っているつもりか」

「ふむ。そうか」

「博士もそうなのだな」

「わしは日本人じゃぞ」

このこと自体に答えがあるかのような言葉であった。

「日本人が国家や国家元首であられる皇室に敬意がなくて何なのじゃ」

「世の中には国旗を切り裂く日本人もいる」

牧村はそうした輩のことも述べた。

「それも政党としてな」

「その連中は日本人ではないのじゃろう」

博士は牧村のその言葉に忌々しげな口調で返したのだった。

「そうとしか思えん」

「だが国籍は日本人だが」

「国籍が日本人でも心が日本人でなければ日本人ではない」

「ここでも実に忌々しげな口調であった。それを隠すこともしない。」

「何処かの独裁国家の人間じゃろう」

「何処かのか」

「そうじゃ。どっちにしるその様な輩はわしは好かん」

はつきりと言い切る博士だった。

「わしとて最低限日本人としての心は持つておるつもりじゃからな」

「学校の教師には少ないがな」

「教師こそじゃ」

博士の忌々しげな言葉はまだ続いていた。消えることがないかの様だった。

「一番問題のある連中なのじゃよ」

「同業者みたいなものなのか」

「同業者でも言うことは言うぞ」

案外そういうことには生真面目なまでに引かない博士だった。

## 第二十二話 主天その七

「教師の世界には問題のある奴が多いのじゃよ」

「それは俺も感じてきた」

実はそれは牧村も感じていることだった。これまでの学生時代で

だ。

「あの世界はどうもな」

「日本人とは到底思えない輩も多ければ人格障害者も実に多い」

「全くだ。暴力教師に異常に神経質な教師にな。他にも色々いるな」

「少なくとも連中には公務員も多い筈じゃが」

公立学校の教諭ならば公務員になる。もっともそれは意図的にかどうかはわからないが忘れられているのではないかと思えることが多い。普通人を防具の上からとはいえ竹刀で何十発も叩いたり床の上で背負い投げなどとしては指導とはいえ懲戒免職を免れない。だがそれが一切お咎めなしというそれこそこの世に別世界が出て来るかの如き異常な現象が起こるのが教師の世界なのだ。これが日本の教育界だ。

「あれはどうなっておるのじゃろうな」

「あの世界は無法地帯だ」

表情は出さないが言い切る牧村だった。

「何もかもがやりたい放題だ」

「日教組は生徒を守る組織ではないぞ」

「教師を守る組織だな」

「それも日教組における教師だけじゃ」

これが日教組の実態である。そうした教師の教師の為の教師による組織なのだ。生徒をどうとか言うのは嘘っぱち、もしくは偽りの看板に過ぎないのだ。

「しかもその理想はじゃ」

「最悪だな」

「共産主義なぞ何にもならん」

博士は珍しく忌々しげな口調になっていた。

「二十で共産主義にかぶれんと情熱が足りん。しかし二十を過ぎて共産主義を信じておるのは馬鹿者じゃ」

「確かチャーチルだったな」

「チャーチルは好かんがこの言葉は好きじゃ」

博士の考えがわかる言葉であった。

「あの組織の本音は今も変わることがないのじゃよ」

「共産主義革命を起こそうと企んでいるのだな」

「そうした輩が今だにおるのは世界で日本だけじゃ」

とりわけ学生運動に参加していた連中である。あのヘルメットに覆面にゲバ棒を振っていた愚か者達の知能も思考も変わることがない。この日本史上に燦然とその愚劣さを記録させている輩共は何かにつけて若者達を愚弄する。しかし彼等こそがその愚弄する若者達にその知能も思想も何もかもを全否定されしかも自分達の『高邁な理想とやらが永遠に実現されないものを理解していないのである。』

「日教組も同じじゃ」

「とりわけ北朝鮮が理想だったな」

「あれは最早共産主義すらない」

さらに悪質なものと断定する博士だった。

「世襲の共産主義なぞ存在し得ないものじゃ」

「ではそうした国家を支持したり認める輩は」

「教師になっておること事態が異常じゃ」

まさしくその通りである。我が国の左翼という存在は共産主義は共産主義でもそこには醜悪なエゴイズムや安っぽいロマン主義、ヒロイズムが加わって下衆なものなのだ。

「ああした連中は何よりも嫌いじゃ」

「それは俺も同じだ」

牧村も共産主義は嫌いなのだった。嫌悪そのものを感じているのだ。



「共産主義になればどれだけの人間が死ぬかわかったものではない」  
「革命？」

「それだっけ」

妖怪達もそれが何と呼ばれるものかは知っているのだった。

「何か社会体制が変わるとかいうんだったね」

「それっていいことじゃないんだ」

「美名の中には醜い真実が隠されている」

牧村は一言彼等に告げたのだった。

「革命はその真実は殺戮だ」

「何かすつごく嫌だね」

「そうだね。僕達無駄な命は奪わないから」

「そうそう」

妖怪達にもその考えはない。これは確かだった。

「っていつか何でそんなことするの？」

「殺しまくるって何でなの？」

「敵だからだ」

だからだと。牧村は彼等に告げた。

「敵だから殺すのだ」

「じゃあ牧村さんと同じ？」

「髑髏天使として魔物を倒す牧村さんと」

「いや、それはまた違うのじゃ」

博士がここで妖怪達に説明をするのだった。

「髑髏天使はあくまで運命として魔物達と戦っておるな」

「五十年に一度生まれる髑髏天使としてだね」

「それだったね」

「左様。しかし共産主義者とかそういう革命を考える者達はじゃ  
違つというのである。」

## 第二十二話 主天その八

「違うのじゃ」

「違うってどういうふうに？」

「その革命をしようって人と牧村さんはどう違うの？」

「革命は自分達で勝手に敵を名指ししてそれで殺すものじゃ」

それが革命である。敵は貴族であったりブルジョワであったり地主であったりユダヤ人であったりする。自分達で敵を作りそのうえで革命の際に殺戮するのである。実際にこれにより歴史上多くの血が流れている。それもまた人間の歴史の一ページである。

「それが革命じゃ」

「ああ、じゃあ髑髏天使と違うね」

「確かに」

「それって全然違うよ」

妖怪達は今の博士の言葉でわかったのだった。

「牧村さんってそういうことしないもんね」

「魔物は自分達から向かって来るし」

「それで受けて立つ形だし」

「自分から敵を名指しして攻撃しないし」

「そういうことはないからね」

「俺は魔物とは戦い倒す」

牧村も言った。

「だが殺戮はしない。敵といえどな」

「倒すけれど殺戮はしない」

「そういうことだね」

「その通りだ。俺は革命家ではない」

彼はまた言うのだった。

「髑髏天使だ。それだけだ」

「そっだよ。牧村さんは髑髏天使だよ」

「あくまで革命家じゃないね」

「革命家は敵の殺戮の後で自分達同士で殺戮をしていくからのう」  
博士は今度はこうも述べるのだった。

「仲間内でのう」

「ああ、今度は自分達の中で敵を作ってやっていくんだ」

「そういうことだね」

妖怪達はもう話がわかった。

「それで殺し合うってことか」

「身内でも」

「そういうことだ。あの連中は何処までも殺し合う」

牧村の言葉もその通りだった。革命家という存在は敵を肅清すればそのうえで次は自分達の中で肅清をはじめなのだ。これはジャコバン派もそうだったしナチスやソ連もだ。彼等は所謂共食いをするのだ。なおあの北朝鮮の金日成もそうして多くの人間を殺している。

「最後に残るものは何も無い」

「そうだね。殺せばかりじゃね」

「何も残らないよ」

「その通りだよ」

妖怪達は牧村の今の言葉にも頷いた。

「牧村さんは髑髏天使」

「それだね、やっぱりね」

「そうだね」

そのうえでまたこのことを確かめることになった。

「じゃあさ」

「いいかな」

「どうした？」

「はい、これ」

「これも食べてよ」

こう言ってまた菓子を出してきたのだ。芋羊羹だった。

「これたっぷりあってね」

「もつとんどん食べてよ」

「遠慮はいらないよ」

「芋羊羹が多いな」

思わず言ってしまった牧村だった。その芋羊羹を見ながら。

「随分とな」

「食べるの？それで」

「どうするの？」

「いらなかったら僕達が貰うけれど」

こうした言葉も一緒だった。

「僕達も大好きだしね、これ」

「だからさ。どうするの？」

「食べるの？食べないの？」

「貰おうか」

これが彼の返事だった。

「それならな」

「そう。じゃあはい」

「お茶もあるよ」

「びっぞ」

ろく子だった。いつものようにその首をにゅっと伸ばして牧村の顔の前にやって来る。そうしてそのうえで彼に対して告げるのだった。

## 第二十二話 主天その九

「このお抹茶を」

「抹茶か」

「はい、これです」

首を引つ込めてからそのうえで彼のところに歩いてきて手渡すのだった。それは確かに鮮やかな緑の抹茶に他ならなかった。

「お抹茶はお好きですか？」

「茶はどれも好きだ」

その茶も受け取りながら答える牧村だった。右手に芋羊羹が置かれていた皿を、左手にその抹茶を持って彼女に応えている。

「この抹茶もな」

「そうですね。それは何よりです」

ろく子は彼の言葉を聞いて笑顔になる。その顔だけを見れば人間に見えるものだった。

「ではどうぞ」

「うむ。しかしだ」

「しかし？」

「何時の間に抹茶を淹れたのだ？」

彼が問うのはこのことだった。自分のところまで来たろく子に問うたのだ。

「気付けば出て来たが」

「研究所の奥でお茶会をしまして」

「奥で!？」

「はい、今しているんです」

にこりと笑ってそのうえで何でもないと聞いた調子で彼に答えるのだった。

「皆で」

「研究所の奥か」

その言葉を聞いてその研究所の奥に目をやる。いつも通り本棚が二列で奥まで続き一体何処まで続いているのかわからない程である。「この研究所の」

「そこでしているんですよ」

また牧村に告げるのだった。

「雪女さん達やぬらりひよんさん達と」

「雪女に熱いものは駄目だろう」

「はい」

ここでその雪女が出て来た。にこりと笑って彼に言うのだった。

白く整った顔と楚々とした容姿は人間好みのものであった。その白い着物にもよく似合っている。

「その通りです」

「では茶会は無理ではないのか」

「すぐに冷やすんですよ」

ろく子はここでこう牧村に説明してきた。

「氷は雪女さん御自身が用意されますし」

「その中に入れて一気に冷やします」

また述べる雪女だった。

「そうして飲んでいます」

「そうだったのか」

牧村はここまで話を聞いてそれで納得したのだった。

「それでか。抹茶を飲めるのか」

「熱いものが飲めないなら冷ませばいい」

博士も言ってきた。

「それだけじゃ」

「そういうことか」

「私もお茶は大好きなんですよ」

可愛らしい仕草で両手に小さく湯飲みを持ってその抹茶を口の中に入れる雪女だった。

「他には紅茶も好きです」

「紅茶もか」

「後は西瓜も」

それもだという。

「やっぱり熱いものは駄目ですけれど」

「雪女さんがいればかき氷だって食べ放題だしね」

「果物もアイスクリームもすぐに冷やしてくれるし」

「有り難いよ」

妖怪達はここでその雪女を一斉に褒めだした。

「しかもこんな美人だし」

「どうか。牧村さん」

「どうかとはどういうことだ」

朴念仁そのものの声での返答だった。

「それは一体」

「だから。どう？雪女さん」

「美人だし性格もいいし」

「誰にだって好かれる性格だよ」

「しかも」

それだけではないというのだ。

## 第二十二話 主天その十

「夏はこの人がいれば問題なし」

「クーラーは必要ないよ」

「扇風機もね」

雪女だからだというのだ。今の話はまさにそこにあった。

「だからどうかな」

「彼女に」

「生憎だが」

しかし牧村はここで言うのだった。

「彼女はもういる」

「いるんだ」

「嘘でしょ」

「いやいや、これが嘘ではないのじゃ」

博士が今の牧村の言葉に驚く妖怪達に対して告げた。

「これがのう」

「だってさ。牧村さんってさ」

「ちよつと」

妖怪達は菓子を食べ続けながら博士の今の言葉に返す。

「そういう感じじゃないし」

「彼女というか人付き合い自体が少なそうじゃない」

「これで友達も多いのじゃぞ」

博士はこのことも話すのだった。

「ちゃんとのう。それなりにおるぞ」

「こんなに無愛想で？」

「それでなの」

「そうじゃよ。確かに言葉遣いは素っ気無いが」

博士もそれは否定しない。芋羊羹を食べながら語っていく。

「それでもじゃ。別に腹黒くもなければ嘘もつかんし意地の悪いと



「ころもないじゃろ」

「確かにね」

「これで結構気も利くし」

妖怪達も牧村のそうしたところは知っていた。実は性格は悪くないのだということをだ。

「だから彼女がいるんだ」

「友達も」

「そういうことなのじゃ。まあかなり変わり者じゃがな」

「変わっていてもどうということはない」

その牧村は彼等の話の間ずっと芋羊羹と抹茶を飲み食いしていた。そうしてそのうえで彼等のやり取りを聞いているのだった。

「別にな」

「こういう人だからねえ」

「誤解され易いのは確かだね」

「それは間違いない」

博士もこのことは認めるのだった。

「わしはまあこういう人間もいると思っただけじゃが」

「それだけだったんだ」

「僕達随分変わった人達がいると思っただけれど」

彼等も彼等で随分なことを言う。

「まあ性格はね」

「悪くないのは間違いないしね」

「さて、それではだ」

ここで丁度芋羊羹と抹茶を全て平らげた牧村が動いた。

「もう行かせてもらおう」

「あっ、講義!？」

「もうそんな時間なんだ」

「行って来る」

こう告げて皿と湯飲みをすぐ側にあつた容器入れに入れた。そのうえでろく子に顔を向けて告げた。

「悪いが洗いものは頼む」

「わかりました」

ろく子がにこりと笑って彼に答えた。

「それじゃあ行ってらっしゃい」

「それではな」

「学生の本分は学問じゃ」

その学者の博士の言葉だけあつて説得力のあるものだった。

「頑張るのじゃぞ」

「わかっている。それではな」

こつ話してそのうえで部屋を後にする。そうしてキャンパスの中を進みそのうえで教室に入った。今彼が入った教室は三十人程度が入られる大学の教室にしては幾分かコンパクトな教室だった。そこには入るとすでに教室の中にいた何人かが彼に声をかけてきた。

第二十二話 主天その十一

「よお」

「今日の授業何処からだった？」

「少し待ってくれ」

言いながら牧村はまず席に座った。それから左手に持っていた鞆から教科書とノート、それに袋の筆箱を出してきた。そのうえでまずは教科書を開いた。

「ここからだ」

「ああ、そこからか」

「そこからなんだな」

彼等は彼が開いたそのページを見て頷きながら言った。

「先週休講だったからな」

「一週間講義がないと何処からかわからないな」

「そうだよな」

こんな話をしながら牧村の席の周りに座っていく。そうして彼等もそれぞれの鞆から教科書やノートを出して勉強の用意をするのだった。

「そこが高校までとは違うよな」

「全くだぜ」

「しかもな」

彼等はそれぞれ言うのだった。ペンも出しながら。

「講義結構気が抜けてるよな」

「そういうところあるか？」

「あるよな」

そんな話もするのだった。

「高校とか結構気が張ってたけれどな」

「こつした英語の授業なんか特にな」

「全然だよな」

「全くだ」

こんな話をしながらだった。彼等は準備を終えるのだった。

「まあ楽つていえば楽だけれどな」

「単位簡単に取りれるしな」

そんな話もする。

「学校の授業より内容も面白いしな」

「特にこの話な」

言いながら金髪が教科書のあるページを開いた。そこは。

「この話な」

「ああ、それな」

「小泉八雲だったな」

見ればそれは貉の話だった。のっぺらぼうのその話である。

「俺これ日本語の読んだことあるぜ」

「ああ、原作か」

「それ読んだんだな」

「結構面白かったぜ」

こんな話もする。

「だからわかりやすかったな」

「ああ、やっぱり原作を読んできるとわかりやすいよな」

「そうだな」

続いてそんな話をする。

「それでよ、牧村よ」

「御前はどうなんだ？」

「読んだことあったか？これ」

言いながらその貉の話をページを出して話してきた。

「これな」

「あるか？」

「ある」

こう答える牧村だった。

「高校の時にな」

「へえ、御前も読んだことあるのか」

「小泉八雲読むんだな」

「小泉八雲は好きだ」

牧村はいつもの口調で答えた。

「家には全集がある」

「全集ってまた本格的だな」

「やっぱりあれか？御前が買ったのか？」

「いや、祖父さんが好きだった」

ここで自分の祖父のことを話に出してみせた。

## 第二十二話 主天その十二

「それで読んだ」

「へえ、御前の祖父さんって結構インテリだったんだな」

「そうした本持つてるなんてな」

「俺はそんなに本は読まないがな」

次に自分のことも話すのだった。

「だが祖父さんはかなりの読書家だった」

「御前の祖父さんってあれだろ？確かサイドカー乗ってたっていう」

「御前が今乗ってるあのサイドカーだよな」

「あれも祖父さんのものだ」

そうだとここでも答えるのだった。

「今も乗っている。いい乗り心地だ」

「何か凄い祖父さんだな」

「そんなの乗り回していてもインテリだったなんてよ」

「職業は軍人だった」

それだったというのだ。

「軍がなくなつてからは少し農業をやっていたが警察予備隊ができてそこに入った」

「で、自衛隊に入ったってわけか」

「そうなるよな」

「そういうことだ。それでサイドカーにも乗っていた」

「ああ、じゃあ陸軍だったんだな」

「サイドカーってことは」

何人かはサイドカーということからこのことを察したのだった。

「陸王だよな、確か」

「あれに乗ってたのかよ」

「そうらしいな。昔そんな話をしていた」

牧村は彼等との話から祖父の昔話を思い出した。彼にとっては遙

かな昔の話だがそれと共に非常に懐かしい話でもあるものだった。

「そうしたバイクに乗っているとな」

「だよな。やっぱり凄いよ」

「バイクだぜ」

「士官学校を出てそれに乗るようになったらしいな」

「余計凄いよな」

「ああ」

彼等は士官学校と聞いてさらに驚いた。この場合の士官学校とは陸軍士官学校のことだ。言わずと知れた陸軍の最高幹部の登竜門である。

「あそこ東大入るより難しかったんだぞ」

「そんなところに入っていたのかよ、御前の祖父さん」

「そうらしい」

だが牧村はそれを聞いても特に何も思っていないようだった。言葉はいつもと変わらない全く以って落ち着いたものであった。

「そんな話も覚えている」

「すげえ祖父さんだよ」

「小泉八雲読んでいてサイドカーにも乗って」

「しかも士官学校出てたなんてよ」

「立派な祖父さんだったんだな」

「今では只の隠居だがな」

今の祖父のこと話すのだった。

「大阪で子供達に剣道を教えている」

「おいおい、今度は剣道かよ」

「さらに凄いな」

皆それを聞いてさらに驚くのだった。

「格好いいにも程があるぞ」

「そこまでいくかよ」

「そうか」

そうしたことまで言われても相変わらずの態度の牧村だった。

「あの祖父さんはそこまで格好がいいのか」

「っていつか完璧じゃねえか」

「で、剣道の方はどうなんだよ」

「八段らしい」

剣道の段の話にもなるのだった。

「それも人を教えられる立場だそうだ」

「八段か」

「さらにすげえ」

「そんな格好いい祖父さんがいたのかよ」

彼等は驚くばかりだった。その目は尊敬する輝きで満ちている。

「そういうふうになりたいよな」

「だよなあ」

「俺にとつては怖い祖父さんだった」

しかし牧村はその祖父についてこう言うのだった。

「子供の頃どれだけ躰けられたかわからない」

「まあ陸軍だしな」

「怖いよな、確かにな」

帝国陸軍の軍規軍律の厳正さは伝説の域にある。確かに中には不心得者もいた。しかしその殆どは恐ろしいまでに正義と道徳を重んじ義侠心を愛した者達だったのだ。それがかえって祖国を不幸にやつてしまったという見方もできないわけではないにしろだ。



## 第二十二話 主天その十三

「それもかなりな」

「鬼だつたんだな、それじゃあ」

「ああ、鬼だつた」

そのことを隠さない牧村だつた。

「少しでも道義にもとることをすれば凄まじいまでに怒つた」

「今だにそんな人いるんだな」

「第二次世界大戦終わつて相当経つてるのにな」

「で、今幾つなんだ？祖父さんつて」

「もう相当な歳だろ」

第二次世界大戦から六十四年だ。それは確かに相当な歲月である。

その遙かな過去のことから中には捏造をして祖国を貶める不貞の輩もいるが。

「最低でも八十を余裕で超えてるよな」

「幾つなんだ？それで」

「九十だ」

もうそれだけなるといふのだ。

「だが背筋はしっかりしていて歯も一本も抜けていない」

「鍛えてるからな」

「なんだろうな」

どうしてこうなのかはすぐに察する彼等だつた。

「やっぱり軍人だつたからだな」

「今でも身体を鍛えてるんだよな」

「身体だけではない」

そこに留まらないといふのである。

「心もな」

「すげえな、そりやまた」

「パーフェクト爺ちゃんなんだな」

皆そんな彼の祖父の話を聞いて賞賛の声をあげるばかりだった。

「けれどな。孫の教育は失敗したな」

「そうだよな」

「俺は失敗作か」

そう言われてもこれといって表情を変えない牧村だった。彼等の言葉は最初からただの冗談だとわかりきってそのうえで話を聞いているのだった。

「そうだったのか」

「つたくよお、フェシングだぜ」

「それにテニスだよな」

「それが駄目なのか」

「剣道やれよ」

「やっぱりよ」

笑いながらこう告げる彼等なのだった。

「そんなリアルで爺ちゃんなんだからよ」

「だからだよ」

「剣道は向かない」

だが牧村はここでこう答えるのだった。

「今の俺にはな」

「向かないのかよ」

「剣道もできそうなのにな」

「なあ」

「いや、向かない」

彼はいぶかしむ友人達に対してまた告げた。

「剣道は刀を使うことを想定しているものだ」

「それはそうだけれどな」

「まあそれはな」

これは誰も否定できるものではなかった。剣道は日本のものである。日本で使うものといえれば日本刀である。ならだそれを使うことを想定して組まれているのは当然だった。

「だからだ。今の俺には合わない」

「それでフェシングかよ」

「それとテニスか」

「剣道や他のものが今の俺に合うのなら」

牧村はまた述べてみせる。

「俺はそれを今していた」

「そういうことかよ」

「まあ何でそんなこと言うのかちよつとわからないけれどな」

誰も彼が髑髏天使であることを知らない。だから何故彼が今の、という区切りをつけて剣道について語るのかわからなかったのだ。

「それでもよ。ちよつとは爺様みたいにな」

「立派な日本男子になるようにしろよ」

「あそこまではまずなれはしない」

何気に自分の祖父への尊敬が見られる言葉だった。

「そう滅多にはな」

「そこは努力してだよ」

「何十年かしてりゃそうなれるだろ」

これはまた随分とスケールの大きな話であった。時間もまた長いものだった。

「御前もよ。そんな凄い爺様いるんならな」

「目指すのもいいだろ」

「目指してなれないまでも」

また言う牧村だった。

## 第二十二話 主天その十四

「しかなれるように努力するのはだ」

「やれるからな」

「まあある程度はなれるだろ」

「いずれ時間があつたら大阪に行く」

「そしてこつも言うのであつた。」

「時を見てな」

「そうしろ。絶対にな」

「それで色々と軍隊の話とかも聞いておいてくれよ」

彼等も彼等で軍隊の話の話を聞きたいようだ。

「どれだけ凄かつたかな」

「是非な」

「覚えていたら聞いておく」

やはり牧村の返答は素つ気無い。

「そういうことだな」

「ああ、先生来たしな」

「それじゃあな」

こつして学校の講義に向かう彼等だった。今の彼等はとりあえず真面目に講義を受けるのだった。

その講義が終わつてから牧村はまた若奈と共にトレーニングを行った。夕方になり学校を後にするとだった。サイドカーの前にあの男が来ていた。

「よお」

「貴様か」

「時間はあるかい？」

ロツカーだった。口の左端を歪めて笑つて彼に声をかけてきたのだ。

「もっともなくても無理に付き合ってもらつたがな」

「選択肢はないということか」

「あつても諦めてもらうからな」

また言うのであつた。

「それでだ。今日の場所はな」

「何処だ、それで」

「ちよつと面白い場所見つけたんだよ」

こつ話すのである。

「俺におあつらえ向きの場所がな」

「あくまで貴様の趣味か」

「それが合わなくても気にするな」

随分と我儘な調子であつた。

「手前が死んですぐに終わることだからな」

「だからだというのか」

「そうさ。ついでに」

彼は今度は己の左手を見た。そうしてそのついでそちらにいる相手に対しても告げるのであつた。

「手前も誘わせてもらうぜ」

「私もか」

「そうさ。わかつて来たんだろ？」

こつ彼に告げるのだった。

「違うか？」

「私が貴様等の前に入る時はだ」

その声の主もロツカーに対して述べる。

「貴様等の魂を冥府に送るその時だけだ」

「話が早いな。そういうことだよ」

ロツカーはその男死神に対して告げた。

「じゃあな。早速はじめるか」

「場所は何処だ」

牧村がその彼に問うた。

「そのおあつらえ向きの場所とは」

「まあ来てくれよ」

軽く首を動かしながら述べた今の言葉だった。

「面白い場所だからな」

「またそれを言うが一体何処だ、それは」

「来な。こつちだ」

こう言つて彼が案内したその場所は。

そこはテーマパークだった。所々に観覧車やメリーゴーランド、それにジェットコースター等が見える。しかしそこには本来いる筈の人達が誰もいなかった。

「テーマパークか」

「おあつらえ向きに今日は休園日ってわけだ」

ロッカーは彼等を案内したうえで笑つて言つてきたのだった。

「どうだい？闘う場所としてはよ」

「俺は何処でもいい」

「私もだ」

二人はこう答えるのだった。

「別にな」

「貴様等の墓標は選ばせてやる」

「そうかよ。何処でもいいっていつのかよ」

「そうだ」

「そして相手は誰だ」

「まあそう焦るなつて」

死神の問いに対して返してみせた。

## 第二十二話 主天その十五

「気にしなくても相手はもうここにいるからな」

「相手はか」

「二人連れて来たぜ」

まずはこう言ってきたのであった。

「おい」

「はい」

ロツカーが呼ぶとだった。不気味な顔の騎士が二人の前に出て来た。彼はその首を右手の脇に抱えている。その騎士が出て来たのであった。

「デユラハンか」

「似てるけれど少し違うな」

ロツカーは死神の言葉にまた答えた。

「首なし騎士っていつてな。それがこいつの名前なんだよ」

「覚えておくことだ」

その小脇に抱えた首からの言葉だった。

「冥府に旅立つ前にな」

「まずはこいつか」

「そしてもう一人は誰だ？」

牧村がロツカーに対して問うた。

「二人いると今言ったが」

「ああ、次はこいつだ」

この言葉と共にもう一人出て来た。今度は一つ目に烏の目を持つた長い髪に緑の肌を持つ異形の者だった。しかもその指は四本である。

「こいつは影喰らいつていうんだ」

「覚えておけよ」

影喰らいと呼ばれた魔物は不気味な笑い声をあげながら二人に告

げてきた。

「俺様が御前等を倒すからな」

「その二人のうちどちらがだ」

「私の相手をするのだ？」

「好きな方を選ぶんだな」

ロツカーはここでも楽しそうな笑みと共に二人に告げてみせた。

「どっちでもいいんじゃないいけれどな」

「ふん」

「ならばだ」

二人は魔ロツカーの言葉を受けてまずは一步前に出た。最初に動いたのは牧村だった。

「俺の相手はだ」

「私か？」

「それとも俺様か？」

「貴様の相手をしてやる」

こう言って指差したのは首無し騎士だった。

「貴様だ。相手をしてやる。光栄か？」

「光栄そのものだ」

彼の言葉にこう返す魔物であった。

「髑髏天使と手合わせできるのだからな」

「それでか」

「そして冥府に旅立たせることができる」

魔物の言葉に鋭いものも宿った。

「これ以上のことはない」

「では決まりだな。貴様の相手は俺だ」

「うむ」

「となるのだ」

死神は二人のやり取りを横目に影喰らいを見ていた。その異形の姿をした一つ目の魔物をじっと見ているのである。そのうえで言うのであった。



「自然と決まったな」

「そうだ。俺様だ」

「覚悟はいいか」

その一つ目を見据えながらの言葉である。

「冥府に行く用意はな」

「それは貴様ではないのか」

魔物はその声だけを笑わせながら彼に言い返してみせた。

「俺様に倒され冥府に旅立つのは」

「生憎だが死神が倒されたことはない」

死神は魔物の不遜な言葉にも動じてはいなかった。

「死神は冥府を行き来しても旅立つことはないのだ」

「それならばだ」

「来るのだ」

死神の相手もここで決まった。

## 第二十二話 主天その十六

「私に魂を刈られにな」

「貴様にできればな」

魔物の声の不気味な深みを増してきていた。彼はそのまま深いものを高めていつていた。

「俺様を倒せるか」

「行くぞ」

死神は右手を拳にした。そうしてそれを己の胸の前に置く、するとそこから白い光が宿り。その中から戦う姿になるのであった。

「それではだ」

その両手に持つ大鎌を一閃させてみせる。これをはじめりとするのだった。

牧村もまた首無し騎士と対峙している。騎士は今も動かない。

しかしその脇に抱えた首から、彼は言うのだった。

「それでははじめるか」

「そうだな」

牧村は彼のその言葉に言葉を返してみせた。

「今からな」

「髑髏天使になるがいい」

魔物はこつも彼に告げた。

「闘いはそれからだ」

「今の俺には興味がないということか」

「私が興味があるのはあくまで髑髏天使だけだ」

こつ言うのである。

「人間としての貴殿ではない」

「人間に興味はないのか」

「私は魔物だ」

だからだというのである。

「それで何故人間に対して向かうというのだ」

「魔物らしいな。その考えは」

「私は魔物であり同時に騎士だ」

騎士だとも言うのであった。

「それでどうして闘う力のない貴殿を相手にするといつか」

「わかった、それではだ」

「早く変身するのだ」

再び牧村にこう告げた。

「早くな」

「そうだな」

魔物のその言葉を受けて両手を拳にした。そのうえで己の胸の前でその二つの拳を打ち合わせてみせるのであった。

するとそこから白い光が生じ彼の身体を包み込んだ。その光の中で姿を変え牧村来期から髑髏天使へるなっていくのであった。

「行くぞ」

肘を曲げた右手を前に出し一旦開いたその手を握り締める。それを合図とした。

「それではな」

「髑髏天使。会いたかったと言っておこう」

「闘う為にか」

「魔物の悦びは強き相手と闘うこと」

「何処までも闘いが好きなのだな」

「隠すつもりもなければ否定するつもりもない」

その脇の首が言う。

「では。行くぞ」

「来い」

すぐに青い力天使の姿になる。翼も生やし両手に剣を持つ。

そのうえでまずは氷の槍を宙に出す。右手の剣を前に振るうとそれが魔物に向かった。

「氷の槍か」

「さて、かわすかどうするか」

「かわすこともない」

魔物はこう言うともまず左手に槍を出してきた。その槍をただ前に出しただけであった。

するとそれだけで氷の槍を止めてしまった。その先端を己の槍の先端で止めてみせたのだ。

「槍の先でか」

「私は騎士だ」

また言う魔物だった。

「ならばこの程度。造作もないことだ」

「だからだというのか」

「貴殿とてこれで私が倒せるとは思っていない」

この言葉と共に目に力を込めた。するとその止められてしまっていた氷の槍が粉々に砕けてしまったのだった。

砕けた氷がアスファルトに落ちる。すぐに水になって消えてしまった。

「違うか」

「確かに。貴様はそう簡単にはいかない相手だ」

「わかっているのならより楽しもう」

槍を構えなおして髑髏天使に告げてきた。

## 第二十二話 主天その十七

「この場は面白い趣向が多い」

その言葉と共に今宙に浮かんできたのだった。翼はなくとも。

「楽しまない道理はない」

「そうだな。貴様も宙を舞うことができるのなら」

それを見て己の背の翼を羽ばたかせる髑髏天使だった。

「俺もだ。行こう」

「来るというのだな」

「そうだ。そうしなくては貴様も面白くあるまい」

「その通りだ。貴様が魔物ならばだ」

己の上にある相手を見据えての言葉である。

「俺もまた髑髏天使なのだからな」

「では来るのだ」

魔物も今は何も仕掛けては来ようとしなかった。

「貴様のその腕を見せるのだ」

「言われずともだ。行くぞ」

羽ばたかせたその翼がより動く。それにより宙にあがるのだった。

そのうえでまずは同じ高さに来た。空中で対峙する。

「さて、それではだ」

「参ろう」

魔物が前に出た。その左腕の槍を前に突き出して来る。

「むっ!？」

「私の槍は決して軽くはない」

攻撃を繰り出しながらの言葉であった。

「さて、かわせるか」

「確かにな。この槍は」

続け様に出されるその槍を右手の剣で受ける。相手が左で攻めて来る為そうなってしまった。これは髑髏天使にとっては不本意であ

った。

彼は本来は左手の剣で防ぎ右手の剣で攻める。それができず苦い目の光になっていた。

「攻撃もさることながら。左か」

「左からの攻撃は何よりも強い」

魔物もそれがわかつているようであった。

「さて、これはどう防ぐか」

「防ぐだけではない」

苦かった。だがその目の光は間違っても負けている者の目ではなかった。

左手のサーベルをここで。左から右に横に一閃させてみせたのである。それにより。

そこから水を放った。それも水の刃だ。圧倒的な圧力によりできた刃であった。

「水か」

「これはどうするか」

刃を放ったうえで魔物に問う。

「この刃を防げるか」

「ふむ。それならばだ」

魔物は至近でそれを見ても冷静であった。そして。

姿を消した。水の刃はそれにより空しくかわされてしまったものだった。

「消えたか」

「如何にも」

消えたうえで声だけが聞こえてくる。

「こうしてかわすこともできるのだ」

「見事だと言っておこう」

今は姿を見せない魔物にこう告げはした。

「今のようにしてかわしたのはな」

「それは認めるのだな」

「俺も相手の実力は見極める」

また魔物に述べた。

「そうということだ」

「そうか。貴殿もか」

「その実力は見事だと言っておこう」

しかしだった。その目は言葉とは違い警戒したものだった。そのうえで周囲を見回していた。何もかもを見逃さない、そうした目であつた。

「それはな」

「それではだ」

ここで魔物の声の色が動いた。

「場所を変えよう」

「変えるというのか」

「見るのだ」

その言葉と共にあつた。ジェットコースターが動いた。その空気に浮かぶレールの上に無人のコースターが恐ろしい速さで動いていた。

「私はここにいる」

「そこにか」

「そうだ。今こうしてな」

その言葉と共にだった。首無し騎士が姿を現わした。彼はコースターの先頭の車両の上に浮かぶようにして立っているのであつた。

## 第二十二話 主天その十八

「中々面白いものだな」

「こうした場所ははじめか」

「少なくとも私の知っているものではない」

こう述べるのだった。

「ここはな」

「ならばそれも楽しんでいるな」

「闘う場所として楽しんでいる」

そうだというのである。

「そうした意味で面白い場所だな」

「本来はこの場所は純粹に子供達が楽しむ場所だ」

「そうなのか」

魔物はそれを聞いてこう述べるのだった。

「ということは女子供が娯楽として楽しむのだな」

「それはその通りだが貴様にとっては興味がないことか」

「如何にも」

そのことを否定しないのだった。

「その通りだ。私の興味の対象は闘いのみ」

実に魔物らしい言葉であった。

「それだけだ」

「ならば俺もそれに応えよう」

言いながらその移動するコースターの方に飛ぶ髑髏天使だった。

「そこで貴様と闘おう」

「そう言うと思っていた」

魔物は髑髏天使が必ず自身の誘いに応えると。もう読んでいたの  
であった。

だからこそそこから移らないのだった。ただ見ているだけであっ  
た。少なくとも今は。



「では来るのだ」

「参ろう」

言葉とコースターの車両の一つの上に立った。そのうえで魔物と対峙する。

コースターは丁度連続宙返りの場所に来た。両者は逆さになるがそれでも対峙を続ける。

「行くぞ」

「来るのだ」

先に動いたのは魔物からだ。音もなく前に出て再び槍を突き出してきた。

槍は先程と同じく鋭い。それに強かった。髑髏天使はそれを今回も右手に持っているその剣で受けしのいでみせるのであった。これも同じだった。

「この状況でも腕は落ちないか」

「普通の人間ならわからないがな」

回転するその中の言葉であった。

「だが俺も髑髏天使だ」

「違うというのなだ」

「この時は貴様等と同じだ」

そうだというのである。彼も防ぐばかりではなかった。隙を見て左手のサーベルを今度は順手に持ってそれで突きを入れていた。しかしそれは魔物が音もなくかわすだけであった。

「攻撃をかわすか」

「この程度は造作もないこと」

丁度真横になった時の言葉であった。

「かわすのみな」

「できるというのか」

「そうだ。何度も言うが造作もないことだ」

魔物は右手の脇に抱えている首から述べてきていた。

「確かにできるがだ」

「くっ、俺の剣が通用しないというのか」

「少なくとも左手のそれはな」

「通じないというのである。」

「その腕は護る為の腕だな」

「如何にも」

そのことを認める。隠しはしない。

「その通りだ。この剣で護るのだ」

「その腕で攻めても限度があるということだ」

魔物はその左からの攻撃をかわしながら述べた。

「利き腕でないならば。その動きにな」

「くっ、ここで出たか」

「右ならばわからない」

魔物はさらに言う。

「だが今の貴殿の攻めは左だ。それならばだ」

「問題ないというのか」

「その通りだ。さて」

攻撃を続け避けながらさらに言う魔物であった。

## 第二十二話 主天その十九

「このままでは貴殿が敗れることになる」

「俺がだというのか」

「現に貴殿の動きにも疲れが見えてきている」

両手を同時に使うというのはやはり普段より体力も気も使う。だからである。魔物もそのことを見抜いているのだ。

「だが私はそうではない」

「疲れていないというのだな」

「私は利き腕を使っているだけだ。貴殿とは違う」

こう言うのである。

「その負担はな」

「くつ、確かにな」

「このまま続けるだけで私の勝利が近付く」

それがわかっていているからこそ攻撃を続けていくのであった。

「それではだ」

「だがそう簡単にいくとは思わないことだ」

魔物の読みを把握したうえで返す髑髏天使であった。

「全てがその様にな」

「面白い。では私の読みを外せるというのか」

「俺のことは誰にも読めるものではない」

攻撃はこの間にも激しいやり取りが続いている。

「誰にもな。そう」

「そう。何だ？」

「俺自身にすらもだ」

ここで妙なことを言った。少なくとも魔物はそう感じた。

「どういうことだ？」

それで思わず問い返した。それに対する返答は。

「俺の中では常に何かが起こっている」

「常にか」

「そうだ。それでどうなるか俺にもわからない  
だからだというのである。」

「この俺自身にもな」

「貴殿にはイレギュラーの要素が多いのは事実だな」  
魔物は髑髏天使の言葉をそう捉えたのだった。

「それではだ」

「そうだ。果たして今もどうなるかだ」

言いながらも二本の剣を振るい続ける。

「わからないのだからな」

「ではそれも見せてもらおう」

首無し騎士は今もこう言うだけだった。やはり沈着である。

「貴様のそれをな」

こう言い合い闘う両者だった。そして死神も魔物と闘い続けてい  
た。

回転するコーヒーカーップの上で両者は睨み合っていた。死神も魔  
物もそれぞれのコーヒーカーップの上に立っている。そのうえで睨み  
合っているのだ。

「さて、どう攻めるのだ」

「私がどうやって攻めるかか」

「見てみたいものだ」

こう言っつて今は動かないのだった。

「貴様のそれはな」

「私の攻撃を見たいというのか」

「そうだ。どう動くのだ？」

魔物は自分から動かさずにこう言うだけだった。

「それを見てみたいのだ」

「敵の動きを見たいとはな」

死神はその魔物の言葉にまずは妙なものを感じ取った。

「貴様も変わった奴だ」

「では何もしないのか？」

「そうは言っていない」

それは否定する死神だった。

「では見せてやろう」

言いながらであった。大鎌を構えたその姿勢のまま音もなく前に出た。足は全く動かすことなくただ前に出てみせたのである。

その姿勢で魔物の前に現われ。そのうえで鎌を振るってきた。

「受ける」

「そうか。それが貴様の影か」

「何っ!？」

「確かに貴様は強い」

魔物は死神のその動きを見ながら述べていく。

「だが」

「だが。何だというのだ？」

「影は違う」

こう言っただけであった。すぐにその右手の爪で切り裂いてみせた。

だがそれは彼を切り裂いたのではなくその影を切り裂いたものであった。

影に直接触れてはいない。その上をなぞるようにして爪を切り裂かせただけである。しかしそれだけで死神は切り裂かれた左肩から血を噴き出させたのである。

## 第二十二話 主天その二十

三条の、爪と同じ数だけの血が噴き出す。肩には同じ数だけの切り裂かれた傷が生じた。

「影を切り裂いてか」

「俺は貴様を切ることはできない」

魔物はその噴き出す血を見ながら述べてみせた。

「だが。影を切ることはできる」

「影をか」

「そうだ。影は魂でもある」

こう言うのである。

「その影を切ればだ。貴様自身も切り裂かれたことになる」

「話は聞いたことがある」

ここで一旦後ろに下がりそのうえで言う死神だった。

「影を切り裂く魔物の話はな」

「ほう。俺も有名になったものだ」

「それが貴様だったか」

あらためて魔物を見据えるのであった。

「貴様がその魔物だったか」

「そういうことだ。それこそが俺だ」

その嘴になった歯のない口で笑ってみせていた。嘴が歪に歪んでいる。

「俺がその魔物だったのか」

「今それがわかった。しかしだ」

「しかし。何だ？」

「私もまた影を操ることができる」

構えは解いていなかった。そのままであった。

「私もな」

「それは知っているが」

「貴様が影を襲うことができるならば」

魔物の言葉を受けたうえでさらに言うのであった。

「私はこうしたことができるのだ」

「むっ!？」

「見るのだ」

その言葉と共にであった。彼の影から無数の影が出て来た。それが一斉に魔物に対して襲い掛かって来たのであった。

「影がだと!？」

「さあ、これならどうするか」

己はそのまま元の場所に立ったままであった。

「この無数の影達に対しては」

「簡単な話だ」

魔物はその無数の影達を見ても動じてはいなかった。

「的が一つでなくなっただけだ」

「そう思うのか」

「そうだ。ただそれだけのことだ」

言いながら今鎌を手に迫ってきた影の一つを切り裂いた。

手応えは確かにあった。その影を確かに切り裂いた。しかしであった。

「むっ!？」

「言うておくが私は分け身も使える」

「こう言うのだった。」

「私自身だけでなく影達もな」

「そうか。影にそれを使ったのだな」

「これでわかったな。そしてだ」

彼はさらに言うのだった。

「この影達も攻撃を繰り返すことができるのだ」

「それで俺様を斬るつもりだな」

「その通りだ。さあどうするか」

影達に囲まれながらの言葉であった。

「私の影達に対して」

「ふん。俺様を甘く見ないことだ」

その爪を禍々しく輝かせながら臆するところはなかった。

「影達がどれだけいようと」

今来た二つの影も切り裂く。すると影達はすぐに消え去った。

しかしすぐにまた影が来た。それも切り裂く。しかしその影も消え去るばかりだった。

それでもだった。魔物は臆していなかった。その影達を切りながらも一つ目を動かしていた。まるで何かを探し出すようにしてだ。

「貴様の影は必ずある。それならばだ」

「何時か必ず倒せるといふのだな」

「そしてだ」

彼はさらに言う。

「貴様自身も切ることができるといふのはわかっているか」

「無論だ」

死神は今の魔物の言葉も受けた。

「その様なことはな」

「わかっているならいい。それならだ」

魔物の方から動いた。その腕を斜め上から繰り出す。

右が来て次に左であった。だが彼が今切り裂いたものは空であつ

た。切り裂かれた筈の死神はその姿を消し去ってしまったのだった。まるで影の様に。

「むっ、消えたか」

「こつしたこともできる」

死神の声だけが聞こえた。



第二十二話 主天その二十一

「私はな」

「こつした術は持つていなかった筈だが」

「持つていないならば学べばいいだけだ」

こつ言う死神だった。

「そして身に着ければな」

「どうやら貴様は見術を身に着けられるようだな」

如何にも」

ここで種明かしもしてみせたのだった。

「私は見る度、戦う度に強くなれるのだ」

「そうして相手の技を身に着けてか」

「貴様の術も貰つておこつか」

またしても声だけがした。

「この闘いでな」

「言つておくが俺様の術は安くはない」

死神の姿は見えないがそれでも冷静さを失つてはいなかった。

「それを今見せてやろう」

するとだった。魔物もまた姿を消した。まるで煙の様に姿を消し

たのであった。

「消えたというのか」

「消えたと思うのなら思えばいい」

彼もまた声だけが聞こえるのだった。

「そのようにな」

「そつか」

だがここで死神の声が頷くのだった。

「そういうことだな。それではだ」

死神はここで姿を現わしたのだった。

「こつすればいいだけだ」

「こう言って姿を現わすのだった。彼は今カップの一つの上に浮かぶようにして立っていた。」

「こうすればな」

「出て来てどうするつもりだ」

「すぐにわかる」

答えはしなかった。

「貴様の死によってな」

「何を考えているかわからぬが」

魔物の今の声は嘲笑の声であった。

「それで俺様を倒せるというのか。姿を出したうえで」

「倒せると言えばどうする？」

「戯言だな」

一言でまた嘲笑してみせた魔物であった。

「所詮な。それは嘲笑だ」

「では攻撃してくるのだ」

その嘲笑を軽く返す死神だった。

「そうすればわかる」

「ではわかってやろう」

魔物の今の言葉は自信そのものであった。

「こうしてな」

その時だった。死神の足元の影が動いた。そうしてそこから魔物が姿を現わしたのであった。

「その影、貰った」

その言葉と共に攻撃を仕掛ける。しかしだった。

死神はまた姿を消した。そうして一瞬のうちに攻撃を繰り出す為に姿を現わしていた魔物の背中に出て来ていて。今鎌を振るったのである。

鎌は背中を斬りそれが決め手となった。魔物は背中を切られそれで倒されたのだった。

「うぐっ……」

「勝負あつたな」

死神はその背を切った相手に対して言った。

「これで決まりだな」

「まさかそう来たとはな」

魔物も切られていたがまだ生きてはいた。それで彼の方に向き直って言うのだった。

「後ろに出て来たか」

「こつした戦い方もある」

死神はまた言ってみせた。

「奇襲と言つべきか」

「そうだな。確かにな」

魔物も彼のその言葉に頷いてみせた。既にその身体には赤い炎が起こつてきている。

「見事な奇襲だった」

「だが貴様が何故姿を消しているのかもわかった」  
今度はこつ言う死神だった。

「影の中に隠れていたのか」

「そういうことだ。俺は影に対しては何でもできる」  
赤い炎に包まれようとしながらの言葉であった。

## 第二十二話 主天その二十二

「隠れることも攻撃を仕掛けることもな」

「そして影を狙う方が得意か」

「そうだ。影を狙えばだ」

魔物は告げた。

「下手に身体を狙うよりも傷付けられるからだ」

「そうらしいな。しかし影を狙うとわかっていればだ」

死神は魔物の言葉を逆手に取るような言葉を出すことになった。

「そこを狙えばいいだけだ。それだけだ」

「それだけか。成程な」

「これでわかったな」

死神と影喰らいの言葉は終わりに近付いていた。言葉のトーンもそれを象徴するかの様に静かで落ち着いたものになってきていた。

「狙う対象がわかっていたら楽になる」

「そういうことか。どうやら貴様の方が上手のようだな」

「わかったら安心して逝け」

死神に相応しい言葉であった。

「冥界にな」

「逝くとしよう。無念だが認めるしかない」

両方が重なった言葉であった。

「それではな」

「これでまた一つだな」

魔物は赤い炎にその全身を包まれて逝った。これで死神の戦いは終わった。

しかし髑髏天使首無し騎士の戦いは続いていた。騎士の左手の槍は飛ぶ様に進むコースターの中で相変わらず素早い攻撃を見せていた。

髑髏天使はその攻撃を受けるばかりであった。左手での攻撃は相

手に通用しない。その差が徐々に出て来ている状況だった。

「さあ。どうするのだ」

攻撃を繰り返し続ける魔物が髑髏天使に問うてきた。

「この攻撃を前にしては間合いを取ることも飛ぶこともできない」

「確かにな」

髑髏天使も忌々しい声色だったがそれを認めるしかなかった。相変わらず魔物の槍による攻撃を何とか防いでいる状況であるからだ。

「だが。俺は倒されることはない」

それでもこう言う髑髏天使だった。

「何があるともだ」

「しかし私の槍は防げなくなってきている」

魔物は言うのだった。

「見ろ」

そして一撃を出すとだった。

今の一撃は防ぎきれなかった。剣を弾きそのまま右肩を突き刺した。魔物の槍が遂に髑髏天使を捉えてしまったのだ。

「うっ……」

「疲れが出て来たな」

魔物の言葉が笑ったものになっていた。

「いずれはこうなる運命だった」

「そうかも知れない」

髑髏天使はすぐに間合いを離れた。後ろに飛んで次の攻撃をかわした。だが右肩の傷は確かなものであり彼に確実なダメージを与えていた。

「だが。俺はまだ闘う」

「死ぬまでということだな」

「魔物の闘いは生きるか死ぬかだったな」

このことを話すのであった。

「それは俺もだ」

「髑髏天使もか」

「そうだ。俺の闘いも生きるか死ぬかだ」

「その闘いは」

「そういうことだ。だからだ」

そしてまた言うのであった。

「この程度で退くつもりはない」

「見事だな」

魔物はその彼の心を見て素直に評してきた。

「その闘いへの気構えはな。賞賛すべきものだ」

「そしてそれだけではない」

強い目での言葉であった。

「貴様を倒す」

その目で言うのであった。

## 第二十二話 主天その二十三

「ここで必ずな」

「ならば見せてもらおう」

髑髏天使の今の言葉は嘲笑されなかった。そのまま正面から受け止められ。そのうえでこう言葉を返された。魔物は確かに魔物だが同時にここでも騎士であるのだった。

「私を倒すその姿をな」

「いいだろう。それではだ」

間合いを離れたままで両手に持つ剣をそれぞれ構える。

「行くぞ」

今まさに突っ込もうとしたその時だった。その身体が輝いた。緑の光が起こりその中で彼は。今度は緑の鎧と髑髏の男になるのだった。

「緑だと」

「変わったのか」

二人はそれぞれ言った。

「ここでまた」

「主天使か」

魔物はその天使が何なのかすぐにわかったようであった。言葉に出してきたからだ。

「それになつたのか」

「そのようだ。俺はまた一つ位をあげたか」

「中級の天使の中で最上位にある位だ」

そしてそれだともいうのである。

「それになつたというのか」

「これまでとはまた違う」

彼はその緑になつた姿を見回しながら言った。

「力がみなぎるだけではない。これは」

「これは。何だというのだ」

「硬い。この力は」

「こう言うのである。」

「どうやら水とはまた違う力のようだな」

「それではその力が何か見せてみることだ」

彼はここで彼は言った。

「その力をな。どんなものかな」

「そうだな。俺も見てみたいものだ」

自分でも言う鬨天使であった。

「俺のこの力をだ」

「では見せてみるがいい」

首無し騎士もまたこう返すのであった。

「貴様のその新しい力をな」

「さて、何だというのだ」

言いながら剣を振るい念じる。するとだった。

「むっ!？」

左手の剣が硬くなった。それはダイアだった。煌くダイアに姿を変えたのである。

「ダイアの剣になっただと」

「ダイアはこの世で最も硬いものだな」

魔物もこのことは知っているのだった。

「そしてだ」

「そして？」

「それは普通大地よりいずるものだ」

「そうだというのである。」

「つまり主天使の力はだ」

「地の力か」

鬨天使もそれをわかったのであった。彼との話の中で。

「火、風、水と続いてか」

「その様だな。では大地の緑か」



このことも察する魔物であった。

「大地のな。それを使うのが今の貴様の力か」

「そのようだな。だからこそ緑か」

髑髏天使もまたわかつたのだった。話をしているうちにだ。

「今の俺は」

「大地か。面白い」

魔物の首が笑った。今度も楽しむ笑みであった。

「その力と闘えるとはな」

「そう思うか。それではだ」

その言葉を受けて再び構える髑髏天使だった。両腕を交差させ右腕の剣を左に、左手のサーベルを右にして。そうして構えるのであった。

そしてすぐにその両腕を交差させて振った。すると両腕から鋭い木の葉の刃が放たれた。

「木の葉か」

「大地の力ならばだ」

また言う髑髏天使だった。

「当然木のそれも使えるということだ」

「木の葉の刃か」

魔物はその刃を冷静に見据えていた。新しい力を見ても動じたところはない。

## 第二十二話 主天その二十四

「その威力。見させてもらうぞ」

言いながらその左手に持つ槍を繰り出す。木の葉自体はあっさり  
と破壊できた。

しかしであった。その裏にあったものはそうはいかなかった。そ  
れが何かというと。

「むっ!？」

「一つ言っておく」

ここで髑髏天使はまた言ってきた。

「刃は一つとは限らない」

「どうやらその様だな」

「二つの場合もある」

「こう言うのであった。」

「こうして。影として含ませておくこともできる」

それはダイアの刃であった。それを木の葉の刃の裏に潜ませてい  
たのである。ダイアは鋼よりも強い。それが今ここで出たのであっ  
た。

「くっ、槍が」

「言った筈だ」

また言う髑髏天使であった。

「この刃はだ」

「この世で最も硬いのだったな」

「今の貴様の言葉だ」

それをそのまま返す形となっているのであった。

「さて。その槍で防げるか？」

「くっ」

槍がへし折られてしまった。弾こうとしたがそれを折ったのであ  
る。そして魔物が新たな槍を出そうとしたその瞬間だった。髑髏天

使は一気に間合いを詰めたのであった。

既に両手の剣はダイアにしている。それで切りつける。何とか槍を出した魔物はそれで防ごうとする。しかしそれは適わなかった。

槍を繰り出すが今度は弾かれてしまったのだ。やはりダイアの方が強かった。

そして左手のサーベルを左から右にと一閃させる。それで勝負は決まった。

「ぐっ……」

「決まったな」

サーベルを一閃させたうえでの言葉であった。刃がダイアとなったサーベルは魔物の右脇にあるその首を深くまで切っていた。それは胸までも切ってしまった。

「貴様の首は弱点に他ならない」

「それを見抜いていたというのか」

「どの様な者でも首は弱点だ」

だからだというのである。

「それを狙っただけだ」

「そういうことか。私の弱点もまた首だとわかったか」

「離れていようと弱点は弱点だ」

また言う髑髏天使だった。

「そこを衝く。そのことにも気付いた」

「では主天使にならずとも貴殿は私に勝つことができたか。いや」  
自分の言葉をここで訂正した魔物だった。その身体から青白い炎が出て来ている。今まさに倒れようとしていることがはっきりと出ていた。

「それに気付いたからこそ主天使になれたのかもな」

「そうかも知れない。どちらにしろ俺は勝利を収めた」

そのことだけがはっきりと言えることであった。

「貴様に対してな」

「そのことは褒めよう」

魔物の身体に出て来ていた炎がさらに多くなってきた。

「そしてだ。最後に伝える言葉は」

「何だというものだ？」

「さらばだ」

こう髑髏天使に告げた。

「貴殿との闘いは実に有意義なものだったと言っておこう」

「それは俺も同じことだ」

髑髏天使もまたこう返すのだった。

「貴様との闘い。学ばせてもらった」

「では去るがいい」

その魔物に対する言葉である。

「苦しまずにな」

「そうさせてもらおう。それではな」

「ああ」

このやり取りを最後にして青白い炎の中に姿を消す魔物であった。後にはジェットコースターの上に残り続けている髑髏天使がいるだけだった。

## 第二十二話 主天その二十五

彼はその無人で動くコースターから舞い降りた。その彼のところに死神がやって来てそのうえで声をかけるのだった。

「また階級を昇ったな」

「見ての通りだ」

「こう返すのだった。」

「今度は緑だ」

「そうか。緑か」

「大地の力の様だな」

今のその色は確かに緑だった。その緑の髑髏で語っていた。

「まだ完全にわかつてはいないが」

「そして中級の最上位になった」

死神は今度はこう告げた。それと共に戦いの服から通常の服になった。髑髏天使もまた牧村の姿に戻りそのうえで話すのであった。

「残るはあと三つだ」

「上級のだな」

「座天使になればまた新たな力を手に入れることになる」

死神の声は落ち着いたものであった。しかしその落ち着きの中にもう一つのものを含ませていた。それは牧村ですら気付かないものであった。

「貴様はな。そして」

「そして。何だというのだ？」

「その中で手に入れるものもあれば離すものもある」

「こう言うのであった。」

「何かを手に入れるばかりではない。それだけには留まらないものだ」

「では俺も力をか」

「そつだ。手放すこともある」

また言う死神だった。

「貴様もそうではないのか」

「そうだとしてもだ」

それを言われても臆するところのない牧村だった。

「俺は髑髏天使だ」

「魔物と闘うのだな」

「何かを失ったとしてもな。それが俺の髑髏天使としての運命ならばだ」

「それはわかった」

今の牧村の言葉はそのまま受け取ったでした。

「しかしだ」

「しかし？」 60

「人であればいいのだがな」

「馬鹿なことを言う」

そう言われても今はわからない牧村だった。

「俺は人間だ。まごうかたなきな」

「だといいいのだがな」

今の牧村の言葉を聞いてもこう返すだけの死神だった。

「果たしてな」

「訳の判らないことを言う。だがいい」

「いいのか」

「闘いは終わった」

そのことをそのまま述べたのであった。

「それで終わりだ。今はな」

「では帰るのだな」

「そうさせてもらうが貴様は違つとでもいうのか」

「いや、私もそれは同じだ」

彼もまただという返答であった。

「用は終わった。これでな」

「そうか。では帰るとしよう」

「しかし貴様の戦いはまだ続く」  
別れ際にまた言ってみせるのだった。  
「そのことも忘れないことだ」  
「忘れるつもりはない。むしろだ」  
「むしろ。何だ」  
「忘れることができないことだ」  
これが牧村の返答だった。  
「俺にとってはな」  
「だからこそなのだ」  
死神は今の牧村の言葉に対しても述べてみせた。  
「だからこそこれからの貴様はだ」  
「相変わらず言っている意味がわからないのだがな」  
「これは前に言った記憶があるが」  
今の牧村の言葉に対しても返す。  
「やがてわかることになるかもな」  
「わからなくても別に構うことはない」  
だが牧村はその態度を変えない。

## 第二十二話 主天その二十六

「それよりもだ」

「帰るのか」

「ここでこれ以上貴様と話しても何にもならない」

また言うのであった。

行く。それではな」

「相変わらず素っ気無いものだな。だがいい」

死神も彼のそうした態度をよしとした。何でもないというのである。

「それでな」

「いいのか。言いたげだったが」

「言いたいことは終わった」

今はこう返すだけであった。

「だからいい。これでな」

「そうか」

「しかし。一つだけ確かなことがある」

それでも死神はまた言うのだった。

「貴様は主天使になった」

「そのことか」

「これだけ早く主天使になれた者はいない」

このことも同時に告げるのだった。

「貴様がはじめてだ」

「そうなのか」

「そうだ。果たして最高位にまでなれるかどうか」

そのうえでこうした話もしてみせる死神であった。

「どうなるかだが」

「その天使になったとしても鬪いは続くのだな」

牧村はサイドカーに向かいながら。また言った。



「俺は」

「その通りだ。貴様の髑髏天使としても戦いはどの階級でも続く」  
「こうその牧村に告げる死神だった。」

「この時代の魔物達を全て倒すまでな」

「そういうことならやらせてもらおう」

「そしてそれを受け入れる牧村だった。」

「そうなってもな」

「ただ。戦う相手が変わるかも知れない」

「また訳のわからないことを言うつもりか」

「貴様がわからなくても私がわかっている」

「こう言うのも変わらなかった。」

「この私かな」

「貴様だけがわかっていても俺にわからなければ話す意味はないが」

「貴様の心に留まればだ」

「彼は言うのだった。」

「それがやがて出て来ることになる」

「そういうものか。そして何が言いたい」

「貴様の相手が魔物ではなく私になるかも知れないということだ」

「やはり訳のわからないことを言ったな」

「今の死神の言葉を聞いた牧村の返答はこれだった。」

「何を言うかと思えばだ。そもそも貴様は」

「そうだ。私は私が刈る魂を刈っているだけだ」

「己の仕事のことを語っていることになった。」

「私が刈るべきその魂をな」

「俺もその中に入っているとは初耳なのだがな」

「そうなるかも知れないということだ」

「死神はまた言うのであった。」

「よく覚えておくことだな」

「できるだけ覚えておいておこう」

「とはいっても身のない言葉であった。実際に牧村は今の死神の言

葉を妙な言葉だと思いそのうえでただ聞いていただけであった。

「それで貴様の気が済むのならな」

「そうしてもらおう。それではだ」

ここで話を切るのだった。そうして。

「それではだ」

「帰るのか、貴様も」

「言いたいことは全て言い終えた」

だからだというのであった。

「では去らせてもらおう」

「ではな。もつとも貴様と闘うことになるうともだ」

「どうだというのだ。その場合は」

「俺は怯むことはない」

声は髑髏天使としてのものであった。

「今度は俺が貴様にそれを言おう」

「それを覚えているというのだな」

「そういうことだ。俺が言うのはそれだけだ」

「わかった」

一言で返した死神であった。

「では覚えておこう」

「ではな。本当にこれで終わりだ」

「わかった。またな」

そう言い合い本当に別れた両者であった。彼等は今度こそ別れた。戦いはまだ続くが不穏なものは漂い続けていたのであった。

## 第二十三話 異形その一

髑髏天使

### 第二十三話 異形

「もうそこまでなるなんてね」

「俺も驚いたぜ」

ロツカーが女に対して語っていた。

「まさかもう主天使なんてな」

「早いわね。いや」

女はここで自分の言葉をこう訂正させたのであった。

「早過ぎるわね、これは」

「ここまで早いうちに主天使になった髑髏天使っていないんじゃないのかな  
かったつけ」

子供はこう言うのだった。

「確か。そうだよね」

「俺の記憶にはない」

子供の問いに男が答えた。

「少なくともな」

「異様な早さだな」

今度言ったのは青年だった。見れば魔神達は全員暗闇の中に集まっている。その中でそれぞれ話をしているのである。円になったうえだ。

「これはな」

「はじめてです」

老人も口を開いてきた。

「私達が封印されている間も調べてみましたが」

「それではだ」

紳士も述べたのだった。

「あの髑髏天使はこれまでで最も強い存在なのか」

「ほお、そりやかなり面白い奴だな」

ロッカーは話を聞いて楽しそうに笑みを浮かべていた。

「戦いがあるな」

「戦うにしてはそうですね」

そのことは老人も認めるのだった。ロッカーのその言葉に対して頷きながら。

「それだけ次々と強くなっていけば」

「それにだ」

ロッカーはさらに言うのだった。

「面白いことにも気付いたんだがな」

「面白いこと？」

「そうさ。あいつは今は人間だけれどな」

ロッカーは今度は女の問いに答える形になっていた。そのうえで述べていた。

「少しずつ。自分でも気付かないうちにな」

「どうなっているというのだ？」

「変わってきてるな」

今度も楽しそうに笑っての言葉だった。男の問いに答える。

「俺達に近付いてきてるって感じだな」

「我々にか」

紳士はそれを聞いて考える目になった。そのうえ言葉を出したのである。

「我々に近付いてきているのか」

「どうやらな。近いな」

「じゃあ僕達と戦う理由がなくなるんじゃないの？」

子供はここまで話を聞いてそのうえで言葉として己の考えを出した。

「近くなってくるんじゃない」

「いえ、それは違うわね」

「それとこれとはまた別になる」

しかし今の彼の言葉にはすぐに女と男が言うのだった。

「若しそうなくても髑髏天使は髑髏天使よ」

「我等と戦う宿命にあるな」

「何だ、そうなんだ」

こころは返すがそれでも残念そうなところは何一つとしてない今の子供の言葉だった。

「若しかしてって思ったんだけれどな」

「心が人でなくなるのが髑髏天使は髑髏天使ということです」

老人もそうだと言うのだった。彼は髑髏天使そのものを見ているかのようなのである。

「我等と戦い続ける宿命にあります」

「しかしだ」

青年は老人の今の言葉に対して告げてみせてきた。

「百目に聞きたいことがある」

「何でしょうか」

「我等魔物は戦う為に存在しているな」

「はい」

青年の今の言葉に答える老人であった。

「我々は本来は妖怪ですが戦うことのみを追い求めるようになって魔物になったのですから」

「魔物は何故魔物かということだな」

「そういうことです。魔物であるのは戦うことを追い求めるからです」

だからだというのだった。老人が言うには。

「そしてその我々と戦う存在として出て来ているのが他ならぬ髑髏天使なのです」

「その髑髏天使達に対してか」

今度は紳士が口を開いていた。

「我々は戦いを挑む。戦いの為に」

「戦いの為の戦いってわけだな」

ロツカーは笑いながらこう評したのだった。

## 第二十三話 異形その二

「つまりはそういうことだな」

「はい、そうです」

また答えた老人だった。

「それが我々の無上の喜びであつた筈ですが」

「ええ。それはね」

「その通りだ」

女と男はその通りだと老人のその言葉に対して述べた。

「私達は戦いたくて仕方がないからこそ魔物になつた」

「妖怪達から抜けてな」

「妖怪は楽しみを求めるものです」

老人はその本来の自分達についても知っていた。知らない筈もないことだった。何しろかつての自分達のことなのであるからだ。

「私達はそれが戦いであつたが為に神々に疎まれ」

「髑髏天使を向けられることになつた」

青年が言つた。

「その我等の戦いによる害をなくす為にな」

「神々は心配性です」

老人は彼等について口元だけで笑つてみせて述べたのだつた。

「私達は人間にもこの世の摂理にも何の興味もないというのに」

「魔神という名前が気に入らないとでもいうのか」

紳士は自分達のその名前について考えを及ばせていた。

「だからだというのか」

「そうかも知れないね」

子供は紳士のその言葉に応える。

「あの人達つてさ。邪神とか魔神つてレッテル付けてすぐに動くしね」

「邪神ですか」

老人は自分達とは違うその存在に対してふと考えを巡らせたうえで言葉を出した。

「そういえばです」

「どうかしたのか？」

「太古にそうした存在の中でもとりわけおぞましい者達がいたと聞いていますが」

「おぞましいのかよ」

ロツカーはそのおぞましいという言葉に眉を顰めさせた。

「俺達はただ戦えればいいだけだからな。髑髏天使がその相手をしているだけだな」

「我々の闘争心が最も激しくなる五十年に一度のその時に」

その時にこそ髑髏天使が姿を現わすのである。そうしてその魔物達と戦いそのうえで倒す。それが髑髏天使の存在意義なのである。

「この世に出てです」

「その他の時も適当に腕に自信のある人間とか妖怪やあちこちの神様の手の連中と楽しくやってるけれどね」

子供はここで魔物の普段のことを述べたのだった。

「それでも。今はね」

「その五十年に一度です」

ここでまた言う老人だった。

「お祭の時です」

「髑髏天使と我々の」

「その祭の時」

「そしてそのお祭に」

老人はその言葉をさらに楽しげなものにさせて述べてきた。

「また一人戻って来られます」

「また一人か」

「今度は誰かしら」

「どうやらアフリカからですが」

男と女に対して出してきたのはこの地であった。



「アフリカから来られます」

「アフリカから」

「というと」

その二人はアフリカと聞いてそれぞれ目を光らせた。そうしてそのうえで老人に対して問うのであった。

「北かしら。それとも」

「南か。どちらだ」

「そこまではまだわかりません」

しかし老人の今の返答はもう一つ要領を得ないものであった。

「アフリカから気配を感じただけですから」

「そうなの。それだけなの」

「アフリカというのがわかったただけか」

「しかし間違いなくどちらかだ」

青年はそれだけでよしとする節を見せていた。

「それならば問題ない」

「そうだね。果たしてどっちかな」

子供もここで楽しそうな笑顔を浮かべてみせるのだった。

「それを楽しみにしておくのも悪くないよね」

「ああ、じゃあどっちが来てもいいようにな」

ロツカーもその子供の言葉に賛成して頷くのだった。そしてそのうえでまた言った。

## 第二十三話 異形その三

「歓迎の準備をしておくか」

「髑髏天使が何時来てもいいようにもしておくか」

「こう言ったのは紳士だった。」

「もっともどちらかが向かうだろうか」

「そうですね。ですが」

ふと老人が一步前に出てそのうえで言うのであった。

「今回は私も行かせてもらいますか」

「あれ、あんたがなの」

「行くというのか」

「はい。久し振りに」

こう女と男に返すのであった。

「遊んでみたくなりました」

「ちえっ、僕が行こうと思っていたのに」

子供は今の彼の言葉を聞いてつまらなさそうに口を尖らせてみせた。

「つまらないな」

「まあいいじゃないか」

ロツカーはその彼の肩をぽんと叩いて慰めてきたのだった。

「また今度があるからな」

「そうだね。じゃあまた今度だね」

「では今回はだ」

「貴殿に任せよう」

青年と紳士は老人でいいとしたのだった。

「それではな」

「遊んで来ることだな」

「遊びはやはり心がときめきます」

実際ににこにこことさえしている老人であった。

「髑髏天使と死神。どちらにしと楽しみです」

こう言って彼は姿を消した。また一人魔神が日本に現われあらたな戦いがはじまるうとしていた。

牧村は階級があがった時の常としてすぐに博士の下を訪れた。そうして彼の研究室において主天使になったことを説明したのであった。

「緑色か」

「そうだ。そして力は土だ」

このことを博士に対して述べる。博士は相変わらず自分の机に座りそこで彼の話を聞いている。彼はもまたいつもの様に壁にその背をもたれかけさせて立って話をする。周りにはこれまたいつも通り妖怪達がたむろしそれぞれ酒や菓子を楽しんでいた。

「土の力だった」

「うむ。文献にある通りじゃ」

老人はまた文献を開いていた。今度は何か書で紙に書いてあるのが見える。彼はそれを見て博士に対してその文字が何かを問うたのであった。

「日本語か」

「ふむ。わかるか」

「随分と古い文献だな」

「平安時代のものじゃ」

その頃のものだというのである。この文献は。

「平仮名で書かれておる」

「平仮名か」

「しかし随分読みにくいものじゃ」

ここでこうも言う博士だった。文献に目をやりながら首を傾げてさえる。

「この平仮名は。相当悪筆な人間が書いたようじゃのう」

「解読は難しいか」

「苦勞しておる」

そのことを隠そうともしない博士だった。

「それでもわかった限りではじゃ。主天使の力は土じゃな」

「俺が使った力そのままか」

「そして緑になるとある。文献では青とあるがのう」

「青はかつては緑という意味もあつたな」

「じゃから緑じゃ」

だからだというのである。ここで博士は日本のかつての色の表現への知識も使つたのである。そのうえで牧村に対して語つたのである。

「この場合はな」

「そうか」

「文献では髑髏、翼、赤、白、藍ときて青となつておる」

色だけでない表現であつた。しかしこれでその階級がわかるのも確かであつた。

「青じゃ」

「つまり緑か」

「うむ。間違いなくこれは主天使のことじゃな」

このことは最早断定できるものであつたし博士も断定していたのである。

「今君はそれになつたのじゃよ」

「遂に中級の最上位なんだ」

「早いよね」

横で話を聞いていた妖怪達がここで言うのだった。流れとしてはいつも通りであつた。

## 第二十三話 異形その四

「こんなに早いって始めてなんじゃないの？」

「そうじゃないかな」

皆で話す彼等であつた。

「それも」

「そうだよ。僕五百年程生きているけれど」

「僕は七百年だけだね」

「どの髑髏天使よりも早いよ」

こう牧村に対して話してきたのだった。

「普通主天使なんてそんなに早くなれないってどうか」

「最低二十年？もつとかかるかな」

「そこまですなれなかつた天使の方が多いよ」

「だよ、やっぱ」

「俺は半年も経たないうちにそこまですなれた」

牧村もまた言うのだった。自分の言葉でも。

「これは何故かと思うが」

「まず戦いの数が違うし」

博士はその要因としてまずその戦いの数を挙げたのだった。

「君は一週間に一回の割合で戦つておるな」

「ああ」

博士の今の言葉にくくりと頷いてみせたのだった。

「その通りだ」

「それはまた随分なペースなのじゃよ」

「妖怪達は本来はそこまで出ないそうだな」

「その通りじゃ。じゃから言つてしまえば髑髏天使の戦いも本来は

遙かにのんびりとしたものなのじゃよ」

「のんびりか」

牧村は今の博士の言葉に対して微妙な顔になった。戦いという緊

張に満ちた世界にそうした言葉は全く合わない異質なものと感じる  
しかなかったからである。

「そういうものだったのか」

「そうじゃ。もつとのう」

そうだと続ける博士であった。

「したものじゃが。今は丁度魔神達も出て来ておるしのう」

「戦いを経ればそれだけ強くなるのか」

「うむ、なるぞ」

博士の今度の言葉もまた断定であった。

「経験を積むことに他ならないからじゃよ」

「そうか。だからか」

「そういうことじゃ。それに加えて」

「それに加えて。今度は何だ」

「君自身の素養もあるようじゃな」

今度言及したのは彼自身についてであった。

「どうやらもう」

「俺自身のか」

「左様、君が戦いで何かを得る力がかなりあるようじゃ」

つまり吸収力ということである。戦いにおいてもそうした能力は  
かなりあるというのである。これもまた人それぞれということなの  
である。

「それでじゃ」

「だからこそ俺はここまで強くなっているのか」

「だと思つがのう。何はともあれ主天使じゃ」

「ああ」

博士の今の言葉に頷く牧村だった。頷きながら考える顔にもなっ  
ていた。

「戦いがまた変わってくると思つのじゃが」

「あつ、そうか。そうだよね」

「新しい力が手に入ったからね」

妖怪達も今の博士の言葉でこのことに気付いたのだった。

「やっぱりその力を使うから」

「そうなるよね」

「その使い方は君次第じゃよ」

「わかっている」

博士は戦うことに関しては全くの素人である。何一つ知りはない。そればかりは牧村の専門であり彼はこのことでは博士と話すわけにはいかなかった。

「それはな」

「じゃがかなりトレーニングを積んでおるな」

「そのつもりだ」

このことは博士もよく大学で見っていたし知っていた。そして牧村自身もこのことを否定することなくはつきりと見せたのであった。

「さもなければ敵に遅れを取ってしまう」

「まあそれも君の強さの急激な上昇に関係しておるな」

「トレーニングもか」

「やはり強くなるからじゃよ。鍛えればのう」

だからだというのである。

「戦いばかりでなくてのう」

「そうか。だからか」

「そうじゃ。やはり君は強くなっておる」

またこの話になるのだった。

## 第二十三話 異形その五

「そしてその力をじゃ」

「どれだけ有効に使えるかだな」

「それはもう学んでおるか」

牧村をじっと見ながら問うてきた。顔自体を彼に向けてそのうえで。

「どつじゃそれは」

「そのつもりだ」

これがその当人の返答だった。

「俺自身もそうしているつもりだ」

「そうか。それで何かわかったかのう」

「地の力はこれまでの力と明らかに違う」

まずはその主天使のあらたな力の性質から話すのだった。

「木の葉を出すこともできれば剣をダイヤや石に変えることもできる」

「凄い技だよな」

「確かに」

「どちらかという戦いを補助するものか」

こう分析する牧村だった。

「木の葉は手裏剣だな」

「そうじゃな。主に補助になるかもしれないな」

博士もここまで話を聞いたうえでそうではと思うのだった。

「それはそれでいいことじゃ」

「いいことか」

「うむ、何も直接攻めるばかりではないじゃろう」

「その通りだ。これまでは火にしる風にしる水にしるだ」

「攻めるものばかりだったんだ」

「そういうことだね」



妖怪達もここでわかったのだった。

「攻める技がかなり頼りになってきたけれど」

「今はそうした補助も入って」

「これをどう使うかだ」

また言う牧村だった。

「これからはな」

「その通りじゃ。上手く使うことじゃ」

博士は言葉に念を入れてみせた。

「それについてはわしは何も言うことはない」

「あくまで俺の問題か」

「頭脳労働専門じゃ。そっちについては全く知らん」

完全な学究の徒である彼にはまさにそうであった。そうした戦いのことなぞ知る由もないことであつたのだ。だから完全に彼に任せ  
る形となつていた。

「力のことはわかつたしのうち」

「話はこれで終わりか」

「そうじゃな。それではじゃ」

話が終わると見るとだつた。ろく子が皿を出してきた。そこにあ  
つたものは。

「メロンか」

「どうですか？」

四分の一度に切つたメロンを牧村の前に差し出してきたのであ  
る。よく熟れた見事なライトグリーンのメロンであり銀色のスプー  
ンも一緒である。

「おーっ」

「では貰おうか」

甘いものが好きな彼である。受け取らない筈がなかった。実際に  
メロンを手にとって左手に持ったうえで右手のスプーンで食べはじ  
めた。するとメロンの独特のまったりとしながらそれでいてくどく  
もある甘さが口の中を完全に覆ってしまったのであつた。

「美味いかのう」

「美味い」

食べながら博士の問いに答える。

「やはりメロンはいいものだ」

「喜んでくれて何よりじゃ。わしはメロンが大好物でのう」

「甘いものなら何だっていいじゃない」

「そうそう、博士ってね」

今言った博士に対していつも通り突込みを入れる妖怪達であった。見れば彼等もそれぞれメロンを食べている。どうやらメロンはかなりあるらしい。

「まあ確かにこのメロン美味しいよね」

「安かったし」

「安かったのか」

牧村はその安いという言葉にも反応を見せた。

「このメロンは」

「存外のう」

そうだったと語る博士であった。

## 第二十三話 異形その六

「安かったぞ。大体スイカと同じ位じゃった」

「スイカとか」

「メロンも安くなった」

よく世間で言われていることも言う博士だった。

「ほんの五十年程前まで驚く程高かったのにおう」

「あとバナナね」

「それも高かったよね」

「そうそう」

また妖怪達が横で話していた。

「何でこんなに高いんだって思う位に」

「今じゃ何でもない値段だけだね」

「メロンもバナナも高かったのは知っているが」

このことは牧村も知っていることだった。無論その時代には彼はまだ生まれていないので実感として知っていることではないがそれでもだった。

「今はこうしてか」

「いい時代になったわい」

そのことを心から喜ぶ博士だった。

「多くのものがこうして安く食べられるようになったからのう」

「そうだよね。卵だってね」

「安くなって料理に使いやすくなったし」

「卵はケーキにもアイスクリームにも必要だ」

作っているからこそその今の牧村の言葉だった。

「どちらにもな」

「だからお菓子も安くなったんだね」

「材料が安くなったから」

「砂糖もだな」

それもだという牧村だった。

「とにかく豊かになった。だから何でも安く多量に手に入るようになった」

「よい時代じゃ。もっともこういったものは正当な貿易とかで手に入れたものじゃからのう」

「貿易でか」

「搾取ではないぞ」

博士が今出した言葉は化石となっている言葉であった。

「マルキストが言うようなな」

「マルキストか」

「あの連中は経済をわからん」

一言で切り捨てた博士だった。

「ついでに言えば教育も宗教も歴史も知らん」

「何も知らないというのか」

「同じことばかり言う連中じゃよ」

実に忌々しげに語る博士であった。

「全くもつてのう」

「それは同意だ」

共産主義者という存在については牧村も同意だった。彼も共産主義には賛同していないのだった。

「あの連中の考えは俺も好きではない」

「わしは大嫌いじゃぞ」

博士ははつきりと言い切ったのであった。

「昔からあの連中が大嫌いじゃった」

「思想的にか」

「それよりも人間として嫌いな奴が多い」

「そうだというのである。」

「我が国のそつちに寄っている人間は下劣な輩が実に多かったのじやよ」

「そうだったのか」

「革命が起こったら首に縄がかかるぞと論戦相手を恫喝した輩もある」

羽仁五郎という。本職はルネサンス研究者であった。それと共に狂信的なマルキスト、いや左翼言論人として有名であった。己を民主主義の信奉者と言っていたが正体はこうした人物だったのである。「そもそもリベラルというがじゃ」

「ああ」

「我が国のリベラルやアメリカや欧州のリベラルと違うのじゃ」

ここでは政治学を語るのであった。博士はそちらの方面でも造詣が深いのである。海外ではその分野でも博士号を習得している。

「あちらのリベラルは労働者の権利やそういったものを保障していく穏健なものじゃ」

「社会民主主義か」

「フェビアン主義ともいうがのう。それじゃ」

それだというのである。共産主義が急激に革命等を打ち出して急激に行くその実情はまさしくジャコバン派そのものの全体主義なのに対してこちらはあくまで民主主義の中で労働者等の権利を保護していくというものである。

「わしはこちらはいいと思っておる」

「こちらはか」

「しかし我が国のリベラルはじゃ」

言葉は実に忌々しげなものになっていた。

## 第二十三話 異形その七

「全く違う。共産主義というか全体主義のことを言っておるのじゃ」

「つまり隠れ蓑だな」

「そうじゃ。全体主義者を受け入れよというものじゃ」

「こう看破するのだった。」

「全体主義を受け入れればどうなるかというじゃ」

「全体主義者は自分以外を認めない」

牧村は看破した。全体主義というものは一人の独裁者、独裁勢力により全てが統率される社会である。まさにロベスピエールのジャコバン派がそうでありナチスもソ連もそうである。ロベスピエールのこれを革命だ民主主義の萌芽だと持て囃す輩は今でもいるがそれは大きな間違いである。

「一旦受け入れればそれで終わりだ」

「その通りじゃ。終わりじゃ」

「言い捨てる博士であった。」

「それが我が国のリベラルじゃ」

「今でもそうだな」

「連中は変わらんよ」

何処までも見下げた言葉であった。

「絶対にのう。終戦直後から変わっておらんじゃよ」

「だから今でも北朝鮮を指示できるのか」

「あの下劣なグルメ漫画もじゃ」

博士はこうも言った。ゴロツキの如き黒い服のオールバックの新聞記者がこれまた権力主義と特権思想の塊の如き父親と戦う漫画である。

「あの原作者も同じじゃよ」

「確か学生運動にも関わっていたな」

「あれだけ愚劣な運動もなかったわ」

博士にとってはまさにそうだった。学生運動にしろだ。

「選挙に行つて票を入れればそれでいい。それで何故暴れる必要があるのじゃ」

「馬鹿にはわからないことだ」

牧村にしろこう言い捨てる。彼も選挙に行く程度はしているのだ。

「所詮はな。馬鹿だから暴れる」

「あれは間違つても民主主義ではない」

暴力に訴えることを否定してこそである。ましてや革命というのはまさにその民主主義の否定に他ならない。革命から生じるのは何時の時代も一つしかない。全体主義である。

「わからん馬鹿共が今もあるわ」

「マスコミやそういつた場所にな」

「連中の言うりべラルなぞ嘘っぱちじゃ」

博士の忌々しげな言葉は続く。

「全体主義に過ぎんわ」

「その全体主義者は妖怪も嫌いだったな」

「連中は現実だけを見ておるつもりでおる」

今度の博士の言葉は馬鹿にしきつたものであった。

「妖怪はおらんと妄信しておるぞ」

「宗教と同じくか」

「妖怪もまた宗教じゃからな」

だからだという博士であった。

「否定するのも当然じゃ」

「考えてみればそうか」

妖怪は民間伝承の中に生きている存在である。民間伝承はどの国でも宗教と密接な関わりがある。シャーマニズムがその根幹だからである。

「そうなつていくか」

「しかし妖怪は実際におる」

博士は力説するのであった。

「その証拠がこの部屋なのじゃよ」

「そして僕達だね」

「そういうことだね」

ここで明るく話す妖怪達だった。確かに彼等は今ここにいる。

「僕達は実際にここに居るから」

「何よりの証拠だよ」

「妖怪がいるということとは神もまたいるということだ」

牧村はその彼等の言葉を受けながら述べるのだった。

「そして魔物もな」

「共産主義とやらだけで全ては語れん」

こう締め括る博士であった。

「あの様なものでは到底のう」

「その通りだな。そして俺はその魔物と戦う」

「魔神達ともいずればそうなるかのう」

「また出て来るかも知れない」

牧村はふと言った。

「また一人な」

「それはそうじゃな」

このことは博士も考えていることであった。



## 第二十三話 異形その八

「有り得ないとは言えない。いや」

「むしろか」

「あると思っておいた方がいいことじゃな」

そしてこう述べるのだった。

「むしろのう」

「そうな。有り得るとな」

「それに出て来るのがかなり早いようじゃ」

博士はその言葉を続ける。

「今七人じゃったな」

「そうだ。七人だ」

「では八人目が出て来るのも早い筈じゃ」

考える目での言葉であった。

「そろそろでもおかしくはない」

「そうか。また出て来てもか」

「心構えはしておくことじゃ。よいな」

「わかった」

博士のその言葉に対して頷いてみせる牧村だった。

「その様にな」

「そうしてくれれば何よりじゃ。さて」

「さて？」

「話は終わったのじゃが実はまだ話したいことがあるのじゃよ」

椅子を回転させて牧村に向かい合ったうえで今の言葉であっ

た。

「まだのう。それで話をしているか」

「何だ？それで」

その言葉を正面から受けてそのうえで返した言葉であった。

「その話とは」

「あのサイドカーじゃが」

彼が話したのはそのことであった。

「最近戦いには使っておるかのう」

「いや」

博士の今の問いに首を横に振って返すのだった。

「翼が生えてからはこれといってな」

「使っておらんのか」

「やはり己で飛べることは大きい」

彼は言った。

「だからだ。移動に使うだけになっている」

「一つ言っておくがあれもかなりの力になるぞ」

博士がここで言うのはそのサイドカーの使い方であった。このことに対しての言葉であった。

「体当たりなり何なりでの中」

「体当たりか」

「最近それもしておらんのではないのかな」

牧村の目を見つつ問うた言葉であった。

「どうじゃ？しておるか？」

「いや」

このことにも正直に答える牧村だった。首を横に振ってみせる。

「ない。そういうことはな」

「やはり移動だけか」

「しかし。考えてみればそうだ」

博士の話の聞いているうちに出された言葉であった。

「サイドカーを使って悪いというルールは何処にもない」

「むしろ使わなければ駄目じゃな」

「勝つ為にはか」

「じゃから剣や術だけでなくともよいのじゃよ」

この辺りは実に柔軟に考えている博士であった。少なくともこれまで体術や鬪體天使としての技だけを考えていた牧村には思い出さ

せるものがあつた。

「そういうものも使つてのう」

「よし、わかつた」

ここまで聞いて頷くのであつた。

「では今度の戦いではだ」

「使つてみるのじゃあな」

「機会があればだな」

こつ断りはする。しかしその発想が頭の中に宿つたのは事実であつた。

「やってみるとしよう」

「そうしてくれればいいのう。何しろあのサイドカーはじゃな」

ここで話を楽しそうなものにもさせる博士であつた。

## 第二十三話 異形その九

「わしが丹精込めて作り出したものじゃからな」

「全面的に改造を施してくれたな」

「科学だけではない」

博士の知識はそうした現実の世にあるものだけではないのだ。その裏に隠されているものもまた使う、そうした類のものであるのである。

「錬金術も入れておるしろう」

「おかげでガソリンの補給をしなくて済むようになった」

「空も飛べるしろう」

「そうだ。空だ」

牧村は今度はこのことに言及した。

「空を飛べることが最も有り難いな」

「髑髏天使として空を飛ぶだけではなくじゃ」

「マシンも使つてか」

「一人ではなく実質的に二人になる」

博士の言葉ではそうなることだった。

「あのマシンは君の思うまま動かせるからろう」

「俺の脳波に基いて遠隔操作が可能か」

「他には人工知能も搭載しておるのじゃよ」

科学も入れているのだった。博士は科学否定主義者でもなかった。

「じゃからかなり自由にも動いてくれるのじゃ」

「有り難いマシンだな」

「その有り難いものを使わずしてじゃ」

さらに言う博士であった。

「生き残るというのも難しいことじゃよ」

「わかつてきた。それではだ」

「次の戦いでどうなるかじゃが」

前置きはここでも為された。

「機会があればやってみてくれ」

「わかった。そうさせてもらう」

「君が生き残る為にな」

「髑髏天使としてか」

「ふうむ」

しかしだった。ここで博士は微妙な声を出してきた。今の牧村の言葉に対して思うところを見せたいかのような言葉だった。そして彼もそれに気付いたのだ。

「何かあるのか」

「いや、今髑髏天使と言ったのじゃが」

「それが何かあるのか」

「君は人間じゃな」

博士はここで彼に問うた。

「そうじゃな。人間じゃな」

「人間でなくて何なのだ」

こう問い返しもする牧村だった。

「俺が人間でなくて」

「そうじゃ。君は人間じゃ」

博士はまた牧村に顔を向けた。そうしてそのうえで再び彼に告げた。

「君はな」

「それがどうかしたのか」

牧村は博士の今の言葉に対して問い返した。

「俺は人間だが」

「しかし君は髑髏天使だと言った」

「それが何かあるのか」

「気になってのう」

難しい顔になっていた。

「いや、君は人間じゃ」

「それは疑いようも否定もできない事実ではないのか」

「髑髏天使はどうなのかじゃな」

「髑髏天使はか」

「髑髏天使は五十年に一度この世に姿を現わしそのうえで魔物と戦う」

その髑髏天使のことを話すのであった。

「髑髏天使は人間であるとは何処にも書かれていないのだ」

「人間とはか」

「人間である君がなるとしても人間とは決して書かれてはいない」

博士はこのことを強調するようにして語るのだった。

「どの文献にもものう」

「髑髏天使は人間ではないのか」

「それもまだわからん」

それについてはということであった。わからないというのである。

「しかしそれだけに余計に人間である存在なのかどうかという断定できんのじゃよ」

「わかっていれば断定できる」

牧村は言った。はっきりとしていればそれで断定することはできる。しかしわかっていなくてはそれは憶測の域を出ない。そういうことであつた。

## 第二十三話 異形その十

「しかしわかかっていなければか」

「そもそも天使はじゃ」

また話す博士だった。

「人間の味方とは限らん」

「天使は時として人に剣を振るうことがある」

牧村もまた言った。

「キリスト教の天使達にしろだ」

「髑髏天使の階級はキリスト教のものじゃ」

博士がこのことを知らない筈がなかった。知っているからこそ言えることであつた。天使というものが何なのか、そのうえでの話であつた。

「そういうことも考えていけばじゃ」

「天使は人間ではない」

「人間がなつてもじゃ」

また言う博士だった。

「そうであつてもおかしくはない」

「そうか」

「君が人間でなくなるのかものう」

じつと牧村を見る。そのうえでまた言うのであつた。

「そんな気もするのじゃ」

「まさかな」

「まあわしもないとは思うぞ」

博士はこのことは断つた。

「人間でなくなるとはな」

「そうだ。有り得ない」

彼は言う。

「決してな」

「そうだといい。まあとにかくじゃ」

「ああ」

「戦いには何があっても生き残ることじゃ」

「このことも言うのだった。」

「絶対にじゃ。さもなければ何も動くことはないぞ」

「それはわかっている」

言うまでもないことだった。何につけてもまずは生き残る、そうしなければ話にならなかった。髑髏天使にしる人間にしるである。

「それはな」

「では行つて来るのじゃ」

「そうさせてもらう」

壁から背中を起き上がらせた。するとろく子がすぐにその手にある皿を受け取った。そのうえで向かうがその背に博士が声をかける。

「生きて帰るのじゃよ」

「わかっている」

「例え魔神が出て来てもじゃ」

「このことを強調する博士であつた。」

「何が出て来てものう」

「それもまたわかっている」

「また返す牧村だった。」

「安心していることだ」

「そうさせてもらうよ」

「じゃあね牧村さん」

「帰ったらまたお菓子を用意しておくから」

「菓子の美味さをわかるのも」

「牧村の言葉がここでも出される。」

「人間だからではないのか」

「その通りじゃよ。菓子の味がわかるのは」

「牧村に伝えて博士も言う。」

「人間と妖怪だからじゃよ」



「魔物にはわからないな」

「天使もまあそうじゃな」

髑髏天使とはあえて言わなかった。今の博士は。

「味はわからんじやろうな」

「なら答えは出ているな」

牧村は言った。

「俺は人間だ。間違いなくな」

「ならいい。それではじゃ」

「ああ」

「勝ってくるのじゃ」

穏やかな声を彼にかけるのだった。

## 第二十三話 異形その十一

「よいな。人としてな」

「わかった。それではな」

「うむ」

こう言葉を交えさせて部屋を後にした。それからサイドカーで道を走っているのだった。その横にあの老人がいるのに気付いたのだった。

そこに近付きサイドカーを彼の前に止めた。すると老人が彼がヘルメットを脱ぐよりも早くあの穏やかな声を彼に対してかけてきたのであった。

「お久し振りです」

「貴様に会うのは確かに久し振りだな」

「いや、お元気だとは聞いていました」

穏やかな言葉は続く。まるで世間話の様なものが。

「実際にこの目で見てみると話以上ですね」

「幾つの目で見ての言葉だ？」

ヘルメットを脱いだ牧村はこう彼に問うてみせたのだった。

「その言葉は。幾つの目で見ての言葉だ」

「二つと言えば嘘になりますね」

老人はその穏やかな笑みをたたえたまま述べてみせたのだった。

「それは」

「そうだな。貴様の目は無数にある」

「実のところ私自身幾つあるのかわかりません」

彼自身もだというのである。

「果たして幾つかは」

「わからないというのか」

「百となっておりますがそれより多いかも知れません」

これが彼自身の言葉であった。

「果たしてどの程度なのか」

「そうか。そこまでなのだな」

「それにです」

老人はさらに言葉を出してみせてきた。

「多ければ多いだけ有り難いものでもありませんし」

「多ければそれだけか」

「あらゆるものが見えますから」

だからだというのであった。彼自身の言葉によればだ。

「いいものです。そう」

「そう?」

「もう一人来られましたね」

ここでこんなことも言ってみせてきたのであった。

「見えていますよ」

「わかつていたか」

牧村から見て右手、老人から見て左手に彼が来ていた。今は黒いジーンズに皮のジャケットというワイルドな格好の彼が歩いてきていた。

「私のことは」

「何しろ無数の目がありますので」

顔だけは穏やかにその彼、死神に対して返す老人であった。

「見えますよ。しっかりと」

「そうか。見えていたのか」

「いや、これで二人と二人です」

老人は牧村にとっては奇妙なことを告げてきた。

「有り難いことです」

「二人と二人だと」

牧村はその奇妙な言葉の意味をすぐに察した。

「つまり貴様だけではないか」

「はい。もうすぐ来られます」

道の端に立つたまま話す老人だった。牧村はその正面にサイドカ

―を後ろにして立っている。死神は今は何も連れてはいない。

「もうすぐ」

「あの男か」

死神は彼の言葉を受けて言ってきた。

「あの男も封印から放たれ出て来たのだな」

「左様です。さあ来ましたよ」

「百目か」

ニメールはあろうかという男であった。彼が牧村から見て右手、死神から見て正面に姿を現わしてきた。ビル街を横にして後ろに長い道を置いた男は漆黒の肌を持つ筋骨隆々の大男であった。

「久しいな。元氣そうだな」

「おかげさまで」

「貴様も魔神だな」

牧村はその黒人の大男を見据えて述べた。彼は白い टीーシャツに青いジーンズというラフな格好だ。そこにその巨大な筋肉が露わになっている。

## 第二十三話 異形その十二

「十二魔神の一人か」

「如何にも。我は逆さ男」

自分から名乗ってみせたのであった。

「これが我の名だ」

「逆さ男は」

「今は姿を見せることはない」

彼は牧村に対して言ってきたのであった。

「我の真の姿はな」

「俺と闘う時になればか」

「その時まで見せることはない。安心するのだ」

こう彼に告げるのであった。

「それはな」

「わかった。では今はいい」

牧村も彼の言葉を受けて述べた。

「貴様の姿を見なくともな」

「だが。髑髏天使には今日倒れてもらう」

その巨大な身体から牧村を見下ろしての言葉であった。やはり途方もない巨大さであった。それは同じ魔神であるあの氷の神ウエンティゴ以上のもであった。

「この日にな」

「魔物をもう連れて来ているのか」

「その通りだ」

まさにそうだというのであった。

「用意はいいか。戦いの」

「だからこそ今ここにいる」

「私もだ」

死神もまたここで言ってみせたのであった。

「それだけだ」

「答えはこれで充分か」

「そうだな。それだけでいい」

黒人も二人の言葉を聞いて述べた。

「では。行くとするか」

「今回の場所は何処だ」

「私としては何処でもいいがな」

「それは私が見つけておきました」

老人が笑みと共に二人と黒人に対して言ってきたのだった。

「既に。ですから御安心下さい」 10

「そうか。貴様がか」

「もう見つけてあるというのか」

「私もまた魔物を用意しておきましたので」

それと共にこうも言ってきたのであった。

「是非。楽しんで下さい」

「わかった。ではまずは行こう」

「その場所にな」

「こちらです」

言つと身体を左にやってそのうえで向かう。そこは目の前のビルであった。

その入り口に入って行く。黒人もそれを見て言つのであった。

「この高い塔の上が戦いの場か」

「ここはビルという」

「そのことは言っておこう」

牧村と死神が今声をあげた男に対して告げた。

「どのみち暫く今のこの日本にいるのだからな」

「覚えておいて損は無い筈だ」

「そうか。ビルというのか」

実際にビルに顔を向けて声を漏らす男であった。

「ここがそうなのだな」

「では入るとするか」

「そして上に向かおう」

「我も行くでしょう」

言いながらそれぞれビルに入ろうとする。三者は互いに隣り合った。しかしここで黒人はその二人に対してこう言ってきたのであった。

「今は戦わない」

「今はか」

「貴様自身はだな」

「安心しろ。魔物も連れて来ているがここでは戦わない」

こう二人に言うのである。

「ここではな」

「戦うのは戦場でか」

「今はビルの上でということだな」

「その通りだ。魔物は決められた場所では戦わない」

黒人の言葉は強いものであった。微動だにしないまでに。

## 第二十三話 異形その十三

「我もまた然りだ」

「ならば共に行こう」

「ビルの屋上にな」

「この時代の階段はだ」

三人はビルの中に入るとその右手の階段を登っていく。灰色のビルの中の階段もまた灰色であり薄い暗がりの中にその姿を見せている。

「えらく堅固な石だな」

「コンクリートという」

「これは見たことがあるか」

「聞いたことはある」

そのコンクリートを巨大な足で踏みながらの言葉であった。

「そういうものがあるというのはな」

「そうか。あるのか」

「これは古代ローマには既にあつたのだがな。その時代にか」

「ローマか。懐かしい名前だ」

ローマという言葉に反応を見せる彼であった。

「かつてそうした国があつた」

「ローマ帝国だ」

死神の言葉である。

「そのことは貴様も知っているようだな」

「旅をしたことがある」

彼はまた言った。

「しかし見たことはなかつた。こつしたものはな」

「ではよく見ておくことだ」

こつ言う黒人に対しての言葉であった。

「これをな。よくな」



「そうさせてもらう。では屋上まで行くでしょう」

死神の言葉を受けながらさらに登っていく黒人であった。そうして三人で屋上に辿り着くとだった。もうそこには老人が彼等を待っているのであった。

屋上からは他のビルも見える。屋上と貯水槽がどのビルにもある。それは彼等が今いる屋上と全く同じであった。それぞれのビルの高さが違い段差にはなっていたが。

「さて、ようこそ」

三人を見ての今の老人の言葉であった。

「戦の場へ」

「そうだな。戦だ」

黒人は彼のその言葉に低い声で頷いた。

「我の最も愛するな」

「そう思つてのことです」

老人は自らの横に移ってきた彼に対してまた告げた。その背丈も体格も優に倍はあった。何処までも大柄な黒人の姿であった。

「貴方の魔物も喜ぶであろう場所を選ばせてもらいました」

「そうだったのか」

「無論私の魔物も」

老人の目が光った。赤い禍々しい光であった。

「楽しめるようにです」

「楽しめるようにか」

「貴様の魔物もか」

「はい」

今度は牧村と死神に対して答えてみせるのであった。

「その通りです」

「ここで楽しめる魔物というのだ」

「すぐにおわかりになれますよ」

その言葉と共に。上から何かが舞い降りて来た。それは。

「むっ!?!」

「その魔物だというのが」

「百目様」

異形の姿であった。その魔物はまずは百目の傍に舞い降りそのうえで彼に声をかけてみせたのであった。

「参上致しました」

「流石ですね」

その魔物の方を見ずに彼に声をかける老人であった。

「もう来られるとは」

「いえ、遅れたのでは」

「いえ、早い時間でしたよ」

高祖の魔物に声をかける。その魔物は人の顔に鳥の翼を持ちまるで蛇の様に細長い身体に獣の毛を生やしている、そうした姿の魔物であった。

「いつまでんか」

死神はその魔物の姿を見てすぐにその名前を言ってみせてきた。

「空を舞う怪鳥か」

「如何にも」

魔物は彼の顔を向けて答えてきた。

## 第二十三話 異形その十四

「我が名はいつまでん」

「まさかもう出て来るとはな」

魔物の姿を見ながらあらためて言う死神であった。

「貴様程の魔物が」

「我を褒めるといふのか」

「少なくとも実力は知っているつもりだ」

それは、といふのである。言葉は鋭いものであった。

「魔物としての貴様はな」

「そういうことか。それではだ」

魔物は死神の顔を見据えていた。そのうえで言葉を続けてきた。

「私の相手は貴様がいいな」

「私か」

「髑髏天使と戦うつもりだったかな」

こつも言いはする。ここで牧村の顔もちらりと見てもきたのだっ

た。

「だが貴様の相手をするのも悪くないな」

「では私が相手をするでしょう」

彼等はこちら言い合い睨み合いはじめた。そしてそれは牧村と黒人もであった。

両者は火花を散らしている。その緊張の中で黒人は言つのだった。

「貴様の相手は私ではない」

「俺と闘うつもりはまだないということか」

「貴様はまだ主天使だ」

彼の今の階級も踏まえての言葉であった。

「それでは貴様と闘うことはしない」

「そうか。それではだな」

「魔物は既に用意してある」

こつ彼に対して告げてみせた。

「既にな」

「ではその魔物を見せてもらおう」

半ば挑発する声で黒人に対して述べた。

「貴様のその魔物をな」

「いいだろう」

牧村の言葉に応えらとだった。黒人の影が動いた。

そうしてそこから何かが出て来た。見ればそれは巨大な人の頭であつた。人として大柄な黒人のそれに比して倍の大きさの巨大な頭であつた。

「それが貴様が連れて来た魔物が」

「その通りだ。大頭という」

彼は牧村に告げた。

「覚えておくことだ」

「覚えておく」

魔神の言葉を受けたうえで述べる牧村だった。

「俺が倒した相手の一人としてな」

「かなりの自信家の様だな」

彼の今の言葉を聞いた魔物の言葉であつた。それは重く低い、まさに地の底から響く様な言葉であつた。それを出すのであつた。

「今度の髑髏天使は」

「少なくとも自信はある」

こつ返す牧村であつた。今は髑髏天使としての言葉を出していた。

「貴様を倒すだけの自信はな」

「それは俺とて同じこと」

魔物もまたそうだと。言ってみせてきた。

「俺もまた貴様を倒すだけの力はある」

「その言葉は偽りではないな」

「俺は嘘を言わない」

また言葉を返す魔物だった。

「決してな」

「面白い。でははじめるとしよう」

牧村は正面からその言葉を受けた。それは一步も引かないものであった。

その魔物との対峙を見てだった。黒人が横から言ってきた。

「では我は下がるとしよう」

「そうですね」

老人は彼のその言葉に応えた。

「邪魔者は下がるとしよう」

「髑髏天使よ」

黒人はその姿を少しずつ影としながら牧村に述べてきた。

「貴様と闘う時が来ればだ」

「どうだというのだ？その時は」

「我の真の姿を見せよう」

こう告げるのであった。

## 第二十三話 異形その十五

「その真の姿をだ」

「それを見せるといふのか」

「その時が来ればだが」

前置きも忘れない。これは挑発の意味を含んだ言葉であった。

「貴様にな」

「来ることは間違いない」

また言う牧村であった。

「俺は魔物を倒すことがその責務なのだからな」

「だからだといふのか」

「如何にも」

黒人に対してもその闘志を隠さない。静かだが強い闘志だった。

「その時を楽しみに待っているのだな」

「ではそうさせてもらおう」

黒人は彼のその言葉を受けた。

「待たせてもらおう」

「そうしておくことだ。さて」

彼との話が終わると。あらためて魔物に顔を向ける。その巨大な顔をだ。

「その前に貴様を倒させてもらおう」

「望むところだ。貴様をそのまま食らい」

魔物もまた彼を見据えて言う。

「逆さ男様の憂いを絶とう」

「憂いといふのか」

「他の魔神の方々の配下の魔物達に貴様が倒されるのではないかという憂いをな」

そういう意味での憂いであるといふのであった。

「絶っておく」

「ふむ。そうか」

黒人はまだ残っていた。老人もである。彼は己の配下の魔物の今の言葉を聞いて満足したような声を出した、表情は変わっていないが。

「相変わらず忠義に篤いようで何よりだ」

「ここはお任せ下さい」

また言ってきたのであった。

「私めが倒しておきますので」

「それでは頼むぞ」

ここで姿が完全に消えた。声だけになった。

「貴様の勝利を聞こう」

「はっ、それでは」

「では私もです」

老人もまた消えようとしていた。

「後は任せましたよ」

「はい、それでは」

いつまでももまた老人に対して応える。

「お任せ下さい」

「では」

こうして彼等も姿を消し後には牧村と死神、それと魔物達が残った。まずは死神が静かにその右手を己の胸の前にやってみせた。

「それではだ」

「早く変身するがいい」

彼に声をかけたのはいつまでんでであった。

「俺の相手をしてもらうのだからな」

「今は攻撃を仕掛けないのだな」

「俺が興味があるのは死神としての貴様だ」

これが彼の返答であった。

「人間の姿をしている貴様ではない。そういうことだ」

「顔は同じなのだがな」

「違うな。鎌を持っていない」

そこが違うというのであった。

「それでは貴様は死神とは言えまい。違うか」

「確かにそれは一理ある」

死神も今の魔物の言葉を否定することはなかった。

「あの鎌で私は命を刈り取るのだからな」

「早くその鎌を出してみせるのだ」

急かしてさえきていた。彼に鎌を出す様に。

「そのうえで私と戦うのだ。いいな」

「いいだろう」

死神は魔物の言葉を受けた。そうして今その右手を拳にして完全に胸の前にやった。するとそこから青い光が発せられ彼の全身を包み込んだ。

光が消えた時白い服に身を包み大鎌を持つ彼がいた。彼はまずその鎌を己の身体の前で一閃させてそのうえで魔物に対して告げた。

「その命、冥府まで届けてやろう」

「それではだ」

魔物は彼が変身を終えたのを見て満足そうな声を出してみせた。



## 第二十三話 異形その十六

「闘うとしよう」

「今からな」

彼等の闘いがはじまろうとしていた。そして牧村もまた。

彼はまだ人間の姿であった。魔物は宙に浮かんでいるがそこから動こうとはしない。今はただその宙に浮かんでいるだけであった。

「それではだ」

「変身しろというのだな」

「そうだ。早く変身するのだ」

彼に対して急かしてさえきたのだ。

「そのうえで俺と闘うのだ。いいな。」

「元より闘うつもりだ」

だからこそ今ここにいる。そういうことである。

両手を拳にしてそれを己の胸の前で打ち合わせる。その打ち合わせた場所から白い光が放たれ彼の全身を包み込んだ。そうしてすぐに甲冑を着た異形の天使になるのであった。

「行くぞ」

この言葉と共に右手を肘を折ったうえで胸の高さまでやって一旦開いてから握り締める。それが闘いの合図となった。

まずはすぐに身体の色を変えてきた。白い権天使となったのである。

それと共に背中の翼で宙にあがる。魔物と空で対峙した。

「これでいい」

魔物はその宙を舞う彼を見て告げた。

「闘えるというものだ。俺もな」

「それでは貴様の闘いを見せてもらおう」

髑髏天使は背中の翼で羽ばたき宙を舞いながらその両手の剣を構えていた。

「今ここでな」

「いいだろう。見せてやる」

魔物もまた彼のその言葉を受けて述べてきた。

「ここでな。俺の力をだ」

「その巨大な頭は伊達ではあるまい」

すぐにそのことを察した彼であった。

「そうだな」

「如何にも。伊達ではない」

魔物もそのことを認めてみせた。

「では行こう」

その言葉と共にだった。恐ろしい速さで髑髏天使に向かって突進してきたのであった。

「突撃だ」

「さあ、かわせるか」

脳天を先にしたうえで髑髏天使に対して問う。

「この速さが貴様に」

「かわさずとも」

今は構えるのだった。かわそうとする素振りはない。

「貴様をそれより先に倒せば問題はない」

「かわさないというのだな」

「そうだ」

こう言ってみせたのだった。

「また言うがかわす必要はない」

「そして俺を倒すのか」

「では。倒してやろう」

魔物を見据えながらの言葉である。

「ここでな」

「そうでなくてはな」

「面白くないのか」

「如何にも。闘うのならば」

魔物は言つのであつた。またしても。

「それに相応しい気概の相手ではなくてはな

「気概か」

「少なくとも貴様はその気概がある」

彼の今の言葉からそれを察したのであつた。

「それだけのものかな」

「少なくとも俺は俺だ」

髑髏天使の今度の言葉はこつしたものであつた。

「その俺と闘うというのなら」

「退くことはないのだな」

「そういうことだ。ではだ」

その突進してくる頭に向かって剣を一閃させた。そのうえで鎌イ足を放つた。

鎌イ足は半月の形で魔物に突き進む。しかしそれはあえなく弾かれてしまったのだつた。

「むっ!？」

「残念だがそれでは俺は倒せん」

何時の間にか至近に来ていた。髑髏天使は何とかそれを身体を左に捻ることで紙一重で交わすことができた。まさに間一髪であつた。

「その程度の攻撃ではな」

「平気だというのだな」

「その通りだ」

言いながら髑髏天使の向こう側に突き抜ける。そうしてそのうえで身体を反転させて再び彼と向かい合いながら言った言葉であつた。

## 第二十三話 異形その十七

「俺はそれでは倒せぬ」

「風では無理だというのだな」

「さて、それはどうかな」

表情は変えない。しかし声は不敵なものであった。

「そう思うのなら他の攻撃を繰り出してみるのだな」

「貴様が言うのならばだ」

髑髏天使はその身体の色を変えてきた。赤い色になった。

「火の力か」

「風を弾き返せてもこれならばどうだ」

言いながら早速攻撃を繰り出す。右手に持つその剣を前に突き出す。するとそこから赤い火球が繰り出されたのであった。

それは一発ではなかった。髑髏天使はその剣を続け様に突き出した。それにより数個の火球が出されそれぞれ一直線に魔物に向かった。

「火は全てを焼き尽くす」

「火はか」

「そうだ。これならばどうだ」

その数個の火球を繰り出したうえでの魔物への言葉であった。

「火ならばな」

「確かに火は全てを焼き尽くすものだ」

魔物はその数個の火球を見ながら述べてきた。

「しかしだ」

「しかし？」

「俺は火では焼かれることはない」

「こう言うのであった。」

「それではな」

「では何で焼かれるというのだ？」

「俺を焼きたければ炎を繰り出すことだな」

こう言うと共にであった。その巨大な頭を左から右へ激しく回転させた。そしてその回転から起こる風で火球を全て消し去ってしまったのであった。

「この通りだ」

「消したか」

「俺にとっては造作もないこと」

魔物は言った。

「この通りだ」

「では氷もか」

「この世の全てを凍て付かす氷でなければだ」

また言う魔物であった。

「俺を倒すことはできない」

「そこまでの自信があるのだな」

「その通りだ。それではだ」

魔物は再び動きだした。また突進しようとしていることは明らかであった。

「この俺を。どの様にして倒すのか見せてもらおう」

「それは貴様の案じることではない」

髑髏天使は再び突進してきた彼に対して言葉を返した。それと共に姿を今は力天使に変えていた。青い姿になっているのであった。

「俺が案じることだ」

「倒すということとはか」

「勘違いしてもらっては困る」

そのうえでこうも言ってみせるのであった。

「俺は倒すのであって貴様は倒されるのだ」

「違うというのだな」

「その通りだ。だからこそそれは俺が案じることだ」

言いながら再び魔物の突進をかわしてみせた。しかし魔物は今度はずぐに反転してきて再び襲い掛かってきた。

それもまたかわしてみせる。しかし今度は。

「くっ……」

「残念だったな」

かわしきれなかった。その攻撃を受けてしまった。左腕に受けてしまったのである。

「今度はかわしきれなかったか」

「抜かったか」

「さて、これで片手が使えなくなったな」

ダメージは魔物にとっては充分なものであった。

「まずはな」

「まずは、か」

「片手が使えなくなったことはそれだけで大きい」

魔物は髑髏天使が左手のサーベルを消したのを見ながら告げた。

「右手だけで俺を倒せるかだが」

「倒せると言えばどうする？」

それでも負けてはいない髑髏天使だった。

「その場合は」

「その気概は健在か」

彼の言葉を受けて満足そうな声を出した魔物だった。

「それだけに闘いがいがある」

「そうか」

「そして倒しがいがある」

「こつも言つのであった。」

## 第二十三話 異形その十八

「俺もだ。だからこそだ」

「また来るか」

「これで決める」

言いながら力を溜めていた。そうしてであった。

今度は横に激しく回転しながら突き進んで来る。これまでよりも速かった。

そうしてそのうえで、であった。髑髏天使に突き進んで来る。それは彼とてもかわしきれるものではなかった。

髑髏天使もそれはわかっていた。そしてそのうえでどうするべきかと考えていた。その彼が出した答えは。魔物にとっては思いも寄らないものであった。

「これだな」

「さて、どうするのだ？」

魔物は突き進みながら髑髏天使に問うてきた。

「この突進。かわせるか」

「かわしはしない」

「こう返す髑髏天使だった。

「俺はな」

「かわさないというのか」

「そうだ。かわさない」

また言う彼であった。

「こうするだけだ」

「むっ!？」

「来るのだ」

その言葉と共にであった。二人の闘いの場の下から何かが出て来た。それは黒と銀のカラーリングの重厚なものであった。

それはサイドカーだった。牧村が普段から乗り髑髏天使も操って

いるものであった。それは下から魔物に突き進み。そして斜め後ろから体当たりを仕掛けて来たのであった。

「何っ!?!」

これで魔物は弾き飛ばされた。かわしはしなかった。髑髏天使はこうして魔物の攻撃を防いだのであった。

「こういつやり方もある」

「貴様の乗り物か」

「そうだ」

彼は言うのだった。

「こういつやり方があるのだ」

「乗り物があるとは知らなかった」

魔物は言った。

「それはな」

「そうか。知らなかったのか」

「成程。使えるものは何でも使うということか」

今のサイドカーの体当たりからそれを察した魔物だった。弾き飛ばされそのうえで大きくバランスを崩したがそこから体勢を立て直していた。

「それもまた見事だ」

「卑怯だとは言わないのだな」

「己の武器は何でも使う」

魔物は再び彼と向かい合いながら述べた。

「それが闘いだからな」

「だからいいのか」

「さらに気に入った」

その巨大な顔が微笑んでいた。

「俺の相手をするに相応しい相手だ」

「そう考えるか」

サイドカーは今ほ宙を舞っていた。下から飛んできたが今は主の周りを待っていた。



「その乗り物は貴様の意志で動くようだな」

「そうだ。動かすことができる」

このことを魔物に語ってみせた。

「今の様にな」

「そうか。便利なものだな」

彼はそれを見てまた言った。

「それは実にな」

「さて、それではだ」

その相棒を周りに回しながらさらに言う髑髏天使だった。

「どうする？また突き進んで来るのか」

「その通りだ。さて、その乗り物のことはわかった」

言いながら再び回転してきた。左から右に。また横であった。

「最早同じ手は受けない」

「体当たりをかわしてみせるか」

「そういうことだ。それではだ」

その激しい回転の中の言葉であった。

「行くぞ」

「今度はサイドカーは使わない」

見ればサイドカーは下に舞い降りていていた。その言葉は真実

であった。

「俺もな」

「同じ手は使わないということか」

「それもある」

その言葉は事実だというのであった。

## 第二十三話 異形その十九

「だが」

「だが？」

「それだけではない」

右手とそこに持つ剣だけを構えたうえでの言葉であった。

「それだけではな」

「その右手だけで俺を倒せるといふのか」

「貴様の弱点はわかった」

ここで髑髏天使は言った。

「最早貴様に敗れることはない」

「そうか。では見せてもらおう」

魔物は前に出ながら彼のその言葉を受けて述べた。

「貴様がどの様にして俺を倒すのかをな」

「いいだろう。見せてやる」

髑髏天使は構えたままだった。そのうえで言うのであった。

「俺の貴様の倒し方をな」

「行くぞ」

魔物の動きが本格のものになった。今突き進んできた。

その速さはこれまで以上だった。髑髏天使はそれを冷静に見ながら今。己の身体を緑に変えたのであった。

「主天使か」

「如何にも」

その通りだと答えてみせるのだった。

「この姿になりだ」

「主天使のことはもうわかってる」

魔物は相変わらず回転しつつ突進しながら述べてきた。

「土の力だな」

「その通りだ。ただ土だけではない」

髑髏天使は右のその剣を構えながら魔物に告げていく。

「それにまつわるもの全てを使えるのだ」

「そしてその力を使い、か」

「貴様を倒す」

一言であった。

「ここでな」

「面白い。それならば倒してみることだ」

魔物の突進はそのまま続いていた。

「この俺をな」

「今からそうしてやるう」

この言葉を出しながらであった。右手のその剣が変わった。刀身が今ダイアのそれに変わったのである。そうしてそのうえで。

突き進んで来るその魔物を見極めていた。その魔物に対して今。

「そこだな」

見極めた様な声と共に剣を突き出した。すると。

回転する魔物の動きが止まった。まるで何かに押し止められたかの如くに。

見れば額に髑髏天使の剣が刺さっていた。それにより動きが止められてしまったのである。ダイアの剣は見事なまでに深々と魔物に突き刺さっていた。

「うぐっ……」

「チエックメイトと言うべきだな」

髑髏天使はその動きを止めた魔物に対して告げてみせた。額からは血が出ていた。

「これで終わりだ」

「まさか。俺の動きを見切って」

「確かに回転していることにより見づらくはあった」

「それでもか」

「そつだ。俺は見切った」

声がこれまで以上に鋭いものになっていた。

「その結果だ。これはな」

「やるとは思っていたがな。これ程までとはな」

「俺の勝利だな」

髑髏天使は剣を抜いた。ダイアの剣はゆっくりと魔物から抜けていく。すると魔物の額からその赤黒い血が流れるのだった。

「貴様の急所が何処であれ脳をやられてはとうしようもあるまい」

「その通りだ」

魔物もそれを認めた。顔には既に死相が浮かんでいる。

「貴様の勝ちだ。俺はこのまま消える」

その言葉を言っているそばからだった。巨体が青白い炎に包まれていっていた。

そうしてその中で。魔物は髑髏天使を見据えながらさらに言うのであった。

「貴様はより強くなるだろう」

「より、だな」

「今は主天使だがさらに強くなる」

こう彼に告げるのであった。

「より、な」

「褒め言葉と考えていいのか？それは」

「褒め言葉ではない。事実だ」

それだというのである。

「今の俺の言葉はな」

「事実か」

「そしてどうなるかは貴様次第だ」

そのうえでこんなことも言うのであった。

## 第二十三話 異形その二十

「それからな」

「俺次第か」

「このことは言った」

炎に全身を包まれながらの言葉であった。今まさにその中に消えようとしている。

「それではな」

「さらばだ」

魔物に対して別れの言葉も告げた。

「消えるがいい」

魔物は今完全に青白い炎になった。髑髏天使はそれを見届ける。

そしてその中で再び呟いた。今度出した言葉はこれであった。

「俺次第か」

魔物の言葉を受けてである。彼はその言葉を心の中でも反芻していた。そうしてその中で次第に消えていく青白い炎を見送っていた。髑髏天使と大頭が闘っていた時。死神もまた宙を舞いつついつまでもんと闘っていた。魔物はその細長い身体を自由自在に舞わせていた。

そうしてそのうえで。死神の周りを舞い続けているのであった。

「仕掛けては来ないのか？」

死神は彼が何時までも仕掛けて来ないのを見てこう問うた。

「まさかとは思うがな」

「すぐにわかる」

魔物はこう彼に言葉を返す。しかし攻めては来ない。

「すぐにだ」

「すぐにか」

「貴様とそのまま渡り合うことはできない」

魔物は舞いながら死神を見据えつつ言うのだった。

「俺ではな」

「少なくとも貴様のその手足では私と渡り合うことは無理だな」  
「いつまでんの手足は短く小さいものだ。爪も鋭いがそれだけである。嘴だけで死神の鎌と渡り合えるかというところどう見ても無理な話であった。」

「それは自分でもわかっているのだな」

「最初からわかっていることだ」

「こう返す魔物であった。」

「それはな」

「そうか。最初からだ」

「だからこそだ」

「そのうえでという言葉であった。」

「こうしているのだ」

「蜘蛛が糸で獲物を絡め取っていくのならともかく」

「相変わらず己の周りを舞い続ける魔物に対しての言葉である。」

「そうして舞い続けて何の意味があるのだ」

「そろそろか」

「死神には応えていない言葉だった。」

「そろそろ効いてくるな」

「効く!？」

「そうだ。効いてくる」

「魔物は言ってきたのだった。」

「次第にな」

「効くか」

「貴様は確かに強い。しかしだ」

「しかし。何だというのだ?」

「それはあくまでその身体が万全ならばだ」

「そうならばだというのである。その言葉には明らかに何か深いものがあつた。」

「その場合にだ」

「それではだ」

死神は今の魔物の言葉から二段も三段も踏み込んで察したのだ。た。

「その私の身体を万全でなくする」

「そういうことだ」

「つまりだ」

言葉が続けていくのだった。その察したものを述べていき。

「貴様のその毛を撒き散らしていたのだな」

「そこまで察するか。流石に我等の同胞を数多く送っただけはあるな」

「簡単な話だ。意味もなく私の周りを飛ぶ筈もないからな」

そこから察したのだった。彼の読みはかなりのものだった。

「それならばだ」

「全ては察したか」

「そしてその毛にはだ」

死神はさらに己のその言葉を出していくのであった。そうしてそこにあるものは。

## 第二十三話 異形その二十一

「毒がある。そうだな」

「如何にも。それにも気付いたか」

「それも身体を麻痺させる。そういう毒か」

「俺の毛は人ならば触れただけで動けなくなってしまうだけの毒がある」

魔物からも言ってみせたのだった。言うその間も舞い続けそのうえで毛を死神の周りに撒き散らし続けているのであった。相も変わらず。

「それは神に対しても同じだ」

「そういうことだな」

「そこまで察したのは見事だと褒めておこつ」

死神の読みは賞賛してきた。

「しかしだ」

「だからといって私の身体はどうにもならないというのだな」

「如何にも」

今度の魔物の言葉は明らかに勝ち誇ったものであった。既に今の時点で勝利を確信している、だからこそ今の言葉であった。

「その通りだ」

「そしてそのうえで私に攻撃を仕掛けるのだな」

「これならば貴様を倒すことができる」

魔物は悠然とした笑みと共に述べてきたのだった。

「完全に」

「確かに」

死神はまず魔物のその言葉を受けた。

「それは可能だ」

「可能だというのか」

「しかしあくまで可能なだけだ」



「こう言うのであった。言葉は限定するものだった。

「可能な、な。倒せるわけではない」

「ほう。それではどうするのだ」

「確かに私の身体は徐々に動かなくなってきた」

「死神はそのことを自分から言ってみせたのだった。そのまま自然とだ。」

「しかしだ」

「しかし？」

「それだけで私を倒せるとは思わないことだな」

「こう言うのである。」

「私の身体を動けなくしたただけでな」

「動けなくなったら終わりではないのか」

「違うな。それだけではない」

「死神の声が強い者になった。そうしてだった。」

「見るのだ」

「むっ!？」

「私自身が体を動けなくともだ」

「影が出て来たのだった。そうしてそのうえで。」

「私の影のことは知っていたな」

「知っていたが」

「なら話はわかるな」

その影が今魔物に対して闘いを挑みだした。それは一つではなかった。無数の影達が襲い掛かってそのうえで攻撃を仕掛けてきたのだった。

「影で俺を倒すというのか」

「そうだ。こうしたやり方がある」

彼は言った。

「身体が動けなくともだ」

「ふむ」

魔物は己に向かって来るその影を見ながら静かに述べた。相変わ

らず宙を舞っている。

「確かに影は来た」

「その通りだが」

「だが貴様を倒せば影達は消える」

彼は言った。

「違うか」

「その通りだがどうしたのだ」

「貴様を倒す」

言いながらその身体を死神に向けてきたのだった。

「こうしてな」

今までよりも遥かに素早い動きだった。その速さで死神に突き進んできたのだった。

そのまま死神に突き進んで来る。何をしようとしているかは明白だった。

それを見て死神はすぐに判断した。己の影達をどうするか。影達をその突き進む魔物に向かわせる。どちらが先に倒すかだった。

「私は敗れはしない」

死神は途中で言った。

「それよりもだ。貴様を逆に倒す」

「俺をか」

「そうだ。こうしてだ」

言いながら魔物に影を向ける。だが魔物もそのまま突き進んで来るのだった。最早デッドヒートそのものになってした。

## 第二十三話 異形その二十一

魔物が勝つのか死神が勝つのかだった。今まさに魔物の嘴が死神に迫ろうとしていた。

「俺の勝ちだな」

「どうか」

今嘴が迫ろうとする中でも死神は冷静なままであった。

「そう上手くいくか」

「貴様の影は間に合わん」

影はようやくあと数歩のところだった。しかし嘴は今まさに胸を貫こうとしていたのだ。

そして死神自身は動くことがままならなくなってしまっている。

それでは勝負あった、魔物はだからこそこう告げることができたのである。

「貴様にとって無念だろうか」

「もう一度言うておく」

しかし死神はまだこう言うのであった。

「私の影は一つではない」

「それは先程聞いた」

「そしてだ」

魔物の返答をよそにさらに言うてみせていた。

「こうしたことできるのだ」

「こうしたこと?」

「見るのだ」

今の言葉と共にであった。突如として魔物の前にまた一つ影が現われたのであった。そうして。

その嘴を防いでしまった。影がそのまま楯となった。魔物にとっては思いも寄らぬことであった。

「何だっ!?!?」

驚いた魔物を今向かっていた影がその両手に持っている大鎌で切り裂いた。丁度首の後ろのところを切られそこから赤黒い血を噴き出したのであった。

明らかに致命傷であった。勝負は一瞬のうちに逆転しそのうえで決着がついた。魔物にとっては驚愕すると共に納得のできないものであった。

それで彼は。もう赤い炎にその身体を包まれながら己の目の前に浮かぶ死神に対して問うた。

「どうということだ」

「言った筈だ。影は一つではない」

彼の返答はここでも変わらなかった。

「だからだ」

「別の影を楯に使えるのか」

「影は攻めるだけではない」

死神は言葉を続けていく。

「守ることに使えるのだ」

「そうか。物理的にもか」

「これでわかったな。どうして私が貴様に勝てたのか」

「うむ」

赤い炎に徐々に包まれながら頷いた魔物だった。

「よくな」

「では。心置きなく逝くがいい」

その魔物を見据えての言葉である。

「あの世にな」

「影が幾つもあるのはわかっていたが」

魔物はその顔も赤い炎に包まれてきていた。全身もだ。しかしそれでも最後に言うのであった。

「それでも。今の使い方は俺も想像できなかった」

「相手の考え付かないことをする」

死神はまた言った。

「それが勝利への最短の道だ」

「そして貴様はそれをわかっていた」

「そういうことだ」

簡単に言ってしまうえばそういうことだった。まさにそれだけである。

「わかったな」

「わかった。ではもう思い残すことはない」

悔いはないということだった。潔いまでの言葉であった。

「敗れた理由がわかったのだからな」

「だからだというのか」

「理由がわからず敗れるのは無念だ」

魔物はそれは認められないというのだった。彼自身の中で。

「しかしわかればそれでいい。そして貴様は俺よりも技が上だった」

「私は神だ」

「このことも告げる死神であった。」

「神は敗れることはない。そういうことだ」

「そうだな。ではな」

遂に全身が赤い炎となった。嘴の先までがその中に消えてしまった。

「さらばだ」

最後にこう告げて消え去ったのであった。死神もまた今回の戦いにも何とか勝利を収めることができたのであった。

地面に降り立つとだった。まずは痺れて碌に動けない左手を己の胸にやった。そうしてその手を開いて何かを呟いたのであった。その言葉は。

少なくとも地上に残っている言葉ではなかった。非常に不可思議な発音でその言葉を出していた。暫くするとその左手の平から淡い緑の光が発せられた。その光が死神の全身を包み込みそれが消える。とそれで彼の身体は普通に動けるように戻ったのであった。

「魔術か」

「神の力だ」

丁度彼の前に来た牧村に対して述べる死神だった。

## 第二十三話 異形その二十三

「これはな」

「神の力は己自身も癒すことができるのだな」

「そういうことだ。そしてだ」

「そして？」

「それは天使も同じだ」

牧村に告げている言葉なのは言うまでもなかった。

「天使もな」

「俺はそうした力は使うことはできないのだがな」

「ではその左の腕は何だ」

「ここでこう彼に告げたのであった。」

「その左腕はだ」

「左腕だと？」

「魔物の攻撃を受けて使えなくなっていた筈だな」

「見ていたのか」

「見えたのだ」

「こう言いはする。しかし目に入ったことは間違いなかった。」

「それで少なくとも剣を握れないまでのダメージを受けたな」

「その通りだが」

「しかし今はどうだ」

その彼自身を見据えての言葉だった。

「貴様のその腕は」

「ふむ」

死神に言われてその左腕をしてみる。そのうえで動かしてみると  
だった。

「何ともないな」

「治っているのだ」

「そうだというのだった。」

「既にな」

「自然に治癒したというのか」

「元々髑髏天使にはそうした力が備わっている」

死神はここで彼にこのことを話した。

「そしてそれは階級が上がる毎に強くなっていく」

「それでだというのだな」

「そうだ。はつきり見えないものだがな」

「そういえばこれまでも何度も傷を負っていたが」

「戦えば傷を受ける。これは当然のことだった。それから避けることはまず不可能なことである。牧村自身が最もよくわかっている」とだった。

「俺はその中でか」

「そういうことになる。階級があがることになる」

「傷を癒す力も強くなっていたのか」

「とりわけ土の力はだ」

「先程彼がなったその主天使の力のことである。」

「それが一際強いものだ」

「一際か」

「土は全てを癒す」

「こう言う死神だった。」

「だからだ。その力を身に着ければだ」

「俺の身体も癒されていくのか」

「そういうことだ。わかったな」

「確かにな。では俺はそのことでも強くなったのだな」

「今まで彼が自覚していなかったことだ。だが今は実によく実感で  
きるものだった。その右手が癒され元通りに動けるようになってい  
たからである。」

「傷が迅速に癒されることでも」

「そういうことになる。そして」

「そして？」



「その癒しの力も人のものではない」

死神の言葉はここで変わった。

「それも覚えておくことだ」

「そうなのか」

「髑髏天使のものだ。それも覚えておくことだ」

「話は聞いた」

そう言われてもこう返すだけの牧村だった。

「髑髏天使としての力だな」

「貴様のものであってそれでいて貴様のものではない」

死神はその牧村を見ながら告げていた。

「それは覚えておくことだな」

「もう一度言おう。話は聞いた」

牧村の言葉は今も変わらなかった。

「一応はな」

「聞いていればそれでいい」

死神は牧村のその無愛想な言葉にも冷静だった。そうした態度に  
対して特に何も変えないということだった。その態度も表情も。

「いずれ蘇ってくるからだ」

「言葉がか」

「言葉は真実と共に蘇る」

死神の言葉には深いものを感じさせる何かがあった。

## 第二十三話 異形その二十四

「それは覚えておくことだ」

「その言葉も聞いた」

「それではだ」

ここまで話すとだった。姿を元のジーンズのものに戻しそのうえで牧村に背を向けた。

「今はこれで去ろう」

「また会うことになるな」

「貴様が本意であろうと不本意であろうとな」

「安心しろ。不本意とは思ってはいいない」

それについてはというのであった。

「特にな」

「何も思っていないのか」

「俺は俺の前に現われる魔物を倒す」

牧村は今はビルの屋上から離れようとしな。そこから見える無数のビル群を見詰めそのうえで死神に対して語るのだった。

「それだけだからな」

「貴様の態度も相変わらずだな」

「今の俺を変えるつもりはない」

何も隠さない言葉であった。

「何もな」

「私もまた同じだ」

背を向け出口に向かいながらの言葉だった。

「己を変えるつもりはない」

「貴様もなのだな」

「そして貴様に対してもだ」

こつも言つのであった。

「それは変わらない」

「そうか」

「そういうことだ。ではな」

ここまで言って姿を消した死神だった。一人になった牧村は暫く景色を眺め続けていた。しかしそれは突如として終わることになった。

急に胸ポケットに入れてあった携帯が鳴った。それに出るとだった。

「ああ、来期ね」

「お袋か」

「そうよ。ちょっと頼みたいことがあるんだけど」

電話の向こうからこう言ってきたのであった。

「いいかしら」

「頼みたいことか」

「実はね。お母さん買い忘れたものがあって」

一応は申し訳なさそうな調子である、しかし言うことはしっかりと息子に告げるのだった。

「それ、帰りに買って来て欲しいんだけど」

「何をだ？」

「ほづれん草よ」

それだというのである。

「ほづれん草。いいかしら」

「ほづれん草か」

「今夜はそれでおひたしを作るつもりなの」

その予定についても彼に話してきたのだった。

「だからね。お願いだから」

「わかった」

ここまで聞いたうえで頷いてみせたのだった。電話での声で。

「今から買って来る」

「御願いな。スーパーでも何処でもいいから」

「ほづれん草なら何でもいいのか」

「何でもってわけじゃないけれど」

一応こう言いはしてきた。

「そうね。新鮮な御願いね」

「新鮮なものをか」

「ほうれん草はそれに限るわ」

流石主婦であった。そうしたところもわかっているのである。

「だからね。それを選んできてね」

「わかった」

牧村も母のその言葉に対して頷いた。

「では今から買って来る」

「今日はお魚だから」

他のおかずについても話してきたのだった。

「それもあるからね」

「魚か」

「鯖焼くのよ」

しかも何かまで話してきた。鯖だというのである。

「あんた好きでしょ」

「ああ」

「そう思ってね。それにしたのよ」

「そうか。今日は鯖か」

「すだちも用意してあるから」

「すだちもか」

それを聞くと僅かだが牧村の声が上ずったものになった。

「それはまた」

「いいでしょ」

母の声が先だった。

「あんたすだちも好きだからね」

「ではほうれん草だな」

「そういうことよ。わかったわね」

また彼に対して言ってきたのだった。

「買って来てね」

「わかった」

こう話して電話を切る母だった。牧村はそれを受けて静かにその場を後にした。そうしてそのほうれん草を買いに行くのであった。

第二十三話

完

2009・10・2

## 第二十四話 妖異その一

髑髏天使

### 第二十四話 妖異

「あつ、今日はおひたしなの」

未久はテーブルに着くとまずこう言ったのだった。

「いいじゃない」

「あんた好きでしょ」

一緒に座る母がこう彼女に言ってきた。

「だからね。それにしたのよ」

「有り難う、お母さん」

「来期はバター炒めの方が好きだけれどね」

「そうだ」

ここで自分の好みを認める牧村だった。三人は今同じテーブルに座ってそのうえで夕食を食べようとしているのであった。その中での話である。

「ほうれん草ならな」

「私はこっちの方がいいわね」

未久はそのおひたしを見ながら述べた。

「やっぱり。ほうれん草ならね」

「そう思っただけにしたの」

「有り難うお母さん、けれど」

礼は言った。しかしそのうえで、少し困った顔でこうも言ったのであった。

「鯖は焼いたのね」

「食べれないってわけじゃないでしょ？」

「それはそうだけれど鯖っていったら」

「ここで彼女は言うのだった。

「やっぱり。煮た方がいいわ」

「そう言うと思ったわ。あんた煮魚が好きだからね」

「生姜も入れてね。それが一番いいじゃない」

まだ中学生だがその好みはかなり大人びていると言ってもいいようである。しかも生姜までというからそれは本物であると言えた。

「身体にもいいし」

「生姜はまた今度ね」

こう娘に答える母だった。

「それでいいでしょ？」

「ええ。それなら」

「それにしても未久は生姜が好きね」

「だって美味しいじゃない」

だからだというのである。理由としては妥当というよりはそれそのままでのものであった。

「だから」

「美味しいだけじゃないしね。身体にもいいしね」

「そうでしょ？だから食べたいのよ」

未久はそうした理由からも生姜を好きだと述べるのだった。

「生姜ね。無いなら仕方ないけれど」

「じゃあ早く食べなさい」

「うん」

母のその言葉に頷くのだった。

「それじゃあ」

「納豆もあるわよ」

「そうか」

「本当!?!」

今度は兄も妹も同時に声をあげたのであった。特に未久の声がうわずっていた。

「じゃあ早速出していい？」

「ここにあるから」

娘の言葉を受けてパツクの納豆を出してきたのであった。三段の

ものだった。

「はい、どうぞ」

「じゃあ一個貰うわね」

早速その納豆を一個貰う未久だった。自分から手を出して早速その中に持つ。

「来期もね」

「ああ」

彼も自分から手を出して受け取る。そのうえで三人で言うのだった。

「いただきます」

この言葉から夕食をはじめた。まずは味噌汁を飲む牧村だった。その味噌汁を飲んでまずは。こう言うのだった。

「昆布か」

「わかったわね」

「それに椎茸に。あとは鰹節か」

「そうよ。やっぱりわかるのね」

息子の言葉を聞いて満足した顔で微笑む母だった。

「今日のはちよっと凝ってみたのよ」

「何でなの？」

未久もまたその味噌汁を飲みながらそのうえで母に対して問う。

味噌汁の具は豆腐と薄揚、それと若布であった。標準的な味噌汁であった。

「また今日は」

「お父さんのことを考えてね」

今はここにいないこの家の大黒柱のことをであるというのだ。



## 第二十四話 妖異その二

「普段は鰹節と昆布だけでしょ、うちのダシは」  
「ええ」

未久はそのまま味噌汁を飲み続けながら母の言葉に頷く。

「そうよね、いつもは」  
「けれどお父さんはそこに椎茸も入れてるのが好きなのよ。だから  
ね」

「こづいふうにしたの」

「そういうことなのよ。それでどうかしら」

ここまで話してまた子供達に問うのだった。

「今日のお味噌汁は」

「美味しいな」

「いいと思うわ」

返答は彼女の期待に沿うものだった。

「どれもな」

「かなりいいじゃない」

「そう。それならいいわ」

彼等の言葉を受けてそのうえで微笑む母だった。

「美味しいのならね」

「何か今日かなり手間かけてない？」

未久は今度はその好物のほうれん草のひたしを食べながら母に問  
うた。

「どうしたの？一体」

「まあ何となくね」

「そうだと答える母だった。」

「そうしたかったから」

「気紛れだっていうの？」

「気紛れっていうんならそうなるわね」

そしてそれを否定しないのだった。

「やっぱりね」

「気紛れでの気配りなの」

「いつもはあれじゃない」

母はさらに未久に話してきた。

「家族の誰かの好みに合わせて作ってるわよね」

「っていうか大体お母さんの好み？」

未久はほうれん草を食べながら言った。

「夕食は」

「作ってる人間だから別にいいでしょ」

「まあそうだけれど」

こう言われるとだった。反論のしようがない言葉であった。

「それは」

「だからそれ位はいいじゃない」

「まあね。お母さん何でも食べるし」

「好き嫌いがいいことはいいいことよ」

今度はこんなことも言う母だった。

「そのおかげであんた達も色々なものが食べられるでしょ」

「まあそうだけれど」

「それによ」

母はさらに言うのだった。

「何でも食べるのが一番身体にいいのよ」

「それ昔から言うわね」

「その通りだからよ。偏食は身体によくないから」

それはまさにその通りであった。正論ではある。

「だからね」

「一応わかつたわ」

「未久もねえ。何でも食べたけれど」

言いながら娘を見て。ふう、と溜息をついたうえでまた言うのであった。

「背だけは大きくならなかったわね。あと胸も」

「いいじゃない、別に」

そう言われても特にどうということのない感じの未久だった。どうやらあまり気にはしていないらしい。

「背がなくても胸が小さくても」

「あんたはそれで満足なの」

「だって小柄な娘とか貧乳の娘が好きの人だって多いし」

これは事実である。好みは人それぞれということだ。

「だからね」

「それがわからないのよね」

しかし母は娘のその言葉を聞いて首を傾げるのだった。

「何でなのよ。背が小さくても胸がなくてもいいなんて」

「お母さんの時は違ったの？」

「背が高くて胸が大きくて」

未久ト正反対の話ではある。

「そうでなくちゃ駄目って思ってたわ」

「まあお母さんはどっちかっていうとそっち系ね」

少なくとも娘よりはずっと背が高く胸もある母である。もう中年だがそれでもその顔もスタイルも中々のものであるのは確かである。

## 第二十四話 妖異その三

「モデル的っていうか」

「そうよ。若い時っていうか子供の頃から牛乳必死に飲んでテニスもして」

「それでスタイルとか作ったの」

「あんたもスポーツしてるのに」

「体操部だけれどね」

「それが駄目なのよ」

今度は駄目出しであった。

「体操はね。背が伸びないのよ」

「そうなの」

「そうよ。だから止めたのに」

困った顔で娘に話すのだった。

「全く」

「別にいいじゃない」

しかし当の未久は一向に気にしていない顔であった。声も同じである。

「それは」

「いいっていうの？」

「そうよ。だから」

そしてまた母に対して言うのだった。

「別にそれでもてないとか人気ないってわけじゃないし」

「背も低くて胸もないのに」

「お母さんそこにこだわり過ぎよ」

「お母さんが若い頃はそうだったのよ」

「じゃああれ？金髪で胸の大きい人が人気だったの？」

未久は言った。所謂ブロード趣味である。この嗜好はかつてはかなりのものだった。当然今もあるが昔は今以上だったのである。

「やっぱり」

「そうよ。それこそね。アグネスⅡラムとかね」

「あの人は白人じゃないけれど」

「それでも人気だったのよ」

「こう娘に言い続ける。」

「榊原郁恵とか。他には宮崎美子とか河合奈保子とか」

「古くない？」

「そうかしら」

「実はこれには自覚がない母だった。」

「そんなに古いかしら」

「古いわよ。私が生まれる前じゃない」

「じゃあかとうれいこは」

「名前だけは知ってるけれど」

「未久の目がしかめられてきていた。」

「けれどね。実際にどれだけ凄かったかは知らないし」

「そうだったの」

「最近あれよ。グラビアだって胸が大きい人だけじゃないからだ」

「これはその通りであった。」

「胸が小さい人だって普通に大人気だし」

「世の中変わったのね」

「っていかお母さんがこだわり過ぎなんじゃないの？」

「身も蓋もない言葉であった。」

「お母さんがね。どうなのよ」

「そうかしら」

「そうよ。確かに私もダイエットには気をつけてるけれど」

「深田恭子ちゃんみたいになったらちよつとあれよ」

「フカキヨンも胸は大きいけれどね」

「これは本当のことである。深田恭子は胸は大きい。ホリプロのタレントは胸が大きい女の子が多いのが特色である。ただし一説にはただ太めが多いだけだと揶揄する者もいる。」

「ああいうのは駄目なの」

「ちよつと。太り過ぎじゃない？」

母もこのことを指摘するのだった。

「あの娘はね」

「まあ確かにね」

そしてそれは未久も否定しなかった。できなかったと言つてもいい。

「けれど私はしつかり運動もしてるし」

「背が伸びる運動したらよかつたのに」

「まあまあ」

この辺りはもう笑つて済ませるしかなかった。

「それはいいじゃない」

「全く。それでもてるのだからね」

「彼氏はまだいないけれどね」

「おかしな人に誘われたら駄目よ」

このことはしつかりと咎める。ようやく母親らしい言葉に戻れたのだった。

「わかつてるわね。それは」

「わかつてるわよ。襲い掛かつて来てもなのね」

「スタンガン渡してるし」

実に用意のいい話であった。

「それにお兄ちゃんもいるし」

「いつも送り迎えしてもらつてるしね」

にこりと笑つて向かい側に座つて黙々と食べている兄を見るのだった。

## 第二十四話 妖異その四

「それは感謝してるわ」

「そうか」

「ええ。とてもね」

その笑顔でまた兄に告げる。

「これからも御願いな、お兄ちゃん」

「わかった」

妹に対して静かに頷いて答えるのだった。

「それではな」

「そういうことだね。それでお母さん」

「今度は何なの？」

「デザートとかは」

「枇杷よ」

それだというのである。

「枇杷買っておいたから」

「そう。枇杷なの」

「これは皆好きでしょ？だからそれにしたのよ」

こう答えるのだった。

「枇杷にね」

「そうなの」

その通りだった。未久は枇杷と聞いてさらににこにことした。

本当に好きなのかわかる顔である。

「枇杷なのね」

「まずは御飯を全部食べてからよ」

「ええ」

「しっかり食べないとね」

これは絶対という口調だった。

「さもないとどうにもならないからね」

「そうそう。食べないと動けないしお勉強もできないしね」

「あんたよく食べるけれどね」

「育ち盛りだからよ」

その笑みで母にまた言葉を返す未久だった。

「だからなのよ」

「まあそれで背とかはもう言わないけれど」

いい加減疲れたのでその話は止めた。そのうえで今度は息子に対して顔を向けて言うのだった。

「あんたも最近さらに食べるようになったわね」

「そうだな」

「食べるのはいいことだけれどね」

それはよしとする母だった。

「けれど前の倍は食べてるわよね」

「そうよね」

未久も母の今の言葉に強く頷くのだった。

「間違いなくそれだけは食べてるわよね」

「二十歳になってからね」

そうなった時のこともはっきりと把握されているのだった。

「今みたいに食べるようになったのは」

「部活もはじめたしね」

未久はこのことにも言及した。

「そのせいよね。今みたいに食べるようになったのは」

「身体を動かしてそれで食べるのはいいことよ」

母もそれはいいというのだ。

「幾ら食べてもね。ただし」

「ただし？」

「バランスよく食べること」

このことを強く言ってきたのだった。

「身体にいいものをバランスよくたっぷりとね」

「バランスか」



「実際にバランスいいでしょ、今日のメニューも」

それについても話された。

「鯖にほうれん草によ。お味噌汁って」

「確かにな」

「納豆もあるし」

それもなのである。確かにバランスとしてはかなりいいと言えた。

「しっかり食べなさい。いいわね」

「そうさせてもらう」

「本当はお米も」

母は主食についても言及した。

「あれなのよね。白米よりも麦を入れたり玄米を入れた方がずっといいのよ」

「玄米!？」

未久は玄米と聞いて幼いながらも整っているその眉を顰めさせてきた。

「玄米なんか食べるの?」

「身体にいいのよ」

「けれどあれって美味しくないんじゃないの?」

眉を顰めさせたままの言葉だった。

## 第二十四話 妖異その五

「確か」

「確かに白米と味は違うわ」

あえてまずいと答えない母だった。ただし今彼女が食べているのは紛れもない白米である。この家も常に白米を食べているのである。

「それはね」

「あまり食べたくないわね」

未久はここでは見事なまでにその本音を語った。顔にまで出して

「麦ならともかく」

「麦御飯はいいのね」

「給食にも出るし」

未久の通っている中学校は給食である。そこで出るというのだ。

「あれ美味しいわよね」

「あの学校まだ麦御飯給食に出すのね」

「お母さんも通ってたし知ってると思うけれど」

「勿論よ」

知っているということだった。

「それはね」

「じゃあ麦御飯の味知ってるわよね」

「ええ。だからそれもいかしらって思ってたりするけれど」

経験からの言葉なのだった。

「玄米は無理でもね」

「私は別にいいけれど」

「そう。未久はいいのね」

まずは未久の言葉を聞いて頷くのだった。そしてそのうえで。

「来期はどうなの？」

「俺も別に構わない」

妹とは全く違つてぶつきらばうな返事だった。しかし答えることは答えていた。

「それでな」

「そう。だったらいいわね」

母もそれで納得するのだった。

「じゃあ気が向いたらするわね」

「気が向いたらなの」

「お母さんも麦御飯は好きだけれど炊くのが白米とまた違つから」

「あれ、ただ麦を入れるだけじゃないの？」

「雑穀が入るとまた違つよ」

このことを言うのだった。しかもわりかし強くである。

「味も違つし炊き方もね」

「味だけじゃないの」

「確かに栄養はあるけれどね。他にも色々入れると」

「じゃあ気が向いたらしてね」

未久もあまり強く言わなかった。わざとそう言うのを避けている感じであつた。

「その時にね」

「そうするわ。麦の他にも色々あるし」

「稗とか粟とか黍とか？」

「あと大豆もね」

そうしたものを入れた飯の話をする二人だった。栄養のことを考えれば確かにいいのは確かである。白米だけではどうしても限界があるからだ。

「そういうのも入れてね」

「いいじゃない。気が向いたら」

「あくまで気が向いたらね。けれどまあ」

母はここまで話してそのうえでまた言ってきた。

「栄養を考えてもいいし味を考えてもいいしね」

「いいこと尽くめよね」

「そうでしょ。特にあなたにはそうね」

また息子に顔を向ける。黙々と食べている我が子である。

「身体動かしてるからね。それもかなり」

「私もね」

未久もそこに入ろうとしてきた。そしてそれは成功した。

「だから余計にね。いいわね」

「お父さんにもいいんじゃないの？」

未久は今度は父を話に出したのだった。

「お父さんにも。健康の為に」

「そうね。お父さんもよね」

子供達とは違って言われて気付いたことだった。

「何だかんだで成人病とかが気になってくる歳だしね」

「お母さんはどうなの？」

「最近方が凝るわね」

それだというのである。

「身体も疲れやすいし」

「じゃあ雑穀の御飯やってみたら？」

今は白米を食べながらアドバイスする未久だった。

## 第二十四話 妖異その六

「身体の為にも」

「そうね。そうしようかしら」

母もそれに乗り気になるのだった。

「カレーの時なんかでも」

「カレーの御飯にそれなのね」

「それでカレーもね」

ルーについても言う母だった。

「お野菜色々入れて。あとお肉も」

「お肉は牛肉じゃないの？」

「スジ肉にしようかしら」

こんなことを言うのであった。

「それをじっくりと煮てね。それでね」

「スジ肉のカレーなのね」

「そう。それね」

「スジ肉も身体にいいの」

「そうよ。力士の人のカレーはそうなのよ」

そのスジ肉を使っているというのである。

「だからそれを考えてるけれど」

「スジ肉のカレーなのね」

未久はそれを聞いて暫し考える顔になった。牧村はその横で黙々と食べ続けているだけである。

「そうねえ」

「どうかしら」

「いいんじゃないの？」

今度もこう答える娘だった。

「それもね」

「いいと思うのね」

「面白そうだからね」

だからいいというのである。まずはそれだった。

「それにスジ肉も美味しいし」

「未久も本当に何でも食べるわね」

母と娘はお互いこう言い合いながらにこにことしていた。そのうえで話すのだった。

「それじゃあね」

「決まりでいいわね」

あらためて未久に対して問うのだった。

「今度のカレーはスジ肉でね」

「ええ、いいわ」

未久もそれでいいとした。話の流れは早いがそれでも決まったのは確かである。

「それじゃあそれでね」

「了解。それじゃあ」

「スジ肉のカレーもいいわね」

「来期はどう思うの？」

二人で話を決めてからそのうえで男衆に問う。この家でもそうした形がとられるのだった。

「スジ肉のカレーは」

「悪くない」

今度もこう答える牧村だった。やはり黙々と食べている最中だった。

「それでな」

「そう。じゃあこれで決まりね」

「俺は豚肉や鶏肉のカレーも好きだがな」

「勿論そうだったのも忘れないわよ」

当然と言わんばかりの母の返答だった。

「余裕があればシーフードカレーもね」

「ならいい」

「それで決まりね。じゃあ今度のカレーは」

「スジ肉のカレーね」

「力士風だね」

そんな話をして夕食の時を過ごすのだった。今は彼女達は平和だった。

この話は博士のところでもした。スジ肉のカレーと聞いてまず研究室の中にたむろしている妖怪達がそれぞれ興味深そうに言った。

「あれ美味しいよね」

「そうだよね」

「知っていたのか」

いつも通り壁にもたれかかっている姿勢で話を聞く牧村がその言葉聞いて述べた。

「スジ肉のカレーは」

「だから力士の人が食べるカレーだよね」

「それだよね」

「そうだ」

まさにそれだと答える牧村だった。

「それだ」

「それなら知ってるよ」

「何度も食べてるよ」

「ねえ」

「自分で作ったりしてね」

そうしたもの自分で作って食べるというのが。ある意味かなり器用である。

## 第二十四話 妖異その七

「お野菜も切って」

「それでじっくりと煮てね」

「じっくりか」

牧村は彼等の言葉を聞いてまた述べたのだった。

「じっくりと煮るのか」

「スジ肉は固いからね」

「よくアクを取りながらね」

アクの話もここで出されるのだった。

「それで食べるんだよ」

「じっくりと煮るんだ」

このことは念押しされるのであった。妖怪達のその口から。

「絶対にね。さもないと」

「とても食べられないよ」

「そういうものなのか」

彼等のその言葉を聞いて頷く牧村だった。

「じっくりと煮てか」

「スジ肉はどれもそうだけれどね」

「使う場合はね」

それはスジ肉ならばというのだった。

「じっくりと煮るんだ」

「そうじゃないとね」

「お袋はそれをわかってしているのか」

いないのか。そこが不安になった。するとだった。

「ああ、心配無用じゃ」

「あっ、博士」

「そうなんだ」

妖怪達は今度はそちらに顔を向けたのだった。博士の方にある。



「心配いらなの？」

「そうなの？」

「いらんいらん、スジ肉をカレーに使おうかって言っている時点でもう心配無用じゃよ」

博士はいつも通り顔を崩して笑いながら言っていた。その白髭だらけの顔をである。

「わかっておる証拠じゃ」

「わかっているのか」

「普通の人はそんなことはせん」

博士はこうも話すのだった。

「まずカレーに入れる肉といえはじゃ」

「カレー用の肉だな」

牧村はそれだとはつきり話したのだった。

「それだな」

「カレーにはカレー用の肉」

博士もまた言った。

「そう考えるのが自然じゃな」

「それをあえてスジ肉を使うというからだな」

「その通りじゃ。わかっておるからじゃ」

博士はまた話す。

「そうしたことを言うのもな」

「お袋はわかっているのか」

「いい御母堂じゃな」

今度は彼の母を褒める博士だった。

「そこまでわかっておられるとはのう」

「いや、お袋さんだけじゃないよ」

「妹さんもだよ」

ここで妖怪達は牧村の話から彼の妹である未久のことも言及するのだった。

「未久ちゃんだっけ」

「牧村さんの妹」

「そうだ」

牧村自身もそうだと話すのだった。

「それがあいつの名前だ」

「まだ中学生なのにわかかってるじゃない」

「スジ肉を使ったカレーみたいなものまで」

「妹さん料理とか上手いの？ひよっとして」

「それか食通とか」

「両方だな」

少し考えた顔になって答える牧村だった。

「作るのも上手だが味についても五月蠅い方だな」

「凄いね、中学生でそれって」

「見上げたものだよ」

妖怪達はあらためて彼の言葉を聞いて素直に賞賛の言葉を出した。

「そこまでねえ」

「本当にまだ中学生なのに」

「妹さんまで立派じゃとな」

博士はそれを聞いてまた感嘆するのだった。

「いや、君は果報者じゃな」

「果報者か、俺は」

「そう言わずして何じゃ」

牧村に対してこうまで話すのであった。

## 第二十四話 妖異その八

「人間として料理がわかっており人が側にいることはこのうえなく  
幸せなことじゃ」

「そうか」

「そうじゃよ。それではじゃ」

その幸せについてさらに話す博士であった。

「君はさらに幸せになる為になければならんことがある」

「何だ、それは」

「奥さんを貰うことじゃ」

それだというのである。

「いい奥さんをじゃ。当然料理上手なのう」

「そういう奥さんをか」

「左様。わしの様にじゃ」

ありげなく自分自身のおろけもその話の中に入れる博士であった。その八十年の間共にいるまさに糟糠の妻のことである。

「貰うことじゃな」

「もう二人もいるんだしね」

「あと一人じゃない」

「頑張ったら？」

妖怪達もここぞとばかりに話すのであった。

「是非ね」

「そうすれば牧村さんはかなり幸せになれるよ」

「わかった」

妖怪達のそのこオト場に静かに頷く牧村だった。そしてそのうえでこう言うのだった。

「そのうちにな」

「まあ今でなくてもよいがのう」

博士は今はいいいいというのだった。

「中には学生結婚する者もおるがじゃ」  
「俺はそれには興味がない」  
学生結婚について、ということである。  
「全くな」  
「そうか。ないのじゃない」  
「ない」  
「今度ははっきりと答えた牧村だった。  
「全くな」  
「わかった。まあ大学を出てから考えても遅くないことじゃ」  
「料理か」  
「料理を楽しむということとは人間の最高の喜びじゃぞ」  
「僕達もね」  
「その通りだよ」  
妖怪達もだと。彼等自身から言ってきたのだった。  
「魔物はそういうことしないからね」  
「それも全くな」  
「魔物は味あうことはしないのか」  
「ああ、それじゃがな」  
このことについては博士が言ってきたのだった。  
「わし等が食べるようなものは食べんということじゃよ」  
「そういうことか」  
「妖怪から魔物になればじゃ」  
博士の説明は続く。  
「舌も変わるのじゃ」  
「それで食べるものも変わるのか」  
「それこそ木の枝でも石でもじゃ」  
いきなりそういうものからであった。  
「無造作に何でも食べてじゃ」  
「無造作にか」  
「他には人間を食べる場合もある」

博士の言葉はここで不吉なものになった。

「人間をのう」

「そうか。人食いもいるのか」

「人だけでなく妖怪も食う」

それもあるのだと。博士は話した。

「つまりかつての同胞もじゃ」

「妖怪から魔物に分かれたからね」

「そうなるんだよね」

妖怪達も話してきたのだった。

「それで僕達も随分と困ったよ」

「かなりやられてきたしね」

「人やかつての同胞も食らうか」

「じゃから舌やそうしたもののが全く変わっていくのじゃよ」

博士が今話すのはそのことだった。

## 第二十四話 妖異その九

「全くのう」

「人や妖怪が食べるものを食べなくなっただか」

「それもまた魔物の特徴の一つなのじゃよ」

「そうなのか」

「ただしじゃ」

「ただし？」

「あちらはそれには全く気付いておらん」

博士は話したのだった。

「全くのう」

「そうそう、自覚ないんだよね」

「自分達じゃ全然ね」

また話す妖怪達だった。このことをだ。

「自分達の食べるものが変わってもね」

「全然気付かないんだよね」

「じゃから。妖怪と魔物はその食べるものからもわかる」

博士はまた話したのだった。

「どちらかがのう」

「それではだ」

牧村は博士の話をごここまで聞いてそのうえでその博士に対して問い返したのだった。

「人もまたそういうものを食べるようになればか」

「魔物となっていくのじゃ」

博士の返答は牧村が考えたままのものだった。まさにそっくりそのままだった。

「魔物にのう」

「人を食えばか」

「これは中国で言われていることじゃ」

また話に前置きしてきた博士だった。

「人を食えばその目が赤くなるのじゃ」

「目がか」

「人食いは大罪じゃ」

これはどの国でもおおむね同じである。確かに中国では人が人を食う話が歴史に多く残ってはいる。しかしそれが大罪であるのは当然のことなのだ。

「それを犯した者は目が赤くなるのじゃ」

「そうなるのか」

「左様、じゃからすぐわかるとされておるのじゃ」

「面白い話だな、それは」

「人は人を食うものではないということじゃよ」

言いながら少し遠い目になった博士だった。

「如何なる理由があるとしてのう」

「そういえば韓国だったか」

牧村もまた博士の話を聞いているうちにあることを思い出したのである。それは。

「強盗団だか何かだったか」

「強盗が人を殺したとか？」

「それで人も食ったとか？」

「そんな話だったな、確か」

妖怪達に応えながら述べた言葉だった。

「人の心をなくす為と言つてな」

「そのままじゃよ。人だけは食ってはならんのじゃよ」

博士の目はやはり遠くを見るものだった。それと共に非常に悲しいものを見る目だった。

「同胞ものう」

「僕達そんなことしないから」

「人間を食べたりしないよ」

このことを確かに言う妖怪達だった。

「何があってもね」

「絶対にだよ」

「それならばいいがな」

牧村も彼等の言葉を聞いてまずはいいとした。

「魔物ではないのだからな」

「それでさ、牧村さん」

「そういう相手いた？」

妖怪達はこう牧村に対して問うてきたのだった。

「目の赤い相手」

「人とか僕達を食べたみたいな相手」

「そういうのいた？これまでに」

「いや」

話を聞いてみて思い出してみた。しかしそうした相手はこれまでいなかった。思い出してみたがそうした手合いは一人もいないのだった。



## 第二十四話 妖異その十

「いなかったな」

「あれっ、いないの」

「そうなの」

「魔物にも魔神にもいなかった」

「それもどちらもだった。全くいなかったのである。  
全くな」

「ふむ。それはまた面白いのう」

博士はそれを聞いて呟く様にして述べたのだった。

「そういうのが一人もいなかったのか」

「それなり以上に相手をしてきたが一人もだ」

「魔物とはそういうものじゃがな」

人や同胞を食らうものだというのである。

「そうではないとはのう」

「ただ俺が今まで出遭っていないだけかも知れない」

こう仮説を立ててもみた。

「そうした魔物とはな」

「そうかも知れんのう」

博士もその可能性は否定しなかった。

「ひょっとしたらじゃがな」

「だからといってもどうかというわけでもないがな」

牧村の言葉はさばさばとしたものであった。

「別にな」

「まあそのうち会っじゃろう」

博士は言った。

「その時に考えておくことじゃ」

「そうさせてもらう。しかしのう」

「しかし？」

「君はどうなのじゃ？」

「俺か」

「そう。君じゃ」

牧村への言葉であった。

「君はそのまま人間でいてられるのかのう」

「俺は人間だ」

今更言うまでもないといった口調だった。

「それは変わらない」

「人間であればよいのじゃ」

博士はまた言った。

「しかし髑髏天使になってからの君は」

「何か変わったか」

「強くはなった」

それは認めるのだった。

「強くはのう。しかし心は変わってきたのではないかのう」

「あれっ、そう？」

「別に変わってないよね」

「ねえ」

妖怪達は彼等の話を聞いて首を傾げるのだった。それは納得して  
いないことの何よりの証であった。

「何もね」

「特にね」

「何処もおかしいことはさ」

「それだったらいいのじゃがな」

博士は妖怪達の言葉を聞いてそれならばというのだった。

「わしの気のせいだったらのう」

「そうだ。気のせいだ」

牧村はあえてそうしようとした。これは彼の心の中だけであり外  
には出さなかった。博士にも妖怪達にも己の心を見せようとしな  
かった。

「博士には悪い言葉だがな」

「よい。気のせいならばのう」

そして博士も彼のその言葉を受けてそう返したのだった。

「それでじゃ」

「それではだ」

壁から背を離す牧村だった。そのまま部屋を去ろうとする。

だがここでまた。妖怪達が言った。

「それで牧村さん」

「何か食べる？」

こう牧村に対して声をかけてきたのである。

「ケーキあるよ」

「どうなの？」

「石榴のケーキね」

それだというのである。今日のケーキは。そして時際に牧村にその石榴のケーキを出してきた。石榴の器用に種を取った紅いものを出してきたのだ。

## 第二十四話 妖異その十一

「どう？これ」

「食べる？」

「石榴のケーキか」

牧村はそのケーキを見て目を動かした。

「美味しいのか、それは」

「美味しいよ」

「珍しいしね」

そのケーキは差し出したままであった。その紅いケーキをである。

「だからどうかな、このケーキ」

「食べる？どうするの？」

「そうだな。貰おうか」

牧村も彼等のその言葉を受けて頷いたのだった。そうして実際にそのケーキを食べるとだった。確かに美味しいものであった。

石榴の甘酸っぱさがケーキによく出ていた。それがスポンジと絶妙に合わさりクリームとも合っていた。不思議なまでである。

「美味しいな」

「そう？よかった」

「これも山月堂のやつでね」

「またあの店なんだな」

最近牧村がよく食べるその店のものである。それで言葉に出した。

「石榴はケーキには難しいと思うが」

「そうだよ。普通に考えたらね」

「よくこんな味が出せるよ」

妖怪達もここでさらに話すのであった。

「石榴をただ使ってるだけじゃないよね」

「かなり工夫してるし」

「それが凄いよ」

「石榴のジュースは飲んだことがあるがな」

牧村はふとこんなことを言葉に出した。

「だが、それでもこれは」

「いいでしょ、本当に」

「美味しいよね」

「しかし。何故石榴なんだ」

牧村は食べたうえでこれが不思議なものに思っただった。

「石榴のケーキが」

「いや、たまたまだけけどね」

「今日お店に行ったらそこにあっただよ」

「こう話すのだった。」

「お店にね」

「何か試作メニューってことでね」

「試作か」

「ふむ。石榴じゃな」

ここでまた博士が口を開いたのだった。

「石榴とはまた奇妙な話じゃ」

「奇妙？」

そのケーキを食べながら博士の言葉に顔を向けた牧村だった。

「奇妙だというのか」

「石榴の味はあれじゃよ」

博士は石榴のその味の話をするのだった。

「人間の味がするとされておるがじゃ」

「そういえばそうだったな」

牧村も博士の今の言葉でそれを思い出したのだった。この話は仏教で鬼子母神の逸話として出て来るものである。実際は違うというがだ。

「それが出て来るとはのう。妙な話じゃ」

「そうか。人間の味が」

「あまりよくない質問じゃが」

博士はここでこう前置きをしてそれから述べた。

「美味しいのじゃな」

「美味しいな」

一言で答えたのだった。

「確かにな」

「そうか」

「しかしこれは人間じゃない」

牧村は言い切った。

「石榴だ。人間は石榴ではない」

「それはその通りじゃよ」「」

牧村に対して応える牧村だった。

「全く以つてのう」

「ではそれでいいな。石榴は石榴だ」

「やはりわしの考え過ぎか」

博士はあらためて首を捻る。その彼に対して妖怪達が茶化して明るく話してきた。

「だからいつも本読んでるからだよ」

「たまには外を歩いてね」

「歩いておるぞ」

しかし博士は彼等にこう反論するのだった。

「ちゃんとな」

「そうかな」

「つていつか歩けるの?」

冗談ではあるがこんなことを言う妖怪までいた。

「その歳で」

「百歳超えてるのに」

「百十歳だったっけ」

博士の詳しい歳は実際のところあやふやなところがあるようだ。その付き合いが長いという妖怪達ですらこんなことを言ってる。

## 第二十四話 妖異その十二

「それか百二十歳だったかな」

「どっちにしても凄い歳だよな」

「歳は関係ないのじゃ」

しかし博士は強引にそういうことにするのだった。

「別のう」

「関係ないってそんな訳ないじゃない」

「だよねえ」

妖怪達は当然ながら博士の今の言葉にそうですかと頷くことはなかった。

「だってさ。足腰だけじゃなく身体って」

「年齢と一緒に衰えていくし」

「そうそう」

人間ならば離れることのできない問題である。それは当然ながらこの博士にしても同じである。少なくともそうである筈の話である。

「それで歩けるの？」

「しかも十分に」

「満足に歩いておるぞ」

しかし博士はあくまでこう主張するのであった。ここでもである。

「しつかりとう」

「そんなになの」

「しつかりとって」

「一日一万歩は歩くようにしておる」

こんなことを言ってきた。

「ちゃんとな」

「一万歩って」

「それはまた」

妖怪達だけでなく牧村もそれを聞いて声をあげた。

「元気なものだな」

「だよねえ」

「歳を考えたら」

百歳を優に超えてそれである。確かに凄い話であった。妖怪達も牧村も驚くのに充分過ぎるまでの域に達していた話であった。

「その歳でそれだけ歩いたらね」

「何の問題もないよ」

「ってどうか凄いね」

妖怪達は今度は賞賛の言葉を出した。その博士に対して。

「一日一万歩って」

「漫画家とか小説家なんて殆ど歩かないのに」

「どんな仕事でも時間があれば歩いた方がいい」

博士はこう述べるのだった。

「少しでもな」

「運動になるってことか」

「それだよ」

「左様。身体を動かすのはいいことじゃ」

やはりそういうことだった。博士は身体を動かすことをよしとしているのである。伊達に百年以上生きているということではないよ  
うである。

「うちのかみさんももう連れ添って八十五年じゃったか？」

「結婚式とダイヤモンド婚いったね」

「そんなの滅多にないよ」

少なくともそうはある話ではない。金婚式ですら稀である。その  
うえ夫婦仲が睦まじいというのはさらにない話である。まさに奇跡  
である。

「何かお化けみたい」

「僕達が言うのも何だけれど」

「病氣一つしたことがないからのう。毎日動いておるおかげでじゃ」

「奥さんもか」



「左様」

ここでまた口を開いた牧村に対する返答であった。

「怪我はあったが病気は一つもしたことがないぞ」

「怪我はあるのか」

「何階か転んですりむいた」

それだというのであった。

「それだけじゃな」

「そうか。それだけか」

「ははは、運動は健康にいいのじゃよ」

言いながら博士もその石榴のケーキを食べていた。横からろく子が出したそれを食べているのである。そのケーキもまた紅いものだった。

「長生きの秘訣の一つじゃ」

「けれど百二十歳？だよな」

「そうだったかな」

やはり博士の詳しい年齢は今一つわからないところがある。

## 第二十四話 妖異その十三

「それでそこまで運動して食べてること自体がね」

「そもそも有り得ないし」

「よく動くからよく食べられるようになるのじゃ」

一つの行動がまた別のものを動かすということだった。

「だからいいのじゃよ」

「まあそれで健康になってるんだし」

「いいかな」

「だよな」

妖怪達はそれで納得することにした。そしてそのうえで、であった。

「それじゃあ牧村さん」

「もう一つあるけれど」

彼にまたその石榴のケーキを出しての言葉であった。

「どうかね」

「食べる？」

「そうだな」

彼もその妖怪達の言葉に頷いてみせたのだった。

「それでは貰うか」

「そうだよ。食べないとね」

「博士みたいに長生きできないからね」

「長生きの問題じゃない」

彼にとってはだった。違うというのである。

「エネルギーの為だ」

「ああ、身体動かしてだね」

「それで戦う為にだよな」

「そうだ」

まさにその為だった。それ以外の何でもなかった。

「エネルギーを貰う」

「そうは言っても味わってくれるしね」

「プレゼントする方にとっても有り難いよ」

「全く」

妖怪達はこうもそれぞれ言った。

「食べてくれるっていうこと自体がね」

「嬉しいんだよね」

「喜んで食べさせてもらっている」

彼等のその言葉に牧村も応える。

「明日食べられない可能性もあるのだからな」

「まあそれはね」

「否定できないものがあるけれど」

髑髏天使ならば。戦いの中にその身を置いているならばそれでも当然のことだった。それが牧村の住んでいる世界なのである。

「まあね。それでもだよ」

「食べたらいよいよね」

こう話していくのだった。それが終わってから牧村は大学を出てそのうえでキャンバスを出る。サイドカーでハイウェイに出た。そこで、であった。

目の前に出て来たのはあの黒人だった。サイドカーで進む彼の横にバイクで出て来た。漆黒のスーツに漆黒のヘルメットを被っている。一見すると顔はわからない。

しかしだった。彼はその声で教えてきたのである。自分が誰かを。

「暫く振りだな」

「貴様か」

「この時代は面白いものがあるな」

バイクのことを言うのである。

「これはバイクだったな」

「そうだ。バイクだ」

牧村は彼の方を見ない。正面を見たままの返答だった。

「これがバイクだ」

「歩くのもいいがこうして運転するのもいい」  
彼は言った。

「楽しいものがある」

「今貴様は楽しみの為だけにここにいるのか？」

牧村は正面を見たままた彼に声をかけた。

「そうなのか。違うのか」

「違うと思わない方がおかしい話だ」

黒人もまた正面を向いている。お互いを見ないままの言葉のやり取りが続けられる。

## 第二十四話 妖異その十四

「俺は魔神で貴様は髑髏天使なのだからな」

「そうだ。俺は髑髏天使だ」

「牧村はまた彼に言葉を返してみせた。」

「しかしだ」

「しかし？何だ」

「俺は今人間だ」

「こう言うのである。」

「今は人間だ」

「髑髏天使ではないというのか」

「そうだ。俺は牧村来期だ」

「彼だというのである。今は髑髏天使ではないと。」

「それは変身してからの話だ」

「そうか。では変身するのだな」

「そうさせてもらおう。ただしだ」

「魔物が出て来てからだな」

「連れて来ているな」

「やはり魔神を見ようとしな。そのうえでの言葉であった。」

「今もまた」

「いや」

「そうではないというのだった。」

「今はいない」

「いないというのか」

「そうだ。連れて来ていない」

「こう言うのであった。」

「今ここにはな」

「ではここには楽しみの為に来たのか」

「連れて来る必要はないからだ」

「ないというのか」

「そうだ。ない」

はつきりとした返答だった。そうして。

速度を速めてきたのである。いきなりだった。

「どういっつもりだ？」

「来るのだ」

それは誘いだった。彼に対する。

「俺の後にな。横でもいい」

「では横にいさせてもらおう」

そうするといっつもりだった。横だと。

「貴様のな」

「いいことだ。負けないつもりか」

「貴様が俺と闘うならばだ」

顔を見ないのは同じだ。そのうえでの言葉なのは変わらない。

「そうさせてもらう」

「俺ではなく魔物であつてもだな」

「その通りだ。早く魔物の場所に案内することだ」

彼等の左右は車が次々に見える。しかし二人はその車達をそれぞれその速度と絶妙なカーリングによってかわしそのうえで話をして  
いるのだった。

「早くな」

「焦ることはない。速度を速めたはだ」

しかしここで魔神が言った。

「貴様を案内する為ではない。場所に急ぐ為にな」

「では何の為だ？」

「貴様の心を見る為だ」

「俺のか」

「その通りだ。闘う気に満ちている」

自身の横に位置しようとした彼を見ての言葉である。言いながら  
二人は左右に別れて前のトラックをかわす。神一重でかわしてみせ

たのだった。

「ならばあの者を出そう」

「出すというのか」

「そうだ。出るのだ」

「はい」

彼の言葉を受けてだった。その魔物が姿を現わしたのであった。

豹の頭に魔神と同じスーツを来たバイクに乗る男。その魔物が出て来たのである。

「逆さ男様、ここに」

「ムングワという」

黒人が牧村に告げてきた。

「この者の名はな」

「ムングワか」

「かつては人を食らっていた」

このことも語ってみせたのだった。

「しかし今はだ」

「そうではないというのか」

「別に人を食わずとも生きてはいけるのだ」

それができるといっているのである。

## 第二十四話 妖異その十五

「そしてだ。今は貴様を食らうことがこの者の望みだ」  
「俺をだな」

「そうだ。この者は貴様を食らうことを望んでいる」

やはり牧村に顔を向けることはない。声だけをかけるのだった。

「他ならぬ貴様をな」

「俺をか」

「逆さ男様の仰る通りだ」

魔物は彼に顔を向けてきた。その顔は豹を思わせる。

しかしその目が違っていた。赤いのだ。赤いその目を彼に向けてそのうえで言ってきたのだった。そうしてまた言うのであった。

「俺の望みは貴様を食らうことだ」

「わかった。それではだ」

「この男と闘うか」

黒人はまた牧村に対して問うてきた。

「どうするのだ」

「いいだろう」

牧村は彼のその言葉を受けて述べた。

「闘おう。それでいいな」

「よし、それではだ」

頷こうとした。しかしであった。

「やっと見つけたよ」

ここで目の前の乗用車の上に子供がいた。あの子供である。

「逆さ男も髑髏天使もここにいたんだ」

「貴様も来たのか」

「そうだよ。面白そうだからね」

子供は黒人の問いに無邪気な、子供の笑みを浮かべて答えた。

「来たんだけれど」



「だが髑髏天使の相手は決まった」

黒人はこのことを彼に告げた。

「それはわかるな」

「わかるけれど相手は一人じゃないじゃない」

「こつ言うのである。」

「そうでしょう。それは」

「あの男も来ているのか」

牧村は子供の言葉を受けてすぐにそのことを察したのだった。

「そうなのか」

「そうだ」

するとだった。バイクがもう一台来た。それはあのハーレーダビツトソンであった。そうしてそこに乗っているのもやはり彼であった。

「私も来た」

「鬪いに誘われてか」

「死者の匂いを嗅ぎつけてだ」

だからだと自分で言うのであった。

「だからここに来たのだ」

「そうか。死者のか」

「正確に言えばこれから死ぬ者だ」

それだというのである。

「その臭いを感じてだ」

「それは誰かな」

「貴様と言いたい」

死神は子供を見て述べてみせた。

「残念だがそうはならない」

「神は死なないからね」

「それは貴様の下にいる者だ」

それだというのであった。

「もう連れて来ているな。早く出すことだ」

「いることはいるよ」

それは子供も認めることであつた。

「ただ。随分とやる気なんだね」

「私が今度魂を送るのは貴様のその下にいる者だ」

まさにそれだというのであつた。

「だからだ。早く出すことだ」

「別に急がなくてもいいじゃない」

子供はここでも余裕を見せていた。

「すぐに闘うんだしさ」

「確かに焦る必要はない」

死神は子供のその言葉に返した。

「しかしだ。私もまたこれが仕事だ」

「だから出せつていうんだね」

「そうだ。何処にいるのだその魔物は」

「ジャガーマン」

子供はふと言つた。

「出て来て。出番だよ」

「はい」

その言葉と共にであつた。前の車の天井から天井にびよんびよんと跳ねて来た者がいた。それは豹の顔に白いティーシャツと青いジーンズを着た男であつた。その手はまさにジャガーのものであつた。

## 第二十四話 妖異その十六

「クマゾツツ様、ここに」

彼の後ろに來ての言葉であつた。

「参上致しました」

「よく來たね。それでだけれど」

「戦いですね」

「相手はもういるよ」

「このことも彼に話すのだった。」

「楽しんでね」

「有り難き御言葉」

魔物は子供のその言葉に恭しく返したのであつた。

「では甘えまして」

「期待しているよ。さて、これでいいかな」

「いいだろう」

死神はその子供に顔を向けて応えた。

「戦わせてもらう」

「決まりだな」

「そうだね」

彼の言葉を受けて黒人と魔物が顔を見合せて言い合った。

「それではだ。我々はだ」

「これで帰らせてもらうよ」

「見ないのか」

「今はそんな気分じゃないからね」

「俺も同じだ」

「こつ牧村に返すのだった。だからだという。」

「それじゃあまた」

「また会うことになる」

それぞれ告げて姿を消すのであつた。

後に残ったのは牧村と死神、そして魔物達だった。周囲は運転に気を取られているのか魔物達には気付かない。少なくとも車の上にいるその魔物には全くであった。

「それではだ。ここでは人目につくか」

「いや、その心配はない」

死神が牧村に対して述べたのだった。

「それには及ばぬ」

「何故だ？人がわからないとでもいうのか？」

「今回の勝負は一瞬で決まる」

死神はこう述べたのだった。

「だからだ」

「変身してすぐにか」

「後は敗者が消える」

死神の声の響きは冷徹でさえあった。

「それだけだからだ」

「わかった。では俺も一瞬で終わらせよう」

牧村は死神のその言葉を受けて静かに応えた。

「その方が後腐れがなくていい」

「面白いな」

二人のその会話にバイクに乗る魔物が乗ってきた。やはりその顔は獣のものである。

「俺もそれに乗ろう」

「一瞬での戦いにか」

「戦いとは本来そうあるべきだ」

魔物はこう言うのであった。

「一瞬で終わらせる。奇麗にな」

「奇麗にか」

「狩りと同じだ」

魔物は言った。

「獲物の狩りも一瞬で終わる。だからこそだ」

「俺を一瞬で倒すというのだな」

「そのうえで食ってやるう」

その赤い目が光った。禍々しく餓えた目であった。

「貴様をな」

「いいだろう。それは俺が敗れた場合だな」

「如何にも」

「敗ればどのみち死ぬのが戦いだ」

それが髑髏天使の戦いだった。魔物との戦いだった。この考えはこれまでの幾多の戦いで備わったものである。それだけのものがあるのだ。

「それならばだ」

「潔いと言うべきか」

「執着しないだけだ」

それだと返すのだった。

「ただ。それだけだ」

「そうか。それならそれでいい」

別に構わないといった口調の魔物であった。

「では戦うとしよう」

「わかった」

牧村は戦いに入る。そうして変身に入っていく。死神もまた同じであった。ハーレーの上から車の上に仁王立ちになっているジャガーの魔物に対して問うのだった。

## 第二十四話 妖異その十七

「貴様の名前はだ」

「わしの名前か」

「そうだ。何というのだ」

その名を問うたのである。

「魔物ならば必ず名前がある筈だな」

「そうだ。わしにも名前がある」

「では言うのだ」

その名前は、というのだった。

「貴様の名前は何というのだ」

「そのままだ」

まずはこう述べてきたのであった。

「ジャガーだ」

「ジャガーか」

「またの名をジャガーマンという」

まさにそのままであった。彼を表す以外の何者でもない名前であった。

「それがわしの名前だ」

「マニトーの類ではなくか」

「もう一つの名をチヨンチヨニーともいう  
するとまた名乗ってきたのであった。

「もう一つの姿の名ではあるがな」

「あの赤い翼を生やした魔物だな」

「それがわしのもう一つの姿」

魔物は述べてみせてきた。

「今こうして出している姿とはまた別のな」

「わかった。それが貴様のもう一つの姿か」

「だが今はこの姿で戦う」

今は、というのである。

「そういうことだ」

「わかった。ならばそれでいい」

それで戦うというのであった。

「それでな」

「では貴様も戦う姿になるのだな」

「如何にも」

一言で返してみせた死神であった。

「では。私の変身する姿を見せよう」

「来い」<sup>6</sup>

こうしてだった。死神はバイクから跳んだ。そうして空中でその右手を己の胸の前に置いた。するとその手から放たれた白い光が彼の全身を包み込んだ。

そうして白い服に身を包んだ姿で現われた。その両手にはもう大鎌がある。それを手にその魔物、ジャガーマンともチヨンチヨニともいう魔物に突き進むのだった。

「覚悟はいいな」

「既にできている」

魔物も言いながらその爪と牙を露わにさせて死神に向かって跳んだ。

「これでな」

「一瞬だ」

言いながら突き進むのだった。そうして牧村とムングワもまた、であった。

「それではだ」

「我々もはじめるとしよう」

二人はそれぞれのバイクで並行していた。そのうえで言葉を交えさせている。

お互いに殺気を放っている。それはまさに刺さんばかりである。

「変身するのだ」

「変身の時間は与えてくれるのだな」

「そうだ」

まさにそうするといつのである。

「そうしてだ。来い」

「よし、それではだ」

牧村はサイドカーのハンドルからその両手を放した。そうしてであつた。

両手を拳にしてそのうえで胸の前で打ち合わせる。そこから眩い青白い光が発せられ。それが彼の全身を包んでそのうえで異形の髑體の天使になつたのだつた。

「行くぞ」

その右手を前に出してそのうえで握ってみせる。それが合図となつた。

髑體天使はすぐに主天使になつた。その両手に剣を持っている。

ムングワは跳んだ。それもバイクごとだ。

「跳んだか」

「言つた筈だ。一瞬で決めるとな」

言いながらであつた。その高々と舞うバイクの上からまだ地上を駆る髑體天使に対して告げるのだつた。その赤い目で見据えながら。

「そつな」

「そうだったな。それではな」

「行くぞ」

その言葉と共にであつた。髑體天使は今そのサイドカーを空に駆つた。まさにその急上昇による攻撃で一気に倒すつもりであつた。



## 第二十四話 妖異その十八

その両手に持っている剣で一氣に振ってそのうえで斬った。一瞬だった。

影と影が交差した。そうしてお互いに着地した時。魔物はその身体から青白い炎を出してそのうえで今まさに倒れようとしていた。

「見事だと言っておこう」

「見事か」

「負けた。こうしてな」

「それを認めるのだな」

「この炎が何よりの証拠だ」

今己の全身に沸き起こるその炎を見据えての言葉であった。

「無念だがそれは認める」

「大人しくか」

「その通りだ。では死のう」

死も受け入れていた。やはり平然としている。

「これでな」

「さらばだ」

「貴様を食いたかったものだがな」

「それでわかった」

「わかった？」

「そつだ。わかったのだ」

それでわかったと。告げる髑髏天使であった。

「貴様の目は俺の喉笛を見ていたからだ」

「その通りだがそこからわかったのか」

「貴様が狙う場所がわかった。その赤い目の視線からな」

何処を攻めてくるのかわかれば、ということだった。髑髏天使が言うのはそういうことだった。

「わかればどうということはない」

「それか」

「これでわかったな」

「よくな。仇になったか」

炎が全身を覆っていく。その中で自嘲めかして述べた言葉であった。

「俺の人の肉を好むこの習性が」

「そうだったな。では死ぬのだ」

「うむ」

こつ言葉を交えさせてであった。魔物は死んだ。髑髏天使はそれを見送るだけであった。

死神とチヨンチヨニーの闘いも同じであった。やはり一瞬であった。

着地した死神は己のバイクの上に立っている。そうして別の車の上に着地したその魔物を肩越しに見て問うてみせたのである。

「終わったな」

「まさか。わしがこつも簡単にはな」

「まさに一瞬だった」

死神は言った。

「貴様もまた私を食らうつもりだったか」

「わしは人を食う趣味はない」

それは否定する魔物であった。彼はそうではないというのだ。

「ムングワとはまた違う」

「そうか」

「まさか首を一閃されるとはな」

首筋に赤黒い血筋が生じている。そこを斬られたのは明らかであった。

「そしていい切れ味だ」

「私の大鎌に切れないものはない」

死神は静かに述べてみせた。

「そう、命でも何でもな」

「そしてわしの命を刈ったのだな」

「そういうことになる。それではだ」

「うむ、さらばだ」

この魔物は赤い炎に包まれた。これで終わりであった。

闘いが終わり髑髏天使は牧村に戻った。死神は何処かにと去った。勝負はまさに一瞬でありそれを見た者は見間違いにしか思えないものであった。

それが終わるとだった。牧村は家に帰って休んだ。そうしてであった。

次の日学校に出た。そうして教室で講義の用意をしているその時だった。

彼の周りに同じ科の仲間達が来て。声をかけてきたのだった。

「よお」

「何か暗いな」

「そうか」

いつも通りの無愛想な様子で彼等に応える牧村だった。静かに己の鞆から教科書とノート、それに筆箱を出してそのうえで応えている。

「いつもと変わらないがな」

「まあそうかもな」

「いつも通り無愛想だな」

「だよな」

彼の言葉を聞いて笑って返す仲間達だった。そうしてそのうえでまた話すのだった。

## 第二十四話 妖異その十九

「それでテキストあるか？」

「あれだろ？前の講義で教授が言ってたな」

「あれだよな」

「これか」

牧村は彼等の言葉を聞きながらある本を出してきた。やたらと分厚くそのうえかなり難しい言葉がその中に満ちている。そんな本であつた。

「ええと、現代における考古学の実態か」

「何か見ただけで難しそうだよな」

「全くだよ」

仲間達は牧村の出したその本を彼の周りに集まって覗きながら述べた。

「こんな本よく持ってたな」

「五千円もするしな」

「高過ぎだろ、これ」

その辞書に匹敵する分厚さの本のカバーも見ての言葉である。そこには消費税を抜いてそのうえで五千円と書かれているのである。

「こんな本買ったのか？」

「それにしちや新しいよな」

「借りたのかよ」

「そうだ。借りた」

まさにそうしたと答える牧村だった。

「大和田教授からな」

「ああ、悪魔博士か」

「あの人からか」

「そうだ、あの教授からだ」

借りたと。事実をそのまま述べたのであつた。

「借りた」

「あの博士そんな本も持ってたのかよ」

「何でも持ってるんだな、あの人」

「この本どころじゃないんだらうな」

彼等も博士のことはよく知っていた。ただしあまりいい意味ではない。博士はこの八条大学においても屈指の奇人として有名なのである。

「それこそネクロノミコンとかあってもな」

「ああ、全然おかしくないよな」

「あの研究室の本棚幾つあるんだらうな」

「その中であつた一冊だ」

それだというのである。

「これはな」

「それで内容だけれどよ」

「何て書いてあるんだよ、これ」

「意味わかんねえよ」

仲間達はここで一斉に眉を顰めさせた。彼等にとってその本に書

かれている内容は全く意味不明な複雑怪奇なものであつた。

「ええと、現代はわかるな」

「何だよコペルニクスって」

「何でそんなのが考古学に出て来るんだ？」

「マルクスまで出るしよ」

「マルクス史観か？」

「何かそれっぽいな」

目を顰めさせ次々に言うのであつた。

「何かそれが考古学を歪めたのか」

「ここでコペルニクス的変換をか」

「そう書いてあるんだな」

とりあえず何を書いているかはわかつたのだった。

「しかしそれにしても」

「わかりにくい文章だな」

「一体何が言いたいんだよ、これ」

「悪文だな」

本を開いている牧村の言葉であった。

「明らかに」

「だよな。読みにくいぜこれ」

「抽象的！？もつと違うだろ」

「専門用語もいじくってるしよ」

だからわからないというのであった。とにかく彼等はその文章が何を書いてあるのか何を言いたいのか全く理解出来なかった。

「小林秀雄だったら知識があつたらな」

「ああ、あれはわかるよな」

「だよな」

小林秀雄は読むにあたって事前に相当な教養を必要とする。しかし今彼等が読んでいるそれはそういったものではなかったのである。

「ちゃんとな」

「けれどこりゃもつ」

「全然わかんねえな」

そしてだった。ここである思想家の名前が出て来るのだった。

## 第二十四話 妖異その二十

「吉本かよ」

「吉本っていうと吉本隆明か？」

「あいつか？」

「そうだよ、あいつだよ」

俗に『戦後最大の思想家』と言われている人物である。

「あいつの昔の文章みたいだな」

「ああ、あの何書いてるのかさっぱりわからない奴か」

「麻原賛美していたあの馬鹿だな」

これが彼等の吉本隆明への評価であった。この男がオウム真理教というテロ組織、そして麻原という邪悪な俗物を賛美していたことは紛れもない事実である。

「あの阿呆の文章みたいだっていうんだな」

「っていうか似てるだろ」

「そうだよな」

「わからないこと書いてるだけだからな」

彼等はこう酷評するのだった。

「誰でもわかるように書かないと駄目だろ」

「全くだよ」

「しかしな」

そうしてこうした考えに至るのであった。

「何でこんなテキストなんだろうな」

「さあな」

「それもわからねえよな」

皆今度はこう言い合うのだった。

「しかもこれ文学の講義だろ？」

「考古学ってわけじゃねえしな」

「だよなあ」

「はじまってからわかることかもな」

ここで牧村が言った。

「それかも知れないな」

「はじまってから？」

「それからだよ」

「そうだ。それではだ」

「ああ」

「そろそろ先生来るな」

「講義を受ける」

牧村は今度は一言だった。

「いいな。それではだ」

「そうだな。何はともあれだよな」

「それからだな」

こうして彼等はその講義を受けるのだった。面白いことにこのテキストは悪文のサンプルとして扱われた。そういうことであった。それが終わってからだった。彼等は学園の喫茶店に集まって。そのテキストの話であらためて話すのであった。今度は笑い話としてだった。

「しかしまあ」

「そういう理由だったか」

「悪文か」

「確かにそうだよな」

「だよなあ」

牧村以外のメンバーが口々に話していくのだった。

「この文章、わからないからな」

「わかっていう方が無理だからな」

「全くだぜ」

「こう話していく。そうしてであった。」

「でよ、牧村よ」

「そのテキストどうするんだ？」



「講義終わったけれどよ」

「返す」

牧村は友人達の問いに一言で返したのだった。

「博士に返す」

「まあそうだよな」

「持っけていても仕方ないしな」

「だよな」

皆も彼の今の言葉に納得した顔になって頷いた。

## 第二十四話 妖異その二十一

「こんな訳わからねえ本持ってたもな」

「しかし。あの博士」

「よくこんな本持ってたな」

「しかもわかるのかね、やっぱり」

「そうじゃねえの？」

こう話されていくのだった。

「あの博士確かに奇人変人だけれどな」

「何年生きてるかわからねえけれどな」

「学識あるのは間違いないしな」

それは確かだった。博士の学識はそれこそ世界屈指である。伊達に多くの博士号を持っているわけでも百年以上生きているわけでもないのである。

「ぼけてもないしな」

「っていうか鋭いしな」

しかも頭の方は全く老いてはいないのだった。

「じゃあ読めるか」

「こんな本もな」

「いや、それでも難しいと言っていた」

ここでまた述べてきた牧村だった。

「博士でもだ。この本はだ」

「そうか。難しいか」

「まあそうだろうな」

「わかりにくく書いているようにしか見えないからな」

「だよな」

日本の知識人は最近までそうした何を書いているのか何が言いたのか理解するのが実に困難なものを有り難がる傾向があった。その為その吉本隆明にしる大江健三郎にしる敬われたのである。だが

それが正しいか、誠に敬うべきかというところとは限らないのである。

「こんなの読んでもな」

「どうにもならないからな」

「だから返すんだな」

「そうだ。俺にとっては読む価値のないものだ」

こうまで言い切る牧村だった。

「だから返す」

「よし、じゃあそれは返して」

「とりあえずコーヒーでも飲もうぜ」

「何飲む？」

無意味な本の話はこれで終わってそのうえでコーヒーという意義のあるものについての話になった。確かにこちらの方が意味のあるものである。

「俺はアメリカンにするか」

「俺はカプチーノな」

「牧村、御前は？」

「何にするんだ？」

「ウインナーにするか」

彼はそれだというのだった。

「ウインナーがいい。コーヒーならな」

「ああ、御前そういえば紅茶派だったな」

「それでも最近飲むんだな」

「少し舌が変わったか」

自分でこんなことを言う牧村だった。

「コーヒーも飲むようになってきたか。いや、前からか」

「味には五月蠅いよな」

「そうだな」

そのうえでこのことも話された。

「特に甘いものにな」

「だからウインナーか」

「それか」

「いいものだ」

そのウインナーコーヒーに対する言葉である。

「飲んでいればそれだけで落ち着く」

「またそれはかなりだよな」

「そうだよな」

皆今の彼の言葉を聞いてまた言ったのだった。

「コーヒーとか紅茶いつも飲んでるしな」

「まあ美味しいしな」

「癖になるんだよな」

「だよなあ」

それが茶やコーヒーである。それはカフェインのせいであるがそれ以上にその味が人々に愛されているからに他ならないのである。

「じゃあそれを飲んで」

「あんな本のごとは忘れるか」

「だよな」

今はこう話をして楽しく過ごす彼等だった。そして牧村も。そのウインナーコーヒーを飲みながら今は普通の学生として時間を過ごすのだった。

## 第二十四話

完

2009・10・17

## 第二十五話 魔竜その一

髑髏天使 第二十五話

魔竜

その闘いは一瞬で終わった。しかしその後の話はそうはいかなかった。

牧村はまた博士の研究室にいた。そこでその闘いのことを話すのだった。

「ふむ、やはり出て来たか」

「ああ」

「その人を食らう魔物がのう」

いつもの様に壁にもたれかかって立っている牧村と話をする博士だった。そしてその周りにはこれまたいつも通り妖怪達がたむろして遊んだり飲み食いをしたりしている。

中には将棋をしている者達もいる。かなりくつろいでいる。

「よし、王手だ」

「何のっ」

その将棋のやり取りの声を聞きながらであった。博士と牧村は話をしていた。

「ムングワといった」

「ムングワか」

「知っているのか」

「タンザニアにおった魔物じゃな」

それだと述べる博士だった。

「二十世紀の前期に出て人を殺しておった。何か豹みたいな姿をしておつたらしいがのう」

「豹か。そうだな」

魔物のその顔を思い出したうえで述べる牧村だった。

「あれはそうした顔だったな」

「それにチヨンチヨニーじゃったか」

「死神が闘った魔物はな」

「ジャガーの姿をしておったのじゃな」

そのことはもう牧村から聞いている博士であった。

「それもじゃ。人を食うのじゃよ」

「あの魔物もか」

「そうじゃ。どちらもな」

両方共だったというのである。

「人を食らう魔物だったのじゃよ」

「その目は確かに赤かったな」

「それが何よりの証拠じゃよ」

目がまさに証だというのである。

「目がのう」

「目がか」

「前に言った通りじゃ。人を食らう魔物は目が赤い」

博士はここでもそのことを牧村に対して話した。

「そしてそれは人も同じなのじゃよ」

「人が人を食うのか」

「知っておるじゃよ」

このことを話してからまた問い返してみせてきた。

「このことはじゃ。知っておるじゃろ」

「中国、そして欧州でか」

「歴史を探せば結構ある話じゃ」

博士はこうまで語った。そうした話はよくあるのだと。

「例えばじゃ。唐代末期のじゃ」

「黄巢の乱か」

中国の長い歴史においても最大の叛乱である。塩の密売商人、所謂塩賊である黄巢が起こした叛乱であり唐王朝に完全に止めをさしてしまったものである。

「あれで人を食った話があったな」

「それこそ部隊単位でじゃ。恐ろしいことになったのじゃ」

「それもそのうちの一つか」

「あとは十字軍もじゃな」

この時もかなり食べられているのである。十字軍の兵士達がイスラム教徒を殺しそのうえでその肉を食っていたのである。

「あれもかなり食っておる」

「人としてか」

「いや、それでもう人ではなくなっておる」

だが博士はそれを聞いてこう述べるのだった。

「人を食えばな。同族をじゃ」

「同族をというのだ」

「魔物は人からなることもあるのじゃよ」

それもあるのだというのだ。

「つまりじゃ。あの者達はじゃ」

「かつては人だったのか」

「そういうことじゃ。人を好んで食いそれで魔物となった」

そうだというのである。

「それでのう」

「それで魔物になったのか」

牧村はそれを聞いてまた述べた。

## 第二十五話 魔竜その二

「あの魔物達は」

「妖怪からも魔物になればじゃ」

「人からも魔物になるのだな」

「そういうことじゃよ。さて」

ここまで話をしてであった。

「これで話は終わりじゃが」

「ああ」

「何か食べるか」

「今は食べるのはいい」

それは断る牧村だった。

「それはな」

「じゃあどうするのじゃ？」

「何か飲みたいが」

そちらだというのである。飲み物であった。

「何かあるか」

「はい、どうぞ」

ここで早速ろく子が出て来た。その長い首で牧村の周りを螺旋状に覆いながらそのうえで彼に一杯のお茶を勧めてきたのであった。

「薬膳茶ですよ」

「薬膳茶か」

「はい、中国のものです」

「そうか。では漢方か」

「それもおわかりですか」

「中国といえばな」

まさにそれ以外にないというのだった。

「それでは」

「如何ですか？」



「一杯欲しいな」

そしてこう答えたのだった。

「是非な」

「はい。それでは」

こうしてその茶を受け取り口に含む。その味は苦いがそれでもその苦さが確かに滋養にいいように思われた。

牧村はその茶を飲みながらろく子に対して問うた。

「それでこの茶に入っているものは」

「色々です」

「色々？」

「もう漢方薬を物凄く入れていましてですね」

「わからないか。何が入っているのか」

これで事情がわかったのだった。

「どれが入っているのかは」

「味はどうですか？」

「お世辞にもいいとは言えない」

苦さは後に残るものだった。しかもその苦さはかなりのものである。それで味がいいとはとても言えなかったのである。これは牧村だけではなかった。

「わしもこれは」

「博士もですか」

「身体にいいのは認めるがじゃ」

博士もこれは言った。

「しかしのう。苦さがあまりにもじゃ」

「それではこれを入れますか？」

言いながらだった。ここで彼女が出してきたものは。

「蜂蜜ですけれど」

「蜂蜜じゃな」

博士はそれを見てまた述べた。

「そうじゃな。少しは飲みやすくなるじゃろうな」

「ではどうですか？」

「是非貰おう」

それがなくてはとても、なのだった。

「そうでなくてはこれは駄目じゃ」

「わかりました。それでは牧村さんは」

「俺も貰おう」

彼もだというのだった。物静かだが確かに答える。

「これはな。とてもな」

「やっぱりこのお茶は飲みにくいんですね」

ろく子は二人がそれぞれのお茶に蜂蜜をかなり入れてそのうえで飲むのを見て述べたのだった。

「それもかなり」

「かなりじゃよ」

「全くだ」

二人の意見は一致していた。

「これだけ苦いお茶はじめてじゃよ」

「しかし身体にはいいのか」

「風邪をひいてもすぐになおる位ですよ」

ろく子はその二人に言うのだった。

## 第二十五話 魔竜その三

「それどころか結核もですね」

「なおるじゃな」

「それはまた凄いな」

「ですから思つて」

それだといろく子だった。しかしここで博士はいぶかしむ顔で言うのだった。

「わしは結核にもかかつておらんが」

「俺も今は病気は」

「その病気をはねつける身体にしてくれますよ」  
「そうだというのだった。」

「もうね。当分の間は」

「よくそんな物凄いお茶があるものじゃな」  
博士はそれを聞いてまた述べた。

「そこまでのお茶は聞いたことがないぞ」

「そうでしょうね。このお茶はですね」

「このお茶は？」

「私達のお茶ですから」

妖怪達の茶だというのである。

「それも秘伝のなんですよ」

「そんなものがあつたのか」

博士はその言葉を聞いて目を少し丸くさせた。

「初耳じゃが」

「博士でも知らないことがあるのか」

「当然じゃ」

それは当然だと牧村に述べた。

「人が知っておることなぞそれこそ大海の中の匙一杯分程度じゃよ」  
「知らないことの方が圧倒的に多いか」

「わしも同じじゃ」

いささか謙遜めいた言葉であった。

「わしにしても知らんことが実に多いのじゃよ」

「そうなのか」

「左様。じゃからこのお茶にしてもじゃ」

「知らなかったのだな」

「こんなものもあつたのじゃな」

あらためて言ったのだった。

「全く。勉強になつたわ」

「それは何よりだが」

「しかし。それでも苦いのう」

また苦さの話をした。

「蜂蜜を入れてもまだ苦いぞ」

「そうですか？それでもかなり入れてるじゃないですか」

「ようやく飲めるようになったわ」

その域だというのである。

「しかし。飲めばじゃな」

「はい。身体にもかなりいいです」

そうだというのである。

「ですから」

「これを飲めば身体の動きも変わるか」

「少なくとも体力はつきますよ」

牧村の今の言葉にも応えた。

「もうそれだけで」

「では飲ませてもらおう」

「そうして頂くと何よりです」

ろく子はまた飲みはじめた彼を見つつ笑顔になっていた。

「出す方も嬉しいです」

「それでだ」

ここまで話してまた問う牧村だった。

「これを作ったのは誰だ」

「作った妖怪ですか」

「そうだ。博士も知らないような妖怪漢方茶をだ」

これは牧村の造語である。今咄嗟に作ったのである。

「作ったのは誰だ」

「わしじゃが」

こう言つて名乗りをあげてきたのは全身毛だらけの大きな猿に見える妖怪だった。その妖怪の名は。

「さとりか」

「そうじゃよ、わしなのじゃよ」

その妖怪さとりは笑いながら彼に言つてきたのだった。

「わしが作った茶じゃよ」

「相手の考えが何でもわかるだけではなかったのか」

「わかるから作られるのじゃよ」

そうだからだというのだった。彼によれば。

## 第二十五話 魔竜その四

「頭の中にある作り方がわかったからじゃ」

「それで作ったのか」

「うむ。昔会った中国の妖怪にな」

「どういった妖怪だ？」

「天狐じゃったな」

その妖怪の名前を思い出しての言葉だった。

「確か」

「狐か」

「そうじゃ。千年生きた狐じゃ」

それだというのだ。狐も千年生きていれば変わるのである。

さとりはその狐のことも話してきた。

「そうして神仙になったものじゃよ」

「神仙か」

「それはわかるかのう」

「わからない筈がない」

牧村は言った。

「そういう存在なのか」

「そうじゃった。えらく力があつてじゃ」

「妖怪という域を超えていたんだな」

「そうなのじゃよ。それと会ってそれで心を聞いてじゃ」

「ふむ。それでじゃな」

博士も横で話を聞いて述べた。

「このお茶ができたのは」

「どうかのう。博士にもいいと思うが」

「お茶が身体にいいというのじゃな」

「そうじゃ。じゃからは非飲んでくれ」

つまりさとの善意だったのだ。そうしてそれは博士に対してだ

けではなかった。

牧村にもだ。ここで彼にも勧めるのだった。

「さあさあ、牧村さんもな」

「言われずとも飲んでいるが」

そうなのだった。彼は飲んでいたのであった。

「だが。味は蜂蜜をかなり入れて何とかだな」

「味は我慢してくれ」

味は仕方ないとのことだった。

「それだけはのう」

「味の分だけいいというのだな」

「そうじゃ。まあ一日一杯とは言わん」

「それは勘弁して欲しいものだ」

魔物との戦いについて何も言うことはない彼でもこの茶だけはと  
いうのである。

「こんな味のものはな」

「じゃからそれは言わんのじゃ」

さとりも笑いながら彼に告げてきた。

「わしはさとりじゃよ」

「さとりなのがどうかしたのか」

「ああ、さとりはじゃな」

ここで博士が牧村に話してきた。さとりとは何かをだ。

「さつき自分から言っておったじゃろ。相手の考えがわかるのじゃ  
よ」

「それでは俺の考えもか」

「いや、難しいものじゃな」

牧村についてはというのだった。

「残念じゃがな」

「わかりにくいのか」

「わしは相手の言葉や目、それに身体全体の動きから心を読むのじ  
ゃよ」

そうしてなのだった。種を明かせばだ。

「しかし。牧村さんはそういうのを見せてくれんからのう」

「戦っていると自然に消える」

牧村はこう述べた。

「それはな」

「相手に感情を見せてはそれがすぐにか」

「敗北につながる」

だからだというのだ。しかしこれはもう言うまでもないことだった。

「それはわかると思うが」

「ううむ。本来はここでもじゃよ」

さとりは残念そうに述べたのだった。

「わかるのじゃがな。相手の考えがな」

「しかし俺に対してはか」

「わからんのう」

そうなのだった。さとりを以ってしても牧村のその考えがわからなかったのである。あまりもわからず首を捻って困った顔にさえなっている。そのうえで言葉だった。



## 第二十五話 魔竜その五

「まあわからんのなら仕方がない」

「そうか」

「ただしじゃ」

「ここまで話して話題を変えてきた。

「一つ言っておくがじゃ」

「何だ」

「これは身に着けておいて損はないことじゃ」

「考えを読むことが」

「そうじゃ。戦いにおいては特にそうじゃな」

博士は牧村の目を見て語った。だが今は考えを読もうとはしていなかった。ただそれだけを話しているだけなのだった。

「相手の考えを読んでじゃ」

「それも大事だな」

「どうじゃ？牧村さんはその辺りは」

「あまり意識したことがなかったな」

どちらかという和无意識に行っていたのである。これまでの闘いでは。

「それはな」

「意識してみればどうじゃろう」

「さとりはこう勧めるのだった。

「闘いも少しは変わると思うがのう」

「戦いならばただ剣を振ればいい」

「戦いは、というのである。

「しかし闘いはだ」

「違うのじゃな。わしは戦わんし闘いもせんからわからんが」

「違う。一対一の勝負ならばだ」

「それが闘いというのだった。彼は。」

「駆け引きと。相手を見抜くことがだ」

「じゃから。さとののじゃよ」

己の名前にもなっているそれであった。まさに『さとの』から「その『さとり』であった。」

「それでよいかのう」

「やらせてもらう。それでな」

「今度の鬭いはじゃな」

「鬭いならばな」

戦いとは違う、それを強く意識していた。

「それをしてみせよう」

「期待しておくぞ。さて、それではじゃ」

「口直しじゃな」

「いや、味は申し訳なかった」

今度は博士に対して謝罪の言葉を出すさとりだった。

「それでじゃ」

「おお、これはいい」

博士はさとりが自分の前に出してきたものを見て顔を綻ばせた。

彼は柿を出してきたのである。皮も薄そうな如何にも美味そうな柿をである。

「幾らでもあるぞ」

「善き哉善き哉」

博士はもう茶のことを完全に忘れていた。

「ではもらつぞ」

「何個でもな。それじゃ」

その柿を牧村の前にも出すのであった。そうしてそのうえで彼に對して言う。

「好きじゃろ」

「わかるか」

「今度は顔にはっきりと書いてあったからのう」  
だからわかるというのだった。

「充分にのう。こういう時は少しはわかるのじゃが」  
「そうか」

「まあそれでも博士や仲間の妖怪達より遙かにわかりにくいぞ」  
「牧村さんって無愛想だしね」

「表情ないから」  
「ここで妖怪達が言う。」

「声も一つ一つが短くて感情籠らないからね」

「わかりにくいんだよね、とても」

「けれどそれがいいんじゃない？」

「ここでこう言ったのは一つ目小僧だった。」

「闘いにはさ」

「感情を読みにくいからのう」

「そうそう、それでね」

「一つ目小僧はさとりの言葉にも返した。」

「いいんだと思うよ。闘いにはね」

「所謂あれじゃな」

博士は柿を美味そうに食べている。固めでありそれもまた博士にとってはいいことだったらしい。実に美味そうに食べ続けている。

## 第二十五話 魔竜その六

「ポーカーフェイスじゃな」

「勝負にはいいよね」

「表情見せないのって」

「昔からポーカーやそうした遊びは強かった」

牧村もこう言うのだった。

「負けた記憶はあまりない」

「そうそう、だからだよ」

「だから強いんだよ」

まさにそうだと返す妖怪達だった。

「感情見せないっていうのもいいんだね」

「少なくとも勝負にはね」

「そのうえで相手の心を読むのじゃよ」

さとりがまた言い加えてきた。

「よくな」

「わかった。ではそうしていこう」

それに頷く牧村だった。ここで手に取っていた柿を食べる。その柿は。

「いいな」

「美味しいじゃろ」

横からさとりが笑いながら言ってきた。

「今は身体から出る気からわかったぞ」

「気でか」

「出て来るのがわかった」

それを見てというのである。

「よくのう」

「そうか。わかったか」

「わかったな、今は」

「僕達にもね」

「はつきりわかったよ」

他の妖怪達もわかったという。

「気はわかりやすいかな」

「目や口の動きよりも」

「仕草よりもまだね」

「そうか」

それを聞いて考える顔になった牧村だった。今度は気であった。

「気もだな」

「そこも注意だね」

「さとられないようにね」

「わしにもじゃよ」

さとりも言ってきたのだった。

「よいな、それは」

「さとられないか」

「練習になるじゃろ」

「ああ」

彼のその言葉に対して頷いた。

「その通りだな」

「しかしもつとも」

さとりはここまで話してまた苦笑いになった。そうして言うのだ。  
つた。

「今は読めんわ」

「俺の考えをか」

「うむ、わからん」

「こう言うのだった。」

「全くな。それを見れば大丈夫じゃがな」

「俺は何も意識していないが」

「意識せずともそれができるんじゃないじゃない」

「そつだよね」

さとり以外の妖怪達はそれを聞いて言い合う。

「牧村さん凄いよ」

「素質あるじゃない」

「というよりかは天才じゃな」

さとりはこう評した。

「感情を見せないことののう」

「そうかもね」

「確かにね」

妖怪達は今度はさとりの言葉に頷いたのだった。

「牧村さんって最初に会った時からそうだったし」

「今は最初のその時よりずっと凄いいけれど」

「しかしじゃ」

今度言ってきたのは博士だった。

「感情を見せないのはいいが消すのは駄目じゃ」

「それは駄目なのか」

「人間にしろ妖怪にしろ感情はある」

こう牧村に話すのだった。

## 第二十五話 魔竜その七

「それがあるからこそ人間であり妖怪であるのじゃよ」

「それじゃあさ、博士」

「感情をなくしたら」

「その時はまさか」

妖怪達は一齐に博士に対して問う。

「魔物になるの？」

「そっちな」

「そこはまだよくわからん」

博士でも、というのである。

「しかしいいものにはならんじやろうな」

「魔物でも感情はあるからね」

「それも感情強いよね」

「そうそう」

魔物にしる感情はある。それは間違いなかった。妖怪達にしる牧村にしるそれはよくわかつていることだった。

このことを確かめてから。彼等はさらに言葉を交えさせるのだった。

「それでだけれど」

「牧村さんが若し」

「若しだよ」

妖怪達はこのことを断ってそのうえで彼に対して言ってきた。

「感情がなくなったら」

「どうなるの？」

「髑髏天使じゃなくなるの？」

「さてな」

牧村は彼等のその問いに首を横に振った。

「それは俺にもわからないことだ」

「わからないって」  
「自分のことなのに」  
「それでもわからないの」  
「いや、待つんじゃないの」  
「ここでまた博士が話に入って来た。」  
「それがわかる筈もないじゃろ」  
「自分のことなのに？」  
「わからないの」  
「彼は髑髏天使であるが髑髏天使が何なのかは知る術がないのじゃ」  
「だからだというのである。」  
「知る術を持っているのはわしだけじゃよ」  
「博士だけ」  
「じゃあ博士が調べていって」  
「それでわかることじゃ」  
「そうだというのである。」  
「そのうえでじゃよ」  
「それだと牧村さんは知らないんだ」  
「髑髏天使であっても」  
「そういうことじゃよ。そしてじゃ」  
「そして？」  
「わしが知っておることも僅かじゃ」  
「今度はこう言う博士だった。」  
「ほんの僅かじゃよ」  
「知らないんだ」  
「博士もまだ沢山のことが」  
「とりあえず主天使にはなった」  
「そこまでは言った。」  
「しかしそれ以上の階級のこととはわからん。それに」  
「それに？」  
「まだ何かあるの」



「階級以外にもあるようじゃな」

博士はここで腕を組んだ。その髭に覆われた顔に深い思案の色が浮かんだ。

「どうやらもう」

「階級以外にも」

「まだあるんだ」

「どうやらじゃがな」

確定はないのだった。

「あるようじゃ」

「俺にはまだ多くの謎があるのか」

その当事者である牧村がそれを聞いて呟いた。

「まだ」

「あるのう」

博士はまた彼に告げた。

「わかっていないことの方が遥かに多い位じゃ」

「そこまでか」

「髑髏天使の謎は多いのじゃよ」

博士の言葉は続く。

「全てが謎と言ってもいい」

「髑髏天使になって結構経つが」

「いや、まだ半年にもなっておらんぞ」

牧村の今の言葉はこう述べて否定したのだった。

## 第二十五話 魔竜その八

「まだじゃ」

「まだか」

「もうではないぞ。まだじゃ」

今の言葉はいささか言葉遊びめいているものだった。なお博士は文学博士でもある。文系の博士号も理系の博士号もどちらも習得しているのである。

「主天使になつたとはいえじゃ」

「わかつていることは微々たるものか」

「それこそあれじゃ」

ここでまたこの言葉を出すのだった。

「大海の中の匙一杯程度じゃな」

「その程度か」

「とにかく色々な文献を見ておるがのう  
博士の言葉は半ばぼやきになっていた。

「それでもわかつておることはじゃ」

「殆どないか」

「そうじゃ。特に」

「特に？」

「これはわしの勘に過ぎんぞ」

「こつ前置きしてから言うのだった。

「どうも一番大事なことがわかっておらんのう」

「最も重要なことがか」

「そんな気がするのじゃ」

「こつ言うのである。

「何かな。確かなことは言えんがのう」

「そうなのか」

「それが何かさえもわからん」

博士の言葉は明瞭だったが目指すものは不明瞭だった。

「全くのう」

「何か厄介だよね」

「本当にね」

妖怪達はそれを聞いて言い合った。

「僕達も髑髏天使については殆ど知らないけれど」

「五十年に一度出て来て魔物を倒すってこと以外にはね」

「それ以外知らなかったのか」

牧村はそれを聞いて彼等に問い返した。

「あんた達も」

「そうなんだよね」

「大天使とかになるのも知らなかったよ」

そうしたこと知らなかったのである。彼等にしてもだ。

「それで今主天使になったけれど」

「博士と同じで」

「殆ど知らないんだ」

彼等にしてもそうなのだった。そして博士がここでまた言うのであった。

「それでじゃ」

「それで？」

「今も調べておるがじゃ」

博士はまた古文書を開いていた。今度は日本のものらしい。

「これは奈良時代のものじゃ」

「奈良時代か」

「平城京跡で見つけたものじゃよ」

その頃のものであるという。しかも見つかったのはその時の都だったのだ。

「残された階級はあと三つじゃ」

「主天使のだな」

「まずは座天使じゃ」

その三つのうちの最初はそれだった。

「これは天使の力とあるのう」

「髑髏天使なら当然のことではないのか」

「わしもそう思うのじゃが」

首を傾げながらの今の博士の言葉だった。

「何か引つ掛かる書き方じゃな」

「そうだな」

「ふむ」

博士は古文書を読み続けている。見ればその文字は漢字である。

この時代の日本にはまだ平仮名も片仮名もない。漢文で書かれているのである。

「そして残る二つはじゃ」

「どうなのだ」

「どうも特別なものらしいのう」

その漢文の古文書を見ながらの言葉だった。

「天使の力じゃが神に近付くとある」

「神にか」

「そしてじゃ」

博士は古文書を見続けながらその言葉を続けていく。

## 第二十五話 魔竜その九

「人を超えるとある」

「人をか」

「うむ」

古文書に目を向けたまま牧村の問いに答えるのだった。

「そうあるぞ」

「面白い言葉だな」

それを聞いてこう言った牧村だった。

「それはまた」

「そう思うのか」

「話としてはな」

面白いというのである。

「それでどうなるのだ」

「書かれておるのはここまでじゃ」

博士の言葉は申し訳なさそうであると共に残念そうでもあった。

「この古文書にはのう」

「そこまでか」

「そうじゃ」

こう言って古文書を閉じたのであった。それから紐でくくる。

そうしてから。また彼に対して言うてきた。

「それでじゃが」

「話は終わったな」

「髑髏天使に関しては今はのう」

終わったというのであった。

「さて、今日はこれからどうするのじゃ」

「いつも通りだ」

こう答える牧村だった。

「またトレーニングに向かう」

「そうするのか」

「闘いに備えてだ」

「では励むことじゃな」

その牧村に対して告げた博士だった。

「よくのう」

「そうさせてもらう。それではだ」

ここで壁から背を離れた牧村だった。そのうえで扉に向かう。

「また来る」

「待ってるからね」

「またね」

妖怪達はその背に声をかける。彼はそれを受けながら今は部屋を後にした。

死神は今は一人でいた。一人であるレストランの個室にいた。王宮を思わせる豪華な部屋だ。

床はビロードの絨毯が敷かれそしてテーブルにかけてある掛け物は白いシルクである。食器は青と白のオーストリアのものとと思われる皿でグラスは水晶だ。フォークとナイフは銀である。その豪華なものに囲まれた彼は今は黒いタキシードを着てそのうえでこれまた立派な食事を探っていた。

その彼の前にあるものが来た。それは目であった。

人のを思わせる子供の頭程の大きさのそれは黒い球体からその目を見せていた。そして左右に羽根が生えておりそれで宙を飛んでいた。そこから彼に対して声をかけていた。

「珍しいね」

「珍しいとは？」

「君がそんな食事を探るなんてね」

そのことを言ってきたのであった。

「とてもね」

「珍しいというのか」

「うん、凄く」

目玉はまた彼に言ってきた。

「だって神だから食べなくてもいいじゃない」  
「確かにな」

死神もそれは認めた。しかしそれでも食べることは止めなかった。  
「それはその通りだ」

「けれど何で食べるのかな」

「興味を持ったからだ」

死神の返答はこれであった。

「この時代の人の食事にな」

「ふうん、それでなの」

「料理の外観は。そうだな」

死神は食べながら述べた。今食べているのは羊のすね肉を焼いたものであった。それを香料で薄く味付けしたものである。それをフオークとナイフで上品に食べている。

「二百年程前のフランスの料理に似ているな」

「ああ、あの時代のね」

目玉もそれを聞いてわかったのだった。

「あの時代のあそこのに似てるね、確かに」

「貴様もそう思うか」

「言われてみればだけれどね。確かにそうだね」

目玉はその羊料理を見ながら述べた。

「それで味は」

「違っている」

味はというのだった。

## 第二十五話 魔竜その十

「今私が食べているものの方が美味だ」

「美味しいんだ」

「調理の仕方が格段に進歩している」

まずはそれだという。

「それに料理の周りにある技術もだ。違ってきている」

「それもなんだね」

「味付けもだ。何もかもが進歩しているからこそ」

「美味しくなっているんだね」

「そういうことだ。美味しいものだ」

彼ははつきりと美味しいと言ったのだ。

「この味はな」

「何か羨ましいね」

目玉は彼のそうした言葉を聞いて述べてきた。

「僕は何かを食べることはできないからね」

「貴様はそうだな」

「何も食べなくても生きていけるけれど」

こう言ってから。

「食べることもできないからね」

「食事ということは貴様とは無縁だからな」

「そういうこと。けれど君は食べられる」

「食べる必要がなくともな」

「それが羨ましいよ」

実際にその感情を言葉に出す目玉であった。

「食べられることがね」

「味わうこと自体が楽しいものだ」

「味ねえ」

「貴様はそれも感じられないのだな」



「そうなんだよね。残念だよ」

目には表情は無い。しかしそこから出される光がそれを述べていた。そして翼の羽ばたきにもいささか元気がなくなってしまうていた。

「全くね」

「それでだが」

「うん」

「何の用で来たのだ」

「食べながら彼に問うた死神だった。

「今私の前に来たのは。何故だ」

「情報を持って来たんだ」

「魔物のか」

「その神々のだよ」

「つまり魔神のものだというのである。

「また一柱来るよ」

「そうか。またか」

「今度はキリムがね」

「その名前も出したのだった。

「来たよ」

「あいつがか」

死神はその名前を聞いてまずはその目を動かした。

「密林から出て来たか」

「もうこの国に来ているよ」

「それを知っているのは」

「まずは僕と」

目玉自身のことである。

「今話した君だけだよ」

「仲間の魔神達はまだ知らないのか」

「うん、まだね」

知らないというのであった。

「知らないよ。あくまで僕達だけだよ」

「今のところはか」

「他の魔神達は何処か別の場所にいるみたいだね」

魔神はまた述べたのだった。

「どうやらね」

「おそらくまた人の世界での暮らしを楽しんでいるのだろう」

死神は彼等の動きについてこう予想したのだった。

「どうせな」

「彼等もなんだ」

目玉はそれを聞いて少し意外そうな声を出した。

「それはまた」

「面白いか」

「変わったね、彼等も」

だからだというのだった。

「前はそれこそ戦いのことしか考えていなかったのに」

「そうだな。随分と変わったものだな」

話をしていてだった。死神もそのことに気付いたのだ。

## 第二十五話 魔竜その十一

「以前と比べるとな」

「別の存在みたいだね」

「人を食らう魔神もいたのだから」

「それも無いんだ」

「人の食べるものを食べるようになってきている」

このことは彼も知っていた。何故なら彼等が人を食らえばその魂が冥界に旅立ち彼がそれを送ることもあるからである。だからそれはわかるのだ。

「どうやらな」

「そして性格も何か楽しんでるみたいだね」

「戦いを楽しんでいるな」

それをだというのだ。

「それとだ」

「それと？」

「人の世界での生活そのものをだ」

「楽しんでるんだ」

「かつての彼等の様にな」

かつてという言葉聞いて。目玉はすぐにこう返した。その目の光を考えるものにさせえ。

「つていうと妖怪だった時みたいだね」

「そうだ。その時の様にな」

「魔物なのにかつての妖怪みたいになんだ」

「どうやらな。しかしあの者達が魔神であることは」

「それは変わらないだろうね」

それについてはこう述べた目玉だった。

「それはね」

「そうだな。そしてだ」

「うん」

「私も。どうやらな」

「そうだね」

死神の今の言葉に頷いた目玉だった。

「君も楽しむ様になってるね。今がそうじゃないか」

「今まではこんなことはなかった」

死神は食事を進めながら述べ続ける。その動きは何処か神らしい落ち着いたものをそこに漂わせていた。そのうえで食べているのだ。つた。

「酒もだ」

「ワインは飲んだっけ」

「飲んでいたが不死の酒を最も愛していた」

「今は？」

「人の世界の酒もいいものだ」

嗜好がそちらにも及んだということだった。

「飲んでみるとな」

「ふうん、そんなにいいんだ」

「貴様には関係のないことだがな」

「残念だけれどね」

実際に声はその感情を込めていた。

「それはね」

「そして美味だ」

死神は味についても述べた。

「人の世界のものもな」

「人間については殆ど考えたことがなかったけれどね」

「私もだ」

死神はまた言った。その紅の酒を飲みながら。葡萄酒の濃厚な甘い退廃さえ感じさせるその香りも楽しみながら飲んでいた。

「それはな」

「けれど今は？」

「興味を持つている人間はいる」

「髑髏天使だね」

「そうだ。あの男」

己の脳裏の中に牧村の姿を思い浮かべる。そのうえでの言葉だ。

「これからどうなるかだが」

「もう主天使になっっているんだっけ」

「このままいけばだ」

「あの域にまでなるかな」

目玉はまた言ってきた。

「果たして」

「有り得るな。そして」

「あの存在になるんだね」

目玉の目の光が変わっていた。思慮深いものに。

「そうしてだね」

「その時はだ」

「君が相手をする。そうだね」

「そのつもりだ。私の今のやるべきことは魔物の魂を刈る」

「うん」

「だからこそだ」

肉を食べながら話をしていく。

## 第二十五話 魔竜その十二

「その時は任せておくのだ」

「そうだね。期待しているよ」

声は少し楽しそうに言ってきた。

「その時はね」

「その時が来るのを楽しみにしているようだな」

「いや、別に」

そうは言ってもやはり楽しそうな言葉であった。

「何ともないよ」

「本当にそうだといいがな」

「本当だよ。それでだけれど」

「今度は何だ」

「これからどうするの?」

目玉はまた彼に問うてきた。

「とりあえず食べてからは」

「食べたならそれで終わりじゃないよね」

「そうだな。キリムに会いに行くとしよう」

そうするといふのである。

「食べてからな」

「わかったよ。ああ、そうそう」

ふと目玉はまた思い出してきたのだった。

「あのさ、君今お酒飲んでるじゃない」

「それがどうかしたのか」

「いやさ、今のこの時代だけれど」

彼は現代の話をするのであった。この時代のだ。

「お酒飲んであのバイクだったっけ」

「バイクのことか」

「そうだよ。バイクはお酒飲んだら駄目なんじゃないの?」

こう彼に問うのだった。目玉にしてもこの時代のことには既に  
程度知っているのだった。

「確かね」

「そういえばそうだったな」

言われてこのことを思い出した死神だった。

「だがそれは人間の世界のことだ」

「僕達には関わりがないってことだね」

「そういうことだ。気にすることはない」

話を聞きながらであった。死神は言葉を続けていく。

「私も気にはしていない」

「それじゃあ警察だったっけ」

目玉はまた思い出してきた。

「あれが出て来ててもいいんだね」

「何か声をかけられたことはない」

食べるものは全て食べ終えたのだった。彼は今度はデザートを食べはじめた。デザートはアイスクリームだった。バニラとストロベリー、チョコレートのそれぞれ丸く取ったそのアイスクリームを食べながらそのうえで目玉に対してこのことも話していくのであった。

「特にな」

「じゃあ。一切気にせずに」

「行かせてもらう」

こう言っただった。彼はデザートも楽しみそのうえで席を立つ。

しかし支払うものは。

「あの」

「何だ？」

カウンターで洒落たタキシードの服を着た店員が死神に対して目をしばたかせながら問うた。

「支払いに不都合があったか」

「これがお支払いですか」

「そうだ」

死神はその店員に対して平然と言葉を返した。

「ダイヤでだ」

「それはわかるのですが」

店員の前にはダイヤが置かれていた。十カラットはあるそのダイヤが出されているのだった。

「これは」

「それとも金か」

また店員に対して問い返す。カウンターの周りもやはり宮殿を思わせるものであった。カーテンは絹で絨毯が敷かれている。そして品のいい彫刻が置かれている。

その中で話をしているのだった。店員とだ。

「金ならあるが」

言いながらカードを出して来た。何処のものかは詳しくはわからないがゴールデンカードであった。それを出して来たのであった。

「これでいいか」

「えっ、ええ」

ダイヤに戸惑ったものは残っていたがそれも応える店員だった。

「やっぱりあれですけれど」

「あれとは何だ」

「お金を支払って頂けるのが何よりです」

こう述べる店員だった。



## 第二十五話 魔竜その十三

「やはり」

「ではこれで」

またカードを出す彼だった。

「いいのだな」

「ええ、それで」

店員はまた彼に応えた。

「御願います」

「わかった。それではこれで済ませるとしよう」

「はい」

「ではダイヤは」

「あつ、お返しします」

謙虚な態度で彼に返すのだった。実際に手に取ってみせて。

「どうぞ」

「遠慮することはないのだがな」

「いえ、遠慮します」

店員の態度は遠慮から恐縮になっていた。

「これではチップという域ではありませんので」

「そうか」

「はい、ですから」

「いいという店員だった。」

「お返しします」

「わかった」

それ以上は聞かない彼であった。

「それでいい」

「ええ。それではまた」

店員が別れの挨拶をしてそれで終わった。死神は店を出るとだった。そのタキシードを忽ちのうちにあの黒いライダースーツに変え

たのであった。

「さて」

「これから行くんだよね」

店の玄関のところでもた、であった。目玉が彼の上に出て来て声をかけてきたのだ。

「魔神のところだね」

「私が動かなくとも向こうから出向いて来るだろうがな」

「まあそうだろうね」

目玉もそれは少し読んでいるようであった。

「そうだった連中だしね」

「だが今はだ」

死神は顔を正面に向けて言った。

「私の方から出向く」

「そうするんだね」

「貴様はついて来なくていいのだがな」

死神はここまで話したうえで目玉に顔を向けた。

「別にな」

「嫌だなあ、そんなこと言うの？」

目玉は声を笑わせて彼に返した。

「長い付き合いじゃない。水臭いよ」

「別に付き合っているつもりはない」

親しげな目玉に対して死神は素っ気無いものだった。

「私としてはな」

「そうかな。僕は違うけれど」

「少なくとも私はそうだ。それにだ」

あらためて彼に言うのだった。

「私がついて来るなど言っても来るのだな」

「いつものことじゃない」

笑っていたが茶化すものもそこにはあった。軽く。

「それも」

「なら好きにするといい」

素っ気無く返した言葉だった。

「それでな」

「あれ、じゃあいいんだ」

「私は相手にしない」

「ここでも言葉は実に素っ気無い。」

「それだけだからな」

「まあそれでいいよ。それじゃあ」

「行くのだな」

「うん、行こう」

こうして死神は目玉と共に何処かへと向かった。ハーレーが空を飛ぶ様に進む。その頃牧村は。スタジアムの前においてあの紳士と対峙していた。

「さて、ここで私が姿を現わしたということとはだ」

「遊びに来たわけではないな」

「遊びと言えば遊びだ」

笑いながらこうも言ってみせてきた。

## 第二十五話 魔竜その十四

「闘いは我々にとっては生きがいであると共に最高の娯楽だからな」  
「だから遊びだというのか」

「そういうことだ。それではだ」

スタジアムの入り口に通じる白い階段をゆっくりと降りて来る。

そのうえでその下にいる牧村のところに来てそうしてまた言うのだ  
った。

「準備はいいか」

「できていなければどうするといふのだ？」

「その時は仕方がない」

紳士の言葉はまさに遊びを誘うものであった。

「去るだけだ」

「安心することだ。去る必要はない」

これが牧村の返答だった。

「特にな」

「それでは闘うのだな」

「だからこそ俺はここにいる」

牧村は己の前に来たその紳士に対してまた告げた。

「これでわかったな」

「わかったと答えよう。それではだ」

「来い」

今度は一言だった。

「相手をしてやろう」

「いいだろう。それではだ」

指示を出そうとした。しかしここで。また一人姿を現わしたので  
あった。

「待ってもらおうか」

何者かの声がした。

「それはまだな。ヴァンパイアよ」

「そういえばそうした頃だったな」

紳士はその声を聞いても動じたところも驚いたところも何もなかった。首も顔も動かすことなくただこう声をあげただけであった。

「貴殿が出て来る頃だったな」

「久しいな」

その言葉と共にであった。黒い肌を持ち上半身は薄いタンクトップに身を包み下はデニムの青いミニを着た女が出て来た。髪は黒く長い。それが波がかったている。目は漆黑で黒檀を思わせる輝きを放っている。その女が今二人の前に出て来たのであった。

「暫く振りだが元氣そうで何よりだ」

「そうだな。お互いにな」

「魔神か」

牧村は己の右手に姿を現わしたその黒人の女を一瞥して述べた。

「また出て来たのだな」

「私が魔神だとわかるのか」

「そこにいるキザな男が魔神なのはもうわかっている」

紳士を見ての言葉である。

「そしてそれと対等に話すのならばだ」

「それで私が魔神とわかるのだな」

「その通りだ。だが貴様の正体まではわからない」

「キリム」

彼女から名乗ってきたのだった。

「それが私の名だ」

「キリムだと？」

「どうやらこの時代の髑髏天使はまだ貴殿のことを知らないようだな」

紳士は今の牧村の言葉を受けて黒い美女に対して言った。

「まだな」

「その様だな。では覚えておくことだ」

彼女から牧村に対して告げてきた。

「私の名はキリムだ。今も言ったがな」

「そしてどういった魔神だ」

「私もまたアフリカにいる。あの逆さ男と同じくな」

「だからその肌か」

「その通りだ。私は北を司る」

彼女がいるのはそこであった。

「あの者とはまた別の場所にいる」

「そこにか」

「そして私の真の姿は七つの頭を持つ竜だ」  
それだというのである。

「その姿は今は見せないでおこう」

「見せてくれと頼むつもりもない」

牧村はここでも素っ気無い態度である。

「別にな」

「無愛想なものだな」

「それが何か問題があるのか」

「私にとっては問題はない」

美女もまたこう返すだけだった。

## 第二十五話 魔竜その十五

「それではだ」

「貴様の魔物を出すのだな」

「如何にも」

言いながらであった。その黒い目を赤く光らせた。牧村はその赤く光った目から彼女に対してあることを察したのであった。それは。

「人食いか」

「わかるのか」

「今貴様の目が赤く光った」

彼はそこからわかつたのである。

「それが何よりの証だ」

「安心するのだ。私は確かに人を食つた。そのことは否定しなかつた。」

「しかしだ」

「しかし。何だ」

「私は人の命は奪わない」

「こつても言つのである。」

「決してな」

「食つておきながら何故そう言える」

「私に食われた者は私の中で生きる」

彼女は牧村に対して言葉を続ける。

「その世界でだ」

「キリムの中にはまた一つの世界があるのだ」

ここで紳士が出て来て牧村に対して話してきた。

「また一つのな」

「腹の中にもう一つの世界がか」

「異なる世界につながっていると云つべきだな」

そつだというのである。紳士は。

「それはだ」

「一つの世界にか」

「そういうことだ。我々魔神はそれだけの力を持っている」

そしてそれはこの美女だけではないというのだ。彼等もまた同じであるというのである。

「それは覚えておくことだ」

「世界をその中に持つことができるのか」

「そういうことだ。わかったな」

牧村を見つつの言葉であった。

「そうしたことともまた」

「わかったと言っておこう。まさに神だということか」

「そういうことだ。しかしだ」

また美女が口を開いてきた。

「私は今中に一人もいない」

「いないというのか」

「誰もいはしない」

再度牧村に告げてきた。

「あの時代の髑髏天使に封印されたその時に全て放たれてしまった」

「その腹の中からか」

「そうだ。だから今はいない」

そういうことだというのだ。

「これでわかったな」

「確かにな。ではこれからまたその腹の中に人間達を収めていくのか」

「さてな」

今の牧村の問いには今一つはつきりしない返答で返してきた。

「それはわからないがな」

「どういうことだ？」

「どうも。封印から解かれてみるとだ」

口元が緩んでいた。明らかに微笑んでいる。



「どうも人を食うことに然程興味を感じなくなった」

「食わないというのか」

「今のこの時代はさらに楽しみがあるようだな」

「その通りだ。この時代は楽しみに満ちている」

紳士がここで美女に話してきた。

「その最高のものが髑髏天使との闘いだが」

「そうならばだ」

それを聞いて美女は。ふと指を鳴らした。すると彼女の影から一

人の男が出て来たのであった。

「行くといい」

「有り難き御言葉」

出て来たのは黒人の頭の禿げた男であった。ドス黒い目の光を放つてそのうえで牧村を見据えつつ彼女の言葉に応えたのだった。

## 第二十五話 魔竜その十六

「それでは髑髏天使は私が引き裂いてみせましょう」

「いや、どちらか選ぶのだ」

だが魔神はここで彼にこう告げたのだった。

「どちらかをだ」

「どちらかといえますと」

「もう一人来たからだ」

だからだというのだった。見ると。

牧村の後ろから一台のハーレーが来た。それに乗っているのは。

死神であった。彼が今来たのだ。彼は牧村のすぐ後ろにその愛車を停めるとすぐに降りてそのうえで美女を見据えて言ってきた。

「久し振りだな」

「会う予定はなかったがな」

「それは私も同じだ」

彼女にこう返してからだ。

「次はやはり貴様だったか」

「そうだな。貴様に渡す魂は今はないが」

「どちらにしるだ。食らった者をその中に止めるのは許されはしない」

死神はまだ鎌を持ってはいない。しかしその心には既に鎌を持っていた。鋭い輝きを放ちながら彼女に対して問うているのである。

「生かしておくのなら外の世界に出すことだ」

「殺すのならその魂をか」

「冥界に送らせてもらう」

まさに死神としての言葉であった。

「それが摂理なのだからな」

「冥界の摂理か。相変わらずだな」

「それを壊す者は決して許しはしない」

間合いは詰めてはいない。それでも凄まじい殺気を魔神に向け続  
けていた。

「この時代でもだ」

「安心するのだな。今はそれには興味はない」

魔神は牧村に告げたことを彼にも告げた。

「それよりもだ。貴様も来たということだ」

「わかっている。闘わせてもらう」

死神の言葉がさらに鋭いものになった。

「私もだ」

「じゃあ僕は」

ここでふとあの目玉が死神の少し上に出て来た。そうして言っ  
てきたのだった。

「見させてもらおうかな」

「そうか」

「貴様も遊びに来たのか」

「二人共久し振りだね」

目玉は紳士と美女に対して挨拶を返した。

「元気そうだね、相変わらず」

「久し振りにこの世に出て来たが」

「見ての通りだ」

「会えて嬉しくはないけれどよかったねと言っておくよ」

「こつも二人に言うのだった。」

「出て来れてね」

「ただの目玉ではないな」

牧村も彼を見ていた。その黒い球体から見える目と脇に左右に  
つずつ出ている翼を見て。すぐにそのことを悟っての言葉である。

「貴様の友人か」

「違う」

死神は今の牧村の問いをすぐに否定した。

「そう思ったことは一度もない」

「違うというのか」

「同じ世界にいるだけだ」

「ということはだ」

今の死神の言葉を受けてだった。牧村は目玉に目をやってそのうえで彼に対して問うた。これが彼と目玉のはじめての会話になった。

「貴様もまた」

「まあそういうことだね」

目玉の言葉は笑っていた。

「僕もそれだよ」

「そうだな。神と言われる存在か」

「そう思ってくれてもいいよ。ところで君が」

ここで彼の方から聞いてきたのだった。

「あれだよ。この時代の髑髏天使だよ」

「そうだ」

まさにそれだと答えた牧村だった。

## 第二十五話 魔竜その十七

「俺がだ。この時代の髑髏天使だ」

「成程ね。何か見たところ」

「何だ？」

「かなり強いね」

すぐにそれを見抜いた目玉だった。

「これまでの髑髏天使の中でも相当かな」

「半年にもなっていないがもう主天使だ」

その目玉に対して死神が教えてきた。

「半年にもなっていないのだ」

「へえ、それは凄いね」

目玉は彼のことばを聞いてあらためて言ったのだった。

「そこまで強くなるのが早い髑髏天使って今までいなかったんじゃないかな」

「いたことはいた」

それはいたというのである。

「しかしだ。この男の強さはだ」

「滅多にない程なんだね。成程ね」

「それを見たいか」

「うん」

その通りだと答えたのだった。

「是非ね」

「では見るがいい」

こう目玉に対して告げた死神だった。

「そこでゆっくりとな」

「そうさせてもらおうよ」

死神は彼に伝えてからまた姿を消した。後に残ったのは死神だけになった。

その彼がだ。魔神達を見ながらゆっくりと前に出た。そう動きながら彼等に対して問うのだった。

「それでだ」

「うむ」

「闘いのことだな」

「そうだ。私の相手は誰だ」

こう彼等に対して問うのだった。

「誰でもいいのだが」

「そうだな」

美女が彼の言葉を受けてまた声を出してきた。そうして自分の隣に控えているその禿げた男に対して声をかけたのであった。

「死神にするか」

「それでは」

彼は主である魔神の言葉に恭しく応えたのだった。

「そうさせて頂きます」

「それで決まった」

美女は彼の言葉を受けてそのうえで頷いたのだった。

そして次は。紳士が牧村に対して声をかけてきた。

「わかるな」

「言われるともな」

わかると返す牧村だった。

「俺の相手は貴様の手の者か」

「そうだ」

まさにその通りだというのであった。

「いいな、それで」

「相手は誰だ」

一段階をあえて飛び越えた問いであった。

「それで今度は」

「この者だ」

言うただった。紳士の右に一人の幼い少女が出て来た。彼女だと

いうのである。

「ヴァンパイア様」

少女はまず主に問うてきたのだった。

「髑髏天使を倒していいのですね」

「その為に呼んだ」

紳士は彼女の問いにこう返してみせた。

「だからだ。好きなだけ暴れるといい」

「はい」

少女はそれを受けて微笑んだ。

「それでは」

「俺の相手は貴様か」

「遊ばせてもらうわ」

髑髏天使に顔を向けての言葉だった。

## 第二十五話 魔竜その十八

「思う存分ね」

「そうか。では」

「はじめましょう」

その言葉と共にだった。少女の背中に翼が生えた。禍々しい蝙蝠の翼であった。

「貴様は何だ」

その翼を生やした少女に再び問う牧村だった。

「その姿は何だ」

「私は夢魔」

白いドレスはそのままだった。ただ翼を生やしてから言うのであった。

「夢の中で闘う魔物」

「夢か」

「さあ髑髏天使」

こつ名乗ったうえでもた彼に声をかけてきた。

「どうするのかしら」

「俺は闘うだけだ」

牧村は既に髑髏天使の言葉を出していた。

「それだけだ」

「では来るのね」

「そうだ。では」

その言葉共にだった。まずは両手を拳にした。

そしてその拳を胸の前で打ち合わせた。そこから白い光が放たれる。

光が全身を包みそこから姿を現わしたのは。あの異形の天使であった。

「行くぞ」



また右手を少し前に出して一旦開いてから握り締める。これが合図になった。

魔物は彼が髑髏天使になったのを見届けてから。こう言ってきた。「それじゃあ」

「その夢の世界にか」

「誘ってあげるわ」

言いながら微笑んでいた。

「さあ、楽しい夢の世界に」

「行ってやろう」

二人の姿は自然に消えた。そうして死神も今己の右手を拳にした。それを胸の前にやると彼もまた青白い光に包まれたのだった。

それが消えるとあの闘う姿になっていた。その姿で右手に持っている大鎌を一閃させてそれから彼の相手に対して言ってみせた。

「私はこれでいい」

「準備はできたか」

「見ての通りだ」

これが返答であった。

「さあいいな」

「いいだろう。それではだ」

男の姿が変わった。巨大な姿になる。六メートルはあるだろうか。ただ足は一本だけしか生えていない。一本足の巨大な男にその姿を変えてきたのである。

「相手をしよう」

「それが貴様の正体か」

「巨人サツシー」

彼は名乗ってきた。

「それがこの俺だ」

「そうか。それではだ」

「来い」

死神に対する言葉であった。

「闘おう」

「では。私はだ」

美女はここでまで見届けてだった。去ろうとした。その中で紳士に対して声をかけた。

「何処か楽しい場所はあるか」

「酒は好きだったな」

声をかけられた紳士が美女に問うたのはこのことだった。

「そうだったな」

「酒はいい」

その美女の返答である。

「あれ程美味なものはない」

「ではいいな。行くとしよう」

「うむ。それではだ」

「はい」

主の言葉に応える魔物であった。

「ここはお任せ下さい」

「そうさせてもらうぞ。それではな」

「はい、それでは」

美女と紳士も姿を消した。後に残ったのは魔物と死神だけであった。魔物はその彼に向き直りそのうえで言ってきたのであった。

「闘いはだ」

「ここで闘うのだな」

「そうだ。ここぞだ」

闘うというのだった。

## 第二十五話 魔竜その十九

「それでいいな」

「私はあの夢魔とは違う」

先程の少女のことを話に出してみせてきた。

「何処でも闘うことができる」

「ではいいな」

「来い」

あらためて魔物に告げたのだった。

「闘うとしよう」

「それではだ」

魔物は彼の言葉を受けてだ。その方足で高々とはねてきた。それは巨体からは想像もできないまでに俊敏な動きであった。

「跳んだか」

「行かせてもらおう」

その方足が彼の頭上こ急降下してきた。それで踏み潰そうというのだ。

「この足が貴様が最後に見たものになる」

「さて、それはどうか」

だが死神はその彼にこう返したのだった。

「それで私を倒せるのか」

「かわすというのだな」

「簡単なことだ」

死神は一言言っただけであった。

「それはな」

「方。ではどうやってかわすのだ？」

「こうするだけだ」

こう言っただけであった。姿を消した。完全にである。

「むっ!?!」

「単純なものだ」

死神の声だけが聞こえてきた。

「その動きがわかっただけなら、こつすればいいだけだからな」  
「かわすことがか」

「その程度の攻撃では私を倒すことはできない」

急降下してくる彼に対してさらに言ってみせたのであった。

「残念だがな」

「そうか」

しかしそれを言われても落ち着いた声を出す魔物であった。

「姿を消してそう来たか」

「無論貴様もこれで終わりではあるまい」

死神はここでも言ってみせたのであった。

「そうだな。終わりではないな」

「当然のこと」

今まさに地面にその一本足を着けんとするところで、不敵に言ってみせたのであった。

「それはな」

「ではどうするつもりなのだ？」

「見るがいい」

その瞬間だった。死神が消えたその場所に一本足を踏みつけた。それによりそのコンクリートを粉々に砕き大きな穴を開ける。そのうえでだった。

再び跳ね飛ぶがそれと共に身体が幾つにも分かれたのだ。分身であつた。

「貴様もまたそれを使えるのか」

「ただ大きいだけではない」

複数になつてからも跳ねながら声だけの死神に対して告げる。

「そしてだ」

「そして？」

「貴様は確かに姿を消した」

それはわかっていることであつた。既に。

「しかしだ。実体を消したわけではないな」

「むっ」

「その言葉が何よりの証拠だ」

複数の口から同時に出した言葉であつた。

「実体は見えないだけで存在している」

「それがわかるか」

「そう、貴様は何処かにいるのだ」

魔物はそれはわかっているのだつた。そうしてであつた。

「ならばだ。こうして複数に分かれてだ」

「何処かにいる私を踏み潰すというのだな」

「さて。かわせるか」

言いながらまたコンクリートを踏み砕くのであつた。

## 第二十五話 魔竜その二十

「何時までもな」

「下でかわす必要はない」

だが死神は巨人に対してこう告げてみせた。

「下にいることもない」

「空か」

「そこか」

また複数の口からの言葉であった。

「そこから来るといふのか」

「今度は」

「如何にも」

その言葉と共にであった。巨人の一体の頭上に死神が姿を現わした。そしてその巨人の脳天に大鎌を一閃させてみせたのであった。すると巨人は赤い炎に包まれその中に消えた。彼は巨人達のうちの一体をこれで倒したのである。

「こうすればいいのだから」

「そうだったな。貴様は空も飛べたのだ」

「そうだ」

まさにその通りだと答える死神だった。宙に浮いたままで。

「これでよくわかったな」

「我がうちの一体を倒すとはな」

「噂通りか」

「噂は噂だ」

今度は己の頭上まで跳んできた魔物の一体を見上げながらの言葉である。

「あくまでな」

「というのだ」

「何かあるのか、まだ」

「見せてやろう」

言いながらその上から来た魔物にだ。手に持っている大鎌を投げる。放たれた大鎌は横に激しく回転しながら。魔物を下から両断してしまった。

そのうえでブーメランの様に戻り死神の手に帰る。両断された魔物の身体は赤い炎に包まれその中に消えていくのであった。

「こうすることもできる」

「鎌を投げたか」

「しかもそうやってだというのか」

「そういうことだ。私もまた髑髏天使と同じなのだ」

彼と、というのだった。

「闘えば闘うだけ強くなっていくのだ」

「闘えばそれだけか」

「強くなるのか」

「以前はこうした技は持っていなかった」

「こつも言うのだった。」

「だが。今はだ」

「使えるのだな」

「今の様に」

「如何にも」

その通りだと答えてみせもする。

「さあ、その私を倒せるか」

「そうしてみせよう」

「望むままにな」

そうするとだった。今度は一斉に彼に襲い掛かって来た。またしても跳ねながら。

上からも下からも襲い掛かる。上からは踏み潰さんと。下からは握り潰さんと。それぞれ一本足と両手で彼に襲い掛かって来たのであった。

「さて、死神よ」

「一体ずつならともかく」

「この数だ」

「どうする？」

「数で来たか」

それを見てまずはこう呟いただけの死神であった。

「数で一斉にか」

「数は力だ」

「それは貴様も知っているだろう」

「その通りだ」

死神もそれは否定しない。はっきりと答えてみせる。

「しかしだ」

「しかし？」

「何か言いたいことがあるのだな」

「私は言葉で出す必要はない」

そして次にはこう言ってみせる。そうしてさらに言葉を続けていく。

「何故ならばだ。数で来るとなると」

「まさか」

「貴様も」

「同じだというのか」

「知らなかったようだな」

魔物達のそれぞれの言葉を聞いて述べる。そうして。

「ならばだ。見せてみる」

「むっ！？」

「貴様もまたか」

「その通りだ」

その言葉と共に、だった。その身体が分かれていく。そうして無数の死神が同時に宙にその姿を現わしたのである。まるで影の様にだ。



第二十五話 魔竜その二十一

「こうしてだ。姿を見せることができるのだ」

「分け身を貴様も」

「使えたか」

「これで同じだ」

魔物と同じだというのである。

「貴様とな。それでだ」

「来るのか」

「貴様は力で来る」

魔物の性質はわかっていた。その巨体から来る力で攻める。それがわかっているといふのだ。それを実際に言葉にも出してみせる。

「それならばだ」

「どうするといふのだ？」

「何で来るといふつもりだ」

「一体」

「技だ」

それだと。一言で告げてみせた。

それと共に両手に持つ大鎌をそれぞれ構える。全ての死神達がその鎌を投げた。

鎌はそれぞれ回転しながら宙に舞う。そのうえで巨人達を切り裂いていく。

中には握り潰される死神もいた。踏み潰され地面に叩き付けられるものもだ。だが鎌達はそれぞれ縦横無尽に動きブーメランの様に戻る。そうして魔物を一体、また一体と切り裂いていくのであった。

「これでは」

「死神も我等も」

「やられていく」

「お互いに」

サツシーのそれぞれの口での言葉である。

「まずいぞ、このままでは」

「倒されるのは我々だ」

「早いうちに死神達を全て倒さなければ」

「こつした闘い方もある」

死神のうちの一体が宙に浮かんだままで述べた。

「こつしたもものな」

「まさか分け身を行ったうえで」

「鎌を一斉に放って来るとは」

「そう来たのか」

「さて、どうする」

あらためて魔物に問うてみせてきたのだった。

「私を全て倒すか。それとも鎌に切られるか」

「答えは一つだ」

「倒す」

魔物が選んだ答えはこれだった。これしかなかった。

「それは言っておこう」

「貴様達を全て倒す」

「面白い言葉だ」

その言葉を聞いて受けはした死神だった。

「それではだ。私も貴様の身体を全てだ」

「倒すというのか」

「我等を」

言っているうちにも闘いは続いている。巨人達は跳ね続けている。

だが一体、また一体と鎌に切り裂かれ赤い炎となって消えていく。

死神も一体ずつ潰され踏まれていく。その都度その死神が消えて

いく。しかし鎌は残っている。その数は減ってはいなかった。

「私を全て消せば鎌も全て消える」

「それまでは残る」

「そういうことか」

「その通りだ」

まさにそうだというのだった。

「さて、どうする？」

「どうするもこうするもない」

「我々にやるべきことは一つしかないからな」

「貴様を全て倒す」

ここでも出される答えはこれしかなかった。

「いいな、これでだ」

「我等の手で」

襲撃を仕掛け続ける。確かに死神の数は減っていく。だが巨人の数も次々に減り残ったのは。

最後の巨人の身体が回転する鎌に貫かれる。残った死神は一体であった。結果としてこれで勝利者が決まったのであった。

「終わったな」

「くっ、貴様の勝ちに終わったか」

「私だけが残ったが勝利は勝利だ」

それを彼に告げるのであった。

「それは認めるな」

「俺も魔物だ」

赤い炎に包まれながら答える魔物であった。

「潔く認めよう」

「よし。では心置きなく冥界に向かうがいい」

「思い切ったことをするものだ」

赤い炎に包まれながらまた言うのであった。

## 第二十五話 魔竜その二十二

「まことにな。賭けだったな」

「賭けてでもやらなければならぬ時がある」

死神は落ち着きそのものの声で述べた。

「戦いにおいて時にはな」

「確かに、貴様はそれに勝った」

「勝ったから生き残った」

「その通りだ。そして俺は敗れた」

魔物は己のことも言った。

「それも認めよう」

「それではだ」

「うむ。さらばだ」

こうして巨人は炎の中に消えた。死神は闘いに勝ったのだ。

だが彼はあるものを観ていた。それはもう一つの闘いであった。

黒と紫が複雑に蠢きながら絡み合う世界だった。髑髏天使はその

中にいた。その世界の中で夢魔と対峙し続けていたのである。

「うふふ、ここに来たからには貴方は終わりよ」

「ここは夢の世界だというのだな」

「そうよ。悪夢の世界よ」

まさにその世界だというのである。

「この世界こそがね」

「そしてだ」

髑髏天使は彼女の言葉を先読みして言うてみせた。

「この世界でこそ貴様の力が全て出されるのだな」

「そうよ」

まさにそうだというのであった。

「その通りよ。私の世界だから」

「成程な」

それを聞いてまずは頷く髑髏天使だった。

「だからこそ俺を倒せるというのだな」

「そういうことよ。話はわかったわね」

「しかし貴様自身は動く気配がない」

彼が今度言ったのはこのことだった。

「ということとはだ」

「私の作り出した夢の世界のもの」

言っている側からだった。何か奇怪な腕が髑髏天使に襲い掛かってきた。

髑髏天使はまずそれをかわした。そのうえで魔物に問う。

「こういったもので俺を倒すというのだな」

「まだあるわよ」

魔物のその少女の顔が微笑んだ。するとだった。

彼女の周りに無数の異形の者達が姿を現わしてきた。

人と獣、魚と植物、とにかくあらゆるものが歪に入り混じった不気味な者達が出て来た。そのうえで髑髏天使に襲い掛かって来たのである。彼はそれを見てすぐに主天使になった。

「力を最大限に出すのね」

「そうでなくては倒せる相手ではあるまい」

早速その魔物のうちの一体の胸を右手の剣で貫いての言葉である。

「そうだな」

「その通りでしょうね。私の世界でのことだから」

「貴様の世界であるならばだ」

次の一体は切り裂いて倒した。だが次から次に来る。

その彼等を切り伏せながらだ。髑髏天使は言っていくのであった。

「こうして全力で闘わなければ生き残れはしない」

「そうね。ただ」

「ただ。何だ」

「それだけで生き残れるかしら」

酷薄な、それでいて楽しむ笑みでの言葉であった。

「果たしてそれだけで」

「どういふことだ？」

「何度も言うけれどここは私の世界よ」

またこのことを言ってきた魔物だった。

「何もかもを生み出せるのよ」

「貴様がだな」

「そうよ」

まさにその通りだというのだ。

「さて、それで生き残れるのかしら」

「むっ」

言っている側からであった。また新たな異形の者達が出て来た。そうして次々に髑髏天使に対して襲い掛かって来たのである。

髑髏天使は彼等を次々に切っていく。しかしであった。

## 第二十五話 魔竜その二十三

彼等の数は尽きない。そうして髑髏天使は次第に疲労が蓄積されていく。ここに夢魔の狙いがあることは明らかであった。

「疲れてきたわね」

「気のせいだ」

「その言葉が何よりの証拠よ」

強がりなのを見越しての言葉である。

「言わなくてもわかるわ」

「ふん」

「さて。まだよ」

ここでまた魔物達を出して来た。それは無数に世界の中に浮かんでいた。立つ場所がなく誰もがその世界の中に浮かんでいるのだ。

「まだまだ出せるのよ」

「出しているのは」

「そうよ。私よ」

紛れもなく彼女だというのである。

「私が出しているのよ。この子達をね」

「そうか」

それを聞いてであった。髑髏天使の目の色が変わった。そうして構えなおした。丁度今周りにいた魔物達は全て切り伏せて消していた。切ると紙の様に裂け消えていくのだ。

「これで俺の勝利は決まった」

「貴方の勝利が決まったですって？」

「その通りだ。今それを見せよう」

それぞれ剣を持つその両手をクロスさせている構えであった。

「今からな」

「何をするつもりかしら」

「それもすぐにわかる」

今は言おうとしなかった。

「今な」

「？何を考えているのかしら」

魔物は彼のその言葉を聞いてまずは首を右に傾げさせた。

「一体何を」

「すぐにわかる」

やはり構えてこう言うだけである。そしてだった。

右手に持つその剣が変わった。ダイヤにだ。

「ダイヤの剣」

「この世で最も硬いものだ」

「このことも告げるのだった。」

「そしてこれを」

「これを？」

「受けるっ」

今の言葉と共に魔物に対して投げた。それで全てが終わった。

剣は一直線に飛び魔物の胸を貫いた。その速さは勝利を確信し安心しきっていた彼女が避けられるものではなかった。まさに一撃であつた。

胸を貫かれてだった。魔物は驚愕の顔になった。そうして言うのであつた。

「まさか。そんな」

「何を驚いている」

その魔物に対しての言葉である。

「この世界は貴様のものだったな」

「ええ」

「それならばだ」

髑髏天使は言うのだった。

「貴様を倒せばそれで済む話だ」

「だから私に対して」

「話は時として単純に考えてもいいのだ」



これは確かに一つの真理だった。それをよくわかっていたのだ。

「答えは複雑とは限らない」

「そうね。それは確かね」

「俺の勝ちだ」

そして単純に言った。

「それは認めるな」

「ええ。こうなってはね」

魔物は青白い炎に包まれてきていた。それで認めないわけにはいかなかった。

「認めるしかないわね」

「では死ぬがいい」

魔物に対してその死を告げた。

「そのままな」

「この時代の髑髏天使は凄いわね」

魔物は青白い炎に全身を覆われながら今の言葉を出した。「

## 第二十五話 魔竜その二十四

「私をこうして倒すなんて」

「主天使だけはあるということか」

「いえ。それだけではないわね」

「それだけではないというのか」

「感じるわ。貴方から」

その彼を見ての言葉である。

「貴方は次第に……」

こう言ったところで姿を消した。完全に青白い炎に包まれたのだ。後に残った髑髏天使は自然とその紫と黒の混沌とした世界から出て来ていた。元のスタジアムの前に一人で立っていた。

その彼に対して。死神が声をかけてきた。

「今回も勝ったのだな」

「ああ」

応えながら前に転がっている己の剣を拾う。それから述べたのだ。つた。

「生き残ることができた」

「見事だと言っておこう」

その彼に対してこう告げた死神だった。

「どうやって勝ったのかは知らないが」

「悪夢というものはわかった」

「こう言うだけの髑髏天使だった。」

「それはな」

「では悪夢はもう恐れないのだな」

「夢を恐れていては何にもなれはしない」

髑髏天使から牧村に戻っての言葉だった。

「何にもな」

「髑髏天使にもだな」

死神はあえて髑髏天使をその話に出してみせた。

「そうだな」

「そういうことだな。それではだ」

牧村は後ろを振り向いてそのうえで自身のサイドカーに向かって歩きだした。今は死神を見てはいなかった。

「帰るとしよう」

「また会うことになる」

死神は己を見ない彼にこのことを告げた。

「それはわかるな」

「わからなかったとしても出て来ると思うが」

「その通りだな。戦いはまだ続く」

死神はまた彼に告げた。

「だからこそだ」

「それなら戦いが終わるまで俺は髑髏天使になる」

サイドカーの前に来た。

「それだけだ」

「そうか。人間として」

「俺は人間だ」

当然だといった返答だった。

「そして髑髏天使だ」

「その言葉覚えておく。それではだ」

死神も既に元の姿に戻っていた。あのジーンズ姿である。

「また会おう」

「そうだな。またな」

「ああ、ちよつと待って」

しかしだった。ここであの目玉が出て来た。そうして牧村に対して声をかけてきたのだった。

「いいかな、髑髏天使」

「何だ」

サイドカーに乗りヘルメットを出そうとしたところで目玉に込え

た。

「何の用だ」

「君さ、大丈夫かなって思ってたね」

「大丈夫かだと」

「うん。何か歪な感じがするから」

彼に言ってきた言葉はこれだった。

「だから気になってね」

「俺が歪だというのか」

「こんな髑髏天使ははじめてだよ」

そしてこんなことも言ってきたのだった。

「何か凄く。変わった感じで」

「俺が変わり者なのは自覚しているが」

「いや、そうじゃなくてね」

それとはまた違うというのである。

「何か。人間？だよね」

「俺は人間だ」

また言葉を返す牧村だった。

「それ以外の何者でもない」

「だけれどね。まあそのうちわかるかな」

目玉はこれ以上は言わなかった。

「そのうち。じゃあいいよ」

「話は終わりだな」

「うん」

確かに終わったと答える。

「御免ね。変なことを聞いて」

「謝る必要はない」

それはいいというのだった。

「別にそんなことは聞かれていない」

「そうなんだ。じゃあ」

「貴様ともまた会おう」

目玉に対する言葉である。

「それではな」

「またね」

これで双方別れた。別れた後は日常に戻る牧村だった。その時は人間としてその日常を送っていた。少なくとも今はそうであった。

第二十五話

完

2009・11・3

## 第二十六話 座天その一

髑髏天使

第二十六話 座天

「目玉なんだ」

「そつだ、目玉だ」

あの闘いの翌日牧村は博士の研究室に向かった。そこでこう妖怪達に話していた。

「目玉が出て来た。瞼に覆われていて左右に羽根が生えたな」

「つていうと」

「こんなのかな」

妖怪達は彼の言葉を聞いてすぐに紙と鉛筆で絵を描いた。するとそれは目が黒い幕でまさに瞼として覆われ左右に小さな羽根が生えたそれであつた。

「こんなの？」

「こういうの？」

「そのままだ」

まさにそれだと。彼等に答える牧村だつた。

「それが出て来た。俺の前にな」

「ふむ」

それを聞いてだ。頷いたのは博士だつた。当然彼も部屋にいる。

そうして今度はパピルスに書かれた象形文字を見ているのであつた。

「それが出て来たのじゃな」

「知っているようだな」

妖怪達と博士の双方の言葉を聞いて言つた牧村だつた。

「あれが何か」

「あれも神じゃよ」

博士が彼に答えた。

「あれもな」

「神か」

「そうじゃ。あれは監視の神じゃ  
それだというのである。」

「それが司るものじゃ」

「監視のか」

「あの死神と同じ世界の神じゃ」

「こつも話すのだった。」

「じゃから一緒にいるのじゃ」

「そうだったのか」

「しかし特に悪い神ではない」

博士の言葉は続く。

「人間に何かをするわけでもなし。死神とただ一緒にいるだけじゃ  
よ」

「わかった」

「そこまで聞いて納得して頷く牧村だった。」

「では特に気にすることはしないことにする」

「まあそれがいいね」

「何もしてこないからね」

妖怪達も牧村の今の言葉に頷く。

「それでだけれど」

「また魔神が出て来たんだね」

「今度もアフリカだ」

黒人と同じだというのである。

「黒い肌の女だ」

「キリムじゃったな」

その名前も既に知っている博士だった。彼もまたもう話を聞いているのである。

「今度出て来たのは」

「自分で言うには七つの頭を持つ竜だというが」

「うむ、そうじゃ」

まさにその通りだと答える博士であった。

「文献にも書いておる」

「今のその象形文字にか」

「凄いものじゃ」

そのパピルスの象形文字を見ての言葉である。

「ここまでわかるとはのう」

「昔のエジプト人はそこまでわかっていたのか」

「左様、どうやらアフリカの奥深くまで入っていたようじゃ」

こう牧村に話す。

「そして書き残していたのじゃよ」

「エチオピア辺りまでと思っていたが」

「違ったようじゃな。それが」

それ以上だったというのである。博士が今持っているそのパピルスによればだ。

「それもわかるかなり凄い資料じゃよ、これは」

「というよりかですね」

ろく子が後ろから首を伸ばしてきた。そのうえで博士のところに首を突き出して話す。

「これって歴史を覆る大発見ですよね」

「そうじゃよ。エジプト人はそこまで探検してわかっていたということじゃからな」

まさにそうだと答える博士だった。

「イギリス人やフランス人より三千年も先に調べていたのじゃからな」

「そうだな」

それは牧村にもよくわかることだった。それを聞いて頷く。

「だが。それは表には出せないか」

「無理じゃな。書かれている内容が内容じゃ」

こうは言っても特に困った様子は見せていない博士であった。少なくともその言葉からはそういったものは全く見えてはこない。



## 第二十六話 座天その二

「公にはできんものじゃ」

「何か残念だよな」

「全く」

妖怪達もこういつた重大な発見が公にできないことにかなり残念な様子である。

「歴史が覆るっていうのに」

「それが発表できないなんて」

「そういつたものは案外多いのじゃよ」

しかし博士は彼等にも言うのだった。

「実際わしはそういうのも随分持つておるぞ」

「随分ねえ」

「持つてるんだ」

「うむ、このパピルスだけではない」

それだけではないという。

「他にも随分と持つておるぞ」

「何か凄いね、博士って」

「じゃあこの研究室は」

「例えばじゃよ」

その後ろの何処まで続いているのはわからない本棚を振り返つての言葉である。この本棚のある研究室にしろどれだけ広いかわからない謎の部屋である。

「カルタゴ人がアメリカ大陸を発見したという資料もあるぞ」

「魔神絡みで公にできないのだな」

「その通りじゃ」

まさにそうだというのであった。

「貴重な発見なのじゃがな」

「カルタゴ人はアメリカ大陸まで行っていたのか」

「カルタゴの航海技術はかなりのものだったからのう」  
だからそれもあるのだと。博士は言うのである。

「ジブラルタルを超えてアフリカ西海岸にも普通に行っておったし  
そのアメリカ大陸にもじゃよ」

「他にも行っていたのか」

「あとはイギリスにも行っておったし喜望峰にも到達しておった」  
こうも話すのである。

「そうしたところまでじゃ」

「凄かったんだね、カルタゴ人って」

「よく知らなかったけれど」

妖怪達も博士の話を聞いて言い合う。

「それもかなり」

「あの時代にそこまでしていたなんて」

「まあ俗に言われていることであるのじゃ」

それはあるというのである。

「しかし確証はない話じゃからな」

「その確証は博士が持っていて」

「決しても表には出せないってことなんだね」

「そういうことじゃ。残念なことなのう」

とはいってもやはりあまり残念そうには見えない今の博士の口振  
りであった。

「まあそれでじゃ」

「今読んでいるパピルスはあの魔神のことなのだな」

「その通りじゃ。これで九人じゃったか」

「そうだったな。それだけだな」

牧村は話を聞きながら頭の中でこれまで出て来た魔神達のことを  
思い出す。反芻するようにして思い出してきたその名前がである。

「全部で十二だったな」

「左様、残りは三人じゃが」

ここで博士はその魔神達のことをさらに話してきた。

「まずは百目に九尾の狐、ウエンティゴ、クグマツツ、バジリスク、狼男、バンパイア、逆さ男に次に出て来たそのキリムじやな」

「それで九か」

「残るは三柱。一応場所がわかっておる者達もおる」

「わかっているものもか」

「まずインドじや」

そこだというのだ。俗に悠久の国と言われている。永遠の歴史と深い叡智を持っているとされているその国にいるというのである。

「そこに一柱」

「そこだけか」

「あとはオセアニアじや」

そこだというのだ。

「最後だけが今一つわからんのじやが」

「そうか。それはか」

「何処じやろうな。南洋じやろうか」

首を傾げながら述べる博士だった。

## 第二十六話 座天その三

「悪いがそこまではわからん」

「そうか」

「わかっているのはここまでじゃ。そして君が今主天使であることじゃ」

「中級の最上位ですよ」

「またろく子の首が伸びてきて牧村に告げてきた。まことによく伸びる首である。」

「それは御承知ですよ」

「知っている。それでだ」

「はい。それではです」

「何だ」

「あとは三つです」

「残る階級の話だった。」

「まずは座天使ですね」

「それについてはわかってはいないか」

「うむ。それもこれから調べるところじゃ」

「言いながらまた新しいものを出してきた。それは。」

「今度は縄であった。そして何かの絵文字だ。見ればマヤかアステカのものであるらしい。」

「少し待ってくれ。解説にかかる」

「中南米か」

「そうじゃ。何しろ中南米のことは何もかもがわかりにくくて困る」  
「言いながら苦笑いになっている博士だった。」

「スペインが滅茶苦茶をしてくれたからな」

「コンキレスタドルか」

「本当に見事に破壊してくれた」

「皮肉ではなく批判であった。」

「おかげでこうしたこともわかりにくい」

「調べることもか」

「そうじゃ。とにかく資料を集めるだけでも大変じゃ」

言いながら早速解読に入るのだった。

「実にな」

「とか何とか言いながら調べるからね」

「博士はやっぱり凄いよ」

こう話すのだった。

「生粋の学者だよな」

「それも老いてなお盛んな」

「さて、では暫し待っておいてくれ」

牧村に告げてそのうえでさらに調べる。

「吉報を待つてな」

「わかった。それではだ」

牧村は博士の言葉を受けて背中を壁から離す。そうして部屋を後にしてサイドカーに乗る。そのうえで若奈のあの喫茶店に向かうのだった。

「あら、お兄ちゃん」

「むっ」

店のカウンターにいたのは未久だった。彼女はにこりと笑って彼に声をかけてきたのである。

「来たんだ」

「来たのかじゃない」

表情を変えずに言葉を返す兄だった。

「何故御前がここにいる」

「ここにいてるって決まってるじゃない」

妹もまた兄に言葉を返す。だがその顔は彼とは正反対ににこやかな笑顔であった。

「お菓子を食べる為よ」

「それでなのか」

「そうよ」

まさにそうだというのである。

「だからここにいるのよ」

「あっ、牧村君」

ここでカウンターから出て来たのは若奈だった。エプロン姿でいつもの明るい笑顔で彼に対して声をかけてきたのである。

「いらつしゃい」

「中学生が喫茶店にいていいのか」

「細かいことは言わないでよ」

また笑って返す妹だった。

「そんなこと」

「そうそう」

若奈も未久の味方であった。

「今時これ位はいいじゃない」

「お兄ちゃん頭古いわよ」

援軍を得てさらに攻撃の手を強める妹であった。

「今時喫茶店位はね」

「金はあるのか」

「お母さんが出してくれたわ」

そうだというのである。

## 第二十六話 座天その四

「優しくね」

「全く」

若奈の援軍を得て攻勢を強めてきた未久に対してこう言うしかできなくなった牧村であった。その表情も普段より慚然としたものになっている。

そうしてその顔でカウンターに座る。未久の隣にである。

「それでだ」

「何？」

「何を注文するつもりだ」

「紅茶よ」

にこりと笑って兄に告げる。彼はいつも見ているので気にしていないが赤いミニスカートから見える素足が実にいい。白く形もいい。実に見事な脚である。

「それを飲みに来たのよ」

「それだけか」

「まあお菓子もね」

その笑みのままこうも言ってきた。

「頼むつもりだけれど」

「じゃあ何がいいのかしら」

「ティラミス」

彼女が若奈に告げたのはそれだった。

「ティラミス下さい」

「わかったわ。じゃあティラミスをね」

「はい、御願います」

「それではだ」

それを聞いた牧村もまた。若奈に顔を向けて言うのだった。

「俺も紅茶とティラミスをだ」

「わかったわ」

微笑んで彼の言葉に頷く若奈だった。

「じゃあ紅茶とティラミスを二つずつね」

「勘定は一つで頼む」

こつも彼女に告げるのだった。

「そうしてくれ」

「あれっ、何でなの？」

妹は兄が勘定を一つにしてきたのを聞いて彼に顔を向けて問うた。

「お勘定を一つって」

「御前が支払うことはない」

だからだというのである。

「俺が一緒にいる場合はだ」

「私お金持つてるけれど」

「それでもだ。兄がいてそれで妹が支払うことはない」

彼は言うのだった。

「その必要はない」

「だからなの」

「わかったらそのままにいることだ」

そしてだった。さらに言うのである。

「いいな」

「とりあえずおごってくれるのね」

「そう考えるのなら考えていていい」

「それじゃあ」

兄のその言葉に納得して頷く未久だった。

「そう考えさせてもらうわ。それにしても」

「今度は何だ」

「お兄ちゃん運がいいわよ」

微笑んで兄に言ってきた言葉である。

「とてもね。運がいいわよ」

「何故俺が運がいいのだ」



そう言われても全く見当がつかない。牧村は表情を変えずその顔も前を向いたままにしてそのうえで彼女に言葉だけで問うた。

「初耳だが」

「だって私が横にいるのよ」

だからだというのである。

「運がいいじゃない。こんな可愛い娘が横にいるなんて」

「そう思ったことは一度もない」

実に素っ気無く返した牧村だった。

「一度もな」

「あら、言っわね」

兄の今の言葉に口を膨らませたふりをしてみせた。唇も少し尖らせてみている。しかしそれが芝居であるのはすぐにわかることだった。

「私これでも街とか歩いていたらスカウト受けるのよ」

「世の中人を見る目のない人間も多い」

やはり素っ気無く返す兄だった。

## 第二十六話 座天その五

「だからそういうこともあるだろう」

「あのね、側にいるからわからないのよ」  
すると妹は今度はこう言うのである。

「中学校でも塾でも。私男の子から人気があるみたいだし」

「気のせいだな」

「気のせいだなんて」

「自意識過剰だ。あまりよくないことだ」

「どうやらお兄ちゃんには言ってもわからないみたいね」

「ここでも怒ったふりをする言葉を出してみせてきた。」

「わかったわ。私にも考えがあるわよ」

「では何をするつもりだ」

「若奈さん」

「何かしら」

ここで、であった。若奈が店の中から出て来た。それぞれの手にティラミスを置いた白い皿を一つずつ持って出て来たのである。

「そのティラミスですね」

「ええ」

「両方共下さい」

「こう言うのである。」

「私に下さい」

「待て」

それを聞いた牧村はすぐに妹に言い返した。

「一体何のつもりだ」

「だから。言っても駄目ならよ」

今度は意地悪そうな笑顔をその顔に作ってみせてきていた。

「こうするだけよ」

「人の食べ物を取り上げるのか」

「そうよ。実力行使よ」

それをするというのである。

「わかったかしら、これで」

「ああ、わかった」

こうされては認めるしかなかった。彼にしる食べる為に来ているのだ。それでその食べるものを害されてはどうすることもできなかった。

「わかったからティラミスはな」

「はい。じゃあ若奈さん」

「ええ。一つよね」

「はい、それで御願いします」

「わかったわ。じゃあ」

未久の前に一皿、そして牧村の前に一皿ずつ置いていく。それと共に紅茶も用意する。ここでまた一人に対して問うてきたのである。

「それで葉だけねど」

「セイロンを頼む」

「アッサム御願いします」

それぞれ言う。これで紅茶も決まる。

牧村はまず紅茶を口に含んだ。ここでまた未久が言うのだった。

「あれっ、お兄ちゃんって」

「どうした？」

「左利きだったっけ」

こう言ってきたのである。見れば彼は左手でカップを手に持っていた。彼女はその兄の手を見て言ったのである。

「前右に持っていたと思うんだけど」

「どちらでもいける」

彼は妹の問いにこう答えた。

「どちらでもだ」

「持てるの」

「そうだ。それは知らなかったか」

「つていつかはじめて見たわよ。いえ」

「ここで彼女は気付いたのだった。そのことだ。」

「そういえば最近鞆とか左手で持つこともあったかしら」

「俺は両利きだ」

「最近なつたみたいね」

「そしてこつも彼に言った。」

「左手を使ったり」

「あつ、そうよね」

未久の言葉を聞いて若奈も言ってきた。彼女は今は見せのコツプを拭いている。一つ一つ奇麗な布で丹念に拭いているのであった。

「牧村君最近右手だけじゃなくて左手でもフェシングできるし」

「両方使うようにしている」

だからだと答える牧村だった。実際に今も左手でフォークを使ってそのうえでティラミスを食べている。またしても左手を使っていた。

「どちらもな」

「器用ね」

未久はその兄のフォークを使うのを見ながら述べた。

## 第二十六話 座天その六

「つていつか何時の間にかつてことだけれど」

「片手より両手の方がいい」

牧村は言った。

「剣を使うのはな。一本より二本だ」

「二本の方がなのね」

「そういうことだ。だからだ」

「両利きね。私には無理ね」

未久は言葉を出しながら自分の右手を見るのだった。小さく柔らかい肌のその手をである。

「あんまりにも器用じゃない、それって」

「あら、未久ちゃんも」

若奈はそのコップを拭き続けながら未久に対して言ってきた。

「あれじゃない。体操部じゃない」

「それはそうですけれど」

「じゃあ器用なんじゃないの？身体を動かしながら色々なもの使わない」

「それは新体操ですよ」

少し笑って若奈に返した。

「私は体操ですから」

「少し違うの」

「はい、確かに身体を動かしますけれど」

それは確かだというのだ。実際に体操はかなり身体を動かすスポーツの一つである。だから彼女の身体はかなり均整が取れたものである。

「道具は使わないです、私は」

「そうだったの」

「ですから別に器用だとは」

「身体は柔らかいかな」

牧村が横から妹に言ってきた。

「それもかなりな」

「まあね」

妹も兄のその言葉に頷いた。

「身体の柔らかさには自信があるわよ」

「それも重要なことだ」

「こつも言つたのだ」

「スポーツにはな」

「お兄ちゃん柔軟もやってるわね」

「このことも思い出した未久だった。」

「やっぱりあれ？身体を柔らかくする為よね」

「いざという時に怪我をしない」

「身体が柔らかければということである。」

「身体が柔らかければな」

「けれどお兄ちゃんって」

「妹はここで笑ってその兄に言うのだった。」

「前屈やって手がやつと足につく位じゃない」

「あつ、そうよね」

若奈もそのことを思い出して話に入ってきた。その手は代わらず

「コツプを拭き続けている。」

「牧村君って足が長いから」

「あれつ、あれつて足が長いからなんですか」

「当然よ。足が長いとやっぱりつきにくいのよ」

「そつだというのである。」

「だからね。それはね」

「身体の硬さと関係ないんですか」

「そうなのよ。未久ちゃんはまあ体操してるから特別として」

「その柔軟さはまた別格だというのである。」

「牧村君は普通に身体柔らかいわよ」

「そうだったんですか」

言われてはじめてそれに気付いた未久だった。

「ずっと硬いんだって思ってた見てましたけれど」

「ストレッチを毎日していれば柔らかくなる」

牧村はまた紅茶を口に含んだうえで述べた。

「自然とな」

「それでも硬いままだって思ってたわよ」

兄に対しては実に容赦のないままの妹だった。

「それが違ったのね」

「だから身体の差ってあるじゃない」

若奈の言葉は完全にマネージャーのそれであった。

「だからね。それもね」

「そういうことだったんですか」

「牧村君の足は長いわ」

これ以上はないまでに素直な賞賛の言葉であった。

## 第二十六話 座天その七

「背が高いしスタイルもいいから余計に目立つのよね」  
「ですよね」

口が悪い妹もこれは認めるところであった。

「スタイルは確かにいいですよね」

「ほら、私は背が低いじゃない」

「私ですよ」

この部分では全く同じの二人であった。

「背が高いだけでも羨ましいのに」

「足は長いし。しかもストレッチに問題が出るまでだなんて」

「未久ちゃんも足長くない？」

「そういう若奈さんも」

ここで二人はお互いのことを言い合う。

「けれどそれでも。背が低いと」

「あまり目立たないのよね」

「ですよね。やっぱり背って大きな関係があるんですね」

「モデルさんだってそうだし」

言いながら牧村を見るのであった。性別は違っても羨ましいことには違いはないのである。だからこそ彼を見続けているのであった。

「私もう背は伸びないみたいですし」

「女の子はね」

若奈の顔は嘆くものになっていた。

「小学校六年で成長が止まるから」

「じゃあずっとこのままなんですよ」

「そうよ、このままよ」

まさにその通りだというのだった。

「ずっとね」

「男の人は十八や九でもまだ伸びる場合があるんですよ」



「そうよ。そういえば」

若奈はまだ牧村を見ている。そうして「ここでも羨ましそうに言うのだった。」

「牧村君また背が伸びた？」

「気のせいじゃないのか？」

「やっぱり伸びてない？」

その垂れ目がさらに垂れている。羨ましそうな光の中で。

「気のせいじゃなくて」

「絶対に伸びてますよ」

未久も言っ。

「大阪にいるうちのお爺ちゃんがですね。また背が高くて」

「そんなに高いの」

「はい、七十歳超えてるのに百八十はあるんですよ」

「今の牧村君と同じ位あるのね」

「ありますね」

牧村にしろそれだけの高さがあるというのである。

「やっぱり」

「遺伝なのね。私はお母さんの血を引いててね」

「お母さんですか」

「実はあれなのよ」

困った顔での言葉が続く。

「私お母さん似でね」

「お母さんですか」

「叔母さん。実は天理教の教会の人でお母さんのお姉さんだけけどね」

「はい」

「その人も小さくて。叔母さんの娘さん三人いるけれど三人共」

その叔母と家族の話もするのであった。

「やっぱり小さいのよ」

「そうなんですか」

「それで私の妹二人も小さいのよ。皆一五〇位しかないのよ」

「お母さんや叔母さんや従姉妹の人達もですか」

「皆小さいのよ」

一人として例外はないというのである。

「皆ね」

「私の家は何か私だけみたいなんですよ」

「そういえば未久ちゃんのお母さんは」

当然ながら牧村の母でもある。

「背は普通よね」

「何で知らないですけど私だけなんですよ」

困った顔で話すのであった。

「小さいのは」

「牧村君は見ての通りだし」

「お父さんも大きいですよ」

「遺伝じゃないのね」

「牛乳とかも好きですよ」

背が高くなるといえばやはりこれであった。カルシウムやタンパク質がいいというのはどうやら本当のことらしい。だが例外もあるのだろう。

「それでも」

「私の場合は間違いなく遺伝だけれど」

「何で私は小さいんでしょうね。何でも食べるのに」

「理由はわかつている」

これまでただティラミスを食べ紅茶を飲んでいた牧村が妹に告げてきた。

## 第二十六話 座天その八

「それはな」

「わかつてるの」

「そうだ。体操のせいだ」

「そのせいだというのだ。」

「小学校の時からやっていたな」

「ええ、そうだけれど」

「体操をすると大きくなるものだ」

彼は言った。

「そのせいだ」

「体操のせいだったの」

「ああ、そういえば」

ここで若奈も気付いたのだった。それではつととした顔になる。

「未久ちゃん体操やってるから。それでなのね」

「激しい運動はかえってなんですな」

「そうなのよ。そのせいだったのね」

体操はかなり激しい運動である。身体全体を使うからだ。成長期にあまりそうしたスポーツをすると背はどうしても伸びないのである。

「私が小さいのは」

「そうだと思うわ。多分だけれど」

「仕方ないですね」

しかしであった。未久は今は苦笑いを浮かべただけであった。そうしてそのうえでまた若奈に顔を向けて言葉を出すのであった。

「それなら」

「いいの」6

「はい」

いいというのであった。

「もうそれならそれで」

「背が低いのもそれでいいの」

「やっぱりコンプレックスはありますよ」

それはあるというのである。否定しない。

「けれどあれですよ。もう背が伸びないのならね」

「そうよね。どうしようもないわよね」

「はい」

また答える未久だった。

「ですから」

「それに」

若奈は「ここで言うのだった。

「背が低くてもね」

「背が低くても」

「それでも彼氏はできるのよ」

「できますか？」

「そうよ。できるわよ」

このことを未久にしっかりとした口調で話した。

「わかるわよね」

「はい」

今の若奈の言葉の意味をすぐに理解した彼女だった。

「よくわかりました」

「そういうことよ。だからね」

「極端に悲観することはないわよ」

「わかりました」

こう話すのだった。とりあえずこれで話は一段落となった。しかしそれで話は終わりではなく。今度は牧村を見ながら二人で話すのだった。

「それだけでもお兄ちゃん」

「何だ」

「今二十歳よね」

今度話すのは年齢についてであった。

「そうよね。二十歳よね」

「そうだが」

彼にとつては今更な話だったがそれでも応えた。

「それがどうかしたのか」

「二十歳になつてどうなの？何か変わった？」

「別に何ともない」

髑髏天使としてのことは最早自然に隠してしまっていた。もうそれだけのものは身に備えてしまっていたのである。これまでの生活の中で。

「何ともな」

「そうなの。何もないの」

「強いて言えばだ」

「うん」

「酒が飲めるようになる」

この誰でも知っていることをぶっきらぼうに言ってきたのである。

「それだけだ」

「それだけ？」

「成人式に出席する」

次に告げたのはこれであった。やはりこれも誰でも知っていることである。

## 第二十六話 座天その九

「他は何も変わりがない」

「何か全然面白くないけれど」

実際に極めて面白くなさそうな顔になる妹であった。

「っていうかわざとつまらなく話してない？大体お兄ちゃんお酒飲まないじゃない」

「飲めないと訂正しておくことだな」

「やあへりぶしつけない返事であった」

「そこはな」

「じゃあそうしといてあげるわよ」

「売り言葉に買い言葉であった」

「飲めない、これでいいのよね」

「それでいい」

「それでね」

再度兄に対して問うた。言葉は自然と荒いものになってしまっているのは感情が出てしまっているからに他ならない。そしてそれを隠すつもりもなくなっていた。

「何も変わらないのよね」

「そうだ。ただ歳を取るだけだ」

「何処が面白いのよ」

話を聞き終えてつい言ってしまった言葉だった。

「若奈さんみたいな美人になれるとかじゃないの」

「何もならない方がいい」

微かに感情を込めてしまった言葉である。

「何もな」

「何もって？」

「何もないのが一番いいのだ」

妹の問いに答えずにまたこの言葉を出してきたのだ。

「何もな」

「言っている意味が強烈にわからないけれど」

「普通の人間でいられたら一番いい」

やはり妹に答えるのではなくこう言うのであった。

「それがな」

「よくわからないけれど」

どうしても兄の言葉の意味がわからず首を捻る。しかし言葉は出すのであった。

「つまりね」

「ああ」

「こういうこと？平凡が一番いいってこと？」

眉を顰めさせたうえでの問いであった。

「つまりは」

「そう考えておけばいい」

彼もまたそれでいいとしたのだった。本心を隠してである。

「それでな」

「平凡ね」

「そうだ。平凡だ」

まさにそれだというのである。

「それが一番いい、何につけてもな」

「じゃあ私には無理じゃない」

兄の平凡という言葉を受けてこんなふうに戻す妹であった。

「私にはね」

「何故無理だ？」

「だってこんなに美人じゃない」

すると彼女は楽しそうに笑ってこう言ってみせたのである。

「こんな美人があれよ。平凡なわけないじゃない」

「そこまで言うのならアイドルにでもなるのだな」

「じゃあなるわ」

ここでも売り言葉に買い言葉だった。

「事務所に履歴書でも送ってね」

「未久ちゃんがアイドルになるの」

若奈はその話を聞いて述べた。

「何かそれも面白いかもね」

「トップアイドル目指します」

もうそのつもりになっている彼だった。

「国民的アイドルになります」

「そうよね。街中に未久ちゃんのポスターがあるっていいわ」

「期待していて下さいね」

「ならそれを目指してもいい」

兄として随分放任的な言葉だった。

「御前がそうしたいのならな。なってしまったよりなってしまう方がいいかも知れない」

「？」

今の兄の言葉にまた首を傾げる妹だった。

「なってしまったよりなってしまう方が？」

「受身より攻める方がいいのかも知れない」

彼はまた言った。

「それが人のものなら余計にな」

「余計に訳がわからないんだけれど」

未久はまた首を傾げるのだった。兄の言葉がどうしてもわからな  
いのである。そしてそれは彼女だけでなく若奈も同じであった。



## 第二十六話 座天その十

彼女も牧村の今の話を聞いて。こう言うのだった。

「最近牧村君つて時々」

「変なこと言いますよね」

「ええ」

未久に対しても彼女と同じ表情で答える。

「そうよね。なってしまったより自分でなる方がいってというのはね」

「わかるんですか」

「それはね」

わかると未久に答えるのだった。

「そういう意見もあるわ」

「あるんですか」

「あるわ。受身より積極的で」

今の言葉は牧村の言葉と同じだった。

「そういう考えはありだと思っわ」

「あるの」

「まあ何になつてしまっかによるけれどね」

「あっ、だったら」

若奈の話からあることがわかった未久だった。

「自分の目指すものになるのがいいってことですか」

「そういうことかしら」

「俺はそういうことは言っていないがそれはいいことだ」

牧村の今の言葉は結果オーライといった類の言葉だった。だがそういう意味では言っていないというのである。しかし今はそうではないという。

「それはな」

「まあアイドルは冗談として」

それは冗談としてであるとした。実際に彼女もアイドルということについては実は真剣に言っただけはなかった。「冗談歳として言っていたのである。」

「じゃあなりたいたいものになるわ」

「それがいい」

「ここでまた言った牧村だった。」

「人がなるものにな」

「人間がね」

未久はまた応えた。

「なるものね」

「俺は今」

牧村はさらに己の言葉を続けていく。

「何かになっていつている」

「何かになのね」

「そしてそこからまたなる」

「何かに？」

「果てにあるのは何かわからない」

彼はさらに続ける。

「しかし俺もまたなる」

「なってしまうのじゃなくてね」

「なる」

未久と話しているうちにその考えに彼も至ったのだった。

「必ずな」

「そうよね。じゃあ私はまずなるものを探すわ」

「未久ちゃんのなりたいたいものをね」

「はい。綺麗な女の人には絶対になりますし」

ここではまた冗談を話に入れたのだった。

「それとは別のものになります」

「フライトアテンダント？それとも看護師さん？」

「何かそういうのいいですよね」

若奈の言葉に微笑みになっていた。

「他にも一杯ありますし」

「ええ。何でも探すといいわ」

若奈の笑みは温かいものだった。まさに妹を見るものであった。

「何でもね」

「はい、まずは見つけて」

「そこからなるのね」

「お巡りさんもいいですよね」

何故か制服のものばかりである。

「とにかく何かになります」

「とりあえず高校に入ったら」

「はい？高校に入ったら」

「ウエイトレスはどうかしら」

若奈は何かを期待する笑みを浮かべて言ってきた。

「ウエイトレス。どうかしら」

「ウエイトレスっていいですよ」

「うちのお店でアルバイトしない？」

「こう言って誘ってきたのである。」

第二十六話 座天その十一

「未久ちゃんさえよかつたら」

「あつ、ウエイトレスですか」

「そうよ。どう?」

そしてまた誘いの言葉をかける。

「それは」

「いいですね」

未久も今の若奈の誘いに笑顔で乗った。

「若奈さんもマスターも知ってますし」

「そうよ。それに」

言いながら今度は牧村を見て。そうして言うのだった。

「その頃には未久ちゃん私の妹になっているかも知れないし」

「ふふふ、そうですね」

そして未久も若奈の今の言葉にも乗った。

「若奈さんがお義姉さんですか」

「どうかしら、それで」

「全然オツケーですよ」

微妙におかしな言葉だった。

「私は」

「小姑娘さんの賛成も得たし。これからは前途洋々ね」

「よかつたね、お兄ちゃん」

「俺は何も賛成もしていないが」

牧村は二人の話にこう返した。

「何の話をしている、しかも」

「別に。気にしなくていいから」

「牧村君も頑張ってね」

未久も若奈もその顔を明るい笑顔にさせていた。そのうえで  
の言葉だった。

「それじゃあ紅茶御願いします」

「はい、わかったわ」

二人の仲はよかった。しかもそれはさらに進展していく。牧村をよそにしてそのうえで進んでいくのだった。

牧村は次の日朝のトレーニングを終えて学校に向かおうとしていた。その彼の横にまた死神のハーレーがやって来たのであった。

「わかるな」

「貴様がここに来たということがか」

「そうだ。何故かわかるな」

こう彼に対して言ってくる。顔は正面を向いていてヘルメットの中にその顔を隠している。

「私が来たということとはだ」

「今度の場所は何処だ」

「このまま行く場所だ」

こう答えてきただけだった。

「ついて来るといい」

「断る選択肢はないということだな」

「貴様が髑髏天使である限りはだ」

「またしても告げられる言葉だった。」

「それはない」

「そうだな」

牧村の話聞きながら述べた。

「俺が髑髏天使ならば魔物と」

「答えはそれしかない」

死神の今の言葉は何処までも冷たいものだった。その冷徹な言葉を出したうえでハーレーのスピードを速めてみせてきたのであった。

「来い」

「わかった。それではだ」

その言葉に従い死神の後について行く。そこは前に国道が橋となつて通っている開けた大きな道だった。そこに案内されたのである。

周りには人がいない。いるのはまずは牧村と死神だけだった。

しかし牧村はそこに着いてだった。まずはこう言ったのだった。

「ここだな」

「そうだ、ここだ」

死神は静かに言葉を返してきた。

「間も無く来る頃だ」

「そうか。では待たせてもらおう」

サイドカーから降りてヘルメットを脱ぐ。そうして白い雲しかない空を見上げる。

天気は晴れず暗いものだった。その空を見ながら牧村はふと言った。

「この空の上には」

「どうした？」

「青い雲一つない空がある」

「こう言うのである。」

「何処までも青い空がな」

「あれっ、珍しいこと言うね」

ここで死神の側にあの目玉が出て来た。そうして牧村の今の言葉に対して言ってきたのだった。

「髑髏天使にしては」

「珍しいか」

「うん、そんなこと言わないって思ってたよ」  
「だからだというのであった。」

第二十六話 座天その十二

「君はね」

「俺もこんなことを思う時がある」

「こつ目玉に応える。」

「たまにはな」

「たまにでもそんなことを思うのがやっぱり意外だよ」

「目玉の言葉はそこが変わらなかつた。」

「案外詩人なんだね」

「詩人か。俺が」

「僕これでも詩が好きなんだよ」

「目玉は今度は自分のことを語ってきた。」

「人間の作つた詩もね。例えばランボーとかね」

「ランボーをか」

「うん、顔も綺麗な詩人だつたね」

ランボーは肖像画が残されている。それを見れば確かに美男子である。物憂げな美男子として今もそうした面からも人気のある詩人である。

「あの人はね」

「そのランボーが好きなのか」

「そうだよ。もつとも君は」

「牧村を見ながらの言葉だつた。」

「ランボーとはまた違うけれどね」

「似せるつもりもない」

「今の目玉の言葉にはこの言葉を返すのだった。」

「別にな」

「そうだね。まあ似せても似合わないしね」

「その通りだな。この髑髏天使はあの詩人とは違う」

死神もまた目玉の言葉に応える。

「また違う種類の人間だ」

「そうそう」

「今のところは、だがな」

今の言葉には何か含むものがあつた。牧村もそれに気付きこのことを問おうとした。しかしそれより前に、であつた。まずはあの老人が出て来たのであつた。

「暫く振りですな」

「貴様か」

「はい、貴方もお元気そうでは何よりです」

顔はにこやかなものであつた。その顔で牧村達の前に現われてきたのである。

「お変わりなく」

「貴様もな」

牧村は今の言葉を受けて老人に返した。

「変わらないようだな」

「我々は変わりませんよ」

自分だけではないというのだった。

「何もね」

「変わらないのか」

「歳を経ることがありませんので」

その穏やかでにこやかな笑みで述べてきた。

「ですから」

「そうか。魔神だからか」

「その通りです。神は歳を経ることがありません」

この時に老人はちらりとだが死神と目玉も見た。そのうえでの言葉であつた。

「そして死ぬこともありません」

「神というのは辛いものだな」

「辛いのですか」

「永遠に生きるということは永遠に苦しむことでもある」



だからだというのである。牧村のこの考えは実に東洋的なものであった。

「死ねばそれから解放されるのだからな」

「ふむ、実に達観した御考えですね」

「生ある者ならば死ぬ」

普通の生ある存在のことも述べた。

「それは時として救いでもあるのだからな」

「それはその通りですね。それではです」

老人は今の彼の言葉を受けて。そのうえで「こうも言ってきたのであった。

「私はこれから」

「これから。どうするのだ」

「貴方の苦しみを解き放つてあげましょう」

「私もだ」

そして老人の横にあの美女が出て来たのだった。これで二人の魔神が姿を現わしたのだった。

「それに協力してやってもいい」

「それで如何でしょうか」

「その申し出は断ろう」

彼等の言葉に一言で返した牧村だった。

第二十六話 座天その十三

「今はだ」

「おや、何故でしょうか」

老人は今の牧村の言葉を受けてすぐに問うてきた。

「死は必ず来るのですからいいのではないですか？」

「そうだ。それで何故そんなことを言う」

老人だけでなく美女もこのことを問うのだった。

「遠慮することはないのだぞ」

「俺が死ぬ時は今ではないということだ」

このことをまた言うのだった。

「少なくとも貴様等との戦いで死ぬつもりはない」

「だからですか」

「今ではないと」

「そうだ。俺は戦いでは死なない」

語る言葉が強く確かなものになっていた。

「決してな」

「では。話は決まりですね」

「ここで私達と戦うのだな」

「来い」

二柱の魔神達を見据えながら告げる。

「両方相手をしてもいい」

「いえ、そうはいきません」

今の牧村の言葉をその穏やかな笑顔で否定した老人だった。

「そういうわけにはです」

「ではいつも通りか」

「はい、貴方のお相手は私の手の者が務めましょう」

こう申し出るのだった。

「それで宜しいでしょうか」

「俺としては相手はどちらでも構わない」

「左様ですか」

「倒すだけだ」

言葉に剣が宿った。

「それだけだ」

「わかりました。では貴方には私が」

「私の相手は死神か」

「そうなるな」

死神は今の美女の言葉に返してみせた。

「不服という言葉は言わせはしない」

「安心しろ、そんな野暮なことを言うつもりはない」

美女もそうしたことを言うつもりは毛頭なかった。

「ただ。楽しませてもらうだけだ」

「それだけか」

「そうだ。それではだ」

魔神の目が赤く光った。するとだった。

「この者を出そう」

「それは」

出て来たのは。黒い目をした女であった。その姿はアフリカのあ  
る部族の服装そのままであった。

それだけ見れば人間に見える。しかし全身から放たれる気配がそ  
うではないと告げていた。

「イブリースだ」

「アフリカにもいたのか」

「そうだ。私の配下でもある」

こう死神に告げる美女だった。

「そのことは知らなかったのだな」

「その魔物の名前は知っていた」

このことにはすぐに答える死神だった。

「だが。貴様の配下だったとはな」

「あの世に戻る前に教えておいておく」

また死神に告げる美女だった。

「そしてそのまま永遠に帰っては来ない」

「その魔物が私を倒すというのだな」

「その通りだ。ではイブリースよ」

「はい」

まるで人形のような声で美女に応える魔物であった。

「死神を倒すのだ」

「わかりました」

「それではだ」

死神は両者の話を受けてであった。まずは目玉に告げた。

## 第二十六話 座天その十四

「貴様は姿を消しておけ」

「邪魔だっというんだね」

「貴様は戦えるか？」

「いいや、無理だよ」

死神にその巨大な目を向けながらの言葉であった。

「だってこの姿だよ。わかるじゃない」

「そういうことだ」

また彼に言葉を返す死神だった。

「だからだ。わかったな」

「うん、それじゃあ」

目玉は言葉で死神の言葉に頷いた。そうしてまるで灯りが消える様にして姿を消してしまった。これで死神は一人に戻ったのであった。

一人に戻るとだ。彼は右手を拳にしてそれを己の胸の前に置いた。するとそこから白い光を発し白いフードのある長衣に身を包み大鎌を持った姿になった。

「これでよし」

言いながらその鎌を右手で前に一閃させた。

それを合図としてだった。美女もまた己の魔物に告げるのだった。

「では私はだ」

「行かれるのですね」

「戦いは見ている」

「こつも魔物に告げた。」

「だからだ。後はだ」

「わかりました。それでは」

こつして魔神が姿を消した。すると魔物はそのままの姿で死神に向かい合ってきたのであった。その姿を変えるところはなかった。

「貴様の姿はそのままか」

「如何にも」

その通りだというのである。

「これが私の姿だ」

「そうか」

「そしてだ」

その手に持つている槍を死神に突き出してきた。左手には楯がある。

「この槍は全てを貫く」

「全てをか」

「そしてこの楯はだ」

次には楯を見せてきたのだった。

「全てを防ぐのだ」

「最強の槍と楯だな」

「如何にも」

まさにそれだというのである。

「貴様が勝つ可能性はない」

「それはどうかな」

死神は今の魔物の言葉を受けても言葉の自信を変えなかった。

「果たしてそう上手くいくかだ」

「私を倒すというのか」

「そうだ。倒す」

返答は一言であった。

「その魂を冥府に送り届けてやるつ」

「言ってくれるな」

「事実を言っただけだ」

両手で鎌を構えての言葉であった。

「これから起こる事実をだ」

「そして私を倒すのか」

「槍と楯があるつとも」

魔物の誇るその二つのものについても言ってみせる。

「私に効きはしない」

「自信家だな」

魔物はそんな死神の言葉を聞いてまた述べた。

「尊以上の」

「自信ではない」

「では何だというのだ？」

「さっきも言った筈だ」

またこう返してみせたのであった。

「事実を言っているだけだ」

「では。それが事実かどうかだ」

「今から見せよう」

この言葉が合図になった。

「それでいいな」

「来るのだ」

言いながら自分も動く魔物だった。

## 第二十六話 座天その十五

彼女は左に反時計回りに動きだした。それを受けて死神は。

彼もまた同じ方角に動いた。それにより動きながら対峙を続ける。

その中で、であった。死神は鎌を一閃させてきた。

「むっ!？」

「この鎌からはだ」

一閃させながら言うのだった。

「こっしたこともできるのだ」

「鎌イ足か」

「そっだ、それだ」

放つてからの言葉だった。

「さて、これは防げるか」

「造作もないことね」

魔物はその鎌イ足を見ても落ち着いたものであった。

「何かと思えばね。ほら」

「むっ!？」

楯を前に出しただけであった。それでその鎌イ足を何でもないと  
いったように防いでしまった。本当にそれで終わりなのだった。

「この通りよ」

「言葉に偽りはないということか」

「私は嘘を言うことはないわ」

声が笑っていた。

「決してね」

「それではだ。その槍もか」

「その通りよ。ほら」

言いながらだった。いきなりその槍を投げてきた。

死神はそれを一瞬だけ身体を消すことでかわした。すると槍はコ  
ンクリートに突き刺さった。実に深く刺さり小回りを粉々にしてし



まった。

死神はそれを横目で見てだ。そのうえで述べた。

「貫けぬものはないというのも」

「この通りよ」

言う魔物の右手にはもう槍が備わっていた。

「これでわかったわね」

「認めることは認める」

こう返す死神だった。

「その言葉が嘘ではないということとはだ」

「この最強の槍と楯」

魔物の言葉は誇らしげなものになってきていた。

「貴方に破れるものではないわよ」

「その言葉は認めない」

その自分に破れないということは、であった。

「今の言葉はだ」

「では破れるというのね」

「私は今まで破れたことはない」

死神は動きを止めていた。魔物も同じでそれぞれ構えたまま対峙していた。

そうしてであった。対峙しつつそれぞれの隙を窺っているのである。動いた方が攻撃を仕掛けられる、そうした緊張した状態になっていた。

「一度たりともな」

「それも今日で終わりね」

「そうした言葉も幾度も聞いてきている」  
やはり負けてはいない。

「それも言っておく」

「面白いわね。ここまで気が強いと」

「どうだというのだ？」

「闘いがいがあるわ」

今度はその顔も笑っていた。凄みのある笑みである。

「とてもね」

「そう思うのだな」

「ええ、そうよ」

言いながら一歩出た。

そしてそれと共に槍を繰り出す。それも一瞬消えてかわす死神だった。

攻撃はかわす。しかしであった。

死神は鎌を繰り出す。だがそれは左手の楯に受け止められてしま  
うのだった。

「生憎だったわね」

「見切ってもいたな」

「そうよ。見切っていれば後は簡単なことよ」

その自信に満ちた笑みは変わらなかった。

「こうするだけだから」

二人の闘いは続く。そして牧村は。今老人と対峙し続けていた。

## 第二十六話 座天その十六

老人はいつもの温厚な笑みのままである。しかしであった。

「さて、それではです」

「何を出してくるつもりだ」

「今回は特別でしてね」

笑みをそのままにしての言葉であった。

「この魔物です」

言つとであった。不意に後ろから巨大なものが出て来た。

それは凄まじい速さで老人の後ろまで来た。そしてそのうえでその禍々しい姿を見せるのであった。

「御呼び頂き何よりです」

「頼みましたよ」

「はい、百目様」

魔物は己のすぐ前にいる魔神の言葉に頷いた。それは髑髏であった。人の上半身を持ち下半身と両手が螻蛄になっている、異様極まる髑髏であった。

全体で十五メートルはあろうか。その巨大な髑髏を見て牧村は思わず言つた。

「変わったところの姿ではないな」

「がしゃどくろといえます」

老人がその魔物の名を告げてきた。

「御存知ないようですね」

「はじめて聞く名前だ」

こう返す牧村だった。

「それがこの魔物の名前か」

「その通りです。彼女が相手でいいですね」

「彼女!？」

魔神の今の言葉にふと目をやった。

「その魔物は女か」  
「そうです。意外でしたか」  
「意外どころではない」  
「また言葉を返すのだった。」  
「女だったとはな」  
「蠅螂ならば女でしょう」  
「老人が言うにはそういうことであった。」  
「だからなのですよ」  
「それか」  
「はい、では貴方の今回の相手は彼女ということだ」  
「わかった」  
「それでいいと返した牧村だった。」  
「それではそれでな」  
「はい、では」  
「髑髏天使ね」  
「魔物からも彼に対して声をかけてきたのである。」  
「はじめて、と言うべきかしら」  
「少なくとも二度も会うつもりはない」  
「そうね。それは私も同じよ」  
「牧村の今の言葉に笑って返す魔物だった。」  
「貴方とは会うのはこれが最初で最後よ」  
「貴様はここで消えることになる」  
「牧村はその巨大な姿を見上げながら彼に告げた。」  
「それもついでに言うておく」  
「いいわね、自信家で」  
「この時代の髑髏天使は特にそうなのですよ」  
「彼女の前にいる老人がまた言ってみせてきた。」  
「こうした方でして」  
「自信のある人は好きです」  
「魔物はその老人に対して再び告げた。」

「紹介して頂きまことに有り難うございます」

「では。後はお任せしますね」

「はい」

「それでは」

老人はここで姿を消した。後に残ったのは牧村とその魔物だけであつた。

両者は対峙をはじめた。まずは魔物から彼に言ってきた。

「髑髏天使になりなさい」

「闘う為にか」

「そうよ。今の貴方には何の興味もないわ」

こう言うのである。

「人間の身体の貴方にはね」

「興味があるのはあくまで髑髏天使としての俺か」

「そうよ」

まさにその通りだと返すのだった。

「だから早く変わりなさい」

「わかつた」

それを聞いて頷く牧村だった。

## 第二十六話 座天その十七

「それではだ」

「どうするのかしら」

「髑髏天使に変わらせてもらおう」

言いながらその両手をゆっくりと動かしてきた。そうしてそれぞれ拳にする。

その拳を胸の前で打ち合わせる。するとそこから白い光が放たれその中で牧村から髑髏天使の異形の姿へとなるのだった。

「行くぞ」

髑髏天使の姿になると右手を少し前に出して握り締めてみせる。これが合図となった。

すぐに両手に剣を出す。そして主天使の姿になった。

天高く飛び左手の剣を一閃させる。そこから無数の岩石を出して魔物に襲わせた。

「岩なのね」

「これがこの天使の力だ」

岩を放ったうえでの言葉だった。

「これをどうかわす」

「かわす、ね」

「その巨体でどうかわすつもりだ」

「確かに私の身体は大きいわ」

髑髏天使を見上げている。骸骨と蠍が合わさったその身体は見れば見る程不気味であり恐れを抱かせるに充分のものであった。

「それはね。けれど」

「けれど。何だ？」

「だからといって何もできないというわけではないわよ」

こう言ってみせてきたのである。

「ただし。かわしはしないわ」

「かわさないというのか」

「そうよ。だって」

自らに降り注ぐその岩達を見上げながらの言葉であった。

「その必要がないから」

「必要がないというのか」

「こうすればいいだけだから」

右手のその鎌を上げてきた。そうして複数振り回す。

するとであった。髑髏天使が今出した岩達は全て細かく切られてしまった。それによって何の効果もないものになってしまったのであった。

ただの塵になってしまった岩達を見ながら。魔物は表情が無い髑髏の顔に笑みを浮かべさせたうえで。こう言ってみせたのである。

「どうかしら」

「見事と言つて欲しいのか」

「女性を褒めるのは殿方の嗜みではなくて？」

「俺の流儀ではない」

この辺りは牧村のままであった。

「そういうことはしない」

「あら、風流がわかつていないわね」

「少なくとも貴様に見せるつもりはない」

やはりいつもの牧村だった。

「それだけだ」

「つれないわね。けれどいいわ」

やはりその髑髏の顔は笑っているように見えた。

「それならね」

「ならいいな」

「ええ。それなら」

言いながらであった。

今度は左手の鎌を一閃させてきた。そのうえで鎌イ足を出してき

たのである。

鎌イ足は一直線に髑髏天使に襲い掛かる。下から上に、であった。

「どうかしら、これは」

「鎌イ足か」

「貴方も使っていたわね」

放ったうえで彼に問うてみせてきた。

「そうだったわね」

「それはその通りだ」

このことを認めるのであった。

「風の力としてだ」

「だったらどうするのかしら」

「風の力はわかってる」

髑髏天使はこう彼に返した。

「ならばだ」

「どうするといふのかしら」

「こうするまでだ」

言いながらであった。能天使の姿になった。白い姿になってみせたのである。

そしてすぐに左手を一閃させて鎌イ足を放つ。それで魔物の鎌イ足を打ち消してみせたのである。そうしてそのうえでまた言ってみせたのである。



## 第二十六話 座天その十八

「こういうことだ」

「やるわね」

それを見て楽しみに笑う魔物だった。

「やはりこれ位はね」

「どうということもない」

また言う髑髏天使だった。

「この通りだ」

「わかったわ。それじゃあ今度は」

「どうするつもりだ？」

「私もそこに行くわ」

こう言ってきたのであった。

「そこにね」

「空を飛ぶとでもいうのか」

「そうよ」

まさにそうだと答える魔物だった。

「そうしてあげるわ」

「貴様は空が飛べるのか」

「貴方にも翼があるように」

魔物は笑いながら言ってみせてきた。

「私にもあるのよ。だからね」

「その蠓螂の羽根でか」

「見せてあげるわ」

言いながらであった。彼女はその背中を動かしてみせたのであった。

その蠓螂の羽根が動いた。すると。

「むっ!？」

「こうしてね」

言いながらであった。魔物は舞ってきた。天高く飛んできたのであった。

そうして髑髏天使の高さで飛んでいる。その螭螂の羽根でだ。

「飛ぶか」

「飛べるのは鳥だけではないのよ」

魔物はこう髑髏天使に言ってきた。

「虫もまた飛べるのよ。知らないわけじゃないわね」

「そうだったな」

言われてそのことに頷く彼だった。

「虫もまた飛べる」

「だからよ。さて、いいかしら」

声が笑っていた。

「行くわよ」

「来るか」

魔物が動いた。信じられない速さで飛んできた。

そしてその両手の鎌で襲い掛かってきたのであった。

「さあ、受けるのよ」

「むっ!？」

「私の鎌を」

突進しつつその鎌を交互に繰り出してきた。まるで風を切るかの様であった。

まずは右が、そして左であった。

交互に鎌を繰り出しそれで髑髏天使を両断せんとする。だがそれは。

「くっ……」

「やるわね」

その鎌を両手の剣で防いでみせたのだった。

それにより危機を乗り越えた。とりあえずは。

だが魔物はそれで止まらず体当たりも浴びせてきた。それは防げなかった。

巨体の体当たりを受けた髑髏天使は吹き飛ばされた。空中で激しく飛ぶ。

「うっ、これは……」

「私の武器は鎌や鎌イ足だけじゃないのよ」  
体当たりを浴びせてからの言葉であった。

「こっしたものもあるのよ」

「身体もだというのか」

「そういうことよ」

空中で何とか体勢を取り直した彼に対しての言葉である。

「この巨体もまた私の武器なのよ」

「そうだったのか」

「意外だったかしら」

「ふん、確かに気付かなかった」

それは彼も認めただった。

「だかだ」

「だが？」

「そうだ。俺はまだ立っている」

こっ魔物に言ってみせたのである。

第二十六話 座天その十九

「こうしてだ。立っている」

「生きているというのね」

「俺は立っている限り闘う」

少なくともその目は死んでいなかった。髑髏の奥にある人の目はあくまで強く確かな二つの光を放ち続けていたのである。

「その限りな」

「いいわね。貴方が魔物だったら」

「どうだったというのだ？」

「惚れていたな」

今の言葉は偽りではなかった。

「間違いなくね」

「魔物に惚れられるというのもだ」

「悪くないでしょ」

「趣味ではない」

そうだとしたのであった。

「貴様にとつては生憎だろうがな」

「つれないわね。そんなのじゃあまりもてないわよ」

「恋だの愛だのに興味がないと言えば嘘になるが」

流石にそれを否定はしなかった。

「しかしだ」

「しかし？」

「貴様ではない」

彼は言い切った。

「貴様をその相手には選びはしない」

「本当につれないわね」

「貴様は敵だ」

魔物を見据えての言葉だった。

「だからだ。敵を愛する趣味は俺にはない」

「敵は敵なのね」

「敵は倒す」

まさに剣そのものの鋭さを持つ言葉だった。

「それだけだ」

「そうなのね」

「だからこそ貴様も倒す」

それを目の前に飛び続けるがしゃどくろに対しても告げた。

「いいな、それで」

「ストイックでいいわ」

魔物はそれを聞くとさらに満足したようであった。声にもそれが出ている。

「さらに惚れそうね」

「敵でなかったらそうするがいい」

「敵としてもよ」

しかし魔物はまた返す。

「貴方にね。惚れそうよ」

「敵に惚れるというのか」

「相手が強くて。そして見事であればある程」

なるというその言葉は。確かにそれを感じさせるものであった。

「魔物は惚れるものなのよ」

「貴様だけではないのか？」

「それが違うのよ」

彼女が言うにはそうであるらしい。声は楽しそうな笑みを含んだままである。

「魔物はね」

「戦いを楽しむからか」

「その相手を見るのも当然ではなくて？」

「言われてみればそうだな」

話を聞いていてそれも確かだと認めた髑髏天使であった。

「だからか」

「そうよ。それでね」

そしてさらに言ってきた。

「貴方は私の中で永遠に生きるのよ」

「貴様の中でというのか」

「ええ」

それはまさに恋人が言うべき言葉であった。だが魔物はその言葉を今確かに言った。そのうえで髑髏天使をその目で見続けているのであった。

そうして再び。彼女は言った。

「だからね」

「俺を倒すというのか」

「私の手で死んでもらうわ」

言いながら再び突進に入ろうとしていた。

「次に私の突進を受けたなら」

「むっ!?!」

「まずいわね」

先程髑髏天使が受けたダメージをわかっているかのような言葉であった。

## 第二十六話 座天その二十

「そうよね。今度受けたならば」

「それを見越しているというのか」

「そうよ。そのダメージを見れば」

既に彼の鎧は先程の攻撃によってかなり損傷している。しかも衝撃のダメージであったので鎧を着けていても完全には消えない。彼がダメージを受けているのは明らかであるのだ。

「わかるわ」

「そうか。それでか」

「覚悟する必要はないわ」

魔物はまた言ってきた。

「私の中でこれから永遠に」

「生きるというのか」

「さあ、行くわよ」

言いながらいよいよ突進に入る。

そのまま攻撃に入ろうとする。髑髏天使はそれをかわそうと考えた。しかしであった。

「ぐっ……」

突進で受けた痛みが今になって彼を襲った。それは鈍いものでかなり広くに渡っていた。

それにより動きが鈍るのは明らかだった。かわせる絶対的な保障はなくなった。

「まずいか」

次の攻撃をかわせなければだ。彼は間違いなく倒れる。それを意識せずにはいられなかった。

魔物は今にも来ようとしている。勝負はつきかねない状況になった。だがその時。

全身が輝いた。黄色い光に包まれる。そしてその中で彼の鎧と髑

體も黄色いものになったのである。

「黄色!？」

「まさかここでか」

魔物も髑髏天使もそれぞれ声をあげた。

「あらたな天使になったのか」

「座天使ね」

魔物もそれを見て言ってきた。

「それになったというのね」

「そうだな」

それは髑髏天使が最もよくわかっていることだった。

「この力は。座天使のものだ」

「上級の天使になるなんて」

魔物は恐れてはいなかった。むしろ恍惚とした様な声になっていた。

そしてその声で、であった。彼女は言うのだった。

「素晴らしいわ。そしてそれを見られるなんて」

「それだけ喜ぶべきことなのか」

「ええ、そうよ」

まさにその通りだというのだった。

「貴方をさらに倒したくなっただわ」

「なら来るのだ」

髑髏天使も引かなかった。

「俺もこの力を見よう。どんなものかな」

「行くわよ」

あらためて突進に入る魔物だった。

「そして今度こそ」

「傷が回復しているか」

ここで髑髏天使はそのことにも気付いた。

傷だけでなく鎧もであった。完全に元に戻っていた。

当然痛みもない。それどころか前よりもさらに力に満ちていた。



「いける」

「いけるのね」

「貴様に勝つ」

魔物に対しても告げたのだった。

「この力でだ」

「座天使の力」

魔物もまたその力について考えを及ばせた。

「それは一体」

「俺にもまだそれはわからない。しかしだ」

「しかし？」

「貴様を確実に倒す」

これは間違いないというのだった。

「何があるうともだ」

「私をその力で倒すと」

「行くぞ」

言うただった。その全身に力がみなぎった。その力は。

全身を無数の蛇が覆った様に見えた。だがそれは蛇ではなかった。

黄色く輝き火花を散らし焼ける様な音を立てる。それは。

「雷ね」

「それか」

魔物も髑髏天使もそれぞれ言った。

「それが座天使の力というのね」

「この力がか。今度の力は」

「あらゆる力を身に着けていくようね。強くなる度に」

「それが髑髏天使なのだな」

そしてだった。魔物はその彼を見て笑った声をここでも出すので

あった。

## 第二十六話 座天その二十一

「面白いわね」

「面白いというのだな」

「ええ、闘いがいが本当にあるわ」

そしてまた言った。

「実にね」

「そう思うなら来るのだな」

「言われずともね。行かせてもらおうわ」

言いながらまた鎌イ足を放ってきた。今度は幾つもであった。

それがそれぞれ髑髏天使を襲う。しかしここでその力を使う彼だった。

右手の剣の前に繰り出した。剣の先から雷を放つ。一直線に飛ぶその雷は忽ちのうちにその幾つも出て来ていた雷を消し去ってしまったのである。

まさに一瞬だった。その雷を見て魔物も。声を変えた。

「凄いわね」

「これが雷の力か」

髑髏天使もはじめて使ったその力に対して声をあげた。

「見事なものだ」

「その力で私を倒すというのね」

「そうなるな。では行くぞ」

「では倒してみるのね」

その力を見ても臆することはない。やはり彼女は魔物だった。

そして突っ込んで来た。今度も一直線だ。

「来たか」

「死ぬのね」

言いながらまた鎌を振ろうとする。髑髏天使はそれを冷静に見ている。

そのうえで再び剣を前に突き出した。するとだった。

再び黄色い雷が放たれた。それが一気に魔物を貫いてしまった。

額を完全に貫いていた。それを受けた彼女は動きを完全に止めてしまったのだった。

「ぐっ……」

「勝負ありだな」

ここで言ったのだった。

「これでな」

「見事よ」

額を貫かれはした。しかしまだ生きていた。

その最後の力であった。魔物は彼に告げるのだった。

「やはり貴方は」

「何だというのだ？」

「見事な戦士ね」

こう言うのである。

「最高の髑髏天使よ」

「そうか」

「まるで人間じゃないみたい」

そしてこんなことも言うのだった。

「私達に近いものがあるわ」

「貴様等にか」

「ええ。そうよ」

魔物はまた彼に告げた。

「その通りよ」

「戯言を言うのだな」

「戯言かどうかはやがてわかるわ。ただ」

「ただ。何だ？」

「私を倒したのは事実よ」

それは間違いないというのである。

「このがしゃどくろをね」

「それははっきりとわかる」  
髑髏天使もそれに応える。

「だが」

「だが？」

「俺は人間だ」

このことは自分でも不思議だったが妙にこだわるものがあつた。あえて自分の口から言わずにはいられなかった。どうしてもであつた。

「それは言っておく」

「そうなの」

「そうだ。では去るといい」

「ええ。そうさせてもらうわ」

ここでその全身を青白い炎が包んできた。

「これでね」

「座天使の力、雷の力が」

「あと二つよ」

魔物はその炎の中でまた彼に言ってきた。

「わかるわね」

「それで俺はどうなるのか」

「私は残念だがそれを見ることはできないわ」

「今倒れるからだな」

「そうよ。じゃあこれで」

いよいよ青白い炎に全身を包まれた。そうして。

第二十六話 座天その二十二

その中に消えてしまった。闘いがまた一つ終わった。

髑髏天使は空を舞いながらそれを見届けていた。そしてその頃も  
う一つの闘いもまた。

死神とイブリースは対峙している。その中で、だった。

また槍を投げてきた魔物だった。死神はまたそれをかわした。

「動きは変わらないのね」

「何度も言うが見切っている」

「こつ魔物に返すのだった。」

「貴様の槍はな」

「そうね。けれど動きは落ちてきているわね」

「落ちてきているというのか」

「変わってはいないわ」

「そう言った上でさらに言うのであった。」

「それでも。速さは落ちてきているわね」

「そうだというのだな」

「そして僅かなその落ちが」

「魔物の言葉に笑みが入った。」

「貴方の敗北につながるわ」

「貴様は違うというのか」

「私は体力をそんなに使ってはいないわ」

「だからだというのである。」

「だから動きはまだ」

「落ちていないか」

「そうよ。貴方は身体全体を使ってかわしているけれど私は」

「楯を使うだけか」

「ええ」

まさにそうだというのだった。

「その通りよ」  
「だからか」  
「貴方の方が体力を使っている」  
神である為に汗はかいていない。しかしわかるというのであった。  
「それは次第に出て来るわ」  
「そして貴様が勝つというのだな」  
「そうよ」  
声の笑みがさらに強いものになった。  
「その通りよ」  
「そこまで上手くいけばいいがな」  
「いくわ」  
それは確信している声であった。  
「間違いなくね」  
「そうか。貴様はそう思っているのだな」  
「その通りよ。さて」  
槍をまた構えてきたのであった。  
「また投げるけれど」  
「かわすというのだな。私が」  
「そうするしかないわね。そして貴方の攻撃は」  
「いいことを教えてやる」  
不意にこう告げた死神だった。  
「一つな。教えておこう」  
「いいこと？」  
「楯が防げるのはその前だけだ」  
「こう言うのであった。」  
「横や後ろは防ぐことができない」  
「それがどうしたというのかしら」  
「それを告げた」  
彼はまた言ったのだった。  
「今確かにな。聞いたな」

「ええ、聞いたわ」

それは認める魔物であった。

「けれどそれが一体どうしたのかしら」

「見るがいい」

その言葉と共にであった。死神は身体を分けた。

六人いる。そのそれぞれの口で言ってみせたのであった。

「貴様は確かに強い」

「それは認める」

「しかしだ」

そのそれぞれの死神の言葉である。

「一人でしかない」

「だとすれば勝てる」

「一人ならばな」

「六人に分かれたのは見事よ」

魔物はその死神の分け身を見ても動じたところはない。

「それはね。けれど」

「けれどか」

「貴様の勝利は揺るがないというのだな」

「そうよ」

また己の声に笑みを含ませたのであった。

第二十六話 座天その二十三

「その通りよ。決してね」

「そう思うのならばだ」

「そう思っていればいい」

「こう返す死神達だった。」

「だが。これでだ」

「貴様は倒れる」

「必ずだ」

「貴方が私に勝つには」

魔物はその自信に満ちた言葉を出し続けていた。

「まずは」

「まずは」

「その楯をか」

「そうよ。破ってから言うのね」

声だけでなく顔もであった。勝利を確信しているその笑みを浮か

べていた。

そすいてその顔で。さらに言うのであった。

「この何もかもを防ぐ楯を」

「それがわかつていてだ」

「言っているのだ」

「こうな」

しかし死神達もこう彼女に返す。

「それではだ」

「行くぞ」

「そして決まる」

その六人の死神達が一斉に動いてきた。

「貴様の死がだ」

「その魂、冥府に送ってやるう」



「来たわね」

魔物もまた身構えた。勝利は確信しているが油断したわけではなかった。

死神達は一斉に彼女に襲い掛かって来た。その鎌を繰り出し斬らんとする。

だが鎌は全て楯に防がれる。魔物はそのうえで自らの槍を出す。槍を続けざまに突き出す。しかし死神達はそれをかわす。

「かわせばそれだけ」

また笑みを浮かべる魔物であった。

「体力を使うのはわかっている筈よ」

「その通りだ」

「それはわかっている」

わかっていると返してみせた。

「それもだ」

「そうね。貴方は今六人」

魔物からも言ってきたのだった。

「六人分の体力を使っているわ。それだけに消耗が激しいわね」

「その通りだ。しかしだ」

「しかし？」

「それだけの価値はある」

声が鋭いものになっていた。

「こうするだけの価値がだ」

「あるというの？」

「私は六人だ」

またこのことを言ってみせたのである。

「六人だ。しかしだ」

「しかし？」

「今私は何人だ」

魔物の攻撃をかわしながら彼女にまた問ってみせたのだった。

「私は何人いる」

「！？そういえば」

言われてみてだった。彼女も気付いた。今の彼の数は。

「五人ね」

「あと一人はだ」

こう言ったその時であった。

「ここにいるのだ」

「！？」

後ろから出て来た。魔物のその影からだ。そうしてその大鎌で背中を斬ったのであった。

忽ちそこから魔物の鮮血が飛び散る。勝負ありであった。

「うっ、まさかこんな」

「楯はその前しか防ぐことはできない」

死神はまたこのことを彼女に告げた。告げながら一人に戻っていく。

「言ったな、確かに」

「こういうことだったのね」

「そうだ。私のうちの一人を忍ばせておいた」

つまり伏兵である。

「狙っていたのだ」

「見事ね。そこまで考えていたなんて」

「最強の槍と楯を持っていてもだ」

「その隙間を狙えば」

「勝てるのだ。私の様に」

声はこれまでになく確かなものになっていた。

## 第二十六話 座天その二十四

「これでわかったな」

「ええ、よくね」

「それではだ。行くのだ」

赤い炎に包まれていく魔物に対して告げた言葉だった。

「冥府にな」

「貴方には負けたわ」

その赤い炎の中で魔物は微笑みながら言ってみせてきた。

「完全にね」

「認めるのだな、それは」

「ええ、そうよ」

ここでも微笑み続けていた。

「それじゃあ。魔物としてあの世に行くわ」

「暫くそこに留まっているのだな」

「そうさせてもらうわ。あちらの世界もあちらの世界で楽しいし。

それに」

「それに？」

「どうやらあちらから楽しいものが見られそうだし」

「ここでこんなことも言ってきたのである。

「どうやらね」

「楽しいものだ」と

「それを楽しみしながら逝くわ」

「こう言うのであった。

「それでは。またね」

「楽しいものか」

魔物が赤い炎の中に消えていくのを見届けながら呟く死神だった。戦いは終わった。死神は元の姿に戻った。その彼の上にまたあの目玉が出て来た。そうしてそこから彼に対して声をかけてきたのだ

った。

「今回も無事に終わったね」

「無事か」

「一時はどうなるかって思ったけれど」

「勝つことはわかってた」

彼は冷静な言葉で目玉に返した。

「既にな」

「その割りには苦戦してなかった？」

「それでもわかってたことだ」

「そうだといいのであった。」

「私が勝利を収めることはだ。何故ならだ」

「何故なら？」

「私は死神だからだ」

これが彼の根拠なのだった。

「だからだ。勝つのはわかっていたことだ」

「だからなんだね」

「そうだ。それではだ」

「うん。それじゃあ帰ろうか」

目玉は今度は彼にこう言ってみせた。

「僕達の世界にね」

「今からな。しかし」

今度は牧村を見る死神だった。彼もまた髑髏天使から元に戻っていた。そのうえで彼を見ながら言うのだった。

「また強くなったのだな」

「座天使だね」

「そうだ」

まさにそれだと返す死神だった。

「あいつはそれになった」

「雰囲気違ってきたね」

目玉はその彼を見ながら述べた。

「随分と。何か」

「どうなっていると思う」

「人間離れしてきたね」

「そうやってきたというのである。」

「何かね」

「人間離れか」

「僕の気のせいだといひけれど」

「いや、気のせいではないな」

「そうだっていうんだね」

「あの気配はだ」

死神もまた牧村を見続けていた。

「間も無く変わるな」

「そうだね。このまま行けばね」

「人でなくなつたならば」

死神の声はここで鋭いものになった。まさに鎌であった。

「動く」

「予定通りだよ」

「そうだ。刈る」

さらに具体的な言葉であった。

「あの魂をだ。刈る」

「わかつたよ。その時は仕方ないね」

「そういうことだ」

ここで牧村が彼等のところに来た。そうして彼から声をかけてきたのであった。

「いいか」

「何だ」

「俺はこれで帰らせてもらつ」

「こつ彼等に対して言つてきたのである。」

「これでだ。貴様達はどつする」

「私は私の世界に帰らせてもらつ」

「僕もね」

彼等は静かに今の牧村の問いに答えた。

「これでだ。そこで休ませてもらう」

「そうさせてもらうよ」

「そうか」

それを聞いて静かに頷いた牧村だった。

「わかった」

「それでいいのだな」

「聞いただけだ。俺が何かを言うことではない」

いつも通りの素っ気無くしかも他人に干渉しない言葉だった。

「それならそれでいい」

「そういうことだな」

「では俺もこれでだ」

彼の横にサイドカーが来た。脳波で呼んだのである。

そのサイドカーを一瞥したうえでだ。また死神達に告げたのであった。

「帰らせてもらう」

「それでは。今日はこれでお別れだな」

「また会うことになるな」

こうは言っても牧村の言葉にはこれと云って感情が見られない。

これもいつも通りであった。

「その時にまた、だ」

「そうだな。またな」

言葉を軽く交えさせて終わりであった。彼等はそれぞれの場所に戻った。闘いは終わりまたあらたな戦いに入るのであった。それまでの休息であった。

2  
0  
0  
9  
·  
1  
1  
·  
2  
2  
0

## 第二十七話 仙人その一

髑髏天使

第二十七話 仙人

「遂にだった」

「その通りです」

美女と老人であった。彼等が仲間達に述べていた。彼等は今は暗黒の中にいた。その中に漂うようにして立ちながら話しているのである。

「座天使になった」

「上位の天使になりました」

「もうか」

それを聞き終えた青年が呟いた。表情も険しいものになっている。

「もうなったというのか」

「幾ら何でも早過ぎるね」

今度は子供が述べた。

「こんなに早い進化というか成長はなかったんじゃないかな」

「そうね。かつてなかったわ」

女も述べた。

「これまでの髑髏天使の中では」

「有り得ない速さだ」

男も言うのだった。

「ここまで速いのはな」

「何かあるな、これは」

ロツカーもいつもの余裕はなかった。

「あの髑髏天使にはな」

「だとすればそれが何かだ」

紳士も言った。

「何がある、あの髑髏天使に」



「気配を感じた」

「ここで言葉を出したのは美女だった。

「明らかにだ。人とは違う気配をだ」

「人とは違う」

「どういふことかな、それは」

「一体」

他の魔神達は彼女の言葉に問うた。

「気配という」と

「それでわかったみたいだけれど」

「だとすれば」

「どういふことだ」

「つまりはです」

美女と交代する形で老人が彼等に説明をしてきたのだった。

「その気配が我々に近かったのです」

「我々にか」

「つまり魔物にか」

「いえ、魔物ではありません」

だがここでそうではないとも述べた老人であった。そうしてさらに言うのであった。

「魔物ではなく」

「となると」

「何だ？」

「私達です」

「こつ言うのであった。

「我々に近くなっています」

「我々にという」と

「神にか」

「そう、魔神にです」

まさにそれだというのである。

「それになってきています」

「魔神にか」

「それになつてきているのだな」

「そうです」

老人はまた答えたのだった。

「我々と同じ存在に」

「しかしそれは」

「真なのか」

それを聞いても今一つ実感の内観時の他の魔神達だった。

「魔神になるとは」

「そうなるのか」

「しかもだ」

男がその中で老人に言ってきた。

「まだ座天使だったな」

「そうです」

そうだと答える老人だった。

「今それになつたところですよ」

「ではまだではないのか」

男はそれを聞いてまた述べた。

## 第二十七話 仙人その二

「それではだ」

「今は座天使でもです」

しかし老人はまた言うのだった。

「さらに強くなります」

「智天使、それにね」

女が言ってきたのだった。

「最上位ともなれば」

「そうです。ほぼ我等に等しくなります」

その強さがというのである。

「ですから」

「最高位になる天使は数あつた髑髏天使の中でも僅かだった」

今言つたのは青年だった。

「数人もいなかったな」

「僕達を封印したあの髑髏天使はそうだったね」

子供が言ってきた。

「確かね」

「智天使にしる滅多になれるものではなかった」

紳士が述べてきた。

「そしてさらに上となるとだ」

「さらに少ない」

美女もまた言ってきた。

「最早数える程度もいはしない」

「しかしそうなればってことだよな」

ロツカーもその言葉は鋭い。

「俺達に等しい力か」

「そうだな」

また応える彼等だった。

「そうなればだな」  
「あくまでそうだが」  
「それではだ」  
「智天使になつた時か」  
その時だというのだった。  
「見極めていくか」  
「どういった存在になるのか」  
「あの髑髏天使」  
他ならぬ牧村のことである。  
「一体どうなる」  
「それで」  
「そしてです」  
ここでまた老人が口を開いてきた。  
「キリムさんが来られましたかまた御一人」  
「出て来たというのね」  
「そうです」  
まさにそうだとその美女に答える老人だった。  
「その通りです。これで十人ですね」  
「増えてきたな」  
黒人はそれを聞いて述べた。  
「かなりな」  
「ええ、これで」  
「また」  
彼等は口々に言っていく。  
「仲間達が増えていく」  
「これで」  
「十二人になれば」  
「どうするかだが」  
「それに」  
ふと美女がまた言ってきた。

「気になることが一つある」

「一つ!？」

「一つとは」

「気配を感じることもある」

美女は言うのだった。

「どうもな」

「気配!？」

「というと」

「何者のだ？」

「まず言っておくが死神のものではない」

彼ではないというのだ。

「あの男のものではな」

「それではないのか」

「違うのね」

「そうだ。違う」

そうではないというのである。

「あの男でも眼神でもない」

「では何だ？」

「何の気配だ？」

「それがわからないのだ」

そこまでは美女にしてもわかりかねるものだったのである。しかしその中でもこう述べる彼女であった。その述べた言葉が何かという。

## 第二十七話 仙人その三

「それは」

「それは？」

「奥底から感じる」

「そういうものだというのが。」

「そして底知れぬ邪悪な。原始的な意志をな」

「邪悪ですか」

「それを聞いて首を傾げさせた老人だった。」

「邪悪とはそれはまた」

「奇怪だな」

「確かに」

「他の神々もこう述べた。」

「我等とはまるで違う」

「邪悪とは」

「俺達は邪悪ではない」

「彼等はそれは強く意識していた。」

「確かに人を食う者もいる」

「しかしそれはあくまで糧としてだ」

「楽しんで食らい鬨り殺すものではない」

「しかもよ」

「口々にそのことを言うのであった。」

「最近じゃ人を食べなくても十分に美味しいものがあり糧も得られるのに」

「何も人をそうする必要もなくなったし」

「ただ。戦うだけだ」

「それだけだというのが。魔物のその存在意義である。」

「ただ戦いあの髑髏天使を倒す」

「それだけだというのが。」

「邪悪であるとは思ってもしない」

彼等に見てみればそれだけなのだ。戦いを好むか好まないかで魔物と妖怪が違ってくる。要は戦いに関する考えでその両者が分かれてしまうのだ。

「だから別にそんなことは」

「ないのにね」

「しかし邪悪か」

「そうだ。感じるのだ」

また仲間達に話す美女だった。

「こんなことは今まで感じたことがない」

「だとすると何なのでしょう」

誰もが首を捻ってしまった。

「その元は」

「まだわからない。しかしだ」

「しかしなのです」

「そうだ。まさかとは思うが我等の前にも出るかも知れない」

美女はそれを話した。

「若しかしたらな」

「髑髏天使とは別の存在ですか」

老人はここまで聞いて静かに述べた。

「私達にとって何になるかですね。それが」

「そうだ。何になるか」

美女はまた話した。

「それを見極める必要があるかも知れない」

「ええ。しかし今はね」

女が述べた。

「十人目の仲間を迎えることを考えましょう」

「迎えは誰が行く」

男が仲間達に問うた。

「誰がいいと思うか」

「誰かか」

「そう言われると」

彼の言葉に青年とロッカーが顔を向けた。

「俺が行くか」

「俺でもいいぜ」

二人が名乗り出た形となった。

「暫く見ていただけだったからな」

「楽しませてもらいたいしな」

「いや、ここは僕が行きたいけれど」

今言ったのは子供だった。

「どうかな」

「いいのではないか？」

紳士は子供についた。

「御前が行っても」

「いいんだ。じゃあそうしようかな」

それに応えた。しかしだった。

ここでまた青年が言うのだった。



## 第二十七話 仙人その四

「やはり俺が行かせてもらう」

「行くんだ」

「どうしてもっていうんだな」

子供とロツカーがその彼に問うた。

「それなら僕はいいけれど」

「俺もだ。譲ってもいいぜ」

彼等はそれぞれこつ彼に告げた。

「じゃあそれでね」

「よし、決まりだな」

二人はそれで下がった。これで本当に決まった。

「よし、じゃあ」

「これでな」

「感謝する」

青年はその二人に対して礼を述べた。

「では行かせてもらう」

「それではその様に」

老人もここで言った。

「貴方が御願ひします」

「ではすぐに行かせてもらう」

青年はもう姿を消そうとしてきていた。動きが確かに早かった。

彼はすぐに姿を消していく。その中でまた言つのであった。

「では迎えに行くその時にだ」

「ええ、どうぞ」

また彼に応える老人だった。

「それも楽しまれて下さい」

「そうさせてもらう。ではな」

「ええ」

こうして青年は完全に姿を消した。話はこれで終わりだった。他の魔神達もそれで姿を消した。後に残ったのは闇だけであった。

牧村はこの日も博士の研究室にいた。そうしてまた天使として進化したことを話した。すると博士はいつもの様に自身のその机に座りながら彼に対して言ってきたのであった。

「これで上級の天使にもなったのう」

「そうだな。これでだな」

「あと二つじゃ」

まずはこう彼に告げるのであった。

「二つじゃぞ」

「あとの二つは」

「わかっていると思うがじゃ」

「熾天使と智天使だったな」

「左様」

まさにその二つだと返す博士だった。

「その二つじゃ」

「あと二つになったのじゃな」

「しかしその二つはじゃ」

博士の言葉が次第に神妙なものになってきた。そうしてその言葉で彼に話すのだった。

「特別な存在なのじゃ」

「特別か」

「天使の中でも特にじゃ」

「そうなのだといふのである。」

「かなり特別じゃ」

「智天使は確か」

「知っておるようじゃな」

「四つの顔と翼を持っていたな」

「このことを言う牧村だった。」

「そしてその顔は」

「人と牛と獅子と鷲じゃ」

博士がその四つの顔について述べた。

「その四つじゃ」

「何かそれって」

「化け物みたいな姿だよ」

「だよ」

周りの妖怪達はそれまで黙っていたが今の博士の話聞いて目を  
顰めさせて述べた。

「何ていうかな」

「普通じゃないし」

「その通りじゃよ。最上位にあたるこの二つはじゃ」

博士は妖怪達にもこのことを話すのだった。

「力も別格じゃし姿も違ってくるのじゃよ」

「それでその四つの顔に四つの翼!？」

「僕達より凄い格好だし」

「そして熾天使じゃが」

その天使の話もするのだった。

## 第二十七話 仙人その五

「姿はそれまでの天使と同じじゃが」

「何かが違うんだ」

「何が違うの？」

「翼が六枚あるのじゃ」

その天使は翼なのだった。

「上の二枚で顔を隠し下の二枚で身体を隠しそれで飛ぶのじゃよ」

「それも異様だよね」

「そうだよね」

ここでまた言い合った妖怪達だった。

「何かこれまでの天使と全く違って」

「化け物みたいだよ」

「一応言っておくがじゃ」

ここで博士は牧村に顔を戻して話した。

「君が智天使になってもじゃ」

「顔が四つにならないとでもいうのか」

「それはない」

ないとほつきりと答えたのだった。

「今ここにある文献じゃが」

「今度は本だな」

見れば古い書であった。今度は木簡でも縄でも粘土板でもパピルスでもない。今よく広まっている形のそうした書の形をしているものだった。

「それか」

「法皇庁から貰ってきたものじゃ」

つまりバチカンからである。

「そこにあつたルネサンスの頃の書じゃが」

「それに上位の二つの天使のことが書いてあつたのか」

「その姿形だけはな」

書いてあるというのである。

「書いてある。それによるとじゃ」

「顔は四つではないのだな」

「うむ、それはない」

微笑んで牧村を安心させるように告げてみせたのだった。

「顔は一つじゃ。髑髏のままじゃ」

「そうか」

「しかし翼は四つになる」

だがそこはそうなるというのだった。

「四つにな」

「四つにか」

「それで熾天使になるとじゃ」

「六枚になるのだな」

「そういうことじゃ。もうわかってくれたようじゃな」

「話を聞いていればわかることだ」

いつもの様子に背中を壁にもたれかけさせたままの姿勢で述べる

牧村だった。

「それでだ」

「左様か」

「そうだ。六枚の翼か」

「色は智天使は銀じゃ」

その色だというのだ。

「熾天使は金になる」

「銀と金か」

「わかったのはここまでじゃ」

それで終わりだというのである。

「能力やそういったものは全くじゃ」

「わからないのか」

「じゃが。相当なものであるのは間違いない」

これは確かだというのである。

「それはな」

「そうか。それだけの力はあるか」

「わかったな」

ここまで話して牧村に問うたのだった。

「それはな」

「わかった。そうか」

実際に頷いてみせた彼だった。

「四枚の翼か」

「そうじゃ。しかしどうにもな」

「今度は何だ？」

「何かのう。この文献を読んでいたらじゃ」

「何かあったのか」

「金と銀じゃ」

色のことを言う博士だった。

「この二色じゃが」

「どうかしたのか」

「いや、今までの髑髏天使の色じゃが」

色のことをさらに話していく博士だった。

## 第二十七話 仙人その六

「青だの白だの赤だのじゃったな」

「そうだが」

「まあ普通の色じゃな」

そうした色をこう評するのであった。

「普通のな」

「少なくとも輝いた色ではなかった」

「しかし金と銀は違う」

博士はここでまた金と銀のことを話した。

「全くのう」

「そうだよね」

「輝いてるし」

「そこが全然」

周りの妖怪達も博士の今の言葉に頷く。

「言われてみればね」

「そうだよね」

「その通りじゃ。あからさまに何かが違う」

博士はそこに注目していた。そしてそれを牧村にも話し続けるのだった。

そうして牧村もだった。その話を黙って聞いていた。

「明らかに」

「では俺がこれから身に着けるかも知れない力は」

「気を着けるのじゃ」

博士の言葉は強いものだった。

「充分にな」

「そうなのか」

「これまでは人間の力じゃったかのう」

「人間の？」

「そうじゃ」

それだという博士だった。

「まだそうだった気がする」

「ではその二つの天使は」

「天使は階級が上がればそれだけ神に近づく」

このことも話された。

「それだけにじゃ」

「神にか」

「そう、神にじゃ」

彼はまた言った。

「神は人とは違う」

「それはわかっている」

「それに近づく。即ちじゃ」

「人ではなくなっていくのでそういうのか」

「まあそうなるな」

少し言いにくそうにして述べた博士だった。

「結果としてじゃが」

「俺が人ではなくなる」

「今のところはそうではないが」

「あれっ、そうかな」

「何か気配変わってきてない？」

「牧村さんって」

そう言うのだった。

「何か結構ね」

「変わってきてるし」

「不思議と」

「俺がか」

牧村は彼等のその話も聞いていた。そうしてそのついで述べるのだった。

「変わってきているか」



「威圧感出て来たし」

「プレッシャーみたいだね」

「それもあるし」

「それもだというのである。

「随分と変わってきてるよ」

「確かにね」

「最初と比べても」

こう言っつて牧村を見るのだった。しかし牧村は今は多くを語らな  
かった。ただこう言うだけだった。

「それならばだ」

「それなら？」

「どうなの？」

「進むだけだ」

それだけだというのである。

「そうすれば嫌でもわかる」

「智天使になつてみるのじゃな」

「その時にわかるな」

「そうじゃな。なつてしまえばな」

「ではその時に考えるとする」

また言つた牧村だった。

## 第二十七話 仙人その七

「そうさせてもらおう」

「わかった。それではじゃ」

「いいというのだな」

「結局それしかないからのう」

博士もまた牧村と同じ考えだった。そうしてこう述べて頷くのだ  
った。

「とどのつまりは」

「その通りだな」

「しかし。髑髏天使は謎ばかりじゃ」

それは調べている博士にとってもなのだった。

「調べれば調べる程謎が深まっていく」

「だよ。魔物を倒すっていうのだけで」

「他のことは本当に少しずつしかわからないし」

「おかしな話だね」

妖怪達もここで言う。そして博士はふと気付いた様に述べたのだ  
った。

「そうそう、それでじゃ」

「どうした？」

「面白い本が見つかったのじゃ」

「はい、あれですな」

ろく子がここで出て来た。また首を伸ばしてきたのである。

「あの本ですな」

「左様、ネクロノミコンじゃ」

「ネクロノミコン」

「知っておるのう」

すぐに牧村に顔を向けてその本のことを問うてみせた。

「この本のごとは」

「本当にあつたのか」

「そうじゃよ。実在していたのじゃよ」

「こつ何でもないように語る博士だった。」

「実はな」

「小説の話の中だけの書ではなかったのだな」

「実を言えばじゃ」

「ここで自分の思っていたことを口にしてみせた博士だった。」

「その口調は妙に神妙な響きがあつた。その響きで話すのだった。」

「わしもそう思っていた」

「実在しないと思つていたのか」

「しかし何と実在した」

「あらためて述べた言葉だった。」

「これがじゃ」

「実在したのか」

「話は同じじゃよ。狂気に支配されたアラビア人が書いてな」

「それは本当のことだったのか」

「うむ。そしてそのアラビア人は街中で白昼に多くの者の前で奇怪

な死を遂げた」

「これもまた小説の中にある通りだというのだ。」

「実に奇怪な、な」

「そのアラビア人が書いたネクロノミコンがか」

「バチカンの奥深くにあつたのじゃよ」

「そつだというのである。」

「これがのう。そしてじゃ」

「今読んでいるのか」

「いや、それはまだじゃ」

「していないというのであつた。」

「まだじゃ。しかしじゃ」

「近いうちに解説にかかるか」

「そのつもりじゃ。さて、何がわかるかじゃが」

「魔神のことか」

最初はそれを考えた牧村だった。これは彼が髑髏天使であるから当然のことだった。やはり髑髏天使であるということは大きいのである。

しかしその彼に対して博士はこう返したのだった。

「いや、そうともばかりはじゃ」

「限らないか」

「うむ、限らん」

そしてこうも言ってみせたのだった。

「他の世界のことかも知れん」

「そうか」

「それでもどちらにしてもじゃ」

さらに話す博士だった。

「ネクロノミコンには間違いなく何かがある」

「何かがか」

「それは間違いはない」

このことははっきりわかっているのだった。読む前から。

「問題はそれが何かじゃがな」

「それがわかるのは今ではないか」

「まだ待っていてくれ」

こう牧村に告げるのだった。

「まだな。よいかのう」

「別に構わない。俺が解読するのではないからな」

「解読するのはわしだからだというのじゃな」

「してもらおう立場の人間が急かすものではない」

彼の考えだった。それは彼のポリシーとも取れる言葉だった。

## 第二十七話 仙人その八

「頼むのだからな」

「おや、謙虚だね」

「そうだね」

今の彼の言葉を聞いてここでも横から話した妖怪達だった。

「何か今の牧村さんは」

「結構」

「謙虚か。俺が」

「まあ前から傲慢じゃなかったけれど」

「無愛想なだけでね」

この辺りは個性であった。

「別に何ともなかったからね」

「それでも謙虚ではなかったけれどね」

「別に意識して謙虚になるつもりはない」

これもまたポリシーであるようだった。彼の中での。

「特にな」

「この無愛想さは健在だね」

「もうこれがかえって面白いよ」

牧村のその無愛想さですら楽しんでいる妖怪達だった。この辺りは実に余裕があった。少なくとも精神的な余裕はかなりのものである。

そうしてその余裕で。さらに楽しげに話すのであった。

「じゃあさ、牧村さん」

「その待っている間だけけど」

「何だ」

「これ食べない？」

「美味しいよ」

言いながら彼にある者を出してきた。それは丸く硬い小さなもの

であった。

「これさ」

「どうかね」

「月餅か」

一目でそれが何かわかった牧村だった。表の模様を見てもそれが月餅であるのは明らかだった。

「また美味しいものを持って来たな」

「中華街からね。買って来たんだ」

「美味しいよ」

「中華街からか」

彼等が今いる神戸には中華街もある。そこからだというのが。

「あそこの食べ物は何れもいい」

「そうだよ。だからね」

「買って来たんだ」

それでだというのである。

「だから食べて」

「美味しいよ」

「それではだ」

その月餅を貰ってだ。早速口に入れる。

一口食べた彼に対してすぐに妖怪達が尋ねてきた。

「美味しい？」

「それで」

「美味しいな」

一言で感想を述べた彼だった。

「確かにな」

「だよ、これはね」

「確かに美味しいよ」

妖怪達も言いながら笑顔で食べていく。

「この味がいいんだよね」

「本当にね」

「お茶にも合うし」

見れば烏龍茶を飲んでいる彼等だった。

「いや、中国のお菓子もいいね」

「中華街の料理も美味しかったし」

「それも食べてきたのだな」

「わしが紹介したのじゃよ」

ここで博士が少しばかり誇らしげに言ってきた。

「わしがな」

「そうだったのか」

「美味しいものは一人で食べるものではない」

彼は言った。

「皆で食べてこそ本当に美味しいのじゃよ」

「そうそう」

「その通りだよ」

見れば妖怪達は皆で食べている。それぞれ研究室のあちこちに位置して月餅を食べている。その他の菓子も口にしていたりしている。

そうしてであった。楽しんでいたのであった。

「それでこそ御馳走だからね」

「皆で食べてね」

「そうだな」

その言葉に牧村も頷くのだった。

「一人で食べているとあまり美味いとは感じない」

「お店でもそうじゃない」

「人が多い時の方が美味しく感じるからね」

妖怪達はまた牧村に言った。

## 第二十七話 仙人その九

「だからね。皆で食べないと」

「美味しいのなら余計にね」

「はい、またどうぞ」

今度はろく子が彼にその月餅を差し出してきたのだった。

「もう一つ」

「悪いな」

「御礼はいいですよ。ですから皆で」

「だからか」

「はい。私も同じ考えですから」

その知的な美貌をたたえた顔での言葉だった。

「美味しいものは皆で」

「そうだな。皆でな」

「食べてこそですよ」

言いながら彼女も食べていた。その月餅をである。

そうしてそのうえで。こう言うのであった。

「美味しいですね」

「皆にか。そうだな」

言われてだった。彼はふとあることを思いついた。

思いつくとすぐにであった。博士に対して言った。

「頼みができた」

「何じゃ？」

「月餅はまだあるか」

まずはこのことを問うてきたのだった。

「月餅は。どうだ」

「あるぞ」

あると答える博士だった。

「何箱でもな」



「それだけあるのか」

「そうじゃ。では一箱持って行くといい」

既に彼が何を所望なのか察している博士だった。

「二十四個入りをな」

「それだけか」

「美味いものは幾らあっても足りんものじゃ」

また笑顔で言う博士だった。

「じゃからそれを持っていくのじゃ」

「悪いな。それでは」

「はい、これ」

「どうぞ」

早速妖怪達がその箱を持って来た。その二十四個入りの大きなものをである。

その箱を差し出してだった。笑顔で言うのであった。

「やっぱり牧村さんはいい人だよ」

「そうだよね」

「いい人か。俺が」

だが牧村はその自分には懐疑的な声を変えすのだった。

「俺はそうはだ」

「思ってないの」

「自覚ないとか？」

「そう思わないだけだ」

それだというのである。

「特にな」

「そうなんだ」

「まあそれならそれでいいけれど」

妖怪達も深く突っ込むことはなかった。静かに言うだけだった。

「まあそれじゃあね」

「それあげるから」

「わかった」

箱を受け取ってそれで応えた牧村だった。

「それではな」

「とりあえずネクロノミコンの解読じゃが  
それに話を戻してきた博士であった。

「暫く待ってくれ」

「時間がかかりそうか」

「他にも調べないとならんことが多くてのつ  
多忙な博士であった。

「じゃからな」

「わかった。では待たせてもらおう」

牧村はここでもこう返したのだった。

「そういうことだな」

「ではな。またな」

「じゃあね」

「またね」

妖怪達は明るく彼に挨拶をした。

「何かあったら来てね」

「またお菓子用意しておくから」

「さて、今度のお菓子はじゃ」

博士がここで楽しそうに話すのだった。

## 第二十七話 仙人その十

「何がいいかのう」

「インドのお菓子なんかいいかも」

「確かに」

「いいかもね」

妖怪達もそのインドのお菓子に賛成した。

「たまにはそれもね」

「いいかもね」

「どんなのかな、それって」

「最近では色々なお菓子が食べられるようになった」

博士はそのことを喜んでいるのだった。

「インドもいいのう」

「そうだね。それでね」

「楽しく食べようよ」

そんな話をしているのを背中であら聞いて部屋を後にする牧村だった。

そうして講義が行われる講堂に行くとそこに仲間達がいた。

「よお、来たか」

「今日は結構早いな」

「そうだな」

仲間達に対しても言葉は変わらないのだった。

「いいものを貰ってきた」

「いいものって博士からか？」

「あの悪魔博士か」

この仇名がすっかり校内に定着してしまっている博士であった。

「また何だ？のろいの蠅人形か？」

「それとも髪が伸びる人形か？」

「何だ？」

どちらにしるオカルト関連である。ここに博士の評価が出ていた。

「それ何なんだろうな」

「悪魔の手かも知れないな」

「ああ、あの魔除けのか」

彼等は冗談で言っているのではなかった。本気である。本気で博士がそういうものを彼にプレゼントしたと思っていたのである。

牧村はその彼等にこう告げた。

「食べ物だ」

「じゃあイモリの丸焼きか」

「ヒキガエルの肝臓か？」

「違う。月餅だ」

ここでそれだと言ったのだった。

「月餅だ」

「えっ、月餅!？」

「マジですか」

「本当にそんな普通のものなのかよ」

「あの博士がそれをか」

皆それを聞いてさらに驚いた。ここにも博士の評価が出ていた。

「意外と普通のもの食べてるんだな」

「そうだな。それもお菓子か」

「面白いもの食べるな」

「博士は甘いものが好きだ」

このことも皆に話す。話しながら鞆に入れてあるその月餅を皆に出す。そのうえで彼等のすぐ側の席に座って落ち着くのだった。

「講義が終わってから食べるとしよう」

「よし、それじゃあな」

「皆でな」

彼のその言葉に頷く仲間達だった。流石に教室では食べたりはしない。

その月餅を見ながら。またそれぞれ言う彼等だった。その口は止められなかった。

「しかし。博士が普通のもの食べてるなんてな」

「しかも甘いものが好きか」

「意外だな」

「酒も好きだ」

このことも一同に教えるのだった。

「それもだ」

「つていうと甘党でもあり辛党でもあるのか」

「何でもいけるんだな」

「日本酒だけでなく焼酎やビールやワインも好きだ」

酒の好みまで話す牧村だった。

「そういったものもだ」

「本当に何でもだな」

「そうだな」

皆それを聞いてまた意外な顔になった。

「普通のを食べるのも信じられないのにな」

「仙人つて噂あるからな」

これは高齢故である。

「百歳を超えてるらしいしな」

「悪魔と契約したつて噂もあるしな」

「そうそう」

これも悪魔博士の仇名から来るものである。

「他には不老不死の霊薬飲んどるとかな」

「色々な噂のある人だからな」

「特に仙人でもない」

それは牧村もはつきりと知っていることだった。

## 第二十七話 仙人その十一

「それはない」

「そうなのか」

「別にそんな特別な存在じゃないのか」

「特に」

「ただ長生きしているだけだ」

それだけだというのだった。

「他には特におかしなところはない」

「まあ百歳超えて講義するのも凄いいけれどな」

「背筋はしっかりしてるしな」

「だよな」

だがそれはそれで超絶的なことであつたのである。彼等もそのことを話す。

「あの博士だけはな」

「あのまま二百歳まで生きててもな」

「おかしくないよ」

「全くだよ」

これが博士への周囲の意見だった。

「あれはな」

「本当にな」

「確かにな」

彼等のその言葉に頷くところのある牧村だった。彼にしるそう思うところがあつたのである。実際に博士にはそういうところが実際にあるのだ。

「あの博士はな」

「二百歳か」

「仙人そのものだな」

「全くだ」

そして皆また言うのだった。

「しかし百超えてまだそういうもの食べるんだな」  
「月餅か」

「これ歯にあまりよくないだろ」

彼等は今度は歯の話をするのだった。

「流石にな」

「百歳を超えてか」

「こんなのを食うのか」

「他にも色々と食べているな」

無愛想なままでこのことを話した。

「甘いものをな」

「じゃあケーキとかもか？」

「饅頭もか」

「どれも好きだった」

牧村は彼等にさらに話したのだった。

「博士は。好きだと言うべきか」

「そうか。好きなのか」

「余計に凄いな」

「それに酒もか」

「歯も一本も欠けてはいない」

そのこともだった。それも百歳を超えてである。

「一本もだ」

「それは物凄いじゃないのか？」

「百歳超えて一本もか」

「何ていうか」

皆またしても驚いた。

「やっぱり仙人みたいだよな」

「ああ、だよな」

「幾つなんだ？本当に」

「詳しい年齢は俺も聞いてはいない」

「けれど百歳超えてるんだよな」

「無茶苦茶凄いな」

このことは間違いないことだった。博士が百歳を超えているのである。それだけは確実なことであったのだ。

「もう特別に年金か何か貰えるんだらう？」

「それでまだ大学にいるし」

「講義もしてるしな」

「その講義もな」

博士は今も講義を持っている。そちらもかなり精力的にしているのである。

「しつかりしてるしな」

「声も大きいしな」

「しかも目もいいしな」

何処までもしつかりしている博士だった。

「それで甘いものも平気で食べるのか」

「何をどうやったらそうなるんだかな」

「長生きしてあそこまでしつかりなんてな」

「博士の言葉ではだ」

その博士の言葉も紹介する牧村だった。

「いつも美味しいものを食べた」

「美味しいものか」

「まずは食べて」

「そうしてさらによく寝る」

それもだというのである。



## 第二十七話 仙人その十二

「適度な運動と頭も動かせば完璧らしいな」

「それで百歳まで生きられるのか」

「そうやったら」

「そうらしい」

牧村の言葉は続く。

「そうやってらしい」

「平均寿命大幅に超えてか」

「そうなるのかね」

「百歳ねえ」

このことがどうしても彼等にとっては遠くのものにしか思えないのだった。彼等はまだ二十歳なのでそれも当然のことであった。

その二十歳の彼等がだ。思うのだった。

「そんなに長生きできるかね」

「無理じゃないのか？」

「だよな」

「こつ思わざるも得ないことだった。

「精々八十だろ」

「七十じゃないのか？」

「それ位だろ」

こつ話されるのだった。彼等に見してみればそうだった。

「何かな。そこまでってな」

「ああ、とてもな」

「生きてないだろ」

「だよな」

「しかしな」

ここで一人が言った。

「言い換えるとな」

「何だ？」

「どうなんだ？」

「百歳まで生きるとな」

博士のそのことの話であった。

「ああなれるのかな」

「博士みたくにか」

「なれるっていうのか」

「博士みたくにして相当上手くやって運がよかつたらな」

かなり限定はしたのであった。

「なれるんだな」

「百歳までか」

「長いな、本当に」

「あと八十年だぞ」

その歳月も話される。今の彼等の年齢の四倍である。

その四倍の長さも感じながらだ。話されるのだった。 6

「それだけ生きたら色々あるだろうな」

「俺今でも充分色々あったぞ」

「俺もだ」

その二十年の彼等にしろであった。

「何かその四倍も生きているってな」

「二十年入れたら五倍か」

「どうなるんだろうな」

そのことはどうしても想像もできないのだった。あまりにも長い

話だからである。

「その間な」

「それで百歳になったら」

「仙人か？」

「だよな」

「そつも考える彼等だった。」

「博士みたくにな」

「なりたいか？それ」

「どうだろうな」

そう言われると少しわからない彼等だった。やはりどうしてもピ  
ンと来ない話だったのだ。百歳というのがそれになってしまってい  
るのである。

「それについてはな」

「まあそれでな」

ここで一人が話を変えてきた。

「食べるか」

「ああ、そうだな」

「その月餅な」

話がそれに戻った。月餅にだ。

「それじゃあ講義の後でな」

「九十分後か」

「待ち遠しいな」

「しかしだ」

また牧村が彼等に言ってきた。

「まさかここで食べるわけにもいくまい」

「ああ、それはな」

「やっぱりな。まずいだろ」

「そろそろ講義もはじまるしな。それに」

「無作法だろ」

それもわかつてはいる彼等だった。それだけの分別はあるのであ  
る。

## 第二十七話 仙人その十三

「だから後でな」

「どっか適当な場所で食おうぜ」

「お茶でも買ってな」

そうしてだというのである。やはりこの辺りはわかっている彼等であつた。

「じゃあそうしてな」

「楽しくゆつくり食おうぜ」

「後でな」

「わかつた」

再びその結論が出て頷く彼だつた。

そうして今は講義を受けてだ。その後で仲間達と月餅を楽しむのだった。それは確かに美味かつた。博士や妖怪達の心の味もした。

その日はトレーニングも全て終わり後は風呂に入ろうとした時だつた。庭での素振りを終え家に入ろうとする彼に声をかけてきた者がいた。

「来たぞ」

「貴様か」

「そうだ。来た」

死神であつた。彼の三メートル程度斜め前に浮かんでそこから声をかけてきたのである。

「魔神がだ」

「今度は誰だ」

「新しい魔神だ」

それだというのである。

「インドからの魔神だ」

「インドにも魔神はいたのか」

「魔神は十二柱いる」

その数も述べる死神だった。

「当然インドにもだ」

「いるというのか」

「それでどうするのだ」

そのことを話してから再度問うてきた死神だった。見れば彼は既に戦う姿になっている。右手にはあの大鎌が既に握られている。

彼の上には月がある。三日月が朧か黄金色の光を放って輝いている。

その光を後ろにしてだ。彼は宙に立ちそのうえで彼に言ってきたのだった。

「戦うのか。それとも」

「俺は逃げることはしない」

彼を見上げながら答えたのだった。

「それは言っておく」

「それが答えだな」

「如何にも」

まさにそうだというのだった。

「これでわかったな」

「わかった。それではだ」

それを聞いて静かに頷いた死神だった。

そうしてであった。再び彼に声をかけるのであった。

「では来るがいい」

「それで何処にだ？」

「今回は特別でね」

ここであの目玉が死神の横に出て来た。そのうえで彼に言ってきたのであった。

「空に来て欲しいんだ」

「空にか」

「そう、空にね」

まさにそこだというのである。

「そこに来てくれるかな」

「俺の今度の相手は空にいるのか」

「どうだ、来るか」

また彼に問う死神だった。

「空にだ。来るか」

「答えは既に言つてある」

こう返すだけであつた。今は。

「わかつたな」

「わかつた。では来るがいい」

「よし、それではな」

応えるとすぐにであつた。両手を拳にしてそのうえで胸の前で打ち合わせる。そこから白い光が放たれ全身を包み込んだのだった。

それが消えた時彼は髑髏天使になつていた。その姿で右手を肘を折つたうえで前に出しそうして握り締めてこう言つたのだった。

「では行く」

「わかつた。それではだ」

こうして二人は空を舞いそのまま上にあがつた。そこから暫く飛ぶのであつた。彼等がいた。

「待つていたぞ」

「まずは貴様か」

「そうだ」

男であつた。彼もまた宙にそのまま立っているのであつた。そうして月を背に二人に告げてきたのである。

「俺と。そして」

「わしじゃ」

インド風の白いゆったりとした服を着た老人だった。その頭には一本の毛髪もなく顔は皺だらけだ。その肌は黒く浅黒さをそこに見せていた。

## 第二十七話 仙人その十四

「わしなのじゃ」

「貴様がその魔神か」

「左様」

彼は名乗った。その仙人を思わせる風貌でだ。

「ヤクシャだ」

「ヤクシャという」と

「日本では夜叉と言った筈じゃ」

それだと自分から髑髏天使に教えてきたのだった。

「それじゃよ」

「そうだったか。夜叉か」

「そうじゃ。わしはそれじゃ」

「ではその夜叉がか」

その仙人に対しての言葉だ。

「俺の今の相手か」

「その通りじゃ。まずは髑髏天使よ」

座禅を組んだ様な姿であった。その姿で彼に言ってきたのだ。

「わしの手の者と闘ってもらおう」

「死神よ」

男は彼に声をかけるのだった。

「貴様の相手はだ」

「貴様だというのだな」

「そうだ」

死神のその返答にも応えるのだった。

「それでいいな」

「相手は誰でもいい」

既にその手に鎌を持っている。それで男を指し示しての言葉だった。

「この鎌で命を断ち切るだけだ」

「それだけだというのだな」

「他に何かがある」

鋭い言葉であった。

「あるのか。どうなのだ」

「ないな」

男もそれはわかっていた。だから今の返答だった。

「そういうことか」

「そうだ。ではいいな」

「俺の魔物はだ」

言うただった。彼の後ろから出て来た。それは。

黒い球体のものだった。周囲にコロナの如く散った様なものが出ている。それを見ると黒い太陽に見える。独特の姿をしていた。

そしてその中央には巨大な単眼があった。それで彼を見据えているのだった。

「貴様は確か」

「バックベアード」

魔物の方から語ってきた。

「知っているのだな」

「その名、よく知っている」

こう返す彼だった。

「そうか。貴様が出て来たのか」

「そういうことだ」

「では相手をしてやる」

鎌を両手に持ち直した。そのうえでの言葉だった。

「この鎌で冥府に送ってやるう」

「それではだ。はじめよう」

彼等の闘いが今はじまった。そうして仙人と対峙している髑髏天使もだ。彼に対して言うのであった。

「ではその魔物はだ」



「既にここにいる」

仙人は髑髏天使のその問いに答えた。

「ここにだ」

「では呼ぶのだな」

仙人に対して告げた言葉だった。

「その魔物をだ」

「い出よ」

こう言うようになった。月からそれはやって来た。

まず月に小さな黒点が出来た。それは次第に大きくなってだ。そうして蝙蝠の禍々しい翼を持った漆黒の猿が来たのであった。

「それが俺の今の相手か」

「不服か？」

「空だからか」

その魔物が何故来たのかは最早愚問であった。

「だからそれなのか」

「そうじゃ。それで返答は」

「いいだろう」

冷静な言葉で返した彼だった。

「相手をしてやる」

「左様か。それではじゃ」

「来い」

仙人に対した言葉ではない。魔物に対した言葉だった。

「倒す。それだけだ」

「それだけだというのだな」

「そつだ。それだけだ」

名前を聞こうとしないのだった。

## 第二十七話 仙人その十五

「わかつたら来るのだ」

「その前に名乗っておこう」

彼から言ってきたのだった。

「我が名は有翼魔だ」

「まさに空の魔物というわけか」

「その通りだ。これで覚えたな」

「覚えた。だがそれは一瞬のことだ」

「何故一瞬だ？それは」

「貴様はここで俺に倒される」

冷徹そのものの言葉だった。

「だからだ。俺が覚えておく時間はそれだけでいい」

「だからだというのだな」

「そういうことだ」

やはり冷徹な言葉は変わらない。

「では。いいな」

「いいだろう。来い」

こうして両者の闘いがはじまった。そして死神とバックベアードとのそれもだ。

死神は宙に漂いながら彼を見ている。まずは対峙であった。

「それでだ」

「何だ？」

「貴様まで出て来るとはな」

その魔物を見据えての言葉であった。

「魔物としてもかなりのものになってきたのだな」

「座天使だ」

髑髏天使の今の階級を述べる魔物だった。

「それならばだ。私が出るのもだ」

「当然だというのだな」

「如何にも。貴様の相手をするとも考えていたがな」

「そうだったのか」

「そうだ。そうしてだ」

魔物はさらに言ってきた。

「貴様も倒すつもりだ」

「そうか」

「それが我等の神ウエンティゴ様の御心でもある」

見れば彼の姿が見えない。いつも通り闘いを離れた場所で見ているらしい。しかし死神はこのことには特に思うことはなかった。

「それこそがだ」

「その為に貴様が来たというのだな」

「如何にも。私が来たからには貴様も終わりだ」

「バックベアード。魔物達の中でもその名前は知られている」

死神はその彼のことを今呟いた。

「その強さにおいて」

「ではいいな」

「いいだろう。来るのだ」

言いながらその目を鋭くさせる死神だった。

「私がこの鎌で冥府に送ってやる」

「受けるがいい」

言つとだった。早速その目を輝かせた。そうしてその単眼から強烈な眼力を出してきたのだった。

「そうか」

その眼力を見てまた呟いた。

「それが貴様の力か」

「私の目は全てを射抜く」

死神はそれだと返すのだった。

「そう、全てをだ」

「では私を射抜いてみせるのだな」

言いながらその姿をスライドさせた。するとだった。

彼の身体が幾つにも分身した。そうしてその眼力をすり抜けさせたのだった。それにより彼の攻撃をかわしてみせたのである。

そのうえでだ。今度は姿を消してみせた。

「消えた!？」

「今度は私の番だな」

彼の声だけがした。

「では行かせてもらうぞ」

その言葉が終わってすぐだった。魔物に左に現われた。そうしてその両手に持っている鎌を一閃させた。

しかしだった。彼が切ったのは空だけだった。そこにはもう魔物はいなかった。

「消えただと」

「姿を消せるのは貴殿だけではない」

魔物の声だけがした。

「私もまた然りだ」

「だからだというのだな」

「如何にも。そしてだ」

少し離れた場所から声がした。そうしてだった。

そこから再び眼力が来た。死神は今度は身体を右に捻った。それにより紙一重でかわしてみせたのであった。

かわしたうえでだ。彼は言った。

## 第二十七話 仙人その十六

「成程な。貴様が強い筈だ」

「これでわかったな」

「嫌でもわかる」

落ち着いた声で返した彼だった。

「それではだが」

「何だというのだ？」

「こちらも楽しませてもらう」

にこりともせずと言ってみせたのだった。

「この鬪いをな」

「楽しむというのか」

「私のこの鎌は命を冥府に送り届ける鎌」

まさにそれだというのだ。

「それに魔物をかける時は鬪うのが常」

「今もだな」

「ただ鬪うだけでは味気ないもの」

「だからこそ楽しみもするというのだな」

「如何にも」

応えながら魔物に身体を向ける。そうして再び対峙する。

「その通りだ」

「貴様もまた鬪いを嗜むというのだな」

「そうかも知れない。そういう意味ではだ」

魔物の言葉を肯定してみせた。そうしてだった。

今度は鎌を投げた右から大きく振り被りそのうえでだ。

鎌は激しく回転しながら彼に襲い掛かる。そのうえで切り裂かんとする。

だが魔物はそれも姿を消すことかわしてしまった。また声だけがした。

「話の続きだが」

「それか」

「我等と同じだというのだな」

「そういうことだ」

鎌は激しく回転しながら旋回し元に戻ってきた。死神はその鎌を右手で受け取ってみせた。そのうえで再び両手持ちで構えるのだった。

「だが。一つだけ違うことがある」

「何だというのだ？それは」

「私は溺れはしない」

それだというのだ。

「鬪いに溺れることはない」

「そこが違うというのか」

「そうだ」

「では貴様は何だ」

「死神だ」

返答は一言だった。

「それ以外の何者でもない」

「だから鬪いにも溺れないのか」

「鬪いとは命を刈る為のもの」

彼にとつてはそうなのだった。やはり死神であった。

「それ以外の何でもないからだ」

「だからこそ楽しんでるか」

「溺れることはない」

彼はまた告げた。

「そういうことだ」

「確かに我々はだ」

彼の言葉をここまで聞いた魔物は述べてきた。

「鬪いを嗜む」

「だからこそその魔物だな」

「そして溺れてもいるだろう」

このことも否定しないのだった。

「しかしだ」

「しかし？」

「それを受け入れている」

そうしているというのであった。

「自ら進んでな」

「それによって魔物となっているのか」

「そうだ。我等は自ら魔物になっている」

彼は言い切った。

「それこそが我等の誇りだ」

「そこまで言えるのだな」

「言える。闘いこそが我等の全て」

「では聞こう」

言い切り続ける魔物に対しての問いだった。

## 第二十七話 仙人その十七

「貴様等が闘うのはわかった」

「うむ」

「ではただ闘うだけか。髑髏天使を倒しその力を得る為だけか」  
そのことを問うたのだった。

「それはどうなのだ。貴様等は何の為に闘う」

「それは」

「ただ闘うのは修羅だ」

それだというのだ。六界の一つにいて互いに闘い続けるだけの存在。それが修羅である。これは仏教の中にある話であった。

「それは修羅だ」

「それだというのか。我々は」

「貴様等は修羅ではない」

しかし彼はそうではないと魔物に告げた。そう、魔物にだ。

「魔物だ。魔物は何の為に強くなる」

「それは」

「ただ闘い相手の力を手に入れ」

死神はまた語った。

「そして強くなるだけなのか。それはどうなのだ」

「わからない」

魔物は死神のこの問いに答えられなかった。

「それはわからない」

「そうだろうな。そして」

「そして？」

「貴様等の神もそれはわかっていない筈だ」

「あの方々も」

「私にもわからない」

それは彼もだというのであった。



「私にもわからないことだ」

「では何故今言ったのだ？」

「疑念を感じたからだ」

魔物を見据えながらの言葉だった。何時しか二人の興亡は中断していた。そのうえで言葉と言葉のやり取りに入っているのであった。

「そのことに対するな」

「疑念か」

「そうだ。互いに闘い力を身に着け」

またそうした存在について語る死神だった。

「それにより来たるべき最後の戦いに備える戦士達もいる」

「エインヘリヤルだな」

「如何にも」

まさにそれだと答えた死神だった。

「北の神々の僕達だ」

「あの戦士達は炎の巨人達と戦う宿命にあるな」

「そして神々自身もまただ」

それが北欧神話である。ラグナロク、神々の黄昏のことだ。

「その中に身を投じるものだ」

「では我等はそれだというのか」

「修羅かエインヘリヤルか」

その双方を並べた言葉だった。

「貴様等はどちらだ」

「それは答えられる」

魔物は今の彼の言葉にはすぐに返した。

「どちらでもない」

「どちらでもか」

「我等は魔物だ」

あくまでそれだというのだった。

「それ以外の何者でもない」

「そうか」

「闘いが全ての存在だ」  
そしてまたこのことを話した。  
「それを言っておく」  
「わかった。それではだ」  
「闘いを再開するでしょう」  
言うとすぐにだった。その眼力をまた放って来た。それは一つではなかった。  
三つだった。それを立て続けに放ちそれで死神を襲って来た。三つの眼力が彼に迫る。  
「三つか、今度は」  
「来るものは一つとは限らない」  
ここでも落ち着いている魔物の言葉だった。  
「こうして幾つもある場合もある」  
「確かにな。しかしだ」  
「しかし？」  
「幾つ来ようともだ」  
言いながら再び分身する死神だった。  
「私はかわしてみせよう」  
「ならば私は倒してみせよう」  
魔物はあえて彼に言葉を返してみせた。

## 第二十七話 仙人その十八

「ここでな」

両者の闘いはさらに激しくなっていた。そして髑髏天使もまた有翼人と激しい闘いを繰り広げていた。

両者は接近戦を行っていた。魔物はその両手の爪で引き裂かんとする。髑髏天使はそれに対して剣を繰り出す。そうした闘いであった。

魔物の攻撃は素早い。髑髏天使をしても防ぐので手が一杯であった。魔物はその激しく素早い嵐を思わせる攻撃の中で彼に問うてきた。

「防ぎきれるか、最後まで」

「この俺がか」

「そうだ。我の攻撃にだ」

こう彼に問うてきたのだ。

「果たして」

「それは貴様が心配することではない」

こう魔物に返す彼だった。

「このことはな」

「そう言うのだな」

「その通りだ。そしてだ」

「むっ!？」

「俺はただ剣を持っているだけではない」

不意にこんなことを言ってきたのだった。

「ただな」

「それはどうということだ?」

「こういうことだ」

言いながらであった。その身体を赤くさせてきた。権天使の力だった。

その力で右の剣に炎を宿らせた。それで魔物に切りつけてきたのだ。

「確かに貴様は素早い」

「それは認めるのだな」

「そうだ。だがこの力はどうだ」

炎の剣を右から左に繰り出しながらの問いだった。

「この力。防げるのか」

「ふむ。ならばだ」

それを見た魔物はまずは動かなかった。声も冷静なままである。

しかし今まさにその剣を受けるといふ時になってだ。姿を消したのだった。

「むっ!?!」

「私の力は素早さと鋭さのみ」

声だけが聞こえてきた。

「炎を防ぐことはできない」

「そうだというのか」

「そうだ。しかしだ」

それまでいた場所のすぐ後ろに現われてみせてきた。どうやら素早く右に跳びそこから今の場所に移動してみせたらしい。そうしたようだった。

「攻撃を受けなければいいだけだ」

「防げなければかわるといふことか」

「私の速さは風を超える」

その黒い猿の顔での言葉だった。毛の色は全身銀色である。それはまさに彼を風そのものとして見せている、そうした銀色であった。炎を受けることもない

「つまり俺の攻撃は受けることはないといふのだな」

「既に見切った」

これが彼の返答だった。

「そういふことだ」

「そうか。俺の動きはか」

「全てだ。そして」

「そして？」

「貴様は私の攻撃を全て見切ることはできない」

それは無理だというのがあった。

「決してだ」

「それを言える根拠は何だ」

「今貴様は我が消えたと思ったな」

言うのは今の動きからだった。

「そうだな」

「確かにな」

嘘は言わなかった。まさにその通りだった。

「貴様の動きはあまりにも素早い」

「では答えは出ている。我が勝つ」

そして髑髏天使が敗れると、言い切ってみせたのだった。

「そういうことだ」

「そうか。それではだ」

「安らかに死ぬがいい」

言いながら今まさに動こうとしていた。

「一撃で喉を切り裂き倒してやる」

「貴様は確かに素早い」

その魔物に対しての言葉だ。

「しかしだ」

「しかし。何だ」

「動きは封じることができない」

こう言ってきたのだった。

## 第二十七話 仙人その十九

「それを言っておこう」

「封じるといふのか」

「そうだ。見るのだ」

言いながらだった。今度は青くなった。力天使になったのだ。

その天使になるとすぐだった。右手の剣を逆手に持ってそのうえで身体を中心に高々と掲げたのであった。

「氷の糸を受けるがいい」

「氷の糸だと!？」

「氷は全てを凍て付かせる」

いぶかしむ声を出した魔物に対しての言葉だ。

「何もかもをだ」

「その氷をどう使うつもりだ」

「見るのだ、これを」

その剣が青く光った。するとだった。

そこから上下左右四方八方に氷の糸が広がった。それはまさに蜘蛛の糸となつて拡がり魔物をその中に捉えたのであった。

魔物はその氷の糸に絡め取られてしまった。避ける時間はなかった。

「これがか」

「そうだ。氷の糸だ」

まさしくそれだといふのだ。

「これから逃れることはできるか」

「逃れてみせると言えばどうするのだ」

「ではやってみせるのだ」

今の髑髏天使の言葉には自信があった。

「それには時間が必要だな」

「時間だといふのか」

「一瞬でもだ」

それでも時間が必要だというのだった。

「そしてだ。その間に俺はだ」

言いながらだった。またしても変わった。今度は座天使になったのだ。

「この力を使わせてもらおう」

「雷の力か」

「受けるのだ」

言いながらだった。その激しい雷を放つ。今度は雷の蜘蛛の巣だった。

それは四方八方に広がりだった。魔物に襲い掛かる。そうしてそのうえで魔物を撃つのがだった。

魔物は氷に身動きを止められていた。その魔物に動きを止められてだった。彼はそれを受けて激しい衝撃に襲われる。これで終わった。

「うぐ………」

「勝負ありだな」

髑髏天使はそれを放ってから言ってみせた。

「これでな」

「見事だ」

糸は消えた。魔物はその中でまだ動きを止めていた。既にその身体から青白い炎が生じていた。明らかに勝敗が決していた。

「こつした闘い方もあったのか」

「蜘蛛は自ら動くことはない」

髑髏天使はその魔物に対して静かに言ってみせた。

「しかしその狩りは見事なものだ」

「それを見てだというのか」

「その通りだ。それが上手くいったな」

「確かに。我はそれにより敗れた」

そのことも認める魔物だった。

「貴様のその狩りによつてな」

「おそらく正面から闘つていれば敗れた」

「その通りだ。我の速さは誰にも止められない」

「蜂は蜘蛛よりも速い」

今度は蜂を話に出した。

「だが蜂は蜘蛛に捕らえられる」

「その糸によつてか」

「そういうことだ。貴様が蜂だった」

「確かにな」

蜂であることも認める彼だった。

「我はまさしく蜂だった」

「そして俺は蜘蛛だ」

魔物の言葉は過去形であり髑髏天使の言葉は現在形である。言葉に既に今の両者の違い、そして勝敗までもが出てしまっていた。

「まさにな」

「我はその蜘蛛に捕らえられ敗れた」

「そのまま眠るがいい」

「このままか」

「炎に包まれてだ」

炎はさらに増えていた。身体の各部を包んで今にもその全身を包み込もうとしている。魔物のその命を完全に燃やそうとしていた。



## 第二十七話 仙人その二十

「眠るのだ」

「そうさせてもらおう」

魔物は潔くそれを認めたのだった。

「どうやら貴様はまだ強くなるようだ」

「まだだというのか」

「そうだ。我を倒した」

だからだというのである。

「その貴様はさらに強くなる」

「そして貴様達をさらに倒す」

「そうするといい。それではだ」

遂にその青白い炎に全身を包まれた。そうしてだった。

「さらばだ」

「これでな」

これで姿を消したのだった。髑髏天使はこの闘いも勝利を収めたのであった。

死神とバックベアードの闘いも激しいものになっていた。魔物は次々に眼力を放ち死神はそれをかわしていく。魔物が押していると  
言えた。

「何時までかわせるか」

「私がか」

「そうだ。何時までそれができる」

このことを死神に対して問う魔物だった。

「私の眼力から」

「永遠にだ」

魔物の自信に満ちた言葉に対する返答は簡潔なものだった。

「貴様の攻撃も既に見切った」

「だからだというのか」

「そうだ。最早どうということはない」

実際に今身体をすり抜けさせたのだった。最低限の動きでかわしてみせた為そう見えたのだ。その動きでも言ってみせたのである。

「こうしてだ」

「そうか。しかしだ」

「それは貴様も同じだというのだな」

「貴殿に私を倒すことはできん」

魔物は己の攻撃が見切られているとわかっててもその余裕を見せるのだった。

「貴殿の攻撃を見切っているのだからな」

「つまりお互いだというのだな」

「そうだ。そしてだ」

「そして？」

「私の攻撃はこれだけではない」

死神をその巨大な単眼で見据えながらの言葉だった。

「この眼力だけではないのだ」

「他にもあるというのか」

「如何にも。では見せよう」

言いながらであった。今度は。

身体の縁にあるその無数の触手めいたコロナを思わせるものが少しずつ離れた。そうして宙をゆっくりと漂いはじめてきたのであった。

「これか」

「そうだ。これだ」

まさしくこれだと彼に答えてみせる。

「これが私のもう一つの技だ」

「これで私を倒すというのだな」

「ただ漂っているとは流石に思っまい」

「炎か」

死神は鋭い声で言った。

「それだな」

「私は漆黒の太陽」

まさにそれだという。

「だからだ。これは炎なのだ」

「その炎で私を焼くつもりか」

「漆黒の炎は全てを焼き尽くす地獄の炎」

「そうだな。それこそまさにだ」

地獄の炎が何なのか知らないわけではなかった。何しろ彼は死神だ。それで地獄のことを知らない筈がないのであった。それは今の言葉にも出ていた。

「地獄の炎だ」

「この炎で焼き尽くす」

魔物は言い切ってきた。

「これでだ」

「その為に今の炎を出してきたのか」

「さて、どうするのだ」

死神に対して問うてきた言葉だった。

「今のこの事態に対しては」

「普通にかわせるものではないな」

それはもう見抜いている彼だった。

## 第二十七話 仙人その二十一

「消えてもだな」

「姿は消せても実体までは消せまい」

「如何にも」

「だからこそだ」

そこまで見ている魔物であった。全て読んでいたのだった。

「さあ、私の勝利を見るのだその目で」

「さて、それはどうか」

「まだ勝機はあるというのか」

「その通りだ。確かに姿を消せてもだ」

死神は言うのだった。

「実体は消えない」

「それは今言った通りだな」

「だが、私は消えるだけではない」

「ではどうするのだ？」

「見るのだ」

こう言っただった。彼は姿を消したのだった。それは一見すると

これまでと同じであった。

「消えたか」

「消えたのではない」

しかしここで死神の声だけが聞こえてきたのだった。

「私はな。消えたのではない」

「どうということだ、それは」

「こうということだ」

その言葉と共にであった。何と後ろに出たのだった。魔物の真後ろに。

「何っ!？」

「私は消えるだけではない」

真後ろに出たところで身構えている彼だった。

そしてだった。その大鎌で斬る。これで決まりだった。

魔物に瞬間移動する間も振り向く間も与えなかった。斬ったのだった。これで全てが決まった。

「うぐっ……」

「勝負あつたな」

魔物を斬ったうえで言う死神だった。

「これでだな」

「その通りだ。見事なものだ」

魔物は最後の力を振り絞って死神に身体を向けた。そのうえで彼に告げた。

「まさかこうするとはな」

「瞬間移動ができるのは私もなのだ」

「それをあえて見せなかったのだな」

「貴様が見せた時にそれを決めた」

そうだったというのである。

「切り札として置くことにしたのだ」

「そうか。駆け引きか」

「その通りだ。わかつたな」

「今ようやくな。そしてだ」

「そして」

「貴殿の真の強さもだ」

それもわかつたというのだった。

「貴殿は見事な強さだ」

「伊達に死神ではない」

「その死神としての強さを見せてもらった」

また言う魔物だった。

「その強さがだ。そしてさらに強くなるな」

「貴様達を刈ることによってだな」

「その通りだ。その貴殿の強さをだ」

「冥界で見ておくというのか」

「見せてもらうことにする」

ここで彼の身体が赤い炎に包まれた。これで終わりだった。バックベアードも倒れた。後に残ったのは髑髏天使と死神だけだった。彼等はお互いに見合いながら宙に浮かんでいた。

そして宙に浮かんだまま。お互いに話すのだった。

「今度も勝利を収めたようだな」

「だからこそ今ここにいる」

こう死神に述べる彼だった。

「だからだ」

「それだけか」

「それ以外に何がある」

「座天使の力使いこなしているな」

それを言ってみせた死神だった。

「なつたばかりだというのにだ」

「意識していない」

それはないという。

## 第二十七話 仙人その二十二

「しかしだ。使いこなせる自信はある」

「そうなのだな」

「そういうことだ。それではだ」

「今度は何だ」

「帰らせてもらう」

「こう言うのだった。」

「これでだ。もう用はないな」

「戦いは終わった」

その彼にこう返した死神だった。

「それではだ」

「そういうことだな。では家に帰るとしよう」

「そして人の生活に戻るのだな」

「その通りだ。何なら貴様も来るか」

「遠慮しておく」

「来ないというのか」

「私は私の世界に戻る」

これを返事とするのだった。

「だからだ。これでだ」

「そうか。ではわかった」

そして髑髏天使もその言葉を受けて頷くのであった。

「そうするといい」

「そうさせてもらう。では今回はこれでだ」

「帰るからね」

ここでまた目玉が出て来たのだった。

「じゃあね、髑髏天使」

「ああ」

目玉に対しては少なくとも死神に対してより愛想はよかった。

「また会おう」

「またね。ところでこうして飛ぶのはどう？」

「飛ぶことか」

「どうか。気持ちいいかな」

「このことを問うてきたのだった。」

「それはどうか」

「悪くはない」

「こう答える髑髏天使だった。」

「空もだ」

「そうだよ。お空はいいよ」

髑髏天使が応えたので彼も機嫌をよくさせていた。

「僕もこうして飛ぶのが好きだしね」

「御前はそれ以外に出来ないのではないのか？」

「その彼に横から死神が言ってきた。」

「身体の構造上飛ぶ以外には」

「それはそうだけれどね」

「彼も声を笑わせてそれは認めた。」

「実際のところね」

「そうだな。何はともあれだ」

「そうだな。話はこれで終わりだ」

「また会おう」

「あらためて髑髏天使に告げる死神だった。」

「すぐにな」

「そうなるだろうな。それではだ」

死神に別れの挨拶を告げると飛び去った。夕焼けを背にして飛び家まで戻る。そうしてその日はそのまま休んだのであった。



2  
0  
0  
9  
·  
1  
2  
·  
6

## 第二十八話 監視その一

髑髏天使

### 第二十八話 監視

牧村はまた若奈の家の店にいた。そのカウンターで紅茶を飲んでいた。

その彼の前にはマスターがいる。彼は明るい声で牧村に声をかけた。

「相変わらず引き締まっているね」

「そうか」

「そうだよ。フェシング部とテニス部の掛け持ちはまだ続けているんだね」

「そうです」

いつもの愛想のまま返す彼だった。

「それはこれからも」

「凄いな。身体が引き締まる筈だよ」

それを聞いて納得した顔で頷くマスターだった。

「いやね、うちは娘が三人いるじゃない」

「はい」

若奈と彼女の二人の妹達である。

「若奈はテニスをやって真ん中は陸上でね」

「それをしていいるのですか」

「丁度高校の時の牧村君と同じだね」

彼と同じだというのだ。

「陸上だからね」

「そうですね。それは」

「いや、あれもいいよね」

笑いながら彼に話すマスターだった。声をかけながら店のそのお皿やグラスを拭いている。清潔さこそが第一というわけである。

「身体全体を使うからね」

「確かに」

「一番下のは吹奏楽でね」

「吹奏楽ですか」

「ほら、あれなんだよ」

「ここで笑いながら話してきた。」

「今中学校だけれど将来は吹奏楽の凄い学校に行きたいって言うていてね」

「とうとうと」

「奈良の天理高校だね」

「この学校の名前が出て来たのだった。」

「あの学校に行きたいって言うてるんだよ」

「奈良のあそこですか」

「丁度近くにある天理教の教会の娘さんも天理高校に通っていたから」

「この話もするのだった。」

「ほら、八条分教会の」

「あの教会ですか。結構大きい」

「そう、あそこが一番上の娘さんね。千里さんだったかな」

「その名前まで言うマスターだった。」

「雰囲気がうちの若奈とそっくりだからね」

「そういえば似ていますね」

「彼女のことは牧村も知っているのだった。実はその教会にも行ったことがあるのだ。」

「親父の勤めている百貨店の重役の人があの教会の信者で」

「ああ、それでなんだ」

「それで顔出しに行くことがありました」

「これも人付き合いというわけである。」

「その時に御会いしたことがあります」

「確か牧村君やうちの若奈より一つ下だったかな、千里さんって」

「確か」

「中学まで八条中学で高校から天理なんだよね、あの人は」

「だから今は天理にですか」

「天理大学の一年だったね」

今牧村達は八条大学の二年である。やはり一つ違いである。

「そうだったね」

「小学校も中学校も違うのでよくは知りませんでした」

「そうだったんだ。いや、あの娘もね」

「あの娘も」

「いい娘だよ。うちの若奈と同じ位ね」

何気に自分の娘の自慢もするのであった。

「本当にね」

「そうですね。それ程」

「いいよ。さて、それでだけねど」

「はい」

ここで話を変えてきたマスターであった。

## 第二十八話 監視その二

「今日の紅茶はどうか」

「紅茶ですか」

「葉がね。これがね」

「これは」

「セイロンだよ」

それだというのである。

「セイロンの葉だけねど」

「コーヒーだけではなくてですが」

「コーヒーも確かに奥が深いよ」

マスターもそれは言う。コーヒーもだ。

「そして紅茶もね」

「紅茶もですか」

「そう、紅茶も重要なんだよ」

それもだというのだ。彼はそこまで見ているのだった。

「喫茶店というのも奥が深いんだよ」

「成程」

「君には絶対に覚えてもらわないと」

マスターの言葉はここでかなり強いものになった。

「絶対になんだよ。わかるかな」

「絶対ですか」

「当たり前じゃないか。何しろ君は」

「ちょっとお父さん」

しかしであった。ここで店の奥から女の子の声がしてきた。それと共にであった。

若奈が来たのであった。そのうえで父に言ってきた。それと共に店に出て来た。

「何言ってるのよ、一体」

「ああ若奈、帰ってたのか」

「ああ、じゃないわよ」

そのむっとした顔で言う若奈だった。言いながらすぐに牧村のすぐ前に来た。

「全く。変なこと言ってる」

「変なことじゃないだろ、別に」

「何でそう言えるのよ」

「御前あれだろう？これから」

「これからって？」

「一緒になるんだらう？」

笑いながら娘に話すのだった。すっかり父に負けてしまっている。

「だったらいいじゃないか」

「何時そうなったのよ」

「それで何時なんだ」

笑ったままさらに娘に話すのだった。

「何時式を挙げるんだ」

「式？」

「何でもないわよ」

慌てながら牧村に対しても言うのだった。

「お父さんが勝手にふざけてるだけだから」

「ふざけてるのか」

「そうよ。ふざけてなくて何なのよ」

何とかそうしようとしている。彼女も必死である。

「こんなこと言うこと自体が」

「話がよくわからないが」

ところが彼は話を聞いてもこう言うだけであった。

「何が何なのかな」

「あつ、そうなの」

それを言われて少し落ち着いた顔になる若奈だった。

「そうだったの」

「どづいつことだ？」

「何でもないわ」

落ち着きを取り戻しながらの言葉だった。

「気にしないで」

「だったらいいがな」

「それでお父さん」

すぐに父にも言ってきたのだった。

「どづなのよ」

「どづなのよって何がだい？」

「今日のお客さんよ」

彼女が言うのはこのことだった。

「結構来てるんじゃないの？」

「さっきまではね」

そうだったというのである。あくまで先程まではというのだ。

「けれど今は」

「牧村君だけなのね」

「そうさ。今は静かだよ」

あらためてそうだというのであった。

## 第二十八話 監視その三

「とてもな」

「そうみたいね。それじゃあ」

「何だ？」

「ここは私がやるから」

今度はこう父に言ってきたのだった。

「お母さん呼んでるわよ」

「母さんがか」

「ちよつと来て欲しいってね」

そうだというのである。

「だからお店の中に入って」

「ああ、わかった」

娘のその言葉に頷く父であった。

「じゃあここは頼んだよ」

「任せて。それに今牧村君しかないのよね」

「ああ、そうだ」

このことがまた確かめられる。

「だから静かなんだよ」

「それじゃあ平気だから。御願するわね」

「わかったよ。それにしても」

ここでまた言う父だった。

「牧村君強いからね」

「今度は一体何言うのよ」

「いや、頼りになるなって思ってたな」

またしても笑いながらの言葉だった。

「それでなんだよ」

「だからそういうこと言わないでよ」

いい加減八重歯まで出してきた若奈だった。その八重歯も実に可



愛らしい。

「本人いるし」

「本人!？」

牧村がその言葉に声をあげた。

「誰なんだ、それは」

「あつ、まあそれは」

ここで若奈も咄嗟に彼のそうした鈍さに気付いてしまったのだ。だがそれはあえて言葉に出さずに話を続けることにしたのであった。

「何でもないわ」

「そうか」

「そうよ。だから気にしないで」

「だといいんだがな」

「そういうこと。それでね」

そうして平静に戻りながら父にまた言うのだった。

「それでお父さん」

「ああ、何だ？」

「今度仕入れた紅茶だけれど」

その話になるのだった。

「そのことなのよ」

「母さんが聞きたいことか」

「ええ。何処から仕入れたかね」

「それか」

「何処からなの？あれは」

「百貨店だよ」

そこだというのであった。

「八条百貨店からな。仕入れてるんだよ」

「あの百貨店からなの」

「そうさ。天理教の教会であそこの偉い人と知り合ってた。それが縁だというのである。」

「それでなんだけれどな」  
「ふうん、そうだったんだ」  
「柳本さんっていうんだよ」  
「柳本さん？」  
「いい人だよ、謙虚でありながら豪快でね」  
「一見すると相反するものが同時に出ていた。」  
「九州出身でね」  
「九州の人なの」  
「ああ、熊本の人なんだよ」  
「そこからの神戸に出て来たのね」  
「そういうことだ、神戸にな」  
「成程、そこからの」  
若奈は話を聞いてそれで応えるのだった。  
「熊本っていつたら」  
「加藤清正だけれどな」  
「あとは熊本城？」  
考えながら熊本と聞いてイメージするものを述べていく。  
「食べ物は何だったかしら」  
「熊本ラーメンだったか」  
「他に馬刺しとこっぱ餅とかよね」  
「そうだな。何かそういうものだったな」  
「九州って何処もラーメン有名なのね」  
そして若奈はこのことを強く思った。

## 第二十八話 監視その四

「それも豚骨のね」

「若奈も豚骨ラーメン好きだな」

「ええ、好きよ」

豚骨ラーメンに対してはにこりと笑って返した。

「もうあのこつてりとしたのがいいのよ」

「そうだったな。けれどラーメンはどれでもいいだろ」

「豚骨もトリガラもね」

「どちらもいけるといっているのである。」

「味噌ラーメンも醤油ラーメンも塩も」

「どれもだったな」

「おうどんもおそばもだし」

とにかくどれもいけるのだった。ラーメンに限らずだ。

「それにしても九州だったら」

「ホークスか？」

「それよね、やっぱり」

まさにそれだった。最早九州といえばホークス、それはもう決ま  
っていることになっていた。

「その人もやっぱり」

「ああ、ホークスファンだよ」

「そうでしょうね。やっぱり九州だとね」

「それだからな」

「ホークスじゃないと駄目ってわけじゃないわよね」

「あとライオンズだな」

このチームも話に出て来た。しかし若奈はライオンズの名前を聞  
くと怪訝な顔になった。それでその顔で父に問い返したのだった。

「何でライオンズなもの？」

「昔は九州にあったんだよ」

その遙か昔の話をするのだった。

「昔はね」

「そうだったの」

「西鉄ライオンズとか知らないか？」

「西鉄！？」

それを聞いても言葉は怪訝なままだった。

「何それ」

「九州の鉄道会社でそこがライオンズの親会社だったんだよ」

「その会社がなの」

「それで紆余曲折があつて西武が親会社になつたんだよ」

「そこまで話すのだった。」

「所沢になつてな」

「何かチームにも歴史があるのね」

「ホークスだつて元はあれだろ？大阪のチームだったじゃないか」

「南海よね」

これは若奈も知っていた。子供の頃この父に教えてもらったことである。

「南海ホークスだったわよね」

「そうだよ。南海だったんだよ」

「近鉄とか阪急の時代よね」

「杉浦が巨人を成敗したんだよ」

ここで父の顔は一気に晴れやかなものになった。彼が巨人を嫌っているのは間違いない。とにかく巨人は関西では、野球を真に愛する人間には人気がない。

「日本シリーズでな」

「本当に昔のお話なのね」

「そういうことさ。それじゃあな」

「やっと店の奥に向かうのだった。」

店は牧村と若奈の二人だけになった。すると彼女は急ににこりとなつて彼に声をかけてきた。

「あのね」

「何だ？」

「美味しいかしら、今の紅茶」

そのことを彼に尋ねるのである。

「それは」

「美味しい」

マスターに対するのと同じ返答を返した。

「いい感じだ」

「そう、よかった」

若奈はそれを聞いて満足した顔で微笑んだ。

「お父さんが考えた第二のルートなのよ」

「お茶を手に入れるか」

「今までコーヒーもお茶も両方共同じお店から仕入れていたのよ」

そうだったというのだ。

「けれどそこコーヒーが専門なのよ」

「コーヒーがか」

「紅茶はあまり強くなくて」

「それで紅茶は特別にか」

「そう、ルート変えたの」

この話を彼にするのだった。

## 第二十八話 監視その五

「それでなのか」

「それでお茶の味が心配だったけれど」

「いい。ただ」

「ただ？」

「同じ種類の茶の葉でも違うな」

牧村が今言うことはこのことだった。

「店が違えば」

「保存方法とか畑とかで違ってくるのよ」

「それでか」

「そうなのよ。お茶は繊細だから」

話が専門的なものになっていった。流石に喫茶店の娘だけはあるそうしたことには熟知しているのだった。

「そういうことだけで違うのよ」

「では今俺が飲んでいる茶は」

「いい畑でいい保存をされていて」

「そういう茶だというのだ。」

「それで作られたものだから」

「それで味が違うのか」

「そういうことなのよ。それでね」

「ここでさらに身を乗り出して言ってきた若奈だった。」

「凄なお茶も手に入ったのよ」

「凄いか」

「イギリス王家で飲まれているお茶よ」

「イギリス王家か」

「これは凄いわよ」

その優しい顔の笑みが満面としたものになっていた。

「もうね。味が全然別よ」

「それだけ凄いのか」

「飲んでみる？」

牧村に対してさらに声をかける。

「一度飲んだら忘れられない味になるけれど」

「そうだな。それでは」

「それでは？」

「飲ませてくれ」

こう答える彼だった。

「そのお茶をな」

「わかったわ。じゃあ」

丁度今飲んでいる茶を飲み終えた彼に伝えてだった。

すぐに茶を淹れはじめる。そうしながらまた彼に言ってきた。

「あのね、牧村君」

「その茶のことが」

「それだけじゃなくて」

話を微妙に変えてきていた。牧村に気付かれないようにだ。

「あのね、今私一人で淹れているじゃない」

「お茶をだな」

「ええ。けれど何時かは」

言葉を慎重に選びながら出していた。

「二人で淹れたいなって思っているけれど」

「俺もお茶を淹れるのは好きだ」

今の若奈の言葉にこう返した牧村だった。

「コーヒーもだ」

「そういうのも得意だったわよね」

「菓子を作るのもな」

それでもある。そうした趣味も持っているのである。

「得意だ」

「じゃあ丁度いいわね」

若奈はそうした一連の言葉を聞いてあらためて頷いた。

「それじゃあ」

「どうだというのだ、それで」

「一人より二人だからね」

言葉に照れが入ってきていた。それは隠せなかった。

「やっぱり」

「二人か」

「お茶もコーヒーも二人で淹れた方が美味しくないかしら」

若奈はまた言ってきた。

「お菓子を作るのも」

「そうだな。では今度は二人でな」

「そうしましょう。それでね」

「そうするか。そうだ」

ここでふと気付いた声も出した。

「あいつも入れるか」

「あいつって？」

「未久だ」

妹である。彼女の名前をここで出したのだった。

「あいつもそういうことを覚えたがっていたからな」

「未久ちゃんね」

その名前を聞いて思うところがあるのか目の光を微妙に変えた若奈だった。



## 第二十八話 監視その六

「そうね。あの娘ならいいわね」

「いいのか」

「可愛いし素質もあるし」

そしてにこりとも笑うのだった。

「丁度いいわ」

「いいのか」

「妹に欲しいわ」

こんなことまで言うのだった。

「是非ね」

「妹にか」

「よかつたらくれないかしら」

にこにこしながら牧村に問うてみせたのである。

「未久ちゃんね。私の妹にね」

「妹はもういるだろうに」

牧村は彼女が三人姉妹の長女なのを指摘した。そのことはもう知  
っているのである。

「それでもか」

「それでもよ。妹がもう一人欲しいのよ」

それでもだと。はつきり返したのである。

「もう一人ね」

「四人姉妹か」

「三人と二人よ」

四人姉妹は否定してそれだというのである。

「そういう意味の妹よ」

「意味がわからないが」

「今はわからなくてもいいわよ。ただ」

「ただ。今度は何だ」

「牧村君もお茶やコーヒーのことはよく勉強しておいてね」

言葉は今度は真面目なものになっていた。

「わかったわね、それは」

「それはいつもしているがな」

「だったらいいわ。それじゃあね」

「そのイギリス王室のお茶だな」

「はい、これ」

それを出してきたのだった。その側にはミルクのポットも添えている。若奈はその白いミルクポットの中についても説明してきた。

「ホットミルクよ」

「ロイヤルミルクティーか」

「イギリス王室だからね」

にこりと笑って話す。まさにそれだというのである。

「だからね」

「わかった。それではな」

「ミルクも選んでるのよ」

「ミルクもか」

「お茶に合うミルクよ」

「それもか」

話を聞きながら今はであった。紅茶だけを口にする。今はその中にミルクを入れようとはしない。まずは紅茶を飲むのであった。

そうしてそのうえで。若奈に言葉を返すのだった。

「あれか。杯に相應しい酒をといるのだな」

「そうよ。牧村君はお酒はやらないけれどその例えなのね」

「これが一番いいと思った」

だからそう例えたというのである。

「これがな」

「成程、そうなのね」

「確かに美味しいな」

その茶を飲みながらの言葉である。

「この味はな」

「いいでしょ。流石って思えるわよね」

「その通りだ。上品な味だな」

「それでミルクもね」

「このミルクは」

「そのルーツは前と同じよ」

「変わらないというのである。」

「今までと同じ。ただ」

「ただ？」

「向こうの牛が変わったみたいなのよ」

「牛がか」

「今の言葉を聞いた牧村の目が微妙に動いた。」

「牛が変わったのか」

「具体的には牛が食べている草が変わったみたいなのよ」

「牧草がか」

「アルファルファをメインにしたらしいのよ」

「牧草の一つである。牛にかなりいいと昔から言われている牧草である。」

## 第二十八話 監視その七

「それで味がね」

「よくなつたのか」

「牛のことはよくわからないけれど」

それは若奈の専門外である。彼女はあくまで喫茶店に関することだ。

「ただ。食べる牧草によつてね」

「牛のミルクの味も変わるのか」

「そうみたいね。向こうの人が考えたらしいのよ」

「それでミルクの味もか」

「よくなつたつてことなのよ」

「成程な」

若奈のその言葉に頷く。頷きながらティーカップを置いてその中にミルクを入れる。するとそのホットミルクの湯気が立ち紅茶の中の白いミルクが一旦底にいく。

そこから沸き起こつてミルクを次第に紅から薄い茶色に変えていく。紅茶とミルクが合わさった時になるあの色になつたのである。

その紅茶を飲むとだつた。その味は。

「どうかしら」

「見事だ」

これがこの紅茶への感想だつた。

「これだけのロイヤルミルクティーはだ」

「滅多にないでしょ」

「ないな」

このこともはっきりと言ひ。

「これは人気が出る」

「そうね。後は」

「コストか」

「それよ。値段がね」

その問題もあるというのだ。若奈はここで腕を組んで述べるのだ  
った。

「ほら、映画だって出来がよくてもお金をかけ過ぎたら」

「赤字になれば話にもならない」

「お店も同じなのよ。幾ら美味しくてもね」

「採算が取れるか取れないかだな」

「取れないと駄目なのよ」

これは当然のことだった。言うまでもない程の。

「絶対にね」

「それではだ」

「そうなのよ。結構これ高くなるのよ」

「やはりそうなるか」

「それがね」

若奈はここで少し困った顔になった。

「ネックなのよね」

「このお茶のか」

「特製ロイヤルミルクティーね」

その商品名も決まっているようだった。

「これだけねど」

「問題はコストか」

「うちで扱っているお茶の葉で一番高いのよ」

顔に出ている困った色はさらに深くなっている。

「一番ね」

「その値段もか」

「どうしても高くなるのよ。出しても売れるかしら」

「宣伝だな」

牧村は若奈の話をここまで聞いて述べた。

「それだとだ」

「宣伝？」

「そうだ、それだ」

まさにそれだというのである。

「宣伝があればそれでもいけるだろう」

「宣伝ねえ」

若奈は今の彼の言葉を聞いて腕を組んだ。そうして。

困った顔を考える顔にしてだ。また言うのだった。

「特別な紅茶つてことでのね」

「そのイギリス王室だな」

「ええ」

とにかくそれである。そこが使っているからこそそのコストである。これはもう言うまでもなかった。つまり権威がコストを作っているのだ。

「それだけどね」

「それならイギリス王室が使っているということだ」

「宣伝しろつてことなのね」

「それでどうだ」

あらためて彼女に問うた。

## 第二十八話 監視その八

「それでだ」

「そうね。それならね」

若奈もここまで聞いて顔を少しだけ縦に動かした。

「いけるかしら」

「何だかんだでイギリス王室は話題になる」

「我が国で言うっちゃっぱり」

「皇室だ」

牧村はまた言った。

「皇室の方々が飲まれているお茶となると」

「凄い宣伝になるわね」

「それもわかった彼女だった。」

「じゃあそれと同じで」

「しかも本当だから余計に話題になる」

「それもあるというのだ。」

「あの王家は世界でもかなり有名だからな」

「じゃあエリザベス二世も飲んでいるとか？」

「それもいい」

「少なくとも悪くないという。」

「それでどうだ」

「わかったわ。じゃあそれでいくわ」

若奈はここまで聞いて納得した顔で頷いた。

「そのイギリス王室御用達のお茶の葉でってことでね」

「これなら多少高くても飲みたいという人間はいる」

「そうね。だったら」

「あとはだ」

「ここまで話してさらに言うのであった。」

「努力だけだ」

「宣伝の？」

「それとその茶の味を上手く引き出すだ」

「その努力もなのね」

「そうすれば売れる」

彼は言った。

「間違いなくね」

「素材とそれを引き出す腕と」

「そして宣伝だ」

「何か商売の基本ね」

「しかしそれができているとだ」

「そうね」

ここから先は生まれついで喫茶店の娘として本能的にわかっていることだった。

若奈はにこりと笑って。それで言うのだった。

「売れるわね」

「そういえばこの店には」

「看板はお茶とコーヒーよ」

その二つだというのだった。

「そしてとりわけね」

「コーヒーか」

「お父さんはそっちの方が淹れるの上手いから」

だからだというのである。

「それでね」

「それなら紅茶も入ればだ」

「余計にお客さんが来るってことね」

「少なくともこの紅茶はだ」

「看板になる」

話はさらに込み入ったものになった。

「そういうことね」

「それでどうだ」



「いいわね。だったら」  
「マスターにも話してくれるか」  
「ええ、それはね」  
「すぐに頷いて返事を返したのだった。」  
「話しておくわ、お母さんにもね」  
「そうしてくれ。それでだ」  
「ええ。それで？」  
「お菓子は何かあるか」  
「それを頼むのだった。」  
「お菓子はだ」  
「ええ、何がいいかしら」  
「タルトがいい」  
「それだというのである。」

## 第二十八話 監視その九

「それをだ」

「わかったわ、タルトね」

「ああ」

また若奈に対して頷いてみせる。

「それを頼む」

「そういえば牧村君ってタルト好きよね」

「嫌いじゃない」

そしてそれを否定しないのだった。

「ケーキもな」

「そうよね。ケーキもね」

「ホットケーキも好きだ」

所謂パンケーキもだというのだ。

「それもな」

「つまり甘いものなら何でも結構いけるのね」

「ただし味には五月蠅いつもりだ」

それはあるのだという。

「好きなだけにな」

「成程ね。じゃあ牧村君の舌に合うだけのタルトをね」

「出してくれるか」

「勿論よ」

にこりと笑って話す若奈だった。

「それじゃあね」

「さくらんぼのをな」

そのタルトを頼んでそれを楽しんで。今はそうした時間を過ごす彼だった。

そして店を出るとサイドカーに乗り妹の未久のところに向かう。するとそこで。

横に一台のハーレーが来た。そこに乗っているヘルメットの男は。「貴様か」

「私が来たということだ」

「わかってるよね」

死神だけでなく目玉も出て来た。そのうえで彼に言ってきたのである。

「暫く振りだね」

「会うつもりはなかった」

「悪いけれどそっちにはそのつもりはなくてもね」

「我々にはある」

死神がここでまた言ってきた。

「それはだ」

「闘いのことだけれど」

「今からか」

牧村は彼等の方を振り向くことなく問い返した。

「魔物が待っているのか」

「いや、今からではない」

「夜にね」

目玉はその時間も彼に話してきた。

「夜になるけれどね」

「そうか、夜か」

「夜に河でだ」

死神は場所を話した。

「河川敷に来るのだ」

「そうか。あの橋のすぐ側だな」

「貴様はその河の中でも橋のところでも魔物と闘ったことがあったな」

「そういえばそうだったな」

その時のことを思い出しながらの言葉である。

「そんなこともあった」

「その河川敷にだ。今夜だ」

「時間は夜か」

「八時半だ」

その時間だというのだ。

「その時間に来ることだ」

「わかった。それならだ」

彼もいいというのだった。

「行かせてもらう」

「納得したと見ていいのだな」

「その通りだ。納得した」

そのことをそのまま話してみせもする。

「その時間でだ」

「ならば楽しみにしている」

死神はここまで告げるとであった。

静かにバイクを前に出して。先に出るのであった。

「私が言うのはこれまでだ」

「じゃあ今夜ね」

「今話すのはそれだけか」

「これを伝えたかっただけだ」

あくまでそれだけだというのだ。相変わらず素っ気無いものだった。夕方の道の中で。周りの車のことを一切見ない世界での話であった。

## 第二十八話 監視その十

「このことをだ」

「そうか。それだけか」

「わかったなら待つている」

「言いながらまた前に出た。」

「また会おう」

「わかった。それではだ」

牧村もそれに応える。こうして死神とのここでの話は終わった。

そうして未久を中学校の校門で迎え彼女を塾に送ってだ。そのうえで一旦家に帰った。

それから夜になり家を出る。サイドカーに乗って夜の街を進む。

「おいおい、サイドカーかよ」

「渋いね」

「いいねえ、あんなの乗れて」

周りの中学生や高校生がそのサイドカーを見てやっかみの声をあげていた。

「格好いいよな」

「俺だつてそのうちな」

「だよな」

牧村はそんな彼等の言葉を聞きながら夜道を進む。そうしてその河川敷に着くとだった。

もうそこにはハーレーが停まっていた。そして彼がいた。

「来たか」

「魔物は何処だ」

「もうすぐ来る」

今はこう返すだけだった。

「相手はだ」

「あの仙人か」

「そしてもう一人いる」

死神はこう返した。

「それはだ。クマゾツツだ」

「あいつか」

牧村はその名前を聞いてすぐにわかった。

「あいつがか」

「これでわかったな」

「それだけで充分だ」

「ならいいな」

死神もこれ以上言おうとはしなかった。そうしてであった。

目の前に彼等が出て来た。まずはあの仙人がだ。

「暫く振りじゃな」

「会いたいと思ったことはない」

牧村は表情を全く変えず彼に返した。

「貴様だけでなく貴様等全員とだ」

「そうか。では闘いは」

「貴様等とは違う」

牧村はまた言葉を返したのだった。

「それは言っておく」

「そうか。それはわかった」

仙人はそれを聞いてだ。彼の前で足を止めたのであった。

そしてその彼の横にだ。あの子供が出て来たのである。

子供はまずは牧村を見た。そして次に死神をだ。そしてそのうえ

で言うのであった。

「久し振りって言うのかな」

「貴様にも会いたいと思ったことはない」

牧村は子供にも同じ言葉を返した。

「闘いたくて生きているのではない」

「つれないねえ。遊び相手なのにな」

子供は純粹な笑みを浮かべて彼の言葉に告げた。

「そんな言葉はないんじゃないかな」

「遊んでいるつもりもない」

牧村のその素っ気無い言葉は続く。

「それも言っておく」

「やれやれだね。まあいいや」

「諦めたな」

「お話は僕達の遊びじゃないしね」

それについてはこう返す彼だった。

「これでいいよ」

「そうか」

「それでだけれど」

ここで彼との話を打ち切りそのうえで今度は彼だけ出なく死神に  
対しても言ってきた。

「今回は僕も来たよ」

「私は貴様等の魂を刈る」

死神の声は牧村のそれとは違っていた。鋭い、まさに大鎌の鋭さを  
そこに見せていた。

第二十八話 監視その十一

「その相手を出してくるのだな」

「そういうことだよ。君達と遊びたい相手はね」

「誰だ」

「出て来て」

彼がこう言うようになった。不意に上から、まさに落ちて来る感じだ。かたかたとしたぎこちない動きの人間が出て来たのであった。

「これが君達と今日遊びたい相手だよ」

「そいつがか」

「そうだよ。そうだね、ねえ」

子供は今度はその人間に見えるものに対して声をかけた。

「君は誰の相手をしたいのかな」

「はい、クマゾツツ様」

見ればであった。やはり彼は人間ではなかった。ぎこちない動きを続けている。その身体は硬い木でできた、その存在だったのである。

「私です」

「うん、君は？」

「髑髏天使の相手がしたいです」

「こつ言つのであった。

「あの者との相手を。いいでしょうか」

「そうだね。ねえ」

子供はここで仙人に顔を向けてそのうえで彼に問うのだった。

「ヤクシャ」

「何じゃ」

「僕の魔物は髑髏天使の相手をしたんだって」

「そうか」

「君はそれでいいかな」



「わしは構わん」

彼もそれでいいというのであった。

「別のう」

「そう。じゃあこれでいいよね」

死神は彼のその言葉を聞いて安心したように微笑んだ。

「それでね」

「よい。それではじゃ」

「それじゃあ髑髏天使の相手は僕で」

「わしの相手は死神じゃな」

「私としてはどちらでもいい」

死神の言葉はここでも大鎌そのものであった。

「ただ。刈るだけだ」

「左様か」

「では問おう」

まだ鎌は出していない。しかしその鎌を突き出してそのうえで仙人に問うてみせた。

「貴様の今回の魔物は誰だ」

「出るのじゃ」

死神に答えずにだった。こう告げたのであった。  
すると後ろから出て来た。それは。

鬼であった。人の身体に牛の顔をしただ。その鬼が出て来たのであった。

身体の色はまさに漆黒であった。その漆黒の姿を闇の中から出して来て。魔物は言った。

「ラークシャサ」

「羅刹か」

死神はそれが何かすぐに察した。名前を聞いただけで。

「鬼だな、まさに」

「そう、俺は鬼」

彼の方からもそれを認めてきた。

「鬼だ。闘い続けるな」  
「ふん、まさに羅刹というよりはだ」  
「死神はそれを聞いてこう述べた。」  
「阿修羅だな」  
「だが俺は阿修羅ではない」  
「魔物はそれは否定した。」  
「羅刹だ。そこが違う」  
「しかし闘いの中に生きるのだな」  
「それはその通りだ」  
「このことはそのまま認めてきた魔物だった。」  
「俺は闘いの中に生きている」  
「それでは今もだな」  
「そうだ」  
「死神に告げてきた。」  
「そしてだ」  
「闘うというのだな」  
「貴様を倒す」  
「こう返してもみせる。」

## 第二十八話 監視その十二

「わかったな。それではだ」

「そうか。ならばだ」

死神はその言葉を返すとだった。

まずは右手を拳にした。そうして。

「貴様の望み通りにしてやるう」

「来るのだな」

「見るのだ」

こう言つてであった。

その拳を胸の前に置く。そこから青白い光が放たれ彼の全身を包み込む。

そうしてそのうえで、であった。あのフードのある法衣を着てそのうえで右手に大鎌を持つ。そのうえでその鎌をまずは一閃させた。

そして。彼は言った。

「その命、刈らせてもらう」

「いいだろう。ではだ」

「貴様の望み通りに闘おう」

こうして二人の闘いがはじまった。そうして牧村達も。

「俺の相手は人形か」

「人形ではない」

魔物は今の牧村の言葉を否定した。

「俺は人形ではない」

「では何だというのだ？」

「魔物だ」

それだというのである。ぎこちない言葉で。

「俺は魔物だ。それを言っておく」

「ああ、言っておくけれどね」

ここで子供も彼に言ってきた。

「この魔物は強いよ」  
「木でできているというのにか」  
「木は強いよ」  
子供はこう言ってくすと笑ってみせるのだった。  
「何よりもね」  
「そしてこの魔物もか」  
「そういうこと。それは確かに言ったよ」  
「耳には入れた」  
牧村もそれを受けて述べる。  
「強いか」  
「俺は負けたことがない」  
魔物の方からも自分のことを述べてきた。  
「それだからこそ」  
「来るか」  
「行かせてもらおう」  
こう言ってだった。一步出た。そうして牧村にまた言ってきた。  
「髑髏天使になるのだ」  
「それまでは闘わないというのか」  
「俺は人間とは闘わない」  
「このことも言ってきた」  
「魔物は人とは闘わない。そして今は喰らいもしない」  
「人はどうでもいいのか」  
「人には何の興味もない」  
実際にそうだともいう。  
「だからだ。人間の姿の貴様にはだ」  
「何の興味もないか」  
「そうだ。確かに言った」  
ぎこちない声なのは確かだが言葉は出した。これは否定できない。  
「俺も。聞いたな」  
「聞いた。それは言うておこう」

「それではだ」

「変身しろというのか」

「来い」

牧村に対してまた告げてみせた。

「そして闘うのだ」

「受けよう」

牧村も最初から退くつもりはなかった。それならばだ。

両手を拳にしてそれを胸の前で打ち合わせた。中指と中指を中心として。そしてそこから放たれる白い光に身体を包み込み。そこから髑髏天使になった。

「行くぞ」

右手を少し前に出して胸の高さで一旦開きまた握り締める。これが合図だった。

「貴様を倒す」

「それは俺の言葉だ」

魔物はまた彼に返した。

## 第二十八話 監視その十三

「しかし。確かに髑髏天使になったな」

「見ての通りだ」

「ならば確かに受けた」

魔物は頷いた。ぎこちない動きで。

「でははじめるとしよう」

「言っておくが遠慮はしない」

言いながら早速その身体を赤くさせてみせた。両手に剣が出て翼も生える。権天使になったのだ。

「いいな、それで」

「いいだろう。貴様の全力を見せるのだ」

「それで焼き尽くされてもいいのだな」

「俺が燃えることはない」

魔物はこう彼に返してきた。

「決してだ」

「燃えないというのか」

「不思議だというのか。それが」

「木は燃えるものだ」

髑髏天使がここで言ったのは木に関する常識のことだった。

「それで何故燃えないと言えるのだ」

「なら見るのだ」

魔物はここでは多くは語らなかつた。あえてであった。

「それをだ」

「仕掛けて来いというのか」

「どちらにしろそのつもりだな」

魔物は既にそれは決まっていることとして言ってきた。

「そうだな。違うか」

「それはその通りだ」

髑髏天使もそれは否定しなかった。

「ではだ。行くぞ」

「来るのだ、見せてやる」

お互いに言い合う。そうしてまずは髑髏天使は身構えた。そうしてであつた。

魔物の周りに幾つもの火柱を出した。彼を四方八方から取り囲んでいる。

そしてその火柱がだつた。それぞれ一直線に一齐に魔物に突き進んできた。

「これが貴様の炎だな」

「そうだ、これがだ」

まさにそうだと答えてみせた。

「これがだ。俺の炎だ」

「それで俺を燃やすというのだな」

「見ればわかることだ」

髑髏天使はここでもあえて多くは言わなかった。

「これがだ」

「ではだ。俺は動かない」

「動かないというのか」

「そうだ。受けてみせよう」

こう言つてであつた。実際に動かないのだった。

魔物は全く動かない。一步もだ。そしてそのまま無数の火柱を受けてみせた。

木の身体で火を受ける。すると。

彼は全く燃えなかった。何一つだ。まるで何でもないといたよ  
うに火の中で立っていた。

「燃えないというのか」

「そうだ。燃えはしない」

彼は平然と言つてみせるのだった。その火の中で。

「それは何故かわかるか」

「どういうことだ、これは」

声は冷静だった。しかし怪訝なものが僅かに入っていた。

「俺の炎が木を燃やせないというのか」

「火が弱いのはだ」

魔物の声は相変わらずぎこちない。だが確かに言うのだった。

「水だな」

「では貴様は」

「そうだ。俺の身体には水が多く含まれているのだ」

「こつ言つのである。」

「そしてそれを出すことができる」

「木は水を出すことができる」

彼は述べた。

「それによつてだ」

「それでなのか」

「その通りだ。だから俺には火は意味がない」

己の中にあるその火を防ぐものを堂々と言ってみせた。

「それを言つておこつ」

「そうか。それではだ」

「行くぞ」

こつ言つてであつた。今度は魔物の方から来た。

身体の動きは相変わらずぎこちない。だがその動きは。

「速いな」

「木を甘く見ないことだ」

言いながら信じられない速さで一直線に向かつて来た。そうして  
だつた。



## 第二十八話 監視その十四

その両手を突き出してきた。それも一度や二度ではない。幾度も突き出してであった。髑髏天使を貫こうとする。

「この速さに追いつけるか」

「俺も言おう」

その彼の攻撃を左手のサーベルで防ぎながら返すのだった。

「甘く見ないことだ」

「貴様もだというのか」

「そういうことだ。俺もまた伊達に多くの闘いを繰り広げたわけではない」

「そうだな。座天使だな」

「天使としての階級だけではない」

それだけではないというのだ。

「これまでの闘いでだ。俺もまた貴様等を見てきた」

「そして倒してきた」

「だからだ。俺もまた」

「敗れはしないか」

「それを言っておく」

「そうだというのだ。」

「わかったな」

「わかった。それではだ」

魔物はその言葉を受けると。その腕を変えてきた。形が変わった。木そのものになったのである。

そしてそれを自由自在に伸ばし。彼をさらに狙ってきた。

「腕をか」

「言ったな。俺は木だ」

彼はまたこのことを言ってみせてきた。

「だからだ。こうして木そのものの形にもだ」

「なれるというのだな」

「さて、これはどうする」

攻撃はさらに速くなってきた。しかも突くだけではなく叩くこともしてきた。尚且つリーチもまるで違うものになっていてそれもあつた。

「この攻撃は。防げるか」

「防げると言えばどうする」

髑髏天使の言葉はここでも強気であった。

「その場合はだ」

「ならばあれになるのか」

魔物はそれを聞いて察したようであった。

「座天使になるのか」

「そうさせてもらおう」

こう言つてだった。実際にその身体を輝かせた。そうして黄色の天使になるのだった。

まさしく座天使だった。その姿になってみせた。

そのうえで。魔物に対して問う。

「これでいいのだな」

「力のある者を倒す」

魔物はまた言つた。

「それこそが魔物の本懐だ」

「それでは権天使としての俺はだ」

「何の興味もない」

まさにその通りだというのだ。

「全くな」

「そうか。何もか」

「そうだ、ない」

彼はまた言つてみせた。

「人としての貴様はさらにだ」

「何の興味もないというのか」

「俺が興味があるのは強い貴様だ」

「そしてその俺を倒す」

「そうさせてもらう。いいな」

言いながらであった。

再び攻撃を仕掛ける。また両手を木にしてそれで突きと叩きを同時に繰り出す。それはまさに密林の中で荒れ狂う嵐そのものであった。

「さて、これはだ」

「防げるかどうかだな」

「どうだ、それは」

「かわせる」

そうだというのだ。

「いや、防げる」

「防げるか」

「この俺の今の力はだ」

その座天使の力だというのだ。

「それも防げる」

言いながらであった。その身体に渾身の力を出し。全身から凄まじい雷を放った。

## 第二十八話 監視その十五

それで魔物を襲う。一気に黒焦げにせんとする。

「これはどう防ぐ」

「雷をか」

「雷は水を通す」

このことを彼に問うのだ。

「そうだな。それはどう防ぐ」

「確かにそれはその通りだ」

「魔物もそれは否定しない。」

「しかしだ」

「しかし？」

「通すだけだ」

それだけだというのだ。

「だからだ。どうということはない」

「どうところはないだと」

「そうだ。見るのだ」

見ればだった。雷は彼の身体を通り過ぎるだけであった。それで終わったのだ。

「こういうことだ」

「雷は効かないというのか」

「今の俺には効きはしない」

あくまでそうだというのである。

「わかったな」

「それもわかった」

一応はこう答える。

「しかしだ」

「しかし？」

「これで貴様は死んだ」

髑髏天使は彼に言い切ってみせた。

「完全にだ」

「俺が死んだというのか」

「そうだ。確かに貴様の水と木の力は見事だ」

それは認めるのであった。

「しかしだ」

「しかし？」

「そのどちらかを消せばそれで済む」

言いながらであった。また権天使になってみせた。

「どういつつもりだ」

「まずは火だ」

言いながら彼のその周囲を紅蓮の炎で包んでみせた。ぶつけはしない。

それで彼を囲んでだ。言うのであった。

「どうだ、これは」

「どうということはない」

それは大したことはないというのだ。

「この程度はな」

「そうだな。しかしだ」

ここで髑髏天使はさらに言う。

「貴様の水はどうだ」

「何っ!？」

「貴様の水は消えていつている筈だ」

このことを言うのだった。

「貴様のその水はな。水は確かに火に強い」

「それをわかつていれば何故だ」

「だが。火は水を消すことができる」

彼が指摘したのはこれだった。

「そうだな、それはだ」

「そしてどうするつもりだ」

「貴様の水を消し」

さらに続けていく。

「そのうえで」

「どうだというのだ」

「死んでもらう」

火をそのままにして。座天使に戻った。

「いいな、それでだ」

「まさかここで」

「そうだ、雷を使う」

まさにそうするというのだ。

「木は雷に弱い。そうだな」

「確かにな」

魔物もそれは忌々しげだが確かに認めた。

「その通りだ」

「では死ぬのだ」

言うとなった。右手のその剣を天に高々と掲げた。

## 第二十八話 監視その十六

するとだった。まずはその剣に雷が落ちた。そして剣に黄色い大蛇となつて宿つた。

そしてそれを魔物に向けて放ち。そのうえで彼を貫いたのだった。

「ぐうっ……」

「勝負ありだな」

貫いたのを見届けながら魔物に告げた。

「これでな」

「まさかこうして俺を倒すとはな」

「水も無敵ではない」

髑髏天使はこのことを魔物に告げた。

「それはわかつていなかったようだな」

「わかつてはいた」

魔物もそれはわかつていたというのだった。

「しかしだ」

「しかし？」

「水と木を合わせることで無敵だった」

「確かに貴様は手強かった」

「水と木があればこそか」

「そうだ。それだからこそ強かった」

その二つがあればだというのだ。そしてそれこそが魔物の弱点でもあつたというのだ。

「ならばだ」

「俺のその二つのうち一つを崩せばか」

「そうだ。そうすれば貴様は倒せる」

「それがわかつたというのだな」

「その通りだ」

まさにそうだというのである。

「そしてその通りだったな」

「確かに。まさか俺の水を消しにかかるとはな」  
「魔物もそれは感嘆した。」

「だが」

「だが。何だ」

「火で水を消したか」

「そのことを言うのである。」

「それも直接ぶつけるのではなくか」

「炙る方が効くと思ったからだ」

「それも考えていたか。どうやら貴様は」

「俺は」

「強さには頭脳があるようだな」

「魔物はそこに彼の強さの源を見たのだ。」

「そこには」

「俺には頭脳があるのか」

「どうやら貴様は常にそれで勝利を収めているようだしな」

「俺の過去の闘いも調べていたのか」

「一応はだ」

「そうだといいのだ。」

「しかし。それでも想像以上だった」

「そうだったのか」

「やはり見事だ」

「そしてまた彼に告げた。」

「貴様と最期に闘えたことを光栄に思う」

「その言葉は覚えておこう」

「では。去ろう」

「魔物の体が青白い炎に包まれていった。」

「これでだ」

「安心して死ね」

「これが髑髏天使への彼のはなむけの言葉だった。」



「闘った誇りを忘れないままな」

「そうさせてもらう。それではだ」

ここで青白い炎の中に消えた。髑髏天使のここでの戦いは終わった。

そして死神はだ。ラクシャサの激しい斧による攻撃を鎌で受け止めていた。

魔物は何処からかその斧を出して来た。そうしてそれで彼を倒そうとしてきていた。

「さあ、死神よ」

「何だというのだ」

「何を考えている？」

その攻撃を加えながら彼に問うてきた。

「今は何を」

「私は何をしようとしているのか興味があるのだな」

「貴様は奇襲が得意だ」

それを言うのだ。

「そうだな」

「だとすれば何だというのだ」

「そう。例えば」

言いながらだった。その目をあえて笑わせてきた。そうしてだった。

## 第二十八話 監視その十七

「後ろからだ」

「むっ!？」

「来る。そうだな」

ここで魔物の背に死神の分身が彼の影から出て来た。そうしてその両手に持っている大鎌を振り下ろす。しかしその攻撃は。

「考えてはいる」

「だが、というのか」

「攻撃は来るのがわかっていればどうということはない」

「そうだというのだ。」

「そう。こうすることができる」

こう言つてであつた。魔物の背中からもう一本腕が出て来た。それで防いだのだった。

「そう来たか」

「腕は二本とは限らない」

魔物は誇らしげに二人の彼に同時に言つてみせた。

「それは忘れていたようだな」

「そういえばインドではだ」

「そうだ。腕も顔も何本もあるものだ」

魔物はこう言つて笑つてみせた。

「神も魔物もな」

「そうだったな。しかしだ」

「しかし。何だ」

「私は腕を増やすことはできない」

彼はそれはできないのだった。そうした術は持っていないのである。

「それでも闘うことはできる」

「そういうことか」

「それでは私はだ」

また死神が出て来た。三人である。

その三人になってそのうえで攻める。魔物を完全に囲んでいる。しかし魔物は三本目の手を引っ込めて新たに肩から二本の腕を生やしてきた。左右にそれぞれ一本ずつ、肩まで出して二対の腕を並べていた。

その手には元の手が持っていた斧だけでなく槍を持っていた。右手に槍があり左手には一つに盾を、そしてもう一つには剣を持っていた。

そしてその武器で。三人の死神の相手をするのであった。

三つの武器で攻撃を仕掛け盾で守る。三人を相手に互角に闘っていた。

「腕が四本あればか」

「我等と闘える」

「そうなのだな」

「そういうことだ」

まさにそうだと答える魔物だった。

「俺の力を見たな」

「確かにそれはだ」

「見させてもらった」

「それは確かだ」

死神達はそのことは認めた。

「だが。ここで一つ言っておこう」

「何をだ？」

「私は三人だけではない」

それを言ってきたのである。

「まだ出せる。貴様の腕が四本あるのならばだ」

「むっ!？」

魔物は目の前にいる死神が右に分かれたのを見た。それでまた一人だ。

そのうえでもう二人右に出た。合わせて六人になったのだ。

その六人で彼を囲む。そうして彼に告げてきた。

「これでどうだ」

「六人ならばだ」

「貴様といえど」

「噂だけはある」

魔物は六人の死神に取り囲まれながらも冷静さを崩していない。

そのうえでだった。彼はさらに言う。

「それではだが」

「何をするつもりだ」

「今度は」

「貴様が今の様に増やせるだけではなく」

それだけではないというのだ。

「俺もまた今以上に増やせることができるのだ」

「腕をか」

「腕だけではない」

それだけではない。魔物は自信に満ちた声で言ってみせてだった。

## 第二十八話 監視その十八

腕をさらに出してきた。今度はその二対の腕からそれぞれだ。また四本の腕を出してきたのである。そのそれぞれの手にも盾や斧、槍、剣がある。

そしてその上も。左右に一つずつ顔が出て来たのである。

「顔までもか」

「出せるというのか」

「それまでも」

「インドでは顔もまただ」

魔物はその顔を己の頭の左右から浮き出させながら言ってみせる。その姿はさながら阿修羅の様であった。異形のその顔が三つになっ  
てきていた。

「多くあるのだ」

「多くか」

「そうだ、この様にだ」

「顔もまた多くある」

「腕と同じにだ」

こう言っただけであった。その三面八臂の姿を見せる。禍々しい姿であつた。

「どうだ、この姿は」

「確かにな」

「強そうではある」

「それは確かだ」

死神達は彼を取り囲みながら述べた。

「それで私を倒すのだな」

「その姿で」

「その通りだ」

「最早貴様を見逃すことはない」

「決してだ」

その三つの顔でそれぞれ言ってみせる魔物だった。

「その為の三面だからだ」

「それもまた言っておく」

「いいな」

「話は聞いた」

「それはな」

死神達はその三面の言葉に対してこう返した。

「聞きはした」

「それではだ」

「遠慮なく闘わせてもらおう」

「面白い。これでこそ闘いだ」

周囲から迫るその六本の鎌をそれぞれ防ぎながらの言葉だった。

一本の腕で一人を相手にして。そしてもう二本の腕で死神達を攻撃するのであった。

「受けるのだ」

「これをだ」

「むっ!？」

「くっ」

死神達はそれをかわしはする。しかしであった。

その二本の腕の攻撃をかわすとここでそれぞれが相手をしている腕が来る。それで死神達は取り囲みながらも劣勢に追い込まれていった。

「まさかな」

「ここまで分かれてもか」

「貴様を倒すことはできないのか」

「ようやくわかったか」

「俺のこの力が」

「この期に及んで」

魔物の声はここで勝ち誇ったものになってきていた。

「闘いを進めてやっとわかったというのだな」

「いや、わかつてはいた」

「今出て来るとなるとだ」

「それだけのものがあるのはな」

わかつていたと。死神達は答えた。

「それは既にだ」

「六人でも駄目であろうというのはだ」

「予想はしていた」

「予想していただと」

「ここでも言うのか」

魔物はその三面から死神達にそれぞれ告げた。

「ではまさか」

「まだ何かあるというのか」

「切り札は一枚とは限らない」

死神はここでこう言ってきた。そのうちの一人がだ。

「それは今はじめて貴様に言うことだ」

「ではまさか」

「六人で終わりではない」

そうだとするのである。

「こうしてだ。影にそれを潜ませておいた」

その言葉と共に魔物の影の中からもう一人死神が出て来た。頭から出て来てそのうえで彼の背にその鎌を突き刺したのであった。

## 第二十八話 監視その十九

それで終わりであった。魔物は動きを止めてしまった。  
「ぐっ……」

それと共に赤い炎がその身体を包んでいく。それが何よりの証であつた。

「まさかな。そうして勝つとはな」  
「どうだ」

魔物に対して問う。その時にはもう一人に戻っていた。

「闘い方は幾らでもあるのだ」

「こつした闘い方もか」

「私はこつしたこともできる」

そのことも魔物に対して告げる。

「そのことは知っていた筈だ」

「確かにな」

魔物の方でもそれは認めた。赤い炎は少しずつ彼を覆ってきていた。

「それは知つてはいたが」

「だが。貴様は勝つたと思つたな」

「そうだ」

そのことも認める彼だった。

「それはだ」

「しかし貴様はそれに驕つた」

「貴様に勝てると思つた」

「それが貴様が敗れた瞬間だったのだ」

「勝利を確信しそれで注意を払うのを怠つたからか」

「そうだ。もつともだ」

ここで死神はまた言う。

「私の今の影に潜ませたのは」



「どつだというのだ」

「咄嗟のことだ」

そうだったというのである。

「それが効を奏したな」

「咄嗟でもそれができるのは貴様にそれだけの力があるということだ」

魔物はその『咄嗟のこと』に対してこう述べた。

「それでだ」

「そう言えるのだな」

「胸を誇っていい。貴様は俺に勝った」

今度はこのことを彼に告げた。

「このラークシャサにな」

「では安心して旅立つのだ」

そうしろというのであった。

「冥界にな」

「そうさせてもらう。それでは俺も」

ここで赤い炎に全身が包まれた。これで彼は消え去った。

闘いが終わりそうして。死神は元の姿に戻った。その頃には髑髏天使も牧村の姿に戻っていた。そのうえで死神に対して声をかけた。  
きた。

「今日はこれで終わりだな」

「御苦労だったと言うべきか」

「別にそうした言葉は必要とはしない」

牧村はそれはいいというのだった。

「勝手にしておけ」

「勝手にか」

「そうだ。言ってもいいし言わなくてもいい」

本当にどうでもいいというのである。

「それではだ」

「帰るのか」

「妹を迎えに行く」  
「こう言って踵を返すのだった。」  
「用事がある。だからだ」  
「人間の世界の用事か」  
「それをしなくてはならない。だからもう行かせてもらう」  
「人間として生きているか」  
「死神はその背を向けた彼に告げてきた。」  
「それならいいがな」  
「いいというのか」  
「牧村も背を向けたまま彼に伝える。」  
「それならば」  
「人間ならばだ」  
「死神はまた彼に告げた。」  
「どうということはない」  
「最近おかしなことはかり言っな」  
「そう思うか」  
「思わないとすればその方がおかしい」  
「牧村はこども返した。」  
「何度も何度も言われていればな」  
「そうかもな。しかしだ」  
「今度は何だ？」  
「人であることだ」  
「牧村にはつきりと告げた。」

## 第二十八話 監視その二十

「いいな、人であることだ」

「またその話か」

「話は聞いているな」

「一応はだ」

聞いているとは答える牧村だった。だが背は向けたままだ。

「聞きはした」

「そうか。ならいい」

「俺は人間だ」

このことをまた言うのだった。

「それも言っておく」

「ならそのままであることだな」

「そうだね」

ここで目玉も出て来たのだった。

「それがいいね」

「その声は。貴様も出て来たのだな」

「ああ、声でわかるんだね」

「わかる。ではまただな」

「あれっ、僕とは話さないんだ」

目玉はそれを聞いてかなり残念そうであった。

「これで終わりだなんて」

「話をする事がないからだ」

そうだと返す牧村だった。やはり彼に背を向けたままだった。

「貴様ともな」

「そうなんだ。だったら」

「帰る」

そうするといふのである。

「これでだ」

「じゃあさようなら」

目玉は彼を引き留めることはしなかった。

「またね」

「話はなかったのか」

「聞きはしたかったよ」

それはあるとは告げた。

「けれど君が何も言うことがないんならね」

「それでいいのか」

「また聞くことができるし」

「こう言っただけのまま素っ気無い態度のままにいる。」

「それじゃあね」

「また会おう」

こう言っただけでサイドカーに乗りそのままその場を去る。死神と目玉はその彼を見送った。そうしてそのうえでお互い話をするのであった。

「どう思う」

「そうだね。本人は否定するけれど」

目玉は死神に対しては饒舌に話すことができた。

「それでもね。あれはね」

「次第になっただけでいるな」

「そうだね。次第にね」

なっているという。それを言うのだった。

「あのままいったら。次には」

「うん、智天使になったら」

その時のことを話すのである。

「その時は近いしね」

「あのままいけばな」

「半年で智天使っていったら」

「今まではなかった」

ないというのである。

「これまでの髑髏天使ではな」

「力天使だつてそうはなれなかつたのにね」

「力天使なぞ瞬く間だつた」

最早その時は遠いことになってしまつていた。既に、である。

「今や座天使だ」

「上級になつてね」

「さらに昇る。しかし智天使はだ」

「あれは普通じゃないからね」

その智天使のことを話すのだった。天使の階級としては上から二番目である。だがそれは決して階級の高さだけではない、二人はそう話をしていた。

「最早な」

「その天使になつた時にだ」

死神の言葉が強いものになつた。

「何かが起こる」

「そうだね。その時に君の危惧することが起これば」

「私が刈る」

彼は言い切つた。

## 第二十八話 監視その二十一

「確実にだ」

「そうするんだね」

「私は魔物を刈るのが今の仕事だ」

「だからなんだね」

「そうする。それではだ」

こう言つて彼は身構えていた。既に闘う姿ではなかったがである。そして牧村は未久の通つている塾の前に来ていた。すっかり夜になつていた。その夜の中で彼はサイドカーを止め彼女を待つていた。程なくして彼女が塾の前に来た。そうして彼女が声をかけてきた。

「ありがとう」

「今来たところだ」

「こう妹に返すのだった。」

「だから気にするな」

「そうなんだ」

「それでだ」

そしてあらためて彼女に告げてきた。

「ヘルメットを着ける」

「ええ、じゃあ」

「寒いからそれには注意しろよ」

「わかつてるわよ。だからこれね」

ここで自分のジャケットを見せる。白いふかふかしたジャケットだ。その下にはやはり白いセーターがあり黄色いミニスカートの下の足も白いストッキングである。

「重武装してるのよ」

「重武装か」

「だって寒いから」

やはりそれが理由であつた。

「だからね」  
「それでバイクの中でもか」  
「ええ、平気よ」  
「にこりと笑って兄に答えた。」  
「もうね」  
「そこまで考えていたのか」  
「そうよ」  
「また答える妹だった。」  
「だって。女の子なのよ」  
「お洒落でもしているのか」  
「違うわよ」  
「そうではないというのだった。ここでは。」  
「そうじゃなくてね」  
「冷えるのか？」  
「そうよ。女の子は冷え性なのよ」  
「今はそれを言うのだった。」  
「だからね」  
「それでか」  
「そうよ、わかってくれたかしら」  
「そうだな。これでな」  
「兄もわかったと答えた。」  
「それでだったのか」  
「女の子は複雑なのよ」  
「そしてこんなことも言うのだった。」  
「すぐ冷えるから大変なのよ」  
「それはよくわからないがな」  
「わかったら怖いわよ」  
「未久はここで少しむっとした顔になった。」  
「男にはわからない話よ」  
「そうした話は他にもあるか」

「あるわよ。恥ずかしくて言えないけれどね」  
「そこから先は言おうとはしない。」

「一杯あるから」

「冷え性だけではなくか」

「それはよくわかっておいてね」

「よくか」

「女の子はデリケートなの」

「こんなことも言った。」

「何につけてもね」

「御前もか」

「勿論よ」

当然といった口調であった。

「私はその女の子なんだしね」

「冷え性なのもはじめて知ったがな」

「前からだけれど」

「前からだったか」

「そうよ。だから一杯食べないといけないし」

「それは関係ない筈だ」

今の言葉にはすぐに突っ込みを入れた。

「食えることと冷え性はだ」

「それがあるのよ」

しかし未久の口は減らない。全くである。

「食べたら身体があつたまるじゃない」

「それでもあるとは思えないのだがな」

「あると思っでいて。それじゃあね」

「やっと帰るんだな」

「そうして。それじゃあ」

ここでやっとそのサイドカーに乗るのだった。横のその車に入る。

牧村もエンジンを再び入れる。しかしヘルメットはまだだった。

未久は今丁度被るところだった。それで兄に対して言った。



「お兄ちゃん、ヘルメット」  
「わかつている」  
「さもないといざという時怖いわよ」  
「ヘルメットを着けないでバイクには乗れない」  
「彼もそれはよくわかつているのだった」  
「それは愚か者のすることだ」  
「愚かなのね」  
「命はできる限り大事にする」  
「こんなことも言つた」  
「だからこそだ」  
「そうよね。やっぱり命はね」  
「何時なくなるかわからない」  
「不意にこんなことも言う牧村だった」  
「まさにだ。何時だ」  
「何時つて」  
「だが未久には今のその言葉は。妙に場違いなものに聞こえた」  
「それで少し引いて。兄に告げた」  
「別にそこまでは」  
「俺はそうだ」  
半分髑髏天使になってしまっていた。その心が。  
「何時なくなるかわからないからな」  
「だからそれオーバーよ」  
「ここでまた言う彼女だった」  
「別にそこまではいかないじゃない」  
「むっ？」  
「何言ってるのよ一体」  
「また兄に告げるのだった」  
「命がどうとかつて」  
「忘れてくれ」  
我に返ってこう述べる兄だった。

「今の言葉はな」

「まあ訳がわからないしね」

妹もそれでいいとした。そうしてあらためてであった。

「帰ろう」

「ああ、それじゃあな」

「ちよっとコンビニに寄ってね」

「こんなことも言った。」

「それでね」

「コンビニか」

「チヨコレート買いたいのよ」

「だからだというのだ。」

「それで。いいわよね」

「わかった」

妹の言葉にそのまま頷く。

「それじゃあコンビニにもな」

「御願いな、お兄ちゃん」

ここまで言ってヘルメットを被る。そうして今は妹を乗せてその場所に向かうのであった。

## 第二十八話

完

2009・12・22

## 第二十九話 小男その一

髑髏天使

第二十九話 小男

「そういうことだ」

「相変わらずだったよ」

仙人と子供がそれぞれ仲間達に告げていた。今彼等は虚空の中にそれぞれ立っていた。周りには何もなくそこに浮かぶ様にして立っている。そのうえで話をしているのだ。

「手強いものだな」

「また一段と強くなってるね」

「座天使になってさらになのね」

女がそれを聞いて述べた。

「どうやらね」

「それじゃあどうするのかしら」

今度は美女が言ってきた。

「また新しい魔物を出すのね」

「それしかないだろう」

男は美女のその言葉に応える。

「どちらにしろ」

「そうだ。我等は魔物を出し髑髏天使の力を手に入れる」

紳士はそのことを話した。

「それが宿命だからな」

「そういうことだ。だがあの強さはだ」

青年はこのことを指摘した。

「かつてない。あれだけ強ければだ」

「我々の方も出す魔物が限られてきたな」

仙人はまた言ってみせた。

「それもかなりな」

「じゃあ誰なんだ？」  
ロツカーは述べた。  
「誰を出すんだ？それで」  
「そうですね。また一人来られますし」  
老人がここでやつと口を開いたのだった。  
「我々の同胞が」  
「これで十一柱だね」  
子供が述べた。  
「後は二人だけだけれど誰かな」  
「女性の方です」  
出して来たのは女であった。そうだというのだ。  
「そちらが来られます」  
「という」と  
「あの娘ね」  
女と美女がそれぞれ言ってきた。  
「あの娘が遂に出て来たの」  
「随分と時間がかかったのね」  
「時間がかかったけれどそれでもです」  
老人はまた仲間達に話す。  
「来られました」  
「そう。じゃあ今度は」  
「彼女の歓迎になるわね」  
「その歓迎ですが」  
「俺が迎えに行く」  
男が名乗り出て来た。  
「そうさせてもらうか」  
「いや、待ってくれ」  
しかしここで紳士が出て来て言うのだった。  
「ここは私が行かせてもらおう」  
「貴様がか」

「ウエンティゴ、貴様は前に魔物を出しているな」

「それはそうだが」

「では私が行かせてもらおう」

また言うのである。

「それでいいか」

「忌々しいがいいだろう」

男は無然としながらその言葉に頷いた。

「貴様の番だというのならな」

「ではそうさせてもらおう」

「やれやれだぜ」

ロツカーはここでシニカルな感じで言うのであった。

「俺も行きたかったんだけれどな」

「まあいいではありませんか」

老人はその彼を宥めに入った。

## 第二十九話 小男その二

「次があります」

「次がかよ」

「それまでは楽しく過ごして下さい」

「わかったよ、じゃあな」

こう言つてである。

「今はそうさせてもらつぜ」

「ではそういうことで」

「僕と遊ぼうよ」

子供がにこりと笑つてロッカーに声をかけてきた。

「それでいいよね」

「おいおい、ガキと遊べつていいのかよ」

「それでいいじゃない」

彼はまた言つてみせた。

「それでね。何をして遊ぶの？」

「音楽でも聴こうぜ」

ロッカーは彼にそれを提案するのだった。

「御前の好きな音楽は最近何だっけな」

「そうだね、この国の音楽は何でもね」

「ああ、日本の音楽は結構いいよな」

ロッカーもそれは認めるのだった。

「じゃあコンサートでもな」

「行くんだね」

「他に誰か行くか？」

彼はここで他の面々にも声をかけた。

「多い方が楽しいからな」

「そうね。それじゃあ」

美女が出て来た。

「私もね」

「よし、他にはいるかい？」

「私も」

「俺もいいか」

女と男も名乗り出て来た。

「面白そうだから」

「一緒に行かせてもらおう」

「俺もいいか」

「わしもじゃ」

今度は青年と仙人もであった。

「楽しみは味わっておくことだ」

「刺激こそが魔物の喜びじゃからな」

「あんたはどうするんだい？」

ロツカーは今度は老人に問うた。

「それで」

「そうですね。では私もまた」

「来るんだな」

「はい、そうさせてもらいます」

老人はにこりと笑って答えた。

「御好意に甘えまして」

「よし、じゃあ悪いがあんただけはだな」

「こちらはこちらで楽しませてもらう」

紳士はこう彼に返すだけだった。

「それだけだ」

「そうか。それじゃあな」

こうして魔神達はそれぞれの楽しみの場所に向かった。彼等は楽しみを追い求めていた。そして牧村はその時またトレーニングに励んでいた。

大学でも自宅でもなくロードワークに励んでいた。白いジャージ姿で街中を走っている。額に汗を流してそのうえで一心不乱に進ん

でいる。

その彼にだ。横から来た者がいた。それは。

「貴様か」

「相変わらず精を出しているな」

「生き残る為だ」

こう死神に述べた。彼は歩きながら牧村の横にいた。駆ける彼の横にそのままついている。歩いているがそれでも足はついてきていた。

「だからだ」

「人間は己を鍛える必要があるか」

「それがどうかしたのか」

「別に何も無い」

それはないと返す死神だった。

「特にだ。しかし」

「しかし。何だ」

「興味深いことではある」

こう牧村に述べるのだった。

「見ているとだ」

「こうして鍛えることについてもか」

「そうだ。特に貴様はな」

「俺自身がそうだというのだな」

「そうだ。貴様がこうして鍛えているのは闘いの為だけではないな」

「ではそこにもまだ何かがあるというのだな」

「そういうことだ」

牧村に顔を向けて告げる。見れば彼の服は今はブルゾンにレザーパーツである。シャツは白いものだ。その格好で彼の横を歩いているのである。



## 第二十九話 小男その三

「それはな」

「こうして鍛えていると体調もよくなる」

「人間は身体を動かしてそれで体調も整えるのだったな」

「そうだ」

そのことも話すのだった。

「それもその通りだ」

「そしてそれを楽しんでもいるな」

「運動は好きだ」

また話す彼である。

「だからだ」

「人間はそうしたこともしめるのだな」

「神は違うのか」

「鍛える必要はないからだ」

彼は言うのだった。

「その必要はだ」

「ないのだな」

「神は鍛えずとも自然とその力をあげていくのだ」

「それは何によってだ？」

「私は死神だ」

己のことも語る。

「生あるその存在を冥府に送ることだ。それはだ」

「鍛えられていくのか」

「闘えばさらにだ」

闘いのことも話す。

「強くなっていく。それは言うておく」

「それは人も同じだがな」

「神はさらにだ」

「そうなのか」

「そういうことだ。そうしてだ」

また話す彼だった。今は鎌は持っていないがそれを持っているように見える。心に持っているそれが鋭く輝いているのである。

「いいか」

「何だ」

「今時間はあるか」

彼に対してこう問うてきたのである。

「それはどうなのだ」

「時間か」

「そうだ。それはあるのか」

こう問うのである。

「どうなのだ」

「今はない」

こう返す牧村だった。実に素っ気無い言葉は変わらない。

「見ての通りロードワークをしている」

「そうか」

「しかしだ。これが終わったらだ」

「時間があるのだな」

「その時はな」

「では待とう」

静かにこう言った。

「その時をだ」

「何処かに行きたいのか」

「コンサートだったな」

彼が今話に出して来たのはこれだった。

「人間の世界ではそうしたものもあるな」

「コンサートか」

「それに興味ができた」

「そしてそれに行くのだな」

「そのつもりだ」

まさにそうだとおっしゃるのである。

「貴様もどうだ」

「音楽か」

「嫌いな訳ではあるまい」

「こつ彼に問うてきた。」

「音楽は」

「ジャンルによる」

牧村の返答はこつしたものであった。

「それはだ」

「ジャンルによるか」

「クラシックが好きだ」

「まずはこつ述べた。」

「そしてロックにジャズもだ」

「そういうものもか」

「他にはポップスも聴かない訳ではない」

「では何でもではないのか」

「そういう訳でもない。演歌はあまりだ」

「聴かないのか」

「どうも合わない」

だからだおっしゃるのである。それで聴かないおっしゃるのだ。

「ラップもあまり得意ではない」

「ラップもか」

「そうだ。それもあまりだ」

「そうだとおっしゃるのである。」

## 第二十九話 小男その四

「どうもな」

「つまり好き嫌いはそれなりにあるのか」

「今一つ好き嫌いはあるにしてもだ」

「そうだとするのである。」

「演歌やラップは今一つ合わない」

「ではそれ以外はどうか」

「駄目な訳じゃない」

「こう述べた。」

「これでわかったな」

「わかった。それでそのコンサートだが」

「行くかどうかだな」

「歌手の名前はだ」

死神はここでその歌手の名前を話した。牧村はその名前を聞くと顔は前を向いたままだったが声は彼に完全に向けるのだった。

「その歌手はだ」

「行くのか」

「そうだ、行く」

「こう答えるのである。」

「その歌手のコンサートにだ」

「そうなのか。貴様もか」

「貴様もそうか」

「二人で行く」

「自然とこの言葉も出た。」

「二人でだ」

「そうか。人間は二人で行くものなのか」

「一人で行く場合もあれば二人で行く場合もある」

「このことは言うのであった。それはだ。」

「それはだ。しかしだ」

「しかし？」

「今は二人で行く」

「そうだといいのである。

「そうさせてもらう」

「人間は面白いものだな」

死神はそんな彼の言葉を聞いてまた述べた。

「同じ音楽を聴いて楽しむのか」

「そうした楽しみもある」

「成程な。確かそれはだ」

「それは？」

「交際していると言うな」

死神は少し辿った様にして言葉を出した。

「そうだな、それは確か」

「そうだ」

牧村の返答はここでも簡潔なものだった。

「そう見られるものも事実だ」

「そして愛を育むのだったな」

死神の言葉は続く。

「長い間人間を見てきたがそれはよくわからないことだ」

「神の間ではそれはないのか」

「ありはしない。我等の中には夫婦である神々はいてもだ」

「愛情はないのか」

「少なくとも人間の様な交流はない」

「こう答えるのである。

「それはだ」

「妙な関係なのだな」

「それは人間から見たうえのことだ」

「そうなのであるという。

「だが神は神の関係があるのだ」

「神のか」

「我等は悠久の時間を生きている」

それが彼等の関係だというのである。悠久の時間を生きているというその関係である。それに対して人間はというのであった。

「しかし人の命は限りがあるな」

「貴様達神から見れば短いな」

「一瞬に過ぎない」

また言う死神だった。

「まさにな」

「人間はその一瞬の間に生きている」

牧村はまた述べた。

「そしてその一瞬の間に全てを為さなければならぬ」

「愛もその中に入っているのか」

「そういうことになる」

彼はまた答えた。その間にも走り続けている。

「それはわかったか」

「いや、よくわからない」

ところが死神はこう返した。

「長い間見てはいてもだ。まだな」

「わかりはしないか」

「少なくとも実感できるものではない」

「神だからか」

「そういうことだ」

やはりそれだというのである。

「これでわかったな」

「わかったということにしておく」

こう返す彼だった。

## 第二十九話 小男その五

「貴様の考えはな」

「人間とは面白いものだ」

またこんなことを言う死神であった。

「見ていれば色々なことがわかる」

「それが興味深いのか」

「そういうことだ。そしてだ」

「そして？」

「貴様もそのコンサートを楽しむのだな」

今度はこのことを問うのだった。

「そうなのだな」

「そうする。それではだ」

「ならそうするといい。私もだ」

「貴様も楽しむのか」

「かつて音楽は神の楽しみだった」

「神のか」

「その頃はまだ人はいなかった」

それは遙か太古の時代のことである。牧村が想像もできないような古い時代のことだ。そのことを死神の口が語るのである。

「その頃は神だけがだ」

「音楽を愛していたのか」

「しかしその曲は単調なものだった」

それでしかないというのである。

「だが今は」

「違うというのだな」

「音楽は人がよくさせたものだ」

そうだというのである。

「神はただ基礎を築いただけだ」

「それだけか」

「そうだ、火を使うことも文字を使うこともだ」

「そういったこともか」

「全ては人が伸ばしていったのだ」

神の力ではない。死神の、神の言葉である。

「人がだ」

「では神は何だ」

「神は見ているだけだ」

「見ているだけというのか」

「それだけだ。大きくさせたのは貴様等人間だ」

「では今日のコンサートもか」

「その通りだ。人間が伸ばした、そしてだ」

言いながらさらに足を進めている。そしてその中においてだ。彼は走る牧村の横を歩き続けている。その彼の横にあのハーレーが来た。

「これもだ」

「バイクもか」

「いいものだ」

そのハーレーに顔を向けての言葉であった。

「乗っているとそれだけで気分がよくなる」

「貴様もまたバイクを愛しているか」

「馬も好きだがこれも好きだ」

「そうだというのである。」

「一度乗ると病みつきになる」

「コンサートにそれに乗って向かうのだな」

「いつも通りだ。では先に行っておく」

「俺は。そうだな」

「貴様もあのサイドカーでか」

「駐車場は……あのサイドカーにはもう関係のないことだな」



話していてそれにすぐに考えが至った。

「自分で動いてくれるからな」

「それは私のこのハーレーも同じだ」

主がなくとも己の横に来たハーレーを見ながらであった。それに乗りヘルメットを取り出す。それに乗って今からそのコンサートに向かおうとする。

しかしヘルメットを被ったところでだ。彼はまた言った。

「自分で私のところに来てくれる」

「只のハーレーではないからか」

「私の考えに合わせて動いてくれる」

「それでは私のサイドカーと同じだな」

「そういうことだ。それではまたな」

「また会おう」

「コンサートの間では何も起こらず音楽に専念したいものだ」

そしてこんなことも話した彼だった。

「そう上手くもいかないだろうがな」

「魔物が来れば一瞬で終わらせる」

それが今の牧村の考えだった。

「それだけだ」

「相変わらず強気なのだな」

「魔物は倒す」

今度も一言だった。

## 第二十九話 小男その六

「それだけだ」

「そうか。それもいつも通りなのだな」

「わかつたら行くといい」

牧村はこれ以上は話そうとしなかった。

「いいな」

「ではそうさせてもらおう」

これで死神は姿を消した。そして後に残った牧村はトレーニングの後でシャワーを浴びて身支度を整えたうえで若奈を迎えに行った。場所はマジックの前だ。

若奈も着飾っていた。淡いピンクのロングスカートに白いシャツ、そこに青いカーディガンを羽織っている。その姿で彼を待っていた。そして彼が来ると。すぐに笑顔を向けるのだった。

牧村はサイドカーを彼女の前に停めて。そのうえで問うた。

「待ったか」

「いいえ、今来たわ」

微笑んで彼に答えた。

「今ね」

「そうか。ならいいがな」

「それじゃあ今からよね」

「コンサートに行くか」

「ええ、それじゃあ御願いますわ」

「わかった」

こんなやり取りの後でコンサートに向かう。そうしてであった。コンサートの場所はもう満員だった。自分達の席を見つけるだけで大変だった。既にステージには楽器の準備がされているのが闇の中で見える。

一旦席に着くとであった。牧村は一旦そこから離れるのであった。

若奈はその彼を見て尋ねた。

「何処行くの？」

「ポップコーンを買いに行く」

「こつ答えるのだった。」

「それと。何がいい」

「コーラね」

彼女が希望するのはそれであった。

「ポップコーンとコーラね」

「それでいいんだな」

「ええ、それで御願いい」

「こつ答える彼女だった。」

「よかつたら私も行くけれど」

「いや、一人でいい」

「こつ言うだけの彼だった。」

「今はだ」

「そうなの」

「ここで荷物を頼む」

「荷物をね。わかつたわ」

「それではだ」

最後にこつ告げて一旦ホールを出る。するとその出口で。

「また会ったな」

「貴様か」

そこに死神がいた。ハーレーに乗った時の服装そのままであった。

その服でそこにいたのである。

「そういえば同じコンサートに来ていたな」

「だからだ。ここにいる」

「こつ答える彼だった。」

「そういつことだ」

「今度は闘いはない筈だが」

「残念だが予定が変わった」

「何っ!？」

「来るのだ」

いぶかしむ声になった彼に告げてきた。

「いいな、すぐにだ」

「それで何処にだ」

「少なくともここではない」

また答える死神だった。

「コンサートホールから一旦出る」

「そこでか」

「そういうことだ。いいな」

「ここでも闘いだというのが」

「貴様が髑髏天使である限り闘いは続く」

「因果なものだな」

「では来るのだ」

断る選択肢はなかった。彼等はそのまま向かう。そうしてコンサートホールを出る。ホールの外は夜でありもう人は皆中に入っていた。そこに出るとであった。

「おやおや、これは」

「こんなところで会うなんてね」

「因果なものだ」

魔神達がいた。彼等が二人の前にいたのである。

## 第二十九話 小男その七

「奇遇と言つにはあまりにも縁ですが」

「貴様等全員で来るといふのか」

牧村は自分の前に立つ魔神達に対して問うた。今の彼の横には死神がいる。

「そついうことか」

「いえ、私達は今日です」

「それはないから」

「安心するのだな」

「私達はね」

「御前達はないといふのか」

その彼等の言葉を聞いても油断はしていなかった。それどころかかえつてその警戒心を高めさせ今にも変身せんばかりになっていた。

「では。何の為にここにいる」

「いや、それは話さなくてもいいんじゃないかな」

ここで子供が笑いながら彼の言葉に答えてきた。

「もうわかつてるでしょ」

「わかつてるといふのか」

「そつだよ。だつてさ」

また言う彼だった。

「今コンサートを開いてるじゃない」

「ではそれにか」

「そついうこと」

ここでにこりと笑ってみせたのであつた。

「それに来ているんだよ」

「私達もです」

「そついうことだから」

「今我等は闘うこととはしない」

彼等はこちら言うだけであった。

「少なくとも我等は」

「それは安心しろ」

「貴様等はか」

しかしだった。彼は彼等の言葉からすぐに察したのだった。実に素早く。

「では他の者は違うというのだな」

「そうだ」

こう言つてであった。紳士が出て来た。その鋭い目を向けての言葉である。

「貴様等の相手はまずは私だ」

「もう一人いるというのだな」

「それは間も無く来る」

紳士は牧村だけでなく死神に対しても告げてきた。彼は丁度牧村達と仲間達である魔神達の間立っている。その後ろに魔神達がいる形になっている。

「我等が同胞の一人がだ」

「あいつだな」

それを聞いてすぐにわかった死神だった。

「あの者も出て来るのか」

「そういうことだ。これで十一人だ」

ここでまた言う紳士だった。

「我等も揃つてきているのだ」

「そうだな。それはな」

死神もこのことは認めた。

「今は十人だな」

「後二人だ」

紳士はここでその数を述べた。

「後二人だ」

「そしてその二人のうちの一人が今来たのか」

「その通りだ。これでわかったな」

「それはわかった」

今度は牧村が答えた。

「それではだ。はじめのだな」

「その通りだ」

紳士が応えた。そしてここで。

また老人が言った。その顔を綻ばせてである。

「来られましたね」

「そうだな」

応える死神のその目が鋭いものになった。

「来たか、遂に」

「お待ちしていましたよ」

老人はここで己の左手を見た。そこは紳士の後ろである。そこから来たのである。それは。

小男であった。背は低く額は広く。その彼がやって来たのだ。痩せたその身体をジーンズと青い上着で包んでいる。背中も曲がったその男がやって来てだ。何処かいやらしい笑みを浮かべて言うのであった。

「皆揃ってるのかい」

「その通りです」

老人は穏やかな笑みで彼に告げた。

「こうして皆さんでお迎えというわけです」

「僕に相応しくないなあ」

老人の言葉を聞いてこう言うのであった。

## 第二十九話 小男その八

「そういうのは」

「それではどうしたものでよかったのだ？」

「自分から出向いてだよ」

それが自分に相応しいというのである。紳士に対して述べた言葉だった。

「それが一番気軽なのに」

「私だけが出向くつもりだったのだがな」

紳士はここでこのことを話した。

「ところがだ。場所がだ」

「ここだからなんだね」

「たまたま全員揃っていた」

紳士はまた彼に述べた。

「それだけだ」

「そうなんだ。それでだけれど」

「それで？」

「闘うのだな」

今度はこのことを小男に問うた。

「今ここで」

「うん、そうさせてもらいたいな」

「ここにことしながら話すのだった。」

「それじゃあ」

「そうだな。でははじめるとしよう」

「それでは私達はこれで」

「去るとするわ」

紳士が応えるのを見て他の魔神達は彼等から見て右手に、コンサートが開かれるアリーナの方へと足を向けてそうして進めるのであった。



「私達はあちらを楽しみますので」

「これで」

「そうか、わかった」

それを聞いて頷く紳士であった。

「私は私の楽しみを堪能させてもらう」

「それじゃあ僕もね」

小男も言うのであった。にこにこしたままで。

「そうさせてもらうよ」

「一つ言っておく」

ここでまた言う紳士であった。

「この時代の髑髏天使はだ」

「どうなのかな。相当強い気配を感じてるけれど」

「座天使だ」

それだというのである。

「今は座天使になっている」

「あれっ、早いね」

座天使と聞いてすぐにこう述べた小男だった。

「もう座天使なんだ」

「この調子でいけばだ」

「そうだね。智天使だね」

「その時にどうなるかわからないが」

「今は闘えるんだね」

「そうだ」

まさにその通りだというのである。

「これでわかったな」

「わかったよ。それじゃあはじめようかな」

小男はここまでのやり取りをしてから牧村と死神に顔を向けた。

そうしてそのにこにことした顔で二人に対して言うのであった。

「それじゃあだけれど」

「はじめるのだな」

「そつだよ。君なのかな」

にこにことした顔のまま牧村に問う。

「今の髑髏天使は」

「だと答えればどうする」

「凄いな」

笑いながらまた言ってきたのであった。

「もう座天使だなんて」

「言いたいことはそれか」

「そつだよ。やらせてもらおうかな」

悠然と、余裕のある顔での言葉であった。

「それじゃあ」

「ではここでの俺の相手は」

「僕なんだよね、流れだと」

ゆつたりとした言葉のままである。その言葉で言っているのである。

「それでいいよね」

「相手が誰であろうと構わない」

「わかったよ。それじゃあ行くよ」

「来るのだな」

「うん、僕の名前も言っておこうか」

彼からの言葉である。

## 第二十九話 小男その九

「僕は虹蛇っていうんだ」

「虹蛇か」

「それが僕の名前だよ」

「名前と顔は今覚えた」

牧村はこう彼に告げた。

「今ここでな」

「記憶力いいんだ」

「そう思っておくといい」

素っ気無い返答は相変わらずである。

「言うのはそれだけだ」

「そうなの」

「そしてだ」

告げたうえでさらに言ってみせるのだった。

「俺と闘うのは貴様か」

「それでいいかな」

「俺は誰であるうが相手は拒まない」

真に実力がある者の言葉を。今ここで言ってみせたのあった。

「それだけだ」

「そう。じゃあ決まりだね」

「来い」

彼から告げた言葉である。

「貴様の魔物を出すのだ」

「それじゃあ」

彼と魔物の闘いがはじまろうとしていた。

そして死神は。紳士と対していた。二人はもう睨み合っていた。

「貴様と対するものだ」

「久し振りだな」

「容赦するつもりはない」

「こう彼に返した。」

「貴様自身が相手でもな」

「闘うのも面白い」

紳士は死神のその言葉にこう返した。

「それもだ。だが」

「今は違うのだな」

「既に魔物を呼んでいる」

「そうか」

「その者と闘ってもらう」

「これが彼の言葉だった。」

「嫌なら私が闘おう」

「相手がいるのならいい」

死神は魔物でいいとした。

「貴様の魂は今預けておく」

「そうするのか」

「では。その魔物を出すのだ」

「あらためて彼に告げた。」

「早くだ。出すのだ」

「焦る必要はない」

「それはないと返す。」

「特にだ。焦ることはない」

「どの道闘うことになるからだな」

「そういうことだ。それではだ」

「はい、ヴァンパイア様」

紳士の言葉に承えてだ。その真名を呼んでみせる声が聞こえてきた。

これこそがであった。魔物の証であった。魔物は自分達の主をその真の名前で呼ぶ。今そう呼んだことがその証なのである。そうであるのだ。

そして今。首だけの魔物が姿を現した。だがその首から下には人間の内臓がそのまま付いている、その姿で己の耳を使って飛んで来たのである。

死神はその彼の姿を見て。すぐにその名前を察した。

「胃ぶらりんだな」

「その通りだ」

紳士が彼の言葉に答えた。

「やはり知っていたか」

「夜の中を飛び人の血を吸う魔物」

それだというのである。

「貴様の眷属だな」

「姿こそ違うがその通りだ」

「そうだったな。吸血鬼だ」

「この者が貴様の相手だ」

紳士はまた彼に対して告げてみせた。

「それでいいな」

「私もまた同じだ」

構えは取っていないが既に目は構えを取っていた。そのうえでの言葉である。

「相手をするとなればだ」

「誰でもいいのだな」

「全力で斬る」

一言であった。

## 第二十九話 小男その十

「その魂を冥界に送り届けてみせる」

「わかった。それではだ」

紳士はその言葉を受けて。己の周りを飛ぶその魔物に顔を向けて告げるのであった。

「存分に相手をするといい」

「畏まりました」

魔物は紳士の言葉を受けて目で頷いてみせた。

「それでは。そうさせてもらいます」

「神の血はまた違う」

「人のそれとはまた」

「そうだ、違う」

そしてこのことも言うのであった。

「それを楽しむといい」

「では御言葉に甘えまして」

「そうするといい。では私はだ」

マントを翻る。それを見てまた問う死神だった。

「帰るのか」

「別の場所で見させてもらおう」

「そうするといつのである。」

「ここはだ」

「そうか、ならそうするといい」

「それではだ。両者の健闘を祈る」

最後にこう言っ姿を消すのであった。

死神と魔物だけになった。死神は今度はその魔物に対して言ってみせた。

「いいな」

「そうね。いいわ」

顔は男である。しかし言葉遣いは女のそれであった。

「貴方でね」

「では私もだ」

「来てくれるのね」

「相手をしてやる」

言いながらも闘いの用意に入ろうとしていた。

その右手を拳にしてそれを胸の前に持って行って行った。そうして。

その拳を胸の前に置く。するとそこから青白い光が放たれ彼の全身を包み込んだ。

その中から闘いの姿になる。右手にはあの大鎌がある。

それを右手に持ったまま一閃させ。そして言った。

「来い」

「いいわ」

こうして二人の闘いがはじまった。

まずはそのまま飛ぶ胃ぶらりだった。その内臓が不気味に動く。

しかも鼓動していた。蠕動にさえ見えるその動きが不気味さを余

計に際立たせていた。

魔物はさらに不気味な笑みを浮かべてである。死神に襲い掛かって来た。

口には牙がある。それで。

「その血。貰うわ」

「私の血を所望か」

「私は吸血鬼よ。それは当然よ」

まさに言うまでもないというのだった。

「そんなことはね」

「そうか。それではだ」

牙が喉に来たその時だった。

彼は姿を消した。残像だけが残る。

だが残像は残像だ。魔物は空を囓むだけだった。

「あら、消えたのね」

「狙う場所がわかればどうということはない」

まさにそうだというのである。

「貴様はその程度か」

「私が大したことはないというのかしら」

「まさかこれだけではあるまい」

死神は姿を消したまま魔物にまた言ってみせた。

「これで終わりでは」

「勿論よ」

魔物はここでもまた女の言葉を男の声で返した。

「それはね」

「そうか。それではどうするのだ」

「見せてあげるわ」

死神のその声に応えるとであった。身体が幾つにも分かれた。しかもであった。

「これは分身ではないわよ」

「実体か」

「そうよ。私は身体を幾つにも分けることができるのよ」  
それが可能だというのである。



## 第二十九話 小男その十一

「だから。貴方が幾つになろうとも」

「倒せるというのか」

「そういうこと。これでわかったわね」

「話はわかったが納得はしない」

これが彼の返答だった。

「何故なら私が貴様を倒すからだ」

「だからだというのね」

「これで話はわかったな」

死神の言葉がさらに鋭くなる。そうしてであった。

彼はここで姿を現わした。それも一人ではなかった。

十人いた。その数で向かうのであった。

「数には数だ」

「単純だけれどその通りね」

「さて、十人の私達にはどうするのだ」

「より多くの数よ」

今魔物は五人であった。しかしそれが。

さらに、しかも一気に増えたのだ。何と二十人までだ。

その二十人の数でだ。死神達を取り囲んでみせたのである。

そしてそれから。彼に対してまた問うた。

「これで形勢逆転ね」

「数に対抗するにはより多くの数が」

「そうよ」

まさにそうだというのである。

「わかったら。いいわね」

「来るか」

魔物の牙が一斉に動いた。それと共に十の大鎌も光った。

その鎌で魔物のその牙を防ぐ。だがそこにもう一人来る。劣勢は

明らかだった。

だが死神達はその鎌で対する。宙に舞い影に隠れその中で闘う。魔物もまた同じだ。

しかし彼等は闘うその中でさらに増えていく。気付けばそれは四十を超えていた。

「数はさらに増えるか」

「私は幾らでも増えられるのよ」

「そうだというのである。」

「本当に幾らでもね」

「増えるか」

「その私にどう闘うのかしら」

「自信に満ちた声だった。」

「果たして。勝てるのかしら」

「勝てる。私が敗れることはない」

「こう言うてであつた。その目が光った。」

「貴様のことはわかつた」

「わかつた!？」

「こうすれば勝てる」

言いながらその鎌を投げた。だがそれは魔物の頭ではなくその下を狙っていた。彼のその心臓を狙って放つたのだ。鎌は回転し大きな唸り声をあげて心臓を断ち切った。

心臓を断ち切られた魔物はそれですぐに姿を消した。赤い炎に包まれて。

その戻つて来た鎌を受け取つてだ。死神はまた言った。

「こうして一人ずつ倒していく」

「流石ね」

「貴様はこうして倒すことができる」

「まさにそうだというのだ。」

「例えどれだけ増えようともな」

「いいわ。そうでなくては私も面白くないわ」

魔物もまた笑っていた。一人消されてもである。

「では私が貴方達からその血を一滴残らず飲み干すか」

「それとも貴様が全て消えるか」

「どちらかね」

「私が勝利を収める」

死神は今また言った。

「それは既に決まったことだ」

「大きく出るのね」

「事実を語ったまでだ」

彼にとつてはまさにそれだけなのであった。

「それだけだ」

「では私は」

「こうさせてもらうわ」

その数をさらに増やしてきたのであった。

その数で死神達を困んできた。そのうえで再び襲い掛かる。

## 第二十九話 小男その十二

だが。ここで死神達はそれぞれの鎌を投げ切り裂きはじめた。

「生憎だが」

「こちらもやり方がある」

「それを見せてやる」

こう言つて一人が鎌を投げ一人が切り裂く。そうしてきたのだ。

二人一組だった。そうして遠近双方から魔物を攻めてきた。

魔物はまず一人が心臓を投げられた鎌で断ち切られた。その魔物がすぐに赤い炎の中に消える。

そして鎌が返つて来てもう一人断ち切る。一撃で二人倒した。

だが魔物達は次から次に増えていきそれに対する。しかしだった。数は次第に減つてきた。死神に喰らいついて血を吸いにかかつている者もいた。だがその魔物もすぐに鎌を振るう死神によつて切られる。

闘いは鎌を自由自在に操る死神に有利となつていた。魔物はその数を少しずつ減らしていき遂に。最後の一人が今心臓を両断された。

「うぐっ……」

「これで最後だ」

両手で鎌を振つた死神の言葉だ。

「私の言つた通りになつたな」

「確かに」

最後の魔物がそれを認めてきた。

「それは褒めておこう」

「私は嘘をつくことはしない」

彼はここでこのことをまた言つた。

「その証拠がこれだ」

「そうね。本当にね」

「安心して冥界に行け」

赤い炎に包まれていく魔物への言葉だ。

「そのままな」

「そうさせてもらっわ。数でも無理だったのね」

「数だけではないということだ」

死神は十人から次第に身体を戻してきていた。次第に重なり合っ  
ていきやがては一人だけになった。元に戻ってしまったのである。

「もう一つの要素がある」

「もう一つとは？」

「質だ」

それを話に出してきたのである。

「質もまた重要だということだ」

「質ね」

「貴様は質では私に劣っていた」

彼はこのことを言い切ってみせた。

「だからだ。私に勝てる筈がなかったのだ」

「よくわかったわ」

魔物は死神のその言葉を受けて頷いた。

「それでね」

「わかったな」

「貴方は私を倒すのに相応しい相手だった」

これが彼の死神への評価だった。

「そういうことね」

「わかったならばだ」

死神はさらに言ってみせた。

「安心して旅立て」

「ええ、これでね」

ここでその赤い炎に全身を包まれた。そうして

その中に消え去った。これで全てが終わった。

死神の闘いは終わった。そして牧村は、小男と対峙を続けていた。

小男は彼に対して言ってきた。

「髑髏天使さん」

「何だ」

魔神の言葉に応える。

「闘う前の前口上か」

「はい、それです」

まさにそれだというのである。

「それですが」

「では俺から言おう」

彼から言ってみせたのだった。

「魔物が来ればだ」

「闘われるのですね」

「早く出すのだ」

これを前口上とするのであった。

「今ここでだ」

「わかりました。それではです」

魔神が笑った。一見すると人懐っこい笑みだ。しかしであった。

その笑みと共に彼の影から一人出て来た。それは。

## 第二十九話 小男その十三

幼女だった。それが出て来て来て牧村を見て言うのであった。

「あんたが私の相手なの」

「貴様が今回の俺の相手か」

「あら、素っ気ないわね」

幼女の姿をした魔物は牧村の今の言葉に少し文句をつけてきた。

「それだけなの」

「闘うのならどちらにしるだ」

「倒すだけだというの？」

「そうだ」

まさにそれだけだというのである。

「来い。倒してやろう」

「ねえ虹蛇様」

幼女はふてくされた顔で魔神に言ってきた。

「この髑髏天使ってかなり」

「繊細な方ですね」

「いえ、全然繊細なんかじゃないですよ」

彼女にしてみればそう言いたくなることであった。

「っていか物凄い無愛想ですよね」

「そうですね。それは確かに」

「こんな無愛想な髑髏天使はじめでなんですけれど」

牧村を指差しながら魔神に対して言ったのである。

「本当に」

「まあそう言わずに」

「我慢しろっていうんですか」

「そうです」

まさにその通りだというのである。

「ですから。ここは」

「わかりました」

魔物も彼の言葉を受けた。

そうして頷いて。また言うのであった。

「どちらにしろ私に倒されるし」

「これで最後です」

「よくわかりました」

こう言ってまた頷くのであった。

「ではその様に」

「はい。それではですね」

「行かれるのですね」

「後は貴女にお任せします」

こう彼女に告げて去ろうとするのだ。

「ですから」

「じゃあ後で」

「結果だけ聞かせてもらいますね」

「はい」

「楽しみにしていますので」

こんなやり取りの後で別れるのだった。こうして小男は消えた。

後は幼女と牧村だけになった。幼女から言ってきた。

「それでね」

「子供の姿をしてもだ」

牧村からの言葉である。

「俺は遅れを取らない」

「姿形には捉われない？」

「相手が誰であろうともだ」

彼は言う。

「倒す」

「魔物だったら？」

「そつだ、倒す」

そつだというのである。



「それが俺だ」

「何か想像通りね」

そんな彼の言葉を受けて言う少女だった。

「本当に無愛想ね」

「愛想を振りまく趣味もない」

「そうじゃなくてよ。その考えがよ」

「俺のこの考えが」

「そうよ」

こう言葉を続けていくのであった。

「何か好きになれないのよね」

「では嫌いになっておくのだな」

やはり言葉は素っ気無い。

「俺は相手に愛想を振りまくことはしない」

「またそんなことを言っ」

「では来い」

そして話をここまでとしたのであった。

## 第二十九話 小男その十四

「相手をしてやる」

「わかったわ。これ以上の話は無駄みたいだし」

「魔物もこれで話を打ち切った。そうしてであった。」

「闘いましょう」

「では問おう」

「彼からの問いだった。」

「貴様は何だ」

「私？」

「そうだ。貴様は何だ」

「それを彼女に問うたのだ。」

「オーストラリアの魔物だな」

「もっと言うとポリネシアとかもよ」

「魔物は楽しそうに笑って牧村に言葉を返してきた。」

「所謂南洋全体ね」

「オセアニアだな」

「そうよ。虹蛇様はオセアニアの魔神」

「彼はそこを司っているというのだ。魔神として。」

「その私がいる場所は」

「何処だ」

「海よ」

「微笑んで言ったのだった。」

「海にいるわ」

「では貴様は」

「そう、海の魔物」

「微笑はそのままだった。そして言葉の調子でもある。」

「鮫なのよ」

「鮫の魔物だというのか」

「私は鯨人」

自分から名乗って来た。

「それが私なのよ」

「面白い話だな。ここは陸だ」

「それがどうかしたの？」

「それで海の魔物が俺と闘うのか」

「ただし。普通の鯨じゃないわ」

これは断ってきたのだった。

「それも言っておくわ」

「ではだ」

牧村の目がここで光った。

「それを俺に見せてもらおう」

「見たいのなら」

「見たいのなら？」

「来て」

彼から来い、こう言うのであった。

「私にね。来るといいわ」

「いいだろう。それではだ」

「髑髏天使になるのよ」

そうなれと。また牧村に告げた。

「いいわね。そうしてよ」

「いいだろう。それではだ」

彼は両手を拳にした。それを己の胸の前にやる。

その拳と拳を中指のところ打ち合わせると。そこから白い光が

放たれた。

白い光が彼を完全に包み込み。そこから出て来たのは。

異形の天使だった。顔は髑髏で身体は甲冑に覆われた。その天使

が出て来た。

彼は右手を肘で折ったまま少し前にやって一旦開いた。そしてそ

れを握り締め。こう言った。

「行くぞ」

「いいわ」

そして魔物は彼女の言葉を受けるのだった。

「それじゃあ私も」

「そういえばだ」

髑髏天使となつたうえでの言葉である。

「貴様はまだその姿をだ」

「焦ってるの？」

「見せるのなら見せる」

こう魔物に告げた。

「さもなければこちらもだ」

「闘えないというのね」

「髑髏天使は魔物と闘うものだ」

魔物に対して返す。

「だからだ。いいな」

「そうね。それじゃあ」

「魔物の姿になれ」

「いいわ」

その言葉と共にだった。幼児の姿が変わった。

顔が徐々に人から魔物になっていく。鮫のものにだ。

手足が鰭になって身体が青くなっていく。

そして背鰭も出て来て。そうして完全に鮫になった。

## 第二十九話 小男その十五

その鮫の姿で空を飛んでいた。鮫の姿でだ。

「これが私の姿なのよ」

「完全な鮫か」

「そう、私は鮫」

その鮫の口での言葉である。

「海だけでなく空も泳ぐことができるのよ」

「成程な。それが貴様か」

「そうよ。その私が相手をさせてもらうわ」

「わかった。それではだ」

それに頷くとであった。髑髏天使は天使から変わった。今度は座

天使になるのだった。

その黄色い姿で。魔物に対して言った。

「これでいいな」

「座天使なのね」

「この姿で貴様と闘う」

こう告げたくえで空に舞うのであった。

互いに空を飛びながら。また魔物に対して告げてきた。

「さて、貴様の攻撃をだ」

「見てみたいというのね」

「来い」

今は動こうとはしなかった。自分からは。

「見てやろう」

「私を見たいというのね」

「そうだ。来い」

あらためて魔物に対して告げる。

「その攻撃をだ」

「いいわ。それじゃあ」

それに応えてその尾鰭を鳴らす様に動かしてきた。そうしてそのうえで彼に前に突っ込みそのうえで一直線に向かってきたのである。

「来たな」

「言っておくわ」

「何だ？」

「私はただの鯨じゃないわ」

「こう言うのである。」

「そう、ホオジロザメよ」

「そういえばだ」

髑髏天使はその大きさも見るのだった。

「貴様は普通の大きさではないわ」

「そうよ。鯨は大きければ大きい程強いのよ」

見れば十メートルはある。まさに人間なぞ一呑みの大きさだった。

その大きさを突き進みだ。巨大な顎を開いてきた。

歯が何列もある。まさに鯨の歯だ。

「さあ」

「来るな」

「一呑みよ」

それだけだというのだ。

「それで終わりだから」

「俺が一呑みか」

「鯨の口を甘く見ないことね」

その言葉には勝利を確信する笑みがあった。

「それこそ飲み込めないものはないのよ」

「俺もだな」

「そうよ。それじゃあ」

その開いた口のまま言うのであった。

「楽にしてあげるわ」

「生憎だが」

しかしここでまた言う髑髏天使だった。髑髏の奥のその目が光っ

た。

「俺もそう簡単にはだ」

「やられるわけにはいかないともいうの？」

「そうだ」

「こう言っただった。魔物の前から姿を消した。」

「!？」

「貴様の口は一つだ」

髑髏天使の声だけがした。

「一つだけだ。それならばだ」

「それならば？」

「かわすのは楽だ」

「こう言うのであった。」

髑髏天使の姿は見えない。しかしだった。

下からだった。突如として雷が襲った。

「受ける」

「!？」

それが魔物を直撃した。黄色い槍が貫いた。

魔物の動きが止まった。髑髏天使は下にいたのだ。

そしてそこから。魔物に対してまた問うてみせた。

「これならばどうだ」

「やるわね」

魔物はその彼に対して応えてきたのだった。

「まさか下にいるなんて」

「空では何処からでも攻めることができる」

「ここで髑髏天使はこう彼女に告げた。」

「だからだ。こうしたことまでできるのだ」

「そうね。それはね」

「だが」

「ここで髑髏天使はまた魔物に対して言った。」

## 第二十九話 小男その十六

「聞いてはいないか」

「そうよ。この程度で私は倒せないわ」

魔物のその言葉には笑みが宿っていた。

「生憎だけれどね」

「この程度の雷ではか」

「そういうことよ。残念だったわね」

「わかった」

魔物のその言葉をそのまま受け入れたのだった。

「それではだ」

「また来るのね」

「一の雷で効かなければ十だ」

こう言ったのだった。

「ただそれだけだ」

「十の雷で来るのね」

「十でも駄目ならば百だ」

さらに増えていた。

「それだけのものをぶつけてやるわ」

「いい言葉ね。それだからこそ戦いがいがあるわ」

鮫のその人形を思わせる漆黒の目が細まった。笑っていた。

「私もね」

「また来るといふのだな」

「そうさせてもらうわ。それじゃあ」

身体を翻してまた来た。その下にいる髑髏天使に向かって来たのである。

「また行かせてもらうわ」

「来い」

髑髏天使もそれを受けて言う。



「俺もまた闘い続けよう」

「呑み込んであげるわ」

言いながらその巨大な口を再び広げてきたのだった。

そうしてまた呑み込もうとする。だがそれはまたかわされてしまった。牙と牙が打ち合う、その音だけが響き渡る形となってしまう。  
ていた。

「あら、またなの」

「何度でも言おう」

今度は魔物の斜め上からの言葉であった。

「俺は諦めが悪い」

「諦めが？」

「だからこそこうして何度でもかわしてみせる」

そうするといふのである。

「そしてだ」

「勝つというのかしら」

「その通りだ」

まさに彼そのものの言葉だった。

「それを見せてやる」

「わかったわ。それだったら」

「また来るのだな」

「今度はただ来るだけじゃないわよ」

身を翻して彼に向かいなおりながらの言葉だった。

「それも見てもらうわ」

「そうか。ならばだ」

「見るのよ」

今度は上にいる髑髏天使に向かって急上昇しながらの言葉だった。

「私のその攻撃をね」

「むっ!？」

「受けるのよ」

こつ言つとであった。大きく開いた口から。

牙が無数に放たれてきた。マシンガンの如く放ってきたのだ。それで髑髏天使を撃とうとする。しかもその間も魔物は突進して来ている。

そうしながら。また彼に対して問うてきたのだ。

「さあ、これで」

「倒すというのだな、俺を」

「その通りよ」

まさにそうだというのである。

「これはどうかわすのかしら」

「こうさせてもらう」

しかし髑髏天使はここで言った。

上に飛んだ。しかしであった。

「甘いわね」

「何っ!？」

そこにも口を向けてであった。また彼を撃ってきたのだ。

まさにマシンガンである。それでまた彼を貫こうとするのだ。

無論その間にも突進して来る。勢いは止まらなかった。

「呑まれるか撃たれるか」

「どちらかか」

「そうよ、どちらなのかしら」

魔物の言葉は勝ち誇っていた。

「どちらを選ぶのかしら」

「どちらもない」

だが髑髏天使はこう魔物に返した。

## 第二十九話 小男その十七

「俺の今の選択肢はだ」

「では何かしら」

「勝つ」

それだというのである。

「それだけだ」

「そう。それではだけれど」

また敵の口をかわした。再びお互い反転し合うことになった。そうして反転しながら。また話に入った。

「どうして勝つつもりかしら」

「今の貴様にか」

「そうよ。今貴方は劣勢よ」

このことをあえて彼に言ってみせたのである。

「それはわかるわね」

「嫌でもな」

わかると。彼も返した。

「それはわかる」

「そうなの」

「だが。それでもだ」

しかし髑髏天使は髑髏天使として言うのであった。

「俺は勝つ」

「この状況でもなのね」

「そうだ、勝つ」

あくまでこう言うのだった。

「それを今言おう」

「では。見せてもらおうわ」

魔物もそれを受けて自信に満ちた声で返した。

「貴方のその勝利の仕方をね」

「安心して見ることだ」

髑髏天使の言葉は落ち着いたままだった。

「貴様のその最後をだ」

「それを見ろというのね」

「より正確に言えば見せてやる」

言葉を言い換えもしてきた。

「では。行くぞ」

「ええ、それじゃあ見せてもらおう」

こうしたやり取りの後でだった。彼はまずはそのままの姿だった。

座天使である。

その座天使の姿でだ。彼はまた言ってきたのだった。

「来るのなら来い」

「来いというのね」

「そうだ。そうすればわかる」

こう彼に言うだけだった。

「貴様のその最期だが」

「貴方の最期は見てあげるわ」

しかし彼は言った。

「それをだ」

「では。見てあげるわ」

言いながらその白い牙を見せてだ。彼に対して突進する。無論その牙を放っている。まさにマシンガンとして彼に攻撃を仕掛けてきていた。

だが髑髏天使はそれをかわした。しかも至近でだった。

「何っ、またかわしたの!？」

「だがかわしたただけではない」

こう言っただった。

右手の剣を下に一閃させた。するとだった。

魔物の前にあるものが出て来た。それは。

「!?!?これは」

「弱点のない存在なぞいない」

その言葉と共に出したのだった。

それは何かというのだ。網だった。

雷の網である。蜘蛛の巣そのままの姿をした黄色い網を魔物の前に放ったのである。

「網!？」

「鮫は常に動く生き物だ」

網を放ったうえでの言葉である。

「ではそれを止めたらどうなるかだ」

「その場合はか」

「そうだ。こうするのだ」

こう言ってであった。魔物を網の中に突っ込ませたのである。

網の中に入った魔物の動きが止まった。そうしてであった。

その動きが止まった魔物の上からさらに雷を放った。だがただ普通に放ったのではなかった。

右手の剣を投げたのだ。それで魔物を貫いたうえで、であった。

雷がそこに落ちた。雷は剣を通して魔物の身体中を走り。一気に勝負を決めたのだった。

雷を受けた魔物は暫くは声もなくのけぞっていた。しかしやがて身体の姿勢を元に戻して全身から黒い煙を出しながら髑髏天使に対して言ってきた。

## 第二十九話 小男その十八

「やってくれたわね」

「闘い方は一つではない」

攻撃を放ち終えた髑髏天使は彼女の斜め上から言ってきた。

「こうした闘い方もあるのだ」

「思いきったわね。まさか網を使うなんて」

「鮫だからだ」

また鮫だからだというのだった。

「貴様が鮫の魔物だからだ」

「それが理由なのね」

「その通りだ。さつきも言ったが」

「鮫は常に動くものね」

「そうしなければ死んでしまう」

髑髏天使は鮫のそのことを話した。これは実際のことと鮫という生き物は常に動きそのうえで呼吸もしているのである。そういう蚊等だの構造なのだ。

「それを思い出してだ」

「けれど私は」

「それはわかっている」

「このことはというのだ。」

「貴様は鮫だが魔物だ」

「そうよ」

「動きを止めてもそれで死ぬとは思えなかった」

「そうだったというのである。」

「しかしだ。動きを止めることは思いついた」

「それはだというのだ。」

「だから網を使ったのだ」

「そうだったのね」

「貴様の闘い方は常に動いてそのついで攻める」  
「このことも言う。」

「ならばそれを止めてしまえばいいだけだ」

「そういうことだったのね。どうやら」

「どうやら。何だ」

「貴方は相当な知恵者ね」

それを彼に対して言ったのである。

「それは間違いないわ」

「それを言うのか」

「そうよ。力では私は勝っていたわ」

「確かにな」

「けれど。知恵を使った」

それをだというのだった。

「そうして私に勝ったのだから」

「そして貴様は倒れた」

「そうよ。残念だけれどね」

それは残念だと言う。

「けれど」

「けれど？」

「満足はしているわ」

それはだというのだ。

「こうして最期まで闘えてね」

「魔物冥利に尽きるか」

「そうよ。それは満足しているわ」

実際にその声は満ち足りたものだった。青白い炎に包まれていきながらもだ。

「充分にね」

「それではだ」

「ええ、これでね」

「消えるといい」

「こう言うのであった。魔物はその青白い炎の中に消えた。ここでの闘いもそれで終わったのだった。」

彼が人間の姿に戻るとだった。死神がそこに来た。彼も普段着に戻っている。あの黒いジーンズの姿だ。

「また勝ったのだな」

「見ての通りだ」

「こう返すだけの彼だった。」

「勝ったからこそ生きている」

「それはその通りだな」

「そして貴様もだな」

「また一人冥界に送った」

簡潔に述べる死神だった。

「それだけだ」

「そういうことか」

「そうだ。そして貴様はだ」

「何だというのだ？」

「これからどうするつもりだ」

このことを彼に対して問うてきたのである。

「これからだが」

「コンサート会場に戻る」

牧村もまた簡潔に彼に返した。

「そして音楽を聴く。それだけだ」

「そうか」

「それは貴様もだな」

そうして彼に対して問い返しもしてみせた。

「貴様もそうするのだな」

「そうだな。忘れてしまっていたが」

彼から見て右手にあるアーリーナを見ながらの言葉だ。そうして言うのであった。



## 第二十九話 小男その十九

「それでは今から戻るか」

「そうするのだな」

「音楽はいい」

そして彼は言った。

「聴いているとそれだけで得られるものがある」

「だから聴くのか」

「そうだ。貴様はどうなのだ？」

「俺は楽しいから聴く」

それだけだというのである。

「人はそうだ」

「そうか。人と神とではだ」

「そういうところが違うようだな」

「しかし求めるものは同じだ」

それは同じだというのである。

「そして得られるものもだ」

「同じだというのか」

「表現する言葉が違うだけだ」

あくまでそれだけだという。

「それだけのことだ」

「そういうものか」

「そうだ。ではそろそろはじまるな」

アリーナを見ながら話す彼だった。

「それではな」

「では行くか」

こうして二人は会場に戻った。そこに戻ると若奈はそのまま席にいた。そうして隣に戻って来た彼に対して声をかけてきたのであった。

「遅かったじゃない」

「そうか。遅かったか」

「トイレなのよね」

「そうだ」

こういうことにした。闘いのことも魔神のことも言える筈もなかった。

そういうことにしてであった。また言う彼だった。

「まだはじまっていけないのだな」

「これからね」

若奈はそれはこれからだと返した。

「これからよ、それは」

「そうか」

「ほら、見てよ」

そうしてステージを指差して彼に言ってきた。

「そろそろメンバーが出て来たじゃない」

「それではか」

「そう、本当にこれからよ」

まさにこれからだというのである。

「丁度いいタイミングだったわね」

「それでは今から聴くか」

「楽しみましょう。いや、実際ね」

「実際。何だ？」

「このグループってやっぱり生で聴くのが一番らしいのよね」  
「ここにこしたことした顔で語る若奈であった。

「だから楽しみなのよね」

「それでなのか」

「そうよ。それじゃあ牧村君もね」

「ああ、俺も」

「楽しんで聴くわよね」

「勿論だ」

顔も声もいつもと変わらない。しかしそれでも言うのであった。

「それはな」

「それじゃあこのまま楽しみましょう」

「コンサートはこれからか」

「はい、これ」

若奈は今度は何かを彼に手渡してきた。それは。

「コーラとお菓子よ」

「中で買ったものか」

「違うわ。持って来たものよ」

「それだというのである。」

「だって中で買ったら高いじゃない」

「確かにな」

「だから買わないのよ」

「それでだというのであった。」

「中じゃね」

「節約か」

「そうよ。まあアリーナには入場料で貢献するとしてね」

「それはそれでか」

「で、食べ物は何」

「また言う若奈であった。」

「自分で持って来てよ」

「そうか。わかった」

「たっぷりあるからね」

「そんなにあるのか」

「お家から持って来たのよ」

「出所はそこだというのだ。」

## 第二十九話 小男その二十

「余りものね。クッキーとかロシアンケーキとか」

「ロシアのケーキもか」

「そうよ、色々持って来たのよ」

「こうにここにこと話す若奈であった」

「だからね。たっぷりと食べて」

「わかった。それではだ」

「最近ロシアンケーキもはじめたのよ」

「若奈はここでこの話もしてきたのった」

「新しいメニューってことでね」

「あのマスターがか」

「お母さんのアイディアなのよ」

「そっちか」

「そうなのよ。ロシアンティーはもうあるし」

「それはあるというのである」

「どうせだからロシアのお菓子もどっかってことになって」

「それでか」

「どっかしら」

「ここまで話してあらためて牧村に問うてきた」

「ロシアのお菓子もあっていいわよね」

「いいと思う」

「こう返す彼だった」

「美味しいのだな」

「実際に試して食べてみたけれどね」

「そうか。いいのか」

「うん。それで牧村君にもここでね」

「わかったそれではだ」

「食べて」

こうして彼もそのロシアの菓子を食べることになった。実際に彼女から受け取ったそのロシアンケーキはクッキーに見えた。そしてその食感ほ。

手に取って食べてみるとだ。すぐに若奈が尋ねてきた。

「どうかしら」

「いいな」

こう答える彼だった。

「ケーキというよりはな」

「クッキーみたいでしょ」

「それを食べているようにしか思えない」

実際に食べてみての感想である。

「これがロシアのケーキか」

「そうなのよ。人気出るかしら」

「ケーキとして人気は出ないな」

食べてみての感想である。彼にしてみればそれはケーキではなかった。他の種類の食べ物にしか思えなかったのである。とてもだ。

「むしろだ」

「クッキー？ やっぱり」

「それにしか思えない」

言いながらさらに食べ続けての言葉である。

「どうしてもな」

「やっぱりそうよね。これってクッキーよね」

「しかし美味しいのは確かだ」

このことには太鼓判を押した。

「焼き菓子として考えるといい」

「じゃあお店に出していいかしら」

「いいな」

今度ははっきりと答えた彼だった。

「出せるものだ」

「わかったわ。それじゃあ出すわね」

若奈もそれを聞いて頷いてから述べた。

「これもね」

「また一つ売り物ができるな」

「そうなのよ。コーヒーと紅茶だけでもお客さんは来てくれるけれどね」

「より多くのものをだな」

「そういうこと。満足したらそれで終わりよ」

今度の言葉はかなり求道的であった。

「お店もね。だから少しでもいいから努力をしていかないかね」

「そうだな。そうしないとね」

「お店だけでなく何事もね」

「努力か」

牧村はその言葉を今呟いたのだった。

「まずはそれからか」

「そうよ。まずは努力よ」

若奈はまたこの言葉を口にしてみせた。

「それがあってだからね。何でもね」

「俺もか」

牧村は若奈の話を聞いて自分自身にも当てはめて述べた。

「努力をしていかなければ」

「フエシングもテニスも上達しないわよね」

「それに」

ここから先は若奈にはわからないことだった。それを一人言うのであった。

「生きることも」

「生きる？」

「生きることできない」

こう言うのだった。これは髑髏天使としての言葉であった。

「決してな」

「まあそれはそうだけれどね」

若奈は今度はそれを普通に生きることだと考えて言葉を返した。

## 第二十九話 小男その二十一

「何でも努力しないとね」

「そうだな。俺も」

「さてと、それじゃあ」

若奈はここまで話して声を明るくさせてきた。そうしてまた言うのだった。

「はじまるわよ」

「もうか」

「ええ。コンサートね」

見ればバンドのメンバーが全員現れてきていた。いよいよであった。

演奏がはじまっていく。若奈はそれを見ながらまた言うのであった。

「それじゃあね」

「聴くか」

「やっぱり生の演奏は違うわ」

もう若奈はそちらに考えを向けていた。目が喜んでいる。

「コンサートに行くと本当にね」

「そうだな」

牧村も彼女の言葉に頷きながら目をそちらにやっていた。当然耳もだ。

「この音がいい」

「本物は違うわよね」

「その通りだ。それではだ」

「聴きましよう」

若奈は笑顔で彼にまた告げた。

「ゆっくりとね」

「そうだな。今はな」



こうして二人そのバンドの曲を楽しむのだった。闘いの後は音楽であった。そしてそれは死神もそうであったり魔神達もだ。コンサートが終わって。

死神はアリーナを出た。やはり外は夜である。濃紫の空には黄金の満月が浮かんでいる。その月の光の下で彼は何処かに去ろうとしていた。

しかしであった。その彼の前にだ。魔神達がいた。

彼もその姿に気付いて。すぐに顔を向けたのであった。

「闘いは終わった筈だが」

「はい、それはわかっています」

老人が彼に伝えてきた。彼等の中心にいてそこから言ってきた。

「それについては」

「では何故ここに来た？」

「今から帰るところです」

「こう彼に返すのであった。

「それで通り掛かっただけです」

「それだけか」

「はい、それだけです」

あくまでそれだけだというのである。

「何もしませんので御安心下さい」

「そうか」

「何か拍子抜けだね」

「ここで目玉も出て来て言ってきた。

「また来るのかって思ったのにな」

「私達にも流儀がありますので」

老人は目玉の言葉にも丁寧な言葉を返したただけであった。そこには何の敵意もない。

「闘うその時以外にはです」

「何もしないんだ」

「その通りです。こうしてこの世界を楽しませてもらいます」

「それだけでいいのだな」

「はい、それだけです」

死神に対しても同じ返答であった。

「それにしてもです。今回もお見事でした」

「私の鎌に斬れないものはない」

死神はここで強い言葉を出してみせた。

「何であろうともだ」

「そうですね。それに」

「髑髏天使か」

「あの方もまた強くなられましたね」

彼についても言うのであった。

「まさかあれだけ楽に勝たれるとは」

「思いも寄らなかつた」

今言ってきたのは小男であった。彼は老人の左隣にいる。そこから言つたのである。

「僕にしてもかなりの者を出したつもりだけれど」

「あの男の強さは尋常ではない」

それは死神も認めるところであった。

「あれでは間も無くだ」

「智天使だな」

今度は青年が言ってきた。

「そうなつていくな」

「そうだ。次の闘いにでもそうなるだろう」

「えっ、もう智天使!？」

これには目玉も驚いた声をあげた。

「それってかなりだよな」

「これだけ早いのは他に例がない」

死神もこう目玉に返した。

第二十九話 小男その二十二

「とてもな」

「そうだよね。それはね」

「そしてだ」

「そして？」

「智天使になればだ」

それからのことも述べていくのであった。

「人であるかどうかが問われる」

「人であるかどうか」

「そういえばだ」

ここで死神は魔神達を見た。そのうえでの言葉である。

「貴様等は十二柱だったな」

「はい」

老人が微笑んで彼の今の言葉に応えた。

「それが何か」

「十二柱と決まっているのか」

「今のところは十二ですが何もそうとは決まっています」

こう死神の問いに返してきたのであった。

「別にです」

「そうなのだな」

「それが何か」

「十三になる可能性もあるということか」

今度はこう呟いた死神であった。

「つまりは」

「そうなるのも面白いですね」

老人もその場合について考えて述べた。

「確かに」

「魔神が増えるか」

死神はそのことをあらためて認識して目を鋭くさせた。

その彼にだ。また目玉が尋ねてきた。

「ねえ」

「そうだ。そうなればことだ」

まさにそうだというのである。

「そしてその場合はだ」

「髑髏天使を」

「冥界に送る」

一言であった。

「その場合はだ」

「じゃあ魔物よりも先につてことだよね」

「その場合も有り得る。魔神をこれ以上増やすわけにはいかない」

「けれどさ。髑髏天使っていったら」

「何だ？」

「魔物を倒すものだよ」

目玉が今言うのはこのことであった。

「魔物を倒す髑髏天使が魔物、それも魔神になるっていうのは」

「有り得ることだ」

しかし死神の言葉は動かなかった。

「それもだ」

「有り得るの」

「有り得る」

そしてまた言ってみせた。

「魔物はだ」

「闘いに溺れるから魔物だからね」

「そうだ。そしてその神がだ」

「魔神」

彼等は彼等の認識での話をしていつていた。これが彼等の魔物、そしてそれを司る魔神という存在への認識に他ならなかった。

「じゃあ闘いに溺れ人の心をなくせば」

「髑髏天使として同じことだ」

「魔物を倒す存在でありながら魔物になっていくというんだね」

「そうなる危険はある。ましてやだ」

死神の言葉は続いていく。

「あの男はだ」

「変わってきているね」

「まだ人ではある」

言葉が限定系になっていた。それも見逃せないものだった。

「しかしだ。徐々に」

「人ではないものも混ざってきているね」

「貴様等に近い」

ここでまた魔神達を見据えたのであった。

「そうしたものも入ってきている」

「はて。それは面妖な」

老人は死神の今の言葉を受けて微妙な様子の言葉を出した。

「髑髏天使が魔神にですか」

「それは今までなかったことだな」

「聞いたことは寡聞にしてありません」

これが魔神の返答であった。

「そうしたお話はです」

「今まで例のないことだな」

「それこそ数え切れないだけの髑髏天使を見てきましたがそれでも  
です」

「少なくとも今まではなかった」

それをまた言う死神であった。

## 第二十九話 小男その二十三

「それはな」

「若しそうなたらはじめての髑髏天使になるね」

目玉の声は幾分か怪訝なものに変化していた。

「かなり大変なことだけれど」

「その通りだ。だが魔物、そして魔神となればだ」

「やっぱり君の仕事をするんだね」

「そうだ。その魂を冥界に送り届ける」

まさにそうするというのだった。

「そうしてやる」

「そうするんだね、死神として」

「それが私の仕事だからな」

「成程、面白いお話を聞きました」

ここでまた老人が彼等に対して言ってきた。

「髑髏天使が魔物、或いは魔神になるとは」

「それが面白いというのだな」

「はい、とても」

顔を綻ばせてさえた。そのうえでの言葉である。

「面白いことです」

「そう言うのか」

「その通りです。それではです」

「その時は私が魂を刈る」

本気の言葉だった。そこには何の偽りもなかった。

「生憎だが貴様等の仲間を新たに作ることはしない」

「もっともこちら髑髏天使である限り闘わせてもらいますが」

「そうするというのだな」

「そうです。闘うのが魔物ですから」

「それはわかった。それではだ」

「また御会いすることになりますね」  
老人は楽しそうに彼に対して告げた。  
「そしてその時にです」  
「あの男が智天使になれば大きく動く」  
死神の言葉が強いものになっていた。  
「そうなるな」  
「はい、それではです」  
「また会おう」  
魔神達に対して別れの言葉を告げた。  
「そしてその時から大きく動くことになる」  
「楽しみが増えました」  
老人の言葉はここでも笑っていた。  
「果たしてどうなるのか」  
「それか」  
「はい。さて、では我々はこれで」  
その笑った声での言葉であった。  
「去らせてもらいます」  
「まさか瞬く間にここまでなるとは思わなかった」  
死神は魔神達が去っていく中でまだ呟いていた。  
「智天使だとはな」  
「そうだよ。こんなになるとはね」  
それに目玉も同意して応えてきた。目玉はまだ死神の上にいる。  
そこで浮かぶ様にして漂っているのであった。そうしてそこにいた。  
「半年かそこらでそこまでってというのは」  
「なかった。恐ろしい早さだ」  
「魔物との戦いの数が多いせいもあるけれどね」  
「それでもあそこまで早いのではない」  
「そうだね。それだけに、ってことだね」  
「あの早さで智天使となれば」  
また言う死神だった。

「何が起こっても不思議ではない」

「それもあるね。只でさえ妙なものを感じてきているしね」  
「どちらにしるだ」

死神の言葉は怪訝なものになっていく一方だった。そして彼自身それを抑えようともしていなかった。彼にしては珍しく感情が言葉にこもっているのだった。

「魔物、そして魔神になるその時はだ」

「わかったよ。君も大変だね」

「できればだ」

「できれば？」

「闘いたくはないものだ」

ふとこんなことも言うのだった。

「それはな」

「闘いたくないの」

「魂を刈りたくもない」

こうしたこととも口に出してきた。

「それはな」

「へえ、それは何でなの？」

「興味が出て来た」

最初に返した返答はこれであった。



## 第二十九話 小男その二十四

「あの男にな」

「髑髏天使自体にだね」

「そうだ。面白い男だ」

「まあそれは確かにね」

そのことは目玉も言葉で頷くことだった。目玉と翼だけの身体なので動作で頷くことはできない。だから言葉で頷いたのである。

「無愛想だけれど面白い人間だよね」

「だからだ。刈りたくはない」

「そして闘うことも」

「できることならばだがな」

「君にしては珍しいじゃない」

目玉は彼の話をここまで聞いて考える声で述べてきた。

「そういう考えを持つなんて」

「そうか」

「うん、珍しいよ」

また彼に対して言ってきた。

「とてもね」

「私も変わったのか」

目玉の話を聞いて己のことも述べるのだった。

「だとすると」

「そうじゃないかな。少なくとも前の君とは違ってきているね」

「そうか」

「うん、それは何かね」

こつ死神に言う目玉だった。

「そういう感じがするよ」

「そうか」

「まあそれだけけれど」

目玉は話を変えてきた。

「もう帰ろうか」

「帰るか」

「そうだよ。もうやることはないよね」

「ない」

一言で返した死神だった。

「それはもうな」

「じゃあ帰ろう。ここにいっても寒いだけだし」

「そうだな。夜ももう寒い」

「何もなくて寒い思いをすることもないしね」

「戻るとするか」

この言葉と共にであった。後ろからバイクの爆音がしてきた。それと共に彼のハーレーがやって来たのであった。それは彼の正面まで来て停まった。

「何処に行く？それで」

「僕達の世界に戻ろうよ」

目玉が言う場所はそこであった。

「その世界にね」

「そうだな。そこで暫く休むとするか」

「うん、だからね」

「わかった。それではだ」

目玉の言葉に伝えてハーレーに乗った。そうしてそれを再び動かし何処かに消えるのだった。後に残ったのは静寂に包まれたアリーナとそれを照らす月だけであった。その他にはもう人もいなかった。

## 第三十話 智天その一

髑髏天使

第三十話 智天

牧村はまた博士の研究室に来ていた。そこでいつもの様に壁に背をもたれかけさせて立ち。そうしてその話を聞いているのであった。「そうか、これで十一じゃな」

「そうだ。また出て来た」

「ふむ。早いのが」

博士はそれを言ってからまずは腕を組むのだった。そうして考える声で述べた。

「あと一人じゃ」

「これだけ次々に出るといっものは」

「考えておらんかった」

「そうだと答えるのだった。」

「まさかのう」

「博士もか」

「いや、もつとゆっくりと出て来ると思っておった」

これが博士の予想であった。しかし予想は予想でしかなくそれが大きく外れてしまったのである。今はそうなってしまったのである。

「もつとのう」

「もつとか」

「そうじゃ。これはまた」

「さらに言う博士だった。」

「あれかも知れんな」

「あれとは？」

「君が影響しておるのかもな」

「牧村を見ての言葉である。」

「君がな」

「俺自身がか」

「君が強くなるのも尋常な早さではない」  
そのことを言うのである。

「尋常なものではのう」

「それ程までか」

「そうじゃ。普通ではない」

博士の言葉は続く。

「十年で階級が一つあがるといった具合が普通の髑髏天使なのじゃ  
よ」

「それが今や座天使だからね」

「半年かちよつとでね」

「やっぱり凄いよ」

ここで横でいつもの様に遊んで色々飲み食いをしている妖怪達が話に加わってきた。いつもの様に博士に対しても牧村に対しても碎けたものである。

「そこまでなるってね」

「有り得ない早さだよ」

「その通りじゃ」

博士は妖怪達その言葉に合わせたまた言ってきた。

「まさにな。このままいくとじゃ」

「さらに上にか」

「左様、智天使じゃ」

この天使のことも話に出してきた。

「それになるのも間近じゃな」

「智天使か」

「どうもここからはじゃ」

「ここからは？」

「勝手が違ってくるようじゃな」

博士は怪訝な顔で述べた。

「どうやらな」

「違ってくるという何がだ？」  
「君は今まで普通の天使じゃったな」  
「天使に普通があるのか」  
「一つの力を階級があがるごとに身に着け」  
「牧村に応えながら述べてきた言葉だった」  
「そしてその都度色は変わったな」  
「そうだが」  
「それが今までの天使じゃ。精々」  
「大天使になった時だよな」  
「そうそう」  
「ここでまた妖怪達が言ってきた。」  
「その時に翼が生えてさ」  
「剣を持った位で」  
「それだけだったけれど」  
「智天使はどうやら違うのじゃ」  
「そうだという博士であった。」  
「どうやらな。ここから上の二つはだ」  
「違うか」  
「これは聖書にある話じゃが」  
出して来た根拠は聖書である。言つまでもなくキリスト教徒にとつては絶対の書である。そこに信仰の基礎があり全てがあるとも言われている。

### 第三十話 智天その二

「聖書の天使達は座天使までは普通の天使の姿じゃ」

「翼があるだけか」

「左様。しかし」

ここでさらに言う博士だった。

「智天使になるとかなり違ってくる」

「確か」

ここで牧村も言ってきた。彼にしても聖書や天使のことに無知というわけではない。それについても既にある程度の知識を備えているのである。

「四枚の翼があったか」

「そうじゃ」

「そして頭が四つだったな」

「人のものとじゃ」

まずはそれであった。

「他に鷲に獅子に牛じゃ」

「その四つだったな」

「そして身体のうちここに目があり」

さらにあるのであった。

「そして車輪まで備わっているのじゃよ」

「異形の姿だよね」

「何か機械みたいだよね」

「そうだよね」

ここでまた言い合う妖怪達だった。

「その格好ってね」

「想像してみたら」

「かなり不気味だし」

「かつてはじゃ」

「ここでさらに話す博士だった。」

「ライオンの身体に人の頭を持ち」

「そこに翼か」

「そういう姿じゃった。天界の番人とされていたのじゃよ」

「どちらにして下の天使達とは全く違う姿だな」

「先のそのまあ」

博士はここで妖怪達をちらりと見た。そのうえで話すのだった。

「妖怪達が言うにはじゃ」

「機械だな」

「そういう姿はその力を言い表しているのじゃ」

まさにそれだというのである。

「まさにじゃ。そういうことじゃ」

「力か」

「力もそれまでの天使達と全く違う」

まさにそうなのだという。

「全くのう」

「そこまで違うというのか」

「そしてどうやら」

博士の言葉はさらに続く。

「その心もじゃ」

「心もだと!？」

「左様。智天使は神にかなり近い」

今度はこのことから話してきた。

「それだけに人から離れており」

「心が違ってくるのか」

「神への絶対の忠誠心を持っている」

「それは聖書の天使だな」

「そうじゃが。髑髏天使としての智天使もじゃ」

「違ってくるのか」

「どうやらじゃ」

こう言つて博士は話を続けてくる。

「魔物を倒すのにさらに躊躇しなくなりだ」

「人にある迷いや躊躇いが消えていくというのか」

「そうかも知れん」

しかし。このことには確証がない返答であつた。

「若しかしてじゃが」

「若しかしてか」

「そうじゃ。まだそちらへの文献は手に入つておらん」

このことにはかなり残念そうな言葉であつた。



### 第三十話 智天その三

「生憎じゃがな」

「だからか」

「そうじゃ。しかし力がこれまでの天使と全く違つのは確かじゃ」

「そして俺の心にも影響を及ぼしてくるか」

「その様じゃな」

また言う博士であった。

「これも今までの天使ではなかったが」

「あれっ、そうかな」

「それは違つと思うよ」

「だよな」

博士の今の言葉にまた妖怪達が突っ込みを入れてきた。

そうして彼等は。こう言つのであつた。

「何か牧村さんってさ」

「そうだよな、最初と比べたら」

「もうかなりね」

「変わったからね」

「そういえばそうじゃな」

言われてみてだった。博士も頷くのだった。

「髑髏天使にはじめてなつた頃と今ではのう」

「でしょ？別人」

「雰囲気も何もかも」

「すっごくなつたから」

「どう凄いのかはわからないが」

牧村はそれはわからないとした。

「しかしだ。今の俺はか」

「そう、別人」

「そう見えるからね」

「最初と比べたら本当にね」

本人にもこう話すのだった。

「何かこのままどうなるかってね」

「思ったりもするし」

「そっぴえばだけれど」

ここでふとした感じでひょうすべが言ってきた。

「最近の牧村さんってさ」

「んっ、どうした？」

「どうだっていうんだい？」

「いやさ」

左右にびたびたと動きながらへっつ、へっ、と笑いながらの言葉であった。それはひょうすべという妖怪の自然な動きであるのだ。

「おいら達じゃなくて」

「僕達じゃなくて？」

「それで？」

「あっちに近いって感じる時があるんだよ」

こう言うのである。

「魔物の方にね」

「おいおい、それはないよ」

塗り壁かそれを否定してきた。一見すると壁にしか見えない。

「牧村さんは髑髏天使だよ」

「それはわかってるけれどな」

「じゃあ何でだよ」

自分の前にいるひょうすべを見ながらの言葉である。

「何でその牧村さんが魔物に近いんだよ」

「何となくそう思うんだよ」

「そっぴえ」というのである。

「おいらがそう感じるだけだけれどさ」

「そりゃ気のせいじゃないかい？」

「そっぴえだよ」

豆腐小僧と一つ目小僧はそうではないかと言ひ合つ。

「牧村さんは人間だよ」

「ねえ」

「紛れもなくね」

彼等が見る限りではそうなのである。

「何で魔物に近いんだろう」

「どう見てもそうじゃないし」

「そうそう」

「やっぱりおいらの気のせいかな」

ひょうすべは仲間達の言葉を聞いて自分の頭をかいて述べた。

「それじゃあ」

「そうかもね」

彼の右隣から垢なめが出て来て慰めてきた。

### 第三十話 智天その四

「まあそれはね」

「それは？」

「見間違いは誰にだってあるよ」

「こう言つてまた慰めるのであつた。」

「だから気にしない気にしない」

「忘れていいんだ」

「うん、いいよ」

まさにそうだと言つた。

「気の迷い、気のせいだからね」

「そう。それじゃあね」

「それよりもだよ」

さらに言つた垢なめであつた。

「そろそろお腹が空いてきてない？」

「確かに」

「お菓子はあるかな」

「おお、これじゃこれじゃ」

ここで子泣き爺が笑いながら何かを出してきた。それは。

プディングだった。それを出してきたのである。妖怪達はそれを

見て一斉に子泣き爺のところ集まつてきた。そのうえでそれぞれ

言つのであつた。

「いいねえ、それ」

「イギリスのお菓子だよね」

「美味しいんだよね、これって」

「イギリスの食べ物はずいばい」

一反木綿の言葉である。

「それでもお菓子だけはいけるばい」

「その通りだ」

牧村の彼のその言葉を聞いて頷いた。

「イギリスで美味しいものはお茶と菓子だけだ」

「他は？」

「口に入れば後悔する」

一言であつた。

「実際にお袋がイギリスの味付けでイギリスの料理を作つてみたが」

「まずかつたんだ」

「そんなに」

「すぐに胡椒とソースをかけた」

そうしたというのである。

「そのうえで我慢して食べた」

「そこまでつて」

「それじゃあ本当に酷いんだね」

「食うことは薦めない」

それは断じてだという口調であつた。

「絶対にな」

「そうじゃな。わしもじゃ」

そしてそれは博士もであつた。彼も言つてきたのである。

「ハギスというのがある」

「ハギス！？」

「何それ」

「スコットランドの名物料理じゃ」

それだというのである。

「簡単に言つとじゃ」

「うん」

「とんでもない代物じゃ」

いきなりこう言つ始末であつた。

「羊の内臓に野菜だのハーブだのミンチだのを入れたのじゃがな」

「ソーセージみたいなものかな」

「そうかな」

「ちと違う」

それではないと忌々しげに語る。

「むしろプディングに近いというがそれじゃが」

「それなんだ」

「それなの」

「そうじゃ。それでも最早じゃ」

忌々しげな言葉がさらさら出されていく。

### 第三十話 智天その四

「まあそれはね」

「それは？」

「見間違いは誰にだってあるよ」

「こう言つてまた慰めるのであつた。」

「だから気にしない気にしない」

「忘れていいんだ」

「うん、いいよ」

まさにそうだと言つた。

「気の迷い、気のせいだからね」

「そう。それじゃあね」

「それよりもだよ」

さらに言つた垢なめであつた。

「そろそろお腹が空いてきてない？」

「確かに」

「お菓子はあるかな」

「おお、これじゃこれじゃ」

ここで子泣き爺が笑いながら何かを出してきた。それは。

プディングだった。それを出してきたのである。妖怪達はそれを

見て一斉に子泣き爺のところ集まつてきた。そのうえでそれぞれ

言つのであつた。

「いいねえ、それ」

「イギリスのお菓子だよね」

「美味しいんだよね、これつて」

「イギリスの食べ物はずいばい」

一反木綿の言葉である。

「それでもお菓子だけはいけるばい」

「その通りだ」

牧村の彼のその言葉を聞いて頷いた。

「イギリスで美味しいものはお茶と菓子だけだ」

「他は？」

「口に入れば後悔する」

一言であつた。

「実際にお袋がイギリスの味付けでイギリスの料理を作ってみたが」

「まずかつたんだ」

「そんなに」

「すぐに胡椒とソースをかけた」

そうしたというのである。

「そのうえで我慢して食べた」

「そこまでつて」

「それじゃあ本当に酷いんだね」

「食うことは薦めない」

それは断じてだという口調であつた。

「絶対にな」

「そうじゃな。わしもじゃ」

そしてそれは博士もであつた。彼も言ってきたのである。

「ハギスというのがある」

「ハギス！？」

「何それ」

「スコットランドの名物料理じゃ」

それだというのである。

「簡単に言つとじゃ」

「うん」

「とんでもない代物じゃ」

いきなりこう言つ始末であつた。

「羊の内臓に野菜だのハーブだのミンチだのを入れたのじゃがな」

「ソーセージみたいなものかな」

「そうかな」



「ちと違う」

それではないと忌々しげに語る。

「むしろプディングに近いというがそれじゃが」

「それなんだ」

「それなの」

「そうじゃ。それでも最早じゃ」

忌々しげな言葉がさらさらに出されていく。

### 第三十話 智天その五

「日本人の口には合わないのう」

「何かそういうのばかりだよな」

「イギリスのものって」

「あまりお勧めはせん」

また言う彼だった。

「それを食べるのはのう」

「何かあの辺りってさ」

「本当に美味しいものはないよね」

「全くね」

「少なくとも日本人には合わん」

博士はこうした言葉を繰り返す。

「じゃからお勧めはせん」

「そうなんだ。まあ美味しくないんならね」

「別にいいよ。それなら」

「そうそう」

妖怪達の返答は実に淡泊で素っ気無いものであった。まるで興味がないといったような口調でそれぞれの口で話をしていくのであった。

「まあそれでだけれどね」

「食べ物だけれど」

「このプディングはいいね」

「本当にね」

それはいいというのである。

「このプディングはね」

「お菓子のプディングはね」

「カスタードプディングだな」

牧村がそのプディングを食べながら述べた。

「これは」  
「プディングでも色々なんだね」  
「イギリス料理って」  
「もつと言えばプディングの他はこれといって種類もない」  
「牧村の言葉もかなり辛辣ではある。」  
「実際の」  
「何かねえ、それって」  
「物凄く寂しいけれど」  
「本当に長い間繁栄していたの？」  
「こんな言葉まで出された。」  
「明治の頃なんてさ、日本から見たイギリスなんてね」  
「そうそう、物凄い国だったよね」  
「もつ仰ぎ見るばかりのね」  
「そういう頃もあったのう」  
「博士もそれを聞いて述べた。」  
「わしの子供の頃や中年の頃まではそうじゃった」  
「第二次世界大戦の頃まではか」  
「牧村が博士に対してまた述べた。」  
「その辺りまでか」  
「そうじゃ。あの頃から今を考えるとじゃ」  
「全然違うか」  
「最早別の国じゃな」  
「そこまで言うのであった。」  
「もつともじゃ」  
「もつとも？」  
「あの頃から料理はまずかった」  
「そうだったというのである。」  
「とてもじゃ」  
「イギリスに行っていたこともあるのか」  
「オックスフォードとケンブリッジにおった」

ここでまた話される博士の過去だった。

「思えば懐かしい頃じゃ」

「それは一体何年前？」

「何十年位前なの？」

「わしが二十代の頃じゃが」

それだけでかなり昔の話なのができることであつた。何しろ百歳は優に超えている博士だからである、それはもうかなりの昔のことである。

「さて。八十年以上昔じゃ」

「ええと、第一次世界大戦の後？」

「その辺り？」

「まだソ連ができたばかりじゃつたかな」

博士は己の記憶を辿りながら述べた。

「それでナチスが新聞に載ることもない頃じゃつた」

「それだけ昔だつたんですね」

「その頃はまだイギリスも力があつたのじゃ」

自分の後ろに来たるく子にも話す。

### 第三十話 智天その六

「まだのう」

「それでもその頃から」

「食べ物はあるだったんだ」

「海軍ものう」

ロイヤルネービーのことである。

「ビーフシチュー等があったのじゃが」

「それもまた」

「味は」

「日本人が作った方が美味しかった」

そうだったというのである。

「もっと言えば肉じゃがの方が美味しいものじゃった」

「何でそこで肉じゃがが出るんだらう」

「意味不明だけれど」

妖怪達は今の博士の言葉には首を捻ってしまった。

「ビーフシチューと肉じゃがってね」

「全然関係ないんじゃない？」

「どう考えても」

「いや、ある」

しかしであった。ここで牧村が言うのであった。

「どちらも関係がある」

「それはある」

「えっ、あるの!？」

「そうだったの!？」

「そうだ、ある」

また言う彼だった。

「その海軍に関するがある」

「海軍にって」

「どついうことかな」

「わからないよね」

「そうだよね」

妖怪達は首を傾げさせて言い合つたのだつた。

「そついうのつて何か」

「どつにもね」

「どついう関係なの？それで」

「東郷平八郎だが」

彼の名前が出て来た。日本海海戦の大勝利の立役者であり海軍にとつて、今の海上自衛隊にとつて不滅の英雄である。そして我が国にとつてもである。

「彼はイギリスに留学に行つていた」

「ふうん、あの国にね」

「そつだつたんだ」

「そつじゃな」

ここでまた声をあげた博士だつた。

「当時イギリスは日の沈まぬ大帝国じゃつた」

「そして？」

「海軍は？」

「まさに世界の海を支配しておつた」

そつした時代だつたのである。今は昔の話になつてしまつてい  
るが。

「その頃じゃからな。日本も人をやつてじゃ」

「勉強しに行つてたんだ」

「そつだつたんだ」

「そつじゃ。それでじゃな」

「そつだ。そこでビーフシチューを知つた」

「そつだつたと。牧村は話すのだつた。」

「それをだ」

「そつじゃな。そこでじゃつたな」

「で、ビーフシチューはわかったけれど」

「それだけじゃないよね」

「肉じゃがもだよね」

「そうだ」

まさにそれもだというのである。

「そしてその肉じゃがだが」

「うん、どうなるの？」

「それで」

「東郷平八郎は日本に帰ってだ」

話は移っていた。その時にだ。

「日本でそれを食べたいと行った」

「ビーフシチューを」

「それじゃあ」

「しかしだ」

ここで牧村の言葉の色が変わったのだった。

「作る調理担当の兵士はビーフシチューとは何か知らなかった」

「へえ、そうだったんだ」

「ビーフシチューを知らなかったんだ」

「まあ当然じゃ」

ここでも言ってきた博士だった。

### 第三十話 智天その七

「それもじゃ」

「当然つて？」

「イギリスの料理だから？」

「そうだ」

まさにそうだと返す牧村だった。

「どうして作るのか。知る筈もなかった」

「それで何で肉じゃがに？」

「何でなの？」

「材料だけは聞いた」

それはだというのだ。

「同じ材料で和風の調理をするとだ」

「ああ、そうなるんだ」

「それであんな風に」

「そうだ。そういうことだ」

まさにそうだというのである。

「これでわかったな」

「成程ねえ。そうだったんだ」

「あの肉じゃがにしても」

「そうだ。肉じゃがにはそうした歴史がある」

牧村は歴史とまで言った。そう言ったのも彼の思い入れがあったのだ。

「そういうことだ」

「ううん、それを考えるとね」

「肉じゃがも何かね」

「そうそう。面白いよね」

「だよね」

こつ話していくのであった。



「肉じゃがもね」

「何となくできた料理じゃないんだ」

「そうだったんだ」

「料理にも歴史がある」

また言う牧村だった。

「そういうことだ」

「それじゃあこの羊羹もかな」

「そうかもね」

「確か羊羹はじゃ」

今度は博士が言うのだった。わりかし固い羊羹を何でもないと  
いった感じで食べている。それを見ていると歯がかなりいいのがわか  
る。

「あれじゃったな。中国からじゃったな」

「ああ、それはね」

「僕達も知ってるよ」

「何となくだけれど」

妖怪達は博士の言葉に応えて述べた。

「元は肉料理だったっばいね」

「こつちじゃお菓子だけれどね」

「そこが違っんだよね」

「そういうところも」

「そうそう」

そう話をしていくのであった。

「何かそれ考えたらね」

「かなり色々あるよね、食べ物って」

「だよね」

「ああ、本当にね」

そう話してであった。その間に牧村にも羊羹が届いた。それを食  
べている。

妖怪達はその牧村にだ。さらに話すのだった。

「ねえ、それで」

「この羊羹どう?」

「美味しい?」

「ああ、美味い」

まさにそうだと話す彼だった。

「やはりな。いい感じだな」

「そう、美味しいんだね」

「それもかなり」

「山月堂だな」

味ですぐにわかったことだった。

「これは」

「そうだよ、あそこ」

「何か鼻屑だけれどね」

「そうだな。この研究室にいとよく食べる」

その山月堂のものをだというのである。

### 第三十話 智天その八

「本当にな」

「まあ他のお店のも色々買ってるけれどね」

「山月堂は確かに多いよね」

「だよな」

「多いな。そうだな」

妖怪達の話をしながら食べていく牧村だった。その羊羹をである。

「この店のはな」

「あとお団子もあるけれど」

「そっちもどう？」

団子のこと話すのだった。

「そっちもね」

「どうかな」

「ああ、いいか」

妖怪達の申し出に対してこう返したのだった。

「そちらもか」

「うん、じゃあ」

「はい、これ」

「笹団子ね」

見ればその通りだった。笹団子が差し出されてきた。牧村は楊枝を使ってその笹団子も食べてみるのであった。するとその味は。

「これは」

「どう？こっちは」

「美味しい？」

「美味いが味が違うな」

「そうだといいのである。」

「山月堂のものではないな」

「そうだよ。その別のお店のなんだ」

「どうかな」

それを出してきたのである。

「この味は」

「いいでしょ」

「ああ、この味もいい」

まさにそうだと答える彼だった。

「こちらは素朴な味だな」

「山月堂って上品な味だからね」

「何でもね」

「こちらはそれに対して素朴な味だな」

そうだと話す彼であった。

「しかしこれもだ」

「いいよね」

「こういう味も」

「美味さは一つだけじゃない」

牧村は言った。こう静かにである。

「ビーフシチューでも肉じゃがでもだ」

「同じもの同士でもそうだしね」

「美味しさはそれぞれ別だよ」

「そういうことだ。それではだ」

「それでは？」

「今度は？」

「そろそろ時間だ」

見れば団子も食べ終えていた。そうしてそのうえで身体を起こし

た。するとここぞでろく子が出て来て彼に対して言ってきたのである。

「そちらは私が」

「洗ってくれるのか」

「機械に入れてすぐですから」

こう言つてにこにことして彼に話してきた。

「ですから」

「俺が洗うが」

「いえ、それはいいです」

しかしそれはいいというのである。

「ですから」

「そうか。それならだ」

「はい」

こうして皿を渡しであった。牧村は研究室の外に向かう。そうしてそこでまた言うのであった。

「講義に行つて来る」

「そういえばもうそんな時間じゃな」

博士もここで壁にかけてある時計を見て述べた。見事な鳩時計である。

「ではわしもじゃ」

「あれっ、博士もなんだ」

「講義なんだ」

「わしも教授じゃぞ」

妖怪達の言葉にこのことを言うのであった。

「だとすればじゃ」

「講義あるんだ」

「ちゃんと」

「当然じゃ。講義を持っていない教授もおらんぞ」  
「それも言うのであった。」

### 第三十話 智天その九

「大学におるからにはじゃ」

「そっだよね。やっぱり」

「講義はね」

「しっかりとやっておるぞ」

それは自分からも言う博士だった。

「わしものう」

「そっいえば時々いなくなるのって」

「それだったんだ」

妖怪達にとつてはそんな認識だった。

「講義に出ていたんだ」

「そっだったんだ」

「では他にどんな理由でいなくなるのじゃ」

博士は少しむっとした顔と声で彼等に返した。

「それではじゃ」

「まあ考えてみればそうか」

「大学の先生なんだし」

「そっいうことじゃ。それにじゃ」

さらに話す博士だった。今度はろく子を見て言う。

「秘書は何の為におるのじゃ」

「仕事の管理だよ」

「そっいう意味ではマネージャーみたいなものだよね」

「また妙な言葉を知っておるのう」

妖怪達の今の言葉にこんなことも思う博士だった。

「何処でそんな言葉を覚えたのじゃ」

「漫画で」

「アニメで」

そっしたものからだという。かなり人間文化にも染まっている彼

等であつた。

「そういうのでね」

「勉強したんだ」

「それでか。まあとにかくじゃ」

「うん、それでだよな」

「行くんだね、今から」

「うむ、行つて来る」

あらためて答えた博士であつた。そうして席を立つてである。

そのまま向かうのであつた。博士も今は大学の教授に相応しく講義に向かうのだった。そしてそれは面白いことに。牧村が今から受けるその講義であつた。

講義の前にだ。空いている席に座つた彼にだ。友人達が声をかけてきた。

「なあ」

「悪魔博士だけれどな」

他ならぬ博士の仇名である。その名前と外見からきている仇名である。

「幾つだつた？」

「御前あの博士と詳しいよな」

「そうだが」

親しいのは否定しない牧村だつた。彼等に対しながら答える。

「それがどうかしたのか」

「いやさ、だつたらな」

「あの博士が幾つか知つてるよな」

そのことを彼に尋ねるのである。

「一体何歳かな」

「本当に何歳なんだ？」

「それは俺も知らない」

しかし彼はこう答えたのだった。

「残念だがな」

「知らないのかよ」

「親しいのにか」

「いつも博士の研究室にいるのにか」

「それでも詳しくは知らない」

素っ気無く答えるのは彼の常であつた。友人達はその言葉に取り付く島もないかといえはそうではなかつた。めげずに聞き返したのであつた。

「それじゃあ大体でいいからな」

「わかるか？」

「大体で幾つなんだ？」

「百歳は確実に超えている」

それはだというのである。

「それはだ」

「そうか。百歳以上か」

「やっぱりそれだけはあるんだな」

「それは間違いない」

百歳以上はだというのだ。



### 第三十話 智天その十

「百十歳は超えているような」

「百十歳か」

「凄いな」

「そんなに生きているのか、あの人」

皆それを聞いて思わず唸った。そうなるだけのものが確かにある。

「それであんなにしつかりと動けるしな」

「声だつて大きいしな」

「背筋だつてしつかりしてるしな」

「歯も一本も抜けていない」

牧村はこのことも言い加えた。

「一本もだ」

「百十歳でか」

「余計に凄いな」

「全くだ」

話をしている誰もが驚いていた。

「普通百歳つてな」

「いや、そこまで生きるだけでもな」

「そうだよな」

一口に百歳といえどもであった。

「その前に老衰で死んだりするからな」

「八十超えたらな」

「それも不思議じゃないからな」

「だよな」

所謂天寿というものである。それをまっとう出来る人間は確かに  
幸せである。

「滅多にいないからな」

「そうだよな」

「それであれか」

「百十歳で」

「本当に人間なのかね」

「こんな言葉も出て来た。

「あれで」

「だよなあ。冗談抜きにな」

「悪魔に魂を売ったとか」

「不老不死の薬飲んだとか」

「そういうのじゃないのか？」

多くの者の博士の見方そのものであった。とかく常人には思われ  
ていなかったのだ。それはやはりその高齢から来るものであった。

「それか仙人とかな」

「そういう感じだよ」

「なあ牧村」

そしてまた彼に問うてきたのであった。

「実際どうなんだ？あの人」

「仙人なのか？」

「それとも悪魔か？」

「錬金術でもやっているのか？」

一つ答えが入っていた。しかし牧村はその答えにも答えようと  
せず。あえて博士のその長寿についてだけ語ったのであった。

「それはだ」

「ああ、それは」

「どうなんだ？それで」

「仙人か？それとも」

「本当に悪魔に魂を」

「ただ長生きなだけだ」

博士のその真実だけを話すのであった。

「そして健康なだけだ」

「おい、それだけかよ」

「それだけなのかよ」

「そうだ。それだけだ」

あらためて言う彼だった。

「博士はそれだけだ」

「本当か？それって」

「ただ長生きだけなのか？」

しかしであった。皆それをそう簡単には信じようとはしなかった。何しろ百十歳を超えてそれでも教壇にいるというのは有り得ないことだからである。

「あれで」

「それだけか」

「それだけだ」

牧村は素っ気無く答えた。やはり錬金術のことは話さない。もっとも博士は錬金術を自分の為にはまだ使ってはいないのであるが。

第三十話 智天その十一

「あまり考えることはない」

「いや、それはそれでな」

「ああ、考えるよな」

「どうしてもな」

それはそれで、であった。

「異常な長生きだよな」

「しかも健康でな」

「やっぱり人間じゃないよな」

「亀か？」

長寿で知られる生き物も話に出て来た。

「それが鶴かな」

「鶴は千年、亀は万年でな」

「もうそんな感じだよな」

「全くだ」

「若しかするとだ」

牧村はふと言った。その博士のことをだ。

「付き合いの関係かも知れあいな」

「付き合い？」

「付き合いって何だ？」

「付き合っている相手が長生きならばだ」

妖怪達のこととは伏せていた。これも言うわけにはいかなかった。

「その影響を受けてだ」

「長生きになるっていうのか」

「それでか」

「そうかも知れない」

こう考えたのである。確かに博士はかなりの部分で妖怪と同化していると言ってもいいものがある。少なくとも妖怪達と完全に絵と

して一つになっている。

「それはだ」

「何かそれ言ったらな」

「やっぱり人間じゃねえな」

「妖怪か？」

一人が牧村が頭の中で思っていた存在を話に出してきた。

「それだとな」

「だよなあ」

「そうとしかな」

「思えない外見だしな」

「白くて長い髭だらけで小柄だしな」

歳のせいかもう一五〇程度しかないのである。もっとも昔の人間は今に比べてかなり小柄であるが。かつての日本軍でも今の自衛官達と比べればかなり小柄である。実際の戦闘力についてはおそらく比べること自体が間違いであるまでに離れてしまっているが。

「そんな人だしな」

「本当に人間なのかね」

「とりあえず人間だ」

また答える牧村であった。

「それは確かだ」

「そうか？」

「それも疑わしくないか？」

「少なくとも今はだ」

とりあえずこう前置きはした。そうして。

不意にこんな言葉が自然に出てしまったのだった。

「俺も」

「御前も？」

「御前もかよ」

「いや」

言ってしまったから気付いてしまった。その言葉にである。

そうしてであった。彼は言うのであった。

「何でもない」

「ああ、そうか」

「別に何でもないか」

「気にしないでくれ。それではだ」

ここで左手の時計を見るとであった。いい時間であった。

チャイムが鳴った。皆それで身構えた。

「じゃあそろそろだな」

「そうだな」

「来るな、博士が」

前を向こうとする。すると暫くして博士が講堂に入って来た。そのまま講義に入る。

彼の大学での日常は今日も終わった。それからトレーニングをして家に帰った。家に帰るその途中でふとプールに足を運んだ。最近では水泳にも興味を持ったのである。

そこは屋内のスイミングスクールであった。中に入ると早速ガラス越しに五十メートルプールが見える。水色の底でありそれぞれのコースに分けられている。プールの周りの床は緑であった。

そこに入っても今は誰もいなかった。そのかわりに。

「やあ」

目玉が彼の前に出て来たのであった。

「来ると思っていたよ」

「貴様がいるということはだ」

「ああ、もうわかるんだ」

「それで充分だ」

こつ目玉に対して告げた。

第三十話 智天その十二

「もうな」

「鋭いね、やっぱり」

「そしてだ」

さらに言う牧村だった。

「貴様がいるということはだ」

「ああ、鋭いね」

「あの男もいるな」

「そうだよ、いるよ」

目玉が言うのであった。右手から死神が出て来た。今は漆黒のス  
ーツを着ている。

「ほら、出て来たよ」

「また会ったな」

死神は己の前にいる牧村に対して言うてきた。

「ここにいるということはだ」

「言つまでもないよね」

「闘いか」

「そうだ」

「それだよ」

死神と目玉が同時に彼に告げてきた。

「ここでの闘いになる」

「いいかな」

「まだここには人はいないのか」

「私が開いた」

死神が述べてきた。

「そうした。働いている者はだ」

「殺した訳ではあるまい」

わかつていての言葉である。静かに返すのだった。

「それは」  
「私は寿命以外ではそうしない」  
「これが死神の返答だった。」  
「死すべき相手以外に対してはだ」  
「そうはしないか」  
「そうだ。それではどうした？」  
「眠ってもらっている」  
「そうである。死神は話してきた。」  
「今はな」  
「僕がそうしたんだ」  
「目玉が笑って言ってきた。」  
「ちよつとね。目でね」  
「目か」  
「僕の目には特別な力があるんだ」  
「彼は笑いながら話す。」  
「ちよつと見てもらおうとそれだけでね」  
「眠るか」  
「そうなんだ。それだけでね」  
「便利な力だ」  
「死神がまた言ってきた。」  
「おかげで余計な力を使わなくて済む」  
「死神もそれはできるよ」  
「目玉はこのことも話した。」  
「ちやんとね。けれどね」  
「眠りは本来は私の力ではない」  
「そうだというのである。」  
「私は死を司る者だからだ」  
「だからそれだけ余分に力を使ってしまっただ」  
「闘いを前に力を使うのは好まない」  
「それでか」



「そういうことだよ」

目玉が牧村の問いに述べた。

「これでわかってくれたかな」

「とりあえずはな。そうか」

「そうだ。そうしてだ」

「闘いだな」

死神の言葉を受けてまた述べた。

「それだな」

「いいな」

死神の言葉である。

「今からだ」

「わかっている。それでは相手はだ」

「中にある」

死神は右手の親指を後ろのプールの中にやった。ガラスの向こうの場所をである。

「既にだ」

「中にか」

「そこに入る」

そうするといつのである。

「それでいいな」

「わかった」

そして牧村もそれに頷くのであった。

### 第三十話 智天その十三

「では行くとしよう」

「それじゃあね」

目玉はその牧村に対して告げてきた。

「健闘を祈るよ」

「生きるか死ぬか」

「それが魔物との闘いだ」

「俺は生きる」

牧村は静かに述べた。

「それだけだ」

「生きるのだな」

「何があるうともだ」

こうまで言うのであった。

「俺は生きる」

「その言葉実現することも祈るよ」

目玉の今回の言葉は牧村に対して実に好意的なものであった。

「本当にね」

「受け取っておく」

「どうも」

「ではだ」

「またね」

こう話してであった。目玉は一旦消えた。後に残ったのは死神だけであった。

その彼はだ。牧村に対して静かに言ってきた。

「いいか」

「闘いか」

「そつだ。それだ」

そのこと以外には有り得なかった。

「闘いはあのプールの中だ」

「あの場所で闘うことになるか」

「場所はそれでいいな」

「場所は何処でもいい」

それはいいと返す彼であった。

「倒す。それだけだ」

「そうか。相変わらずだな」

「では相手は誰だ？」

今度はそのことを問うのであった。

「今回の相手は」

「中に入ればわかる」

それはだというのだ。

「それはだ」

「そうか。それではだ」

「行くとしよう」

自分から前に出たうえでの言葉である。

「ではな」

「いいだろう。それではだ」

死神がプールとこちらを隔てているそのガラスに目をやるとであった。ガラスの中央がゆっくりと溶けてである。丸い大きな穴が開いたのだった。

そしてその穴を見ながら。さらに言う彼であった。

「入るとしよう」

「ガラスに穴を開けたのか」

「閉じることできる」

こつも言う死神だった。

「開けるのも開くのもだ」

「便利な術だな」

「身に着けておいて損はない」

死神は術についても話す。

「こつこついう術もだ」

「そうか。それではだ」

「行くでしょう」

二人はその穴を潜りであった。プールの中に入った。中に入るとである。プールサイドの向こう側にもう二人の魔神が立っているのであった。

「今回はだ」

「僕達が相手だよ」

男と小男であった。その二人がそこにいた。

そうしてそのうえで。牧村と死神に対して声をかけてきたのであった。

「いいな、それで」

「嫌なら別の仲間が来るのだけれど」

「俺の考えはもうわかっている筈だ」

牧村は鋭い声で彼等の言葉に返した。

### 第三十話 智天その十四

「それはだ」

「闘うのだな」

「僕達と」

「そうだ」

まさにそうだと返すだけだった。今の牧村はだ。

「その通りだ。では来るがいい」

「わかったよ。それではだ」

「僕達も」

こう言つてであつた。二人はそれぞれの魔神を出してきたのであつた。

男は一旦目を閉じた。そうして開くとであつた。

後ろからピエロが出て来た。しかしそのピエロは普通のピエロではなかつた。

手に鋭い刀を持っている。片刃の鋭く曲がつた刀である。

「この道化師はだ」

「何だというのだ？」

「殺人道化師だ」

それだと答える男であつた。

「これはだ」

「そうか。殺人道化師か」

「これが名前だ」

この魔物の名前だという。ピエロは化粧をしている。白地に緑と赤の派手で、それでいて実に毒々しい化粧をしている。それは衣装でもある。

丸い玉があちこちに付いている。その玉がしきりに動く。魔物はその中で何処か邪な笑みを浮かべてである。そのうえで言つのであつた。

「相手はこれでいいか」

「望むところだ」

これが牧村の返答だった。

「では俺の相手はこれで決まりだな」

「そうか。それではだ」

彼の相手は決まった。そうしてであった。

死神は小男と対している。小男の方から言ってきた。

「それじゃあ」

「貴様の魔物は何だ」

「鰐かな」

それだというのであった。

「鰐だよ」

「鰐か」

「オセアニアは鰐も多くてね」

魔神は笑いながら話してきた。

「鮫人の他にもいるんだよ」

「今度は鰐人だというのか」

「その通り。それじゃあ」

「出すといい」

死神から誘う言葉であった。

「早速な」

「そうさせてもらうよ。じゃあ」

「はい」

こう言つてであった。そこに魔物が出て来た。プールの中に巨大な鰐がいた。その大きさは精々三メートル程である。しかしである。

「泳げるな」

「鰐だからね」

「しかも水以外の場所もだ」

こんなことを言ってみせた死神だった。

「泳げるな」

「あれ、わかるんだ」

「勘だ」

それによりわかるというのである。

「前の鮫の時といいな」

「この鰐はただの鰐じゃないんだよ」

小男も笑いながら肯定の言葉を述べてきた。

「実際ね。水の中だけじゃなくて」

「空もか」

「そうだよ。まあ楽しめるとは思うよ」

実際に楽しげに笑いながらの今の言葉だった。

「これからね」

「それならそうさせてもらう」

魔神のその言葉を受けて返したものであった。

「今からな」

「それじゃあ」

「来い」

受けて立つ言葉だった。

### 第三十話 智天その十五

「その魂を冥界に送り届けてやろう」

「それじゃあ僕はこれで」

「変えるか」

「後は魔物に任せてね」

そうするといふのである。これはいつも通りであった。

「そうさせてもらおうよ」

「ならば消えるのだな」

死神も引き止めることはなかった。

「早くな」

「うん、じゃあね」

「ではここは私が」

水の中の鰐が魔神に対して言ってきた。

「お任せ下さい」

「じっくりと楽しむんだよ」

魔物に対しても言う小男だった。

「それはね」

「そうさせてもらいます。それでは」

「これでね」

これで魔神は煙の様に姿を消した。そして後にはプールの中の魔物がいるだけであった。その禍々しい姿の鰐がである。

魔物はだ。今度は死神に対して水の中から言ってきた。

「死神よ」

「私を喰らうとでもいうのか」

「神は喰らったことがない」

それを実際に言う彼だった。

「一体どんな味がするかだな」

「少なくともそれはない」



「それはない？」

「私は誰にも喰らわれたことはない」

悠然とその水の中にいる魔物を見下ろしての言葉であった。

「誰にもだ」

「それは今までの話でしかないな」

「これからもだ」

過去だけではないと返すのであった。

「私は誰にも喰らわれることはない」

「大した自信だな」

「自信ではない」

この言葉も否定する彼だった。

「確信だ」

「確信か。流石は神だな」

「では神の力を見せよう」

死神は神というその言葉に応えて述べた。

「この力をな」

「では闘う姿になるのだな」

「やらせてもらう」

言いながらであった。その右手を拳にして胸の前に置く。するとであった。

青白い光がその拳から放たれ全身を包んだ。それが消えた時彼はその戦装束を身にまとっていた。右手にはあの大鎌がある。

右手に持ったまま大鎌を一閃させてだ。言った言葉は。

「その魂、冥府に送ってやるう」

「それじゃあはじめようか」

こうして彼等は闘いに入った。そうしてであった。

男は道化師を前に置いたうえで牧村と対し続けている。そうして言うのだった。

「ではだ」

「はじまりだな」

「それでいいな」

「こう彼に問うのである。」

「逃げるのならばそれでいいがな」

「俺の辞書に逃げる言葉はない」

「ないというのか」

「少なくとも魔物に対してはだ」

「そうだとするのである。」

「それはない」

「そうか」

「来い」

今度は道化師に対する言葉である。

「倒してやるう」

「ヒヒヒヒヒヒ、ではウエンティゴ様」

「うむ」

男は魔物の言葉に対して返した。目は牧村を見たままである。

「髑髏天使の相手をすることを許す」

「有り難きお言葉」

魔物はその言葉にわざとらしいまでに慇懃な礼で返した。その右手を胸にやっけてまるでこれから芝居をはじめるとような仕草であった。

### 第三十話 智天その十六

「それでは」

「倒すか」

「無論です」

今度はおどけた動作であった。

「闘うからにはです」

「ならばそうするまでだ」

牧村は魔物に言葉をまたしても返した。

「俺もまた」

「闘いとは最高のショーです」

またしても道化師らしい言葉を出してきた。

「それではウエンデイゴ様」

「うむ」

魔神も彼の言葉に応える。

「楽しむがいい。そのショーをだ」

「観客がいないのが残念ですが」

「それは安心しろ」

「左様ですか」

「我々が見ている」

だからだというのである。

「見ている。だから安心するのだ」

「有り難き御言葉。それでは」

「楽しませてもらう」

また魔物に対して告げた言葉であった。

「ではな」

「はい、これで」

「それではだ」

男は今度は小男に顔を向けてその声をかけた。

「我々は去るとしよう」

「はい、それでは」

小男はもう姿を消している。声だけが返ってきた。

「我々の場所で見ることになりましたよ」

「そうする。それではだ」

「ええ、では」

「髑髏天使よ」

あらためて彼にも言う。

「この闘いも見せてもらおうぞ」

「一つ言っておく」

その魔神に対して彼も言葉を返してきた。

「いいか」

「何だ、その言葉は」

「俺の闘いは見せるものではない」

「そうだとするのである。」

「生きる為の闘いだ」

「生きる為か」

「生きて人としての人生を送る」

「まずはこう言うのであった。」

「その為の闘いだ。そして」

「そして？」

「倒す為の闘いだ」

「それでもあると。言うのであった。」

「魔物を倒す為の闘いだ」

「それは生きる為ではないのか」

「生きる為でもある」

二つの理由は混ざり合い一つになっているというのであった。

「しかしだ。貴様等を倒すことはだ」

「髑髏天使の勤めだというのだな」

「だからだ。貴様等を倒す」

そうするといふのである。

「必ずだ。髑髏天使として貴様等を倒す」

「そうか。それではそうするといひ」

「いづれ貴様等も倒す」

魔神達への宣戦もする。

「それも覚えておくことだ」

「今は座天使だったか」

男は今の彼の言葉に思い出したように述べた。

「そうだったな」

「それがどうかしたのか」

「間も無くか」

こう言ってきたのである。

「それならばだ」

「貴様等と闘うことがか」

「智天使になり」

そこからであった。

### 第三十話 智天その十七

「そしてさらに登り詰めたその時にだな」

「貴様等と闘うことになるな」

「面白いことだ」

魔神は笑った。その男らしさそのものの顔に楽しむ笑みを見せていた。彼にとっては珍しいことであった。笑うということ自体がある。

「思えば長きに渡って闘ってはいない」

「封印されていたからだな」

「そこまで辿り着いた髑髏天使も僅かだった」

「それも理由だというのだ。」

「だからこそだ。余計に楽しみだ」

「俺と闘うことがか」

「期待している」

「こつも彼に告げたのであった。」

「充分にだ」

「ではその時を楽しみにしていることだな」

「そうさせてもらう」

「倒す」

今の牧村の言葉は一言であった。

「貴様等をだ」

「ではだ」

ここまで話して姿を消す魔神だった。こうして牧村は完全に魔物と対峙することになった。最早存在しているのはお互いだけしかなかった。

「それではです」

「はじめるのだな」

「髑髏天使になって下さい」

「こう彼に言ってきた。

「全てはそれからです」

「それからだというのだな」

「ですから」

「いいだろう」

魔物のその言葉は当然として受けた。

そうしてであった。両手を拳にしてそのうえで己の胸の前に持つて行つてである。ゆっくりと変身の構えに入つていくのであった。

拳と拳を打ち合わせるとであった。そこから白い光が放たれた。

そうしてその光に包まれてその中で異形の天使の姿となるのであった。

甲冑を着た髑髏の姿になつてだ。右手を一旦開き握り締める。次の言葉は。

「行くぞ」

「はい、それでは」

「一気に決着をつける」

こう言つてであった。すぐにその姿を変えた。

座天使である。その姿になつてからまた言つた。

「この姿でだ」

「闘われるのですね」

「それでいいな」

「はい、是非」

こう言つてであった。魔物は一步前に出て来た。

そうしてである。跳んできた。

「跳んだか」

「さあ、参ります」

跳びながらだった。身体が幾つにも分かれてきた。

「むっ!？」

「私の芸の一つでして」

「分身がか」

「はい、参ります」

その幾つにも分かれた魔物達が言ってきた。そうして髑髏天使に  
一斉に襲い掛かってきた。

それぞれ急降下を仕掛けてきた。その手の刃を手いだ。

「それでは」

「これで」

「倒させてもらいます」

「生憎だがこちらにも事情がある」

こう言ってであった。髑髏天使はその彼等に向けて攻撃を繰り出  
した。剣を上に向けてそこから拡散する雷を放ってみせたのである。

「雷!?!」

「それをですか」

「さて、どうするつもりだ」

急降下してきている魔物達に問う言葉である。

「この攻撃は。どうかわすつもりだ」

「それならばです」

「こうするまでです」

こう言ってであった。彼等は空中で跳ねた。まるでそこに足場が  
あるかの様にそこで跳ねてみせたのである。それで雷をかわしてみ  
せたのだ。



### 第三十話 智天その十八

「何っ!？」

「こつしたこともできますから」

「御安心下さい」

彼等は髑髏天使の前に着地した。そのうえでまた恭しく言ってみせたのである。

一礼をしてそのうえで。顔を上げて言うのであった。

「それではですが」

「これで終わりではありませんね」

「貴方も」

「俺が終わることはない」

その髑髏の顔で見据えての言葉である。

「それは言っておく」

「終わることはないですか」

「そうでないはいけません」

「我々も張り合いがありません」

魔物はそれぞれの口で笑いながら言ってきた。

「シヨ―は相手があつてのことです」

「それも私に相応しい相手があつてこそです」

「そうでなければなりません」

「では貴様等もまだ闘うのだな」

魔物を見据えたままの言葉である。自分の前にいる彼等をだ。一人であるが身体は幾つもある。その彼等を見ての話である。

「やはり」

「無論です。私は魔物です」

「ですから」

「お答えさせて頂きます」

「では来るのだ」

言いながらまた右手に持っている剣に雷を帯びさせている。攻撃に入ろうとしているのはそれを見ただけであきらかであった。

「こちらからはやらせてもらう」

言葉と共にその剣を前に突き出す。すると激しい雷が魔物達を覆う様にして襲い掛かる。それは魔物達ですら避けられそうにはなかった。

だがその雷の嵐を見てもだ。魔物達は平然としていた。

そうしてである。それぞれの前に幕を出してきた。赤、青、黄色、それに緑である。それぞれの幕で自分達を完全に包んでだ。

その雷を防いだのである。まさに一瞬である。

「幕か」

「便利なものです」

「これで何でも防げます」

「この通りです」

「どうやら身のこなしだけではないな」

髑髏天使は幕を消してそこからまた姿を現してきた彼等に対して言った。

「細かい芸当もできるのか」

「道化師ですから」

「そうしたことできます」

「この通りです」

「ここで出て来るだけはあるか」

髑髏天使はそれを見て冷静に述べた。

「やはりな」

「貴方も。流石に座天使であるだけがあります」

「これだけの攻撃をされるとは」

「やはり素晴らしい」

「お見事です」

魔物もそれぞれの口で髑髏天使を褒め称える。その彼をだ。

「それだけに私の相手に相応しい」

「では。今度はです」

「私の方からです」

こう言っただけであった。剣を投げてきた。すると。

その剣は一本ではなかった。何本も来る。しかもそれはブーメラ  
ン状に反転しそのうえで髑髏天使に前後から襲い掛かってきたのだ  
った。

「これが貴様等の攻撃か」

「これだけではありません」

「付け加えてです」

また一斉に跳んできた。また空中を踏み台にして上からも剣を繰  
り出す。その様にして髑髏天使を追い詰めにかかってきたのである。

「こうしたこともです」

「できます」

「さあ、どうでしょうか」

「くっ、これは」

縦と横、双方から囲まれてしまった。劣勢なのは明らかであった。  
髑髏天使は今はそのをフットワークでかわす。テニスのそれを応  
用した動きは確かに見事である。無数の上と横からの剣をかわしき  
っている。

### 第三十話 智天その十九

だがそれにも限界がある。魔物もそれを見越していた。

「さて」

「何時までできるでしょう」

「そうしてかわすことが」

「何時まででしょうか」

「こうするまでだ」

こう言つてであつた。また雷を放ち剣を消そうとする。

しかしであつた。その余裕は今は無かつた。

かわすだけで手が一杯であつた。数が多過ぎる。とてもであつた。

「くっ……」

「そういうことです」

「この数にはです」

「とても無理な筈です」

魔物達の声は勝利を確信しているものであつた。

「この数の剣にはです」

「それはとても無理です」

「しかもです」

「しかも。何だ？」

「今私は言いました」

「お気付きでしょうか」

今度はこう言つてきたのである。

「剣と言いました」

「刀ではなくです」

「このことにです」

言葉はこれであつた。

「このことにお気付きでしょうか」

「剣と」

「片刃ではないか」

髑髏天使もそれで察したのだった。

「つまりは」

「はい、そうです」

「もう片方にも刃があります」

「この通り」

空中を跳ね床に下りながらそのうえで剣を放ち続けている。その中で一人が髑髏天使の前に下りそのうえで懐から林檎を取り出してきたのである。

その林檎を今持っている剣の反対、背の方に置いた。するとである。

林檎はすうっと切れていった。それだけで、である。奇麗に切れてしまったのである。

他の魔物達がその林檎を受け取って食べる。そうしながら笑って言ってきたのである。

「こうして切れます」

「つまりです。もう一方を受けてもです」

「斬れるのです」

「そうなるというのか」

「さあ、如何でしょうか」

「この剣は」

誇らしげに髑髏天使に対して問うてきた。

「貴方に防ぎきれませんか」

「さあ、何時までかわせるでしょうか」

「それも見せてもらいます」

こうして彼等の勝負は続く。そして死神もまた。その鰐と闘っていた。

鰐の姿が消えた。プールの床の中に潜り込んだのだ。まるで水中に入るかの様に自然といてである。そうして姿をけしたのである。

「消えたか」

「消えたのではない」

魔物からの言葉である。声だけはしてきた。

「私はいる」

「ここにいるというのか」

「そうだ。ここだ」

その言葉と共にであった。

下から出て来た。死神がいるその床からだ。そうして彼を喰らわんとしてきたのだ。

「床でもというのはだ」

「そうだ。本当のことだ」

言いながら襲い掛かって来る。しかし。

死神は宙にあがった。自然に浮かんでみせたのである。

それで魔物の顎をかわした。そのうえで上から反撃として鎌イ足を鎌から放った。

だがそれは床を撃つただけであった。魔物は床の中に再び潜りその中に消えてしまったのである。

「残念だったな」

「消えたというのか」

「私は攻めることもできるし守ることもできる」

「その中に入っただけか」

「そういうことだ。さて」

あらためて死神に問うてきた。

「貴様はどうだ」

「私か」

「この様に私を攻めることはできない」

このことを言うのであった。

「守るだけだ。それではやがて限りがある」

「確かに。それはその通りだ」

それは彼も認めた。

「このままではな

「では。死ぬな」

死神からではない。魔物からの死の言葉であった。

第三十話 智天その二十

「このままだ」

「私が死ぬというのか。死神である私が」  
「神もまた死ぬ」

「魔物はその冷然たる現実を告げた。」

「だからこそだ」

「それは事実だ。だが」

「だが？」

「私が死ぬのは今ではない」

「着地しながらの言葉である。ゆうりとした着地である。」

「少なくともだ」

「私に倒されることはないか」

「決してな」

「今度は断言であつた。」

「それは言っておく」

「自信だな」

「魔物はその彼のことは聞いて述べた。」

「そうとしか言い様がない」

「その通りだ。私には自信がある」

「そのことを自分から言いもする。」

「貴様に倒されず。それに」

「それに？」

「貴様を倒す自信がある」

「確かにだな」

「そうでなければ言いはしない」

「実際に自信に満ちた言葉になっていた。」

「何があるうともだ」

「ではだ」



「では？何だ」

「あらためて問おう」

声だけである。やはり姿は隠されている。そのプールの床の中に  
潜り込んで、である。

「どうやって私を倒すのだ」

「それか」

「貴様は床の中に入ることはできない筈だ」

「如何にも」

ここでもありのままに話す死神だった。

「私はその術は知らない」

「そうだな」

「水の中で自由に動くことはできてまだ」

「それはできないな」

「それはその通りだ」

このことは認めるのである。

「しかしだ」

「しかし？」

「それでも貴様を倒すことはできる」

言葉は動かなかった。不動のままである。

「必ずだ」

「面白いことを言うものだ」

こっちは言ってもその声は笑っていなかった。真剣なものである。

「死神というものはだ」

「面白いというのか」

「そうだ。私の世界に入らずに私を倒すというのだからな」

「その言葉の通りだ」

「何っ！？」

「私の言いたいことはそれだ」

今の魔物の言葉に対してであった。

「それこそがだ」

「どついつことだ」

「来い」

今は答えずに誘うだけであった。

「来ればそれでわかる」

「わかるというのか、それで」

「知りたいのならば来ることだ」

場所も動かない。両手でその大鎌を持ったままである。そのうえで床の中にその姿を隠している魔物に対して告げるのである。

「それでわかる」

「その言葉確かに聞いた」

魔物もこう返すのだった。

「訂正するつもりはないな」

「ない」

今度は僅かな言葉で、かつ完全に否定してみせた。

「何かあるうともだ」

「そうか。それならばだ」

声が動いた。そして気配も。

第三十話 智天その二十一

「その言葉が偽りであることを示そう」

「どちらの言葉が偽りなのか」

やはり動かない死神だった。そのうえで魔物に応え続けている。

「すぐにわかることだ」

「行くぞ」

その言葉と共にさらに気配が動く。そうして。

後ろからだった。魔物は死神を頭から飲み込まんと飛び出てきた。それはまさに水面から出て来る動作であった。それで一気に勝負を終わらせようとしていた。

しかしである。死神はその彼を背にしてである。こうやってきたのだった。

「こういうことだ」

「何っ!？」

「この時を待っていた。そう」

「そう!？何だというのだ?」

「この時で決着がつく」

言葉を言い終えると共に振り向く。それと共に両手に持っている大鎌を横に一閃させた。右回転に振り向きまさに一気にであった。飛び出てきていた魔物の身体を一閃した。それで終わりであった。動きを止めた魔物の身体は忽ちのうちに赤い炎に包まれていつていた。魂を刈られた何よりの証であった。

その魂を刈られたうえで。魔物は死神に対して問うのであった。

「何故だ」

「何故だとは?」

「何故私を倒せた」

問うのはそのかなりシンプルなことについてであった。

「何故私を倒せた」

「貴様は言った」

死神はその魔物に顔だけでなく身体全体を向けたうえで告げてみせた。

「貴様の世界に入らずにどうして貴様を倒せるのかとな」

「そのことか」

「そうだ、そのことだ」

まさにそれだというのである。

「確かに私は貴様の世界に入ることにはできない」

「それはその通りだな」

「しかし貴様は私の世界に入ることができる」

言葉が逆になっていた。それをあえて語ってみせるのである。

「そこに入れば私は貴様を倒すことができるのだ」

「貴様の世界だからだな」

「その通りだ」

「成程な」

それを聞いてまずは頷いた魔物だった。

「それは迂闊だった」

「私を倒すには私の世界に入る必要がある」

死神はその厳然たる事実を話す。

「だからこそだ」

「それはわかった」

魔物はそこまで聞いた。

「それではだ」

「わかったならばだ」

「私はこれで去ろう」

赤い炎に包まれながら述べたのだった。

「これでだ」

「さらばだ」

魔物は赤い炎の中に消えた。死神はその炎の輝きを背で受ける。そのうえで闘いを終えるのであった。

そして髑髏天使は。道化師の複数の攻撃を受け続けていた。

「さあ、どうでしょうか」

「そろそろですか？」

「疲れが見えてきたのではないですか？」

攻撃は今も繰り返し続けていた。

「そうではありませんか？」

「少しでも感じたらそれからですよ」

「あらたなシヨーンのはじまりです」

「あらたなシヨーンだと」

髑髏天使は攻撃をかわすその中で魔物達に対して問うた。

「それがはじまるというのか」

「はい、貴方が敗れる場面がです」

「それがはじまります」

「ですから」

こう言ってきたのである。

「それがシヨーンになります」

「おわかりですね」

「貴方はそれによつてです」

「わからないと答えておこつ」

だがここでも髑髏天使は髑髏天使であった。こつ返したのである。

「それはだ」

「まだそう言えるのですか」

「それはまた」

「見事ではありませんが」

「しかし」

「しかし？」

さらに言ってきた道化師達であった。

### 第三十話 智天その二十二

「だからこそ闘いがいがあります」

「そうした方ですから」

「全くです」

こう言つて彼に攻撃を浴びせ続けていく。そして遂にであった。前から来た剣に左肩を切られた。それがはじまりであった。

「むっ」

「さて、まずは最初です」

「一撃目ですね」

「それが決まりました」

「こう言つていくのである。」

「こうしてです」

「さて、次もですよ」

「一撃目が決まればそこからまた」

「ほら」

言っているその傍からであった。二撃目はその右足に来た。そこから血が流れる。

続いて三度目もであった。今度は背に。髑髏天使は確実にダメージを受けていた。

動きも鈍つてきた。傷口から血も流れる。危ういのは明らかであった。

魔物もそれを察してだ。笑いながら言ってきたのである。

「では私が」

「勝ちます」

「そして勝者に」

「髑髏天使の力を」

彼等は勝利を確信していた。間違はなく。

だがここで。髑髏天使は踏み止まった。そうしてであった。

「まだだ」

「まだ？」

「諦めないというのですね」

「俺の辞書に諦めるという言葉はない」

「こつ返す彼だった。」

「それは言っておく」

「では見せてもらいましょう」

「是非」

魔物達の言葉には感嘆さえあった。

「貴方のその闘いをです」

「是非共ここで」

「見させてもらいます」

「残念だが最後ではない」

「ここでまた言うのであった。」

「貴様に勝つ」

「私に勝つと」

「しかしどうやって」

「その傷で」

「この程度の傷は傷ではない」

その言葉の間にも剣を受け続けていく。それで全身血だらけになっている。しかしそれでも立っていた。目の光も消えてはいなかった。

そうしてである。彼は言った。

「俺は死なない限りそれは傷とは言えない」

「では」

「まだ立ちそして」

「闘われると」

「行くぞ」

毅然として告げてみせたのだった。

「倒す」

一言であった。

「何があるうともだ」

「むっ!?!」

「これは」

髑髏天使が言ったその瞬間だった。

魔物達は感じ取った。彼のその変化にだ。

「どうやらここで」

「貴方は変わられるのですね」

「また」

「!?!まさか」

そしてだった。髑髏天使自身もそれを感じ取ってだ。言葉に出すのであった。

「この力は」

己の中に力がこみ上がって来るのを感じ取ったのである。

「まさかここでまた」

「今は座天使なら」

「そしてその上となると」

「いよいよ」

魔物達は攻撃の手を止めていた。それぞれ着地してそのうえで髑髏天使の様子を見守るようになっていた。その彼に起こるうつつとしていることをだ。



### 第三十話 智天その二十三

その彼がだ。今変わったのであった。

身体が光った。白い、いや銀色の光に包まれた。その光は周囲も包み込みそのうえで彼に襲い掛かってきていた全ての剣を消したのであった。

「剣までも」

「私達の剣も全て」

「消し去ったというのですか」

「これがか」

光の中で髑髏天使の声が出てきた。

「これが俺のあらたな力か」

「その姿は」

「それが」

「そしてだな」

その中でまた言う髑髏天使だった。

「俺自身もまた」

「そうですね。それが」

「光の天使」

「智天使ですか」

光が消えてそこに彼がいた。白銀の甲冑と半ば透き通った水晶を思わせる髑髏の顔に翼は四枚であった。その天使がそこに立っていた。

「その姿が」

「九つの階級の中での二番目の天使」

「それが智天使ですか」

「この力はだ」

その智天使になった彼の言葉である。

「どうやら今までの力とは違うな」

「その様ですね」

「それは確かに」

「先程までとは全く違います」

それは魔物達も感じていた。その気配からである。

「そしてその力で」

「私達を倒す」

「そうされるといいますか」

「そうだ、倒す」

その水晶を思わせる顔での言葉だった。

「貴様等をだ」

「それでは」

「また闘われるのですね」

「私達と」

「それを止めるつもりはない」

闘いについての考えは変わらなかった。姿が変わってもである。

「決してだ」

「決してですか」

「やはり髑髏天使だからですね」

「だからこそ」

「また言っておこう」

彼は峻厳でさえあるその声で魔物達に話してきた。

「俺は闘うからには勝つ」

「勝つというのだな」

「そうだ。勝つ」

そうしてであった。両手に持っているその剣を構えてだった。闘いに入るうとしていた。

魔物達もであった。その手に持っている剣を構えた。そのうえで再び一人になるのだった。

それぞれの身体が重なり合いそうして。元の道化師一人になったのである。

「一人になったのか」

「下手なシヨールはできなくなりましたので、  
そうだったというのである。」

「ですから」

「シヨールができなくなったというのか」

「そう、下手なものはです」

「それはどういう意味だ？」

「言葉通りです」

笑いながらの言葉であった。

「私のそのままの純粹な力で、です」

「俺を倒すというのか」

「はい、シヨールを見せて差し上げます」

こう言つてであった。剣を構え。駒の如く回転して跳び上がり。  
そのうえで向かつてきたのであった。

「さあ、どうされますか？」

「それで切り刻むつもりか」

「その通りです。どうされますか？」

笑う声で髑髏天使に対して問うてきた。

「この攻撃に対しては」

「どうということはない」

髑髏天使は自身に急降下を仕掛けてくるその存在に冷静に返すだ  
けであった。彼を見上げてそのうえでだ。冷静に言うだけである。

「何故ならだ」

「何故なら？」

「俺は貴様を確実に倒せる」

彼を見上げたまま告げた。

### 第三十話 智天その二十四

「確実にだ」

「では」

その声を聞いてすぐに返してきた魔物であった。

「どうされてですか？どうして私を倒すのでしょうか」

「受けるといい」

髑髏天使は身構えた。その両手の剣をだ。

そうして全身に力を溜めてだ。下から上に。

一気に飛んだ。跳んだのではなかった。

一陣の、それも光り輝く風となつてだ。突つ切つたのであった。

勝負は一瞬であつた。竜巻と光の風が交差し。

それで降り立つたのは。彼であつた。

髑髏天使は降り立った。その背中で魔物は切り裂かれていた。その身体でかろうじて立っていた。既に青白い炎を発してきていた。

「この通りだ」

「わかりました」

背中合わせでの言葉に応える魔物であつた。

「それもよく」

「勝負は一瞬でつく」

また言う髑髏天使であつた。

「まさにだ」

「そうですね。ただ」

「ただ。何だ」

「それだけの力を持たれるとは」

最後の力で髑髏天使に顔を向けていた。髑髏天使もまた彼に顔を向けてきていた。

「最早それだけの力はです」

「どうだというのだ？」

「人ではありません」

「人ではか」

「そう、最早人ではありません」

言っているその間にもであった。魔物の身体は青白い炎に包まれていく。断末魔のその中でも声を発しているのであった。

「魔物。いや」

「いや、何だ？」

「神に近付こうとしていますね」

それだというのである。

「私達の神に」

「魔神にか」

「力はです」

そしてそれだけではないとも言っているのであった。

「そして心も」

「心もか」

「そこまで鬨いに迎えるその心」

「それがか」

「はい、まさに人ではなく」

「魔神か」

今度は髑髏天使から言ってみせた。

「それになるうとしているか」

「そうです。さて、では私は」

「死ぬのだな」

「では」

最後に一礼した。それもまた優雅な一礼であった。それをしてから。

彼は青白い炎に全身を包まれた。その中に静かに姿を消した。髑髏天使はそれを見届けてから姿を牧村のそれに戻した。しかしであった。

「そのままだな」

「何っ!？」

「目はそのままだな」

死神が彼の前に来ていた。そうしてそのうえで言ってきたのである。

「髑髏天使の時のままだな」

「何が言いたい」

「今言つたままだ」

髑髏天使を見据えての言葉である。

「貴様の目は闘いをしていた時そのままになっている」

「戯言だな。俺は決して」

「自分でそれを否定するのならいい」

それはいいという。

「だが。私が言ったことはだ」

「事実だというのか」

「そうだ。私は嘘は言わない」

「では見間違いだな」

「だとすればいいのだがな」

あくまでそうではないと言っていた。そのうえで牧村を見て告げてきているのであった。

### 第三十話 智天その二十五

そうして彼から一旦目を放して。静かにこう言ってきた。

「それではだ」

「ここから出るのだな」

「闘いが終われば用はない」

それはその通りだという。

「それではだ」

「では。ここから出るのだな」

「その通りだ。まさか泳ぐ訳でもあるまい」

「水泳にも興味はある」

いささか冗談めいて言葉を返しはした。

「しかし今泳ぐ用意はしていない」

「では帰るのだな」

「そうさせてもらう。また窓を出てだな」

「後は眠らせている人間達を起こすだけだ」

それで全て終わるといふ。実にそ素っ気無い調子であった。

「わかつたな」

「俺はそれでいい。それではだ」

「帰るとしよう。だが」

「今度は何だ？」

「私は今は人は刈らない」

今度言ってきた言葉はこれであった。

「だが。魔物ならば違う」

「魔物ならばか」

「それだけは言っておく」

彼から顔を放したまま窓の方に歩いていく。見ればまだ窓には穴が開いている。まるで水飴の様に溶けたその穴はそのままであった。「ではな」

「言いたいことはそれだけか」

「私からは何も無い」

「僕としてはね」

今度は目玉が出て来て彼に声をかけてきた。目玉は彼を見てきている。そのうえでの言葉である。

「まさかこんなに早く智天使になれるなんてね」

「そのことが」

「凄いつていうより怖いね」

「こう言ってきたのであった。」

「それってね」

「怖いというのか」

「段々人間離れたものを感じてきているっていつかね」

「それは無い」

「ないって？」

「俺は人間だ」

一言であった。こう言ってみせた牧村だった。

「それだけだ。他の何者でもない」

「だといいいけれどね。じゃあね」

「行くでしょう」

「うん」

死神の言葉にも応える。

「それじゃあね。君も出るんだよね」

「すぐに行く」

「君が出たら窓も元に戻して人も起こすから」

「そうか。ではすぐに出よう」

目玉のその言葉に頷いた牧村だった。そうして彼も前に出た。

そのままプールサイドを出る。窓は元に戻り人々も起きた時には二人はもうプールの駐車場にいた。死神は既にヘルメットを被りハ―レーに跨っていた。

「それではだ」



「帰るのだな」

「そうだ。ただしだ」

「さっきの言葉か」

「覚えておくことだ」

今はこう言うだけであった。

「わかったな」

「一応覚えておこう」

牧村の方も言葉を返しはした。

「それではな」

「まただ」

これで話を終えて死神は去った。牧村もであった。彼等が姿を消した後は普通のプールがあった。そこにはるのは日常だけであった。他には何もなかった。

### 第三十話 完

2010・1・26

### 第三十一話 赤眼その一

髑髏天使

#### 第三十一話 赤眼

「早いのが」

「言われた」

また研究室で牧村が博士に答えていた。いつも通り妖怪達が彼等の周りにいてやはり酒を飲んでいたり菓子を食べていたりしている。全てがいつもと同じであった。

「死神や目玉にもだ」

「ああ、あの目玉はじゃ」

「あれも神か」

「そうじゃ、神じゃ」

そうだと答える博士だった。

「あれの正確は名前はだ」

「何だというのだ？」

「眠りの神なのじゃ」

「そして監視の神か」

「左様じゃ」

まさにそうだと話すのだった。

「魔物に見えたか」

「どちらかといえば妖怪に近い」

牧村が感じたのはそれであったのだ。

「そう感じたがな」

「そうなのか。妖怪か」

「妖怪だな。もっとも神なのはわかっていたが」

「それならばよいがな」

「それでだ」

ここで牧村は話を変えてきた。戻したといってもいい。

「俺のことだが」  
「智天使になつたのじゃな」  
「そうだ、それは早いのだな」  
「今までここまで早いのはなかつたじゃろつ」  
「そこまでか」  
「文献にある限りではない」  
「それはないというのだった。博士はだ。」  
「全くじゃ」  
「ないのか」  
「そうじゃ。そもそも智天使自体になつた者も少ない」  
「少ないか」  
「稀になつた者いるだけじゃ」  
「そうである」と牧村に話す。  
「本当にな。しかし」  
「しかし？」  
「君はなつた」  
「こう牧村に話すのだった。」  
「それ自体が驚くことじゃ」  
「そうなのか」  
「そしてじゃ」  
「そして？」  
「その智天使のことじゃが」  
「今度は博士から話を変えてきた。その天使のことに話をやるのであつた。」  
「その智天使とはだ。博士は話すのである。」  
「キリスト教の世界では座天使までは普通の天使の姿をしておる」  
「あの翼を生やした姿だな」  
「そうじゃ。座天使まではじゃ」  
「彼が前までその階級にあつたその座天使である。」  
「しかし」

「しかし？」  
「智天使から違ってくるのじゃ」  
「残り二つの階級はか」  
「神に近いだけではない」  
「それだけではないとも話す。  
「その力もじゃ」  
「かなり違ってくるのか」  
「それは姿にも表れてきている」  
「あの天使の姿ではないのか」  
「かつては翼を持ち人の顔を持つ獅子の姿をしておった」  
「そうだったというのである。  
「そして後はじゃ」  
「他の姿もあるのか」  
「四枚の翼を持ち」  
「あの俺の姿と同じか」  
「そしてじゃ」  
さらに話す博士だった。

### 第三十一話 赤眼その二

「顔は四つじゃ」

「顔もか」

「人に鷲に獅子に牛じゃ」

その四つだという。

「それぞれが持っている力を表しておるのじゃ」

「そうなのか」

「こうした姿になっておる」

「まさに異形だな」

「その力もじゃよ」

それもだというのである。

「まさに異形の天使じゃ。少なくとも人間とはかけ離れてしまつてきておる」

「人間とか」

「まだ智天使についてはわしもよく知らん」

博士は髑髏天使の階級としての智天使にはこう述べたのだった。

「これから調べるからのう」

「済まないな」

「だが」

しかしであった。ここで不意に言うのであった。

「その力はじゃ」

「力は」

「これまでの天使の比ではない」

「それはわかるのか」

「文献に出ておつた」

こう牧村に話す。その前には今度は羊皮紙の分厚い本があった。

まるで辞書の様に分厚い。その本を前に置いてそのうえで話すのである。

「この本にじゃ」  
「今度は何処の本だ」  
「スペインの本じゃ」  
「スペインか」  
「そう、スペインじゃ」  
まさしくその国だという。  
「スペインの本なのじゃ。カスティーリヤの頃じゃな」  
「カスティーリヤというのだ」  
「あの国の統一前じゃ」  
その頃だという。スペインはカスティーリヤとアラゴンが連合してできた国である。そうして一国になり現在のスペインになったというわけである。  
「その時の本じゃ」  
「何世紀の本だ、それで」  
「十四世紀じゃな」  
その頃だという。  
「その時の本じゃ」  
「結構古いな」  
「古いぞ。文字はラテン語じゃ」  
「ラテン語も読めたな」  
「言語も得意分野じゃぞ」  
言いながらその本を開いてみせる。手書きでかなり古い文字なのがわかる。その古ぼけた羊皮紙にその文字が細かく書かれていた。博士はその本を開きながらだ。牧村にこう言ってきた。  
「この文字がまたな」  
「読みにくいか」  
「書かれていることも文章が下手でじゃ」  
首を振りながらの言葉である。  
「それにじゃ」  
「文章だけではないのか」

「やたらと小難しい言葉ばかり使っておる」

「理解しにくいか」

「ラテン語を知っている者でも難しい」

今度は苦笑いしながら述べた。

「おまけに文字まで汚い」

「最悪なのか」

「読むのが難しい。極めてな」

「文章や単語だけでなくか」

「その二つもじゃ」

ここで日本のある作家を話に出してきた。その作家は。

「大江健三郎の文章じゃな」

「大江か」

「そうじゃ。大江じゃ」

それだというのである。

「あそこまで難しい、大江の小説はただ難しいだけじゃがな」

「大江は嫌いか」

「嫌いじゃ」

はつきりと言い切る博士であった。

「ついでに言えば吉本隆明も嫌いじゃ」

「あの男もか」

「どちらもその人間性も嫌いじゃが」

要するに全否定である。

### 第三十一話 赤眼その三

「何を書いておるか全くわからんじゃろ」

「吉本もそうなのか」

「最初の頃の文章を見てみるといい。実にわかりにくい」

「そこまでか」

「吉本隆明は読んだことはないのじゃな」

「哲学書はあまり読まない」

「こつ返す牧村だった。その言葉は素っ気無い。」

「だから吉本だ」

「まあ読んでもいい」

「いいのか」

「大江もそうじゃがな」

つくづくこの二人が嫌いな博士であった。言葉の端々にその感情が浮き出ている。その言葉を聞いているとそれがはっきりとわかるものだった。

「あんなものはな」

「確かにな。俺も大江は好きじゃない」

「読んでみてか」

「そうだ。わかりにくいだけだ」

やはりそうだというのだった。彼もだ。

「それにだ」

「それに？」

「俺もあいつの人間性は嫌いだ」

彼もであった。

「言っていることから見られる人間性はだ」

「そうじゃな。あれはな」

「しかし吉本もだったか」

「まともな人間の行き着く先はオウムの筈がなかつた」



吉本隆明がかつてオウム真理教とその教祖である麻原という男を  
賛美していたことを批判しているのである。これは紛れもない事実  
である。その発言も残っている。

「それでは精々その最盛期も知れておる」

「知れているか」

「そうじゃ、知れておる」

こう言つて切り捨て続ける。

「読まんでも死ぬものでもないしな」

「そうだな。それに俺は哲学を専攻しているわけでもない」

「大江はどうじゃ？」

「学ばなくてもいい状況だ」

こう返すのであった。

「二度と読むつもりはない」

「わかった。それはいいことじゃ」

「それでだ」

大江健三郎と吉本隆明のことから話を戻してきた。

「その本に書いてあるのだな」

「左様。智天使の力はそれまでと比べて隔絶たるものがある」

「隔絶か」

「その証拠に翼が四枚あるな」

「ああ」

「それがその象徴なのじゃよ」

翼にこそそれがあるのだというのだ。

「その翼の数にな」

「ただ多いただけではなくか」

「無論。天使の力は翼にこそある」

ここでこのことも話してみせたのである。

「翼があるからこそその天使じゃよ」

「ではその翼がなくなれば天使ではないのか」

「そついう訳でもない」

今の牧村の言葉は少しばかり否定した。

「現に君がなりたての頃は翼はなかったな」

「それか」

「左様、翼がなくとも天使は天使じゃ」

「ただ力が違うだけか」

「そうじゃ。また天使は翼をなくそうがすぐに生えるものなんじゃよ」

「生えるのか」

このことは牧村にとっては思わぬことであつた。翼は切られたり引き千切られるとそれで終わりだと思つていたからだ。だがそれは違ふというのである。

「なくしてもまだ」

「そうじゃ、天使は人とはまた違つてじゃ」

「翼を切られたり引き千切られてもか」

「自然に回復して生えるのじゃ」

「それは翼だけか」

「いや、他の場所もじゃ」

そうした場所もだというのだ。

### 第三十一話 赤眼その四

「腕にしる足にしるじゃ」

「生えるのだな」

「それこそ首を飛ばされでもしない限りは生きることができ」

「首をか」

「まあ君もじゃな」

髑髏天使である彼にもというのである。

「普段の身体に比べて回復は早いじゃろ」

「確かにな」

自分のことを言われると理解できた。確かに髑髏天使の時は人である時と比べてその回復力が尋常ではない。瞬く間に治ってしまうのである。

それを思い出してみてだ。さらに話す彼であった。

「そういうことか」

「また言うが人と天使は違うじゃ」

実際にまた言ってきた。

「何もかもがじゃ」

「だからか。力の源の翼もか」

「何度でも生える」

三度目のこの言葉であった。

「それは安心している」

「そうか。それでだ」

「翼の数じゃな」

「それが」

まさに博士の指摘の通りであった。八条が今応えるのはそこであった。その翼の数のことである。智天使になり四枚になったその翼のことである。

「四枚になったということは力は二倍か」

「座天使のな」

こう言われるのだった。

「その二倍じゃ」

「座天使のか」

「そうじゃ。二倍の強さがある」

その智天使と座天使とではというのだ。

「二倍じゃ」

「道理でだな」

それを言われるとであった。牧村も納得できた。道化師との闘いにおいて発揮されたあの驚異的な力のことである。そのことに対して納得できたのである。

「あれだけの力があつたのか」

「まあわしは君の闘いを見てはおらんがな」

「わかるよね、それはね」

「そうだよね」

「見ただけだね」

ここで妖怪達が口を開いた。そうしてそれぞれ言うのだった。やはり今も酒を飲んだり菓子を食べたりしている。研究室のあちこちに車座になつて座りつも通りである。

「牧村さんが強くなつたのはね」

「見れば充分わかるよ」

「わかるし感じる」

「そうそう」

こう言つていくのだった。牧村はその話を立つて壁に背をもたれかけさせたいつもの姿勢で聞いているのだった。そうしながらである。

「見ただけでか」

「わしはわからんがな」

博士はあくまでこう述べる。

「そうしたことはわからん」

「戦闘力等はか」

「それをわかるのはこの連中じゃよ」

友人を見る目で妖怪達を見回しながらの言葉である。

「わしてではない」

「そうか」

「そうじゃよ。さて」

「ああ」

「君のその強さは格段にあがった」

またその話に戻った。

「二倍じゃよ、よいな」

「二倍か」

「それまでは段階的に強くなってきたが格段にあがった」

それが大きな違いなのだという。

「その力、上手くコントロールするようにな」

「コントロールはしてみせる」

「だといいがな。まだこの文献にしる他の文献にしる解読中じゃが」

「それはか」

「そうじゃ。じゃがひよっとしたら」

ここで博士は首を傾げさせであった。こう言ってきたのである。

### 第三十一話 赤眼その五

「あまりにも強い力じゃ。コントロールできなかつたり飲み込まれたりすれば厄介なことになってしまいかも知れんわ」

「厄介なことか」

「ひよつとしたらじゃがな」

こうした前提は置いていてもそれでも話すのであった。

「そのことも注意しておいてくれ」

「わかった」

牧村も頷きはした。

「それではな」

「とにかく智天使については殆どわかつてはおらんのじゃ」

「まだまだか」

「左様。少し待っていてくれ」

「わかった。ではそうさせてもらう」

「そしてじゃ」

博士はここまで話したところで話題を変えてきた。

「今日のお菓子じゃが」

「今日は何だ？」

「支那のものじゃが」

随分と古いと言える言葉を出してきたのだった。

「月餅じゃ」

「支那か」

牧村が最初に反応したのはこのことだった。

「また随分と古い呼び方だな」

「少し使ってみた」

「それだけか」

「特に他意はない。ついでに言えば悪意もない」

「別にそう断らなくてもいいと思うが」

「何かと五月蠅いのがいるからじゃ」

それを今の言葉の理由とするのだった。

「やれそれは差別用語だの言っではいけないだのとう」

「別に今の言葉は差別用語でもないのではないのか？」

「無論違つ」

それはきつぱりと否定した博士だった。

「例えば英語ではチャイナと呼ぶな」

「陶器が語源だったがな」

「茶という者もおるようじゃがな。まあとにかくじゃ」

「そこから来た言葉で差別用語ではないな」

「秦が支那になったという話もある」

言つまでもなく中国の統一王朝の一つである。あの始皇帝の秦である。なお秦は彼が築いたのではない。遙か春秋時代より存在している国である。

「とにかくじゃ。仇名みたいなものでもあつて」

「差別用語ではないな」

「左様、わしにしる中国と呼ぶのが普通じゃがな」

「またあえて使つてみたのだな」

「使つてみたくなつたのじゃよ」

「たまたまだな」

博士の悪戯心によるものと察したのである。ささやかな悪戯心である。

「それは」

「左様じゃよ。それでじゃ」

「中国の菓子か」

「うむ、その中国のじゃ」

ここでは中国と言つてみせたのである。

「その月餅じゃ」

「美味しいのか、それで」

「美味しい」

今度の言葉は断言であつた。

「何しろ中華街で買って来たやつじゃからな」

「神戸のか」

「あの中華街はよい」

にんまりと笑いながらの言葉だつた。髭が自然と動いている。

「何を食つても美味しい」

「時々行っているのか」

「時々どころではないな」

それには留まらないというのだった。

「それこそ最近は特にな」

「しょっちゅうか」

「行つておるよ。やはりいい場所じゃ」

それを言うのである。

「何しろ麺類も飲茶も炒飯も全てよいからな」

「全部か」

「蒸し餃子を酒でな」

「酒でか」

「君は飲まなかつたな」

「そつだ、飲まない」

彼は根っからの甘党である。だから酒はやらない。体質としても受け入れないのである。



### 第三十一話 赤眼その六

「それはだ」

「そうじゃったな。しかし飲茶は好きか」

「正直に言おうか」

「うむ」

「好きだ」

そお通りだというのだった。

「麵も炒飯も好きだ」

「では一度行ってみたらどうじゃ？」

今度はにこやかな笑顔になって彼に行ってきた。

「中華街にじゃ」

「そうだな」

言葉を一ステップ置いてからであった。

「それも悪くないな」

「その通りじゃ。美味しいものは食べに行くに限る」

「だからか」

「この月餅を売っている店も紹介するぞ」

博士はその月餅をビニールから出してそのうえで口の中に入れていた。薄く固生地の中に白っぽい独特の餡が入っている。それを食べたのである。

「どうじゃ？」

「頼む」

それを是非という牧村だった。

「これは美味い」

「あつ、もう食べてるんだ」

「早いね」

妖怪達が牧村がその月餅を食べているのを見て言ってきた。当然彼等も食べている。笑顔でその中国の菓子を口に行っているのである。

そうしながら。妖怪達はさらに言ってきた。

「それでだけれどね」

「牧村さん何を食べるつもり？」

「その中華街で」

「行ってから決める」

そうするとうのだった。

「ただ。一人で行くのはな」

「面白くないというのか」

「そうだ。誰かと一緒に行くか」

「ふむ。それならじゃ」

ここで博士は明るそうに言ってきた。

そうしてだった。こう言ってきたのである。

「男同士で行くのもいいが」

「それよりもか」

「彼女と行く方がいいぞ」

こう言ってみせてきたのである。

「それならじゃ」

「女とか」

「牧村さんもてそうだけれどね」

「そうだよね」

ここでまた言い合う妖怪達だった。

「顔いいしね」

「背は高いしスタイルもいいし」

「人間は外見はどうでもいい」

牧村はその彼等にこう述べてきた。

「そうしたものはだ」

「あれっ、いいんだ」

「顔とかはいいんだ」

「顔がよくとも心が腐っていればだ」

こう言うのである。

「それで何にもならない」

「何か深い言葉だけれど」

「過去に何かあったのかな、やっぱり」

「そんな感じの言葉だね」

「なかつたと言えは嘘になる」

そして次の言葉はこうしたものだった。

「それはだ」

「そうなんだ。やっぱりあったんだ」

「そんな感じだったけれど」

「そうだったんだ」

妖怪達はその彼の今の言葉を聞いてまた言い合った。

「まあ顔がよくてもね」

「人間も妖怪も性格が悪かったら」

「それでどうしようもないし」

「そしてだ」

牧村はさらに言ってきた。

### 第三十一話 赤眼その七

「人間は性格が顔に出て来る」

「ああ、そうだよね」

「確かにそれはね」

「あるよね」

これは妖怪達にもわかることだった。

「人間も妖怪もだけれどね」

「顔にそうしたもの出るよね」

「もう性格が悪いと」

「自然と顔に出るからね、本当に」

「感情は顔に出る」

牧村はまた言ってきた。

「それによつて顔が作られるからだ」

「顔が歪んでいってね」

「物凄く悪い相になるよね」

「そうそう、テレビに出て来るニュースキャスターとかに多いよね」

かなり具体的な話であった。

「二十年位前は普通の顔だったのにね」

「物凄く嫌らしい顔になったりね」

「人相悪くなるよね」

「だからだ。まずは性格だ」

何度もこう言つていく牧村だった。

「性格をまず見る」

「それで牧村さんの彼女も」

「性格美人なのかな」

「まあそうみたいだけれどね」

妖怪達の言葉はさらに続く。そしてこうも言つのであった。

「こんな無愛想な人と付き合えるんだからね」

「中身はしつかりしていてもね」

「無愛想極まりないから」

彼の無愛想さについての言葉であった。

「正直なところね」

「僕こんな無愛想な人見たことないよ」

「私も」

「わしもじゃ」

このことには見事なまでに一致するのだった。

「全然笑わないし」

「言葉もぶつきらばうだし」

「最初こんな人いるのかって思ったよね」

「全くだよ」

「そうか」

そしてそれを言われてもどうということはない牧村だった。

「俺はそこまでか」

「って自覚してないし」

「何でこれで人付き合いができるのかな」

「やっぱり中はしつかりしてるからから」

「みたいだね」

何となくだがこれはわかった。

「意地悪でもないし」

「結構気を配ってくれるし」

「親切だしね」

「気前も悪くないし」

それが彼だった。確かに愛想はないがそうしたことにはするのである。

「全然笑わないけれど」

「全然無口なことでもないしね」

「こんな変わり者の博士とも付き合ってるし」

「今度はわしか」

話を振られた博士は苦笑いを浮かべて述べた。

「全く。どうなのじゃ」

「だって博士だってね」

「凄く変わってるし」

「奇人だよね」

「それか変人」

妖怪達も博士にはこんな認識だった。

「仙人みたいだし」

「そもそも人間としては桁外れに長生きだしね」

「百歳超えてるんだよね」

そしてまた年齢の話になるのだった。

「実際幾つなの？」

「百幾つなの？」

「百十は超えておるかのう」

博士は自分のその長い髭の顎に左手を当てて述べた。

「そういえばじゃが」

「自分の年齢はつきりわからないって」

「そこまでの歳っていうのも」

「人間にしては珍しいし」

「実際に覚えておらんのじゃ」

そつだというのである。

### 第三十一話 赤眼その八

「これがよくのう。まあ確か」

「確か？」

「それで？」

「そろそろ天海僧正の歳じゃったかな」

江戸時代初期の怪僧である。その出生も全半生も謎に満ちている。そのうえ能力についても様々なことが言われている。非常に謎の多い人物なのは間違いない。

「確か」

「ああ、あの不気味なお坊さんだね」

「あの人の歳なんだ」

「一応戸籍ではじゃ」

「百十七歳になってますよ」

ろく子の首が伸びてきて話してきた。

「そちらでは」

「経歴でもそうじゃったかな」

「はい、そうなっています」

一応そういう年齢になっているのだという。

「その通りです」

「ふむ。左様か」

それを聞いて納得した顔になった博士だった。

「もういよいよ肩を並べるのじゃな」

「やっぱり仙人じゃないの？」

「ねえ」

妖怪達はここでまた話した。

「人間でそこまで生きてるなんてね」

「まずないし」

「しかも背筋だっけしっかりしてるしね」

「人間とは思えないから」

「まあ長生きなのは事実じゃな」

流石にそれは否定できなかつた。当人でもだ。

「しかし思えば明治も遠くなつたのう」

「もう生きてる人殆どいないよ」

「大正の人もね」

「人は絶対に死ぬからね」

人は死ぬ、それはまさに絶対のことだつた。誰も否定できないことであつた。

そしてだ。それを聞いた牧村がまた言つてきたのである。

「妖怪も死ぬのか」

「それはやっぱりね」

「僕達だつて生きてるんだし」

「死ぬよ」

「絶対にね」

それは彼等もだという。他ならぬ彼等自身の言葉である。

「生きてるんだから」

「生きてる限り死ぬよ」

「それはね」

「そうか」

それを聞いて静かに頷く牧村だつた。

「妖怪もか」

「ただ長生きだけだよ」

「人間と比べてね」

それだけの差だといつのである。

「生きていたら絶対に死ぬよ」

「それはもう避けられないから」

「神様は別だけれど」

「神はか」

それは聞いて納得した彼だつた。



「そうか。神はか」  
「あの十二魔神とかね」  
「死神とかはね」  
「死なないけれど」  
彼等はこの話だ。それは死なないという。  
「神様は僕達とは違うからね」  
「不死身だから」  
「例え死んでも」  
死んでも、と話されるのだった。不死身である彼等が死んだ場合はどうなるかである。  
「すぐに生き返ってくるから」  
「肉体が元通りになつてね」  
「魂も入つてね」  
「そうなるのか」  
それを聞いて言葉だけで頷く牧村だった。  
「やはり死なないのか」  
「うん、死なないから」  
「それはわかつておいて」  
「まあ知っていたとは思うけれどね」  
「知つてはいなかった」  
知っているかというところそれは否定するのだった。  
「わかつてはいた」  
「わかつてたの」  
「そつちなんだ」  
「そつだ。わかつていた」  
そちらだというのである。

### 第三十一話 赤眼その九

「わかってた。知ってるのではなくだ」

「わかってると知ってるってどう違うのかな」

「さあ」

「それはどうなのかな」

「知っているということはただ見ているだけなのじゃよ  
いぶかしむ彼等にまた博士が言ってきた。

「しかしわかるというのはじゃ」

「それはどうということなの？」

「それで」

「頭の中に入れてしまうということじゃ」

「それだということである。」

「そういうことじゃ」

「ふうん、そうなんだ」

「そういう違いがあるんだ」

妖怪達はそれを聞いて少し納得した。まだ完全ではないにしろだ。

「成程ね」

「そうなんだ」

「そういうことじゃよ。さて」

ここまで話して牧村に顔を向けてまた言うのであった。

「わかっておるに越したことはない」

「それはか」

「いいことじゃ。何事においてもな」

「わかった。ではその言葉もだ」

「わかってくれたか」

「わかるように努力する」

「ここではこう言うだけであった。

「そうさせてもらおう」

「左様か。まあそれではじゃ」

「話はこれで終わりだな」

お互いにここで言ってきた。

「俺はこれでだ」

「部活にじゃな」

「鍛錬は欠かさない」

それは何があるうともだった。牧村はもうそこに考えを及ばせていた。頭の中を切り替えてそのうえで言うのである。

「闘いそして生きる為にだ」

「いいことじゃ。それはな」

「ではだ」

こう話してからトレーニングに入る。ジャージになりそのうえでランニングの後で筋力トレーニングに入る。器具を使って腹筋をしながら一緒にいてセコンドの役割をしているその若奈の言葉を受けているのだった。

「ねえ」

「何だ？」

「最近また動きがよくなってきたわね」

彼女もジャージである。白いジャージでその手にストップウォッチやタオルを持ってだ。そのうえで彼に言ってきたのである。

「さらにね」

「変わったか、また」

「変わったわ。それもよくな」

さらにというのである。

「どうなのかって位にね」

「そこまでか」

「ええ、本当によくなくなったわ」

また言うのである。その身体をやや斜め下に寝かしてその斜面で腹筋をする牧村を見ながらだ。そのうえで話すのだった。

「ワンランクアップね」

「ワンランクか」

「全体的にね」

それは総合的にだというのだ。

「何かトレーニングはじめてからね」

「はじめてから？」

「どんどんよくなってるとは言えど最近はずいぶん  
凄くなったというのだ。」

「もう脂肪率とか全然ないでしょ」  
「かなり減った」

実際にそうだと返す牧村だった。その間にも腹筋をしている。

「実際にな」

「テニスにフェシングだからね」

「そのせいか」

「それに毎日それだけトレーニングしていたら」  
そのことも話すのだった。

「やっぱり。身体からまず余分な贅肉が取れてね」

「その分身体の動きがよくなるか」

「そういうことよ。それに牧村君って」

「どうしたのだ？」

「余分なトレーニングしないわよね」

若奈は今度はこのことを指摘した。

### 第三十一話 赤眼その十

「あくまでフェシングとテニスにだけ必要なトレーニングだけじゃない」

「それがいいのか」

「余分な筋肉はかえって邪魔なのよ」

若奈はこのことを指摘した。

「それはね」

「そうだな。動くのにあたってな」

「テニスにはテニスの」

さらに言う若奈だった。

「フェシングにはフェシングの筋肉があるから」

「では例えはだが」

「例えは？」

「野球に格闘技の筋肉をつけてはだ」

「ああ、それ絶対に駄目だから」

すぐに答えが返って来た。

「野球は球技であって格闘技とは全然必要な筋肉が違うから」

「そうだな」

「そんな筋肉は百害あって一利なしよ」

そこまでだというのである。

「そんなトレーニングとかしたら後で大変なことになるから」

「間違いなくだな」

「そう、絶対よ」

若奈の今の言葉はまさに断言だった。

「牧村君もね」

「俺もだな」

「そう、あくまで必要な筋肉だけを身に着ける」

そうしなければならぬというのだ。

「本当にそうしないと」

「何にもなりはしない」

「だから。牧村君には牧村君のトレーニングがあるから」

「わかっている」

言われずともであった。既にそれを踏まえて最初からトレーニングをしているのだ。彼にしてもそうした道理はわかっているのである。

「そういうことだな」

「変なトレーニングはしないに限るわ」

それは若奈も言った。

「さもないとかえって駄目になるから」

「食べ物」

「それは別に気にしなくていいわ」

「それはか」

「今のままでバランスよく食べてるし」

だからいいのだというのである。

「お菓子は結構採り過ぎかしら」

「その分は動いているが」

「ふふふ、そうね」

ここでは少し微笑みもした。実際のところこのことは彼女も人のことが言えなかった。彼女にしても甘いものは好きだからである。

「それだと問題ないわね」

「むしろ脂肪率はかなり減っている」

これが牧村の現実だった。

「トレーニングをするようになったからな」

「物凄いトレーニングだからね」

若奈もそれはよくわかっていた。

「実際にね」

「動けばそれだけカロリーが減る」

「そうよ。あの金田正一さんはね」

通算四〇〇勝をあげたその大投手である。彼は食事に気を使っていたことでもかなり有名である。つまり身体に気を使っていたのだ。

「一日六〇〇〇カロリー採っていたそうよ」

「六〇〇〇か」

「そう、六〇〇〇カロリー」

それだけだというのである。

「相当のものよね」

「普通の人間が確か」

「一日三〇〇〇カロリーよ」

「そうだったな」

「その倍採ってたのよ」

単純に計算すればそうなる話だった。

「監督になってからも。ロツテね」

「マリンスか」

「その時はオリオンズだったけれど」

何気にそういうことも知っている彼女だった。

### 第三十一話 赤眼その十一

「千葉にもなかったし」

「あの海風の強いスタンドではなかったのか」

「そう、まあかなり昔の話だけれど」

もう遙かな話になってしまっていた。時が為す業である。

「その時にね。選手の人達にも食べる物のことと言っていたのよ」

「その話は何処かで聞いたな」

「結構有名な話だから」

「金田さんの話もな」

それもだという。彼は尚も腹筋を続けながら話す。

「聞いたことがある。今思い出した」

「そうなの。とにかくね」

「食べるものはか」

「牧村君は物凄いカロリーを消費してるから」

そのカロリーの話だった。

「かなり食べても大丈夫よ」

「かなりだな」

「普通の人の倍は食べてもね」

「つまり俺は金田さん並に身体を動かしているのか」

「そう思うわ、私も」

具体的にそうだと。若奈も話した。

「バランスよくたっぷりとね」

「量も多くか」

「あとお酒は……飲まなかったわね」

「酒は駄目だ」

彼は下戸である。だからこのことは何の問題もなかった。彼は酒は飲めないのだ。体質として受け入れられないのである。

「そっちはだ」



「そうだったわね。じゃあそれはいいわね」

「そして煙草もだ」

「それは吸わなくて全然構わないから」

煙草はもう全否定だった。

「というか煙草はね」

「身体によくないというのだな」

「よくないどころか最悪よ」

そこまで言うのだった。またしても全否定だった。

「煙草なんて吸ったらそれこそ」

「すぐに息があがってしまうな」

「スポーツ選手には厳禁よ」

それはとにかく絶対に駄目だというのである。

「歌手でもそうだけれど」

「喉や肺に悪いからだな」

「そう、肺よ」

まさにそこであった。煙草といえばやはり肺である。肺にかなりの影響を及ぼしてしまう、肺癌の原因になっているのは伊達ではない。

「肺によくないから絶対に駄目よ」

「わかった」

それに当然といった面持ちで腹筋しながら応える牧村だった。

「それはもうな」

「まあ牧村君はお酒と煙草はやらないから何の問題もないわ」

「それでいいな」

「別に食事制限とかしなくていいから」

そしてこうも言うのだった。

「白米は駄目とかお肉は駄目とか」

「そういうことも言わないか」

「そこまでいくと極端だし」

だからだという。

「別に玄米や小魚も否定しないけれど」

「それでも制限はしないか」

「じゃあ聞くけれど」

「ああ。何だ？」

「お昼にトーストとか」

軽食である。昼食というよりは朝食向けである。

「クラッカーとか野菜スティックだけで充分？」

「いや」

すぐに否定した牧村だった。

「軽食だと後が続かない」

「だからよ。そういうことは言わないから」

「そうか」

「というか食べないとね、何でもバランスよく」

「バランスよくか」

「食べてる？」

牧村に具体的に尋ねもするのだった。

「ちゃんと」

「一応はな」

とはいっても目は少し疑問を感じるものになっていた。自分の食生活を省みてのうえのことである。

「そうしているつもりだが」

「完璧じゃないのね」

「完璧かどうかは自信がない」

こう答えるのだった。

### 第三十一話 赤眼その十二

「それはな」

「そうなの。まあここでそうだって断言したらね」

「断言したら？」

「正直信じられなかったわ」

笑って彼に話す若奈だった。

「そう言われてもね」

「そうか」

「そうよ。今話が出てそれで完璧にしてるって言われたら」

「信じられないな」

「そういうこと」

こう言いたいのだった。そして彼女も実際にそう思っていた。

それだ。若奈はさらに言ってきた。

「炭酸飲料も飲まないわよね」

「飲むがあまり多くはない」

「それも身体を作る為にはよくないから」

「コーラだな」

「それが代表でね。いいのは」

ここからは栄養の話であった。飲む場合のである。

「豆乳に」

「まずそれか」

「あと野菜ジュースに牛乳も」

「その三つか」

「果物のジュースもいいけれど」

それもいいというのである。

「その場合は百パーセントね」

「それが身体にいいんだな」

「そうよ。だからね」

若奈の話は続く。

「飲み物にも気をつけてね」

「本当に強くなるうと思うならか」

「そういうこと。まず身体からだから」

強くなるには、というのだ。

「しつかりとした身体はまず食べ物だから」

「だからか」

「これでもよ」

若奈はさらに言ってきた。

「うちの店も出すものはちゃんと考えてるのよ」

「味だけではなくか」

「そう、栄養も」

それもだというのだ。若奈はここでは明るくそして誇らしげに話している。どうやらこのことも店の自慢であるらしい。

「考えてるからね」

「そうだったのか」

「甘いものは食べていいのよ」

これは前提だった。

「そしてそれからね」

「身体を動かしてか」

「そういうこと。それで今のドリンクはね」

「スポーツドリンクではなくか」

「豆乳と野菜ジュースをミックスさせてみたのよ」 54

それだというのだ。

「それだけれどいいかしら」

「どちらも好きだ」

腹筋はまだ続けていた。かなりの数をこなしている。

「豆乳も野菜ジュースもな」

「そう、だったらよかったわ」

「今までスポーツドリンクだったのに代えたのか」

「そうなの。思うところがあってね」

「このことも話してきた。」

「それでなのよ」

「そして今の話もか」

「ええ。牧村君がトレーニングしてるじゃない」

「ああ」

「それってやっぱり強くなる為だからね」

「ただし彼が何故強くなりたいたいのか、その理由は知らなかった。そして強くならなければならぬということとはさらに知らなかった。」

「だったら。飲み物も大事だと思って」

「スポーツドリンクよりそちらの方がいいのか」

「そう思うけれど」

「また話す若奈だった。」

### 第三十一話 赤眼その十三

「どうかしら、それで」

「いいと思う。では筋力トレーニングの後でだ」  
「飲んで」

「ここでは明るい声になる若奈だった。

「よかつたらね」

「ああ、後でな」

「それで休憩してから」

それからのことも話す若奈だった。既にトレーニングのメニューやスケジュールについては完全に頭の中に入っていた。

そうしてだった。次に言うことはだ。

「フェシングの方ね」

「それだったな」

「まずはそれね」

次はそれだというのだ。

「フェシングの方の動きも凄くなってきたし」

「剣捌きがか」

「テニスだってフットワークがさらによくなったし」

「そしてさらによくなる為にはか」

「今度は食べ物よ」

まさにそれだというのである。

「食べ物をよくすればね」

「もっと違うか」

「そういうこと。牧村君もっともっとも強くなれるし」  
フェシングの話である。

「上手になれるわよ」

「そうだな。食べ物もだが」

「ええ」

「それにだ」

「ここで彼は話を変えてきた。

「今思っているが」

「今度は何なの？」

「トレーニングにだ」

「こう話してきたのである。

「水泳を入れてみるか」

「水泳もなの」

「それはどうだ」

「水泳はちよつと違うわよ」

「若奈はそれについては首を傾げさせて言つのだった。

「それはね」

「水泳は駄目か」

「駄目ではないわ」

「そうではないというのである。しかし、であった。

「けれど」

「けれど。何だ」

「フェシングやテニスとまた求められる筋肉が違うし」

「違うか」

「水泳は水に浮かばないといけないじゃない」

「これは前提であった。泳ぐからにはまず水に浮かばないとならぬい。そのまま沈むということは即ちカナヅチである。

「だからね。筋肉質だとかえって」

「駄目か」

「そうなのよ。フェシングもそうだし特にテニスは」

「やっている」と筋肉だけになるな」

「浮かびにくいんじゃないかしら」

「こう言つのである。

「だからそれはね」

「あまりしない方がいいか」

「ほら、黒人の人」

若奈は話に黒人を出してきた。

「黒人の水泳選手ってかなり少ないじゃない」

「色々なスポーツで活躍していても水泳だけはか」

「一説には人種差別もあつたらしいけれど」

これは実際に言われていることである。黒人と同じ水の中には入られないというのである。そうした人種論もあつたのである。今もこうした考えを持っている人間はいるのであろうが。

「それでも筋肉質だからね」

「水に浮かばないか」

「脂肪は軽くて筋肉は重いから」

これが前提としてあるのだった。

「だからね」

「それでか」

「どうかと思うわ」

また言う彼女だった。

「それはね」

「わかった。それではだ」

牧村はそこまで聞いて頷くのだった。



### 第三十一話 赤眼その十四

「水泳は止めておくか」

「そうした方がいいんじゃないかしら。ただ」  
「ただ？」

「牧村君泳げるわよね」

「このことは彼に問うたのだった。」

「確か。そうよね」

「泳げることは泳げる」

「こう答える彼だった。これは本当のことだ。」

「それはだ」

「そう。だったらいいわ」

「しかし水泳はトレーニングには入れない」

「ええ。ただ牧村君の身体つきはね」

「それはどうだ？」

「ジャージとか服の上からでしか見ていないけれど」

「実はそこまで深い仲にはなっていないのだ。若奈にしる彼にしる  
そうした意味では非常に奥手であると言えた。」

「それでもね。筋肉のバランスはいいと思うわ」

「そうか」

「ボディービルダーみたいな感じじゃなくてむしろ」

「ここで若奈はこう表現した。」

「仁王像みたいな感じかしら」

「あの奈良の像か」

「そう、あの感じで」

「あの逞しい阿吽の仁王像だというのである。」

「そんな感じだね」

「そうか。俺は仁王か」

「凄くいい意味での筋肉質よ」

彼はそうだというのだ。

「それでいいと思うわ」

「わかった。ではこのままフェシングとテニスでいく」

彼は若奈のその言葉を受けた。今は腹筋から背筋に変わっている。そちらも斜めになってそのうえでしている。

「その二つでだ」

「種類を多くすればいいものじゃないからね」

「じっくりとやるのもか」

「そういうことだから。それじゃあね」

「まずはこの筋力トレーニングをしてだ」

それからだという牧村だった。

「やっていくか」

「ええ、それじゃあ」

若奈はその彼の隣にいてセコンドに徹していた。彼はその彼女のサポートを受けて充実したトレーニングを行っていた。

そのトレーニングは夜も行われていた。それが全て終わり今はくつろいでいた。そのうえで自分の部屋にいる。

その彼の部屋にだ。未久が来た。そのうえで彼に言ってきたのだ。

「ねえ、お兄ちゃん」

「何だ？」

「この前ゲーム買ったわよね」

このことを問うてきたのである。

「新作の」

「それがどうした？」

「貸して」

一言であった。

「今からするから」

「今からか」

「そつよ、今から」

「」つづきののである。

「わかったら貸して」

「駄目だ」

しかし兄は妹の我儘にこう返してきた。

「今は駄目だ」

「何だよ」

「今丁度俺がやっている」

だからだというのである。

「だから駄目だ」

「今は駄目なの」

「後にしろ」

そしてこう告げるのだった。

「わかったな」

「ちえっ、今すぐ終われるのに」

「いい加減我儘を言うのは止める」

彼にしてもこう言いたかったし実際に言った。

「俺もゲームをしたいんだからな」

「それは私もよ」

妹の我儘は終わらない。あくまでこう言うのである。

「私だってそのゲームしたいんだから」

「それでも後にしろ」

「どうしても？」

「そうだ。どうしてもだ」

兄も引かない。

「わかったな」

「わかったわよ。それじゃあね」

「他のゲームを借りるのか？」

「そうさせてもらうわ」

まさにその通りだというのだった。妥協ではあった。

### 第三十一話 赤眼その十五

「それでだけれどね」

「他の適当なのを持って行け」

「何本でもいい？」

「今やっているゲーム以外なら何でもいい」

こう答えた。実際に彼は今プレイしているゲーム以外には興味がなかった。ただそれだけを集中してプレイしているのである。

「何本でも持って行け」

「わかったわ。それじゃあね」

それを聞いてであった。未久も頷いてだ。そのうえで兄の部屋の中にさらに入りソフトを何本か持って行くのであった。

そして扉のところに戻ってだ。兄の方を振り向いて告げた。

「借りたから」

「何本だ？」

「五本」

こう答えた。

「五本貰ったから」

「そうか、わかった」

「後で返すから」

このことはちゃんと言うのだった。

「それは安心してね」

「部屋に置いておいてくれたらいい」

「私の部屋は入らないでね」

妹はここでこんなことも言ってきた。

「それはちゃんとしてよね」

「俺の部屋に入ってもか」

「女の子の部屋は聖域なの」

だからだという。かなり一方的な言葉ではある。しかしそれでも

言うのだった。

「だからよ。入ったら駄目よ」

「女の部屋は誰も入られないのか」

「同じ女の子はいいわよ」

それはいいというのである。

「ただし男の子は駄目よ」

「俺もか」

「当たり前よ。お兄ちゃんも男じゃない」

だからそれは当然だというのである。

「ついでに言えばお父さんもね」

「家の男は全員駄目なのか」

「入っていい男の子は一人だけ」

しかしこうも言ってみせるのだった。

「一人だけよ」

「誰だ、それは」

ゲームをして正面を見ながらの言葉だった。

「その入っていいたった一人だ」

「彼氏よ」

それだというのだ。

「彼氏だけ、入っていいのはね」

「そいつだけか」

「とはいってもまだいないけれど」

ここではその口調が少し寂しげでかつ残念なものになった。

「これから作るし」

「そうか、わかった」

「あれっ、何も言わないの」

ここで意外な顔になる未久だった。それは何故かというのだ。

「私に彼氏ができても」

「まともな彼氏ならそれでいい」

それだというのである。

「それならな」

「そうなんだ」

「ただしだ」

しかしであつた。ここで彼は妹に対して言うのだった。

「おかしな奴には気をつけることだ」

「悪い男はつてこと？」

「悪い女もいれば悪い男もいる」

両方を言うのだった。

「悪い友人と悪い彼氏は持つな」

「両方なのね」

「悪人はそれに気付いたら避けることだ」

そうしろとも忠告した。

「わかつたな」

「まあそういうのは気をつけているけれど」

「し過ぎるにこしたことはない」

こつも話した。

「わかつたな」

「人間関係は大変なのね」

「それが一番大変だ」

「そつなの」

「最も苦勞することだ」

話はいささか哲学めいたものにもなっていた。

### 第三十一話 赤眼その十六

「生きている中でもな」

「そういうものなんだ」

「わかつてくる」

今は、という言葉が言外にあつた。

「少しづつな」

「まあ悪い男には気をつけてるから」

未久も馬鹿ではない。それはとるのである。

「私だつて変な人と付き合いたくはないし」

「それならいい」

「一応ね」

そしてこんなことも言うのだった。

「これでも夢はお嫁さんなのよ」

「結婚することがか」

「それが夢だから」

微笑んでこう話すのである。

「だからね。これでもね」

「では余計にだ」

「悪い男には引つかかるなつてことね」

もう話はわかつていた。そういうことだった。

そんな話をしてから妹は部屋を出た。牧村は暫くゲームをしていた。しかしここで不意に部屋の窓に小石が当たってきたのだった。

それに気付いて窓の向こうに顔をやるとだった。そこに死神がいた。彼は宙に浮かんで窓の外に立っていた。小石の主は言うまでもなかった。

「今からか」

「そつだ。もうわかるな」

「言うまでもない」

「こつ返す牧村だった。」

「それはもうな」

「そうか。話がわかってきたな」

「貴様は闘いになる時に姿を現わす」

彼にこのことを告げた。

「それならだ」

「他の時にも姿を現わしているが」

にこりともせず彼に告げる死神だった。

「縁があれば会うのだしな」

「しかしその時が多いのは事実だな」

「それはそうだな」

それは否定しない。彼にしてもだ。

「その通りだ」

「それではだ」

ここまで話してさらに言ってきた。

「戦いに向かう」

「そろそろまた魔神が出て来るか」

牧村は窓に向かいながらこつも述べた。

「そういう頃か」

「さて、それはどうか」

「まだだというのか？」

「それも縁だ」

魔神についてもだというのだ。

「そちらもだ」

「全ては縁か」

「そうだ。そしてだ」

窓を開けてきた彼を見てまた言うのだった。

「貴様もだ」

「俺も縁か」

「縁は運命とも言い換えることができる」



死神はふとこんなつぶつぶにも言ってみせてきた。牧村が今窓を開けて照らすに出て来るのを見ながらだ。こう言ってみせたのである。

「運命とな」

「俺の運命か」

「まず髑髏天使になった」

最初に言ってみせたのはこのことだった。

「そしてだ」

「そして？」

「そこからどうなるかだ」

テラスに完全に出て来た彼をまだ見ていた。

「貴様がな」

「俺がどうなるかあ」

「そつだ。どうなるかだ」

このことを言ってきたのである。

「貴様がだ」

「俺はこのままだ」

牧村は死神のその問いにこう述べるだけだった。

### 第三十一話 赤眼その十七

「このまま人間でいるだけだ」

「髑髏天使としてでなくか」

「人間だ」

あくまでこう言うのである。

「俺は人間だ」

「そうか、人間なのだな」

「それ以外の何者でもない」

少なくとも彼の考えではだった。そこから変わることはなかった。

「何があるうともな」

「ではそうであることだ」

死神はその彼にこう返した。

「そのままな」

「今日もおかしなことを言うな」

「そう思うのなら思えばいい。それでだはだ」

「今度の戦いの場所は何処だ」

「空だ」

そこだというのだ。

「空で待っている」

「そうか。夜空での戦いか」

「我等の戦いに相応しい場所の一つだ」

死神の言葉にふとロマンシズムが宿ったように見られた。

「そうは思わないか」

「髑髏天使の戦いにか」

「そして死神のだ」

彼等二人だというのだ。

「相応しい場所だ」

「夜の世界はか」

「そうだ。夜の戦いはだ」

まさにその世界がだというのだ。

「私は今心地よい気分だ」

「そうして戦いに向かうのだな」

「そうだ。それではだ」

「いいだろう。俺は戦いの場所にはこだわらない」

そこにはロマンシズムを見ていないというのが彼だった。

「だが」

「だが、か」

「戦う」

それはというのだ。

「戦う。それだけだ」

「それならだ。行くか」

「行かせてもらおう。それではだ」

両手を拳にしてそのうえで胸の前でそれを打ち合わせてだ。そこから白い光を放つ。

その光に包まれその中で髑髏天使に変わる。そうして。

「行くぞ」

右手を肘で折ってそのうえで右手を開いてから握り締める。そして死神もだ。

右手を拳にして胸の前に置く。そうすると。

青白い光が放たれその中で戦装束になる。その右手に出て来た大鎌を一閃させてだ。そして言う。

「来い、戦いの場にだ」

「そうさせてもらおう」

髑髏天使はすぐに座天使になった。そのうえで空を舞いだ。

死神も空を舞う。そうして上に行くのだ。

「来たか」

「ここに」

そこにいたのは紳士とロッカーだった。二人は宙に浮かんでいる。

そのうえで彼等と対峙してだ。言ってきたのである。

「今回の貴様達の相手はだ」

「俺達ってわけだ」

こう言いながら笑ってきたのはロッカーだった。

「相手はそれでいいかい？」

「不服なら相手は変わるが」

「相手にもこだわらない」

髑髏天使の返答だった。

「それは言っておく」

「そうか。それならだ」

「来い」

紳士に対しての言葉だ。

「相手をしてやる」

「そうか。拒むことはないのだな」

「さつきも言った通りだ」

また言ってみせるのだった。

「俺は相手が誰であろうとだ」

「闘うのだな」

「そして倒す」

言いながら既にその両手に持っている剣を構える。

「今度の相手は誰だ」

「私もだ」

今度は死神が言ってきた。

「相手が誰であろうとだ」

「構うことはねえってか」

彼に心えてきたのはロッカーだった。彼は軽口であった。

### 第三十一話 赤眼その十八

「要するにか」

「そうだ。私もまた相手が誰であろうともだ」

「魂を刈るってんだな」

「今度そうなりたいのは誰だ」

魔神に対してそれを問う。

「誰でもいいのだがな。私も」

「まあ焦ることはないだろ」

ロツカーは余裕を以って彼に告げた。

「別にな」

「今いるからか」

「そういうことさ」

その軽口での言葉が続く。

「じゃあいいな」

「来い」

「いいさ。それじゃあな」

ロツカーが言うのであった。

その後ろから何かが来た。それは。

翼を持った魔物であった。蝙蝠の翼を持ち頭には角がある。そして漆黒の身体に右手には剣、左手には鞭、そうした格好であった。

その姿を見てだ。死神は言った。

「バルログか」

「ほお、知っているんだな」

「名前はな」

それはだというのだ。

「知っている」

「それなら話は早いな」

「遂にか」

今度の死神の言葉はこれであつた。

「その魔物まで出て来たのか」

「俺にしても。いや俺達か」

死神はここでは言葉を代えた。

「そちらの強さを自覚してきたんでな」

「それでバルログまで出してきたか」

「これ位の魔物じゃないと駄目だろ」

死神に対して問うてもみせた。

「そっちも満足できないだろ」

「確かにな」

死神もそれを否定しない。

「私もまた強くなってきた」

「特にだ」

ロツカーはここで髑髏天使も見つた。彼をだ。

「そっちは特にそうだな」

「俺か」

「ああ、あんたさ」

まさに髑髏天使だというのである。

「あんたのことさ」

「そうか、やはりな」

「あんたも相当強くなったね」

こつ髑髏天使に対して告げ続ける。

「最初に会つた時とはもう別物だよ」

「そうか」

「それに」

ロツカーは自分に顔を向けている彼のその目を見ていた。髑髏の中にあるその目を見てだ。そのうえでさらに語るのであつた。

「あんたどうやら」

「今度は何だ？」

「赤くなっているね」

その目を見ての言葉である。

「いい感じだよ」

「赤くなっている」と

「そうさ」

その通りだというのだ。

「いい感じだよ。赤くなってきたな」

「それがどうかしたのか」

「そのうちわかるさ」

今は言わなかった。楽しげに笑っているだけであった。

「そのうちな」

「詳しく言うつもりはないか」

「秘密は後でわかるものさ」

こう言って言わないのだった。

「そういうことさ」

「ふん、ならばいい」

髑髏天使もそれ以上は問わなかった。聞くつもりもなかった。

「それではだ。俺の戦いの相手はだ」

「私の手の者だ」

今度は紳士が彼に言ってきたのだった。

「それでいいか」

「貴様のか」

「そうだ。既に呼んである」

そのマントを一閃させるとであった。その後ろから出て来た。禿頭の老人の顔に蝙蝠の身体をしている。そしてその翼の爪の部分には鋭い蟹のそれを思わせる缺がある。その魔物が出て来たのである。

### 第三十一話 赤眼その十九

「何だ、その魔物は」

「ウィプリという」

紳士がその魔物の名前を彼に話した。

「それがこの者の名前だ」

「そうか、それがか」

「そうだ。我が着属でもある」

紳士はこのことも述べてきた。

「吸血鬼なのだ」

「それが吸血鬼か」

「吸血鬼といつても様々だ」

「こつも話すのだった。」

「それがだ」

「血を吸うから吸血鬼か」

「そうだ。そうした意味では吸血鬼は世界各地にいる」

「このことも話すのであった。」

「それは言っておく」

「わかったと答えておこう」

「それが返答か。承知した」

紳士もそれを受けると返した。

「それでは。闘うか」

「相手は誰でも構わない」

「言いながらその両手に持つ剣を構える。」

「それは言った通りだ」

「言葉には偽りはないか」

「偽ったところで勝てはしない」

あくまで闘いだけを見ているのである。

「だからだ」



「そうか。それではだ」

「来い」

魔物に対する言葉だった。

「勝ってみせよう」

「では。ヴァンパイア様」

「うむ」

魔物の最初の言葉は紳士に対するものだった。紳士もそれに応えて述べる。

「それではこの場合は」

「楽しみにしている」

「これが紳士の返答だった。

「その闘いをだ」

「有り難き御言葉。それでは」

「さて、それではだ」

紳士は話を終えてから一旦髑髏天使に顔を向けてだ。また言ってみせるのだった。

「髑髏天使よ」

「俺にも闘えというのか」

「そうだ」

彼に対する言葉でもあったのだ。

「今度の闘いも楽しみにしている」

「やがて貴様とも闘うことになる」

「その時のことはさらに楽しみにしている」

魔神の今度の言葉はこうしたものだった。

「私もまた闘いたいのだからな」

「闘いの中にいるから魔神になるのだったな」

「そして魔物になった」

これはその魔物の言葉である。

「魔物はそれにより魔物となるのだからな」

「そうだったな」

そのことは既に彼も知っていた。これまでの闘いでだ。

「貴様等はそうだったな」

「闘いが魔物を魔物にしていくのだ」

魔物はこつも言った。

「覚えておくことだ」

「その言葉は受けた。それではだ」

「行くぞ」

髑髏天使はこれ以上言わなかった。

「それでいいな」

「気が早いな」

「必要な話は終わった」

これは彼の判断である。

「だからだ。はじめるとしよう」

「それではだ」

紳士も彼の言葉を受けて述べた。

「私もこれでだ」

「では」

魔物はその彼には恭しく一礼した。

それからまた彼に対してこつ述べるのだった。

「後は私が」

「楽しませてもらう」

「御意」

こつしてであった。紳士は姿を消し髑髏天使と魔物だけになった。

そしてそれは彼等だけではなかった。もう一組もそうなのであった。

ロッカーはだ。相変わらず軽い調子で死神に言ってきた。

「それじゃあ俺はな」

「帰るのだな」

「姿を消させてもらうぜ」

その口調での言葉である。身振り手振りも軽い。

### 第三十一話 赤眼その二十

「それでいいな」

「好きにしろ」

それについてはこう返す死神だった。

「ここに残って見るのもよし」

「姿を消すのもか」

「私には関係のないことだ」

だからだというのである。

「貴様の話だな」

「その通りさ。俺の話さ」

「なら貴様がそうするのだ」

完禅に彼任せというのであった。

「好きにするのだ」

「まあ放任つてのはな」

ここで魔神は楽しげに笑って彼に話してみせた。

「俺も嫌いじゃないぜ」

「そうか」

「俺は自分が束縛されるのも人を束縛するのも嫌いなんだよ」

これは彼の信条だった。

「どっちもな」

「ロツクらしくか」

「それがロツクだろう？」

そしてこんなことも言うのだった。

「違うか？それは」

「人間の歌ではそうだな」

そのロツクの話にもなるのだった。

「反抗だったな。つまりは」

「魔神つてのはその存在自体が反逆なんだよ」

「神の摂理に反するか」  
「平和とかそういうのは糞くらえなんだよ」  
笑いながら手を派手に動かしながら言ってみせてきていた。  
「俺達に必要なのはな」  
「闘いだな」  
「そうだよ。その通りだよ」  
今の死神の言葉に得意そうに笑ってみせたのだった。  
「それが一番大事だからな」  
「だからか」  
「そうさ。平和なんてどうでもいいんだよ」  
「むしろ邪魔か」  
「俺達は好きなように闘う」  
それを言うのである。  
「誰にも邪魔されることなくな」  
「確かにそれは神の摂理ではない」  
死神自体が属しているその神族の摂理でもなかった。  
「それはだ」  
「俺達だけの摂理さ」  
「そしてそれがそのまま反抗だというのだな」  
「そうさ、ロックさ」  
得意そうにこう言ってみせたのである。  
「これでわかったな」  
「少なくとも言いたいことはわかった」  
「ならいいぜ」  
「そして私はそれについて何も言う気はない」  
「それはだというのだ。」  
「私は私の仕事をするだけだ」  
「死神としてだな」  
「如何にも」

大鎌が光った。夜の中に鋭く。

「この鎌でだ」

「わかつたぜ。じゃあはじめるんだな」

「その魔物の魂を刈る」

今もロッカーの横にいるその魔物イルを見据えての言葉だった。

「それでいいな」

「刈れるのならな」

その言葉へのロッカーの返答はこれであった。

「そうしたらいいさ」

「ではそうさせてもらおう」

「今回も楽しませてもらうぜ」

軽い口調はここでもであった。

### 第三十一話 赤眼その二十一

「存分にな」

「お任せ下さい」

そして魔物もまたロッカーに顔を向けて述べてきた。

「その任は私が」

「頼んだぜ。それと御前もな」

「はい、私もですね」

「楽しめよ」

こう彼にも言うのだった。

「それはいいな」

「有り難き御言葉。それでは」

魔神のその言葉を受けてであった。魔物も応える。

「今から」

「さて、話は終わったな」

ロッカーはここで姿をゆっくりと消してきた。

「それじゃあな」

「やがてだ」

死神はそのロッカーの消え行く姿に声をかけた。

「貴様も倒す」

「へへへ、相変わらずの威勢だね」

「威勢ではない」

それは否定するのだった。

「これからのことだ」

「未来ってわけか」

「そうだ、貴様達全員刈る」

そうすると強い言葉で言うのだった。

「それは覚えておくことだ」

「オッケー、わかったぜ」

ロツカーは楽しげな笑顔で彼のその言葉に応えてみせた。  
「それじゃあな」

「そういうことだ。覚えておくことだ」

「ああ、それじゃあな」

こうしたやり取りのうえで別れる両者だった。そうしてであった。  
死神はあらためて魔物と向かい合った。そのイルとである。

「さて」

「わしと戦うことになったな」

「そうだ。既に心構えはできているな」

「無論」

「これが彼の返事だった。」

「そのことについては安心するのだ」

「そうか。それならだ」

「来るのか？」

「その命刈らせてもらおう」

大鎌を両手に持つての言葉だった。その鎌が銀色に鋭く輝く。

「いいな」

「刈れるものならだ」

「その言葉確かに受けた」

両者の間にさらに緊張が走った。そうして。

死神は空中を駆った。足を動かさずそのまま滑ったのだ。

そのうえでだ。魔物に襲い掛かろうとする。

だが魔物も動いてきた。その翼を動かし飛翔して来たのだ。

驚くべき速さだった。それで襲い掛かって来たのだ。

「来たか」

「思ったよりも動きがいいな」

「私のこの動きがか」

「翼がないというのにだ」

死神には翼はない。それは見ればわかることだった。

「しかしそれでもだな」

「私には翼は不要だ」

これが死神の返答だった。

「翼がなくともだ」

「自然に動けるといふのだな」

「その通りだ。空を駆ることができる」

言いながらその両手に持っている大鎌を投げた。それは激しく回転しながら魔物に襲い掛かる。

だが魔物は左に動いてた。その鎌をかわしたのだった。

「かわしたか」

「生憎だったな」

魔物はにこりともせず彼に告げてきた。

「いい攻撃だがわしに通じるものではない」

「この程度では、というのか」

「この程度とは言わない」

それは違うというのである。



### 第三十一話 赤眼その二十二

「そうか、見事か」

「並の魔物なら倒せる」

今の攻撃で、というのだった。

「だがわしはだ」

「普通の魔物ではないというのだな」

「わしはイル」

「名前を聞いてはいないが」

「だが言っておく」

そうするというのだ。

「この名前を覚えておくのだ」

「覚えるつもりはない」

死神のところに先程の鎌が戻って来た。彼はそれを右手で受けた。凄まじい衝撃を片手で受けてた。そのうえでまた言ってみせたのである。

「これまではそうだった」

「では今はか」

「気が変わった」

これが今の彼の返答だった。

「その名前覚えておこう」

「わしは空では負けたことがない」

その言葉には絶対の自信がこもっていた。

「一度もだ」

「空ではか」

「そうだ、それはない」

その自信と共の言葉だった。

「このことは告げておく」

「その言葉も覚えておく」

そしてこう返した死神だった。再びその鎌を両手に持っている。そうしてそのうえでまた言っただった。声は鎌と共に鋭いものとなっていた。

「貴様の名前と共にな」

「そうか」

「では来るのだ」

魔物を見据えながらの言葉である。

「貴様の攻撃を見せてもらおう」

「ではだ」

するとだった。魔物が幾つにも分かれてきた。それは。

「分け身か」

「これを使えるのは死神、貴殿だけではないのだ」

「魔物も使えるとな」

「そしてだ」

さらにであった。今度はその右手を死神に向けて突き出してきたのだ。

そこから雷を放ってきた。それで死神を撃つ。

死神はその雷を姿を消してかわした。そのうえですぐ左に出てみせたのである。

そうしたうえでだ。また言ってみせた。

「貴様の技はそれか」

「左様、雷を使う」

まさにその通りだというのである。

「こうしてだ」

「大体わかった」

「わかったというのだな」

「貴様のことはな」

言葉は笑ってはいなかった。その手にしている鎌の輝きそのものだった。その言葉を魔物に対して告げて見せたのである。それが今の彼だった。

「よくわかった」

「そうか。それは何よりだ」

「そしてだ」

その言葉をさらに続けるのだった。

「わかれば造作もないことだ」

「それで勝てるというのか」

「貴様が分け身を使うのならばだ」

鎌を両手に持ち構えたままでの言葉だった。

「私もだ」

「むっ!？」

「同じ技を使うまでだ」

こう言って身体を分けてきた。彼もまた分身を使ったのだ。七人になった。その七人の口でそれぞれ言うのであった。

「こうしてだ」

「闘う」

「貴様とだ」

「ふむ。さすれば」

「わしもまた」

「増えるでしょう」

そして魔物もそれぞれの口で応えてきた。そうしてだった。

### 第三十一話 赤眼その二十三

魔物もさらに分かれるのだった。それまでは四人だった。だが三人あらたに増えた。そのうえで七人になってみせてそう言った言ってきたのである。

「これで数は同じ」

「数の差はなくなった」

「何一つとしてだ」

「そうだな」

彼のその言葉に死神も応えた。それは否定しなかったのだ。

「数のうえではだ」

「後は実力が全てを決める」

「わしが上か貴様が上か」

「それ次第だ」

魔物もまたそれぞれの口で話すのだった。

「さすれば」

「よいな」

「行くぞ」

「こちらもだ」

「今から行かせてもらう」

「是非だ」

魔物達のその言葉にそれぞれの口で返した死神達だった。一人であるが七人であるのは同じだった。まさに数は同じであった。

そしてその数でだ。それぞれ言い合いだ。鎌と雷を放ち合うのだった。

髑髏天使はその異形の魔物と闘っていた。ウィプリとである。

魔物は一人ではなかった。無数に出て来ていた。その数で髑髏天使を囲みそのうえで群狼の如く彼に群がり襲撃を仕掛けているのだった。

「さて、数はこちらが上」

「一人ではない」

「この数にはどうするか」

「見せてもらおう」

「例え数がどれだけ多かろうとも」

その髑髏天使は両手の剣を振るっていた。そのうえで言うのであった。

「俺は倒す。それだけだ」

「それだけか」

「闘うだけと」

「そうなのだな」

「そうだ」

まさにその通りだというのである。

「敵は倒す。それだけだ」

「左様か。ならば」

「倒すのだな」

「我等をだ」 64

「言われずともだ」

そしてであった。髑髏天使の身体が銀色に輝いた。

その光の中で四枚の翼を出す白銀の身体に変わった。それこそが。

「智天使か」

「それになるといつのか」

「ここで」

「そうだ。この力で相手をしよう」

白銀の身体でだ。彼は語るのである。

「それでいいな」

「ふむ。光栄なことだな」

「確かにな」

「智天使とはな」

その言葉には侮りはなかった。彼のその智天使の姿を見てだ。そ

れで言っている言葉であつた。素直な賞賛の言葉に他ならなかつた。

「我等の実力を認めるといふのだな」

「それはいいことだ」

「それでこそ闘う楽しみが味わえるといふものだ」

「それでいいのだな」

髑髏天使は魔物のそれぞれの言葉を聞いて述べた。

「貴様達も」

「我等も魔物」

「ならばだ」

これが彼等の返答だつた。

「闘うことは喜び」

「さすればだ」

「強い相手ならばよい」

「だからか」

「左様」

「その通りだ」

口々に髑髏天使に述べてもきた。

### 第三十一話 赤眼その二十四

「智天使ならば」

「この手で倒したくなるもの」

「是非な」

「ならばだ」

それを受けて言う髑髏天使だった。その智天使の姿でだ。

そのうえで今剣を構えそこに光を宿らせてである。

光を一気に放つ。それで魔物達を撃つ。

「むっ？」

「光か」

「これが智天使の力だ」

攻撃を放つてからの言葉だった。それで数体倒した。そこから青い炎が出ていた。魔物として死んでいくのがそこからはつきりと見えている。

しかしである。魔物の数はまだ多い。その彼等がまた言ってきたのだ。

「ふむ、これは中々」

「攻撃は強いな」

「しかも強いだけではない」

「速い」

その攻撃を冷静に見ている言葉だった。

「我々の相手には充分だ」

「それならだ」

「さらに楽しめるといふものだ」

「楽しむか」

髑髏天使はその彼等に囲まれながらまた言ってきた。

「それならだ」

「来るのだな」

「今から」

「またその光を放つか」

「光を使いはしない」

それはないというのだ。冷静な言葉だった。

「今はだ」

「今はだというのか」

「それではどうしてだ」

「どうして闘うつもりだ？」

「それを見せよう」

言いながらの言葉だった。そうして。

髑髏天使は動いた。光を放たず己から動いた。縦横に動きそのうえで魔物達に向かうのだった。

その動きも速いものだった。両手の剣で魔物達に斬りかかる。そうして。

一人また一人と斬っていく。その都度青い炎が生じる。しかし魔物達はそれを見ても冷静なままであり。そうして言ってきたのだ。

「面白いことになってきたな」

「そうだな」

言いながらその間もその両手の剣で襲い掛かる。首筋を狙って来た。

だが髑髏天使はその彼等に剣を振るいまた一人倒す。そしてその度にだった。動きが変わってきていたのだ。その強さは。

「何っ!？」

「動きがさらにか」

「速くなっているか」

「しかもだ」

魔物達は斬られていく同胞達を見ながら言うのだった。

そして髑髏天使を見てもだ。こつも言った。

「!？目が」



「目が変わってきたか」

「目の色がだ」

その目を見ての言葉だった。

「我等のか」

「いや、魔神の方々の目が」

「それだな」

まさにその目だというのだ。

「その目になってきているな」

「これは」

「さらに面白いことになってきたな」

「俺の目に何かあるのか」

ここでまた髑髏天使が言うのだった。

「それに」

「あるといえはどつする？」

「それで闘いを止めるわけではあるまい」

「それはできないな」

「そうだな」

そしてそのことを認める髑髏天使でもあった。

「それはな。確かにな」

「我等を全て倒すことしかできはしない」

「それまで貴様は闘いから抜け出すことはできない」

「そして」

「そしてか」

魔物達のその言葉にまた反応を見せた。

### 第三十一話 赤眼その二十五

「また何かあるのだな」

「それはやがてわかる」

「だが。一つ言っておこう」

「面白いことをだ」

魔物達の攻撃を繰り返しながらの言葉は続く。その間も髑髏天使に同胞達を斬られながらも。それでも攻め続け言い続けるのだった。

「魔物はどの者も最初から魔物だったのではない」

「このことをだ」

「言っておこう」

「魔物にはなるものか」

「そうだ」

「その通りだ」

まさにそうだというのである。

「魔物はなるものだ」

「人もまた然りだ」

「人もまた魔物になるのだ」

「だとしてもだ」

髑髏天使はその言葉に対しても返した。

「それは俺ではない」

「ふむ、断言か」

「断言するのだな」

「俺は俺だ」

こう言ってみせたのである。

「それ以外の何者でもないからだ」

「口ではそう言える」

「そして自分でも気付かないものだ」

「それはだ」

わからないというのが魔物達の言葉であった。

「しかし。魔神も今は十二柱」

「きりといえればいいがだ」

「それでもだ」

「何が言いたいのだ？」

「ふふふ、やがてわかる」

「やがてな」

そこから先は言おうとしない。魔物達もだ。

「だが。今はだ」

「闘いに専念させてもらう」

「それでいいな」

「闘いを避けることはない」

髑髏天使はさらに迫り来る魔物達を次々に斬り青い炎に変えながら言っている。

「それが髑髏天使なのだからな」

「闘い、闘い続けければだ」

「それでいいのだ」

「それこそがだ」

魔物達は楽しんでいて。それは今の闘いだけを楽しんでいるのはなかった。

その声を出しながらさらに攻撃していくのだった。そのうえで髑髏天使の目を見る。

「そうだな、それだ」

「目がよくなつてきている」

「うむ、目がだ」

「目がどうしたという」

髑髏天使はそれを聞いても態度を変えない。冷静なまま魔物達を倒す。ただそれだけであった。

やがて魔物の数は減っていく。そうしてであった。最後の一体を前にしていた。

「来るのだな」

「我は魔物」

これがその最後の魔物の言葉だった。

「それならば当然だ」

「闘うというのか」

「その通りだ、背を見せることはない」

こう言っただけで前から襲い掛かってきた。右手の剣に貫かれた。それで終わりであった。最後の魔物からも青い炎があがった。魔物は青い炎をあげながら。最後の言葉を出すのだった。

「いいことだ」

「倒されていいというのか」

「そうだ、いいのだ」

その言葉は偽りではなかった。実際に顔まで笑わせていた。

その顔での言葉だった。さらに言うのである。

「このままだ」

「このままだ」

「そうだ、なるのだ」

髑髏天使に向けた言葉だった。

「いいな、そのままなるのだ」

「言っている意味はわからないが俺はまた勝った」

「勝ったからこそいい」

やはりであった。魔物の言葉はこれだった。

### 第三十一話 赤眼その二十六

「今はだ」

「やはりわかりはしないな」

「ではさらだだ」

魔物の身体を青白い炎が包んでいた。そうしてだった。

魔物はその中に消えた。彼の闘いは終わった。

その頃死神もだ。イルとの闘いに決着をつけようとしていた。

同じ数同士の闘いであった。雷と鎌が交差する。

その中でだ。死神がふと言ったのである。

「よし」

「何だ？」

「決着をつける」

こういったのである。

「これでだ」

「決着をつけるというのか」

「これで終わらせる」

言いながらであった。鎌を一齐に投げた。

だがその鎌はそれぞれ対している魔物達全てにかわされてしまっ

た。魔物達はかわしたうえで前にいる死神達に対して問うた。

「まさかと思うが」

「これが切り札ではあるまい」

「そうだな」

「無論」

死神の一人の返答だった。

「これで終わりではない」

「それは言っておく」

「そしてだ」

「そして？」

「どうだというのだ？」

「鎌はそれだけではない」

「こう言ったのである。」

「そして鎌は一つでもだ」

「一つでもだと？」

「どうだというのだ？」

「それだけで切り札になる」

「こう言ってみせたのである。」

「それは言っておく」

「鎌一本でも切り札になる」

「それはわかる」

「しかしだ」

魔物達の声はいぶかしむものになっていた。死神は今彼等の中の一人だけが話しているのに対してだ。彼等はそれぞれの口で話していた。

「だがそれをだ」

「一体どうするつもりなのだ？」

「ここで」

「鎌は出すだけのものではない」

「今度はこう言ってみせた死神だった。」

「隠すこともできるのだ」

「隠すというのか」

「そうだ、それもできる」

「こう魔物達に話すのである。」

「それを見せよう」

「むっ!？」

「そしてだった。ここで。」

魔物達の横にだ。突如としてそれが現われたのである。

「何っ!？」

「もう一人だと!？」

「まさかここで」

「言った筈だ」

また言ってみせるのだった。

「切り札があると」

「これがか」

「そうだ。そして」

その彼等の横に現われた死神がである。今度言う死神だった。彼はその両手の鎌を彼から見て横一列になっている魔物達に対して放ったのだった。

それは回転しながら飛んでいった。魔物達を断ち切っていく。まさに一瞬だった。

「決まったというのか」

「まさか」

「こうして」

「これで終わりだな」

死神は一人に戻っていた。その口での言葉だった。

「この闘いもまた」

「まさかここでもう一人とは」

「その様なことが」

「言った筈だ。切り札だ」

「それだったな」

魔物もまた一人に戻っていた。その身体は今赤い炎に包まれてきていた。

### 第三十一話 赤眼その二十七

そしてその中でだ。彼は最後の言葉を出しているのだった。

「貴様の切り札はこれだったのか」

「私は貴様よりも多くの魔物を出すことができる」

「それを隠していたのか」

「貴様は一体でもかなり強い」

魔物の実力はわかつていたというのだ。

「だが」

「だが、か」

「それでも闘い方がないわけではない」

そうだというのだ。

「そして切り札を見せないこともだ」

「闘い方の一つだというのだな」

「如何にも」

そしてそれが今だったのである。

「貴様は強い。容易に手を見せてはだ」

「敗れるか」

「その可能性はあった」

まさにそうだと。赤い炎に包まれていつている魔物を見据えての言葉だった。

「だからこそだ」

「切り札は隠していたのだな」

「そういうことになる」

「よくわかった」

ここまで聞いて満足した顔になる魔物だった。既にその身体は燃え上がるうとしている。

「それではだ」

「死ぬのだな」



「もう名残りはない」  
「実に満足しきった言葉だった。」  
「思う存分闘った。だからな」  
「その魂は冥界に行く」  
「冥界でも闘えるな」  
「魔物はこのことを死神に問うてきた。」  
「それもだな」  
「そうだと言えば？」  
「ならばいい。また出て来るまでの間はだ」  
「死ぬというのだな」  
「そうさせてもらう。それではだ」  
「遂にその全身が赤い炎に包まれた。そうして。」  
「また会おう」  
「ではな」  
こうして魔物は赤い炎となり消え去った。彼もまた闘いを終えた。闘いを終えた死神は髑髏天使を見る。するとであった。その目を見てだ。言うのだった。  
「やはりな」  
「何かあるのか？」  
「私が見ていた通りだ」  
「こう言ったのである。」  
「貴様はやはり」  
「俺がどうかしたのか」  
「変わるうとしている」  
「魔物と同じことを言いたいらしいな」  
「その通りだ。その目がだ」  
目を見続けていた。その人のものの目をである。  
「見ればわかる」  
「目が、か」  
「目が赤くなれば」

死神はその彼にまた話した。

「私は貴様に対してだ」

「どうだというのだ？」

「刈る」

一言だった。

「魂を刈らせてもらおう」

「俺の魂もか」

「そのことは覚えておくことだ。それではだ」

「帰るのか」

「闘いは終わった。そして言いたいことも言った」

髑髏天使に踵を返したうえでの言葉だった。

「それならばだ」

「用はないか」

「そういうことだ。それではだ」

死神は姿を消していった。そうして夜空から消えたのだった。

彼が消えると髑髏天使も自分の家に戻った。そして牧村に戻りそのうえで照らすから部屋に入った。ゲームに戻っているとまた未久が部屋に来た。

第三十一話 赤眼その二十八

「ねえ」

「今度は何だ」

「何か食べない？」

「こう言ってきたのである。」

「お腹空いたから」

「何かか」

「果物か何かね」

「そうしたものをというのだ。」

「食べない？いい？」

「そうだな。林檎があつたな」

「じゃあ切るわね」

「御前が切るのか」

「そうよ」

「まさにその通りだという返事だった。」

「駄目？それで」

「御前が切るのか」

「ゲームの画面を見ながらの言葉だった。彼女の方は見てはいない。」

「包丁使えるのか」

「あのね、私だって女の子よ」

「兄の今の言葉にはかなり露骨に反感を見せたのだった。」

「それで使えない筈がないでしょ」

「自分も人も刺さないようにな」

「お兄ちゃんを刺すかもね」

「いささか剣呑な目での言葉だった。」

「何時かね」

「俺をか」

「女の子に対して失礼なこと言うからよ」

無然とした顔での言葉である。

「全く。よく若奈さんも付き合っただけであげてるわよ」

「それがどうかしたのか」

「だから。何で若奈さんと付き合ってるの？」

目を三角にさせての言葉だった。

「お兄ちゃんが」

「不思議なのか」

「不思議も何も怪奇現象よ」

こつまで言うのだった。

「全く。あんな綺麗で優しい人がよ」

「綺麗で優しいのは確かだな」

「何でそういう人がお兄ちゃん？」

今度は腕を組み考える顔になっていた。

「それが凄くわからないままだし。ただ」

「ただ。何だ？」

「若奈さんだったらいいわね」

一転してにこやかな顔になる妹だった。

「それはね」

「いいのか」

「私の義姉さんになるのよね」

かなり飛躍した考えだった。しかし彼女の中ではそれはもう半ば現実のものになって話だった。そしてそれを言葉に出していたのである。

「それはね」

「随分とかなり飛躍しているな」

「けれど結婚とか考えてる？」

「考えたこともない」

それは全く、であった。

「何でそんなことが考えられる」

「私は考えたことあるわよ」

「何っ？」

「だから。あるのよ」

「こう話すのである。」

「それはあるのよ」

「中学生で結婚か」

「女の子は十六歳で結婚できるじゃない」

法律上の話である。若奈はまだ中学生であるが年齢的には結婚が近くなってくる頃なのだ。この辺りは微妙なところもある話であった。

「だからね」

「御前が結婚か」

「それで子供はね」

「楽しそうに笑いながらの話だった。」

「三人がいいわね」

「三人か」

「それか五人か」

結構子沢山が好きなようである。

「大勢欲しいわね」

「本当に話が飛躍しているな」

「そうかしら。女の子だったら皆そう思うわよ」

「彼女が言うにはそうらしい。」

「だって。赤ちゃん産めるのって女の子だけじゃない」

「男ができたら怖いものがあるな」

「そうでしょ？だからこう考えるのよ」

「だからだというのである。」

第三十一話 赤眼その二十九

「本当にね。子供は何人でも欲しいわ」

「三人か五人じゃなかったのか」

妹の今さっきの言葉に突っ込みを入れた。

「早速変わるのだな」

「いいじゃない、別に」

居直ってさえしたのだった。

「それでも」

「とにかく子供は欲しいんだな」

「好きな人と結婚してね」

「こんなことも言ってきた。」

「そうよ。幸せな家庭を築いてね」

「なら築け」

兄の言葉とはいささか思えないぶしつけなものだった。

「ただしだ。相手は」

「わかってるわ。しっかりと選べよね」

「変な相手だったら俺が許さん」

「私を？」

「相手もだ」

「両方だというのだ。」

「許しはしない」

「斬るとか？」

「必要ならだ」

フェシングのその話にもなった。

「わかったな」

「物騒ね」

「物騒か」

「そう言わないで何なのよ」

未久は軽く笑いながら述べてきた。

「そんなこと言って」

「物騒でもそれでもだ」

「本気？」

「碌でもない相手とは付き合っちな」

このことを言いたいのだった。要するにだ。

「わかつたな」

「わからなかったらどうするの？」

「御前を斬る」

今度は妹に向けた言葉だった。彼女に対してもだった。

「わかつたな」

「やっぱり物騒じゃない」

「物騒で結構だ」

「開き直るのはどうなのよ」

「それでもだ」

言葉の調子は変わらない。

「そんな相手とは付き合っちな」

「しっかりと見てということなのね」

「人は選べ」

しっかりとしてぶれない言葉だった。

「下手な相手とはだ」

「絶対に付き合ったら駄目なのね」

「こんな言葉がある」

彼は不意にこんなことも言ってきた。

「妻の良し悪しは夫の人生を左右する」

「どっかで聞いた言葉ね」

「そしてだ」

言葉をさらに続ける彼だった。

「夫の良し悪しもだ」

「奥さんの人生を左右するのね」

「そういうことだ」  
「これが彼の言いたいことだった。飛躍はしているがだ。  
「だからだ。交際相手は選べ」  
「わかったわ。それは心得ておくわ」  
「今の時点で既に心得てはいるな」  
「それはね」  
「既にというのだった。」  
「わかっているから」  
「わかっていればいい。それではだ」  
「果物ね」  
「食べるか。カロリーを使った」  
「何処がよ」  
「今度はまた妹が言うターンだった。」  
「何でゲームしていてカロリーを使うのよ」  
「気にするな。御前に関する話じゃない」  
「私には？」  
「そうだ。俺には関係のある話だ」  
「それでも彼女には関係はないというのだ。」  
「わかったな」  
「わからなくても気にしないでしょ」  
「その場合はそうする」  
「やはりこの辺りはであった。牧村らしかった。」  
「そういうことだ」  
「わかったわよ。それじゃあね」  
「下に行くか」  
「私が斬るから」  
「自分から言ってきたのだった。」  
「行きましょう」  
「それじゃあな」  
「苺に林檎に」



その果物についても話が為された。

「後はオレンジよ」

「種類もあるんだな」

「とにかくお家にある果物全部だから」

それを食べるというのだ。

「種類はね」

「そういうことか」

「食べてそれで」

「食べてか」

「お勉強しないとね」

くすりと笑つての今の言葉だった。

「しつかりとね」

「ゲームは止めるのか」

「中学生は忙しいの」

何処か兄を小馬鹿にした様にして告げた言葉だった。

「わかったわね」

「わかった。俺も昔は中学生だった」

「大昔はね」

「ほんの少し前だ」

この辺りの認識はまさにそれぞれだった。主観と主観である。

「何はともあれだ。果物を食べてだ」

「勉強ね」

「またゲームをする」

それぞれ言つたうえで部屋を出た。そのうえで兄妹で果物を食べた。今牧村は人間の日常の中にいた。しかしそれは変わろうとしていた。

2  
0  
1  
0  
·  
2  
·  
1  
7

2001

## 第三十二話 変貌その一

髑髏天使

第三十二話 変貌

「ほほう、それは」

「面白い話だと思うが」

「確かに」

今魔神達はテーマパークの中にいた。そのお化け屋敷の中を一同で歩きながら話をしている。廃墟となった病院を模したお化け屋敷である。

その周りに患者や看護婦の亡霊達が来て襲い掛かろうとする。しかし彼等はその人が演じているそういつたものには一切気を止めずに話を続けていた。

「それはその通りです」

「やはりそう思うか」

「ええ」

老人は温和な顔で紳士の言葉に応えていた。

「その通りです」

「それは何よりなことだ」

「このまま髑髏天使が変われば」

「我等の方に来ればだ」

「それはそれで面白いこと」

老人は笑いながら紳士に話す。

「そうではありませんか？」

「そうだな」

紳士は彼の言葉に頷いた。

「それはその通りだ」

「貴方もそう思って頂けますか」

「ああ。しかしだ」

「しかし？」

「あの髑髏天使はだ」

「彼ですか」

その彼の話であつた。

「どうなのだ？」

「どうなのだとは？」

「今は智天使だ」

話すのは彼のその階級のことだつた。

「そこから大きく変わってきている」

「確かにな」

「それはな」

彼の今の言葉に他の魔神達も応えて話す。

「前から兆候はあつたが」

「それ以上にだ」

「大きく変わった」

髑髏天使に対してこう話していくのだった。

「より人間でないものになろうとしている」

「目が赤くなりだ」

「我等に近付くか」

「そうなるとはな」

「それが今の彼か」

魔神達は言つていく。そうしてだつた。

「ここで、です」

「彼が魔物になつた場合はだね」

子供が老人の言葉に問うた。

「そういうことだね」

「いえ、魔物ではありません」

「魔物ではないの？」

「魔神になるかも知れません」

こう話すのだった。

「若しくはです」

「魔神として？」

「凄い話になってきたわね」

女はそれを聞いて述べてきた。

「十二柱からね」

「十三柱か」

それを聞いて述べたのは男だった。

「あらたな同胞か」

「どうでしょうか、それは」

また問う老人だった。

「同胞が増えるのは」

「面白いとは思わ」

これが美女の考えであり言葉だった。

「それでどうなる紙物だしね」

「俺は反対だな」

今言ったのはロッカーである。

「それはな」

「反対なのですな」

「今のままで充分じゃないのか？」

己のその考えも述べるのだった。

「そんなのはよ。そうじゃないのか？」

「一理ありますね」

老人もそれは否定しなかった。彼の考えはある。

## 第三十二話 変貌その二

「別に」

「そうか、じゃあ俺の考えは間違いじゃないんだな」

「間違いではありません。ただ」

「ただ。何だ？」

「もう少し楽しみたいものです」

「こつ言うのである。老人の言葉だ。」

「私としてはです」

「俺はだ」

大男も言ってきた。

「もう少し遊びたいな」

「貴方もですか」

「これで我々の中に入れば」

また話す老人だった。

「どうなるかもですし」

「このまま戦うのもいいな」

青年も言ってきた。

「そうは思わないか」

「戦いも楽しみですか」

「俺は戦いを見られればいい」

それが彼の考えなのだった。

「それだけだ」

「そうか。それだけか」

「貴方はなのね」

他の魔神達が青年に対して言う。

「それも確かにいい」

「このまま戦うのも」

「だが」

そしてさらに話は続く。周りの人間達は一切見ていない。

「より面白くする為には」

「どうなればいいか」

「それが問題だが」

「仕掛けてみますか」

老人は楽しそうに笑いながらまた述べた。

「ここは」

「仕掛けるのだな」

「はい」

まさにそうだと紳士の言葉に応えて頷く。

「少し」

「そつか。それではだ」

「今回はだ」

「貴殿に全て任せるとしよう」

「有り難うございます」

老人は仲間達の問いを温和な笑みで受けて言葉を返した。

「では早速」

「見せてもらおうとしよう」

「それをな」

こんな話をしながらお化け屋敷の中を進んでいく。そしてその周りを見回しながら女が楽しそうに笑ってそのうえで言うのであった。

「人間もね」

「そうだな」

男もだった。何と仏頂面の彼の口元が微かだが綻んでいる。

「中々面白い趣味を持っている」

「楽しいことは楽しいわね」

「うむ」

こつ言い合つのがだった。そのお化け屋敷の趣向を見ながらだ。

「退屈はしないわ」

「戦いもいいがだ」

「僕はさ」

子供はかなり純粹に楽しそうな顔をしている。

「今で充分楽しいよ」

「充分なのだな」

「うん」

明るい声も出して青年に対しても答える。そのうえで彼に対して問うた。

「バジリスクはどうか」

「俺か」

「うん。君はどうなの？」

「悪くはない」

笑いはしないがこう答えたのだった。



### 第三十二話 変貌その三

「こうした世界もだ」

「人間の世界もだよね」

「元々魔物は人間は喰らいはするがだ」

「他に美味しいものがあればどうでもいいさ」

今言つたのはロツカーだった。

「何せ筋ばっているわ食うところは少ないわだからな」

「はつきり言つてまずいわね」

美女も素っ気無い。

「猿と同じだわ」

「確かにな。下は同じだからな」

今言つたのは大男である。

「それはな」

「そうなのよね。猿は嫌いよ」

美女は今度は忌々しげな口調だった。

「人間もその味はね」

「今は他に幾らでも食べるものがありますね」

小男も述べる。

「人間達の世界にそれが溢れ返っています」

「それでどうして人間を食べるのか」

女も言ってきた。

「必然性はないわ」

「人間よりも牛や豚の方が美味しい」

そして男もそれは同じだった。

「そちらの方がふんだんにある時代だしな」

「その通りですね。私にしてもです」

老人も温和な笑みのままにこやかに語っている。

「人間の肉にはもう全く興味がありません」

「それどころかさ。ここでずっと遊びたいよ」

子供の本音はやはりこれであった。

「ねえ百目」

「はい」

「今度は何処に行こうかな」

「メリーゴーランドはどうでしょうか」

老人は彼にそれを勧めるのだった。

「ここは」

「メリーゴーランドなんだ」

「お嫌いですか？」

「ううん」

その問いには微笑んで首を横に振った子供だった。

「好きだよ、それもね」

「では決まりですね。メリーゴーランドです」

やはりそれだというのだ。

「それに乗りましょう」

「ジェットコースターはどうかな」

「私はそれがいいな」

紳士の言葉である。

「あれが一番好きだ」

「そうね。私もね」

そしてそれは美女も同じであった。

「あれはいいものね」

「ではそれが」

紳士はまた言った。

「それに乗るか」

「そうしましょう」

「皆さんそれぞれのものを楽しまればいいかと」

ここでまた老人は同胞達に温和な笑みと共に告げた。

「では。今回は私が」

「そういうことでだ」

「御願いな」

こんなやり取りをしながら人間の娯楽を楽しむ彼等だった。そして牧村もまた。この遊園地に未久、そして若奈と共にいた。三人であちこちを回っていた。

「たまにはよ。トレーニングの合間にね」

「遊ぶといいというのだな」

「そういうことよ」

軽やかなクリーム色のズボンにパーカーのある上着の若奈がにこやかな顔をしていた。

「だからこうしてね」

「しかしだ」

だがここで牧村はふと言ったのだった。

「何かな」

「何かって？」

隣のデニムのミニに青いジャケットの未久が兄に問うた。

### 第三十二話 変貌その四

「何かって何よ」

「三人か」

彼が言うのはこのことだった。

「それがどうもな」

「そんなにおかしいかしら」

「普通は二人じゃないのか」

兄が言うのはこういうことだった。

「そうじゃないのか」

「そうかも知れないわね」

兄の言葉にこう返す妹だった。

「言われてみれば」

「何かおかしい言葉だな」

「そう？お兄ちゃんの気のせいでしょ」

「気のせいだというのか」

「だって。デートじゃないんだし」

そしてこんなことを言うのであった。

「今回は慰労よ」

「慰労か」

「だから。私達がいつもお兄ちゃんの世話をしているから」

「俺の世話をか。御前がか」

「そうじゃない。だからこうして連れて来てもらってるのよ」

実にぞんざいな態度での言葉だった。

「これでわかってくれたかしら」

「その説明でわかれという方が無理だと思うがな」

牧村は慥然とした声で妹のその言葉に返した。

「大体御前が俺に何かしたか」

「してんじゃない」

「迷惑をかけることをか？」

「だからお世話をよ」

それをだとかくまで言うのだった。

「ちゃんね」

「記憶にはないがな」

「記憶にないのはお兄ちゃんの気のせいよ」

未久も引かない。自分勝手な分だけ。

「全く。いつもこんな可愛い妹が傍にいただけでもね」

「今回も連れて行けと無理を行ったな」

「だから。私達の慰労じゃない」

強引な主張は続く。

「私と若奈さんのね」

「私は別に」

若奈は少しきよとんとした顔で述べた。

「何も言っていないけれど」

「若奈にも随分強く言ったそうだな」

牧村はまた妹に問うた。

「何かな」

「一緒に来てくれって言ったのは確かよ」

若奈の方もこう言うのだった。

「それはね」

「やはりな」

「まあ私としては」

ここで微笑んで話す若奈だった。そしてその言葉は。

「嬉しいけれどね」

「嬉しいのか」

「だってテーマパークなんて久し振りだし」

満面の笑みでの言葉であった。

「だからね。渡りに船だったわ」

「そう思ってお誘いしたんですよ」

また笑いながら話す未久だった。

「若奈さんもね」

「有り難う、未久ちゃん」

「どういたしまして」

にこやかに笑い合って話す二人だった。ここでは牧村は疎外されている。

「では今日は」

「楽しみましょう」

「お兄ちゃんはエスコートするのよ」

兄に向ける顔と声はきついものだった。

「いいわね」

「俺はエスコートか」

「そうよ」

まさにそれだというのがである。

### 第三十二話 変貌その五

「それでわかったわね」

「選択肢はないな」

「一個だけあるわよ」

あるにはあるというのだった。

「聞きたい？」

「イエスだな」

「そうよ、それだけよ」

「それはないというんだ」

もつともな返答だった。

「全く。何という奴だ」

「いいじゃない、たまには」

口は今回は妹の方が上だった。

「こうして外に出ることだって少ないんだし」

「あら、それは違うけれど」

未久の今の言葉にはすぐに若奈が言ってきた。

「私大学じゃいつも牧村君と」

「あつ、そうじゃなくてですね」

「そうじゃなくて？」

「とにかくですね」

そのまま言葉を続けるのだった。

「たまにはいいじゃないですか」

「御前がだな」

「そうよ」

兄の言葉にまた居直ってみせたのだった。

「いいじゃない。そうでしょ？」

「まあいいか」

「そう、いいのよ」

「ここでも強引だった。」  
「わかったわね」  
「それで今度は何がいいんだ？」  
「何がって？」  
「何処に行くつもりだ」  
「こつ問うのだった。」  
「今度は」  
「そうね。今度はね」  
未久は考える顔になってから述べた。  
「ジェットコースターに行きたいわ」  
「ジェットコースターか」  
「それでね」  
「ここにこしながら兄と、そして若奈にも話してきたのであった。」  
「二人で行って来て」  
「何っ？」  
「何っ、じゃないわよ」  
「またにこりと笑って兄に言葉を返す。」  
「何っ、じゃ」  
「二人でか」  
「そうよ。お兄ちゃんと若奈さん」  
その二人だというのだ。  
「二人で行って来たらいいわ。私は下で待ってるから」  
「馬鹿を言え」  
「だが兄はすぐに言葉を返した。」  
「そんなことができるか」  
「できるかって？」  
「御前一人を置いていけるか」  
「こつ言うのである。」  
「御前も来い」  
「そつ言う理由は？」



「誘拐されたり迷子にされたらどうする」

それを言うのだった。

「一人になったらどうなるかわからないんだぞ」

「それは大丈夫よ」

しかし未久はあっけらかんとして話すのだった。

「それはね」

「大丈夫だというのか」

「そうよ、大丈夫よ」

「そうだというのだ。」

「だってこれがあるし」

「それが」

「これと」

スタンガンを見せてそれで終わりではなかった。

### 第三十二話 変貌その六

今度は投げると色がつくボールにブザー、それと特殊警棒まで持っている。次から次に色々なものを出してみせるのである。

「ここまであるから」

「大丈夫なのか」

「それに用心して」

さらにであった。

「係りの人のすぐ側にいるから」

「あつ、それいいわね」

それまで暫く黙っていた若奈もそれには賛成した。

「それだとそうそう声もかけられないしね」

「そうよ。それでどうかしら」

「まあそれならいいか」

牧村も妹の想像以上の深い思慮と用意周到さに内心脱帽してはいした。

「そこまであるのならな」

「合格ね」

「しかし御前は」

「何？」

「何時の間にそれだけ持っていた」

「こつ言つのだった。」

「警棒まで」

「何言ってるのよ、お母さんが持つように言ってたじゃない」

「母さんがか」

「そうよ。私が可愛いから」

「それは聞いていないが」

「それも言つたの」

これも本当のことだがそれでもかなり派手に言つたのだった。

「お母さんはね」  
「相変わらず甘やかし過ぎだ」  
「何かあったら自分の身は自分で守るしかないからって」  
「ボールやスタンガンもか」  
「ボールは自分で買って」  
「それは彼女の用意だという。」  
「お父さんはスタンガンよ。渡してくれた理由はね」  
「父さんもか」  
「そうよ。あとブザーは」  
「それについても話す。」  
「家にあるのを使ってるのよ」  
「何かあったらそういうもので全部か」  
「逃げてみせるわ。何かあってもね」  
「逃げるといふより倒すだな」  
「牧村はここまで話を聞いて述べた。」  
「そこまですぐとだ」  
「そうかしら」  
「とにかくそこまであれば大丈夫だな」  
「太鼓判を押しはした。」  
「流石にな」  
「そうでしょ」  
「しかし御前もだ」  
「だがあらためて妹に言いはした。」  
「どうもな」  
「何、今度は」  
「顔の割には危険だな」  
「こつ言っただった。」  
「そこまで持っているとはな」  
「だから。自分は自分で守らないと」  
「身体を鍛えることはしないのか」

「してるわよ」

今の言葉にもはっきりと返したのだった。

「ちゃんとね」

「新体操か」

「新体操だったな。そうだったな」

「どれだけ強いかはわかってるわよね」

「一応はな」

わかっていると返す兄だった。

「全身を使う。しかも身体は柔軟だ」

「だから凄いのよ」

「しかし身体は大きくならないのだったな」

「まあそれは人それぞれっていうか体操じゃない」

未久はそれは少し突っ込みを入れた。

「また違うわよ」

「そうだったか」

「体操は身体全体を激しく使うから身体の成長がかえって止まるの

よ」

あまり激しいスポーツも発育に影響するというのがのである。

### 第三十二話 変貌その七

「だからね。体操だとね」

「小さいままになるのだな」

「そういうこと。それにしても」

「今度は何だ」

「私確かに低いのよね」

ふう、と溜息になっていた。

「お兄ちゃんは大きいのにね」

「男と女では背が違う」

「せめて若奈さん位になればいいのに」

「私だって小さいけれど」

その若奈の言葉だ。実際に彼女も一五〇程度しかない。だが未久はそれと比べてもまだ小さい。一四六程度しかないのである。

「多分それ以上は」

「伸びないかしら」

「女の子は中学生じゃもう成長が止まるから」

「じゃあ本当にこのままなの」

「多分」

言いにくい言葉を言っているという自覚はあるのだった。

「だからね」

「困ったなあつてなるわ。子供の頃は江角マキコさんみたいになるって思っていたのにそれがこんなに小さいままだもの」

「背は気にするな」

その背の高い兄の言葉である。

「コンプレックスに感じることもない」

「感じるわよ。それはお兄ちゃんが大きいから言えるのよ」

「牧村君私の頭の天辺見えるわよね」

「見える」

若奈の問いにも答える。

「隣に立って覗けばな」

「それが一番嫌なのよ。私昔から小さくて」

「ですよねえ。小さいと何か」

「小さいなら小さいでいい」

だが彼の言葉はこうしたままだった。

「世の中はそれでいい」

「まあそこまで言うんなら」

「出来るだけ気にしないようにするわ」

とはいっても二人の顔は浮かないままである。

「それでとにかく」

「ジェットコースターか」

「そう、それ」

遊園地のことに話が戻った。

「早く行って来なさいよ。私は待ってるから」

「わかった。それではだ」

「行って来るわね」

「たまにはこうしたサービスをしないと」

未久は笑いながら話す。

「若奈さんが可哀想よ」

「ちよつと未久ちゃん」

若奈は今の彼女の言葉に顔を赤らめさせて返した。

「そんなこと言ったら」

「いいんですよ。うちの兄貴はですね」

しかし彼女はその若奈の耳元で囁くのだった。

「滅多なことじゃわかりませんから」

「鋭いの？」

「こつこつことには鈍いですから」

こつこつのである。

「ですから」

「そうなのよね。それはね」

「そうでしょ？ですから」

「一応どういう関係なのかはわかってくれてるみたいだけれど」

「仲はそのままですよね」

「ええ」

残念な顔で頷いたのがその証拠だった。

「そうなの」

「仲は自然に進むものじゃないですよ」

未久はこつこつと言った。

「自分からですね」

「勧めるものなのね」

「はい」

にこりと笑つての言葉だった。

「ですから」

「わかったわ。それじゃあね」

「応援してますから」

明らかに彼女の方に立った言葉だった。

## 第三十二話 変貌その八

「頑張つて下さいね」

「有り難う、それじゃあ」

「そういうことで」

こうして二人をジェットコースターに向かわせた。彼女は笑顔でそれを見送る。そんな楽しい時間を過ごす三人であった。

そしてそれが終わりであった。牧村は家でくつろいでいた。テレビも終わり今は落ち着いていた。

リビングでテレビを観ている。するとそこにまた未久が来て声をかけてきた。

「ねえ」

「何だ？今度は」

「今度つて何よ」

「昼あれだけ声をかけてきたからだ」  
「だから今度だというのだ。」

「それで何だ？」

「お風呂もう入ったわよね」

「今出たばかりだ」

「そうよね。じゃあ次入るわよね」

「そうすればいい」

「お父さんもお母さんも入ったのかしら」

兄の言葉を聞きながらふと両親のことも考えるのだった。

「どうなのかしら」

「入ってもう自分達の部屋に入った」

「いないと思つたら」

「俺ももう少ししたら寝る」

彼もそうするというのだ。

「御前も入ったら湯を落として寝るな」



「最後に洗っておくけれど？」

「別にそれはいいんじゃないのか」

牧村はそれは別にいいのではないかというのだ。

「そこまでは」

「いや、綺麗にしておかないと駄目だからね」

これが未久の主張だった。実際に彼女はそこまで考えて動いているのだ。家事もできる範囲でしているのである。

「お風呂とトイレは特にね」

「いい心掛けだな」

「だからね。お風呂はね」

「ならそうするといい」

声はにこりともしていないがそれでも言うのだった。

「綺麗にするのはいいいことだ」

「わかったわ。それじゃあね」

「何だかんだ言ってそれでいいっていうのね」

「そこまで言うのならいい」

テレビから目を離れた。そして妹に顔を向けて言うのだった。

「御前がそこまで言うならな」

「そうなの」

「それなら俺はだ」

テレビに顔を戻す。そのうえで傍にあったりリモコンを手にとってだった。テレビのスイッチを切った。すると画面が暗転してしまっ  
た。

「これで寝る」

「あれ、次の番組観ないの」

「夜のニュース番組は観ない主義だ」

「だからなの」

「夜のニュース番組のキャスターは碌な人間がいない」  
だから観ないというのだ。

「観れいれば馬鹿になる」

「極論ね」

「実際に酷い内容だ」

それを言う。

「捏造も平気でやるニュース番組なぞ観ても百害あって一利なしだ」

「そんなことがあったの」

「マクドナルドの話だ」

その時のことだというのだ。

「内部告発者は告発者ではなかった」

「どういうこと？それって」

「俳優だった。マクドナルドの店員ではなかった」

「つまり視聴者を騙そうとしていたのね」

「そしてその俳優は番組のメインキャスターの事務所の人間だった」

これが事実だから恐ろしい。視聴者を騙し自分達の望む方に世論を誘導しようともくろんでいる番組もあるのである。

「だからだ」

「もうその番組は観ないのね」

「観ているだけで反吐が出る」

何時になく嫌悪感を露わにする彼だった。

「人間として最低の連中だ」

「最低なの」

「そうだ、最低だ」

まさにそうだというのだ。

「そんな連中の顔も見るつもりもない」

「そこまで嫌いなもの」

「今日はこれで寝る」

こう言ってソファから立った。

### 第三十二話 変貌その九

「じゃあな」

「ええ、じゃあね」

こう話をして別れてだった。この日はゆっくりと休んだ。

そして朝だ。トレーニングに出ようとす。しかしだった。

「貴様か」

「おはようございます」

老人だった。彼が玄關のところ立っていたのだ。

「お迎えにありがとうございました」

「家の前で待つていたな」

「いえ、今来たばかりです」

老人は温和な笑みと共に語った。

「たった今です」

「この時間に出て来るのはわかっていたな」

「それはその通りです」

「そうだというのだ。」

「では。宜しいでしょうか」

「断るつもりはない」

牧村は鋭い目になって言葉を返した。

「行くか」

「では場所はどちらに」

「好きな場所にしろ」

「こちらで場所を選んでいいのですね」

「それで何処にするつもりだ」

「はい、それではです」

牧村の言葉を受けてであった。老人は言った。

「御案内します」

「そうか」

「ではサイドカーに乗られますか？」

「そうだな」

言うただった。早速二人の間にそのサイドカーが来た。その側車にはヘルメットがもうあった。

それを取り中に乗る。そこで。

「貴様も乗るか」

「私にですか」

「そうだ。乗るか」

老人を同乗に誘ったのである。

「行く場所は同じだからな」

「いえ、それは遠慮させてもらいます」

しかしここで彼は微笑みと共にそれは断るのだった。

「それは」

「いいのか」

「はい。お気遣いなく」

こうも言うのであった。

「私は歩いていけますので」

「歩いてか」

「そうしたものも嫌いではありませんが」

ここでこんなことも言うのであった。

「しかしです」

「遠慮するというのだな」

「では参りましょう」

こうしてだった。老人はバイクに乗る牧村を案内した。歩いていくだけでそれでもバイクの彼と同じ速さであった。その速さで向かった場所は。

そこは橋だった。牧村がかつて烏男と闘ったその場所だ。そこに案内されたのである。

「ここか」

「懐かしい場所と思いますか」

「その通りだ」

ヘルメットを脱ぎながら老人の言葉に応える。

「かなり前のことに感じる」

「あの時貴方はまだ天使でしたね」

「そうだったな」

「しかし今は智天使です」

変わったものだ。老人は彼に話してきた。

「凄いものです」

「変わったと言われることが多くなった」

「ええ。それも」

「それも？」

「望む方に」

こう言つてであつた。サイドカーから降りる牧村を見ていた。その一見温和だが目の奥に何かを含んだ顔でだ。言つてみせたのである。

「なりそうですね」

「貴様がどう考えているかは知らない」

牧村はサイドカーから完全に降りて話す。

「しかしだ」

「闘われますね」

「来い」

その言葉と共にであつた。老人を見据えた。

### 第三十二話 変貌その十

すると老人の後ろにだ。二体の魔物がそれぞれ左右に出て来たのである。

「では百目様」

「今回は我等が」

「頼みますね」

その魔物達に告げるのであった。

「ここは」

「有り難き御言葉」

「この時を待っていました」

「闘う時を」

「この時を」

こうそれぞれ言ってみせる彼等であった。

「では早速」

「はじめても宜しいですね」

「では」

「どうぞ」

老人も彼等にそれを許すのだった。温和な笑みは期待で笑っている笑みになっていた。その笑みでの言葉であった。

「お任せしますので」

「智天使になつたとか」

「早いものだな」

魔物達は老人の後ろから出て来た。その姿は今はそれぞれ若者の姿をしている。違うといえばその目が赤く光っているかどうかだけであった。

しかしその赤い目を爛々と輝かせながらだ。魔物達は牧村に言ってきたのである。

「いいな、髑髏天使よ」

「これから貴様と楽しむ」

あえて楽しむと言ってみせたのは明らかであった。

「そして倒す」

「覚悟するのだ」

「楽しむか」

牧村もまたそこに反応を見せた。

「戦いを楽しむ。それが魔物だったな」

「如何にも」

「だからこそだ」

こう返す彼等だった。

「髑髏天使の姿になるがいい」

「すぐにだ」

「わかっている」

髑髏天使もその言葉を受けてであった。

すぐに両手を拳にした。そうして。

それを胸の前で中指のところまで打ち合わせる。するとその打ち合ったところから白い光が放たれた。彼はその光の中で姿を変えた。

そうしてその異形の姿になるのであった。髑髏天使の姿になったのだ。

「行くぞ」

右手を肘を曲げて前に出して一旦開いてから握り締める。そのうえで言うのであった。

そして魔物達もだ。その姿を変えてきた。

人間の姿から徐々に変わる。その正体は。

一人は前足が両方とも鎌になった黴だ。そしてもう一人は巨大な蜘蛛だ。それぞれそうした姿になってみせてきたのであった。

「さて、それではだ」

「我等の名前はだ」

「言われずともわかる」

こう返す髑髏天使だった。

「そうか、既にか」

「わかるというのだな」

「それは」

「鎌鼬と土蜘蛛だな」

「こう言ってみせたのである。」

「そうだな」

「如何にも」

「その通りだ」

魔物達もその通りだと答えるのだった。

「我等の名前はそれだ」

「知っていたのか」

「かつては妖怪だった」

髑髏天使はまた述べた。

「しかし今はだ」

「その通りだ。こうして魔物になった」

「今はな」

その通りだと彼にも返すのだった。

「戦いに喜びを感じてだ」

「こうなっている」

「戦いに喜びか」

髑髏天使は魔物達のその言葉を聞いて静かに言うのだった。



## 第三十二話 変貌その十一

「それをか」

「その通りだ」

「貴様はどうなのだ？それは」

「俺は」

魔物達の言葉にだ。まずは口ごもってしまった。

それが何故かはわからない。本来なら否定の言葉がすぐに出る筈であった。しかしそれが何故か出ずにそうなってしまったのである。

「戦うことはだ」

「ふん、まあいい」

「それではだ」

魔物達は動きだした。髑髏天使もそれを見てである。すぐに智天使の姿になった。白銀に四枚の翼の天使の姿になったのだ。

そのうえで早速来た鎌鼬のその攻撃を左手の剣で受けてみせた。

攻撃を受けてからだ。髑髏天使は魔物に対して言うのだった。

「素早いか」

「俺は風の魔物だ」

鎌鼬は至近で彼の目を見ながら言ってきた。

「素早いのも当然だ」

「そうだな。それはな」

「そしてだ」

魔物はさらに言ってきた。

「俺だけではない」

「来るか」

「如何にも」

土蜘蛛の声だった。彼は赤い糸を出してきた。

鎌鼬が上に飛ぶのと入れ替わりに糸が来た。それで彼を捉えようとする。

「来たか」

「さあ、どうする」

糸を放ちながら髑髏天使に問うてきた。

「この糸はだ」

「知れたこと」

言いながらであった。翼を羽ばたかせる。四枚の翼が同時に動いた。

そしてであった。空に舞い糸をかわしてみせた。糸はつい先程まで彼がいたその空間を空しく通り過ぎた。それだけであった。

しかし魔物はそれを見てもだ。何も動じたところはなかった。

そうしてそのうえで。こう言ってみせたのである。

「それでだ」

「それで、か」

「そうだ。かわしたと思っっているな」

己の上にいる髑髏天使への言葉である。

「そうだな」

「だと言えはとうだというのだ？」

「甘いな」

一言だった。

「そう思うのならばだ」

「そうか」

「何っ!？」

「そうかと言った」

髑髏天使の返答は異様なまでに落ち着いていた。魔物はその落ち着きは予想していなかった。だから今驚いた言葉を出してしまったのである。

「それがどうかしたのか」

「それだけか」

「そうだ、それだけだ」

平然と返すのは変わらなかった。

「俺の今の相手は貴様だけではない」

「そうだ」

「ではそういうことだ」

やはり言葉は平然としたものであった。

「もう一人いるからな」

「くっ、読まれていたか」

ここで鎌鼬が横から奇襲を仕掛ける。髑髏天使から見て右手だ。

だが彼は魔物のその鎌を右手の剣を一閃させることによって弾き返してみせたのである。

そのうえでだ。彼は言うのであった。

「一人でないとわかつているならだ」

「対処は容易いともいうのか」

「如何にも。この通りだ」

落ち着き払った言葉で応えたのだった。

「これでわかったな」

「やるものだな」

「だからこそ今まで生きてきた」

こっぴどく鎌鼬に返した。

「今までだ」

「成程な」

「そしてだ」

「ここでさらに言うのであった。」

### 第三十二話 変貌その十二

「これからもだ」

「生きるというのだな」

「如何にも」

こう言つて左手のサーベルを魔物に向けた。それで横から一閃せんとする。

しかし魔物はここで素早く後ろに飛んでだ。その一閃をかわしてしまつた。

「惜しいな」

「かわしたか」

「貴様は確かに強い」

魔物もそれは認める。

「しかしだ」

「しかし？」

「俺もまた強いのだ」

こう言うのである。

「そう簡単に倒れることはない」

「簡単にはか」

「そうだ。そして」

今の言葉と共にであつた。今度は下からであつた。

「むっ!？」

「もう一人いることを忘れるな」

土蜘蛛の声だつた。

「俺をだ」

「そうだつたな。貴様もいたのだつたな」

「そしてだ」

土蜘蛛の聲がさらにしてきた。それと共にであつた。

あの赤い糸が来た。それで髑髏天使を捕らえようとす。

しかし髑髏天使はそれを右に飛んでかわした。糸はただ宙を舞っただけであった。

「惜しいと言うべきか」

「残念を言うべきか」

「それではだ」

髑髏天使は攻撃をかわしたうえでその右手の剣に光を込めた。そうしてその光を下にいる魔物に対して放ってみせたのである。

「神の光などと言うつもりはない」

「では何だというのだ？」

「闘いの光だ」

それだというのである。

「それを受けるのだ」

「ふむ。それではだ」

土蜘蛛は上を見上げていた。彼もまた冷静である。頭上から光が迫って来てもだ。至って落ち着いてそのうえで言葉を返してきたのだ。

そのうえでその光を左に少し動いただけでかわしてしまった。光は橋のアスファルトを砕いた。だがそれだけで終わってしまっただった。

「こちらと同じことをするだけだ」

「かわしたか」

「今度は俺が言おう」

かわしたうえで言葉であった。

「惜しいと言うべきか」

「そうかもな。だが」

「だが？」

「かわされたのは事実だ」

髑髏天使はこのことを冷静に受け止めて判断にも入っていた。

「それはだ」

「受け入れているな」

「受け入れなくては生き残ることはできない」

あくまで生き残ることを言うのであった。

「そして勝つこともな」

「成程な。その通りだ」

「そしてだ」

前から鎌鼬がその鎌から鎌イ足を放ってきた。それは後ろに左斜め上に飛んでかわした。

「今は敵は一人だけではない」

「全てわかつているか」

「その通りだ。そしてだ」

羽ばたきながら両手のその剣を再び構えての言葉であった。

「俺もだ」

「貴様も？」

「やらせてもらおう」

今の言葉と共にであった。その目が。

彼は気付いていなかった。目が変わったのだ。それは普段の彼の目ではなかった。

それは空にいる魔物にも橋の上にいる魔物にも見えた。はっきりと見えたのである。

そのうえでだ。彼等はこう言うのであった。

「成程な」

「やはりな」

まずはそれぞれ納得した言葉を出すのであった。

### 第三十二話 変貌その十三

「近付いているな」

「さらに」

「何がだというのだ？」

「やがてわかる」

「貴様自身にもだ」

今はこう言うだけであった。

「やがてだ」

「しかし間違いなくだ」

「何を言っているのかはわからないがだ」

髑髏天使はその言葉はまずは捨て置いた。

「しかしだ」

「闘うか」

「まだ」

「そうだ。俺は闘う」

あくまでそうするというのだった。

「その為にもだ」

そしてまた言った。

「ここで倒させてもらおう」

「よかるう」

「ならば来るがいい」

魔物達も再び攻撃に入った。

また糸と鎌イ足が迫る。しかしであった。

「一度見た攻撃はだ」

髑髏天使は前と下から来るそれぞれの攻撃を冷静に見極めていた。

「通用しない」

「通用しない？」

「そうだというのか」

「そつだ」

こう言つてであつた。髑髏天使は不意に動いた。ただ動いただけではなかつた。相当な速さであつた。

凄まじい動きで上下左右に動き。凄まじい量の光の矢を放つたのだつた。

「受けるのだ」

「くつ、この矢は!?!」

「かわしきれない!?!」

「ただ攻撃を放つだけではない」

動き回り攻撃を放ち続けながらの言葉であつた。

「こうしてだ」

「攻撃をか」

「それをすると」

「さて、死ぬのだ」

これが今の彼の言葉であつた。

「今こそだ」

「くつ、これは……」

「駄目か」

彼等がかわしきれずその無数の矢に貫かれてしまった。それで終わりであつた。

それぞれ青白い炎に包まれていく。最後であつた。

そしてだ。髑髏天使は身体の動きを止めていた。そのうえでだつた。

「この通りだ」

「己、何という速さだ」

「動きだけではないのか」

「速さと技だ」

髑髏天使の言葉だつた。

「それを使つてだ」

「そういうことか」



「それにしてもだ」

魔物達は青白い炎に包まれながらだ。そのうえで髑髏天使を見ていた。見ればその目がだ。彼等は彼のその目を見て言うのであった。

「貴様に聞きたい」

「いいか」

「聞きたいことがあるのだ」

「そうだ。今の貴様はだ」

「どう思っているのだ？」

こう彼に問うのであった。

「闘いについてだ」

「それはどうなのだ」

「闘いにか」

「そうだ、それについてはだ」

「どうなのだ？」

「そうだな」

言葉がであった。微かに笑みが入っていた。しかし彼はそれを自覚することはなかった。だがこつした言葉を出してしまったのだ。

「悪くはない」

「ふふふ、言ったな」

「今な」

「確かにな」

「言った？何をだ？」

言ったところでそれに気付かない彼だった。

「俺に何がある」

「気付かないならいい」

「やがてわかる」

魔物達は青い炎に囲まれながら話していく。

### 第三十二話 変貌その十四

「だからこそだ」

「我等はそれでいい」

「それではだ」

「我等は去ろう」

遂にその全身が炎に包まれ。最後の言葉になっていた。

「貴様の今後はあの世で見せてもらう」

「どうなるかはな」

「それではだ」

「去る」

彼等は青い炎に包まれ消えていった。髑髏天使はそれを見届けてからゆつくりと降り立った。そして牧村に戻ったその時だった。

「また闘ったのだな」

「貴様が」

「見ていた」

死神であった。目玉もいる。

「最初から最後までな」

「今度は闘わなかったのか」

「闘いを挑まれたのは貴様だ」

今はこう言うだけの死神だった。

「だからだ」

「だからか」

「そうだ。私は見させてもらった」

「僕もね」

目玉もそうだとしたのであった。

「見ていたよ」

「そうか」

「やはりな」

そしてであった。死神はこうも言ってきたのであった。

「貴様はやはり」

「どうしたというのだ？」

「いや、言つまり」

彼も言葉を閉ざしたのだった。

「今はだ」

「言わないというのか」

「言つまりだった」

「こう言ってもであった。」

「しかし今はだ」

「いいのだな」

「言つまり気がなくなった」

だからだというのである。

「だからいい」

「そうか」

「しかしだ。これからだが」

「これからか」

「私は貴様を刈る」

刈る、というのである。

「貴様のその魂をだ」

「俺が魔物になった時とでも言つまりか」

「そうだ。今の私の役目は魔物の魂を刈ることだ」

その手にはあの大鎌がある。いつもの白銀の光がそこにはある。

その輝きは誇示してはいない。しかし見せてはいた。

そうしてだ。その輝きを見せながらあらためて言うのであった。

「それではだ」

「来るつまりか、今から」

「いや、今はない」

それは否定した。闘う気はないというのだ。

「貴様はまだ人間だ」

「俺は人間だというのだな」

「まだな」

まだ言うのであった。

「まだ人間ではある。しかしだ」

「戯言だな。俺が魔物になるなどとはな」

「そうだといいけれどね」

「何っ!？」

牧村は今度は目玉の言葉に応えた。そのうえでさらに言うてみせた。

「俺がこれから変わるとでもいうのか」

「だから。人は変わるんだよ」

「よく言われる言葉だな」

「よくも悪くも変わるんだよ」

それは決していい場合だけではないというのである。しかもここでの悪い場合というのが問題であったのだ。それこそがであった。

「君だって髑髏天使に変わったじゃない」

「髑髏天使にか」

「そうさ、確かにそれは運命によるものだけれどね」

「運命。五十年に一度この世に現われるか」

「その髑髏天使にね。なるのと同じだよ」

こう言うのである。

「君が魔物になる場合もあるんだよ」

「魔物を倒す髑髏天使でもか」

「過去にそうした話はなかったかな」

「なかった」

死神が目玉の言葉に答えたのだった。

「これまでではだ」

「そうだったね。そもそもね」

「智天使になる髑髏天使も殆どいなかった」

「しかもこんな短期間にはね」

「特殊な場合には特別なことが起こるものだ」

死神はここでも冷静に述べた。

「だからこそだ」

「この場合の彼も？」

「有り得る。いや」

「いや？」

「このままどうなってもおかしくはない」

死神は牧村を見据え続けていた。そのうえで言葉である。

そうしてだ。死神はまた牧村に告げた。

「今の貴様は人になるか魔物になるかの狭間にある」

「人と魔物のか」

「どうなるかは貴様次第だ」

そしてこんなことも言うのだった。

「貴様がどう心を持っていくかだ」

「魔物を倒す」

牧村の考えは今ほこれ以外の何でもなかった。

「それだけだ」

「それが何の問題もないものだといいいね」

目玉が彼に告げた言葉だった。

「本当にね」

「何の問題もか」

「僕は何だかんだで君のことが嫌いじゃないんだ」

これは目玉の本音であった。彼は今本音を言ったのである。

「君という人間はね」

「俺はか」

「無愛想だけれど努力家だしさりげなく優しさを見せるしね」

「俺は別にそんな人間ではないがな」

「だといいいけれどね。それじゃあ」

「そうだな」

死神は目玉の言葉に応えた。

「もう行くか」

「そうだね。じゃあさ」

目玉がまた牧村に告げた。

「また会おうね。その時はね」

「俺が人間でいればか」

「それを願うよ。じゃあね」

こうして姿を消す死神と目玉だった。彼等はこれで去った。牧村は闘いが終わるとサイドカーに乗って家に戻りそのうえでトレーニングをあらためてはじめたのであった。だがその心には何時までも彼等の言葉が残っていたのだった。それは容易に消えるものではなかった。

### 第三十二話

完

2010・2・28

### 第三十三話 闘争その一

髑髏天使

第三十三話 闘争

牧村は博士の研究室にいた。そこでいつもの様に自分の机に座っている博士に問うた。言うまでもなく問うのはあのことであった。

「魔物か」

「そうだ。それはどうしてなるのだ？」

それを問うのであった。

「一体」

「闘いじゃな」

「闘いか」

「それじゃ」

まさにそうだというのであった。

「そのせいじゃ」

「闘いの結果か」

「魔物は闘いの中で生きる存在なのはもうわかっておるな」

「無論だ」

それについては異論のない牧村だった。

「よくわかつているつもりだ」

「そういうことじゃ。つまりじゃ」

「闘いを経ていればか」

「魔物に近くなっていくのじゃ」

「しかし髑髏天使はだ」

「過去君程短い間に智天使になったものはおらん」

「これも話すのであった。牧村のことである。」

「それもまたじゃ」

「それか」

「それだけ闘いを経ていることでもあるからじゃ」

「闘いを経ることで魔物に近付くか」

「実は今まで前例がない」

「これが問題だった。」

「当然文献にもない」

「文献にもか」

「髑髏天使が魔物になるか」

博士はここで腕を組んで大きく息を吐き出した。そのうえでの今の言葉であった。

「うづむ」

「わからないか」

「正直言つてわからん」

このことを正直に述べる博士だった。彼も己を偽ることはなかった。

「これだけ短い間に智天使になったのもないのじゃからな」

「前例がないからか」

「前例がないということはそのから調べて検証しなければならん」

これはどのことにも言えることであった。それはどうしてもであった。

「さて」

「さて？」

「さし当たつてじゃがな」

「当面か」

「またもう一度闘つてみればよいかのう」

博士はこんなことを言うのであった。

「わしもこれはよくわからんが」

「わからないのか」

「のう」

博士は次に今日も部屋の中にはべつて遊んでいる妖怪達に顔をやめた。そのうえで彼等に対して問うたのであった。

「今彼はどうじゃ？」



「牧村さんが？」  
「どうかって？」  
「魔物に近くなっておるか？」  
「このことを問うたのである。」  
「どうじゃ？そこは」  
「そうだね。それはね」  
「どうかなあ」  
「少しだけどなってるかな？」  
「そうだよね」

妖怪達はまずは牧村をじっくりと見た。そのうえで述べたのであった。

「気がね。闘いの中で殺伐ともしてきている？」  
「そうかもね」  
「そのせいかな」  
「そうした意味では魔物に近くなってるかな」  
「そうよね」  
それを話すのであった。  
「何か今の感じって」  
「不吉な感じがあるけれど」  
「それでも弱いよ」  
「あるのじゃな」

博士の目の光が強いものになっていた。そのうえでまた妖怪達に問うのだった。

### 第三十三話 鬭争その二

「やはり」

「このままいけばどうか」

「危ないかな」

「そうかもね」

「俺が魔物にか」

牧村はそれを聞いてだった。考える目になった。そのうえでまた言うのであった。

「滑稽な話だな」

「いや、なるとは限らん」

それは否定した牧村だった。

「それはな」

「ならないというのか？」

「君のこれから次第じゃな」

あくまでそれからだというのである。

「妖怪になるのも魔物になるのもその者次第じゃ」

「俺次第か」

「そうじゃ。何事も同じじゃがな」

「同じか」

「左様、同じじゃよ」

ここでは人生論めいた話になっていた。

「君が魔物になるのもならぬもこれから次第じゃ」

「具体的にどうするかだな」

「心を鍛えることじゃな」

博士が今言うのはこのことだった。

「心をじゃ」

「心をか」

「左様、それで随分と違う筈じゃ」

「つまり武道かな」

「ああ、あれね」

「そのことになるよね」

博士の話を聞いて言い合う妖怪達だった。相変わらず酒やつまみや果物や菓子を飲み食いしながら楽しくやっている。少なくとも彼等には闘いというものはなかった。

「ここはだよな」

「それがいいんじゃないかな」

「心の鍛錬ね」

「それがね」

「それが」

牧村は彼等の言葉を聞いてだ。まずは冷静に述べた。

「それが大事なのか」

「そうじゃな。わしは武道については知らんが」

博士はこのことには答えられなかった。武道は専門外なのだ。

「それでもじゃな。よいのかもな」

「心か」

「君は今テニスとフェシングをやっておったな」

博士はこのことをここで牧村に問うた。

「そうじゃったな」

「その通りだ」

「ふむ。それはじゃ」

博士はそれを聞いてまた述べた。

「確かに身体の鍛錬にはかなりいい」

「それにはか」

「じゃが。スポーツは心の鍛錬には造詣が薄いからのう。ストレスを解消させるにあたってはこれ以上はない程よいものなのじゃがな」  
スポーツのそうした点も語ってからの話であった。

「しかし。心の鍛錬はじゃ」

「武道か」

「左様じゃ。確かこの学園にも」

「一通り揃ってるよ」

「全部ね」

妖怪達がここでまた述べてきた。

「剣道もあれば柔道もね」

「空手も合気道もあるしね」

「少林寺拳法だってあるよ」

「そうじゃったな。全部あったな」

博士は彼等の言葉を受けて静かに返した。

「あとは弓道もあるし」

「どれでも好きなもの選んでいいんじゃないの？」

「いや」

ところがここで、であった。牧村は否定の言葉を出してそのうえで述べたのである。

「選ぶ」

「あれっ、一通り見たりしないの」

「それは」

「そうだ。しない」

このことをはっきりと答えたのであった。

「それはだ」

「またどうして？」

「それは」

「俺が使うのは剣だ」

その格闘スタイルは念頭に置いていた。そしてそのうえでの言葉であった。彼はそれを離れて考えることはあえて止めているのだ。

「だからだ。それはしない」

「だからなんだ」

「それでなんだ」

「そうだ。だからしない」

また言ってみせたのであった。

### 第三十三話 鬪争その三

「そして選ぶとすればだ」

「剣道じゃな」

博士が横からバームクーヘンを食べながら言ってきた。フォークで小さく切ってそれを口の中に入れていた。その横にはコーヒーもある。

「それじゃな」

「そうだ。それを考えている」

まさにその剣道をだというのだ。

「フェシングと通じる。やるからにはそれをした」

「考えてるんだ、そういうことも」

「剣を使うからそれだっというのまで」

「俺が柔道や空手をして何にもなりはしない」

こうしたことも話した。

「だからこそだ。俺は剣道を見てみたい」

「答えは決まったな」

博士は彼のこの言葉を聞いてまた述べた。

「それではじゃな」

「そうだ。それに剣道ならだ」

彼はここでだ。いつもの様に白い壁に背をもたれかけさせたその格好のままだ。確かな口調で言ってきたのであった。

「知っている人間もいる」

「へえ、知ってる人いるんだ」

「剣道をやっている人に」

「そこに行こうとも考えている」

「よいことじゃな」

博士はそれを聞いてその通りだと頷いた。今はコーヒーを右手に持ちそのうえで口に近付けている。そのうえで彼の対する言葉だ

った。

「それは」

「そう思うのか」

「知り合いがいればそれに越したこともない」

「こつも言つのだった。」

「だからじゃ」

「そうか。それならだ」

「剣道も人を選ぶものといえますしね」

「今度言ってきたのはろく子だった。その長い首を博士の周りに幾重にもした様にリングを作りながらだ。そのうえで言ってきたのである。」

「ですから」

「そうじゃな。何でもそうじゃが」

「全てが全てではないですが中には剣を持つのに値しない人間もいますよ」

その眼鏡をかけた知的な美貌の顔での言葉だった。

「竹刀を暴力の道具にしか考えていない人間も」

「ああ、いるよね」

「そういう人間はね」

「特に学校の教師に多いんだよね」

他の妖怪達もその通りだと話す。

「そういう奴ってね」

「普通の職場とか道場だったら一発で問題になるか首だけれどね」

「教師の世界って暴力振るっても何の問題もないしね」

「だからね」

「我が国の言葉だ」

ここでまた牧村が言った。

「いい鉄は釘にはならない」

「そつだよね。そして」

「後に続く言葉は」

「いい人間は教師にはならない」

まさにそうだというのだ。

「そういうことだ」

「何でかな、これって」

「学校の先生ってね」

「おかしくなるんだろうね」

「最初からおかしいのも多いけれど」

そうした教師が多いのもまた事実である。恐ろしいことにだ。

「そういう人間が人を教えるからね」

「しかも竹刀持って人を教えるから」

「洒落にならないんだよね」

「まあわしもじゃな」

また言う博士であった。

「この世界にいて長いが」

「長いからか」

「よく知っておるのじゃよ」

まさにそうだというのである。博士もだ。

「教授の世界でもそうした人間が多いのじゃ」

「セクハラとか横領とか多いよね」

「全然高踏な世界じゃないよね」

「本当にね」

「確かに」

妖怪達もあれやこれやと話す。彼等も学校の世界については知っていた。

### 第三十三話 鬭争その四

「僕達も見えていてね。呆れてるからね」

「戦争終わってからかなり酷くなったよね」

「先生とか教授の世界って」

「正直なところ嫌な世界じゃよ」

博士はそれを否定しなかった。

「まああまりお勧めはせん。陰謀も多いしな」

「どろどろしてるんだね」

「そついうのも入るなんて」

「つていうか滅茶苦茶じゃないの？」

「ねえ」

「滅茶苦茶なんてものではない」

牧村も知っている世界だった。だからこそまた話すのだった。

「腐敗し尚且つそれに光が当てられることは長い間なかった」

「なかったんだ」

「何でだろうね、それって」

「最近までなかったって」

「どついうこと？それって」

「聖職者と呼ばれておったからのう」

博士はまた話した。実際に教師はそう呼ばれてきていた。それが  
真実かどうかというのである。甚だ疑問なのはもう言うまでもない。

「かつては」

「今は違うよね」

「もうね」

「じゃからいい鉄は釘にはならん」

博士もまたこのことを話した。

「そついうことじゃ」

「まあそついうさ、先生には教わらない方がいいね」



「碌なことにならないからね」

「だよ」

妖怪達もそれはわかっていた。

「絶対にね」

「実際にいるだけでも信じられないし」

「っていつか剣道なんかするなよって思っけれど」

「全くだよ」

「一応言うがだ」

また牧村が言ってきた。

「中学校では突きは禁止されている」

「それはどうしてですか？」

ろく子が彼の方に首を伸ばしてそのうえで目をぱちくりさせて問うてきた。

「中学生で禁止されているのは」

「中学生はまだ身体ができていない」

これは事実だった。

「だからそんな危険な技を使えば大変なことになりかねない」

「だから突きはしないんですか」

「そうだ。これは常識の話だ」

そう、『常識』であった。だが教師の世界というものはマスコミの世界と並んでその常識が通用しない世界なのである。まさに無限の腐敗地獄の中にある世界なのだ。

「教師なら当然知らなくてはならないことだ」

「っていつか生徒怪我させたら問題なんじゃ？」

「そんな稽古させてね」

「そうだよ」

「しかしだ」

牧村の言葉はここで剣呑なものに変わった。

「それを教師が行う」

「えっ!？」

「何で!？」

「禁止されてるのに!？」

「先生が生徒にやるの!？」

「そうだ。生徒に突きを入れる」

これもまた事実である。中学生の生徒に突きを入れるのである。

無論これで罰せられることはない。教師の世界は日本で最も無法がまかり通る世界の一つであるからだ。こうした意味においてもマスコミや知識人の世界というものは異常な世界なのである。

「しかも只のリンチ技のシャベル突きをだ」

「シャベル突き!？」

「何、それ」

「変な技みたいだけれど」

「下から上にスコップを上げる様にして突きを入れる。実際の試合で使おうものなら即刻退場になってもおかしくはない技の一つだ」

そういう技だというのだ。

「それを使うことすらある」

「いや、それおかしいでしょ」

「そんなのするってもう指導でも何でもないし」

「シゴキのレベル超えてるし」

「幾ら何でもさ」

「僕達の間でもそんなことしたら」

妖怪達にもモラルがある。それを見せる言葉だった。

### 第三十三話 鬭争その五

「普通にね。魔道に墮ちるよね」

「そうだよね」

「幾ら何でもね」

「そんなことがまかり通る社会って何？」

その教師の世界についての言葉だ。

「それで何のお咎めもなしだよね」

「そこまでして」

「それどころか床の上で背負い投げまでする」

これもまた有り得ない話だった。

「しかも受身を知らない生徒相手にだ」

「それって人間の世界じゃ犯罪なんじゃないの？」

「完璧に」

「床で背負い投げって」

「危ないから畳を使うのに」

柔道が畳の上で行われるのにはしっかりとした理由があるのだ。

畳は衝撃を緩和するからだ。その為柔道では畳を使うのである。

「それでそれって」

「おかしいでしょ」

「ってどうか先生って何？」

「犯罪しても捕まらないの？」

「しかも」

話はそれで終わりではなかった。

「まだある」

「まだあるって」

「どれだけとんでもないんだよ」

「異常過ぎない？」

「他の部活の練習の前で生徒を殴ったり蹴ったりしても一切お咎め

なしだ。むしろそこに連れ出してやっていた」

これが現実であるから恐ろしい。それこそ悪魔が昼の空を飛び回っているもおかしくはない、それが教師の世界というものなのである。

「それをだ。竹刀を蹴ったりしてな」

「剣道やる資格ないね」

「っていうかそれ人間？」

「魔物になってるんじゃないの？」

「人間は腐敗する時は何処までも腐敗する」

そうしたこと話す牧村だった。

「教師の世界がその証左だ」

「しかし。それで一切お咎めなしって」

「とんでもない世界だよね」

「あのさ、政治家とか官僚の世界の比じゃないんじゃないの？」

妖怪達も人間の世界のことに詳しい。それで眉を顰めさせながら言うのだった。幾ら何でも有り得ないというのだ。その教師の世界はである。

「そこまで出鱈目だなんて」

「酷過ぎるっていうかさ」

「異常じゃない」

「あの世界は生徒のことなぞ考えてはいない」

日教組の体質でもある。彼等はいくまで自分達のことしか考えていない。生徒のことなぞ口だけでしかない。近頃ではそれもなくなり捨てているようであるが。

「何一つとしてだ」

「自分達だけなんだね」

「そういう世界なんだね」

「そうした世界だ。マスコミの世界も同じだがな」

「何か社会の木鐸とか聖職者っていうけれど」

「全然嘘なんだね」

「全くの逆じゃない」

その軽蔑の感情を露わにさせる妖怪達だった。

「で、その教師は？」

「まだ教師やってるの？」

「やってるっばいけれど」

「流石に問題になったが今でも教師をやっている」

牧村はここでも事実を話した。

「今もだ」

「凄いつていうか」

「もう幾ら驚いたかわからないけれど」

「酷い世界だよね」

「何、それ」

妖怪達の誰もが呆れる話であった。

「そこまでやったら絶対にいられないじゃない」

「人間の世界で言うところ。確か」

「これだよね」

河童が右手で自分の首をかき切る動作をしてみせた。その時にそ

の青い舌も出してみせる。如何にもコミカルな動作ではある。

「どう考えてもね」

「それしかないよね」

「つていうかならないんだ」

「教師の世界とマスコミの世界は不祥事には強い」

当然それはいい話ではない。

### 第三十三話 鬭争その六

「どれだけ問題を起こし背信行為をしてもだ」

「お咎めなしなんだね」

「異常なんてものじゃないね」

「どうなってるの？本当に」

「あるニュース番組は俳優を使って自作自演の芝居をして視聴者を騙していた」

「これも実際にあつた話である。」

「それがインターネットで公になってもだ」

「何のお咎めもなしなんだね」

「あれだよ。夜の十時からいつもやってる」

「ああ、あの番組か」

「あれかあ」

「妖怪達もそれがどの番組かわかった。」

「あの番組なんだ」

「そうか。胡散臭いとは思っていたけれどね」

「人は恥を忘れたら何処までも腐敗する」

「牧村の今の言葉をまさにそのマスコミや教師の世界についての言葉だった。」

「何処までもな」

「いや、そんな教師いたらさ」

「本気で言っければね」

「髑髏天使になってやっつけてもいいじゃない」

「そうだよ」

「妖怪達も話を聞いてかなり憤慨していた。」

「そんな奴はさ」

「それこそいいじゃない」

「やっっちゃっても」

「いや、それはならん」

しかしだった。ここで博士が彼等を制止したのであった。

「それはじゃ。絶対にならんぞ」

「絶対につて」

「何でなの？それつて」

「理由があるの？」

「理由はある」

まさにそうだと返す博士だった。

「それはじゃ。髑髏天使は魔物と戦う存在じゃ」

「それで人と戦うとか」

「それだけで髑髏天使ではなくなる」

まさにそうだというのだ。

「その時に魔物になってしまう」

「魔物にか」

「そうじゃ。なってしまう」

そうなってしまうというのである。魔物にだ。

「じゃから絶対に駄目じゃ」

「じゃあそういう教師は野放し？」

「結局実質的には何のお咎めもなし？」

「それつて酷過ぎるじゃない」

妖怪達は口を尖らせてそのことを批判する。河童や烏天狗はその口先が既に尖っているがそれでも口を尖らせたのである。

「世の中つていつか人間の世界つて」

「何なの？それ」

「おかしいじゃない」

「ねえ」

「そうした奴は法律の世界の話じゃ」

博士はそちらだというのだった。

「髑髏天使の話ではない」

「牧村さんも幾ら強くなっても万能じゃないんだね」

「そうした奴に何もできないって」

「結局は」

「その通りじゃよ。まあそれはわかってくれ」

「俺もだ」

その髑髏天使である牧村もだ。静かに応えて言うのだった。

「魔物以外に向かう気はない」

「それを聞いて安心したぞ」

「安心してもらう。外道は確かにいる」

牧村もそのことはよくわかっていた。人間の世界は複雑である。

そうした存在もどうしてもいてしまうのだ。やはり教師やマスコミの世界にはそうした輩が割合的にも質的にも数的にも桁外れではあるがだ。

「しかし。俺は髑髏天使だ」

「そうじゃな」

「魔物を倒すだけだ」

あくまでそれだけだというのであった。

「俺はそれだけだ」

「それはよい」

「いいか」

「しかしじゃ」

ここでまた、であった。博士はその牧村を見てだ。あらためて告げたのである。

「その魔物達との戦いもじゃ」

「さっきの話だな」

「そうじゃ。気をつけてくれ」

こう告げるのだった。



### 第三十三話 鬭争その七

「くれぐれもな」

「さもなければ俺もか」

「深淵を覗いた者は自らもその深淵に取り込まれる」

そしてこんな言葉も出したのだった。

「ニーチエの言葉じゃったかな。確かこんな言葉だったと思うぞ」

「まあそんな感じですね」

またろく子の首が来て彼に話す。

「私は哲学が専攻ですが」

「おや、そうだったんだ」

「哲学だったんだ、ろく子さんの専門って」

「ふうん」

妖怪達もそれを聞いて納得した顔で頷く。

「成程ねえ」

「哲学者ね」

「秘書だけかと思っていたけれど」

「そっちの顔もあるんだ」

「しかも専門は十九世紀の西欧の哲学ですよ」

話しながら上機嫌でその首を左右に動かしていく。実によく動き伸べる首である。

「ですからニーチエも」

「ニーチエか」

牧村が反応したのはそこだった。

「そうか」

「いいと思われませんか？牧村さんは」

「そうだな。悪くはないだろう」

「そうですね」

彼の今の言葉を聞いて明るい顔になるろく子だった。

「それは何よりです」

「しかしだ」

「しかし？」

「ニーチェか」

彼が今度言うのはそのニーチェについてだった。

「あの学者も独特だな」

「色々辛いことも経験してきておる」

博士もそのニーチェについて話に加わってきた。

「特に最後はのう」

「狂死だったな」

「梅毒だったと言われておる」

これはあくまで一説である。しかし有力な説であるらしい。

「それでじゃ。錯乱してのう」

「そしてそのままでした」

ろく子の声は実に悲しいものだった。表情もそうになっている。

「あの人はそれで」

「そうだったな」

博士がまた言った。

「惜しい話じゃ」

「あのまま生きていたらどうなったでしょうか」

「さて」

しかしろく子の今の問いにはだ。首を捻る博士であった。

「それはわからんな」

「わかりませんですか」

「どうなったか見当がつかん」

「そしてこうも言った。

「わしにはな」

「学界でもかなり特別な位置にいましたし」

「逸材じゃったが異才じゃった」

それがニーチェだというのだ。

「何しろ哲学よりもギリシア悲劇じゃったからな」

「そしてワーグナーですね」

「うむ」

ドイツを代表する音楽家である。まさに音楽史の巨人である。

「ニーチェといえばな」

「ワーグナーですね」

「星の友情は残念な結果に終わった」

ここでも残念という言葉を出す博士だった。

「まあ仕方ないと言えば仕方ないが」

「ワーグナーの人間性も考えれば」

「ニーチェもワーグナーを完全にわかっておらんかった」

それもあつたというのだ。

「二人の相違がそのまま決別になったからのう」

「特にニーチェのワーグナーへの一方的な感情がですね」

「そうじゃな。ニーチェはワーグナーに片思いをしておった」

ここでは恋愛的な意味合いはない。

### 第三十三話 鬭争その八

「あくまで一途にのう」

「そしてそれが裏切られたと思つたからこそ」

「決別になつた。バイエルン王とはまた違つてじゃ」

今度は王が話に出て来た。少年時代に彼のオペラをはじめて観てそれから終生彼の全てを愛し続けた美貌の王、ルートヴィヒ二世である。

「彼は王以上に純情であつたし」

「そしてワグナーを一方的にしか見ていなくてそれで片思いをしていた」

「バイエルン王はワグナーをわかつていた」

王はだというのだ。

「ワグナーの人間性もな」

「あのかなり問題のある人間性も」

「その通りじゃ」

ワグナーは女癖の悪さは非常識の域に達していた。すぐに舞台の歌手やダンサーに手をつけるだけではない。パトロンの妻と関係を持ったこともあれば拳句には弟子の妻を奪つた。コジマワグナーはそうして彼の妻となつた女性なのである。しかも女性問題だけではなかつた。

元々ワグナーは尊大で図々しい人間だつたと言われている。反ユダヤ主義者として有名でもあり極端な浪費家でバイエルン王がその借金の肩代わりをした。己の舞台にバイエルンの国庫から金を出してもらいそのうえ政治にまで口出しをした。失言癖に放言癖もかなりのものであつたのだ。

「知っていてそのうえで終生愛し続けた」

「ワグナーの手管に乗せられていた感もあるとはいへ」

「しかし王はワグナーを終生愛していた」

これが事実であるのだ。

「ニーチェと違ってな」

「そうですね。まさに」

「ワグナーは偉大じゃった」

博士はそれは確かだというのだ。

「確かに問題のある人間性にしてもじゃ」

「それでもすね」

「魅力的な人間でもあった」

博士はこつも話した。

「じゃからニーチェも一度は魅了されたのじゃ」

「結果としてそうなりますね」

「ニーチェが生き続けてもワグナーとの和解はあったかのう」

「どうでしょうか」

ろく子はその伸ばした首を傾げさせながら述べた。

「果たしてそれは」

「なかったかのう」

「私はそう思います」

こつ答えるのであった。

「ワグナーが死んでいたとかそういう問題ではなくです」

「なかったか」

「そう思います。ニーチェは純情でありながら頑固なところもある人でしたから」

つまり一途というのである。だから熱中し嫌いになればそれが何処までも高じていくのである。それがニーチェであったのだ。

「ですから」

「左様か。そういうものか」

「残念でしょうか」

「いや、やはりああなったと思うからのう」

そのニーチェとワグナーの決別に関する言葉だった。

「やがてニーチェがな」

「ワグナーをああして一方的にですね」  
「見てじゃ。ワグナーもニーチェに嫌われたからといってじゃ」  
「気にする人でもありませんでしたね」  
「元々敵の多い人物じゃった」  
「これもその人間性や行動故である。」  
「じゃからな」  
「ニーチェに嫌われたところで、ですね」  
「敵も多いが味方も多かった」  
「それがワグナーなのだ。」  
「それもあつたからのう」  
「そうですね。ワグナーにとってはですね」  
「今更といったところじゃ」  
「確かに」  
「さて」  
「ここで話を変える博士であつた。」  
「それでじゃが」  
「俺にだな」  
「君はとりあえず戦いのこと以外も考えるのじゃ」  
「そうしろというのだ。」  
「心の鍛錬をしながらな」  
「そうしながらか」  
「君は確かに髑髏天使じゃ」  
「それは紛れもないのだというのだった。」

### 第三十三話 闘争その九

「しかし。それでもじゃ」

「人間だな」

「左様、魔物ではない」

「俺は人間か」

「言うまでもないと思うがのう」

博士は牧村を見つつまた告げたのだった。

「そんなことは」

「そうか」

「そうじゃ。とにかくじゃ」

「とにかく、か」

「闘いから心を離すのも重要じゃ」

今度言うのはこのことだった。

「今までは何かあればすぐに考えておったな」

「否定しない」

まさにその通りだった。髑髏天使になってからこのことが頭から離れたことはなかった。それは一秒たりともそうなのであった。それも否定できなかった。

「そうか。時にはか」

「少しでもいい。少しでも全然違う」

「そうしていけば魔物になるということはないのか」

「少しはましじゃな。それじゃ」

「今度は何だ」

「もうすぐ大学も休みに入る」

博士は大学の話に変えてきた。

「その間どうにかしてみればいい」

「どうにか、か」

「闘いのことを僅かの間でも忘れてたり」

他のことも言うのであった。

「それにじゃ」

「心の鍛錬か」

「両方してみればいい。どうじゃ?」

「考えさせてもらおう」

静かに答えた牧村だった。

「それはな」

「そうするとよい。今君はかなりの力が備わった」

「智天使か」

「左様、これまでの天使とは全く違うまでじゃ」

「そこまで強大なのだというのだ。」

「だからじゃ」

「それに飲み込まれても駄目か」

「魔物は戦いに溺れ力に飲み込まれてなる」

「そうしてなる存在だというのだ。」

「だからじゃ。力が大きければじゃ」

「それを使いこなすものが必要か」

「そういうことじゃよ。わかったな」

「わかった」

今度の返答は一言であった。

「少しだがやり方が見えた」

「ではどうするのじゃ?」

「祖父のところに向かう」

具体的にはそうするというのである。

「まずはだ」

「御祖父君のところにか」

「剣道をやっている。大阪でな」

「いいよね、丁度」

「本当にね」

妖怪達も頷くことだった。



「じゃあ頑張つてね」

「それでね」

彼らはそれぞれ牧村に告げた。

「僕達も応援に覗きに行くから」

「その時はね」

「いやいや、君達が行くとじゃ」

博士は彼等をこう言つて止めてきた。

「それはかえつてよくない」

「あれっ、何で？」

「それはどうしてなの？」

「君達は目立ち過ぎる」

少なくとも一つ目小僧や輸入道といった面々を見ればそうとしか思えなかった。赤鬼にしても一反木綿にしる塗り壁にしるだ。異様なまでに目立っている。

### 第三十三話 鬭争その十

「それで街を歩けばまずいじゃろ」

「普通に歩いてるけれどね」

「ねえ」

「楽勝だよ」

猫又にから傘、それと一本だたらの言葉だ。

「一本足でも尻尾が二本あっても」

「傘でもね」

「全然目立たないよ」

「普通目立って仕方ないが」

これは牧村の言葉だった。

「尻尾が二本ある猫なぞな」

「だってさ。黙ってればわからないし」

「僕なんか独特なファッションで終わりだよ」

今言っただのは河童だ。河童巻きを楽しそうに食べている。

「もうそれだけでね」

「絶対に嘘だな」

「嫌だな、妖怪は嘘つかないよ」

「では思い込んでるだけだ」

牧村の言葉も辛辣だ。

「その格好で目立たない筈がない」

「駄目じゃ駄目じゃ」

砂かけ婆がそんな牧村に対して言ってきた。

「やっぱり牧村さんはわし等のことを何一つとしてわかってはおらん」

「わかっているというのか」

「そうじゃ、わかっておらん」

まだ言う砂かけ婆であった。

「わし等はこのままの格好でじゃ」

「外に出て平気だというのか」

「全くのう」

まさにそうだというのである。

「何の悩みも憂いもない」

「本当なのか」

「はい、本当ですよ」

ろく子はその首を伸ばしてきて答える。本当によく伸びる首である。

「私なんか黙っていればわかりませんよね」

「わかりやす過ぎる位だがな、今は」

「まあそれは置いておいてですね」

「置いていいのか」

「はい、首は縮めることができます」

言いながら今は伸ばしている。もう十メートルは伸びているがさらに伸びる。その伸び方はかなり尋常なものではなかった。それはまるで。

牧村もだ。その長さを見て言うのであった。

「何かな」

「何か？」

「いや、首長竜か」

彼が出してきた名前はこれだった。

「それみたいだと思つてな」

「首長竜ですか」

「そういう感じだ。何処まで伸びるのか」

それをまた言う。

「エラスモサウルスにも似ているな」

「うふふ、そうですね」

ろく子の方も笑ってそれに応えるのだった。

「私もあの恐竜には親近感がありますし」

「あるのか」

「もつとも私は縮めることもできませんから」

言いながら引っ込めていく。すぐに普通の人間と全く違わないようになった。外見を見れば確かにそう見える。知的な美女にだ。

「こつした風に」

「そうか。そうなるか」

「はい、それでなのですが」

「何だ、今度は」

「私達は全然ばれません」

「ばれないというのである。彼女もだ。」

「傘さんなんて誰かが持っていればわかりません」

「昔の傘なのにか」

「だから。それは化けていればいいんだよ」

から傘が笑いながら話す。今は江戸時代の傘である。しかしというのだ。

実際にここでどろんと白い煙に包まれる。するとであった。

「ほらね、これではれないよね」

「そうだな」

赤い普通の蝙蝠傘になった。少なくともそうとしか見えないものにはなかった。

「その外見だとな」

「だから大丈夫なんだよ」

すぐに元の江戸時代の傘に戻ってきた。

第三十三話 鬭争その十一

「妖怪は化けられるんだよ」

「だからか」

「うん、全然平気」

また言う彼だった。

「砂かけ婆なんか砂使わないとわからいし」

「わしなんかあれじゃぞ」

今度言ってきたのは子泣き爺である。

「普通に今の格好をすればそいじょそこいらの爺さんじゃ」

「小柄なか」

「左様、それだけじゃ」

あくまでそれだけだというのだ。

「それで何なくじゃ」

「おいどんも包まれば反物ばい」

一反木綿はひらひらと飛びながら話す。

「塗り壁どんは姿を透明にすることが出来るばい」

「塗り壁――――」

「僕だつて顔化けられるよ」

一つ目小僧は自分の顔をその両手で一旦覆う。それを外すとすぐに普通の男の子の顔になった。河童も同じであった。他の多くの妖怪達もだ。

「こうしてね」

「人間に化けられるから」

「ノープロブレムだよ」

「変化か」

牧村はそれを見てまた述べた。

「成程な。そういうことか」

「そうそう、それだけ」

「全然平気だから」  
妖怪達は明るく話していく。  
「安心していいよ」  
「僕達についてはね」  
「勿論このままの姿で出歩いたりもするけれど」  
「それもあるというのだった。」  
「けれどね。人間の世界って隠れる場所凄く多いからね」  
「誰にも気付かれずに歩くなんてね」  
「楽勝だよね」  
「本当にね」  
「それでもできるというのだ。」  
「だから牧村さん僕達のことわかってないよ」  
「そんなの楽だから」  
「全然できるから」  
「そうか」  
「そこまで聞いて頷く牧村だった。」  
「それでか」  
「そうだよ。それじゃあこれ」  
「食べる？」  
「美味しいよ」  
言いながら饅頭を出して来た。ここで狸や狐が言う。  
「馬のうんこじゃないからね」  
「安心していいよ」  
「若しそんなものを出せば殴り倒すかもな」  
「牧村にしては珍しい冗談だった。」  
「それこそな」  
「剣呑な冗談だね」  
「っっていうか本気？」  
「本気じゃないよね」  
「俺は暴力は嫌いだ」

これが返答だった。

「何も生み出しはしない」

「それはそうだけれどね」

「さっき話した暴力教師じゃあるまいし」

「暴力で手に入れたものなんて何にもなりはしないしね」

「続かないし」

妖怪達はこうも言うのだった。

「所詮はね。暴力だけじゃ人はついて来ないからね」

「人だけじゃなく妖怪もね」

「大事なのは中身」

このことは彼等も実によくわかっていた。

「中身がない人間は駄目だからね」

「まあさっきの暴力教師の話だけれど」

「その屑野郎？」

「そいつのこと？」

「そう、そいつ」

まさに彼のことだというのである。

### 第三十三話 闘争その十二

「そいつ多分生徒を暴力で萎縮させたり恐がらせてそれで威圧して支配していたんだよね」

「その通りだ」

牧村もそうだといいのさ。

「それはな」

「やっぱりね。それで悦に入ってるんだよね」

「傲慢な歩き方で学校中を練り歩き常に威張り散らしていた」

「だろうね。聞くまでもなかったよ」

「そうだよな」

他の妖怪達もそれに頷く。

「そういう奴だから暴力振るうんだね」

「そういうことだね」

「生徒を支配して常に有頂天にあった」

つまりそれで自分が偉い、権力を持ったと思っていたのだ。こうした人間が存在できる世界というのは学校の教師の世界以外には存在しない。

「その証拠にだ」

「砂場でガッツポーズしながらジャンプでもしてたの？」

「それもちよつと跳んだだけで」

「よくわかつたな」

何とその通りだった。

「そうしていた」

「馬鹿だね」

「本当にいい人って教師にならないんだね」

「全くだね」

妖怪達の言葉は呆れ果てたものになっていた。

「普通の社会じゃ絶対に通用しない人間だけれど」



「そんなのが普通に存在しているのが学校の教師なんだ」  
「教育がおかしくなる筈だよ」  
「全く」

まさにそうだというのだった。

「そんな人間がいるんじゃないかね」

「それもお咎めなし」

「普通に腐ってるね」

「腐ってるなんてものじゃないんじゃない」

「今も学校に存在している」

また言う牧村だった。

「実際にだ」

「まだいるんだ」

「余計に凄いけれど」

「腐敗の極みだね」

妖怪達はまた呆れてしまった。呆れざるを得ないことだった。

「けれど牧村さんってそんな人間みたいにならないようにしてるんだね」

「それじゃあ」

「よかつたんじゃない？」

「よかつたのか」

牧村は妖怪達の話の話を聞いてその鋭い目を向けた。

「それもまた」

「牧村さんは少なくとも暴力は嫌っている」

「そしてそんな最低最悪な人間にはなるまいと思っている」

「じゃあよかつたじゃない」

「人には最低限守らなくてはならない事柄がある」

牧村はこつも言った。

「何があつてもだ」

「さもないとその教師みたいになる」

「そういうことだね」

「教師は権力者だ」

牧村はまたある事実を述べた。

「生徒に影響を及ぼし力を行使できる権力者だ」

「そして権力を握るべきでない人間がなったら」

「そういうふうになるんだね」

「そういうことになる。教師は本来人を選ぶべきなのだ」

我が国で最も為されていないことの一つである。教師の中に占める人格障害者の割合は異常に高いのではないかとさえ思えるのが今の我が国だ。

「しかしだ」

「そうはならず」

「実際は」

「そんな人間もいる。しかし俺は確かにああした人間にはなるまいと誓った」

「そうそう、それぞれ」

「それなんだよね」

妖怪達は今の彼の言葉を一斉に指摘してきた。

### 第三十三話 鬭争その十三

「だからいいと思うよ」

「つまり反面教師ね」

「それでね」

「そうか。反面教師か」

牧村もここでわかったのだった。要するにその教師はそれだったのである。反面教師であったのだ。

「それだったのだな」

「そういうことだよ、だからさ」

「役には立っただんじやないかな」

「実際に暴力を振るわれた生徒は可哀想だけれど」

「被害者も実際にいる。これは事実ではあった。」

「そんな人間もいるんだなって思うけれどね」

「昔の軍隊でもいかなかったんじやないかなあ」

「ちよつとそこまで酷いのはいなかったね」

「ああ、やっぱり」

こういう人間がいるという意味において今の教師の世界は戦前の軍より遙かに酷いものであると言えた。少なくとも批判する資格のないレベルではある。

「いかなかったんだ、流石に」

「そこまですんでもない人間は」

「確かに暴力はあったよ」

それは否定できなかった。

「兵学校名物鉄拳制裁とかね」

「だよねえ、あつたね」

「陸軍も凄かったしね」

東南アジア等に進出した時に現地民を困惑させたことがこれであった。日本軍は確かに規律正しく軍律も厳正だ。左翼の学者や運動

家達が言うような野蛮で残虐な存在では決してなかった。しかしそれでも問題があったことは事実である。ただし左翼勢力の言うような問題ではなかったのだ。

「もうね。すぐ殴ったからね」

「相手が日本人でなくてもそうでなくてもね」

「殴ったからね」

「しかも本気でね」

それが日本軍であった。

「それでも。ちゃんとわかることはわかってたからね」

「中学生に突きつて禁止されてるよね」

「それする教師ってやっぱりないよね」

「有り得ないから」

そもそもそれ自体が異常であった。

「それもリンチ技だよ、シヤベル突き？」

「下から上に思いきり突き上げる」

「それも技じゃないから」

「リンチだから」

そうした技も存在する。しかしそれを試合で使えば間違いなく警告される。それで済めばいいが退場になってもおかしくはない。そんな技だ。

「それ生徒にするとかね」

「もう日本軍でもなかったから」

「そんな人間にならなかつたというだけでね」

「大きいと思うよ」

まさにそうだというのだった。

「だからさ。牧村さんはそんな屑というか人間以下の存在にはならないで」

「人間になればいいよ」

「何なら妖怪になる？」

今度言ったのは豆腐小僧だった。

「よかつたらだけれど」

「あつ、いいねそれ」

「牧村さんだつたら歓迎するよ」

「お化けの世界は楽しいよ」

話はかなり明るく楽しいものになっていた。

「お化けは死なない」

「試験も何にもない」

「ほほほ、そうじゃなあ」

博士も妖怪達の今の言葉に顔を崩す。

「お化けの世界は人間の世界とは同じ世界にありながら別の世界じやからな」

「だからいいんだよ」

「楽しいんだよね」

「どう？よかつたら」

「妖怪になつて僕達と一緒に過ごさない？」

「明るく楽しくね」

「それも悪くはないな」

牧村も妖怪達の言葉と心を受けて眩いた。

### 第三十三話 闘争その十四

「明るく楽しくか」

「そうそう、こうしてお菓子やお酒を楽しんで」

「ゲームセンターや遊園地で遊んで」

「夜は墓場で運動会」

何処かの漫画みたいなのも言うのであった。

「そして朝は寢床でグーグーグー」

「遊んでばかりだな」

牧村の言葉はまさにその通りだった。

「それが妖怪の世界か」

「人間でいるのもいいけれどね」

「妖怪もどうかね」

「それでね」

こう言っつて誘い続ける彼等だった。

「いや、それでもだ」

「人間でいるんだね」

「絶対に」

「今の命の間は何があっても人間でいる」

そうするといふのであった。

「俺はだ」

「わかったよ。それじゃあさ」

「牧村さん、しっかりね」

妖怪達は彼のその言葉を受けて温かい声をかけた。

「人間のままでいてね」

「何があつてね」

「またすぐに闘いになるじやろう」

博士はそのことはもうわかっていた。

「しかしじゃ」

「人間のままでいなければならぬ」

もう博士の言うことはわかっていた。

「そうだな」

「左様じゃ。心をしっかりと持ち人間の世界を楽しむことじゃ」

「それにより人間であることができるか」

「人間は何によってなるか」

博士はこのことも話した。

「それじゃよ」

「戦いのみになれば魔物になる」

「それもわかっておくことじゃ。よいかな」

「わかった。それではだ」

壁から背を離した。そうしてだった。

「時間だ。行かせてもらおう」

「おっと、そうじゃな」

博士もここで壁の時計を見た。そのうえで言うのであった。

「それではわしもじゃ」

「ああ、牧村さんって学生だったね」

「そうだったね」

妖怪達はこのことは忘れかけていた。

「何か髑髏天使の話ばかりでね」

「つい忘れかけてたよ」

「学生の本分は勉強だ」

牧村もこのことは忘れていなかった。

「それは忘れていない」

「真面目だね」

「それもわきまえてるなんて」

「学ばない学生もいるのにな」

これはどの大学にもいる。そして何時の時代にもどの国にもである。

「ってことは牧村さんって」

「優秀な学生？」

「そうなのかな」

「成績は優ばかりじゃよ」

博士はここで彼について話した。

「しかも落とした単位は今まで一つもない」

「それって結構凄いよね」

「受けても出ない講義とかあるしね」

「大学はね」

「受けた講義は絶対に単位は取る」

彼のポリシーだった。

「だからだ」

「真面目なんだ」

「絶対について」

「将来はあれかものう」

ここでまた楽しそうに言う博士だった。

「わしの後継者かもな」

「って博士まだ大学にいるじゃない」

「それでもなの？」

「それでもじゃよ。わしも後継者が欲しい」

「そういえば博士って今まで」

「そっだよね」

妖怪達の口からあらためて話される博士の真実だった。この博士も謎が実に多い。少なくともそれは一つや二つではない。かなりのものだ。



### 第三十三話 闘争その十五

「人間の助手とかさ。秘書とかね」

「そういう人はいないよね」

「研究室に来る人も少ないし」

「いるのは僕達と牧村さんばかりで」

それが博士の研究室なのだった。

「もう卒論のゼミも持ってないしね」

「それもね」

「確か最後の卒論のゼミはじゃ」

博士は腕を組み遙かな過去を思い出す顔になっていた。

「受け持ったのは三十年前だったかのう」

「七十の時？」

「八十の時？」

「確か八十じゃったかな」

最早今の博士にとって十歳の年齢の違いも大したことではなかった。人間も百歳を超えれば自然とそういったものになっていくのかも知れない。

「あの時は」

「八十で卒論のゼミを受けていたのか」

牧村はその方に驚いていた。

「それはまたな」

「凄いかのう」

「有り得ない話だ」

まさにそうだというのである。

「大体百歳を超えてもまだ大学にいるしな」

「生涯現役じゃよ」

「それが通用するのって八十歳位までだよね」

「百歳超えたら人間はね」

「流石にだと思っけれど」

妖怪達ですら言うことであつた。

「それでもやるんだ」

「まだまだ」

「何処までやるのって話になつてゐるけれど」

「若しかしたらわしもじゃ」

これは博士の自己分析の言葉であつた。

「本当に妖怪に近くなつてきておるのかも」

「外見は殆どそれだけけどね」

「實際悪魔博士だつたつて。博士の仇名つて」

「妖怪博士じゃなかつたつて」

最早江戸川乱歩の世界であつた。しかし博士の外見が異様なものなのは確かだ。白い髭で顔を覆い白髪を無造作に伸ばしそのうえで黒いスーツの上に黒マントの小柄な老人だ。異様と言わずして言葉はなかつた。

「凄い仇名だけれどね」

「人間離れしてるし」

「よいことじゃ」

しかもその仇名を笑顔で受ける博士であつた。

「面白い仇名は受ける方も楽しい」

「そういうものなんだ」

「博士にとつては」

「つむ。これもまた一興」

まさにそうだといふのである。

「さすればじゃ。今からその悪魔博士が講義に行こう」

「講義の時間も多いしね」

「元気だよね」

確かに百歳を優に超えている老人にはとても思えないものがそこにはあつた。

「それでまだだから」

「凄いよ」

「では行くでしょう」

牧村は席を立ったその博士に告げた。

「今からな」

「おお、君もあの講義じゃったか」

「毎週楽しみにさせてもらっている」

静かにこう述べた。

「では今週もだ」

「うむ、それではじゃ」

「先に行っている」

こうして講義に向かう二人だった。そして後に残った妖怪達はと  
いうと。

「さて、お化けは死なない」

「試験も何にもない」

懐かしい歌を歌いながら楽しくやっていた。彼等は気楽だった。

学校の講義もトレーニングも終わった牧村はサイドカーで家に帰  
っていた。その途中の道でだ。一人の男が道の真ん中で転がってい  
るのを見つけた。

「こいつは」

見れば知っている顔であった。河豚の様に膨らみ色は黒く細く異  
様に鋭い、だがガラの悪そうな目をしている。それはヤクザの目で  
あった。

髪はパーマにしている。そして身体は大柄で太い。丸々としてい  
る。その彼が仰向けに横たわっていたのである。

彼はそれを見てだ。言うのであった。

「死んだか」

「そうだ、死んだ」

ここで死神の声が出てきた。声と共に死体の直前でサイドカーを  
止めていたその彼の前に出て来た。そのうえで告げてきたのである。  
「心臓が止まってだ。そこから落ちた。」

「歩道橋か」

見れば上には歩道橋がある。そこから落ちたといっつのである。

### 第三十三話 鬭争その十六

「それで今こうして無様に転がっているというわけだ」

「そうか。死んだか」

「知り合いだな」

「通っていた中学校の教師だった」

「こう死神に答えた。

「嫌な奴だった」

「この男の寿命は本来はより長かった」

「長かったのか」

「だが。あまりにも悪事を重ね過ぎた」

死神の声が蔑むものになってきていた。

「その結果だ。こうしてだ」

「連れて行かれたのだな」

「魂を刈ったのは私だ」

他ならぬ彼自身だというのである。

「あちらの神々から直々に連れて来いと言われてな」

「それでか」

「悪人の寿命は短くなるものだ」

死神は牧村にこうしたこと話してきた。

「特にこの男の様な輩はな」

「自業自得というところか」

「随分なことをしてきたのだな」

「生徒を恒常的に虐待していた」

牧村は語った。実は今無様に転がっているこの男こそが博士や妖怪達に話していたその教師だったのである。その暴力教師だったのだ。

「それは俺も見た」

「その結果だ。この男は死んだ」

「平生強一も遂に死んだか」

「この男はこれから地獄に落ちた」

悪人の行く先はそこしかなかった。

「そして未来永劫責められるのだ」

「いいことだ。こいつはそれだけのことをしてきた」

牧村の言葉も実に冷たい。

「是非共そうあるべきだ」

「私もそう思う。そしてだ」

「そして？」

「ここに来た理由はこれだけではない」

牧村を見据えながらの言葉であった。

「この男の魂を刈るだけではな」

「わかった」

最早言わずもがなであった。牧村はまずはサイドカーから降りた。

そしてヘルメットを脱ぎだ。あらためて死神と対峙するのであった。

そのうえでだ。彼に告げた。

「貴様と闘うのも久し振りだな」

「見せてもらおう」

死神はまだ闘う姿にはなっていない。しかし既にその心に鎌を持つていた。

「貴様がどうなるのかをだ」

「見ればいい。だが」

「だが。何だ？」

「俺はあくまで人間だ」

こう言うのであった。

「魔物ではない。それは言っておく」

「確かに今はそうだ」

死神もまずは否定はしなかった。

「しかしだ」

「しかしか」

「これからはわからないな」

「こつも言うのであつた。」

「違つか。それは」

「戯言だ。俺は俺だ」

しかし彼も引かない。

「それ以外の何者でもない」

「だといいがな」

「だといいがな、か」

「私は貴様はこのまま魔物になるとも見ている」

死神は今このことをありのまま述べた。

「そしてだ」

「闘いの中に溺れるか」

「そうなるかも知れぬ。それを見極めさせてもらつ」

「その為に闘つか」

牧村の今の言葉には感情はなかった。しかし何故かそこには冷笑も見られた。

「因果なものだな」

「全ての存在は因果の中にある」

だが死神はこつ返しもした。

「私も。貴様もだ」

「そして俺の因果はか」

「髑髏天使としての因果だ」

まさにそれだというのである。

### 第三十三話 闘争その十七

「魔物と闘い続け。そうして」

「その魔物と化していく」

「そうだ。それが貴様の因果か」

「そうだ。そして」

死神は牧村を見据えたまままた言ってきた。

「ここで見せてもらう」

「俺が魔物となるかどうかか」

「それを見極める」

言いながら既に闘う目になっていた。

「いいな」

「いいだろう。それではだ」

牧村は両手を拳にした。そうしてだった。

それを胸の前で合わせる。そこから白い光が放たれ。

髑髏天使の姿となった。そのうえで右手を少し前に、膝を曲げた

まままで言ってみせたのだった。

「行くぞ」

「そうか。それならだ」

死神もだった。彼もまた右手を拳にして胸の前に置いた。そこから青白い光を放ち身体を包んだ。闘う姿になったのであった。

「よしっ」

右手に持っている鎌を一閃させた。これが合図となった。

二人はまずは対峙した。その彼に死神が言ってきた。

「まずはだ」

「どうだというのだ？」

「智天使になれ」

そうなれというのである。

「智天使にだ。いいな」



「その姿で闘えというのだな」

「来い」

まさにその姿でだと返す。

「その姿でだ」

「いいだろう。それではだ」

死神の言葉を受け全身から白銀の光を放った。そのうえで四枚の翼を持つ白銀の姿を持つ髑髏天使となったのである。そうしてだ。

「これでいいな」

「いいだろう。成程な」

「今度は何だ？」

「迷っているな」

その智天使になった彼を見ての姿だった。

「そうだな」

「迷っているのか、俺が」

「そうだ。気配でわかる」

「そうだというのである。」

「それは否定しないな」

「否定はしない」

髑髏天使は両手の剣を構えたまままた言ってきた。

「俺は人である」

「人でいたいのだな」

「魔物になることに興味はない」

「まさにそうだというのだ。」

「全くだ」

「そうか。全くか」

「だからだ。俺は魔物になるつもりはない」

「それを死神に対しても言うのである。」

「ではだ。いいな」

「いいだろう。行くぞ」

死神が動いた。またその身体を複数に分けてきた。

そしてそのそれぞれの身体でだ。髑髏天使に一斉に遅い掛かるのだった。

「さあ、それではだ」

「実際に見せてもらう」

「貴様が本当に魔物になるのかどうかをな」

「いいだろう」

髑髏天使もまた引かずに応えるのだった。

そしてだ。一斉に来るその鎌を両手の剣で受けてみせたのである。そうしてだ。彼はその中でまた言った。

「かつてはだ」

「そうだな。私の分身を前にしてだ」

「その鎌を全て受けることはだ」

「そうはできないな」

まさにそうだというのだった。

「かつての貴様ではな」

「しかし今は違う」

それを言うのである。髑髏天使自身もだ。

### 第三十三話 闘争その十八

「俺もまた強くなったということだな」

「その強さが問題なのだ」

「そうだ、その強さがだ」

「それこそがだ」

死神達はそれぞれの口で言うのだった。言いながらそれぞれの鎌で髑髏天使に襲い掛かる。だが髑髏天使は全ての攻撃を受けていた。

「貴様が魔物になる原因なのだ」

「強さこそがだ」

「闘いの中に生き闘いに飲み込まれる」

髑髏天使は博士や妖怪達との話をここで思い出していた。

「それだけではなくか」

「そうだ。手に余る強さはそれを手にする者を溺れさせる」

「それによっても魔物になるか」

「その通りだ」

まさにそうだというのだ。

「貴様は飲み込まれるかどうかをだ」

「見たいのだな」

「さあ、どうする」

あらためて彼に問う。

「この攻撃を受けるだけか」

「受けるにも限度があるか」

「ならばだ」

「どうする？」

「無論受けるだけではない」

髑髏天使の方もそれは否定した。

「むしろだ」

「むしろか」

「ではどうする」

「それを見せてもらおう」

「いいな」

こうして再び鎌を振るう。だが髑髏天使はそれを受け続けていく。そうしてだ。不意に右手に持つ剣を横に回転する様に振ってきた。そうしてだった。

死神の一体を斬ったかに見えた。しかしだった。

「むっ!?!」

「残念だったな」

その死神が消えると共に声がしてきた。

「それは幻影だ」

「幻術も共に使ってきたか」

「そうだ。分身はただそれだけでも芸がない」

「こう言うのである。」

「こうしたことまでできるのだ」

「そうか」

「それではだ」

「この場合はだ」

「どうする?」

「どうするもこうするもない」

言いながらまた構えに入る。そして。

死神達の鎌を左手のサーベルで受けてだ。右手の剣を今度は突き出した。そのうえで前にいた死神の一体を貫いたのだった。

「今度もか」

「如何にも」

また姿が消えてであった。声だけが聞こえてきた。

「その通りだ」

「だが攻撃はできるのだな」

「身体は実体でなくとも鎌は違う」

「鎌はか」

「そうだ。違う」

こう言ってまた攻撃をしてきたのだった。だが髑髏天使はそれも受ける。

そうして攻撃を繰り返しているが髑髏天使は今度は剣を上から下に閃させた。そうしてそのうえでまた死神を一体消したのであった。

「残るは一人か」

「今度は安心するのだ」

その最後の死神が言ってきた。

「私は実体だ」

「実体か」

「そうだ、実体だ」

つまり死神自身だというのである。

「それは言っておく」

「そうか。それならだ」

「確かに貴様は強くなった」

ここでまた言ってきた死神だった。

「しかしだ」

「しかしか」

「その心はどうか」

それを問うのだった。

「人間のままか」

「少なくともそのつもりだ」

髑髏天使の今の言葉は牧村来期のものだった。

### 第三十三話 闘争その十九

「俺はだ」

「ではだ。それを見極めさせてもらう」

言いながら鎌を縦横に振り回す。そのうえで髑髏天使の命を絶たんとする。その速さも威力も魔物達とは比較にならなかった。

「むっ、これは」

「どうだ、私の鎌は」

「確かに。これはかなり」

「何時までも耐えられるものではないな」

「その通りだ。だが」

「だが、か」

「そうだ。倒れはしない」

「そうだというのだった。」

「ただやられるだけではない」

「ではどうするというのだ？」

「俺は守るだけではない」

こうしてまた右手の剣を振るう。それで攻める。

しかしその攻撃をだ。死神は身体の動きだけでかわしてみせる。

足の動きも使った。それはかなりの動きだった。

「ただ武器を振るうだけではないか」

「そうだ。貴様の剣と違い私の鎌はだ」

「小回りが利かないな」

「そして守りに適していない」

己の得物についても把握しているのだった。

「それはわかつている」

「そうか。それならだ」

「こうしてかわすまでのこと」

身体を巧みに使いながらの言葉だった。

「それだけだ」

「そうか。それだけか」

「そしてだ」

ここでまた言う死神だった。

「私の術はまだある」

「まだか」

「例えばだ」

この言葉と共にであった。不意に後ろから来た。

髑髏天使の影からもう一人死神が出て来たのだ。そうして。

「これはどうする」

「来たか」

「何っ!?!」

「来たかと言ったのだ」

こう返すのであった。

そしてその後ろからの一閃を上を飛んでかわした。まさに読んでいる動きだった。

「貴様はこうした奇襲を好む」

「それは既にわかっていたか」

「その通りだ。だからこそだ」

かわせたというのである。

「こうしてかわせた」

「流石だな。最初に会った時とは何もかも全く違う」

「それはどういう意味での言葉だ」

大地に降り立ちながらの問いだった。

「一体」

「安心しろ。悪意はない」

「悪意はか」

「それはない」

このことは確かに言う死神だった。

「だが。事実を言っている」

「事実だというのか」  
「そうだ。貴様は確かに変わった」  
「どういう風に変わったかだな」  
「鋭くなった」  
「まずはそうだというのである。」  
「貴様はかなり強くなった」  
「鋭い強さになったのか」  
「そうだ、かなり強い」  
彼の言葉は続く。  
「そうなった」  
「智天使になれるのは髑髏天使の中でも僅かだと聞いてはいる」  
「そうだ。ましてやだ」  
「まして、か」  
「貴様程僅かな間になった例もない」  
「このことも言うのだった。」  
「一人としてだ」  
「一人としてか」  
「そうだ。貴様はそれだけ特別の存在なのだ」  
「選ばれたとかそういうものでもないな」  
「なったというべきだな」  
「そうだというのである。」



### 第三十三話 闘争その二十

「そうした存在にだ」

「そうか」

「僅かな間に強大な力を身に着けた」

そしてこのことも話してきた。

「それを持って余すかどうかだが」

「それを再び見るか」

「その通りだ。確かに今まで闘ったが」

「それはどうだった」

「まだ飲み込まれてもいないし持て余してもいないな」

死神はこう彼に告げた。

「確かなものになっている」

「なっているのだな」

「さしあたってはな。だが」

「だが、か」

「このままでは危ういことも事実だ」

大鎌をその両手に持ったまま話してきた。

「今のままではだ」

「危ういというのだな」

「己を見ることだな」

「己をか」

「そうだ。心も鍛えることだ」

それは博士が言うことと同じだった。

「いいな。その心をだ」

「俺の心が」

「そうすれば危うさもなくなる」

「わかった」

「貴様は今持て余してもいないし飲み込まれてもいない」

またこのことを話すのだった。

「だが」

「だが、か」

「危ういのも確かだ」

「このこともまた言うのであった。

「若し危うさに揺れたらだ」

「俺は魔物になるか」

「その時は刈る」

死神の言葉は本気そのものだった。

「その魂を冥界に送り届けてやる」

「いいだろう。俺も魔物として生きるつもりはない」

髑髏天使もそのつもりはないと返した。

「あくまで人として生きるつもりだ」

「ならその為に関心を鍛えるといい」

「そうさせてもらう。それではだ」

「話も闘いも終わりだ」

彼だけでなく死神の方も言ってきたのであった。

「それではな」

「帰るのだな」

「既にこの者の命も刈った」

まだ無様に転がっているその暴力教師の骸を冷たく見下ろしての言葉だった。

「今からこの汚らわしい魂を地獄に送り届ける」

「地獄には」

「これからこの輩は気が遠くなるまで責め苦を受けた」

所謂地獄の責め苦である。それを受けるといっているのである。

「そのうえで生まれ変わる事になる」

「何に生まれ変わるのだ？」

「まずは寄生虫だ」

それだというのだ。

「確かサナダ虫になる」

「人の腹の中にいるあれか」

「そうだ、あれに生まれ変わる」

「そうだというのだ。全長数メートルに及ぶ気色の悪い寄生虫である。」

「まずはだ」

「それから何に生まれ変わる？」

「回虫にも生まれ変われば蛆虫にも生まれ変わる」

「そうしたものになっていくというのである。」

「蚊やゴキブリに生まれ変わり続けそれを何千回も繰り返した」

「人にはならないのか」

「この輩はあまりにも下劣な罪を犯し続けた」

「ここでも死神の言葉も目も冷たい。」

「人になれる筈もない。最早な」

「そうか」

「それについて何とも思わないのだな」

「自業自得だ」

髑髏天使の言葉も極めて冷淡であった。知り合いに対する言葉とは思えないまでだった。

### 第三十三話 鬭争その二十一

「確かにその男は最低だった」

「生徒から見てもか」

「生徒だったからこそ余計によくわかる。そうなるべき輩だ」

「そうか」

「そう考える。生きるべきではなかった」

「こつまで言うのであった。彼もまた。」

「こつした人間はだ」

「生きるべきではなかったか」

「世の中こつした人間もいる」

「死神の言葉は冷酷ですらあった。」

「残念かどうかまでは私は言わないがな」

「そうだな。こつした人間もいる」

「牧村もその言葉を肯定した。」

「かつてはそうは思わなかった」

「かつてはか」

「しかし今は違う」

「そしてこつ言うのだった。」

「今はだ」

「そう考えるようになったのは」

「またその暴力教師の骸を見てそれから言う死神だった。」

「この輩を見てからか」

「そうだ。まさしくそうだ」

「そうだな。この輩はまさにそれだ」

「何故そうなったかだ、問題は」

「牧村はこつも言った。」

「そいつもだ。最初は違っていた筈だがな」

「環境だ」

「環境か」

「この輩は暴力を振るいそれが許される世界にいた  
そうだったというのである。」

「だからこうなったのだ」

「何も言われない世界か」

「チエツク機能だったな」

死神はこうした言葉も出してみせた。

「人の世界ではそう呼ばれているがな」

「チエツクか」

「それがない世界にいた」

それこそまさに教師の世界であるのだ。教師の世界は閉鎖的なだけではなく彼等をチエツクする機能が内外に存在していない世界であり続けたのだ。

「だからこうなった」

「それでか」

「そして教師の世界は権力者の世界だ」

死神は教師の世界についても言及した。

「それもわかるな」

「生徒を教え影響力を与える」

牧村が言うのはこのことだった。

「それこそつまり」

「そうだ。権力だな」

「その通りだな」

「世の中それを理解している人間は少ないようだがな」

「しかし教師は権力者だ」

それは否定できることではないというのだった。人に影響を与えることができ支配することができるかすればそれはまさしく権力者である。即ち教師というのはそれ自身が権力者なのである。

「そしてチエツク機能のない権力ならば」

「必ず腐敗する」

死神はまた言った。

「それも確実にだ」

「尚且つ極限までだな」

「だからこそそうした人間になった」

まさにそうだというのだ。

「生きるべきではなかった人間にだ」

「そして永遠に等しい時間責め苛まれ」

地獄の責め苦という意味である。

「そのうえで永遠に人に生まれ変わらないか」

「寄生虫や病原菌に生まれ変わり続ける」

死神の言葉は相変わらず冷酷なままである。

「人になることは最早絶対はない」

「罪の結果か」

「そしてだ。言っておく」

「今度は俺にだな」

「そうだ。貴様もまた力がある」

死神はここではあえて権力とは言わなかった。力だとしたのだ。

「力がだ」

「そうだな。俺も確かに持っている」

「それを律することだ」

死神が今彼に言うことはまさにそれであった。

「いいな、それは」

「わかっている」

牧村としても異論のないことであった。

第三十三話 闘争その二十一

「それではだ。これからだが」

「どうする？」

「心を鍛えに行く」

死神から踵を返しての言葉だった。

「これから。そこに行く」

「心をだな」

「そうだ。また会おう」

彼に背を向けて歩きながらの言葉だった。そのうえで「ロ」のサイドカーに向かう。

「何時になるかはわからないにしてもだ」

「安心しろ。魔物達は貴様の前に現われる」

「それは避けられはしないか」

「そして私もまた」

彼自身もだというのだった。

「現われることになる」

「魔物を刈りにか」

「貴様を見る為でもある」

彼もその中に入っているというのだった。

「その貴様をな」

「そうか」

「そうだ。見させてもらう」

また言ってきた彼だった。

「よくな」

「なら見るといい」

彼はそれを拒みはしなかった。

「好きただけだ。どういったふうにもな」

「そうか」

「何かね」

「ここで目玉も出て来たのだった。」

「君も色々あるね」

「貴様も出て来たか」

「僕はいつもいるから」

「こつ言つてきたのであつた。」

「君のことは見ているよ」

「それは何故だ」

「嫌いじゃないからね」

「だからだといつのである。」

「君みたいな人間は嫌いじゃないんだ」

「それは何故だ」

「一生懸命なところだね」

「彼のその点を言うのであつた。」

「そこがいいからね。だからね」

「そうか」

「君はあまり感情は出さないけれど」

「それは牧村の性格である。彼はその感情は表には出さない。しかしそれでも目的の為に何かを必死にする。それが彼なのである。」

「それでもわかるからね」

「そうか。わかるか」

「うん、君は人間でないと駄目だよ」

「こつ彼に言うのである。」

「絶対にね」

「言われずともそうする」

「彼の言葉も既に決まっていた。」

「そういうことでだ」

「帰るのか」

「また会うことになるな」

「サイドカーに乗りそのうえでヘルメットを被るのだった。既に顔



は見えなくなっている。

「その時にまただ」

「そうだな。会うとしよう」

「また会おうね」

死神だけでなく目玉も言ってきた。

「魔物になればその時は、だがな」

「その時は好きにするといい」

牧村もその時はといたのであった。

「魂でも何でも刈るといい」

「ではだ。そうさせてもらう」

「またね」

こうやり取りをして別れる三人であった。闘いは終わった。そしてお互いのバイクに乗り今は別れるのであった。

### 第三十三話 完

2010・3・17

## 第三十四話 祖父その一

髑髏天使

第三十四話 祖父

「ふうん、あいつ死んだんだ」

「もう知っているな」

「まあね」

大阪への道をサイドカーで進む。その横には未久がいる。二人で進みながら言うのだった。

「全校集会でも言われてたし」

「あいつは死んだ」

「死んでよかったわよ」

心からそのことを喜んでいることがわかる言葉だった。

「本当にね」

「よかったか」

「そうよ。しよっちゅう女の子にセクハラはするし」

そうした人間が罰されにくいのも教師の世界である。

「おまけに威張り散らして。死んで何よりよ」

「俺達の頃と同じだな」

牧村は妹の話聞いてヘルメットの中で応えた。

「それは」

「あいつあの頃から皆に嫌われていたの」

「好かれる筈がない」

「牧村は一言だった。」

「ああした人間はだ」

「そうよね。もう皆全校集会の後万歳したわよ」

「万歳か」

「もう三唱どころじゃなくてね」

それ以上だというのだ。

「十唱も二十唱もね」

「死んで喜ばれる人間か」

「もうこれでセクハラも暴力もないのね」

「とかく素行の悪い教師だったことがわかる。」

「よかったわよ。そうそう」

「何だ」

「あいつの腰巾着だった剣道部の太谷って奴がいたのよ」

「大谷か」

「そう、大谷直久っていうんだけれどね」

「その名前を出すのだった。」

「もう剣道部で先輩いじめたり同級生に底意地悪いことしたりしている最低な奴なのよ。そいつももう終わりだって言われてるのよ」

「腰巾着は主がいなくなれば滅びる」

「牧村の今の言葉は冷たい。夏であつてもだ。」

「そういうことだな」

「そうなの。もう皆からシカトされるようになってね」

「余程嫌われていたのだな、そいつは」

「学校一の嫌われ者よ。底意地は悪いし欲張りだし平気で嘘つくし」

「未久は忌々しげに話す。」

「もうそいつも終わりね」

「学校もよくなるのだな」

「よくなるわ。清々するわ」

「こつまで言う程だった。」

「その大谷もいなくなればいいのにね」

「そういう状況か、今は」

「ええ、それでお兄ちゃん」

「学校はよくなったか」

「もう一変よ」

「そこまでだというのだ。」

「空気が奇麗になった感じよ」

「俺がいた時からだった」

牧村も言う。

「あいつがいるせいでな」

「学校の雰囲気が悪かったのね」

「一人の暴力教師が全てを悪くする」

学校ではよくあることである。

「よく今まで問題にならなかったものだ」

「そうよね、本当にね」

「それが学校なのか」

「学校っておかしなことも多いのね」

「多いな。確かにね」

「私実はね」

未久は自分の話もしてきた。

「学校の先生になりたいと思ったことがあったのよ」

「止めておけ」

兄の返答は一言だった。

「おかしな人間が異常に多い世界だ」

「だから止めたの」

まさにそれが理由だというのである。

### 第三十四話 祖父その二

「もうね。絶対にならないから」

「あいつを見て思ったな」

「そうよ。本当にいい判断材料になったわ」

無論悪い意味での判断材料である。

「おかげでね」

「それで何になるつもりだ」

「そうね。OLかしら」

「OLか」

「別にいいわよね」

「悪いとは一言も言っていない」

素っ気無くすらある今の返答だった。

「別にだ」

「そう。それじゃあ」

「仕事は何でもいい」

それにはこだわらないとまでいうのである。

「御前の人生だ。自分が好きな仕事をするといい」

「お兄ちゃんはどうするの？」

「俺か」

「そうよ。やっぱりあそこ？」

兄に対してこう言うのであった。

「マジックに。永久就職？」

「何故そうなる？」

「だって。若奈さんと一緒になるのよね」

言うのはこのことであつた。

「だったらそうなるじゃない。必然的に」

「だからどうしてその結論になる」

「違つていうの？それとは」

「だから何故そうなる」

少しむっつとして返しているところがあつた。

「そんなことは別にない」

「本当に？」

「嘘を言う必要もない筈だ」

「こつも言うのであつた。」

「違つか、それは」

「まあそうだけれどね」

「将来か。そうだな」

「それでどうするの？」

「考えてはいる」

それは彼自身もだというのである。

「サラリーマンか」

「あまりそういう感じじゃないと思うけれど？」

「それとも学者か」

「あの変な博士と一緒に妙なことを研究するの？面白そうね」

「そうだな。それもいいな」

しかもそれに乗気な様子さえ見せる。

「博士と共に様々なことを学ぶもだ」

「どっちにしても若奈さんを大切にしてくね」

「だからどうしてそうなる」

「だって。若奈さんってマジックの跡取り娘よ」

古い言葉であるが確かにその通りであつた。若奈はそうした立場なのである。

「それだつたらやっぱり」

「だからどうしてそうなる」

「だから違つなの？」

「違つ」

きつぱりと断言してみせた。

「それはない」

「どうかしらね。わからないわよ」

「まだ言うのか」

「だって。お兄ちゃんお菓子好きよね」

「ああ」

「作るのも食べるのも」

お菓子作りは意外なことに彼の趣味であり特技でもある。

「それにお茶やコーヒーも」

「淹れるのには自信がある」

そちらもあるのであった。

「それじゃあ完璧じゃない」

「だから何が完璧だ」

「喫茶店をやっついていくの」

やはり話をそこにやる若奈だった。

「とりあえずお兄ちゃんはお菓子とコーヒーとかお茶に専念して接客は若奈さんね。あのエンゼルスマイルには誰だって陥落するから」

「どうしてもそちらに話をやりたいのだな」

「そうよ」

完全に開き直った言葉だった。

「その通りよ」

「居直ったな」

「居直ったから今もここにいるし」

「そうだな」

兄は妹の今の言葉にも頷いた。

### 第三十四話 祖父その三

「それはそうだな」

「大阪久し振りだし」

未久の顔が笑ってきていた。

「楽しみよ。お爺ちゃん元気かしら」

「元気だ」

一言で返した牧村だった。

「昨日電話したがな。元気だった」

「そう。だったらいいけれど」

「しかし御前も一緒だとは行っていない」

「それはなの」

「夏休みの初日から行くとはな」

「悪い？」

「悪いとは言っていない」

それはないという。ここでもこうした言葉になっている。

「悪くはないがだ」

「それでも？」

「話していないで来るから向こうは驚くだろうな」

「いいのよ、それが面白いんだから」

兄の言葉に顔を崩して笑っての言葉だった。

「サプライズがね。面白いのよ」

「悪趣味だな」

「そうかしら」

「人を驚かせて喜ぶのは悪趣味だ」

まさにそうだというのである。

「そう言う他ない」

「そういうものかしら」

「そうだ。それにしてもだ」



「今度はどうしたの？」

「父さんも母さんもよく許したものだ」

「今度はこうした言葉になつていた。」

「全くな。今朝言い出してそれをあっさりとは許すとはな」

「いいじゃない。孫がお爺ちゃんの家に行くのよ。いいことじゃない」

「いいことか」

「そうよ、いいことよ」

「こうしれつとして言うのである。」

「顔を見せるだけでもね」

「部活はいいのか」

「部活お休みななのよ」

それについての心配はないという。そして他のことでもある。

「塾もね。お休みななのよ」

「夏休みなのに」

「どっちも夏休みに入ってすぐは休みななのよ。都合のいいことにね」

「全くだな。都合のいい話だ」

「お兄ちゃんの方はどうなの？」

「今度は未久の方から問うてきた。」

「お兄ちゃんはどうなの？」

「俺か」

「そうよ。ただそこにいるだけじゃないわよね」

それを言うのである。

「大阪にずっといないわよね。夏の間」

「そうだな。どうなるかだな」

「どうなるかって？」

「俺がどうなるかだ」

顔は正面に向けたままだ。サイドカーを運転しているからこれは当然だ。だが未久は運転せずその横にいるだけなので顔を動かすことは自由だった。バイクの風を前から爽やかに受けている。

「俺がだ」  
「お兄ちゃんが？」  
「そうだ。俺がだ」  
「こう言うのである。」  
「俺がどうなるかだ」  
「何かわからない言葉ね」  
「少なくとも未久にはわからない言葉だ。それで首を横に振った。」  
「それって」  
「そうか」  
「そうよ。お兄ちゃんがどうなるか？」  
「わからないならいい」  
「このことについてはこれ以上言わないのだった。」  
「別に構わない」  
「本当に沸けわからないわね。けれどいいわ」  
「このことに関しては未久はこれ以上言わないことにした。そうしてそのうえでまた兄に対して言うてきた。ただし話題は変えている。」  
「それでね」  
「それで？」  
「大阪に入ったらどうするの？」  
「すぐにお爺ちゃんの家に向かう」  
「これが妹への返答だった。」  
「そうする」  
「そう、すぐなの」  
「それから好きにするといい」  
「そしてこうも言うのだった。」  
「御前の好きにだ」  
「じゃあ難波とか新世界にも行っていいのね」  
「いや、一人では駄目だ」  
「それはすぐに止めた。」

### 第三十四話 祖父その四

「ああした場所は止めておけ」

「危ないのね」

「かなりな」

だからだというのだ。兄らしい言葉であった。

「だからだ。一人では行くな」

「わかったわ。じゃあ二人でね」

「そうだ。二人で行け」

「お婆ちゃんと一緒に行くのかしら」

そして言う言葉はこれであった。

「こうなったら」

「そうだな。それがいい」

「お婆ちゃんとだといいのね」

「お婆ちゃんも強い」

牧村は不意にこんなことを言った。

「だからいい」

「強いからいいの」

「そうだ。少なくとも御前を護ってくれる」

それが理由であった。

「だからいい」

「まあ私だつてね」

「御前も？」

「バネはあるわよ」

まずはそれを話す未久だった。

「それに脚力もね」

「体操だからか」

「そうよ。体操って身体全体を使うから」

それをしていればというのである。未久にしても鍛えているのだ。

「当然身体の柔らかさもね」  
「それが一番凄いな」  
「そうよ。凄いのよ」  
まさにそうだと話すのだった。  
「喧嘩は嫌いだけれどね」  
「喧嘩になれば。いや」  
「いや？」  
「悪い男が来ればだ」  
その場合を話すのである。用心としてだ。  
「その場合はいい方法がある」  
「どうすればいいの？」  
「潰せ」  
「まず一言だった。」  
「急所を衝け。いいな」  
「随分物騒な言い方ね」  
未久も兄の言葉に少し辟易した様子で返した。  
「急所をつて」  
「別に金的だけではない」  
「当然そこが第一だというのだ。」  
「みぞおちにしても眉間にしてもだ」  
「多い、そんなに」  
「他にも目と目の間、口と鼻の間」  
その急所を次々と話していく。人間の身体の急所は中央に集まっている。なお中央にはあのクンダリーニのチャクラも集まっている。  
「そして喉や脳天もだ」  
「そういうところを攻めればいいの」  
「そうだ。怯むことなくそうしたところを潰せ。いいな」  
「大勢だつたらどうするの？」  
「一人をそれで潰せば大したことのない奴等なら逃げる」  
「逃げるの」

「そうでない場合はだ」

その場合もしっかり話すのだった。

「逃げる」

「逃げるの」

「危険が及ぶ前に逃げるのもまた手だ」

そうだとするのである。

「その為にも足は速くしておくことだ」

「それと体力ね」

「そういうことだ。人間相手はとにかく急所を狙う」

とにかく物騒な話が続く。

「一番いいのは目を潰すことだ」

「何かさつきから物騒な話ばかりしてない？」

流石に未久もいい加減言うのだった。

「目とかつて。殆ど殺人拳じゃない」

「そうだ。殺すつもりでないと駄目だ」

「駄目なの」

「その辺りのチンピラなら殺してもどうということはない」

やはり物騒な言葉だった。

「だからだ。いいな」

「一応話は聞いたけれど」

それはだといってでもであった。

### 第三十四話 祖父その五

「何か。お兄ちゃんって前からそうだったけれど」

「今は余計にか」

「そうね。余計にそうなったら」

こう兄に言う。

「物騒っていうか。やるとなったら徹底してるっていうかな」

「そうでないとき残り残れない」

不意に髑髏天使の顔になった。

「戦いはだ」

「戦いは？」

「何でもない」

やはりそこから先は言わなかった。

「気にするな」

「まあ聞いてもわからないしわかるつもりもないけれど」

「それでいいか」

「いいわ。じゃあもう少ししたらね」

「大阪だ」

高速道路の前の青と白の看板にそれが書かれていた。今二人は神戸から大阪に入った。その日本有数の都市にである。入ったのである。

そして此花にある二人の祖父母の家に来た。そこは和風の大きな屋敷であった。道場もそこにあった。

その黒い門を潜るとであった。まずは白い髪を端整に後ろに撫で付けた背筋の伸びた老人が出て来た。年齢はもう七十を優に超えているようだがそれでも姿勢はいい。服は和服であった。

その彼が出て来てだ。すぐに二人に言ってきた。

「久し振りだな」

「ああ」

「こんにちわ、お爺ちゃん」  
「来期も未久も元気で何よりだ」  
「その武士を思わせる古めかしい言い回しでの言葉を出してきた。まずよく来た」  
「暫くここで学ばせてもらおう」  
「大阪見物楽しみにしているから」  
「それぞれわかった。だが未久」  
「最初に直接声をかけたのは彼女に対してであった。  
御前はどうもな」  
「どうもな？どうしたの？」  
「綺麗になったが背は伸びないな」  
「言うのはこのことだった。」  
「それは」  
「背はどうでもいいのよ」  
「むっとはしたがこう返したのだった。」  
「それはね」  
「いいのか」  
「体操やってたら伸びないし」  
「そうなのか？」  
「そうよ、伸びないのよ」  
「こう祖父に話すのである。」  
「っってお爺ちゃん知らなかったの？」  
「わしが知っているのは武道のことだけだ」  
「それでなの」  
「そうだ。特にそうしたことは知らん」  
「体操のことはだとまた言う。」  
「だが」  
「だが？」  
「それにしても本当に低いな」  
「孫娘を何度もまじまじと見て言うていく。」

「本当にな」

「だからもうその話は止めてよ」

いい加減うんざりとした口調になっている未久だった。

「とにかくよ。中に入らないと」

「うむ、そうだな」

祖父もその言葉に頷く。そうしてだった。

「じゃあ行くとするか」

「そうね。だったら」

「まずは茶でも飲もう」

「お茶か」

「緑茶だ」

お茶はそれだというのだ。

「それでいいな」

「緑茶！？ああ、グリーンティーね」

未久はそちらの名前で頷いた。



### 第三十四話 祖父その六

「それなの」

「何故そこで横文字が出るのだ」

家に向かつて歩きながらの話だ。当然牧村もいる。

「そこでだ」

「そこでって。よくその名前で売ってるけれど」

未久はこう祖父に話す。

「駅のキオスクとかで」

「それで覚えたのか」

「それよね、グリーンティーって」

「茶道の茶だが」

だが祖父はそれだと残念そうな口調で言っただった。

「そちらでは覚えていないか」

「何時の時代の話よ。っていうか」

ここで未久はさらに話すのだった。

「お爺ちゃんってまだ八十ってないわよね」

「うむ、そうだ」

「じゃあ戦前とかそんなに知らない筈だけれど」

「かつては海軍に入りたかった」

何気に己の若い時の夢も話している。

「兵学校にな」

「兵学校か」

ここでようやく口を開いた牧村だった。

「そこだったのか」

「来期なら入られたな」

祖父は牧村に顔を向けて述べた。信頼する者への微笑みと共の言葉だった。

「そして海軍でやっていけた」

「そうなのか」

「心がそうなっているからだ。海軍に相應しい」

「だといいがな」

「では。まずは入ろう」

そうした話をしていいるうちに門から屋敷までの道を歩いてしまっていた。そこまでの長さは結構なものがあった。庭も立派なものである。

「それでいいな」

「そうさせてもらう。緑茶か」

「お菓子か？」

未久はそれも聞いてきた。

「お菓子はあるの？」

「ある。しかしだ」

「しかし？」

「未久は本当に変わらないな」

家の門の前での言葉であった。

「全く。背だけでなく心も子供か」

「だから背の話はもういいわよ」

いい加減うんざりとした口調になっている。

「とにかく。お婆ちゃんも元氣よね」

「薙刀九段、それに合気道六段」

祖父はこんなことを言ってもきた。

「そうそう容易なことでは倒れはせん」

「そういうお爺ちゃんは剣道九段よね」

「うむ」

「それに柔道八段だったわね」

「どちらもいいものだ」

祖父は静かだが確かな口調で述べた。

「やはり武道はいいものだ」

「そんなにいいの？」

「いいが御前は体操の方がいいのだな」

「うん、武道も悪くないと思うけれど」

それでもまだというのである。

「やっぱり私にはそっちの方が合ってるから」

「だが来期は違うな」

「学ばせてもらいたい」

こう祖父に言った。

「それではだ」

「うむ、それではだ」

「頼む」

「そうさせてもらおう。それではだ」

こうして彼は祖父の下で心を学ぶことになった。この日はお茶を飲んでから大阪に出た。向かう場所は難波だった。その賑やかな街と未久と共に歩く。

これは彼女の希望である。まずは大阪を見て回りたかったのだ。

「しかしな」

「どうしたの？お兄ちゃん」

「御前は大阪が好きだな」

こう妹に対して言うのだ。

### 第三十四話 祖父その七

「それもかなりな」

「大阪？大好きよ」

実際にその賑やかな街を見回しながら言うのだった。

「もうかなりね」

「そんなに好きなのか」

「だって楽しいじゃない」

「こつも言ってきた。」

「それもかなりね」

「確かに楽しい街だ」

左右には様々な店が並んでいる。食い倒れの人形や蟹、それに河豚、エイリアンにあとは金龍ラーメンといったものが立ち並んでいる。まさに大阪である。

牧村もこの街は好きだ。ここでまた言うのだった。

「神戸とはまた違ってな」

「神戸って綺麗だけれどこつした賑やかさには欠けるから」

「この大阪の賑やかさは独特だな」

「そつよね、だからいいのよ」

「全くだ。しかし」

「しかし？」

「御前はまたかなりだな」

「こつ妹に言うのである。」

「大阪が本当に好きだな」

「食べ物も美味しいし」

「さらにこれであつた。」

「神戸のよりもまだ美味しいわよね」

「そつだな。美味しい」

「そつそつ。それに何処に行くの？」

「何処にか」  
「ここでまた言う牧村だった。」  
「一つでは済まないな」  
「それはね。食べても食べてもお腹が空くのよ」  
「未久は笑いながら話す。」  
「もうね。幾らでもね」  
「では店の一つでは足りないな」  
「お金はお爺ちゃんから貰ってるわよね」  
「一人五千だ」  
「それだけあれば充分食べられるわね」  
「そうだと話す未久だった。」  
「もうかなりね」  
「ではまずはカレーにするか」  
「カレー？」  
「自由軒のカレーがいいな」  
「それだというのだ。」  
「それか金龍ラーメンもだな」  
「他には？」  
「たこ焼きにお好み焼きもだな」  
「そうしたものも挙げていく。」  
「後は何がいいかな」  
「とりあえず最初は？」  
「場所が近い。まずはラーメンだ」  
「それにするというのだ。金龍ラーメンが丁度右手に見えた。それを見てなのだった。」  
「それを食べるか」  
「カレーはそれから？」  
「たこ焼きにお好み焼きか」  
「その二つが先だというのだ。」  
「自由軒に行くのはそれからだな」

「わかったわ。じゃあそうしましょう」  
「そして最後は」

牧村の言葉はさらに続いていた。

「デザートだが」

「何がいいかしら」

「善哉だな」

それだというのだ。

「それでいいな」

「夫婦善哉かしら」

「それだ。それでいいな」

「うん。ただ」

ここでふと言ってきた未久だった。

「夫婦善哉よね」

「それがどうかしたのか」

「してるわよ。私もあの小説読んだのよ」

こう言ってきたのだ。

「織田作之助のあの小説ね」

「小説も読むのか」

「読むわよ。これでも文学少女なのよ」

意外な事実がここで一つわかった。

### 第三十四話 祖父その八

「太宰だって芥川だって読むし」

「そうか」

「ただ」

しかしであった。ここで顔を赤らめさせてきた。そのうえでの言葉だ。

「谷崎はね」

「谷崎はどうか？」

「抵抗があるわ」

「こう言うのである。」

「ちよつとね」

「あの作家のはか」

「あれ、かなり辛くない？」

「癖はあるな」

牧村も谷崎潤一郎については知っている。耽美派にされる文豪である。

「それは事実だな」

「中学生が読んでいい作家かしら」

「作品によるが」

「こつ前置きしてからの言葉である。」

「おおむねそうは言えないな」

「そうよね、やっぱり」

「俺も電車の中で読んでいたことがあった」

「っていかお兄ちゃん電車に乗ったことあるの？」

未久にはこのことの方が驚くべきことだった。

「最近。それあったの？」

「たまに乗る」

「そうだというのだ。」

「それで身に着けた」

「そうだったの」

「そうだ。それでだ」

「どうなったの。それで」

「隣にいたおばさんに嫌な顔で見られた」

それが牧村の経験したことだった。

「それこそだ。危ない本を読んでいるようなな」

「間違っていないからね、それって」

「だから余計にだ。かつて国会で問題にもなった」

「えっ、国会!？」

国会と聞いて思わず大声を出してしまった未久だった。

「国会で問題になったの、小説家」

「そうだ。芸術かそれとも猥褻か」

こう妹に話す。

「それで問題になったこともある」

「そんなに危ない作品だったの」

「それと共にそうしたことには五月蠅い時代でもあった」

このことを話すのも忘れていない。

「だからだ」

「それでなの。何か凄い話ね」

「この辺りも谷崎は歩いたことがある筈だ」

その道頓堀の中での言葉だ。道行く人達の顔も実に賑やかなものだ。

「それ以上に織田作之助がだ」

「そうした場所なのね」

「では食べるとしよう」

ここでようやく金龍ラーメンに入る。早速豚骨スープの独特の香りとふんだんに置かれているキムチと大蒜も目に入る。その店に入る。

二人でラーメンを注文しそこにそれぞれキムチと大蒜を入れてい



く。そうして胡椒をかけてから二人並んで食べるのであった。

未久はそれを食べながらだ。兄に対して言ってきた。

「ねえ」

「何だ？」

「コテコテの味よね」

それを言うのであった。

「ここのラーメンって」

「そうだ。これがこの店の味だ」

「神戸のラーメンとはまた別の味なのね」

「ここのラーメンは大阪の味の一つでもある」

「一つのなのね」

「大阪のラーメンといっても様々だからな」

こう話しながらラーメンを食べる。麺は細めである。

「そうなる」

「そうなの。それでこれを食べたら」

「お好み焼きとたこ焼きだからな」

「わかってるわ。それじゃあ」

ラーメンをしっかりと食べた後でそのお好み焼きにたこ焼きも食べてそれからその自由軒に入る。店に入るとその織田作之助の写真が飾ってあった。未久はその写真と傍に置かれている文字を見て、その文字を読むのだった。

「虎は死んで皮を残す」

「よく言われている言葉だな」

「それで織田作死んでカレー残すなのね」

「織田作之助は確かに死んだ」

昭和二十二年の年頭に東京で客死している。死因は以前から患っていた肺結核である。既に余命あと僅かといった状況だったのだ。

### 第三十四話 祖父その九

「だが、カレーは確かに残っている」

「死んでもう六十年以上経ってるのにね」

「この店のカレーはその時の味がそのまま残っている」

そのわりかし狭い店の中を見回りながらの言葉だった。

「あの夫婦善哉の時の味がな」

「あつ、来たわ」

こんな話をしてしているとであった。そのカレーが来た。既に御飯とルーと一緒にしてありその中央にくぼみを作って生卵を入れている。それがこの店のカレーであった。

「これよね」

「この店ではインディアンという」

「インディアンなの」

「普通のカレーは別カレーという」

このことも妹に話す。二人は席に向かい合って座りそのうえで話をしているのだ。

「そう呼ばれている」

「この店独特なのね」

「そうだ。そして味もだ」

「独特なのね」

「食べればわかる」

言いながらそのカレーの卵のところソースを入れる。そのうえでその卵とソースごとカレーをかき混ぜてである。カレーを食べはじめるのであった。

未久もそれは同じだ。そして実際に食べてみると。

「あつ、これって」

「どうだ？」

「美味しい」

未久はそのかき混ぜたカレーを食べてすぐにこう言った。食べた瞬間にもう目が丸くなっている。

「このカレー美味しいのね」

「そうだ。これがそのまま昔から残っている」

「織田作之助の時代からなのね」

「そのままの味だ」

「成程ね。これがなのね」

未久はそのカレーを食べながらまた言う。

「美味しさはそのままなの」

「街も人も味も変わるものだ」

つまり全てが変わるのだという。

「だが。こうしてだ」

「変わらないものもあつたりして」

「だからいいのだ」

いいとまで言った。

「世の中もな」

「そうよね。それにしても」

「何だ？」

「今日私達随分食べてるわよね」

笑ってこう言う未久だった。

「ラーメンにお好み焼きにたこ焼きにこのカレーで」

「まだある」

「善哉もよね」

「餃子か肉饅かどれがいいか」

今度はこれを話に出してきた。

「どちらがいい」

「どちらがって？」

「だからだ。どちらを食べる」

問うのはこのことだった。どちらにしる食べるといつのだ。

「餃子か肉饅か」

「何でその話になるの？」

「蓬莱だ」

牧村が今度話に出してきたのはそれだった。

「蓬莱に行くぞ」

「蓬莱つていつたら」

「名前は聞いたことがあるな」

「豚饅売ってるお店よね」

「そつだ。次はそこに行く」

「それも食べるの」

「入るな」

最早入ることが前提の話だった。

「まだ」

「まあね。育ち盛りだし」

量を食べることについては何の問題もないのだという。

「そつちは」

「では食べ終わったら行くぞ」

「ええ、わかつたわ」

こうして話は決まった。また食べることになった。

そうしてである。二人は今度は蓬莱に行き豚饅を食べた。それから夫婦善哉に入る。そこは法善寺横町にある。狭い路を通ってそこに入る。

### 第三十四話 祖父その十

そこに入るとだ。和風の内装はごく普通の甘味処である。しかし出されるその善哉が他の場所のものとは少し違っているのだった。

「これよね」

「そうだ、二つだ」

「そうそう、それで夫婦善哉なのよね」

未久は二つ並んで置かれているその善哉を見ながら楽しげに話す。

「これがなのよね」

「二つ並んでいると量が多く見える」

牧村はここでも話した。

「そう書いてあったな」

「その織田作之助の小説にはね」

「いいアイディアだ。そして味もだ」

「これも美味しいわ」

それを食べながらの言葉だ。

「やっぱり」

「さて、これを食べたらだ」

「終わりね」

「北極に行くか」

「えっ、まだ食べるの」

「アイスキャンデーを食べる」

何とまだ食べるというのである。

「それもだ。いいな」

「ううん、またかなり食べるわね」

「大阪に来たらまず食べることだ」

それを当然だという牧村だった。

「大阪だからだ」

「大阪だからなのね」

「そういうことだ。とはいっても」

「とはいっても？」

「食べ忘れたものがあつた。それも食べておこう」

この期に及んでまだ言うのだった。

「きつねうどんだ」

「って待ってよ」

流石にもう一品話に出ると未久も言葉を止めた。

「アイスキャンデーだけならともかく」

「大丈夫だ。ぎりぎりの筈だ」

「うっ、私の胃のスペースわかつてるの？」

「おおよそな。善哉ときつねうどんの後でアイスキャンデーはいけるな」

「本当にぎりぎりだけれどね」

それでもいけるといふのは事実であつた。

「いけるわよ」

「なら行くぞ。いいな」

「やれやれ。食べるのも戦いね」

未久はその善哉を食べながらぽつりと云つた。

「全く」

「戦いか」

「だつて凄い量食べてるわよ」

未久は苦笑いする声で述べた。

「もう相当ね」

「そうだな。食べるのもまた戦いだな」

しかしであつた。牧村はここであることを思い出しその中に浸つたのである。それは言うまでもなく髑髏天使としての戦いのことであつた。

「あれと同じだ」

「どうしたのよ、急に」

未久は兄の様子が変わったことを見逃さなかつた。

「何か様子が変わったけれど」

「何でもない」

「そうは見えないけれど？」

「そうか」

「そうよ。どうしたのよ本当に」

怪訝な顔で兄に問い続ける。

「何があつたのよ」

「何かか。そうだな」

「そうだな？その続きは？」

「必死にしなければできないな」

「食べることも必死になの」

「そうだな。そしてそれは」

牧村の言葉は続く。だがそれは妹に向けているものではなく自分に向けているものだ。それを言っていくのであった。

「人間のものだな」

「人間のなのね」

「そうだ。人間のだ」

それだというのだ。

「ただな」

「ただ？」

「それはいいな。食べることはだ」

第三十四話 祖父その十一

「言っている意味はわからないけれど食べる方がいいのは確かね」  
未久もそれはいいとした。

「じゃああれね。これからきつねうどんも食べて」

「それでアイスクャンデーもね」

「そうだ、それも食べる」

「わかったわ。じゃあ付き合っから」

「食べられるな」

「育ち盛りだからね」

笑って兄に返す。

「幾らでも食べられるわよ」

「それはわかった。しかしな」

「今度は何？」

「俺と同じだけ食べてもだ」

牧村も自分がどれだけ食べているのかはわかっている。かなりの量なのも自覚している。そうしてそれを踏まえて妹に対して言うのだ。

「それでその大きさか」

「お兄ちゃんもそれ言うの？」

「体操をしているにしても不思議だ」

やはり言うのだった。

「御前は大きくならないな」

「いいじゃない。それはそれで人気があるんだし」

「人気があるのか」

「小柄な女の子はそれはそれで人気があるのよ」

このことを自信を持って言うのだった。

「ちゃんとね」

「だからいいのか」



「若奈さんだつて小さいじゃない」

彼女の名前も出してみせたのだった。

「というか妹さん達も全員」

「確かにあの姉妹は誰も小さいな」

「若奈さん達がどれだけ食べるかは知らないけれど」

「あまり食べない」

即答だった。

「御前の三分の一程か」

「それだけなの」

「しかし。御前は昔からよく食べるが」

「うん」

「太りもしないな。体質か」

「いい体質よね。太らない体質って」

自分のそうした体質は非常に感謝している。生んでくれた両親と天に対してだ。それは深く感謝しているのである。

「それって」

「そうだな。俺はどうか」

「そうじゃないの？というかお兄ちゃんってすぐに筋肉がつく体質よね」

「そうかもな。それはそれでいい体質だな」

「運動するにはね。私はあまり筋肉ムキムキにはなりたくないけれど」

このことについては拒否反応を見せるのだった。

「やっぱり。可愛いままでね」

「いたいか」

「はい、それは」

こんな話をしてであった。二人で食べ続ける。そしてアイスキャンデーを食べた後でだ。不意に前で女の子達に絡んでいる柄の悪い三人組を見た。

「あの、すいません」

「私達これで帰るんで」

「だからもうこれで」

「放して下さい」

こう言つて三人組から放れようとする。しかし三人はそれを放そうとしない。

「いいじゃねえかよ」

「そうだよ。ちよつとの間だからさ」

「なあ」

「馬鹿共がいるな」

牧村はその彼等を見て呟いた。

「今時珍しい古典的な馬鹿共だ」

「古典的なのね」

「そうだ、古典的な」

その三人組を見ての言葉である。

「馬鹿共だ」

「あの人達が馬鹿だつていうのはわかつたけれど」

未久は兄のその言葉をまずはそのまま受けた。

そしてそのうえで。彼に顔を向けて問うた。

「それでどうするの？」

「どうするか、か」

「ただ見ているだけじゃないわよね」

「馬鹿は嫌いだ」

これが返答だった。

第三十四話 祖父その十二

「そしてだ」

「そして？」

「見逃すつもりもない」

「じゃあやっぱり」

「少し行つて来る」

一歩前に出たの言葉だった。

「御前はそこで見ている」

「危ないから？」

「そうだ」

当然のことだった。何しろ相手は三人だ。それだけの数を相手に妹を巻き込む訳にはいかない、これは当然の判断であった。

「だからだ。見ている」

「わかつたわ。じゃあ」

こうしてだ。そのゴロツキ達のところに行く。そうして言うのだ。  
つた。

「おい」

「何だ？」

「邪魔するんかい」

「まさかとは思うがな」

「そのまさかだ」

牧村は素っ気無く言葉を返した。

「それでここに来た」

「おいおい。ヒーロー気取りかい」

「またええかつこしいが来たな」

「何のつもりやっちゆうねん」

「格好をつけるつもりはないが」

こう断つての言葉であった。

「貴様等は好きにはなれない」

「ああん！？じゃあ御前からやったるわ」

「こら、覚悟せい」

「ほなやったるわ」

「ここまでの展開はマニユアルだな」

牧村は自分に向かって来た三人に対して落ち着いて返す。

「だが」

「だが！？」

「次の言葉は何やねん」

「ここからも同じだな」

こつ言っのだった。

「マニユアル通りだ」

「何がマニユアル通りや」

「ふざけるなや、こら」

「しばくぞ」

「生憎だがやられることはない」

牧村は彼等の前から一步も動くことはない。そのうえでの言葉だった。

「それを見せてやる」

「ほなしばくわ」

「何か御前見てたらむかつく」

「折角ガールハントしようと思ってたところにな」

その向かって来る彼等に対してズボンのポケットに両手を入れたままの姿勢でいる。そして一人が来るとだった。

よけた。それだけだった。だが相手はそれで前のめりにこけてしまった。派手に前に転倒して顔をアスファルトに激しく打ちつけてしまった。

「いててててて……」

「て、手前！」

「何しやがった！」

「何もしていない」

「こう返すだけだった。」

「俺は何もしない」

「何っ!？」

「何もしねえだと!？」

「そつだ、何もしない」

「また言う彼だった。」

「俺は何もだ。御前等程度にはな」

「程度やと!？」

「俺等程度つちゆうんかい」

「そつだ。御前等程度だ」

「牧村の言葉は変わらない。」

「その程度だ」

「この野郎」

「ふざけんや!」

「一人が右の拳を振るって向かう。だがその彼に対してもだ。」

「身をかわずだけだ。すると相手はそれでまた前にこけてしまった。」

「牧村はそのまま動いて最後の一人の前に来た。」

第三十四話 祖父その十三

「ひ、ひいいいいいっ！」

彼はそのままひっくり返ってしまった。これで三人共倒れてしまった。牧村は本当に何もすることなくだ。三人を倒してしまったのである。

「この通りだ」

「な、何て野郎だ」

「御前何やねん」

「何やつちゆうねん」

「人間だ」

三人に返す言葉はこれだけだった。

「ただの人間だ。それだけだ」

「人間!？」

「嘘つけ、何処が人間だ」

「化け物やるが」

だがゴロツキ達は何とか起き上がりながら。こつ彼に言つのだつた。

「この化け物が」

「何ちゆう強さやねん」

「そんだけ強くて人間なんかい」

「強さで言つのか」

牧村はその彼等の言葉を受けてまた述べた。

「成程な」

「!？何や」

「何やこいつ」

「何もない」

彼等にはこれといって言おうとしない。

「ではな」

「何処行くねん」  
「御前何やってんや」  
「だから人間だ。それよりもだ」  
「その彼等に対する言葉だ。」  
「言つたぞ、相手は」  
「んっ！？しもた」  
「あの連中何処行ってん」  
「逃げられたんかい」  
「手が空けば当然のことだ」  
「牧村はまた彼等に告げた。」  
「それに気付かなかつたか」  
「忘れてたんや」  
「気付かなかつたんちやうわ」  
「同じよ、それじゃあ」  
「未久は呆れた声で突っ込みを入れた。」  
「それだと」  
「ちっ、こつなつたらだ」  
「もうここにおいても仕方がねえ」  
「三人はいらだつた顔で言ってきた。」  
「覚えてるんやな」  
「今度会つたらな」  
「忘れてるから安心しろ」  
「牧村は彼等の言葉を聞いてこつ返した。」  
「御前等のことはだ」  
「ちっ、くそっ」  
「ふざけた奴だ」  
「こんな捨て台詞を残して消える彼等だった。一人残つた牧村のところに未久が来た。そうしてそのうえで兄に対して声をかけてきたのだった。」  
「あっさり終わったのね」

「どつとということはない」

「こつ返す牧村だった。」

「所詮はな」

「所詮はなの」

「そつだ。ただの人間だ」

牧村が言った言葉はこれだった。

「ただのな」

「ただのなのね」

「そつだ。しかも何もしていない人間だ」

「だからどうでもいいのね」

「そつだ。では帰るか」

「うん、それにしても」

ここで未久はまた兄に言ってきた。

「お兄ちゃんって何か」

「どつした」

「かなり強くなったのね」

「言つのはこのことだった。」



### 第三十四話 祖父その十四

「それもかなり」

「そうか」

「何か別人みたいよ」

「そしてこんなことも言うのだった。」

「もうね」

「そうか。別人か」

「うん、別人」

「それだというのだ。」

「何かね」

「しかし。人か」

「！？人つて？」

「別人。別の人だな」

「言葉を分けてきた。確かにそうなるものだった。」

「人なのだな」

「人間じゃなかったら何なの？」

「未久にはわからないことだった。」

「それだったら何なの？」

「いるのは人だけとは限らない」

「妹に向けた言葉ではなかった。自分自身に向けた言葉だ。」

「人だけではな」

「どういうこと？それって」

「そうだな。俺は人間だ」

「牧村の自分自身に向けた言葉は続く。」

「その通りだな。俺は人間だ」

「あの、何言ってるのよ」

「兄の言葉の意味がどうしてもわからず問い返した。」

「人間がどうとかって」

「人間ならいい」  
また言うだけだった。  
「俺は人間だ。そうだ」  
「ちよつとお兄ちゃん」  
「むっ？」  
「ここでやつと妹の言葉に気付いたのだった。」  
「何だ？ 一体」  
「何だじゃないわよ。何話してるのよ」  
「気にするな」  
「いつもの言葉を返すだけだった。」  
「何でもない」  
「そうなる時も多いし。何か最近おかしいわよね」  
「おかしいか」  
「そうよ、おかしいわよ」  
「また言うのであるが何処か話が噛み合っていない。」  
「そうして不意に自分の世界に入って」  
「そうなってるか」  
「一人の時はいいけれど二人の時は止めてね」  
「二人の時はか」  
「私の時はいいけれど」  
「自分の時はというのだ。」  
「ただ。若奈さんとの時はね」  
「その時はか」  
「絶対に止めてね」  
「その時はだというのだ。」  
「さもないとお嫁さんなくすわよ」  
「何故お嫁さんになる」  
「私も未来の義姉さんとお別れしたくないし」  
「未久の言葉はそんなものになってきていた。」  
「だからね。いいわね」

「変な理由だな」  
「わからなければいいのよ」  
「それはいいというのだった。」  
「ただね」  
「今度は何だ」  
「もう帰るのよね」  
「こう言ってきたのだ。」  
「これから」  
「そうだ。そのつもりだ」  
「かなり食べたしね。もう満腹」  
「満足したな」  
「食い倒れ満喫したし。ただ」  
「ただ？」  
「明日もよね」  
「こんなことを言ってきたのだった。」  
「明日も食べるのよね」  
「そうだな。明日もだな」  
「何か食べるものが多くて困るわよね」  
「笑って話す未久だった。」  
「大阪って」  
「それで明日は何を食べるつもりだ？」  
「ハンバーグ？」  
「それだというのだ。」

第三十四話 祖父その十五

「ハンバーグにしようかしら」

「それか」

「ハンバーグ好きだから」

「そうだな。御前は昔から好きだな」

「そうそう。だからね」

「それでどの店にする」

「このことも尋ねた。」

「一体どの店にするつもりだ？」

「びっくりドンキーにするわ」

「それだというのだ。」

「そこにね」

「びっくりドンキーか。しかしそれなら」

「神戸にもあるって言いたいよね」

「御前よく行くな」

「こつ言つのである。」

「しかし。それなら」

「神戸でも食べられるっていうのね」

「そうだ。それでもか」

「そうよ。それでもよ」

「また言う未久だった。」

「美味しいからよ。ボリユームも凄いし」

「チェーン店だったら別にここではなくてもな」

「いいじゃない。そんなこと言ったら」

言葉でのやり取りは妹の方が一枚上手だった。少なくとも今はだ。

「それでもね」

「それでもか」

「食べたいものを食べる。そうじゃない」

「結局はそれか」

「そう、それ」

有無を言わせぬ口調だった。

「とにかく明日はハンバーグよ。いいわね」

「わかった。では何を食べる」

「そうね。大きさは絶対に四百グラム」

言うのは大きさからだった。

「それで目玉焼きを乗せたのね」

「いいな、それでは俺もだ」

「その気になったのね」

「気が変わった。そこでいい」

「わかったわ。じゃあ明日も二人でね」

こう話してそのうえで二人で祖父母の屋敷に帰った。牧村はそこに帰るとすぐに持って来たジャージの一着に着替えた。そうしてラニンングに出た。まだ夕方であり赤い世界である。その赤い大阪の中を走るのだった。

その赤い世界の中を走っているとだ。声がしてきた。

「楽しんでいるな」

「ここにも来たか」

「私は何処にでも現れることができる」

死神だった。走る彼のところに来たのだ。そのうえでの言葉だった。

「そしてだ」

「そしてか」

「見ていた。貴様はかわしたただけか」

「あれか」

死神の言葉を受けて返した。

「見ていたか」

「見ていた。人に対してはそうか」

「下らない相手だ」

「ゴロツキ達をこう言い捨てる。走るのを止めて相手に対している。所詮はな」

「そうだな。雑魚にしか過ぎない」

死神もそれで終わらせた。

「魔物とは雲泥どころの違いではない」

「そうした相手に向ける剣はない」

牧村はまた述べた。

「俺は魔物に対してだけだ。それ以外には剣は抜きはしない」

「それでいい。若しあそこで拳を振るうか」

「髑髏天使になればか」

「その時は貴様は終わっていた」

死神の言葉は鋭いものになっていた。

「完全にな」

「完全にか」

「そうだ。魔物になっていた」

言葉だけでなく目の光も強いものになっている。

「その時は私が勝っていた」

「少なくとも髑髏天使になるつもりは毛頭なかった」

牧村はまた彼に返した。

「それはな」

「なかつたか」

「人だ」

だからだというのだ。

「人が相手ならばだ」

「そうする必要はないか」

「髑髏天使はあくまで魔物と闘う存在だ」

「そうだ。それ以外の何者でもない」

「その通りだな」

「それで貴様はだ」

「俺はか」

牧村も彼に応える。

「どうだというのだ？」

「これでまた踏み止まった」

「人であることにか」

「そのまま人であることだな。それにだ」

「今度は何だ」

「今智天使だったな」

今度話してきたのは天使としての階級だった。それだった。

「もう一つある」

「最上位か」

「そうなる。それはわかっておくことだ」

「わかっている。だが」

「だが？」

「それになればどうなるか、か」

それを言うのであった。

「私もあの階級については詳しくは知らない」

「神である貴様もか」

「何故ならそこにまで至った者は殆どいない」

だからなのだというのだ。

「それで知る筈もないと思わないか」

「そうだな。それは確かにな」

「だからそれについてはわからない」

また言う彼だった。

「だが。それはさらに人であることを超えるものだ」

「そうなのかもな。では、だ」

「また会おう」

ここまで話して踵を返した。

「それではな」

「そうだな。またな」

二人はこれで話を止めた。死神は立ち去った。そしてそのうえで

牧村もランニングに戻った。彼の大阪での己を見つける旅はまだ続くのだった。

第三十四話 完

2010・3・30



## 第三十五話 瞑想その一

髑髏天使

### 第三十五話 瞑想

次の日牧村は道頓堀にいた。当然未久も一緒である。その行く場所はびっくりドンキーだった。そこでハンバーグを食べていた。

妹はその木造の店の中でハンバーグを楽しそうに食べている。その巨大なハンバーグの上には目玉焼きがある。それも一緒に食べるのだった。

そして食べながら。兄に対して言ってきたのだ。

「ねえ」

「何だ」

「このハンバーグと目玉焼きの組み合わせだけけど」  
それについての話だった。フォークとナイフを巧みに使ってそのうえでハンバーグの上に目玉焼きの白身を置いてだ。そのうえで食べていた。

「凄くいいわよね」

「そうだな。確かにな」

見れば兄も同じようにして食べている。

「それに」

「それに？」

「この組み合わせもいい」

チーズも食べていた。そのうえで言葉だった。

「ハンバーグに目玉焼きはよく合う」

「ええ」

「そしてチーズもな」

「お肉にチーズって合うわね」

「熱い肉にはな」

「パスタにもそうだけれど」  
未久はパスタも話に出した。  
「それもね」  
「チーズはあちらの料理にはどれも合うな」  
「そうよね。とうかないとはじまらないっていつか」  
「そこまでだというのだ。」  
「もうね」  
「そうだな。そして」  
「そして？」  
「今日はこれで終わりか」  
「こう妹に問うのだった。」  
「ハンバーグで終わりか」  
「そうね。お兄ちゃん今二枚食べてるわよね」  
「それがどうした？」  
「私ももう一枚」  
「こう言うのである。」  
「もう一枚貰うわ」  
「もう一枚か」  
「そう、お兄ちゃんと同じものをね」  
「チーズのハンバーグを見ながらの言葉だった。」  
「それをね」  
「そうか」  
「何か昨日かなりの種類を食べたし」  
「どれだけ食べたか覚えているか？」  
「もう覚えてない位」  
「そこまでだというのだ。」  
「何か色々食べたわよね」  
「アイスクャンデーまでは覚えているな」  
「まあそれで終わったけれど」  
「実際牧村もそれで終わっている。」

「じゃあ。ええと」

「まずはラーメンからはじまったな」

「お好み焼きにたこ焼きに」

「カレーも食べた」

「豚饅もね」

「それにきつねうどんに善哉と」

「後はアイスクャンデーだったな」

とにかくかなり食べたのは間違いなかった。

「それで終わりだったわね」

「それで今日はハンバーグね」

「とにかく食うんだな」

「大阪にいたら食べないと」

とにかくそれに尽きた。しかもだった。

未久は思い出した顔になってた。言うのだった。

「そうそう、思い出したけれど」

「どうした」

「串カツ」

この単語が出て来た。

第三十五話 瞑想その二

「串カツだけれど」

「それか」

「そうそう、それぞれ」

まさにそれだというのである。

「串カツも食べない？この後で」

「ハンバーグ二枚の後でか」

「駄目かしら」

「それで何本食うつもりだ」

「二十本？」

具体的な数はすぐに出て来た。

「それ位ね」

「二十か」

「お兄ちゃんもいけるわよね」

「いけない訳ではない。いや」

「いや？」

「三十はいけるか」

こう言うのだった。

「それだけな」

「いけるじゃない。じゃあこの後は」

「新世界に行く」

場所は彼が指定した。

「そこにだ」

「新世界になの」

「そう、そこにだ」

また場所を話した。

「そこに行くぞ、いいな」

「新世界にいいお店があるの」

「明日行くつもりだったかな」  
さりげなく予定も話すのだった。  
「実はな」  
「新世界ね」  
「そうだ、そこでいいか」  
「いいけれど」  
未久にそれを断る理由はなかった。  
「じゃあそれでね」  
「決まりだな。さて」  
「ええ」  
「食うぞ」  
まずはハンバーグだった。  
「食ってから行く」  
「絶対に食べ終えないとね」  
「食べ物は残すものではない」  
牧村の言葉が厳しいものになる。  
「何があってもだ」  
「食べ物粗末にするな」  
「その通りだ」  
まさにそれだというのである。  
「だからだ。いいな」  
「わかってるわ。私だってね」  
未久自身も真面目な顔で話す。  
「それは大嫌いだから」  
「御前も残さないな」  
「残したら駄目っていつも言われていたじゃない」  
「そうだな」  
「お父さんとお母さんにね」  
二人の両親の教育だった。それで身に着いたことなのだ。  
「だったらそれも当然よ」

「それではだな」

「ええ、まずはハンバーグを食べて」  
「全てはそれからだった。」

「それからよね」

「そういうことだ。それにしても」

「それにしても？」

「胸焼けには注意することだ」

次に言うことはこれだった。

「それにはだ」

「胸焼けね」

「ハンバーグに串カツはな」

「癖強いわよね、確かに」

「だからそれには気をつける」

このことを妹に話す。

「それはいいな」

「わかってるわ。じゃあね」

「食っていく」

二人はそのまま新世界まで向かいそうして串カツの店に入った。  
白い木造のその店に入るとだ。すぐに油の匂いと店の中の客達が目  
に入った。

第三十五話 瞑想その三

未久はそれを見てだ。まず兄に対して言ってきた。

「ねえ」

「何だ？」

「お兄ちゃんビール飲まないわよね」

「そうだが」

「じゃあビールはなしね」

それを聞いて納得した顔で頷くのだった。

「やっぱりね」

「言うまでもないことだと思うが」

「それでもよ。じゃあ串カツだけね」

「御前も飲まないな」

「まさかここで飲む筈ないでしょ」

それはすぐに否定した。

「つていうか私まだ中学生よ」

「だからだな」

「それに元々お酒飲まないし」

彼女もまた飲まない。年齢からもそうであるが何よりも彼女もまた酒については兄と同じ体質なのである。つまりかなり弱いのである。

「それに煙草も」

「御前は煙草嫌いだったな」

「そうよ。あんなの何処がいいのよ」

顔を顰めさせての言葉だった。

「全く。このお店もそういえば」

「禁煙だな」

「そうね」

見ればそうだった。ちゃんと壁にそれを書いた紙が書かれている。

それを見ればすぐにわかることだった。無論品書きもそこにはある。

「じゃあ心置きなくね」

「そこまで嫌いか」

「大嫌いよ」

「ここまで言うのだった。」

「煙草なんてね」

「俺も吸わないからな。では座るとするか」

「ええ、じゃあね」

空いている席に座ってそのうえで串カツを次々と注文する。頼むのは普通のものだけでなく鱧に貝、それに海老に烏賊に蛸だった。海の幸が多かった。

そしてだ。ソースに浸けるがここでだ。未久が言ってきたのだ。

「ねえ」

「わかつているな」

「だから言ったのよ。二度漬きはよね」

「それは絶対に駄目だ」

「それだけはというのだ。」

「何があつてもだ」

「わかつてるわよ。そんなことしないわよ」

未久も自分から言っただけはあつた。わかつていた。

「何があつてもね。ただ」

「ただ、だな」

「世の中実際にそれをする人もいるのね」

「色々な人間がいる」

牧村もまたその串カツをソースに浸けて食べながら話す。

「それをする人間もいる」

「許されないわね」

「味噌汁を飲んだ後の味噌汁茶碗に痰を吐く者がいる位だ」

「それっておかしいでしょ」

未久はそれを聞いて思わず顔を顰めさせた。



「何よ、それ」

「しかし実際にいる」

また話す彼だった。

「そうした人間もいるからだ」

「二度漬けもなのね」

「いる。世の中マナーを知らない人間も多い」

「許されないことね」

「だからだ。それにしても」

「そうね」

話は自然に進んでいた。本当に自然にである。

「この串カツね。美味しいわよね」

「串カツだけじゃない」

それだけではないともいう彼だった。

「キャベツもな」

「そうそう、それぞれ」

まさにそのキャベツだというのだ。未久もそのキャベツを食べている。爪楊枝で刺してそのうえで口の中に入れてだ。そうして食べていた。

第三十五話 瞑想その四

「キャベツも食べないとね」

「胸焼けするからな」

「何でだろうね」

未久も食べながら話す。

「これを食べたら胸焼けしないのは」

「さてな。だが肉ばかり食べてもだ」

「身体によくないし」

「油気の強いものばかりでもな」

「そうよね。だからね」

こつ話すのだった。

「だから野菜もね」

「食べないと駄目だ」

「お兄ちゃんつてそういえば」

未久はそのキャベツと串カツを交互に食べながら話す。

「あれよね。野菜もたっぷり食べるよね」

「バランスよく多くだ」

牧村は言った。

「そう食べないと駄目だ」

「バランスよくね」

「量も多くだ」

量にも考えを及ばさせていた。

「それも考えている」

「まあ私はね」

ここで自分のことを話す未久だった。

「幸い太らない体質だから量は気にしなくていいけれど」

「そうか」

「そう、それはね」

いいというのである。

「大丈夫だけれど」

「だがバランスはだ」

「それを考えていかないと駄目なの」

「スポーツをするからにはな」

それではというのだ。

「しつかりとな」

「そうよね。そういえばよ」

「どうした？」

「ほら、あの死んだあいつ」

「あの屑か」

この前死神が地獄に送ったその教師だ。二人の間ではそれで通じる話になっていた。これは二人だけでなく中学校全体においてそうだった。

「あいつはそれは全くだったな」

「もうデブデブでね」

未久は嫌悪感を露わにして話す。

「あれで他人には減量しろとか言っていたし」

「あいつは馬鹿だった」

牧村も忌々しげに言い捨てる。

「自分がわかっていなかった、全くな」

「もうね。酒も煙草もだし」

「そもそもそこから節制ができていなかったな」

「もう皆大嫌いだったわよ」

死んでからもこう言われる。見事な人望だ。だが教師という職業にはこうした卑しい人物が多いというのもまた事実である。嘆かわしいことにだ。

「あいつだけはね」

「だがあいつでもだ」

「あいつでも？」

「一つだけ人の役に立てる」

「あんな奴が？」

未久は兄の言葉に眉をしかめさせて問い返す。

「何の役に立つてきたのよ。体罰や罵倒ばかりで威張り散らしていたのに」

「反面教師だ」

それだというのだ。

「それでだ」

「反面教師なの」

「そうだ。ああいう人間にはなるまいと思うな」

「ええ、それはね」

当然だというのだった。

「誰だっと思うわよ。人間と見なせない位ね」

「そうだな。それだ」

「反面教師ね」

「あいつはそれだ」

まさにそれだというのだ。

「他人の反面教師になるべき輩だ」

「死んでもなのね」

「そうだ。人はあいつを見てああはなるまいと思う」

牧村は冷徹に妹に対して述べる。

### 第三十五話 瞑想その五

「そういう存在だった」

「そして今もなのね」

「そういうことだ。あいつは反面教師だ」

彼はまた言った。

「死んでからもだ。そうした意味で人の役に立つ」

「他の人のね」

「そう考えると学校はいい場所だな」

「いいの、それで」

「反面教師という教師には事欠かない」

牧村は教師という職業に質の悪い人間を多く見てきた。だからこそその言葉だ。それを今シニカルに妹に対して述べてみせたのである。

「あいつはその最高の例だ」

「最高のなの」

「そうだ、最高のだ」

最高とはいっても褒めてはいない。言葉に嫌悪と侮蔑がはつきりと出ている。

「そうした意味で役に立っている」

「もう一つあるんじゃないかしら」

ここで未久はまた言ってきた。

「あいつには」

「もう一つか」

「死んで皆大喜びよ」

言うのはこのことだった。

「本当にね。誰もがね」

「死ぬのも奉公のうちか」

元老の一人山縣有朋が死んだ時に言われた言葉だ。

「そういうことだな」

「死んだ方がいい人間っているのね」

「残念だがいる」

その通りだと答える牧村だった。

「世の中更正しない人間もいるからな」

「そういうものなのね」

「しかし更正する人間もいる。その更正した人間の過去を暴いて糾弾する奴もいるがな」

「ちよつと待つて」

未久は兄の今の言葉に眉を顰めさせて返した。

「更正した人の過去を暴いて責めるって!？」

「そうした人間もいる」

冷静に述べるのだった。

「そうして己の正義を満足させる奴がだ」

「つまり人の古傷暴いて攻撃するのね」

「そういう人間はどう思うか」

「最低じゃないの？ある意味あいつ以上に」

「そう思うか」

「普通にそう思うわよ」

串カツを食べながら述べる。

「私はね」

「だがそういう人間もいる」

牧村もまたその串カツを食べながら話した。

「それはね」

「そうだな。そういう奴はだ」

「人間じゃないわよね」

「必ず碌な死に方をしない」

「こつ言つのだった。」

「末路はそうなる」

「そうならないとかえって不思議よね」

「そうだな。それでだ」

「ええ」

「このカツだが」  
今食べているのは鱧だった。それもソースに浸けてそれから食べる。

「いいな、やはり」

「そうよね。美味しいわよね」

未久は貝を食べている。食べながら満足した顔になっている。

「これもね」

「そうだな。だが」

「だが？」

「この味が大阪にしかないのはな」

「そうよね、それは残念よね」

「昨日食べたものも同じだ」

それもだというのだ。

第三十五話 瞑想その六

「どれも大阪にしかない」

「神戸の味って少し違うわよね」

「だからだ。神戸でも食べたいがな」

「そうね。まあ神戸からは近いし」

だが未久はこう言うのだった。

「すぐに来られるし」

「それでいいのか」

「いいわ、別にね」

そしてにこりと笑ってもみせた。

「お兄ちゃんのスイドカーで来ればいいし」

「俺は夏の間ここに居るつもりだが」

「じゃあ電車だね」

それでだと返す。即答だった。

「それで行くから」

「何が何でも食べるつもりか」

「人生は何の為に生きているのかよ」

不意にこんな人生論まで出す妹だった。

「それだとどうなのよ」

「食べる為か」

「そう、人生は食べる為にあるの」

まさにそれだというのだった。

「そうでしょ？やっぱり」

「そこまでは思わないがな」

「人生は楽しむもの」

今度は蛸を食べる未久だった。

「そしてその中で最も楽しいことはね」

「食べることか」



「そういうこと。さて、じゃあ」

「それではか」

「まだ食べられるわよね」

蛸を食べながらの兄への問いだった。

「まだ。そうよね」

「そうだと言えば」

「食べましょう」

返答はこれしかなかった。

「いいわね、お腹一杯ね」

「わかった。それではだ」

「食べて食べて食べまくって」

とにかく繰り返し返せばいいという感じだった。

「それで楽しみましょう」

こんな話をしながら串カツも楽しむ二人だった。それを食べてから祖父の屋敷に戻る。未久は夏休みの宿題にかかり牧村はまずランニングをしてそれから筋トレニング、それとテニスにフェシングのトレーニングをした。それが終わった時にだった。

「いいか」

「ああ」

祖父が出て来た。中庭でテニスのラケットを持っている彼に声をかけてきたのだ。

「何だ」

「剣道はどうだ」

「こう彼に言ってきたのである。」

「その素振りをしてみるか」

「そうだな」

祖父のその言葉に応える。

「それではな」

「よし、では道場に来るのだ」

また彼に告げた。もう夕も暮れようとしている。その中でのやり

取りだった。

「いいな」

「よし」

こうして彼は木刀での素振りにかかった。白い床が実にいい。彼はそこで祖父に素振りを見てもらった。そしてまずはこう言われたのだった。

「筋はいいな」

「いいか」

「少しやれば段になれる」

こう言われたのだった。

「剣の動きもいい」

「そうか」

「だが」

しかし、であった。

「しかしな。それでもだ」

「何かあるのか」

「迷いが見られる」

「迷いか」

「そうだ。心当たりはあるな」

孫の目を見ての言葉であった。

第三十五話 瞑想その七

「それは」

「わかるか」

「言わずともわかることだ」

こう孫に言うのであった。

「目の光がそうだからな」

「目か」

「目は口程にものを言う」

昔から言われ使われている言葉であった。

「だからこそだ」 8

「それでか」

「そうだ、迷いがあるのならばだ」

「どうせよというのだ？」

「おそらくそれは剣で断ち切れるものではない」

また孫に告げた。

「禅だな」

「禅か」

「そうだ、座禅だ」

それを話に出してきた。

「座禅をすることだ」

「座禅をか」

「それをしていくことだ。いいな」

「座禅をすればいいのか」

祖父のその言葉を聞いてだ。牧村はあらためて言った。

「それをか」

「そうだ。いいな」

「それがいいというのならだ」

静かに頷いた彼だった。

「そうさせてもらおう」  
「そうするか」  
「そうさせてもらおう。それではだ」  
こうして彼は座禅に入った。道場の中で座りそうして目を閉じる。それと共に無我の中に入りその中に留まり続けるのであった。それを暫く続ける。ここで声がした。  
「よし」  
「終わりか」  
「急ぐことはない」  
祖父は目を開けた彼にまた言ってきた。  
「決してだ」  
「急ぐことはないか」  
「そうだ、急ぐ必要はない」  
目を開けた彼の前に立っていた。そのうえでの言葉であった。  
「決してだ」  
「わかった。それではだな」  
「戻るといい。修業自体もこれで終わりとする」  
「今が座禅か」  
彼はふと言った。そしてだ。  
祖父に対して問う。その座禅のことをである。  
「これは黙想とは違うな」  
「武道の最後に行くあれとか」  
「あれとはまた違うのだな」  
「そうだ、違う」  
「そうだというのである。」  
「また違うものだ」  
「無我の世界に入っていたが」  
「それが禅だ。迷いはその中で消え去る筈だ」  
「続けていけばだな」  
「そうなっていく。では帰ろう」

「屋敷にか」

「そうして休めばいい。これでな」

こう言って孫を屋敷の中に戻す。この日はそれで終わりだった。

次の日は未久は家に帰ることになった。それがかなり残念そうだった。

「部活はじまるのよね」

「嫌か」

「ええ、かなり嫌」

こう兄に対して言う。リュックを背負う背中にもその気持ちがオーラとなって出ていて背負うようになっていく。そのうえでの言葉であった。

「もうね。一昨日に戻れたら」

「部活が嫌ではないのだな」

「大阪の食べ物を食べられなくなるのが嫌」

そういうことだった。

「それがね」

「ではまた来い」

「お兄ちゃんはいいわよね。ずっと大阪なんですよ？」

「そうだが」

「大学生っていいわよね」

兄を羨む言葉さえ出す。それも心の奥底からである。

### 第三十五話 瞑想その八

「本当にね」

「ずっとこの街にいられるからか」

「中学生ってそうはいかないのよ」

その自分の立場を言うのであった。

「もう忙しいし」

「部活にそれに熟か」

「そうよ、お兄ちゃんも中学生だったしわかるわよね」

「わかるがもう一度経験するつもりはない」

「だからなの」

「そうだ。そういうことだ」

妹に対してつれない感じで返す。しかしであった。

「だが。それだとな」

「それだと？」

「送ろう」

「こつ言つのであった。

「家までだ。サイドカーで送ろう」

「送ってくれるの？」

「神戸に帰るまでに何かあったら駄目だ」

何気に妹思いでもあった。言葉にも態度にも普段は中々出さない

彼ではあるがだ。

「だからだ。送ろう」

「そうしてくれるの」

「遠慮することはない」

妹にこつまで言う。

「だからな」

「そう。じゃあ」

「行くぞ」

早速妹をガレージに連れて行く。そうしてだった。

彼女を実家まで送った。母はその彼を見て少し驚いた顔で言ってきた。

「お父さんのところに行っただんじやなかったの？」

「戻って来た」

返答はこれだった。

「今な」

「夏休みの間ずっといるんじゃないの？」

「すぐに戻る」

しかしこつも言っただった。

「大阪にな」

「お兄ちゃんが送ってくれたの」

彼の横にいる未久がこつ母にいる。二人は今玄関にいる。そこで母と三人で話をしているのである。思わぬ親子の面会の場ではあった。

「こつまでね」

「えっ、大阪まで神戸って」

「何かおかしいか？」

「随分早く出たの？」

母はこつ言っただけ驚きを見せていた。

「まだ八時にもなっていないのに」

「物凄い速さで来たのよ」

しかし未久がこつで言うのだった。

「ほら、お兄ちゃんのサイドカーでね」

「あれでなの」

「そうなの。高速を物凄い速さで帰って来たのよ」

「けれどこつまで来るのにそれなりの時間がかかるし。前の車もあるし」

「全部追い抜いてきたのよ、お兄ちゃん」

「サイドカーで!？」

母はそれを聞いてまずは首を傾げさせた。

「随分無茶をしたの？」

「凄かったわよ。もう次から次に抜いてね」

「あのね、来期」

母は珍しく彼の名前を呼んでた。心配する顔で言ってきたのだっ  
た。

「あまり無茶な運転はね」

「止めるべきか」

「そうよ。貴方だけじゃないし」

その心配する顔で我が子に話す。

「未久もいるから」

「だから余計にか」

「二人に何かあったら冗談じゃないから」

それが理由だった。

「わかったわね。くれぐれもね」

「わかった」

母の言葉を無下にすることはなかった。

「それでは。自重することにする」

「そうよ。未久もね」

「私も？」

「そうよ、貴女もよ」

娘に対しても言うのであった。



### 第三十五話 瞑想その九

「お兄ちゃんにもっとスピード出してとか言わなかったでしょうね」

「それはないけれど」

「そう。だったらいいけれど」

母はそれを聞いてまずはほっとした顔になった。

「それだったらね」

「私あまりスピードとか興味はないし」

「そうよ。狭い日本よ」

交通標語めいた言葉まで出て来た。

「そんなに急いで何処に行く、だからね」

「そうね。それはね」

「わかったらくれぐれも気をつけなさい」

母の言葉は厳しいものになっていた。咎めるものである。

「車にしてもバイクにしても凶器だからね」

「そうだな」

牧村は母の今の言葉にふとした感じで返した。

「それはな」

「流石に来期はわかっているのね」

「わからない筈がない」

「こつ返すのだった。」

「それもだ」

「だったらいいわ。それじゃあ未久」

「うん」

「また大阪に行くのよね」

「こつ娘に問うのである。」

「部活や塾がない日は」

「そのつもりだけれど」

「わかったわ。その場合はね」

前置きしてからの言葉だった。

「電車で行きなさい。いいわね」

「電車でなの」

「そうよ。それが一番安全だから」

だからだというのだ。

「わかったわね。それで」

「ええ、じゃ次からはそれでね」

「来期も。サイドカーもいいけれど」

「ああ」

彼にも言うのを忘れない。母親らしい気遣いだ。

「くれぐれもね。気をつけてよね」

「わかっている。それはな」

「わかってくれていたらいいから。それで」

母の言葉がここで変わった。

「いいかしら」

「何だ」

「どうしたの？」

牧村だけでなく未久も母に言葉を返した。

「何かあるのか」

「私お昼は部活だけれど」

「それでも朝は空いてるわよね」

母は今度はこう言ってきた。

「だったら今からパンケーキ焼くからどうかしら」

「パンケーキか」

「いいじゃない、それって」

目を輝かしたのは未久だった。

「パンケーキ大好きよ」

「未久はパンケーキ以外もでしょ」

母はそんな娘に笑顔を向ける。そしてこつも言うのであった。

「来期もよね」

「好きだ」

それはその通りだと頷く牧村だった。

「それではだ」

「シロップと生クリームも用意してあるから」

「そうか」

「特にシロップがないとね」

パンケーキには欠かせない。それは母もわかっていた。

そうしてだ。母はここでまた言ってきた。

「じゃあ食べるわよね」

「よし、じゃあ食べましょう」

「そうだな」

こうしてだ。二人は家にあがりそのうえでパンケーキを食べる。

そしてそれから未久は部活までの間は夏休みの宿題をすることにした。

### 第三十五話 瞑想その十

「あれなのよね」

「あれとは？」

「学校の宿題だけじゃないからね」

「塾のもか」

「そうそう、それぞれ」

パンケーキをフォークとナイフで食べながら兄に言うのである。

「塾もあるし。それに」

「それにか」

「学校のも塾のも両方予習復習をしないといけないし」

「そうだな。どちらもあるな」

「お勉強も大変なのよ」

言いながら頬を膨らませてみせる。

「夏休みだとかえってね」

「そこまで勉強しなくても生きてはいけるが」

「まあそうだけれどね。ただ」

「ただ、か」

「私八条大学医学部目指してるし」

「医学部か」

言うまでもなく牧村の通っているその大学である。八条大学は様々な学部がある。医学部もあるのである。

「あそこか」

「八条大学の中で一番レベル高いわよね」

「確かドイツの細菌学の権威や陸軍の軍医達がそのまま入った」

「陸軍なの」

「そうだ。医学部は陸軍だ」

八条大学医学部の特徴である。

「それに」

「それに？」

「工学部は海軍だ」

「じゃあ医学部と工学部は仲悪いの？」

「流石に今はそれはない」

「それはないと否定する。」

「今ではどちらもそれぞれ陸上自衛隊と海上自衛隊になった」

「じゃあ数学部は航空自衛隊とか？」

「その通りだ」

未久の言葉は見事に的中した。

「よくわかったな」

「自衛隊ねえ」

「強いぞ」

「けれどゴジラには負けるじゃない」

未久はさりげなく言っではならないことを言った。

「それも見事なまでに」

「大丈夫だ、それ以外にはそこそこ強い」

「動いてくれるの？」

「甚だ疑問だ」

自衛隊はそもそもまともに動けるかという時点で疑問であったりする。これについても色々言われているが改善の兆しはない。

「果たしてな」

「やっぱりまずいんじゃない」

「だがいざという時は頼りになる」

牧村は苦しかった。妹に対して分が悪い。

「いてくれるだけでも頼りになる」

「まあそうよね。けれど八条大学って自衛隊と関係深いのね」

「出身者は結構いる」

「そうなの。まあお兄ちゃんも自衛隊には向かないでしょうね」

「それは何故だ」

「だって。個人主義だし」

指摘するポイントはそこだった。

「団体で何かするのは合わないじゃない」

「そうだな。それはな」

「無愛想だけれどコーヒーとか紅茶を淹れるのは上手いし」

そしてこうした話になった。

「それにね」

「それにか」

「お菓子作るの上手だしお皿も奇麗に手早く洗えるし」

「つまり喫茶店か」

「やっぱりそれね。で、マジック」

「そこか」

「そこしかないじゃない」

もう決まっているかの様な口調だった。

第三十五話 瞑想その十一

「そうでしょ？やっぱり」

「何故そうなる」

「いいじゃない。若奈さんいい人だし」

「それはそうだがな」

「あんないい人いないわよ」

「こつまで言うのだった。」

「顔も綺麗だし」

「顔もか」

「そうじゃない。もうアイドルになれる位」

未久の言葉は本気である。

「それもトップアイドルにね」

「そうだな。それはなれるな」

「そうよねってお兄ちゃんも言ったわね、今」

「言ったがどうした？」

「開き直ったし。まあとにかくお兄ちゃんもそう言うんだったら」

それだけというのである。

「決まりね。若奈さんと一緒になってね」

「また勝手に話を決めてくれるな」

「妹さん達とも仲良くなれてるし」

「あら、未久も隅に置けないわね」

母親がここで娘の言葉に笑ってきた。

「そうだったの」

「そうなのよ。お母さんもマジックには行くわね」

「ええ、よくね」

しかも母もであった。

「行くわ。将来の娘に会いにね」

「いい人でしょ、若奈さんって」

「いい娘ね。ただ」

「ただ？」

「来期と若奈ちゃんが一緒になったら」

母も勝手にこんなことを言う。しかもである。既に言葉はちゃん付けである。牧村も未久もそれには気付いている。そのうえで先に言ったのはだ。

「あつ、お母さん今」

「ええ、言ったわよ」

しかもわかつていたのだった。

「若奈ちゃんってね」

「何時の間にそんなに仲良くなってたの？」

「だってあの娘誰にでも優しいし親しげでしょ」

「そうなのよね。そこがまたいいところで」

「だからよ。いい娘だからね」

にこりとしての言葉だった。

「こうして自然にね」

「仲良くなったのね」

「そういうこと。今もね」

「成程ね」

「それでだけれど」

ちゃん付けの話から戻してきた。

「若し来期が若奈ちゃんと一緒になったら」

「それね」

「それよ。若奈ちゃんはあるお店の跡取り娘よね」

「三人姉妹の長女さんだからね」

それはもう決まっていた。既にである。

「それはもうね」

「だったら来期が婿入りするのね」

「そうよね。けれどお兄ちゃん長男だし」

「どうなるのかしら」



「それじゃあ私がお嬢さん取るの？」

未久がこう話す。

「それなら」

「そうよね。なるわよね」

「お嬢さんね。私も」

「結婚するけれど来期はあちらの家に入って未久は家に残って？」

こう考えていく。

「そうなるわよね」

「そうそう、それはね」

また話す娘だった。

「なっっていくわよね」

「そうよね」

「話が何時の間にか進んでいるな」

一人蚊帳の外になっていたその長男の言葉だ。

「何時の間いだ」

「ああ、お兄ちゃん」

最初に気付いたのは妹だった。

「いたの」

「いたが」

こう返す。

第三十五話 瞑想その十二

「二人で実に勝手に言ってくれな」

「そう？もう決まってることだし」

「半分以上ね」

「半分以上か」

「お母さんあそこのマスターとも奥さんとも仲良くなってるし」

「何時の間にだ」

「この前からよ」

息子にも笑って返す。

「そつなれたのよ」

「本当に何時の間にだ」

「お母さんを甘く見ないの」

にこりと笑っての言葉だった。

「そついうことの抜かりはないわ」

「抜かりなしか」

「そつ、抜かりなしよ」

また言うのであった。

「さて、大学卒業したらすぐにね」

「お兄ちゃん永久就職ね」

就職まで決まっていた。

「よかつたわね」

「就職もか」

「だって。喫茶店のマスターじゃない」

妹は能天気にも兄に話す。

「それそのものじゃない。マジックのマスターよ」

「勝手に決めてくれるものだな」

「だから決まってるから」

強引にそつだと返す未久だった。しかも母に対しても言う。

「ねえ、お母さん」

「そうよね」

しかも母もにこりとして返す。

「来期は無愛想で客商売には向かないけれど」

「それがわかっていてもか」

「そうよ。それでもよ」

さらに話すのだった。

「お茶やコーヒーを淹れるのは美味しいしお菓子だって上手だし」

「それでか」

「お客さんの相手は若奈ちゃんがいるし」

完全にそう決めつけていた。

「だから安心よね。あの笑顔は無敵だから」

「百億ドルの微笑よね」

「その通りよね」

妹と二人でそこまで言う。

「まあ今はお菓子の腕を磨いておきなさい」

「そのまま作っていればいいから」

「お菓子はか」

「そうそう、そのままね」

「作っていればもっと美味しくなるし」

二人で息子、そして兄に話す。

「そういうことだから」

「頑張つてね」

「話は聞いた」

一応こう返す彼だった。

「しかしだ」

「話はしたからね」

「もう決まってるからね」

無理にでもそういうことにする二人だった。そんな話をしながらパンケーキを食べる。そのうえでそれを食べ終えてそれからだった。

牧村は家を出てだ。そうしてサイドカーに乗り神戸に戻った。祖母がその彼を出迎えることになったが孫を驚いた顔で出迎えたのだ。つた。

そしてだ。こう言ってきた。

「あんれまあ」

「何かあったのか」

「もう戻って来たのかい」

こう言って驚くのだった。

「もうなのかい」

「それでか」

「そうだよ。まだお昼にもなってないよ」

「サイドカーを飛ばしてきた」

「それでも随分と早いねえ」

孫の話の聞いてもこう言っただった。

第三十五話 瞑想その十三

「いや、全く」

「そこまで早いか」

「早いのはいいけれど交通安全だからね」

「ここでは母と同じ言葉だ。尚その母はこの祖母の娘である。

それは気をつけておいてくれよ」

「お婆ちゃんも同じことを言っな」

「同じことって?」

「お袋とだ。同じことを言っな」

「あはは、それは当たり前だよ」

祖母は孫の言葉を受けて今度は笑顔になった。そうしてそのうえ  
で言っのである。随分と明るい感じの祖母だ。謹厳な祖父とは正反  
対だ。

「だって親娘なんだよ」

「だからか」

「だからだよ。当たり前じゃないかい?」

その笑顔でこっ言っのだった。

「それであんたは」

「お婆ちゃんの孫か」

「お爺ちゃんの方に似ているけれどね。ただ未久はね」

もう一人の孫のことも話すのだった。

「私達に似たね」

「そうだな。それはな」

「小柄でしかも運動神経がよくて」

そこから話すのだった。

「それに可愛いからね」

「顔もか」

「あの可愛さがいんだよ」

そしてこうも言うのであった。

「本当にね。そっくりだよ」

「あいつはお婆ちゃんの血か」

「そうだよ、あんたはお爺ちゃんとあとは」

「あとは」

「あの人の血だね」

「親父だな」

それはすぐにわかった。

「親父の血だな」

「そうだよ。やっぱり男の子だね」

「そうか。俺はお爺ちゃんと親父の血か」

「間違いないね。まあそれがいいんだよ」

「いいのか」

「親がはつきりしているのはいいことだよ」

こう孫に話すのである。

「少なくとも誰かはつきりしないよりはずっといいじゃないか」

「それもそうだな」

「まあそれでも」

ここで祖母のその口調が変わってきた。

「何だね」

「どうした？」

「そっくりだね」

「そっくりか」

「あんたとお爺ちゃんはそっくりだよ」

こう温かい声で言うのだ。

「本当にね」

「そんなにか」

「無口っていうか無愛想で」

「無愛想なのは自覚している」

実際にそれをわかっている彼だった。

「それはだ」  
「そうなのかい」  
「しかし。似ているか」  
「似てるよ、しかも一つのものを見るしね」  
「そうしたところも似ていると話す祖母だった。」  
「本当にね。まあいいとおもうよ」  
「いいか」  
「そうだよ。じゃあお昼にするかい」  
「そして今度は昼食の話をしてきた。」  
「お魚だけどいいかい？」  
「魚は好きだ」  
「いいことだよ。魚が好きなのはね」  
「身体にいいからだな」  
「そうだよ。魚は身体にいいんだよ」  
「また笑顔になって話す祖母だった。」  
「だからね。食べようかね」  
「それで何だ」  
「鰯だよ」  
「祖母が最初に話に出したのはそれだった。」  
「それとキスだよ」  
「鰯にキスというと」  
「天麩羅だから。お店で買ってきたやつだよ」  
「そうか、しかも天麩羅か」  
「しかもっていうといいんだね」  
「いい。それではだ」  
「あとは朝のお味噌汁にもやしのお浸しに」  
「祖母の言葉が続く。」

### 第三十五話 瞑想その十四

「それに梅干と納豆だよ」

「納豆も食べるのか」

「おかしいかい？納豆嫌いかい？」

「いや、好きだ」

すぐに返答を返した。

「むしろ大好きだ。他のものと同じだ」

「それならいいね」

「大阪でも納豆を食べるか」

「最近じゃ結構食べるようになったよ。時代は変わったからね」

祖母は笑っている。納豆も好きであるらしい。話からそれがわかる。

「だからね」

「納豆はいい食べ物だ」

「美味しいし身体にもいいしね」

「家でもよく食べる」

「いいことだよ。あの娘に納豆を食べさせたのは私だし」

「お袋にか」

「そうだよ。私なんだよ」

笑顔のままである。そのうえで孫への言葉だった。

「あの人にもね。何とか食べさせてね」

「お爺ちゃんにもか」

「いや、あの人は生粋の大阪人だから。最初はもう見ただけで嫌がって」

関西では昔は納豆は食べなかった。それこそ食べる人間はおろか納豆自体が忌み嫌われたものだ。食べる人間は異端視された程だ。

「凄かったからね」

「それを食べさせたのか」



「お婆ちゃんの家は大阪だけれど食べてたからね」

「その時は珍しい家だったのか」

「物凄くね。珍しい家だったんだよ」

「そうだったと話すのである。」

「本当にね」

「そうだったのか」

「そうだよ。まあそれでも食べてもらって」

「そうしてである。」

「今に至るんだよ。そうかい、納豆は好きなんだね」

「そのままかき混ぜて食べる」

「牧村は食べ方についても話した。」

「白い御飯にかけてだ」

「その食べ方がいいね。じゃあ今から」

「食べるか」

「たっぷり食べるんだよ。遠慮はいらないからね」

「済まない」

「御礼なんていいよ。じゃあ皆で食べよう、お爺ちゃんも呼んでね」

「こうして三人で食べる。そして食べてからトレーニングに入った。」

「いつも通りランニングに筋力トレーニング、それとフェシングとテ

「ニスの練習をした。それが終わり夕食の前にはだ。道場に入り座禅

を組む。」

「それが終わり目を開けるとだ。そこには祖父がいた。彼は自分の

孫に対して静かに言ってきた。

「昨日よりも統一されてきているな」

「心がだな」

「左様、よいことだ」

「それをいいというのであった。」

「まことにな。よいことだ」

「俺もそう思う」

「心を統一し迷いを払い」

老人の言葉は続く。

「そうして全てを払うのだ」

「そこに俺の辿るべき道があるか」

「あるな」

それは間違いないというのだ。

「少なくともここに来る前までならばだ」

「そのままだったなら」

「御前は取り込まれていた」

こつ孫に告げた。

「御前が進むべきでない世界の中にだ」

「そこにか」

「そうなっていた」

「危ないところだったか」

「今もだ」

また言ってきた。

「今もそうなる恐れがある」

「危ないか」

「座禅だ」

具体的な言葉だった。

「座禅を組みそしてだ」

「己の中に築いていくか」

「そうするのだ。御前は今まで身体を鍛錬してきたな」

「その通りだ」

「これからは心もだ」

それもだというのである。

### 第三十五話 瞑想その十五

「それも鍛えるのだ。いいな」

「座禅によつてか」

「座禅はただ座るだけではない」

言葉にある意味が深いものになった。

「全ての中にある深いものを感じ取りその中に入るのだ」

「宇宙か」

「そして人だ」

「人もか」

「人は宇宙でもある」

祖父は孫に話を続ける。

「ありとあらゆるものは同じだ。わかったな」

「わかった。では宇宙の中に入ろう」

彼は祖父の言葉に静かに頷いた。

「俺が俺である為に」

「そして人である為にだ」

「そうだな。人である為にも」

牧村は祖父の言葉に応えた。そしてまた座禅に入った。

祖父は彼の前から去る。彼が再び目を開けた時いるのは。

彼がいた。彼は牧村の前に立っていた。そして彼だけではなかった。

「禅か」

「それだよね」

死神と目玉だ。死神は黒いジーンズと上着だ。その服で彼の前にいたのである。二人は今道場で牧村の前に立っていた。

白い床にその黒い服が絶妙のコントラストを為している。死神はそのコントラストの中で彼に応えてだ。言葉を再び出してきた。

「いいことだな」

「禅を知っているのか」

「知っている。東洋の精神修養の一つだな」  
「そうだ」

その通りだと返す。立ち上がりながら。

対峙する形になった。しかし闘うことはない。見合った形になり  
そのうえで再び話をするのだった。そのうえでのやり取りであった。

「その通りだ」

「そうだな。だが」

「だが？」

「貴様にとつてそれはいいことだ」

こつ彼に言うのだった。

「髑髏天使である為にはな」

「いいか」

「目が黒くなつてきている」

「目がか」

「そうだ、目が黒くなつてきている」

また言ってきた。

「実際にだ」

「赤ではなくか」

「目が黒い。そしてだ」

「そしてか」

「人であり続けるならば私も貴様と闘わなくて済む」  
こつも言うのであった。

「やはりいいことだ」

「俺は魔物と闘う」

牧村も彼と同じ言葉で返す。

「だが」

「わかるな」

「貴様と闘う必要はない」

「その通りだ。私は死神だ」

また言う彼だった。

「死すべき者の命を刈るだけだ」

「それが死神か」

「そうだ、今は魔物がそれだ」

こう話した。

「貴様が魔神となればわからないがな」

「それか魔物か、か」

「智天使の力は絶大だ」

天使の力の話もしてきた。

「操れなければその時はだ」

「力に飲み込まれそうしてか」

「魔物になる」

また言った。

「そういうことだ」

「わかった。俺は人だ」

「そして髑髏天使だな」

「このままでいる」

それをまた話した。

「何があってもだ」

「その通りだ。それではだ」

「去るのか」

「今は魔神達も仕掛けては来ない。だからだ」

「去るのか」

「大阪という街を歩く」

そうするというのだ。

第三十五話 瞑想その十六

「今はだ」

「そうだね。いいと思うよ」

その死神に目玉が言ってきた。

「楽しそうな街だしね」

「そうだな。しかし」

「しかし？」

「私も変わった」

自分でこう言う死神だった。

「随分とな」

「そうだね、変わったね」

目玉もそれを認めた。死神のその言葉をだ。

「昔はもつと無愛想で楽しみに興味がない性格だったけれどね」

「そうだったのか」

「無愛想なのは変わらないけれどね」

それは変わらない。しかしだというのだ。

「それでも。楽しむようになったね」

「人の世界は思っていたよりいいものだ」

こう言う死神だった。

「特に今の時代はな」

「そうそう、楽しいからね」

目玉の言葉も笑っているものだった。

「じゃあ行こうか、楽しい場所にね」

「そうするでしょうか。では髑髏天使よ」

「去るか」

「今はそうさせてもらう」

「それじゃあね」

目玉は牧村に対して言葉をかけた。

「また会おうね」

「そうだな。またな」

死神も最後の挨拶をしてだ。別れた。後に残った牧村はすぐに道場を後にした。そして自分の部屋に帰るとであった。

携帯を見る。黒と銀のサイドカーと同じカラーリングの携帯である。その塗装も同じだった。黒地に銀のラインが入られているものだ。

それを見ると留守電が入っていた。それを取り連絡するとだった。

「おお、帰ったか」

「博士か」

「そうじゃ、わしじゃ」

声が笑っている。紛れもなく博士のものだった。

「わしじゃがな」

「何かあったのか？」

「大阪はどうかのう」

まずはこのことを尋ねてきたのだった。

「そっちはじゃ。どうじゃ？」

「いい街だ」

まずはこう答えた彼だった。

「楽しみの多い街だな」

「そうじゃろうな。ではわしもじゃ」

「博士が？来るのか」

「そうじゃ。行かせてもらおう」

実際にこう言ってきた博士だった。そして電話の向こうにいるのは彼等だけではなかった。あの面々の声もしてきたのであった。

「僕達も行くよ」

「大阪に行くのも久し振りだよな」

「確かにね」

「今から楽しみだよ」

妖怪達の声もしてきた。彼等もいるのだった。

「牧村さん、そういうことだから」

「皆で行くからね」

「待っていてね」

「目立たないか」

牧村が言うのはこのことだけだった。

「妖怪が一緒だとだ」

「ああ、それは気にすることはない」

博士はそれはいいというのであった。

「何の心配もいらんぞ」

「不要か」

「そうじゃ。不要じゃ」

博士の言葉はそのままだった。笑っているものだった。

「何の心配もいらん」

「だといいがな」

「うむ、心配無用」

博士はまた言ってきた。

「さて、それではじゃ」

「待っている」

牧村は深く突っ込まなかった。しかし言わずにはいられなかった。

「ここまで無事に来てくれればそれでいい」

「それじゃあ今から」

「行こうか」68

「今から楽しみだよ」

「本当に大丈夫ならいいが」

牧村の心配は尽きない。

「果たしてな」

「わしがおるからな」

博士がここでまた楽しそうに言ってきた。



### 第三十五話 瞑想その十七

「大船に乗ったつもりで待っていてくれ」

「不安だが」

「それでも安心しておいでくれ」

やり取りがちぐはぐではあった。しかしそれでも言葉は出された。

「妖怪達が今まで見つかったことはない」

「ならいいがな」

「そういうことだからね」

「大阪のことも充分知ってるしさ」

「もう遊び場だよ」

「遊び場か」

妖怪の一人の言葉に反応した。

「そうなのか」

「もう全然ね」

「それこそ隅から隅まで知ってるよ」

そこまでだというのである。

「そういうことだからね」

「安心していて」

「ならいいがな」

「それじゃあね。明日からね」

「また一緒だよ」

「明日からか」

「うむ、通うぞ」

博士がここでまた明るい声を出してきた。

「神戸から大阪までな。実は孫の一人が大阪にいるのじゃよ」

「お孫さんがか」

「孫娘じゃ。もう結婚しておっつな」

「その人の家に厄介になるのか」

「いやいや、神戸から大阪は日帰りで行ける」

これは事実である。神戸から大阪は実に近いのである。尚京都と大阪もわりかし近い。奈良とも近い。大阪の交通の便は実にいい。

「じゃからそれはせんがな」

「そうなのか」

「しかし顔は見せたいからな」

「それもわかった」

「では明日な」

こう話して今は電話が切れた。だがすぐにであった。

また電話がかかってきた。今度の相手は若奈だった。彼女は心配するような声で電話の向こうの牧村に対して言ってきたのであった。

「ねえ、大阪はどう？」

「大阪はか」

「食べ物合う？身体壊してない？」

「こう彼に問うのだった。」

「トレーニングしてる？ストレスは溜まってない？」

「どれも大丈夫だ」

「気遣う若奈にこう返した。」

「まず食べ物だが」

「ええ」

「美味しい」

「まずはそれから話したのである。」

「噂以上だ。どれを食べてもいける」

「そうなの」

「そして身体の調子もいい」

「次にはこのことを話した。」

「おかげでトレーニングも順調だ。それにストレスもだ」

「全部大丈夫なのね」

「全部だ。何の心配もない」

「そう、よかったわ」

そこまで聞いて安堵した声をあげる若奈だった。

「それを聞いて安心したわ」

「そうか」

「それじゃあね」

ここで若奈はまた言ってきた。

「私もそっちに行くから」

「大阪にか」

「行っていいわよね」

あらためて彼に問うてきた。

「私もそっちに」

「店はいいのか」

「お父さんもお母さんも許してくれたわ」

電話の向こうで微笑んでいるのがわかる。そうした言葉だった。

「ちゃんね」

「そうなのか」

「こっちに叔母さんのお店があつてそこに住み込んで働くってこと  
でね」

「それで決まったのか」

「そうなの。お店の名前はマジシャンっていうの」

店の名前も話すのだった。

「うちの姉妹店なのよ」

「そんな店もあつたのか」

「夏の間ずっとこっちについていいって」

若奈の声が弾んでいるのがわかった。

「有り難いわよね」

「そうだな。それではな」

「明日から大阪に行くから」

「トレーニングを見てくれるのか」

「ええ、そうよ」

その弾んでいる声での言葉だった。

「だから。楽しみにしておいてね」

「わかった。それではな」

「まだよ」

電話を切ろうとする牧村を止めてきた。

「一つ聞きたいことがあるけれど」

「何だ、それは」

「牧村君が今いる場所って何処？」

それを問うてきたのだ。

「そこって何処なの？」

「此花だ」

そこだと答えた。

「そこにいるが」

「そう、此花なの」

「そのマジシャンという店は何処にある」

「天王寺よ」

そこだと答えた若奈だった。

「JR天王寺駅の近くになるのよ」

「便利のいい場所だな」

「そうでしょ、とてもね」

若奈の声が笑っていた。明らかにだ。

「大阪の何処でもすぐに行ける場所なのよ」

「またかなりいい場所だな」

「大阪、楽しみにしているからね」

「わかった。それではな」

「明日からね」

こう話して電話を切った。牧村の周りは普段と変わらなくなってきていた。日常は彼が気付かないうちに静かに包んでいたのである。

2  
0  
1  
0  
·  
4  
·  
1  
4

## 第三十六話 日常その一

髑髏天使

第三十六話 日常

牧村は博士と会っていた。場所は中之島図書館だ。大阪市庁のすぐ隣にいるその図書館に入った。そのうえで話をしていた。

「ここにも何度か来たのう」

「そうなのか」

「文学の研究でじゃ」

「それでだというのだ。」

「織田作之助の研究でじゃ」

「織田作之助か」

「知っておるな」

「このことも話してきた。」

「あの作家のことは」

「この大阪で生まれ育った作家だったな、戦争中に主に活躍した」

「うむ、戦後すぐに亡くなった」

「博士はこのことも話した。」

「その作家じゃ」

「織田作之助のことも研究していたのか」

「わしはそつちの方も勉強しておるよ」

「またほつほつほと笑って言う博士あつた。」

「他にも芥川や太宰も研究しておる」

「そつした作家もか」

「そつじゃ。意外か？」

「法学博士ではなかったのか」

「牧村が問うのはこのことだった。」

「確か」

「あれ？医学博士じゃなかったっけ」

「工学じゃないの？」  
「哲学なんじゃ」  
「神学も持っていたような」  
「周りから妖怪達が出て来て言う。彼等も一緒だった。」  
「理学も持っていたよね」  
「他にもあつたんだ」  
「わしはありとあらゆる学問を研究しておるのじゃ」  
「その博士の言葉だ。」  
「だからじゃ。文学博士でもあるのじゃよ」  
「他の博士号も持っているんだ」  
「法学とか哲学も」  
「理系まで」  
「左様、伊達に長生きはしておらんよ」  
「今度は歳のことまで話に出した。」  
「それもじゃ」  
「うっん、やっぱり学問に生きてるんだね博士って」  
「そうだね」  
「皆それを見てまた話す。妖怪達がだ。」  
「けれど文学にも詳しくて」  
「この図書館にも来ていたんだ」  
「成程ね」  
「じゃからここはよく知っておる」  
「博士はまた言った。」  
「最近来ておらんかったがな」  
「そうなんだ」  
「それで今ここに来たんだね」  
「久し振りに」  
「左様。それでじゃが」  
「ここでまた話す博士だった。」  
「面白いことがわかったぞ」

「面白いことか」

「そうじゃ、わかつたのじゃよ」

今度は牧村に対して話していた。古風な、そしてかなり年代もの席に座ってそのうえで向かい合い話す二人だった。妖怪達はその周りにいる。近くに人が来ればさっと消える。隠れるのはかなり上手かった。

「髑髏天使のことじゃが」

「それで何がわかつた」

「今君は智天使じゃな」

「そうだ」

これはもう言うまでもないことだった。

「それはな」

「そうじゃ。それで智天使じゃが」

その話だった。そのものずばりであった。



第三十六話 日常その二

「智天使の力はかなりのものじゃな」

「制御するのが難しいまでにな」

「うむ、しかしそれは制御できる」

「できるか」

「心によってできるのじゃ」

「心か」

「左様、心じゃ」

それだというのだ。

「心によって制御できるのじゃ」

「心か」

「人として強い心を持つ」

また言う博士だった。

「それによってじゃ。制御できる」

「心でか」

「左様、それで心じゃが」

「心をか」

「心を鍛える」

博士の言葉が強くなった。

「そうするのじゃよ」

「そしてそれによってか」

「智天使の力の舵取りをするのじゃ」

具体的にはそういうことだった。心である。

「人の心でじゃ」

「ということだ」

牧村はその言葉を聞いて述べた。今の己のことをだ。

「俺は今」

「今とは？」

「座禅をしている」

「このことを話したのだった。」

「それはいいのだな」

「よい」

「いいのか」

「かなりのう。そうか、座禅か」

博士はその座禅についても話すのだった。

「あれをするとは。いいところに目がいったものじゃ」

「そこまでいいのか」

「座禅は心のものじゃ。そして」

「そして？」

「全てでもある」

博士はこうも言った。

「全てを見るものでもあるのじゃよ」

「宇宙のだな」

「左様、だからこそ昔より行われてきた」

「悟りか」

「悟りを得るのは流石に容易なことではない」

博士は悟りについても知っていた。やはり長きに渡って様々なことを学んできたわけではなかった。こうしたことも知っていたのである。

「だが。していただくだけでもじゃ」

「いいだな」

「よい。そうして全てを見てじゃ」

「それからか」

「君はその髑髏天使の力を制御するだけの力を身に着けるのじゃ」

「こう告げるのである。」

「よいな」

「そうさせてもらう。それならな」

「ただ。気をつけておくことじゃ」

「ここで博士は言った。

「座禅は確かにいいがじゃ」

「それでもか」

「それはあくまで正しい座禅をした場合じゃ」

「その場合というのである。あくまでだ。

「座禅と言っても色々じゃ。正しきものもあればそうではない場合がある」

「俺の座禅もそのことに気をつけるべきか」

「その通り。よく考えておくことじゃ」

博士はまた話した。

「よいな」

「わかった。それではお爺ちゃんの話をよく聞くことにする」

「あれ、お爺ちゃんいたんだ」

「牧村さんってお爺ちゃんいたんだ」

「そうだが」

牧村は周りの妖怪達に対して怪訝な目をしてそのうえで返したのだった。

「それがどうかしたのか」

「いや、意外だっと思ってね」

「そうだよね」

「本当にね」

こっ話すのであった。

「何か肉親の人とかいないっばいから」

「天涯孤独って感じるよね」

「どうしてもね」

「俺も人間だ」

しかし彼は言う。

「家族はいる」

「そっいえば妹さんいるって言ってたよね」

「ああ、何か前にね」

「言ってた言ってた」

「そうそう」

こう話していく妖怪達だった。

### 第三十六話 日常その三

「やっぱりこういう人かな」

「それだったら怖いけれど」

「どうなのかな」

「ああ、安心するといい」

博士がここで妖怪達に対して言った。

「牧村君の妹はじゃ」

「やっぱりこういう人ですか？」

「こつした無愛想な感じで」

「表情がないとか」

「全然別人じゃよ」

博士は妖怪達に対して真実を話した。

「もうな。顔も表情も何もかもが違うのじゃ」

「えっ、嘘」

「そんなに違うの」

「全然なの」

「左様、全然じゃ」

また言う博士だった。

「小柄で可愛い娘じゃよ」

「へえ、小さいんだ」

「しかも可愛いっていったら」

「美少女!？」

「そうなるよね」

「そうじゃな。美少女じゃな」

博士もその言葉に頷いた。その通りだといっているのである。

「まあ牧村君も顔はいいがな」

「顔もスタイルもいいけれどね」

「けれど無愛想だから」

「それがねえ」

「問題なのよね」

妖怪達の言葉には容赦がない。しかしそれは勝手知ったる相手だからであった。

「顔はよくてもね」

「愛想がいいって大事だからね」

「愛想がいいのは七難隠す」

「そうそう」

「俺がそこまで愛想がないのか」

「言われてそれで言った彼だった。」

「そうだったのか」

「うん、ないよ」

「残念だけれどね」

「つていうか自覚していないの？」

「自覚はしていた」

「していない筈もないことだった。」

「だが」

「だが？」

「俺はそれで特に悪いと思わない」

「そう言うんだ」

「それでも」

「個性だ」

今度は単語を出してみせたのである。

「これは俺の個性だ」

「まあね。無愛想じゃない牧村さんってね」

「ちよつと考えられないし」

「確かに」

妖怪達もそれは言う。

「というか想像するのが困難っていうか」

「そんな牧村さんってどうかな」

「気持ち悪い？」

「にこにここと笑ったりしたらね」

「夢に出そう」

彼等もかなり言う。ある意味容赦がない。

「そうそう、しかもね」

「悪夢だよね」

「それ以外の何者でもないよね」

「いらっしやいませ、とか笑顔で言う牧村さんってね」

「有り得ないし」

「まあそうじゃな」

ここで博士も自分の周りで言う彼等の言葉に頷きはした。

「実際に想像するのがかなり難しいことじゃ」

「牧村さんは牧村さんでいいですよ」

ろく子もいた。その首をいつもの様に伸ばしての言葉である。

「それで。らしくですよ」

「らしくか」

「はい、らしくです」

伸びた首の先には知的な笑顔がある。身体は相変わらずスーツにズボンだ。この格好は今日も変わらない。ズボン派のままである。

### 第三十六話 日常その四

「らしくあればそれで」

「人間らしくか」

牧村は不意にこうも言った。

「そうしたことだな」

「そうじゃ、人間らしくじゃ」

博士は牧村の今の言葉に会心の顔で頷いた。

「そういうことじゃよ。禅じゃが」

「それか」

また禅の話にもなるのであった。

「あれは悟りに至る為に行うものじゃな」

「そう言われているな」

「悟りを得るのは何か」

博士はここから話した。

「何じゃと思う」

「人だからだな」

「そう、人だからじゃ」

まさにその通りだというのである。

「人じゃから悟りを得られるのじゃよ」

「そういうことか」

「妖怪でも悟りを得られるがじゃ。その心が人のものとなればじゃ」

「あれっ、そうした意味だと僕達も人間？」

「そうなるよね」

妖怪達は博士の今の言葉からこのことに気付いた。思わぬ事実だ。

「人間なのかな」

「違うんじゃないかな」

「いや、そういう意味では人間じゃよ」



そうである。妖怪達に対しても告げたのだった。

「御主達もな」

「そうだったんだ、人間だったんだ」

「僕達も」

「今までそんなこと全然思わなかったよ」

「人は心で人になるものじゃよ」

博士の今の言葉は深いものだった。それもかなりだ。

「しかし姿形が人であってもじゃ」

「心が魔物なら」

「それで魔物なんだね」

「左様、要は心じゃ」

また妖怪達の言葉に応えながら牧村に対して話していた。

「そういうことなのじゃよ」

「心ねえ」

「それなんだ」

「そういうことじゃ。君は人として戦うのじゃ」

「これからもだな」

「頼んだぞ。わしが言うのはこれじゃ」

牧村を見ながらの言葉だった。

「しかしよく覚えておいてくれ」

「わかった」

牧村は博士の今の言葉にこくりと頷いた。

「そうさせてもらおう」

「さて、話はこれで終わりじゃ」

「じゃあ博士、これからどうするの？」

「何処か行く？」

「大阪見物するの？」

「大阪城にでも行くかのう」

博士は周りの妖怪達の言葉に微笑みを浮かべて述べた。

「これからのう。行くとするか」

「大阪城、いいね」

「あそこは見るだけでもう雰囲気があるし」

「いいお城だしね」

「私秀吉さんに会ったことありますよ」

ろく子がさつきよりもその首を伸ばしながら言っていた。二十メートルは伸ばしているようであるがそれでも全く平気な様子である。

「小柄で。すばしい人でしたね」

「ああ、太閤さんね」

「猿だね、猿」

「またの名前を禿鼠」

織田信長が名付けた仇名である。これを言うのだった。

「そうともいったね」

「猿だけじゃなかったし」

「そうそう」

「秀吉は大阪の英雄じゃからな」

博士はここで手に一冊の本を出してきた。それはまさにその豊臣秀吉の本である。机の上に出してきてそのうえでまた話すのであった。

### 第三十六話 日常その五

「この街を作ったな」

「まあ元々は尾張の人だけれどね」

「信長さんと同じでね」

「それに言葉だってね」

「向こうの言葉だったし」

「そうだったな」

牧村もこのことは知っていた。妖怪達のその言葉に対して頷く。

「尾張の言葉丸出したったそうだな」

「今で言うあれだよな」

「名古屋弁ね」

「それね」

「名古屋の言葉は独特じゃからな」

ここでまた言った博士だった。

「あの言葉には少し馴染めんものもある」

「そうなんだ」

「博士つて名古屋苦手なんだ」

「苦手ではないが雰囲気が違うからのう」

だからだというのであった。

「名古屋の食べ物好きじゃかな」

「ああ、名古屋のはいいいよね」

「そうそう、あれはね」

「確かにね」

妖怪達は食べ物の話になるとさらに元気になる。いつも通りである。

「味噌の味が強くてね」

「海老も多いし」

「きし麺最高だよな」

「それについてうもね」

「ただ。あの言葉で中日の応援をするとじゃ  
博士の話は野球に関するものになってきた。」

「いささかのう」

「ああ、博士って阪神ファンだからね」

「もう球団設立以来だから古いよね」

「六十年？七十年だったっけ」

「そこまで古くないんじゃないの？」

妖怪達は野球にも詳しくかった。やはり長生きをしているだけはある。

「まあかなり古いチームなのは確かだけれどね」

「巨人の次だったっけ」

「中日にしても古いけれど」

「うむ、思えば中日にも随分と負けた」

阪神の長い歴史では多くのことがあった。中には暗黒時代もあったのだ。

「それこそ星の数だけだけのう」

「阪神ねえ。一時期凄く弱かったしね」

「確かにね」

そんな話もするのであった。

「もつね。常に負けていたからね」

「負けて負けて負けまくって」

「実に見事なまでにね」

所謂阪神暗黒時代である。その時の阪神の弱さは筆舌に尽くし難いものがあった。百敗ですら夢ではないとまで言われてきたのである。

「その時は凄かったね」

「けれど阪神応援止めなかったし」

「寿命が縮むんじゃないかって思ったけれど」

「それでも応援続けたし」

「阪神は別格のスポーツチームなのじゃよ」

その博士の言葉である。

「あそこはのう」

「そうそう、どんな勝ち方でも負け方でもね」

「絵になるからね」

「納得できるから」

妖怪達にしてもであった。どうやら阪神が好きなのようだ。言葉も表情も明るいものになってそのうえで阪神の話もするのだった。

「どんな見事な勝ち方でも無様な負け方でもね」

「絵になるから凄いやね」

「普通にね」

「それが阪神なのじゃよ」

博士の言葉は温かい。

「それこそがじゃ」

「勝っても負けてもなんだ」

「そつだからね」

「凄いチームだよ」

「それに対して巨人はどうじゃ」

阪神ファンらしく巨人は嫌いな博士であった。

### 第三十六話 日常その六

「勝って当然じゃと思いがつておる」

「ああいうの駄目」

「僕も」

「もう馬鹿にしか思えないから」

「本当にね」

妖怪達も巨人は嫌いであった。巨人を嫌うということは日本人としてのまず第一の義務であると言ってもいいが妖怪達もそれは忠実に守っていた。

「巨人には無様な負けがよく似合う」

「その通りだよ」

「負けてこそいいんだよ」

「御飯もお菓子も美味しくなるしね」

「巨人はそういうチームじゃよ」

巨人への言葉は冷たい博士であった。

「所詮はな」

「だよ、負けてもらわないと」

「勝ったら駄目なんだよ、巨人はね」

「もう一億年は最下位でいいし」

「全くだよ」

妖怪達も博士と同じであった。

「僕達関西の妖怪にとっては何」

「もう巨人大嫌いだからね」

「というか好きな奴いないから」

「全くだよ」

「牧村さんもだしね」

また牧村に話を振ってきたのだった。

「それは同じでよかったよ」

「俺はああいうチームは嫌いだ」

牧村もそれに応える。

「自分のことしか考えないチームはだ」

「うんうん、自分達だけが球界だと思ってるからね」

「全く何様だよ」

「本当にね」

「関西では巨人の悪口はどれだけ言ってもよいのじゃ」

博士も完全に一緒になっている。

「あと広島でも九州でも名古屋でもじゃ。横浜も東北も北海道もじゃ」

「全国だな」

「うむ、巨人は日本国民共通の敵じゃ」

何処までも言う博士だった。

「まさにそれじゃ」

「そうかも知れないな。巨人の試合は見ても面白くない」

「それ以上に放送がね」

「もう巨人ばかり褒めてね」

「殆ど何処かの国のプロパガンダだし」

そうしたことになってしまっているのである。

「全くねえ。あんな放送よくできるよ」

「いや、見られたものじゃないから」

「そうそう」

「関東は嫌いだ」

牧村は言った。

「巨人を褒める場所は好きにはなれない」

「牧村さんは正しいよ」

「関東は寒いし食べ物もまずいし」

「おまけにその食べ物が高い」

「全然駄目だから」

何故か関東について詳しい妖怪達だった。

そしてだ。ここで彼等はまた言うのであった。

「さて、それでだけれど」

「牧村さんってまだ強くなるんだよね」

「もう一つ上があったよね」

「うむ、あるぞ」

博士がその彼等に答えた。

「遂に最上級の階級じゃ」

「最上級なんだ」

「遂にそこまでなんだね」

「熾天使じゃ」

その階級が今話された。

「熾天使があるのじゃ」

「それが最上級の天使なんだ」

「九つの階級の最高になるんだね」

「ここに至れば魔神の相手もできるじゃろう」

「魔神か」

それを聞いた牧村の目の光が強くなった。



### 第三十六話 日常その七

「あの連中と遂にか」

「そうじゃ、戦えるようになる」

「それはいいことだな」

「これまで熾天使になった髑髏天使は一人しかおらん」

「一人か」

「文献に残っている者は一人しかおらん」

「そうだというのだ。」

「一人しかな」

「ではその一人がなった熾天使はどういったものだった」

「そのたった一人か」

「そうだ。どういった存在だった」

「それはまだ調べている最中じゃ」

これについてはまだ答えられないというのである。

「残念じゃがな」

「そうか、これからか」

「これからじゃよ。ただ」

「ただ？」

「本題じゃ」

言葉が変わってきた。

「今日の本題じゃ」

「これまでは本題ではなかったのか」

「うむ、その通りじゃ」

こう述べる博士だった。

「本題ではなかったのじゃ」

「そうだったのか」

「さて、それでじゃ」

ここまで話してまた言ってきた博士だった。

「よいかのう、本題じゃが」

「ああ。それで何だ」

「魔物達だけではないらしいのじゃ」

「こう言ってきたのである。」

「どうやらな」

「魔物達だけではない」

「そうじゃ。そうではないのじゃ」

「いぶかしむ牧村に対してさらに話す。」

「他にもおつたのじゃ」

「ではその他の存在とは何だ」

「牧村はそれを問うのであった。」

「妖怪ではないな」

「僕達がどうしたの？」

「何かあるのかな」

「さあ」

話を振られた彼等はいぶかしむばかりである。どうして自分達に話 came のか全く見当がつかない、そうした顔で言っていた。

「どうなのかな」

「話？僕達に」

「僕達になんだ」

「妖怪でもないのか」

「妖怪とは全く違う」

「博士もそれに応えて言う。」

「そしてさつきも言ったが魔物とも違う」

「魔物ともだな」

「そしてその違いじゃが」

「博士の言葉は続く。」

「魔物は邪悪ではないな」

「そうだな、確かにな」

「ただ戦いの中に生きておるだけじゃ」

「戦いを全てと捉えている」

「所謂修羅じゃ」

仏教の言葉だった。それも出してみせる博士だった。

「魔物は修羅なのじゃよ」

「修羅は悪ではないのか」

「これは難しい言葉じゃが三善道のうちの二つとなっており」

仏教の話が続く。博士は仏教にも通じているようである。

「修羅道もまたな」

「善か」

「諸説あるがそうじゃ。少なくとも餓鬼道や地獄道とは違うものじゃ」

「だから魔物は悪ではないか」

「それは君が一番感じておる筈じゃ」

また牧村に対して述べてみせたのである。

「何度も戦ってきた君がな」

「邪悪なものを感じたことはなかった」

「そうじゃな」

「闘かう気迫や闘争心は感じ取ったがな」

「しかしそれは純粹なものじゃったな」

博士はこのことも言った。

### 第三十六話 日常その八

「そうじゃな」

「その通りだ。しかしその存在はか」

「混沌と言つべきか」

出て来た言葉はこれだった。

「原始的な悪意、よからぬものを胎動させておるのじゃよ」

「よからぬもの？」

「うむ、闇の底から出て来る様なものと文献には書いてあった」

こう牧村に話す。

「そしてその最も重要な文献はじゃ」

「何だ、それは」

「闇の書という」

「闇の書!？」

「混沌の書ともいうのじゃがな」

この名前も出す博士だった。

「その書に出て来るのじゃ」

「闇の書か」

「この名前は知らんな」

「初耳だ」

そのことを素直に認めた牧村だった。

「そうした名前なのか」

「そうじゃ、その書にある名前ではな」

「ああ、何というのだ」

「妖魔だとある」

「妖魔か」

「おそらくこれは当て字じゃな」

博士はこう見ていた。

「表わす適当な言葉がなかったのじゃ」

「それがか」

「そうじゃ。なかったのじゃ」

「それで妖魔か」

「うむ、それは太古に出て来たという」

話はかなり遡るものだった。

「そう、古代エジプト文明が出来た頃かのう」

「その時か」

「その時に出て来たというのじゃよ」

こつ話すのであった。

「その時の髑髏天使と戦ったという」

「その時か」

「この時には魔物は出なかった。その髑髏天使は妖魔達と戦った」

「そうした髑髏天使もいたのか」

「その様じゃ。そしてじゃ」

博士の言葉は続く。

「どうやら。とりわけ力の強い髑髏天使でもあったらしい」

「とりわけだと？」

「そうじゃ。とりわけじゃ」

その話が続く。

「当然今の君よりも。そして」

「そしてか」

「魔神達を倒した髑髏天使よりもじゃ」

「どういった存在だ？」

牧村は話を聞いて珍しく言葉にいぶかしむものを入れていた。

「その髑髏天使は」

「申し訳ないがそれはまだわからん」

「そうか」

「しかしじゃ。妖魔はおる」

それは確かなのだというのだ。

「この時代に出て来るかどうかはわからんがな」

「それでもか」

「うむ、おる」

博士の言葉も強いものになった。

「それは間違いない」

「古代エジプトか」

「その時代の文献を今集めておる」

博士の動きは速かった。

「あのヒエログリフとかじゃよ」

「考古学か」

「それじゃがな」

「そこからわかるのか」

「わかると言えばわかる」

返答は今一つはつきりしないものだった。

「じゃが。難しいのう」

「解読がか」

「うむ、難しい」

このことを言うのだった。

### 第三十六話 日常その九

「どうも思ったよりもじゃ」

「ヒエログリフも知っているのではなかったのか」

「エジプトの象形文字の解読は慣れておるつもりじゃ」

博士はこのことも言った。

「何十年もやってきておるしな」

「それでもか」

「うむ、かなり昔のことを書いておるしのう」

博士はここで腕を組んで述べた。

「それにじゃ」

「それにか」

「書いておる内容もやたら難しいのじゃよ」

「そこまでなのか」

「じゃから少し待ってくれ」

こう牧村に放した。

「少しのう」

「わかった。ならそうさせてもらう」

「悪いのう。しかしじゃ」

「しかしか」

「髑髏天使はまだまだ謎が多いのう」

「こつも言う博士だった。」

「もうそろそろ終わりかと思つたのじゃがな」

「そういうわけにはいかなかったか」

「階級も九つだけではないのか」

博士はこのことも述べた。

「まだあるとはのう」

「それは俺もだ」

「思いも寄らなかつたのじゃな」

「九つだけだと思っていた」

「うむ、その上となるとじゃ」

「わからないな」

「じゃから少し待ってくれ。調べておく」

そしてこのことも話すのだった。

「妖魔のこともう」

「妖魔もか」

「何かさ、妖魔っていうとね」

「そうだよな」

「嫌な予感しない？」

「確かにね」

妖怪達もこの妖魔という名前には不吉なものを感じていた。それでこうそれぞれ言うのであった。

「これはかなりね」

「まずいなんてものじゃないだろ」

「正体がわからないんだし」

「だよねえ」

妖怪達の言葉もいつもと違っていた。

「だとするとどうかかな」

「敵を知り己を知ればだし」

「それに魔神だって」

魔神の話も出て来た。

「確か十二柱だったっけ」

「今十一柱だから」

「残りは一柱」

「それって誰？」

「うむ、そちらはもうすぐわかる」

博士は魔神についての返答はすぐであった。

「じゃから安心するのじゃ」

「そうなんだ。それはなんだ」



「だったらいいけれどね」

「よかったよかった」

妖怪達は博士の今の言葉を聞いてまずはほっとしたのだった。

「魔神と魔物も何とかしないとイケないし」

「戦って勝たないとね」

「そっちの問題もあるしね」

「いや、それはどうかのう」

だがここで博士が言ってきた。

「君達は妖魔に対して嫌なものを感じておるな」

「うん、そうだよ」

「それはね」

妖怪達はすぐに博士に対して答えた。

「もう本能的にね」

「それは感じているけれど」

「魔物達も同じかな」

「そうかも知れぬ」

こう答えるのだった。

「元は君達と同じじゃからな」

「だからだとすると」

「どうなるのかな」

「三つ巴になるの？」

「そう考えるのが一番妥当じゃがな」

また言う博士だった。

第三十六話 日常その十

「しかし果たしてそうなるかのう」

「まあ魔物は戦えればそれでいいしね」

「そうした相手だけれど」

「どうなるのかな」

「わからん。まあとにかくじゃ」

ここで話を変えてきたのだった。

「これから色々なことが起こってもじゃ」

「動じないってこと？」

「そういうことなんだね」

「そうじゃ。動揺は禁物じゃ」

牧村への言葉である。妖怪達から離れてであった。

「それはよいな」

「わかった。それでは今は」

「まずは人であり続けることじゃ」

話が戻った。

「それが最初じゃ」

「それが」

「うむ、よいな」

あらためて牧村に告げた。

「そういうことじゃよ」

「わかった。それではだ」

「それじゃあまた来るからね」

「また明日ね」

妖怪達は笑顔に戻って彼に言ってきた。

「今度は大阪城で会わない？」

「あそこでさ」

「そこでどうかな」

「大阪城か」

牧村は大阪城と聞いてふと眉を動かしたのだった。

「あそこか」

「あそこもいい場所だしね」

「だからね」

「こつも言う妖怪達だった。

「明日はそこでね」

「お弁当も用意しておくし」

「お菓子もね」

「用意がいいな」

「後じゃ」

博士もまた言ってきた。

「あの娘も来るぞ」

「未久か」

「いやいや、違う違う」

博士はその名前は笑って否定したのだった。それではないという。

「違うぞ。もう一人じゃ」

「もう一人というとか」

「そうだよ、若奈さんだよ」

「あの人だけれど」

妖怪達の言葉だ。何とこの名前を知っているのだった。

「今日にでも来るんだって」

「そつちにね」

「来るという話は聞いた覚えがある」

「それはあるのだった。

「だが」

「今日とは思わなかったんだ」

「そうだったんだ」

「何処に泊まる」

牧村はそのことを考えた。泊まる場所も大事だからだ。

「何処にだ、一体」

「それは知らないけれどね」

「本人に聞いてみたら？」

妖怪達の今度の返答は素っ気無いものだった。

「そういうことだからね」

「またね」

「ではまた明日じゃ」

博士も顔を崩して言うのだった。

「それではな」

「ああ、またな」

博士との話は終わった。牧村は祖父の屋敷に戻った。するともう

そこに彼女が待っていたのである。

「お帰りなさい」

「もう来たのか」

「あつ、携帯で連絡していたよね」

「そうだったか」

言われて思い出した。どうも色々なことを忘れてしまっている牧村だった。他のこと、髑髏天使のことばかり考えてた。それで忘れてしまっていたのだ。

「そういえばそうだったな」

「そうよ、それで来たのだけれど」

「ああ」

「ああ、帰ったね」

屋敷の方から祖母が出て来た。そのうえで孫に言ってきたのだ。

第三十六話 日常その十一

「来期もよかったね」

「よかった!？」

「そうだよ。こうしたいい娘を見つけてくるなんてね」

完全に若奈の側に立った言葉であった。

「いや、本当によかったよ」

「誤解しているな」

「誤解じゃないよ」

それはすぐに否定する祖母だった。

「絶対にね」

「いや、誤解だ」

牧村はこう返した。

「それはだ」

「いやいや、わかるから」

しかし祖母の方が上だった。伊達に長生きしているわけではなかった。

「本当によかったよ」

「それで何がいい」

「相手はね。いい娘に限るよ」

かなり具体的な言葉であった。

「それはね」

「だから誤解だ」

「あの」

その若奈も祖母に言ってきたのだった。顔が赤い。

「私達はまだ」

「あつ、そうなのかい」

「そうです。ですから」

何気に自爆しているがそれには気付かない若奈だった。

「そんなことは」

「そうだね。来期が大学を卒業してからだね」  
未久と同じく全てわかつているのだった。

「そういうことだね」

「話を終わらせたいが」

牧村は強引にこう言ってきた。

「いいか」

「そうそう、後は二人でゆっくりとね」

「それは違う」

牧村の声は少し怒ったものになっていた。

「それはだ」

「それじゃあね」

「じゃあ。ええと」

「はい、奥谷といます」

若奈は祖母に伝えて自分の名前を名乗ってきた。一礼しながらだ。

「奥谷若奈です」

「あら、いい名前ね」

祖母は若奈の名前を聞いてあらためて笑顔になって述べた。

「若奈さんね」

「はい」

「来期のこと宜しくね」

そしてこれも告げたのだった。

「この子のことね」

「牧村君のことですか」

「無愛想でつつけんどんな子だけれどね」

それでもだというのだ。

「悪い子じゃないから。宜しくね」

「有り難うございます」

今の有り難うという言葉の意味はだ。だが牧村はそれには気付かなかった。

「それでは」

「そういうことだね」

「全く」

牧村は気付かないままだった。そうして祖母は屋敷の奥に入った。若奈は彼と二人になるとだった。すぐにこう言ってきたのである。

「それだけけれど」

「それでか」

「ええ。喫茶店に行かない？」

これが彼女の言葉だった。

「今からね」

「喫茶店か」

「叔母さんがやっている店だけれど」

「そこにか」

「そのコーヒー美味しいから」

だからだというのである。

「一緒に飲みましょう」

「わかった。今からな」

「行きましょう」

「ああ」

こうして二人でその喫茶店に入った。そこは綺麗な、マジックとよく似た内装の店だった。牧村はその店の中を見てもずはこう言ったのだった。

第三十六話 日常その十二

「似ているな」

「マジックに似てるでしょ」

「ああ。親戚だからか」

「そうなの。お母さんの妹さんがやってるお店なの。御主人、叔父さんと一緒にやっていて」

「それでか」

若奈の話から事情はわかったのだった。

「こつした内装になってるのか」

「そうよ。味は違うけれど」

「味はか」

「だって。牧村君には味のことも知ってもらいたいからね」

こんな話もするのだった。

「だからと思つて」

「味か」

「この店の味も確かめてみて」

「あつ、若奈ちゃんじゃない」

カウンターから少し年配の女の声がしてきた。見れば若奈に実によく似た小柄な中年の女がいた。彼女が声をかけてきたのである。

「こつちに来たの」

「うん、叔母ちゃん」

若奈は笑顔で彼女に応える。それと共に叔母ちゃんと呼んでいた。

「そうなの」

「そう、来てくれたのね」

「コーヒー貰えるかな」

その笑顔で彼女に言うのだった。

「二杯ね。それと」

「スイーツはどうするの？」



「ケーキ頂戴」

甘いものはそれだというのである。

「さくらんぼのケーキね。叔母ちゃんが得意なあれね」

「わかったよ。それじゃあね」

「それで御願いな」

また言う若奈だった。

「二つずつね」

「わかったよ。それにしても」

その若奈によく似た叔母はこれまたよく似た笑顔で牧村を見てきた。そうしてそのうえでにこりと笑ってこう言ってみせたのである。

「うちの人によく似てるね」

「叔父ちゃんに？」

「そうよ、あの人の若い頃によく似てるね」

「こう言ったのである。」

「とてもね」

「そうかしら」

「そうよ。格好よくてね」

牧村に対するだけでなく自分の夫に対しても言った言葉だった。

「とてもいい感じね」

「そうでしょ。背も高いし」

「若奈ちゃん小さいから余計に目立つね」

「小さいのは叔母ちゃんだって同じじゃない」

今の叔母の言葉には少しむくれた顔になる若奈だった。見れば背も同じ位だ。そうしたところまで実によく似ている二人である。

「それは言わない約束でしょ」

「あはは、そうだったね」

「そうだったねじゃなくてそうよ」

また言葉を返す若奈だった。

「とにかく。カウンターいいかしら」

「ええ、いいわよ」

叔母も笑顔で返した。

「それじゃあ」

「牧村君、座ろう」

若奈は牧村に対しても声をかけた。

「それじゃあね」

「そうだな。それではな」

「コーヒーでいいわよね」

あらためて彼に問うた。

「コーヒーで」

「いい」

「紅茶もあるけれどね」

「うちのお店は紅茶もいいわよ」

叔母も笑いながらまた話してきた。

第三十六話 日常その十三

「何だつて美味しいけれどね」

「それは確かだけれど叔母さんはコーヒーが一番上手なのよ」

若奈はカウンターに座った。牧村もその横に座った。そうしての話になっていた。

「それにお菓子もね」

「そうなのか」

「叔父さんも上手なのよ」

今はいないその叔父の話もするのだった。

「叔父さんはどちらかという和红茶なの」

「紅茶か」

「そうよ、紅茶よ」

また話す若奈だった。

「叔父さんはね」

「お菓子か」

「ええ、叔父さんお菓子も得意なのよ」

つまりどちらもそれはいけるといっているのである。

「ただ、叔父さんのお菓子はね」

「ケーキか？」

「ケーキよりアイスクリームの方が得意なの」

「アイスクリームか」

「あっ、そういえば」

若奈は牧村の話を聞いてだった。そうしてそのうえで言うのであった。

「牧村君ってアイスクリームも好きだったわよね」

「好きだ」

「やっぱりね。牧村君って甘いもの好きだし」

それはよくわかる若奈だった。

「それもかなりだからね」  
「そういえばアイスクリームでだ」  
「何？」  
「最近豆腐のアイスクリームもあったな」  
「このアイスクリームの話を出したのだ」  
「そうだったな」  
「ええ、最近あるわね」  
若奈も彼の言葉に頷いた。  
「豆乳で作るのよね」  
「そうだったのか」  
「実は今新しいお菓子考えてるのよ」  
若奈の目の色が少し変わった。考えるものになった。  
「お父さんもお母さんもね」  
「その中にか」  
「そうなの、豆乳を使ったお菓子も考えの中にあって」  
「美味しいのか、それで」  
「美味しいわよ」  
叔母がここで二人に対して言ってきた。  
「もうかなりね」  
「えっ、叔母さん知ってるの」  
「勿論知ってるよ」  
笑顔で二人に答えてきた。  
「だってうちにもあるしね」  
「えっ、それ本当!？」  
それを聞いてであった。若奈は思わず声をあげたのである。  
「このお店って……あっ」  
「あるわね」  
「ええ、確かに」  
若奈は今メニューを開いていた。実際にはつきりと載っていた。  
「あるわね」

「そうでしょ。美味しいわよ」  
「ううん、けれどもう頼んだし」  
「さくらんぼのケーキだ。それを変更するつもりはなかったのだ。」  
「それじゃあどうしようかしら」  
「追加メニュー頼む？」  
「それもいいけれど」  
「難しい顔で答える若奈だった。」  
「ただ」  
「ただ？」  
「最近ちよつと食べ過ぎて」  
「若奈は顔だけでなくその声もそうさせていた。」  
「それでね」  
「太るの気にしてるの」  
「そうなの」  
「ここで今度は困った顔になる若奈だった。」  
「実はね」  
「ああ、それね」  
「甘いものってそれがね」  
「太る、それであつた。」  
「それが気になって」  
「それじゃあまた明日ね」  
「ええ、そうさせてもらうわ」  
若奈は叔母の提案に苦笑いと共に頷いた。

### 第三十六話 日常その十四

「明日という日があるしね」

「そういうことでね」

「牧村君はどうするの？」

あらためて彼に顔を向けて問うた。

「それだけでけれど」

「そうだな。俺も明日にする」

「そうなの」

「この店に泊り込むのだな」

「アルバイトも兼ねてね」

アルバイトもあるのだというのだ。

「それもあつて。それと」

「それとか」

「修行の意味もあるのよ」

それもだというのだ。

「私のね。他の店のことも知っておくといいつてことで」

「しかしこの店は」

「殆ど同じだけれどね」

それは笑って話す若奈だった。彼女もそれはわかっていた。

「それでもね」

「違うことはあるのか」

「それを見る為もあつてね」

また話すのであつた。

「今年の夏はこのお店に入るの」

「家には帰らないのか」

「この夏はね」

帰らないというのであつた。

「泊り込むのよ」

「そうか」

「だからずつと一緒だからね」

今度はにこりと笑ってだった。牧村に対して言ってみせたのである。

「これからもね」

「この夏はか」

「夏だけじゃなくてもいいわよ」

こつとも言ってみせたのだった。

「夏だけじゃなくてもね」

「秋も冬もか」

「それからもよ」

話をさらに進めてみせてきた。

「ずつとね。私はいいから」

「あら、若奈ちゃんも大胆ね」

叔母が笑っていた。そのうえでコーヒーとさくらんぼのケーキを出してきた。それをだ。

「若奈ちゃんはこれもバイト代に入ってるからね」

「有り難う、叔母ちゃん」

「そつちの男前は。まあいいわ」

その若奈によく似た顔を笑顔にしてだ。そのうえでの言葉だった。

「あんたは半額よ」

「いや、金は持っている」

「それでもいいのよ」

牧村に対して笑ってまた話してみせてきた。

「だって。若奈ちゃんの相手なんだよ。サービスしないとね」

「相手ってそんな」

言っておきながら頬を赤らめさせる若奈だった。

「牧村君は。その」

「いいからいいから。じゃあその色男」

「牧村だ」

「ここで名乗った彼だった。」

「よかつたら名前を呼んでくれ」

「わかったよ。じゃあ牧村さんだね」

「ああ」

「あなたは特別に半額だよ」

笑つての言葉であり続けている。

「それか定額で二倍だからね」

「そうか」

「どっちがいいかしら」

「どっちでもいいが」

「そうだね。あんた背が高いしね」

長身でしかも均整がとれた筋肉質の身体である。

「二倍にしようか」

「それでいいと思うわ」

若奈もそれに賛成した。

「それでね」

「そうだよ。じゃあコーヒーもう一杯と。それと」

ケーキはもう出してきた。そのさくらんぼのケーキをだ。

「はい、これね」

「悪いな」

「だから若奈ちゃんの相手だからね」

これが全てだった。この店での彼はあくまで若奈の相手である。

若奈が主体であった。

「いいのよ」

「有り難う」

「牧村は静かに礼を述べた。」



第三十六話 日常その十五

「では有り難く頂く」

「ただし巨人ファンだったら定額になるからね」

「ああ、それは安心して」

また若奈が自分の叔母に対して話す。

「牧村君巨人は嫌いだから」

「いいねえ、気に入ったわ」

叔母もアンチ巨人と聞いてさらに機嫌をよくさせた。

「阪神ファンじゃなくてもアンチ巨人ならそれでいいわ」

「このお店巨人ファンお断りだしね」

「巨人の帽子とか法被着て入ったら塩かけて追い出すわよ」

本当にこう言う叔母だった。

「何があってもね」

「うちのお店はそこまではしないけれど」

「けれどあんたのお父さんもお母さんも巨人嫌いだしね」

「ええ、それはね」

若奈もよく知っていることだった。

「私だってそうだし」

「けれどそこまではしないんだね」

「お店の常連さんは巨人ファンの人いないけれど」

「うちにもだよ。いないよ」

「そうよね。大阪だしね」

「大阪で巨人ファンに人権はないよ」

事実である。尚これは関西ほぼ全域である。

「けれどあんたがアンチ巨人で本当によかったよ」

「代々一家全員アンチ巨人だ」

また言う牧村だった。

「そして阪神も嫌いじゃない」

「筋はいいわね」

叔母は彼の言葉を満足そうに聞いている。

「巨人が嫌いってなるとね」

「関西人は殆どそうじゃないのかしら」

若奈は少し冷めていた。

「やっぱり」

「そう、だからいいのよ」

また言う叔母であった。

「関西人らしくてね」

「成程ね」

「しかもよ」

ここでまた言う叔母であった。

「若奈ちゃん、あんたのお店は神戸じゃない」

「ええ」

「八条町だから余計にね」

「八条町も阪神ファン多いのよね」

「そうよね。叔母さんも一回八条町に行かないとね」

こんなことも言ってきたのだった。

「教会にも行かないとね」

「教会？」

「八条分教会よ」

そこだというのだ。

「そこにね」

「ああ、千里ちゃんのところなの」

「そう、そこにね」

行くというのである。

「そこに行かないとね」

「今千里ちゃんいないけれど」

「知ってるわよ」

若奈の言葉ににこりと笑って返してきた。

「それもちゃんとね」

「じゃあ何でなの？今高校生の女の子達ばかり来てるけれど」

「親戚だし教会にもお参りしないといけないしね」

何気に信仰も見せていた。

「だからね」

「お参りね」

「若奈ちゃんのところはいつも参拝しているからわからないけれどね」

「離れていたらなのね」

「そうよ、お参りできるのって有り難いことよ」

こう姪に話すのであった。

「若奈ちゃんもそれはわかっておいてね」

「ええ。けれど」

だがここで若奈も言うのだった。

第三十六話 日常その十六

「叔母さん大阪だし」

「それがどうしたの？」

「奥華大教会に近いじゃない」

若奈が叔母に対して言うことはこのことだった。

「奥華にね」

「まあそうだけれどね」

「大教会にはいつもお参りしているのよね」

「ええ、それはね」

「しているというのだった。」

「ちゃんとね」

「それじゃあいじんじやないかしらって思うけれど」

「それでも。八条さんの方もお参りしないと」

真面目な顔で話すのであった。

「いけないからね」

「相変わらず真面目に信仰してるのね」

「信仰だけじゃなくてね」

「だけじゃなくて？」

「教会の雰囲気も好きだから」

「それもあるというのである。」

「だからお参りしているのよ」

「成程、そうだったの」

「そういえば千里ちゃんだけれど」

話がその女の子のものにもなった。

「今天理よね」

「ええ、おちばね」

「元気にしてるかしら」

「元気みたい。ただ」

「ただ？」

「いつも高校の後輩と一緒にいるみたいなのよ」

「若奈は彼女のこのことを叔母に話した。」

「何でもね」

「後輩の子と？」

「そうなの、ずっとね」

「いるというのである。」

「二年下の男の子とね」

「あつ、彼氏なの」

「彼氏かどうかはわからないけれど。同じ奥華のしかも八条さんの信者さんらしいわ」

「このことも話したのだった。」

「その子がいつも側にいるのよ」

「付きまとわれてるとか？」

「それだったら詰所の人達が止めるからそうでもないみたい」

「ストーカーじゃないのね」

「ええ、そうじゃないみたい」

「だったらいいじゃない」

「叔母はストーカーであることは否定されてまずは微笑んだ。」

「危ない相手じゃないとね」

「けれど。何か結構能天気な子らしいから」

「能天気ね」

「それでずっと千里ちゃんの側にいるらしいわ。学校が終わったらすぐに詰所に来て」

「あら、すぐになの」

「そう、授業と部活とかが終わったらすぐに。しゅっちゅう詰所にも泊まってるみたい」

「奥華の詰所は優しいからね」

「そんな子らしいのよ」

「こつ話すのであった。」

「何でもね」

「よかったじゃない」

また言う叔母だった。

「いい子みたいだし」

「会ってないのにわかるの？」

「聞く限りじゃね。いい子ね」

「聞く限りなのね」

「そうよ、いい子ね」

見れば叔母の顔は笑顔であった。

「そうなのね、千里ちゃんもういい相手見つけたのね」

「何かもう結婚するみたいな言い方だけれど」

「だって相手見つけないと駄目な娘じゃない。若奈ちゃんと同じでね」

「私と同じって」

「あれじゃない。若奈ちゃんだってお店継ぐのよね」

「まあそれは」

若奈の家の店の話になるとだった。彼女も少し真剣な顔で頷いたのだった。

### 第三十六話 日常その十七

「その通りだけれどね」

「長女だしね」

「私喫茶店好きだし」

そこにあるのは義務だけではなかった。

「だから。やっぱり」

「じゃあ同じじゃない」

「千里ちゃんも教会継がないといけないのよね」

「そうよ。だからね」

「私と同じね、本当に」

「けれど。いい感じね」

叔母は今度は感じという言葉を述べてもみせた。

「年下の相手なんてね」

「年下がいいの？」

「千里ちゃんには似合ってるじゃない。三人姉妹の長女さんだし」

「私だってそうだけれど」

それは若奈も同じであるのだ。彼女も三人姉妹の長女なのである。しかも親戚同士の関係もあって容姿も背丈も似ていたりする。しかも声もだ。

「それは」

「あんた達本当にそっくりだしね」

「それいつも言われるわ。学校だって中学校まで一緒だったし」

「八条中学だったわよね」

「ええ、そこよ」

そこが若奈の出身中学だった。それと同時に千里のだ。

「そこだったから。ただ千里ちゃんは」

「高校から天理だしね」

「天理高校だったわよね」

「そうよ、そこよ」

まさにその高校だった。

「それで今天理大学なのよね」

「将来教会継ぐ為の勉強をしないといけないからね」

「親元を離れて一人なのね」

若奈はその自分に何もかもよく似た親戚の女の子のことを考えていた。似ているだけに親近感はかなりのものである。そのうえでの言葉であった。

「大変じゃないかしら」

「大変だけれど千里ちゃんは頑張ってるでしょうね」

「あの娘私よりずっと頑張り屋だし」

「そうかしら。若奈ちゃんも同じじゃないかしら」

「私も？私は違うわよ」

「それは自分でも気付かないだけよ」

叔母は若奈に笑って話すのだった。

「その証拠に大阪まで来て」

「大阪に？」

「そうよ、そこまで来てね」

「こう言うのである。」

「それで彼氏と一緒になんて。頑張ってるわよ」

「それは別に」

「こういう娘だからね」

姪にはこれ以上言わせずにだ。牧村に笑みを向けての言葉だった。

「宜しくね」

「一緒にか」

「そうよ、見たところあなたは接客は不得手だね」

それはもう見抜かれていた。牧村の無愛想さはだ。

「そのかわりお茶やお菓子の方は得意だね」

「食べるのも作るのも嫌いじゃない」

「見た通りだね。まあ接客は百億ドルの微笑があるからね」



今度は若奈を見るのであった。彼女も忙しい。

「そっちは気にしなくていいよ」

「いいのか」

「顔もいいしね」

今度は彼の顔についても話す。

「無愛想でも顔がいいとカウンターにいるだけでいいんだよ」

「叔母さん、ちょっと」

「ちょっとって?」

「さっきから何言ってるのよ」

困った顔での言葉だった。

「前提で話してない?」

「話してるわよ」

実に素っ気無い返答だった。

第三十六話 日常その十八

「それがどうしたのよ」

「全く。何なのよ」

「何なのってこうなのよ」

ある意味見事な切り返しだった。

「見た通りよ」

「全く」

「全くも何もなくてね」

「ないの？」

「そう、ないのよ」

また言うのであった。

「わかったわね」

「何かこの夏休み不安になってきたわ」

「大丈夫、悪いようにはしないわよ」

「悪いようにはって」

「あんたが幸せになるようにするからね」

だからだというのである。

「安心していいからね」

「全く。これじゃあ本当にこの夏休みどうなるかしら」

「どうなるのかしらって」

「叔母さんのところに入るの止めようかしら」

「それ本気？」

「今のところ本気じゃないわ」

とりあえずこうは言ったのだった。

「安心してね」

「安心はするわ。それでもね」

「それでも？」

「若奈ちゃんも夏休みは安心しなさい」

「こう言うのだった。」

「それはいいわね」

「わかったわ。じゃあこの夏はね」

「バイト代は弾むから」

「それはだというのだ。」

「しつかり頑張つてね」

「アルバイト代いいの」

「時給八五〇円よ」

「額も言ってきた。」

「それでいいわよね」

「ええ、じゃあ」

「はい、じゃあ頑張つてね」

「うん。そういえば牧村君って」

若奈はここでまた牧村に顔を向けた。そうして声をかけてきたのだった。

「あれよね」

「あれか」

「そうよね。アルバイトとかしないわよね」

「金は特に欲しくはない」

「だからだというのである。」

「だからそれはいい」

「そうなの」

「お小遣いだけで足りている」

「そしてこうも言うのだった。」

「それだけで充分だ」

「そうなの」

「必要になれば見つけて働く」

「素っ気無くすらある言葉だった。」

「だからだ。それはいい」

「無欲なんだね」

「欲があつても死ねばそれで終わりだ」

若奈の叔母に対してもこう話した。

「それでだ」

「何か悟ってるね」

「悟ってるか」

「悟っているし落ち着いてるね」

また叔母が言ってきたのだった。

「歳の割にはね」

「そうでしょ。牧村君ってそうなのよ」

若奈がその叔母に説明する。

「実際にね。そうなのよ」

「大人びてるかというとまた違うかしら」

叔母は彼を見ながらこう言った。

「むしろ。何か色々と経験してきたみたいだね」

「そんな感じなのね」

「そうね。そうした感じね」

「言われてみればそうね」

叔母もそれで頷いたのだった。

第三十六話 日常その十九

「この人はそうね。何か色々あったんだね」

「あつたかも知れない」

牧村はここでも髑髏天使としての言葉は隠したのだった。見せるわけにはいかなかった。それは博士や妖怪達にだけ言えるものであった。牧村の姿ではだ。

「それはな」

「そうなの。まあ今はくつろいでいいからね」

「それでいいか」

「もう一つずつあるから楽しく食べてね」

叔母はまた牧村に話した。

「それじゃあね」

「はい、それじゃあ」

「今から」

こうしてであった。牧村は今はそのコーヒーとさくらんぼのケーキを食べた。そうしてそのうえで今はそれぞれを楽しんだ。そうしていたのである。

それが終わってから祖父の屋敷に戻る。そこで、であった。

横には若奈がいた。送りに来たのである。今は共に歩いている。

その中で話をするのだった。

「ねえ」

「どうした」

「美味しかったでしょ、あそこのコーヒーとケーキ」

そのことを尋ねてきたのである。

「どうだった？ 気に入ってくれた？」

「美味かった」

牧村は静かにこう答えた。

「確かにな」

「そうでしょ。美味しかったでしょ」  
若奈は彼の今の言葉を聞いてだ。我がことのように喜んだ。そうしてそのうえで今は牧村と話をするのだった。  
「あそこのはね」  
「繊細な味だったな」  
実際に食べてみての言葉である。  
「あの味は」  
「そうそう。だから今年の夏はね」  
「ここですか」  
「修行するのよ」  
そうだというのである。  
「味を知る為にね。後はね」  
「サービスだな」  
牧村はここでまた言った。  
「それだな」  
「ああ、わかるの」  
彼のその言葉を受けてであった。  
「やっぱり」  
「わかることだ」  
「喫茶店も勉強よ」  
「何でもだな」  
「そうよ、何でもよ」  
まさにそれだというのである。  
「人生は何でも勉強だしね」  
「そうか。人生だな」  
牧村は若奈のその言葉でも思うのだった。  
「人生だな」  
「そうよ………って」  
ここで若奈は笑って述べた。  
「そんなの言うまでもないじゃない」

「そつだな」  
言葉をそのまま受けて頷いたのだった。  
「それはな」  
「そつよ。それでだけれど」  
「ああ」  
「また明日来てね」  
彼への誘いだつた。  
「お店にね。来てね」  
「わかつた。ではそつさせてもらつ」  
「それで今お爺さんとお婆さんのお家にいるのよね」  
話はそちらにもなつた。  
「そつなのよね、確か」  
「そつだが」  
「それで確かお爺さんとお婆さんって武道やってるのよね」  
「俺もそれをしてると思つのだな」  
「違つのか？それは」  
「してはいる」  
そのことは隠せない。人間としての行動はだ。  
「剣道をな」  
「いいじゃない、それもしたらね」  
「しかし今はそれよりも」  
「それよりも？」  
「座禅をしている」  
「それをしてるというのだ。」

第三十六話 日常その二十

「座禅をだ。今はそれをしている」

「そうだったの。座禅をなの」

「そこから何かを得る」

得られればいい、とは言わなかったのだった。

「そして得ようとしている」

「ああ、もう掴みかけてるのね」

「もうすぐだ。それではだ」

「ええ、それじゃあね」

「何かを掴んでそれを使う」

目が強くなっていた。その光がだ。

「必ずだ」

「そうするといいわ。それじゃあね」

若奈は牧村がどうして決意したのかはあえて聞かずに笑顔で述べてきた。髑髏天使のことは知る筈もない、だが彼が何かを思っているのは察していたからだ。

「座禅も頑張つてね」

「そうさせてもらう」

「それじゃあね。また明日ね」

こんな話をして今は別れるのだった。彼等は今は平和だった。そして屋敷に帰るとだ。

鍛錬の後でまた座禅をするのであった。その座禅を終えるとだ。

祖父と祖母が二人で彼に言ってきた。

「昨日よりもさらによく言っているな」

「そうね」

夕食を食べながらのやり取りだった。ちやぶ台を囲んで座りそのうえで話している。

「一日ごとにな」



「いいことね」

「そうか。よくなっているか」

牧村は井の中の麦飯にとろろをかけていた。祖母のこだわりで山芋には麦飯だというのだ。それで今は麦飯を井の中に入れてい

だ。  
「座禅だけではなくか」

「全てがな」

「よくなっているよ」

また言う二人だった。

「少しずつだがな」

「確かにね」

「そうか」

牧村はとろろを食べながら祖父母の言葉に頷いた。

「ならいいがな」

「それでだがな」

「この夏はずっとここにいるんだよね」

このことも問われた。

「ならゆっくりと考えるんだな」

「あんたのその中にあるものもね」

「中か」

「悩んでいるな」

祖父はこのことを察していたのだ。

「その悩みの中が何かはわからないがな」

「悩みは誰にもあるよ」

祖母もこう言ってきた。彼女も察していたのだ。

「それでもだ。それを越えればだ」

「あんたは大きくなれるからね」

「人としてだな」

牧村は二人にあえて人という言葉で返した。

「それでだな」

「そう、人としてだ」  
「それでなんだよ」  
「ならわかった」  
頷いた彼だった。  
「それでな」  
「しかしね。あんたもね」  
「何だ？」  
「悩んでそれを越えて大きくなっていくんだね」  
祖母の言葉はしみじみとしたものだった。  
「少しずつね」  
「そうか。少しずつか」  
「そうだよ。少しずつね」  
また言うのであった。  
「なつていくよ。けれど」  
「けれどか」  
「道を踏み外すこともあるだろう」  
祖父の言葉だ。  
「道をな。それをだ」  
踏み外すか」  
「そうなくても惑わないことだ」  
こう言うのである。孫に対してだ。  
「決してな」  
「決してか」  
「そうだ、決してな。惑わず焦らずだ」  
「己の道に戻つてか」  
牧村はその話を真剣に聞いていた。そのうえでの言葉だ。  
「俺は今の道をか」  
「踏み外しても戻ればいい」  
また言うのだった。  
「そして御前ならすぐに戻れる」

「自信か」

「そう、自信じゃ」

それだともいうのだ。

「御前は自信を持って己の道を歩き続ければいい」

「では歩いてか」

「歩いていけばいい」

また言う祖父だった。

「御前の道をだ」

「それでは俺はだ」

「また座禅をするのだな」

「今はいい。だがわかってきた」

食べながらの言葉だ。おかずも食べている。それは豆腐であった。冷奴であり葱や生姜が上にかけられたものを食べながらの言葉である。

「俺はこのままだ」

「このままか」

「そうだ、行く」

「こう言うのである。」

「それがわかってきた」

「そうか。御前もわかったか」

「俺は俺の道を歩く」

言葉は澄んでいた。澱みは何処にもない。その言葉を出していたのだ。

「その先にあるものはわからないがな」

「それでも悪い道じゃないよ」

それはしつかりと言う祖母だった。

「人の道だね」

「言うならな」

「それならいいよ。人として生きるんだよ」

「わかった、それなら」

「行くぞ」

こう話してだった。三人で話してだ。

牧村は今自分が歩くべき道を歩んでいた。戦いの中にあってもだ。それでもだった。

第三十六話

完

2010・5・1

## 第三十七話 光明その一

髑髏天使

第三十七話 光明

牧村は喫茶店の中にいた。あの若奈の叔母の店だった。そこに入つてだ。そのうえで話を聞いていた。

話しているのは横にいる客達だ。彼等があれこれと話していたのだ。

「いや、本当にこの時期はな」

「困るんだよな」

「そうだよ、甲子園がなあ」

見ればカーキ色の作業服の中年の男達だ。彼等はカウンターに座つてだ。そのうえで話をしているのだ。

「高校野球で貸切になるからな」

「それで阪神は遠征だよ」

「地獄のロードな」

「毎年ここで落ちるんだよな」

「いつもな」

「阪神だけなんだよな」

「まあ今はな」

さらに話していく。彼等のその忌まわしいハンデをだ。

「大阪ドーム。ああ、京セラドームか」

「そうそう、今の名前はそれだったな」

「まあどっちにも名前はそれだよな」

「オリックスの球場なんか使い切れればいいんだよ」

かなりエゴイズムな言葉ではある。

「そうだよな。阪神様にその球場差し出せ」

「それでオリックスは北朝鮮行きだよ」

「巨人と一緒にな」

やはりエゴイズムを出している。しかし巨人についてはまさに正論であった。巨人というチームこそはまさに我が国の北朝鮮そのものだからだ。

「巨人があるから日本はよくなるならないしな」

「今年はあるのまま崩れたらいいけれどな」

「ヨネスケもテレビに出るな」

まさに巨人ファンの悪い意味でのサンプルとも言うべき存在である。

「今年の阪神どうか」

「ああ、それでヨネスケまた叩かれてたよな」

「自業自得だよ、あいつは」

ヨネスケの話は皆口を歪ませていた。コーヒーの苦さによるものではないの是一目瞭然である。間違ってもそんな味のコーヒーではないからだ。

「巨人の犬だからな、完全に」

「というか男従軍慰安婦だろ、あいつは」

「リーグ制も賛成していたしな」

要するに巨人の言うことは何でも尻尾を振る輩である。尚同じ事務所にはとある捏造番組のコメンテーターも存在している。

「あいつも北朝鮮に行っちゃえ」

「全くだ」

こう言いながらコーヒーを飲んでいるのだった。

「巨人なんかこの世からなくなっちゃえ」

「悪は滅べ」

「悪か」

牧村もその言葉に反応した。

「巨人は悪なのだ」

「それ以外の何でもないじゃない」

若奈の叔母もその通りだというのだった。

「あんなやりたい放題の連中はね」

「あの能無し落語家はただの愚か者か」

「まあ普通では考えられないレベルのアホだな」

「そうだよな」

男達もそれは言う。話が戻っていた。

「朝まで生テレビでも古田を馬鹿にしてな」

「後は総攻撃受けたしな」

義憤を感じた視聴者や野球を本当の意味で愛する者達に糾弾を受けたのだ。所詮はしゃもじを持って騒ぐだけの輩でしかなく馬脚を表わしたのである。

「それで暫くテレビに出なかつたしな」

「ネットで非難が殺到したしな」

これも当然のことである。

「あのまま消えればいいんだがな」

「そうだな」

「全くだよ」

そんな話をしてコーヒーを飲んでいる。一人が新聞を読むと。

「おお、負けた負けた」

「これで八連敗」

「巨人見事！」

皆で巨人の敗北を喜んでいる。

「よく負けたよな」

「このままずっと負けてくれたらいいのにな」

「それに対して阪神は七連勝」

「いいことだ」

皆満面の笑顔である。

「巨人はこのまま千年は最下位にでいいからな」

「というか本当に平壤に行ってくれ」

「ああ、あそこで好きなことやって欲しいよな」

また平壤の名前が出た。

## 第三十七話 光明その二

「それでチーム名も変えてな」

「そうだよな。何がいいかな」

「それでどんな名前がな」

「ああ、だったらな」

それで言われた名前は。こうしたものだった。

「名付けて平壤読売イルソンス」

「おお、それいいな」

「センスあるよな」

皆笑顔で言う。

「あと対抗馬がだよ」

「ああ、何だ？」

「どのチームだ？」

「ジョニイルズだ」

言うまでもなくあの国の親子の独裁者だ。尚世襲制の共産主義国家などはこれまで存在したことがない。共産主義なら本来有り得ないことである。

「この名前はどうだ？」

「いいよな、それであのアナウンサーのおばさんが実況してな」

「ああ、あの人だよな」

「いつも絶叫しているチマチョゴリの」

北朝鮮のアナウンサーは非常に独特である。常に絶叫して汚い文章の言葉を喚く。名前よりもその顔と喋り方でインパクトがあるのだ。しかももう一人いる。

「あとあの痩せたおっさんな」

「ああ、あの人もいいよな」

「もう実況解説最高に面白いだろうな」

無論善意の言葉ではない。



「そしてリーグの名前は將軍リーグとかか？」

「それだとセンスないだろ」

「じゃあ何だ？」

「白頭リーグなんてどうだ？」

こう言われるのだった。北朝鮮の聖地とされている山の名前だ。

尚金日成、本名金聖柱は実はこの山にはあまりいなかった。実際はソ連にいた。金正日もソ連生まれだ。この山で生まれてはいないのだ。

「それでな」

「ああ、それが好きがつかない」

「いい感じじゃね？」

「だよな」

そしてこうも言われるのだった。

「とにかくあいつ等は北朝鮮だよな」

「ああ、そつちで野球やれよ」

「日本から出てな」

関西だけあって巨人の評判は悪い。叔母もそんな客達の言葉を笑顔で聞いてた。そのうえで牧村に対して言ってきたのである。

「それだけでくれどね」

「何だ」

「今日はどうするの？」

「今日か」

「今からそつちに若奈行かせるけれど」  
「にこりと笑っての言葉である。」

「それでどうかしら」

「そうだな。今から戻るか」

「それなら若奈送ってくれる？」

「わかった」

それでいいというのである。

「それならだ」

「御願いするわね。あのサイドカーで来たのよね」

「移動する時はいつもあれだ」

「実際にこう答えるのだった。」

「送るのも楽だ」

「そうなのよね。サイドカーって滅多に見ないけれど」

「ああ、あのサイドカーあんたのだったのか」

「前のあれは」

男達が今の二人の話に入って来た。

「そうだったのか」

「あれかなり渋いよな」

「そうか、あれ持ってたのか」

「それで乗ってるんだな」

「サイドカーは人気があるか」

牧村は彼等のその言葉を聞いて述べた。

「そんなにか」

「ああ、そうだよ」

「あれはロマンだよ」

「なあ」

男達は口々に言うのだった。

「サイドカーはそれこそな」

「まさに夢だよ」

「俺はハーレー持ってるけれどな」

一人が楽しそうに言う。

「あれもいいよな」

「ハーレーか」

牧村はハーレーと聞いてだ。まずは考える目になった。

### 第三十七話 光明その三

そしてそのうえでだ。こう言うのだった。

「そうだな。あれはな」

「いいよな、やっぱり」

「あれも男のロマンだよな」

「金はあれの為に使うもんだよ」

男達は口々に言う。目が輝いている。

「ロマンの為にな」

「あれで道路を走るのがいいんだよ」

「格好よさ極まれりつてな」

こう言うてであった。口々に話していく。そうしてだった。

「兄ちゃんのサイドカーとどっちがいいかな」

「そうだよな、どっちがいいかな」

「ハーレーかサイドカーどっちがな」

「俺はどちらも好きだ」

その牧村の言葉だ。

「だが乗っているのはサイドカーだ」

「これからハーレーはどうするんだい？」

「そっちも乗るのかい？どうするんだい？」

「それはまだ考えていない」

好きではあるがだ。それでも買うことはまだ考えていないのだ。

財政的な面もあるがそれ以上にだ。好きでもサイドカーで満足して  
もいるからだ。

それでだ。彼はまた言うのだった。

「サイドカーも充分過ぎる程いいしな」

「あの黒と銀の配色な」

「それもいいよな」

「あのカラーリングもセンスいいしな」

「最高なのは黒と黄色だけねどね」

叔母が絶妙のタイミングで言ってきた。

「黒だとね」

「黒と黄色か」

牧村もその配色に顔を向けた。

「確かに。それもいいな」

「最悪は黒とオレンジだがな」

「それは止めてくれよ」

「折角のサイドカーが台無しだからな」

男達は巨人の色は否定するのだった。

「まあ黒と銀は渋くていいけれどな」

「あんた配色のセンスあるよ」

「全くだ」

そしてまた彼を褒めるのだった。そしてだ。

「俺もサイドカーにするか？」

「おいおい、ハーレーはどうするんだよ」

「そっちはどうするんだ」

そのハーレーを持っているという男の言葉に一斉に突っ込みを入れたのだ。56

「捨てるとか言つなよ」

「そんなことしたらバチが当たるぞ」

「誰がそんなことするかよ」

彼も捨てるという言葉にはムキになって返してきた。

「ハーレーは俺のもう一つの身体なんだぞ」

「じゃあ何でサイドカーもなんだよ」

「買っつていうんだよ」

「だから両方愛するんだよ」

そうだとするのである。両手を拳にしての言葉だ。

「ハーレーもサイドカーもな」

「どっちもか」

「また大胆だな」

「そこまで言うか」

彼の仲間達はその言葉に感嘆さえしていた。

「何かここまでではつきりした言葉はじめてだよな」

「ああ、全くだよ」

「漢だよ」

こうした言葉まで出ていた。

「じゃあ頑張れ」

「頑張つて両方愛してくれ、絶対にな」

「ああ、俺はやるぜ」

今誓うのだった。

「絶対にな。どっちも愛するからな」

「それでカラーリングはわかってるよな」

「それもな」

「ああ、黒と黄色だ」

阪神は最早絶対だった。虎から離れることはなかった。

「絶対にそれだからな」

「何か凄い話になったね」

叔母はここでまた温かい顔で言うのだった。

「あんたも罪な男ね」

「俺か」

「そう、あんたもね」

そして牧村にも言うのだった。

### 第三十七話 光明その四

「他人をそういう気にさせる。罪な男だよ」

「そうだったのか」

「若奈ちゃんも乗せてるんだろ」

「そのまま若奈のことも言ってきた」

「あの娘も。そうなんだろ？」

「横にだ」

「素っ気無い言葉だった」

「乗せている」

「やっぱりね。そうだね」

「横に乗せてそうしてだ」

「いつも送ってるのね。若奈ちゃんも喜ぶわ」

「ちよつと叔母さん」

「しかしだった。後ろで声がしてきた」

「若奈の声だ。エプロンの彼女が出て来て言ってきたのである」

「何言ってるのよ」

「何って？」

「だから。牧村君によ。何言ってるのよ」

「顔を赤くさせてだ。そのうえでの言葉だった」

「変なこと言わないでよ」

「言っていないわよ、別に」

「聞こえてたわよ」

「しかしそれでも若奈は言う」

「ちゃんとね。聞こえてたわよ」

「あら、そうだったの」

「そうだったのって」

「全然おかしいことじゃないじゃない」

「本当に素っ気無い言葉である」

「そうでしょ？事実なんだし」  
「事実って」

「それでどう？サイドカーの横は」  
それを本人にも問うてみせる。

「いい感じ？やっぱり」

「風を感じるわ」

自分が運転しているようにも聞こえる言葉であった。

「ちゃんね。感じるわ」

「けれど寒くはないわね」

「だからそれは」

叔母の言葉に顔をむっとさせる。しかしだった。

「別に」

「別になのね」

「そうよ。別にね」

また言う若奈だった。

「言わなくてももいいじゃない」

「もう言ってるし」

「言っていないから」

「強引に話を進めるわね」

「いいじゃない、だから」

意固地にさえなっている。そうした言葉だった。

「お店、お客さん来られてるし」

「おっ、可愛い娘だな」

「ああ、美人だよな」

「おばちゃんにそっくりだよな」

「なあ」

叔母がここで反応を見せた言葉はだ。これであった。

「お姉さんよ。おばちゃんじゃないわよ」

「あっ、これは失敬」

それを言った男も笑って返す。そしてこう訂正したのだった。

「じゃあお姉さん」

「それでいいわ」

そう呼ばせて満足した顔になるのだった。

「多いにね」

「それでさ、お姉さんさ」

「何？それで」

「この娘お姉さんによく似てるね」

話は完全に仕切りなおしになっていた。

「っていつかそっくりなんだけれど」

「ああ、それはね」

叔母もだ。明るく笑って彼に返す。

「当たり前だよ。姪なんだし」

「姪御さんなんだ」

「ええ、そうなのよ」

こう言うのであった。

「だからね。それも当然よ」

「へえ、姪御さんね」

「確かにそっくりだよね」

「何もかもね」

皆で言う。それと共に顔を見比べてもいる。すると余計にだった。



### 第三十七話 光明その五

「クローンにも見えるしな」

「そうだよな」

「本当は親子だったりしてな」

「あはは、それもあるよな」

「生憎だけれどそれはないから」

叔母は笑って親子の可能性は否定した。

「私は男の子しかいないからね」

「何だ、そうなのか」

「ここで実はだったら面白かったのにな」

男達は今度はこんなことを言った。

「もつとな。こう面白い話にな」

「なつてればよかつたのにな」

「それは無茶よ。とにかくね」

また言う叔母だった。

「この娘も宜しくね」

「はじめまして」

若奈は客達に深々と頭を下げた。小柄だが身体は思いきり動かす。

「奥谷若奈といます」

「へえ、若奈ちゃんっていうのか」

「いい名前だよな」

「そうだよな」

彼等は笑顔でそれぞれ若奈を褒めだした。

「顔に合った名前っていうかな」

「だよな、けれどこの顔だと」

「顔ですと？」

ここであった。話が微妙に変わってきた。彼等はこう言ってきたのだ。

「アイドル。なれるよな」

「ああ、なれるよな」

「絶対にな」

その若奈への言葉である。

「モーニング娘。とかAKB48とかな」

「普通に入られるよな」

「それでトップアイドルな」

「ああ、すぐになれるよ」

「こつも言われるのだった。」

「簡単になれるよな」

「ここまで綺麗で可愛いとな」

「声だつて綺麗で」

若奈は声もいいのだった。それもしつかりとチェックされていた。

「笑顔もいい。しかも」

「礼儀正しくてさ」

「頑張り屋みたいだし」

「そうよ。凄い頑張ってくれるのよ」

叔母がここでまた話すのだった。

「いつもね。何でも物凄く頑張ってくれるのよ」

「そうだろうな。いい娘だしな」

「やっぱりそうか。じゃあこれは増々な」

「ああ、アイドルになれるな」

「完璧になれるって」

「トップアイドルな」

只のアイドルではないのだという。トップアイドルだ。若奈はそこまでなれるとだ。彼等はそれぞれ太鼓判を押して言ってみせているのである。

しかし当の若奈はだ。困惑して言うのだった。顔は真っ赤である。

「あの、私はそんな」

「いや、嘘じゃないから」

「本当になれるから」  
「ああ、なれるからな」  
「絶対になれるさ」  
だが彼等はまだ言う。どうやら相当若奈が気に入っているらしい。  
「松田聖子も中森明菜もな」  
「それ古くないか？」  
「じゃあ小泉今日子か早見優な」  
「同じ年代だろうが」  
「こんな話がされる。」  
「それじゃあ高橋由美子か」  
「それも少し古くないか？」  
「よし、松浦亜弥か藤本美貴だ」  
「一気に飛んだ感じがするな」  
アイドル達を出しての話になってきていた。  
「今じゃやっぱり前田敦子か？」  
「俺は大島優子の方がいいな」  
「いや、篠田麻里子だろ」  
こうした話にもなるのだった。  
そしてだ。また言われることはだ。  
「そうした娘にも勝てるんじゃないのか？」  
「なあ、この娘な」  
「勝てるだろ」  
「そうかもね」  
叔母も彼等の言葉に頷くのだった。  
「この娘だったら。アイドルにもね」  
「ちょっと、叔母さんまで何言うのよ」  
若奈は完全に困っていた。あたふたとしながら叔母に対しても言う。

### 第三十七話 光明その六

「私はそんな。アイドルなんか」

「けれど本当だよ」

冗談とは言わないのだった。

「あんただったらなれるよ」

「それもトップアイドルな」

「山口百恵超えるよな」

「ああ、超える超える」

「間違いなくな」

今度は伝説的アイドルであった。アイドルといえば何ととってもまずは山口百恵である。彼女からはじまったと言っても過言ではない。

「北乃きいもいいけれどな」

「あの娘も平均点高いけれどな」

「演技も上手だしな」

「あんた達よく知ってるね」

叔母は彼等の話に思わず突っ込みを入れた。

「本当に」

「アイドルに興味がなくて何が男なんだよ」

「アイドルとバイクはやっぱりな」

「男のロマンだよ」

三人共どう見ても三十を超えている。しかしそれでも言うのだった。

「例えかみさんがいてもアイドルは見るんだよ」

「だからこそその男のロマンだよ」

「絶対にな」

「何か男ってややこしいね」

しかしこう言う叔母もだった。

「まあタッキーにはうちの旦那も合わないでしょうけれどね」

「そういうあんただってそうじゃないか」

「タッキーってきたか」

「前はキンキキッズって言ってたのにな」

「キンキも今も好きよ」

叔母は悪びれずに言ったのだった。

「マツチもニッキもね。サワ君も慎吾ちゃんも皆ね」

それぞれ近藤真彦、錦織一清、大沢樹生、香取慎吾である。誰も歴代ジャニーズのトップアイドル達である。どうやら相当な年季があるらしい。

「今でも大好きだよ」

「おかみはマツチ派だったのか」

「成程な」

「マツチはいいよ」

それを自分でも言うのだった。にこやかな顔でだ。

「DA PAMPも好きだけれどね」

「アイドル好きだよな」

「そうだな」

「ええ、好きよ」

完全に居直りの言葉だった。

「女はずっと少女なのよ」

「だからアイドルは好き」

「そういうことか」

「まああんた達と同じね」

笑っての言葉だった。

「そういうところはね」

「成程、そうなるのか」

「そういうことか」

「男も女も同じか」

男達はここで納得して頷くのだった。

そしてだ。そんな話をしながら喫茶店での時間を過ごすのだった。そしてその後でだ。

サイドカーで屋敷に戻る。その時だ。

若奈は一緒だった。その横の座席にいる。そこに座って話をしている。

「ねえ」

「何だ？」

「叔母さんのお店気に入ってくれたかしら」

「こつ彼に問うのである。」

「どうなの？それは」

「いい感じだ」

「これが牧村の返答だった。」

「明るくてな」

「そうでしょ。叔母さん明るいしね。気さくだし」

「気さくだな」

「あの人柄もお店にお客さんを引き寄せてるのよ」

「人柄か」

「まあ牧村君は」

彼に顔を向けての言葉だった。

「人柄はいいけれどわかりにくいわね」

「俺は人柄はいいか」

「いいと思うわ」

「そうだというのである。」

「意地悪でもないし尊大でもないしね」

「それは普通ではないのか」

「普通じゃない人も一杯いるじゃない」

「こつ返すのだった。」

### 第三十七話 光明その七

「いるでしょ、一杯ね」

「そうだな。確かにな」

「平気で嘘を吐く人もいるし」

若奈の顔が曇っていた。

「それこそ息をするようにね」

「いるな、確かに」

「それも一種の精神病みただけけれど」

「精神病か」

「人格障害っていうのかしら」

そうした類であるというのである。人格障害だとだ。

「そういう人っているらしいから」

「異常犯罪を犯す人間か」

「そういう人間もいるから」

「そうした奴にも会ってきた」

「いたの」

「知り合いでいた。どんな嘘をつこうがどんな悪事を働こうが全く平気だった」

牧村は語っていく。運転しながらだ。

「そして人を騙しても利用してもな。全く平気だった」

「そういう人っているのね」

「今は刑務所にいる」

牧村は一言付け加えた。

「詐欺で逮捕された」

「人を騙したことがばれたのね」

「それで捕まってだ。今は刑務所にいる」

「刑務所でも更正しそうにないわね」

「更正しない奴は更正しない」

牧村は言葉に感情を込めずにそれで言い捨てた。

「何があってもだ」

「死んでもなのね」

「そうだ。死んでも直らない」

まさにそれだというのだ。

「世の中にはそうした人間もいる」

「残念な話ね」

「どんな嘘を吐こうがな。盗みをしようがだ」

「そういうのって確か」

若奈は牧村のその話を聞いているうちにある言葉を思い出した。

その言葉は。

「サイコパスっていうのね」

「確かな」

「そうだったわね。サイコって何か禍々しい響きがあるけれど」

「そこから来る」

そうした良心が異常に欠如した人格のことを言う。あのオウム真理教の麻原がそうだったと言われている。俗に百人、若しくは千人に一人いるとも言われている。

「ごく稀にだがそうした人間もいる」

「何処までも卑怯でも平気なのね」

「どれだけ卑劣でも醜悪でも信用をなくしても平気だ」

牧村はまた言い捨てた。あえて感情は消しているようである。

「恥も知らない」

「ある意味幸せな人間ね」

「だからこそ重度の人格障害者だ」

「重度のね」

「こうした人間はまず自分しか考えない」

牧村の言葉は続く。

「そうした知り合いがいた」

「そういう人間って自分が報い受けても逆恨みしかしないのよね」



若奈の顔は困ったものになっていた。

「絶対にね」

「そうだな。そして果てはだ」

「果ては？」

「破滅しかない」

またしても言い捨てたのだった。

「それしかない。わかっていないのは自分だけだ」

「自分だけなのね」

「自分だけしかないからわからない」

「エゴイストってことよね」

「簡単に言えばそうだ」

まさにそうだというのだ。

「そういう人間はだ」

「人間ってそういう人もいるのね」

「人は色々だ」

牧村はまた言った。

「素晴らしい人間がいれば76だ」

「そうした腐った人もいるのね」

「腐った奴もまた何処にもいる」

こつも話すのだった。

「何処にもだ」

「そうよね。それでだけれど」

「それでか」

「牧村君は。そうね」

彼を見ながらだった。若奈はヘルメットの中で微笑んでいた。そうしてであった。

「綺麗な方ね」

「俺の何がだ」

「決まってるじゃない。心がよ」

まさにそれだというのだ。若奈の今の言葉は嘘ではなかった。

### 第三十七話 光明その八

「心がね。牧村君のね」

「そうか、心がか」

「だからお父さんもお母さんもね」

「あの人達か」

「気に入ってるのよ、実はね」

何気に彼の運命を大きく決めることだった。

「性格がiiiってね」

「性格はか」

「そうよ、それはiiiってiiのよ」

笑顔での言葉だ。ヘルメットの中で言ったのである。

「とてもね」

「iii感じだな。しかし」

「しかし？」

「俺は好かれているのか」

「嫌われてはないわ」

このことははっきりと告げた若奈だった。

「安心してiiiわ、それもね」

「そうか」

「確かに愛想はないけれどね」

それも言うのだった。

「無愛想だからね」

「それは諦めろ」

「なおすことはできないの」

「iiiしてもだ。しかしそれが問題になることはいない」

「まあね。soちはね」

諦めたよii話だった。

「私の方で何とかするし」

「何とかか」

「そうよ。私は笑顔担当でね」  
「そうだと話すのである。」

「それでやっていけばいいし」

「そうか」

「牧村君は調理とか。お皿洗って。お掃除もね」  
「何気に言うことは多かった。」

「頑張ってもらおうし」

「何の話しだ、それは」

「将来の話よ。それじゃあね」

「それじゃあか」

「お屋敷行きましょう。いつも通りセコンドさせてもらおうから」  
こつ話してだった。その屋敷に着いてからすぐにトレーニングに入った。牧村のその動きを見てである。若奈は彼に対して言うのだった。

今二人は大阪の道にいる。若奈は白いジャージで牧村は黒だ。それぞれの格好でトレーニングをしているのだ。若奈は自転車に乗り彼女の隣にいる。

そしてだ。その言葉はだ。

「ねえ」

「何だ」

「前より動きがよくなってるわね」

「こつ言っただった。」

「一段とね」

「数日でか」

「男子三日会わざればっていうじゃない」

自転車の上で笑顔で言ってみせたのである。

「それを考えたらね」

「三日の間にもか」

「そうよ。動きよくなってるわ」

「そうだといいのである。」

「さらにね」

「そうか。ならいいがな」

「全体的にね。それに」

「それに？」

「動きが思いきりよくなってる感じね」

「それも言うのだった。」

「凄くね」

「思いきりもか」

「よくなってるわ。何かあったの？」

「何か、か」

その言葉を聞いて考える顔になる。そのうえで「言うのだった。」

「吹っ切れようとしているからな」

「吹っ切れるって？」

「思うところがあった」

「ここでも髑髏天使としての話はしなかった。」

「しかしそれからだ」

「吹っ切れかけてるのね」

「何とかな。それにだ」

「それに？」

「そこから新たなものを見られた」

「そうだといいのである。」

「後はだ」

「そこに入るのね」

「入るといいかそこに行くのか」

「こう表現するのだった。」

第三十七話 光明その九

「これからは」

「ふうん、ひよつとしてね」

「ひよつとしてか」

「お爺さんとお婆さんって武道家だったわよね」

「そうだが」

「じゃあそつちかしら」

「こつ言つのであつた。」

「そつちに目覚めたの？」

「武道はしていない」

素振りを少しする程度だ。牧村はその程度ではしているとは思えない。この考えのまま今は若奈に対して話しているのである。

「それはだ。だが」

「何をしてるんだつたつけ」

「禅をしている」

「これをだというのだ。」

「座禅をだ」

「ああ、それが新しいものなのね」

「座禅の中にある」

「牧村はまた言った。」

「その新たなものがだ」

「座禅つて凄いつて聞いてたけれど」

若奈はここで考える顔になった。そのうえでの言葉だった。

「それはしないからね」

「座禅はしないか」

「宗教違うしね。お寺は行くけれどね」

「宗教は確か」

「天理教だから。ほら、親戚に天理教の教会の人いるつて言つたわ

よね」

「このことも牧村に放す。」

「八条分教会ね」

「教会か」

「天理教はお寺とか神社じゃなくて教会だから」

「キリスト教みたいだな」

「名前だけで実際は全然違うわよ」

これは言葉以上のものがあつた。天理教の教会は完全な和風である。しかしキリスト教のそれはそこから欧州がはじまっている。やはり何から何まで全く違う。

「実際にはね」

「名前だけなのか」

「見たことあるわよね、天理教の教会」

「あの瓦の屋根のだな」

「そう、それよ」

まさにそれだというのだ。

「その屋根の建物よ」

「ああした建物か」

「天理市はもつと凄いから」

その街の話もするのだった。

「行ったことは」

「あつたか」

牧村の言葉がここでは少しあやふやなものになった。

「それは」

「わからないのね」

「一度は行ったか」

「私は結構行つてるのよ。親戚の娘もいるし」

「その話は前にしていたな」

「そうでしょ。叔母さんと話してたわよね」

このこともまた話すのだった。

「それ聞いてたわよね」

「それは覚えている」

「だったらいいわ。それじゃあね」

「また走るか」

「ええ、休憩は終わりよ」

若奈はここで時計を見る。そのうえでの言葉だった。

「再会しましょう」

「それではな」

トレーニングの合間にこんな話もしていた。そしてその日のトレーニングが終わり若奈を店まで送った。彼女と別れサイドカーで帰る時にだ。その横にだ。

ハーレーが来た。そしてそれに乗っていたのはだ。あの彼であった。

「やあ、また来たよ」

まずは目玉が出て来て彼に声をかける。

「元氣そうだね」

「貴様等か」

「うん、そうだよ」

笑顔で返してきた。目玉だけなのでわかりにくいがその目の色がそうなっていた。

「そうなんだ、僕達がなんだ」

「何の用だ」

牧村はその彼に対して冷静に返した。

### 第三十七話 光明その十

「今度はだ」

「知らせに来た」

ヘルメットの中からこう言ってきた。

「貴様にだ。あることをだ」

「あることか」

「最後だ」

「最後!？」

「十二柱の最後だ」

こう言ってきたのである。

「それが出て来る」

「魔神か」

「如何にも」

その彼等のことだった。

「それが出て来る」

「そうか、来たか」

「忘れてはいなかったな」

今度はこのことを問うのだった。ハーレーからだ。漆黒のスーツとヘルメットのせいで表情も何も見えはしない。しかしそれでも言うのだった。

「それは」

「無論だ」

牧村の返答も一言だった。

「それはだ」

「そうか。そう言えるか」

「何度でも言える」

また言う牧村だった。

「このことはだ」



「そうか。既にか」  
「それでだが」  
今度は死神に対して自分から言ってみせた。  
「俺からも聞きたいがだ」  
「何をだ」  
「貴様は俺を刈るつもりだったな」  
問うのはこのことだった。  
「そうだったな」  
「如何にも」  
このことを隠しめせず答えた死神だった。  
「その通りだ」  
「そうだったな。だが今は何故それをしない」  
「人間だからだ」  
これが死神の返答だった。  
「これは何度も言った筈だがな」  
「そうだったな、確かにな」  
「わかっていたらそれを問う理由は何だ」  
「確かめたかったのだ」  
「それでか」  
「そうだ、だからだ」  
こつ答えるのだった。  
「それでだ」  
「確かめたいというのは余程気になったか」  
「若し刈るといふのならだ」  
「鬪うか」  
「俺はむざむざやられる趣味はない」  
「本気だった。その言葉だった。」  
「決してだ」  
「そうだな。貴様はそういふ男だな」  
「如何にも」

その通りだともいうのだった。

「その時は貴様を倒すつもりだった」

「だった、か」

「そうだ、だっただ」

あえて過去形の言葉を出してみせているのだった。

「今は貴様はそうしないのだな」

「貴様が人間であるならばだ」

「そうか」

「そうだ。そしてだ」

死神の言葉のターンになっていた。彼はそのターンを上手く使って言うのだった。

「いいか」

「今度は何だ」

「貴様は今智天使だ」

「しかしさらにか」

「そうだ、まだ一つ上があるな」

「最上位にか」

「それになれるかもな」

こう言ってきたのだった。

「間も無くな」

「至高の天使にか」

「その力はかなりのものだ」

それについて知っている言葉だった。

「神に近い」

「神にか」

「その力、使いこなせるか」

「使いこなしてみせる」

これが今の彼の返答だった。

第三十七話 光明その十一

「何があるうともだ」

「その言葉確かに聞いた」

死神は静かに返した。

「今だ。確かにだ」

「受けたな」

「如何にも」

「わかった。では覚えておいてくれ」

「そしてそのうえで戦うか」

「魔物が全て消えるまでだ。髑髏天使の使命だったか」

使命という言葉も出したのだった。

「それが」

「そうだな。髑髏天使の戦いはその時代の魔物達がいなくなるか髑髏天使が何らかの事情で死ぬまでだ。それまで続けられるものだ」

「ではだ」

「戦い続けるか」

「人としてな」

これは外さなかった。彼にしてもだ。

「絶対にそうする」

「ではそうするのだ」

「そうか」

「俺は戦う」

「その言葉も受けた」

「ではだ。そういうことだ」

「話はまずは終わりだ」

そうしてであった。そのうえでさらに言ってみせたのだった。

話が変わった。今度の話はだ。

「それでだが」

「今度は何だ」  
「私もこの前知ったことだが」  
「何だ、それで」  
「魔神達だけではないようだ」  
「こう言うのだった。」  
「どうやらな」  
「その様だな」  
そして牧村もだ。こう返してみせたのだった。  
「どうやら」  
「知っていたか」  
「話を聞いた」  
死神に対して答える。  
「そうしたことを調べている人間からだ」  
「そうか、知っていたのか」  
「それだが」  
「妖しい、そして禍々しい存在の様だな」  
死神の目が鋭いものになった。  
「どうやらな」  
「その存在とも戦うのか」  
「そうなるだろう」  
今は素っ気無く答える死神だった。  
「おそろくな」  
「そうか」  
「まあ僕達は戦いも仕事だからね」  
目玉がここで牧村に説明してきた。  
「そうなるのも当然だね」  
「戦いの神でもあったのか」  
「一応それもやってるんだ」  
「その通りだ」  
目玉に続いて死神も言ってみせてきた。

「この者もだ」

「そう、僕もね」

「貴様もだと」

牧村は楽しそうに目を細めさせる目玉を横目で見ながら言った。

「そうだったのか」

「そうだよ。僕は本来は眠りの神だけけどね」

「それと共にか」

「戦いの神は僕達の系列の神族じゃ何人かいてね」

「何人か、か」

「だから僕達も戦いの神なんだ」

「そうだというのである。」

第三十七話 光明その十二

「そういうことなんだ」

「そうか」

「そうだよ。それでね」

目玉の楽しそうな話は続く。

「そういうのが本当に出てきたらね」

「戦うか」

「うん、それで魂を持って行くよ」

「そういうことだ」

死神は髑髏天使に対して告げた。

「これでわかったな」

「そして俺もか」

「そうだ、そうなるだろう」

「魔物以外にも戦う存在が出るのか」

「その時も死なないことだ」

死神はこうも言ってみせた。

「わかったな」

「死なずに戦えか」

「そうだ、戦え」

また言う死神だった。

「そして人のままでいるならばだ」

「死ぬなか」

「そういうことか」

「わかったな、いいな」

死神の言葉は続く。

「このことが」

「わかった」

牧村もその言葉に頷いた。

「それではだ」

「それでは行く。いいな」

「行くのか」

「大阪はいい街だ」

死神の話が変わった。ここでだ。

「楽しまなければな」

「だからこれで終わりか」

「神戸とはまた違った楽しさがある」

「それは確かにだな」

「だからだ。行く」

また言う死神だった。

「楽しみにだ」

「それはわかった。だが死神よ」

「何だ」

「貴様も変わったか」

「私がか」

「人の世を楽しんでいるな」

牧村がその彼に次に言った言葉はこれだった。

「明らかに。そうだな」

「そうだな。この時代は楽しい」

それを隠さない死神だった。そして目玉もだ。

「そうそう、色々なものがあってね」

「遊びというものもここまで楽しまなかった」

「遊びもか」

「遊びもまたいいものだ」

死神は笑ってはいなかった。だがそれでも楽しんでいるのはわかった。牧村はそれをヘルメットの中から聞こえる言葉で察していたのである。

「何時になくだ」

「これまでの時代よりもか」

「私はこれまでここまで遊んだことはない」  
「自分自身についての言葉だった。」  
「何時になくだ」  
「そうか」  
「そうだ。何なら貴様も共に来るか」  
「今はいい」  
彼の誘いは今は断った。  
「帰ってからもやることがある」  
「だからか」  
「だから今はいい。それに」  
「それに」  
「酒を飲むな」  
「このことも問うのだった。」  
「酒もだな」  
「この国の酒は美味しい」  
「そうだよね」  
目玉も言ってきた。彼も飲むらしい。  
「あのお米のお酒。いいよね」  
「日本酒が好きか」  
「大好きだよ。まあそれでだけけどね」  
「ああ」  
「君は飲まないんだ」  
目玉が牧村に問うてきていた。  
「そうなんだ」  
「酒は飲めない」  
実際にそうであつた。彼は飲めないのだ。



### 第三十七話 光明その十三

「だからいい」

「残念なことだな」

死神は彼のその言葉を聞いてこう述べた。

「それは」

「酒が飲めないことがか」

「酒は最大の楽しみの一つだ」

「飲める者にとってはそうだな」

「しかしそれを飲めない者にとっては何でもないか」

「少なくとも俺にはわからない世界だな」

話はここでも平行線だった。酒についてもだ。

そしてである。牧村はまた言うのだった。

「では。話は終わりか」

「終わりだ。それではだ」

「行くのだな」

「そうする。ではな」

「またね」

死神と共に目玉も言ってきた。

「すぐ会うことになるけれどね」

「すぐか」

「すぐだよ」

目を閉じさせ楽しそうなものにさせての言葉だった。

「だからね。待っていてね」

「そうさせてもらうとするか」

そんな話をしながらだった。二人で言うのだった。

そしてだ。牧村は屋敷に戻った。するとすぐに祖母から言われた。

「ああ、いいところで帰って来たね」

「いいところか」

「そうだよ。丁度連絡が来たんだよ」  
「連絡？」  
「あなたのお母さんからね」  
「こう彼に言うのである。」  
「連絡が来てね」  
「一体何だ」  
「すぐに駅まで来て欲しいってさ」  
「こう言ってきたのである。」  
「駅までね」  
「駅か」  
「未久がまたこっちに来たのよ」  
「あいつがか」  
「そうだよ。今金曜だよね」  
「ああ」  
「土曜と日曜はこっちで遊びたいってさ」  
「それで大阪にまた来たというのである。」  
「それでね。ここまでね」  
「それでなのか」  
「そうだよ。それであなたが迎えに行つて欲しいんだよ」  
「それでいいところにか」  
「そういうことさ」  
「わかった」  
「それを聞いて頷く牧村だった。」  
「なら今から行つて来る」  
「悪いね、それじゃあね」  
「あいつも暇なのかそれとも忙しいのか」  
「暇でもあれこれ動いていたら忙しいんだよ」  
「祖母はこうその孫に対して話した。」  
「動いていたらね」  
「そういうことか」

「そういうことだよ。それじゃあね」

「行って来る」

また言う牧村だった。

「今からな」

「頼んだよ。くれぐれも事故には気をつけてね」

「事故はない」

これまた素っ気無い言葉だった。

「それはだ」

「ないのかい」

「あのサイドカーでそれはない」

博士から錬金術等まで使われて改造されていることは言っていない。だがそれにより故障をせず事故もしないようになるまでに改造されているのは事実だった。

### 第三十七話 光明その十四

「だからだ」

「そういう過信は危険だよ」

「過信か」

「サイドカーはそれでもあんたは違っただから」

彼自身はだというのだ。

「人は失敗するものだからね。だからそれをしないようにね」

「注意しておくのか」

「そういうことだよ」

こう話すのであった。

「それでわかったね」

「そうだな。言われてみればそうだな」

「そうよ」

「俺だけで事故を起こすのはいいが」

それはいいというのだった。

「しかしだな」

「他人を巻き込まないようにね」

「そういうことだな」

「そうよ。それでだけれど」

「それでか」

「事故を起こして相手が若しね」

その相手のことも孫に話すのだった。

「変なのだったら問題だからね」

「変な奴か」

「世の中色々な人間がいるものだよ」

「そうだな。中にはな」

「ヤクザやゴロツキだっているんだよ」

こうした存在のも話に出した。

「そういう手合いだったらね」  
「問題か」  
「まあ。あんただったら」  
孫をちらりと見てまた言った。  
「少なくとも変なのが相手だったら」  
「叩きのめす」  
返答はこれだった。  
「それだけだ」  
「相手がヤクザ屋さんでもだね」  
「叩きのめすのが問題なら」  
「そういう時は弁護士だね」  
それだというのだった。この辺りは流石に年の功であった。  
「それを呼ぶんだね」  
「それが一番か」  
「保険会社はいいものだよ」  
また孫に話した。  
「本当にね」  
「そういう経験があるのか」  
「人間生きていれば一度はあるよ」  
「事故の経験はか」  
「そうだよ、あるよ」  
「こつ孫に告げる。」  
「お爺さんだつてね」  
「事故を起こしたか」  
「相手に保険のことは別にタイヤを全部換えたいって言われてね」  
「タイヤを」  
「そうだよ、タイヤをね」  
「事故で破損したタイヤ以外にか」  
「全部だつていうんだよ」  
「こつ孫に話すのである。」

「おかしいって思うよね、これは」

「事故を起こした場所が済むのならな」

「それとは別について言ってきてね。保険会社がそれを聞いて」

「どうなった」

「その話は自分達を通してしてくれって言ってくれたんだよ」

世の中色々な人間がいる。中にはそうした妙なことを急に言い出す人間がいるということである。普段まともに見えてもそう言うのである。

「弁護士も出すって言ってね」

「それでは話は」

「その話はなしになったよ」

無事そうなったというのである。

「いいことにね」

「それは何よりだったな」

「全くね。とにかくね」

「とにかくか」

「そういう人も世の中にはいるんだよ」

「そうか」

「それは覚えておくといいよ」

また孫に話した。

第三十七話 光明その十五

「事故は絶対に起こるってこととね」

「色々な人間がいることか」

「それを常に頭において考えるといいよ」

また話したのだった。

「よくね」

「わかった。それではだ」

「それでは？」

「それを踏まえて行って来る」

これが今の牧村の言葉だった。

「あいつを迎えにな」

「そうしてくれると有り難いよ。あと来期」

今度は牧村の名前を呼んでの言葉だった。

「一番大事なことを言っておくよ」

「何だ、それは」

「あんたは私とお爺ちゃんの孫だよ」

微笑んで彼に言うのである。

「未久もね」

「二人共か」

「二人共同じ位に可愛いんだよ」

そしてこつこつも言うのだった。

「それはわかっておくんだよ」

「孫か」

「そうよ、孫なんだよ」

目も温かいものになっていた。

「孫だからね」

「孫か」

「中にはそうじゃない人もいるけれど」

一応こつ前置きをしてだった。

「皆子供や孫は可愛いものだよ」

「皆か」

「人間ならね」

それならばというのだ。

「だからね」

「わかった。ではだ」

「気をつけて行って来るんだよ」

行こうとするその孫への言葉だ。

「いいな」

「そうさせてもらおう」

こうして妹を迎えに行く。そしてだ。

駅に着くとだ。もう彼女が明るい顔でいた。黄色のタンクトップに白いひらりとした感じのミニスカートだ。リュックを背負って素足を見せている。

その彼女がだ。すぐに兄に言ってきた。

「今来たところだったのよ」

「いいタイミングだったか」

「うん。ただ」

「ただ？」

「お兄ちゃんのサイドカーって相変わらず目立つね」

言うのはこのことだった。

「夜の中でもすぐにわかったわ」

「すぐにか」

「ええ、すぐにね」

わかったというのである。

「目立つから」

「黒い色でもか」

「銀色がね、夜の中で光るから」

「それでか」



「うん、それでなのよ」

「こう兄に話す。」

「わかったのよ」

「それでか」

「しかも普通のバイクじゃなくて」

「サイドカーだからか」

「余計にね。目立つのよね」

「こう話すのだった。」

「凄くね」

「夜の中で目立つのはいいことだな」

「そうね。事故も起こりにくいし」

未久もそれには頷く。頷きながらサイドカーのその側車に乗る。

そのうえで中にあるヘルメットを出してだ。それを両手に持つのであった。

「目立つとね」

「目立つのはこうした場合いいな」

「そうね。確かにね」

「事故に遭わなくて済む」

「ええ。それに」

さらに言う未久だった。

「見つけやすいしね、待つ方もね」

「そういうことだな。なら行くか」

「お爺ちゃん元気にしてる？」

「ああ、元氣過ぎる程だ」

「こう妹に答える。」

第三十七話 光明その十六

「今日も素振りを何百、いや千本はしていた」

「千本もなの」

「素振りだけでな」

そうしていたと話す。

「他にも色々としていたな」

「相変わらず矍鑠たるっていうの？」

少し難しい言葉を出す未久だった。

「そういふ感じよね」

「そしてお婆ちゃんもだ」

「相変わらず元気なのね」

「元氣過ぎる程だ。それでだ」

「それで？」

「今からそこに行く」

話をかなり先に進めた言葉だった。

「わかったな」

「ええ、それじゃあ晩御飯もね」

「食べていないのか、まだ」

「あれっ、連絡してなかったっけ」

「聞いていないが」

こつ妹に答える。

「今始めて聞いた」

「お婆ちゃんには携帯でお話したけれど」

「お婆ちゃんにはか」

「お兄ちゃんには伝わっていなかったのね。けれどいいわ」

それでもだというのだった。

「お婆ちゃんが知ってるのならね」

「それでいいか」

「ええ。じゃあ行こう」

兄に対して出発を勧める。

「お屋敷にね」

「よし、行くぞ」

「それじゃあね」

こう話してだった。二人で屋敷に戻る。サイドカーは速度こそ出しているがそれでも安全な運転でだ。祖父母のいる屋敷に戻ったのであった。

屋敷に戻りだ。そうして夕食になった。とはいっても未久だけだ。牧村は既に食べていたので横で菓子を食べていた。そうした団欒だった。

未久は冷奴とカレイの煮たものを食べながらだ。兄に問うてきた。

「ねえ」

「ねえ？」

「その笹団子私のもある？」

牧村が食べているのは笹団子だった。それを見ながらの問いだった。

「それも」

「勿論だ」

食べながら妹の問いに答える。

「アイスもある」

「アイスもあるの」

「バナラだが。どうだ」

「それもいいわね」

話を聞いてだった。彼女は悩む顔になった。そのうえでの言葉だった。

「バナラも」

「どちらかだ」

「両方は駄目なのね」

「そうだ、どちらかだ」

これは外せないというのだ。  
「夕食を食べてからだ。どちらかだ」  
「うっん、どうしようかしら」  
「まずは夕食だぞ」  
「それはわかってるわよ」  
「当然といった返答だった。」  
「それはね」  
「ではどうしてそう言う」  
「だから。悩んでいるのよ」  
「悩んでいるのか」  
「そっよ、悩んでいるのよ」  
「こっ兄に返すのである。」  
「どっちにするかね」  
「笹団子がバナナかか」  
「どっちも捨て難いけれど」  
「――言っておく」  
「ここでまた言う兄だった。」

第三十七話 光明その十七

「いいか」

「何を？」

「笹団子は今日までだ」

言うことはそれだった。

「今日までだ」

「今日までなの」

「そしてバニラは日持ちする」

アイスクリームだからこれは当然だった。

「それならどうする」

「お団子にするわ」

今度は即答だった。

「それにするわ」

「団子にするか」

「ええ、決めたわ」

こう兄に返す。

「それでね。ただ」

「ただ？」

「その笹団子だけれど」

今度は団子を見ながらであった。

「随分美味しそうね」

「お婆ちゃんの手作りだ」

「そう、お婆ちゃんね」

「美味い」

感想はこれ以上不要だった。

「それは言っておく」

「そう、美味しいの」

「是非食べるといい」

そしてこう言って勧めるのだった。

「残った分は好きだけな」

「それで幾つ残りそうなの？」

「三つだな」

数の話にもなった。

「三つ残る」

「そう、三つね」

「俺は五つ食べたいがな」

「四つにして」

むっとした顔で兄に告げる。

「いいわね、四つよ」

「俺が四つか」

「兄妹なんだから半分こにしてよ」

「俺は身体が大きい」

「私は志が大きいのよ」

強引に言い返す未久である。

「だから、いいわよね」

「それで四つか」

「そうよ。五つ食べたら許さないから」

完全に本気の言葉だった。

「それはいいわね」

「仕方ないな。では四つだ」

「当たり前でしょ」

むっとした顔で兄に返す。

「それは」

「それもそうか」

「そうよ。兄妹じゃない」

そしてこうも言うのだった。

「兄妹は公平に。お母さんいつも言っているじゃない」

「そういえばそうだったな」

「そうよ。だから半分こよ」  
「わかった。ではそうする」  
「全く。油断も隙もないんだから」  
「御前といると自然とそうなる」  
「自然って？」  
「またしてもむっとした顔で兄に返す。」  
「どうということよ、それ」  
「御前がいつも何でもかんでも好き勝手に先に食べるからだ」  
「お兄ちゃんの分はいつも残してるじゃない」  
「十個あつたら三個だけだな」  
「つまり三割程度というわけである。随分な取り分である。」  
「それだけだな」  
「ちゃんと十個あつたら四個は絶対に残してるじゃない」  
「それでも御前の方が多いぞ」  
「それでも残してるわよ」  
「言葉に少し逆キレも入ってきていた。」  
「ちゃんとね」  
「それで今は半分こか」  
「悪い？」  
「不公平も甚だしいな」  
「表情を変えずに抗議した。」  
「それは」  
「女の子はそれでいいのよ」  
「最早論理も何もなかった。」

第三十七話 光明その十八

「それでね」

「太るぞ」

「運動してるから太らないの」

「こう返すのはいつも通りだった。」

「だからいいのよ」

「全く。相変わらずだな」

「気にしない気にしない」

「俺の食べる分は気にする」

「大体いつも御飯私の倍は食べてるじゃない」 8

今度はこう返す未久だった。

「それでまだお菓子もだなんて」

「では御前もそう食べる」

「食べないから」

少しむっとした顔で返すのだった。

「っていつか食べられないから」

「それでも甘いものはか」

「だから。言うでしょ」

「別か」

「そうよ。甘いものは別腹よ」

言いながら今は御飯を食べている。それももうすぐ終わりだった。

「だからいけるのよ」

「麺類もそうなのか」

「麺類もって？」

「ここで聞いた言葉だな」

「うん」

「そう言っていた人がいた」

妹に対しての言葉である。



「麺類は別腹だとね」

「そうなの」

「確か焼肉屋の前だったな」

「あっ、そうそう」

焼肉と聞いてしまった。未久はその顔をさらに明るくさせた。そのうえで言葉である。

「それ聞いて思い出したけれど」

「何だ」

「明日焼肉食べに行かない？」

「今度の提案はそれだった。」

「焼肉ね。行かない？」

「焼肉か」

「そう、焼肉」

見れば目も輝かせている。そうしてまた言うのだった。

「それでどうかしら」

「焼肉か」

「何か足りないって思ったのよね」

「何かか」

「そうよ。大阪の美味しいものはもうかなり食べたけれど」

「何処までも食べ物から離れない。」

「そうそう、大阪は焼肉もあつたのよね」

「名物の一つか」

「そうなってるのよ。じゃあ明日はね」

「焼肉か」

「鶴橋連れて行って」

「こつ兄にねだる。」

「鶴橋にね。御願いね」

「鶴橋か」

「サイドカーだったらすぐよね」

「一応はな。だが」

「だが？」

「食べてばかりだな」

少し真剣な顔での今の言葉だった。

「本当にな」

「いいじゃない、大阪なんだし」

未久の言葉はそれも当然というものだった。

「そうでしょ？大阪なんだし」

「大阪ならいいのか」

「いいのよ。だから何度も言うけれど食いだおれ」

それで説明がつくからかえって不思議ではあった。牧村にとって  
は。

「それじゃあ食べないとね」

「明日は焼肉か」

「それにキムチと冷麺よ」

その二つも忘れないというのだ。

「だって焼肉なんだから」

「その二つはか」

「ホルモンも食べましょう」

勿論これも忘れていなかった。

「明日もお腹一杯食べないとね」

「本当に食うものだな」

「人間食べられる時に食べておかないと」

今度の言葉はこれだった。

「後悔するし」

「だからか」

「だから行きましょう」

最早それが規定事項となっている言葉だった。

第三十七話 光明その十九

「明日は鶴橋ね」

「わかった。それではな」

そしてそれに頷く彼だった。

「明日の昼にだ」

「じゃあその前に」

「その前に？」

「宿題とお腹空かせる為に走ったりしないかね」

こんなことを言うのだった。

「本当は水泳が一番いいけれど」

「走るのか」

「あと柔軟もね。身体って少し動かしていないとすぐにカチコチになるから」

「それはいいことだな」

「そうよね。これでもトレーニングは欠かしていないのよ」

少し真面目な顔になっての言葉だった。

「ちゃんとね」

「それはか」

「ちゃんとしているのよ」

また言うのだった。

「一応ね」

「一応か」

「部活に追いつけるだけっていうかレギュラーだし」

「レギュラーだったのか」

「そうよ、これでもね」

こう兄に話す。

「ちゃんとしないとすぐに身体が硬くなってそれだけで駄目になるから」

「体操も難しいな」  
「そうよ、難しいのよ」  
「こう話すのだった。」  
「これがね。テニスやフェシングと同じよ」  
「同じか」  
「少ししてないと錆びるのは同じよ。常にしていないとね」  
「そういうものか」  
「そして少しでも油断すると」  
「未久のその顔が厳しいものになる。少しばかりではあるが。」  
「怪我するから」  
「体操は特にだな」  
「背が伸びないのはいいけれどね」  
「それはいいのか」  
「私小柄でいいから」  
「それでいいというのである。」  
「背のことはね」  
「小柄でもか」  
「だって。小柄でももてるし」  
「その理由はこれだった。」  
「だからいいのよ」  
「小柄でもか」  
「女の子はそれでもいいのよ」  
「そうだというのである。」  
「小柄でもね」  
「男の人はそうじゃないみたいだけれど」  
「背はよく言われるな」  
「お兄ちゃんが高いからその分は大丈夫ね」  
「低いと言われたことはない」  
「実際そうなのだという。」  
「それはな」

「そうよね。まあ私も男の子だったら背は欲しかったわ」  
欲しいというのである。

「その場合はね」

「男ならか」

「あくまで男の子だったらよ」

割り切っていた。そうしてであった。

食べ終えたところだ。また話す二人だった。

未久は笹団子食べていた。それを食べながらの話だった。

「風呂だが」

「お風呂ね」

「入れ」

一言だった。

「いいな」

「お兄ちゃんもう入ったの」

「最後に入る」

そうするというのである。

第三十七話 光明その二十

「最後にだ」

「そう、最後にね」

「そうだ、最後に入る」

「何でなの？それは」

「少し座禅をする」

「ふうん、座禅ね」

「それをしてから入る」

「こう妹に話す。」

「それからだ」

「そう、それからね」

「それから入る」

「また言った。」

「ゆっくりとな」

「成程、それでなのね」

「だから先に入るといい」

「こう言って妹に勧める。」

「わかったな」

「わかったわ。お爺ちゃんとお婆ちゃんはもう入ったの」

「スーパ―銭湯に行った」

「あれっ、そっちな」

「お爺ちゃんとお婆ちゃんの趣味だからだ」

「そうだというのである。」

「だからだ」

「ふうん、相変わらずお風呂好きなのね」

「最近は何でも温泉に入られると喜んでる」

「それはそうよね。サウナだってあるし」

「サウナは好きか」

「好きよ」

答えながらまた笹団子を食べるのだった。

「汗かいてその分綺麗になれるしね」

「だからか」

「そうよ。だからね」

にこりとしていた。どうやら本当にサウナが好きらしい。それが窺える言葉だった。

未久は牧村にさらに話してきた。

「それでなのよ」

「サウナは美容にいいのか」

「最高にいいのよ。じゃあ私も明日ね」

「入るのか」

「入りたいわね」

また言うのであった。

「是非ね」

「なら連れて行く」

「有り難う」

「そこまで言うなら俺もだ」

「綺麗になりたいの？」

「健康になりたい」

言うのはこちらだった。

「俺はだ」

「健康なの」

「そもそも綺麗になるのもだ」

「ええ」

「健康であってこそだな」

そこが原点だというのだ。これが牧村の考えだ。

「そうだな」

「まあそうよね」

未久も兄のその言葉に頷く。

「健康じゃないとどうにもならないし」  
「健康は幸福の原点だ」  
牧村はこうまで言った。  
「そもそもここからはじまる」  
「うっん、言われてみれば」  
「だからだ。俺はその為に行って来る」  
「ねえ。そのサウナだけれど」  
「何だ」  
「スポーツジムとかある？」  
このことを問うのだった。かなり不意にだ。  
「そっちはあるの？」  
「確かな。あつたな」  
「プールは？」  
「それもある」  
「よし、じゃあわかったわ」  
未久はここまで聞いて腕を組んで述べた。  
「それじゃあそこにね」  
「行くんだな」  
「一緒に泳ぐわ」  
「それもするといつのである。」  
「水着も持って来たし」  
「用意がいいな」  
「泳ぐのも好きだしね」  
にこりと笑って言うのであった。  
「だからね」  
「太らない筈だな」  
「身体をよく動かすからよね」  
「だから太らないということだな」  
「そういうことね。それじゃあまた明日ね」  
「行くか」



「行くとしますか。明日ね」  
兄妹で言い合ってた。そのうえで明日のことも話すのだった。  
牧村は落ち着きの中にいた。それは戦いとは完全に別の世界であつた。

第三十七話 完

2010・5・17

### 第三十八話 老婆その一

髑髏天使

#### 第三十八話 老婆

牧村は未久を連れてそのサウナに向かった。そこはスーパ―銭湯もありそしてスポーツジムやプールもあった。そうした場所に来たのである。

入り口は白く非常に清潔な場所だった。右手に看板が見える。建物は一階建てで風呂屋を思わせる。横に大きくかなり広い場所だ。駐車場も相当な大きさだ。

その入り口に来た。するとだ。

「むっ」

「待ってたわよ」

若奈もいた。赤いティーシャツに黒いジーンズという格好でだ。入り口をすぐに入ったところで立っていてだ。牧村に挨拶をしてきたのだ。

「少しだけね」

「まさか」

「そうよ、私が連絡したのよ」

やはりであった。ここで未久がにこりと笑って言うのだった。

「若奈さんにね」

「毎日メールのやり取りしてるから」

若奈からも笑顔で言ってきたのだった。

「だからね」

「それでなのよ。若奈さんにも来てもらったのよ」

「それでか」

「それでなのよ。それで一緒にね」

「それはいいがだ」

「いいが？」

「何故俺に黙っていた」

妹を咎める目で見据えての言葉だった。

「それは何故だ」

「サプライズよ」

「驚かせる為か」

「こういうことは最後まで隠した方が面白いじゃない」

無邪気な顔で言うのだった。

「そうでしょ？」

「趣味が悪いな」

「悪くないわよ。お兄ちゃんをあつと驚かせたくてね」

「私は止めたんだけれど」

若奈は困った顔で言う。見ればその背にはリュックがある。小柄な身体にそのリュックがやけに大きく見える。そしてよく似合ってたもいた。

「それでもね」

「こいつはいつもだ」

「うふふ、慣れたでしょ」

「慣れたくて慣れた訳じゃない」

無然とした声で返す。

「全く」

「じゃあ入りましょう」

兄にこれ以上言わせなかった。この辺りは見事である。

「それじゃあね」

「そうよね。じゃあ最初は」

「プールね」

未久の言葉だ。

「プールに行きましょう」

「そこになの」

「身体を動かしてそれでサウナにしましょう」

「そうね。その方がいいわよね」

「お兄ちゃんへのサービスにもなるしね」

「サービスだと」

「そう、サービスよ」

それだということである。

「これはサービスなのよ」

「どういうことだ、それは」

「プールよ」

未久はにこりと笑って述べてくる。

「プールなのよ」

「それがどうした」

「鈍いわね。プールは何で入るの？」

「水着だ」

「そう、水着よ」

ここでさらに笑ってきたのだった。

「水着なのよ。わかったわね」

「それでか」

「美少女二人の水着姿よ」

こづも言うのだった。

### 第三十八話 老婆その二

「感謝しなさい、いいわね」

「ちよつと未久ちゃん」

若奈がここで顔を赤らめさせて未久に言う。

「それは」

「いいじゃないですか。お兄ちゃん朴念仁ですし」

「それでも」

「若奈さんも積極的にいかないと駄目ですよ」

逆に若奈に対して言うのであった。

「もつと積極的に」

「積極的に」

「だから今回だつてこうしてですね」

「それは有り難いけれど」

「だから。いきましよう」

兄に聞こえていることは意に介してはいなかった。彼がこうした

ことにはお世辞にも敏感とは言えないことをわかつてのことなのだ。

「もつともつと積極的にね」

「そうですね」

「そうですねよ。じゃあ早速」

「中に、なのね」

「はい、中に行きましよう」

こうしてであった。二人で女性用の更衣室に入る。牧村は黒いトランクスタイルの水着になった。そのうえでプールに来るとであった。

「お待たせ」

「今来たばかりだが」

「それでもお待たせ」

笑いながら言ってきたのは未久だった。

「私達も今来たばかりだけれどね」

「そうなのか」

「そうよ。それでどう?」

さらににこにことなっていた。着替える前よりもだ。

その彼女の姿はだ。ビキニだった。水色で所々に赤と白のラインが入っている。そんなかなり派手と言ってもいい水着姿であった。そして若奈は白いワンピースである。二人の姿は実に対象的だ。しかしどちらも胸は小さいがそれでもかなりスタイルはよかった。かなりだ。

周りの視線が集中している。未久はそれを気にすることなく兄に言うのだった。

「それじゃあね」

「泳ぐか」

「ええ。何なら競争する?」

「水泳も重要なトレーニングだからな」

「そうよね。それじゃあね」

これで話が決まった。そしてだ。

若奈がここでだ。言うのだった。

「それじゃあ向こうの五十メートルのプールに行きましょう」

「あそこか」

「ええ。あそこでタイムを見るから」

こっ牧村に言うてきた。

「だからね」

「そうか、悪いな」

「それでだけれど」

「私も一緒に泳いでいいかしら」

未久もここで言うてきた。

「それじゃあ駄目かしら」

「いいけれど」

「御願いますね。ただ」

「ただ？」

「若奈さんの水の中に入らないんだったら上からジャージ着た方がいいですよ」

「ジャージを？」

「下もちゃんと」

「それもだというのである。」

「着ておいた方がいいですよ」

「どうしてなの？それは」

「だって。今でも視線を集めていますし」

これは若奈のせいだけではなかった。見れば彼女のスタイルはかなりいい。小柄で胸は小さいがそれでも均整がとれている。とりわけ足が見事であった。

「ですから」

「だからなの」

「私もお水の中に入らないんだったらジャージ着ますよ」  
にこりと笑っての言葉をまた言ってみせる。

「さもないと声かけられて大変ですよ」

「そんなになの」

「私が男だったら絶対に若奈さんに声かけますよ」

「こつも言うのだった。」

「ですからね」

「そう。だったら今から」

「はい、そうして下さい」

「また若奈に勧める。」

「そういうことで」

「ええ、それじゃあ」

「さて、それじゃあお兄ちゃんは」

「ああ」

兄への話になっていた。

### 第三十八話 老婆その三

「準備体操してそれからね」

「泳ぐのだな」

「そう、泳いで」

まさにそうしろというのである。

「それからね」

「じゃあ御前もだな」

「勿論よ。じっくりとやるわ」

準備体操をというのである。

「それはね。柔軟からね」

「柔軟からか」

「当たり前でしょ」

それを当然だというのである。

「それもね」

「当然か」

「そうよ。まずは準備体操」

それは欠かせないというのである。

「絶対にね」

「それは厳しいのだな」

「そうよ。怪我したりしたら何にもならないじゃない」

「それに水泳だから」

横から若奈が話す。

「万が一ということがあるわね」

「心臓麻痺とかになったらね」

「大事よね」

「そうよね。だから余計に」

「身体は動かすの」

また話す未久だった。



「ちゃんね」

「そうだな。それでは俺もな」

「ちゃんと準備体操してよね」

「ああ、わかつている」

妹のその言葉に頷いてであった。そうしてだ。

彼も準備体操に入った。前では妹がかなり念入りにしている。確かに体操部だけあってだ。その身体の柔らかさはかなりものだった。

準備体操の間に若奈はジャージを着てきた。上下共に白である。

それで二人のところに戻るとだ。未久はまだ柔軟をしていた。

アキレス腱まで伸ばす。本当に念入りであった。

「足までするのね」

「はい、そうなんです」

若奈に対して述べていた。

「いつもそうしてますから」

「とにかくストレッチは念入りになのね」

「先生に言われてるんです、部活の先生に」

「ストレッチはしろって？」

「はい、そうです」

そのものずばりなのだというのだ。

「ですから」

「基本的に忠実なのね」

「体操って身体中使いますよね」

「それもかなりハードにね」

「だから余計にそうしろって」

このことを話しながら尚もストレッチをしている。

「それでなんです」

「わかったわ。そういえば牧村君も柔軟は欠かさないわよね」

「怪我は駄目だ」

彼もこう言うのだった。

「それで何もかも終わってしまいかねない」

「怪我は付き物にしてもね」

「そうだ、しないよりする方がずっといい」

牧村は今は柔軟はしていない。しかししたことは事実だ。  
「だからだ」

「そういうことね。それじゃあ後は」

「泳ぐか」

「そうしましょう。未久ちゃんも一緒よね」

「はいっ」

明るい返答だった。

「そうさせてもらいます」

「わかったわ。それじゃあね」

「すいません、何かここでもトレーニングで」

「いいのよ。私も後で泳ぐし」

「そうなんですか」

「プールに来たら泳がないと」

若奈は微笑みながら述べた。

### 第三十八話 老婆その四

「だからね」

「そうですね。やっぱり泳がないと」

「ええ。それじゃあね」

「はい、はじめましょう」

二人で話を中心に進めて牧村は少し除け者になっている感じであった。しかしそれでも話を進めてであった。そのうえで泳いだ。それが終わってからだった。

プールから出て着替えてサウナで汗を流して全てを終わってからだ。リビングでくつろぎながらアイスクリームを食べて。未久は笑顔で言うのである。

「最後はやっぱりこれよね」

「アイスクリームか」

「そう、アイスよ」

まさにそれだというのだ。笑顔でそのソフトクリームに似た形のアイスクリームを食べている。その色はストロベリーのもだった。

「これよね」

「アイス好きだな」

「大好きよ」

満面の笑顔での言葉である。

「他にも一杯好きなのあるけれど」

「未久ちゃんは甘党なのね」

「お兄ちゃんもそうですけれどね」

「そうそう、牧村君もね」

「俺もか」

「だって今」

兄が今食べているものを見る。するとだ。

「ほら、クレープ」

「食べて悪いか」  
「中生クリームとチョコとバナナで一杯よね」  
「それが美味しい」  
「それよ、甘いもの大好きじゃない」  
「また言う未久だった。」  
「それもかなりね」  
「否定するつもりはない」  
「っていうかできないわよね」  
「そしてそのクレープを見て意地悪く笑ってみせたのだった。」  
「今そんなの食べて」  
「そうだな」  
「お兄ちゃんってクレープも好きよね」  
「大好きだ」  
「実際にそうだと答えるのだった。」  
「本当にな」  
「そうよね。アイスだって好きだし」  
「結局あれ？甘いものは何でも好き？」  
「そういえば和菓子も好きよね」  
「横から若奈も言ってきた。彼女はソフトクリームを食べている。」  
「牧村君って」  
「それも好きだ」  
「そうよね、実際に」  
「昔からね。和菓子も何でも食べるわよね」  
「甘いものはどれでもいける」  
「いいことかしら」  
「それを聞いてだった。アイスを食べながらふと言ったのだった。」  
「やっぱり」  
「好き嫌いが無いのはいいことですよ」  
「こう述べたのは若奈だった。」  
「やっぱり」

「そうなるのね」

「そうなると思っわ。ただ」

「ただ？」

「甘いものは注意も必要だけれど」

ふとだった。言葉が少し真面目なものになったのだった。

「それもね」

「太るからですね」

「それと糖尿病」

それもあるというのである。若奈の話はいささか栄養士を思わせるものになっていた。トレーナーらしいといえばらしいのではあるがだ。

「それにも気をつけないといけないから」

「幾ら身体を動かしてもですね」

「それでも油断していたらなるから」

「若くてもですね」

「若年性の糖尿病もあるわよ」

ソフトを食べながら言うのである。そうだというのだ。

### 第三十八話 老婆その五

「それも危険だし」

「ですよ。十代でも下手したらなりませんよ」

「なるわよ。そしてそうならない為には」

「身体をよく動かしてですね」

「そういうことよ。節制も大事だけれどね」

だがそれは幾分かどうでもいいという感じだった。言葉にそれが出ている。

「やっぱり身体をじっくりと動かしてね」

「では帰ってからもだな」

「トレーニングするのね」

「当然だ」

言うまでもないといった口調で妹に述べた。

「そういうことだ」

「そう、凄いわね」

「未久ちゃんは今日はこれで終わりなのね」

「滅茶苦茶泳ぎましたから」

だからだと。アイスを食べ続けながら答えたのだった。

「ですからもう」

「わかったわ。それじゃあね」

「サウナも入りましたし。すつきりしましたし」

「牧村君もそれは同じだけれど」

「俺はまだする」

こう返すだけの今の彼だった。

「まだできる」

「だからなのね」

「そうだ、それでだ」

また言っただけであった。そのうえでだ。

食べ終わると少し休んでから屋敷に戻った。未久は後ろに乗り兄に掴まる。若奈が側車に乗ってそのうえで三人で戻ってだ。それでトレーニングをするのだった。

それが終わるとだ。夕食を食べて夜になった。その時にだった。

屋敷の外で涼んでいた。庭で池のほとりにいる。そこには鯉達がいる。しかし今は闇夜の中で姿は見えない。その鯉達ではなく上の黄色い月を見ていた。その時だった。

「お久し振りですね」

「ここまで来たのか」

「はい、とはいってもです」

あの老人だった。温厚な笑みでだ。庭にある松の木陰から出て来たのである。

「今は何もしません」

「闘わないというのか」

「魔物達もいませんし」

穏やかな声で言うてくる。

「それにです」

「それにか」

「今の貴方と戦ってもです」

「面白くないというのか」

「そうです。あまり戦いにお心を向けていませんね」

「確かにな」

牧村の方も頷いてみせたのだった。

「それはな」

「だからです。それはです」

「しないというのか」

「今日は別の用件で来ました」

「ではそれではだ」

牧村の方から彼に対して問うた。

「それは何だ」

「はい、それはです」  
そしてだ。老人は穏やかに話してきたのだった。  
「最後の魔神のことですが」  
「その十二柱目か」  
「間も無くここに来ます」  
「そうだとするのである。」  
「貴方の前に」  
「そうか」  
「思われることは？」  
思わせぶりな笑みでの問いだった。  
「それで」  
「思うことがないと言えば」  
「それはまた剛毅ですね」  
「剛毅とは思わない」  
「そうではないというのだった。」  
「ただそう思うだけだ」  
「左様ですか」  
「しかし。それで十二柱か」  
「これで全て揃った次第です」  
「どうした相手かを見る」  
「それはだというのだ。」



第三十八話 老婆その六

「だが」

「だが？」

「貴様達と戦うにしろ」

「はい」

「妖魔達か」

「このことも言うのであった。」

「あの者達にしてもだ」

「ほう」

「老人も今の彼の言葉に反応を見せた。そうしてだ。」

「目の光を変えてだ。こう言ってきた。」

「御存知でしたか」

「話は聞いている」

「こう返してもみせる。」

「既にな」

「そうですね。実はですね」

「実は？」

「彼等は私達にとっては非常に好ましくない存在なのです」

「このこともまた牧村に話すのであった。」

「何故ならですが」

「それは何故だ」

「私達は戦いを楽しみと考えています」

「そうだったな。確かにな」

「しかし彼等は違います」

「そしてだ。次に言う言葉は。」

「彼等は破壊と殺戮、いえ」

「いえ？」

「混沌の存在です」

「混沌か」

「私達もまた秩序を重んじています」

「秩序をか」

「はい、秩序をです」

その彼等の秩序も話すのであった。

「戦いにおいてもルールとモラルを見えています」

「しかし妖魔はか」

「混沌です」

秩序と対極にある。それだというのである。

「そうした存在ですから」

「だからこそ対立するのだな」

「そうなります。私達も彼等についてはまだ殆ど知らないのですが」

「殆ど!？」

牧村は魔神である老人のその言葉に目の色を変えた。

「どうということだ、それは」

「どうということとは」

「何故魔神が知らない」

問うのはこのことだった。

「それは何故だ」

「何故か、ですか」

「何万年も生きているな」

「はい」

老人もこのことは頷いてみせた。

「その通りです」

「では何故知らない」

「我々もです」

「我々もか」

「知らないこともあります」

「そうだとするのである。」

「ましてやです」

「ましてや？」

「それが過去ならば」

「過去？」

「私達の前の時代の存在ならばです」

その妖魔達への言葉だ。

「知ることができないのも道理ではないでしょうか」

「記録は残っていないかったのか」

「人間は残っていたようですね」

「微かに、ではないようだがな」

「しかし残していたのは事実です」

それはだというのである。

「ですが我々は」

「知ることができなかったか」

「残念ながら」

何時になくその言葉に感情を入れている老人だった。その感情は悔しさであり悲しさでもあった。そうした感情を珍しく見せていたのである。

「その通りです」

「そうか」

「そしてです」

ここまで話したうえでまた牧村に対して言ってきた。

### 第三十八話 老婆その七

「貴方はどうされるのですか」

「俺か」

「はい、貴方はです」

それは今の彼を見ての言葉ではなかった。髑髏天使としての彼を見てである。そのうえで彼に対して語ってきている、そうした言葉だった。

「どうされますか」

「若しもそれが俺に向かう存在ならば」

「はい」

「戦う」

これが返答だった。

「その場合はだ」

「左様ですか」

「貴様等はどうする」

自分のことを答えたうえで老人に対して問う。

「それでだが」

「無論私達もです」

「戦うか」

「本来は髑髏天使との戦いを楽しむのが我等ですが」

その髑髏天使である彼を見ながらの言葉である。

「しかし彼等と戦うのもです」

「どうだというのだ？」

「一興です」

それだというのである。

「ですから」

「そうか、戦うのか」

「私達に向かつて来るならば尚更です」

その場合についてもだ。老人は言うのであった。

「戦い。そしてです」

「倒すか」

「はい、それだけです」

「そうだとしたのであった。

「そういうことです」

「そうか、わかった」

「しかし」

「しかし？」

「妖魔ですか」

老人は表情は変えない。しかし何か引つ掛かるものを見たようだった。

「何かしらですが」

「どうだというのだ、今度は」

「不吉な、禍々しいものを感じずにはいられませんね」

「そうだな。それは俺もだ」

「ふむ。貴方もですか」

「何故かはわからない」

「それだもだという。牧村の言葉は変わらない。

「それでも感じるものは感じる」

「左様ですか」

「そもそもが倒さなくてはならない相手かも知れないな」

「髑髏天使としてですね」

「そんな気もする。さて」

ここまで話してだった。彼はまた言うのであった。

「話はこれで終わりか」

「はい、お話することはそれで」

「最後の魔神か」

「ですが今度は戦わないでしょう」

このことも言ったのであった。

「今の貴方とは」

「俺とはか」

「申し上げた通りどうやら貴方との戦いよりも前にです」

「妖魔か」

「それについて調べないといけません」

「だからだというのである。」

「ですから」

「そうだな。それでは俺もだ」

「貴方との戦いが無いのは寂しいのですが」

「多くの魔物達を今まで倒してきたがな」

「彼等も言っていますよ」

ここでだった。老人は奇妙なことを言った。少なくとも牧村が聴いてはそうだった。

「また闘いたいと」

「まただと？」

「そうです、またです」

「こう言うのである。」

「また闘いたいと」

「死んだのではなかったのか」

牧村は怪訝な顔で老人にこのことを問うた。

「確か」

「はい、死にました」

老人もそれは認めてきた。

### 第三十八話 老婆その八

「ですが」

「ですがか」

「はい、しかし魔物には多くの命があります」

「こう言うのである。」

「そう、幾つもです」

「九つの命だともいうのか」

「ははは、御存知でしたか」

牧村の今の言葉を聞いて笑って述べてみせてきた。

「我々魔神は不死身ですが魔物は九つありまして」

「一度死んだだけではか」

「暫くすれば冥界から帰ってきます」

「そうだというのである。」

「それだけです」

「魔物らしいな。それは」

「それは妖怪もですが」

妖怪についてもだというのである。

「それはです」

「妖怪もか」

「妖怪と魔物は元々同じものですから」

老人はこのことも指摘してみせた。

「実際に」

「だから同じか」

「はい、同じです」

また答えてみせる老人だった。

「どちらも九つの命があります。それに」

「それにか」

「命は九つから減ることがありません」

「こうだともいうのであった。

「ですから実質的にはです」

「不死身か」

「はい、そうなります」

まさにそうだというのである。

「魔物も妖怪もです」

「不死身か」

「貴方もどうでしょうか」

こうして言ってもきたのだった。誘いの言葉だった。

「魔物になられますか」

「魔物にか」

「十三柱目の魔神でもいいですが」

こつとも言ってきたのであった。

「それでどうでしょうか」

「悪いが遠慮する」

牧村は素っ気無い声で返した。

「俺は魔物になるつもりはない」

「では魔神は」

「余計にない」

それにもだというのだった。

「何もかもだ。そしてだ」

「妖怪にもなられませんか」

「俺は人間でいたい」

これが彼の言葉だった。

「だからだ」

「ふむ。肉体的にはですか」

「妖怪と人間の心も少し違うな」

「妖怪も魔物も妖精と言われることがあります」

「妖精か」

「確かイギリスの言葉ですが」



日本ではなくだ。その国でのことだというのが。

「そうなります」

「そうか、イギリスか」

「我が同胞人狼から聞いたことですが」

そのイギリスにいる魔神からの言葉なのだという。

「イギリスでは妖怪も魔物もです」

「妖精になるか」

「妖精はよき存在でもあり悪き存在でもある」

言葉はこうなっていた。

「そういうものだとか」

「妖精か」

「考えてみれば魔物は妖怪からなっています」

「その通りだな。それはな」

「だからそれも一理あります。つまり我々は」

楽しげに笑ってだ。次の言葉は。

### 第三十八話 老婆その九

「妖精神になります」

「そちらのか」

「はい、妖精神です」

「成程な。言い換えればそうなるか」

「はい、ですが我々は元々魔神でいいと思っています」

魔神という呼び名で満足しているというのであった。

「それで」

「貴様等が妖精かどうかはまずはいいい」

牧村もそれはいいというのであった。

「だが」

「戦うならばですが」

「そうだ。遠慮も容赦もしない」

そうだというのであった。

「これは言っておく」

「そうですね。では私から言うことはこれで終わりです」

「帰るのだな」

「ここはいい街ですから」

笑みが変わった。楽しみを前にしているものだ。

「色々と回っていきます」

「そうか。それではそうするといい」

「食べ物の特にです」

彼が言うのもまたそれであった。やはり大阪は食の街だ。それは外せなかった。

「楽しみですので」

「食べることもまた楽しみだな」

「この世でもっとも尊い楽しみではないでしょうか」

そうだというのであった。老人はだ。

「ですから。今から」

「貴様だけではないな」

「はい、他の魔神達もです」

彼等もだというのである。

「無論です」

「そうか。全員でか」

「人の余波楽しいものです」

こう言って笑いもしていた。

「では」

「また会うことになるな」

こう話をしてだった。老人は姿を消した。牧村は暫く池の中や夜空の月を見上げていた。だがそれも見飽きたのか。暫くしてその庭から姿を消した。

その次の日だった。街を歩いているとだ。横にいた若奈が声をかけてきた。

「ねえ」

「何だ」

「今からだけれどね」

こう言ってきたからの言葉だった。

「お茶飲みに行かない？」

「お茶か」

「そう、お茶ね」

彼の顔を見上げながらの言葉だった。

「今からね。どう？」

「そうだな」

そして牧村もそれに頷いてだった。

少し時間を置いてからだ。静かにいつてきた。

「近くの喫茶店にだな」

「夫婦善哉にしましょう」

若奈が言ってきた店はそこだった。あの法善寺横丁の店である。

そこだというのである。

「あそこに行きましょう」

「今から難波にか」

「ええ、駄目かしら」

やはり彼を見上げながらの言葉だった。

「今からね」

「そうだな」

「嫌だったらいいし」

若奈の言葉は譲歩も入っていた。

「それならそれでね」

「別の場所か」

「そうするし。どう?」

「わかった」

まずはこう述べた牧村だった。

「それならだ」

「ええ、それなら」

「行くか」

返答はこれであった。

「今からな」

「夫婦善哉でいいのね」

「そこでいい。それに」

「それに?」

「前にも行つた」

このことも話すのだった。

### 第三十八話 老婆その十

「知っている店だしな」

「あれっ、夫婦善哉行つたことあるの」

若奈は彼の今の言葉にその垂れ目を少し丸くさせた。

「牧村君も」

「前に妹と行つた」

このことも話すのだった。

「だから知っている」

「ああ、未久ちゃんとだつたの」

「それで二人で行つた」

「そうそう、あのお店は二人で行くものだからね」

若奈は頷きながらこう話してきた。

「一人で行く場所じゃないから」

「二人でか」

「そう、二人で」

また言うのだった。

「二人で行く場所よ」

「夫婦善哉だからか」

「どうして善哉が二つ出されるかよ」

彼女が話すのはここからだつた。

「それも考えるとね。やっぱりね」

「二人で行く店か」

「そういうこと。だからよ」

今は牧村に顔を向けて話していた。

「あそこはね。一人で行く店じゃないのよ」

「だが一人でいた客もいたな」

「随分変わった人ね」

若奈は自分の主観から首を傾げさせて述べた。

「その人って」  
「織田作之助の本を読んでかららしい」  
「ああ、成程ね」  
それを言われるとだった。彼女も納得した顔で頷くのだった。  
「それじゃそれもわかるわ」  
「それでいいのか」  
「小説の中に出て来る味を知りたいのよ」  
それだというのである。  
「それでなのよ」  
「それで一人で入ってか」  
「そういうことよ。それもありね」  
「こつも述べるのだった。」  
「あそこはね」  
「文学の店だからか」  
「よくあるのよ。作品の中に出て来る味を確かめたいってね」  
「それで実際に入ってみて」  
「食べるのよ」  
彼に顔を向けての話であった。  
「そういうことなのよ」  
「それでか」  
「牧村君はそういうことする？」  
「文学に出て来る店巡りか」  
「ええ。それはするの？」  
「意識しないがそうなっているな」  
牧村は考える目で若奈の今の問いに答えた。  
「自然とな」  
「そうなってるのね」  
「なっているな。ただ」  
「ただ？」  
「意識はしない」

このことはまた言うのだった。

「それはしない」

「つまりそういうことにはこだわらないのね」

「そうなるな」

こう若奈に述べた。

「大事なのは美味いかそうでないかだ」

「味が第一なのね」

「有名な店でもまずいものがまずい」

そしてこうも述べてみせた。

「それは事実だと思いが」

「そうね。それはね」

「事実だな」

「ほら、東京なんか行ったら」

若奈はその目を自然に顰めさせていた。そのうえで今の言葉だった。

第三十八話 老婆その十一

「おそばだけれど」

「まずいらしいな」

「口に合わないわ」

目は顰めさせたままだった。

「とてもね」

「そこまでか」

「東京はおそばって言うけれどね」

これは実際によく言われていることである。東京ではそれが本場だと江戸時代の頃よりされている。怪談のよなきそばもここから来ている。

「私には」

「合わないか」

「全然」

困った顔での言葉だった。

「とてもね」

「そうか。やはりな」

「関東は駄目よ」

関東自体に駄目出しであった。

「黒いおそばのおつゆなのよ」

「ざるそばもか」

「そうなの、おつゆが辛いなのよ」

困った顔でまた話す。

「だしが全然違って」

「黒いうえに辛い」

「お勧めしないわ。美味しくないし」

「わかった。関東に行ってもうどんやそばは食べない」

「ラーメンも駄目だから」



うどんやそばだけではないというのだ。

「そっちもね」

「醤油のせいか」

「関西は薄口醤油だけれど」

「関東はというのだった。」

「関東は濃いだよ」

「濃い醤油か」

「だからね。味はね」

「また言う若奈だった。」

「あまりよくないわ」

「何もかもが合わないか」

「関東と関西じゃ味は全然違うから」

「ではラーメンも止めておくか」

「もう何もかもが違うのよ」

「やはり関東自体についての話になる。」

「だからお勧めしないわ」

「それに値段もか」

「そう、高いの」

「値段についてもだった。」

「関西と比べてね。東京は特にね」

「わかった。やはり俺は関西で生きる」

「それがいいわ。おまけにね」

「おまけにか」

「寒いし」

「気候についても話す。」

「東京ってかなり寒いから」

「からっ風か」

「そのせいで寒いだよ。千葉はもっと寒いし」

「千葉にも行ったことがあったのか」

「柏の方に行ったのよ」

若奈の話は今度は千葉のその街についての話にもなった。

「いい街だけれど寒くてね」

「それでか」

「あまり楽しめなかったわ。とにかく寒いのよ」

それに尽きるといふのだ。

「横浜や横須賀はよかったけれど」

「神奈川はか」

「厚木の辺りもよかったわよ」

神奈川の話になるとだ。若奈の顔が明るくなった。

そしてだ。こう話すのだった。

「横須賀にはアメリカ軍がいてね」

「ああ、基地があったな」

「それに中華街は中国系で」

「国際色豊かか」

「だからいいのよ。神奈川はお勧めよ」

「わかった。では機会があればな」

その時はだというのであった。

「行ってみる」

「そうしたらいいわ。神奈川はいいから」

まさにお勧めといった口調だった。

第三十八話 老婆その十二

「東京や千葉より寒くないし」

「それもか」

「そう、だからいいのよ」

「横須賀で美味しい食べ物」

「一杯お店もあるし。横浜も厚木、まあ大和の辺りもね」

「わかった。しかし」

ここまで話を聞いたうえでだ。若奈の顔を横目で見ながら言っただった。

「神奈川に詳しいな。それにどうして関東に」

「ああ、それはね」

「それは？」

「親戚がいてね」

「こう話すのだった。」

「それで行ったことがあるから」

「親戚か」

「丁度横須賀にいるのよ」

「そうか。それでか」

「そう。それで何度か行ったことがあるの」

「そうだと牧村に説明していた。」

「そこにね。よかつたら牧村君もね」

「俺もか」

「そう。どうかしら」

「こう話すのだった。」

「二人でね。行かない？」

「それはまさか」

「その時が来たらね」

今はあえてこう言うだけだった。

「その時にね」  
「その時か」  
「そういうこと。あとだけれど」  
「あとは？」  
「横浜の中華街はね」  
「まだその話をする若奈だった。言葉も明るいものになっている。」  
「美味しい場所が一杯よ」  
「中華料理が四種類全てだな」  
「そう、全部あるから」  
「そしてであった。その種類も話すのだった。」  
「四川に広東に。上海に北京ね」  
「どれが一番いいかな」  
「どれもよ」  
「四つ共というのだった。」  
「どれもいいから」  
「四つ全てか」  
「そうよ、どれもいいから」  
「若奈の機嫌のいい言葉は続く。」  
「その時は楽しみにしててね」  
「そうさせてもらう」  
「あと。横須賀は」  
「横須賀もか」  
「カレーもあるし」  
「まずはカレーの話だった。」  
「海軍の街らしくてカレーを宣伝してるの」  
「カレーか」  
「そう、それね」  
「そしてであった。その他も話すのだった。」  
「パスタのお店もあって。飲み屋は牧村君興味ないし私も飲めないから知らないけれど」

牧村のことを最初に話してであった。

「他にはベースにもね」

「ベース？」

「アメリカ軍の基地のことよ」

それだというのである。

「基地の英語読みでね。ベースよ」

「そういうことか」

「そう、ベースでもね」

「食べられるのか」

「休日の午前中にいけば凄いバイクンクがあるわ」

「そんなものもあるのか」

「もう。凄いから」

若奈の話す言葉はさらににこにことしたものになっていた。

「何でもあつてしかも安くて」

「それだけいいのか」

「最高よ。アメリカ人が太るのもわかる位ね」

「アメリカの料理は味はよくないと聞いていたが」

「実はそうじゃないみたいね」

意外と知られていないことである。その色が異様なまでにカラフルなケーキでもその味は意外なまでによかったりするのである。

「これがね」

「そうなのか」

「イギリスは実際にあれらしいけれど」

しかしイギリスはそうなのだという。

第三十八話 老婆その十三

「まずいらしいわ」

「イギリスはか」

「お母さん実際に旅行に行ったことがあって」

「それで知っているのか」

「まずかつたらしいわ」

「そうか」

「もう。お菓子位しかないって」

「こつまで言われる。」

「朝食を三食食べてたって言ってるわ」

「朝食をか」

「イングリッシュブレイクファストね。それだけ食べてたって」

「朝食だけはいけるのか」

「それ以外は食べない方がいいってね」

「実に酷い評価であった。」

「こつ言ってたから」

「わかった。ではイギリスに行った時はそうする」

「紅茶はいけるみたいだけれど」

「店の話にもなった。」

「それはね」

「紅茶はか」

「あとお茶菓子」

「そのお菓子である。」

「それもいけるらしいわ」

「そうか、ではイギリスに行った時はな」

「それだけね」

「食べるとするか」

「とにかく。酷いらしいから」

若奈の言葉は今度は苦いものになっていた。まさに一転であった。

「これがね」

「そこまでか」

「そう、酷いのよ」

苦い言葉は続く。

「物凄くね」

「アメリカはいいのにか」

「よく考えたら。アメリカって」

アメリカの話になると言葉の色が変わる。明らかにだ。

「あれじゃない。色々な人がいるじゃない」

「移民の国だからな」

「だからね。食べ物も色々あって」

「しかも調味料や香辛料も多くあるな」

「レシピの本とか設備もしっかりしているし。それなら」

もう答えは出ていた。それならばだ。

「普通に美味しくなるわよ」

「しかも資本主義か」

「そういうこと。だからね」

「美味しい料理になるか」

「そうなのよね。だからベースの料理もね」

そのベースの話に戻ってまた話が為される。

「美味しくなるのよ」

「イギリスも資本主義だが」

牧村はこのことも話した。

「それも発祥の地だが」

「それがわからないのよね」

若奈もここで首を捻る始末だった。

「普通美味しくなるわよね」

「普通はか」

「けれどイギリスは違うのよ」

「まずいままか」

「どうしてかわからない位にね」

「そこまでだという。」

「本当にまずいのよ」

「噂以上か」

「残念だけれどね。それでね」

「それで？」

「これから夫婦善哉行くじゃない」

「話がそこに戻ってきていた。」

「そこは美味しいのよね」

「そうだな。あの店はな」

「イギリスの食べ物とは大違いよ、本当に」

「そこまでか」

「何もかもが違うわ。それじゃあね」

「行くか」

「ええ、行きましょう」

こう話してだった。そのうえでその夫婦善哉に二人で向かう。そしてその二つ並んで置かれたその善哉を二人で食べる。そうしてまた話をした。



### 第三十八話 老婆その十四

「美味しいわね」

「そうだな。しかし」

「しかし？」

「和食も勉強するんだな」

牧村が今言うのはこのことだった。箸でその善哉を食べながらだ。

「それも」

「そうよ。欧風だけじゃなくてね」

「和食もか」

「中華街にもよく行くし」

「そちらもだというのだった。」

「中華街もね」

「そこもか」

「よく行くわよ。それで食べて勉強しているの」

「他の文化の料理もか」

「あれよ。欧風の中に和食を入れたりして」

「若奈もその善哉を食べながら話す。」

「そこから新しい料理が出来るのよ」

「店のメニューがか」

「そういうこと。和風のアイスクリームとかね」

「そういうものもか」

「出来るのよ。だからいいのよ」

「にこりとしての言葉だった。」

「こつしたお店に入るのも」

「そういうことか」

「意外な、そうね」

「若奈は少し真面目な顔になって話す。」

「思わぬものとの結合からいい味が生まれたりするのよ」

「成程な、それもまた勉強か」  
「勿論普通に喫茶店も入るわ」  
「それもするという。」  
「けれどね。こうしたお店にも入ってね」  
「勉強していくか」  
「そういうこと。わかってくれたかしら」  
「少しだが」  
「これが牧村の今の返答だった。」  
「わかった」  
「わかってくれたら有り難いわ。だって」  
「だってか」  
「お父さんとお母さんにも宜しく言われてるし」  
「話がだ。また妙な方向に向かうのだった。」  
「それはね」  
「このことはね」  
「このこと？」  
「そうよ。だって将来お店に入るんじゃない」  
「未久と同じ話になっていた。それも自然にだ。」  
「だからね。言われてるのよ」  
「あの人達にもか」  
「私三人姉妹の長女じゃない」  
「これはもう二人の間では言うまでもないことだった。」  
「そうよね」  
「それはもう」  
「知っているのだ。牧村も返そうとした。しかしそれよりも先にだ。」  
「だったらわかるわよね」  
「だから？」  
「そう。だったらよ」  
「そしてだ。今言う言葉はだ。」  
「お婿さんを取らないといけないの」

「俺か」

「そう、牧村君はお嬢さんになるのよにこりとしてきていた。その顔がだ。」

「わかったわね。だから余計にね」

「決まっているのか」

「大学卒業したらね」

リミットまで定められていた。彼が気付かないうちにだ。

「いいわよね、それで」

「いいがな」

「そういうことだね。じゃあね」

そんな話をしながら食べていた。そうしてだ。

店を出て石の小道を歩いているとだ。目の前からだ。

### 第三十八話 老婆その十五

腰の曲がった老婆が来た。鼻が長くそれも曲がっている。黒い服を着た彼女が牧村と若奈の前に来た。そうしてそのうえでだった。

「ふむ」

杖を右手に持ちながらだ。彼の顔を見てきた。

「御主か」

「何だ」

「中々よい顔をしておるな」

「こつ言つのである。」

「実にのう」

「そうですね」

若奈は老婆のその言葉を聞いてだ。素直に喜ぶだけだった。

「牧村君つてとても」

「伊達にあそこまでなった訳ではないな」

「そうか」

「うむ。それだけはある」

「こつ牧村に言つのであった。」

「御主はじゃ」

「俺はか」

「相手になるのに相應しい」

これは若奈にはわからない言葉だった。老婆の今の言葉にきよとんとなった。

「そしてだ。思わず問うのだった。」

「あの」

「何じゃ、娘さんよ」

その歯が殆ど残っていない口での言葉だった。

「わしに何か用か？」

「相手つていいいますと」

そしてだ。よくわからないまま言う若奈だった。

「テニスですか？お婆さんもテニスをされるんですか？」

「テニスか」

「それともフェシングですか？」

「これも話に出すのだった。」

「どっちですか？」

「どちらじゃと思う？」

「ええと、それは」

「どっちでもないと思っておるな」

「はあ」

「どちらでもない」

老婆はまた言ってきた。

「そういうことじゃ」

「そういうことではないっていいですよ」

「じゃがフェシングに近い」

老婆はこう言い換えた。

「それにじゃ」

「近いんですか」

「左様、近いな」

若奈にわかりやすく言ったのであるうか。「こうも言ったのである。」

「どちらかというところじゃ」

「そうですね」

「ううん、剣道じゃないですし」

若奈はわからないまま考えていく。このことに察しがつかないのは彼女が髑髏天使を知らないからだ。それは仕方のないことであつた。

「だったら薙刀ですか？」

「面白い娘さんじゃな」

「そう言えるのか」

「うむ。大切にすることじゃ」

今度は、秋村への言葉だった。

「よいな」

「安心しろ。生きるのは俺だ」

「生きるのじゃな」

「生き残ってみせる」

そしてだ。言う言葉はだ。

「人間としてな」

「よい言葉じゃ。そうするといいい」

ここまで話してであった。老婆は前に出た。そうして牧村と若奈の間を通り過ぎてだ。そのうえで杖も使いながら前に進むのであった。

その動きはだ。外見からは想像できないまでに速くだ。二人の後ろを進んでいく。

その中でだ。老婆はまた二人に今度は後ろから言ってきた。

「さて」

「さて、か」

「楽しみじゃ」

今度の言葉はこれであった。

「これからな」

「これから？」

「そうじゃ、これからじゃよ」

若奈にも言う。彼女がわからない話なのを承知してた。

### 第三十八話 老婆その十六

「ようやく出て来たのじゃ。そうさせてもらっぞ」

「好きにすればいい」

牧村も彼女に言う。

「それではな」

「またな」

こつ話してだ。二人と老婆は別れた。それでこの時は終わりだつた。

しかしだ。この次の日だ。外でランニングをしている彼の横にハレーが来た。

そのハレーに乗っている一人の男が言ってきた。漆黒のスーツとヘルメットの彼がだ。

「貴様か」

「そうだ、私だ」

こつ牧村の言葉に応える。

「会ったそうだな」

「あの魔神とか」

「そうだ。バーバヤガだ」

「バーバヤガというのか」

「ロシアの魔神だ」

その国まで言うのだった。

「これで全てだ」

「十二魔神が全て揃ったか」

「そうだ。そしてだ」

「わかってるかも知れないけれどね」

目玉も出て来た。死神の頭上を飛びながらだ。牧村に対して言うてきていた。

「もう一つ出て来たし」

「妖魔だな」

「彼等についてはよく知らないけれどね」

「私もだ。妖魔については知らない」

「神である貴様等もか」

牧村はこのことには意外なものを感じていた。

「知らないのか」

「何かね。相当昔にいた存在らしくてね」

「私達の世界ができる、それよりもだ」

「神々の世界ができる前からの存在か」

「そうなんだよね」

目玉は語るのだった。

「これがね」

「そして長い間何処にいるのかわからなかった」

「このことも話すのだった。」

「全くだ」

「全くか。ただ」

「ただ。何だ」

「妖魔、かなり不気味な存在の様だな」

本能として悟っている言葉だった。

「どうやらな」

「そうだな。それはな」

「間違いないね」

死神も目玉もだった。牧村の今の言葉に頷くのだった。

「得体の知れない邪悪なものを感じる」

「魔物にはそれはなかったけれどね」

「そうだな。魔物は邪悪ではない」

「ただ戦っただけだしね」

「そうだというのだった。魔物は戦っただけだ。邪悪さはそこにはないのだ。」

「しかし妖魔にはだ」



「邪悪なものを感じるね」

「何が出て来る」

また言う彼だった。

「それでだ」

「さてな。その怪しい存在だが」

「多分僕達と争うね」

二柱の神々は既にそれを察していた。存在を察してすぐにだ。

「どういうことになるか」

「それが問題だね」

「そちらも調べるな」

「調べる」

「勿論ね」

二人もそれに返す。

「では。そういうことでだ」

「多分近いうちに戦いがまたはじまるよ」

「戦いか」

「どうやら貴様が人のままでいるということとは」

牧村への言葉だった。彼を見ないまま声だけを向けていた。

「この為だったようだな」

「この為か」

「そうだ。妖魔との戦いの為だ」

「その時の為に俺は人間でいた」

「そうかも知れない。これは運命だったのだから」

今度はだ。運命という言葉を出したのだった。

「人のままでいたのはな」

「そういうことになるか」

「ねえ」

今度は目玉がだった。彼に声をかけてきた。双方バイクで進みながら言葉のやり取りをしていた。そのうえでの話になっていたのだ。

「今度の戦いだけけれど」

「それについてか」

「ひょっとしたら今までよりも激しい戦いになるよ」  
「こつ牧村に言うのであった。」

### 第三十八話 老婆その十七

「もつとね」

「激しいか」

「まだはじまっていけないけれどね。そんな気がするよ」

「そうか」

「その時には。死なないでね」

目玉の口調が変わってきていた。

「絶対にね」

「死ぬなか」

「そう、死んだら駄目だよ」

牧村を気遣う言葉だった。明らかにだ。

「何にもならないからね」

「生きてそれでか」

「最後まで戦え」

死神もここで言うてきた。

「いいな」

「最後までか」

「そうだ、戦え」

牧村にだ。告げた言葉だった。

「わかったな」

「話は聞いた。しかしだ」

「しかしだ」

「言われるまでもないことだ」

牧村もまた、であった。死神に対して告げたのである。

「俺は死なない」

「絶対にだね」

「そうだ、死なない」

こう断言してみせるのだった。

「何があるうともだ」  
「そう。その言葉確かに聞いたよ」  
目玉もその言葉を受けていた。  
「今ね」  
「死ぬことはない」  
「死神もこう言う。」  
「貴様はだ」  
「これまでとは口調が変わったな」  
「認識が変わったからだ」  
「死神はまた返してきた。」  
「貴様へのな」  
「それでなのか」  
「少し前の貴様は人間からなくなるうとしていた」  
「魔物にか」  
「そうなるうとしていた」  
「魔物にだというのだ。」  
「だが。それが変わった」  
「人間でいるか」  
「私はそれを見た」  
やはり牧村を見ていた。その心でだ。  
「しっかりとな」  
「大阪に来てからずっとか」  
「そうだ、見ていた」  
また話してだ。そしてそのうえでだ。  
目玉がだ。また言ってきた。  
「君は人間だよ」  
「最初からそのつもりだ」  
「もう完全に人間だよ」  
「こつ牧村に言うのである。」  
「揺らぐことはないだろうね」

「人間からか」  
「うん、揺らないよ」  
「揺らぐつもりもない」  
「そう思っていることが一番大きいんだよ」  
「そこを指摘するのだった。」  
「そういうことだよ」  
「思うことがか」  
「思うからこそ動くことができる」  
「今度は死神の言葉である。」  
「そういうことだ」  
「思うことがか」  
「最初は全てそこからはじまる」  
「思い、それからか」  
「そうだ、思うことだ」  
「そこを強調するのだった。」  
「わかったな」  
「話は聞いた。思い、そこから動くか」  
「牧村もそれを話す。」

### 第三十八話 老婆その十八

「それならだ」

「実際にそうして動いたんだし」

「またしても目玉が指摘する。」

「よかったじゃない」

「そうだな。確かにな」

「わかったら頑張つてね」

「妖魔と戦うことになってもだ」

「妖魔との戦い」

それを聞いた牧村の言葉が止まった。そのうえでだった。

「貴様も戦うのか」

「私か」

「そうだ、貴様もだ」

死神への言葉である。それだった。

「貴様も戦うのだな」

「無論だ」

返答は僅かなものだった。

「妖魔の魂を刈ることもだ」

「仕事に入っているか」

「主神に言われた」

「こつ述べるのである。」

「だからこそだ」

「それでなのか」

「妖魔は放つてはおけない」

死神の言葉が強いものになった。

「決してだ」

「そついうことにもなるか」

「戦うなら同じだ」

「同じか」  
「そう、同じだ」  
「魔物達と戦った時と同じだな」  
「そして」  
「死神の言葉がまた変わった」  
「妖魔を一人残らず刈る」  
「一人残らずか」  
「おそらく恐ろしい存在もいる」  
「死神の言葉がまた変わった」  
「妖魔の上にな」  
「神か」  
「そうだ、魔神と同じ存在だ」  
「それがまたいるのか」  
「それがある筈だ」  
「こう話すのだった」  
「そしてそれをだ」  
「倒すか」  
「倒さなければならぬ。何かあるうとも」  
「死神もまただ。戦いを見ていたのである」  
「そのうえでだ。さらに話した」  
「私が言うのはそれだけだ。ではな」  
「また会うか」  
「間も無く戦いがはじまる。その時にまた会おう」  
「それではな」  
「またな」  
「こう話を終えてだ。二人は別れた。話は終わった。だがそれもまた新たな幕開けの序曲であった。新しい戦いがはじまるうとしていた。」

第三十八話

完

2  
0  
1  
0  
・  
6  
・  
1



### 第三十九話 妖魔その一

髑髏天使

第三十九話 妖魔

牧村は今度は図書館にいた。あの中之島図書館とは別のだ。立派な図書館にいてそこでまた博士と話をしていた。

当然妖怪達もいる。しかし彼等は上手に隠れていた。

そのうえでだ。博士は自分の向かい側に座る牧村に対してだ。こう言ってきた。

「妖魔についてじゃが」

「わかってきたか」

「少しじゃがな」

「こう前置きしての言葉だった。」

「わかってきたぞ」

「そうか。それは何よりだな」

「どうやら本能的な存在らしいな」

「本能的か」

「うむ、そうじゃ」

「こう話すのである。」

「本能的な存在じゃ」

「本能というのだ」

その言葉からだ。牧村はこう考えた。妖魔という存在に対してだ。

「知能は高くないか」

「どうじゃるな。そこまではわからん」

「そこまではか」

「随分と凶暴でもあるようじゃ」

「本能的だからか」

「そうじゃ、だからじゃろうな」

博士もそう見ているのだった。

「そこが魔物とは違う」  
「ただ暴れる存在か」  
「うむ、暴れるというよりは」  
「というよりは？」  
「殺したい、破壊したい」  
「そうした剣呑な言葉が出て来た。」  
「破壊衝動だけがある存在じゃな」  
「そうした存在か」  
「何か太古からじゃ。邪神と言われてきた連中が奥深くにいてじゃ」  
「奥深くだと」  
「みたいじゃ。そして一人、いや一柱か」  
「言葉をここで言い換えた。」  
「中心になって動く神がいるな」  
「その邪神の中でか」  
「うむ。名前は確かじゃ」  
「そしてその名前はだ。実に剣呑な存在であつた。」  
「盲目のスフィンクスや漆黒の男、そうした存在じゃ」  
「スフィンクスに漆黒か」  
「その二つのキーワードはだ。牧村にある答えを導き出した。そして  
てだった。」  
「彼にだ。この文明の名前を出させたのだった。」  
「エジプトか」  
「古代エジプト人達も彼等と遭遇しておつたようじゃな」  
「それで資料として残したか」  
「うむ。それがスフィンクスになったり漆黒の男になっている」  
「それでなのか」  
「ただしじゃ」  
「ここで博士の言葉が変わつた。」  
「盲目のスフィンクスとはな」  
「それか」

「漆黒の男も気になるがじゃ」  
「実際にだ。博士の言葉は曇ってもきていた。」  
「その盲目というのがな」  
「意味がわからないな」  
「スフィンクスには目がある」  
「博士はこのことを指摘した。」  
「それで見える存在じゃ」  
「だからこそか」  
「それで見ないというのはじゃ」  
「有り得ないか」  
「かなりのう。どういった存在かじゃ」  
「ここでだ。妖怪達も言ってきたのだった。」  
「それがわからないにしてもね」  
「うん、何かね」  
「邪悪なものは感じるよね」  
「確かにね」  
「こうそれぞれ言うのである。」  
「何でだろう」  
「それがわからないし」  
「その邪神のことだけれど」  
「多分じゃ」  
「そしてだ。砂かけ婆が言ってきた。」

### 第三十九話 妖魔その二

「そいつが最初に牧村さんの前に出て来るな」

「それがか」

「これはわし等の勘じゃ」

「こう前置きしての言葉である。」

「しかしじゃ。まず出て来るのう」

「それが戦いの合図か」

「そうなるな。しかし勘で感じるのはここまでじゃ」

「それ以降はというのだ。とともだ。」

「さて、どうなるかじゃ」

「それがわかるのは」

「多分そいつに会ってからだね」

「それ以外は何も」

「最後の魔神も出て来た」

「博士はここでまた話す。」

「しかし。それもじゃ」

「吹き飛んでしまったね」

「もうね」

「完全に」

「その通りじゃ」

「博士は妖怪達はその言葉に対して頷いたのだった。」

「それ以上に問題じゃ、これは」

「魔神以上にか」

「魔神のことはわかっておる」

「博士は真剣な顔で述べる。」

「しかし妖魔も邪神も」

「わかっていないからだな」

「わかっておるのは邪なものを感じる」

妖怪達の言葉を受けてである。

「それだけじゃ」

「だからこそか」

「左様、だからこそ問題じゃ」

こう牧村にも話すのだった。

「わかっておらんからじゃな」

「そのことがわかった」

牧村は静かに返した。

「わかっていないことがだ」

「それがわかればいい。さすればじゃ」

「話は終わりか」

「うむ。さて、これからじゃが」

ここぞだ。博士の口調が変わってきた。それが何かというところであつた。

「何を食おうか」

「鰻にしない？」

「あつ、いいね」

「それがいいね」

周りの妖怪達もそれに賛成する。かなりいるが隠れるのが上手いのだろう。図書館の中にいる他の人間には全く気付かれていないのだった。

「それじゃあね」

「そうしようか」

「鰻だね」

「そうじゃな。鰻じゃな」

博士は彼等の言葉をさらに受けてだ。そのうえで頷いたのだった。そうしてだ。あらためて牧村に問うた。

「それでじゃが」

「俺にか」

「どの店がいいかのう」

「こう牧村に対して問うのである。

「鰻となるとじゃ

「そうだな。難波にでも出たらどうか

「難波か

「そこで探せばいい。鰻が見つからなくとも他にもいい店がかなりある」

彼のこの言葉を聞いてだ。また妖怪達が言ってきたのだった。

「何でもな

「食いだおれだからだね

「それで食べるものが一杯ある

「それでなんだ

「そうだ、それでだ

また話す牧村だった。今度は妖怪達に対してだ。

「だから行けばいい

「そうだね。鰻じゃなくてもね

「うどんもあるし

「お寿司だって

「ふむ、寿司もよいのう

博士は子泣き爺の寿司という言葉に反応した。

### 第三十九話 妖魔その三

「寿司ものう。よいものじゃ」

「そうだよね、大阪のお寿司もね」

「食べてみたいしね」

「寿司も大阪が本場じゃからな」

博士はここでこんなことをも言った。

「やはりな」

「待て」

しかしだ。その言葉には牧村がすぐに言ってきた。

「それは違わなかったか」

「江戸前寿司か」

「そうだ、違ったか」

「確かに寿司の発祥は江戸じゃ」

それを知らない博士ではなかった。やはり博識だけはあった。尚中にはだ。寿司の起源は韓国だという説もある。根拠は一切不明である。

「しかしじゃ」

「しかしか」

「寿司は大阪の方が美味しいのじゃ」

「こう言うのである。」

「それもかなりのう」

「かなりか」

「そうじゃ。大阪は前に瀬戸内海がある」

言うのは地の利だった。

「これが大きい」

「大阪には新鮮な海の幸がある」

「そうじゃ。それがあるのじゃ」

また言う彼等だった。

「わかってくれたのう、これで」

「それでか」

「しかもじゃ」

ここで博士はさらに言うのであった。まだあった。

「それだけではない」

「まだあるのか」

「サービスが違う」

今度はこれであった。サービスもあるのだという。

「大阪の寿司屋は威張っておらんな」

「寿司屋が威張って何かなるのか？」

「東京では違うようじゃ」

そうだというのである。これは実際にそうであり東京の寿司屋は何故か一見お断りであったり威張っていたりするのである。それが東京の寿司屋なのだ。

「威張っておるのじゃよ」

「あんまりむかついたんでね」

「ちよつと悪戯してやったよ」

妖怪達もここで話す。

「ちよつとだけね」

「そうしてやったよ」

「ちよつとだけか」

「そうそう、ちよつとだけね」

「姿を現してね」

そうしたというのである。

「そうしたらお店の中大騒ぎになってさ」

「凄かったよ」

「もうね」

「まあそれ位はいいじゃろ」

博士はそれはいいとしたのだった。

「その程度はな」



「いいのか」  
「わしも威張った寿司屋は嫌いじゃ」  
博士もここでは己の主観を述べていた。  
「だからいいのじゃ」  
「それか」  
「そうじゃ、いいのじゃ」  
また言うのであった。  
「そういう寿司屋にはな」  
「関西じゃそういうのは絶対に駄目だからね」  
「そうそう」  
「何があってもね」  
また妖怪達がそれぞれ言う。  
「ああいうことしたらね」  
「お店潰れるよね」  
「何があってもね」  
「特に大阪ではそうじゃな」  
博士はここで大阪を話に出した。

### 第三十九話 妖魔その四

「ここではそうじゃな」

「おばさんが一杯出て来てね」

「騒ぐからね」

「あの店は駄目ってね」

「しかも話に尾鱈をつけてね」

「色々言うから」

それが大阪である。大阪ではそうしたことは日常茶飯事である。接客が悪いとそれが話に尾鱈がついてだ。あちこちに広まるのだ。

「それで潰れるからね」

「あっさりと」

「どんなに味がよくてもじゃ」

また話す博士だった。

「そんなことではじゃ」

「駄目か」

「駄目に決まっておる」

牧村にも話す。このことをだ。

「容赦なくだ」

「容赦なくか」

「左様、絶対に駄目じゃ」

こうしてそうした寿司屋が否定した。そのうえでだ。

「だから関西の方がいいのじゃよ」

「寿司はか」

「そうそう、そもそも食材もいいしね」

「関西の方がね」

「お米もお酢もお砂糖もね」

「それにネタも」

またしても妖怪達が話すのであった。

「断然関西の圧勝」

「お寿司も関西」

「それも大阪ね」

「安いし」

最後には値段の話にもなった。

「東京の寿司って高いんだよね」

「食べ物全体がもうね」

「高いから」

それが東京のネツクの一つであった。土地の値段も関係があるのである。東京の食べ物は大阪と比べて高いのである。

「あれが問題なんだよね」

「しかもまずいし」

「口には合わないね」

「全くだよ」

「やはり食は関西にありじゃ」

博士はこの言葉を締めにした。

「そういうことじゃよ」

「じゃあ今日はお寿司にする？」

「回転寿司もいいよね」

「関西のあれも美味しいしね」

「回転寿司は立派な寿司じゃ」

博士は回転寿司に対しても自説を述べる。

「ある料理漫画は真っ先にけなしそうだがな」

「あの漫画は野蛮人が原作の下品な漫画だ」

牧村もこう言って切り捨てる。

「読むと馬鹿になる」

「何が究極のメニューじゃ」

博士はさらに言う。

「あんなもので料理がわかるものか」

「そうだな。そもそもあの原作者はまずい飯には店の中で怒鳴り散

らしていたそうだしな」

「完全に野蛮人だね」

「人間として最低ってどうか」

「馬鹿だね」

妖怪達もそれはばつさりと切り捨てた。

「そんな下品な屑なんだね」

「ってどうかそんな奴もの食べる資格ないから」

「あの漫画のキャラクターも同じことしてるけれど」

人間は自分にあるものしか書くことはできないという。それを考えると下品な原作者が書くキャラクターが下品になるのも当然のことである。

キャラクターは作者の分身、我が子であると言ってもいい。下品で卑しい人間は下品で卑しい人間しか生み出せず育てられない。だからそうなるのだ。

「屑だよね」

「ってどうか食べる資格ないから」

「全く」

妖怪達も言う。

「ものを食べるにはそれなりのものが必要だから」

「有難いと思う気持ちね」

「それが大事だよ」

正論を述べていくのであった。

### 第三十九話 妖魔その五

「あの漫画のキャラクターって結局それがないんだよね」

「綺麗事言つ話もあるけれどね」

「実際にはね」

「食べ物を投げる奴がおるか」

博士も忌々しげに言う。

「それにじゃ。他の客のことを考えるのじゃ」

「店の中でまずいとか喚くってね」

「完全に営業妨害じゃない」

「新聞記者ってそんなことをしても許されるんだね」

少なくともそれは民主主義の人間のことではないだろう。こ

の世で最も下劣で汚らわしいならず者国家の人間のことである。

「凄い世の中だよな」

「今もそうかな」

「今は少し違ってきておるぞ」

博士はそれはしつかりと言う。

「流石にのう」

「新聞記者でも好き勝手できないんだね」

「今は」

「うむ、できん」

それは保障する博士であった。

「ネットで書かれてそれで大騒ぎじゃ」

「何かさ、マスコミってさ」

「嘘書くしそうやって暴れるし」

「まともな人間はいないんだね」

「教師とマスコミと知識人にはとんでもない人間が多いぞ」

その知識人の一人だからこそという意味もある言葉だった。

「呆れるまでじゃ。戦後の我が国の特徴じゃな」

「戦後か」  
「そうじゃ、戦後のじゃ」  
「こう牧村にも話す。」  
「教師は生徒にどんな暴力を振るっても罪にならんかった」  
「それはわかる」  
「牧村は中学時代のあの暴力教師を思い出していた。」  
「よくな」  
「マスコミ関係者も同じなのだ」  
「権力者だからそうなるのか」  
「左様、奴等は権力者じゃ」  
「まさにそれだというのである。彼等は権力者なのだ。」  
「情報を独占していたり生徒に影響を及ぼせるじゃからな」  
「情報を持ち影響を及ぼせるか」  
「それこそが権力者じゃ」  
「博士はこう断定するのだった。」  
「そしてじゃ。チエックされることはない」  
「マスコミは権力をチエックしてもか」  
「しかし彼等はチエックされることはなかった」  
「権力だというのにか」  
「しかしチエックされてこなかった」  
「そうなればどうなるかはだ。まさに自明の理であった。」  
「それが今の有様じゃよ」  
「あの漫画みたいにか」  
「マスコミと教師と知識人は我が国の歴史上最も腐敗した権力者じゃ」  
「博士はまた断定してみせた。」  
「呆れるまでにじゃ」  
「呆れるな。確かにあの漫画はな」  
「野蛮な権力者なんだね」  
「インテリぶってるけれど実際はそうなんだ」

「下品な野蛮人が権力を握ってやりたい放題する」  
「凄いね」

妖怪達も忌々しげに述べていく。これこそが戦後の我が国であった。知識人はただ立場や自称でなるものではない。そこに相応しいものがあつてなのだ。

「じゃああの漫画はもう」

「読む価値ないね」

「それも全く」

「そう、読む価値はないぞ」

博士はここでも断定したのだった。

「全くじゃ」

「ペンは確かに剣よりも強い」

牧村もそれは認めた。

「しかしだな」

「剣よりも腐敗しやすい」

博士はここで言い加えたのだった。

### 第三十九話 妖魔その六

「覚えておいてくれ」

「わかった。それではな」

「大学ではじゃ。そこまではじゃ」

「教えることはないか」

「左様、まずない」

また牧村に話す。

「知識人の世界だからじゃ」

「知識人だからか」

「誰でもそうじゃが身内にはどうしても甘くなる」

博士の言葉は苦いものになった。

「特に教師もマスコミも知識人も」

「甘いか」

「異様にな」

だからこそ腐敗するのであった。これも自明の理であった。

「そうなるのじゃよ」

「嫌な世界だね」

「だよね、全然駄目じゃないか」

「全く」

妖怪達はここでも呆れていた。

「人間の世界も色々あるけれどさ」

「それでもそれはないでしょ」

「ねえ」

「そんな酷い世界があるんだ」

「戦前も問題はないわけでもなかった」

戦前から生きている人間だからこそその言葉だった。博士は戦前から学者なのだ。

「しかしじゃ。今は特にじゃ」



「酷くなつたんだね」

「そういうことなんだ」

「左様、だからじゃ」

また話す博士だった。

「最早あの世界はどうにもならん」

「そうした連中が世論をミスリードするか」

「連中がいいという奴は信用せんことじゃ」

国家運営や選挙にも関わる話にもなっていた。

「絶対にじゃ」

「つていつか信用する方がおかしいんじゃ」

「あの馬鹿総理だつてね」

「見ただけでおかしかったし」

「そうした連中があいつを支持していたんだよね」

これも事実である。戦後の我が国では強姦魔の集団でも『平和勢力の軍隊』になったのである。幽霊が昼間に集団で行動するが如き異常現象が普通にまかり通っていたのが戦後の我が国なのだ。今こんなことを言えばネットで大騒ぎになっていることは間違いない。しかし長い間インターネットはなかった。だから普通にまかり通っていたのだ。

「ソ連だつてね」

「あんなのとんでもない国じゃない」

「そういう国家を支持していたじゃない」

「その責任は？」

「責任？」

博士の今度の言葉は愚弄したものになっていた。

「そんなものないぞ」

「ああ、やっぱり」

「ないんだ」

「そうなんだ」

「うむ、連中は絶対に責任を取らん」

これまた事実であつた。

「他人に責任を言うが自分達は無責任じゃ」

「酷いにも程があるし」

「何それ無茶苦茶じゃない」

「どんだけ酷いんだよ」

「じゃから腐敗を極めるのじゃ」

自浄能力もなく責任も取らないならばだ。そうなるのは自明の理である。

「そういうことじゃ」

「凄い社会だよ、学校の先生の社会って」

「それにテレビや新聞って」

「僕達の世界でもそんなのないよ」

「そういう世界も存在するか」

「牧村の口調も忌々しげである。」

「あまりにも酷いな」

「連中は同じミスを何度もしでかす」

博士はまた言った。

### 第三十九話 妖魔その七

「それを考えて奴等を見るのじゃ」

「できればだ」

「できれば、じゃな」

「そうした連中は潰すべきだ」

牧村の下した結論はこれであつた。

「置いておけばそれだけ害毒を撒き散らす」

「ああ、前のあのニュースキヤスターとかね」

「ミスタースポックの出来損ないみたいな顔した」

「今は眼鏡のアホ面がいるけれど」

「あいつなんか凄かつたらしいじゃない」

「あれは生きる害毒じゃ」

博士はそのキヤスターについても忌々しげに話す。

「十八年間害毒を垂れ流しておつた」

「そういえば最初の頃のあいつの顔は」

また牧村が言う。

「謙虚で普通の顔をしていたな」

「顔が変わつたじゃろ」

「醜くな」

その口調はやはり忌々しげである。

「変わり果てているな」

「醜い生き方をすればそうなるのじゃ」

その理由も話す博士だつた。

「自然とそうなるのじゃ」

「生き方は顔に出るからか」

「左様、あの愚か者の出来損ないの総理もじゃ」

博士もまたあの愚劣極まる史上最低最悪の宰相の話をする。

「あれも同じじゃ」

「顔か」

「だからああいう世界の人間は醜い顔の奴が多いのじゃよ」

「だよ、酷い顔が多いよね」

「学校の先生もね」

「ヤクザみたいな普通のいるし」

ヤクザは悪事がばればそれで逮捕される。しかし学校の教師は日教組が庇う。つまり学校の教師とは悪事が露見しても捕まらない素晴らしい職業なのだ。

「そういう世界だったらさ」

「まともな人間も集まらないよな」

「左様、いい鉄は釘にはならん」

博士はここでもこの話をした。

「そういうことじゃ」

「成程ね」

「そういうものなんだね」

「結局は」

「左様、それでじゃ」

博士は牧村と妖怪達にさらに話す。

「そういう世界の人間の言うことは相手にするな」

「そうしなくなったな」

牧村がここでまた言う。

「最近」

「牧村さんなら気付くんだね」

「すぐに」

「少し気をつけて見ていればわかるが」

「普通はそうじゃな」

博士もその通りだと述べる。

「じゃが」

「だが、か」

「教師だのマスコミだの知識人だのの肩書きに惑わされるとじゃ」

「見誤る」

「そういうことじゃ。そうなってしまふのじゃ」  
こう話すのだった。

「どんな職業でもいい者もいれば悪い者もある」

「そしてチエツクが働かない権力には」

「碌な人間が集まらない」

この二つは結局人間が人間の世界を営んでいる限り変わらないものであった。牧村も今それを聞いているのであった。

「この二つって覚えておかないとね」

「しつかりとね」

「覚えておいてくれ」

博士もそれは念押しする。

「しつかりとな」

「うん、それじゃあ」

「よくね」

「覚えておくよ」

まずは妖怪達が頷く。それから牧村もだった。

### 第三十九話 妖魔その八

「忘れはしない」

「うむ。それではじゃ」

「ここでまた話す博士だった。だが話題を変えてきたのであった。」

「それでじゃが」

「それで？」

「今度は？」

「何を食べるかじゃ」

それだというのであった。話題はそれになった。

「その似非グルメ漫画の話から戻るがな」

「ああ、それね」

「何を食べようか」

「今日は」

「ハンバーグはどうだ」

牧村がここで勧めるのはそれだった。

「ハンバーグはだ」

「ハンバーグっていったらチエーンのか？」

「ドンキー？」

「あそこ？」

「あそこはどうだ」

実際にそうだった。そこはどうかというのである。

「それで」

「そうだね。いいね」

「たまにはハンバーグもいいよね」

「ましてやドンキーって」

「そうそう、大きいし」

「食べがいがあるし」

これがドンキーの売りである。大きくしかも美味しいのである。値

段も手頃なものである為に非常に人気があるのである。

「それじゃあそこでね」

「食べようか」

「そうしようか」

こう話してであった。そして決まろうとしていた。

「じゃあそこでね」

「あの大きなハンバーグ食べようか」

「それでいこうか」

「是非ね」

そしてであった。博士もだ。楽しそうな顔で述べるのであった。

「いいのう」

「よし、じゃあ決まりだね」

「ハンバーグ」

「それだね」

「君の提案とは少し珍しいがのう」

博士は目を微笑まさせて牧村に対して述べた。

「しかしそれもまたよしじゃ」

「いいのだな」

「うむ、面白い」

だからいいのだというのだ。

「それではじゃ」

「皆でドンキーね」

「行こうか、それじゃあ」

「今からね」

妖怪達も言う。そうして全員でその少し暗い色の内装の店に行く。そこでそれぞれハンバーグを頼んでフォークとナイフで美味そう煮食べるのだった。

牧村は味はいいとした。しかしである。

妖怪達が誰もがフォークとナイフを器用に使うのを見てだ。怪訝な顔で言うのであった。

「しかし」

「どうしたのじゃ？」

「いや、器用だな」

実際にこうも言った。

「皆な」

「当然箸も使えるぞ」

博士は笑いながら向かい側に座っている彼に話す。見ればから傘の様な妖怪までもがその細く小さい手でフォークにナイフを見事に使っている。

「そちらもな」

「使えるのか」

「そうじゃ、使える」

博士はまた話した。

「しつかりとな」

「箸やフォーク、ナイフまで使えたとはな」

「当たり前じゃないか」

今言ったのは輸入道である。だが彼には手も足もない。車輪の中央に顔があるだけである。その彼が牧村に対してこう言ってみせたのである。

「そんなの」

「使えるのか、あんたも」

「ほら、こうしてね」

こう言つとであつた。目の前にそのフォークとナイフが浮かんでいた。



### 第三十九話 妖魔その九

そのうえでだ。彼は言うのである。

「使ってるじゃないか」

「確かにな」

「見たとおりだよ」

また言うわ入道だった。

「こうしてね。使えるから」

「手がなくてもそれでもか」

「妖怪はそういうものじゃよ」

また話す博士であった。

「これでわかったな」

「よくな。だが」

「だが？」

「見ていて面白いな」

牧村の今度の言葉はこうしたものだった。

「妖怪の食事というものも」

「妖怪は面白いぞ」

実際にそうだといいのだ。

「色々と勉強になる」

「その様だな」

「それでじゃが」

博士はさらに話してきた。

「よいかのう」

「今度は何だ」

「デザートのことじゃがな」

「デザートか」

「それはどうするのかな」

牧村の顔を見ての問いだった。

「それについては」

「アイスクリームがいいか」

牧村は少し考えてから答えた。

「それがいいか」

「アイスクリームか」

「それかプリンか」

これも出したのだった。

「どちらかだな」

「ふむ、わしもそうするか」

博士もまたフォークとナイフを器用に使っている。そうしながら述べたのだった。

「それにな」

「それにするか」

「うむ、問題はどちらにするかじゃが」

「どれがいい」

「プリンじゃな」

博士が選んだのはそれであった。プリンであった。

「それにするとしよう」

「プリンか」

「あれは食べやすい。あれがいい」

「そうか。それなら俺もそうするか」

「ああ、プリンね」

「いいね」

「そうだよね」

妖怪達もであった。二人のそのことばを聞いて頷くのであった。

「それにするか」

「最後はあっさりだね」

「それでしめようか」

「プリンはあっさりしているのか」

牧村は妖怪達その言葉には眉を顰めさせた。

「そうなのか」

「少なくともハンバーグよりはあっさりしているぞ」  
博士はこう述べた。

「ハンバーグはどうしてもな。油っこくなるからな」

「それがいいんだけれどね」

「けれどね。最後までそれはね」

「そうそう、口がすすきりしないからね」

「だからね」

妖怪達はこう口々に言うのであった。

「だからどうしてもね」

「最後はそれじゃないと」

「脂っこいままだとどうしても」

「嫌だからね」

「そういえばそうだな」

「ここぞだ。牧村も頷いたのだった。

「そのままだとどうしてもな」

「日本人じゃからな」

「ここで博士はまた話した。

「どうしてもそうなるのじゃよ」

「妖怪も日本人になるのか」

「正確に言えば日本の妖怪かのう」

博士は腕を少し組んだうえで述べた。

### 第三十九話 妖魔その十

「そうなるかのう」

「そういうことか」

「妖怪も同じじゃよ。日本の住人じゃ」

博士は言うのであった。

「住人になるのじゃ」

「日本にいればか」

「ないのは参政権等じゃな」

「それは国籍がなければ駄目だな」

「僕達人間じゃないからね」

「それはいいよ」

妖怪達もそれについては興味を見せなかった。相変わらず上手に自分達を人間の中に溶け込ませてだ。そのうえでハンバーグを楽しみながら話す。

「別にね」

「日本は日本の住人のものだけね」

「参政権はいいよ」

「あの首相よりずっとまともなことを言うな」

「あれは馬鹿者じゃ」

博士はその首相の話には忌々しげに応えた。

「普通を遥かに凌駕した馬鹿じゃ」

「日本は日本人だけのものではない、か」

「他にも多くの発言があつたのう」

「確かにな」

「あれを見てはじゃ」

博士のその忌々しげな言葉は続く。

「普通に重度の人格障害と思つてもじゃ」

「当然だな」

「本当にどうかしておる」

博士はまた言う。

「あんなのではじゃ。あつという間に退任もじゃ  
当然だな」

「人も妖怪も見ておるのじゃ」

「誰もがが」

「そして評価される。それがわかっておらん」

「マスコミさえ支持してくれればいいと思っていたようだな」

「ここで話が戻った。マスコミについてであった。

「それでどうにかなるとな」

「国民は何時までも騙せるか」

「そう思っていたようだな」

「その国民もマスコミだけ見ては馬鹿になるがじゃ」

これが現実であるから恐ろしいのだ。マスコミの言うことをそのまま鵜呑みにした時には人間は愚物になってしまう。テレビや新聞だけでは駄目になっているのだ。

「ネット等を見ればわかる」

「そういうことだな」

「勉強することじゃよ」

博士が出した答えはこれだった。

「そうでないとおあした奴がまた出て来る」

「そして破滅するな」

「騙される方も悪い」

博士は断言する。

「何しろ一目見ただけで駄目なのがわかるじゃろ」

「俺にもわかった」

「普通にわかる。保守系の雑誌でも十数年前から警鐘が鳴らされておったしな」

「しかしそういったものを一切見ないで投票してあれが首相になったか」

「勉強しないからじゃ」

愚か者や人格障害者を誰が首相にするか。国民であるというのだ。

「そうなるのじゃよ」

「よくわかった」

ここまで聞いて頷く牧村だった。

「今日の話も勉強になるな」

「人生は勉強じゃよ」

博士の人生訓でもある。

「それがわからんと何をしても駄目じゃよ」

「何をしてもか」

「政治も然りじゃ。あの首相も全く勉強しておらんかった」

「首相になってからも遊んでばかりだったな」

「日本では社会主義だのを唱えていれば強盗でも聖者になれる」

恐ろしい話だが現実だ。どれだけ不誠実で破廉恥な人間であつても社会主義の側に立っていれば進歩的ないい知識人になっていたのが戦後日本なのだから。

「そういうものがまだあるのじゃ」

「ではテロをやってもだな」

「庇う馬鹿は出るぞ」

所謂赤軍派等である。

### 第三十九話 妖魔その十一

「そういうものじゃ」

「魔物は腐っていないが人間は腐っているか」

「妖怪にもいるよ」

「魔物にもね」

ここで妖怪達が言い加える。

「そういう奴はここにはいないけれどね」

「皆から嫌われるから」

「屑は嫌われるか」

「それが普通じゃ」

博士はまた牧村に話す。

「人は職業や主義思想で決まらない」

「まずは性格だよ」

「それだよ」

妖怪達がここでも話す。

「普通はそつだよ」

「それが違つのがおかしいんだよ」

「そつそつ」

「そつじゃ。我が国のマスコミや知識人の世界はおかしい」

博士の言葉はまたしても深刻な方にその振り子をやった。

「おかしいというレベルではない」

「俺はそういう世界にはいたくないものだな」

牧村も声を険しいものにさせていた。

「どうもな」

「君にはわしの後継者になって欲しいのじゃがな」

「学者にか」

「考えておいてくれ」

今はこう言うのに留めた。

「それもな」

「学者か」

「わしも歳じゃ」

百歳を優に超えている。

「流石にもう何十年も生きられんじゃろ」

「つていつかそのまま妖怪になるんじゃ」

「だよな」6

妖怪達はその博士を見ながらこう述べる。

「僕達の仲間だね」

「なるんじゃないかな」

「殆どそうなつてるところもあるし」

「悪くないのう」

博士もそれでいいというのだった。

「それも」

「じゃあその時はまたね」

「こうして楽しくやろうよ」

「そうしよう」

こんな話もするのだった。

「これまで通り皆で仲良くね」

「飲んで食べて楽しくやって」

「そうしていこう」

「そして俺が学者になつてか」

牧村は博士の先程の言葉を受けたうえで話す。

「そうしてか」

「そうそう、それでどう？」

「牧村さんが大学院に入つてね」

「研究室を持つてさ」

「それで今まで通り」

「ふむ、よいな」

博士もまんざらではなかった。



「ではわしはその横で楽しく過すよ」と

「妖怪になつてね」

「これまで通りね」

妖怪達にとつてはだ。それはこれまでと全く変わらないことであつた。

「それっていいよね」

「そうそう、かなりね」

「じゃあこれでいこうよ」

「決定にしよう」

「学者か」

牧村は自分でこのことを考えてみる。そうして言うのであつた。

「どうもな。それもな」

「嫌とか？」

「駄目？」

「気に入らない？」

「あまり想像できないな」

これが彼の今の言葉だつた。

### 第三十九話 妖魔その十二

「どうもな」

「最初はそういうものじゃ」

博士はその言葉に笑って述べるのだった。

「しかしなってくるものじゃよ」

「次第にか」

「そうじゃ、なってくるものじゃ」

「そうだというのだ。」

「そうしたものじゃよ」

「そうか、そういうものか」

「左様、それではじゃ」

博士はここでだ。自分のハンバーグを食べ終えた。

牧村も妖怪達もだ。ここでまた話が為された。

それからデザートを食べた。一同は別れた。牧村は一人サイドカーで夕暮れの街を進んでいた。時間は丁度逢魔ヶ時であった。

その時に前に進んでいるとだ。そこに男が立っていた。

漆黒のスーツにネクタイをしていた。肌も漆黒だ。しかしその顔は黒人のものではなく白人のものだ。唇が薄く彫のある顔で鼻も高い。

だが目も髪も黒だ。その不可思議な黒い男が彼の前に立っていた。

牧村は彼の直前でサイドカーを停めた。そのうえで彼に問うた。

「魔物ではないな」

「わかるか」

「気配が違う」

だからわかるというのだった。

「妖魔か」

「その上にいる存在だ」

テノールの声だった。その高い男の声で牧村に対して話すのであ

った。

「こつ言えはもう察しがつくな」

「邪神か」

「そうだ、盲目のスフィンクスと呼ばれていた」

漆黒の男からの言葉だった。

「これでわかるな」

「早速出て来るとはな」

「名前をナイアーラトホテップという」

今度は名前も名乗ってきたのだった。

「この名は知っているか」

「ラグクラフトの世界か」

「あの男が書き残したことはほんの一旦でしかない」

邪神ナイアーラトホテップは笑みを浮かべていた。底知れぬ邪悪

なもののある笑みであった。

「我等についてのな」

「ほんのか」

「そうだ。私はただ本能のままに動き」

こつ言ってきたのであった。

「そして全てを破壊し何も残さない」

「それが邪神か」

「その通りだ。我が同族達も同じだ」

「他の魔神達もか」

「また出て来る」

余裕に満ちた言葉で告げたのであった。

「すぐにな」

「そうか、すぐにか」

「これまでにないことになることは言っておく」

笑っていた。その言葉が。

「貴様にとつてな」

「これまでにないか」

「そつだ、魔物とは違つ」

断言であつた。明らかな。

「完全にな」

「面白いと言えはどつする」

牧村は怯んではいなかった。それをあえて見せてみせたのだ。

「それを」

「面白いか」

「妖魔という存在は知らなかつた」

「しかし知ればか」

「俺に向かうのなら容赦はしない」

言葉には剣を宿らせていた。そのうえでの言葉であつた。

「その時はだ」

「妖魔はただ貴様だけを狙いはしないがな」

「何っ!？」

「言つた筈だ。魔物とは違つ」

「だからか」

「我等は混沌」

その異形の姿で言うのであつた。不気味なまでに説得力があつた。それを見せたのである。

### 第三十九話 妖魔その十三

「そう、何もかもを破壊し全てを濁流に飲み込む存在だ」

「それでなのか」

「この世界も文明も何もかもを破壊することこそが望みだ」

「そしてその混沌の中で生きるのか」

「それが妖魔であり邪神だ」

こう語るのだった。得体の知れぬ邪悪さをその身にまといだ。

「わかったな」

「理解はした」

牧村はまずはこう返した。

「しかしだ」

「しかしか」

「それを許しはしない」

「決してだな」

「俺には関係ないということと言わない」

牧村は個人主義的な面が強い。しかしここではそれは見せなかつた。

「俺は人間だ。人間ならばだ」

「何だというのだ、それで」

「人間の世界を護る義務がある」

「だからか」

「貴様等を倒す」

はつきりとした宣戦布告であった。

「しつかりとな」

「そうか、わかった」

「いいな、それではだ」

彼はまだ髑髏天使になっていない。しかし剣は持っていた。その心にだ。

「貴様等を一人残らず倒す、今それを言う」

「面白い。幕開けとしては予想以上だ」

死神は彼の言葉を受けて。楽しげにわらってみせてきた。

「ここまで愉快的幕開けになるとはな」

「面白いか」

「そうだ、面白い」

ナイアーラトホテップは言葉を続ける。実際に楽しむ声でだ。

「こうしたことになるとはな」

「それでどうする」

牧村は邪神を見据えたまま問い返した。

「貴様は。今は」

「私がか」

「そうだ、戦うのか」

問うのはこのことだった。

「今ここで。貴様自身が」

「そうだな」

邪神はその問いにだ。まずは一呼吸置いたのだった。

そしてだ。話そうとする。しかしであった。

「止めておくのだな」

「貴様か」

「そうだ、私だ」

死神であった。既に戦う姿であった。右手にはあの大鎌がある。

「もう出て来るとは思わなかったがな」

「死神か」

「ナイアーラトホテップだな」

死神は彼の姿を見据えてその名を問うた。そうしながら牧村の横にきたのだった。

「そうだな」

「その通りだ」

「やはりな。姿は聞いたとおりだ」

その漆黒の白人の顔を見ての言葉だ。

「黒い邪神か」

「だがこれが私の真の姿ではないことも知っているな」

「如何にも」

死神は当然だと返した。

「既にな」

「なら話は早いな」

「貴様は邪神の中でも特別だ」

その漆黒の邪心を見ての言葉である。

「ならばだ」

「ならば、か」

「ここで消しておくか」

一歩前に出る。右足を出してみせた。

「いいか」

「二人になったか。だが」

「だが？」

「趣向としては面白いが今は止めておこう」

「こつ言っただった。」

「今はだ」

「戦わないか」

「今は伝えるだけだ」

それだけだからだというのだ。

### 第三十九話 妖魔その十四

「何もしない」

「そうか」

「それだけか」

「そうだ、それだけだ」

また言う邪神であった。

「それではだ。すぐに会おう」

「その時にはだ」

牧村がここでまた話す。

「貴様は最期の時を迎える」

「私を倒すというのか」

「その通りだ。貴様を倒す」

闘争心を見せる。全身にそれを漂わせてさえいる。

「それを言っておこう」

「私は今まで倒されたことはない」

「運がいいだけだな」

「そう思うか」

「貴様より強い相手に会ってこなかった」

牧村の言葉だ。

「それは運がいいというのだ」

「その言葉は少し違う」

だが邪神はその言葉を訂正してきた。そのうえで言っただった。

「私より強い者はいない」

「そう言うのか」

「そうだ。だから私は今まで倒されたことがない」

こう言ってみせるのである。

「そういうことだ」

「そう言うか」



「貴様は今智天使だな」

次にはだ。牧村の天使としての階級を問うてみせた。

「そうだな」

「それがどうかしたのか」

「あと一つ」

その階級の話である。

「そしてその上にもなるか」

「上だと」

「そうだ、天使の階級は九で終わりではない」

こう話すのであった。

「もう一つあるのだ」

「もう一つか」

「それになった時には私の相手も可能だろう」

「その時にか」

「神を倒せるかどうか」

楽しんでいた。それを言葉に見せている。

「それがわかる時が来れば面白い」

「邪神よ」

今度は死神が彼に問うた。

「貴様は何を求めている」

「私がか」

「そうだ、何をだ」

「言った筈だが。混沌だ」

不敵な笑みでそれだというのだ。

「究極の混沌だ」

「そしてその中心にいるのはか」

「わかつていたか」

「私もまた神だ」

死神は己が神であることから話していたのだった。その目での言葉だった。

「知らないと思うか」

「そうだな。それでは話は早いな」

「それで何を求めている」

また問うた。その目から。

「貴様は一体何を求めているのだ」

「あえて言おう。混沌の渦だ」

「そうか、渦か」

「これで全て語った」

邪神は話を自分から切ってみせた。

「それではな」

「混沌の渦」

だが牧村はそれで全てがわかったわけではなかった。思わず自分の口で言ってしまった。そうしてそのうえで邪心に対して問うのだった。

「何だそれは」

「調べればすぐにわかることだ」

邪神は今は言おうとしなかった。

「それだけのことだ」

「すぐにだと」

「そうだ、それではな」

姿を消してきた。足元からだ。

### 第三十九話 妖魔その十五

「また会おう」

「消えるか」

「また現われる」

牧村の言葉に返してみせた。

「またな」

「その時にはじまる」

死神は牧村に言っていた。今は。

「いいな」

「わかった。妖魔か」

「激しい戦いになる」

「このことも告げた。」

「わかったな」

「よくな」

邪神は消えた。その頃にはもう夜になっていた。漆黒の邪神はその漆黒の中に消えていた。

その姿が消えたのを見届けてからだった。死神は牧村に顔を向けて言ってきた。

「さて」

「さて、か」

「今はこれで終わりだ」

こう彼に言うのだった。

「しかしこれで終わりではない」

「はじまりだな」

「新たな戦いのな。それではだ」

「明日にでも戦いがはじまるか」

「覚悟しておくことだ。いいな」

「わかっている。それではな」

牧村はこう言っただった。帰るのだった。  
サイドカーに乗り。そこでまた話す。

「それではな」

「帰るか」

「これでだ」

こう言っただった。ヘルメットも被った。

それで帰ろうとする。その時にだった。目玉が出て来て声をかける。

「いいかな」

「何だ」

「これからの戦いはかなりとんでもないよ」

こう彼に話すのである。

「尋常じゃないまでだね」

「尋常ではないか」

「うん、間違いなくね」

こう話すのである。

「妖魔は魔物みたいにルールの中で動いたりしないからね」

「無法か」

「というか法とは別の世界の連中だから」

「だから混沌か」

「そういうこと。奴等は混沌の世界の住人だよ」

それが妖魔達だというのだ。そうしてだ。

「だからね。どんなことでもするよ」

「破壊と殺戮か」

「周りを巻き込むこともあるしね」

「例えばだが」

死神もここでサイドカーに乗ってエンジンを入れようとする牧村に話す。

「私は命を刈る相手はあらかじめ決められているのだ」

「あらかじめか」

「そうだ、無闇に命を刈る訳ではない」  
「そこには法があるか」  
「神は法の中で動くものだ」  
「そうだというのである。」  
「その法を破ればそれで神でなくなるんだ」  
「神でなくなるか」  
「神にとつても法は絶対のものだ」  
「魔神でもね」  
目玉がまた話す。  
「けれどあの連中は違つんだよ」  
「邪神は法はないか」  
「そうだ、法があるとすればだ」  
「混沌そのものだね」  
「それが彼等の法だと。死神も目玉も話す。」  
「よくわかつておくことだ」  
「何だつてするからね」  
「では俺のこれからの戦いは」  
「周りを守らないといけないよ」  
目玉もそれを言う。  
「特にさっきのナイアーラトホテップはね」  
「手段を選ばない」  
「そうした者だとだ。二人は見抜いていた。」  
「策略家でもあるし」  
「用心しておけ」  
「おおよそわかった。では妖魔はだ」  
「自分だけを注意しないで」  
「それはな」  
「話はわかった」  
ここまで聞いてだ。牧村はエンジンを入れた。既にヘルメットは被っている。

そのうえでだ。動かしながらだった。

「では。そうした戦いだとしておく」

「うん、じゃあね」

「また会おう」

二人の別れの言葉を受けてだ。牧村は彼等とも別れたのだった。

そしてそのうえで今は屋敷に戻った。再び日常の生活に戻ったのである。

### 第三十九話

完

2010・6・12

## 第四十話 漆黒その一

髑髏天使

第四十話 漆黒

「ナイアーラトホテップか」

「そうだ」

今日は中之島図書館だった。そこで博士に話していた。

「知っているか」

「いきなり大物が出て来たのう」

博士の最初の言葉はこれであった。

「随分と」

「ということを知っているな」

「前に話した筈じゃ。その盲目のスフィンクスじゃ」

「それは聞いた」

牧村はまず博士に告げた。向かい合って座った状態だ。

「よくな」

「邪神の中でも相当高位にあつてじゃ。恐ろしい力を持っている」

「そして人の姿をしていた」

牧村はこのことも話した。

「漆黒で。顔付きは白人のものだった」

「それで本人が仮の姿と言ったのじゃな」

「その通りだ。わかっていたか」

「わかっていたぞ。あれが一番厄介な邪神なのじゃ」

「最もか」

「邪神の封印を解ける者じゃ」

「そうだというのである。」

「邪神の封印か」

「邪神は今封じられておる」

博士はまた話す。

「その殆どがな」

「そうなのか」

「しかしそれをじゃ。解ける者じゃ」

「では最も危険な者か」

「うむ」

また頷く博士だった。

「気をつけておくことじゃ」

「それはわかった。ではまずあいつからか」

「倒すというのじゃな」

「そうだ、倒す」

単刀直入なのは言葉だけではなかった。

「そして」

「そしてか」

「あいつを倒せば他の邪神達は封印を解かれないな」

「それはそうじゃが」

「では答えは出た」

彼は言った。断言だった。

「あの邪神を倒し話を終わらせる」

「それができればいいのじゃがな」

「いいというのか」

「強いぞ」

博士は牧村の顔を見てだ。そうして話す。

「あの邪神は」

「神だからか」

「それ以上のものがあるのじゃ」

「それ以上だと？」

「左様、ナイアーラトホテップはただ封印を解けるだけではないの  
じゃ」

博士はだ。このことを牧村に話すのであった。

「解けるだけの力があるのじゃ」



「力がか」

「だから解ける。そもそもあの邪神も封印されておった筈じゃ」

「誰が解いた」

牧村がここで問題にするのはこのことだった。

「あの邪神の封印は。誰が解いた」

「ヒントを出そうか」

「ヒントか」

「そうじゃ、ヒントを出そう」

こう牧村に話してきた。

「邪神の封印を解けるのは邪神だけじゃ」

「ではそれを解いたのは」

「ナイアーラトホテップ自身じゃ」

「そうだというのであった。話すのはこのことだった。」

「これでわかったな」

「どうやってその封印を解いたかだが」

「封印に少しずつ攻撃を仕掛けそうして長い年月をかけてじゃろっ  
な」

「長い年月をか」

「人が何十世代、いや何百世代か」

それだけでだ。気の遠くなる世代の話だった。

「それだけの時間をかけて封印に攻撃をして解いたのじゃ」

「執念か」

「神の時間は人の時間とはまた違う」

博士はまた話した。

「そういうことじゃ」

「人の時間とは違うからか」

「問題とすべきはあの邪神が自ら封印を解きそして世に出た」

言うのはこのことだった。

## 第四十話 漆黒その二

「わかるのう、それは」

「よくわかった。では今倒すのは無理か」

「智天使でもおそらく無理じゃ」

博士は難しい顔で話す。そうしてだった。

「最高位でもじゃ」

「あの天使でもか」

「そうじゃ。無理じゃ」

「そういえばだ」

天使の話が出てからの言葉だった。

「気になったことだが」

「今度は何じゃ？」

「天使の階級は九だったな」

彼が今度言うのはこのことだった。

「そうだったな」

「そうじゃが」

「上があると聞いた」

彼はだ。そのナイアーラトホテップの話したことを思い出しながら博士に話す。

「さらにだ。あの邪神が言ってきた」

「あの邪神がか」

「そうだ。さらに上があるとな」

「初耳じゃな」

博士はそのことを聞いてだ。眉を顰めさせて述べた。

「そうじゃったのか」

「調べてくれるか」

牧村はこのことを博士に問うた。

「このことを」

「わかった」

博士はすぐに牧村の言葉に頷いてみせた。

「それでは神戸に戻ったらすぐにじゃ」

「頼む、それでな」

「しかし。次から次に出て来るのう」

博士はあらためて溜息を吐き出す。そのうえで腕を組んで話すのだった。

「謎というものは」

「謎はか」

「謎は消えぬものじゃ」

博士はまた言った。

「人と謎は友達だからじゃ」

「謎は、か」

「そうじゃ。人は常に何かに対して不思議と思つものじゃ」

「それが謎だというのだな」

「左様、じゃから謎は常に人とある」

こう牧村に説明する。

「常にじゃ」

「人が謎を作るか」

「その文明の中でできるものじゃ」

「興味を持つことからだな」

「興味がないものは謎でも何でもない」

博士はこの真理も語ってみせた。

「そういうものじゃよ」

「わかった、よくな」

牧村もそれを聞いて頷く。

「そういうことか」

「左様、それでじゃ」

「その謎か」

「わしは今一つの謎を持っておる」

話をこう進めてきた。

「一つのじゃ」

「それは何だ」

「きつねうどんじゃ」

話に出したのはそれだった。

「きつねうどんの謎じゃ」

「大阪名物だな」

「うむ、この謎を持っておる」

神妙な顔である。それがかえって滑稽さを出していた。

「どうすべきじゃろうか」

「解決する方法はあるよ」

「ちゃんとね」

絶好のタイミングで妖怪達が話してきた。

「それはね」

「最高の方法がね」

「ふむ。それではじゃ」

神妙な顔のままでの言葉だった。

「それは何じゃ」

「食べればいいんだよ」

「味の謎だよね」

「それだよね」

「左様」

まさにそれだというのだった。

第四十話 漆黒その三

「味の謎じゃ」

「じゃあ食べればわかるよ」

「それでね」

「充分にね」

妖怪達もにこにこしながら博士の周りで話す。

「それだけじゃない」

「それじゃあ今からね」

「行かない？」

「うむ、そうじゃな」

神妙なものにさせている顔はそのままであった。

「では行くとするか」

「さて、お店は何処かな」

「何処がいいかな」

「それが問題だけれどね」

「ここはじゃ」

博士はここであえてといった感じで話した。

「立ち食いにするとするか」

「立ち食いそばの店か」

「あれがいいのじゃよ」

博士は今度は牧村に話す。

「立ち食いと言っても馬鹿にはできんぞ」

「僕達最初から馬鹿にしていないうし」

「そつだよね」

「ねえ」

「立ち食いもね」

妖怪達もそれは言う。

「ちゃんと認めてるよ」

「それで差別しないし」

「美味しいしね」

「だよな」

「立ち食いを馬鹿にする奴は立ち食いに泣くものじゃ」

博士はまた真理を話した。

「そういうものじゃ」

「じゃあ泣かない為にも」

「今はね」

「そこに行くんだね」

「さて、どの立ち食いに行くかじゃな」

次の話はこれであった。問題は幾らでもあるのだった。

「何処に行くべきかじゃが」

「鶴橋はどうだ」

牧村はここで言った。

「そこはどうだ」

「鶴橋か」

「近鉄の鶴橋の駅の下だったな」

場所も話した。

「その立ち食いは美味いらしい」

「ふむ、ではそこにするか」

博士もそれを聞いて頷く顔になった。そのうえでの言葉だった。

「今からのう」

「そうするといい。それでどうする」

「ではそこにするでしょう」

博士は即座に決断を下した。

「地下鉄ですぐじゃしな」

「大阪って地下鉄便利にできてるよね」

「それで何処にでも行けるしね」

「ちよっと路面が複雑だけれどね」

妖怪達もその路面についてはもう知っていた。大阪の地下鉄の。

「それでも便利だよね」

「そうそう」

「凄くね」

「あとさ」

「やっぱり大阪だよね」

ふと妖怪達の話が変わった。

「ここってね」

「そうだよね」

「それはどういうことじゃ？」

博士が妖怪達の今の話に問い返した。

「何かあったのか？」

「いやさ、阪神の帽子被ってる人が多いよね」

「法被着てる人もいるし」

「かなり多いよね」

「そうそう」

「大阪じゃかな」

博士も妖怪達と同じことを言った。

#### 第四十話 漆黒その四

「多いのは当たり前じゃ」

「じゃあ巨人ファンは？」

「いないの？」

「堂々と名乗れば命がないぞ」

これもまた大阪であった。

「関西で巨人ファンの人権はないぞ」

「本当にないんだね、それは」

「完全に」

「そうじゃ、ない」

まさにその通りだというのであった。

「試しに巨人グッズを来て大阪の街を歩いてみるのじゃ」

「死ぬね」

「殺されるね」

「南港に浮かぶね」

妖怪達もすぐに答えた。

「大阪でそんなことしたら」

「地獄に落ちるよね」

「僕達でもできないよ」

「死ぬに決まってるから」

「それが答えじゃ」

博士は冷静に述べた。

「巨人はここでは死の単語じゃ」

「甲子園でも凄いからね」

「一塁側だけじゃなくて甲子園全体が揺れるからね」

「もう壮絶にね」

阪神ファンのその熱狂ぶりはまさに日本一である。ファンをしてこうたらしめるといなのが阪神という球団が持っている魅力なのだ



るう。

「恐ろしいからねえ」

「何かが違うっていうかね」

「全く」

「大阪はその本場だし」

「阪神ファンの、という意味である。」

「神戸も阪神ファンだけれど大阪はもつと熱いよね」

「っていつか阪神と一体化してない？」

「だよねえ」

「大阪で阪神を馬鹿にしてはならんのだ」

博士はまた言った。

「けなして褒めるのはいいのじゃ」

「それはいいんだ」

「けなすのはいいんだ」

「阪神は何をやっても絵になる球団じゃ」

博士の今度の言葉はこれだった。

「どんな勝ち方をしてもどんな負け方をしてもじゃ」

「どんな負け方って」

「勝つだけじゃなくて」

「そうじゃ。絵になる」

博士はまた言った。

「それが阪神なのじゃよ」

「褒めてるんだよね、それって」

「負けて絵になるって」

「負けだけではない」

博士の言葉はさらに続くのだった。

「お家騒動やそういったものまで絵になる」

「ううん、確かに」

「何故か納得できるし」

「だよねえ」

「阪神だけはね」

妖怪達は結果として博士のその言葉に頷いてしまった。

「何故かどんなことでも不思議とね」

「絵になるよね」

「何でかな」

「訳がわからないよね」

「阪神だからじゃ」

博士の返答である。

「阪神だからじゃ」

「阪神だから絵になる」

「そういうことなんだね」

「つまりは」

「そうじゃ。阪神は何をしても絵になるのじゃ」

このことも再度言うのであった。

「それが阪神なのじゃよ」

「そうだな」

牧村も博士のその言葉に頷いてきた。

「逆に巨人はだ」

「負けないと駄目じゃ」

「そうだ。巨人には無様な負けがよく似合う」

牧村は巨人が嫌いだ。だからこそその言葉だった。

「実にな」

「そうじゃ。巨人の勝利は実に不愉快じゃ」

博士はまたしても話す。

## 第四十話 漆黒その五

「そういうことじゃ」

「全くだ。巨人は負けてこそだ」

「君もアンチ巨人じゃったな」

「巨人か」

「うむ、嫌いじゃな」

「大嫌いだな」

「これが返答だった。

「負けてこそだ」

「よい心掛けじゃ。そうあるべきじゃ」

「博士も巨人嫌いだしね」

「戦前からね」

「そうそう、阪神ができた頃から応援してるしね」

「古いよね」

その時からのアンチというのである。そして阪神ファンというのだ。

「年季が違うよね、普通の人と」

「そういえば博士って野球は何時から好きだったの？」

「職業野球の前から？」

「大学野球の頃からじゃ」

その時からだというのである。

「興味を持ったのはあれじゃな」

「あれ？」

「あれっていつと？」

「旧制中学の時からじゃ」

戦前は中学は五年だった。そして義務教育は小学校までだった。

「その頃からじゃな」

「旧制中学か」

「聞いたことはあるな」  
「そのうえにだ、だったな」  
牧村の言葉だ。  
「高校が三年あったな」  
「大学は三年だったり四年だったりした」  
「そういう時代だったか」  
「士官学校や兵学校は中学を出てから入った」  
所謂陸軍士官学校、海軍兵学校のことだ。  
「それは知らんか」  
「一応知ってはいた」  
牧村も勉強しないという訳ではないのである。  
「それはな」  
「左様か、それはいいことじゃ」  
「しかしだ」  
「しかし？」  
「実感はない」  
「それはないというのである。」  
「知らないからな」  
「まあ若いとどうしてもそういうこととはな」  
「知らないか」  
「旧制中学も昔の話じゃ」  
「こう言うのだった。」  
「だから仕方がない」  
「そうか」  
「わしは当然旧制中学出身じゃがな」  
「そして旧制高校か」  
「あの頃の高校は大学のようなものじゃった」  
「高校のことも話すのであった。」  
「そこが違うのじゃよ」  
「そういうことか」

「そしてじゃが」

博士の話は続く。

「あれはあれで非常に楽しい場所じゃった」

「旧制高校ねえ」

「博士の青春だからね」

「そうそう」

このことも話される。

「もう八十年以上前になるけれどね」

「九十年じゃないの？」

「そうだったかな」

その年齢は実際のところわからなくなっているところがあった。

「まあ戦前だね」

「そうだね」

「それも昭和の初期か大正か」

「そんな頃だね」

「芥川龍之介の本は初版で読んだぞ」

博士は自分からその年齢をおおよそ話してきた。

## 第四十話 漆黒その六

「どうじゃ、それは」

「初版でか」

「うむ、自殺した話もリアルで聞いた」

それはもう歴史になっていることであるが博士は違っていた。

「勿論太宰の話もじゃ」

「それもか」

「そうじゃ、それもじゃ」

もう一人の自殺したことで有名な作家に關しても話した。

「思えばどちらも結核じゃったしな」

「あの頃って結核にかかったら終わりだったからね」

「だよな、梅毒もね」

「終わりだったからね」

ペニシリンは終戦直後からのものである。フレミングが見つけたものだ。

「それまでかかったら終わり」

「そういうものだったからね」

「だからあの人達はどちらにしてもね」

長生きできなかつた。それは事実だった。

「けれど自殺したのはね」

「残念だったよな」

「確かにね」

「あれはショックを受けた」

博士もその自殺について詳しく語りはじめた。

「芥川のも太宰のものな」

「どちらもか」

「終戦直後は織田作之助も死んだ」

「あの作家もだったな」

「結核じゃった」

彼等が今いるその大阪の作家である。

「残念なことにじゃ」

「結核ね、あれはね」

「もう少しで助かる病気になってたのにね」

「本当にね」

妖怪達もしんみりとしたものになっていた。

「それがああして」

「死んだなんてね」

「もう何ていうか」

「惜しいことじゃった」

博士も腕を組んで話す。

「結核でどれだけ死んだのか」

「わからないか」

「数え切れぬ程死んでしまった」

そしてこうも話すのだった。

「わしの友人も結核で死んだ」

「そうだったのか」

「いい奴じゃったがな」

言葉がしんみりとしたものになっていた。

「しかしそれでもじゃ」

「結核でか」

「死んだ」

博士は苦い声で話す。

「まことに無念じゃ」

「その友人の墓には今もか」

「行くぞ。七十年になるか」

「七十年か」

「長いかのう」

ふとその時間も振り返るのだった。

「それは」  
「長いと言えば長いだろうな」  
牧村もそれは否定しなかった。  
「そうか。結核か」  
「結核や梅毒で死んだ者は多かった」  
「これがその時代だといふのである。」  
「わしにはついこの前のことに思える」  
「僕達もだよ」  
「それはね」  
「本当に最近だよね」  
「あの戦争の頃だから」  
「世の中は変わるものじゃ」  
「博士はまた話した。」  
「実にな。それでじゃが」  
「それでか」  
「昔と変わらんものもある」  
「こつも言つのであつた。」



#### 第四十話 漆黒その七

「味にしる何にしるじゃ」

「味もか」

「うむ、変わるものもあれば変わらんものもある」

博士はまた言った。

「それではじゃ。その変わらない味を楽しみに行くか」

「そうするとするか」

「うむ、それではな」

二人で話してだった。そのうえで食べに向かう。そうしてだった。きつねうどんを立ち食いで食べた後は串カツだった。そうしたものを食べたうえで牧村は博士達と別れ一人になった。そのうえで難波の街を歩いていた。

そしてならば花月の前を歩いているとだ。あの男が来た。

「暫く振りだな」

「呼んだ覚えはないが」

「安心しろ、こちらから来た」

こう返してきたのだった。

「私の方からな」

「では。用件はあれか」

「そうだ、あれだ」

にこりともせず牧村に告げてみせた。

「いいな」

「断るつもりはない」

牧村にしてもそのつもりはなかった。

「それではだ」

「ここで闘うか。それとも」

「ここで闘うのは一目につく。場所を変えるか」

「いいだろう。人の世界には人がいない場所も多い」

逆説的な真理を話してもみせたのだった。

「それではな」

「そこに入ってか」

「まずはその身体を変えることだ」

漆黒の男は牧村に告げた。

「髑髏天使にな」

「いいだろう」

牧村もそれに返してだった。そして。

ならば花月の前から離れる。そして前の商店街の脇に入ってた。

そこであらためて対峙するのであった。

「さて」

「ここで闘うか」

「闘いはすぐに終わるもの」

漆黒の男は不敵な笑みと共にこう述べた。

「さあ、出るがいい」

「貴様が闘う訳ではないのだな」

「それはまだ先のことだ」

ここでは不敵な言葉だった。

「貴様がそれに相応しい者になったその時だ」

「そうか」

「では、だ」

この言葉が終わるとだった。

男の背後に何かが出て来た。それは漆黒の翼だった。

顔はない。頭に角がある。その姿は何処かあるものを思わせた。

そして牧村もその思った存在をその口に出してみせたのである。

「悪魔か」

「キリストの世界の話だな」

「似ている。しかし違うな」

「如何にも」

黒衣の男もそうだと返してきた。

「ナイトゴーストだ」

「それがその妖魔の名前か」

「いい名前だと思うか」

「さてな」

その問いには積極的に答えようとしなかった。

「しかしだ。それでもだ」

「それでもだというのか」

「面白い戦いではありそうだな」

こう邪神に返したのである。

「中々な」

「面白いというか」

「少なくとも貴様等は楽しむな」

「如何にも」

その通りだというのだった。

「ただ。我々は魔物達とは違う」

「戦いだけではないのはもう知っている」

「破壊と殺戮か」

「如何にも。それも楽しむ」

また言う彼だった。

「それもだ」

「話は聞いた。それではだ」

「はじめるか」

「いや、まだだ」

だがここで牧村は言った。

「俺の相手はそのナイトゴーストとやらだな」

「如何にも」

「それはわかった」

「まだ何か言いたいか」

「俺の相手以外にもいるな」

邪神を見据えてだ。こう問うたのである。

## 第四十話 漆黒その八

「そうだな」

「私もいる」

そしてここだ。牧村の後ろから声が出てきた。その声は。

死神だった。彼がそこに来てだ。そのうえで言ってきたのである。

「私の相手は用意しているか」

「死神の相手か」

「いないという訳ではあるまい」

死神は邪神を見据えていた。それで彼に問うてきていた。

「そうだな、まだいるな」

「如何にも。貴様の相手も用意している」

「面白い。ではその相手は誰だ」

邪神を鋭い目で見据えながらまた問うてみせた。

「それではだ」

「出て来るのだ」

こう言うのであった。今度は地の底から出て来たのだった。

得体の知れない、何か影か泥を思わせる。そうしたものが出て来

たのである。

蠢くそれを見てだ。死神は言った。

「スライム、違うな」

「似ているが違う」

邪神の言葉は笑っていた。

「生憎だがな」

「ではその名前は何だ」

「シヨゴズ」

返答は一言だった。

「それがこの妖魔の名前だ」

「シヨゴズか」

「そうだ。いい名前だと思うか」  
「さてな」

死神の返答は牧村のそれと同じものだった。意識せずにそうなっていた。

「それはどうかな」

「特に何も思わないようだな」

「その魂を刈るだけだ」

彼が今言う言葉はこれだけだった。

「それだけだ」

「そうか」

「あくまでそれだけだ。さて」

「そうだな」

今の死神の言葉に応えたのは牧村だった。

「それではだ」

「はじめるとしよう」

「髑髏天使と死神」

邪神ナイアールトホテップはそのそれぞれの名前を言ってみせた。

「見せてもらっぞ、その戦いを」

「いいだろう、見るがいい」

「思う存分な」

両者もその声を受けて述べた。

「この髑髏天使の戦い」

「死神の鎌を」

言いながらだった。構えに入った。

そしてだ。髑髏天使は両手を拳にしてその中指のところを胸の前で打ち合わせた。そして死神は右手を拳にして胸の前に置いてみせたのだ。

それであった。彼等はそれぞれ青白い光、白い光に包まれて。戦いの姿になった。  
「行くぞ」

「やらせてもらおう」

髑髏天使はその右手を前に出して握り締めた。死神は右手に持ったその鎌を己の前で一閃させた。それがそのまま名乗りになった。それを見てだ。邪神も妖魔達に告げた。

「いいな」

「はい」

「わかっています」

言葉を出してきたのだ。その妖魔達だ。

「では我々も今より」

「髑髏天使、そして死神を倒します」

「楽しむがいい」

また言う邪神だった。

「思う存分な」

「はい、それでは」

「今より」

「戦いを楽しめ」

彼はまた言った。

「わかったな」

「貴様は戦わないのか」

「私も何かと忙しい」

邪神は今ほ笑って話すだけだった。

## 第四十話 漆黒その九

「その時が来ればその時にだ」

「わかった」

髑髏天使はこれ以上問わなかった。

「それでは。そうするがいい」

「ではな。生きていればまた会おう」

邪神は己の影の中に消えていった。これで終わりだった。

そうしてだ。後には妖魔達が残った。まずはナイトゴーストが髑

髏天使に言ってきた。

「さて、それではだ」

「闘うか」

「そうだ、是非闘おう」

彼は髑髏天使に対して告げてきていた。

「それでいいな」

「このナイトゴーストだが」

ナイトゴーストは自ら言ってきた。

「侮ることはないな」

「安心しろ、それはない」

こう返す彼だった。

「決してな」

「そうか、敵を侮ることはないか」

「侮る奴はそれまでのこと」

髑髏天使は静かに言う。

「その時に死ぬ。それだけだ」

「それだけか」

「そうだ、それだけだ」

また言ってみせたのだった。

「所詮はな」

「だからこそ侮りはしないか」

「貴様もそうだな」

目も鼻も口もない、その妖魔の顔を見ながら問う。

「それはないな」

「妖魔にあるのは破壊と混沌」

妖魔が言うのはこの二つだった。

「さすればだ」

「それはないか」

「敵は倒す。それだけだ」

「こつ言つのであつた。」

「ではだ。貴様もだ」

「行くぞ」

銀色の光に包まれた。それにより四枚羽の白銀の天使になった。

その煌く甲冑と両腕の剣を手いだ。彼は天上にあがった。

「闘いの場は選ばせてもらうがいいな」

「望むところだ。我もまた」

「貴様もだというのか」

「空での闘いを得意とする」

漆黒の翼を羽ばたかせての言葉だった。

「それを今見せよう」

「いいだろう、それではだ」

「行くぞ」

妖魔もまた天にあがった。そのうえで難波の空において死闘をはじめた。

死神はだ。シヨゴスと対峙していた。その中でだ。

「さて、そろそろだな」

「はじめなのだな」

「如何にも。貴様は地の妖魔だな」

「見ての通りだ」

多くを答えようとはしない妖魔だった。



「このままだ」

「そうだな。貴様はそうした妖魔だな」  
「そうしてだ」

妖魔はさらに言ってきた。

「この鬪いだが」

「どうだというのだ？この鬪いは」

「貴様にとって最後の鬪いになる」

死神への言葉である。

「貴様は俺によって死ぬのだからな」

「だからだというのだな」

「貴様をこの中の取り込み溶かす」

身体を震わせた。そのゼリー状の不気味な身体を。

「今ここでだ」

「面白い。ならば私はだ」

「そうはさせないというのだな」

「妖魔の魂ははじめてだが」

こつ前置きしてからの言葉だった。

## 第四十話 漆黒その十

「その魂冥界に送り届けてやるう」

「いいだろう、それではだ」

「行くぞ」

死神は大鎌を手にして述べた。

「いいな」

「いいだろう。行くぞ」

「来い」

二つの戦いが膜を開けた。まずは髑髏天使とナイトゴーストだった。彼等は街の上空を舞いそのうえで激しい応酬をはじめようとしていた。

その中でだ。妖魔が彼に言ってきた。

「髑髏天使よ」

「何だ」

「貴様の強さだが」

そのことについての言葉だった。

「かなりのものだな」

「それがわかるというのか」

「そうだ、わかる」

こう彼に言うのである。

「その発する気だ」

「それによつてか」

「それで充分にわかる」

また彼に対して告げる。

「充分にな」

「そうか。それは俺も同じだ」

「我の強さがわかるというのか」

「如何にも。よくわかる」

これは実際のことである。彼は妖魔の発する気配からそれを察していたのだ。

「実にな」

「一つ言っておこう」

「何だ」

「確かに我は強い」

妖魔もそれは認める。

「しかしだ。あの方はさらに強い」

「あの方が」

「そうだ。あの方だ」

あえてこう言うのであった。

「あの方はさらにだ」

「あの邪神のことだな」

「ナイアールトホテップ様は我等よりもさらに強いのだ」

邪神とはその彼のことだった。

「今の貴様では勝てはしない」

「智天使よりもか」

「そうだ、智天使では勝てはしない」

「では何で勝てるというのだ」

「さらに強くなることだ」

言いながらだった。飛翔してきた。

そうしてだ。両手のその爪で襲い掛かってきた。それで髑髏天使を切り裂かんとする。

「むっ」

「防いだか」

「来るとわかっていれば容易だ」

左手のその剣で防いでみせたのであった。妖魔の右手からの攻撃をだ。

「実にな」

「見ればわかることはな」

「見ればか」

「そうだ、それでわかることは容易だ」

「こう妖魔に対して言う」

「それだけでだ」

「そうか。それではだ」

「それでは。何かあるな」

「我等は魔物とは違う。しかしだ」

そして話したことは。

「魔物と似たこともできる」

「という」

「見るがいい」

一旦後ろに飛び間合いを開けてきた。そうしてだった。

そこで羽ばたき何かを出してきたのだ。それは闇だった。

闇そのものを出してだ。妖魔はその中に消えたのだ。声だけが聞こえる。

「見えればといったな」

「それで姿を消してきたか」

「そうだ、こうしてだ」

「こう言うのである。」

「姿を消してみたがだ。これならばどうする」

「面白いと言っておこう」

髑髏天使はその闇の中で妖魔に対して告げた。

「実にな」

「面白いが」

「そうだ、面白い」

何も見えはしない。見えるのはまさに闇だけだ。だが彼はその中で言うのである。

「これもまた、だ」

「余裕をみせていると見ていいのか」

「見るがいい」

彼は言ってみせた。

「それを確かめたければだ」

「いいだろう。それではだ」

音も聞こえない。しかしだった。

明らかに何か動いた。髑髏天使もそれはわかった。

## 第四十話 漆黒その十一

「ここでまた我が名を言っておこう」

「貴様の名をか」

「そうだ。ナイトゴースト」

「この名をあえて言ってみせたのである。」

「それを言っておこう」

「夜か」

「夜は闇」

彼は言った。

「その闇の中でこそ我はその力を見せるのだ」

「力もだというのだな」

「姿は消える」

まずはこれだった。

「そして何もかもがだ」

「貴様の全てがか」

「闇は全てを消してくれる」

妖魔の声だけが聞こえてくる。

「だからこそだ」

「ふむ。それではだ」

ここでだ。髑髏天使はその両手に持つ剣に何かを宿らせた。

雷であった。それは黄色く輝いている。

「雷か」

「そうだ、そして」

「光だな」

「闇には光だからな」

だからだともいうのだ。

「だからこそだ。こうしてだ」

「我を探し出すというのか」

「その通りだ。これにはどうする」

「只今まで生きていた訳ではないな  
それを見ての妖魔の言葉だった。

「どうやら」

「頭脳を見てか」

「そうだ、頭脳もあるか」

「少なくとも考えて闘わなければだ」

「生きてはいられないか」

「そうだ」

こう妖魔に対して答える。

「その通りだ」

「そうだな。ではその頭脳、見せてもらおう」

妖魔は闇の中から告げてきた。

「この闘いの中でな」

「行くぞ」

こうしてだった。髑髏天使はその雷を使った。そして。

死神はシヨゴズと闘っていた。その中でだった。

妖魔は地の底から出ては消え出ては消えだった。そうして死神と闘っていた。死神はそれに対して下からの攻撃をかわすので必死だった。

「くっ……」

「どうだ、下からの攻撃は」

妖魔の勝ち誇る声がする。

「避け難いな」

「確かにな」

死神は下から襲い掛かる妖魔の身体をかわしながら述べた。

「これはかなり」

「しかし諦めてはいないな」

「私も変わったようだ」

一旦着地してからの言葉だった。

「以前はそうではなかったが」

「今は違うか」

「何故かわからないが諦めが悪くなったものだ」  
「そうだというのだった。」

「随分とな」

「そうなのか」

「そうだ、それが今実際に出ている」

彼は言った。

「貴様を倒す」

「その諦めの悪さでか」

「そうだ、貴様を倒す」

両手にその大鎌を持つての言葉である。

「わかったな」

「面白い。ではどうする」

妖魔は死神の言葉を受けたうえで問い返してみせた。

「この俺を。どうして倒す」

「どうしてか、か」

「俺はここから出ることはない」

得意気に笑ってさえた。

「地の中からだ。俺はここから出ることはない」

「だから倒せないというのか」

「如何にも」

まさにそうだというのだった。



## 第四十話 漆黒その十二

「俺は地の中で蠢き地の中で生きる」

「そうした妖魔だな」

「そうだ。その俺をどうして倒す」

また死神に対して言ってみせた。

「どの様にしてだ」

「一つ言っておく」

死神は妖魔のその言葉に落ち着いた声で返してみせた。

「一つだ」

「何だ、それは」

「私はただ身体を斬るだけではない」

「俺だけをだというのか」

「私の鎌は他のものも斬ることができる」

そしてだ。こうも言ってみせたのだ。

「魂もだ」

「魂をか」

「そしてだ」

言葉を続ける。

「貴様もまた倒すことができるのだ」

「面白い。それでは斬ってみるがいい」

妖魔は死神の言葉を受けてさらに楽しげに言ってきた。

「俺を。どうするつもりだ」

「行くぞ」

死神は言った。そしてだった。

一旦跳んだ。そのうえで下にその大鎌を投げてみせた。それと共に言った。

「これで決まる」

「鎌を地面に投げ付けるだけではないのか」

「そう思うか」

「違うというのか」

「そうだ、それを今から見せよう」

「こう言うのだった。その激しく回転する己の大鎌を見ながらだ。」

「貴様にだ」

「では。俺はだ」

「ここだ。妖魔はその身を地の中に隠してみせた。」

「姿は見えなくなった。それで完全にだった。」

「さて」

「しかしだ。声だけは聞こえてきた。」

「どうする？」

「どうするか、か」

「俺はこうして姿を消した」

「楽しげに死神に対して話してきていた。」

「さて、それでどうするつもりだ」

「言った筈だ。私の鎌に斬れないものはない」

「鎌は放ったままだ。そのままだった。」

「何もかもな。斬るのだ」

「では今の俺もか」

「そうだ。斬れる」

「そうだというのだった。」

「既に貴様のいる場所はわかっている」

「馬鹿な。俺の姿は見えない筈だ」

「確かに見えない」

「それは彼も否定しなかった。」

「それはだ」

「見えなければわからない筈だが」

「目だけではないのだ」

「耳か。しかしだ」

「耳についてもだった。妖魔は笑って言ったのだった。」

「その耳も地の底からの声にはわかるまい」  
「それもまたその通りだ。私は今は耳も使っていない」  
「五感でわからなくして何でわかる」  
「そのこともまた貴様に教えよう」  
「これが彼の言葉だった。」  
「よくな」  
「教えるだと」  
「そうだ。あの世に送るそのついでにだ」  
「こつ妖魔に対して言ってみせるのだった。」  
「それも教えてやろう」  
「戯言か」  
「そう思うか？」  
死神の声は笑っていない。そのままだった。  
「思っのなら思えばいい」  
「いいというのだ」  
「そうだ、そう思っておくといい」  
彼はまた言ってみせた。  
「そのうえであの世に行くといい」  
「ふん。かなりの自信があるのは確かだな」  
「自信ではない」  
「では何だ」  
「確信だ」  
「それだというのだった。」  
「今私は確信しているのだ」  
「確信。貴様の勝利をか」  
「それを確信している」  
その激しく回転する大鎌を見ながらの言葉だった。

## 第四十話 漆黒その十三

「では。見るのだ」

「むっ!？」

鎌は地面に激突するかと思われた。しかしであった。

何と鎌がだ。地面の中に入っていった。アスファルトをすり抜けそのうえで入ったのだ。

そうしてだ。地面の中にいるその妖魔に向かい。

一気に両断した。上から下に突き抜けた。そのうえで回転して戻り死神のその手に返ったのであった。

死神はその鎌を受け取ってだ。それから妖魔に対して言った。

「こういうことだ」

「まさか。地の底でもそのまま進めたのか」

「そうだ。私の鎌はあらゆる場所に入ることができる」

このことを妖魔に対して話した。

「そして斬ることができるのだ」

「それが死神の鎌か」

「そういうことだ。これでわかったな」

「このことはわかった」

それはわかったと。妖魔は返した。身体を両断されながらもそれでもだった。アスファルトの上に出てきてそのうえで宙に浮かぶ死神と対した。

「これはな。だが」

「だが、か」

「それでも聞こう。何故わかった」

「貴様の居場所がか」

「そうだ。それは何故わかった」

このことを問うのだった。

「それは何故だ」

「気配だ」

「気配か」

「身体から発せられる気配。それを見たのだ」

「こう妖魔に対して述べた。」

「それでわかったのだ」

「成程、それでか」

「気配を隠すことは容易ではない。例え姿を完全に隠してもな」

「俺はそれがわかっていなかったか」

「だからこそ敗れた」

死神は妖魔を見下ろしながら告げた。

「そういうことだ」

「わかった」

妖魔は彼のその言葉に頷いた。

「そういうことなのだな」

「その通りだ。そしてだ」

「そしてか」

「逝くがいい」

妖魔に対してこうも告げた。

「今からな。逝くがいい」

「そうだな。そうさせてもらおう」

妖魔もだった。死神のその言葉に対して頷いた。

「最早そうするしかない」

「そして永遠に眠れ」

死神はまた妖魔に告げた。

「そのままな」

「そうさせてもらおう。潔くな」

シヨゴスはそれで消えた。赤い炎に包まれその中で眠った。そして。

髑髏天使はその闇の中で稲妻を放った。その光で妖魔を映し出すとしていた。

「これならばだ」  
「私を見ることができるといっただな」  
「如何にも。光は闇を払う」  
彼は言った。  
「だからこそだ」  
「面白い考えだ。ではしてみろ」  
闇の中から声だけがする。  
「是非な」  
「見えぬというのか」  
髑髏天使は妖魔のその言葉からそれを察した。  
「だからか」  
「さてな。しかしだ」  
「しかし？」  
「私からは見える」  
「そうだとしたのであった。」  
「よくな」  
「見えるというのか」  
「そうだ、見える」  
彼はまた言った。  
「光から闇は見えぬが闇から光は見える」  
「闇からはか」  
「そういうことだ。光は見るものであり闇は隠れるものだ」  
「確かにな」  
「そういうことだ。そして」  
「そして？」  
「こつすることもできる」  
気配がした。髑髏天使はそれを感じすぐに身体を左に捻った。

#### 第四十話 漆黒その十四

それで攻撃をかわした。妖魔が爪で襲おうとしてきたのだ。だが妖魔は攻撃をかわされてもだ。それでもだった。

「ふむ。そうか」

「特に思うところはないか」

「流石だな。智天使にまでなっただけはある」

声は遠くに離れてきていた。そのうえで笑っていた。

「この程度では効かぬか」

「気配でわかった。今のはな」

「一瞬だけ出してしまったか。しかしだ」

「しかしか」

「これで終わりと思わないことだ」

こう言うのだった。

「これでな」

「ではどう来る、次は」

「案ずることはない」

今度の声は後ろからだった。

「まだやり方がある」

「そうか。ではだ」

ここで遂にであった。髑髏天使はその稲妻を放った。

それは一方に放たれたものではなかった。四方八方、そして上下にもだ。立体的に蜘蛛の巣を思わせる梯子状の形の黄色い稲妻を放ったのだ。

それでだ。妖魔をも襲った。

「むっ!？」

「稲妻は確かに光だ」

稲妻を放った髑髏天使は言った。

「しかしだ」

「光だけではないということか」

「こうして貴様を狙い倒すこともできる」

「それでか。稲妻を選んだのか」

「その通りだ。これでわかったな」

「よくな」

妖魔は右手と左足に稲妻を受けてしまった。その痛みには耐えながらそのうえで髑髏天使の言葉に対して返してみせたのである。

「やるものだ。予想以上だ」

「貴様の予想以上だな」

「やる。しかし」

「まだ闘うのだな」

「妖魔の闘いもまたどちらが死ぬまで行われるもの」

そうした意味では魔物達と同じであった。

「だからこそだ」

「そういうことか」

「その通りだ。貴様が死ぬか私が死ぬか」

「どちらかしかないか」

「さて、どちらがいい」

声は死んではいなかった。

「貴様を選ぶのはどちらだ」

「俺は生きる」

後ろからする妖魔の問いにこう返した。

「それだけだ」

「つまり貴様が勝つということか」

「如何にも。死ぬのは貴様だ」

決して振り向かない。相手が後ろにいることがわかっていてもだ。

「そういうことだ」

「よくわかった。では私はだ」

「生きるつもりだな」

「生きてこの世界に破壊と殺戮をもたらす」



そうするといふのだった。

「その為にもだ」

「いいだろう。ならばだ」

「行くぞ」

妖魔は言った。

「今からな」

「来い。斬る」

やはり振り向かない。

「そうしてやる」

「斬れるか」

しかし妖魔は言うのだった。

「果たして。私を」

「斬れる」

返答は一言だった。

「貴様が案じることではない」

「それは自信か」

「自信か。そうではない」

「違うといふのか」

「そうだ、言つなら予言だ」

「予言だと」

「そうだ、予言だ」

うそぶいていた。あえてそうしているのだ。

## 第四十話 漆黒その十五

「それを言っておく」

「貴様はほらや嘘をつく人間ではないようだがな」

「決まっていることを言うのが予言ならばそれだ」  
「そうだといいのだった。」

「これでわかったな」

「そういうことか」

「その通りだ。では来い」

また妖魔に対して告げた。

「予言をその通りにしてみせよう」

「では私も予言をしよう」

妖魔はふとここでだ。こんなことを言ってきたのだった。

「それでいいか」

「貴様の予言か」

「そうだ。勝つのは私だ」

彼の予言はそれだった。

「貴様は私に倒される」

「貴様の予言、確かに聞いた」

髑髏天使はまだ振り向かない。

「今な」

「それでは死ぬ覚悟はできたか」

「俺は予言した。その必要はない」

こう返すだけだった。

「そういうことか」

「そういうことだ。では来い」

「行くとしよう」

動いた。そのうえで向かう。黒い闇の風だった。

だが髑髏天使はまだ振り向かない。そうしてだった。

気配がすぐそこまで来た。ここであった。

ここで振り向いてだった。右手の剣をその振り向きざまに一閃させた。

その剣が斬った。闇を。

斬った感触はあった。間違いなかった。

「くっ……」

「予言はその通りになってこそその予言だ」

彼は振り向いたその姿勢で言った。

「しかしその通りにならないければ」

「何だというのだ」

「只の戯言だ。それに過ぎない」

「では私の言葉は戯言か」

「そうなる。残念だったな」

「見事だ」

妖魔は黒い血を流していた。そのうえでの言葉だった。

「髑髏天使。ここまで生きているだけはある」

「闘いの中でだな」

「そうだ。それは見事だ」

また話す彼だった。

「私を倒すだけはある」

「背中を見せればそこに来る」

また言う髑髏天使だった。

「そしてそこを斬るだけだ」

「口で言うのは容易いがな」

「勝負は全て一瞬で終わる。ならばだ」

「これもいいというのか」

「そういうことだ。では死ね」

彼は言った。

「あの世に旅立つのだ」

「そうさせてもらう。それではな」

青い炎に包まれていく。そうしてだった。

その中に消えた。それと共に闇が消え元の世界に戻った。

「終わったな」

「貴様はまだ生きたな」

そこに死神が来た。そのうえで言ってきた。

「無事にと言っべきか」

「それがどうかしたか」

「何も無い。ただ」

「ただ。何だ」

「貴様は最早完全に人間となったな」

こう彼に言うのだった。

「魔物になることはないな」

「それはわかるのか」

「妖魔の闇の中でもそのままだった」

「それが何かあるのか」

「あの闇は妖魔の闇」

彼は言う。

「それに取り込まれなかったな」

「どういうことだ？」

今の死神の言葉にだ。すぐに問い返した。

「それは」

「言ったまでのことだ。若し貴様が人の心をなくしていればだ」

「取り込まれていたというのか」

「そうだ」

これが死神の言葉だ。

## 第四十話 漆黒その十六

「そうなっていた」

「そうか」

「驚かないのか」

「俺は取り込まれなかった」

その事実を淡々と語るのだった。

「それならばな」

「少なくとも取り込まれないだけのものは身に着けたな」

「如何にも」

また答えた髑髏天使だった。

「それならばそれで終わりだ」

「しかし。貴様はまだ強くなつたな」

死神はここで話を変えてきた。

「実にな。特に」

「特にか」

「心がだ」

その心を指摘するのだった。

「強くなつたな」

「大阪での鍛錬の結果だな」

「間違いなくな。だからこそ闇にも取り込まれなかった」

その理由も話した。

「いいことだ。だが」

「だが？」

「心はそのまま強くなればいい。後は腕だ」

「戦いの腕か」

「妖魔は強い。そして禍々しい」

「魔物の様に強いだけではないか」

「禍々しさもある。それが大きいのだ」

「こう話すのだった。

「それも忘れるな」

「感じ取った。ならば忘れない」

また答えた髑髏天使だった。

「そういうことだ」

「そうか。ではだ」

死神はまた話を変えてきた。

「これで終わりだが」

「変身を解くか」

「闘いはもうない。ならばな」

「よし、わかった」

ここまで聞いてであった。髑髏天使も頷いてみせた。

そのうえで死神と共に降り立ちだ。牧村に戻った。

死神も黒のジーンズとタンクトップになる。夏らしいラフな格好だ。

しかしその格好でもだ。彼は言うのだった。

「暑苦しい服か」

「黒だからな」

牧村はその服の色から述べた。

「どうしてもそう見えるな」

「そうか」

「黒が好きなのうだな」

「黒は死の色だ」

死神のここでの返答はこれだった。

「だからだ」

「そうか。だからか」

「だから私は黒を愛する」

「色としてか」

「戦う時の白も悪くない。だが黒は普段から好きだ」

「そういうことか」

「そういうことだ。ではこれからだが」

死神は街の方に目をやっていた。

「街を楽しむとしよう」

「街をか」

「大阪の街は飽きない。実にいい」

彼は言った。

「いるだけで面白さを感じる街だ」

「だからこそか」

「少し見回る。何か食べるのも悪くはない」

「ならその辺りの店に入ってみるといい」

牧村は食べることにについてはこう勧めた。

「どの店でも普通に楽しめる」

「味をか」

「この街は特別だ。何を食べても美味しい」

「成程な。それはいい街だ」

「好きなものを好きなだけ食べるといい。それではだ」

ここまで話してだ。牧村は踵を返した。

「俺はこれでだ」

「帰るか」

「屋敷に帰りまた修行だ」

死神に踵を返した。そのうえでの言葉だった。

## 第四十話 漆黒その十七

「だからだ」

「そうか。また修行か」

「修行は多い。そして」

「そして」

「得るものも多い。だからこそまたする」

「では次の戦いまでにだ」

死神も自身に背を向けた彼に対してだ。こう告げた。

「より強くなっておくことだな」

「そうさせてもらう。それではな」

「またな」

「うむ、また会おう」

これで別れた。今はだ。

牧村は自分が呼んだサイドカーに乗った。そのうえで祖父母が待っている屋敷に戻った。屋敷に戻るとすぐに祖父母と顔を合わせた。するとだ。まず祖母が言ってきた。

「決闘でもしたのかい？」

「何故そう言う」

「そんな顔だからね」

「だからだというのだった。」

「あんたの今の顔はね」

「決闘の後の顔か」

「鋭く陰しくなってるよ」

「また彼に言ってきた。」

「特に目がね」

「目が、か」

「ええ、そうになっているわよ」

「こう言うのだった。」



「それもかなりね」

「そうだな」

祖父も言ってきたのだった。

「真剣勝負をしてきたな」

「真剣か。確かにな」

髑髏天使としての戦いについては言わない。しかしであった。

「言われてみればそうだ」

「そうなの、やっぱりね」

「誰とは聞かないがそうか」

「そうだ。だが生きている」

彼は祖父母にこう答えた。

「それにだ」

「犯罪は犯してないみたいね」

「そういうものではないか」

「犯罪か。そうだな」

これはこの時まで考えたことのないことだった。

「それとはまた違う話だな」

「だったらいいわ」

「人の世界のことではないのならな」

「それでいいのか」

「あんたが何をしているのか」

「それは問わない」

それはあくまでというのである。

「だがそれでもね」

「人の理を外れていなければそれでいい」

「そうか。それでか」

また答えた彼だった。そうしてだった。

「それでだが」

「ええ、夕食ね」

「あるぞ」

話はそこに向かうのだった。それだった。

「フライを揚げたけれど。どうだ？」

「婆さんのフライは美味いぞ」

「フライか」

それを聞くとだった。牧村の顔が少し動いた。

## 第四十話 漆黒その十八

そのうえでだ。また問うのだった。

「牡蠣か海老か」

「両方共よ」

祖母が答えた。

「どちらもあるわよ」

「そうか、両方か」

「うむ、たらふく食べるといい」

今度は祖父が言ってきた。

「好きなだけな」

「有り難い、それではな」

「お味噌汁もあるわよ」

それもあるというのだった。

「菊菜のおひたしもあるし」

「味噌汁は大根のものだ」

祖父も言ってきた。

「さあ、食べましょう」

「三人でな」

「三人か」

あらためてだった。この言葉に家族の絆も感じたのだった。

「そうか。俺は一人ではない」

「おやおや、何時一人になったんだい？」

「そんなことはない筈だがな」

祖母の顔がここでは笑みになった。

「だから食べましょう」

「一人で食べても美味くはない」

祖父はこんなことも言ってきた。

「皆で食べてこそだ」

「そうだな。一人で食べる飯は美味さが限られている」  
牧村もこう話した。

「しかし家族で食べればだ」

「美味しいでしょ」

「そういうことよ」

「そうだな。それではな」

「食べましょう」

「行くぞ、三人で」

「ああ」

祖父母の言葉に頷く。ちゃぶ台のある居間に向かった。するとそこにはもうそのフライや味噌汁、それに野菜にお椀も置かれていた。それを見てだった。牧村はまた言った。

「美味そうだな」

「だから腕によりをかけてるから」

「しかも家族で食べるからな」

「それも当然だというのであった。

「さあ、それなら」

「いいな」

「食べるか」

三人で食卓につく。いただきますの後で食べる。すると。

「美味しいな」

「そうでしょ？美味しいでしょ」

「さあ、どんどん食べる」

祖父母がまた笑顔で声をかけてきた。

「あなたは私達の孫だからね」

「遠慮することはないぞ」

「遠慮もか」

それを聞いてだった。牧村はまた言った。

「いらぬのか」

「だから他人じゃないのよ」

「それでどうしている、遠慮が」

「そういうことになるか」

「わかつたら食べなさい」

「いいな」

祖母の声がここでも温かい。

「スイカもあるし」

「それもな」

「有り難う」

牧村は珍しくだ。この言葉を出したのであった。

「それではな」

「皆で食べましょう」

「家族でな」

こう話してであった。三人で楽しく仲良く食べた。彼にとっては祖父母もかけがえのない家族だった。このことをよくわかつた時であった。

#### 第四十話 完

2010・6・27

## 第四十一話 暗黒その一

髑髏天使

第四十一話 暗黒

「妖魔か」

「まさか本当にいるなんてね」

「これは考えていなかったな」

「噂ではなかったのか」

「私達の遙か前にいた存在」

魔神達であつた。彼等は今闇の中にいた。その場所で話をしていた。

「今ここに出て来た」

「そしてそのうえでこの世界に破壊と殺戮をもたらす」

「混沌の存在がいた」

「はい、そうです」

彼等のまとめ役の老人がだ。ここで静かに述べてみせたのだった。

「彼等が出て来ました」

「ふむ、わしが復活してすぐじゃったな」

今言つたのは老婆だった。

「髑髏天使と戦うと思つておつたのじゃがな」

「残念ですか」

「残念といえば残念じゃな」

老婆は老人の問いにこう述べた。

「確かにのう」

「左様ですか、やはり」

「ただ、じゃ」

しかしだった。ここで老婆は言つたのだった。

「妖魔に対してはどうするのじゃ」

「そうだな。それだ」

「妖魔が出て来た」  
「それに対してどうするか」  
「見ているだけじゃないよね」  
「はい、それはしないでおきましょう」  
老人は同胞達の言葉にこう返したのだった。  
「それでは何も面白くありません」  
「そうだな。それはな」  
「何の余興もない」  
「見ているだけでは喜びは限られる」  
「それでは」  
「ただしです」  
老人はここでまた言った。  
「髑髏天使との戦いは一時中断になります」  
「中断なのか」  
「そうなのか」  
「髑髏天使との戦いは」  
「はい、戦力は集中しないといけません」  
「穏やかな言葉である。しかしその言うことは確かであった」  
「ですから。妖魔と戦うのなら妖魔に対してです」  
「戦力を集中させる」  
「そうして」  
「妖魔を倒す」  
「そうするべきです」  
「こう述べたのだった。」  
「ですから今はです」  
「どちらと戦うかを決める」  
「そうするべきね」  
「ここは」  
「しかしだ。髑髏天使はまだいい」  
「今言ったのは紳士だった。」

「髑髏天使は確かに我々と戦う存在だ」

「はい」

「だがこちらから仕掛けない限り来ることはない」

牧村の性格を踏まえてのことだ。確かに彼は自分から襲い掛かることはない。それを考えるとわかりやすい相手ではあるのだ。

「それはない」

「その通りです。しかし妖魔はです」

「あれだろ？破壊と殺戮が目的だったな」

今度はロツカーが話した。

「そうだったな」

「はい、その通りです」

「それなら俺達にも普通に攻撃を仕掛けてくるんじゃないか？」

彼はそう見ていた。



## 第四十一話 暗黒その二

「俺達が髑髏天使と戦っていても気にせずな」

「じゃあここはどうする？」

「そうだね。それが問題だよ」

青年と子供も言ってきた。

「髑髏天使は仕掛けて来ないと何もしてこない」

「けれど妖魔は違う」

「じゃああれだな」

「そうね。ここは」

男と女が言ってきた。

「妖魔と戦うか？」

「髑髏天使は放っておいて」

「それでいいのでは？」

今度は中年の男が考えを述べてきた。

「ここは」

「うつむ、それでは」

「そうするべきかしら」

黒人と美女も妖魔と戦う方に動いた。

「髑髏天使との戦いは後でいい」

「それならね」

「そうじゃな。わしもそれに賛成じゃ」

老婆が最後に言ってきた。

「妖魔と戦うべきじゃ、まずは」

「わかりました」

老人は同胞達の意見を聞いたうえで最後に述べた。

「では我々はこれよりです」

「髑髏天使との戦いを中断し妖魔に向かう」

「そうするか」

「それでね」  
「はい、それではです」  
ここでまた言う老人だった。  
「私が髑髏天使に伝えに行きましょう」  
「待つのじゃ」  
ここで老婆も出て来た。  
「わしも行くう」  
「貴女もですか」  
「来たばかりじゃ。もう一度挨拶もしておきたい」  
「だからですね」  
「そういうことじゃ。それでじゃ」  
それが理由だというのだ。  
「それでよいかのう」  
「はい、それでは」  
老人は微笑んで老婆のその申し出を受けて述べた。  
「共に参りましょう」  
「相変わらず話がわかるのう」  
「いえいえ、こうしたことはやはりです」  
「やはり？」  
「一人だけで楽しむものではありません」  
「だからだと。老人は話す。」  
「ですから。共に参りましょう」  
「さて、その時に妖魔も出て来ればじゃ」  
「丁度いいですね」  
「ナイアーラトホテップじゃったな」  
「そうです」  
妖魔を束ねる邪神の名前も既にわかっていた。  
「盲目のスフィンクスです」  
「しかし見えている」  
「面白いですね。矛盾しています」

「しかしその矛盾もまた妖魔の属性じゃったな」  
「混沌」

老人が言う言葉はそれだった。一言だった。  
「ですから」

「その為に矛盾もまた当然のことか」

「そうなります。面白いですね」

「聞けば聞く程な。わし等は楽しみじゃが」

「戦いは楽しみ」

「そうじゃな。じゃから妖怪から魔物になった」

それが妖怪と魔物を分けるものだった。妖怪が戦いを楽しむようになればそれで魔物になるのだ。両者の違いはそうしたものであるのだ。

## 第四十一話 暗黒その三

「じゃからな」

「それではです」

「共に行かせてもらおう」

「こう言つてであつた。彼等がまず姿を消した。」

「行つてらっしゃい」

「楽しんでくるといい」

姿を消した彼等に子供と青年が声をかける。

「さて、僕達は僕達でね」

「遊ぶとするか」

「遊園地はどうですか？」

中年男が言つてきた。

「そこで遊ぶというのは」

「そうね」

「悪くはないな」

女と男が応えた。そして紳士とロッカーもだ。

「我等もそれでいい」

「さて、お化け屋敷でも行くか」

「ふふふ、今の人の世はかなり」

「面白いものだ」

黒人と美女は笑つてさえた。そうしてだつた。

彼等もまた闇の中から消えた。そのうえで楽しみに向かうのだった。

牧村はこの時だ。プールにいた。そこで二人の声を聞いていた。

「ねえお兄ちゃん」

「泳がないの？」

未久と若奈だ。見れば二人の格好は。

未久は白のビキニだ。胸は小さいがスタイルはかなりのものだ。

若奈は黒の競泳水着である。やはり胸はないがそのスタイルは均整が取れている。その二人が安楽椅子に寝て休んでいる彼に声をかけてきたのだ。

「折角プールに来たのに」

「泳がないと」

「後で泳ぐ」

彼は今はこう言うのだった。見れば円になった流水プールに広い百メートルはあるプール、滑り台のあるプールと種類はかなりある。彼は今流水プールの横にいるのだ。

「今は休ませてくれ」

「っていつかここ来るまでに走ってるわよね」

「そうよ。二十キロね」

「二十キロねえ」

未久はその距離を聞いてまず呆れた。

「それを毎日よね」

「そうだが」

「運動選手並じゃない、それって」

ここまで聞いてこう言うのだった。

「本当に」

「それで今度は泳ぐのよ」

「何かそこまで体力あったら何でもできそうね」

未久は隣にいる若奈のその言葉を聞いて述べた。

「本当にね」

「そうかも。実際に牧村君ってね」

「うん」

「そう簡単に倒れそうもないし」

「そうよね、確かに」

「だから何でもできると思う」

その牧村のことに他ならない。

「未久ちゃんもそう思わない？」

「思います」

「こう返す彼女だった。

「私も」

「そうよね。やっぱり体力だからね」

「まずはそれだというのがあった。

「それに身体のこなしも凄いし」

「こなしもですよ。それも確かに」

「このままだとテニス選手かフェシングの選手になれるわ」

「若奈の言葉は本気のものだった。

「絶対にね」

「特にフェシングはですよ」

「ええ、なれるわ」

「間違いないというのである。

#### 第四十一話 暗黒その四

「金メダル取れるかも」

「狙ってみたら？」

未久はここまで聞いてから兄に告げた。

「一回本気で」

「メダルか」

「そうよ。狙ってみたら？」

兄に再度告げる。

「それもね」

「俺はそうしたことには興味はないがな」

「一生食べていけるよ」

即物的な言葉だった。

「それでも駄目？」

「何故そこで食べる話が出る」

「だって人間食べないと生きられないじゃない」

やはり即物的な主張である。

「だからね」

「それでか」

「そうよ。そもそも将来どうするのよ」

「ああ、それは大丈夫なのよ」

だがここで若奈が話してきた。

「それはね」

「もう決まってるんですか、就職先が」

「大学に残るみたいよ」

そうだというのである。

「大学にね。それでそのまま先生になるみたいよ」

「お兄ちゃんが大学の先生ですか」

「助手から助教授になって」

具体的な言葉である。とはいってもまだ未久にはわからないところもある話であった。

「それで最後は教授にね」

「お兄ちゃんが教授」

あまりわからないがこれには驚いた顔になった。

「教授にですか」

「おかしい？」

「何かイメージと違います」

怪訝な顔での言葉であった。

「お兄ちゃんのイメージじゃ」

「まあそうかもね」

若奈もそれは否定しなかった。

「どっちかっていうと体育の先生よね」

「本当にどっちかっていうとそんな感じですけどね」

「それでもね」

「何か決まってるんですか」

「うちの大学に百歳を超えてる教授の人がいて」

あの悪魔博士のことである。若奈も実はその本名を知らない。本名ははつきり言われているのだが誰もそれで話すことはないのである。

「その人の後継者に考えられてるみたいなのよ」

「百歳を超えてるんですか!？」

「百十歳だったかしら」

年齢も実際のところよくは知らなかった。

「どうだったかしら」

「仙人みたいな人ですか？」

「まあそうね」

若奈は未久のその言葉に頷いた。

「そんな感じの人なの」

「仙人ですか」



「そうよ、凄いから」

また話すのだった。

「戦前からうちの大学におられるのよ」

「戦前つて」

「昭和よりも前だったかしら」

言いながら首を少し傾げさせました。

「どうだったかしら、それは」

「それで今も教えてるんですか？」

「そうよ、物凄く元気よ」

「普通死ぬんじや」

「一説によると不死身らしいし」

若奈はこんなことも話した。

「今四十位の図書館の人に聞いたらね」

「はい」

八条大学の図書館に勤務しているという意味である。

## 第四十一話 暗黒その五

「何でもその人が大学にいた時からだから」

「百歳超えてたつて言われてたんですか」

「実際の年齢は不明なのよ」

「そうだというのだった。」

「実はね」

「やっぱり凄い人ですね」

「そう思うでしょ」

「お兄ちゃんそんな人に気に入られてるんですか」

「悪い人じゃないわよ」

「若奈は博士の人柄についても話した。」

「別にね」

「仙術とか使ったりしないんですか」

「わかってる限りはね」

「随分とあやふやな言葉だった。」

「多分」

「多分なんですか」

「そう、多分だけれどね」

「やはり言葉はあやふやである。」

「そうみたい」

「それでも百歳超えて教授ですか」

「お元気よ。声だつてしつかりしてるし」

「普通もう八十でよぼよぼになりますけれど」

「それでもなのよ」

「博士はそうした意味で規格外だった。」

「歩くのも平気だし」

「衰えてないんですね」

「そうね、本当にね」

「そんな人が八条大学におられるんですか」

「そうよ。凄いでしょ」

「うっん、信じられません」

未久は腕を組んで考える顔を見せた。

「本当に」

「実際に大学に来てみればわかるわ」

「八条大学にですか」

「多分未久ちゃんが入学する時にもいるから」

こう話すのである。

「多分ね」

「あの、五年程先なんですけれど」

未久は若奈の今の言葉にこう返す。

「それって」

「それでも多分ね」

「生きてます？その博士」

「絶対に生きておられるわ」

若奈はこのことを確信していた。

「もうね」

「そうなんですか。それだったら」

「八条大学受けるの？」

「はい、そのつもりです」

このことはある程度決めていたことだった。

「近いですしレベルも高いですし」

「就職先もしつかりしてるしね」

「そうした意味ではいい大学ですよね」

「キャンパスライフも楽しいわよ」

それもだというのだった。

「だからね。入られたら入るといいわ」

「わかりました」

「その頃には私も牧村君も卒業してるけれど」

「卒業してなかったら怖いです」

若奈はこのことにもすぐに返してきた。

「っていうかその頃ってもう大学七回生ですけどね」

「大学には普通にいます」

こう話してきたのは牧村だった。相変わらず休んでいる。

「普通に」

「そうした主みたいなのいるのね」

「八回まではいけるから」

若奈も話してきた。

「大学はね」

「小学校より長く過ごせるんですか」

「過ごそうと思えばね」

「大学って凄いですね」

腕を組んでの言葉だった。胸の下に組んでいるがそこに胸が乗ることはない。見ればその胸はまだまだ小さい。しかも成長する気配も見られない。

「それだけいられるなんて」

「未久ちゃんは何年いるつもりかしら」

「四年です」

普通の卒業年数である。

「それ以上は」

「そうなの」

「いるつもりないですから」

無然としてかつ真剣な言葉だった。

「八年なんて」

「そうよね。女の子で大学留年する娘っていないのよね」

「そうなんですか」

「大抵は男だ」

牧村も言ってきた。

## 第四十一話 暗黒その六

「大学で留年するのはだ」

「そうなの」

「女は大抵真面目に勉強して真面目に卒業する」  
「そうだとするのである。」

「それで大学を出て行く」

「何で男の人が残るの？」

「それはお酒とか麻雀とかで遊んで」

「つまり勉強よりそっちに集中して、ですか」

「それで留年してしまうのよ」

「こつ話すのだった。」

「それでなのよ」

「成程、それでなんですか」

「女の子はあまり麻雀しないからね」

「そうみたいです。中には女の人のプロもいますけれど」

「声優でもいたりする。麻雀をする人間も様々である。」

「それでもあまり」

「いないわよね」

「少なくとも私は興味ないですね」

「俺もだ」

「これは牧村もだった。ここでまた言ってみせた。」

「そうしたことにはだ」

「そういえばお兄ちゃんてギャンブルは」

「全く興味がない」

「一言での返答だった。」

「全くな」

「そうよね、本当にね」

「ゲームはするけれど」

「金をかける遊びは嫌いだ」

彼はその未久と若奈に対して言い切った。

「無駄だ」

「じゃあパチンコも」

「しない」

やはり断言だった。

「パチスロも麻雀もだ」

「競馬や競輪もなのね」

「しようと思ったことはない」

断言が続く。

「全くだ」

「それはいいと思うわ」

若奈も彼のその考えに対して賛成して頷く。

「お父さんもお母さんもギャンブル嫌いだし」

「マスター達もか」

「そうよ。だからいいと思うわ」

話す若奈の顔もにこにこしている。

「そうしたことをしないのはね」

「そうか」

「そういうことよ。ただ」

「ただ？」

「牧村君って運はいいわよね」

こころ彼に話すのだった。

「ギャンブルには運は必要だけれどね」

「運が、か」

「ええ。運はいいわよね」

また牧村に話す。

「それは」

「確かにそうですね」

未久も若奈のその言葉に頷いた。

「お兄ちゃんって昔から運がいいんですよ」

「それはあるからね」

「運か」

「運って大事よ」

若奈は牧村にまた話した。

「いざって時にそれがいいか悪いかで随分と変わるし」

「偶然が」

「偶然は世の中に付きものだし」

「こつも話す。」

「だからそれがあるのとないのとでね」

「違いますよね」

「牧村君の運って大きいわ」

「はい、確かに」

未久も頷いて認めることだった。

## 第四十一話 暗黒その七

「それは」

「だから何があってもね」

「運に助けられますよね」

「もつと言つとね」

若奈は明るい顔で言葉を続けてみせた。

「あれよ。死神がスポンサーについてるようなものね」

「死神!？」

その名前を聞いてだ。牧村は思わず問うた。

「死神がか」

「運がいいってそういうことになるんじゃないかしら」

若奈は特に考えることなく述べた。

「やっぱり」

「そういうものか」

「極論すればね」

そうだと牧村に話すのだった。

「運がよかつたら死ぬような状況でも死なないし」

「死なないか」

「生きることだってあるじゃない」

また言うのであった。

「そうじゃないかしら」

「運、か」

「だから運って大きいから」

言葉が繰り返り返しになっていたがそれでも言う若奈だった。

「牧村君は運がいいわ。それは間違いないわ」

「そうか」

「悪運よね」

それだというのは未久だった。



「お兄ちゃんはね」  
「悪運か」  
「まあ本当に死神がスポンサーについてるならそれでいいじゃない」  
「彼女もまた特に考えることなく述べていた。」  
「助かるんならね」  
「死神か」  
「別に悪い神様でもないんでしょ？」  
「その言葉は実にあっけらかんとしていた。」  
「人間絶対に一度は死ぬんだし」  
「死神はお迎えでしかないのよね」  
「若奈もそう考えていた。死や死神についてはだ。」  
「やっぱり」  
「ですよね、だからやっぱり」  
「死神は悪い神様じゃないですね」  
「未久の考えはこれで決まっていた。」  
「そうなる」と  
「ですよね。まあもつともね」  
「若奈は笑いながら話した。」  
「死神が本当にいたら怖いけれどね」  
「ましてや目の前に出て来たらですよね」  
「怖いと思うわ」  
「こう未久に話すのだった。」  
「やっぱりね」  
「ですよね。まあ死神なんてね」  
「いないし」  
「二人は死神の存在は信じていなかった。それも全く。」  
「そうした存在ってね」  
「妖怪とか魔物とかいませんよね」  
「絶対にね」  
「さてな」

明るく話す二人にだ。牧村は言ってみせたのだった。

「それはどうかな」

「どうかなって」

「どうしたのよ、急に」

若奈と未久は彼のその言葉に目を少し丸くして問い返した。

「何かそうしたのが本当にいるみたいな」

「そんな口調だけねど」

「いや」

しかしだった。牧村はここで己の言葉を引っ込めた。その時に己の感情も抑えてだ。そうしてそのうえであらためて二人に対して告げた。

「何でもない」

「何でもないの」

「そうだっていうの？」

「そうだ、何でもない」

また言うのだった。

## 第四十一話 暗黒その八

「それはな」

「だったらいいけれど」

「妖怪とか本当にいるっていうのはね」

特に未久が言うのであった。

「ナンセンスよね」

「神様はいるでしょうけれど」

若奈は何気に己の信仰を口にしていた。

「それはね」

「神様はいるんですか」

「悪魔はいなくても神様はいるわよ」

こう未久にも話すのだった。

「神様はね」

「いるんですか」

「いるわ、間違いなくね」

「それはいい神様なんですね」

「そうよ。いい神様よ」

さらに話していく。

「この世の中にいるのはね」

「悪魔はいなくていい神様はいるんですか」

「だってあれじゃない。皆自分が正しいと思うことをしようとする  
じゃない」

「はい」

「だったらいい神様しかいないのよ」

「そうなるんですか」

「正しいことをしようとするのならね」

つまり正義というものは幾つもあるものだ。若奈はこうしたことも同時に言っているのだ。だがまだ中学生である未久にはそこま

ではわからない。彼女の話をしただ驚いた顔で聞いているだけだった。しかしだ。その若奈の言葉が続く。

「百人がそれぞれ信じている正しい神様がいるのよ」「じゃあ私にも」

「いるわ。そういうものなのよ」

「成程、そういうことなんですか」

「これでわかったかしら」

「ちょっと」

未久は実際にその首を傾げさせてしまった。

「わからないです」

「そう。わからないの」

「難しくて。正しいことって一つじゃないんですか」

「今はわからなくていい」

「ここで兄も言ってきた。

「特にだ」

「お兄ちゃんもそう言うの」

「絶対の正義はない。そして絶対の悪もない」

「こう妹に対して告げる。」

「そういうことだ」

「ううん、正しいことは一つじゃないって」

「しかしだ。己が正しいと思うことが時として他の人間を害する」

「魔物、そして今の妖魔との戦いを思い浮かべながらの言葉だ。だがこのことはやはりどうしても表に出すわけにはいかないものだった。」

「それでだ。そうしたことを隠しながら妹に話すのだった。」

「それも覚えておくことだ」

「つまり正しいことでも」

「元々頭は悪くない未久だ。兄の言葉を反芻しながら述べた。」

「他の人にとつてはそうではない場合もあるのね」

「その通りだ。それがわかっていればいい」

「わかったわ。そういうことなのね」  
「つまりは我儘や自分勝手は駄目なの」  
若奈はこのことをわかりやすく話してみせた。  
「そういうことよ」  
「それならわかります」  
「それでいいのよ」  
やはりわかりやすく話す若奈だった。  
「それだけの」  
「じゃあプールで泳ぐのも」  
「そうよ、他の人の迷惑にならないようにね」  
にこりとした笑みで話した言葉であった。  
「そういうことよ」  
「わかりました。じゃあ今日は」  
「他の人の迷惑にならないようにね」  
「お行儀よく泳ぎます」  
未久はにこりと笑っていた。彼女もまた。  
「そうします」  
「そうしてね。それじゃあね」  
「はい」  
「今から泳ぎましょう」  
「わかりました。じゃあお兄ちゃん」  
若奈の言葉に頷いてからまた兄に顔を向ける。

## 第四十一話 暗黒その九

「泳いでくるね」

「二人でね」

「待て」

しかしここでだ。牧村が起き上がった。きた。

そしてそのうえで。二人に言うのだった。

「気が変わった」

「気が変わったって？」

「俺も一緒に泳ぐ」

こう言ってきたのだった。

「二人とな」

「何でまた急にそうなったのよ」

「女の子二人だけでは危ない」

だからだという。

「特に未久、御前はな」

「何で私は特になのよ」

「中学生だ。何かと知らないことも多い」

つまり世間知らずだという。言うのはこのことだった。

「世の中には悪い男も多いからな」

「そんなのわかってるわよ」

「わかっていいるのと実感しているのとでは違う」

牧村はまた妹に対して話した。

「実感していないからだ」

「そういう奴が出て来たらどうなるかわからないっていつの？」

「だからだ。俺も一緒に泳ぐ」

また言うのだった。

「それでいいな」

「まあね」

妹は少し釈然としない顔だったがそれでも頷いた。

「それじゃあ」

「なら行くぞ」

「私もね」

ここで若奈も話してきた。

「それでいいわ」

「若奈さんですか」

「女の子二人だと確かにね」

自分の周りを見回す。すると結構視線を感じた。通る男達は必ず意識しているしていないにしる二人の水着姿をチェックしてきたのだ。

「危ない感じだし」

「ううん、水着だと余計になの」

「お肌とスタイルがはつきり出るじゃない」

若奈は水着の問題点をはつきりと指摘してみせた。

「それだからね」

「確かに。それが魅力ではありませんけれど」

アイドルのグラビアに使われる最大の理由である。アイドルにしる女優にしる水着になるのもまた仕事の一つなのである。それもかなり重要な。

「問題でもありませんよね」

「だからね。余計にね」

「気をつけないといけないんですね」

「そういうことよ」

若奈はまた未久に対して話した。

「注意しないとね」

「はい、じゃあ」

「男が一人でも一緒にいれば違う」

「ここでも言う牧村だった。」

「だからだ。いいな」

「ええ、じゃあ」

こうしてだった。二人は牧村と一緒に泳ぐのだった。そうしてプールでの楽しい一時を過ごした。そしてその時間が終わってからだった。

牧村は祖父母の屋敷に戻りまた鍛錬を行った。それからサイドカーで夜の街に出た。気分転換に夜の街を走ることにしたのである。夜のハイウェイは左右に淡いオレンジの光がありそれで照らされている。そこをサイドカーに跨り一人駆っていたのである。するとだ。横に彼が来た。

「また来たか」

「来て悪いか」

「いや」

黒いライダースーツとヘルメットの彼に静かに返した。



## 第四十一話 暗黒その十

「別にな」

「ならいいな」

「そうだな。しかしだ」

「しかし？」

「貴様が出て来たということだ」

「牧村が今言うのはこのことだった。」

「またか」

「そうだ、まただ」

彼もまたこう返してきた。

「まただ」

「そうか、またか」

「いいな、それで」

死神に顔は向けない。しかし言葉は向けてきていた。

「行くぞ」

「相手は何処にいる」

「暫く進むのだな」

「暫くか」

「そうすれば出て来る」

これが死神の今の言葉だった。

「そうすればだ」

「ではここか」

「そうだ。見るのだ」

気付けば二人の他にハイウェイにいる者はいなかった。何時の間にか道にいるのは二人だけという異様な状況になっていたのである。

「いるな」

「あの男か」

「そうだ、これでわかったな」

「確かにな」

牧村は死神のその言葉に頷いた。

「よくな」

「ならいいな」

「ああ、それではだ」

「行くぞ」

そうしてだった。さらに前に進むとだ。あの男が道の中央に立っていた。

左右からのライトがそのまま彼を照らしていた。それを背にしてだ。漆黒の姿を闇夜の中に映し出していた。

牧村と死神はそれぞれバイクを止めた。男の少し前だった。

「来たか」

「誘い出されたというのか」

牧村は男のその言葉に返しながらヘルメットを脱いだ。

「この場合は」

「そうかもな。私は御前達をここに招き寄せた」

「やはりな」

「今ここには誰もいない」

男はまた二人に告げてきた。

「いるのは私達だけだ」

「闘うのにはおあつらえ向きということだな」

「如何にも」

男は牧村のその言葉に声だけで頷いてみせてきた。

「そういうことだ」

「そうか。それならだ」

「来い」

男からの言葉だ。

「既に妖魔は呼んでいる」

「また二人か」

死神はもうヘルメットを脱いでいた。そのうえで男に対して告げ

た。

「妖魔の数は」

「いや、一人だ」

男はここでは死神の言葉を否定した。

「今回は一人だ」

「一人か」

「不服なら別の妖魔も呼ぶが」

「いや、いい」

死神はそれはいいとした。今の言葉には感情は見られなかった。

「それならそれでいい」

「そう言うか」

「そしてだ。その妖魔だが」

死神は自分から話を変えてみせた。

「何だ」

「来るのだ」

男の今度の言葉はだ。二人に向けたものではなかった。

身体を一切動かさずに言うた。そこに来た。

## 第四十一話 暗黒その十一

それは蜘蛛だった。禍々しいまでに巨大で漆黒の姿をした。その蜘蛛であった。

「蜘蛛か」

「アトラク!! ナクア」

男は言った。

「それがこの妖魔の名だ」

「アトラク!! ナクアか」

「古代より糸をつぬぎ獲物を喰らってきた闇の蜘蛛だ」

その妖魔についても話された。

「それが今の貴様等の相手だ」

「そうか、よくわかった」

牧村は男のその言葉を受けて頷いてみせた。

「この闘いで俺に倒される相手のことはだ」

「倒せるかな」

男は牧村のその言葉に思わせぶりな口調で返してみせた。

「果たして」

「倒す」

可能の言葉ではなかった。

「必ずだ」

「断言したな」

「既に決まっていることだ。だからだ」

「それでか」

「そうだ。俺は倒す」

牧村はまた言ってみせた。

「その妖魔をだ」

「私もだ」

死神もまた、だった。男に対して言ってみせた。

「その妖魔を倒そう」

「いいだろう。それではだ」

「行くぞ」

「それでいいな」

二人は今度は同時に男に告げた。

「今から闘いだ」

「そして倒す」

「よかるう。ならばだ」

男もその言葉を受けてだ。静かに応えてみせた。

そしてそのうえで。その姿を闇の中に消していった。

声だけが聞こえる。男の声はこう二人に告げた。

「私が何故今一人だけ呼んだかだ」

「どうしてだ、それは」

「強いからだ」

これがその声の言葉だった。

「だからだ」

「強いか」

「そうだ、強い」

また言うのだった。

「先の妖魔達よりもだ」

「我々二人を同時に相手にできるだけか」

「如何にも」

そうだと。また死神にも返してみせていた。

「それはすぐにわかる」

「ならばだ」

牧村はその言葉を聞いても臆してはいなかった。

構えは取っていない。しかし闘う目になってだ。声に返すのだっ

た。

「見せてもらおう、その強さ」

「そうだな。それではだ」

死神もだった。牧村に続く。

そのうえでだ。二人はそれぞれ構えに入った。牧村の両手が拳になり己の胸の前に行く。死神もまた右手を拳にして。そのうえで己の胸の前にやった。

拳と拳が打ち合わされそこから白い光が放たれる。拳が胸の前に置かれたその時に青白い光が放たれた。そうしてそのそれぞれの光の中で。

髑髏天使となり闘う姿となった。髑髏天使が右手を少し前に出してあらためて握り締めた。

「行くぞ」

「刈ろう」

死神は右手の大鎌を一閃させた。これが名乗りだった。

男の気配は消えていた。そうして。

妖魔がだ。彼等に対して声をかけてきた。

「いいかしら」

「女か」

「そうよ」

こつ髑髏天使に答えるのだった。

「その通りよ」

「妖魔にも男や女があるのか」

「そうした意味では同じよ」

こんなことも言ってきたのであった。

## 第四十一話 暗黒その十二

「人間や魔物とね」

「それは考えなかったな」

「考えることもなかったのね」

「誰であろうが倒す」

これが髑髏天使の言葉だった。

「それだけだ」

「随分とシンプルに考えてるのね」

妖魔はそんな彼の言葉を聞いてまた述べた。

「貴方は」

「それが悪いか」

「悪くはないわ。ただ」

「ただ、か」

「話に聞いた通りだわ」

その髑髏天使を見ながらの言葉である。既に彼は智天使になっている。四枚の翼と銀色の姿がだ。夜の道の中で輝いていた。

「噂通りの性格ね」

「そう言うのか」

「ナイアーラトホテツ様の仰る通りね」

「ここまで言うのだった。」

「そうした性格なのね」

「性格か」

「そうよ。面白い性格をしているわね」

「その面白い性格の相手とか」

「闘わせてもらおうわ。それに」

今度は死神を見た。

「貴方もね」

「次は私か」

「死神。命を刈る存在」

まさにそれだというのであった。

「その死神を私が倒すのね」

「随分と自信があるようだな」

「あるわ。だからこそ貴方達を一度に相手にできるのよ」

低めの女の声が笑っていた。まさにそれは獲物を前にして舌なめずりする獣の声だった。異形の、この世にあつてはならない獣の声だった。

「そういうことよ」

「そうなるのか」

「さあ、来るのよ」

二人に対する言葉だった。

「相手をしてあげるわ」

「それではだ」

「行くぞ」

二人は彼女のその言葉を受けて一度に動いた。まず髑髏天使がその四枚の翼を使ってそのうえで宙に舞った。そうしてそれからだった。

「受ける」

右手の剣を前に突き出した。そこから光を出してみせた。

その光で妖魔を撃たんとする。しかしであった。

「甘いわね」

「何っ!？」

「他の妖魔ならいざ知らず」

その声での言葉だった。光を見ずしても言っていた。

「それでもね」

「それでもか」

「こうすればいいわ」

光の先にだった。不意に白い糸が出て来た。それが。盾となりそれで光を防いだ。まさに一瞬であった。



「防いだか」

「動きは見えていたわ」

悠然とした口調でさえあった。

「生憎ね」

「だからか」

「言った筈よ、私は強いわよ」

そしてこうも言ってみせてきたのだった。

「この通りね」

「俺の攻撃をあっさりと防ぐ程にはか」

「そうよ、強いわよ」

まさにそうだといっているのである。

「この通りね」

「しかしだ」

今度は死神が言ってきた。

## 第四十一話 暗黒その十三

「私もいるのだ」

「来るのね」

「こうしてだ」

突進しながらだった。右に左に分身を出していく。そうして。その分身達が一齐に鎌を投げる。それで切り裂かんとする。しかしその鎌達に対してもだ。妖魔は悠然と言うのだった。

「生憎だけれどね」

「どうして防ぐ」

「こうしてよ」

こう言っただけであつた。すぐにだった。

またあの白い糸が出て来て盾になる。それによつてだった。

鎌を全て防いだ。まさに絶対の障壁だった。金属と金属がぶつかり合う音がした。

「見たわね」

「見たくはなかつたがな」

「けれど見たわね」

「確かに。私の鎌を防いだ」

彼は突進を止めていた。分身もだ。そのうえでの言葉だった。

「見事だと言つておこつ」

「お世辞ではないわね」

「それを言う趣味はない」

死神は表情を変えずに言葉を返した。

「それはな」

「そうね。そうした顔をしているわね」

「私は事実だけを言う」

鋭い目になつての言葉だ。

「事実だけをだ」

「そしてその事實は」

「貴様は強い」

これを紛れもない事実だといっているのである。

「確かな強さだ」

「そうよ。貴方達を二人共ここで倒すのだからね」

「それだけの強さがあるか」

髑髏天使もまたここで言ってきた。

「そういうことだな」

「その通りよ。それじゃあだけれど」

「今度は守るだけではないか」

「守るだけでは勝てはしないわ」

笑っている声だった。悠然とだ。その声で髑髏天使に応えていた。

「そうでしょ」

「その通りだ。それでか」

「私の攻めを見せてあげるわ」

言葉と共にであった。彼女の周りに無数の黒蜘蛛達が出て来た。

「蜘蛛か」

「小さいな」

「私の可愛い僕達」

妖魔は動かない。声だけを出してきていた。

「この子達が相手をするわ」

「只の蜘蛛ではないな」

髑髏天使はすぐにこのことを見抜いた。

「そうだな」

「当然よ。私は妖魔よ」

妖魔の声はここでも笑っていた。

「その私が只の蜘蛛を操る筈がないわね」

「では。子供か」

死神が察したのだった。

「若しくは分け身の一つか」

「分け身よ」

妖魔の返答はこれだった。

「それよ」

「貴様自身だというのか」

「その通り。この子達は私自身」

こう死神にも髑髏天使にも話す。

「この子達が見るものはそのまま私も見るし聴くものも聴こえるのよ」

「そしてそのうえでか」

妖魔の周りを囲むその無数の子蜘蛛達を見てだ。髑髏天使は言う。

「攻撃を仕掛けてくるのか」

「小さいけれど私自身」

妖魔の言葉は続く。

「それはわかっておくことね」

「話は聞いた」

髑髏天使は言葉を返した。しかし臆するところはなかった。

## 第四十一話 暗黒その十四

「それではだ」

「闘うというのね」

「その通りだ。やらせてもらおう」

「無論私もだ」

彼の左隣にいる死神も言ってきた。

「この程度のことですと退くとは思わないことだ」

「その前に退くということはしないわね」

妖魔はその死神にも告げてみせた。

「そうね」

「その通りだ。例え相手が誰であろうとも」

死神は両手に鎌を握った。そのうえで構えながら話す。

「私は背を向けはしない」

「俺もだ」

そしてそれはだ。髑髏天使もだというのだ。

「相手が誰であろうともだ」

「逃げないというのね」

「そして倒す」

言葉は一言だった。

「いいな」

「いいわ。倒すといいわ」

妖魔はその二人をここでも悠然と受けていた。そのうえでの言葉だった。

「倒せるならね」

「来い」

「それではだ」

「ええ。それじゃあ」

こうしてだった。その無数の子蜘蛛達が二人に襲い掛かる。まず

は糸が来た。

「この糸で何をするかはだ」

「既にわかっている」

髑髏天使は落ち着いて死神の言葉に返した。そうしてだった。

赤い天使になってだ。周囲に火柱を無数に出してみせた。

そしてそれを螺旋状に動かして。前や横から来る糸を全て消してみせた。

「炎で対するか」

「こつした時にはこれが一番いいからだ」

死神にこつ述べる。

「だからだ」

「そうか。それならだ」

「次は貴様だな」

「上から来るものは任せるのだ」

蜘蛛達の中には跳んでいるものもいた。彼等はその上から攻撃を仕掛けてきていたのだ。

それを見てだ。彼は言ったのである。

「やり方はある」

「どうする？」

「貴様は炎だな」

髑髏天使のその出したものに対してだった。

「それならば私はだ」

「少なくとも炎ではないか」

「それでは芸がない」

「そうだというのだ。」

「だからだ。見せよう」

言いながら鎌を一閃させた。するとだった。

鎌から何かを出した。それは。

氷だった。氷の刃を鎌から出してみせたのだ。

その氷でだ。蜘蛛達を切ってみせたのである。

「氷か」

「はじめて使ったな」

ここで髑髏天使に対して述べた。

「貴様の前では」

「そうだな」

髑髏天使も己の記憶を辿ってから述べた。

「確かな」

「そういうことだ。面白いだろう」

「技としては面白い」

髑髏天使はその氷を見てまずはこう告げた。

「しかも俺の氷より力は上なのか」

「上に決まっている」

死神は平然とその自信を告げてみせた。

「私の力は貴様より上なのだからな」

「それか」

「私の力は今も貴様より上だ」

死神はまた氷を放ってそのうえで話した。

## 第四十一話 暗黒その十五

「神だからな」

「今も、か」

「貴様は確かに強くなった」

そのことは認めた。

「天使として階級を上げるにつれてな」

「それと共にか」

「強くなった。だが私は神だ」

「天使とは違うか」

「そういうことだ。私の力は智天使より上だ」

「最高位の天使よりもか」

「それと同等か」

そのクラスだというのである。

「その階級の天使のことはよくは知らないがな」

「貴様といえどもか」

「そこにまで至った髑髏天使はこれまで殆どいなかった」

「それでか」

「それで知る方が無理ではないか」

「確かにな」

髑髏天使は炎を放ち続けている。そのうえで死神に言葉を返していた。死神もまた同じく氷の刃を放ち続け攻撃を行っている。

「それはその通りだ」

「だからだ。私もあの天使のことは知らない」

死神はまた言った。

「残念だがな」

「そういうことか」

「そうだ、だが」

「だが？」



「今の貴様はさらに強くなっている」

「智天使の中でか」

「その通り。同じ階級の中でも強さは変わる」

これは天使にだけ限ったことではない。同じ強さのレベルにあるとされていてもその中でさらに違いがあるのだ。また成長もするのだ。

「どうやら貴様は」

「変わるか」

「そろそろな。また変わるだろう」

こつ髑髏天使に話すのだった。

「その時を楽しみにしている」

「そうさせてもらうか。だが今はだ」

髑髏天使は今度は剣を前に出した。そうしてだ。

その先から巨大な炎の渦を出してみせた。それで糸も蜘蛛も焼いてみせたのだ。

「炎の渦を!？」

「これは読んでいなかったか」

驚きの声をあげた妖魔に対して言ってみせた。

「どうなのだ」

「そうね。思いはしなかったわ」

妖魔もそのことを認めた。

「けれどね」

「けれどか」

「それだけの強さでもよ」

「勝てるというのか」

「見なさい」

そしてだ。その炎の渦が自身に迫るのを髑髏天使自身にも見るように言ってみせた。するとであった。

その糸もだ。白い糸の盾に防がれてしまった。炎ですらだ。

「貴様には届かないか」

「私の糸は特別よ」

妖魔は誇らしげに言ってみせてきた。

「炎で焼けるものではないわよ」

「炎でもか」

「かといって氷も通じないわよ」

それもだというのだ。死神の攻撃に対してもだった。

「それもね」

「そう言うか」

「私の盾は最強の盾」

その糸がというのだ。

「どうやって貫くのかしら」

「それが問題か」

髑髏天使もそれを見て言った。

しかしだ。ここで彼はだ。あることを考えた。そしてすぐにそれを実行に移したのである。

「それならばだ」

「何か考えがあるのか」

「なければ言いはしない」

こう死神にも言葉を返した。

## 第四十一話 暗黒その十六

「決してな」

「そうか、あるのか」

「ある」

今度は断言だった。そうしてだった。

「来い」

「来いだと」

「そうだ。来い」

「こう言うのだった。」

「来るのだ」

「私への言葉ではないな」

死神は彼の口調からそれを悟った。

「そうだな」

「如何にも」

そしてその通りだと。髑髏天使も言った。

「来るのはだ」

「何だ、それは」

「何かしら」

死神だけでなく妖魔も問うてきた。

「それは」

「これだ」

返答は一言だった。

そしてだ。彼のあのサイドカーである。ひとりでに来たのだ。そのうえで妖魔に対して全速力で向かって来たのである。

「あれは」

「貴様のサイドカーか」

「そうだ」

まさにそうだというのだった。

「炎も氷も防ぐがだ」

「それはどうかというのね」

「この衝撃はどうだ」

妖魔を見据えての言葉である。

「耐えられるか」

「充分よ」

妖魔の言葉はここでも笑っている。

「言わせてもらうけれどね」

「充分か」

「見なさい」

突進してくるそのサイドカーを見ようもしない。そして。

またあの糸が盾を作った。それでだった。

サイドカーは動きを止められた。また金属音がする。

「こういうことよ」

そして妖魔の勝ち誇った声も来た。

「これでわかったかしら」

「よくな」

だが。髑髏天使の言葉は冷静なものだった。

「やはりそうなるか」

「予想していたとでもいうのかしら」

「その通りだ」

まさにそうだと返してみせた。

「そういうことだ」

「言うわね。けれどこれではつきりとしたわね」

「何がだ？」

「貴方達は私に傷をつけられない」

このことを彼等に告げてみせる妖魔だった。

「私のこの盾がある限りね」

「そうだな。貴様の盾はだ」

道路天使の今の言葉は防がれた者のものとは思えない落ち着きが

あつた。その落ち着きを隠さないままの言葉であつた。

「確かに強い」

「その通りね」

「どんな矛も通さないな」

「矛盾ね」

韓非子にある話だ。所謂最強の矛と盾の話だ。どちらも両立せず話が合わないということがそのまま言葉として残っているのだ。

「私にはどんな矛も通じないわよ」

「確かにな。だが」

「だが？」

「あくまでそれは盾があるならばだ」

こう妖魔に対して告げるのだった。

「その場合はだ」

「それは一体どういう意味かしら」

妖魔は髑髏天使の今の言葉に問い返した。

「わからないけれど」

「安心しろ、わからせてやる」

髑髏天使の言葉はここでも冷静なものだった。

そしてだ。その彼の前にサイドカーが戻ってきた。主がおらずとも底に主がいるように。流れるように前に来たのである。

「これからな」

「これからね」

「そういうことだ。さて」

髑髏天使は妖魔との話を中断した。そうしてあらためて死神に顔を向けてだ。彼に対して言ってみせてきたのである。

「乗るぞ」

「貴様のその馬にか」

「そうだ、乗れ」

こう彼に言うのである。

## 第四十一話 暗黒その十七

「いいな」

「どうしてもだな」

「嫌ならいい」

その場合はというのだ。

「それなら貴様のそのマシンに乗るのだな」

「私のあの馬にか」

「そうしろ。俺は強制はしない」

突き放したような言葉だった。

「決してな。しかしだ」

「しかし、か」

「勝ちたいならばだ」

こう言って限定してみせたのだった。

「乗れ」

「貴様のその馬にか」

「そうだ、乗れ」

髑髏天使はまた告げた。

「わかったな」

「いいだろう」

そして死神もだ。頷いてみせたのだった。

「それではだ」

「乗るのだな」

「そうさせてもらう」

髑髏天使のその言葉を受けたのだった。

「それではな」

「では今からだ」

「乗ってどうする」

「貴様が考える通りの動きをしろ」

今はこう言うだけの髑髏天使だった。

「俺もそうする」

「考える通りのか」

「そうだ。そうすれば勝てる」

今度の言葉は断言だった。

「貴様も俺もな。あの妖魔にだ」

「その言葉だが」

「今のか」

「信じる」

こう髑髏天使に告げた。

「いいな、信じる」

「俺の言葉をか」

「その考えもだ」

言葉だけではないというのだ。

「考えも行動もだ。信じさせてもらう」

「だからこそか」

「乗ろう」

彼から言った。

「貴様のその馬にな」

「よし、それではだ」

「行くぞ」

「うむ」

二人でそのサイドカーに乗った。髑髏天使は運転席に、そして死神は助手席にだ。それぞれ乗ってそのうえであった。

進みはじめた。妖魔に対してだ。

「二人で来るのね」

「そうだ、今度はだ」

髑髏天使はサイドカーを進ませながら妖魔の言葉に答えた。

「二人だ。どうする」

「簡単よ。防げるわ」

妖魔の言葉はここでも悠然としたものだった。

「これまで通りね」

「これまで通りか」

「私の盾に防げないものはないわ」

その白い糸の盾でだというのだ。

「だからよ」

「そうだな。貴様の盾で防げないものはない」

髑髏天使もこのことはよくわかっていた。

「だが」

「だが？」

「全てが防げるかというところではない」

「全てが？」

「今からそれを見せてやる」

こう言っただ。そのうえでだった。

サイドカーを進ませる。全速力だった。

「それでまたぶつかるのかしら」

「だとすればどうする」

「防ぐわ」

それだけだというのだ。

「それだけよ。これまで通りね」

「そうだな。しかしだ」

「それでも突き進むのね。防がれるとわかっていて」

妖魔は勝利を確信していた。既に小蜘蛛達も出している。防いだ

後でそのうえでだ。二人をまとめて倒すつもりだった。



## 第四十一話 暗黒その十八

今サイドカーは軌道に乗った。ここぞだ。

「いいな」

「うむ」

髑髏天使と死神はお互いに頷き合った。そうしてだ。

跳んだ。それぞれ左右にだ。

その瞬間にだ。サイドカーは止まった。妖魔のその糸の盾によって防がれたのだ。またしても鈍い金属音が響く。

しかしだ。二人はそこにいなかった。それぞれ妖魔の斜め上にいた。そこからだった。

「よし、これならばだ」

「防げるか」

言いながらそれぞれ剣に鎌を投げる。その二つが凄まじい唸り声をあげて妖魔を襲う。そしてそのうえでだった。

貫いた。一気にだ。妖魔はその攻撃を防ぐことはできなかった。

盾を出すことはできなかった。間に合わなかったのだ。

貫かれた妖魔はだ。動きを止めてしまった。そのうえで言うのであった。

「くっ、まさか」

「勝負あつたな」

「確かだな」

髑髏天使と死神は着地した。そのうえでおのれの前にいる妖魔を見ながら言った。

「盾は全てを防いでも貴様自身はだ」

「防げはしないな」

「ええ、そうよ」

それを自分でも認める妖魔だった。

「その通りよ。見ての通りよ」

「だからだ。勝負ありだ」

「これでだ」

「まさか。私にわざと盾を出させて」

「ここでやっとだった。二人の今の攻撃の意味がわかったのである。」

「それでそのうえでだったのね」

「そういうことだ」

「私も動きを合わせた」

二人はまたそれぞれ言う。

「それでだ」

「そうだったのね。見事よ」

「見事か」

「私を倒したのだから。それでね」

「倒したからこそか」

「勝てると思っていたわ」

語るその身体からだだった。青と赤の二つの炎を出していた。二人の攻撃により倒されたことの何よりの証であった。その二つの炎がだ。

「それでも。こうなってはね」

「認めるしかないか」

「そうよ。認めるわ」

実際にそうだというのだった。

「それじゃあ」

「去るか」

「私はね。ただ」

ただ、というのだった。

「私達はまだこれからよ」

「まだ戦うか」

「まだよ。あの方々もおられるわ」

こんなことも口にするのだった。

「だからね。まだよ」

「それですか」

「そうよ。まだよ」

妖魔はまた言ってみせた。

「私達はこれからのなのよ」

「これからか」

「楽しみにしておいて」

「楽しみにか」

「ええ」

こう二人に告げるのだった。

「これからのことをね」

「それではだ」

死神が彼女の言葉に返した。

「そうさせてもらおう」

「それは何よりよ」

「ただ」

「ただ？」

「それは刈るという意味でだ」

「刈る？」

「そうだ、刈る」

こう妖魔に告げる。

「その意味でだ」

「それは一体どういうことかしら」

「貴様等の魂を刈るということだ」

死神が言うのはこのことだった。

「そういうことが」

「強気ね」

妖魔は死神のその言葉を受けて述べた。既にその身体は二色の炎に包まれている。今まさにその中に消えようとしている。

## 第四十一話 暗黒その十九

「またえらく」

「強気だと思うか」

「それ以外の何だというのかしら」

「当然のことを言っているだけだ」

こう返す死神だった。

「それだけだ」

「貴方の実力から言っているのかしら」

「そういうことだ。これからもだ」

そしてまた言うのであった。

「貴様等の魂を刈っていく」

「そして冥界に送る」

「それで」

「そつだ。それではだ」

「わかったわ。それじゃあ」

既にだ。炎に全身を包まれてだった。

「さようなら」

「去るか」

「まだ話したかったけれど」

ここではだ。少し名残惜しさも出していた。

「それじゃあさようなら」

「これでだな」

「ええ、さようなら」

死神と話してそのうえで姿を消した。妖魔は炎の中に消えた。

それを見届けてから。髑髏天使も死神も本来の姿に戻った。死神

はあのライダースーツに戻った。そのうえで牧村に話してきた。

「先程の攻撃だが」

「あのサイドカーに乗ったあれか」

「あれだ。あの時の言葉だが」

「どうだというのだ？あの言葉は」

「真実だ」

それだというのである。

「真実だ。私のな」

「そう言うか」

「言う。そしてこれからもだ」

「これからは。どうする」

「共に闘おう」

牧村のその顔を見ての言葉である。

「それでいいな」

「俺はそれで構わない」

牧村は一旦突き放したようにして告げた。

「貴様がそう思うのならな」

「その場合はか」

「そうだ。それでいい」

また言う彼だった。

「それでだ。いいのだ」

「そうか。それでか」

「また会おう」

ここまで話してだ。牧村は死神に背を向けた。その彼の前にサイドカーが来た。あの二人が共に乗ったそのサイドカーがだ。

「次の闘いの時にな」

「その時にだな」

「その時でなくてもいい」

目の前にサイドカーが停まる。それも見ていた。

「貴様が会いたい時に来ればいい」

「ではそうさせてもらうが。いいな」

「構わないと言った」

今度は多くを語らなかつた。

「そうだな」

「確かに。それではだ」

「また会おう」

サイドカーに乗った。そこで死神のハーレーも来た。彼のバイクもだ。主の傍に己から来てそのうえで停まったのである。

## 第四十一話 暗黒その二十

「その時までだ」

「さらばだな」

こう言い合つてそれぞれのバイクに乗り戦場を後にする。闘いはこれで終わった。だがそれを見てだ。あの男が呟いていた。

「ふむ。二人か」

「そうだな、二人だ」

「二人」

「二人だ」

「敵は二人だ」

「見たな」

男は周りから聞こえる声達に告げた。

「あの二人を」

「確かに」

「見た」

「この目で」

「間違いない」

「見たぞ」

声達は口々に言う。だが姿は見えない。

「そしてだ。盲目のスフィンクスよ」

「我等は」

「何時出るのだ」

「まだだ」

男の返答は一言だった。

「まだ封印は解けないな」

「そうなのか」

「まだか」

「そうだ、まだだ」

「ここでだ。男は告げた。」

「しかし確実に迫ろうとしている」

「その時はだな」

「我等の封印が解かれる時」

「その時がか」

「迫っているのか」

「まずは四つだ」

数も具体的に話された。

「四つの封印を解く」

「そしてそのうえでか」

「太古の封印も解く」

「原初の封印も」

「それは最後になる。だが必ず解かれる」

その通りだとだ。話すのだった。

「この私の手によってだ」

「では待とう」

「そうさせてもらおう」

「楽しみにしていてもな」

「そうしてくれ。是非な」

男は声達に話した。そうしてであった。

男は自分が今見ているものをだ。それもまた声達に話してきた。

「それにはだ」

「それにはか」

「何かある」

「何がだ」

「二人だ。見た筈だ」

また彼等に話した。

「確かにな」

「髑髏天使か」

「あの存在か」



「思い出したぞ」

声達の言葉がくぐもった。その何処か違う世界の底から聞こえてくるような言葉がだ。無意識のうちにくぐもってそんな声になったのだ。

「かつて我等を封印した」

「あの髑髏天使か」

「この時代にもいるのか」

「あれは五十年に一度姿を現すという」

「こつ話すのだった。」

「そういうものだな」

「それに死神か」

「あれとは戦つてはいないが」

「それでも出て来た」

「あれもか」

「その二人だ」

男はまた話してみせた。その声達にだ。

「私達の前に立ちはだかるのだ」

「その二人との戦いでどうなるか」

「封印はどうなる」

「それが問題だが」

「案ずることはない。戦えば戦う程力は強くなる」

男が今話に出したのは力だった。

「そしてそれが封印に影響するのだ」

「それで我等の封印が解かれる」

「まずは四つ」

「そうだな」

「この世に出て破壊と混沌をもたらすでしょう」

「是非な」

そう話す声達にだ。男はまた告げた。

「破壊と混沌。望むな」

「無論」

「それが我等の生きる根幹なのだからな」

「我等を作ってきているもの」

「だからこそな」

「それならばだ。今は待て」

待てというのだった。

「いいな、待て。楽しみにしている」

「そうしよう。それではだ」

「待たせてもらう」

「是非な」

「待っていることだ」

男の言葉は繰り返しだった。

「それではな」

「そうさせてもらう」

「それではな」

「また。話そう」

こう話していった。彼等は気配を消した。そしてだった。

男もまたそこから姿を消す。後に残るのは何も無い。無、それだけだった。

#### 第四十一話 完

## 第四十二話 共闘その一

髑髏天使

第四十二話 共闘

「そう、あの二人がね」

「共闘したか」

「これまでとは全く違って」

「はい、これまでではです」

今は倉庫の裏だった。港にあるその倉庫の裏は何処か湿っており、  
人気もない。彼等はそこに集まり話をしていた。まずは老人が告げ  
たのだった。

「共にいても共闘はしていませんでした」

「それぞれで闘っていた」

「たまたま戦場が同じであっただけ」

「それだけだったわね」

「しかしです」

ここで老人はまた言った。

「今回は違いました」

「うん、はっきりと一緒に闘ったね」

「共通の相手に」

「息を合わせて」

「そうしたところが全く違います」

老人はまた述べた。

「今度です」

「そうよね」

女が老人のその言葉に頷いた。

「それが違うわね、これまでとは」

「これまではね。あれだったからね」

子供もいた。そのうえで語る。

「本当に戦場が同じだったただけだから」  
「敵が同じであつた」  
紳士もいる。  
「それだけだつた」  
「しかしあの時は違いました」  
老人は仲間達に話す。  
「二人は完全に共闘していました」  
「そうね」  
「確かにね」  
「その通りだ」  
魔神達は老人のその言葉に応えて頷く。  
「どういうことでそうなつたのか」  
「それは何故か」  
「それは？」  
「おそらくはです」  
老人は仲間の神々の問いにも答えた。  
「仲間意識ができたのではないかと」  
「仲間意識か」  
男がその言葉に反応を見せた。  
「それが」  
「つまり。あれだよな」  
次はロツカーだつた。  
「同じ敵と戦い続けるうちについてことか」  
「そういうことですね。この場合は」  
小男もそれではと返す。  
「やはり」  
「そうだと思います、私も」  
老人もこう予想を述べた。  
「それによつてです」  
「それならばね」

美女だった。

「二人にとつてはいいことになるわね」

「しかし我々にはどうだ」

黒人はそこに疑問符を投げかけた。

「あの二人と戦う我々にとつてはだ」

「二人が手を組めばそれだけ手強くなる」

青年も言う。

「だからこそだな」

「そうじゃな。厄介になるやもな」

最後に老婆が口を開いた。

「さすれば」

「いえ、その前にです」

ところがだ。老人がここでまた仲間達に対して言ってきた。

「我々は今後彼等と戦うでしょうか」

「何っ、それは一体」

「どういうことだ」

「髑髏天使や死神と戦わない」

「そうなる」と

「妖魔です」

老人は今度はこの単語を出してみせた。

## 第四十二話 共闘その二

「妖魔について。どう思われますか」

「妖魔か」

「あれもまた厄介」

「いや、むしろ」

「放つてはおけない」

「あの連中は」

魔神達は口々に言った。彼等にとつてはだ。妖魔という存在は非常に疎ましくかつ警戒すべきものであった。そしてそれは何故かというのだ。

「この世界に破壊と混沌をもたらさんとする」

「混沌、それは無秩序」

「我々の求めるものとは違う」

「明らかに」

「我々は戦います」

また老人が話す。

「しかしです」

「破壊はしない」

「あくまで戦うのみ」

「髑髏天使、そして」

ここからは新たに増えた相手である。

「死神と」

「それが秩序」

「我等は戦いを楽しむ」

「それこそが魔物」

「魔物とは何か」

老人は仲間達に話す。

「つまり戦いを楽しみとします。それが妖怪との違いです」

「その通りじゃな」

老婆が老人のその言葉に頷いた。

「まさにじゃ」

「この世の秩序には戦いもあるのです」

老人はこつも述べた。

「しかし彼等はです」

「それも破壊する」

「全てを破壊する」

「そこが違つ」

「そうだな」

こつ話をするのだった。

「だとすればあの連中は敵になる」

「我等のものも壊すのなら」

「必然的に」

「そういうことになります」

その通りだとだ。老人も話した。

「妖魔は我々にとつても敵になります」

「それじゃあどうするの？」

子供があらためて老人に問うた。

「僕達は。どうすべきかな」

「どうすべきかですか」

「そうだよ。妖魔は敵だよね」

子供はこのことを強調してきた。

「その通りだよね」

「それはその通りです」

「それならだよ。戦うしかないじゃない」

子供の結論はこれであつた。

「敵ならね」

「その通りだな」

子供のその言葉にはだ。青年が頷いてみせた。

「敵とは戦い。そして倒す」

「それが僕達魔物だしね」

「そういうことだ。それならだ」

「倒すか」

「それしかないと思うよ」

また言う子供だった。

「どちらにしてもね」

「それはいいけれどな」

ロツカーがだ。子供と青年に対して異論を述べてきた。

「ただ。髑髏天使はどうするんだ」

「髑髏天使か。そうだな」

紳士がロツカーに続いた。

「そして死神。あの二人だな」

「あの二人だよ。あの連中はどうするんだよ」

ロツカーの言いたいことは彼等についてであった。

「まさかと思うが無視するなんてことはないよな」

「簡単なのは両方共倒す」

「それね」

男と女が話す。



## 第四十二話 共闘その三

「それが一番簡単だが」

「そうすればどうかしら」

「それが最も魔物らしいですね」

小男の言葉だ。

「そうなりますね。ただしそれはそれで問題があります」  
「戦力の分散」

「それね」

男と女もそれだと話す。

「妖魔と二人を同時に相手にすると」

「こちらとしては手間が倍になるわね」

「それは我々としても厄介なことです」

小男はまたこのことを指摘した。

「どちらかに絞るべきでは」

「それではどちらだ」

「どちらを相手にするのかしら」

黒人と美女がそこを問い返す。

「どちらを倒す」

「妖魔かしら。それとも」

「それが問題じゃな。どちらかじゃな」

老婆が話した。

「さて、どちらじゃ」

「そうですね。問題はです」

ここで言ったのはまたしても老人だった。

「どちらが我々にとってより相手にすべき存在かということですよ」

「問題はそれか」

「そついうことになるんだ」

「どちらがより問題か」

「我々にとって」  
「そしてです」  
また言う老人だった。  
「私としてはですか」  
「百目はどう思う」  
「どちらだ」  
「どちらが厄介だ」  
「妖魔ですね」  
そちらだと。今はじめて答えたのだった。  
「妖魔です。問題とするべきはです」  
「破壊と混沌をわし等にも及ぼすからこそ」  
「その通りです」  
老婆の言葉に応えたのだった。  
「だからこそです」  
「そうじゃな」  
老婆も老人のその言葉に頷いた。  
「わしもそう思う」  
「賛成して頂けますね」  
「髑髏天使とは何時でも戦える。しかしじゃ」  
「妖魔はそうはいきません」  
「今戦わなくてはならぬな」  
老婆の皺がれた声がだ。強いものになっていた。  
「さもなければわし等が滅びてしまうわ」  
「滅びていいと思われませんか」  
老人はまた仲間達に問うた。  
「皆さんは。何もせずに滅びていいですか」  
「まさか」  
「そんな筈がないじゃない」  
「馬鹿げた話ね」  
「全くだ」

これが魔神達の言葉だった。

「それなら。ここは」

「髑髏天使を置いておいて」

「まずは妖魔達の相手をする」

「そういうことね」

「はい、これで決まりですね」

老人は仲間達の意見をまとめて言った。そうしてだった。

彼等は何処かに消えた。それでそれは終わった。

牧村はまた走っていた。若奈も一緒だ。彼女は自転車に乗ってそ

のうえで彼の横にいた。セコンドの役割を務めているのである。

## 第四十二話 共闘その四

そしてだ。彼に対して声をかけた。

「飲み物いる？」

「飲み物か」

「そろそろ摂った方がいいと思うけれど」

こう彼に言うのだった。

「どうかしら」

「そうだな」

二人はジャージ姿だ。牧村は青、若奈は白のジャージをそれぞれ着ている。そして二人共帽子を被っていた。熱射病対策である。

そして熱中症対策としてだ。今若奈は言ったのである。それに牧村もだ。静かに頷いてだ。そのうえで彼女の言葉に応えたのである。

「そろそろだな」

「はい、これ」

こう言っただ。あるものを出してきた。それはだ。

「野菜ジュースよ」

「それと豆乳だな」

「水分を摂るだけじゃ勿体ないじゃない」

「栄養もか」

「そういうこと。栄養もね」

「それで野菜ジュースと豆乳か」

差し出されたその野菜ジュースと豆乳を走りながら飲む。それはどちらもよく冷えていた。そして美味くもあつた。かなりである。

「成程な」

「どう、これで」

その二つを飲む牧村に問うのだった。

「いつもこれだけね」

「いいな。俺はスポーツドリンクよりもだ」

「こつちの方がいいのね」

「だからいい」

「こつと言うのだった。」

「お陰でまた走られる」

「だったら嬉しいわ」

若奈もそれを聞いて笑顔になる。

「力になるんだったらね」

「そうか」

「紅茶とか緑茶もいいけれど」

喫茶店の娘らしくお茶も話に出した。

「やっぱりスポーツの時はこの二つだと思っわ」

「野菜ジュースと豆乳か」

「そうなの。それで後だけけれど」

「ランニングの後だな」

「筋力トレーニングだったわね」

「それだというのだった。」

「それもするのよね」

「当然だ」

こつ話した牧村だった。

「それもだ。そしてだ」

「そして？」

「テニスとフェシングの素振りの後でだ」

「あれっ、それで終わりじゃないの」

「座禅をする」

「こんなことをだ。若奈に言うのだった。」

「それをだ」

「座禅を？」

「最近しているな」

「そうね。牧村君大阪に来てからそれはじめたわよね」

若奈は目を二度か三度しばたかせてから答えた。

「どうしてなの？それって」

「少しな。思うところがあっただ」

「それでなの」

髑髏天使のことはだ。ここでも隠していた。

「それではじめたの、座禅を」

「それでだ。また座禅をする」

また話す彼だった。

「最後にな」

「わかったわ。それじゃあ最後に座禅ね」

「そうさせてもらう」

「うっん、私も座禅を付き合おうかな」

ここでだ。若奈はこんなことを言ったのだった。

「それでいいかしら」

「俺は別にいいが」

「そう。だったらね」

牧村の言葉を受けてだ。そうしてであった。

実際に祖父の屋敷の道場で二人で座禅をした。その中でだ。

## 第四十二話 共闘その五

牧村は中に何かを感じていた。それが終わってだ。彼は言うのだ。  
「た。」

「この座禅でだ」

「座禅で？」

「俺は掴むことができた」

「こう共にいる若奈に話す。」

「今あるものをな」

「今あるものって」

「ただ。トレーニングをしているだけでは不十分だ」

「心の鍛錬もってこと？」

「簡単に言えばそうなるか」

多くは言えなかった。髑髏天使であることはだ。自分以外の誰にも、人間である者には誰にも何があるうと言えないことであるからだ。  
だ。

「それでだ。彼は今はこう言ったのであった。」

「それで今している」

「心ね」

「これまで心のことは考えていなかった」

「牧村はこう若奈に話す。」

「しかし今はだ」

「そういうことね。成程ね」

「若奈も彼のその言葉に頷いてだ。こう返したのだった。」

「いいと思うわ」

「いいか」

「ええ、求道っていうのね」

「若奈はここではこれまで自分の口からは出さなかった。言葉を出した。」

「それよね」

「そうだな。求道か」

牧村もその言葉に静かに応えた。

「そうなる。俺は今それもしている」

「身体だけじゃなく心も鍛えれば」

若奈は話しているうちに微笑んできていた。

「きつとね。よくなるわ」

「今よりもだな」

「ええ、よくなるわ。さらに強くなれるわよ」

「フェシングもテニスもだな」

「人間としてもね。いいじゃない」

太鼓判まで押した若奈だった。

「何か私が思ってたよりもずっとずっと」

「ずっとか」

「牧村君って大きくなったのね」

しみじみとした口調もここで出してみせた。

「人間としてね」

「人間としてか」

「そうよ。身体は前から大きかったけれど」

言いながらふと自分の小さな身体のことと思う。しかしこれは言

つても仕方がなかった。それでも思わざるを得ないことでもあった。

「今度は。人間としてもなのね」

「そうなるか」

「なってるわ。私負けそう」

今度は少し残念そうな言葉だった。

「牧村君にね」

「負ける、か」

「人間としてね。何かそう思うと」

自然にだ。出てしまった言葉だった。

「私も頑張らないとね」



「頑張るか」

「そうよ、頑張るわ」

また言ったのだった。

「頑張るからね。私もね」

「それならだ」

「それなら？」

「頑張るといい。だが」

「だが？」

「一人で頑張るよりも」

牧村もだ。ここでは自然に言葉が出た。これもまた今までの彼とは違っていた。それを言ってから自覚した。そうした言葉だった。

「二人だ」

「二人？」

「そう、二人だ」

言いながらだ。若奈だけでなく未久や博士、それにあの男のことを考えた。それぞれ時と場合に応じて共にいる相手のことをだ。

## 第四十二話 共闘その六

「二人でやるとさらにいい」

「一人でよりもなの」

「そう思う」

静かに述べた言葉だった。

「俺はだ」

「そうね。言われてみればね」

若奈は彼のその言葉を微笑んで受けた。

「そうなるわよね。何か」

「何か、か」

「牧村君本当に変わったわね」

その彼を見ながらの言葉だった。

「これまで何か一人だったのに」

「一人だったか」

「友達と一緒にいても一人だったじゃない」

彼は人付き合いをしない訳ではない。友人達もちゃんといる。だがその口調や冷静に過ぎる性格からだ。何処か線を引いた感じがあつたのだ。

「それがね。今そんなことを言うなんて」

「だから変わったか」

「ええ、変わったわ」

また言うのだった。

「本当にね。それもいい方にね」

「いい方にか」

「そのまま変わっていくともっといいかもね」

若奈は彼のその顔を明るい笑顔で見ていた。

「牧村君にとつてね」

「そうか」

「じゃあ二人で頑張りましょう」  
若奈はまた告げた。

「二人でね」

「わかった。それならだ」

「また座禅する？」

そしてこう自分から提案したのだった。

「そうする？また」

「そうだな。それではな」

「ええ、それじゃあね」

「またするか」

彼女の提案を受けた。

「これからな」

「そうしよう。二人でね」

「二人だ」

牧村はまた言った。

「二人でしよう」

「ええ」

こうしてまた二人で座禅をするのだった。そしてそれが終わってからだ。

この日は博士と会った。会う場所はカレー屋だ。あの自由軒である。

勿論妖怪達も同行している。しかしであった。

「何か変わった子達よね」

「そうよね」

「服とか外見もね」

「最近の娘ってあなのかしら」

店のおばちゃん達がその妖怪達を見て言う。妖怪達は服を着て一人人間らしく見せている。しかも人間の子供らしく見せているのである。

しかした。やはり外見はだ。どうにもおかしなものだった。

「何かな」

「おかしい？」

「そうよね」

「まあいいけれど」

しかしおぼちゃん達はこれで終わらせたのだった。

そしてだ。妖怪達はそれぞれカレーを食べている。この店の名物であるカレールーを御飯に最初からまぶしただ。そのカレーをだ。最初から卵があつてそこにソースをかけてだ。食べるのだった。

「美味しいね」

「そうだね」

「噂には聞いていたけれどね」

「このカレーってね」

「病み付きになるよね」

彼等は口々にこのカレーを持って囃す、実際に食べてみての言葉である。

「大阪ってこんな美味しいカレーがあるんだ」

「カレーだけではないぞ」

博士がここでその妖怪達に話した。

## 第四十二話 共闘その七

「それはな」

「カレーだけじゃないって？」

「そうなの？」

「じゃあ他には」

「お好み焼きもたこ焼きもじゃ」

博士が言うのはそうしたオーソドックスな大阪の食べ物だった。

「それにうどんもじゃ」

「多いね」

「それも結構」

「大阪って美味しいもの多いんだ」

「つまりは」

妖怪達は皆で話すのだった。

「いい場所だね、本当に」

「美味しいものが多いって」

「しかも安いし」

「安くて美味しい」

また話す彼等だった。

「大阪が羨ましいよ」

「神戸も美味しいものが多いけれど」

「大阪ってそれ以上だよね」

「こないいい街ないよ」

「わしはよく来るぞ」

博士もまたそのカレーを食べている。この店の名物のそのカレーをだ。食べながらちらりとだ。店の壁にかけている織田作之助の写真を見た。

「そつえばのう」

「どうしたの？」

「今度は」

「残念じゃ」

その織田作之助の写真を見て言うのだった。

「まことにな」

「残念つて？」

「この写真の人が？」

「そうなの」

「結核でな。若くして亡くなったからのう」

織田作之助は終戦後すぐに死んだ。結核で僅か三十四歳で亡くなっている。大阪にとってこの作家の死はあまりにも寂しいものだった。

「それが残念じゃ」

「そういえば博士って百十歳超えてるけれど」

「この人知ってるの？」

「若しかして」

「酒が飲めなくてのう」

博士はまたその作家を見て残念そうに話した。

「それでコーヒーが好きじゃった。甘いものがな」

「コーヒー、ああそうだね」

「この写真にも一緒に写ってるね」

「これがなんだ」

「そうだったんじゃ。好きだったんじゃ」

また話す博士だった。カレーを食べながらだ。

「それで菓子を食べながら何度も話をした」

「何時の話？」

「戦争前と戦争中じゃった」

博士の言葉はしみじみとしていた。

「戦争の後は食べ物がなかったからのう」

「戦争中もなかったよね」

「そうだったよね」

妖怪達はすぐにこのことを突っ込んだ。

「それで戦争中って」

「何でそこで？」

「蓄えておつたのじゃよ」

博士はあつたその理由も話した。

「まだな。あつたのじゃ」

「ああ、それでなんだ」

「そういうことだったんだ」

「戦争の後はそれもなくなった」

博士の言葉はこのことにも残念に思うものだった。

「それでも話はしたぞ」

「この人とね」

「そうだったんだ」

「二人でよくな」

博士もまた二人と言った。

「話した」

「二人でなんだ」

「よく話したんだ」

「それで食べたんだ」

妖怪達はこうも話してみせた。

「二人で」

「二人。まあ誰かと一緒じゃな」

博士はこう話した。

## 第四十二話 共闘その八

「それで食べると美味いからのう」

「そうだな」

牧村も博士の今の言葉に頷いた。

「一人より二人だな」

「そういうことじゃ。そういえば」

「そういえばか」

「君もそれがわかったのか？」

博士は自分の向かいに座る牧村の顔を見てだ。話した。

「このことが」

「ようやくな。どうも今までの俺はだ」

「違ったな」

「何処までも一人だった」

牧村はこれまでの己を振り返り述べた。

「一人でしかなかった」

「そういえばこれまでの牧村さんってな」

「そうそう。僕達と一緒にいてもね」

妖怪達もここで話す。カレーを食べながら。

「一線を引いていたよね」

「何処か。それはね」

「あつたよね」

「何か障壁があつて」

見えない障壁である。それだというのだ。

「近寄り難いものがあつたし」

「話せてもどうしても一線があつて」

「それは感じてたし」

「何かがあつたから」

「そうだったな。俺はだ」



また話す牧村だった。

「何か他の人間を避けているところがあつた」  
「それはじゃ」

博士がその牧村にまた話した。

「人間として誰もあるものじゃ」  
「誰もがか」

「どうしても人と自分は違うものじゃ」

博士はまた話した。

「それで一線を引いてしまふ」

「それは自然か」

「自然じゃ。だが」

「だが、か」

「君はそれが強かつたな」

言葉はもうだ。過去形になっていた。

「他の者よりもな」

「それが何故かだよね」

「問題はそこだよね」

「うん、確かに」

妖怪達はここで話を進めてきた。

「牧村さんがそうやって一線を引いてきたか」

「それが問題ね」

「どうしてなのか」

「それはわしがわかる」

博士がまた話した。

「一応精神鑑定や心理学もできるしな」

「それもできるのか」

「そつちの方も専門にしておる」

博士の学問への造詣はかなり深く広い。そうした分野も入っていたのだ。

「それでわかるのじゃが」

「それでどうしてだ」

牧村からだった。博士に問うた。

「何故だ」

「何故か、か」

「そうだ。何故かだ」

こう問うのだった。

「俺がそうして他人と関わろうとしなかったのかは」

「迷惑をかけたくなかったからじゃない」

「迷惑か」

「君は何でも自分でしようとするな」

「ああ」

その通りだと答えた彼だった。

「そうしたい。何でもだ」

「それじゃ。その通りだ」

「それは他人に迷惑をかけたくないからだだったのか」

「君は勉強でもスポーツでもその他のこともだ」

あらゆることであつた。

## 第四十二話 共闘その九

「人並以上にできる。しかし君は天才ではない」

「俺は天才と思っただことはない」

牧村の今の言葉にだ。博士の目が光った。

「一度もな」

「だから努力したな」

「今もそうだといいのだな」

「そうじゃ。だから努力してきた」

また言う博士だった。

「人並以上にできるようになって他人に迷惑をかけない為にじゃ」

「それでか」

「左様、君は他人に迷惑をかけたくないのじゃ」

「それで一線も引いていたか」

「それが君のはじまりじゃ。だが」

「だが、か」

「君も成長した」

牧村の目を見ての言葉だ。

「そこに至ったのじゃよ」

「成長してか」

「人と触れ合えるようになるのも成長なのじゃよ」

「一線を取り払ってか」

「左様、そういうことじゃ」

博士の目は今は細いものになっていた。

「それだけわだかまりを消せたということじゃからな」

「そうなるのか」

「心の鎧は案外役には立たんのじゃ」

「心のは、か」

「戦う鎧は別じゃ」

髑髏天使である彼のことをわかつての言葉だった。

「それはともかくとしてじゃ」

「心の鎧は、か」

「役には立たん。むしろ邪魔じゃ」

「こつまで言うのであった。」

「じゃから。それを脱ぐということとはじゃ」

「成長か」

「左様、まさにそれじゃ」

博士の言葉は続く。

「君はまた一つ大きくなったのじゃよ」

「二人でいられる」

「二人でいられるようになればさらに増える」

「それで終わらないか」

「二人が三人になり三人が四人になりじゃ」

「さらに増えるか」

「何処までも増えるぞ」

牧村に話すとだった。ここでまた妖怪達が言ってきた。彼等は今の牧村と博士の話をしっかりと聞いていた。そのうえで言うのであった。

「だから僕達ともね」

「今までよりずっと仲良くなれるよ」

「友達としてね」

「もつともつとね」

「友か」

牧村は彼等の言葉も聞いて呟いた。

「そうか。友だったな」

「まあ今までは人間とね」

「それだったから」

「それがあつたから」

店の中なので流石に自分達が妖怪であるとは言えなかった。店の

おばちゃん達はしっかりと働いている。彼等の間を動き回っているのだ。

「ちょっと離れていたけれどね」

「けれどこれからは違うよ」

「友達だよ」

「親友だよ」

「既にわしは親友だったぞ」

ここでまた言う博士だった。

「もう既にな」

「この連中とか」

「そうじゃ。そしてこれからはじゃ」

「これからは、か」

「君ともじゃ」

再度牧村に話す。ここでカレーを食べ終えた。するとすぐにだった。

「お姉さん、よいかのう」

「はい」

おばちゃんの一人がお姉さんと言われてすぐに応えてきた。表情も声も明るい。

「何でしょうか」

「名物カレーもう一杯じゃ」

「わかりました。インディアンー」

おばちゃんは博士の言葉を受けて店の奥のキッチンに声をかけた。

## 第四十二話 共闘その十

「他にはありますか」

「僕も」

「僕も」

「わしもじゃ」

「私もね」

妖怪達もここで言うのだった。

「名物カレー下さい」

「それを」

「もう一杯」

「ええと、数は」

「とりあえず五十下され」

博士が話をまとめておばちゃん達に話した。

「それだけ御願いします」

「五十ですね」

「そうじゃ、五十じゃ」

博士はまたおばちゃん達に告げた。

「それだけじゃ」

「わかりました。インディアン五十」

すぐに再度店の奥に告げられてだった。話に戻った。

「それで君とわしもじゃ」

「これからは友人同士か」

「これまではどうも何処か他人行儀じゃったからのう」

「教授と生徒だったからな」

その垣根を意識してこれまではさらに一線が引かれていたのである。

「どうしてもな」

「まあそれを師弟関係に発展させてじゃ」

「それと共にか」

「うむ、友人になるう」

博士から申し出た言葉だった。

「それでどうじゃ」

「わかった」

牧村の博士の今の申し出に対する返答は一言だった。

「それでは。俺達はこれからはだ」

「友人じゃな」

「そうだ、友人だ」

牧村も言った。

「そうなったな」

「年齢は違ってもな」

「どれだけ離れてたっけ」

「そうだよね」

妖怪達もここでまた話に加わってきた。

「ええと、博士って百十歳？」

「百二十じゃなかったっけ」

「そうだったっけ」

彼等も博士の詳しい歳は知らないのだった。

「だから。百歳は離れてるんだっけ」

「一世紀ねえ」

「長いね」

「それでも友達なんだ」

「だから世代を超えているのじゃよ」

また話す博士だった。

「友人関係にはそもそも世代なぞ関係ないのじゃ」

「そうなのか」

「うむ、関係ない」

また牧村に話した。

「わしも最近になってそれがわかった」

「最近か」

「今かも知れんな」

「こう言い換えもした。」

「若しかしたらじゃ」

「今か」

「そうかも知れん。しかしわかったのはじゃ」

「それは確かか」

「そう、確かじゃ」

「その通りだというのである。」

「わしもわかったわ」

「そうか、それではだ」

「君もじゃな」

「色々とわかった。俺は一人ではない」

「まずはこう話した。」

「そしてだ」

「世代についてもじゃな」

「世代だけではないな」

「これに止まらないというのだった。牧村はだ。」



## 第四十二話 共闘その十一

「それだけではないな」

「とうとうとどういいうことじゃ？」

「人間かそうでなくともだ」

言いながらちらりと妖怪達を見る。実際には彼等を見ての話ではない。だが人間でないということからあえて彼等を見たのである。

「それでも友人になれるな」

「わしとこの連中みたいじゃな」

「それがわかった。そうだな」

「友達つていいよ」

「そうだよ。博士は友達だし」

「とてもいいよ」

妖怪達はここでまた博士を囲むようにして話した。

「もう長い付き合いだしね」

「色々遊んで話をしてるしね」

「美味しいものも食べて」

「今だつてそうだし」

それは現在進行形だともいうのである。

「そう、人間とかそういうのはね」

「些細なことだよ」

「その人の気持ち次第で」

「友達になれるんだ」

「人間でありながら人間とは違う存在とも友達になれる」

牧村は彼等の言葉を聞きながらまた述べた。

「面白いものじゃな」

「それもまた世の中じゃよ」

博士は顔を少し崩して牧村に述べた。

「それでなのじゃが」

「それでか」  
「さて、来たぞ」  
話が一段落したところでだ。カレーが来たのだ。も。  
「お代わりのカレーじゃ」  
「早いな」  
「大阪は美味い、早い、安いじゃ」  
所謂三拍子である。  
「これが大阪の食べ物じゃ」  
「そうでなくては駄目か」  
「それとサービスも必要じゃ」  
「このことも+された。」  
「サービスもなのじゃ」  
「サービスもか」  
「それを入れたら四拍子じゃな」  
また言う博士だった。  
「大阪の店は全てないと駄目なのじゃ」  
「東京は違うけれどね」  
「あそこはね」  
妖怪達はそこはだというのだった。  
「サービス悪い店あるよね」  
「老舗だと何かね」  
「もう最悪」  
「一見さんに冷たいし」  
「これが東京なのである。」  
「お客さん大事にしろって」  
「しかも高いしね」  
「大阪よりもずいし」  
「東京は駄目だよ」  
「寿司とか鳥鍋とかのう。一回行ってじゃ」  
博士はまた話した。

「冗談ではないわ」  
「そうそう、最低だよ」  
「お客さん選ぶなんてね」  
「あんなの」  
妖怪達も口々に話す。  
「大阪でもそんなお店あったけれどね」  
「潰れたしね」  
「当たり前だけれどね」  
大阪にもそういう店はあるにはあった。だが問題を続発させて見事につぶれてしまったのである。  
「よく大阪であんなことできたよ」  
「何考えてるんだか」  
「だよねえ」  
「正気だったのかな」  
「思いついておったのじゃよ」  
博士も突き放した口調だった。  
「だからじゃ」  
「それでそんな経営をしていた」  
「そういうことなんだね」  
「結局は」  
「そうじゃ。結局はそうなのじゃ」  
また言う博士だった。  
「あそこの親父もおかみもじゃ。思いついておった」  
「だから手抜きというか出しちゃいけないものをお客さんに出したりして」  
「そういうことを何度もやって信頼をなくして」  
「そして遂に」  
そうした店の辿り着く末路は一つしかなかった。

## 第四十二話 共闘その十二

「お店潰してね」

「馬鹿だよね」

「全くだよ」

「潰れる為の行動にしか思えんな」

博士はカレーと卵をかき混ぜながら話していた。当然ソースもかけている。

「美味しいものを食うのにはじゃ」

「差別は不要だな」

「そうじゃ。お金を出せば誰でもよいのじゃ」

博士は牧村にもこう話した。

「誰でもな」

「そうだな。金さえ払えばな」

「客の方もマナーを守らないといけないがのう」

「それは常識だな」

「双方常識を守っていればそれでよいのじゃ」

博士の言葉はまさに正論であった。

「それだけなのじゃよ。必要なのは」

「そうだな。しかしだ」

だが、だった。ここで牧村は言うのだった。

「それができていない客がだ」

「多いな」

「それもかなりのう」

博士はそのかき混ぜたカレーを食べながら残念そうに述べた。

「店の方も問題じゃがな」

「客もだな」

「冗談抜きで酷い客もある」

博士の残念そうな言葉は続く。

「全く以てな」  
「そうそう。例えば食べた後の食器に痰吐いたりね」  
「もう論外なのいるから」  
「食べ物投げたりちやぶ台ひっくり返したり」  
「漫画のキャラクターの様だがこつした人間も実在する。」  
「そういう奴本当にいるからね」  
「そういう奴は何かを食べる資格ないよ」  
「全く」  
「食器に痰か」  
牧村はこのことに眉を顰めさせる。彼もまたカレーを食べている。  
「信じられないな」  
「しかしこれがあるんだよね」  
「そうそう、本当にね」  
「いるから」  
「僕達も見て驚いたから」  
妖怪達は口々に話す。  
「あんなことする人間本当にいるんだって」  
「もう我が目疑ったから」  
「普通じゃないよ」  
「食器、そして食べ物、ひいては食事への冒瀆じゃ」  
博士も苦い顔で述べた。  
「こつした行為はのう」  
「そうだな。人間として絶対にやってはいけないことだ」  
牧村もこつと考えていた。  
「俺もそう思うことだ」  
「どんな無作法な者も普通はそんなことはせん」  
博士の口調は苦いものになっていた。  
「普通の無作法者はじゃ」  
「っていうかあいつどんな生活してるのかな」  
「そうだよな。どれだけ酷い生活してるんだか」

「仕事何？」

「つていうかどんな生き方してきたの？」

「そうしたことまで疑われる行動じゃ」

博士の言葉も厳しい。

「論外じゃ」

「そうだな。最低限のマナーだ」

牧村もまた述べた。

「反面教師としなければな」

「そうそう、牧村さんは立派になってよね」

「それが友達としての願いだからね」

「頼むよ」

「わかっている」

牧村は迷いがなかった。

「最低限のことだからな」

「それができてない奴は最低以下じゃな」

博士はここでも述べた。

「最低より下は何とというかというところじゃ」

「何ていうの？」

「文学博士でもあるしわかるよね、それは」

「それで何て表現になるの？」

「論外じゃ」

出て来たのはまたこの言葉だった。

第四十二話 共闘その十三

「それじゃ」

「最低の下ってそれでいいのかな」

「どうかな」

「違うんじゃないかな」

「そうだよね」

妖怪達は博士の今の言葉にはそれぞれ異議を述べた。

「そんな気がするけれど」

「どうなのかな」

「わしはそれでいいと思っておるぞ」

博士は少し強引に言ってみせた。

「だからいいのじゃ」

「やっぱり強引だよね」

「そうだよね」

「最低の下が論外って」

「本当なのかな」

「そう思ってくれ。それでじゃ」

博士は今度は話を強引に打ち切った。今度も強引だった。

「よいかのう」

「うん、それじゃあ」

「何かな」

「食べたなら次の店に行くとするか」

言ってきたのはこのことだった。

「それでどうじゃ」

「次の店か」

「カレーの次は甘いものじゃ」

「ならあそこか」

牧村は博士の今の言葉ですぐにそこがどの店なのかわかった。

「夫婦善哉か」

「うむ、そこじゃ」

まさにそこだと。博士も答えた。

「そこでどうじゃ」

「いいねえ」

「善哉大好きだし」

「夏に善哉っていうのもね」

「おつだしね」

「夏に冷たいものは確かにいい」

今度はこんなことを言う博士だった。

「しかし暑いものもいいのじゃ」

「そうそう。汗かくからね」

「汗をたっぷりかくのがいいんだよ」

「だからだよね」

妖怪達はここでは博士の言葉にそれぞれ笑顔で頷く。

「夏に暑いものはね」

「それでだよね」

「やっぱり」

「その通りじゃ。では行くぞ」

笑顔で妖怪達にも言う博士だった。

「今からな」

「わかった」

頷いたのは牧村だった。

「では行くでしょう」

「うん、そうだね」

「それじゃあ次は」

「善哉でお口を甘くして」

「楽しもうよ」

妖怪達も応えてそれで今度はその善哉を楽しむのだった。牧村は博士、そして妖怪達ともそれぞれ絆を確かめ合った。そうしてだっ



た。

今は一人だった。一人でサイドカーに乗ろうとした。そこに。

「どうだ」

「今度は貴様か」

「今度は、か」

死神だった。あの黒いライダースーツで彼の横に出て来たのである。

「では今までもだな」

「友人と話していた」

死神に顔を向けての言葉であった。

「そうしていた」

「友人とか」

「そうだ。そして今度は」

「戦友か」

死神の方から出て来た言葉だった。

## 第四十二話 共闘その十四

「そうだな」

「戦友か」

「共に戦っている」

死神はまた言ってみせた。

「それで戦友でないのか」

「いや、戦友だ」

牧村もその言葉に頷いた。

「俺と貴様は」

「戦友だな」

「そうなったな」

「そうだな。なった」

死神もまた彼に対して告げる。

「この前にだ」

「前からそうだったかも知れないがな」

「前の戦いで確実にそうなった」

「俺達は戦友か」

「何故そうなれるか」

死神はだ。その戦友に対してこんな風にも言ってきた。

「それだが」

「何故なれる」

牧村もその彼に問うた。

「それは」

「貴様に心があるからだ」

「心か」

「そうだ、心だ」

まさにそれだと。牧村に話すのだった。

「それがあるからだ」

「心によつてか」  
「当然だ。心がなければどうか」  
死神はまた牧村に問うてきた。  
「例えばだ。妖魔達はどうか」  
「あの連中か」  
「友人になれる筈がないな」  
「奴等と俺では根本的に違う」  
牧村は感性で感じていることを話した。  
「奴等の心はだ」  
「人の心ではないな」  
「この世に存在しているものの心ではない」  
「こつ言うのであつた。」  
「それとは別の。あれは」  
「一言で言つと原始的だ」  
死神はその妖魔達の心も話した。  
「深い考えはない」  
「それはか」  
「知性や知能はある」  
「このことも間違ひなかつた。」  
「それもかなり高いな」  
「人と同じか。若しくはそれ以上だな」  
「そうだ。妖魔もその神々も知能は高いのだ」  
死神は再びこのことを指摘した。  
「だが。心はだ」  
「原始的か」  
「本能しかない」  
それしかとつのである。それだけだ。とだ。  
「あるのは本能だけだ」  
「それだけだな」  
「そうだ、破壊と混沌」

出て来た言葉は二つだった。

「この二つだけしかないのだ」

「そしてそれによって動いているのか」

「妖魔にあるのはそれだけだ。他にはない」

死神はその妖魔を見ていた。今ここにはいなくともだ。

「それがあの者達だ」

「心はないか」

「あつたとしても人のものとは全く違う」

「だから友人やそういったものにはか」

「決してなれない。殺し合うだけだ」

断言であつた。揺ぎ無いまでの。

「それだけだ」

「そうだな。魔物達とはまた違うな」

「魔物か」

死神は牧村の今の言葉にだ。ふと動きを止めたのであつた。特に言葉にそれが出ていた。そして一呼吸置いてからだ。こう言ってきたのだつた。

「その魔物達だが」

「何かあつたか」

「ここに来ているな」

こう牧村に告げてきたのである。

## 第四十二話 共闘その十五

「今ここにだ」

「来ているか」

「もう感じる距離だな」

死神はまた話した。

「そうだな。貴様もまた」

「そうだな。今感じた」

牧村の言葉が鋭いものになった。

「来るか。しかも」

「今度は多いな」

死神はまだその手に鎌を持っていない。だが心にはもう持っていた。

「どうやらな」

「十二か」

牧村は具体的な数を述べた。

「それだけだな」

「しかもこの力の大きさはだ」

「魔神か」

「間違いない。それだ」

二人はそれぞれ話していく。

「全員で来たか」

「どういっつもりだ」

牧村は声をさらに鋭いものにさせていた。

「これは」

「それは本人達に聞けばいい」

死神は今はそのれについて考えていなかった。

「本人達にな」

「そうだな。それで済むな」

「話はこれでいいな」  
「よし、それでいい」  
二人はそれぞれ身構えた。そこにであった。  
「お久し振りですね」  
「まずは老人の声が出てきた。」  
「お元気そうで何よりです」  
「少なくとも体調はいい」  
牧村がその老人の声に返した。  
「貴様等と戦えるだけの身体は維持している」  
「おやおや、戦われるつもりですか」  
「貴様等がそのつもりならな」  
老人にも鋭い声を向けていた。  
「そうするが。どうだ」  
「それもまた面白いでしょう」  
老人は笑いながら述べてきた。  
「ですが」  
「ですが、か」  
「今はそれをするつもりはありません」  
「こつ言つのであつた。」  
「我々も考えました」  
「そのうえで結論か」  
「はい」  
牧村にも答える。  
「その通りです」  
「では。その結論を聞こう」  
「今度は死神が問うた。」  
「貴様等のその結論をだ」  
「貴方達とは戦いません」  
「これがその結論だというのである。」  
「そう決めました」

「それは何故だ」

「妖魔は私達に取っても敵であるからです」

「敵か」

「はい、敵です」

また言う老人だった。後ろにいる他の魔神達は今は動かない。

「彼等が望むのは破壊と混沌ですね」

「そうだな。他にはない」

「我等は破壊と混沌は望んでいません」

老人はこのことも述べたのだった。

「戦いは望んでいてもです」

「俺との戦いをだな」

「はい」

牧村を見ての返答であった。

「その通りです。戦いは望んでいますが」

「破壊と混沌は望んではいないか」

「戦いは我等の生きがいです」

魔物を司る者としての言葉に他ならなかった。

## 第四十二話 共闘その十六

「その為に妖怪から魔物になったのですから」  
「ではだ」

「はい、それでは」

「貴様等はこれからは妖魔と戦うのか」

牧村はその老人を見据えて問い返した。

「そうするつもりか」

「はい、結果としてそうなります」

まさにそうだというのである。

「彼等は必然的に我等も滅ぼそうとしますし」

「わかった」

牧村はここまで聞いて頷いた。

「では。貴様等も妖魔と戦うか」

「ですが貴方達とは共闘はしません」

「手は結ばないのか」

「休戦です」

老人が話した言葉はこれだった。

「休戦を申し出ます」

「それをか」

「如何でしょうか。我々はあくまで戦いを愛します」

「そしてそれを邪魔する者は」

「去ってもらいます」

穏やかであったが確実な言葉であった。

「だからです」

「それではだ」

「ここまで聞いてだ。今度は死神が言ってきた。

「暫くは貴様等との戦闘はないな」

「そちらから来ない限りは」



「ならいい。こちらから攻めることはしない」  
死神もそれでいいとした。

「それでな」

「話はまとまりましたね」

ここまで聞いてだ。老人はまた述べた。

「それではそういうことで」

「そうだな。髑髏天使よ」

「ああ」

牧村は死神が自分に顔を向けるのを見た。そしてその声に応えた。

「貴様はどうだ」

「俺もそれでいい」

「いいのだな」

「まずは妖魔だ」

彼もまたこの考えになっていた。

「妖魔を倒さなければこの世界そのものが危うい」

「世界を守るか」

「この世界には友人がいる」

これが彼の返答だった。

「友人を守るのは当然のことだ」

「だから妖魔と戦うか」

「それでは駄目か」

「駄目とは言っていない」

死神もそれは否定しなかった。

「むしろいいことだ」

「そうか、いいか」

「貴様らしい」

そしてこつも言っのだった。

「今の貴様らしい」

「今の俺にか」

「だからこそいい。それではだ」

「ああ」

「貴様の考えは聞いた」

死神は確かな顔で頷いてみせた。

「そういうことだな」

「そうだ。そういうことだ」

「聞いたな」

死神は今度は老人達に再び顔を向けた。

「我々の考えは」

「確かに」

また老人が答えた。

「今しがた」

「それでは今はだ」

「休戦ということだ」

「それでいい。我々は我々で妖魔に当たる」

「では我々もまた」

これで話はまとまった。

「妖魔と戦います」

「そうするといい」

死神が言葉を返した。

## 第四十二話 共闘その十七

「貴様等は貴様等でな」

「はい、それでは」

「私達も私達で戦う」

今死神は二人称を使ってみせた。自然にである。

「そうさせてもらうからな」

「左様ですか。私達ですか」

「そうだ、私達だ」

また使ってみせたのであった。

「それでおかしいか」

「いえ」

老人もそうではないと返す。

「そうは思いません」

「特におかしくはないか」

「しかしです」

だがここでだ。こう言ってきたのであった。

「変わりましたね」

「変わったか」

「貴方も。そして髑髏天使も」

牧村もだというのであった。

「変わりましたね」

「変わったか」

「これまでではどちらも一人だと言われました」

「そうだな。それはな」

死神もこのことを認めた。こくりと頷いてもみせる。

「これまでの私はな。そうだったな」

「そして俺もだな」

牧村も言ってきたのであった。

「俺もこれまではそう答えていた。一人だとな」

「しかし今は二人です」

「如何にも」

「その通りだ」

二人同時に認めてみせた。どちらもだ。

「俺は今は一人で戦っているのではない」

「私達は今は二人で戦っている。それは紛れもない事実だ」

「そして二人で、ですね」

老人はその二人に対してまた述べた。

「妖魔達を倒しますか」

「その通りだ、倒す」

「何があるうともだ」

またしても二人同時であった。

「それを言っておく」

「貴様等との戦いは後だ」

「後ですね。それもわかりました」

こう言われてもであった。老人の飄々とした感じは変わらない。

そしてである。後ろにいる己の同胞達に対して告げるのであった。

「それではです」

「帰るのね」

「そうするのだな」

「はい」

その同胞達の返答に答えもする。

「その通りです。それで宜しいですね」

「うん、いいよ」

「異論はない」

「それではな」

「帰り。そしてここは」

ここからは。老人の声を楽しみを前にして期待するものになった。

「何処に行きましょうか」

「スパゲティってあったよね」

子供の言葉である。

「あれだけねど」

「あれを食べたいのですね」

「うん、皆で食べに行こう」

子供はうきうきとした感じの声で老人に対して言った。

「それでね。どうかな」

「そうね。いいわね」

「あれは美味い」

「それにワインとも合う」

「実に美味しいものだ」

他の魔神達も子供のその言葉に頷くのであった。

「それならここは」

「スパゲティの美味い店に行くとするか」

「そうするとしよう」

「パスタならだ」

牧村はその彼等に対して言った。

「チェーン店でいい店がある」

「それは何処なの？」

「カプリチョーザだ」

そこだというのである。

「量も多いし色々な種類のパスタがある。行くといい」

「カプリチョーザか」

それを聞いて興味深そうな声を出したのは紳士であった。

「あの店か」

「知っているのだな」

「オリーブと大蒜を利かしていい実にいい」

やはり知っている言葉だった。

「あの店ならな。全員で行けるしな」

「行けばいい。吸血鬼でも大蒜が平気ならな」

「生憎だが私は大蒜は好きだ」  
紳士は彼の本来の姿と合わせて答えてみせた。

## 第四十二話 共闘その十八

「それも大好きだ」

「そうなのか」

「何と勘違いしている」

そして紳士はこう牧村に問い返してきたのだった。

「映画のあれか」

「そうだ。ドラキュラだが」

「確かにそうした吸血鬼もいる」

「やはりいるのか」

「スラブにはな」

その吸血鬼発祥の地だ。元々吸血鬼というものはスラブやギリシアに伝承が多い。とは言っても世界各地に存在はしているものである。

「だが私は違う」

「大蒜は平気か」

「流れる水も太陽も平気だ」

その二つもだというのである。

「どちらもだ」

「吸血鬼の弱点はか」

「ついでに言えば十字架も聖水もどうということはない」

この二つもであった。

「無論銀もだ」

「吸血鬼の弱点は全て何ともないか」

「そもそも私は神だ」

魔神としての己も話すのだった。

「そうしたものを苦手と思うか」

「神か」

「神の力は普通の魔物とは違うのだからな」

「そうだな。言われてみればそうだ」

牧村もその言葉には納得した。

「魔物ならばだな」

「これでわかったな」

「うむ」

紳士のその言葉にも頷いた。

「そういうことか」

「それでだ。今から食べに行く」

「好きにするといい。誰が何を食べようが構うことはしない」

「それはないか」

「ない。どうでもいいことだ」

牧村の言葉はここでは素っ気無くすらあった。

「誰が何を食べようとな」

「人間はどうじゃ」

「それは許さん」

老婆の言葉には即座に返してみせた。

「髑髏天使として相手になる」

「ほっほっほ、安心せい。それはない」

だが老婆はここでそのことは否定してみせた。

「人間なぞ食いはせぬわ」

「食わないというのか」

「左様、食わん」

老婆は笑ったまま話した。

「美味しいものが満ちておるからのう」

「そこまでか」

「何処にでもある。美味しいものはな」

「そのパスタもか」

「パスタだけではない。他にも色々とあるではないか」

そしてだ。老婆が話に出した料理はこれであった。

「天麩羅などのう」



「天麩羅か」

「蟹鍋もいい。いや、海のものはいいのう」

「確かロシアだったな」

牧村は少し怪訝な目になって老婆に問うた。老婆はバーバヤガーである。ロシアにいる魔神であり言うならばロシアの山姥である。

「そうだったな」

「そうじゃが」

「それでも海のは好きか」

「好きになったのじゃよ」

老婆はまた笑ってこう話した。

「この時代のこの国に入ってからじゃ」

「それでか」

「天麩羅だけでなく刺身や煮つけやフライも好きじゃ」

そういうものも話に出すのであった。

## 第四十二話 共闘その十九

「海のものなら何でもじゃ」

「何でもか」

「左様じゃ。今日はトマトソースのシーフードパスタがよいのう」  
それが何かというのであった。

「ペスカトーレじゃな」

「おやおや、お好きですな本当に」

老人は老婆のその話を聞いて笑いながら彼女に対して告げた。

「海のもが」

「だから大好きじゃ。では早速それを食べに行くでしょう」

「はい、それでは」

老人はニコニコとした顔で老婆のその言葉に頷いてみせた。

「参りますか」

「うむ、ではのう」

こんな話をして姿を消す魔神達だった。後に残ったのは牧村と死神、そしてである。もう一人がここで姿を現してきたのであった。

「じゃあ僕達これからどうするの？」

「貴様か」

「ずっと姿を消していたんだ」

目玉である。彼が出て来て牧村に対して話すのである。

「それで見えていたんだだけだね」

「そうだったのか」

「一応魔神との話は終わったし」

目玉はまた言う。

「だから僕達もこれからどうするのかな」

「帰る」

牧村が答えた。

「そうする」

「帰るんだ」  
「帰って俺も食べる」  
「そうするといつのである。」  
「スパゲティをな」  
「それをなんだ」  
「話を聞いて食べたくなつた」  
「こつ目玉に告げる。」  
「魔神達の話聞いていてな」  
「成程、そうなんだ」  
「ではな」  
「こつ言つてであつた。死神達から踵を返した。」  
「今から帰る」  
「それじゃあね。じゃあ死神」  
「うむ」  
「今度は目玉と死神の話になつた。二人もそれぞれ話す。」  
「僕達も帰ろうか」  
「そうだな。長居は無用だ」  
「帰つたらどうする？」  
「目玉はこつ死神に対して尋ねた。」  
「僕達の世界に帰つたら」  
「飲むとするか」  
「お酒なんだ」  
「葡萄酒の酒があつたな。黄金の」  
「あるよ。それと黄金の林檎もね」  
「それを飲んで食するとしよう」  
「目玉に対して話す。」  
「それでどうだ」  
「いいね。それじゃあね」  
「目玉も彼のその提案に頷いた。」  
「それで楽しくやろう」

「そうするとしよう。そしてだ」  
「そして？」

「これからの戦いはさらに激しいものになる」

「ここで死神の目が光った。そのうえでさらに言うのであった。

「おそらく髑髏天使もさらに強くなる」

「遂にあの最高位になるんだね」

「間も無くな」

「こう話しているとだ。サイドカーに乗ろうとしていた牧村が応えてきた。

「あの天使に俺がなるのか」

「そうだ。今の智天使よりも上になる」

死神はその当人にも告げた。

「それだけのものが備わってきた」

「そうか」

「嬉しいか」

「あらためて彼に問う。

「それは」

「特に何も思わない」

しかし牧村の反応はこうしたものだ。た。

第四十二話 共闘その二十

「何もな」

「思うところはないか」

「力を得てそれで喜ぶようなことはない」

実に牧村らしい言葉だった。それを隠すこともしない。

「むしろそれに溺れることを怖れる」

「かつて魔物になりかけたようにか」

「その力を制御できなくなれば終わりだ」

実際に牧村はその時のことを思い出したうえで今話していた。このことは彼の記憶から離れられないものになっていた。しかしである。

「ここだ。目玉がその彼に言うのであった。」

「それは大丈夫だよ」

「安心していいというのか」

「君はもう乗り越えたからね」

だからだというのである。

「だから力に飲み込まれたり溺れたりすることはもうないよ」

「そうか」

「だから心を鍛えたんだね」

このことも指摘するのだった。

「そうだよね」

「それはその通りだ」

「なら大丈夫だよ。心はそれをはねつけるだけ強くなったから」

「だからか」

「心だよ」

目玉はまた彼に告げた。

「大事なものはね」

「そうだな。貴様はもうその心配はない」

死神も目玉と同じことを話してきた。

「既にな」

「そうか、既にか」

「安心しろ。貴様はもう魔物にはならない」

死神は落ち着いた声で告げてきていた。

「それはない。そしてそのうえでだ」

「最高位にか」

「その天使になる」

またこの話に戻った。

「安心することだ」

「安心していいか」

「それでいい。しかしだ」

「しかし、か」

「妖魔には敗れるな」

このことは念を押すのであった。

「いいな、決してだ」

「それはか」

「そうだ、敗れるな」

また言う彼だった。

「わかったな」

「それはわかつている」

牧村も冷静に返すのだった。

「よくな」

「ならいい。それではだ」

「また会おう」

「またな」

こう話してであった。双方別れた。そして祖父母の屋敷に帰るとであった。祖母が帰って来た彼に対してこう言ってきたのであった。

「ああ、今晚なだけれど」

「何だ」

「スパゲティにするわよ」

「こう言ってきたのである。」

「それでいいわね」

「スパゲティか」

「来期好きよね」

「そしてこうも言ってきたのだった。」

「そうよね」

「好きだ」

言葉は素っ気無いが真実を言っていた。

「それもかなりだ」

「昔からそうだったしね」

「それで今晚はそれか」

「最近和食が多かったでしょ」

祖母はこのことも話してきた。

「だからね。それも考えてね」

「それでパスタか」

「そういうこと。イカ墨のね」

「しかもそれだというのだ。」

「大蒜とオリーブを効かせるから」

「そうしたものも作れたのか」

「勿論よ、お婆ちゃん洋食も作れるよ」

祖母はこんなことも言ってきた。

第四十二話 共闘その二十一

「中華だつてそうだし」

「何でも作れたのか」

「戦中派を甘く見ないことよ」

「今度の言葉はこれだった。」

「何でも作れるからね」

「そうだぞ」

「ここで今度は祖父が出て来た。相変わらず背筋がしっかりしている。」

「わしも陸軍士官学校を出ているのだ」

「そういえばそこを出ていたな」

「そこで鬼と言われていた」

「祖父は孫にこんなことも言ってきた。」

「竹刀を持てば右に出る者はいなかった」

「そうそう、お爺さんはその頃から剣道が強くてねえ」

「そして風流も好きなのじゃぞ」

「風流もか」

「昔の軍人はただ強ければいいものではなかった」

「ここが重要なのだ。軍人、しかも将校ともなればかなりの教養も求められたのである。これは陸軍だけでなく海軍も同じだ。」

「料理はせんかったがな」

「それはか」

「それは婆さんに任せている」

「言葉は現在形であつた。」

「じゃが茶道はするぞ」

「お爺さんの入れた茶はこれがねえ」

「祖母の言葉は妙に嬉しそうなものだった。」

「凄く丁寧で美味しくて」



「茶道も身に着けておるのじゃ」  
「そちらもか」  
「スパゲティの後で淹れてやる。楽しみにしておるのじゃ」  
「そうさせてもらおう」  
「さて、パスタだけね」  
「祖母もいそいそとした口調である。」  
「量はかなりあるからね」  
「それはいいな」  
「あんた本当に食べるからね」  
その牧村を見て笑いながら話していた。  
「だから量も考えてるよ」  
「イカ墨のそれをか」  
「そうそう。あれは美味しいよね」  
祖母は笑顔をさらに明るいものにさせていた。  
「一回食べると病みつきになるね」  
「全くだ。しかし」  
「しかし？」  
「まさかここで洋食を食べるとはな」  
牧村にとってはそれが以外なのだった。  
「どうもな」  
「その意外なのがいいのよ」  
「そうだぞ。わしが茶道をやっていることも意外だったか」  
「それもしていたのか」  
「しかも先生もやっておる」  
「そこまで至っているのである。」  
「茶道は元々武家のたしなみじゃ」  
「織田信長だな」  
「そういうことじゃ。軍人は教養も大事じゃった」  
このことを自分自身でも話すのだった。  
「漢詩もやっておったぞ」

「そちらもか」

「何かとな。学んでおった」

「軍人は大変だったのだな」

「よく陸軍は言われておるがな」

左翼勢力にである。とかく言われてきたのが帝国陸軍である。

「しかし実際は違った」

「軍規軍律は厳格だったな」

「左様、恐ろしいまでにじゃ」

これは伝説の域にまでなっていることである。

「まあ俗に言われているようなことはなかった」

「実際はそうだったな」

「そもそも日本刀一本で百人は斬れぬ」

祖父はこのことも話してきた。

「それはわかるな」

「常識の話だな」

「しかしつい最近までその常識は忘れられていた」

マスコミによって歪められてきた結果である。それによってだ。

「人の心から」

「人の心から、か」

「そうだ、忘れるにはだ」

「嘘を吹き込めばいいか」

「そうする輩は実際にいる」

そのマスコミこそがそうしてきたのだ。それにより歴史を改竄してきたと言ってもいい。これが破廉恥な行動であるのは言うまでもない。

「だが。思い出すことはできる」

「思い出せるか」

「嘘を取り去ることもそのうちの一つだ」

「そういうことか」

「御前にはそれを教えておこう」

祖父としてだった。牧村に語っていた。

「そしてだが」

「茶か」

「夕食の後で共に楽しもう」

その茶道をだというのである。

「それもまたいいものだ」

「茶会か。はじめてだな」

「そうそう、お茶だったら」

祖母もその茶会の話に加わってきた。

「お婆ちゃんも参加させてもらうよ」

「婆ちゃんもか」

「実はこう見えてもお茶が好きでね」

「わしも婆さんも酒は飲めん」

祖父は話してきた。

「だからなのじゃよ。茶に親しんできた」

「酒の代わりか」

「このこともまた話そう」

祖父は今は話そうとしない。それはあくまでだというのだ。

「ではまずは食べるとしよう」

「夕食をか」

「パスタをな。久し振りだな」

「そうですね。家でパスタを食べるのは」

祖母もまたつきつきとした感じを見せている。

「本当に久し振りです」

「うちはどうしてもうどんや蕎麦が多いがな」

「はい、それは」

その理由はだ。祖母の口から話された。

「やっぱり和食がメインですから」

「何だかんだ言ってもな」

祖父も祖母のその言葉に伝えてきた。

「和食が最も多いな」

「そうですね。お爺さんおうどん大好きですし」

「力うどんか天麩羅うどんが最もよい」

祖父はそのうどんの好みについて自分から話した。

「食べやすいからな」

「ですよ、天麩羅はお蕎麦にも合いますし」

「しかし今は」

「はい、パスタです」

スパゲティだというのである。パスタと同義語になっている。

「三人で食べましょう」

「今度は若奈と共に食べるか」

「そうしましょうか」

こんな話をしてであった。三人でそのイカ墨のスパゲティを食べるのであった。そうしてその後で、牧村は祖父の話聞くのだった。

#### 第四十二話 完

2010・8・22

## 第四十三話 熾天その一

髑髏天使

第四十三話 熾天

牧村は夕食を食べ終えた。そしてその後すぐにであった。

「それではだ」

「茶か」

「今から用意をはじめる」

祖父はこう孫に告げるのだった。

「今からだ」

「それで今から茶室にか」

「籠る。その間婆さんの手伝いをしておくれ」

孫にこうも告げるのだった。

「わかったな」

「そうだな。ここはだ」

「ああ来期、悪いけれどね」

祖母もここで孫に言ってきた。丁度食器をなおそうとしていた。

「鍋とフライパンを洗ってくれないかい？」

「それをか」

「あんたはそれで私は他のを洗うよ」

笑ってこう孫に告げる。

「それでいいかい？」

「構わない。むしろ」

「むしろ？」

「こちらからそうさせてもらいたい」

彼の祖母への言葉であった。

「いつもの様にな」

「そういえばそうだね。あんたも若奈も食器洗うわね」

「食器を洗うことは得意だ」

牧村はちゃぶ台から立ち上がった。そのうえで鍋やフライパンを使ったコンロのところに向かう。そしてそこから洗面所にその鍋やフライパンを置き早速洗いはじめた。

洗剤をかなり使っている。そのうえでまずはフライパンと鍋を一回手で洗ったのだった。

「手洗いなんだね」

「最初はな」

その理由も祖母に話した。

「墨があるからな」

「おや、しっかりしてるねえ」

「墨はスポンジに着きやすい」

彼は述べた。

「だからだ」

「そうそう。だから最初は手洗いだね」

「墨を落としてからだ」

また言うのであった。

「それからだからな」

「そうそう。イカの墨は美味しいけれどね」

「後片付けが問題だな」

「わかってるじゃない、来期も」

「洗いものをしていればわかる」

その言葉は当然と聞いたものだった。

「食べるには何かをしないとな」

「洗いものもそのうちの一つなんだね」

「そう思うが違うか」

「中にはそうじゃない人もいるからね」

祖母は悲しい声を出した。

「そういう人もいるよ」

「いるな、確かに」

「まあ来期はそういう人じゃないからね」

孫の性格や人間性はわかっていることであるのだ。

「そういう人はどんどん落ちていくよ」

「人間としてか」

「そうだよ。人が周りで必死に働いていてもぼーっとした顔で突っ立っているだけで何もしようとしない人はあんたも見たことがあるね」

「残念だがある」

そうした人間は何処にでもいるのだった。二人は洗いものをしながら話す。牧村はもう墨を洗い落としスポンジで丹念に洗いはじめている。

「何処にもいるな」

「そうなんだよね。それでね」

「それで？」

「酷い人が道場に入入りしていてね」

「どんな人間だ？」

「お爺さんの剣道の道場の門下生だった人だよ」

その人間だというのである。

## 第四十三話 熾天その二

「私達が屋敷で門下生の人達にお汁粉を御馳走した時にね」

「その時に何をした？」

「お汁粉を飲んだ後の茶碗に痰を吐いたんだよ」

「何っ!？」

その話にはだ。牧村も思わず動きを止めた。

「茶碗の中に痰を」

「そうだよ。味噌汁茶碗だったけれどね」

祖母はその茶碗の種類も話した。

「そこに吐いたんだよ」

「そんなことをする人間がいたのか」

「普通はしないよね」

「そんなことをする人間には会ったことがない」

牧村の声はいささか以上に驚いたものになっていた。表情にも声にも喋り方にも感情を込めない彼だが今回はかりは違っていた。

「そこまで無作法な人間にはだ」

「いや、お婆ちゃんも他の門下生の人達も驚いてね」

「当然だな」

「啞然として。お爺さんも怒ってね」

祖父もだというのだ。

「その人をその場で破門にしたよ」

「当然だな」

「お爺さんがあそこまで怒ったのを見たことがないし」

「それ程怒ったのか」

「破門したのもその時だけだよ。その人だけだよ」

「その時だけか」

「他にはいないよ。うちの道場は来る人は拒まずだから」

そうした道場なのだというのである。



「だからねえ。あの時は余計に驚いたよ」

「破門がか」

「破門されるような人がいたなんてね。お爺さんにね」

祖母は牧村に話しながら首を捻っていた。彼の横の流し台で皿やフォークを洗っている。実に手馴れた素早い動きで洗っている。

「そんな人がいたんだってね」

「そこまでする人間がいるとはな」

「まあ普通はそこまで落ちられないよ」

「最低限の律する心があればか」

「そうした人はそうしたことが全くないんだらうね」

こう孫に話すのである。

「やっぱりね」

「だからそういうことをするか」

「だらうね。本当に信じられなかったよ」

「茶碗に痰をか」

「いや、お婆ちゃんもはじめて見たよ」

「俺もはじめて聞いた」

「それだけ有り得ないことなんだらうね」

祖母は食器を洗いながら首を右に左に傾げさせていた。

「この歳になつてはじめて見たことだからね」

「人間の下品さには限りがないか」

「ないけれどそこまで落ちられる人はいないよ」

祖母は言った。

「小さな子供でもそれはしないだろ？そういうことだよ」

「そうだな。どんな小さな子供でもそれはしないな」

牧村も頷いて応える。

「そこまで有り得ないな」

「そうだよ。それで茶道はね」

「礼儀か」

「それを身に着けるものでもあるからね」

孫に今言つのはこのことだった。

「しつかりとしないとね」

「そうだな。それはな」

「茶道もまた礼にはじまり礼に終わるからね」

「それはわかっているつもりだ」

「じゃあ。洗い終わったし」

二人同時だった。洗いものを終えていた。

「茶室に行こうかね」

「もうできているか」

「お爺さん動くのが早いから」

だからだというのである。

「もうできてるわよ」

「そうか。それではだ」

「行くわよ」

こう話してそのうえで向かうのであった。

#### 第四十三話 熾天その三

茶室に入るとだ。祖父はもう茶の用意を済ませていた。そうして二人に対してであった。その茶をそれぞれ差し出したのであった。

牧村はまずは菓子を食べる。それは饅頭だった。

「抹茶のか」

「茶と茶だがどうだ」

「茶は好きだ」

こう祖父に返す彼だった。

「だからいい」

「そうか」

「そして茶だが」

「作法はわかっているな」

「聞いてはいる」

茶器の中のその茶を見ながらの言葉だった。

「最も実際にするのははじめてだがな」

「はじめてか」

「茶道は今まで実際にしたことがなかった」

「ならしてみるといい」

「余計にか」

「知らなかったことを知る」

祖父はまた言った。

「そうしていつて人は大きくなるのだからな」

「それでか」

「そうだ、知るのだ」

また孫に話した。

「大きくなりたいな」

「強くなりたいと思っていた」

「いた、か」

「ただ身体が強くなればいいと思っていた」  
それが今までの彼だった。

「しかしそれだけではないこともわかった」  
心を持たぬ強さは何か」

祖父は己の茶を手にしながら述べた。

「それは何だと思うか」

「蛮勇か」

牧村はその強さをそれだと断言した。

「それだな」

「そうだ、そのものだ」

「蛮勇は何にもなりはしない」

牧村もまた茶を飲みながらだ。素っ気無く述べた。

「最後には敗れ消えるものだ」

「そうだ、蛮勇は消えるものだ」

「その通りなんだよね」

祖父だけでなく祖母も言ってきた。

「確かなものがない強さなんて何にもならないんだよ」

「それも見てきたのか」

「そうだよ。見てきたよ」

祖母はここでも孫の言葉に答えるのだった。

「それもね」

「人生経験というやつか」

「その通りだよ。長く生きていると色々なものを見るからね」

「かつてだ」

祖父がここでまた話す。

「この道場に一人の中学生が来た」

「その中学生ではないな」

「その子は剣道が好きだった。それで部活に入ったのだがな」

「顧問か先輩に問題があったな」

「顧問に問題があった」

そちらにあったというのだ。

「非常識な教育方針だった。それでその子は顧問に打ちのめされ部活を追い出されてそのうえでこの道場に來たのだ」

「非常識な教育か」

「試合に負けて生徒を全員丸坊主にさせるが自分はしない」

「そうした教師は多いな」

そしてだ。牧村はこうも言うのだった。

「いい鉄は釘にはならない」

「次の言葉は何だ」

「いい人間は教師にはならない」

これが牧村がここで言いたいことだった。

「全てがそうではないがそう言わせる教師が多いな」

「その教師は剣道四段だった」

「四段でもか」

「生徒に理不尽な暴力を幾度も振るい罵倒し続けていた」

「あの戦争の後増えたんだよね」

祖母は己の茶を飲みながら悲しそうに話す。

#### 第四十三話 熾天その四

「本当にね」

「戦後か」

「学校の先生の質は落ちたよ」

「また言う祖母だった。」

「本当に」

「その教師と会った」

「祖父も言う。」

「人間として最低だった」

「最低だったか」

「下劣で粗暴な人間だった」

「まさに教師の鑑か」

「戦後の教師のな。わしはその教師と剣を以て対した」

「それでどうした」

「答えはわかっていた。だがそれでも問う牧村だった。」

「その教師を」

「一撃で終わらせた。そしてその行動を教育委員会等に告発して懲戒免職にさせた。」

「いいことだな」

「そう思っている」

「そうだな。おかしな教師はいてはならない」

「牧村もこう確信しているのだった。」

「絶対にだ」

「被害を被るのは子供や生徒だ」

「だからね」

「祖母も話す。」

「許してはおけなかった」

「お爺さんも徹底的にやっただよ」

「いいことだ」

牧村はまた頷いてみせた。

「それでな。それでその教師は」

「剣道連盟から追放されて教師も首になった」

「そうだったよ」

「そうか。それは何よりだ」

牧村もそれでいいとした。

「それでな」

「そうだ。有害な教師はいてはならない」

「本当にあの戦争の後おかしくなつたよ」

「戦前と戦後で教師は全く違う」

牧村も強い声で言った。

「質も思想もか」

「これでは戦争前の方がいい」

「そうだよね。どうにかしないと駄目だよね」

「日教組か」

牧村は言った。

「最大のガンは」

「そうなるな。日教組が一番の問題だ」

「あの組織がだよね」

「あそこをどうにかしなければ」

「あんな先生がまた出て来るよ」

「こう話していく祖父母だった。そうしてだ。」

「未久からも聞いた」

「あなたの中学校にもいたんだね、そんな先生が」

「いた。一人な」

「こう答える孫だった。」

「しかし今はもういない」

「死んだか」

「それとも転勤？」

「死んだ。誰も悲しまなかった」

牧村は一言で事実を話してみせた。

「誰もな」

「そうか、誰もか」

「誰もなのね」

「むしろ喜ばれていた。暴力だけで知性も教養も何もなかった」

そうした教師が大手を振って歩いているのが今の日本である。それで教育がよくなる筈がない。腐敗して当然のことであった。

「爺ちゃんが成敗した奴と同じだ」

「全く同じみたいじゃな」

「本当にね」

「そうだな。そうした教師は何処にもいるか」

このことを今よく噛み締める牧村だった。

「それでその子はどうなった」

「今はうちの道場で剣道をしている」

「もう初段になったのよ」

祖父母がその子供のことを話した。

「中学生だ、これからどんどん伸びるぞ」

「剣道だけでなく人間もね」

「そうか」

それを聞いてだった。少し安心した顔になる彼だった。



## 第四十三話 熾天その五

「それはよかった」

「剣道は何か」

「武道全体だけれどね」

「それを考える必要があるからな」

「強くなるだけじゃないからね」

「そうだな。スポーツ自体がそうだな」

牧村はそれをだ。武道だけではなくだ。スポーツ全体についても話すのだった。

「それはな」

「そうだ、スポーツはただ身体を鍛えるだけではない」

「心もだよ」

祖父母はまた牧村に言ってきた。

「この茶道にしるそうだな」

「ただお茶を飲むだけじゃないんだよ」

「心か」

牧村もそれを察した。

「心を修養するものか」

「その通り。だから道だ」

「お茶の道は深いわよ」

「深いか。それを考えるとだ」

牧村はここで茶を飲んだ。そしてまた話すのであった。

「この茶を飲むことは特別なものだな」

「特別ではない」

祖父はそれは否定した。

「茶道において茶を飲むことは特別ではない」

「違うか」

「素振りと同じだ」

そして剣道に例えるのだった。

「それと全く同じだ」

「それとか」

「そう、全く同じだ」

彼はまた言った。

「それとな」

「そういうことか。特別ではないか」

「そう思っていていい。そして」

「そして？」

「楽しむものでもある」

「こつも言つのであつた。」

「そういうものでもあるからな」

「楽しむか」

「真面目にはやるべきだ」

祖父はこのことも話した。

「やはりな。それはだ」

「そして、か」

「そうだ、それと共に楽しむ」

「そうでなくては駄目か」

「余裕だ」

今度は一言で話すのだった。

「余裕もまた大事なのだ」

「余裕か。今までの俺にはあまりなかったな」

「ないなら身に着ければいいのよ」

祖母も言ってきた。

「たったそれだけよ」

「そうか。それだけか」

「どうだ、わしの茶は」

祖父はにこりと笑つて孫に尋ねてみせた。

「味はいいか。どうだ」

「いい」

返答は「ここでも一言だった。」

「落ち着くな、それに」

「飲んでいるとだな」

「そうだ、落ち着く」

「それが茶だ。弓もいつも張っている訳ではない」  
武道をしている者に相応しい言葉であった。

「常に落ち着きそしてだ」

「余裕を以て楽しめ、か」

「真面目にな」

「匙加減ね。来期もそろそろそれを覚えることね」

「それがそのまま活きる、か」

祖父母の話を聞きながら述べた。

「そういうことだな」

「その通りだ。御前のテニスやフェシングにもな」

「生きてくるわよ」

「そうだな。そのテニスやフェシングから」

それからもある。それが今の彼であった。

## 第四十三話 熾天その六

「さらにだな」

「そうするのは御前自身だ」

「頑張ることよ」

「ああ、そうする」

祖母の言葉にまた頷いた。するとであった。

「ここでだ。祖母が笑顔でこんなことを言ってきたのであった。

「それでね」

「むっ、何だ」

「あの娘いるよね。あの小柄な娘」

「あいつか」

「そうよ、あの娘よ」

祖母が話すのは若奈のことだ。大阪でもトレーニングを共にしている彼女である。

「あの娘はどうなのよ」

「どつと言われてもな」

「私もかなり長生きしたわ」

「こつ前置きもしてみせたのだった。

「かなりね。けれど最後の望みはね」

「わしもだ」

祖父が間合いを見計らったかの様に参戦してきた。

「もう最後の望みはだ」

「御前も未久も他の孫達もね」

「話が大きくもなっていた。

「結婚してねえ」

「曾孫の顔が見たいな」

「それか」

牧村の眉がだ。ここでは一瞬だがピクリと動いたのだった。

「それを言うか」

「どうだい？あの娘は」

祖母は彼にさらに言ってきた。

「いつも一緒にいるし仲はいいんだろ？」

「それにいい娘だ」

祖父はこのことをもう見抜いていた。

「それもかなりな」

「そうですね。いい目をしてますね」

「あの目は心根の美しい娘ならではの目だ」

「よく気がつくし親切だし公平だし」

「あんないい娘が今時いるとはな」

「昔からそうはいませんよ」

とにかく若奈を絶賛する二人だった。

「あんな娘はそうは」

「そうだな。あの娘ならいい」

祖父は勝手にこんなことを言った。

「来期、あの娘にしる」

「大学を卒業したらね。どうだい？」

「何故そんな話になる」

だが彼はここでは無然として返した。

「どうしてだ、それは」

「それはね。当たり前じゃないか」

「わし等の最後の望みだぞ」

祖母も祖父も強い言葉になっている。そのうえで茶を飲みながら孫に対して言うのであった。話は何時しかそうしたものになった。た。

「夫婦になつてこそなんだし」

「そうだ、それが世の中だ」

「そこまでは考えてはいない」

今はこう答えるだけの彼だった。

「そんなことはだ」

「そう思っていてもね」

「すぐだぞ」

やはり歳の功だ。二人の方が上だった。

「結婚する時が来るのはね」

「その時だ。どうするかだ」

「その時はすぐか」

今の牧村にはこのことだけが頭に残った。

「本当に」

「すぐだよ」

「あつという間だよ」

また言う祖父母であった。

「さて、その時はだ」

「楽しみにしているからね」

「わしはそれまで生きるからな」

「曾孫の顔を見るまではね」

「子供か」

二人にとっての曾孫とはだ。彼にとっての子供であった。それを聞くとである。どうにも実感が沸かずそのうえで言うのであった。

「実感はどうしても」

「できないか」

「まあそうだろうね」

「そうだな、それはな」

「実際にできるまではね」

二人は人生経験から語っていた。

#### 第四十三話 熾天その七

「どうしてもわからないものだしな」

「仕方ないのかもね」

「とにかく今はだ」

「うむ、学生の間は勉学に励め」

「その間はね」

祖父母はこつも告げる。

「いいな、今はな」

「卒業してからだよ」

「卒業して就職してからか」

実はその就職もだ。半分決まっていた。そして次の日だ。そして次の日だ。若奈とトレーニングをしながらだ。その場で彼女に話すのであった。

今二人は公園で休憩を取っている。若奈の差し出してきたそのスポーツドリンクを飲みながらそのうえでだ。彼女に問うた。

「マジックだが」

「お店のこと？」

「俺が来てもいいのか」

「つていうか今すぐ来てもいいけれど」

こつ返す若奈だった。

「もうすぐにもね」

「すぐにもか」

「うん、何なら夏休み終わったらお店に入る？」

若奈は牧村にこつまで告げた。

「牧村君さえよかつたらね」

「俺さえか」

「部活二つもあるから忙しいかな」

「そつだな。今はな」

「まあ。就職活動がはじまつたらね」

そこからの話になった。

「それからお店に入ってもいいし」

「就職活動はどうなる」

「だから。マジックに来てくれるんでしょ？」

「話は若奈がリードしていた。」

「そうなんでしょ？」

「そうなるのか」

「なるでしょ。普通に」

「マスターや奥さんはそれでいいのか」

「妹達もよ」

「若奈は家族全体をひっくるめての話にしてきた。」

「いいって言ってるわよ」

「家族全員か」

「そういうこと。牧村君が次のマスター兼シェフよ」

「兼任か」

「私が接客してね」

「接客はどう考えてもできない彼に代わってというのだ。」

「それでどうかしら」

「そうだな」

「妹達がウエイトレスしてね」

「このことを言うのも忘れない。」

「それでどうかしら」

「俺が店に入ることはもう決まっているのか」

「それだけじゃないわよ」

「ここで若奈の顔が少し赤らんだ。」

「ねえ」

「ねえ？」

「わかってるわよね」

「その赤らんだ顔での言葉である。」

「二人でお店やっていこうね」



「二人でか」

「うちのお店はそこそこ評判もいいしお客さんも多いし」

「美味しいし安いからな」

「忙しいけれどそれでもいいよね」

「繁盛している方がやりがいがある」

「こう返す牧村だった。」

「そういうことだ」

「そう。だったらね」

「そしてそれから」

「あの、大学卒業してからだけれど」

「若奈の顔がここでさらに赤らんだ。」

「いいかな、それで」

「二人になるんだな」

「そういうこと。それでいいわよね」

「宜しく頼む」

牧村はその言葉に静かに頷いた。今彼は公園のベンチに座っている。そして若奈はその横に止めた自転車に乗ったままである。二人共そのスポーツドリンクを水筒のストローで飲み首のタオルで汗を拭いている。

## 第四十三話 熾天その八

「俺でよかったら」

「つていうか私でいいかしら」

若奈の言葉が返ってきた。

「私で」

「俺に断る資格はない」

「ないの？」

「そうだ、ない」

「どうしてないの？」

「男にはないものだからだ」

返答はこれだった。

「だからだ」

「何で男の子にはないのよ」

「女の申し出は受け入れるものだな」

「まあよく言われるわね」

「特にそうした相手にはな」

「あの、今言った言葉だけれど」

若奈は今の彼の言葉を聞いてまた言った。

「はつきり覚えておいていい？」

「そうしてくれ」

普段のあのぶっきらぼうな言葉ですらなかった。

「そうしたいのならな」

「わかったわ。じゃあ覚えてたわ」

若奈も顔を明るくさせて確かな声で返した。

「今の言葉ね」

「ああ」

「それじゃあ。就職決まったから」

「俺のか」

「そうよ、しかも永久就職だからね」

念押しまでしてきた。若奈にしても確かにしたいことだったからだ。

「ずっとよ、ずっと」

「死ぬまでだな」

「そうよ、死ぬまでずっとマジックでの勤務よ」

「喫茶店でか」

「マスターやってもらうから、次のね」

「では大学卒業してからその修行か」

「違うわ、それは」

今の牧村の言葉はすぐに否定されてた。

「卒業してからじゃないから」

「就職活動がはじまってからか」

「そういうことよ。バイト代は出るからそれは安心して」

「アルバイトをしながらか」

「そうよ。色々覚えてもらうから頑張ってるね」

「わかった。それではな」

牧村も頷いた。そうしてであった。

若奈はだ。こんなことも言った。

「お菓子のレパートリーも増やしたいし」

「メニューをか」

「臨機応変でね。お父さんも今色々と考えてるのよ」

「あのマスターもか」

「メニューはそのまま店の命よ」

そこまで重要だというのだ。これはその通りである。

「だからよ。味をよくすると共に増やしてね」

「俺が作るんだな」

「そういうこと。値段とのバランスも考えて」

流石は喫茶店の娘である。若奈はここまで考えていた。見ればその顔はこれまでの女の子の普通の顔からだ。商売を見る顔になって

いた。

「うちのお店って学生のお客さん多いし」

「それと八条学園の関係者だな」

「先生も多いしね」

「そうだな」

「けれど学生さんが多いから」

メインはあくまでその層なのだという。

「甘いものには五月蠅いのよ」

「特に女の子がか」

「女の子がよく行く店は確かよ」

若奈は断言した。

「舌で動くからね」

「舌でか」

「そう、舌ですよ。女の子の脳と舌は一つになっているのよ」

「そこまでいくか」

「いくわよ、女の子はね」

若奈のその断言は続く。

「だから。頑張ってよね」

「味は今よりも上をか」

「目指して」

一言であった。

## 第四十三話 熾天その九

「御願いな」

「店の為だな」

「同時に私達の為よ」

「俺達もか」

「だってうち喫茶店よ。喫茶店がなかったらどうするのよ」

「困るな」

「そういうこと。だからよ」

シビアな話でもあった。彼等が生きるかどうかもそこにかかっているというのである。若奈の考えることは現実に関しては実に厳しかった。

「私も頑張るから」

「そしてウエイトレスは」

「妹達と。それに」

「未久か」

「未久ちゃんなら看板娘になれるわね」

「なれるか」

「だって可愛いし頭がいいし」

まず言うのはこの二つであった。

「それに小柄だけれどスタイルもいいし」

「スタイルもいいのか」

「いいわよ。均整が取れててね」

胸だけを見てはいなかった。全体を見ての言葉であった。

「あれは絶対に人気が出るから」

「いいか」

「太鼓判押すわ。未久ちゃんは確実に人気が出るわ」

「しかし喧嘩は強いぞ」

「尚いいわ。体操部だったわよね」

「ああ」

「体操は身体全体使うから。筋肉が発達するからね」

「若奈はそのことについても話す。」

「牧村君と二人で用心棒のツートップね」

「あいつは基本的に喧嘩はさせないが」

「させないの」

「それ位なら俺がやる」

「お兄さんだから？」

「そうだ」

「それが理由なのだというのだ。」

「あいつに危険は降りかかせない」

「成程ね。合格よ」

「合格か」

「マジックの入社試験合格よ」

「そんなものがあつたのか」

「そう、試験官は私」

「若奈はにこりと笑って牧村に告げた。」

「その心を見たのよ」

「俺の心をか」

「正直幾ら腕があつても心がないとね」

「駄目だな」

「そう、全然駄目」

「まさに駄目出しであつた。」

「それがあつてこそよ。例えばね」

「例えばか」

「牧村君みたいにフェシングやテニスができても」

「ああ」

「それでも心が伴ってないと駄目じゃない」

「彼が鍛える為に行っているこの二つから話すのだった。」

「それがないとね」

「ただ強いだけか」  
「それって何にもならないじゃない」  
「何にもか」  
「そうだ、ならない」  
彼はまた言った。  
「何にもだ」  
「そうよ。そんな人普通に駄目よ」  
「駄目か」  
「幾ら強くてもそれでも心がないとただ強いだけ」  
限定した言葉だった。  
「それだけ。そんな人は最後にはね」  
「終わるか」  
「だって魅力も何もないから」  
「だからだというのであつた。」  
「そんな人はね」  
「そうだな。そうした相手は知っているしな」  
「いるわよね、本当に」  
「そうした相手は何でもない」  
「下らない相手なのね」  
「そうだな。心がある強さこそがいい」  
彼はまた言った。  
「それがあつてこそだな」  
「そうよ。だから牧村君は合格よ」  
笑つて告げる若奈だった。  
「それでね。マジックと一緒にやっつていこう」  
「ああ」

そんな話をした。そしてその次の日だ。彼は屋敷に用意されている自分の部屋にいた。広い屋敷なので空いている部屋があつたのだ。

## 第四十三話 熾天その十

そこで一人くつろいでいるとだった。何かを感じた。

「来たか」

それを感じてすぐに屋敷を出た。サイドカーを走らせる。

そして来たのはだ。海の傍であった。丁度波止場になっている。

そこに入るとだ。海から何かが来た。

「今度は海からか」

「如何にも」

ここでまたあの声がした。夜の闇の海の中からだ。あの黒い男が出て来た。そうしてそのうえでだ。男は牧村に対して言ってきたのだ。

「どうだ、今度は」

「水の中での戦いもあったな」

「それは経験しているか」

「既にな」

「そうか」

「これで納得したか」

「貴様のことはな」

男はこう彼に返した。

「それはだ。だが」

「だが？」

「だからといって貴様等が今回勝てる相手と思わないことだ」

「貴様等か」

「如何にも。来ているな」

男は牧村の方を見据えて話した。

「そうだな」

「そうだ」

こう言っただ。死神がだ。港に出て来たのであった。



「今ここに来たがな」

「気配でわかった」

「俺もだ」

牧村もこう話す。

「気配を感じていた」

「消したつもりだった」

その死神の言葉だ。黒いジャケットにジーンズという格好だ。

「しかしわかっていたのか」

「気配でわかった。それでだが」

「それでか」

「今度の相手は海からか」

死神は前から出て述べた。

「面白いな」

「気に入ってもらえたか」

「海での戦いは暫くしていなかったからな」

「それでか」

「そうだ。それではだ」

死神が先にであった。

その右手を拳にして己の胸の前に置いてだ。そして。

そこから青白い光を放った。その中で戦いの姿になった。

右手に出した大鎌を己の前で一閃させてだ。言うのであった。

「はじめるとしよう」

「まずは死神だな。そして」

「次は俺だ」

牧村が男に応えた。

「そうだな」

「そうだ。では早く姿を変えるのだ」

「わかっている」

牧村は彼に対して言葉を返した。そうしてであった。

両手を拳にしてその中指の部分で己の胸の前で打ち合わせる。す

るところから白い光が放たれた。その中でだ。甲冑を着た髑髏の姿になった。

その姿になり右手を少し前に出してだ。一旦握ってみせてである。「行くぞ」

「これではじまりだな」

「そうだ、来い」

髑髏天使の姿で男に告げた。

「貴様が相手でもいい」

「生憎だが今はその時ではない」

「まだだというのか」

「そうだ、まだだ」

また言う男であった。

「貴様と戦うのはな」

「それでこの者達か」

「深き者という」

男は今も海から出て来る異形の妖魔達の名前を話した。魚を思わせる顔にぎよろりとした黒い目、牙が生え揃っている歯、そして緑の鱗に覆われた身体に水掻きのある手。全てが妖魔のものであった。

「これがこの者達の名前だ」

「そうか」

「知ってはいるな」

「名前は聞いている」

答えたのは死神である。

第四十三話 熾天その十一

「貴様等の神々の一柱の尖兵達だな」

「水の神クトウルフ」

男から語ってみせてきた。

「その僕達だ」

「そうだったな」

「その者達は出て来た。しかしだ」

「クトウルフはまだか」

「焦る必要はない」

男は静阿寒言葉で返してみせた。

「まだ先になるがな」

「出て来るのか」

「その時を待っていることだ」

少なくともそれは今ではないというのであった。

「そしてだ」

「そしてか」

「今はこの者達の相手をする事だ」

彼が言うのはこれであった。

「それでいいな」

「俺はそれでどうということはない」

髑髏天使は既に智天使の姿になっている。白銀のその姿での言葉であった。

「それではだ」

「戦うのだな」

「その妖魔達を全て倒してみせよう」

言いながら両手にそれぞれ持っている剣を構えた。そうしてだ。

空を飛んだ。死神もそれに続く。

そして上から。男に対して言った。

「ここに留まるということはいらない」

「空にはか」

「貴様等は海での戦いを望んでいるな」

「如何にも」

男はその通りだと返した。

「だからこそここに呼んだのだ」

「それならばだ」

「来るのか」

「そうだ、行くぞ」

「無論私もだ」

死神は髑髏天使の横にいた。そこからの言葉である。

「今からだ。そこに行く」

「来るといい」

男は二人を見上げながら言ってみせた。

「私はこれで去るがな」

「しかし見ているのだな」

「ここではない場所で」

「それはその通りだ」

男もそれは隠さなかった。

「そうさせてもらう。それではだ」

「行くぞ」

「今からだ」

こうしてだった。彼等は海に入った。男はそのまま姿を消した。

そうしてであった。

二人は周りを取り囲む妖魔達を見てだ。そして言うのであった。

「いいな」

「うむ」

二人は海に飛び込んだ。その中にはだ。

妖魔達がいた。その数は。

「どれだけだ」

「百は超えている」

死神が髑髏天使に対して答える。

「いや、二百か」

「そうか、多いな」

「勝てるな」

死神は髑髏天使に対して問うた。

「この数相手に」

「勝ってみせる」

これが髑髏天使の返事であった。

「では行くぞ」

「よし、それならだ」

二人は海の中でも空中にいるかの様に舞う。そうしてそのうえでだ。迫り来る妖魔達をだ。縦横無尽に斬って回るのだった。

まずはだ。死神がだ。

大鎌を横に一閃させた。それで妖魔の首を刎ねた。

刎ねられた首と首をなくした身体が海の中で燃えていく。赤くだ。

「まずは一人だな」

「まずはか」

「一人斬っただけで終わるものではない」

死神はその赤く燃え上がる骸を見ながら髑髏天使に返す。

第四十三話 熾天その十二

「それではだ」

「あれを使うか」

「その通りだ。それではだ」

こう言うのだ。死神が増えた。一人が二人になり二人が三人にだ。そうしてすぐ十人にまで増やしてみせたのである。

「十人か」

「それがどうかしたのか」

「数が増えたな」

髑髏天使は横から来た妖魔を左のサーベルで横薙ぎにしながら彼に述べた。横薙ぎにされた妖魔は腹を兩断されて青白い炎に包まれる。

「分身の数かな」

「そうだな。これだけの数でもいけるようになった」

「そうか」

「つまりそれだけ強くなったということか」

死神はその理由を自分で分析して述べた。

「私もまた」

「強くなったのか」

「だからこそだ」

十人の死神達が動いてであった。

それぞれ斬つてだ。妖魔の数を減らしていく。

「こうしたこともできるのだ」

「だからか」

「そしてだ。髑髏天使よ」

「何だ」

「貴様もだな」

こう彼に言うのである。

「前の戦いの時よりもさらに動きがよくなっているな」  
「そうか」

言いながら後ろから迫ってきた妖魔に対してだ。

まずは右手の剣を前にいる妖魔に繰り出す。ここでも横薙ぎに繰り出す。そしてそのうえでだ。振り向いて後ろにいるその妖魔も横薙ぎに斬った。瞬く間に二人斬ったのである。

「そうなっているか」

「今の動きがまさにそれだ」

それだというのである。

「よくなっている」

「だといいがな」

「そしてだ」

敵をさらに斬る髑髏天使にさらに述べる。

「そろそろだな」

「そろそろだというのか」

「またあがる」

死神は言った。

「貴様はな」

「あがる。そうか」

牧村もここでわかった。

「俺は遂にか」

「熾天使だ」

それだというのである。

「貴様はそれになる」

「熾天使は天使の中で最高位だったな」

「その通りだ。この戦いでなるかもな」

「だといいがな。さて、だ」

ここでだ。髑髏天使は動いたのだった。

そしてだ。両手の剣を四方八方に振り回してだ。そこから雷を放ったのだった。

それで周りの妖魔達を次々に倒す。雷に貫かれた妖魔達はそれで青白い炎に包まれていく。それを放ち終えたその時であった。

「むっ!？」

「遂にか」

死神はその髑髏天使を見て述べた。

「なるか」

「これか」

「そうだ、それだ」

髑髏天使の身体が黄金の光に包まれた。

そしてその中で、であった。

それまで四枚だった翼が六枚になった。甲冑が黄金のものになる。

そしてだ。髑髏の色も変わった。

それまでの銀色がだ。見る見るうちに黄金になる。黄金の髑髏と

甲冑に六枚の翼のだ。その姿になったのであった。

その姿になってだ。髑髏天使が言うのであった。

「これがか」

「そうだ、その姿こそがだ」

「熾天使か」

自分自身の口からの言葉である。

「この姿がか」

「力は感じるか」

「そうだな」

一呼吸置いてからの返答だった。

「少しだが」

「そうか、感じるか」

「徐々にあがってきている」

こつも言う髑髏天使であった。



第四十三話 熾天その十三

「力が」

「その力がか」

「凄いものだ」

また言うのであった。

「この力、これまでとは比べものにならない」

「ではその力をだ」

「何だ」

「使いこなせるな」

死神が今髑髏天使に問うのはこのことだった。

「貴様はその力を充分にだ」

「今までは無理だった」

まずはこう答える髑髏天使だった。

「今まではな」

「そうだったのか」

「心がなかった」

それでだというのである。

「しかし今はだ」

「違うな」

「使える」

まずは一言だった。

「使いこなしてみせる」

「ではそれを見せてもらおう」

「いいだろう。それではだ」

既に力は全身に及びみなぎっていた。そうしてである。

その黄金の身体からだ。無数の空の刃を出したのであった。

両手の剣を縦横に振るってだ。そのうえで出していた。

それは水の中の妖魔達を次々に切り裂く。そのうえで青白い炎に

変えていく。

そのうえでだ。雷も次々と放つ。次はそれであった。死神はその戦う姿を見てだ。また言うのであった。

「見事だな」

「見事か」

「使いこなしている」

彼もまた認めるのだった。

「その力をだ。それならばだ」

「大丈夫か」

「今の貴様には心がある」

死神も言った。

「だからだ。大丈夫だ」

「そうか。それならばだ」

「安心してその力を使え」

彼はまた髑髏天使に告げた。

「妖魔との戦いにな」

「そうさせてもらう。少なくともこの戦いはだ」

「生き残るのだな」

「俺は生きる」

戦いながらの言葉だった。

「生きて、そして妖魔達を倒す」

「私もだ」

死神もここで再び鎌を振るった。

そのうえで十人の死神達がそれぞれ妖魔達を斬る。戦いは完全に彼等のものになっていた。

海の中の妖魔達は瞬く間に倒された。最後の一人がだ。

死神の一人に首を刎ねられ赤い炎となった。それが終わってからだ。

海から出た。するとそこにであった。

男がいた。そのうえで二人に言うのだった。

「遂になつたか」

「熾天使のことか」

「無論だ」

髑髏天使を見据えながらの言葉である。

「遂にそこにまでなつたか」

「そうだ。この姿が何よりの証だ」

「わかつた。どうやらだ」

「どうやらか」

「貴様との戦いは本気になる必要があるな」

「本気か」

「私もまたこの力を見せる時が来る」

その漆黒の姿で髑髏天使に告げる。

「その時がだ」

「それは今ではないのか」

「今か」

「そうだ。そうではないのか」

「貴様は熾天使になってすぐだ。まだその力を完全には出していな

い

「こつ告げるのであった。」

#### 第四十三話 熾天その十四

「だからだ。それは今ではない」

「それでか」

「しかしだ」

ここでまた言う男であった。

「その時が来れば貴様と戦おう」

「早ければ早い程いいのだがな」

「焦るな。私のもたらず破壊と混沌はまだ貴様には早い」

こう述べて口元に余裕のある笑みを浮かべてみせていた。

「このナイアールトホテップの闇を見るにはな」

「闇か」

「真の闇だ」

こうも言ってみせたのだった。

「それを見るのはまだ先だ、そして」

「そしてか」

「そこからも見せてやろう」

また話すのであった。

「真の混沌もだ」

「真という言葉が好きだな」

「少なくとも私は真だ」

「真の混沌か」

「それが私だ」

二人に対する言葉だった。

「そしてその中にあるものはだ」

「混沌の中にあるもの」

「それは」

「貴様等はそこに辿り着けるか」

こう二人に言う。

「そうなれば面白いのだがな」  
「真の混沌の中にあるものか」  
「そういえば聞いたことがある」  
「死神が考える顔になって述べた。」  
「まず貴様がいる」  
「うむ」  
「扉を開ける者ナイアーラトホテップ」  
「彼がだというのだった。最初はだ。」  
「そして四柱の神々だな」  
「それを思い出したのか」  
「地水風火」  
「四つであった。」  
「そのそれぞれを司る混沌の神々だな」  
「さて、どうか」  
「答えずともわかる。そしてだ」  
「死神は男に対してさらに話す。」  
「混沌の中にさらにいたな。それは」  
「そう、気分がいいから言っておこう」  
「男も死神の言葉に応える形で話した。」  
「そこには二柱だ」  
「二柱の神々か」  
「我々のことはおいおいわかるだろう」  
「こつ髑髏天使と死神に述べる。」  
「しかしそこまで辿り着けるかどうかはだ」  
「それは言わなくてもいい」  
「いいというのか」  
「そうだ、いい」  
「髑髏天使の言葉である。」  
「それはいい。何故ならだ」  
「何故なら。どうだというのだ」

「俺はそこに普通に辿り着く」

「普通にか」

「そうだ、普通に辿り着く」

これが髑髏天使の男への言葉だった。

「そういうことだからだ」

「自信か」

「自信だがそこにもう一つ加わる」

「ほう、ではそれは何だ」

「確信だ」

それだというのである。

「俺は必ずそこまで辿り着く。そしてその混沌の中にいる二柱の神々も倒してみせる」

「ではそうするがいい」

男は髑髏天使の言葉を受けて微笑んでみせてきた。その微笑みは笑みは笑みでもだ。何か邪な、原始的な邪が宿った微笑みだった。

「貴様がそう確信しているのならな」

「言われずともだ。それではだ」

「話はこれで終わりだ」

男はここでも話を自分から終わらせてきた。

「それではな」

「去るか」

「また会おう」

こう話してだ。男は姿を消した。

後に残った二人はすぐに元の姿に戻った。そのうえで、であった。死神がだ。牧村に告げてきたのだ。

「私はこれで帰るがだ」

「また会うということか」

「そうだ。貴様は天使として最高の力を手に入れた」

「遂にということか」

「しかしそれについては何とも思っていないか」

「あくまで戦うだけだ」

それだけだと。髑髏天使は言った。

「それだけだからだ」

「そうか。それでか」

「この力は戦い。そして生き残っていくだけの力だ」

その髑髏天使の力はだ。そうしたものだというのだ。

「それ以上の、それ以外の何者でもない」

「それに取り込まれることはないか」

「ないようにする」

こう死神に返した。

「今の俺の考えはこうだがな」

「いい。それでだ」

「いいか」

「そうだ、いい」

死神も言った。

「それでな。それではな」

「そうだな、また会おう」

「次の戦いの時にでもだ」

こう話してそれで姿を消す。牧村もサイドカーを呼んでそれに乗ってだ。屋敷に戻った。その新しい力について話した後でだった。

#### 第四十三話

完

## 第四十四話 妖虫その一

髑髏天使

### 第四十四話 妖虫

「ふむ、遂にか」

「そうだ、なった」

牧村はまた博士に話していた。今話している場所はお好み焼き屋である。そこでお好み焼きを食べながら話をしているのである。

無論妖怪達も一緒である。彼等もそれぞれお好み焼きを焼いてそれで食べている。

そしてだ。博士もイカ玉を食べながら牧村と話していた。

それでだ。彼は言うのだった。

「八ヶ月やそこいらでなるとはのう」

「なかつたことだな」

「前代未聞じゃ。そもそも最高位になるということがじゃ」

「なかつたか」

「一人か二人だったのじゃぞ」

その程度だったというのだ。

「それも何十年もかかってじゃ」

「しかし俺はか」

「僅か八ヶ月か九ヶ月。まずなかつた」

「それは聞いていたが」

「凄いことじゃ。どうやらこれは」

「これは？」

「やはり故あつてのことじゃな」

そうではないかという博士だった。

「それでじゃな、やはり」

「そうか」

「そうじゃ。そしてじゃが」



「ああ」

「まずは魔神達が出て来た」

「彼等のことも話される。」

「この時代に全ての魔神達がのう」

「そして魔物達も数多くか」

「出て来た。これはどうもじゃ」

「魔物だけの問題じゃなかったみたいだね」

「そうだね」

「ここで妖怪達も言う。ここでも人間に変装はしている。」

「何かに触発されてね」

「それで出て来ていたのかもね」

「つまりは」

「妖魔か」

「牧村はすぐにわかった。」

「あの連中の存在があったのか」

「妖魔についてはのう」

「博士は難しい顔になった。牧村の前に腕を組んでいる。その髭だ」

「らけの顔がだ。微妙に歪んでいることも確認された。」

「資料が少ないのじゃ」

「少ないか」

「そうじゃ。前にネクロノミコンの話はしたか」

「それは手に入れていたな」

「一応な。しかしじゃ」

「しかしか」

「解読は難しい」

「こつ牧村に話す。」

「どうもな」

「それは何故だ」

「ネクロノミコンを書いた人間に問題がある」

「まずはそこから話すのだった。」

「発狂した人間だったのじゃ」

「発狂した、か」

「発狂したアラブ人が書いたものじゃ」

「それがそのネクロノミコンだというのだ。」

「その書かかれている内容もな。相当なものでのう」

「ではそれを読むとか」

「わしも発狂する恐れがある」

博士が危惧しているのはこのことだった。

「それが問題なのじゃ」

「そうなのか。それでか」

「それで何とか気を落ち着かせながら解読をしている」

「それでも進んでいるか」

「何とかのう」

博士の言葉は今一つはつきりしないものだった。

## 第四十四話 妖虫その二

「他の書もあるがじゃ」

「他にもあるのか」

「あることはあるが同じじゃ」

博士はまた話した。

「やはりな、読んでいくと発狂しかねん」

「随分と厄介な書ばかりなのだな」

「それが妖魔に関する書じゃ」

博士はこう話す。

「だから解読は少し待ってくれ」

「わかった。俺は読めない」

「まあそれは仕方ないよ」

「それはね」

妖怪達は牧村のフォローに出た。

「ええと、アラビア語？」

「そんなの日本人で読める人ってね」

「そうそう、そうはいないし」

「まして発狂した人が書いた文字なんてどんなものか」

「うむ、文字の解読自体が非常に厄介でう」

博士もそのことについて述べてきた。

「そちらも困難じゃ」

「博士って古文書の解読の専門でもあるのに？」

「それでもなんだ」

「そうじゃ。難しい」

また話す博士だった。

「ここまで難しい書ははじめてじゃ」

「そこまでなんだね」

「厄介な話だよね」

「全くだよ」

妖怪達も言う。

「僕達も妖魔についての知識はないしね」

「というかどんな連中かね」

「ううん、全然知らなかったし」

「日本ってそれ考えたら平和だったね」

こんな話もする。

「そんな連中いなかったしね」

「そうそう」

「平和だったよね」

「魔物は髑髏天使と戦うだけだったしね」

「そうだな。思えばだ」

その髑髏天使である牧村も話す。

「魔物との戦いは戦いだけに専念できた」

「けれど妖魔は違うよね」

「何かが」

「魔物になる恐れよりも恐ろしいものを感じる」

こう妖怪達に述べる。

「不気味なものがな」

「不気味なもの、確かに」

「混沌だしな」

「何が何だかわからないっていうのが」

「怖いよね」

「わからないか」

牧村も彼等のその言葉に反応して述べた。

「そうだな。奴等のことはほぼ何もわからない」

「これは魔物や天使についてもじやがな」

博士はここでこんなことを言った。

「君のその髑髏天使についてもじや」

「わかることは少ないか」

「しかし。大きく違うことがある」

博士はこう指摘した。

「それはじゃ」

「それは。何だ」

「混沌じゃな。これまでのことはただわかっていないだけじゃった」

博士の指摘はこうしたことだった。

「しかしじゃ。今度の妖魔達はじゃ」

「それは混沌の中にあるか」

「わからないことが混沌の中にあるのじゃ」

そうだというのである。

「その得体の知れないものの中にじゃ」

「何かさ。その混沌がね」

「そうだよな。そのわかっていることを隠してね」

「牙を剥いてくるみたいな」

「近寄ったらね」

「そうしてきそうだね」

「だから怖いんだよ」

妖怪達もこう話す。

## 第四十四話 妖虫その三

「今度の妖魔って」

「僕達は戦ったりはしないけれどね」

「それでも何かを感じるよね」

「どうしてもね」

「だから。牧村さん」

ここまで話してあらためて牧村に声をかける彼等だった。

「いい？気をつけてね」

「これまで以上にね」

「少しでも油断したりしたら引き込まれるから」

「その混沌の中にね」

「引き込まれそして」

今度は牧村自身の言葉である。

「その中でどうなるか」

「君は死ぬどころではなくなるだろうな」

博士は腕を組み深刻な顔になっていた。

「髑髏天使でもなくなる」

「当然人間でもか」

「どちらでもなくなる。混沌に完全に飲み込まれ」

そうなってからだ。博士はさらに話す。

「混沌の中で永遠にその意識だけが残る」

「それって多分だけれどね」

「そうだよ。辛いよね」

「間違いなくね」

「大変だよ」

「そうだよ」

妖怪達も珍しく深刻な顔になっていた。

「混沌の神々の中に入るのか」

「それとも混沌にずっと食われながら意識だけが残るのか」  
「混沌そのものになるのか」  
「どれにしても碌なものじゃないだろうね」  
「それは間違いないね」  
「牧村さんは少なくとも牧村さんじゃなくなるよ」  
「このことだけは確かだった。」  
「死ぬよりも辛いその中でね」  
「そうなるし」  
「それに奴等がこのまま大きくなったらね」  
「僕等もね」  
「彼等自身の話にもなる。」  
「その中に取り込まれてね」  
「そうなるよね」  
「世界全体がね」  
「そうなってしまふよ」  
「全てが」  
「世界を守るとかそういうことは考えたことはない」  
「牧村は自分のその席に座ったうえで述べた。」  
「しかしだ」  
「しかしか」  
「そうだ」  
「こつ話してであった。」  
「俺は少なくとも生きるつもりだ」  
「それは確かかだというのだ。」  
「戦い、そしてだ」  
「生きるんだね」  
「絶対に」  
「それ以上に守るものがある」  
「今までの牧村にはない言葉だった。」  
「それもある」

「あれ？好きな人とか？」

「若しかしたら」

「そうだ。そして大切な人間がいる」

「こつも言った。」

「そうした相手がいるからだ。俺は戦う」

「そうなんだ」

「そういう風になったんだね」

「博士も。そして」

さらに言う。その言葉を向けたのは。

「あんた達もだ」

「あんた達？っていうと」

「僕達かな」

「そうだよね」

「それって」

妖怪達は今の彼の言葉にはきよんとした顔になった。

「まさかと思うけれど」

「違う？」

「いや、ひょっとして」

「やっぱり」

「その通りだ」

だが牧村はここでまた彼等に言った。



#### 第四十四話 妖虫その四

「あんだ達もだ。友達だ」

「うわあ、はじめて言われたね」

「そうだよね」

「はじめてだよ」

妖怪達は牧村のその言葉をまた聞いて笑顔になった。

「牧村さんにそんな言われたなんてね」

「いつも何考えてるかわかりにくかったのに」

「無愛想な感じだね」

「そうそう」

「無愛想か」

「うむ、無愛想じゃな」

それは博士も言う。

「君程無愛想な人間もそうはいないな」

「そうか」

「自覚しておらんかったのか？」

「いや、している」

言葉は現在形だった。

「前からだ」

「そうじゃな。まあ無愛想なもの個性じゃ」

「そうなのだな」

「君だけ無愛想な人間は少ないがな」

こつこつ話すのであった。

「それでも無愛想もまた個性じゃ」

「まあ僕達みたいに陽気なのはね」

「少ないと思うけれどね」

「明るく楽しくばかりっていうのもね」

「そうそう」

妖怪達はこう述べるのであった。実際に彼等はいつも通り明るく朗らかである。能天気とまで言っていていい程の明るさである。

「明るく生きてこそだしね」

「それが妖怪の人生だし」

「あれ、人生じゃないんじゃない」

「ああ、妖怪だからね」

「そうそう」

こんな話もするのだった。その中でだ。

雪女がだ。かき氷を食べながら述べる。

「ただねえ」

「ただ？」

「暑い」

「今年は特に暑いわね」

その白い肌が溶けそうになっていた。

「ほら、私あれじゃない。雪女だから」

「夏は苦手だよね」

「やっぱり」

「わしもじゃ」

「おいらもだよ」

毛むくじゃらの雪男と昔の雨傘を被った雪ん子も困った顔になっている。

「夏はのう。いつもじゃが」

「苦手なんだよ」

「まあ冬の妖怪だからね」

「それは仕方ないね」

「やっぱりね」

「クーラーと氷が欠かせないわ」

雪女が言った。

「だから冷凍庫の中がね」

「いいものじゃ」

「全くだよ」

雪男と雪ん子もそうだと話すのであった。

「冬が恋しいぞ」

「早く冬にならないかな」

「ううん、冬かあ」

ここで困った顔を見せるのは河童だった。

「冬って川が凍るからなあ」

「それで外に出られなくなるよね」

「川の中にいたら」

「それで割るのが面倒なんだよ」

河童はこう話す。

「ちよつとねえ」

「河童は冬が嫌いだったんだ」

「そうだったんだ」

「そうだよ。どうもね」

また話す河童だった。

「好きになれないね」

「冬が一番いいのに」

雪女はこうであった。

## 第四十四話 妖虫その五

「まあそれはね」

「そうそう、妖怪それぞれ」

「夏が得意な妖怪もいればね」

「冬が得意な妖怪もいる」

「そうだよね」

「本当にね」

こんな話をしながらそれぞれのデザートを食べる妖怪達だった。そして食べながらだ。また牧村に対して声をかけた。

「それでさ」

「牧村さん」

「楽しみたいよね」

「ああ」

牧村はその彼等の言葉に頷いて返した。

「絶対にな」

「じゃあね。生きて」

「そうしてね」

「何があってもね」

「生きる」

今度は一言だった。

「あの妖魔達を倒してな」

「うむ、それではじゃ」

博士も彼の今の言葉を聞いて頷いてだった。

「わしもやるぞ」

「やるのか」

「うむ、やるぞ」

強い言葉であった。

「わしのやるべきことをじゃ」

「それは何だ」  
「妖魔達に対して調べる」  
「それがだというのだ。」  
「それをしようぞ」  
「ネクロノミコンをか」  
「他にも色々な本があるがな」  
「しかしどの本もあれではないのか」  
「そうじゃ。中々読めん」  
博士はこう牧村に返した。  
「解読が難しくその内容もな」  
「下手をすれば読んでいるうちに発狂するのだったな」  
「そうじゃ。流石に発狂してしまえばじゃ」  
妖怪達がその言葉に突っ込みを入れた。  
「どうにもならないよね」  
「解読なんてとてもね」  
「問題外になるから」  
「そうじゃ。だからそれには気をつけておる」  
「無理はしないで下さいよ」  
博士の横からろく子が言ってきた。流石に今は普通の首の長さだ。人間の店の中なのでその首を伸ばすわけにはいかないのだ。  
「くれぐれも」  
「わかっておるぞ。しかしじゃ」  
「頑張りはされるんですね」  
「無理をせずに頑張るぞ」  
博士はそうするというのであった。  
「しっかりとな」  
「そうして下さいね。本当に」  
「ろく子はまた博士に話した。」  
「それでなのですからね」  
「ふむ。それで？」

「大学に戻られましたら」

教授としての話になっていた。博士はまだ減益の教授であるのだ。

「今度ですね」

「何かあったかのう、大学で」

「論文の御願いが来ております」

「どの分野のじゃ？」

「医学です」

そちらだというのだ。

「臓器移植に関する論文ですが」

「そちらか。よし、わかった」

「お受けされますか」

「来る者は拒まずじゃよ」

博士は笑ってこころく子に返した。

## 第四十四話 妖虫その六

「それがわしの方針ではないかのう」

「はい、その通りです」

「さすればじゃ」

ここまで話してであった。また話す博士であった。

「その論文も書かせてもらおう」

「それでどの場所の臓器移植について書かれますか」

「心臓じゃな」

「そこだというのである。」

「そこについて書こう」

「心臓ですか」

「臓器移植の中でもとりわけやりがいのある場所じゃ」

博士は楽しそうに話す。

「最も難しくかつ最も重要な臓器じゃからな」

「博士は心臓移植が得意ですしね」

「好きこそもの上手なれじゃな」

また笑顔で言う博士だった。

「そうということじゃな」

「そうですね。それでは」

「うむ、帰ってからじゃな」

「はい、それからです」

ろく子は時間はそれからと述べるのだった。

「それで書かれるのにどれだけで」

「一日あれば充分じゃろ」

博士は素っ気無くその必要な時間を述べた。

「それだけあればのう」

「では」

「うむ。それではじゃ」

ここまで話してであつた。あらためて向かいにいる牧村に話す。

「大学でもじゃ」

「そちらでもか」

「調べてはおく」

そうするといふのである。

「当然君のこともな」

「この新しい力のこともだな」

「そういうことじゃ。その力かなりのものじゃな」

「そうだな。これまではそれぞれの力はそれぞれの天使でないと使えなかつた」

「うむ」

「しかし今は違つ」

こつ博士に話す。

「そのままの姿で使える」

「黄金の六枚羽根のままか」

「使える。それだけでもかなり違つ」

「そしてその力自体もじゃな」

「それも全く違つ」

そのことを細かく話す牧村だつた。

「絶大な力だ」

「全くじゃな。それではな」

「頼むな」

「頼まれたぞ」

博士はにこりと笑つて彼に返した。

「今しかとな」

「わかつた。それではだ」

「今日はこれからどうするのじゃ？」

博士が彼に今度問うたのはこつしたものだつた。

「それでじゃが」

「またトレーニングだ」



「それか」

「ああ。例えどれだけ天使の力を手に入れてもだ  
彼は真剣な面持ちで話す。

「それを俺が使いこなせなければ意味がないな」

「そうそう」

「幾ら天使の力が強くてもね」

「それを使って制御するのは牧村さんなんだから  
妖怪達もその彼に語る。

「牧村さんが弱かったらね」

「どうしようもないからね」

「振り回されるからね」

「だからだ。またトレーニングだ」  
また話す牧村だった。

## 第四十四話 妖虫その七

「今日もだ」

「鍛錬鍛錬」

「毎日してこそだからね」

「だからこそ力を手に入れられるしね」

「確かなものがね」

「そういうことじゃな。さて」

「ここでまた言う博士だった。」

「わし等はこれでな」

「またね」

「また会おうね」

妖怪達も朗らかに話す。

「しかし大阪の甘いものってね」

「うんうん、甘さが強くてね」

「それでいて繊細だし」

「いいよね」

妖怪達は大阪のスイーツも気に入ってきていた。笑顔で顔を見合  
わせそのうえでこんな話をするのが何よりの証拠である。

「やっぱり食いだおれ」

「食べる方の舌が肥えてるからね」

「作る方も努力する」

「いいことだよ」

「その通りじゃ」

博士も妖怪達のその言葉にうんうんと頷く。

そうしてだ。ある国のことを話に出した。

「イギリスなぞはのう」

「イギリス？」

「あの国？」

「何でも食べ物がまずいらしいね」

「食べ物を冒流しておる」

酷評そのものだった。

「料理をじゃ」

「そんなに酷いんだ」

「噂には聞いていたけれど」

「そこまですんだ」

「あの料理のまずさにじゃ」

博士の口調はしみじみとしていた。しかしそれ以上にだ。実に忌々しげなものにもなっていた。そんな複雑な口調であった。

「わしは泣いた」

「泣いたって」

「そこまですんだ」

「壮絶だね」

「ある意味凄いよ」

「全くだよ」

「男泣きに泣いたのじゃ」

妖怪達に應える形でさらに話す博士だった。

「そこまですじゃった」

「うっん、食べたくないね」

「そうだね」

「そんなのはね」

「勘弁して欲しいね」

妖怪達も口々にこんな風に言う。

「っていうか大英帝国なのに？」

「長い間凄く繁栄してきた国なのに」

「それなのに料理がまずいって」

「何でかな」

「料理には関心を払わなかったのじゃよ」

博士はどうしてそうなったのか実に簡単に話した。

「それでじゃ」

「それでまずいんだ」

「他のことには関心を払っていても」

「料理に関心を払わなかったから」

「それで」

「イギリスの料理は駄目じゃ」

また駄目出しをする博士だった。

「イギリスでは料理は期待せんことじゃ」

「まあイギリスは行かないしね」

「そうそう、僕達日本の妖怪だし」

「興味もないしね」

「そうだよね」

こんな話をしていた。その時だった。

牧村がだ。ここまで話を聞いていたがそれでも口を開いたのであった。

「だが」

「だが、じゃな」

「イギリスの菓子は作ると美味い」

そうだというのである。

## 第四十四話 妖虫その八

「作るとだ。美味しい」

「ああ、それはじゃ」

「それは？」

「普通に料理をしたら美味しいのじゃ」

博士はこう牧村に対して答えた。

「その場合はじゃ」

「そうなのか」

「しかしイギリスではまずいのじゃ」

「つまりそれって」

「そうだよね」

「イギリスの料理人って」

妖怪達が言う。

「相当な腕の悪さだよね」

「っていうか素人ばかりなんじゃ」

「そうかもね」

「牧村さんはお菓子作るの確かに上手いけれど」

「それでも。本場の人じゃないし」

日本人である。それでもなのだった。

「本場の味ってやっぱり違うけれどね」

「カステラにしても蕎麦がきにしてもね」

「けれどイギリスは例外なんだ」

「そういう国なんだね」

「例外もいいところじゃ」

また忌々しげに言う博士だった。

「あの国ではイギリスの食べ物には口にしないことじゃ」

「朝食だけだったな」

ここで牧村は言った。

「それ以外はだったな」

「そういうことじゃ。食べないようにな」

「嫌な国だなあ」

「食べ物がそこまでまずいってね」

「全くだよね」

「そんな国なんだ」

妖怪達も言う。そうしてそのうえでその日本人が作ったイギリスの御茶やお菓子を食べていた。それは確かに美味しいものだった。

屋敷に帰ってトレーニングをした。それが終わりシャワーを浴びたところだ。屋敷に妹の未久が来たのであった。

「来たのか」

「うん」

陽気な顔で答える未久だった。

「明日土曜だからね」

「部活がないからか」

「塾もないの」

「どちらもだというのだ。」

「だからなんだけれど」

「それでまたこの大阪にか」

「お兄ちゃんは何時帰って来るの?」

妹は自分の為に用意されたその部屋に入る。そうしてそのうえで、  
である。荷物を置きながらそれを手伝う兄に話しているのである。

その中でだ。妹はこう兄に問うたのだ。

「それで」

「それでか」

「そうよ。夏休みの間ずっといるの?」

「そのつもりだ」

「そうだというのである。」

「それでだが」

「それで?」

「家はどうなっている」

彼が本来住んでいる神戸の実家についての話だった。

「それでだが」

「別に」

「何ともないか」

「そうよ、何ともないよ」

また言う未久だった。

「別にね」

「ならいいが」

「ただね。お父さんとお母さんはね」

「どうなっている」

「お兄ちゃんが帰って来ないから寂しがってるよ」

「そうなのか」

「たまには帰って来たら？」

それどころか話すのだった。

## 第四十四話 妖虫その九

「夏休みの間に一回はね」

「そうだな」

「それで帰るの？」

「いや」

妹の言葉に首を横に振る。そんな話をしながらだ。二人は屋敷の居間に向かっていた。兄は妹に対して冷えた茶と菓子を出していた。それは。

「アイスティーとアイスクリームなの」

「そうだが」

「お兄ちゃんが作ったの？」

「どちらもな」

「紅茶は淹れて冷やすだけだけれど」

未久は木の台の上に置かれたガラスのコップの中の茶とガラスの容器の中のアイスクリームを見てだった。そのうえで兄に話した。

「それでアイスはね」

「難しいと思うか」

「思うわ。こんなのどうやって作るのよ」

「コツがある」

「コツが？」

「コツがわかれば作ることができる」

「そうだとするのである。」

「どんな菓子でもな」

「そういうものなの」

「それでどうだ」

スプーンを持っている妹に対して問う。彼は彼女の向かい側に座りその前にはやはり同じアイスティーとアイスクリームがある。

「見た目は」



「いいんじゃない？」

その白に近いクリーム色のアイスを見ての言葉だ。

「外見はね」

「そうか」

「お菓子って見た目も大事だけれどね」

これはよくわかってている妹だった。

「それで次よね」

「そうだ、味だ」

「少し待って」

それはだというのである。

「食べてみないとわからないから」

「わからないか」

「当たり前じゃない。食べ物は何の為にあるのよ」

「食べる為だ」

「だからよ」

それだというのである。

「まずは食べさせてもらうわ」

「わかった。それではだ」

「よし、食べるわね」

「ああ」

こうして未久はそのアイスクリームを食べてみた。するとだった。

その味を一口確かめてからだ。言うのだった。

「いいじゃない」

「そうか」

「ええ、いいわ」

にこりとなつての言葉である。

「お兄ちゃんアイスもいけるじゃない」

「ならいい」

「それじゃああれよね」

ここでさらに言う妹だった。

「マジックでも通用するよね」

「またそれが」

「ええ、それよ」

このことを隠しもしなかった。

「充分いけるわよ。若奈さんも満足してくれるわ」

「そうか」

「そういうこと。それで私もね」

「御前もか」

「将来はあそこでウエイトレスさんね」

にこにことして話す。

「アルバイトには困らないわね」

「御前が望むのはそっちな」

「第三の御願いよ」

「第三か」

「第一と第二は違うわよ」

そしてこつも話すのだった。

「第一はね」

「ああ」

「まずはお兄ちゃんと若奈さんが幸せになること」  
「それだというのである。」

## 第四十四話 妖虫その十

「それよ」

「まずはそれが」

「そうよ。そして次は」

「第二だな」

「それはマジックがこれからもずっと繁盛すること」  
次に出て来たのはこれだった。

「ずっとね」

「それもか」

「だって。お店が賑わってないとあれじゃない」

未久は現実を見て話していた。

「やっていけないでしょ」

「それはそうだが」

「だからよ。その二つをまず御願っているの」

「その二つか」

「そういうこと。まずはその二つ、そして」

「御前自身のか」

「将来のアルバイトね」

兄に対してにこにことしながら話す。そんな話をしながらだ。妹はアイスを食べていく。兄が作ったそのアイスである。

そうしながらだ。こんなことも話した。

「それでね」

「今度は何だ」

「アイスクリームもいいけれど」

まずはそのアイスのことだった。

「もう一つね」

「もう一つか」

「あれよ。アイスクャンデーもどうかしら」

「アイスクャンデーか」  
「お店の中で食べるんじゃないやなくてお店の外で売るものになるけれど」  
「これはアイスクャンデーの商品としてのイメージからの話だった」  
「アイスクリームは店の中でも食べるがだ。アイスクャンデーは違っているのだ。」  
「それでもね」  
「アイスクャンデーもか」  
「それでどうかしら」  
「あらためて問う妹だった。」  
「お兄ちゃんアイスクャンデーも作られるわよね」  
「ああ」  
「あれってアイスクリームより簡単よね」  
「まだそちらの方がな」  
「じゃあどうかしら」  
「また兄に対して言う。」  
「そっちも」  
「考えておく」  
「そう、考えてくれるのね」  
「話は聞いた」  
「兄もこう返す。」  
「それはな」  
「そう、じゃあね」  
「アイスクャンデーか」  
「私あれ好きだし」  
「ここでは自分のことを先に話す彼女だった。」  
「お兄ちゃんもだしね」  
「好きなのはいいがだ」  
「何？」  
「御前アイスクャンデーある時はいつも御前だけが食うな」  
「そうかしら」

「そうだ。俺は殆ど食べられない」

声にいささか恨めしいものが宿っていた。

「全く。少しはだな」

「置いておけっというのね」

「そうだ」

まさにその通りだった。

「幾らアイスキャンデーが好きでもだ」

「だって仕方ないじゃない」

「何で仕方ないんだ？」

「私アイスキャンデー好きだから」

それでだというのである。

「だからね」

「それが理由か？」

「理由になつてない？」

「随分我儘な理由だな」

「女の子の我儘はいいのよ」

冗談で返す。しかし牧村はそれを冗談とわかっているが真剣に受

けて真剣に返す。そうしてやり取りを続けているのであった。

「そう言われてるじゃない」

「初耳だな、それは」

「じゃあ今から覚えておいてね」

「それを許さないと言えばどうする」

「無視するだけだから」

あくまで強気の未久だった。

第四十四話 妖虫その十一

「そういうことで宜しくね」

「全く。御前という奴は」

「けれどどう？アイスクャンデーは」

妹は強引に話を元に戻してきた。

「悪い考えじゃないでしょ」

「そうだな。それはな」

兄も認めることは認める。

「店の外で売るにはいいな」

「商売は基本だしね」

これはよく言われていることである。

「そういうことだから」

「わかった。それではだ」

「ええ」

「それも考えてみる」

受け入れるということだった。

「マジックに入ったその時にな」

「そうしてね。それでだけれど」

「ああ」

「このアイスバニラだけなの？」

アイスの話にも戻った。未久が戻したのである。

「どうなの？それは」

「いや、他も作っていく」

「そう、やっぱりね」

「チョコレートもだ」

「それもなのね」

「ストロベリーもブルーハワイもだ。作っていく」

この考えを妹に話す。

「そうしていく」

「そうするといいわ。バニラだけじゃ寂しいからね」

「ただな」

「ただ？」

「アイスクリームも奥が深いな」

今度するのはこうしたことだった。

「実にな」

「難しいの？」

「難しい。そうした意味で奥が深い」

そうだというのだ。

「これだけで店が成り立つのもわかる」

「作ってはじめてわかったのね」

「そうだな。それまではそこまでわからなかった」

「ケーキにクレープもよね」

「どの菓子も奥が深い」

牧村はどの菓子も軽く見てはいなかった。むしろである。作ってみてである。そこからその深さがわかってきたのである。そういうことだった。

「それもかなりな」

「そうなの」

「それでだ」

「ええ」

「アイスは作っていく」

このことは断言した。

「しかしだ」

「しかし？」

「それはやはり喫茶店のアイスだ」

「喫茶店のなの」

「お茶やコーヒーと一緒に出すアイスだ」

そうしたアイスだというのである。

「アイスだけで売るものじゃない」  
「ふうん、アイスクリーム屋さんのアイスと喫茶店のアイスって違  
うのね」  
「違う、アイスクリーム屋のアイスはそれだけを食べるものだが」  
「けれど喫茶店はね」  
「お茶がある。若しくはコーヒーだ」  
「そうしたバランスも考えてなのね」  
「それで作っていく」  
「これが彼のアイスへの考えだった。」  
「他の菓子もだ」  
「わかったわ。それじゃあね」  
「ああ」  
「そうしたアイスをまた作って」  
「実にちやっかりとした妹の言葉だった。」  
「御願いな、お兄ちゃん」  
「わかった、それではこれからもな」  
「私高校入ったらそっちのお店行かせてもらおうし」  
「勝手に決めているのか」  
「違うわ。マスターと奥さんにも言われてるのよ」  
「マスターと奥さんにか」  
「そうなの、もうね」  
「実に楽しみに兄に話す。」



第四十四話 妖虫その十二

「そういうことだから」

「また随分と話が早いな」

「それだけ見込まれてるってことよね」

「よくそんな自分に好意的に考えられるな」

「考えるわよ」

まさにそうだというのであった。

「だってね」

「だって。何だ」

「そっちの方が楽しいじゃない」

にこりと笑って述べる。

「そうでしょ？人間積極的にね」

「まあ確かにそうだがな」

「そうでしょ？だからね」

「しかし言っておく」

兄として彼女に話す。

「いいな、多少はだ」

「最悪の事態も考えろってこと？」

「楽観だけでは駄目だ」

「けれど悲観だけでも駄目でしょ」

「それもその通りだ」

「じゃあ楽観の方がよくない？」

「九十五の楽観と五の悲観だ」

その割合だというのである。

「それでいいな」

「結局楽観の方がずっと多いじゃない」

「その通りだがだ」

「僅かな悲観も必要なのね」

「そういつことだ。ここで重要なのはだ」

「何？」

「悲観のことだ」

このことであつた。未久のそのあまりにも多い楽観の正反対のものである。それについて彼はここで細かく話をするのであつた。

「それは多過ぎるとだ」

「駄目よね」

「悲観が多いと騙される」

「そうなるの」

「世間には最悪の事態が来ると吹聴する輩もいる」

「詐欺師？」

「そうだな。詐欺師だ」

まさにそれだというのだ。

「世界が滅亡する、人類はいなくなる、世界経済が崩壊するとな」

「よくそう言う人っているわよね」

「そうした最悪の事態は避けられないと煽る」

こうした本は巷に氾濫している。嫌になる位にだ。

「そして己の目的に誘導したりするのだ」

「タチ悪いわね」

「己の本を売る為に行っている者もいる」

「余計に悪いじゃない」

「極端な悲観性はそれに乗せられる」

そうなるというのだ。

「そして騙される」

「ううん、注意するわ」

未久は考える顔で述べた。

「それじゃあそれはね」

「そうしろ。楽観の方がいいがな」

「それでも悲観も少しだけ入れて」

「しかし悲観には捉われるわ」

「わかったわ」

あらためて頷くのであった。

「うっん、世間には悪質な人間がいるのね」

「そうだ、いる」

いるというのだ。

「それはわかっておけ」

「よくある予言の本とか？」

「ああいうものはまだいい」

「まだいいの」

「面白おかしく書いているだけだからな。さらに悪質な人間もいる」

「どんな奴？それって」

「例えだが」

こう前置きしてからの言葉だった。

「海援隊の再来とか自称する人間はだ」 60

「要注意ね」

「絶対に信用するな」

兄もこうまで言う。

## 第四十四話 妖虫その十三

「何があってもだ」

「厳しいわね」

「そうするべき相手だからだ」

「成程ね」

「そうした相手は信用するな」

そしてだ。兄は話を少し変えてきた。

「特にそうしたことを言うマスコミはだ」

「マスコミ？新聞とかテレビとか」

「そうだ、そこだ」

「そんなに駄目なの」

「日本のマスコミや政治家がいいという人間は信用するな」

「ああ、あの鳩とかいう政治家とか？」

「あれを見ればわかる」

ついでにもう一人話に出すのだった。

「小とか沢とかいうのもだ」

「わかったわ。考えてみればどっちも胡散臭いわね」

「胡散臭い人間を推す人間もまた胡散臭いものだ」

「類は友を呼ぶ、なのね」

「より汚いのはつきりした表現もある」

「どんなの？それ」

条件反射的に兄に問い返した。

「その表現って」

「糞には糞蠅がたかる」

「確かに汚い表現ね」

聞いて納得であった。

「それって」

「その反対の言葉もある」

「今度は？」  
「花には蝶が寄る」  
「蝶がなの」  
「いい人間にはいい人間が集まる」  
「そうでもあるというのである。」  
「そういうものだ」  
「本当に類は友を呼ぶなのね」  
未久はここであらためて納得した。  
「人間って」  
「そうだ。これでよくわかったな」  
「ええ、よくね」  
「それでだが」  
「アイスある？」  
未久はおかわりを言うのだった。  
「それある？」  
「俺は今それを言おうとしていた」  
「じゃあいいタイミングじゃない」  
「そうだな。それでだが」  
「あるの？おかわり」  
あらためて問うのであった。  
「それで」  
「ある」  
「そう、あるの」  
「それもかなりある」  
「量も多いというのである。」  
「安心しろ」  
「そう。じゃあおかわりもらうわよ」  
「遠慮するな。それにしてもだ」  
「それにしても？」  
「御前は本当に甘いものが好きだな」

未久のその甘党ぶりを話すのであった。

「昔からな」

「それは知ってると思うけれど」

「しかし太らないのか」

「身体動かしてるし」

「それにだな」

「そう、勉強もしてるし」

身体を動かしているだけではないというのだ。それもあるというのだ。

「ちやんとね」

「勉強をすればな。脳を働かせればカロリーを消費する」

「それって案外大きいわよね」

「そうだ。学んでもやせられる」

「それもダイエツトよね」

「その通りだ。しかしだ」

ここで牧村はこうも言った。

## 第四十四話 妖虫その十四

「それは人による」

「太つても勉強できる人はいるわよね」

「身体を激しく動かしているとほぼ間違いなくやせる」

それはだというのだ。

「贅肉が落ちる」

「動かしていればね」

「しかし頭脳はまた違うからだ」

「贅肉は落ちないからね」

「その通りだ。それはわかっておくことだ」

「わかっているわよ。それでね」

「ああ」

話が戻った。それも未久が望む方だ。

「アイスおかわりね」

「冷蔵庫の中にある」

牧村はこう妹に素っ気無く告げた。

「そこでとつて来るといい」

「冷蔵庫になの」

「冷蔵庫の一番下だ」

そこだという。

「その冷凍庫の中にある」

「ああ、あそこね」

「そこに行って好きなだけ取ればいい」

また妹に話した。

「そうしろ」

「自分では入れてくれないの」

「それ位は自分でしろ」

そういうことだった。

「わかったな」  
「わかったわよ。何かね」  
「何か？」  
「冷たいわね」  
兄を咎める目で見ての言葉だった。  
「そういうところって」  
「俺が冷たいか」  
「冷たいじゃない」  
咎める口調でもあった。  
「ここで妹の為にに入れてあげようって気にはならないの？」  
「なる筈がない」  
兄は冷たい口調だった。  
「自分の分は自分で入れろ」  
「ちえっ」  
「そのかわり好きだけ入れろ」  
「本当にそうするわよ」  
「構わない」  
それはいいというのだ。  
「どれだけ食べてもな」  
「お兄ちゃんはどうするの？」  
「俺の分も作ってある」  
「そんなに沢山作ったの」  
「バケツ一個分だ」  
その実際の量も話した。  
「それだけある」  
「アメリカサイズね」  
「イメージはした」  
「そうだったの」  
「それでだ。量もある」  
また量について言及した。



「食べるといい、好きなだけな」

「お兄ちゃんも食べるわよね」

「そのつもりだ」

こう妹に話す。

「ただ自分でおかわりを入れる」

「入れてきてあげてもいいけれど」

「それはいい」

いいというのだった。

「自分のことは自分でだ」

「自分で、なのね」

「そうだ。そうする」

「わかったわ。じゃあね」

こうした話をしてそのうえでだった。彼等はアイスクリームを楽しんだのであった。そうして兄妹の団欒の時を楽しんだのであった。そうした日もあった。だが次の日はそれが一変した。朝にだった。トレーニングから帰りシャワーを浴びてすぐにだった。

目玉が来た。そうして彼に告げるのであった。

「いいかな」

「戦いか」

「うん、そうなんだ」

こう彼に言ってきたのだ。

## 第四十四話 妖虫その十五

「これからね」

「場所は」

「これから案内するよ」

今は言わないのだった。

「それでいいかな」

「いい」

返答は一言だった。

「それでは行くでしょう」

「話が早いね。ってというか話がわかるね」

「嫌だと言える話ではない筈だが」

「それはね」

「その通りだな」

「うん、その通りだよ」

目玉もこのことは否定しなかった。

「それはね」

「それならだ。行くだけだ」

「そして勝つんだね」

「勝ってそれで生きる」

言う言葉はこれだけだった。

「それではだ」

「よし、それじゃあね」

「行くぞ」

「いやいや、案内するから」

出ようとすると牧村に少し慌てた口調で話した。

「それはちゃんとね」

「そういえばそうだったな」

「そうだよ。死神ももうそこにいるよ」

いるというのである。

「だから安心してね」

「安心していいのか」

「そう、安心していいよ」

「あの男もそこに向かっているのか」

「もうね。死神も逃げられないから」

彼もだというのだった。

「妖魔の命を刈ってね。それで冥界に送り届けないといけないから」

「魔物からそれに変わったか」

「正式に決まったんだ」

目玉はここでこんなことを話した。

「こっちの神々の会議でね」

「神々か」

「そう、僕達神様なんだよ」

言うのはこのことだった。

「僕が眠りの神で死神はわかるよね」

「ああ」

このことは話すまでもなかった。すぐにわかることだった。

そしてだ。あらためて話す牧村だった。

「名前がそのままだな」

「なってるよね。あと僕の名前はね」

「目玉ではないのか」

「違うよ。眠神なんだ」

それが彼の名前だというのだ。

「死神とは同じ時に生まれてそれからずっと一緒なんだよ」

「一緒か」

「そう、一緒だよ」

そうだというのである。

「死と眠りは近いからね」

「ギリシア神話と同じだな」

牧村は目玉、即ち眼神の言葉からこう考えたのだった。

「そうだな」

「タナトスとヒュプノスだね」

「知っているのか」

「会ったことはないけれどね」

それでもだという目玉だった。

「知っているよ」

「そうか、やはりな」

「うん、それでね」

今度は目玉の方から話してきた。

## 第四十四話 妖虫その十六

「死ぬのもまた一種の眠りだからね」

「眠りにつくという言葉通りだな」

「その通りだよ。そして眠りもね」

「一種の死か」

「そういうこと。わかったね」

「わかった」

まさにそうだというのだった。

「だから僕達はいつも一緒なんだ」

「兄弟みたいなものか」

「そうだね」

目玉もこう返す。

「本当にお互い同時に産まれたしね」

「誰が産んだ」

牧村はその出生について問うた。

「貴様達を産んだのは誰だ」

「ああ、産まれたじゃないんだ」

「産まれたのではないのか」

「出て来たんだ」

そうだというのである。

「僕達はね。出て来たんだ」

「誰からも産まれていないのか」

「神つてのは産まれるだけが誕生じゃないから」

「そういえばそうか」

「ほら、ギリシア神話のガイアなんかそうじゃない」

大地の母神だ。その産まれは誰からも産まれたものではない。まさに原初の母なのがギリシア神話における母神ガイアなのである。

「最初からいたじゃない」

「ああ」  
「それと同じなんだ、僕達って」  
「そうした神はだ」  
それを聞いてまた言う牧村だった。  
「かなり高位だな」  
「あつ、わかるんだ」  
「ガイアと同じ出生だと聞けばな」  
牧村はこのことから察したのである。  
「おおよそわかる」  
「成程ね」  
「つまり創世神に近いか」  
「死と眠りはね」  
目玉は己が司るものもその兄弟が司るものも話した。  
「どちらもこの世に最も必要なものだから」  
「それでか」  
「うん、それでだよ」  
「こう言うのであった。」  
「だから僕達は最初の頃に産まれたんだ」  
「それによつてか」  
「けれど僕達はあれだよ」  
「あれとは」  
「妻もいないし子供もいないんだ」  
「どちらもか」  
「うん、どちらもないんだ」  
つまり家族はないというのだ。  
「死と眠りにはね」  
「眷属はいないのか」  
「うん、お互いだけだよ」  
死と眠りだけだというのだ。  
「その他には誰もいないよ」

「孤独か」

「そう言われると違うし」

孤独ではないという。

「だって。いつも一緒にいるからね」

「それでなのか」

「そう。そしてね」

ここでまた言う目玉であった。

「いいよね、今から」

「行くか」

「うん、行こう」

牧村をあらためて促した。

「戦いの場にね」

「今度の相手は誰だ」

「少なくとも尋常な相手じゃないよ」

「そうだな。妖魔はな」

「僕達もよく知らないんだ」

目玉は目に曇ったものを見せて述べた。

## 第四十四話 妖虫その十七

「実はね」

「妖魔についてはか」

「お互い原初からいるけれど」

「古いか」

「原初の中で産まれたけれどもお互いを知らないことだってあるんだ」

「違う存在だからだな」

「うん」

その通りだというのである。

「それでなんだ。まだわかっていることは少ないままだよ」

「そのことはわかった」

「そのことはだね」

「だが他はまだわからない」

不満の文体だが言葉にはそれは含まれていなかった。

「それもわかった」

「わかってくれたね」

「では行くとしよう」

家の玄関に出るとだ。そこにサイドカーが来た。

それに乗り目玉が案内する場所に向かう。そこは。

通天閣の下だった。そこに来たのだ。周りには商店が立ち並んでいる。賑やかな通天閣の下にだ。彼と目玉はやって来たのである。

そこに着くとだ。目玉は冗談めかしてこう言ってきた。

「悪いけれどね」

「何だ」

「串カツは後でね」

これが目玉の冗談であった。

「戦いの後でね」

「そうだな。そうするとしよう」



牧村も彼のその冗談に応える。

「勝つてその祝いにだ」

「そうそう」

「ただ。酒は飲めない」

「このことも言う。」

「それはな」

「ああ、そうだったよな」

目玉もそれを聞いて声で頷いた。

「そっちはね」

「身体が受け付けない」

何故飲めないか。その理由も話した。

「どうしてもな」

「体質ね。仕方ないね」

「仕方ないか」

「日本人には時々いるみたいだね。そういう身体が受け付けない人は」

「そうらしいな。それでだが」

「うん」

「死神はまだか」

その通天閣の下で目玉に問う。

「あの男は」

「もう少しで来るよ」

目玉は明るい声でこう返した。

「もう少しでね」

「来るのか」

「今ちよつと仕事をしてるから」

「命を送り届けているのか」

「そう。死神の本来の仕事をね」

「しているというのである。」

「それをしてるから」

「戦うのは本来の仕事ではないのか」

「そう。それでなんだ」

「わかった。では待とう」

牧村は応えた。そのうえでサイドカーを降りた。

そこから降りるとだ。そこにだった。

あのハーレーが来た。そしてそこに乗っているのは。

あの男だった。彼はそのハーレーから降りてヘルメットを脱いでだ。そのうえで牧村に対して言うのだった。

「遅れたな」

「事情は聞いた」

牧村はその彼に静かに返した。

「そういうことか」

「そうだ。そしてだが」

「ああ」

「はじまるぞ」

死神から牧村に告げてきた。

「いいな」

「よし、それではだ」

「来るぞ」

死神のその言葉と共にであった。向かい側からだ。あの黒い男が来た。彼は悠然と歩きながらだ。そのうえで二人と目玉のところに来たのだ。

## 第四十四話 妖虫その十八

そしてだ。その彼等に対して言ってきた。

「揃ったな」

「来てやったと言うべきか」

牧村はあえて傲慢に返してみせた。

「ここは」

「来てやった、か」

「そうだ。来てやった」

「そうだというのである。」

「あえてここにな」

「それで戦うのだな」

「無論だ。それで相手は誰だ」

「急くことはない」

男は牧村の作った傲慢に対して余裕で応えた。

「別にな」

「では既に用意をしているのか」

「そうだ。それではだ」

こう話してだった。男はふとその目を光らせた。

するとだ。牧村達はそれだけで何処かに連れて行かれた。そこは。

「何だここは」

「何もない」

「うん、何もないよ」

二人だけでなく目玉も言う。

「漆黑の中」

「しかし渦巻いているな」

「ここってまさか」

「そうだ、混沌の中だ」

一堂の前に男がいた。そのうえでの返答だった。

「ここがだ」  
「何故ここに呼んだ」  
死神が男に問うた。  
「何故だ」  
「見てもらう為だ」  
その為だと。男は答えた。  
「その為だ」  
「見てもらう、か」  
「如何にも」  
その通りだとまた返す男だった。  
「この混沌こそが我等の故郷」  
「故郷か」  
「この中が」  
「そして我等の父であり母でもある」  
「そうしたものでもあるというのだ。」  
「つまりだ。ここはだ」  
「貴様等にとつて全てか」  
牧村が言った。  
「そうだというのだな」  
「如何にも。そしてだ」  
また言ってきた男だった。  
「いいか」  
「来るといふのだな」  
「私ではないがな」  
「またか」  
「私と戦うのはまだ先だ」  
「こつ二人に言うのである。」  
「楽しみは後に取っておくことだ」  
「別に楽しみにはしていない」  
牧村がそれを否定した。

「ただ。貴様を倒さなければだ」

「混沌がこの世を覆う、か」

「そうだ。この混沌がだ」

それがだと返すのである。

「それはさせる訳にはいかない」

「私としてはそれが望むところだがな」

「残念だが俺はそうではない」

「私もだ」

死神も言う。そうしてだった。

死神はだ。あらためて男に問うた。

「それでだが」

「相手か」

「そうだ、私の相手は誰だ」

「俺の相手もだ」

その相手に対する問いだった。牧村も問うのだった。

「今度はだ」

「どの妖魔か」

「今回も面白い相手を用意しておいた」

男は悠然と笑って二人に対して告げた。

「この空間ならではのだ」

「この空間か」

「この混沌の世界でか」

「一つ約束しておこう」

男はここで笑って言うてみせてきた。

## 第四十四話 妖虫その十九

「若しこの妖魔に勝てればだ」

「どうだというのだ」

「それで」

「この混沌の空間から出してやろう」

「こう約束するというのである。」

「その時はな」

「写真の約束か」

「死神がその言葉を受けて返してきた。」

「それを信じろというのか」

「如何にも。その通りだ」

「信じると思うか」

「死神は鋭い目で男に返した。」

「混沌の世界には法なぞない筈だが」

「そうだ、ない」

「男もこのことを認めるのだった。言葉だけで頷いてみせる。」

「混沌の中に法律というものはない。秩序なぞありはしない」

「ではどうして信じろというのだ」

「こう男に返す。」

「法がないというのにだ」

「言葉がある。そしてだ」

「そして」

「今度は何だ」

「我等とてこの状況を楽しんでいるのだ」

「口元に僅かな綻びが見えていた。」

「この戦いをだ」

「それでだというのか」

「そうだ。勝てばまた新たな妖魔を用意する」

男は悠然とした態度で言った。

「その時にはだ」

「そうか、それでか」

「それで出すというのか」

「そうだ。今再び約束する」

またこう言ってみせる男だった。

「これでいいな」

「話は聞いた」

牧村が言った。

「それではな。その妖魔を出すことだ」

「そうだな。それではだ」

男が言うようになった。その後ろにだった。

蛆が出て来た。ただし普通の蛆ではない。それは途方もない大き

さの蛆であった。

「大きいな」

「ドールという」

男が牧村に対して答えた。

「それがこの妖魔の名だ」

「ドールか」

「手強いとだけ言っておく」

男はその言葉に余裕を見せていた。ここでもだった。

「この妖魔はな」

「大きいからといってだ」

牧村はその巨大な、混沌の中に蠢く白い蛆を見てもだ。臆しては

いなかった。

「強いとは限らない」

「自信があるか」

「無論だ。そしてだ」

「そしてか」

「その根拠を今から見せてやるう」

「私もだ」

死神も牧村に続いた。

「それではだ。行くぞ」

「面白いではここでも見せてもらおう」

男は二人の話を聞いて答えた。

「貴様等のその戦いをな」

「そしてやがては貴様をだ」

「貴様を倒す」

二人は男を見据えて言葉を告げた。

「ここで勝ちだ」

「やがてはだ」

「私と戦うのか」

「如何にも」

「その通りだ」

また男に言葉を返した。

「ではだ、行くぞ」

「その時を楽しみにしていることだな」

「いいだろう。それでは今はだ」

男は悠然とした態度を崩すことなく述べてみせた。



## 第四十四話 妖虫その二十

「また見させてもらおうとしよう」

「その時を待っている」

「是非な」

「話は聞いた。ではな」

男は今はこちら返すだけであった。そうしてその上で彼は闇の中に姿を消した。彼が姿を消すと二人はだ。その妖魔を見据えるのであった。

「さて。貴様か」

「ドールといったな」

「そうだ」

何処からか声がした。妖魔の声だった。

地の底から響く様な声がだ。二人の耳に入った。

「我が名はドール」

「人形か」

牧村はその言葉を聞いてこう返した。

「そのまま言えば」

「人間の世界の一部の国の言葉ではそうなるな」

「だが。違うか」

「そうだ、違う」

そうだと返す妖魔だった。

「私の名はそうした意味ではない」

「貴様自身の名に過ぎないか」

「その通りだ。私は私だ」

こう牧村に返した。

「そしてだ。ここで貴様等をだ」

「倒すか」

「覚悟はいいな」

牧村だけでなく二人に対して言ってきた。

「それではだ」

「無論そのつもりだ」

「私もだ」

牧村だけでなく死神も言った。そしてだった。

二人共構えに入った。姿を変える構えにだ。

死神は己の右手を拳にして胸に置き牧村は両手を拳にしてその中指の部分を胸の前で打ち合わせた。そうしてそのうえで、であった。

白い光、青白い光が放たれてだった。二人は変身した。

牧村は髑髏天使に、死神は戦う姿にだ。それぞれなったのだった。

その中で死神はだ。己の中に何かを感じていた。

「これは」

「どうした」

「昂ぶりを感じる」

そうだとだ。牧村に返すのだった。

「私の中でだ」

「戦いを前にしてだな」

「まさか。これは」

「これは」

「貴様と同じなのか」

髑髏天使に顔を見ての言葉だった。

「まさか」

「そうなのかもな。しかしそれがわかるのはだ」

「うむ」

「戦いの中でわかることだ」

そうだという髑髏天使だった。

「貴様自身がな」

「そうだな。それでは行くでしょう」

「行くぞ」

「わかった」

髑髏天使は開いた右手を握り締め死神は右手に持った鎌を一閃させてだ。そのうえでだ。あらためて妖魔に対して対峙するのだった。その妖魔を見るとだ。やはり巨大だった。船を思わせるシルエツトだが。どんな船よりもだ。遙かに巨大だった。

白いその禍々しいまでの巨大な姿を見てだ。髑髏天使はあの最高位の天使の姿になりながらその妖魔に対して言ってみせるのであった。

「貴様の武器はその身体か」

「それだけだと思うか」

「いや」

妖魔の今の問いはすぐに否定した。

「それはない」

「そうだ。私はそれだけではない」

まさにその通りだという妖魔だった。

「それは言っておく」

「口か」

見ればだ。身体その戦端に口があった。黒い空洞がだ。

「そこから」

「そういうことだ。この口でだ」

「喰らうというのか」

死神が妖魔に問うた。

「そしてその他に」

「愚かではないようだな」

妖魔は今の死神の言葉を聞きながら述べた。

第四十四話 妖虫その二十一

「どうやら」

「愚かであればだ」

「生きてはいない」

二人同時に妖魔のその問いに答えた。

「違うか」

「そうだな」

妖魔もこう返してきた。

「それはその通りだ」

「そしてだ」

「今度もまた」

「残念だがそうはいかない」

二人の今の言葉は否定する妖魔であった。

「それはだ」

「では貴様が勝つというのか」

「生き残るといふのだな」

「如何にも」

自信に満ちた返答であった。

「だからこそ今こうして答えるのだ。」

「ではだ」

「どちらが生き残るから決めるとしよう」

二人は言いながら構えてだった。早速だった。

それぞれ左右に跳び妖魔に襲い掛かる。まずはだ。

髑髏天使がだ。右手の剣から炎を放った。

それで妖魔を焼こうとする。しかしであった。

「むっ!？」

「無駄だ」

「無駄だというのか」

「見ればわかる」

そう言っただけで避けることなく炎を受ける。するとであった。炎は巨体に受けられそれで消えた。それで終わりだった。そしてだ。平然とした妖魔の言葉が返ってきた。

「この通りだ」

「巨体故にか」

「そういうことだ。この身体はだ」

また言う妖魔だった。

「私を守る最大の武器だ」

「身体が大きいとそれだけか」

「わかったな。このことが」

「それはわかった」

死神が妖魔の言葉に応える。

「そのことはだ」

「しかしというのだな」

「如何にも。炎が駄目ならだ」

鎌を右斜めに大きく振り被ってだった。そのうえで。

投げた。大鎌は回転しながら妖魔に向かう。そうしてだった。

その巨体を貫きブーメランの様子に返ってきた。死神はその己の鎌を右手で受け止めてだ。構えなおしてそのうえで妖魔に対して問うた。

「これでどうだ」

「どうかと言われてもだ」

「普通の者ならこれで首や胸が飛ぶ」

そこまでの攻撃だというのである。

「当然貴様もただでは済んでいない筈だ」

「普通ならばな」

だが、であった。ここでも妖魔の声には余裕があった。

「そうなっていたな」

「違うというのか」

「如何にも」

こう言ってであった。妖魔のその身体がだ。

切り裂かれ穴になった場所がだ。次第に狭まっていく。そうしてその穴は完全に消えてしまった。何ごともなかったかのようにであった。

その穴が消えてからだ。妖魔は死神に言ってみせてきた。

「この通りだ」

「回復したというのか」

「見事な攻撃だった」

死神のその攻撃の威力は認めていた。

「だが」

「だが、か」

「私を倒せるものではない」

こう死神に告げた。

「残念だがな」

「これで無理とはな」

「私を倒すことは無理だ」

妖魔は断言さえしてきた。

「この巨体を倒すことはだ。そして」

「そして」

「今度は何だ」

「私はただ攻撃を受ける趣味はない」

彼からの言葉であった。

「こうしてな。だからだ」

「来るか」

「貴様から」

「如何にも」

その通りだというのであった。

## 第四十四話 妖虫その二十二

「その攻撃を今から見せよう」

こう言つてであつた。その口からだ。何か得体の知れない液を出してきた。それはねばねばとした粘膜を思わせるものでだ。二人を包もうとしてきた。

二人はそれを見てだ。素早く飛んでその場を去つた。するとだ。粘膜は空間にへばりつきそこをであつた。瞬く間に溶かしてしまつたのだ。

その光景を見てだ。髑髏天使が言つた。

「何もかもを溶かすか」

「これが私の武器だ」

妖魔から返答が来た。

「わかつたな、これで」

「わかりたくはなかつたがな」

髑髏天使は妖魔に顔を戻して告げた。

「わかつたと言つておこつ」

「それは何よりだ」

「空間も何もかもを溶かすか」

「それが私の力だ」

ここでも悠然とした口調の妖魔であつた。

「そしてだ」

「さらにか」

「そつだ。何時までかわせる」

こう二人に問うのである。

「私のこの攻撃をだ」

「最後までかわしてみせよう」

「私もだ」

どちらも言つ。

「そしてそのうえで貴様をだ」  
「倒すぞ」

「どうして倒すつもりだ」

妖魔は自信に満ちた声で二人に返してきた。

「この私を」

「無敵の存在なぞありはしない」

髑髏天使はこうその妖魔に返した。

「そう、決してだ」

「決してだというのか」

「俺は今まで多くの魔物、そして妖魔を倒してきた」

「その中でわかってきたというのだな」

「如何にも。貴様とて無敵ではない」

「そうだというのである。」

「だからだ。ここで必ず倒す」

「面白い。それではだ」

その言葉を受けてだ。妖魔はまたその口を向けてきた。

それでだ。また粘液を放ってきた。

二人は今度は上に飛んだ。それでかわした。

そのうえで髑髏天使は左手のサーベルを左から右に振った。それ

で雷を放った。だがそれも妖魔の巨体には何の効き目もなかった。

「これもか」

「私の巨体はその程度の雷では倒せぬ」

「この程度か」

「そうだ、私を倒すにはまだまだ足りぬ」

「そうだと行ってみせるのである。」

「残念だな」

「いや、わかった」

しかしだった。髑髏天使は今こう言ったのだった。

「その言葉でだ」

「何がわったというのだ」



「やはり貴様は無敵ではない」

このことをまた指摘した。

「そう、その程度と言ったな」

「確かに言った」

妖魔もそれは認める。

「しかしだ。貴様のその力で私を倒せないのも確かだ」

「それはな。だが」

「だが？」

「貴様を倒せることがわかった」

それがだというのだ。

「では。ここでそうするとしよう」

「そうだな。私もだ」

死神もここで言った。

「この鎌で必ず貴様を倒す」

「では来るのだ」

妖魔は二人の言葉を受けてもだった。平然とした声を崩すことはない。そうしてそのうえでだ。また粘膜を放とうと口を向けてきた。

髑髏天使はその妖魔を見据えてだ。ある動きを取った。

左手に持っているサーベルとだ。右手の剣を合わせた。

柄と柄を合わせる。そうしたのだ。

彼のその仕草を見てだ。死神は問うた。

「それは何だ」

「何だ、か」

「そうだ、それは何だ」

こう彼に問うのである。

#### 第四十四話 妖虫その二十三

「一体何をするつもりだ」

「この二つの剣に念を入れてだ」

「うむ」

「あの妖魔に向かって放つ」

そうするというのである。

「それで倒す」

「二つの剣でか」

「一つで駄目なら二つだ」

「二つか」

「普段は右の剣で攻め左のサーベルで防いでいたな」

「それが貴様の戦いだな」

「それを変えてだ。戦う」

それが今の彼の考えだった。

「そうして勝つ」

「勝つか」

「そうだ、勝つ」

勝利への渴望はだ。隠せなかった。

「そして生きる」

「それでか」

「行くぞ、それではだ」

その二本の剣を合わせ念を入れた。するとだった。

剣が一つになった。右手の剣に左手のサーベルが吸い込まれてだ。

それから。

何と剣が巨大なものになっていく。髑髏天使のその身体の十倍程の大きさにまでなった。いや、それよりもさらに大きくなってきていた。

その剣を見てだ。髑髏天使自身が言った。

「この剣は」  
「どうやらそれもだ」  
「それも？」  
「そうだ、貴様の新たな力だ」  
「それだというのである。」  
「その最高位の天使の力だ」  
「これもまた、か」  
「そういうことだ。ではだ」  
「ああ」  
「その力で妖魔を倒すのだな」  
「こう髑髏天使に問うのだった。」  
「そうするな」  
「そのつもりだ。それではだ」  
「ここは任せた」  
「任せるのか」  
「貴様のその剣を見ればだ」  
「それならばだというのだ。」  
「そうさせてもらうしかあるまい」  
「わかった。それではだ」  
「見せてもらおう」  
「死神は言った。」  
「貴様のここでの戦いをな」  
「この戦いはだ」  
その巨大な剣を両手で持ったの言葉である。  
「これで終わる」  
「終わるといふのか」  
下から妖魔の声がしてきた。  
「貴様が倒れてだな」  
「いや、逆だ」  
「逆か」

「倒れるのは貴様だ」

髑髏天使だというのである。

「いや、貴様達だ」

「私もか」

「どちらも倒れる」

そうだといいのだった。そしてだ。

また攻撃を繰り出すとする。その粘液をだ。

今度こそ二人を完全に溶かそうとする。しかしだ。

髑髏天使はその剣を振り被った。

そこから思いきり振り下ろしてだ。妖魔に向かって投げた。

「これならばだ」

「私を倒せるというのか」

「そうだ、倒せる」

まさにそうだといいのであった。投げてから。

「貴様はこれで終わる」

「どうか、それは」

「いや、終わる」

髑髏天使の言葉は変わらない。そしてだ。

## 第四十四話 妖虫その二十四

剣は凄まじい唸り声をあげてだ。妖魔に向かう。

妖魔は避けようとしなない。己のその強さに絶対の自信を持っていることがここからもわかる。だが、だった。

「ぬっ!？」

剣は妖魔の身体を貫いた。そのまま突き刺さる。まさに串刺しだった。

その串刺しになった妖魔にだ。髑髏天使は言った。

「こういうことだ」

「ぐう……」

「これで終わりだな、貴様も」

「まさかとは思った」

妖魔は串刺しになってもまだ生きていた。そのうえで言葉を出してみせた。

そうしてだ。彼に対して言うのだった。

「だが」

「だが、か」

「この通りだ。こうなってはだ」

「負けを認めるな」

「死ぬとわかっていてそれを認めないことはしない」

そうであるというのである。

「そういうことだ」

「潔いな」

「事実を言っているだけだ」

「それだけか」

「そうだ、それだけだ」

妖魔の言葉は素っ気無い。

「そしてだ」

「そして。何だ」  
「貴様は私に勝った」  
「このことを言ってきたからだだった。」  
「そしてこれからも戦うな」  
「それしかないしな」  
「ならば戦え。最後までな」  
「それも最初からそのつもりだ」  
「だが。貴様はやがて敗れる」  
「敗れるか。俺が」  
「我等混沌の中に潜む神々」  
「この言葉が出て来た。」  
「その神々によって敗れることになる」  
「混沌の神々か」  
「地水火風」  
「その四つがまず話された。」  
「そして混沌の司祭」  
「あの黒い男か」  
「ナイアーラトホテップ様もおられる。あの方々には勝てはしない」  
「勝手な推測だな」  
「推測ではない。事実だ」  
「俺からしてみればそれは推測だ」  
「青白い炎に包まれる妖魔を見据えて告げる。」  
「完全にな」  
「そう思うのなら思っておくことだ」  
「まだ言うことはあるか」  
「ない」  
「妖魔の全身は青白い炎の中に消えようとしている。そしてだった。」  
「その炎の中に消えながら。彼は言った。」  
「ではな」  
「消えるか」

「混沌に帰るとしよう」

これが彼の言葉だった。

「それではな」

「帰るか」

「そうだ、帰る」

そして最後の言葉は。

「混沌の心地よい闇の中で眠ろう」

この言葉を最後にして消えたのであった。そしてだ。

二人は次の瞬間には通天閣の下に戻っていた。それを見てだ。

元の姿に戻った。その前にだ。

男がいた。そして二人に対して言ってきた。

「約束は守った」

「守ったか」

「まさかとは思っていたがな」

「私は己の言葉は守る」

こう二人に断言した。

「何があるうともだ」

「混沌の中にもか」

「そうだ。それは言っておく」

余裕のある笑みと共に話した。

「これでわかったな」

「わかったと答えておこう」

死神がその彼に返した。

「しかしだ」

「しかしか」

「次だな」

死神はこう言うのであった。

「次の戦いの時にまた、だな」

「また会おう。どうやら貴様もだ」

「私か」

「変わってきているな」  
死神を見ての言葉である。  
「それもかなりな」  
「変わってきているか」  
「髑髏天使だけではない」  
また言ってみせた。



## 第四十四話 妖虫その二十五

「そうか。面白いことになりそうだな」

「どう変わるのか私にもわからない」

「自分自身でもか」

「しかし、それは先程の戦いで既に感じていた」

「そうだったというのである。戦いのはじまりの時のあの感触をだ。思い出しそのうえで男に返ししながら述べた言葉であった。それだつた。」

「不思議な感覚ではあるな」

「そしてその感覚をさらに実感することになるだろう」

「間も無くだな」

「そうだ。そしてその時こそだ」

「戦いはさらにか」

「そういうことになる。また妖魔を出す」

男は告げた。

「楽しみにしていることだ」

「ではな」

牧村は彼に別れの言葉を告げた。

「また会おう」

「そうだな。まただ」

こう話してだった。彼等は別れた。

男は姿を消してだ。後に残るのは二人だけだった。

その牧村がだ。死神に言葉をかけた。

「さて」

「今日はこれで終わりだな」

「そうだな。そしてだが」

「そして、か」

「貴様もまた変わるか」

問うのはこのことだった。

「そうなるか」

「おそらくな。だがどう変わるかはだ」

「まだわからないか」

「自分でもわかりはしない」

こつ牧村に言うのだった。

「果たしてだ」

「変わることは悪いことではない」

「貴様が言うつと説得力があるな」

「そうだろう。俺はこれまで幾度も変わってきた」

髑髏天使としてである。だからこそ言えることであつた。

「それは決してな」

「わかつた。それではだ」

「恐れないことだ」

こつ言つてであつた。己の前にサイドカーを持って来てだつた。

それに乗る。するとだつた。

死神もだ。己の前にハーレーを盛ってきた。そしてそれに乗つた。

そのうえでだ。牧村に言つた。

「これからどうする」

「今日はこれで休む」

そつするといふのであつた。

「ではな」

「そうか。では私もか」

「休むか」

「休ませてもらう」

こつ言つて彼等は別れた。死神はそのハーレーで道を走りながらだ。目玉と話をしていた。

「ねえ」

「何だ」

目玉の方から声をかけてきたのだった。

「夏もそろそろ終わりだね」  
「その話か」  
「そうだよ、夏もね」  
「長い夏だったな」  
「うん。牧村さんの夏休みはまだ続くみたいだけれど」  
「大学の休みは長いのだな」  
「日本の学校は大体休みが長いね」  
「こう話す目玉だった。」  
「その中でも大学は特にね」  
「そうかもな。しかし」  
「しかしか」  
「それは決して悪くない」  
「死神の言葉だ。」  
「人の世界の摂理としてな」  
「そうなんだ」  
「よく働きよく休むだったな」  
「うん」  
「それでいい」  
「何かえらく穏やかな考えになったね」  
「そうか」  
目玉の言葉でだ。あらためて自分に気付いた彼だった。  
そしてだ。こう言ったのであった。  
「そういえばな」  
「うん、これまでそんなこと言ってなかったよね」  
「とてもな。興味もなかったしな」  
「君変わったよ」  
「変わったか」  
「うん、変わったね」  
また彼に告げた。  
「何もかもがね」

「そうか」

「自分で自覚はしていないのかな」

「していない」

まさにそうだというのである。

「私は私だ」

「そう思っているけれどね、君は確かにね」

「そうか。それではだ」

「どうするの？」

「その変わった私を受け入れるとしよう」

これが死神の返答だった。

「それではな」

「そこも変わったね」

「それもか」

「うん、いいようにね」

そんな話をしながらだった。死神は彼が本来いる場所に戻るのだった。それに目玉も同行する。彼もまた何かが変わろうとしていたのだ。

#### 第四十四話

完

2010・9・23

## 第四十五話 新生その一

髑髏天使

### 第四十五話 新生

死神はだ。この時彼の本来いる世界にいた。

そこは様々な色の花々があつた。それが咲き誇つてだ。その中で周りにいる彼等に言うのだった。

「私もだ」

「どうしたのだ」

「何かあつたのか」

「いや、神もか」

彼だけではないとだ。その彼等に話す。話すその周りは花びらが漂っている。かぐわしい香りもまたその場に立ち込めているのだった。

その中でだ。彼は話し続ける。

「私達もまた」

「私達もというと」

「何が言いたいのだ」

「いきなり」

「私達もまた成長するのだろうか」

彼が周りに問うのはこのことだった。

「神であるうともだ」

「さてな」

「それはどうかかな」

周りの返答はまずは素っ気無いものだった。

「新たな武器は手に入れられる」

「力もまた」

「そつしたものはだ」

「だが」

しかしというのであった。

「成長するとなるとだ」

「それはどうか」

「人は成長する」

このことはわかっていた。確かにだ。

「それはな」

「しかしだ」

「しかしか」

死神が問い返した。今の言葉を出した神にだ。

「神はというのか」

「そうだ、我々は最初から何かを司っている」

「最初から完成されているな」

「そうだな」

他の神々もその神の言葉に頷く。そうしてだった。

結論が出された。それは。

「神は成長しないな」

「うむ、新たな司るものは備わるかも知れない」

「しかしだ。その司るものを行い操る力は最初からある」

「それならばだ」

こう死神に対して話して行ってであった。

死神もそれを聞いてだ。そのうえで述べた。

「では私はだ」

「どうした」

「何かあったのか」

「新たに司るものができたのか」

彼等の言葉を聞いてだ。こう考えるのだった。

「そういうことになるのか」

「おそらくは」

「そうなる」

「この場合はだ」

「では」

死神は彼等の言葉を聞きながらさらに考えていった。また言った。

「私がこれから司るものは何だ」

「それか」

「それは何か」

「そういうことか」

「それについて考えているのか」

「私は既に死を司っている」

それは既にであった。

「最早な。そしてだ」

「その他に司るべきもの」

「それは何か」

「何なのかだな」

「一体」

「何がないかだな」

死神はここで考える。このことをだつた。

「ないものは」

「戦いは私が司っている」

神々の一人が言った。

「法もだ」

別の一人が言った。

「私だ」

「他にないものはあるか」

「さてな」

「死は貴殿だしな」

その死神である。

## 第四十五話 新生その二

「他にないものと言われてもな」

「これと違って見当たらないが」

「しかし何かあるかも知れない」

「そうだな」

周りの神々はこう話す。しかしそれが何かまではわからなかった。今彼も己がわからなくなってきた。それは牧村とはまた違った意味においてだ。

その牧村はだ。またしても博士と話していた。今度は図書館においてだ。

市庁の傍の図書館の中でだ。彼等は話すのであった。

「ふむ、剣を一つにしたら巨大なものになったのじゃな」

「それで勝てた」

こう博士に話す。二人は今日も向かい合って座っている。

「その巨大な剣の力でな」

「成程のう」

「これが熾天使の力の一つか」

「どうやらそうみたいじゃな」

博士はこのことを否定しなかった。

そしてだ。こう彼に話してきた。

「今はアボリジニーの伝承を調べておつてじゃ」

「そこにも髑髏天使のことが書いてあつたか」

「左様じゃ。そこに丁度じゃ」

「熾天使の力のことがか」

「書いてあつた」

「そうだとするのである。」

「今解読中じゃ」

「そうか」



「左様、しかしものを変えられる力か」

「己がその時に使うに相応しい形にか」

「変えられるようじゃな」

「ではだ」

ここで牧村は言った。

「剣以外のものも変えられるのか」

「そうじゃろうな」

博士は牧村の今の言葉に応えて頷いたのだった。

「確かなことは言えぬがな」

「そうなのか」

「これはまた凄い力じゃな」

博士はまた言った。

「熾天使はそれだけで他の全ての天使の力を使える」

「そうだな」

「しかもこれまでよりも遥かに強い力でじゃ」

「使えるというのだ。」

「炎も風も。何もかもをな」

「それだけのものがあるか」

「左様、金色の六枚羽根の力は伊達ではない」

熾天使のその姿も話に出すのだった。

「まさに最高位の天使じゃよ」

「そしてその力はまだあったのか」

「熾天使になつた者は僅かじゃ」

博士は言った。

「これまでの長い歴史でもな。ほぼおらん」

「だから余計にわかつていることは少ないか」

「申し訳ないが今解読中じゃ」

「時間はかかるか」

「うむ、少し待ってくれ」

まさにその通りというのであった。

「暫しな」

「わかった。では待たせてもらおう」

「そうしてもらおうと助かる。さて、それではじゃ」

「それでは」

「そのアポリジニーの伝承でじゃが」

「このことへの話だった。それを続けるのであった。」

「一つ面白いことが書かれておった」

「髑髏天使のことか」

「いや、死神のことじゃ」

「それだというのだ。」

「死神のことじゃよ」

「あいつか」

「その死神の系列の神々のことが書かれておった」

「どういう話だ、それは」

「神は既に完成されたものじゃ」

「死神が同胞達と話したことそのままである。」

「しかしじゃ。新たに司るものができればじゃ」

「その時にどうなる」

「さらに強くなる」

「こう牧村に話した。」

「そうなるとな。書いてあったぞ」

「そうか」

「左様じゃ。面白い話じゃな」

「そうだな。あいつは前の戦いの時に言っていた」

「何とじゃ?」

「何か奥底から感じるとな」

「博士にこのことを話すのだった。」

## 第四十五話 新生その三

「何かが変わりそうだな」

「ふむ、ではそれが」

「あいつは新たに何かを司るか」

「そうかも知れぬな」

「ではそれが何か、か」

牧村はさらに踏み込んで考えた。

「それが問題か」

「そういうことになるな。混沌の神々にまつわるものだと思うぞ」

「混沌か」

「混沌と戦うものかのう」

博士は首を捻りながら言った。

「それではないのか？」

「混沌とか」

「混沌と戦うとすればじゃ」

博士の言葉が続いた。

「この場合はじゃ」

「何だ」

「秩序か」

それではといたのであった。

「それかのう」

「秩序か」

「うむ、混沌の逆はやはりそれじゃろっ」

博士は牧村にまた話した。

「そして戦うとすればじゃ」

「秩序か」

「それぞれの神々の系列によって様々な司るものがある」

「そうだな。それは知っている」

牧村も神話について無理という訳ではない。だとすればだ。己の中にある知識を整合させてだ。こう答えることもできたのである。

「太陽神にしてもだな」

「ギリシアではヘリオスからアポロンになったりしておるな」

「ああ」

「そして重要な神じゃ」

「確かにな」

「しかし至高神ではない」

博士はこつも話した。

「しかしエジプトではじゃ」

「ラーか」

エジプト神話における極めて重要な神の一つである。その司るものが太陽であるのだ。

「そうだったな」

「太陽神じゃ」

まさにそれだというのだ。

「その司るものは主でもある」

「ファラオか」

「後継者であるホルスも然りじゃ」

「至高の神として王もだな」

「王権も司つておる」

「ギリシアには王権を司る神と言えば」

牧村は考えてみた。しかしこれと違ってであった。

見たらなかつた。こう言うだけだった。

「三つの世界のそれぞれの主神達か」

「ゼウス、ポセイドン、ハーデスじゃな」

「その三柱だったな」

「確かにそれぞれ三つの世界を治めておる」

ゼウスは天界、ポセイドンは海界、ハーデスは冥界をである。それぞれ治める世界が違うせいかわ彼等は兄弟でありながらそれぞれあ

まり仲がよくない一面もあつたりする。

「しかし人の王権はじゃ」

「司つてはいないか」

「そこがギリシアとエジプトの違いになつておる」

「成程な」

「そういつことじゃ。若しかするとあの死神のいる神族ではじゃ」

「これまで秩序を司どる神はいなかった」

牧村はこのことに察しをつけた。

「そういつことか」

「可能性はある。それはな」

「そうなのか」

「うむ、それでじゃ」

「ああ、それでか」

「死神は若しかするとそれも司るようになるかも知れぬ」

こう牧村に話した。

「若しかするとじゃが」

「そうなるか」

「左様じゃ。さて」

「ああ」

「若し死神が新たな司るものを手に入れれば」

話はその時にどうなるかということに移っていた。博士が動かし  
たのだ。

「その場合じゃがな」

「その時はどうなる」

「強くなる」

まずは一言で答えた博士だった。

#### 第四十五話 新生その四

「神の強さはその司るものの重要さと」

「まずそれか」

「それとその数じゃ」

「司るもののその数が」

「その二つで決まるのじゃ」

「そうなのか」

「例えばゼウスじゃ」

またギリシア神話の話になった。

「天界の主としてじゃ」

「天界を治めているな」

「空を司つておる」

まずはそれであつた。

「そして雷と。繁栄や秩序やそういったものもじゃな」

「重要なものばかりだな」

「だから力が強いのだ」

まさにそれによつてとこののである。

「その質と数によつてじゃ」

「死神は死を司っている」

「いうまでもなく重要じゃな」

「確かにな」

「そして秩序じゃ」

仮定であるがあえて断定して話してみせたのだつた。

「それもまた重要じゃな」

「秩序。この世の摂理」

「左様、これもまた重要じゃ」

「死と秩序か」

「二つの司るものができれば」

また言う博士だった。

「それだけ強くなるからのう」

「だからか」

「それでじゃ」

「それで、か」

「死神は強くなる」

こう彼に話した。

「君と同じようにじゃ」

「俺とか」

「左様、しかしそれはじゃ」

「それは？」

「君にとってもいいことじゃ」

そうだというのである。

「混沌の勢力との戦いはこれからさらに激しくなる」

「それは間違いないな」

牧村もそう呼んでいたのだった。

「さらに強い妖魔が出て来るな」

「そうじゃ。君だけでなく死神が強くなれば」

「こちらの戦力があがる」

「だからか」

「うむ、それでじゃ」

「今度は何だ」

「これから何か食べるのじゃな」

この話になった。

「それで何じゃ？」

「そうだな。そう言われてもな」

「すぐには思いつかぬか」

「何がいい」

博士に問い返す程だった。

「それで」

「そうじゃな。お好み焼きはどうじゃ？」  
「それか」

「そうじゃ。お好み焼きじゃ」  
「それだというのである。」

「お好み焼きをじゃ。どうじゃ」  
「そうだな。いいな」

「大阪のお好み焼きじゃ」  
「本場のものを食べてか」  
「やはりいいものじゃ」

博士はもうそれにするつもりだった。顔が完全に笑っている。それが何よりの証だった。それでさらに話をするのであった。

「本場のお好み焼きはな」  
「今思ったが」

牧村はここでふとした感じで博士に言った。

「お好み焼きだな」  
「そうじゃが」

「歯は大丈夫なのか？」  
「こう博士に問う。」

「そちらは」  
「わしの歯か」

「百十歳だったな。確か」  
「まあその辺りじゃ」

時際の年齢はだ。博士自身も曖昧になっているところがあった。



## 第四十五話 新生その五

「百二十かも知れんが」

「とにかくその年齢になつてもだ」

「うむ」

「齒は大丈夫なのか」

あらためて博士に尋ねた。

「そちらは」

「ああ、大丈夫じゃ」

博士はあつさりと答えた。

「それはな」

「そういえば何でも食べるな」

「齒は一本も欠けておらんよ」

かかか、と笑いながら話す博士だった。

「まさに一本もじゃ」

「そうなのか」

「髪の毛はこの通りじゃしな」

その長いぼさぼさとした髪を指差しもした。確かに真っ白になつているがそれでもだった。犬のその様にもさもさとさえしていた。髭もだ。

「目もじゃ」

「そうしたところは老いてはいないか」

「全くな」

そつだというのである。

「だからお好み焼きもじゃ」

「大丈夫か」

「さて、とびきり大きなものを焼いてもらおうか」

大きさも言うのであった。

「色々入れてもらつてな」

「色々か」  
「海老に烏賊に貝にじゃ」  
「海のものばかりだな」  
「そこに豚もじゃ」  
さらに言う博士であった。  
「とにかく何でも入れてもらってじゃ」  
「豪勢にいくか」  
「君もそうするじゃろ」  
牧村にも問うてきた。  
「そうではないのか？」  
「そこまでは考えていなかった」  
「まだ、か」  
「今さっきまで何を食べるのかもまだ考えていなかった」  
「それでなのか」  
「しかし。お好み焼きだな」  
それはもう決まっていた。二人の中では。  
「それならだ」  
「どうするのじゃ？それで」  
「モダン焼きがいいか」  
彼が言うのはこれだった。  
「それにするか」  
「モダン焼きか」  
「久し振りにそれを食べたくなつた」  
「それもよいのう」  
「ソースに鰹節をかけてだ」  
「それか」  
「うむ、それじゃ」  
こう笑顔で話す博士だった。  
「あと生姜に青海苔も外せぬのう」  
「お好み焼きにはかけるものが多いからな」

「おっと、忘れてはならん」

「ここでまた言う博士だった。」

「マヨネーズもじゃな」

「そうだな。それもだな」

「うむ」

「忘れてはならない」

「マヨネーズがあるのとないのとでな」

「味が全く違うのがお好み焼きじゃ」

かなりのこだわりをこれでもかと思わせている。しかも牧村もそれに乗っている。

「だからじゃな」

「そうだな。それではだ」

「うむ、行くでしょう」

こう話して実際にお好み焼きを食べに行く。移動は牧村のサイドカーを使ってであり博士は側車に乗っている。そうしてであった。そして来たのはだ。西成だった。

その天下茶屋に入る。人がやけに多い場所だ。

その中学校の前でだ。二人はサイドカーを降りたのだった。

## 第四十五話 新生その六

見れば中学校の塀の上には鉄条網がある。随分と物々しい。博士はその鉄条網を見て牧村に話した。

「この中学校じゃったな」

「ああ、大体察しはつく」

「君もか」

「この中学校出身だったな」

言葉に忌まわしいものを含ませての言葉だった。

「あの兄弟は」

「そうじゃ、あの馬鹿兄弟じゃ」

「カリスマの家系と言っているあの愚劣な一家のだな」

「左様、あの三人はこの中学校の出身じゃ」

「そうだったな。生まれはここだったな」

「今では地元の恥じゃよ」

何故そうなったかはその連中の品性と知性、そして人格故である。テレビがどれだけ持て囃してもだ。生来のそうしたものは隠せないのだ。

「見事なまでにのう」

「下衆は何処にでもいる」

牧村は一言で言い捨てた。

「そのまま滅んでしまえばいいのだがな」

「そうじゃな。それでじゃが」

「お好み焼きだな」

「ここから少し先に行ったところじゃ」

そこだというのであった。

「そこにその店はある」

「そうなのか」

「大阪は何といってもお好み焼きの本場じゃ」

今更言うまでもないし既に言っていることだがそれでも言う博士  
だった。

「しかもどちらかというところじゃ」

「どちらかというところ」

「洒落た場所よりこうした場所の店の方が美味しいのじゃよ」

「そうしたもののはか」

「何も気取って食うものではない」

「こつも話すのだった。」

「だからじゃよ」

「そうだな。それは神戸でも同じだな」

「あのぼっかけカレーがあるじゃよ」

「ああ」

神戸の長田名物である。筋肉を使ったカレーだ。

「あれも洒落た店で食べても美味しくないじゃろ」

「長田の店や家で食べてこそだな」

「そういうことじゃよ」

まさにそうだと言う博士だった。

「だからじゃ。それでな」

「ああ、それでだな」

「こうした場所の店がいい」

これが結論だった。

「それでその店じゃが」

「何処だ、それで」

「ここから少し行った商店街にある」

そこだというのである。

「他にもいい店が沢山ある場所じゃよ」

「そんなに」

「団子もあればうどんもあるしラーメンもある」

中々多彩と言えば多彩である。

「コロッケに天麩羅にホルモンもじゃ」

「たこ焼きもだな」  
「当然じゃ。勿論たこ焼きもある」  
「そしてそのお好み焼きもだな」  
「何ならじゃ。お好み焼きの他にも食べるか？」  
「牧村に顔を向けて問うた。身長差のせいで見上げる形になっている  
他のも」  
「そうだな。悪くないな」  
「とにかく食べられるうちに食べることにじゃ」  
「博士は言った。」  
「そうしなければ後で後悔するぞ」  
「過去にそういうことがあったのか」  
「いつもじゃ」  
「いつもか」  
「後で食べようと思ったものは必ず誰かに食べられる」  
「博士の語るその顔が寂しいものになる。」  
「そうして悔しい思いをしてきているからじゃ」  
「食べるのは妖怪達か」  
「それと家族じゃ」  
「敵は一つではなかった。」  
「学校にも家にもおるのじゃよ」  
「食べる相手はか」  
「そうじゃ、何処にでもおる」  
「博士は泣きそうな顔になっていた。」

## 第四十五話 新生その七

「それこそな」

「そういえば博士の家は」

「やしゃ孫の家族までおるぞ」

「一体家に何人いるんだ？」

「五十人はおる」

そこまできるといふのである。

「常に家におるだけでじゃ」

「それはまた多いな」

「今度はじめてのひひひ孫ができる」

「はじめてのか」

「まさかもう産まれるとは思っておらんかった」

自分でも想定範囲外というのであった。

「しかしのう」

「子供が多かったのか」

「まず二人できるじゃろ」

具体的な話をはじめたのだった。

「それが四人、孫じゃな」

「曾孫が八人になり」

「常に嫁さんや旦那さんが来る」

「そこにやしゃ孫の家族もか」

「どうじゃ、それで五十は楽に超えるぞ」

「多過ぎないか、それは」

「家族は増えるものじゃ」

今ではあまりそうは言えないがだ。博士の家では違つたのだった。

「凄いで。それでじゃが」

「家は満員か」

「アパート、いやマンションじゃな」

「こう言い換えました。

「メゾン永田というマンションを「一つ丸」と借りておる」

「そこが博士の家か」

「各部屋にバスやトイレがある」

「中々いい条件の部屋か」

「冷暖房も完備じゃ。空き部屋も全部使ったのう」

「それで家賃は」

「いや、もう買ったのじゃよ」

「そうだといいのだった。

「マンション丸ごとな」

「そうなのか」

「借りたというよりは買ったじゃな」

自分の言葉はここで少し訂正したのだった。

「そうなるのう」

「そうか。しかし五十人の家族か」

「子供も全部生きておるぞ」

「お子さんは幾つだ？」

「上は九十で下は八十七じゃ」

かなりの高齢である。

「兄妹でのう」

「そうなっているのか」

「それぞれの奥さんや旦那さんも健在じゃよ」

「長生きだな」

「わしの家系は代々長寿なのが自慢じゃ」

博士はここでは嬉しそうな顔を見せた。

「それでじゃ。子供達も孫達もずっとびんびんしている」

「家系でそうなのはわかるが」

牧村はここで言い加えてきた。

「しかしだ」

「しかし？」



「博士の奥さんも百歳は超えているな」

「百十じゃったかな」

何かを思い出すような顔をして牧村に述べた。

「確かな。それだけじゃ」

「それだけか」

「うむ、妻も長生きで何よりじゃ」

「長生きは伝染するののか」

その博士の奥さんや子供達の配偶者のことを聞いての言葉である。

「若しかして」

「いや、それはないじゃろ」

「しかし何故そこまで長生きする」

牧村はこのことに素朴な疑問を感じていた。

「有り得ないことだが」

「そういえばそうじゃな」

言われてこのことに気付く博士だった。

## 第四十五話 新生その八

「何故じゃろうか」

「食事に関係あるのか」

「まあ薬は飲んでおる」

「話がここで変わった」

「そのせいかのう」

「薬か」

「丹薬じゃ」

「それだというのである」

「それを飲んでおるがな」

「丹薬か」

「知っておるな」

「不老不死の薬だったな」

「こう返す牧村だった」

「確か」

「左様、無論水銀等は入れてはおらぬ」

「純粋な丹薬か」

「不老不死にはならんが健康になる」

「そうなるというのだった」

「それは飲んでおるがな」

「ではそのせいだな」

「牧村はここで謎を解いたのだった」

「それでか」

「そうなるかのう、やはり」

「なると思う。しかし水銀を入れないのはいいことだな」

「かつては入っておったからな」

「始皇帝だな」

「始皇帝の死因の一つじゃ」

実際にそう言われている。

「他には激務による過労もあつたがな」

「しかし水銀はやはり大きな原因だな」

「それは間違いない」

「そうだといいのだった。」

「だからそういうものは入れてはおらんぞ」

「当然と言えば当然だな」

「うむ」

こう返す博士だった。

「だからそういうものは入れてはおらん」

「では何を入れている」

「無論身体にいいものばかりじゃ」

「具体的に言えば」

「大蒜に」

最初はそれだった。

「それと干し椎茸に高麗人参にじゃ」

「そういうものか」

「他にはスツポンのエキスも入れておる」

これも来た。

「ママシもな」

「確かに身体にいいものばかりだな」

「そうしたもので作った丹薬を飲んでおるからな」

「そしてそれだけではないな」

「わかるようじゃな」

「一つのものだけでは長寿は得られない」

「牧村はこのことを指摘してみせた。」

「多くの要因があつてこそだ。違うか」

「それもその通りじゃ」

博士自身もそのことを認めた。

「無論それだけではなくじゃ」

「他には何だ」

「十分な睡眠と」

「これもあるというのだ。」

「あまり怒らないことじゃな」

「それもか」

「不摂生にストレスが一番よくない」

「よく言われることをだ。博士も言うのだった。」

「だからのう」

「それでか」

「左様じゃ。とにかくそういうことをしてきてじゃ」

「長生きをしているか」

「そういうことじゃ。充分にな」

「こつ牧村に話すのだった。」

「そしてお好み焼きを食べながらだ。また話した。」

第四十五話 新生その九

「お好み焼きもじゃ」

「身体にいいのか」

「いいぞ」

まさにそうだと返した。

「色々なものが入っておるな」

「何でも入れられる」

牧村もそれに応えて話す。

「だからお好み焼きだからな」

「例えば烏賊に海老に貝じゃ」

博士が自分のお好み焼きに入れてもらって食べているその具だ。

「どれも身体にいい」

「ああ」

「そうしたものをたっぷり食べるのじゃ」

「身体にいいものをたっぷりか」

「しかもバランスよくじゃ」

言葉は少し付け加えられた。

「食べるのじゃよ」

「基本だな」

「基本が大事じゃ」

「こつ返す博士だった。」

「それこそがだ」

「基本か」

「君にしるそうじゃよ」

牧村を見て問い返す。

「違うか」

「その通りだ」

「髑髏天使として。基本がなければ」

「死ぬ」

返答は短かったがその通りだった。

「それでだ」

「そうじゃな。健康も同じじゃ」

「基本か」

「それをしていなければじゃ」

「長生きはできないか」

「簡単なことでも続けるのじゃよ」

何処か説教めいていたがそれでも話す博士だった。

「さすればじゃ」

「健康になる」

「左様」

まさにその通りだという。

「百歳まで生きられるのじゃ」

「俺もか」

「うむ。癌とかもな」

「それが怖いな」

「何とかなるのじゃ」

「なるか」

「色々と難しい病気じゃがな」

博士もそれは否定しなかった。

「癌で死ぬ者は多い」

「それは否定しないか」

「それも注意すればじゃ」

「何とかなるか」

「注意しても駄目な時はある」

「こつも言いはした。」

「しかしそれでもじゃ」

「注意すれば違つか」

「うむ、違つ」6

博士はこう話す。

「癌はとにかく注意じゃな」

「博士の家系は癌はないか」

「今のところはない」

「そうだといいのだった。」

「白血病もな」

「それもか」

「白血病は血液の癌じゃ」

よく言われることだ。それで非常に恐れられている病気でもある。

「他には外国に行った時には」

「その時は伝染病か」

「エボラやデング熱だけではないからな」

「まだ天然痘やペストもあるか」

「完全にはな。消えてはおらん」

「天然痘もか」

「うむ、たまにあつたりする」

「そうだといいのである。」

「だから要注意じゃ」

「ペストは聞いていたがな」

「あれもまだあるからな。それも欧州だけではないからな」

「他の国でも流行っていたのか」

「不潔ならばな。何処でも流行るものじゃ」

「鼠の菌がペスト菌だ。つまりペストは鼠からなのである。」

## 第四十五話 新生その十

「あの頃の欧州は非常に不衛生だったからのう」

「道の端にゴミや糞尿が捨てられていてか」

「そこを鼠が走り回ってじゃ」

「そしてペストを流行らす」

「そういうことじゃ」

まさにそれだというのだった。

「そういうことだ」

「そうだったな。つまり鼠か」

「衛生的にしておくのも大事じゃよ」

博士はこのことも注意した。

「わしはそれについては五月蠅いつもりじゃ」

「医者としてか」

「左様じゃ」

牧村の今の言葉に大きく頷いてみせる。

「だから言えるのじゃよ」

「医者だからか」

「だから食べ物にも気をつけておるのじゃ」

「しかし。それにしては」

「それにしては？」

「甘いものを食べ過ぎではないのか」

牧村は博士のこのことを注意した。

「それもかなり」

「ああ、それか」

博士も牧村のその言葉に返してきた。

「それじゃがな」

「それはいいのか」

「これでもちやんと気をつけておる」



「そうだといいのだった。」

「糖尿病についてもわかっておるからな」

「本当か？」

「嘘について何になるのじゃ」

博士は言った。

「わしが糖尿病になるだけじゃぞ」

「それはその通りだな」

「自分の身体は自分で何とかせんといかん」

「そうしなければ」

「自分が身体を壊す」

そうなってしまうというのである。

「だからじゃよ」

「その通りだな。それは俺もだな」

「君の場合はじゃ」

「どうなのだ、俺は」

「とにかく食べることじゃ」

そうすべきだというのである。

「今よりも食べていい位じゃよ」

「そこまでか」

「普段のトレーニング、それに戦い」

「その二つの為か」

「左様じゃ、栄養だけでなくカロリーもじゃ」

「必要か」

「どうやら髑髏天使の姿になると」

博士の目が光った。髑髏天使になると尚更であった。

「相当な体力を使うようじゃしな」

「確かにな」

牧村自身もだ。それは実感していた。

だからこそだ。今こう話すのだった。

「戦いの後と比べるとな」

「全く違うのじゃな」

「かなりの疲れを感じる」

実際にそうだというのだった。

「どうもな」

「そういうことじゃ。だからじゃ」

「食べることか」

「今の階級はとりわけじゃ」

「あらゆる力を使えるようになればそれだけか」

「体力を浪費する。そして下手をすれば」

その時についてもだ。牧村に話すのだた。

「その時にやられてしまうからじゃ」

「わかった」

牧村は博士のその言葉に頷いだ。そして言うのだった。

「それではだ」

「よく食べることじゃ」

博士は言った。

第四十五話 新生その十一

「よいな」

「わかった。そうさせてもらおう」

「とにかく食べないと駄目じゃ」

博士の今度の言葉は強調だった。

「それが全てのはじまりじゃ」

「そういうことだな。ではだ」

「うむ」

「もう一枚もらおう」

「こう来た。」

「もう一枚な」

「食べるのか」

「それとサイダーも貰おうか」

「炭酸飲料はいけるのじゃな」

「コーラも好きだ」

そちらもだというのだった。

「酒以外ならいける」

「そういえばそうじゃったな、君は」

「では博士の分も頼むぞ」

「うむ、頼む」

笑顔で応える博士だった。

「お好み焼きにはやはりじゃ」

「サイダーか」

「若しくはコーラじゃな」

博士もそれは同じであった。

「ビールもよいがのう」

「ビールか。ではよかったら」

「いや、今はいい」

それは断るのだった。

「遠慮しておく」

「そうなのか」

「昼から飲むのも何じゃ」

まずはそれを理由にした。

「それにじゃ」

「それに？」

「まだ研究することがある」

これも理由であった。

「だからじゃ。止めておく」

「研究を優先させるか」

「飲んでまともな研究はできん」

博士はきっぱりと言い切った。

「少なくともわしはじゃ」

「その辺りはドイツ人やイタリア人とは違うか」

「朝からビールやワインをごくごく飲めたら違うのじゃろうが」

その場合はというのである。

「しかしわしはそれは無理じゃからな」

「ドイツやイタリアに行ったことはあったのか」

「何回かな。それぞれあった」

そうだったというのである。

「しかし。その時も飲むのは夜にじゃ」

「朝や昼にはか」

「飲まなかった」

そうだったというのである。

「決してな」

「成程な。研究に差し支えるからだな」

「その通りじゃ」

こんな話をしながらお好み焼きを食べる二人だった。牧村はそれを食べ終えて博士と別れてまたトレーニングを開始した。その日は

それで終わった。

だが次の日だ。不意に目覚めるとだ。

まだ四時だった。暗い。しかしである。

胸騒ぎがしてだ。着替えて外に出た。するとであった。

屋敷の外にであった。男がいた。朝がはじまるうとする世界の中でだ。漆黒の姿をそこに見せて悠然と立っていたのである。彼の前に。

そのうえでだ。静かに口を開いてこう言ってきた。

「はじめるとするか」

「断るカードはないな」

「貴様は最初からそれを持っているのか？」

「いや、持っではないない」

これが牧村の返答だった。

「俺もな」

「そういうことだ。それではだ」

「場所は何処だ」

牧村が問うたのはそれについてだった。

「一体何処だ」

「今度はこちらの世界だ」

「そうか、そこか」

「ついて来るがいい」

こう牧村に言ってだった。踵を返したのだった。

第四十五話 新生その十二

「そこまでな」

「わかった。それではだ」

牧村の前にサイドカーが来た。彼はすぐにそれに乗った。

そのうえで進む。サイドカーは全速力だった。優に五百キロは超えている。しかしその前を歩いて進む男はとうとうとであった。

何とだ。歩いているのにだ。サイドカーから一定の距離を保ち続けれていた。

そしてそのうえでだ。ある場所に来た。そこは。

「ここか」

「戦いの場所には相応しいな」

牧村に身体を向けなおしてきたの言葉だった。

「そうだな」

「確かにな」

牧村は己の右手を見た。そこにはだ。あの大阪城の見事な天守閣があった。朝になろうとしているその中にだ。青い瓦と勇壮な姿をだ。そこに見せていた。

二人はその前で対峙する形になった。そこにだった。

もう一人も来た。やはり彼だった。

死神はだ。ゆっくりと前に進みながら言うのであった。

「今日は朝早くからか」

「そうだ」

男は死神にも答えた。

「嫌か」

「私に時間は関係ない」

「神にはか」

「死にはだ」

死神は男を見据えて言い返した。

「時間なぞ関係ないのだ」

「命が絶える時は朝だろうが夜だろうが」

「そういうことだ。だからこそだ」

「それでだな」

「その通りだ。だからこそだ」

それでだと言ってだった。死神も男の前に出て来た。

そしてである。牧村もであった。男と対峙していた。

「はじめるのだな」

「この城のことは知っている」

男は彼に答えずにまずは大阪城のその天守閣を見た。そのあまりにも大きな天守閣を見てである。そのうえで話をするのだった。

「一つの家がここで滅んでいるな」

「豊臣家のことか」

「家の名前はどうでもいい」

男はそれにはこだわらなかつた。どの家かまではどうでもいいと  
いうのだ。

だが、だった。男はさらに話してきた。

「それはだ」

「ここで家が滅び人が滅んだことがか」

「それがいいのだ」

そうだというのであった。

「つまりだ。人間の世界で言うのだ」

「墓標だな」

「その家の墓標だ。そしてだ」

「今度は俺達のか」

「これ以上はないまでの見事な墓標ではないか」

こう二人に対して話した。

「違うか、それは」

「俺はここで死ぬつもりはない」

「私もだ」

二人は男の今の言葉をすぐに打ち消した。

そしてである。そのうえでさらに言い返すのだった。

「何なら貴様の墓標にしていいたいのだが」

「どうだ、それは」

「生憎だがそれはまだだ」

男は二人の言葉に悠然として返した。

「私が貴様等と戦うのはだ」

「それはまだか」

「そう言うのだな」

「その時が来れば楽しむ」

「しかし楽しむのは今ではない」

「だからか」

「その時を楽しみにしている」

二人に対してではなくだ。自分自身への言葉だった。

そうしてだった。また話すのだった。

「では今の相手はだ」

「今度はどの妖魔だ」

「私達に倒されるのは」

「死神よ、強気だな」

男は死神の言葉に反応を見せた。

「また随分と」

「いつもと変わらないつもりだが」

「貴様がそう思っているのならいいがな」

「それでも何か言いたそうだが」

「いや、ない」

男は余裕を見せたまま話す。

「だが。妖魔は既に連れて来ている」

「それはか」

「いつも通りだな」

「そういうことだ。ではいいな」



男の目が光った。その光は銀の本来の光ではなかった。

## 第四十五話 新生その十三

黒い光である。有り得ない混沌の光を放つとだった。それによつてだった。

目の前にその妖魔が出て来た。それはだった。

「また趣向を変えてきたな」

「妖魔ごとに何もかもが違うのだな」

「妖魔は数多い」

男はその妖魔を後ろにおいて話すのだった。

「こつした妖魔もいるのだ」

「そうか」

「成程な」

二人は男の言葉を聞いてまずは納得して頷いた。そうしてだった。あらためてだ。男に対して言った。

「ではだ」

「はじめるのだな」

「そうだ」

その通りだと返す男だった。

「思う存分戦うがいい」

「貴様と戦うことはできないがな」

「その妖魔と戦わせてもらおう」

「そしてここで死ぬのだ」

また言う男だった。

「いいな」

「大阪城は人が死ぬ場所ではない」

牧村はその男に述べた。

「言っておくがな」

「ではどうした場所だというのだ」

「最早戦う場所ではない」

「そうではなくて何だ。墓標でもないとするれば」  
「人が見る場所だ」  
「それだというのだ。」  
「文化としてな」  
「文化。聞き慣れない言葉だな」  
その言葉にはだ。男はその感情に微かにいぶかしむものを入れた。  
そしてである。こう言うのだった。  
「何だそれは」  
「貴様等の世界にはないのか」  
「ない」  
まさにそうだというのだった。  
「我等にあるものは破壊と混沌だけだ」  
「だからか」  
「文化はない」  
そしてだ。こう言うのだった。  
「余興はあるがな」  
「余興!？」  
「そうだ、余興はある」  
それはだと二人に話す。  
「我等の下僕達に考えを授けそれをさせることはだ」  
「それはあるというのだな」  
「様々な場所での怪しい街やならわし」  
「ここで死神が言った。」  
「あれか。ネクロノミコンにも書かれている」  
「如何にも。それはある」  
男は死神のその言葉に応えて話す。  
「そうしたものはない」  
「しかし文化はないか」  
「そんなものはない」  
また言う男だった。

「決してな、ないのだ」

「そうか、それはわかった」

死神は男のその言葉を聞いてまずは頷いた。そしてだ。彼にあらためて言うのだった。

「話はこれで終わりだな」

「そうだな。これでだな」

「でははじめるとしよう」

ここでその妖魔を見た。男の後ろにいるその妖魔をだ。そのうえでだ。彼は妖魔を見てまた言った。

「馬の頭を持つ鳥か」

「クームヤーガという」

男がその妖魔の名前を話した。

「この妖魔はだ」

「そうか、わかった」

死神は男のその言葉に頷いて返した。

「名前はな」

「では相手をするのだな」

「いいだろう」

また死神が言った。そしてだ。

牧村もだ。ここで言うのだった。

「やがて貴様と戦うその時の為にだ」

「今はクームヤーガと戦うのだな」

「そうさせてもらう。それではだ」

構えに入った。両手を拳にして己の胸の前に持っていく。

## 第四十五話 新生その十四

死神もだった。右手を拳にして己の胸の前に置いた。そうしてだった。

二つの光が起こりだった。彼等は姿を変えた。

髑髏天使になり戦う姿になった。右手が握り締められ鎌が一閃された。

そのうえでだ。それぞれその妖魔を見据えるのだった。

「クームヤーガか」

「そう言ったな」

「如何にも」

馬の頭から人間の言葉が返って来た。

「その通りだ」

「馬が人の言葉を話す」

「それには最早驚きはしない」

「では何に驚く」

「何にも驚きはしない」

「これが死神の返答だった。

「貴様等のことにはだ」

「そうなのか」

「そうだ、驚きはしない」

死神はまた妖魔に返した。

「でははじめるとするか」

「最初からそのつもりだ。それではだ」

「来い」

髑髏天使も言った。

「貴様もまた倒す」

「俺もか」

「そうだ、倒す」

また言う髑髏天使だった。

「必ずな」

「俺はかつてこの言葉を多く聞いてきた」

「戦いの中でか」

「俺もまた混沌の中にいる」

妖魔に相応しい言葉だった。それを言ってからだ。

「その中で戦ってきたのだ」

「同族同士でか」

「妖魔は同族では戦わない」

「それはないというのだ。」

「混沌の中で出て来たまつろわぬ存在とだ」

「そうした者達とか」

「戦いそして聞いてきた」

「こつ髑髏天使に言うのである。」

「そうした言葉をな」

「それではだ」

死神がその妖魔に問う。

「その者達をどうしてきた」

「答えは聞くまでもあるまい」

「これが妖魔の返答だった。」

「それだけだ」

「そうか」

「では貴様等もだ」

倒すと。妖魔は言った。

「倒してやろう」

「その言葉確かに聞いた」

「まだいる男の言葉だった。」

「それではだ」

「はい、この戦いお任せ下さい」

「見させてもらう」

男は姿を消しながら妖魔に告げた。

「楽しくな」

「ではナイアーラトホテップ様」

妖魔は男のその正式な名前をここで出した。

「私めの戦い、御覧になって下さい」

「では私はその戦いの後でだ」

「はい」

「私のやるべきことをするとしよう」

こう言った時だった。既に黄金の姿になっている髑髏天使が男に問うた。

「待て」

「何だ」

「今やるべきことと言ったな」

「それがどうかしたのか？」

「それは何だ」

問うのはこのことだった。

「それは一体何だ」

「前にも言ったな。私は封印を解く者だ」

「その混沌のだな」

「如何にも。この世に出す存在は六つだ」

「六つか」

「地水火風」

まずはこの四つを話に出した。

## 第四十五話 新生その十五

「そして混沌の原初の神」

「原初のだと」

「そうだ。そこにいる二柱の神々」

その彼等だというのである。

「その神々もまたこの世に解き放つのだ」

「それが貴様のやるべきことか」

「その時にだ」

男はまた告げてきた。

「この世界は完全に破壊と混沌の中に覆われる」

「それでは俺はだ」

「私もだ」

死神も彼等の話に入って来た。

「それを止めてみせよう」

「必ずだ」

「この戦いに生きられればな」

これが男の彼等のへの返答だった。

「それを目指すがいい」

「その言葉確かに受け取った」

死神の言葉だ。

「忘れはしない」

「ではだ。見させてもらおう」

男の姿が完全に消えた。声だけになった。

「貴様のその戦いをな」

「それではだ」

「戦うとしよう」

二人は男との話を終えてそのうえで対峙するのだった。二人の対峙する相手は妖魔だった。その妖魔が二人を見て話したのだった。



「六枚の翼を持つ黄金の天使か」

「それが今の俺だ」

「そして鎌を持つ白い者」

「私のことだな」

「我が相手に相応しい」

妖魔は悠然として話した。

「実にな」

「相応しいか」

「そう言うのだな」

「そうだ」

また答えた妖魔だった。

「そして葬るのにだ」

「その言葉確かに受けた」

死神は妖魔のその言葉も受けたのだった。

「それではだ」

「はじめるとするか」

「行くぞ」

まずはだ。死神が動いたのだった。

飛んだ。そうしてだった。

上から鎌を投げる。その手に持っている大鎌を。

その鎌で妖魔を断ち切らんとした。しかしであった。

「甘いな」

「むっ!？」

「俺は翼を持つ妖魔だ」

妖魔が言うのはこのことだった。

「それは通じはしない」

「それはわかっている」

わかっていると返した。そして空に舞った漆黒の妖魔を見た。

そしてだ。その手に再び鎌を出した。その鎌も投げた。

そのうえでだ。こう言うのであった。

「どうやら私はだ」

「何だというのだ」

「新たな力が出ようとしているな」

「これが死神の今の言葉だった。」

「その様だ」

「あらたな力だと」

「そうだ、新たな力だ」

また妖魔に返した。髑髏天使も既に闘いの場に加わっている。

「それが出ようとしている」

「ではだ」

妖魔は羽ばたいた。無数の羽が剣となり二人に襲い掛かる。その中での言葉だった。

「その力で俺を倒すのか」

「そうなる」

その通りだというのだった。

「それが今だ」

「そうか」

「動じないな」

「そうした言葉は聞いてきた」

こう返す妖魔だった。

「何度もな」

「だからか」

「そうだ、だからだ」

それを理由としていた。そうしてだ。

「俺は言葉では驚きはしない」

「ではこれではどうだ」

髑髏天使は右手の剣を一闪させた。するとだった。

## 第四十五話 新生その十六

彼の周りに無数の氷の柱が起こった。それが妖魔に向かう。それで妖魔を突き刺さんとする。だが。

妖魔はそれを上に飛んでかわした。まさに何でもないといたったものだった。

「残念だったな」

「かわしたか」

「この程度でも驚きはしない」

また言う妖魔だった。

「それも言うておく」

「ではだ」

今度は死神だった。

死神はだ。今度は分身をしてきた。そうしてであった。それぞれの死神が妖魔に対して言う。

「それではだ」

「私いだ」

「あらためて見せよう」

「そして驚かせてみせよう」

こう言うてだった。一斉に鎌を投げる。それも続けてだ。だがその無数の鎌達もだ。妖魔はかわすのだった。

「この程度か」

「この攻撃もか」

「そうだ、無駄だ」

こう彼に返す妖魔だった。

「俺を倒せはしない。そしてだ」

「来るか」

「如何にも」

こう言うてだった。そしてだ。

また翼を羽ばたかせ。無数の刃を出して襲う。  
二人はその無数の刃をかわした。だがここで。  
かわした筈の刃がそこに残る。剣から羽根に戻っていた。だがその羽根にはまだ刃が残っていた。見れば羽根同士で互いに切り合っている。

死神はそれを見てだ。洋間に言った。

「羽根は増えていくな」

「そうだ。そして言うておく」

「何だ、今度は」

「この羽根は燃えはしない」

「そうだというのである。」

「そして凍りもしない」

「炎も氷も効果がないか」

「それは言うておく。そして俺もだ」

「妖魔自身もだというのだ。」

「炎も氷もだ。効きはしない」

「そして当たりもしない」

「髑髏天使は先程の己の攻撃がかわされたことから述べた。」

「そういうことだな」

「話が早いな。その通りだ」

「そう言うのか」

「そういうことだ。それでだ」

「それでか」

「貴様等に俺は倒せぬ」

「これが妖魔の言うことだった。」

「そしてだ。この羽根が増えていけばだ」

「やがては我々をか」

「捉えそして切っていく」

「このことを確信して笑う妖魔だった。」

「そうして俺に倒されるのだ」

「切る、か」

死神はその言葉に返した。

「切るに対してはだ」

「何をするといいのだ、死神よ」

「斬る」

妖魔に返した言葉はこれだった。

「これで返そう」

こう言っただ。分身を元に戻した。そうして一人に戻ったのである。

「この鎌でだ」

「それはもうかわしたが」

「安心しろ。一度かわされた程度ではだ」

死神は妖魔を上から見据えながら話す。

「私の鎌は敗れはしない」

「一度ではか」

「そうだ、一度ではだ」

死神はまだ言う。

「私の鎌は見切れはしない」

「あの軌道だけではないか」

「無論だ。まだある」

そうだというのである。

「今からそれを見せよう」

「そうか」

「そしてだ」

死神は身構えた。その時だった。

これまで白かった彼の肌がだ。急に黒くなった。

## 第四十五話 新生その十七

そしてだ。服も黒くなりだ。髪も腰まで伸びた。

姿が急激に変わった。その姿を彼自身も認めてだ。言っているのであつた。

「これがか」

「それが新たな力だな」

隣にいる髑髏天使が彼の姿を見て言った。

「貴様の」

「秩序だな」

「秩序か」

「そうだ、秩序だ」

まさにそれだという死神だった。

「今私はその力を得た」

「秩序の神になったのだな」

「死と秩序」

この二つだった。

「これが今の私の司るものだ」

「その秩序は何だ」

「混沌を倒す秩序だ」

こつ髑髏天使に述べた。

「それが私の秩序だ」

「それではだな」

「倒す」

一言だった。鋭い言葉を出した。

「妖魔、貴様をな」

「その秩序の力でか」

「考えてみれば死は世界の絶対の秩序だ」

死神は己が最初から司っているものについても述べた。

「それを私が持つのもだ」

「意義があるというのか」

「如何にも」

こう妖魔に述べる。そしてだった。

また分身を使った。今度はだ。

「むっ！？数が」

「力を増したのは確かだな」

これまでよりも数が多かった。倍程度はいる。

「それがわかる」

「数で攻めるつもりか」

「生憎数だけではない」

こう言っただった。

そのそれぞれの手にだ。色々なものを出してみせた。

火もあれば氷もある。雷もだ。吹きすさぶ風を持っている者もいる。

そのあらゆるものを持ったうえでだ。死神達は言うのだった。

「それではだ」

「今からこの全てをだ」

「解き放つ」

「それにより貴様を倒す」

こう妖魔に告げた。

「いいな、今からだ」

「そうさせてもらおう」

「それでこの戦いを終わらせる」

「無駄なことだ」

妖魔は死神達のその言葉を一笑に伏した。

「幾ら力が強くなろうともだ」

「貴様を倒すことはできないというのだな」

「如何にも。何故か」

その答えは簡潔なものだった。

「俺が強いからだ」

「強いからか」

「強いものが勝つ」

簡潔だがまさに真理であった。

「だからだ。俺が貴様に敗れることはないのだ。髑髏天使にもな」  
「強い方が勝つのならば」

妖魔のその言葉を聞いて言ったのは髑髏天使だった。彼は今は動いてはいない。ただ言葉だけを妖魔に対して出しているのである。

「敗れるのは貴様だ」

「何っ？」

「この戦いは死神が勝つ」

こう言うのであった。

「間違いなくな」

「戯言を言うものだな」

「俺に戯言を言う趣味はない」

そつだというのであった。

「全くな」

「では嘘だな」

「嘘を言うこともない」

それも否定するのだった。

「全くな」

「では何だというのだ」

「真実だ」

彼は言い切った。

「それを言うだけだ」

「では死神は俺より強いというのか」

「そつだ」

まさにそつだという髑髏天使だった。



## 第四十五話 新生その十八

「その通りだ」

「ではそのことを今から確かなものにしよう」

死神を見ての言葉だった。

「この俺の手でだ」

「ではだ」

死神の方が先に動いた。分身はそのままだ。

そうしてだ。風のように動き妖魔を取り囲んだ。

「何時の間にだ」

「確かにな。強くなった」

「そうだな」

「その通りだ」

また死神達が言う。

「この速さ、今までなかった」

「これまで以上にだ」

「速くなった」

「力を得ただけではない」

こうそれぞれ言っていた。そうして。

取り囲んですぐにであった。攻撃を仕掛けたのであった。

「では、だ」

「やらせてもらおう」

「これでだ」

「何っ、身体が」

妖魔は攻撃を逃れる為に上に飛ぼうとした。しかしであった。

「動かないというのか」

「結界を張った」

「そうさせてもらった」

また死神達が言うてきた。

「それによつて貴様の動きを止めてだ」

「そうしてだ」

「攻めるといふのか」

次に何が起こるのか、妖魔はもうわかった。

「そういうことか」

「そうだ。それではだ」

「滅する」

こう言った。そしてであつた。

それぞれの手にあるものを放つたのであつた。投げた鎌に込めてその鎌達がだ。さらにそれぞれ幾つかに分かれ複雑な動きを示しつつ妖魔を襲つた。その数は如何に妖魔とてかわしきれるものではなかつた。

鎌の一つが妖魔を突き刺しだ。それが勝負を決めた。その突き刺さつた己の鎌を見てだ。死神はにこりともせずこう言ったのだつた。

「私の勝ちだな」

「そうだ」

妖魔も言葉を返してきた。

「貴様は確かに勝つた」

「そして貴様はだ」

「滅びるな。まさかこの俺が」

「死の力だけではわからなかつた」

ここでこう言う死神だつた。

「だが今の私にはだ」

「秩序もだな」

「その力もある。それが大きかつた」

このことに今の強さの原因を求めて話す。

「やはりな」

「それでなのだな」

「そういうことだ。そしてだ」

「今度は何だ」

「貴様等は何なのだ」

妖魔に妖魔のことを問うたのだった。

「貴様等の神は。何なのだ」

「神か」

「そうだ、あの男」

あの黒い男のこともここで話した。

「ナイアーラトホテップといったな」

「あの方もまた神であられる」

「あの男もか」

「そうだ、我等を導き解き放たれる神だ」

そうだというのだった。

「それがあのナイアーラトホテップ様なのだ」

「そうなのか」

「俺が言うことはこれだけだ」

「言わないというのか」

「後はあの方に聞くのだな」

妖魔は赤い炎に包まれながら素っ気無く述べた。

「そうするのだな」

「あの男に直接か」

「俺は言うつもりはない」

やはり素っ気無い言葉であった。

「ではな。俺はこれで去るとしよう」

「死ぬか」

「そうさせてもらう。それではだ」

最後にこう言ってであった。妖魔は赤い炎に包まれそのうえで消えた。後に残った死神、そして髑髏天使は地上に降り立ちそれから元の姿に戻った。そうしてであった。

牧村がだ。死神に対して言ったのだった。

「今の力がか」

「私の新たな力だな」

「秩序の力だな」  
「そう、そしてそれはだ」  
「混沌を消し去る力か」  
「私の場合は刈ると言った方がいいか」  
「死神はここでこの表現を使ってみせた」  
「むしろな」  
「刈る、か」  
「私の鎌は命を刈るものだな」  
「そうだな。確かにな」  
「だからだ」  
「また言う死神だった。」  
「刈る。そうなるな」  
「だからか」  
「そういうことだ。さて」  
「ここまで話してであった。死神はこんなことを言ってきたのであった。」  
「私の呼び名だが」  
「秩序の力も手に入れたな」  
「だが。死の力も備わっている」  
「これは最初からだった。このことにも言及してみせたのだ。」  
「だからだ。呼び名はこのままでいい」  
「死神でか」  
「そうだ、それでいい」  
「こう牧村に話すのだった。」  
「それでな」  
「そうか。それではだ」  
「死神と。今まで通り呼んでくれるな」  
「そうさせてもらおう」  
「牧村は彼のその言葉を受けた。そのうえでの言葉だった。」  
「では死神よ」

「うむ」

「また会おう」

牧村は実際にその呼び名で呼んでみせた。

「次の戦いの時にだ」

「そうだな。それでは今はだ」

「元の世界に帰るか」

「私の元の世界にな」

まさにそこにだというのであった。

「そして休むとしよう」

「そうするか」

「そして次の戦いにはだ」

戦いのことにもだ。言及したのだった。

「貴様の力も見せてもらおう」

「俺の力は既に見せているが」

「いや、まだ全てではない」

「全てではか」

「最高位の天使の力はその程度ではない」

「ではまだ隠された力があるのだな」

「そうだ、まだある」

彼はまた言った。

「だからだ。見せてもらう」

「そうか。ならばだ」

「見せてもらえるな」

「その時が来ればな」

こう返した牧村だった。

「ではな」

「そうか、わかった」

「ではまた会おう」

彼はサイドカーに乗った。そうして実際に帰るのだった。

それでこの話は終わった。だがそれはまた次の戦いへの休息に過

ぎなかつた。そのあらたな戦いはだ。既にはじまっているとも言え  
た。

#### 第四十五話

完

2010・10・8

## 第四十六話 形変その一

髑髏天使

### 第四十六話 形変

魔神達はまた話をしていて。今彼等が話している場所は海の中だった。その青い海の中にいてそこで彼等の話をするのであった。

老人がだ。最初に言った。

「それではなのですが」

「そうじゃな」

老婆が最初に応えた。

「今の状況じゃな」

「妖魔達は我等に取ってもな」

「敵です」

老人はまずはこのことを定義した。

「それは間違いありません」

「我等はただ戦いたいただけだ」

黒人が話した。

「髑髏天使とな」

「しかしあの連中は違うな」

「そうね」

男と女は妖魔について話した。

「この世に破壊と混沌をもたらす」

「そういうことだからね」

「僕達はこの世界を壊そうなんて思わないからね」

子供はこのことを指摘した。

「そんなことはね。全然ね」

「そんなことは全く興味がない」

青年が話した。

「そんなことに何の意味がある」

「そつだよ。それにだよ」  
「子供はさらに話す。」  
「世界に破壊と混沌をもたらすつて」  
「私達もその中に入ってるわね」  
「美女もこのことを話した。」  
「間違いなくね」  
「それじゃあ話は決まってるよな」  
「ロツカーだった。」  
「俺達はむざむざやられるつもりはないからな」  
「そついうことだな」  
「紳士は青年に同調した。」  
「ではだ」  
「私達も戦う」  
「中年男の言葉だ。」  
「そついうことですね」  
「話は決まりでしょうか」  
「老人は同胞達の言葉を聞いて述べた。」  
「これで」  
「しかし」  
「ここで言ったのは老婆だった。」  
「それはいいとしてじゃ」  
「戦うのはですね」  
「それはいい」  
「老婆は妖魔と戦うそのこと自体はいいとした。」  
「しかしじゃ」  
「髑髏天使のことですか」  
「それと死神じゃ」  
「彼のことも話される。」  
「あの二人はどうするのじゃ、一体」  
「そつですね。とりあえずはです」



老人は老婆の話を聞きながら話していく。

「休戦ということはどうでしょうか」

「休戦!？」

「休戦なのか」

「そうですね、休戦です」

また同胞達に話した。

「ここはです」

「休戦か」

「そうしてなのか」

「ここは」

「敵を一度に二つ持つのはよくありません」

老人は戦略も話した。

「ですからここはです」

「敵を一つに絞ってそのうえで」

「戦う」

「それが」

「それでどうでしょうか」

老人はまた言った。

「今のところは」

「戦略だったよね」

子供が最初に応えてきた。

## 第四十六話 形変その二

「それだよ、これって」

「はい、そうです」

「それと考えたらいいんじゃないかな」

「こう老人に言うのだった。」

「それだったら」

「では賛成ですね」

「うん、いいと思うよ」

老人に対してにこりと笑って述べるのだった。

「僕は賛成だよ」

「どうも有り難うございます」

「僕はだけれど。皆はどうかな」

「子供は同胞達に問うた。」

「皆はそれでいいかな」

「髑髏天使とは戦いたい」

「それはな」

「しかしだ」

「ここでそれぞれ言葉を出すのだった。」

「相手が相手だ」

「放つてはおけないしね」

「仕方のないことだ」

「それならだ」

「こう話してだった。そうしてだった。」

「やはりここはな」

「髑髏天使とは休戦ね」

「死神とも」

「はい、これで話は終わりですね」

老人が話をまとめにかかった。

「それでは」  
「ええ、それじゃあ」  
「それでだ」  
「決まりだね」  
「それで百目」  
「子供もここで話す。」  
「それでいいんだね」  
「はい、まずは妖魔です」  
「老人は子供の問いに答えた。そうしてであった。」  
「ですから。それで」  
「うん、決まりだね」  
「それでは皆さん」  
「老人はまた話を変えてきた。」  
「この話はこれで終わりです」  
「そうね」  
「それで次の話は」  
「話はこれで止めましょう」  
「老人はその話はこれで終わった。しかしだった。」  
「私はこれで帰ります」  
「帰るんだね」  
「これで」  
「はい、何処かに食べに行きます」  
「ではだ」  
「我々も」  
「それぞれ話してだった。」  
「何か食べるとするか」  
「それなら」  
「何がいいかな」  
「とりあえず私はです」  
「百目がここでまた話した。」

「湯豆腐を食べに行きます」

「あれをじゃな」

「はい、京都まで行きます」

行き場所も話すのだった。

「そこに」

「南禅寺じゃな」

老婆はその食べる場所も話した。

「そこじゃな」

「おわかりですか」

「京都で湯豆腐といえはそこだと聞いている」

「湯豆腐を食べられたことがあるのですか」

「いや、それがないのじゃよ」

「左様ですか」

「百目よ、それでなのじゃが」

老婆の口調が変わった。こんなことを言ってきたのだ。

## 第四十六話 形変その三

「わしも一緒に行つてよいかのう」

「京都にまでですな」

「左様、その南禅寺までじゃ。駄目かのう」

「いえ」

老人は微笑んでだった。こう老婆に答えたのだった。

「では共に」

「よいのじゃな」

「美味しいものは一人で食べてもあまり美味しくないものです」

「より多くで食べてじゃな」

「はい、だからです」

「それでだというのだ。」

「ですから。私からも御願ひします」

「それでは共に行くか」

「皆さんも如何ですか」

老人は他の魔神達も誘つた。同胞達をだ。

「それで」

「そうね。お豆腐ね」

「悪くはないな」

「それなら」

他の魔神も口々に答えてきた。これで決まりだった。

彼等は京都に向かいそこで湯豆腐を楽しむのだった。そうしたのである。

そしてだ。彼等はだった。まさ大阪にいた。

「終わりね」

「中学校はだな」

牧村が未久に言う。今彼等は祖父の屋敷で昼食を食べている。

白い御飯に揚げの味噌汁、それとホウレンソウのお浸しに海苔であ

った。それを食べながらだ。

兄がだ。こう妹に答えた。

「大学はまだある」

「夏休み滅茶苦茶長くない？」

「夏休みだけではない」

「そうよね、冬休みも春休みもよね」

「大体三分の一が休みだ」

そこまであるのだと話した。

「それ位はある」

「やっぱり長いわね」

「そしてその間は」

「そうやってトレーニングなのね」

「そうだ」

まさにそうだというのである。

「トレーニングを欠かさない」

「何か大変ね」

「大変ではない」

牧村はそれは否定した。そして言うのだった。

「何故ならだ」

「何故なら？」

「日課だからだ」

それでだというのだ。

「だからだ。大変とは思わない」

「それでなの？」

「言うならばだ」

「ええ」

「学校の授業と同じだ」

「それか部活か？」

「そういうことだ。それでわかったな」

「ええ、成程ね」

未久は腕を組んで納得した顔で述べた。

「それでなのね」

「そういうことだ」

「ただね」

「何だ、一体」

「トレーニングはずっと続けるの？」

「こつ言つのであった。」

「それは」

「ずっとか」

「そうよ、ずっと続けるの？」

兄に対してそのトレーニングそのものについて尋ねるのだった。

「やっぱり」

「つまりだ」

「そうよ。大学が終わって」

「ああ」

「若奈さんのお店に入って。それでもなの？」

「言うことはそれか」

牧村は若奈のその話を聞いてだ。目を妹に向けてだ。そうしてそのうえで話す。その顔はだ。かなり真剣な顔になって話すのだった。

## 第四十六話 形変その四

「あの店の話か」

「それはどうするのよ」

「店に入る」

それは絶対だというのだった。

「店はだ。入る」

「じゃあトレーニングは」

「ランニングは続ける」

「それはなの」

「そうだ、それは続ける」

そしてだった。こつも話した。

「ただ」

「フェシングやテニスよね」

「それはだ」

「止めるの？やっぱり」

「大学までだ」

そこまでだというのだった。

「そうだな。天使でなくなれば」

「天使つて？」

「いや」

妹の声に気付いてだった。すぐに己の言葉を一旦止めた。そうし

てそのうえでこつ返した。

「何でもない」

「そうなの」

「そうだ。大学までだ」

話はこちらで終わらせてだった。また妹に話す。

「大学が終われば。フェシングやテニスはしない」

「ランニングだけなの」



「その他はしない」

「そうなのね。スポーツする時間は減るのね」

「店の方に専念することになるな」

「頑張つてね。それで」

妹の顔が急ににこにことなってだ。こんなことを言ってきたのだ  
つた。

「美味しいスイーツ御願いな」

「御前にか」

「できるだけ毎日来てあげるから」

「そうだというのである。」

「だから美味しいの御願いな」

「随分都合のいい話だな」

「それでね」

「今度は何だ」

「お金は定額より半額よね」

「何故そうなる」

「だって妹じゃない」

そこを根拠にするのだつた。

「そうでしょ？それだったら」

「妹だからか」

「そうよ、妹だからそれもいいじゃない」

「俺にそんなことを決める権利はない」

「ないの？」

「ある筈がない」

「お兄ちゃんが次期マスターなのに」

そのマジックのマスターだというのである。

「それでもなの」

「何故あると思える」

「だって。若奈さんのお婿さんになるじゃない」

そのものずばりの言葉をだ。堂々と言い切った。

「違うの？」

「結婚か」

「若奈さんはそのつもりよ」  
「ここにこととして話す。兄に対して。」

「お兄ちゃんと結婚してね。マジックをやっていこうって」

「何故そうなる」

「だって。お店に入るんじゃない」

「ただ就職するだけだ」

「何言ってるのよ。その就職は」

未久は最早満面の笑みだった。その笑みから出される言葉は。

「あれよ。永久就職」

「それが結婚だということか」

「その通り」

芝居がかった言葉だった。

「だからよ。御願いな」

「妹だから半額か」

「当然の権利よね」

「そうなるというのか」

「そうよ。いいでしょ、それでも」

「いい訳があるか」

兄はそれはすぐにつっぱねた。

## 第四十六話 形変その五

「何故そうなる」

「だから妹だから」

「それはならない」

「あら、冷たいのね」

「ただでそうなるものか」

「何言ってるのよ。私もお店に入るんじゃない」

「御前もだというのか」

「そうよ。ウエイトレスとしてね」

完全に決まっているかのような口調で兄に話す彼女だった。

「もうそれはね」

「決まっているというのだな」

「そういうこと。それでいいわよね」

「誰が決めた。そんなこと」

「マスター」

彼だというのである。

「マスターは快諾してくれたわよ」

「中学生相手にか」

「そんな筈ないでしょ。高校に入ってからよ」

「その時からか」

「高校に入っても部活はするけれど」

この場合は体操部だ。未久は今も部活に熱中している。それは高校になってからも変えるつもりは一切ないというのである。

「それでもね。時間が空いてる時にね」

「アルバイトをするのか」

「そういうこと」

そうだと話すのだった。

「それでね。お店の人にもなって」

「半額か」

「いいわよね、それで」

「全く。要領がいいな」

「妹だからね」

「それで要領がよくなるのか」

「なるわよ。二番目の子は大体そうなるじゃない」

「こんなことも話す彼女だった。」

「それでなのよ」

「そうなるものなのか」

「お兄ちゃんにはわからないわよ。それじゃあね」

「ああ」

「九月ね、お家に帰ってくるの」

「話はそこに戻っていた。」

「その時よね」

「そうだ、その時だ」

「わかったわ。じゃあ待ってるからね」

こう話してだった。朝の兄妹の会話は終わった。夏休みの終わりの時だった。

それが終わるとすぐにトレーニングに出た牧村だった。それが終わってからだ。

昼食は屋敷で食べた。そうしてである。

若奈と映画館に行った。難波の映画館である。

そこで今流行のアメリカからの映画を観る。だがその時にだ。

不意に後ろの席からだ。こう言ってきたのだった。

「久し振りですね」

あの声だった。こう彼に言ってきたのである。

「それでなのですが。お話をしませんか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

牧村が応えなくともだ。声はさらに言ってきた。

「場所は用意していますのね」

「……………」

牧村はやはり応えない。だがその代わりに無言で席を立ったのだ。  
った。

その彼にだ。若奈が尋ねた。

「何処に行くの？」

「コーヒーを飲んでくる」

こう彼女に言った。

「少しな」

「そうなの、コーヒーなの」

「暫く飲んでくる」

「そんなに眠い？」

「少しな」

「ううん、この映画面白いけれど」

若奈は前の大画面を観ながら彼に話す。彼女も目が少しとろんと  
なっている。

「どうもね」

「眠いか」

「どういう訳か。寝不足かしら」

「そうかも知れないな」

「昨日遅くまで妹達と電話してたから」

それでだというのである。

「そのせいね」

「寝ることも大事だ」

「ええ、確かにね」

「では今は」

「私はここでいいわ」

コーヒーは飲まないというのだった。

## 第四十六話 形変その六

「ガムもあるし」

「そうか。それならだ」

「ええ、行つてらっしゃい」

若奈はそのガムを出しながら告げた。

「それじゃあね」

「ああ、それではな」

こつ話してだった。牧村は席を後にした。そうして暗い通路を通つてそうして映画館のロビーに出た。そこに老人がいたのであった。老人はだ。いつもの穏やかな笑みで彼に言ってきた。

「まずはです」

「ここで戦つつもりか」

「いえ、そのつもりはありません」

老人はそれは否定した。

「それどころか今戦つつもりはです」

「それもないのか」

「ありません。何故なら」

「妖魔がいるからか」

牧村はすぐに言った。

「だからだな」

「おわかりなのですね」

「すぐにわかることだ」

また答えた彼だった。

「妖魔は貴様等にとつても敵か」

「はい」

老人は率直な声で答えてきた。

「その通りです」

「破壊と混沌は望んでいないのか」

「私達が望んでいるのは戦いだけです」  
「それだけか」  
「他のことは望んでいません」  
「俺や死神との戦い以外にはか」  
「何故破壊や混沌が楽しいのでしょうか」  
「老人はこうも言った。」  
「私にはそうしたもの。私達自体がですが」  
「興味がないか」  
「混沌と秩序を相反するものとすれば」  
「老人はここから話した。」  
「私達は秩序の世界にいます」  
「そちらにか」  
「そして破壊も望んではいません」  
「それもだというのだ。」  
「望むのは戦いだけです。むしろこの世をです」  
「この世をか」  
「楽しんでいます」  
「屈託のない笑みになっての言葉だった。」  
「それも存分に」  
「妖魔達はこの世自体を破壊しようとしている」  
「だとすれば我々はです」  
「その妖魔達と敵対するか」  
「その通りです。おそらくは」  
「老人はふと話を変えてさらに語ってきた。」  
「彼等は私達にも手を及ぼしてくるでしょう」  
「そして戦うか」  
「戦いは望むところです」  
「老人の顔が笑った。そのうえでの言葉だった。」  
「それはです」  
「そうか」

「貴方や死神と戦えないのは幾分残念ですが」  
「しかしそれどころではないというのだな」  
「今は。仕方がありません」  
諦めた口調そのものだった。  
「でsから」  
「わかった。それではだ」  
「貴方もそれでいいですね」  
「いい」  
また言った彼だった。  
「今は妖魔をだな」  
「それではそういうことで」  
「休戦か」  
牧村は言った。  
「そういうことになったか」  
「同胞達には私から伝えておきます」  
老人からの言葉だった。  
「では。そういうことで」  
「そうか。これで帰るのか」  
「私の用件はこれで終わりです」  
老人からの言葉だった。



## 第四十六話 形変その七

「ですから」

「では俺はだ。中に戻らせてもらおう」

「映画を楽しめますね」

「そうさせてもらおう。ではな」

「楽しまれるといいです」

老人の言葉はここでは鷹揚なものだった。そうしてあった。

牧村は映画館の中に戻り若奈と共に映画を楽しんだのだった。その帰りだ。

またサイドカーに乗る。若奈は側車に乗っている。彼女はその側車からだ。こう彼に対して言ってきたのだった。ヘルメットを着けたままだったがそれでもだった。

「あの」

「何だ」

「映画、どうだった？」

「映画か」

「ええ。どうだった？」

「悪くはなかったな」

こう答えた牧村だった。

「だが」

「だが、なのね」

「幾分か眠かったな」

「やっぱりね。そうだったのね」

「少し長かったな」

牧村の映画への感想だった。

「どうにもな」

「私も」

「そうだったのか」

「面白かったけれど長かったわね」

若奈も同じ感想であった。

「それで少し」

「眠くなっただか」

「もう少し短かったら問題ないのに」

「そう思うな。どうもな」

「それを思うと残念な映画だったわ」

実際に表情にもそれが出ていた。残念そうな顔になっていた。

「本当にね」

「編集はしていなかったのか」

「ディレクターカットね」

「それはしていなかったのか」

「そうかも知れないわね」

「こう言う若奈だった。」

「これはね」

「それだけの長さだな」

「ええ」

若奈も頷く。

「長かったから」

「長いのも考えものだ」

牧村はこうも言った。

「本当にな」

「じゃあインド映画は？」

若奈はここでこの国の映画を話に出した。

「どうかしら、あれは」

「最早何が何なのかわからない」

これが牧村のインド映画への返答だった。

「最早な」

「そうなの」

「カオスか」

それだというのである。

「あれは」

「カオスなのね」

「そうだ。混沌」

この言葉を出してだった。牧村は己の言葉に気付いた。そうしてだった。

そのうえでだ。こう訂正した。

「いや」

「いや？」

「カオスだな」

混沌という言葉はあえて使わなかったのだ。妖魔を意識してしま  
う為だ。

そしてだ。彼はまた言った。

「この場合のカオスとはだ」

「混沌とはまた違うのね」

「違う。清濁あるものだ」

「清濁ね」

「濁りばかりの混沌ではない」

それこそがだ。妖魔の混沌であるというのである。

「それとはまた違う」

「濁りばかりの混沌？」

「そうしたものもある」

「そうなのかしら」

「濁りばかりのものもまたある」

妖魔を脳裏に浮かべてだ。そうしての言葉だった。

## 第四十六話 形変その八

「中にはな」

「何かよくわからないけれど」

「そうなのか」

「牧村君インド映画は苦手なのね」

「あまりな」

実際にそうだというのだった。

「踊るマハラジャという映画があったが」

「あれは特に凄かったわね」

「最早何が何かわからなかった」

「そこまでだというのだった。」

「覚えている限りではだ」

「ええ」

「悪役が主人公達を追い掛けていた」

「ええと、馬でのカーチェイスの場面だったわね」

「その時だったな」

「あれをね。逃げた主人公とヒロインに対して」

「若奈も思い出しながらだ。話すのだった。」

「先回りしろって言って」

「実際にはそうしなかったな」

「というかそれから出て来なかったし」

「それが普通にあっただのである。」

「一体どうなったのかしら」

「そうした展開があるからだ。インド映画は」

「苦手なのね」

「ストーリーがわからない」

「わかりにくいどころではなかった。」

「訳がわからない」

「絶対に入る踊りは？」

「あれもだ」

それもであった。

「何処から出て来る大勢の一团と仲良く踊るが」

「あれ受け入れられないのね」

「理解できない」

「実は私もね」

自分もだと言う若奈だった。

「あれはかなり」

「わからないか」

「これがインドなのねって思うけれど」

「それでも受け入れられるかどうかはか」

「別よね」

「こつ言つのであった。」

「やっぱり」

「そうだな。それにしても」

「ええ、それにしても」

「長い映画だった」

またその映画の話になった。今まで観ていたそれにだ。

「本当にな」

「そうね。それが残念だったわ」

こんな話をしてだ。帰りは二人でカレーを食べた。そうしてその日は過ぎた。

その夜だった。一日が終わろうというところでだ。部屋の窓が急に明るくなった。

牧村はそれを見てだ。すぐに悟った。

「来たか」

「こつ呟いて窓のところに行くのだった。やはりいた。」

「目玉がいた。そうして彼に言つのだった。」

「いいかな」

「戦いか」

「うん、そうだよ」

そのものずばりであった。まさにだ。

「どうする？それで」

「行かない選択肢はない」

牧村はこう目玉に答えた。

「俺にはだ」

「そう。いつも通りだね」

「いつも通りか」

「そうだよ、いつも通りじゃない」

目玉の言葉は笑っていた。

「その返事がね」

「そうなのか」

「まあそういうことだから」

目玉の言葉はここでは単刀直入だった。

## 第四十六話 形変その九

「行こうか」

「そうだな。それではだ」

「場所は案内するよ」

目玉は彼にまた言ってきた。

「これからね」

「頼む」

「あとね」

ここでまた言つ目玉だった。

「彼だけれど」

「死神か」

「うん、下にいるから」

そこにだというのだ。

「ハーレーに乗ったままでね。待ってるから」

「あいつもいるのか。やはりな」

「僕達はいつも一緒だからね」

ここでこんなことも言つ目玉だった。

「だからね」

「そうだったな。死神と眠りの神はな」

「一緒だよ。ギリシアのあの二人と一緒さ」

ここでこんなことも言つ目玉だった。

「タナトスとヒュプノスとね」

「死と眠りは同じか」

「そういうこと。日本でもよく同じように言われるよね」

「確かにな」

牧村もそれは否定しなかった。よく使われる死んだように眠ると  
いう表現や死ぬことを眠ると言う場合を考えてだ。彼も否定しな  
かったのだ。

「それはな」

「そういうことだから」

また言う目玉であった。

「じゃあ話はこれでね」

「行くか」

「下に来てくれたらいいよ」

目玉はそうしろというのだった。

「それでそこからサイドカーでね」

「進んでか」

「そういうこと。じゃあ行こう」

「わかった」

このやり取りの後で下に向かい駐車場に出た。そこからだった。サイドカーに乗る。すると目の前にそのハーレーに乗った死神がいた。

彼はだ。牧村にすぐに言ってきた。

「行くぞ」

「わかつている」

こう答える牧村だった。

「それで場所は何処だ」

「そこはね」

また目玉が出て来た。死神のその肩のところに浮かんでいる。

「公園だよ」

「公園。大阪城のか」

「違うよ。鶴見緑地だよ」

そこだというのである。

「ほら、万博のあった」

「万博か」

「そう、あれが開かれていたね」

こう牧村に話すのだった。

「そこなんだよ」



「わかった」

牧村は一言で頷いた。

「なら行くとするか」

「うん、行こう」

「そこにまたいるのか」

「今度はどんな妖魔だろうね」

目玉がまた言ってきた。

「一体ね」

「それを見るのも楽しみだ。それならだ」

サイドカーを発進させた。そうしてであった。

その鶴見緑地に向かう。その途中でだ。

牧村と死神は並行して走る。そうして。

それぞれ変身の仕草に入る。二つの光が二人のバイクを包んだ。

それが消えた時にだ。もう彼等は戦う姿になっていた。そしてだ。

## 第四十六話 形変その十

二人のバイクが宙を舞った。そのまま空を飛んでだ。鶴見緑地に一直線に向かったのだった。

そこに着くとだ。もういたのだった。

男はだ。髑髏天使達を見てすぐに言ってきた。

「今日は気が早いな」

「そう思うか」

「既に戦う姿になっっているからな」

「だからだというのだ。」

「気が早いものだ」

「そう思うか」

「だがそれがいい」

「そしてだ。男はこうも言った。」

「すぐに戦いに入られる」

「でははじめるのだな」

「如何にも。既に妖魔は用意してある」

「彼の方も抜かりはなかった。」

「それではだ」

「さて、と」

「目玉の言葉である。」

「今度の妖魔はどんな奴かな」

「少なくともだ」

「死神がその彼に伝えて述べる。」

「尋常な相手ではない」

「それは間違いないんだね」

「確実に言える」

「そこまでだというのである。」

「次の相手もだ。そうだ」

「まあそうだね」

目玉もそれは否定しなかった。

「いつものことだしね」

「そうだ。そして次の相手は何だ」

「フサツグア」

男の言葉と共にだ。青みがかった巨大な稲妻が出て来た。

それはやがて人の形になった。それが出て来たのである。

「これがこの者の名前だ」

「そうか」

「それがか」

二人もそれを聞いて話した。

「それではだ」

「戦うとするか」

「気が早いな」

男は二人の言葉を聞いて述べた。

「もうなのか」

「気が乗っている」

「そういうことだ」

こう返す彼等だった。そうしてだった。

それぞれ身構える。それを見てだった。

男はだ。また話した。

「それではだ」

「来るか」

「そうするのだな」

「それではだ」

男は彼等の言葉を聞いてだ。ここでも姿を消すのだった。

黒い霧となり姿を消してだ。それでも言うのだった。

「さて」

「何だ」

「まだ言うことがあるのか」

「ここでも見させてもらおう」

これが彼の言葉だった。消えていく中のだ。

「貴様等の戦いをな」

「そうしたければそうするといい」

「好きなだけな」

二人は素っ気無く返した。

「しかしだ。何時かはだ」

「倒す」

二人はその黒い霧を見据えて告げた。

「貴様もだ」

「そうさせてもらうぞ」

「そう思いたいなら思うといい」

「思うのはいいか」

「そう言うのだな」

「そうだ」

こう返すのだった。男の声はだ。

「そういうことだ。それではだ」

「その時は必ず来る」

「貴様が倒れる時がな」

男は完全に消えた。そうしてだった。

## 第四十六話 形変その十一

妖魔がだ。言ってきたのであった。

「いいか」

「無論だ」

「既にこちらはできている」

「我が二人の相手になる」

「こう二人に告げるのだった。」

「楽しませてもらう」

「稲妻か」

髑髏天使は彼を見て最初はそう見た。

「そうだな」

「違うな。火だ」

「火だというのか」

「もつと言えば雷炎だ」

「それだというのである。」

「我はそれなのだ」

「雷炎か」

「その力を見せよう」

この言葉と共にであった。洋間は自然と増えていった。

一人が二人になり二人が三人にだ。そうして無数に増えていくのであった。

「増えたか」

「言っておくが分身ではない」

増えながら死神に対して言葉を返す。

「それは言っておこう」

「では現実の身体か」

「如何にも」

「そうか」

それを聞いてもだ。動じない死神だった。  
そしてだ。彼は身構えるのだった。

「ならばだ」

「来るか」

「行かせてもらおう」

こう言つてであつた。そうして。

彼はあの漆黒の姿になつた。それからだつた。

彼もまた増えようとする。しかしここで、であつた。

「待つて」

「何だ」

目玉が出て来た。その彼に応えた。

「何かあるのか」

「あるから出て来たんだよ」

「こう返す目玉だつた。」

「だからだよ」

「それでは何だ」

「あのね、今わかつたことだけれど」

「今か」

「そう、わかつたんだ」

「これが目玉の言葉だつた。」

「あることがね」

「あることだと」

「これは髑髏天使もだけれど」

「あいつもか」

「うん、彼は自分でできるみたいだけれど」

死神にだ。さらに話すのだった。

「君の場合はね」

「違うか」

「そう、僕が必要なんだ」

「貴様がか」

「ほら。君と僕は」

「同じか」

「一心同体じゃない」

そうだといいのだった。

「生まれた時からね。一緒だったしね」

「お互いの考えていることがわかり」

「意志の疎通も言葉なしでもできるし」

それもだといふのだ。

「だからね。僕達はね」

「だからか」

「そう、同じだから」

そしてだ。目玉はまた言った。

「僕の方が必要になるんだ」

「それではどうなるのだ」

「どうなるかだね」

「そうだ、何がどうなる」

今度は目玉にこのことを問うのだった。

「一体だ。どうなるのだ」

「まずはね」

「まずは、か」

「バイク呼んで」

それをだといふのだった。今度はだ。

## 第四十六話 形変その十二

「バイクをね」

「ハーレーか」

「うん、ここに呼んで」

「わかった。それではだ」

死神は念じた。するとだった。

彼の前にあのハーレーが来た。そうしてであった。

目玉がそのハーレーの中に入った。するとだった。

バイクは銀と黒の馬になった。機械の八本足の馬にだ。蠶も銀に輝き目は黒くまさに機械の光を見せている。その機械の馬になったのだ。

その馬がだ。死神に言ってきた。

「乗って」

「これがか」

死神は目玉の言葉を聞きながら馬に告げた。目玉と馬は同じものだった。

「これが私の新しい力か」

「そういうことだよ」

「成程な」

死神はその馬を見ながらまた言った。

「そういうことか」

「乗るよね」

目玉はまた死神に言ってきた。

「やっぱり」

「そうさせてもらう。数が多い」

「こう返す死神だった。」

「すぐに倒すにはだ」

「馬に乗った方がいいよね」



「騎馬は歩兵に勝る」

古来の戦争の常識の一つである。騎馬を使うことにより他国を圧倒した国家は多い。その代表があゝのモンゴル帝国なのである。

「だからな」

「そうだね。それじゃあ」

「行くとするか」

また言う彼だった。

「それではだ」

「そういうことだね」

「行くぞ」

死神は馬に飛び乗った。鞍も鐙も手綱もない。だがそういったものは全て不要だった。

八本足の馬となった目玉にだ。こう言うのであった。

「頼んだぞ」

「任せて。それじゃあね」

彼等は戦場を駆けはじめた。死神は両手に持つ大鎌を右に左に振る。それによって妖魔達を次々に屠り赤い炎に変えていった。

そしてだ。髑髏天使もだった。

今は六枚羽根の黄金の天使の姿で両手に剣を持ち戦っている。その時だった。

死神を見てだ。彼は言った。

「面白いことになっているな」

「そうだな。確かにな」

「それはその通りだ」

妖魔達も彼の言葉に同意してきた。

「ああしたことができるとはな」

「あれが死神の新たな力か」

「実に面白い」

「全くだ」

「あの男にはできる」

牧村はここでまた言った。

「では。俺はどうなのだ」

「貴様はか」

「貴様はどうだというのだな」

「そうだ。俺はできるのか」

自分自身への問いであった。

「それを見てみたいものだ」

「そして勝つつもりか」

「我等に対して」

「力はこの場合は使う為にあるものだ」

そうだと。妖魔に返す髑髏天使だった。

「だからだ。そうさせてもらおう」

「では貴様もか」

「機械をか」

「持って来るのか」

「この通りだ」

言うのであった。地上にいて妖魔に囲まれている彼の頭上からだ。

あのサイドカーが飛んで来たのであった。そうしてであった。

サイドカーは流星を思わせる速さで彼の前に降り立って停まった。

それを見てだ。

髑髏天使は飛んだ。するとだ。

サイドカーも飛んだ。彼は己の愛車に右手の剣から黄金の光を放

ち当てた。するとだ。だ。だ。

マシンはその光の中で姿を変えていったのだった。

サイドカーからだ。平たいスカラベを思わせる黄金の機械の虫の

姿になってだ。そのうえで空を舞うのであった。

髑髏天使はその上に飛び乗った。するとだ。

これまでとは比較にならない速さで飛ぶ。そうしてだ。だ。

第四十六話 形変その十三

空にまで追ってきた妖魔達にだ。そのまま突っ込んだのだった。

「これならばだ」

「それは」

「虫か」

「それで来るか」

「確かに虫だ」

髑髏天使はその機械の虫の上から妖魔達に答えた。

「しかしだ」

「しかし、か」

「では何だというのだ」

「只の虫ではない」

まずはこう言ってからだった。

「これは天使の虫だ」

「天使のだと!?!」

「では貴様のか」

「貴様の虫だというのか」

「如何にも」

その通りだと返しもしてみせる彼だった。

「これはだ。髑髏天使の虫なのだ」

「髑髏天使の」

「それでは」

「この虫で貴様等を倒す」

こう言いながら突き進み続ける。

「ではだ。行くぞ」

「面白い。それならばだ」

「来い」

「来るがいい」

妖魔達はそれぞれの両手を髑髏天使に向けた。そのうえでそこから雷火を繰り出す。まさに雷と火が合さった。その絡み合ったものをだ。

無数のそれが髑髏天使に向かう。しかしだった。

髑髏天使はその両手の剣でだ。全ての雷火を打ち消してみせる。

そしてだ。

そのスカラベもだ。雷火を弾き返すのだった。

「通じぬだと」

「我等の力が」

「その虫にはか」

「効かぬというのか」

「俺自身に当たればわからない」

髑髏天使からの言葉だった。

「だが、だ。今はだ」

「その虫にはか」

「効果がないというのか」

「そうだというのか」

「その通りだ。そしてだ」

さらに言う彼だった。

「今の俺にだ。攻撃を当てられるのか」

「それか」

「まずはそれか」

「それをというのか」

「それはどうだ」

また言う髑髏天使だった。

「如何に貴様等の攻撃といえどだ」

「くっ、確かにな」

「速い」

「かなりの速さだ」

妖魔達の声に歯噛みが宿った。虫の速さはかなりのものでだ。妖

魔達が取り囲んでそのうえで攻撃を繰り返してもだ。とてもであつた。

「これではだ」

「攻撃を当てられはしない」

「我等ですらか」

「まさか」

「そしてだ」

虫は突き進む。そうしてだつた。

前にいる妖魔達に体当たりをしてそうして消し飛ばす。青白い炎が次々に沸き起こる。

「この戦いだ」

「何だというのだ」

「今度は」

「もらった」

これが髑髏天使の今の言葉だ。

「完全にだ」

「おのれ、しかしだ」

「数は我等が有利だ」

「それを忘れるな」

妖魔達の言葉はだ。完全に負け惜しみになっていた。

#### 第四十六話 形変その十四

そしてだ。彼等は攻撃を当てられずその虫に消し飛ばされ次々に青白い炎に変わっていく。それは死神と目玉の前にも同じだった。

その二人がだ。お互いに話すのだった。その間も馬は進み鎌が煌く。彼等の周りでは赤い炎が次々と発生することになっていた。

そしてだった。その中でだった。彼等は話すのだった。

「いけるね」

「そうだな」

死神は目玉の言葉に答えた。馬になっている彼のだ。

「これはな」

「万全だな」

「そうだね、いけるね」

「間違いなくな」

「ただね」

しかしだ。ここで目玉は言った。

「僕もこうして戦いに加わるってことはね」

「それだけのことになっているということか」

「うん」

こう答える目玉だった。

「力が備われればその前にその力を使わなければならない相手が出て来る」

「それが今だな」

「そういうことだからね」

こう彼に話すのだった。

「それはわかっておいてね」

「無論だ」

死神の返答は簡潔なものだった。

「それはだ」

「わかつているならいいよ」

「そうか」

「今度はどういった相手かな」

目玉の声に興味深いものを期待するものが宿った。

「一体ね」

「そうだな。おそらくはだ」

「おそらくは？」

「そろそろ神が出て来るな」

「神、ね」

「それが出て来るな」

「こう話すのだった。」

「おそらくだがな」

「そうなんだ、神が」

「そうだ、あの男は」

「あれはまだだろうね」

目玉はこう死神に返した。 6

「多分ね」

「まだか」

「多分だけれどね」

「これが彼の予想だった。」

「それはないね」

「そうか」

「うん、それでだけれど」

「ああ、今だな」

「今のこの妖魔達はこのままいけるかな」

「いけるな」

それは間違いないという死神だった。

「普通にな」

「そうだね。僕も加わったせいかな」

「それは間違いない」

死神は言いながら左に鎌を振るった。それでだった。

そこにいた妖魔の一人をだ。赤い炎に変えたのだった。

そのうえでだ。また目玉に対して述べた。

「馬が手に入ったことはだ」

「やっぱり大きいよね」

「これからは戦いでも共にだな」

「そうだね」

また答えた目玉だった。

「じゃあ一緒にね」

「戦うでしょう」

「うん、じゃあね」

こうしてだった。死神は今二人であった。まさに一心同体となりそのうえでだ。縦横に戦い妖魔の数を次々と減らしていく。

髑髏天使もだった。突き進み続けていく。その突進の中で妖魔を屠っていく。

そうしてだ。彼は言うのであった。

「貴様等を倒してだ」

「どつするといふのだ」

「それで」

「俺は次の戦いに向う」

そうするといふのである。



## 第四十六話 形変その十五

「そうさせてもらっ」

「次の戦いにか」

「我等を全て倒したうえで」

「そのうえでか」

「そうだ、戦っ」

まさにそうするという彼だった。そしてだ。

さらに倒してだ。遂に彼の周りにいる全ての妖魔を倒した。最後の一体が青い炎の中でこう彼に対して言うのを聞いていた。

「見事だったと言おう」

「そう言うのか」

「そうだ、そう言う」

こう髑髏天使に言うのだった。

「そしてだ」

「そしてか」

「次の戦いに向かうのだな」

「言ったままだ」

「それはわかった」

妖魔は髑髏天使の言葉を受けた。そうしてだった。

「貴様はその戦いでだ」

「何だというのだ」

「死ぬのだな」

「死ぬというのか」

「次の相手は我よりもさらに強くなる」

「こう言うのであった。」

「そして死ぬのだ」

「残念だが俺はだ」 56

「生きるつもりか」

「少なくとも死ぬつもりはない」

「そうだというのだった。」

「全くな」

「次の相手は我よりもさらに強い」

「それはわかっている」

「それならば勝てる筈がない」

「これが妖魔の主張だった。」

「今の貴様ではな」

「今の俺では勝てなくともだ」

「だが、だった。髑髏天使はここでこう言ってみせたのだった。」

「その時の俺は勝つ」

「今の貴様ではなくか」

「そうだ、その時の俺はだ」

「そうだというのである。」

「勝つ。必ずだ」

「言うものだな」

「何度も言う。それにだ」

「それにか」

「俺だけではない」

この言葉を言ったその時だった。彼のところに死神が来た。その八本足の機械の馬に乗ってだ。そうしてそこに来たのである。

「この男もいる」

「死神もか」

「そうだ、俺達は一人ではないのだ」

「だから勝つというのか」

「そういうことだ。貴様もそれはわかった筈だな」

「そうだな」

そしてだった。妖魔も彼のその言葉を否定しなかった。

青い炎と完全に一つになりながらもだ。彼は言うのだった。

「二人だな」

「いやいや、違うよ」

目玉も出て来た。そうしての言葉だった。

「二人じゃないよ」

「責様もか」

「そういうこと」

これが彼の言いたいことだった。

「それはわかっかけていてね」

「わかっかけている」

死神も彼に言葉を返した。

「それではだ」

「うん、宜しくね」

「ここでも二人になったな」

そうだというのだった。死神もだ。

「そうだな」

「うん、そうだね」

「ではだ」

死神はだ。髑髏天使に顔を向けてきた。そのうえでだった。

## 第四十六話 形変その十六

「こう髑髏天使に言う。

「まただな」

「これで終わりか」

「この戦いはな。これで終わりだ」

「そうだな。それではだ」

変身を解き牧村に戻った。そのうえでだ。

彼もまた言ってきた。

「帰るとするか」

「戦う度にだ」

ふとだ。死神はこうも言ってきたのだった。

「しかしだ」

「しかし、か」

「果たしてどうなるかだな」

「こう話す彼だった。」

「これからは」

「戦う度にどうなるか、か」

「それがわからない」

死神の言葉は今一つよくわからないものだった。牧村もそれを聞いていた。そうしてそのうえでこんなことを言うのであった。

「私の力はここで終わりなのか」

「先程のあれか」

「貴様も同じだな」

「そうだな。あの虫だな」

「黄金の虫だ」

牧村が髑髏天使として乗った。そのスカラベである。

そのスカラベを使ってだ。彼は言うのであった。

「あの力があるのはわからなかった」

「お互いにな」

「力は自分ではわからない」  
また話す死神だった。

「何があるからな」

「力はその都度発揮されていく」

牧村の言葉はこうしたものだった。

「そして勝つ」

「果たして何処までの力があるのは考えないか」  
「特にな」

「そうか。貴様はか」

「俺はその中で戦い。そしてだ」

「妖魔達を倒すか」48

「そうしていくつもりだ」

「成程な」

そこまで聞いて頷く死神だった。そうしてだった。  
彼の前にあのハーレーが来た。今は馬ではなかった。

そのハーレーを前にしてだ。彼はまた話した。

「ものを変えられるようになった」

「馬にだな」

「これもまた力だ」

「そうだというのだった。」

「それをだ。使う」

「そうするか」

「では、だ」

死神はバイクに乗った。そのハーレーにだ。  
ハーレーに乗ってそのうえで去ろうとする。ここでだ。

牧村の前にも来た。サイドカーがだ。彼もそれに乗った。

そうして二人でだ。こう話すのであった。

「またな」

「次の戦いで会おう」

「多分だけれどね」  
目玉も話に入ってきた。それからだった。三人で話すのだった。  
「物凄いことになるよ、次からね」  
「次からね」  
「戦う度に手強い妖魔が出ているし」  
「こう二人に言うのだった。」  
「近いうちにね。出るよ」  
「神がだな」  
「そう、神がね」  
出て来るといっているのである。  
「その時のことは考えているね」  
「私もだな」  
「俺もだな」  
「そう、二人共ね」  
彼等双方に対しての言葉だった。それを言うのであった。  
「考えてるよね、勿論」  
「その神を倒す」  
「同じだ」  
「これがその彼等の返答だった。」  
「それだけだ」  
「これで間違っているか」  
「いや、いいよ」  
目玉の返答は満足したものだった。  
「それでね。僕も同じだから」  
「そういうことだな」  
死神が目玉のその言葉に頷いた。  
「私達もな」  
「何か楽しくなってきたよ」  
目玉の言葉がふとつきうきとしたものになった。  
「急にね」

「戦いに参加できるからな」

「うん、だからね」

まさにそれが理由だった。

「そうなってきたよ」

「なら共に楽しむか」

「うん、そうしよう」

「私達はこれから戦いの時も常に一緒だ」

「ずっとね。離れないよね」

こんな話をしてだ。彼等は今は自分達のその世界に戻るのだった。そうしてだった。そのうえで、である。

牧村も自分の居場所に戻った。そこはだ。

屋敷である。そこに戻って休むのだった。それでその日は終わりであった。だが、である。彼等は戦いの中に生き続けるのだった。

今は。

## 第四十六話

完

2010・10・21

## 第四十七話 神々その一

髑髏天使

第四十七話 神々

博士はだ。また牧村と話をしていた。今はうどんを食べている。うどんといつても博士の知り合いの家でだ。夏だが鍋でうどんを食べているのだ。

かなり巨大な鍋で妖怪達も一緒である。妖怪達はそのうどんを食べながら汗だくなつてだ。そのうえで博士にこんなことを言うのだ。

「いや、夏にうどんもね」

「いいよね」

「暑い時は汗をかくのもよし」

「そういうことだね」

「そうじゃ。だからなのじゃよ」

博士も鍋からうどんを取って自分の茶碗の中に入れてどんどん食べている。そうしながらの言葉だった。

「うどんにしたのじゃ」

「しかも唐辛子もたつぷりかけて」

「それでだよね」

「うどんすきにしたんだね」

「そうなんだね」

「その通りじゃよ。うどんはいいものじゃ」

博士も汗をかいている。その白く多い髭がだ。汗だくになっている。

その汗だくになっている顔をそのままにしてだ。さらに食べていく彼だった。

そして食べながらだ。博士はこうも言った。

「それでうどんじゃが」



「これだよね」

「うどんのことだよね」

「そう、それじゃ」

今食べているそのうどんのことも話す。見ればだ。そのうどんは何処か四角い。そしてやけに固いものに見えるものであった。

そのうどんを食べながらだ。博士は言うのだった。

「このうどんはどうじゃ？」

「これって冷凍うどんだよ」

「それだよ」

妖怪達もだ。それぞれの箸でそのうどんを自分達の茶碗に入れていつて食べながら話す。食べるその傍からうどんが鍋に入れられていく。

「これってそうだよ」

「凍らしてるんだね」

「これが中々いいのじゃよ」

博士は汗をかきながらもほくほくとしている。

「かなりのう」

「味、かなりいいね」

「それにコシもあるしね」

「いい感じだね」

「美味しいよ」

「冷凍うどんは馬鹿にできんものじゃ」

まさにそうだとするのである。

「だからじゃよ。今日はこれにしたのじゃ」

「成程ね」

「そうだったんだ」

「そうしたんだ」

「そうじゃ。それでなのじゃよ」

博士の話ではそうであった。

「冷凍うどんは美味いからう」

「ただ茹でるだけなのにね」  
「それでも下手なお店のうどんより美味しいって」  
「凄い食べ物だね」  
「これって」  
「美味しいものは何処にもあるのじゃよ」  
「そうだといい博士だった。」  
「何処にでもあるのじゃよ」  
「そうだな」  
「ここでだ。牧村はここでははじめて言った。そうしてだ。彼もまたうどんを食べる。そのうえでの言葉だった。」  
「冷凍うどんは美味しい」  
「ふむ、君もわかるか」  
「味はわかる」  
「そうだ。彼も言った。」  
「自信がある」  
「それは何よりじゃな」  
「このうどんはコシが中々なくならないしな」  
「それもあるからじゃ。冷凍うどんはいいのじゃ」  
「またこう言う博士だった。とにかく冷凍うどんを褒める。」  
「暇な時は夏でも冬でもこれじゃよ」  
「博士ってとにかく好きな食べ物多いよね」  
「そうだね」  
「妖怪達は博士のこのことも話した。」  
「お菓子だって好きだしね」  
「カレーだってそうだし」  
「とにかく何でも食べるし」  
「しかも残さないし」  
「このことも加わるのだった。」  
「だから長生きしてるんだね」  
「そうなるかのう」

それを否定しない博士だった。

## 第四十七話 神々その二

「やはり食べる」じじや

「そうですよね」

ろく子の首がここで延びてきた。身体はそのまま箸を持っている。

「やっぱり食べないと駄目ですよね」

「うむ。そうじや」

「このおうどんも」

ろく子は今度は鍋の中のそのうどんを見ながら話す。

「身体にいいですからね」

「あれじゃな」

子泣き爺もそのうどんを食べている。そうしながらろく子に伝えるのだ。

「身体があつたまるからじゃな」

「はい、そうです」

「うどんだけではないからのう」

砂かけ婆も当然ながら食べている。

「お野菜に茸にのう」

「葱に白菜に」

塗り壁はそのうどんと共に鍋の中にあるものを見ている。

「椎茸にエノキにね」

「それにお豆腐」

一旦木綿は実際に豆腐を鍋からすくって己の茶碗の中に入れてい

る。

「これもよいよい」

「御餅もね」

「からかさはそれだった。」

「おうどんに合うんだよね」

「揚げもだよ」

「これも外せないし」

ひょうすべとさとりは揚げを楽しんでいる。

「とにかく。おうどんってこういうのをどんどん入れて食べられるから」

「いいんだよね」

「暑いけれどね」

雪女はこのことに苦笑いだった。その白い顔に汗をかいている。

それが何処か溶けそうなの、そんな感じを周囲に見せてもいた。

「それが困るけれど」

「あの、雪女さんって」

雨ふり小僧がその雪女に尋ねる。

「夏でもいいんですか？」

「何とかね」

「そうなんですか」

「溶けることはないわ」

それはいいというのである。本人の言葉ではだ。

「ただね」

「ただ？」

「苦手なのは確かよ」

言いながらうどんをさらに食べる。ただし口の中に入れる前にだ。

口から冷たい息を出してそれで冷やすことも忘れていない。

「こうしないと食べられないから」

「辛いですね、それは」

「雪女だからね」

理由はこれに尽きた。

「暑いのか熱いのに弱いなのよ」

「けれどこうして一緒に食べられる」

輸入道は茶碗を己の前に浮かせて念力でうどんをその中に入れてだ。そのうえでうどんやその他のものを食べてそうしながら話している。

「友達としてはそれが嬉しいよ」

「そうじゃのう」

博士もだ。そのことを喜んでうどんをさらに食べていく。

「こうして大勢で食べてこそじゃな」

「そうそう。冷凍うどんっていいよね」

「幾らでも食べられるし」

「しかも鍋に最適」

「いい食べ物だよ」

妖怪達は機嫌のいい声でそれぞれ言う。そのうえでだ。

牧村にも顔を向けてだ。彼に言うのであった。

「食べて食べて」

「どんどんね」

「遠慮はいらないよ」

「最初からしていない」

こう返す牧村だった。実際に彼の茶碗の中には大量のうどんがある。それに葱や春菊、そして鶏肉に鱈まで入っていた。

「食べさせてもらっている」

「牧村さんは一番食べないとね」

「髑髏天使だから」

「だからね」

ここでもこう言われる彼だった。

## 第四十七話 神々その三

「食べて力をつけて」

「栄養を摂って」

妖怪達はさらに話していく。

「それからね」

「戦いに勝たないとね」

「勝つ為にか」

ここでだ。牧村の言葉に強いものが宿った。そうしてだった。彼はこう返すのだった。

「俺はだ」

「俺は？」

「どうしたの？」

「俺は生きる」

これが彼の言葉だった。

「勝つ以上にだ。生きる」

「そうするんだね」

「勝つんじゃなくて生きる」

「そうするんだ」

「人間として生きる」

そうするというのがこの世である。

「それでは駄目か」

「いいと思うよ」

「そうだよね」

「それもね。人間として生きるのもね」

「いいんじゃないかな」

妖怪達は彼のその言葉を否定しなかった。

「っていうか牧村さん人間だし」

「そうそう、人間だからね」

「それだったらね」

「そういう考えもいいよね」

「確かにね」

「そうか」

牧村も妖怪達の言葉を受けてだ。まずはこう呟いた。

そしてそれからだ。こう言うのだった。

「勝つことよりも生きることを考えていいのか」

「はい、それでいいんですよ」

ろく子の首が延びてきてだ。彼に話してきた。その知的な美貌をたたえた顔をにこにこさせせてだ。そのうえで彼に話してくるのだ。つた。

「勝つことよりもです」

「勝つことよりもか」

「生きる方が大変ですから」

「生きる方がか」

「はい、私はそう思います」

こう話してだ。また牧村に言うのだった。首を延ばしたままでだ。

「勝つても死んだりするじゃないですか」

「特攻か」

「極端な例はそれですね」

「あの様にか」

「勝つには命を賭ければそれでできる場合もあります」

「しかし生きるのはか」

「そうはいきません」

こう話してだ。その理由も話すろく子だった。

「負けて生きることできますよね」

「それはな」

「撤退すればいいんですし」

「しかしその撤退もだ」

「とても難しいですよね」



ここで博士も加わるのだった。うどんを食べながら。

「戦争で一番難しいのは撤退じゃよ」

「よく言われる話ですね」

「戦国時代では殿を無事務められる者こそが最高じゃった」

博士はその話もした。

「まさにそれこそがだ」

「そうそう、本多平八郎ね」

「あれは凄かったよね」

妖怪達はこの武人の話をする。徳川四天王の一人と言われ恐ろしいまでの武勲を重ねていった者である。その強さは伝説にまでなっている。

「武田に攻められて後ろを持ってもね」

「怪我一つせずに軍を退かせたからね」

「いや、退き佐久間や逃げ弾正も凄かったけれど」

「あの人は別格だったよね」

「全くだよ」

「そういうことです」

ここでまた牧村に言うろく子だった。

「撤退は生きてこそですね」

「ああ」

牧村も目の前の彼女の顔を見ながら頷く。

#### 第四十七話 神々その四

「その通りだ」

「生きていればまた次もありますし」

「次もか」

「やっぱり命あつての戦いですから」

「だから生きることを選んで正解か」

「その通りです。ただ」

また、だった。ろく子は言葉を付け加えてきたのだった。こう言うのだった。

「それは最後の最後までですよ」

「最後の最後まで」

「はい、全ての戦いが終わりました」

「その時か」

「その時にも生きていないと駄目ですよ」

これがろく子の言いたいことだった。

「絶対に」

「そういうことか」

「戦いが終わっても生きていないと」

「駄目か」

「絶対に駄目です」

ろく子の今の言葉はぴしやりとしたものだった。

「それでそれからの生活も楽しまないと」

「駄目なのだな」

「ですから。生きて下さい」

またにこやかな優しい声に戻ったろく子だった。

「いいですね」

「わかった。ならだ」

「生きられますね」

「俺は生きる」

このことをだ。また自分の口で言うのだった。そうしてだ。再び自分の茶碗の中にうどんを入れてだ。食べる。もうかなり煮ている筈だ。しかしそれでもだった。

「美味しいな」

「冷凍うどんのコシは強い」

「だからか」

「左様、だから美味しいのじゃ」

こう話す博士だった。

「かなりのう」

「そうだな。冷凍うどんはだからいい」

「これはインスタントラーメンに匹敵する発明品じゃよ」

「そこまでいくか」

「普通にいくじゃろ」

博士も言いながら食べる。

「ここまで美味しいのじゃからな」

「そうか」

「さて、それでじゃが」

「それでは」

「まだあるのじゃ」

言いながらだ。その冷凍うどんの玉を出してきた。見れば数えるのも馬鹿馬鹿しいだけある。

「食べられるかのう」

「楽勝楽勝」

「そうそう」

「僕達にかかればね」

妖怪達は博士に次々に言う。

「食べるの得意だからね」

「うどん大好きだし」

「それならだよ」

「あるだけ食べるから」

「好きなだけね」

「私もいるしね」

二口女がここで出て来た。頭の後ろに方に大きな口がある。

「安心して」

「あっ、そうそう。二口女がいたんだ」

「食べるのなら二口女だよね」

「やっぱりね」

「そうよ。食べるのならね」

実際にこう話す二口女だった。前の口での言葉である。

「もうどれだけでもね」

「頼もしいね、こうした時は」

「本当にね」

妖怪達はその彼女を見て笑顔になっている。

「じゃあ今は」

「あるだけ食べて」

「それでお開きにしようよ」

「最後にはですね」

ろく子も話してきた。

## 第四十七話 神々その五

「デザートもありますよ」

「デザート？」

「デザートは何かな」

「うどんの後は」

「おはぎです」

それだというのである。

「餡子をたっぷりと使った」

「いいねえ」

「それとお茶だよね」

「この組み合わせがね」

「シメに来るとね」

「そうじゃな」

博士もおはぎと聞いてた。満足した顔になっていた。そのうえで言うのだった。

「それでは。最後はそれじゃな」

「勿論牧村さんもね」

「おはぎ食べるよね」

「それも」

「好物だ」

一言で言う彼だった。

「実際にだ」

「そう言うと思ったよ」

「甘いもの大好きだしね」

「だったらおうどんの後も皆で」

「食べようよ」

こんな話をしてだった。彼等は食べるのだった。そうしてである。博士は食べ終えた後でだ。牧村に話す。周りではたらふく食べた

妖怪達が満足している面持ちでそれぞれ横たわっている、その中で話すのだった。

「さて」

「話はまだあるのか」

「あるから話すのじゃ」

まさにそうだとするのである。

「それでなのじゃがな」

「妖魔の話か、それとも」

「髑髏天使の話じゃ」

そちらだというのである。

「それじゃがな」

「髑髏天使のか」

「今度はものの形を変えられるようになったな」

「ああ」

博士の言葉にこくりと頷く。その通りだった。

「その通りだ」

「剣を大きくできてサイドカーをスカラベに変えてか」

「それもあの天使の力か」

「その様じゃな。実はわしも知らなかった」

「そうだったのか」

「そうじゃ、知らなかった」

こう牧村に話す博士だった。

「あの天使についてはまだよくわかっておらん」

「力についてか」

「うむ、まだまだ未知の力があるかもな」

「そうなのか」

「ただ全ての力を使えてじゃ」

これまでの天使の力をといて意味である。

「そしてものの形を変えられる」

「その他にもか」

「あるかもな。少なくともこれまでの天使達とは違う」  
「最高位であるだけに」  
「だからこそ違うのじゃ」  
まさにそこにあるのだという博士だった。  
「あの階級はそこまでのものがあるようじゃ」  
「そうか」  
「そうじゃ。それでじゃが」  
「ああ」  
「それだけの力が必要となっておる」  
博士の言葉が妙に哲学的な響きを帯びてきた。  
「そういうことでもあるな」  
「必要にか」  
「では今の力は不要か」  
牧村自身にも問い返してみせる。  
「それはどうなのじゃ」  
「一つでも欠ければだ」  
「うむ」  
「死ぬ」  
「これが返答だった。」  
「俺はだ。間違いなく死ぬ」  
「そうなるというのじゃな」  
「だからだ。必要だ」  
「そういうことじゃな」  
「そうだ。それでだが」  
さらにだ。彼は話した。

## 第四十七話 神々その六

「俺は生きる」

「さつきも言ったのう」

「生きるが卑怯なことはいらない」

「戦いの中にあってもじゃな」

「それをすればだ」

「ここだ。こんなことも話すのだった。

「死ぬ気がする」

「死ぬというのじゃな」

「そんな気がする。何故かわからないがな」

「ああ、それはわかるぞ」

博士は牧村の今の言葉にすぐに答えてきた。

「それはのう。わかるぞ」

「わかるか」

「うむ、わかる」

また言う博士だった。

「よくな。つまりはじゃ」

「つまり、か」

「あれじゃよ。その場合の死ぬとはじゃ」

その場合とは。博士は話すのだった。

「君の心が死ぬということじゃ」

「俺の心がか」

「この場合心は誇りじゃ」

それだということのである。

「そういうことなのじゃ」

「そうなのか」

「左様、君の心が死ぬ」

博士はまた話した。



「そういうことじゃ」  
「卑怯なことをすればか」  
「誇りはあるな」  
今は牧村の目を見ていた。そのうえでの問いだった。  
「君には」  
「ないと言えはどつ思つ」  
「嘘じゃと思つ」  
これが返答だった。  
「確実に。嘘じゃと思つぞ」  
「そういうことか」  
「少なくとも信じられん」  
博士はまたこう話した。  
「君を見ていればじゃ」  
「そうなのか」  
「君は髑髏天使であることに誇りを持っているな」  
「如何にも」  
そしてだった。彼はここでそのことを認めてみせた。  
そのうえでだ。こつも言つのだった。  
「その通りだ」  
「そういうことじゃ。人は誇りがある」  
また言つのだった。  
「特に君は髑髏天使として、戦う者として」  
「それ故に誇りがか」  
「あるということじゃよ」  
「だから俺は卑怯にはか」  
「抵抗があるのじゃよ」  
そしてだった。博士はこんなことも行ってみせたのだった。  
牧村はだ。こつ話した。  
「俺が知っている人間にはだ」  
「うむ」

「中には平然と卑劣なことをしている者もいるな」

「確かに多いのう」

博士もそうした人間は知っていた。世の中にある通りだ。

「そうした人間は」

「そうだな。確かにな」

「そうした人間に誇りはないのだな」

「うむ、ない」

断言した博士だった。

「誇りは恥でもある」

「恥か」

「恥を知るということじゃ」

それだというのである。

「そして恥を知らぬ者はじゃ。何処までも卑劣になる」

「そういうことか」

「恥を恥と思わなくなった時」

博士の言葉は続く。格言めいたものになっていた。

## 第四十七話 神々その七

「最も恐ろしい腐敗がはじまるといふな」

「それはそのせいか」

「卑劣を極められるようになるからじゃよ」

「だからか」

「そういうことじゃ。卑劣になれるからじゃよ」

「そういえば魔物達はだ」

話していて彼等のことを考えた。そして言う牧村だった。

「卑劣ではなかったな」

「誇りがあつたからのう」

「そして妖魔達も」

「いや、あの者達はまた違うな」

「違うか」

「うむ、違う」

また言う博士だった。

「あれは本能のみじゃな」

「本能か」

「高い知性はあるようじゃ」

「それがあつてもか」

「本能があまりにも強い」

「本能がか」

「それがじゃ」

こう牧村に話す博士だった。

「かなりのう」

「そしてそれでなのか」

「妖魔に魔物程知性は感じられないのじゃ」

「しかし知性はあるのか」

「それは間違いないな」

博士は考える顔になって牧村に述べた。

「だから考えることもできる」

「戦いにおいてるか」

「知性はあるな」

「そうだな。ある」

牧村は強い言葉で頷いてみせた。実際にこのことはよく感じていた。何度も戦い倒していればだ。それでわかることであつたのだ。

「だが確かにだ」

「本能はか」

「それがあまりにも強いんじゃない」

「本能は知性と対立するものか」

「決してそうではない」

それは否定する博士だつた。

「だがそれが強過ぎればじゃ」

「その場合は、か」

「そのみになってしまう」

そうだというのである。

「そういうことじゃ」

「それでか」

「うむ、それでじゃ」

また話す博士だつた。

「それで妖魔から知性はそれ程感じられないのじゃ」

「そういうことだな」

「うむ、妖魔は決して愚かではない」

「それはわかつておくことだな」

「左様。敵はよく知ることじゃ」

戦い方の話にもなつた。それからだつた。

博士はだ。こつも言つた。

「敵を知り」

「またそれか」

「そして己も知る」  
「このことも話した。」  
「それでよいのじゃ」  
「そうすれば百戦危うからずだな」  
「そういうことじゃよ。何度も話しておるがな」  
「向こうはどう考えているかだが」  
「それか」  
「妖魔は俺を調べているのか」  
「いや、それはないな」  
「博士はその可能性は否定した。」  
「聞いたところそれはないな」  
「ないか」  
「そうじゃ、ない」  
「また言う博士だった。」

## 第四十七話 神々その八

「それはない」

「本能故か」

「本能のまま戦う」

既に妖魔の習性は把握していた。だからこそ言えたのだ。

「だから調べることはじゃ」

「それはないか」

「まずない。それは安心することじゃ」

「わかった」

牧村は博士のその言葉に頷いた。そしてだ。

そのうえでだ。落ち着いた声で述べたのだった。

「その時になるまでどの妖魔と戦うのかもわからないしな」

「魔物の時とそれは同じじゃな」

「しかし妖魔の習性は把握した」

それはだというのだ。

「本능が異様なまでに強いか」

「そういうことじゃ」

「それはわかった」

博士の言葉に頷いてみせた。

「ではそれを把握してだ」

「戦うとよいぞ」

「またすぐに戦いになるしな」

「どうやらその戦いも核心に近付いているな」

博士はここでこんなことも言った。

「少しずつだがな」

「少しずつでもか」

「近付いている」

そうだというのである。

「そうなっているぞ」

「そうか」

「そして神々じゃが」

博士はこの存在も話に出してきた。

「妖魔の神々じゃが」

「魔神達とは明らかに違うな」

「破壊と混沌の存在だからのう」

「全く別だな」

「何もかもがそうじゃな」

「そうだというのだった。」

「やはり妖魔だからじゃ」

「それでか」

「それでじゃ。その混沌の渦の中の中心にいる」

「その神々を倒せばだな」

「妖魔との戦いは終わりじゃな」

「そうなるか」

「そこまで頑張ってくれ」

牧村の目を見ながら告げた。

「頼むぞ」

「俺は死なない」

「ここでもこう言う牧村だった。」

「それは約束する」

「頼むぞ。それではな」

「ああ、わかった」

こんな話をしていたのだった。そしてだ。

夏が終わろうとする中でだ。屋敷で祖父母に言われたのだった。

「ねえ」

「もうすぐだな」

「まずはここからだっただ。」

庭の見える縁先で西瓜を食べているとだ。二人が彼のところに来

て言ってきたのだ。

「神戸に戻るのね」

「そうするんだな」

「ああ、そうだ」

その通りだと答えた彼だった。

「この夏は有り難う」

「いえいえ、いいのよ」

「それでだ」

「それで？」

「あんたこれからは」

「どうするつもりだ」

孫にこう問うてきたのだ。

「神戸に戻ったら」

「武道からは離れるのか」

「武道か」

それを聞いてだ。牧村の眉が少し動いた。

そしてそのうえでだ。こう祖父母に返した。

「俺は元々テニスとフェシングの人間だからな」

「それでなのね」

「離れるか」

「座禅はする」

それはだというのだ。



## 第四十七話 神々その九

「それはしていくがな」

「そうなの。それはね」

「座禅はするか」

「ああ。していく」

こう答える彼だった。

「だが。剣道や薙刀はだ」

「それはしないのね」

「やはりな」

「戦うスタイルが違うからな」

彼がしない理由はそれだった。だから剣道は積極的にしないというのだ。

それでだ。彼はまた言った。

「剣道や薙刀はフェシングとは全く違うからな」

「それは当然だ」

祖父が彼に答えた。

「当然のことだ」

「そもそも文化も文明も違うしね」

祖母も言ってきた。

「だからそれはね」

「全く違って当然か」

「それでか」

祖父母の話聞いてだ。彼も納得した顔で頷いた。

そのうえでだ。彼は言うのだった。

「ではそれではか」

「そうだ。だが座禅をするのならだ」

祖父はその座禅のことを話した。

「それは御前にとっていいことだ」

「いいことか」

「座禅はただ座るだけではない」

それだけではないというのだ。

「そこから無限を感じ無我の中に入る」

「無我か」

「そこから感じ取っていく。いいな」

「続けていく」

これが彼の返答だった。

「そうしてな」

「そうしたらいいわ」

こう言う祖母だった。

「是非ね。そうしなさい」

「わかった」

「きつといいことになっていくから」

「少なくともいいことは既にあつた」

牧村は魔物になるうとしながら人間に留まれたことを思い出していた。座禅もまたそうだった。一つだとだ。このことを思い出したのである。

「そしてこれからもだな」

「これからもね。その通りよ」

「座禅の中にはないものもある」

祖父が不意に言った。

「それは何だと思う」

「ないものか」

「そうだ。それは何だ」

「何かだな」

「そうだ。何だと思うのだ」

こう牧村に対して話すのだった。

「それはだ、何だ」

「わからない」

まだだ。牧村はこのことはわからなかった。  
そうしてだ。彼はいぶかしむ顔で言った。

「それはだ」

「そうか。まだわからないか」

「これからもどうなるかわからない」

「こつも言う牧村だった。

「だが。わかるか」

「わかるかも知れない」

祖父も今は断言しなかった。あえてこつ言ったのである。

「それはだ」

「わからないのか」

「そのことはわからない」

こつ表現して孫に伝えた。

「そうとしか言えない」

「そうか」

「未来は誰にもわからんさ」

「そうだな、それはだな」

「そついうことだ」

孫に言う言葉はこれだった。

「それでだ。やることはだ」

「それでも生きるか」

「そうだ、先に進め」

また孫に告げた。

## 第四十七話 神々その十

「わかったな」

「わかったつもりになった。それではだ」

「はい、西瓜ね」

祖母が切ったその西瓜を出してきた。奇麗に三角に切っている。

「まだまだあるから遠慮しなくていいよ」

「美味しいな」

牧村は祖母の差し出したその西瓜を受け取って先を一口かじってから述べた。

「しかもよく冷えている」

「冷蔵庫でさつきまで冷やしておいたからね」

「それでか」

「そうだよ、それだよ」

笑顔で孫に話すのだった。

「それでなんだよ」

「成程な。それで美味しいのか」

「西瓜はそのままで甘いんだよ」

祖母はこんな話をしてきた。

「西瓜のままでね」

「塩をかけなくてもか」

「そうだよ。それでも美味しいのが西瓜なんだよ」

「そうだな。確かにな」

牧村は実際に今西瓜に塩をかけていない。それでもだった。

その西瓜は美味かった。確かにだ。その西瓜を食べながらだ。牧

村はまた言った。

「美味しいものはそのままでもか」

「そういうことだよ」

「ただしだ」

「ここで祖父がまた彼に言う。

「美味くなるまでにはそれなりのことが必要だ」

「手入れか」

「そうじゃ。手入れは必要じゃ」

「このことを言うのは忘れないのだった。

「それはわかっておるな」

「つまりは。人も同じだな」

「わかっていればよい。それでじゃが」

「わかっている。座禅もしてだな」

「身体だけでなく心も同じなのじゃよ」

「そういうことだな」

「来期はね」

祖母は孫に直接語りかけた。その名前を出してだ。

「昔から身体を鍛えてはいたけれどね」

「心はそうではなかったからな」

「心か」

「そうだ、心の鍛錬はしていなかったな」

「ここでは修行という意味である。そうした意味での言葉だった。

「だが身体だけではなくだ」

「心もだな」

「健全な精神は健全な肉体に宿る」

祖父はこの言葉を出した。着ている夏用の和服の袖の中でそうし

てだ。

「この言葉の最後はだ」

「それで終わりではなくか」

「かし、という言葉が加わる」

「そうだというのであった。

「宿って欲しいという意味だ」

「かし、はそうであってもらいたいという意味でか」

「そうだ、健全な肉体だけでは駄目だ」

「健全な精神もだな」

「それを忘れないことだ」

こう孫に告げる。

「神戸に戻ってもだ。心の鍛錬もだ」

「忘れずにだな」

「そうしていくことだ」

こんな話もするのだった。そしてこのことを若奈にも話す。場所は難波の喫茶店である。その中に入って話をするのだった。

若奈はだ。紅茶を飲みながら話を聞いてだ。まずはこう言った。

「凄いお爺さんね」

「そうか」

「そして凄いお婆さんね」

どちらも凄いというのである。

「本当にね」

「そんなに凄いか」

「今そんなこと言う人少ないわよ」

だからだというのである。

「だから。凄いお爺さんとお婆さんね」

昔から可愛がってくれるが厳しかった」

「優しくかつ厳しいのね」

「そういうことになる」

牧村も紅茶を飲んでいる。白い洒落た店の中でそんな話をしていく。

「そうした祖父母だ」

「うっん、和風でしかもそれって」

「滅多にいないか」

「もうね。そういう人達ってかなり減ったわよね」

「確かにね。いなくなっただな」

「そうそう。おられることはおられるけれど」

それでもだというのである。

## 第四十七話 神々その十一

「少なくなつて」

「そうした意味でも貴重な存在だな」

「そうね。牧村君にとつてだけじゃなく」

若奈の言葉は彼に止まらなかつた。さらに広い範囲での言葉だつた。

「日本にとつてもね」

「大きくなつたな」

「だつてそういう人つてね」

「必要か」

「どうしてもね。そうだから」

「注意する人はか」

「必要よ」

だからだと言つ若奈だつた。

「それでなのよ」

「そうだな。そうした人はな」

「最近かなり減つてしまつたけれどね」

「残念な話ではあるな」

「昔はやっぱりいたのよね」

「博士の話ではな」

その博士である。百年以上生きている人間の言葉だというのだ。

「いたらしい」

「戦前には？」

「主に軍人がそうだつたらしい」

「帝国陸軍とか海軍とか」

「そうした職業の人は本当に厳しく言つていたらしい」

「海軍ねえ」

若奈が反応を見せたのはそちらだつた。陸軍ではなくそちらだつ

た。

「海軍っていつたらね」

「何かあったのか」

「うちのひいお爺ちゃんが海軍だったのよ」

「そうだったのか」

「海軍経理学校だったんだって」

これまた随分と古い学校だった。舞鶴にあった学校で海軍の経理将校を育成する学校だった。この学校も入るのがかなり難しかった。

「そこにいてそれでね」

「海軍で頑張っていたのか」

「よく海軍の歌歌ってたわ」

このことも話す若奈だった。

「懐かしいわね」

「それでその人もか」

「ええ、物凄く厳しかったわ」

そうだったというのである。

「剣道じゃなくて柔道をしていてね」

「柔道か」

「それが凄かったのよ」

若奈のその細い眉が少し顰めさせられた。そのうえでの言葉だった。

「八段で」

「帯の色が変わるな」

「あっ、知ってたの」

「柔道の帯は初段で黒になる」

「そうそう、まずはね」

初段から五段が黒なのである。所謂黒帯だ。柔道に限らず空手においてもそれがステータスシンボルの一つになっている。それだけ目印となるものなのだ。

「それで六段になったら」



「赤と白になるな」

「それで八段はね」

「完全に赤になる」

牧村は静かにこのことを話した。

「それだっ たんだな」

「そうなの。物凄く強くてね」

「海軍仕込みの柔道か」

「滅茶苦茶強かったのよ。小柄で細かったのにそれでもね」

「柔よく剛を制すか」

「昔は何か武専？」

ここで若奈の目は少しいぶかしむようなものになった。表情も少  
しきよとんとしたようなものになる。そのうえでの言葉であった。

「その人と試合をしたこともあったとか」

「武道専門学校か」

「何なの、そこって」

「昔あった学校だ」

そこから話す牧村だった。

「剣道、柔道、そして薙刀だけを学ぶ学校だ」

「それだけをなの」

「そう、そしてその専門家を育てる学校だった」

「じゃあその腕はやっぱり」

「日本屈指だった」

言葉は過去形だった。しかしそれでも確かなものがそこにはあっ  
た。

## 第四十七話 神々その十二

「それだけの人間が集められそしてだ」

「さらに鍛えられていったのね」

「それが武専だった」

「こつ若奈に話すのだった。」

「今はもうないがな」

「それって何時の時代にあつた学校なの？」

「戦争前だ」

「実在の学校である。だがGHQの指導の中で軍国主義の一環として廃校とされてしまったのだ。このことを残念に思う人もいるかも知れない。」

「京都にあつた」

「そうだったのね」

「その人とも試合をしていたか」

「やっぱり強かつたって言ってたわ」

「若奈はその曾祖父の話をも村にするのだった。」

「それもかなりね」

「当然だな。あそこはもう伝説だ」

「牧村君も知ってる話なのね」

「ツレに教えてもらった。そういうことが好きな奴にだ」

「格闘マニア？」

「そうなる」

「やっぱりそうなのね」

「若奈はその話を聞きながらまた彼に対して言った。」

「そういうことが詳しい人もいるのね」

「自分でもしているがな」

「剣道？それとも柔道？」

「いや、空手だ」

そちらだというのである。

「それをしている奴だ」

「じゃあうちの空手部の」

「そうだ、そこにいる」

「ふうん、顔広いんだ」

これは若奈がはじめて知ることだった。

「牧村君って」

「自覚はないが」

「けれど結構お友達いるのね」

今度はこう言う彼女だった。

「よかったわ」

「いいのか」

「だって。牧村君無愛想だから」

それはその喋り方にも出ている。とにかく愛想がないのが彼なのだ。

「だからね」

「心配なのか」

「うん、そうよ」

まさにその通りだと返すのだった。

「してただけけどね。よかったわ」

「そうか」

「そうよ。それでね」

「ああ」

「その赤帯だったの、ひいお爺ちゃん」

若奈の曾祖父の話に戻ったのだった。

「もう滅茶苦茶強くて」

「そんなにか」

「八重超えても身体柔らかくて」

「どんな感じだった、それは」

「普通に身体曲げて掌が全部地面に着いたの」

そこまでだというのである。

「他にもね。足の関節も柔らかくて」

「それでは怪我はしなかったな」

「全然ね」

若奈は牧村にこのことも話した。

「やっぱり身体硬いと」

「怪我をしやすいからな」

「特に柔道はそうだからって」

「柔軟をしていたか」

「毎日ね。じつくりとしていたわ」

「それはいいことだな」

素直に賞賛の言葉を出す彼だった。

「俺も柔軟は毎日しているしな」

「朝と夜の二回ね」

「それは忘れない」

「ストレッチは必須よ」

若奈の顔が厳しいものになった。トレーナーの顔だった。

「絶対に忘れないでね」

「怪我をしない為だな」

「そう、身体を柔らかくして温める」

柔らかくするだけではないとも言っているのである。

## 第四十七話 神々その十三

「だから絶対によ」

「それから運動だな」

「そして一日の最後にね」

「こつも話すのだった。」

「絶対に忘れないでね」

「わかっている。それはな」

「怪我、これが一番怖いから」

「怪我をすれば元も子もないか」

「そうよ。スポーツと怪我は切っても切れないけれど」

「それもわかつたうえだ。若奈は厳しく話しているのである。」

「その厳しい声で。さらに話す。」

「いい？怠けるのは一瞬で」

「怪我は永遠だな」

「だから。忘れないでね」

「ああ、わかっている」

「牧村も確かな顔で頷き返す。」

「それはな」

「そついうことよ。それで」

「若奈はここで話を変えてきた。」

「今度ね」

「今度。何だ」

「お父さんとお母さんが新しいメニューを考えてるのよ」

「マジックのことか」

「そう、それ」

「まさにそれだというのだ。」

「そのことでね。考えてるのよ」

「具体的にはどんなメニューなのかだが」

「クレープよ」

まずは一言だった。

「それ、考えてるのよ」

「クレープか」

「私が試食することになってるけれど」

「俺もか」

「そう、店に入るじゃない」

何故かだった。若奈の中ではそれは規定路線になっていたのだった。

「だったら余計にね」

「店の味を知る為にもか」

「御願いな」

微笑んでの言葉だった。

「そっちもね」

「わかった」

牧村は素っ気無く言葉を返した。

「それではな」

「クレープの中はバナナとね」

「それとか」

「アイスクリームなのよ」

そういたものだといっているのである。

「ただ。バナナは焼いて」

「焼いてか」

「アイスもお豆腐のアイスなのよ」

「それは合うのか」

「どうかしら」

首を傾げさせての今の若奈の返答だった。

「それはね」

「わからないか」

「はじめてのお菓子だし」

だからだというのである。

「それはね」

「まだわからないか」

「要は食べてから」

「ギャンブルだな」

「そう、本当に一か八かのね」

「食べるのには勇気があるな」

「けれどよ」

それでもだとだ。若奈はここでも言うのだった。

「それでもね。専大福だって」

「あれはな。確かにな」

「普通考えないわよね、ああいうの」

「しかし美味しい」

「不思議と合うからね」

「とにかくやることか」

「そう、何でもやってみるの」

こう話すのだった。

「何をどうやったら美味しいものができるかっていうのは本当にわからないじゃない」

「それでその料理もか」

「やってみるってこと」

「話はわかった」

牧村はここまで聞いて納得したのだった。

#### 第四十七話 神々その十四

「それでだな」

「そう、牧村君もね」

「というよりか俺がか」

「試食にもアルバイトのお金出るから」

「その時も出るのか」

「食べる分だけだから千円もないけれど」

「それでもだというのだ。出るというのである。」

「どう？それで」

「やらせてもらう」

断る選択肢がないのはこの時も同じであった。

「それではな」

「有り難う。それじゃあその時は御願いな」

「わかった」

こう話してだった。彼はその申し出を受けたのだった。

日常は終わらない。そして戦いもだった。

この日は橋の上をサイドカーで走っていた。雨が激しく降っている。

その橋は川の上にかかっている橋だ。アーチまであるその頑丈な橋の車道を進み先に進んでいく。それで屋敷に戻ろうとしていたのだ。

その中を進んでいるとだ。前にだった。

「雨の中でもか」

「場所は選ばない主義だ」

男はその雨の中で言う。雨に打たれても平気な顔であった。

「だからだ」

「それでか」

「そうだ。そして貴様はどうだ」



「俺も同じだ」

こう返す牧村だった。既にサイドカーは彼の前で停めている。ヘルメットはそのまま被りそのうえで男に対して話すのであった。

「何時でも何処でもだ」

「戦うというのだな」

「それが俺のやり方だ」

だからだというのである。

「それでだ。次の相手は誰だ」

「焦ることはない。間も無くだ」

「来るか」

「もう一人がな」

来るといふのだ。それはだ。

死神だった。牧村の後ろから来てだ。彼の横に停まった。

こうして二人になったのを見てだ。男はそれからまた言うのであった。

「さて」

「妖魔だな」

「そうだな」

「そろそろ神が必要か」

男はこうも述べてきた。

「そう思ってた」

「その神が、か」

「ここで出て来るか」

「そういうことか」

「如何にも。今度からは神を呼ぶことにした」

その通りだと言う死神だった。

「貴様等を倒す為にだ」

「神であるうともだ」

ヘルメットを脱いだ牧村は既にサイドカーから降りていた。そのうえで男に対し言葉を返す。

「倒す」

「倒すか」

「それだけだ」

これが彼の返答だった。

「わかったな、それで」

「話はわかった」

「しかし異議はあるな」

「ないと言えば嘘になる」

一言述べてからだった。本題に入る男だった。

「神を倒せるか。混沌の神を」

「その為に来ている」

「私もだ」

牧村だけでなく死神も言ってみせる。二人の動きが合わさっていた。

## 第四十七話 神々その十五

「神であろうとも何であろうともだ」

「戦うならば倒す」

「それだけだ」

「それは言っておこう」

「死神は既に神だ」

男はここでは死神について延べてからにしたのであった。

「そして髑髏天使も天使としては最高位にあるな」

「その通りだ」

「神の相手をするのに相応しいか」

これまでの戦いも思い起こしての言葉だった。

「どちらもな」

「だからか」

「遂に神を出してきた」

「そういうことだな」

「如何にも」

男は悠然として答えてきた。

「その通りだ」

「そうか。そしてだ」

牧村はその男に対してさらに問うた。

「その神は何だ」

「海の神だ」

「海か」

「そうだ、海にいる神だ」

それを聞いてだ。死神が言った。

「ダゴンか」

「知っていたか」

「名前は聞いたことがある。妖魔達の神の一柱だったな」

「私の同胞だ」

男は死神のその言葉を認めてみせた。そうしてであった。あらためてだ。二人に話すのだった。

「その存在が今ここにいるのだ」

「来るか」

「いよいよ」

ここで牧村も死神も身構えた。まだ変身していないがそれでもだつた。

そのうえでだ。男に対して言うのであった。

「では今からか」

「出て来るか」

「来るのだ」

実際にだ。ここで男はその神を呼んだ。

するとだ。彼の後ろに突如として巨大な水柱が起こった。そしてだ。

そこから魚と人を合わせたような、耳まで裂けた口に丸く前についた黒く光のない目を持つ巨人が出て来た。その大きさは優に牧村達の十倍はある。

全身が青緑の鱗に覆われ手には水かきがある。口には牙だ。そんな姿だ。

その不気味な神だが。名乗ってきたのである。

「我が名はダゴン」

「やはりな」

死神がその名乗りを聞いて呟いた。

「貴様がそのダゴンか」

「死神だな」

「如何にも」

その海から響く波の如き声に応えた死神だった。

「私とその死神だ」

「そして横にいるのは髑髏天使だな」

「俺のことを知っているのか」

「我等神は何処にいても全てを見ることが出来る」

「それが我等だ」

男もここで言ってきた。

「我等は何処にいてもだ。見ることが出来るのだ」

「神の目は全てを見ることが出来る」

「だからだ」

こう話す彼等だった。

「貴様のこともわかるのだ」

「そういうことだ」

「そうか」

牧村は彼等のその言葉を聞いても驚く素振りは見せない。ただ受けて応えるだけだった。感情はそこにはなかった。少なくとも驚いたものはだ。

「それはわかった」

「わかったな」

「それで俺のことを知っていたのだな」

「そういうことになる。さて」

その神はあらためて言ってきた。

「どちらが先だ」

「貴様と戦うのはか」

「どちらだというのだな」

「そつだ、どちらだ」

また問う神だった。

## 第四十七話 神々その十六

「どちらが先に我に倒される」

「生憎だがそのつもりはない」

牧村が神の言葉に返した。

「倒されるのは貴様だ」

「神である我がだというのか」

「そうだ」

「こつ言つのである。」

「俺ではない」

「無論私でもない」

死神も言ってみせる。

「ここで貴様を倒す」

「神であるうともだ」

「言つものだな」

海神はそれを聞いても動じない。怒りすら見せない。

二人を見下ろしてだ。そのうえで男に問うのであった。

「ナイアーラトホテツプよ」

「楽しむというのだな」

「いいな、それで」

「その為に封印を解いた」

だからだというのである。

「それは言っておく」

「そうか」

「楽しむといい」

実際にだ。男はこつ同胞に告げた。

「思う存分な」

「ではそうさせてもらうぞ」

「好きなだけそうするのだな。それではだ」

「去るか」

「また見させてもらおう」

やはりこう言うだけだった。男はここでも姿を消すのだった。そしてだった。行く先はだ。

「混沌の中に戻るか」

「今はな」

こう告げてだ。彼は消えたのだった。そして後に残った神はだ。二人に顔を向けてだ。あらためて言ってみせる。

「それではだが」

「来るか」

「戦いだな」

「如何にも」

まずはこうしたやり取りからだった。

「貴様等は我が倒す」

「今までその言葉は幾度も聞いた」

死神が彼に返す。

「しかしその都度だ」

「倒してきたというのか」

「如何にも」

こう告げるのである。

「それは言っておく」

「言葉は聞いた」

神も負けてはいない。

「だが。しかしだ」

「貴様も同じことを言うのだな」

「そういうことだ」

「では、だ」

死神はだ。ここで構えを変えた。そうしてだった。右手を拳にする。そのうえでまた言うのであった。最早お喋りは不要だな」

「はじめるとしよう」

「いいだろう」

「では、だ」

そしてだ。牧村もだった。

彼は両手を拳にした。それを己の胸の前にやる。

死神も同じ動きを右手だけでしてだ。二つの光が起こった。

髑髏天使が右手を少し前に出してその右手を握り締める。死神が右手に持っているその大鎌を前で一閃させた。それが合図になった。

「行くぞ」

「はじめさせてもらおう」

「その最大の力を見せるのだ」

神はその二人を見下ろしながら告げた。

「我にだ」

「言われずともだ」

「そうさせてもらおう」

これが二人の返答であった。そうしてだ。

それぞれ姿を変えた。髑髏天使は黄金の姿になり死神は漆黒のそれになりだ。そのうえで宙を駆り神に対して向かうのであった。

まずはだ。死神がだ。分身をはじめた。

「行くぞ」

「分け身か」

「この術のことは知っているか」

「一応はな」

「こう返す神だった。」

「知ってはいる」

「そうか」

「どうやらその分け身の数も増えているな」

「私とてただいるだけではない」

死神は気付けば十人になっていた。そのそれぞれの口からの言葉だった。



## 第四十七話 神々その十七

「こうしてだ」

「さらに増えることもできる」

「今はだ」

「さらなる力を得たことによつてだ」

「そしてその力をだな」

神はその増えていく死神を見ながら話す。

「使うというのだな」

「如何にも」

「力は何の為にあるのか」

「使う為だ」

「だからだ」

それだだというのである。

「私はこの力で貴様も倒す」

「それではだ」

「行くぞ」

「来るがいい」

神の言葉は悠然としたものだった。

「相手をしよう」

「俺もいる」

金色の輝きを放つ髑髏天使もいた。

「忘れてはいないな」

「忘れて欲しいのか」

「そう思うのならそうするのだな」

こう神に返す彼だった。

「だが。それでもだ」

「戦うというのだな」

「そういうことだ。それではだ」

その両手に持つ剣に雷を宿らせていく。そのうえでの言葉だった。  
「俺も行くぞ」

「二人同時でも構うことはない」

神の言葉は余裕そのものだった。

「さあ。来るのだ」

「行くぞ」

「それではだ」

髑髏天使はその雷を放ち死神達が一斉に斬り掛かる。そうしてであつた。

二人の方から攻撃を浴びせた。しかしだった。

どれだけ攻撃を受けてもだった。神は動じない。立ったままだった。

それを見てだ。牧村がまず言った。

「聞いていないというのか」

「いや、それは有り得ない」

死神の一人が彼に答えた。

「聞いている」

「しかし見たところ」

「体力があるのだ」

それでだというのである。

「それでだ」

「そういうことか」

「そしてだ」

死神の言葉は続く。

「回復力も尋常なものではないな」

「如何にも」

ここで神も言ってきた。

「私の体力と回復力を甘く見ないことだな」

「それは貴様の武器の一つだな」

「それもまた武器になる」

「戦いは最後に立っている者が勝者となる」

死神はこの現実も話した。

「そうということだな」

「話を理解しているな。その通りだ」

「それでか」

「それではだ」

ここまで話してだった。今度は神の方から仕掛けてきたのであった。

その身体からだ。青黒い何かを出してきた。それは。

「毒か」

「そうだな」

髑髏天使も死神もすぐに察した。

「それを出してきてか」

「我々をとということだな」

「これは海の毒だ」

そうだとだ。神は話すのだった。

## 第四十七話 神々その十八

「海にいる生物達のあらゆる毒が我に集まる」

「つまりその全ての毒を合わせただけの強さを持っている」

髑髏天使は神の言葉からこのことを察して継げた。

「そういうことだな」

「よくわかったな。その通りだ」

「海にも確かに多くの毒のある生物がいるな」

「それもわかつているな」

「如何にも。そしてその毒でか」

「貴様等を一度に倒してみせよう」

神はこう告げてきた。

「今からな」

「毒か」

「さて」

死神は髑髏天使に顔を向けた。そのうえで彼に問うのだった。

「ここはどうするつもりだ」

「どうするか、か」

「まさかただ毒を受けるつもりはあるまい」

彼が問うのはこのことだった。

「そうだな。違うか」

「その通りだ」

髑髏天使もこのことを否定しなかった。

「このまま何もせず倒されるのは俺の流儀ではない」

「ではだ。どうするつもりだ」

「既に手は考えている」

こう言っただ。髑髏天使は右手に持っているその剣を左から右に横に一閃させてみせた。するとその切った空からであった。

紅蓮の炎が沸き起こった。そしてである。

それはすぐに巨大な炎の柱となりだ。神の青黒い毒霧を燃やした。

それを二つ、三つと次々と作りだ。彼は言うのだった。

「霧は熱に弱い」

「それでか」

「そして生物の毒はだ」

それについても話すのだった。

「その多くが蛋白質だ」

「だから燃やすというのだな」

「そういうことだ。こうしてな」

「考えるものだな。毒といっても恐れはしないか」

「この世に無敵のものはない」

髑髏天使は言い切ってみせた。

「だからだ。毒であろうともだ」

「恐れはしないか」

「そういうことだ。さて」

神を見据えて。そのうえで言葉だった。

「貴様の毒は最早意味がない」

「そうだな。毒はな」

「ではどうする」

「毒だけではない」

神は言った。その海鳴りの如き声でだ。

「我にあるのはだ」

「毒だけではないか」

「神ぞ」

己が何かも言うのだった。

「神の力をこれで終わりと終わめことだ」

「それはわかる」

死神がその神に対して返した。

「私もまた神だからな」

「そうだな。それではだ」

「見せてもらおう」

これが死神の彼への言葉だった。

「それをだ。今からな」

「いいだろう。それではだ」

こう言うのであった。不意にだ。

世界が変わった。海の中になった。

髑髏天使も死神もその中に移っていた。ここで目玉が出て来てそのうえで死神に対して言うてきたのであった。

「これって幻術じゃないよね」

「違うな」

死神は目玉に対してこう話した。

「間違ってもな」

「じゃあやっぱりこれって」

「そうだ、現実だ」

その証拠にだった。彼は今浮力を感じていた。そして動きにくい。明らかに海の中にいた。それは間違えようのないものであった。

## 第四十七話 神々その十九

「これはだ」

「これも神の力だね」

「そういうことになるな」

「僕達も神だけだね」

「生憎こうした力はない」

死神は感情のない言葉で述べた。

「我々にはな」

「何かそれ、悔しいよね」

「別に困ることはない筈だが」

「まあね」

目玉もそれは認めた。

「別に空間を変えなくてもね」

「普通にやっつけていける」

「だからね。まあ確かに今は羨ましいって思ったけれど」

「考えてみればそうでもないな」

「実際にはね。それでだけれど」

「うむ」

「力、使う？」

目玉は死神に対して問うてきた。

「力。それはどうするの？」

「今はまだいい」

「いいんだね」

「特にな。今は必要ない」

「じゃあ今は隠れておくね」

「ここはあの力よりもだ」

海の中の岩が一齐に動いてきた。死神はそれを見ながら目玉に話す。

「あの神を倒すことだが」  
「どうするの、それは」  
「奴を倒すにはだ」  
「うん、それは」  
「致命傷を一撃で与えることだ」  
「鋭い目での言葉だった。」  
「それこそがだ」  
「この戦いに勝つことになるね」  
「そういうことだ。だからだ」  
「あの力は必要ないね」  
「今はスレイプニルはいい」  
「また言う死神だった。」  
「それよりもだ。やはり」  
「一撃で、だね」  
「その通りだ。いいな」  
「うん、じゃあこの戦いは休んでいていいね」  
目玉は落ち着いた声で死神に対して述べた。  
「そういうことだね」  
「その通りだ。それではだ」  
「じゃあね」  
目玉は姿を消した。その瞬間に無数の岩達が死神と髑髏天使を襲う。二人はそれを海中を舞うことにより上下左右にかわすのだった。そうしながらだ。髑髏天使が言う。  
「海の中での戦いはだ」  
「不利だと言うのだな」  
「奴の土俵だ」  
「だからだと言うのだった。」  
「そこで戦うとなればだ。やはり」  
「我々が不利だな」  
「それをどうするかだ」



死神に対して言う。今も前から岩が来たがそれは剣を一閃させて断ち切った。

「こうするだけではやがて限界が来る」

「時間も奴に味方しているな」

「何度も言うがここは奴の土俵だ」

髑髏天使は今目の前に立つ神を見ている。彼は動きはしない。しかしその周りの岩達を念力で次々に動かしてだ。それを向けてきているのだ。

その岩達をかわし断ち切りながらだ。髑髏天使は言うのだった。

「それでどうするかだ」

「一撃で決めるべきだな」

死神は目玉に言ったことを彼にも告げた。

「ここはな」

「一撃か」

「そうだ、一撃だ」

また言ってみせる。

「それで決めるべきだ」

「そういうことだな。それではだ」

「うむ。それではだ」

お互いに言い合ってた。

死神が髑髏天使に対して問う。

「あれを使おうか」

「サイドカーか」

「そうだ、それを使うべきだ」

こう髑髏天使に対して言うのである。

## 第四十七話 神々その二十

「ここはだ」

「何を考えている」

「戦いに勝つことをだ」

それをだというのだった。言葉は簡潔だった。

「それを考えている」

「それでサイドカーか」

「それに二人で乗る」

サイドカーにだというのだ。

「まずはそうする」

「そしてそれからだな」

「二人で一気に奴を斬る」

その巨大な神を見ながらの言葉だ。

「いいな、そうするぞ」

「わかった」

髑髏天使も死神のその言葉に頷いた。

「それでは、だな」

「今からだ」

ここぞだ。そのサイドカーが二人の前に来た。海中でもその動きは妨げられていない。

それを見てだ。神が言ってきた。

「それを使うのか」

「そうだ」

「その通りだ」

二人で神に言い返した。

「それは言っておこう」6

「今からだ」

「小さいな」

神はそのサイドカーを見て一言だった。

「それで我を倒すというのか」

「小さいか」

「だから無理だというのだな」

「如何にも」

その通りだというのだった。

「貴様等程度ではだ」

「倒せはしないか」

「そう言うのだな」

「如何にも」

それを認めた神だった。そしてだ。

また岩達を動かしてきた。そうして倒そうとする。

だがここでだ。髑髏天使と死神が動いた。

そのサイドカーに乗る。まず髑髏天使はバイクのところに乗った。

死神は側車に乗りだ。二人でお互いに言い合うのであった。

「いいな」

「何時でもいい」

死神が髑髏天使の言葉に応える。

「私はな」

「わかった。それではだ」

「行くぞ」

バイクを発進させた。そしてだ。

海中を突き進む。岩達は前から、そして左右からも来る。上下か

らもだ。

その間を潜り抜けながらだ。二人は突き進むのであった。

その二人を見てだ。神はまた言ってきた。

「前に出てそれでか」

「岩もかわす」

「そうさせてもらっている」

こう返す二人だった。

「そしてだ」

「それだけではない」

「そう言うのだな」

「如何にも」

髑髏天使の返答だ。

「貴様を倒す」

「ここでだ」

「我を倒すにはだ」

その言葉を聞いた神の言葉だ。

「容易なことではできはしないぞ」

「それはわかっている」

「存分にな」

また返す二人だった。

「そしてそれがわかったうえでだ」

「こうして攻めるのだ」

「そして貴様を倒す」

「それを言っておく」

「面白い」

神は二人の言葉を受けて述べた。

「それではだ。我をどうして倒すのかをだ」

「見る」

「そう言うのだな」

「そういうことだ」

こう言うのであった。

## 第四十七話 神々その二十一

「今からな」

「では見るがいい」

「我等がどうして貴様を倒すのかをだ」

「それをだ」

「今見せよう」

二人を乗せたサイドカーはそのまま突き進む。岩は当たりはしない。

そしてだった。距離を詰めた。そこにおいてだった。

二人はだ。同時に動いたのだった。

髑髏天使は右斜め上に、死神は左斜め上にそれぞれ跳んだ。海中をだ。

そしてだった。そこからだった。

それぞれ急降下してだ。一閃したのだった。

「これならばだ」

「どうだ」

攻撃を浴びせてからの言葉だった。髑髏天使は神の左肩から、死神は神の右肩からだ。それぞれ袈裟懸けにしてみせたのだった。

明らかな致命傷だった。それを浴びせてからだった。

二人はだ。また神に告げた。

「これで終わりだな」

「如何に貴様とてな」

「ふむ」

神の返答はまずは落ち着いたものだった。

そしてだ。その声で言うのであった。

「見事だ」

「見事か」

「それは認めるか」

「この攻撃を受ければだ」

さらに言う彼だった。

「我といえどもだ」

「終わったな」

「そうだな」

「そうだ、貴様等の勝ちだ」

まさにその通りだというのである。

「我は敗れた。確かにな」

「そしてだな」

「滅びるか」

「我は滅びる」

神もそれは認めた。

「しかしだ」

「しかしか」

「それでもか」

「そうだ。それでもだ」

赤と青の炎にそれぞれ包まれながらもだ。神はまだ言うのだった。

「貴様達もだ」

「滅びるといふのだな」

「そうだな」

「如何にも」

神は二人に答えてきた。

「そうなる」

「貴様等に敗れてか」

「それでだといふのだな」

「それは言っておく」

断末魔の中でも言う神だった。

「それはな」

「そしてだ」

「その神はどういった存在だ」

二人はこのことを問うのだった。

「貴様等はだ」

「何だというのだ」

「あらゆるものを混沌の渦の中に入れ」

神は語った。二人に応えてだ。

「そしてその中で破壊するのだ」

「その為に存在している」

「それが貴様等ということか」

「そういうことだ。我等は文明なぞ欲してはいない」

まずはそれを否定した。

「文化も法も秩序もだ」

「この世のあらゆる摂理をか」

「否定して。そして」

「全てを混沌にする」

「それが貴様等だというのだな」

「それはもうわかっていていると思うがな」

神は二色の炎に全身を包まれた。その最期の中で話すのだった。

第四十七話 神々その二十二

「既にな」

「それはその通りだが」

「では普通の神とはだ」

「違う」

「全てがだな」

二人はそのことをあらためて確認した。そしてだった。

あらためてだ。死ぬゆく神に対して問うのだった。

「あの黒い男はだ」

「主なのか、貴様等の」

「主神というのか」

神はここでも二人の言葉に応えてきた。

「ナイアーラトホテップが」

「そうだ。それはどうなのだ」

「違うのか、それは」

「同胞ではある」

神は二人の問いにまずはこう答えた。

「それではある」

「そうか、やはりな」

「同胞なのだな」

「しかし主ではない」

それは否定するのだった。

「それは違う」

「主ではない」

「あれだけ不気味な力を持っていてか」

二人は神の今の言葉に怪訝な目になった。

「では誰だ」

「誰が混沌の神だ」



「貴様等が既に知っている存在だ」

それだとだ。神は言うのである。

「それがなのだ。我等の主神達だ」

「しかもそれは一柱ではない」

「そうなのか」

「原初の混沌」

神の言った言葉だ。

「それが我等の主神達だと言っておこう」

「そうか」

「それはわかった」

「ではだ」

ここまで話してだった。遂に神の姿が完全に消えてしまった。その赤い炎と青い炎に全て包まれてだ。その中に消えてしまったのである。

これで終わりだった。神が消えるとだ。二人は元の世界に戻っていた。その大阪の街にだ。二人で戻ってきていたのであった。

戻るとだ。二人はすぐに変身を解いた。髑髏天使は牧村に戻り死神は普段の黒いジーンズとタンクトップになった。その姿でまた話すのだった。

「聞いたな」

「確かにな」

死神が髑髏天使に対して答える。

「そして覚えた」

「原初の混沌か」

「そして一柱ではない」

「あの男は主神ではない」

「そうしたことだな」

「全て覚えた」

こう二人で言い合ってた。確かめ合うのだった。  
「そしてだ」

「そしてか」

「そうだ、そしてだ」

死神はあらためて牧村に告げた。牧村もそれを聞く。

「そこまで辿り着くのはすぐではないな」

「まだ戦うか」

「それがある」

こう告げるのである。

「原初の混沌達に辿り着くにはな」

「後どれだけ神がいるか、か」

「それはまだわからない」

死神は言う。

「だが、だ。それでもだ」

「戦うしかないな」

牧村はこう彼に言葉を返した。

「つまりは」

「そういうことだ。わかっているな」

「言うまでもない」

「ではだ」

「今日はこれで終わりだ」

とりあえず戦いが終わったことは確認した。そしてだった。

牧村はサイドカーに乗った。死神もだ。自分の前にハーレーを持って来ていた。

そのハーレーに乗りだ。そのうえで牧村に顔を見て最後に言った。

「次の戦いの時だ」

「また会おう」

「それではな」

こう言葉を交えさせてだった。彼等ここでは別れた。今戦いは終わった。そしてすぐにまた新たな戦いがはじまるのであった。

第四十七話

完

2  
0  
1  
0  
・  
1  
1  
・  
7

## 第四十八話 妖神その一

髑髏天使

第四十八話 妖神

「酷いね」

「そうだな」

子供が青年の言葉にうなずいていた。彼等は今ビルの屋上にいる。そこで下に拡がる昼の街を見下ろしながら話している。そこには動く車や人々が見える。それでだった。

子供はまた言うのであった。

「あんな人間もいるんだね」

「この国の政治家か」

「そう、何とか長官っていう」

その詳しい役職は知らないがであった。

「あいつの言葉を聞いてたらね」

「酷過ぎるな。あれはな」

「あれでも人間なのかな」

子供は言いながら首を傾げさせるのだった。

「あそこまで下品な言葉を言えるなんて」

「おそろくはじゃ」

今言ったのは老婆だった。

「あれは人ではない」

「じゃあ何なのかな」

「外道じゃ」

それだというのだ。

「あれは外道じゃ」

「外道？」

「人でも妖怪でも魔物でもない」

彼等でもないというのだ。

「そして無論妖魔でもない」  
「それが外道なんだ」  
「当然動物でもない。全てから逸脱した存在じゃ」  
「そういう存在だというのだった。」  
「それが外道なのじゃ」  
「何か知らないけれどとことん腐った奴等なんだね」  
「うむ」  
妖魔は子供に対して頷いてみせた。  
「それを外道という」  
「姿形は人間のままでも？」  
「大事なのは心じゃ」  
「それだというのだ。これは老婆も言うことだった。」  
「わし等は元々妖怪じゃな」  
「うん」  
「しかし戦いを選んだことにより魔物となった」  
「心が魔物のものになったからだよね」  
「それで魔物となったからじゃ」  
「これをだ。その外道についても当てはめて話すのだった。」  
「そういうことだからじゃ」  
「それであいつも外道になるんだね」  
「そういうことじゃ。そして」  
「そして？」  
「外道になればじゃ」  
「今度はどうなるかというのだった。それは。」  
「一億回は生まれ変わっても人間にも動物にも妖怪にも魔物にもなれぬ」  
「妖魔にも？」  
「なれん」  
「そうだというのである。」  
「なれるのはじゃ」

「何になれるのかな、それで」

「寄生虫や細菌といったものじゃ」

「全然よくないね、それって」

「それを一億回程繰り返すことになる」

「植物にもなれないんだ」

子供は今度は植物はどうかと老婆に尋ねた。

「それにも」

「なれん。悪質な細菌や寄生虫ばかりじゃ」

「それを一億回はだね」

「そして最後は餓鬼になる」

止めはそれであった。

「そして未来永劫苦しみ抜くことになるのじゃ」

「餓鬼ねえ」

「餓鬼の中でも最低の餓鬼じゃ」

餓鬼といつても色々なのだ。糞尿を喰らう存在もいれば食べ物が喉を通らない存在もある。その種類や苦しみは様々なのである。

## 第四十八話 妖神その二

その中でだ。そうした餓鬼は最低のものだというのだ。

「何も食えず何も飲めず常に苦しみじや」

「辛いね、それって」

「そして常に炎や氷に苦しめられる」

「そっちもあるんだ」

「とにかく苦しめられ続けるのじや」

それが永遠だというのだ。

「外道はそうなるのじや」

「ううん、厳しいね」

「それだけ外道になるということはじや」

「腐ったことなんだね」

「腐ればその報いがある」

老婆は言った。

「そういうことじやよ」

「じやあさ」

子供はここで老婆に質問した。

「一つ聞きたいんだけど」

「何じや？」

「僕達もそうなるのかな」

「外道にじやな」

「やっぱりなるのかな。腐れば」

「そうじやな。結論から言えばじや」

老婆は一呼吸置いてから子供の言葉に答えた。

「なる」

「腐ればなるんだね」

「今まで外道になった神はないがな」

「それでもなるんだね」

「そうじゃ」

その通りだというのである。

「だから気をつけることじゃ」

「わかったよ。じゃあね」

子供は老婆のその言葉に頷く。そうしてだった。

そのうえでだ。老婆に対して話すのだった。

「僕は魔神のままにいるよ」

「魔神であるにはじゃ」

「戦いを忘れないんじゃね」

「そういうことじゃ。わかっておいて欲しいな」

「わかったよ。戦いだね」

「ただ。最近のう」

今度は老婆が考える顔になった。そうして言うのだった。

「どうも戦いよりな」

「遊びだね」

「そちらの方に興味がいつておらぬか」

「そうだね。それはね」

子供も言われて気付いた。そしてそれはだ。

他の魔神達もだった。彼等もどうかというのだ。

「食べて飲む」

「そして映画館やテーマパークに行く」

「そうしてだ」

魔神達はそれぞれ話していく。

「それを楽しむ」

「どうも最近は戦いよりもだ」

「そちらの方が楽しくなってきたな」

「そうだな」

「本当にな」

「特に僕がそうだね」

子供は自分のことを話した。そうしてであった。



考える顔になつてだ。さらに話す彼だった。

「何か最近本当にね」

「遊びが楽しくて仕方ないのじゃな」

「今の世の中つてさ」

彼等が今いるその日本のことである。

「あれじゃない？物凄く楽しいことが一杯あるじゃない」

「確かに。目に入るもの全てがだ」

「我々を楽しませてくれるわ」

「何時までも遊ぶことができる」

「何処でもな」

「いい世界だ」

「我等のいた頃とは全く違っている」

世の中が変わり文明が進歩した結果だった。そうだったのである。

## 第四十八話 妖神その三

そして魔神達はその世の中を知りだ。そこに入ろうとしているのである。

やはり特にだった。子供がなのだった。

「昨日は幼稚園で遊んでね」

「何をしたのじゃ？」

「ブランコをやったんだ」

それで遊んだというのだ。

「人間の子供達とね」

「人間とか」

「いや、人間の子供達も面白いね」

笑顔で話す子供だった。

「明るくて。色々な子がいてね」

「よいか」

「うん、とってもいいよ」

そうだというのだった。

「やっぱり子供っていいよね、本当に」

「それは何よりじゃな」

「そうだよな。戦いよりも楽しいことが一杯ある」

子供は楽しそうに話す。

「いやあ、それがわかったよ」

「ではわしはじゃ」

老婆もここで話すのだった。

「これから雀荘に行っじゃ」

「麻雀だね」

「あれはよいぞ」

彼女にしても実に楽しそうな笑みである。

「やればやる程儲かるからもう」

「バーバヤーガはそつちなんだね」

「駆け引きが面白いのじゃ」

そこに楽しみを見ているのだった。

「それでじゃよ」

「これからはそつちだね」

「うむ、楽しんでくる」

「じゃあ僕は今日は」

そして子供も言う。

「これから公園に行こうかな」

「俺も行こう」

青年も出て来た。

「公園にな」

「バジリスクはどうして行くの？」

「花を見る」

彼の目的はそれだった。

「行くのは駅前の公園だな」

「うん、そうだよ」

「あの公園のチューリップは実にいい」

「それを見るんだ」

「俺があ頃知っていたたどの花よりもいい」

言葉にいとしげなものまで入っていた。

「だからこそだ」

「わかったよ。じゃあ一緒にね」

「行こうか」

「うん、行こう」

こんな話をしてだった。彼等は公園に向かった。しかしであった。その公園にだった。牧村がいたのだ。博士や妖怪達も一緒だった。

完全に鉢合わせだった。まずは妖怪達が言った。

「まさかとは思っけれど」

「やるつもり？」

「それで来たとか？」

「ここに」

その子供と青年を見ての言葉である。

「この公園で戦うっていうの？」

「随分洒落た場所を選んだね」

「ああ、それはね」

子供がその彼等の言葉に応えた。

「ないから。安心してよ」

「戦わないっていうの？」

「魔物の上に立つ魔神が？」

「そんなこと言ってもね」

「そっだよね」

彼等は明らかに子供の言葉を信じていなかった。しかしであった。

#### 第四十八話 妖神その四

今度は青年がだ。彼等に対して言ってみせた。

「安心しろ。それはない」

「確かなことは言えるのかな」

「どうかな」

「魔神が戦わないと言ってもね」

「ちよつとね」

「だよねえ」

やはり信じようとしないう彼等だった。だが青年はその彼等に対してまた言うのだった。彼の顔は真剣なものでありそこに歪んだものはなかった。

「魔神は嘘は言わない」

「うっ、それはね」

「その通りだけれどね」

「誇りが許さないからだよね」

「そうだよね」

「我等魔神は確かに戦うことは好きだ」

それは魔神である青年も認めることだった。

「しかしだ。嘘は言わない」

「じゃあ安心？今は」

「牧村さんと戦わないんだ」

「そうなんだ」

「そうだよ。それにね」

また青年が彼等に話してきた。

「僕達は今ここに来た理由はね」

「何だっただよ」

「まさかと思うけれど遊びに来たとか？」

「ブランコとか滑り台で」

「それにチューリップを見たいとか」

見れば花壇には赤いチューリップがこれでもかと咲いている。一体何百本あるかさえわからない程だ。その一本一本が実によく手入れされていてそこには愛情さえ感じられる。

そうしたものを見ながらだ。妖怪達も彼等に言うのであった。

「そういうのじゃないよね」

「魔神がね」

「それはないよね」

「絶対にね」

「絶対という言葉は否定されるべきものだな」

青年は無愛想な顔だが確かにこう言った。

「それはな」

「えっ、ということは」

「本当に？」

「お花見に来たんだ」

「魔神が」

「僕は遊びに来たけれどね」

子供はにこにこことして話してみせた。

「最近ブランコが好きだから」

「遊びもって」

「それも信じられないけれど」

「だよねえ」

「かなりね」

「やっぱり」

「しかし事実だ」

また言う青年だった。

「俺はこの赤いチューリップ達を見たくて来た。それは事実だ」

「ううん、やっぱり信じられないけれど」

「実際にお花見てるしね」

「じゃあやっぱり本当なんだ」

「そうみたいだね」

妖怪達もここで遂に頷いたのだった。

「まだ全然信じられないけれど」

「魔神なのにそうしたことを楽しむなんてね」

「遊ぶとかお花見るとか」

「僕達じゃあるまいし」

「いや、それは違うな」

だがそのいぶかしむ彼等にだ。博士が言ってきたのだった。

「万物は変わる。その心も然りじゃ」

「だからっていうの？」

「魔神も楽しむことがある」

「そう言うの？博士は」

「ここは」

「左様、わしも驚いているがのう」

博士のこのことは隠さなかった。流石に表情には出してはいないがそれでもだった。実際にそうしたことを言ってみせたのだった。

「かなりな」

「うっん、そうなんだ」

「魔神も遊ぶんだ」

「そうしたくなっただ」

「今じゃね」

「戦いよりもだ」

その他ならぬ魔神達の言葉であった。

## 第四十八話 妖神その五

「こうして遊ぶ方がね」

「楽しいとさえ思う時が出て来た」

「具体的には今ね」

「この時だな」

「遊びか」

牧村が言った。

「貴様等が遊ぶのか」

「うん、そうだよ」

「それがおかしいか」

「戦い以外のことを楽しむのか」

「そうなってきたよ」

「この時代に來てな」

魔神達はまた話してきた。

「そういうことだから」

「わかったか」

「話は聞いた」

「しかしわかつてはいないかな」

「そういうことだね」

「信じられないと言っておこう」

これが牧村の彼等への返答だった。

「戦いしか見ない貴様等がそうだと言ってもな」

「まあそうだろうね」

「魔物、とりわけ魔神ならな」

そうなるというのだった。彼等もそれを話す。

「戦いしか楽しめないし見ないからね」

「これまではだな」

「そうだな。それはだな」



また話す彼等だった。牧村も魔神達の話聞く。

そうしてだった。博士も加わってきた。

「まあ今は戦わないのじゃな」

「うん、そういうこと」

「我々は嘘は言わない」

これは確かだった。魔神は嘘は言わない。それは彼等の誇りによるものだった。

そしてであった。博士もそれを聞いて言うのであった。

「それならばよいがのう」

「そういうこと。君と戦うよりも大変なことがあるしね」

「妖魔との戦いもあるからな」

子供と青年はこのことも言ってきた。妖魔とのこともだ。

「僕達が戦っていてそこに来たらね」

「話にもならないからな」

「戦略もあるのか」

牧村がその話を聞いて悟った。

「それでか」

「うん、それでなんだ」

「だから今はそれはしない」

また言う彼等であった。

「とにかく今は戦わないから」

「安心することだ」

「戦わないのはわかった」

牧村も完全に納得して頷いた。

「ではだ。今はだ」

「また会おうね」

「花を見させてもらおう」

彼等はこうそれぞれ言っつてその場を後にする。そこまで見てだつた。

妖怪達がここでひそひそと話をはじめた。その内容は。

「とりあえずだけれど」

「どうしよう、これから」

「ここで遊ぶ？」

「そうする？」

「魔神達がいるけれど」

それぞれ怪訝な顔になって話をするのだった。

「別に戦わないっていうしね」

「それだったらいいんじゃないかな」

「ううん、けれど魔神がいるなんて」

「物騒だしね」

「そうだよねえ」

「何、戦わないというのならいいじゃろ」

博士はその彼等にこう話すのだった。

「それならな」

「いいんだ、それで」

「それならってことで」

「別にいいんだ」

「それなら」

こう話してだった。妖怪達も納得した。

そうしてそのうえで彼等は魔神達がいるブランコやチューリップの花壇に向かった。そうしてそのうえでそれぞれ楽しむのであった。

## 第四十八話 妖神その六

公園での楽しみは終わった。それだった。

牧村は公園からある場所に向かった。そこはだった。

博士と妖怪達はここでも一緒だった。彼等は本屋に入っていた。

難波花月の前にある何階もあるその本屋に入ってた。本を探すのだった。

そしてその中でだ。博士はある本を手を取っていた。その本は。

「歌劇か」

「うむ、ワーグナーじゃ」

日本語の専門書を手にして牧村に伝えていた。

「それを読もうと思ってるな」

「歌劇にも関心があったのか」

「そちらの論文も書いておってるな」

「それでだというのである。」

「それでこうしてじゃ」

「読むのか」

「ワーグナーの論文は難しい」

「博士はぼろりと漏らした。」

「しかしそれだけにじゃ」

「書きがいがあるというのか」

「ワーグナーは深い」

「博士はこつも話した。」

「学べば学ぶ程わかってくるものじゃ」

「そういうものか」

「だからじゃ。今読んでおるのじゃ」

「また言う博士だった。」

「何冊もな」

「それだけ専門書が多いのか」

「ワグナーは特に多い」  
「そこまでか」  
「モーツァルトも多いがな」  
「ワグナーもか」  
「とにかく資料にはこと欠かん」  
博士は牧村に話していく。  
「かえって多過ぎてじゃ」  
「どの資料にするか迷う位だな」  
「そういうことじゃ。とにかくのう」  
困ったようできてそれでいて嬉しそうな。そんな顔であった。  
「ワグナーの論文は書きがいがあるのじゃ」  
「そこまで言えるか」  
「君もワグナーをどうじゃ？」  
牧村に対しても勧めてきた。  
「よければじゃが」  
「そうだな。一度な」  
「聴いてみるといい」  
「そうさせてもらう。そこまでいいとなるとな」  
「何でも一度は聴くものじゃよ」  
博士は笑いながら話す。  
「クラシックでもロックでも何でものう。聴いてみるものじゃ」  
「ロックもか」  
「そうじゃ。ほれ、古いがじゃ」  
「こう前置きしてからの言葉だった。」  
「プレスリーじゃが」  
「エルビス＝プレスリーか」  
「あれはよいのう」  
目を細ませて話す。  
「実にな」  
「そうした音楽も聴くのか」

「何でも聴くぞ」

実際にそうだというのだった。

「今のアイドルの音楽もじゃ」

「ではAKBもか」

「あれも大好きじゃ」

そういったものもだというのだ。博士の楽しげな話が続く。

「それでじゃがな」

「後でCDも買いに行くか」

「そちらは一人で行く」

今は牧村と妖怪達も一緒だ。だがその時はというのである。

「そうさせてもらう」

「そうか」

「そういうことじゃ。さて」

ここで博士の言葉が一旦切られた。そのうえでだった。

## 第四十八話 妖神その七

白と黄色のコントラストの店の中の前を見る。そこには喫茶店があった。彼は客が何人かいるその喫茶店を見て言うのだった。

「少し疲れたのう」

「ではあそこに入ってか」

「本を読みながらコーヒーでもな」

「そういうことか」

「それでどうじゃ」

こう牧村に勧める。

「コーヒーとワグナーはじゃ」

「そうだな。いいな」

牧村もその提案に頷く。

「俺は別の本にするがな」

「それでもじゃな」

「コーヒーを飲もう」

「じゃあ僕達もね」

「ジュースだけれどいいよね」

「それで」

ここで妖怪達も言ってきたのだった。それでだった。

彼等はそのまま喫茶店に入る。それぞれ本を手にしてだ。

見れば妖怪達の本はだ。様々だった。

「漫画だけではないな」

「うん、ゲームの攻略本もね」

「ほら、あるから」

「そういったのも買ったんだ」

「つまりだ」

牧村はその攻略本を見ながら言う。

「ゲームもしているのか」

「そういうこと」

「ゲームもしてるよ」

「ちゃんとね」

その通りだとだ。妖怪達も彼の問いに答える。

「遊びは何でもするからね」

「それもかなり楽しくね」

「そうしてるからね」

「だからか」

それに納得する牧村だった。今度は特に驚いていない。

そうしてだった。彼はこう言うのだった。

「では俺もだ」

「牧村さんもゲームするよね」

「やっぱり」

「そうだよね」

「している」

実際にそうだと答える。それはその通りである。

そしてだった。彼は言うのだった。

「それではだ」

「うん、それじゃあ?」

「どうするの?」

「そのゲームのこともこれからは話をしたいな」

ゲームの話題もしていくというのだ。

「何かとな」

「そうそう、ゲームって一人でやるだけじゃ中々先に進めないからね」

「行き詰るんだよね」

「特にアドベンチャーとかシミュレーションはね」

「そうなるよね」

「どうしてもね」

こう言っっていく妖怪達だった。

「面白いゲームなら余計にね」

「昔のゲームなんか凄いやね」

「そうそう」

「解けるかって謎があったりとか」

「そうだな」

そしてだった。牧村は昔のゲームの話題にも乗ってきた。

「例えばドルアーガの塔だな」

「ああ、あれね」

「あのゲームね」

「あれは凄かったね」

妖怪達はそのゲームの名前を聞いてすぐに反応してきた。

「もつわからないって」

「あんなアイテムの出し方」

「しかもちよっと間違えたらだからね」

「そうそう」

話が盛り上がってきていた。



## 第四十八話 妖神その八

「それでクリアできないから」

「ラスボスが強いんじゃないさ」

「そこまですぐ前提が滅茶苦茶だから」

「わからないって、あんなの」

「そう簡単にはね」

「しかもだ」

ここでまた言う牧村だった。

「あのゲームは最初アーケードだった」

「だよ。ゲームセンターでやったよ」

「人間に化けてね」

「変装してやってたよ」

「それでだよ」

そこまですてやってた。そのうでの言葉だった。

「もう謎が全然わからなくてさ」

「皆で言い合って確かめ合ってそれで進んでいったよ」

「やっとクリアしたんだよ」

「そしたら裏があつてさ」

「それがアイテムの出し方全部違ってて」

「全く別のゲームだったの」

「ただキャラクターが同じだけで」

一見すると酷評だ。だが話す彼等の顔は明るい。

「そんなゲームだったよね」

「だよ。ええ」

「他にはさ」

「忍者くんどう？」

「あれも酷いね」

「凄かったね」

今度はそのゲームの話だった。

「獅子舞とかねえ」

「火を吹くのはいいけれどさ」

「それがそのまま残って」

「それもどんだん」

妖怪達の口調が忌々しげなものになっていく。

「こんなのどうするんだって思う位」

「もうむかついてむかついて」

「後のトカゲが可愛く見える位にね」

「酷かったよね」

「ガイコツも強かったけれどね」

「獅子舞はもう最悪」

「けれど」

それでもだと言っただった。彼等は。

「その獅子舞でもヨロイよりはね」

「うん、平気だったね」

「まだ倒せたよね」

「何とかね」

「ヨロイか」

牧村がここでまた出て来た。

「あれは阿修羅の章でも苦戦したな」

「あれ一人だけでもやばいのにね」

「気絶させないと倒せないから」

「しかも弓矢ビームみたいに出すし」

「もう最強」

そんな敵だったのである。

「それを雑魚でどんどん出してきてくれてね」

「どうやってクリアしろってんだよ」

「その阿修羅の章でも爆弾使ってもさ」

「気絶しないと倒せないし」

「何十発かやってたら倒せなかった？」

「そうかな」

話はさらに盛り上がっていく。その懐かしいゲームでだ。

「全然平気だったよな」

「気絶させた瞬間に爆弾で倒したことはあるけれど」

「まあ爆弾凄い武器だったけれどね」

「あれ最強だよな」

「三連射にしたらもう無敵に思えたよな」

「あくまで思えたただけだけれどね」

昔のゲームはとにかく難しかったというのである。そしてだった。

牧村はアーケードの話題だけでなくだ。他の種類のゲームの話もしてきた。

「うちの叔父が言っていたがな」

「ああ、牧村さんの叔父さん？」

「牧村さんにも叔父さんいたんだ」

「そうだったんだ」

まずはこの話からだった。

「よく考えたら家族もいるしね」

「じゃあ叔父さんも普通にいるか」

「そうだよな」

「やっぱりね」

「当然だ」

牧村も彼等に対して告げる。

## 第四十八話 妖神その九

「俺にも叔父位いる」

「だよね、確かに」

「牧村さんも人間だしね」

「やっぱりね」

「それでだ」

ここでさらに言う彼だった。

「叔父はMSXをやっていた」

「あつ、懐かしいね」

「それ久し振りだよ」

「あの頃よくやったよね」

「そうそう」

「あれもよかったよね」

「そのMSXのゲームだ」

その話もするのだった。

「俺はしたことがないがな」

「あれもねえ」

「凄かったよね」

「名作多かったけれどね」

「それでも難易度はね」

「えげつなかつたよね」

妖怪達が言っていく。

「特にコナミはね」

「グラディウスのシリーズとかねえ」

「有り得ない位に難しかったし」

「グラディウスか」

「牧村もこのシリーズは知っていた。最早古典的名作となっている。あれか」

「うん、あれ」  
「あのシリーズのMSX版ね」  
「えげつなかったんだよ」  
「凄いという域ではないというのだ。」  
「もうボスの戦艦酷かったし」  
「二作目とかねえ」  
「どれも酷かったよ」  
「アーケードの3よりもね」  
「凄かったよね」  
「あれよりもか」  
その三作目は牧村も知っていた。レトロゲームでしたことがあるのだ。彼のゲームの守備範囲はかなり広いものであるのである。  
「難しかったのか」  
「切れる位にね」  
「フル装備でも簡単に死ぬし」  
「それでクリアしたら本当のエンディングじゃないと言われるし」  
「それやるにも条件があつて」  
「何かと厄介だったんだな」  
牧村もそれはわかった。話を聞いていてだ。  
「そうしたシリーズだったんだな」  
「うん、他にも魔城伝説とかね」  
「あと夢大陸アドベンチャーもね」  
「難しいの何のつてね」  
「ファミコンなんてお遊戯だったよ」  
「そうそう」  
「MSXのそれと比べたらね」  
「コナミに絞つての話だった。だがそれでもであるといつのである。妖怪達の話は今も真剣そのものになっていた。昔を思い出しながらのやり取りであった。」  
「もう全然簡単」

「攻略本も多かったしね、ファミコンって  
「だよ」

「すぐに攻略もわかったし」

「気楽にやれたよ」

「あのドルアーガだってね」

またこのゲームの話にもなった。

「ナムコはまだ優しいゲーム多かったかな」

「かもね。ワープマンとかディグダグとかね」

「あとバトルシテイもよかったよね」

「あれも名作だったね」

「色々やってたんだな」

牧村はあらためて妖怪達の遊びの深さに感心した。

「ファミコンまでもか」

「いや、ファミコンが一番だったけれどね」

「何ていうか。あれが原点だよ」

「あれがあったからテレビゲームできたし」

「今見ると画面チャチだけれどね」

「それでも。よかったよ」

ファミコンと聞いてだ。博士も言っただった。

「ふむ。わしもやったものじゃ」

「博士もか」

「今は流石にPSPじゃかな」

それだというのである。

## 第四十八話 妖神その十

「ファミコンもやったのう」

「当時幾つだった」

「さて」

年齢を問われると首を傾げさせる。それが博士であった。そして首を傾げさせてだ。あやふやな返事をするのだった。

「八十か九十か」

「それでゲームをしていたのか」

「今でもしておるぞ」

「こつも言うのだった。」

「ちゃんとのう」

「百歳を超えてテレビゲームをできるのか」

「ぼけなくていいのじゃよ、これが」

笑いながらの言葉だった。

「頭も手も使うからのう」

「そうそう、遊びをしているとぼけないんだよね」

「勉強もいければそつちもね」

「頭のいい運動になるからね」

「だからいいんだよ」

「それでか」

牧村は妖怪達の話も聞いたうえで述べた。

「博士もテレビゲームをか」

「他には迷路やパズルもしておる」

「そうしたものもだというのだ。」

「クロスワードやピースパズルものう」

「多彩だな」

「頭を使う遊びは好きじゃ」

博士は笑いながら言う。そうしてストローでオレンジジュースを

飲んでいく。

「何かとな」

「ではカードゲームは」

「うむ、してある」

「それもなのだった。」

「しかとな」

「そうなのか」

「あれもいいものじゃ」

子供の遊びとされているものだが博士はそれでもいいというのだ。

「中々のう」

「子供と一緒に遊んでいるのか」

「ひいひい孫達とだけじゃなくてじゃ」

「僕達ともそれで遊んでるよ」

「それに他にもね」

「ここでまた話す妖怪達だった。」

「街の子供達とも遊んでるよ」

「カードのお店に行つてね」

「そうしているというのである。」

「他にもテレビゲームとか」

「そういうものも買ってね」

「子供達とあれこれ話して」

「そうしてるよね」

「こつ話すのだった。これが博士だった。」

「とにかく博士は遊ぶの好きだよ」

「とてもね」

「僕達と同じで」

「気は若いよ」

「いや、それは」

牧村は妖怪達の博士は若いという言葉にすぐに一言入れた。

「違うな」



「違つて？」  
「違つて？」  
「どう違つて？」  
「そうだよ。違つて言われても」  
「よくわからないけれど」  
「この場合はどう違つのかな」  
妖怪達は牧村の今の言葉にそれぞれ首を傾げさせて問うた。  
「違つていっても色々だけれど」  
「ここじゃあどう違つのかな」  
「若くはない」  
牧村は彼等に応えてこう話した。  
「幼いと言つべきか」  
「ふむ。それではじゃ」  
博士も彼の言葉を聞いて述べた。  
「あれじゃな。童心じゃな」  
「それか」  
「わしがそれを持っているというのじゃな」  
「こう自分で言う博士だった。」  
「つまりは。そうじゃな」  
「そうかもな」  
牧村もそれを否定しなかった。それで言つのだった。  
「童心か」  
「昔から持つておつた」  
博士はにこやかに笑いながら話す。  
「子供の頃からずっとじゃ」  
「遊んできたか」  
「中年の時も初老の時も」  
その時もだと話していく。

## 第四十八話 妖神その十一

「無論少年時代も青年時代もじゃ」

「古いな」

「そうじゃな。懐かしい話じゃ」

「その頃から博士は博士か」

「うむ」

博士は今は目を細めさせていた。そのうえでの言葉だった。

「そういうことじゃよ」

「それでか」

「そうじゃ。それでじゃがな」

「また遊ぶか」

「今度はゲームショップに行くでしょう」

「こう牧村に話すのだった。」

「それで今人気のゲームを買っぞ」

「それでは俺もだ」

「うむ、二人で楽しもう」

「そうするか」

博士は確かに遊んでいた。その心には確かに童心があった。そしてそれに従いだ。彼は牧村や妖怪達と共にいて遊ぶのだった。

そしてだった。牧村は博士と別れそれで屋敷の自室に戻った。それで買って来たゲームをしようとする。しかしそこには。

未久がいた。それで笑顔でゲームをしていた。そうしてだった。

「おかえり」

「今日はここにいたのか」

「うん、遊びに来たの」

笑顔で兄に話す妹だった。

「そうなのよ」

「そうか。それでか」

「だって土日だし」

妹は曜日のことも兄に話した。

「それでなのよ」

「土日か」

「そうよ、部活もお休みだし」

「塾もだな」

「そういうこと。それで今は」

ゲームを続けている。アクションゲームである。それをしながら

牧村に話すのだった。

「ここで遊んでるの」

「そういうことか」

「うん。それでね」

「それで。今度は何だ」

「何買つて来たの？」

兄が左手に持っている黒いリュックが膨らんでいるのを見ての言葉だ。

「一体何をなの？」

「ゲームをな」

妹に対して正直に答えながら部屋の中に入っていく。

「それを買ってきた」

「ふうん、ジャンルは？」

「格闘ゲームだが」

「ああ、そうなの」

未久は格闘ゲームと聞くと急に面白くなさそうな顔になった。それで言葉を返したのだ。

「それなの」

「やらないな」

「ええ、別にいいわ」

実際にこう言葉を返す。

「それじゃあね」

「本当に興味がないんだな」

「ええ、そうよ」

その通りだというのだった。

「全然ね」

「相変わらずだな、それは」

「格闘ゲーム苦手だから」

だからだと返す未久だった。

「だからね」

「それでか」

「そうよ。だからいいのよ」

「見ているのはいいんだな」

「全然。それはね」

こう兄に話す。それはいいというのである。

「いいから」

「そうか。それじゃあな」

「今からやる？」

「いや、後でやる」

「今はいいの」

「御前がまだやっているな」

見れば未久はまだゲームをしていた。それはまだ途中である。彼はそれを見てだ。そしてそのうえで告げたのであった。そうしたのである。

「だからだ。いい」

「セーブできるけれど？」

「今すぐか」

「うん、今すぐ」

できるといっのであった。

## 第四十八話 妖神その十二

「それじゃあ代わる？」

「それでいいか」

「いいわ。じゃあこれで終わったら」

「宿題か」

「そんなのとづくに終わったわよ」

素っ気無く返す。何でもないといった顔でだ。

「ゲームやる前にね」

「そうか、終わったか」

「面倒なことはまず終わらせて」

「それからゆっくりとだな」

「そう、ゲームしてるの」

これが未久のやり方だった。彼女は面倒なことは先に済ませてそれから自分の楽しみを後でゆっくりと行うタイプなのである。

それを今もしたというのであった。そうしてだった。

「じゃあね」

「ああ」

「はい、セーブしたわ」

今そうしたというのである。

「これでお兄ちゃんがね」

「させてもらうか」

「私こっちの部屋にいていい？」

「別にいいがな」

「有り難う。じゃあお菓子食べるね」

早速紙袋から何かを出してきた。それはドーナツだった。黒くそしてチョコレートをかけてコーティングしてある、そうしたドーナツだった。

「お兄ちゃんも食べる？」

「そうだな。それじゃあな」  
「エンゼルシヨコラもあるけれど」  
「それもあるわ」  
「あるというのだった。」  
「他にも色々とおあるけれど」  
「色々とか」  
「ミスタードーナツでね。お母さんに買ってもらったの」  
「俺と御前に、か」  
「そうよ。じゃあお兄ちゃんエンゼルシヨコラね」  
「他にもあるか」  
「お兄ちゃん半分、私半分」  
「数の話であつた。」  
「お母さんそう言ったから」  
「わかつた。じゃあ俺もだな」  
「そうよ。エンゼルシヨコラとね」  
「食べるか。それじゃあな」  
「後でよね」  
「ここで未久はこう彼に言ってきた。」  
「そうよね。ドーナツ食べるのは」  
「そうさせてもらう」  
「今はゲームに熱中するのね」  
「専念して楽しませてもらう」  
「そうだとしたのであつた。」  
「それではな」  
「私はドーナツ食べるから」  
「それはいいが」  
「わかつてるわ。クズは落とさないようにってね」  
「蟻が出て来る」  
「これが理由だった。クズを落とさない理由だった。」  
「だからだ」

「そういうところ厳しいわね」

「蟻ならまだいい」

「ゴキブリね」

「あれが出たら終わりだ」

まさに死の宣告そのものの言葉だった。

「鼠もだがな」

「食べ物を扱うとそうよね」

「そうだ。だからだ」

「うん、わかってるから」

「ならいいがな」

「お兄ちゃんも何だかんだで」

未久の顔が微笑みになる。ドーナツを食べながらゲームをはじめた兄に言ってみせる。見れば食べているのはそのチョコレートのドーナツである。

「あれよね」

「あれ、か」

「食べ物を扱うお店に入られるようになってきてるね」

「こっ兄に話すのだった。」

「そういうところ気にするなんて」

「普通だと思うが」

「最近そうでもないよ」

「そういう人間も増えているか」

「うん、女の子でもいるしね」

「それは信じられないな」

「けれど本当よ」

ドーナツを食べながら兄にまた話す。

## 第四十八話 妖神その十三

「学校にもいるよ、そういう娘」

「部屋に入れば滅茶苦茶か」

「うん、ゴミとかあちこちに一杯あって」

それでどうなっているかだ。さらに話すのだった。

「もう足の踏み場もない位なの」

「ベッドの周りまでそうなってだな」

「っていつかベッドの周りが一番酷くてね」

「それは絶対に駄目だ」

牧村の言葉は完全な否定だった。

「何があるうともな」

「そこまで言うんだ」

「綺麗にしておかないと色々と問題が起る」

「問題って極端じゃないの？」

「ゴキブリや鼠が出たら問題だと思っが」

「まあ言われてみればね」

そう言われるとだった。未久も頷く。流石にゴキブリや鼠が出る

と聞いてはだ。彼女もこう考えて言っしかないことだった。

それでだ。ドーナツをもう一個食べながら話すのだった。

「その通りね」

「だから食べかすは落とすな」

「わかったわ」

あらためて兄の言葉に頷くのだった。

「じゃあそういうことだね」

「そうしろ。それでだが」

「うん、お兄ちゃんの分のドーナツよね」

「置いておいてくれ」

画面を見ながら話すのだった。



「その辺りにな」  
「ベッドの上は駄目？」  
「そこは駄目だ」  
「すぐに否定で返すのだった。」  
「若し落としたら後が面倒だ」  
「だからなのね」  
「そういうことだ。このゲームが終わってから食べる」  
「飲み物は？」  
「自分で入れる」  
「そうするというのがあった。」  
「紅茶でもな」  
「コーヒーにはしないの」  
「夜に飲むと眠れなくなるからな」  
「まあそうだけれどね」  
「だから紅茶だ」  
「それも薄いよね」  
「濃い紅茶も眠れなくなってしまっ」  
「この辺りが難しいのだった。カフェインのせいである。」  
「だからそうする」  
「じゃあさ。ティーパックでね」  
「それでだな」  
「そう、私が先に使って後のでいいよね」  
「そうしてくれるか」  
「じゃあ食べ終わったら入れてくるね」  
「また兄に話す。」  
「そうするね」  
「悪いな」  
「いいわよ、そんなの」  
「それはいいというのだった。」  
「気にしないでよ」

「そうか」

「そうよ。別にいいから」

「自分も飲むからだな」

「そういうこと」

兄の今の言葉に応えてだ。未久は楽しそうに笑ってもみせた。

そうしてであった。また言う彼女だった。

「そういうことでね。後で紅茶ね」

「カップは何でもいい」

「何でもいいの」

「陶器のものなら何でもいい」

「じゃあお湯飲みでいいわね」

兄の言葉を逆手に取って言うてみせたのだった。

「日本ので」

「それは駄目だ」

「何でもいって訳じゃないじゃない」

「カップと言った」

牧村はそこに重点を置いて述べたのだった。

## 第四十八話 妖神その十四

「それでないと駄目だ」

「ちえっ、面白くないの」

「では聞くがだ」

「うん」

「日本の湯飲みで紅茶を飲めるか」

具体的にこう問う彼だった。

「それはどうだ」

「正直あまりいいものじゃないでしょうね」

「そういうことだ。茶は気分でも飲むものだ」

「気分ね」

「そう、心でも飲むものだ」

そうだとしたのであった。

「だからだ。わかったな」

「わかったわ。それじゃあね」

「後でいいからな」

「私も後で飲むから」

このことはいいのであった。

「そういうことでね」

「それではだな」

「用意しておくからね」

こんな話をしてだった。牧村はドーナツも楽しんだ。そうしてその日は過ぎ去ったのだった。

その次の日だった。この日は駅にいた。ふと思立ち電車に乗りたくなったのだ。そして思い立つままある場所に向かうのであった。

そこから住吉大社に向かう。太鼓橋に来た。

かなり上に曲がった独特の橋である。住吉大社の名物である。

その下には池があり亀達がいる。そこに足をかけるとだった。

「ここで戦うぞ」

「ここですか」

「そうだ、ここでだ」

後ろからだ。死神が声をかけてきたのであった。

「わかったな」

「相手はまだ来ていないな」

「そうだね」

今度は目玉だった。彼も出て来たのである。

「けれどわかるよね」

「気配は感じる」

こう返す牧村だった。死神と目玉が彼の左横に来た。

「はつきりとな」

「いるな」

死神は上を見上げた。するとだった。

橋の上にだ。彼がいたのであった。

男は太鼓橋の頂上にいた。そこから二人を見上げて言うのだった。

「髑髏天使よ」

「何だ」

「何故ここに来た」

「たまたまだ」

「たまたまか」

「そうだ、たまたまだ」

こう男に返す。

「ここに来たのはな」

「しかしだな」

「如何にも」

また返す牧村だった。

「俺は何時でも何処でもだ」

「戦うか」

「貴様等がいる限りだ」

男を見上げて。そうして告げるのであった。

「戦わせてもらう」

「わかった。それではだ」

「では今度の相手は誰だ」

死神が男に問うた。

「神だな」

「そうだ。我が同胞だ」

彼等を同胞と呼んでだ。そのうえでの言葉だった。

「また一柱来てもらっている」

「やはりな。最早神でないと我等の相手はか」

「貴様等は強くなってきた」

男は死神に対して言葉を返した。

## 第四十八話 妖神その十五

「最早妖魔ではだ」

「相手にならないからだな」

「如何にもだ。それではだ」

「はじめるのだな」

「行くぞ」

こう話してだった。まずは二人からだった。

牧村はその両手を拳にしてそうしてだった。胸の前で打ち合わせた。

死神も右手を拳にして己の胸の前に置く。それによってだった。

それぞれの光が放たれそしてだった。彼等は姿を変えたのだった。

髑髏天使になり戦う姿になった。そのうえでだった。

「行くぞ」

「覚悟はいいな」

髑髏天使は右手を開きそれを己の顔の前で握り締めさせた。死神は右手に持っているその大鎌を一閃させた。そうしてそれぞれ言った。

それからだ。それぞれ六枚翼の黄金の姿。漆黒の姿になってであった。その姿になってそのうえであらためて男に告げたのだった。

「その神を出すのだ」

「今からな」

「いいだろう」

男が応えるとだった。すぐにだった。

緑の火柱が出て来た。男の横にだった。

「トウルスチャという」

「そうか」

髑髏天使がその火柱の言葉に応えたのだった。

「それが貴様の名前だな」

「そうだ」  
「名前はわかった」  
「ではだ。いいな」  
「私が貴様等の相手をする」  
「そうだな。それではな」  
「今からだな」  
    髑髏天使と死神が言う。そしてであった。  
    二人は空に上がった。神もそれに続いた。  
    緑の炎はそのままだ。蝙蝠の翼を持つ人の姿になるのだった。  
「ではな」  
「去るのだな」  
「見させてもらおう」  
    男はその緑の炎の横に来ていた。そのうえで応えるのだった。  
「それではな」  
「それではか」  
「姿は消させてもらおう」  
    それはだというのだ。  
「そういうことでだ」  
「この戦いの後でだ」  
    神は姿を消していく男に告げてきた。  
「そろそろか」  
「いや、まだだ」  
「あれはまだか」  
「あの四柱はまだだ」  
    こう神に言うのであった。  
「まだ出はしない」  
「そうか。まだか」  
「まだ少しの時間がかかる」  
「残念な話だな」  
「しかし確実にだ」

男はここでまた言うのだった。

「その時は来ている」

「そしてだな」

「そしてさらにだ」

それからもあるとだ。男は神に話すのだった。

「その先のだ」

「あの方々もだな」

「出て来られる」

そう話したのだった。

「ではな。私は今はだ」

「見るか」

「貴様の戦いを見せてもらう」

その神への言葉だった。

「それではな」

「楽しむがいい。見てな」

「そうさせてもらう」

こう告げてだ。男は姿を消したのだった。

そしてであった。神は彼だけになるとだ。二人に対して言うのだった。

「それではな」

「はじまるな」

「戦いを」

「そうだ、戦う」

二人とだ。戦うというのだった。



## 第四十八話 妖神その十六

そしてそのうえでだ。その両手に何かを出すのであった。それは。

「右手に剣」

「そして左手には鞭か」

「この二つで戦うのが流儀だ」

こう返す神だった。

「私のな」

「そうか。武器を使うか」

「それが貴様の流儀か」

「如何にも。それでは貴様等と同じだ」

二人に対してまた話す。

そしてだった。二人に対して翼で飛び突っ込んできた。

そのうえでだ。その左手の鞭を縦横に振り回してきた。

「来たか」

「まずはそれか」

「一つ言っておく」

神は緑に燃え盛るその鞭を振り回しながら話してきた。

「この鞭はただの鞭ではない」

「確かにな」

「一見すると短い。だが」

「伸びるか」

「そうなるか」

実際にだった。その鞭は縦横に伸びる。二人がかわそうとしてもそれを追ってきてだ。そうして二人に襲い掛かってくるのであった。しかもその動きはだ。只の鞭のものではなかった。

髑髏天使が左にかわす。するとその左にさらに動いてくるのだ。

「追うか」

「この鞭は私の身体でもある」

「それで自在に動かせるのだな」

「そういうことだ」

「こう話す神だった。」

「これでわかるな」

「わかりはした」

実際にそうだと話す髑髏天使だった。

「だが、だ」

「だが、か」

「これだけではどうということはない」

髑髏天使はその攻撃をまたかわしてみせた。

「幾ら来ようともし」

「そう言えるか」

「所詮鞭は一つ」

髑髏天使は今度は上に飛びかわす。追ってくるがそれも何ともしていなかった。

「それでどうして恐れる必要がある」

「そうだな」

ここで死神も神に言うのだった。

「一つではだ。恐れることはない」

「そうか」

「そういうことだ」

彼は鎌で剣を受けていた。接近戦を挑み攻防となっているのだ。

「違うか、それは」

「如何にもな。それではだな」

「何をするつもりだ」

「それならば」

「一つで駄目ならば増やせばいい」

まさに何でもないと口調であった。

「それだけだ」

「ならばどうする？」

「増やすという」と

「こっすらするだけだ」

言っただった。その瞬間にだった。

神の左右からそれぞれだ。腕が現れたのだった。

四本腕になりそこにそれぞれ剣と鞭を持つ。その姿になったのであつた。

「そう来たか」

「その意味で増やしたのか」

「如何にも」

その通りだとだ。神は言葉を返した。

「これでわかつたな」

「それで俺達を倒すか」

「四本の腕で」

「一つで駄目ならこっすらすればいいだけだ」

ここでも何でもないといった口調だった。

「そういうことだ」

「安直だな」

死神がその彼に突っ込みを入れた。

「実にな」

「そうかもな。しかしだ」

「しかしか」

「確実ではある」

それを優先したというのであつた。

## 第四十八話 妖神その十七

「違うか、それは」

「如何にも」

それは死神も否定しなかった。

「それはその通りだ」

「そしてだ」

神はさらに言うのであった。

「これで貴様等を倒せるようになった」

「それはどうか」

「私にはわかる」

「わかるのか」

「そうだ、わかる」

また言う彼だった。

「私が勝つということがな」

「ではだ」

髑髏天使も言ってみせたのだった。

「それを見せてもらおう」

「こうしてだ」

言いながらだ。二本に増えた鞭で髑髏天使に襲い掛かってきた。それを見てだった。

髑髏天使はまたかわそうとする。しかしだった。

「くっ、これは」

「一本だけならできたな」

二本になるとだ。それが容易でなくなったのだ。

一本ならそれだけを見て動けばよかった。しかしなのだった。

「だが二本になるとどうか」

「二つ同時に来るか」

「これならどうだ」

また言う神だった。

「容易ではないな。そして」

「次は私か」

「そうだ。二本の剣はどうだ」

その縁に燃え盛る二本の剣で死神を攻めながらの言葉だった。

それは同時に縦横に繰り出される。死神は受けるのだけで必死だった。

「くっ、流石にな」

「厳しいな」

「そうだな」

忌々しげな口調で返す彼だった。

「私は嘘は言わない」

「ならばだな」

「しかしだ」

だが、だった。彼はここでこう言うのだった。

「それでもだ」

「勝てるというのか」

「貴様は腕を増やした」

まず指摘するのはこのことだった。

「だが私はだ」

「身体を増やすか」

「如何にも」

その通りだというのであった。

「私の術は知っているな」

「分け身を使いそのうえでだな」

「そうだ、勝ってきた」

彼の得意技のあの術のことを話すのだった。

「そうしてだ」

「今度もそうするつもりか」

「如何にも。それではだ」

「来るか」

「見せておこう」

こう言っただった。後ろに滑る様に飛びそのうえでだった。彼は飛び退きながら身体を一つ、また一つと増やしていくのであった。

そして十人になったうえでだ。神に対して言うのだった。

「これでだ」

「どうする」

「貴様が増えるのなら私も増える」

「これならどうだ」

「ふむ」

神もだ。彼も見て話すのだった。

「ここでもそれを使うのか」

「そうだ、それでだ」

「これで貴様に勝つ」

「そうする」

「俺もだ」

ここであった。髑髏天使も言ってきた。

そのうえでだ。左右に身体がぶれたように見えた。すると。

## 第四十八話 妖神その十八

彼もまた増えた。十人になったのだった。そのそれぞれの口での言葉だった。

「ではだ」

「これで貴様も終わりだ」

「十人の俺が相手ならだ」

「勝てるのか」

「結論から言おう」

神は彼等に冷静に返してみせた。左右に展開する彼らを見てはいない。正面を向いたままでのその言葉なのだった。

「勝てる」

「それでもか」

「勝てるというのか」

「如何にも」

その通りだというのであった。

「それならば私もだ」

「まさかと思うが」

「増えるか」

二人はすぐにこのことを察した。

「そうするか」

「貴様もまた」

「それができるか」

「そうだ、できる」

こう二人に答える神だった。

「それも見せよう」

「炎が分かれるか」

「それによつてか」

「そういうことだ。そしてだ」

神の言葉は続く。

「それにより貴様等を倒す」

「炎で全てを焼き尽くす」

「そうしてやるう」

「炎か」

髑髏天使は神の今の言葉にふと耳を止めた。

「そういえばそうだったな」

「何が言いたい」

「貴様は紛れもなく炎だな」

「如何にも」

神もそれを否定しない。

「見ての通りだ」

「炎の化身だな」

「だとしたらどうだというのだ」

「一つ言っておく」

髑髏天使は前置きしてみせた。本題を言う前にだ。

「弱点のないものはない」

「神にそんなものはないが」

「いや、神であるうともだ」

髑髏天使は神のその言葉を否定してみせたのだった。

「それが無いものはいないのだ」

「戯言だな」

「そう思うのなら思うがいい」

「そう言うのか」

「そうだ、貴様がそう思おうとだ」

どうかというのであった。

「事実が変わらない」

「ではその事実をか」

「今から見せよう。いいな」

「では見せてもらおう」



神もそれを受けて言い返す。

「それを今からな」

「火には絶対に勝てないものが一つある」

「絶対の存在である火がか」

「そうだ、ある」

「こつ神に告げるのであった。」

「それが何かだ」

「成程な」

髑髏天使の今の言葉を聞きだつた。死神が言うのだった。

「そういうことか」

「わかつたようだな」

死神はだというのだった。

「わかつた」

「そうだな。そしてそれは」

「水だ」

髑髏天使の今の言葉は一言だった。

「それだ」

「水か」

だがそれを聞いてもだつた。神の余裕は変わらない。

「それだというのか」

「その通りだ。貴様もそれは変わらない」

「では見せてみるといい」

またこつ言つてみせる神だった。

## 第四十八話 妖神その十九

「私にその水をだ」

「いいだろう」

「それではだ」

「今から貴様を倒す」

「それでな」

十人の髑髏天使それぞれの口からの言葉だった。そしてそれを発してだった。

彼等は一斉にその両手の剣にだ。あるものを宿らせた。それこそは。

「氷か」

「それか」

「それを使つてか」

「私を倒そうというのだな」

「氷は即ち水だ」

また言う髑髏天使だった。

「それで貴様を倒そう」

「今からな」

「行くぞ」

「ではだ」

「では来るがいい」

「今からな」

神は動くことさえしなかった。彼に合えて攻撃をさせようとさえしていた。それはどの分かれている神も同じだった。そしてだった。髑髏天使は攻撃をはじめた。両手のその剣を縦横に振るった。

そしてだった。そこから氷の矢を次々に放つのだった。

死神もだ。彼もまた。

大鎌の刃に氷を宿らせた。それで神に攻撃を浴びせる。

だがそれは全てその炎の剣に受けられる。氷と炎がぶつかり蒸気が起こる。何かが溶けるシュウシュウとした音さえ聞こえてくる。

それを続ける。あくまでだった。

矢も突き刺さっていく。しかしそれでもだった。

神はだ。崩れていかない。全く平気な様子であった。

そしてその平気な様子でだ。髑髏天使達に話すのだった。

「さて、この通りだ」

「私は健在だ」

「この通りな」

「わかるな、それは」

「そうだな」

それは髑髏天使も認めた。

「姿形はな」

「その通りだ。私は倒れない」

「姿形はだ」

髑髏天使はこう言うのであった。

「それはだ」

「何が言いたい」

「だからだ。姿形はだ」

「それはだというのか」

「しかしだ」

「ここであった。」

「他はどうか」

「どうかとはどういうことだ」

「完璧な存在なぞいない」

これは髑髏天使の考えだった。

「決してな」

「それで氷で倒せるといいうのか」

「私を」

「それを今から見せてやろう」

言っただった。髑髏天使も死神もその氷で攻撃を続けていく。氷はその都度消え蒸気があがる。それが暫く続いた。

しかし神は衰えない。そうして勝ち誇ったような声で言うのだった。

「さて、この通りだ」

「立っているというのだな」

「貴様が」

「そうだ、立っている」

これを言うのだった。

「それが何よりの証だ」

「それはそうだな」

死神がまた言った。

「しかしだ」

「しかしだというのか」

「そうだ。だが」

「だが、か」

「俺は嘘を言わない」

こつとも言つ髑髏天使だった。

そしてだった。その手に持つ剣を巨大化させた。

剣は一本になりだ。彼の身体の優に十倍はある大きさになった。

それだった。神達を一闪した。無論そこにも氷を帯びさせている。

その一撃で再び蒸気が起こった。そしてであった。

「ぐっ……」

「これは……」

「まさか」

それぞれの身体からだ。神が声をあげるのだった。

「我の力が衰えてきている」

「こんなところでか」

「どついうことだ」

「確かに少しだけの攻撃ではだ」

髑髏天使は剣を元に戻した。そのうえで神に告げるのだった。

「それでじゃ貴様を倒せはしない」

「そして一撃でもだ」

死神も言ってきたのだった。

「貴様はそう容易には倒れないな」

「だが。攻撃を何度も続けるとだ」

「それが変わっていく」

こう二人で神に告げた。

## 第四十八話 妖神その二十

「それでだ」

「こうして攻撃を続けたのだ」

「それにだ」

鬮體天使はここでさらに言うのだった。

「この蒸気だ」

「蒸気がだと」

「貴様の身体を覆ってきているな」

その蒸気はまさに霧の様になっていた。濃い、戦いの場を完全に覆わんばかりにだ。そこまで立ちこめてしまっているのだった。

その蒸気を見ながらだ。彼は言うのであった。

「それが貴様をさらに弱らせていく」

「水か」

「そうだ、水だ」

今度はそれであるというのだ。

「攻める氷だけでなく覆う水でもだ」

「私を弱らせていつているというのか」

「これならだ」

彼はまた言った。

「貴様も弱るな」

「考えたものだな」

神は一つに戻っていく。十あった身体がだ。それは力を維持できなくなったからに他ならなかった。それは二人にもわかった。

二人もだ。身体を一つに戻しつつ話すのだった。

「そこまで考えてか」

「勝利は何も手に入れなくともできるものではない」

彼は言った。

「考えて手に入れるものだ」

「力だけではなくか」

「そうだ、頭でもだ」

それでもまだというのであった。

「手に入れるものだ」

「成程な。どうやら私は」

ここでまた言う死神だった。

「貴様等を侮っていたか」

「ではだ」

「決着の時だな」

「確かに私の力は衰えた」

神も認めたのだった。それはだ。

「しかし。それでもだ」

「退かないか」

「それは」

「そうだ、退くことはない」

断言さえしてみせる彼だった。

「絶対にだ。あくまで貴様等を倒す」

「ならばだ」

「行くぞ」

二人は神のその言葉を受けて身構えた。そうしてなのだった。それぞれ突つ込む。正面からだった。

神も身構えその四本の手から剣と鞭を繰り出したのだった。

炎と二人が激突した。今度は衝撃と火花が散った。

そしてその後でだ。勝者は。

「ぐっ……」

「勝ったな」

「これでな」

三者はそれぞれ言った。

「俺達の勝ちだ」

「それを認めるな」

「認めるしかあるまい」

これが神の言葉だった。身体から青と赤の炎を出しはじめていた。  
「こうなってはな」

「危うい勝利だったがな」

ここで髑髏天使は言った。見ればだ。

右手の剣が神を突き刺していた。しかしその首に二本の鞭が今まさに打たんとしていたのだ。

死神も同じであった。鎌を突き刺している。しかしその腹に二本の剣が迫っていたのだ。

その危うい勝利の中でだ。彼等は言うのであった。

「だが勝利は勝利だ」

「こうして勝たせてもらった」

「そうだな、それではだ」

神は二色の炎に包まれながら言った。

「私はこれでだ」

「消えるか」

「もつか」

「そうだ、消える」

実際にそうするというのだった。



## 第四十八話 妖神その二十一

「敗れた者はそのまま消える」

「潔くか」

「潔くではない」

それは否定するのだった。

「命が消えようとしているからだ」

「それでだ」

「それでだというのか」

「如何にも。ではだ」

炎が既に身体の半分を覆ってきていた。

「私はこれで去ろう」

「ではだ」

また言う 髑髏天使だった。

「これでな」

「これでだ」

こうして神は消えた。緑の炎が青と赤の炎の中に消えていくのだった。

これで戦いは終わった。それでだった。

髑髏天使も死神も元の姿に戻った。二人はそのうえで顔を見合わせた。

「この戦いも終わったな」

「今な」

死神が牧村の言葉に応える。

「確かに終わった」

「その通りだ。ではだ」

「私はこれで帰るとしよう」

「何処かに行くつもりか」

「そうだな。さしあたってだが」

「何処に行く」

「港に行く」

そこにだというのだ。

「南港という場所があるな」

「そこに行くのか」

「そしてそこで海を見る」

そうするというのだった。

「いい場所らしいからな」

「いい場所とは思わないがな」

「その南港はか」

「大阪ではよく言う。南港に浮かべるぞとな」

「脅し文句だな」

「そうだ。その手の者が気に入らない者を始末する場所だ」

俗にそう言われている。真偽は今一つ不明だが。

「そう言われている」

「では尚更いい」

「貴様にとつてはだな」

「私は死神だ」

このことが大きいのであった。彼自身のそのことだ。

「だからだ。それでだ」

「まつろわぬ魂を送るのだな」

「それもまた死神の仕事だ。いや」

「むしろだな」

「そちらの方が主な仕事だ」

完全に死神としての言葉だった。そこから語るのだった。

「だからだ。そうする」

「では今から行くな」

「そうするとしよう。だが」

「そうだな」

ここで、だった。二人の言葉が変わったのだった。

「何か用か」

「俺達に」

彼等は身体ごと後ろを振り向いた。そのうえでだった。そこにいる彼等に問うた。

見ればそこにはだ。魔神達がいた。しかもである。

「全員で来たか」

「ここに」

「はい」

彼等の真ん中には老人がいた。彼が応えてきたのだ。

「そうさせてもらいました」

「それではだ」

「何の用だ」

二人はその老人に対してまた問うた。

「戦いか」

「妖魔達との戦いの前に」

「いえ」

しかしだった。ここで老人は言うのであった。

「そうではありません」

「では何だ」

「何の用で来た」

「そのことです」

老人は語りはじめた。そしてそれは。魔神としての存在にも関わるような、二人にとっても驚くべき話なのだった。それが今語られるのだった。

## 第四十九話 停戦その一

髑髏天使

第四十九話 停戦

「今はもうです」

「今は」

「どうだというのだ」

「貴方達と戦うつもりはありません」

「そうだというのだった。」

「最早です」

「何故だ、それは」

「貴様等が戦わないというのか」

「はい、そうです」

その通りだというのだった。

「今はです。停戦ということでしょうか」

「それを信じるといえるのか」

「少なくとも魔物は嘘を吐きません」

老人が言うのはこのことだった。

「とりわけ魔神はです」

「誇り故にか」

「はい」

老人の言葉は穏やかなものだった。

「信じられないのならそれで結構ですが」

「いや」

ここであった。牧村は言うのだった。

「確かに貴様等は戦いを嗜む」

「それが生きがいとなっています」

「しかしそれでもだな」

「おわかりにですね」

「それ以外のものは求めてこなかった」

「戦いが喜びですから」

「だからだな。嘘や謀略は」

どうかというのはだ。老人から話してきた。

「私達の流儀ではありません」

「その通りだな。では貴様等の言葉はだ」

「信じて頂けますね」

「そうさせてもらう。それではだ」

牧村はだ。あらためて言うのであった。

「話を聞かせてもらおう」

「そうだな」

死神もだった。話すのだった。

「私もその話を聞かせてもらう」

「それではです」

こうしてだった。二人は老人の話を聞くのだった。するとだ。

老人はだ。こう言うのだった。

「確かに私達は戦いを欲し」

「その貴様等と戦い倒すのが俺の役目だったな」

「はい、髑髏天使のです。ですが」

しかしだと。老人は言葉を変えてきた。

「妖魔が出て来ましたね」

「まずはあの連中をか」

「彼等の相手をする必要が出て来ました」

「俺達と同じくか」

「その通りです。それにです」

「それに？」

「私達は長い間封じられてきました」

その封じたのが他ならぬ髑髏天使だ。ただしそれは牧村とは違う

遙か昔の髑髏天使である。その彼によってであるのだ。

「そしてこの時代に再び出ましたが」

「それでか」

「あるものを見ました」

こう話す老人だった。

「戦いの他の楽しみをです」

「そうだな。それはわかる」

死神も老人のその言葉に頷いた。

「よくな。この時代の世界はだ」

「はい、実に多くの楽しみがあります」

「食べ物だけではない」

死神もだった。彼もそういったものを楽しんでいるのだった。

「その他のものもな」

「娯楽に満ちています。その中にいてです」

「様々な楽しみや喜びを知った」

「はい」

また答えてみせる老人だった。

## 第四十九話 停戦その二

「その通りです」

「そうか、そういうことか」

「その通りです。ですから今はです」

「俺達とは戦うことはしないか」

「まずは妖魔です」

老人は言い切った。

「そして戦いの他の楽しみを堪能します」

「それで停戦か」

「むしろね」

今度は子供が言ってきたのだった。

「僕達は君達との共闘も考えてるんだよ」

「魔物と髑髏天使がか」

「うん、そうだよ」

こう言ってくるのだった。

「そうしてね」

「変わるものだな」

「僕達も驚いてるよ」

子供が牧村に返す。

「実際にね」

「そうか」

「まあ今は流石にそこまでは無理かな」

「こちらから停戦を申し出たばかりですし」

老人がまた言ってきた。

「そちらも心の整理がありますね」

「ないと言えば嘘になる」

「私もだ」

牧村と死神もそれは否定しなかった。

「髑髏天使としての宿命を考えればな」  
「これまでの戦いだけでもだ」  
「それはわかっています」  
「老人も述べてきた。」  
「それはです。しかしです」  
「それは事実だというのだな」  
「嘘ではないと」  
「何度も申し上げた通りです」  
「また言う老人だった。」  
「では。そういうことで」  
「待て、帰るのか」  
「そうするのか」  
「お話することは終わりましたから」  
「だからだよ」  
「老人だけでなく子供も告げてきた。」  
「戦う理由はなくなりましたし」  
「だからこれでね」  
「そうか。それでなのか」  
「もう帰るのか」  
「じゃあさ。百目さ」  
「子供は無邪気な笑顔で老人の本来の名前を言ってきた。」  
「これからどうしようかな」  
「これからですか」  
「うん、これからね」  
「彼が言うのはこのことだった。」  
「遊ぶにしても何をしようかな」  
「そうですね。まずは食べましょう」  
「食べるんだ」  
「ハンバーガーなぞどうでしょうか」  
「老人もにこやかに笑って提案するのだった。」



「それを食べてですね」

「それからだね」

「後は。近頃犬猫ランドという場所ができたそうですが」

「ああ、犬や猫が一杯いる」

「そこに全員で行きませんか」

「これが老人の提案だった。

「のどかでそれでいて非常に楽しいところのようです」

「そうね。それじゃあ」

「そこにするか」

女と男が応えた。

「犬や猫と遊んだりたわむれたりするのもね」

「癒されるものだ」

「はい、癒しもいいものです」

それを肯定してそのうえで語る老人だった。

「では。そういうことで」

「僕犬は秋田犬が好きなんだよね」

子供はその犬について話しはじめた。

## 第四十九話 停戦その三

「猫はマンチカンでね」

「俺は犬はシエパードだな」

青年がその子供に応えて話す。

「そして猫はな」

「やっぱりあれ？ペルシャ猫？」

「あの毛が長くふわふわしているのがいい」

それが彼の好みだった。

「だからだ。それがいい」

「僕もシャパードもペルシャも好きだけれどね」

「そちらもか」

「うん、ただ一番はね」

どうかというのだった。それは。

「やっぱり。秋田犬とマンチカンだね」

「俺は犬はブルドッグで猫はスコティッシュフォールドだな」

今度はロツカーだった。

「特にスコティはな。垂れた耳がいいんだよ」

「耳が立ってるスコティは駄目？」

「それはそれでいいんだよ」

それも認めるロツカーだった。

「まあとにかく今はな」

「はい、ハンバーガーを食べてから参りましょう」

老人が彼等をまとめてそのうえで述べた。

「今から」

「そうだね。じゃあね」

子供は笑顔で牧村と死神に別れの挨拶を告げてきた。

「また会おうね」

「そうだな。会うべき時にな」

「またな」

二人もその別れの言葉に伝えてだった。これで話は終わった。

魔神達は何処かへと消えてそのうえで二人が残った。その二人は、「これで妖魔に専念することができるようになったな」

「そうだな」

まずは戦略からの話だった。

「それはいいがだ」

「ああ、しかしな」

「まだ信じられない」

牧村は眉をしかめさせて述べた。

「どうもな」

「そうだな。魔物達の方から停戦を言うとはな」

「しかもだ。戦いの他に楽しみを見出したとはな」

牧村が最も考えているのはこのことだった。

「あの魔物がか」

「それが信じられないな」

「それでは妖怪と同じだ」

「こう言うのだった。」

「まさにな」

「そうだな。それは確かにそうだな」

「そう思うな」

「うむ」

死神もここで頷いた。

「私もそう思う」

「魔物は元は妖怪だったが」

「その妖怪に戻ってきているということか」

「それはまだ言えない」

牧村もだ。即答はできなかった。しかしなのだった。

「だが、だ」

「考えられるのだな」

「否定するしかできない状況と考えられる状況ではだ」  
「全然違うな」

「そうだ、だからだ」

牧村の言葉は続く。

「かなり違ってきているのは間違いない」

「妖怪は戦わない」

死神もまた言った。

「それはしない」

「魔物は戦いだけを好む」

「その二つの違いがあるな」

「魔物は妖怪が戦いを知り」

牧村がまた話していく。

「そしてその中に身を投じてなるのだったな」

「だが妖怪はこの世の遊びだけを楽しむ」

「魔物はその遊びから背を背けた」

それこそが魔物だというのだった。

「そういうものだったかな」

「しかしまた遊ぶとなるとな」

「妖怪とどう違うのかだな」

「それだよな」

ここであった。目玉も出て来て話に加わってきた。

#### 第四十九話 停戦その四

「ああ、出て来たけれどいいよね」

「別にな」

「構いはしない」

二人も彼にこう返す。

「特にな」

「そのまま入ってくれていい」

「有り難う。それじゃあね」

「うむ」

「それでその話は」

「僕思っただけれど」

目玉は二人に対して字分の考えを述べてきた。

「彼等は結局何かを楽しみたいんだよ」

「何かをか」

「それでか」

「うん、だから戦いに入って魔物になって」

それもその一環だというのである。

「それで。この時代の色々な遊びを見てね」

「また遊びに戻った」

「そういうことか」

「妖怪は人間に比べてずっと純粋な存在なんだ」

目玉は二人にこのことも版下。

「だから影響されやすいんだ」

「そういえば」

そう言われてだ。牧村はいつも博士の周りにいる彼等のことを脳裏ぬ浮かべた。その彼等はどうかと。そのうえで考えてみてだった。

「あの連中もだな」

「牧村君もわかるよね」

「話を聞いてな。わかった」  
「そうだと返す彼だった。」  
「成程な、確かにそうだな」  
「妖怪は純粹だよ。そしてね」  
「魔物もだな」  
「うん、そうなんだ」  
「魔物達もだというのだった。純粹な存在だとだ。」  
「だからね。影響されやすいから」  
「それが遊びに向けば妖怪のままになり」  
「戦いに向けば魔物になる」  
「二人も目玉の話から言葉を続けた。」  
「成程な」  
「そういうことか」  
「そういうことだと思うよ。結局のところはね」  
「そういえば悪ではないな」  
「牧村もここでこのことを再び認識した。」  
「それはないな」  
「そうだろ？悪でもなければ善でもない」  
「それが妖怪であり魔物だな」  
「少なくとも妖魔みたいに邪なものはね」  
「ないというのであった。」  
「まあ。彼等が戦わないというのならね」  
「それはいいことだな」  
「今の我々にとっては」  
「戦略的にはその通りだね」  
「また二人に述べる目玉だった。」  
「敵が一つになるんだからね」  
「ではだ」  
「その妖魔達と戦いだ」  
「そして滅ぼす」

「そうしなければな」

「魔物は世界をどうするかは知らないけれど」

妖魔はまた妖魔について話す。だが今度のそれは妖魔について語るのではなかった。もう一つのその邪な存在についてだった。

「けれど妖魔は違うからね」

「だからだな」

「ここは」

「そういうこと。気をつけてね」

目玉は二人にだ。真剣な言葉をかけた。

「本当にくれぐれもね」

「わかっている」

「安心するといい」

これが二人の返答だった。

「それはな」

「油断はしない」

「だといいよ。それでだけれど」

目玉は二人の言葉を受けたうえでさらに話すのだった。

## 第四十九話 停戦その五

「あの男が言つてたよね」

「ナイアーラトホテップ」

「あの男か」

「そう、あの男ね」

その黒衣の男のことをだ。それを話すのだった。

「あの男はただ戦つてるだけじゃないよ」

「目的があるな」

「明らかにな」

「そう、その目的は」

そのことをだ。目玉は察して話すのだった。

「四柱の混沌の神々だね」

「地水火風」

「その四つの元素のだな」

「そう、まずはその四つで」

そしてさらにだった。

「あとの二つは」

「原初の混沌の神か」

「その二つか」

「それか」

「確か」

「何かいたね」

彼等の誰もその名前を思い出せなかった。不吉なもやを感じてだ。それで言うのだった。

「ええと、あれは」

「駄目だな、口に出そうとすると」

「妙に不吉なものを感じる」

「瘴気すらな」



「それによつて、どうも」

「まだ言つべき時じゃないのかな」

目玉も言った。

「そういうことかな」

「そうかもな。それで」

「自然と言葉が止まるのか」

「だが。最後にはだな」

「その原書の混沌とも戦わないとならないな」

それはわかつているのだった。二人共だ。

「それにあの男ともだ」

「やがては」

「多分。もう少し他の神との戦いがあるよ」

目玉は自分の予想を話してきた。

「それでそれからね」

「四つの元素の神々と戦うことになるか」

「それから」

「多分、戦いによつて生じる膨大なエネルギーの拡散が混沌の神々

の封印を解く力になっているんだらうね」

「それは魔神の時と同じだな」

「それとか」

「そう、ナイアーラトホテップはそれがわかつてるんだ」

目玉はまた自分の予想を話してきた。

「それでそうしてね」

「神々を出してきて俺達に向かわせ」

「そのうえでさらに戦わせまた力を拡散させて」

「そうして次から次にか」

「進めていくか」

「頭がいいね」

ここでは目玉は賞賛の言葉を出した。

「実にね」

「そうだな、考えたものだ」

「我等を倒せればそれでよし」

「倒せなくともだ」

「そこから次の神を出せる」

徐々に深まっていく、戦う二人は今それを感じていた。

そしてそのうえでだった。彼等はさらに話していくのだった。

「それに対して俺達はだ」

「戦うしかない」

「そして勝つしかないよ」

目玉はこころも告げた。

「仕方ないけれどね」

「そうだな。勝つしかない」

「混沌を食い止めるにはな」

「わかりやすいけれど」

目玉の言葉が続く。

## 第四十九話 停戦その六

「それでもね」

「敗ればそれで終わりだな」

「全てがな」

「世界までもね」

「そうだ、何もかもがだ」

「私達の手にかかっている」

二人は今そのことを実感していた。

「勝つしかない」

「原初の混沌までだ」

「そしてそれは」

「あちらもか」

「混沌の側もだな」

「そう、どちらが最後まで勝つかね」

目玉の言葉に真剣なものが宿っていた。

「これはそうした勝負だよ」

「わかっている」

「それもよくな」

「だから僕もね」

「戦うのだな」

「私と共に」

「うん、死神もそれでいいかな」

パートナーへの言葉だった。

「僕と一緒にで」

「構わない」

これが死神の返答だった。

「むしろだ」

「むしろ？」

「頼む」  
顔は彼に向けていないがだ。言葉を向けたのだった。  
「是非な」  
「うん、それじゃあね」  
「混沌を倒す」  
死神は言った。  
「必ずだ」  
「そうだね。そうしよう」  
「しかしだ。謎はまだ多いな」  
「むしろさ」  
目玉はその謎についても言及した。  
「あれじゃない？戦えば戦うだけね」  
「謎も増えていくか」  
「謎が謎を呼びね」  
目玉は話していく。  
「そうしてさらに謎を呼んでね」  
「何処までもだな。謎が多くなっていくな」  
「それも深まってるね」  
「その中心にだ」  
死神の目が光った。そのうえでの言葉だった。  
「あの男がいるな」  
「ナイアールトホテップがね」  
「あの男が鍵だな」  
今度は牧村が言った。  
「混沌のな」  
「うん、大抵の妖魔やその神々も」  
目玉は牧村のその言葉に伝えて彼に顔を向けて話してきた。  
「あれじゃない。本能だけでさ」  
「これといった知性はないな」  
「言葉は喋れるけれどね」

それでもなのだった。知性は感じられないのだった。

「原始的っていうのかね」

「本能的と言うべきか」

「知能は高いだろうけれどそれでも本能が異常に強いね」

「そうした存在だな」

「うん、けれどあの男はね」

目玉もなのだった。男をこう呼んだのであった。

「かなり知性的な発言に行動だからね」

「そして常に妖魔を俺達の前に出してくる」

「絶対に鍵だよ」

目玉は言い切った。

「あの男こそがね」

「仕掛けるか」

死神の言葉だ。

「ここはあの男に」

「そして謎に近付くか」

「それはどうか」

こう牧村にも言う。

「そうして攻めてだ」

「そうだな。悪くはないな」

「そうだね」

牧村だけでなく目玉も賛同してきた。

## 第四十九話 停戦その七

「何もしないのではな」

「待っているだけじゃどうもね」

「そうだ。攻めてだ」

死神はまた言った。

「そうするか。あの男をだ」

「あの男は間違いなく強大な力を持っている」

「それでもあえてだね」

「諺であつたな」

死神はここでこんなことを言ってきた。

「虎穴に入らずば虎子を得ずだつたな」

「危険を冒すだけのリスクがある」

「そうしてだな」

「謎を解くか」

「そうしていくか」

こうしてだつた。おおよそのことが決まつた。そのうえでだつた。

牧村がだ。不意に二人にこう言ってきた。

「それでだが」

「今度は何だ」

「それで」

「この顔触れで何処かに行ったことはなかつたな」

死神と目玉を見てだ。そうして話すのだった。

「そうだつたな」

「ふむ。そういえばな」

「なかつたね」

「何処かに行くか」

また二人に提案したのであつた。

「今からな。それはどうだ」

「悪くないな」  
「南港に行く？これから僕達はそうするし」  
死神の仕事の話だった。  
「それではだ」  
「南港に三人でさ」  
「そしてそれからだ」  
牧村は南港からのことも話すのだった。  
「それからもだ」  
「南港から何処に行くつもりだ」  
「堺か」  
「そこだというのだった。」  
「行ったことはあるか」  
「何度かな」  
「あるよ」  
死神と目玉はすぐに答えてきた。  
「面白い街だな」  
「あそこもね」  
「そうか、行ったことがあるのか」  
「私達もだ」  
死神は今度は目玉も入れて話をしてきた。  
「楽しみを見つけたのだ」  
「人間の世界にか」  
「そうだ、今の人間の世界はだ」  
「面白いね」  
そして二人で言うのだった。  
「あちこちに行くだけでもだ」  
「かなり面白いよ」  
「貴様等も同じか」  
「我々はそもそもだ」  
「考えは人間に近い部分も多いよ」

そうだといいのだった。

「だからだ。こつした楽しみもだ」

「魔物以上に素直に楽しめるんだ」

「それでか」

「そうだ、それでだ」

「僕達は楽しめるんだ」

また話す彼等だった。そうしてそのうえでだった。二人でだ。牧村に対して言うのだった。

「いいか、それではだ」

「まずは南港だね」

「そこに行くか」

三人で言い合う。そしてだった。

三人はまずはその南港に向かった。そしてそこで海の上に来た。港の向こうにあるその海の上にそれぞれのバイクで着たのだった。



## 第四十九話 停戦その八

海の上を走る牧村のサイドカーを見てだ。死神は言うのだった。

「貴様のものか」

「そうだ、こうしてだ」

「海の上を進めるのだな」

「このサイドカーは特別だ」

「そうだというのである。」

「博士がだ。改良したこのバイクならばだ」

「海の上も空もだな」

「全て行ける。だがそれはだ」

「私のこのバイクもか」

「同じではないのか」

「否定はしない」

「こう返す死神だった。」

「ただこれはだ」

「これはか」

「そうだ、私のバイクは神の手で作られた」

それが彼が今乗っているハーレーだというのである。

「とはいっても私の力によってではない」

「僕でもないよ」

「目玉もまた言ってきた。」

「私にはその技術はない」

「残念だけれどね」

「では他の神がだな」

「その通りだ。それはだ」

「技術の神が造ってくれたんだ」

これが彼等の話だった。そうだというのである。

「神にもそれぞれの力がある」

「司るものがあるからね」

「死神が司るものは」

「死だ」

そのものずばりであった。死神は一言で言い切ってみせた。

「そして今は戦いも司っている」

「しかし技術はないか」

「そういうことだ。実は大鎌にしてもだ」

「その技術神が造ってくれたんだ」

こう二人で牧村に話す。

「そういうことだ」

「これでわかってくれたかな」

「話はわかった。そうか、神もまたか」

「それぞれ得手不得手がある」

「そういうことなんだ」

「色々と事情があるのだな」

「神は万能の存在ではない」

死神の言葉だ。

「一つ一つ司るものについては意のままだが」

「全知全能じゃないんだ」

「全知全能の神か」

「それはあくまであの神だけだ」

「僕達とは違う神だよ」

「あの神は特別か」

牧村もその神が何なのかわかった。あの砂漠の神である。

「あれだけは」

「あの神はあの神だけで成り立っている」

「そういう世界だからね」

「我が国では今一つ馴染がないがな」

「そうだろうな。この国はな」

「これだけ多くの神で成り立ってる国はないからね」

二人は日本についてはこう述べた。そうした国だといっているのである。  
「知られはしても根付きはしない」

「この国ではそうだね」

「そういうことか」

「そうだ。それではだ」

死神はその造られたハーレーに乗りながらその右手に大鎌を出してだ。そのうえでだった。

前を一閃する。それで終わりだった。

「これでよし」

「仕事は終わったか」

「これで終わりだ」

返事は素っ気無くさえあった。

「これで完全にな」

「早いものだな」

「まつろわぬ魂を冥府に送っただけだ。それではだ」

「早いのも当然か」

「そういうことだ」

やはり素っ気無い死神だった。

「仕事は早くだ」

「そしてそれからか」

「ゆっくりと楽しませてもらう」

「では堺にだな」

「行くでしょう」

「さて、それじゃあね」

目玉も出て来て言う。

「何を食べようかな」

「食べるだ」と

「うん、食べるんだよ」

目玉は牧村の問いにも答えた。

## 第四十九話 停戦その九

「美味しいものをね」

「貴様は食べられるのか」

「そうだよ。何かおかしいかな」

「どうして食べるのだ」

牧村は真剣な声で問うていた。

「その身体で」

「だから。僕のこの目でね」

「それは口にもなるのか」

「そういうこと。味覚を味わうこともできるよ」

「随分変わった食べ方だな。いや」

「いや？」

「変わっているどころではないか」

牧村は言い換えた。そうしてそのうえでこう言ったのだった。

「はじめて聞く食べ方だ」

「まあそうだろうね。こんな食べ方をするのはね」

「貴様だけか」

「口ないからね」

見れば本当でない。それは誰が見ても言えることだった。

「目で食べるの」

「噛むことはしないな」

「うん、吸収するんだ」

そうするというのだった。やはりかなり特異な食べ方である。それは誰が見ても、牧村が見てもそう言うしかないものだった。

そしてだった。ここでまた言う死神だった。

「それではだ」

「何だ」

「堺にはこのまま行くのだな」

「そうだ、バイクでな」

「わかった。では海の上を走りか」

「道を進むより早い」

信号があるかないか、そして道路があるかないかという問題だった。

「だからだ」

「そういうことだな。しかし」

「しかしか」

「水の上進めるということは便利だ」

二人はそのまま海の上を進んでいる。サイドカーもハーレーも陸上、しかも舗装されたアスファルトの上を進むのと全く同じ速度だった。

その速さで進んでであった。彼等は話をしていた。

「空も飛べるのだからな」

「空か」

「そのサイドカーもだな」

「如何にも。飛べる」

戦いの中で何度も飛んでいる。そうしているのだ。

「それができるが」

「私のハーレーもだ」

「そうだったな。飛べるからな」

「では飛ぶか」

「その方が早いな」

「そういうことだな。それではだ」

こうしてだった。二人はそれぞれのバイクを飛ばしたのだった。

堺まで来たのは瞬く間であった。二人は堺の港の一つに降り立ちそのうえで道に出て進む。そしてそこでまた話をするのだった。

「そしてだな」

「何処に行くかだ、堺のな」

「だから食べようよ」

「ここでまた目玉が出て来て言う。」

「何がいい？食べるのは」

「堺の名物といえばだ」

死神が言った。

「すっぽんか」

「それにする？」

「金はある」

死神はまた言った。

「それではな」

「よし、それじゃあね」

目玉も明るい声で死神のその言葉に頷いた。そうしてだった。

二人でだ。牧村に対して問うのだった。

「それでいいか」

「すっぽんで」

「それか」

「食べたことはあるか」

「どうなの？」

「あることはある」

牧村の返答はこうだった。

「そして好きだ」

「ならいいな」

「そうだね」

「しかしだ」

二人はそれで納得したが牧村はまた言った。

「それを今食べるか」

「そうだよ」

「思い立てばだが」

「そうか。すっぽんはそうそう食うものではないが」

「そうなのか」

「そうだったんだ」

二人の返事はこうだった。

「それはな」

「はじめて知ったね」

「知らなかったのか」

牧村は二人の言葉を聞いてこう返した。

## 第四十九話 停戦その十

「それはな」

「思わなかったよね」

「すっぽんは昔薬だった」

江戸時代では実際にそうだった。そういう瞑目で食べていたのだ。

「だからだ。そうそう簡単にはだ」

「食べなかった」

「そうだったんだ」

「だからそうそう簡単にはな」

また言う牧村だった。

「食べはしないがな」

「ではどうする」

「止める？」

目玉が二人に話してきた。

「他のものにする？」

「いや、それでもだ」

「ここはだ」

だが、だった。牧村と死神は彼にこう返すのだった。

「俺は長い間すっぽんを食べていない」

「私には人間のそうした考えは関係ない」

二人の言葉は違っていた。しかしであった。

二人でこう話してだ。すっぽんについて決めたのだった。

「食べるでしょう」

「そのつもりだが」

「そういうことだね。それじゃあね」

目玉も笑顔になっていた。目が笑っていた。

「これから行こうね」

「そうだな。しかしだ」



ここであった。牧村は目玉を見て話すのだった。

「貴様も来るのだな、店に」

「そのつもりだよ」

「その姿でだな」

言つのはこのことだった。

「その姿で店に入るのか」

「いつもそうしているけれど」

「誰も何も言わないのか」

牧村はヘルメットの中からいぶかしむ声を出して目玉に言つのだ  
つた。

「その姿で店に入って食べてもだ」

「全然。平気だけれど」

「何故だ」

それを聞いていぶかしむ彼だった。

「何故それで何も言われない」

「何もつてね」

「本当に言われないんだな」

「そうよ、言われないよ」

目玉はまた言う。

「だから全然平気だから」

「妙な話だ」

「それについてだが」

死神が牧村に対してこのことについて話してきた。

「人の視覚は操作できるのだ」

「見ることをか」

「目玉は我々にはありのままの姿を見せているのだ」

「しかし他の人間にはか」

「そうだ、子供に見せている」

「そうだというのだった。」

「だから何の問題もないのだ」

「そういうことなんだ」

目玉は「ここでも牧村に対してその目を笑わせて述べた。

「だから大丈夫なんだ」

「それは知らなかったな」

「言わなかったっけ」

「初耳だ。しかしだ」

「これでわかってくれたな」

「うん、それじゃあね」

「行くか」

こんな話をしてだった。一行はそのすっぱんの店に向かったのだ。  
った。

バイクで行けばすぐだった。道路の脇にあるその店は外観は料亭  
風である。門が大きく厳しい。バイクは駐車場に停めてその門をく  
ぐってだった。

そのうえで店に入るとだった。中もまた和風だった。

木造であり白い壁と茶色の木の柱がある。寿司屋のそれを思わせ  
る内装の店であり水槽にはそのすっぱん達が泳いでいる。

そのすっぱんを見てだ。目玉が言った。

「美味しそうだね」

「魚と同じだな」

牧村はそのすっぱん達を見て言う。四つの足で水の中を上手に泳  
いでいる。

「こうして店で客に見せるのはな」

「そうだな。それでだが」

死神もそのすっぱん達を見ながら話す。

第四十九話 停戦その十一

「何処に座る」

「何処にか」

「そうだ、どの席に座る」

当然ながら席も全て木のものであり和風だ。座敷には座布団まである。壁の品書きも筆で丁寧に手書きされたものだった。

その店の中を見てだった。死神は牧村に問うたのだ。

「店のな。何処にだ」

「そうだな」

「私は何処でもいい」

「僕もだよ」

二人は構いはしなかった。

「どの席でもな」

「大事なものは料理だし」

「そうか。俺もだ」

そしてそれは牧村もなのだった。それでだった。

三人で空いている四人用の席に座ってだった。それでだった。6

注文を聞きに来た店の者にだ。こう話した。

「鍋だ」

「三人分だ」

「いいかな、それで」

「わかりました。それでなのですが」

店の者はすぐに三人にこう尋ねてきた。

「鍋の後はどうされますか」

「雑炊にするかどうか」

「そういうことだな」

「つまりは」

「そうです、それにされますか」

店の者はあらためて三人に問うてきた。

「それとも御飯はそのまま」

「いや、鍋ならだ」

「それしかない」

「そうだね」

三人の言葉はここで一致した。それでだった。

鍋の後にどうするかも決まったのであった。そうしてそのうえでだった。

三人でそのすっぽんを食べる。まずはだ。

牧村はそのゼラチンを食べる。それからだった。

「これがだな」

「最初にそれを食べるか」

「そうだ、食べる」

こう話すのだった。

「普通の肉はそれからだ」

「ゼラチンが好きか」

「実際に好きだ。それにだ」

さらに話す彼だった。

「これは身体にもいい」

「身体にもか」

「だから食べる。ゼラチンをまずな」

「成程ね。相変わらず健康にも気を使ってるんだ」

目玉は野菜を食べている。葱に白菜だ。そうしたものを食べながらである。そのうえで牧村の言葉を受けて話すのであった。

「偉いね」

「当然だと思うが」

「いや、それでもだよ」

「凄いいいのか」

「うん。僕そういうの全然してないからね」

彼はだというのだ。言いながら笑顔でその野菜を食べていく。

「だから余計にそう思えるよ」

「そう言うか」

「うん。じゃあ僕も」

「そうだな」

死神がここで目玉に言う。

「そうするべきだな。神といえどもな」

「これまで食べたいものを食べただけ食べてきたけれど」

「発想を変えることだ」

「発想を？」

「そうだ。身体にいいものを好きになる」

死神の話ではそうであった。そうしろというのだ。彼は普通のすっぽんの肉を自分の碗に入れている、そのうえで食べていた。

そしてだった。彼は言うのだった。

「そうすればいいのだ」

「それで食べたいものを食べれば」

「自然に身体のいいものを食べるようになるな」

「そういうことなんだね」

「それでどうだ」

また目玉に言う死神だった。

## 第四十九話 停戦その十二

「簡単な話だな」

「そうだね。じゃあ僕これからそうするよ」

目玉は明るい声で述べた。

「身体にいいものを好きになってね」

「具体的には色々あるがな」

「野菜もそうだよな」

その彼が今食べているものだった。

「葱にしても白菜にしてもだよな」

「その通りだ。そしてだ」

「すっぽんもだよな」

「その通りだ。すっぽんも身体にいい」

これは事実だった。だからこそ薬とされているのだった。

そしてだった。彼はまた話すのだった。

「だからだ。この鍋はだ」

「どれを食べてもいいんだね」

「そういうことだ」

「わかったよ。じゃあ」

「さて」

牧村は今度は普通の肉と葱を食べていた。そうしながらの言葉だった。

「この鍋の後もいい」

「雑炊か」

「それだね」

「鍋の後にそれがある」

また言う彼だった。

「これもまただ」

「身体にいい」

「そうなんだね」

「結局はあれだ」

そしてであった。牧村はこうも話すのだった。

「どの食べ物もだ」

「身体にいい」

「そういうことだね」

「レトルトやインスタント食品もだ」

俗に身体に悪いとされているものについても言及が為される。

「食べ方次第だな」

「インスタントラーメンには野菜や卵を入れる」

「レトルトだってアレンジしてね」

「そうして食べればだな」

「そうだな。それでよくなるな」

「幾らでもね」

「そういうことだな」

そしてだ。牧村はこうも話した。

「何でもだ。結局は身体にいい」

「何処かの美食漫画とは全く違うな」

「ああいうことは言わないんだね」

「あの漫画は何にもならない」

そうだというのだった。

「読んでも。何の役にも立たない」

「役に立つのはレシピを紹介してくれるような漫画か」

「そういうものだね」

「つまりはそうだな」

「そういうのが一番なんだね」

「そう思う」

牧村は話す。そしてだった。

すっぱんを食べていく。何時の間にか何もかもなくなっていた。何もなくなるとだった。次に出て来たのはだった。

御飯だ。そしてだ。

「卵か」

「それでだな」

「味噌にしますか？」

その御飯と卵、それに海苔を持って来た店員がこう言ってきた。

「そちらにしますか」

「いや、いい」

「卵にする」

牧村と死神が同時に答えてきた。

「それでだ」

「そうさせてもらおう」

「わかりました。それではです」

店員は笑顔で答えてだった。そのうえで鍋の中に御飯を入れてだ。といた卵を入れて軽くかき混ぜてだった。上に海苔をかけてだった。

そのうえでまた三人に言ってきた。見れば店員は仕事をやったという穏やかな笑顔になっている。その笑顔で三人に言ってきたのだ。



第四十九話 停戦その十三

「どうぞ」

「ああ」

「それではな」

「頂きます」

三人もそれに応えてだった。その雑炊を食べていく。そしてだった。

雑炊も食べる。するとだ。

「すつぽんの味が生きているな」

「確かに」

「美味しいね」

三人がそれぞれ言う。

「これがすつぽんの雑炊のよさだな」

「鍋の後の雑炊はな」

「それがいいんだよね」

「では今はだな」

「そうだな」

「そうしようね」

こうしてだった。三人で頷いてであった。食べていくのだった。

雑炊の後はデザートだった。アイスクリームだ。豆乳のアイスクリームを食べてだ。それが終わって勘定を済ませてであった。

店を出る。するとだった。

三人の前にだ。彼がいたのだった。

「随分と楽しんだようだな」

「その通りだ」

「美味しいものを食べさせてもらった」

店の駐車場である。そこでだった。牧村と死神は男に対して言うのだった。

「それで帰るつもりだったが」

「そうはいかなくなつたか」

「そうだ。それではだ」

男は単刀直入という感じで二人に言つてきた。

「いいな」

「はじめるか」

「そうするか」

「相変わらず話が早いな。その通りだ」

男も言い返してきた。

「でははじめるとしよう」

「ああ、待つて」

しかしだった。ここで目玉が男に言つたのだつた。

「ここじゃあれだよ」

「あれとは何だ」

「ほら、幾ら何でもさ」

目玉は周りを見回してだ。そのうえで男に言つのである。

「ここじゃ人目につくよ」

「人の目か」

「うん、車も多いし」

国道に面している店だった。それで夜でも車の往来がかなりあった。灯りが次々に飛び交っている。

「しかも人も多いし」

「私は構わないが」

「そりゃ君はいいさ」

「しかしか」

「僕達はそうじゃないんだよ」

こつ男に告げるのだつた。

「そうはいかないんだよ」

「場所を変えろということか」

「そうということ」

「そうだな。私としてもだ」

男はだ。目玉の言葉に応えてきた。

「その方がいいな」

「その理由は何だ」

「何故そう言える」

「何故か、か」

牧村と死神には微笑んだような声で返してきた。

「それは私の思うような場所に移れるからだ」

「混沌の世界のか」

「その中でか」

「そうだ。私はだ」

ここぞだ。彼はこんなことを言ってきた。

「持っている力の一つにあらゆる場所に瞬時に移動できるといっても  
のがある」

「神の力の一つ」

「それだな」

「それは私自身だけにできるのではない」

他にもというのだ。

「貴様等も私の同胞達もだ」

「そうして今まで呼んできたのだな」

「妖魔や混沌の神々を」

「そういうことだ。私にはできるのだ」

また言う男だった。

#### 第四十九話 停戦その十四

「そうしたことがだ」

「そしてその力を使ってか」

「今もか」

「そうだ。今度はだ」

そしてだった。男はこう言ってきた。

「荒れ狂う世界がいいな」

「乱れた世界か」

「そうした世界か」

「そうだ、嵐もあれば」

まずはそれだった。

「吹雪もあり炎もある」

「そして大地もあり」

「水もか」

「そうした場所がいいだろう。どうだ、その場所で」

男はここでまた二人に問う。

「どうだ。眠りの神よ」

「ああ、僕ね」

「貴様にも問おう」

彼もだった。戦う者とみなして問うのだった。

「それでいいか」

「うん、いいよ」

死神の返答は素っ気無い。

「別にね。文句はないよ」

「そうか。それではだ」

「問われる前に答えよう」

「私もだ」

二人は男の言葉を遮るようにして述べた。

「俺も構いはしない」

「どうした場所でもな」

「そうか。それではだ」

男がこう言うのだった。彼も含めて四人のいる世界が一変した。そうしてであった。

様々な色が混ざり合いせめぎ合っている場所だった。赤い炎と青い吹雪がぶつかり合い砕け散っている。黒い大地と白い風もだ。

水も雨も降り注ぎ下から火が沸き起こりだ。どれもこれもがぶつかり合いせめぎ合いモザイクになっている。そうした世界だった。

音も荒れ狂うまさに混沌とした中でだ。男はまた三人に言った。

「これもまた混沌の世界だ」

「まさにという感じだな」

「そうだよね」

目玉が牧村のその言葉に頷く。

「これってね」

「そうだな。こうした異様な状況こそがな」

「確かに混沌の世界はだ」

その混沌の神の一柱の返答だ。

「常に何かが変わり何かが生まれ」

「そしてだな」

「何かが滅んでいつている」

死神の言葉に返すのだった。

「そうした場所だ」

「何の形も定まらずだな」

「何もかもが壊れ、そして溶けてただれていき」

赤い炎と青い吹雪にそれぞれ左右から照らされ黒い顔を不気味に輝かせながら。男は彼等に対して話をしていくのであった。

「そこから元の形になりまた滅ぶ」

「それが混沌だな」

「如何にも。そして」  
ぞつとする笑みを浮かべてであった。  
「貴様等の世界もすぐに同じになるのだ」  
「生憎だがそうはならない」  
牧村は男の言葉をすぐに否定してみせた。  
「何があるとな」  
「その理由は」  
「俺達がいるからだ」  
「このやり取りはいつもと同じだった。  
だからだ」  
「そう言うのだな」  
「如何にも。それではだ」  
「出してきたら？」  
目玉も言うのだった。  
「今回の相手をさ」  
「急いでいるのか」  
「急いでいるんじゃないよ。待ってたんだよ」  
目玉は男の赤と青に照らされている黒い顔を見て返す。  
「戦うのをね」  
「それでか」  
「そうだよ。それでいるんだよね」  
「無論だ」  
男も返してみせてきた。

## 第四十九話 停戦その十五

「それはな」

「じゃあはじめようか」

目玉からだった。ここでも。

「早速ね」

「そうだな。それではな」

「はじめるとしよう」

こう言つとであつた。すると。

異様な匂いがしてきた。それは。

「臭いね」

「そうだな」

目玉も死神もそれぞれ言い合つ程だった。そこまでの悪臭だった。

「何だ、この匂いは」

「今まで嗅いだこともない位臭いけれど」

「強いな」

そして牧村も言つ。

「凄まじい刺激臭だ」

「この匂いはだ」

だが男は平気だった。それだけの匂いの中にもだ。

そのむせかえす耐えられないまでの、信じ難いまでの刺激臭の中  
でだ。男は言葉を続ける。その匂いが何かと話すのであつた。

「神の匂いだ」

「その神か」

「今度の神か」

「そうだ、その神だ」

こう牧村と死神にも返すのだった。

「今度の神の匂いだ」

「あのさ」

目玉が嫌な声で男に問うた。

「これってないじゃない」

「何がない」

「だからこの匂いだよ」

彼が今言うことはやはりこれであった。

「そんなさ。むかつく匂いって」

「いいものだとは思わないか」

「全然」

それはすぐに否定した目玉だった。

「そんなの思う筈ないじゃない」

「そうか」

「そうかじゃなくてね」

「話はそれだけだ。匂いに関してはな」

「これはどうしようもないんだね」

「匂いを消したければだ」

どうするか。男が言うようになった。

彼の後ろに犬がいた。だがただの犬ではなかった。

青い脳漿を思わせるいやらしい粘り気のある液体を全身から滴らせ舌が注射針を思わせる針になっている。それを見ると明らかに犬ではなかった。

そしてだ。男も言ってきた。

「ティンダロスだ」

「それがその神の名だな」

「そうだ。ティンタロスの獵犬」

男は牧村にこう返した。

「これがこの神の名だ」

「獵犬か」

「混沌の世界の獵の神だ」

そうだというのである。

「話は聞いたな」



「確かにな。しかし」

「しかしか」

「聞いたのは名前だけだ。それではだ」

「戦うか」

「如何にも。来い」

牧村からの言葉だった。

「その犬を倒してやろう」

「犬か」

その獵犬からの言葉だった。そしてだ。

鋭い声でだ。こう牧村と死神に言ってきたのだった。

「僕が犬ね」

「少なくとも外見はそうだな」

「違うか」

「それはその通りだよ。ねえ叔父さん」

男に顔を向けての言葉だった。言葉を出す度にその口からも青い液が滴り落ちる。そこから刺激臭が立ちこめていた。そこからだった。

「この三人だね」

「そうだ」

男は己を叔父と呼ぶその神に対して述べた。

## 第四十九話 停戦その十六

「その通りだ」

「そうなんだ。わかったよ」

獵犬は男のその言葉に頷いた。そうしてだった。

彼等に顔を戻してだ。そうして彼等にも言う。

「それじゃあ」

「戦うな」

「そうするな」

「だってその為に呼ばれたから」

神もこう返す。

「ここにね」

「ではだ。いいな」

「死んでもらう」

牧村と死神が強い声になっていた。そうしてだった。

それぞれ変身に入る。神はそれを見てだ。

また男に顔を戻してだ。告げたのだった。

「じゃあ任せて」

「楽しむといい」

「そうさせてもらうよ。じゃあね」

犬の目がだ。それまでの黒から赤くなった。そしてだ。

その赤い目を細めさせてだ。また男に告げた。

「じゃあ叔父さんはね」

「見させてもらう」

これが男の言葉だった。

「今回もな」

「わかったよ。それじゃあね」

神は男のその言葉を明るく受ける。

「見ていてね、僕の戦いをね」

「そうさせてもらおう」

「ここでもか」

「貴様は戦いはしないか」

それを聞いてだった。牧村と死神が話すのだった。

「まだか」

「それは」

「そうだ、しない」

男は彼等にも返す。

「その時はまだだ」

「まだだというのか」

「その時はか」

「そういうことだ。楽しみにしているのだ」

にこりともせず告げた男だった。

「それではな」

「去るか。そうか」

「ではそうするといい」

二人も彼を行かせた。そうしてだった。

男は闇の渦を彼の前に作りその中に入って消えたのだった。そうしてだった。

その毛から青い腐った液を滴らせてだった。そのうえで彼等につてきた。

「それじゃあね。戦おうか」

「今からだな」

「そうするか」

「僕に勝てたらここから出られるよ」

その混沌の世界からだというのだった。

「それでもね」

「貴様が勝てばか」

「それはなくなる」

「当然だね。僕が勝つということは」

それはどういうことか。神は話した。

「君達がここで死ぬことだからね」

「そういうことだな。話は簡単だな」

「二者択一だな」

「うん。じゃあ」

「はじめるぞ」

「今からな」

牧村と死神はそれぞれ構えに入った。そうしてだった。

牧村はその両手を拳にして己の胸の前で打ち合わせた。死神は右手を拳にしてそのうえで己の胸の前に置く。するとだった。

牧村はその身体が青白い光に包まれ死神はその全身を白い光に包ませた。そうしてだった。そのうえで言うのであった。

「行くぞ」

「斬る」

髑髏天使はその右手を少し前に出して一旦開いてから握り締める。死神は右手に持った大鎌を己の前で一閃させる。それが合図となった。

髑髏天使は六枚翼の黄金の天使になり死神は漆黒の姿になった。そしてだった。

二人はすぐにだった。神に向かうのだった。

右と左からだ。一気に突き進む。しかしだった。

## 第四十九話 停戦その十七

青い魔犬はだ。素早く何処かに消えた。それを見てだった。髑髏天使は動きを止めた。死神もだ。

「消えたか」

「何処に行った」

「ここだよ」

その言葉と共にであった。二人に何かが来た。

それは青い液だった。それが二人に降り注いできたのである。

「液!？」

「あの液だと」

「そうだよ。この液はね」

どうかとだ。神の声だけがする。

「普通の液じゃないよ」

「少なくとも俺達の世界のものではない」

「そうだな」

「触れたら死ぬよ」

神は誇らしげに言ってきた。声だけでだ。

「全部溶けてしまうよ」

「ならばだ」

「消えるつもりはない」

こう言っただった。髑髏天使と死神は今自分達がいるその場所から素早く退いた。その後ろに炎が迫ったがそれはものとはしなかった。

青い液はそれまで二人がいた場所に滴り落ちてだ。そこに出て来た岩を溶かし嵐を腐らせた。ここでまた神の声が聞こえてきた。

「こういつふうになるよ」

「それが貴様の戦いか」

「姿を消してか」

「そつだよ。僕はただ戦うんじゃない」  
「こつ話す神だった。」  
「姿を消してそのうえでなんだ」  
「相手を溶かしていく」  
「その青い液で」  
「この液に触れて大丈夫なのは僕だけ」  
「他ならぬ彼だけだというのだ。」  
「どんな存在でも忽ち消えてなくなるよ」  
「それではか」  
「我々の剣や鎌もまた、か」  
「勿論」  
「声は既に勝ち誇っているものだった。」  
「そうなるよ」  
「話はわかった」  
「貴様の特性はな」  
「そしてもう一つのがわかったよね」  
「今度は神から問うてきたのだった。」  
「そのことがね」  
「それは何だ」  
「何だというのだ」  
「僕が勝つということさ」  
「その勝ち誇った声での言葉だった。」  
「それがわかったよね」  
「いや、わからない」  
「それは全くな」  
「二人は強気なまま神に返した。」  
「そのことはわかりはしない」  
「何故ならだ」  
「何故なら？」  
「勝つのは俺達だ」

「だからだ」

これが二人の返答だった。

「そういうことだ」

「それはわかっている」

「言うね。面白いね」

神は二人のその言葉を受けても余裕を見せている。

そしてだった。今度はこう言うのだった。

「じゃあ。譲歩してね」

「譲歩だと」

「そう言うか、今度は」

「うん、こういうことにするよ」

姿を消したまま言葉を出すのだった。

「僕が勝ったら君達は終わり」

「それは言うか」

「あえて」

「そうさ。そして君達が勝ったら」

その場合もだ。彼は話すのだった。

## 第四十九話 停戦その十八

「君達は次の相手と戦えるんだ」

「次か」

「次の神か」

「そうして近付いていつているんだよ」

神はその青い雨を滴らせながら言っていく。

「君達は少しずつ。中心にね」

「中心か」

「そこには」

「混沌の中心」

今度の言葉は一つだった。

「そこにね」

「その中心にもいるのだったな」

「神が」

「いるよ。二柱ね」

実際にいるとだ。神は話すのだった。

「その彼等に会えるかな」

「会う」

「必ずだ」

二人はその雨をかわしながら言う。雨は二人が何処に逃れようが追って来る感じだった。だがその降らしている者の姿は見えない。

その静かな攻防の中でだ。また言う神だった。

「まあそこまでいくのが大変だけれど」

「まだ神はいるか」

「混沌の中心まで至るまでも」

「うん、いるよ」

実際にそうだと述べる目玉だった。

「まあそれも楽しみにしておいてね」



「楽しみにはしていない」

「生憎な」

二人はここでも雨をかわす。今は防戦に徹している彼等だった。  
「しかしだ」

「それでも言っておこう」

二人はまた神に言葉を返した。

「俺達はだ」

「確実に貴様等を封じる」

「最後の最後までな」

「そうする」

「いいね。じゃあその為にも」

また声がしてきた。

「僕を倒すんだね」

「そうだな。そうさせてもらうか」

「いよいよな」

だが、だった。今の二人は防戦するしかなかった。相手が見えないからだ。様々な元素が渾然と混ざり合い衝突するその中でだ。彼等は今は雨をかわしていた。

しかしだった。ここでだ。目玉が二人に言ってきたのだった。

「ねえ」

「何だ」

「何があつた」

「ここはさ」

こう目玉が言ってきたのである。

「考えがあるんだけれど」

「考えか」

「何だ、それは」

「相手の姿が見えないとどうしようもないよね」

目玉が言うことはこのことだった。

「この戦いはね」

「それはその通りだ」

「気配すらしらない」

二人もこう返す。

「何処にいるのかさえわかれば」

「それで勝負はつくのだがな」

「いや、見つける必要はないよ」

目玉の今度の言葉はこれだった。

「それはね」

「ないというのか」

「そうなのか」

「うん、ないよ」

目玉の言葉は明るいものだった。

「見つけようとするからかえって駄目なんだよ」

「見つけようとするから」

「そうだというのか」

「そうだよ。だから」

目玉はまた言う。

「ここはね。それは狙わないで」

「一気に」

「そうだよ。どうか」

これが目玉の言葉だった。

## 第四十九話 停戦その十九

「どう、それで」

「そうだな」

死神は目玉のその言葉に頷いた。そしてであった。全身に力を込める。そこからだ。

白いオーラが沸き起こる。その中で言うのだった。

「その通りだな」

「わかるよね。下手に探さずにね」

「周りを攻撃するべきか」

「そういうこと。蜘蛛の巣みたいにな」

「よくわかった。それではだ」

死神はそのオーラを放った。まさに四方八方にだ。それを見てだ。神の声がしてきた。

「そう来たんだ」

「そうだ。貴様を探すのに見回すにははだ」

それはといたのであった。

「こうして周囲に糸を張ればだ」

「そうしてだな」

「そうだ。こうして見つけ出す」

まさにそうするというのである。

「蜘蛛の巣でだ」

「そして見つけ出してだね」

「貴様を倒す」

死神は言い切ってもみせた。

「こうしてだ」

「面白いね。見つけ出したらそれで勝てるかな」

「勝てる。必ずだ」

こうしてだった。オーラが突き刺してだった。神の姿を見せたの

だった。

神はその犬の姿を見せてだ。そうして言うのだった。

「見つかったみたいだね」

「さて、これでよしだね」

死神は光の中心からその神を見据えて話した。

「姿は見つけた」

「ではだ」

それまで様子を見守っていた髑髏天使の言葉である。

「倒すとするか」

「やれやれ。気楽だね」

「気楽と云うか」

「そうだよ。だってね」

神の姿が変わった。何とだ。

これまでの五倍は大きくなりだった。そうしてだった。

髑髏天使と死神にだ。また話してきた。

「さて、大きくなればどうか」

「姿を隠すまでもない」

「その大きさならか」

「そうだよ。倒せるよ」

まさにそうだと言った。そしてである。

あの青い液を滴らせてだ。そのうえで二人に突進してきたのである。

だがそれに対してだ。髑髏天使と死神は身構える。そしてだった。

死神はだ。こう言うのだった。

「例えどれだけ大きくともだ」

「そうだな」

髑髏天使が彼のその言葉に頷く。

「姿が見えればだ」

「どうということはないな」

「倒せる」

「それも確実に」

それぞれ両手の剣に鎌を構えて。顔を見合わせたうえでそれを投げた。

大鎌が神の右肩に刺さった。二本の剣は左肩に。それぞれ刺さった。だがそれを受けてもだ。神は全く動じずに突進しながら言うのであった。

「何でもないね」

「この程度ではか」

「どうでもないか」

「うん、ないよ」

実際にそうだというのであった。

「まさかこんなことで僕を倒せるなんて思ってないよね」

「そうだな。確かにな」

「その程度ではな」

二人もそれを言う。

「大鎌だけでは貴様を倒せはしない」

「俺の剣でもだ」

「それじゃあ何で今こうしたのかな」

「知れたことだ。それだけではないからだ」

「だからだ」

二人の言葉が変わった。

## 第四十九話 停戦その二十

「それでだ」

「それを今から見せよう」

「見せる？」

「例外がどれだけ強かるうが」

「中はどうだ」

これが二人のここでの言葉だった。

「それを今から見せてやるう」

「そうさせてもらう」

「!?!?これは」

そしてだった。この瞬間だった。

神の動きが止まった。そしてだ。

その身体から何かが噴き出した。まずは紅蓮の炎だった。

次に氷だった。岩も出る。雷もまた。ありとあらゆるものが神の

青い身体を引き裂いてそこから勢いよく飛び出てきたのであった。

「なっ、これって」

「そうだ、中だ」

「中を攻める」

二人で驚く神に告げる。

「それが今のだ」

「私達の選んだ戦術だ」

「そうだね。僕のこの液は」

その青い液のことに他ならない。

「全てを溶かすよ」

「そうだな。最強の矛であり」

「最強の盾だな」

「うん」

その通りだというのである。

「僕のそれはね」

「一見矛盾だ」

「しかしだ」

どうかというのだった。この場合は。

「その矛と盾が一つになればだ」

「その定理は崩れる」

「そうさ。矛と盾が一緒になっているから」

それを神自身も認める。

「だからだよ」

「その矛と盾はどうにもならない」

「何をしてもだ」

二人もそれをわかってのことだというのである。

「しかしその中はだ」

「違う」

そこはだというのだ。

「ならばその中を攻めればだ」

「貴様を倒せると見てだ」

「正解だよ」

神もまたそれを認める。その間も身体中からあらゆるものを出していく。それはまさに彼の敗北、即ち死に他ならないものであった。

その死の中でだ。彼は言うのだった。

「それはね」

「それではだな」

「認めるな」

「僕の負けだよ」

それを自分から認めた彼だった。

「見事だよ、本当にね」

「それならばだな」

「これから」

「お別れだね」

いささか残念そうだが彼は言った。

「これでね」

「それではだな」

「死ぬといい」

「面白かったよ」

赤い炎と青い炎が彼の身体を包みだしていた。

「本当にね」

「この戦いはか」

「それだけか」

「うん、とてもね」

声は笑っていた。弾んでさえいる。

「だから。それじゃあね」

「死ぬか」

「今から」

「さよなら」

実に気軽な返答だった。



第四十九話 停戦その二十一

「それじゃあね」

「苦しくは無いのか」

「特に」

「苦しみ？何かなそれって」

死のうとしてもだ。神はそれに気付いていない言葉だった。

「知らない言葉だね」

「痛みを知らないのか」

「そして心の動きもまた」

「僕に痛みはないんだよ」

そうだとしたのであった。

「僕達混沌の存在にはね」

「身体の痛みも心の痛みも」

「どちらもか」

「そうだったのか」

「そのどちらもないのか」

「そうだよ、ないよ」

神はそれをまた二人に話す。

「人間でも動物でもないからね」

「そして妖怪でも魔物でもか」

「どちらでもない」

「妖魔だから」

それでだというのであった。

「妖魔には痛みなんてないんだよ」

「感覚がない」

「そういうことか」

「妖魔は混沌から生まれた存在」

そのはじまりから語る彼だった。

「混沌にあるのは混沌だけ」

「他の世界の生き物とは違うか」

「そもそもそのはじまりが」

「混沌には痛みもなければ苦しみもないよ」

さらにだった。神はないものを語っていくのだった。

「恨みや悲しみも。人間の世界で言うものはね」

「ではその楽しみや笑いもか」

「そうしたものか」

「混沌の中にあることが楽しいかな」

それが彼等の楽しみだというのだった。

「それがだね」

「そうだったのか」

「貴様等は」

「そうなんだ。わかったかな」

「ようやくな」

「そのことがな」

「わかってくれたらいいよ」

神の言葉はこうだった。そしてだった。

その全身を赤と青の炎に包ませ。彼はその中に消えていく。

「それじゃあね」

「ではな」

「さらばだ」

髑髏天使と死神も彼に告げてだ。そうしてであった。

神は消えた。するとであった。

二人のいる場所は元に戻った。現実の世界であった。

そしてだ。そこに戻るとであった。

髑髏天使は牧村の姿に戻った。そうしてやはりこちらの世界に服

になっっている死神に対してだ。顔を向けたうえで尋ねるのであった。

「終わったがだ」

「これからどうするか」

「そつだ、どうする」  
「こつ死神に問うのだった。  
「帰るのか」  
「貴様はそつするのだな」  
「もつ時間も遅い」  
「だからだといつ牧村だった。  
「屋敷に帰る」  
「そつか。それではだ」  
「今日はこれでお別れだね」  
「目玉も出て来て話してきた。  
「それじゃあね」  
「私達はもつ少しここにいる」  
「これが死神の言葉だった。  
「そして遊ぶ」  
「そつするのか」  
「食べるものは食べた」  
「後はバイクを駆つてね」  
「死神と目玉二人での言葉である。  
「行きたい場所に行く」  
「そつするつもりだよ」  
「堺は面白い場所が多い」  
「牧村はその二人にこつ告げるのだった。  
「それではな」  
「場所は気の赴くままだ」  
「行くつもりだよ」  
「では。まただな」  
「そつだな。それではな」  
「またね」

三人は別れに入った。そつしてであつた。  
牧村の前にサイドカーが来た。死神の前にはハーレーだ。それぞ

れ来たのだった。

それぞれのバイクに乗りだ。そうしてであった。

「ではまた会おう」

「次の戦いの時にな」

「それまで元気でね」

「ああ。それでなのだが」

牧村はヘルメットを被りながら彼等にまた言ってきた。

「間も無く俺は神戸に戻る」

「大学か」

「そっちがはじまるんだね」

「知っていたか」

「今の人間の世の中もわかってきた」

「それでだよ」

「こつ話す彼等であつた。」

「その時になつたか」

「遂に」

「間も無く大学の講義もはじまる」

牧村は学生だ。そのことをよくわかっていた。そしてなのだった。

大学の講義についてだ。こんなことも言った。

「面白い講義を受けたいものだな」

「講義か」

「現実生活も楽しんでるんだ」

「貴様等と同じだ」

彼等とだと返す牧村だった。

「俺もまた楽しんでる」

「それでいい」

「人間でいられるからね」

「そうだな。人の世にいる」

牧村も言う。

「それがそのまま人であることだからな」

「その通りだ」

「それじゃあね」

「神戸か。久しいな」

牧村はサイドカーのエンジンを入れながら述べた。

「変わっていないが。また戻る」

「では大阪と暫し別れてか」

「神戸にだね」

「そうさせてもらおう」

こう話してなのだった。それだった。

三人は今は別れたのであった。牧村は日常に戻った。死神と目玉はそこに入る。だがそれぞれ楽しんでいることは同じであった。

#### 第四十九話

完

2010・12・9

## 第五十話 帰郷その一

髑髏天使

第五十話 帰郷

「そうか、もうか」

「神戸に帰るのね」

「そうだ」

牧村は屋敷の居間でだ。こう祖父母に話していた。

畳が敷かれ祖父母の後ろの草色の壁には掛け軸がある。そして襖には水墨画が描かれている。その部屋の中で二人に話すのであった。

「今まで有り難う」

「何、いいことだ」

「楽しんでくれたわよね」

「ああ」

祖母の言葉に対して頷くのがだった。

「充分にな」

「それはいいがだ」

ここで祖父は苦笑いと共に言ってきた。

「しかしだ」

「しかし」

「無愛想なのは変わらなかったな」

「こう孫に言うのがだった。」

「その喋り方もな」

「礼儀がなっていないか」

「言葉を文字にするとな」

その場合はというのだった。

「しかしその中にだ」

「入っているか」

「だからいい」

これが祖父の言葉だった。

「それはな」

「だといいがな」

「それでだが」

祖父の言葉は続く。

「神戸に戻ってもだ」

「その時はか」

「そうだ。もう剣道はしないか」

「おそらくな」

そうだというのだった。それを否定しないのだった。

「フェシングとテニスに専念する」

「わかった。それではな」

「座禅はする」

孫はこうも言った。

「それはだ」

「それは何よりだ」

祖父は孫の言葉を聞いてまた笑顔になった。

「座禅は心のもものだからな」

「俺はそれまで心の鍛錬はしていなかったか」

「いや、していた」

「それはしていたよ」

祖父だけでなく祖母も話してきた。

「それはだ」

「ちやんとね」

「していたか」

牧村は祖父母の言葉に意外な顔になった。そうしてそのうえで言うのだった。

「だといいのだが」

「スポーツがそれだ」

「それでしていたよ」

そつだというのである。

「だからだ」

「そこまで気に病むことはないよ」

「スポーツもまた心の鍛錬になるか」

「知っていたと思うが」

「違つたのかい？」

「知つてはいた」

これは事実だ。彼もそれは知つていたのだ。しかしであつた。

「だが大きいものだとは思つていなかった」

「そつだつたのか」

「そこは違つよ」

「違つ」

牧村は祖母の今の言葉に顔を向けた。

「そこは違つのか」

「そつだよ。スポーツも心の持ち方次第でね」

どうなるのか。祖母は話していくのだった。



## 第五十話 帰郷その二

「大きな心の鍛錬になるよ」

「持ち方次第か」

「そうよ。こんな言葉があるよ」

祖母は言葉を続けてきた。

「健康な精神は健康な肉体に宿るかし」

「その言葉か」

「宿って欲しいってあるね」

祖母が指摘するのはこの点だった。

「そういうことだよ」

「意識してすればなるか」

「うん、そうだよ」

「成程な。身体だけでなく心もか」

また言う牧村だった。

「そういうことか」

「だから神戸でも頑張るんだよ」

「わかった」

牧村は祖母のその言葉に対してしっかりとした口調で頷いてみせた。

「それではな」

「それだが」

祖父の言葉である。

「帰る前にだ」

「帰る前にか」

「食べていくといい」

「朝御飯用意してあるよ」

こう孫に話す。朝食があるというのである。

「どうだ、それは」

「食べていくかい？」

「途中でパンでも買って済ますつもりだった」

実際にそう考えていた彼だった。しかしそれがここで変わった。

二人の言葉にだ。こう答えたのである。

「だが。それでは」

「食べていくといい」

「たんとね」

「有り難う」

牧村の言葉だ。

「それではだ。この朝食を」

「うむ、食べるといい」

「それじゃあね」

こうして彼は祖母の作ったその最高の朝食を食べた。それを食べ終わってからそのうえで神戸に戻る。懐かしい我が家に戻るとだ。

「ああ、おかえり」

「只今」

母は今下校してきたように息子に返した。彼もそれに素っ気無く応える。

「今帰ってきた」

「おやつあるわよ」

「おやつか」

「っっていうてもお昼ね」

母はここでふと言う。今二人は家の玄関にいるのだ。

「それじゃあ」

「昼食か」

「オムライスよ」

昼食はそれだというのだ。

「今から作るつもりだったけれどね。御飯もかなりあるし」

「オムライスか」

「あんた好きよね」

息子に対してこのことも尋ねる。

「そつよね」

「好きだ」

息子は母の言葉に対し玄関にあげりながら述べた。

「そつか。オムライスか」

「お母さんオムライスは作らないわよね」

「そついえばそつだつたな」

言われて気付いたことだ。祖母はそうしたものを作らなかった。

牧村は母のことばかりはじめてそのことに気付いたのであった。

「オムライスや炒飯はな」

「お母さんは御飯のお料理作らないのよ」

「そつだつたのか」

「お粥や雑炊は好きだけれどね」

「しかしオムライスは、か」

「それと炒飯もね」

そちらもだというのだ。

第五十話 帰郷その三

「そういうのよりもカレーやハヤシライスとかの方が好きなのよ」

「ハヤシライスか」

「そうそう、今晚はハヤシライスだから」

夕食の話もされた。

「あんた、それも食べるわよね」

「ハヤシライスも好きだ」

それもだと答える牧村だった。

「そうか。それが」

「とりあえずお昼はどうするの？」

母はあらためて我が子に問うた。

「オムライスでいいわよね」

「是非な」

靴をその玄関の脇に置きながら。母に対して答えた。

「それを頼む」

「特大オムライスにコンソメスープもあるから」

「スープもか」

「昨日の残りだけれどいいわよね」

「有り難いな」

牧村は率直に述べた。母に対して言いながら自分の部屋に戻る。

「それではだな」

「じゃあね。その組み合わせでいいわね」

「頼む。それで」

「そうね。後あんた学校は？」

話がそちらに移った。

「何時からなの？」

「明日からだ」

その時からだというのである。

「学校は明日からだ」

「そう、わかったわ」

「明日からまた登校する」

「それじゃあ今日はゆっくりしなさい」

背中から聞こえる母の言葉は優しいものだった。

「いいわね、それじゃあ」

「そうさせてもらうか」

「けれどトレーニングはするわね」

「絶対にな」

「じゃあそれやっつけてゆっくりしなさい」

二階の自分の部屋への階段を登る我が子にまた告げる。

「心を休めなさい。いいわね」

「そうさせてもらうか」

そんな話をしてだ。彼はまずは自分の部屋で休んだ。それから暫くして呼ばれてだ。一階のリビングに来てそれでだ。母と二人でそのオムライスとコンソメスープを食べるのだった。

オムライスはオレンジライスを黄色いオムレツで包みそこに赤いケチャップをかけている。そしてコンソメの中にはスライスした人参に玉葱、キャベツ、それにベーコンが入っていた。それを見ながらだった。

牧村はだ。こう母に話した。

「いい感じだな」

「そうですね。何でも食べるからにはね」

「食べるからには」

「美味しくてもしかも栄養がないとね」

その二つが両立してこそだというのである。

「意味がないからね」

「そのどちらもだな」

「それはお母さんが言ってる通りよ」

母はにこりと笑ってまた祖母の話をした。

「和食でも洋食でもね」

「どちらでもか」

「そうよ。どちらでもね」

「こう話すのだった。」

「とうがかどの料理でもよ」

「同じことか」

「その通りよ」

「味覚と栄養か」

「その両立よ」

母は話していく。

「そうなるのよ」

「では、だな」

「食べなさい」

母は穏やかな声で息子に話した。

## 第五十話 帰郷その四

「両方共。考えてあるから」

「有り難う」

「御礼はいいわよ。ただ」

「ただ？」

「たっぷりと食べなさい」

「ここで我が子にこつも告げるのだった。

「いいわね」

「わかった。それではな」

「食べ物美味しく栄養のいいものをたっぷりと食べる」

母は言い切ってみせた。

「そういうものだからね」

「だからか」

「お母さんもそうしているから」

「たっぷりとか」

「ええ。ただ問題は」

母のことは少し変わった。

「あなたとお母さんじゃ事情が違うからね」

「事情か」

「あなたは毎日激しく運動してるじゃない」

フェシングにテニス、それに対するトレーニングのことである。

「それに対してお母さんはね」

「そこまでの運動はか」

「してないから。あなたみたいには食べないわよ」

「そういうことだな」

「若しお母さんがあなたみたいに食べたら」

母の顔が冗談を言う時の笑みになった。

「一発で太るわよ」

「そうだな。カロリーでな」

「だから食べる量はあんたよりはずっと少ないわよ」

「しかし食べられるのか」

「量はね」

それはいけるといっているのである。

「いけるわよ」

「そうなのか。量はか」

「食べられるけれどあえて食べないの」

母の言葉がしっかりとしたものになる。

「そうしているのよ」

こんなことを話してだ。牧村と息子は久し振りの二人での食事を  
楽しむのであった。これが彼が帰った最初の日のことである。

そして次の日だ。学校に来てだった。

博士の研究室に入ってだ。ろく子と話をした。周りには妖怪達も  
いる。

「博士はか」

「はい、まだなんですよ」

ろく子はその伸ばした首を空中にゆらゆらとさせながら話した。

「まだ講義中ですよ」

「そうか。講義か」

「ですからまだです」

また言うろく子だった。

「こちらには戻られません」

「そうか、わかった」

「牧村さんの講義は」

「朝のそれで終わりだ」

午前でだというのだ。

「今日の講義はな」

「じゃあ午後は暇ですね」

「そういうことになるな」



「わかりました。それじゃあですね」

「ここで待っていていいな」

「はい、どうぞ」

ろく子は笑顔で牧村に対して答えた。

「じゃあお茶でも飲みますか？」

「お茶か」

「丁度ね。今ね」

「物凄く美味しいもの飲んでるんだけれど」

塗り壁とから傘が言ってきた。

「どう、アップルティー」

「美味しいよ」

「アップルパイもあるよ」

「そっちな」

今度は雨降り小僧と河童が言ってきた。

「牧村さんもどう？」

「林檎のやつね」

「そうだな。それではな」

こう一呼吸置いてからだ。牧村は答えるのだった。

## 第五十話 帰郷その五

「頂くか」

「そうそう。美味しいし栄養がある」

「だからね」

「楽しく飲もう」

「それで食べようね」

「はい、それじゃあ」

ろく子がそのアップルティーとアップルパイをだ。牧村に対して差し出してきた。

「これです」

「早いな」

「今丁度またできたところですよ」

「さつきから僕達で食べてるからね」

「飲んでるし」

また妖怪達が話してきた。

「それで全部飲んで食べちゃったから」

「また作ったんだ」

「それでなのか」

「そういうこと。だからだよ」

「今出て来たのはそれでなんだ」

「そうか」

牧村は妖怪達のその説明に頷いて答えた。

「事情はわかった」

「それで食べるよね」

「それで飲むよね、やっぱり」

「そうさせてもらいたい」

牧村はこう返した。そしてだった。

ろく子から受け取りだ。壁にもたれかかったいつもの姿勢でアッ

ブルパイを食べはじめた。皿は左手に持ち右手のフォークで食べる。そうしてだ。一口食べ終えてから言うのだった。

「普通の林檎ではないな」

「アメリカの林檎を使っているんですよ」

ろく子がにこりと笑って答える。

「そっちを使いました」

「アメリカの林檎か」

「はい、それです」

「アメリカの林檎はどちらかというところと紅玉に近かったな」

牧村はアップルパイをさらに食べながら述べた。

「そうだったな」

「御存知ですね、そのことは」

「知っている。成程な」

そこまで聞いて頷く彼だった。

「それでこの味が」

「林檎のお菓子にはこうした林檎がいいんですよ」

「林檎本来の味だからか」

「それで。そうしています」

「林檎も種類によるからな」

牧村はまた言った。

「それでだな」

「そうですね。それでなんですけれど」

「味が」

「はい。御気に召されたでしょうか」

ろく子は牧村に対して問うた。

「このアップルパイは」

「いい味だ」

これが牧村の返事だった。

「やはりアップルパイはこうした林檎だな」

「流石におわかりですね」

「アップルパイも作ったことがある」

だからだという言葉であった。

「それでわかる」

「成程。作られたからこそですね」

「何処かのグルメぶつた似非漫画は嫌いだ」

牧村の最も嫌う漫画の一つだ。もつと言えば彼はその漫画の原作者はより嫌いである。そうしたことも言外に述べてもいた。

「それでだ」

「それで、ですね」

「しかしそれでも言う。林檎には種類がある」

彼が言うのはそのことだった。決して似非食通ではない。純粹に料理や食事について考えているからこそだ。彼は言うのだった。

「その中で菓子に使えるものは少ない」

「紅玉はそれを考えたらいい林檎ですね」

「味に癖があるがな」

それでもだというのである。

## 第五十話 帰郷その六

「菓子に使うには最高の林檎だ」

「はい、ですから私もです」

「それで作ったのだな」

「その通りです。それで次は」

「アップルティーか」

「それも飲んで下さい」

また言うろく子だった。

「どうぞ」

「そうさせてもらう。それではだ」

アップルパイを食べ終えてそのうえでアップルティーを受け取りそれを飲む。その濃厚な味を楽しみながらだ。彼はその味についても答えた。

「やはり紅玉だな」

「合格ですね」

「そういうことだ」

こう答える牧村だった。

「美味しいな」

「御気に召されたようで何よりです」

ろく子は素直な笑顔で返す。知的な顔にその笑みが宿るのだった。

「こちらとしても作ったかいかがあります」

「そういうことだな」

「それのだが」

また言う牧村だった。

「このアップルパイとアップルティーだが」

「まだ何かありますか」

「もう一つずつあるか」

牧村はアップルティーを飲み終えた。そうしてからだだった。

彼はだ。お代わりを頼んだのであった。

「パイとティーは」

「はい、ありますよ」

ろく子の素直な笑顔はそのままだった。

「どうぞです」

「済まないな。それではな」

「御礼はいいです」

それはいいという彼女だった。そのうえでの言葉だった。

そしてだ。牧村にこつも話すのだった。

「お代わりこそが最大の御礼ですから」

「それがか」

「美味しいから頼んでくれるんですよね」

牧村に対して笑顔で問う。

「だからですよね」

「その通りになるな」

牧村の今の言葉は少し素直でなかった。

「結果としてな」

「これから作りますので」

「今ここでか」

「はい、どんどん」

そうするといろく子であった。

「少し待って下さいね」

「そうか。まだあるのか」

「そうだよ。妖怪の食べ方ってね」

「そうじゃない」

ここで他の妖怪達も牧村に対して話してきた。

「もうどんどん次から次に食べる」

「そうしてるじゃない」

「だからだよ」

「今だってそうしてるんだよ」

「そういえばそうだったな」

牧村もだ。彼等のその言葉に頷いて述べた。

「成程な。それでか」

「それで牧村さんもだよ」

「これからも食べるよね」

「まだ食べるよね」

「勿論だ」

その通りだとだ。彼も返すのだった。

「美味い。これならだ」

「食べていってそうしてね」

「楽しんでいけばいいよ」

「それじゃあね」

「どんだんね」

勿論妖怪達にもアップルパイとアップルティーが来る。彼等はそれを次々と食べていく。牧村もその中に入っているのであった。

そしてだ。彼はまた話す。姿勢はやはり壁に背をもたれかけさせて立っている。その姿勢のまま飲み食いをしているのだった。

その中でだ。彼は言うのであった。

「こつしたパイに紅茶もだ」

「今度はどうしたの？」

「何かあったの？」

「身体によかったか」

こつ話すのだった。

## 第五十話 帰郷その七

「確かな」

「林檎だからね」

「絶対に悪くないよね」

「そうだよね」

「やっぱりね」

これは彼等もわかつていることだった。そしてであった。

妖怪達はそのアップルパイとアップルティーを食べながらだ。林

檎について話をはじめた。

「林檎つてあれだよね」

「一日一個食べてたらもう充分だったっけ」

「医者知らずっていったかな」

「そうだったよね」

「ドイツの言葉ですね」

ろく子が彼等の話に対して言う。

「それは」

「医者いらすですか」

「何か凄いやな」

「そうだよね」

「身体にいいってそこまでだったんだ」

「滅茶苦茶凄いやね」

「だよね」

口々にその林檎を讃える。そしてであった。

牧村もだ。その林檎を食べながら言うのであった。

「菓子もまた身体にいいか」

「果物ですから」

ろく子は牧村にも答える。

「悪くない筈がないですよ」



「糖分が気になってもだな」  
「そのことです」  
「抑えてあるか」  
「砂糖や蜂蜜は使わず」  
「そうしたものはとっているのである。」  
「林檎の甘さだけでいきました」  
「林檎だけか」  
「そうすると糖分の問題もかなりましになりますよ」  
「考えているな」  
「味の面からもそうしました」  
「栄養面からの考慮だけではないというのだ。」  
「味も。林檎本来の味を出したくて」  
「それでだな」  
「はい、あえて林檎だけです」  
「またそうだと話するく子であった。」  
「それでなんですよ」  
「美味しいな。それだけにな」  
「はい、ではまたですね」  
「またもらおう」  
「お代わりの話はこれで決まった。」  
「是非な」  
「そうして下さると何よりです」  
「菓子も身体にいいか」  
「結果として何でもじゃないかな」  
「そうだよ。身体にいいってね」  
「食べ物全部そうだよ」  
「ここでまたあれこれと話す妖怪達だった。」  
「バランスの悪い食べ過ぎこそが問題だね」  
「結局何でもだよ」  
「そうそう。食べ物は何でも」

「身体にいいんだよ」

「その通りだな」

牧村も妖怪達のその言葉に頷いた。

「結論としてはそうだな」

「だから生きられるんだしね」

「食べたら」

「何でも自然食ばかりがいいんじゃない」

牧村はこつこつと言った。

「他の食事もだな」

「インスタントだって結局そうだよね」

「そうそう。確かに食べ過ぎはよくないけれどね」

「それでもね」

妖怪達はさらに話していく。

「インスタントラーメンにお野菜を入れる」

「それだけで全然違うんだよね」

「料理は工夫」

「そういうこと」

「ですよ。この前なんですけれど」

ろく子が牧村に対して言ってきた。

## 第五十話 帰郷その八

「あれですよ。食堂で酷い人見つけました」

「どんな奴だ」

「オールバックで黒いスーツで」

「まずは外見から話すのだった。」

「その人が御飯を食べてですね」

「それでどうした」

「化学調味料がどうか。味付けがとか」

「騒いだのか」

「喚き散らしていました」

「騒いだどころではないというのだ。」

「もう滅茶苦茶だったんですよ」

「そういう人間もいるな」

「職業は新聞記者でした」

「職業もわかっているというのだ。」

「柄の悪い警官も一緒でした」

「そうか。警官もか」

「一緒になって店の料理がどうかとか喚いて」

「それでどうなったかであった。」

「お店のお客さんに注意されてもまだ喚いて」

「だからあんまり酷いからね」

「僕達がその人達捕まえたんだ」

「妖怪達が動いたというのだ。うんざりとした顔で話していく。」

「それで袋にしてから簞巻きにしてね」

「淀川まで運んで放り込んでおいたよ」

「いいことだ」

「それが正しいとだ。牧村も言い切った。」

「そういう奴はそうするに限る」

「化学調味料だつてねえ」  
「結果として良し悪しだけれど」  
「何でもかんでも自然食っていう人いるけれど」  
「それってどうなのかな」  
「これが妖怪達の意見だった。」  
「まあその新聞記者と警官だけねどね」  
「川に放り込んだ後でね」  
「さらにどうしたかというのだった。」  
「私がネットで話を公にしておきました」  
「ネットでか」  
「暴れている動画をユーチューブに送りましたし」  
「それもしたというのだ。」  
「あつという間に記者と警官の身元がわかりまして」  
「首か」  
「二人共見事懲戒免職になりました」  
「それが末路なのだった。」  
「それでどうでしょうか」  
「いいことだ」  
「牧村の返答は素っ気無くすらあつた。」  
「そうした人間はだ。そうなって然るべきだ」  
「その通りですね。ですから」  
「しかし。新聞記者か」  
「はい」  
「マスコミ関係者にはそうした手合いが多いな」  
「そうですね。かなり多いですね」  
「それはろく子も言うのだった。」  
「あと学校の先生にも」  
「その通りだな。実に多い」  
「また言う牧村だった。」  
「品性の怪しい奴がな」

「怪しいってどうか」

「どうかというのだ。」

「卑しいですね」

「そうだな。卑しいな」

「はい、そういう人が多いです」

「また言うらく子だった。」

「非常に」

「しかし。そういう人間ばかりではないと思うが」

「けれどジャーナリストや学校の先生にはそうした人がいる割合が」

「多いか」

「それもかなり」

「そうだとだ。話すのだった。」

「大学の教授もですけどね」

「つまり知識人か」

「それが今の日本ですね」

「話はそこまで至った。」

## 第五十話 帰郷その九

「戦争が終わってからの日本です」

「戦後日本の病床か」

「博士は違いますけれどね」

彼はというのであった。

「あの人はあれでも清潔ですし紳士ですよ」

「そうだよ。外見は怪しいけれど」

「それでもだよ」

「博士ってあれでね」

「紳士だよ」

妖怪達も話していく。

「温厚だし」

「気さくだしね」

「公平でもあるよね」

「それを考えると」

牧村もだ。彼等の言葉に同意だった。そのうえで言うのだった。

「あの博士は立派か」

「そう思うよ、案外ね」

「あんな怪しい外見だけれど」

「心はしっかりしているね」

「そうそう」

「ですから私も」

ろく子もまた言うのだった。

「秘書をさせてもらっています」

「秘書だったな。そういえばな」

「はい、そうなんです」

知的な笑みで首を伸ばしての言葉だ。

「ちゃんとお給料も貰ってますよ」

「八条大学からか」

「はい、学校職員の扱いです」

そうした扱いでだ。学校にいるのだった。

「ただ。お部屋は」

「それはどうなっている」

「僕達と同居だよ」

「皆一緒に色々なお部屋借りてね」

「それで生きてるんだ」

妖怪達が述べてきた。

「アパート一つ丸々借りてね」

「そうして生きてるんだ、この町にね」

「それでわしがじゃ」

子泣き爺であった。

「管理人じゃ」

「管理人だったのか」

「左様じゃ。意外じゃったか」

「そうは思わない」

これが牧村の今の返答だった。

「特にな」

「ふむ。左様か」

「その外見ならだ」

子泣き爺のその姿を見てである。確かに普通の老人に見えなくもない。

「術を使わずとも通じるな」

「それで不動産屋さんにも認めてもらったぞ」

「法的にもか」

「まあ戸籍とかはあれじゃが」

ここでは言葉を濁す彼だった。

「実際ではないがのう」

「妖怪に戸籍はあるのか？」

「無論ない」  
当然だというのであった。  
「そんなものはないぞ」  
「そうだな。ある筈がないな」  
「その通りじゃ。それはない」  
また言う子泣き爺であった。  
「だからその辺りは法的にはあれじゃが」  
「実は違法か」  
「そうなるのう。人間の世界では」  
それを否定しない彼だった。そうしてであった。  
今度はだ。砂かけ婆が出て来て言うのであった。  
「わしも管理人じゃ」  
「夫婦という設定か」  
「そういうことじゃ。それはわかるのじゃな」  
「すぐに察しのつくことだ」  
こう答えた牧村だった。



## 第五十話 帰郷その十

「二人を見ればな」

「ふむ。勘は相変わらずじゃな」

「しかし。よく見れば」

その子泣き爺と砂かけ婆を見ての言葉である。

「怪しいな」

「怪しいと」

「わし等がか」

「よく見ればそうだ」

にこりともせずだ。こつ述べたのである。

「わかるな」

「うつむ、よく見ればか」

「わかるものなのじゃな」

「他の面々よりはましたが」

他の面々とはだ。鬼やから傘や塗り壁といった面々である。

「一つ目小僧もだな」

「あれつ、僕もなんだ」

「その目ではまずいだらう」

こつ彼に言う。

「そのままの姿で出ていればだ。誰でも怪しく思つ」

「そうかなあ。目が一つだけじゃない」

「その一つ目がだ」

問題だと返す牧村だった。

「問題だ」

「まあ昔から言われてたけれどね。これで驚かせて喜んでるし」

「確信犯か」

「そうなるね。まあ僕も普段は術で化けてるよ」

「それで大丈夫か」

「大丈夫だよ。そういうことだから」  
「それでか」

「そうしたことだよ。それでね」  
さらに話す二人だった。そしてだ。

あらためてだ。こんなことも言う一つ目小僧だった。

「僕もアパートの一室で暮らしてるけれどね」

「僕と一緒にね」

「おいどんも同居してるばい」

河童と一旦木綿も出て来た。

「仲良く暮らしてるから」

「そうしているからね」

「それはいいことだな」

牧村もそれはよしとした。そしてだった。

あらためてだ。アップルパイについて話すのであった。

「ではもう一つだが」

「はい、アップルティーもですね」

「どちらも貰いたい」

「こう言うのであった。」

「それではな」

「はい、それじゃあ」

ろく子はまたその二つを牧村に渡す。そうしてなのだった。

彼はそのアップルパイとアップルティーを楽しんだのだった。そこに博士も戻ってきた。博士は研究室に入るなりこう言ったのであった。

「ふむ、林檎じゃな」

「そうだよ、アップルパイ」

「それにアップルティーね」

妖怪達が博士に対して話す。

「美味しいよ」

「とてもね」

「それは何よりじゃ」

その二つを聞いてだ。博士は明るい笑顔になった。

その笑顔のまま自分の机に座るとだ。その前にアップルパイとアップルティーが出される。当然秘書でもあるろく子が置いたのであった。

「どうぞ」

「済まんのう」

笑顔でその彼女に述べる。

「それでは有り難くな」

「はい、それでは」

彼女の言葉を受けてからそのアップルパイとアップルティーを食べる。その二つを飲み食いしながらだ。牧村に対して話すのだった。

## 第五十話 帰郷その十一

「それでだが」

「妖神達のことか」

「それじゃ。既に結構な数を倒しているな」

「そうだな」

それは否定しない彼だった。

「既にな。倒してきているな」

「ただ倒しているだけではないな」

ここでこう言う博士だった。

「そうじゃな」

「そうだ。戦うことにより何かが起こっているな」

それは牧村も感じていることだった。それで博士に言うのであった。

「近付いていつているか」

「左様。聞いておると思うが」

博士の目の色が変わった。そこには剣呑なものさえあった。

その目でだ。牧村に対して述べるのであった。

「戦うことにより発散されるエネルギーじゃ」

「それが重要か」

「それがそのまま混沌を刺激しておるのじゃ」

そうだとしたのであった。

「混沌の中心までな」

「そしてその中にある、か」

「混沌の神々、その中でも中心にいる者達をじゃ」

「出すことになるか」

「その神々を倒さねばじゃ」

牧村に対してさらに話すのであった。

「この戦いは終わらぬ」

「中心を滅ぼさずして、か」

「そういうことじゃ。それはわかるな」

「わかってきている」

これが牧村の今の返答だった。

「次第にな」

「ならばよい。それではじゃ」

「今の俺は戦うことか」

「戦い。そして勝つことじゃ」

「最後の最後までだな」

「うむ。それにじゃ」

そしてだった。博士はここでこうも言ってきたのであった。

「天使のことじゃが」

「髑髏天使か」

「この文献じゃがな」

今度は何かの動物の骨にだ。刻まれたかなり古代的な文字であった。それを牧村に見せてだ。博士は今度の話をするのであった。

「甲骨文字じゃ」

「昔の中国のだな」

「うむ、殷、つまり商のじゃ」

殷というのはその商王朝の王家の姓である。この王朝は正式には商というがそちらの呼び名もかなり広まって定着しているのである。

「その時代の文字じゃが」

「そこに書いてあったか」

「今の君の天使の階級」

「熾天使だな」

「そのさらには上があるようじゃ」

「まだあるのか」

「どうやらな」

そうだとだ。牧村に話すのであった。

「あるようなのじゃ」

「九の階級だけではなかったのか」

「わしもそう思っておった」

「しかしそれでもか」

「まだあつたのじゃ」

こゝろ牧村に話すのだった。

「これがのう」

「ではだ」

そこまで聞いてだ。牧村はあらためて博士に尋ねた。

「その階級は何だ」

「天使長じゃ」

それだというのだ。

## 第五十話 帰郷その十二

「天使を束ねる立場の。それじゃ」

「天使長だと」

「天使にはまず九つの階級がある」

博士はまたそこから話した。

「しかしそれだけでなくじゃ」

「その上でか」

「天使を束ねる者達がおるのじゃ」

「それが天使長だな」

「有名なのがミカエルじゃな」

天使達の中でもとりわけ有名な天使である。炎を司りそして口

マの守護天使でもある。その手には剣がありそれで魔を倒すのだ。

「それじゃ」

「では。そのミカエル達の力をか」

「手に入れることになるやもな」

こう牧村に対して話す。

「これから次第でな」

「そうか。そうなるか」

「そしてじゃ」

博士の言葉は続く。

「その力でじゃ」

「混沌をだな」

「倒すことになるやもな」

また牧村に話した。

「果たしてなるかどうかはわからんが」

「ではだ」

そこまで聞いてだ。牧村は述べた。

「その力を手に入れた時はだ」

「その力でじゃな」

「混沌を潰す」

一言だった。そうするといふのだった。

「そうさせてもらう」

「そうか。それではじゃな」

「それはもう決めている。だが」

「だが、じゃな」

「その力はどうしたものだ」

決意を語ってからだ。牧村は尋ねるのだった。

「天使長の力はどうしたものじゃ」

「それはまだわからん」

「まだか」

「この骨に書いてあるのは存在だけじゃ」

甲骨文字を見てだ。そのうえで言葉だった。

「その他のことはじゃ」

「書かれてはいないか」

「残念なことにな。しかし存在することはわかった」

それはだというのだ。

「しかし。どうやらこれまでその天使長になった髑髏天使はじゃ」

「いるか」

「いないようじゃな」

首を傾げさせてだった。博士は述べた。

「もしやな」

「そうか。いないか」

「そもそも君まで上り詰めた髑髏天使は稀じゃぞ」

「最高位までなったのはだな」

「それだけでも凄いことじゃ」

その牧村に話すことだった。

「そしてこれまで書かれているものは九つの階級だけじゃった」

「天使長はか」



「なかった。今はじめてわかった」  
「そうだったとだ。博士は話を続けていく。」  
「それでそれかもというとうのう」  
「そういうことか」  
「まあ待ってくれ」  
「待つようにと告げた。」  
「よいな。少しだけな」  
「わかった。それではだ」  
「済まんのう。いつもそうじゃがな」  
「わかるのとわからないのでは全く違う」  
「牧村は博士の今の謝罪はいいと返した。そしてだ。そのうえでだ。こう告げるのだった。」  
「博士にはいつも感謝している」  
「感謝してくれておるか」  
「俺は一人で戦ってはいいない」  
「そしてだった。この言葉を出した。」  
「博士がいて妖怪達がいて」  
「ああ、僕達もなんだ」  
「戦ってたのかな」  
「妖怪達には和ませてもらっている」  
「そちらだというのである。」

第五十話 帰郷その十三

「それだ」

「和みだつたんだ、僕達つて」

「ただこうして遊んでいるだけだけれどね」

「それで牧村さんの和みになってたんだ」

「そうだったんだ」

「そうだ。こうして共にいると」

どうかとだ。牧村はさらに話していく。

「和む。それで助けられた」

「息抜きは絶対に必要ですよ」

ろく子がここでも首を伸ばしてきて話す。

「何においても」

「何においてもか」

「はい、そうですよ」

こう話すろく子だった。

「弓だつてあれじゃないですか」

「常に張っておくものではない」

「必要な時に張ればいいですからね」

「そういうことか」

「備えは必要です」

ろく子はこうも話した。

「ですがそれでもです」

「息抜きもだな」

「常に備えて息抜きもして」

ろく子は牧村に話していく。

「そうして戦われるのが一番です」

「人間は機械ではないからのう」

博士も彼に話してきた。彼は今アップルティーを飲んでいる。

「それはしておかねばな」

「そうだな。思えばだ」

牧村もアップルパイを食べ続けながら話す。

「ここについて随分と助かった」

「そう言ってくれるか」

「博士がいて妖怪達がいて」

言うのは双方についてだった。

「その中にいてだ。俺は人間のままでいられた」

「戦ってばかりだとね」

「そのことだけを考えているとね」

「やっぱりね」

「よくないからね」

妖怪達も話す。

「それこそ魔物になるからね」

「そうそう。だから」

「それで僕達が牧村さんの役に立っているのなら」

「本当にいいことだよ」

「最初は驚いた」

牧村は彼等と最初に会った時のことを思い出していた。その時のことは決して忘れられなかった。髑髏天使になったことと共に。

「実際にこの世にいるのかとね」

「僕達がね」

「これがあるんだよね、実際は」

「そうそう。世の中住んでいるのは人間だけじゃない」

「僕達だっているからね」

妖怪達はこう明るく話していくのだった。

「それがわかってくれる人って少ないから」

「博士はそうだけれどね」

「わかってくれる人以外には見えないのが僕等だからね」

「そういうものだからね」

「それはどういうことだ」

牧村は妖怪達のそのわかってくれる人しかという言葉に問うた。

「一体」

「ああ、僕達がいなかったらね」

「心から完全にそう思っていた場合にはね」

「そういうことなんだ」

「そうだったのか」

これを聞いてだ。牧村はあることに気付いたのだった。

「では俺はだ」

「そうだよ。心の何処かで僕達がいるって思ってたんだ」

「だから実際に僕達と出会えたんだ」

「そういうことなんだ」

「そうだったのか」

それを聞いてだ。納得する彼だった。

## 第五十話 帰郷その十四

そしてそのうえでだ。こつも話すのだった。

「ではそう思っていてだ」

「うん、会えたんだよ」

「いいことだよ、本当にね」

「僕達にとつてね」

「俺もそう思う」

自然とだ。出た言葉だった。

そうしてだ。彼はまたアップルティーを飲んだ。そうしての言葉  
だった。

「このアップルティーもだ」

「うん、アップルティーが？」

「どうなの、それは」

「美味しいだけじゃないんだ」

「一人で飲んでも美味さは限られている」

ここでこつ言うのであつた。

「しかしだ。こつして皆で飲むとだ」

「そうそう、味が違うんだよね」

「ずっと美味しくなるんだよね」

「一人より二人」

そして言われるのだった。

「二人より三人でね」

「多ければ多いだけね」

「楽しくなるんだよね」

「そうだな。一人でいてはな」

彼はだ。考える顔になつてそれで言った。

「限られている」

「おそらく君はじゃ」

またここで博士が話す。

「そのまま戦っているだけじゃと」

「魔物になつていたか」

「只でさえ危うかつたのじゃ」

その話にもなつた。

「智天使になつた時のことは覚えておるな」

「よくな」

「君は強くなるのが尋常ではなかつた」

「これまでの髑髏天使に比べてだな」

「そうじゃ。文献によればじゃ」

「どうだかはだ。今ここにいる者は全て知っている。だがあえて」  
う話されるのだった。

「君は一年で全ての階級を昇つたが」

「それ自体がだな」

「ないことじゃつた」

こつ話す博士だった。

「そもそもそれがない」

「だからこそか」

「そもそも上級の座天使ですらなる者は稀じゃつた」

それ自体もだと博士は話していく。

「しかし君はそれを遙かに越えてじゃ」

「今に至るか」

「それだけに危うかつた」

その魔物になることについてだ。

「非常にな」

「それだけ戦っているからか」

「その通りじゃ。君は非常に危うかつた」

博士の話は続く。

「しかしそれがじゃ」

「そうならないで済んだ」

「戦いに入っているだけではなかった」

「こうしてここにいてか」

「わしゃこの連中とも一緒にいたからのう」

博士はここでは妖怪達を見た。彼等は相変わらず楽しげに飲み食いをして博士と牧村の話の聞いている。それは非常に明るいものだった。

そしてだ。博士はさらにであった。

「あとはじゃ」

「あとはか」

「これが一番大きいと思う。家族じゃ」

博士が次に出したキーワードはこれであった。

「君はよく家族と一緒にいるな」

「そうだな。今こうしている俺達の年代はな」

「どうかとだ。牧村もまた話し手いく。」

「少ないだろうな」

「特に兄弟とはじゃな」

「未久か」

この名前をだ。牧村から出した。

## 第五十話 帰郷その十五

「あいつか」

「ああ、妹さんね」

「そういえば牧村さんって妹さんと仲よかったよね」

「そうだったよね」

「それは非常に大きいのじゃ」

妖怪達が言う中だ。博士はまた指摘してみせた。

「そこがじゃ」

「兄弟がが」

「親子と兄弟」

博士はこの二つの軸について話した。

「その二つと常に接しているとじゃ」

「そこが大きいか」

「うむ、大きい」

そうだというのである。

「人間でいる為にはな」

「それで俺はこうして今もか」

「人間であるのは間違いないな。それに」

「それに？」

博士は言葉を変えてきた。牧村もそれに顔を向けた。

「それにとは」

「君にはもう一つあるな」

「もう一つか」

「友人とっておくか」

博士はここではあえて多くは言わなかった。これだけに留めた。

「それでよいかのう」

「友人か」

「こう言えばわかるな」



また言う博士だった。

「そうじゃな」

「よくわかる。そうか」

それが若奈のことであるのは牧村もわかった。だが博士の気遣いに応えてだ。今は多くを言わなかった。これだけに留めたのである。しかしだ。博士は話自体は続けた。そうしてであった。

「それじゃ。君のその友達じゃが」

「俺にとつては大きいか」

「非常に大きい」

そうだというのである。

「君をこれまで。妹さんと共にじゃ」

「支えてくれてきているか」

「おっと、そうじゃそうじゃ」

博士も牧村の言葉を受けて破顔してだ。言葉を訂正したのだった。

「今もじゃったな」

「そうだな。それはな」

「そしてこれからもじゃな」

現在だけでなく未来も話すのだった。

「そういうことじゃな」

「そうなるな。話は」

「うむ。とにかく君はじゃ」

「特にその二人によつてか」

「人間でいてるのじゃよ」

暖かい目になってだ。牧村に話した。

「そういうことじゃ」

「俺は一人ではない」

「孤独だと思つたことはないじゃろ」

「ないな」

実際にその通りだった。

「それはな」

「よいことじゃ」

「孤独はそれだけで不幸になるか」

「人によるがな」

「俺の場合はだな」

「だから魔物になっておった」

「そうだったというのである。」

「危ないところじゃった」

「しかし俺は孤独ではなかった」

「だからよかったのじゃ」

「こう話すのだった。」

「君は家族も友人もいて」

「そしてだな」

「わし等もある」

最後は自分達だという博士であった。

## 第五十話 帰郷その十六

「だからよいのじゃ」

「それでだな」

「そういうことじゃ。それではじゃ」

「今だな」

「食べることじゃ」

実に具体的な言葉だった。

「そして飲むことじゃ」

「このアップルパイとアップルティーをか」

「食べることもまた、じゃ」

「人間でいさせてくれるか」

「食べるという行為は」

どうだとだ。博士はそれについても話した。

「実に生物的な行為じゃな」

「そうだな。生きているからには食べる」

「そうそう。食べないとね」

「生きていけないからね」

「絶対に」

それを妖怪達も話す。そしてだ。

一反木綿に塗り壁もだ。笑いながらこう話すのだった。

「食べて生きるばい」

「そういうことだね」

「だよね」

「その通り」

から傘に輸入道もその言葉に頷く。

「食べてそれによって」

「妖怪達も生きるからな」

「生きるのはいいがだ」

牧村はその彼等の姿形を見てだ。いぶかしむ声を出したのだった。もつと言えはである。その声を出さずにはいられないのであった。

「しかし」

「しかし?」

「っていうと?」

「どうやって食べている」

牧村はとりわけ一反木綿を見ている。見れば口がない。

「そしてどうやって消化している」

「あれっ、そういえば」

「どうやって食べてるかな」

「それにどうやって消化して」

「言われてみれば」

実はだ。彼等自身も理解していないことだった。

「うっん、考えてみれば」

「不思議なことだね」

「妖怪の身体ってどうも」

「不思議だな」

「生物学的にはじゃ」

博士が妖怪達その身体について生物学的な見地から述べてきた。実は博士は生物学の分野においてもその名を知られているのじゃ。

「妖怪の身体は説明できんのじゃ」

「そうなのか」

「うむ、かなり滅茶苦茶な身体の構造になっておる」

こう牧村に話すのだった。

「内臓はしつかりとあるがな」

「おいどんにもばい」

「俺にもだ」64

一反木綿と輪入道の言葉である。

「だから生きているから」

「それは安心してくれ」

「どついつ内臓の構造だ」  
しかし牧村はまだ言う。  
「謎だな」  
「だからこの身体の中に」  
「ちゃんとあるよ」  
今度は塗り壁とから傘である。  
「平べつたいけれど」  
「小さいけれどね」  
「ものから妖怪になってもです」  
ろく子も話してくる。やはり首が伸びている。  
「内臓やそうしたものはありますから」  
「心臓や脳もか」  
「勿論あります」  
「そうだとするのである。」  
「そうしたもののはしっかりと」  
「わかるが理解できない」  
これが牧村の今の言葉だ。

第五十話 帰郷その十七

「内臓があるのはわかったが」

「どういった構造で働いているのがですね」

「理解できない」

「そうした意味での今の彼の言葉だった。」

「実にな」

「まあそうじゃろうな」

博士は笑いながら彼に述べる。

「それは」

「生物学だけでは説明がつかないか」

「所詮学問なぞ一つ一つではそうじゃ」

博士はそこに学問の限界にさえ言及していた。

「一つ一つでは限度がある」

「限られているか」

「わかることも説明できることもじゃ」

そのどちらもだというのだ。

「しかしじゃ。それぞれの学問を重ねていけばじゃ」

「それが違ってくるか」

「左様」

牧村に対して頷いてみせた。

「そういうことじゃ」

「だから博士はか」

「生物学だけではない」

「一つの分野だけではないというのだ。」

「他の学問もな。しておるのじゃ」

「科学に医学もか」

「それと工学もじゃ」

理系について述べられていく。

「それと文系もな」  
「この場合は民俗学だな」  
「それと歴史学に文学もじゃ」  
「その二つであつた。」  
「とにかく色々な学問を学ぶことじゃな」  
「そうして多くのものを知っていくか」  
「そうしなければ妖怪でも何でもじゃ」  
妖怪だけに限らないという。他のものもだというのだ。  
「わからんものじゃ」  
「そうだよ。僕達妖怪つてね」  
「生物学じゃ説明つかないからね」  
「中々ね」  
「というか生物学つてね」  
「だよね」  
妖怪達はその生物学についても話していく。どうだというのだ。  
「所詮は今の時点での知識でしかないし」  
「それ以上のものはないからね」  
「だから僕達についてはね」  
「全くわからないから」  
「そういうことじゃ。学問は調べることじゃ」  
「まずはそこからだというのである。」  
「調べないとわからんものじゃからな」  
「だから僕達のことだつてね」  
「調べないとわからないよ」  
「全然ね」  
「はつきり言つて」  
これが妖怪達の主張であつた。言われてみればその通りだつた。  
そしてであつた。またろく子が首を伸ばしてきて牧村に話す。  
「私の首だつてそうですよ」  
「そういえばどうして伸びる」

「それは一切わかっていません」

にこりと笑ってだ。そうして話す彼女だった。

「実はそうなんです」

「全くか」

「はい、全くです」

何一つわかっていないとだ。彼女は話すのであった。

「私自身にもです」

「脊椎に関するのか」

牧村はここは今考えられるだけの知識で述べた。

「それでだろうか」

「どうぞでしょうか」

それはよくわからないといった感じの返答だった。

「果たして」

「脊椎の関係ではないのか」

「首の骨が伸びているという意識はありませんし」

それはないというのである。



## 第五十話 帰郷その十八

「本当にどうなんでしょうか」

「今調べているところじゃ」

博士もここでまた言う。

「ろくろ首はどうなっているかな」

「宜しく御願いますね」

ろくろ首は博士にその伸びた首を向けて話す。

「その辺りも」

「わかっておる。本当にどうなっておるか調べるとしよ」

「それが博士の楽しみですしね」

「うむ。世の中調べることは実に多い」

そしてだった。こつも言う博士だった。

「人が知っておることなぞ所詮は」

「大海の中の小匙一杯」

「そういうことじゃ」

牧村の言葉に応える。

「その程度でしかないのじゃよ」

「しかし調べていき」

牧村も言う。

「わかっていくな」

「大海のことがな」

「少しずつだな」

「左様、何でも少しずつじゃ」

博士は知識についてだ。実に謙虚であった。

「何でも知っているとかは有り得んのじゃよ」

「人間ではか」

「僕達もだよ」

「それはね」

妖怪達もだというのだった。

「そんなの。全部なんてね」

「とれも知れないよ」

「絶対に」

「わしにしてもじゃ」

ぬらりひよんの言葉だ。妖怪達の長老の一人である。

「とにかく知らんことが多いぞ」

「わしものう」

今度はさとりであった。

「確かに相手の考えは読める」

「けれど知らないことはあるんだね」

「さとりにしても」

「だからわしは考えが読めるだけじゃ」

彼はそれだけだというのだ。

「考えはじゃ」

「そういえばどうやってわかるの、相手の考え」

「それは」

仲間の妖怪達がそれを問う。

「前から気になっていたけれど」

「どうなの、それって」

「目じゃ」

目だというのである。

「相手の目を見て読むのじゃよ」

「目なんだ」

「それを見てなんだね」

「相手の考えを読むんだ」

「洞察じゃよ、洞察」

さとの秘密はそれであった。洞察であったのだ。

「そこから読むのじゃよ」

「うっん、今はじめてわかった衝撃の事実」

「相手の頭の中を覗けるんじゃないやなかったんだ」

「それはなかったんだ」

「そこまではできんよ」

さとりもそれはできないというのだった。

「目だけじゃなく言葉や表情からも読み取るがのう」

「それで知らないこともある」

「そうだったんだ」

「わしも知る為にはじゃ」

どうかというのであった。それについてはだ。

「学ばなければならん」

「やっぱりね。勉強だよね」

「妖怪も人間も結局そうだよね」

「何でも勉強」

「それだよね」

「うむ、その通りじゃ」

博士は明るい顔で頷いてみせた。

「知る為にはやはりそれじゃよ」

「そしてだな」

また話す牧村だった。

## 第五十話 帰郷その十九

「その小匙をだな」

「うむ、少しづつな」

「大きくしておくか」

「そうじゃ。そうするのじゃ」

こう話すのであった。

「確かに知らないことはあまりにも多いがのう」

「思えばな」

牧村もここでこう話す。

「俺も最初は何も知らなかったな」

「わしもじゃ」

「しかし少しづつ知っていったな」

「そうじゃな。思えばそうじゃな」

また言う博士であった。

「最初は本当に何も知らなかった」

「髑髏天使についてな」

「探せば色々な文献があつた」

それも様々な国にである。それがあつたのである。

「縄文字や象形文字を解読する必要もあつたがのう」

「楔形文字もあつたな」

「甲骨文字にしてもな」

「そうしたもの全て解読できるか」

「うむ、できる」

博士の特殊技能の一つである。

「解読できるようになるには苦労したがのう」

「っていつかさ。そうした文字ってさ」

ここでまた妖怪達が話すのだった。

「普通の人って一つの文字に必死になつてるけれど」

「博士つて幾つもだからね」  
「物凄い数の文字解読できるよね」  
「そうだよな。それつて凄くない？」  
「かなりね」  
「そういえば喋ったり書ける言葉だつて」  
現代の言語についてもであった。  
「二十ヶ国語は喋れるよね」  
「四十じゃなかったっけ」  
「とにかく多いよね」  
「そつちもね」  
「言語は昔から得意じゃ」  
博士にとつてはそれで済むことであった。  
「それに一度覚えたことは忘れんのじゃ」  
「そうそう。一度見たり聞いたらね」  
「博士つて絶対に忘れないよね」  
「知識もどれだけでも入るし」  
それが博士の頭脳であった。  
「記憶力が桁外れつていうかね」  
「そつちが凄いから今こうしてるんだね」  
「まあそうじゃな」  
博士もそのことを認めるのだった。  
「記憶力と長生きには感謝しておるぞ」  
「どちらも桁外れだな」  
「そうそう、博士のそういったことつてね」  
「もう普通じゃないから」  
「人間離れしてるから」  
また妖怪達が楽しそうに話していく。  
「そうしたところつてやっぱり」  
「僕達に似てるかな」  
「似てるつていうか同化してきてる？」

「あつ、それ言えるかもね」

「確かにね」

「前にもそんな話をしておったのう」

「このことを覚えていた博士だった。」

「そういえばのう」

「だよねえ。けれど実際じゃない？」

「実際に僕達と博士って似てきてるよね」

「能力だけでなく性格も」

「どっちもね」

「博士、そういえばですけれど」

「ろく子の首は今度は博士の方に伸びてきていた。」

「今お歳は」

「さて」

「首を傾げさせながらの返答であった。」

「幾つだったかのう」

「おわかりになられませんか」

「百十歳は超えておる」

「それだけはあるというのだ。」

「子供の頃じゃったかのう。日露戦争を見たのは」

「懐かしい戦争だよね」

「そうだよね」

「妖怪達もこんなことを話す。」

## 第五十話 帰郷その二十

「あの戦争は勝てるとは思わなかったね」

「だよねえ」

「奇跡的な勝利だったよ」

「本当にね」

彼等から見てもだ。そうした戦争であったのだ。

「日本負けたら危なかったし」

「けれどしない訳にはいかなかったしね」

「それで皆悩みに悩んで」

「結果はじめた戦争だったね」

強硬派と言われることの多い山縣有朋ですらだ。最後の最後、開戦のその時までその戦争を躊躇っていたのだ。そうした戦争だったのだ。

「あの時の日本には天恵があったかな」

「天の意志がね」

「そうじゃないかって場面も多かったし」

「神様達がついてたのかな」

「僕達も応援してたけれど」

「あの戦争のことは覚えておるぞ」

その博士の言葉だ。

「わしはまだ子供だったからのう。あまり深くは考えられなかった」

「とてもだよね」

「そこまではね」

「子供だとね」

「しかし勝つと信じておった」

それでもだというのであった。

「必ずな。二次大戦は駄目かと思っただが」

「けれどあの戦争だってね」

「やっぱりするしかなかったよね」  
「そうしないといけない状況だったし」  
「あの時だって」  
「あの戦争の頃わしはもう立派な歳じゃった」  
「博士はその戦争のこともよく覚えていた。」  
「あの時色々な兵器にも携わったわ」  
「兵器の開発もしていたのか」  
「あの時はそうじゃ」  
「こつ牧村にも話す。」  
「そうしておった」  
「それが俺のサイドカーにも活用されているのだろうな」  
「左様、あの時の経験を活かしておる」  
「やはりそうか」  
「そういうことじゃ。主に航空機を作っておった」  
「空か」  
「車や船にも携わっておった」  
「つまりありとあらゆるものにある。戦えるもの全般であった。」  
「そうしておったぞ」  
「博士も日本の為に働いていたか」  
「当然のことじゃ」  
「それはむべもないといった感じの返答だった。」  
「わしは日本人じゃからな」  
「それで僕達は日本の妖怪だよ」  
「生まれも育ちもね」  
「日本だよ」  
「この国の産だよ」  
「妖怪達もそうだとしたのであった。」  
「それは否定できないよ」  
「日本好きだしね」  
「一番ね」



「わしも好きじゃ」

博士もであった。

「ずっと生きておるこの国がのう」

「俺もそうだな」

そしてそれはだ。牧村もであった。

「俺も我が国が好きだな」

「そうじゃろ。それが自然じゃ」

「自然か」

「日本は君の故郷じゃ」

博士は牧村にこう述べた。

「故郷は大事にせねばな」

「中には違う人間もいるがな」

こんなことも言う牧村だった。

「たまにな」

「政治家におるか」

「いるだろう。あのカメムシみたいな顔をした奴だ」

牧村は言葉に表情を出さないがそれでも微かに忌々しげなものを

見せている。

「そのカメムシを踏み潰して皺だらけにしたみたいな顔をした奴だ」

「ああ、あれか」

そう言われてだ。博士もわかったのだった。

「あの健忘症のか」

「あいつは違うな、明らかに」

「あれは屑じゃ」

博士にしては珍しく忌々しげな口調だった。

第五十話 帰郷その二十一

「人間の屑じゃ」

「そうだな。あいつはな」

「生きながら餓鬼道に堕ちておる」

「そこまですというのである。」

「人間あなつたら終わりじゃ」

「そういうことか」

「うむ、終わりじゃ」

「まさにそうだというのである。」

「ああなつてしまえばな」

「そうだよ。ああいう奴つてね」

「次は人間には生まれ変われないから」

「妖怪にもなれないよ」

「妖怪達もその輩について忌々しげに話す。」

「かといつても魔物にもなれない」

「動物にも植物にもね」

「そうしたのは絶対になれないから」

「昆虫だつて無理」

「そこまですというのである。」

「だからなるとしたら餓鬼だよ」

「それで一億回はやり直すことになるね」

「そつから細菌に生まれ変わるから」

「そつなるよ」

「そつじゃろつな」

「博士も妖怪達その言葉に頷く。」

「ああいう奴はそつなるわ」

「あんまりにも卑しいから」

「下品過ぎるよ、全く」

「そつだよね。あれ日本人どころか  
それどころではないというのである。

「人間ですらないから」

「生き方って顔に出るけれどさ」

「本当にそうした顔してるじゃない」

「あれは本当に下劣な奴だよ」

妖怪達から見てもだ。そうした輩であった。

「これまでそうした奴もいたし見てきたけれど」

「今の日本ってそういう奴多いよ」

「あいつがいる政党とか」

まさに類は友を呼ぶであった。下劣な輩の周りには下劣な輩が集まるものだ。

「あとマスコミとかね」

「学校の先生にも多いよね」

「それもかなりの割合でね」

「どっちも酷いものですよ」

ろく子もその長い首の先にある顔を曇らせている。

「学校の先生なんて滅茶苦茶ですから」

「こんなことは言いたくないがのう」

博士も暗い顔である。

「マスコミとか教師の世界はじゃ」

「最悪だな」

「卑しければ卑しだけ」

博士は牧村に応えて話していく。

「無能であれば無能であるだけじゃ」

「偉くなつていくな」

「左様、そのどちらも備わっていてこそじゃ」

それによつてであるというのだ。

「そうした組織は偉くなれるのじゃ」

「よくなる筈がないな」

牧村も話を聞いて述べた。

「そんな組織は」

「はい、そうした人間は今の日本に多いです」

「それも実にじゃ」

ろく子と博士はまた牧村に話した。

「大学ですよ」

「この大学にはおらんがな」

「そうだな。この大学はな」

つまり八条大学のことである。彼等が今いるその場所だ。

「そうした教師等からは嫌われるだろうな」

「八条グループにしてもじゃ」

博士はそこから話す。八条大学を経営しているそのグループである。

「随分そうした連中から中傷を受けたぞ」

「凄かったんですよ、昔なんて」

また博士とろく子が牧村に話す。

「環境破壊だの経済侵略だのな」

「社員の現地での破廉恥行為とか。嘘ばかり書いてたんですよ」

「嘘か」

「完全にな」

「それを書き殴られ続けていました」

「それが許されていたか」

牧村はこのことに深い憤りを覚えた。

第五十話 帰郷その二十二

「恐ろしい話だな」

「それが戦後の日本の知性じゃ」

「知性か」

「そうじゃ。戦前とは全く違う」

博士は明らかに憤っていた。言葉にそれが出ていた。

「恐ろしい話じゃろう」

「そう言うしかないな」

「それを書く学者やマスコミこそがじゃ」

「現地でそうした行為を行っていたな」

「日本国内でもしておった」

まさにだ。やりたい放題だったというのである。

「それが報道されることはなかった」

「全くか」

「そうじゃ、試しにじゃ」

「試しに」

「学校の教師の不祥事などはじゃ」

そちらに話を移してであった。話すのだった。

「報道で出て来るのはほんの氷山の一角じゃ」

「ほんのか」

「そうじゃ、ほんのじゃ」

そうではかないというのである。

「酷い話は幾らでもある」

「確かにな。俺の中学校でもな」

「そうじゃったな」

「現実世界では有り得ない暴力教師がいた」

あの魔物に殺された暴力教師のことだ。

「受身知らない生徒に床で背負い投げをした」

「それって普通捕まるよね」  
「そうだよね」

妖怪達もこう言う行為であった。

「っていつか床でって」

「下手したら死なない？」

「しかも受身知らない相手につて」

「その教師頭おかしいでしょ」

彼等も啞然としながら話す。

「あの、柔道で畳あるのって」

「床でしたら危ないからだけれど」

「それで床で背負い投げって」

「普通の社会でそれやったら」

どうなるか。それも話すのだった。

「確実に傷害罪で逮捕だよ」

「それが許されるのが先生の世界なんだ」

「そうなんだね」

「そうだ。捕まることなぞなかった」

実際にそうだとだ。牧村も話す。

「全くな」

「それがおかしいから」

「そんなの警察とか自衛隊とか」

「そんな閉鎖的って言われてる世界でもね」

「クビだから」

「絶対に」

これは警察や自衛隊が健全な世界だということに他ならない。少なくとも教師の世界に比べれば遙かにだ。健全であると言えた。

「それでお咎めなしじゃあね」

「酷い世界にもなるよ」

「ならない筈がないよ」

「有り得ないから」

「その有り得ない社会が戦後の日本ではじゃ」  
また話す博士であった。  
「尊敬されておったのじゃ」  
「ううん、とんでもないね」  
「先生様なんてとても言えないね」  
「っていつか教師って何？」  
「悪いことしても捕まらない人達なんだね」  
「そうした世界もあるのじゃ」  
博士は溜息と共に述べた。  
「しかし君はじゃ」  
「俺か」  
「そうした人間には絶対にならん」  
こう牧村に話すのだった。  
「絶対にな」  
「ならないか」  
「そうした人間ならとつくに魔物になっておった」  
「そっだというのである。」

第五十話 帰郷その二十三

「しかなっておらん」

「そうだな。確かに」

「そういうことじゃ」

「それでだということである。」

「君は大丈夫じゃ」

「だといいな」

「まあ君はこの大学に残るなり喫茶店に入るなり」

「喫茶店か」

「ははは、話は聞いておる」

顔を崩して笑う博士であった。

「よいことじゃ」

「それはわかったが」

「わかったが？」

「何処で聞いた」

牧村は真剣な目で博士に問うた。

「その話をだ。何処で聞いた」

「僕達からだよ」

「博士に話したんだ」

妖怪達がここで言うのだった。

「実はね。あのお店にも行き来してるから」

「それでなんだ」

「それでか」

「僕達美味しいものがある場所なら何処でもだよ」

「行くよ」

この辺りは実に彼等らしかつた。

「だからだよ」

「そこで見てたしね」



「牧村さんとあの人ね」

「綺麗な人だね」

若奈のことも話される。

「小柄で笑顔が素敵だね」

「牧村さんにお似合いだよね」

「確かにね」

「小柄な人と背の高い人の組み合わせってね」

「それがいいんだよね」

「そうそう」

「そういえばですけれど」

またろく子が牧村に首を向けて話してきた。

「牧村さんまた背が伸びましたね」

「伸びたか」

「はい、伸びてますね」

そうだとするのである。

「今身長どれ位ですか？」

「最近測ってないが」

「見たところ」

その長い首を利用して牧村を上から下まで見てだ。そのうえでの言葉だった。

「一八三位ですか？」

「前は一八〇位だったよね」

「そうそう」

立派と言っているいい身長である。妖怪達もそれを言う。

「そこから三センチ伸びたんだ」

「何か羨ましいね」

「僕達って背とか変わらないからね」

「術で変えられてもね」

「本来の背はどうしてもね」

「変わらないんだよね」

それが妖怪達だというのだ。この辺りは人間とは全く違っている。

「その僕達と違ってね」

「背が伸びるってね」

「いいよね、人間って」

「本当にね」

「そうだろうな」

牧村もそれについて頷く。

「俺も自分の背が伸びることはだ」

「嬉しいんだ」

「そうなんだ、やっぱり」

「ああ、いいものだ」

また妖怪達に対して述べた。

「本当にな」

「そうじゃのう。わしもじゃ」

博士もここで笑顔と共に言ってきた。

「かつてはあれじゃぞ。一七五あったのじゃ」

「本当か、それは」

牧村は半分真顔で博士に問い返した。

「本当にそれだけあったのか」

「あつたぞ。本当にじゃ」

「そうなのか」

「うむ、それが歳と共に縮んだのじゃ」

笑顔はそのままであった。

「それで今に至るのじゃ」

「そうだったのか」

「全く。八十、いや九十を超えた辺りからじゃ」

日本人の平均寿命を超えている。

「その辺りから縮んでじゃ」

「そうだったのか」

「今では一五〇位か」

そこまで小さくなったというのである。

「いや、小さくなったわ」

「そうだよね。博士ってね」

「昔と今じゃ全然外見違うからね」

それを妖怪達も話す。

「性格は変わらないけれどね」

「喋り方もね」

「けれど外見は本当に変わったよ」

「昔は海軍将校にも負けない位の外見だったのに」

かつては海軍将校といえどもてにもてた。その彼等にもひけを取らなかつたというのだ。

「今じゃ僕達と一緒にいても普通だしね」

「何かこのまま妖怪になるとか？」

「あはは、それ有り得るね」

「そうだよね」

こんな話をしてだった。そうして。

牧村はだ。壁から背を離してだ。そうして言うのだった。

「さて、それではだ」

「講義じゃな」

「言ってくる。それではな」

こう博士に言うのだった。

「ではな」

「うむ、それではな」

「勉強も頑張ってるね」

「しっかりね」

妖怪達も笑顔で彼に言う。彼等はまだアップルパイにアップルパイを楽しんでいる。

「それじゃあまたね」

「待ってるからね」

「行ってらっしゃい」

「またな」

別れの挨拶をしてだ。彼は日常生活、学校の講義に向かった。その日常生活こそがだ。彼を人間にしていることに考えることにもなるのだ。た。

第五十話

完

2010・12・31

## 第五十一話 解放その一

髑髏天使

第五十一話 解放

男はだ。この時混沌の中にいた。

様々なものが複雑に絡み合い蠢き続けるその中でだ。彼は語り掛けていた。

「どうだ、今は」

「それは我への言葉か」

「我なのか」

「どちらもだ」

双方だというのである。彼は混沌の中に浮かびながら彼等に話していた。

「どちらにも言っている」

「そうだったのか」

「両方にか」

「そうだ。それでだ」

男はだ。また彼等に問うた。姿を見せていない彼等にだ。

「今はどうなっている」

「近付いているな」

「それは感じている」

「そうか。やはりな」

男は二つの声を聞いてだ。納得した声を出した。そのうえで、であつた。

「それではだ」

「解放するか」

「いよいよ」

「そうだ。それを考えている」

まさにそうだとだ。声達に話すのだった。

「今はな」

「ならそうするといい」

「是非な」

彼等もそれを勧めるのだった。

「それがそのまま我等の復活につながる」

「間違いなくだ」

「また神を一柱出す」

男はこう彼等に話す。

「そしてそれでだ」

「あの四柱か」

「いよいよ」

「時は間違いなく来た」

男はそれを確信していた。

「彼等を解放するその時がだ」

「それだけの力が集まったな」

「そうだな」

「その通りだ。 髑髏天使に死神」

彼等の名前も出す。 その戦いの相手達をだ。

「いい力を出している。 実にな」

「そうだな。 戦いから相当の力を出した」

「封印に影響を与えてくれる」

「それこそがだ」

「我等を解放する糧になるのだからな」

「相手もそれはわかつている」

戦いにより発散されるその力がどういった影響を与えるのかをだ。

髑髏天使と死神もまたわかつていると。 こう言うのである。

「しかしそれでもだ」

「戦うか」

「あえて」

「我等を全て倒すつもりだ」

「我等もか」  
「混沌の中心である我等も」  
「そうだ。それにだ」  
それだけではないともだ。男は彼等に話した。  
「それで混沌で世界を覆うことを防ぐつもりなのだ」  
「最後まで戦い勝ちか」  
「そうしてか」  
「その通りだ。ならばだ」  
どうするか。男は既に答えを出していた。  
「我等としてもだ」  
「髑髏天使と死神を倒してだな」  
「そのうえでだな」  
「そういうことだ。それでいいな」  
「我等が解放されればな」  
「その時はな」  
彼等もだ。それでいいというのである。  
「ではな。我々もだ」  
「その時が来ることを待とう」  
「楽しみにしている」  
「その時が来るかどうかはわからぬが」  
「そうしているといい。四つの封印を解放し」  
「そこからだというのだ。」

## 第五十一話 解放その二

「そしてそのうえでだ」

「その跡は貴様とその伴侶だな」

「奴等と戦うな」

「四柱が倒されたなら私の番だ」

だからだと話す男だった。

「だからその時はだ」

「では楽しむといい」

「その時が来ればな」

「戦うとすれば随分久し振りのことになるな」

男は妙な笑みを浮かべた。酷薄な、それでいて楽しむ笑みであった。

「どれだけだっただろうか」

「さてな。我も前に戦ったのはだ」

「どれだけだったか忘れた」

「あれは。何時だったか」

男は彼等の言葉を聞きながら思い出そうとしていた。それは人の頭脳では考えるだけで気が狂ってしまいそうな極彩色の世界の中の記憶であった。

「あの神々だったか」

「そうだったな」

「あの神々との戦い」

「古い昔だな」

「その時だった」

こう話していくのだった。

「その時にだった」

「我等が最後に戦ったのは」

「そして」



話がさらに続く。

「それから長い間眠っていたがな」

「気付いたらこの時代だったな」

「人間の時代か」

ここで二つの混沌がこう言った。

「鉄の時代だったか」

「ふむ。あの頃は黄金の時代だったか」

「いや、ティターンという神々の時代だった」

「その時だったか」

こうお互いに話をするのだった。

「ふむ。その頃だったか」

「そして今に至る」

「あの頃も懐かしいがな」

「今はこうしてだな」

「そうだ、その髑髏天使と死神だ」

男がまた二つの混沌に告げた。

「若し私が戦うようになればだ」

「うむ、その時にこそ我等の封印もまた」

「解かれるな」

「その通りだ。そうなる」

こう彼等に話してだった。男は遂に動こうとしていた。

その頃牧村は。若奈と共にいた。大学のある広い教室にいた。そうしてそこで講義前の準備をしていた。

何十段にもなった教室である。教室の一番下に講師が話す教壇がある。全体的にすり鉢型になっているそれはまさに大学の教室であった。

その教室の真ん中辺りにいてだ。二人はこう話すのだった。

「何かね」

「久し振りだと言うか」

「うん、そうよ」

その通りだと答える若奈だった。

「大学の夏休みって長いから」

「そうだな。かなりな」

「あとね。長いのはね」

ここで若奈はこんなことを話した。

「あそこ。奈良県でいつも甲子園に出る高校」

「甲子園にか」

「ラグビーも柔道も強くて」

こう言っていくのだった。

「それで吹奏楽や雅楽も有名なあの高校ね」

「随分独特な高校だな」

「うん。私の親戚の娘が行ってる高校なの」

その高校だというのだ。

「そこね。夏休みが相当長くて」

「どれだけある」

「五十日位」

「長いな」

牧村もそれを聞いてはつきりと言った。

「それが高校の夏休みか」

「冬休みも一月あって」

話はまだあった。冬もなのだった。

「春休みもそれ位あるの」

「またどうしてそれだけあるのだ」

「あれなの。その高校日本全国から生徒が来るから」

そうした高校もあるのだ。高校としては珍しい部類であるが確かに存在しているのである。それがその高校であるというのである。

## 第五十一話 解放その三

「だからそれで」

「生徒のことを考えてか」

「そういう面も確かにあるわ」

「一年のうち三分の一が休みか」

「やっぱり凄いわよね」

「そう思う」

牧村もそれを否定しない。

「そこまでか」

「それがその娘の通っている高校なの」

「今もその高校に通ってるのか」

「いえ、もう卒業したわ」

今はそうではないというのだ。

「それでその上の大学に通ってるの」

「エスカレーター式にか」

「半分ね」

「半分か」

「一応選定試験みたいなのあるそうなの」

「それだとエスカレーターだろう」

「ううん、そうなるかしら」

この辺りは二人の認識の違いだった。とにかくだった。

「それで今はそっちの大学に通ってるから」

「まだそちらにいるのか」

「そう、奈良にね」

そこにその学校があるのだという。

「顔も背丈も私そっくりなの」

「何もかもがか」

「歳はその娘が一つ下で」

そこは違っただった。

「後はね」

「殆ど同じか」

「ううん、性格は違うわね」

「それは流石に違うか」

「その娘あれなの」

その性格についての説明がはじまった。

「物凄く真面目で頑張り屋さんだけれど」

「それでもか」

「おっちょこちょいなもの」

まずはそこから話すのだった。

「もうかなりね」

「そうなのか」

「そう、しかも慌て者だし」

その娘の話がさらに続けられていく。

「鈍感だし」

「何か随分問題のある娘だな」

「性格はいいのよ」

それ自体はいいというのだ。

「けれどね。そうした抜けたところが多くて」

「それが心配か」

「顔も背丈も殆ど同じだし」

だから気になるという若奈だった。

「親戚だし。子供の頃から付き合いあるし」

「特別な相手か」

「かなりね」

若奈もそれは否定しなかった。

「だからちよつと以上にね」

「しかし鈍感か」

「そう、実はその娘を好きな子がいるの」

「同じ奈良にか」  
「高校時代の後輩の子で」  
つまり年下から好かれているというのである。  
「その子縁のある人が神戸にいるのよ」  
「この街にか」  
「そう、それで神戸でその子を見たけれど」  
「彼女にべたべたとしてか」  
「それで大変なことになってるの」  
こうだ。牧村に話すのだった。  
「誰が見てもわかるっていう位のね。ベタボレなんだけれど」  
「しかし当人だけはか」  
「全く気付いてないの」  
若奈の顔は困り果てたものになっていた。  
「どうしたものかしらね」  
「それはかなりまずいな」  
「まずいなんてものじゃないのよ、これが」  
若奈はかなり困った顔になっていた。  
「その娘何で自分に近寄ってくるかわからないっていうし」  
「自分ではだな」  
「そう、自分だけはね」  
「わからないか」  
「漫画とかでよくある展開だけれど」  
若奈はこんなことまで言うのだった。

## 第五十一話 解放その四

「けれど。実際にいるとね」

「しかも身内にいるとか」

「気が気でないわ、本当に」

まさにそうだと答える若奈だった。本当に心配している顔だった。

「どうなるのかしら、一体」

「俺が思うにはだ」

「思うには？」

「なるようになる」

これが彼の考えだった。

「そうしたこととはな」

「なるようになるの」

「その子は高校生だな」

牧村は後輩という言葉からこのことを察した。

「そうだな」

「そうよ。今高校二年なの」

「その娘は大学一年だな」

「私より一つ下だからね」

つまり大学にはストレートで入学したというのだ。この辺りは若奈や牧村と同じである。二人も大学にはストレートで入学しているのだ。

「そうなるわ」

「そうだな。やはりな」

「その学校って高校と大学が隣同士なのよ」

エスカレートならよくあることだった。

「それでしょっちゅう会うらしいのよ」

「後輩が会いに行くな」

「ええ、それでいつもらしいわ」

話は実に簡単であった。その後輩が積極的にアプローチしているのだ。だがその娘はというとだ。全く気付いていないというのである。

「それで困ってるのよ」

「嫌っているのか、その後輩のことを」

「ところがそうでもないみたいね」

「まんざらでもないか」

「口では困ってるっていつも言ってるけれど」

実際はどうかというのだ。言葉と本音は一致するとは限らない。

「その辺りはね」

「違うか」

「それも見たらわかるのよ」

若奈が見てもだというのである。

「もうね」

「そうか。それなら」

「上手くいくと思う?」

「いくな。その娘が気付けばな」

「そうよね。とにかくその子って凄いのよ」

後輩の話にもなる。

「もう積極的で。いつも来るから」

「一途か」

「滅茶苦茶一途よ」

実際にそうだとするのである。

「その娘の他は何も見えない位にね」

「それはまたかなりのものだな」

「見ているこっちが応援したい位に」

「そこまでか」

「一見軽いけれどね」

その後輩の高校生の話だ。

「それにいい加減に見えるけれど」

「それでもか」

「少し見たらわかるのよ。かなり一途な子よ」  
また話す若奈だった。

「その娘にね」

「根は真面目か」

「そう、悪い子じゃないわ」

「ではその娘にか」

「お似合いだと思うわ。実際にね」

若奈は太鼓判さえ押していた。

「その娘三人姉妹の長女さんでね」

「そこも同じか」

「そうなのよ。私とそこまで同じなのよ」

苦笑いで話す若奈だった。



## 第五十一話 解放その五

「本当に何もかもそっくりなのよ」

「聞いている限りではそうだな」

「見間違えられたこともしょっちゅうだし、それもなのだった。」

「とにかくそっくり過ぎて」

「他人の気がしないか」

「そうなの。ただ、ね」

「鈍感なのが心配か」

「その子も肝心なことは言わないし」

「だから気付かないのか」

「そういうことは全然気付かない娘だから」

とにかく恋愛に疎いというのである。若奈にとってはそれがやきもきして仕方のないことなのであった。どうしてもという具合にだ。

「どうしたものかしらね」

「やはり成り行き次第だな」

「それしかないの」

「聞いた限りではお似合いだ」

牧村が聞く限りという意味である。

「その後輩はその娘はな」

「そう思うのね。牧村君も」

「話を聞く限りはだが」

それでもまだというのである。

「いい感じだ」

「そうなのよ。外見的にもね」

性格やそういったものの次にこれが来た。

「その子結構いい感じなのよ」

「顔はいいか」

「いい方ね」

「少なくともだ。悪くはないというのである。」

「背は高いし髪は茶色でさらさらしててすばりとしてて」

「そうか。それなら」

「そう、そつちもいいし」

「しかも一途でか」

「あの娘にも合ってるって思うし。いいと思うのよ」

「ここまで話してだ。こう牧村に言うのであった。」

「けれど。成り行き次第ね」

「それで進むな」

「片思いに終わらないっていうのね」

「その後輩があくまで好きなら」

「それならばだと。牧村は話した。」

「一念が通じる」

「矢の一念岩もなの」

「そうだ」

まさにそれだというのだ。中国の逸話から来た諺だが牧村は今それを言うのであった。

「そうなる」

「じゃあ私がやきもきしても」

「仕方ないな」

「そうなのね、結局は」

「気持ちわかるがな」

「わかったわ」

若奈はここで遂に頷いたのだった。そうしてであった。

牧村の顔を見てだ。微笑んでこう言ったのであった。

「それじゃあもうこのことはね」

「二人に任せるか」

「そうするわ」

こう判断を下したのだった。

「もうね。それでね」

「それが一番だな」

「そうなのね。それにしても」

「それにしてもか」

「ええ。私もこれで」

自分を振り返ってだ。苦笑いになっての今の言葉だった。

「案外あれなのね」

「世話焼きか」

「おばさんみたいね」

苦笑いのまま自分自身をこう言うのだった。

「そういうのって」

「そう思うか」

「ええ、そう思うわ」

そうだとだ。牧村にも話すのだった。

## 第五十一話 解放その六

「どうもね」

「それも別に気にすることはない」

「それもいいの」

「俺はそう思う」

若奈にだ。また述べたのだった。

「それもな」

「そうなのね」

「大切な相手のことを考えるのはだ」

「それは？」

「当然だ」

こう若奈に言うのだった。

「それもだ」

「そうなのね。そう言ってもらえたらね」

微笑んでだ。それで言う若奈だった。

「嬉しいわ」

「そうか」

「ええ。有り難う」

また微笑んで告げる若奈だった。

「それじゃあだけけれど」

「何だ、今度は」

「そろそろ講義ね」

腕時計を見ての言葉だった。左手のだ。

「そうね」

「そうか。もうか」

「ええ、じゃあお話はこれで止めて」

「それでだな」

「お勉強ね」

そちらに向かうのだった。二人は今は大学生であった。牧村は今は静かに時間を過ごしていた。人間としてのかげがえのない時間を。そうして次の日だった。夕食の時だった。

母にだ。こう言われたのだ。この日の食事はコロッケに玉葱と人参のコンソメスープ、それに茸のバター炒めであった。それと御飯だ。

そうしたものを食べながらだ。母は言ってきたのである。

「どう、今日のお料理は」

「味が」

「うん、味どう？」

「こう息子に尋ねてきたのである。」

「それは」

「美味い」

牧村は一言で述べた。

「洋食も好きだ」

「そう。それは何よりよ」

母は息子のその言葉にだ。笑顔で言うのだった。

「美味しいって言われるとこっちもね」

「作りがいがあるか」

「そういうことよ」

「そういうことだった。」

「今日は献立に困ったし」

「困ってたのか」

「何を作るうか考えていたのよ」

「しかし母さん」

父が母の横から言ってきた。父も共にいるのだ。

「今日のメインはコロッケだよね」

「ええ、そうよ」

「コロッケはあれだろ。買ってきたものだろ」

「だから。何にしようかってね」

母は夫にもこう言うのであった。

「困ってて」

「それでコロッケを買ったのか」

「お魚は昨日したじゃない」

「かれの煮付けだな」

「だから今日はそれはできないし」

魚がそれで消えたというのだ。

「お肉も。ちよつとねえ」

「駄目なのかい？」

「おとついしたから」

それで肉も消えたというのだ。

「鶏肉は明日するつもりだし」

「それで今日はコロッケなのか」

「そうなの」

夫に顔を向けて話す。二人は横に並んで席についている。

## 第五十一話 解放その七

「それでなの」

「コロッケなあ」

「お父さん好きでしょ」

「ああ、好きだよ」

それはその通りだというのであった。

「特にソースをかけたらいいな」

「そうでしょ。来期も未久も好きだし」

子供達もだというのである。

「だからそれにしたのよ」

「コロッケねえ。いいねえ」

そして父は今度は笑顔になって言った。

「食べやすいしね。ジャガイモだし」

「お父さんジャガイモは何でも好きよね」

「身体にいいんだよ」

それが理由だというのだ。

「それに味もいい」

「でしょ？ジャガイモとサツマイモはね」

どちらもであった。サツマイモもだというのだ。

「献立に困った主婦の助っ人なのよ」

「助っ人だったんだ」

「そうよ。もうそれを使えばいいってね」

そしてだ。出す献立は。

「肉じゃがにカレーに。ビーフシチューにジャーマンポテトにね」

「本当にイモばかりだね」

「御飯が少ないとサツマイモ」

サツマイモはそれだというのだ。

「一個食べたら充分でしょ」

「三個だな」

「ここで息子が言った。

「いや、四個か」

「まあ何個でもいいけれどね」

母はこう言われると数はいいとしたりした。

「それはね」

「数はか」

「そうよ。その数だけれど」

「ここでまた言う母だった。

「コロツケの数ね」

「そういえば随分多いな」

父が大皿の上のそのコロツケをあらためて見て少し驚いた声をあげた。見ればコロツケがうず高く、これでもかと積まれている。

「一体何個あるんだ」

「四十は買ったかしら」

「四十!？」

「ミンチカツもあるわよ」

「それもあるというのである。

「そっちは明日ね」

「明日はそっちか」

「安かったから一杯買ったの」

「それでも四十もあるのか」

「そうよ。お父さんも来期も未久も好きだから」

「それでそれだけ買ったというのである。

「だからね」

「それでもこれは」

「多過ぎるかしら」

「今日だけじゃ食べられないだろ」

「こつ妻に言うのだった。顔を顰めさせてだ。

「全くな。どうなんだ」



「だったら明日もあるし」

「明日もか」

「そう、明日もあるわよ」

今日だけではないというのだ。食べるのは。

「だからね。今日食べきれなくてもいいから」

「まあコロッケは好きだけれどな」

またこう話す夫だった。

「いいか、それだったら」

「納得してくれたのね」

「納得しなかったらどうするんだ」

「それでもコロッケはあるから」

どちらにしても同じだというのである。

「だからね」

「食べるしかないっていうんだな」

「そういうことよ」

「全く。まあコロッケは好きだからいいけれどな」

結論はここにあった。好きならばであった。それで父はコロッケ

を一個自分の皿に取ってソースをかけてだ。食べるのであった。

そして牧村もだ。コロッケを食べ続けている。母はその彼にもま

た声をかけた。

「来期もね」

「明日はミンチカツか」

「それとこれの残り」

コロッケのだというのである。

「だからね」

「わかった。遠慮なく食べさせてもらおう」

「そうよ。どんどん食べてね」

我が子に対してさらに声をかける。

## 第五十一話 解放その八

「本当に幾らでもあるから」

「未久の分もだな」

「ええ、だからね」

「わかった。ではな」

「どんどんね」

こうした団欒の生活も過ぎ去っていた。彼にとってはかけがえのない時間があった。しかしそれが中断されるのが今の彼だった。

朝だった。学校に行こうとするその時にだ。サイドカーの横に彼が来た。

「貴様か」

「久しいか」

死神だった。学校へ行く途中の道を進んでいる時に彼がハーレーに乗ってそのうえで彼の横に来てだ。声をかけてきたのである。

「こうして会うのは」

「いや、そうは思わない」

「ここに戻ってからはじめてだったな」

「それはそうだな」

このことは牧村も頷く。死神は今彼の右隣に来ていた。

「神戸に戻ってから貴様と会うのはな」

「それでだ」

死神は話を本題に持って来た。ヘルメットの中の表情は見えない。

「私が来たといことはだ」

「戦いか」

「来るぞ」

前を見てだ。牧村に言うのだった。

「このままな」

「前に来るのか」

「そうだ、今だ」

この言葉が出た瞬間にであった。

二人は乗っているそれぞれのバイクごとある場所に来た。そこは黒と紫が不気味に重なり合い蠢き合っている空間だった。二人はそこに来たのであった。

そしてその空間にだ。あの男が立っているのであった。

「今度はここか」

「この空間で戦うのか」

「そういうことだ」

その通りだとだ。男はこう二人に話してきた。

「ここもまただ」

「混沌か」

「その中にある場所だな」

「如何にも。混沌の世界は様々な場所がある」

その通りだとだ。男はまた二人に話した。そしてであった。二人に対してあらためてこう言うのであった。

「ではだ。はじめるとするか」

「そうだな」

「ではな」

バイクは既に停めている。いや、いなかった。速度はそのままだ。前にいる男に何時までも追いつけずだ。空間の中を走り続けているのであった。

その異様な状況の中でだ。牧村が男に問うた。

「これもまた混沌故か」

「混沌は貴様等の世界とは違う」

事実そうだというのであった。

「全くな」

「だからこうしたことか」

「あるというのだな」

「そうだ」

また答える男であった。

「それを言っておこう」

「理屈はわからないが事情はわかった」

「それはな」

こう返す二人であった。そのうえでだった。男にさらに問うのであった。

「そして聞くがだ」

「次の神は何だ」

「それか」

「俺達を何故ここに呼んだか」

「それは戦う為だな」

「如何にも」

男はにこりともせず答えた。

「その通りだ」

「そういうことだな」

「それではだな」

「では呼ぼう」

こう言っただった。男の背中にだった。

九つの首を持つ大蛇が出て来た。それは。

「ヒドラだ」

「ギリシア神話に出て来る妖蛇か」

「名前と姿は同じだな」

「そうだな。しかしだ」

男は二人の言葉を聞きながら話していく。

## 第五十一話 解放その九

「同じなのは二つだけだ」

「その二つか」

「名前と姿だけか」

「その二つ以外に同じものはない」

「こう二人に告げるのだった。」

「それはわかるな」

「蛇ではなく神だからこそ」

「それでだな」

「そういうことだ。ではだ」

男はだ。二人に話し終えてから神に顔を向けてだ。こう告げたのだった。

「いいな」

「わかった。それではだな」

「貴様の戦いはかなり重要だ」

男は神にこうも話した。

「わかるな」

「わかつている。封印だな」

「それを解く」

男は言った。

「貴様が戦いで出すその言葉でだ」

「よし、それではだ」

「わかった。ではな」

男は神との話を聞いてだった。そのうえでだった。

「私はこれで消えさせてもらおう」

「そしてこの神の戦いを見るか」

「心おきなく見させてもらおう」

神の方を振り返っての言葉だった。見ればこの神も途方もない巨

大さだ。ぬめぬめと黒く光る鱗に全身を覆った九つの首を持つ蛇の姿だ。

その姿はそのまま神話にある通りだ。しかしであった。

「この気配は」

「感じているか、貴様も」

「感じない筈がない」

こう死神に返す牧村だった。

「これだけの気を出すとはな」

「これがこの神ということだ」

「これまでの神とはまた違うか」

牧村はサイドカーに乗ったまま神を見上げて言った。

「その力は」

「この神はまた別格だ」

男もこう二人に告げるのだった。

「それは後でわかる」

「後でか」

「今ではないか」

「わかるケースは二つだ」

男はこうも言ってきた。

「まずは貴様等が敗れた時だ」

「その強さの前に敗れる」

「だからこそか」

「そうなれば貴様等は終わりだ」

それはそのままであった。まさにその通りであった。

「そしてだ」

「次か」

「次のケースだな」

「貴様等が勝った時にそれはわかる」

男はその冷徹な声で二人にまた告げたのだった。

「その時にな」

「ではだ」

「後者を選ぼう」

二人が彼に返したのはこの言葉だった。

「勝ってそれでだ」

「どうなるかを見せてもらおう」

「そう言うと思っていた」

これまでのやり取りでだ。男も読んでいたのであった。彼等がそう返すことをだ。

そのうえでだ。また彼等に告げたのであった。

「それではだ」

「戦いだな」

「これからだな」

「戦い、そして見るのだ」

悠然と上にあがりながらの言葉だった。

「敗れても勝利を収めてもな」

「そうだな。それではだ」

「はじめるとしよう」

男が上に消えゆく中で二人はそれぞれのバイクに乗ったまま変身に入る。両手の拳を胸の前で突き合わせ右手の拳を己の胸の前に置き。そうして。

それぞれ姿を変えた。髑髏天使と戦う姿にだ。そして。

そこからすぐにであった。

髑髏天使は六枚羽の黄金の天使に、死神は漆黒の肌の長髪になった。その姿になってだ。

## 第五十一話 解放その十

彼等はだ。その神と対峙するのだった。バイクには乗ったままだ。  
「行くぞ」

「それではな」

右手を握り締め鎌を一閃させてだった。そのうえでだ。

そのバイクを駆りだ。神に向かうのだった。二人はそこで。

バイクから飛び上がった。そのそれぞれのバイクが変形した。

サイドカーはあのスカラベになりハーレーは八本足の馬になった。

それが神を直撃したのであった。

「ふむ」

「戦い方はだ」

「私達だけでするものではない」

「こう言うのだった。」

「こうしたやり方もある」

「そうだ」

「そうだな」

神はその頭の一つで言った、

「見事だ」

「そうだな。見事だ」

「この戦い方はな」

「見所がある」

「確かにな」

そしてだった。その九つの頭で話すのだった。

「だが、しかしだ」

「これで神を倒せるとは思わないことだ」

「決してな」

「この程度ではだ」

「そうか」



それを聞いてもだ。髑髏天使の言葉は変わらない。そのうえで混沌の中をその六枚の翼で舞いだ。その神に対して言うのであった。  
「確かにな」

「これだけではだ」

死神も混沌の中に浮かびながら話す。

「倒せはしないのはわかっている」

「自覚しているのか」

「貴様等自身もか」

「そうだというのか」

「貴様の力は感じている」

死神は神のその九つの頭を見据えながら言った。彼が今いる高さは丁度その九つの頭が前に見える、そうした高さであった。

「既にな」

「わかっているか」

「そういうことか」

「そう思っているのだな」

「そうだ」

その通りだとだ。また言う死神だった。

「我が馬だけではない」

「俺もだ」

髑髏天使も言ってきた。馬とスカラベは神に体当たりを仕掛けた後で彼等のところに戻ってきていた。まさに忠実なる友であった。

そのパートナーが戻ってきてからだ。また言う二人だった。

「ではだ」

「あらためてだ」

神を見据えながらの言葉である。

「行くぞ」

「覚悟はいいな」

「覚悟か」

「神に覚悟と言うか」

「それを言うか」

またそれぞれの頭で返す神だった。

「面白い。それではだ」

「神もまた、だ」

「真の力を見せよう」

「今からな」

「真の力」

「それをだというのか」

二人もだ。その神のそれぞれの言葉を聞きながら述べた。

「今から見せるか」

「我々に」

「そうだ。そしてだ」

「滅ぼしてやろう」

「貴様等を二人共な」

「そうしてやろう」

またそれぞれの頭で言ってきた。

「我等の頭はそれぞれあるだけではない」

「この頭それぞれがだ」

「こつしたことができるのだ」

この言葉と共にであった。九つの頭が一斉にであった。

## 第五十一話 解放その十一

伸びてだ。それで髑髏天使と死神を襲うのだった。

「むっ」

「そう来るか」

二人はすぐにその場所を飛び退いた。それぞれ左右にだ。

そしてそのうえでだ。両者は互いに分身してみせた。十体ずつだった。

「死神は知っていたが」

「髑髏天使もか」

「分け身ができるか」

「そうだったのだな」

「その通りだ」

こうだ。髑髏天使も返すのだった。

「こうしてできるようになったのだ」

「それだけの力がある」

「だからだな」

「備わっているのか」

「そういうことだ」

髑髏天使の一体が答えた。

「術は死神と同じだ」

「それぞれの俺がそれぞれで動く」

「それも言っておこう」

「見事だ」

「確かにな」

「そこまでするとはな」

ヒドラの頭達が口々に述べてきた。

「倒しがいがある」

「それもかなりだ」

「実にいい」

「倒しそのうえでだ」

彼等はだ。髑髏天使、それに死神を見据えながらだ。そのうえで言葉を続けていく。言葉を続けながらだ。彼等の隙を窺うのも忘れていなかった。

そしてだった。その彼等はだった。

九つの頭をそれぞれ伸ばし髑髏天使達を分身ごと襲っていく。その中でこう言ってみせるのだった。

「さて、それではだ」

「何時まで逃げられる」

「そうしてな」

「何時までだ」

「何ならだ」

頭の一つが言ってきた。

「神の頭を落としてみるか」

「そうしてはどうか」

「是非な」

「生憎だがな」

他の頭も続く。だがここで死神が言うのだった。無論彼もまた分身を使っている。それぞれが神を見据えて宙を漂っているのだ。

「それはしない」

「わかっているからだ」

「既にな」

「この神のことをだな」

神の頭の一つがすぐに返してきた。

「そうだな」

「ヒドラの頭は一つを落とせばだ」

「そこから二つ生える」

「落とせば落とすだけだ」

「こちらが不利になる」

それを知っているからこそだ。死神は攻めないのだった。そしてだ。髑髏天使もそれぞれ言うのだった。

「そして貴様は唯のヒドラではない」

「その切り跡を焼くのも通じないな」

「そうだな」

「如何にも」

その通りだとだ。すぐに返答が来た。

「神はその程度では動じない」

「そこからもまた生える」

「首はそこから幾らでも生える」

「焼こうか凍らそうがだ」

どちらでもだというのだ。通じないというのである。

「そんなことでは何ともならない」

「それを言っておく」

「ではだ。いいな」

「それではだ」

「倒させてもらおう」

勝利を確信した言葉であった。また頭達が伸びて彼等を襲う。分身達は一体、また一体と倒され消えていく。そうして。

## 第五十一話 解放その十二

遂に本体の彼等だけになった。誰がどう見ても追い詰められた形であつた。だが。

彼等の目はだ。死んでいなかった。その声もだ。

「それではだ」

「そろそろだというのだな」

「そうだな。終わらせてもらう」

神の中央の頭が言ってきた。九つの頭の中央がだ。

「次の一撃でだ」

「喰らわせてもらおう」

「是非な」

「頭は駄目だ」

髑髏天使がふと言つた。

「貴様のそこを狙つてもな」

「そうだな」

そしてだ。死神も言つのであつた。

「例え胴を狙つてもだ」

「両断してもそれはくつつくな」

「そうなるな」

「神を甘く見ないことだ」

実際にそうだとだ。神からも言つてきた。

「その程度のことは造作もない」

「やはりそうだな」

「胴もだな」

「神は不死だ」

今度はこの言葉を出すのだった。

「その程度では死なない」

「決してな」

「その程度では、だな」  
だが、だった。髑髏天使はその言葉に目を向けたのだった。  
「言ったな」  
「それがどうした」  
「何があるというのだ」  
「その言葉に」  
「その程度では死なないと言った」  
髑髏天使はまた指摘してみせた。  
「つまりそれはだ」  
「貴様は不死と言ったがそうではない」  
死神もだった。ここで気付いたのであった。  
「死ぬのだ。間違いなくな」  
「そうだな」  
「ふむ」  
それを聞いてだ。神は言うのであった。  
「確かに神は不死ではない」  
「先程の言葉はそういう意味でだ」  
「真実ではない」  
彼等もそれを認めるのだった。  
「偽り、いやはったりと言おうか」  
「それだった」  
「それは確かだ」  
「やはりな」  
髑髏天使もそれを聞いて頷く。  
「それを認めるか」  
「神は嘘は吐かない」  
「決してな」  
「この神はだ」  
ヒドラはだというのだ。彼自身はだというのである。  
「嘘を言うことはない」

「だからそれは訂正しよう」

「神は死ぬ」

「決して不死の存在ではない」

あらためてだ。こう話すのであった。

「しかしだ。それでもだ」

「貴様等に倒せるか」

「この神が」

「どうなのだ」

「頭も胴も無理でもだ」

今度は死神が言うのであった。

「それでもだ」

「その通りだ」

髑髏天使も続く。

「倒す方法はある」

「決して倒せない存在なぞない」

死神はこのことを断言するのだった。

「完全な無敵なぞな」

「ありはしない」

「そういうのか」

「この神もか」

「そうだ、今の貴様も倒せる」

こうだ。死神は断言した。またしてもだ。



## 第五十一話 解放その十三

「私と」

「俺がそうする」

また髑髏天使が続いた。二人は呼吸を合わせてだ。そのうえで神と対峙する。しかし神は今も余裕を見せてだ。こう言ってきたのであった。

「ではだ」

「それを見せてみる」

「今それをだ」

「そしてだ」

「倒せるというのなら倒してみるのだ」

それぞれの頭で告げていく。

「さあ、今こそだ」

「どうして倒す」

「この神を」

「見せてもらおう」

「ではだ」

「行くぞ」

二人同時に構えて。そしてであった。

髑髏天使はその二刀を一つにして十字の巨大な剣にした。死神もまただつた。

その大鎌をとつともなく巨大なものにさせた。その大きさは。

「己の倍以上にするか」

「その鎌を」

「そうしてか」

「そうだ。倒すのだ」

あまりにも巨大になった鎌を両手に持っていた。柄はそのままだが刃が途方もなく巨大なものになっていた。その鎌を持ちながらの

言葉だった。

「この鎌でだ」

「俺もこの剣でだ」

髑髏天使もその剣を手にして言う。

「行くぞ」

「これでだ」

「断ち切られようともだ」

「それでも神は死なない」

「それは言っておく」

また告げる。それぞれの頭で。

「それができないというのにどうする」

「どうして神を倒す」

「あるのか」

「あるから言うのだ」

死神もだ。構えながらその自信を変えない。

「そういうことだ」

「ではだ」

髑髏天使はその巨大な剣を上をやった。死神は左斜め下をやって構えた。そうしてそのうえで、であった。彼等は動いたのだ。

それぞれその剣と鎌を投げた。剣は一直線に、鎌は激しく回転してそれぞれ神に対して向かう。その狙う先は。一点であった。

神は動かない。その二つの死が来てもだ。

「それで倒せるのか」

「この神を」

「どうしてだ」

「倒すというのだ」

「こうしてだ」

髑髏天使が応えるとであった。

まず剣がだ。そこを貫いたのだった。続いて。

鎌も来た。剣と同じ場所を貫いた。その鎌の先がだ。

貫いた先は心臓だった。そこだった。

その貫いた先から赤黒い血が噴き出る。それこそが勝利の証であった。二人はその噴き出る異形の血を見ながら告げるのであった。

「勝負ありだな」

「これでな」

「まさかな」

神の中央の頭が言ってきた。

「そうしてきたか」

「頭も胴も駄目ならばか」

「そこか」

「そこを狙ってきたか」

「心臓を狙えばだ」

髑髏天使がその神に告げる。まだ噴き出る血を見ながらだ。

「生きているならばそれで終わりだ」

「そういうことだな」

死神もそれに続く。

「心臓を潰せばだ。如何に不死といえどもだ」

「倒れる。そういうことだ」

「これでは回復も追いつかない」

また中央の頭が言ってきた。

## 第五十一話 解放その十四

「確かにな。これでだ」

「神は倒れる」

「滅びるしかない」

「貴様等の勝ちだ」

それぞれの頭でも言ってきた。しかしであった。

神はだ。ここでもこうも言うのであった。

「だが。これはこれでだ」

「いいことだ」

「神のこの命でだ」

「新たな舞台が開くのだからな」

「新たなだ」と

それを聞いてだ。髑髏天使がまず言った。

「何だ。それは」

「封印が解かれるのだ」

不意にだ。あの声が聞こえてきたのだった。

「あの神々のな」

「貴様か」

「ヒドラが勝てばそれでよしだった」

男がまた出て来た。そのうえで髑髏天使と死神に話すのだった。

「しかし負けねばだ」

「封印だと」

「そうだ、今四つの封印が解かれる」

こうだ。髑髏天使と死神に続けるのであった。

「地水火風の四つがだ」

「今それが成る」

「神もまた言ってきた。」

「我の死により生じる力を使つてな」

「そしてその力によりだ」

「封印が解かれ」

「そしてだ」

彼等が話していきだ。そして。

遂にだ。神の身体が赤と青の二色の炎に包まれていく。その中に  
おいてであった。

「さあ、ナイアーラトホテップよ」

「今だ」

「今こそ封印を解くのだ」

「神のこの最後の炎を使つてだ」

「礼を言う」

男はだ。その神に礼を述べた。彼にしては珍しくだ。  
そのうえで彼を見ながらだ。さらに話すのであった。

「ではな。これからな」

右手を掲げる。するとだ。

そこから黒い光が放たれ。それが全てを包み込み。

光が爆発してだ。神がその中に消え失せていく。

「こうしてだ。この中でだ」

「神の命が燃え上がり」

「四つの封印が解かれる」

「そして遂に」

「混沌の世界が訪れるのだ」

神が光の中で言うのであった。遂に。

凄まじい衝撃と黒い光が次々に爆発し。男は言うのであった。

「わかるな。こうしてだ」

「四つの封印が解かれたか」

「そして遂にか」

「その四柱の神々がか」

「復活するのか」

「その通りだ」

また言う男であった。

「その名も言っておこう」

「水は知っている」

死神がその言葉を返した。

「既にな」

「そうか。知っていたのか」

「クトウルフだな」

それだとだ。死神は指摘したのだった。既に鎌は彼の両手に戻っている。髑髏天使の剣も二本の小さいものに戻りそうして構えられている。

その構えを見せたままだ。彼等は男と対しているのだった。

「それだな」

「如何にも。まずはそれだ」

クトウルフだと。男も話した。

「水のクトウルフだ」

「水はわかった」

それを聞いて言う髑髏天使だった。

「では後の三つは何だ」

「風から言っておこう」

男は次はそれについて述べた。

## 第五十一話 解放その十五

「風のアストールだ」

「アストールか」

「そうだ、覚えておくのだ」

「それだというのである。」

「風はそれだ」

「では次は火だ」

「火を知りたいのか」

「そうだ、火は何だ」

髑髏天使がそれを問う。

「それは」

「クトウヴァだ」

この神の名前が出された。

「地はツアトウヴァ。風はアストール」

「まだ問うていなかったが」

「先に言わせてもらった」

男は臆面もなく髑髏天使に返した。

「そうさせてもらった」

「そうか」

「そういうことだ。この四つだ」

また言ってきた男だった。

「さて。その四柱の神々でだ」

「俺達をか」

「倒すのか」

「そうだ、倒す」

こう告げてきた。男は今度はそうしてきたのだ。

「貴様等をな」

「果たしてそれができるか」

「我々に」

「自信を見せるのだな」

男は嘲笑しなかった。表情を変えていない。

その表情のないまままでだ。彼はさらに話すのだった。

「だがその自信がだ」

「最後まで続くか」

「そう言いたいのだな」

「その通りだ。この四柱の神々は違う」

彼は言い切る。

「これまでの神とはな」

「そこまで言うのなら見せてもらおう」

髑髏天使が言ってきた。今度は彼がだった。

「その連中の強さをな」

「また会おう」

男はここまで話したところでこう返した。

「次に会う時にだ」

「その神の一柱がだな」

「我々の前に出て来るか」

「そういうことだ。ではだ」

男の姿が消えていく。後に残ったのは。

混沌の世界も消えていた。何も残っていなかった。

残っていたのは二人だけだった。髑髏天使がまずだった。

牧村に戻った。それから話すのだった。

「遂にという感じだな」

「そうだな」

死神も既にだった。元の姿に戻っていた。漆黒のライダースーツ

の姿でだ。そこにいるのだった。

「四柱か」

「奴等を倒してからだな」

また言う牧村だった。



「あの男を倒すのは」

「そしてだ」

死神も彼に言葉を返す。

「その先にだ」

「二柱だな」

「混沌の中心にいる神々だ」

「奴等を倒せば終わりか」

牧村の目が鋭くなる。語るその目がだ。

「この戦いも」

「そうなるだろう。だが、だ」

死神もだ。その目の光を強くさせていた。そのうえでの言葉だった。

「これからの戦いは」

「これまで以上に激しい戦いになる」

「そういうことだ」

彼が言いたいのはそういうことだった。まさにそれであった。

第五十一話 解放その十六

「死ぬな」

「死んでは何にもならないか」

「だからだ。いいな」

「こう告げるのだった。」

「死ぬな」

「安心しろそのつもりはない」

「牧村も言う。しつかりとした声でだ。」

「俺は死なない。絶対にだ」

「生きるか」

「人間として生きる」

「ただ生きるだけでなくだ。そうするといっつのだ。」

「そうする」

「人間か」

「俺は人間だ」

「出すその言葉は揺るぎない。」

「それ以外の何でもない」

「いいことだ。それではだ」

「人間として最後まで戦いか」

「そして生きる」

「死神は牧村の顔を見て告げた。」

「私もまた生きる」

「貴様は死神としてだな」

「人間ではないがそうして生きる」

「これが彼だった。」

「そうする」

「わかった。ではな」

「まただ」

死神の前にハーレーが来た。あのハーレーだ。

「また会おう」

「そうだな。俺もこれでだ」

「またね」

目玉も出て来て声をかけてきた。

「これからが正念場だけれど」

「そうだな。それはな」

牧村も目玉のその言葉を受けて言う。

「いよいよだな」

「一つでも負ければ終わりだ」

死神はハーレーに乗りながら牧村に話した。

「そこでだ」

「世界も。俺達もだな」

「そうだ。混沌に飲み込まれたくはあるまい」

「格好いいことは言わない」

牧村はそのつもりはなかった。彼もまたサイドカーに乗ろうとしていた。

「のだが」

「それでもか」

「そうなんだね」

「そうだ。混沌に飲み込まれるつもりはない」

これが彼の言葉だった。

「人間として人間の世界でだ」

「生きるのだな」

「そのつもりだ。それだけだ」

ハーレーに乗っての言葉だった。

「それではだ」

「もう行くか」

「そうさせてもらう。それではな」

「またな」

こうしてだった。お互いにバイクに乗り別れるのだった。牧村はそのうえで家に帰りそうしてだった。最初に妹に会ったのだった。

「お帰り」

「ああ」

「何かいつも通りね」

未久は玄関にあがる兄にこう述べたのだった。

「いつも通り無愛想ね」

「そうか」

「うん、その態度がね」

まさにそうだというのである。

「いい感じにいつも通りね」

「何も意識していないが」

「意識しなくてできるのが凄いわ」

未久はまた兄に告げた。兄は話をしながらそのうえで家にあがった。本当に何もかもがいつも通りだ。少なくとも妹から見ればだ。

## 第五十一話 解放その十七

「本当にあれね」

「無愛想か」

「接客は絶対に無理ね」

「それはか」

「若奈さんもご両親もわかってるわ」

未久はしみじみとした顔で兄に話した。

「お兄ちゃんを接客にはしないっていうのはね」

「またその話か」

「うん。お菓子を作ったりコーヒーを淹れたり」

そうしたことはというのだ。

「お皿を洗ったりはいいけれど」

「接客はか」

「絶対に無理よ。その無愛想さじゃ」

「愛想よくするのは苦手だ」

「得意になるつもりはないでしょ」

「ない」

実際にその通りだった。最初から努力するつもりもなかった。

「別にだ」

「まあカウンターでは後ろにいてね」

「あの店に入るのは最初から決まってるのか」

「お兄ちゃんはもう就職先も決まってるのよ」

また話す彼女だった。

「言っておくけれど」

「そのマジックにだな」

「だから。事故とか病気にだけは気をつけてね」

兄にだ。ここでは真剣な顔で話した。

「長生きしてね」

「長生きか」  
「そうよ。何かあったら許さないからね」  
「そうだな。それはな」  
「わかってるわよね」  
「当然だ。わかってる」  
「そしてだ。彼は言った。強い言葉になって。  
俺は死なない」  
「死なないの」  
「絶対にだ」  
「こつ言つのだった。その強い言葉でだ。  
何かあってもな」  
「そうしてよ。本当にね」  
「そうさせてもらおう」  
「そうしたやり取りの後でだ。台所に向かう。ここで未久はまた言  
つてきた。  
「ああ、台所にね」  
「何かあるのか」  
「アイスクリームは全部食べたけれど」  
「相変わらずそれが好きな妹である。」  
「それでもね。アイスクリームはあるから」  
「それはか」  
「置いといてあげたから」  
「随分とぞんざいな口調だな」  
「だって。私アイス好きだから」  
「それが理由というのだ。」  
「アイスクリームもね」  
「それは理由か」  
「食べようと思ったけれど食べなかったのよ」  
「しかしアイスクリームは全部食べたな」  
「それはね」

否定せずだ。胸を張つての言葉だった。

「けれどアイスクリームはね」

「置いているのか」

「そう、それ食べて」

「それはいいのだな」

「だから。アイスクャンデーは別だけれど」

それにはかなりのこだわりと執着を見せている。

「けれどアイスクリームはね」

「アイスクャンデー程好きではないんだな」

「アイスクリームは大好きよ」

それは言う未久だった。

「けれどアイスクャンデーはね」

「そちらはどうなのだ」

「超好きよ」

そうだというのであった。

「もうね。あれがないとよ」

「生きていけないか」

「そう。私はまずアイスクャンデー」

とにかくそれだという口調である。

「それがあってこそよ」

「本当に好きなんだな」

「だから超好きなの」

この主張は変えない。変えることはなかった。

「だから悪いわね」

「わかった。それではな」

「ええ、アイスどうぞ」

こうしてだった。牧村はそのアイスを食べるのだった。これから死闘のことは今は忘れてだ。そのうえで今はアイスを食べていた。

第五十一話

完

2  
0  
1  
1  
・  
1  
・  
1  
1  
3



## 第五十二話 死風その一

髑髏天使

### 第五十二話 死風

牧村は博士の研究室にいた。そこでだった。

前の戦いのことを話した。するとだった。博士はすぐにこう言うのであった。

「いよいよじゃな」

「いよいよか」

「うむ、ここからが大変じゃぞ」

博士は真剣な面持ちで言うのだった。いつも通り自分の椅子に座り壁にもたれかかって立っている牧村の話を聞いて言うのだった。

周りにはこれまたいつも通り妖怪達がいる。彼等も話を聞いている。

「混沌の神々の中でもじゃ」

「強いか」

「その象徴とも言える者達じゃ」

「だからこそ余計にか」

「そうじゃ。強大じゃ」

博士はその強さをこう表現した。

「これまで以上にじゃ」

「激しい戦いになるか」

「うむ、これまでもそうじゃったが」

「死ぬ危険もか」

「あるぞ」

それを否定しなかった。博士もだ。

「むしろじゃ。そちらの方がのう」

「危険が高いな」

「言いにくいことじゃが」

それでもだと。博士は話す。

「君もな。あの死神も」

「今の天使の力でもか」

「相手が悪過ぎるわ」

ここに今の問題のポイントがあった。まさにそこにであった。

「流石にのう」

「クトウルフだったな」

「あれは有名じゃがな」

「知られているだけはあるか」

「そうじゃ。そうした相手じゃ」

こう牧村に話していく。

「だからくれぐれもじゃ」

「死ぬなというのだな」

「絶対にじゃ。死んではならん」

いつもの飄々とした感じは消えていた。真剣そのものであった。

「よいな」

「当然俺もだ」

牧村自身も言うのだった。

「そのつもりはない」

「死なんな」

「俺は生きる」

断言だった。無論これまで以上に強い声での言葉になっていた。

「人間としてな」

「最後までじゃな」

「俺は生きて喫茶店に入る」

今はじめた。彼は自分から言った。

「そこで菓子を作って生きる」

「ではその為にじゃ」

「負けはしない。最後まで勝つ」

その決意を話した。はっきりとだ。

「絶対にだ」

「まさかここで封印が解かれるとはのう」

「それが予想外だったか」

「君がその伝説の天使長になれば若しくは」

「勝てたかも知れないか」

「しかし今ではじゃ」

その六枚の翼でもだというのである。

「危うい」

「危うくとも勝てる可能性が僅かでもあればだ」

「勝つのじゃな」

「零は零だ。だが」

「そこにコンマ幾つでも可能性があればじゃな」

「俺はそれを百にする」

これが今の彼であった。僅かな可能性を確実のものとするというのだ。

「何があってもな」

「ではじゃ。わしはじゃ」

「博士はか」

「その君に話そう」

いつも通り文献を開いての話になったのであった。

## 第五十二話 死風その二

「あの四柱の神々じゃが」

「あの連中だな」

「やはり。これまでの敵とは違う」

「強いか」

「強いというものではない」

「そうした言葉では言い表せないというのだ。」

「その物質の力そのものじゃ」

「水や火のか」

「そうじゃ。そのクトウルフじゃが」

「語るのはこの神についてだった。」

「水を司るな」

「そうらしいな」

「力はその水そのものじゃ」

「こう牧村に話すのだった。」

「この世にあるな」

「水か」

「水の力は言うまでもないな」

「それはわかる」

「それを聞いてだ。牧村も頷いた。」

「水は万物を支配すると言っている」

「その水の力なのじゃよ」

「それがその神か」

「クトウルフじゃ」

「博士は言った。」

「そして他の神々もじゃ」

「火、風、地のか」

「それぞれの力なのじゃよ」

「それが俺のこれからの相手か」

牧村は壁に背をもたれかけさせたまま腕を組んでいた。そのうえで言うのであった。

「この世の摂理とか」

「勝てる可能性は極めて少ないぞ」

「だが零ではないな」

「君がそう思っているならばな」

「ならいい」

それをだ。彼の答えとしたのだった。

「言ったな。零ではないのなら」

「それを百にするのじゃな」

「そうする。俺は嘘は言わない」

断言だった。彼のだ。

「絶対にだ」

「そうじゃな。ではまたここに来てくれ」

「そうさせてもらう」

「とびきりの菓子を用意しておくからのう」

「菓子が」

「ケーキじゃよ」

博士は笑顔で彼に話した。

「オーストリアから特別に注文したものじゃ」

「ザッハトルテか」

オーストリアと聞いてだ。牧村はすぐに察した。

「それだな」

「左様、それじゃ」

まさにそのザッハトルテというのである。

「それを用意しておくからのう」

「有り難いな。それではだ」

「待っておるからな」

暖かい言葉だった。真剣な暖かさであった。

「次にここに来ることをな」

「是非な。そうしておいてくれ」

「絶対だよ」

「約束だからね」

妖怪達も彼に声をかけてくる。それまでは二人の話を黙って聞いていた。だがそれが一段落したと見てだ。彼等もそうしてきたのである。

「だからね」

「ザッハトルテを皆でね」

「食べようね」

「ザッハトルテは好きだ」

牧村はまた答えた。

「そういうことだ」

「うん、じゃあね」

「皆でザッハトルテ食べよう」

「一杯注文したから」

「もう飽きる位にね」

妖怪達はその量についても話した。

第五十二話 死風その三

「どれだけ買ったかな」

「わからないよね」

「お金がかかってない？」

「やっぱり」

「昔はハブスブルク家御用達だったところから注文したしね」

「何、食べ物にける金なぞじゃ」

「しかしここでだ。博士は笑ってこう話すのだった。

「大したものではない」

「そうなんだ」

「大したものじゃないんだ」

「食べ物」

「文献に比べればな」

そしてこれを引き合いに出す博士だった。

「どうということはない」

「ああ、文献ね」

「そっちは凄いからね」

「楔形文字とかパピルスとか」

「一杯あるからね」

「そうしたもの比べればじゃ」

「どうということはない」というのである。そうした古代の文献と比べればだ。

「全くのう」

「っていうかよくそこまで文献集められるね」

「博士ってやっぱり凄いな」

「文献を集めるのもコツじゃ」

これが博士の返答である。

「ちよっと工夫すれば結構集められるのじゃ」

「遺跡みたいなのでも？」  
「それでもなんだ」  
「そうじゃ。それでもじゃ」  
「お金とルートがあれば」  
「手に入るんだ」  
「ピラミッドの中の象形文字もあるぞ」  
「それまでもというのである。」  
「模写じゃがな」  
「まあピラミッドの中だとね」  
「やっぱりそのまま持つては来られないよね」  
「それは流石に」  
「うむ。削り取ることさえできん」  
ピラミッド自体が人類の宝だからである。博士もそれはわきまえていた。  
「だから模写じゃ」  
「けれどその模写でもわかるんだ」  
「色々なことが」  
「その妖魔のことも」  
「わかる。色々なものがわかった」  
博士はここでまた牧村を見て話す。  
「文献は揃っておる」  
「そして後は、だな」  
「後はそれを調べて解読するだけじゃ」  
「そうして色々なことがわかるか」  
「待っていてくれ」  
「わかっている。そうさせてもらおう」  
牧村は静かに応えた。そうしてであった。  
背を壁から離して。立ち上がった。  
それから扉の方に向かう。そのうえで博士に告げた。  
「今からまた、な」



「講義じゃな」

「それに行く」

「うむ。学業も楽しむのじゃ」

牧村は何といても大学生である。大学生ならば講義に出るのが当然である。中にはそうでない学生もいるにはいるがだ。

「よいな」

「学問は楽しむものだな」

「そうじゃ。それでこそ色々なことがわかる」

「博士もそうしているか」

「だからこの歳になるまで学者をやっておるのじゃよ」

左手に開いた文献を持ち右手で自分の白い髭をしごきながらの言葉だ。

「そういうことじゃよ」

「では俺も楽しめば」

「わしの歳になるまで学者になれるぞ」

「学者になるつもりはないがな」

「ではやはり喫茶店か」

「そうなればそれでいい」

喫茶店というのだ。やはりそこであった。

## 第五十二話 死風その四

「そう考えている」

「わかった。それではな」

こんな話をしてであった。彼は講義に向かおうとする。だが。

博士の研究室がある校舎を出て木々が左右に並ぶ道を歩いているところだ。彼が来たのであった。

死神はだ。すぐに牧村に対してこう言ってきた。

「ではだ」

「今からか」

「そういうことになる」

こう彼に言うのであった。

「用意はいいか」

「俺は髑髏天使だ」

牧村はこれを返答にした。

「戦いならば何時でもだ」

「そういうことだな」

「ではだ。行くとするか」

「いや、行く必要はない」

牧村が促したが死神はそれを否定した。

「ここで戦うことになる」

「ここですか」

「そうだな」

死神は牧村に告げてからその牧村の背中の方を見て告げた。

「その通りだな」

「そうだ」

男がいた。彼は死神の問いにすぐに答えてみせた。

「ここから異世界に入ってた」

「そうして戦うそうだ」

「いつも通りだな」  
牧村は背中越しに男を見た。そのうえで言うのであった。  
「それは」  
「確かにな。最近の戦いはそうだな」  
「男もそれは否定しない。」  
「何なら他の場所で戦ってもいいが」  
「それはいい」  
「いいというのか」  
「例え何処であつてもな」  
「それでもだとだ。牧村は男に完全に向き直つてから述べた。」  
「俺は勝つ」  
「だからか」  
「そうだ。だからこそ戦う場所は何処でもいい」  
「わかつた。それではだ」  
「案内するのだな」  
牧村から男に告げた。  
「その戦場にだ」  
「それではだ。行くとしよう」  
「よし、じゃあ僕もね」  
目玉もここで出て来て言う。  
「行かせてもらうよ」  
「貴様もか」  
「僕と死神は一心同体だからね」  
「それでだと。牧村に対して返すのだった。」  
「だからだよ」  
「死ぬかも知れないのか」  
「えっ、死ぬって!？」  
「今度の相手は今までとは違う」  
「牧村はその目玉に言うのである。」  
「死ぬ危険も充分にある」

「そんなのどうでもいいよ」

「どうでもいいのか」

「そうだよ。死ぬのならね」

そしてだ。目玉はこう牧村に言うのであった。

「一緒だからね」

「だからか」

「そう、生きるのも死ぬのも一緒だよ」

「それで今も共に行くのか」

「だから。一心同体だから」

だからこそだとだ。これが今の目玉の言葉だった。

「それでなんだよ」

「言うものだな」

「うん、言うよ」

実際にそうだとだ。目玉はまた言ったのだった。

## 第五十二話 死風その五

「本気だよ」

「ではだ」

「うん、行こう」

目玉の声は明るい。何処までもだ。

「それじゃあね」

「ではな」

こうしてだ。彼等は戦いに向かうのであった。そうしてだ。

あの男がだ。彼等のところに来て言うのであった。

「集まっているな」

「来たか」

「待っていた」

牧村と死神がそれぞれ男に告げる。

「その風の神とか」

「戦いだな」

「そうだ。そしてだ」

どうかとだ。さらに話す男であった。

「貴様等の最後の時だ」

「そう言うと思っていた」

牧村が返した。

「やはりそう言うか」

「そうだ。我等混沌の神々の中でも高位にある」

男はだ。声にその不敵な笑みを含ませていた。

そしてその不敵な笑みでだ。彼等に告げるのだった。

「これまでの妖魔や神とは違う」

「その全てがだな」

「如何にも」

男は死神の言葉にも応えた。

「何があるともだ。貴様等は勝てはしない」  
「言うねえ」

ここで言ったのは目玉だった。

「いや、本当にね」

「確信しているから言えることだ」

「確信してるんだね」

「今度の神には勝てはしない」

男はその確信を言葉に出してみせた。

「あまりにも強いからだ」

「その確信は確信ではない」

だが、だった。牧村はこう言ってだ。男のその言葉を否定するのだった。

「俺達は勝てる可能性は皆無ではない」

「そう思っているのだな」

「僅かな可能性でもそれは確実なものにできる」

これが牧村の言葉だった。

「それを言うておく」

「ではそう思っていることだな」

男の言葉の調子は変わらない。あくまでだった。

「そしてそのうえでだ」

「死ねというのだな」

「その通りだ。では行くでしょう」

男の後ろから。世界が変わった。

今度は無色の世界だった。色は何もない。

白でも黒でもない。そのどちらでもない、かといって灰色でもない色が漂っている。その無色の世界には風が様々な方角から吹き荒れている。

その中にだ。牧村達も何時しかいた。牧村は周りを見回してから言った。

「風か」

「風の神の世界だ」

また男が言ってきた。

「それがこの世界だ」

「そしてこの世界でだな」

「貴様等は死ぬのだ」

告げる言葉は同じであった。

「そうなるのだ」

「何度も言うがな」

そしてだ。牧村の言葉も同じであった。

「そうはならない」

「ではそれを見せてもらおうか」

「思う存分見るのだな」

鋭い目を男に向けて告げた。

## 第五十二話 死風その六

「遠慮なくな」

「そうさせてもらう。それではだ」

「その神は何処だ」

死神の言葉だ。その左肩の上に目玉がいる。

「ここにいるのだな」

「今ここにいる」

男は死神の問いにこう返してきた。

「ここにだ」

「ここにだと」

「いるんだって？」

「そうだ、いる」

こう死神と目玉に答える男だった。

「既にな」

「ということはだ」

「そうだね」

二人は彼の言葉からだ。すぐに悟ったのだった。

「風だからか」

「もうここに」

「そうだ。わかったのだな」

男もまたそうだというのだった。

「それが」

「わかった。そしてだ」

「はじめるんだね」

「その通りだ。ではだ」

男はだ。風に語り掛けた。するとであった。

風が形になつていく。それは不気味な、黒と言つべきかそれとも白と言つべきかすらわからない、全く異なる属性の色が異様に絡み



合った色をしたオオトカゲであった。

だが普通の蜥蜴ではない。その身体には無数に蠢く触手が生え鱗の代わりに身体を覆っている。その異形の姿が出て来たのである。

男は自身の後ろに出て来たそれに顔を向けてだ。こう声をかけた。

「そろそろはじめていいな」

「うむ」

何かが違う、風を切る様な声であった。人の声ではなかった。

その声でだ。巨大な禍々しい蜥蜴が言ってきたのである。

「楽しませてもらうおう」

「そうするといい。それではだ」

「ではナイアーラトホテツプよ」

蜥蜴は男の名を呼んでみせた。

「このハストウールの戦いを見ているのだ」

「そうさせてもらう。それではな」

「今よりだ。この者達を滅ぼす」

「そして混沌の世界を」

「この世界に表すでしょう」

こう話してであった。男はだ。

右手を掲げそこから闇を出した。その中に消えるのであった。

だが声だけは聞こえる。彼はこう牧村達に言つのであった。

「でははじめるのだ」

「そうさせてもらう」

牧村が彼に応えた。

「今からな」

「私もだ」

「僕もだね」

死神と目玉も応えた。

「その風の神とだ」

「これからね」

「四つの元素の一つ」

牧村はその神の禍々しいものを見ながら語った。

「それがこの禍々しい蜥蜴か」

「そうだ。先にも言ったな」

こうだ。神からも言ってきた。

「我が名はハストウール」

「そうか。それではだな」

「今から貴様を倒す」

「神を倒すか」

神はまた二人に言う。

「そう言うのだな」

「そうだ、必ずだ」

「ここで倒す」

牧村と死神がそれぞれ神に告げる。

「例え何があるうとも」

「絶対にだ」

「面白いことを言うな。人間や我等と違う神は」

こうだ。二人に言う神だった。

「我を倒すというのか」

「それが面白いか」

「貴様自身が倒されるといふそのことが」

「面白いのはそれではない」

神はそれは否定した。

## 第五十二話 死風その七

「この我を倒すと言えることがだ」

「それがだというのか」

「貴様はそれが面白いというのか」

「我を倒すことはできはしない」

これが神の言葉だった。

「何があるうともだ」

「貴様にも言おう。可能性が皆無でなければだ」

「皆無ではないと思っっているのだな」

「そうだ、皆無ではない」

それを否定してからの言葉なのだった。

「決してだ」

「そうだ。それは決してだ」

死神も彼のその言葉に頷いた。彼の横から。

「そして皆無でないならだ」

「それは確実なものにできる」

「我を確実に倒すか」

「今からそうする」

牧村は神のその巨大な目を見ながら述べた。

「いいな、今からだ」

「私もいる。ならばだ」

「やろうね」

目玉も続いてだ。そうしてであった。

彼等はここだ。それぞれ変身に入るのであった。

「今からそれをはじめる」

「いいな」

こう言いながらであった。二人は姿を変えていく。

牧村の拳が胸の前で打ち合わされ死神の右の拳が胸の前に置かれ

る。

それと共に二色の光が起こりだった。

「行くぞ」

「はじめるとしよう」

右手が握りなおされ鎌が一閃される。それが合図であった。

二人は戦う姿になった。そのうえで神に対するのであった。

そしてそこで、であった。

「お待ち下さい」

「むっ!？」

「その声は」

「はい、私達です」

何とだ。戦いの場にだ。彼等がいたのだ。

老人だけではない。魔神達が全ていた。離れた場所から双方を見る位置にいたのだ。

そしてそのうえでだ。老人が二人に言うのであった。

「お邪魔させてもらいます」

「どういいうつもりだ」

髑髏天使は既に六枚羽根の黄金の姿になっている。そのうえで言うのであった。

「何故ここに来た」

「戦うつもりか」

死神も彼等に問う。彼もまた漆黒の姿になっている。

「我々と」

「それがお望みでしょうか」

老人は楽しげに笑いながら二人にまた言ってきた。

「私達との戦いは」

「貴様等がそれを望むならだ」

「そうしてもいいのだがな」

こう返す二人だった。

「それはどうするのだ」

「貴様等次第だ」

「いえ、私達にとってもです」

ここであった。党人派笑顔のまま話すのであった。

「混沌の神々のことは問題なのです」

「問題か」

「そう言うのだな」

「はい、そうです」

まさにそうだという老人だった。

「ですからここは」

「どうするというのが」

男の声がしてきた。

「それで」

「知れたことです。戦います」

老人は今度はだ。その男の声に対して告げたのであった。

「貴方達とです」

「我々にとってはだ」

ハストウールの言葉だ。彼にしても魔神達を見ていたのだ。

## 第五十二話 死風その八

「どのみち貴様等魔神も敵だ」

「その通りですね」

「この世を混沌で覆うには貴様等も倒さなくてはならないのだから」

「私達もそれをわかっていきますので」

その通りだと返す老人であつた。

「ですから」

「ここに来たのか」

「髑髏天使、死神とは今は休戦です」

老人はこうも言った。

「そのうえで貴方達を倒します」

「休戦か」

それを聞いた死神が言うのだった。

「思わぬことだな」

「確かにな」

髑髏天使もそれに続く。

「貴様等とは果てしなく戦うつもりだったがな」

「私達も最初はそのつもりでした」

また言う老人だった。

「ですが状況が状況ですから」

「だからか」

「それでか」

「はい、そしてです」

老人はまた彼等に言う。

「私達もということなのです」

「俺達と共に戦うか」

「混沌の神々と」

「うん、それじゃあ」

子供の言葉だ。

「僕達の真の姿を出そうか」

「そうね。それじゃあね」

「長い間見せなかったその姿をだ」

女と男も言ってきた。

「では今からね」

「そして真の力も出そう」

彼等の姿が変わった。全員のがだ。

まず老人は全身に無数の目を持つ異形の存在になった。青年は八本足の蜥蜴に、そして子供は蝙蝠と人を合わせた姿にだ。

それぞれなっていく。まさに魔物の姿になっていたのであった。

老人、百目はだ。そのうえで二人に言ってきた。

「縁後は私達がします」

「貴様等がか」

「はい、ですから戦いに専念して下さい」

「そういうことよ」

「貴様等は思う存分戦うのだ」

女、黄金の九尾の狐と男、凍った巨大な痩せた屍も言ってきた。

「いいわね」

「そうするのだ」

「礼は言わない」

髑髏天使が言葉を返した。

「それはな」

「そんなのどうでもいいんだよ」

ロツカー、狼男が応えたのだった。

「こっちはこっちの事情で動いているんだからな」

「そちらのか」

「あくまでそうか」

「そうだ。それは断っておく」

吸血鬼、紳士であった。

「あくまで休戦だ」

「けれどね」

美女はだ。七つ頭の恐竜に似た姿、キリムだった。

「今は一緒に戦うわ」

「さもなければ倒せはしない」

足の場所に手があり足の場所に手があり背中と腹も逆になっており首のところに脳天がある。その異様な姿は逆さ男、大男であった。

「だからこそだ」

「そういうことじゃ」

仙人は牙の生えた鬼であった。ヤクシヤだ。

「わかったかのう」

「それではです」

小男は七色に輝く蛇、虹蛇の姿である。

「私達もその妖魔の神と戦います」

「いいね、それで」

少年は蝙蝠と獣、人が合さった混沌とした姿、それがクマゾツツの姿であった。



## 第五十二話 死風その九

「僕達も一緒にね」

「戦うとするかのう」

老婆の姿はあまり変わってはいないが石臼の上に乗った一つ目の老婆になっていた。バーバヤーガである。

「それではじゃ」

「はい、では」

百目が彼等をまとめてきた。

「共にあの神に」

「ええ、それじゃあね」

「行くでしょう」

九尾の狐とウエンティゴが応えてだった。他の彼等もだ。

神に対して向かう。そのうえでだった。

一気に突き進みだ。神に対して次々とその手や口から光を放ちだ。

神に攻撃を仕掛けるのだった。

それを見てだ。髑髏天使が言う。

「神だけはあるな」

「そう言われますか」

「かなりの力だ」

こつ百目に述べるのだった。彼はその百の目全てから光を放っていた。そうしてそのうえで神を撃っていた。そうしながら髑髏天使に応えるのだった。

「いい攻撃だ」

「しかしです」

「しかしか」

「貴方も見ているだけではありませんね」

これが髑髏天使への言葉だった。

「そうですね」

「その通りだ。俺もだ」

「そして私もだ」

髑髏天使だけでなく死神も応えたのだった。

「この神を倒す」

「この力で」

「他力本願ではないのですね」

「頼むのは己の力のみだ」

これは髑髏天使が今までの戦いで備えた考えである。

「だからこそだ」

「それで、ですか」

「そうだ。だからこそ」

「こうする」

髑髏天使は己の剣から雷を放ってそれで神を撃つ。死神はその鎌を一閃させてそのうえで炎を出してだ。神を撃つのであった。

神はそうした攻撃を受け続ける。しかしであった。

全く動じることなくだ。こう髑髏天使達に言うのだった。

「それが貴様等の攻撃か」

「余裕だな」

「如何にも。余裕だ」

その通りだとだ。死神に返す。

「この程度ではな」

「そう言うのだな」

「何度でも言うがな」

やはりその余裕は崩れない。

「私はこの程度では倒れはしない」

「そうか、それではだ」

「どうするというのだ」

「この程度ではというのならだ」

死神のその黒い目は光った。そうしての言葉だった。

「これまで以上に攻めるだけだ」

「それだけか」

「そうだ、それだけだ」

これが彼の言葉だった。そのうえでだった。

鎌を巨大化させた。その鎌に今度は氷を宿らせて一気に放った。

氷が神を撃つ。それを受けると神の巨体が一瞬だが揺れ動いた。

それを見てだ。死神はそこに確かな手応えを感じていたのだった。

それでだ。彼は言った。

「完全な不死身の存在なぞいはしない」

「この神もだというのか」

「これまで既に多くの神を倒してきた」

他ならぬその混沌の神々をだというのだ。倒してきたというJの  
だ。

「だからこそだ」

「倒せるのだな、我を」

「百度の攻撃で駄目なら千度だ」

「千でも駄目ならどうする」

「万だ」

それだけ多くの攻撃を浴びせてみせるといのである。

「そうするまでだ」

「数だけだな」

「確かにそれだけだ」

死神もそれは認めてみせる。

「しかし数はだ」

「何だというのだ、その数は」

「力だ」

一言でだ。言ってみせたのであった。

## 第五十二話 死風その十

「数はそのまま力となるのだ」

「そしてその力で我を倒すか」

「その通りだ」

死神はまた神に述べた。

「何度でもな」

「ではどう来る」

「こうさせてもらおう」

分身だった。ここでもそれを使うのだった。

十二体ある。そのそれぞれの鎌に炎を宿らせてであった。

神に対して一斉に放った。それは髑髏天使もだった。

死神と同じく十二体になり攻撃を浴びせてだ。そのうえで言うのだった。

「どうだ、これでだ」

「無駄だな」

まだこう言う神だった。

「これで我は倒せん。そしてだ」

「そして？」

「我もこうして攻撃を受けるだけではない」

「こつも言うのであった。」

「こちらもだ」

「来るか」

「風を受けるがいい」

こうしてだった。神のその無数の触手からだった。

数えきれない、それこそ億はあろうかという鎌イ足を放ってきたのだった。

そしてそれはだ。髑髏天使達を襲うのだった。

「！？この鎌イ足は」

「普通のではないですね」  
クマゾツツと百目がその風をかわしながら言う。  
「それぞれが意識を持っている」  
「そうですね。一つ一つが」  
「厄介だね、これは」  
「やはり。風の神ともなると違いますか」  
「その通りだ」  
攻撃を出しながらだ。神は言うのだった。  
「この風を何時までかわしきれん」  
「くっ、この風は」  
「尋常なものではないわね」  
バジリスクとキリムもだ。攻撃をかわすのに苦勞していた。  
それかどの魔神達もだった。何時しか攻撃をかわす方に注意が  
ついていた。  
彼等の攻撃は弱まっていた。そしてだ。  
髑髏天使と死神もだ。何時しかそうになっていた。  
「これはな」  
「尋常な攻撃ではない」  
二人でそれぞれ言う。  
「攻撃を繰り返して続ければ」  
「こちらが」  
「さて、数を繰り返すのではなかったのか」  
神はその彼等に問うのだった。  
「違ったか」  
「これではな」  
「できはしないか」  
「そうだな。できないな」  
神もそれを指摘する。  
「さて、どうする」  
「どうして貴様を倒すか」

「それか」

「我を万も億も攻撃はできない」

神はまた言ってみせた。

「それではだ。どうするのだ」

「こうなってはだ」

最初に動いたのはだ。髑髏天使だった。

その身体を一つに戻した。そしてまずはだ。

己の周りに障壁を出した。それで風を防ぐ。

死神もそうする。そのうえでだった。

「こうしてだ」

「そのうえでだ」

「その障壁も何時までもつかだな」

神は余裕の声でそれで防ぐ彼等に対してまた言ってみせた。

「果たしてな」

「少しの間でいい」

だが、だった。髑髏天使はこう神に言うのであった。

## 第五十二話 死風その十一

「防ぐのはだ」

「少しか」

「そうだ、少しでいい」

これが髑髏天使の今の考えであり言葉であった。そしてだった。その二本の剣を一本の、十字の剣にしてだった。それを巨大化させた。

何十メートルもある、そこまで巨大にした剣にであった。炎に雷、それに氷に木に土にあらゆるものを注ぎ込んだのであった。

そのうえで剣を大上段に振り被ってであった。

「その間にこれでだ」

「我を倒すか」

「この剣ならばできる」

髑髏天使は断言してみせた。

「必ずな」

「私もだ」

死神もだった。鎌の刃を途方もない大きさにしてだ。そこにあらゆるものを注ぎ込んでだ。複数の光を放つそれを横に構えていた。

そのうえで。彼は神に言った。

「これならば必ず貴様をだ」

「倒すか」

「そうしてみせよう」

「ならば来るのだ」

神はだ。ここであった。

また風を出した。その風でだ。

自分の周りに障壁を作ってみせた。今度は彼がそうしたのであった。

「この障壁、破れるか」

「できる」  
「そして倒す」  
二人の意志は変わらない。  
「何があるうともな」  
「この一撃でだ」  
「できるのならな」  
神はその二人に対して余裕を見せた。  
「してみるがいい」  
「おやおや、これは」  
その神の言葉を聞いてだ。百目が言ってきた。  
「面白いですね」  
「面白いだと」  
「貴方は。敗れますね」  
神への言葉である。  
「今から」  
「神が敗れるというのか」  
「御二人を甘く見ないことです」  
「こつ神に言うのであった。」  
「ですから」  
「所詮は人と低級の神だ」  
混沌の風の神から見ればそうでしかなかった。まさにだ。  
「それがこのハストウルを倒すというのか」  
「生憎ですが私達もいます」  
「そうだね」  
百目だけでなくクマゾツツも言ってきた。  
「その私達の攻撃も受けています」  
「それも頭に入れておいて欲しいな」  
「貴様等にしてもものの数ではない」  
神は彼等に対してもこつ返すのだった。  
「そうした相手の攻撃なぞだ。幾ら受けてもだ」



「何ということはない」

「そう言うんだね」

「そうだ。何ということはない」

やはりこう言うのであった。

「所詮はな」

「それは今わかります」

「僕達の言葉が正しいかどうかね」

「既にわかっていることだ」

神は言っただ。障壁で己を覆いながらだ。また鎌イ足を放った。

それで髑髏天使と死神を攻撃する。しかしそれは二人の障壁に防がれ続けている。だがそれでも神は攻撃を続けていた。

二人はその中でだ。遂にだ。

髑髏天使が剣を放ち死神が鎌を投げた。剣は一直線に、そして鎌は回転しながら神に襲い掛かる。凄まじい唸り声をあげながら。

## 第五十二話 死風その十二

だが神はそれを見ても動かない。そしてだった。

「無駄だな」

「まだそう言うのだな」

「言えるか」

「言える」

身動き一つしないまままでの言葉だった。

「では。神の障壁でだ」

「防ぐか」

「そうするか」

「こうしてだ」

言った。そうしてその障壁で防いだ。筈だった。

ところがそうはならなかった。障壁は砕かれそして。

剣と鎌がだ。彼の身体を貫いた。それを受けてだ。

神は今になってだ。驚きの声をあげたのだった。

「ば、馬鹿な」

「俺達の言葉通りになったな」

髑髏天使が神に対して述べた。

「こうしてな」

「我が。その程度の攻撃で」

「確かに一撃では無理だった」

「私にしてもだ」

髑髏天使だけでなく死神も述べる。

「しかし貴様はこれまでも攻撃を受けていた」

「そのダメージが蓄積されていた」

「そうだとするのである。」

「だからこうしてだ」

「貴様を倒せたのだ」

「どれだけ小さな攻撃でも傷は受けるか」

神は二人の言葉を聞いてこう述べた。

「つまりはそういうことだな」

「如何にも。その通りだ」

「これでやつとわかったな」

「忌々しいがそう答えておこう」

剣と鎌に貫かれたまま。神は述べた。

「まさか。ここで敗れるとはな」

「まずは一柱」

「風は倒した」

髑髏天使と死神は神の巨体が青と赤の炎に包まれていくのを見た。それこそがその証であった。

「これでな」

「間違いなくだ」

「そうだな。我はこれで消える」

神もそのことを認める。

「思わぬことだが」

「では。安心して消えて下さい」

百目もまた彼に告げてきた。穏やかな声はいつも通りであった。

「そうしてそのうえで」

「後の三柱の神々はこうはいかぬ」

神は炎に包まれながら述べた。

「それは言っておこう」

最後にこう言っただ。二色の炎に完全に包まれたのだった。そうしてそのうえで彼は完全に消えた。それと共に世界は元に戻った。するとだ。魔神達は人間の姿にもう戻っていた。それでだ。

「貴方達もです」

「もういいじゃない」

こう髑髏天使達に言ってきたのである。

「戦う姿はもう終わりにして」

「それでね」

「そうだな」

「言われてみればな」

ここで二人も頷く。そうしてだった。

二人共元の姿に戻った。そのうえで魔神達に言葉を返すのだった。

「こうしてだな」

「それでだな」

「はい、そうです」

「それでいいよ」

二人に老人と子供が言ってきた。

「とにかく。今回の戦いはこれで終わりです」

「これでね」

「まずは一柱だな」

「そうだな」

二人もここで言う。

第五十二話 死風その十三

「後は三つ」

「それだけだな」

「わかっておられると思いますが」

「ここだ。老人はその牧村と死神に話すのだった。

「それで終わりではありません」

「四柱の神々を倒した後でか」

「そのうえでだな」

「はい、混沌の中枢です」

「そこだというのである。」

「そこにいる神々との戦いがあります」

「あの男もいるな」

「そうだな」

牧村と死神は顔を見合わせてまた話した。

「あの黒い男もまた」

「その混沌の中枢に」

「はい、勿論です」

その通りだとだ。老人は答えた。

「彼もまたいます」

「ナイアーラトホテップだったね」

子供はその名前を言ってみせた。

「そんな名前だったよね」

「そういえばそんな名前だったな」

牧村は子供の問いにこう答えた。

「確かな」

「実際に戦ったことはないけれど」

それでもだとだ。子供は彼と死神に言うのだった。

「強いよ、あれ」

「それはわかつている」  
「だから。ただの強さじゃないよ」  
「こう言うのである。」  
「尋常なものじゃないから」  
「先程の風の神よりもです」  
「老人も言う。」  
「ハストウルといったあの神よりもです」  
「まださらにか」  
「はい、遙かにです」  
「そこまで強いというのである。」  
「あの神はです」  
「混沌を呼び出す者が」  
「人間の政治の世界で言うなら。この時代では」  
「老人は現在の人間の世界、それも日本のそれに当てはめて言うの  
だった。」  
「あれです。首相です」  
「今の首相なら何の役にも立たないがな」  
「牧村はここで額に黒子の様なものがある学生運動あがりの首相の  
ことを述べた。彼はその首相は全く評価していないのである。」  
「あの男は存在自体が邪魔だ」  
「いえ、地位としてです」  
「そちらか」  
「はい、そちらで考えるとです」  
「それだというのである。」  
「あの神は混沌の世界の首相です」  
「俺達が今倒した神は。それでは」  
「閣僚といったところですね」  
「首相よりは格が落ちる。そうした意味での言葉だった。」  
「それですね」  
「そうしたところか」

「ですからかなりです」

老人の言葉は続く。

「強いです」

「魔神よりもか」

「私達全員と貴方達二人でようやくでしたね」

今度は先程の戦いについてのことであった。

「そうでしたね」

「その通りだ」

「それよりもまだ強いのです」

「なら。それだけにか」

「御用心を」

老人の今の言葉は真剣なものだった。

「無論私達もそうしなればなりません」

「勝ち残り生き残る為にだな」

「死なれるおつもりならいいです」

老人はその場合は構わないという。無論本心からの言葉ではない。

## 第五十二話 死風その十四

「ですが生きらたいならばです」

「それだけの心構えが必要だな」

「そういうことになります」

こう話すのだった。

「私達としてはです」

「どうだというのだ」

「是非生きて欲しいのです」

そうだというのである。

「貴方達にはです」

「戦いたいからか」

「はい」

まさにそうだというのである。

「だからこそです」

「貴様等の為にもか」

「私達の楽しみの為にも」

「だからだよ」

ここで子供も言うのであった。

「君達には生きてもらいたいんだよ」

「その通りです。ですが」

ここで老人の言葉が変わった。

「私達は最近はです」

「変わってきたんだよね」

「この世界にいるうちにです」

「どうもそうなってきたんだ」

こうだ。老人と子供がだ。魔神達を代表して話すのだった。

「戦い以外の楽しみを覚えてきました」

「色々だね」



「楽しみをか」

死神がその彼等に言った。

「それをか」

「はい、食べることに遊ぶこと」

「大きく言えばこの二つだね」

「この世界には様々な美味しいものがあります」

「ゲームに映画に。他にも色々あるしね」

彼等がこれまで楽しんできたことをだ。話すのだった。

「いい世界です」

「思った以上に」

「そうだとするとだ」

彼等のその話を聞いてだ。牧村はこう思ったのだった。そしてその思ったことをだ。今は実際に言葉に出して言ったのだった。

「妖怪と同じだな」

「はい、そうですね」

「そうなるね」

そしてだ。彼等もそのことを認めるのだった。

そのうえでだ。彼等はこう二人に話した。

「私達は元々妖怪でしたし」

「戦いが楽しいと思つてそれから魔物になったからね」

「魔物は。戦いだけを楽しむ存在です」

「それが魔物なんだ」

妖怪と魔物の違いはそれだというのだ。

「その私達が戦いの他に喜びを見出せば」

「妖怪に戻るのかな」

「戦い以外も楽しいものじゃ」

老婆も笑いながら話してきた。大きく開いたその口には歯が殆どない。しかしそれでも彼女はその口を大きく開いて笑つたのだ。

「実なのう」

「変わったのか」

「うむ、変わった」

老婆は死神に答えた。

「いや、戻ってきたのかのう」

「そしてそのうえでか」

「はい、戦わせてもらいます」

「君達とね」

また老人と子供が言ってきた。

「ですから。何としてもです」

「最後まで生き残ってね」

また二人に告げるのであった。

「それは絶対にです」

「頼んだよ。それじゃあね」

ここまで話してだ。彼等は。

姿を消していった。そうしてその中で最後に告げるのだった。

「また会おうね」

「次の戦いの時にまた」

「次か」

「これからの戦いでは協力させてもらいます」

老人は消えゆく中で牧村に述べたのだった。

## 第五十二話 死風その十五

「さもないと。お互いに生き残れませんから」

「それでか」

「御嫌でしたらいいですが」

「好きにするといい」

牧村は断る言葉は出さなかった。かといって受け入れる言葉でもなかった。こうしてだ。突き放しはしているが否定もしない言葉を述べるのだった。

「貴様等のな」

「はい、ではそうさせてもらいます」

「それではだな」

「また。御会いしましょう」

こうしてだった。魔神達は消えるのだった。そしてだ。

二人だけになった牧村と死神はだ。今度はお互いに話すのだった。

「それではだ」

「私達もだな」

「帰るとするか」

「そうだな。今回の戦いは終わった」

それは間違いなかった。

「それではだな」

「ここにいる理由もなくなった」

二人で話していく。言葉のやり取りは今は素っ気無い感じになっていた。戦いが終わった後の緊張が解けた感じがそうさせているのだ。

「それではだ」

「帰るだけか」

「帰り。そして」

牧村はそれからのことも死神に話した。

「休ませてもらう」

「今はそうするか」

「また戦いがある」

それは既にだ。決まっているといった口調だった。

その言葉を出してからだ。牧村はまた言った。

「それならだ」

「そうか。では私もだ」

死神の前にハーレーが来た。彼はそれに乗った。

ヘルメットを被りだ。そのうえでまた牧村に対して告げた。

「これでだ。帰ろう」

「貴様のその世界にか」

「そこで休ませてもらう」

「こう言うのであった。」

「よくな」

「ではそうするのだな」

牧村の前にもサイドカーが来た。彼もそれに乗った。

そのうえでだ。彼もヘルメットを被った。そうしてだ。

「次の戦いの時にだ」

「まただな」

こう話してだ。それぞれ去るのであった。

牧村は家に戻った。するとだ。半ズボン姿の未久が出迎えてきた。

彼女はすぐに兄に対して挨拶の言葉をかけてきたのだった。

「御帰り、お姉ちゃん」

「何だ、その服は」

半ズボンは黒である。そして上は体操服だ。つまり彼女は中学の体操服を家の中で着ているのだ。それは牧村もよく知っている体操服だった。

「中学のあれか」

「お兄ちゃんの時からこれだよな」

「そうだ。しかし」

「何でお家で着てるかっていうのよね」

「それは何故だ」

実際にそのことを問うた牧村だった。

「今ここでそれを着ているのは」

「うん、実はこの体操服ね」

「何かあるのか」

「新品なの」

そうだというのである。

「それでちよつとサイズ確かめてたのよ」

「それで着ているのか」

「ぴったりよ」

未久はにこりと笑って述べた。

「私にね。丁度いいサイズよ」

「そうか。丁度いいか」

「大き過ぎないし」

小柄な彼女はまずそれを気にしたのである。

「丁度いいから」

「特にズボンがだな」

「そうなのよね。気になるのはズボンなのよ」

実際にそれを重点的に見ている妹だった。

## 第五十二話 死風その十六

「大きかったら。見えちゃうから」

「下着がが」

「横からね。そうなったら駄目だから」

「そうだな。それはな」

「かといって小さくとも」

その場合についても言う彼女だった。

「はみ出るし」

「半ズボンでもか」

「そうよ。うっかりしていたらね」

「ブルマーみたいだな、それは」

「ブルマー？何それ」

しかしだった。未久はブルマーと聞いてきよとんとした顔になるのだった。そうしてそのうえでこう兄に言葉を返すのだった。

「ウルトラマンか何かの怪獣？」

「何故そうなる」

「だって。聞いたことない言葉だから」

だからだというのである。

「何、それ」

「昔はそんな服があったらしい」

実は牧村もブルマーの実物は知らない。彼が小学校の頃にはもうなくなっていたのだ。当然中学や高校でもそれは同じである。

「下着みたいな形でだ」

「下着みたいなの」

「それで下に穿く」

「何かそれついでいやらしそうね」

「そんな服が昔は女子の体操服だったらしい」

「何、それ」

未久はその説明を受けてすぐに顔を顰めさせて問うてきた。

「それって水着とかレオタードで体育してるようなものじゃない」

「そうだな。確かにな」

「そんなの恥ずかしくてとてもできないわよ」

口を尖らせてだ。こう言うのであった。

「半ズボンでも足丸見えて結構恥ずかしいのに」

「半ズボンでも駄目か」

「やっぱりジャージよ」

それだというのである。

「ジャージだと見えないからね」

「それでか」

「そうよ。けれどうちの学校それは駄目だから」

この辺りが難しいところである。これは学校の考えによる。

「いつもこうしてね。半ズボンじゃないとってね」

「寒さや暑さになれる為か」

「夏はいいけれど」

未久は困った顔になって話す。

「けれど冬はやっぱり」

「寒いな」

「神戸って。風も強いし」

海と山の間にあるからだ。それは当然のことだった。

「冬は厳しいわよね」

「だからだな」

「しかも女の子は冷えるのよ」

未久は困った顔で話していく。

「それなのに半ズボンって」

「まあそれは仕方ないな」

「仕方ないってどういうの？」

「それも鍛えるうちだ」

それでだというのだ。兄はここでは校則を話には出さなかった。

「寒さに慣れることもだ」

「慣れるの？寒さって」

「暑さもそうだがな」

「あれ？心頭滅却すればっていの」

未久はここでこのことを言った。古い言葉である。

「それだっっていうの？」

「そういうことになるか」

「精神論なのね。それって」

それをわかってだ。未久は少し慥然としてから兄に述べた。

「お兄ちゃんらしくないわね」

「そうか」

「うん、何かね」

こう兄に言うのである。

「そういうのって」

「何かをするには心も必要だ」

「前はそんなこと言ってたっけ」

「少し変わった」

何故変わったのかはここでは言わない彼だった。しかしそれでも未久に話していく。そうしていつているのだ。



## 第五十二話 死風その十七

「その辺りはだ」

「そうなのね」

「そうだ、だからだ」

「成程ねえ。お兄ちゃんも変わるのね」

「人は誰でも変わる」

牧村は言いながらソファーに座った。そうしてそこでお茶を飲んだ。また話すのだった。

「誰でもな」

「じゃあ私もよね」

「そうだ。御前も変わる」

「そうなのかしら」

未久は冷蔵庫を開けていた。そこから牛乳を出している。そうしてそれをコップの中に注ぎ込みながらだ。兄に対して言葉を返していた。

「私も変わるの」

「少しずつにしてもな」

「何か自分ではね」

「そうは思わないか」

「全然ね。実感もないし」

こう牧村に返す。

「背だつて伸びないし」

「身体のこととは関係ない」

「心つていうのね」

「それが少しずつ変わっていく」

「だといいいけれどね」

「ではだ」

ここまで話してだ。それからだった。

牧村は一杯飲んだ。そうして一杯入れてだ。飲む。未久はその兄に言った。

「ねえ、そのお茶何なの？」

「麦茶だ」

それだと返す。まだ暑いのでそれを飲んでいるのだ。

「美味い」

「ううん、麦茶もいいけれど」

未久はコップの中の牛乳を飲みながら難しい顔をするのだった。

その麦茶を見てだ。

「あれだからね」

「あれとは何だ」

「麦茶を飲んでも背は伸びないし」

言うのはこのことだった。

「それに胸もね」

「胸か」

「大きくならないから」

こう言うのである。

「あまりね。飲むのは」

「嫌か」

「やっぱり牛乳よ」

それだというのである。彼女が今それを飲んでいるのはそうした理由からだった。

「これを飲むのがね」

「いいか」

「やっぱりこれよ」

また言う未久だった。

「絶対に大きくなるから」

「そうして変わりたいか」

「背は大きくしたいわ」

また言うのであった。

「やっぱりね」

「そこは変わったな」

兄は妹のそんな言葉を受けて述べた。

「昔はそうしたことと言わなかったししなかったがな」

「こついうところが変わったっていいのかしら」

「そうなるな。やはりな」

「うっん、そうなのね」

「誰でも変わる」

麦茶を飲みながら述べた。

「何かがな」

「変わるんだつたら」

未久は兄のその言葉を聞いてこつ言った。

「いい方向に変わりたいわね」

「そうだな。どうせならな」

「そう思つわ」

こつ言いながら牛乳を飲む。そうしてだった。二人は話をするのだった。兄妹で。

## 第五十二話

完

2011・1・26

## 第五十三話 怪地その一

髑髏天使

第五十三話 怪地

男はだ。この時混沌の中にいた。

そのうえでだ。彼等と話していた。

「ハストウールが倒れた」

「そうだな」

「感じ取っている」

二つの、不気味そのものの声が彼に伝えてきた。

「まさかと思つたがな」

「風が消えるとはな」

「魔神達も完全に敵に回つた」

男は彼等にこのことも話した。

「髑髏天使達と共に攻撃を仕掛けてきた」

「十二の魔神達もか」

「我等にか」

「そうだ、今はそうした状況だ」

こう話すのだった。

「敵が増えた」

「面白くなつてきたか」

「これまで以上に」

「若しかするとだ」

男の言葉は続く。

「四柱の神々は全て倒されるかもな」

「そして貴様が戦う」

「そうなるというのか」

「だとすればだ」

ここであった。男の声に笑みが宿った。

「どれだけの過去だったかはわからないがだ」

「貴様が真の姿を現す」

「そうなるな」

「今の貴様のその姿ではなく」

「あの姿に」

「あの姿に戻ることは久しくなかった」

男は言う。

「忘れかけていた程だ」

「そうだな。我等もだ」

「その姿はだ」

「どうかというのである。その彼等もだ。」

「忘れかけている」

「果たしてどうした姿だったのか」

「己の姿だというのにな」

「それは最早な」

「だがそれも当然のことだ」

男は彼等の今の言葉を肯定した。そうしてさらに言うのであった。

「どれだけの時をこの中で過ごしているのかわからないのだからな」

「この無限の混沌の中だな」

「我等は存在し続けている」

「この何も無い空間でな」

「何も無いが何もかもがある」

それがこの混沌の中だというのである。極彩色のものが蠢き合っ

ているその中だというのである。

「ここはそうだ」

「その中においてはどうしてもな」

「己の姿を忘れてしまっ」

「どういったものか」

「だがだ」

男はその彼等にまた話した。

「ここから出ればだ」

「そうだな。我等は真の姿を出せる」

「この無限の混沌の中から」

「そうなればだ」

「思い出せる」

「そうなるにはだ」

どうしてそうなるか。男は彼等にそれも語った。

「髑髏天使と死神を倒し混沌の世界をこの世に出すか」

「それか我等があの方達と戦うか」

「どちらかだな」

「もつとも。後者はない」

男はそちらは否定した。絶対はないというのだ。

「私と戦うことになればだ」

「必ず倒すか」

「そうするか」

「この盲目のスフィンクスには誰も勝てはしない」

だからだというのだ。男は己をその異形の存在と言ってからだ。

さらに言う。その言葉には絶対の自負と誇りがあった。混沌として  
いるがだ。

## 第五十三話 怪地その二

その混沌の自負の中でだ。彼はまた言った。

「だからだ。貴様等はだ」

「前者を待てばいいな」

「それを」

「そうだ。私の前に残りの三柱もいる」  
彼等もだというのだ。

「あの者達が髑髏天使達を倒す」

「その三柱の次は誰だ」

「それでだ」

ここでこう問う彼等だった。

「地か火か水か」

「どれだ」

「地だ」

それだとだ。男は述べた。

「地が出る」

「クアトウヴァか」

「あの者がだな」

「おそらくそこで終わる」

男は彼等にこうも告げた。

「風はまさかとは思ったがな」

「そうだな。地ならばだ」

「混沌の大地の力ならばだ」

「勝つ」

「あの者達にだ」

「そうだ、負けることはない」

男も彼等に述べる。

「確実にな」

「それではだ」

「我等はそれを見よう」

「そしてだ」

「その時を待とう」

彼等も話していく。そうしてだ。

男に対してもだ。こう述べるのであった。

「では混沌の世界になることをな」

「心から願う」

「我等がここから出るその時を」

「是非な」

こんな話をしてだった。彼等は待つのがだった。混沌の世界が実現することだ。

牧村はまた研究室にいた。そこで博士と妖怪達にだ。前の戦いのことを話した。

それを聞いてだ。博士はまず驚いた顔で言うのがだった。

「魔神達がか」

「そうだ。共闘してきた」

牧村はこう博士に述べた。いつもの壁にもたれかかって座っているその姿勢でだ。博士に対して述べたのがだった。そうしたのである。

「そうして勝った」

「ううむ、それはまたのう」

博士は腕を組んで難しい顔になった。

「予想せんかったわ」

「俺もだ。それはだ」

「そうじゃろうな。本来髑髏天使といえばじゃ」

その髑髏天使についての存在から話すのであった。

「魔物を倒す存在だからのう」

「その俺がだ。魔物の神であるあの連中とだ」

「戦ったのじゃからな」

それを話すのがだった。



「有り得ないことじゃよ」

「しかし実際に戦った」

「魔神達も変わってきていたがのう」

博士はここでこのことも言った。

「それが影響しておるのかのう」

「楽しみを覚えてきていると言っていたな」

「それじゃ」

博士もそこだと指摘する。

「それがあるからのう」

「それが影響してか」

「そうではないかのう」

博士も言う。真面目な顔のままだ。

「魔物、魔神も変わってきておるのかのう」

「そして変わってか」

「うむ、君達と共に戦った」

そうだったのではないかというのだ。

「ただ。考えてみればじゃ」

「考えればか」

「うむ。元々魔物は戦うことにはのみ喜びを見出しておった」

それが魔物であるということとはもうわかっていた。妖怪達が戦いを覚えた。それに溺れのめり込んだのが魔物だからである。

しかしなのだった。それがであった。

### 第五十三話 怪地その三

「魔神達はあれやこれやと人間の世界で遊んでおったからのう」  
「そこですか」

「戦い以外の楽しみを知ったのじゃな」

博士は言った。

「その結果じゃ」

「そしてああなったのか」

「そうじゃ。おそらくはそうじゃ」

そしてだ。博士はこんなことも話した。

「魔物が戦いのこと以外の楽しみも知ればじゃ」

「それでどうなる」

「妖怪と変わらぬ」

そうだとするのである。

「それではじゃ」

「同じになるか」

「魔物は戦いを楽しむ妖怪じゃ」

博士はここでは簡単に述べた。

「そして妖怪は戦い以外のものを楽しむ妖怪じゃ」

「そう、遊びに食べることをね」

「それが妖怪なんだよ」

「つまりはね」

その妖怪達の言葉である。

「遊びを知った魔物ってね」

「思い出したって言うてもいいかな」

「かもね」

彼等の間でこんな話もした。

「それともうね」

「妖怪とあまり変わらないよね」

「戦いが好きでもね」

「それじゃあね」

「そうじゃな。その通りじゃ」

博士も彼等のその言葉に頷く。そうして述べた。

「それでは変わらぬ」

「だよねえ」

「魔神達も元々妖怪だし」

「最初に生まれたね」

「妖怪の古株でね」

「古株か」

牧村は彼等のその言葉に反応した。そのうえで彼等に問うた。

「あの連中は古い妖怪達なのか」

「そうじゃよ」

天狗が出て来て彼に答える。赤ら顔に白い髪と髭、そして高い鼻が何よりもだ。彼が天狗であるということを知らしめていた。

「わしと同じじゃ」

「天狗か」

「わしは長老になるかのう」

「いやいや、わしもじゃぞ」

「わしもじゃ」

ここで子泣き爺と砂かけ婆も出て来た。

「かなり長生きしておるからのう」

「本当の歳がわからん位にじゃ」

「そこまでか」

「そうじゃ、古いぞ」

「百目達と一緒にあったからのう」

彼等は牧村にも答えた。

「あ奴が子供の頃はよく一緒に遊んだものじゃ」

「そうじゃったな」

「わし等も子供だったしのう」

「そうだったのう」

「あのさ」

ひょうすべがその彼等に問うた。

「それってどれ位前なの？」

「さて。だからわし等歳はわからんのじゃ」

「長生きしておるからのう」

ひょうすべにもだ。子泣き爺と砂かけ婆は答えた。

「果たしてどの程か」

「さてさて」

「確かじゃ」

二人の代わりにだ。博士がこう述べた。

「九尾の狐じゃがな」

「あの女か」

「あれは中国の殷の頃にはもうおった」

およそ三千年前である。

## 第五十三話 怪地その四

「夏にもおつたという説もあるがな」

「あの悪女か」

「そうじゃ。王を惑わしたあの悪女達じゃ」

周にも出たとされている。王達を惑わした悪女の正体は九尾の狐と言われているのだ。

「無論あの狐とは別の狐じゃがな」

「それでもだな」

「そうじゃ。あれとはまた違う九尾の狐じゃ」

十二魔神のそれはというのだ。違うというのである。

「狐といっても色々じゃからのう」

「それでなのか」

「そういうことじゃ。まああれが四千年前じゃったか」

博士はその王を惑わした狐の年齢を述べた。

「そう考えると最低でも五千歳じゃな」

「あの殺生石になつてるのだよね」

「あいつだよな」

「うむ、あれがそれ位じゃ」

その九尾の狐は中国だけでなくインドでも悪事を働き遂には日本にまで来た。そのうえで鳥羽法皇を惑わさんとし見破られ討たれたのである。

そして石になった。それが殺生石なのである。

「どう少なく見てもものう」

「九尾の狐になるのは千年かかるからな」

「どうしてもね」

「そうなんだよね」

二本の尻尾を持つ猫が言う。猫又である。

「僕で今三百年生きてるけれどね」

「猫又になるのって五十年だよね」

「そうだよ」

猫又はがんぎ小僧の言葉に答えた。

「猫が五十年生きたら尻尾が二本になってね」

「それからだよね」

「そうだよ、猫又になるんだ」

こう話すのだった。

「晴れて妖怪になるんだ」

「そうだよね」

「九尾猫もいるけれどね」

尻尾が九本になるのは狐だけではないというのだ。

「けれど。あそこまでするようになるのは」

「千年かかるよね」

「猫も」

「うん、かかるよ」

実際にそうだとだ。猫又は仲間の妖怪達に話した。

「そこは狐と同じだよ」

「九尾になると凄いよ」

狐もいる。勿論狸もだ。

「ああして神様になるからね」

「だよ。力が尋常じゃなくなるからね」

その狸も言った。

「尻尾つて凄いね、考えると」

「全くだね」

狐と狸も話す。そして猫又は話を戻してきた。

「それで。百目って正確な年齢はわからないんだね」

「そうだ。わしが知らぬのじゃ」

天狗が答える。子供の頃から彼と共にいるその天狗がだ。

「あ奴も知らぬな」

「ううん、そうなんだ」

「とにかく古く生きておるとそれだけの力を持つしろう」  
博士がまた言った。  
「その魔神達が君と共闘すること自体はじゃ」  
「いいことか」  
「そうじゃないと勝てる相手でもない」  
相手の神達の力をだ。踏まえての言葉だった。  
「とてももう」  
「今の俺達ではか」  
「そうじゃ。それまでの相手じゃ」  
牧村にだ。ここはあえて正直に言う博士だった。  
「それは前も言ったと思うが」  
「確かにな。それはな」  
「だからじゃ。あの魔神達が力を貸すならじゃ」  
「頼りになるか」  
「なる」  
それは間違いはないというのだ。  
「安心していいな」  
「敵としては恐ろしくてもか」  
「味方になれば違う」  
よく言われる話だがそれはここでもだった。  
「かなりのう」  
「そうだな。それではな」  
「君にとつて大きいぞ」  
「そしてあいつにとつてもだな」  
牧村は死神のことも述べた。

## 第五十三話 怪地その五

「俺達二人にとっても」

「そうじゃ。魔神達は混沌の神々とは違う」  
「心があるか」

「混沌の神々にも心はあるがじゃ」  
「それでもだというのであった。」

「その心はのう」

「俺達のものとは違う」

「そうじゃ」

こう牧村に話すのだった。

「考えも何もかもが違う」

「混沌の心か」

「原始的な、破壊と混沌だけを望むものじゃ」  
「本能か」

牧村は混沌の神々の心をそれかと述べた。

「では奴等は」

「そうじゃ。あの神々にあるのは本能じゃ」

「本能以外にはあるか」

「ないじゃろうな」

博士もだ。そう見ていた。

「ナイアーラトホテップは別じゃが」

「あの男か」

「あれは少し違う」

博士は男についても述べた。

「あの男は知性がある」

「知性か」

「そうじゃ。それがある」

こう話すのだった。



「他の混沌の神々と違いじゃ」  
「そういえばだ」  
牧村もそこからあることがわかった。  
「あの男には確かな知性があった」  
「そうじゃろう。あるな」  
「ある。だが他の混沌の神々はだ」  
「やはり本能だけじゃな」  
「喋り方にも出ていた」  
「まずそこにであった。」  
「少ない言葉でだ。戦い方もだ」  
「本能によるものじゃな」  
「他にはない。力は強いが」  
「原始的じゃな」  
「魔物には知性があったがな」  
「魔物は武器も使ってきたな」  
「そして戦術もあつたからな。だが、だ」  
牧村の言葉は続く。さらにだ。  
「あの神々はただ。暴れるだけだ」  
「そこじゃ。自然の様じゃな」  
「自然か」  
「そうじゃ。自然じゃ」  
博士の言葉が続く。  
「あの神々は自然の存在なのじゃよ」  
「原始は自然か」  
「少し違うがそうじゃな。そこに文明はないのじゃ」  
「そうそう、僕達はね」  
「魔物もだけれど」  
「また妖怪達が話してきた。」  
「文明とも近いからね」  
「知性ともね」

「近いのか」  
「近いよ」  
「妖怪も自然の具現化だけれど」  
「それも妖怪だ。しかしなのだ。」  
「けれど。混沌とはまた別で」  
「世界を破壊しようというのじゃなくて世界と遊ぶ」  
「それが僕達だからね」  
「遊ぶ対象には文明もあるか」  
「そうだよ。現にさ」  
「都会にいる妖怪もいるじゃない」  
「僕とかね」  
「ここで出て来たのは豆腐小僧だった。」  
「僕は雨の日にこうして人に豆腐を差し出すじゃない」  
「町でもだな」  
「そうだよ。町でもね」  
「その都会にだというのだ。」  
「それでこの豆腐を食べたら」  
「駄目か」  
「食べてみる？」  
豆腐小僧は悪戯っぽく笑って牧村に言ってきた。  
「よかつたら」  
「いや、いい」  
本能的にだ。彼はそれを悟って断った。  
「その豆腐はな」  
「ああ、わかつたんだ」  
「只の豆腐ではないな」  
「うん、実は食べるとね」  
豆腐小僧は悪戯っ子そのものの笑みで述べてきた。

## 第五十三話 怪地その六

「身体中カビだらけになるんだ」

「やはりそうか」

「うん、それわかったんだ」

「カビが生えるまではわからなかった」

「けれど何かあるのは」

「それはわかった」

「そうだったというのである。」

「察した」

「凄いね、その勘は」

「妖怪は楽しむものだな」

「そうだよ。それはもうよくわかってくれてるし」

「それだ。それでだ」

「また言う牧村だった。」

「それでだ。その豆腐が楽しみで差し出したならば」

「絶対に何かあるっていうんだね」

「毒はあるとは思わなかった」

「それはなかったというのだ。」

「だがそれでもだ」

「うん、毒は無いけれどね」

「豆腐小僧もそれは保証する。」

「けれど。そういうことだから」

「仕掛けてあったか」

「その通りだったんだ。豆腐小僧はそうしてカビだらけになるのを見て楽しむんだ」

「悪戯か」

「別に悪質な悪戯じゃないよね」

「そのことは牧村にも確認した。」

「そうでしょ、別に」

「いや、カビだな」

「うん、カビだよ」

「結構悪質だと思うが」

牧村は実際に彼にこう言った。

「後で始末が大変だからな」

「ああ、お風呂で身体を拭けばそれで落ちるから」

それだけでだというのだ。妖怪は笑いながらこう話した。

「それが乾燥させたらね」

「それだけで終わりか」

「別にインキンとかタムシにはならないから」

その心配はないというのである。

「だからね。安心していいよ」

「そうか。それならな」

「特に悪質じゃないでしょ」

「インキンやタムシにかかったことはない」

牧村はだ。その経験はなかった。

「だが辛いらしいな」

「水虫もそうらしいのう」

博士はこの病気の話もしてきた。

「昔よく聞いたわ」

「昔か」

「そうじゃ。軍隊では付きものじゃからな」

それだけだというのだ。とにかく軍においてはインキンに水虫は付きものである。それからはどうしても離れられない組織なのである。

「特に海軍さんはそうじゃった」

「今で言う海自だな」

「海自さんもそうらしいがのう」

結局名前だけ変わっても働く場所は変わらない。それではだった。

「インキンに水虫はじゃ」

「切っても切れない縁にあるか」

「職業病じゃ」

「そこまで至るといふのだ。」

「あそこではな」

「そうだったのか」

「だから自衛隊も自衛隊で大変なのじゃ」

「また言う博士だった。」

「痒さとの勝負じゃ」

「僕そこまでしないから」

「豆腐小僧がここでまた言った。」

「インキンなんて酷い病気にはさせないから」

「それはか」

「うん、ただカビだらけにするだけ」

「まさにそれだけだといふのである。」

「そんなのになつたら大変だよ」

「そうそう。三年苦しむってね」

「そこまでいくからね、インキンと水虫ってね」

「本当にね」

「妖怪達もそれを話す。」

「夕子悪い病気だからねえ」

「本当にね」

「あれの特効薬を作ればじゃ」

「ここでまた話す博士だった。」

## 第五十三話 怪地その七

「インキンにしる水虫にしるじゃ」

「それを作ればか」

「ノーベル賞を貰えるぞ」

「そこまです。牧村に話した。」

「後は禿げもじゃ」

「それもか」

「インキンと水虫と禿げは人類の宿敵じゃよ」

「博士はどれも関係ないと思うが」

「それでもじゃ。その三つはじゃ」

「天敵か」

「人類のな。まさにじゃ」

博士の断言が再び出た。

「それをどうにかできればじゃ」

「ノーベル医学賞か」

「うむ、間違いなくな」

「そこまですくのか」

「風邪はどうしようもない」

万病の元はそうだというのだ。

「しかしじゃ」

「他の三つはか」

「そうじゃ。どうにかなるかも知れん」

こう牧村に話す。このこともだ。

「そしてどうにかできた者にはそれだけの価値がある」

「まあ僕達には関係ないけれどね」

「禿げとか水虫とかね」

「インキンもね」

「関係ないのか」

牧村は妖怪達のその言葉に問うた。

「それは無関係か」

「そうだよ。だってそれ人間の病気じゃない」

「だったらね。それはね」

「ないから」

「それはね」

こう話す彼等だった。

「まあそれはいいかな」

「その点はね」

「どれも辛い病気みたいだし」

「わしも幸いどれとも縁がない」

また話す博士だった。

「しかしそれでもじゃ。苦しんできている者は見てきた」

それはだというのだ。

「やはり軍とか自衛隊には多いのう」

「減らないのか、それは」

「昔に比べれば減ったぞ」

そうだというのである。

「減ったことは事実じゃが」

「完全にはなくならないか」

「完全には無理じゃな」

「衛生の関係か」

「うむ。水虫とインキンはそれじゃ」

まさにそれである。博士は話す。

「衛生的な問題でなるからのう」

「それとうつるのだったな」

そうした意味で水虫やインキンは伝染病なのである。ただの皮膚病であるがそれでもだ。れっきとした伝染病になるのである。

「どちらも」

「禿げは帽子やヘルメットで頭がむれるからじゃ」

「それは髪の毛に悪いな」  
「悪いぞ。むれるのは大敵じゃ」  
「やはりそうか」  
「むれるから鬻になったしのうち」  
所謂ちよん鬻である。兜を被りむれるからだ。ああした髪型になつたのである。  
「他にも辮髪がそうじゃしな」  
「満州民族のあれもか」  
「そうじゃ。兜を被るからじゃ」  
「暑い部分は剃るか」  
「そうしておつたのじゃよ。あれも髪が薄くなつても目立たん」  
「それを考えるといい髪型か」  
牧村は話を聞いていてこうした考えにもなった。  
「鬻というのも」  
「当時としては合理的であつたからのうち」  
「そういうものか」  
牧村は話を聞きながら述べた。



## 第五十三話 怪地その八

「それでああした髪型になったか」

「そういうことだよね」

「何の意味もなくあんな髪型にはならないしね」

「そうそう」

妖怪達も言ってきた。

「まあねえ。禿げもねえ」

「人間を悩ましてきているよね」

「そうだよね」

「俺も将来はわからないな」

牧村はふと自分にもあてはめて述べた。

「誰でも可能性がある話だからな」

「早い人間ではな」

「二十代からくるな」

「いやいや、十代からじゃ」

博士の話はさらに早かった。

「十代からくる者もある」

「そうなのか」

「そうじゃ。それで二十代で髪が見事になくなる」

博士の牧村への話は怪談めいたものになってきていた。

「そうした場合もある」

「本当の話だな」

「こんな話は嘘ではせん」

実際に真顔で話している博士である。

「なるものじゃよ」

「そうか。なるか」

「なるからのう。わしはその点は幸いじゃった」

白いライオンを思わせる髪は健在だった。一種の妖怪にすら見え

るまでに多く長い。それが博士の髪の毛であるのだ。白髪であるが衰えは見られない。

「禿げなかつたのはのう」

「禿げの特効薬はない」

牧村はまたこのことを述べた。

「しかしだ」

「しかし？」

「防ぐことはできたな」

今度の話はこうしたものだつた。

「そうだつたな」

「うむ、それはな」

できるとだ。博士も答える。

「できるぞ」

「そうだな。それはな」

「髪の毛をよく洗い」

まずはそれからだつた。

「毛根までよくじゃ」

「そこまでか」

「そしてマッサージもする」

次にはそれだつた。

「洗う時には泡もよく落とす」

「それもか」

「そうじゃ。それとじゃ」

さらにだつた。博士の言葉は真面目に続く。

「洗い終わつたらよく拭く。湿気は残さぬ」

「残さないのだな」

「むれるのは危険じゃ。だからヘルメットは危ないのじゃよ」

「それでだな」

「左様。それと食べ物じゃが」

「食べ物。脂気の多いものはだな」

「あまり摂り過ぎるとよくはない」

これはよく言われていることだが博士も言うのだった。

「髪の毛にもな」

「そうだな。脂肪はな」

「あと髪の毛にいいものを食べる」

博士はこうも話した。

「カルシウムの系統じゃな」

「そうしたものか」

「それと野菜じゃ。それとじゃ」

また話す博士だった。

「頭皮には乾燥させて焼酎に漬けた蜜柑をやるのじゃな」

「民間療法か」

「意外といいらしい。まあとにかくじゃ」

「防ぐ方法はあるな」

「そうじゃよ。特效薬はなくともな」

この辺りは風邪と同じだった。特效薬はまだなくともだ。それでも防ぐ方法はあるのである。博士が話すのはそのことであるのだ。

「できるからのう」

「そういうことだな」

「髪の毛がなくなっただけいいと思う者はいない」

博士はここでは断言だった。

## 第五十三話 怪地その九

「わしとてそうじゃ」

「博士もか」

「それは昔からじゃよ」

「俺もそうだ」

「君もじゃな。やはり」

「そうだ。髪の毛があるにこしたことはない」  
実際にそうだという牧村だった。

「どうしてもな」

「そうじゃ。それでなのじゃが」

「今度は何だ」

「昔の欧州じゃが」

その頃の話をするのだった。

「欧州では肉食じゃな」

「そうだな」

「それに風呂にも入らなかつた」

「髪の毛も洗わないな」

「おまけに髪の毛を脂で固めておつた」

髭にもだ。ワックス等をしていたのである。

「あまりよくない脂でろう」

「しかもさらにだな」

「欧州の人間は毛深いのも知っておるな」

「そうだな。日本人よりも遙かにな」

「男性ホルモンが多いのじゃ」

全体的に言えることだった。欧州の人間は日本人に比べて毛深い。これは髭を見てもわかることだ。それは男性ホルモンの影響であるのだ。

「男性ホルモンが多いとじゃ」

「髪の毛にも影響するな」  
「左様。ここから出される結論はじゃ」  
「かつての欧州では禿げが多かったか」  
「牧村もこの結論に達した。」  
「そういうことか」  
「そうじゃ。わしはそう見ておる」  
「成程な。そういえばだ」  
「ここで牧村はこのことにも気付いた。それは。」  
「フランスの人間は日本に比べてな」  
「多いじゃ。髪の毛の薄い者が」  
「そういうことか」  
「ドイツはもっと多いぞ」  
「ドイツはさらになのだった。」  
「何しろソーセージにビールじゃからな」  
「その二つは最強か」  
「痛風の問題もあるがのう」  
「それもあつた。」  
「食べ物や清潔に注意じゃよ」  
「結論はそれか」  
「そうじゃ。そうすればかなり防げる」  
「あとはストレスだな」  
「髪を染めるのも要注意じゃぞ」  
「博士の指摘はそこにも及んだ。」  
「それもくるぞ」  
「そうらしいな。俺は髪は染めないが」  
「髪を傷める。一番駄目じゃ」  
「では脱色も」  
「無論駄目じゃ。同じじゃよ」  
「やはりそうか」  
「確実にくるからのう」

博士の言葉はしみじみとしたものさえあった。

「染めたり脱色はじゃ」

「絶対に駄目だな」

「禿たければよいがな」

「普通はそうした人間はいないな」

「そういうことじゃ。女の子でもあれはくるぞ」

女の子という言葉にだ。妖怪達が突っ込みを入れてきた。

「あれっ、女の子も禿るんだ」

「最近はそうなんだ」

「くるんだ」

「禿げはせんがやはり髪は傷める」

それがあるというのだ。

「確実にのう」

「そうなんだ。それはあるんだ」

「やっぱり」

「そして歳をとってからじゃ」

髪の毛にまつわる絶対のことであった。

第五十三話 怪地その十

「かなり薄くなるからのう」

「だから駄目なんだ」

「それはなんだ」

「駄目なんだね」

「そういうことじゃ。男に比べて遙かにましでもじゃ」

「ううん、染めるのって」

「怖いんだ」

「禿げや薄毛にはよくない」

また述べる博士だった。そうしてであった。

自分の髪の毛をさすってだ。こつも言うのだった。

「わしはこれまで一度も染めたことはないからのう」

「一度もなんだ」

「それはないんだ」

「脱色もない」

それもだった。

「まあ今は脱色しているのと同じじゃがな」

「白髪だからね」

「それはね」

妖怪達は博士の雪の色の毛を見ながら話す。

「けれど白髪になっても」

「それでもなんだ」

「そうじゃ。この通りかなり健在じゃ」

鬣そのものである。その髪はだ。

そしてだ。今度は鬣をしごく。そしてまた言った。

「この鬣もじゃ」

「随分長い鬣だね」

「それも何時見てもね」

「切ったりしないんだ」  
「散髪屋で整えてもらっておる」  
「それはあるというのだ。」  
「そうしてもらっておる」  
「一応そういうことはしてるんだ」  
「ただ無造作に伸ばしてるんじゃないやなかつたんだ」  
「そうだったんだ」  
「流石にそれだとえらいことになるわ。それこそ  
そしてだった。この動物の名前を出した。  
「犬になってしまいわ。チャウチャウにのう」  
「そういえば博士ってそんな犬に似てるし」  
「そうだね。似てるね」  
「確かに似てるよね」  
「よく見たら」  
「妖怪と言われたこともあるぞ」  
「笑いながらだ。このことも話す博士であった。」  
「人間離れしておるとな」  
「そうだね。似ているね」  
「僕達にね」  
「かなり近くなってきたるよね」  
「半分そうなつてない？」  
「妖怪に」  
「ふおおおお、それもよい」  
「妖怪になつていいることもだ。博士はいいというのだった。」  
「そうしてずっと楽しく暮らすのもよいのう」  
「それは仙人だな」  
「牧村がそんなことを言う博士に述べた。」  
「そこまでいくとな」  
「仙人と妖怪って近いのかな」  
「全然違うんじゃない？」



「そう思っけれどね」

「そうだよね」

「いや、近いかもろう」

だが博士は今度は妖怪達よりも牧村に伝えて述べた。

「言われてみればのう」

「近いんだ。僕達と仙人って」

「そうなんだ」

「うむ。どちらも楽しむ存在だからじゃ」

それでだというのだ。

「まあ特に区別化しなくてもよいかもな」

「ううん、じゃあ結局人間と妖怪も」

「近い？」

「そうだよね」

妖怪達も何となくだが納得してきた。そのうえでまた話すのだった。

「まあ博士とか牧村さんとかね」

「僕達とそのままお話できる人もいるし」

「それ考えたらね」

「同じかもね」

「そうかもね」

「そうだな。俺もだ」

牧村だった。彼がまた話すのだった。

第五十三話 怪地その十一

「近くなつてきているな」

「だからほんの少しの違いじゃよ」

博士はこう牧村にも述べた。

「人間と妖怪の違いはのう」

「ほんのか」

「紙一重じゃ」

それだけだというのである。

「大したことではない」

「そうだな」

牧村は博士の言葉を聞いてだ。そうして言うのだった。

「俺も。危うくな」

「魔物になりかけたね」

「そうだったよね」

「そうだな。魔物にもなる」

そう考えてなのだった。

「一歩間違えればな」

「人間とそれ以外の違いはほんの少しじゃよ」

また話す博士だった。

「ほんのな」

「そうだな。心が少し傾けばな」

「人間のままでいられるし」

そしてなのだった。さらに話す博士だった。

「妖怪にもなれば魔物にもなる」

「俺もだな」

「左様、君は余計にそうじゃな」

「髑髏天使である故にか」

「力があると余計にそうなるのじゃよ」

博士はだ。その言葉をしみじみとさせていた。そのうえでだった。牧村にだ。こうも話した。

「智天使になった時は色々あったじゃろう」

「大阪でだったな」

「そうして人間で留まった」

「禅もして。心も鍛えてか」

「それがよかった。そしてじゃ」

「余裕だな」

牧村は言った。それだった。

「こうして。余裕を感じて遊びも知ってか」

「そうじゃ。遊びと余裕は人間に必要じゃ」

そうしたものもだというのだ。博士はだ。

「働くこともそのうちの一つじゃ」

「働くこともか」

「そうじゃ。労働も遊びになるのじゃよ」

「博士の仕事もか」

「これも遊びじゃ」

笑顔での言葉だった。そこには嘘がなかった。

「何故なら楽しめるからじゃ」

「だからか」

「働くことは楽しみを見出すことができるものなのじゃよ」

「そうだな。俺もな」

「わかるな」

「大学を卒業した時は喫茶店に誘われている」

若奈の家でもあるその店にだ。実際に誘われているのである。

それを自分で言っただ。さらに話すのだった。

「そこでアルバイトみたいなこともな」

「はじめたのか」

「まだ少しだが」

それでもだ。しているというのである。

「している」

「楽しいな」

「何かを得ている」

その何かまでにはだ。彼はわからなかった。だがそれでもはつきりと感じているのは確かだった。それもまた否定できないことだった。それも話してだ。牧村はまた話した。

「それも遊びか」

「そうじゃ。遊びになるのじゃ」

「そうだな。まさにな」

「さて、君は遊びと余裕も知っておる」

「それを忘れずにか」

「これからも戦っていればいい」

最後にだった。髑髏天使としての話になった。

そんな話をしてだ。牧村は博士との話を終えた。それからだった。マジックに行きそこでマスターにだ。皿の洗い方を教わっていた。マスターはカウンターにおいてだ。彼にこと細かに話すのだった。

第五十三話 怪地その十二

「そう、そうするんだよ」

「こうか」

「皿洗いで必要なのはね」

「まずそこからだった。彼に話すことは。」

「まずは丁寧に洗うこと」

「それか」

「そして数をこなすこと」

「次に言うのは経験だった。」

「数をね。こなすんだ」

「そうすればいいのか」

「そう、丁寧に数をこなしていけば」

「洗うのも速くなるか」

「そうだよ。速さは自然と身に着くから」

「それについては何も言わないというのだ。」

「だからまずはね。どんどん皿を洗ってね」

「いけばいいか」

「それと」

「それと？」

「丁寧に洗うことは大事だけれど」

「それでもまだというのだった。ここでだ。」

「水と洗剤は大事にしてね」

「無駄遣いはしないか」

「そう、資源はね」

「こう話すマスターだった。」

「大切に使わないとね。勿体ないからね」

「だからだな」

「エコとかは言わないよ」

マスターはそれは笑って否定した。

「けれどそれでもね」

「ものは大切にだな」

「それを忘れたらいけないからね」

「だからだというのであった。」

「まあ僕もほら、エコとかはね」

「そういうことは好きではない」

「何か胡散臭いと思うんだよね」

「それでだというのである。」

「だから好きじゃないんだ」

「環境を言い立てる背景には何かある」

「そんな気がするんだ。気のせいだといいいけれどね」

「気のせいではないかもな」

牧村はマスターに対してこう述べた。皿を洗いながら。コップもそうしている。全て陶器なのでそれなりに慎重にしてもいる。

「それは」

「気のせいじゃないんだね」

「温暖化というがだ」

「実際は寒冷化しているって話もあるね」

「温暖化を言い立てて何があるか」

牧村はそれを考えていた。そこにあるものをだ。

「それは何か」

「そうだよ。マスコミも言うけれどね」

「マスコミは信用できない」

牧村の言葉が曇った。マスコミに対してだ。

「嘘を平気で言う」

「そうそう、だから店の新聞からね」

「新聞か」

「朝日とか毎日もう取らなくなったから」

そうしたというのである。その二誌を店に置かなくなったという

のだ。

「読売は最初からなかったけれどね」

「巨人だな」

「巨人は嫌いだからね」

だからだというのだ。もっともな理由だった。

「だからあるのは」

「産経か」

「あそこが一番ましに思えてきたよ」

皿を洗いながらだ。マスターの顔が曇っていた。

「本当にね」

「そうかもな。あとは」

「八条新聞も置いているよ」

その新聞もだというのだ。八条グループが出している日刊新聞である。夕刊も出している。かなり中道的な新聞として知られている。

その記事はある意味無味乾燥とも言われている。事実だけ書きだ。そこには何の主観も入れないからだ。それがこの新聞のスタンスだ。

その新聞をだ。店に置いてあるというのだ。

「それもね」

「あの新聞はいいな」

「うん、それとスポーツ新聞も置いてるよ」

マスターの顔が笑顔になった。スポーツ新聞の話になるとだ。

「ただし。サンスポと夕刊フジは置いていないよ」

「巨人をよく書くからか」

「あと報知もね」

読売系の新聞である。理由は最早言うまでもなかった。

第五十三話 怪地その十三

「巨人なんて負ければいいんだよ」

「全くだな」

マスターと牧村はこのことでも一致していた。アンチ巨人なのだ。

「だから置いていないよ」

「いいことだな」

「あと日刊ゲンダイも置いていないから」

それもだというのだ。

「品がないからね。マスコミは最近選ぶようになったね」

「そうあるべきか」

「そうだよ。君も」

マスターは話を牧村にシフトさせてきた。彼にだ。

「そのことはわかっておいてくれよ」

「俺もか」

「だって大学を卒業したらうちに入るんだろう？」

にこりと笑ってだ。彼に言ってきた。

「だったら。そういうこともね」

「マスターまで言うか」

「言うよ。女房なんて」

その笑顔のままだ。牧村にさらに話すのだった。

「完全に乗り気だからね」

「そうなのか」

「そうだよ。じゃあ楽しみにしてるから」

「楽しみか」

「凄くね」

まさにそうだというのだった。マスターは笑顔だ。しかしその笑顔はだ。本気であった。牧村に対して真剣に話しているのだった。

「しているからね」



「そうなのか」

「じゃあ。皿洗いはね」

話が最初に戻った。そしてだった。

彼はマスターと共にその皿や他の食器を洗ってだ。店の話を聞くのだった。そうして店でも時を過ごすのであった。

店を出るとだ。そこにであった。

男が待っていた。もうそこにだ。牧村はその彼を見て言った。

「待っていたか」

「そうだ」

その通りだとだ。男も答える。

「貴様が店を出るのをな」

「何時から待っていた」

牧村は男のその漆黒の目を見ながら問うた。

「それは何時からだ」

「ほんの数分前だ」

その時からだというのだ。

「少しだけだ。待ったのはだ」

「そうか。少しか」

「それについて何も思うことはない」

「安心しろ、それはない」

牧村もだ。それはないというのだった。

「貴様も何とも思っていないな」

「その通りだ」

「なら俺もだ」

こう男に答えたのだった。

「一時間程なら話は違ったがな」

「時間の長さの関係か」

「そうだ。人間としての時間の概念でのことだ」

「私にはないものだな」

男の言葉が微妙に変わった。妖魔の神のものになっていた。

「そうしたものはない」

「時間はか」

「私は気の遠くなるだけの時間を過ごしてきた」

「その中での一時間は何だ」

「瞬きするまでもない」

「そこまでもないというのであった。」

「何ということもない時間だ」

「それが貴様等の時間か」

「そういうことだ。それではだ」

「戦いか」

「後ろにもいるな」

男は振り向かない。だが後ろにいる気配も感じ取っていた。

そしてそのうえでだ。彼はこうその後ろに話した。

「貴様も来ているか」

「わかっていたか」

「そうだ、わかっていた」

男の後ろには死神がいた。その彼に対しての言葉だった。

「今来たな」

「貴様等の気配がすれば必ずそこに行く」

死神はこう男に述べた。

## 第五十三話 怪地その十四

「そして貴様等の魂を刈る」

「だからこそだな」

「そうだ。では、だな」

「役者は揃ったな。いや」

男の言葉が止まった。一旦だ。そしてそれからだった。

やはり頭を動かさずにだ。今度は上にいる彼等に対しての言葉だった。

そこにいたのはだ。魔神達だった。彼等は宙に立ちながらだ。そのうえで男の言葉を受けていた。

「それは今ようやくか」

「はい、そうですね」

小男が男のその言葉に応えた。

「そうなります」

「さて、それではじゃ」

今度は老婆が男に告げる。その黒い男にだ。

「わし等は今度もじゃ」

「我等と戦うか」

「そうさせてもらう」

「こつ男に言うのだった。」

「それでよいのう」

「拒むことはしない」

これがその男の返答だった。そうするというのだ。

「戦いたいというのならだ」

「わかりました。それでは」

老人が応えた。そうしてだった。

彼等が全て揃ったところだ。男が右手を掲げた。

すると世界が変わった。これまでの人間の世界からだ。あの混沌

の世界になったのだ。

世界はまたしても異様なものだった。毒々しい赤や青、それに緑や黄色の様々な大地が上下左右にある。空もまた大地になっている。その世界になっていた。牧村や死神、魔神達はその世界の中で男と対峙していた。

そしてだ。男が彼等にあらためて言ってきた。

「ここだ」

「ここか」

「今度の戦いの場は」

「そうだ。混沌の大地だ」

それだとだ。男は牧村と死神に答えたのだった。

「ここにいるのはだ」

「大地の神ですね」

老人が答えた。

「混沌の大地の神。その名は」

「ツアトウヴァという」

男がその神の名を言った。

「それがその神の名前だ」

「名前はわかったわ」

女が応えた。

「それでその神は何処かしら」

「もういるんだよね」

子供は周囲を見回してこう男に問うた。

「そうだよね、もう」

「その通りだ」

男もそれを認めて言ってみせたのだった。

「神は既にいる」

「大地か」

青年は目で周囲を見回していた。その上下左右に広がる極彩色の、胸が悪くなるような色彩の大地をだ。それを見回してであった。

「それならばだな」

「我はもういる」

男とは別の声であった。

「ここにだ」

「では姿を見せるよ」

ロッカーは首を左右に動かしながらその声に返した。

「待ってるんだからな」

「待っているのか」

「姿を見せずに戦うつてののか？」

声に対して挑発する様にしてまた言うロッカーだった。

「それはまた無礼な話だな」

「混沌の中に礼儀なぞない」

まずはこの言葉が来た。

「混沌のやり方があるだけだ」

「混沌のね」

「そつだ。そちらの世界と混沌の世界は違つのだ」

声はこう言うのだった。

「それはわかつている筈だがな」

「確かにな」

そのことはだ。牧村が認めたのだった。

「それはその通りだな」

「混沌のやり方では今はいい」

声はさらに話していく。

## 第五十三話 怪地その十五

「だが、そろそろだ」

「姿を出されますか」

「そうするんだね」

「そうさせてもらう」

こう老人と子供にも述べた声だった。

「それではだ」

「はい、それではです」

「そろそろ出てくれるかな」

声と共にだ。そうして。

やはり巨大な姿だった。色は漆黒だ。

大きな腹にヒキガエルを思わせる顔、青黒い舌を持ち細い目をしている。短く柔らかい毛が全身に生えている。蝙蝠でありながらナマケモノでもある、その相反する二つの動物を同時に印象付けさせる姿をしている。

その姿で出て来てだ。牧村達に言うのであった。

「我がその神だ」

「ツアトウヴァ」

「混沌の大地の神だな」

「そうだ」

こう牧村と死神の言葉に答えた。その横に広い、異様なまでにそっとなつている口でだ。見ればその口には歯が一本も生えていない。

その口でだ。神は答えたのだった。

「我がその大地の神だ」

「そういうことだ。名乗りは終わったな」

男が言ってきた。

「これでいいな」

「はい」

老人が男の言葉に応えた。

「よくわかりました」

「そういうことだ。それではだ」

「戦いですね」

「風を倒したことは認める」

男はだ。神を背にしながら老人達に述べた。

「そのことはな。しかしだ」

「しかしか」

「それでもだつていうのね」

「それならば」

「そうだ。この神は倒せるか」

こゝろ魔神達に返すのだった。

「風と強さは同じだが性質は違う」

「その性質だ」

神もまた自ら言ってみせた。

「それが違えばだ。力が同じ強さであつてもだ」

「容易には倒せない」

「そういうことが、つまりは」

「そうなのだな」

「そうだ」

その通りだとだ。神は魔神達に対してまた述べた。

「それはわかつておくことだ」

「性質が違うことはわかったよ」

「それについては」

魔神達はそう言われてもだ。まだ落ち着いていた。

そしてその落ち着きのままだ。彼等はさらに言った。

「わかったから。じゃあ」

「はじめるとしよう」

「早速な」

「気が早いものだな」

神は彼等のその言葉を聞いてだ。その顔も見下ろしたうえで今の言葉を発した。

「こちらの世界の住人達は」

「それはわかっておくことだ」

男も神に対して述べる。

「よくな」

「それが戦いにも関係するか」

「ないと言えば嘘になる」

そうだとしたのであった。

「それはな」

「そうか。嘘になるか」

「そういうことだ。では私はだ」

男の前に巨大な黒い渦が現れた。それは自分から男に向かってだ。彼をその中に覆い隠してしまたのである。

そうして姿を消したうえでだ。今度は彼が声だけになっていである。男、そして牧村達に対してだ。こんなことを言ってきたのだ。た。

「まず魔神達に言おう」

「何だ」

「それで何だというのだ」

「私もまた混沌の神だ」

言うのはこのことだった。



## 第五十三話 怪地その十六

「戦うことは嫌いではない」

「その様じゃな」

老婆が彼のその言葉を聞いて述べた。

「気配でわかるわ」

「それでか」

「わし等と戦いたいと言っておる」

そうだというのである。

「心の奥底でのう」

「大地に勝てるとは思ってはいない」

今彼等が対峙しているその大地の神にはというのだ。

「だが。私と戦う時になればだ」

「その時はか」

「思う存分戦うつもりか」

「そういうことだ。そのことを言うておこつ」

こつ魔神達に話すのであった。

「今ここでな」

「話は聞いたわ」

これが男の声に対する老婆の今の返答だった。

「聞きはした」

「しかしだというのか」

「そうじゃ。少なくともわし等はここでは倒れぬよ」

「そうね。それはね」

「決してありません」

美女と小男もそれを言う。

「目の前にいるこの巨大な相手にも勝って」

「私達は貴方に辿り着きましょう」

「言葉を偽りとするか真実とするか」

男は彼等のその言葉を受けた。そうしてまた話すのだった。

「それは貴様等次第だ」

「そういうことじゃな。では見ておるのじゃな」

「そうさせてもらおう」

こうしてだった。男は今は姿を消したのだった。その気配もだ。後に残ったのは魔神達に混沌の神、そして牧村と死神だった。

魔神達はすぐにそれぞれの真の姿を現した。そうしてだった。

牧村と死神もだ。構えに入った。そのうえでだ。

魔神達、そして混沌の神に対してだ。こう言うのだった。

「ではだ」

「戦うとしよう」

「待っておいでやろう」

神は余裕を以て彼等に告げた。

「貴様等が戦う姿になるまでだ」

「待つのか」

「そうするといふのか」

「そうだ。本来の強さの貴様等を倒す」

これが神の彼等への言葉であった。

「そうでなくては面白くとも何ともない」

「だからか」

「そえでなのか」

「その通りだ。では待っておこう」

神はそうした。そして魔神達もだった。

牧村と死神に対してだ。こう告げたのだった。

「じゃあさ。君達が変身してからね」

「はじめろぞ」

クマゾツツと逆さ男が彼等に告げる。

「それまで僕達は動かないから」

「待っておいでやろう」

「待つのか」

「貴様等もまた」

「僕達だけで先にはじめてもね」

クマゾツツが二人に話す。その彼がだ。

「面白くないから」

「面白くないか」

「そうなのか」

「そうだよ。だからだよ」

また言う。二人に対して。

「では今はね」

「少し待っている」

「私達の姿が変わるまでな」

こうしてだった。二人はそのまま変身に入るのだった。

牧村は両手を拳にして己の胸の前でその先と先を打ち合わせる。

死神は右手を拳にしてそれを己の胸の前に置く。そうするとだった。

二人共それぞれ青、白の光に覆われてだった。その光の中で。

髑髏天使と戦う姿になる。そのうえでだった。

右手を一旦開き握り締める。鎌を一闪させる。それからだった。

## 第五十三話 怪地その十七

彼等はそのうえで神に対してだ。こう告げた。

「行くぞ」

「刈らせてもらう」

「ではだ。はじまりだな」

神も二人の言葉を受ける。それが合図となった。

髑髏天使は黄金の六枚羽根の姿になり死神も漆黒の姿になる。その姿で巨大な神に向かいだ。早速攻撃を仕掛けたのだった。

髑髏天使はその両手の剣で斬りつけた。だがそれは。

跳ね返されてしまった。金属と金属がぶつかり合う鈍い音が生じた。神が言ってきた。

「見事な攻撃だ」

「しかしというか」

「そうだ。それでは我は倒せはしない」

こう髑髏天使に対して言うのだった。

「この我はな」

「身体を金属にしたか」

何故防いだか。それをすぐに察しての言葉だ。

「それで防いだか」

「地にあるのは土だけではない」

「こう述べる神だった。」

「金属もある。我はその中に金属もあるのだ」

「それも様々な金属がか」

「そうだ」

まさにその通りだというのである。

「そして他のものもだ」

「避ける」

死神が髑髏天使に告げてきた。

「来るぞ」

髑髏天使は彼の言葉の前に動いていた。そうしてだった。彼は上に飛んだ。するとそこまで彼がいた場所にだ。

マグマが来た。赤い、泥を思わせる激流がそこを襲った。そしてそれでだ。髑髏天使がそれまでいた場所を全て焼き尽くしたのだった。

髑髏天使はそのマグマを見てだ。死神に対して告げた。

「危ないところだった。月並な言葉だがな」

「そうなるな」

死神も彼のその言葉に応える。

「だが助かったのは確かだ」

「そうだな。それはな」

「今回は助かった」

また言う髑髏天使だった。

「しかしだ。次はな」

「楽観はしないことだな」

こう話す二人だった。攻撃をかわしてもそれで安心していなかった。そのうえでだ。神はだ。今度はその巨大な口からマグマを出して

きた。

そのマグマは瞬く間に拡散する。そうして。

二人だけでなく魔神達にも迫ってきた。それが増えていく。

「意志を持っていますね」

「そうじゃな」

百目とバーバヤーガが話す。

「このマグマは」

「明らかに」

「そうだ。このマグマは我そのものだ」

神もこう話すのだった。

「このマグマは貴様等を追う」

「追ってきますか」

「ふむ。そしてわし等を追い詰めるか」

「追い詰めそうして焼き尽くす」

神は己のマグマについて話す。

「それがこのマグマだ」

「貴方自身」

「そうなのじゃな」

「そうだ。ではだ」

神の言葉が続く。

「そのマグマに焼かれるがいい」

「何ということはないな」

髑髏天使はそのマグマ達が迫る中でもだ。落ち着いて言うのであった。

「この程度ではな」

「何ともないというのか」

「マグマには触れなければいい」

それだけでいいというのである。

「それだけでいい」

「そしてその前にだな」

「貴様を倒す」

そうするというのである。

## 第五十三話 怪地その十八

「そうすればいいのだからな」

「そう言うのだな」

「そうだ。貴様を倒す」

また言う鬨體天使だった。その両手の剣を掲げながらだ。

「ダイアにもだ。弱点はある」

「炎だな」

「ダイアは炭素の結晶だ。燃えるものだ」

この世で最も固いダイアも弱点はある。炭素の結晶であるが故に燃えるのだ。鬨體天使はそれを熟知してそのうえで述べたのである。

「だから貴様がダイアになろうとも」

「燃やすか」

「そうする。覚悟するのだな」

「私もだ」

死神も言ってきた。

「炎を操ることができる」

「それならばか」

「倒せる。必ずな」

「マグマに焼かれる前に我を焼くか」

神は二人の話を聞いたうえで述べた。

「いい考えだ。だが」

「だが。何だ」

「炎を防ぐことはたやすい」

こうだ。神は言い切ったのだった。

「実にな」

「たやすいというのか」

「炎を防ぐことはか」

「また言おう。たやすい」

また言う神だった。

「どうとでもなるものだ」

「まさか」

それを聞いてだ。百目が察したのだった。

「それは」

「察したか、魔神よ」

「ええ。貴方は今は」

「そうだ。炎で来るならばだ」

どうするかというのであった。そしてだ。

神はすぐにそうしてきた。まずは全身をダイアに変えた。白く輝く身体になった。それはこれまでとは違う光の姿だった。

だがそれは一瞬でだ。そのダイアの上にあった。

黒く蠢く泥を出したのだった。それでダイアを完全に覆ったのだった。つまり自身の全身をだ。泥で覆ってみせたのである。そうしたのだ。

「泥か」

「それで防ぐか」

「そうだ。泥ならばだ」

どうかとだ。髑髏天使達に述べるのだった。

「炎では焼けまい」

「確かにな」

「考えたものだ」

髑髏天使も死神もだ。それを認めた。

「そうするとはな」

「確かに炎はそれで防げる」

「さて、どうする」

泥で覆わせた身体でだ。神は問うた。

「それではだ」

「だがそれでもだ」

「倒す」



髑髏天使達の言葉は変わらなかった。そしてだ。

魔神達もだ。こう言うのだった。

「我々もだ」

「これで諦めたりはしない」

「絶対にね」

これが彼等のここでの言葉だった。

「貴様もまた倒す」

「そうさせてもらうぞ」

「その言葉は聞いた」

それはだというのだ。

「だが、だ」

「倒せはしない」

「そう言うのだな」

「その通りだ。我は容易に倒せはしない」

神はまた言った。

「炎が通じない。それでどうして倒すつもりだ」

「確かにそうですね」

百目が述べる。その無数の目から光を放つ。それで神を攻撃するがそれもだ。泥によってあえなく防がれていた。そうしながらの言葉だった。

## 第五十三話 怪地その十九

「こうしていても」

「通じないのがわかるな」

「泥だけならどうということはありませんが」

百目は攻撃しながらまだ言う。

「ダイヤは」

「そしてダイヤもじゃな」

ダイヤについてはだ。バーバヤーガが話した。

「ダイヤだけなら対処できた」

「そうだな」

ウエンティゴは神に冷気を浴びせた。しかしだった。

その冷気も通じない。泥に熱を帯びさせだ。常に動かしているからだ。

それならば泥は凍らない。神も考えているのだ。

「泥とダイヤか」

「その二つが合さればな」

「どうにもならないか」

彼等にとつてはだ。お手上げだと思われた。

しかしだ。ここで言ったのはだ。

髑髏天使だった。彼は落ち着いて言った。

「確かに手強い」

「我は倒せぬ」

「いや、手強いがだ」

それでもだ。髑髏天使は神に返した。

「それでもだ」

「倒せるというのか」

「そうだ。倒せる」

髑髏天使は確かな声でこう神に言うのだった。

「倒せない相手はない」

「相手はない」

「そう言うのか」

「そうだ、無敵の存在なぞいはしないからだ」

髑髏天使の今の主張の根拠はそこにあった。そうしてだ。

彼はだ。ここで剣を構えた。その両手に持つ剣を一つにしたのだ  
った。

そのうえでその剣を巨大化させた。己の何倍もある大きさの両刃  
の十字の剣にした。

そしてそれをだ。振り被ってから言うのであった。

「確かに今の貴様には炎は通じない」

「何度も言うのだな」

「そしてどんな攻撃も通じない」

「ダイヤにはな」

「泥でダイヤの唯一の弱点を消している」

「凍らせ泥を剥ぎ取らせもしない」

先程のウェンティゴの冷気への対処のことだった。

「それも言っておこう」

「そうだな。だが、だ」

「だが、か」

「それでも貴様は倒せる」

「今の我には何も通じなくともか」

「そうだ、倒せる」

また言うのだった。神に対して。

「今それを見せよう」

「どうする気だ、それで」

「いいか」

髑髏天使はここで死神に対しても声をかけた。

「俺が決める」

「勝てる算段はあるのだな」

「俺は勝てない戦いはしない」

これが死神に対しての返答だった。

「絶対にだ」

「そうか。それではか」

「これで決める」

髑髏天使は剣をさらに振り被った。そうしてだった。

その剣をだ。神に対して投げた。

巨大な剣が唸り声をあげて一直線に飛ぶ。そしてだった。

その剣がだ。神を貫いたのだった。それを受けてだ。

神がだ。驚愕の声を漏らしたのだった。

「何っ……」

「上手くいったな」

髑髏天使が言った。

「予想通りだ」

「ダイヤを貫いたというのか」

「どんな物質にも急所がある」

髑髏天使は驚愕する神に告げる。六枚の翼で舞いながらだ。神に

正対してだ。そのうえでその彼に対してこう告げるのであった。

第五十三話 怪地その二十

「ダイヤにもだ」

「ではそこをか」

「そうだ、衝いた」

まさにそうだというのである。

「そうさせてもらった」

「宝石の細工と同じだな」

死神がその髑髏天使に横から話した。

「そういうことだな」

「その通りだ」

まさにそうだと答えるのだった。

「それを応用させてもらった」

「そうか。貴様はどうやら」

「どうだというのだ」

「我の思った以上の存在だな」

髑髏天使はだ。神の考える以上の存在だというのである。

「それを今認めよう」

「そうか、それをか」

「認める」

また言う神だった。身体を青白い炎が包もうとしていた。

その死の中でだ。また話す神であった。

「確かにな。どんな石や鉄でもだ」

「その急所、欠点を突けばだ」

「崩れる。それがわかっていたか」

「言った筈だ。弱点のないものは存在しない」

髑髏天使は落ち着き払っていた。確信している言葉だった。

「そういうことだ」

「そうか。それではだ」

神は髑髏天使の言葉に頷いた。そしてだ。

「我は消えるでしょう」

「消えるか」

「そうだ。消える」

こうだ。髑髏天使に告げた。

「我はな」

「しかしだな」

死神は動いていない。だがその青白い炎の中に消えようとする神を見据えてだ。そうしてそのうえでその神に対して告げた。

「貴様が消えようとも」

「まだ二つの元素の神がいる」

彼等がだというのだ。

「そしてその先にもだ」

「あの男だな」

死神がまた言った。

「あの黒い男か」

「ナイアーラトホテップには誰も勝てはしない」

神は断言したのだった。

「何があるうともな」

「俺でもだというのだな。貴様を倒した」

「あの男は混沌を司る司祭だ。その司祭にはだ」

「俺ではか」

「そうだ。勝てない」

その言葉は変わらなかった。

「それを言うておく」

ここまで話してだ。神は青白い炎の中に消えた。これでこの戦いは終わった。

戦いが終わるとだ。神の代わりにだ。あの男が出て来た。そしてだ。

男はだ。髑髏天使達を前にしてこう言うのだった。

「まさかああして勝つとはな」

「貴様も予想外だった」

「そう言うのだな」

「そうだ。私の思惑を超えるとはな」

「こつは言ってもだ。男の言葉には感情が見られない。その感情の  
見られない言葉でだ。髑髏天使達に対して告げ続けるのだった。

「貴様達はもしやな」

「もしや」

「どうだというのだ」

「私と戦うかもな」

「このことをだ。今言ったのだった。

「そうなれば面白そうだな」

「貴様だけではない」

だが、だった。髑髏天使はこつその男に話した。

「貴様の向こうにいる」

「混沌の中心の二柱もか」

「あの連中も倒して滅ぼす」

そうするといふのであった。

「それは言っておく」

「話は聞いた」

「聞いたか」

「だが。言葉は現実になるとは限らない」

そのこともだ。髑髏天使達に対して告げたのだった。

第五十三話 怪地その二十一

「それは言っておこう。それではな

「消えるか」

「今は」

「そうさせてもらう。それではな」

こうしてだった。男は再び姿を消した。そしてであった。

男が姿を消すとだ。世界は元に戻った。それと共に魔神達は人間の姿になり髑髏天使達もその姿を元に戻した。そうしてなのだった。

紳士がだ。二人に告げた。

「ではだ」

「またか」

「次の戦いの時にだな」

「そうだ。その時に会おう」

こう告げるのだった。

「ではな」

「そうだな。それではな」

「また会おう」

「随分友好的だな」

死神は紳士の今の言葉にこう言った。

「変わったものだな」

「少なくとも今は敵同士ではない」

だからだ。紳士は死神のその言葉に答えた。

「これからはどうかかわらないがな」

「だからか」

「そうだ。敵同士でなければだ」

どうかとだ。紳士はこのことも話した。

「特に敵意を向けるつもりはない」

「そういうことだ。それじゃあな」



ロッカーは仲間達に顔を向けてだ。その彼等に対して言った。

「今からどっか行くか」

「はい、そうですね」

老人が彼に穏やかな笑顔で応えた。

「それでは。今から」

「何処に行く」

「百貨店に行きましょう」

こうロッカー達に勧めもした。

「そこで何か食べましょう」

「いいね、それは」

「そうだな」

彼のその提案に女と男が賛成した。

「あそこは食べる以外にも色々もあるしね」

「いるだけで楽しめる」

「買い物もできるね」

美女も言った。

「それならそこでね」

「はい、では行きましょう」

老人は彼等の賛成の言葉を受けてだ。あらためて同志達に述べた。

「今日はそこで遊ぶとしましょう」

「では行こうか」

青年が応えてだ。そのうえで百貨店に向かうのだった。

その向かおうとする彼等にだ。牧村がふと問うた。

「待て」

「何でしょうか」

「何かあるのかのう」

小男と老婆が彼に応えた。百貨店に向かおうとした足を止めてだ。

「もう戦いは終わりましたが」

「それでも何かあるのじゃ？」

「金のことだ」

彼が問うのはこのことだった。

「貴様等は遊んでばかりだが」

「それでもですか」

「何故金が続くかじゃな」

「そうだ。労働はしていないな」

このことをだ。彼等に話した。

「人間でない限りはな」

「はい、その通りです」

労働をしていないことをだ。老人が認めて答えた。

「私達に労働は関係ありません」

「そうだな。しかし金はあるのか」

「お金なぞはどうとでもなります」

老人は素っ気無い口調で牧村に答えた。

第五十三話 怪地その二十二

「それはです」

「それは何故だ」

「こうすればいいだけですから」

老人は牧村に右手の平を見せた。するとだ。

そこにだ。宝石が出て来た。赤いルビーであった。

それを牧村に見せてだ。穏やかに笑って述べた。

「この宝石を売ればそれで」

「金はできるか」

「私達は大気から金や宝石を作れますので」

「これも神の力だよ」

子供も明るく笑って言う。

「だからね。お金のことはね」

「何の心配もないか」

「そういうこと。魔物にとってお金なんて何でもないよ」

笑ってまた話す子供だった。

「気にしたこともないし」

「そういうことか」

「おわかり頂けましたか」

老人はあらためて彼に話した。

「そのことは」

「わかった。そういうことか」

「それでは。これで」

老人はまた穏やかな顔で牧村に述べた。

「百貨店で遊んできますので」

「好きにしる」

牧村は彼等が百貨店で遊ぶことにはこう言うだけだった。特に何も思うことはなかった。それがそのまま言葉になって出ていた。

「楽しんでくるといい」

「はい、それでは」

「じゃあね。またね」

最後に子供が手を振った。そうしてだった。

彼等は百貨店に向かった。そして残ったのは二人だった。

今度は死神がだ。彼に言ってきた。

「ではだ」

「貴様も去るのか」

「私は元の世界に戻る」

「貴様のいるその世界にか」

「そうだ、戻る」

彼の神族のいるその世界にだ。そこに戻るといふのだった。

「ではな。またな」

「そうだな。またな」

「その時まで精々生きることだ」

己の前にハーレーを持って来ての言葉だった。ハーレーは己で走

つて彼の前まで来てだ。そうしてその彼の前で停まったのだった。

「最後までな」

「最後までか」

「混沌を完全に倒すまでだ」

具体的にはそこまでであった。

「いいな、生きろ」

「言われなくともな」

「そうするか」

「死ぬつもりはない」

彼もだ。サイドカーを己の前まで走らせて停めてから述べた。

「戦いが終わってからもだ」

「生きるか」

「だから今死ぬつもりはない」

こう死神に話すのだった。

「決してな」

「ならいいがな」

「さて、鬭いが終わりだ」

牧村はここで言葉を変えた。

「落ち着きたくなった」

「では店に戻るか」

「いや、家に帰る」

そうするというのであった。

「家に帰りそうしてだ」

「そこで落ち着くか」

「そうする。アイスでも食べてな」

「ならそうするといいい」

死神はヘルメットを被った。バイクに乗る時のそのヘルメットを  
だ。

第五十三話 怪地その二十三

そしてハーレーに乗りだ。牧村に告げた。

「ではだ。私もだ」

「帰り。落ち着くか」

「そうする。それではな」

「またな」

こうしてだった。彼等は別れた。牧村は家に戻り玄関から台所に向かった。そこで冷蔵庫を開ける。しかしそこにはそれはなかった。彼はそれを見てだ。すぐにわかったのだった。

「食べたか」

「ああ、おかえり」

後ろからだ。妹の音がしてきた。

「どうしたの？アイス？」

「アイスクリームはないのか」

「全部食べちゃったわよ」

いつも通りの返事であった。

「もうね」

「食べたのか」

「アイスクリームならあるじゃない」

そちらはだ。あるというのであった。

「それ食べたら？バナラでもチョコでも」

「しかしアイスクリームはないのか」

「だから全部食べたから」

未久の返事は変わらない。実にあっけらかんとさえしている。

「もうないわよ」

「そうか」

「ないものを欲しがっても仕方ないじゃない」

このことは正論だった。とりあえずはだ。

「だから。それ食べたなら？」

「アイスクリームか」

「うん。何ならコンビニで買ってきたらいいし」

「そこまでする気はない」

牧村はいささか無然として述べた。そうしてだ。

アイスクリームの中からバニラを取った。それを手にして椅子に座った。

スプーンはもう持っている。それで食べはじめた。

美味いとは思った。しかしそれでもこう言うのであった。

「俺はだ」

「アイスクャンデーを食べたかったのね」

「何故いつもない」

妹に顔を向けて問う。能天気な調子で牛乳を飲んでいる彼女をだ。

「御前はいつも食べ尽くすな」

「だって好きだから」

悪びれることのない返事だった。

「その代わりアイスクリームはいつも置いてるでしょ」

「それはそうだがな」

「アイスクリームだって好きなのよ」

「俺もアイスクャンデーも好きだが」

「いいじゃない。お兄ちゃんにはアイスクリーム置いてるから」

「全く。勝手だな」

無然とした声で妹に告げる。

「たまにはアイスクリームにしる」

「じゃあアイスクャンデー食べてアイスクリームも食べるわね」

「太るぞ」

言葉が剣になった。

「そこまで食べたなら」

「そう来るのね」

「太らなければ腹を壊す」

そのケースも言うのであった。

「どちらがいい」

「当然どっちも嫌よ」

「それならアイスクャンデーだけにしろ」

折れた形になっていた。妹の勝手な我儘にだ。

「仕方のない奴だ」

「まあまあ。アイスクリームでも食べて」

「そうだな。これは貰う」

「今度マジックでアイスクリーム食べようね」

未久は笑顔でこんなことも言ってきた。

「若奈さんと一緒にね」

「俺が作ったアイスをか」

「うん、それをね」

まさにそれをだというのだ。



第五十三話 怪地その二十四

「食べようね」

「そうだな。それではだ」

「どんなアイスを作ってくれるのかな」

「抹茶アイスはどうだ」

それはどうかというのである。日本独自のアイスの一つだ。

「あれはどうだ」

「いいわね。私あれ好きなのよ」

「ではそれをな」

「期待してるからね」

「わかった。それとだ」

ここでだ。妹を見てだ。こつも言った兄だった。

「牛乳をくれ」

「御兄ちゃんも飲むの」

「牛乳は美味い」

最初の理由はこれだった。

「そしてだ」

「そしてなの」

「身体にもいい」

それで飲むというのである。

「飲んでいて損はない」

「そうよね。飲んだら背も高くなるしね」

「だが御前は背は」

「ああ、私はそれはね」

いいとだ。笑顔で兄に話すのだった。

「実際にそうだけれどね」

「しかし他のことか」

「そう。カルシウムがあるし」

牛乳はカルシウムの塊である。その他の栄養も当然ながら豊富である。

「だからね」

「それでだな」

「そう。体操もしつかりとした身体がないとね」

未久はにこりと笑って述べた。

「いざって時に怪我とかするから」

「怪我だな」

「体操もね。怪我が怖いだよ」

未久の顔がここでは真剣なものになった。

「骨折とかもあるし」

「筋や腱もだな」

「そうそう。ぶちつとかいっいたら怖いだよ」

こう兄に話す。

「だから。そうならない為にね」

「牛乳も飲むか」

「そうしているのよ。御兄ちゃんよね」

「そうだ。食べることも強くなるうちの一つだ」

「そうよね、本当に」

「しかし。御前はそれでもだ」

また妹を見る。そうして今度言う言葉は。

「アイスクャンデーはな」

「独占し過ぎだっというのね」

「そうだ。あまりにもな」

「だからアイスクリームは残してるじゃない」

「だからいいか」

「そう思っけれど？」

「全く。勝手な話だな」

そうは言ってもだ。しかしだった。

結局のところ妹の言葉を受け入れた。そうしてだった。

牛乳を受け取って飲んでだ。それからだった。

牧村はだ。牛乳を飲みながらまた話した。

「今度は俺でアイスキャンデーを買っ」

「それで自分で食べるの」

「そうする、食べたい時はな」

「うん、それがいいわね」

「家にあると御前が全部食べるからな」

「実際食べるわよ」

悪びれずにだ。堂々と言い切る未久だった。

「あればね」

「我慢するしかないか、俺が」

「我慢はしなくていいけれど」

「しかし御前は家にあるアイスキャンデーは」

「家にあるのを食べるだけよ」

「俺が買ったものは食べないか」

「家にないとね」

その場合はというのだ。やはり悪びれない。

そして悪びれない未久は兄と共に牛乳を飲んでいく。確かに言い合いはする。しかしそれでもだ二人は共にその牛乳を飲むのだった。

## 第五十三話

完

2011・2・14

## 第五十四話 邪炎その一

髑髏天使

### 第五十四話 邪炎

魔神達は人の姿でだ。百貨店の中のアチコチを回っていた。そしてだった。

そのうえでだ。彼等はだ。楽しい顔をしていた。その中で子供がだ。こう老人に声をかけた。

「ねえ百目」

「何でしょうか」

「今度はどのお店に入る？」

笑顔でこう老人に尋ねたのだった。

「一体さ。どのお店にするの？」

「そうですね。本屋はどうでしょうか」

「本屋？じゃあ漫画でも読もうかな」

「クマゾツツは漫画が好きでしたね」

「うん、大好きだよ」

実際にそうだという子供だった。

「野球漫画が特にね」

「野球漫画か」

大男がそれを聞いて述べた。

「そうだな。野球はな」

「逆さ男も好きだな」

「そうだ。観ていて実に楽しい」

その通りだとだ。大男はロッカーに話した。

「他にはアメリカンフットボールか」

その球技の名前も出て来た。アメリカで人気の、非常にハードなスポーツだ。その激しさは格闘技だと言ってもいい程である。

「あれもいいな」

「そうか。あれも好きか」

男が大男の言葉に応えて言ってきた。

「あのスポーツも」

「スポーツはいい」

実際にこう言う大男だった。

「観ているだけでな。それだけで楽しくなる」

「するのはどうだ」

「そちらか」

「そうだ。それはどうだ」

「嫌いではない」

こう男に答えた。

「そちらもか」

「そうか」

「そうだ。ただプロになることはだ」

「興味がないか」

「なれるかも知れない」

人間に化けてだ。それは可能だというのだ。

「しかしそこまではだ」

「しないか」

「金には困らない」

以前牧村達に見せたその事情からのことだ。

「だからだ」

「それはしないか」

「そうだ。ただ純粋に楽しむだけだ」

それだけだというのである。

「俺はただそれだけだ」

「そうか」

「そういうことだ。さて」

本屋に向かう。そうしてだ。

大男は野球に関する雑誌を買った。その中でまた仲間達に話した。

「この雑誌がいいな」  
「週刊ベースボールね」  
「この雑誌は実に面白い」  
今度は美女に対して述べていた。満足している顔でだ。  
「勉強にもなる」  
「野球の勉強になの」  
「そつだ。野球は勉強のしがいがある」  
「そつしたものだつだ。大男は話すのつだつた。」  
「この国には十二の球団があるが」  
「そつですね。多いでしようか」  
老人は囲碁の雑誌を見ている。それを読みながら話す。  
「日本に十二のプロ野球の球団は」  
「少ないだつらうな」  
「少ないですか」  
「チームはもつと多くていいだつらう」  
「こつ老人に話すのつだつた。」  
「減らすのは持つての他だ」  
「そついえば以前そつした話があつたそつで」  
「あいつだね」  
子供はホビー雑誌を開いている。色々な雑誌がある。

## 第五十四話 邪炎その二

「あの新聞社の社長だね」

「あいつには賛成できるところがない」

男の口調は忌々しげなものになっている。

「何一つとしてな」

「確かにね。その通りだね」

それには子供も同意して頷く。

「人間には色々いるけれどね。あいつはね」

「最も嫌いな人間だ」

大男はその言葉に明らかな嫌悪を見せている。

「人間の中でな」

「そうですね。人間は見ていて楽しいものですが」

小男も雑誌を読んでいる。彼は文芸雑誌である。

「それでも。中にはです」

「卑しい人間や悪人もいるな」

「そして傲慢な人間もですね」

「傲慢は嫌いだ」

大男はまたその声に嫌悪を含ませている。

「何よりもだ」

「我々も気をつけなくてははいけませんね」

小男は人間を反面教師として話した。

「ああなつては本当に終わりです」

「その通りね。人間は見ていて参考になるわ」

女はファッション雑誌である。美女も同じだ。

「いい意味でも悪い意味でもね」

「その通りじゃな。さて」

老婆は料理雑誌だ。実に様々な雑誌がある。

「今度は何処に行くかじゃな」

「本屋で本を買った後で」

「何処に行こうかのう」

「こう老人にも話す老婆だった。」

「一体何処に行こうかのう」

「時間はあります」

老人はそれはあると述べた。

「ですから適当な場所を巡ることもです」

「よいかのう」

「そう思います」

「こう話すのだった。」

「それも」

「では今はじゃな」

「はい、めぐりましょう」

こんな話しをしてだ。彼等は百貨店の中を適当に遊んでいた。人間の世界の中でだ。楽しく遊んでいた。そこに喜びを見出してだ。そして牧村はだ。マジックにいてだ。そこでマスターからアイスクリームの作り方を教わっていた。そうして実際に作ってみるとだ。

見事なバニラのアイスクリームだった。それができたのであった。マスターはそれを見てだ。満足した顔で言うのであった。

「いいねえ」

「これでいいのか」

「いいよ、とてもね」

「こう返すのであった。」

「その調子で作っていけばいいよ」

「そうか」

「最初から美味しそうなアイスを作るなんてね」

「それは難しいか」

「アイスは難しいんだよ」

牧村に対して話す。

「何から何までね」



「そうだな。確かにな」

実際に作ってみてだ。牧村もそれがよくわかった。それを言葉にも出す。

「素材を混ぜることからな」

「難しいだろ」

「しかもそれを美味しく作ることは」

「さらに難しいだろ？」

「その通りだ。ケーキも難しいが」

そちらを作ることの難しさもだ。彼はよくわかっていた。

「だがアイスもだな」

「そういうことだよ。けれど何度も作って」

「そうして身に着けていくか」

「どのお菓子でも同じだけれどね」

経験によって次第に美味しいものを作っていくことはだ。同じだといっているのである。

「特にこのアイスは」

「経験か」

「そう、経験がものを言うんだ」

そしてだ。マスターはこの格言も出した。

## 第五十四話 邪炎その三

「九十九パーセントの努力だよ」

「一パーセントの才能よりもか」

「一パーセントの才能は誰にもあるからね」

「そうだな。全く才能がないということはない」

「基本的にないんだよ」

こっぴくに話すマスターだった。

「そういうものだからね。それに」

「それにか」

「君にはお菓子作りにかけては確かな才能があるね」

「俺にはあるか」

「あるよ。充分にね」

そうだとするのである。

「二パーセントはあるね」

「二パーセントか」

「いや、その二パーセントが凄んだよ」

マスターはいささか真面目な顔になってた。そのうえで彼に述べた。

「普通の人にはそんなに才能がないんだよ」

「その二パーセントもか」

「実際には一パーセントがあれば立派なものだからね」

「一パーセント。その九十九パーセントのうちにか」

「そういうことだよ。けれど君は二パーセントあるから」

「そこに九十九パーセントの努力か」

「それで全然違うね。ただ」

ここで、だった。マスターは彼にこんなことも話した。

「普通は誰でもどんなことでも多少の才能はあるけれどね」

「例外もあるか」

「誰にもそうした例外はあるからね」

こう話すのだった。

「君の場合は接客だね」

「自覚している」

自分のことだからだ。それは彼もよくわかっていた。その無愛想さとぶつきらぼつな口調はだ。他の誰よりもよくわかっているのだ。それをだ。彼は自分で言うのだった。

「それはな」

「そうなのかい、やはり」

「前に出るのは駄目だな」

「間違つてもウェイターにはならなくてくれよ」

顔は笑っているがそれでもだ。目の光は真剣なものだった。

「そうしたことは若奈がやるからね」

「わかった」

「君はお菓子作りに皿洗いに」

これも喫茶店において欠かせない仕事である。それは確かだ。

「それと用心棒だね」

「用心棒か」

「そう、フェシングをしてるね今は」

「自信はある」

それもかなりだった。髑髏天使としての戦いのことはあえて話さないがだ。

「だからだ。それはだ」

「できるね」

「大抵の相手。拳銃と持つてしてもだ」

「いけるのかい」

「拳銃も当たらなければ意味がない」

少なくとも髑髏天使としての戦いにおいてはだった。そうしたもののなぞ問題にならない、そこまでの戦いが常である。だからこう言えたのだ。

「安心することだ」

「わかったよ。じゃあ用心棒もね」

「やらせてもらう」

「そういうことだね」

こんな話をしながら作ったアイスクリームを盛り合わせていた。そこにだった。

若奈とだ。二人の少女が戻って来た。その二人の少女はというと、顔も背丈もスタイルもだ。実に若奈によく似ていた。ただし一人、年長の娘は髪が長くもう一人はまだセーラー服だ。その二人だった。その二人がだ。牧村の姿を見て彼に笑顔で声をかけてたのだ。

「あつ、牧村さん来てたの」

「アイスクリーム作ってたの」

「そうしてるんだ」

「そうだ」

その通りだとだ。牧村も彼女達に返す。

## 第五十四話 邪炎その四

「はじめて作った」

「はじめてって割には」

「そうよね」

二人の少女は彼が作ったそのアイスクリームを見て二人で話す。

「随分慣れた感じよね」

「相変わらずお菓子作るの上手いよね」

「プロみたいよね」

「その域に達してるわよね」

「ははは、御前達にもわかるんだな」

マスターは二人の少女の言葉を聞いて笑顔で言った。

「このアイスクリームの凄さが」

「だってねえ。お菓子いつも見てるし」

「それに食べてるし」

それでわかるというのである。

「喫茶店の娘だから」

「わかるわ」

「そうだ、それでいいんだ」

マスターは娘達のその言葉に満面の笑顔になる。まさに父親の顔だ。

「それがわかるようになるまでが大変だからな」

「美味しいお菓子かどうかを目でなのね」

「わかることがよね」

「その通りだ。そしてだ」

さらに話すマスターだった。

「見るよりもわかることはだ」

「食べることよね」

「やっぱりそうよね」

「その通りだ。食べるか？」  
娘達に笑顔で告げる。

「このアイスを」

「あつ、食べていいの？」

「このアイス」

二人は今の父親の言葉に表情を明るくさせた。そうしてであった。  
あらためてだ。父にこう言った。

「お姉ちゃんの分もあるわよね」

「ちゃんと」

それについても尋ねるのだった。姉の分もだ。

「アイスクリーム」

「三人公平によね」

「当たり前だ。娘が三人だぞ」

その三人だというのだ。

「それなら三人公平にが当たり前だろう」

「そうよね。じゃあ三人でね」

「お姉ちゃん、食べようね」

二人でその笑顔でだ。若奈に話すのだった。

「牧村さんの作ったアイスクリームね」

「将来のお嬢さんの」

「ちよっと、何言ってるのよ」

お嬢さんという言葉にはだ。若奈は顔を赤くさせて反論した。

「牧村君はそんな」

「だから。わかってるから」

「そういうことはもうね」

妹達の方が一枚上手だった。顔を赤くさせる姉にこう返すのだった。

「だからお父さんだって牧村さんに教えてるし」

「それでよね」

「うう、だから違うから」

「まあいいじゃないか」

マスターは若奈が困っているのを見てさりげなく助け舟を出した。

「若奈もアイスを食べるよな」

「え、ええ」

その通りだとだ。若奈も答える。

「それじゃあ」

「さて、じゃあ盛り付けをするからな」

マスターは早速そのアイスクリームの盛り付けをはじめた。それが実に早い。しかも的確な動きである。

それで五人分のアイスクリームを皿に乗せてだ。そうして五人で食べる。

食べてだ。すぐに二人の妹達が言った。

「うん、やっぱりね」

「そうよね」

「美味しいわよね」

「はじめて作ったなんて思えないわ」

「そうか」

牧村の無愛想さは二人に対してもであった。

## 第五十四話 邪炎その五

「それならいいがな」

「うん、甘くてそれで食べやすいし」

「いい感じですよ」

二人もにこりと笑って牧村に返す。三姉妹はカウンターに座り牧村とマスターはカウンターのなかでだ。立って食べているのであった。その牧村にだ。二人は話すのだった。

「この味ならすぐにお店に出せます」

「本当に」

「いや、まだだ」

しかしだ。牧村はここでこう言うのだった。

「それはまだだ」

「まだですか」

「そうですね」

「もう少し工夫が必要だ」

牧村は冷静な声で述べる。

「もう少しな」

「もう少しですか」

「そうですね？」

「御客さんの舌は厳しい」

現実を見た言葉であった。それもかなり厳しい。

「だからだ。これでいいということはない」

「シビアですね、その辺り」

「とても」

「けれどそれでいいんだよ」

マスターはこう娘達に述べた。

「現状に満足しない、そうしてより高みを目指してこそなんだよ」

「何かの漫画みたいなこと言うわね、お父さんも」



「そうよね。探偵ものの女怪盗みたいに」  
二人はここでこんなことを言った。  
「けれど確かに」  
「そうよね。今に満足したらね」  
「それで終わりよね」  
「進歩はしないわね」  
「そうだ。満足したら終わりなんだ」  
マスターは父親として語る。  
「そういうものなんだよ、全部ね」  
「全部なの」  
「そうなの」  
「この世の中にあるものは何でもそうなんだよ」  
「こう娘たちに話すのであった。」  
「全部ね」  
「うん、じゃあ何でも努力しないといけないのね」  
「そうなんだ」  
「そう。少しずつでもいいから努力を続ける」  
言葉は継続にもなった。  
「それが大事だからね」  
「じゃあ私達もね」  
「いつも。努力してね」  
「そうしていかないといけないのね」  
「先に進もうと思ったら」  
「そういうことよね」  
若奈もだ。ここで頷いた。  
「私だって。やっぱり」  
「そうだな。俺もだな」  
「そう、牧村君はこのまま努力すればね」  
「もっとよくなるか」  
「うん、九十九パーセントの努力を続ければね」

「天才になれるか」

「お菓子作りの天才になれるよ。それに」

「プラスアルファだった。そこに加えてだった。」

「このお店を任せられるようになれるね」

「この店？」

「そうだよ。若奈と結婚するんだよね」

「このことをだ。マスターも話すのだった。」

「そうするんだよね」

「それは」

「あれっ、そうよね」

「牧村さんお姉ちゃんと結婚するのよね」

二人の妹達もだ。ここで話すのだった。

## 第五十四話 邪炎その六

「それもう決まってるのよね」

「違うの？」

「お母さんそう言ってたよね」

「そうよね」

二人もそう思っていた。そしてだった。

さりげなくだ。その言葉からだ。牧村はとんでもないことを知った。そしてそのことをだ。彼自身も言葉に出して言うのであった。

「しかし」

「しかし？」

「しかしって？」

「今言ったな。ここの奥さんが」

「うん、言ってたよ」

「牧村さんがお姉ちゃんと結婚するってね」

二人は実にあっけらかんとして牧村に話す。アイスを食べながら。

「それでお店継ぐってね」

「そう言ってたから。笑顔で」

「何時そうなった」

牧村はこのことにいささか唾然となっていた。

「俺は。この店に」

「そくだよ。嫌なのかい？」

マスターもだ。彼に笑顔で言った。

「ひよっとして」

「いや、それは」

「いいね。じゃあ大学を卒業したら早速」

「ちよっと待ってよ」

若奈がだ。マスターがさらに言うのを止めた。

「お父さんも何言ってるのよ」

「おいおい、若奈までそう言うのかい」

「言うとかそういうのじゃなくてよ」

顔を顰めさせてだ。そのうえでの言葉だった。

「だから。私はね」

「若奈は？」

「そこまでは考えていないから」

こう父に話すのだった。

「そんな先のことまでは」

「先のこととはっていうのか」

「そうよ。そこまではね」

「じゃあ待つか」

父は一旦退いてみせた。

「その時をな」

「そうよ、待ってて」

さりげなく否定はしないのであった。若奈自身もだ。

「その時をね」

「そうさせてもらうか。じゃあ牧村君は」

「また俺か」

「暫くは修業だな」

こう彼に告げるのであった。笑顔でだ。

「このマジックでな」

「お菓子作りに皿洗いにか」

「それも掃除もね」

それもあるのだった。

「掃除も大事だからね」

「そうそう、お店を持ってるよね」

「どうしても大事になるわよね」

妹になる予定の二人も言う。見れば見る程その顔は若奈に似ている。声もだ。

「だからお兄ちゃんにはね」

「そつちの修業もね」

「何時の間にか兄か」

牧村はまた気付いた。

「話が。勝手に動くな」

「気のせいだよ」

「そうよ。それはね」

二人は牧村に対して楽しげに話す。

「お兄ちゃんになるのはもう決まってたし」

「随分と前にね」

「随分とだと」

この言葉もだ。牧村には聞き捨てならないものだった。

それで僅かであるが眉を顰めさせてだ。二人にあらためて問うた。

「となると何時にそうなった」

「ええと、中学の時？」

「そうよね、その頃よね」

二人は顔を見合わせてそんな話をはじめた。

## 第五十四話 邪炎その七

「御姉ちゃんが中学の時にね」

「決まったよね」

「私まだその時小学生だったけれど」

「私なんて子供だったけれど」

それを聞くとだ。かなり昔に聞こえるのだった。

「覚えてるしね、御姉ちゃんが言ってたの」

「うん、はつきりとね。牧村さんとね」

「結婚するってね」

「言ってたから」

「ちよ、ちよつと二人共」

妹達の言葉に慌てたのは長姉だった。顔を真っ赤にして同じ顔をしている妹達に言う。尚背の高さまで同じ位だ。三人共実によく似ている。

「私そんなことは」

「言ってるじゃない」

「ねえ」

しかし妹達は真剣な顔で述べる。

「今だってね」

「言ってるから」

「そんなこと言ってないわよ」

何とかそれを否定しようとする彼女だった。明らかかな言い繕いであったもだ。

「そうよね。お父さんだって聞いてないわよね」

「まあそういうことにしておくか」

父は苦笑いと共にこう言うのだった。

「今はな」

「その言い方じゃ何か」

「いいじゃないか。どっちにしる牧村君はうちの店に来てもらう」  
最低限のことさえ隠しているかどうかわからない言葉ではあった。  
「そういうことだな」  
「それは絶対になのね」  
「絶対なのはそこまでにしておくか」  
店に来るという意味をわざとぼかしての言葉だった。  
「そういうことだな」  
「何かその言葉も聞いてると」  
若奈は眉を顰めさせて父に返した。  
「狐につままれたみたいない気持ちになるけれど」  
「ははは、狐か」  
「ええ。狐にね」  
言う言葉はそれだった。  
「そんな感じになるわ」  
「じゃあ今日はきつねうどんにするか」  
「そこで何でそうなるのよ」  
「若奈が狐と言ったからだよ」  
腕を組んでだ。笑って娘に返す。  
「それだよ」  
「何か今一つよくわからないけれど」  
「そうか？」  
「そうよ。だから何できつねうどんなのよ」  
それがだ。どうしてもわかりかねている若奈だった。顔にもそれ  
が出ている。  
「狐につままれたって言ってそれでって」  
「わかるわよね」  
「そうよね」  
ところがだった。妹達もここでこう話すのだった。  
「お父さんが何を言いたいのか」  
「結構あからさまよね」

「そうそう」

「そう?」

姉は妹達に口を尖らせる様にして顔を向けた。

「わかるの?」

「簡単というか単純な連想よね」

「もう考えるまでもない位にね」

「そうなの」

首を傾げさせて言う今の若奈だった。

「もう何が何だか」

「落ち着くことだ」

牧村はこう言ってだ。彼女に飲み物を出して来た。アイスティーだ。

その紅茶にはミルクが添えられている。銀色の小さなポットにだ。それとストローだ。それを差し出してからまた言う彼だった。

「これでも飲んでな」

「紅茶ね」

「アイスに合わせた」

それでアイスティーだというのだ。

「よかつたらな」

「これを飲んで落ち着けっというのね」

「茶は落ち着く」

その葉にそうした効用があるからだ。当然のことである。



## 第五十四話 邪炎その八

「だからだ。どうだ」

「わかったわ。それじゃあね」

「飲むか」

「そうさせてもらうわ」

こうしてだった。若奈はストローの紙のカバーを取りそこからそれを出し紅茶の中に入れる。氷が先に当たるがそれをかわしてだ。

そのうえで銀色のポットを手にしてミルクを中に入れる。それからストローでかき混ぜる。

すると紅茶の紅とミルクの白が混ざり合いだ。白が瞬く間に紅と一つになり独特の、茶色を思わせる中間色になったのだった。

紅茶をその色にしてだ。それからだった。

若奈は紅茶をストレートで飲む。それを飲んでから話すのだった。

「美味しいわ」

「美味しいか」

「ええ、美味しいわ」

こうだ。若奈は牧村に対して話した。

「紅茶を淹れるのもかなり上手なのね」

「そうだった」

「なったの？」

「最初はそうではなかった」

牧村は静かに話した。

「最初はな」

「違ったの」

「未久に言われた。最初にアイステイーを淹れた時にな」

話はそこまで遡ることだった。

「こんなまずいアイステイーはないとな」

「ああ、未久ちゃんねえ」

マスターはだ。彼女の名前を聞いて笑顔になった。そうしてだつた。

「あの娘ははつきりと言うからね」

「これ以上はない位に言われた」

「だろうね。毒舌だからね」

「特に俺にはそうだ」

兄である彼には特にだというのだ。

「言うことに容赦がない」

「あの娘らしいよ、本当に」

「いい娘だけれどね」

「口は悪いのよね」

娘二人もそれを話す。彼女達も未久と知り合いなのだ。友人と言つてもいい。

「けれどそれでもね」

「牧村さんには容赦がないから」

「それでなのね」

若奈がまた牧村に対して問うた。

「最初のアイステイは失敗だったの」

「俺も飲んでみたが駄目だった」

まさにそうだというのだ。

「どうしようもなかった」

「牧村君でもそうなの」

「ホットティーとはまた違っていた」

「そうそう、同じ紅茶でもね」

マスターは腕を組んで考える顔になって述べた。

「ホットとアイスじゃ全然違うからね」

「俺はその時はまだそれがわかっていなかった」

「そのうえでの失敗だった」

「不覚だった。しかしだ」

それでもだというのだ。

「あの失敗があつたからだ」  
「このアイスティーがあるのね」  
「そういうことだ。失敗したからこそこうして淹れられる」  
若奈に述べながらだ。彼女が今飲んでいるそのアイスティーを見ている。  
「これも努力か」  
「そうだよ、努力だよ」  
その通りだと話すマスターだった。  
「立派だね」  
「そうか。これもか」  
「上手になるうとする。これが努力なんだ」  
彼はまた話した。  
「だから君もね」  
「そうか。努力はそうしたものか」  
「失敗は成功の母。事実だよ」  
「ではだ。駄目な奴は何をやっても駄目というのは」  
「ああ、それは間違いだから」  
マスターはその言葉ははっきりと否定した。

## 第五十四話 邪炎その九

「それは絶対にだって言えるね」

「間違いか」

「そうだよ。人間は努力して何もかもができるんだよ」

「しかしそうした努力を否定する発言はか」

「間違いだよ。そんなことを言う人間こそね」

「駄目か」

「うん、駄目だよ」

マスターは少し厳しい顔になって牧村に話す。

「娘達にもそんなことを言う教育はしていないしね」

「そうそう、お父さんそういうところには厳しいのよね」

「凄くね」

若奈の妹達もそうだと話す。アイステイーを飲みながら。

「努力を否定することはね」

「絶対にしないし許さないから」

「僕は実際に見てきたんだ」

マスターの顔は今度は難しいものになっている。牧村に向けている言葉だ。

「そうしたことを言う人をね」

「それで言えるか」

「自分が一番駄目だったよ」

そうだったというのである。確かにだ。努力を否定する人間は努力をしない。それならばだ。何かを果たせる筈がないのである。

「何もかもがどうしようもない人だったよ」

「そいつは今どうしている」

「さて。どうなったかな」

まさにどうでもいいといった感じの返答だった。

「他人が仕事をしていても呆けているような人だったから」

「ぼつつとして何もしなかったのか」  
「うん、全然ね。それで言われたら」  
「逆に怒ったか」  
「そういう人だったからね」  
「そうした人間がどうなるかもだ。まさに自明の理であった。」  
「皆最後には何も言わなくなったし」  
「言わなくなったか」  
「そして最後はね」  
末路についての話になった。  
「とんでもないことをして。終わったよ」  
「終わったか」  
「今はどうしているやら」  
「項垂れる様な顔でだ。腕を組んでの言葉だった。」  
「もつわからないんだよ」  
「わからないって」  
「どうなったのかもなの」  
娘達も父であるマスターの言葉に啞然となる。  
「それじゃあ死んでるかも知れないのね」  
「その可能性もあるの」  
「そうなっていてもおかしくはないなあ」  
マスターはぼやく様な声で娘達に答えた。  
「冗談抜きでとんでもない人間だったからね」  
「とんでもない馬鹿だな」  
牧村は話を聞いてこう解釈した。  
「つまりは。そうだな」  
「そうだよ。そうなるよ」  
まさにその通りだというのであった。  
「残念な話だけれどね」  
「愚かさ故に滅んだか」  
「人の話は全然聞かないしことの善悪もつかないし」

そうした意味での愚かだといっているのである。愚かにも色々な種類がある。だがその種類の愚かさはだ。まさに最悪のものであった。

「それでだっただよ」

「そんなのじゃあね」

「破滅するわよね」

「つていつか破滅しない方がおかしいね」

「そうよね」

こう話す娘達だった。

「ちよつとねえ」

「何ていうか」

「そんなのじゃね」

「とてもね」

娘達にもわかることだった。そしてだ。

彼女達はだ。こんなことも話した。

「そんな人間にならないようにしないとね」

「なったら終わりよね」

「もうね。人間としてね」

「そうね」

自分達への戒めとしたのである。固く誓うのだった。

## 第五十四話 邪炎その十

そんな話をしてだ。牧村は店でアイスクリーム以外のことも学んだ。それは人生において重要なことだった。そうした話をしてからだ。

外に出た。そして一旦街に出た。あるものを買うのだった。

アイスクリームだ。洋菓子屋に入りそこでアイスクリームを買おうとする。しかしそこにいたのは。

彼等だった。誰もが牧村の姿を見てだ。楽しげに言うのであった。

「あれっ、君もなんだ」

「ここでか」

「アイスクリームを買うか」

「そして食うのか」

「そうするのね」

「アイスクリームは何の為にあるか」

牧村は店の前に集まる彼等に静かに述べた。

「食べる為だな」

「その通りです」

「言つまでもなくのう」

老人と老婆がそれぞれ彼に答えた。

「ですから我々もです」

「ここに居るのじゃ」

「こう話すのであった。」

「アイスクリームを食べる為に」

「皆でのう」

「その顔触れで集まるとな」

牧村は彼等のそれぞれ独特な外見を見回してだ。そのうえでまた言った。

「目立つな」

「ははは、そうかも知れませんか」

「それは否定せん」

老人と老婆は顔を崩して笑いそれを否定しなかった。

「それぞれ顔も服装も違いますし」

「それで十二柱も集まるとのう」

「目立ちますね」

「それもかなりじゃな」

「しかもだ」

牧村の指摘はまだあつた。さらにだ。

「平日の昼間から。普通の男や女がうろつろしているのはだ」

「おかしいか」

「人間の世界ではそうなのね」

「その通りだ。普通は働いている」

今度は男と女に述べた。

「それも十二人。老若男女が揃うとじゃ」

「ないな」

「確かに」

今度は青年と紳士が述べたのであつた。

「人間の世界ではな」

「そうそうな」

「目立つという他ない」

牧村はこつも告げた。

「どうしようもないまでにな」

「どうしようもないか」

ロッカーが牧村のこれまでの言葉を聞いて述べた。

「目立つのはだ」

「そうだ。だが遊ぶのならいいだろう」

「いいのか」

「遊ぶだけで暴れないのなら一行に構わない」

そうだというのである。



「全くな」

「目立ってもなんだ」

「目立つことは迷惑にはならない」

牧村はこう子供に話した。

「少なくともそれで誰かは死にはしない」

「そうだね。それは確かにそうだね」

「貴様等が遊んでいるとしてもだ」

その場合はだ。彼はどうかというのだった。

「俺は構いはしない」

「それはいいのですね」

「戦いでなければいい」

また言う牧村だった。

「貴様等は今は遊びたいだけか」

「そうですね。戦いよりもです」

老人が言った。このことをだ。

## 第五十四話 邪炎その十一

「今は遊びの方がいいですね」

「変わったな」

「否定はしません」

穏やかに述べる老人だった。その顔は人間と全く変わりはない。少なくともだ。牧村や死神以外が見るとだ。人間としか思えないものだった。

「それはです」

「そうか。遊びの方がか」

「よくなりましたね。少しずつ」

「けれどね。それでも」

美女がその牧村に言ってきた。

「戦いのことは忘れていないわ」

「俺との戦いか」

「それもあるわ。けれどそれ以上に」

「混沌の神々か」

「そうよ。あの連中との戦いよ」

まさにだ。その戦いだというのであった。

彼等はだ。それを見てだった。戦うというのだった。

そのうえでだ。彼等はまた話すのであった。

「まずはそれを何とかしないとね」

「アイスを食べてからにしたかったが」

「ここでだ。言ったのはロッカーだった。」

「そうもいかないようだな」

「その通りだ」

死神だった。今度は彼が出て来た。

「また来た。ここでな」

「そうか。来たか」

「その通りだ。貴様も覚悟はいいな」

牧村を見てだ。そのうえで彼に声をかけた。

「戦いだ。いいな」

「構いはしない」

牧村は当然だと述べた。考えをそこではこれだけで出した。

「ではだ。戦いならばだ」

「俺達もだな」

大男が述べた。

「そうするとしよう」

「当然ですね」

老人もだ。大男に続く。

「では。アイスを食べる前にです」

「軽い運動をしようかな」

子供は実際に軽い声で述べた。

「今からね」

「軽いな」

「うん、軽いよ」

子供も死神に対して返す。実際に声はそのままだ。

そしてだ。彼等の前に今度はだ。

あの男が出て来た。闇の中から霧の如く現れる様にだ。出て来たのだ。

男はだ。彼等の前に出てだ。そうして言うのであった。

「さて、いいな」

「答えを求めているのか」

「求めてはいない」

こゝろ牧村に返しもする。

「既に決まっていることだ」

「戦うことはか」

「貴様等は逃げることはしない」

全てを見透かしただ。そうした言葉だった。

「ならばだ。決まっているな」

「貴様等もまた逃げないからだな」

「そつだ」

まさにその通りだとだ。男も言う。

「我々にはそつした考えはない」

「戦い、滅ぼすだけだ」

「それだけだな」

「如何にも」

簡潔に答える男だった。

「それだけだ」

「話は聞いた」

牧村もだ。短く答えた。

「では。はじめるとしようか」

「死ぬがいい」

男の言葉の闇が深くなった。

「全員な」

「その言葉はじゃ」

老婆が男を見据えながら話す。

「これまで何度も聞いたのう」

「そうですね。本当に」

老人も老婆のその言葉に頷く。

## 第五十四話 邪炎その十二

「そうした言葉は本当に」

「何の面白みもない」

「こう言う老婆であつた。」

「楽しくとも何ともないわ」

「楽しみか」

「御主等にはわからぬか」

「そんなものは知らない」

男はその通りだと述べた。

「混沌の世界にはだ。そんなものはない」

「やはりですね」

「そうじゃつたな」

その言葉を聞いてだ。老人と老婆が述べた。6

「貴方達にあるのは破壊と混沌ですね」

「それだけじゃな」

「そうだ。その他のものは不要だ」

「こつまで言うのであつた。男もだ。」

「我等にとつてはだ。そうしたものはだ」

「不要か」

「そうだ。我々は人間でも魔物でもない」

「妖魔だな」

「そうだ、妖魔だ」

まさにその通りだとだ。牧村に話すのだった。

「妖魔にそうしたものはない」

「楽しみも遊びもか」

「戦いもだ。貴様等の戦いとは違う」

それもだ。これから行うそれも違うといつのだ。

「我々は本能に従い戦う」

「本能か」

「我々にあるのはそれだ」

「それだけだな」

「本能以外にはない。それを言っておこう」

「混沌故だな」

どうしてそうなのか、死神が述べた。

「だからだな」

「如何にも。我々は混沌の存在だ」

「混沌には。文化や文明はない」

「そんなものは最初から存在しない。またあるものでもない」  
全くだ。縁のないものだというのが。

「それも言っておこう」

「そうか。だからこそこの世界をか」

「結果として滅ぼすことになる」

淡々とだ。彼等の望みも述べた。

「混沌と破壊に覆うからだ」

「では俺はそれを防ごう」

「私もだ」

牧村と死神の呼吸が合さった。そして。

魔神達もだ。ここでこう言うのだった。

「僕達もね」

「この世界を破壊されてはたまったものではない」

「だからこそだ」

「貴様を倒す」

こう話してだった。そのうえでだ。

男と対峙する。それを見てだった。

男はだ。その黒い目を光らせた。するとだ。

世界が一変した。人間と魔物、そして妖怪達の世界からだ。

あの混沌の世界に入った。今度の混沌は。

「炎か」

「今度はこの世界か」

「そうだ、混沌の炎の神」

男が周りを見回す。牧村達に述べた。どす黒い炎もあれば不気味に青い炎もある。異様に白い炎もある。様々な色の炎がだ。渦巻き状に混ざり合っている。その炎の中がだ。その世界だった。

その世界の中を見回してだ。牧村は男に言うのだった。

「混沌の四元素。炎か」

「その神が貴様等の今回の相手だ」

「そうだな。名前は確か」

牧村がだ。その名前を今言った。

「クトウヴァだったな」

「その通りだ。クトウヴァだ」

男もその名前を言ってみせた。

## 第五十四話 邪炎その十三

「それがこの神の名だ」

「名前は聞いた。それではだ」

「戦うのだな」

「そうさせてもらう。どのみちその神を倒さなければだな」

「この世界からは出られない」

男が答えてみせた。

「そういうことだ」

「生きる為には戦うことか」

「そうだ」

まさにその通りだというのだ。

「それしかない」

「そうだな。それはこれまでと同じだな」

「死にたくなければ戦え」

男はまた牧村達に言ってみせた。

「簡単な話だ」

「話はわかった」

「それならだ」

牧村と死神が同時に言う。

「戦いだな」

「神よ、姿を見せろ」

「わかった」

その混沌の炎からだ。声がした。

そしてその声と共にだ。炎が形作られていった。

炎から炎が生まれ出てだ。なつたものは。

「ふうん、禍々しいね」

「そうですね」

魔神達は既に本来の姿になっている。クマゾツツと虹蛇が述べた



のだった。

「今度の奴もね」

「まさに混沌の神に相応しい姿です」

「いい姿だろう」

その神の言葉である。

灰色の炎、それが大蛇となった姿だ。その頭には禍々しい冠がある。

その蛇がだ。言うのである。

「これが余の姿だ」

「確かにな」

牧村がその神の言葉に応える。

「貴様に相応しい姿だ」

「貴様もそう思うが」

「禍々しい」

それだというのである。

「そうした意味で相応しい姿だ」

「そうか、禍々しいと思うか」

「そう言わずして何と言う」

「話は聞いた」

禍々しいと言われてもだ。神は何とも思っていない口調であった。

「そうか。余は禍々しいのか」

「それについては何も思わない」

「そうなのだな」

「そうだ。混沌の世界にはそうした言葉はない」

だからだ。牧村と死神に対して述べた。

「だからこそだ」

「混沌にはないか」

「ないものについて思うことはない」

そういうことだった。

「それでだ」

「ではだ。考えることはか」

「やはり。破壊と混沌」

「この二つ」

「そうだな」

「今からその為に戦おう」

「こう述べた神だった。」

「いいな」

「話は聞いた」

「それもよくな」

「こう返す牧村と死神だった。そうしてだ。」

「変身に入りながらだ。また話すのであった。」

「では。今度もだ」

「倒させてもらおう」

「来るのだな」

「神もその彼等の言葉を受ける。」

## 第五十四話 邪炎その十四

「今からだな」

「そうだ、行くぞ」

「そうさせてもらうぞ」

牧村は両手を拳にした。そして死神は右手をだった。

それぞれの胸の前にやってだ。青白い光、白い光に包まれた。

そうして髑髏天使、戦う姿になった。それからだ。

「行くぞ」

「刈らせてもらう」

髑髏天使は開いた手を拳にして握り締め。死神が右手に持った鎌を一閃させる。そのうえでだ。彼等はそのうえで、なのだった。

髑髏天使は黄金の六枚羽根になった。死神は漆黒の戦う姿になった。それからだ。

神に向かう。空を舞い一気に突き進む。

魔神達もだ。突き進みながら攻撃を繰り返す。

だが、だった。神にはだ。攻撃が通じないのだった。

「この程度ではな」

「やはりですね」

「通じないか」

「そうだというのか」

「そう言うのか」

「そうだ、この程度の攻撃ではだ」

神もだ。こう話すのだった。

「全く通じはしない」

「相変わらずしぶといね」

クマゾツツが彼に対して言う。

「本当にね」

「そう言うのか」

「うん、残念だけれどね」

それでもまだというのであった。そしてだ。

他の魔神達も攻撃を浴びせる。それぞれの手の平や口から光を放つ。それ等の光は神に当たりはする。しかしそれでもなのだった。

神はだ。全く通じていないのだった。

「効いていないわけではないでしょう」

「そうね」

九尾の狐が百目に対して述べた。

「全然ではないわね」

「少しでも効いています」

「そうだといいなのであった。

「本当に僅かですが」

「けれどその僅かがね」

「積もり重なればです」

それが彼等の狙いであった。

「少しずつ攻撃を浴びせていきましょう」

「そうだな。それにだ」

ウエンティゴはだ。髑髏天使と死神を見た。

神に突き進む彼等を見てだ。こう言うのであった。

「貴様等だ」

「俺達か」

「私達が決めるといふのだな」

「少なくともそのつもりだな」

「こう彼等に言うのであった。

「そうだな」

「勝つ。そのつもりだ」

「そうした意味ではそのつもりだ」

「だからだ。貴様等も攻撃を加えてだ」

「この神も倒す」

「そうさせてもらおう」

二人は動く。まずはだ。

髑髏天使は己のその周りに無数の氷の矢を作った。それをだ。

神に対してだ。一斉に放つのだった。

神はそれを見てだ。静かに言うのであった。

「火には氷か」

「そうだ、弱点のないものなぞいない」

だからだというのである。

「この氷ならばだ。どうだ」

「確かに火は氷に弱い」

神もそのことは認めた。そのことはだ。

「だが、だ」

「だが、か」

「火を消す氷は弱くては話にはならない」

「それなりの力か」

「余の炎は混沌の炎の全てだ」

そこまで強いというのだ。

## 第五十四話 邪炎その十五

「その余の炎を消すにはその矢達はだ」

「弱いか」

「そうだ、弱い」

まさにそうだと言ってであつた。

矢達の対してだ。目を向けた。するとだ。

氷の矢達がだ。一斉に溶けた。炎に包まれそれでだ。

全て溶かしてしまつてから。神はまた言つた。

「この通りだ。弱いのだ」

「言葉には嘘はないか」

「神は嘘を吐くことはない」

この神もまた、だつた。こつ言つのであつた。

「見たままだ。貴様の氷は弱い」

「そつ言えるか」

「より強い氷でなければ我は倒せない」

神の言葉は続く。

「それは言つておこつ」

「話はわかつた」

今度は死神だつた。その大鎌を巨大化させている。

鎌の刃がだ。持ち主の十倍程度の大きさになっている。禍々しく曲がつているその刃がだ。青白い、冷たい光を放つていた。

その青白い鎌を持ちだ。彼は神に言つのであつた。

「ではこれはどうだ」

「氷の鎌か」

「氷の矢では貴様は倒せない」

それは今見てわかつたことだ。

「だが。この鎌ならばだ」

「余を倒せるというのか」

「少なくとも矢よりは効果がある」

大きさも威力も違う。だからだというのだ。

「それでだ。貴様をこれでだ」

「いいだろう。ではだ」

「受けるがいい」

死神はその鎌を横に一閃させた。それでだった。

神を斬る。その氷だ。

確かに両断した。だが。

神はだ。白い、炎と氷がぶつかることによつてできる蒸気を出しながらもまだそこにいた。両断されたがだ。身体は元のままそこにいた。

そのうえでだ。死神に対して言うのであった。

「確かに威力はある」

「それでもか」

「余を倒すまでではない」

そうだというのであった。

「残念だったな」

「貴様の力は。そこまで強いのか」

「火を消すことは容易ではない」

神は髑髏天使に言ったのとはほぼ同じことを死神にも述べた。

そのうえでだ。彼はだ。

その目を灰色の、不気味な闇にも似た光で輝かせながらだ。髑髏天使達に対して言うのであった。その言う言葉はこうしたものだった。

「ではだ。次はだ」

「貴様か」

「貴様が攻める」

髑髏天使と死神はやや距離を置いて横に並んで宙にいる。そのうえで神に対して言った。

「そうだな」

「そうするのだな」

「その通りだ」

まさにそうだという神であった。

「次は余の番だ」

こう言つたであつた。すぐにだ。

辺りをだ。炎の渦が巻き込んだ。次から次にだ。

それが起こりだ。髑髏天使達を襲つ。炎達は無数の蛇となりだ。

魔神達も襲つ。それを受けてだ。クマゾツツがその炎をかわしながら言つた。

「この炎もだね」

「そうですね」

百目はその無数の目から光を放ちだ。その光で炎を打ち消しながら彼の言葉に答える。

「生きていますね」

「これまでの。風や地と同じで」

「神の意志で動きます」

「厄介な話だよ。本当に」

「しかもです」

百目の言葉は続く。



## 第五十四話 邪炎その十六

「この炎は普通の炎よりも熱いですね」

「白い炎よりも」

「そうです、この灰色の炎は」

まさにだ。神のその炎はというのだ。

「赤いものや青いものはおろか」

「白い炎よりも」

「熱いです」

「そんなに凄いなだね」

「触れれば。いえ」

百目の言葉は確かなものだ。

「かするだけで、です」

「焼けちゃうんだね」

「そうなります。気をつけて下さい」

「わかったよ。それじゃあね」

「かわされるのは危険です」

百目のクマゾツツへの忠告であった。

「ご注意を」

「そうだね。それじゃあ」

クマゾツツは百目の言葉を受けてかわすのを止めた。それでだ。

そのうえでだ口から光を放ってだ。それで炎を相殺するのだった。

彼等はそれで防戦一方になっていた。そしてそれは。

髑髏天使と死神もだった。彼等もだ。

それぞれ周囲に水の防壁を出し炎の攻撃を防いでいた。そうしな  
がらだ。

神の隙を窺う。しかしだった。

その隙は見えなかった。全くだ。

「まずいな」

「そうだな。隙がない」

「これはだ。思った以上にだ」

「厄介か」

「この攻撃はだ」

「また話す神だった。」

「これで終わりではない」

「増えるか」

「そう言うのか」

「そうだ、増える」

「こう話すのだった。」

「実際にそうしてみせよう」

言葉と共にであった。その炎がだ。

さらに増えた。髑髏天使達がいるその空間にだ。炎の渦が増す。

そしてそのうえでだ。髑髏天使や魔神達をさらに襲うのであった。

魔神達は最早相殺させることを諦めてだ。そのうえでだ。

彼等も光を出しそれで炎を防ぐ。光の球体の中に入ってだ。その

うえで防いでいるのだった。

だがそれで精一杯だった。防ぐことでだ。

「力も何もかもな」

「この防壁に使うしかない」

「どうする？ここは」

「このまま防ぐだけしかできないのかしら」

「そうだ、その通りだ」

魔神達にだ。神が告げる。

「そしてその球体もやがて壊れる時が来るな」

「確かにな。それはだ」

「このままではね」

「この球体も壊れる」

「そうなれば」

「余の勝利だ」

神は簡潔に言った。

「このままだ。貴様は死ぬ」

「そうだな。このままではな」

「我々の敗北だ」

髑髏天使と死神が神のその言葉に応えた。

二人はそれぞれ水の球体の中に入って炎を防いでいる。炎と水が打ち合い蒸気が沸き起こる。蒸気の色は白かった。

その蒸気の中でだ。彼等は神を見ていた。そしてだった。

強い目でだ。彼等は言った。

「だが、だ」

「このままやられるつもりはない」

「倒せない敵なぞいない」

「だからこそな」

「ではどうするつもりだ」

神は二人の言葉を受けてだ。その灰色に濁った光を放つ目を向けた。

「この状況から。どうして勝つつもりだ」

「まずはだ」

「こつさせてもらおう」

二人はそれぞれの言葉と共にだ。

## 第五十四話 邪炎その十七

分身に入った。水の球体と共に。

鬮體天使も死神も十体になっている。分けてからだった。それぞれの口でだ。神に対して言ってみせるのだった。そしてであった。

そのままだ。神に対して突進するのだった。

「来るか」

「防ぐなら防ぐでだ」

「やり方がある」

こう言いながらであった。

突進する。その中で彼等はまた言った。今度は魔神達への言葉だった。

「貴様等もだ」

「続くのだ、私達に」

彼等への言葉はこれであった。

「そしてそのうえでだ」

「神に突き進め」

「そしてか」

バジリスクが彼等の言葉を受けて述べた。その鶏冠のある八本足の蜥蜴の姿で。

「その身体を突き破れというのか」

「あの炎の身体をだ」

「そうするのだ」

こうだ。二人は魔神達に話す。

「そうすれば勝てる」

「だがそうしなければ勝てはしない」

「確かにな」

吸血鬼が二人のその言葉に頷いた。彼とてその光の中にいたままだ。

「このまま動かなければやがて敗れる」

「何時までも防げるものではない」

「ならばだ。全ての力を今のうちに使った」

「これが二人の考えだった。」

「倒す」

「そうするべきだ」

「確かにそうじゃな」

バーバヤーガが二人のその言葉に同意して頷いた。

「このまま守っていてもじゃ」

「何にもならない」

「そういうことだ」

「ではじゃ」<sup>8</sup>

また話す魔神だった。そしてだ。

そのうえでだ。彼等もだった。

光の球体に守られたままだった。彼等も神に突っ込むのだった。

そのうえでだ。それぞれ体当たりを仕掛けるのだった。

光と炎が触れてだ。これまで以上に激しい熱と蒸気が起こる。だが。

そのダメージはだ。これまでの攻撃よりもだ。

威力があった。それは確かだ。

「むっ」

「聞いているな」

「そうだな」

神が声をあげてだ。逆さ男とワーウルフがわかった。

「この攻撃の法がだ」

「ちまちまと攻撃をするよりはな」

「効果がある」

「光でちまちまとやるよりはな」

「そういうことだ」

髑髏天使もだ。体当たりを浴びせていた。彼は氷の球体になって

いる。

氷はだ。光よりもだ。

効果があった。それ以上のダメージを確実に与えていた。蒸気がだ。さらに起こっていた。それが死神の体当たりでも同じだった。

神のダメージが次第に蓄積されていた。しかしだ。

まだ神はそこにいた。そうして言うのであった。

「そうするのでもいいだろう」

「余裕だな」

「まだそう言えるのか」

「そうだ、言える」

その通りだというのであった。

「確かに余もダメージを受けている」

「それでもか」

「そうだ。貴様等の力が続くか」

彼が言うのはこのことだった。

「それだけの力を使い続けてだ」

「それはわかっている」

「私もだ」

髑髏天使だけでなく死神も言った。

「これはダメージを与えている」

「だが。決め手にはならないか」

「そういうことだ。この程度ではだ」

まだというのであった。その余裕の声でだ。

## 第五十四話 邪炎その十八

「余は倒れん。そして貴様等の力が尽きた時にだ」

「その時にか」

「我々を」

「倒す」

そうするといふのであつた。

「余の灰色の炎でだ」

「貴様はそこまで持つ」

「確実に」

「そうだ、確実にだ」

それを確信している。だからこそその余裕であつた。

「だからこそ。勝つには余なのだ」

「そうだな。しかしだ」

「わかっているのはだ」

「貴様だけではない」

「我々もだ」

こつ話すのだった。彼等もだ。

「だからこそだ」

「我等もこつしよう」

二人はここでもだった。それぞれ剣を一本にし鎌を再び巨大化させた。それでだ。

一点を見ていた。そこは。

額だった。神のその額を見てだ。そのうえでだった。

一気にだった。そこにだった。貫いたのであつた。

そしてそこにだ。さらに。

全力を込めてだ。水を注ぎ込む。すると。

炎と水がぶつかり合いだ。これまでになく激しい蒸気を出した。

しかしそれがやがて。

炎が消えていく。次第にだ。燃え盛る神の身体はだ。次第に炎を消してだ。そのうえで炎のない蜥蜴に変わったのであった。

身体は巨大なままだ。しかしだ。

そこにはもう炎はない。混沌の炎の神は倒れていた。

只の巨大な蜥蜴になった身体にだ。二色の炎が起こる。もうそれは止まらなかった。

違う炎に包まれながら。神は言った。二人に対して。

「弱点はわかっていたのか」

「いや、わかつてはいなかった」

「それはな」

髑髏天使と死神は神の今の言葉は否定した。

「混沌の存在は俺達とは全てが違う」

「頭が弱点とは限らない」

「確かに。その通りだ、余にしてもだ」

神自身もだ。どうかと話すのであった。

「脳は腹にある」

「では頭にあるのはか」

「別のものか」

「頭には何も無い」

そこにはだ。無いというのだ。

「だからここを攻められても何ともなかった」

「しかしだ。一点に攻撃を集中させてばだ」

「それだけで違う」

これがだ。二人の狙いだったのだ。

「それで貴様を倒した」

「そういうことだ」

「一気にか」

神もだ。ここで言うのだった。

「一気に攻めて余を倒したのか」

「そういうことになる」



「結論から言えばだ」

「そうか。わかった」

神の言葉は今では納得したものだった。

それでなのだった。神は炎に包まれながら話した。

「ではだ」

「去るか」

「そうするのだな」

「そうだ、去る」

まさにだ。その通りだというのだ。

「これで去る。これでな」

「では見送ろう」

「そうさせてもらう」

まずは髑髏天使と死神が述べた。

「貴様のその最期をな」

「今からな」

「それは何だというのだ」

神はだ。己の最期を見送ろうという二人に対して尋ねた。

「余の知らないものだが」

「礼儀と言つべきか」

「それだ」

それだとだ。二人は神に対して答えたのだった。

## 第五十四話 邪炎その十九

「戦った相手に対するだ」

「それなのだ」

「礼儀か。そういうものがあるのだな」

神の言葉ははじめて知ったというものだった。

それを聞いてからだ。彼はあらためて話した。

「それは知った」

「知った、か」

「学んだとは言わないのだな」

「混沌の世界にはそうしたものはない」

その学ぶということもだというのだ。

「それもまた、だ」

「だからか」

「学んだとは言わないのか」

「それが混沌か」

「混沌の世界なのか」

「混沌の世界には人はいない」

そのこともだった。神は話したのだった。

「そして魔物や妖怪達もだ」

「だからね」

キリムがそれを聞いて述べた。その七つの頭でだ。

「文化やそうしたものも存在しないのね」

「文化。知らないものだ」

実際にそうだと話すのであった。

「文化か。それに」

「文明もだな」

ワーウルフだった。彼の言葉だ。

「そうしたものは一切だな」

「混沌にあるものは混沌だけだ」

前に見ても一体何を見ているのかわからない、そうした世界だけがあるというのだ。それこそが混沌の世界だというのである。

「それだけだ」

「人も魔物もない」

「妖怪もまた」

「いるのは混沌の住人だけ」

「そうした世界なのね」

魔神達はそのことがあらためてわかった。だが、だった。

わかりはしたがそれでもだった。受け入れられるものではなかった。

それでだ。彼等とはつきりと言うのであった。

「そんな世界はお断りだね」

「そうだな。そこには我等の求める楽しみがない」

「そうした世界にいるということはだ」

「耐えられないわね」

「まさにね」

こう話すのだった。彼等は完全に否定していた。

そのうえでだ。あらためてだった。その混沌を否定してだった。

「そんな世界にいたくはないですね」

「僕達がいていいという訳でもないようだし」

「それならな」

「そんな世界を実現させるなぞ」

「考えたくもない」

こう話すのであった。そのうえで彼等もだった。

赤と青の炎に包まれていく神を見届ける。そうしたのだった。

神はやがて二色の炎に包まれ。そしてだった。

その中に消えた。完全にだ。

戦いはこれで終わった。世界は元に戻った。

それと同時に髑髏天使達は元の世界に戻った。あのアイスクリーム

屋の前にだ。

そこに出るとだ。魔神達もだ。

既に人間の姿になっていた。そのうえでだった。

アイスクリームを受け取る。そうしてそれぞれ食べはじめる。

「美味ですね」

「そうだな」

青年が老人の言葉に応えていた。コーンの上の丸いアイスを食べながらだ。

「アイスだけでなくな」

「トッピングもいいですね」

「こつしたものが食べられるのもだ」

「文化あってですね」

老人はここでこう言った。

## 第五十四話 邪炎その二十

「だからこそですね」

「その通りだな。それはな」

「全ては文化があつてこそ」

「その世界だからこそ。俺達は楽しめるのだ」

「そして遊べるのです」

「その通りだな」

死神がだ。彼等のその言葉に応えて述べた。

「混沌ではない」

「はい、混沌ではです」

「そうしたものを楽しむこともな」

「できません。ですから」

それでだ。老人は話すのだった。

「私達はこうして彼等とです」

「戦うな」

「そうします。それは貴方達と同じです」

「だが、だな」

今度はだ。牧村が彼等に言ってきた。

「混沌との戦いが終われば俺達と」

「いえ、それは」

「いえ、というのか」

「どうでしょうか。それは」

少しだ。曖昧な感じになっての返答だった。

「果たして。私達はこのまま」

「戦うのが魔物ではないのか」

「確かにそうですが。最近変わりました」

「戦うことよりもね」

子供もだ。ここで話すのだった。

「それよりもね」

「それよりもか」

「遊ぶ方が楽しくなってきたんだよ」

「こつ話すのであった。」

「最近そつちの方がね」

「遊ぶ方が楽しいか」

牧村はそこに見た。はっきりとしたものをだ。

そしてそのはっきりとしたものをだ。魔神達に話した。彼等自身にだ。

「それではだ。妖怪と同じだな」

「そうですね。同じですね」

老人がだ。牧村のその言葉に対して述べた。

「確かにその通りです」

「妖怪に戻るのか」

「若しかすると」

老人はそれを否定しなかった。

「そうなるかも知れません」

「おかしな話じゃがな」

老婆は楽しげにだ。こつ言つのであった。

「わし等はかつてじゃ」

「はい、戦いにのみ戦いを見出して」

「妖怪でなくなったのじゃからな」

「魔物の神、魔神になりました」

妖怪からだ。そうだったというのである。

「最初の魔物達として」

「それが貴様等か」

「はい、そうです」

その通りだと話す老人だった。それが彼等のはじまりだったのだ。

「それが我々魔神であり魔物だったのです」

「そしてそのわし等にじゃ」

老婆がここでまた牧村達に話す。

「対する存在として。出て来たのがじゃ」

「俺か」

「そうじゃ。髑髏天使じゃ」

他ならぬだ。彼だというのだ。

「天界の神がじゃ。わし等がこの世を戦いで覆つことを防ぐ為にじや」

「俺を生み出したのか」

「五十年に一度この世に出てだ」

紳士が話す。

「戦いにも楽しみを見出す魔物を倒しこの世を安定させる存在がだ」

「髑髏天使か」

「そうだったのか。生み出したのは天界の神だ」

その神がだ。何かということも話される。

「あの。荒野から出た神だ」

「あの神か」

「その通りじゃ。だから天使だったのじゃ」

その天使だった理由も話される。老婆の口でだ。

## 第五十四話 邪炎その二十一

「九つの階級のな」

「階級まで。そこにあつたのか」

「わし等は古の髑髏天使に封印された」

「それは知っていたが」

「そして今封印は解放されたのじゃ」

また話すのだった。

「この時代にじゃ」

「そして俺達と戦った」

「そうじゃ」

「それと共にか」

「混沌がここで復活するとは思わなかったがのう」

「予想外でしたな」

それも話したのは老人だった。

「この事態は」

「私もだ」

それはだ。死神も同じだったのだ。

彼等は鋭い目になって話すのだった。

「名前を何処かで聞いた程度の認識でしかなかったしな」

「そうですね。我々もです」

小男もそうだと話す。

「この時代でも動けるかどうか。疑っていた位です」

「しかしな。もう四元素の三つまで倒したからな」

ロツカーは今の戦況を話す。彼等のそれをだ。

「後は。とことんかもな」

「最後の最後までか」

牧村の目が鋭くなった。

「ここまで来ればか」



「それは覚悟しておくんだな」  
「戦いは覚悟なくしてではいけない」  
牧村は話した。  
「そうだな」  
「それが答えか」  
「そう取ってもらおう為の言葉だ」  
静かにこう述べるのであった。  
「今はな」  
「そうか。その辺りは相変わらずだな」  
「相変わらずか」  
「いつもの貴様だ」  
そのだ。牧村だというのだ。  
「貴様らしくて何よりだ」  
「自覚はないがな」  
「人も魔物もだ。妖怪も同じだ」  
「同じだというのか」  
「案外。自分のことは自覚できないのだ」  
こう話すのだった。牧村に対して。そして自分に対してもだ。  
「そういうものだ」  
「それは同意する。ではだ」  
「帰るのだな」  
「いえ、今日は違います」  
また老人が話す。ここでだ。  
「この場でアイスを食べることにします」  
「そうか。そうするのか」  
「貴方達もですね」  
老人はその手のアイスを食べながら牧村と死神に問うた。  
「そうされますね」  
「そうだな。今はな」  
「ここで食べよう」

牧村と死神が話す。そうしてであった。

二人もそのアイス注文してだ。そのうえで食べる。そうするのだった。

そして食べるその場にはだ。魔神達もいた。彼等を見てだった。

そのうえでだ。こう話すのであった。

「貴様等と同じか」

「同席していいかしら」

「それでどうだ」

女と男が牧村の言葉に応える。

「私達は構わないけれど」

「戦いは終わったのだしな」

「そうだな。一緒に食べるか」

牧村もだ。こう言うのだった。

「共にな。食べるか」

「アイスをだな」

死神もだ。彼も去ろうとしない。右手にアイスを持ってだ。そうしてそのうえでだ。魔神達にを見ながら彼等に対して話すのだった。

「同席か」

「あんたはどうなのじゃ？」

老婆がその死神に問うた。

「やがてまた敵となる相手とじゃ。共に食べるか」

「構わない」

彼もだ。迷いなくこう答えたのだった。

「それではだ」

「いいのじゃな」

「そうだ、それでいい」

また語るのだった。

「少なくとも今は敵ではない」

「敵ではじゃな」

「だからだ。それはいい」

「こう話す。そしてだった。」

全員でだ。一つになった。そのうえでだ。それぞれ食べる。そうしたのである。

そしてそのうえでだ。牧村はその場でだ。魔神達に言うのだった。

「こうして食べるのもだ」

「美味しくないとか？」

「いや、美味い」

「こうだ。子供に対して述べたのだった。」

「実にだ。美味い」

「そう、美味しいんだね」

「美味い。敵同士だが。共に食べてもな」

その顔はいつもと同じ無表情だ。しかし緊張の色はなかった。

緊張のないままにだ。彼は静かに話したのであった。

「美味しいものだな」

「美味いか」

「そうだ、美味い」

また言うのであった。

「実にな」

「そうか。それではだな」

今度言ったのは大男だった。彼もまたアイスを食べている。大柄でいかつい外見にはアイスは一見不似合いだ。しかしそれでいてだった。

妙に絵になっていた。その彼が話すのだった。

「今は共にな」

「食べるか、こうして」

「それもまた、だ」

「こう話してだった。彼等は共にアイスを楽しむのだった。」

今はそうしてだ。戦いを離れてだ。共にいるのだった。

第五十四話

完

2  
0  
1  
1  
・  
3  
・  
2

## 第五十五話 魔水その一

### 髑髏天使

#### 第五十五話 魔水

研究所でだ。牧村は魔神達から聞いたそのことをだ。博士に話していた。

博士はそれを聞いてだ。静かにこう言った。

「そうじゃったのか。それで髑髏天使がのう」

「それはまだ知らなかったか」

「うむ、知らなかった」

こうだ。牧村に答える博士だった。

「そうじゃったのか」

「髑髏天使は。天界の神が造ったのか」

「あっちの神じゃな」

博士はふとこう言った。

「あの宗教の神じゃ」

「そうだな。あれだな」

「思えばな。天使という時点でじゃ」

「それは考えられたことか」

「うむ、九つの階級といい」

博士はその天使の階級についても述べた。

「まさにそれじゃったな」

「あの神が魔物、特に魔神と戦う為にか」

「髑髏天使を生み出したのじゃ」

それがだ。髑髏天使の誕生の秘密だったのだ。博士もそのことはじめて知った。彼もそこまではまだ知ってはいなかったのである。

「そういうことじゃ」

「そうだな。そしてだ」

「うむ、前に言ったな」

「五十年に一度だったな」

「左様、髑髏天使は五十年に一度生まれる」

このことはだ。二人もよく知っていた。

そしてだ。あらためてだ。二人でこのことをだ。話していくのだ  
った。

「魔物と戦う為にな」

「本来妖魔と戦う為ではなかったのだな」

「それが変わったようじゃな」

こう話すのだった。

「それはな」

「そうか。それがか」

「そうじゃ。変わった」

博士はこう牧村に話す。

「髑髏天使は戦いを楽しみとする魔物のその戦いがじゃ」

「他に及び世を乱すことを抑える存在だったか」

「そうだったのじゃ」

こう話をしていくのだった。

「それがな。妖魔に対してはじゃ」

「滅ぼし。そうしてか」

「抑える存在となるのう」

「同じ抑えることが目的でも違うな」

「うむ、違う」

まさにだ。そうだというのだった。

「魔物は戦うことだけが目的じゃが」

「妖魔は破壊と混沌の世界にすることが目的だな」

「その目的が違う」

「だからか」

「同じ抑えることが目的でも違うのじゃ」

博士はこう牧村に話す。

「そういうことなのじゃよ」

「そうなるな」

「しかし。これはじゃ」

「これは、か」

「運命じゃな」

博士は今はどんな文献も開いていない。そのうえでだ。

牧村と顔を見合わせてだ。そうして話をしていた。いる場所はいつもと同じだがだ。彼等は今はそうしてだ。話をしているのだった。

「それじゃな」

「運命か」

「そうじゃ。運命じゃ」

また言う博士だった。

「そうだったのじゃな。それはな」

「髑髏天使の運命ではなくだな」

「俺の運命か」

「君は髑髏天使となり妖魔と戦いじゃ」

「混沌を抑える」

「それが君の運命だったのじゃよ」

強いが穏やかで暖かい声になっている。その声での言葉だった。

「髑髏天使として以上にな」

「そうだったのか」

「そうじゃ。その運命は受け入れるか」

「妖魔と戦う運命をか」

「既にはじまっているがな」

つまりだ。最後まで戦うかどうかだ。博士が今牧村に対して問うのはそのことだった。彼のその顔を見据えてそのうえで問うのであった。

## 第五十五話 魔水その二

「どうじゃ、それは」

「俺は一度はじめたことはだ」

「牧村はだ。普段と違い即答せずだ。言葉を長くして話した。」

「降りない主義だ」

「戦うのじゃな」

「そうだ、戦う」

「こつ答えたのだった。」

「最後までな」

「死ぬかも知れんがじゃな」

「関係ない」

「こつ言つた。まただ。」

「それはだ」

「そうか。そうするのじゃな」

「そうする。人は何時か必ず死ぬ」

「この摂理は絶対のことだった。否定できないものだった。」

「だからな」

「そうか。ではわしもじゃ」

「博士もか」

「君と最後まで一緒にいよう」

「微笑んでだ。こつ牧村に話したのだった。」

「戦うことはできんがな。力にならせてもらつ」

「済まないな」

「それを聞いてだ。牧村は静かに述べた。」

「そうしてくれるか」

「当然じゃ。長い付き合いになつておる」

「だからか」

「うむ、それではじゃ」



博士はまた笑顔で牧村に話した。

「わしのできる限りのことをさせてもらおう」

「文献を調べてか」

「それにじゃ」

それに留まらなかつた。さらにであつた。6

「ここには何時でも来てくれ」

「この部屋にか」

「そして菓子でも茶でも果物でもじゃ」

甘いものが続く。

「好きなものを飲み食いするといい」

「そうしてもいいか」

「どんどんしてくれ。それが君の癒しになる」

戦士の癒しになるというのだ。博士が言うのはこのことだつた。

「癒しは。特に君にはじゃ」

「必要か」

「戦いばかりだから魔物になりかけた」

智天使になつたその時のことはだ。博士も覚えていた。

「では。それを止める為には人間の生活だつたのう」

「そうだつたな。あれで俺は人間でいられた」

「今度も同じじゃよ。戦いばかりでは潰れてしまつ」

「そしてそれを防ぐ為に」

「癒しじゃ」

博士は微笑みのまま話した。

「だからじゃ。何時でも来てくれ」

「では。有り難くだ」

「わしの言葉受けてくれるか」

「そうさせてもらつ」

牧村は壁に背をもたれかけさせたいつもの姿勢で答えた。

そしてそのうえでだ。彼の顔は。

微笑みになつた。本当に微かであるがそれになつた。

そしてその顔でだ。博士を見て話すのだった。

「すまない」

「あれ、笑った!？」

「牧村さん今笑ったよね」

「うん、笑ったよ」

「確かに笑ったよ」

「本当にね」

それまで沈黙していた周りの妖怪達だ。彼のその顔に気付いて一斉に言う。彼等もその顔ははじめて見るものだったのだ。

それでだ。彼等はだ。あらためて話すのだった。

「いや、牧村さんの笑顔ってね」

「稀少価値だよな」

「こんなの見られるなんて思わなかったよ」

「全くだよ」

こう話すのだった。喜んでいる様な、それでいて驚いている様な。そうした顔になってだ。彼等は話すのであった。

第五十五話 魔水その三

「牧村さんも笑うんだね」

「いつも無表情だっと思ってたけれど」

「そうじゃなかったんだ」

「笑えたんだね」

「わしもはじめて見たぞ」

博士もだ。こう言うのであった。

「いや、君が笑うとはな」

「俺が笑ったか」

「笑ったぞ、確かにな」

本人に対しても話す。

「間違いなくじゃ」

「そうか。俺も笑ったか」

「つていうか牧村さんってこれまで笑ったことなかったの？」

「そうだったの？」

「ひよつとして」

「長い間なかった」

実際にそうだという牧村だった。

「元々感情を出すのは苦手だったからな」

「それで笑ったこともなかったんだ」

「鉄仮面みたいになっちゃったんだね」

「何時の間にか」

「そうだ、そうだった」

まさにだ。それでだというのである。

「それでそうだった」

「そうだったんだね」

「牧村さんってつまりは」

「あれ？照れ性？」

「それなんだ」

「こうだ。妖怪達は言うのであった。」

「それで感情を出すのが苦手だったんだ」

「そういうことなんだね」

「つまりは」

「そうなるか」

「うむ、そうじゃな」

牧村はいぶかしんだがだ。博士は答えたのだった。

「そういうことになるな」

「俺は今まで気付かなかった」

牧村はその背にもたれかかった姿勢のまま述べた。

「そうしたことにな」

「自分のことってやっぱり気付かないんだね」

「自分自身のことなのに」

「そうなんだ」

「一番身近なものが一番遠い場所にあるのじゃよ」

博士はこう妖怪達に話した。

「背中は見えないものじゃな」

「私もそれは無理ね」

二口女が笑いながら言う。頭の後ろの口でも喋っている。その口

に髪の毛、蛇の形になったそれが饅頭を入れていつている。

「目はないから」

「背中だけではない」

「あら、そうなの」

「そうじゃ。背中だけではなくじゃ」

「こう話すのだった。」

「他の場所もじゃ」

「あらゆる場所が？」

「そうなんだ」

「背中だけじゃなくて」

「他の場所も」

「そうなのじゃ。とにかく自分は見えないものじゃ  
こう話していくのだった。博士はだ。」

「人間にしる妖怪にしるな」

「魔物だってそうだよな」

「とにかく。自分自身は見えない」

「そうなんだね」

「そういうものなんだね」

「そうじゃ。そしてじゃ」

さらに話すのだった。博士はまた牧村を見た。  
そうしながらだ。博士は牧村を見てまた話す。

「君もそうだったのじゃな」

「自分はわからないか」

「見えないからのう。見えても一部分だけじゃ」

「自分自身は鏡を見てわかるものだな」

牧村はここで鏡を話に出した。

## 第五十五話 魔水その四

「それ以外でなければだな」

「自分を映し出すもので見なければのう」

「わからないし気付かない」

「それが人間なのじゃよ。ただし鏡もじゃ」

「それはそれでだな」

「癖のあるものじゃ」

「こつ話すのだった。その自分自身を見る鏡もだというのが。」

「正確に自分を見られるかという」と

「違つよね」

「鏡もね」

「それはないよね」

妖怪達も言う。その鏡についてだ。

「だって。鏡は自分を逆に見るから」

「逆に見るものだからね」

「正確に見えないからね」

「完全には」

「そうじゃ。それに気をつけて見なければいかん」

博士は強い声で述べた。

「何も考えずに見てはいけない」

「鏡は。そうしたものだな」

「わかったかのう。鏡を見るのも用心が必要なのじゃ」

博士はここまで話した。そしてだ。

話を終えたところでだ。ここであった。

傍に来ていたろく子に顔を向けてだ。こつ告げた。

「それではじゃ」

「はい、お菓子ですね」

「今日は何かのう」

楽しげにだ。ろく子に顔を向けたまま尋ねる。

「どんな甘いものかのう」

「野菜です」

ろく子は笑って述べた。

「野菜ですが」

「ふむ、野菜か」

「苺です」

具体的にはだ。それだというのだ。

「それで如何ですか」

「よいのう」

まずはだ。笑顔で答える博士だった。

「苺は大好きじゃ」

「あれっ、博士苺食べても大丈夫なの？」

「苺を食べても」

「いけるの？」

「安心していいの？」

「大丈夫じゃよ」

白い髭の中から歯が見える。白い歯がだ。

「入れ歯に。苺の粒が入るというのじゃな」

「うん、そうならないの？」

「それはいいの？」

「いけるの？」

「わしの歯は一本も欠けてはおらんからな」

だからだ。大丈夫だというのだ。

「苺でも何でもな」

「食べられるんだね」

「そうなんだね」

「そうじゃ。苺だけではない」

それに留まらないというのだ。苺だけではないとだ。

「煎餅も何でも食べられるぞ」

「ああ、そういえばクッキーも好きだよね」  
「そうだよね」

妖怪達はここでこのことを思い出した。

「じゃあその歳でなんだ」

「歯は一本も欠けてないんだ」

「そうだったんだ」

「このことは前に話しておっと思ったと思うが」  
博士はこのことを思い出して述べた。

「背は縮んだがそれでもじゃ」

「頭だけじゃなくて歯もだね」

「大丈夫なんだね」

「そうだったんだね」

「左様、その通りじゃ」

また言う博士だった。



## 第五十五話 魔水その五

「衰えてはおらんぞ」

「凄いねえ。百十歳なのにね」

「あれっ、百二十歳だった？」

「どうだったかな、そこは」

「幾つだったっけ、博士って」

博士の年齢はだ。結局今もはっきりしないのだった。

「戸籍じゃ百十五歳だったかな」

「それ位？」

「けれど日清戦争がどうとか言ってたし」

「日露戦争はもっとはっきりだし」

「日韓併合の時はもう物心ついてたって？」

「じゃあ百二十歳？本当は」

「その位？」

まさにだ。歴史の生き字引であった。

「うっん、何か仙人みたいだね」

「人魚の肉を食べたみたいな」

「僕達と同化してるかな、やっぱり」

「妖怪化してるのかな」

「しておるかものう」

自分でもそれを否定しない博士だった。

「ひょっとしたらのう」

「やっぱりねえ」

「そうなのかな」

「前にもこんなこと話したけれど」

「やっぱり僕達と」

「一緒になってきてる？」

「妖怪化してる？」

こう考えていく。そしてだ。

妖怪達はだ。あらためてこう話すのだった。

「そうだったら歓迎するからね」

「博士は僕達の友達だし」

「喜んでね。ずっと一緒に暮らそうね」

そしてだ。あの歌を皆で歌うのだった。

「楽しいな楽しいな」

「お化けは死なない」

「試験も何にもない」

妖怪達は楽しげに踊りながら歌うのだった。

そしてそのうえでだ。こつも歌うのだった。

「朝は寢床でぐーぐーぐー」

「夜は墓場で運動会ってね」

「その歌か」

牧村も彼等のそうした歌を聴きながら述べた。

「それを歌うか」

「牧村さんもどう？」

「一緒に歌わない？」

「この歌名曲だからね」

「どうか、一緒に」

「いや、いい」

それはだ。いいという牧村だった。

彼はだ。今はこう言うのだった。

「歌を歌うことは苦手だ」

「あつ、そういえばこれまで歌ったことってないよね」

「見たことないよ」

「歌嫌い？」

「そうなの？」

「聴くのは好きだ」

それはだ。いいというのである。

「しかしだ。歌うのはだ」

「嫌いなんだ」

「そうだったんだ」

「歌うことには抵抗がある」

「こつ話す。いささか慥然とした顔でだ。」

「どうにもな」

「音痴つて訳じゃないよね」

「それはないよね」

「まさかと思うけれど」

「音痴ではないじゃろうな」

博士がここでまた言った。丁度その前に母が乗せられた白い皿が来た。ろく子が差し出したのである。それを一個手に取りながらの言葉だった。

第五十五話 魔水その六

「牧村君はな」

「そうだよな。戦いにはリズムも必要だし」

「それだったらね」

「音感がないってのはね」

「考えられないよね」

「絶対音感とまではいかなくとも」

「流石にだ。そこまではないとしてもというのだ。」

「音痴じゃないよね」

「むしろ音感はあるかだよな」

「動きだつてリズムカルだし」

「そういうのも考えたら」

「だからだ。恥ずかしい」

「これが牧村の言葉だった。」

「歌うことはだ」

「ああ、それもそうなんだ」

「照れるんだ」

「そういうことだったんだね」

「そうだ。恥ずかしい」

「また言う牧村だった。」

「そうしたことばな」

「ううん、牧村さんって実はかなりのの」

「照れる人だったんだ」

「無愛想じゃなくて」

「そうだったんだね」

「その様じゃな」

「博士もここで言う。」

「わしも今まで気付かなかった」

「ただの無愛想だっと思ってたけれど」

「実は照れてたんだ」

「それが恥ずかしくて」

「それだったんだ」

「俺もだ」

彼自身もだ。ここで言う。

「それには中々気付かなかった」

「そうだよ。だから言うんだよね」

「気付かなかったことに気付いて」

「それでなんだ」

「だが。気付いた」

それは確かだというのである。

「気付いたらだ。どうするかだ」

「なおすべきじゃな」

博士は言った。

「そうするべきじゃな」

「そうだね。それじゃあね」

「牧村さんはもっと愛想よくね」

「愛想よくしていけばいいよ」

「僕達みたいだね」

「難しいがな」

だが、それはとうのだった。

「すぐにはな」

「けれど、少しずつね」

「笑っていつてもいいし」

「そうしていつてもいいじゃない」

「少しずつね」

「わかった。少しずつやっていこう」

実際にそうすると述べた彼だった。

「これからな」

「じゃあ。話はこれ位にしてね」

「食べよう、苺ね」

「皆でね」

「ミルクあるかな」

「ここだ。ミルクのことも話される。」

「ミルクね。あるかな」

「ああ、あるよ」

輸入道にだ。ひょうすべがそれを差し出す。

「どうぞ」

「有り難う。それじゃあ喜んでね」

「使えばいいよ」

「そうするよ」

「はい、苺にはミルクです」

ろく子も笑顔でだ。自分が手にしている皿にミルクをかけてだ。そのうえで言うのだった。

## 第五十五話 魔水その七

「この組み合わせはまさに最強です」

「最強か」

「はい、最強の味です」

ろく子は牧村にも述べた。

「牧村さんもどうですか？」

「そうだな」

ここでも微笑んだ。そのうえでの言葉だった。

「では俺も」

「はい、どうぞ」

ろく子はそのミルクのパックを牧村に渡す。彼はそれを受け取った。

それからだ。自分の皿のミルクにそれをかけてだ。

そのうえで食べる。ミルクの甘さと苺の甘酸っぱさが混ざり合ってた。絶妙な味になる。そしてその甘さを堪能しながらだ。

ろく子に対してだ。こう言うのだった。

「この味だな」

「甘さのうえに甘さですね」

「極限までの甘さもいいな」

「そうですね。そういえば」

ろく子は思い出した様にこんなことも言った。

「自然の甘さが一番だ、ミルクをかけるのは邪道だという人もいますね」

「邪道とまではいかなくてもだな」

「それもまた食べ方ですね」

「そう思う。それを見て怒ることもないな」

「ところが怒る人もいます」

「どんな奴だ、それは」

「はい、この前喫茶店にいました」

その人間のことがだ。ここで話される。

「黒いスーツでオールバックの人で」

「ああ、あいつね」

「あいつは酷かったね」

「最悪だったね」

妖怪達がすぐに気付いたようにして言ってきた。

「もうね。お店の中で騒いで」

「こんな料理の仕方があるかって」

「フルーツホットケーキを見てね」

「大暴れしてたよね」

「フルーツホットケーキか」

牧村もそれが何か知っていた。ホットケーキにフルーツの盛り合わせをかける。そうして食べるホットケーキなのである。それのことだ。

「あれにか」

「うん、怒鳴り散らして酷かったんだ」

「もうね、あんまりにも酷くて」

「僕達がつまみ出したんだ」

「そうしてやったんだ」

妖怪達は顔を顰めさせて話す。

「何でも弁護士らしいけれどね」

「とんでもない奴だったよ」

「弁護士か」

ここで博士が困った顔で話した。

彼はだ。今度はこう言うのだった。

「どうもなあ。我が国の弁護士はのう」

「質悪いの多くない？」

「そうだよね」

妖怪達は曇った顔で話す。



「何か変にね」

「そういう人間多いよ」

「これって日本だけ？」

「そうなのかな」

「日本だけとは限らんじやろうが」

それでもだと。博士は濁ってしまった言葉で述べりy。

「それでも。どうものう」

「そうした人間が多いんだね」

「それは否定できないんだね」

「どうしても」

「そうじゃ。残念じゃがな」

それでもだとこののである。

## 第五十五話 魔水その八

「多いのじゃ」

「困ったことだね」

「何ていうかね」

「弁護士とかジャーナリストとかってね」

「変な人間多いね」

「知識人全体がそうじゃ」

博士が言うのはより範囲の広いものだった。

「戦後の我が国はな」

「教師もそうだな」

牧村はここで彼等の話を出した。

「厄介なことにな」

「教師の世界は最低じゃ」

博士は忌々しげに言った。

「ジャーナリストの世界もな」

「どちらもだな」

「悪事をしてもじゃ」

それをしてもだというのだ。

「全く平気な人間が多い」

「頭おかしなのが多くない？学校の先生ってさ」

「異常に暴力振るったりするしね」

「セクハラも多いし」

「そうした人間が人教えるんだね」

「怖いね」

確かに恐ろしいことだ。しかしそれが事実なのだ。

「そうした人間ばかりいるって」

「学校の先生がそんなのだと」

「子供達が可哀想だよ」

「そうだよね」  
「戦争が終わって一番駄目になった世界じゃ」  
博士は嘆息して言った。  
「マルクスだのそんなのでじゃ。一気に腐ってしまっただけから元に戻ってやらん」  
「戦争が終わってすぐか」  
「すぐにそうなってしまった」  
その通りだというのだ。  
「一気に腐ってそのままじゃ」  
「六十年以上もそのままか」  
「だから吉本隆明が戦後最大の思想家と持て囃された」  
この男の名前が再び出た。  
「オウムが。麻原が偉大な思想家か」  
「それは絶対に違うな」  
牧村はそれは断言だった。  
「何があるともな」  
「そうじゃ。あれは紛いものじゃ」  
麻原という男はそれだと。博士は忌々しげに言い切った。  
「最も浄土に近いのかも言っておったが」  
「地獄だよ」  
「あの男絶対に地獄に落ちるよ」  
「それは言えるな」  
「ここで言ったのは鬼達だった。地獄と縁のある彼等だ。」  
「ああした人間が地獄に落ちなかったことはないから」  
「それで浄土って」  
「頭おかしいから」  
「最初から何を書いておるかわからん文章じゃった」  
博士の吉本隆明への評価である。  
「そして行き着いた先がオウムじゃ」  
「それではだな」

「そうじゃ。最初からたかが知れておる」  
また話す博士だった。  
「そうした男が戦後最大の思想家だったのじゃ」  
「そんなのじゃね」  
「知識人が駄目なのも当然だね」  
「何か。おかしいね」  
「それはわかるね」  
「性犯罪者や暴力常習者が大手を振って歩ける」  
異常な社会だ。少なくとも一般社会ではない。  
「それが教師やジャーナリストの世界なのじゃ」  
「腐敗を極めているな」  
「その通りじゃ。わしはあの連中は大嫌いじゃ」  
その知識人達がだというのだ。  
「学会とも距離を置いておる」  
「そこからもか」  
「嫌いだからじゃ」  
理由はそこに他ならなかった。  
「全く以てな」  
「そういえばある週刊誌の人間は」  
牧村はとあるタレントのスクヤンドルをスクープする写真週刊誌のことを思い出した。過去に何十回も問題を起こしている雑誌だ。他人のプライバシーを暴くことを報道の自由と勘違いしているのである。

## 第五十五話 魔水その九

「社内で仕事も出来ない、人間性も腐り果てた連中が行く場所だっ  
たな」

「そうじゃ。そうした人間がじゃ」

「ジャーナリストか」

「呆れた世界じゃよ」

「全くだな。しかし」

「しかし？」

「そうした世界はやがてなくなるな」

こう述べる牧村だった。

「腐り果てれば。やがてはだ」

「塵になって消える」

「そういうことだよな」

「そうだ。腐り続けるものも存在しない」

これもまた牧村の考えだった。彼はそれを述べるのだった。

「永遠というものがないのだからな」

「その通りじゃな。腐っている間が長い場合もあるが」

博士も牧村のその言葉に頷く。

「そのまま腐り続けるものはありはしない」

「世の中つて。腐ったものも多いし」

「それが長い間続いている場合もあるけれど」

「やがてはだね」

「本当になくなるからな」

妖怪達も話していく。

「消えてなくなっていく」

「そうだよね」

「不滅のものってないから」

「やがてはね」

消えていくというのだ。そしてだ。

妖怪達自身もだ。こんなことを話した。

「僕達は死んでもまた生まれ変わるけれどね」

「姿は同じで」

「だから死なないって言えるけれど」

「やっぱり死ぬから」

「そうだよね」

彼等の生死はだ。そうしたものだというのだ。

妖怪の生死と人間の生死が違う。それもだった。

「死んでも何度も蘇る」

「人間は姿が変わって記憶が消えるけれどね」

「僕達は受け継がれるからね」

「そうした意味で死なないんだからね」

「それでも」

けれどだというのだ。

「記憶は永遠だから」

「その辺り魔物もだけれどね」

「記憶は残ってそうしていつてるから」

「その辺りはいいかな」

「だよね」

「妖怪の死はそうした意味での死か」

牧村も今それがわかったのである。

「肉体の死か」

「魂は不滅じゃよ」

博士が牧村の今の言葉に述べた。

「人間は記憶がなくなるがのう」

「しかし妖怪はか」

「そうじゃ。記憶が残る」

そこが違うというのだ。

「そして姿形もそのままじゃ」

「服を着替えるのと同じだね」  
「同じ形の服をまたね」  
「そういう感じなんだよ」  
「人間は。違う服に着替えるけれど」  
同時にこれまでの記憶をなくすというのだ。  
「まあ。死なないつては言えるね」  
「そうだね」  
「そうなるね」  
こう話していく。そしてだった。  
博士がだ。ふと言うのだった。  
「わしもこうなったらじゃ」  
「僕達と一緒になる？」  
「妖怪にね」  
「なつて遊ぶ？」  
「そうするの？」  
「ははは、あと五十年生きたら考えよう」  
博士は顔を崩して笑って言ってみせた。

## 第五十五話 魔水その十

「それか死ぬ時にのう」

「そこで妖怪になるかどうか」

「それを決めるんだね」

「そうしてくれるんだね」

「妖怪になるのも悪くはない」

博士は実際にだ。そう考えていた。

そのうえでだった。博士はだ。牧村にも言った。

「君もどうじゃ？やがてはじゃ」

「妖怪になるかどうか」

「いいぞ。妖怪は長生きじゃ」

その一つの肉体の寿命がだというのである。

「死んでも同じ姿形の肉体で。記憶もそのままじゃ」

「いや」

「いや？」

「それも悪くはないが」

それでもだと。牧村は話す。

「俺は人間として生まれ変わっていききたい」

「そうしたいのか」

「確かにそうした意味で死なないのはいい」

それはだというのだ。

「しかしそれでもだ」

「違うというのじゃな」

「一つの記憶を永遠に持つていくことも辛いことだろう」

牧村の声が曇った。その声だ。

「だからだ。死ぬべきならば死にたい」

「その都度記憶を消して身体を換えて」

「そうしていききたいんだ」



「そうなんだ」

「忌まわしい記憶もある」

人間にはそれがあるというのだ。誰にも忘れてくてもどうしても忘れられない記憶がある。心の傷ともいう。それについて考えての言葉だった。

「だからだ。俺は」

「心の傷ね」

「それは消せない場合もある」

それを話すのだった。

「死ぬことで消えるのならいいと思うがな」

「それも一理あるのう」

博士はその考えを否定しなかった。むしろ肯定していた。

そしてだ。こう話すのだった。6

「実際に人間は難しいものじゃ」

「特に心はな」

「人間は心で人間となるのじゃ」

「その心の傷こそがだな」

「一番厄介じゃ」

博士もわかつている顔で述べる。

「心理学にもなるがな」

「博士ってそれも詳しいよね」

「っていか心理学もやってたっけ」

「そうだったよね」

「うむ、心理学者でもある」

実際にそうだとだ。妖怪達に答える博士だった。

「所謂トラウマじゃ。それは厄介なのじゃ」

「心の傷は。容易には消せない」

「身体の傷は何とかなってもじゃ」

それでも。心はだというのだ。

「心は中々そうはいかん」

「そしてその傷は膿みやすいな」

「身体のそれよりもな」

さらに厄介な理由があった。それであった。

「心を蝕み続ける。癒せる場合もあるが」

「そうならない場合もある」

「それを考えれば。どうしてもな」

「人として生まれ変わるのもいいのじゃな」

「俺はそこまでの心の傷はないが」

牧村自身はそこまでのトラウマはないのだという。しかしなのだった。

彼はだ。ここでさらに話すのだった。

「だがそういう人間は見てきた」

「そうなのじゃな」

「そうだ。極端な暴力を受けてそれが傷になっていた」

そうだったというのだ。

「身体ではなく心に及んでいた」

「暴力はそうしたものじゃ」

まさにそれだと。博士も述べる。

第五十五話 魔水その十一

「身体だけでなく心も傷つけるのじゃよ」

「圧倒的な暴力なら尚更だな」

「圧倒的な暴力は受ける相手を無力にしまつ」

だからこそ恐ろしいのだ。博士は珍しくその目を怒らせていた。そうしてだ。そのうえで話すのだった。

「傷は。受けられるままになり尚更にじゃ」

「傷つけていくな」

「左様じゃ。そうしていくものじゃ」

「それが暴力だな」

「心を傷つけていく」

暴力について話していく。

「それが厄介なのじゃよ」

「そうした人間を見てきた」

牧村は話す。

「だから思うのだ」

「そんな暴力振るう奴なんて許せないけれどね」

「どうせ人間の屑だろうけれど」

「そいつどうなったか知りたいけれど」

「どうなったの？」

「警察に通報された」

そう言ったと述べる牧村だった。

「そして被害者から引き離され後でヤクザ者に喧嘩を売ってコンクリートと一緒に海の中だ」

「自業自得だね」

「っていつかそういう奴って絶対に碌な末路迎えないからね」

「もうこれって世の中の絶対の法則だよね」

「悪事は必ず己に跳ね返る」

博士は今度は神妙な声で述べた。

「それからは逃れられんのじゃ」

「そいつは悪事に相応しい末路を迎えた」

牧村も言う言葉が冷たい。

「しかし。暴力を受けた人間の心の傷は深い」

「それを見てきたから」

「だから牧村さんは言うんだ」

「人間として生まれ変わりたい」

妖怪達もここまで聞いてわかった。彼のその考えがだ。

「確かに。心の傷も残るよ」

「記憶が残るんだからね」

「どうしても」

「そうだ。それにだ」

牧村はここでもうも言った。

「髑髏天使でいることは今だけでいい」

「次の人生ではもういらぬ」

「それもなんだ」

「俺は今髑髏天使だ」

そのことは受け入れる。しかしだというのだ。

「だが、次は普通の人間か動物として生きたい」

「もう髑髏天使じゃなくて」

「他の存在になりたいんだね」

「そう思う。だからだ」

「そういうことなのじゃな」

博士も言った。そうして。

「では君はじゃ」

「妖怪にはならない」

それを言う牧村だった。

「妖怪は嫌いではないが」

「人間だね」

「人間でいたいんだ」

「次も」

「人間でなければ他の生物だ」

どちらにしろ妖怪ではないというのだ。

「それでいたい」

「それもいいね」

「まあ僕達は妖怪だけれどね」

「それでも。それなら」

「それもいいね」

こうした話もしたのだった。そしてだ。

牧村は尊を堪能した後で研究所を出た。そして大学の講義に向かおうとした。

だがそこでだ。不意にだった。

校舎のビニールの廊下を進む彼の周りが一変した。そこは。

嫌な、胸の悪くなる様々な濁った色の水が四方八方に渦巻き合う世界だった。彼は急にその世界に来てしまったのである。

そしてだ。そこにはだ。

男がいた。男は彼の前に立ちこう言ってきたのだ。

「はじめるか」

「早いな、今回は」

「今回の相手は急に動く相手だからな」

それでだと答えるのであった。

「それでだ」

「今回の相手か」

「水だ」

それだというのだ。

## 第五十五話 魔水その十二

「水は今回の貴様等の相手だ」

「俺だけではないか」

「確かにここに呼んだのは貴様だけだ」

「呼んだか。連れて来たと言っべきだな」

「ではそう言い換えよう。しかしだ」

「しかしか」

「ここに来るのは貴様だけではない」

「こう言っつのである。」

「それは言っておく」

「では。ここに」

「そつだ。来たぞ」

牧村の後ろからあの声が出た。そしてだ。

黒いブラウスとスラックスの彼が来た。死神である。

そして魔神達もだ。全員来たのだった。

そのうえで男に対してだ。魔神達が言っつのだつた。

「来ましたよ」

「気配を察したからのう」

「それでだ。ここまでだ」

「来たわよ」

「この世界に来ることは神ならできるとだ」

男は魔神達の言葉を受けたうえで述べた。

「若しくは神に等しい力を持つならばだ」

「しかし俺はか」

「持っているが。それを引き出すまでには至っていない」

「そつだとだ。牧村に述べたのだ。」

「今貴様が神に等しいのは戦う力だけだ」

「空間を移動できる力はないか」

「具体的にはそうなる」

男がここで言いたいのはそうしたことだった。そしてだ。あらためてだ。男は述べた。

「その力が得られるかはわからないがだ」

「それでも今はだな」

「戦いになる」

それになるというのだった。

「四元素の最後の力とだ」

「水か」

それならばだと。牧村は察した。

「混沌の水か」

「前に自分で言ったな。クトゥルフだ」

男はその神の名を話した。

「それだ」

「混沌の水の神か」

「それと戦い。死ぬことだ」

この戦いでもだ。男は牧村達の死を確信して述べる。

「混沌と破壊に飲み込まれることだ」

「その言葉は何度も聞いた」

だが、だ。牧村の言葉は冷静だった。

そしてだ。彼はその冷静なままでだった。逆に男に対して返した。

「ではその神を今すぐにな」

「実体化させるといふのだな」

「そうだ。そうさせる」

こう男に言った。

「戦ってやる」

「わかった。それではだ」

男も牧村の言葉を受けてだった。

「いいな、クトゥルフよ」

「うむ」

その水の中からの声だった。

「それではな」

「準備はいいな」

「何時でもいい」

濁りきった。嫌になる声であった。

「こちらはだ」

「そうか、いいのか」

「盲目のスフィンクスよ」

水はこつ彼を呼んだ。

「その為に私を呼んだのではないのか」

「如何にも」

男も静かに答える。

「それはその通りだ」

「ならばだ」

「すぐに戦うのだな」

「そうする。私はこの者達を倒す」

こつ言い切るのであった。



第五十五話 魔水その十三

「そうして混沌と破壊の世界にしよう」

「そうしてくれるな」

「必ずな」

「では。任せよう」

ここまで話してだ。そうしてだった。

男はだ。ゆっくりと姿を消していった。その中でだ。

彼はだ。水に対して話した。

「ではクトウルフよ」

「うむ」

「貴様に全てを任せた」

「そうさせてもらおう」

「まさか貴様まで辿り着かれるとは思わなかったがな」

「それは以外だったか」

「正直なところその通りだ」

まさにそうだというのである。

「だが。貴様ならばな」

「水は何よりも強い」

その水に対しての。絶対の自負であった。

「それを見るのだな」

「では。見させてもらおう」

「そして楽しむのだな」

「そうさせてもらう。ではだ」

「またな」

こつ言葉を交えさせてであった。男はその姿を完全に消した。

そしてだ。入れ替わりにであった。

水の声がだ。牧村達に向かい合いだ。こつ言つのであった。

「それではだ」

「戦う」

「そうさせてもらおう」

「わかった。もつともだ」

牧村と死神の言葉を受けたうえで、であった。

声はだ。また話すのだった。

「逃れる選択肢はないがな」

「安心しろ、それはだ」

「最初から考えてはいない」

二人はここの声に対して答える。

「貴様を倒す」

「そうさせてもらおう」

「そうだな。それしかないのだ」

また言う声であった。

「生きるか死ぬか」

「選択肢はそれだけだ」

「その二つだけだ」

「いや、一つだ」

だが、だった。声はここでこう言ったのだった。

彼等の選択肢は一つしかない。そしてその理由も言った。

「貴様達は全て私に倒される」

「だからか」

「それでだというのか」

「俺達は貴様に倒される」

「そう言いたいのだな」

「如何にも」

まさにだ。その通りだというのである。

「だからだ。選択肢は一つだ」

「面白い言葉だ」

「これまで何度も聞いたが」

今更だ。そうした言葉では驚かない二人だった。そしてだ。

あらためてだ。声に対して告げる。

「では貴様の選択肢も一つだ」

「それだけしかない」

「私が死ぬというのか」

「そうだ、だからだ」

「一つしかないのだ」

それでだというのである。

「死ぬのは貴様だ」

「これまでの神と同じくな」

「これまでののか」

声にだ。微かだが確かな笑みが宿った。

そしてその笑みでだ。声は話すのであった。

「私がこれまでの混沌の神々と同じだというのか」

「違うか」

「同じ神ではないのか」

「確かに属するものは同じだ」

それは声も認めた。その通りだとだ。

「しかしだ。それでもだ」

「力が」

「それが違うか」

「そうだ、違う」

まさにだ。その通りだというのだ。

## 第五十五話 魔水その十四

「私の力。他の神々とは違う」

「話は聞いた」

「そこまではな」

二人も怯むことなく返す。

「確かにな」

「聞かせてはもらった」

「そうか。それは何よりだ」

「それではだな」

「いいな」

また話す彼等だった。そしてだ。

そのうえでだ。彼等はだ。

それぞれの構えに入った。

牧村は両手を拳にしてそれを己の胸の前で打ち合わせる。

死神は右手を拳にして己の前に置く。そうして。

白、青の光に包まれ。その姿を変えたのであった。

「行くぞ」

「その魂、刈らせてもらう」

右手を一旦開いて握り締め、鎌を一闪させる。それと同時に姿も変えた。

魔神達もだ。それぞれ戦う姿になっていた。

その姿になつてだ。最初に百目が声に問うた。

「では貴方もですね」

「姿を現せというのだな」

「はい」

声に対して一言で答えた。

「そうしてもらえますか」

「わかった。それではだ」

声が実体化した。それは。

蛸を思わせる漆黒の頭、それに蝙蝠の翼、そして鋭い爪が生えた手足、その姿の巨人だった。それがおぞましい水の世界に出て来たのである。

その姿でだ。神は言った。

「これが私の真の姿だ」

「水の神クトゥルフのだな」

「如何にも」

死神の問いにも答えた神だった。

「その通りだ」

「貴様の名前は知っていた」

死神はその神を見据えながら述べた。

「確かにな」

「そうだな。しかし」

「しかし。何だ」

「私の強さは知らないな」

それはだ。どうかというのである。

「知っているか。どうだ」

「察しはついてはいる」

死神は神を見据えながら述べた。

「貴様は。これまでの三柱の神よりもな」

「そうだ、強い」

その通りだと。また答えた神だった。

「私より強い神はナイアーラトホテップと」

「あの黒い男か」

「そして混沌の原初の二神」

「この名前も出た。」

「アザトースとヨグソロホートだけだ」

「その連中だけか」

「如何にも」

神は今度は髑髏天使の問いに答えた。黄金の姿になっている彼にもだ。

「その通りだ」

「そうか。それではだ」

「私を倒しそうしてだな」

「そうだ、最後までいかせてもらおう」

鋭い声で言う髑髏天使だった。

「必ずな」

「そうするか。では来るのだな」

この言葉が戦いのはじまりになった。そしてだ。

まずはだ。魔神達だ。それぞれの光を放ったのだった。

それが神を受ける。だが。

神はそれを受けてもだ。全くだった。

動じない。そしてこう言うのであった。

「そうか」

「効いていないか」

「全くな」

こう魔神達に述べるのである。

「何一つとしてな」

「それではです」

それを聞いてだ。百目はだ。

## 第五十五話 魔水その十五

その身体中にある目からだ。さらに目を出した。

そしてだ。そうしてであった。

そのうえで神にぶつける。目を無数に放ったのである。

放ちながらだ。彼は神に問うた。

「これならどうでしょうか」

「光以外にも使えたのか」

「はい」

その通りだというのである。

「こうして。私達はです」

「それぞれの力を使えるか」

「話はわかった。確かに光よりは効く」

「こう述べる神だった。」

「しかし。まだまだ」

「これだけでは倒せそうもないね」

「そうですね」

クマゾツツは黒い闇、虹蛇は虹を放っていた。だがだった。

そうしたものを受けてもだ。神はだ。まだ立っていたのだ。

そうしてだ。神は言う。

「私はそう簡単には倒せない」

「ではだ」

「そう言うのならだ」

今度はだ。髑髏天使と死神だった。

彼等はそれぞれ身構えてだ。そのうえで。

髑髏天使がだ。剣からあるものを放った。それは。

「これは」

「貴様が水ならだ」

そこからだというのだ。

「俺はこれを使う」

「炎か」

「火は水に弱い」

それを踏まえてだというのだ。

「しかしだ。水は火を消す時にだ」

「その時にか」

「水も蒸発する」

それを知ってだ。使うというのである。

「だからこそやらせてもらう」

「確かに。水も無限ではない」

神もだ。それはわかっているというのだ。

だがだ。こつも言うのだった。

「しかしだ」

「しかしか」

「炎で私を倒せると思うか」

「違うというのだな」

「そうだ、違う」

まさにだ。その通りだというのである。

「こつするのだからな」

「むっ!？」

神はだ。その髑髏天使の炎の前にだ。

水の壁を出した。それで、であった。

炎を防いだ。彼に当たる前にである。そうしてなのだった。

「私に当たらなければどうということはない」

「だからか」

「そうだ、どうということはない」

また言う神だった。

「こつすればいいのだからな」

「確かに。炎もだ」

それもどうか。髑髏天使もわかっていた。



「貴様に触れなければ意味がない」

「何一つとしてだな」

「その通りだ」

「しかしこれで終わりではないな」

神からの言葉である。

「そうだな、何故なら」

「如何にも」

ここで応えたのは死神である。

彼はだ。身構えながら述べる。

「私もいるのだ」

「当然私達も」

「いるぞ」

「忘れるな」

死神だけでなくだ。魔神も言うのであった。

## 第五十五話 魔水その十六

「そう簡単にはやらせん」

「決してだ」

「何があるうともだ」

「では仕掛けてくるのだ」

神がその言葉を返す。

「来い」

「言われずともだ」

死神はその両手の鎌を投げた。両手に持って右から左に振り下ろす様にしてだ。

そのうえで鎌を神に投げる。鎌は激しく回転しながら神に向かう。向かいながらだ。その鎌がだ。

紅蓮の炎に包まれる。その炎でだった。

「貴様を消す」

「その炎の輪でか」

「これならどうだ」

神に対して問う。炎の輪を見据えながら。

「貴様もかわせるか。それとも」

「それとも？」

「防げるか」

「こつ問うのである。」

「この鎌の炎を」

「ならばだ」

神の言葉はここでも冷静なものであった。

そしてその冷静さのままだ。彼は動いてみせた。

右手を前に出した。それでだ。

鎌の前に水の車が出来た。それがだ。

炎の輪に向かいだ。次々にぶつかるのだった。

「水の車輪か」

「私は水ならだ」

それならばだ。どうかというのである。

「自由に使えるのだ」

「だからか」

「そうだ、こうする」

こう話すのである。

「これならばどうか」

「仕方がないか」

死神はだ。炎が水により消されていくのを見てだ。すぐに決断した。

鎌を見据え。こう言うのだった。

「下がれ」

その言葉を受けてだ。鎌は回転を続けながら戻った。

そして彼の手に戻った時にはだ。炎は消えていた。炎の輪は失敗に終わった。

「小細工は通じないという訳だな」

「その様だな」

髑髏天使が彼の横に来て応えた。

「この程度ではな」

「この神は倒せない」

二人はこのことを認識していた。

「ではどうするか」

「それが問題だな」

「さて、それではです」

虹蛇が二人に声をかける。

「どうするかですが」

「御互いにだな」

「どうするかだな」

「どうにかしなければ敗れてしまいます」

虹蛇は現実も話した。彼等の今の現実をだ。

「勝たなければなりません」

「そうだ。私に勝てなければだ」

どうなるか。それを話すのは神だった。

「貴様等は死ぬ」

「そうだな。死ぬな」

「我々がだ」

それは言うまでもなかった。そうしてだ。

髑髏天使と死神はだ。また構えを取った。そこにだ。

目玉が出て来てだ。彼等に言ってきた。

「いいかな」

「何だ」

死神がその目玉に問う。

「何の用だ」

「苦戦しているようだけれど」

「そう見えるか」

「うん、見えるよ」

まずはこう告げてからの言葉だった。

「だから出て来たんだよ」

「ただ出て来ただけではないな」

「当然ね。それだけじゃ負けちゃうからね」

目玉は死神の顔の横に来て話す。

「絶対にしないよ」

「ではどうする」

「ここに呼んだよ」

目玉が言うようになった。

## 第五十五話 魔水その十七

死神のハーレーが来た。髑髏天使のサイドカーがだ。二つのマシンがだ。それぞれの主の前に来たのだ。

そしてだ。そのうえでだった。目玉はまた言うのだった。

「これがあると全然違うよね」

「これを使って戦え」

「そういうことか」

「クトウルフは強いから」

それでだとだ。目玉の言葉が続く。

「使えるものは何でも使わないとね」

「わかった」

髑髏天使が目玉のその言葉に頷いた。そうして。

己のサイドカーをだ。あのスカラベに変えた。

すぐにそれに乗る。その上から死神達に声をかける。

「貴様等もだな」

「うん、じゃあ」

目玉が彼のその言葉に応える。その瞬間にだ。

目玉はハーレーに向かう。それと合さる。

そうしてだ。ハーレーと目玉はだ。銀色の馬になった。

八本脚の馬になってだ。そのうえで死神に声をかける。

「じゃあ乗ろうか」

「わかった」

死神もだ。彼の言葉に頷く。

「では乗らせてもらおう」

「そうして戦おうね」

「そうするか。共にな」

こうしてだ。二人はそれぞれの乗るべきものに乗った。

そのうえで構え。また突進するのだった。

神はだ。その彼等に対してだ。その爪を向けた。  
その爪でだ。二人を切り裂こうとする。十本の禍々しい刃が襲い掛かる。

刃に対して。髑髏天使は。

剣を一本にする。それを巨大化させ。

それで受けた。刃達をだ。

「むっ」

「接近戦ではそれか」

髑髏天使は神の攻撃を受けてから述べた。

「それを使うのか」

「見切っていたか」

「風の動きでわかった」

それでだ。わかったというのである。

「貴様は風はわからないか」

「それがどうしたというのだ」

「そうだな。火はわかってもだ」

水と対立するだ。それはわかってもだというのだ。

彼と直接関係のない風はだ。どうかというのだった。

「そうだな。わからないな」

「水は万能だ」

その水の神の言葉である。

「他のものを知る必要はない」

「それもわかった」

無論だ。神の言葉をそのまま受けたのではない。

聞いてだ。それからの言葉だった。

「それではだ。この戦いは」

「勝てる」

死神も言った。

「確実にだ。勝てる」

「勝てるというのか、私に」

「そつだ、貴様のその驕りによつてだ」

「勝てるな、間違ひなくな」

髑髏天使も言う。彼等だけではなかつた。

魔神達もだ。言うのだった。

「勝てる、この戦いはな」

「私に勝てるというのか」

「そつだ。一つ言つておく」

髑髏天使はこう髪に返した。

「慢心や油断、驕りはだ」

「何だというのだ」

「破滅と同義語だ」

それだというのだ。

「それを言つておく」

「神の力を侮るのか」

「侮つてはいない」

「では何だというのだ」

「少なくとも俺達は貴様を侮つてはいない」

神をだ。それは決してないというのだ。

## 第五十五話 魔水その十八

「侮っているのは貴様だ」

「私だというのはか」

「それがどういう結果をもたらすかはもう言った」

既にだというのである。それはだ。

そうしてだ。まず髑髏天使がであった。

そのスカラベに乗りながらだ。神に突進する。

突進しながら。両手に持つ巨大な剣を一閃させた。

その一閃で竜巻を出す。その竜巻が神を打つ。

するとだ。水が飛び散った。

「むっ、私の身体がか」

「水の神ならばだ」

髑髏天使は竜巻を続けて出す。そうしながらだ。神に対して言うのだ。

「その身体は水が全てだな」

「そうだな。その通りだな」

死神もだった。彼もだった。

彼は馬に乗りそうしてだ。鎌を一閃させる。

そこから鎌イ足を放つ。それが神を斬る。

それでも水を飛び散らせる。それを出しながら言うのだった。

「生物は元々その大部分が水だが」

「貴方は特にですね」

「そうだな」

百目と逆さ男はそれぞれの手、逆さ男は本来は足がある部分のその手からだ鎌イ足を出している。それで神の身体を打ちながらの言葉だった。

「水の神だからこそ」

「その身体はだな」



「全てがですね」

「水だな」

「だからこそか」

神も攻撃を浴びせる。しかしそれはだ。

魔神達の中にはその魔水をだ。風で打ち消していた。そうして神の攻撃を防いでいる。

それを見ながらだ。神は言うのだった。

「風で攻撃をするか」

「如何にも」

「こうしてだ」

「これならどうか」

「確かに水は飛び散る」

それは事実だと。神は認めた。

しかしだ。神はここでこうも言うのだった。

「しかし飛び散った水はだ」

「また一つになる」

「そう言うのだな」

「そうだ。その通りだ」

こう答える。髑髏天使と死神にだ。

「所詮は同じことだ」

「いや、違う」

「そうはならない」

ところがだ。二人はここで神に言葉を返した。

「残念だな」

「そこからのことはもう考えている」

「考えているだと」

「そうだ、水を蒸発させる」

「消すこともだ」

蒸発、この言葉にこそ全てがあった。

髑髏天使がだ。あるものを出した。それは。

炎だ。それをだ。また出してみせたのだ。

それは一つではなかった。無数の赤い火球を己の周りに出す。そして。

その火球をそれぞれ飛び回らせた。それだった。

飛び散った水を蒸発させていく。相殺しているのだ。

そしてだ。死神もだった。

髑髏天使と同じ様にして火を出した。飛ばせる。それによって神の身体を構成していた水をだ。次から次に蒸発させていくのであった。

「私の身体が」

「これでどうだ」

「少しは堪えている筈だがな」

「いや、かなりじゃな」

バーバヤーガは右手に持っている棒を一閃させ風を出しながら二人に答えた。

「その証拠にじゃ」

「そうだね。攻撃がね」

これは死神が乗る馬と一体化している目玉の言葉だ。

「弱まってきているよ」

「その規模も威力もじゃ」

「攻撃が効いてるんだよ」

目玉はそれを見抜いていた。無論バーバヤーガもだ。

「確実にね」

「このまま攻めればじゃ」

「やれるよ」

こう髑髏天使と死神に述べる。

## 第五十五話 魔水その十九

「安心してよいぞ」

「この戦い勝てるからね」

「そうだな、先に言った通りだ」

「勝つのは私達だ」

髑髏天使と死神の言葉は強いものだった。

「このままやらせてもらう」

「そして貴様を倒す」

「おのれ」

二人に対してだ。神が今言ったのは。

呪詛だった。最早それしか言えなかった。

「我を滅ぼすか」

「最初からそのつもりだ」

「それは言ったと思うが」

こう返す二人だった。

「だからこそこうしてだ」

「仕掛けている」

「そうか。これでは」

神の口調がだ。変わった。

そしてだ。攻撃が次第に弱くなりだ。

神の動きが衰える。それを見てだ。百目が言った。

「このままですね」

「攻めるか」

「そうしろというのだな」

「そうです。そうするべきです」

さらなる攻撃をとだ。彼は二人に話したのだった。

「無論我々もそうします」

「わかった。それではだ」

「ここで」

二人はさらにだった。風を出し炎も出ず。その二つがだ。今一つになった。

風が炎を乗せ吹き荒れる。それを受けてだ。

神からも炎が出た。その炎は。

赤と青、それこそがだった。

「まさか。このまま」

「そうだ。貴様は倒れる」

「このままな」

二人が神に告げる。

「その炎が何よりの証拠だ」

「滅びるのは貴様だ」

「まだだ」

しかしだ。神はだ。ここであった。

全身に何かを宿らせた。そのうえでだ。

禍々しい、濁った様々な色の水を全身から出した。それによつてだ。

二人だけでなく魔神達をも襲う。そうしてきてだ。

「滅びるのならばだ」

「最後の攻撃か!？」

「それを」

「それを仕掛けて来たか」

「只で滅びるつもりはない」

神は魔神達に対しても述べた。

「貴様等もまた。道連れだ」

「まずいですね」

「そうだね。これはね」

クマゾツツが百目の言葉に頷いた。

「これだけの水が来るとなると」

「危険だね」

「防ぐにもです」

「どうなのか。百目が言う。」

「水の量が多過ぎます」

「向こうも。命を捨てて仕掛けて来たから」

「風も炎も追いつかない」

「バジリスクはどちらも出している。しかしだ。」

「そのどちらもがだ。間に合わなかった。」

「今の神の水を防ぐにはあまりにも少ない。そしてだ。」

「髑髏天使も死神も魔神達もだ。水に包まれた。神の水に。」

「水その輪の中で。神の音がする。」

「このまま貴様等を全て」

「道連れにするか」

「そうだ、滅びるのだ」

「神の音が死神に答える。」

「我と共にだ」

「うっん、何とかしないといけないけれど」

「馬と同化している目玉も言う。」

## 第五十五話 魔水その二十

「この状況だとね」

「手はないか」

「僕達全員の力でも無理だよ」

「こう死神に言うのである。」

「ちよつと。今はね」

「そうか。ではこのまま」

「何か。手は」

「なければそれを見つckerだけだ」

「ここで言ったのはだ。髑髏天使だった。」

「そしてそのうえでだ。彼はだ。」

「全身に力を込めた。そのうえでだ。」

「全ての力を放った。髑髏天使としての全ての力をだ。」

その身体の姿勢もだ。変わっていた。両手を交差させて身体を屈めさせたものからだ。それを思いきり伸ばしてだ。開放するものになっっていた。

「そして黄金の光をだ。水に対して放ったのだ。」

「光か」

「いや、違う」

「これは光であって光じゃない」

「気だ」

「それだとだ。魔神達は悟ったのである。」

「天使のオーラか」

「それでこの状況を打開する」

「そうするというのね」

「今から」

「これならばだ」

「髑髏天使は力を開放し続けながら話す。」

「どうだ」

「この力は」

神の声もだ。それに反応を見せた。

「まさかとは思うが」

「俺は死ぬつもりはない」

だからだともいうのである。

「貴様等を倒し。そうしてだ」

「生きるというのか」

「ここで死ぬつもりは絶対はない」

「しかしだ。それでもだ」

「言っておく」

神の言葉を遮ってだった。彼はまた言った。

「俺は最後の最後まで戦う」

「そして勝つか」

「諦めたらそれで終わりだ」

だからだというのである。

「それでだ。俺は戦う」

「あくまでか」

「今もだ。この力は」

「どうだというのだ」

「これまでの俺の力ではない」

それはだ。発しながら感じ取っていた。

「黄金の天使の力ではない」

「では何だというのだ」

「まだわからない」

それでもだと。彼は言葉として言っている。

「だが。この力でだ」

「我を退けるというのか」

「そうする。受けるがいい」

言っただ。そのオーラを全ての方角に放った。

それでだ。そのオーラでだ。

水をだ。消し去ったのだった。

水は瞬く間にだ。光の中に消えていく。

そして光の中であ。またあの二つの炎が出て来た。

それが己の周囲に起こっているのを見てだ。髑髏天使は言うのだった。

「これで終わりだな」

「くっ、確かにな」

神の声もだ。それを認めるものだった。

「これでは。この力を受けてはだ」

「死ぬな」

「そうだ、死ぬ」

まさにだ。その通りだというのだった。

そしてだ。神は元の姿に戻った。しかしその姿は赤と青の炎に包まれようとしている。実際に死が近付いているのはだ。明らかだった。



第五十五話 魔水その二十一

その二つの炎の中でだ。神は言うのだった。

「貴様等の勝ちだ」

「それを認めるか」

「認めよう。しかしだ」

「しかし。何だ」

「その力は何だ」

神が問うのはそのことだった。

「最高位の六枚の翼を持つ黄金の天使以上の力か」

「そうだな。それは」

「それはか」

「おそらく。俺は九つの階級を超えた」

天使の全ての階級をだ。超えたというのだ。

「さらに上の位に至ったようだ」

「その位にか」

「その力だ」

こう神に対して告げる。

「それで貴様を倒すことができた」

「そうか。それにか」

「そういうことだ。それではだ」

「わかつている。このままだ」

神はだ。今は潔かった。

二つの炎に囲まれながらだ。神は告げる。

「消えよう。ではな」

「これで四つの元素は全て倒した」

地水火風の全てをだというのだ。

「残りは三柱か」

「さてな。それはどうか」

「どういうことだ、一体」

「確かに混沌の中心には三柱の神々がいる」  
クトウルフとしてだ。こう語るのだった。

「しかしだ。その前にだ」

「まだいるというのか」

「それは言わぬ。そこまで言う程私は愚かではない」  
髑髏天使に対しての言葉だった。

「だが。三柱に辿り着く前にだ」

「まだ神がいるのか」

「それは自分で確かめることだ。それではだ」

「完全に滅びるか」

「そうなる。ではだ」

最後にこう言っただ。神は消えたのだった。

神の滅びと共に世界は元に戻った。元のあの世界だった。

そこに戻るとだ。魔神達も人の姿になっていた。無論髑髏天使達もだ。

その彼等の前にだ。男が出て来た。そしてだ。

牧村を見てだ。こう告げたのだった。

「まさかクトウルフまで倒すとはな」

「思わなかったか」

「予想外だ」

こう告げるのである。

「まさにな。だが」

「だが、か」

「そうだ。しかも新たな力を手に入れたか」

「この力が何かはまだわからないが」

「そうか。だが今の貴様ならばだ」

「どうだというのだ。今の俺だと」

「我々とも対せられるか」

それがだ。可能ではというのだ。

「しかしその前にだ」  
「もう一柱神がいるな」  
「如何にも。私の忠実な腹心」  
その存在だとだ。男は話すのだった。  
「それを差し向けるとしよう」  
「そうか。まずはか」  
「その神と相手をしてもらおう」  
「勿体ぶっているのではないな」  
牧村が男に対して言う。  
「そうではないな」  
「何なら私が相手でもいい」  
それでもいいとさえ言う髪だった。  
「しかしだ。それよりもだ」  
「その神が戦いたいというのだな」  
「そういうことだ。そしてだ」  
さらに言う神だった。

第五十五話 魔水その二十二

「先程の光だが」

「見ていたのだな」

「あれは今の天使の力ではないな」

男は牧村に問う。

「そうだな」

「確かに。あれはそれ以上の力だ」

「九つの階級以上の力か」

「それは何かだが」

「貴様は知っているのか」

「それは貴様で調べて知るのでな」

男は言わなかった。そのことはだ。

そうしてだ。あらためてこう牧村に言つのであった。

「そうするのだな」

「俺自身でか」

「それをする手段はあるな」

「ない訳ではない」

実際にそうだと答える牧村だった。

「調べてもらうことはできる」

「ではだ。そうするのだな」

「少しは聞いているがな」

ふとだ。博士の言葉を思い出して言ったのである。

「だが詳しくではない」

「そうか。詳しくはか」

「詳しく聞いておくことにしよう」

「ではだ。次の戦いはだ」

「貴様のその腹心か」

「その神と戦いだ」

そうしてだ。それからだというのだ。

「それに勝てばだ」

「貴様か」

「貴様と戦うのだな」

牧村だけでなく死神もまた男に対して言う。

「混沌の中心にか」

「いよいよ迫るか」

「混沌の中心には三柱の神々がいる」

男の背に黒い光が走った。それを背にしての言葉だった。

「その一柱が私だ」

「そして残りの二柱」

「それが貴様等なのだな」

「そうだ。その三柱には尋常なことでは勝てはしない」

こつだ。黒い光を背にしたまま話すのだった。その有り得ない光はだ。男を照らすのではなくだ。その中に隠してしまっていた。

だがそれでいてだ。姿は見えていた。光の中でだ。男はその姿を  
はつきりと見せていてそのうえで彼等に対して話すのである。

「私を含めてな」

「その時が最後の戦いか」

「それのはじまりだな」

「混沌との最後の戦い」

「そののだな」

「それがどうなるか」

そのこともだ。男は話す。

表情はない。だがそれでも言葉が出されていた。

「楽しみではあるな」

「破壊と混沌の世界にすること」

「それがだな」

「それが楽しみだ、ではだ」

ここまで話してだ。そうしてだった。

男はその黒い光の中に消えた。やがて光も消えてだ。後には何も残っていなかった。それを見届けてだ。

魔神達も姿を消した。それからだった。

死神もだ。男に話すのだった。

「また帰るか」

「そうするか」

「そしてだ。また会おう」

こう話すのだった。そうしてだった。

己の前にハーレーを呼んでだ。それに乗ってだ。

姿を消した。そして牧村もだ。

その場を去ろうとする。だがふとだった。

思いなおしてだ。懐から携帯を出した。そしてそれをかけてだ。

話す相手は。

「何、お兄ちゃん」

「今は何をしている」

「何を？」

「そうだ、何をだ」

こう妹に問うのである。

「何をしている」

「何をつて。帰るところよ」

「学校からか」

「部活も終わったしね」

丁度だ。そうした時間だというのである。

「今からね」

「わかった。それならだ」

「迎えに来てくれるの？」

「そうしていいか」

携帯の向こうの妹にこう問うのである。

「今からだ。いいか」

「うん、いいよ」

返答はだ。明るいものだった。

「有り難うね」

「有り難うか」

「うん、迎えに来てくれるからね」

それでだというのだ。礼を述べるのだった。

そしてその話の後だ。牧村は電話を切った。そしてそのうえでだ  
った。

あのサイドカーに乗り妹を迎えに行く。そうしたのであった。

第五十五話

完

2011・3・21

## 第五十六話 使長その一

髑髏天使

第五十六話 使長

またあの研究室でだ。博士が牧村に話していた。

「そうか、あそこで出したか」

「急に出た」

牧村が博士に対して話す。

「俺も想像しなかった」

「そのパターン自体はいつも通りだよね」

「そうだよね」

一つ目小僧と雨ふり小僧がここで話す。

「一ランク上の天使になる時とね」

「同じだよね」

「そうじゃな。同じじゃな」

その通りだとだ。博士も述べるのだった。

「全く以てのう」

「けれどさ。これまでとは違うよね」

「だよな」

その一つ目小僧と雨ふり小僧が話す。雨ふり小僧は部屋の中だといふのである。その頭に被っている古い傘が濡れている。

その彼等がだ。話すのであった。

「九つの階級よりさらに上だから」

「天使の階級ってまだあったんだ」

「九つだけじゃなかったんだ」

豆腐小僧もそれを言う。

「まだあったんだ」

「今度は天使長だったっけ」

垢舐めも言う。



「それだったっけ」

「そうじゃ。実はじゃ」

ここで話す博士だった。妖怪だけでなく牧村にもである。

「天使達をまとめるじゃ。天使長という存在がおるのじゃ」

「天使長ねえ」

「何か凄く偉そうというか強そうだけれど」

「そういうのもいるんだね」

「そうなんだね」

「左様じゃ。天使達をまとめ神の傍にいる存在じゃ」

それがだ。天使長という存在だというのである。

「ミカエルとかガブリエルという名前の天使がそれにあたる」

「あれか」

牧村はそうした名前を聞いて口を開いた。

「あの天使達か」

「そうじゃ。名前は聞いておるな」

「有名だからな」

それでだ。知っているというのである。

「ミカエルにしるガブリエルにしるな」

「その強さはまさに神に匹敵する」

博士はその強さについても述べた。

「そう文献には書かれている」

「それにか」

「古代ヘブライの文献じゃ」

これまただ。かなり古いものだった。実際にその机の上にだ。パピルスか何かに書かれてたと思われる。古代ヘブライ文字の文章があった。

それを読みながらだ。博士は牧村に話すのだった。

「これじゃがな」

「ヘブライか、今度は」

「その天使の本場じゃ」

「そうだったな。確かな」

「ここに書いておる。天使長となった髑髏天使の力は  
具体的にだ。どういったものかというのだ。」

「神に匹敵する。それこそじゃ」

「それこそか」

「これまでのどの天使なぞ比較にならん」

「今の天使でもか」

「うむ、それ以上じゃ」

まさにだ。そうだというのだった。

「遥かにじゃ」

「では。その力でか」

「最後まで戦うな」

「そうさせてもらう」

強い言葉でだ。言い切った牧村だった。

「是非な」

「そうだね。それじゃあね」

「真剣な話はこれで終わりにして」

「何か食べよう」

「お菓子でも果物でもね」

「甘いものをね」

妖怪達がここで笑顔で言う。話が一段落ついたところだ。話す  
のだった。

## 第五十六話 使長その二

「何がいいかな」

「メロンなんてどうかな」

塗り壁の言葉である。

「あれ、凄く美味しいよ」

「ああ、それいいなあ」

一反木綿が塗り壁のその言葉に賛成した。

「メロン、昔は高かったけれど」

「今はかなり安くなったしね」

「しかも味がよくなったから」

その味もだ。違ってきているというのだ。

そうした話をしてだった。実際にだ。

メロンが出て来た。皆でそのメロンを食べていく。当然博士と牧村もだ。だが博士はそのメロンを前にしてだ。こんなことを言った。

「最高のメロンの食べ方はじゃ」

「どんなの？」

「どんな食べ方なの？」

「アイスクリームじゃ」

ここでこれを出すのだった。

「それとブランデーじゃ」

「その二つも一緒に？」

「一緒に食べるんだね」

「メロンと一緒に」6

「この食べ方が最高に美味しいのじゃ」

こう話すのだった。

「一度やると病みつきになる」

「そこまでいいんだ」

「アイスクリームとブランデーも」

「その二つも一緒に食べる」

「それがいいんだね」

「やってみるか？」

博士は妖怪達に対しても勧めた。その食べ方をだ。

「かなりいいぞ」

「そうだね。それじゃあね」

「僕達もね」

「やってみようかな」

「そうしようか」

妖怪達も博士の誘いに頷いた。そうしてだ。

彼等は牧村に対してもだ。こう話すのだった。

「どう？牧村さんも」

「この食べ方どう？」

「アイスクリームとブランデー」

「どうかな、メロンと一緒に」

「それでどうかな」

「アイスクリームはいいが」

牧村はまずはそれはいいとした。アイスクリームはだ。

「しかし。もう一つは」

「ああ、ブランデーね」

「お酒だからだね」

「だからそれは駄目なんだ」

「そうだ。酒は駄目だ」

これが牧村の返事だった。やはり彼は避けは駄目なのだ。

「だからブランデーはいい」

「ううん、残念だね」

「お酒がどうしても駄目なんだ」

「それこそ全然なんだ」

「一滴もなんだね」

「そうだ。一滴も飲めない」

とにかく酒は絶対に飲めない牧村だった。体質なのだ。

「ウイスキーボンボンもだ」

「それも飲めないんだ」

「そっちなんだね」

「そうしたお菓子も」

「だからそれはいい」

あらためてだ。ブランデーは断った彼だった。

「そういうことだな」

「いや、待ってくれ」

しかしである。ここで博士が話に加わったのだった。

そうしてだ。彼はこう牧村達に話す。

「アルコールがないブランデーならどうじゃ」

「えっ、アルコールなし？」

「そういうお酒もあるんだ」

「そうなんだ」

「うむ、最近そうしたものもある」

実際にそうだとだ。博士は妖怪達に話す。牧村は今は沈黙してい

る。その彼には話しておらず聞かせている状況であった。

## 第五十六話 使長その三

「ビールでもあるじゃろ」

「ああ、ノンアルコールビール」

「あれと同じなんだ」

「それがブランデーにもあるんだ」

「そうなんだね」

「そうじゃ。それはどうじゃ」

また話す博士だった。

「牧村君はどうじゃ」

「アルコールが入ってなければいい」

牧村はだ。こう話した。

「それならどんなものでもだ」

「よし、じゃあ決まりじゃな」

「そうだ。それならだ」

「うむ、ではアルコールのないブランデーをじゃ」

「わかりました」

ろく子が博士の言葉に応えた。そうしてだ。

そのノンアルコールブランデーをだ。冷蔵庫から出して来たのだ。

そしてそれを牧村に差し出す。それから彼に話した。

「これでいいですね」

「済まないな」

「いいんですよ。お酒が飲めないなら」

「こうしたものをか」

「飲めばいいですから」

「酒を飲めなくても酒の味は楽しめるか」

「凄世の中になりましたね」

牧村に笑顔で話するろく子だった。

「これも文明の進歩の結果ですね」

「そうだな。酒の味自体を楽しめる」  
「牧村さんはお菓子にはお酒を使われるんですか？」  
「使いはする」  
「それはするというのが。しかしであった」  
「だがそうした時はな」  
「味は残りませうけれどアルコールは消えますね」  
「だから平気だ」  
「結局はだ。アルコールが問題なのだった」  
「それでな」  
「だからですね」  
「その通りだ。だから」  
「お菓子に使うのは平気ですね」  
「大丈夫だ」  
「まさにそうだというのが。である」  
「それならだ」  
「アルコールですか」  
「酒の味自体は大丈夫だ」  
「それはいいというのだった」  
「ジューズのように飲むことはしないがな」  
「成程、体質なのですね」  
「飲めない者もおるからのう」  
「博士もここで話す」  
「織田信長もそうじゃったしな」  
「そうそう、あの人ね」  
「あの人は飲めなかつたよね」  
「ここで妖怪達が楽しそうに話す」  
「飲みそうな感じなんだけれどね」  
「あれでお酒は全然駄目だね」  
「甘いものが好きだつたんだよ」  
「その通りじゃ。織田信長は酒よりも甘いものじゃった」

博士がこう話すのだ。ろく子が言うのであった。

「牧村さんと同じですね」

「体質がだな」

「流石に性格は違いますが」

その言葉からだ。ろく子もまた織田信長を知っていることが窺えた。だが牧村はこのことについては問わずにだ。話をさらに聞くのだった。

「甘いものがお好きのところといい」

「そうか。しかし」

「しかし？」

「織田信長と酒は合いそうだがな」

「実は違うんですよ、それが」

「意外だな」

牧村は静かに言った。呟く様に。

「そこが」

「わしも最初は少し驚いた」

それは博士もだという。



## 第五十六話 使長その四

「如何にも飲みそうじゃからな」

「しかし違うか」

「見た目は往々にして裏切られるものじゃ」

博士はこうした風にも述べた。

「それは君もあつたじやろう」

「そうだな。戦いでもな」

髑髏天使としてのだ。その戦いでもだというのだ。

「そうしたことが何度もあつた」

「そうじやろう。真の姿を出す敵も多いな」

「あの男もだな」

その黒い男だ。彼のこと話すのだった。

「あの黒い男もだな」

「ナイアーラトホテップじゃな」

「あの男は一見すると人だが」

「真の姿は全く違う」

それを言う博士だった。

「とはいつてもどういった姿はというとじゃ」

「わからないか」

「わからん。だが腹心がおると言っておつたな」

「そちらはわかるか」

「イホウンデーじゃな」

「ここでこの名前が出た。」

「おそらくそれじゃ」

「それがあの男の腹心か」

「腹心というよりは妻か」

「妻か」

「もう一人のその神かも知れん」

博士の話は少しばかりあやふやなものになってきた。

「しかしどちらにしてもじゃ」

「あの男と関係が深い神か」

「腹心というのもあながち嘘ではない」

そのことは否定されなかった。

「その辺りはどうにもよくわからん」

「それがその神か」

「イホウンデーじゃ」

「そうなのか」

「だが。その力はじゃ」

力はどうなのかと。博士はその目を真剣なものにさせて述べた。

「かなりのものじゃ」

「絶大な力があるか」

「ナイアーラトホテップは混沌の神々の中でも中心の一柱じゃ」

「そのもう一柱ともなると」

「相当な力がある」

それは間違いないというのである。

「だから用心してくれるようにな」

「そうだな。そしてその神との戦いで」

「君の力じゃな」

「天使長か」

その天使のことだ。話は戻ったのだった。

牧村は考える目になってだ。博士に尋ねるのだった。

「その力はどれだけのものだ」

「これまでの九つの天使の階級のそれを全て合わせたよりもじゃ」

「強いか」

「比べものにならん」

そこまでだというのである。

「それこそ。力だけならじゃ」

「神にも等しいのだったな」

「そうじゃ。そうした力じゃよ」  
「その力を使えば」  
「君は残りの混沌の神々に勝てるやも知れん」  
「そうなる可能性についての言及が為された。」  
「そして生き残れるやもな」  
「そうか。神を倒す神の力か」  
「それを手に入れ」  
「さらにだと。博士は話す。」  
「使いこなすかじゃ」  
「使いこなすか」  
「手に入れるだけでは駄目じゃ」  
「それで終わりではないというのである。」  
「手に入れた力はじゃ」  
「そのうえで使いこなす」  
「そうしなければ駄目じゃ」  
「そうだな。これまでの力と同じだな」  
「難しく考える必要はない」  
「博士はだ。それはいいというのだった。」  
「難しく考えるとかえって駄目じゃ」  
「これまでと同じだな」  
「そう考えればよい」  
「天使長の力も」  
「それも同じじゃ」  
「また言う博士だった。」

## 第五十六話 使長その五

「これまでとな」

「難しく考えずにか」

「そのうえで使いこなす」

「わかった。それならだ」

「剣を使うのと同じじゃ」

天使長の力と剣をだ。同じとするのだった。

「それとじゃ。同じじゃ」

「では。新たな剣でだ」

「最後の最後まで戦うのじゃぞ」

「そうさせてもらう。まずは次の戦いか」

「次の戦いは重要ですね」

ろく子が話した。こうだ。

「天使長になれるか。そしてなつてから」

「その力を使いこなせるか」

「神の力はかなりのものです」

言うまでもないことだが、だ。ろく子は今はそれをあえて言ったのである。

「これまでの力とは全く違うので」

「しかしだな」

「はい、難しく考えずにです」

「使いこなすか」

「剣に例えればです」

ろく子もだ。力を剣に例えてだ。話をするのだった。

「大きな、重くて」

「そして切れ味の鋭い剣か」

「そうなりますね。そうした剣です」

「それを俺が操る」

「そうなります。巨大で重い業物です」

天使長の力はだ。そうしたものだと話される。

その話をしてだ。ろく子だけでなく博士もだ。牧村を見て告げた。

「それを君が使いこなせば」

「必ず生きて戻れます」

「だから。頼んだぞ」

「使いこなして下さいね」

「そしてじゃ。今はじゃ」

「食べましよう」

ここまで話してだ。話を戻してきた。

メロンをだ。話に出すのであった。

「アイスクリームとブランデーと一緒にじゃ」

「牧村さんのブランデーはノンアルコールで」

「それで皆で食べるとしようぞ」

「楽しく」

笑顔で話す二人だった。それを受けてだ。妖怪達がまた賑やかに話す。

「そうそう、メロンなんてね」

「ついこの前まで夢みたいなの御馳走だったし」

「それがこうして簡単に食べられるなんて」

「凄い話だよ、これって」

「メロンはそうだったな」

牧村も知っている話だ。かつてメロン、それにバナナは滅多に食べられないどころではなかった。最高の御馳走の一つだったのだ。

「かつてはな」

「決して何処かの尊師や將軍様の好物というだけではないぞ」

「そうだよ。あの連中が好きでもね」

「それでもだよ」

「美味しいのは変わらないし」

妖怪達も笑顔で話す。ここでもだ。

「だからね。皆でね」

「皆で食べよう」

「食べることはじゃ」

博士の言葉が哲学めいてきた。

「人生最大の喜びの一つじゃ」

「だよ。僕達にとってもね」

「妖怪生最大の喜びの一つだよ」

「最高の遊びだよ」

「そうだよ」

「食べることもだ。遊びだというのだ。」

「生きる為に食べるんじゃないからね」

「食べる為に生きる」

「ひいては遊ぶ為に生きる」

「そういうものだからね」

「遊ぶ為にだ」

牧村はその言葉に反応した。

「それが妖怪か。そして」

「人間じゃ」

博士が彼のその言葉を補完した。

## 第五十六話 使長その六

「そういうものじゃよ」

「そうだな。遊ぶことはそのままな」

「生きることじゃ」

これがだ。博士の哲学だった。

「では。遊ぶ為にじゃ」

「生きるというんだな」

「人間は遊ぶものじゃ」

「遊びは。大事か」

「大事じゃぞ。極論すればじゃ」

博士はさらにだ。こつも話した。

「仕事やそうしたものもじゃ」

「遊びに入るのか」

「そうなる。だから全ては遊びじゃ」

「戦いはどうだ」

牧村は彼が行うべきだ。その戦いはどうかとだ。問うたのだった。

「あれはどうなのか」

「戦いか」

「そうだ、あれはどうなのだ」

博士に対して問う。強い言葉で。

「戦いもそうなるのか」

「そうじゃな。戦いもな」

「なるのか」

「やはり極論じゃかなる」

その通りだというのだった。戦いもまただというのだ。

「しかし戦いに溺れるとじゃ」

「そうだな。魔物になる」

智天使のことを思い出してだ。そのうえでの言葉だった。

「危ういところじゃったな」

「そうだったな。あの時はな」

「戦いに溺れず、捉われずか」

「これは遊び全体に言える」

戦いだけではないというのである。

「溺れては駄目なのじゃ」

「そうそう、楽しむんだよ」

「溺れたらそれで終わりだからね」

「捉われてもね」

妖怪達もだ。そのアイスクリームとブランデーを入れたメロンを食べながらだ。話すのだった。その二つを組み合わせたメロンの味は見事だった。

「どうしようもなくなるんだよね」

「魔物もそうだしね」

「そういうことを忘れずにじゃ」

それでだと話す博士だった。

「よいな。天使長になってもじゃ」

「戦うか」

「そうするのじゃ」

こう牧村に話をする博士と妖怪達だった。その話をしてメロンを食べてだ。牧村は研究室を後にした。そうして大学の講義に出た。

教室に入り友人達がいる場所に座るとだ。彼等はすぐにこう言うてきた。

「博士のところに行ったのかよ」

「あのデビル博士のところにか」

「わかるのか」

「口元にアイス付いてるぜ」

友人の一人が笑いながらこのことを指摘した。

「そこでアイス貰ったよな」

「それでわかるのか」



「だったな。あの博士誰かが来たら絶対に甘いもの出すからな」

それは牧村に対してだけではないのだ。博士は誰かにだけ好意を向ける人間ではない。博愛主義的な面も備えているのである。

「だからわかるんだよ」

「アイス食ってたのかよ」

「いいな、それってな」

「その通りだ」

静かに述べる牧村だった。

「俺はアイスを食べていた」

「やっぱりな。そうだったんだな」

「アイス食ってたのか」

「美味かったか？それで」

「アイスクリームだけではなかった」

正直にだ。牧村は何を食べたのかありのままに話した。

## 第五十六話 使長その七

「他のものもだ」

「食べたのかよ」

「アイスだけでもいいってのに」

「他に何食ったんだ？」

「それで何をなんだよ」

「メロンだ」

それをだと。やはり正直に話したのだった。

「それとだ」

「おい、まだあるのかよ」

「アイスにメロンにまだかよ」

「随分と豪勢だな」

「アルコールを抜いたブランデーだ」

最後の最後までだ。正直に話したのだった。

「その三つだ」

「凄いな、おい」

「何か話を聞いたら俺もな」

「俺もだよ」

彼等は羨ましい顔でそれぞれ言う。

「博士のところ行くか」

「それでアイスとメロン貰うか」

「そうするか？」

「だよな」

「博士は誰も拒まない」

とりわけこの学園の生徒ならだ。博士のお菓子や果物は実は無尽蔵とも思える程あるのだ。ただしどの冷蔵庫に収めているかは謎である。

「そうするといい」

「だよな。じゃあ行くか」

「この講義の後でな」

「そうするか」

「けれどな」

ここで一人がこんなことを言った。

「またアイスとメロンが出て来るとは限らないよな」

「だよな。あの博士つてその都度出してくれるもの違うからな」

「チョコレートだったりケーキだったり」

その他にはだ。こうしたものもあったのだ。

「クレープだったりな」

「あんみつだったこともあるよな」

「杏仁豆腐もあったしな」

「色々食べる人だからな」

「だからな。何が出て来るかな」

「わからないんだよな」

それが博士であった。

「けれどそれがだよな」

「そうそう。だからこそな」

「楽しいよな」

彼等は笑いながら話していく。

「何が出てくるかわからないからな」

「しかも美味しいことは保障されてるしな」

「確実に楽しみがあるからな」

「だからいいんだよな」

「博士もだ」

牧村もここで話す。

「誰かが来るのを待っている」

「俺最近それがわかったんだよ」

「俺もな」

「俺もだよ」

ここで友人達は笑いながら話していく。

「最初見た時何だこの人って思ったけれどな」

「見るからに怪しいからなあ」

「白い髭だらけの顔に黒い服」

そうした外見がだ。余計にそう見させているのだ。

「外見まんまだからな」

「マッドサイエンティストっていうかな」

「理学博士だったよな」

「工学博士でもあったよな」

博士の博士号の話にもなる。

「医学博士でもあったよな」

「他にも色々あったよな」

「文学に哲学に」

「それに法学に」

「博士号幾つも持つてるからな」

それが博士なのだ。その仇名は伊達ではないのだ。

## 第五十六話 使長その八

「そういう人だからな」

「しかも何歳だった？」

「百歳だろ？」

「あれっ、百八じゃなかったか？」

「百十五だろ」

博士の年齢はだ。実は誰も知らないのだった。

「第一次世界大戦の頃は生きていたんだっけ」

「日露戦争その目で見たんじゃないかったか？」

「日韓併合の時ソウルにいたって聞いたぞ」

最早百年以上前の話だ。日韓併合という神武開闢以来の失政、第二次世界大戦ですらそれと比べたら些細な過ちでしかないそれからもう百年なのだ。

「実際の年齢もわからないからな」

「怪人って思ってたからな」

「いや、リアルで怪人だろ」

「そうだろ」

「だからな」

その怪しさがだ。原因であったのだ。

「博士のことってな」

「幾つかわからないってせいだな」

「何者かすらな」

「だからなあ。ちよっとな」

「怖かったんだよ」

博士のそうしたことがだ。博士自身を誤解させていたのだ。

しかしだ。それがなのだった。

「いざ御会いしてみたらな」

「それが全然違うからな」

「そうそう。気さくでな」  
「色々と教えてくれるしな」  
「生徒にも礼儀正しいしな」  
「いい人だよ」  
博士の人間性についてはだ。肯定的であった。  
「だからな。研究室行くのもな」  
「いいよな」  
「お菓子だけじゃないしな」  
「博士自身もな」  
「行くといい」  
牧村はその彼等にまた告げた。  
「博士も喜んでくれる」  
「ああ。何かいつも変な面々一緒にいるけれどな」  
「ありや小学生か？」  
「博士のお孫さんじゃないのか？」  
「曾孫だろ」  
「いや、やしや孫だろ」  
とりあえず妖怪達はだ。上手く化けていたのである。  
「何か育児所みたいな研究室だよな」  
「そんな感じにもなってるよな」  
「ちよつとな」  
「そんなことも話される。」  
「アットホームっていうのか？」  
「秘書の人も奇麗だしな」  
「だよな、あの人も」  
「何ていったっけ」  
今度はろく子の話になる。ただし誰も彼女が妖怪だとは知らない。  
「ええと、ろく子さんか？」  
「変わった名前だよな」  
「美人さんだけれどな」

「何か前はうちの学生さんで？」

「博士のお孫さんの一人だったってか？」

「そうだったか？」

社会的にはそうなっているらしい。牧村もはじめて知ったことだ。

「あの人にも会えるしな」

「それ考えたらな」

「やっぱりいいよな」

「博士のところに行くのな」

「本当だよな」

「いいのか」

ここぞだ。牧村はこう言ったのだった。

しかした。友人達はだ。その彼にむつとした顔でこう返したのである。

「御前にはわからないよ」

「そつだよ、彼女持ちにはな」

「絶対にわからないよ」

「こんな話はな」

「俺は別にだ」

だが、だ。また言う彼だった。

## 第五十六話 使長その九

「それは」

「若奈ちゃんと付き合っていないとでも言うのか？」

「まさかと思うけれどそれはないよな」

「誰もそんな言葉信じないからな」

「それわかっているんだろうな」

「彼女だ」

それは確かだと答える牧村だった。

「確かにな。それはだ」

「俺達は彼女いないんだよ」

「残念だけれどな」

「そこが違うんだよ、御前と」

「その辺り格差社会なんだよ」

随分と懐かしい共産主義的な言葉も出て来ている。

「彼女がいるのといないのとじゃな」

「もう全然違うんだよ、わかっているのかよ」

「だからな。俺達だってな」

「彼女が欲しいんだよ」

「だからだよ」

それでだ。ろく子だというのである。

「ああした綺麗な人が彼女だとな」

「やっぱりいいんだよ」

「わかるか？そういうの」

「そのところどうなんだよ」

「この世で一番綺麗というのだ」

そうした話にだ。牧村は何故か受け取った。

そしてであった。彼はこう言うのだった。

「やはりだ。それは」



「若奈ちゃんか？」

「そう言うのかよ」

「まさかと思うけれどな」

「そう思う」

実際にだ。そうだとしたのであった。

「俺はだ。そう思う」

「うっん、若奈ちゃんってな」

「そっだよな」

「綺麗っていつかな」

「ちよっと違うよな」

「可愛いだよな」

彼等の若奈への評価はこちらであった。可愛いというのである。

「小柄で童顔でな」

「垂れ目もいいしな」

「八重歯も見えるし」

「そっいうの見てたらな」

「可愛いだよな」

「可愛いか」

牧村も彼等の言葉を聞いて述べた。

「皆はそう思うのか」

「ちよっと綺麗ってイメージないな」

「大人って感じしないからな」

「制服着たらそのまま高校生だろ」

「いや、中学生だろ」

「小学生でも通用しないか？」

小柄で童顔だからだ。どうしてもそう見えてしまっというのである。

この辺りが若奈の特徴であった。彼女はそうした風に見られているのである。

「六年かそれ位でな」

「そうかもな。女の人ってあの辺りで背が止まるしな」

「若奈ちゃんどう見たって小さいしな」

「それ考えたらな」

「やっぱり可愛いだよな」

「そうだよな」

またこう話す彼等だった。

「綺麗じゃないよ」

「御前には悪いけれどな」

「可愛いという感じだよ」

「そうか」

彼等のそうした言葉をだ。牧村はそのまま受けた。

そしてだ。それからこう話したのだった。

「可愛いか」

「あれっ、それでもいいのかよ」

「綺麗にはこだわらないんだな」

「そうなんだな」

「どちらも褒め言葉だ」

だからだ。いいという彼だった。

## 第五十六話 使長その十

「それならそれでいい」

「そうか。何か器の大きいこと言うな」

「褒め言葉ならいいか」

「そう言うんだな」

「俺はそれでいい」

また言う牧村だった。

「それでな」

「そうか、何かそれってな」

「余裕だよな」

「そうだよな」

それだと話す友人達だった。

「彼氏持ちのな」

「それ以外の何でもないよな」

「ったくよ、いいよな」

やっかみの言葉が話される。

「俺達も彼女作るか」

「羨ましいからな」

「ああ、そうしような」

「絶対にな」

こんな話をするのだった。そうしてだ。

彼等はだ。今度はこんな話をするのだった。

「合コンするか」

「そうだな、今度社会学部とやるらしいしな」

「それに出るか？」

「教育学部もやるしな」

話がそちらに移った。ある意味学生らしい話だ。

「そこにも行くか」

「それで絶対にな」

「彼女捕まえような」

牧村はその話を聞くだけになっていた。そうになっていた。そんな話から講義になってた。それを受けてからだ。彼は家への帰路についた。サイドカーに乗り家に着いた。

家には今は誰もいなかった。その誰もいない家の中を進み己の部屋に入った。

ゲームをはじめようとした。しかしそこで、であった。

窓からだ。彼等が声をかけてきたのである。

「いいでしょうか」

「今からだよ」

老人と子供がいた。彼等が声をかけてきたのである。

窓のところにいる。それも二階のだ。

見れば宙に浮かんでいる。そうして牧村に言ってきたのだ。

「戦いですが」

「用意はいかな」

「用意はいつでもできています」

こつ答える牧村だった。

「ゲームをしようと思っていたがな」

「ですがその前にです」

「しないといけないことができたから」

「わかっている」

それはもう既にというのであった。

「ならばだ。行くか」

「はい、それではです」

「今からいいよね」

「では少し待ってくれるか」

窓の向こうに浮かんでいる老人と子供にだった。

立ち上がながら話した。だがそれでもだった。

子供がだ。楽しげに笑いながらその牧村に言ってきた。

「玄関から出るつもりかな」  
「そのつもりだが」  
「別にそんな必要ないじゃない」  
「こつ牧村に話すのだ。」  
「窓から出ればね」  
「髑髏天使になつてか」  
「うん、それでいいんじゃないの？」  
「そういうわけにはいかない」  
「人間の世界の観点からだ。子供に話す牧村だった。」  
「今家にいるのは俺だけだ」  
「だからなんだ」  
「戸締りをする必要がある」  
「こつ話すのである。」  
「だからだ。窓から出ることはだ」  
「戸締りですか」  
「それを忘れはどうにもならない」  
「それはその通りですね」  
「老人が牧村のその話に頷いた。」

## 第五十六話 使長その十一

「さもなければ家によからぬ者が入ってきます」

「泥棒とかそういうのだね」

「はい、そうです」

老人が子供に答えた。

「人間の世界にはつきもののそうした存在には注意しないといけません」

「そうだね。そういう連中は何時でもいるからね」

「何処にでも」

「じゃあ仕方ないね」

子供はいささか残念そうに述べた。

「玄関の戸締りをしてからだね」

「はい、それまで待ちましょう」

「うん、じゃあ」

子供も素直に頷いた。そうしてだった。

牧村は玄関から出てそこに鍵をかけた。その時にはだ。

二人は彼の前に来ていて。足は地に着けている。そのうえでだ。

牧村に対してだ。あらためて話した。

「では」

「行こうね」

「これでいい」

牧村もその彼等に対して述べた。

「行くとしよう」

「はい、それでは」

「いいね。行こうね」

彼等の世界が一変した。そのうえでだった。

彼等はあの世界に来た、今度のあの世界はといつと。

今回もわからない世界だった。暗闇と触手が混ざり合っている。

その中にだ。既に彼等がいた。

「遅かったな」

「少し待ったぞ」

青年と紳士がいた。他の魔神達もだ。

全員揃っていた。そのうえで牧村に言ってきたのだ。

「既に相手はだ」

「ここにいる」

「そうだな。いるな」

牧村は混沌の中にだ。男を見た。

男は混沌の中に浮かんでいる。牧村を見ていた。 10

その彼がだ。こう牧村に言ってきた。

「貴様も来たな」

「呼ばれてだ」

「はい、私達がです」

「呼んだんだよ」

老人と子供がここで名乗りを挙げた。

「そうさせてもらいました」

「どっちにしろいないとはじまらないよね」

「そうか。貴様等が呼んだか」

男は今度は老人達を見た。

そのうえでだ。こう彼等に言うのだった。

「手間は省けた」

「彼を呼ぶ手間がですか」

「それをだね」

「それだけ動かなくて済んだ。そしてだ」

「私は今来た」

不意に霧が闇の中に出て来た。

それはすぐに実体化してだ。死神の姿になったのである。

その姿を現した死神がだ。男に言うのだった。

「こうしてだ」

「そうか。来たか」

「これで役者は全て揃ったな」

死神はまた男に対して言った。

「そうだな。違うか」

「その通りだ。こちらもだ」

「既呼んでいるのか」

「ここにいます」

そのだ。混沌の世界にだというのだ。

「この世界にだ」

「触手か」

牧村は闇の中に蠢く触手を見て問うた。

「それがなのか」

「正解だが完全ではない」

「完全ではないのか」

「この世界全てがだ。そうなのだ」

「俺達が今度戦う神か」

「そういうことだ。さてだ」

男は言う。するとだ。

混沌から何かが浮き出てきた。その姿は。

異様なものだった。無数の触手と様々な動物の足が所々に生え色

はどれだけあるかわからない。柱の如き姿に顔も頭も何も無い。



## 第五十六話 使長その十二

そして鹿の角があちこちに生えている。その姿が出て来たのである。

その得体の知れないものを見てだ。死神が言った。

「イホウンデーか」

「そうよ」

その得体の知れないものから返答が来た。

「私がイホウンデーよ」

「ナイアーラトホテップの妻にして腹心だったな」

「如何にも。その通りよ」

「混沌で夫婦になっっているのは貴様等だけ」

死神はこのことも言った。

「その貴様とここで会うとはな」

「混沌の神はだ」

男も言ってきた。ここでだ。

「そもそもそうした考えはない」

「婚姻は」

「ないんだね」

「そうだ、ない」

こゝろ魔神達にも話すのだった。

「我々には。この世界の常識はない」

「そもそも常識自体がないな」

「あるのは混沌のみ」

「それが貴様等だな」

「そうだな」

「その通りだ。だが私達は違う」

男の言葉が二人称になった。

「こゝろして二人でいるのだ」

「私達は共に生まれた存在」  
その得体の知れない女神も言う。  
「混沌の原初の中から」  
「私達四柱はそうだ」  
彼等だけではないとも言つ男だった。  
「混沌の中にだ。生まれてきたのだ」  
「その中で私だけが女だった」  
「そして私だけが男だった」  
つまりだ。性別があつたのは彼等だけだというのだ。混沌の原初  
の中から生まれた存在ではだ。  
「だからこそね」  
「夫婦になつたのだ」  
「混沌の中にはないものを」  
「あえてしてみたのだ」  
「それが貴様等か」  
牧村はここまで聞いてまた述べた。  
「道化になつたつもりか」  
「道化？あれか」  
男が牧村の言葉に反応を返してきた。  
「我々はそれだというのか」  
「それでしているというのか」  
「そうかも知れない」  
その可能性をだ。否定しない男だった。  
「道化という言葉は人間達を見てはじめて知つたがな」  
「自分をそれだと認めるのか」  
「人間を嘲笑する存在だ」  
それがだというのである。  
「私だ。ただしだ」  
「ただし。何だ」  
「私は人間だけを嘲笑する存在ではない」

「他の存在もか」

「この世のあらゆるものを嘲笑する。それが私だ」  
混沌の神として。そのことを話すのだった。

「このナイアーラトホテップなのだ」

「それがか」

「ではだ。私はだ」

静かに言っただ。男はだ。

闇の中に消えた。そして声だけで牧村達に話した。

「この戦いも見させてもらおう」

「伴侶の戦いを見るのか」

「そうだ。そうさせてもらおう」

こう牧村達に告げるのである。

「ゆっくりとな」

「さて、それではだ」

「はじめるとするか」

牧村と死神はあらためてだ。神を見た。

その神は相変わらずの姿だ。その姿でだった。

第五十六話 使長その十三

「牧村達に対してだ。こう言ってきたのである。」

「はじめるにあたってね」

「何だというのだ、それで」

「髑髏天使だったわね」

「牧村を見下ろしてだ。そのうえでの言葉だった。」

「貴方はどうやら」

「感じ取っているか」

「今あるそれ以上の力を発揮しようとしているわね」

「これが牧村への言葉だった。」

「そうね。私達を超えるかも知れない力をね」

「ではその力を出す前にか」

「いえ、出した貴方を倒したくもあるわ」

「嘲笑だった。彼女もそれを言うのだった。」

「それも一興ね」

「余裕だな」

「ええ、余裕よ」

「それだというのだ。」

「神としてね」

「混沌の神か」

「その混沌に飲み込んであげるわ」

「言いながらだ。その周りにだ。」

「どす黒い何かを出してきた。それは。」

「瘴気ですね」

「そうじゃな」

「魔神達は既に正体を出していた。バーバヤーガーが百目の言葉に  
応える。」

「それじゃな」

「この神の力はそれなのですね」

「戦闘開始という訳じゃな」

「ではだ」

「こちらをはじめるとしよう」

牧村と死神もだ。その瘴気を見てだった。

それぞれ身構える。そうしてだ。

牧村は両手を拳にしてそれを己の胸の前で打ち合わせる。

死神は右手を拳にして己の胸の前に置いた。するとだ。

それぞれ二色の、白と青の光が起こってだ。彼等は戦う姿になっ  
た。

今度は最初から今二人がなれる最も強い姿になっていた。その姿  
でだ。

髑髏天使は拳を開いてから握り締め死神は右手の鎌を一閃させた。

それからだ。二人は言った。

「行くぞ」

「刈らせてもらう」

この言葉を合図にしてだ。戦いに入るのだった。

まずはだ。神からだった。

その瘴気を四方八方に放つ。それでだ。

そこにあるもの、空間も含めてだ。全てを溶かしていく。それを  
見てだ。

髑髏天使がだ。まず言った。

「何もかもをか」

「ええ、そうよ」

神からの言葉だ。

「私の瘴気は全てを溶かしていくわ」

「この世界も何もかもか」

「そう。そしてそれはね」

「俺達もだな」

「勿論よ。全てを溶かしていくから」

当然だ。彼等もだというのである。

「さあ、それに対してどうするのかしら」

「その瘴気は酸だな」

死神が言った。その瘴気を見てだ。

「そうだな。正体は酸だな」

「わかるのね、それが」

「見ればわかることだ」

こう言ってみせる死神だった。

「かなり強力ではあるようだがな」

「混沌の酸よ」

それだとだ。神も言う。

「これはね。混沌の酸よ」

「全てを溶かす酸か」

「そう、全てをね」

「それに対してどうするか」

今度は髑髏天使が言う。

「それがこの戦いということだな」

「どうしようもないわよ」

神はその言葉に勝ち誇ったものを含ませて述べた。

「誰にもね」

「勝つのは貴様ということか」

「そういうことになるわね。私の酸は何を以てしても防げないわ」

「そうだというのである。」

## 第五十六話 使長その十四

「私の力で出す酸は」

「混沌の中心にある力か」

「死神はそれだというのだ。」

「それによつてか」

「さて、覚悟はいいわね」

「神は動かない。その不気味な身体を全く動かさない。」

「そのうえでだった。髑髏天使達に言うのである。」

「このまま。溶かされることね」

「さて、どうしたものか」

「ここでこう言ったのはバジリスクだった。」

「俺の石化を使うか」

「酸を石にするのか」

「そうだ。それならどうか」

「こうだ。ワーウルフに対して言うのである。」

「それで防ぐか」

「それはできそうにないな」

「ワーウルフはこうバジリスクの問いに答えた。」

「残念だがな」

「できないか」

「そうだ、石では酸を止められない」

「だからだ。できないというのだ。」

「それは無理だ」

「そう言うのか」

「他のことを考えるべきだな」

「俺は石化が最大の武器なのだがな」

「しかしそれはできない」

「また言ってみせるワーウルフだった。」

「どうしてもな」

「通じないか」

「そうだ。そして俺の力もだ」

今度はだ。ワーウルフが話すのだった。

「それはできないのだ」

「貴様もか」

「俺はこの身体で戦う」

つまりだ。彼の得意技は接近戦だというのだ。その牙と爪によつてである。

「しかし。これではだ」

「近付けないのだな」

「どうしてもな。できない」

また言うワーウルフだった。

「溶かされてしまう」

「そういうことになるか」

「そうだ、俺も攻められない」

「手詰まりか、これでは」

少なくとも彼等ではだった。有効な手は打てなかった。

しかしだった。それでもだ。

魔神達はそれぞれの手や目、口から光を放つ。それで酸を防いではいた。

それは一定の効果を發揮していた。ある程度止めてはいた。

しかしだ。それでもだ。

それは完全ではない。少しずつだ。

酸は彼等に迫っていた。全てを溶かしながらだ。

「さて、このままではね」

「溶かされるわね」

「そうなるか」

九尾の狐とウェンティゴが忌々しげに言う。その酸を見ながら。

「そのつもりはなくても」



「そうなってしまおうか」

「さて、どうするのかしら」

余裕と共にだ。また言ってみせる神だった。

「覚悟を決めて運命を受け止めるのかしら」

「運命か」

その言葉に反応を見せたのはだ。髑髏天使だった。

彼は黄金の六枚の翼の姿だ。その姿でだ。

神の巨大な姿を見据えてだ。こう言うのだった。

「運命を言うのか」

「そうよ、その通りよ」

神は彼に対しても余裕を見せる。

「混沌に飲み込まれる。それが運命なのよ」

「運命はそうしたものではない」

髑髏天使は神のその言葉を否定した。違うといたのである。

## 第五十六話 使長その十五

「貴様にとつては。残念だがな」

「違うというのね」

「そうだ、違う」

また言う彼だった。

「運命は決まったものではない」

「ではどういふものなのかしら」

「決めるものだ」

それだというのだ。彼はだ。

「己で切り開き。決めるものなのだ」

「人間の考えね」

「その通りだ」

まさにだ。人間の考えだというのだ。

「それが悪いか」

「神の考えとは違うわ」

神もだ。その考えを言ってみせた。

「神の考えは絶対よ」

「だからか。俺の考えはか」

「いいかどうか考えるまでもないわ」

「神の考えは絶対か」

「そういうことよ。だから」

その運命のことを話したのだった。

「運命は。変えられないわ」

「果たしてそれが真実かどうか」

髑髏天使は負けていなかった。それは言葉に出していた。

「見せてやるわ」

「そうだな。それはな」

神である死神もだ。こう言っていた。

「私も見せよう」

「貴様もか」

「そうだ、見せる」

こうだ。髑髏天使に答えるのである。

「私も。その運命は自分で切り開くということだ」

「貴様は神ではないのか」

「確かに神だ」

それは否定しなかった。

「だが。それでもだ」

「それでもか」

「私も運命については同じ考えになった」

「己で切り開くものか」

「貴様は本来だ」

神とその酸を見据えながら。髑髏天使に話すのである。

「智天使になった時に終わっていたのだ」

「それが運命だったのか」

「本来はな、魔物になりだ」

そのうえであるというのだ。

「そして私に刈られる運命にあった」

「しかしそうはならなかったな」

「そうだ。そしてそのことこそがだ」

「運命をか。切り開くということか」

それである。髑髏天使は聞いた。

それを聞いてだ。あらためてであった。

彼も神を見据えてだ。こう死神に返した。

「では見せてやろう」

「運命をか」

「それを切り開くことをだ。見せてやろう」

彼がこう言うのだ。彼と共に戦う魔神達もだ。口々に彼に言ってきた。

「ではだ」

「見せてもらうよ、その運命を」

「己で切り開くというそれを」

「見せてもらうわ」

「そうだな。それではだ」

どうするかだ。髑髏天使はだ。

己の身体に力を込めた。するとだ。

黄金の身体がだ。少しずつ変わった。

あのクトウルフとの戦いの時の光が再び彼を覆いだ。そしてだつた。

身体は七色に輝き髑髏もその色になる。翼も変わった。

それまで六つであった翼はだ。両手を両足にも一対ずつ生えた。

背中にもう一組現れた。六対、そして十二枚の七色の翼になったのだ。

虹色に輝く十二枚の翼を持つ姿になった。それこそがだ。

「これがだな」

「その天使は何だ」

「天使長だ」

それだとだ。死神に話すのだった。

## 第五十六話 使長その十六

「これがだ。九つの階級の上に立つだ」

「天使長か」

「ミカエルやガブリエルの力だ」

聖書にも出て来るだ。その天使達だというのだ。

「神に等しい力なのだ」

「そしてその力でか」

「俺は戦う」

「運命もだな」

「切り開く。そうする」

「では見せてもらおう」

死神はその髑髏天使に対して告げた。

「先に言った通りにな」

「そうさせてもらう。それではだ」

髑髏天使は身構えた。そのうえでだ。

彼は両手の剣、今度は一本ずつ持っているそれをだ。

一本にした時の様に巨大にしてだ。その剣にだ。

七色の光を注ぎ込んだ。それを一気に振る。するとだ。

酸がだ。その一振りでだ。

消えた。瞬く間にだ。それを見た神が思わず言った。

「まさか。私の酸を」

「これまでとは力が違う」

剣を振った髑髏天使の言葉だ。彼はこう言ったのだ。

「この力ならばだ」

「私を倒せるというのね」

「運命を切り開くことができる」

まさにだ。それができるといふのだ。

「確実にだ」

「いえ、それはないわ」

神は気付いていなかった。今の自分の言葉は虚勢だということに  
だ。

そしてその虚勢でだ。神はまた言った。

「決してね」

「決してか」

「ええ、決してよ」

こう返すのである。気付かない虚勢のまま。

「運命は決まっているのよ」

「では確かめる」

髑髏天使はこうその神に返した。

「今からな」

「さあ、受けるがいいわ」

神はまた酸を出してきた。これまで以上に強くだ。

「この酸を受けて。溶けるのよ」

「手出しはいい」

髑髏天使は死神と魔神達に告げた。

「ここは俺がだ」

「一人で倒すというのか」

「そうだ、そうする」

こう死神に話すのだった。

「俺一人でだ。やる」

「言うものだな。それではだ」

「これでだ」

両手の巨大になっただ。

右手のサーベルも左手の剣もだ。今度はだ。

前に突き出した。両手で一度にだ。

それは神には届かなかった。しかし今度もだった。

神の酸を消し去った。剣にある虹色の光で。

髑髏天使は酸を消すとさらにであった。両手の剣を振り回しながら

前に突き進む。彼はまさに虹色の竜巻になった。そのうえで神に突っ込んでいく。それを見てだ。神はだ。酸の壁を出そうとしてきたのである。

「これなら。どうかしら」

「壁か」

「これまでとは違うわよ」

こう言っただ。その酸の壁を出してきたのだ。

「この壁は。簡単には」

「破れはしないというのだな」

「そうよ。私の力の全てを注ぎ込んだ壁よ」

見ればだ。これまでと密度が違っていた。

それは髑髏天使からもわかった。しかしだ。

彼はその壁に対して向かい続ける。そうして言うのであった。

「言った筈だ」

「運命を切り開くというのね」

「そうだ、そうする」

まさにだ。そうするということである。

## 第五十六話 使長その十七

「そして俺は生きる」

「そうだね。生きるんだよ」

目玉が死神の傍に出て来た。そのうえでだ。

彼に対してだ。親しげな声で言ってきたのである。

「君は絶対だね」

「その為にもだ。俺はだ」

どうするかを言うのだった。

「こつして突き進みだ。勝つ」

「私に対してなの」

「そついうことだ」

混沌の神にだ。また言葉を向けた。

「俺の今の力で。俺は生きる」

こつ言つてであつた。壁に体当たりをした。

壁はだ。それを受けてだつた。

一撃でだ。突き破られた。そして神が驚く間もなく。

彼はさらにだ。神の身体を貫いた。それを受けると。

神の巨体に青白い炎が宿つた。まさに勝負ありだつた。

それを確認してからだ。神はここでようやく驚きの声をあげたのだつた。

「まさか」

「運命は切り開かれた」

髑髏天使は神の身体を突き抜けてから反転した。そのうえで己が先程までいた場所に戻つてだ。着地してから述べるのだった。

「こつしてだ」

「私に勝つたのね」

「そつだ、勝つた」

その通りだと言つ髑髏天使だつた。



「俺はまずは今は運命を切り開いた」

「私に勝つなんて」

「これが運命だ」

また運命と言ってみせる髑髏天使だった。

「この通りだ」

「わかったわ。けれどね」

「けれど。何だ」

「私に勝ったとしても。運命自体は」

「変わらないというのか」

「混沌の中心にいる神々」

彼女も含めてであった。それは。

「残り三柱は私なぞ及びもつかない存在だから」

「この天使長の力でもか」

「勝てはしないわ」

こう髑髏天使に告げるのである。

「絶対にね」

「俺は同じだ」

「同じ？」

「どの神に対しても同じだ」

そういう意味での同じだとだ。青白い炎に包まれていく神に対して告げるのである。

「運命を切り開いていく」

「ナイアーラトホテップはね」

この神の名前をだ。急に出してだった。

「私の夫であるけれど妻の私よりも遙かにね」

「強い力を持っているのか」

「既に封印は解かれたわ」

神は言う。

「混沌の中心の封印はね」

「何時の間にも？」

それを聞いてだ。目玉が驚いた様に言った。

「あの二柱まで」

「そうよ。既にね」

「あの四柱だけじゃなかったんだ」

「我が夫の力を以てすればね」

ナイアーラトホテップだ。彼ならばだというのだ。

「それは可能なのよ」

「そうだったんだ。あの男が」

「ええ。じゃあ」

ここまで話してであった。神はだ。

青白い炎に包まれてだ。そうしてであった。

その中に消えようとしてだ。最後の言葉を髑髏天使達に告げた。

「名残惜しいけれどこれでね」

「死ぬか」

「そうよ。敗れた者は消える」

そうなるというのである。

「だからね。これでね」

「わかった。それではだ」

「さようなら」

最後の言葉はこれであった。その言葉を出してだ。

消えたのであった。青白い炎の中に。

神が姿を消えるとだ。世界は元に戻った。

戻ったのは橋の真ん中だ。かつて髑髏天使が烏男と闘ったあの場所だ。

## 第五十六話 使長その十八

そこにだ。全員でいた。姿は戻ると同時に元になった。

その彼等の前にだ。男がいた。そしてだつた。

彼等を見据えてだ。こう言つてきたのである。

「遂にだな」

「貴様との戦いの時が来たな」

「そうだな。つまりだ」

それがどういふことなのかだ。男は彼等にそのことも話した。

「貴様等は遂に混沌の中心に迫つたのだ」

「最後の戦いだな」

「そうだ。そこに迫つたのだ」

まさにだ。そうだとするのである。

「貴様等はそこに迫りそして」

「死ぬといふのだな」

「これは忠告だ」

神としての言葉だつた。混沌のだ。

「今のうちに知人には別れを告げておけ」

「別れをか」

「貴様等は間違いなく死ぬのだ」

だからだといふのである。

「そうしておけ。いいな」

「言つものだな」

それを言われてもであつた。牧村はだ。

平然としてだ。こう返すのだつた。

「貴様が勝つと決まっている様だな」

「では貴様等が勝つといふのか」

「私には敗北はない」

「それは絶対にか」

「そうだ、絶対にだ」  
それをだ。断言してみせる男であった。  
「それはない。別れの挨拶を終えたらだ」  
「それならばか」  
「来るのだ」  
男からだ。誘いの声をかけたのである。  
「待っているからな」  
「待たなくても心配はいらない」  
今度は死神が男に話す。  
「こちらから出向くからだ」  
「それでか」  
「そうだ。待つ必要はない」  
男のその漆黒の姿を見据えての言葉だった。  
「こちらから行くからだ」  
「そうか。それではだ」  
「残る三柱」  
残った混沌の神々の数である。  
「その貴様等を全て倒させてもらおう」  
「ちよつと凄いや」  
目玉もここで話す。  
「今の僕達はね」  
「凄いのか」  
「とにかく。こちらから行くから」  
「無論私達もです」  
老人もだった。男に対して話すのである。  
「こちらから出向くつもりですから」  
「貴様等もか」  
「はい、そうです」  
老人は魔神達を代表して男に話す。そうしているのだ。  
「そうさせてもらいますので」

「では。来るのだ」

男はだ。今は待つているとは言わなかつた。それでだ。ここまで告げて姿を消してだ。後には牧村達が残つた。その彼等はだ。男が消えるとだ。

まずは魔神達がだ。こつ牧村に話したのだ。

「それではです」

「最後の戦いがはじまるけれどね」

「今は帰らせてもらつ」

こつ彼に言つのである。

「これからです。正念場は」

「最後の最後で、です」

老人と小男の言葉だ。

「私達もその前にです」

「精一杯遊んできます」

「思い残すことがないようにか」

人間の考えでだ。牧村は彼等に問い返した。

「それでか」

「そうなりますね」

老人はそのことを否定しなかつた。

「これからは」

「貴様等もか」

牧村は老人の話を聞いて静かに言つた。

「では俺もだ」

「遊ばれますか？」

「遊ぶがそれ以上にだ」

何をするかというのである。

「挨拶をして回るか」

「挨拶か」

「そつだ、挨拶だ」

死神にも答えるのだった。

「挨拶をして回る」

「混沌の中心に入る前にだな」

「必ず生きて帰る」

その考えも述べるのだった。

「何があるうともな。しかしその前にだ」

「暫しの別れだな」

「それ位はしておかないと気が済まない」

他ならぬだ。牧村の気がだというのだ。

そうした話をしてだ。そのうえでだった。

彼は死神とも別れた。そうしてであった。

混沌の中心に向かう前に為すべきことを果しに入った。それは彼の一つの覚悟でもあった。戦う者としての強い覚悟だったのである。

## 第五十六話 完

2011・4・4

## 第五十七話 挨拶その一

髑髏天使

第五十七話 挨拶

まずはだ。博士のところであった。

博士と妖怪達にだ。話すのだった。

「そうか、行って来るのじゃな」

「今からな」

こつだ。いつもの姿勢でまずは博士に述べた。

「それでだが」

「そうじゃな。帰って来た時にじゃな」

「何か美味しい菓子はないか」

「ケーキはどうじゃ？」

博士はその牧村にこれはどうかというのだった。

「とびきりのじゃ。デコレーションケーキじゃ」

「デコレーションか」

「うむ、山月堂のな」

博士のお気に入りの店だ。その店のものだというのだ。

「そののじゃが」

「そうか。山月堂か」

「君も好きじゃろ」

牧村もその店の菓子は好きだと知っていただ。そのうえで  
の言葉  
だった。

「だからじゃ。どうじゃ」

「そうだな。それではな」

「うむ、では飛び切りのデコレーションを用意しておこつ」

博士は楽しげに笑って述べた。

「今日これから注文しておく」

「済まないな」

「いいのじゃよ。君の最後の戦いじゃ」

博士は白い髭の中に白い歯を見せてだ。そうして話すのだった。

「それが終わった祝いにじゃ。最高のケーキと一緒に食べよう」

「そうさせてもらうか」

「ではな。待つておるぞ」

「僕達もだよ」

「ケーキ一緒に食べようね」

妖怪達もだ。牧村達に対して話すのだった。

「僕達もケーキ大好きだし」

「だからね」

「そのケーキ一緒に食べようね」

「そうだな。ケーキも皆で食べる方がいい」

牧村は微笑んで述べた。

「だからだな。戻つて来ればだな」

「御茶も凄いの用意しておきますから」

ろく子の首が伸びてきた。そのうえで牧村に告げる。首が彼のす

ぐ傍まで来てだ。そうして彼に対して笑顔で声をかけるのだった。

「イギリス王室が飲むものです」

「イギリス王室か」

「それを用意しておきますので」

「緑茶も用意しておくか」

博士は笑いながらまた話してきた。

「こちらは宮内庁ご用達じゃ」

「どうして調べたの？そんなの」

「宮内庁って」

「うむ、電話で聞いた」

博士は妖怪達に笑顔で話した。

「宮内庁に直接じゃ」

「それでわかるんだ」

「それだけなんだ」



「そうじゃ。宮内庁に聞けば教えてくれるのじゃ」

実際にそうだと話す博士だった。

「そうしたことは教えてくれるぞ」

「教えてくれないこともあるんだ」

「そうしたことっていうと」

「他にも」

「まあ知れば尋常なことでは済まん話もある」

この辺りはまさに謎である。皇室の謎というものの程底の深いものではない。それを知ることが博士でも容易なことではないのだ。

「わしも知ったが」

「言えないね、多分」

「他言無用って言われたんだね」

「だからトップシークレットじゃ」

言っているのと同じだがやはり知らないというのである。

第五十七話 挨拶その二

「言えぬからのう」

「言えはどつなる」

「さて、見当もつかぬ」

牧村に対しても話す。

「まあ命か記憶が危ういのう」

「それはな」

「流石になんだ」

「博士でもあそこには勝てないんだ」

「宮内庁には」

「宮内庁に喧嘩売ったら恐ろしいぞ」

博士は真顔で言った。

「それこそなのじゃよ」

「命か記憶が危ないんだ」

「そうなるんだ」

「そうじゃ。例えばじゃ」

博士の例えはだ。恐ろしい事実を元に話された。

「あの政治家おつたじやる。岩手の」

「ああ、あいつね」

「あの大臣したことないけれど実力者の」

「御職で何もかも失ったあいつだね」

「マスコミ手なずけるのだけ上手な」

「そうじゃ。あれが何もかもを失ったのもじゃ」

どうかというのだ。それについてだ。

「宮内庁に喧嘩を売ってからじゃったな」

「関連性あつたんだ、あれ」

「そうだったんだ」

「それについては誰も言えぬが」

それこそ言ってはならないことだった。

「そういうことじゃよ」

「それで説明つくのがねえ」

「あそここの怖いところだよね」

「全く。何ていうかね」

「妖怪でも相手できないしね、あそこは」

そんな話をしていてもリラックスはしていた。そしてだ。

そんな話の中でだ。また話す牧村だった。

「ではな」

「あれ、他の場所に行くの」

「そうするんだ」

「そのつもりだが」

妖怪達にこう返すのだった。

「また行く」

「いやいや、待ってくれ」

その彼をだ。博士は呼び止めた。そうしてであった。

牧村にだ。あるものを勧めた。それは。

「クレープか」

「うむ、好きじゃったな」

「クレープも好きだ」

実際に好きだと話す彼だった。

「中身にもよるが何でもだ」

「そうじゃな。それではか」

「もらっていいのだな」

「是非な」

貰うと返す彼だった。そうしてだ。

その手にクレープを貰った。包みになっている。

黄色いその中に黒と白、黄色が見える。この三色は。

「チョコにバナナアイスか」

「それとバナナじゃよ」

「その三つが中に入っているのか」

「どうじゃ？よいじゃろ」

「いいな。美味しそうだ」

牧村は声に喜びを込めて応える。

「ではだ。早速だ」

「食べるのじゃな」

「そうさせてもらう。そしてだ」

そのクレープを手にとって食べながら話す彼だった。

「帰ったらだな」

「うむ、ケーキじゃ」

「皆で食べようね」

「それもお腹一杯ね」

妖怪達も笑顔で言う。そうしてだった。

## 第五十七話 挨拶その三

牧村はクレープを食べてから研究室を後にした。そうしてだ。

次は講義に出た。そこで友人達と話すのだった。

「次の講義だが」

「ああ、何だ？」

「どうするんだ？次の講義」

「何かするのかわ？」

「いつも通り受ける」

こうするといふのだ。

「次の講義もな」

「そんなの普通じゃないのかわ？」

「だよな。次休講って話もないしな」

「それだったらな」

「普通に受けてな」

こう話す彼等だった。そしてであった。

牧村は彼等にだ。あるものを出した。

それは何かというのだ。スナック菓子だった。

「ああ、かりんとう」

「御前甘いもの好きだしな」

「何だ？次の講義に食うつてのかわ？」

「講義の前にも」

「そうしたいが」

こう答える彼だった。

「それでだ。次にはだ」

「よし、それじゃあな」

「次だな」

「そのかりんとう皆で食べるか」

「講義の前にな」

こんな話をするのであった。彼等とはだ。

そして講義を受けてだ。大学を後にするのだった。そして次はだ。マジックに言った。そこにはだ。

マスターがいた。彼は牧村をだ。カウンターに呼んだ。

そしてそこに彼を座らせてだ。こんなことを話した。

「そろそろバイトはじめるかい？」

「アルバイトか」

「部活はあるけれど」

フェシング部とテニス部のことである。

「どうかね」

「わかりました」

こう答えた牧村だった。

「それなら。時間のある時に」

「うん、来てくれるね」

「そうさせてもらいます」

「そしてだよ」

マスターの話は変わらない。さらにであった。

「大学を卒業したらね」

「この店に」

「うん、入ってね」

笑顔でだ。牧村にこうも話すのだった。

「本格的な修業に入るから」

「本格的なですか」

「そうだよ。君がこの店の次のマスターだから」

かなり重要なことをさりげなく話すのだった。

「宜しく頼んだよ」

「この店を」

「若奈もだよ」

店だけではないとだ。笑顔で言うのである。

「いいね、それじゃあね」

「あの、それは」

「ははは、わかってるから」

牧村にだ。多くを言わなかった。

「それじゃあね」

「だからですか」

「そうだよ。それじゃあね」

こんな話をしてだった。マスターにも挨拶をした。そこにだ。

若奈の妹達が来たのだった。そして自分達から牧村に挨拶をしてきた。

「牧村さんこんにちは」

「来てたんですね」

笑顔で彼に挨拶をしよう。

「お姉ちゃんは今はいませんけれど」

「いいですか？」

「構わない」

それでいいという彼だった。

「また後で会いに行く」

「携帯で連絡して、ですね」

「そうですね」

それで会える。便利な話ではある。

そんな話をしてだ。妹達はだ。

カウンターの中に入ってそこからだ。店の奥に声をかけたのである。

「お母さん、いい？」

「いる？」

「どうしたの？」

早速だった。彼女達の、つまり若奈の母が出て来た。そのうえで彼女達の声に応えてきたのだ。見れば見る程娘達によく似ている。

## 第五十七話 挨拶その四

「牧村君ならここにいるけれど」

「だから。その牧村さんによ」

「あれ出してよ」

娘達はまた母に話した。

「あれね」

「あれ出して」

「ああ、あれね」

娘達の話聞いてだ。母親もだった。

笑顔になってだ。こう牧村に言うのだった。

「新しいスイーツできたんだけど食べる？」

「新しい」

「そう、和風ザツハトルテね」

それがだ。新しいスイーツだというのだ。

「それを作ったのよ」

「それをか」

「試作品だからただよ」

しかもだ。値段も不要だというのだ。

「日本人の口に合わせたザツハトルテね」

「ほら、オーストリアのザツハトルテは甘過ぎるじゃないか」

「ここで言うマスターだった。」

「その甘さを抑えたんだよ」

「日本人の甘さにしたのよ」

「また話す母だった。」

「それをどうかしら」

「私も頂戴」

「私も」

妹達もここぞとばかりに言う。



「ザツハトルテ大好きだから」

「だからね」

「ええ、いいわよ」

母もだ。娘達の言葉に笑顔で応える。

「たっぷりと作ったからね。皆で食べましょう」

「勿論牧村さんもね」

「一番沢山食べてね」

「済まないな」

牧村は声に微笑みを入れて彼女達の言葉に応えた。

「それならな」

「これからいつも食べられるからね」

「こっした風にね」

「いつもか」

「だって。お店に入るんだから」

「そうなるわよ」

この二人もだ。かなり重要なことを笑いながら話した。

「これからはお姉ちゃんも入れて四人でね」

「お菓子食べられるわよ」

「そうよ。それで完成品はね」

彼女達の母親もだ。笑顔で牧村に話す。

「今度ね」

「今度ですか」

「ええ、そうよ」

笑顔での言葉だった。

「だから楽しみにしておいてね」

「わかりました」

牧村は声に微笑みを入れて頷いた。その彼にだ。

若奈の妹達だ。また声をかけてきた。

「じゃあお兄ちゃん、今度ね」

「また一緒に食べようね」

今からそうした話をするのだった。

「皆でね」

「お姉ちゃんも入れてね」

「そうだな。そうしようか」

牧村も二人の言葉に頷く。そうしてだった。

今はその試作のザツハトルテを食べる。今の時点でもだ。

確かな、優しい甘さがあった。まさに日本の甘さであった。

その甘さを味わってからだ。若奈と会う。会う場所はテニスコートだった。

そこでジャージ姿でトレーニングしながらだ。話をするのだった。

「そうなんだ。あの娘達って」

「そんなことを言っていた」

こつ話すのであった。若奈にだ。今二人は走っていた。テニスコートから校内に出て走るのだ。若奈は自転車でその彼についていくのだ。

## 第五十七話 挨拶その五

その準備をしながらだ。話をしているのだ。

「ザッハトルテをだ」

「ああ、そういえば」

ザッハトルテと聞いてだ。若奈は考える顔になった。

そのうえでだ。また話す彼女だった。

「お母さん今ザッハトルテを考えてるのよ」

「和風のだな」

「そう、和風のね」

それをだというのである。

「作ろうってしててね」

「それでか」

「そう、だから」

「俺も食べていいのか」

「というか牧村君はね」

「俺は？」

「これからずっとその役してもらうから」

つまりだ。試食係だというのである。

「ずっとね」

「アルバイトでもありか」

「それもアルバイトだから」

試食係もそうだというのである。アルバイトだとだ。

「それだけでけれど」

「部活か」

「それも続けるわよね」

若奈は牧村の顔を見て問う。彼女は今は赤いジャージだ。牧村は

それに対して青いジャージだ。色は好対照になっている。

「やっぱり」

「大学にいる間は」

「やっていくわね」

「そうする。それでだが」

「付き合うわね」

笑顔で話す若奈だった。

「そっちもね」

「部活もか」

「勿論お店もね」

そちらもだというのだ。

「手伝うからね」

「俺が菓子を作り食器を洗い」

「食器は私も洗うから」

「コーヒーや紅茶もするな」

「そう、それもね」

そちらもだというのだ。喫茶店の仕事は菓子作りだけではないのだ。

「御願いするわね」

「わかった。ただだ」

ここでこんなことを言う牧村だった。

「俺はウェイターにはなれないな」

「うん、無理ね」

笑ってだ。そのことについてはこう言う若奈だった。

「牧村君には接客はね」

「無愛想だからだな」

「これも才能みたいね」

若奈は首を傾げさせながら述べた。

「こつしたことができるかできないのも」

「最高か」

「そつみたい」

また牧村に話した。

「牧村君はそつちの才能はどうも」

「ないな」

「言ったら悪いけれどね」

こつち前置きしての言葉だった。

「どうしても。牧村君は」

「なら俺は裏方に徹するか」

「表には私が出るから」

若奈はそれは自分から言った。

「だからそつちはね」

「任せる。そつちな」

「そつちして。妹達もいるし」

若奈は彼女達の名前も出した。

## 第五十七話 挨拶その六

「あの娘達も喫茶店の娘だから」

「接客ができるか」

「できるわ」

まさにそうだというのだ。

「だから。任せてね」

「となると仕事は」

「分担になるわね」

「そうだな。はっきりとな」

「牧村君ができないことは私がして」

若奈は笑顔で話していく。

「それで私ができないことはね」

「俺がしていく」

「そうなるわね」

「そうあるべきか」

牧村は若奈の話を聞いてこんな風にも述べた。

「仕事は」

「一人でできる仕事もあるけれど」

若奈はこう前置きしてから話した。

「けれど。皆でする仕事だとね」

「互いに助け合ってか」

「それでやっていけばいいと思うわ」

こうだ。牧村に笑顔で話すのだった。

「皆でね」

「そうだな。人間の仕事はな」

「人間って？」

「いや、何でもない」

髑髏天使の匂いを自分で出してしまったと察してだった。

すぐに言葉を止めてだ。それを打ち消した。

そしてそのうえでだ。また若奈に話した。

「とりあえず今からは」

「準備体操をしてからね」

「走るか」

「ええ。そうしましょう」

「そして走ってからだな」

「本格的なトレーニングね」

いつものメニューだった。彼は日々そうして身体を鍛えている。

それは最後の戦いの前の今もだ。そうして鍛えているのである。

「いつも通りね」

「それをする」

「じゃあ。一緒にね」

「これからもだな」

牧村は不意に遠くを見て話した。

「トレーニングをしていくか」

「部活四年までやるわよね」

髑髏天使のことを知らない若奈はこう彼に返した。

「そうするわよね」

「そのつもりだ」

「だったらそうなると思うけれど」

「身体を鍛えることはしていく」

戦いが終わってもだ。そうしていくというのだ。

「これからもな」

「ええ、頑張つてね」

「それに付き合ってくれるか」

「そうするわ」

若奈は彼に笑顔で答えた。そうするといふのだ。

「二人でやっていきましょう」

「いつも付き合ってくれて悪いな」

「何言ってるのよ。私達ずっとこうだったじゃない」

だからだ。それはいいという若奈だった。

「それでそんなこと言ってもね」

「他人行儀か」

「そうよ。だから言わなくていいから」

若奈は笑顔のまま牧村に話す。

「これからだしね」

「そうだな。これからもな」

「二人で頑張りましょう」

そしてだ。若奈は牧村にこうも話した。

「スポーツ以外のこともね」

「そうするか」

こんな話をする二人だった。こうして牧村は若奈とも挨拶をした。それからだ。

彼は家に戻った。そこで夕食を食べる。今日の食事は親子丼だ。

それを食べながらだった。

未久がだ。こう兄に話すのだった。

「御兄ちゃん今日だけねど」

「今日か」

「ちよつと雰囲気違わない？」

こうだ。兄に言ったのである。

「何かね。あつたの？」

「別にない」

それはないというのである。



第五十七話 挨拶その七

「特にな」

「そうなの？」

「ただ。今はだ」

「今は？」

「こうしてここにいたい」

そうだとだ。その親子丼を食べながら話すのだった。

「皆で食べたい」

「そんなのいつもじゃないのか？」

「そうよね」

今の彼の言葉にだ。両親はいぶかしみながら話した。

「皆がいる時はな」

「こうして食べてるじゃない」

「それで何でそんなこと言うの？」

未久がここでまた話した。

「訳がわからないけれど」

「今の来期って」

母がそのいぶかしむ顔でまた話した。

「御別れをしてるみたいだけれど」

「そうだな。挨拶をしているみたいだ」

父も言う。自分の妻と同じ顔でだ。

「どうしたんだ？」

「何かあったの？」

「何もなし」

ここでも真実を隠して応える彼だった。

「特にな」

「そう。だったらいいけれど」

「それじゃあな」

「ああ。それでだが」

牧村は真実を隠したままだ。さらに話すのだった。

「明日だが」

「明日？」

「明日何かあるのか？」

「明日家に帰れば」

その時はどうするか。彼は両親に話すのだった。

「甘いものが食べたいな」

「ああ、甘いもの」

「それか」

両親は息子の言葉にまずは戸惑いを覚えた。しかしである。

彼のそうした言葉を受けてだ。まずは安心した。

牧村は二人にだ。さらにこんなことを言うのだった。

「何がいいか」

「アイスクャンデーは駄目よ」

未久がすぐに言ってきた。

「それ私のだから」

「アイスクャンデーはか」

「そう、それは私のものよ」

勝手にだ。そうしているのだった。

「一本もあげないから」

「けちな話だな」

「アイスクャンデーだけは駄目」

あくまでだ。こう言う妹だった。

「他にして、他に」

「そうか。それならだ」

「他にしましょう」

両親は娘の言葉を受けてだった。

息子に対してだ。こう言うのであった。

「アイスクリームはどうだ？」

「それならどう?」

また息子に話した。

「御前それ好きだったな」

「だからどうかしら」

「それならだ」

牧村もだ。二人のその言葉を受けてだった。

静かに一言でだ。頷いてみせたのだった。

「それで頼む」

「よし、じゃあ決まりな」

「アイスクリームね」

両親は笑顔で述べた。そのうえでだ。

今度はどのアイスクリームにするか。そのことを話すのだった。

## 第五十七話 挨拶その八

「ハーゲンダッツがいいか」

「そうね。来期も好きだしね」

「それならそれでな」

「いいわよね」

こうした話をしてだった。二人はそれでいいとした。話を決めてからだ。また息子に話してきた。

「ハーゲンダッツでいいか？」

「それでいい？」

「楽しみにしている」

これが息子の返事だった。

「明日だな」

「父さんが仕事の帰りに買って来るからな」

「お母さんも買って来るわね」

「アイスクリームは多い方がいいからな」

「皆で食べましょう」

「御兄ちゃんよかったね」

未久も笑顔で兄に言ってきた。言いながら親子丼をかき込んでい

る。  
「ハーゲンダッツになったわよ」

「そうだな。それはな」

「私はアイスクャンデーがあるけれど」

「御前も食べることだ」

牧村は妹にだ。こう告げたのだった。

「一緒に食べる。いいな」

「アイスクャンデーを？」

「ハーゲンダッツをだ」

アイスクャンデーではなくだ。それをだというのだ。

「いいな。食べるんだ」

「家族全員で？」

「そうだ。皆で食べよう」

また言う彼だった。

「わかったな」

「そりゃ私アイスクリームも好きだけれど」

それは否定しない未久だった。まさにその通りだからだ。

「けれど。お兄ちゃんの為にとって買ってくれるものなのに」

「家族で食べてこそだ」

しかしだ。牧村の言葉は変わらなかった。あくまでこう言うのだ  
った。

「だからだ」

「それでなの」

「一緒に同じものを食べよう」

具体的にはアイスクリーム、ハーゲンダッツのそれをだ。

「わかったわ」

「ええ、わかったわ」

ここでだ。妹も遂に頷いたのだった。

「それじゃあね」

「よし、食べるか」

牧村もここで言った。

「帰った時にだ」

「帰ったらって」

未久はここでまた兄に言うのだった。

「そんなの絶対にじゃない」

「家に帰ることはか」

「そうよ。そんなの決まってるじゃない」

何を言っているといった口調でだ。兄に話すのである。

「交通事故とかに遭わない限りはね」

「そんなの絶対に駄目だからな」

「事故には気をつけなさい」

両親もここで我が子に言う。

「事故には気をつけろ」

「いいわね。何があってもね」

「わかっている。俺は帰って来る」

また言う牧村だった。

「絶対にな」

「そうよ。そんなの絶対じゃない」

未久はそのことをまた話した。

「事故に遭わない限りはね」

「わかっている。それはない」

牧村はスピードは出す。しかしなのだ。

視野が広く運動神経も高い。だから事故に遭うことはないのだ。

## 第五十七話 挨拶その九

その彼がだ。言うのであった。

「絶対にな」

「そうよ。じゃあハーゲンダッツね」

「それだな」

「食べようね。一家団欒でね」

最後に言った未久だった。そうした話をしてだ。

牧村は知り合い全てでの挨拶を終えた。そのうえでだ。

深夜にサイドカーを出した。その横に彼が来た。

「来たか」

「挨拶は全て終わったか」

「終わった」

実際にそうだとだ。彼は死神に答えたのだった。

死神は黒いライダースーツにヘルメットである。そしてあのハー

レーだ。そのハーレーを飛ばしながらだ。牧村の横に来て問うてき

たのだ。

そしてその問いにだ。牧村も冷静に答えるのだった。

「全てな」

「では思い残すことはないな」

「挨拶をした」

牧村の声にだ。今度は素っ気なさが宿った。

「それだけだ」

「その口調はだ」

死神の声が変わった。そのうえで今の言葉だった。

「帰ることは絶対だというのだな」

「そうだ、絶対だ」

「そうか。必ずだな」

「俺はまた帰る」

牧村は言うのだった。

「この世界にだ」

「わかった。では私もだ」

「責様も帰るか」

「そうだ、帰る」

牧村はまた言った。サイドカーを駆りながら。

「戦いを終わらせた」

「いいことだ。死ぬとは思わないな」

「全く思わない」

「私と同じだな」

死神は声に笑みを含ませて話した。

「私もだ。死ぬことはない」

「絶対にだな」

「そうだ、絶対にだ」

まさにだ。そうだというのである。

「この世界に帰る」

「混沌との戦いを終わらせ」

「そのうえで帰る」

「よし、それではだ」

「行くとしよう」

こんな話をしてだ。彼等は先に進むのであった。そして進むうちにだ。

やがてだ。暗黒の世界に着いた。その闇は。

蠢く闇だった。その闇こそがだ。

「混沌の闇だな」

「それ以外の何者でもない」

死神が牧村に答えた。

「こここそがだ」

「俺達の最後の戦場か」

「そうなる。そしてだ」



「来ているのは俺達だけではないな」

「そうだ。既に来ている」

それはだ。誰かというのだ。

「魔神達はな」

「はい、来ています」

ここだ。老人の声がしてきた。

「御待ちしていました」

「そうか。来ていたか」

「少し前にです」

来たのだ。老人は姿を現しながら述べるのだった。

## 第五十七話 挨拶その十

そしてだ。他の魔神達もだ。彼と共に全員いた。その彼等が二人に言うのだった。

「最後の最後」

「それではだ」

「行くわよ」

「そうだな。行くとするか」

「ではな」

「これからだ」

他の魔神達も言う。そしてだ。

彼等はだ。死神に対してだ。こう言ってきた。

「それでだが」

「いいだろうか」

「考えがあるのだけれど」

「考えだど？」

死神もだ。彼等に目を向けて述べた。

「一体どういう考えだ」

「眠りの神です」

老人がその名前を出してきた。

「その神ですが」

「僕のこと？」

目玉がだ。ここで出て来た。

そしてだ。彼も魔神達に話すのだった。

「僕がどうしたの？」

「眠りと死は同じものですね」

「まあそうなるね」

死神は老人のその言葉に声で頷いた。

「実際のところ」

「貴方達は元は同じでもあります」  
「その通りだ」  
「うん、そうだよ」  
死神と目玉が同時に答えた。老人の今の言葉にだ。  
「私達は元は同じだった」  
「生まれた時は同じだったんだ」  
「言うならば双子だ」  
「それが僕達だよ」  
「そうですね。それではです」  
老人はさらに言葉を続けていく。そうしてだ。  
彼等を見ながらだ。こんなことを言うのだった。  
「一つになられてはどうでしょうか」  
「ここですか」  
「一つになんだ」  
「戻られてはどうでしょうか」  
また言うのであった。  
「そうされては」  
「そうだね」  
目玉がだ。最初に老人の言葉に応えた。  
「その方がいいかもね」  
「納得してくれますか」  
「そうできるものは見つけたよ」  
目玉の返事の声が笑っていた。  
「確かにね」  
「それでは」  
「じゃあさ」  
目玉は今度は死神に対して問うた。  
「それでいいかな」  
「そうだな。私もだ」  
「今はその方がいいっていうんだね」

「戦いはこれで最後だ」

「それだけに相手もね」

「これまでの相手とは違う」

言うのはこのことだった。

「比較にならないまでに強い」

「だからこそだね」

「一つに戻るか」

御互いに話す。そうしてだった。

目玉はだ。自然にだった。死神の中に入った。するとだ。

死神の身体の色が変わった。髪がだ。

白銀になった。あの戦う時の白ではなくだ。白銀になった。

第五十七話 挨拶その十一

そして服もだ。黄金のそれになった。その姿になってだ。彼はだ。牧村に言うのだった。

「これがだ」

「僕達の真の姿なんだ」

目玉も言うのだった。二人でだ。

「一つになった私達の」

「死と眠りの神の力なんだ」

「二つの力を合わせた姿だな」

「そういうことになる」

「今の姿がね」

「天使長としての俺だけではないか」

牧村は己のことを当てはめて考えてそれから述べた。

「貴様達もまた」

「一方が弱くては何にもならない」

「だからだよ」

それでだと話す彼等だった。

「今魔神達に言われて気付いた」

「そのことにね」

「そうか。わかった」

牧村もその話を聞いて頷いた。

そうしてだ。彼等は言うのだった。

「では。行くか」

「そうしようか」

「そうするとしよう」

牧村も頷く。そうしてだった。

魔神達もだ。口々に言うのだった。

「それではです」

「僕達もね」

「行くとするか」

こうしてだった。彼等もだった。変身した。その正体になった。

そのうえでだ。百目が同胞達に言った。

「では、行きましょう」

「ええ、それじゃあね」

「その混沌の場に」

九尾の狐とウエンティゴが応えた。そうしてだった。

一步前に足を踏み出した。その彼等に続いてだった。

牧村もだった。その姿をだ。

髑髏天使に変えていた。あの天使長の姿にだ。

「はじまりだな」

「終わりのな」

「そうだ、終わりののはじまりだ」

こう死神に應えるのだった。

「今からだ」

「そして完全に何もかもが終わる」

また言う髑髏天使だった。

「混沌との戦いが」

「そうだな。我々もだ」

バジリスクがだ。髑髏天使の今の言葉に應えてきた。

「最早髑髏天使とはだ」

「戦わないというのか」

「戦い自体をしない」

それ自体をというのである。

「最早だ。それ以上の楽しみを見つけた」

「人間の世界、今の世界だな」

狼男だった。彼も本来の姿で話していく。

「この世界は楽しいことが山程あるからな」

「そちらを楽しめればそれでよくなったのじゃよ」  
「バーバヤーガもだ。そうだったというのだ。」  
「かなり変わったわ」  
「変わったね、確かにね」  
クマゾツツもそれを話す。  
「僕達もね」  
「遊びはいいものだ」  
逆さ男もそれを話す。  
「それでは。この戦いの後はだ」  
「飲みましよう、皆で」  
キリムはだ。酒を望むのだった。  
「それから。ずっとね」  
「楽しむとしよう」  
「戦い以上の楽しみを」  
「僕達もあれかな」  
目玉が死神の中から死神に話した。  
「この戦いだけなんだね」  
「そうだな。一つに戻つての戦いはだな」  
「これが最後になるだろうね」  
「少なくとも千年はない」  
「それだけの長い間はだ。ないというのだ。」  
「その間はない」  
「千年なんだ」  
「それから先はどんな奴が出て来るかわからないのだからな」  
「まあそうだね。混沌の神々だってそうだし」  
「しかし当面はない」  
「そのだ。千年を当面だというのだ。」  
「我々が一つに戻り戦う必要のある相手はだ」  
「そういうことなんだね」  
「そうだ。それはない」

また言う死神だった。

「私だけで充分だ」

「言い換えると。僕達が一つに戻らないとならないだけの相手」

「それが混沌の中心にいる神々だ」

「原初の混沌だね」

「それを倒せば。当分はない」

「わかったよ。それじゃあね」

こうした話もしてだ。彼等はだ。

混沌の中心に進んでいく。そこにおいてだ。彼等の最後の戦いを行っただった。

## 第五十七話

完

2011・4・13



## 第五十八話 嘲笑その一

髑髏天使

### 第五十八話 嘲笑

若奈がだ。未久と共に街を歩きながらだ。こんなことを言うのだった。

二人は今ラフな私服だ。それで二人でショッピングを楽しんでいる。その中でのことだった。

「今度だけれど」

「今度ですか？」

「牧村君にザツハトルテ御馳走することになったの。そうなったとだ。街を歩きながら話すのだた。」

「うちで作ったね」

「あつ、うちでもです」

「お家でも何か作るの？」

「作りはしないですけど」

それでもだとだ。未久は話すのだった。

「あれなんです。アイスクリームを買って」

「それを牧村君になの」

「はい、お兄ちゃんと一緒に皆で食べるんです」

こうだ。話すのだった。

「ハーゲンダッツを」

「いいわね。あれって美味しいのよね」

「はい、アイスクリームはあれが一番ですかね」

「高いけれどね。スーパーやコンビニで買うアイスクリームならね」

「一番いいですよね」

「牧村君もあれ好きなのよね」

若奈はにこにことして未久に話す。

「とてもね」

「御兄ちゃんアイスクリーム自体好きですから」  
「そうそう。甘いものなら何でもだから」  
「ですよね」  
「だからうちもなの」  
「ザッハトルテですか」  
「一応試食つてことになつてゐるけれど」  
「それでもだというのである。」  
「牧村君にね」  
「御馳走するんですね」  
「そういうこと。それに」  
「若奈のその言葉が続く。」  
「そろそろね」  
「そろそろつていいいますと？」  
「だから。牧村君がお店に入ってくれるじゃない」  
「その話になるのだった。」  
「うちのお店にね」  
「じゃあその味をもつと知ってもらつてね」  
「そうなの。だから余計にね」  
「食べてもらつてね」  
「そうなの。まあ太つてもらつたら困るけれど」  
「それはだというのだ。太ることはだ。」  
「牧村君のスタイルって好きだから」  
「御兄ちゃん背が高くですらりとしてますからね」  
「あのスタイルはあのままだね」  
「いて欲しいんですね」  
「そういうことだから」  
「太られたら困るといふ理由はだ。まさに女の子の理由だった。そのことを話してだ。それでだった。若奈はこつても言つたのだ。これからもトレーニングは続けてもらつわ」  
「トレーニングは絶対なんですね」

「そういうこと。それでね」

「そのうえでお菓子を」

「食べてもらおうわ」

こうした話をしてだった。彼女達はだ。

一緒に話してだ。牧村に食べてもらおうお菓子の話をしていた。そしてだ。

博士達もだ。研究室で笑顔で話すのだった。

「それじゃあね」

「ケーキね」

「牧村さんに食べてもらおうケーキ」

「それだよね」

「うむ、是非食べてもらおう」

笑顔で妖怪達に応える博士だった。

「そうさせてもらおう」

「当然僕達もね」

「僕達も食べていいんだよね」

妖怪達はケーキについてだ。博士に笑顔で尋ねるのだった。

## 第五十八話 嘲笑その二

「その他のも」

「そうしていいんだよね」

「はい、そうですよ」

ろく子がだ。笑顔で同族達に話した。

「皆さんの分もです」

「あるんだ」

「そうなんだ」

「はい、それもたつぷりとです」

あるというのである。

「だから安心して下さい」

「よし、それじゃあ」

「牧村さんが帰ってきたら」

「皆で食べようか」

「是非共」

そんな話をするのだった。そうしてであった。

彼等は笑顔で待つ。その中だ。こんな話もするのだった。

「混沌ねえ」

「混沌の神々の中心になんだ」

「遂に至るんだね」

「最後の戦いじゃ」

まさにそれだと話す博士だった。

「しかし帰って来るのはすぐじゃ」

「すぐなんだ」

「そうなんだ」

「そうじゃ。戦いが続けて行われてじゃ」

それでだというのだ。

「あっという間に終わる」

「よし、じゃあ今のうちにね」

「用意しておこうか」

「御祝いのケーキをね」

彼等はこの様な能天気な調子だった。牧村の帰還を確信していた。彼を信じているからだ。

その牧村髑髏天使たちが来ている混沌の中ではだ。男がだ。混沌の中心においてその中心にいる者達にこう言うのだった。

「ではだ」

「行って来るか」

「今からだな」

「そうだ。行って来る」

こう彼等に言うのである。

「今からだな」

「わかった。それならだ」

「行って来るといい」

彼等は男にだ。くぐもった声で述べた。

「そのうえで滅ぼすのだ」

「あの者達を」

「そのつもりだ。そしてだ」

滅ぼしてどうするか。男はそれを話すのだった。

「あちらの世界を我等の世界に入れる」

「この混沌の世界に」

「そうするとするか」

「感情や意識など必要ない」

男は言うのだった。

「必要なのはだ」

「混沌だ」

「そして破壊だ」

声達も言う。

「必要なものはそういうものでしかない」

「他のものはだ。不要だ」

「混沌。それこそがだ」

「必要なのだ」

「その通りだ」

男もだ。彼等のその言葉に賛同するのだった。

そしてだ。彼はまた言った。

「それではだが」

「うむ、行くか」

「そうするか」

「混沌を邪魔する者達」

彼等からの視点だった。混沌からのだ。

## 第五十八話 嘲笑その三

「その者達を始末してくる」

「そして我等は」

「それと共に目覚めるのだな」

「そうなる。力は既に蓄えているな」

「充分だけ」

「目覚め。そして」

それからもあるのだとだ。声達は話していく。

「全てを混沌に覆うだけのものはだ」

「既にある」

こう話していく声達だった。そうしてだ。

男は出る。戦いにだ。

戦いに向かうのだった。そして髑髏天使達の前に来た。

その彼等にだ。男は言うのであった。

「ではだ」

「はじめるといふのだな」

「いや、はじまるのだ」

男は髑髏天使の言葉に対して述べた。

「これからだ。はじまるのだ」

「はじまる。混沌の世界がか」

「混沌がこの世の全てを覆うのだ」

そうなると話す男だった。

「そうなるのだ」

「言うものだな。混沌がすべてを覆うか」

「覆う。そして貴様等はだ」

「貴様の前に敗れるのか」

「私は混沌の原初の中で生まれた」

男は話していく。己のその生まれのことをだ。

「混沌そのものなのだ。しかしだ」

「貴様には知性があるな」

「そうだね」

死神の身体からだ。死神と目玉の声がした。

「それは今までのやり取りでわかる」

「そこが他の混沌の神々とは違うね」

「混沌とは何か」

男はそれを話していく。

「原初の中で蠢くものなのだ」

「だからこそ知性といったものはない」

「けれど君はあるね」

「これは私だけにあるものなのだ」

男の話は続く。

「混沌の者達の中ではだ。私だけにあるものだ」

「そして感情もあるな」

「その通りだ。喜怒哀楽のうち怒りと哀しみは知らない」

「そうした感情はか」

「そうだ。知らない」

このことを話していく。男に感情があるがそれでもだ。備わっていない感情もあるというのだ。そこがやはり混沌の勢力の者だった。

「だが喜びや楽しみは知っている」

「つまり嘲笑だな」

「私は常に嘲笑する者」

「そうだというのだ。」

「それが私なのだ」

「顔には出ていないね」

目玉がそれを指摘した。

「君はいつも無表情だからね」

「否定はしない」

まさにそうだと話す男だった。



「顔には出さない。しかし感情ではだ」

「嘲笑しているね」

「それが私だ。私はナイアーラトホテップ」

己の名前もここで話す。

「嘲笑する者なのだ」

「ではその嘲笑はここで終わりだ」

髑髏天使がその彼に言った。

「この場でだ」

「私が滅びるからだというのだな」

「その通りだ。貴様は滅びる」

髑髏天使はだ。男を見据えて告げるのである。

その間だ。彼の全身から凄まじい気が放たれている。それは混沌を消し去らんばかりのものだ。それだけの気を放ちながらだった。

「確実にだ」

「そう言うか。ではだ」

「戦うな」

「これまで見せなかったものを見せよう」

男は髑髏天使達に対して静かに言ってみせた。

## 第五十八話 嘲笑その四

「私の真の姿をだ」

「盲目のスフィンクスですか」

百目が言った。

「その姿をですな」

「知っていたか」

「貴方は。これまで色々と蠢いてこられてましたから」

「それで知っているというのだな」

「その通りです。さて、その真のお姿ですが」

百目の言葉が続く。

「見せてもらいましょう」

「私の姿か」

「はい、それをです」

百目はこう男に言うのである。

「見せてもらいたいのですが」

「そうだな。見せはする」

こう返す男だった。

「しかしだ」

「しかし？」

「しかしっていうと？」

百目だけでなくクマゾツツも言葉を返した。

「何かあるのでしょうか」

「その前には」

「話がある」

これだ。男の言葉だった。

「面白い話だ。ある」

「へえ、面白いな」

狼男がその言葉に応えて言うのだった。

「俺は面白い話は好きなんだよ」

「そう言っただな」

「そうさ」

狼男は男に言葉を返した。

「その通りさ。俺は聞かせてもらいたいな」

「そうだな。混沌の話ならな」

「興味があるな」

「ここは是非な」

「聞かせてもらいたいな」

こう返す魔神達だった。

「どういった話なのか」

「混沌の話か」

「それか」

「その通りだ。混沌とはだ」

男は魔神達の言葉を受けてだった。そのうえでだ。

彼はゆっくりと口を開いてだ。言っのであった。

「何だと思うか」

「何も形がない」

髑髏天使が男の言葉に返した。

「そういうものだな」

「それが混沌だと思っか」

「俺はそう見ている」

こう返す髑髏天使だった。

「混沌とはな」

「そうだな。確かにな」

「その通りというのだな」

「如何にも」

男の言葉は変わらない。その通りだというのだ。

しかした。ここであった。男はこうも言っのだった。

「しかした」

「しかしか」  
「それだけではない」  
形がないだけではないというのだ。  
こう話してだ。そのうえでの言葉だった。  
「混沌には心もない」  
「感情もか」  
「そういったものはない」  
「そうだというのだ。」  
「そして善悪もだ」  
「それもないか」  
「そうだ。全てない」  
それがだ。何かというところだ。  
「それが混沌なのだ」  
「そこには何も無い」  
「それが混沌」  
「無だというのかしら」  
「いや、無ではない」  
それでも無いというのだ。

## 第五十八話 嘲笑その五

「言い換えればそこにはあらゆるものがある」

「あらゆるものがか」

「そうだ。あらゆるものが形も心も善悪も何もなく入り混じっている」

丁度だ。彼等が今いるその世界がだった。

あらゆる元素があらゆる色で胸の悪くなる感じで渦巻き蠢き合いながらだ。その中にある。その中にいてだ。男は話すのであった。

「それが混沌か」

「そうか」

「それがこの中か」

「混沌だというのか」

「わかったか。そして混沌はだ」

そのだ。混沌の話をさらにするのだった。

「何処から生まれたと思っている」

「何処から」

「何処からだというのか」

「そうだ、何処からだ」

また話すのだった。その話はだ。

「何処から出て来て生まれたと思う」

「神話ではだ」

髑髏天使がここで話す。彼がだ。

「混沌は常に最初から存在しているな」

「その通りだ。ギリシアのものでもエジプトのものでもだ」

「混沌は最初から存在している」

「そしてその中からだ」

「あらゆるものが出て来るな」

「それは知っているな」

「わかったな」  
また話す男だった。そうしてだ。  
そのうえでだ。男はこうも話した。  
「混沌は即ち原初なのだ」  
「全てのはじまり」  
「それだというのか」  
「つまりは」  
「そういうことだ」  
これが男の彼等への言葉だった。  
「最初から形のあるものなぞ何もありはしないのだ」  
「そしてだな」  
「そう、そしてだ」  
「そしてか」  
「全てはその中に戻るのだ」  
男は言うのだった。  
「今からな」  
「貴様等のその中にか」  
「我々は混沌が生まれてだ」  
そうしてだというのだ。  
「それと共に生まれた存在なのだ」  
「つまりはです」  
「混沌そのもの」  
「それだというのか」  
「そうだ、世界のはじまりからいるのだ」  
それが彼等だというのである。男達だというのだ。  
「その我々に勝てるというのか」  
「勝つ」  
髑髏天使の言葉はだ。断言だった。  
「確かに混沌は全てのはじまりだ」  
「その通りだ」

「そして圧倒的な力を持っているな」  
「言うまでもないことだな」  
「確かに最初にあるのは混沌だ」  
それはだ。否定できないことだった。  
だが、だ。髑髏天使はそれでもだというのだ。  
「しかし混沌から何もかもが生まれたな」  
「神話ではだな」  
「そうだ。神話、即ち人間はだ」  
神話は人間と共に生まれる。それが即ち人間だというのだ。  
「混沌を打ち払っているな」  
「原初を忘れ。そしてだな」  
「そしてと言うか、ここで」  
「法や秩序などというものを形成していった」  
「それが誤りだというのだな」  
「全ては原初の中にあるべきなのだ」  
混沌としての考えを。ありのまま話していく。

## 第五十八話 嘲笑その六

「だからこそだ。貴様等はだ」

「その中に戻りか」

「滅びるのだ」

悠然とだ。彼等を見据えての言葉であった。

「今からだ」

「生憎だがそのつもりはない」

髑髏天使がまた男に言い返す。

「今まで言った通りだ」

「そのままにか」

「そうだ、そのままにだ」

ないとだ。また言う髑髏天使だった。

「貴様を倒す。そして残りの二柱もだ」

「混沌を打ち払うか」

「消えてもらう」

混沌の中に浮かぶだ。男を見据えての言葉だった。

「いいな」

「それではだ」

「行くぞ」

髑髏天使だけでなくだ。死神も言った。

こうして戦いがはじまるうとしてしている。その中でだ。

死神の中の目玉がだ。こう問うのだった。

「それだけれどさ」

「何だ」

「君のことは聞いたよ」

それはだとだ。男に対して言うのである。

「けれど君の姿は何なのかな」

「私の姿か」



「これから戦いならその姿になるよね」  
「私の真の姿にだな」  
「その黒い男の姿は正体じゃないね」  
それを問うのである。  
「まさかと思うけれど」  
「如何にも。違う」  
違うと返す男だった。  
「これは私の仮の姿に過ぎない」  
「やっぱりね。そうだったんだ」  
「そうだ。この時も来たのだな」  
笑っていた。しかしその笑いはだ。  
嘲笑だった。何に対しての嘲笑かはわからない。だが嘲笑で言うのであった。  
「私の真の姿を見せる時がだ」  
「見せるか。その姿を」  
「この姿になるのは久方のことだ」  
長い間だ。なかったというのだ。  
「そう、どれだけの長い間か」  
「自分でもわからないというのか」  
「何度も言うが私は原初から存在している」  
人よりもだ。遥かに古いというのだ。  
「その私の原初の姿を知ることになるのだ」  
「光栄だとも言つつもりか」  
「そう思いたいのなら思うといい」  
男は髑髏天使に対して述べる。  
「思いたいのならな」  
「そうか」  
「それではだ」  
男の話が変わった。ここでだ。  
「その姿を見せるとするか」

「真の姿だね」  
「そうだ、真のだ」  
まさにだ。それだというのである。  
「見せるとしよう。ただしだ」  
「ただし。何かな」  
クマゾツツが男に対して言い返す。  
「勿体ぶってるけれど。何が言いたいのかな」  
「言い忘れていたことがある」  
男はこう前置きしてから話すのだった。  
「先に水の神と戦ったな」  
「クトウルフですね」  
百目がその神の名前を言った。  
「あの神ですか」  
「あの神の姿を見ればそれだけで発狂したのだ」  
「そういえばそうだったな」  
死神がその話を聞いて述べた。

## 第五十八話 嘲笑その七

「あの神の、いや貴様等は狂気を沸き起こらせることもできるな」

「正気は混沌の中にはない」

それもだ。混沌の中にはないものだった。

「狂うことは混沌の原初の中にあるものだ」

「だからか」

「そうだ。我々の姿を見れば精神が混沌の中に戻るのだ」

「その恐怖に耐えられないのではないのだな」

「そうでもあるがまた別だ」

「そうだという男だった。」

「我々は。あらゆるものを混沌に引き戻すのだ」

「ではだ」

死神はまた男に対して問うた。

「貴様のその姿を見ると我々はか」

「精神から原初に帰ることも有り得るのだ」

「そうだな。狂気に陥りだな」

「それを狂気と呼ぶのならそうなる」

「あれだね」

今度は目玉が言った。

「ネクロノミコンを書いたあのアラビア人もそうだね」

「そうだ。私の真の姿を見てだ」

「君達の言葉だと原初に帰ったんだね」

「では帰ってみるか」

「即ちだ。原初に帰れというのだ。」

「そうなるか」

「あの時。あの神の姿を見てだ」

「ここで言ったのは髑髏天使だ。彼だった。」

「俺は何もなかった」

「そうだな。狂気には陥らなかつたな」

「クトウルフだったな」

「他の神もそうだがな。どの神もその姿に原初を含んでいるからこそだ」

「見ただけで狂うか」

「混沌に陥るのだ」

そうなると話されていく。そしてであった。

男は遂にだ。その姿を変えようとしている。次第にだ。

身体の中から動きだした。いや、蠢きだした。

その不気味な胎動の中でだ。男の腕から何かが出た。

「むっ」

「瘤か」

「瘤ではない」

それではないとだ。男は魔神達に答えた。

「私の姿が真のものになるうとしているのだ」

「成程ね」

九尾の狐はその男の姿が変わっていくのを見ながら言った。今度は額から眼球が出た。闇の光を放つ眼球がだ。触手の先から出て来たのだ。

「そうしていつてなのね」

「見るのだ」

手の平からだ。五つに分かれた蹄が出た。

足もだ。前足だけでなく後ろ足も出た。それはだ。

漆黒のだ。八つに分かれた蹄だった。今度はそれだった。

目は五つも六つも出た。それぞれがゆらゆらと揺れている。

髪は鬣になり首は伸びだ。その姿は。

六本足の獣だった。痩せた漆黒の、人の顔から九つの触手の先にある目が出ている。そして背中からだ。蝙蝠を思わせる六枚、三対の翼が出た。

毛は一本もない。ぬらぬらとした肌がある。その姿になってだ。

あらためてだ。髑髏天使達に対して言うのであった。

「この姿だ」

「それが貴様の真の姿か」

「如何にも」

その通りだというのだった。

「私の。ナイアーラトホテップのだ」

「真の姿がそれか」

「どうだ。心は大丈夫か」

人の口でだ。嘲笑しつつ髑髏天使達に問うのだった。

「貴様等の心は」

「安心しろ。何ともない」

髑髏天使が最初に答えた。

「今時それでは何ともないようだ」

「そうか。何ともか」

「そうだ、ない」

こう神に返す彼だった。

## 第五十八話 嘲笑その八

「俺はその原初の狂気に打ち勝った様だ」

「私もだ」

「僕もね」

今度は死神、そして彼と一つになっている目玉が答えた。

「秩序は混沌に勝った」

「少なくとも今はね」

「我々もです」

魔神達もであった。百目が言うのだった。

「こうして貴方のお姿を見てもです」

「何ともない」

「確かに不気味なものは感じるけれど」

「それでもだな」

他の魔神達も神に言う。そのナイアーラトホテップにだ。

「全くな」

「狂いはしない」

「何一つとして」

「それだけ精神が強くなっているか」

神は口を開いて言った。見ればその口にある歯はだ。人のものだ。

しかし普通の歯ではなかった。三列あった。

その三列の歯でだ。神は言うのだ。

「髑髏天使も貴様等も」

「その通りだ」

髑髏天使が神のその言葉に答えた。

「俺だけではなくだ。全員だ」

「これまでの戦いと生きてきたことでだ」

「そうなったんだよね」

死神と目玉の声が同時に出された。

「私達はそれだけ強くなった」

「君達の姿を見ても大丈夫なだけね」

「面白いことだ」

そこまで聞いてだ。神は嘲笑する様に返した。

「実にだ」

「貴様と戦えるからか」

「それでか」

「貴様等の言葉で狂うという」

こつ話してからだった。さらにだ。

「原初に戻るのを見るのもまたいいがだ」

「それでもか」

「それでもだというのだな」

「そうだ。戦えるのもまたいいものだ」

髑髏天使と死神に対して述べた言葉だった。

「では。はじめるとするか」

「そうだな。貴様を倒してだ」

「混沌の中枢にさらに入る」

「そしてこの戦いをだ」

「完全に終わらせる」

そう話してだ。彼等はだ。

それぞれ戦う姿に入った。その中でだ。

魔神達は神を囲んだ。左右だけでなく上下からだ。

しかしだ。今はだった。

彼等は動かない。もつと言えはだ。

「参ったわね」

「そうだな」

ウエンティゴが九尾の狐に対して述べた。

「攻めたいけれどね」

「そうはいかない様だな」

それがどうしてかもだ。彼等はわかっていた。

そのこともだ。彼等は言うのだった。

「この気」

「ここまでとはな」

「何度も言うが私は原初の存在だ」

そのだ。はじまりからいる存在だというのだ。

「混沌、この世のはじまりのな」

「だからね」

「それだけの力があるというのね」

「その通りだ。その私に勝てるのか」

そうした話をしてみせる神だった。

「果たしてな」

「時としてだ」

ここでだ。髑髏天使もだ。既に神を取り囲む中にいる彼も言うのだった。



## 第五十八話 嘲笑その九

「考えても仕方ない時がある」

「それが今だというのだな」

「そうなのだろう」

神の正面に立ちだ。そのうえで言葉だった。

「これまででは考えて戦ってきたがだ」

「では私に向かうか」

「そうさせてもらう」

また神に述べる。

「これからな」

「ではだ」

今度は死神が言った。

「今からか」

「そつだ、行くがだ」

「私もそうするとするか」

「当然僕もね」

彼等もだ。目玉も言つのだつた。

「だからだ。共にだ」

「攻めようか」

「いえいえ、それならです」

「わし等も忘れないことじゃ」

百目とバーバヤーガだった。

「今こうして留まっけていてもです」

「仕方ないのう」

「では俺達もだ」

「共に行くか」

「ここは」

こう話してだった。魔神達もだ。

前に出ることにした。そうしてだ。

彼等は突き進みだした。神に対して。

そして神はだ。それに対してだ。

「ふむ。来たな」

「それでだというのだな」

「そうだ。来たのは認める」

それはだというのである。だが、だ。

それと共にだ。神はこうも言うのだった。

「しかしそれで勝てるものではない」

「貴様はそう思うか」

「ここでは嘘を言うつもりはない」

神は平然とした口調で述べてみせた。

「この私にそれでは勝てはしない」

「では。仕掛けて来るか」

「仕掛けるから言うのだ」

「そうか。では何をしてくるつもりだ」

「闇だ」

神は言った。

「その闇を見せよう」

「闇だというのか」

「我が妻の闇は酸だった」

それがあの酸の正体だった。夫であるこの神もそのことを知っていた。

そうしてだ。神はだ。ここでだ。

羽ばたきそうしてだ。そこからだった。

全身から凄まじい闇を放った。その闇こそは。

「これは」

「わかったか。見ることによって」

「わかった。闇だな」

死神がこう神に返すのだった。

「闇そのものか」

「この漆黒の姿が表わしているようにだ」  
どうかというのである。

「私は闇そのものを扱うことができるのだ」

「そしてその闇はか」

「そうだ、混沌そのものだ」

そうだとするのである。それが神の今の言葉だった。

「全てを飲み込むな」

「光だね」

目玉もここで言った。死神の中から。

「闇の光だね、それは」

「黒い光とも言うな」

死神は目玉のその言葉に応えた。一つの口を使って二つの人格が話をしている。彼等はそうして今お互いのやり取りをしているのだ。

## 第五十八話 嘲笑その十

「それだな」

「そうだね。普通はないもの」

「それを出すか」

「混沌にないものはだ」

それが何かとだ。神は話すのだった。

「秩序とそれに連なるものだけだ」

「それ以外はあるというのか」

「秩序により多くの摂理が定められてしまった」

それを形作るのが秩序だからだ。それでだというのだ。

「こうしたことだ」

「決められできなくなつたというのだな」

「闇の光もあればだ」

神は再び羽ばたいた。するとだ。

今度はだ。虹が出た。七色の虹だ。

しかし普通の虹ではなかつた。輝きがないのだ。とはいっても絵画等にある絵でもなかつた。色があつて色ではない。そうした虹だった。

その虹を放つてからだ。神はまた言うのだった。

「色のある闇もまただ」

「どちらもあるというのか」

「その通りだ。混沌にはこうしたものもある」

「色のない光も。色のある闇もか」

「混沌の中にはあるのだ」

こう髑髏天使達に話すのだった。

「そしてこの光と闇でだ」

「どうする。俺達を飲み込むか」

「そうさせてもらう。受けてみるのだ」

言いながらだ。神はだ。

己の羽ばたきから放たれた色のある闇の虹をだ。髑髏天使達に対して弓矢にして放った。そうしてだ。彼等を襲ってみせたのである。その攻撃に対してだ。まずは百目が言った。

「かすりでもしましたら」

「危ないわね」

「はい、それだけであらゆるものが消えてしまいます」

こうキリムに話す百目だった。

「まさにです」

「では。ここは」

「かわすか。それが」

「こうするしかないわね」

キリムは己の七つの口から光を放った。秩序の世界のそれをだ。

そしてその光達でだ。闇の虹の矢を相殺するのだった。

それを見届けてからだ。彼はまた言った。

「相殺するかね」

「その通りです。受ければそれだけで終わりです」

「そうね。それならね」

「かわすか相殺しましょう」

百目もだ。その無数の目から光を放ってだった。

虹の矢を消していく。そうしながらだ。

髑髏天使、両手の剣を巨大なものにして振るう彼にだ。こう言うのである。

「ここはです」

「突っ込むのは止めるべきだな」

「それにはあまりにも危険ですから」

「そつだな」

髑髏天使も百目のその言葉に頷いた。

「ここは。まずはだな」

「守られるべきです」

「そうする」

「こつ答える髑髏天使だった。

「今はな」

「賢明ですね」

「勇気と無謀は違う」

「ここでも言つ彼だった。

「今はだ」

「勇気は出してもですね」

「無謀にはならない」

「そうだというのだ。そしてだ。

髑髏天使は己の周りにだ。無数の虹の球体を出してみせた。それは七つの色で光り輝くだ。光から生まれた虹であった。闇のものではない。

その虹の球体をだ。己の周りに上下左右に回転させてだ。

第五十八話 嘲笑その十一

それで闇の虹の矢を打ち消していく。それで己を守るのだった。それを見てだ。神は言った。

「護りか」

「如何にも。見た通りだ」

「そうだな。しかしだ」

「しかし。何だ」

「防ぐだけではないだろう」

その虹の球達を見つた。彼は言つのだった。

「そうだな」

「わかるか」

「護るだけで済ませる貴様ではない」

髑髏天使はだ。そうだというのだ。

「そうだな」

「その通りだ。そしてだ」

「そしてか」

「どうして攻める」

それを問う神だった。

「貴様はどうして攻める」

「それを見たいのか」

「そうさせてもらおう。それではだ」

「まだ攻めはしない」

また言う髑髏天使だった。

「それはまだだ」

「機を窺うか」

「そういうことだ。私は楽しむ存在だ」

嘲笑しながらの言葉だった。

「それはこの場でも同じだ」

「成程な。それではだ」

「その時を待たさせてもらおう」  
「言いながらだ。再びだ。」

神は闇の虹の矢を放っていく。そうしてだ。  
それに加えてだ。さらにだ。

闇の光も放って来た。今度はだ。  
神のその翼が拡がりだ。それがだ。

髑髏天使達を襲う。それを見て死神の中の目玉が言う。  
「この闇の光もだね」

「そうだな。かするだけでな」  
「消えるよ」

目玉はこう死神に述べた。  
「間違いなくね」

「消えるな。確かに」  
「髑髏天使は虹の球体で防いで」

「まずはだ。彼について話す。」  
「そして魔神達もね」

「そうだな。それぞれの気で己を覆っている」  
「見ればだ。魔神達はだ。」

それぞれの身体に己の光を出してだ。それで囲んでだ。  
闇の虹からも黒い光からも護っている。そうしているのだ。

その彼等を見てだ。さらに話す彼等だった。  
「それに対してはだな」

「私達は今はかわしているだけだ」  
「矢だけならそれでいけるよ」

目玉はそれは大丈夫だというのだ。しかしだ。  
それに加えてなのだ。今は。

「黒い光はね」  
「それはどうするべきか」

「それだよ。どうするの？ 一体」



「こうする」

死神は言った。するとだ。

その周りにだ。あるものを出した。それは。

無数の風の刃だった。それを己の周りに巡らせてだ。

虹も光も斬り消し去っていく。それで防ぐのだった。

そうしてだった。死神と目玉は己を護るのだった。そしてだ。

彼等は護る。そうしたのだ。

その彼等も見てだ。神はまた言った。

「そうしたやり方もあるか」

「おかしいか」

「おかしくはない」

こう死神に答える神だった。

第五十八話 嘲笑その十二

そしてだ。そのうえでこう彼に告げた。

「興味深い」

「そちらだというのか」

「そうだ。実に興味深い」

まただ。死神と目玉に対して告げるのだった。

「風で。私の光も闇も切るか」

「しかも何もかもをだ。完全にだ」

「護り方として面白い」

それもだ。実にとり口調だった。

「私も攻め方を考えているのだがな」

「そしてさらに考えているな」

「その通りだと答えよう」

死神は静かに言う。

「そしてそれはだ」

「それはか」

「すぐだ」

神を見据えての言葉だった。

「今すぐにだ」

「ではどうするのだ」

「この言葉を知っているな」

死神は一呼吸置いてから述べた。

「攻防一体だ」

「その言葉か」

「そうだ。知っているな」

「知っている」

その通りだとだ。神も答えた。

そのうえでだ。死神に言うのであった。

「成程な。ではその風達をか」

「風だけではない」

それだけではないとだ。神はまた言った。

そのうえでだ。風の他にだ。

様々なものを出す。それは。

火もある。水もだ。

岩もあれば雷もある。氷も木の葉もだ。

あらゆるものを出してだ。そうしてだった。

神に対してだ。放ったのである。

それを見てだ。神はだ。冷静そのものの口調でこう話した。

「姿形が変わればだな」

「そうだ。力もまた変わる」

「髑髏天使とそこは同じか」

「同じだ。それはわかっていたな」

「わかっていた」

また冷静に述べる神だった。

「貴様が黒い姿になった時にな」

「そうだな。その時にな」

「それではだ」

どうするか。それも話す神だった。

そのうえで。彼はだ。

また闇の光の翼を羽ばたかせた。それでだ。

その光で死神が出したあらゆるものをだった。

打ち消した。その光でだ。

「この光は全てを飲み込む」

「今の様にか」

「見ての通りだ。この光と虹の闇は絶対のものだ」

「貴様はそう見ているのだな」

「見ているのではない」

そうだと返す神だった。その話をしてであった。

神はまた出した。虹をだ。

今度の闇の虹はだ。影だった。神の影が髑髏天使達に迫る。

しかもそれは平面的にはない。立体的にだ。神を中心として混沌の世界全体にだ。虹が彼等を脅かし消そうとだ。そうしてきたのだ。

髑髏天使はだ。それを見て言った。

「これは先の神と同じだな」

「我が妻とだな」

「確かにな。ただしだ」

「この虹は酸よりも強い」

そうだというのである。

「比べものにならないまでにだ」

「そういうことだな。しかしだな」

「そうだ、あらゆるものを飲み込み消す」

それが神の虹だというのだ。闇の虹とだ。

「貴様らもだ」

「さて、どうしたものか」

逆さ男がその虹が迫るのを見て話す。

第五十八話 嘲笑その十三

「ここは」

「何、簡単なことだ」

バジリスクが同胞のその言葉に応えて言う。

「これは充分にできる」

「という」と

「どうするのだ」

「虹が我等を消す前に」

その前にだと。バジリスクは言うのである。

「あの神を倒せばいいのだ」

「混沌の原初の神をか」

「あいつを」

「それだけだというのね」

「どうだ、簡単な話だな」

また言うバジリスクだった。

「実にな」

「言うのは簡単だね」

それはだと言うクマゾツツだった。

「それはね」

「しかしそれは難しい」

ヤクシャである。

「いざ実行に移すとなると」

「そう思うか」

「思うからこそ言うのだ」

ヤクシャはバジリスクに対して述べてみせた。

「違うか、それは」

「その通りだな。しかしだ」

「不可能ではないというのだな」

「この世に不可能という言葉は存在しない」  
「バジリスクは言い切ってみせた。」  
「できないことはないのだ」  
「それを言うか」  
「そうだ。それを言おう」  
「神に対しても言うのだった。」  
「今ここでだ」  
「話は聞いた」  
「それはだと返す神だった。」  
「しかしだ」  
「しかしか」  
「圧倒的な力の前にはどうか」  
「神が言うのはこのことだった。」  
「それはどうだ」  
「つまり不可能だというのだな、我々が貴様を倒すことは」  
「例えて話そうか」  
「神は言葉を変えてきた。」  
「象という生き物があるな」  
「あの生き物のことか」  
「そうだ、象だ」  
「こうヤクシヤに話す。」  
「象が蟻に敗れるか」  
「つまり貴様が象か」  
「そして貴様等が蟻だ」  
「神は実際にそうだと話すのだった。」  
「そういうことだ」  
「蟻は象を倒せないというのだな」  
「蟻はどれだけいようと蟻だ」  
「また言う神だった。」  
「その貴様等は私には決して勝てないの」

「蟻か。言うものだな」

髑髏天使が神のその言葉を聞いて述べた。

「確かに原初の最初からいるという貴様から見ればそうかもな」

「理解したか」

「話は聞いた」

ここでもこう返す髑髏天使だった。

「しかしだ。それは間違いだ」

「肯定はしないか」

「確かに貴様は象だ」

それは認めるといふのだ。神が象だといふことはだ。

そしてそれを言っただ。さらにであった。

神はだ。こうも言ってみせたのである。

「しかし俺達は蟻ではない」

「では何だといふのだ」

「狼だ」

それだといふのである。

## 第五十八話 嘲笑その十四

「俺達は狼だ。それを言っておく」

「狼か」

「狼は集れば倒せない存在はいない」

所謂群狼だ。そうして数で戦うのがだ。彼等だというのだ。

「そのことを言っておく」

「そう言うか」

「その狼達が貴様という象を倒す」

「面白い言葉だ。それではだ」

「あらためて言う。行くぞ」

両手のその巨大な剣を構える。十字の型にだ。

そのうえでだ。髑髏天使はだ。

剣にも全身にも周りにもだ。

あらゆる力を出した。そのうえでだ。

激しく回転してそのうえで神に向かう。そうして突き進むのだった。

た。それを見てだ。神もだ。

翼の数を増やしてきた。一対から三対にだ。その全てから闇の光を出してだ。

髑髏天使を襲う。だがそこにいるのはだ。

彼だけではなかった。死神もだ。

彼は金と銀の光を全身に纏いだ。髑髏天使の横に来ていた。そして

そのうえでだ。共に突き進みながらだ。こう言うのだった。

「狼か。面白いな」

「そうだね」

死神が彼のその言葉に応える。同じ口でだ。

「狼は一匹一匹も強いけれどね」

「集ればな」

「さらに強くなるからね」



「群をなす狼は最強だ」

死神は言う。

「私は今その狼になろう」

「僕もね。そうなるよ」

「まずは二匹だ」

狼のその数だった。

「そしてさらにだ」

「うん、僕達とね」

目玉が言うのだ。彼等の横にだ。

それぞれの光に覆われただ。魔神達も来るのだった。

彼等もだ。それぞれ言うのであった。

「さて、狼ですか」

「言い得て妙じゃな」

「少なくともこの神には」

「滅多なことでは勝てはしない」

彼等はそれぞれ言うていく。

「それならばだ」

「あえて狼となりだ」

「戦おう」

「そして勝つ」

こうだ。口々に言うてだ。彼等も神に突き進むのだった。

そこに翼が来る。しかしだ。

その光はだ。彼等の力の前にだ。

打ち消された。簡単にだ。

そしてそのうえでだ。彼等はさらにだ。

突き進みだ。遂に神の傍まで来た。

髑髏天使はその両手に持つ剣をだ。振るった。そうしてである。

神を斬る。上から二条の光が振り下ろされた。

一閃した。しかしだ。

両断されてもだ。それでもだった。

神の姿はそこにありだ。一瞬でだ。元に戻ったのだった。

「死なないか」

「この程度ではだ」

「死なないというのだな」

「見ての通りだ」

その元に戻った姿でだ。神は髑髏天使に話した。

「私はこの程度では死にはしない」

「魂が幾つもあるというのか」

「いや、一つだ」

神は死神の言葉にも答えてみせた。

「一つしかない」

「では。その魂が尽きないのか」

「そういうことだ」

これがだ。答えだというのである。

「これでわかったな」

「話はわかった」

「僕もだよ」

死神だけでなく目玉も話す。

## 第五十八話 嘲笑その十五

「つまりだ。貴様を滅ぼすにはだ」

「もつとダメージを与えないと駄目だね」

「さて、それができるか」

神はそのことを死神と彼と共にいる目玉に問うた。

「貴様等に」

「先程のバジリスクの言葉だが」

死神は彼の言葉を引き合いに出して神に話した。

「不可能という言葉はこの世にはないのだ」

「では。貴様もか」

「倒す」

こう言つてであつた。そのうえでだ。

死神もまた、だつた。

己の鎌を巨大なものにさせ。それをだ。

右から左にだ。横薙ぎにであつた。神を斬つた。今回も両断だつた。

そうしてだ。神に言つのだつた。

「これでもまだだな」

「そうだ、まだだ」

神の身体はまた元に戻つた。そのうえで死神に言つてみせるのだ。

「見ての通りだ」

「そうだな。何度も何度もこうして斬りか」

「滅ぼしてみるのだな」

「ではそうしよう」

死神もだ。意を決していた。

「是非な」

「しかしそれはできるのか」

神はその死神の言葉に嘲笑を込めて問い返してきた。

「私はこうして斬られるだけではない」

「攻めもするか」

「そうしない筈がない」

実際にだ。再びだ。

虹の矢を放ってきた。それで死神を攻撃してきたのだ。

それを放ちながらだ。神は言うのである。

「こうしてだ」

「むぎむぎというのだな」

「さて、私が倒れるまで斬れるか」

悠然と。嘲笑で語るのである。

「果たしてな」

「そうしないと駄目だけれどね」

目玉が言った。

「正直なところね」

「しかし攻めるだけには専念できないな」

「確かにね」

まさにその通りだった。死神はその矢を飛び回りながらかわしていた。今は攻めることに専念できなかった。それではとてもであった。

「これじゃあね」

「それで何故私を倒せる」

神は言うのであった。

「最後までな」

「俺達だけでは無理だろう」

髑髏天使も攻撃をかわす。そうしながらの今の言葉だった。

「確かにな」

「その通りだな」

「しかしだ」

「しかしだというのか」

「俺達だけでは無理だとしてもだ」

彼等だけではとだ。言葉に出して言うのだ。

「全員ならどうか」

「全員というのか」

「俺達三人だけではない」

死神を仲間とみなしてだ。目玉も入れた言葉であった。

「そう、俺達だけではなくだ」

「我等もいる」

バンパイアの言葉だった。

「我等十二柱の魔神達もだ」

「貴様等もか」

「そうだ、三で駄目ならだ」

それに加えてというのである。

「十五ならどうか」

「数は多ければ多いだけです」

虹蛇も言ってみせる。

第五十八話 嘲笑その十六

「力は多く強くなります」

「十五の力ならだ」

「貴様がどれだけ強大であろうとも」

「そうそう簡単には押せない筈だ」

「違うか」

「数は力だな」

神もそれを言う。

「それはその通りだ」

「ではです」

百目である。

「その十五の力をお見せしましょう」

「そう、ここはだ」

ヤクシヤが言うのはだ。

二人に対してだった。髑髏天使と。そして死神だ。

この場合目玉も共にだ。彼等はこの場合共に話されている。

その彼等にだ。ヤクシヤは話すのである。

「貴様等は攻撃に専念するのだ」

「そして守りはか」

「貴様等がか」

「そうだ、そうするのだ」

彼らに告げる言葉はこれだった。

「わかったな。守りは我等が引き受ける」

「ではだ」

「ここはだ」

「そうさせてもらうね」

二人だけでなく死神も話すのだった。そうしてだ。

彼等は守りを解いた。構えに入った。

その構えでだ。彼等は神に告げた。

「では我々でだ」

「貴様を攻める」

「ふむ。攻めと守りを分けたか」

死神はそれを見てだ。静かに言うのであった。

「考えたものだな」

「考えているからこそだ」

「これまで勝ってきた」

「考えがあつてこそだ」

「そうだ」

まさにだ。その通りだとだ。髑髏天使が答えた。

そうということだ。

「俺達のこれまでの戦いは見てきたな」

「全てな」

見てきたとだ。紙も話す。

「混沌の中からもだ」

「ではわかる筈だ」

髑髏天使がまた神に告げる。

「そうしたことだ」

「確かにわかつてはいる」

「わかつているというのか」

「貴様等がだ」

どうかというのだ。髑髏天使達がだ。

「私を倒せないということがだ」

「それがわかつているというのか」

「これまででは倒せたのだ」

「しかし貴様はか」

「倒せない」

こう言うのである。

「決してな。倒せはしないのだ」

「ではその言葉通りになると思っか」

「なるから言っのだ」

「相変わらずの強くだな」

「私は強くではない」

その言葉もだ。神は否定して言っのだった。

「事実を言っているだけなのだから」

「その事実として我々は貴様に勝てないというのだな」

「それが結論だ」

「貴様の結論だな」

「私のか」

「そっだ、貴様の結論だ」

ではだ。彼等の結論はだ。どうかというのである。



## 第五十八話 嘲笑その十七

「俺達の結論はまた違う」

「神の出した結論に反論するのか」

「神は常に正しいのか」

「だから神だ」

「そうだな。しかし神は一柱ではない」

唯一神の考えではなかった。彼はそうした考えはない。

それは魔神達も見えてきたからだ。彼の中ではだ。

「神は無数にいる」

「私だけではないというか」

「実際に貴様の他にも混沌の神はいるな」

「それはその通りだ」

「ではだ。貴様が常に正しいのではない」

「では。私を倒すというのか」

「こうしてだ」

言いながらだ。再びだった。

剣で斬った。また上から両断だった。そしてだ。

死神もだ。その鎌を今度は斜め上に閃させたのだ。

それで神を斬る。それを続ける。

その彼らに神が攻撃を続ける。しかしだった。

守りは万全だった。魔神達の守りはだ。

彼等だけでなく髑髏天使達も覆いだ。広範囲のバリアーになっていた。

それで守られつつだ。彼は攻撃を続ける。その中で百目が彼等に言う。

「確かに守ってはいます」

「しかしか」

「はい、何時までも守られるものではありません」

これが彼の言葉だった。

「残念ですが」

「では今のうちにか」

「はい、御願います」

こう髑髏天使達に言うのである。

「倒して下さい」

「決められた時間か」

「しかもその時間は短い」

髑髏天使も死神も言う。

「そしてその時間が過ぎれば」

「その時はだな」

「そうだ。貴様等は敗れる」

そうなるのだ。神から話すのだった。

「私の力の前にだ」

「分の悪い話だ」

それはよくわかっていた。髑髏天使もだ。

だがそれでもだとだ。彼は言うのだった。

「だが。その分の悪い方に必ずだ」

「なるというのか」

「そうだ。なる」

絶対にという口調だった。

「それも見せよう」

「私もそうする」

「僕もね」

死神と目玉も髑髏天使に続く。

「行くぞ、この鎌で」

「君の魂。刈り取ってあげるからね」

こうしてだ。髑髏天使と死神、そして目玉は神に攻撃を続ける。

神もそのバリアーを破らんとだ。黒い光と輝きのない虹で攻めたてる。

まさにどちらがより先に潰れるからだった。やがてだ。

バリアーに綻びが出た。それを見てだ。

神は嘲笑してだ。そうして言うのだった。

「いよいよだな」

「そうだな。確かにな」

ヤクシヤが神のその嘲笑に答える。

「間も無くだ」

「その障壁は潰える」

神はこのことを指摘してみせる。

## 第五十八話 嘲笑その十八

「そしてそのままだ」

「貴様が勝つか」

「貴様等が滅びる」

そうなるというのだ。

「混沌が勝つのだ」

「それはどうか」

だが、だ。ヤクシヤはだ。

その神に対して言葉を返す。言葉は怯んではない。

そしてその怯んだ言葉でだ。神にまた言った。

「そう言う貴様もだ」

「どうだというのだ」

「そろそろではないのか」

こゝ神に言うのである。髑髏天使と死神の攻撃を受け続ける彼にだ。

「限界ではないのか」

「そうだな。そろそろだ」

「近いな」

髑髏天使と死神もまた言った。

「貴様の身体にだ」

「我々の炎が宿る」

「あれか」

神もだ。炎のことを聞いて述べた。

「あの青と赤の炎だな」

「俺達が倒した時に出るあの炎」

「それがそろそろ出るな」

「さて、どうか」

また言う神だった。

「それはだ」

「貴様がわからずともだ」

「それでもだ」

彼等はさらに攻撃を続ける。するとだ。

彼等の言った通りになった。まさにだった。

その漆黒の身体に別の色が宿った。その色こそだ。

青だった。そして赤だった。彼等の色に他ならない。

その色を見てだ。今度言ったのはウエンティゴだった。

「デッドヒートになったな」

「どちらが先に潰えるかか」

「そうだ、それになったのだ」

こうだ。その神に対して言うのである。

「貴様が倒れるか。それともだ」

「私が倒れるか、か」

「どちらが先に倒れるかだ」

そうした戦いにだ。なったというのである。

「そうになったのだ」

「そうか。確かにこのままではだ」

どうなるか。神もそれを言う。

「私も倒れるな」

「自覚はしているのだな」

「痛みは感じない」

混沌の存在にはそうしたものは無いというのだ。彼等はそもそも

身体の構造もだ。普通の存在とは違うのだ。何もかもがなのだ。

「しかし自覚はできるのだ」

「だからか」

「このままでは私も危うい」

攻撃を繰り返しながらの言葉だ。

「しかしそれはだ」

「俺達もだというのだな」

「出ている」

何がだ。出ているかというのだった。

「その崩壊がだ。出ているな」

「確かにな。俺達の作ったこの障壁もだ」

「今まさに潰えようとしている」

綻びはさらに酷くなっていた。あちこちにヒビが生じていた。

そのヒビがそれぞれつながろうとしていた。まさにそれこそがだ  
った。

「間もないな」

「さて、どちらが先か」

神は言う。

「それはどちらか」

「貴様だ」

髑髏天使の言葉は変わらない。

「それは貴様だ」

「あくまでそう言うのだな」

「何度でも言う」

髑髏天使は尚も言う。

「それを言っておこう」

「そうか。それではか」

「倒す」

「そうさせてもらおう」

こうしてだった。その障壁が割れようとする中でだ。

彼等は攻撃を続けた。まさに先にどちらが終わるかだった。

そして遂にだった。障壁がだ。

割れた。割れた障壁は完全に消え去った。しかしだ。

## 第五十八話 嘲笑その十九

その瞬間にだった。神もだ。

赤と青の二色の炎にだ。完全に包まれてしまった。そして。

光も虹もだ。消え去ってしまった。勝敗がこれで決した。その中でだ。

神はだ。二色の炎に包まれながら言うのだった。

「決まったか」

「貴様の敗北だ」

「髑髏天使が神に告げる。」

「見ての通りだ」

「そうだな。敗れたのは私だ」

神自身もだ。それを認めて言うのであった。

「その通りだ」

「潔いな。敗北を認めるのか」

「否定して何になる」

「それをしてもだ。どうかというのだ。」

「それでだ。何になるのだ」

「敗北を否定してもだ」

「どうかとだ。髑髏天使も話してみせる。」

「貴様が滅びることは変わらない」

「そうだ。だからだ」

「私はそのことを認める」

神はまた言ってみせた。

「否定してもだ。私は滅びるのだ」

「そういうことだ。言葉で否定しても事実は変わらない」

「ましてや私自身のことだからな」

「ではそのままか」

「滅びよう。では行くのだな」

神は既にその身体の半分以上を炎に包まれていた。  
そしてその炎の中でだ。髑髏天使達に言うのだ。

「先に」

「そうさせてもらおう」

「私達は貴様に勝った」

死神もまた神に告げる。

「それならばだ」

「そうだな。我が兄弟達」

「兄弟だというのか」

「そうだ、兄弟になる」

それだと話す神だった。

「私達は混沌の中で同時に生まれたのだからな」

「それがですか」

「御前さん達なのじゃな」

百目とバーバヤーガが神の話聞いて言う。

「混沌の原初の神々」

「その三柱の神々じゃな」

「そういうことだ。我が兄弟であるヨグ＝ソトホートとアザトース」

彼等の名前も言うのだった。その兄弟達のだ。

「彼等のところに行くのだな」

「では貴様はここでか」

「私は滅びる」

そのことをだ。何でもないといいのだ。

「それを見ることはできない」

「我々の最後の戦いをか」

「それをだね」

死神と目玉が言う。

「その二つの戦いを見ることはだな」

「決してできないんだね」

「その通りだ。貴様にそれはできない」



また言う神々だった。そんな話をしてだ。

神はだ。炎の中に消えようとする。その中で最後の言葉を言うのだった。

「我が兄弟達を見てもだ」

「驚くなどというのか」

「そうだ」

その通りだというのである。

「それは言っておこう」

「好意の言葉ではないな」

「警告だ」

無論それではなくだ。そちらだというのだ。

第五十八話 嘲笑その二十

「これはそれなのだ」

「何があつても狂気に陥るなというのか」

「そういうことだ。もつとも私の姿を見て何もなかったな」

「そうだな。それならだな」

「それはないな」

また言う神だった。

「考えてみれば。だが」

「だが、か」

「私とは違うことは知っておくのだな」

それはだというのである。

「よくな」

「そうだな。では我々はだ」

「先に行き。精々最後まで戦うことだ」

また嘲笑を戻しての言葉だった。

「では。消えよう」

「別れの言葉は言わない」

髑髏天使は神に告げる。

「では。先に行く」

「そうするのだな」

こう言い合いだ。そうしてだった。

神は炎の中に消えた。それを見届けたうえでだ。

髑髏天使がだ。仲間達に告げた。

「先に行くか」

「混沌のさらに奥に」

「そこにだね」

「そうだ」

その通りだと答える。死神と目玉に対して。

「中に進むとしよう」  
「そうですね。何だかんだ言ってもです」  
「あと二つだしね」  
「百目とクマゾツもここで言う」  
「残る神はそれだけです」  
「あと僅かだしね」  
「そうだ。残り僅かだ」  
「髑髏天使は彼等にも話した」  
「ようやくな」  
「長かったと言うべきか」  
「逆さ男はこんなことを言った」  
「ここに至るまでは」  
「そうかもな。しかし思えばだ」  
「思えばか」  
「ここまで来るのは一瞬だった」  
「時間の流れをだ。そう感じたというのだ」  
「まさにだ」  
「一瞬だったか」  
「そう感じる」  
「こう話す髑髏天使だった」  
「今思うとな」  
「今思うとだな」  
「そう思う。そして最後はだ」  
「その最後の戦いに向かうつえでの言葉だった」  
「その二つだ」  
「二度の戦いが終わればだ」  
「ヤクシヤも話す」  
「これで完全に終わりだな」  
「じゃあ終わらせに行くでしょう」  
「狼男の言葉だ」

「今からな」  
「終わらせそして」  
「後は悠々自適の生活ですね」  
「バンパイアと虹蛇の言葉だ。」  
「さて、好きなことをしてだ」  
「楽しむとしましょう」  
「今もそうしているのではないのか」  
「髑髏天使が魔神達に言う。」  
「違うか、それは」  
「そうかも知れないわね」  
「九尾の狐は笑いながら応える。」  
「けれどそれでもね」  
「戦いが終われば遊ぶか」  
「そうするわ。絶対にね」  
「それならだ」  
「遊びたいならというのだ。髑髏天使は魔神達に言うのである。」  
「残り二つの戦いに生き残ることだな」  
「そうだな。それではだな」  
「勝って生き残ろうね」  
「死神と目玉がここでも同じ口で話した。それも同時にだ。」  
「その最後の二つの戦いにだ」  
「向かおうか」  
「そうする。それではな」  
「こうしてだった。彼等はだ。」  
混沌のさらなる中心に向かうのだった。混沌のあらゆるものが渦巻き状に入り混じったその世界の中を進みだ。最後の二つの戦いに赴くのだった。

2  
0  
1  
1  
·  
4  
·  
2  
8

## 第五十九話 精神その一

髑髏天使

第五十九話 精神

混沌の。あらゆるものが異様に絡み合い続ける世界の中でだ。彼等は話していた。

「ナイアーラトホテップが敗れたな」

「そうだな」

「こつ話す彼等だった。」

「そしてあの者達はだ」

「こちらに向かっている」

「我等の元に」

「混沌の原初の前に」

「そしてだ。こんな話もするのだった。」

「しかし。ナイアーラトホテップが敗れたか」

「意外だったな」

「我等が兄弟」

「混沌の原初の一柱」

「その彼がだというのだ。」

「敗れるとはな」

「そして我等が戦うことになるとは」

「予想していなかった」

「まことにな」

「しかしだ」

「それでもだとだ。彼等は話すのだった。」

「それはそれでいいな」

「あの者達を飲み込みそのうえで」

「全てを混沌で覆う」

「そうしようぞ」

「そしてだ」  
さらにだ。彼等は話していく。  
「全てを混沌に戻した」  
「我等はその中で蠢き続ける」  
「そうしようぞ」  
「共にな」  
「ではだ」  
話がだ。ここで動いた。  
「どちらが先に行く」  
「我等のどちらかだな」  
「そうだ。どちらだ」  
一方がもう一方に尋ねるのだった。  
「どちらが行く」  
「我等は違う存在だ」  
それはだと話す彼等だった。  
「しかし同じでもある」  
「混沌の原初の存在としてな」  
「それは同じだな」  
「そうだな」  
「違う存在であるが同じ存在でもある」  
「そうした存在が彼等だというのだ」  
そしてだ。彼等はさらに話していくのだった。  
「ではどうするか」  
「どちらが行ってもいいが」  
「この場合はどうする」  
「どちらが行くか」  
こう話していった。やがてだ。  
一方がだ。こうもう一方に言った。  
「我が行こうか」  
「そう言うのか」

「うむ。ナイアーラトホテップの戦いを見てだ  
そうしてだというのだ。」  
「あの者達を見てみたくなった」  
「戦いをか」  
「その心とやらだ」  
「見たいのはだ。それだというのだ。」  
「それを見たくなった」  
「それでか」  
「そう、それでだ」  
「また言うその神だった。」  
「倒してくる」  
「わかった。それではだ」  
「行くがいい」  
もう一方もそれでいいと答えた。



## 第五十九話 精神その二

「そして混沌の世界に戻すのだ」  
「そうしてくる」

こう話してだ。その神が向かうのだった。戦いの場に。その頃髑髏天使達はだ。混沌の中を進んでいた。そうしてその中でだ。髑髏天使がである。魔神達に対してこんなことを尋ねるのだった。

「いよいよ二柱だが」

「その残る二柱の混沌の神がか」

「どういった存在なのかをか」

「知りたいのだな」

「そういうことだな」

「そうだ」

まさにその通りだとだ。髑髏天使は魔神達に答えた。

「アザトースとヨグソトホートだったな」

「そうだ、その二柱だ」

「その神々こそがだ」

「混沌の最後の神々」

「原初の三柱の神々の残る二柱だ」

「その連中がだ」

こうそれぞれ答える魔神達だった。そしてだ。

彼等の中でだ。キリムが言うのだった。

「その力はわかるわね」

「ナイアーラトホテップに匹敵するか」

「若しくはそれ以上か」

そこまでだというのである。

「それだけの力があるわね」

「あの神以上の力がか」

「ナイアーラトホテップには感情があったわ」  
嘲笑を見せる。それが何よりの証拠だった。  
「けれど残る二柱の神々にはね」  
「それがないか」  
「ええ、ないわ」  
まさにそうだというのだ。  
「そしてその分だけ原初に近いから」  
「力も強いか」  
「感情という余計なものがないだけに」  
「余計にか」  
「その力自体は強くなっているわ」  
「そうだというのである。」  
「それは覚悟しておくことね」  
「そうか。強いか」  
「そう、そういうことになるわ」  
「話はわかった」  
キリムの話をここまで聞いてだった。  
髑髏天使は頷きだ。そのうえでだ。  
「あらためてだ。こう言うのだった。」  
「流石に最後ともなるとそうか」  
「そうです。ただ問題はです」  
「問題は？」  
「どちらが先に来るかです」  
「百目の言葉だ。」  
「残る二柱のどちらが先に来るかです」  
「両方一度はないか」  
「それはないです」  
「一度に来ることはだ。百目はないと断言した。」  
「彼等の力はあまりにも強大です」  
「その強大さ故にか」

「若し一度に両方が戦えばです」  
「それでどうなる」  
「彼等自身がお互いに滅んでしまつてしょう」  
「強大な混沌の力が相互に影響してか」  
「混沌がさらに混沌を生み」  
「そうしてだというのだ。」  
「何もかもをなくしてしまうのです」  
「混沌さえもなくなるのか」  
「混沌は混沌です」  
「ここでこう言う百目だった。」  
「無ではないのです」  
「混沌は世界か」  
「はい、混沌という世界です」  
「そうした意味でだ。混沌もまた世界だといつのである。」

## 第五十九話 精神その三

「何かがある世界なのです」

「あの連中も無は望んでいないか」

「彼等は混沌を望みます。混沌の存在です」

「無の存在ではないからこそか」

「だからそれは望みません」

「成程な」

そこまで聞いてだった。髑髏天使は頷いた。

そしてそのうえでだ。こう言うのだった。

「では。個々に戦えるか」

「そうなるのう」

バーバヤーガも話す。

「敵は個々に倒せじや」

「戦い方としては正しいな」

「そうじやな。しかしじや」

「しかしか」

「そうじや。しかしじや」

バーバヤーガはさらにだった。髑髏天使に対して言うのだった。

「わかると思うがじや」

「同時に戦えば一つの世界が崩壊するだけの力がある」

「それはわかっておくことじや」

「それがこれからの相手か」

「先のナイアーラトホテップよりもまだ強大なのじや」

バーバヤーガはこのことを話すのであう。

「よいな、そのことは」

「言われずともだ」

「頭の中には入れておるか」

「入れている」

既にだという口調での返答だった。

「よくな」

「ならよい。ではじゃ」

「行くか」

「うむ、行こう」

こう話しながらだ。彼等はさらに中に入りだ。

遂にだ。無限の暗闇が渦となって蠢く中でだ。その気配を察したのだった。

「いるな」

「そうだな」

髑髏天使と死神が同時に言った。だがだ。

周囲には何もいない。そう、何もだった。

「だが姿はないか」

「ということはだ」

「我はここにいる」

周囲そのものからの言葉だった。

「このヨグソトホートはだ」

「今度はこの空間そのものがか」

「神だというのか」

「それが我の実体だ」

まさにだ。その空間こそがだというのだ。

神だとだ。その神の声が言うのである。

「それがわかったな」

「話はわかった」

こう返したのは死神だった。

「それでは。我々は今度はこの空間を倒すか」

「そうなるね」

目玉も言うのだった。

「ここはね。確かにね」

「そうなるな」

「空間ねえ」

目玉が考える声で述べた。

「空間と戦うことはね」

「それはなかったか」

「それが実体の相手とはなかったよね」

「言われてみればそうか」

死神は同じ口で告げる目玉に対して述べた。

「これまでなかったことだな」

「そうだね。一体どうして戦うのかな」

「興味深くはある」

死神は言った。

## 第五十九話 精神その四

「確かにな。だが、だ」

「だが、だね」

「結果はわかっている」

「そっだという死神だった。」

「勝つのは我々だ」

「そっだね。そうなるね」

「如何にも。そうなる」

「こっ目玉に返してだった。そうしてだ。」

「死神はその手に持つている大鎌を巨大化させた。もうだった。」

「その鎌でだ。一旦振るってだ。こっ神に問うのだった。」

「これを合図にしてだ」

「戦いははじめるか」

「そっするぞ。いいな」

「神に言ってみせた。」

「貴様の方はそれでいいな」

「我に異論はない」

「神の返答である。」

「何もな」

「では話が早いな」

「そっだな。では早速だ」

「貴様を倒す」

「髑髏天使は告げた。」

「そして最後の戦いに向かう」

「アザトースに向かうのか」

「アザトースか」

「死神がその名前に反応した。」

「原初の混沌の神の最後の柱になるか」

「我等とだ」

神が言う。

「ナイアーラトホテップは同じなのだ」

「同じ混沌の原初の神々か」

「この世が生じる」

混沌からだ。秩序の世という意味の言葉だ。

「それ以前の。混沌が生じた頃にだ」

「貴様等三柱は生じた」

「そうということだ」

こう話すのである。

「その我等は同じなのだ」

「強さもか」

「ナイアーラトホテップには感情というものがあつた」

神はここでこうも話した。

「その分。純粹な強さは我等の方が上だつた」

「感情がマイナスになっていたか」

「しかし全体としては同じだ」

彼等三柱はだというのだ。

「同じなのだ」

「ではだ」

「我とアザトースは同じ強さだ」

神はそうだと話すのだつた。

「では。その強さを味わうのだな」

「来たか」

「そうだね」

死神と目玉が同時に言った。同じ口でだ。その瞬間だ。

彼等の中にだ。何かが来た。

「！？これは」

「一体！？」

二人はまたしても同時に声をあげた。



「何だ。精神にか」

「何かが来たね」

「私の攻撃は物理ではない」

それではないとだ。神が言ってきた。

「その精神に対してだ」

「攻める」

「そうなんだね」

「そうなる。ではその精神を壊してやろう」

「来ますね」

「その精神への攻撃がのう」

百目とバーバヤーガも受けていた。その攻撃をだ。

## 第五十九話 精神その五

無論他の魔神達もだ。彼等も言うのだった。

「心が溶ける、いや」

「何かに飲み込まれていく」

「これは。混沌か」

「心が混沌の中に飲み込まれていつているわね」

「その原初の中に」

「今こうして」

「混沌の中に摂理のある者が浸ればだ」

「どうなるか。神の今の話はそうしたものだ」

「そうなればどうなるか」

「それにより壊れるな」

ヤクシヤは神の言葉の続きを言ってみせた。

「そうなるな」

「狂気に陥るのだ」

秩序から見ればそうなるのだ。神は彼等に話した。

「完全に破壊され。何もかもができなくなる」

「廃人だね」

クマゾツツはその破壊されたものをこれだと言ってみせた。

「そうなるんだね」

「魔神といえどそうなる」

その廃人と呼ばれるものになるというのだ。

「そうなるのだ」

「そして身体はあるがだ」

「心がなくなるかな」

「同じになるのだ。死ぬのだ」

身体的な死でなくだ。精神的な死だというのだ。

「そうなるのだ」

「混沌。これがか」

髑髏天使の精神はだ。既にだ。

得体の知れないものの中に浸っていた。そこは水だった。しかし普通の水ではない。何かが違う。

触れるだけでおぞましさ、生理的な嫌悪を感じた。冷たくもあり熱くもある。

しかも水だけでなかった。他にもあった。

火もある。風も土も。あらゆる元素、混沌の中のそれが彼の精神を覆いだ。そのうえで無限の渦の中に引き込みだ。心を侵してきていた。

その中でだ。彼は言うのだった。

「この中に暫くいれば」

「普通は瞬く間にだ」

心の中にもだ。神の声がしてきた。

「壊れてしまうのだ」

「そうなるか」

「そうだ。我の声を聞いてもだ」

それだけでもというのである。神はだ。

「通常の者なら狂気に陥るのだがな」

「生憎そこまで弱くはない」

こう返す髑髏天使だった。

「俺はな」

「そうなのか。だが、だ」

「このまま耐えられるか、か」

「最後までな。そしてだ」

「そしてか」

「我をどうして攻める」

神は自分に対してどうするかも問うのだった。

「この我をだ」

「責様をか」

「我に実体はない」

神が言うのはこのことだった。

「その我をどう攻めるか」

「どうして攻めるかか」

「そうだ。実体のない我をだ」

どう攻めるのか。神はさらに問うた。

「できるのか、それは」

「できると言えばどうする」

髑髏天使はそのだ。混沌に覆われていく心の中で神に告げた。今彼の精神はその混沌の侵略を受けている。それでもだった。

## 第五十九話 精神その六

彼はこう言つてだ。神に対したのである。

「その場合はどうする」

「できるというのか」

「そうだ。攻め方は色々だ」

あると話すのだ。神に対して。

「ただこちらから攻めるだけではない」

「ほう。貴様等からは攻めはしないか」

「そうだ。しない」

髑髏天使は言い切つてみせた。

「それはしない」

「どういつた攻め方かわからないのだがな」

「最後にわかる」

髑髏天使はこう言つてだ。やはり動かなかつた。

「最後にな」

「我が倒れるその時にか」

「その時にわかる」

また言つのだつた。神に。

「さあ、このまま攻めてくるのだ」

「では。そうさせてもらおう」

「来るか」

「そのまま。貴様等は全て」

彼等の精神に当てるだ。混沌の力を増幅させていつてだ。

神はだ。彼等に告げるのだつた。

「混沌の中に沈むのだ」

「これは」

「普通の魔物ならばだ」

九尾の狐とウェンティゴがその混沌の中に浸りながら言つた。

「既に狂気に陥っているわね」

「混沌に完全に取り込まれてな」

「心がそのままなくなっていく」

「それだけのものがある」

既に彼等の精神体は全て混沌の海の中に入っていた。そしてあらゆる場所からだ。混沌の侵食を受けていっていた。そうになっていた。

だがそれでもだ。彼等はだった。

「まだね」

「この程度ではな」

「私達は全く平気よ」

「何ということはない」

「ふむ。そう言うか」

その彼等の言葉を聞いてだった。

神はまた言葉を出した。そうしてだ。

混沌の濃さをさらに増していった。混沌の狂気がさらに深まる。だがそれを受けてもだ。彼等はまた正気を保っていた。

死神と目玉がだ。話をした。

「耐えられるな」

「大丈夫だよ」

目玉が死神に答える。

「まあ昔の君だけだったら無理だったろうね」

「最初に髑髏天使と会った時の私か」

「その時の君だったら今は耐えられなかったね」

「そうだな。無理だったな」

自分でもそのことを認める彼だった。

「まずな」

「そうだね。無理だったね」

「だが今はだ」

「いけるね」

「私も。多くの戦いを経て」

それによつてだというのだ。

「精神も強くなった」

「それもかなりだね」

「そうだな。かなり強くなった」

それを相棒に言う死神だった。

「ただ。戦闘力が強くなったただけではない」

「その心も鍛えられていったね」

「戦いが。身体も精神も磨いていった」

「そして今は」

「貴様もいる」

目玉がいるというのだ。

## 第五十九話 精神その七

「貴様が私と共にいる」

「僕達は今は一つだし」

「一柱で無理でもだ」

「二柱いけばね」

「どんな状況でも耐えられる」

「そうだというのだ。」

「私達はな」

「魔神達もかな」

「ははは、その通りじゃ」

バーバヤーガの言葉だった。見れば彼等は全て健在だった。

彼女は混沌の海の中でだ。死神と目玉に話すのだった。

「わし等も一柱ではないしな。それにな」

「それにか」

「それに加えてなんだね」

「生きねばならん」

言葉は絶対的なものになっていた。

「何があつてもものう」

「そうそう、まだまだ遊ばないと」

「死んだら遊べなくなる」

「それならね」

「こんなところで」

他の魔神達も話すのだった。

「死んでなるものか」

「ここから帰って遊ぶ」

「さらにな」

「遊びか」

神は遊びという言葉に反応を見せた。そうしてだった。



感情が見られない言葉でだ。こつ話すのだった。

「時々聞くがその言葉は何だ」

「知らないのだな」

「知らない言葉だ」

まさにそうだとだ。神は髑髏天使に言うのである。

「聞きはするがわからない」

「混沌の世界の者ではか」

「そうだ。どういったものだ」

神は言うのだった。

「その遊びとはだ」

「おそろくはだ」

「おそろくは？」

「貴様に話してもわからないものだな」

そうだと話す髑髏天使だった。

「それが何かはだ」

「我にはわからないというのか」

「貴様には感情がない」

「確かにそれはない」

「ではわからないことだ」

こつ神に言うのである。

「感情がないならな」

「そうか」

神はそう言われてもだ。それでもだった。

特に思うことなくだ。ただこつ言うのだけだった。

「わかった」

「それだけだな」

「わからないのならいい」

やはりだ。感情のない言葉だった。その言葉で髑髏天使に返すのである。

「それでならそれでいい」

「そう言うからだ」  
「だからいいのだな」  
「我、混沌の中枢にいる者達のうち我とアザトースはだ」  
「感情が全くなかったな」  
「あるのはナイアーラトホテップだけだ」  
「あくまでだ。彼だけだというのだ。」  
「そうしたものはないし興味もない」  
「遊びを知らないのもだからこそか」  
「混沌で世を包めばだ」  
「どうなるか。そのこともだ。神は言った。」  
「そうした遊びというものもだ」  
「なくなるか」  
「感情そのものがなくなる」  
「そうなるな。言われてみればな」  
「あるのは。無限の破壊と混沌」  
「その二つだけだというのだ。」

## 第五十九話 精神その八

「今のこの世界になるのだ」

「感情がないと何も楽しむこともない」

髑髏天使の今の言葉は独り言だ。それを話しながらだ。

彼は神の攻撃を受け続けていた。それはさらに強くなる。しかしだ。

彼は倒れない。全くだ。そしてそれはだ。

他の者達もだ。死神も目玉も魔神達もだ。誰も倒れようとしない。混沌の中にあっても彼等の精神は均衡なままで。こう神に言うのだった。

「まだだ」

「そうだね。まだまだ緩やかだね」

死神と目玉の言葉である。その混沌の中でだ。

「こんなもので倒れると思うか」

「最大限の力じゃないよね」

「そうだ。これで七分だ」

それだけの力だ。神は言うのだった。

「まだだ」

「ではだ。完全の力をだ」

「見せてもらいたいけれど」

「そう言うか」

「では来い」

「その全ての力でね」

こう言うてであった。神を挑発した。それを受ける形であった。

神はだ。その力をさらに出した。それは。

完全の力だった。そしてそれに留まらずだ。さらにだった。

神はだ。力を出しながらこう言うのだった。

「まだだ」

「さらにですか」  
「力を出すというのね」  
「その通りだ」  
「こう言う神だった。魔神達への言葉だ。」  
「我の。最大以上の力でだ」  
「我等を倒す」  
「そうするのだな」  
「破壊しよう」  
「そうするといつのであつた。神はだ。」  
「実際にだ。髑髏天使達にだ。」  
「その攻撃を強めた。混沌のその渦がだ。」  
「極限まで強くなる。それを受けてだ。」  
「髑髏天使がだ。言つのだつた。」  
「これが極限か」  
「まだだ」  
「神の言葉はすぐに返つてきた。」  
「まだだ」  
「まだか」  
「そうだ、まだだ」  
「神は言つのだつた。」  
「これで終わりではない」  
「力をさらに強めるか」  
「貴様等を全て倒す」  
「そうするといつのである。神はだ。」  
「そして混沌を」  
「混沌の世界にか」  
「全て戻すのだ」  
「彼等の基準の世界からの言葉だつた。」  
「何もかもをだ」  
「では来い」

髑體天使はその神に対して言い返す。やはり動くことはしない。

「そのままだ」

「強めさせてもらおう」

神も言う。そしてだった。

攻撃を強める。その精神攻撃をだ。

するとだ。髑體天使達のその精神が。

ひしゃげた。精神の形がひしゃげた。そうしてそれを見てだ。

神はだ。感情のない声で話した。

「これがだ」

「貴様の極限の力」

「それなんだね」

「そうだ。では何時まで耐えられる」

神が死神と目玉に応えて言う。

「この攻撃にだ」

「まだだ」

「まだ大丈夫だよ」

二人だけではなかった。他の者達もだ。

## 第五十九話 精神その九

確かに精神の形はひしゃげ曲がっている。だがそれでもだ。

「これではだ」

「僕達の誰も倒れないよ」

「ここまできるとだ」

神はそんな彼等を見てだ。そうして話してきた。

「普通の生命体ならばだ」

「壊れるな」

「そうだ、壊れる」

逆さ男への返答だ。

「確実にな。しかし貴様等の誰もが壊れないとはな」

「さて、どうするつもりだ」

髑髏天使は精神の全体がひしゃげ形が元のものでなくなるうとしてもだ。それでも言葉を出す。

「さらに来るか」

「貴様等がまだ壊れないならだ」

「ならだだと。神は乗った。」

「我もだ」

「来るか」

「そのまま。壊れるのだ」

「こつ言つてだ。そのうえでだ。」

その力をさらに込める。極限のさらに極限だ。それを出すとだ。やがてだ。神はだ。己の方がだった。

次第にだ。その力がだった。

「むっ」

「遂にか」

「どういうことだ、これは」

「ここだ。神の力がなくなったのだ。」

そしてだった。急にだ。

神のその攻撃がなくなった。それを見てだ。

「何だ、これは」

「遂にだな」

髑髏天使が言った。

「貴様が壊れたのだ」

「我がだと」

「そうだ、貴様がだ」

こゝ神に言うのである。力がなくなった神をだ。

「貴様は極限までその力を出したな」

「如何にも」

「その為だ。貴様が壊れたのだ」

「力を出した故にか」

「出し過ぎた」

それだというのだ。

「貴様は出し過ぎたのだ」

「馬鹿な、我は神だ」

「そうだ。確かに貴様は神だ」

髑髏天使は神の言葉をそのまま返してみせた。そのうえでだ。

その神にだ。言うのだった。

「しかし神といえどだ」

「神といえどもだというのか」

「その通りだ。力を出し過ぎれば耐えられなくなる」

「我自身がか」

「だから貴様は壊れた」

そのせいだというのだ。神は力を出し過ぎだ。自滅したというのだ。

そしてだ。神にさらに言うのである。

「おそらくだ。俺や死神達だけであればだ」

「壊せた」

「確実に壊せた」

それだけの力がだ。神にはあつたというのだ。

だがそれでもだとだ。髑髏天使は言葉を続けるのだ。

「だが俺達だけではなかった」

「魔神達もいたからだ」

「その連中にも攻撃を浴びせていた。その分だけだ」

「我は。力を使い過ぎたか」

「そして敗れたのだ」

そうだというのだ。

「そういうことだ」

「そうだったのか。それで我は」

「貴様は力を使い過ぎた」

「それ故にか」

「滅びる」

そうなるというのだった。

「このままな」

「わかった」

神はその髑髏天使の宣告に対してだ。こう返すのだった。



## 第五十九話 精神その十

そしてだ。そのうえでだった。

「ではこのまま滅びよう」

「それで終わりか」

「滅びるのが事実なら受け入れるだけだ」

こう言うだけであつた。

「それだけだ」

「潔いのではないな」

「安心しろ。それは感情だ」

「感情ならばか」

「我にはないものだ」

「そうしたものも全てか」

「そうだ、ない」

神は言い切つた。有無を言わさぬまではっきりと。

「全くだ」

「だからそうしてか」

「滅びるのならそれを受け入れる」

そうだと答える神だった。

「それだけだ」

「では、だな」

「このまま滅びる」

言いながらだ。その気配がだった。

消えていく。そうしてであつた。

神は滅んだ。その気配が完全に消えてしまった。

それを見届け感じ取つてからだつた。髑髏天使は仲間達に話した。

「では。いよいよだな」

「そうだ、最後だ」

「遂にだね」

死神と目玉が髑髏天使のその言葉に応えて話す。

「最後の神アザトース」

「そいつとの戦いだよ」

「長い戦いもこれで終わりになるか」

髑髏天使のその言葉に感慨が宿る。

「いよいよか」

「はい、思えばです」

百目がその髑髏天使に話す。

「私達と貴方達が最初の敵味方でした」

「それが変わったな」

「我々魔物は元々五十年に一度その行動を活発にさせ」

「同時に出る髑髏天使と戦う」

「それを楽しみとしていました」

こつだ。髑髏天使に話していくのであった。

「ですがそれが変わりました」

「他の楽しみを知ったか」

「私達の場合は思い出したと言うべきか」

「思い出したか」

「はい、思い出したと言うべきでしょうか」

これが百目の今の言葉だった。

「この場合は」

「思い出したか」

「魔物は元々は妖怪でした」

この事実が話される。魔物と妖怪の関係についての話だ。

「しかしそれがです」

「大きく変わったな」

「はい、変わりました」

その変わったものが何かというところだった。

「戦いを知り魔物になりました」

「しかしこの時代にいてだな」

「私達は楽しみを知りました」  
「そうだったというのである。そうした風に戻ったというのだ。」  
「そしてです」  
「そしてか」  
「私達はこの戦いが終わればもう戦うことはありません」  
「そうするのだな」  
「はい、遊びの中に戻ります」  
「妖怪達と同じ楽しみの中にだ。それに戻るといふのだ。」  
「そうしますので」  
「ではだ。髑髏天使の戦いもか」  
「おそらく貴方で最後になります」  
「百目はまた話した。」  
「ただ、です」  
「ただ、何だ」  
「魔物との戦いは終わりますが」  
「妖魔、そして混沌の神々はか」  
「彼等はまた蘇るでしょう」  
「不滅だといふのだ。彼等はだ。」

第五十九話 精神その十一

「どれだけかかるかわかりませんが」

「それでもか」

「彼等是不滅の存在です」

百目は言った。

「それならばです」

「必ずまた蘇るか」

「百年後、いや千年後になるかも知れませんが」

「それでも蘇るか」

「そうして再びこの世に現れるでしょう」

「そのうえでこの世をか」

「混沌に落とそうとします」

こう言っただ。すぐにだ。百目はこうも言ってみせた。

「彼等の言葉では戻そうとします」

「混沌にだな」

「そうしようとするでしょう」

「ではだ。髑髏天使の戦いはだ」

「その遙かな先においてです」

少なくとも今でないのは確かだった。

「貴方とは別の髑髏天使がです」

「混沌と戦うか」

「はい、そうなります」

こう髑髏天使に話すのだ。

「その時貴方は間違いなく生きてはおられません」

「人間の寿命ではな」

「百年でしょうか」

「それで長生きだ」

それもだ。かなりと言っただい。

「そこまで生きられればな」

「そうですね。人間の寿命は短いです」

「俺は戦えない」

次の混沌との戦いにはというのだ。

「残念だがな」

「ですが私達がいいます」

百目はここでこう言うのだった。

「私達魔神がです」

「いるからね」

クマゾツも言ってきた。

「僕達はね」

「いるか」

「彼等とは戦いますので」

「さもないと僕達の世界が破壊されるから」

それで戦うというのだ。彼等にとってみても死活問題だった。

混沌が世界を覆えば当然彼等も滅ぼされる。それならばだった。

「使命感はないですが」

「世界を守るとかはね」

その考えはないと断りもするのだった。

「しかし我々が生きる為にです」

「混沌とは戦うよ」

「私もだ」

「僕もだよ」

今度は死神と目玉だった。この神々もだった。

「私達はこの世界を守る為になる」

「やっぱり。混沌の伸張は問題があるからね」

「その時の髑髏天使と共にだ」

「戦うよ」

「それでだ」

さらに話す彼等だった。死神からの言葉だった。

「貴様はいないがだ」

「それでもか」

「安心するのだ。私達がいてだ」

「その時の髑髏天使もいるからね」

「そうか。安心していいのか」

それを聞いてだった。髑髏天使はだ。

考える言葉でだ。こう言った。

「少なくとも俺はいない。頼むしかないな」

「そうなるな」

「まあ頼まれる以前に戦わせてもらっけれどね」

それはそうするというのだった。そんな話をしてだった。

## 第五十九話 精神その十二

彼等は先に進む。混沌の最も奥にだ。

その中でだ。ふと彼は言った。

「やはり。この戦いが終わればだ」

「終わればか」

「元の世界に戻ってだね」

「楽しみみたい」

望みだった。それを口に出したのだ。

「是非な」

「髑髏天使としての戦いは終わるな」

ヤクシヤが話す。

「少なくともな」

「それが終わればだ」

「人間の生活を送るか」

「戦いはもうしない」

髑髏天使としてだ。それは完全に終わるといふのだ。

「これでな。しかしだ」

「しかしか」

「また違う戦いがあるのかもな」

その可能性は否定しないのだった。

「人間の一生は生きていてそれが続くのだからな」

「人間の戦いはあらゆる形があるのだったな」

「剣や銃を手に取ってだけではない」

まさにだ。そうだというのだ。人間の戦いは戦争や闘いだけとは限らないのだ。実に様々な形でだ。あらゆる対象に行われるものだ。

その中でだ。彼は言った。

「菓子や。そうしたものとの戦いか」

「それになるのだな」

「そうなるな。だがその戦いにもだ  
どうかというのだ。その戦いのだ。」

「俺は勝つ」

「勝つか」

「そうだ。勝ちだ」

「そしてだというのだ。」

「生きる。二人でな」

「成程な」

バンパイアがだ。髑髏天使の今の言葉にだ。  
何か納得した感じになってだ。こう言った。

「二人になるのか」

「喫茶店に入ることになっている」

「若奈とのかをだ。自然に話すのだった。」

「そしてその中ではだ」

「菓子との戦いか」

「美味い、誰からも喜んでもらえる菓子を作る」

「そうするということのだ。」

「必ずな」

「お菓子だね」

「いいのう」

クマゾツツとバーバヤーガが楽しそうに言うてきた。

「じゃあこの戦いの後でね」

「わし等も来ていいか」

「店にか」

「うん、髑髏天使のいるその店にね」

「そのお菓子を食べにじゃ」

「金は払え」

「これが髑髏天使の彼等への返答だった。」

「馴染みでも店は店だ」

「わかってるよ。お金は払うからね」



「安心してよい」

「こう返す彼等だった。

「ではじゃ。その時はじゃ」

「楽しみにしている」

「髑髏天使はバーバヤーガに返した。

「貴様等が俺の菓子を食べる日をだ」

「さて、それでなのですが」

「どうした味かしら」

「今度は百目とクリームが言った。

「髑髏天使の作ったお菓子は」

「美味しいのかしら」

「少なくとも俺からしてみれば美味しい」

「本人が食べるとだというのだ。」

第五十九話 精神その十三

「それも充分にだ」

「期待していいのかな」

「そうかもな」

「その言葉を聞く限りは」

魔神達は髑髏天使の今の言葉に次々と行っていく。

「確かに実際に期待しているが」

「我々は菓子も好きだしな」

「甘いものもだ」

「だからこそだ」

「そういえばあれだよね」

魔神達に続いて目玉も言ってきた。

「髑髏天使ってさ」

「何だ」

「お酒は全然駄目だったよね」

彼が髑髏天使に対して言うことはこのことだった。

「そうだったよね」

「そうだ」

髑髏天使もその通りだと返す。

「俺は酒は駄目だ」

「本当に全然駄目なんだ」

「全く飲めない」

また言うのだった。

「アルコールは本当にだ」

「体質だね」

それによるものだ。目玉は言った。

「お酒がそこまで駄目なのはね」

「だが菓子には使う」

「それはいいんだ」  
「ワインにブランデー」  
まさにだ。洋菓子に使うものだ。  
「それを使って作っている」  
「そっちのアルコールは大丈夫？」  
「アルコールは調理の間に消える」  
「そうだというのだ。」  
「だから大丈夫だ」  
「やっぱり体質なんだ」  
「そうだろうな。それでだ」  
「それで？」  
「貴様等も来い」  
死神達への言葉だった。  
「いいな。俺の菓子を食いにだ」  
「来いか」  
「来ていいんだ」  
「そうだ、来い」  
彼等にも言うのである。  
「わかつたな」  
「誘いならばだ」  
「受けさせてもらうよ」  
「こつ返す彼等だった。」  
「私も菓子は好きだ」  
「僕もね」  
「貴様も食うのか」  
髑髏天使はその神に対して尋ね返した。  
「菓子を」  
「食べられるよ」  
実際にそうだと答える目玉だった。  
「これ前にも言わなかったっけ」

「言ったか」  
「そんな記憶あるよ」  
「こう話すのである。」  
「確かね」  
「そういえばそうだったか」  
「まあそういうことだから」  
「貴様も食えるのだな」  
「いざとなれば死神と今みたいに一緒になつてね」  
「それでだというのだ。」  
「味を知ることが出来るよ」  
「そうしたことまでできるか」  
「だって僕達つて元々は同じだったから」  
「それが分かれたのだ」  
「死神もこの事情を話す。」  
「生まれてすぐにだ」  
「この世ができてすぐに生まれて」  
「そうしてだというのだ。目玉が話す。」  
「そうして死と眠りができて」  
「分かれたのだ」  
「死神と眠りの神にか」  
「そういうことだからね」  
目玉が明るい顔で髑髏天使に話す。

## 第五十九話 精神その十四

「一緒になることもできるんだ」

「分かれ一つに戻るか」

「面白いでしょ、僕達って」

「そうした意味で兄弟であり一心同体だ」

死神も話す。

「それが私達なのだ」

「成程な」

「うん、そういうことだから」

「なら来るといい」

髑髏天使はここまで話を聞いてから述べた。

「菓子を食べさせてやる」

「僕達もお金は払うから」

「何なら宝石でもいいか」

死神は宝石もあるというのだ。

「それはどうだ」

「宝石か」

「私達にとつては何というものもないものだ」

「それこそ腐る程あるから」

目玉も宝石について話す。

「好きなだけあげるよ」

「そうか」

「どうか、宝石は」

「金でいい」

髑髏天使は目玉に対してこう答えた。

「日本のだ。札か貨幣でいい」

「じゃあ黄金もいいんだね」

「価値はわかっている」

宝石や黄金のだ。価値は彼もわかっている。しかしそれでもだといふのだ。

「だが、だ」

「いらないんだね」

「興味がない」

「そうだといいのだ。」

「そうしたものにはだ」

「売れば凄いいけれど？」

「その価値に相応しいだけ払ってもらえばいい」

やはり無欲な髑髏天使だった。あくまでこう言つたのだ。

「それ以上のものは求めない」

「そうなんだ」

「そうだ、それでいい」

また言うのであつた。

「それだけのものでな」

「成程、そうした欲はないんだ」

「金銭欲はな」

「うん、まあいいことだね」

目玉は彼のそうしたところはいいとしか。

「その欲で破滅する人間は結構多いからね」

「欲全てについて言えるな」

死神はここでこう言つた。

「欲で破滅する人間は多い」

「神だつてそれはあるしね」

「神にも欲はあるのか」

「勿論あるよ」

目玉は髑髏天使にそのことも話した。

「神にだつて感情があるから」

「だからか」

「うん、だから欲はあるよ」

こつ髑髏天使に話すのだった。

「そこは人間と同じだよ」

「神も同じか」

「僕達の系統の神じゃないけれど」

「ゼウスは知っているな」

目玉と死神はこの神の名前を出してきた。ギリシア神話のその神だ。

「あの人は凄いいからね」

「とにかく女好きだ」

「そういうのを見ればわかるんじゃないかな」

「神にも欲はあるのだ」

「そういうことか」

「そういうことだよ」

目玉の声は笑っているものだった。

「じゃあ。そういうことだから」

「食欲を満たしに来るか」

「美味しいものを味わうという欲もね」

その欲もだというのだ。

## 第五十九話 精神その十五

「味あわせてもらおうよ」

「そうするか」

「うん、そうするよ」

また話す。そうしてであった。

その話をしただ。彼等はだ。

最後の戦いの場に確実に向かう。その中でだ。

クマゾツツがだ。こう言った。

「最後の最後だね」

「長い戦いじゃったが」

「これで終わりだね」

クマゾツツはバーバヤーガにも言う。

「次だね」

「次の戦いでか」

「終わり、それから」

「遊びの中に生きる」

「そうなるのだな」

「俺もだ」

髑髏天使もだった。言うのだった。

「もう一つの戦いに向かえるようになるな」

「そのことが楽しみだな」

「楽しみだ。そしてその為にもだ」

死神に応えながら話すのだった。

「行くでしょう」

「そうするとするか」

こうした話をしただ。最後の戦場に向かうのだった。そしてその頃。

博士はだ。自分の研究室でだ。妖怪達の話聞いていた。



彼等はだ。こう博士にそれぞれ話していた。

「牧村さんもいよいよだね」

「最後の最後の戦いかな」

「それをしてるんだね」

「今あつちで」

「うむ。彼は全てを終わらせる為にあの場所における」

まさにその通りだとだ。博士も述べる。

「ただじゃ」

「ただ？」

「ただつていうと？」

「混沌はこれで終わりではない」

そのことはだ。博士も話すのだった。

「この文献じゃが」

「ああ、ネクロノミコンね」

「その本に書いてあるんだ」

「これは原典のアラビア語のものじゃ」

まさにだ。それだというのだ。

「なくなつたと思われていたが見つかったのじゃよ」

「凄いな、そういう本よく見つけてきたね」

「それで手に入れられたね」

妖怪達もだ。このことには驚く他なかった。

それでだ。その驚嘆の顔で博士に話すのだった。

「前にはもう一つの死海文書も手に入れたしな」

「そういうのもあつたんだ」

「手に入れていたんだ」

「うむ。原典だけに混沌の根幹が書かれておる」

それが書かれているとだ。彼は言うのだった。

「そしてそこにじゃ」

「それで何が書かれてるの？」

「一体何が」

「うむ、混沌は一度倒されてもじゃ」  
「それでもまだとだ。博士は妖怪達に話していく。」  
「何度でも蘇るようじゃな」  
「不死身？」  
「そうなんだ」  
「混沌の神々は一度倒されてもじゃ」  
「それでもまだというのだ。」  
「長い年月を経て蘇るのじゃ」  
「長い？」  
「そんなになんだ」  
「長いんだ」  
「少なくとも千年はかかる」  
「それだけの年月がだ。かかるというのだ。」  
「長い間かかる」  
「じゃあ牧村さんの話じゃないね」  
「そうなるね」  
妖怪達はすぐにそのことを察して述べた。

## 第五十九話 精神その十六

「人間ってそこまではとても生きられないからね」

「絶対にもう一度戦えないね」

「それじゃできないよね」

「そうじゃ。できないのじゃ」

まさにそうだと話す博士だった。

「牧村君が戦うことはない」

「他の髑髏天使になるね」

「そうなるんだね」

「五十年に一度のその復活もじゃ」

髑髏天使のだ。その復活についても話が為される。

「変わるのう」

「魔物が敵じゃなくなるから」

「そういうことだよな」

「その通りじゃ。もう魔物と戦うことはない」

博士はそのことはネクロノミコンからではなくだ。今の状況から話した。

「決してじゃ」

「もう。彼等が戦い以外に楽しみを見出したから」

「それでだね」

「そういうことじゃ。妖怪が戦いに魅せられ」

そうしてだというのだ。

「魔物になつたな」

「それがまた遊びの楽しみに触れてだね」

「戦いから離れるから」

「それでも魔物と戦うことはない」

「そういうことだね」

「左様、もう魔物は魔物ではない」

彼等はそうした存在でなくなったというのだ。

「妖怪になるのじゃ」

「妖怪にね」

「それに戻るんだ」

「魔物の話は終わりじゃ」

博士はこう述べた。

「そしてそのうえでじゃ」

「それだけでけれど？」

「っていうと？」

「何かあるの？」

「うむ、お菓子じゃ」

博士は話をそれに移すのだった。

「牧村君のお菓子は楽しみじゃな」

「そうだよな。牧村さんのお菓子ね」

「その日本のザッハトルテだけれど」

「どんな味かな」

「楽しみよな」

「かなりね」

「こうだ。妖怪達も話すのだった。

そしてそのうえでだった。彼等はだ。

「ここでだ。こんな話をするのだった。

「ねえ、ザッハトルテもいいけれどさ」

「他のお菓子も食べたいよな」

「そうそう、お菓子は多い方がいいし」

「種類も量もね」

「そのだ。どちらもだというのだ。

「それに飲み物もね」

「飲み物があるといいよな」

「そうね、飲み物もね」

「コーヒーも用意して」

「紅茶も用意してね」

そうした話もするのだった。飲み物もだった。

その話をするに当たった。彼等はだ。

今もだ。飲み物の話もした。

「ねえろく子さん何か飲み物ある？」

「コーヒーか紅茶か」

「何かあるかな」

「カルピスはどうですか？」

ろく子がここで勧めたのはそれだった。

## 第五十九話 精神その十七

「それがありますけれど」

「カルピス？いいね」

「そうだね」

「それいいよね」

カルピスと聞いてだ。妖怪達はだ。

明るい笑顔になってだ。それで話すのだった。

「じゃあカルピス頂戴」

「皆で飲もう」

「楽しくね」

「博士も飲むよね」

当然の様にだ。彼等は博士にもそのカルピスを勧めた。

そして博士もだ。彼等のその言葉を受けてだ。笑顔でこう応えるのだった。

「カルピス。どう？」

「飲む？一緒に」

「皆で仲良くね」

「いいのう」

博士はその髭と白髪だらけの顔を綻ばせてだった。笑顔で応えた。

「わしはカルピスも好きなのう」

「カルピスも好きだったんだ」

「うむ、好きじゃ」

博士はまた妖怪達に答えた。

「その通りじゃ」

「そうね。それじゃあね」

「一緒に飲もう」

「楽しくね」

こうしてだった。博士も共にだ。そのカルピスを飲むのだった。

ろく子が持つて来たそれは水である程度薄められ氷で冷やされている。そのよく冷えたアイスを備え付けられているストローで飲みながらだ。

妖怪達はだらしげな笑顔でそれぞれ言うのだった。

「この滅茶苦茶な甘さがいいんだよね」

「カルピスの甘さって病みつきになるよね」

「もう一度味わったらね」

「忘れられないんだよね」

これが妖怪達のカルピスへの反応だった。

「けれどこのカルピスってもう長いよね」

「そうそう、できてからね」

「結構長いよね」

「そうだよね」

カルピスを食べながらの話だった。

「三十年？四十年？もっと昔かな」

「もっと古いかな」

「カルピスの味って変わらないよね」

「まずはなつてないよね」

「むしろいい意味で美味しくなってるよね」

企業側も努力しているということだ。さもなければ売れない。人間社会のその摂理は何時の時代でも変わらないことだ。そういうものなのだ。

「そのカルピスも牧村さんに残しておこうか」

「そうだね。そうしよう」

「カルピスも残してそのうえでね」

「待とうね」

「うむ、待とうぞ」

博士は笑顔で応えた。

「彼にはそうじゃな」

「そうじゃな？」

「つていうと？」

「一本残しておくか」

カルピスをというのだ。

「残しておくとするか」

「いいね。牧村さん甘い飲み物も好きだしね」

「じゃあそれを残しておいてね」

「待とうね」

妖怪達も笑顔で応える。

「それじゃあ今は」

「そうして待とうか」

「けれどカルピス一本かあ」

「何が凄いね」

そのカルピスについても話す彼等だった。



## 第五十九話 精神その十八

「これ一本飲んだら普通は太るね」

「一気にくるよ、カルピスって甘いから」

「もう肥満一直線」

「太って仕方ないね」

「普通カルピス一本一気はないのでは？」

「ろく子がここで彼等に突っ込みを入れた」

「カルピス一気というのは」

「ないのう」

実際にそうだとだ。博士も言う。

「カルピスはちびちびと飲むものじゃ」

「水に溶かしてですよね」

「うむ。だから一本置いてもじゃ」

それでもだとこのうのだ。

「牧村君にしる少しずつ飲むぞ」

「ですよ。カルピスは」

「そういうことじゃ。だからそれはない」

また言う博士だった。

「それに牧村君はそうそう太らんしのう」

「あれだけ動いてたらね」

「そうそう太らないよね」

「そうだよね」

「だよね」

妖怪達もそのことについて話す。

「一日何千カロリー消費してるかな」

「五千とか六千は消費してる？」

「それ位は普通にいつてるよね」

「そこまでカロリー消費してたら」

それならばだとだ。妖怪達はそれぞれ話していく。

「太らないね」

「だよ。やっぱり」

「だからそうそう食べても太らないんだ」

「甘いものを食べても」

「甘いものも必要じゃ」

博士はまた話した。

「糖分はすぐにエネルギーになるからのう」

「けれどカロリー消費以上を摂ると危ないんだね」

「そうなんだね」

「そういうことなんだ」

「その通りじゃ。わしは栄養学もやっておる」

そちらでもだ。博士は権威なだった。

「その観点から言つとじゃ。甘いものも多少ならばよいのじゃ」

「あくまで自分の適量だけけれど」

「それでもだね」

「そうじゃ。甘いものもいいのじゃ」

また言つ博士だった。

「むしろ太るのを怖がつて食べない方がまずい」

「好き嫌いなら仕方ないけれど」

「それでも。極端に我慢するのはよくない」

「そうなんだ」

「何度も見てきた。無理なダイエットをする子をな」

博士のその目は悲しみを見るものになっていた。

「女の子に多いのう」

「そうですね。確かに」

ろく子も博士のその言葉に頷く。長く伸びたその首を上下にうねらせて。

## 第五十九話 精神その十九

- 「女の子はスタイルを気にしますから」
- 「それでじゃ。あまり太つていなくとも」
- 「周りに少し言われたりして」
- 「それで極端なダイエットに走る」
- 「よくある話だった。残念なことに」
- 「心身共に痩せ衰えてしまうのじゃ」
- 「そうした人を何とかするのもまた」
- 「わしの務めの一つじゃ」
- 「そうですね。本当に」
- 「全くじゃ。困ったことにじゃ」
- 「また言う博士だった。」
- 「それで何人もぼろぼろになった娘を見てきた」
- 「よくあるよね、人間の世界じゃ」
- 「そうよね、本当にね」
- 「それで無茶に痩せて」
- 「かえつて駄目になるよね」
- 「太り過ぎも痩せ過ぎもよくないのじゃ」
- 「博士はまた話した。」
- 「どうも痩せれば痩せる程よいという娘が多いようじゃ」
- 「そうした娘つてがりがりなんだよね」
- 「風が当たつても痛がるみたいになって」
- 「もう死ぬ様な状況になって」
- 「それでもまだ食べないんだから」
- 「妖怪達もであつた。暗い顔で話す。」
- 「それじゃあまずいよね」
- 「やっぱり牧村さんみたいなのがいいんだね」
- 「身体を動かしてそれで食べる」

「それがいいんだね」  
「運動をして食べていく」  
「それが一番なんだね」  
「その通りじゃ」  
博士もだ。それが最もいいというのだった。  
「そうなのじゃがな」  
「それをしないで食べないで」  
「それで痩せるのは駄目だね」  
「危険なんだね」  
「そうじゃ。それをわかることじゃ」  
「博士はこう妖怪達に話す。」  
「痩せたければ食べることじゃ」  
「食べるのは止めるべきじゃない」  
「そういうことだね」  
「そうじゃ。食べることじゃ」  
「また言う博士だった。」  
「絶対にじゃ」  
「ですよ。食べないと駄目ですよね」  
「ろく子も博士のその言葉に頷いて述べる。その長い首が動く。」  
「さもないと破滅しますよ」  
「痩せて奇麗になるか」  
「博士はそのことも話す。」  
「そうとも限らん」  
「かえってよくなりませんね」  
「痩せたその極限にあるのは」  
「はい」  
「ろく子は博士に伝えて話す。」  
「骸骨じゃ」  
「そうです。本当にそれです」  
「骸骨になれば一緒じゃ」

博士は悲しい顔で述べた。

「太り過ぎ以前の問題じゃ」

「本当に痩せ過ぎも太り過ぎも同じですね」

「同じじゃ。全くな」

こんな話をしてだった。彼等はだ。

カルピスを牧村に残してだ。彼等は彼等でカルピスを楽しむのだった。そうして彼の帰りを待っていた。帰還を楽しみに待ちながら。

## 第五十九話

完

2011・5・13

## 第六十話 最終その一

髑髏天使

### 第六十話 最終

若奈はだ。妹達や未久と共にだ。マジックにいた。

マジックのカウンターにいてだ。そのうえで話をしていた。

「若奈さん」

まずはだ。未久が若奈に言うのだった。彼女はカウンターの席に座っている。そのうえでカウンターの中に立つ若奈に話しているのだ。

「今度お兄ちゃんが作るんですよね」

「そうよ。ザッハトルテをね」

「ですよね。どうでしょうか」

「牧村君なら大丈夫よ」

若奈は笑顔で未久に答えた。

「絶対にね」

「そうですか。大丈夫ですか」

「牧村君お菓子作るの得意だからね」

それでだ。大丈夫だというのだ。

「安心していいわ」

「そうなんですか。ただ」

「ただ？」

「ザッハトルテ作るのはじめてですよね、お兄ちゃん」

はじめてだからだ。未久は不安だというのだ。

「やっぱりはじめてですから」

「無事できるかどうかはなのね」

「はい、不安です」

こう話すのだった。

「どうなるのか」

「あらゆることははじめてからはじまるじゃない」

若奈は笑顔で未久に話す。

「だから別にね」

「不安になることはないんですか」

「そうよ。別にね」

また話す若奈だった。

「牧村君も気合入れて作るでしょうし」

「そうそう。牧村さんのお菓子ってね」

「美味しいから」

若奈の二人も妹達も言う。彼女は未久と一緒にカウンターにいる。

そこにいてだ。そうして話すのだった。

「楽しみに待っていますよ」

「牧村さんのザツハトルテをね」

「わかったわ」

未久もだ。二人に言われてだ。

ようやくだ。納得した顔で言うのだった。

「じゃあここは」

「そう、楽しみにするべきよ」

若奈は笑顔で話す。

「是非ね」

「そうさせてもらいます」

「そういうことだね。それでね」

「それで？」

「今は何を食べるの？」

笑顔はそのままに未久に尋ねたのだ。

「それとも飲むの？」

「飲み物を御願います」

未久が頼んだのはそちらだった。

「紅茶御願います」

「紅茶ね」

「はい、ミルクティーを」

それをだというのだ。

「御願います」

「私も」

「私も御願い」

妹達も姉に言う。

「同じミルクティーね」

「合わせて三つね」

「三つなの」

「そう、三つ」

「御願いね、お姉ちゃん」

「数間違えてるわよ」

しかしだった。若奈はだ。

笑顔でだ。こう妹達に言うのであった。

「三つじゃないわよ」

「っていうと？」

「どついうこと？」

「四つよ」

それだというのだ。数はだ。



第六十話 最終その二

「だって私も飲むから」

「ああ、お姉ちゃんもなの」

「ミルクティー飲むんだ」

「そうよ。それで四つよ」

それでだと話すのだった。

「そういうことだから」

「四つね。そうね」

「丁度四人いるんだし」

「だからね」

「そうよ。それにね」

そこにだった。さらにであった。

二人の妹達はだ。若奈にこんなことも言った。その言ったことは。

「もうちよつとしたら四人姉妹になるわよね、私達」

「そうそう。四人にね」

「なるのよね。未久ちゃんも入れて」

「そうなるよね」

「あっ、そうね」

未久もだ。笑顔になってであった。二人の言葉に頷いた。

「お兄ちゃんと若奈さんが結婚したらね」

「それで四人よ」

「四人姉妹になるのよ」

「若草物語ね」

「それになるわよね」

こう話す妹達だった。その話を聞いてだ。

若奈は紅茶の用意をしながら微妙な顔になる。そうしてこう話すのだった。

「私、本当はね」

「本当は？」

「っていうと？」

「お兄ちゃんか弟が欲しかったのよ」

微妙な顔がだ。残念そうな顔になった。

その顔でだ。彼女はさらに言うのだった。

「それでも。私が最初で」

「で、続いたのが私達」

「三人姉妹になっちゃったね」

「従姉の千里さんもだし」

若奈はその人の名前も出した。

「そう、という血筋なのかしらね」

「三人姉妹ってあれですよね」

ここで話す未久だった。

「ほら、王監督とか」

「あの人も？」

「そう、あの人もですよね」

王貞治のことだ。球史に残る最高のスラッガーである。本塁打数八六八本はだ。今も尚世界記録である。監督としても二度の日本一を経験している。

「娘さんばかりで三人ですよね」

「そういえばそうだったわね」

若奈も未久のその言葉に頷く。

「あの人も」

「はい、他には中西太さんや中村紀洋さんも」

未久は歴代のスラッガー達の名前も出していく。

「娘さんは三人姉妹でしたよ」

「じゃあお父さんってスラッガー？」

「そうなる？」

若奈の妹達は未久の話聞いて述べた。

「千里さんの家の方も」

「中村さんの方も」

「まあそうなるかしら」

未久はこう姉妹に答えた。

「けれど。それが四人になるのね」

「妹がもう一人増えるの」

若奈はまた微妙な顔になった。

「ううん、こうなったら」

「こうなったら？」

「どうするの？」

「子供は男の子がいいわね」

その顔でだ。若奈は言った。ここで紅茶が全部できた。

そのうちの三つを三人に出して一つを自分の手に取ってだ。それ  
でだった。

## 第六十話 最終その三

そのミルクティーをストローで飲みながらだ。若奈は言った。

「男の子ばかりで三人がいいわね」

「あれっ、そう来たの」

「お姉ちゃん男の子が欲しいの」

「だから。妹が三人もいるのよ」

「それでだというのだ。」

「それだったらよ」

「子供は女の子より男の子」

「そうなるのね」

「そう、あんた達はどつなの？」

若奈は妹達に尋ねた。

「子供はどつちが欲しいの？」

「やっぱり男の子？」

「そうよね」

二人はこう言うのだった。

「私も。ずっと女の子ばかりの環境だったし」

「それだったらよね」

「やっぱり男の子欲しいし」

「自分の子供にはね」

「ふうん、そうなんだ」

その二人の話を聞いてだ。未久は言った。

「若奈さんは男の子が欲しいんですね」

「そう。男の子を何人もね」

未久にさらに話すのだった。

「そう考えてるの」

「ふうん、私は」

未久は彼女の話をそこまで聞いてだ。

そのうえでだ。彼女はこう言うのだった。

「とりあえず将来は結婚したいですけどね」

「それでもなの？」

「子供までは考えてないです」

「そうだというのだ。彼女はだ。」

「まだ。そんなことは」

「そうね。若奈ちゃんまだ十四よね」

「はい」

「そのだ。年齢の話にもなった。」

「その話をしてだ。さらに話すのだった。」

「まだ結婚できる歳になってないです」

「十六からだから」

「法律上での話だ。年齢はそれだけだった。」

「それまではね」

「ですよ。だからそこまでは」

「考えられないとだ。未久は話した。」

「考えられないです」

「けれどそのうち考えるようになるわ」

「なりますか？」

「考えられるようになる時があるのよ」

「これは年長者としての言葉だった。」

「その時になればね」

「考えられるんですね、私も」

「そうよ。だから今は特に考えなくてもいいわ」

「わかりました」

「未久は若奈のその言葉に頷いた。」

「そしてそのうえでだ。彼女は若奈の妹達に対して尋ねた。」

「二人は」

「私はね。少しはね」

「まずはだ。上の妹が話した。」

「考えてるわ」

「そうなんですか」

「十七だから」

高校二年である。つまり法律적으로는結婚できる年齢だ。

「だから。ちよつと意識しだしたわ」

「じゃあ若奈さんが仰ることそのまま」

「そう、私も考えられなかったけれど」

子供のことをだ。考えられなかったというのだ。

「けれど今はね」

「そうしたこと考えておられるんですか」

「男の子も欲しいけれど」

彼女はこう話した。

## 第六十話 最終その四

「女の子も欲しいわ」

「両方なんですか」

「そう。けれど最初は男の子がいいかしら」

「これが彼女の願いだっただけだ。」

「お兄ちゃんって感じてね」

「お兄ちゃんですか」

「やっぱり。うちって男の子いなかったから」

このことを考えるのは彼女の姉と同じだった。やはり同じ姉妹だけであつた。

「それでなのよ」

「女の子よりも男の子が」

「最初は男の子ね」

また未久に話すのだった。

「それから女の子よりもどっちかっていうと」

「男の子ですか」

「そう、そっちが欲しいわね」

どちらかというのだった。そちらだというのだ。

「できればね」

「そうですね」

「私は今は」

今度はだ。下の妹だった。彼女の言葉はあっけらかんとしている。

「そういうのはないです」

「ないの？」

「考えてないです」

明るく笑つてだ。未久に話すのだった。

「というかまだ。全然」

「考えられないの」

「だって私あれですよ」  
笑いながらだ。未久と妹達に話すのである。  
「小学校六年ですから」  
「それじゃあなのね」  
「結婚も考えられないですよ」  
彼女の歳ではだ。そうなのだった。  
しかしだ。彼女はこんなことは言うのだった。  
「けれどウエディングは着たいですね」  
「ウエディングドレス？」  
「はい、それと白無垢」  
つまりだ。花嫁衣裳をというのだ。  
「着たいですけど」  
「憧れよね、あれは」  
「はい、憧れです」  
笑顔で話す彼女だった。  
「あれは絶対に着たいです」  
「それは私も」  
「未久さんですか」  
「白い。ああした服着たいわ」  
話は憧れについてのことになった。そちらにだ。  
「夢みたいな話だけれどね」  
「そうですね。何か夢みたいですよ」  
「うん、まだね」  
そこまで考えられる年齢でもないのだった。  
「結婚も」  
「夢といいですか」  
「現実じゃないみたい」  
「けれどそれが変わってくんですか」  
「成長していつて」  
そうしてだというのだ。



「わかっていくものなのね」

「お姉ちゃんを見ていると」

「そうなんですよ」

未久はその若奈に対して問うた。

「やっぱり。そうなりますよね」

「ええ、そうよ」

その通りだとだ。若奈も答える。

「人ってただ歳を重ねるだけじゃないから」

「成長していくんです」

「ええ、そうよ」

まさにだ。そうだと話す若奈だった。

「人間ってそういうものなのよ」

「成長ですか」

「いい成長もあれば悪い成長もあるけれど」

それはあるというのだ。若奈は未久と妹達にそのことは話した。

## 第六十話 最終その五

そのことを話したうえでだ。さらにだった。

「いい成長をしていけばね」

「そういうこともわかっていくんですね」

「そうよ」

微笑んでだ。三人に話した。

「ただ。成長の仕方はそれぞれね」

「あれ？」

「やっぱりあれなの？」

妹達がここで姉に返す。

「いい成長をしていく」

「そうしないといけないのね」

「そうよ。いい成長をしていけば」

まさにだ。そうしていけばというのだ。

「そういうことがわかっていくの」

「全然成長しないってことはあるの？」

「そういうことは」

「それでも少しは成長していくけれど」

それでもだというのだ。しかしだった。

ここでもだ。彼女は三人に話すのだった。

「ただ。悪い成長もあるからね」

「碌でもない人間になる」

「つまりはそれ？」

「そういうことよね」

未久と二人の妹達が話す。そうだとだ。

「結構以上にね。碌でもない人間がいるけれど」

「そういう人間って何処にでもいるわよね」

「そうよね」

三人もだ。あらためて話した。

「ああした人間になっちゃいけないって思うよね」

「とんでもない人間っているから」

「最低の人間とかってね」

「そういう人間にならないことね」

そうした意味でだ。悪い成長はよくはないというのだ。

そんな話を続けていく。そしてだった。若奈は三人に笑顔で話した。

「三人共頑張つてね」

「わかりました」

「いい成長するからね」

「私達も」

「未久ちゃんだけじゃなくて」

妹達にもだ。話すのだった。

「若葉と若美もね」

「私達よね」

「やっぱり。私達も」

「当然よ。皆いい成長をしないと」

そのことをだ。妹達の名前を呼んで強調して話した。

「私もそうだしね」

「お姉ちゃんもなの」

「そうなるの？」

「よく言われたのよ。人間は一生成長するものだって」

これでいいというものではないというのだ。

「それこそ一生ね」

「死ぬまでなの」

「成長していくものなのね」

「そうよ。そういうものよ」

こう話すのだった。

「だから。私もまだまだ二十歳」

「大人も成長していくのね」

「大人になっても」

「だから。一生だから」

またこのことをだ。妹達に話した。

「それはわかっておいてね」

「ううん、長いのね」

「ずっとって」

「一生なのね」

「成長していくのって」

「別に焦らなくてもいいわよ」

妹達がその顔をうんざりとしたものになったのを見てだ。若奈はすぐに話した。

「特にね」

「じゃあゆつくりでもいいの？」

「そうなの？」

「自分のペースでいいの」

三人への言葉だ。

## 第六十話 最終その六

「自分のね」

「自分のペースでいっていい」

「それでいい成長をしていく」

「それでいいのね」

「そうすればいいから」

「そうだと話す若奈だった。」

「深刻に考える必要もないし焦る必要もないのよ」

「じゃあ私も」

「未久もそうなのだとだ。自分で言ってだった。」

「そのうえでだ。若奈に対して話した。」

「自分で自分のペースでそうなっていけます」

「そうしてね。未久ちゃんならね」

「私ならですか」

「ええ。きつと素敵な女の人になれるから」

「なれるように頑張ります」

「頑張つてね」

優しい微笑みで彼女に告げる若奈だった。

「それですつと一緒にいましょう」

「姉妹になつてですね」

「ええ。そうなつてね」

そう話してであつた。彼女達は四人で楽しく過ごしていた。その頃だ。

髑髏天使は遂にだ。闇が蠢き渦巻くその空間の中でだ。最後の神と対峙していた。

そこにはだ。闇そのものがあつた。それこそがだつた。

「私が最後の混沌の神だ」

「貴様がだな」

「そうだ。アザトース」  
蠢く闇が名乗る。  
「混沌の原初の神の一柱だ」  
「その最後の神だな」  
「我等は本来同じだった」  
この神もだ。こう話すのだった。  
「ヨグソトホートやナイラーラトホテップと同じだ」  
「そうなるな」  
「そうだ。混沌の原初だ」  
また話す神だった。  
「それはもう知っているな」  
「よくな。そしてだな」  
「私もまた同じだ」  
この神もまただ。そうなのだった。  
「全てを混沌で覆う」  
「そうするのが望みか」  
「貴様の世界で望みと言うのか」  
「違うというのか。それは」  
「本能だ」  
それだというのだ。神はだ。  
「我々にはそうした感情はないのだからな」  
「本能か」  
「そうだ。本能だ」  
また言う神だった。  
「これは我々の本能なのだ」  
「そうか。本能か」  
「それによつて世界を混沌に覆う」  
そうすると話していく。  
「もつとも。私が消えればそれも行われなくなる」  
「その通りだ。残るは貴様だけだ」

今度は死神だった。彼が神に告げたのだ。

「貴様だけだ。残る混沌はな」

「そうだな。私だけだ」

「貴様との戦いが終われば混沌との戦いも終わる」

それ自体がだというのだ。

「わかったな。ではだ」

「戦うか」

「その為に来た」

死神の言葉は単刀直入だった。

「ここまでな」

「私も避けるつもりはない」

「戦いもか」

「貴様等を倒してこの世の全てを混沌に戻す」

神の言葉だった。

「そうさせてもらおう」

「そうするのだな」

「混沌は全てだ」

この神もだ。これまでの神と同じことを言葉に出す。

## 第六十話 最終その七

「その全てに戻すのだ」

「貴様等の考え、いや本能は聞いている」  
「髑髏天使が言い返す。」

「しかしだ」

「それは受け入れないか」

「だからこそここまで来た」

「こう神に言い返すのである。」

「それでなのだ」

「そうだな。それは先程も聞いた」

「話がまとまらないのはわかっている」

「それもだと言っ髑髏天使だった。そしてだ。」

「両手に持つ剣を構える。そのうえで神と対峙する。」

「神はだ。また言った。」

「ではだ」

「ではか」

「貴様等の相手をしよう」

「神は感情のない声で話す。」

「そのだ。貴様等のだ」

「さて。では最後の戦いです」

「百目も話す。」

「それをはじめましょう」

「いよいよじゃな」

「そうだね」

「バーバヤーガとクマゾッツも言う。」

「この戦いで終いじゃ」

「当分戦うことはないね」

「私がここで敗れることがあれば」



どうなるか。神も話す。

「千年は復活しない」

「千年。短くてだな」

ヤクシヤがその年数について述べた。

「長ければ一万年だな」

「それ位になるか」

その辺りの年数だとだ。神は述べた。

「どちらにしろ貴様等の感覚では長いな」

「俺はその頃には生きてはいない」

髑髏天使がこう述べた。

「人間である俺はだ」

「そうだな。生きていないな」

「しかしだ」

それでもだと話す髑髏天使だった。

「貴様が。貴様等混沌の神々がいない間はだ」

「その千年か一万年か」

「その間人類は貴様等の脅威を感じなくて済むな」

「そうなる。我々はいないのだからな」

「話は聞いた」

ここまでだ。聞いたと返す髑髏天使だった。

「ではだ。ここで戦い勝利を収めだ」

「混沌の脅威を取り除くというのだな」

「そうさせてもらおう」

その闇の渦を見据えての言葉だ。

「では。行くぞ」

「戦い。私の戦いはだ」

「どうして戦うというのだ」

「鏡だ」

それだとだ。神は一言で言って来た。

「それが私の戦い方だ」

「鏡か」

「私は鏡だ」

また言う神だった。

「その鏡の戦いを見せよう」

「鏡の戦いか」

「というと」

今度は死神と目玉が話す。

「私達自身が相手になるのか」

「そうなるのかな」

「私はその対称全てを映し出した」

そのうえでだというのだ。

## 第六十話 最終その八

「その映し出したものと映し出されたもの双方を戦わせるのだ」

「成程な。では俺と俺が戦う」

「貴様が貴様に勝てばだ」

「それで貴様は滅ぶな」

「そうだ。鏡は私だからだ」

その映し出しているものも神なのだ。それならばであった。

「その私を倒したことになる」

「そういうことか」

「話はわかったな。貴様は貴様自身と戦うことによって私と戦うことになるのだ」

「俺自身」

そしてそれを出すだ。神との戦いだというのだ。

「それに勝つというのだな」

「戦うからには勝つ」

まさにそうするとだ。髑髏天使も述べた。

「必ずだ」

「私に対してもか」

「相手が誰であろうとも」

そのだ。アザトースといえどもだというのだ。混沌の原初の神にも。

「私は勝つ」

「最後の最後までだな」

「勝つことは最後の最後までだ」

まさにだ。そうだというのだ。

「その時までだ」

「私と勝つまで」

「それまでが俺の。俺達の戦いだ」

「そういうことだ」  
死神も髑髏天使に続いた。  
「そうか。私自身と戦うのか」  
「死を司る死神と死神の戦いだ」  
神は死神に対しても述べた。こう。  
「果たしてどちらが勝つかだな」  
「これまで多くの魂を刈ってきた」  
「ここで死神の鎌が光った。銀の鋭い光だ。」  
「そして戦い勝ってきた」  
「それを今度もだというのか」  
「そうだ、今度もだ」  
まさにだ。今もだというのだ。  
「勝たせてもらおう」  
「そうか。それならばだ」  
「行くぞ」  
彼もだ。そうするといふのであった。  
そしてだ。魔神達もであった。  
「自分と闘うのははじめてだが」  
「それもいいだろう」  
「面白い話だ」  
「これまではなかった」  
彼等もだ。彼等自身と闘うことはなかったのだ。  
しかし今は違う。そういうことだった。  
「確かにな」  
「しかしだな」  
「そうだ。闘いそしてだ」  
そのうえでだ。髑髏天使も言う。  
「最後まで生きる」  
「勝つというのか」  
「そうさせてもらう。生き残るのは俺達だ」

髑髏天使の言葉は続く。

「貴様ではない」

「そう言うのならだ」

神も応えてだ。そうしてだった。

髑髏天使の前にだ。彼が出た。

髑髏天使がもう一人出て来た。その髑髏天使を前に見てだ。彼は言うのであった。

「俺自身だな。間違いないな」

「最も手強いのは何か」

神の声がする。ここでも。

「鏡なのだ」

「つまり自分自身がか」

「それに勝つのはどうか」

それがどうかとも話す神だった。

## 第六十話 最終その九

「最も難しいことだ」

「そうだな。それは誰にも言える」

「まさにね」

そのことはだ。死神と目玉も話せた。彼等もその彼等を見て話す。

「己と全く同じものはな」

「何もかもが難しいからね」

「それではだ」

「僕達も勝とうか」

死神と目玉は同時に言った。

「他ならぬ自分自身にだ」

「そうしよう」

こう話してであつた。彼等もであつた。

闘いに向かう。そして魔神達も同じだった。

それぞれの自分自身にだ。向かつてだ。闘いに入った。それぞれ

の闘いだつた。

髑髏天使はその中でだ。彼自身にその巨大な剣を振るつた。

右手に持っているその剣をだ。上から振り下ろす。巨大な刃が上

から来る。大抵の相手ならこれで一気に両断されるものだった。

だがそれはだ。ならなかつた。

もう一人の髑髏天使、鏡の彼はだ。その剣を受けた。そのうえで

言うのだった。

「見事な攻撃だ」

「喋れたのか」

「貴様は俺だ」

そのだ。鏡の彼が言うのである。

「何もかもが同じなのだ」

「だから喋れるのだな」

「その通りだ」

また言う鏡だった。

「こうしてだ。喋ることもできる」

「俺自身である故にか」

「その通りだ。そしてだ」

「そしてか」

「貴様は俺に勝てるのだな」

髑髏天使への問いだった。その自分自身へのだ。

「それができるのだな」

「できると言えば信じないか」

「信じる、信じないの感情は俺にはない」

そうした意味では髑髏天使ではなかった。混沌の存在だった。

その混沌の存在がだ。彼に言うのだった。

「何もかもがだ」

「ないか」

「そうだ、ないのだ」

また言う影だった。

「だができるというのならだ」

「それならばか」

「見せてもらおう」

これが鏡の言葉だった。

「俺自身に勝てるのかどうかをな」

「では見せよう」

再びだった。髑髏天使はその両手の巨大な剣を振るった。

右に左にだ。縦横に振るう。しかしかった。

その剣はだ。全てだった。

影は防ぐ。彼の攻撃を全てだ。

防ぎ弾き返す。そうしてきたのだ。

そしてだ。影からもだった。

剣を振るう。それに対してはだ。

髑髏天使が防ぎ。攻防は逆だった。それを繰り返してだった。

互角の攻防を繰り返す。打ち合いは百合を超えた。

だがそれに終わらずだ。さらにだった。

二百、三百と続けられる。剣と剣が打ち合い銀の火花が弾け飛ぶ。

だ。だ。

その中でだ。髑髏天使はまた言った。

「まさに互角だな」

「何しろ貴様自身だからな」

「ならばか」

「そうだ。同じなのは強さだけではない」

「頭もか」

「貴様は今まで機転で勝ってきた」

そのこともだ。指摘されるのだった。

「そうだな」

「だと言えはか」

「その機転も通じない」

そうだというのだ。



## 第六十話 最終その十

「俺にはだ」

「俺自身であるからこそ」

「そういうことだ。だからこそだ」

「俺は勝てないというのだな」

「何が最強の敵か」

影はそのことも言うのだった。

「それは己自身だ」

「全てが同じだからこそ」

「己に勝つことはできない」

それは無理だとだ。述べる影だった。

「何しる戦闘力は同じでだ」

「戦うスタイルもだな」

「頭脳も同じだ」

つまりだ。何もかも、全てが同じだというのだ。

「その俺に勝てるのか」

「確かに全て同じだ」

そのことは髑髏天使も確かに認めた。

「だが、だ」

「それでも貴様は勝つというのか」

「何度も言うが勝ち、そして生きる」

この考えは変わらなかった。変えないと言ってもいい。

「だからこそ。俺は貴様を、俺自身をだ」

「倒すか」

「そうする。行くぞ」

「来るか」

髑髏天使は再び剣を振るった。だがそれは全て受けられる。そして影の攻撃も同じだった。髑髏天使は彼の攻撃を防ぐ。まさ

に互角の攻防だ。

それは死神も魔神達も行っていた。その中でだ。

目玉がだ。死神に言うのだった。

「本当に何もかも同じだね」

「そうだな。私には貴様がいるが」

「僕は向こうにもいるよ」

そのだ。彼等の目の前にいる影にもだというのだ。

「あちらにもね」

「そうだな。いるな」

「それで同じ様に話してるから」

「厄介だな」

「どうするの、それで」

「考えても無駄か」

死神はここでこんなことを言った。

「この場合はだ」

「考えても無駄？」

「そう、無駄だ」

まさにだ。そうだというのだ。

「ここはだ」

「考えても無駄って」

「これまでは考え、頭を使って勝ってきた」

これについてはだ。髑髏天使と同じだった。彼もまた戦いにおいてはその技よりもその技を何処でどう使うか、つまり頭脳で勝ってきたのだ。

それを考えてだ。彼は今目玉に話すのだった。

「それを变えるか」

「变えるって」

「考えて勝つだけではない」

「それだけじゃない？」

「考えを捨てる」

また目玉に言った。

「そうするべきだな。今は」

「考えを捨てて闘うの？」

「そうする」

鎌の構えを解いた。そうしたのだ。

そうしてただ右手にその鎌を持ったままだ。己の影を見る。

影は鎌を構えている。その彼に言っのだった。

「ではだ」

「死ぬつもりではないな」

「残念だがそれはない」

死神は己の影に返した。

「今こうしたのは生きる為だ」

「その為に構えを解いたか」

「生きる、即ち貴様を倒す」

また影に告げる。

「そうさせてもらおう」

「しかし貴様は構えを解いた」

「その通りだ」

「それでどうして闘うというのだ」

影はこう己に問うた。

「勝てないのではないのか。そもそも闘うことさえも」

「そう考えるのなら考えるといい」

影にはだ。そうしろというのだ。

「私は今は考えない。そうさせてもらおう」

「それで私を倒すのか」

「来い」

死神は己自身に言っていく。構えを取らないまま。

第六十話 最終その十一

「私から行くかも知れないがだ」

「闘い方も放棄したか」

「全ての考えることを放棄した」

「そうだといいのだ。」

「そうした」

「わからないな」

「わからせるつもりもない」

「そのことも放棄しているのだった。」

「何もかもをだ」

「考える一切のことをか」

「そのうえで貴様と闘いだ」

「勝つか」

「では来るのだ」

「また影に言う。」

「勝つのは私だ」

「貴様か」

「そうだ、私は」

「死神は言うのだった。」

「何があっても貴様に勝つ」

「貴様自身にか」

「私もやるべきことがある」

「影に対してこども話す。」

「私は死者の魂を送ることが仕事だからだ」

「それをする為にか」

「私が死ねばそれをする者がいなくなる」

「死神も大切な仕事なんだよね」

「目玉も言ってきた。」

「それに僕もいるからね」

「おっと、僕自身もだね」

目玉の影もいた。死神の影の口を借りての言葉だった。

「役目があったよね」

「そうだよ。僕も神様だしね」

「眠りの神の仕事だね」

「それをしないといけないからね」

それでだとだ。目玉も言うのだ。

「死ぬわけにはいかないからね」

「そういうことなんだ」

「そうだよ。じゃあ死神」

「わかっている」

死神は自身の半身、もう一柱の自分に応えた。

「そのことはだ」

「それじゃあ。やろうか」

「勝つ」

構えないまま言う。

「ではだ」

「うん、じゃあね」

こうしてだった。彼等は今考えないことにした。それを見てだ。

魔神達もだ。それぞれその選択を選んだのだった。

「こういうのもじゃ」

「面白いですね」

虹蛇がバーバヤーガに応える。

「これまでは考えて闘ってきましたが」

「今度は違うからのう」

「はい、考えず闘う」

「そうした闘いははじめてじゃが」

「それによって勝てるのなら」

それならばだというのだ。

「そうしよう」

「ここで敗れば終わりだ」

バジリスクが話す。

「世界はだ。もっとも俺は世界よりもだ」

「遊べなくなることがだな」

「その方が気になるがどちらにしる同じだ」

バジリスクはバンパイアに話す。

「俺達が敗れば世界は終わり遊ぶこともできなくなる」

「そういうことになるな」

「死ぬことも世界が終わることも同じだ」

この場合はだ。そうなっていた。

第六十話 最終その十二

「そういうことになる」

「その通りだな。ではだ」

「闘うとしよう」

そのだ。はじめての闘いでだというのだ。

「思考というものを捨てて」

「そのうえでな」

魔神達もそうすることにした。そして彼もだ。

髑髏天使も構えない。両手に剣をだらりと下げて持ったままでだ。そのうえで混沌の中に浮かんでいた。それだけなのだった。

その彼にだ。影が来る。そのうえでだった。

影はだ。髑髏天使に対して問うた。

「来ないのか」

「何度も言うが行くことはしない」

こうだ。影を見て言うのだった。

「行くことはここでは考えることだ」

「だからしないのか」

「俺は考えることを捨てた」

このことは変わらないというのだ。

「そういうことだ」

「そうか。なら俺はだ」

「考えるか」

「俺は貴様だ。考えることができる」

混沌の存在であつても鏡であり髑髏天使自身であるからだ。それができるというのだ。彼をそのまま全て映し出したものであるからだ。

「だからだ」

「それでか」

「そうだ。考えそのうえで  
そしてだというのだ。」

「勝つ」

「勝つ為に考えるか」

「貴様とは逆になる」

勝つ為に考えを捨てている髑髏天使とはというのだ。

「それを言っておこう」

「有が勝つか無が勝つか」

そうした話にもなっていた。考えることが有とするならだ。

「それがわかるな」

「有が勝つ」

ここぞだ。影は過ちを犯していた。それを言葉に出してしまっていた。

「それは決まっていることだ」

「有がか」

「無が有に勝てるか」

影は言うのだった。

「それは無理だな」

「その言葉否定しないな」

「否定する必要はない」

影は今度は断言したのであった。

「その必然性も見出さない」

「確かに言ったな」

髑髏天使は影のその言葉を繰り返し問うた。

「有が無に勝つと」

「そうだ。何度でも言おう」

「わかった。それではだ」

「それではというのか」

「その言葉が正しいかどうか」

それをだというのだ。



「それを見せてやる」

「それが貴様が勝つということだな」

「如何にも。それではだ」

どうかというのだった。そしてだ。

彼等はだ。衝突した。その中でだ。

髑髏天使はだ。無意識の中でだ。

考えることなく、流れる動きでだ。その両手にある剣を。

一閃させた。右に左にだ。その一撃でだ。

影、彼自身を斜めからそれぞれ斬った。影を斬るとだ。

その斬った場所からだ。闇が噴き出した。それは血ではなかった。

「混沌か」

「そうだ、それだ」

そうだとだ。影も言うのだった。

「これは混沌だ。俺は何か」

「影だ」

髑髏天使はすぐにその言葉に返してみせた。

## 第六十話 最終その十三

「俺の影だ。そしてだ」

「混沌だというのだな」

「そうだ。俺は混沌だ」

まさにそれだというのだ。それは即ちだった。

「アザトース、その力そのものだ」

「混沌は何だ」

髑髏天使はその闇、混沌を噴き出す影にまた問うた。

「それは何だというのだ」

「混沌はか」

「原初だな」

混沌の者達自身が言うだ。それだというのだ。

「そうだな。原初だな」

「その通りだ。混沌こそが全ての原初なのだ」

まさにその通りだとだ。影も話す。

「それがどうかしたのか」

「貴様は言った」

その影自身の言葉だ。

「有が無に負けることはないと言ったな」

「言った」

影は己の言葉を否定しなかった。少なくとも彼は不誠実ではなかった。何も無い混沌の世界にはだ。そもそも誠実というものもない。誠実がないのならそれを否定するものである不誠実というものもない。何故なら不誠実とはだ。誠実が存在してはじめて成り立つものだからだ。

それでだ。影もそれを言うのだった。

「確かに言った」

「そうだな。貴様は言った」

「それがどうかしたのか」  
「貴様は全てを否定したのだ」  
何を否定したのか。その話になった。  
「貴様の全てをだ」  
「俺の全てをだというのか」  
「そうだ、貴様の全てをだ」  
髑髏天使はその混沌を嘖き出し続ける影に話していく。  
「貴様自身が否定したのだ」  
「混沌は無」  
「その無である貴様が有だと言い」  
それでだというのだ。  
「無を否定したのだ」  
「では。俺は」  
「貴様他ならぬ貴様自身を否定した」  
そのだ。混沌をだというのだ。  
「その貴様が勝てる筈がなかったのだ」  
「そういうことか」  
「混沌は無だ。その混沌が形を造ったその時にだ」  
「俺は敗れる運命にあったのか」  
「そういうことだ。だが俺は違う」  
どう違うか。それは彼自身が言うことだった。  
「無にも有にもなれるのだ」  
「どちらにもか」  
「混沌にこだわることはない」  
「こつも言うのであった。」  
「だからこそ。今こつしてだ」  
「俺に勝ったか」  
「勝った、そしてだ」  
どうかというのだ。勝利を収めてだ。  
「生き残ったのだ」

「そうだな。生き残ったのは貴様だ」

「そして」

「そして？」

「仲間達もだ」

そうだといいのだった。仲間達もだといふのだ。

「貴様に勝つたのだ」

「そうだな」

見ればだ。その通りだった。

死神も魔神達もだ。全員だった。

彼等も勝っていたのだ。影に。

その中でだ。死神が言う。やはり鎌を構えてはいない。

ただ右手にだらりと持っただけでだ。消えゆく己の影に告げた。

「若しも貴様がだ」

「私がか」

「無に徹したならだ」

つまりだ。混沌のままならばだといふのだ。

「私達は敗れていた」

「そうだね」

その通りだとだ。目玉も言っのだった。

「混沌のままだったからね」

「貴様はそれを忘れていた」

影であるだ。神への言葉だった。

## 第六十話 最終その十四

「混沌は有ではないことにな」

「それを見越してだったのか」

神の問いだった。死神の影の口を通しての。

「貴様等が考えを捨てたのは」

「それは違う」

「そうしたことは考えていなかったよ」

死神と目玉はそれは否定した。

「貴様が我々と同じ考えをするとわかってた」

「それで対抗したただだよ」

「それでか」

「そうだ。だがそれがそのまま我々の勝因になった」

「こちらが無になったことがね」

二人で一つの口で影に話す。

「我々はそれで勝った」

「有に対して無になることでね」

「有になったことを自覚しそれを勝利の要因とみなしたその時にだ」

「君は混沌でなくなっていたからね」

「そうだな。我は混沌でなければならぬ」

神も言った。やはり影の口を通して。

「それを忘れていた。迂闊だった」

「ではだ」

「負けを認めるね」

「認める認めないは混沌にはない」

その混沌の者としての言葉だった。

「ありのままだ」

「最後は混沌として消えるか」

「そうするんだね」

「少し眠る」

神にとってはその程度のことだった。混沌の原初の神にとっては。

「そして再び目覚めた時には」

「また倒す」

死神が神に告げた。

「混沌は私が防いでみせる」

「無論我々もだ」

「そうさせてもらおう」

魔神達も神に対して言う。目の前の自分達自身を見据えながら。

「貴様等が復活すればだ」

「この世界で遊ぶ為に戦わせてもらおう」

「その時俺はいない」

髑髏天使は人間として神に返した。

「しかし必ず別の髑髏天使がだ」

「私達と戦うのだな」

「その通りだ。その時にはそうなる」

これが髑髏天使の神への言葉だった。

「その髑髏天使と戦うがいい」

「そうさせてもらおう。ではだ」

次第に混沌の闇を噴き出し終わりだ。そうしてだった。

髑髏天使の影は赤い炎、死神の影は青い炎にそれぞれ包まれてだ。

遂に。

消えた。何も残らなかった。

彼等が消え去ったこの時がこそなのだった。髑髏天使達の戦いが終わったということだった。

それを見届けてからだ。髑髏天使が言った。

「ではだ」

「帰るのだな」

「そうする」

死神の言葉にも答えた。

「混沌の最後の神が消えたなら」

「この世界も消える」

そのだ。混沌の世界もだというのだ。

「遂にだ。消えるのだ」

「そうか。そうなるか」

「しかし混沌は残る」

それは残るというのだ。混沌自体はだ。

「主がないままだ」

「その司る者がいないままか」

「あの神々はまた蘇る」

ここでもだ。死神は子の話をした。

「この世界はそれを待つのだ」

「主達の復活をか」

「混沌は消えはしない」

死神はまた言った。

## 第六十話 最終その十五

「絶対にだ。消えないものだ」

「絶対か」

「力を弱め漂っただけになるうともだ」

「それでも消えないというのだ。何があってもだ。

「それをわかっておくことだ」

「消えはしないか。混沌は」

「その通りだ。ではだ」

「ではか」

「帰るとしよう」

今度は死神から帰ることを言ってきた。

「最早この世界にこれ以上いても仕方がない」

「戦いは終わったからね」

目玉が出て来た。そのうえで言葉だった。

「もうね。それだったらね」

「そういえば世界が」

気付けばだった。髑髏天使達の周りは。

「変わってきているな」

「元の世界に戻って来ている」

「少しずつね」

「こうだ。死神と目玉も話す。

「少なくとも千年はだ」

「混沌がこちらの世界に来ることはないよ」

「戦いは本当に終わったのだな」

それを聞いてだ。髑髏天使は言った。

「俺達の戦いは」

「それではです」

どうかとだ。百目が言ってきた。



「私達はです」

「どうするといふのだ」

「遊びましょう」

笑顔の言葉だった。

「これで心おきなく」

「そうするか」

「何度もお話しますが我々は楽しみを見出しました」

こう話すことはだ。同じであった。

「戦い以外のことにです」

「人間の世界においての遊びか」

「その中で遊びます」

「わかった。ならだ」

「また御会いしましょう」

「縁があれば会うな」

「そうなるでしょう」

髑髏天使、かつて敵対した彼にもだ。何ともない口調だった。

「それだけです」

「それだけだな」

「私達が戦う理由はなくなりました」

百目からの言葉だった。

「では」

「そうだな」

「ここだ。完全にだった。」

彼等は元の世界に戻った。そのうえでだ。

彼等は人の姿になった。髑髏天使は牧村に戻った。そして死神もだ。人間の服になってだ。その姿でそれぞれ話を続けるのだった。

「俺も。髑髏天使になることはないな」

「そうだな。貴様はそれでだな」

「最早そうなることはない」

死神にも話す牧村だった。

「幸いと言つべきか」

「戦いは好きではなかつたのだ」

「俺は。平穩に暮らしたい」

「これは返答だつた。」

「だからだ。戦いはだ」

「好きではなかつたか」

「そうだつた。ようやく終わった」

肩の荷が降りた言葉だつた。

第六十話 最終その十六

「まさにか」

「そうか。ならよかったな」

「貴様はこれからどうする」

「私か」

「そうだ、貴様はだ」

今度は彼が死神に尋ねる。

「どうするのだ。これからは」

「私は同じだ」

「同じか」

「私は死神だ。そのことは変わらない」

そうだというのだ。

「人の魂を冥府に送るだけだ」

「それを続けるだけか」

「私は死神だからな」

それでだというのだ。

「だからだ。そのままだ」

「そうか。そうなのか」

「ではだ。私もだ」

死神の前にだ。ハーレーが来た。彼の乗るそのハーレーがだ。

それが来てだ。そうして話すのだった。

「今は別れるがだ」

「また会うか」

「機会があればな」

彼もだ。こう言うのだった。

「また会おう」

「そうか。それではな」

「では俺もだ」

牧村も前にだ。彼のサイドカーが来た。そしてだ。

彼もそれに乗る。そのうえでだった。

彼もまたその場を去ろうとする。魔神達はその彼に。

「その機会があればですが」

「いいかな」

「何だ」

サイドカーに乗りながらだ。魔神達、人間の姿になっている彼等に  
応えた。

「まだ何かあるのか」

「あんたは喫茶店に入るのよね」

美女が彼に問うた。

「そうだったわね」

「そうだ。マジックという店だ」

「その店は美味しいのか」

青年はそのことを問うたのだった。

「紅茶や菓子は」

「美味しい」

牧村の返答は一言だった。

「何故ならだ」

「何故なら？」

「俺が淹れて作るからだ」

「それでだというのだ。」

「来るのなら楽しみにしておくといい」

「自信あるんだね」

子供が彼のその言葉を聞いて言った。

「また随分と」

「来てみるか」

「そうだね」

一呼吸置いてからだ。子供は答えた。

「じゃあどんな味かね」

「飲ませてもらおうか」

大男も言った。

「そのコーヒーをな」

「楽しみにはしておこう」

紳士もだ。同僚達と同じことを言った。

「ただ。まずければだ」

「その可能性は絶対にないがな」

「言うものだな。そこまで自信があるのか」

「接客以外は自信がある」

流石にそのことについては自信があるとは言わなかった。牧村自身自分が無愛想であることはわかっている。だからこそその言葉だった。

## 第六十話 最終その十七

「それ以外のことはな」

「話はわかりましたが」

小男はその言葉は聞きはした。だが、だった。

「しかしそれは喫茶店をやるうえでは」

「致命傷じゃねえのか？」

ロツカーもそのことには他人事ながら危惧する言葉で応えた。

「ちよつとな」

「だから俺は作ることに専念する」

牧村自身こう言いはした。

「それだけだ」

「そうじゃな。あんたは店には出ん方がいい」

老婆もそれはそうするべきだといふのであった。

「さもなければ店を潰すぞ」

「店をか」

「流石にそれはしたくないな」

男も今は牧村に親身に話す。彼寄りになっている。

「店を潰すことは」

「俺は喫茶店が好きだ」

牧村もその考えはないといふのだ。流石にだ。

「潰すことなぞ論外だ」

「では。接客はしないことね」

女もそれは止めておけといふのだった。

「本当に潰すことになるわ」

「そうだな。あんたのコーヒーは飲みたいが」

仙人にしてもだ。そのことについては同じ意見だった。

「それでもな。接客は受けたくはない」

「君無愛想にも程があるよ」

何故牧村の接客は駄目なのか。子供は率直に言ってみせた。

「何処の東京の寿司屋なんだよ」

「東京の寿司屋は好きではありません」

老人はその東京の寿司屋を否定していた。

「東京ではあれがいいのですか」

「いいらしいな」

死神も話す。東京の寿司屋をだ。

「東京ではあれが」

「理解できないね」

目玉もであった。東京の寿司屋については否定的だった。

「威張つて無愛想でさ。一見さんお断りってね」

「大阪ならばあれで潰れる」

死神も言い切った。

「味以前だ」

「安くても潰れるよ」

子供はまた指摘した。

「あんな寿司屋はね」

「俺はそうした寿司屋は知らない」

牧村もだった。そうした寿司屋はだというのだ。

「入ったことがない」

「東京自体に行かれたことはありませんね」

「東京か」

「はい、おありですか？」

「あることはあるが」

「こう老人に話す。」

「しかしだ」

「それでもですね」

「寿司屋に入ったことはない」

そのだ。寿司屋にはだというのだ。

「うどんを食べて東京の飯は合わないと思った」

「ああ、あれじゃな」

老婆もその東京のうどんについて話した。

「あの墨みたいなつゆのうどんじゃな」

「あれは食えない」

牧村は一言で否定した。

「俺には合わない」

「美味いまずい以前の問題なんだね」

「そうだ。合わない」

子供にも一言であった。



## 第六十話 最終その十八

「だからいい」

「まあそれなら仕方ないね。それじゃあね」

子供は牧村の話を受けてからそれを訂正して述べてきた。

「君のそのコーヒーとお菓子。楽しみにしておくよ」

「そうしておけ。是非な」

「ではだ」

ここまで話してだ。死神が言った。

彼はもうハーレーに乗っている。そしてだ。

「帰るとしよう」

「貴様の世界にか」

「そうだ、帰る」

まさにだ。そこにだというのだ。

「そして少し休む」

「それじゃあね」

目玉もここでまた話す。

「コーヒー楽しみにしておくよ」

「そうしておくといい」

「では私達も」

「これでね」

魔神達も別れる。こうしてだった。

牧村は一人になった。それでだ。

彼もヘルメットを被りサイドカーを動かしてだ。この場を去るのだった。

そしてそれからだった。彼はだ。

まずは家に帰った。その彼にだ。まずは母親が声をかけてきた。

「ああ、今帰ったのね」

「只今」

牧村はいつもの調子で帰りの挨拶をした。

「今帰った」

「そう。今日は早いね」

「早いか」

「まだ五時よ」

「こう我が子に話す。

「夕方のね」

「五時か」

牧村はここで家の壁の時計を見た。簡素な丸い時計だ。見れば確かにだ。

今五時になったばかりだ。その時間を見て話す母だった。

「でしょ？また早いわね」

「随分と時間が経ったと思ったが」

「随分って？」

「何でもない」

混沌の中での戦いのことは言わなかった。

「そうか。ここではそれだけなのか」

「こんなに早く帰ってくるんだったらね」

「未久の塾の見送りか」

「何言ってるのよ。あの娘はまだ学校よ」

「部活か」

「そうよ。中学生は忙しいのよ」

大学生よりもだ。我が国の中学生は教育期間において最も忙しいのだ。

「だから。もうちょっとしたらね」

「迎えにだな」

「ちよつと言って来て」

母はこう我が子に話した。

「悪いけれどね」

「わかった。じゃあ行って来る」

「それまではゆっくりしてね」

「紅茶を淹れていいか」

不意に飲みたくなつてだ。母に問うた。

「それを淹れて飲んで時間を」

「そうしていいわよ。別にコーヒーでもいいわよ」

「どっちでもか」

「ええ。好きにしなさいそれ位は」

言いながらだ。母はだ。

台所においてだ。野菜を切っていた。その野菜を切りながらこう  
息子に話す。

「今日の晩御飯は」

「何だ」

「肉じゃがにね」

まずはそれだというのだ。

「もやしと」

「それか」

「それとピーマンと」

見れば切っている野菜はそれだった。緑のピーマンだ。

## 第六十話 最終その十九

「ビーフンを炒めるから」

「肉じゃがとビーフンか」

「それでいいわよね」

「美味そうだな」

その組み合わせを聞いて静かに言うのだった。言いながらだ。

紅茶を淹れている。コップにティーカップを入れてだ。そこにお湯を注ぎ込む。

そうしてからだ。テーブルに座ってその紅茶を飲みながら話すのだった。

「それはまた」

「そうでしょ。肉じゃがはね」

「肉じゃがはか」

「久し振りに作ったけれど」

それでもだ。自分の横の鍋を見ながら話す。

「上手くいったわ」

「では楽しみだな」

「そうでしょ。あんたも未久も肉じゃが好きでしょ」

「じゃがいも自体が好きだ」

「そうそう、ジャガイモ自体がね」

兄妹の好物なのだ。

「それも考えて作ったのよ」

「悪いな。それは」

「いいのよ。好きなものを食べて成長できるのならね」

「それに越したことはないか」

「そういうことよ。お父さんには」

夫のことも忘れていなかった。

「ビーフンがあるから」

「そういえばビーフンは親父の好物だったな」

「好きなものを用意するのがお母さんの仕事よ」

話しながら言葉を微笑まさせていた。

「好きなものを開拓するのもね」

「どちらもか」

「そうよ。じゃあ未久はね」

「迎えに行く」

その話は必ずだというのだった。

「今からな」

「行つてらっしゃい」

「変わらないな」

母に伝えてからだ。牧村はこつも言つたのだった。

「何もかもな」

「何もかもがつて？」

「世界は何も変わらないな」

これが彼が今言うことだった。

「同じか」

「何言つてるのかわからないけれどね」

母は息子の今の言葉には首を軽く傾げさせてから応えた。

「それでも。未久はね」

「わかっている。行かせてもらつ」

「御願いな」

そのことを話してからだ。牧村はだ。

席を立ちそのうえで妹を迎えに行くのだった。彼は完全に日常に戻っていた。戦いを終えてだ。その日常の世界に戻ったのである。

2  
0  
1  
1  
·  
5  
·  
2  
7

3685

## 最終話 日常その一

髑髏天使

最終話 日常

牧村は大学の教室でだ。友人達と話していた。

小さな教室だ。それぞれの机と椅子がある。そのうちの一つに座つてだ。周りにいる友人達と話をしていた。その話は何かというただ。

「AKB48な」

「最近特にいいよな」

「そうだよな」

こつだ。友人達はそれぞれ話すのだった。

「俺はやっぱり大島優子がいいな」

「俺は渡辺麻衣だな」

「高橋みなみだな」

彼等はそれぞれの鼻根の女の子を話に出す。

「あの小柄な感じがいいよな」

「大島優子つてそんなに小さいか？」

「小さかったか？」

「ああ、一五二なんだよ」

大島優子の背はそれ位だ。確かに大きな方ではない。

「あまりそうは見えないだろ」

「何かあまり小さく見えないよな」

「AKBで一緒にいるとな」

「そんなにな」

「けれど実際にな。一五二位なんだよ」

データにある背はだ。確かにそうだった。

「AKB自体がそんなに大きな娘いないしな」

「だよな。皆あまりな」

「背は高くないよな」

「篠田だけか？」

篠田麻里子のことだ。AKBでは最年長でもある。

「あの娘で一六八だよな」

「あの中で一番大きいよな」

「どう見たって他の娘はかなり小さいよな」

「本当にな」

こう話していく。そしてだった。

その中でだ。牧村もだ。こう話すのだった。

「一五二か」

「ああ、小柄だろ」

「やっぱり小さいよな」

「テレビじゃあまりそうは見えないけれどな」

「俺が大島優子さんの隣に来ると」

「どうなのか。彼は自分のことも考えて話す。

「そのつむじが見えそうだな」

「御前背高いからな」

「普通にそうなりそうだな」

「三十センチ近く離れてるしな」

それならばだというのだった。確かにそうなりかねなかった。

そうした話をしてだった。休み時間を過ごしていく。その中でだ。

彼等は今度だ。こんな話をした。やはりAKBの話だ。

「選挙もな。楽しみだな」

「一体誰がトップになるか」

「大島優子ちゃんじゃないのか？」

また彼女の名前が出る。

「前田敦子ちゃんもいいけれどな」

「大島優子ちゃんやっぱり強いからな」

「スタイルもいいしな」

小柄でもだ。スタイルがいいのが彼女なのだ。



「スター性はかなりだしな」

「前田敦子ちゃんも好きだけれどな」

「けれどやっぱりな」

「いいよな」

「俺はだ」

牧村もその選挙について話した。

「既に投票したが」

「ああ、誰に票入れたんだ？」

「どうしたんだ？」

「峰岸みなみさんだ」

彼女にしたというのだ。

## 最終話 日常その二

「最初は前田さんにするつもりだった」

「それで何でみなみちゃんなんだよ」

「どうしてなんだよ」

「妹が言ってきた」

そのだ。未久がだというのだ。

「その娘に入れてくれとな」

「ああ、そういえば御前妹さんいたよな」

「そうだったよな、中学生の」

「その娘にか」

「言われた」

一票入れてくれとだ。こつした話は政治の選挙でもあるだろうか。

「それでだ」

「成程な。妹さんはみなみちゃんのファンだったのか」

「そうだったのか」

「それでか」

「そうだ。それで俺もだ」

彼自身もだというのだ。

「入れさせられた」

「成程な。そうした話つてあるよな」

「女の子もAKB好きな娘多いよな」

「案外多いよな」

「そうだよな」

こつ話す彼等だった。

「男だつて男のアイドル好きだしな」

「俺実は特撮タレントだけれどな」

「俺はジャニーズな」

「ああいうのもいいよな」

彼等も彼等でだ。同性のタレントが好きなのだった。その話になってだった。彼等はまた話すのだった。

「しかし。牧村がAKBか」

「一見合わないな」

「ああ、ちよつとな」

「何か違う感じだよな」

「妹にも言われた」

その未久の話をだ。彼はまたした。

「そうな」

「ああ、やっぱりか」

「そう言われたんだな」

「そうだったんだな」

「言われた。俺がアイドル好きなのが嘘みたいだな」

実際にそう言われたとだ。彼は話す。そしてだ。

彼はだ。己の好みもだ。友人達に話した。

「しかも前田敦子が好きと聞いてだ」

「余計に驚かれたんだな」

「そうなんだな」

「そんなに意外か」

彼は言った。

「そこまで意外か」

「俺達でも意外って言うんだからな」

「そりゃ妹さんになるとな」

「そうだよな」

「そりゃそう思うだろ」

「だよな」

友人達もこう話すのだった。実際にそうだと話してだった。

笑いながらだ。こつも話すのだった。

「けれどそれでもいいよな」

「そうだよな。牧村もちゃんとアイドルに興味があるってわかった

「からな」

「若奈ちゃんって彼女もいてな」

「アイドルも好きでな」

「AKBの他の女優はだ」

その女優の話もするのだった。

「北乃きいが好きだ」

「ああ、きいちゃんね」

「あの娘も好きか」

「趣味いいな」

「そう言ってくれるか」

その女優の話聞いてだ。彼は言っのだった。

### 最終話 日常その三

それでだ。彼はその北乃きいについて話した。

「有り難いな」

「有り難いか」

「北乃きいちゃんがいいって言うってもらってか」

「外見がいいだけじゃない」

それだけではないというのだ。

「しかも演技力もある」

「だよな、演技力もな」

「それもあるよな」

「そうだよな」

「だから余計に好きだ。将来が有望だ」

北乃きいについて話していった。そこからだ。別の女優の話もした。

「それと最近小池里奈もだな」

「あの娘もいいよな」

「あの娘も外見もいいし演技力もあるし」

「コミカルな演技なんか特にな」

「抜群にいいからな」

こう話していくのだった。牧村は日常の生活を楽しんでいた。

それは研究室でも同じだった。そこでもだった。

博士にだ。こう話すのだった。

「楽しくやっている」

「そうか。楽しいか」

「ああ、楽しい」

まさにだ。そうだというのだった。

「とてもな」

「ならよい。もう君は髑髏天使ではないか」

「変身はできる」

それはできてもだというのだ。

「だが、もうだ」

「そうじゃな。戦いは終わったな」

「戦いが終われば髑髏天使になる必要もないな」

「うむ、ない」

実際にだ。ないと話す博士だった。

「君はそれを自分で終わらせたのじゃ」

「俺自身でか」

「無論君だけではないがな」

博士は自分の席に座っていつも通り話すのだった。

「死神や魔神達もいてじゃ」

「それでだな」

「よくやった」

博士は彼にあらためて話した。

「ここまです」

「そうだよ。まさかね」

「混沌まで封じるなんてね」

「そこまでするなんてね」

「凄いよ、本当に」

妖怪達、いつも通りいる彼等もだ。牧村にこう話してきた。彼等は今もお菓子やジュースを楽しんで集っている。研究室のいつもの風景だ。

その風景の中でだ。彼等は牧村にいつも通り話し掛けてきているのだ。

「髑髏天使の階級も全部昇ったし」

「天使長になったしね」

「それで混沌の神々を全部倒して」

「封印したんだね」

「封印はしてはいない」

牧村はそのことはそうではないと話した。

「俺は倒しただけだ」

「そうじゃ。倒したことは倒した」

博士もそれは言う。

「しかし神は死なん」

「また蘇るな」

「千年後か一万年後か」

遙かな未来でもだ。何時かは必ずそうなるというのだ。

「必ず蘇る」

「じゃあ危険は去っていないんだね」

「そうなるよね」

「僕達が生きているうちに出て来るんだね」

妖怪達の基準での話だ。彼等の寿命は人間のそれとは違っている。それで彼等が生きているうちにはだ。また混沌が出て来るというのだ。

## 最終話 日常その四

それを話す彼等だった。博士はその彼等にも話した。

「しかし安心するのじゃ」

「安心？」

「安心していいって？」

「混沌はこの世を覆うことはできん」

それはだ。できはしないというのだ。

何故そうなのか。博士はそのことも話した。

「混沌は原初。あまりにも原初に過ぎるのじゃ」

「原初に過ぎるから？」

「だからこちらの世界を支配できない？」

「そうなんだ」

「そうじゃ。あまりにも異質でありじゃ」

そしてだというのだ。

「髑髏天使に死神、魔神達だけではない」

「混沌を阻む相手はなんだ」

「牧村さん達だけじゃないんだ」

「そうなんだ」

「こちらの世界そのものがじゃ」

彼等だけでなくだ。彼等のいるこの世界自体がだ。混沌を拒むと  
いうのだ。

「それは何かあると混ざり合わぬものなのじゃよ」

「混沌が幾ら支配しようとしても」

「それはできないんだね」

「混沌は混沌のまま」

「そうなって覆えないんだ」

「あの者達はわかっておらん」

そのだ。混沌の神々はだというのだ。



「あの者達は今の混沌の領域の中で生きるしかないのじゃ」

「秩序は完成されている」

牧村がここでこう言った。

「だからだな」

「左様、世界は混沌から生まれ混沌でなくなったのじゃ」

「秩序の世界になった」

「この二つは何があっても混ざり合わないものになった。若し髑髏天使が倒れても」

そうなってもだ。どうかというのだ。

「髑髏天使は秩序とそれを司るそれぞれの神話世界の神々に蘇えさせられじゃ」

「戦うのだな」

「混沌が来るならな」

「わかった。では俺は安心していいのだがな」

その遥かな未来の自分と同じく闘う髑髏天使、そしてその彼が守る世界についてだ。彼は安心していいということがわかってだ。

安堵した声でだ。こう博士達に話した。

「俺は。日常に入られるのだな」

「左様じゃ。これも文献でわかったことじゃがな」

「混沌が決してこの世を覆えないことがか」

「古代エジプトの象形文字に書かれておった」

今度の文献はこれだった。

「そう書いておった」

「そうか。それも読んだのだな」

「読んだぞ。それでじゃよ」

「この世界は混沌によって滅ぶことはない」

「左様。無論滅びぬものはない」

正者必衰、その理屈だった。

「今の人間世界も必ず滅びはする」

「僕達妖怪もね」

「勿論そうなるよね」

「そうじゃ。形あるもの必ず滅びる」

博士は妖怪達にもこう話す。

「しかし混沌によつてはそうはならん」

「それを聞いて安心した」

「ならよいのじゃよ。君は安心することだ」

「安心してだな」

「これからの人生を楽しむことじゃ」

戦いが終わったからだ。そういうのだ。

「そうしてくれたらわしも嬉しい」

「僕達もだよ」

「楽しんでね、これからの人生」

「そうしてね」

妖怪達も牧村に明るく話す。

「それでここにも来るよね」

「これからも」

「勿論だ」

それはだ。当然だと牧村も言った。

## 最終話 日常その五

「これまで通りだ。来させてもらおう」

「うんうん、そうだよな」

「それでこそ牧村さん」

「僕達とも仲良くやっていく」

「それがいいんだよ」

「そうじゃな。それが君のいいところじゃ」

博士もだ。牧村に言うのだった。

「相手が誰でも。認められるな」

「妖怪と人間の違いは」

「それは何じゃ？」

「外見だけだ」

それだけだというのだ。違いは外見だけだというのだ。

「その他には何も変わらない」

「中身はじゃな」

「妖怪の心は人とほぼ同じだ」

そのこともわかったのだ。これまでの髑髏天使として戦い接してきた中でだ。彼は妖怪達についてまだ。その内面がわかったのだ。

それを話してだった。彼は妖怪達をいつもの壁に背をもたれかけさせた姿勢で見ながらだ。彼等に対してこう言うのであった。

「ではこれからもだ」

「これからもね」

「宜しくね」

「楽しくやろうね」

「そうさせてもらおう」

声を微笑まさせての言葉だった。

「甘いものを食べながらだ」

「そうそう、それでなんですけれど」

ろく子の首が伸びてきて。彼の傍から言ってきた。

「最後の戦いに向かわれる前にですけれど」

「メロンだったか」

「はい、確かメロンでしたね」

眼鏡の奥の目を笑わさせての言葉だった。

「それを食べるってお話でしたね」

「そうだったな。そういえばな」

「ではそのメロンを」

「うむ、皆で食べるでしょう」

博士はろく子の言葉を受け笑顔で話した。

「ではまずはメロンを半分に切ってじゃ」

「あつ、豪華だね」

「メロンを半分に切るんだ」

「それで食べるんだ」

「しかもそこにじゃ」

牧村が話したその食べ方をだ。博士は妖怪達にあらためて話していく。

「アイスクリームとブランデーじゃ」

「凄いね。豪華だね」

「そんな食べ方があるなんて知らなかったし」

「一体どんな味かな」

「やっぱり美味しいんだよね」

「百聞は一食にしかずじゃ」

博士は諺をあえてこう言い換えてみせた。

「まずは食べてみることじゃ」

「そうですね。食べればわかりますね」

ろく子も博士の言葉を受けて話す。

「それじゃあ今から」

「食べよう」

「そうしよう」

妖怪達も笑顔で頷いてた。そうしてだった。

彼等はその半分に切ったメロンにアイスクリームを乗せブランデー、牧村のそれはアルコールを抜いたそれを食べるのだった。その味は。

「美味しいね」

「そうだね」

「これいけるよ」

「最高だよ」

妖怪達は口々に笑顔で話す。

「こんな美味しい食べ物あるんだね」

「何か病みつきになるね」

「そうじゃな。これはよい」

博士もだ。銀のスプーンを動かしながら笑顔で話す。

## 最終話 日常その六

「一度食べればもう普通の食べ方では物足りなくなるのう」

「そうですね。これは本当にいいです」

ろく子だ。今は首を引つ込め人間と同じ姿で食べながら話した。

「メロンといえば昔は」

「御馳走じゃったな」

「まるで宝石でした」

そこまでだ。博士とろく子はメロンについて話す。

「高価で。とても手が出せませんでしたね」

「戦前も戦後もな」

「長い間そうでしたね」

「南方では食べられた」

「けれど日本では」

「とても食べられなかったのう」

しかしだ。今はだった。

「こうして食べられるのも夢の様じゃ」

「食べられない時は夢の様でしたけれど」

「食べれば美味いがな」

「夢じゃなくなりましたね」

「そうはならなかった」

そうだったとだ。博士は話した。

「そして食ってみた」

「どうでした？いつも食べられるようになったメロンは」

「美味しい」

「まずはこう言った。」

「しかしじゃ」

「しかしですか」

「有り難味はなくなった」

それがだ。なくなったというのだ。

「どうもな」

「食べられないものならですね」

「余計に有り難くなるものじゃ」

人間心理であつた。まさにそれだ。

「しかしそれがなくなつてじゃ」

「物足りなくなつたんですね」

「うむ。今は誰でも何でも食える」

そうした意味ではだ。人類社会、日本はよくなつたと言える。

「北海道に行けばメロンなぞ腐る程ある」

「だよ。蝦夷つて凄いやね」

「メロンもジンギスカンも牛乳もあつてね」

「もう御馳走の宝庫」

「凄いの何のつて」

妖怪達も北海道について話す。

「けれど。食べられないものを食べられるつていうね」

「そうした有り難味はなくなつたね」

「確かにね」

「いいことじゃが寂しいな」

博士はまたこう言つた。

「しかしふんだんにあると思えばこれ程嬉しいことはないのう」

「そうだな。それではだ」

牧村はそのメロンを食べながら話す。

「このメロンを食べさせてもらおう」

「その北海道のものですよ」

ろく子が明るく牧村に話す。

「一杯ありますから楽しんで下さい」

「アイスクリームもブランデーもか」

「勿論です。戦いが終わったお祝いに」

どうするか。ろく子は話すのだった。

「ふんだんに食べて下さい」

「わんこメロンじゃ」

博士はその半分のメロンをぺろりと、アイスクリームやブランデーまで全て胃の中に入れてからだ。そのうえで話をするのだった。



## 最終話 日常その七

「どんどん食しようぞ」

「そうだね。お祝いだよ」

「牧村さんおめでとう」

「よくここまで戦ったね」

「そう言ってくれるか。それではな」

牧村も妖怪達の言葉を受ける。そうしてだった。

彼はメロンを心ゆくまで楽しんで。それが研究室でしたことだった。

それをしてからだ。彼は大学の授業とトレーニング、部活においてのそれを済ませてだ。家に戻りそのうえで夕食を食べるのだった。

夕食の場でだ。父が彼に言ってきた。

「明日からだったな」

「そうだ」

彼はローストチキンを食べながら父に答える。

「明日からマジックに入る」

「そうか、いよいよなんだな」

父は海草サラダを食べている。メニューはそのローストチキンに海草サラダに卵と野菜の中華風のスープ、そうしたメニューだ。

その中の海草サラダを食べながらだ。父は息子に問うたのだ。

「アルバイトのはじまりか」

「そしてそれからだ」

「ずっとあそこで務めるんだな」

「それでいいな」

「ああ、あそこの家に入るのなら入るといい」  
婿入りもだ。いいというのだった。

「若奈さんと幸せになれ」

「じゃあうちはね」

母はだ。にこりと笑って未久を見て話した。

「未久がお婿さんを迎えるのね」

「私がなの」

「そうなるわよ。だって来期がお婿さんに入るのよ」

長男の彼がそうなればというのだ。

「だったらお家は貴女がね」

「私が継ぐの」

「もう継ぐとかそういう時代じゃないけれどね」

それでもだというのだ。

「まあそうなるわね」

「そうなのね。私が牧村家の主になるの」

「奥さんになるのよ」

それになるというのだ。

「頑張りなさいよ」

「何か夢みたいな話ね」

未久は首を捻りながら話した。

「そんな話今だと」

「そうでしょうね。けれど絶対になるものだから」

「絶対になるように頑張るわ」

未久はにこりと笑って答えた。

「是非ね」

「頑張りなさい。そうそう、貴女もね」

「私も？」

「貴女の話もできてるから」

こう言うのだ。娘に。

「高校に入学したらマジックよ」

「あのお店で？」

「アルバイトを」

それをしるというのだ。

「いいわね。八条学園に行くのよね」

「そのつもりだけれど」

「あそこはアルバイトしていいから」

当然学校から許可を得てだ。そのうえでしていいのだ。

「だからね」

「部活は？」

「それもしていいから」

部活もいいというのだ。

「とにかく。マジックでね」

「アルバイトしろっていうのね」

「アルバイトして悪いことはないから」

それはだ。全くないというのだ。

「お金も入るしね」

「まずはお金なのね」

「それに社会勉強になるわ」

そうしたことだ。できるというのだ。

## 最終話 日常その八

「だからね。高校に入ったらね」

「アルバイトをしろっていうのね」

「そう。お小遣い増えるわよ」

「その場合お小遣いとは違うんじゃないかな」  
父が横から母に言った。

「だって。この場合は」

「ああそうね、自分で稼ぐからね」

「うん、そうなるよ」

「けれどよ」

それでもだとだ。母の言葉は変わらない。

「お金が入るから」

「じゃあ好きなもの食べられるのね」

未久はそこから話すのだった。

「クレープとかマジックのスイーツとか」

「そうそう、マジックのスイーツも食べられるわよ」

「お店で働くからよね」

「これって大きいでしょ」

「確かに。それじゃあ」

未久はお金と食べ物との二つでだ。完全に乗った。こうしてだった。  
彼女の高校生活も決まったのだった。そんな話をしてだ。

母はだ。牧村に対しても言ってきた。

「じゃあ来期。その時は未久を御願いな」

「何かあればか」

「そう、護衛役もね」

そちらもだ。頼むというのだ。

「いいわね。それもね」

「わかった。それではだ」

「そうしてもらうわね」

「何か色々な話がまとまってきたな」

父は何処か蚊帳の外という感じで述べた。

「ううん、来期も未久も成長してるんだな」

「そうね。それはね」

母は今度は妻として微笑んで答えた。

「子供は成長するものなのよ」

「そうだよな。気付いたらそうなるからな」

「そういうものよ。それで親はね」

「そうした子供を見守ることが務めか」

「親って文字はね」

文字の話になった。漢字である。

「木の上に立って見るよね」

「ああ。だからか」

「そうよ。見守っていきましょう」

「来期も大きくなったしな」

まずは牧村、自分の息子のことから話す父だった。

「そして未久もか」

「大きくなるわよ。背もね」

「ははは、大きくなれよ」

父は優しい声で娘の言葉に応えた。

「腕白でもいい。明るく育てよ」

「果てはカリスマウエイトレスよ」

もう目標を見つけている娘だった。笑顔での言葉だ。

「この腕一本でやっていくわよ」

「よし、頑張れよ」

「二人共ね」

父も母もだ。我が子達に話した。牧村は家族の中でもだ。いつも通りであり家族が育む温かい家庭の中にその身を置いているのだった。

マジックではだ。彼は。

カウンターにいてだ。若奈と話すのだった。

「ではいいな」

「うん、いいよ」

隣にいる彼女は真剣な顔で彼の言葉に頷いて応えた。

そしてだ。彼が取り出すそれを見るのだった。それは。

黒く丸いものだった。それを見てだ。彼女は再び言った。

「できたわね、遂に」

「ああ、できた」

彼もだ。若奈のその言葉に頷いて返す。

## 最終話 日常その九

「ザッハトルテがな」

「日本のザッハトルテね」

「オーストリアのザッハトルテとはまた違う」

本場のそれとはだ。また違うというのだ。

「日本人の舌に合わせたザッハトルテだ」

「遂にできたのね」

「作っている間も今に至るまでもだ」

今度は時間の話だった。それはどうかというのだ。

「あっという間だった」

「すぐに終わったのね」

「本当に早かった」

「こう言うのだ。」

「ここまでな」

「そう。早かったの」

「お菓子を作っている間の時間は流れるのが早い」

牧村はそのザッハトルテを見ながら話す。

「精神を集中しているからな」

「そうということよね」

「そうだな。それにだ」

「それに？」

「食べている時間はより早い」

その時はだ。さらにだというのだ。

「食べているものを見る時間もだ」

「つまりあれなのね」

若奈は彼のそうした話を聞きながら述べた。

「食べ物にかける時間は短く感じるのね」

「全て一瞬に感じてしまう」

「確かにね。それが特に美味しいものだった場合はね」  
「そうなるな」

「楽しい時間は早く過ぎるものだからね」  
「なら俺はだ」

若奈の今の言葉からだ。牧村はこのことがわかったのだった。

「お菓子を作ることを楽しんでるのだな」

「そうよ。それでそれってすごくいいことよ」

「いいことか」

「だって。好きこそものの上手なれよ」

にこりと笑ってだ。そうだと話す若奈だった。

「牧村君いいお菓子職人になれるわよ」

「ならいいのだがな」

「なれるわ。じゃあ妹達呼ぶから」

お菓子ができたからだ。彼女達も呼ぶというのだ。

「そうするからね」

「わかった。それならな」

「それならよね」

「皆で食べよう」

声だけをだ。微笑まさせての言葉だった。

「是非な」

「お父さんとお母さんはいないけれどいいわよね」

「買出しに行っていたな」

「そうなの。今はね」

それでだというのだ。

「それが残念だけれどね」

「そうだな。あの人達にも食べてもらいたかったな」

「ええ。けれどまたの機会にってことでね」

「そうしてもらうか」

「じゃあ。あの娘達にも連絡するから」

言いながら携帯を取り出してだ。メールを送った。すると程なく



だ。

妹達が来てだ。カウンターのところ座って笑顔で言ってきた。

「じゃあザツハトルテよね」

「それよね」

「ええ、それよ」

若奈はカウンターのの中から笑顔で妹達に話す。

## 最終話 日常その十

「牧村君が作ってくれたね」

「それよね。待ってたのよね」

「そうそう、どんな美味しいんだろってね」

「それがいいよね」

「食べられるわね」

二人は笑顔で話すのだった。そうしてだ。

さらにだ。こんな話をするのだった。

「未来のお義兄さんのお菓子ね」

「楽しみにしてるから」

こう話してだった。二人は牧村のザツハトルテを楽しみにしていた。しかしここからだ。

彼はだ。若奈の妹達にこう言うのだった。

「少し待ってくれるか」

「少しって？」

「待ってって？」

「未久も来る」

まずはだ。自分の妹の名前を出すのだった。

「あいつもこの店に来る」

「ああ、未久ちゃんもですね」

「来られるんですね」

「それまで待ってくれ」

こう二人に言うのだった。

「そうしてくれるか。他にも来るしな」

「他のお客さんもですか？」

「来られるんですか」

「多分来る」

そうだというのだ。

「だからそれまでだ」

「誰なんだろ」

「気になるわよね」

牧村の今の言葉にだ。二人は顔を見合わせて話した。

「大勢かな」

「お客さんよね」

「お客さんが一杯来てくれるのは嬉しいけれどね」

「お店にとってはね」

喫茶店の娘としてだ。二人共妥当なことを話した。しかしそれもだ。それで誰が来るかと言うとだ。そのことはどうしてもわからないのだった。

それでだ。こう話すのだった。

「ううん、怖い人だったらどうしよう」

「あっちの筋の人とかね」

所謂暴力団員の危険も考える。

「最近一目でそれだってわかる人は少ないけれど」

「どうなのかしら」

「目でわかる」

牧村が二人に話した。

「そうした人間はだ」

「目？」

「目なの」

「そうだ、目だ」

そこでだ。わかるというのだ。

「目でわかるものだ」

「目でなの」

「それでわかるの」

「目は全てを語る」

牧村はまた話した。

「その人間の本質を語るのだ」

「それよく言われるわよね」  
若奈も彼のその言葉に頷いて言う。  
「心が綺麗な人は目も澄んでいるって」  
「目の濁っている人間はだ」  
「心も濁っているのね」  
「そういうことだ」  
まさにそうだというのだ。

## 最終話 日常その十一

「それで碌でもない奴はわかる」

「目ね」

「その人の目を見ればいいのね」

「そういうことだ。それでわかる」

牧村はまた妹達に話した。

「その素性もな」

「成程ね。最近よく悪戯つ子みたいなのもよく来るけれどね」

「そうそう、来るわよね」

妹達の話がここで変わった。

「何か顔中白い髭だらけの小さいお爺ちゃんね」

「それと眼鏡の綺麗な人と一緒にね」

「あれっ、その人って」

若奈はその二人の話を聞いてすぐにわかった。

「悪魔博士と秘書さんよね」

「そうだな。博士とあの人だ」

牧村も答える。ろく子の素性は隠してだ。そしてその悪戯者達のこともわかったのだった。

「それとか」

「それと？」

「いや、何でもない」

ここから先は言わないのだった。そんな話をしてしているとだ。

その博士とろく子、それにだった。

妖怪達も来た。一心人間に化けてだ。そうして来たのだった。

「おお、頑張ってるな」

「何よりですね」

博士とろく子が陽気に笑って挨拶してきた。人間になっている妖怪達もだ。

「ケーキ買う前に来たけれどね」

「元気そうだね」

「楽しくやってるんだね」

「ケーキ。そうだったな」

牧村はそのケーキの話をここで思い出した。

「帰ったら。そうだったな」

「そうそう、デコレーションケーキね」

「牧村さんと一緒に食べるあれね」

「あれを買う前に来たんだ」

「コーヒーを一杯飲みだね」

「何よりだ。それに丁度いい」

牧村は彼等にも言うのだった。

「ザッハトルテはある」

「ほう、ザッハトルテか」

ザッハトルテと聞いてだ。博士も笑顔になる。

そのうえでだ。こう言うのだった。

「それはよいのう」

「そうですね。ケーキの前にケーキになりますけれど」

「それもまたよい」

ろく子にもにこにここと話す博士だった。

「それではじゃ。貰えるか」

「わかった。それではだ」

牧村はナイフを切ろうとした。そこでだった。

また客が来た。今度はだ。

死神だった。あの黒い皮のジャケットとジーンズだ。その格好で

店に来た。

その彼はカウンターに座りだ。牧村に言ってきた。

「約束は守った」

「そういうことだな」

「そうだ。来た」

「こう彼に言うのだった。

「では貰おうか」

「相棒はいるか」

「私の中にいる」

目玉についても話す。

「だから共に味わうことができる」

「そうか。ならいい」

「それでだが」

この話の後でだった。彼、正確に言えば彼等もそのザッハトルテを待つのだった。

その彼の次にはだった。あの来客達だった。

「あっ、あんた達も？」

「あんた達も来たんだ」

「このお店に」

「はい、そうです」

老人がだ。妖怪達に答えた。

「私達も約束しましたので」

「そうだったのか」

「はい、そうです」

まさにそうだというのだ。

## 最終話 日常その十一

「だからお邪魔しました」

「来たか」

牧村は彼等を見て言った。

そうしてだ。彼はまた魔神達、今は人間の姿の彼等に話した。

「ならだ」

「ザッハトルテだよね」

子供が話す。

「それだよね」

「食うな」

「勿論だよ」

返答は決まっていた。これしかなかった。

「たっぷりと貰うからね」

「安心しろ。量はある」

「あるんだ」

「正直作り過ぎた位だ」

見ればだ。ザッハトルテは一つではなかった。

実際に幾つもある。そのザッハトルテを前にしてだ。

牧村はだ。また魔神達に話した。

「好きなだけ食べ」

「わかった。それならな」

「そうさせてもらう」

魔神達はそれぞれの席を見つけてそこに座った。そうしてだ。

そこに座ってからだ。彼等は今度は妖怪達に話すのだった。

「まさか同席になるとはな」

「思いも寄らなかった」

「久し振りだな」

共にいるようになるのもだ。そうだというのだ。



「こうして共に過ごすというのも」

「別れて。随分と経つけれど」

「それでもね」

「こうしてまた一緒になる」

「不思議な話ですね」

こう妖怪達に話す。そしてだ。

妖怪達もだ。複雑な顔になってだ。こう魔神達に話した。

「何か嘘みたいだよ」

「ついこの前まで完全に別の存在になっていたのに」

「それが今こうして一緒にいるなんてね」

「おかしな話っていうか」

「妙に納得できるしね」

「そうなるね」

妖怪達はこんなことを口々に言う。しかしだ。

彼等はだ。いぶかしみながらも話すのであった。

「けれど落ち着くね」

「元の鞘に戻ってね」

「まさにそんな感じだね」

「本当にね」

「それでいいのじゃよ」

博士も言う。牧村がザッハトルテを切るのを見ながらだ。

「楽しめばいいのじゃよ」

「楽しめばいいんだ」

「それならそれでなんだ」

「それでいいんだね」

「何でも楽しめば」

「そうじゃ。皆食べることも遊ぶことも楽しめばじゃ」

それでいいとだ。博士は妖怪達だけでなく魔神達にも話す。

その話をしてだ。牧村を見た。

牧村も博士の目に気付いてだ。こんなことを言うのであった。

「では俺はこれからか」

「そうじゃ。楽しむことじゃ」  
「そうせよというのだ。」

「この日常の生活をな」

「日常。いい言葉だな」

博士のその言葉をだ。噛み締める様にして呟いた。

「聞くだけで落ち着く言葉だ」

「そうじゃろう。それではじゃ」

「切れた」

ザッハトルテがだ。全てだというのだ。

## 最終話 日常その十二

「なら食べるか」

「御邪魔します」

兄がこう言ったところでだ。妹が来た。

そうしてそのうえでだ。兄の前まで来て言うのだった。

「お兄ちゃん、ザッハトルテもうできてる？」

「今切り終えたところだ」

妹に顔を向けてそうして話す。

「食べられるぞ」

「わかったわ。じゃあ最高のタイミングだったのね」

「そうだ。いいタイミングだ」

「そうだ。妹に話す。」

「では皆で食べよう」

「そうしましょう。ねえ」

若奈が牧村のその言葉を聞いて笑顔で彼に言った。

「これからもね。一緒に作っていきましょう」

「そうだ。二人でな」

「ずっとね」

こう話してなのだった。二人はだ。

笑顔で、牧村も微笑みになってだ。それだった。

ザッハトルテを一同に配り。フォークを手にとってだった。

「食べるでしょう」

「皆でね」

「戦いは終わった」

牧村は誰にも聞こえない小さな声で呟いた。妖怪達や魔神達にさ  
え。

「俺はこれから。日常の中で生きる」

若奈も見る。そしてまた呟いた。

「ここで。楽しくな」

「いい感じだな」

死神はそのザツハトルテを見ながら言う。

「この雰囲気は」

「いいか」

「人間の雰囲気だ」

それだとだ。牧村に話すのだ。

「これこそがな」

「人間の日常だな」

「貴様がいるべき世界だ」

こつも言ってみせるのだった。

「まさにな」

「俺が人間だからだな」

「その通りだよ」

目玉も言ってきた。ただしそれは死神の口からの言葉だ。

「人間はやっぱり人間としてね」

「楽しく生きるべきか」

「楽しいだけの世の中じゃないけれどね」

目玉の言葉は哲学的な色も有る。その中でだ。

彼はだ。牧村にさらに話すのだった。

「それでも。楽しくね」

「過ぎすのがいいか」

「そつだよ。過ぎそつ」

こつ牧村に言うのである。

「楽しくね」

「そついうことだ」

すぐにだ。死神も言ってきた。彼の口からの言葉であるのは言う

までもない。

「だからこそいいのだ」

「それでだな」

「そうだ。では私もだ」

「ザッハトルテを食べさせてね」  
また目玉も言ってきた。

「貴様のそのザッハトルテな」

「食べさせてもらおうよ」

「何か格好いい人いるわね」

未久はその死神を見て言う。

「お兄ちゃんのお友達なの？」

「そうだったところだ」

牧村が妹の言葉に答える。

## 最終話 日常その十三

「それなりに長い付き合いだ」

「大学のお友達なのね」

「それは違うがな」

「ふうん。そうなの。まあとにかく」

大学での友人ではないと聞いてもだ。未久は友人であることは間違いないと納得してだ。そうしてそのうえでだ。今度は死神に話した。

「じゃあお兄ちゃんのこと御願いますね」

「こちらこそな」

死神はクールな調子で彼女に返した。

「色々と助けてもらっている」

「お兄ちゃんにですか」

「そうだ。それでだ」

「それでなんですか」

「今はザッハトルテを食べる」

そうするというのだ。彼の作ったザッハトルテをだ。

それを食べると言う。そのうえでここにいるのだった。

そのザッハトルテが来た。若奈が切ったものを彼女と彼女の妹達

が店にいる全員に配ってだ。そうしてそこからまた話になった。

「ではだ」

「そうね。それじゃあね」

若奈が牧村の言葉に微笑んで返す。

「皆でね」

「食べてくれ。当然俺も食べる」

「自分のものを食べてこそじゃな」

博士はそのザッハトルテと牧村を見ながら話していく。

「料理じゃな」

「自分も食べてこそなんですか」  
「自分で味わってこそじゃ」  
それでだとだ。博士は未久にも話した。  
「よさがわかるのじゃ」  
「味の良し悪しがですね」  
「そうじゃ。わかるのじゃ」  
「こう彼女に話すのである。」  
「よくな」  
「よくなんですか」  
「そうじゃ。己がわかってこそじゃ」  
博士は目を細めさせながら牧村の妹に話していく。  
「全てがはじまるのじゃよ」  
「そうなんです」  
「己を知ってこそじゃ」  
博士はまた話した。  
「何もかもわかるのじゃ」  
「その一歩なのです」  
未久はこのこともわかったのだ。話を聞いていた。  
「じゃあ。私もおにいちゃんを見習おうかな」  
「俺を見習っても何もなりはしない」  
牧村は妹の言葉に即座に返した。  
「他の人間を見習え」  
「そこでそう言うのってお兄ちゃんよ」  
未久はその兄に対して言葉を返した。  
「本当にお兄ちゃんよ」  
「悪いか」  
「別に。悪いとは言っていないわ」  
「こう話すのだった。兄にだ。」  
「特にね。じゃあ見るから」  
「見習わないのか」

「見習うなって言ったからよ。見てはいるから」

見習うと見るは違うとだ。何気にこんな話にもなっていた。  
そうした話の後でだ。また未久が言う。

「じゃあ。お兄ちゃんはそのザッハトルテを」

「そうね。いよいよね」

若奈が彼女の言葉に笑顔で応える。



## 最終話 日常その十四

そうしてだ。全員で食べてみる。その味は。

「これは」

「中々」

「いい感じだな」

「ああ、美味い」

魔神達が最初に感想を述べていく。

そして博士と妖怪達もだ。こうそれぞれ言うのだった。

「ザツハトルテでも穏やかな味だね」

「甘過ぎないしかと違って上品だし」

「美味しいよ、これ」

「うん、かなりいけるよ」

彼等もこう話す。その博士も言うのであった。

「うむ、この味ならばじゃ」

「大丈夫だな」

博士に死神が応える。彼はカウンターから博士の方に顔を向けてだ。そのうえで言うのだった。

「この店でやっていけるな」

「安心していいのう」

「そうなんだって」

話を聞いていた若奈が笑顔で牧村に話した。

「よかったね。じゃあこれからね」

「宜しくな」

「ええ、こちらこそ」

二人でお互いに話すのであった。牧村は髑髏天使としての剣は収め牧村来期、一人の人間としてだ。若奈と共に生きることを決意した。

そのうえでだ。若奈にだ。もう一切れザツハトルテを差し出して

言った。

「また食べてくれ」

「待って、その一切れはね」

差し出されたそれを見てだ。若奈はだ。

優しい笑顔でだ。こう彼に話した。

「二人で食べましょう」

「二人でか」

「ええ、二人でね」

食べようと話してだ。そのうえでだ。

自分でそのザッハトルテの一切れを半分に分けてだ。それでだ。た。

その半分を別の皿に取って牧村に差し出してだ。こう言うのだった。

「二人で食べよう」

「二人でか」

「このザッハトルテもその他のものも」

「二人でか」

「ええ、食べましょう」

若奈のその言葉にだ。牧村もだ。

微笑んでだ。ザッハトルテの皿を受け取りだ。そうして話すのだった。

「では」

「それではな」

こう話してだ。二人でだ。

その一切れのザッハトルテ、半分に分けたものをそれぞれ食べてだ。それでだ。

二人で一つのものを食べてだ。彼等はこれから二人で生きることを誓い合った。その彼にだ。店にいる誰もが温かい笑顔に向けていたのだった。幸せをはじめ二人に。

最終話

完

髑髏天使

完

2  
0  
1  
1  
・  
6  
・  
6

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1803g/>

---

髑髏天使

2011年7月25日03時14分発行